

国定読本用語総覧⁴：第三期『尋常小学国語読本』 大正七年度以降使用 あ～て

著者	国立国語研究所
ページ	3-1131
発行年月日	1989-08
シリーズ	国立国語研究所国語辞典編集資料；4
URL	http://doi.org/10.15084/00001617

国立国語研究所
国語辞典
編集資料
4

国定読本用語総覧
4

第三期
あゝて

●『尋常
小学国語読本』大正七年度以降使用

国立国語研究所編

© 1989 The National Language Research Institute

刊行のことば

国立国語研究所は、その事業項目として国語辞典の編集を掲げている。その一つは歴史的辞典であるが、日本語の展開を記述する基礎をなすものとして、我々は日本大語誌とも名づけるべきものを構想した。文献の上にたどられる限りの日本語の足跡を、用例として収集し整理しようとするものである。

時代をかりに三百年、百五十年、五十年等に区切って見るとき、一八五一年以後の時期は、日本語が近代的発展をとげた、著しい一時代である。そして一九〇一年からの五十年は、現代語の基礎の確立した時期と見ることができるといえる。

我々は、まずこの五十年にしばって、用例収集の作業にとりかかった。ここに取りあげる六種の国定読本は、ちょうどこの時期に使用されたものであつて、この時期の国語教育の基本教材であり、その用語は、それ自身発展しつつ、国民的な現代語の成立の基礎をなすといふことができる。

この作業は、もともと、この時期の用語を採集する方法の検討のために、試験的に行つてきたものであるが、昭和六十年十月に国語辞典編集室が新設され、その室の担当事業となつた。その結果は、現代言語生活の基幹である、いわゆる標準語の確立の経過を示す基本的な資料となるものと考えられる。

ここで国定読本というのは、明治三十七年四月から昭和二十四年三月までの間に使用された文部省著作の小学校用国語教科書六種のことである。その六種を使用時期に従つて示すと次の通りである。

- 第一期 明治三十七年より使用『尋常小学読本』（今日イエスシ読本と俗称）一―八
- 第二期 明治四十三年より使用『尋常小学読本』（今日ハタタコ読本と俗称）巻一―十二
- 第三期 大正七年より使用『尋常小学国語読本』（今日ハナハト読本と俗称）巻一―十二
- 第四期 昭和八年より使用『小学国語読本』（今日サクラ読本と俗称）巻一―十二
- 第五期 昭和十六年より使用『ヨミカタ』一―二『よみかた』三―四『初等科国語』一―八（今日アサヒ読本と俗称）

第六期 昭和二十二年より使用『いくい』一〜四『国語』第三学年（上下）第四〜六学年（各上中下）（今日みんないいこ読本と俗称）

第一期国定読本については、『国定読本用語総覧1』（第一期 あ〜ん）を、第二期国定読本については二分冊とし、第一分冊を『国定読本用語総覧2』（第二期 あ〜て）とし、第二分冊を『国定読本用語総覧3』（第二期 と〜ん）として刊行した。さらに第三期国定読本について作業を進めた結果、ここに編集を完了したので、『国定読本用語総覧4』及び『同5』の二分冊で刊行することにした。このたび刊行するのはその第一分冊『国定読本用語総覧4』であるが、これには第三期の用語「あ〜て」の部を収める。

この『国定読本用語総覧4』の編集作業及び諸本の調査にあたったのは、主幹 飛田良文（言語変化研究部長）、木村睦子（国語辞典編集室長）、高梨信博（主任研究官）、調査員 林大（前所長・名誉所員）、見坊豪紀（元第三研究部長）、加藤信明、貝美代子、服部隆である。

国定読本の諸本の調査にあたっては次の機関・大学及び諸氏のお世話になったことを記して謝意を表する。

国立教育研究所教育情報資料センター教育図書館、東書文庫、大分県立大分図書館、埼玉県立文書館、藤沢市文書館、横須賀市教育研究所、御宿町歴史民俗資料館（千葉県）、財団法人五倫文庫、愛知教育大学附属図書館、滋賀大学附属図書館教育学部分館、奈良女子大学附属図書館、筑波大学学校教育部、増穂町教育委員会（山梨県）、増穂小学校創立百周年記念教育資料展実行委員会（山梨県）、文化庁文化語課主任国語調査官 安永実、国立教育研究所教育情報資料センター教育図書館事務室長 中村紀久二、大谷女子大学教授 鈴木博、山梨大学教授 松井栄一、岐阜大学助教授 梶山雅史、筑波大学専任講師 塩澤和子

また、前三巻にひきつづき印刷刊行を引き受けられた三省堂にも謝意を表する。

平成元年八月十日

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

解 説

- (一) はじめに
- (二) 国定読本第一期から第三期へ
- (三) 第二期国定読本について
- (三・一) 『尋常国語読本』編集の考え方
- (三・二) 『尋常国語読本』各巻の編集
- (三・三) 書誌・諸本・底本

(一) はじめに

国定読本の資料的意味と第一期国定読本の概要とについては、『国定読本用語総覧1』の解説に、第二期国定読本の概要については『国定読本用語総覧2』の解説に記したので、ここでは、第二期から第三期への読本改訂の事情と、今回の作業対象である第三期国定読本の概要について述べる。

(二) 国定読本第二期から第三期へ

第二期のいわゆるハタコ読本が使用され始めた明治四十三年四月から、第三期のいわゆるハナハト読本が使用され始める大正七年四月までの間に、いくつかの大きな社会状況の変化があった。第一は、大正三年に起こった第一次世界大戦である。大戦下の好景気は日本の資本主義を急速に発展させ、国内的には物価が高騰し国民生活は極度に圧迫され労働争議や小作争議が各地に発生した。一方、国際的に日本はイギリス・アメリカ・フランス・イタリアと並ぶ発言力を獲得して、列強の仲間入りをした。第二は、ロシア革命の成功が社会主義への関心を高めたことである。先進諸国の社会思想が紹介され、教育思想もその影響を受け、師範学校付属小学校や私立学校を中心に教師中心の画一主義から児童中心の自由教育への運動が展開された。

このような状況の中で、政府は大正六年九月二十一日内閣直属の諮問

機関、臨時教育会議官制（大正八年五月まで）を公布し、学制全般の改革について諮問した。その答申は、国家主義を基調とする国民思想・国民道徳の徹底を要求し、教科書の編集に多くの影響を与えた。

これに先立ち、文部省では明治四十四年に図書局を置き、国定教科書の編纂事務はここで扱うことにした。大正二年この事務は普通学務局第二課の所管となり、さらに国定教科書の編集に専任の図書官を置いた。大正五年六月十四日（勅令第一六七号）には大臣官房図書課ができ、組織を拡大して、図書事務官、図書監査官、図書官、図書官補を置いた。ここで、小学校の修身・歴史の教科書とともに、第三期のいわゆるハナハト読本の編集が開始されたのである。

また、明治四十五年六月文部大臣は、第二期国定読本の内容について修正すべき事項を報告するよう各府県師範学校に内訓を発していた。『国定教科書意見報告彙纂』第一集（第五集がその報告である。大正五年の春には、帝国教育会が第六回全国小学校教員会議を開き、文部省の諮問に対して新しく読本を編集する場合の四項にわたる希望を答申した。

一、他教科トノ連絡ヲ計ルコト

二、教材ハ主要課ト補助課トニ別ツコト

三、行文ヲ平易ニシ分量ヲ豊富ニスルコト

四、文章及挿絵ハ児童ノ性情ニ適切ナルモノヲ択ブコト

これらについては、『尋常国語読本巻一・巻二・巻三・巻四編纂趣意書』（大正六年十二月）の緒言の中で「新二編纂スベキ小学読本ハ従来ノ第一種本ヲ標準トシ、高等師範学校及ビ各府県師範学校ノ他実地教授者等ノ意見ヲ参酌シテ之ヲ編纂ス」（編集の要旨）と記されている。

さて、第三期ハナハト読本は大正五年十一月から編集がはじまり、大正七年から学年進行で使用されることになるが、この時期には第二期ハタコ読本の修正も行われた。『尋常国語読本』の新編集と『尋常小学読本』の修正編集が並行したのである。文部省内では、修正編集の『尋常小学読本』は「尋読」、新編集の『尋常国語読本』は「国読」という区別していた。俗に、尋読は黒い表紙であったので黒表紙本、国読は灰白色

の表紙であつたので白表紙本の称も行われた。

尋読は従来の関係上、教科用図書調査委員会の委員芳賀矢一、乙竹岩造、三土忠造の三氏及び新たに補助委員に青木存義を囑託して修正の任にあたらせ、国読は八波則吉、高野辰之を図書官（教科用図書調査委員会の委員も兼任）に任命して起草にあたさせた。

右の尋読は、第二期国定読本に第一種第二種の兩種あつたうちの第一種本の修正であるが、国読は、これとは別に新たに編集されるものである。尋読と国読との編集作業が同時に進行することになった事情については、詳細は不明であるが、友納友次郎は『国語読本の體系』（明治図書・昭和二年刊）で、

現在の読本は現在の読本として適当に修正を行ひ、更に新しく時代の要求に應ずるような読本を編集しようといふことにやつと省議が纏まつた。（形態編六ページ）

と述べ、両者の作業が全然没交渉で進められたについては、

異つた編纂者が異つた気分異つた思想で編纂に従事したら、出来た読本も自づから其の色彩を異にするであらうといふ用意に外ならなかつた（同前七ページ）

としている。また、大正九年から図書監修官であつた高木市之助は『尋常国語読本』（中公新書・昭和五年刊）で、

この二組の関係は、必ずしも緊密であつたとは言えないらしく、わたしの入る前にいろいろな軋轢があつたようです。それは（中略）代表者の方々の間がうまく行つていなかったというのではないと思ひます。芳賀先生などは、そうした抗争にかかわるほど狭量な方ではなかつたし、それは多分省内の官僚同志のありがちな競争心のあらわれではなかつたでしょうか。とにかく両派の対抗意識は相当なもので、お互いに部屋を閉め切つて、極秘のうちにそれぞれ仕事を進めたといひますから、想像がつくでしょう。

と書いている。

大正七年四月からは、修身、国語、書き方手本の新しい教科書が、こ

の年入学の一年生から学年進行で使用されることになった。国語教科書は、これまでの『尋常小学読本』を修正したものと、新しく編集された『尋常国語読本』の二種が用意され、府県知事の裁定によって、どちらを使用してもよいことになった。

しかし、『尋常小学読本』を採用したのは東京、栃木、岐阜、愛知、広島、山口、長崎、熊本の一府七県で、『尋常国語読本』を採用した府県が圧倒的であつた。前者を採用した府県も順次後者に変更し、切り替えの最も遅かつた東京府でも、新編集の読本が完成した大正十三年四月入学の一年生から『尋常国語読本』に変更している。いいかえれば、『尋常小学読本』は昭和三年度に東京府の六年生が使用したのが最終であつた。

この兩種読本の巻八の編集が終つた大正九年四月、官制が改まつて図書局が復活し、教科用図書調査委員会も教科書調査会という名の文部大臣の諮問機関に改組された。このとき、芳賀矢一、乙竹岩造、三土忠造が修正から手を引き、八波則吉、高野辰之は文部省を去り、『尋常小学読本』は図書監修官の青木存義と大岡保三が、『尋常国語読本』は図書監修官の武笠三と高木市之助が担当し起草することになった。大正十年には待鳥清九郎が尋読に加わり、井上超が国読に加わり、同十一年には高木にかわつて佐野保太郎が加わり、大正十二年五月に至つて両者とも全十二巻の完成をみるに至つた。

大正九年四月からの編集の状況を井上超は「読本編集三十年」の中で次のように述べている。

まず、各人が文章を担当して書く。（中略）教材ができるにしたがつて、まず各本担当の三人が会議をして批評し逐一修正する。それが終ると今度は両本の担当六人が集まつて実にしんらつな批評をする。批評でなく悪罵に近いものがあり初心者は腹が立つが、腹を立てたらちやかされるだけである。友納友次郎君など実家も参加して実際的な立場から批評する。これらの批評を総合してまた書き直すほど修正し三訂四訂、底止する所を知らぬ。

こうして一巻分まとまると清書ガリ版に仕立てた一冊ができるが、

それが省内協議会の議案である。当時の次官南弘氏はこの協議会が楽しみだとあって図書局長、普通局長、督学官、文書課長の面々とわれわれを官邸に招き、うなぎ飯を夕食に午後から夜深更まで会議が続く。いろいろ格のちがった立場からこれ横槍が出、時に大修正を命ぜられることもあるが、協議会は内々であるだけにだいたい和氣のうちに終了する。そしてこの会議の結果を綜合して修正したものが教科書最後の大会議、教科書調査会の議案となるのである。

このようにして作成された読本は、さらに教科書調査会に提出された。調査会のメンバーは次のような人々であった。

〈会長〉 澤柳政太郎

〈委員〉 尾野實信 芳賀矢一 小笠原長生 松原行一 馬場鏊一 林

春雄 吉田熊次 黒板勝美 前田利定 徳富猪一郎 東郷安

佐々木吉三郎 山内繁雄 穂積重遠 北澤種一 杉浦尙太郎

伊藤房太郎 (大正九年五月七日現在・文部時報第三号)

こうした審議の結果である『尋常国語読本』は、大正七年から使われはじめ、第四期サクラ読本までの十五年間使用された。その長所を井上超は次のように述べている。

「国語」が「尋読」を圧倒的に、子どもの興味と、指導する先生がたの熱意をひっそらったのは、実にその表現にあったと思います。児童の生活、田園趣味を打って丸とした多くの低中学年の教材が、芳賀読本式思想読本の窮屈さを打破して、趣味ゆたかな、感動的な表現に導きました。もっとも、八波読本といえども、たとえば「五一ちいさん」は労働の神聖を説くものであり、「一本杉」にしても、その底には露骨な教訓があります。けれども、これらの道德や教訓が、巧みな表現に包まれて、しみじみとした味わいの中から、自然に汲み取られるような趣きがありました。「曾我兄弟」や「扇のま」と「くりから谷」「弓流し」等は口語的表現ではありますが戦記物語の口調をそのままに生かそうとしたところに、やはり八波読本の表現主義が一貫しています。

編集の新味と、教材の巧みな表現——そういう特色から私はこの読本を表現読本といったらよいかと思っています。

また短所として「八波読本の詩という詩は、みんな道德の歌でした。大正から昭和へかけ、白秋や雨情の詩が世に出るにつれ、こうした「国語」の詩は、しだいに鼻もちのならぬものになって来ました。」(国定読本の編集)とも指摘している。

(三) 第三期国定読本について

(三・一) 『尋常国語読本』編集の考え方

『尋常国語読本』(ハナハト読本)の編集は大正五年十一月、大臣官房図書課に設けられた教科用図書調査委員会が編集方針を決定すると同時に始まった。その方針は、

新二編纂スベキ小学読本ハ従来ノ第一種小学読本ヲ標準トシ、高等師範学校及ビ各府県師範学校其ノ他実地教授者等ノ意見ヲ参酌シテ之ヲ編纂ス(『尋常国語読本』編纂趣意書)

というものであった。第一種本とは第二期国定読本(ハタタコ読本)のことである。したがって、基本的には編集方針に変更はなく、部分的に修正が行われたといつてよいであろう。文章や用語については、第一期・第二期の方針がそのまま継承された。

第一期の編纂趣意書には、

文章ハ口語ヲ多クシ、用語ハ主トシテ東京ノ中流社会ニ行ハルモノヲ取り、カクテ国語ノ標準ヲ知ラシメ、其統一ヲ図ルヲ務ムルト共ニ、出来得ル文児童ノ日常使用スル言語ノ中ヨリ用語ヲ取りテ、談話及綴リ方ノ応用ニ適セシメタリ。

と記されており、「東京ノ中流社会ニ行ハルモノ」を「模範語」と呼んで標準としている。

第二期の編纂趣意書には

口語ハ略東京語ヲ以テ標準語トセリ。但シ東京語ノ訛音・卑語ト認ムル

モノハ固ヨリ之ヲ採ラス。例ヘバヒラツタイトイハズシテヒラタイトイヒ、イイ天気ヲ採ラズシテヨイ天気ヲ採レルガ如シ。国語読本ハ一方ニ於テ国語統一ノ実効ヲ挙ゲントスルモノナレバ、教授者ハ成ルベク読本ノ言語ニ熟シテ、訛音及ビ方言ヲ匡正スルノ覚悟ナカルベカラズ。と述べており、「東京語ヲ標準語」として「国語統一ノ実効ヲ挙ゲン」ことを強調している。

第三期の編纂趣意書には、用語ハ其ノ選択ノ方針従来ト更ニ異ナル所ナシ。タダ對話ニ於テ一層長幼尊卑ノ別ヲ明ラカニシテ、日常口語ノ實際ニ近ヅカシメンコトヲ期セルノ差アルノミ。(二八ページ)

と記されており、用語についての方針が一貫していることは明らかである。ただ第三期編纂趣意書の中には標準語という名称が使用されていない。が、ハタタコ読本の編者の一人、八波則吉著『（読本）国語の講習』（教育研究会発行・大正十一年刊・大正十三年修正七版）には、

紺のふろしきづつみをしよつて来て

のしよつては、たとひ漢字は「背負つて」と書いても「しよつて」と読むのが標準語です。ついでに、

着物のすそをはしよつた（巻七「潮干狩」も、漢字では「端折つた」と書くのですから、地方に依り、又人に依つては、異様に感ぜられる方もありましようが、これが標準語と極つた以上は、致方はありません。(二四二ページ)

と述べており、標準語という名称と概念は、すでに定着していた。

一方、「実地教授者等ノ意見ヲ参酌シテ」という部分は、先にふれた『国定教科書意見報告書』の意見をさしている。

文部省は明治三十七年一月、高等師範学校及び各地方長官に通牒を發し、文部省著作の小学校教科用図書について高等師範学校及び府県師範学校の付属小学校において、国定教科書を使用した経験によって、教授者に「其ノ分量、程度、材料等ノ適否」を年々報告させていた。この報告が教科書改良に有益であると認められ、明治四十五年六月には更に文

部大臣が内訓を發して意見報告を年々提出するように命じた。これに対する報告を集成したのが『国定教科書意見報告彙纂』五冊である。その報告は、第二期国定教科書についての修正意見であつて、

第一輯 明治四十五年六月の内訓によって新しく提出したもの

第二輯 明治四十五年・大正元年度に提出されたもの

第三輯 大正二年度に提出されたもの

第四輯 大正三年度に提出されたもの

第五輯 大正四年・五年度に提出されたもの

を収録している。

教科用図書調査委員会は、これらの意見を参考にして、教科書の分量、文字、教材、挿画について、修正方針を決定した。すなわち、

分量 従来ノ第一種読本ニ比シテハ、低学年用ニ於テ約三割ヲ増加シ、高学年ニハ一割乃至二割ヲ増加ス。

文字 仮名並ビニ漢字ノ提出時期及ビ漢字ノ数ニ関シテハ、略従来ノ第一種読本ニ拠ル。但シ漢字ノ配当ハ、第一種読本ニ比シテ高学年用ニ稍減少シ、低学年用ニ増加ス。

教材 教材ノ選択ニ就キテハ、児童ノ日常生活ニ触レタルモノ、田園趣味ヲ養成スベキモノ、理科実業經濟及ビ公民ノ心得ニ関スルモノ、国勢ノ現状世界ノ事情ニ通ゼシムベキモノ等ノ材料ヲ従来ノ第一種読本ヨリモ稍増加ス。練習文ヲ適宜各巻中ニ挿入ス。

挿画 従来ノ第一種読本ノ画風ノ外ニ、洋画風ノモノ及ビ略筆画ヲモ加ヘ、且成ルベク児童ノ性情ニ適合セシメ又地方ノ生活情態ヲ描写ス。

と決定したのである。

では、どのように実地教授者の意見は尊重されたのであろうか。大正五年七月から大正九年の四月まで、文部省にあつて『（尋常）国語読本』の編纂に従事していた八波則吉はその著書の中で次のように述べている。

私は国語読本が世に出ると間もなく、「国語読本は実地教授者諸君の意見を尊重し、其の手腕に信頼して之を編纂す」と明言し、具体的に

其の理由を開陳しました。(中略)例へば、「ハト・マメ・マス」又は「ミノ・カサ・カラカサ」の如く、単語を三つ宛一頁に出すに致しましても、挿絵を一幅の画図に纏めて、或は動物愛護者或は勤労の精神を示す様にしましたのも、実地教授者諸君の意見を尊重したのであります。従来の読本に「タコ・コマ・マリ」等の個々の品物が羅列してありましたところ、あれでは興が無いから成るべく活動的に、出来たら一幅の絵にしてくれよとの意見が方々の師範学校から出てゐましたので、早速「意見尊重」を実現したのであります。(中略)従来の読本に「アメ・カサ・カラカサ」とあったら「アメ」は直観教授に都合が悪いから「ミノ」とでも直してくれないかとあったのを見て、意見尊重、そのまゝ「ミノ」と改めたやうな次第です。(『読本国語の講習』三九ページ)

なお、八波則吉は、ハナハト読本の特色を「児童本位」の読本だと豪語している。そして、「汝のいはゆる『児童本位』とは何か。曰く、児童を大人の犠牲にしないこと、即ち是れです。」(『読本国語の講習』二ページ)と述べ、その具体例を挙げている。

○文の主人公、若しくは副主人公に、成るべく当該学年の児童を採用する事、(中略)例へば巻六を一冊開いて見ましても、第二「俵の山」の作者「私」は第三学年の児童です。(後略)(『読本国語の講習』二〇ページ)

○児童の個性を尊重すること。(中略)私どもは国語読本に一切児童を笑ひの種子に使用しまいと考へました。「ゆびのな」の課で、

「二郎 おまへはそのゆびで人をさすか。」

の次に、「といつたので、うちぢゆうのものが、どつとわらひました」とは書かずに、

「あしのゆびは、おやゆびとこゆびのほかにはないのです。」

と書いてゐるのが其の一例です。(同前 一三〜一四ページ)

○どの課も、どの課も、「希望と元氣」に充ち満たしめようと企てました。で苟も陰気臭く、しめつばい話は、たとひ大人に取つては棄て難

い材料でも、思ひ切つて割愛しました。(同前 一六ページ)

○低学年用書に、童謡と童話が多く採用してあるのも「児童本位」の証左なのです。(中略)一例を挙げれば、巻一の如き全巻の頁数が僅か五十四頁しかありませんのに、童謡六首ほど引用し、童話に二十一頁、即ち三分の一強を割いてゐます。(同前 一七〜一八ページ)

このほか、八波則吉が意図したのは、「世界を相手に」という方針であつた。

世界を相手に、これは現代人の標語でなければなりません。私どもが尋常小学国語読本を編纂する際にも、これを標語の一つに選んで、少国民に逸早く世界の事情に通ぜしめることを心掛けました。二三の例を申しますれば、先づ外国の人名地名に単線や複線を引かないことに致しました。(同前 二二七ページ)

このような世界化の考え方は、たとえば、巻十二第二十七課「我が国民性の長所短所」などの教材になり、世界の中で、日本人の長所短所を客観的に比較している。

これら編纂の主眼は、みな、第二期国定読本の編纂趣意書にある「大国民ノ品格ヲ造成スル」ことを継承しているものであり、第三期編纂趣意書の巻五に記された「国民性ノ涵養ト常識ノ養成」にあたるものであらう。

(二・二) 『尋常小学国語読本』各巻の編集

第三期国定読本は、第二期の「小学読本ヲ標準」としたので、根本方針に変更はない。『尋常小学国語読本』の編纂趣意書は、数回にわたつて刊行された。

尋常小学国語読本巻一・巻二・巻三・巻四編纂趣意書	大正六年十二月
尋常小学国語読本巻五・巻六編纂趣意書	大正九年三月
尋常小学国語読本巻七・巻八編纂趣意書	大正十年三月
尋常小学国語読本巻九・巻十編纂趣意書	大正十一年十一月
尋常小学国語読本巻十一・巻十二編纂趣意書	大正十二年七月

その構成はそれぞれ同一ではない。それは編集担当者の交替したこと

を反映しているのであるが、基本方針が一貫していることはいうまでもない。

以下、編纂趣意書と読本から、その要点を紹介しよう。
分量については、

(1) 教科用図書調査委員会の方針は「従来ノ第一種本ニ比シテハ、低字年用ニ於テ約三割ヲ増加シ、高字年用ニハ一割乃至二割ヲ増加ス。」である。巻一は五十四ページからなり、第二期より一ページ減じているが、編纂趣意書によると、文字数は一七四〇字に上り、第二期の一一九三字に比べて凡そ四割五分の増加となっている。各巻のページ数を比較してみると次のようになる。

巻/期	第二期	第三期	巻/期	第二期	第三期
巻一	五五	五四	巻七	九二	一一四
巻二	六六	七八	巻八	九五	一二六
巻三	七四	九〇	巻九	九六	一二三
巻四	八三	九六	巻十	一〇四	一三四
巻五	八二	一〇二	巻十一	一一八	一三〇
巻六	八六	一〇八	巻十二	一二一	一三九

文字と符号については、

(2) 片仮名は巻一に清音・濁音・半濁音・促音・転呼音として全部を提出した。その提出法は第二期とは大きく異なる。

従来ノ第一種本ニ於テハ、片仮名ノ新字ハ専ラ名詞・形容詞・動詞等ニヨリテ提出シ、語ヨリ句ニ進ミ、句ヨリ文ニ移ルコトトシ、巻一第十九頁ニ至リテ始メテ完全ナル文ヲ提出セリ。サレド是等ノ語ト句トハ教授ノ際、文ノ形ニ於テ問答セラルコト多キニ鑑ミ、本書ハ成ルベク早く文ニ入り、文中ノ品詞ニヨリテ片仮名文字ノ提出ヲナスノ方針ヲ採リテ、第四頁ヨリ文ニ入レリ、コレ又仮名提示ノ間、動モスレバ事物教授ニ傾キテ、言語文章ノ応用練習ヲ閑却スルノ憂ヲ除クニ便ナルベシ。

この「文」重視の編集方針は第三期国定読本の一大特色であり、第四期サクラ読本の、最初から「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」にはじまる読本への橋渡しの役をしている。そして八波則吉は「是れ語や句を軽んずるに非ずして、実に実地教授者の御手腕を信頼致してゐるからであります」(『尋常国語読本要義』)と述べている。

そのほか、巻一には「二三ノ長音」、巻二には「拗音・長音・拗長音」の片仮名の記し方を提出している。

(3) 五十音図は巻一の清音文字の提出が終わったところに掲げ、濁音表は巻一の濁音文字の終わったところに掲げてある。

いろは四十七字は従来は巻三の終りに提示したが、第三期では「第四巻ニ『かるた取』ノ課ヲ設ケテ、其ノ課ノ終ニ之ヲ提出」した。そして、いろは順ハ今ナホ世ニ行ハルルヲ以テ之ヲ掲ゲタレド彼ノ五十音図ノ如ク学理的ニシテ将来語法学習ノ基礎トナルモノニアラザレバ、タダ一応学バシムルニ止ムルモ可ナリ。

と趣意書に記している。いろは順から五十音順への注目すべき発言である。

また、未熟ノ片仮名文字を反復練習させるため、巻一の四十三ページに二十五個の略画を示しその便を図った。その画は濁音・半濁音を含む左の答を期待したものであった。

メガネ	カギ	カザグルマ	ゲタ	ゴトク
ザクロ	サジ	スズ	ゼン	コソウ
ダイコン	フヂ	ツツミ	フデタテ	ドビン
ヒバチ	エビ	ブタ	ツルベ	トンボ
ラッパ	ビン	コッパ	ペン	タンポポ

(4) 平仮名は巻三から提出した。その提出法は、従来平仮名ノ提出ハ、其ノ総ベテヲ教授シ了ヘテ後、一課全文平仮名交リヨリ入ルノ方法ヲ採リタレドモ本書ニハ第四課ヨリ平仮名ノ新字ヲ欄外ニ掲グルコト漢字ノ場合ノ如クシテ、成ルベク早く平仮名交リノ文ヲ提出スルコトトセリ而シテ此ノ間別ニ練習ノ語句ヲ設ケズ。教

授者宜シク適當ノ語句文章ヲ用ヒテ、ヨク練習セシムベキナリ。
と記しているように変更されている。

(5) 変体仮名は第二期では巻十から巻十二の韻文に二十六字を提示しているが、第三期ではわずかに巻八第十六の「看板」に「まきぞ（キンバ）・うぜん（ウドン）・あるふ（シルコ）・あし（スシ）・おんざん（センペイ）が提出されているだけである。

(6) 漢字は「実地教授者ノ意見ニ基ツキ、其ノ配当ヲ従来ノ尋常小学第五六学年用書ヨリ百余字ヲ減ジテ、之ヲ第一二三学年用書ニ加フル」の方針により、巻一に十字（数字一から十まで）を、巻二に三十九字を提出した。巻二は第二期と比べると十五字の増加になる。各巻の趣意書によって提出漢字数をまとめて第二期と比較すると次のようになる。

期	第二 期		第三 期	
	新 出	読 替	新 出	読 替
卷一	一〇字	〇字	一〇字	〇字
卷二	二四	二	三九	五
卷三	五一	九	七一	一七
卷四	六八	一五	一〇二	四五
卷五	一二二	三一	一五八	八四
卷六	一四六	五四	一四九	六四
卷七	一七四	八九	一八〇	九五
卷八	一七七	一二七	一六三	八六
卷九	一五七	一六八	一三〇	一二二
卷十	一五六	一八〇	一三二	一五二
卷十一	一四一	一七〇	一二一	一七九
卷十二	一二四	一四九	一一一	一三六
計	一三五〇	九八四	一三六五	九八五

漢字の提出法は、

強ヒテ字形ノ類似、觀念ノ類似等ニ連絡ヲ求メズ、字画ノ繁簡ト応用ノ多少トヲ酌量シテ、教材ニ適當セルモノヲ掲グルノ方針ニ出デタリ。而シテ其ノ字体ハママ従来ノ読本中ノモノト異ナルモノアリ。コレ世間通用ノ字体ニ鑑ミテ、新ニ之ヲ定メタルノミナリトス。

と記されているように、「教材ニ適當セルモノ」を優先させ、字体も「世間通用ノ字体」を参考にして新たに定めており、第三期の字体には特色が認められる。編纂趣意書の巻五・巻六では、「振仮名付ノ漢字ヲ多ク出シタルコト」と、「世間通用ノ字体ニシテ簡略ナルモノハ、其ノ正体ト共ニ教フル方針ヲ取りテ、上欄ニ萬（万）蠶（蚕）絲（糸）等ト掲ゲ」た。後者は、世間通用の字体にも通じさせようとい図したからである。

第三期の漢字の字体は、第二期と比較すると、「 \downarrow 」 \rightarrow 「羽 \downarrow 羽」

「ル \downarrow ハ」が注目される。たとえば、

\downarrow 運 遠 近 週 進 送 達 通 道 縫 遊
羽 \downarrow 羽 羽 弱 習 曜
ル \downarrow ハ 商 深 船

であつて、いずれも第四期・第五期へと受け継がれていく。また、第三期だけ字形が他の期と異なるものがある。たとえば、次のようなものである。

雨 \downarrow 雲 \downarrow 會 \downarrow 強 \downarrow 教 \downarrow 荒 \downarrow 告 \downarrow 黒 \downarrow 歲 \downarrow 耳 \downarrow 修 \downarrow 所 \downarrow 乘 \downarrow 税 \downarrow 席 \downarrow 雪 \downarrow
殿 \downarrow 度 \downarrow 曇 \downarrow 内 \downarrow 分 \downarrow 步 \downarrow 本 \downarrow

右の二十数字のうち、*印をつけたものは、『漢字整理案』の標準体と合致するものである。同案は、この第三期読本の編纂進行中である大正八年十二月に文部省普通学務局から発表されたもので、その凡例に「尋常小学校ノ各種教科書ニ使用セル漢字二千六百余字ニ就キテ、字形ノ整理ヲ行ヒ其ノ標準ヲ定メタルモノ」とある。

(7) 分かち書きは第二期と同様で、巻四まで行っている。その基準は『尋常国語読本』の編纂趣意書には明記されていないが、明治三十九年に文部大臣官房図書課で編成し、同年十二月国語調査委員会の議決を経た「分別書き方案」によるものと見られる。

(8) 送り仮名は第二期と同様で、編纂趣意書の巻九のところで、
尚此ノ巻ヨリ書簡ノ文トシテ候文ヲ提出セリ。シカモ読易ク解シ易キ
ヲ旨トシ、送仮名ノ如キモ世間ノ慣用ニヨラズ、他ノ口語文・文語文
ト同様ニ扱ヒタリ。

とあって、明治四十年六月文部省国語調査委員会の編纂に係る「送仮名
法」に準拠するものとしてよからう。しかし、巻十一・十二においては、「候
文ノ送仮名ハ巻九及ビ巻十二於ケルモノト稍々趣ヲ異ニシテ、幾分世間
慣用ノ送仮名ニ近ツカシメタリ。」とあり、世間の慣用を重視している。

(9) 句読法も第二期と同じである。準拠しているのは、明治三十九年文
部省官房図書課が編成し、同年十月国語調査委員会の議決を経た「句読
法案」としてよい。

句読点はそれぞれに一字分をとっていない。

段落表示も改行一字下げを行っていない。

分ち書きで一語が二行にわたるものは、前行の終りに「」を用い、改
行すべき個所で前行に余地のないものは「」を用い、第二期と同様である。

(10) 外国の地名・人名及び外国語は第二期同様すべて片仮名書きである
(ただし、巻四に「のきらんぶ」の例がある)。第二期では地名の右側に
双線を施し、人名には単線を右側に施したが、第三期では行っていない。
八波則吉は傍線を施さないことによって「これで児童に外国の地名
や人名を日本語同様に親しめる事となります」(『^{日本}中心国語の講習』)と
記している。

なお、外国の地名・人名及び外国語では、促音・拗音の書き方に小字を用
いている。たとえば、「ニューヨーク」(巻八・七〇ページ)、「將軍ステッセ
ル」(巻九・三九ページ)、「ピンセット」(巻十二・五三ページ)など。

(11) 字音仮名遣いは、第二期の方針を受け継ぎ、歴史的仮名遣いを採用
している。巻三の十八「をの たうふう」にある
だんだん 高く とべる やうになつて、とうとう やなぎ
にとびつきました。(五六ページ)

の「とうとう」は問題のあるところであるが、第二期でも「とうとう」

である。到頭を宛字と見たものであろう。

文章については、

(12) 口語は巻一から提示し巻六まではすべて口語文である。編纂趣意書
の巻二には「初歩ノ口語文ヲ学バシムルヲ目的」として種々の長短の文
を収めている。巻三には「叙述ハ成ルベク児童ノ觀察及ビ用語ヲ尊重ス
ルノ方針ヲ採リ、家庭ヲ中心トシテ記シタルモノ少カラズ」とあり、巻
四では「教授者宜シク適宜ニ単元ヲ求メテ(中略)其ノ内容ノ難易ト新
形式ノ有無トヲ考慮シテ、時ニ或ハ一課ヲ一単元トシ、時ニ或ハ数行ヲ
一単元トナス」よう注意している。巻五・巻六では「文章ハ内容ニ順応
セシメテ、各課ノ長短格調ヲ定メ」たとあり、所々に写生文・日記・日
用文を掲げ「綴リ方教授トノ間ニ連絡アラシメン」としている。

(13) 口語の用語については巻五・巻六編纂趣意書に「用語ハ其ノ選択ノ
方針從來ト更ニ異ナル所ナシ」とあり、第二期の「東京語ヲ以テ標準語」
とする方針を受け継いでいるが、対話に関しては「タダ対話ニ於テ一層
長幼尊卑ノ別ヲ明ラカニシテ、日常口語ノ實際ニ近ツカシメンコトヲ期
セルノ差アルノミ」と相違のあることを記している。これは、第二期の
編纂趣意書に見える「然レドモ我が口語ハ未ダ確乎タル標準ヲ得ズ、社
会ノ階級尊卑等ニ於テ、又ハ児童ノ男女間ニ於テモ特殊ノ言語アルヲ以
テ、学校用語本トシテハ純然タル自然的言語ヲ写スコト能ハザル憾少シ
トセズ」という記述と比較してみると、東京語が統一され定着してき
たことを示すものとして注目される。

また、八波則吉は『^{日本}中心国語の講習』の中で、

此の「ハコニハ」の如く敬体の口語文で綴つてある文章は、声音に出
して朗読すれば、これが其の儘で話し方になります。(六九ページ)
と述べており、口語は話し言葉の標準語として執筆されている。

(14) 文語文については巻六の編纂趣意書に「從來巻六ヨリ提出シタレ
ド、本書ニ於テハ巻七ヨリ之ヲ提出ス」とあるように、巻七では冒頭の
「世界」を始めとして九課の文語文を提出した。その割合は巻七全体の約
三分の一強にあたる。文語文の提出法は、最初の二課又は三課ずつ連続

して提出し実地教授者の取扱上の便利を考慮している。以下巻十二まで
ほぼ三分の一が文語文で三分の二が口語文である。

この文語文の量について井上超は、「小学読本編纂史」の中で、
文体にても（中略）各巻に著しく口語文が幅を利かせ、最上級に於て
すら教材の三分の一以上（中略）に至った。旧読本が巻十一に於て口
語五・文語二十三、巻十二に於て口語四・文語二十四といふのに比べ
ると、けだし著しい変遷であり相違であるといわねばならない。（一八
三ページ）

と指摘している。

（15）候文は書簡文として巻九から提出した。読み易さを重視して「送仮
名ノ如キモ世間ノ慣用ニヨラズ、他ノ口語文・文語文ト同様ニ扱」い、
巻十一・巻十二において「行書ヲ以テ記スルモノ」を置き、送り仮名も
「幾分世間慣用ノ送仮名ニ近ヅ」けたと記されている。

教材については、

（16）教科用図書調査委員会の方針は先に述べた通りであるが、第三期の
編纂趣意書は巻ごとに方針を示している。

巻一では犬・猫・馬・牛のような家畜を選んで児童の喜ぶところに応
じ、また猿蟹合戦・桃太郎のような昔話、ほかに動植物・天然現象及び
器具玩具を加えて偏りのないようにした。さらに「新字ヲ用ヒザル練習
文」を所所に加えた。

巻二は「都鄙男女ノ何レニモ偏スルコトナキヲ期シ」、地理・理科のよ
うな実科的教材を減じて文学的教材を多くした。

教材は修身・歴史・地理・理科・実業・国民科等とし、その他「以上
ノ類別ニ入ルベカラザル国語読本特有ノ教材」を仮りに文学的教材と呼
び、以下巻ごとに類別表を掲げている。各巻の編纂趣意書の分類をもと
に教材数を数えると下の表のようである。

なお、教材の中には第二期国語読本から採ったものも毎巻二、三ある
が「其ノ内容・文章ノ上ニハ面目ヲ異ニセルモノ多シ」（巻四編纂趣意書
の結語）と記している。

教材	巻													計
	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	計	
修身的教材	5	5	4	4	3	4	5	3	4	2	3		42	
歴史の教材	4	3	3	5	5	4	5	2	4	5	4		44	
地理の教材		2	2	4	2	4	3	4	3	4	3		31	
理科の教材	1	4	3	3	4	2	2	3	2	3	3		30	
実業の教材			2	2	2	2	3	3	3	3	4		23	
国民科的教材			1	1	1	1	2	2	3	3	3		17	
文学的教材	15	12	9	7	9	9	9	9	8	8	8	7	101	
計	25	26	24	26	26	26	28	25	27	28	27		288	

巻五では、文学的教材を除く本書の教材の内容について次のように述
べている。

○修身的教材ハ第三学年用ノ小学修身書ト連絡ヲ取りテ、其ノ訓戒ノ予
備トナリ、応用トナルガ如キ事例ヲ掲グルコトセリ。タダコレニア
リテハ、必ズシモ実在ノ人ヲ主トセズシテ、寓話アリ、仮作譚アリ、
マタ韻文ノ形式ニヨルモアリテ、何レモ皆児童ヲシテ感奮興起セシメ
ンコトヲ期セリ。

○歴史の教材ハ他日学習スベキ日本歴史ノ準備トシテ、上ハ神代ヨリ下
ハ現代ニ至ルマデノ、国史上重要ナル人物・事蹟ヲ選ビテ、之ヲ第
三・第四両学年ニ載スル方針ヲ取り、第三学年用書ニハ神代ヨリ吉野
朝ニ至ルマデヲ配当スルコトセリ。

○地理的教材ハ歴史の教材ト共ニ、他日学習スベキ日本地理ノ予備知識
トナルベキモノヲ採レリ。

○理科的教材ハ成ルベク児童ノ目撃スルモノニシテ、人生ニ関係深キ事
物・現象ニ採リ、時ニ珍奇ナル物ヲ紹介ストイフ方針トセリ。

○実業的教材ハ農工商等ニワタリテ、其ノ一二偏スルコトナク、
○国民科的教材ハ日常生活ニ密接ノ関係アル制度ニシテ、理解シ易キモ
ノヲ採ル方針トセリ。

巻七からは「外国ノ地名人名其ノ他外国ニ関スル材料」を加えた。
これらの教材について、井上超は「小学読本編纂史」の中で、

国語教材は、押しなべて在来のよりも文学化せられ、又よし中には不自然な表現があつたにしても、それが在来よりも児童といふものに接近して来たことは事実である。(一八二ページ)

と評している。

(1) 挿画については、「従来ノ第一種本ノ画風ノ外ニ、洋画風ノモノ及ヒ略筆画ヲモ加ヘ」た点に特色がある。また、第二期では人物・家屋・衣服はなるべく「多数国民ノ階級ヲ標準」とし貴族的にならないようにしたとあるのに対して、第三期では「地方ノ生活情態ヲ描写ス」となつていて、方針が変わっている。

以上は、『^{尋常}国語読本編纂趣意書』に述べるところを中心に若干の解説を加えたものである。

なお、用語の特色の一端をここに述べておく。

第三期の用語の特色は、先にも述べたが、編纂趣意書に「従来ト更ニ異ナル所ナシ」とある。やはり第一期で樹立された一人称・二人称の代名詞、あるいは「おとうさん」「おかあさん」などの親族名称の体系を継承した点がまず挙げられる。しかし、一人称の場合「わたし」「わたし」「ぼく」「われわれ」など上品な語彙が使用され、第二期で加わった「おれ」「は使われていない。親族名称でも「おとうさん」「おかあさん」が使用され、第二期で加えられた山の言葉の「おかあさま」「下町言葉の「おっかさ」は除かれてゐる。標準語を定め「国語統一ノ実行ヲ挙ゲン」とする第二期編纂趣意書の方針が更に徹底してきたものと考えられる。

しかし一方では、ゆれのみられるものもあり、「マツクロナ 目」「キイロイ クチバシ」「黄色なのは」「赤いのは」という場合の「な」と「い」、また「タクサンナ種類」「たくさんの星」「仕合はせのよい事」「はるかの下に」のように体言に続くときの「な」と「の」にゆれが見られる。

用法の異なるものには、

- 我が国で出来る品物ばかりでは用が足らない。(巻十・八六ページ)
- 馬も誠に従順で、けたり。かみついたりするやうな事は決してしません。(巻十・一七ページ)

○一包十箱が十銭ぐらゐで買はれる。(巻八・一〇三ページ)

○毎日何処へか出かけたくてたまらないだらうと思ひました。(巻十・七七ページ)

などが注目される。

敬語の用法で異なるものに、

○おとうさんへ電報で御返事をいたしたやうに(巻五・八四ページ)

○先生が拝殿にかけてある絵馬のお話をして下さいましてから、たんばの小道へ出て、(巻五・四〇ページ)

が目につく。

今日と異なるものには、「景物」「活動写真」「最大急行の列車」「地下鉄道」「相持のもの」「赤さん」「調べかは」「学問をべんきやうしなさい」などがある。

このほか、第一期から受けついでいるのは「こうば(工場)」「ていしやば(停車場)」の「ば」の読み方や「こがわ(小川)」の「こ」の読み方である。

表記では外国の国名表示に特色があつて、

第一期 イギリス いぎりす
第二期 アメリカ イギリス ロシヤ

第三期 アルゼンチン アルゼンチン國 ブラジル ブラジル國

のように、仮名書きされたものは、第一期は文章の仮名表記に従い、第二期は片仮名に双線〓を加え、第三期は片仮名に「國」を加えたものがある。今日と異なる表記には、「中直り」(仲直り)、「おなかを明けて」(開けて、「仕合はせ」(幸せ)などがある。

(二・三) 書誌・諸本・底本

『^{尋常}国語読本』(いわゆるハナハト読本)十二巻の編集は、大正五年十一月から開始され大正十二年五月に完成した。その間に官制の改革があり起草者も交代した。

大正五年から大正九年四月図書館が復活するまでは大臣官房図書課の

図書官八波則吉と高野辰之が担当していた。巻一から巻八を起草し、その草稿本は教科用図書調査委員会の第三部会の修正を経て総会へ提出した。大正九年四月からは図書局の図書監修官武笠三と高木市之助が巻九から巻十二を担当した。同十年からは井上超が加わり、同十一年には高木が去り佐野保太郎が加わり完成したのである。

教科書調査会の任務は「文部大臣ノ監督ニ属シ其ノ諮問ニ応シテ小学校ノ教科用図書ヲ調査ス」るものであった。当時文部省の図書監修官であった高木市之助は、その回想録『尋常国語読本』（中公新書 昭和五一年刊）の中で、調査会の有様を次のように伝えている。

この巻九にわたしが盛り込もうとしたのは、この教科書で学ぶ五年生の児童の熱情を鼓吹するような教材で、それには、叙事詩がふさわしいだろうと考えました。（中略）こんな気持ちから探したものが例の『平家物語』六之巻の祇園女御の条でした。（中略）わたしは苦心慘憺、原典の表現を活写するよう推敲に推敲を重ねて一文を草し、調査会に提出したのです。

ところが、（中略）某代議士がいきなり食ってかかってきた。

「こんな教材を国定の読本に入れるのはもってのほかだ。なぜなら、後白河法皇はそのとき人もあろうに愛妾のもとへお通いになるのではないか。おそれ多くも皇室に関してこんな事実をあばくのは教育上不敬千万である。こんな教材は根こそぎ撤去すべきだ」

代議士委員が威丈高になってそう発言すると、ほかの二、三の委員も、さも我が意を得たりという顔をして同調する。（三〇—三三ページ）こうした意見によって『尋常国語読本』巻九の草稿本にあった「第二十四 忠盛ノ沈勇」は撤回され、巻九の最後にある「選挙ノ日」にさしかえ採択されたのであった。

教科用図書調査委員会及び教科書調査会が審査し決定した第三期国定読本『尋常国語読本』は、文部省原本又はその修正原本として逐次刊行された。詳細は「国定読本用語総覧5」の付録「尋常国語読本（ハナハト読本）の修正経過」を参照されたい。

また、個別的な訂正・修正事項については、『国定教科書及本省著作教科書訂正通牒』によって知ることができる。

- ①『国定教科書及本省著作教科書訂正通牒』（昭和六年七月）文部省
尋常小学国語読本（偶数巻）（昭和五年十月ヨリ使用分）
尋常小学国語読本（奇数巻）（昭和六年四月ヨリ使用分）
尋常小学国語読本（後期）（昭和六年十月ヨリ使用分）
尋常小学国語読本（前期）（昭和七年四月ヨリ使用分）
- ②『昭和九年度使用国定教科書及本省著作教科書訂正通牒』（昭和九年三月）文部省
- ③『昭和十年度使用国定教科書及本省著作教科書訂正通牒』（昭和十年三月）文部省
- ④『昭和十一年度使用国定教科書及本省著作教科書訂正通牒』（昭和十一年三月）文部省

しかし、その修正事項がどのように実現されたかについてはさまざまである。巻八についての実態は昭和六十三年度科学研究費補助金一般研究(B)研究成果報告書『光学文字読み取り装置によるコンコードダンス作成システムの開発』（研究代表者 飛田良文）にくわしい。

なお、底本を決定するため奥付の年月日と本文の異同を調査したところ、奥付の年月日が同じであっても使用年度に相違のあることが貝美代子調査員によって明らかにされた。奥付に付されている符号（東京書籍は変体仮名及び平仮名、日本書籍は数字）が、使用年度を示していたのである。詳細は先述の科学研究費の報告書にゆずりその結果を整理すると次頁の表の通りである。なお、大阪書籍発行本にも片仮名の符号があるが、調査した冊数が少ないため詳しいことはわからない。

底本には、この使用年度を示す符号の発見によって、学年進行によって使用された初年度使用本を確信をもって使用することができた。その奥付の年月日・符号・所蔵は以下の通りである。

巻一 大正6年11月24日翻刻印刷 大正7年1月31日翻刻発行
東京書籍 国立国語研究所蔵本

期	年	東京書籍	日本書籍	共 通	教 科 書
第 一 期	明治43			(〇七五二)	ハタタコ 使用開始
	明治44			(一七五二)	
	明治45	は	2	(二七五二)	
	大正2	い	3		
	大正3	ほ	4		
	大正4	ふ	5		
第 三 期	大正5	や	6		ハナハト 使用開始
	大正6	ち	7		
	大正7	て	8		
	大正8	ぬ	9		
	大正9	る	10		
	大正10	け	11		
	大正11	え	12		
	大正12	ろ	13		
	大正13	を	14		
	大正14	あ	15		
	大正15	せ	16		
	昭和2	そ 巻	17		
第 四 期	昭和3	ほ	18		サクラ 使用開始
	昭和4	お	19		
	昭和5	ふ	20		
	昭和6	い	21		
	昭和7	ろ	22		
	昭和8	は	23		
	昭和9	に	24		
	昭和10	は	25		
	昭和11	へ	26		
	昭和12	と	27		

東京書籍「定価欄の下 日本書籍 翻刻発行兼印刷者の住所の末尾 共通」文部省検査日の下

〈国定読本の使用年度と奥付の符合の関係〉

- 卷二 大正6年11月27日翻刻印刷 大正7年6月20日翻刻発行
東京書籍 藤沢市文書館蔵本
- 卷三 大正7年9月28日翻刻印刷 大正7年10月12日翻刻発行
日本書籍 横須賀市教育研究所蔵本
- 卷四 大正7年10月1日翻刻印刷 大正8年3月30日翻刻発行
日本書籍 国立教育研究所教育情報資料センター教育図書館蔵本
- 卷五 大正8年8月25日翻刻印刷 大正8年12月5日翻刻発行
東京書籍 国立教育研究所教育情報資料センター教育図書館蔵本
- 卷六 大正9年3月10日翻刻印刷 大正9年4月25日翻刻発行
日本書籍 横須賀市教育研究所蔵本

- 卷七 大正9年10月9日翻刻印刷 大正9年10月25日翻刻発行
日本書籍 国立教育研究所教育情報資料センター教育図書館蔵本
- 卷八 大正10年4月16日翻刻印刷 大正10年4月30日翻刻発行
日本書籍 国立教育研究所教育情報資料センター教育図書館蔵本
- 卷九 大正10年12月5日翻刻印刷 大正11年1月15日翻刻発行
東京書籍 横須賀市教育研究所蔵本
- 卷十 大正11年7月1日翻刻印刷 大正11年7月23日翻刻発行
東京書籍 国立教育研究所教育情報資料センター教育図書館蔵本
- 卷十一 大正11年12月24日翻刻印刷 大正12年1月20日翻刻発行
東京書籍 横須賀市教育研究所蔵本
- 卷十二 大正12年7月1日翻刻印刷 大正12年7月23日翻刻発行
東京書籍 東書文庫蔵本
- 解説の執筆にあたっては以下の文献を参考にした。
- 古田東朔『小学読本便覧』第七巻 昭和五十九年十月 武蔵野書院
- 海後宗臣『日本教科書大系』近代編四(九国語) 昭和三十八年
三十九年 講談社
- 井上超著・古田東朔編『国定教科書編纂二十五年』昭和五十九年五月
武蔵野書院
- 文部省『学制百年史』昭和四十七年十月 帝国地方行政学会
- 春日政治著『^{尋常}小学国語読本の語法研究』大正七年七月 修文館
- 友納友次郎著『国語読本の體系 形態編』『同 内容編』昭和二年五月
明治図書
- 高木市之助・深宣和男録『^{尋常}小学国語読本』昭和五十一年二月 中央公論
社
- 『近代教科書教授法資料』第十二巻 編纂趣意書2 昭和五十八年二月
東京書籍
- 『複刻国定教科書(国民学校期) 解説』昭和五十七年二月 ほるぷ出版

凡 例

- (一) 内容 (二) 底本 (三) 用語採集の範囲 (四) 見出し語の立て方 (五) 見出し語の注記 (五・一) 見出し
 (五・二) 漢字 (五・三) 品詞 (五・四) 人名・地名などの注記
 (五・五) 度数 (五・六) 表記 (五・七) 活用形 (六) 見出し語の排列
 (七) 用例と所在 (七・一) 用例文 (七・二) 所在 (七・三) 層別

(一) 内 容

本書は、大正七年度から用いられた第三期国定読本『尋常国語讀本』(いわゆるハナハト読本。全十二冊)の全用語を五十音順に排列し、その全用例のうちアからテの部までを収めたものである。

(二) 底 本

国立国語研究所所蔵本を含め、各種機関の所蔵本を底本として用いた。詳しくは本書所収の解説参照。

(三) 用語採集の範囲

底本のうち、

- ① 目録
 ② 本文
 ③ 図版

の部分を用語採集の対象とした。ただし、③のうち、判読しがたい語は除いた。

表紙・扉・ページを示す数字・奥付などの部分は、用語採集の対象としない。

なお、本文の上部欄外に示された、仮名・漢字の新出と読み替えの表示は、トの部以下の用例を収めた『国定読本用語総覧』の巻末に別にまとめて付録とする。

(四) 見出し語の立て方

自立語は原則として文節から助詞・助動詞を切り離したものを一単位とし、助詞・助動詞は、『現代語の助詞・助動詞——用法と実例』(国立国語研究所報告3)を参考にして単位を決定した。ただし、

① 形容動詞は立てない。形容動詞の語幹にあたる部分を「形状詞」として一単位とし、語尾にあたる部分を助動詞とする。

② サ変動詞「する」、および「いたす・くださる・なさる・もうしあげる」など意味上ほぼサ変動詞「する」にあたるものが、体言または体言相当のものにじかに接続している場合は切り離さない。

③ 助詞・助動詞を構成要素に持つ副詞・接続詞等の処理は別に行う。

④ 動植物名や固有名詞(人名・地名・戦争名・課名・題名など)は全体で一単位とする。

⑤ 同語形であっても品詞の異なるもの、口語・文語などで活用の異なるものは別見出しとして扱った。ただし、「会う」のように口語五段活用と文語四段活用の終止形が同形で併存するものは、一つの見出しにまとめた。

なお、単位決定の詳細については、別に問題語一覽を作成する予定である。

複合語などの後部にあらわれる要素については、次のように切り出して見出しに立て、↓で、主となる見出しを参照させて検索できるようにした。

あいて ↓おあいていたす・そうだんあいて

また見出し語のうち、以下にあげるように、国定読本に用いられた語形が、現代語として一般的な語形と異なっていたり、漢字表記の語で、読みに通りの可能性があったりして、検索に支障をきたすおそれのあるものは、*印をつけた空見出しをもうけ、参照すべき項目を示した。

*うしろあし ↓あとあし (後足)

*かねだか ↓きんだか (金高)

さらに複数の読みがそれぞれ見出しになっていて、相互に参照することが望ましいと思われるものは、表記の下に↓で示した。

あした↑あす・みょうにち (明日)

あす↑あした・みょうにち

じ↓ち (地)

ち↓じ

(五) 見出し語の注記

各見出し語ごとに、次のような事項を記した。

例

見出し	漢字	注記	度数	表記
いつくしま	〔嚴島〕	〔地名〕	1	嚴島

用例

十一 34 8 〔嚴島〕

嚴島は古より日本三景の一に數へられて殊

に名高く、〔略〕。

所在 (巻・ページ・行)

層別

見出し

漢字

品詞

度数

表記

活用形

そう

〔沿〕

〔四・五〕

4

そふ

沿ふ

《ウ・ーッ・ーヒ》

六 72 2 東の方は此の橋のたもとから、川にそつて電車が

出ます。

(五・一) 見出し

現代仮名遣いによって、和語・漢語は平仮名、外来語は片仮名で記した。

活用語は終止形を見出しとし、活用しない部分と活用する部分との間に・(中点)を入れた。

(五・二) 漢字

語の識別のため、必要に応じて、見出し語にあたる漢字を注記した。

(五・三) 品詞

品詞は次の通りとし、後に記すような略号を用いて示した。なお、助詞と動詞は、さらに細分類を行った。

名詞 (名)	代名詞 (代名)	形状詞 (形状)	副詞 (副)
連体詞 (連体)	接続詞 (接)	感動詞 (感)	助詞
形容詞 (形)	助動詞 (助動)		動詞

助詞は次のように分類し、後に記すような略号を用いて示した。

格助詞 (格助) 副助詞 (副助) 係助詞 (係助) 接統助詞 (接助)
並立助詞 (並助) 準体助詞 (準助) 終助詞 (終助)
間投助詞 (間助)

また、動詞は活用の種類によって分かち、次のように示した。

四段 (四) 五段 (五) 上二段 (上二) 上二段 (上二)
下二段 (下二) 下一段 (下二) カ行変格 (カ変) サ行変格 (サ変)
ナ行変格 (ナ変) ラ行変格 (ラ変)

(五・四) 人名・地名などの注記

見出し語の意味・用法について、必要に応じて、「人名・地名・課名・話し手名」などの注記を加えた。なおその場合には品詞は省略した。

(五・五) 度数

見出し語ごとに、その使用度数 (用例の数) を記した。

(五・六) 表記

その見出し語の全用例について、片仮名・平仮名・漢字や、振り仮名の有無などの表記の異なりを列挙した。二種類以上の表記がある場合は、次の順とした。

- ① 片仮名
- ② 平仮名
- ③ 変体仮名
- ④ 漢字 (片仮名の振り仮名つき)
- ⑤ 漢字 (平仮名の振り仮名つき)
- ⑥ 漢字 (振り仮名なし)
- ⑦ アラビア数字

⑧ ローマ数字

(五・七) 活用形

活用のある見出し語の用例について、活用形の異なるものを列挙した。ただし、ここでいう活用形の異なりとは、未然形・連用形などの別ではなく、語形上の異なりをさす。

活用形を列挙する際、活用しない部分 (見出しで、中点・より前の部分) は「ー」で記し、活用する部分を、原文通りの仮名遣いで、片仮名によって示した。

また、二つ以上の活用形がある場合は、五十音順に並べた。

(六) 見出し語の排列

見出し語の排列は現代仮名遣いの五十音順とする。ただし、片仮名は平仮名に、濁音・半濁音は清音に、小字 (アイウエオ つやゆよ) は普通の仮名に、長音符号「ー」は直前の仮名の母音に、それぞれ置き換えたものとみなして、一字目から順次、五十音順に排列する。

同じ仮名の連なりとなった見出しは、次の各項を一字目から順に適用して排列する。

- ① 清音→濁音→半濁音
 - ② 小文字→大文字
すなわち、拗音→直音、促音→直音
 - ③ 普通の仮名→長音符号
- 以上によっても排列の決まらないものは、次の各項を順に適用して排列する。

- ① 次の品詞順とする。
名詞→代名詞→形状詞→副詞→連体詞→接統詞→感動詞→助詞→

動詞→形容詞→助動詞

a 名詞のなかでは次の順とする。

課名→話し手名→人名→地名→それ以外の名詞

b 助詞のなかでは次の順とする。

格助詞→副助詞→係助詞→接続助詞→並立助詞→準体助詞→終助詞→間投助詞

c 動詞のなかでは次の活用順とする。

四段→五段→上二段→上一段→下二段→下一段→力変→サ変→ナ変→ラ変

② 漢字表記の付けられるもの、付けられないものの順とする。

a 漢字表記の付けられるものについては、字数の少ないものから多いものの順とする。字数が同じ場合は、一字目の画数順とし、一字目が同画数の場合は、『康熙字典』の順に並べ、同字はまとめたうえで、二字目の画数順とする。

b 漢字表記の付けられないものについては、

平仮名→片仮名（外来語）の順とする。

(七) 用例と所在

(七・一) 用例文

用例は、仮名遣い・分かち書きなどまで、できるだけ原文通りとした。

漢字字体は、対応する普通の明朝活字体とした。

用例の長さは、五十字（本書の三行）程度を目安として、一文を採用したが、必要に応じて長短がある。用例文の一部を省略する場合は、〈略〉のように示した。

同一見出し語に含まれる用例は、底本における出現順に排列した。

用例中、見出し語にあたる部分は太字で示した。

なお、五十音図・いろはは、本文ではそれぞれ一部分を示すにとどめ、付録に全体の形を示した。

(七・二) 所在

用例は、見出しにあたる語のはじまる位置によって、底本の巻・ページ・行の順で所在を示した。

なお、目録と図版中の語は、それぞれ

六目2

五36図

のように記し、目録または図版中の語であることが分かるようにした。




(七・三) 層別

用例文の文体上の性格を次の三類八種に分類した。

① 口語文 文語文 候文

② 散文 韻文 手紙文

③ 地の文 会話文

以上のうち、口語文・散文・地の文については注記せず、それ以外は、上記の分類の第一字目によって、   のように区分を示した。

なお、目録と図版中の語については、原則として層別の表示を行わない。

あ

あ (感) 4 ア あ

三36 図 「ア、日ガ出ハジメタ。

キレイダ。ニイサン、ニイサン。」

四36 2 図 スルトホカノ鳥ガ見

ツケテ、「ア、ニクイヤツガ居
ル。」トイハナイバカリニ、〈略〉。五65 5 図 「あ、町の方へ馬車が二だ
いかけて行きます。」十一41 3 図 あ、西の空がほんのり明る
い。明日は晴かも知れない。

ああ (副) 3 あ、

八94 2 図 「先生、私の娘にもあゝし
て教へて下さったのでせうか。どう
も恐れ入ったことだ。」十50 8 図 「あれは銀行だよ。今まで
は横町の小さい家だったが、今度は
あゝいふりつばなのを建てたのだ。」十二56 8 図 誰だ、仕事臺の上をかき
廻したのは。あゝいふねぢはもう無
くなつて、あれ一つしか無いのだ。

ああ 「嗚呼」 (感) 29 ああ あゝ、

三52 7 図 「ああわかつた。あの光
るところが雨のふるあな
だ。」三89 2 図 「いいや、天人はうそを
いひません。」「ああ、はづかしい
ことを申しました。」

四72 5 図 ああ、よいぼんだ。〈略〉。

五17 4 図 「をちさん、〈略〉一番こつ

ちは金鶏勲章でせう。」「あゝ、今度
の戦争でいたゞいた。」五44 8 図 「われは天皇の皇子やまと
をぐな。」「あゝ、たゞ人ではおあり
なさらなかった。〈略〉。」五68 4 図 此の村の名を言ふと、
「あゝ、あの貧乏村か。」と言はれた
ものださうだ。六15 4 図 「あゝ、それは紅茸だ。
〈略〉。」と、にいさんが言ひました。六45 1 図 雷はかんしんして、「あゝ、
月日の立つのは早いものだ。自分は
夕立にしよう。」六58 8 図 さて萬じゅは、だれか母の事
をいひ出す者はないかと氣をつけて
ゐますが、十日たつても二十日たつ
ても、母の名をいふ者がありません。あゝ、母はもう此の世の人ではない
のかと、力をおとして居りました。七89 5 図 「あゝ、さうだ。」と言つて、
マリーはおばあさんのづきんを取つ
て、兵士の頭にかぶせました。七90 7 図 「かうですか。」「あゝ、さ
うです。それから、つんぼのまねを
してね。」七110 4 図 「シンとあります。」「あゝ、
信吉からだ。よんでごらん。」八87 3 図 今度は先生に向つて、
「あゝ、あなたが先生でいらつしや
いますか。娘が大そうお世話様にな

ります。

九80 10 図 「あゝ、あの角の石屋

か。」と、誰もうなづく工場あり。

九88 10 図 「あゝ、あの一番高い杉の
眞上の所にあるのが北極星でせう。」

九89 10 図 あゝ、よく氣がついたね。

九92 3 図 「あゝ、かはいさうだ。あ
のアルカスに親殺の大罪をかさせ
てはならぬ。」

九92 7 図 あゝ、面白かつた。

十39 7 図 父は腰から鎌をぬきながら、
「あゝ、今朝はなか／＼寒い。指の
先がしびれるやうだ。」といつて、
〈略〉。十44 10 図 「あゝ、きれいだ。あの色
をどうかして出したいものだ。」十58 9 図 あゝ、あのかはい、鳩が、一
度任務を命ぜられると、〈略〉。

十62 2 図 あゝ、おいたはしいお姿。

十101 4 図 先に立つたにいさんが、
「あゝ、咲いてゐる、く。」十129 9 図 見る／＼艦は速力を増して、
白波高く海にをどり入る。あゝ、海
の戦士の勇ましき誕生。

十一87 3 図 とう／＼大島についた。

「あゝ、五海里の海上を僕も泳ぎき
ることが出来たのだ。」十二33 8 図 あゝ、此のむざんな光景
を御らんさない。十二37 6 図 あゝ、あれは僕の作つた
曲だ。

十二43 2 図 「あゝ、あなたはベー

トーベン先生ですか。」きやうだい
は思はず叫んだ。十二55 1 図 唯自分だけが此のやうに
小さくて、何の役にも立ちさうにな
い。あゝ、何といふ情ない身の上で
あらう。

アークとう (名) 2 アーク燈

十二111 7 図 然れどもこは今日のアー
ク燈に類するものにして、公園・街
路等の照明用としては適當なれども、
〈略〉。十二117 6 図 〈略〉、活動寫眞のフィルム
がアーク燈の熱の爲に發火して、多
くの死傷者を出した話などを附加へ
た。あい (名) 1 おきあい・ぐあい・
さんぎょうくみあい・じゃれあい・す
じあい・つきあい・ばあい・ひとつき
あい・わりあい

あい (名) 1 いたにあい

あい (藍) (名) 2 藍

十二63 8 図 即ち赤・黄・藍・白・黒
の五色を横に並べたるものにて、
〈略〉。十二63 9 図 〈略〉、赤は漢人、黄は滿
洲人、藍は蒙古人、〈略〉を代表す
るなり。あいあらそう 「相争」 (四) 2 相争
ふ 《一ヒ》十133 4 図 年久しく相争ひて互に勝敗
ありしが、〈略〉。

十一52 2 図 當時支那は數國に分れて

互に相争ひ、戦亂止むことなかりしかば、〈略〉。

あいうえお 〈略〉〔五十首図〕 3 アイウエオ 〈略〉 あいうえお 〈略〉

一26 / アイウエオ 〈略〉〔第五巻付録参照〕

二1 / アイウエオ 〈略〉〔第五巻付録参照〕

三24 / あいうえお 〈略〉〔第五巻付録参照〕

あいおん 〔哀音〕(名) 1 哀音

十二101 / 人なつかしげに寄り来る鹿の、春はわけてもやさしく、秋より冬にかけて哀音しきりに人の眠をさますも、〈略〉。

あいかわらず 〔相変〕(副) 3 相カハラズ 相かはらず

七51 / 8 〈略〉、朝カラ晩マデ、相カハラズ、トンテンカン、トンテンカント、働イテキマス。

八84 / 父は「相かはらずせつからだね。」といったが、〈略〉。

九34 / 叔父さんも相かはらず丈夫で島々を廻つてゐるから、安心して下さい。

あいこう・する 〔愛好〕(サ変) 1 愛好する 《―スル》

十二134 / 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、〈略〉、自然美を愛好するやさしい性情を育成するのに與つて力があつた。

あいこく 〔愛國〕(名) 2 愛國

九36 / 7 〈略〉、正義の念と愛國の情とに死を恐れざるベルギー軍の防戦も、終に如何ともしがたく、〈略〉。

十二61 / 6 〈略〉、日の丸は熱烈燃ゆるが如き愛國の至誠を表すものともいふべきか。

あいこくしん 〔愛國心〕(名) 1 愛國心

十二134 / 萬世一系の皇室を中心として團結した國民は、〈略〉、熱烈な愛國心を養成した。

あいさくくん 〔愛作君〕(人名) 1 愛作君

七40 / 8 六月十五日 良助 愛作君

あいさつ 〔挨拶〕(名) 3 あいさつ

七98 / 5 ところが長盛がろくく、あいさつもせず、〈略〉。

八83 / 7 信吉は僕の両親に歸つて來たあいさつをすまずと、〈略〉。

十122 / 6 あいさつをしてもいいねいで、〈略〉、しかもよいいなことは言ひません。

あいさりもう・す 〔相去申〕(四) 1 相去り申 《―(シ)》

十一43 / 7 しかし幸に經過良好にて、熱も凡そ二週間餘にて全く相去り申候。

あいじ 〔藍地〕(名) 1 藍地

十二62 / 1 〈略〉、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、藍地に斜白十字の徽章ある後者の國旗とを合して一旗となし、〈略〉。

あいじちゅう 〔藍地中〕(名) 1 藍地中

十二62 / 9 〈略〉、藍地中の星章は、常に州の數と一致せしむるを定めとす。

あいしろあかさんしよく 〔藍白赤三色〕(名) 1 藍・白・赤三色

十二63 / 2 藍・白・赤三色を以て縦に染分けられたるは、フランスの國旗なり。

あい・す 〔愛〕(サ変) 3 愛す 《―ス・スル》

九42 / 9 〔圖〕『我に愛する良馬あり。今日の記念に獻ずべし。』

十126 / 1 校長も着實温厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く、〈略〉。

十二103 / 8 愛すべく美しき山野は、更に太古以來の歴史と結び文學と結びて、感いよく深きを覺ゆ。

あいず 〔合図〕(名) 11 あひづ 合圖

六30 / 3 蟻は虎の指のまたからくづつて、仲間の者にあひづをしました。

八76 / 神主は「支度」といふあひづの一番太鼓を鳴らした。

八77 / 五人の騎手は神に勝利をいのつて、第二のあひづを待ちかまへてゐる。

八83 / 二番太鼓の「並べ」のあひづに、五人の騎手は打連れて、拜殿のそばの大きな立石の前に並んだ。

八89 / 1 先生、どうして口がきけ

たんでせう、指であひづもしないのに。」

八89 / 3 指であひづをしたのは昔のこととて、今は口を見せてものを言はせませう。

九106 / 3 馬はどれも皆張りきつて、〈略〉、乗手のあひづが下るのを待ちかまへてゐた。

十二21 / 4 掛の人が其の直で賣渡すといふあひづに手を打つて、取引が成立ちます。

十79 / 9 合圖のかねが鳴るとすぐ動き出す。

十128 / 2 造船部長の指揮に於て吹く進水主任の號笛を合圖に、着々と進み行く進水作業。

十二78 / 6 其の時魚見やぐらの上で旗を揚げて、まぐろの群が網にはいつたといふ合圖をすると、〈略〉。

あいず・す 〔合図〕(サ変) 1 合圖す 《―シ》

十一28 / 9 鉄砲組に合圖して銃火をあげせかけたれば、〈略〉。

あいせつ・す 〔相接〕(サ変) 1 相接す 《―セ》

十一32 / 1 本土の西、近く九州と相接せんとする處、下關海峡あり。

あいそう 〔愛想〕(名) 1 愛想 じぶあいそう

十一71 / 1 或夏の半ば、宣長はかねて買ひつけの古本屋に行くと、主人は

愛想よく迎へて、〈略〉。

あいだ 〔間〕(名) 88 アヒダ あひだ
間 ↑かん ↓このあいだ

二184 マツノ木ノアヒダガダ
ンダン アカルク ナツテキマス。

三156 〔略〕、中ゆびとおやゆび
の あひだにあるのが人さし
ゆび、〈略〉。

三158 〔略〕、中ゆびとこゆび
の あひだにあるのがくすりゆ
びです。

三205 〔略〕、二人はまつやつ
じの あひだをあちらこちらへ
くぐつてとりました。

四396 日は雲の あひだ からや
さしい かほを出して、〈略〉。

四785 私の 下で、長い間しよ
んぼりとして居まして、〈略〉。

四796 私は長い間に子どもを
たくさん見ましたので、〈略〉。

四927 〔略〕、長い間つけねらひま
したが、手を出すすきはあり
ませんでした。

五272 ツバメハコチラニ居ル間ニ、
人ノ家ニスヲ作ツテ、ヒナヲソダテ
マス。

五566 松島は大小二三の島が、海
上三四里の間にちらばつてゐて、
〈略〉。

五572 あたりの高い所からもながめ
ますが、多くは舟に乗つて、島の間
を通つて見物します。

五722 〔略〕、一年ばかりの間は、べ
つだんくじやうも出なかつた。

五763 長い間の苦勞が病氣のもとで
あつたといふことだ。

五798 いころすのめかはいさうだと
思つて、兩耳の間をねらつて、頭の
上をすれ／＼にいました。

六148 僕がぐみをたべてゐる間に、
にいはんは初茸を五六本取つたやう
でした。

六234 兩方からおしよせて、ちんの
間がわづか三町ばかりになりました。

六694 京都は長い間の都ですから、
〈略〉。

六725 〔略〕、青い松の間に、五重
の塔や大きな寺の屋根が見えます。

六912 〔略〕、城の四方三里の間は、
人や馬でふさがつた。

七88 〔略〕横濱と東京との間には汽
車・電車の便あり。

七173 麥島やななね島の間にさいて
ゐるのは、ことに目立つて美しい。

七178 石垣の間でも、地藏様のかけ
でも、辻堂のえんの下でもさく。

七359 〔略〕通は廣くて平で、歩道と車
道の間に並木が植ゑてありますが、
〈略〉。

七438 謙信はそれをさつて、夜の
間に進んで信玄の陣へ攻入つた。

七477 二人は〔略〕むんずと組み、
兩馬の間にどうと落ちた。
七803 魚類ニハ〔略〕、岩ノカゲヤ

海藻ノ間ヲ泳グモノガアリ、〈略〉。

七1094 〔略〕彼岸ハ七日ノ間ニシテ、其
ノ中日ニ、春ハ春季皇靈祭、秋ハ
秋季皇靈祭ヲ行ハセラル。

八88 始の間はあまり甲乙はなかつ
たが、〈略〉。

八127 〔略〕どうか今日から一年の間、
あなたの方の村が五箇村の頭になつて
下さい。

八302 〔略〕、炭を焼く間ねとまりを
するための小屋を建てる。

八316 〔略〕、四五日の間、中の木を
むし焼にする。

八351 〔略〕、一生の間仕合はせのよ
い事がつゞいたと申します。

八429 〔略〕、白木綿を二反づつ、
名札をつけて、三日の間に間違なく
持参致せ。」

八432 三日の間に一同は白木綿を一
反づつ持つて参りました。

八492 スナハチ一間餘モアルツバサ
ヲハツテ、數分ノ間羽バタキ一ツセ
ズ、空中ヲノシテ行ク。

八502 巢ハ至ツテソマツナモノデ、
人ノヨリツケナイ絶壁ノ間ヤ老木ノ
上ニ、〈略〉。

八505 ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒
クテ、〈略〉。

八712 〔略〕シカゴとニューヨークの間
は九百八十哩もありますが、〈略〉。

八824 落ちる時の勢が加はると、長
い間には、思ひの外の事をする。

八826 長い間かゝらなくても、工夫
して大仕掛に水を落せば、大きな仕
事をする。

八858 〔略〕といふ間も、信吉は
のびるやうにして奥の方を見た。

八1022 〔略〕君等は僕を苦しめようと
して、此の数日の間少しも食物を送つ
てよこしませんでした。

八1134 大將はこれから後、一生の間
「寒い。」とも「暑い。」ともいはな
かつたといふ。

九85 〔略〕美しい魚の群が、珊
瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行
く。

九234 〔略〕そこで此の父も、〈略〉、四
十餘年の間、寢食を忘れて其の道の
書物を読み、〈略〉。

九312 〔略〕、もう／＼と立ちこめる
水煙の間から近く瀧をながめるのも
よく、〈略〉。

九5110 〔略〕、それから又長い間忠
實に勤めて、〈略〉。

九627 〔略〕、傳令員は號笛を吹きな
がら、〈略〉、つり床の間をぬつて行
く。

九728 其の中に汽車は山の間を出て、
大きな川の見える所に出た。

九7410 此の邊から野邊地あたりまで
の間には、所所に放し飼の馬の群れ
てゐるのが見えた。

九971 〔略〕あの雷鳥といふ珍しい鳥も、
〈略〉はひ松の間に居るのです。

九一〇 八 やがてもうくと上る白煙の間から、〈略〉。

十 四 六 此所を出でて舊御苑に入り、木立の間の細道をたどれば、〈略〉。

十 七 八 〈略〉、わづか十数年の間に四方の國々を征服して、〈略〉。

十 二 〇 其の間、買手の競争する聲と掛の人の聲と入亂れて、非常ににぎやかです。

十 二 二 此の町では、二歳駒の市が十日間も續いて、其の間には千頭からの賣買があり、〈略〉。

十 三 五 昔、太平・大西兩洋の間を往來する船は、〈略〉。

十 四 二 しばらくの間めいゝがこんな風に働いてゐると、〈略〉。

十 七 五 面白いのは、三日四日續いて寒ければ、其の次には又其のくらの間暖さが續くといふやうに、〈略〉。

十 一 三 九 もうくと立ちこめる白煙の間から見ると、〈略〉。

十 一 六 十 まだ芽の出ないはぜの木の間を通り、〈略〉。

十 一 八 九 白梅は今ちやうど眞盛りであるが、其の間に咲きかけの紅梅が點々と交つて美しい。

十 一 九 六 〈略〉、霜よけのわらの間から黄色い夏みかんがちら／＼見えてゐるのも珍しい。

十 一 一 六 九 〈略〉、本棚に並んでゐる雑誌の間へそれ／＼お入れになりまし

た。

十 一 一 九 五 此のやうに、人々相互の間の訴訟を裁判するのを民事裁判といひ、〈略〉。

十 一 三 八 九 〈略〉、今まで兩方の枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて〈略〉。

十 一 四 〇 四 使ひみちによつて、三十年目から五六十年目ぐらゐの間に伐るのださうだから、〈略〉。

十 一 四 四 四 君は〈略〉、數年の間一度も筆を取り給ひし事なし。

十 一 五 二 一 其の間〈略〉、苦心はなかく／＼通りでない。

十 一 五 二 五 元來ゴム液は、幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るのだから、〈略〉。

十 一 六 〇 六 〈略〉、緑草の間に羊の群をなして遊ぶ様は、實にのどかである。

十 一 六 一 三 汽車は密林の間をあへぎ／＼通り抜けて、〈略〉。

十 一 六 六 八 此の方法は各國民の間に、廣く又極めて長い間行はれてゐたものであるが、〈略〉。

十 一 六 六 九 〈略〉、廣く又極めて長い間行はれてゐたものであるが、〈略〉。

十 一 七 六 十 宣長は眞淵の志をうけつぎ、三十五年の間努力に努力を續けて、遂に古事記の研究を大成した。

十 一 九 二 九 太陽暦は春分から春分までを一回歸年といつて、それを本としてこしらへたものだ。其の間は約

三百六十五日と四分の一だが、〈略〉。

十 一 九 四 一 こんな不便な曆でも長い間の習慣で、今でも使つてゐるものがあるやうだ。

十 一 一 〇 七 中にも十三四ばかりの子供が、各國人の間にまじりてかひ／＼しく立働ける様を見ては、〈略〉。

十 一 五 七 四 やがて打續く松並木の間を過ぎて境内に入り、〈略〉。

十 一 一 三 一 〇 〈略〉、生物は總べて長年月の間には次第に變化し、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。

十 一 一 五 五 我が國にてかゝる新聞の現れたるは維新前後にして、其の後數十年の間に驚くべき發達を遂げた。

十 一 二 〇 七 黒い程こゝろの緑の葉の間から、其の一つ／＼が日の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。

十 一 三 一 九 〇 〈略〉、車道と人道との間には、緑したゝる街路樹が目もはるかに連なつてゐます。

十 一 三 五 五 やがてベルリンに入つて見ても、勤儉の美風が市民の間にあふれてゐて、〈略〉。

十 一 八 三 二 〇 それより一年ばかりの間、風波をしのぎ、飢寒と戦ひ、〈略〉。

十 一 九 四 三 さうして〈略〉、六年の間種々の苦行を試みた。

十 一 九 五 一 〇 彼は此の心境の尊さに數日間唯うつとりしてゐたが、〈略〉。

十 一 一 三 六 二 今日我が國が列強の間に立つて世界的の地歩を占めた以上、〈略〉。

あいだ (援助) 4 間

十 一 一 〇 八 〇 〇 〇 今日小包にて粗末なる物、赤さんの御着物にもと御送り致し候間、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一 一 〇 四 〇 〇 〇 尚御生前御好物なりしやうかん一折、小包便にて御送り申し上げ候間、御佛前へ御供へ下されたく候。

十 一 四 二 七 〇 〇 〇 尚當地産の葛粉少少御見舞の印までに御送り申上候間、御受納下され度候。

十 一 一 一 〇 三 〇 〇 〇 〇 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

あいて 「相手」 (名) 9 アヒテ 相手

↓ おあいていたす・そうだんあいて

三 七 六 五 又鳥ノ方へ行キマス、ト「略」。

「略」。

七 四 九 九 〈略〉、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音ガ聞エマシタ。

七 七 四 八 妻もまた「せつかくです

が。」といつて、相手になりません。

八 一 一 六 〇 〇 〇 信作が落ちたのかまはず馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、

〈略〉、相手を助けてやつたのはえらい。

八 一 一 八 〇 〇 〇 相手の信作があゝの通りだか

う・すれあう・だしあう・つきあう・とりあう・にあう・ねじあいおしあう・はなしあう・ひきあう・ひっぱりあう・まにあう・みあう・みせあう・むかいあう・ゆずりあう・よびあう
六八三 自分たち程の子どもが出て来て、象の前足にだきついて見せた。子どもの手がやつと合つてゐた。

白帆が浮んでゐるのは、〈略〉。
十一五九 主な通にはアカシヤの並木が青々と茂つてをり、〈略〉。
あおい「青」(形) 10 アライ 青い
一四五 ミガナリマシタ。サルガミツケテトリマシタ。アライノヲカニニナゲツケマシタ。
三五一 ツイコノアヒダウエタ田ガ、モウアンナニ青クナリマシタ。

あう「敢」(下二) ↓とりあえず
あえぐ「喘」(五) 4 あへぐ「ギ」

十一六三 汽車は密林の間をあへぎ

〈通り抜けて、やがてトンネルにはいる。〉

十一六三 汽車は密林の間をあへぎ
〈通り抜けて、やがてトンネルにはいる。〉

十二九四 〈略〉、牛はつかれ果ててあへぎあへぎ働いてゐる。

十二九四 〈略〉、牛はつかれ果ててあへぎあへぎ働いてゐる。

あお「青」(名) 2 青 ↓まつさお
九八四 青・緑・紅・紫、目のさめるやうに美しい魚の群が、〈略〉。

十〇三 成程、緑色の絹糸で作つたのかと思はれるやうな葉もあれば、赤や黄や青や紫のまだらの美しいものもある。

あおあ「青青」(副) 2 青々
九七五 青々とした波の上に、點々と

あおあ「青青」(副) 2 青々
九七五 青々とした波の上に、點々と

あおあ「青青」(副) 2 青々
九七五 青々とした波の上に、點々と

五五八 其の洲の白い砂の上に、青い松が一面に立つてゐて、長い橋のやうに見えます。

六三三 銅ハニ使ハレテキテモ、時々青い物ヲ出シマス。

六七四 〈略〉、青い松の間に、五重の塔や大きな寺の屋根が見えます。

七五二 先づいかりをあげて港を出て行きますと、〈略〉。どちらを向いても青い水ばかりです。

八〇一 かうして二三日たちますと、〈略〉、顔の色も青くなつて来て、からだに全く力がなくなりました。

九〇二 〈略〉、井戸端の柿の木に柿がすゞなりになつてゐるのが目につく。〈略〉。まだ青いが早く甘くなるたちだから、もう直に食べられる。

十一六一 〈略〉、眼下には廣々とした十勝の大平野がはるばると續いて、末は青い大空に接してゐる。

十二三九 薄暗いらふそくの火のもと

十二三九 薄暗いらふそくの火のもと

十二三九 薄暗いらふそくの火のもと

で、色の青い元氣のなささうな若い男が靴を縫つてゐる。

あおがきやま「青垣山」(名) 1 青垣山
十二〇三 げにや「めぐらせる青垣山に、こもれる大和うるはし。」と歌ひしにそむかず。

あおぎ・いる「仰居」(上二) 1 仰ぎ
ある「一書」

九八五 信吉は感心して、熱心に空を仰ぎあしが、驚けるやうに聲をあげて、「略」。

あおぎだす「扇出」(五) 1 あふぎ
出す「一シ」

六九〇 すると象は鼻で、其所にあつたうちはを拾つて、子どもの顔をあふぎ出した。

あおぐ「仰」(五) 9 あふぐ 仰ぐ
「一イ・ガ・ギ」

五二一 大日本、大日本、われら國民七千萬は 天皇陛下を神ともあふぎ、おやとしたひてお仕へ申す。

七三九 十日ばかり前に、私ども中學の二年生が修學旅行に行つて、白玉山上の表忠塔をあふぎ、〈略〉。

七九二 「略」と、おとうさんは朝起きるとすぐ空を仰いでかうおつしやつた。

八二五 此の父母の下に、此の家に育つた乃木大將が、〈略〉、武人の手本と仰がれるやうになつたのは、〈略〉。

九六五 軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は、〈略〉。

十一〇四 彼が他日大統領となり、世界の偉人として萬人に仰がれるやうになつたのは、〈略〉。

十二九四 今や釋迦は衆星の中の満月の如く國中から仰がれる身となつたが、〈略〉。

十二一〇 北に大内裏の宮殿を仰ぎ、朱雀の大路南に走りて、南端に羅城門をふまへたる古の奈良の都は、〈略〉。

十二三二 さうして直に静岡の大總督府にはせつけて議をまとめ、更に京都に上つて勅裁を仰ぎ、とう／＼徳川方の願意をとほさせた。

あおじろい「青白」(形) 1 青白い
「一ク」

十一五五 ものすごい程青白くかはつた老砲手の顔には、決心の色が浮んだ。

あおぞら「青空」(名) 3 青空
三八一 青空 高くそびえたち、〈略〉、ふじは日本一の山。

十四三 〈略〉、高い／＼青空を、ひわの一群が身軽さうに飛んで行く。

十一三四 瀬戸内海の沿岸には〈略〉、汽船絶えず通航して、遠く近く黒煙の青空にたなびくを見る。

あおた「青田」(名) 4 青田
五六四 あおの青田の中にあるのだから。あれは製絲工場で、〈略〉。

あおの青田の中にあるのだから。あれは製絲工場で、〈略〉。

あおの青田の中にあるのだから。あれは製絲工場で、〈略〉。

あおの青田の中にあるのだから。あれは製絲工場で、〈略〉。

あおの青田の中にあるのだから。あれは製絲工場で、〈略〉。

あおの青田の中にあるのだから。あれは製絲工場で、〈略〉。

五66 2 道の兩がはは一面に青田で、ちやうど田の草取のさい中です。
 五68 5 此のあたりの青田も、其の頃は大きいあれ地で、〈略〉。
 九69 4 目がさめると、もう夜が明け、汽車は果もなく續いてゐる。青田の中を走つてゐた。
 あおだいしょう 「青大将」(名) 1 青大将
 九35 5 〈略〉、大きな青大将が、向ふの水たまりの所をうねつて、のろのろと草の中にかくれて行く。
 あおのくさりと 「青鎖戸」(名) 2 青のくさり戸
 十二104 4 これからが世に恐しい青のくさり戸である。
 十二104 9 此の青のくさり戸にさしかゝる手前、路をさへぎつて立つ岩山に、〈略〉。
 あおのけ 「仰」(名) 1 あをのけ
 九110 4 中尉はあをのけになつて倒れてゐる。
 あおのどうもん 「青洞門」(課名) 2
 青の洞門 青の洞門
 十二目8 第二十一課 青の洞門
 十二103 10 第二十一課 青の洞門
 あおのり 「青海苔」(名) 2 アヲノリ
 七84 四 アヲノリ
 七85 6 先ツタベルモノニハ、コンブ・ワカメ・アラメ・ヒジキ・アマノリ・アヲノリ・モツクナドガアリ、〈略〉。

あおば 「青葉」(名) 1 青葉
 五20 7 ゆふべの雨がはれて、青葉の上に日が氣持よくつてゐます。
 あおもり 「青森」(地名) 1 青森 ↓
 とうきようからあおもりまで
 九76 5 午後二時二十分、汽車は青森に着いた。
 あおもりけんかみきたぐん 「青森県上北郡」(地名) 2 青森県上北郡
 十二49 7 十和田湖は一部分秋田縣鹿角郡に屬し、其餘は青森県上北郡に屬してゐる。
 十二51 四 青森県上北郡
 あおもりゆき 「青森行」(名) 1 青森行
 九67 8 午後六時、叔父さんと一所に、上野驛から青森行の列車に乗つた。
 あおやま 「青山」(地名) 1 青山
 十一4 四 青山の神宮前停留場にて電車を下り、廣き参道を行くこと十町ばかりにして神宮橋に達す。
 あおりたゝてる 「燭立」(下) 1 あふり立てる 「一テ」
 七22 4 此の時義貞が方々へ火をかけさせますと、濱風が之をあふり立てたからたまりません。
 あおる 「燭」(五) 1 あふる 「一ル」
 九22 3 まくらもとに置いてある行燈の光はうす暗く、たて切つてあるしやうじのやぶれを、秋風がはたはたとあふる。

あか 「赤」(名) 9 赤 ↓ あいしろあかさんしよく・まっか
 五61 1 四 赤・黄・みどりやむらさきと、七つの色をならべて、空のまぎぬへ一筆に、だれがかいたか、虹の橋。
 十103 7 成程、緑色の絹糸で作つたのかと思はれるやうな葉もあれば、赤や黄や青や紫のまだらの美しいものもある。
 十一125 2 取分け美しかつたのは電燈の笠で、赤・黄・紫・緑とりどりに目もさめるばかりであつた。
 十二62 7 四 アメリカ合衆國の國旗は〈略〉。即ち赤・白合はせて十三條の横筋は、獨立當時の十三州を表すものにして、〈略〉。
 十二63 5 四 〈略〉、黒・赤・金の三色を横に染分けたるものはドイツの國旗なり。
 十二63 8 四 國旗の色彩が其の國の人種を表すものに、支那の國旗あり。即ち赤・黄・藍・白・黒の五色を横に並べたるものにて、〈略〉。
 十二63 9 四 〈略〉、赤は漢人、黄は滿洲人、藍は蒙古人、白は回疆人、黒は西藏人を代表するなり。
 十二64 1 四 イタリアの國旗は、緑・白・赤の三色を縦に染分け、中央の白地中に王家の紋章を表せり。
 十二64 4 四 〈略〉、其の家の紋章の色なる白と赤とに、統一の成功を祈る

希望の色として緑を加へ、〈略〉。
 あかあか 「赤赤」(副) 1 赤々
 十41 2 向ふの山の頂に日の光が赤々とさして來た。
 あかい 「赤」(形) 25 アカイ あかい 赤イ 赤い 「一イ・一ク」 ↓ うすあかい
 二77 四 「ワタクシハアノアカイ大キナハナガスキデス。」
 二40 5 〈略〉、目ハナンテンノミデス。アカイ小サナ目デ、カハイラシウゴザイマス。
 二76 1 ソノ大キナカホハ火ノヤウニアカク、イビキハカミナリノヤウデシタ。
 三18 6 四 あかいきものをきてゐます。
 三71 6 それから、あの赤いじゅばんはねえさんのので、ねずみ色のもんつきはおかあさんのです。
 四11 8 四 「やつとすんだ。」と見上げる空に、あすも天氣か、夕日が赤い。
 四24 4 〈略〉、二つ三つとりのこしてある柿が、赤い玉のやうに光つてゐます。
 四61 7 〈略〉、其のさをの先には、ひらいた赤い扇がつけてあります。
 四66 6 赤い扇はかなめのきはをいきられて、〈略〉。

五103 罫 「頭が八つ、尾が八つある大蛇で、目はほづきのやうに赤く〈略〉。」

六127 罫 「ソレデモ鐵ハデキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」

六144 松山の入口で、赤くなつてゐたぐみを一枝折ると、〈略〉。

六102 ねえさんは赤いたすきをかけて、手洗鉢の水をかへてゐました。

六102 7 〈略〉、しやくやくが赤い芽を出してゐました。

七112 さうしてさをの先に、赤いしるしのあるはんでんをしぼりつけて〈略〉。

八14 黄色なのはならやくぬぎで、赤いのはかへでや櫻やぬるである。

八246 罫 「それ程首がほしいなら、明日の晝頃、赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」

八247 罫 「〈略〉、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」といひました。

八252 〈略〉、果して赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着た人が來ました。

八253 〈略〉、赤い着物を着た人が來ました。

九324 〈略〉、やぶかうじの赤い實に並んで、春蘭のつぼみのふくらんだのも見える。

九596 赤いたすきを掛けた女たちがよい聲で歌をうたふと、へうきんな

五平ちいさんが、時々へんな掛聲をして皆を笑はせる。

九1005 其の隣の畠にしやうがが、根ぎはの赤い所を少し土からあらはして、ぎやうぎよく並んでゐるのも美しい。

十一1235 細長い管の一端を、とけたガラスの中に突つこんで引出すと、先に赤い玉がくつついてゐる。

十二397 妹の顔はさつと赤くなつた。

あかい 赤色 (名) 2 赤色

十4510 喜三右衛門は、其の日から赤色の焼付に熱中した。

十765 罫 すみきつた空氣の中に煉瓦の赤色や、松の緑色などが鮮かに浮出して見えるのは實にきれいです。

あかこ 赤子 (名) 2 赤子

七845 〈略〉、象ヲ鯨ニクラベルト、赤子ト大人トヨリモ、モツトチガフ。

八343 さうして教へられた場所へ行つて見ますと、望の赤子は居ませんでした。

あかさん 赤 (名) 1 赤さん

十1003 罫 今日小包にて粗末なる物、赤さんの御着物にもと御送り致し候間、〈略〉。

あかし 赤 (形) 2 赤シ 赤し

《一ク・一シ》

八216 罫 揚子江ハ〈略〉、河口ヨリ海上百里ノ間、海水コレガタメニ赤シトイフ。

十897 罫 こずゑ明るき林を行けば、

やぶかうじの實木の根に赤く、〈略〉。

あかしさん 赤石山 (地名) 1 赤石山

六72 罫 「信州の槍岳や赤石山で、どれも二万尺以上ある。」

アカシヤ (名) 1 アカシヤ

十一596 主な通にはアカシヤの並木が青々と茂つてをり、〈略〉。

あかす 明 (五) 2 明かす 《一シ》おあかしくださる

六628 やがてうばをも呼入れて、三人は其の夜をなみだの中に明かしました。

十二726 王は二三の忠臣にかしづかれて、とある小屋に一夜を明かしたが、〈略〉。

あかちゃん 赤 (名) 3 あかちゃん

三125 あかちゃんがなき出すと、すぐそばへよつて、〈略〉、子もりうたをうたひます。

三134 それでもまだあかちゃんがなくなるときには、〈略〉。

三136 罫 「おかあさん、あかちゃんにおちちをのませてちやうだい。」

あかつき 暁 (名) 1 あかつき

十一2310 罫 時は天正十一年四月二十日のおかつき、十三箇所のうちなる大岩山のとりでより、〈略〉。

あかとんぼ 赤蜻蛉 (名) 1 赤とんぼ

九1019 空には赤とんぼが幾つともなく飛んでゐる。

あかみ 赤 (名) 1 赤み

六265 庭の菊も白い花びらに赤みがさして來た、霜にあたつたからだらう。

あかむらさき 赤紫 (名) 1 紅紫

七172 此の頃はれんげさうの花ざかりである。〈略〉、田の形其のまゝに紅紫のもうせんをしきつめたやうに見える。

あかり 明 (名) 5 アカリ あかり

一385 オチヨサンノウチデハ、オザシキニアカリガツイテキマス。

二196 コチラノクライモリノ中ニミエルノハ、ドコノウチノアカリデセウ。

二584 イツモアナタニツイテキマスガ、日ヤ月ガデテキナカツタリ、アカリガツイテキナカツタリスレバ、〈略〉。

七594 罫 〈略〉、燈臺のあかりを知ることは、船に乗る者に取つて、はなはだ大切なことなのであります。

八642 罫 今風であかりがきました。

あがり 上 (名) 1 上り ↓あめあがり

九49ノ罫 それがすむとやがて夏蠶の上りだ。

あかりとり 明取 (名) 1 あかり取り

十二1107 洞門の長さは實に三百八間、

高さ二丈、幅三丈、川に面した方には處々にあかり取りの窓さへうがつてある。

あがりはじめる 「上始」 (下二) 1

上りはじめる 《一メ》

五468 昨日からうちの蠶が上りはじめました。

あがる 「上」 (四・五) 27 アガル 上

ル 上る 《一ツ・ラー・リ・ール》

うきあがる・おあがりくださる・おあがりなさる・おあがる・おきあがる・おどりあがる・かけあがる・すりあがる・たちあがる・つきあがる・できあがる・とびあがる・のびあがる・はいあがる・はねあがる・ひあがる・まいあがる・めしあがる・もちあがる・もりあがる

二692 罎 アレアレ アガル、ヒカウ

キガ。

二696 罎 ズンズン アガル、クモ

ノ上。

三533 罎 そんなところとどく

ものか。やねへ上つてはたけ。

三573 罎 《略》、毎日字をならひま

した。ずんずん手が上つて、の

ちには名高い書手となりまし

た。

四45 今年田がよく出来た

ので、ぼんにはそのおいはひ

の花火が上るさうです。

四154 罎 《略》、イマ一足デヲカへ

上ラウトイフトコロデ、《略》。」

トイツテワラヒマシタ。

四623 舟はなみにゆられて、上

つたり下つたりします。

五468 昨日からうちの蠶が上りはじめました。上る頃には、蠶のからだ

がすき通るやうになります。

五494 今桑をたべてゐる蠶も、明日

の朝までには、たいてい上つてしま

ふさうです。

六43 土間でこぼれもみを拾つてゐ

たにはとりが、俵の山へ上つてとき

を作りました。

六367 それでも義経は、太刀で熊手

をふせぎ、とうとう弓を拾ひ上

げました。陸へ上つた時、《略》

六825 《略》、敵の船は高く上ること

が出来ない。通有はほぼしらをた

ふして、之をはしこにして、敵の船

へをどりこんだ。

七231 村の西にくぬぎ林がある。そ

れを通りぬけて四五町上ると、《略》。

七241 晒木綿のづきんをかぶつて、

雨ざらしになつていらつしやるが、

何時もお花が上つてゐる。

七241 時々は線香の上つてゐること

もある。

七255 塚の前に《略》石が立つてあ

て、其の前に時時新しい馬のくつが

上つてゐる。

八511 はね起きて見ると、《略》せ

いろいろからは、盛にゆげが上つてゐ

た。

八533 二かきね目のせいろうから、

ゆげが上るまでに、少し間があつた。

九673 朝日にかゝやく軍艦旗が、海

風にひらめきながら、しづくと上

つて行く様は、《略》。

九1077 やがてもうくと上る白煙の

間から、《略》。

九1127 罎 先日遊びに上り候節御約

束致し候三毛の子猫、《略》。

九1129 罎 近き中に頂きに上りたく

候に付き、《略》。

十347 かうして前後三段に上つた船

は、海面より約二十六メートルも高

い水面に浮ぶのである。

十1079 罎 近き處ならば早速上り候

て御世話も致すべく候へども、《略》。

十一858 その中、先に進んでゐた者

が三人列から離れて船に上つた。

十一8510 僕も急に元氣がなくなつて、

一所に船に上らうかと思つたが、

《略》。

十二351 罎 《略》、又工場といふ工場

には盛に黒煙が上つてゐました。

あかるい 「明」 (形) 12 アカルイ

あかるい 明るい 《一イ・ーク》

二184 マツノ木ノアヒダガダ

ンダン アカルク ナツテ キマス。

二187 一メンニ アカルク ナツテ、

ヒルノヤウデス。

四283 電とうはらんぶとちがつ

て、へやのすみずみまであかる

く、《略》。

七102 潮がずんくと下がるので、舟

はすすと進んで、たちまち海へ出

た。ぱつと明るくなつた。

九323 何時もはうす暗い程茂り合つ

てゐる兩がはの木立も、まだ若葉だ

けに、下草まで見えるぐらゐ明るい。

九608 東の空が明るくなると、《略》。

九1046 だんく明るくなつて来た。

十623 罎 とても明るいうちに山本ま

ではお着きになれますまい。

十一413 あ、西の空がほんのり明る

い。

十二421 折から燈がぱつと明るくな

つたと思ふと、ゆらくと動いて消

えてしまつた。

十二528 暗い箱の中にしまひ込まれ

てゐた小さな鐵のねちが、《略》、明

るい處へ出された。

十二1174 罎 一體最も理想的な燈火は

太陽の光のやうに明るくて、しかも

ほたるの光のやうに熱をとまはな

いものであります。

あかるし 「明」 (形) 1 明るし 《一

キ》

十896 罎 こずゑ明るき林を行けば、

《略》。

あかれんが 「赤煉瓦」 (名) 1 赤れん

ぐわ

五1005 東京停車場は《略》。赤れん

ぐわの三階造で、間口が百八十四間

もあります。

の見ゆるかな、
すゝきがはらの秋

秋田杉

つて汝に返しあたへる。

九二三 文韻 きざみく^て、明方の

鶏鳴けば、夜のとぼり しづかにあきて、ほのくくと 東の窓はしらみたり。

あ・く 「飽」(四) 1 あく 《一カ》

十113 図 二荒の山もと 木深き處、

《略》、ひねもす見れども あかざる宮居。

あ・く 「明」(下二) 3 明く 《一ク

レ・一ケ》

九25 図 よき日は明けぬ、さわやかに。

十一28 図 明くれば二十一日の朝、

盛政は賤嶽より西北に當れる高地に兵を引きまとめたりしが、《略》。

十一47 図 夜明けて住持、畫師に向ひて、《略》。

あ・く 「開」(下二) 1 明く 《一ケ》

七34 図 《略》、谷あひの家窓明けて、夜に親しむ時は來ぬ。

あ・く 「上」(下二) 6 あぐ 上ぐ 舉ぐ 《一グル・一ゲレ・一ゲ》 ↓ おん

うかがいもうしあぐ・おんおくりもうしあぐ・おんくやみもうしあぐ・おん

さっしもうしあぐ・おんしらせもうしあぐ・おんねがいもうしあぐ・きこえ

あぐ・すくいあぐ・ねがいあぐ・はりあぐ・まきあぐ・まちあぐ

九80 図 石安工場と筆太に、小屋根に上げし看板が 《略》。

十120 図 拍手かつさい、天地をとどろかす萬歳の叫、勇壯なる軍樂の調、

工場といふ工場、船といふ船の汽笛

が一せいにあぐる歡呼の聲。

十130 図 主上さきに笠置におはせし

時早くも義兵を擧げしが、《略》。

十134 図 高德此の故事をひきて、やがて忠臣の起りて勤王の兵を擧げ、《略》。

十一49 図 少時より學問に勵み、長じて後魯の君に仕へ、大いに治績を擧げしかども、奸臣の爲にさまたげられ、《略》。

十二45 図 今其の主要なるものを擧ぐれば、杉・檜・《略》等なり。

あくしゅ 「握手」(名) 2 握手 ↓ りようしようぐんのあくしゅ

九37 図 《略》、エンミツヒ將軍はみづから進んで握手を求め、《略》。

九43 図 『さらば』と、握手ねんごろに、別れて行くや右左。

あくしゅう 「惡臭」(名) 1 惡臭

九21 例ヘバ 《略》、惡味や惡臭ノアル蝶ノ羽ニハ美シイ色ドリガアル

ヤウナモノデアル。

あくふう 「惡風」(名) 1 惡風

八23 例 鳳凰は役人になつた時から、どうかして首取の惡風を止めさせた

いものだと思ひました。

あくまで 「飽迄」(副) 6 アクマデ

あくまで 八48 図 《略》、トガツテカギノ如クニ

見エル爪、コゲ茶色ノ羽、アクマデモガンジヨウナツツサ・尾、何所ニ一分ノスキモナク、強ミガ全身ニミ

チミチテキル。

十一120 図 鐵眼の深大なる慈悲心と

あくまで初一念をひるがへさざる熱心とは、強く人々を感動せしめしにや、《略》。

十二410 図 停車場の外に出づれば、秋晴の空はあくまですみで、暖さ春の如し。

十二132 ダーウィンは興味を覺える

と、あくまでそれにこる性質で、《略》。

十二124 徳川方も事ここに至つては、

あくまでも戦ふ覺悟をきめて、《略》。

十二136 堅忍不拔あくまでも初一念を通すねばり強さが缺けてはゐない

か。

あくみ 「惡味」(名) 1 惡味

九21 例ヘバ 《略》、惡味や惡臭ノアル蝶ノ羽ニハ美シイ色ドリガアル

ヤウナモノデアル。

あくる 「明」(連体) 2 明クル 明くる

四38 図 フクロフガ鳴クト、其ノ明クル日ハ天氣ガヨイカラ、《略》。

六63 図 さうして其の明くる年の春

舞姫に出ることになつたのでござい

ます。

ごろ・よあけまえ

あけ(名) ↓ おびあけ・ひきあけ・りくあけする

あけおろし 「上下」(名) 1 上げ下し

五46 図 米をつくの、上にもうす

をさかさにつるしておけば、きねの上げ下しに米がつける。

あけがた 「明方」(名) 1 明方

九21 図 きざみくで、明方の

鶏鳴けば、《略》。

あけく 「挙句」(名) 1 あげく

十二105 図 さていろくと思案したあ

げく、遂に心を決して、《略》。

あけくれ 「明暮」(名) 1 あけくれ

十二122 図 夢にのみ見し山川も、

あけくれにしたひし家も、まのあたり近く迫りぬ。

あけしお 「上潮」(名) 1 上げ潮

七15 図 舟は上げ潮に乗つて、をかの

方へ動きはじめた。

あけそめる 「明初」(下二) 1 明け

そめる 《一メ》

十二95 図 《略》、夜はほのくと明け

そめた。

あけはじめる 「明始」(下二) 1 明

ケハジメル 《一メ》

六33 図 病院ノ前ノ酒屋デハ雨戸ヲ明

ケハジメタ。

あけはなし 「明放」(形状) 1 明けは

なし

十一95 図 それは三方が丸太の壁で、

一方は明けはなしになつてゐて、戸

も窓も床もないものであつた。

あける 「明」(下二) 7 明ケル 明

ける 《一ケ・一ケル》

四356 其ノ中ニ夜ガ明ケルト、

目ガ見エナクナルノデ、《略》。

八341 婦人は大いに喜んで、夜の明

けるのを待つて、すぐに其の山へ上

りました。

九693 目がさめると、もう夜が明け

てゐて、汽車は果もなく續いてゐる

青田の中を走つてゐた。

十256 夜がほの／＼と明けた頃、

《略》、かの難破船を見とめた。

十485 其の夜喜三右衛門は窯の前を

離れないで、もどかしさうに夜の明

けるのを待つてゐた。

十488 いや／＼夜が明けた。

十855 坑外に出ると、急に夜が明け

たやうで、日光の有難さをしみ／＼

感じると共に、《略》。

あける 「開」(下二) 29 アケル あ

ける 明ける 《一ケ・一ケル》もあ

けなさる

三33 トヲアケルト、ムカフノ

ソラガウスアカクナツテキマ

ス。

三464 《略》、おとひめのいつた

こともわすれて、玉手箱をあけ

ました。

三464 あけると、箱の中から

白いけむりがぱつと出て、《略》。

三667 私ハソレヲヒロツテ、フ

シノマン中ニ、キリデ小サナ

アナヲアケマシタ。

三691 《略》、フシニ小サナアナ

ヲタクサン アケマシタ。

三695 図 コンナニアナヲタクサ

ン アケテハダメダ。

四691 きずを見てやらうと思

つて、私がかごの戸を明けま

すと、《略》。

五158 先生がまどをすつかり明けて、

出しておやりになりました。

五195 図 鶏の光がまるでいなびかり

のやうで、わるものどもは目を明け

てゐることが出来ず、《略》。

五253 うちへかへつて、ふろしきを

明けて見ましたら、《略》。

五382 ちやうどかまを明けたところ

で、白いけむりが立つてゐました。

五924 毎日きまつた時刻に来て、私

のおなかを明けて持つて行きます。

七112 図 濁音半濁音文字の下は一字あ

けること

八338 しやうじを明けて見ると、小

さな犬ころが二匹、上になり下にな

りしてじやれてゐる。

八311 かまは《略》、後の方に煙出

の口を明けるのである。

十489 彼はふるふる足をふみしめて

窯をあけにかゝつた。

十一354 障子をあけてみるとまだ雨

が降つてゐる。

十一913 図 もつとおしまひの方をあ

けて御らん。

十一1185 図 「ジョージ、早く行つて

農場の門をしめる。人が何と言つて

も決してあけるな。」

十一1189 さうしてジョージに早くあ

けて通すやうにと言つた。

十一1192 図 僕はおとうさんから、誰

が來ても此の門をあけてはならない

と言ひつけられてゐるのです。

十一1194 するとジョージは、「《略》。」

と言つてどうしてもあけない。

十一1194 騎馬の人たちは、あけない

となぐるぞと言つておどしたり、

《略》。

十一1195 騎馬の人たちは、《略》、あ

けてくれ、ばお禮に金貨をやると言

つてすかしたりした。

十一1198 図 「おとうさんは、誰が來

ても此の門をあけてはならないと僕

に言ひつけました。」

十一1209 図 僕は、誰が來ても此の門

をあけてはならないとおとうさんに

言はれてゐるのです。

十一1222 シャベルでさく／＼かきま

ぜると、白い粉が一面に煙のやうに

立ちのぼつて、目も口もあけられな

い。

十二389 ベートーベンは急に戸をあ

けてはいつて行つた。

十二424 友人がそつと立つて窓の戸

をあけると、《略》。

あける 「上」(下二) 50 アゲル あ

げる 上ゲル 上げる 擧げる 揚げ

る 《一ゲ・一ゲル》 ↓ おあげ

なさる・おあげる・かきあげる・きづ

きあげる・さしあげる・しあげる・せ

りあげる・つきあげる・つくりあげ

る・つみあげる・とりあげる・のりあ

げる・はさみあげる・ひきあげる・ひ

ろいあげる・ふりあげる・まきあげ

る・まくりあげる・みあげる・もうし

あげる・ゆりあげる

二261 ワタクシハマイ日ミヨチ

ヤンノオモリヲシテアゲマス。

二262 ワタクシガアヤシテアゲ

ルト、ミヨチヤンハ《略》、ウマ

ウマトイヒマス。

二331 図 「オ年ダマニハナニヲ

アゲマセウ。」

三296 圖 「ねえさんこれをあげ

ます。」

三364 タイサウノトキアルキ出

スノハ左ノ足デ、オケイコ

ノトキアゲルノハ右ノ手デ

ス。

三417 図 そのおれいにりゆうぐ

うへつれていつて上げませう。

三448 図 それではこの玉手箱を

上げます。

三646 みよ子はさつとささの

小えだを上げて、《略》。」

三674 池ノ水デタメシテミル

ト、ウマク出来テキテ、高ク上

ゲルト、ヤネノ上マデトドキ

マス。

四三7 一 モズハ〈略〉、「キイ キイ」

ト カチドキヲ アゲマス。

四九4 二人はたいまつを上げて、

つくづくとかほを見合ひました。

五八2 話して上げようか。」

五二1 略、鯉が大きな口で、思ふ

ぞんぶん風をのんで、家のむねより

も高く尾を上げます。

五四2 もう桑の葉をたべないで、頭

を上げて、繭をかける所をさがしま

す。

五五1 喜んで、それから毎日其の

酒をくんで来て、おとうさんに上げ

ました。

五八1 大水が出なければよいがと

心ばいして、夜中に手をけやはき物

まですつかり二階へ上げました。

五八7 囲 おとうさんやおかあさんに

は、取りまぎれてまだ手紙も上げず

に居ります。

六二3 其の夜のことです、義仲は

略、両方から一度にとつときの

こゑをあげさせました。

六五8 サウシテ灰ノ中ヲカキマハシ

テ、上ゲテ見ルト、果シテ磁石ノサ

キニ釘ガタクサンツイテキタ。

六八3 さて主人に火事の話をして、

義捐金のことをいひ出すと、略、

粃や豆の種を分けて上げててもよいと

言つた。

て出て、どつとときの聲をあげた。

七二5 略、石が立つてゐて、其の

前に時時新しい馬のくつが上つてゐ

る。これは馬がけがをしないうやうに、

馬方が上げるのださうだ。

七四1 其の船に乗つてゐるなら、

鐵砲を上げる。

七四2 すると甲板の上で鐵砲を上げ

た者がある。

七四5 わかつたらもう一度鐵砲を

上げる。

七四6 すると、又鐵砲を上げたのが

かすかに見えた。

七四8 武田方が之を見て、聲をあげ

て喜ぶと、略。

七四9 上杉方はどつとときの聲をあ

げた。

七五3 先づいかりをあげて港を出

て行きますと、略。

八七5 神主は先づ神前で祝詞を上げ

て、略。

八二5 蕃人どもは聲を上げて泣きま

した。

八四3 此の爲替はほんのわづかで

すが、何か好きな物を買つて上げて

下さい。

八四6 略、母が私に、お友だち

をお呼びなさい、おこはでもふかし

て上げようと申します。

九三9 頭を上げてみると、それは石

井君であつた。

竿に軍艦旗があげられる。

九八6 信吉は感心して、熱心に空

を仰ぎみし、驚けるやうに聲をあ

げて、「略。」

九八7 北風は、略、得意さうに頭

を高くあげた。

九八9 其の時にはお互に目ざまし

い働をして、我が高千穂艦の名をあ

げよう。

九八9 此のわけをよくおかあさん

に言つてあげて、安心なさるやうに

するがよい。

九八9 水兵は頭を下げて聞いてゐた

が、やがて手をあげて敬禮して、

略。

九八9 私は思はず、「やあ、すつか

り變つた。」と聲をあげると、略。

九八9 喜三右衛門は、略、不意に

「これだ。」と大聲をあげた。

九八9 或日、略、たき火をして

ゐると、そばの黒い岩に火がつき、

煙をあげて燃出しました。

九八9 「命中、々々。」一同は歡呼の

聲をあげた。

九八9 うやくしく拜んでさて頭を

上げる、略。

九八9 略、さて四方より火

を放てば、天をもこがすばかりのほ

のほをあげて燃ゆる光景は、實にす

さまじきものに候。

九八9 本當に自治の精神に富んで

の適任者を擧げることだけを考へて、

決して私心をもたないのである。

九八9 例へば教育・衛生等の自治

團體の事業は、略、始めて其の効

果を完全に擧げることが出来る。

九八9 其の時魚見やぐらの上で旗

を掲げて、略。

九八9 八重の高潮かちどき掲げ

て、海の誇のあるところ。

あこがれる「懂」(下) 1 あこが

れる「一レ」

九八9 日頃から自然の色にあこがれ

てゐた彼は、目のさめるやうな柿の

色の美しさに打たれて、略。

あさ「朝」(名) 37 アサ あさ 朝

ぐんかんせい かつのあさ・まいあ

さ・まのあさ・よくあさ

三二2 略アサハヤクカラヒバ

リガサヘツツテキマス。

三六8 アルアサ、オカアサンガ

「ヒヨコガカヘツタ。」トオツシ

ヤツタノデ、略

三二7 雨ふべの雨でくさや

木のみどり いろますなつの

あさ、略。

四一2 うちがみさまの森で、あ

さからたいこのおとがします。

四一7 略、今日も朝から

せい出すおや子。

四六7 どんなにか鳴いたのでせ

うが、うちのものは朝まで

しらずに居ました。

四80 6 昨日おとうさんと朝九時の汽車で、軍たいに居るにいさんの所へ出かけました。
 五28 四月四日の朝、當番で僕が机の上をふいてみると、〈略〉。
 五42 朝、おさらひをすましてから、春子とつくしをつみに行きました。
 五32 7 ある朝早く、おとうさんがたびへお立ちになった時、〈略〉。
 五49 3 今桑をたべてゐる蠶も、明日の朝までには、たいてい上つてしまふさうです。
 五57 4 晴れた日、月の夜、雪の朝、いつ見てもよい景色です。
 五84 5 団 〈略〉、四日の日は朝からひどい雨で、〈略〉。
 六27 2 こんな寒い日にも、朝早くから、高い木の上をとびまはつて鳴いてゐる。
 六44 5 朝、雷が目をさまして見ると、月と日が居りません。
 六77 7 湖の上は朝からひじやうな人出である。
 六94 6 或朝、夜明頃、城中からうつて出て、どつとときの聲をあげた。
 七51 8 〈略〉 若イムスコガ、今デハ其ノ後ヲツイデ、朝カラ晩マデ、〈略〉、働イテキマス。
 七76 8 或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、〈略〉。
 七92 7 〈略〉。と、おとうさんは朝起きるとすぐ空を仰いでかうおつし

やつた。
 七110 9 団 「アシタノアサーパンノキ シヤデタツテイキマス。」
 八7 1 〈略〉、おびたらしい見物人が、朝早くから宮の境内へつめかけた。
 八83 3 〈略〉 信吉が、昨日の朝三年ぶりでハワイから歸つて來た。
 九11 10 団 朝早く起きて、井戸端に出づ。
 九14 9 団 机の引出より養鶏日記を出し、「四月二十五日朝、卯二つ」と記入す。
 九56 6 今日天気がいので、朝から麥を打つ音が方々で聞える。
 九62 4 「總員起し。」此の號令で、朝の静かさが忽ち破られ、〈略〉。
 九103 10 或朝の事であつた。
 九116 9 団 村の方々は、朝に夕にいろ／＼とやさしく御世話下され、〈略〉。
 十13 10 団 朝のかゝりはおそいし、晩のしまひは早い上に、とかく無責任な事はかりしてゐました。
 十16 7 団 〈略〉、今日は朝から、義雄君に案内してもらつて見物に行きました。
 十38 3 父は毎日、〈略〉、朝早くから行つて、夕方おそくまで働いてゐる。
 十40 8 団 「朝のうちに此のけやきだけぶつ倒したいと思つてね。」
 十77 10 団 此の頃は半分寒くなつて、朝は攝氏零度以下十何度といふきび

しさ、〈略〉。
 十一28 4 団 明くれば二十一日の朝、盛政は賤嶽より西北に當れる高地に兵を引きまとめたりしが、〈略〉。
 十二31 2 団 一昨日朝ロンドンを出發して午後早くパリに着きました。
 十二34 7 団 汽車でドイツの國內にはいつたのは朝まだほの暗い頃でしたが、〈略〉。
 あさいい 「浅」(形) 4 浅イ 浅い
 《一イ》
 六46 3 ダン／＼上流ニサカノボツテ、時ニハセ中ガ出ル程ノ浅イ所マデ上ツテ來ル。
 七12 3 浅い水たまりを歩くと足のうらがぬるりとした。
 七85 1 〈略〉、岸ニ近イ浅イ所カラ二三尺グラキソマデニハ、海藻ガ生エテキル。
 七87 2 一ガインイフコトハ出來ナイガ、先ツ綠色ノモノハ浅イ所ニ、〈略〉生エテキルノデアル。
 あさいと 「麻糸」(名) 1 麻糸
 六74 6 団 「春子、オ前ハ着物ヤ帶ノ地ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマスカ。」〈略〉。「麻絲。」
 あさがお 「朝顔」(名) 1 アサガハ
 一36 3 オハナガエンピツデアサガハヲカキマシタ。
 あさかげ 「朝風」(名) 1 朝風
 九69 9 窓から吹きこむ朝風のひやりとするのは、餘程北へ進んだ爲だら

う。
 あさきち 「浅吉」(人名) 1 浅吉
 八46 1 団 十二月十四日 浅吉 御主人様
 あさきちどの 「浅吉殿」(人名) 1 浅吉殿
 八47 5 団 十二月十六日 村尾甲藏 浅吉殿
 あさぎり 「朝霧」(名) 2 朝霧
 十29 6 団 しら／＼と、朝霧 野山をこめて、月のごと、日輪 ほのかに浮ぶ。
 十30 1 団 谷間よりはひ出で、木の幹ぬらし、しら／＼と、おぼろに 朝霧流る。
 あさけ・る 「嘲」(五) 1 あさける
 《一リ》
 十47 2 人は此の有様を見て、たはけとあさけり、氣ちがひと罵つたが、少しもとんちやくしない。
 あさせ 「浅瀬」(名) 2 浅瀬
 七57 4 団 こんな時には、悪くすると浅瀬へ乗上げたり、外の船に衝突したりするやうなまちがひが出來ます。
 七57 8 団 深さをはかるのは、浅瀬に乗上げないため、〈略〉。
 あさつゆ 「朝露」(名) 1 朝つゆ
 九104 5 月が西の空にうす白く残り、野には朝つゆがしつとりと置いてゐた。
 あさばん 「朝晩」(名) 4 朝晩

六46図「朝晩めつきり寒くなつた。

高い山はもう雪だらう。」

七72図 妻や子どもに、朝晩おねん

ぶつのかはりにとなへさせます。

八33図 昔朝鮮に一人の婦人があつて、

子どもをおさづけ下さるやうに、朝

晩神様にいのつてゐました。

八110図 幼名を無人といつたが、寒い

といつては泣き、暑いといつては泣

き、朝晩よく泣いたので、〈略〉。

あさひ「朝旦」(名) 7 朝旦

六34図 朝日ガバツト西ガハノ家ノガ

ラス戸ニカガヤイタ。

八96図 天守閣ニハ棟ノ兩端ニ金ノ

シヤチホコアリ。其ノ高サ八尺五寸、

朝日・夕日ニカマヤキテ、〈略〉。

九26図 湯 湯き日は明けぬ、さわや

かに。朝日は出でぬ、花やかに。

九67図 朝日にかゞやく軍艦旗が、海

風にひらめきながら、しづ／＼と上

つて行く様は、實におごそかなもの

である。

十48図 朝日のさわやかな光が、木立

をもれて寒場にさし込んだ。

十89図 冬の朝日のさす軒下に、

俵あむ手のいそがしげなる 父と

母とに暇を告げて、勇みて出づる

我が家の門。

十二24図 さし昇る朝日の如く、

さわやかに もたまほしきは心なり

けり。

あさひゆうひ「朝日夕日」(名) 1 朝

日夕日

十一34図 海の静かなることは鏡の

如く、朝日夕日を負ひて、島がくれ

行く白帆の影ものどかなり。

あさまやま「浅間山」(地名) 1 浅間

山

九98図 浅間山は煙をなびかせて、

東南の空はるかにそびえ、〈略〉。

あさみどり「浅緑」(名) 1 浅緑

十二15図 浅緑すみわたるたる大

空の ひろきをおのが心とまがな。

あさむく「欺」(四) 1 あさむく

「一ク」

十一27図 夜に入れば、見渡す限り

のかゞり火畫をあさむく中を、一萬

五千の軍勢まつしぐらに進軍して、

〈略〉。

あさむしちかく「浅虫近」(名) 1 浅

蟲近く

九75図 浅蟲近くになると、汽車が海

岸を走るので、陸奥灣の風光が手に

取るやうに見えた。

あさめし「朝飯」(名) 3 朝飯

六16図 朝飯の時こんな話が出ました。

七93図 それが、朝飯がすむと間もな

く、稲の葉がさわ／＼し出した。

九15図 朝飯を終へて、妹と共に學

校に行く。

あさやか「鮮」(形状) 5 あさやか

鮮力 鮮か

五62図 ああさやかな色どりも

しだい／＼にうすくなり、小山の

方はもう見えぬ。

九75図 殊に毎日のやうに降るには

か雨が、非常な勢で木を洗ひ草を洗

つて通り過ぎた後の、あさやかな緑

の世界は、〈略〉。

九20図 又或動物ハ保護色トハ反對ニ、

マハリノ物トマギレナイヤウナ鮮カ

ナ體色ヲモツテキル。

十76図 すみきつた空氣の中に煉瓦

の赤色や、松の緑色などが鮮かに浮

出して見えるのは實にきれいです。

十一33図 〈略〉、夏は山海皆緑にし

て目覺むるばかり鮮かなり。

あざらし「海豹」(名) 2 アザラシ

七83図 陸ノ獸ニ似タモノニハ、ラツ

コ・ラツトセイ・アザラシナドガア

リ、〈略〉。

七83図 アザラシ

あさり「浅蜊」(名) 3 アサリ あさ

り

七12図 小さい熊手で砂をかくと、お

もしろいやうにあさが出了た。

七14図 あさり

七81図 アサリヤ蛤ハ砂ヤ泥ノ中ニ居

リ、カキヤアハビハ岩ニツイテキル。

あさる「漁」(四) 1 あさる

九15図 〈略〉、めんどりはせはしげ

に幾度か土をかきちらして、餌をあ

さるにいそがしく、〈略〉。

あし「足」(名) 33 アシ あし 足

脚、あたとあし・おあし・かけあし・

かたあし・ちからあし・てあし・てあ

しらいちどう・ひきあし・ひだりあ

し・ひとあし・ふたあし・みあし・まえ

あし・みぎあし・りようあし

三87 ヒヨコハホソイアシデ、

チヨコチヨコアルキマス。

三16図 それではあしのゆび

のなをしつてゐますか。

三17図 あしのゆびは、おやゆ

びとこゆびのほかにはなが

ないのです。

三19図「それではでもあしも

ないでせう。」

三29図 足すべらせてこけかかる

おととをかばふあねのうで。

三35図 足ニモ右左ガアリ、目

ニモ耳ニモ右左ガアリマス。

三36図 タイサウノトキアルキ出

スノハ左ノ足デ、〈略〉。

四22図 をぢさんのうちでは、に

は一ぱいもみがほしてあつて、

足のふみばもないくらゐでし

た。

四68図 それがかはいさうに、あ

るばんねずみに足のゆびを

くひきられました。

四69図 〈略〉、今でも山がらのこ

ゑをきくと、〈略〉、足のきず

はどうしたらうかと思はない

ことはありません。

五53図 或日山の中で、こけに足をす

べらせて、うつむけにたふれました。

五94 2 〈略〉、かついで足をはらしてゐる書生さんが、お友だちへ出した葉書には、〈略〉。

六86 5 〈略〉、それから太い足、細い尾、一切繪で見た通りであつた。

六88 5 象つかひが「此の太い足で、どさりと歩きます。」といふと、七12 4 浅い水たまりを歩くと足のうらがぬるりとした。

七81 1 〈略〉、タコヤイカガ、アシヲソロヘテ泳グ様ハ、マコト二面白イ。

八86 7 信吉は〈略〉、頭の先から足の爪先までながめたが、しばらくして、〈略〉。

八99 5 或時、口・耳・目・手・足等が申し合はせて、胃に向つていひますには、〈略〉。

八100 6 さうしてそれから後は、〈略〉、足は食堂へ行くことを止めました。

九32 8 「もう一息だ。」さう思ひながら足を早める。

九32 10 〈略〉、手もうす緑、足もうす緑、帶も着物も皆うす緑。

十38 6 〈略〉、まだあらごなしの開墾地は、まるで足のふみ場も無い有様である。

十48 8 彼はふるへる足をふみしめて窠をあげにかゝつた。

十57 5 鳩に手紙を運ばせるには、足にアルミニウムカセルロイドの細いくだを附け、〈略〉。

十59 6 雪の日の夕暮に近き頃、上

州佐野の里に、つかれし足の歩重くたどり着きたる旅僧あり。

十105 2 にいさんも足を止めて、「〈略〉。」とお笑ひになつた。

十一24 3 水際に寄りて馬の足を冷さんとする折しも、〈略〉。

十一47 3 今度ひびちを張り、足をのべ、手を口に當てて鶴の臥したる様をなせり。

十一83 8 砂の上を歩いて行くと、足の裏が焼けるやうだ。

十一83 9 手や足の關節を曲げたり延ばしたりして、出發の號令を待つ。

十二37 8 彼は突然かういつて足を止めた。

十二56 2 ねぢは仕事臺の脚の陰にころがつた。

十二97 10 〈略〉、石は釋迦の足を傷つけただけで、目的を果すことは出来なかつた。

あし「悪」(形) 2 あし 《一シキ・一シク》

十59 10 〈略〉、身なりはそまつなれど氣品高き婦人立出でて、「折あしく主人が留守でございますので。」とことわりぬ。

十二26 6 よきを取りあしきを捨てて、とつ國に おとらぬ國となすよしもがな。

あじ「味」(名) 4 あぢ 味

五54 4 なめてみると、酒のあぢがいたします。

八60 2 彼ノ燒^{イロ}諸屋ノ看板ニ、八里半ト記セルモノノ如キハコレニシテ、其ノ味クリニ近シトイフ意ナリ。

九69 9 味はまことにあつさりしたものです。

九20 7 コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐レル武器ヲソナヘテキルカ、イヤガル味ヤニホヒノアルモノデ、〈略〉。

あじ「鱈」(名) 2 アヂ

七79 7 魚類ニハイワシ・アヂ・カツヲナドノヤウニ、水ノ表面ニ近イ所ヲ泳グモノガアリ、〈略〉。

七79 9 アヂ

あしおさんちゅう「足尾山中」(名) 1 足尾山中

九27 10 これは今から百三十年ばかり前に、下野の國足尾山中の旅人宿で起つた事で、〈略〉。

あした「朝」(名) 2 あした 朝

十一73 4 「朝に道を聞くことを得ば、夕に死すとも可なり。」

十一114 4 雪降りみだるゝ冬のあしたに、風なほ冷たき春のゆふべに、〈略〉。

あした「明日」(名) 12 アシタ 明日

↑あす・みょうにち

二17 3 「ユフヤケコヤケ、アシタテンキニナアレ。」

四87 4 明日ハオセツクデスカラ、學校ガヒケトラ、スゲアソビニオ出デナサイ。

五49 3 今桑をたべてゐる蠶も、明日

の朝までには、たいてい上つてしまふさうです。

七110 6 「さうか。それでは明日の一番で立たう。」

七110 9 アシタノアサーバンノキシヤデタツテイキマス。

七111 4 「アシタ」バンノキシヤデイキマス。」

八24 6 呉鳳は「それ程首がほしいなら、明日の晝頃、赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」といひました。

八33 7 すると或夜ゆめの中に、明日何山の何所へ行けば、望のものをさづけてやるといふ神様のお告がありました。

八77 9 「明日にでもなつて、雪がはれてからではいけませんか。」

十一35 4 「これでは明日の山廻りはだめだ。」と思ひながら、机によりかゝつて向ふの方をながめると、〈略〉。

十一36 2 〈略〉、明日の用意に出しておいた植林地の書付を開いて見る。

十一41 3 あ、西の空がほんのり明るい。明日は晴かも知れない。

あした「足駄」(名) 1 足だ

三29 5 かばふはずみにあねはまた 足だのはなをふつとりと。

あしなみ「足並」(名) 1 足なみ

七66 6 三萬近き學校に 分れて學ぶわれくの 望に向ふ足なみは

皆一せいにそろふなり。

あしはらのなかつくに「葦原中国」(地名) 2 葦原の中つ國 葦原の中つ國 十二63図 此の葦原の中つ國は皇孫之をしるしめすべし。」

十二73図 此において大國主命「此の葦原の中つ國を皇孫にたてまつりて、としへに天つ日嗣を護りまつらん」(略)。

あしもと「足匹」(名) 4 足もと 九129図 妹は餌箱を持ちて、とやの前に来る。親どりどもすぐに見つけて、其の足もとにむらがる。

九326 ひとつりとしめりを帯びた一すぢの道が、足もとからうねくとついで、(略)。

九828図 ちいさん今年六十の坂を越えたる足もとに、大いなる石横たへて、(略)。

十810 安全燈をたよりに歩いて行く と、不意に足もとからねずみが一匹飛出しました。

アジアしゅう (地名) 3 アジヤ洲

七17図 (略) 陸を分けて、アジヤ洲・ヨーロッパ・アフリカ洲・南アメリカ洲・北アメリカ洲・及び大洋洲とす。

七19図 我が大日本帝國はアジヤ洲の東部にあり。

七3図 アジヤ洲

あしらう (五) 1 あしらふ 《一ツ》 十1154 しかしまだなかなか勢が強い

ので、綱を巻いてはのぼし、のぼしては巻いて、氣長くあしらつてゐるうちに、さすがの鯨も次第に弱つて、(略)。

あじわい「味」(名) 1 味はひ

十二1382 日本人ほどあつさりした色や味はひを好むものはあるまい。

あす「明日」(名) 4 アス あす ↑ あした・みようにち

四117図 「やつとすんだ。」と見上げる 空に、あすも天氣か、夕日が赤い。

七1121図 「アス—バンデタチマス。」 七1128図 「アス—バンデタツ。」

七112図 アス—バンデタツ あずかる「与」(五) 3 あづかる

九382図 (略)、レマン將軍は靜かに、「おほめにあづかつて恐れ入る。」(略)。」と答へたり。

十二921 それを見てひどく氣をもんだ父王は、彼に妃を迎へ、(略)、國政にも與らせようとした。

十二1345 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、(略)、自然美を愛好するやさしい性情を育成するのに與つて力があつた。

あずかる「預」(五) 6 あづかる 預る《一ツ》

五906 私のやくめは、(略)郵便物を大切にあづかつてゐて、これをあつてに來る人に渡すのであります。

五916 作物の種や商品の見本も入れてよいことになつてゐますが、私はまだそれをあづかつたことはありません。

七713図 (略)、仲間の者が國へ送る金をあづかつて、此の財布に入れて來たのでございます。

八357 幾年かの後、里子を返してもらはうとすると、先方はあづかつたおぼえがないといつて返しませぬ。

十5210図 一體、銀行は人からお金を預つてそれをどうするのですか。

十535図 銀行は有餘つてゐる人からお金を預つて、資金の足らぬ人に貸附けるのだ。

あずき「小豆」(名) 2 小豆^{アサキ} 小豆^{アサキ} 六468 第十三 蛙 (略) 卵ハ小豆^{アサキ} 程ノ大キサデ、ウスアカイ玉ノヤウニ見エル。

八551 おしまひの一日には、小豆やきな粉をつけて、うちでもたべ、近所へも配つた。

あずけおく「預置」(四) 1 あづけ置く《一キ》

八568図 米屋の小ぞうお得意へ米を運びし歸り途、ひらりと下りて自轉車を角の下駄屋にあづけ置き、すぐに老婆をみちびきぬ。

あずける「預」(下) 5 預ける 《一ケ—ケル》

十5010図 銀行といへば、おとうさんは、何時かも銀行へ行つてお金を預

けて來るとおつしやいましたね。

十511図 銀行はお金を預ける處ですか。

十513図 一體、なぜお金を預けるのですか。

十5110図 預けたお金は何時でも返してもらへますか。

十523図 銀行の預金には定期預金といふのと當座預金といふのがある。

(略)、定期の方は、預けた日から半年とか一年とかきまつた期限が來ないと引出すことが出來ない。

あすこ「彼処」(代名) 1 あすこ 十一162図 (略)、のぶ子さんは上の棚を指さして、「あすこに全部學年別にしてのせてあります。」とおつしやいました。

アスファルト(名) 1 アスファルト 十一95 アスファルトや石を敷いた道が縦横に通じ、(略)。

あせ「汗」(名) 6 アセ 汗 七513 夏ノドンナ暑イ日デモ、アセヲ流シナガラ、日ノクレルマデ働イテキマシタ。

九344 道端の切りかぶに腰かけて、ひたひの汗をふいてゐると、(略)。

九602 男も女もひたひの汗を、ほこりだらけの腕でふきながら、にぎやかに打續ける。

十3810図 「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」

十1121 黨の周圍には、八九人の職

工が汗を流して働いてゐる。

十二914 ぼろを着た農夫は玉のやうな汗をかいて田をすき起し、〈略〉。

あせだらけ 「汗」(名) 1 汗だらけ

十834 近づいて見ると、坑夫が汗だらけになって、元氣よく石炭を掘つてゐます。

あせば・む 「汗」(五) 1 汗ばむ「ン」

九333 〈略〉、ふろしき包をしよつたせなかがじつとりと汗ばんで来る。

あぜみち 「畦道」(名) 1 あぜ道

十933 其の近道といふのは田のあぜ道で、途中にはかなり深い小川にかけ渡した一本橋がある。

あせりだ・す 「焦出」(五) 1 あせり出す「ーシ」

四504 これから友一はだんだんあせり出しました。みんなもし

まひにはむちゆうになつて取りました。

あせ・る 「焦」(五) 2 あせる「ーッーラ」

九553 図 それにあの人の事だから、決してあせらず、一軒二軒と得意先をまして行つて、〈略〉。

十一571 驚いて一しやうけんめい逃げようとしてあせつてゐるが、もう遅い。

あそこ 「彼処」(代名) 2 あそこ

十一357 図 「あそこは一昨年植付をした地藏山だ。」

十一361 図 「あそこの植付をした時はまだ寒かつた。」

あそここ 「彼処此処」(代名) 1 あそここ

三272 又あそここにわらをむすびつけてあるのは、ほりとならないしるしで、のぼしておや竹にするのださうです。

あそぼす ↓こしきよあそぼす

あそび 「遊」(名) 2 あそび 遊 ↓

おきやくあそび・ぶらんこあそび・へいたいあそび・ままごとあそび

三432 りゆうぐうのおとひめは〈略〉、毎日いろいろなごちそう

をしり、さまざまなあそびをして見せたりしました。

六492 図 ともし火近く、衣ぬふ母は春の遊の、楽しさかたる。

あそびくら・す 「遊暮」(四) 1 遊び暮す「ーシ」

十一447 図 〈略〉、或畫師久しく寄食してありけるが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を経たり。

あそびごと 「遊事」(名) 1 遊事

四916 九つとなり、七つとなつたころからは、遊事にも、兄が弓をひけば、弟はたちを

ふりまはし、〈略〉。

あそびなる 「遊價」(下二) 1 遊びなる「ーレ」

十一818 図 〈略〉、百尋・千尋海

の底、遊びなれたる庭廣し。

あそ・ぶ 「遊」(四・五) 17 アソブ あそぶ 遊ぶ「ービ・ーブ・ーベ・ー」

↓あやしみてあそぶ・もてあそぶ

三24 カゼモアタカデ、オモテデアソブニハバンヨイトキデス。

三617 図 二郎さん、又今日も舟をながしてあそびませう。」

四258 図 今日ハ〈略〉、をちさん

もをばさん早くかへります。もつとあそんでお出で。

四514 それから又二くみに分れて、何べんも取つてあそびました。

四608 私ハ昨日ハ〈略〉、友ダチトツミ木ヲシテアソビマシタ。

四875 図 明日ハオセツクデスカラ、學校ガヒケトラ、スゲアソ

ビニオ出デナサイ。

五504 此ノ頃ハ雨ガ降りツイテ、表デ遊ブ日ガアリマセン。

七526 図 私も子どもの時には、〈略〉、あの運動場で遊んだり、此の講堂で

お話を聞いたり致しました。

八497 〈略〉、マレニハ庭先ニ遊ンデ

ヘル子ドモヲサラツテ行クコトモアル。

八1082 図 〈略〉、お晝前にいらつしやい。面白いことをして遊びませう。

んが旅行からお歸りになつたと聞いて、今日にいと二人で遊びに行きました。

九1127 図 先日遊びに上り候節御約束致し候三毛の子猫、〈略〉。

十49 図 前には横長き池をひかへ、池のめぐりは見渡す限りの木立・くさむらにて、さながら別天地に遊ぶ

思あり。

十一142 今日ハ、のぶ子さんのうちへ始めて遊びに行きました。

十一351 図 我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、〈略〉。

十一606 見渡す限り果もない原野に、〈略〉、緑草の間に羊の群をなして遊ぶ様は、實にのどかである。

十二565 図 「此處で遊んではいけない。」

あたい 「価」(名) 16 價のものあたい

五922 それも品と目方によつて切手の價がちがひます。

八1037 マツチはちよつとした物で、價も安く、一包十箱が十錢ぐらゐで買はれる。

九444 図 同じ物ニテモ、意ノ如クニ得ラルレバ價ナク、得ガタケレバ價アルナリ。

九444 図 同じ物ニテモ、意ノ如クニ得ラルレバ價ナク、得ガタケレバ價アルナリ。

九446 図 得ガタキ物ニテモ、有用ナ

アルナリ。

九446 図 得ガタキ物ニテモ、有用ナ

ラヌ物ハ價ナシ。

九44 9 図 〈略〉、用ヒヤウナケレバ、
誰モ之ヲ買フ者ナク、シタガツテ價
アルコトナシ。

九45 1 図 カクノ如ク物ニ價アルハ、
其ノ物ガ人ノ爲ニ有用ナルト、意ノ
如クニ得ラレザルトニヨルナリ。

九45 5 図 又コ、ニ一匹ノ馬アリテ、
之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、
〈略〉、争ヒテ高キ價ヲツク。

九45 6 図 カクテ價ハ次第二高クナリ
テ、馬ハ最モ高キ價ヲツケタル人ノ
物トナル。

九45 6 図 〈略〉、馬ハ最モ高キ價ヲツ
ケタル人ノ物トナル。

九46 1 図 〈略〉、五人ノ持主各其ノ馬
ノ賣レザランコトヲ恐レテ、争ヒテ
價ヲ下グ。

九46 1 図 カクテ價ハ次第二安クナリ
テ、最モ價ヲ下ゲタル持主、其ノ馬
ヲ賣ルコトトナル。

九46 2 図 〈略〉、最モ價ヲ下ゲタル持
主、其ノ馬ヲ賣ルコトトナル。

九46 4 図 カクノ如ク、品物多クシテ、
之ヲ望ム者少ケレバ、其ノ物ノ價安
クナリ、〈略〉。

九46 5 図 カクノ如ク、〈略〉、品物少
クシテ、之ヲ望ム者多ケレバ、其ノ
物ノ價高クナル。

九46 5 図 スナハチ物ノ價ノ高トハ、
主トシテ需要ト供給トノ關係ニヨル
ナリ。

あとう [能] (四) 6 あたふ 能ふ

《一ハ》
十97 10 図 されど宋軍の大勢日々に非
にして、天祥の誠忠を以てしても如
何ともすることあたはず。

十98 6 図 天祥固くこばみてはいく
「我、國を救ふことあたはず。 いづ
くんぞ人をいざなひてそむかしめん
や。」と。

十98 8 図 張世傑等の奮戦も大勢を轉
ずることあたはずして、宋遂に亡び
しかば、〈略〉。

十99 7 図 心力を盡くしてしかも救
ふことあたはざるは天命なり。

十一4 10 図 〈略〉、久しく其の職に居
ることあたはずして魯を去りぬ。

十二100 5 図 社寺の壯麗はしばらくお
き、何の山、何の川、一木一草に至
るまでも歴史あり古歌あり、人をし
て低回去る能はざらしむ。

あた・う [与] (下二) 1 あたふ 《一
フル》

九14 4 図 くだきたる貝殻を器に入れ
てあたふるに、これには餌の時のや
うに集らず。

あた・える [与] (下二) 8 あたへる
與へる 《一ハ》 ↓ かえしあたえる
六64 4 頼朝は唐糸をゆるした上に、
萬じゆにはたくさんなほうびをあた
へましたので、〈略〉。

七108 4 秀吉は感心して、「〈略〉。」と
いつて、軍功の賞として、清正に名

刀をあたへました。

十15 9 高橋さんの熱心な話は、それ
からそれへと續いて、團員に強い感
動をあたへた。

十二65 10 王は其の治めてあるイギリ
スを三分して娘たちに與へ、〈略〉、
餘生を安樂に送らうと決心した。

十二67 5 長女の言葉に満足した王は、
地圖を指さしながら領地の三分の一
を與へた。

十二68 1 王はリガンにも三分の一を
與へた。

十二71 10 全領地を二分して與へてや
つた二人の娘が、揃ひも揃つてこれ
程の不孝者であらうとは。

十二73 5 フランス王の侍醫はとりあ
へず老王に藥を與へて靜かに眠らせ
た。

あたかも [恰] (副) 1 あたかも
十一27 2 図 これより先、秀吉は織田
信孝を攻めて大垣にありしが、二十
日の正午大岩山の敗報至る。あたかも
晝食の膳に向ひ居たる秀吉は、持
ちたる箸を投捨て、〈略〉。

あたたか [暖] (形状) 7 アタタカ
アタ、カ あたたか あたゝか 暖

二67 4 コレカラ ダンダン アタタ
カニナツテ キマシタ。

三2 4 カゼ モ アタタカデ、オモ
テデアソブ ニハ ーバンヨイト
キデス。
四39 7 日は雲のあひだからや

さしい かほを出して、あたたかな
光をおくりました。

五26 4 ガントオナジク、ワタリ鳥デ、
アタ、カニナツテ、ガンガ北ノ國へ
カヘルコロ、南ノ國カラワツツテ來
マス。

六39 1 図 こつちは國よりよほどあ
たゝかだ。

六100 7 図 「雨々々々暖になつて、よ
いあんばいです。」

七14 1 日は暖で、風はなし、むされ
るやうな氣がする。

あたたかい [暖] (形) 1 暖い 《一
ク》

八113 1 図 「よし。寒いなら、暖くな
るやうにしてやる。」

あたたかさ [暖] (名) 6 暖さ
十78 5 図 面白いのは、三日四日續い
て寒ければ、其の次には又其のくら
ゐの間暖さが續くといふやうに、
〈略〉。

十78 5 図 面白いのは、〈略〉寒さと
暖さがほとんど規則正しく交替する
ことです。

十101 1 第十九 温室の中 〈略〉。
〈略〉、ぼうつと身を感じる暖さ、ガ
ラス屋根を通して來るやはらかい日
の光、まるで春の國に居るやうだ。

十101 7 図 熱帯地方から持つて來たの
だから、かうして年中六七十度以上
の暖さの處に置かなければいけない
のだ。

十二4 10 図 停車場の外に出づれば、秋晴の空はあくまですみて、暖さ春の如し。

十二21 9 小春日和の暖さにとけて、其處からも夢のやうに船歌が聞えて来る。

あたたかし「暖」(形) 1 暖シ「ク」

七109 2 図 晝ノ長クナルニツレテ、氣候ハ次第二暖ク、夜ノ長クナルニツレテ、氣候ハ次第二寒シ。

あたためる「暖」(下二) 4 アタタメル アタ、メル 暖める「メーメル」

三6 2 エヤ水ヲヤツテモ、見ムキモシナイデ、タマゴヲアタタメテキマス。

八50 4 春ノ初ニ二三ノ卵ヲ産ミ、五週間程アタ、メテ、ヒナニカヘス。

十104 5 図 其處から熱い湯を管で各室へ送つて、適當に暖めるやうになつてゐるのだ。

十一67 5 木炭や石炭や石炭ガスの火は、部屋を暖めたり物を煮たりするに用ひられ、〈略〉。

あたま「頭」(名) 36 アタマ あたま頭 ↑かしら

一21 3 圖 デンデンムシムシカタツムリ、アタマガアルカ、メガアルカ。

一21 7 圖 ツノダセ、ヤリダセ、アタマダセ。

三7 5 〈略〉、ヒヨコガ小サナアタマヲ出シテ、ビヨビヨトナイテキマシタ。

三34 6 〈略〉、五一ちいさんは「略」といつて、大きな手であたまをなでました。

三80 5 圖 あたまを雲の上に出し、四方の山を見おろして、〈略〉。

四40 5 おかあさんがあたまに手ぬぐひをかぶり、着物の上にちりよけを着て、〈略〉。

五10 2 圖 「どんな大蛇か。」「頭が八つ、尾が八つある大蛇で、〈略〉。」

五11 3 間もなく大蛇が来て、八つの頭を八つのけに入れて、其の強い酒を飲みました。

五34 2 せまい中庭から、屋根の上に頭を出してゐるひよろ松は、葉がほこりだらけでした。

五47 2 もう桑の葉をたべないで、頭を上げて、繭をかける所をさがします。

五80 1 いころすのめかはいさうだと思つて、兩耳の間をねらつて、頭の上をすれ／＼にいました。

六19 6 風がひゆうつとうなつて来るたびに、濱の松は身をふるはせて、頭を地に着けさうにします。

六30 7 さうして〈略〉食ひつきました、頭のでつぺんから尾のさきまで、からだ中すき間もなく。

六46 7 第十三 鮭 〈略〉。キレイナ水ガサラ／＼流レテ、川ソコニ小石ノ多イ所ガアルト、頭ヤ尾デ穴ヲ掘ツテ、其ノ中ヘ卵ヲ産ム。

六87 3 象が大きな桶を鼻で頭の上へまき上げると、〈略〉。

七64 4 〈略〉男が、〈略〉、着物をぬいで頭にのせ、一人で川へはいつて行きました。

七89 8 〈略〉、マリーはおばあさんのづきんを取つて、兵士の頭にかぶせました。

八4 6 僕が庭へ下りて、かはる／＼頭をなでてやると、喜んで僕の手にとびついて、べろ／＼となめる。

八86 7 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の先から足の爪先までながめたが、〈略〉

八113 3 すると大將の父は〈略〉、大將を井戸端へ連れて行つて、着物をぬがせて、頭から冷水を浴びせかけた。

九5 6 圖 〈略〉、其の葉の根本には、大人の頭ぐらゐの實がすゞなりになつてゐます。

九13 2 圖 〈略〉、十幾羽の鶏一つにかたまり、頭と頭とをつき合はせて、いそがしげに餌を拾ふ。

九13 2 圖 〈略〉、頭と頭とをつき合はせて、いそがしげに餌を拾ふ。

九31 6 殊に遊覧船に乗つて、頭から雨のやうなしぶきを浴びながら、瀧

つばを見物して廻るのは、實に壮快です。

九35 9 〈略〉と、聲をかけた者がある。頭を上げてみると、それは石井君であつた。

九65 5 〈略〉、ブラシを持った數十人の水兵が、甲板をこすりながら頭を並べて進んで行く。

九82 1 圖 頭に飾れる石燈籠、頭の長き福祿壽、〈略〉。

九105 7 北風は、〈略〉、うれしくて、得意さうに頭を高くあげた。

九106 3 馬はどれも皆張りきつて、〈略〉、頭をふり上げたりしながら、乗手のあひづが下るのを待ちかまへてゐた。

九115 6 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、やがて頭を下げて、「〈略〉。」と言つて、其の手紙を差出した。

九119 7 水兵は頭を下げて聞いてゐたが、〈略〉、につこりと笑つて立去つた。

十15 4 圖 朝鮮の青年も、近頃はなか／＼頭が進んで來ましたので、〈略〉私どもは、非常に喜んでをります。

十47 3 彼の頭の中にあるものは、唯夕日を浴びた柿の色であつた。

十118 3 うや／＼しく拜んでさて頭を上げると、神前の大きな神鏡が、きら／＼とかゞやいてゐて神々しい。

十一56 2 〈略〉、船から三四百メートル、

ルの處に、大きなふかの頭が見える。
十二867図 土人等怒りて林蔵の頭を打ち、強ひて酒を飲ましめんとす。

あたらし「新」(形) 4 新し「一シキ」

十一7図 兩がはに木立すき間もなく茂りて、新しき宮の境内とは思はれず。

十二192図 但し大新聞にありては、

「略」、新しき事件ある毎に改版して、最後の最も新しきものを市内版とす。

十二193図 但し大新聞にありては、

「略」、最後の最も新しきものを市内版とす。

十二1123図「略」トマス、エヂソン

は、既に電話機に關する發明に成功したるを以て、更に進んで新しき電燈の發明に従事したり。

あたらし「新」(形) 10 新し

新しい「一イ・ーク」↓ことあたらしい・みみあたらしい

三498 新道ノリヤウガハニハ、

新シイ家ガ七八ケンデキマシタ。

五163 四月二十六日 木曜 雨 學

校からかへつて、新しい筆で書き方のおいこをしました。

五421 お着きになりますと、間もなく

くたけるが新しい家造つて、人々をあつめて、其の祝をしました。

七255 塚の前に馬頭觀世音とほつ

た石が立つてゐて、其の前に時時新しい馬のくつが上つてゐる。

八1023図 其の爲に新しい血が出来なくなつて、かへつて君等は自分で苦しむやうになつたのです。

九241図「略」、此所の銅の製法を改良したり、新しい鑛山を開いたり

する爲に、此の山中へ來たのである。

九254図「略」、おぢい様の不味軒様

はまた、地質や鑛物の方で新しい発見をなされた。

九575「略」、束をむしろの向ふにぱいと投げて、又新しい束を取る。

十441 かる、切る、掘る、運ぶ、

「略」、仕事は豫想以上にはかどり、九時頃にはもう數坪の地面が新しく開かれた。

十一651 農業者は多く古い習慣になづみやすいものであるが、此の邊では新しい知識をいれて、新式の農具を用ひ、「略」。

あたり「刃」(名) 23 アタリ あたり

ムインドシナはんとうあたり・さくちようあたり・のへじあたり・らいねんあたり

四21 鳥ゐのあたりは、道のりやうがはに、いろいろな店が

ならんでゐます。

五568 松島は「略」。あたりの高い所からもながめますが、多くは舟に

乗つて、島の間を通つて見物します。

五685 此のあたりの青田も、其の頃は太ていあれ地で、「略」。

六474 サウシテ外ノ魚ガ其所へ來ナ

イヤウニ、シバラク其ノアタリニ番ヲシテキテ、ソレカラ海へ歸ル。

六593 或日のこと、萬じゆが御殿のうらへ出て、何の氣もなくあたりを

ながめて居りますと、「略」。

八394 目をさまして見ると、ふろしきづつみがありません。「略」。驚いてあたりをさがしても見當らず、「略」。

八984図「略」 船は次第に波間に沈み、敵彈いよくあたりにしげし。

九102図「略」、相模の國より上總の國へこえんとて、今の浦賀のあたり

より海を渡り給へり。

九1210図 妹は餌をつかみて、わざと少しはなれたるきりの木のあたりに

まきちらせば、鶏はあわてて其の方へ行く。

九331 あたりの空氣までが何となくぼうつとして、「略」。

九9610図 あゝ雷鳥といふ珍しい鳥も、此のあたりから頂上へ登る途中のは

ひ松の間に居るのです。

九1049 やがてあたりの静かさを破つて、大砲の音がとゞろき始めた。

九1096「略」、ゆめからさめたやうに

あたりを見廻した。

九1106 北風は、もう一度鼻先をなで

てもらひたくなつて、そつと顔を主人の肩のあたりへすりよせた。

十392 地面は霜で眞白である。あた

りは如何にも静かで、「略」。

十411 ずいこゝといふのこぎりの音が、あたりの静かさを破る。

十805 昇降器を下りて、あたりを見まはすと、周囲の壁は皆石炭で、それが電燈の光に物すごく光つてゐます。

十8410図「略」 百姓が、たき火をしてゐると、そばの黒い岩に火がつき

煙をあげて燃出しました。驚いて調べてみると、あたりは同じ眞黒な岩ばかりでした。

十1162 二十メートルもある大鯨が今は全く息たえて、小山のやうな體を

水面に横たへる。あたりに流れる血に、紅の波がたゞよふ。

十一611 此の峠には長いトンネルがあつて、其のあたりは海拔約千八百

尺、「略」。

十一629 當時此のあたりは未開の原野で、殆ど交通の便もなく、「略」。

十二529 ねぢは驚いてあたりを見廻したが、「略」。

十二749 やがて眠から覺めた王は、幾分氣も靜まつたのか、「略」。

いつてあたりを見廻し、「略」

あたり「立」(名) ↓さしあたり・てあたりしだい・ひあたり・まのあたり

あたりどし「当年」(名) 1 あたり年

四68 今年、柿のあたり年で、どの木にもよくみがなりました。

あたる [当] (四・五) 23 アタル あたる 當る 《ツ・ー・ラ・ー・リ・ール・ーレ》 ↓ いきあたる・つきあたる・みあたる

二362 ヤハウマク アタリマシタ。
二363 ヤハウマク アタリマシタ。
アタルト、モチハ白イトリニナツテ、《略》。

四332 父「人のこゑも山の中では、かべにあたつたごむまりのやうに、かへつて来る」とが、あります。

五315 庭は一日日がよくあたる。

五805 宗任が「矢はあたつて居りませぬのに、狐は死んで居ります。」

六266 庭の菊も白い花びらに赤みがさして来た、霜にあたつたからだらう。

六423 分家の萬藏君などは小男だから、ひよつとすると輜重輪卒にあたるかも知れない。

六845 全く上下の者が心を一にして、國難にあたつたのである。

七453 信玄の家來は之を見て、後からやりで謙信をついたが、あたらな

七778 一時は今の二時間にあたるのである。

十975 其の友之を止めてはいはく、「《略》」と。天祥きかずしてはいはく、「《略》」と。出でて元軍に當る。

十一110 さうして其のさしわたしは三十五萬四千里、即ち地球の百九倍餘りに當り、《略》。

十一21 《略》、其の容積は地球の百三十萬倍に當つてゐる。

十一206 此の場合には訴へられた者が被告で、検事といふ役人が原告に當るのである。

十一2510 《略》、ふと東南の方を望み見るに、美濃路の方面に當りてた

十一284 明くれば二十一日の朝、盛政は賤嶽より西北に當れる高地に兵を引きまとめたりしが、《略》。

十一883 「おとうさん、二百十日は立春から二百十日目に當るのですね。」

十一1052 河幅は驚く程の廣さにて、河口の處にては、三百二十キロメートルもこれある由、略、東京・豊橋間の距離に當り候。

十一1143 地方人民が協同一致して自ら地方公共の事に當り、《略》。

十一11510 公吏・議員等、直接間接に公共の事務に當る者は、《略》。

十二771 だいぼう網は《略》。《略》ちやうど大きなひしやくに似てゐる。即ち水のはいる處に當る部分が身網で、《略》。

十二772 即ち水のはいる處に當る部分が身網で、柄に當る部分が垣網である。

十二1341 《略》、いざといへば、舉國一致國難に當る氣風を生じた。

あちこち 「彼方此方」 (代名) 1 あちこち

七915 「たしかに來たはずだ。」と言つて、敵はあちこち見まはしました

が、《略》

あちら 「彼方」 (代名) 13 アチラ あちら

一233 アチラ ニモ、コチラ ニモ、ホタルヲヨブ コエガシマス。

一307 「アチラ ニーハ キマス。」

二167 日ガハイリマシタ。《略》。

アチラ ノソラガマツカニナリマシタ。

二374 フルフルユキガ、《略》。

アチラ ノ山ニ、コチラ ノモリニ。

三796 おばあさんが「ふみ子もこんやはきつとあちらでこの月を見てゐませう。」と、ひとりごとのやうにおつしやいました。ねえさんは遠いところへおよめに行つていらつしやるのです。

五611 こちらは今さくらさかりですが、あちらでは、もうとうにちつてしまつたさうです。

八844 それをお聞きして安心致しました。あちらでも、あの子のことばかりが、氣にかゝつてゐたのでございました。

八869 おとよ、大きくなつたなあ。わしはあちらに居ても、お前の事ばかり心配してゐた。

九799 あちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲。

九109 《略》、地上には、人馬の死がいがあちらにもこちらにも重り合つてゐる。

十123 《略》、此の頃墓参りのために朝鮮から歸つてをられる高橋さんが來られた。高橋さんは、あちらで長らく教育に従事してゐる人である。

十155 朝鮮の青年も、近頃はなか／＼頭が進んで來ましたので、あちらの教育に關係してゐる私どもは、非常に喜んでをります。

十二216 あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよきん／＼と聞える。

あちらこちら 「彼方此方」 (代名) 7 あちらこちら

三205 《略》、二人はまつやつつじのあひだを あちらこちらへくぐつてとりました。

四41 あちらこちらに子どものならすらつばやふえの音もして、《略》。

六611 月の光にすかして、あちらこちらさがしますと、松の一むら立つてゐる中に、石のらうがありました。

九100 山のすその方があちらこちら白いのは、蕎麥の花であらう。

十207 あちらこちらの村々からは細

い煙が立上つてゐる。

十一89 弟は尚あちらこちら暦をく
つてゐるうち、〈略〉

十二93 師を求めてあちらこちらさ
まよつてゐるうちに、マダダ國の首
府王舎城の附近に來た。

あつ (感) 2 あつ

五437 窓 〈略〉、たけるのむねをおつ
きになりました。なみくの者なら
「あつ」とさけんで死にませうが、
〈略〉。

十一582 窓 ふかの口はもうほとんど
子供に届いてゐる。「あつ。」と、思
はず人々が叫んだ。

あつ 〔三〕 (下二) 2 あつ 當つ

《一ツル・一ツ》

十268 窓 其の利益は、〈略〉、其の殘
部を一村共同の有益なる事業の費用
にあつる計畫なり。

十一279 窓 すなはち喜捨せる人々に
其の志を告げて同意を得、資金を悉
く救助の用に當てたりき。

あつ・い 〔厚〕 (形) 4 あつ・い 厚い
《一・一・一》

六775 二三日ひどく寒かつたので、
湖の水が大へんあつくなつた。

十289 〈略〉 人々は、親子にあつく
再生の恩を謝し、名残を惜しんで此
の島を去つた。

十二672 窓 昔からあつた孝子のどの
人よりも厚い眞心をもつて、父上に

お仕へ致します。

十二91 釋迦は生れつき同情の念に
厚く、何事も深く考へ込むたちであ
つた。

あつ・い 〔暑〕 (形) 5 あつ・い 暑イ
暑い 《一・一・一》 ↓ むしあつ・い
五305 窓 つりも出来るし、およぎも
出来て、あつ・い夏でもすくなくく
らす。

六894 窓 印度の國はいたつてあつ・う
ございしますので、〈略〉。

七513 夏ノドンナ暑イ日デモ、アセ
ヲ流シナガラ、日ノクレルマデ働イ
テキマシタ。

八1109 幼名を無人といつたが、寒い
といつては泣き、暑いといつては泣
き、〈略〉。

八1134 窓 大將はこれから後、一生の
間「寒い。」とも「暑い。」ともい
なかつたといふ。

あつ・い 〔熱〕 (形) 5 熱い 《一・一》
八1151 實に鐵は熱いうちにきたへな
ければならぬ。

十83 或日王は部下の精兵を引連れ、
焼けつくやうに熱い平原を横ぎつて、
タルススといふ町に着いた。

十121 熱い番茶にのどをうるはして
休んでゐる所へ、〈略〉。

十1044 窓 其處から熱い湯を管で各室
へ送つて、適當に暖めるやうになつ
てゐるのだ。

十1054 窓 此の温室は南を受けてゐる

上に、十分熱い湯が通つてゐるから、
こんなに早く咲くのだ。

あつ・いた 〔厚板〕 (名) 1 厚板
十二85 窓 寶物殿に入りて拜觀する
に、火きりぎね・火きりうすといふ
ものあり。〈略〉と、幅四五寸長さ
三尺ばかりの厚板となり。

あつ・い ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

た船員等は、〈略〉、我先にと海に飛
込んだ。

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い
あつ・い ↓ ↓ きちがいあつ・い

そなたがあつぱれなるとがらを立て候やうとの心願に候。

あつぱれ「大晴」(感) 1 あつぱれ

十694 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、略、真先かけて敵の大軍に割つて入り、これぞと思ふ敵と打合つて、あつぱれてがらを立てるか。

あつぱりきたる「集来」(四) 1 集り来る「ール」

十二173 さて編輯部にては刻々集り来る原稿を選択整理し、略。

あつまる「集」(四・五) 21 アツマル

あつまる 集ル 集る「ーッー」
「ーリール」↓おあつまりなさる・きたりあつまる・はせあつまる・よりあつまる

五228 島屋の前には、人が黒山のやうにあつまつてゐました。

五513 ハジメハ絲スデホドノ流デスガ、ソレガダンくアツマツテ、略。

六523 奉納の當日は、頼朝をはじめ舞見物の人々が何千人ともなくあつまりました。

六801 四國・九州の武士は博多の濱にあつまつた。

七828 中デ面白イノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテキル。

八74 やがて五人の騎手は多くの人々につきそはれ、略、鳥居の中

に集つて来た。

八252 翌日番人どもが、役所の近く

に集つてゐますと、略。

九55 鳥の羽に似た大きな葉が、幹の上の方に集つてついでをり、略。

九136 略、中なるひよこどもは小さき口を開きて、ぴよくと鳴き

つゝかこひぎはに集る。

九144 くだきたる目殻を器に入れてあたふるに、これには餌の時のやうに集らず。

九168 黄色ナ蝶ハ菜ノ花ニムラガリ、

白イ蝶ハ大根ノ花ニ集ル。

九5410 人々の同情は集つてゐるし、商賣の仕方は十分心得てゐるので、略。

九782 さうして大急ぎで學校道具をかばんにしまひ、めいめい身輕になつて、校舎の後の菜園に集つた。

九1017 ざるを持つた子供が、川下の方に集つてさかいであるのは、略。

十一17 團員は、午前七時八幡神社の境内に集つた。

十一110 午後四時、豫定の仕事を終へて、再び境内に集つた。

十208 子馬が一頭づつ中央の廣場に引出されると、黒山のやうに集つてゐる買手は、略。

十725 今度の勢ぞろへに集つた諸侍の中に、訴訟ある者は申し出るがよい。

十一112 略、港内には常に數百隻

の船が集つてゐて、頗る壯觀である。

十二985 危篤の報が傳はると、これまで教を受けた人々が四方から集つて別れを惜しんだ。

十二1065 子どもらは仕事をしてゐる老僧のまはりに集つて、「氣違よく」とはやし立て、略。

あつ・む「集」(下二) 7 あつむ 集む「ーメ」

八636 或夜弟子をあつめて、書物を教へし時、風にはかに吹きて、ともし火きえたり。

十971 宋の臣文天祥大いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。

十1310 然るに今主上隱岐にうつされ給ふと聞き、高德一族共を集めていへるやう、略。」と。

十一1068 大勢の人々が熟したるコーヒーの實を手にてこき落し、之を集めてみぞに投入し候へば、略。

十一1255 一切經は、佛教に關する書籍を集めたる一大叢書にして、略。

十一12710 苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も残らずなりぬ。

十一1292 二度資を集めて二度散じたる鐵眼は、終に奮つて第三回の募集に着手せり。

あつ・める「集」(下二) 15 アツメル

あつめる 集める「ーメーメル」

↓かきあつめる・ひろいあつめる

三16 略、ハチハセツセトミツヲアツメテキマス。

五42 略、間もなくたけるが新しい家を造つて、人々をあつめて、其の祝をしました。

五907 私のやくめは、略郵便物を大切にあづかつてゐて、これをあつて来る人に渡すのであります。

五923 郵便物をあつめる人は、毎日きまつた時刻に来て、私のおなかを明けて持つて行きます。

五925 其のあつめに來る頃に、急ぎの封書を入れに來る者が、途中で人と立話ではじめると、私は氣がもめてたまりません。

六511 源頼朝が略、舞姫をあつめました。

八105 略、乾かしたのをそろへてマツチの箱に入れる者もあり、箱に入れたのを十づつ集めて包紙に包む者もある。

十667 私のもと鉢の木がすきで、いろ／＼集めた事もありましたが、略。

十1015 此處は重に蘭の類を集めてある處だ。

十1033 「さあ、今度は葉のきれいな植物を集めてある處だ。」

十一532 それがすむと、今度はバケツを持つてコップにたまつた液を集

めて歩くのである。

十一532 集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不純な物を取り除き、〈略〉。

十二910 ごく小さい時分から動植物に深い趣味を持ち、又物を集めることがすきで、〈略〉。

十二128 かくて世界の各地をめぐつて、〈略〉、種々の材料を集めて本國に歸つたのはそれから五年の後である。

十二304 我が日本のよろひ・かぶとその他の武器類もたくさん集めてあります。

あて (名) してあて・めあて

あてどころ 「宛所」(名) 1 宛所

七112 宛所は判りよく

あ・てる 「当」(下二) 7 あてる 當

てる 《一テ》したずねあてる

三177 図 「このはの中に、おもしろい人がゐます。あててごらん なさい。」

五372 一匹は目に、一匹は口に、一匹は耳に手をあててゐます。

十99 〈略〉、王の日頃信頼してゐるパルメニオ將軍から、王にあてた密書が届いた。

十一473 図 〈略〉、今度はひぢを張り、足をのべ、手を口に當てて鶴の臥したる様をなせり。

十一1235 一端に口を當てて息を吹きこむと、ぶうつとふくれる。

十一1246 エプロンをかけた職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板

にあてて模様をほりつけたり、〈略〉。

十二598 時計師は仕上げた時計をちよつと耳に當ててから、ガラス戸棚の中につり下げた。

あと 「後」(名) 32 アト あと 後

↑うしろ・のち

一331 ハシゴノ アト カラ マトヒ ガイキマス。

一335 マトヒノ アト カラ ポンプ

ガイキマス。

一355 圖 オホキナガンハ サキ

ニ、チヒサナガンハ アト ニ、

ナカヨク ワタレ。

一544 圖 サルガアト オス エンヤ

ラヤ。

三145 ゆふはんがすんだあとで、

おぢいさんが二郎にたづねました。

三662 私ノウチヘキノフヲケ

ヤガ來テ、手ヲケヤタラヒノ

タガヲカケカヘマシタ。アトヘ

竹ノキレヲノコシテ行キマシ

タガ、〈略〉。

四426 下女がびつくりして、「き

やつ」といつたので、後でみん

なにわらはれました。

六512 十二人いるうち、十一人まで

はありました、あとの一人があり

ません。

六767 圖 コレハ、ハジメ白地ニオツ

テ置イテ、後デカタヲ置イテ染メル

ノデ、〈略〉。

六832 通有はほしらをたふして、

之をほしこにして、敵の船へをどり

こんだ。味方は後からくつづいた。

六832 味方は後からくつづいた。

七186 「〈略〉。」といふ使の後から、

「大將も討死されました。」といふ使

が來たが、〈略〉。

七517 〈略〉若イムスコガ、今デハ

其ノ後ヲツイデ、朝カラ晩マデ、相

カハラズ、トンテンカン、トンテン

カント、働イテキマス。

七739 かの男は「〈略〉。」といひな

がら、人夫の後について來ましたが、

〈略〉。

八187 將軍はあとで、御臺所に、

「〈略〉。」といつたといふことである。

八415 〈略〉、四五百人のものが、ぞ

ろく／＼と車の後について、思はず知

らず役所の門内へ入りこみました。

八572 圖 「年の若きに感心な。」

かくいふ聲を後にして、小ぞうは

乗りぬ、自轉車に。

八773 圖 「諸君、これも人のした後

では、何のさうさもない事でござい

ませう。」

八794 圖 「さうです。此の一枚には

徴税令書とありませう。〈略〉。」

九75 圖 殊に毎日のやうに降るには

か雨が、非常な勢で木を洗ひ草を洗

つて通り過ぎた後の、あざやかな緑

の世界は、〈略〉。

九268 圖 此の四代の苦心の後を受け

て、國家の爲に、此の學問を大成す

るのがお前の役目だ。

九506 お返事をお渡しした後で、お

とうさんに「〈略〉。」と言ふと、

〈略〉。

九666 間もなく食事用意のラツパが

ひゞく。一時間餘りも活動した後で

あるから、食事のうまいことはいふ

までもない。

九1093 北風は驚いてすぐに立止らう

としたが、後からかけて來る味方に

追はれて、思はず其の場から數十間

も進んでしまつた。

十998 フィリップが藥を調査しに別

室へ退いた後へ、〈略〉、王にあてた

密書が届いた。

十632 圖 主人は僧の後を追ひて外に

出でぬ。

十一171 聞けば、雑誌の類は號の順

に並べておいて、取出したら後でき

つともとの場所へお入れになるのだ

さうです。

十一516 此の邊でゴムを栽培するに

は、先づ森林を焼拂つて、其のあと

に種をまくか、又は苗木を植付ける

のであるが、〈略〉。

十一723 圖 「後を追つて御いにな

つたら、大い追ひつけませう。」

十一72 7 「略」。宣長は、大急ぎで眞淵の様子を聞きとつて、後を追つたが、略。

十一121 3 略、一同を引連れて立去つた。ジョージは後を見送つて、帽子を振りながら叫んだ。

十二131 4 警衛の兵士等は、略、西郷が後に續いてゐるのを見て、一同恭しく捧げ鉢の禮をした。

あと「跡」(名) 11 あと 跡 1 だんがんあと・へいじようきようあと・もえあと

九72 3 義經の居た高館のあとも右手に見えたはずだが、もう通過してしまつた。

九82 5 略、玉をふくめるこまたも、皆ちいさんののみのあと。

十41 10 さうして兄は略、父のかり取つたあとを元氣よくつるはしで掘返し始めた。

十70 7 降積みし雪もあと無くきえて、山河草木喜にあふる、春とはなれり。

十90 1 略 耕地整理のあとうつしく、並ぶ田の面に水きらめき、略。

十一9 8 途中、太宰府といふ昔の役所の跡などを見て、榎寺といふ處に立寄つた。

十二26 7 此處は菅公配所の跡である。十二26 7 上るや石のきざはしの左に高き大いてふ、問はばや遠

き世々の跡。

十二102 4 今若草山に登りて古京の跡を展望すれば、略。

十二102 10 大極殿の跡はるかに指點すべく、南の方郡山の町の東に羅城門の跡今も残りりといふ。

十二103 1 略、南の方郡山の町の東に羅城門の跡今も残りりといふ。あとあし「後足」(名) 2 後足

七31 4 武士の馬はおどろきて、後足にて立上り、おそれて其所に近づかんともせず。

九101 6 蛙が略。やがておもだかの莖や芹の葉などにつかまつて、後足を長く延ばし、眞青な空をじつとながめてゐる。

あとかたづけ「後片付」(名) 1 あとかたづけ

五88 3 仕合はせに水はそれからふえませんでした、町は大てい水につかつて、人家も七八軒流れました。略、今ではあとかたづけも大がすすみました。

あな「穴」(名) 11 アナ あな 穴 ↓あめのあな・ほらあな

三52 2 一「ああわかつた。あの光るところが雨のふるあなだ。」

三66 7 私ハソレヲヒロツテ、フシノマン中ニ、キリデ小サナアナヲアケマシタ。

三68 8 略、フシニ小サナアナ

ヲタクサン アケマシタ。

三69 5 コンナニアナヲタクサン アケテハダメダ。

三76 7 ソコデカウモリハシカタナシニ、ヒルハ木ノウロヤアナノ中ニカクレテキテ、略。

四59 1 ノコギリデ木ヲキルモノモアリ、ノミデアナヲホルモノモアリ、略。

六46 7 略、川ソコニ小石ノ多イ所ガアルト、頭ヤ尾デ穴ヲ掘ツテ、其ノ中へ卵ヲ産ム。

九33 8 すると木のうろから、栗鼠が一匹、略、急にまた穴にかくれてしまつた。

十二59 1 略、やがてピンセットでねちをはさんで機械の穴にさし込み、小さなねち廻しでしつかりとした。

十二105 1 略、毎日々々根氣よくのみを振るつて、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。

十二107 4 かくて又幾年かたつうちに、穴はだんく奥行を加へて、既に何十間といふ深さに達した。

あなご「穴子」(名) 2 アナゴ

七79 図 アナゴ

七80 1 魚類ニハ略、タヒ・アナゴ・ハモナドノヤウニ、岩ノカゲヤ海藻ノ間ヲ泳グモノガアリ、略。あなた「貴方」(代名) 29 アナタ あなた

一48 2 「モモタラウサン、モモタラウサン、アナタハドチラヘ

オイデニナリマスカ。」

二57 3 ワタクシハアナタノオトモダチデス。

二57 5 アナタガオタチニナレバ、ワタクシモタチ、略。

二57 6 略、アナタガオアルキニナレバ、ワタクシモアルキマス。

二58 2 イツモアナタニツイテキマスガ、略、ワタクシハアナタカラハナレマス。

二58 6 略、アカリガツイテキナカツタリスレバ、ワタクシハアナタカラハナレマス。

四20 8 アナタハオナサケブカイオ方デスカラ、後ニハキツトオシアハセノヨイコトガゴザイマス。

五33 3 ここがあなたの教室です。五44 6 「あなたはどなたでいらつしやいます。」

七66 5 「あなたは今朝一人で川をこした方ではありませんか。」

七69 4 それがあなたのやうな正直なお方に拾はれて、財布をいたゞかせてもらひましたが、略。

七70 3 あなたから一文でもらふ氣があるくらゐなら、此所まで持つて来はしません。

七71 6 略、此の金をあなたにさ

し上げまでも、おしかりになることはあるまいと思ひます。

七119 其の上あなたのお名前をうけたまはりたうございます。

七125 もしお金をもらつたら、あなたの氣はそれですむかも知れませんが、私の氣がすみません。

八873 あゝ、あなたが先生でいらつしやいますか。

八908 あなた、此のお子が返事をしないのは、あなたの口が見えないからです。

八908 あなた、此のお子が返事をしないのは、あなたの口が見えないからです。

八1077 呼びするのは大い近所の人で、あなたが知つていらつしやる方ばかりです。

十132 高橋さんは、すぐ前に居る順太郎君を見て、「あなたもずあぶん大きくなりましたね。」

十133 私も、あなたのおとうさんなどと一しよに、よく道ふしんに出たものでした。

十611 「旅僧が一夜の宿を頼むとおほせられて、あなたのお歸を待つていらつしやいます。」

十672 略、今夜は之をたいて、あなたのおもてなしに致しますせう。

十1132 はるかあなたに白い水煙が見える。

御話になる江戸の賀茂眞淵先生が、先程御見えになりました。

十一757 あなたはまだ若いから、しつかり努力なさつたら、きつと此の研究を大成することが出来ませう。

十二401 實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが、——あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふお話でした。

十二428 「一體あなたはどの御方でございますか。」

十二432 「あゝ、あなたはペー トーベン先生ですか。」

あなたがた「貴方方」(代名) 6 あなたがた あなた方

六292 人間があなた方を生けどりにするには、いく人かで力を合はせるではありませんか。

六298 私どもだつて、大ぜいしてかゝれば、あなた方に負けません。

八123 もう改めて勝負をするには及びません。あなた方の村が勝つたのです。

八127 どうか今日から一年の間、あなた方の村が五箇村の頭になつて下さい。

十139 私どもの若い自分には、略、あなた方の半分ぐらゐしか働きませんでした。

十一702 「あなたがたはともでもない人たちだ。」

あなたどる「悔」(五) 1 悔る

ラ

十二1374 習、性となつては、遂に日本人には獨創力がないであらうと自らも輕んじ、外國人からも侮られる。

あに「兄」(話手) 1 兄

三542 兄「こんなくらいばんにかぞへないで、ひるかぞへるがよい。」

あに「兄」(名) 19 兄「おとうとからあにへ・にゆうえいしたあにから・にゆうえいちゆうのあにへ

三536 兄「おまへ、何をかぞへてゐるのだ。」とたづねますと、略

四897 曾我兄弟は兄を十郎、弟を五郎といひました。

四916 兄が弓をひけば、弟はたちをふりまはし、早く強くなつて、かたきを取らうと心がけました。

六221 沖へ急ぐ兄の小舟、濱へ歸る父の小舟、すれ合つて、あがほとあがほ。

六255 親が落ちれば其の子も落ち、弟が落ちれば兄も落ち、馬の上には人、人の上には馬、略。

六433 十二月十五日 兄から 千太どの

九851 信吉は夏休にて歸り居たる兄に向ひて、いろ／＼と星の説明を求めたり。

九932 信吉は兄と姉とに謝して、

樂しく其の夜のゆめに入れり。

十241 十一月二日 兄から 信吉どの

十382 父は毎日、兄や木びきの力藏さんと、朝早くから行つて、夕方おそくまで働いてゐる。

十389 略、兄は「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」といつて、略。

十393 兄は略、木の根や、小枝などを拾ひ集めて来て、たき火を始めた。

十415 兄は私に「略。」といひながら、生木の枝で雜木を束ねて見せた。

十419 さうして兄は腰の手ぬぐひを取つて鉢まきにし、略。

十908 略、はうき手に／＼此方をさして 語りつゝ来る若き人々、今朝とく出でし兄も交れり。

十二387 「そんなことをいつたつて仕方がない。略。」と兄の聲。

十二398 妹の顔はさつと赤くなつた。兄はむつとりとしてやゝ當惑の體である。

十二408 それに樂譜もございませんが。」と兄がいふ。

十二426 しばらくして兄は恐る恐る近寄つて、略、「一體あなたはどのういふ御方でございますか。」

あにうえ「兄上」(名) 1 兄上

四946 略、十郎五郎、かほを

見せよ。」五郎「兄上。」

あにうえさま 「兄上様」(名) 2 兄上様

六104 三月十八日 千太 兄上様
九49 六月十日 要吉 兄上様
あにさまがた 「兄様方」(名) 1 兄様
ガタ

四18 4 ソコへ大國主ノ神ガオ出
デニナリマシタ。〈略〉。兄様ガ
タノオトモヲシテ、〈略〉。

あね 「姉」(名) 10 あね 姉

三29 1 つつみ かかへてがくかう
へ つれだちいそぐあねおとと。

三29 3 足すべらせてこけかかる
おととをかばふあねのうで。

三29 4 足だのはなをふつとりと。
またあねは手ばやくをを

三30 4 たてて、小川の水で手をあ
らひ、〈略〉。

四47 2 よみ手はおぢいさんで、
取手は〈略〉の四人と、友一と

友一のあねの道子です。

九90 7 信吉は傍なる姉に向ひて、
「ねえさん、どうぞ其の話を聞かせて下さい。」と頼みたり。

九93 2 信吉は兄と姉とに謝して、
楽しく其の夜のゆめに入れり。

十二65 8 姉二人は既にさる貴族に嫁
し、妹はかねてフランス王の后にな

ることにきまつてゐた。
十二66 6 先づ姉のゴネルルから言

つてみよ。

十二69 10 さうして残りの領地を二分
して、姉二人にやつてしまつた。

あねうえ 「姉上」(名) 3 姉上
十二67 6 私も姉上と同じ心で、
ほんたうに姉上は私の思つてゐる通りをおつしやいました。

十二67 6 〈略〉、——ほんたうに姉
上は私の思つてゐる通りをおつしやいました。

十二73 9 「略」、此の白い髪を髭
を御覧になつたら、姉上もお氣の毒
とお思ひになりさうなものなのに、
〈略〉。

あねたち 「姉達」(名) 1 姉たち
十二72 9 それは父が姉たちの爲に
虐待されてゐるといふことであつ
た。

あねむすめ 「姉娘」(名) 1 姉娘
十二71 1 リヤ王は百人の家來を連れ
て先づ姉娘ゴネルルの許に身を寄せ
た。

あの「彼」(連体) 89 アノ あの
一40 2 一パンボシミツケタ。ア
レアノ モリノ スギノ キノ
ウヘニ。

一40 6 二パンボシミツケタ。ア
レアノ ドテノ ヤナギノ キノ
ウヘニ。

一41 4 三パンボシミツケタ。ア
レアノ ヤマノ マツノ キノ
ウヘニ。

二72 2 オカアサンハアノ シロ
イハナガスキデス。

二76 2 「ワタクシハアノアカイ
大キナハナガスキデス。」

二83 2 「ソノツギハ、アノタク
サンサイテキル、小サナキイロ
イキクデス。」

二86 2 アノキクハオトウサン
モタイソウオスキデス。

二21 4 「ソレデハムカフニ木
ガアリマスカラ、アノ木ノ下
ヘイツテミマセウ。」

三52 1 「あわかつた。あの光
るところが雨のふるあな
だ。」

三59 1 〈略〉、モウリツバニセミ
ニナツテキマス。コノ大キナモ
ノガ、ヨクアノカラノ中ニ
ハイツテキタモノダトオモヒ
マシタ。

三60 1 今ニハノ木ニセミガ
ウルサイホドナイテキマス。ア
ノセミモコノ中ニキルノデ
セウ。

三71 6 それから、あの赤いじゆ
ばんはねえさんので、〈略〉。

四57 5 何百年かたつた後、山
のふもとの大木は、あのしひ
の木か、かしの木か。

四63 2 「だれかあの扇をいお
とすものはないか。」

四76 7 あのうちは此の上よく
なるばかりでせう。

五62 4 あれく、虹がきえて行く。
あのあざやかな色どりも しだい
くうすくなり、小山の方ほも
う見えぬ。

五63 7 あのとんぼの中に、ちよつ
とした森があるだらう。

五64 7 「略」白壁造の家は工場で
すか。」「あの青田の中にあるのだら
う。

五65 3 うちの繭もあの工場で生絲
になつたはずだ。

五68 4 「あゝ、あの貧乏村か。」

五77 6 あの白壁造の土蔵のある家が
それだ。

五78 1 〈略〉、あの家にはよい事が
つゞいて、身代は前よりもよくなつ
た。

六15 5 來年もやはりあの稻を作り
ませう。

六27 6 「どうも分らないのは、あ
の弱い人間がわれわれの仲間を生け
どりにすることだ。」

六59 4 「あの門の中へ、はいつて
はなりませぬ。」

六59 7 「あの中には石のらうがあ
つて、唐系様がおしこめられて居ら
れます。」

六73 7 ああ美しい友禪染は、もと此
の川べりで出来たのでございます。

六98 6 あの學校がたつた時、
〈略〉、かついで行つて植ゑたのだ。

になつたのかと尋ねた。

十121 〇 主人は答へて、「あの青年が私の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、〈略〉」。

十123 〇 〈略〉、あの青年ははいるとすぐに書物を取上げて、テーブルの上に置きました。

十124 〇 かういふ點から、〈略〉、あの青年をやとふことにしたのです。

十137 つまり此の宇宙には、あの太陽のほかに、これと同じやうなものがあるは無限にもなく存在してゐるが、〈略〉。

十1310 しかも我々に最も近いあの太陽でさへ、地球からは凡そ三千八百萬里も離れてゐる。

十13610 一昨年植付けた時の覺書だ。あの時、「こんなに間をおいてよいのですか。」と僕が聞いたら、〈略〉。

十1402 僕がお手傳して植ゑたあの杉や檜は、何時になつたら伐るのだらう。

十1718 〇 あの新上屋に御泊りになつて、さつき御出かけの途中『何か珍しい本はないか。』と、御立寄り下さいました。

十2545 〇 あのいろいろの道具、たくさんさんの時計、〈略〉、これを見ても自分よりは大きく、自分よりはえらさうである。

十27310 〇 コーデリヤは眠つてゐる父の衰へ果てた姿をつくづくと見て、

「〈略〉、——まあ、此のお體であのひどい嵐の中を——。」といひながら、よゝと泣きくづれた。

十21069 其のうちに誰言ふとなく、あれは山師坊主で、あのやうなまねをして、人をろうらくするのであらうといふうはさが立つた。

十21084 〇 〈略〉、我々もあのくさり戸を渡る難儀をのがれようではないかと相談して、其の方法をも取りきめた。

あはは (感) 1 あはは、六281 〇 其の時「あはは。」と笑ふものがあつました。

あばらや「荒屋」(名) 1 あばら家十596 〇 雪の日の夕暮に近き頃、〈略〉旅僧あり。とあるあばら家の門口に杖を止めて、一夜の宿を貸し給へとこへば、〈略〉。

あばれまわる「暴回」(五) 1 アバレマハル「一リ」

四355 〇 〈略〉、此ノ鳥ハ見エルノデ、ホカノ鳥ヲイデメタリ、ツカミコロシテエニシタリシデアバレマハリマス。

あび (名) ↓みずあび
あびせか・く「浴掛」(下二) 1 あびせかく「一ケ」

十289 〇 〈略〉秀吉、勝政の引足になりたるを見て、すかさず鐵砲組に合圖して銃火をあびせかけたれば、〈略〉。

あびせか・ける「浴掛」(下二) 1 浴びせかける「一ケ」

八1133 〇 すると大將の父は〈略〉、大將を井戸端へ連れて行つて、着物をぬがせて、頭から冷水を浴びせかけた。

あひる「家鴨」(名) 2 アヒル あひる
一301 〇 アヒルガオヨイデキマス。

五301 〇 うちの前には小川が流れ、舟もうかべば、あひるもうかぶ。

あ・ひる「浴」(上二) 8 アヒル 浴びる「一ビ」

四173 〇 「ソレナラ海ノ水ヲアビテ、ネテ居ルガヨイ。」

四176 〇 白ウサギハスグ海ノ水ヲアビマシタガ、〈略〉。

九317 〇 殊に遊覽船に乗つて、頭から雨のやうなしぶきを浴びながら、瀧つぽを見物して廻るのは、實に壯快です。

九343 〇 みねからすそにかけての若々しいこずゑの色は、強い日光を浴びて、一面に煙つてゐる。

十1510 〇 やがて暮近くなつたので、一同は〈略〉、夕日を浴びて歸途についた。

十474 〇 彼の頭の中にあるものは、唯夕日を浴びた柿の色であつた。

十23310 〇 私は今落日に對して、うすら寒い秋風を浴びながら、〈略〉戦跡に立つてゐます。

あぶない「危」(形) 7 あぶない「一イ」

五824 〇 「あぶないことだ。もし宗任に悪い心があつたら。」と、義家の家來どもはひやくしたといひます。

五995 〇 「あぶない時に、友だちをすててにげるやうな者には、これからつきあふな。」

七455 〇 馬はおどろいてとび上つたので、信玄はあぶない所を助かつた。

七645 〇 さうしてずるぶんあぶない目にあつて、やうやう向岸に着きました。

七653 〇 〈略〉、渡賃が高いといつて、此のあぶない川を一人でこしたほどの人である。

十942 〇 かねてあぶないといつて置いた、あの橋を渡つたのでは無いか。

十956 〇 お前のやうな弱蟲には、ひよつとすると命を失ふやうなあぶない時でも、〈略〉。

あぶなく「危」(副) 1 あぶなく

九921 〇 〈略〉、アルカスはそれと知りませんから、あぶなく親身の親を射殺すところでした。

あぶら「油」(名) 2 油 ↓たねあぶ

ら

六96 6 さうして其の上へ油をふりかけさせた。

十一679 燈火としては、初め松の木や魚・獸の油などをたいたのであつたが、〈略〉。

あぶらぜみ「油蟬」(名) 1 アブラゼミ

三582 〈略〉、カラヲキタセミガハヒ上ツテキマス。〈略〉。アブラゼミデス。

アフリカ「地名」 1 アフリカ ↓なんぶアフリカ

十一546 昔、アフリカの或港に一その船がとまつてゐた時の話である。アフリカしゅう「地名」 2 アフリカ洲

七17 図 海を分けて太平洋・大西洋・印度洋とし、陸を分けて、アジア・ヨーロッパ・アフリカ洲・〈略〉とす。

七3 図 アフリカ洲
あふる「溢」(下二) 1 あふる「一ル」

十707 図 降積みし雪もあと無くきえて、山河草木喜にあふるゝ春とはなれり。

あふれる「溢」(下一) 2 あふれる
《一レ》しみなぎりあふれる

七627 連日の雨で、川といふ川には水があふれました。

十二355 図 やがてベルリンに入つて

見ても、勤儉の美風が市民の間にあふれてゐて、〈略〉。

あべかわのぎふ「安倍川義夫」〔課名〕 2 安倍川の義夫

七目5 第十七 安倍川の義夫

七618 第十七 安倍川の義夫
あべかわのしゆく「安倍川宿」(名) 1 安倍川の宿

七625 中でも安倍川の宿は一そうの入こみであつたと申しますが、〈略〉。

あべかわ「安倍川原」(名) 1 安倍川原

八134 徳川家康が幼時家來に負はれて、安倍川原へ石合戦を見に行つた。

あべのむねとう「安倍宗任」(人名) 1 安倍宗任

五794 八幡太郎義家が或日安倍宗任をつれて廣い野原を通りますと、〈略〉。

あま・い「甘」(形) 2 アマイ 甘い
《一ク》

五963 庭サキノブドウ棚ニ、今、タ日ガサシテキマス。〈略〉。モウアマクナツテキマセウ。

九1022 〈略〉柿がすゞなりになつてあるのが目につく。〈略〉。まだ青いが早く甘くなるたちだから、もう直に食べられる。

あまがえる「雨蛙」(名) 2 雨蛙

九167 田二住ム土蛙ハ土色、木ノ葉ニ宿ル雨蛙ハ緑色。

九178 例ハバ雨蛙ハ緑色ノ葉ノ上ニ

居ル時ハ緑色デアルガ、〈略〉。

あまがき「甘柿」(名) 2 あま柿
四517 しふ柿が三本、あま柿が二本で、〈略〉。

四53 しふ柿が三本、あま柿が二本で、その中に私の木が一本あります。あま柿です。

あまざらし「雨曝」(名) 1 雨ざらし

七238 其の松の下に石できざんだ地蔵様が立つていらつしやる。晒木綿のづきんをかぶつて、雨ざらしになつていらつしやるが、〈略〉。

あま・す「余」(五) 1 餘す 《一ス》
↓もてあます

六948 図 賊は「それ、敵が出た。一騎も餘すな。」とおしよせた。

アマゾンがわ「地名」 3 アマゾン河

十一102 図 アマゾン河

十一1042 図 其の中に有名なるアマゾン河や、イグアッスの大瀑布の壯觀を寫したるものもこれあり候。

十一1046 図 アマゾン河は全長五千五百キロメートル、世界の河の王といはれ居候。

あまだれ「雨垂」(名) 1 雨だれ

八824 雨だれでも石をうがつ。

あまつひつぎ「天日嗣」(名) 1 天つ日嗣

十二74 図 此の葦原の中つ國を皇孫にたてまつりて、とこしへに天つ日嗣を護りまつらん。」

あまてらすおおみかみ「天照大神」(人

名) 4 天照大神 天照大神

五76 天照大神の弟の方に、すさのをのみことと申す神様がございました。

五125 これはめづらしいつるぎだ。自分の物にしてはならぬとおぼしめして、天照大神へお上げになりました。

十752 図 此處には天照大神をおまつりした京城神社があり、〈略〉。

十二61 図 時に天照大神の使者建御雷命此の地に來りていふやう、〈略〉。

あまど「雨戸」(名) 3 雨戸

五868 図 〈略〉、うちでも下の雨戸がたふれて、中からうすやたらひがばかばか流れ出すほどで、どうすることも出来ませんでした。

六331 病院ノ前ノ酒屋デハ雨戸ヲ明ケハジメタ。

九634 これ等の仕事は、陸上の家で、毎朝起きると先づ夜具をかたづけ、雨戸をくるのとかはりはないが、〈略〉。

あまね・し「遍」(形) 1 あまねし
《一ク》

十二151 図 第四課 新聞 〈略〉。

〈略〉、やがてあまねく内外の事件を報ずると共に時事を論ずるもの起りて、こゝに始めて我等の生活に切實なる關係を有するものとはなりぬ。

あまのかぐやま「天香久山」(地名) 1

天の香久山

十二103 図 更に首を回らして南を望めば、〔略〕 畛傍山・耳成山・天の香久山の三山まゆの如く、〔略〕。

あまのはしだて 「天橋立」(地名) 2

天の橋立

五56 4 〔略〕、松島・天の橋立・宮島の三つを、昔から日本三景と申しま

す。
五57 6 天の橋立は海中へつき出た細長い洲で、長さは一里、はゞは四五

十間。
あまのり 「甘海苔」(名) 2 アマノリ

七84 図 アマノリ

七85 6 海藻ニハイロくアル。先ヅタベルモノニハ、コンブ・〔略〕・アマノリ・アヲノリ・モツクナドガアリ、〔略〕。

あまみず 「雨水」(名) 3 雨水

五51 6 雨水ノ流レル道ハ地圖ニカイ

タ川ヲ見ルヤウデス。

五52 4 雨水ハタマカウシテ流レルバカリデハアリマセン。地ノ中ニシミ

コンデ、〔略〕。

九7 8 図 水の乏しい此の島々では、其の雨水がまた大切な飲料水となる

のです。

あまり 「余」(名) 2 あまり 餘り
↓いちじかんあまり・いちまんろくせんじやくあまり・ごじゅうマイルあまり・さんじつさいあまり・さんじやくあまり・じつかりあまり・じつちよ

うあまり・しまイルあまり・じゅうねんあまり・とおかあまり・にしゅうかんあまり・ひやくねんあまり・ひと

つきあまり・ひやくくばいあまり・ひやくねんあまり・みつきあまり

九43 1 図 厚意謝するに餘りあり。軍のおきてにしたがひて、他

日我が手に受領せば、長くいたはり養はん。』

十二97 5 今や釋迦は衆星の中の満月の如く國中から仰がれる身となつた

が、中には彼をそねむあまり、反抗

するばかりでなく、〔略〕。

あまり 「余」(形状) 2 餘り

九115 7 図 それは餘りな御言葉です。〔略〕。何で命を惜しませう。どうぞ之を御覽下さい。

十44 8 喜三右衛門は餘りの美しさに

うつとりと見とれてゐたが、〔略〕。

あまり 「余」(副) 15 アマリ あまり 餘り

三44 2 図 「いろいろおせわになりました。あまり長くなりますから、もうおいとまにいたしませう。」

三83 6 あまりけしきがよいので、れふしがぼんやりと海をながめてゐました。

三87 3 図 れふしはきのどくに

りまして、「あまりおかはいさう

ですから、おかへし申します。

四71 2 一人ハタイソウ皆サンニ

スカレマスガ、一人ハアマリ

スカレマセン。

四79 1 其の後間もなく死んだのです。さむい日のことで、

あまり氣のどくでしたから、〔略〕。

七89 1 あまり急ぎましたので、水が

いすの上にあつたおばあさんのづきにこぼれました。

八4 1 〔略〕、小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれてゐる。あまりかはいらしいので、僕はしばらくそれを見てゐた。

八8 8 三番太鼓が鳴るが早い、五

匹の馬は一人にかけ出した。始の間はあまり甲乙はなかつたが、〔略〕。

九114 6 ふと通りが、つた某大尉が之を見て、餘りにめづしいふるまひと

思つて、「こら、どうした。」

十131 6 図 行幸餘りに遅かりしかば、

人をしてうかゞはしむるに、〔略〕。

十一10 3 租界の外に出ると大ていは

支那風の町で、町幅も狭く、あまりきれいでない。

十一71 5 あまり思ひがけない言葉に

宣長は驚いて、「先生がどうしてこ

ちらへ。」

十二10 2 九歳の時始めて學校にはいつたが、餘りすばらしい生れつきでなかつたので、〔略〕。
十二39 9 ベートーベンも我ながら餘りだしぬけだと思つたらしく、口ご

もりながら、「〔略〕。」

十二55 9 男の子は指先でそれをつま

まうとしたが、餘り小さいのでつま

めなかつた。

あまる 「余」(五) 1 餘る 《一ツ

↓ありあまる

十51 8 図

だから、少しでも餘つたお金があつたら必ず預金にして置くものだ。

あみ 「浴」(名) ↓ゆあみす

あみ 「網」(名) 4 網 ↓かきあみ・

かなあみ・だいぼうあみ・まぐろあ

み・みあみ

十二78 5 其の時魚見やぐらの上で旗

を揚げて、まぐろの群が網にはいつ

たといふ合圖をすると、〔略〕。

十二78 10 かうしてだん／＼網の中が

狭められるに随つて、まぐろは水面

に渦巻を起したり、〔略〕。

十二79 3 網の中がいよ／＼狭くなる

と、其の周圍を船で取巻いてしまふ。

十二83 10 図 網をすき、舟を漕ぎ、漁

業の手傳などして土人に親しみ、さ

てさまぐの物語を聞くに、〔略〕。

あみがさ 「編笠」(名) 1 あみ笠

九57 9 あみ笠をかぶつた父がふり向

くと、母もすげ笠をそちらへ向けて、〔略〕。

あみぐち 「網口」(名) 2 網口

十二78 6 〔略〕、まぐろの群が網には

いつたといふ合圖をみると、網口の

近くに番をしてゐる漁夫が急いで網

口をしめてしまふ。

十二78 7 〈略〉、網口の近くに番をしてゐる漁夫が急いで網口をしめてしまふ。

あむ 〔編〕(四) 1 あむ 《ム》

十89 3 〔圖〕 冬の朝日のさす軒下に、俵あむ手のいそがしげなる 父と母とに暇を告げて、勇みて出づる我が家の門。

あめ 〔雨〕(課名) 2 雨

五目2 十四 雨

五50 3 十四 雨

あめ 〔雨〕(名) 35 アメ 雨 ↓おおあめ・にわかあめ・ひとあめ・ひとあめごと

一20 1 アメガヤミマシタ。ヒガテリダシマシタ。

三25 2 この一三日の雨で、竹の子がこんなに出了た。

三28 6 〔圖〕 ゆふべの雨でくさや木のみどりいろますなつのあさ、〈略〉。

三52 1 〔圖〕 「ああわかつた。あの光るところが雨のふるあなだ。」

三55 1 あるとき、雨のふる日に、たうふうがにはへ出て、池のはたを通りますと、〈略〉。

四94 1 五月二十八日、雨のふるばんの事です、〈略〉。

五12 8 四月二十一日 土曜 雨

五16 1 夕方から雨がふり出しました。

五16 2 四月二十六日 木曜 雨

五20 7 ゆふべの雨がはれて、青葉の上に日が氣持よくつてゐます。

五50 4 此ノ頃ハ雨ガ降リツミイテ、表デ遊ブ日ガアリマセン。

五50 5 カウ毎日降ル雨ハドウナツテシマフノデセウ。

五50 7 カラカサニ降ル雨ガ四方ヘ流レオチルヤウニ、水ハ低イ方ヘ低イ方ヘト流レテ行キマス。

五51 1 庭ヘ降ル雨モ、庭ノ高イ所カラ、低イ方ヘ流レテ行キマス。

五61 6 〔圖〕 さて、虹はおもしろい。雨のはれ間にちよつと出て、用ありさうに天と地の 遠きをつなぐ雲の上。

五84 5 〔圖〕 〈略〉、四日の日は朝からひどい雨で、夕方から風もはげしくなりました。

五85 3 〔圖〕 夜明け方になつて、雨も風もやみますと、急に川水の音がごうくくと聞えて来て、〈略〉。

五89 6 雨が降つても、風が吹いても、夜でも、晝でも、此所に立通しに立つてゐますが、〈略〉。

五93 8 いつか大そう雨のふるばんに、〈略〉。

六14 2 二三日降りつづいた雨がかりとはれたので、〈略〉。

七61 9 連日の雨で、川といふ川には水があふれました。

七94 9 仕合はせに午後は風が弱つた。

夕方からは雨になつて、風は全く止んだ。

八12 此の間三度降つた雨に、山の木の葉は目立って色づいた。

九31 6 殊に遊覧船に乗つて、頭から雨のやうなしぶきを浴びながら、瀧つばを見物して廻るのは、實に壯快です。

九47 1 〔圖〕 あの降りつづいた雨のおかげで、山田の高い所まで一息に植ゑることが出来ました。

九62 9 すると乗員は、一せいに飛起きて、手早くつり床をくぐる。これから號令が雨のやうに下る。

九100 8 昨夜雨が降つたせゐか、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近く見える。

九103 8 〈略〉、北風は〈略〉、砲彈の雨の中でも、銃劍の林の中でも、びくともせずに勇ましく活動した。

九107 4 敵彈は前後左右へ雨のやうに落ちて来る。

十77 6 〔圖〕 こちらへ来てもう三月餘りになります、よくも續くと思ふくらゐの天氣續きで、雨といふものはごくたまにしか降りません。

十80 1 地下水のしづくが、四方から雨のやうに落ちて来る。

十一35 4 障子をあけてみるとまだ雨が降つてゐる。

十一35 6 〈略〉、うねくくと續く岡が雨に煙つて、ぼんやりと遠く見える。

十一99 10 ところが或夜、夜中に激しい雨が降つたことがある。

十一100 1 壁のすき間をもつた雨のために、本がすっかりぬれてゐたので、〈略〉。

あめあがり 〔雨上〕(名) 1 雨あがり 六101 1 雨あがりの庭はぼううつとけむつてゐました。

あめざいく 〔鉛細工〕(名) 1 あめ細工 十一123 7 まるであめ細工のやうである。見てゐるうちに大きなフラスコが出来た。

あめつづき 〔雨続〕(名) 1 雨つづき 五84 4 〔圖〕 九月にはいつては雨つづきでしたが、四日の日は朝からひどい雨で、夕方から風もはげしくなりました。

あめのあな 〔雨穴〕(題名) 1 雨のあな 三51 7 十七 一口ばなし 一 雨のあな

あめや 〔鉛屋〕(名) 1 あめや 四26 又 あめややくわしやでは、はやし立てておきやくをよんでゐます。

あめゆき 〔雨雪〕(名) 1 雨雪 十一91 5 〔圖〕 それから雨雪の量は何處が一番多いか、又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。

アメリカ 〔地名〕 3 アメリカムきた

- アメリカ・きたアメリカしゅう・みなみアメリカ・みなみアメリカしゅう
 八七二 コロンブスがアメリカを発見して歸つた時 イスパニヤ人の喜んだことは非常なものでした。
 十二一四九 Edison の發明せるは電話・「略」など極めて多く、アメリカにて特許を得たるもののみにも其の數實に千餘に及ぶ。
 十二一八四 アメリカにおいては此の無線電話の應用が極めて廣く、「略」。
 アメリカがっしゅうこく 「地名」 9
 アメリカ合衆國
 七二四 アメリカ合衆國
 七四三 其の中我が大日本帝國と、「略」及びアメリカ合衆國を世界の五大強國といふ。
 七八一 「略」、生絲は多くアメリカ合衆國に、羽二重はフランス・イギリス等に送る。
 九二九 世界一といはれるナイヤガラ
 の瀧は、アメリカ合衆國とカナダとの國境にあります。
 十三六 最後にアメリカ合衆國は、國家事業として此の工事に着手し、「略」、遂に之を造り上げたのである。
 十七八 輸出品の主な物は、「略」などで、輸出先はアメリカ合衆國・「略」等である。
 十八八 綿花は主に印度やアメリカ合衆國から輸入し、それに加工して綿絲や綿織物を造る。
 十一九四 七 アメリカ合衆國第十六代の
 大統領リンカーンは、「略」。
 十二二六六 アメリカ合衆國の國旗は一定不變の部分と、變化を許された部分とより成る。
 アメリカじん (名) 3 アメリカ人
 八六六 アメリカ人の元氣なことは、これだけ聞いてもわかりませう。
 八六八 日本人は八萬人餘も居て、子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、英語で勉強しますが、「略」。
 八七三 アメリカ人は大きいこと、廣いこと、高いこと、早いこと、何でも世界一になるやうに心掛けてあるといひますが、何しろ大した勢です。
 アメリカだき 「地名」 2 アメリカ瀧
 九三〇 右にあるのがアメリカ瀧、左にあるのがカナダ瀧で、此の二つを合はせてナイヤガラの瀧といふのです。
 九三〇 瀧の幅は、アメリカ瀧が百餘丈、カナダ瀧が三百餘丈、高さはどちらも十五六丈あります。
 アメリカだより 「課名」 2 アメリカだより
 八目七 第十八 アメリカだより
 八六八 第十八 アメリカだより
 あやうい 「危」(形) 4 あやふい
 危い 《ウー・ーク》
 六九六 今度こそは千早城もあやふく
 見えた。
 七一八 五 「極樂寺坂の味方があやうございます。」
 十二七四 打ちよせる大波、打返すさか波、危く岩に打付けられ、忽ち死の口に吞まれようとする。
 十二一三六 「略」、國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國內はおほむね平和であつた。
 あやうく 「危」(副) 1 危く
 十一二四七 あわてて逃げんとすれども時既におそく、大方はやにはに斬倒されたり。危く逃延びたる一二の兵卒、はせもどつて急を告ぐれば、「略」。
 あやうげ 「危気」(形状) 1 危げ
 十二一〇四 それは山國川に沿うて連なる屏風のやうな絶壁をたよりに、見るから危げな數町のかけはしを造つたものであるが、「略」。
 あやうし 「危」(形) 4 危し 《一カ
 ル・キ・ーシ》
 九一〇 八 其の時、御供にしたがひ給へる弟、橋媛、尊の御身危しと見給ひ、「略」。
 十九七三 「羊の虎に向ふが如し。
 危し。」
 十九七四 「我もとより之を知る。
 唯國家の危きを如何せん。」
 十二八四七 「容貌の異なる汝が彼の地に行かば、必ずや人に怪しまれ、なぶりものにせられて、或は命も危かるべし。」
 あやしみてあそぶ 「怪弄」(四) 1
 怪しみてもあそぶ 《一バ》
 十二八七二 林藏の怪しみてもあそばさるゝこと、此處にては更に甚だしかりしが、「略」。
 あやしむ 「怪」(四・五) 2 あやしむ
 怪しむ 《一マ・ーン》
 八一三 見物人は争つて、多勢の方へ行つたが、家康は小勢の方へ行くと命じた。家來があやしんで、其のわけをたづねると、「略」。
 十二八四六 「容貌の異なる汝が彼の地に行かば、必ずや人に怪しまれ、なぶりものにせられて、或は命も危かるべし。」
 あやす 「(五) 1 アヤス 《一シ》
 二二六 二 ワタクシガアヤシテアゲルト、「略」、ウマウマトイヒマ
 ス。
 あやつる 「操」(四・五) 2 あやつる
 操る 《一ッ・ーリ》
 十二七 一進一退、たゞ運を天にまかせて、二人はボートをあやつつた。
 十一八五一 丈餘のろかい操りて、行手定めぬ浪まくら、百尋・千尋海の底、遊びなれたる庭廣し。
 あやにく 「生憎」(副) 1 あやにく
 十六五九 だんく寒くなつて來たが、あやにく新も盡きてしまつた。
 あやまり 「誤」(名) 1 誤

十二24 8 文明の進んだ今日尚此のやうな考を持つのは、大きな誤といはねばならぬ。

あやまる 「誤」(五) ↓みあやまる

あやまる 「謝」(五) 1 あやまる

《一ツ》

六31 3 虎は《略》、どうすることも出来ません。とう／＼弱つて、蟻に

あやまつたと言ひます。

あゆみ 「歩」(名) 2 歩

十59 6 雪の日の夕暮に近き頃、上州佐野の里に、つかれし足の歩重く

たどり着きたる旅僧あり。

十60 8 感がいに打沈みてとぼ／＼と歩を運ぶ。

あゆみきたる 「歩来」(四) 1 歩み

来る 《一レ》

八55 6 雪どけ道のぬかるみを杖にすがりてとぼ／＼と、歩み來

れる老婆あり。

あゆみよる 「歩寄」(四) 1 歩みよ

る 《一レ》

九13 4 妹はやがてかこひ近く歩みよれば、中なるひよこどもは《略》

かこひぎはに集る。

あゆむ 「歩」(五) 1 歩む 《一マ》

八7 3 やがて五人の騎手は多くの

人々につきそはれ、しづ／＼と馬を

歩ませて、鳥居の中に集つて來た。

あら (感) 2 あら

三64 7 みよ子「あら、てふてふが

五郎さんの舟にとまりまし

た。」

十二58 5 仕事臺のそばに、ふさぎ

こんで下を見つめてゐた女の子がそ

れを見附けて、思はず「あら。」と

叫んだ。

あらい 「洗」(名) ↓かんばんあらい・

じようかんばんあらい・じようかんば

んあらいかた・てあらいばち

あらい 「荒」(形) 2 荒イ 荒い

《一イ・一ク》

八50 5 ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒

クテ、家畜ヲサラフノモ多クハ此ノ

時デアル。

十二13 10 《略》、昔から此の島國で荒

い浮世を知らずに過して來たことが、

其の主たるものであらう。

あらいおわる 「洗終」(四) 1 洗ひ

をはる 《一リ》

九12 2 顔を洗ひをはりて、いつも

の如く、庭のすみなるとやの戸を開

く。

あらう 「洗」(四・五) 11 アラフ あ

らふ 洗フ 洗ふ 《一ツ・一ヒ・一フ・

一ヘ》

三4 7 ハヤクカホヲアラツテ、

ニイサント一シヨニオサラヒヲ

シマセウ。

三30 5 あねは手はやくをを

たてて、小川の水で手をあ

らひ、《略》。

四19 8 早ク川へ行ツテ、シホ

ケノナイ水デカラダヲアラ

ツテ、ガマノホヲシイテ、ソノ上ニコロガレ。

五86 2 其の時表で水だ／＼とさけ

ぶこゑがしましたので、二階のまど

からのぞいて見ますと、水が表の通

をさつと洗ひました。

七83 2 又物ヲ洗ツタリフイタリスル

時ニ使フ海綿モ、《略》 蟲ノ骨デア

ル。

八97 7 荒波洗ふデツキの上に、

やみをつらぬく中佐の叫。

九7 5 殊に毎日のやうに降るには

か雨が、非常な勢で木を洗ひ草を洗

つて通り過ぎた後の、《略》。

九7 5 勢で木を洗ひ草を洗つて通り過ぎた

後の、あざやかな緑の世界は、《略》。

九65 8 総員顔洗へ。」

九65 9 そこで始めて乗員は顔を洗ふ。

九69 10 顔を洗つて來て、ビスケット

を食べながら、《略》。

あらうず 「荒渦」(名) 1 あら渦

十二81 1 山もどろに引潮たぎり、

たぎる引潮あら渦を巻き、《略》。

あらかじめ 「予」(副) 1 豫め

十56 2 しかし此の外に、往復通信の

方法もある。それは、豫め甲乙の二

地をきめて置いて、一方を飼養所、

一方を食事所とし、《略》。

あらこなし 「荒」(名) 1 あらこなし

十38 6 かり取つた雑木、切倒した大

木、掘起した木の根や石ころ、まだ

あらこなしの開墾地は、まるで足のふみ場も無い有様である。

あらこま 「荒駒」(名) 1 荒駒

十二3 1 荒駒を馴らしがてらに、

野邊遠く 櫻がりするますらをのとも。

あらし 「嵐」(名) 2 嵐

十24 10 一そのの船が、俄の嵐におそ

はれて、此の島に近い岩に乘上げた。

十二73 10 《略》、——まあ、此の

お體であのひどい嵐の中を——。」

あらし 「荒」(形) 1 荒し 《一ク》

十二83 5 北より北は波荒くして

舟を進むべくもあらず、《略》。

あらす 「荒」(五) 1 荒す 《一シ》

↓ふみあらず

十一52 1 其の間草をとつたり、虎や

象の荒しに來るのを防いだり、苦心

はなか／＼一通りでない。

あらそい 「争」(名) 2 争 ↓こども

あらそい

十一22 6 若し裁判が無いとしたら、

人々相互の争がはてしなく行はれて、

《略》。

十一22 7 《略》、人々相互の争がはて

しなく行はれて、しかも其の争は、

力の強い者やわがしこい者が勝つ

ことになるであらう。

あらそう 「争」(四・五) 10 あらそふ

争フ 争ふ 《一ツ・一ハ・一ヒ・一

フ》↓あいあらそう

四54 2 山國のものが「日は山

から出て、山へはいれる。」といへば、島國のものが「いや、略。」といつてあらそひます。

七627 図 〈略〉、「それ、川が渡れる。」といふことになりますと、我もく先をあらそつて渡りました。

七642 此の時見すばらしいなりをした一人の男が、人夫と渡賃を高いやういと言つてあらそつてゐましたが、〈略〉。

七648 かの入夫は、少ししてから、何の氣もなく、先程渡賃をあらそつた所へ行つて見ますと、〈略〉。

八136 一方は百四五十人で、他の一方は三百人以上もあつた。見物人は争つて、多勢の方へ行つたが、家康は小勢の方へ行けと命じた。

九45 図 又コ、二一匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、其ノ五人ハ、各其ノ馬ガ他人ノ手ニ渡ランコトヲ恐レテ、争ヒテ高キ價ヲツク。

九45 10 図 之二反シテ、同ジヤウナル馬五匹アリ、其ノ持主ハ別々ニテ、買ハントスル人タゞ一人ナルトキハ、五人ノ持主各其ノ馬ノ賣レザランコトヲ恐レテ、争ヒテ價ヲ下グ。

十一223 裁判の目的は、決して人を争はせ、又は人を罰することではない。

十一306 図 直に組合ひたる二人の勇士、ねぢ合ひ押合ひ争ふうちに、清

正やがて正國をねぢ伏せたり。

十二309 図 〈略〉、地下鐵道・乗合自動車などの乗り下りにも、むやみに先を争ふやうなことはありません。

あらた「新」(形状) 2 新

十五7 図 舊御苑と舊御殿の邊とをのぞきては、立木きはめて少かりしかば、新に植込みたる木の數、實に十數萬本に及べり。

十二949 ところが此の新たな態度に驚いた五人の友は、釋迦が全く修行を止めてしまつたものと思ひ、彼を捨てて去つた。

あらた・む「改」(下) 1 改む「一メ」

十99 1 図 宋亡びぬ。御身の忠義を盡くすべき所なし。今より心を改めて元に仕へば、富貴は意の如くならん。

あらためて「改」(副) 3 改めて

八119 図 相手の信作があゝの通りだから、いづれ又改めてやり直しをしてもらはなければならぬまい。

八123 図 もう改めて勝負をするには及びません。

十614 図 〈略〉、一夜の宿を貸し給へとこへば、〈略〉。僧は改めて主人に一宿をこへり。

あらた・める「改」(下) 4 改める

十496 かうして柿の色を出す事に成功した喜三右衛門は、程なく名を柿

右衛門と改めた。

十685 図 〈略〉。」といひて目をふせしが、主人はやがて語氣を改めて、〈略〉。

十858 事務所の湯にはいつて服を改めると、更に生きかへつたやうな氣持がしました。

十二110 今では此の洞門を掘りひろげ、處々に手を加へて舊態を改めてはるが、一部は尚昔の面目を留めて、禪海一生の苦心を永久に物語つてゐる。

あらて「新」(名) 1 新

十一267 図 此のまゝ、新の兵を迎へては、萬に一つの勝算もなし。

あらなみ「荒波」(名) 3 荒波

八977 図 荒波洗ふデッキの上に、やみをつらぬく中佐の叫。

十285 かうしてボートは再び荒波を切りぬけて、燈臺に歸り着いたのである。

十二442 〈略〉 急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で「ぱいになつて、〈略〉。

あらなわ「荒縄」(名) 1 荒縄

八406 下役の者が石地藏に荒縄を掛けて、車に積んで参ります。

あらぬ(連体) 1 あらぬ

十二759 王は尚あらぬ言葉を口走つてはゐたが、其の言葉の端端にも、前非を悔い、自分を責めて娘にわび

る眞心がこもつてゐた。

あらむしやども「荒武者」(名) 2 荒武者ども 荒武者共

十一297 図 「承る。」と、福島正則・〈略〉等の荒武者ども、勇みに勇んで突進す。

十二1279 一室に通されて待つてゐると、やがて西郷が出て來た。次の間には官軍の荒武者共がひかへて、何となく物々しい。

あらぬ「荒布」(名) 3 アラメ

七84 図 アラメ

七855 海藻ニハイロくアル。先ツタベルモノニハ、コンブ・ワカメ・アラメ・〈略〉ナドガアリ、〈略〉。

七868 ミルヤモヅクノ様ニ緑色ノモノモアレバ、コンブヤアラメノヤウニ茶色ノモノモアリ、〈略〉。

あらものや「荒物屋」(名) 1 あら物屋

四272 米屋ごふく屋小ま物屋あら物屋〈略〉、そのほか大きな店はいくつも電とうをつけました。

あらゆる(連体) 5 あらゆる ↓ありとあらゆる

九13 図 ふけ行く夜のしつけさよ。あらゆるものはやみといふ 黒きとばりにおほはれて、安き眠に入れるなり。

十372 〈略〉、ほとんどあらゆる文明の利器を運用して、山をくづし、地

をうがち、河水をせき止めた事など、
《略》。

十一15 太陽の光と熱とがなくては、
我々人間は勿論、あらゆる生物、一
として生存することは出来ない。

十一68 人は生活上の必要から發火
法を工夫し、燃料を研究し、火の熱
と光とをあらゆる方面に利用するこ
とを考へて來た。

十二15 8 《略》、相當に名ある新聞
は、通信に、印刷に、あらゆる文明
の利器を用ふるを以て、《略》。

あらわす 「現」(四・五) 15 あらはす
表す 現す 《一サ・一シ・一ス・一
セ》

八62 8 保己一は五歳の時めくらと
なりしが、《略》、多くの書物をあら
はせり。

九23 5 ところで此の父も、《略》、本
もあらはし、出来るだけは骨折つた
つもりである。

九27 8 目に涙を一ぱいたためて聞いて
ゐた少年は、固い決心を顔にあらは
して、實行をちかつた。

九100 6 其の隣の畠にしやうがが、根
ぎはの赤い所を少し土からあらはし
て、ぎやうぎよく並んでゐるのも美
しい。

十一11 7 《略》、王は信頼の情を面にあ
らはして、フィリップを見下してゐ
た。

十一14 王は間もなく健康を回復して、

再び其の英姿を陣頭にあらはす事が
出來た。

十一27 《略》、之を燭光でいへば
一三の下に零を二十六もつけて表さ
ねばならぬ。

十一78 8 「おのれを修めて人を安
んず。」とは、彼が簡明に此の意を
あらはせる語なり。

十二61 6 更に思へば、《略》、日の
丸は熱烈燃ゆるが如き愛國の至誠を
表すものともいふべきか。

十二62 8 即ち赤・白合はせて十三
條の横筋は、獨立當時の十三州を表
すものにして、永久に變化すること
あらざれども、《略》。

十二63 3 此の三色は、自由・平
等・博愛を表すものと稱せらる。

十二63 7 國旗の色彩が其の國の人
種を表すものに、支那の國旗あり。

十二64 2 イタリアの國旗は、緑・
白・赤の三色を縦に染分け、中央の
白地中に王家の紋章を表せり。

十二64 7 かくの如く各國の國旗は、
或は其の建國の歴史を暗示し、或は
其の國民の理想・信仰を表すものな
れば、《略》。

十二79 2 《略》、まぐろは水面に渦卷
を起したり、背びれを水上に現した
りして泳ぎ廻つてゐる。

あらわす 「現」(下二) 5 あらはる
現る 著る 《一ル・一レ》

十一82 8 其の身を忘れ、よはひを

忘れて、人生の爲に盡くしたる大聖
の面目、よく此の語にあらはれたり
といふべし。

十一33 3 岬かと見れば島なり。一
島未だ去らざるに、一島更にあらは
れ、水路きはまるが如くにして、ま
た忽ち開く。

十二15 4 我が國にてかゝる新聞の
現れたるは維新前後にして、《略》。

十二49 5 中にも南部松・日向松は
良材として最も世に著る。

十二82 3 然るに其の實際を調査し
て此の疑問を解決したる人、遂に我
が日本人の中より現れぬ。

あらわす 「現」(下二) 7 あらは
れる 現れる 《一レ・一レル》

五78 1 親のほねをりが子の時になつ
てあらはれたのであらう、《略》。

七46 9 上杉方からは小さな馬に乗つ
た小さな鎧武者が一人あらはれて、
《略》と名のつた。

九60 9 東の空が明るくなると、《略》
軍艦の壮大な姿が、だん／＼にあら
はれて來る。

九61 9 副長もはや上甲板にあらはれ
て、今日の天氣はどうかと空をなが
める。

十一62 1 畫がけるが如く美しき山の、
或は右に或は左にあらはれるのは、
サホロ嶺の連峯の一つであらう。

十二106 4 《略》、きつと結んだ口もと
には意志の強さが現れてゐる。

十二120 6 すると其のうちには又思
の外な尻押なども現れて、事めんだ
うな筋合にならぬとも限りませぬ。

あらんかぎり 「有限」(名) 1 あらん
限り

十28 2 親子は非常な危険ををかし、
人々をボートに收容し、又あらん限
りの力をオールに注いで、我が家へ
と向つた。

あり 「蟻」(名) 8 蟻 蟻 ひとらと
あり

六28 5 「私です。蟻です。」
六28 6 なるほど、ごまつぶ程の蟻が
一匹虎を見上げてゐます。

六30 1 虎はおこつて、蟻をふみつぶ
さうとしました。

六30 2 蟻は虎の指のまたからくゞつ
て、仲間の者にあひづをしました。

六30 5 さあ大へん、何千匹か何萬匹
か、數かぎりもない蟻がまつ黒にな
つて、出て來ました。

六31 3 とう／＼弱つて、蟻にあやま
つたと言ひます。

十二34 8 園 いづ方に志してか、日
盛りのやけたる道を蟻の行くらむ。

十二33 4 眺望臺で眺めると、道を
往來してゐる人間や自動車などは、
まるで蟻のはふやうに見えるし、
《略》。

あり 「在」(ラ変) 140 アリ あり
在り 非 《一ラ・一リ・一ル・一レ》

七14 8 地球の表面には、海と陸と

ありて、海の廣さはおよそ陸の二倍半なり。

七19 図 我が大日本帝國はアジア洲の東部にあり。

七41 図 地球の上には大小合はせて六十餘國あり。

七53 図 日本中の小學生、八百萬人ありといふ。

七63 図 日本中の小學校、三萬近くありといふ。

七74 図 横濱は東京の西南八里半の所にある一大貿易港にして、商船の出入たゆる時なし。

七76 図 港には防波堤ありて、風波のおそれ少く、〈略〉。

七89 図 横濱と東京との間には汽車・電車の便あり。

七29 図 又多クノ堀アリテ、川ト川トヲツナゲリ。

七29 図 大阪ノ西十里ニ神戸アリ。

七33 図 獅子は〈略〉つと海の中にをどり入たり。船におよぎつかんとてなり。されどかなふべくもあらず。

七108 図 彼岸ハ春ト秋トニアリテ、〈略〉。

七112 図 取扱上不都合の廉あらば口頭又は無料郵便にて申越されたし

七112 図 發信人の居所氏名を受信人に知らする必要があるときは〈略〉

八20 図 此ノ河ノ上流地方ヨリ木材ヲキリ出シ、之ヲイカダニ組ミテ河

ヲ下スコトアリ。

八21 9 図 又沿岸ニハ上海・漢口等アリテ、我が國トノ貿易甚ダ盛ナリ。

八55 6 図 雪どけ道のぬかるみを杖にすがりてとぼくと、歩み來れる老婆あり。

八56 4 図 北風寒き町の辻、身なりいやしき老婆には、手をかす人もあらざりき。

八57 5 図 國に母をや残すらん、彼のまぶたにつゆありき。

八57 7 図 下駄買ふ人も、賣る人も、下駄屋にありし人は皆、彼の姿を見送りぬ、〈略〉。

八59 8 図 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、今ナホ古風ヲ守リテ、せぎぞ(キツバ)・〈略〉ナドト記シテ、軒ニ下ゲタルモアリ。

八59 9 図 又マレニハナゾヲ用フルモアリ。

八60 5 図 看板ニハマタ商品ヲエガキタルモノアリ。

八61 2 図 又足袋屋・〈略〉等ニハ、商品ヲ大キクセル模型ヲカ、グル風アリ。

八61 5 図 此ノ他宿屋ニハ、掛行燈ニ旅人宿何屋ト記シテ掛クルモアリ、〈略〉。

八61 6 図 芝居又ハ活動寫眞ナドノ興行場ニハ、繪看板アリ、〈略〉。

八61 7 図 寫眞屋ニハ、寫眞ノ

看板モアリテ、看板ノ種類ハキハメテ多シ。

八62 4 図 昔はあきめくらも多かりしに、まことのめくらにして、大學者となりし人あり。

八63 1 図 保己一の家は今の東京、其の頃の江戸の番町にありて、〈略〉。

八95 9 図 名古屋市ハ我が國屈指ノ大都ニシテ、人口四十餘萬アリ。

八96 4 図 此所ニ名高キ名古屋城アリ。

八96 9 図 天守閣ニハ棟ノ兩端ニ金ノシヤチホコアリ。

八97 2 図 名古屋市ハ此ノ城アルニヨリテ名高ク、「尾張名古屋ハ城デ持つ。」ト歌ハレタリ。

八97 4 図 市ノ南部ニ熱田神宮アリ。

九39 2 図 レマン將軍の目には涙ありき。

九42 6 図 『二人の我が子それぐに、死所を得たるを喜べり。これぞ武門の面目。』と、大將答力あり。

九42 9 図 我に愛する良馬あり。

九43 1 図 厚意謝するに餘りあり。

九43 10 図 飲料水ニ不自由ナキ土地ニアリテハ、金錢ヲツヒヤシテ、水ヲ買フナドトイフハ、思ヒモヨラヌ事ナリ。

九44 4 図 同ジ物ニテモ、意ノ如クニ得ラルレバ價ナク、得ガタケレバ價アルナリ。

九44 7 図 例ヘバコ、ニ一ツノ石アリトセヨ。

九44 9 図 ソレガ〈略〉、用ヒヤウナケレバ、誰モ之ヲ買フ者ナク、シタガツテ價アルコトナシ。

九45 1 図 カクノ如ク物ニ價アルハ、其ノ物ガ人ノ爲ニ有用ナルト、意ノ如クニ得ラザルトニヨルナリ。

九45 3 図 又コ、ニ一匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、

九45 4 図 又コ、ニ一匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、

九45 8 図 之ニ反シテ、同ジヤウナル馬五匹アリ、其ノ持主ハ別々ニテ、買ハントスル人タゞ一人ナルトキハ、

九81 1 図 、「あゝ、あの角の石屋か。」と、誰もうなづく工場あり。

九117 1 図 一人の子が御國の爲いくさに出でし事なれば、定めて不自由なる事もあらん。

十32 図 又日々奉る供へ物には、御生前殊に御好みありし品々を選ぶ由なるが、〈略〉。

十39 図 何れも、御在世中しばし行幸・行啓ありし所にて、〈略〉。

十44 図 はぎの御茶屋といふ名のあるも之がためなるべし。

十49 図 前には横長き池をひかへ、

十65 図 臺灣・樺太など、遠方よ

り送り來れるもあれば、枯損するもの多かるべきに、〈略〉。

十596 雪の日の夕暮に近き頃、上州佐野の里に、つかれし足の歩重くたどり着きたる旅僧あり。

十705 旅僧もまた主人夫婦の情心にしみて、そとに別れがたき思あり。

十7010 常世は、時こそ來れと、やせ馬にむちうつてはせつたり。やがて命ありて御前に召されぬ。

十996 父母の病あつければ、醫藥の効なきを知りても、尚治療につとむるは人情の常にあらずや。

十1247 我が村には戸數三百、人口千四百餘あり。

十1256 役場と學校とは村の中央にあり。

十1306 此の頃備前に兒島高德といふ武士あり。

十1309 主上さきに笠置におはせし時早くも義兵を挙げしが、事のいまだ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、力なくて止みたり。

十1313 心ある者ども何れも同意しければ、〈略〉。

十1329 天、勾踐を空しうするなかれ。時、范蠡無きにしもあらず。

十1331 主上は詩の心を御さとりありて、天顔殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。

十1333 昔支那に呉・越とて相隣れる二國ありき。

十1334 昔支那に呉・越とて相隣れる二國ありき。年久しく相争ひて互に勝敗ありしが、〈略〉。

十168 富貴は人のねがふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之に居らず。

十1610 貧賤は人のいとふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之を去らず。

十1242 時は天正十一年四月二十日のあかつき、〈略〉余吾湖のほとりに下り來れる七八人の兵卒あり。

十1266 味方は今日の戰に將卒共につかれ果てて、物の用に立つべくもあらず。

十1271 此れより先、秀吉は織田信孝を攻めて大垣にありしが、二十日の正午大岩山の敗報至る。

十1317 福島正則以下の六人、またそれ〴〵に名ある勇士を討取つて、武名を天下にとどろかせり。

十1322 本土の西、近く九州と相接せんとする處、下關海峡あり。

十1329 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、大小無數の島々各所に散在す。

十1329 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、〈略〉。

十1344 月影のさなみにくだけ、漁火の波間に出没する夜景もまた一段の趣あり。

十1421 何とぞ十分の御養生ありて、一日も早く御全快なされ候様に祈申候。

十1423 御承知の通り當地には温泉これあり、病後の保養には特に宜しき由に候。

十1446 昔、泉州堺のなにがし寺に、或畫師久しく寄食してありけるが、何一畫がくともなく、毎日遊び暮して既に數年を経たり。

十1452 我もとより衣食の費をいとふにあらずれど、何時までもかくておはすべきにあらねば、〈略〉。

十1453 何時までもかくておはすべきにあらねば、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。

十1454 愚僧も所用ありて京に上り、或は一二年滞在せんもはかり難し。

十1466 翌朝畫師は常にもあらず早く起出で、ふすまに向ひてしきりに筆を動かしたり。

十1488 「先に畫がきたる櫓、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、〈略〉。」

十1811 高く鼻つくいその香に、不斷の花のかをりあり。

十1821 幾年こゝにきたへたる鐵より堅き腕あり。

十1103 此のブラジル國は、廣

さ我が國の十三倍もこれあり、其の大部分は熱帯に屬し居候へども、〈略〉。

十1104 其の中に有名なるアマゾン河や、イグアッスの大瀑布の壯觀を寫したるものもこれあり候。

十1105 河幅は驚く程の廣さにて、河口の處にては、三百二十キロメートルもこれある由、〈略〉。

十11054 次にイグアッスーの瀧は、ブラジル國と隣のアルゼンチン國との境にある大瀑布にて、〈略〉。

十11061 殊に日本人の小學校ありて、御前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては、〈略〉。

十11063 御前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては、殆ど身の南米に在るを忘れ候。

十11094 先づ柄の長さ一間もあるなにて灌木を伐拂ひ、〈略〉。

十11096 次になをの振るつて大木を伐るに、三抱も四抱もあるものが地ひゞきを打つて倒る様、壯快言語に絶し候。

十11256 一切經は、此の教に志ある者の無二の寶として貴ぶところなり。

十11258 しかも其の卷數幾千の多きに上り、これが出版は決して容易の業に非ず。

十11262 今より二百數十年前、山城宇治の黄檗山萬福寺に鐵眼といふ

僧ありき。

十二126図 たま／＼大阪に出水あり。

十二127図 喜捨を受けたる此の金之を一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ふるも、歸する所は一にして二にあらず。

十二127図 一切經を世にひろむるはもとより必要の事なれども、人の死を救ふは更に必要なるに非ずや。

十二128図 然れども鐵眼少しも屈せず、略、効果空しからずして宿志の果さるゝも近きにあらんとす。

十二128図 然るに、此の度は近畿地方に大飢饉起り、人々の困苦は前の出水の比に非ず。

十二129図 大空にそびえて見ゆるたかねにも、のぼればのぼる道はありけり。

十二147図 「此の川は古の鰻川にして、かのをろち退治の傳説あるは此の川の川上なり。」

十二153図 旅行にはよき日なりなど思ひつゝ、參詣人の群にまじりて行けば大鳥居あり、略。

十二160図 此の時事代主命はすなごりのため美保崎といふ處にありしが、使を得て急ぎ歸り、父君に申すやう、略。

十二183図 寶物殿に入りて拜觀するに、火きりぎね・火きりうすといふものあり。

十二148図 略、印刷術の幼稚なる

時代にありては、唯をり／＼興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。

十二148図 略、唯をり／＼興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。

十二151図 されど人智の進歩と印刷術の發達とは、何時までもかく單純にして遊戲的なものに満足すべくもあらず、やがて略。

十二157図 勿論今日我が國にて發行せらるゝ新聞中にも大小種種ありて、一がいには言難けれども、略。

十二157図 略、相當に名ある新聞は、略、今や遠くヨーロッパに起りし事件も僅か一兩日にして讀者に報道せらる。

十二164図 先づ社の組織について述べん。これも社によりて多少の相違はあれども、多くは略。

十二164図 これも社によりて多少の相違はあれども、多くは總務局ありて全體を統べ、略。

十二165図 略、編輯・營業の二局ありて、編輯に關することは前者之を司どり、略。

十二169図 しかして編輯局は略等に分れ、各部にそれ／＼掛の記者又は技術家ありて、略。

十二1610図 略、各部にそれ／＼掛の記者又は技術家ありて、或は出でて材料を取り、或は社内において編

輯事務にたづさはる。

十二171図 略、世界各國主要の地に特派員又は通信員ありて、事件起れば直に電話又は電信にて通知し來る。

十二1810図 但し大新聞にありては、比較的早く印刷したるものをば地方版として遠隔の地方へ送り、略。

十二192図 但し大新聞にありては、略、新しき事件ある毎に改版して、最後の最も新しきものを市内版とす。

十二195図 されば同一日附の同じ新聞にても、發行地にて受取るものと他地方にて受取るものとは、記事に多少の相違あるを常とす。

十二245図 殊に杉は略、其の需要の多きこと我が國の木材中第一位にあり。

十二247図 ひば・松・落葉松は何れも堅くして、耐久・耐濕の性あるを以て建築・土木・造船等其の用途頗る廣し。

十二260図 國旗は實に國家を代表する標識にして、其の徽章・色彩にはそれ／＼深き意義あり。

十二2614図 略、我が國の國旗は、略、皇威の發揚、國運の隆昌さながら旭日昇天の勢あるを思はしむ。

十二2621図 略、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、藍地に斜白十字の徽章ある後者の國旗とを合して一旗となし、略。

十二2622図 略、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、藍地に斜白十字の徽章ある後者の國旗とを合して一旗となし、略。

十二622図 略、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、藍地に斜白十字の徽章ある後者の國旗とを合して一旗となし、略。

十二624図 略、更にアイルランドの加はるに及び、白地に斜赤十字の徽章ある其の國旗を合はせて、遂に今日の如き形式をなすに至れり。

十二629図 即ち赤・白合はせて十三條の横筋は、略、永久に變化することあらざれども、藍地中の星章は、略。

十二638図 國旗の色彩が其の國の人類を表すものに、支那の國旗あり。

十二826図 樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざること、此の探檢によりて略、知ることを得たれども、略。

十二835図 これより北は波荒くして舟を進むべくもあらず、略。

十二873図 林藏の怪しみもてあそばさるゝこと、此處にては更に甚だしかりしが、かゝる中にありても、彼は土地の事情を研究することを怠らざりき。

十二879図 林藏が二回の探檢によりて、樺太は大陸の一部にあらざること明白となりしのみならず、此の地方の事情も略。

十二1004図 略、何の山、何の川、一木一草に至るまでも歴史あり古歌あり、人をして低回去る能はざらし

言語・風俗の違つた幾多の人種が入交つてゐるので、其の有様は一見世界人種の展覽會のやうである。

十一96 / 一家の暮し向は誠にあはれなもので、食物なども自由には得られず、時には生のじやがいもしか食はれないこともあつた。かういふ有様であつたから、〈略〉。

十一109 2 園 子 かゝる處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、其の有様は如何にも男らしく勇ましきものに候。

ありさん 「阿里山」(地名) 3 亞里山

八22 4 臺灣の蕃人(ばんじん)には、お祭に人の首を取つて供へる風がありますが、

亞里山の蕃人(ばんじん)にだけは、此の悪い風が早くから止まりました。

八22 7 呉鳳は今から二百年程前の人で、亞里山の役人でした。

十二49 1 園 〈略〉、檜は木曾産(きそ)の聲高く近時臺灣阿里山の檜また有名な

り。

ありた 「有田」(地名) 1 有田
十49 7 柿右衛門は今から三百年ばかり前、肥前の有田にゐた陶工である。

ありとあらゆる 「有」(連体) 1 ありとあらゆる

十二67 8 園 「略」私はありとあらゆる身の樂しみを退けても、ひたすら父上を大事に致すのを此の上もない仕合はせと存じてをります。」

ありなし 「有無」(名) 1 ありなし

八43 4 越前守は呉服屋の手代を呼出して、其の中に盗まれた品のありなしを調べさせました。

ありのまま 「有儘」(名) 2 ありのまま、有りのまゝ、

八18 2 園 將軍は長四郎を大きな袋へ入れて、「ありのまゝに申すまでは出さぬ。」といつて、袋の口を封じて柱に掛けた。

十94 6 其の夜又父に強く聞きたゞされて、太郎はやつと今日の次第を有りのまゝに話した。

ありばしよ 「在場所」(名) 1 あり場所

六41 2 園 〈略〉、兵種がちがふと、兵舎のあり場所もちがふので、めつたに一しよになることはない。

ある 「或」(連体) 65 アル ある 或

二33 4 ムカシアルトコロニ、田ヤハタケヲタクサン モツテキタ人ガアリマシタ。

二34 6 アル日トモダチニユミノジマンヲシテ、〈略〉」トイヒマシタ。

二42 1 アル日犬ハ畠ノスミデ、「ココホレ、ワンワン。ココ

ホレ、ワンワン。」トヲシヘマシタ。

三6 8 アルアサ、オカアサンガ「ヒヨコガカヘツタ。」トオツシヤツタノデ、〈略〉。

三40 1 ある日はまを通ると、

子どもが大ぜいのかめをつかまへて、おもちゃにしています。

三53 5 あるばん、弟がにはへ出て、「二つ二つ」とかぞへてゐました。

三55 1 あるとき、雨のふる日に、たうふうがにはへ出て、

〈略〉。

四12 5 アル日ハマベヘ出テ見ルト、ワニザメガ居マシタカラ、

〈略〉。

四38 5 ある時、日と風が力くらべをしました。

四68 4 それがかはいさうに、あるばんねずみに足のゆびをくひきられました。

四93 2 ある年、よりともは日本中のさむらひを引きつれて、ふ

じのまきがりをいたしました。

五6 3 ある日、僕がうんどう場へ出て見ると、中村君が泣いてゐました。

五7 7 ある時、出雲の國のひの川のほとりを通りになりますと、川上から箸が流れて來ました。

五32 7 ある朝早く、おとうさんがたびへお立ちになつた時、お見送をして表へ出て見ました。

五53 8 或日山の中で、こけに足をすべらせて、うつむけにたふれました。

五79 4 八幡太郎義家が或日安倍宗任をつれて廣い野原を通りますと、

〈略〉。

六9 2 或晩人ガネシツマツテカラ、金物屋ノ店デ、ヤクワントテツビンガ、ジマン話ヲシ合ヒマシタ。

六59 2 或日のこと、萬じゆが御殿のうらへ出て、何の氣もなくあたりをながめて居りますと、〈略〉。

六66 6 或村に大火事があつて、一村ほとんど丸やけになつた。

六66 8 或物持の所へ行くと、下男がまだ使へる小縄を捨てたと言つて、

主人がひどくしかつてゐた。

六94 6 或朝、夜明頃、城中からうつて出て、どつとときの聲をあげた。

七43 6 ある時謙信が山の手陣を取つてゐると、信玄は兵を二手に分けて、はさみうちしようとした。

七55 6 園 又ある時にはとび魚が甲板の上へとび上ることもあります。

七76 8 或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、「誰か居るか。」と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て來た。

七99 8 ところが或夜大地震が起つて、人家堂塔一時に倒れ、人々の泣けぶ

聲は天地にひびきました。

八5 9 昔或氏神のお祭に、競馬の神事といふ事があつた。

八6 6 或年選ばれた子どもの中に、すぐれて上手なものが二人あつた。

八29 6 或日炭を焼く男が太郎のうちへ來て、ゐるのはたでいろ／＼の話をした。

八33 7 すると或夜ゆめの中に、〈略〉

神様のお告がありました。

八63 或夜弟子をあつめて、書物を教へし時、風にはかに吹きて、ともし火きえたり。

八99 或時、口・耳・目・手・足等が申し合はせて、胃に向つていひますには、「略。」

八112 或年の冬、大將が思はず「寒い。」といつた。

九15 中デモ面白イノハ、或動物ノ體色ガマハリノ物ノ色ニ似テキルコトデアル。

九20 又或動物ハ保護色トハ反對ニ、マハリノ物トマギレナイヤウナ鮮カナ體色ヲモツテキル。

九91 其の中に、子供のアルカスはだん／＼大きくなつて、狩人になりましたが、或日大熊を見つけたので、それを射殺さうとしました。

九102 或年戦争が始つたので、北風も外の軍馬と同じやうに、主人にしたがつて戦地へ向つた。

九103 或朝の事であつた。東の空がほんのりと白む頃、略。

九114 或日我が軍艦高千穂の一水兵が、女手の手紙を読みながら泣いてゐた。

十82 或日王は部下の精兵を引連れ、焼けつくやうに熱い平原を横ぎつて、タルススといふ町に着いた。

十95 方法は或劇薬を用ひる外になかつたので、フィリップは眞心こめ

て此の事を申し出た。

十24 或秋の夜の事である。一その船が、略。

十47 或日の夕方、喜三右衛門はあわたしく窯場から走り出た。

十79 此の間、九州三池の或炭坑を見物しました。

十84 或日、此の附近の山へ薪をとりに来た百姓が、たき火をしてゐると、略。

十99 或人又なじりてはいはく、「略。」と。

十121 外國の或商會で、新聞紙に店員入用の廣告を出した。

十121 主人はそれ等の人々をさしおいて、或一人の青年をやとひ入れた。

十44 昔、泉州堺のなにがし寺に、或畫師久しく寄食してありけるが、略。

十44 住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、「略。」

十45 或夜小僧、住持の居間に來りて、「彼處に行きて、彼の畫師のする様を見給へ。」とさゝやきければ、略。

十49 ゴムは、熱帶地方に産する或植物からとる白色の液を原料として、製造したものである。

十54 昔、アフリカの或港に一その船がとまつてゐた時の話である。

十69 或山寺で、四人の僧が一室

に閉ぢこもつて、七日間の無言の行を始めた。

十一70 或夏の半ば、宣長はかねて買ひつけの古本屋に行くと、主人は愛想よく迎へて、略。

十一94 或時近邊の人からワシントン傳を借りたことがある。

十一99 ところが或夜、夜中に激しい雨が降つたことがある。

十一117 昔イギリスの或大きな農場で、農場主が大勢の人の耕作するのを監督してゐた。

十二11 或日彼が古木の皮をむくと、珍しい甲蟲が二匹ゐた。

十二37 月のさえた冬の夜友人と二人町へ散歩に出て、薄暗い小路を通り、或小さいみすばらしい家の前まで來ると、略。

十二91 或時、父王と共に城外に出て、農夫の働く様を見廻つたことがある。

十二93 かくて彼は二十九歳の或夜、人知れず宮殿を出て修行の途に上つた。

十二94 彼は遂に「略。」と決心して、或静かな森へ行つた。

十二95 或時のことである。彼は夜もすがら静坐してひたすら思をこらしてゐると、略。

十二97 或時の如きは、釋迦が山の下にゐるのを見附けて、上の方から大石をころがしたが、略。

十二113 或日のことなりき。エヂソンは例の如く略。

ある「在」(五) 985 アル ある 有る 《ーッ・ラー・リー・ール・ーレ》 ↓ おありなさる・おある・じゅうしさいのときがにどあるか・それであるから・とある

一62 ハサミガアリマス。

一64 モノサシガアリマス。

一66 ヒノシモアリマス。

一72 オミヤガアリマス。

一74 オテラガアリマス。

一76 ヤクバモアリマス。

一213 デンデンムシムシカタツムリ、アタマガアルカ、メガアルカ。

一214 デンデンムシムシカタツムリ、アタマガアルカ、メガアルカ。

一294 ヤマニハ、キガウエデアリマス。

一297 カハニハ、ハシガカケテアリマス。

一44 ムカシムカシ、オデイサン

トオバアサンガアリマシタ。

一203 コノ山ニハ、クリノ木

ガタクサンアリマス。

一211 「モウ人ガヒロツタノ

カ、サツパリアリマセン。」

一213 「ソレデハムカフニ大

キナ木ガアリマスカラ、アノ

木ノ下ヘイツデミマセウ。」

二七三 窓 「コノゴロナカマノモノ
ガ、ネコニトラレテコマルガ、
ナニカヨイクフウハアルマイ
カ。」
二八四 窓 ヨイクフウガアリマス。
二三六 ムカシアルトコロニ、田
ヤハタケヲタクサンモツテキ
タ人ガアリマシタ。
二四三 ムカシムカシ、ヨイオヂイ
サントワルイオヂイサンガア
リマシタ。
二六〇 窓 「イイエ。サウニガクハ
アリマセン。」
二六三 窓 センセイノオツシャルコ
トヤ、ミンナノイフコトヲキ
キオトスヤウナコトハアリマ
セン。
二七三 タイヘン力ガツヨク、テ
シタモ大ゼイアリマシタ。
二五七 窓 「略、中ゆびとおやゆ
びのあひだにあるのが人さ
しゆび、略。」
二五八 窓 「略、中ゆびとこゆび
のあひだにあるのがくすりゆ
びです。」
二六一 一人がむちゆうになつて
とつてゐますと、下のはうか
らかさかさいはせてかけ上つて
くるものがあります。略、そ
れは小一郎のうちのいぬで
した。

二二八 どちらもたいていおなじ
くらゐで、かちまけはありませ
んでした。
二七三 又あそこここにわらを
むすびつけてあるのは、ほりと
らないしるしで、のぼしておや
竹にするのださうです。
三一二 村はづれに水車やがあり
ます。
三二七 窓 からのなかない日は
あつても、五いちいさんがうた
はない日はない。
三三六 足ニモ右左ガアリ、目
ニモ耳ニモ右左ガアリマス。
三三七 窓 目ニモ耳ニモ右左
ガアリマス。
三三六 一 キモノノソデニモ、タビ
ニモ、手ブクロニモ、クツニモ
右左ガアリマス。
三三九 七 むかしうらしま太郎とい
ふ人がありました。
三四八 窓 それではこの玉手箱を
上げます。どんなことがあつて
も、ふたをおおけなさいませ
な。
三六二 窓 略、村のやうすもすつ
かりかはつてゐます。しつてゐ
るものは一人もありません。
三八二 窓 學校ノ北ニ小高イヲカ
ガアリマス。
三八四 ヲカノ上ニ天ジンサマ
ノオミヤガアリマス。
三九二 窓 學校ノ東ドナリニニカイ

ツクリノヤクバガアリマス。
三三〇 窓 新道ノリヤウガハニハ、
新シイ家ガ七八ケンデキマシタ。
ソノ中ニハ、ニウリヤモアリマ
ス。
三五六 むかしをののたうふうと
いふ人がありました。
三六六 窓 アトヘ竹ノキレヲノコ
シテ行キマシタガ、ソノ中ニ
フシガーツアツテ、水デツパウ
ニナリサウナノガアリマシタ。
三六五 窓 略、水デツパウニナリ
サウナノガアリマシタ。
三七〇 窓 たんすやつづらから着物
を出して、風通しのよいとこ
ろにかけてあります。
三七四 ムカシ鳥トケダモノガ
ケンクワラシタコトガアリマ
ス。
三七五 窓 スルトカウモリハ「私
ハ羽ガアルカラ、鳥ダ。」ト
イツテ、鳥ノ方ニツキマシタ。
三七八 一 えんがはには、夕方から
いもやだんごをつくゑにのせ
て、お月さまにそなへてありま
す。
三七八 窓 今日私が川の土手から
とつて来たすきも、花いけ
にさしてそなへてあります。
三七八 窓 空は水のやうにすみき
つて、雲一つありません。
三八五 窓 「これはよい物がある。

ひろつて家のたからにしよ
う。」
四二四 おもちややにはらつばや
かたなやひかうきなどがなら
べてあります。
四四八 私のうちには柿の木
が五本あります。
四五二 しぶ柿が三本、あま柿が
二本で、その中に私の木が
一本あります。
四九一 村ノ方ヲ見ルト、ドノ
家ニモコクキガ出シテアリマ
シタ。
四九三 谷ソコノ一ケンヤニモ、
川ヲ下ツテ行ク小サナ舟ニモ、
コクキガ出シテアリマシタ。
四二二 一 山一つむかふの村にを
ぢさんのうちがあります。
四二五 窓 をぢさんのうちでは、に
は一ぱいもみがほしてあつて、
足のふみばもないくらゐでし
た。
四二四 前の畠の柿の木は、
はがまつかになつてゐて、二つ
三つとりのこしてある柿が、
赤い玉のやうに光つてゐます。
四二五 窓 今日ほんなんにもみが
ほしてあるから、をぢさんも
をばさんも早くかへります。
四三六 犬のすがたが見えなく
なつたので、「ぼちぼち」とよび
ますと、向ふの方で、「ぼちぼ

ち」と口まねをするものがあ
ります。

四三二 〇「それは山びこです。だ
れも居るのではありません。」

四三三 〇父「人のこゑも山の
中では、かべにあたつたごむま
りのやうに、かへつて来るこ
とがあります。」

四三六 九 フクロフ 〈略〉。カホ
ハネコノヤウデ、其ノ上ネズ
ミヲトツテクフノデ、ネコ鳥
トイフトコロモアリマス。

四三六 一 〈略〉、目ガ見エナクナル
ノデ、森ヤ林ノヒクイ木ノ
枝ニトマツテ、ボンヤリトシテ
居ルコトガアリマス。

四三八 フクロフガ鳴クト、其ノ
明クル日ハ天氣ガヨイカラ、
「ノリツケホウセ」ト鳴クノダ
トイフ所モアリマス。

四四七 〇今ちらしで取つて居ま
す。「花よりだんご。」みよ子「は
い、ありました。」

四四六 〇お前はたいそうとんち
があると聞いた。

四四七 〇此のからかみにかいて
あるとらをしばつて見せよ。

四四八 ドンナサムイ日デモ、大
工サンハ〈略〉、キセイヨクハ
タイイテ居マス。ノコギリデ木
ヲキルモノモアリ、ノミデア
ナヲホルモノモアリ、〈略〉。

四五二 ノコギリデ木ヲキルモ
ノモアリ、ノミデアナヲホル

モノモアリ、カンナデ板ヲ
ケツルモノモアリマス。

四五九 〇〈略〉、カンナデ板ヲケツ
ルモノモアリマス。

四六一 〇見ればへさきに長いさを
を立てて、其のさをの先には、
ひらいた赤い扇がつけてあり
ます。

四六八 〇私のうちに山がらが一
羽かつてありました。

四七〇 一 〈略〉、今でも山がらのこ
ゑをきくと、まだあれが生き
て居るだらうか、足のきずは
どうしたらうかと思はないこ
とはありません。

四七三 〇私は長生をして居ます
ので、〈略〉、家がたつたり、こは
れたり、火事があつたり、水が
出たりしたことをみんな見て
知つて居ます。

四八五 〇モノノ花ガ花イケニサ
シテアリ、ヒシモチモモウソナ
ヘテアリマス。

四八六 〇〈略〉、ヒシモチモモウソ
ナヘテアリマス。

四八六 一 〇花「クワンデヨノリヤ
ウワキニカザツテアルノデセ
ウ。ズキジンデス。」

四九二 〇〈略〉、長い間つけねらひま
したが、手を出すすきはあり

ませんでした。

五〇二 〇「頭が八つ、尾が八つある
大蛇で、目はほほづきのやうに赤く
〈略〉。」

五〇八 〇學校からかへつて見ると、廣
田君からゑはがきが来てゐました。

五〇九 〇と書いてありました。

五一六 〇むかし神武天皇がわるもの
どもをごせいばつになつた時、わる
ものどもが強く、おこまりになつ
たことがある。

五二〇 〇此の勲章には功一級から功
七級まである。

五二二 〇二かいのまどに萬國旗がつる
してあつて、おくの方からたえずち
くおんきの音が聞えて來ます。

五二八 〇下のかざりまどには、目のさ
めるやうなちりめんや、きれいな帶
や、すゞしさうな浴衣地がかざつて
あります。

五三二 〇入口の左手には、小切やえり
や帶あげなどがたくさん下げてあつ
て、それを見てゐる人も大ぜいあり
ます。

五三六 〇入口の左手には、〈略〉、それ
を見てゐる人も大ぜいあります。

五三六 〇〈略〉、りやうがはの歩道に人
通のたえることがあります。

五三八 〇店・客間・居間・勝手など、
これで間数が七つもあるとは、どう
しても思はれませんでした。

五三六 〇時計屋の前に電車の停留場が

あります。

五三七 〇大道へ出て、となり村の入口
へ行くと、道ばたの立石にさるが三
匹ほつてありました。

五三八 〇〈略〉、先生が「ちよつと用
があるから。」といつて、私どもを
道に待たせておいて、學校へおより
になりました。

五三九 〇八幡様の高い石だんを上りつ
めた所に、しめをはつた大きな杉の
木がありました。

五三九 〇御神木ださうです。私ども
が六人で、やつとかかへました。
「さしわたしが八尺もある。」と先生
がおつしやいました。

五四〇 〇先生が拜殿にかけてある繪馬
のお話をして下さいましてから、
〈略〉。

五四三 〇昔熊襲のかしらに川上のたけ
るといふ者があつて、天皇のおほせ
にしたがひませんでした。

五四四 〇なみくくの者なら、「あつ」
とさけんで死にませうが、たけるも
熊襲のかしらだけあつて、「しばら
くお待ち下さい。申したいことがあ
ります。」といひました。

五四三 〇「しばらくお待ち下さい。
申したいことがあります。」

五四九 〇早いのはもう繭を作り上げて
ゐます。又〈略〉、一生けんめいに
はたらいてゐるものもあります。

五四九 〇まだ繭をかける場所をさがし

てゐるのもあります。

五505 此ノ頃ハ雨ガ降リツツマイテ、表デ遊ブ日ガアリマセン。

五517 雨水ノ流レル道ハ地圖ニカイタ川ヲ見ルヤウデス。本流ガアリマス。支流ガアリマス。

五517 本流ガアリマス。支流ガアリマス。

五524 雨水ハタマカウシテ流レルバカリデハアリマセン。

五526 地ノ中ニシミコンデ、井戸水ヤ泉ノモトニナルノモアリ、目ニ見エナイ水蒸氣ニナツテ、空ヘカヘルノモアルサウデス。

五527 〈略〉、目ニ見エナイ水蒸氣ニナツテ、空ヘカヘルノモアルサウデス。

五531 昔美濃ノ國にまづしい人がありました。

五534 此ノ人に年取つたおとうさんがありまして、酒がすきでございました。

五563 日本の國には、景色のよい所がたくさんありますが、〈略〉。

五584 宮島はまはりが七里もある島で、〈略〉。

五587 島の東北に嚴島神社があります。

五594 ことにしほのみちた時は、社殿や廻廊が海の中に浮いて、お話にある龍宮はこれかと思はれます。

五597 社前の海に、日本一の大鳥居

があります。

五617 鯛 さて、虹はおもしろい。雨のはれ間にちよつと出て、用ありさうに天と地の 遠きをつなぐ雲の上。

五636 鯛 「おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、まだ一里半もあるのですか。」

五638 鯛 あのとんぼの中に、ちよつとした森があるだらう。

五643 鯛 あれは神明様の森だが、あれまでが半道で、あれから町まで一里ある。

五644 鯛 「神明様のこちらにある白壁造の家は工場ですか。」

五647 鯛 「神明様のこちらにある白壁造の家は工場ですか。」「あの青田の中にあるのだらう。あれは製絲工場で、〈略〉。」

五657 鯛 「今日は買物もあるし、歸りには馬車に乗つて、此の下まで来てもよい。」

五666 鯛 「うちの方では、田に水がないと言つて、さわいでありますのに、此の村にはよく水がありますね。」

五668 鯛 此の村には、向ふの杉山のすそに、大きな用水池があつて、其

所から水を引くからだ。

五681 鯛 「鯉も居るが、それよりも、もつとお前に聞かせて置きたい話がある。」

五701 〈略〉、さうでもしなければ、

外に村のさかえる工夫はあるまいといふので、みんな賛成したといふことだ。

五716 土手は長さが三百間、高さが六間半、幅が一番上で三間といふ大きなもくろみであつた。

五721 「そんな大きな池がいるだらうか。」と言つて、首をひねる者もあつたといふが、〈略〉。

五747 其の賃金をみんな庄屋が自分のところから出した。よい身代であつたが、其のために田を賣り、畠を賣り、家も土藏もみんな賣りはらつた。

五763 長い間の苦勞が病氣のもとであつたといふことだ。

五777 あ白壁造の土藏のある家がそれだ。

五781 親のほねをりが子の時になつてあらはれたのであらう、あの家にはよい事がつゞいて、身代は前よりもよくなつた。

五785 土手の此の記念碑に、今話した事がくはしく書いてある。

五824 鯛 「あぶないことだ。もし宗任に悪い心があつたら。」と、義家の家來どもはひやくしたといひます。

五842 鯛 おとうさんへ電報で御返事をいたしたやうに、うちには大した事ありませんでしたが、中々のさわぎでした。

五895 私は町の辻に立つてゐる郵便函であります。

五901 〈略〉、葉書や封書などを入れる人の外は、私のからだにささる者がありません。

五904 〈略〉、「うん、郵便函といったのはこれだな。」とひとりごとを言つて行く者があります。

五908 私のやくめは、〈略〉郵便物を大切にあげかつてゐて、これをあつめに來る人に渡すのであります。

五912 いかな日でも葉書の百枚や封書の三十通ぐらゐは、私の口にはいらないことはありません。

五913 毎日かならず新聞を入れに來る方も四五人はあります。

五914 たまには雑誌や寫眞がはいることもあります。

五917 作物の種や商品の見本も入れてよいことになつてゐますが、私はまだそれをあづかつたことはありません。

五921 私の口にはいる物は、はがきの外はきつと切手がはつてあります。

五933 葉書には、大でいちよつとした用事が書いてありますが、封書には、いろ／＼こみ入つた事が書いてあります。

五934 〈略〉、封書には、いろ／＼こみ入つた事が書いてあります。

五935 おめでたい事やたのしさうな事が書いてありますと、私もうれし

いと思ひますが、〈略〉。

五93 7 〈略〉、悲しい事や苦しうな事が書いてありますと、もらひ泣きをいたします。

五94 5 図 「それにはどんな事が書いてあつたか。」

五96 6 叔父サンノウチニモ、ブダウ棚ガゴザイマス。ソレニハ黒ミノアルムラサキ色ノ實ガナツテキマス。五97 1 ブダウニハ、マダイロノ種類ガアルトイヒマス。

五100 4 東京停車場は東洋第一の大停車場で、宮城の東にあります。

五100 7 赤れんぐわの三階造で、間口が百八十四間もあります。

五101 3 停車場の階上には、役所もホテルもあります。

五101 5 階下の入口には、左右に大きな待合室があつて、〈略〉。

五101 6 〈略〉、此の外に中央郵便局の分室もあれば、兩替店や、いろいろの賣店もあります。

五101 8 〈略〉、此の外に中央郵便局の分室もあれば、兩替店や、いろいろの賣店もあります。

五101 8 又洗面所もあれば、食堂もあります。

五102 1 又洗面所もあれば、食堂もあります。

六2 1 おぢいさんが庭にほしてあるもみをかへしていらつしやると、〈略〉。

六2 6 うちでも土間に丸太を置いて、其の上につんであります。

六3 3 今日庭にほしてあるもみをすつて、俵に入れてつんだら、三つ目の山は出来上りませう。

六5 2 図 「にいさん、富士山はまっ白でせうね。」さうさ、〈略〉。何しろ一万二千五百尺もあつて、内地第一の高山だから。」

六5 5 図 臺灣の新高山さ。これは一万三千尺からある。

六6 4 図 「いや、一番も三番も臺灣にあつて、四番目が富士山だ。」

六7 3 図 「信州の檜岳や赤石山で、どれも一万尺以上ある。」

六7 5 図 「外國には、新高山より、もつと高い山がありますか。」

六9 5 図 金ニハいろ／＼アリマスガ、中デ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デアラウト思ヒマス。

六9 6 図 〈略〉、中デ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デアラウト思ヒマス。

六10 2 図 金ヤ銀ハ〈略〉、ドチラモタクサンアリマセンカラ、ネダンモ高ウゴザイマス。

六10 5 図 銅ハソレニヒキカヘテ、金ヤ銀ヨリモタクサンアリマセンカラ、シタガツテネダンモ安ウゴザイマス。

六11 2 図 シテムレバ銅ホド役ニ立ツ物ハアリマスマイ。

六11 4 図 ナルホド、銅ハタクサンア

ツテ、役ニモ立チマセウガ、モット

タクサンアツテ、モット役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。

六11 5 図 〈略〉、モットタクサンアツテ、モット役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。

六11 6 図 〈略〉、モット役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。

六12 8 図 「ソレデモ鐵ハデキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」

六17 5 図 「此の近くに、しめちの出る所はありませんか。」

六20 4 いつも通る汽船も、〈略〉、汽てきの音は少しも聞えませんが。冬時の海には、よくこんなことがあります。

六24 8 不意を討たれた平家方は、上を下への大さわぎ、〈略〉、人の馬には自分が乗り、自分の馬には人が乗り、後向に乗る者もあれば、一匹の馬に二人乗る者もあります。

六25 1 不意を討たれた平家方は、〈略〉、後向に乗る者もあれば、一匹の馬に二人乗る者もあります。

六28 2 其の時「あはゝ。」と笑ふものがありました。〈略〉「私です。蟻です。」

六29 5 図 人間があなた方を生けどりにするには、いく人かで力を合はせるではありませんか。

六32 3 橋ノタモト二人力車ガ一ダイアツテ、車夫ガ「ダンナ、マキリマ

セウ。」ト言ツタ。

六34 1 ベンタウヲサゲテ來ル女工ハ、サツキカラ汽デキノ鳴ツテキル工場へ急グノデアラウ。

六38 5 義經に此の名を惜しむ心があつたので、何時の戦にも勝つたのでございませう。

六40 3 図 〈略〉、兵には歩・騎・砲・工・輜重の五種があつて、私の村から、今歩兵になつて來てゐるのは私一人だけなのだ。

六45 6 鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ魚デモアル。

六45 6 鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ魚デモアル。

六46 5 大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬ニカケテ、海カラ川へ上ツテ來ル。〈略〉。コレハ卵ヲ産ム場所ヲ見ツケニ來ルノデアル。

六46 7 キレイナ水ガサラ／＼流レテ、川ソコニ小石ノ多イ所ガアルト、頭ヤ尾デ穴ヲ掘ツテ、其ノ中ハ卵ヲ産ム。

六47 6 中ニハ其所デツカレテ死ンデシマフノモアル。

六51 2 源頼朝が〈略〉、舞姫をあつめました。十二人いるうち、十一人まではありましたが、あとの一人は

六51 3 十二人いるうち、十一人まではありましたが、あとの一人は

六51 3 十二人いるうち、十一人まではありましたが、あとの一人は

六51 3 十二人いるうち、十一人まではありましたが、あとの一人は

六51 3 十二人いるうち、十一人まではありましたが、あとの一人は

六515 こまつてゐる所へ、御殿に仕へてゐる萬じゆがよからうと申し出た者がありました。

六531 其の五番目の舞姫といふのは、かの萬じゆの姫であつたのでございます。

六541 図 「さてく、此のたびの舞は日本一の出来。國はどこ、又親の名は何と申す。ほうびはのぞみにまかせて取らせるであらう。」

六547 之を聞くと、頼朝のかほの色はさつとかはりました。かはるも道理、これには深いわけがあつたのでございます。

六554 義仲からは折りかへし返事があつて、〈略〉大切な刀を送つてよしました。

六558 光盛の娘は其の後、夜晝頼朝をねらひましたが、少しもすぎがありません。

六563 頼朝は其の刀に見おぼえがあつたのでございます。

六567 唐糸には其の時十二になる娘がありました。

六587 さて萬じゆは、だれか母の事をいひ出す者はないかと氣をつけてゐますが、十日たつても二十日たつても、母の名をいふ者がありません。

六597 図 「あの中には石のらうがあつて、唐糸様がおしこめられて居られます。」

六602 之を聞いた萬じゆの喜はどんなであつたのでございませう。

六612 〈略〉、松の一むら立つてゐる中に、石のらうがありました。

六642 〈略〉、居合はせた者に、だれ一人もらひ泣きをしない者はありませんでした。

六666 或村に大火事があつて、一村ほとんど丸やけになつた。

六698 又いくさのあつた時には、〈略〉武士の刀や、なぎなたの光も、いくたびとなく此の川の水にうつつたのでございませう。

六711 賀茂川には橋がたくさんかけてあります。

六745 図 「春子、オ前ハ着物ヤ帯ノ地ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマスカ。」「絹^ヌ絲^シト木綿^{キヌ}絲^シデス。」「マダアリマス。」

六747 図 「絹^ヌ絲^シト木綿^{キヌ}絲^シデス。」「マダアリマス。」「麻^{アサ}絲^シ。」「マダアリマセウ。」「毛絲^{モウ}デス。」

六752 図 毛絲^{モウ}デオツタ物ニハ、ドンナ物ガアリマスカ。

六756 図 「セルモサウデセウカ。」「サウデス。マダアリマセウ。」

六775 二三日ひどく寒かつたので、湖の水が大へんあつくなつた。一尺ぐらゐもあらう。

六777 湖の上は朝からひじやうな人出である。

六787 すべるく、みんなすべる。片足でおそろしい程早くすべる者も

あれば、人の手にすがつて、こはごはすべる者もある。

六791 〈略〉、人の手にすがつて、こはごはすべる者もある。

六792 いろくな曲すべりをやる者もあり、ころんでばかりゐる者もある。

六793 いろくな曲すべりをやる者もあり、ころんでばかりゐる者もある。

六797 博多^{はくた}の沖は見渡すかぎり、元からおしよせた船でおほはれた。十何萬といふ大軍である。

六806 敵は高いやぐらのある大船、こつちはつり舟のやうな小舟であつた。

六807 敵は高いやぐらのある大船、こつちはつり舟のやうな小舟であつた。

六815 まるで大きな島が出来たやうなものである。

六837 〈略〉、敵は一先づ沖の方へしりぞいたが、又おしよせて来るのは明らかである。

六838 實に我が國にとつては、これまでにない大難であつた。

六846 全く上下の者が心を一にして、國難にあたつたのである。

六848 此のまごころが神のおぼしめしになつたのであらう、一夜大暴風雨がおこつて、海はわきかへつた。

六861 見せ物小屋で象を見た。先づ大きなのおどろいた。たけは一丈からあつた。

六866 自由^{じゆう}にうごかすことの出来る長い鼻、箕^{ひし}のやうな耳、〈略〉、一切繪で見た通りであつた。

六878 象の鼻は手の用をなすもので、實に力がある。

六898 すると象は鼻で、其所にあつたうちはを拾つて、子どもの顔をあふぎ出した。

六908 楠木^{くすのぎ}正成^{せいせい}が守つた千早城は、けはしい金剛^{こんがう}山上にはあるが、まはりが一里にも足らず、〈略〉。

六914 こんな山城一つ、何程の事があるものかと、賊が城の門まで攻上ると、〈略〉。

六927 城中には十分水の用意があつた。

六955 ふみとま^{ふみとま}つてゐたのは、みんな薬^{やく}人形^{にんぎやう}であつた。賊はうまくはかられたのである。

六956 賊はうまくはかられたのである。

六978 正成は實にえらい人である。

六987 圖 あの學校がたつた時、うちの島にあつたのを、死んだあの子が掘取つて、かついで行つて植ゑたのだ。

六1041 図 うちにも村にも、かはつた事はありません。

六1064 図 御門の前でうやうやしく拜禮してから、神殿の御もやうを拜し

た。一切白木造で、お屋根はかやでふいてある。

六〇六 棟にはかつを木がならべてあり、棟の兩はしには千木が置いてある。

六〇八 棟にはかつを木がならべてあり、棟の兩はしには千木が置いてある。

七一一 さうしてさの先に、赤いしるしのあるはんでんをしぼりつけて、「皆さん、これが目じるしだよ。」と言った。

七一二 浅い水たまりを歩くと足のうらがぬるりとした。おさへて見たら、小さなかれひであつた。

七一三 「丸山君、かれひだ。」と言つて、つかんで見せると、ふりかへつたのは知らない人であつた。

七一四 妹やお松は何があつたのか、笑ひながらしきりに取つてゐる。

七一五 珍しかつたのは、丸山君のさるに、たつのおとしごが一つあつたことであつた。

七一六 珍しかつたのは、丸山君のさるに、たつのおとしごが一つあつたことであつた。

七一七 此の頃はれんげさうの花ざかりである。

七一八 道はたや土手にさいてゐるのはこぼれ種であらう。

七一九 又南の海上にはひしひしと軍船を浮べて、岸には大木がきりたふ

してあります。

七二〇 鎌倉へは海陸ともに攻めこむすぎがありません。

七二一 村の西にくぬぎ林がある。

七二二 それを通りぬけて四五町上ると、道ばたに大きな松が一本ある。

七二三 みきが二かゝへもあつて、枝が傘をひろげたやうに出てゐるので、村の人は之を傘松と呼んでゐる。

七二四 時々線香の上つてゐることもある。

七二五 傘松の四五間さきに、小さな茶屋が一軒ある。

七二六 此のおばあさんにむすこが一人あるのださうだが〈略〉。

七二七 茶屋から二三町行つた所の右手に、まんどゆう笠をふせたやうな塚がある。

七二八 戦争の時には乗用としても、輸送用としても、きはめて大切なものである。

七二九 〈略〉、近くは乃木大將も、馬は煉瓦造の小屋に入れて置かれたのである。

七三〇 馬の高さは前足の所ではかる八寸・九寸などといふのは、四尺八寸・四尺九寸などのことで、五尺あると、十寸といふ。

七三一 町に大山通・乃木町・奥町・兒玉町などと、日露戦争の時の大將方の名を取つてつけてゐるのは面白いでせう。

七三二 通は廣くて平で、歩道と車道の間に並木が植ゑてありますが、此の頃は其の葉の美しいさかりです。

七三三 日露戦争當時のことである。

七三四 軍人をもせた御用船が今しも港を出ようとした其の時、「ごめんなさい。く。」といひく、見送人をおし分けて、前へ出るおばあさんがある。

七三五 年は六十四五でもあらうか、腰に小さなふろしきづつみをむすびつけてゐる。

七三六 すると甲板の上で鐵砲を上げた者がある。

七三七 郡長をはじめ、見送の人々はみんな泣いたといふことである。

七三八 私ノ近所二年ヨリノカヂ屋ガアリマシタ。

七三九 〈略〉、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音ガ聞エマシタ。一日モ休ンダコトハアリマセン。

七四〇 鎌ヲキタヘテキタコトモアリマス。

七四一 鎌ヲ打ツテキタコトモアリマス。

七四二 ナタヲ打ツテキタコトモアリマスシ、車ノ輪ヲ打ツテキタコトモアリマス。

七四三 〈略〉、車ノ輪ヲ打ツテキタコトモアリマス。

七四四 私ノ乗つてゐる太平丸といふのは、長さが六十間程もある汽船で、乗組人員だけでも二百人からあります。

七四五 月夜には波が銀色に光つて、其の美しいことは何ともいひやうがありません。

七四六 時には鯨が高く潮を吹いてゐるのを見ることがあります。

七四七 何萬とも知れないいるかが、はね上つてはおよぎ、はね上つてはおよぎして行くのを見ることがあります。

七四八 又ある時にはとび魚が甲板の上へとび上ることもあります。

七四九 見るもの聞くものが、總べて皆珍しいのであります。

七五〇 けれども船はなか／＼沈むものではありません。

七五一 又きりがかゝつたり、大雪が降つたりして、一寸先も見えなくなることもあります。

七五二 深さをはかるのは、淺瀬に乗上げないため、かねや汽笛を鳴らすのは、〈略〉、衝突をさけるためであります。

七五三 一たい船にはらしんぎといふ物があつて、それで方角をとつて進みますから、〈略〉。

七五四 〈略〉、いくらきりが深くて

も、まるでちがつた方へ行くやうなことはありません。

七五九 又海岸には所々に燈臺がありますから、それを見ると、あれは何所だといふことが分ります。

七五九 此の星を見分けることや、燈臺のあかりを知るとは、船に乗る者に取つて、はなはだ大切なことなのであります。

七六〇 さておしまひに一ついつて置きたい事があります。

七六〇 それは日本は海國でありながら、まだ海を恐れる人もあるといふことで、これは實に残念な事です。

七六〇 それは日本は海國でありながら、まだ海を恐れる人もあるといふことで、〈略〉。

七六〇 それは〈略〉、これは實に残念な事です。

七六〇 ちよつと渡船に乗つてさへ、こはがる者があります。

七六〇 海の波を見たばかりで、もう恐しがる人もあります。

七六一 皆さんのうちには、大きくなつてから、商用其の他で、外國へ出かける人もあります。

七六一 漁業や航海業に従事する人もあります。

七六四 どうか今から十分海になれて置くやうにしてもらひたいのであります。

七六一 百八九十年昔の事です。

七六二 中でも安倍川の宿は一そうの人ごみであつたと申しますが、〈略〉。

七六四 〈略〉、渡賃が高いといつて、此のあぶない川を一人でこしたほどの人である。もし此の大金がなかつたら、氣がちがつて死ぬやうな事になるかも知れぬ。

七六二 三四里行つて、大きな峠へかゝりますと、上から片はだぬいで右手につるをついて、かけ下りて来る者があります。

七六五 〔あなたは今朝一人で川をこした方ではありませんか。〕

七六七 五十兩は黄色なきれにつゝんであつて、百兩は小さなふくろに入れてあります。

七六八 〈略〉、百兩は小さなふくろに入れてあります。

七六九 まして人通の多い渡場で落しましたから、たとひとんで行つて見た所で、もうあるまいとは思ひましたが、〈略〉、引つかへして参りました。

七七〇 おやめなさい。あなたから一文でももらふ氣があるくらゐなら、此所まで持つて來はしません。

七七一 〈略〉、だんなはななけ深い方ですから、此の金をあなたにさし上げまして、おしかりになることはあるまいと思ひます。

七七二 私は川ばたの人夫で、名前

をいふ程の者ではありません。

七七二 家には七十近い父と、三十になる妻と、三つになる子どもがあるの、どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともあります、〈略〉。

七七二 〈略〉、どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともあります、〈略〉。

七七二 一度もした事はありません。

七七三 一度もした事はありません。

七七三 一度もした事はありません。

七七三 一度もした事はありません。

七七三 一度もした事はありません。

七七三 一度もした事はありません。

七七三 一度もした事はありません。

七七三 一度もした事はありません。

七七三 一度もした事はありません。

七七八 藤吉郎出世のいとぐちである。

七八〇 魚類ニハイワシ・アヂ・カツヲナドノヤウニ、水ノ表面ニ近イ所ヲ泳グモノガアリ、〈略〉。

七八三 魚類ニハ、タヒ・アナゴ・ハモナドノヤウニ、岩ノカゲヤ海藻ノ間ヲ泳グモノガアリ、〈略〉。

七八五 魚類ニハ、カレヒ・ヒラメナドノヤウニ、底ニ沈ンデキルモノモアル。

七八七 アハビハ岩ヲハナレテ動クコトガアルケレドモ、カキハ一度ツイタラ決シテハナレナイ。

七八二 カキハ又スグフェルモノデ、軍艦ヤ汽船ハ時々ノカキオトサナケレバナナイホドデアル。

七八三 又眞珠貝トイフモノガアル。

七八六 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

七八六 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

七八六 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

七八六 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

七八六 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

七八六 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

七八六 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

七八六 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

七八六 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

七八六 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

七八六 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

七八六 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

七八六 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

- 七85 8 〈略〉、糊ニスルモノニハ、フ
ノリヤツノマタガアリ、〈略〉。
七86 1 〈略〉、トコロテンヤカンテン
ニスルモノニハ、テングサヤエゴノ
リガアル。
七86 2 此ノ他海藻ニハマダタクサン
ナ種類ガアツテ、中ニハ肥料ニスル
モノモアル。
七86 4 海藻ノ形ハ様々デ、帶ノ様ニ
廣クテ長イノモアレバ、全體ガ細カ
ニ分レテ、枝ノ様ニナツテキルノモ
アリ、〈略〉。
七86 5 海藻ノ形ハ様々デ、〈略〉、全
體ガ細カニ分レテ、枝ノ様ニナツテ
キルノモアリ、ニハトリノトサカニ
似タノモアル。
七86 6 海藻ノ形ハ様々デ、〈略〉、ニ
ハトリノトサカニ似タノモアル。
七86 8 色モ一様デハナイ。ミルヤモ
ヅクノ様ニ緑色ノモノモアレバ、コ
ンブヤアラメノヤウニ茶色ノモノモ
アリ、〈略〉。
七86 9 ミルヤモヅクノ様ニ緑色ノモ
ノモアレバ、コンブヤアラメノヤウ
ニ茶色ノモノモアリ、テングサノヤ
ウニ紅色ノモノモアル。
七87 1 〈略〉、テングサノヤウニ紅色
ノモノモアル。
七87 4 〈略〉、先ヅ綠色ノモノハ淺イ

- 所ニ、紅色ノモノハ深い所ニ、茶色
ノモノハ其ノ中間ニ生エテキルノデ
アル。
七87 9 〈略〉、海藻ハ養分ヲ其ノ體ノ
全面カラ吸取ルノデアル。
七88 2 あわたゞしくかけこんで來た
者があります。
七88 7 マリーはどうかしてかくして
やりたいと思ひました。けれども貧
しい木こり小屋で、戸棚一つもあり
ません。
七89 2 あまり急ぎましたので、水が
いすの上にあつたおばあさんのづき
んにこぼれました。
七92 6 図 「よいあんばいだ。此のも
やうなら、今日は大したことはある
まい。」
七98 3 此の人だけは自分のために心
配してくれるであらうと思つたので
ございます。
七98 8 図 清正は腹を立てて、「神々
も照覽あれ、戦一つ出來ず、人のか
げごとばかりいふ石田めとは、此の
清正一生中直りは致さぬ。
七103 8 図 三成は驚いて、「今天下に
此の石田を知らぬ者はあるまい。御
門を守る者は誰か。」
七106 8 図 小西は日本の大將ならず、
まことは堺の町人、道案内の者故、
にげも致したであらう。
七110 3 図 「おとうさん、電報が來ま
した。」「どこからだらう。」「シンと

- あります。」「あゝ、信吉からだ。よ
んでごらん。」
七117 7 図 十五字までが一音信だが、
にごりのある字は二字に數へるのだ
から、それでは十七字になる。
八15 黄色なのはならやくぬぎで、
赤いのはかへでや櫻やぬるである。
八21 四十雀・目白・ひよどり・も
ず・ひわ、秋の山は小鳥の聲でにぎ
やかである。
八26 小鳥は時々此の清水にのどを
うるほしては、こずゑでさへづるの
である。
八28 栗のいがのゑむのも今である。
八32 きこのむらがつて出るのも、
しひの實が落ちて、くぼたまりにこ
ろがり合ふのも今である。
八59 昔或氏神のお祭に、競馬の
神事といふ事があつた。
八65 それは〈略〉といふ定めであ
つた。
八67 或年選ばれた子どもの中に、
すぐれて上手なものが二人あつた。
八102 しかも其所は深い所である。
八112 つきそひの者や見物人はかけ
よつて來て、〈略〉、上を下へのさわ
ぎである。
八129 信作方の人々は之を聞いて、
「〈略〉。」といったので、さうきまつ
たといふことである。
八136 一方は百四五十人で、他の一
方は三百人以上もあつた。

- 八156 図 〈略〉「殿はまだお若くて、
これから功名をお立てになる折はい
くらもございます。」といつてなぐ
さめると、頼宣は顔色をかへて、
「やあ、正綱、十四歳の時が二度あ
るか。」といった。
八164 長四郎が十一歳の時のことで
ある。
八172 將軍秀忠が刀を取つて出て見
ると、長四郎であつた。
八178 図 「誰に頼まれた。」「誰にも
頼まれは致しません。」「いや、きつ
と頼まれたであらう。」
八189 図 「長四郎があゝの心で大きく
なつたら、竹千代には無二の忠臣で
あらう。」
八191 將軍はあとで、御臺所に、
「〈略〉。」といったといふことである。
八224 臺灣の蕃人には、お祭に人の
首を取つて供へる風がありますが、
〈略〉。
八234 ちやうど蕃人が、其の前の年
に取つた首が四十餘ありましたので、
〈略〉、毎年其の首を一つづつ供へさ
せました。
八311 かまは〈略〉、前には三尺に
一尺程のかま口を造り、後の方に煙
出の口を明けるのである。
八319 〈略〉、かまの外へ引出し、消
粉をかけて消せば、かた炭が出來上
るのである。
八326 山野に生ずる草木の中には、

薬用にするものが多くありますが、
《略》。

八三三 四 さうして其の栽培については
次のやうな話もあります。

八三三 昔朝鮮に一人の婦人があつて、
子どもをおさづけ下さるやうに、朝
晩神様にいのつてゐました。

八三三 すると或夜ゆめの中に、《略》、
望のものをさづけてやるといふ神様
のお告がありました。

八三二 目をさまして見ると、ふろし
きづつみがありません。

八二七 四 「しからは許してつかはす
であらうが、其の代りと致して、白
木綿を一反つ、名札をつけて、三
日の間に間違なく持参致せ。」

八四三 越前守は呉服屋の手代を呼出
して、其の中に盗まれた品のありな
しを調べさせました。すると其の中
に二反ありました。

八四八 大キサカライツテモ、強サカ
ライツテモ、驚ハタシカニ鳥類ノ王
デアル。

八四九 マシテ自由ノ天地ニ居テ、自
在ニ空ヲトブ様ハ、實ニ勇マシイモ
ノデアル。

八四九 スナハチ一間餘モアルツバサ
ヲハツテ、數分ノ間羽バタキ一ツセ
ズ、空中ヲノシテ行ク。

八四六 狐・《略》ナドハ彼ノ求メル
物デアルガ、マレニハ庭先ニ遊ンデ
キル子ドモヲサラツテ行クコトモア

ル。

八四八 《略》、マレニハ庭先ニ遊ンデ
キル子ドモヲサラツテ行クコトモア
ル。

八五〇 巢ハ至ツテソマツナモノデ、
人ノヨリツケナイ絶壁ノ間ヤ老木ノ
上ニ、タテ横ニ小枝ヲ並べ、其ノ上
ニヤハラカナコケヲ置クダケデアル。

八五〇 ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒
クテ、家畜ヲサラフノモ多クハ此ノ
時デアル。

八五〇 餅をつく音に目がさめた。は
ね起きて見ると、土間の大金の上に
積んであるせいろうからは、盛にゆ
げが上つてゐた。

八五三 二かさね目のせいろうから、
ゆげが上るまでに、少し間があつた。
八六四 此の港には、十五六年前に
大地震があつて、町は大方こはれた
のですが、《略》。

八六七 四 サンフランシスコはカリ
フォルニア州にあるのですが、此の
州は合衆國の中でも、氣候がよくて、
《略》。

八七〇 四 此所は工業地で、煙突の煙
で空は眞黒だが、大きな公園が幾つ
もあるから、健康には害がなささう
です。

八七三 四 シカゴとニューヨークの間
は九百八十哩もありますが、《略》。
八七六 四 日本にはまだこんな早い汽
車はありません。

八七九 四 ニューヨークは人口からい
へば、ロンドンに次ぐ大都會で、七
百萬以上もあるといひます。

八七九 四 高い建物のあることは世界
第一で、十階・二十階の家はいくら
もありません。

八七二 四 高い建物のあることは世界
第一で、十階・二十階の家はいくら
もありません。

八七二 四 高い建物のあることは世界
第一で、十階・二十階の家はいくら
もありません。

八七三 四 此所は有名な商業地ですが、
りつばな學校もありますし、博物
館や圖書館などもたくさんありま
す。

八七三 四 《略》、博物館や圖書館な
どもたくさんあります。

八七四 四 此の切符に、『一月二十日
限り當役場へ納付』とありませう。
八七九 四 此の一枚には徴税令書と
ありませう。これは村の税で、《略》。

八七六 四 ごらん、これには徴税傳令
書とありませう。これは縣の税で、
《略》。

八七九 四 それからこれは國の税で、
納税告知書としてあります。
八八〇 四 明治天皇の御製に、《略》。
といふ御歌がある。
八八二 四 彼の水力電氣の如きはそれで、
電燈・電車等に用ひる電氣も、もと
をたゞせば水の力である。

八八四 信吉にはおとといふ今年十
一になる女の子があるが、《略》、啞
の學校に入れたある。

八八六 信吉にはおとといふ今年十
一になる女の子があるが、生れつき
啞なので、僕のうちに世話して、啞
の學校に入れたある。

八八六 《略》、間もなく黒い服を着た
先生が、女生徒を一人つれて、はい
つて來られた。生徒はおとよであつ
た。

八八九 四 「いや、聲が聞えるのでは
ありません。口の動き方を見てさ
るのです。」

八九一 げんに此の學校の卒業生で、
商店の番頭になつてゐる者もあれば、
裁縫の先生になつてゐる者もあるな
どと話された。

八九二 《略》、商店の番頭になつてゐ
る者もあれば、裁縫の先生になつて
ゐる者もあるなどと話された。

八九六 四 僕はたゞ坐つてゐて物を食
ふだけの者ではありません。
八九七 四 食つた物をこなして、之を
血の製造場へ送るのが僕の役目であ
つて、僕が若し食物をこなさなかつ
たなら、からだを養ふ所の血がどう
して出來ませう。

八九六 四 《略》、かへつて君等は自分
で苦しむやうになつたのです。これ
は全く君等が自分で招いたのであり
ます。

八103 9 マッチはちよつとした物で、
 價も安く、〈略〉。しかし之を一人で
 造るとして、こんなに安く賣れるで
 あらうか。
 八104 6 それではマッチは、どうして
 誰が造るのであらう。
 八105 1 材木を機械にかけて軸木をこ
 しらへてゐる者もあり、〈略〉。
 八105 1 〈略〉、軸木を火で乾かす者も
 あり、〈略〉。
 八105 2 〈略〉、乾かした軸木の先に薬
 をつける者もあり、〈略〉。
 八105 3 〈略〉、薬をつけた軸木を温室
 で乾かす者もあり、〈略〉。
 八105 4 〈略〉、乾かしたのをそろへて
 マッチの箱に入れる者もあり、〈略〉。
 八105 5 〈略〉、箱に入れたのを十づつ
 集めて包紙に包む者もある。
 八106 3 したがつて一包のマッチを十
 錢ぐらゐで賣つても、さうおうにま
 うかるのである。
 八106 6 うちを造るにしても、時計
 を造るにしても、家を建てるにし
 て、皆これによるのである。
 八106 9 分業で仕事をする時、誰か一
 人の手ぎはが強いと、全體の出來ま
 でも悪くなる。やはり世は相持のも
 のである。
 八110 8 乃木大將は幼少の時、體が弱
 く、其の上臆病であつた。
 八111 2 幼名を無人といつたが、〈略〉、
 近所の人は大將のことを、無人では

ない、泣人だといつたといふこと
 ある。
 八111 9 〈略〉、大將の父はうす暗い中
 に大將を起して、往復一里餘もある
 高輪の泉岳寺へよく連れて行つた。
 八112 3 泉岳寺には名高い四十七士の
 墓がある。
 八112 6 大將の父は途々義士のことを
 大將に話してきかせて、其の墓に参
 詣したのである。
 八113 6 大將の母もまたえらい人であ
 つた。
 八113 7 大將が何か食物の中にきらひ
 な物があると見れば、三度三度の食
 事に、必ず其のきらひな物ばかり出
 して、〈略〉。
 八115 1 當時大將の體は、もうこれだ
 け丈夫になつてゐたのである。
 八115 5 郷里の家は六疊・三疊・二疊
 の三間と、二疊の板の間が一つだけ
 の、至つてせまい、そまつな家であ
 つた。
 八115 7 けれども刀・槍・薙刀など、
 武士の魂と呼ばれる物は、何時もき
 らく光つてゐたといふことである。
 八116 2 此の家に育つた乃木大將が、
 終生忠誠質素でおし通して、武人の
 手本と仰がれるやうになつたのは、
 まことにいはれのあることである。
 八116 2 〈略〉、まことにいはれのある
 ことである。
 九4 5 団 〈略〉、内地から移つて來た

人も多く、少しもさびしくはありま
 せん。
 九5 3 団 コ、椰子は、高いのは七八
 間もあります。
 九5 7 団 實の中にはかたい殻があつ
 て、其の内がはに白い肉のやうなも
 のがあります。
 九5 8 団 實の中にはかたい殻があつ
 て、其の内がはに白い肉のやうなも
 のがあります。
 九6 2 団 まだ十分にじゆくしてゐな
 い實は、中にきれいな水があります。
 九7 2 団 珍しい植物は此の外にもま
 だたくさんあります。
 九15 9 多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、
 イロく珍シイ事ガアルノニ氣ガツ
 ク。
 九15 10 中デモ面白イノハ、或動物ノ
 體色ガマハリノ物ノ色ニ似テキルコ
 トデアル。
 九16 5 シタガツテ敵ニオソハレル心
 配モ少ク、又コチラカラ敵ヲオソフ
 ノニモ都合ガヨイノデアル。
 九16 6 保護色ノ例ハイクラモアル。
 九16 9 〈略〉、雪ノ中ニ住ム北極熊
 ハ眞白デアル。
 九17 3 保護色ヲモツテキルモノノ中
 ニハ、季節ニヨツテマハリノ物ノ色
 ガカハレバ、ソレニツレテ同ジヤウ
 ナ色ニカハルモノモアル。
 九17 8 又季節ニヨツテカハルカラキ
 デナク、何時デモマハリノ物ノ色ガ

カハレバ、間モナクソレト似タ色ニ
 カハルモノモアル。
 九17 9 例ヘバ雨蛙ハ綠色ノ葉ノ上ニ
 居ル時ハ綠色デアルガ、枯木ニ移レ
 バ枯木ニ似タ色ニナル。
 九18 4 保護色ヲモツテキル上ニ、其
 ノ動物ノ姿勢ニヨツテ、形マデマハ
 リノ物ニ似テ見エルモノモアル。
 九18 10 所ニヨツテ此ノ蟲ヲドビンワ
 リト呼ンデキルノハ、農夫ナドガ小
 枝ト見違ヘテ、ドビンヲ掛ケ、落シ
 テワルトイフ意味デアラウ。
 九19 2 又冲繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、
 其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シイ色ドリガ
 アルガ、裏ハ枯葉ニ似テキルノデ、
 〈略〉。
 九19 10 シカシサラニコレヨリモ色ヤ
 形ガウマク出來テキルノハ、印度ニ
 産スルカマキリノ一種デアラウ。
 九20 1 此ノ蟲ハ主ニ蘭ニ止ツテキテ、
 外ノ蟲ヲトツテ食フモノデアルガ、
 〈略〉。
 九20 3 此ノ蟲ハ〈略〉、羽ヲ廣ゲテ
 キルト、全ク蘭ノ花ト同ジヤウデ、
 ナカく見分ケガツカナイサウデア
 ル。
 九20 7 コレ等ハ大デイ他ノ動物ノ恐
 レル武器ヲソナヘテキルカ、イヤガ
 ル味ヤニホヒノアルモノデ、〈略〉。
 九20 9 コレ等ハ〈略〉、之ニ近ツカ
 ウトスルモノガナイカラ、タヤスク
 見トメラレル方ガハツテ安全ナノ

デアル。

九21ノ 例ヘバ〈略〉、惡味ヤ惡臭ノアル蝶ノ羽ニハ美シイ色ドリガアルヤウナモノデアル。

九212 〈略〉、惡味ヤ惡臭ノアル蝶ノ羽ニハ美シイ色ドリガアルヤウナモノデアル。

九212 〈略〉、惡味ヤ惡臭ノアル蝶ノ羽ニハ美シイ色ドリガアルヤウナモノデアル。

九214 動物ノ形ヤ色デモ、注意シテ調べテミルト、コノヤウニイロクフシギナ事ガアル。

九221 まくらもとに置いてある行燈の光はうす暗く、〈略〉。

九222 〈略〉、たて切つてあるしやうじのやぶれを、秋風がはたはたとあふる。

九225 〈略〉 歡庵様が、國民民福の本は農業を盛にするにあるとお氣づきになつて、〈略〉。

九236 ところで此の父も、何とぞ此の學問を大成したいと、〈略〉、出来るだけは骨折つたつもりである。

九243 それから諸國を歩き廻つたすゑ、〈略〉、此の山中へ來たのである。

九245 老人は大分つかれたやうである。

九261 〈略〉、一すぢに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ事で、これが佐藤の家の學

問の精神である。

九263 わたしも此の精神にもとづいて、〈略〉、くはしく計畫を立てた事もあるが、いろくの差支があつて、實行が出来ずにしまつた。

九264 〈略〉、くはしく計畫を立てた事もあるが、いろくの差支があつて、實行が出来ずにしまつた。

九265 これはまことに残念な事である。

九271 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、さぞ心細くもあらう、又つらい事もあるであらうが、〈略〉。

九271 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、さぞ心細くもあらう、又つらい事もあるであらうが、〈略〉。

九271 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、さぞ心細くもあらう、又つらい事もあるであらうが、〈略〉。

九276 古人も『志ある者は事終に成る。』と言つてゐる。

九282 〈略〉、此の老人こそは出羽の國の醫者佐藤信季、少年は其の子信淵である。

九291 歡庵以來代々力をつくして來た農學は、信季の望通り、信淵に至つて大成したのである。

九294 世界一といはれるナイヤガラ

の瀧は、アメリカ合衆國とカナダと

の國境にあります。

九295 廣さが千數百方里もある、海のやうな湖から流れる大きな河が、一大絶壁をみなぎり落ちるのですから、〈略〉。

九2910 瀧は、落口にあるゴート島といふ小島の爲に二つに分れてゐます。

九301 右にあるのがアメリカ瀧、左にあるのがカナダ瀧で、此の二つを合はせてナイヤガラといふので

九302 右にあるのがアメリカ瀧、左にあるのがカナダ瀧で、此の二つを合はせてナイヤガラといふので

九308 瀧の幅は、アメリカ瀧が百餘丈、カナダ瀧が三百餘丈、高さはどちらも十五六丈あります。

九359 それをじつと見送つてゐると、「やあ、加藤君、よく來てくれたね。」と、聲をかけた者がある。

九3510 頭を上げてみると、それは石井君であつた。

九3710 「閣下の防戦はまことに見事であつた。」

九384 しかし部下の者は、最後までベルギーの名譽をけがさなかつたつもりである。

九501 會社では、幾臺もある精米機械が電力で勢よく廻り、〈略〉。

九524 さて商賣を始めると、あの人ならといふ信用はあるし、それに

わき目もふらず働くので、店はだんだん繁昌して、〈略〉。

九539 世間にはこんな場合に、なるだけ自分の負擔を軽くしようとする者もあるが、あの人は反對に、〈略〉。

九548 町の人々は之を見かねて、〈略〉、資本を出さうとする者もあつたが、社長さんは、〈略〉、夜を日についで働いた。

九5610 後には麥の束が山と積んである。

九572 〈略〉、莖の先についてゐる穂が、敷いてあるむしろの上に面白いやうに飛散る。

九614 艦内は深山のやうな静かさである。

九618 軍艦の起床時間は、夏は五時、冬は六時である。

九6310 そこで五分間の休けいがあつて、上甲板洗となる。

九645 兩舷直といふのは、特別の務のあるものをぞいた外の水兵のことである。

九646 兩舷直といふのは、特別の務のあるものをぞいた外の水兵のことである。

九652 甲板洗はいかにも勇ましく面白いものである。

九656 其の様は、まるで雨後の蛙がむらがり飛んでゐるやうである。

九666 一時間餘りも活動した後であ

るから、食事のうまいことはいふまでもない。

九六四 朝日にかゞやく軍艦旗が、海風にひらめきながら、しづく／＼と上つて行く様は、實におごそかなものである。

九六七 軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は、これから訓練に取掛るのである。

九六八 まだ日が暮れたばかりのやうに思つたが、もう八時半であつた。

九六八 此の邊が有名な那須野が原だ。昔は一面の荒野であつたが、今は方々に町や村が出来てゐる。

九七〇 白河を通つたのは昨夜の十一時前であつた。

九七〇 略、此の關所は濱街道の勿來の關と共に、有名なものであつた。

九七一 仙臺に着いたのは午前の三時で、少しは下りた人も乗つた人もあつた。

九七二 仙臺は東北第一の都會で、大學も高等學校もある。

九七三 昔は竹に雀の紋所で名高い仙臺様の城下であつた。

九七九 あの上に名高い金色堂がある。

九七二 辨慶が立往生をしたと傳へられてゐる衣川は、すぐ此の先にある。

九七四 あれは岩手山だ。南部富士

といはれるだけあつて、ちよつと形が似てゐるね。

九七四 あのもとに有名な小岩井農場があるのだ。

九七四 山畑に稗の作つてあるのも珍しく、谷間に白い山ゆりの花のまばらに見えるのも面白い。

九七四 陸中と陸奥との境にある幾つかのトンネルをくぐると、廣い原野がだん／＼に開けて来る。

九七六 遠くにはかすかに津輕半島が横たはり、近くには形のよい島々などもあつて、大そう景色のよい所であつた。

九七六 略、大そう景色のよい所であつた。

九七六 北海道に渡る人は、停車場に續いた乗船所から汽船に乗るのである。

九七六 「東京から此所までは四百五十六哩もあるのだが、かうたやすく来てみると、そんなに遠い所に來たやうな氣がしないね。」

九七九 大人の握りこぶし程の大きなものあれば、雀の卵ぐらゐなはいらしいものもあるが、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。

九七九 大人の握りこぶし程の大きなものあれば、雀の卵ぐらゐなはいらしいものもあるが、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。

九七九 大人の握りこぶし程の大きなものあれば、雀の卵ぐらゐなはいらしいものもあるが、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。

九七九 大人の握りこぶし程の大きなものあれば、雀の卵ぐらゐなはいらしいものもあるが、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。

九七九 大人の握りこぶし程の大きなものあれば、雀の卵ぐらゐなはいらしいものもあるが、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。

九七九 大人の握りこぶし程の大きなものあれば、雀の卵ぐらゐなはいらしいものもあるが、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。

九七九 大人の握りこぶし程の大きなものあれば、雀の卵ぐらゐなはいらしいものもあるが、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。

九八五 それでも航海をする人など

が、よく星を見て船の位置をはかるといふではありませんか。

九八六 それに、たくさん星の中に一つだけ、年中ほとんど位置の變らないのがあるから、まことに都合がよいのだ。

九八六 「でも、あんなにたくさんある星ですもの、それを見つけるのに大變でせう。」

九八七 それにはまた都合のよい事がある。

九八七 何かといふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 あ柄でない方の端にある二つの星を結びつけて、其の線を、ひしやくの口の向いてゐる方へのぼして行くと、略。

九八八 略、今結んだ二つの星のへだたりの五倍ばかりのところに、かなり大きい星があるだらう。

九八九 「あ、あの一番高い杉の眞上の所にあるのが北極星でせう。」

九九〇 小熊座と大熊座について、面白い昔話があるはずだから、ねえさんに聞いてごらん。

九九二 昔カリストといふおかあさんと、アルカスといふ子供がいました。

九九五 雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて來て、時には一寸先も見えないやうな

ことがあります。

九九五 下山の時には、木の枝などを櫓にして、此の雪溪をすべつて下る人があります。

九九六 お花畠は雪溪を登りつめた所にあります。

九九九 富士山も、晴れた日には、白雲の上にかすかに見える事があるさうです。

九九九 面白いお話がまだたくさんありさうでしたが、もう夕方になつたので、僕等はおいとまごひをして歸りました。

九九九 向ふの畠には、たうのいもが作つてある。

九九九 山のすその方があちらこちら白いのは、蕎麥の花であらう。

九九九 ざるを持つた子供が、川下の方に集つてさわいでゐるのは、鮒やどちやうを取るであらう。

九九九 北風はたけが五尺二寸もある黒馬で、略、見るからに強さうな軍馬である。

九九九 戦地ではいろ／＼つらい事もあつたが、戦場をかけ廻るのは、北風にとつて愉快な事であつた。

九九九 略、戦場をかけ廻るのは、北風にとつて愉快な事であつた。

九九九 戦場の光景は實に恐いものであつたが、北風は略、びくと

九一〇 下山の時には、木の枝などを櫓にして、此の雪溪をすべつて下る人があります。

九九六 お花畠は雪溪を登りつめた所にあります。

九九九 富士山も、晴れた日には、白雲の上にかすかに見える事があるさうです。

九九九 面白いお話がまだたくさんありさうでしたが、もう夕方になつたので、僕等はおいとまごひをして歸りました。

もせずに勇ましく活動した。

九一〇 或朝の事であつた。

九一三 〇「おい北風、今日は大部分手ごたへがあるぞ。しつかり頼むよ。」

九一四 〇「しかし聞えるのはかすかな息づかひばかりであつた。」

九一五 明治二十七八年戦役の時であつた。

九一六 〇私には妻も子も有りません。

九一七 〇大尉はそれを取つて見ると、次のやうな事が書いてあつた。

九一八 〇其のうちには花々しい戦争もあるだらう。其時にはお互に目ざましい働をして、我が高千穂艦の名をあげよう。

九一九 〇道雄が今朝起キテミルト、商用デ四國ノ方ヘ旅行シテキタ父ガ、夜汽車デ歸ツタコロデアツタ。

九二〇 〇シカシ今度ノ候補者ノ中ニ、實ニリツバナ考ヲ持ツテキテ、アノ人ナラバト思ハレル人ガアルカラ、オトウサンハ最初カラチャント其ノ人ニキメテキタ。

九二一 〇世間ニハ、〈略〉、或ハ棄權シテシマツタリスル人モアルガ、ソノナ事ヲスルノハ、選舉ノ趣意ニソムイテキル。

九二二 〇道雄ノ學校デハ、此ノ間級長ガ轉校シタノデ、近々後任ノ選舉ヲスルコトニナツテキルノデアツタ。
九二三 〇昔ヨーロッパにアレクサンドル大王といふ王があつた。

十七 〇マケドニアといふ小さな國の王子と生れ、〈略〉、當時世界に類のない大國を建設した英雄である。

十八 〇其の大王が東方諸國の遠征に出かけた時の事である。

十九 〇水は意外に冷たくて、まるで氷のやうであつた。

二十 〇醫師は皆、投藥してもし萬一の事があれば、毒殺のうたがひを受けないかと恐れて、〈略〉。

二十一 〇醫師は皆、〈略〉、たゞ經過を見守つてゐるばかりである。

二十二 〇それにはフィリップが敵から大金をもらふ約束で王を毒殺しようとしてゐるといふ風説があるから、用心するやうにと書いてあつた。

二十三 〇それには〈略〉と書いてあつた。

二十四 〇十月二十五日は、青年團の道ぶしんの日であつた。

二十五 〇高橋さんは、あちらで長らく教育に従事してゐる人である。

二十六 〇市場は町はづれにあります。
二十七 〇私の行つた時には、もう其所にすぎ間も無く子馬がつないでゐりました。

二十八 〇まだせりが始まるの間にあらるといふので、馬つなぎ場を見て廻つたが、〈略〉。
二十九 〇中には、母馬がつきそつて來てゐるのにもたくさんあります。
三十 〇中には、君ぐらゐの子供や、

其のおかあさんらしい人が、〈略〉、くびや背をなでたりしてゐるのもあります。

三十一 〇せり場の一方に高い臺があつて、其の上に掛の人が居る。

三十二 〇此の町では、二歳駒の市が十日間も續いて、其の間には千頭からの賣買があり、直段も一頭四千圓・五千圓といふ高いのがあるさうです。

三十三 〇此の町では、二歳駒の市が十日間も續いて、〈略〉、直段も一頭四千圓・五千圓といふ高いのがあるさうです。

三十四 〇歸りに散歩がてら町を歩いて見ると、〈略〉、店の看板にも馬がかいてあるのがよく目に付きまして。

三十五 〇英國の東海岸にロングストーンといふ島がある。

三十六 〇〈略〉、老夫婦のなぐさめとなるものは、氣だてのやさしい一人娘のグレース、ダーリングであつた。

三十七 〇或秋の夜の事である。
三十八 〇命を捨ててかゝつたら、救へないことはありませんまい。

三十九 〇かうしてボートは再び荒波を切りぬけて、燈臺に歸り着いたのである。
四十 〇此地の峽に造つた運河が、世界に名高いパナマ運河である。
四十一 〇其の外にもいろいろの理由があるの、〈略〉、太平・大西兩洋の

水を通はせることは到底出来ぬ事であつた。

四十二 〇〈略〉、此地の峽を切通し、平かな掘割を造つて、太平・大西兩洋の水を通はせることは到底出来ぬ事であつた。

四十三 〇そこで此の運河は、非常に變つた仕組に出来てゐるのである。

四十四 〇高い土地の上に水をたゝへたのであるから、湖の水面は海面よりずつと高い。

四十五 〇此の湖へ兩方の海から掘割が通じてある。

四十六 〇〈略〉、掘割の處處に水門を設けて、たくみに船を上下する様にしてある。

四十七 〇しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。

四十八 〇上手にも水門があるので、船は大きな箱の中に浮いてゐる形である。
四十九 〇上手にも水門があるので、船は大きな箱の中に浮いてゐる形である。
五十 〇上手にも水門があるので、船は大きな箱の中に浮いてゐる形である。

五十一 〇此の湖を横ぎると又水門があつて、船はさらに一段高くなる。
五十二 〇かうして前後三段に上つた船は、海面より約二十六メートルも高い水面に浮ぶのである。
五十三 〇これは高い山地を切通したもので、此處を切通すのは非常な難工事であつたといふ事である。

- 十352 〈略〉、此處を切通すのは非常な難工事であつたといふ事である。
- 十354 ガッソ湖といつて、廣さが霞が浦の二倍以上もある大きな人造湖で、〈略〉。
- 十356 〈略〉、もと此處にそびえてゐた山々である。
- 十359 此處から又掘割を走つて、終に洋々たる大西洋に出るのである。
- 十364 パナマ地峽に運河を造る事は、〈略〉、實地に大仕掛の工事を行つた事もあつたが、成功を見るに至らなかつた。
- 十368 最後にアメリカ合衆國は、〈略〉、遂に之を造り上げたのである。
- 十3610 米國が此の運河を造るに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。
- 十379 しかしパナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり、したがつて世界の航路に大きな變動を生じたのである。
- 十381 村はづれにある、うちの雜木山を開墾し始めてから、もう一月餘りになる。
- 十387 〈略〉、まだあらごなしの開墾地は、まるで足のふみ場も無い有様である。
- 十392 地面は霜で眞白である。
- 十459 日頃から自然の色にあらがれてゐた彼は、〈略〉、もう立つても居ても居られなくなつたのである。

- 十464 毎日焼いてはくだし、焼いてはくだしして、歎息する彼の様子は、實に見る目もいたましい程であつた。
- 十473 彼の頭の中にあるものは、唯夕日を浴びた柿の色であつた。
- 十474 彼の頭の中にあるものは、唯夕日を浴びた柿の色であつた。
- 十498 柿右衛門は今から三百年ばかり前、肥前の有田にゐた陶工である。
- 十516 うちに置くと、火事にあつたり、盗人に取られたりする危険があるからね。
- 十517 金がある、さうで無くても、餘分の金があると、ついむだな事に使つてしまふ。
- 十518 金がある、さうで無くても、餘分の金があると、ついむだな事に使つてしまふ。
- 十518 金がある、さうで無くても、餘分の金があると、ついむだな事に使つてしまふ。
- 十522 銀行の預金には定期預金といふのと當座預金といふのがある。
- 十533 世の中にはお金の有餘つてゐる人もあるが、又何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。
- 十535 世の中にはお金の有餘つてゐる人もあるが、又何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。
- 十537 貸附の利子は預金の利子より高くしてあるから、其の差だけが銀行の収入になるのだ。
- 十543 寶玉をちりばめたやうなかは

- いゝ目、〈略〉鳩は見るからに愛らしいものである。
- 十547 此の愛らしい小鳥が、〈略〉、いろ／＼の困難ををかして、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、誰でも驚かない者はあるまい。
- 十557 それ故鳩の體に手紙を附けて放せば、容易に通信が出来るのである。
- 十5510 普通傳書鳩を使用する方法は、一定の飼養所から他の土地に連れて行つて、飛歸らせるのである。
- 十562 しかし此の外に、往復通信の方法もある。
- 十568 それは、豫め甲乙の二地をきめて置いて、〈略〉、其の往來を利用するのである。
- 十5610 鳩は一分間に約一キロメートルも飛ぶ力があるから、四五キロメートルの處を往復して食事するぐらいは何でも無い。
- 十577 鳩に手紙を運ばせるには、〈略〉、又は胸に袋を掛けさせて、其の中に入れるのである。
- 十585 又戦争の時戦線から戦状を報じたり、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。
- 十593 あゝ、あのかはいゝ鳩が、〈略〉、何人も其のかしこさと勇ましさに感心しない者はあるまい。
- 十607 「お、降つたはく。世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ

- 面白事であらうが。」
- 十617 此處から十八町程先に、山本といふ宿場があります。
- 十646 「お連れ申しはしたが、差上げる物はあらうか。」
- 十668 私はもと鉢の木がすきで、いろ／＼集めた事もありましたが、かう落ちぶれては、それも無用の物好と思ひ、大てい人にやつてしまひました。
- 十716 それなるは佐野源左衛門常世か。これは何時ぞやの大雪に宿を借りた旅僧であるぞ。
- 十725 今度の勢ぞろへに集つた諸侍の中に、訴訟ある者は申し出るがよい。
- 十727 「今度の勢ぞろへに集つた諸侍の中に、訴訟ある者は申し出るがよい。理非を正して裁斷致すであらう。」
- 十732 皆様御かはりはありませんか。こちらも一同無事です。
- 十7310 京城の市街は、〈略〉、その處々にかういふ門があつて、出入口になつてゐたのださうです。
- 十751 南大門の東南の方に南山といふ山があつて、公園になつてゐます。
- 十753 此處には天照大神をおまつりした京城神社があり、又其の近くに朝鮮總督府があります。
- 十754 此處には天照大神をおまつ

りした京城神社があり、又其の近くに朝鮮總督府があります。

十76ノ国 北の方の山のすそには、松林を後にして右に昌徳宮、左に景福宮の壯大な構がある。

十76ノ国 京城の西南部に龍山といふ處があります。

十76ノ国 龍山はもと漢江にのぞんだ小さな町であつたが、京城の發展するに連れて次第に廣がり、〈略〉。

十77ノ国 此處には軍司令部や龍山停車場などがあります。

十78ノ国 お知らせしたい事はまだいろいろありますが、大分長くなりましたから、今日は此のくらゐにして置きます。

十86ノ4 又國內で出来るものを使ふよりも、時には外國の品を使ふ方が都合のよい事もある。

十86ノ5 種々の品物が遠く外國から輸入されるのは、主にこれ等の事情からである。

十87ノ9 〈略〉、輸出先はアメリカ合衆國・支那・イギリス・フランス等である。

十88ノ6 支那の豚の毛が輸入されて日本でブラシに造られ、又支那へ輸出されるなども同じ例である。

十88ノ9 最近における我が國の輸出入總額は數十億圓の多額で、之を十年前の額に比べると、實に十數倍である。

十88ノ10 輸出入の額の増加して行くのは國家が次第に盛になる印である。

十92ノ5 國「はい。」「いゝえ。」大變やさしい言葉ではありませんか。どうしてそんなに言ひにくいのです。」

十92ノ9 父は「誠にやさしいやうだが、それで中々言ひにくい場合があるのだ。」

十93ノ1 翌日太郎が友だちの正雄・良一と三人連で、學校から歸る時の事であつた。

十93ノ4 其の近道といふのは田のあぜ道で、途中にはかなり深い小川にかけ渡した一本橋がある。

十93ノ6 太郎は前から父に、「〈略〉。」と固く禁ぜられてゐたのであるが、友だちのすゝめをことわりかねて、一所に渡り出した。

十101ノ5 國 あゝ、咲いてゐる、く。みよ子、ずるぶん珍しい花があるだらう。

十101ノ5 此處は重に蘭の類を集めてある處だ。

十102ノ1 たくさん咲いてゐる中で一番美しいのは、たれ下つた莖に、幾つも咲いてゐる薄紅色の花である。

十102ノ3 それから少し行くと、うつばかづらといふものがある。

十103ノ3 國 「さあ、今度は葉のきれいな植物を集めてある處だ。」
十103ノ7 成程、緑色の絹絲で作つたのかと思はれるやうな葉もあれば、赤

や黄や青や紫のまだらの美しいものもある。

十103ノ8 〈略〉、赤や黄や青や紫のまだらの美しいものもある。

十103ノ9 中には、まるで花かと思はれる紅色の葉が、莖の上の方に群がつて出でゐるものもある。

十104ノ3 椰子・バナ・コーヒー・ゴムの木などは名を聞いてゐたが、實物を見るのは始めてである。

十104ノ4 此の後にかまがある。

十104ノ9 其處から又右に折れると、細長い室一ぱいに、目もさめるやうな草花が並べてある。

十114ノ4 もりが體內深くくひ込んで、破裂矢が見事に破裂したのであらう。

十116ノ1 二十メートルもある大鯨が今は全く息たえて、小山のやうな體を水面に横たへる。

十117ノ4 太宰府町は太宰府神社のある處である。

十117ノ4 太宰府町は太宰府神社のある處である。

十117ノ10 何百年も経たであらうと思はれる樟の大木が茂り合つてゐる。

十118ノ1 池にかけてある二つの太鼓橋を渡り、〈略〉。

十118ノ9 白梅は今ちやうど眞盛りであるが、其の間に咲きかけの紅梅が點々と交つて美しい。

十119ノ3 茶屋のおばあさんに尋ねると、それは園内に飼つてある鶴の聲であつた。

つた。

十119ノ3 茶屋のおばあさんに尋ねると、それは園内に飼つてある鶴の聲であつた。

十119ノ9 此處は菅公配所の跡である。

十119ノ10 低いじめじめした松林の中に小さな社がある。

十120ノ2 公は此處にうつされてから一歩も外へは出ないで、三年の歳月を送られたさうである。

十120ノ4 宮中の御宴の事を思ひ出して詩を作られたのも此處であらう。

十121ノ3 申し込んで來た者は五十人許もあつて、〈略〉、或一人の青年をやとひ入れた。

十121ノ5 申し込んで來た者は五十人許もあつて、〈略〉、りつばな學歴のある者もあつたのに、主人はそれ等の人々をさしおいて、或一人の青年をやとひ入れた。

十121ノ5 〈略〉、りつばな學歴のある者もあつたのに、主人はそれ等の人々をさしおいて、或一人の青年をやとひ入れた。

十121ノ6 これほど我々に重大な關係のある太陽とは、一體どんなものであらう。

十121ノ7 これほど我々に重大な關係のある太陽とは、一體どんなものであらう。

十121ノ7 一口にいへば、白熱の状態にある一大火球で、〈略〉。

十121ノ8 一口にいへば、〈略〉、之を形造つてゐるものは、液體に近い氣

體であらうといふ。

十一210 望遠鏡で見ると、〈略〉、光の強い部分もあれば弱い部分もあり、〈略〉。

十一31 望遠鏡で見ると、〈略〉、光の強い部分もあれば弱い部分もあり、〈略〉。

十一31 望遠鏡で見ると、〈略〉、又所々に黒點といつて黒く見える所もある。

十一32 此の黒點は多分表面に生ずるうづ巻であらうといふ。

十一39 〈略〉、たゞ其の距離の遠いために、あんなに小さく見えるのである。

十一43 今かりに一時間五十里の速度で飛ぶ飛行機に乗つて行つたとしても、太陽に到着するには八十七年かかるのである。

十一87 それから〈略〉、更に十海里餘りさかのぼると、其の西岸にある上海に着く。

十一89 上海は支那第一の貿易場で、百萬近くの人口を有する大都會である。

十一92 租界といふのは居留地の一種で、〈略〉、自治制を布いてゐる處である。

十一95 租界には〈略〉、其の有様は一見世界人種の展覽會のやうである。

十一105 唯商業の取引の盛な部分は、

〈略〉、西洋風の建物もあつて、趣がやゝ變つてゐる。

十一108 上海が黃浦江に臨む部分は延長八哩、六十餘の波止場がある。

十一111 此の地は〈略〉、外國との貿易ばかりでなく、支那の各地との取引にもきはめて便利であるから、〈略〉。

十一113 此の地は〈略〉、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。

十一143 通された部屋には、古いたんすや戸棚などが並べてありました、さうぢもよく行届いてゐるし、總べてがきちんとしてゐました。

十一148 三月の末になさるはずであつたのが、お取込があつたため、今まで延びてゐたのださうです。

十一148 三月の末になさるはずであつたのが、お取込があつたため、〈略〉。

十一162 図 「あすこに全部學年別にしてのせてあります。」

十一166 私は學校で習ふ本でさへ時々見失つて、大さわざをすることがあります。

十一178 見れば引出にはみんな札がはつてあつて、「ふろしき」「ハンケチ」などと一々書いてあります。

十一178 〈略〉、「ふろしき」「ハンケチ」などと一々書いてあります。

十一184 図 これまで自分の不整頓の

ために、むだに費した時間と努力は大きなものであつた。

十一1810 約束は固く守らなければならぬ、他人に害を加へてはならぬなどといふことは、我々が十分心得てゐる事である。

十一1810 しかし大勢の中にはそれを守らない人もある。

十一192 例へば、借りた金を、返す約束の日が来ていくら催促されても、返さない人がある。

十一198 又他人の物を盗んだといふやうな犯罪があつた場合には、國家は其のやうな不法な行が再びされないやうに、〈略〉。

十一203 ところで、どういふ事をすれば罪になるか、其の制裁としてどのやうな刑罰を受けるかは、法律で明かに定めてあるから、裁判所は、〈略〉。

十一203 〈略〉、裁判所は、犯罪の疑のある者を十分に取調べて適當公平な裁判をする。

十一207 此の場合には訴へられた者が被告で、検事といふ役人が原告に當るのである。

十一209 裁判所は國家が設ける機關で、これに〈略〉の四階級がある。

十一216 かういふ風に、三回くりかへして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、つまり裁判を急人にするためである。

十一217 裁判を行ふのは判事の職務であり、刑事裁判で、國家を代表して犯罪者の處罰を求めるのは検事の職務である。

十一218 〈略〉、刑事裁判で、國家を代表して犯罪者の處罰を求めるのは検事の職務である。

十一222 又〈略〉するために辯護士といふものがある。

十一225 此の世を不道理や罪惡の行はれない、平和な、秩序正しい世の中にするのが其の目的である。

十一228 若し裁判が無いとしたら、〈略〉、しかも其の争は、力の強い者がやるがしこい者が勝つことになるであらう。

十一2210 若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、〈略〉、我々は安心して生活することが出来ぬであらう。

十一231 裁判は實に正義保護のための大切な仕事であり、判事・検事・辯護士の任務は極めて重大なものといふべきである。

十一232 裁判は〈略〉、判事・検事・辯護士の任務は極めて重大なものといふべきである。

十一364 地圖の中の薄緑に染めてあるのが一昨年植付けた處、〈略〉。

十一365 〈略〉、朱線で圍んであるのが今年伐採する處、それから次々といろ／＼の印がついてゐる。

十一369 「〈略〉。」とおとうさんの手

で記してある。

十一 37 10 植付けた苗木の枯れた處へ補植をするのは、翌年一回だけだといふから、今年はもうしなくともよいのであらう。

十一 38 5 〈略〉、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

十一 39 4 いつかにもいさんが、「杉の散髪だ。」といつてみんなを笑はせたことがある。

十一 39 9 それから始めて聞いて面白いつたのは、枝打をしないと木に節が出来ることである。

十一 40 8 今年伐るはずのは、〈略〉、もう幹のまはりの三尺餘りもあるものが大分見える。

十一 49 7 一體ゴムは何からどうして造るのであらうか。

十一 49 9 ゴムは、〈略〉を原料として、製造したものである。

十一 50 1 これには種類が多く、一番よいのはパラゴムといふのである。

十一 50 2 今日世界におけるゴムの大部分は、此の木から取つたものである。

十一 50 4 此の種のゴムが、昔主として南米ブラジルのパラ州から産出したので、パラゴムの名が生じたわけである。

十一 50 6 ブラジル邊でゴムを製造す

るには、山野に自生するゴムの木から原料をとるのであるが、〈略〉。

十一 51 4 マレイ半島・蘭領東印度等には、日本人の經營してゐるゴム園もたくさんにある。

十一 51 8 此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあとに種をまくか、又は苗木を植付けるのであるが、〈略〉。

十一 52 4 切付といふのは、ゴムの木から液をとるために、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。

十一 52 5 元來ゴム液は、幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るものであるから、〈略〉。

十一 52 6 元來ゴム液は、幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るものであるから、〈略〉。

十一 52 9 此の傷から出て来るゴム液は、流れて下のコップにたまるのである。

十一 53 2 それがすむと、今度はバケツを持つてコップにたまつた液を集めて歩くのである。

十一 53 5 集めた液は之を工場に持つて行き、先づ〈略〉、機械で薄くして乾かすのである。

十一 53 6 こゝまでが原産地における仕事である。

十一 53 10 之をそれく用途に應じて、更に加工するのである。

十一 54 4 ゴムの用途は、年を追うて

益々廣くなるばかりである。

十一 54 7 昔、アフリカの或港に一そこの船がとまつてゐた時の話である。

十一 55 3 〈略〉、中にもうれしさうに見えたのは、十三四になる二人の少年であつた。

十一 55 5 一人は老砲手の子である。

十一 58 7 立ちこめた砲煙の薄れゆくにつれて、先づ目に入つたのは、大きなふかの死體であつた。

十一 59 5 札幌に來て先づ感ずることは、街路が眞直で幅の非常に廣いことである。

十一 59 9 〈略〉、市街の中央を東西に貫ぬく幅六十間の大通は、むしろ公園ともいふべきもので、花壇が設けてあり、銅像なども立つてゐる。

十一 59 10 未開の土地を切開いて、思ふまゝに設計して造つた町であるから、總べてが大規模でのびくとしてゐる。

十一 60 4 市外の眞駒内及び月寒には、大きな牧場がある。

十一 60 7 〈略〉、緑草の間に羊の群をなして遊ぶ様は、實にのどかである。

十一 60 10 〈略〉、約五時間後に石狩と十勝の境にある狩勝の峠にかゝる。

十一 61 1 此の峠には長いトンネルがあつて、〈略〉。

十一 61 2 此の峠には長いトンネルがあつて、其のあたりは海拔約千八百尺、北海道鐵道沿線中の最高所であ

る。

十一 61 7 〈略〉、突如として眼前に展開せられた風景は、雄大といはうか豪壯といはうか、恐らく全道第一の壯觀であらう。

十一 62 2 畫がけるが如く美しき山の、或は右に或は左にあらはれるのは、サホロ嶽の連峯の一つであらう。

十一 62 7 十勝川の流域一帯の廣野はいはゆる十勝平原で、其の中心をなすものは帶廣の町である。

十一 62 8 明治十六年こゝに十三戸の農家が移住して來たのが此の町の始まりであつた。

十一 63 2 それが今は人口約二萬、戸數約四千を算するりつばな町となつたのである。

十一 63 6 こんな廣い畠であるから、耕すにも、うねを作るにも、種を蒔くにも、大い機械と馬の力による。

十一 63 8 中にはトラクターを用ひて全く大農式にやつてゐる處もある。

十一 63 10 トラクターはちやうど軍用のタンクのやうな形で、ガソリンの發動機が取付けてある。

十一 65 1 農業者は多く古い習慣になづみやすいものであるが、〈略〉。

十一 65 6 十勝の平野は心ゆくばかり晴々しい處である。

十一 65 10 〈略〉、火を使用するのは人類ばかりで、他の動物には見られない所である。

十一 66 1 一體人は最初どうして火を得たであらうか。

十一 66 4 思ふに落雷の爲に樹木が燃えたり、《略》たりした自然の火から、火種を取つたものであらう。

十一 66 9 此の方法は各國民の間に、廣く又極めて長い間行はれてゐたものであるが、マッチの使用が廣まるにつれてすたつて來た。

十一 67 1 マッチは今から約百年前に發明されたものである。

十一 67 3 火の熱は、初め主として食物を調理するのに用ひたもののやうであるが、《略》、火の用途もだん／＼廣くなつて來た。

十一 67 10 燈火としては、初め松の木や魚・獸の油などをたいたのであつたが、其の後らふそくや種油がともされ、《略》。

十一 68 3 かくして人は、暗黒の世界からだん／＼光明の世界へと、みちびかれて來たのである。

十一 68 4 「必要は發明の母。」である。十一 68 7 しかし火の利用法は、決してこれで完成したといふわけではあるまい。

十一 68 9 將來は又どんなものが發明されて、今のガスや電氣にかはることであらうか。

十一 69 9 〇 「無言の行に口をきくといふ事があるか。」

十一 70 7 本居宣長は伊勢の國松坂の

人である。

十一 73 2 さうして新上屋の主人に、萬一御歸りに又泊られることがあつたら、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。

十一 73 8 望がかなつて、宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出來たのは、それから數日の後であつた。

十一 73 10 眞淵はもう七十歳に近く、いろ／＼りつばな著書もあつて、天下に聞えた老大家。

十一 74 4 年こそちがへ、二人は同じ學問の道をたどつてゐるのである。

十一 77 6 我々の普通に金錢といつてゐる物の中には、金貨を始め、銀貨・白銅貨・青銅貨がある。

十一 77 7 又此の外に貨幣の代りに用ひられる紙幣がある。

十一 78 1 我々は殆ど貨幣・紙幣なくして一日も生活することは出來ぬといつてもよいからである。

十一 78 7 しかし今日の貨幣や紙幣を案出するまでには、人間は實に種々様々なるものを使用してゐたのである。

十一 78 9 石・貝・家畜・獸皮・布・農産物などが、《略》、それ／＼貨幣の役目をしたこともあつた。

十一 78 10 しかしこれらの物は、受取る者にそれが不用であつたり、思ふやうに分割することが出來なかつたり、其の他いろ／＼の缺點がある。

十一 79 2 しかしこれらの物は、《略》、

其の他いろ／＼の缺點がある。

十一 79 4 それで金屬を用ひることを思ひつき、《略》、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。

十一 79 5 かうして出來た貨幣は極めて使用に便利ではあるが、尚場合によつては持運びに不便なので、《略》。

十一 79 7 今では世界各國、貨幣・紙幣を用ひない國はないのである。

十一 84 9 ふと見ると、さしわたし六七寸もある大きなくらがが、ふわり／＼と浮いてゐる。

十一 88 7 〇 これは略本曆だ。この中にある『通日』で數へて御らん。

十一 89 9 〇 「こゝに『八十八夜』とありますが、これは何ですか。」

十一 90 2 僕はこれまで曆といふと、今年は紀元何年であるか、何月何日は何曜日であるか、《略》といふやうな事を見るものとはかり考へてゐたので、《略》。

十一 90 3 《略》、今年は紀元何年であるか、何月何日は何曜日であるか、祝祭日・土用・彼岸・入梅・日食・月食が何時になるか《略》。

十一 91 4 〇 もつとおしまひの方をあけて御らん。『各地の氣候』といふ所がある。

十一 91 7 〇 それから雨雪の量は何處が一番多いか、又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。

十一 92 3 〇 曆には太陽曆と太陰曆とあつて、《略》。

十一 93 9 〇 したがつて二百十日も太陽曆なら《略》、太陰曆になると三十日もちがふことがある。

十一 93 10 〇 櫻の咲く季節でも霜の降る季節でも、やはりさうである。

十一 94 1 〇 こんな不便な曆でも長い間の習慣で、今でも使つてゐるものがあるやうだ。

十一 94 3 〇 最後に父は「曆は實に重寶なものだ。こんな重寶なものがあるのに、それを利用しないのであるのは寶の持ちぐされだ。」

十一 95 4 それは三方が丸太の壁で、一方は明けはなしになつてゐて、戸も窓も床もないものであつた。

十一 96 1 一家の暮し向は誠にあはれなもので、《略》、時には生のじやがいもしか食はれないこともあつた。

十一 96 1 かういふ有様であつたから、リンカーンは十歳頃までは本を読むことなどは殆ど出來なかつた。

十一 98 1 かういふ心掛であつたから、成績は何時も優等であつた。

十一 98 2 かういふ心掛であつたから、成績は何時も優等であつた。

十一 99 4 或時近邊の人からワシントン傳を借りたことがある。

十一 99 10 ところが或夜、夜中に激しい雨が降つたことがある。

十一 101 5 彼が他日大統領となり、世

界の偉人として萬人に仰がれるやうになつたのは、實に此の少年時代の苦心のたまものである。

十一113 我が國の地方自治團體には、府・縣・市・町・村の別がある。

十一113 4 其の土地に廣い狭いがあり、其の組織に繁簡の差があるにしても、
〈略〉。

十一113 4 其の土地に廣い狭いがあり、其の組織に繁簡の差があるにしても、
〈略〉。

十一114 1 其の土地に廣い狭いがあり、其の組織に繁簡の差があるにしても、地方自治の精神に基づいて其の團體の幸福を進め、國運の發展を期することは皆同じである。

十一114 2 一體自治の精神とは何であるか。

十一114 4 地方人民が協同一致して自ら地方公共の事に當り、誠意其の團體の爲に力を盡くす精神が即ちそれである。

十一114 5 此の精神は實に自治制の根本であり、又其の生命である。

十一114 5 此の精神は實に自治制の根本であり、又其の生命である。

十一115 3 市町村長や議員を選挙するには、〈略〉私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。

十一115 6 まして威力によつて強制するとか、〈略〉するのは、自治の精

神に全く反するものである。

十一115 9 本當に自治の精神に富んでゐる者は、〈略〉決して私心をもたないのである。

十一116 1 公吏・議員等、直接間接に公共の事務に當る者は、如何に其の職務に忠實であつても、一般の人民の後援がなければ自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。

十一116 10 又産業組合を設けたり、
〈略〉、風俗の改善等に務めたりする

のは、皆公共心の發動であつて、自治の精神を養成し、自治團體を助長するものであるから、〈略〉。

十一117 1 又〈略〉は、皆公共心の發動であつて、自治の精神を養成し、自治團體を助長するものであるから、地方人民は大いにこれ等の事業に力を盡くさねばならぬ。

十一117 3 制度を運用するのは人である。

十一119 10 しかしジョージは依然として、〈略〉。」とくり返すばかりであつた。

十一120 5 ジョージは、かねてウェリントン公爵が勲功も高く、りつばな人物であるといふ事を聞いてゐたので、〈略〉。

十一122 6 こんなところで毎日働いてゐる人たちは、どんなにつらいことであらうと思つた。

十一122 8 次の建物にはいると、こゝ

には熔解窯がある。

十一123 7 まるであめ細工のやうである。

十一123 10 何が出来てあらうかと思つてゐると、いろ／＼扱つてゐるうちに臺付のコップになつた。

十一124 2 實にうまいものである。

十一124 4 橋本君にうながされて、次の室にはいつた。こゝは加工場である。

十一125 3 取分け美しかつたのは電燈の笠で、赤・黄・紫・緑とどりに目もさめるばかりであつた。

十一127 又父には「〈略〉。」といつて叱られたことがあつた。

十一127 此の頃のことであつた。

十一126 彼が〈略〉本國を出發したのは、二十三歳の時である。

十一129 かくて世界の各地をめぐるで、〈略〉本國に歸つたのはそれから五年の後である。

十一137 ダーウィンの後半生は病氣がちであつたが、〈略〉、七十四歳の長壽を保つことが出来た。

十一14 1 〈略〉、生物は總べて長年月の間には次第に變化し、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。

十一14 3 これが有名な進化論で、學界を根本から動かしただけである。

十一21 6 さつきの歌の主であらう。

十一21 9 あれは港の親船へ蜜柑を運

んで行くのであらう。

十二22 7 これ即ち世間の信用を博して堅實に自己の事業を發展させる道である。

十二22 10 〈略〉、見本には精良な品を使つて、實際の注文に對しては粗惡なものを送るやうな事は、人として爲すべからざる事である。

十二23 10 昔は個人の利益を營むのが商業であると思はれてゐた。

十二24 3 それ故大多數の商人は、〈略〉、忍耐も努力も要するに皆自己の爲であつた。

十二24 4 彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。

十二24 7 これはひつきやう〈略〉商業の本質が理解されず、商人の人格が重んぜられなかつたからである。

十二29 9 टीमス川を飾るタワー橋・〈略〉、其の他見る物聞く物唯々驚く外はありません。

十二30 3 陳列品の多種多様で、しかも其の數量の數限りもないのは、さすがに世界の大博物館といはれるだけあると思ひました。

十二30 4 我が日本のよろひ・かぶと其の他の武器類もたくさん集めてあります。

十二30 10 〈略〉、地下鐵道・乗合自動車などの乗り下りにも、むやみに先を爭ふやうなことはありません。

十二31 5 此處はさすがに藝術の都

として世界に聞えてゐるだけあつて、建物なども一般に壯麗です。

十二318 世界最美の街路といはれてゐるシャンゼリゼーの大通には、五六層もある美しい建物が道路の兩側に並び、〈略〉。

十二322 有名な凱旋門は此の大通の起點にあります。

十二328 ルーブル博物館も一覽しましたが、りつばな繪畫・彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。

十二331 此の塔は世界最高の建物で、高さが三百メートルもあるさうです。

十二332 塔の中には賣店もあり、音楽堂・食堂なども設けられてあります。

十二333 塔の中には賣店もあり、音楽堂・食堂なども設けられてあります。

十二373 ドイツの有名な音楽家ベートーベンがまだ若い時分のことであつた。

十二384 〈略〉、「〈略〉。」と、情ないやうにいつてゐるのは若い女の聲である。

十二392 其のそばにある舊式のピアノによりかゝつてゐるのは妹であらう。

十二393 其のそばにある舊式のピアノによりかゝつてゐるのは妹であらう。

う。

十二398 兄はむつとりとしてやゝ當惑の體である。

十二411 〈略〉、ふと見ると、かはいさうに妹はめくらである。

十二418 一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか彼自らも覺えないやうである。

十二456 ベートーベンの「月光の曲」といつて、不朽の名聲を博したのは此の曲である。

十二4910 此の邊は一體に山地で、〈略〉、其の面積は約六十方キロメートルある。

十二501 湖岸線は大體單調であるが、〈略〉。

十二508 〈略〉中湖の東岸の如きは、絶壁の高さが二百メートル以上もある。

十二511 中湖は深さが三百七十八メートル、此の湖中で一番深い處である。

十二513 我が國の湖沼中此の湖より深いものは秋田縣の田澤湖だけである。

十二515 湖の水は東岸から奥入瀬川となつて流れ出るのであるが、一年を通じて水位の變化は極めて少い。

十二523 これは奥入瀬川を十町餘り下つた處に大きな瀧があつて、魚類のさかのぼる道を絶つてゐるからである。

十二523 〈略〉、魚類のさかのぼる道を絶つてゐるからである。

十二525 今日鯉の産地として世に知られるやうになつたのは養魚經營の賜である。

十二533 しかしだん／＼落着いて見ると、此處は時計屋の店であることがわかつた。

十二5310 かち／＼と氣ぜはしいのは置時計で、かつたり／＼と大やうなのは柱時計である。

十二542 〈略〉、あれは何の役に立つのであらう、これはどんな處に置かれるのであらう〈略〉。

十二543 〈略〉、あれは何の役に立つのであらう、これはどんな處に置かれるのであらう〈略〉。

十二545 自分は何といふ小さい情ない者であらう。

十二548 あのいろいろの道具、〈略〉、どれを見ても自分よりは大きく、自分よりはえらさうである。

十二5410 一かどの役目を勤めて世間の役に立つのに、どれもこれも不足は無ささうである。

十二551 何といふ情ない身の上であらう。

十二554 〈略〉、小さな子どもが二人奥からかけ出して來た。男の子と女の子である。

十二573 それでは自分のやうな小さな者でも役に立つことがあるのかし

らと、夢中になつて喜んだが、〈略〉。

十二587 父も喜んだ、子どもも喜んだ。しかも一番喜んだのはねぢであつた。

十二658 王にはゴネリル・リガン・コーデリヤといふ三人の娘があつた。

十二664 今日はお前たちに一つ聞いてみたい事がある。

十二669 ゴネリルの答は如何にも言葉巧みであつた。

十二671 昔からあつた孝子のどの人よりも厚い眞心をもつて、父上にお仕へ致します。

十二682 コーデリヤは王が一番かはいがつてゐる娘であつた。

十二689 私は胸にある事が十分に言へないのでございます。

十二693 「どうしたのだ、コーデリヤ。何とか言方がありさうなものだ。」

十二702 家來の中にはしきりに王をなだめた者もあつたが、王の怒はいよく／＼つて、もうどうすることも出来ない。

十二721 全領地を二分して與へてやつた二人の娘が、揃ひも揃つてこれ程の不孝者であらうとは。

十二724 怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた王は、我にもあらず荒野の末にさまよひ出た。

十二725 其の夜は風雨にともなつて雷鳴・電光ものすさまじい夜であつ

た。

十二72 10 それは父が姉たちの爲に虐待されてゐるといふことであつた。

十二75 1 園 「これはどなたであらうな。笑つて下さるな、どうも娘のコーデリヤのやうに思はれてならぬが。」

十二76 6 まぐろを取る方法はいろくあるが、〈略〉。

十二76 7 まぐろを取る方法はいろくあるが、だいたい網で取るほど勇壯なものはあるまい。

十二76 9 だいたい網は身網と垣網と二つの部分から成つてゐて、非常に大きなものである。

十二77 3 即ち水のはいる處に當る部分が身網で、柄に當る部分が垣網である。

十二77 10 潮に流されないやうに、身網にも垣網にも土俵や石などが重りに附けてある。

十二78 1 身網の外側や陸上の高い處に魚見やぐらが設けてあつて、漁夫が絶えずまぐろの來るのを見張つてゐる。

十二79 6 三四十貫、時には百貫以上もある大まぐろがどたりくと船中へ投込まれる光景は、實に壯快の極みである。

十二79 8 三四十貫、時には百貫以上もある大まぐろがどたりくと船中

へ投込まれる光景は、實に壯快の極みである。

十二80 8 八重の高潮かちどき揚げて、海の誇のあるところ。

十二88 3 法律は、國家といふ共同生活、秩序ありかつ幸福なものにするための規則であるから、〈略〉。

十二88 4 法律は、國家といふ共同生活を、秩序ありかつ幸福なものにするための規則であるから、いやしくも國民たる者は必ず之を守らなければならぬ。

十二89 8 そこで天皇が之を裁可せられ、公布せしめられると、始めて法律が出来上るのである。

十二89 9 法律の外に勅令・閣令・省令・府縣令等の命令がある。

十二89 10 これ等の命令も國の規則であつて、〈略〉、其の制定も出来る限り慎重な手續を経る。

十二90 1 これ等の命令も國の規則であつて、廣い意味でいふ場合にはやはり法律であるから、〈略〉。

十二91 2 釋迦は生れつき同情の念に厚く、何事も深く考へ込むたちであつた。

十二91 3 或時、父王と共に城外に出て、農夫の働く様を見廻つたことがある。

十二95 6 或時のことである。

十二97 7 殊にデーバダッタは、いとこの身でありながら、かねてから釋

迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。

十二98 10 これまで説いた教そのものが私の命である。

十二104 5 これからが世に恐しい青のくさり戸である。

十二104 7 それは山國川に沿うて連なる屏風のやうな絶壁をたよりに、見るから危げな數町のかけはしを造つたものであるが、〈略〉。

十二104 8 〈略〉、昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。

十二104 9 享保の頃の事であつた。

十二105 1 〈略〉、毎日々々根氣よくのみを振るつて、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。

十二105 3 身には色目も見えぬ破れ衣をまとひ、日にやけ仕事にやつれて年の頃もよくわからぬくらゐであるが、きつと結んだ口もとには意志の強さが現れてゐる。

十二105 9 〈略〉、たとへ何十年かゝらばかゝれ、我が命のある限り、一身をさへげて此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、〈略〉。

十二106 2 さていろ／＼と思索したあげく、〈略〉、神佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。

十二106 6 〈略〉、中には古わらぢや小石を投げつける者さへあつた。

十二106 10 〈略〉、あれは山師坊主で、あのやうなまねをして、人をろうらくするのであらうといふうはさが立つた。

十二107 9 出来る氣づかひはないと見くびつてゐた岩山の掘抜きも、これではどうにか出来さうである。

十二107 10 一念こつた不斷の努力は恐しいものであると思ひつくと、此の見る影もない老僧の姿が、急に尊いものに見え出した。

十二108 3 そこで人々は〈略〉、老僧の命のあるうちに其の志を遂げせせると共に、我々もあのくさり戸を渡る難儀をのがれようではないかと相談して、〈略〉。

十二108 7 其の後は老僧と共に洞穴の中でのみを振るふ者もあり、費用を喜捨する者もあつて、仕事は大いにはかどつて來た。

十二108 8 其の後は〈略〉、費用を喜捨する者もあつて、仕事は大いにはかどつて來た。

十二110 1 〈略〉、時には夜半までも薄暗い燈を便りに、經文をとこなへながら一心にのみを振るふことさへあつた。

十二110 7 洞門の長さは實に三百八間、〈略〉處々にあかり取りの窓さへうがつてある。

十二115 5 二十五日午後一時から、學校の講堂で村崎工學博士の「電氣の

世の中」と題する講演があつた。

十二115 諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力もだん／＼電氣に變つて、工業界の一大革新をうながしてゐます。

十二117 エジソンが炭素線の電燈を發明したのは四十年ばかり前のことであつたが、今では更に進んで「略」。

十二117 一體最も理想的な燈火は「略」熱をとまはないものであります。

十二117 電信や電話の發明は其の當時實に全世界を驚かしたものであります。が、「略」。

十二119 最後に博士は「略」、家庭における電氣の利用に就いて興味ある話をして壇を下つた。

十二124 月の十五日を期して總攻撃を行ひ、一舉に江戸を乗取するはずである。

十二125 しかし市中の混亂は蜂の巣を突いたやうなさわざである。

十二126 安方は今日こそ最後の確答を得ようと決心して、西郷をおとづれたのである。

十二128 之に比べれば、幕臣の身としては如何がな申分ではあるが、徳川家の存亡などは言ふにも足らぬ小事でござります。

十二132 我が國が世界無比の國體を有し、三千年の光輝ある歴史を展開

し來つて、今や世界五大國の一に數

へられるやうになつたのは、「略」。

十二132 我が國が「略」、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、主として我々國民にそれだ

けずぐれた素質があつたからである。

十二132 我が國が「略」、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、主として我々國民にそれだ

けずぐれた素質があつたからである。

十二133 東海の島に據つた日本は、國家を建設する上に頗る有利であつた。

十二133 國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國內はおほむね平和であつた。

十二133 國內はおほむね平和であつた。

十二134 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、自ら國民の性質を穩健ならしめ、自然美を愛好するやさしい性情を育成するのに與つて力があつた。

十二134 我が國民は、とかく引込み思案におちいり易く、奮闘努力の精神に乏しく、遊惰安逸に流れるかたむきがある。

十二135 すべて日本人の短所として、性質が小さく狭く出來たきらひがある。

が、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、其の主たるものであらう。

十二136 其の原因はいろいろあらうが、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、其の主たるものであらう。

十二136 今日我が國が列強の間に立つて世界的の地歩を占めた以上、かういふ短所はやがて我が國民から消去であらうが、「略」。

十二136 かういふ短所はやがて我が國民から消去であらうが、「略」。

十二136 我が國民から消去であらうが、出來る限り早く之を一掃することは我々の務ではあるまいか。

十二136 支那・印度の文明を入れ、更に西洋の文明を入れて長足の進歩を成し遂げた日本國民は、賢明な機敏な國民である。

十二136 他國の文明を消化して、之を巧みに自國のものとすることは、實に我が國民性の一大長所である。

十二136 しかし此の半面にもまた短所がうかゞはれないであらうか。

十二137 昔から殆ど摸倣のみを事として來た觀がある。

十二137 習、性となつては、遂に日本人には獨創力がないであらうと自らも輕んじ、外國人からも侮られる。

十二137 我々は「略」、世界文明の上に大いに貢獻したいものである。

十二137 我が國民には潔いこと、あ

つさりしたことを好む風がある。

十二137 櫻の花の一時に咲き一時に散る風情を喜ぶのがそれであり、「略」。

十二138 古の武士が玉とくだけける討死を無上の名譽としたのがそれである。

十二138 日本人ほどあつさりした色や味はひを好むものはあるまい。

十二138 こゝにもまた我々の反省すべき短所があるやうである。

十二138 こゝにもまた我々の反省すべき短所があるやうである。

十二138 我が國民の長所・短所を數へたならば、まだ外にもいろいろあらう。

ある「荒」(下) 1 荒る 《一レ》九116 ふしぎや、今まで荒れに荒れるたる大海、おのづから静まりておだやかなる風となり、尊はつゝがなく上總の國に着き給ひきといふ。

あるいは「或」(副) 4 或は

十一43 今少しく日もたゞ、轉地するもよからんと醫師も申居候に付、或は仰に従ひ、其の中御地へ參り候やもはかり難く候。

十一45 愚僧も所用ありて京に上り、或は二年滞在せんもはかり難し。

十二84 「容貌の異なる汝が彼の地に行かば、必ずや人に怪しまれ、なぶりものにせられて、或は命も危

ヨ。」トイヒマシタ。

四605 風が吹クト、カンナクツ

ガ小屋中 マツテ アルキマス。

六885 象つかひが「此の太い足で、

どさりくんと歩きます。」といふと、

長い鼻をぶら／＼させて歩き出した。

七48 一年生を先頭に、二・

三・四・五・六年が 四列になりて

歩く時、全校生徒の八百は 八十

間もつゞくなり。

七55 八百萬の小學生、四列

になりて歩かんか、八十萬間つゞ

くべし。

七123 浅い水たまりを歩くと足のう

らがぬるりとした。

七261 馬はたいそう元氣のよい動物

で、生れた日からすぐ歩く。

七808 エビノピン／＼ハネタリ、カ

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、池ヤ

川ニスムモノトチガハナイガ、

八591 近年人々ノ生活次第ニイソ

ガシクナリテ、見物人ノ外ハ、町ノ

兩側ヲナガメテ、ユル／＼歩クガ如

キ者ナシ。

八1147 其の時大將は江戸から大阪ま

で、馬やかごに乗らず、兩親と共に

歩いて行つた。

十174 土地の人は一向平氣

で、三四歳の子供でも、腹の下など

を自由に／＼歩いて歩きます。

十233 歸りに散歩がてら町を歩い

て見ると、

十819 此處は電燈も無いので、眞暗

です。安全燈をたよりに歩いて行く

と、不意に足もとからねずみが一匹

飛出しました。

十1194 歸りは二日市まで歩くことに

した。

十一181 お暇してから、私はひとり

で歩きながら自分の始末のわるいこ

とを考へて、

十一532 それがすむと、今度はバケ

ツを持つてコップにたまつた液を集

めて歩くのである。

十一838 砂の上を歩いて行くと、足

の裏が焼けるやうだ。

あるける 「歩」 (下二) 1 歩ける

《一ケ》

六437 第十一 笑ひ話 一 「海

の上でも歩けさうだ。」

アルゼンチン 「地名」 1 アルゼンチ

ン

十一102 アルゼンチン

アルゼンチンこく 「地名」 1 アルゼ

ンチン國

十一1053 次にイグアススの瀧

は、ブラジル國と隣のアルゼンチン

國との境にある大瀑布にて、

アルプ 「地名」 1 アルプ

十二367 るり色の水に浮ぶルソー

島、湖畔に連なる緑樹・白壁、はる

かに紺青の空にそびえて雪をいたゞ

くアルプの連峯。

アルミニウム (名) 1 アルミニウム

十575 鳩に手紙を運ばせるには、足

にアルミニウムセルロイドの細い

くだを附け、又は胸に袋を掛けさせ

て、其の中に入れるのである。

あれ 「彼」 (代名) 32 アレ あれ

二86 「ソノツギハ。」 「ソノツ

ギハ、アノタクサンサイテキル、

小サナキイロイキクデス。」 「ア

レデスカ。アノキクハオトウ

サンモタイソウオスキデス。」

三268 石がきの下へ出たのは、

かはがおちはじめ、竹になり

かかつてゐます。あれはいまに

さを竹にでもなるのでせう。

三282 むかふの方に、二本なら

んでゐるほそい竹の子は、いま

に竹になつたら、おちいさんに、

あれで竹うまをこしらへてい

ただくつもりです。

三714 そちらのはばの廣い光

るおびはねえさんの、はば

のせまい黒いのはおばあさん

のです。おばあさんはあれを

しめて、よくお寺まゐりにいら

つしやいます。

三726 略、そのとなりのめり

んすのあはせは私のです。私

どもはあれを着て、をばさん

の村のお祭によばれて行く

のです。

四697 略、今でも山がらのこ

ゑをきくと、まだあれが生き

て居るだらうか、

ないことはありません。

四866 オ花「扇ヲ持ツテ居ル

人デスカ。アレハウタヲウタ

フ人ダサウデス。」

五33 「ここがあなたの教室です。

せきはあれにします。」といつて、

此の間からあいてゐたせきをおさし

になりました。

五331 ある朝早く、表へ出て

見ました。晝あれほどにぎやかな通

に、新聞配達と四五人の人のすがた

が見えるだけでした。

五496 今桑をたべてゐる蠶も、明

日の朝までには、たいてい上つてし

まふさうです。さつきおかあさんが、

「民子、いよく今夜一ばんになつ

たよ。あれで八分通だ。」

五638 あのとんぼの中に、ちよつ

とした森があるだらう。あれは神明

様の森だが、あれまでが半道で、あ

れから町まで一里ある。

五641 あれは神明様の森だが、あ

れまでが半道で、あれから町まで一

里ある。

五642 あれは神明様の森だが、あ

れまでが半道で、あれから町まで一

里ある。

五648 あ青田の中にあるのだら

う。あれは製絲工場で、女工が四百

人も絲を取つてゐる。

六135 銅ハ人ニ使ハレテキテモ、

時々青イ物ヲ出シマス。アレガヤハ

リサビデス。

七48 鬼神の如き彦六が、あれ程の小兵に討たれたは味方の不運。

七59 又海岸には所々に燈臺がありますから、それを見ると、あれは何所だといふことが分ります。

九72 其の中に汽車は山の間を出て、大きな川の見える所に出た。

「あれが北上川だ。」

九73 汽車が盛岡を出て少し進むと、遠く左に見えるかくかうのよい山を指さして、「あれは岩手山だ。」

九87 あれごらん、向ふの杉林の上の所に、ひしやくのやうな形になつて、七つの星が並んでゐるのが見えるだらう。

九87 、「えゝ、見えます。」「あれが北斗七星だ。」

九88 今結んだ二つの星のへだたりの五倍ばかりのところに、かなり大きい星があるだらう。あれが今話した北極星だ。

九89 、「さうだ。それにあの星は何時も真北に居るから、あれを見つければ、道に迷つた時などにもすぐ方角を知る事が出来る。」

十50 、「おとうさん、今度役場の隣にりつばな建物が出来ましたね。あれは何ですか。」

十50 、「おとうさん、今度役場の隣にりつばな建物が出来ましたね。あれは何ですか。」「あれは銀行だよ。」

十68 かやうに落ちぶれてはゐるものの、御らん下さい、これに具足

一領、長刀一ふり、又あれには馬を一匹つないでもつてをります。

十二21 ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。あれは港の親船へ蜜柑を運んで行くのであらう。

十二37 中からピヤノの音が聞える。「あゝ、あれは僕の作った曲だ。」

十二54 ねぢは、これ等の道具や時計をあれこれと見比べて、あれは何の役に立つのであらう、これはどんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、

十二56 ねぢが無い。へ略。あゝ、いふねぢはもう無くなつて、あれ一つしか無いのだ。

十二56 あゝいふねぢはもう無くなつて、あれ一つしか無いのだ。あれが無いと町長さんの懐中時計が直せない。

十二106 其のうちに誰言ふとなく、あれは山師坊主で、あのやうなまねをして、人をろうらくするのであらうといふはさが立つた。

あれ (感) アレ

一40 一バンボシミツケタ。アレアノモリノ スギノキノ

ウヘニ。

一40 二バンボシミツケタ。アレアノドテノ ヤナギノキノ

ウヘニ。

一40 二バンボシミツケタ。アレアノドテノ ヤナギノキノ

ウヘニ。

一40 二バンボシミツケタ。アレアノドテノ ヤナギノキノ

ウヘニ。

一41 三バンボシミツケタ。アレアノ ヤマノ マツノキノ

ウヘニ。

あれあれ (感) 4 アレアレ あれ

二69 二十四 ヒカウキ アレアレアガル、ヒカウキガ。大キナ

トビガ、トプヤウダ。

二70 アレアレ アンナニ ヒカウキガ。小サナ トンボガ トプヤウダ。

五62 あれ、虹が立つてゐる。五63 あれ、虹がきえて行く。あれ、いる「荒居」(上) 1 荒れる

九116 ふしぎや、今まで荒れに荒れるたる大海、おのづから静まりて、

アレクサンドルだいう (人名) 1

アレクサンドル大王

十76 昔ヨーロッパにアレクサンドル大王といふ王があつた。

アレクサンドルだいうといしフィリップ (課名) 2 アレクサンドル大王と

十目3 第二 アレクサンドル大王と

十75 第二 アレクサンドル大王と

あれくる、う「荒狂」(四) 3 荒れくるふ「ヒーフ」

九104 既に大海に出で給ひしに、大風俄に吹來りて、波すさまじく荒れくるひ、御船少しも進まず、今にもくつがへらんばかりなりき。

十25 夜がほのくと明けた頃、荒れくるふ海上を見渡したグレース親子は、ふとはるかかの沖合に、かの難破船を見とめた。

十27 岩の附近は波がいよく荒れくるふ。

あれこれ「彼是」(代名) 2 あれこれ

十二54 ねぢは、これ等の道具や時計をあれこれと見比べて、あれは何の役に立つのであらう、へ略。

十二55 二人は其處らを見廻してゐたが、男の子はやがて仕事臺の上の物をあれこれといぢり始めた。

あれち「荒地」(名) 3 あれ地

五68 此のあたりの青田も、其の頃は、大いであれ地で、其の杉山なんぞは、木もろくにない草山だつたといふことだ。

五69 ところが、今から百三千年前に、此の村の庄屋が、へ略、ど

うかして村のあれ地を田地にして、米がとれるやうにしたものだと思つた。

五75 6 それを見て、村の人は急にあれ地を田にしました。

あれる「荒」(下) 1 あれる「レ」

四104 ならやくぬぎのはは

はは

はは

はは

黄にそまり、廣いたんぼに北風あれる。

あわ「阿波」(地名) 1 阿波

十二805 阿波と淡路のはざまの海は、此處そ名に負ふ鳴門の潮路。

あわ「粟」(名) 1 粟

十6410 ちやうど有合はせの粟の飯、召上るならと妻が申してをりますが、いかでございませう。

あわ・し「淡」(形) 1 あはし「一シ」

十一1107 白雲うく去り又來る。西窓一片残月あはし。

あわじ「淡路」(地名) 1 淡路

十二805 阿波と淡路のはざまの海は、此處そ名に負ふ鳴門の潮路。

あわじしま「淡路島」(地名) 1 淡路島

十一324 淡路島の東端、本土と相望む處、紀淡海峡となり、四國に近き處、鳴門海峡となる。

あわす「合」(下) 4 合はす「一セ」

六631 これから後萬じゆは、うぼと心を合はせて、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。

十一2910 正國も槍を合はせ、しばらく防ぎ戦ひしが、俄に槍を投捨てて大手をひろげ、「組打。」と叫ぶ。

十二624 元来イギリスは、(略)、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、藍地に斜白十字の徽章ある後者

の國旗とを合して一旗となし、更にアイルランドの加はるに及び、白地に斜赤十字の徽章ある其の國旗を合はせて、遂に今日の如き形式をなすに至れり。

十二627 アメリカ合衆國の國旗は(略)。即ち赤・白合はせて十三條の横筋は、獨立當時の十三州を表すものにして、(略)。

あわせ「合」(名) ありあわせ・おひきあわせ・みあわせ

あわせ「合」(名) 2 あはせ

三723 こちらのかすりのつつそでは太郎のあはせで、そのとなりのめりんすのあはせは私のです。

三724 (略)、そのとなりのめりんすのあはせは私のです。

あわせて「併」(副) 1 あはせて

十二906 我々は常に國法にしたがつて幸福な生活を営み、あはせて國の品位を高めることにつとめなければならぬ。

あわせ「合」(下) 9 合はせる

「セ・セル」いあわせ・うちあわせ・こすりあわせ・つなぎあわせる・ひきあわせる・もうしあわせる

六295 人間があなた方を生けどりにするには、いく人かで力を合はせるではありませんか。

七41 地球の上には大小合はせて六十餘國あり。

七1143 あの子ども向の品をもう五十反、至急お送り下さい。代金は二口合はせて月末に送ります。

八142 「多勢の方はゆだんをしてゐるが、小勢の方はみんな心を合はせて、一生けんめいになつてゐる。」

九303 右にあるのがアメリカ瀧、左にあるのがカナダ瀧で、此の二つを合はせてナイヤガラ瀧といふのです。

九476 一昨日海軍のいさんが、休暇で回歸になつたので、おとなりからの手つだひと合はせて、植手が八人になつて、にぎやかでした。

九591 正一のうちの人たちに手つだひもまじつて、七八人の男や女が向ひ合つて、片足をふみ出し、掛聲を合はせながら、ばたんばたと穀竿で麥を打つてゐる。

九113 ちやうど其の時、はるか遠方で味方の萬歳の聲がわき起つた。(略)。さうして之に合はせるやうに、(略)、一聲高く天に向つていなゝいた。

十722 其の返禮として加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、合はせて三箇所の地を汝に授ける。

あわたし「慌」(形) 2 あわたし「一ク」

七882 あわたししくかけこんで來た者があります。見れば自國の兵士です。

十476 或日の夕方、喜三右衛門はあわたししく塞場から走り出た。

あわつ「慌」(下) 2 あわつ「一テ」

九131 妹は餌をつかみて、わざと少しはなれたるきりの木のあたりにまきちらせば、鶏はあわてて其の方へ行く。

十一244 水際に寄つて馬の足を冷さんとする折しも、思ひもよらぬ敵の一隊、湖に沿ひたる一筋路を急ぎに急ぎに進み來る。あわてて逃げんとすれども時既におそく、大方はやには斬倒されたり。

あわてさわ・「慌騒」(五) 1 あわてさわ・「一イ」

七222 賊のそなへは忽ちくづれて、防ぐにも防がれず、たゞあわてさわいでゐます。

あわ・て「慌」(下) 2 あわてて

「一テ」おどろきあわてて

六227 木曾義仲が都へせめ上ると聞いて、平家はあわてて討手をさしむけました。

七668 「なんで又さうあわてて引つかへします。」「落し物をしましたから。」

あわび「鮑」(名) 3 アハビ

七815 アサリヤ蛤ハ砂ヤ泥ノ中ニ居リ、カキヤアハビハ岩ニツイテキル。

七816 アハビハ岩ヲハナレテ動クコ

トガアルケレドモ、カキハ一度ツイ
タラ決シテハナレナイ。

七81図 アハビ

あわめし 「粟飯」(名) 1 粟飯

十647図 「お連れ申しはしたが、差
上げる物はあらうか。」「粟飯ならご
ざいます。」

あわや (副) 1 あはや

十一311図 正國得たりと、力足をふ
ん張りてはねかへさんとせしが、ふ
みそこねてあはや谷底へ轉び落ちん
とす。

あわれ 「哀」(形状) 3 あはれ

十一959 一家の暮し向は誠にあはれ
なもので、食物なども自由には得ら
れず、時には生のじやがいもしか食
はれないこともあった。

十二922 しかし彼は城外に出る毎に、
杖にすがるあはれな老人や、《略》
をまのあたり見て、益々世のはかな
さを感じた。

十二1066 《略》、諸國の靈場を拜み巡
つた末、たま／＼此の難處を通つて

幾多のあはれな物語を耳にし、《略》。

あわれ 「哀」(感) 1 あはれ

七339図 獅子は武士の方を見まもり
て、あはれ、波の底に入りぬ。

あわれさ 「哀」(名) 1 あはれさ

七962図 村の役場に三十年、勤
めつけし小使の年のよりしがあ
はれさに、人々物を出し合ひて、
樂なくらしにかへてやる。

あわれみたまう 「哀給」(四) 1 ア
ハレミタマフ 《一ヒ》

七286図 《略》、其ノ頃天皇ハ立上ル
煙ノ少キヲ見テ、民ノ貧シキヲアハ
レミタマヒキ。

あわれむ 「哀」(五) 1 あはれむ

《一ン》

十二918 折から飛下りて來た鳥が鋏
に傷つけられた蟲をついばんだ。木
陰からじつと見てゐた彼は、《略》、
蟲の運命をあはれんだ。

あん 「案」(名) 5 案 ↓ほうりつあ
んぜんたい

十二887 法律を制定するには、政府
又は貴衆兩院の何れかが其の案を作
成して議會に提出する。

十二888 政府から提出された案は先
づ議會の一院で討議される。

十二8810 即ち第一讀會で其の案を大
體に調査し、《略》。

十二892 かうして其の院で可決すれ
ば、其の案を他院に移す。

十二896 又貴衆兩院の何れから提
出された案は、他の一院のみで討議
し、可決すれば同じ手續によつて奏
上する。

あにい 「安易」(形状) 1 安易

十二1347 狭い島國に育ち、生活の安
易な樂土に平和を樂しんでゐた我が
國民は、《略》。

あंनीつ (名) ↓ゆるだあंनीつ
あんか 「安価」(形状) 1 安價

十二224 商人たる者は、《略》、品質
のよい品物となるべく安價になるべ
く敏速に供給して、廣く公衆の爲を
計らなければならぬ。

あんこく 「暗黒」(名) 2 暗黒

十一614 汽車は密林の間をあへぎ
く通り抜けて、やがてトンネルに
はいる。しばらく暗黒の中を通つて
再び光明の世界に出た時、《略》。

十一682 燈火としては、《略》、今は
ガス燈や電燈が到る處にかゞやき渡
る時代となつた。かくして人は、暗
黒の世界からだん／＼光明の世界へ
と、みちびかれて來たのである。

あんざいしょ 「行在所」(名) 1 行在
所

十1326図 高德せめては此の所存を君
に知らせ奉らばとて、夜にまぎれ
て行在所の御庭にしのび入り、《略》。

あんざん (名) ↓ごあんざん

あんじす 「暗示」(サ変) 1 暗示す
《一シ》

十二646図 かくの如く各國の國旗は、
或は其の建國の歴史を暗示し、《略》。

あんしゅつする 「案出」(サ変) 2
案出する 《一シースル》

十一786 しかし今日の貨幣や紙幣を
案出するまでには、人間は實に種々
様々なものを使用してゐたのである。

十一796 《略》、更に貨幣の代りにな
る紙幣といふ物を案出した。

あんしん (名) ↓ごあんしんくださる

あんしんいたす 「安心」(四・五) 5
安心致す 《一サーシ》

八454図 始は熱が高くて心配致しま
したが、昨朝あたりから熱が下つて、
食事に進むやうになりましたので、
やつと安心致しました。

八844図 ありがたうございます。そ
れをお聞きして安心致しました。

十1065図 寒さきびしき折から皆様
には御障もなく、御前様にも日々學
校に御通ひなされ候由、安心致し候。

十一1019図 二人ともよく勉強し居
る由、安心致候。

十二1219図 此の上はいよく仕事
に勵み、一日も早く一人前の商人と
なりて、親に安心致せしと存じ
居り候。

あんしんしなさる 「安心」(五) 1
安心しなさる 《一イ》

七681図 「中には。」「小判が百五十
兩はいつて居ります。《略》。外にま
だ手紙が七八本。」「安心しなさい。
此所へ持つて來ました。」

あんしんする 「安心」(サ変) 5 安
心する 《一シ》

八465図 其の後どうかと案じてゐま
したが、手紙を見て安心しました。

八743図 うちには何事もないさうで
安心しました。其のうちに繪葉書や
寫眞帖を送りますから、ゆつくりご
らん。

九35図 叔父さんも相かはらず丈夫

で島々を廻つてゐるから、安心して下さい。

九二七 父は安心した様子で、やがてすやくと眠つた。

十一二二 若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、〈略〉、我々は安心して生活することが出来ぬであらう。

あんしんなさる「安心」(五) 1 安心なさる「ール」

九一九 此のわけをよくおかあさんに言つてあげて、安心なさるやうにするがよい。

あんずる「案」(サ変) 2 案ずる「ージ」

八四六 其の後どうかと案じてゐましたが、手紙を見て安心しました。

十二七二 父の身の上を案じながらフランスに行つたコーデリヤは、やがていたましい報知を得た。

あんぜん「安全」(形状) 2 安全

九二〇 コレ等ハ〈略〉、之ニ近ツカウトスルモノガナイカラ、タヤスク見トメラレル方ガカヘツテ安全ナノデアル。

十二一〇五 〈略〉、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、神佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。

あんぜんとう「安全灯」(名) 5 安全灯

十七九 此の間、九州三池の或炭坑を見物しました。事務所で坑内服に着かへ、安全燈を持つて、案内の事務

員と一所に昇降器に乗りました。

十八〇 昇降器がすさまじい勢で下りて行くので、目がまはりさうです。

安全燈の取手を握りしめて、じつと目をつぶつてゐるうちに、〈略〉。

十八一 安全燈をたよりに歩いて行く、不意に足もとからねずみが一匹飛出しました。

十八三 暗やみの中にかすかに安全燈が光つてゐる。

十八三 石炭の壁は安全燈の光に照らされて、黒光りに光つてゐます。

あんどん「行灯」(名) 2 行灯 ↓ かけあんどん

九二二 まくらもとに置いてある行燈の光はうす暗く、たて切つてあるしやうじのやぶれを、秋風がはたはたとあふる。

十一七三 二人はほの暗い行燈のもとで對坐した。

あんな(形状) 15 アンナ あんな

二七〇 アレアレア アンナニ ヒカウキガ。

二七二 ダンダン チカヨル オ日サマニ。 アンナニ トンダラ ユクワイダラウ。

三五一 ツイコノ アヒダウエタ田ガ、モウ アンナニ 青ク ナリマシタ。

五三六 「おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、まだ一里半もあるのですか。」

五七九 今年のひでりにも、此の用水池にはあんなに水がたまつてゐる。

六八六 「こまかな人だが、出す時には出すね。」「全くだ。あんな小言を言ふ程だから、此の義捐が出来たのだらう。」

六八〇 「わたしの植ゑた落葉松があんなに高くなりました。」

九五八 そこで間もなく片手間に精米所を始め、追追に大きくして、あんなりつばな會社にしたのだ。

九五九 全くあんな人は珍しい。」とお話になりました。

九八三 「にいさん、空にはあんなにたくさん星が見えますが、少しも動かないのですか。」

九八六 「でも、あんなにたくさんある星ですもの、それを見つけるのに大變でせう。」

九八八 北斗七星は何時もあんなにひしやくの形をしてゐて、北極星との關係も常に變らないから、〈略〉。

二二八 私は今日此所に来て、飼主たちがあんなにかはいがつてゐたのを見て、此の子馬共を買つた人たちも、どうか同じやうにやさしく扱つてくれ、ばよいと、心からのりました。

十一三九 〈略〉、たゞ其の距離の遠いために、あんなに小さく見えるのである。

十一一七 弟さんまでが、あんなに氣

をつけていらつしやるとは實に感心なことです。

あんない「案内」(名) 3 案内 ↓ みちあんない

八八四 學校へ行つて案内をこふと、小使が出て來た。

一四一 案内の人にみちびかれて、まづ事務所の隣なる舊御殿を拜觀す。

一七九 事務所で坑内服に着かへ、安全燈を持つて、案内の事務員と一所に昇降器に乗りました。

あんないずる「案内」(サ変) 2 案内する「ーシ」

一六七 ちやうど此の頃、此所の名物の馬市が始つてゐるといふので、今日は朝から、義雄君に案内してもらつて見物に行きました。

一〇五 「さあ、今度は葉のきれいな植物を集めてある處だ。」といつて、にいさんは次の室へ案内して下さる。

あんない「塩梅」(名) 3 あんない

一〇七 「一雨々々暖になつて、よいあんないです。」と、おかあさんが誰かにおつしやつてゐる時、私は庭へ出ました。

七九二 第二十一 二百十日 「よいあんないだ。此のもやうなら、今日は大したことはあるまい。」と、おとうさんは朝起きるとすぐ空を仰いでかうおつしやつた。

一四〇 「しかし天氣が続いてよいあんないだ。」

あんまひころく 「安間彦六」(人名) 1

安間彦六

七46 翌日武田方からは安間彦六と

いふ大の男が、物の具見事に着かざり、大の馬に打乗つて、上杉方の陣へ向つた。

あんらく 「安楽」(形状) 2 安楽

十二66 王は其の治めてゐるイギリスを三分して娘たちに與へ、自分は百人の家來を連れて月代りに三人の娘の許に身を寄せ、餘生を安樂に送らうと決心した。

十二76 3 其の後老王はコーディネヤの孝養によつて餘生を安樂に送つたといふ。

い

い 1 い

八93 7 此所では女の先生が、生徒に五十音の發音を教へてゐられた。

「い」を「う」と間違へたり、「う」を「え」と間違へたりするのを、先生は根氣よく、何度もく教へてゐられた。

い 1 「亥」(名) ↓かのとい・きのとい

い 1 「位」(名) ↓だいいち

い 1 「居」(名) ↓おるすい・みやい

い 1 「胃」(名) 2 胃

八99 5 或時、口・耳・目・手・足等

が申し合はせて、胃に向つていひますには、〈略〉。

八101 2 此の時胃は一同に向つて言ひました。

い 1 「意」(名) 7 意

八60 2 彼ノ焼諸屋ノ看板ニ、八里

半ト記セルモノノ如キハコレニシテ、其ノ味クリニ近シトイフ意ナリ。

九44 4 同ジ物ニテモ、意ノ如クニ得ラルレバ價ナク、得ガタケレバ價アルナリ。

九45 2 かくノ如ク物ニ價アルハ、其ノ物ガ人ノ爲ニ有用ナルト、意ノ如クニ得ラルレザルトニヨルナリ。

十99 1 図 〇 「宋」にびぬ。御身の忠義を盡くすべき所なし。今より心を改めて元に仕へば、富貴は意の如くならん。

十一78 〇 「おのれを修めて人を安んず。」とは、彼が簡明に此の意をあらはせる語なり。

十一48 10 〇 「先に畫がきたる繪、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、東國へ下る路すがら、箱根山中にてよき枝ぶりの繪を見て、其の意を得たれば、かき添へんために歸りしなり。」

十一128 8 〇 〈略〉、人々のくるしみは日々にまさりゆくばかりなり。鐵眼こゝにおいて再び意を決し、喜捨せる人々に説きて出版の事業を中止し、

〈略〉。

い (終助) 1 い

六28 4 〇 「だれだい、今笑つたのは。」

いあわ・せる 「居合」(下二) 1 居合はせる 《一セ》

六63 8 二人がたがひに取りついて、うれし泣きに泣いた時には、頼朝をはじめ、居合はせた者に、だれ一人もらひ泣きをしない者はありませんでした。

いあ・う 「言合」(五) 1 いひ合ふ 《一ツ》

六69 1 其の歸り途で、青年たちは「こまかな人だが、出す時には出すね。」「全くだ。〈略〉。」「さうだ、く。」「といひ合つた。

い・い・ず 「言出」(下二) 1 いひ出づ 《一デ》

九41 9 〇 彼はたゞへつ、我が武勇、かたち正していひ出でぬ、『此の方面の戦鬪に、二子をうしなひ給ひつる、閣下の心如何にぞ。』と。

いいうらさか 「飯浦坂」(地名) 2 飯浦坂 飯浦坂

十一25 〇 飯浦坂

十一28 5 〇 明ければ二十一日の朝、盛政は賤嶽より西北に當れる高地に兵を引きまとめたりしが、此の時までも飯浦坂にふみ留つて、追來る敵を防ぎ居し弟勝政に引きあげを命じたり。

い・い・え (感) 15 イイエ イ、エ い

い・い・え

二60 6 〇 「オカアサン、ソノオクスリハニガウゴザイマスカ。〈略〉。」「イイエ。サウニガクハアリマセン。」

二61 6 〇 「ソレナラ、〈略〉、モツトタクサンオアガリニサツタラ、ハヤクナホリマセウ。」「イイエ。サウードニノンデハイクマセン。

三18 8 〇 「あかいきものをきてゐます。」「それではをんなでせう。」「い・い・え。」

三19 2 〇 「それではをこの子ですか。」「い・い・え。としよりです。」「導子」は「い。」「道子」私が取つたのです。」「友」い・い・え。僕が取つたのです。」「

五18 1 〇 「これは鶏だよ。〈略〉、鶏のついてゐるわけは知つてゐるだらう。」「い・い・え。」

六76 2 〇 「ソレハメリンスデ、絹デセウ。」「イ、エ、ヤハリ毛絲デオツタ物デス。

七91 3 〇 「おい娘、兵士が一人來たらう。」「い・い・え。」

八17 9 〇 「いや、きつと頼まれたではあらう。」「い・い・え、頼まれたではございません。」

十92 4 〇 「おとうさんは、もつと言ひにくい言葉を知つてゐる。」「何といふ言葉ですか。」「『はい。』といふ言葉と、『い・い・え。』といふ言葉だ。」

十925 図 『はい。』『いゝえ。』大變やさしい言葉ではありませんか。

十947 図 「なぜ其の時『いゝえ、僕は止められてゐるから渡りません。』と、きつぱりことわらなかつたのか。」

十954 図 成程弱蟲だ。人の言ふことに對して『いゝえ。』と言切るには、ほんたうの勇氣がいる。

十957 図 お前のやうな弱蟲には、ひよつとすると命を失ふやうなあぶない時でも、言出すことの出来ない程、『いゝえ。』といふ言葉は言ひにくいのだ。

十965 太郎はつくぐと自分の惡かつた事を後悔すると共に、「はい。」と「いゝえ。」の言ひにくいわけをさとることが出来た。

いいかた 「言方」(名) 2 言方

十二404 「實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが、——あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふお話でしたね。まあ一曲ひかせていただきますせう。」其の言方が如何にもをかしかつたので、(略)。

十二693 図 「どうしたのだ、コードリヤ。何とか言方がありさうなものだ。」

いいがた・し 「言難」(形) 1 言難し

《一ケレ》

十二157 図 勿論今日我が國にて發行せらるゝ新聞中にも大小種種ありて、

一がいには言難けれども、相當に名ある新聞は、(略)。

いいかわす 「言交」(五) 1 言ひかはす 《一サ》

九6510 そこで始めて乗員は顔を洗ふ。其の中に上陸員が歸艦する。其所此所で、「お早う」が言ひかはされる。いいか・せる 「言聞」(下二) 3 言聞かせる 《一セ・一セル》

九218 病みつかれた六十ばかりの老人が、ふとんの上に起直つて、十五六の少年に、熱心に何か言聞かせてゐる。

九258 図 其の本については、後に又言聞かせるが、(略)、これが佐藤の家の學問の精神である。

九1196 大尉は之を讀んで、思はずも涙を落し、水兵の手を握つて、「(略)。」と言聞かせた。

いいきる 「言切」(五) 2 いひきる 言切る 《一ツ・一ル》

七994 清正は腹を立てて、「(略)」、石田めとは中直りは致さぬ。」といひきつて歸りました。

十954 図 人の言ふことに對して『いゝえ。』と言切るには、ほんたうの勇氣がいる。

いいさす 「言止」(五) 1 いひさす 《一シ》

十二4010 「(略)」。それに樂譜もございませぬが。」と兄がいふ。ペーローペンには、「え、樂譜がない。そ

れでどうして。」といひさして、ふと見ると、かはいさうに妹はめくらである。

いいだす 「言出」(五) 5 いひ出す 言出す 《一シ・一ス》

六585 さて萬じゆは、だれか母の事をいひ出す者はないかと氣をつけてゐますが、十日たつても二十日たつても、母の名をいふ者がありません。

六678 「こまかな人だ。これではとても義捐はしてくれまい。」「さうかも知れない。」「さて主人に火事の話をして、義捐金のことをいひ出すと、『それはお氣の毒だ。』と言つて、(略)。

八536 其の時にいさんが「私にもつかせてみて下さい。」といひ出すと、おぢいさんが「とてもまだ。」とおつしやつたが、おばあさんは「まあ、ついてみるがよい。」とおつしやつた。

八767 之を聞いたコロンブスは、(略)、「諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立ててごらん下さい。」といひました。人々は何の爲にこんなことをいひ出したかと思ひながら、やつて見ましたが、もとより立たうはずはございません。

十957 図 お前のやうな弱蟲には、ひよつとすると命を失ふやうなあぶない時でも、言出すことの出来ない程、『いゝえ。』といふ言葉は言ひにくい

のだ。

いいつけ 「言付」(名) 2 いひつけ 言ひつけ

十一362 「(略)。」と思ひ出しながら、さつきおとうさんのいひつけで、明日の用意に出しておいた植林地の書付を開いて見る。

十一1208 図 ウェリントン公爵ともいはれるえらいお方が、おとうさんの言ひつけに背けとおつしやらうとは、どうしても考へられません。

いいつける 「言付」(下二) 3 言ひつける 《一ケ》 1 おいひつける

十一1186 農場主は(略)、そばに居た自分の子に、「ジョージ、早く行つて農場の門をしめる。人が何と言つても決してあけるな。」と言ひつけた。

十一1192 図 僕はおとうさんから、誰が來ても此の門をあけてはならないと僕に言ひつけました。

十一1199 図 「おとうさんは、誰が來ても此の門をあけてはならないと僕に言ひつけました。」

いいにくい 「言惡」(形) 7 言ひにくい 《一イ》

十918 図 幾度もくりかへしてゐる中に、太郎は生麥生米生卵。と、早口にすらく言へるやうになつた。太郎は得意になつて、「おとうさん、こんなに言ひにくい言葉は外に無いでせう。」

十92ノ「おとうさんは、もつと言

ひにくい言葉を知つてゐる。」

十926「はい。」「いゝえ。」大變

やさしい言葉ではありませんか。ど

うしてそんなに言ひにくいのです。」

十928父は「誠にやさしいやうだ

が、それで中々言ひにくい場合があ

るのだ。」

十958「お前のやうな弱蟲には、ひ

よつとすると命を失ふやうなあぶな

い時でも、言出すことの出来ない程

『いゝえ。』といふ言葉は言ひにくい

のだ。

十963「僕何だかきまりが悪くつ

て、さう言へなかつたのです。」「そ

れ御らん。『はい。』も言ひにくい言

葉では無いか。」

十965 太郎はつく／＼と自分の悪か

つた事を後悔すると共に、「はい。」

と「いゝえ。」の言ひにくいわけを

さとることが出来た。

いいにくいことば 「言悪言葉」〔課名〕

2 言ひにくい言葉

十目4 第十七 言ひにくい言葉

十91ノ 第十七 言ひにくい言葉

いいはる 「言張」(五) 2 いひはる

《一リール》

八94 さうしてそれが同時に決勝點

へ着いた。二人を出した村の者は、

たがひに勝利をいひはるので、《略》

八363 時の町奉行は名高い大岡越

前守で、一人の子どもに二人の實

母はないはずといつて、いろいろ調

べますが、どちらも實母だといひは

ります。

いいぶん 「言分」(名) 1 言分

十一193 其の場合に貸主から借主を

裁判所に訴へると、裁判所は兩者の

言分を聞いた上で、《略》。

いいや (感) 1 いいや

三888「いやいや、おかへし申し

たら、まはずに空へお上りに

なりませう。」「いや、天人はう

そをいひません。」

いいよう 「言様」(名) 1 いひやう

七549「どちらを向いても青い水は

かりです。《略》、月夜には波が銀色

に光つて、其の美しいことは何とも

いひやうがありません。

いいわたす 「言渡」(五) 1 言渡す

《一シ》

十二6910 娘の答に失望した王は、例

の烈しい氣性から、苦り切つて、

「お前にはもう何もやらぬぞ。永の

勘當だ。」と言渡した。

い・う 「言」(四・五) 639 イフ いふ

言フ 言ふ 《一ッ・ハ・ヒ・フ・

一へ》

一472 オダイサンハソノコニ、

モモトラウトイフナヲツケマ

シタ。

二265 ワタクシガアヤシテアゲ

ルト、ミヨチャンハ《略》、ウマ

ウマトイヒマス。

二276 「《略》。」ト、年トツタネズ

ミガナカマノモノニイヒマシ

タ。

二281 ソノトキ一ピキノ子ネズ

ミガマヘヘデテイヒマシタ。

二294 「ナルホドヨイカンガヘ

ダ。」トイツテ、ミンナカンシン

シマシタ。

二303 スルト年トツタネズミガ、

「《略》。」トイヒマシタノデ、ミン

ナダマツテシマヒマシタ。

二353 アル日トモダチニユミ

ノジマンヲシテ、「《略》。」トイ

ヒマシタ。

二367 ソレカラコノ人ノ田ニ

ハ、オ米ガスコシモデキナクナ

ツタトイヒマス。

二535 「コレハニセモノダ。ニク

イヤツダ。」トイツテ、ワルイ

オダイサンハトウトウシバラレ

テシマヒマシタ。

二636 センセイノオツシヤルコ

トヤ、ミンナノイフコトヲキ

キオトスヤウナコトハアリマ

セン。

二716 ムカシ大江山ニシユテン

ドウジトイフワルモノガキマ

シタ。

二732 ソコデ天子サマカラ、ラ

イクワウトイフツヨイ大シヤウ

ニ、シユテンドウジヲタイヂセ

ヨト、オホセツケニナリマシタ。

三82 ヒヨコガナクト、オヤド

リハオハナシデモスルヤウニ、

コココトイツテキマシタ。

三96 オヤドリハナンニモタバ

ナイデ、コココトイヒナガラ、

ソノヘンヲ見マハリマス。

三141 それでもまだあかちやん

がなくときには、「《略》。」かう

いつて、だつこをして おかあさ

んのところへつれていきます。

三165「さうです。それではあ

しのゆびのなをしつてゐま

すか。」「《略》。」「まあ、いつてご

らん。」

三204 よけいにとつたはうがか

ちだといつて、二人は《略》と

りました。

三213 《略》、下のはうからかさ

かさいはせてかけ上つてくるも

のがあります。

三222 犬ははなをくんくんい

はせ、《略》そばへよつてきまし

た。

三321 「《略》。」と村の人から

いはれるほど、いつもきげんよ

くうたをうたふおひさんです。

三346 いつかうちのおとうさん

が道で、「いつもおたつしやな

ことで。」とおつしやつたら、五

一ぢいさんは「もうすつかりよ

わりまして。」といつて、大きな

手であたまをなでました。

三397 むかしうらしま太郎といふ人がありました。
 三421 「略」、大きなかめが出てきて、「略。」といひました。
 三445 うらしまは「略」、おとひめに「略。」といひました。
 三452 おとひめは「略。」といつて、きれいな箱をわたしました。
 三463 「略」、おとひめのいつたこともわすれて、玉手箱をあけました。
 三478 東西南北ヲ四方トイヒマス。
 三532 星を二つ三つはたきおとさうとしてゐるのだ。「ばかなことをいふ。
 三545 むかしをののたうふうといふ人がありました。
 三698 コマツテニイサンニ見テモラヒマシタラ、「略。」トイフコトデシタ。
 三738 ソノトキカウモリハ「私ハ鳥デモケダモノデモナイカラ。」トイツテ、ドチラヘモツキマセンデシタ。
 三746 ソノ中ニ「略」トイツテ、ケダモノノミカタニナリマシタ。
 三753 スルトカウモリハ「私ハ羽ガアルカラ、鳥ダ。」トイツテ、鳥ノ方ニツキマシタ。
 三762 ソノ時カウモリガケダモノ

ノノ方ヘ行キマス、ト、「略。」トイツテ、ナカマヘ入レテクレマセン。
 三765 又鳥ノ方ヘ行キマス、ト、「略。」トイツテ、アヒテニシマセン。
 三771 ソコデカウモリハ「略」、クラクナツテカラ空ヲトビマハルヤウニナツタトイヒマス。
 三825 「今日はまあ、何といふよいお天きだらう。」
 三827 むかし一人のれふしが「略。」といひながら、みほの松原を通りました。
 三847 「これはよい物がある。略。」といつて、持つてかへらうとしますと、「略」。
 三856 「いや、それは天人のはごろもといふ物で、人げんにはようのないものです。」
 三875 そのかはりに天人のまひといふものをお見せ下さいませ。
 三891 「いいや、天人はうそをいひません。」
 四64 「略」、下男の太七がわらひながら、「略。」といつたさうです。
 四67 その時おぢいさんは「略。」とおつしやつたといふことです。
 四132 アル日ハマベヘ出テ見

ルト、ワニザメガ居マシタカラ、「オマヘノナカマトワタシノナカマト、ドツチガ多イカ、クラベテミヨウ。」トイヒマシタ。
 四134 ワニザメハ「ソレハオモ白カラウ。」トイツテ、スグニナカマヲ大ゼイツレテ來マシタ。
 四146 オマヘタチノセ中ノ上ヲアルイテ、カゾヘテミルカラ、ムカフノヨカマデナランデミヨ。」トイヒマシタ。
 四148 ワニザメハ白ウサギノイフ通りニナラビマシタ。
 四154 白ウサギハ「略」、イマ一足デヨカヘ上ラウトイフトコロデ、「略。」トイツテワラヒマシタ。
 四161 白ウサギハ「略」、「オマヘタチハウマクワタシニダマサレタナ。略。」トイツテワラヒマシタ。
 四214 ソノ後大國主ノ神ハ、白ウサギノイツタ通り、エライオ方ニオナリニナリマシタ。
 四235 おばあさんはもう耳が遠いので、大きなこゑで、「おばあさん、今日は。」といふと、ふりかへつて、「略」。
 四237 「略」、「おばあさん、今日は。」といふと、ふりかへつて、「略」。
 四251 にはとりが時時もみをかき出します。おばあさんが「ほうほう」といつておおひになりますと、「略」。
 四261 おばあさんが「略」。もつとあそんでお出で。」といつておとめになりましたが、「略」かへりました。
 四308 八山びこ「略」、「おうい」とよぶと、「おうい」といひ、「だれだ」といふと、「だれだ」と答へます。
 四311 「略」、「だれだ」といふと、「だれだ」と答へます。
 四312 正太郎がおこつて、「ばか」といひますと、又向ふで、「ばか」と口まねをします。
 四335 それが山びこです。こちらでやさしくいへば、向ふでもやさしく答へ、「略」。
 四336 こちらでやさしくいへば、向ふでもやさしく答へ、おこつていへば、おこつて答へるのです。
 四337 向ふで「ばか」といつたのも、お前が先に「ばか」といつたからです。
 四341 向ふで「ばか」といつたのも、お前が先に「ばか」といつたからです。
 四346 九フクロフ「略」。カホ

をうけ取つて、「略」。
 四251 にはとりが時時もみをかき出します。おばあさんが「ほうほう」といつておおひになりますと、「略」。
 四261 おばあさんが「略」。もつとあそんでお出で。」といつておとめになりましたが、「略」かへりました。
 四308 八山びこ「略」、「おうい」とよぶと、「おうい」といひ、「だれだ」といふと、「だれだ」と答へます。
 四311 「略」、「だれだ」といふと、「だれだ」と答へます。
 四312 正太郎がおこつて、「ばか」といひますと、又向ふで、「ばか」といひますと、又向ふで、「ばか」と口まねをします。
 四335 それが山びこです。こちらでやさしくいへば、向ふでもやさしく答へ、「略」。
 四336 こちらでやさしくいへば、向ふでもやさしく答へ、おこつていへば、おこつて答へるのです。
 四337 向ふで「ばか」といつたのも、お前が先に「ばか」といつたからです。
 四341 向ふで「ばか」といつたのも、お前が先に「ばか」といつたからです。
 四346 九フクロフ「略」。カホ

ハネコノヤウデ、其ノ上ネズミヲトツテクフノデ、ネコ鳥トイフトコロモアリマス。

四36 スルトホカノ鳥ガ見ツケテ、「ア、ニクイヤツガ居ル。」トイハナイバカリニ、ヨツテタカツテイデメカヘシマス。

四35 鳥ハ大キナコエデワル口ライヒ、太イクチバシデツツキマス。

四37 フクロフノ鳴キゴエハ所ニヨツテイロイロニイヒマス。

四38 フクロフガ「略」ノリツケホウセ」ト鳴クノダトイフ所モアリマス。

四37 たび人のぐわいたうをぬがせた方が勝といふことにきめて、先づ風からはじめました。

四42 下女がびつくりして、「きやつ」といつたので、後でみんなにわらはれました。

四44 花子はねこをだいてうろうろして居ましたので、「略」といはれました。

四45 「此のころは略」と今吉がいひましたが、略。

四53 山國のものが「日は山から出て、山へはいる。」といへば、島國のものが「略」といつてあらそひます。

四54 山國のものが「略」と

いへば、島國のものが「いや、海から出て、海へはいる。」といつてあらそひます。

四55 山の中からころげ出て、人にふまれたかしのみが、しひを見上げてかういつた。

四62 さをの先の扇をいよといふのでせう。

四64 其の時一人の家來がすすみ出て、「略」といひました。

四72 東の村では「それ、もう日がくれるぞ。一本杉のうしろへお日様がおはいりになった。」といひ、西の村では「略」などと申します。

四73 それは西の村で、二番目の金持だといはれたうちに生れた人のでした。

四75 「略」、送つて行く人が「此の人一本杉の外にないてくれるものがなくなつた。」といひました。

四77 私は略、どういふ子はどういふ人になるといふことを見ぬきます。

四79 私は略、どういふ子はどういふ人になるといふことを見ぬきます。

四79 私は略、どういふ子はどういふ人になるといふことを見ぬきます。

四81 「略」とたづねましたら、

「河上の方で雪がとけはじめたのだらう。」といふことでした。

四83 そばに乗つて居た人の話では、軍かんだといふことでした。

四89 曾我兄弟は兄を十郎、弟を五郎といひました。

四90 母は泣きながら二人の子どもに、「何といふくやしい事だらう。略」といひました。

四90 母は泣きながら二人の子どもに、「略」といひました。

四92 けれどもかたきのくどうは、みなもとのよりともといふ大將のお氣に入りて、略。

五35 「ここがあなたの教室です。せきはあれにします。」といつて、此の間からあいてゐたせきをおさしになりました。

五38 此の方は中村さんといふ人で、今度遠い所から来て、今日から此の級へはいる方です。

五65 聞けば級のが三人で、中村君を生いきだといつて、いぢめたのださうです。

五71 僕は「君、しつかりしたまへ。日本の男は泣くものではない。」といつて、力をつけてやりました。

五176 「これは鶏だよ。それで金鶏勲章といふのだが、略。」

五37 見る・いはざる・聞かざるといふのださうです。

五38 先生が「ちよつと用があるから。」といつて、私どもを道に待たせておいて、學校へおよりになりました。

五39 此の時私どもの村へよく物賣に来るおぢいさんが、略といつて通りました。

五41 昔熊襲のかしらに川上のたけるといふ者があつて、天皇のおほせにしたがひませんでした。

五41 尊は其のころ、やまとをぐなといふ御名で、略。

五44 略、たけるも熊襲のかしらだけあつて、「しばらくお待ち下さい。申したいことがあります。」といひました。

五45 略、たけるも熊襲のかしらだけあつて、略。略。「略。」といつて、息がたえしました。

五48 まふしには、かさくといふ音がしてゐますが、これは蠶が動くからです。

五55 又まことにめでたい事だといふので、年がうを養老とお改めになつたと申します。

五56 松島は略、島といふ島には、枝ぶりのよい松がしげつてゐます。

五66 「うちの方では、田に水がないと言つて、さわいでありますのに、

此の村にはよく水がありますね。」

五68 昔此の村はひどく貧乏で、此の村の名を言ふと、「あゝ、あの貧乏村か。」と言はれたものださうだ。

五68 4 〈略〉、「あゝ、あの貧乏村か。」と言はれたものださうだ。

五68 7 〈略〉、其の杉山なんぞは、木もろくにない草山だつたといふことだ。

五70 2 〈略〉、さうでもしなければ、外に村のさかえる工夫はあるまいといふので、みんな賛成したといふことだ。

五70 2 〈略〉、外に村のさかえる工夫はあるまいといふので、みんな賛成したといふことだ。

五70 4 着手は來年からといふことになつて、庄屋は方々の村へ用水池を見に出た。

五71 6 土手は長さが三百間、高さが六間半、幅は一番上で三間といふ大きなものであつた。

五72 1 「そんな大きな池がいるだらうか。」と言つて、首をひねる者もあつたといふが、〈略〉。

五72 1 〈略〉、首をひねる者もあつたといふが、一年ばかりの間は、べつだなくじやうも出なかつた。

五72 4 氣早な者は自分の持地を田に造りかへたといふことだ。

五73 4 「こんなむだな仕事をすれば、貧乏村はいよいよ貧乏になる。」な

どと言ふ者が出て來て、〈略〉。

五73 6 庄屋は村の者にいろ／＼言つて聞かせて、土手をつきなほしたが、〈略〉。

五74 2 かうなつては、もう庄屋の惡口を言ふ者ばかりで、普請方はとう／＼にげてしまつた。

五75 3 人の一心といふものはえらいもので、三度目に土手の工事はうまいいつた。

五76 4 長い間の苦勞が病氣のもとであつたといふことだ。

五78 8 昔の貧乏村は、今、郡の中でもゆびをりの金持村だと言はれてゐる。

五80 7 かけよつて見て、宗任が「〈略〉。」と言ふと、義家が「〈略〉。」と言ひました。

五81 2 〈略〉、義家が「びつくりしてたふれたのだ。ほつて置け、今に生きかへる。」と言ひました。

五82 6 「あぶないことだ。もし宗任に悪い心があつたら。」と、義家の家來どもはひやく／＼したといひます。

五86 3 叔父さんは大へんだ土手が切れたといつて、すぐ屋根へ出ました。

五90 2 〇 「うん、郵便函といつたのはこれだな。」

五90 3 〈略〉、「うん、郵便函といつたのはこれだな。」とひとりごとを言つて行く者があります。

五94 6 「それにはどんな事が書いてあつたか。」といふおたづねが出る

かも知れませんが、それは人にもらしてはならないことになつてゐます。

五97 2 ブダウニハ、マダイロ／＼ノ種類ガアルトイヒマス。

五99 4 熊が君の耳の所へ口を持つて行つたやうだが、何か言つたのか。

五100 1 〇 「うん。『あぶない時に、友だちをすててにげるやうな者には、これからつきあふな。』と言つた。」

六5 8 〇 臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、此の山のいたゞきには、いつもつもつてゐるといふことだ。

六9 4 或晩人ガネシジマツテカラ、金物屋ノ店デ、ヤクワントテツビンガ、ジマン話ヲシ合ヒマシタ。先ヅヤクワンガ言ヒマスニハ、「〈略〉。」

六13 1 ヤクワンハ之ヲ聞イテ、「ソレデモ鐵ハデキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」ト言ヒマシタ。

六13 8 其ノ時鐵ビンハ「〈略〉。」ト言ツテ、中々マケマセンデシタ。

六15 6 〈略〉、「あゝ、それは紅茸だ。毒だよ。其の手でぐみをたべてはいけない。」と、にいさんが言ひました。

六17 3 にいさんが「今日は。」と言つて、「此の近くに、しめぢの出る所はありませんか。」とたづねますと、〈略〉。

六18 1 〈略〉、「さあ、まだ早いかも知れないがね。」と言つて、栗林の下のくぼ地を教へてくれました。

六18 7 歸りがけに、力藏さんにお禮を言ひましたら、「一雨降つたら、又お出で。」と言ひました。

六19 1 〈略〉、「一雨降つたら、又お出で。」と言ひました。

六20 7 こんな時には、「これが五日もつゞくと、ひぼしだ。」と言ふれふしのこゑが、其所此所にします。

六27 8 大きな虎が山おくで、「〈略〉。」とひとりごとを言ひました。

六31 3 とう／＼弱つて、蟻にあやまつたと言ひます。

六31 5 一番汽車ニ乗ラウトイフノデ、父ト五時半頃ニ家ヲ出タ。

六32 5 橋ノタモトニ人力車ガ一ダイアツテ、車夫ガ「ダンナ、マキリマセウ。」ト言ツタ。

六36 2 源氏の者どもは義經をかばひながら、「捨てておしまひなさい。」

「お捨てなさい。」と口々に言ひます。六38 2 〇 〈略〉、此の弱い弓を取られて、『これが義經の弓だ。』など言はれては、源氏の名折れになるからだ。

六38 4 義經は笑つて、「〈略〉。」と言つたと申します。

六44 8 宿の者にきくと、「もうとうにお立ちになりました。」と言ひます。

六47 卵ハ「略」。一匹デ三四千粒
モ産ムトイフガ、「略」。
六48 ④「之ヲ蛙ノ里歸トデモ言ツ
タヲヨカラウ。」
六48 ④「略」、「之ヲ蛙ノ里歸トデモ
言ツタヲヨカラウ。」ト叔父サンガ
言ハレタ。
六52 其の五番目の舞姫といふのは、
かの萬じゆの姫であつたのでござい
ます。
六54 ほうびはのぞみにまかせて取
らせるであらう。」と言ひました。
六56 ④さあ、此の女にはゆだんが出
來ぬといふ事になつて、石のらうを
造つて、それに入れました。
六56 ⑤唐糸といふのは此の女のこと
でございす。
六58 ⑦さて萬じゆは、だれか母の事
をいひ出す者はないかと氣をつて
ゐますが、十日たつても二十日たつ
ても、母の名をいふ者がありません。
六60 ③三月二十日、今日はお花見と
いふので、御殿は人少でございす。
六65 ⑤僕ハ「待テ、待テ。」トイツ
テ、磁石ヲ持ツテ來タ。
六67 ②或物持の所へ行くと、下男が
まだ使へる小繩を捨てたと言つて、
主人がひどくしかつてゐた。
六68 ②さて主人に火事の話をして、
義捐金のことをいひ出すと、「それ
はお氣の毒だ。」と言つて、たくさ
ん金を出した上に、粳や豆の種を分

けて上げててもよいと言つた。
六68 ③「略」、粳や豆の種を分けて上
げててもよいと言つた。
六68 ⑥「全くだ。あんな小言を言
ふ程だから、此の義捐が出来たのだ
らう。」
六69 ④京都を北から南へ流れてゐる
川を賀茂川といひます。
六79 ⑦博多の沖は見渡すかぎり、元
からおしよせた船でおほはれた。十
何萬といふ大軍である。
六80 ②元の兵は一人も上陸させぬと
いふ意氣ごみで、濱べに石垣をきづ
いて守つた。
六84 ②武士といふ武士は必死のかく
ごでふせいだ。
六85 ④生きてかへつた者は數へる程
しかなかつたといふ。
六88 ⑥象つかひが「此の太い足で、
どさり／＼と歩きます。」といふと、
長い鼻をぶら／＼させて歩き出した。
六89 ⑦又「略」といふと、今の
子どもが象の腹の下へねころんだ。
六90 ④此の時、「大きなお守さん
だ。」と誰かがいつたので、みんな
が一度にふき出した。
六91 ②之をかこんだ賊は百萬騎とい
ふ大軍で、城の四方二三里の間は、
人や馬でふさがつた。
六95 ⑦もう此の上は、しやにむに攻
落さうといふので、賊は大きなはし
ごを作つて、之を城の堀に渡して橋

にした。
六97 ⑤百萬騎にげ、二百騎にげして、
はじめ百萬騎といった賊も、しまひ
には十萬騎に減じ、「略」。
六101 ⑧「略」、「義一さん、それはお
節供に使ふのですよ。」といふねえ
さんの聲がしました。
七13 ④われらが住む世界は、其の
形まるくして、球の如し。ゆゑに之
を地球といふ。
七44 ④其の中我が大日本帝國と、
「略」を世界の五大強國といふ。
七53 ④日本中の小學生、八百
萬人ありといふ。
七63 ④日本中の小學校、三萬
近くありといふ。
七10 ⑧船頭が「皆さん、そろ／＼お
したくだ。」と言つたので、みんな
羽織をぬいで、着物のすそをはしよ
つた。
七11 ⑤さうしてさの先に、赤いし
るしのあるはんでんをしばらくつて、
「皆さん、これが目じるしだよ。」と
言つた。
七12 ⑧「丸山君、かれひだ。」と言つ
て、つかんで見せると、ふりかへつ
たのは知らない人であつた。
七18 ⑥「極樂寺坂の味方があやふう
ございす。」といふ使の後から、
「大將も討死されました。」といふ使
が來たが、「略」。
七18 ⑧「極樂寺坂の味方があやふう

ございす。」といふ使の後から、
「大將も討死されました。」といふ使
が來たが、「略」。
七24 ⑨此のおばあさんにむすこが一
人あるのださうだがずつと前から南
アメリカへ行つてゐるといふことだ。
七26 ⑧武人は昔から之を愛養して、
いざといふ時には、それに乘つて出
かけた。
七27 ①畠山重忠はひよどりごえのさ
か落しに、馬をしようつて下りたとい
ふし、「略」。
七27 ⑤馬の高さは前足の所ではかる。
八寸・九寸などといふのは、四尺八
寸・四尺九寸などのことで、五尺あ
ると、十寸といふ。
七27 ⑥八寸・九寸などといふのは、
四尺八寸・四尺九寸などのことで、
五尺あると、十寸といふ。
七27 ⑦それ以上は十寸一寸・十寸二
寸などといふ。
七28 ⑨市中ヲ流ル、川ヲ淀川トイ
フ。
七36 ⑥目ぬきの所には三階建・四
階建の石造や煉瓦造の家が軒をなら
べて立つてゐるので、日本の町より
はかへつて西洋の都會に似てゐると
いひます。
七38 ⑧大連の貿易高は横濱や神戸
よりは少し下で、大てい大阪ぐらゐ
だといひます。
七39 ①輸出品は豆粕が第一で、輸

入品は綿布が一番多いといふことで
す。

七414 〈略〉、「こめんなさい。
く。」「といひく、見送人をおし

分けて、前へ出るおばあさんがある。
七414 〈略〉、「こめんなさい。

く。」「といひく、見送人をおし
分けて、前へ出るおばあさんがある。
七427 おばあさんは「やれく。」

といつて、其所へすわつた。

七431 郡長をはじめ、見送の人々は
みんな泣いたといふことである。

七466 翌日武田方からは安間彦六と
いふ大の男が、〈略〉、上杉方の陣へ

向つた。

七492 此の時信玄は之を止めて、
「〈略〉。」といつたので、めでたく中
なほりが出来た。

七534 私の乗つてゐる太平丸とい
ふのは、長さが六十間程もある汽船
で、〈略〉。

七566 航海といふものは、かうい
ふ面白いものですが、たまには恐し
い目にもあひます。

七566 航海といふものは、かうい
ふ面白いものですが、たまには恐し
い目にもあひます。

七583 一たい船にはらしんぎとい
ふ物があつて、それで方角をとつて
進みますから、〈略〉。

七592 又海岸には所々に燈臺があ
りますから、それを見ると、あれは

何所だといふことが分ります。

七598 船長はかくいひて後、一だ
ん聲をはり上げて、〈略〉。

七601 さておしまひに一ついつて
置きたい事があります。

七603 それは日本は海國でありな
がら、まだ海を恐れる人もあるとい
ふことで、これは實に残念な事であ
ります。

七608 こんなことでは、どうして
海國の民といはれませう。

七621 連日の雨で、川といふ川には
水があふれました。

七626 川が渡れ
る。」「といふことになりますと、我
もくゝと先をあらそつて渡りました。

七628 渡るといつても、自分一人で
は渡ることは出来ません。

七642 此の時見すばらしいなりをし
た一人の男が、人夫と渡賃を高いや
すいと言つてあらそつてゐましたが、
〈略〉。

七653 これはあの人が落ちて行つた
にちがひないが、渡賃が高いといつ
て、此のあぶない川を一人でこした
ほどの人である。

七671 「落し物をしましたから。」と
いひくゝかけ出します。人夫は其の
男のたもとをおさへて、「まあ、お
待ちなさい。落した物は。」

七671 「落し物をしましたから。」と
いひくゝかけ出します。人夫は其の
男のたもとをおさへて、「まあ、お
待ちなさい。落した物は。」

七671 「落し物をしましたから。」と
いひくゝかけ出します。人夫は其の
男のたもとをおさへて、「まあ、お
待ちなさい。落した物は。」

七671 「落し物をしましたから。」と
いひくゝかけ出します。人夫は其の
男のたもとをおさへて、「まあ、お
待ちなさい。落した物は。」

七682 「安心しなさい。此所へ持つ
て來ました。」といつて、人夫は財
布を出して渡しました。

七701 しばらくして、〈略〉。つい
ては此の中の金を半分だけお禮のし
るしにさし上げます。」といつて、
財布の中に手を入れました。

七707 人夫は之を見て、「おやめな
さい。〈略〉。」といつて、歸らうと
しました。

七708 かの男は「どうぞしばら
く。」「といつて引きとめました。

七727 私には川ばたの人夫で、名前
をいふ程の者ではありません。

七737 人からいへなく金を
もらはうとは思ひません。」かうい
つて、さつさと歸つて参ります。

七738 かの男は「それではこまる、
ぜひ。」「といひながら、人夫の後に
ついて來ましたが、〈略〉。

七742 見れば年取つた父といふのが、
うす暗い小窓の下で、わらちを作つ
て居りまして、〈略〉。

七745 かの男がわけを話して、どう
かお禮を受けてくれといひますと、
〈略〉。

七746 〈略〉、年よりはちよつとふり
かへりましたが、何ともいはず、す
ぐ又仕事をつづけました。

七748 妻もまた「せつかくです
が。」といつて、相手になりません。
七762 豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎と

七762 豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎と
いつて、織田信長の草履取をしてゐ
た時のことである。

七777 「一時も前に。」といつて信長
は驚いた。

七823 又眞珠貝トイフモノガアル。
七871 一ガイニイフコトハ出來ナイ
ガ、先ツ緑色ノモノハ淺イ所ニ、紅
色ノモノハ〈略〉。

七889 こまつてゐますと、「では水
を一ぱい下さい。」と兵士が言ひま
した。

七896 「あゝ、さうだ。」と言つて、
マリーはおばあさんのづきんを取つ
て、兵士の頭にかぶせました。

七902 「しばらく、うちのおばあさ
んにおなりなさい。」かう言つて、
又大急ぎでおばあさんの着物を着せ
てやりました。

七915 「たしかに來たはずだ。」と言
つて、敵はあちこち見まはしました
が、〈略〉。

七923 さうして、「〈略〉。」と言つて、
みんな出て行つてしまひました。

七935 おちいさんにきいたら、二百
十日といふのは立春の日から二百十
日目の日のことで、〈略〉。

七937 おちいさんにきいたら、二百
十日といふのは〈略〉よく大風が吹
くから、厄日といつて、農家ではこ
とに心配するのださうだ。

七941 「どうかひどい風にならなけ
ればよいが。」と、おちいさんが言

七941 「どうかひどい風にならなけ
ればよいが。」と、おちいさんが言

七941 「どうかひどい風にならなけ
ればよいが。」と、おちいさんが言

七941 「どうかひどい風にならなけ
ればよいが。」と、おちいさんが言

七941 「どうかひどい風にならなけ
ればよいが。」と、おちいさんが言

七941 「どうかひどい風にならなけ
ればよいが。」と、おちいさんが言

七941 「どうかひどい風にならなけ
ればよいが。」と、おちいさんが言

つていらつしやつたが、其の中に南の空が黄色になつて、風がだん／＼はげしくなつて來た。

七九八 神々も照覽あれ、戦一つ出來ず、人のかげごとばかりいふ石田めとは、此の清正一生中直りは致さぬ。

七九九 「略。」と清正がいひますと、秀吉はうなづきました。

七〇〇 石田でござる。お通しなされ。「石田といふ者ださうだ。」

七〇一 秀吉が之を聞いて、幕の中から、「もうよい。通してやれ。」といひましたので、清正は「略。」三成を入れてやりました。

七〇二 略、清正は「あのせいの低いのが石田だ。通してやれ。」といつて、三成を入れてやりました。

七〇三 小西程の者を堺の町人とのしり、又明國への返書に豊臣清正と記したといふが、それはまことの事か。

七〇四 秀吉は感心して、「略。」といつて、軍功の賞として、清正に名刀をあたまへました。

七〇五 故二「暑サ寒サモ彼岸マデ。」トイヘリ。

七〇六 それでもよいが、電報はさうていねいにはなくてもよい。

七〇七 昔或氏神のお祭に、競馬の神事といふ事があつた。

七〇八 それは「略」、勝つた子ども

を出した村が、次の年のお祭の日まで、五箇村の頭になるといふ定めであつた。

八〇九 一人は信作、一人は耕造といつて、年は同じく十五歳。

八一〇 「今年の競馬はさぞ見ものだらう。」といつて、祭の當日には、おびたらしい見物人が、朝早くから宮の境内へつめかけた。

八一一 略、それがすむと、「支度」といふあひづの一番太鼓を鳴らした。

八一二 耕三方の人々は「略。」などといつた。

八一三 信作方の人々は之を聞いて、「略」、あなた方の村が五箇村の頭になつて下さい。」といつたので、さうきまつたといふことである。

八一四 略、あなた方の村が五箇村の頭になつて下さい。」といつたので、さうきまつたといふことである。

八一五 家來があやしんで、其のわけをたづねると、「多勢の方はゆだんをしてゐるが、略。」といつた。

八一六 居た松平正綱が「略。」といつてなぐさめると、頼宣は顔色をかへて、「略。」といつた。

八一七 略、頼宣は顔色をかへて、「やあ、正綱、十四歳の時が二度あるか。」といつた。

八一八 家康は之を聞いて、「今の一言は、先陣の功名にもまさる。」と

いつて喜んだ。

八一九 松平正綱の子信綱は幼名を長四郎といつた。

八二〇 將軍は長四郎を大きな袋へ入れて、「ありのまゝに申すまでは出さぬ。」といつて、袋の口を封じて柱に掛けた。

八二一 將軍はあとで、御臺所に、「長四郎があつた心で大きくなつたら、竹千代には無二の忠臣であらう。」といつたといふことである。

八二二 將軍はあとで、御臺所に、「略。」といつたといふことである。

八二三 其ノ家ヲ出デテヨリ、イカダヲキテ木材ヲ賣ルニ至ルマデ、一年ノ長キニワタルコト珍シカラズトイフ。

八二四 揚子江ハ「略」、海水コレガタメニ赤シトイフ。

八二五 これは呉鳳といふ人のおかげだと申します。

八二六 そこで蕃人どもが呉鳳へ、首を取ることを許してくれといつて出ました。

八二七 呉鳳はお祭の爲に人を殺すのはよくないといふことを説聞かせて、もう一年、もう一年とのばさせてゐましたが、「略。」

八二八 略、もう一年、もう一年とのばさせてゐましたが、四年目になると、「もう、どうしても待つてゐられませんか。」といつて來ました。

八二九 呉鳳は「それ程首がほしいなら、略。」といひました。

八三〇 さうして今も其の通りにしてゐるのだといひます。

八三一 手はすべて仕事のもとにして、いそがしき時に、手の足らずといふは、働く人の少きをいふなり。

八三二 手はすべて仕事のもとにして、いそがしき時に、手の足らずといふは、働く人の少きをいふなり。

八三三 何山の何所へ行けば、望のものをさづけてやるといふ神様のお告がありました。

八三四 幾年かの後、里子を返してもらはうとすると、先方はあづかつたおぼえがないといつて返しません。

八三五 略、一人の子どもに二人の實母はないはずといつて、いろいろ調べますが、どちらも實母だといひはります。

八三六 越前守はじつと考へましたが、「略」。勝つた方へ其の子を渡す。」といひました。

八三七 里親の方は「それ見よ。」といはぬばかりに、子どもを引きよせますと、「略。」

八三八 略、越前守は聲をかけて、「略」。手を放した女が實母にきまつた。」と申し渡しましたので、里親は恐れ入つたといひます。

八三九 越前守は手代の言ふ所を聞い

て、〈略〉。

八403 越前守は手代の言ふ所を聞いて、「略。」といつて、下役の者に石地蔵をしばつて来るやうに命じました。

八414 「これは珍しい。地藏様でも悪いことをなさつたと見える。」などといつて、四五百人のものが、ぞろ／＼と車の後について、思はず知らず役所の門内へ入りこみました。

八477 大キサカライツテモ、強サカライツテモ、鷲ハタシカニ鳥類ノ王デアル。

八477 大キサカライツテモ、強サカライツテモ、鷲ハタシカニ鳥類ノ王デアル。

八519 「お早う。」といふと、「よく目がさめたね。今四時を打つたばかりだ。」と、にいきさんがいつた。

八523 「お早う。」といふと、「よく目がさめたね。今四時を打つたばかりだ。」と、にいきさんがいつた。

八572 図 年の若きに感心な。」
かくいふ聲を後にして、小ぞうは乗りぬ、自轉車に。

八602 図 彼ノ燒薩屋ノ看板ニ、八里半ト記セルモノノ如キハコレニシテ、其ノ味クリニ近シトイフ意ナリ。

八623 図 目は見ゆれども、字のよめざる人をあきめくらといふ。

八635 図 〈略〉、多くの弟子保己一につきて學びたれば、時の人 番町で

目あきめくらに 道をきゝ。と言ひたりといふ。

八635 図 〈略〉、時の人 番町で目あきめくらに 道をきゝ。と言ひたりといふ。

八644 図 〈略〉、弟子どもは「先生、少しお待ち下さいませ。今風であかりがきえました。」と言ひしに、保己一は笑ひて、〈略〉。

八645 図 「さてく、目あきといふものは不自由なものだ。」

八647 図 〈略〉、保己一は笑ひて、「さてく、目あきといふものは不自由なものだ。」と言ひたりとぞ。

八717 図 ニューヨークは人口からいへば、ロンドンに次ぐ大都會で、七百萬以上もあるといひます。

八719 図 ニューヨークは人口からいへば、ロンドンに次ぐ大都會で、七百萬以上もあるといひます。

八734 図 アメリカ人は〈略〉、何でも世界一になるやうに心掛けてゐるといひますが、何しろ大した勢です。

八761 図 〈略〉、コロンブスの成功を祝しますと、一人の男が「大洋を西へく」と航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がだらうか。」といつて冷笑しました。

八766 之を聞いたコロンブスは、〈略〉、「諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立ててごらんさい。」といひました。

八819 明治天皇の御製に、器には

したがひながら、いはほをも とほすは水の力なりけり。 といふ御歌がある。

八821 水にはこれといふ形がない。

八823 それでは弱いものかといふに、さうではない。

八834 信吉にはおとよといふ今年十一になる女の子があるが、〈略〉。

八842 母が「とよちゃんかね。丈夫であるよ。」といふと、信吉はほつと息をついて、〈略〉。

八847 〈略〉、信吉はほつと息をついて、「ありがたうございます。〈略〉。それではちよつと行つて参ります。」といつて、すぐ出かけようとした。

八849 父は「相かはらずせつちだね。」といつたが、別に止めようとせず、〈略〉。

八852 父は〈略〉、僕に、「お前も一しよに行つてお出で。」といつた。

八858 「私はこちらに御やくかいになつてゐる松木とよの父でございます。〈略〉。」といふ間も、信吉はのびるやうにして奥の方を見た。

八867 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の先から足の爪先までながめたが、〈略〉。

八872 信吉は〈略〉、しばらくして、「おとよ、大きくなつたなあ。〈略〉。」といつて、今度は先生に向つて、

〈略〉。

八879 私は三年ぶりに此の子にあふのでございすが、何のいんぐわで、ひさしぶりに歸つた私に、一口も口をきくことが出来ないのございませう。」といふと、先生はおとよに、低い聲で言かれた。

八888 図 ありがたい。もう一つ何とか言つておくれ。

八889 信吉はびつくりして、二足三足後へ下つたが、〈略〉。ありがたい。もう一つ何とか言つておくれ。」といつて、娘を引きよせて、

八894 図 「指であひづをしたのは昔のこと、今は口を見せてものを言はせませう。」

八895 図 それはありがたい。おとよ、わしの言つてることがわかるか。わしの聲が聞えるか。

八897 図 聞えるなら、もう一つ何か言つておくれ。

八902 信吉はまだ先生の言はれたことがわからなかつたと見えて、〈略〉。

八906 信吉は〈略〉、娘の耳に口をよせて、「おとよ、おとうさんが歸つて来て、うれしか。」と大きな聲で言つたが、〈略〉。

八906 〈略〉、おとよは何も言はないで、信吉の顔を見てゐる。

八911 図 よく見えるやうにして、もう一度しづかに言つてごらんさい。

八913 先生は「略」、もう一度しづかに言つてごらんさい。」と言はれた。

八916 信吉は少しはなれて、今度はおとよの顔を見ながら、「おとよ、おとうさんが歸つて、うれしか。」と言つた。

八923 信吉は「もうく何所へも行きはしない。」といつて、大きな涙をばたく落した。

八944 信吉は教室を出ると、「略」。どうも恐れ入つたことだ。」といつて、先生を廊下でをがむやうにした。

八948 先生は「略。」といはれた。

八951 信吉は「いや、何、それには及びません。」といったが、「略」。

八954 信吉は「略。」といったが、すぐ「では、一日お借り申します。近所の者に見せてやりたい。」といつて、「略」。

八996 或時、口・耳・目・手・足等が申し合はせて、胃に向つていひますには、「略」。

八1003 僕等是一同申し合はせて、今日からは働かないことにしたから、さう思つてくれ給へ。」といひました。

八1012 此の時胃は一同に向つて言ひました。

八1028 君等が若し僕に食物を送る爲に働いたといふなら、僕もまた君等を養ふ爲に骨を折つたといひます。

八1029 略、僕もまた君等を養ふ爲に骨を折つたといひます。

八1032 世の中といふものは、すべて相持のものです。

八1035 之を聞いて、手足等一同は、なるほどと感心したといひます。

八1056 すべてかういふやうに、手分をして別々に仕事をするを分業といふ。

八1057 すべてかういふやうに、手分をして別々に仕事をするを分業といふ。

八1108 幼名を無人といつたが、「略」、近所の人は大將のことを、無人ではない、泣人だといつたといふことである。

八1108 幼名を無人といつたが、寒いといつては泣き、暑いといつては泣き、「略」。

八1109 略、寒いといつては泣き、暑いといつては泣き、「略」。

八1112 略、近所の人は大將のことを、無人ではない、泣人だといつたといふことである。

八1112 略、無人ではない、泣人だといつたといふことである。

八1128 或年の冬、大將が思はず「寒い。」といつた。

八1132 すると大將の父は「略。」といつて、大將を井戸端へ連れて行つて、「略」。

八1134 大將はこれから後、一生の間

「寒い。」とも「暑い。」ともいはずかつたといふ。

八1135 大將はこれから後、一生の間「寒い。」とも「暑い。」ともいはずかつたといふ。

八1142 其の爲、大將には全く食物に好ききらひといふものがないやうになつた。

八1157 けれども刀・槍・薙刀など、武士の魂と呼ばれる物は、何時もきらく光つてゐたといふことである。

九113 略 あらゆるものはやみといふ 黒きとばりにおほはれて、安き眠に入れるなり。

九114 其の時、御供にしたがひ給へる弟・橘媛、尊の御身危しと見給ひ、「略。」といひて、「略」、其の上に飛下り給へり。

九118 略、尊はつゝがなく上總の國に着き給ひきといふ。

九161 コンナ體色ヲ保護色トイフ。

九189 所ニヨツテ此ノ蟲ヲドビンワリト呼ンデキルノハ、農夫ナドガ小枝ト見違ヘテ、ドビンヲ掛ケ、落シテワルトイフ意味デアラウ。

九2010 此ノ類ノ色ヲ警戒色トイフ。

九229 略 しかし此の農學といふ學問は、種々様々の事を、實地と學理の兩方から調べて行かねばならぬので、「略」。

九2510 略、一すぢに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなた

も皆同じ事で、「略」。

九276 古人も『志ある者は事終に成る。』と言つてゐる。

九293 世界一といはれるナイヤガラナイアガラの瀧は、アメリカ合衆國とカナダとの國境にあります。

九2910 瀧は、落口にあるゴート島といふ小島の爲に二つに分れてゐます。

九304 右にあるのがアメリカ瀧、左にあるのがカナダ瀧で、此の二つを合はせてナイヤガラナイアガラの瀧といふのです。

九441 飲料水ニ不由ナキ土地ニアリテハ、金錢ヲツヒヤシテ、水ヲ買フナドトイフハ、思ヒモヨラス事ナリ。

九443 然レドモ飲料水ノ得ガタキ所ニテハ、一手桶何程トイフ代價ヲハラヒテ水ヲ買フ。

九484 米が出来るのも、麥が取れるのも、土といふありがたいものが、めいぐの骨折に對して、御ほうびを下さるのだ。

九509 お返事をとお渡した後で、おとうさんに「略。」と言ふと、おとうさんは「略」。

九523 さて商賣を始めると、あの人ならといふ信用はあるし、「略」、町でも屈指の財産家となつた。

九544 けれども社長さんは、「略」、『なあに、もう一度出直すのです。』といつて、笑つてゐた。

九547 町の人々は之を見かねて、『そんな事までなさらずにても。』といつて、資本を出さうとする者もあつたが、〈略〉。

九549 社長さんは、『自分の力でやれる所までやつてみます。』といつて、夜を日について働いた。

九552 毎朝引いて出た荷が、夕方には必ず空になるといふ景氣。

九583 母もすげ笠をそちらへ向けて、『ほんたうにさうですね。〈略〉。』と言ひながら、正一を見てにつこりした。

九645 兩舷直といふのは、特別の務のあるものをのぞいた外の水兵のことである。

九667 一時間餘りも活動した後であるから、食事のうまいことはいふまでもない。

九704 昔能因といふ人が、『都をば、〈略〉。』とよんだのは其所のことで、〈略〉。

九717 次の平泉といふ驛を出て間もなく、叔父さんは近く左に見える山を指さして、〈略〉。

九719 あの上に名高い金色堂がある。光堂ともいつて、昔は金光りに光りかゞやいてゐたさうだ。

九730 あれは岩手山だ。南部富士といはれるだけあつて、ちよつと形が似てゐるね。

九8510 それでも航海をする人などが、よく星を見て船の位置をはかるといふではありませんか。

九864 いや、何月何日の何時には、何所に何星が見えるといふ事が、學問上ではわかつてゐるから、はかられない事はない。

九868 「それは何といふ星ですか。」

九869 「北極星といふ星だ。」

九872 それにはまた都合のよい事がある。何かといふと、北斗七星といふ一群の星があつて、〈略〉。

九873 何かといふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九904 西洋では昔から、あの七つの星と其の近所の星を一しよにして小熊の形を想像し、北斗七星と其の近所の星を一しよにして大熊の形を想像して、それ／＼小熊座・大熊座といふ名をつけてゐる。

九911 昔カリストといふおかあさんと、アルカスといふ子供があらました。

九912 昔カリストといふおかあさんと、アルカスといふ子供があらました。

九914 おかあさんのカリストは、大そう美しい人だつたので、ジュノーといふ神様がそれをねたんで、とうとうカリストを熊にしてしまひました。

九922 ところがめぐみ深いジュビターといふ神様が、それを見て、〈略〉。

九9310 白馬岳が飛驒山脈中の有名な山だといふ事は知つてゐましたが、くはしい事は今日始めてうかゞひました。

九969 いろいろの珍しい高山植物が紅・黄・紫と咲亂れて、何ともいへない美しさです。

九969 あの雷鳥といふ珍しい鳥も、此のあたりから頂上へ登る途中のはひ松の間に居るのです。

九972 「〈略〉。」と言つて、岡田さんは高山植物や雷鳥の繪葉書を、たくさん出して見せて下さいました。

九999 かげやちやを見廻ると、此の前まだ少し早いと言つて残して置いたのが、今日はもう熟しきつたやうな顔をして、へそを日にさらしてゐる。

九105 中尉はひらりと北風にまたがつて、〈略〉。「おい北風、今日は大分手ごたへがあるぞ。しつかり頼むよ。」と、まるで人間に言ふやうに言つた。

九105 中尉はひらりと北風にまたがつて、〈略〉、まるで人間に言ふやうに言つた。

九116 水兵は驚いて立上つて、〈略〉。「それは餘りな御言葉です。〈略〉。」

どうぞ之を御覽下さい。」と言つて、其の手紙を差出した。

九117 一人の子が御國の爲にくさに出でし事なれば、定めて自由なる事もあらん。何にても多量りよなく言へ。」

九118 おかあさんは、『一命を捨てて君恩に報いよ。』と言つてゐるが、まだ其の折に出會はないのだ。

九119 此のわけをよくおかあさんに言つてあげて、安心なさるやうにするがよい。

九121 「オトウサンハ誰ニ投票ナサルノデス。」「ソレハ誰ニモ言フベキ事デハナイ。」

九121 自分ノタフトイ選舉權ヲ棄テルトイフ事ハ、選舉人トシテカリソメニモスベキ事デハナイカラ、〈略〉。

九126 當選スルシナイハ別ニシテ、メイ／＼自分ノ適當ト信ジテキル人ニ投票スルノガ、ホンタウノ選舉トイフモノダ。

九123 道雄ハ誰ガ何ト云ツテモ、自分デ一番適當ダト信ジテキル中村君ヲ選舉シヨウト決心シタ。

九134 彼らの品を社務所にたづさへ来て、神前にさ／＼げたと願ひ出づる者數多しといふ。

九144 はぎの御茶屋といふ名のあつても之がためなるべし。

十47 図 名を隔雲亭といふ由なり。

十51 図 昔の武蔵野の姿を此所に残さんとの皇太后の思召のまゝに、今も人工を加へずといふ。

十76 昔ヨーロッパにアレクサンドル大王といふ王があつた。

十77 マケドニヤといふ小さな國の王子と生れ、〈略〉、當時世界に類のない大國を建設した英雄である。

十83 或日王は〈略〉、タルスといふ町に着いた。

十94 此の有様を見て、フィリップといふ醫師が、一命をなげうつても王を助けようと決心した。

十107 それにはフィリップが敵から大金をもらふ約束で王を毒殺しようとしてゐるといふ風説があるから、用心するやうに書いてあつた。

十139 図 私どもの若い時分には、かういふ仕事になると、あなた方の半分ぐらゐしか働きませんでした。

十166 図 ちやうど此の頃、此所の名物の馬市が始つてゐるといふので、〈略〉見物に行きました。

十177 図 なれない私は、大丈夫といはれても、やはり馬のそばを通るのが危険なやうな氣がしてならなかつたが、〈略〉。

十183 図 まだせりが始るのに間があるといふので、馬つなぎ場を見て廻つたが、〈略〉。

十214 図 さうして、もうこれが最高

の直だと見ると、掛の人が其の直で賣渡すといふあひつに手を打つて、取引が成立ちます。

十224 図 此の町では、二歳駒の市が〈略〉、直段も一頭四千圓・五千圓といふ高いのがあるさうです。

十244 英國の東海岸にロングストーンといふ島がある。

十317 北アメリカが南アメリカに續く部分は、パナマ地峽といつて、地形がきはめて細長くなつてゐる。

十352 これは高い山地を切通したもので、此處を切通すのは非常な難工事であつたといふ事である。

十353 ガツン湖といつて、廣さが霞が浦の二倍以上もある大きな人造湖で、〈略〉。

十397 〈略〉、兄は「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」といつて、かついで來たつるはしを下へ置いた。

十399 父は腰から鎌をぬきながら、「あゝ、今朝はなか／＼寒い。〈略〉。」といつて、たき火のそばの切りかぶに腰を下し、鎌をときにかゝつた。

十402 力藏さんも、「しかし天氣が續いてよいあんばいだ。」と誰に言ふともなく言つて、〈略〉。

十402 力藏さんも、「しかし天氣が續いてよいあんばいだ。」と誰に言ふともなく言つて、〈略〉。

十406 父は「力藏さん、まあ、一服やつてから始めなさい。」といった

が、力藏さんは見向きもせず、に、
〈略〉。

十4010 ずい／＼といふのこぎりの音が、あたりの静かさを破る。

十416 図 「壯吉、お前はおとうさんのかつた雜木を、かういふ風に束ねて運んでくれ。」

十418 兄は私に「壯吉、〈略〉、かういふ風に束ねて運んでくれ。」といひながら、生木の枝で雜木を束ねて見せた。

十438 父は「〈略〉」と楽しさうに言つた。

十499 彼は此の後も尚研究に研究を重ね、工夫に工夫を積んで、世に栴右衛門風といはれる精巧な陶器を製作するに至つた。

十508 図 「あれは銀行だよ。今までは横町の小さい家だつたが、今度はあゝいふりつばなのを建てたのだ。」

十509 図 銀行といへば、おとうさんは、何時かも銀行へ行つてお金を預けて來るとおつしやいましたね。

十514 図 お金といふものは、うちにしまつて置くものではない。

十527 図 銀行の預金には定期預金といふのと當座預金といふのがある。

十522 図 銀行の預金には定期預金といふのと當座預金といふのがある。

十617 図 此處から十八町程先に、山本といふ宿場があります。

十619 図 されど主人は、「〈略〉、一

足も早くお出かけなさい。」といふに、僧は返す言葉もなく出て行きぬ。

十643 図 降積む雪に道を失ひ、進みもやらずたゞずみたる様は、古歌に駒とめて袖打拂ふかげもなし、佐野のわたりの雪の夕暮。といへるにも似たりけり。

十678 図 僧は其の厚意を深く謝し、さて「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」「〈略〉。」主人はけんそんして言はず。

十685 図 「それ程おつしやるなら、恥かしながら申し上げませう。〈略〉。」といひて目をふせしが、〈略〉。

十6810 図 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、ちぎれたりとも、此の具足に身を固め、〈略〉。

十7310 図 京城の市街は、もと石でたゞんだ高い城壁で圍まれ、その處々にかういふ門があつて、出入口になつてゐたのださうです。

十757 図 南大門の東南の方に南山といふ山があつて、公園になつてゐます。

十767 図 京城の西南部に龍山といふ處があります。

十776 図 こちへ來てもう三月餘りになりますが、よくも續くと思ふくらゐの天氣續きで、雨といふものはごくたまにしか降りません。

十787 図 此の頃は、大分寒くなつて、朝は攝氏零度以下十何度といふきび

しき、〈略〉。

十782 此の頃は十分寒くなつて、

〈略〉、學校へ行く途中などは、寒いといふよりもいたいやうに感じます。

十785 面白いのは、三日四日續いて寒ければ、其の次には又其のくらの間暖さが續くといふやうに、寒さと暖さがほとんど規則正しく交替することです。

十942 かねてあぶないといつて置いた、あの橋を渡つたのでは無いか。

十9410 すると、しまひに皆が僕の事を弱蟲だといつて笑ひました。

十954 人の言ふことに對して『いゝえ。』と言切るには、ほんたうの勇氣がいる。

十958 前回のやうな弱蟲には、ひよつとすると命を失ふやうなあぶない時でも、言出すことの出来ない程、『いゝえ。』といふ言葉は言ひにくいのだ。

十9510 それから又、晝間私が聞いた時、なぜすなほに『はい。』といはなかつたのだ。

十968 支那の宋朝の末、北方に元といふ國おこり、〈略〉。

十1023 それから少し行くと、うつぼかげらといふものがある。

十1035 「さあ、今度は葉のきれいな植物を集めてある處だ。」といつて、にいさんは次の室へ案内して下さる。

十1198 途中、太宰府といふ昔の役所の跡などを見て、櫻寺といふ處に立寄つた。

十1199 途中、太宰府といふ昔の役所の跡などを見て、櫻寺といふ處に立寄つた。

十1217 後日、人が主人に向つて、どういふお見込で、あの青年をお用ひになつたのかと尋ねた。

十1228 あいさつをしてもいていねいで、〈略〉、しかもよいなことは言ひません。

十1235 それで注意深い男だといふことを知りました。

十1241 かういふ點から、〈略〉、あの青年をやとふことにしたのです。

十1245 主人は答へて、〈略〉。りつばな人の紹介状よりも、何よりも、本人の行がたしかな保證です。」といつた。

十1293 拍手かつさい、天地をとどろかす萬歳の叫、勇壯なる軍樂の調、工場といふ工場、船といふ船の汽笛が一せいにあぐる歡呼の聲。

十1294 工場といふ工場、船といふ船の汽笛が一せいにあぐる歡呼の聲。

十1306 此の頃備前に兒島高德といふ武士あり。

十1310 然るに今主上隱岐にうつされ給ふと聞き、高德一族共を集めていへるやう、「義を見てせざるは勇なきなり。〈略〉。」と。

十1317 行幸餘りに運かりしかば、人をしてうかゞはしむるに、播磨の今宿といふ處より、山陰道にかゝり給ひし由なり。

十13110 主上はや院庄に入らせ給ふ。」と人の言へば、衆皆力を失ひて散りくになりぬ。

十1337 勾踐此のうらみ忘れ

がたく、范蠡といふ忠臣の助を得て報復の計を立て、〈略〉。

十117 一口にいへば、白熱の状態にある一大火球で、〈略〉。

十119 一口にいへば、白熱の状態にある一大火球で、之を形造つてゐるものは、液體に近い氣體であらうといふ。

十125 光の強さに至つては非常なもので、之を燭光にいへば一三の下に零を二十六もつけて表さねばならぬ。

十131 望遠鏡で見ると、〈略〉、又所々に黒點といつて黒く見える所もある。

十132 此の黒點は多分表面に生ずるうづ巻であらうといふ。

十136 ところが此の大きな太陽も、夜の空に銀の砂をまいたやうに見える小さな星の一つと同じものだといふ。

十172 孔子常に中正不偏を貴び、「中庸は徳の至れるものなり。」といひ、「過ぎたるは及ばざるが如し。」ともいへり。

十172 過ぎたるは及ばざるが如し。ともいへり。

十174 又きはめて學問に熱心にして、其の好學の念の切なる、「朝に道を聞くことを得ば、夕に死すとも可なり。」といふに至れり。

十182 其の身を忘れ、よはひを

十923 「何といふ言葉ですか。」

十924 「はい。」といふ言葉と、

「はい。」といふ言葉だ。」

「はい。」といふ言葉と、

「はい。」といふ言葉だ。」

「はい。」といふ言葉と、

「はい。」といふ言葉だ。」

「はい。」といふ言葉と、

「はい。」といふ言葉だ。」

「はい。」といふ言葉と、

「はい。」といふ言葉だ。」

「はい。」といふ言葉と、

「はい。」といふ言葉だ。」

「はい。」といふ言葉と、

「はい。」といふ言葉だ。」

「はい。」といふ言葉と、

「はい。」といふ言葉だ。」

「はい。」といふ言葉と、

「はい。」といふ言葉だ。」

「はい。」といふ言葉と、

「はい。」といふ言葉だ。」

「はい。」といふ言葉と、

「はい。」といふ言葉だ。」

「はい。」といふ言葉と、

忘れて、人生の爲に盡くしたる大聖の面目、よく此の語にあらはれたりといふべし。

十一 86 それから五十海里ばかりさかのぼつて、黄浦江といふ支流に入り、〈略〉。

十一 810 こゝには外國人の居留する者が非常に多く、これ等は租界といふ特別の區域内に住んでゐる。

十一 91 租界といふのは居留地の一種で、居留民が支那政府の手を離れて、自治制を布いてゐる處である。

十一 163 図 「成程、かういふ風に分類してそろへておけば、いつ取出すのにも便利だ。」

十一 184 図 整頓といふのは體裁をつくることではなくて、むだをなくすることだ。

十一 189 約束は固く守らなければならぬ、他人に害を加へてはならぬなどといふことは、我々が十分心得てゐる事である。

十一 196 此のやうに、人々相互の間の訴訟を裁判するのを民事裁判といひ、訴へた方を原告、訴へられた方を被告といふ。

十一 197 此のやうに、〈略〉、訴へた方を原告、訴へられた方を被告といふ。

十一 198 又他人の物を盗んだといふやうな犯罪があつた場合には、〈略〉。

十一 201 とところで、どういふ事をす

れば罪になるか、其の制裁としてどのやうな刑罰を受けるかは、法律で明かに定めてあるから、〈略〉。

十一 205 此の犯罪者を罰するための裁判を刑事裁判といふ。

十一 206 此の場合には訴へられた者が被告で、検事といふ役人が原告に當るのである。

十一 214 かういふ風に、三回くりかへして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、〈略〉。

十一 222 又民事裁判では、原告・被告〈略〉の主張を助け、刑事裁判では、〈略〉被告を保護するために辯護士といふものがある。

十一 232 〈略〉、判事・検事・辯護士の任務は極めて重大なものといふべきである。

十一 319 図 武器は皆槍なりしかば、世に之を稱して賤獄の七本槍といふ。

十一 328 図 此の四海峽に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。

十一 352 図 我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、世界における海上の一大公園なりといへり。

十一 378 〈略〉、おとうさんが「〈略〉。」といつて笑つてをられた。

十一 3710 植付けた苗木の枯れた處へ補植するのは、翌年一回だけだといふから、今年はどうしなくともよいのであらう。

十一 393 いつかにもいさんが、「杉の散髪だ。」といつてみんなを笑はせたことがある。

十一 401 生きた枝でも枯れた枝でも、其のまゝにしておくと、〈略〉、其處が節になるのだといふ。

十一 407 今年伐るはずのは、おとうさんの子供の時植ゑたのだといふが、もう幹のまはりの三尺餘りもあるものが大分見える。

十一 456 図 住持は「〈略〉、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。〈略〉」といへば、畫師「そはいと名残をしき事なり。さらば謝恩の爲に何か畫がきて参らすべし。」とて、〈略〉。

十一 468 図 其の畫がく所皆鶴にして、筆勢非凡、丹青の妙言ふべからず。

十一 492 図 〈略〉、畫師「〈略〉、かき添へんために歸りしなり。」とて一枝かき添へ、又別れを告げて立去れりといふ。

十一 4910 此の液の取れる木を普通にゴムの木といつてゐる。これには種類が多く、一番よいのはパラゴムといふのである。

十一 501 これには種類が多く、一番よいのはパラゴムといふのである。

十一 522 切付といふのは、ゴムの木から液をとるために、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。

十一 524 切付といふのは、ゴムの木

から液をとるために、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。

十一 526 元來ゴム液は、幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るものであるから、〈略〉。

十一 542 電氣の機械や、蓄音機の圓盤などに用ひるエポナイトといふものもゴムから造る。

十一 5510 ちやうど其の時、「ふかだく」といふ船長のけたゝましい叫び聲が聞えた。

十一 598 〈略〉、市街の中央を東西に貫ぬく幅六十間の大通路は、むしろ公園ともいふべきもので、花壇が設けてあり、銅像なども立つてゐる。

十一 616 〈略〉、突如として眼前に展開せられた風景は、雄大といはうか豪壯といはうか、恐らく全道第一の壯觀であらう。

十一 616 〈略〉、雄大といはうか豪壯といはうか、恐らく全道第一の壯觀であらう。

十一 658 「人は火を用ひる動物。」といはれてゐるやうに、火を使用するのは人類ばかりで、〈略〉。

十一 687 しかし火の利用法は、決してこれで完成したといふわけではあるまい。

十一 699 図 「無言の行に口をきくといふ事があるか。」

十一 703 三人とも物を言つてしまつたので、上座の老僧がもつたいらし

い顔をして、「物を言はないのはわしばかりだ。」

十一705 図 「物を言はないのはわしばかりだ。」

十一715 〈略〉、主人は愛想よく迎へて、「どうも残念なことでした。あなたがよく會ひたいと御話しになる江戸の賀茂眞淵先生が、先程御見えになりました。」といふ。

十一751 図 私も實は我が國の古代精神を知りたいといふ希望から、古事記を研究しようとしたが、〈略〉。

十一7510 図 たゞ注意しなければならぬのは、順序正しく進むといふことです。

十一772 有名な古事記傳といふ大著述は此の研究の結果で、我が國文學の上に不滅の光を放つてゐる。

十一775 我々の普通に金銭といつてゐる物の中には、金貨を始め、銀貨・白銅貨・青銅貨がある。

十一776 これらを總べて貨幣といふ。

十一7710 我々は殆ど貨幣・紙幣なくして一日も生活することは出来ぬといつてもよいからである。

十一796 〈略〉、更に貨幣の代りになる紙幣といふ物を案出した。

十一882 父は空をながめて、「〈略〉。二百十日もこれで無事にすんだ。」と、團扇を使ひながら言つた。

十一885 すると弟が「おとうさん、二百十日は立春から二百十日目に當

るのですね。」と言つて、日數を數へてみようとした。

十一889 父は曆を持つて來て、「これは略本曆だ。〈略〉。」かういつて弟の手に渡した。

十一902 僕はこれまで曆といふと、今年は紀元何年であるか、〈略〉といふやうな事を見るものとはかり考へてゐたので、此の話を聞いて珍しく感じた。

十一904 僕はこれまで曆といふと、今年は紀元何年であるか、何月何日は何曜日であるか、祝祭日・土用・彼岸・入梅・日食・月食が何時になるかといふやうな事を見るものとはかり考へてゐたので、〈略〉。

十一914 図 もつとおしまひの方をあけて御らん。『各地の氣候』といふ所がある。

十一918 図 それから雨雪の量は何處が一番多いか、〈略〉。〈略〉。かういふやうに、曆はわたしたちに日日の事を教へてくれる大切なものだ。

十一9110 僕はよく年寄の人が新の幾日とか舊の幾日とかいふのを思ひ出して、其の事を父に尋ねた。

十一925 図 それから太陰曆を舊曆、太陽曆を新曆といふやうになつた。

十一928 図 太陽曆は春分から春分までを一回歸年といつて、それを本としてこしらへたものだ。

十一957 父が木を伐れば自分は雜草

をかり取る、父が畠を打てば自分は種をまくといふ風にかひがひしく働いてゐた。

十一961 かういふ有様であつたから、リンカーンは十歳頃までは本を讀むことなどは殆ど出来なかつた。

十一965 かうしてゐるうちに、知識を得たいといふ彼の欲望は益々強くなり、〈略〉。

十一968 〈略〉、父は學校へ行つて時間をつぶすよりも畠に出て働いた方がよいといつて、なか／＼許してくれなかつた。

十一981 かういふ心掛であつたから、成績は何時も優等であつた。

十一986 それから父の助手をしたり、人にやとはれたりすることになつたが、本を讀みたいといふ心は少しも變らなかつた。

十一1038 圖 此のブラジル國は、〈略〉、唯をかしきは日本の秋が春、日本の冬が夏といふ様に季節の相反する事に候。

十一1048 圖 アマゾン河は全長五千五百キロメートル、世界の河の王といはれ居候。

十一1155 まして威力によつて強制するとか、私利によつて勧誘するとかいふやうな手段を用ひたり、〈略〉。

十一1184 圖 「ジョージ、早く行つて農場の門をしめろ。人が何と言つても決してあけるな。」

十一1189 さうしてジョージに早くあけて通すやうにと言つた。

十一1194 するとジョージは、「〈略〉。」と言つてどうしてもあけない。

十一1195 騎馬の人たちは、あけないとなぐるぞと言つておどしたり、〈略〉。

十一1196 騎馬の人たちは、〈略〉、あけてくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。

十一1201 最後に目つきのやさしい老紳士が言つた。

十一1205 ジョージは、かねてウェリントン公爵が勲功も高く、りつばな人物であるといふ事を聞いてゐたので、〈略〉。

十一1207 圖 ウェリントン公爵ともいはれるえらいお方が、おとうさんの言ひつけに背けとおつしやらうとは、どうしても考へられませんか。

十一12010 図 僕は、誰が來ても此の門をあけてはならないとおとうさんに言はれてゐるのです。

十一1262 圖 今より二百數十年前、〈略〉鐵眼といふ僧ありき。

十一246 圖 傍なる人のいふやう、「此の川は古の簞川にして、〈略〉。」と。

十一262 圖 時に天照大神の使者建御雷命此の地に來りていふやう、「大神の勅にいはいく、『〈略〉。』と。快く此の國をたてまつり給ふや如何に。」

十一269 圖 此の時事代主命はすなど

りのため美保崎といふ處にありしが、〈略〉。

十二83図 寶物殿に入りて拜觀するに、火きりぎね・火きりうすといふものあり。

十二89図 此の社にては、今も太古の法に従ひ、之によりて火を作るといふ。

十二91図 境内を出でて海岸に到る。稻佐の濱といふ處なり。

十二92図 稻佐の濱といふ處なり。かの建御雷命が大國主命と會見せられしは此處なりといふ。

十二93図 折から日は地平線に近づきて、雲も水も金色に輝き、美しさいふばかりなし。

十二107 又父には「〈略〉。」といつて叱られたことがあつた。

十二141 さうして廣く動植物を研究して、生物は總べて長年月の間には次第に變化し、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。

十二178図 かくいへば、頗る繁雜にして多大の時間を要する如くなれども、〈略〉、以て其の如何に速なるかを知るべし。

十二187図 〈略〉、一臺よく一分間に四百五十枚を印刷すといふ。

十二205 どれを見ても、枝といふ枝にはもう黄金色に色づいた實が鈴なりになつてゐる。

十二243 彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。

十二248 文明の進んだ今日尚此のやうな考を持つのは、大きな誤といはねばならぬ。

十二291図 ロンドンは何と言つても世界の大都會です。

十二302図 陳列品の多種多様で、しかも其の數量の數限りもないのは、さすがに世界の大博物館といはれるだけあると思ひました。

十二317図 世界最美の街路といはれてゐるシャンゼリゼーの大通には、五六層もある美しい建物が道路の兩側に並び、〈略〉。

十二340図 〈略〉、又工場といふ工場には盛に黒煙が上つてゐました。

十二359図 世界の公園といはれてゐるスイスは、到る處我が日本のやうに景色がよい。

十二378 「あゝ、あれは僕の作つた曲だ。聴き給へ。なか／＼うまいではないか。」彼は突然かういつて足を止めた。

十二381図 にいさん、まあ何といふよい曲なんぞう。

十二384 〈略〉、「〈略〉。ほんたうに一度でもよいから、演奏會へ行つて聴いてみたい。」と、情ないやうにいつてゐるのは若い女の聲である。
十二385図 そんなことをいつたつて仕方がない。

十二397 「御免下さい。〈略〉。」とペートーベンがいつた。

十二402図 實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが、——あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふお話でした。

十二404 其の言方が如何にもをかしかつたので、言つた者も聞いた者も思はずにつこりした。
十二408 「有難うございます。〈略〉。」と兄がいつ。

十二413 「いや、これでたくさんです。」といひながら、ペートーベンはピアノの前に腰を掛けて直にひき始めた。

十二428図 「一體あなたはどいふ御方でございますか。」

十二4210 「まあ待つて下さい。」ペートーベンはかういつて、さつき娘がひいてゐた曲を又ひき始めた。

十二437 「それでは此の月の光を題に一曲。」といつて、彼はしばらくすみきつた空を眺めてゐたが、やがて〈略〉。

十二449 「先生、又お出で下さいませうか。」きやうだいは口を揃へていつた。

十二455 ペートーベンの「月光の曲」といつて、不朽の名聲を博したのは此の曲である。
十二545図 自分は何といふ小さい情ない者であらう。

十二551図 あゝ、何といふ情ない身の上であらう。

十二566 時計師は「此處で遊んではいけない。」といひながら仕事臺の上を見て、出して置いたねちの無いのに氣が附いた。

十二569図 あゝいふねちはもう無くなつて、あれ一つしか無いのだ。

十二604 「直りました。〈略〉。」といつて渡した。

十二616図 更に思へば、白地は我が國民の純正潔白なる性質を示し、日の丸は熱烈燃ゆるが如き愛國の至誠を表すものともいふべきか。

十二657 王にはゴネリル・リガン・コーデリヤといふ三人の娘があつた。

十二667図 先づ姉のゴネリルから言つてみよう。

十二715 其の上王に百人の家來を五十人に減ずるやうにいつた。

十二718 ところがリガンは、まだ父上を迎へる準備が整つてゐないといふのを口實にして、すげなくも王を内に入れなかつた。

十二7210 それは父が姉たちの爲に虐待されてゐるといふことであつた。

十二742 コーデリヤは〈略〉、「〈略〉。——まあ、此のお體であのひどい嵐の中を——。」といひながら、よゝと泣きくづれた。
十二749 やがて眠から覺めた王は、

幾分氣も静まつたのか、「略。」といつてあたりを見廻し、「略。」

十二76 其の後老王はコデーリヤの孝養によつて餘生を安樂に送つたといふ。

十二78 其の時魚見やぐらの上で旗を揚げて、まぐろの群が網にはいつたといふ台圖を見ると、「略。」

十二82 先づ樺太の南端なる白主しめぬといふ處に渡り、「略」探檢の途に上りぬ。

十二83 樺太の北端に近きナニヲといふ處にたどり着きたり。

十二83 止むなく南方のノテトといふ處に引返し、「略。」

十二84 出發の日近づくや、林藏はこれまでの記録一切を取りまとめ、之を從者に渡していふやう、「略。」と。

十二88 法律は、國家といふ共同生活を、秩序ちぎありかつ幸福なものにするための規則であるから、「略。」

十二89 これ等の命令も國の規則であつて、廣い意味でいふ場合にはやはり法律であるから、「略。」

十二90 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。

十二96 彼は「略」、やがて此の尊い心境を世界の人々と共にせずにはゐられぬといふ慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。

十二103 大極殿の跡はるかに指點すべく、南の方郡山の町の東に羅城門の跡今も残りといふ。

十二105 僧は名を禪海といつてもと越後の人、「略。」

十二106 其のうちに誰言ふとなく、あれは山師さんし坊主で、あのやうなまねをして、人をろうらくするのであらうといふはさが立つた。

十二106 其のうちに誰言ふとなく、「略」といふはさが立つた。

十二107 かくて又幾年かたつうちに、穴はだんく興行を加へて、既に何十間といふ深さに達した。

十二115 今日文明の利器と稱せらるゝものにして、直接間接に彼の天才によらざるもの殆どなしといひて可なり。

十二116 そればかりでなく、石炭は早晚使ひ盡くされてしまふが、水力は無限といつてよい。

十二116 博士は先づ「略。」といつて、「略」ことを力説した。

十二117 一體最も理想的な燈火は太陽の光のやうに明るくて、しかもほたるの光のやうに熱をともしはないものであります。」といひ、「略。」

十二121 安方がいふ、「官軍方の御意見はどのやうなものか存じませんが、略。」

十二128 之に比べれば、「略」、徳

川家の存亡などは言ふにも足らぬ小事でござります。

十二131 安方は自分の胸を指さして、「略」。よく此の胸を見覚えておいてくれ。」といひながら、西郷と顔を見合はせてにつこり笑つた。

十二133 君と親とに眞心を捧げ盡くして仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、今更いふまでもない。

十二133 随つて「略」、いざといへば、舉國一致國難に當る氣風を生じた。

十二136 今日我が國が列強の間に立つて世界的の地歩を占めた以上、かういふ短所はやがて我が國民から消去であらうが、「略。」

いえ「家」(名) 66 家↓のぶさんのいえ

三48 大キナ家ガ三ムネ、「コ」ノ字ナリニタツテキマス。

三49 新道ノリヤウガハニハ、新シイ家ガ七八ケンデキマシタ。

三84 「これはよい物がある。ひろつて家のたからにしやう。」

三85 持つてかへつて家のたからにします。

四8 村ノ方ヲ見ルト、ドノ家ニモコクキガ出シテアリマシタ。

四28 よこ町に電氣の力で、米をつく家も出来ました。

四46 略、家の内も外もきれいになつて居ましたので、みんながほめられました。

四73 私は「略」、人が生れたり、死んだり、家がたつたり、こはれたり、「略」みんな見て知つて居ます。

四77 それでとうとう家も土ざうも田も畠も人の物になつてしまひました。

五21 略、鯉が大きな口で、思ふぞんぶん風をのんで、家のむねよりも高く尾を上げます。

五27 ツバメハコチラニ居ル間ニ、人ノ家ニスヲ作ツテ、ヒナヲソダテマス。

五27 こんな所にと思ふやうな村外れに、家がけけん立つてゐます。

五42 お着きになりますと、間もなくたけるが新しい家を造つて、人々をあつめて、其の祝をしました。

五42 尊はかみをいいて、女のすがたになり、つるぎをふところにかくして、其の家の中へおはいりになりました。

五64 「神明様のこちらにある白壁造の家は工場ですか。」

五74 よい身代であつたが、其のために田を賣り、畠を賣り、家も土藏もみんな賣りはらつた。

五75 其の後村の人は、庄屋の家屋敷や田地を買ひもどして、妻や子ど

もに、もとの家へ歸つてもらつた。

五七七 あの白壁造の土藏のある家がそれだ。

五七八 〈略〉、あの家にはよい事がつゞいて、身代は前よりもよくなつた。

六三六 一番汽車ニ乗ラウトイフノデ、父ト五時半頃ニ家ヲ出タ。

六三四 朝日ガバツト西ガハノ家ノガラス戸ニカガヤイタ。

六五五 義仲からは折りかへし返事があつて、「すきをねらつて、頼朝の命を取れ。」と、木曾の家につたはつてゐた大切な刀を送つてよこしました。

六七二 川の西は水のすぐそばから、すき間もなく家が立ちならんでゐます。

七三八 田の面は水の廣々と、蛙の聲もにぎはしく、谷あひの家窓明けて、夜に親しむ時は來ぬ。

七三六 目ぬきの所には三階建・四階建の石造や煉瓦造の家が軒をならべて立つてゐるので、〈略〉。

七五八 外國の港に着くと、見なれない形の家が並んで立つてゐます。

七六八 家の中で見えなくした物でも、中々出ないものでございます。

七七八 家には七十近い父と、三十になる妻と、三つになる子どもがあるの、どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともあります

が、〈略〉。

七四一 かの男は〈略〉、とうく又川を渡つて、人夫の家へ参りました。

八二〇 其ノ家ヲ出デテヨリ、イカダヲキテ木材ヲ賣ルニ至ルマデ、一年ノ長キニワタルコト珍シカラズトイフ。

八二五 大工の家を建て、左官の壁を塗り、船頭の舟をこぎ、農夫の田畑を耕すも、皆手の働なり。

八二九 保己一の家は今の東京、其の頃の江戸の番町にありて、〈略〉。

八六六 おとうさんが着いた日は、ちやうど五月のお節供の日で、日本人の家には、鯉のぼりが立つてゐました。

八七二 高い建物のあることは世界第一で、十階・二十階の家はいくらもあります。

八八五 分業はマッチの製造ばかりではない。うちを造るにしても、時計を造るにしても、家を建てるにしても、皆これによるのである。

八八三 郷里の家は〈略〉、至つてしまい、そまつな家であつた。

八八四 郷里の家は〈略〉、そまつな家であつた。

八八八 此の父母の下に、此の家に育つた乃木大將が、終生忠誠質素でおし通して、武人の手本と仰がれるやうになつたのは、〈略〉。

九二四 歡庵様は佐藤の家の農學の

本をお開きなされ、元庵様は〈略〉、おぢい様の不味軒様は〈略〉。

九二六 〈略〉、これが佐藤の家の學問の精神である。

九三五 主人の家が大きな醬油屋だつたので、〈略〉。

九五八 正一の家でも、親子三人、庭にすゑた打臺の前に並んで、麥を打つてゐる。

九六三 これ等の仕事は、陸上の家で、毎朝起きると先づ夜具をかたづけ、雨戸をくるのとかはりはないが、〈略〉。

九八四 信吉の家にては、夕飯後庭先に涼み臺を出して、家内一同涼みゐたり。

一〇五七 「あれは銀行だよ。今までは横町の小さい家だつたが、今度はあゝいふりつばなのを建てたのだ。」

一〇六五 折から、たもとの雪を打拂ひくつ、此方へ來かかれるは、此の家の主人なるべし。

一〇六三 主人は急ぎて家に歸りぬ。

一〇九〇 さいはひ附近の田で働いてゐた村の人々に助けられ、何れもぬれぬずみのやうになつて家に歸つた。

一〇九六 青銅の大鳥居をくゞつて進むと、沿道の家は大てい天満宮にちなんだ物を賣つてゐる。

一〇九八 〈略〉、殊に一村鶏を飼はざる家なし。

一一一七 此の一事で、家の中がどん

なによく整頓されてゐるかが想像されます。

一一九八 アメリカ合衆國第十六代の大統領リンカーンは、今から百年餘り前、ケンタッキー州の片田舎の貧しい家に生れた。

一二〇五 リンカーンが七歳の時、一家はインディアナ州に移つたが、さしあたり家がなくてはならぬので、父は自分で木を切出して小さな家を造つた。

一二〇九 リンカーンが七歳の時、父は自分で木を切出して小さな家を造つた。

一二一四 家が出來てから次に土地を開きにかゝつた。

一二一八 鉛筆や紙も自由には買へなかつたから、家で算術の練習をするには、木のシャベルと炭を用ひた。

一二二七 ところが家に書物がないばかりでなく、近くに圖書館もないので、〈略〉。

一二三〇 翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、「〈略〉。」と願つた。

一二三六 たまぐ大阪に出水あり。死傷頗る多く、家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らず。

一二三七 月のさえた冬の夜友人と二人町へ散歩に出て、薄暗い小路を通り、或小さいみすばらしい家の前まで來ると、〈略〉。

十二453 彼は急いで家に歸つた。
 十二643 〇 これイタリヤ中興の主エ
 ンマヌエル王、國土統一の時、其の
 家の紋章の色なる白と赤とに、〇略〇。
 十二863 〇 キチーにて土人の家に宿
 る。
 十二864 〇 土人等林蔵を珍しがりて
 之を他の家に連行き、大勢にて取圍
 みながら、〇略〇。
 十二1208 〇 私の勤め居り候家は呉
 服店にて、なか〇忙しく御座候。
 十二1227 〇 夢にのみ見し山川も、
 あけくれにしたひし家も、まの
 あたり近く迫りぬ。
 いえいえ 「家」(名) 3 家々
 八807 〇 村役場で、村内の家々から
 納めるのをまとめて、それ〇〇へ送
 るのです。
 十303 〇 〇 しめやかに、夜の霧 ち
 またをつゝみ、立並ぶ家々、とも
 しびうるむ。
 十一763 〇 夏の夜は更けやすい。家々
 の戸はもう皆とざされてゐる。
 いえやしき 「家屋敷」(名) 2 家屋敷
 家屋敷
 五765 〇 家屋敷もなくなつた上に、夫
 に死なれたので、庄屋の妻は子ども
 をつれて里へ歸つてゐた。
 五773 〇 其の後村の人は、庄屋の家屋
 敷や田地を買ひもどして、妻や子ど
 もに、もとの家へ歸つてもらつた。
 いえやす 「家康」(人名) 3 家康 ↓

とくがわいえやす
 八137 〇 見物人は争つて、多勢の方へ
 行つたが、家康は小勢の方へ行けと
 命じた。
 八145 〇 後に此の話を聞いた者は、皆
 家康の年に似合はずかしこいのに驚
 いた。
 八157 〇 家康は之を聞いて、「今の一
 言は、先陣の功名にもまさる。」と
 いつて喜んだ。
 いええ 「言」(下) 4 言へる 〇
 〇へーへル〇
 八886 〇 おとよ、お前はものが言へ
 るやうになつたのか。
 十916 〇 幾度もくりかへしてゐる中に、
 太郎は生麥生米生卵。と、早口にす
 ら〇〇言へるやうになつた。
 十961 〇 「僕何だかきまりが悪くつ
 て、さう言へなかつたのです。」
 十二689 〇 私は胸にある事が十分に
 言へないのでございます。
 いおとす 「射落」(五) 3 いおとす
 〇一ス〇
 四626 〇 いくら弓の名人でも、こ
 れを一矢で いおとす ことは、
 なかなかむづかしさうです。
 四632 〇 「だれかあの扇をいお
 とすものはないか。」
 四638 〇 空をとんで 居る鳥で
 も、三羽ねらへば、二羽だけは
 きつといおとす ほどの上手で
 ございます。

いおり 「庵」(名) 1 いほり
 十一1118 〇 〇 〇 劉備が三顧の
 こよなき知遇、我が身をすてて報
 いんと、起ちてぞ出でぬる、草の
 いほりを。
 いか 「以下」(名) ↓せつしれいどいか
 じゅうなんど・たかときいかほうじょ
 うがた・ちゅういか・ふくしままさの
 りいか
 いか 「鳥賊」(名) 3 イカ
 七806 〇 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タ
 コ・イカナドガスンデキル。
 七80 〇 イカ
 七81 〇 〇 〇 タコヤイカガ、アシヲ
 ソロヘテ泳グ様ハ、マコトニ面白イ。
 いか 「毬」(名) 1 いが
 八27 〇 栗のいがの多むのも今である。
 いかい 「意外」(形状) 3 意外
 十85 〇 水は意外に冷たくて、まるで
 氷のやうであつた。
 十一419 〇 〇 〇 貴兄には去月以
 來御病氣にて、しかも一時は大分御
 重態なりし由、誠に意外の事に驚入
 候。
 十一129 〇 〇 〇 喜んで寄附するも
 の意外に多く、此の度は製版・印刷
 の業着々として進みたり。
 いかい いこうげき 「威海衛攻撃」
 (名) 1 威海衛攻撃
 九1165 〇 〇 〇 聞けば、そなたは豊島沖
 の海戦にも出ず、又八月十日の威海
 衛攻撃とやらにも、かく別の働なか

りきとのこと。
 いか 「如何」(形状) 1 如何が
 十二1287 〇 之に比べれば、幕臣の身
 としては如何がな申分ではあるが、
 徳川家の存亡などは言ふにも足らぬ
 小事でございます。
 いか 「如何」(副) 2 いかゞ
 十626 〇 〇 〇 お泊め申してはいかゞでこ
 ざいませう。
 十651 〇 〇 〇 ちやうど有合はせの粟の飯、
 召上るならと妻が申してをりますが、
 いかゞでございます。
 いかだ 「筏」(名) 3 イカダ
 八201 〇 〇 〇 此ノ河ノ上流地方ヨリ木材
 ヲキリ出シ、之ヲイカダニ組ミテ河
 ヲ下スコトアリ。
 八202 〇 〇 〇 イカダノ大ナルモノハ長サ
 六七十間、幅三四十間、〇略〇、流ニ
 シタガヒテ下ル。
 八208 〇 〇 〇 其ノ家ヲ出デテヨリ、イカ
 ダヲトキテ木材ヲ賣ルニ至ルマデ、
 一年ノ長キニワタルコト珍シカラズ
 トイフ。
 いかな 「如何」(連体) 1 いかな
 五908 〇 〇 〇 いかなる日でも葉書の百枚や封
 書の三十通ぐらゐるは、私の口にはい
 らないことはありません。
 いかなる 「如何」(連体) 2 いかなる
 如何なる
 七77 〇 〇 〇 港には防波堤ありて、風波
 のおそれ少く、水深くして、いかな
 る大船もきしに横づけにすることを

得。

十一1263図 一代の事業として一切經を出版せん事を思立ち、如何なる困難を忍びても、ちかつて此のくはだてを成就せんと、〈略〉。

いかに「如何」(副) 13 いかに如何ニ 如何に

八281図 取る・拾ふ・握る・持つなどは皆手の働なり。もし手なくば、我等は如何に不自由ならん。

九422図(圖) 『此の方面の戦闘に二子をうしなひ給ひつる 閣下の心如何にぞ。』

九447図 ソレガ如何ニマレニシテ、タヤスク得ラレザル物ナリトモ、用ヒヤウナクレバ、誰モ之ヲ買フ者ナク、〈略〉。

十一264図 〈略〉、盛政直に物見の兵を出してうかゞはしむるに、こは如何に、降つてわいたる敵の大軍、木之本の邊に満ち／＼たりと報じ来る。

十一468図 かくて次の夜は如何にとうかゞふに、畫師は〈略〉。

十一478図(圖) 「我が心に思ひ構へし事を如何にして知り給へるか。」

十一11510 公吏・議員等、直接間接に公共の事務に當る者は、如何に其の職務に忠實であつても、一般の人民の後援がなければ自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。

十二14図(圖) 古のふみ見るたに思ふかな、おのが治むる國はいかに

と。

十二64図(圖) 「大神の勅にいはいく、『此の葦原の中つ國は皇孫之をしろしめすべし。』と。快く此の國をたてまつり給ふや如何に。」

十二161図 然らばかくの如き新聞は如何にして編輯せられ、印刷せられ、讀者に配布せらるゝか。

十二1710図 〈略〉、原稿締切時刻より刷出まで其の間僅かに數十分、以て其の如何に速なるかを知るべし。

十二1021図 〈略〉 古の奈良の都は、そも／＼如何に美しく、如何に盛なりしぞ。

十二1022図 〈略〉 古の奈良の都は、そも／＼如何に美しく、如何に盛なりしぞ。

いかに「如何」(副) 16 イカニモいかにも 如何にも

七514 イカニモ丈夫サウナ老人デシタガ、去年ノクレニ死ンデシマヒマシタ。

八117図 〈略〉、人の命にはかへられないと思つて、相手を助けてやつたのはえらい。如何にも見上げた心掛だ。

九637 〈略〉、千數百人の乗員が號令にしたがつて、規律正しく活動する其の様は、如何にも目ざましい。

九651 甲板洗はいかにも勇ましく面白いものである。

九1166図(圖) 聞けば、そなたは豊島沖

の海戦にも出ず、又八月十日の威海衛攻撃とやらにも、かく別の働なりきとのこと。母は如何にも残念に思ひ候。

十392 あたりは如何にも静かで、たまに散る落葉の音が、かさり／＼と聞える。

十984図 敵將張弘範如何にもして之を降らしめんとし、文天祥に命じていはく、〈略〉。」と。

十一54図 〈略〉、孔子大いに之をうれひ、如何にもして國家を治め、萬民の苦を救はんものと、廣く各國をめぐりて、用ひられんことを求めぬ。

十一3810 なたや鎌などでつる草を拂ひ、下枝を伐落して行くと、今まで兩方の枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて如何にも氣持よさうに見える。

十一551 船員等は、如何にも氣持よさうに泳ぎ廻つてゐたが、〈略〉。

十一1076図(圖) 中にも十三四ばかりの子供が、各國人の間にまじりてかひ／＼しく立働ける様を見ては、如何にもけなげに存ぜられ候。

十一1092図(圖) かゝる處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、其の有様は如何にも男らしく勇ましきものに候。

十二369図 久しく單調平凡な景色にあきてゐた私には、如何にも心地よく眺められます。

十二404 其の言方が如何にもをかしかつたので、言つた者も聞いた者も思はずにつこりした。

十二441 〈略〉、やさしい沈んだ調は、〈略〉、一轉すると、今度は如何にもものすごい、いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生にをどるやう、〈略〉。

十二669 ゴネリルの答は如何にも言葉巧みであつた。

いかばかり「如何許」(副) 2 如何ばかり

九1177図(圖) 母も人間なれば、我が子にくしとはつゆ思ひ申さず。如何ばかりの思にて此の手紙をしたゝめしか、よくよく御察し下されたく候。

十1097図(圖) 大兄をはじめ皆様方の御悲歎、如何ばかりかと御察し申し上げ候。

いかめ・し「嚴」(形) 1 いかめし

十二94図(圖) なぎさに立ちて昔をしのべば、そのかみ此處にいかめしく向ひあひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如く、〈略〉。

いかり「怒」(名) 3 怒

七1025 さうして清正のやせた姿、日にやけた顔を見ては、怒がとけて、涙ぐみました。

十二703 家來の中にはしきりに王をなだめた者もあつたが、王の怒はいよく／＼つて、もうどうすること

も出来ない。

十二72 怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた王は、我にもあらず荒野の末にさまよひ出た。

いかり「碇」(名) 1 いかり

七53 先づいかりをあげて港を出て行きますと、港に立並んでゐる人家は、だん／＼小さくなつて行きます。

いかりやすい「怒易」(形) 1 怒り易い「一ク」

十二65 生れつき烈しい氣性の上に、年とともに老の氣短さが加はつて、ちよつとした事にも怒り易くなつてゐた。

いかる「怒」(四・五) 4 怒ル 怒る「一ツ・一リ」

七30 獅子の目は火の如くにもえ、怒りてさけぶ聲には、百獸おそれてにげまどへど、蛇はます／＼強くしめつけたり。

八48 十三 鷲「略」。「略」、怒ツテキル肩、サキノ曲ツタ大キナクチバシ、「略」、何所ニ一分ノスキモナク、強ミガ全身ニミチミチテキル。

十二71 王は胸も張裂けんばかりに怒り、早速馬にむちうつて次女リガンの許に走つた。

十二86 土人等怒りて林蔵の頭を打ち、強ひて酒を飲ましめんとす。

いかん「如何」(名) 7 如何い／＼ころがけい／＼

九36 正義の念と愛國の情

とに死を恐れざるベルギー軍の防戦も、終に如何ともしがたく、「略」。

十89 陣頭に立つては百萬の敵を物とも思はぬ英雄も、病氣は如何ともすることが出来ない。

十97 我もとより之を知る。唯國家の危きを如何せん。」と。出でて元軍に當る。

十97 宋軍の大勢日々非にして、天祥の誠忠を以てしても如何ともすることあたはず。

十99 汝大勢の如何ともすべからざるを知つて、何ぞいたづらに苦しむことの甚だしきや。

十二125 しかし大勢は如何ともしがたく、危機は既に目前に迫つたので「略」。

十二129 拙者は、此の談判がよしどのやうに決着するにもせよ、さやうな事になれかしとは毛頭考へませぬが、大勢は人力の如何ともしやうのないもので――。

いかななく「遺憾無」(副) 1 遺憾なく

十二112 彼が稀代の天才はこゝにも遺憾なく發揮せられて、着々成功の域に進みしが、「略」。

いき「生」(名) ひながいき

いき「息」(名) 6 息ひといき

五45 今御名をさし上げます。日本武皇子と申したまへ。」

といつて、息がたえました。

七31 今や獅子の息はたえんとす。八84 母が「とよちゃんかね。丈夫であるよ。」といふと、信吉はほつと息をついて、「ありがたうございます。」と「略」。

十90 耕地整理のあとつくしく、並ぶ田の面に氷きらめき、新道つたひ車重げにひき來る馬のつく息白し。

十一125 一端に口を當てて息を吹きこむと、ぶうつとふくれる。

十二92 しかし彼は城外に出る毎に、杖にすがるあはれな老人や、息もたえだえの病人、さては野邊に送られる死者をまのあたり見て、益々世のはかなさを感じた。

いき「域」(名) 2 域ひめいじんぐういきりやくす

十二112 彼が稀代の天才はこゝにも遺憾なく發揮せられて、着々成功の域に進みしが、「略」。

十二137 我々は何時かは摸倣の域を脱して十分に獨創力を發揮し、「略」。

いき「意氣」(名) 1 意氣ひなまい

十二135 殊に徳川幕府二百餘年の鎖國は、國民をして海外に發展する意氣を消磨せしめ、「略」。

いき「意義」(名) 2 意義ひしんい

十二24 これはひつきやう文明の程

度が低いために、共同生活の意義が明らかでなく、随つて商業の本質が理解されず、「略」。

十二60 國旗は實に國家を代表する標識にして、其の徽章・色彩にはそれ／＼深き意義あり。

いきあたる「行当」(五) 1 行キアタル「一ル」

五52 雨水ノ流れル道ハ「略」。

「略」。低クテ廣イ所ニタマルト、池ノヤウニナリ、高イ所ニ行キアタルト、其所ヲヨケテ流レマス。

いきおい「勢」(名) 21 いきほひ 勢六81 敵は此のいきほひにおそれ、鐵のくさりで船をつなぎ合はせた。

七106 大明の軍勢四十萬、勢はげしくおしよせたるに、日本の大將小西行長は一たまりもなくにげ落ち、「略」。

七107 切つて／＼切りまくり、其の勢で明の都へおしよせ、四百餘州をやきはらはう。

八82 「ぜひ勝つてくれ。」

「負けたら村のはちになるぞ。」

「しつかりやつてくれ。」などと、口々に勢をつけてゐる。

八54 いよ／＼にいきさんがつき出した。始のうちは勢がよかつたが、間もなく腰がふらつき出して、「略」。

八73 アメリカ人は大きいこと、

「略」、何でも世界一になるやうに心掛けてゐるといひますが、何しろ大

した勢です。

八八三 落ちる時の勢が加はると、長い間には、思ひの外の事をする。雨だれでも石をうがつ。

九七四 殊に毎日のやうに降るにはか雨が、非常な勢で木を洗ひ草を洗つて通り過ぎた後の、あざやかな緑の世界は、〈略〉。

九五〇 會社では、幾臺もある精米機械が電力で勢よく廻り、〈略〉。

十六六 臺灣・樺太など、遠方より送り來れるもあれば、枯損するもの多かるべきに、ほとんど皆勢よく根づきたるは、誠に驚くべき事ならずや。

十八〇 昇降器がすさまじい勢で下りて行くので、目がまはりさうです。

十八一 室の中には、大きなポンプが幾つも、すさまじい勢で活動してゐます。

十九六 支那の宋朝の末、北方に元といふ國おこり、勢日々に盛にして宋の領地ををかし、かば、〈略〉。

十九七 然るに元軍の勢いよく盛にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝・皇后も遂に敵手に落ちぬ。

十一四 八 やがて鯨は再びはるか彼方に浮上つた。今まで勢よく引出されてゐた綱もやゝゆるんで來た。

十一五 二 しかしまだなかなか勢が強いので、綱を巻いてはのぼし、のぼしては巻いて、氣長くあしらつてゐる

うちに、さすがの鯨も〈略〉。

十三五 年久しく相争ひて互に勝敗ありしが、勾踐越の王となるに及び、呉の勢盛にして越軍大いに破れ、勾踐は呉に捕へられぬ。

十一一 九 上海は〈略〉、近時工業も次第に盛になつて、紡績・造船・製粉・製紙其の他の諸工場が勢よく黒煙を立ててゐる。

十一三五 四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるのが、目に見えるやうな氣がする。

十二六一 我が國の國旗は、最もよく我が國號にかなひ、皇威の發揚、國運の隆昌ながら旭日昇天の勢あるを思はしむ。

十二一七 安芳は太音に「西郷はどこに居る。」と叫んだ。其の勢に吞まれて兵士等は思はず道を開いた。

いきかえり「行遍」(名) 1 行きかへり

四八〇 學校の行きかへりに道草をくつたり、石をなげたり、生物をころしたりするやうな子どもは、大ていゝろくなものになりません。

いきかえる「生返」(五) 2 生きかへる「一ツ・ール」

五八一 かけよつて見て、宗任が「矢はあたつて居りませぬのに、狐は死んで居ります。」と言ふと、義家が「びつくりしてたふれたのだ。

ほつて置き、今に生きかへる。」と言ひました。

十八五 事務所の湯にはいつて服を改めると、更に生きかへつたやうな氣持がしました。

いきこみ「意氣込」(名) 1 意氣こみ六八〇 元の兵は一人も上陸させぬといふ意氣こみで、濱べに石垣をきづいて守つた。

いきたゝえる「息絶」(下) 1 息たゝえる「一エ」

十一六 二十メートルもある大鯨が今は全く息たえて、小山のやうな體を水面に横たへる。

いきづかい「息遣」(名) 1 息づかひ九一〇 しかし聞えるのはかすかな息づかひばかりであつた。

いきなり「行成」(副) 2 いきなり八八六 おとよは信吉の顔を見ると、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

十二一〇 これも逃しては大變と、いきなり右の手の蟲を口の中へ投込んだ。

いきのこる「生残」(五) 1 生残る「一ツ」

十二七 からうじてボートはかの難破船にたどり着いた。生残つた船員は涙を流して喜んだ。

いきもの「生物」(名) 1 生物四八〇 學校の行きかへりに〈略〉、生物をころしたりするやうな

子どもは、大ていゝろくなものになりません。

いきようよう「意氣揚揚」(副) 1 意氣揚々十二五 彼が探検船ビーグル號に乗込んで意氣揚々と本國を出發したのは、二十三歳の時である。

イギリス「地名」11 イギリス七三 其の中我が大日本帝國と、イギリス・フランス・イタリア及びアメリカ合衆國を世界の五大強國といふ。

七八二 輸出品の主なる物は、〈略〉、羽二重はフランス・イギリス等に送る。

十八七 輸出品の主なる物は、〈略〉などで、輸出先はアメリカ合衆國・支那・イギリス・フランス等である。

十一一七 昔イギリスの或大きな農場で、農場主が大勢の人の耕作するのを監督してゐた。

十二九 八 チャールス、ダーウインは今から百年餘り前イギリスに生れた。

十二三五 これはイギリスやフランスなどでは見られぬ光景で、私は今更ながらドイツ人の勤勉なのに驚きました。

十二六一 イギリスの國旗は、今日の形式を具ふるまでに幾多の變化を重ねたるものなり。

十二六一 元來イギリスは、インゲ

ランド・スコットランド・アイルランド三國の合同して成れる國家にして、略。

十二6510 王は其の治めてあるイギリスを三分して娘たちに與へ、略。

十二7311 そこでコーディリヤは夫に請うて共に家來を連れてイギリスに渡つた。

いきる「射切」(五) 1 いきる「ラ」

四666 赤い扇はかなめのきはをいきられて、空に高くまひ上つて、略。

いきる「生」(上二) 5 生きる「キ」

四653 よ一は心の中で、もしこれをいそなつたら、生きては居まいとかくごをきめて、略。

四697 略、今でも山がらのこゑをきくと、まだあれが生きて居るだらうか、足のきずはどうしたらうかと思はないことはありません。

六853 生きてかへつた者は數へる程しかなかつたといふ。

十一399 生きた枝でも枯れた枝でも、其のまゝにしておくと、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十二991 略 私になくなつた後も、めいゝが其の教をまじめに行ふ所に

私は永遠に生きてをる。

いゝ「行」(五) 228 イク いく 行く 行く 往く「カ・キーク・ク」

一183 サルガミヅヲツケニイキマス、ハチガチクリトサシマス。

一324 ヒケシガトンデイキマス。

一326 トビグチヲカツイデイキマス。

一333 ハシゴノアトカラマトヒガイキマス。

一337 マトヒノアトカラポンプガイキマス。

一447 オヂイサンハヤマヘシバカリニ、オバアサンハカハヘセントクニイキマシタ。

一501 イヌヲケライニシテイキマス、サルガキマシタ。

二216 略、アノ木ノ下ヘイツテミマセウ。

二301 略「ソレモヨイガ、ダレガソノスズヲツケニイクカ。」

二365 アタルト、モチハ白イトリニナツテ、バツトトンデイキマシタ。

二665 オヤ牛ヲソトヘ出スト、子牛モツイテイキマス。

二672 ツナヲツケナクテモ、ヨソヘハイキマセン。

三35 カラスガ二三バナキナガ

ラトンデイキマス。

三73 アルアサ、オカアサン「ヒヨコガカヘツタ。」トオツシヤツタノデ、見ニイキマス、略。

三123 お花はがくかうからかへると、おつかひにいつたり、にはをはいたりして、略。

三142 それでもまだあかちゃんがなくときには、略、だつこをしておかあさんのところへつれていきます。

三203 小二郎は正一とうらの山へわらびをとりにいきました。

三306 略 あねは手ばやくををたてて、小川の水で手をあらひ、「さ、いきませう。」ときやうだいは かくかうさしていそぎゆく。

三383 略 ぼくは右のちか道の方をいつてみます。

三417 略 そのおれいにりゆうぐうへつれていつて上げませう。

三424 略、かめはだんだん海の中へはいつていつて、まもなくりゆうぐうへつきました。

三495 ヤクバノヨコデ、川ガ二ツオチアツテ、マガリクネツテ、南ノ方ヘナガレテイキマス。

三595 ツカマヘヨウトシテ手ヲ出シマス、略「ジイツ」トナイデ、

トンデ行キマシタ。

三632 舟は風にゆられながら、土ぼしの方へながれて行きます。

三634 三人は舟とならんで、川のふちをかけて行きます。

三663 私ノウチヘキノフヲケヤガ來テ、略。アトヘ竹ノキレヲノコシテ行キマシタガ、ソノ中ニ略。

三731 私どもはあれを着て、をばさんの村のお祭によばれて行くのです。

三757 ソノ時カウモリガケタモノノ方ヘ行キマス、略トイツテ、ナカマヘ入レテクレマセン。

三763 又鳥ノ方ヘ行キマス、略「オ前ハケタモノダラウ。」トイツテ、アヒテニシマセン。

三802 ねえさんは遠いところへおよめに行つていらつしやるのです。

三906 まひながら松原の上をだんだん高く上つて、ふじの山よりも高い大空のかすみの中へはいつて行きました。

四92 谷ソコノ一ケンヤニモ、川ヲ下ツテ行ク小サナ舟ニモ、コクキガ出シテアリマシタ。

四123 島ニキタ白ウサギガ、ムカフノ大キナヨカヘ行ツテ見

タイトオモツテ、海ヲワタル
クフウヲシテキマシタ。

四153 白ウサギハ一ツニツト
カゾヘテ、ワタツテ行キマシタガ、
《略》。

四196 〇「ソレハカイサウダ。
早ク川ヘ行ツテ、シホケノナ
イ水デカラダヲアラツテ、ガ
マノホヲシイテ、ソノ上ニ
コロガレ。」

四206 ヨロコンデ大國主ノ神ノ
トコロヘオレイニ行ツテ、「オ
カゲサマデ、《略》。」ト申シ上ゲ
マシタ。

四222 私はきのふふろしきづつ
みを持つて、おつかひに行きま
した。

四254 《略》、にはとりよりさき
に、すずめがくらのやねへに
げて行きます。

四315 そこへぼちが來ました
ので、一しよに向ふの方へ行
つてみました、だれも居ませ
んでした。

四693 《略》、山がらはとび出して、
竹がきの上にとまつて、それ
からうらの山へとんで行つて
しまひました。

四714 シカシ二人トモ大セツナ
モノデ、ドナタノウチニモ、ナ
カマノモノガ大テイ行ツテ居
マス。私ドモハ何ト何デセウ。

四748 まことによくはたらく人
たちでした。《略》、くはやかま
を持つてたんぼへ行きました。

四753 《略》、お星様が光りはじめ
るころになつて、小さなわらぶ
きのうちへかへつて行きまし
た。

四782 それからどこへ行つて
居たか、村にもひさしく居ませ
んでした。

四793 《略》、送つて行く人が
「此の人も一本杉の外にない
てくれるものがなくなつた。」
といひました。

四925 くだうが東へ行けば、兄
弟も東へ行き、西へ行けば、
西へ行き、長い間つけねらひま
した、が、《略》。

四926 くだうが東へ行けば、兄
弟も東へ行き、《略》。

四926 くだうが東へ行けば、兄
弟も東へ行き、西へ行けば、
西へ行き、《略》。

四927 《略》、西へ行けば、西へ
行き、長い間つけねらひました
が、手を出すすきはありませ
んでした。

四935 かたきのくだうもよりと
ものおともをして行つて居ま
す。

五143 四月二十二日 日曜 晴 朝、
おさらひをすましてから、春子とつ

くしをつみに行きました。

五227 おひるすぎおかあさんにつれ
られて、買物に行きました。

五262 ツバメハトブコトガ上手ナ鳥
デ、《略》、矢ヨリモ早クトンデ行キ
マス。

五271 サウシテダンノスバシクナ
ツテ、《略》、南ノ國ヘカヘツテ行キ
マス。

五354 遠足のしたくをして學校へ行
くと、もう級のものが大分來てゐて、
先生もお出でになつてゐました。

五358 平尾山のすそへ行くと、わら
びやぜんまいが、すつかり葉になつ
てゐました。

五366 大道へ出て、となり村の入口
へ行くと、道ばたの立石にさるが三
匹ほつてありました。

五381 大平橋を渡つてから左へをれ
て、松山の下へ瓦やきを見に行きま
した。

五384 此所を出て、となり村の學校
の前へ行くと、《略》。

五508 カラカサニ降ル雨ガ四方へ流
レオチルヤウニ、水ハ低イ方ヘ低イ
方ヘト流レテ行キマス。

五512 庭ヘ降ル雨モ、庭ノ高イ所カ
ラ、低イ方ヘ流レテ行キマス。

五523 カウシテ流レル水ハ、ミゾカ
ラ小川ヘ、小川カラ大河ヘ、流レ
くテ海ヘ行キマス。

五535 それで山へ行くにも、へうた

んを腰に着けてゐて、《略》。

五623 〇あれく、虹がきえて行く。
五632 作太郎は父につれられて、は
じめて町へ行きました。

五655 〇「あ、町の方へ馬車が二だ
いけて行きます。」

五676 〇少しまはり道だが、となり
村の用水池を見て行くことにしよう。

五754 人の一心といふものはえらい
もので、三度目に土手の工事はうま
くいつた。

五903 時々道を人にきいて來た者と
見えて、「《略》。」とひとりごとを言
つて行く者があります。

五924 郵便物をあつめる人は、毎日
きまつた時刻に來て、私のおなかを
明けて持つて行きます。

五987 熊が來て、《略》、其のまま行
つてしまひました。

五993 〇熊が君の耳の所へ口を持つ
て行つたやうだが、何か言つたのか。

六117 今日ほうちの者がみんなたん
ぼへ稲こきに行きました。

六23 おちいさんが庭にほしてある
もみをかへしていらつしやると、卵
買が來て、卵を七つ買つて行きまし
た。

六24 今どこのうちへ行つて見ても、
俵の山が出來てゐます。

六37 私がたんぼへお湯を持つて行
つてくると、おちいさんが庭で腰を
のばして、「もうお晝かな。」とおつ

しやいました。

六14 4 〈略〉、昨日のお晝すぎ、にい
さんときのご取に行きました。

六16 3 だん／＼上つて行くと、〈略〉
木びきの力蔵さんがうたをうたひな
がら、大きなのこぎりで板をひいて
ゐました。

六18 3 行つて見ますと、なるほど少
し早すぎましたが、それでも、小さ
なしめちが列を作つて出てゐました。

六19 8 うちよせて来る波は、岩をか
み、小じやりをとばしては、さあつ
と引いて行きます。

六32 2 マツ先二出アツタノハ牛乳
配達デ、車ノ音ヲ高クサセテ、ハシ
ツテ行ツタ。

六32 7 カラノ荷車ヲヒイテ行クノハ、
八百屋ヤサカナ屋デ、買出しニ行ク
ノラシイ。

六32 8 カラノ荷車ヲヒイテ行クノハ、
八百屋ヤサカナ屋デ、買出しニ行ク
ノラシイ。

六33 1 少シ行クト、呉服屋ノ小ゾウ
ガ表ヲハイテキタ。

六33 3 自轉車ガ後カラ來テ、カケヌ
ケテ行ツタ。

六35 2 弓は潮に引かれて流れて行き
ます。

六47 8 翌年ノ春ニナツテ、卵カラカ
ヘツタ蛙ハ、川ヲ下ツテ海ヘ行ク。

六57 8 〈略〉、それから頼朝の御殿へ
行つて、うばと二人で御ほうこうを

ねがつたのでございます。

六67 1 或物持の所へ行くと、下男が
まだ使へる小縄を捨てたと言つて、
主人がひどくしかつてゐた。

六99 1 園 あの學校がたつた時、う
ちの畠にあつたのを、死んだあの子
が掘取つて、かついで行つて植ゑ
たのだ。

六99 6 園 あの子がいくさに行く時に、
學校の前でふりかへり、「〈略〉。」

六101 3 池のはたへ行つて見ると、し
やうぶが小指程に芽を出してゐまし
た。

六101 5 うちの人はみんな知らずに居
るから、一つ取つて行つて見せよう
と思つて、手を出すと、〈略〉。

六102 7 こんなことを思ひ出して垣根
の方へ行くと、しやくやくが赤い芽
を出してゐました。

六104 8 園 〈略〉、千年もたつたかと思
ふ老木の下へ行つた時には、何とな
く心持がかはつて、一そうありがた
くかんじた。

六107 7 園 参拜をすましてから、二見
浦を見に行つて、おみやげに貝細工
を買つた。

七9 5 大川を下つて行く舟の中はう
すら寒い。

七21 1 すると、〈略〉、落ちて行く潮
にさそはれて、賊の軍船はことごと
く沖へ流れてしまひました。

七24 9 此のおばあさんにむすこが一

人あるのださうだがずつと前から南

アメリカへ行つてゐるといふことだ。
七25 2 茶屋から二三町行つた所の右
手に、まんぢゆう笠をふせたやうな
塚がある。

七39 8 園 十日ばかり前に、私も中
學の二年生が修學旅行に行つて、
〈略〉。

七50 2 私ハ時々其ノ仕事場へ行ツテ
見マシタ。

七51 6 其ノ時分マデ、ヨソヘ奉公ニ
行ツテキタ若イムスコガ、今デハ其
ノ後ヲツイデ、〈略〉。

七53 7 園 先づいかりをあげて港を出
て行きますと、港に立並んでゐる人
家は、だん／＼小さくなつて行きま
す。

七53 9 園 〈略〉、港に立並んでゐる人
家は、だん／＼小さくなつて行きま
す。

七55 5 園 何萬とも知れないいるかが、
はね上つてはおよぎ、はね上つては
およぎして行くのを見ることもあり
ます。

七58 5 園 一たい船にはらしんぎとい
ふ物があつて、それで方角をとつて
進みますから、いくらきりが深くて
も、まるでちがつた方へ行くとやうな
ことはありません。

七64 4 此の時見すばらしいなりをし
た一人の男が、〈略〉、一人で川へは
いつて行きました。

七64 8 かの入夫は、少ししてから、
何の氣もなく、先程渡賃をあらそつ
た所へ行つて見ますと、革の財布が
落ちてゐました。

七65 2 これはあの人落して行つた
にちがひないが、〈略〉。

七65 9 三四里行つて、大きな峠へ
かゝりますと、〈略〉、かけ下りて來
る者があります。

七68 8 園 まして人通の多い渡場で落
しましたから、たとひとんで行つて
見た所で、もうあるまいとは思ひま
したが、〈略〉。

七71 1 園 房州へ出かせぎに行つて、
れふを致して居りましたが、〈略〉。

七92 3 さうして、「こいつ、かなつ
んぼだな。」と言つて、みんな出て
行つてしまひました。

七110 9 園 「アシタノアサ一パンノキ
シヤデタツテイキマス。」

七111 4 園 「アシタ一パンノキシヤデ
イキマス。」

八5 4 二匹はいちもくさんにかけて
行つたが、間もなくかはいらしいの
を一匹つれて來た。

八9 6 今度の競走も五分々々に進ん
で行つたが、中程まで行つた時、信
作の馬はつまづいて、前足を折つた。

八9 7 今度の競走も五分々々に進ん
で行つたが、中程まで行つた時、信
作の馬はつまづいて、前足を折つた。

八13 5 徳川家康が幼時家來に負はれ

て、安倍川原へ石合戦を見に行つた。
 八137 見物人は争つて、多勢の方へ行つたが、家康は小勢の方へ行けど命じた。

八137 見物人は争つて、多勢の方へ行つたが、家康は小勢の方へ行けど命じた。

八169 日が暮れてから、長四郎がそつと屋根つたひに行つて、もう少しで雀の巢へ手が届かうとした時、ふみ外して軒下へどうと落ちた。

八296 太郎は毎日炭を焼く煙を遠くに見てゐるが、まだ一度も其所へ行つて見たことがない。

八338 すると或夜ゆめの中に、明日何山の何所へ行けば、望のものをさづけてやるといふ神様のお告がありました。

八342 さうして教へられた場所へ行つて見ますと、望の赤子は居ませんでした、(略)。

八492 スナハチ一間餘モアルツバサヲハツテ、數分ノ間羽バタキ一ツセズ、空中ヲノシテ行ク。

八498 (略)、マレニハ庭先ニ遊ンデキル子ドモヲサラツテ行クコトモアル。

八682 日本人は八萬人餘も居て、子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、英語で勉強しますが、(略)。

八684 日本人は八萬人餘も居て、

(略)、歸つて來ると、又日本人の立てた學校へ行つて、日本語で學問をしてゐます。

八813 役場のひけないうちに行つて來よう。

八846 それではちよつと行つて参ります。

八851 (略)「お前も一しよに行つてお出で。」

八854 學校へ行つて案内をこふと、小使が出て來た。

八861 小使は僕等を應接室へ通して出て行つたが、間もなく黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。

八918 (略)「はい、うれしうございませう。もう何所へも行つて下さいませう。」

八922 (略)「もうくゝ何所へも行きはしない。」

八936 それから先生は、僕等を一年生の教室に連れて行かれた。

八1006 日は食物を見ても、見ないふりをし、手は食物を口へ入れることを止め、足は食堂へ行くことを止めました。

八1047 マツチの製造所へ行つて見ると、職工が大勢居つて、それ／＼手分をして働いてゐる。

八1121 そこで大將が四五歳の時から、大將の父は(略)泉岳寺へよく連れて行つた。

八1132 すると大將の父は(略)、大將を井戸端へ連れて行つて、着物をぬがせて、頭から冷水を浴びせかけた。

八1147 其の時大將は江戸から大阪まで、馬やかごに乗らず、兩親と共に歩いて行つた。

九86 青・緑・紅・紫、目のさめるやうに美しい魚の群が、珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。

九131 (略)、鶏はあわてて其の方へ行く。

九231 (略) しかし此の農學といふ學問は、種々様々の事を、實地と學理の兩方から調べて行かねばならぬので、(略)。

九3010 瀧の上手にかけた石橋を渡り、木立の深いゴート島に行つて、もうくゝと立ちこめる水煙の間から近く瀧をながめるのもよく、(略)。

九349 (略)「此の坂を下りて、あの清水の所まで行くと、石井君のうかが見えるはずだ。」

九356 (略)、大きな青大將が、向ふの水たまりの所をうねつて、のろのろと草の中にかくれて行く。

九4910 僕は今日學校から歸るとすぐ、おとうさんのお手紙を持つて、精米會社へお使に行つて來ました。

九554 (略) それにあの人の事だから、決してあせらず、一軒一軒と得意先をまして行つて、後には表通へ店を

出すまでになつた。

九585 仕事は水入らずの三人の手で、ずん／＼はかどつて行く。

九606 鶏が麥のこぼれを食ひに來ては、追はれて逃げて行く。

九627 (略)、傳令員は號笛を吹きながら、「總員起し。」と呼んで、つり床の間をぬつて行く。

九655 (略)、ブラシを持った數十人の水兵が、甲板をこすりながら頭を並べて進んで行く。

九674 朝日にかゞやく軍艦旗が、海風にひらめきながら、しづ／＼と上つて行く様は、實におごそかなものである。

九689 紅葉と温泉で名高い塩原へ行くには、此所で下りるのだ。

九716 (略)「仙臺から三つ目の松島驛で下りるのだ。歸りに見物して行かう。」

九798 となりでは、(略)、星野君が根氣よくほつて、ほつたいもを一つ一ついいねいにならべて行く。

九881 (略) あの柄でない方の端にある二つの星を結びつけて、其の線を、ひしやくの口の向いてゐる方へのぼして行くと、今結んだ二つの星のへだたりの五倍ばかりのところに、かなり大きい星があるだらう。

九925 (略) ところがめぐみ深いジューピターといふ神様が、(略)、すぐに親子の者を天へ連れていつて、大熊座

と小熊座になさつたのださうです。

九37 にいさんのお友だちの岡田さんが旅行からお歸りになつたと聞いて、今日にいさんと二人で遊びに行きました。

九40 幅は二三町、長さは一里に近く、行つても行つても眞白です。

九41 幅は二三町、長さは一里に近く、行つても行つても眞白です。

九42 蛙がぼかんくんと飛込んですうつと泳いで行く。

九43 午後には弟と天神山へきのこ取りに行くのだ。

九44 味方は其の正面から眞一文字に進んで行く。

十810 ようだいは時々刻々に悪くなつて行く。

十168 略、今日は朝から、義雄君に案内してもらつて見物に行きました。

十1710 私の行つた時には、もう其所にすき間も無く子馬がつないでありました。

十259 おうさん、早く助けに行きませう。

十264 窓、さあ、行きませう。命を捨ててかゝつたら、救へないことはありますまい。

十383 父は毎日、兄や木びきの力蔵さんと、朝早くから行つて、夕方おそくまで働いてゐる。

十384 今日は私もついて行つて見た。

十414 やがて父は、鎌を手にして雑木のやぶへはいつて行つた。

十433 略、高いく青空を、ひわの一群が身輕さうに飛んで行く。

十479 さうして手當り次第に、何でもひつつかんで行つては黨の中へ投入んだ。

十509 銀行といへば、おうさんは、何時か銀行へ行つてお金を預けて來るとおつしやいましたね。

十5510 普通傳書鳩を使用する方法は、一定の飼養所から他の土地に連れて行つて、飛歸らせるのである。

十591 あ、あのかはい、鳩が、略、矢のやうに目的地へ向つて飛んで行くのを見たならば、何人も其のかしこさと勇ましさに感心しない者はあるまい。

十631 窓 此の大雪、まだ遠くは行かれない。

十781 略、學校へ行く途中などは、寒いといふよりもいたいやうに感じます。

十802 昇降器がすさまじい勢で下りて行くので、目がまはりさうです。

十808 此處から方々へ坑道が通じてゐて、廣い坑道には、電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

十8010 坑道を少し行つて、ポンプ室の前に出ました。

十8110 安全燈をたよりに歩いて行く

と、不意に足もとからねずみが一匹飛出しました。

十845 炭車が一ぱいになると、馬方がそれを馬に引かせて、電氣機關車の通ふ道まで運んで行きます。

十861 我が國で出來る品物ばかりでは用が足らない。

十867 米は我が國でずるぶん多くとれるが、全く外國米の足しまへを受けぬわけには行かない。

十889 輸出入の額の増加して行くのは國家が次第に盛になる印である。

十1022 それから少し行くと、うつぼかづらといふものがある。

十1127 一隻の捕鯨船が、勇ましく波を切つて進んで行く。

十1195 地圖を便りにして進んで行く

と、山畑の其處此處に野梅の咲きこぼれてゐるのも面白く、略。

十142 今かりに一時間五十里の速度で飛ぶ飛行機に乗つて行つたとしても、太陽に到着するには八十七年かゝるのである。

十1142 今日、のぶ子さんのうちへ始めて遊びに行きました。

十1386 略、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

十1388 なたや鎌などでつる草を拂ひ、下枝を伐落して行くと、今まで

兩方の枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて如何にも氣持よさうに見える。

十13910 生きた枝でも枯れた枝でも、其のまゝにしておくと、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十14010 植林は貯金のやうなもので、植ゑてさへおけば、年々太つて利息が附いて行く。

十1413 略、いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。

十1533 集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不純な物を取り除き、略。

十1644 略、ものすごいなり聲を立てながらのそりくときき廻ると、二間幅ぐらゐに耕されて行く。

十1653 略、新式の農具を用ひ、新式の方法によつてどしどし土地を開いて行く。

十17010 或夏の半ば、宣長はかねて買ひつけの古本屋に行くと、主人は愛想よく迎へて、「略。」といふ。

十1729 宣長は、略、後を追つたが、松坂の町はづれまで行つても、それらしい人は見えない。

十17210 次の宿のさきまで行つてみたが、やはり追ひつかなかつた。

十1838 砂の上を歩いて行くと、足の裏が焼けるやうだ。

十一843 やがて「進め。」の號令と共に、三十人の一組は二列になつて順々に水の中へとはいつて行く。
 十一846 だんく沖の方へ進んで行く、水の色はものすごい程濃い紺色だ。
 十一862 僕も急に元氣がなくなつて、一所に船上らうかと思つたが、「略」自ら勵まして進んで行つた。
 十一868 これに力を得て、又一しやうけんめいに泳いで行く。
 十一967 「略」、父に對して是非學校に入れてもらひたいと願つたけれども、父は學校へ行つて時間をつぶすよりも畠に出て働いた方がよいといつて、なか／＼許してくれなかつた。
 十一9810 熱心なリンカーンは、書物を持つてゐる人の所には遠近を問はず借りに行つた。
 十一1004 翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、「略」と願つた。
 十一1184 園 ジョージ、早く行つて農場の門をしめろ。
 十一1187 ジョージがとんで行つて門の戸にくわんぬきをさすが早いか、騎馬の人たちはもう門の外まで乗りつけた。
 十一1217 昨日橋本君と一しよに町はづれのガラス工場を見に行つた。
 十二124 此の時にはもう三番目の蟲はどこへ行つたかわからなかつた。

十二218 ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。
 十二219 あれは港の親船へ蜜柑を運んで行くのであらう。
 十二383 園 ほんたうに一度でもよいから、演奏會へ行つて聴いてみたい。
 十二389 ベートーベンは急に戸をあけてはいつて行つた。
 十二402 園 あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふお話をしたね。
 十二728 父の身の上を案じながらフランスに行つたコーデリヤは、やがていたましい報知を得た。
 十二7810 そこで数そのの船に分乗した漁夫が、えんや／＼と掛聲を掛けながら身網を一方からたぐつて行く。
 十二942 彼は遂に「略」と決心して、或靜かな森へ行つた。
 十二1042 豊前の中津から南へ三里、激流岩をかむ山國川を右に見て、川沿の道をたどつて行くと、左手の山は次第に頭上にせまり、「略」。
 十二1269 安芳がはいつて行かうとする、門を守つてゐた兵士等が「略」行くてをさへぎつた。
 イグアススー「地名」2 イグアススー
 十一1043 園 其の中に有名なるアマゾン河や、イグアススーの大瀑布の壯觀を寫したるものもこれあり候。
 十一1052 園 次にイグアススーの瀧は、ブラジル國と隣のアルゼンチン

國との境にある大瀑布にて、「略」。
 イグアススーおおかき「地名」1 イグアススー大瀧
 十一102 園 イグアススー大瀧
 いくかさね「幾重」(名) 1 幾かさね
 八529 二目目で小さなおそなへが幾かさねか出来、三目目からは、のし餅が出来た。
 いくさ「軍」(名) 9 いくさ軍
 四434 天じやうをはらふ、たたみをたたく、ひさしうらのくものすを取る、勝手のすすをはらふ、まるでいくさのやうでした。
 六503 園 ろりのはたに縄なふ父はすぎしいくさの手がらを語る。
 六698 又いくさのあつた時には、よろひかぶとの勇ましいなりをした武士の刀や、なぎなたの光も、いくたびとなく此の川の水にうつつたこととでございませう。
 六996 園 あの子がいくさに行く時に、學校の前でふりかへり、「略」。
 七201 さて、心の中に、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をほろぼさうとしてゐます。
 九1149 園 軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、其の有様は何事だ。
 九1167 園 何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。
 九11610 園 一人の子が御國の爲に

さに出でし事なれば、定めて不自由なる事もあらん。
 十一249 園 されども不意を討たれし俄の軍に、清秀等の奮戦其のかひなく、「略」。
 いくすじ「幾筋」(名) 1 イクスズ
 七289 園 淀川ハイクスズニモ分レテ海ニソ、ゲ。
 いくせい「育成」(サ変) 1 育成する「一スル」
 十二1345 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、自ら國民の性質を穩健ならしめ、自然美を愛好するやさしい性情を育成するのに與つて力があつた。
 いくせん「幾千」(名) 1 幾千
 十一1257 園 しかも其の巻數幾千の多きに上り、これが出版は決して容易の業に非ず。
 いくせんねん「幾千年」(名) 1 幾千年
 十一45 園 支那幾千年の人物中、大聖として長く後人に敬はれ、徳化の尚今日に著しきもの、孔子に及ぶはなし。
 いくそう「幾艘」(名) 1 いくそう
 七99 川口近くになると、潮干狩の舟がいくそうもよつて來た。
 いくた「幾多」(副) 4 幾多
 十一93 租界には皮膚の色の違い、言語・風俗の違つた幾多の人種が入交つてゐるので、「略」。

十二617 図 イギリスの国旗は、今日の形式を具ふるまでに幾多の變化を重ねたるものなり。

十二105 僧は「略」、たま／＼此の難處を通つて幾多のあはれな物語を耳にし、どうにか仕方はないものかと深く心をなやました。

十二133 忠孝は實に我が國民性の根本をなすもので、之に附隨して幾多の良性・美德が發達した。

いくだい「幾台」(名) 2 いくだい幾臺

五102 4 汽車の發着時刻が近づく、自動車・馬車・人力車がいくだいとなく、入口・出口によつて來ます。

九50 1 會社では、幾臺もある精米機械が電力で勢よく廻り、「略」。

いくたび「幾度」(名) 2 いくたび

六69 7 京都は長い間の都ですから、「略」、きれいな着物を着て、牛車に乗つたお姫様方の姿を、此の川の水はいくたびとなくうつしたことでございませう。

六70 2 又いくさのあつた時には、「略」、なぎなたの光も、いくたびとなく此の川の水にうつつたことでございませう。

いくだん「幾段」(名) 2 幾段

十二20 1 今登つて來た方を振返つて見ると、幾段にも幾段にもきつき上げられた山畑には、蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。

十二20 2 今登つて來た方を振返つて見ると、幾段にも幾段にもきつき上げられた山畑には、「略」。

いくつ「幾」(名) 8 イクツ いくつ幾つ

二30 6 図「オートサン、モウイクツネトラ、オ正月デスカ」

二32 6 図「オ正月ガクルト、オマヘハイクツニナリマスカ」

四27 5 米屋ごふく屋「略」、そのほか大きな店はいくつも電とうをつけました。

八70 2 図 此所は工業地で、煙突の煙で空は眞黒だが、大きな公園が幾つもあるから、健康には害がなさうです。

九74 8 陸中と陸奥との境にある幾つかのトンネルをくぐると、廣い原野がだん／＼に開けて來る。

九101 9 空には赤とんぼが幾つともなく飛んでゐる。

十81 1 室の中には、大きなポンプが幾つも、すさまじい勢で活動してゐます。

十101 10 たくさん咲いてゐる中で一番美しいのは、たれ下つた莖に、幾つも咲いてゐる薄紅色の花である。

いくど「幾度」(名) 6 幾度

七68 3 かの男はゆめかとばかり喜んで、財布を幾度かいたゞきました、目からはなみだがひつきりなしにこぼれてゐます。

八95 5 信吉は「略」、應接室に待つてゐた娘の手を取つて、幾度も先生におじぎをした。

九15 3 図 出がけにとやの方を見れば、めんどりはせはしげに幾度か土をかきちらして、餌をあさるにいそがしく、「略」。

十91 4 ナムギナガゴメナガタマゴ。ナムギナマモメナタマゴ。幾度もくりかへしてゐる中に、太郎は生麥生米生卵と、早口にすら／＼言へるやうになつた。

十125 9 図 村長は「略」、幾度の改選にも重ねて選舉せられ、既に二十餘年勤續せり。

十二97 8 殊にデーバダッタは、いとこの身でありながら、かねてから釋迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。

いくとう「幾頭」(名) 1 幾頭

十一24 1 図 時は天正十一年四月二十日のあかつき、「略」、幾頭かの馬をひきて余吾湖のほとりに下り來れる七八人の兵卒あり。

いくとせ「幾年」(名) 5 幾年

七32 7 図 かくて幾年かすぎし後、武士は海をこえてふるさとへ歸ることとなり。

八35 6 昔江戸で、夫に死なれた女が、乳飲子を里子にやつて奉公に出ました。幾年かの後、里子を返してもらはうとすると、「略」。

十一81 10 図 幾年こゝにきたへたる鐵より堅き腕あり。吹く潮風に黒みたる はだは赤銅さながらに。

十二107 4 かくて又幾年かたつうちに、穴はだん／＼奥行を加へて、既に何十間といふ深さに達した。

十二108 9 かうして又幾年か過すうちに、村の人々は此の仕事にあきて來た。

いくにち「幾日」(名) 3 幾日

九28 3 信季は其の後幾日かたつて、とう／＼此の宿でなくなつた。

十一91 10 僕はよく年寄の人が新の幾日とか舊の幾日とかいふのを思ひ出して、其の事を父に尋ねた。

十一91 10 僕はよく年寄の人が新の幾日とか舊の幾日とかいふのを思ひ出して、其の事を父に尋ねた。

いくにん「幾人」(名) 1 いく人

六29 4 図 人間があなた方を生けどりにするには、いく人かで力を合はせるではありませんか。

いくひやくにん「幾百人」(名) 1 幾百人

十二104 8 「略」、昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。

いくひゃっぽん「幾百本」(名) 1 幾百本

十118 7 社殿の後に廻ると、其處は廣々とした梅林で、幾百本とも知れない古木の梅が咲續いてゐる。

いくぶん 「幾分」(副) 1 幾分

十二74 4 やがて眠から覺めた王は、幾分氣も靜まつたのか、「略」。

いくぶん 「幾分」(副) 3 イクラモい
くらかも

いくまん 「幾萬」(名) 1 幾萬

十37 1 米國が此の運河を造るに成功したのは、略。衛生の設備をよくして危険な病氣を根絶し、幾萬の従業者の健康をはかつた事や、略。

いくら (名) 7 イクラ いくら

二52 5 コンド ハイクラ ハヒヲ
マイテモ、スコシモ 花ガサキマ
セン。

四62 5 いくら弓の名人でも、こ
れを一矢でいおとすことは、
なかなかむづかしさうです。

七58 4 園 一たい船にはらしんぎとい
ふ物があつて、それで方角をとつて
進みますから、いくらきりが深くて
も、まるでちがつた方へ行くやうな
ことはありません。

七58 6 園 又夜はいくら暗くても、星
が出てあれば、それにたよつて方角
を知ること出来るし、略。

十46 1 しかしいくら工夫をこらして
も、目ざす柿の色の美しさは出て來
ない。

十一19 1 例へば、借りた金を、返す
約束の日が來ていくら催促されても、
返さない人がある。

十二94 6 次第にやせ衰へて、物にす
がらなければ立てない程になつた時、
彼はいくら苦行をしても更に効的な

いことを知った。

八15 4 園 「殿はまだお若くて、これ
から功名をお立てになる折はいくら
もございます。」

八72 2 園 高い建物のあることは世界
第一で、十階・二十階の家はいくら
もあります。

九16 6 保護色ノ例ハイクラモアル。

いけ (生) (名) 1 けはいけ

いけ (池) (名) 18 イケ 池 けかわ
いけ・ようすい いけ

二23 6 園 ドコカラ キタノカ、
トンデ キタ木ノハ、ヒラヒラ
マツテ キテ、イケノ上ニオチ
テ、略。

三55 2 あるとき、雨のふる日
に、たうふうがにはへ出て、池
のはたを通りますと、略。

三67 3 池ノ水 デタメシテミル
ト、ウマク 出來テ キテ、高ク上
ゲルト、ヤネノ上 マデ トドキ
マス。

五51 8 低クテ廣イ所ニタマルト、池
ノヤウニナリ、高イ所ニ行キアタル
ト、其所ヲヨケテ流レマス。

五67 2 園 「私どもの村では、どうし
て池を掘らないのでせう。」

五71 8 園 「そんな大きな池がいるだ
らうか。」

五74 1 略、其の年のつゆに、又土

手がくづれて、池のたまり水が村の
中へおし出した。

五75 5 一雨毎に池の水はふえた。

五75 7 一冬こして、春には池の水が
一ぱいになつた。

五76 2 そこで一年ましに田がふえた
が、をしいことに、庄屋は池が出來
上つた年の冬、死んでしまつた。

六101 3 池のはたへ行つて見ると、し
やうぶが小指程に芽を出してゐまし
た。

七80 9 エビノピンノハネタリ、カ
ニノ横ニハツテアルク様子ハ、池ヤ
川ニスムモノトチガハナイガ、略。

八62 それは氏子の五箇村から、子
どもの騎手を一人づつ出して、社の
横の池のまはりで競走させて、略。

八99 信作はつるりとすべり落ちて、
其のはずみに、ころ／＼と池の中へ
ころげこんだ。

十47 園 前には横長き池をひかへ、
池のめぐりは見渡す限りの木立・く
さむらにて、さながら別天地に遊ぶ
思あり。

十48 園 前には横長き池をひかへ、
池のめぐりは見渡す限りの木立・く
さむらにて、さながら別天地に遊ぶ
思あり。

十118 1 池にかけてある二つの太鼓橋
を渡り、繪馬堂の前を通つて樓門を
くぐると、本殿の前に出る。

十125 2 園 又池・沼を利用して鯉・鮒

を養ふことも盛にして、大てい二年
毎に之を賣るに、其の利益少しとせ
ず。

いけどり 「生捕」(名) 3 生けどり

六27 7 園 「どうも分らないのは、あ
の弱い人間がわれわれの仲間を生け
どりにすることだ。」

六29 3 園 人間があなた方を生けどりに
するには、いく人かで力を合はせ
るではありませんか。

六83 3 味方は後から／＼とつゝいた。
さん／＼に切りまくつて、其の船の
大將を生けどりにして引上げた。

いけどる 「生捕」(五) 1 生けどる

七106 3 園 「略、もはや朝鮮に日本
の武士は一人も居らぬ。生けどつた
者は皆かへせ。命ばかりは助けてや
らう。」

いけみず 「池水」(名) 1 池水

十二99 7 園 興福寺は伽藍半ば廢れた
れど、尚三重五重の塔、猿澤の池水
に影をうつして南都第一の美觀たり。

いける 「行」(下二) 8 イケル い
ける 行ける 《一ケ》

二35 7 園 「モチハタイセツナ オ米
デコシラヘタモノ デスカラ、
イテハイケマセン。」

二61 7 園 イイエ。サウウドニノン
デハイケマセン。

四49 2 園 さうひつぱりあつては
いけません。まん中へふせてお

きなさい。こんど取つた人がそれも取ることにします。

六155 〇「あゝ、それは紅茸だ。毒だよ。其の手でぐみをたべてはいけない。」

七396 〇旅順へは汽車で一時間で行けます。

八779 〇「明日にでもなつて、雪がはれてからではいけませんか。」

十1018 〇熱帯地方から持つて來たのだから、かうして年中六七十度以上の暖さの處に置かなければいけないのだ。

十二565 〇「此處で遊んではいけない。」

いけん「意見」(名) 1 意見 いごいけん

十二893 此處でも同様の形式で討議し、兩院の意見が一致すれば、最後に議決した議院の議長から國務大臣を経て奏上する。

いご「以後」(名) 1 以後

十一769 其の後〈略〉、面會の機會は松坂の一夜以後とうく來なかつた。

いこう (名) ↓いこう

いこまやま「生駒山」(地名) 1 生駒山

十二1017 〇佐保・佐紀の連岡に北を限り、春日・高圓の山々を東に、矢田山・生駒山を西にひかへて、〈略〉。いころす「射殺」(五) 4 イコロス

いころす 射殺す 《一サ・一シ・一ス》

二344 ユミヲイルコトガスキデ、トリヤケダモノヲイコロシテ、オモシロガツテキマシタ。

五797 いころすのかはいさうだと思つて、兩耳の間をねらつて、頭の上をすれ／＼にいました。

九918 〇「狩人になりましたが、或日大熊を見つけたので、それを射殺さうとしました。」

九921 〇「アルカスはそれと知りませんから、あぶなく親身の親を射殺すところでした。」

いざ (感) 3 いざ

七268 武人は昔から之を愛養して、いざといふ時には、それに乗つて出かけた。

九27 〇朝日は出でぬ、花やかに。いざ、起出でて、勇ましく 我もはげまん、今日の業。

十二1310 随つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、又其の誇を永久に持續しようとする心掛けも出來て、いざといへば、舉國一致國難に當る氣風を生じた。

いさぎよい「潔」(形) 2 潔い 《一イ》

十二1378 我が國民には潔いこと、あつさりしたことを好む風がある。

十二1382 あつさりしたこと、潔いことを好む我が國民は、其の長所とし

て廉恥を貴び、潔白を重んずる美德を發揮してゐる。

いざなう「誘」(四) 1 いざなふ 《一ヒ》

十987 〇「我、國を救ふことあたはず。いづくんぞ人をいざなひてそむかしめんや。」

いさまし「勇」(形) 5 勇まし 《一シ・一シキ・一シク》

九27 〇いざ、起出でて、勇ましく 我もはげまん、今日の業。

九364 〇「勇將レマンは、〈略〉ドイツの大軍を物ともせず、勇ましく防ぎ戦ひたり。」

十1299 〇あゝ、海の戰士の勇ましき誕生。

十一1093 〇かゝる處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、其の有様は如何にも男らしく勇ましきものに候。

十二817 〇船頭勇まし、此の潮筋を落し漕ぎゆく、木の葉舟。

いさましい「勇」(形) 13 勇マシイ 勇ましい 《一イ・一ク》

六701 又いくさのあつた時には、よろひかぶとの勇ましいなりをした武士の刀や、なぎなたの光も、いくたびとなく此の川の水にうつつたこと

でございませう。

八489 マシテ自由ノ天地ニ居テ、自在ニ空ヲトブ様ハ、實ニ勇マシイモノデアル。

九625 此の號令で、朝の静かさが忽ち破られ、起床ラツパは勇ましくひゞき、〈略〉。

九652 甲板洗はいかにも勇ましく面白ものである。

九753 黒・白・茶色、大小さまざまの馬が、林のかげや沼のほとりを元氣よくかけ廻つてゐる様は、實に勇ましい。

九1039 戦場の光景は實に恐ろしいものであつたが、北風は〈略〉勇ましく活動した。

九1107 北風はもう一度あの勇ましい號令が聞きたいと思つて、〈略〉、左右の耳をそばだててみた。

十283 つかれ果てた人々も、親子の勇ましい働にはげまされて、我もく／＼と力をそへる。

十293 娘の勇ましい行爲は、歌に歌はれ、其の肖像畫は到る處の店頭に飾られた。

十552 ところが、先年の歐洲大戰で、やはり此のやさしい、しかも勇ましい通信者の働の偉大な事が證明せられたので、今では各國共に盛に傳書鳩の改良に力を用ひ、〈略〉。

十588 殊に〈略〉、全く方法の盡きた場合などには、此の勇ましい小傳令使にたよるより外はない。

十5810 あゝ、あのかはい、鳩が、一度任務を命ぜられると、勇ましく高空に輪を畫がきながら、しかと方向

を見定め、〈略〉。

十112 6 一隻の捕鯨船が、勇ましく波を切つて進んで行く。

いさましき「勇」(名) 1 勇ましさ

十59 2 あゝ、あのかはいゝ鳩が、〈略〉、矢のやうに目的地へ向つて飛んで行くのを見たならば、何人も其のかしこさと勇ましさに感心しない者はあるまい。

いさみたつ「勇立」(五) 2 いさみ

立つ 勇みたつ「一ツ一ツ」
541 8 尊は其のころ、やまとをぐな

といふ御名で、御年はわづかに十六でいらつしやいましたが、いさみ立つてお出かけになりました。

九103 4 ラツパのひゞきや大砲の音に、北風の心は先づ勇みたつ。

いさ・む「勇」(四・五) 4 勇む「一

ミーン」↓よろこびいさむ

九108 2 人はいよく勇み、馬はますくはやる。

十89 5 図鑑 冬の朝日のさす軒下に、

俵あむ手のいそがしげなる父と母とに暇を告げて、勇みて出づる我が家の門。

十一29 7 図「承る。」と、〈略〉等の

荒武者ども、勇みに勇んで突進す。

十一29 7 図「略」等の荒武者ども、

勇みに勇んで突進す。

いさめ「諫」(名) 1 いさめ
十二93 1 父のいさめも妻のなげきも、此の決心をひるがへすことは出来な

かつた。

いざや(感) 1 いざや
十一12 4 図鑑 鳴くやびりの聲う

らゝかに、かげろふもえて野は晴れわたる。いざや、我が友うち連れ行かん。今日はうれしき遠足の日よ。

いし「石」(名) 28 石↓おおいし・

こいし・たていし・ちからいし

三39 2 ちか道の方は、道がこはれてゐたり、石が出てゐたりしました。

四80 2 学校の行きかへりに道草をくつたり、石をなげたり、生物をころしたりするやうな子どもは、大ていゝるくなものになりません。

五54 3 すると酒のほひがしますの

で、ふしぎに思つて、見まはしますと、石の中から酒にいた物がわいてゐます。

五71 2 土を掘る、石を運ぶ、〈略〉、

村の人は普請方のさしづをうけてはたらいだ。

六56 4 さあ、此の女にはゆだんが出

来ぬといふ事になつて、石のらうを造つて、それに入れました。

六59 7 図「あの中には石のらうがあつて、唐糸様がおしこめられて居られます。」

六60 5 萬じゆは其の夜ひそかにうばをつれて、石のらうをたづねました。

六61 2 月の光にすかして、あちらこ

ちらさがしますと、松の一むら立つてゐる中に、石のらうがありました。

六63 6 親を思ふ孝子の心には、頼朝もかんしんして、石のらうから唐糸を出して、萬じゆに渡しました。

六91 6 〈略〉、賊が城の門まで攻上ると、城のやぐらから大きな石を投落して、賊のさわぐ所をさんざんに射た。

七23 5 其の松の下に石できざんだ地藏様が立つていらつしやる。

七25 4 塚の前に馬頭観世音とほつた石が立つてゐて、其の前に時時新しい馬のくつが上つてゐる。

七87 7 海藻ハ花ガ咲カナイ。根ノヤウナ所モ、〈略〉。タバハナレナイヤウニ、岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲナスモノデ、〈略〉。

八30 5 次に其の小屋のそばへ土と石でかまをつく。

八82 5 雨だれでも石をうがつ。

九32 3 其所の木のかけ、此所の石のそばには、やぶかうじの赤い實に並んで、春蘭のつぼみのふくらんだのも見える。

九44 7 図 例ヘバコ、ニ一ツノ石アリトセヨ。

九82 9 図鑑 ちいさん今年六十の坂を越えたる足もとに、大いなる石横たへて、なほ怠らずこつくと、何をか常に刻みある、めがねを

掛けてはつび着て。

十73 9 図 京城の市街は、もと石でたゝんだ高い城壁で圍まれ、その處々にかういふ門があつて、出入口になつてゐたのださうです。

十85 1 図 それから『燃える石』といふやうばんが高くなつて、附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。

十一9 6 アスファルトや石を敷いた道が縦横に通じ、電車・馬車・自動車等が絶間なく往來してゐる。

十一66 7 それから少し進むと、石や金を打合はせて火を出す法を考へるやうになつた。

十一78 8 石・貝・家畜・獣皮・布・農産物などが、時代により場所によつて、それ／＼貨幣の役目をしたこともあつた。

十一106 9 図 大勢の人々が熟したるコーヒーの實を手にてこき落し、之を集めてみぞに投入れ候へば、まじりたる石・砂などは沈み、實のみ浮びて流れ候を、〈略〉。

十一124 4 こゝは加工場である。調べかほの廻るにつれて、石や木や金の圓板が車輪のやうに廻つてゐる。

十二26 5 図 上るや石のきざはしの左に高き大いてふ、問はばや遠き世々の跡。

十二77 9 潮に流されないやうに、身網にも垣網にも土俵や石などが重り

に附けてある。

十二97 10 或時の如きは、釋迦が山の下にゐるのを見附けて、上の方から太石をころがしたが、石は釋迦の足を傷つけただけで、目的を果すことは出来なかつた。

いし 〔医師〕(名) 3 醫師 ↓アレク

サンドルだのおうといしフィリップ

十八10 醫師は皆、投薬してもし萬一の事があれば、毒殺のうたがひを受けはしないかと恐れて、たゞ経過を見守つてゐるばかりである。

十九4 此の有様を見て、フィリップといふ醫師が、一命をなげうつても王を助けようと決心した。

十一43 9 園 今少しく日もたゞば、

轉地するもよからんと醫師も申居候に付、或は仰に従ひ、其の中御地へ参り候やもはかり難く候。

いし 〔意志〕(名) 1 意志

十二105 4 〔略〕、きつと結んだ口もとは意志の強さが現れてゐる。

いし いくん 〔石井君〕(人名) 2 石井君

九34 9 園 〔此の坂を下りて、あの清水の所まで行くと、石井君のうかが見えるはずだ。〕

九35 10 頭を上げてみると、それは石井君であつた。

いしがき 〔石垣〕(名) 3 石がき 石垣

三26 6 そこから竹の子が出る

のです。〔略〕。石がきの下へ

出たのは、かはがおちはじめ、竹になりかかつてゐます。

六80 3 元の兵は一人も上陸させぬといふ意氣ごみで、濱べに石垣をきづいて守つた。

七17 8 石垣の間でも、地藏様のかげでも、辻堂のえんの下でもさく。

いしがき せん 〔石合戦〕(題名) 2 石合戦

八目6 第四 武將の幼時 一 石合戦

八13 3 第四 武將の幼時 一 石合戦

いしがき せん 〔石合戦〕(名) 1 石合戦

戦 八13 5 徳川家康が幼時家來に負はれて、安倍川原へ石合戦を見に行つた。

いし かり 〔石狩〕(地名) 1 石狩 十一60 10 瀧川から根室行の汽車に乗ると、約五時間後に石狩と十勝の境にある狩勝の峠にかゝる。

いし ころ 〔石塊〕(名) 1 石ころ 十38 6 かり取つた雑木、切倒した大木、掘起した木の根や石ころ、まだあらごなしの開墾地は、まるで足のふみ場も無い有様である。

いし じぞう 〔石地藏〕(題名) 2 石地藏

八目17 第十一 大岡さばき 〔略〕

二 石地藏 二 石地藏

八38 6 二 石地藏

いし じぞう 〔石地藏〕(名) 4 石地藏

八37 呉服屋の手代が、大きなふろしきづつみを石地藏の前におろして休みましたが、〔略〕。

八40 3 越前守は手代の言ふ所を聞いて、〔略。〕といつて、下役の者に石地藏をしぼつて来るやうに命じました。

八40 5 下役の者が石地藏に荒縄を掛けて、車に積んで参ります。

八44 1 越前守は再び一同を呼出して、さきに納めさせた白木綿を返し、ついでに石地藏を、もとの所へもどしたと申します。

いし ずえ 〔礎〕(名) 1 いしずえ

十一112 3 園 〔いしずえ〕 蜀漢の國、漢中王はおごそかに帝の位をふませ給ひぬ。

いし だ 〔石田〕(人名) 5 石田 七98 5 ところが長盛がろく／＼あいさつもせず、石田と中直りをしなれば太閤の御きげんは直るまいと申しました。

七103 2 園 〔石田でござる。お通しなされ。〕

七103 3 園 〔石田といふ者ださうだ。〕

七103 8 園 〔今天下に此の石田を知らぬ者はあるまい。御門を守る者は誰か。〕

七104 8 園 〔あのせいの低いのが石田だ。通してやれ。〕

いし だ みつなり 〔石田三成〕(人名) 2

いし だ みつなり 〔石田三成〕(人名) 2

石田三成 石田三成

七97 5 行長は清正の軍功をねたみ、石田三成に頼んで、清正のことを秀吉にざんげんしました。

七103 1 間もなく石田三成が城に登つて参りました。

いし だ め 〔石田奴〕(人名) 2 石田め

七98 9 園 神々も照覽あれ、戦一つ出来ず、人のかげごとはばかりいふ石田めとは、此の清正一生中直りは致さぬ。

七99 2 園 たとひ數年の軍功がみとめられず、此のまゝ切腹を命ぜられても、石田めとは中直りは致さぬ。

いし だ ん 〔石段〕(名) 1 石だん

五39 4 八幡様の高い石だんを上りつめた所に、しめをはつた大きな杉の木がありました。

いし づ き 〔石茨〕(名) 1 石づき

九95 5 園 登山者はんじきをはいて、石づきの付いた金剛杖や鳶口を力に、此の坂を登るのです。

いし づ くり 〔石造〕(名) 1 石造

七36 3 園 目ぬきの所には三階建・四階建の石造や煉瓦造の家が軒をならべて立つてゐるので、〔略〕。

いし だ とうろう 〔石燈籠〕(名) 1 石燈籠

九81 10 園 店に飾れる石燈籠、頭の長き福祿壽、〔略〕、皆ちいさんのみのあと。

いしばし 〔石橋〕(名) 1 石橋

九30 瀧の上手にかけた石橋を渡り、

本立の深いゴト島に行つて、もう

く」と立ちこめる水煙の間から近く

瀧をながめるのもよく、〈略〉。

いじめかえす『苛返』(五) 1 イヂ

メカヘス『一シ』

四36 スルトホカノ鳥ガ見ツ

ケテ、「ア、ニクイヤツガ居

ル。」トイハナイバカリニ、ヨツ

テタカツテイヂメカヘシマス。

いじめる『苛』(下二) 3 イヂメル

いぢめる『一メ・一メル』

四35 略、此ノ鳥ハ見エルノ

デ、ホカノ鳥ライヂメタリ、ツ

カミコロシテエニシタリシテ

アバレマハリマス。

五6 聞けば級のが三人で、

中村君を生いきたといつて、いぢめ

たのださうです。

五7 僕は自分よりえらい友だちを

大ぜいしていぢめるのは、男らしく

ないと思ひます。

いしや『医者』(名) 4 醫者 ↓おい

しやさま

八11 略、信作に水をはかせるや

ら、醫者を呼びに走るやら、上を下

へのさわぎである。

八45 略、しかし醫者の申す所では、

老體のこと故、餘程大事にしなければ

ならないとのことでございます。

九28 略、此の老人こそは出羽の

國の醫者佐藤信季、少年は其の子信

淵である。

十二11 父はダーウインを醫者にし

ようと思つて大學へやつた。

いしや『石屋』(名) 2 石屋

九80 略、あゝ、あの角の石屋

か。」

九84 略、今朝遠足にとく起きて、

石屋の前を通りしに、廣き工場

にたゞ一人、〈略〉。

いしやすこつば『石安工場』(課名) 2

石安工場

九目6 第十八 石安工場

九80 第十八 石安工場

いしやすこつば『石安工場』(名) 1

石安工場

九80 略、石安工場と筆太に、小

屋根に上げし看板が、往來の人の目

につきて、〈略〉。

いじゅうする『移住』(サ変) 2 移

住する『一シ』

十一62 明治十六年こゝに十三戸の

農家が移住して來たのが此の町の始

りであつた。

十二136 そこで海外に移住しても外

國人から思ひ掛けぬ誤解を受けて排

斥されるやうなことも起つて來る。

いじよう『以上』(名) 1 以上 ↓い

ちまんじやくいじよう・さんびやくに

んいじよう・しちひやくまんいじよ

う・じつけんいじよう・それいじよ

う・どういじよう・にばいいいじよう・

にひやくメートルいじよう・ひやつか

いじよう・よそいじよう・ろくし

ちじゅういじよう

十二136 今日我が國が列強の間に立

つて世界的の地歩を占めた以上、か

ういふ短所はやがて我が國民から消

去るであらうが、〈略〉。

いしよく『衣食』(名) 1 衣食

十一45 略、我もとより衣食の費を

いとふにあらざれど、〈略〉、今は何

處へなりとも行きて君の技をふるひ

給へ。

いしよくする『移植』(サ変) 1 移

植する『一スル』

十一50 略、近年ゴムの需要が激

増したために、英國人はマレイ半島

の領地にパラゴムの木を移植するに

至つた。

いじりはじめる『弄始』(下二) 1

いぢり始める『一メ』

十二55 二人は其處らを見廻してゐ

たが、男の子はやがて仕事臺の上の

物をあれこれといぢり始めた。

いじる『弄』(五) 1 いぢる

『一ツ』

十二58 さうして一つの懷中時計を

出してそれをいぢつてゐたが、やが

てピンセットでねちをはさんで機械

の穴にさし込み、〈略〉。

いじわるし『意地悪』(形) 1 意地

悪し『一キ』

八26 略、軒下にはらばへる黒き犬、

にくらしき黒と思へば、黒もま

た、意地悪き人と見るらん。

いしん『維新』(名) 1 維新

十二132 安芳が一命をかけた努力と、

西郷の果斷によつて、江戸の市民も

徳川家もわざはひを免れて、維新の

大事業もこほりなく成し遂げら

れるやうになつた。

いじん『偉人』(名) 3 偉人 偉人

十一99 或時近邊の人からワシント

ン傳を借りたことがある。リンカー

ンはかねて此の偉人を非常にした

つてゐたので、鬼の首でも取つた氣

になつて一心に讀續けた。

十一100 リンカーンは〈略〉、此の

偉人の品性に深く感化された。

十一101 彼が他日大統領となり、世

界の偉人として萬人に仰がれるやう

になつたのは、實に此の少年時代の

苦心のたまものである。

いしんぜんこ『維新前後』(名) 1 維

新前後

十二154 我が國にてかゝる新聞の

現れたるは維新前後にして、其の後

數十年の間に驚くべき發達を遂げた

り。

いす『椅子』(名) 3 いす 椅子

七89 あまり急ぎましたので、水が

いすの上にあつたおあさんのづき

んにこぼれました。

七90 略、向ふむきになつて、此の

いすにかけていらつしやい。」

十124 略、談話の最中に一人の老人が

いすに

いすに

いすに

十二43 第二課 出雲大社

いずもたいしゃ 「出雲大社」(名) 1
出雲大社

十二77 図 これ即ち出雲大社の起原なり。

いずものくに 「出雲国」(地名) 1 出雲の國

五77 ある時、出雲の國のひの川のはたをお通りになりますと、川上から着が流れて來ました。

いづれ 「何」(代名) 12 いづれ 何れ
九13 6 図 毎日世話し居ることといづれの鶏も皆かはゆき中に、ひよこは一そうかはゆく思はる。

九98 6 図 「略」、眼前には「略」、遠くには「略」など、いづれおとらぬ高山が、南から西へ連なつて、互に雄姿を競つてゐます。

十39 図 何れも、御在世中しばく行幸・行啓ありし所にて、當時の御殿・御庭などの、今も其のまゝに保存せらるゝなりとぞ。

十610 図 又御造營の半ば頃より、各地方青年團の御手つだひを願ひ出づる者數多かりしかば、何れも十日間を限りて土木に従事せしめたるに「略」。

十9310 さいはひ附近の田で働いてゐた村の人々に助けられ、何れもぬれねずみのやうになつて家に歸つた。
十1313 図 然るに今主上隱岐にうつされ給ふと聞き、高德一族共を集めて

いへるやう、「義を見てせざるは勇なきなり。」「略。」と。心ある者ども何れも同意しければ、さらばとて「略」。

十二462 図 凡そこれ等の木材は、其の有する性質によりて各種の用に供すべく、随つて何れも重要ならざるはなけれど、中にも其の用途の廣きは杉及び檜なり。

十二473 図 されど何れも美しき光澤を有するが上に、もみは「略」、諸種の箱を作るに用ひられ、つがは「略」、家屋の柱・土臺となすに宜し。

十二477 図 ひば・松・落葉松は何れも堅くして、「略」。

十二481 図 けやき・栗・かしは何れも甚だ堅く、もくめこまやかなり。
十二886 法律を制定するには、政府又は貴衆兩院の何れかが其の案を作成して議會に提出する。

十二895 又貴衆兩院の何れかから提出された案は、他の一院のみで討論し、「略」。

いづれ 「何」(副) 2 いづれ
八119 図 相手の信作があゝの通りだから、いづれ又改めてやり直しをしてもらはなければなるまい。

九94 図 いづれ又近い中に便りをしませう。おとうさんやおかあさんによろしく。
いせい 「威勢」(名) 5 威勢
四586 ドンナサムイ日デモ、大

工サンハミンナシルシバンテン
ヲヌイデ、サセイヨクハタライ
テ居マス。

六346 停車場デキツブヲ買ツテキルト、郵便物ヲツンダ車ガサセイヨクカケテ來タ。

九647 間もなく當直將校から威勢のよい號令がかかる。

十1166 「萬歳、々々。」船員は手早く鯨の尾をくさりで船ばたにつないで、威勢よく根據地に引上げる。

十二61 図 昔、大國主命賊を平げ民をなつて、威勢四隣に並ぶものなし。

いせさんぐう 「伊勢參宮」(課名) 2
伊勢參宮

六目14 第二十六 伊勢參宮
六1031 第二十六 伊勢參宮

いせさんぐう 「伊勢參宮」(名) 1 伊勢參宮
六1035 図 おとうさんは昨日分家の叔父さんと、夜汽車で伊勢參宮に立たれました。

いせのくに 「伊勢国」(地名) 1 伊勢の國

十一707 本居官長は伊勢の國松坂の人である。
いぜん 「依然」(副) 1 依然

十一1197 しかしジョージは依然として、「略。」とくり返すばかりであつた。
いそ 「磯」(名) 2 いそ

七539 図 海岸の松原や、いその小山も次第に遠くなつて、しまひにはもう何も見えなくなります。

十一8010 図 高く鼻つくいその香に、不斷の花のかをりあり。

いそがし 「忙」(形) 4 イソガシ
いそがし 忙し「一シキ・一シク」↓
おんいそがし

八291 図 手はすべて仕事のもとにして、いそがしき時に、手の足らずといふは、働く人の少きをいふなり。

八589 図 近年人々ノ生活次第ニイソガシクナリテ、見物人ノ外ハ、町ノ兩側ヲナガメテ、ユルユル歩クガ如キ者ナシ。

九154 図 出がけにとやの方を見れば、めんどりはせはしげに幾度か土をかきちらして、餌をあさるにいそがしく、をんどりは箱のふちをふまへて、首をすゑ、むねを張り、今やときをつくらんとする様なり。

十二1208 図 私のお勤め居り候家は呉服店にて、なか／＼忙しく御座候。

いそがしい 「忙」(形) 2 いそがしい
い「ウ・一ク」↓おいそがしい
五478 今日のお晝頃はうち中、目がまはるほどいそがしうございました。

八997 図 僕等はふだんいそがしく働いてゐますのに、君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、少しも僕等の爲につくさない。
いそがしげ 「忙」(形状) 2 いそがし

げ

九133 図 白・黒・うすかば色、十幾

羽の鶏一つにかたまり、頭と頭とをつきはせて、いそがしげに餌を拾ふ。

十893 図 冬の朝日のさす軒下に、

俵あむ手のいそがしげなる 父と母とに暇を告げて、勇みて出づる我が家の門。

いそぎ 「急」(名) 1 急ぎ ↓ おおいそぎ

五925 郵便物をあつめる人は、毎日

きまつた時刻に来て、略。其のあつめに來る頃に、急ぎの封書を入れに來る者が、途中で人と立話でもはじめると、私は氣がもてたまりません。

いそぎかえる 「急帰」(四) 1 急ぎ歸る 《一リ》

十二610 図 此の時事代主命はすなごりのため美保崎といふ處にありしが、使を得て急ぎ歸り、父君に申すやう、《略》。

いそぎなさる 「急」(五) 1 急ぎなさる 《一イ》

七705 図 さあ、道を急ぎなさい。私は渡場へ歸つて人を渡します。

いそぎゆく 「急行」(五) 1 いそぎゆく 《一ウ》

三307 図 《略》、「さ、いきませう。」ときやうだいは かくかうさして いそぎゆく。

いそぐ 「急」(四・五) 14 いそぐ 急

グ 急ぐ 《一イ・ギ・グ》

三291 図 《略》、つづみ かかへてかくかうへ つれだち いそぐ あねおとと。

四937 兄弟は今度こそはと、

母にいとまごひをして、ふじのすそ野へ急ぎました。

六221 図 沖ものどか、濱ものどか、沖へ急ぐ兄の小舟、濱へ歸る父の小舟、すれ合つて、ゑがほとゑがほ。

六341 ベンタウヲサゲテ來ル女工ハ、

サツキカラ汽デキノ鳴ツテキル工場へ急グノデアラウ。

七429 聞けば今朝から五里の山道を、

わらぢがけで急いで來たのださうだ。

七754 図 紀州の男は急いで國へ歸つて、其の金をまぢがひなくとけるやうに致せ。

七891 あまり急ぎましたので、水が

いすの上にあつたおばあさんのづきにこぼれました。

十613 図 主人は急ぎて家に歸りぬ。

十1206 榎寺を出て二日市の停車場へ

急いだ。

の一隊、湖に沿ひたる一筋路を急ぎ

に急ぎて進み來る。

十一578 つと大砲のそばへ寄つて、急いで彈丸をこめ、ねらひを定めた。

十二453 彼は急いで家に歸つた。

十二787 《略》合圖をみると、網口の近くに番をしてゐる漁夫が急いで網口をしめてしまふ。

いそこなう 「射損」(五) 1 いそこなふ 《一ツ》

四652 よーは心の中で、もし

これをいそこなつたら、生きては居まいとかくごをきめて、馬にまたがつて、海の中へのり入れました。

いそづたい 「磯伝」(名) 1 いそ傳ひ

十二2410 図 七里が濱のいそ傳ひ、

稲村が崎、名將の 劍投せし古戦場。

イソツプものがたり (名) 1 イソツプ物語

十一992 かうしてイソツプ物語やロ

ビンソン、クルーソーや合衆國史等を讀んだ。

いそなみ 「磯波」(名) 1 磯波

十268 打返す磯波にまき込まれたか

家なれ。

いた 「板」(名) 5 いた 板 ↓ あつ

いた・のしいた

四413 にはへいたやむしろを

して、《略》いろいろな物がはこび出されました。

四593 《略》、カンナデ板 ヲケツ

ルモノモアリマス。

四601 ヨクキレルカンナガスウ

ツト板ノ上ヲ通ルト、カンナ

クヅガヒトリデニクルリトマハ

ツテスベリオチマス。

六167 木びきの力藏さんがうたをう

たひながら、大きなこぎりで板を

ひいてゐました。

十二86 図 此の棒を此の板の上にて

きりをもむが如く廻せば、摩擦によ

りて火を生ず。

いた・い 「痛」(形) 3 イタイ いた

い 《一イ・一ウ》

四165 白ウサギ ハイタクテタマ

リマセンカラ、ハマベニ立ツテ、

ナイテ居マシタ。

四177 白ウサギ ハスグ海ノ水

ヲアヒマシタガ、前ヨリモカ

ヘツテ イタク ナツテ、クルシガツ

テ居マシタ。

十782 図 《略》、朝は攝氏零度以下十

何度といふきびしさ、學校へ行く途

中などは、寒いといふよりもいたい

やうに感じます。

いだい 「偉大」(形状) 1 偉大

十552 ところが、先年の歐洲大戰で、やはり此のやさしい、しかも勇ましい通信者の働の偉大な事が證明せられたので、今では各國共に盛に傳書鳩の改良に力を用ひ、略。

いたがる「痛」(五) 1 いたがる「ツ」

八372 略、両方から引合ひました、子どもがいたがつて、わつと泣出しますと、實母の方は驚いて手を放しました。

いたく「痛」(副) 2 いたく
十629 同情深き妻の言葉に、主人はいたく心動きて、「ではお泊め申さう。略。」

十698 一語々々、心の底よりほどばしり出づる主人の物語に、いたく動かされたる旅僧は、兩眼に涙をたへて聞きあたり。

いたく「抱」(四) 2 いたく 抱く「キ」

八581 因幡 下駄屋にありし人は皆彼の姿を見送りぬ、さとすべき子にさとされし 小さき悔をいだきつゝ。

十二864 土人等林藏を珍しがりて「略」、或は抱き、或は懷を探り、

いたし「痛」(形) 1 いたし「キ」

八283 もし手なくば、我等は如何に不自由ならん。箸を持つことも出

來ず、略、いたき所をさすることも出來さるべし。

いたしおく「致置」(四) 1 致置く「キ」

十一1098 伐倒したる木は乾くまで其のまゝに致置き、さて四方より火を放てば、略。

いたす「致」(四・五) 27 いたす 致す「サ・シ・ス・セ」あんしんいたす・えんいんいたす・おあいていたす・おつかえいたす・おやどいたす・おんおくりいたす・おんやくそくいたす・かんしやいたしおり・かんしんいたす・きこいたす・ごぶざいたす・さいだんいたす・さんじよういたす・しさついたしおり・じさんいたす・じゆうじいたしおり・しんばいいたす・につきさんいたす・はいけんいたす・はつきりいたしおり

三444 あまり長く なりますから、もう おいとまに いたしませう。

三863 「天人のはごろもなら、なほさらかへすことは出來ません。國のたからにいたします。」

四933 ある年、よりともは日本中のさむらひを引きつれて、ふ

じのまきがりをいたしました。

五544 なめてみると、酒のあぢがいたします。

五847 おとうさんへ電報で御返事をいたしたやうに、略。

五937 略、悲しい事や苦しうな事が書いてありますと、もらひ泣きをいたします。

六714 今、三條の大橋に立つて、川下を見ると致しませう。

六894 なれますれば、お子どもしゅうのお守も致します。

七527 私も子どもの時には、略、此の講堂でお話を聞いたり致しました。

七532 私は年中航海をしてゐるものですから、少し其のお話を致します。

七717 房州へ出かせぎに行つて、れふを致して居りましたが、略。

七756 紀州の男は急いで國へ歸つて、其の金をまちがひなくとけるやうに致せ。

七757 人夫には此方から手あてを致す。

七991 神々も照覽あれ、戦一つ出來ず、人のかげごとばかりいふ石田めとは、此の清正一生中直りは致さぬ。

七993 たとひ數年の軍功がみとめられず、此のまゝ切腹を命ぜられても、石田めとは中直りは致さぬ。

七1067 小西は日本の大將ならず、まことは堺の町人、道案内の者故、にげも致したであらう。

八426 しばらくして、其の中のおも立つた者が出て、いろくおわびを致しますと、越前守は「略。」と命じました。

八428 「しからは許してつかはすであらうが、其の代りと致して、白木綿を一反づつ、名札をつけて、三日の間に間違なく持參致せ。」

八1087 來る二十五日に、亡母の三回忌の法事を致します。

八1097 父が今年八十八になりましたので、略、ほんの心ばかりの祝を致したいと存じます。

十73 略、通常の人夫にもまさりて仕事ははかりたりと聞く。これも眞心の致す所なるべし。

十649 お宿は致しても、さて何も差上げる物はございません。

十672 略、今夜は之をたいて、あなたのおもてなしに致しませう。

十10710 近き處ならば早速上り候て御世話も致すべく候へども、略。

十二679 私はありとあらゆる身の樂しみを退けても、ひたすら父上を大事に致すのを此の上もない仕合せと存じてをります。

十二1215 毎晩賣上高の勘定を致す時など、仲間のうちにて計算は私が一番達者なりとて、何時もほめられ申候。

いたす「出」(四) 6 出ス 出ス「シ・セ」おおいだしもうす・

おもいいだす・さしいだす・とりいだす

八584 図 學校用具ヲ賣ル店ニ、手帳・筆・墨・繪具ナドト記シタル看板ヲ出シ、〈略〉看板ヲ出セルハ、ヨク人ノ知ル所ナルベシ。

八586 図 〈略〉、ハキ物屋ニ下駄・草履・傘ナドト、大字ニテ目立ツヤウニ記シタル看板ヲ出セルハ、ヨク人ノ知ル所ナルベシ。

九148 図 机の引出より養鶏日記を出し、「四月二十五日朝、卵一つ。」と記入す。

九848 図 信吉の家にては、夕飯後庭先に涼み臺を出して、家内一同涼みゐたり。

十一263 図 こはたゞ事ならじと、尾野路山の本營に急報すれば、盛政直に物見の兵を出してうかゞはしむるに、〈略〉。

十二866 図 やがて酒食を出したれども、林蔵は其の心をはかりかねて顧みず。

いたずら 〔徒〕(形状) 3 いたづら徒

十993 図 汝大勢の如何とすべからざるを知つて、何ぞいたづらに苦しむことの甚だしきや。

十二1134 図 こゝにおいて再び炭素線の研究に没頭したれども、徒に多くの時日と金銭とを費したるに過ぎざりき。

十二1353 殊に徳川幕府二百餘年の鎖國は、國民をして海外に發展する意氣を消磨せしめ、徒に此の小天地を理想郷と觀じて、世界の大勢を知らぬ國民とならしめた。

いたずらもの 〔惡戯者〕(名) 1 いたづらもの

四775 此の人は小さい時からいたづらもので、〈略〉。

いただき 〔頂〕(名) 2 いたゞき 頂 六577 臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、此の山のいたゞきには、いつもつもつてゐるといふことだ。

十一412 向ふの山の頂に日の光が赤々とさして來た。

いただく 〔頂〕(四・五) 20 イタダク イタバク いただく いたゞく 頂 く 《イ・イ・カー・キーク》

二402 ワタクシハネエサンニ、ユキデウサギヲコシラヘテイ タダキマシタ。

三283 〈略〉、おちいさんに、あれで竹うまをこしらへていただくつもりです。

四262 〈略〉、おそくなるとおもつて、いただいたくりを持つてかへりました。

四844 オ花ハオカアサンニオヒナ様ヲカザツテイタダキマシタ。 五174 図 「をわさん、〈略〉。一番こつちは金鶏動章でせう。」「あ、今

度の戦争でいたゞいた。」

六651 町ノ叔父サンカラ、オ年玉ニ大キナ磁石ヲイタバイタ。

六1026 かしはもちをこしらへていたゞいた。

七161 図 昨日おかあさんにするすをしていただいて、うち中の者が潮干狩に参りました。

七684 〈略〉、人夫は財布を出して渡しました。かの男はゆめかとばかり喜んで、財布を幾度かいたゞきました、〈略〉。

七696 図 それがあなたのやうな正直なお方に拾はれて、財布をいたゞかせてもらひましたが、いたゞいたのは財布ではなくて、私の命でございます。

七696 図 〈略〉、財布をいたゞかせてもらひましたが、いたゞいたのは財布ではなくて、私の命でございます。

八446 図 取分けおいそがしい中を、一週間もおひまをいたゞきまして、まことにありがたう存じます。

八1101 図 又まことに申しかねますが、當日祝の歌を一首いたゞきたうございます。

九1129 図 〈略〉三毛の子猫、もはや大きくなり候事と存じ候。近き中に頂きに上りたく候に付き、〈略〉。 十157 図 それにつけても、諸君にも大いに奮發していたゞきたいのです。 十653 図 〔略〕粟の飯、召上るなら

と妻が申してをりますが、いかゞでございませう。」「それはけつこう、頂きませう。」

十675 図 「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」

十一154 一年生の時からの成績物も見せていたゞいて、其の始末のよいのに感心してしまひました。

十二367 図 〈略〉、はるかに紺青の空にそびえて雪をいたゞくアルプの連峯。

十二403 図 まあ一曲ひかせていたゞきませう。

いたって 〔至〕(副) 5 イタツテ いたつて 至ツテ 至つて 六736 賀茂川は〈略〉水がいたつてきれいで、染物にむいてゐます。

六894 図 印度の國はいたつてあつうございませう、〈略〉。

七496 〈略〉、チヨット見ルト、コハイヤウデシタガ、イタツテ正直デ、氣立ノヤサシイ老人デシタ。

八499 驚ハ遠ク人里ヲハナレテ深山ニスム。巢ハ至ツテソマツナモノデ、〈略〉。

八1154 郷里の家は〈略〉、至つてせまい、そまつな家であつた。

いたてる 〔射立〕(下二) 1 射立てる 《一テ》

六817 敵ははげしく射立てた。味方はばたばたとたふれた。

いたどり 〔虎杖〕(名) 2 いたどり

五362 いたどりは私どものせいほどにのびてゐました。

五36図 いたどり

いたのま 「板間」(名) 1 板の間

八1153 郷里の家は六疊・三疊・二疊の三間と、二疊の板の間が一つだけの、至つてせまい、そまつな家であつた。

いたばし 「板橋」(地名) 1 板橋

十二1248 明治元年三月徳川慶喜征討の官軍は諸道より並び進んで、〈略〉、東山道先鋒は板橋に着いた。

いたまし・い 「痛」(形) 2 いたまし
い「―イ」

十464 毎日焼いてはくだし、焼いてはくだしして、歎息する彼の様子は、實に見る目もいたましい程であつた。

十二729 父の身の上を案じながらフランスに行つたコーデリヤは、やがていたましい報知を得た。

いた・む 「痛」(五) 1 いたむ「―ン」

十二602図 直りました。ねちが一本いたんでゐましたから、取りかへて置きました。

いたや 「板屋」(名) 1 イタヤ

二382圖 ツモルツモルユキガ、マツ白ナユキガ。ワラヤノヤネニ、イタヤノノキニ。

いたり 「至」(名) 1 至り

十717図 其の時の言葉にたがはず、眞先かけて参つたは感心の至り。

イタリヤ (地名) 4 イタリヤ

七3図 イタリヤ

七42図 其の中我が大日本帝國と、イギリス・フランス・イタリヤ及びアメリカ合衆國を世界の五大強國といふ。

十二641図 イタリヤの國旗は、〈略〉を表せり。

十二642図 これイタリヤ中興の主エシマヌエル王、國土統一の時、〈略〉。

いたる 「至」(四・五) 33 いたる 至ル 至る 到る「―ツ―ラ―リ―ル―レ」

七458 川中島で前後五回戦つたが、まだ勝負がつかなかつた。第六回目にいたつて、信玄から謙信へ、

「〈略〉。」と申しこんだ。

八194図 揚子江ハ〈略〉、我が國ノ最南端ヨリ最北端ニ至ル長サヨリモ長シ。

八209図 其ノ家ヲ出デテヨリ、イカダヲトキテ木材ヲ賣ルニ至ルマデ、

一年ノ長キニワタルコト珍シカラズトイフ。

八594図 ヨリテ看板ノ如キモ、タヤスク人目ヲヒカシメンガ爲ニ、キノ

ヒテ小屋根ノ上ニカ、グルニ至レリ。

九291 歡庵以來代々力をつくして來た農學は、信季の望通り、信淵に至つて大成したのである。

十355図 寶物殿に到りて御遺物を拜觀す。

十364 パナマ地峽に運河を造る事は、數百年來ヨーロッパ人のしばく計畫したところで、〈略〉、成功を見るに至らなかつた。

十4910 彼は此の後も尚研究に研究を重ね、工夫に工夫を積んで、世に柿右衛門風といはれる精巧な陶器を製作するに至つた。

十9610図 支那の宋朝の末、〈略〉、宋は次第におとろへて、ほとんど亡びんとするに至れり。

十981図 たま／＼元の大軍至るに及んで天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。

十998図 事既にこゝに至る。天祥唯死せんのみ。

十一23 温度は〈略〉。光の強さに至つては非常なもので、〈略〉。

十一71図 「中庸は徳の至れるものなり。」

十一74図 〈略〉、其の好學の念の切なる、「朝に道を聞くことを得ば、夕に死すとも可なり。」といふに至れり。

十一710図 「發憤しては食を忘れ、樂しんではうれひを忘れ、老の將に至らんとするを知らず。」

十一272図 これより先、秀吉は織田信孝を攻めて大垣にありしが、二十日の正午大岩山の敗報至る。

十一509 〈略〉、近年ゴムの需要が激増したために、英國人はマレイ半島

の領地にパラゴムの木を移植するに至つた。

十一1291図 鐵眼こゝにおいて再び意を決し、〈略〉、其の資金を以て力の及ぶ限り廣く人々を救ひ、又もや一錢をも留めざるに至れり。

十一1301図 かくて天和元年鐵眼が初度の募集を始めてより十八年の後に至りて、一切經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられたり。

十二810図 境内を出でて海岸に到る。

十二234 外國貿易に至つては、之に従事する者の心掛け如何の影響が更に大きい。

十二466図 家屋・橋梁・船舶・電柱より桶・たる・曲物の類に至るまで、一として杉を用ひざるなし。

十二492図 松に至りては産地極めて廣くして、〈略〉。

十二493図 松に至りては産地極めて廣くして、奥羽地方より九州に至るまで殆ど之を見ざる處なく、〈略〉。

十二625図 イギリスの國旗は、〈略〉、遂に今日の如き形式をなすに至れり。

十二839図 止むなく南方のノテトといふ處に引返し、酋長コーニの宅に留りてしばらく時機の至るを待ちぬ。

十二844図 〈略〉、林蔵は好機至れりとひそかに喜びて、切に己をとまなはんことを求む。

十二881図 林蔵が二回の探検により

十一〇七 第二十三課 南米より（父の通信）一

十二二八 第八課 ヨーロッパの旅

一 ロンドンから

十二八〇 第十六課 鳴門 一

十二二五 第二十五課 港入 一

いち「市」（名）1 市 ↓うまいち・うまいちけんぶつ

十二二二 此の町では、二歳の市の十日間も續いて、〈略〉。

いち「位置」（名）8 位置

九八五 どの星かを見おぼえて置いてごらん、寝る頃にはもう位置が變つて見えるから。

九八五 それでも航海をする人などが、よく星を見て船の位置をはかるといふではありませんか。

九八六 星がそんなに位置の變るものなら、目當にならないでせう。

九八六 それに、たくさん星の中に一つだけ、年中ほとんど位置の變らないのがあるから、まことに都合がよいのだ。

九八七 何かといふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 何かにいふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出来たのだと思ふと、〈略〉。

いちいち「二」（副）2 一々

十二二七 何を知りても、一々明白に答へて、しかもよけいなことは言ひません。

十二一七 見れば引出にはみんな札がはつてあつて、「ふろしき」「ハンケチ」などと一々書いてあります。

いちいん「二院」（名）2 一院

十二八八 政府から提出された案は先づ議會の一院で討議される。

十二八九 又貴衆兩院の何れから提出された案は、他の一院のみで討議し、可決すれば同じ手續によつて奏上する。

いちおう「二応」（副）2 一應

十二三二 此の邊の事情をよく御推察下されて、特別の御仁慈を以ておだやかに事のまとまるやう今一應御評議下することになります。

十二三三 誠に日本國の幸でございます。

十二三四 何分今一應の御評議を推して御願ひ申す次第でございます。

いちおん「二音」（名）3 一音

十二四一 前に腰を掛けて直にひき始めた。其の最初の音が既にきやうだいの耳には不思議にひびいた。

十二四二 一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか彼自ら

も覺えないやうである。

十二四七 一音は一音より妙を加へ神に入つて、〈略〉。

いちおんしん「二音信」（名）1 一音信

七三三 十五字までが一音信だが、〈略〉、それでは十七字になる。

いちかいきねん「二回帰年」（名）2

一回帰年

十一九二 太陽曆は春分から春分までを一回帰年といつて、それを本としてこしらへたものだ。

十一九三 ところが太陽曆は〈略〉、此の一年は一回帰年より約十一日少いから、太陽曆とくひちがつて來て、〈略〉。

いちがい「二概」（副）2 一ガイニ

一がい

七三七 色モ一樣デハナイ。〈略〉。一ガイニイフコトハ出來ナイガ、先ツ綠色ノモノハ淺イ所ニ、紅色ノモノハ深イ所ニ、〈略〉。

十二一五 勿論今日我が國にて發行せらるゝ新聞中にも大小種種ありて一がいには言難けれども、相當に名ある新聞は、〈略〉。

いちかぞく「二家族」（名）1 一家族

十二四九 子馬には大い飼主の一族がついて來て、親切に世話をしてゐます。

いちがつ「二月」（名）1 一月

十二五一 即ち水位の一番高い五月と

一番低い一月との差は、僅かに三八センチメートルに過ぎない。

いちがつじゅうはちにち「二月十八日」（名）1 一月十八日

八七四 一月十八日 父から 太郎

どの さち子どの

いちがつついたち「二月一日」（名）1 一月一日

十一八八 「これは略本曆だ。この中にある『通目』で數へて御らん。これは一月一日から數へた日數だ。」

いちがつはつかぎり「二月二十日限」（名）1 一月二十日限り

八七三 「二月二十日限り當役場へ納付」

いちぎょう「二行」（名）2 一行

十二一〇 一口又一口、平然と藥を飲む王、一行又一、おそれと興奮に眼かゞやくフィリップ。やがて讀終つたフィリップが、〈略〉。

十二一〇 一口又一口、平然と藥を飲む王、一行又一、おそれと興奮に眼かゞやくフィリップ。

いちぐん「二軍」（名）1 一軍

十二二八 敵は見る間にぼた／＼と倒れて、一軍今や崩れんとす。

いちぐん「二群」（名）2 一群

九八三 何かといふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

十二四三 日は大分高くなつてさわやかに、高い／＼青空を、ひわ

の一群が身輕さうに飛んで行く。

いちげん 「一言」(名) 1 一言

八五八 今の一言は、先陣の功名にもまさる。」

いちご 「一語」(名) 2 一語

十 697 一語々々、心の底よりほどばしり出づる主人の物語に、いたく動かされたる旅僧は、〈略〉。

十 697 一語々々、心の底よりほどばしり出づる主人の物語に、〈略〉。

いちこっか 「一国家」(名) 1 一國家

十二 608 今一國家を形成する國々にして、國旗の制定せられざる所なし。

いちこん 「一言」(名) 1 一言

十一 487 住持「昨夜のぞき見て知りたり。」此の一言を聞くや、〈略〉東國へ出立しぬ。

いちさん 「二三」(名) 1 二三

十一 26 光の強さに至つては非常なもので、之を燭光でいへば一三の下に零を二十六もつけて表さねばならぬ。

いちじ 「一字」(名) 1 一字

七 112 濁音半濁音文字の下は一字あけること

いちじ 「一事」(名) 2 一事

十一 179 此の一事で、家の中がどんなによく整頓されてゐるかが想像されます。

十二 1308 よろしい。とにかく明日の總攻撃見合はせの一事だけは、拙

者一命にかけて御引受け申します。

いちじ 「一時」(名) 4 一時

五 882 うちでも一時は飲水やたべ物にこまりましたが、今ではあとかたづけも大がいます。

十 549 鳩を通信に使つたのは、餘程古い時代からの事で、殊に一時は非常に盛に行はれたが、〈略〉。

十一 419 貴兄には去月以來御病氣にて、しかも一時は大分御重なりし由、誠に意外の事に驚入候。

十二 237 又單に損益の點から見ても、かやうな仕方は唯一時の利益を得るに止つて、永續することが出来ないから、〈略〉。

いちじかん 「二時間」(名) 2 一時間

七 396 旅順へは汽車で一時間で行けます。

十一 47 今かりに一時間五十里の速度で飛ぶ飛行機に乗つて行つたとしても、〈略〉。

いちじかんあまり 「二時間余」(名) 1 一時間餘り

九 665 間もなく食食用意のラツパがひびく。一時間餘りも活動した後であるから、食事のうまいことはいふまでもない。

いちじつ いちにち

いちじに 「二時」(副) 4 一時に

七 998 ところが或夜大地震が起つて、人家堂塔一時に倒れ、人々の泣叫ぶ

聲は天地にひびきました。

十二 1313 警衛の兵士等は、安芳の姿を見ると一時に押寄せて來たが、〈略〉。

十二 1379 我が國民には潔いこと、あつさりしたことを好む風がある。櫻の花の一時に咲き一時に散る風情を喜ぶのがそれであり、〈略〉。

十二 1379 櫻の花の一時に咲き一時に散る風情を喜ぶのがそれであり、〈略〉。

十二 1379 櫻の花の一時に咲き一時に散る風情を喜ぶのがそれであり、〈略〉。

いちじょう 「一丈」(地名) 1 一丈

十二 1028 今若草山に登りて古京の跡を展望すれば、遠く連なる田園の間に東西に走る三筋の路は、北より數へて古の一・二・三・四の大路の名残とす。

いちじょう 「一丈」(名) 2 一丈

六 867 見せ物小屋で象を見た。〈略〉。たけは一丈からあつた。

八 307 かまはさしわたしが一丈ぐらゐ、高さが四五尺ぐらゐで、〈略〉。

いちじょう 「一丈」(名) 1 一丈

十一 622 はるかの下に一條の白煙をたなびかせて見えがくれする上り列車は、ちやうどおもちやのやうに見える。

いちじょう 「一場」(名) 1 一場

十二 1033 そのかみ金殿玉樓相望みてうちつゞく都大路を、大宮人の櫻かざし紅葉かざして往來しけむ、今にして思へば唯一場の夢に過ぎず。

いちじょうごしゃく 「一丈五尺」(名)

1 一丈五尺

六 967 廣さが一丈五尺、長さが二十丈、其の上を賊が我先に渡つた。

いちじるし 「著」(形) 1 いちじるし

九 399 庭に一本なつめの木、彈丸あともいちじるく、くづれ残れる民屋に、いまだ相見る二將軍。

いちじるし 「著」(形) 3 著し

十一 466 支那幾千年の人物中、大聖として長く後人に敬はれ、徳化の尚今日に著しきもの、孔子に及ぶはなし。

十二 472 もみ・つがは共にそり又は伸び縮みすること著しきを以て、杉・檜に比すれば用途甚だ狭し。

十二 484 栗は耐久・耐濕の性殊に著しきを以て、家屋の土臺、鐵道のまくら木等の用に供せられ、〈略〉。

いちすいはい 「一水兵」(名) 1 一水兵

九 1145 或日我が軍艦高千穂の一水兵が、女手の手紙を読みながら泣いてゐた。

いちぞくども 「一族共」(名) 3 一族ども 一族共

十 683 佐野源左衛門常世と申して、もとは佐野三十餘郷の領主、それが一族どもに所領を奪はれて、此の通

一族ども 一族共

一族ども 一族共

りの始末でございます。

十七18図 さて一族ともに奪はれた佐

野三十餘郷は、理非明らかなるによ

つて汝に返しあたへる。

十130図 然るに今主上隠岐にうつさ

れ給ふと聞き、高德一族共を集めて

いへるやう、〔略〕。と。

いちぞん 〔二存〕(名) 1 一存

十二130図 其餘の事は拙者の一存

にはまゐりませぬから、追つての沙

汰をお待ち下さい。

いちだい 〔二代〕(名) 1 一代

十一1262図 〔略〕鐵眼といふ僧あり

き。一代の事業として一切經を出版

せん事を思立ち、〔略〕。

いちだい 〔一台〕(名) 3 一ダイ 一

臺

六323 橋ノタモトニ人力車ガ一ダイ

アツテ、〔略〕。

九545図 社長さんは早速荷車を一臺

借りて来て、醬油のはかり賣を始め

た。

十二186図 〔略〕、機械は電力により

て働き、印刷も切斷も人手を要せず、

一臺よく一分間に四百五十枚を印刷

すといふ。

いちだいかきゅう 〔二大火球〕(名) 1

一大火球

十一17 〔略〕太陽とは、一體どん

なものであらう。一口にいへば、白

熱の状態にある一大火球で、〔略〕。

一大革新

十二11510図 諸機械の原動力であつた

人力又は蒸氣力もだんく電氣に變

つて、工業界の一大革新をうながし

てゐます。

いちだいこうえん 〔二大公園〕(名) 1

一大公園

十一352図 我が國に遊べる西洋人は

此の瀬戸内海の風景を賞して、世界

における海上の一大公園なりといへ

り。

いちたいじゅうまん 〔二対十万〕(名)

1 1: 1000000

十二102図 1: 1000000

いちだいぜつべき 〔二大絶壁〕(名) 1

一大絶壁

九296 世界一といはれるナイヤガラ

の龍は、〔略〕。廣さが千數百方里も

ある、海のやうな湖から流れる大き

な河が、一大絶壁をみなぎり落ちる

のですから、〔略〕。

いちだいそうしよ 〔二大叢書〕(名) 1

一大叢書

十一1255図 一切經は、佛教に關する

書籍を集めたる一大叢書にして、此

の教に志ある者の無二の寶として貴

ぶところなり。

いちだいちょうしよ 〔二大長所〕(名)

1 一大長所

十二1369 他國の文明を消化して、之

を巧みに自國のものとすることは、

實に我が國民性の一大長所である。

いちだいほうえきこう 〔二大貿易港〕

(名) 2 一大貿易港

七74図 横濱は東京の西南八里半の

所にある一大貿易港にして、商船の

出入たゆる時なし。

七297図 神戸ハ一大貿易港ニシテ、

輸出入ノサカンナルコト横濱ニユツ

ラズ。

いちたろう 〔二太郎〕(人名) 1 一太

郎

七418図 〔二太郎やあい。其の船に

乗つてゐるなら、鐵砲を上げる。〕

いちたろうやあい 〔課名〕 2 一太郎

やあい

七目14 第十三 一太郎やあい

七409 第十三 一太郎やあい

いちだん 〔二段〕(名) 2 一段

十342 前と同じ方法で、船はもう一

段高く浮上り、次の水門を越して、

小さい人造湖に出る。

十346 此の湖を横ぎると又水門があ

つて、船はさらに一段高くなる。

いちだん 〔二段〕(副) 3 一だん 一

段

七598図 船長はかくいひて後、一だ

ん聲をはり上げて、〔略〕。

九1085 中尉は始終先頭に立つて進ん

でゐたが、敵陣が間近になつたのを

見て、一だん高く軍刀をふりかざし、

〔略〕。

十一344図 月影のさなみにくだけ、

漁火の波間に出没する夜景もまた一

段の趣あり。

いちど 〔二度〕(名) 22 一ど 一ど

一度

二522図 〔モウ一ど花ヲサカセ

テミヨ。〕

三655図 もう一どやつてごらん

なさい。

四507 一どすみしました。道子が

十二まい、みよ子が十まい、國太

郎が九まい、ちよ子が八まい、

音二郎が六まい、友一はたつた

一まいでした。

五24圖 大日本、大日本、神代此

の方一度もてきに 負けたことなく、

月日とともに、國の光がかがやき

まさる。

五745 方々から人夫をやとつて来て、

もう一度土手をつきなほした。

六855 それからこゝに六百餘年、ま

だ一度も外國から攻められたことは

ない。

七177 しやうの強いもので、一度種

が地に落ちれば、年年其所で花がさ

く。

七424図 わかつたらもう一度鐵砲を

上げる。

七733図 〔略〕、どうかすると、其の

日のくらしにこまるやうなこともあ

りますが、心にすまないことはまだ

一度もした事はありません。

七817 アハビハ岩ヲハナレテ動クコ

トガアルケレドモ、カキハ一度ツイ

タラ決シテハナレナイ。

八95 二人を出した村の者は、たがひに勝利をいひはるので、神主は二人の者だけで、もう一度競走させることにした。

八296 太郎は毎日炭を焼く煙を遠くに見てゐるが、まだ一度も其所へ行つて見たことがない。

八911 図 よく見えるやうにして、もう一度しづかに言つてごらんさい。九544 図 『なあに、もう一度出直すのです。』

九1105 北風は、もう一度鼻先をなでてもらひたくなつて、そつと顔を主人の肩のあたりへすりよせた。

九1107 北風はもう一度あの勇ましい號令が聞きたいと思つて、〈略〉。

十589 あゝ、あのかはいゝ鳩が、一度任務を命ぜられると、〈略〉、矢のやうに目的地へ向つて飛んで行くのを見たならば、〈略〉。

十1055 図 一度此の中にはいると、また寒い處へ出るのがいやになるね。

十一4410 図 君は畫を以て一家を成せる人なるに、數年の間一度も筆を取り給ひし事なし。

十二133 ダーウィンは興味を覺えるど、あくまでそれにこる性質で、一度何かをし始めたなら、満足な結果を得るまでは決して途中でやめなかつた。

十二382 図 ほんたうに一度でもよい

から、演奏會へ行つて聴いてみたい。十二1195 圖 當地に参りて以來、一度手紙を以て御様子御伺ひ申上げたしとは存じながら、〈略〉。

いちどう 「同」(名) 14 一同 ↓ かないちどう・かんちゅういちどう・けんぶつにんいちどう・じょういんいちどう・てあしらいちどう

八423 越前守は早速門をしめさせて、見物人一同の所名前を書取らせ、〈略〉と申し渡しました。一同は驚いて、泣くやならなくやら、大さわざでございます。

八432 三日の間に一同は白木綿を一反づつ持つて参りました。

八439 越前守は再び一同を呼出して、〈略〉。

八999 図 或時、口・耳・目・手・足等が申し合はせて、胃に向つていひますには、〈略〉。僕等は一同申し合はせて、今日からは働かないことにしたから、〈略〉。

八1012 此の時胃は一同に向つて言ひました。

十一2 図 十月十二日、我等五年生一同は、〈略〉明治神宮に参拜せり。

十1510 やがて暮近くなつたので、一同は元氣よく團歌を歌ひながら、夕日を浴びて歸途についた。

十724 図 時頼は尚一同に向ひて、〈略〉。

十728 図 一同謹んで承る中に、常世

は有難さ身にしみ、喜にみちて御前を退きけりとぞ。

十732 図 皆様御かはりはありませんか。こちらも一同無事です。

十1142 「命中、々々。」一同は歡呼の聲をあげた。

十一1212 さうして自身も帽子をぬいで答禮し、一同を引連れて立去つた。

十二4110 ベートーベンの友人も全く我を忘れて、一同夢に夢見る心地。

十二1314 警衛の兵士等は、〈略〉、西郷が後に續いてゐるのを見て、一同恭しく捧げ銃の禮をした。

いちどきに 「二時」(副) 1 一どきに七382 図 第一第二第三と三つならんでゐて、たくさん大船を一どきに横づけにすることが出来ます。

いちとし 「二都市」(名) 1 一都市 十二996 図 第二十課 奈良 〈略〉、今は唯鐵内の一都市として僅かに古の名残を留むるのみ。

いちどに 「二度」(副) 6 一ドニ一度に

二134 人ガテツパウデ、一ドニ

三パウチオトシマシタ。

二616 図 サウ一ドニノンデハイケマセン。

四675 海の方でもへいけ方がふなばたをたたいて、一度にどつとほめました。

六237 其の夜のことで、義仲はひそかにみ方の者を敵の後へまはらせ

て、兩方から一度にどつとときのことあげさせました。

六904 此の時、「大きなお守さんだ。」と誰かがいつたので、みんなが一度にふき出した。

六953 賊が四方から之を目がけておしよせると、城から大石を四五十、一度に落したので、又何百人かころされた。

いちに 「二」(名) 1 一一

十一247 図 危く逃延びたる一二の兵卒、はせもどつて急を告ぐれば、〈略〉。

いちにけん 「二間」(名) 1 一二間 十一556 初は十間以上も相手をぬいてゐたが、どうしたのか急に相手にぬかれて、一二間も後れてしまつた。

いちにさん 「二三」(感) 1 一、二、三

三626 図 みよ子さあ、私がおゑをかけましたら、みなさん一しよに舟を出すのですよ。一、二、三。

いちにち 「二日」(名) 18 一日 ↓ ひと

五315 圖 松をのこして木の葉がちれば、庭は一日日がよくあたる。

七501 〈略〉、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音ガ聞エマシタ。一日モ休ンダコトハアリマセン。

七523 図 遠洋航海を終へて、郷里に歸り來れる太平丸の船長は、一日其

の町の學校へまねかれて、航海の話
をなせり。

八七五 一日祝賀會の席上で、人々が
かはるく立つて、コロンブスの成
功を祝しますと、〈略〉。

八四六 何なら、あのお子进行日
一日お連れになつてもようございま
す。」

八五二 では、一日お借り申します。
八四二 たとひ休まず働いても、一人
で一日に一包は造れまい。

十703 今一日留り給へとすゝめて
止まざりき。

十1074 我々とはかほゆらしきめ
ひの生れ候と聞きては、何よりうれ
しく、一日も早く御顔を見たく存じ
候。

十一421 何とぞ十分の御養生あ
りて、一日も早く御全快なされ候様
切に祈申候。

十一7710 我々は始ど貨幣・紙幣なく
して一日も生活することは出来ぬと
いつてもよいからである。

十一931 普通四年毎に一日
の間をおくことになつてゐる。

十一938 したがつて二百十日も太
陽曆なら大が九月一日で、ちがつ
ても一日ぐらゐのものが、〈略〉。

十二5910 一日おいて町長さんが來た。
「時計は直りましたか。」

十二1083 そこで人々はいつそ我々も
出来るだけ此の仕事を手付けて、一日

も早く洞門を開通し、〈略〉。

十二1197 當地に参りて以來、一
度手紙を以て御様子御伺ひ申上げた
しとは存じながら、〈略〉、一日々々
と延引致し、今日に相成り申候。

十二1197 〇略、一日々々と延引
致し、今日に相成り申候。

十二1218 此の上はいよく仕事
に勵み、一日も早く一人前の商人と
なりて、親に安心致させたと存じ
居り候。

いちにちおき 「二日置」(名) 1 一日
置

五711 村の人は代り合つて、一日置
に普請の手つたひをするになつ
た。

いちにねん 「二年」(名) 1 二年

十一454 〇略 愚僧も所用ありて京に
上り、或は二年滞在せんもはかり
難し。

いちにんまえ 「一人前」(名) 3 一人
前

八928 〇略、もう二年たつて、此の
學校を卒業する頃には、りつぱに一
人前の事が出来るやうになる。

九519 〇略 十年餘りもしんばうして、
やうく一人前の番頭になり、それ
から又長い間忠實に勤めて、〈略〉。

十二1218 〇略 此の上はいよく仕事
に勵み、一日も早く一人前の商人と
なりて、親に安心致させたと存じ
居り候。

いちねん 「二年」(名) 13 一年

五722 〇略、首をひねる者もあつた
といふが、一年ばかりの間は、べつ
だんくじやうも出なかつた。

八127 〇略 どうか今日から一年の間、
あなた方の村が五箇村の頭になつて
下さい。

八217 〇略 其ノ家ヲ出デテヨリ、イカ
ダヲトキテ木材ヲ賣ルニ至ルマデ、
一年ノ長キニワタルコト珍シカラズ
トイフ。

八242 〇略 吳鳳は 〇略 説聞かせて、も
う一年、もう一年とのぼさせてあま
したが、〈略〉。

八242 〇略 吳鳳は 〇略、もう一年、も
う一年とのぼさせてあましたが、
〈略〉。

十467 〇略 困難はそればかりで無かつた。
〈略〉。一年と過ぎ二年とたつうちに、
其の日の暮しにも困るやうになつた。

十523 〇略 當座の方は 〇略、定期の
方は、預けた日から半年とか一年と
かきまつた期限が來ないと引出すこ
とが出来ない。

十一157 〇略 成績物は 〇略、皆一生の
記念になるのだ。」と思ふと、私も
急に一年からのをまとめたくなりま
したが、〈略〉。

十一9210 〇略 其の間は約三百六十五日
と四分の一だが、便宜上三百六十五
日を一年とし、〈略〉。

十一933 〇略、通例十二箇月を一

年とするが、此の一年は一回歸年よ
り約十一日少いから、〈略〉。

十一934 〇略、通例十二箇月を一
年とするが、此の一年は一回歸年よ
り約十一日少いから、〈略〉。

十二515 〇略 湖の水は 〇略、一年を通
じて水位の變化は極めて少い。

十二832 〇略 それより一年ばかりの間、
風波をしのぎ、飢寒と戦ひ、〈略〉。

いちねん 「一念」(名) 1 一念 ↓
しよいちねん

十二1079 〇略 一念こつた不斷の努力は恐
しいものであると思ひつくと、此の
見る影もない老僧の姿が、急に尊い
ものに見え出した。

いちねんじゅう 「二年中」(名) 2 一
年中

十一511 〇略 南洋は一年中温度が高く、
雨量が多いので、ゴムの木の發育に
は最もよく適してゐる。

十一916 〇略 それから雨雪の量は何處
が一番多いか、又一年中で何時頃が
一番多いか、こんなことも記してあ
る。

いちねんせい 「二年生」(名) 3 一年
生

七46 〇略 一年生を先頭に、二・
三・四・五・六年が 四列になりて
歩く時、全校生徒の八百は 八十
間もつゞくなり。

八935 〇略 それから先生は、僕等を一年
生の教室に連れて行かれた。

十一154 一年生の時からの成績物も
見せていたといて、其の始末のよい
のに感心してしまひました。

いちねんたらず 「二年足」(名) 1 一
年足らず

十一984 しかしせつかく始めた學校
通ひも、家事のために僅か一年足ら
ずで止めねばならなくなつた。

いちねんまし 「二年増」(名) 1 一年
まし

五761 そこで一年ましに田がふえた
が、をしいことに、庄屋は池が出来
上つた年の冬、死んでしまつた。

いちのせき 「一関」(地名) 2 一關
一關

九697 「仙臺はとづくに過ぎて、
やがて一關だ。よくねたね。」

九717 一關で辨當を買つた。

いちば 「市場」(名) 3 市場

十169 だんく市場に近づくと、
本通も横町も皆馬でいっぱいです。

十177 市場は町はづれにあります。
十238 別封の繪葉書も歸りに買つ
たのです。市場の様子がよくわかる
から、引合はせて見て下さい。

いちばん 「二番」(名) 10 一ばん 一
番

四762 西の村 一番の金持の
むすめさんが、此の人の所へ
およめに來ましたが、〈略〉。

六61 「一番は新高山、二番は富
士山、三番目は。」

六523 一番二番三番と、十二番の舞
がめでたくすみましたが、〈略〉。

七110 「さうか。それでは明日の
一番で立たう。」

七1109 「アシタノアサ一ばんノキ
シヤデタツテイキマス。」

七1114 「アシタ一ばんノキシヤデ
イキマス。」

七1121 「アス一バンデタチマス。」

七1128 「アス一バンデタツ。」

七1129 「アス一バンデタツ」

十692 唯今にも鎌倉の御大事とい
ふ時は、〈略〉一番にはせ參じ、
〈略〉、あつばれてがらを立てるかく
ご。

いちばん 「一番」(副) 39 一ばん 一
ばん 一番

一532 モモトラウハカタナヲヌ
イテ、一ばんオホキナオニニム
カヒマシタ。

二67 「オカアサン、オカアサン
ハドノハナガ一ばんオスキデ
スカ。」

三25 カゼモアタタカデ、オモ
テデアソブニハ一バンヨイト
キデス。

三151 「一ばんふといのがおや
ゆびで、一ばんほそいのがこ
ゆびです。」

三152 「一ばんふといのがおや
ゆびで、一ばんほそいのがこ
ゆびです。」

三152 「一ばんふといのがおや
ゆびで、一ばんほそいのがこ
ゆびです。」

三155 「それから、一ばんなが
いのが中ゆびで、〈略〉。」

三486 村ノ中デ、一バン目ダツ
ノハ私ドモノ學校デス。

四162 ワニザメハ〈略〉、タイソウ
オコツテ、一バンシマヒニ居タ
ノガ、白ウサギノ毛ヲミンナ
ムシリ取ツテシマヒマシタ。

四411 一番先にしやうじやか
らかみが外へ出されました。

四864 五人バヤシノ一番右ニ
居ル人ハ何ヲスルノデセウ。

五172 をぢさん、勲章がふえま
したね。一番こつちは金鶏勲章でせ
う。

五715 土手は長さが三百間、高さが
六間半、幅は一番上で三間といふ大
きなもくろみであつた。

六26 今どこのうちへ行つて見ても、
俵の山が出来てゐます。〈略〉。一番
下は四俵、一番上は一俵で、一山は
十俵づつです。

六26 一番下は四俵、一番上は一俵
で、一山は十俵づつです。

六95 金ニハいろ／＼アリマスガ、
中デ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモ
ノ仲間ノ銅デアラウト思ヒマス。

六415 どの町村からも、歩兵が一
番多く出でゐるのに、ふしぎと私の
村からは私一人だ。

六521 萬じゆは當年やうやく十三、
舞姫の中では一番年わかでございます

六521 萬じゆは當年やうやく十三、
舞姫の中では一番年わかでございます

七115 僕が一番先に海へ下りた。
七391 輸出品は豆粕が第一で、輸
入品は綿布が一番多いといふことで
す。

七842 陸ニスムモノデハ、象ガ先ツ
一番大キイガ、〈略〉。

九67 其の實は土人の一番大事な
食料で、焼いて食べたり、餅にして
食べたりします。

九8810 「あ、あの一番高い杉の
眞上の所にあるのが北極星でせう。」

九1069 中でも一番目ざましかつたの
は最後の襲撃。

九1110 案の中にて一番面白き話
をよくおぼえ置き、來週學校にて話
し方の時間に話し、〈略〉。

九1234 道雄ハ誰ガ何ト云ツテモ、自
分デ一番適當ト信ジテキル中村君
ヲ選舉シヨウト決心シタ。

十748 南大門通から本町通・鍾
路通にかけての一帶が、京城での一
番にぎやかな處です。

十1010 たくさん咲いてゐる中で一番
美しいのは、たれ下つた莖に、幾つ
も咲いてゐる薄紅色の花である。

十一404 使ひみちによつて、三十年
目から五十年目ぐらゐの間に伐る
のださうだから、一番早く伐るとし
ても、其の時は僕がおとうさんくら
ゐる年になつてゐるわけだ。

十一4910 これには種類が多く、一番

十一4910 これには種類が多く、一番

十一4910 これには種類が多く、一番

十一4910 これには種類が多く、一番

十一4910 これには種類が多く、一番

よいのはパラゴムといふのである。
 十一754 古い言葉を集めるのに一番よいのは萬葉集です。

十一916 それから雨雪の量は何處が一番多いか、又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。

十一916 略、又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。

十二5010 中湖は深さが三百七十八メートル、此の湖中での一番深い處である。

十二517 即ち水位の一番高い五月と一番低い一月との差は、僅かに三八センチメートルに過ぎない。

十二517 即ち水位の一番高い五月と一番低い一月との差は、略。

十二586 父も喜んだ、子どもも喜んだ。しかも一番喜んだのはねちであつた。

十二665 前あたりのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、わしはそれを知りたいのだ。

十二682 コーデリヤは王が一番かはいがつてゐる娘であつた。

十二1215 毎晩賣上高の勘定を致す時など、仲間のうちにて計算は私が一番達者なりとて、何時もほめられ申候。

いちばんがち 「一番勝」(名) 1 一ばんがち

三648 「いちばんがち、五郎さんの舟。」
 いちばんきしゃ 「一番汽車」(名) 1

六315 一番汽車二乗ラウトイフノデ、父ト五時半頃二家ヲ出タ。
 いちばんだいこ 「一番太鼓」(名) 1

八76 神主は「略」、「支度」といふあひづの一番太鼓を鳴らした。
 いちばんどり 「一番鶏」(名) 1 一番鶏

十485 略、もどかしさに夜の明けるのを待つてゐた。一番鶏の聲を聞いてからは、もうじつとしては居られない。

いちばんぼし 「一番星」(名) 1 一バンボシ

一401 一バンボシミツケタ。アレアノモリノスギノキノウヘニ。

いちびょう 「一秒」(名) 2 一秒

十1286 一秒又一秒、七百尺に近き大船體は、寸、尺、間と音もなくすべり出づ。

十1286 一秒又一秒、七百尺に近き大船體は、略。

いちぶ 「二分」(名) 1 一分
 八484 第十三 驚 略、何所ニ一分ノスキモナク、強ミガ全身ニミチミチテキル。

いちぶ 「二部」(名) 2 一部

十二879 林蔵が二回の探検によりて、樺太は大陸の一部にあらざることを明白となりしのみならず、略。

十二110 今では此の洞門を掘りひろげ、處々に手を加へて舊態を改めて、略。

いちぶしじゅう 「一部始終」(名) 1
 一部始終
 十二707 しかしフランス王は一部始終をよくくきゝたゞして、コーデリヤの簡単な答の中にも十分真心のこもつてゐるのを認め、略。

いちぶぶん 「二部分」(名) 1 一部分
 十二497 十和田湖は一部分秋田縣鹿角郡に屬し、其餘は青森縣上北郡に屬してゐる。

いちぼくいつそう 「一木一草」(名) 1
 一木一草
 十二1003 社寺の壯麗はしばらくおき、何の山、何の川、一木一草に至るまでも歴史あり古歌あり、略。

いちまい 「一枚」(名) 5 一枚
 八791 此の一枚には徴税令書とありませう。

八795 一枚は縣の税で、一枚は國の税です。

八795 一枚は縣の税で、一枚は國の税です。

八795 一枚は縣の税で、一枚は國の税です。

十一151 略、成績物を一枚も無くなさずそろへていらつしやるのに驚きました。

いちまんごせん 「二万五千」(名) 2
 一萬五千
 十一235 略、柴田勝家、先づ佐久間盛政をして一萬五千の兵を率ゐ、近江の柳瀬に討つて出でしむ。

十一634 略、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。

いちまんごせん 「二万五千」(名) 2
 一萬五千
 十一235 略、柴田勝家、先づ佐久間盛政をして一萬五千の兵を率ゐ、近江の柳瀬に討つて出でしむ。

十一278 夜に入れば、見渡す限りのかぎり火畫をあざむく中を、一萬五千の軍勢まつしぐらに進軍して、略。

いちまんごひやくしやく 「二万五百」(名) 1 二万五百尺

六68 富士山の次は、「内地では甲斐の白根で、一萬五百尺。」
 いちまんさんぜんじやく 「二万三千」(名) 1 二万三千尺

六55 臺灣の新高山さ。これは一萬三千尺からある。

いちまんじやくいじよう 「二万尺以上」(名) 1 一萬尺以上

六73 信州の槍岳や赤石山で、どれも一萬尺以上ある。

いちまんにせんごひやくしやく 「二万二千五百尺」(名) 1 二万二千五百尺

六52 何しろ一萬二千五百尺もあつて、内地第一の高山だから。

いちまんろくせんじやくあまり 「二万六千尺余」(名) 1 一萬六千尺餘り
 十二182 殊に驚くべきは輪轉機の

能力なり。巻取紙とて幅三尺六寸、長さ一萬六千尺餘りのものを之に取りつくれば、〈略〉。

いちめい 「二命」(名) 5 一命

九一六 何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。一命を捨てて君の御恩に報ゆる爲には候はずや。

九一八 〇 「一命を捨てて君恩に報いよ。」

九二四 此の有様を見て、フィリップといふ醫師が、一命をなげうつても王を助けようと決心した。

九三〇 〇 とにかく明日の總攻撃見合はせの一事だけは、拙者一命にかけて御引受け申します。

九三二 〇 安芳が一命をかけた努力と、西郷の果斷によつて、江戸の市民も徳川家もわざはひを免れて、〈略〉。

九三六 〇 「二面」(名) 11 一めん一面 〇 うらいちめん・そらいちめん

九三八 〇 ネエサン、デテゴランナサイ、月ガデハジメマシタ。〈略〉。

九四〇 〇 メンニアカルクナツテ、ヒルノヤウデス。

九四二 〇 ハヒヨマキマス、カレ木ニ花ガサイテ、一めんニ花ザカリニナリマシタ。

九五〇 〇 其の洲の白い砂の上に、青い松が一面に立つてゐて、長い橋のやうに見えます。

九五二 〇 道の兩がはは一面に青田で、ちやうど田の草取のさい中です。

七二五 鎌倉は一面火の海になつて、

〈略〉。

九三三 〇 みねからすそにかけての若々しいこずゑの色は、強い日光を浴びて、一面に煙つてゐる。

九三八 〇 庭に敷きつめたむしろの上に、黄色い麥の穂が一面に廣げられて、

〈略〉。

九六八 〇 此の邊が有名な那須野が原だ。昔は一面の荒野であつたが、今は方々に町や村が出来てゐる。

九七二 〇 枯れかゝつて一面に黄色になつたじやがいも畑を、午後の日がかん／＼と照らしてゐる。

九七四 〇 シヤベルでざく／＼かきまぜると、白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、目も口もあけられない。

九七六 〇 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、自ら國民の性質を穩健ならしめ、自然美を愛好するやさしい性情を育成するのに與つて力があつた。しかし此の事情は一面に國民の短所をもなしてゐる。

九八〇 〇 「二目散」(名) 1 いちもくさん

九八二 〇 ふと、垣根の外でちや／＼とすゑの音が聞えた。二匹はいちもくさんにかけて行つたが、〈略〉。

九八四 〇 (名) 〇 むい いちもつ

九八六 〇 (名) 〇 文 1 一文

九八八 〇 あなたから一文でもらふ

氣があるくらゐなら、此所まで持つて來はしません。

いちもんじ (名) 〇 まい いちもんじ

いちや 「二夜」(名) 6 一夜 〇 まつさかのいちや

八四八 〇 此のまごころが神のおぼしめしにかなつたのであらう、一夜大暴風雨がおこつて、海はわかへつた。

八五二 〇 「旅僧あり。とあるあばら家の門口に杖を止めて、一夜の宿を貸し給へ」とこへば、〈略〉。

八五六 〇 「旅僧が一夜の宿を頼むとおほせられて、あなたのお歸を待つていらつしやいます。」

八六〇 〇 「略」常世も、一夜の物語にうちとけては、名残なかく盡きず。

八六四 〇 「略」、面會の機會は松坂の一夜以後とう／＼來なかつた。

八六八 〇 王は二三の忠臣にかしづかれて、とある小屋に一夜を明かしたが、〈略〉。

八七二 〇 (名) 〇 おお いちよう

八七六 〇 「二様」(形状) 3 一様

八八〇 〇 海藻ノ形ハ様々デ、〈略〉。色

八八四 〇 海藻ノ形ハ様々デ、〈略〉。色

八八八 〇 一ひつきやう掘取る者、運ぶ者、植込む者、一様に心を盡くして、大切に取扱ひたるによるならん。

八九二 〇 望遠鏡で見ると、太陽の表面は全部が一様にかゞやいてゐるのではなく、〈略〉。

いちらんする 「一覽」(サ変) 2 一覽する 《一シ》

一二二〇 〇 昨日大英博物館を一覽しました。

一二二四 〇 ルーブル博物館も一覽しましたが、りつばな繪畫・彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。

いちり 「二里」(名) 4 一里

五五七 〇 天の橋立は海中へつき出た細長い洲で、長さは一里、はゞは四五十間。

五六〇 〇 あれは神明様の森だが、あれまでが半道で、あれから町まで一里ある。

五六四 〇 楠木正成が守つた千早城は、六九八 〇 まはりが一里にも足らず、總勢わづか千人ばかり。

九〇四 〇 雪溪は「略」。幅は二三町、長さは一里に近く、行つても行つても眞白です。

九〇八 〇 「二里半」(名) 1 一里半

九一二 〇 「おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、まだ一里半もあるのですか。」

九一六 〇 「二里余」(名) 1 一里餘

九二〇 〇 「略」、往復一里餘もある高輪の泉岳寺へよく連れて行つた。

九二四 〇 「二領」(名) 1 一領

九二八 〇 かやうに落ちぶれてはゐるものの、御らん下さい、これに具足

一領、長刀一ふり、又あれには馬を

一匹つないでもつてをります。

いちりょうじつ 「二兩日」(名) 1 一兩日

十二159図 〈略〉、今や遠くヨーロッパに起りし事件も僅か一兩日にして讀者に報道せらる。

いちわ 「二羽」(名) 6 一ハ 一羽

一304図 「一ハ二ハ三バ四ハ、四ハキマス。」

一311図 「アチラニ一ハキマス。」

一314図 「マタ一ハキマシタ。」

四678 私のうちに山がらが一羽かつてありました。

五188図 〈略〉、金色の鶏が一羽とんで来て、天皇のお弓の先にとまつた。

十4210 〈略〉、山鳥が一羽飛立った。

いつ 「二」(名) 8 一↑ひとつ

六845 全く上下の者が心を一にして、國難にあたつたのである。

十374 米國が此の運河を造るに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。〈略〉、病氣を根絶し、幾萬の従業者の健康をはかつた事や、〈略〉山をくづし、地をうがち、河水をせき止めた事など、

一としてそれならぬものはない。

十1266図 青年團の事業の一として、杉・檜の植林を營めり。

十115 太陽の熱と光とがなくては、我々人間は勿論、あらゆる生物、一として生存することは出来ない。

十一349図 嚴島は古より日本三景

の二に數へられて殊に名高く、〈略〉。

十一1275図 喜捨を受けたる此の金之を一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ふるも、歸する所は一にして二にあらず。

十二466図 家屋・橋梁・船舶・電柱より桶・たる・曲物の類に至るまで、一として杉を用ひざるなし。

十二1328 我が國が〈略〉、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、〈略〉。

いつ 「何時」(代名) 25 イツ いつ何時

三644図 「イツヒヨコガ出マスカ。」

三754 イツマデタツテモシヨウブガツカナイノデ、中ナホリヲシマシタ。

四824 トンネルを出て、海を見下した時には、いつ見てもよいけしきだと思ひました。

五574 晴れた日、月の夜、雪の朝、いつ見てもよい景色です。

六1344図 モシセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ、イツデモ光ツテキマス。

六385 義經に此の名を惜しむ心があつたので、何時の戦にも勝つたのでございませう。

六964 すると正成は、何時の間に用意して置いたか、たくさんなたいまつを出して、〈略〉。

七155 潮がだんだんさして来て、何

時の間にか洲が見えなくなつた。

七1105図 「ハナシデキツイツクルヘン。」

八237 四十餘年はいつの間にか過ぎて、もう供へる首がなくなりました。

八389 呉服屋の手代が、〈略〉、何時の間にか、ぐつすりねこんでしまひました。

九176 〈略〉、何時デモマハリノ物ノ色ガカハレバ、間モナクソレト似タ色ニカハルモノモアル。例ヘバ雨蛙ハ〈略〉。

九873図 何かといふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九957図 眞夏の日中でも、杖を握つてゐる手などは、何時の間にかつめたくなつてしまひます。

九9710 〈略〉、僕等も何時の間にか、山の上に居るやうな氣持になつて聞きました。

十5110図 「預けたお金は何時でも返してもらへますか。」

十522図 當座の方は何時でも引出すことが出来るが、定期の方は、〈略〉。

十705図 〈略〉、そゝろに別れがたき思あり。されどかくて何時まで留るべき身ぞと、心強くも立去りけり。

十804 安全燈の取手を握りしめて、じつと目をつぶつてゐるうちに、何時の間にか、地下九百尺の坑底に着きました。

十一164図 「成程、かういふ風に分類してそろへておけば、いつ取出すのにも便利だ。」と思ひました。

十一402 僕がお手傳して植ゑたあの杉や檜は、何時になつたら伐るのだらう。

十一755図 そこで先づ順序として萬葉集の研究を始めたところが、何時の間にか年をとつてしまつて、〈略〉。

十一904 僕はこれまで暦といふと、〈略〉・日食・月食が何時になるかといふやうな事を見るものとばかり考へてゐたので、〈略〉。

十二114 温順な彼は父の命に従つて勉強してゐたが、何時の間に好き

な博物學の研究が主となつてしまつた。

十二727 王は〈略〉、何時の間にかもう發狂してゐた。

いっか 「二家」(名) 5 一家↓いっしんいっか

八206図 イカダノ大ナルモノハ〈略〉、一家コトゴトコレニ乘リテ、流ニシタガヒテ下ル。

八1144 大將が十歳の年、大將の一家は郷里へ歸ることになつた。

十一4410図 君は畫を以て一家を成せる人なるに、數年の間一度も筆を取り給ひし事なし。

十一9410 リンカーンが七歳の時、一家はインディアナ州に移つたが、〈略〉。

十一 95 9 一家の暮し向は誠にあはれなもので、〈略〉。

いつか「五日」(名) 6 五日 ↓くがついつか・こがついつか

六 20 6 図 「これが五日もつゞくと、ひぼしだ。」

七 62 2 橋のないところでは五日も十日も水のひくのを待たなければならず、〈略〉。

八 46 8 図 〈略〉、五日でも十日でも、一人で寝起の出来るまで、ゆつくり看病してお上げなさい。

十一 89 図 五日 月立春 つちのととり 〈略〉

十一 89 図 五日 水かのとみ 〈略〉

十二 86 10 図 翌日此の地を去り、河をさかのぼること五日、遂に目的地なるデレンに着せり。

いつか「何時」(副) 12 いつか 何時か 何時か

三 34 2 いつかうちのおとうさんが道で、「いつもおたつしやなこと。」とおつしやつたら、〈略〉。

五 55 2 いつか此の事が天皇のお耳に入りまして、わざ／＼奈良の都から美濃の國へ行幸になりました。

五 93 8 いつか大そう雨のふるばんに、年取ったおぢいさんが、遠方に居るむすこの所へ出した封書や、〈略〉。

七 13 6 何時か知らない人とも話し合ふやうになつて、〈略〉、おたがひに

見せ合ふ。

七 50 8 何時か私ノウチノツルベノ金タガゴコレタ時、ツクロヒヲタノンダラ、翌日スグニナホシテクレマシタ。

七 108 1 図 清正はつけひもの頃から、此の方のひざの上でそだつたので、何時か見習つたものと見える。

九 68 3 「宇都宮」と驛夫の呼ぶ聲に、何時かおかあさんと日光見物に來た時のことを思ひ出した。

十 50 9 図 銀行といへば、おとうさんは、何時かも銀行へ行つてお金を預けて來るとおつしやいましたね。

十 73 3 図 何時か御約束した通り、今日は當地の様子を少しばかり申し上げます。

十一 38 10 いつかにもいさんが、「杉の散髪だ。」といつてみんなを笑はせたことがある。

十一 41 1 ぼんやりいろ／＼の事を考へてゐるうちに、いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。

十二 137 6 我々は何時かは摸倣の域を脱して十分に獨創力を發揮し、世界文明の上に大いに貢獻したいものである。

いつかい「二回」(名) 1 一回

十一 37 9 植付けた苗木の枯れた處へ補植するのは、翌年一回だけだといふから、今年はもうしなくともよ

いのであらう。

いつかく「二角」(名) 1 一角

十 24 5 其の一角にそびえてゐる燈臺に、年とつた燈臺守が、妻と娘と三人で、わびしく其の日を送つて居た。

いつかげつ「二箇月」(名) 1 一箇月

十一 93 6 図 ところが太陰曆は〈略〉、三年にならないうちに一箇月の閏をおかなければならぬ。

いつかん(名) ↓しゅうしいつかんする

いつき「二揮」(名) 1 一揮

十 128 4 図 やがて工廠長のふりかざしたる金色の槌は、二年間の苦心を此の一揮にこめて、切斷臺上の繫索をはつしと切る。

いつき「二旗」(名) 1 一旗

十二 62 2 図 〈略〉、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、藍地に斜白十字の徽章ある後者の國旗とを合して一旗となし、〈略〉。

いつき「二騎」(名) 2 一騎

六 94 7 図 「それ、敵が出た。一騎も餘すな。」

八 8 9 始の間はあまり甲乙はなかつたが、半分程の所から一騎後れ、二騎後れ、〈略〉。

いつきうち「二騎打」(題名) 2 一騎打

七 目 16 第十四 川中島 一 一騎打

七 43 3 第十四 川中島の戦 一 一騎打

いつきよく「二曲」(名) 4 一曲

十二 38 8 図 「はいつてみよう。さうして一曲ひいてやらう。」

十二 40 3 図 まあ一曲ひかせていたゞきませう。

十二 43 5 図 三人は「どうかもう一曲。」としきりに頼んだ。

十二 43 7 図 「それでは此の月の光を題に一曲。」

いつきよに「二挙」(副) 2 一舉に

十一 25 5 図 奇手の大將佐久間盛政は、〈略〉、一舉に敵をみぢんにせんと、〈略〉。

十二 124 9 月の十五日を期して總攻撃を行ひ、一舉に江戸を乗つ取る手はずである。

いつくしま「嚴島」(地名) 1 嚴島

十一 34 8 図 嚴島は古より日本三景の一に數へられて殊に名高く、〈略〉。

いつくしまじんじや「嚴島神社」(名) 1 嚴島神社

五 58 7 島の東北に嚴島神社があり、ます。

いつけい(名) ↓ばんせいいつけい

いつけん「二軒」(名) 3 一けん 一軒

五 27 8 こんな所にと思ふやうな村外れに、家が一けん立つてゐます。

七 24 3 傘松の四五間さきに、小さな茶屋が一軒ある。

九 55 3 図 それにあの人の事だから、決してあせらず、一軒二軒と得意先

をまして行つて、〈略〉。

いっけん 二間 (名) 1 一間

十一〇四 園 先づ柄の長さ一間もあるなにて灌木を伐拂ひ、次に〈略〉。

いっけん 二見 (副) 1 一見

十一九四 租界には〈略〉幾多の人種が入交つてゐるので、其の有様は一見世界人種の展覽會のやうである。

いっけんや 二軒家 (名) 1 一ケン

ヤ

四九二 谷ソコノ一ケンヤニモ、川ヲ下ツテ行ク小サナ舟ニモ、コクキガ出シテアリマシタ。

いっけんよ 二間余 (名) 1 一間餘

八四九 スナハチ一間餘モアルツバサヲハツテ、數分ノ間羽バタキ一ツセズ、空中ヲノシテ行ク。

いっこう 二行 (名) 2 一行

十二八五 園 文化六年六月の末、コニ・林藏等の一行八人は、〈略〉上陸したり。

十二八七 園 歸途一行は黒龍江を下りて河口に達し、海を航してノテトに歸れり。

いっこう 二向 (副) 1 一向

十七三 園 なれない私は、〈略〉危険なやうな氣がしてならなかつたが、土地の人は一向平氣で、〈略〉。

いっこく (名) 1 一こく

いっこくぶんか 二国文化 (名) 1

一國文化

十二九四 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。

いつころ 何時頃 (名) 2 何時頃

九八三 園 何時頃までに出来ましか。

十一九一 園 それから雨雪の量は何處が一番多いか、又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。

いっさい 二切 (名) 1 一切

十二八四 園 出發の日近くや、林藏はこれまでの記録一切を取りまとめ、之を從者に渡していふやう、〈略〉。

いっさい 二切 (副) 2 一切

六八五 自由になうごさすことの出来る長い鼻、〈略〉、細い尾、一切繪で見た通りであつた。

六八六 園 神殿の御もやうを拜した。一切白木造で、お屋根はかやでふいてある。

いっさいきよう 二切經 (名) 8 一切經

十一二五 園 一切經は、佛教に關する書籍を集めたる一大叢書にして、〈略〉。

十一二六 園 一代の事業として一切經を出版せん事を思立ち、〈略〉。

十一二七 園 我が一切經の出版を思立ちたるは佛教を盛にせんが爲、佛教を盛にせんとするは、ひつきやう

人を救はんが爲なり。

十一二七 園 喜捨を受けたる此の金、之を一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ふるも、〈略〉。

十一二七 園 一切經を世にひろむるはもとより必要の事なれども、人の死を救ふは更に必要なるに非ずや。

十一一三〇 園 かくて〈略〉、一切經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられたり。

十一一三三 園 これ世に鐵眼版と稱せらるゝものにして、一切經の廣く我が國に行はるゝは、實に此の時よりの事なりとす。

十一一三八 園 鐵眼は一生に三度一切經を刊行せり。

いっさくじつ 二昨日 (名) 1 一昨日

八六五 園 おとうさんは一昨日の正午無事にサンフランシスコへ着きました。

いっさつ 二冊 (名) 1 一さつ

十一二八 園 私はわざと一さつの書物を床の上に投げて置きました。

いっさんに 二散 (副) 3 一さんに一散に

七二〇 此の時清正は、地震と共にね起き、家來の者二百人に梃を持たせて、一さんに伏見の城へかけつけました。

八八七 三番太鼓が鳴るが早いか、五匹の馬は一さんにかけ出した。

九一一 さうして主人がこひしくなつて、今來た方へ一散にかけもどつた。

いっしつ 二室 (名) 3 一室

十一六九 園 或山寺で、四人の僧が一室に閉ぢこもつて、七日間の無言の行を始めた。

十一七三 園 望がかなつて、宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出来たのは、それから數日の後であつた。

十二二七 園 一室に通されて待つてゐると、やがて西郷が出て來た。

いっしやく 二尺 (名) 1 一尺

六七五 二三日ひどく寒かつたので、湖の水が大へんあつくなつた。一尺ぐらゐもあらう。

いっしやくほど 二尺程 (名) 1 一尺程

八三〇 前には三尺に一尺程のかま口を造り、後の方に煙出の口を明けるのである。

いっしゅ 二首 (名) 1 一首

八二〇 園 又まことに申しかねますが、當日祝の歌を一首いたゞきたうございます。

いっしゅ 二種 (名) 3 一種

九一九 園 シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出來テキルノハ、印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。

十一九一 園 租界といふのは居留地的一種で、居留民が支那政府の手を離れて、自治制を布いてゐる處である。

十二四七 園 ひばは〈略〉、落葉松は

一種の品位を有する等、各其の特性を具へたり。

いっしゅうかん 「一週間」(名) 2 一週間

八四六 取分けおいそがしい中を、一週間もおひまをいただきます、まことにありがたう存じます。

九七八 これこそ僕たちが、一週間も前から、毎日々々待つてゐた命令だったので、〈略〉。

いっしゅく 「二宿」(名) 1 一宿
十六一 僧は改めて主人に一宿をこへり。

いっしょ 「一所」(名) 22 いっしょ
一シヨ 一しよ 一所

二一七 子ドモガ大ゼイ、オモテデ一シヨニウタツテキマス。

三四八 ハヤクカホヲアラツテ、ニイサント一シヨニオサラヒヲシマセウ。

三六四 さあ、私がこゑをかけましたら、みなさん一しよに舟を出すのですよ。

三六七 三人は一しよに舟を出しました。

四三九 そこへぼちが来ましたので、一しよに向ふの方へ行つてみました、〈略〉。

五三九 うめやも、やさくらがみんな一しよにさいてゐます。

六四三 略、私を入れて村からは五人も出てゐるが、兵種がちがふと、

兵舎のあり場所もちがふので、めつたに一しよになることはない。

六五七 此の時には頼朝もおもしろくなつて、いっしよに舞を舞ひました。

八五九 「お前も一しよに行つてお出で。」

八五二 僕ははかまを着けて、信吉と一しよに出かけた。

八五九 さうしてみんな一しよに學校の門を出た。

九六八 午後六時、叔父さんと一所に、上野驛から青森行の列車に乗つた。

九七二 西洋では昔から、あの七つの星と其の近所の星を一しよにして小熊の形を想像し、〈略〉。

九八三 略、北斗七星と其の近所の星を一しよにして大熊の形を想像して、それぐ、小熊座・大熊座といふ名をつけてゐる。

九八四 略、北風は外の軍馬と一所に、露營のテントの前に、列を正して並んだ。

一〇三九 私も、あなたのおとうさんなどとしよに、よく道ぶしんに出たものでした。

一〇四九 事務所で坑内服に着かへ、安全燈を持つて、案内の事務員と一所に昇降器に乗りました。

一〇五七 略、一本橋がある。太郎は友だちのすゝめをことわりかねて、一所に渡り出した。

一〇五九 その中、先に進んでゐた者

が三人列から離れて船に上つた。僕も急に元氣がなくなつて、一所に船に上らうかと思つたが、〈略〉。

一〇六〇 略、此の手紙と一しよに、繪葉書をたくさん小包にて送り申候。

一〇六一 昨日橋本君と一しよに町はづれのガラス工場を見に行つた。

一〇六二 略、八人一所にうづくまりて僅かに雨露をしのぐ。

いっしゅう 「二生」(名) 8 一生
七九八 略、戦一つ出来ず、人のかげごとばかりいふ石田めとは、此の清正一生中直りは致さぬ。

八〇一 これが人蔘で、此の婦人は長生をしましたが、一生の間仕合はせのよい事がつづいたと申します。

八〇四 大將はこれから後、一生の間「寒い。」とも「暑い。」ともいはなかつたといふ。

八一六 「成績物は一つ一つ自分の力のこもつたもので、皆一生の記念になるのだ。」

八二〇 略、鐵眼は一生に三度一切經を刊行せり。

八二一 此の航海によつて彼の博物學者としての基礎が十分に出来、一生の方針がはつきりときまつた。

八二二 かうして、略、彼が一生をさへげた大工事が見事に成就した。

八二三 略、一部は尚昔の面目を留めて、禪海一生の苦心を永久に物語つてゐる。

いっしゅうけんめい 「一生懸命」(形容) 8 一シヤウケンメイ 一しやうけんめい 一生けんめい

二三八 グランナサイ、ミンナガチカラヲイレテ、一シヤウケンメイデス。

三二七 それからは一しやうけんめいになつて、毎日字をならひました。

五八八 又うすい吉野紙のやうな作りかけの繭の中で、きゆうくつさうにからだをまげて、一生けんめいにはたいてゐるのがあります。

六八四 武士といふ武士は必死のかくごでふせいだ。百しやうも一生けんめいで、ひやうらうをはこんだ。

八四二 「多勢の方はゆだんをしてゐるが、小勢の方はみんな心を合はせて、一生けんめいになつてゐる。」

九四三 世の中は何でも一生けんめいに働く者が勝た。

九四六 やがて「進め」の號令がかゝると、たゞ愉快にたゞ一生けんめいにかへ出す。

一〇八八 これに力を得て、又一しやうけんめいに泳いで行く。

いっしゅうけんめい 「一生懸命」(副) 1 一しやうけんめい

一一六 驚いて一しやうけんめい逃げようとしてあせつてゐるが、もう遅い。

いっしん 「一心」(名) 1 一心

五七三 人の一心といふものはえらいもので、三度目に土手の工事はうまいといつた。

いっしん 「一身」(名) 1 一身

十二一〇五 略、我が命のある限り、一身をさへけて此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安全な路を造つてやらう(略)。

いっしん いっか 「一身一家」(名) 1

九二五九 略、大體一身一家の爲でなく、一すぢに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ事で、(略)。

いっしん いったい 「二進一退」(名) 1

一進一退

十二七五 岩の附近は波がいよく荒れくるふ。(略)。一進一退、たゞ運を天にまかせて、二人はボートをあやつつた。

いっしん に 「一心」(副) 8 一心に

八六二七 保己は一は五歳の時めくらとなりしが、人に書物をよませて、一心に之を聞き、(略)。

九二七五 略、それにはわたしは死んでも國へ歸らずに、すぐに江戸へ出て、

りつばな學者を先生にして、一心に學問をはげむがよい。

九二八六 信淵は(略)、宇田川玄隨・大槻玄澤などの人々をたよつて、一

心に西洋の學問を勉強した。

九八四四 略、安ちいさんは一

心に 毘沙門天を刻みゐき、めがねを掛けてはつづ着て。

十一七〇八 本居宣長は(略)。(略)、將來學問を以て身を立てたいと、一心に勉強してゐた。

十一九九六 リンカーンは(略)、鬼の首でも取つた氣になつて一心に讀續けた。

十二一〇〇 彼の初一念は年と共に益々固く、(略)、經文をととなへながら一心にのみを振るふことさへあつた。

十二一〇二 略、何事も忍耐が第一とのかねての御教訓に従ひ、一心に働き候ため、追々店の様子もわから、(略)。

いっしん ふらん 「一心不乱」(名) 1

一心不乱

十四三九 かる、切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不乱に働くので、仕事は豫想以上にはかどり、(略)。

いっすん 「一寸」(名) 1 一寸

十二一〇二 しかしたとへにも申す通り、一寸の蟲にも五分の魂。徳川侍のなまくら刀にも少しは切れる所がござりませう。

いっすん さき 「一寸先」(名) 2 一寸先

七五七三 又きりがかゝつたり、大雪が降つたりして、一寸先も見えなくなることもありす。

九九五四 雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて來

て、時には一寸先も見えないやうなことがあります。

いっせいに 「一齊」(副) 8 一せいに

七六七 略 三萬近き學校に 分れて學ぶわれ／＼の 望に向ふ足なみは皆一せいにそろふなり。

九六二八 すると乗員は、一せいに飛起きて、手早くつり床をくくる。

九七七九 これこそ僕たちが、一週間も前から、毎日々々待つてゐた命令だつたので、皆一せいに小をどりして喜んだ。

九七八八 皆は一せいにほりにかゝる。

九一〇六 「乗馬。」兵士たちは一せいに馬上の人となつた。

十二八六 拜觀者の目は、一せいに艦にそゝがれぬ。

十二八五 略、工場といふ工場、船といふ船の汽笛が一せいにあぐる歡呼の聲。

十二一七三 安芳がはいつて行かうとすると、門を守つてゐた兵士等が

(略)、一せいに銃劍を取直して行くてをさへぎつた。

いっせき 「一隻」(名) 1 一隻

十一二六 一隻の捕鯨船が、勇ましく波を切つて進んで行く。

いっせん 「一錢」(名) 2 一錢

十一一七 略 苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も残らずなりぬ。

を決し、(略)、又もや一錢をも留めざるに至れり。

いっせんさんびやくり 「一千三百里」(名) 1 一千三百里

八一九三 揚子江ハ支那第一ノ大河ニシテ、其ノ長サ一千三百里、(略)。

いっせん にひやくねん 「一千二百年」(名) 1 一千二百年

十二九九 略、東大寺の金堂は天空高くそびえて、五丈三尺の大佛一千二百年の面影を残せり。

いっそ (副) 1 いっそ

十二一〇八 そこで人々はいっそ我々も出来るだけ此の仕事を助けて、一日も早く洞門を開通し、老僧の命のあるうちに其の志を遂げさせると共に、我々もあのくさり戸を渡る難儀をのがれようではないかと相談して、(略)。

いっそう 「二草」(名) 1 いちばくいっそう

いっそう 「一艘」(名) 4 一そう

四六一四 略、へいけ方から舟を一そうこぎ出して來ました。

六二〇 もとより舟は一そうも出てゐません。

十二四一〇 一そうの船が、俄の嵐におそはれて、此の島に近い岩に乘上げた。

十一五五六 昔、アフリカの或港に一そうの船がとまつてゐた時の話である。

いっそう 「二層」(副) 6 一そう 一層

六105 2 宇治橋を渡つて〈略〉、何

となく心持がかはつて、一そうあり

七62 5 中でも安倍川の宿は一そうの

九13 7 毎日世話し居ることとい

は一そうかはゆく思はる。

九22 9 それから元庵様・不昧軒様、

二代つゞいて、其のお志をおつぎに

十105 7 外はさつきよりも一そう風が

る向ふの木がひどくゆれる。

十116 6 此の神社は菅公の御墓所に

建てたものだといひ、一層感を深

くした。

いっそうする 「一掃」(サ変) 1 一

掃する 《一スル》

十二136 4 〈略〉、かういふ短所はやが

て我が國民から消去であらうが、

出來る限り早く之を一掃することは

我々の務ではあるまいか。

いっぞや 「何時」(副) 1 何時ぞや

十171 5 世か。これは何時ぞやの大雪に宿を

借りた旅僧であるぞ。

いっそん 「二村」(名) 4 一村

六66 6 或村に大火事があつて、一村

ほとんど丸やけになつた。

十125 7 全村農業を以て生計を立つ。

〈略〉、殊に一村鶏を飼はざる家なし。

十125 7 村長は〈略〉、常に力を一

村の幸福の爲に盡くすが故に、深く

村民に敬愛せられて、〈略〉。

十126 10 萬事此の有様なれば、一村

は誠に平和にして、年を追うて其の

繁榮を増すばかりなり。

いっそんきょうどう 「二村共同」(名)

1 一村共同

十126 8 其の利益は、大部分を學校

の基本金とし、其の殘部を一村共同

の有益なる事業の費用にあつる計畫

なり。

いったい 「二体」(名) 1 一體

十31 4 パナマ地峽は一體に小山が起

伏してゐる上に、地層にはかたい岩

石が多い。

いったい 「二退」(名) 1 いっしんいっ

たい

一隊、湖に沿ひたる一筋路を急ぎに

急ぎて進み来る。

いったい 「二体」(副) 11 一たい 一

體

七58 3 一たい船にはらしんぎとい

ふ物があつて、それで方角をとつて

進みますから、いくらきりが深くて

も、まるでちがつた方へ行くやうな

ことはありません。

十51 3 一體、なぜお金を預ける

のですか。」

十52 10 一體、銀行は人からお金を

預つてそれをどうするのですか。

十一1 6 これほど我々に重大な關係

のある太陽とは、一體どんなもので

あらう。

十一49 6 一體ゴムは何からどうして

造るのであらうか。

ほたるの光のやうに熱をとまはな

いものであります。

いったん 「二反」(名) 2 一反

八42 8 名札をつけて、三日の間に間違なく

持參致せ。」

八43 2 三日の間に一同は白木綿を一

反づつ持つて參りました。

いったん 「二端」(名) 3 一端

十一6 5 今此の書によりて其の一

端を述べん。

十一123 3 細長い管の一端を、とけた

ガラスの中に突つこんで引出すと、

先に赤い玉がくつついてゐる。

十一123 5 一端に口を當てて息を吹き

こむと、ぶうつとふくれる。

いったん 「二旦」(副) 1 一たん

八10 4 耕造は〈略〉、一たん沈んで

又浮上つた信作のえりを引つつかん

で、ぐつと岸へ引上げた。

いっち (名) 1 ききょういっち

いっちす 「二致」(サ変) 1 一致す

《一セ》

十二62 10 即ち〈略〉、藍地中の星

章は、常に州の數と一致せしむるを

定めとす。

いっちする 「二致」(サ変) 1 一致

する 《一スレ》 1 ききょういっち

する

十二89 4 〈略〉、兩院の意見が一致す

れば、最後に議決した議院の議長か

ら國務大臣を経て奏上する。

- いっちょう 「二丁」(名) 2 一ちやう
 八287 図 〈略〉、のみ一ちやうにて見
 事なるほり物をほりて、人を感じせし
 むるも、手の働なり。
 十二794 漁夫はめい／＼手に一ちや
 うづつの鈎を持ち、狂ひ廻るまぐろ
 を引つけ、はねるはずみを利用し
 て船中に引上げる。
 いつつ 「五」(名) 2 五ツ 五つ ↓
 よつついつつ
 二317 図 モウ五ツ ネレバ、オ正月
 デス。
 四898 十郎が五つ、五郎が三つ
 の年に、父はくどう すけつね
 にころされました。
 いったい 「二定」(名) 2 一定
 九637 それにつれて、つり床は正し
 く一定の場所に納められる、すべて
 の窓や出入口は開かれる。
 十559 普通傳書鳩を使用する方法は、
 一定の飼養所から他の土地に連れて
 行つて、飛歸らせるのである。
 いったいふへん 「一定不変」(名) 1
 一定不変
 十二626 図 アメリカ合衆國の國旗は
 一定不變の部分と、變化を許された
 る部分とより成る。
 いったん 「一天」(名) 1 一天
 五186 図 其の時一天にはかにき曇
 つて、ひようがひどくふり出すと、
 〈略〉。
 いったん 「二点」(名) 1 一點
 十二957 彼は夜もすがら靜坐してひ
 たすら思をこらしてゐると、やがて
 一點の明星がきらめいて、〈略〉。
 いったんする 「一転」(サ変) 1 一
 轉する 《一スル》
 十二4310 〈略〉、やさしい沈んだ調は、
 〈略〉、一轉すると、今度は如何にも
 ものすごい、いはば奇怪な物の精が
 寄集つて、夜の芝生にをどるやう、
 〈略〉。
 いったん 「一島」(名) 2 一島
 十一332 図 岬かと思れば島なり。一
 島未だ去らざるに、一島更にあらは
 れ、〈略〉。
 十一333 図 一島未だ去らざるに、一
 島更にあらはれ、水路きはまるが如
 くにして、また忽ち開く。
 いったん 「二頭」(名) 2 一頭
 十207 図 子馬が一頭づつ中央の廣場
 に引出されると、〈略〉。
 十224 図 此の町では、二歳駒の市が
 〈略〉、直段も一頭四千圓・五千圓と
 いふ高いのがあるさうです。
 いったん 「一時」(名) 2 一時
 七776 図 「いつもより早いのに、よ
 く参つて居つた。」「いつも人より一
 時前に参つて居ります。」「一時も前
 に。」
 七777 一時は今の二時間にあたるの
 である。
 いったんきまえ 「二時前」(名) 1 一時
 前
 七775 図 「いつも人より一時前に参
 つて居ります。」
 いっぱい 「一杯」(名) 1 一ぱい
 七88 図 「では水を一ぱい下さい。」
 いっぱい 「一杯」(形状) 7 いっぱい
 一ぱい ぐかこいっぱい・せい
 ぱい・ちからいっぱい・にわいっ
 い・みせいっぱい
 五757 一冬こして、春には池の水が
 一ぱいになつた。
 七34 図 なはてつたひに來る風も、
 若葉のにはひかんばしく、空一
 ぱいの星は皆、涼しく金にまたゝ
 けり。
 十1610 図 だん／＼市場に近づく
 と、本通も横町も皆馬でいっぱい
 十844 炭車が一ぱいになると、馬方
 がそれを馬に引かせて、電氣機關車
 の通ふ道まで運んで行きます。
 十1048 其處から又右に折れると、細
 長い室一ぱいに、目もさめるやうな
 草花が並べてある。
 十二444 〈略〉、三人の心はもう驚と
 感激で一ぱいになつて、唯ぼうつと
 して、ひき終つたのも氣附かぬくら
 る。
 十二799 船がまぐろで一ぱいになる
 と、〈略〉、えつき／＼と陸の方へ漕
 歸つて來る。
 いっぱい 「一杯」(副) 2 一ぱい
 四247 〈略〉、とだなからうでた
 くりをおぼんに一ぱい持つて
 來て下さいました。
 九277 目に涙を一ぱいためて聞いて
 ゐた少年は、固い決心を顔にあらは
 して、實行をちかつた。
 いっぱつ 「二発」(名) 2 一發
 十1138 〈略〉、ねらひを定めて、ずど
 んと一發、破裂矢をしかけたもりを
 打つ。
 十一582 とたんに、ずどんと一發す
 さまじい大砲の音がとどろき渡つた。
 いっぱん 「一般」(名) 3 一般
 十一1167 公吏・議員等、直接間接に
 公共の事務に當る者は、〈略〉、一般
 の人民の後援がなければ自治團體の
 圓滿な發達を望むことは出來ない。
 十一116 例へば教育・衛生等の自治
 團體の事業は、地方人民が一般に之
 を尊重し、之に協力することによつ
 て、〈略〉。
 十二315 図 此處はさすがに藝術的都
 として世界に聞えてゐるだけあつて、
 建物なども一般に壯麗です。
 いっぱんじんみん 「一般人民」(名) 1
 一般人民
 十一1145 一體自治の精神とは何であ
 るか。〈略〉。一般人民が〈略〉する
 にも、皆此の精神を本としなければ
 ならない。
 いっぴき 「二匹」(名) 19 一匹
 二277 ソノトキ一ピキノ子ネズ
 ミガマヘヘデテイヒマシタ。

二415 ヨイオヂイサンハ犬ヲ
一匹キカツテ、タイソウカハイガ
ツテキマシタ。
四424 だい所で〈略〉、子ねずみ
が一匹きとび出しました。
五371 一匹は目に、一匹は口に、一
匹は耳に手をあててゐます。
五371 一匹は目に、一匹は口に、一
匹は耳に手をあててゐます。
五371 一匹は目に、一匹は口に、一
匹は耳に手をあててゐます。
五795 八幡太郎義家が〈略〉廣い野
原を通りますと、狐が一匹とんで出
ました。
六248 〈略〉、人の馬には自分が乗り、
自分の馬には人が乗り、後向に乗る
者もあれば、一匹の馬に二人乗る者
もあります。
六286 なるほど、ごまつぶ程の蟻が
一匹虎を見上げてゐます。
六471 卵ハ〈略〉。一匹デ三四千粒
モ産ムトイフガ、産デシマフト、
其ノ上ニ砂ヤ小石ヲカブセル。
七304 昔一匹の獅子、森の中にて
眠りしに、〈略〉。
八55 二匹はいちもくさんにかけて
行つたが、間もなくかはいらしいの
を一匹つれて来た。
九336 すると木のうろから、栗鼠が
一匹、けろりとした顔を出したが、
〈略〉。
九453 又コ、二匹ノ馬アリテ、

之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、
〈略〉。
十689 御らん下さい、これ
に具足一領、長刀一ふり、又あれに
は馬を一匹つないでもつてをります。
十810 安全燈をたよりに歩いて行く
と、不意に足もとからねずみが一匹
飛出しました。
十821 はつと思つて立止ると又一匹。
十二119 〈略〉、珍しい甲蟲が二匹ゐ
た。早速兩手に一匹づつつかむと、
又一匹變つたのが見えた。
十二119 早速兩手に一匹づつつかむ
と、又一匹變つたのが見えた。
いっぴょう 二俵(名) 1 一俵
六27 今どこのうちへ行つて見ても、
俵の山が出来てゐます。〈略〉。一番
下は四俵、一番上は一俵で、一山は
十俵づつです。
いっぶく 二服(名) 1 一服
十405 父は「力藏さん、まあ、一
服やつてから始めなさい。」といつ
たが、〈略〉。
いっぶんかん 二分間(名) 2 一分
間
十568 鳩は一分間に約一キロメー
トルも飛ぶ力があるから、〈略〉。
十二186 殊に驚くべきは輪轉機の
能力なり。〈略〉、一臺よく一分間に
四百五十枚を印刷すといふ。
いっぺん 二片(名) 1 一片
十一1107 白雲いうく去り又来

る。西窓一片残月あはし。
いっぺん 一遍(名) 1 一ぺん
一376 ハナハソレデヨイカ
ラ、ハヲチヒサクシテ、モウ一
ペンカイテゴランナサイ。
いっぽ 二歩(名) 3 一歩
十120 公は此處にうつされてから一
歩も外へは出ないで、三年の歳月を
送られたさうである。
十一761 これは學問の研究には特
に必要ですから、先づ土臺を作つて、
それから一歩一歩高く登り、最後の
目的に達するやうになさい。
十一761 それから一歩一歩
高く登り、最後の目的に達するやう
になさい。
いっぽう 二方(名) 7 一方
八135 〈略〉、安倍川原へ石合戦を見
に行つた。一方は百四五十人で、他
の一方は三百人以上もあつた。
八136 一方は百四五十人で、他の一
方は三百人以上もあつた。
十206 せり場の一方に高い臺があ
つて、其の上に掛の人が居る。
十564 それは、豫め甲乙の二地をき
めて置いて、一方を飼養所、一方を
食事所とし、〈略〉。
十564 〈略〉、一方を飼養所、一方を
食事所とし、〈略〉。
十一953 それは三方が丸太の壁で、
一方は明けはなしになつてゐて、戸
も窓も床もないものであつた。

十二789 〈略〉、えんやくと掛聲を
掛けながら身網を一方からたぐつて
行く。
いっぽん 二本(名) 10 一本
四52 しぶ柿が三本、あま柿が
二本で、その中に私の木が
一本あります。
七231 それを通りぬけて四五町上る
と、道ばたに大きな松が一本ある。
八287 又筆一本にて美しき繪をゑ
がき、のみ一ちやうにて見事なるほ
り物をほりて、人を感じしむるも、
手の働なり。
九351 〈略〉、此の前來た時の事を考
へながら、出後のわらびを一本折
つて、又歩き出す。
九661 火繩一本の煙草ぼんのまはり
には、人の山が出来て、いろいろの
話が出る。
九789 僕はわり合にしつかりしてゐ
る一本の莖を握つて、ぐつと引張つ
た。
十一368 一坪一本の割。」とおとう
さんの手で記してある。一昨年植付
けた時の覺書だ。
十一482 此の一言を聞くや、畫師
又かのふすまの鶴に筆を取らず、唯
杉戸に繪一本を畫がきて東國へ出
立しぬ。
十二602 直りました。ねちが一本
いたんであましたから、取りかへて
置きました。

十二113 8 園 エヂソンは〈略〉、ふと見れば机上に形珍しき一本の團扇あり。

いっぽんすぎ 「二本杉」(課名) 2 一本杉

四目9 二十 一本杉

四71 7 二十 一本杉

いっぽんすぎ 「二本杉」(名) 4 一本杉

四71 8 私 は 道 ば た の 一 本 杉 で す。

四72 3 園 一 本 杉 の う し ろ へ お 日 様 が お は い り に な っ た。

四72 5 園 一 本 杉 の ふ と こ ろ か ら

お月様がお上りになった。

四79 4 園 「此の人も一本杉の外にないてくれるものがなくなつた。」

いっぽんばし 「二本橋」(名) 1 一本橋

十93 4 其の近道といふのは田のあぜ道で、途中にはかなり深い小川にかけ渡した一本橋がある。

いつまでも 「何時迄」(副) 2 何時までも

十一45 2 園 我もとより衣食の費をいとおにあらざれど、何時までもかくておはすべきにあらねば、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。

十二14 10 園 されど人智の進歩と印刷術の發達とは、何時までもかく單純

にして遊戲的なるものに満足すべくもあらず、〈略〉。

いつも 「何時」(副) 28 イツモ いつも 何時も

二58 2 十九 ナゾ 〈略〉。イツモ アナタ ニ ツ イ テ キ マ ス ガ、日

ヤ月ガデテキナカツタリ、アカリガツイテキナカツタリスレバ、

ワタクシハアナタカラハナレマス。

二62 5 私ノ目ハイツモハツキリシテキテ、ヨク見エマス。

三32 1 「〈略〉。」と村の人からいはれるほど、いつもきげんよくうたをうたふぢいさんです。

三34 3 園 「いつもおたつしやなこ

とで。」

三83 2 日はよくてつてゐて、ふじの山はいつもよりなほきれいに見えました。

四92 3 けれどもかたきのくどうは、〈略〉、いつも大ぜいの家來をつれて居ます。

六5 7 園 臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、此の山のいたゞきには、いつもつもつてゐるといふことだ。

六20 1 いつも通る汽船も、高波をよけて、沖を通ると見えて、汽てきの音は少しも聞えません。

六26 7 うめもどきの實がいつもより目立つて見える。

七23 9 晒木綿のづきんをかぶつて、雨ざらしになつていらつしやるが、何時もお花が上つてゐる。

七76 7 毎朝げんくわんへ出て、「誰か居るか。」と呼ぶと、いつも藤吉郎が眞先に出て來た。

七76 8 或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、〈略〉。

七77 4 園 「いつもより早いのに、よく參つて居つた。」

七77 5 園 「いつも人より一前に參つて居ります。」

八115 6 〈略〉、武士の魂と呼ばれる物は、何時もきら／＼光つてゐたといふことである。

九12 2 園 顔を洗ひをはりて、いつもの如く、庭のすみなるとやの戸を開く。

九32 1 何時もはうす暗い程茂り合つてゐる兩がはの木立も、〈略〉。

九77 5 園 皆いつものやうに、此所で支度をして、學校園へお集りなさい。

九88 4 園 北斗七星は何時もあんなにひしやくの形をしてゐて、北極星との關係も常に變らないから、〈略〉。

九89 2 園 それにあの星は何時も眞北に居るから、〈略〉。

九101 3 たんぼの middle を流れてゐる小川は、いつもより水が多い。

九105 8 やがて中尉はちよつと腕時計を見て、いつものやうにすんだ聲で號令をかけた。

九106 6 中尉は〈略〉、いつものはれ／＼とした聲で、「そら、もう一息だぞ。襲へ／＼。」と叫んだ。

十14 3 園 そんな風でしたから、ぼんの道ぶしんなどは、何時も二日はかゝつたものでした。

十一38 1 下刈はいつも土用中にするので、〈略〉。

十一98 2 かういふ心掛であつたから、成績は何時も優等であつた。

十二120 1 園 〈略〉、先生には何時も御壯健の由、何よりのことに御座候。

十二121 6 園 毎晩賣上高の勘定を致す時など、〈略〉、何時もほめられ申候。

いて 「射手」(名) 2 いて

十一89 園 いて

十一89 園 いて

いで 「出」(名) ↓おいで・おいでくださる・おいでなさる・おんいでなさる

いで (感) 2 いで

十一82 10 園 いで、大船を乗出して、我は拾はん、海の富。

十一83 2 園 いで、軍艦に乘組みて、我は護らん、海の國。

いであ・う 「出會」(四) 1 出であふ

《一ヒ》

十一29 9 園 中にも加藤清正は、山際のがけ路にて敵將山路正國に出であひ、片鎌槍をしこいて突いてかゝる。

いできたる 「出来」(四) 1 出来る 《一リ》

十648 主人はうちうなづきて出來り、僧に向ひて、「略。」
 いでたまう 「出給」 (四) 1 出で給ふ「一ヒ」
 九103 既に大海に出で給ひしに、大風俄に吹來りて、波すさまじく荒れくるひ、略。
 いでや (感) 1 いでや
 十131 義を見てせざるは勇なきなり。いでや、行幸の路に待受け君を奪ひ奉りて義軍を起さん。
 いでゆく 「出行」 (四) 2 出行く「一キ」
 十603 略、おのれは主人を迎へにとて外に出行きけり。
 十619 略、僧は返す言葉もなくて出行きぬ。
 いでる (下) 1 おいでる
 いと「糸」 (名) 3 糸 ↓ あさいと・きいと・きぬいと・けいと・もめんいと
 五651 あれは製絲工場で、女工が四百人も糸を取つてゐる。
 六742 「春子、才前ハ着物ヤ帶ノ地ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマスカ。」
 六763 ラシヤヤフランネルトチガツテ、絲ガ細イカラ、氣ガツカナイノデス。
 いと「最」 (副) 1 いと
 十一457 さいいと名残をしき事なり。

いと「井戸」 (名) 1 井戸
 九1110 井戸に近き柿の木、日ましのびゆく若芽のうす緑、見るに氣持よし。
 いと「う」 「厭」 (四・五) 3 いとふ「ハ・ーフ」
 十一69 貧賤は人のいとふ所なり。
 十一451 我もとより衣食の費をいとふにあらざれど、何時までもかくておはすべきにあらねば、今は何處へなりとも行きて君の枝をふるひ給へ。
 十一974 略、路の遠いのは少しもいとはず、毎日毎日元氣よく通學した。
 いどう・する 「移動」 (サ変) 1 移動する「一シ」
 十573 略、飼養所を移動し、其處を見覚えさせて飛歸らせるやうにする事も出来る。
 いとからだ 「課色」 2 胃とからだ
 八17 第二十五 胃とからだ
 八994 第二十五 胃とからだ
 いとぐち 「糸口」 (名) 1 いとぐち
 七787 これがそもく藤吉郎出世のいとぐちである。
 いとこ「從兄」 (名) 1 いとこ
 十二97 殊にデーバダッタは、いとこの身でありながら、かねてから釋迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。

いとすじ 「糸筋」 (名) 1 糸スヂ
 五512 ハジメハ絲スチホドノ流デスガ、略、水ノカサモ多クナリマス。いとな・む 「宮」 (四・五) 3 營む「一ミ・ム・一メ」
 十1266 青年團の事業の一として、杉・櫨の植林を營めり。
 十二2310 昔は個人の利益を營むのが商業であると思はれてゐた。
 十二906 我々は常に國法にしたがつて幸福な生活を營み、あはせて國の品位を高めることにつとめなければならぬ。
 いとばた 「井戸端」 (名) 4 井戸端
 井戸端
 三38 「オウイ」トオドバタデ、ニイサンノコエガシマス。
 八1132 すると大將の父は「略。」といつて、大將を井戸端へ連れて行つて、着物をぬがせて、頭から冷水を浴びせかけた。
 九1110 朝早く起きて、井戸端に出づ。
 九10110 うちの方をふりかへると、井戸端の柿の木に柿がすなりになつてゐるのが目につく。
 いとま 「暇」 (名) 2 暇 ↓ おいとま・おいとまする
 十6910 翌朝僧は暇をこひて又行くへ知らぬ旅に出でんとす。
 十894 父と母とに暇を告げて、勇みて出づる我が家の門。

いとまこい 「暇乞」 (名) 1 いとまこい ↓ おいとまこい
 四936 兄弟は今度こそはと、母にいとまこひをして、ふじのすそ野へ急ぎました。
 いどみず 「井戸水」 (名) 1 井戸水
 五525 地ノ中ニシミコンデ、井戸水ヤ泉ノモトニナルノモアリ、略。
 いなか 「田舎」 (名) 1 田舎 ↓ いたな
 十一424 何分田舎にて萬事不便には候へども、略。
 いなさのはま 「稲佐浜」 (地名) 1 稲佐の濱
 十二810 境内を出でて海岸に到る。稲佐の濱といふ處なり。
 いなだ 「稲田」 (名) 1 稲田
 七944 垣根も倒れば、しをり戸も外れる。まして稲田は大波が打つ。
 いなづま 「稲妻」 (名) 1 いなづま
 九1081 砲口はかはるがはるいなづまのやうな砲火をはいては、耳もつぶれさうにほえ立ててゐる。
 いななく 「嘶」 (五) 1 いななく「一イ」
 九1115 さうして略、一聲高く天に向つていないた。
 いなびかり 「稲光」 (名) 1 いなびかり
 五193 鶏の光がまるでいなびかりのやうで、わるものどもは目を明けてゐることが出来ず、略。

いなみたてまつる「古奉」(四) 1

いなみ奉る「一ル」

十二67図「我もとよりいなみ奉る心なし。我が子事代主とはかりて答へ申さん。」

いなむらがさき「稲村崎」(地名) 3

稲村が崎 稲村崎 稲村崎

七192 稲村崎の此方に着いて、

略。

七208 すると、これまで潮の満ちて

ゐた稲村崎は、其の夜の月の入る頃に、二十餘町にはかに干上つて砂地にかはり、略。

十二251図 七里が濱のいそ傳ひ、

稲村が崎 名將の 劍投ぜし古戦場。

いならぶ「居並」(五) 2 居ならぶ

「一ブ」

六494圖 ともし火近く 衣ぬふ母は

春の遊の 樂しさかたる。居ならぶ子どもは 指を折りつつ、日

數かぞへて、喜び勇む。

六504圖 居ならぶ子どもはねむさ忘れて、耳をかたむけ、こぶしをにぎる。

いにしえ「古」(名) 9 古

十一348圖 嚴島は古より日本三景

の二に數へられて殊に名高く、略。

十一1258圖 されば古は、支那より渡

來せるものの僅かに世に存するのみにて、學者其の得がたきに苦しみた

十二13圖 古のふみ見るたびに思

ふかな、おのが治むる國はいかにと。

十二46圖「此の川は古の鏡川に

して、かのをろち退治の傳説あるは此の川の川上なり。」

十二147圖 されば珍しき事件の起り

し時、之を記述して印刷に附し、廣く發賣することは古より行はれたりしが、略。

十二996圖 第二十課 奈良 略、

今は唯畿内の一都市として僅かに古の名残を留むるのみ。

十二1021圖 略 古の奈良の都は、

そもく如何に美しく、如何に盛なりしぞ。

十二1028圖 略、遠く連なる田園の

間に東西に走る三筋の路は、北より數へて古の一條・二條・三條の大路の名残とす。

十二13710 略、古の武士が玉とくだける討死を無上の名譽としたのがそれである。

いにんする「委任」(サ変) 1 委任

する「一セ」

十二1254圖 慶喜から官軍に對する交渉

の全權を委任せられてゐた舊幕府の

陸軍總裁勝安方は、略。

いぬ「犬」(名) 24 イヌ いぬ 犬

いこまいぬ

一81 イヌガキマス。

一83 シロイヌトクロイヌ

ガキマス。

一85 シロイヌトクロイヌ

ガキマス。

一501 イヌヲケライニシテイ

キマス、サルガキマシタ。

一525 キジハツツキマハリ、サ

ルハヒツカキマハリ、イヌハカミツキマハリマス。

一542圖 クルマニツンダタカラ

モノ、イヌガヒキダスエンヤラヤ。

一142 犬ガサカナヲクハヘテ、

ハシノウヘヲトホリマシタ。

一146 シタヲミルト、川ノナ

カニモサカナヲクハヘタ犬ガ

キマス。

一415 ヨイオヂイサンハ犬ヲ

一ピキカツテ、タイソウカハイガ

ツテキマシタ。

一421 アル日犬ハ畠ノスミ

デ、略。」トヲシヘマシタ。

一435 ワルイオヂイサンハソレ

ヲキイテ、ソノ犬ヲカリニキ

マシタ。

一436 サウシテムリニ犬ヲナカ

セテ、ソコヲホツテミマシタガ、

キタナイドロ水バカリシカデマ

セン。

一443 オヂイサンハハラヲタテ

テ、ソノ犬ヲコロシテシマヒマ

シタ。

ウカナシガツテ、犬ヲウツメテ、

略。

一551圖「ヲヂサン、コンヤモマ

タカゲエヲシテ見セテクダサ

イ。」略。サア、犬デス。

一221 二人がびつくりして見て

ゐますと、それは小二郎のう

ちのいぬでした。

一221 犬ははなをくんくんい

はせ、ををやたらにふつて、小

二郎のそばへよつてきました。

一237 小二郎がうちへかへつて

みますと、犬はもうとつくと

かへつてゐて、かけてきてとび

きました。

一432 正太郎が犬をつれて、山

道を通りました。

一433 犬のすがたが見えなく

なつたので、「ぼちぼち」とよび

ますと、略。

一267圖 軒下にはらばへる黒き犬、

にくらしき黒と思へば、黒もま

た、意地悪き人と見るらん。

一496 狐・狸・兎・犬・豚ナド彼

ノ求メル物デアルガ、略。

一118 農場主はせつかくよく出來

てゐる麥を、たくさん馬や犬にふ

みあらされてはたまらないと思つて、

略。

一1105圖「お前のやうに犬の世話

やねずみを取ることにばかり熱心で

は困るではないか。」

いぬ 〔戌〕(名) ↓かのえいぬ・きのえいぬ

い・ぬ 〔寝〕(下二) 1 寝ぬ 《一ネ》
十一469 〔略〕、畫師は前の如く夜もすがら寝ねずして、明日はかく畫がかんなど獨言してゐたりければ、
〔略〕。

いぬころ 〔犬〕(課名) 2 犬ころ

八目3 第二 犬ころ

八36 第一 犬ころ

いぬころ 〔犬〕(名) 1 犬ころ

八38 しやうじを明けて見ると、小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれてゐる。

いぬのよくばり 〔課名〕 2 犬ノヨクバリ

二目7 六 犬ノヨクバリ

二14 六 犬ノヨクバリ

いぬ 〔稲〕(名) 5 稲

四75 此の人たちの田や畠

の作り方はていねいでしたから、稲も麥もよそのよりはよく出来ました。

六15 〔略〕 來年もやはりあの稲を作りませう。

七93 だが、朝飯がすむと間もなく、稲の葉がさわ／＼出した。

九101 二百十日を無事に越した田には稲の穂先がもう大分重みを見せてゐる。

十一8910 〔それも立春から數へると八十八日目で、稲をはじめ大い

の物の種をまく目安になる日だ。〕
いねこき 〔稲拔〕(名) 1 稲こき

六17 今日のはうちの者がみんなたんぼへ稲こきに行きました。

いのち 〔命〕(名) 18 いのち 命 ↓おいのち

四94 今夜かぎりのいのちと思つて、十郎五郎、かほを見せよ。〕

六554 〔すきをねらつて、頼朝の命を取れ。〕

六576 先づ鶴岡の八幡宮へまゐつて、母の命を助けたまへといひ、〔略〕。

七697 〔略〕、いたゞいたのは財布ではなくて、私の命でございます。

七1064 生けどつた者は皆かへせ。命ばかりは助けてやらう。

八116 信作が落ちたのにかまはず馬をかせさせたら、大勝に勝つのに、

人の命にはかへられないと思つて、相手を助けてやつたのはえらい。

八125 耕造さんのおかげで、信作の命が助かりました。

九243 しかし此の分では、わたしの命は、とても仕事の出来上るまでもつまいと思ふ。

九1148 ころ、どうした。命が惜しくなつたか、妻子がこひしくなつたか。

九1159 私も日本男子です。何で命を惜しませう。

十264 〔さあ、行きませう。命を捨

ててかゝつたら、救へないことはありますまい。〕

十956 〔略〕 お前のやうな弱蟲には、ひよつとすると命を失ふやうなあぶない時でも、言出すことの出来ない程、『いゝえ。』といふ言葉は言ひにくいのだ。

十二671 〔略〕 私はもう何よりも、どんな寶よりも――ほんたうに自分の命よりも父上を大事と存じます。

十二847 〔容貌の異なる汝が彼の地に行かば、必ずや人に怪しまれ、なぶりものにせられて、或は命も危かるべし。〕

十二9810 これまで説いた教そのものが私の命である。

十二1048 〔略〕、昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。

十二1059 〔略〕、我が命のある限り、一身をさへげて此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、〔略〕。

十二1083 〔略〕、老僧の命のあるうちに其の志を遂げさせると共に、我々もあのくさり戸を渡る難儀をのがれようではないかと相談して、其の方法をも取りきめた。

いのちからがら 〔命辛辛〕(副) 1 命から／＼

六258 大將維盛は命から／＼加賀の國へにげました。

いのりもうす 〔祈申〕(四) 1 祈申 《一(シ)》

十一422 〔略〕 何とぞ十分の御養生ありて、一日も早く御全快なされ候様切に祈申候。

いのる 〔祈〕(四・五) 6 いのる 祈る 《一ツ・リール》 ↓おいのる

四661 しばらく目をつぶつて、神様にいのつてから目をひらいて見ると、今度は扇が少しおちついて見えます。

六577 先づ鶴岡の八幡宮へまゐつて、母の命を助けたまへといひ、〔略〕。

八77 五人の騎手は神に勝利をいのつて、第二のあひづを待ちかまへてゐる。

八336 昔朝鮮に一人の婦人があつて、子どもをおさづけ下さるやうに、朝晩神様にいのつてゐました。

十231 〔略〕 私には、此の子馬共を買つた人たちも、どうか同じやうにやさしく扱つてくれ／＼ばよいと、心からいのりました。

十二644 〔略〕 イタリアの國旗は、〔略〕。

〔略〕 白と赤とに、統一の成功を祈る希望の色として緑を加へ、更に王家の紋章を配したるものなり。

いばしょ 〔居場所〕(名) 1 居場所

七588 〔略〕 又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、〔略〕、自分の居場所を知ること出来た。

いはなす 〔射放〕(五) 1 いはなす

《—シ》

四六五 よ一は弓に矢をつがへ、よくねらひをさだめて、ひょうといはなしました。

いばる 「威張」(五) 1 ゐばる 《—ツ》

四七六 此の人は小さい時からいたづらもので、大きくなつても、うちの仕事もせず、あばつてばかり居ました。

いびき 「軒」(名) 1 イビキ

二七六 ソノ大キナカホハ火ノヤウニアカク、イビキハカミナリノヤウデシタ。

いぶつ (名) ↓こいぶつ

いま 「今」(名) 136 イマ いま 今 ↓ただいま

二三一 ウンドウクワイ 《略》イマ、ツナヒキノマツサイチュウデス。

二四五 ミヨチャンガイマオカアサンニダカレテ、オチチヲノンデキマス。

二五九 太郎ハイマ、オカアサングオクスリヲノムトコロヘキテ、「《略》」

三一二 イマハサクラヤナタネノ花ザカリデス。

三五三 ソノ中ニハ、ニウリヤモアリマス。今ソノミセノマヘニ二車ガトマリマシタ。

三五六 今ニハノ木ニセミガ

ウルサイホドナイデキマス。

三八三 園 いや、これは私が今

四七三 友一のうちでかるた取がはじまつて居ます。《略》。今

ちらしで取つて居ます。

四五六 園 今に見てゐろ、僕だつて、見上げるほどの大木になつて見せずにおくものか。」

四六九 《略》、今でも山がらのこゑをきくと、《略》と思はないことはありません。

四七二 私は東の村の今の村長さんのおぢいさんやおばあさんを其のわかい時から知つて居ました。

四七五 今の村長さんのおとうさんもおとなしい人で、小さい時からよくはたきました。

四七六 今の村長さんも子どもの中からすなほで、なさけふかい人でした。

四八四 今オキクトオヒナ様ノ前ニスワツテナガメテ居マス。

五五八 こちらは今さくららのさかりですが、あちらでは、もうとうにちつてしまつたさうです。

五五三 園 今御名をさし上げます。日本武皇子と申したまへ。

五九三 今桑をたべてゐる蠶も、明日の朝までには、たいいてい上つてしま

ふさうです。

五八八 ところが、今から百三十年

五八四 土手の此の記念碑に、今話した事がくはしく書いてある。

五七九 昔の貧乏村は、今、郡の中でもゆびをりの金持村だと言はれてゐる。

五八三 園 うちでも一時は飲水やたべ物にこまりましたが、今ではあとかたづけも大がいますみました。

五九一 庭サキノブドウ棚ニ、今、タ日ガサシテキマス。

六一二 園 「今年はほんたうにほう年だ。今の分では去年より七八俵よけいに取れさうだ。」

六二四 今このうちへ行つて見ても、俵の山が出来てゐます。

六二五 園 今デハ鐵ハオアシノ仲間ニハハイレマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ銅以上デス。

六二八 園 「だれだい、今笑つたのは。」

六四四 園 《略》、私の村から、今歩兵になつて來てゐるのは私一人だけなのだ。

六四四 園 お前は今の分では大男になりさうだから、砲兵か騎兵になれるだらう。

六七一 今、三條の大橋に立つて、川下を見ると致しませう。

六七五 園 「ネエサンガ今ヌツテキル

此ノ帶ハ。」「ソレハメリンスデ、絹デセウ。」

六八七 自分たち程の子どもが出て來て、象の前足にだきついて見せた。

《略》。《略》、今の子どもが象の腹の下へねころんだ。

六九四 園 あの子は十二、落葉松はあの子のせいより低かつた。それが今では學校の二階のまにとゞいてる。

七一九 さて、心の中に、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をほろぼさうとしてゐます。

七二六 園 大阪ハ《略》。今ハ商工業サカンニシテ、大工場多ク、《略》。

七五七 其ノ時分マデ、ヨソヘ奉公ニ行ツテキタ若イムスコガ、今デハ其ノ後ヲツイデ、《略》、働イテキマス。

七六三 園 どうか今から十分海になれて置くやうにしてもらひたいのであります。

七七七 一時は今の二時間にあたるのである。

七九八 園 三成は驚いて、「今天下に此の石田を知らぬ者はあるまい。

八二七 栗のいがの多むのも今である。八三二 きこのむらがつて出るもの、しひの實が落ちて、くぼたまりにころがり台ふのも今である。

八五八 園 「今の一言は、先陣の功名にもまさる。」

八二七 呉鳳は今から二百年程前の人

で、亞里山の役人でした。

八26 4 〈略〉、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。さうして今も其の通りにしてゐるのだといひます。

八32 8 これはもと野生のものでしたが、今から千何百年も前から栽培することになったのだとつたへてゐます。

八52 1 窓 「よく目がさめたね。今四時を打つたばかりだ。」

八59 5 窓 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、今ナホ古風ヲ守リテ、まぎぞ（キノバ）・やぎん（ウドン）・〈略〉ナドト記シテ、軒下ゲタルモアリ。

八62 9 窓 保己一の家は今の東京、其の頃の江戸の番町にありて、〈略〉。

八64 2 窓 「先生、少しお待ち下さいませ。今風であかりがきえました。」

八66 5 窓 此の港には、十五六年前に大地震があつて、町は大方こはれたのですが、今では前よりもかへつてりつぱになつてゐます。

八78 6 窓 「今手に持つていらつしやるのは、みんな切符ですか。」

八89 3 窓 「指であひづをしたのは昔のこと、今は口を見せてものを言はせませう。」

八98 5 窓 「杉野はいづこ、杉野は居ずや。」〈略〉、敵弾いよくあたりにしげし。今はとボートにうつれる中佐、〈略〉。

八102 6 窓 これは全く君等が自分で招いたであります。今になつて始めて、考慮をしてゐたことがお分りになるでせう。

九10 1 窓 駿河の賊を亡し給ひし後、〈略〉、今の浦賀のあたりより海を渡り給へり。

九11 6 窓 ふしぎや、今まで荒れに荒れるる大海、おのづから静まりて、〈略〉。

九27 10 これは今から百三十年ばかり前に、下野の國足尾山中の旅人宿で起つた事で、〈略〉。

九40 1 窓 庭に一本なつめの木、彈丸あともいちじくる、くづれ残れる民屋に、いまだ相見る二將軍。

九60 8 東の空が明るくなると、今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壮大な姿が、だん／＼にあらはれて来る。

九61 3 千數百人の乗員は、今もなほ安らかに眠を續けてゐる。

九68 8 窓 昔は一面の荒野であつたが、今は方々に町や村が出来てゐる。

九72 1 窓 八百年前の建物で、今も鞘堂の中に其のまゝ保存されてゐる。

九88 1 窓 あれが北斗七星だ。あの柄でない方の端にある二つの星を結びつけて、其の線を、〈略〉のぼして行くと、今結んだ二つの星のへだたりの五倍ばかりのところに、かなり大きい星があるだらう。

九88 3 窓 あれが今話した北極星だ。

九104 3 兵士たちはめい／＼馬のそばに立つて、今かくと命令の下るのを待つてゐた。

九104 3 〈略〉、今かくと命令の下るのを待つてゐた。

九106 7 其の日の戦は果して今までになくはげしかつた。

九109 5 しかし主人をうしなつたと思ふと、今まで張りつめてゐた勇氣もくじけて、〈略〉。

九110 1 北風は俄におちけがついた。さうして主人がこひしくなつて、今来た方へ一散にかけもどつた。

九118 4 窓 しかし今の戦争は昔と違つて、一人で進んで功を立てるやうなことは出来ない。

十3 10 窓 何れも、御在世中しば／＼行幸・行啓ありし所に、當時の御殿・御庭などの、今も其のまゝに保存せらるゝなりとぞ。

十4 10 窓 昔の武蔵野の姿を此所に残さんとの皇太后の思召のまゝに、今も人工を加へずといふ。

十12 5 窓 やあ、皆さん御苦勞ですね。今通つて見て來ましたが、大そうつぱになりました。

十29 1 今まで人にも知られなかつた燈臺守の娘グレース、ダーリングの名は、程なく國の内外に傳はつた。

十33 4 今太平洋の方から此の運河を通るとする。

十46 10 弟子たちも此の主人を見限つて、一人逃げ二人逃げ、今は手助する人さへも無くなつた。

十49 7 柿右衛門は今から三百年ばかり前、肥前の有田にゐた陶工である。

十50 7 窓 「あれは銀行だよ。今までは横町の小さい家だつたが、〈略〉。」

十55 3 〈略〉、今では各國共に盛に傳書鳩の改良に力を用ひ、其の飼養を奨勵してゐる。

十70 3 窓 〈略〉常世も、一夜の物語にうちとけては、名残なかく盡きず。今一日留り給へとすゝめて止まざりき。

十74 1 窓 今でも城壁は大部分昔の面影を留めてゐますし、門も主なものに残つてゐます。

十76 10 窓 〈略〉、兩方が町續きになつて、今では龍山も京城の中に編入されたのださうです。

十84 7 窓 今から四百年許前の事ださうです。

十98 10 窓 「末」びぬ。〈略〉。今より心を改めて元に仕へば、富貴は意の如くならん。」

十114 8 今まで勢よく引出されてゐた綱もや／＼ゆるんで來た。

十116 1 二十メートルもある大鯨が今は全く息たえて、小山のやうな體を水面に横たへる。

十118 9 白梅は今ちやうど眞盛りであるが、〈略〉。

十1309 然るに今主上隠岐にうつされ給ふと聞き、〈略〉。

十1314 心ある者ども〈略〉舟坂山にかくれ、今かくと待ち奉れり。

十1314 今かくと待ち奉れり。

十一41 今かりに一時間五十里の速度で飛ぶ飛行機に乗つて行つたとしても、〈略〉。

十一46 孔子は今より凡そ二千年前、當時の魯即ち今の山東省の地に生れたり。

十一47 當時の魯即ち今の山東省の地に生れたり。

十一65 論語は、〈略〉。今此の書によりて其の一端を述べん。

十一148 三月の末になさるはずであつたのが、お取込があつたため、今まで延びてゐたのださうです。

十一287 今まで賤嶽の山上より、またゝきもせず戦況を見居たりし秀吉、〈略〉、すかさず鐵砲組に合圖して銃火をあびせかけたれば、〈略〉。

十一38 なたや鎌などでする草を拂ひ、下枝を伐落して行くと、今まで兩方の枝と枝と組合つてゐたのが〈略〉。

十一43 今少しく日もたゝば、轉地するもよからんと醫師も申居候に付、〈略〉。

十一453 何時までもかくておはすべきにあらねば、今は何處

へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。

十一485 「東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。」

十一63 當時此のあたりは未開の原野で、〈略〉。それが今は人口約二萬戸數約四千を算するりつばな町となつたのである。

十一66 マッチは今から約百年前に發明されたものである。

十一68 燈火としては、初め〈略〉、今はガス燈や電燈が到る處にかゞやき渡る時代となつた。

十一68 將來は又どんなものが發明されて、今のガスや電氣にかはることであらうか。

十一793 それで〈略〉、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。

十一796 今では世界各國、貨幣・紙幣を用ひない國はないのである。

十一941 こんな不便な曆でも長い間の習慣で、今でも使つてゐるものがあるやうだ。

十一947 リンカーンは、今から百年餘り前、ケンタッキー州の片田舎の貧しい家に生れた。

十一126 今より二百數十年前、山城宇治の黄檗山萬福寺に鐵眼といふ僧ありき。

十一1305 此の版本は今も萬福寺に保存せられ、三棟百五十坪の倉庫に

満ち／＼たり。

十二88 此の社にては、今も太古の法に従ひ、之によりて火を作るといふ。

十二95 なぎさに立ちて昔をしのべば、そのかみ此處にいかめしく向ひあひけん英雄の姿、今までのあたり見るが如く、〈略〉。

十二98 チャールス、ダーウィンは今から百年餘り前イギリスに生れた。

十二110 今登つて來た方を振返つて見ると、〈略〉、蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。

十二133 私は今落日に對して、うすら寒い秋風を浴びながら、山鳩の聲さびしきベルダンの戦跡に立つてゐます。

十二135 私は今ジュネーブ市のモンブラン橋のてすりにもたれて、ジュネーブ湖上の風光に見とれてゐます。

十二136 「そんなことをいつたつて仕方がない。家賃さへも拂へない今の身の上ではないか。」

十二140 實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが、〈略〉。

十二145 今其の主要なるものを擧ぐれば、杉・檜・〈略〉等なり。

十二158 其の時、今まで雲の中に居た太陽が顔を出したので、日光が店一ぱいにさし込んで來た。

十二159 龍頭を廻すと、今まで死

んだやうになつてゐた懷中時計が、忽ち愉快さうにかち／＼と音を立て始めた。

十二160 今我が國を始め主なる諸外國の國旗に就いて述べん。

十二174 一體わしは今までどうしてゐたのだらう。

十二182 今より百一十年ばかり前即ち文化五年の四月に、林藏は〈略〉樺太の海岸を探検せり。

十二185 文化六年六月の末、コニー・林藏等の一行八人は、小舟に乗じて今の間宮海峡を横ぎり、デカストリー灣の北に上陸したり。

十二190 釋迦は今から凡そ二千年五百年前、〈略〉生れた。

十二195 奈良の都も、色移り香失せて年既に久しく、今は唯畿内の一都市として僅かに古の名残を留むるのみ。

十二102 今若草山に登りて古京の跡を展望すれば、〈略〉。

十二103 南の方郡山の町の東に羅城門の跡今も残りといふ。

十二110 今では此の洞門を掘りひろげ、處々に手を加へて舊態を改めてはゐるが、〈略〉。

十二113 電燈の發明せられたるは、今より凡そ百十餘年前のことなり。

十二117 エチソンが炭素線の電燈を發明したのは四十年ばかり前のことであつたが、今では更に進んで

〈略〉。

十二1210 図 かもめ飛ぶ海をすべり

て、船は今靜かに歸る、懷かしき故郷の港。

十二1237 図 〈略〉、思出の深き船

路や、つゝがなく今日しも果てて、船は今靜かに歸る、懷かしき故郷の港。

十二1244 図 〈略〉、うづたかき積

荷の中に 海山の寶を載せて、船は今靜かに歸る、懷かしき故郷の港。

十二1302 図 〈略〉、特別の御仁慈を以

ておだやかに事のまとまるやう今一應御評議下さることにあります。

十二1305 図 何分今一應の御評議を推

して御願ひ申す次第でござります。

いま「居間」(名) 2 居間

五337 店・客間・居間・勝手など、

これで間数が七つもあるとは、どう

しても思はれませんでした。

十一4510 図 或夜小僧、住持の居間に

來りて、「彼處に行きて、彼の畫師のする様を見給へ。」とさゝやきければ、〈略〉。

いま「今」(副) 1 イマ

四153 白ウサギハ〈略〉、イマ一

足デヲカヘ上ラウトイフトコロデ、〈略〉。」トイツテワラヒマシタ。

いまいち「今市」(地名) 1 今市

十二49 図 今市を過ぎ、大社驛に着

きぬ。

いまきち「今吉」(人名) 2 今吉

四435 手つだひの今吉がおどけ

て、はうきを大なぎなたのやうに持つて、べんけいのまねをしました。

四456 「略。」と今吉がいひま

したが、それでも〈略〉。

いまさら「今更」(副) 4 今更

十10010 図 當地に御住まひの頃度度

參上致し、大兄と共にいろ／＼御話を承り候事など、今更のやうに思ひ出され候。

十二353 図 これはイギリスやフラン

スなどでは見られぬ光景で、私は今更ながらドイツ人の勤勉なのに驚きました。

十二1077 此の洞穴と、十年一日の如

く黙々としてのみの手を休めない僧の根氣とを見た村の人々は、今更のやうに驚いた。

十二1331 君と親とに眞心を捧げ盡く

して仕へる忠孝の美風が世界に冠た

ることは、今更いふまでもない。

いまし・む「戒」(下二) 1 いましむ

《一ムル》

九177 図 夜をいましむる夜まはり

の 拍子木のごとかち／＼と、さ

法な行が再びされないやうに、其の

犯罪者をこらし、又世間の人々のい

ましめにもせねばならぬ。

いましも「今」(副) 1 今しも

七412 軍人をのせた御用船が今しも

港を出ようとした其の時、〈略〉。

いまじゆく「今宿」(地名) 1 今宿

十1317 図 行幸餘りに遅かりしかば、

人をしてうかばはしむるに、播磨の

今宿といふ處より、山陰道にかゝ

り給ひし由なり。

いまだ「未」(副) 3 いまだ 未だ

十1308 図 〈略〉、事のいまだ成らざる

に先だち、笠置も落ちたる由風聞あ

りしかば、力なくて止みたり。

十一333 図 一島未だ去らざるに、一

島更にあらはれ、水路きはまるが如

くにして、また忽ち開く。

いまに「今」(副) 6 イマニ いまに

今に

一256 ツボミモタクサンツイテ

五811 図 「びつくりしてたふれたの

だ。ほつて置け、今に生きかへる。」

七461 図 戦をはじめてから十二年、

今に勝負がきまらない。

十一375 図 今に御らん、此のくらゐ

離して植ゑても、十五六年目には間

伐をしなければならぬやうになる

から。

いまにして「今」(副) 1 今にして

十二1033 図 そのかみ金殿玉樓相望み

てうちつゞく都大路を、大宮人の櫻

かざし紅葉かざして往來しけむ、今

にして思へば唯一場の夢に過ぎず。

いまにも「今」(副) 3 今にも

七569 図 急に暴風雨が來ると、山の

やうな波が立つて、船は今にも沈む

かと思ふやうになります。

九104 図 〈略〉、波すさまじく荒れく

るひ、御船少しも進まず、今にもく

つがへらんばかりなりき。

十一694 夜が更けるにつれて燈がだ

ん／＼暗くなり、今にも消えさうに

なつた。

いまは「今」(課名) 2 イマハ

三目2 一 イマハ

三目1 一 イマハ

いまや「今」(副) 9 今や

七311 図 〈略〉、蛇はますます強くし

めつてたり。今や獅子の息はたえん

とす。

八85 馬の頭をそろへて、三番太鼓

を今やおそしと待ちかまへてゐる。

九155 図 〈略〉、をんどりは箱のふち

をふまへて、首をすゑ、むねを張り、
今やときをつくらんとする様なり。

十一2810 図 〈略〉、敵は見る間にばた

くと倒れて、一軍今や崩れんとす。

十二159 図 〈略〉、相當に名ある新聞

は、〈略〉、今や遠くヨーロッパに起
りし事件も僅か一兩日にして讀者に
報道せらる。

十二683 王は満面に笑みをたゝへな

がら、今や遅しと其の答を待受けて
ゐる。

十二974 今や釋迦は衆星の中の満月

の如く國中から仰がれる身となつた
が、〈略〉。

十二1182 図 又最近無線電話が發明さ

れましたが、今やそれが盛に利用さ
れる機運となりました。

十二1328 我が國が〈略〉、今や世界

五大國の一に數へられるやうになつ
たのは、主として我々國民にそれだ
けすぐれた素質があつたからである。

いみ 〔意味〕(名) 3 意味

九189 所ニヨツテ此ノ蟲ヲドビンワ

リト呼ンデキルノハ、農夫ナドガ小
枝ト見違ヘテ、ドビンヲ掛ケ、落シ
テワルトイフ意味デアラウ。

九1112 戦争なれた北風は、此の聲の

意味をよく知つてゐた。

十二8910 これ等の命令も國の規則で

あつて、廣い意味でいふ場合にはや
はり法律であるから、〈略〉。

いみ・じ (形) 1 いみじ 一ジキ

十一813 図 高く鼻つくいその香に、

不斷の花のかをりあり。 なぎさ
の松に吹く風を、 いみじき樂と我
は聞く。

いも 〔芋〕(名) 3 いも ↓とうのい

も・やきいもや

三778 えんがはには、夕方から
いもやだんごをつくゑにのせ
て、お月さまにそなへてありま
す。

九787 先生も大きな箱を持つて來て、

ほつたいもは此の中へ入れるやうに
とおつしやつた。

九797 〈略〉、ほつたいもを一つ一つ

ていねいにならべて行く。

いもうと 〔妹〕(名) 15 イモウト 妹

二254 ミヨチヤン ハワタクシノ

イモウトデ、〈略〉。

七117 おとうさんも、にいさんも、

丸山君も、妹も、お松も、みんな下
りた。

七144 妹やお松は何があつたのか、

笑ひながらしきりに取つてゐる。

七151 妹とお松のざるには、やどか

りがたくさんゐた。

九128 図 妹は餌箱を持ちて、とやの

前に來る。

九129 図 妹は餌をつかみて、わざと

少しはなれたるきりの木のあたりに

まきちらせば、〈略〉。

九133 図 妹はやがてかこひ近く歩み

よれば、〈略〉。

九137 図 妹も同じ心にや、しばし見

とれてひよこのそばをはなれず。

九147 図 妹の置きて行きたる餌箱に

入れて持歸り、茶の間の戸棚の中に
しまふ。

九152 図 朝飯を終へて、妹と共に學

校に行く。

十107 図 男ばかりの御兄弟の中に、
此の度始めて妹を得られ候事、御前
様の御喜さぞかしと察し申し候。

十二393 其のそばにある舊式のビヤ

ノによりかゝつてゐるのは妹であら
う。

十二397 妹の顔はさつと赤くなつた。

十二4010 〈略〉、かはいさうに妹はめ
くらである。

十二658 〈略〉、妹はかねてフランス

王の后になることにきまつてゐた。

いもほり 〔芋掘〕(課名) 2 いもほり

九目5 十七 いもほり

九773 第十七 いもほり

いもほり 〔芋掘〕(名) 1 いもほり

九775 図 今日はいもほり

しませう。

いや 〔嫌〕(形状) 2 いや

十1056 図 一度此の中にはいると、ま

た寒い處へ出るのがいやになるね。

十一384 木でも見下されるのがいや

なのか、斜面などに植ゑた木は、低
い處にあるもの程早く大きくなつて、
こずゑの差が段々少くなつて行くの

も面白い。

いや 〔否〕(感) 16 イヤ いや

三853 図 「それは私の着物で

ございます。」「いや、これは私
が今ここでひろつたのです。」

三856 図 「いや、それは天人の

はごろもといふ物で、人げん
にはようのないものです。」

四54 図 山國のものが「日は
山から出て、山へはいる。」と
いへば、島國のものが「いや、
海から出て、海へはいる。」と
いつてあらそひます。

六63 図 「一番は新高山、二番は富

士山、三番目は。」「いや、二番も三
番も臺灣にあつて、四番目が富士山
だ。」

八178 図 「誰に頼まれた。」「誰にも

頼まれは致しません。」「いや、きつ
と頼まれたであらう。」

八81 図 「どのうちでも、納める金

高は同じですか。」「いや、それは財
産や収入の多少によつて違ひます。」

八899 図 聞えるなら、もう一つ何か

言つておくれ。」先生はこゝし

て、「いや、聲が聞えるのではあり
ません。口の動き方を見てさとのる
です。」

八949 図 先生は「何なら、あのお子

を今日一日お連れになつてもよろこ
びます。」といはれた。信吉は

「いや、何、それには及びません。」

といったが、〈略〉。

九38 9 図 やがてレマン將軍は、萬感胸にみちて、かすかにふるふ手に帶劍をときて渡さんとするを、エンミツヒ將軍は「いや、それには及ばん。〈略〉。」と、強ひて之をおし止めたり。

九53 2 図 「ほんたうにえらい人ですね。」「いや、これから先があの人のはんたうにえらい所だ。」

九86 3 図 星がそんなに位置の變るものなら、目當にならないでせう。」

「いや、何月何日の何時には、何所に何星が見えるといふ事が、學問上ではわかつてゐるから、はかられない事はない。」

九120 6 図 「オトウサン、御用ハモウスンダノデスカ。」「イヤ、マダスマナイ。今日午後四時ノ汽車デ又出カケルノダ。」

九121 10 図 「ソナエライ方ナラ、オトウサンガワザ／＼オ歸リニナラクツテモ大丈夫デセウ。」「イヤ、其ノ人ガ當選スルコトハウタガヒナイガ、自分ノタフトイ選舉權ヲ棄テルトイフ事ハ、選舉人トシテカリソメニモスベキ事デハナイカラ、カウシテワザ／＼歸ツテ來タノダ。」

十67 6 図 「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」「いや、名前を申し上げる程の者ではございません。」

十一85 10 図 僕も急に元氣がなくなつ

て、一所に船上らうかと思つたが、「いや、こゝがまんのだころだ。そんな弱いことではだめだ。」と、自ら勵まして進んで行つた。

十二41 2 図 しかし誠に粗末なピヤノで。それに樂譜もございませんが。」と兄がいふ。〈略〉。「いや、これでたくさんです。」

いやいや 「否否」(感) 2 いやいや いや／＼

三88 4 図 そのほころもをおかへし下さいませ。」「いやいや、おかへし申したら、まはずに空へお上りになりませう。」

六37 5 図 陸へ上つた時、家來が「たとひ金銀で作つた弓でも、御命には代へられませぬ。」と申しますと、義經は笑つて、「いや／＼、弓が惜しかつたのではない。」

いやがゐる 「嫌」(五) 1 イヤガル 《一ル》

九20 7 コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐れル武器ヲソナヘテキルカ、イヤガル味ヤニホヒノアルモノデ、〈略〉。

いやく 「医業」(名) 1 醫藥

十99 5 図 父母の病あつければ、醫藥の効なきを知りても、尚治療につとむるは人情の常にあらずや。

いや・し 「卑」(形) 1 いやし 《一シキ》

八56 3 図 老婆の前を右左、行きかふ男女多けれど、北風寒き町の

辻、身なりいやしき老婆には、手をかす人もあらざりき。

いやしくも 「苟」(副) 1 いやしくも 十二88 4 法律は、〈略〉、いやしくも國民たる者は必ず之を守らなければならぬ。

いやし・める 「卑」(下二) 1 賤しめる 《一メ》

十二24 3 彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。

いよいよ 「愈」(副) 26 いよいよ いや／＼

四42 7 ばたばた、ばたばた、いよいよ さうちが はじまりました。

五22 4 美しいびらで、一月も前から廣告してゐた島屋の大賣出しは、いよく今日からはじまりました。

五49 6 図 「民子、いよく今夜一ばんになつたよ。あれで八分通だ。」

五70 7 着手は來年からといふことになつて、〈略〉。いよく其の年になつて、庄屋は普請方をよそからつれて來た。

五73 2 図 「こんなむだな仕事をすれば、貧乏村はいよいよ貧乏になる。」

六82 3 此の時河野の通有は、たつた小舟二そうで向つた。〈略〉。通有も左のかたを射られたが、少しも屈せず、刀をふるつて進んだ。いよくおしよせたが、敵の船は高くて上ることが出来ない。

七69 2 図 〈略〉、もうあるまいとは思

ひましたが、此のまゝ歸ることも出來ませんので、引つかへして参りました。いよく／＼ない時には、川の中へとびこんで死んでしまはうと、かくごをして來たのでございます。八54 2 其の時にいさんが「私にもつかせてみて下さい。」といひ出すと、〈略〉。いよく／＼いさんがつき出した。

八70 9 図 長く滞在してゐたシカゴ市を立つて、今日いよく米國第一の都會ニューヨーク市に着きました。

八98 4 図 船内くまなくたづぬる三度、呼べど答へず、さがせど見えず、船は次第に波間に沈み、敵彈いよく／＼あたりにしげし。

九74 5 北上川はまだをりをり見るが、いよく／＼せまくなつて、とう／＼谷川になつてしまつた。

九97 6 お話が頂上のながめに移ると、いよく／＼はずんで來て、〈略〉。

九100 2 人はいよく／＼勇み、馬はます／＼はやる。

十27 2 岩の附近は波がいよく／＼荒れくるふ。

十48 8 いよく／＼夜が明けた。

十82 9 馬屋の前を通つてだん／＼奥深く進むと、いよいよ石炭を掘つてゐる處へ來ました。

十97 6 図 然るに元軍の勢いよく盛にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝・皇后も遂に敵手に落ちぬ。

十一127 一端に口を當てて息を吹きこむと、ぶうつとふくれる。ふり動かしては又吹く。いよ／＼大きくなる。

十二70 3 〈略〉、王の怒はいよ／＼つのつて、もうどうすることも出来ない。

十二79 3 網の中がいよ／＼狭くなる
と、其の周圍を船で取巻いてしまふ。

十二83 1 先づ樺太の南端なる白主といふ處に渡り、此處にて土人を雇ひて従者となし、小舟に乗じていよ／＼探検の途に上りぬ。

十二98 6 いよ／＼臨終が近づいた時、釋迦は泣悲しんでゐる人たちに、〈略〉。

十二103 9 愛すべく美しき山野は、更に太古以來の歴史と結び文學と結びて、感いよ／＼深きを覺ゆ。

十二120 4 〇 私のこと御心にかけ下され、常に「小山はどうしてゐるだらうか。」と仰せらるゝ由、いよ／＼御なつかしく存じ奉り候。

十二121 8 〇 此の上はいよ／＼仕事に勵み、一日も早く一人前の商人となりて、〈略〉。

十二134 2 萬世一系の皇室を中心として團結した國民は、かくていよ／＼結束を固くし、熱烈な愛國心を養成した。〔拘軌〕

いよう「異様」(形状) 2 異様
十二41 5 ベートーベンの兩眼は異様

に輝いて、彼の身には俄に何者かが乗移つたやう。

十二113 9 〇 何心なく手に取りて眺めぬたりし彼の眼は異様に輝きぬ。

いらい「以來」(副) 2 以來、きかい
つういらい・かんあんいらい・きよげ
ついらい・たいこいらい

十54 10 鳩を通信に使つたのは、〈略〉、無線電信などが發明せられて以來、自然輕んぜられるやうになつた。

十二119 5 〇 當地に參りて以來、一度手紙を以て御様子御伺ひ申上げたしとは存じながら、〈略〉。

いらつしやる (五) 36 イラツシヤル
いらつしやる 《イー・ツ・ール》
二5 4 〇 「オチヨサンデスカ、ヨ
クイラツシヤイマシタ。」

三71 4 おばあさんはあれをしめて、よくお寺まゐりにいらつしやいます。

三80 2 ねえさんは遠いところへおよめに行つていらつしやるのです。

四5 8 おぢいさんがこの柿の木をついでいらつしやる時、〈略〉。

四18 5 兄様ガタノオトモヲシテ、フクロヲカツイデイラツシヤッタノデ、オオクレニナツタノデス。

四23 1 〈略〉、おばあさんが日あたりのよいえんがはでつぎ物を

していらつしやいました。

五11 2 〈略〉、八岐の大蛇の來るのを待つていらつしやいました。

五28 8 此の間町のをばさんがいらつしやつて、「〈略〉。」とおつしやいました。

五41 7 尊は其のころ、やまとをぐなといふ御名で、御年はわづかに十六でいらつしやいましたが、〈略〉。

五42 6 大ぜいの女どもにもまじつていらつしやいますと、たけるは尊を見つけて、自分のそばへ呼びました。

五44 6 〇 「あなたはどなたでいらつしやいます。」

六2 2 おぢいさんが庭にほしてあるもみをかへしていらつしやる時、〈略〉。

七23 6 其の松の下に石でぎざんだ地藏様が立つていらつしやる。

七23 8 晒木綿のづきんをかぶつて、雨ざらしになつていらつしやるが、何時もお花が上つてゐる。

七90 4 〇 「向ふむきになつて、此のいすにかけていらつしやい。」

七94 1 「どうかひどい風にならなければよいが。」と、おぢいさんが言つていらつしやつたが、其の中に南の空が黄色になつて、〈略〉。

八41 1 〇 「何だ、何だ。」「地藏様が繩にかゝつていらつしやる。」

八51 3 おかあさんは取粉をのし板の上にひろげて、餅のつき上るのを待

つていらつしやる。

八51 5 おぢいさんは大釜の火をたいていらつしやる。

八52 5 つき上ると、おばあさんが餅を臼の中で丸めて、おかあさんの所へ持つていらつしやつた。

八52 7 おかあさんはそれを二つにちぎつて、ぐるぐるまはしていらつしやつたが、忽ちきれいなおそなへになつた。

八78 6 〇 「今手に持つていらつしやるのは、みんな切符ですか。」

八87 3 〇 あゝ、あなたが先生でいらつしやいますか。娘が大そうお世話様になります。

八107 8 〇 お呼びするのは大てい近所の人で、あなたが知つていらつしやる方ばかりです。

八108 1 〇 もし天氣がよかつたら、三郎さんを連れて、お晝前にいらつしやい。

九46 10 〇 「今年ほど水の都合のよかつた事はない。」と、おとうさんが喜んでいらつしやいます。

九48 8 〇 其の時おとうさんがいさんと、「〈略〉。」と話していらつしやいました。

九52 10 〇 うちのおぢいさんはあの人とは前から友だちだつたので、よく其の話をなすつては、大へんほめていらつしやつたものだ。」

九80 2 ふと氣がつくと、校長先生と

山田先生が、箱のそばへ来て、面白さうに僕等の仕事を見ていらつしやつた。

九38 ちやうど岡田さんは四五人のお友だちに、白馬登山のお話をなさつていらつしやる所でした。

十一612 僧が一夜の宿を頼むとおほせられて、あなたのお歸を待つていらつしやいます。」

十一147 のぶ子さんはちやうど、五年生の時の成績物に表紙をつけて、とちていらつしやる所でした。

十一151 〈略〉、成績物を一枚も無くなさず、そへていらつしやるのに驚きました。

十一1510 本や帳面はどうしていらつしやいますか。」

十一172 弟さんまでが、あんなに氣をつけていらつしやるとは實に感心なことです。

十一176 のぶ子さんはすぐたんのすの小引出から取出して、持つていらつしやいました。

いり (名) ↓おきにいり・つきのいり・でいり・でいりぐち・でいりさせる・でいりす・ねんいり・ひのいり・みなといり

いりぐち 「入口」 (名) 6 入口

五238 入口の左手には、小切やえりや帯あげなどがたくさん下げてあつて、それを見てゐる人も大ぜいあります。

五366 大道へ出て、となり村の入口へ行くと、道ばたの立石にさるが三匹ほつてありました。

五1007 向つて右が入口、左が出口で、まん中が帝室用になつてゐます。

五1014 階下の入口には、左右に大きな待合室があつて、〈略〉。

五1024 汽車の發着時刻が近づく、自動車・馬車・人力車がいくつとなく、入口・出口によつて來ます。

六144 松山の入口で、赤くなつてゐたぐみを一枝折ると、「そんな大きな枝を。」と、にいさんに注意されました。

いりこむ 「入込」 (五) 2 入りこむ

八416 〈略〉、四五百人のものが、ぞろ／＼と車の後について、思はず知らず役所の門内へ入りこみました。

十二424 友人がそつと立つて窓の戸をあけると、清い月の光が流れるやうに入込んで、ピヤノとひき手の顔を照らした。

いりまじる 「入交」 (五) 3 入りまじる

七135 舟で來た人も、をから來た人も入りまじつて、何百人か數へきれない程ある。

七444 兩車は入りまじつて、火花をちらして戦つた。

交つてゐるので、其の有様は一見世間人種の展覽會のやうである。

いりみだれる 「入乱」 (下) 1 入亂れる

十一217 其の間、買手の競争する聲と掛の人の聲と入亂れて、非常ににぎやかです。

いりよく 「威力」 (名) 2 威力

九366 されど比類なき四十二センチメートルの大口徑砲の威力に對しては、正義の念と愛國の情とに死を恐れざるベルギー軍の防戦も、〈略〉。

十一1153 まして威力によつて強制するとか、〈略〉のは、自治の精神に全く反するものである。

いる 「入」 (四・五) 28 入る

一ラ・リー・ル・レ ↓おそれいる・おどろきいる・ききいる・こみいる・しのびいる・せめいる・ながめいる・ねいる・みいる・みずいらす

五552 いつか此の事が天皇のお耳に入りまして、わざ／＼奈良の都から美濃の國へ行幸になりました。

六1047 宇治橋を渡つて神苑に入り、千年もたつたかと思ふ老木の下へ行つた時には、〈略〉。

七208 すると、これまで潮の満ちてゐた稻村崎は、其の夜の月の入る頃に、二十餘町にはかに干上つて砂地にかはり、〈略〉。

七339 獅子は武士の方を見まもり

て、あはれ、波の底に入りぬ。

九15 黒きとばりにおほはれて、安き眠に入れるなり。

九117 われ皇子の御身代りとなりて海に入り、神の御心をなだむべし。

九124 中に入りてひよこの箱をかへ出し、軒下なるかこひの中にひよこを放つ。

九145 どの内に入りて見るに、敷薬の中に見事なる卵二つころがれり。

九795 〈略〉、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。

九933 信吉は兄と姉とに謝して、楽しく其の夜のゆめに入れり。

十一16 橋を渡り、大鳥居をくぐりて南參道に入る。

十一110 水屋の水に手を清め口をすすぎて南神門を入れば、〈略〉、神々しさとへん方なし。

十45 此所を出でて舊御苑に入り、木立の間の細道をたどれば、程なく小さき建物の前に出づ。

十693 眞先かけて敵の大軍に割つて入り、これぞと思ふ敵と打合つて、あつぱれてがらを立てるかぐ。

十1310 主上はや院庄に入らせ給ふ。」

十二
35
4
手 やがてベルリンに入つて

— 93 — オヤネコトコネコガキマ

モンヲシメテ、シロヲマモ

マツクロナ目ヲシテ、コ

チヲヲニランデ **■**マス。
 二417 ヨイオヂイサン ハ犬ヲ
 一ピキカツテ、タイソウカハイガ
 ツテ **■**マシタ。
 二512 ワルイオヂイサン ハコノ
 ハナシヲキイテ、ノコツテ **■**タ
 ハヒヲカキアツメテ、**〈略〉**。
 二515 ワルイオヂイサン ハ**〈略〉**、
 トノサマノオカヘリヲマツテ
■マシタ。
 二582 イツモアナタニツイテ **■**
 マスガ、**〈略〉**、ワタクシハアナ
 タカラハナレマス。
 二584 **〈略〉**、日ヤ月ガデテ **■**
 ナカツタリ、アカリガツイテ **■**
 ナカツタリスレバ、ワタクシハ
 アナタカラハナレマス。
 二585 **〈略〉**、アカリガツイテ **■**
 ナカツタリスレバ、ワタクシハ
 アナタカラハナレマス。
 二593 太郎ノオカアサンハカゼ
 ヲヒイテネテ **■**マス。
 二626 私ノ目ハイツモハツキ
 リシテ **■**テ、ヨク見エマス。
 二646 私ノウチニハオヤ牛ト
 子牛ガ **■**マス。
 二716 ムカシ大江山ニシユテン
 ドウジトイフワルモノガ **■**マ
 シタ。
 二725 ソノ上イハヤニコモツテ
■マシタカラ、ナカナカタイデ
 スルコトガデキマセンデシタ。

三17 **〈略〉**、ハチハセツセトミ
 ツヲアツメテ **■**マス。
 三21 ミチバタニハスミレヤタ
 ンポボガサイテ **■**ルシ、**〈略〉**。
 三23 **〈略〉**、ムギ畠ノ上ニハア
 サハヤクカラヒバリガサヘツ
 ツテ **■**マス。
 三27 コウバノキテキガナツテ
■マス。
 三34 トヲアケルト、ムカフノ
 ソラガウスアカクナツテ **■**マ
 ス。
 三46 コウバデハモウシゴトガ
 ハジマツテ **■**ルラシイ。
 三56 メンドリハヘンナコエヲ
 タテテ **■**マシタガ、**〈略〉**。
 三57 メンドリハヘンナコエヲ
 タテテ **■**マシタガ、見テ **■**ル
 ウチニ、タマゴヲハラノ下ニ
 ダイテシマヒマシタ。
 三62 エヤ水ヲヤツテモ、見
 ムキモシナイデ、タマゴヲアタ
 タメテ **■**マス。
 三77 **〈略〉**、オヤドリノムネノ
 トコロカラ、ヒヨコガ小サナア
 タマヲ出シテ、ビヨビヨトナイ
 テ **■**マシタ。
 三78 ハネノ下ニモ二三バ **■**
 ルヤウデシタ。
 三83 ヒヨコガナクト、オヤド
 リハ**〈略〉**トイツテ **■**マシタ。
 三148 **図**「おまへはてのゆびの

なをしつてゐますか。」
 三151 **図** しつてゐます。
 三163 **図** それではあしのゆび
 のなをしつてゐますか。
 三177 **図** このの中に、おも
 しろい人がゐます。
 三185 **図** この人はどんないろ
 のきものをきてゐますか。
 三186 **図** 「あかいきものをきて
 ゐます。」
 三194 **図** どんなかほをしてゐま
 すか。
 三208 太くてやはらかなわらび
 がたくさんはえてゐました。
 三212 二人がむちゆうになつて
 とつてゐますと、**〈略〉**かけ上つ
 てくるものがあります。
 三217 二人がびつくりして見て
 ゐますと、それは小二郎のう
 ちのいぬでした。
 三237 **〈略〉**、犬はもうとつくに
 かへつてゐて、かけてきてとび
 つきました。
 三255 むぐらもちでもとほつた
 やうに、土がところどころもち
 上つてゐます。
 三267 石がきの下へ出たのは、
 かはがおちはじめ、竹になり
 かつてゐます。
 三281 むかふの方に、二本なら
 んでゐるほそい竹の子は、**〈略〉**。
 三313 村の人は五一車とよん

でゐます。
 三315 五一ぢいさんがその水車
 やのばんをしてゐるからで
 す。
 三375 ソレカラ、道ヲアルクト
 キニハ、左ガハヲ通ルノガヨ
 イコトニナツテ **■**マス。
 三392 ちか道の方は、道がこ
 はれてゐたり、石が出てゐたり
 しました。
 三392 ちか道の方は、道がこ
 はれてゐたり、石が出てゐたり
 しました。
 三392 ちか道の方は、道がこ
 はれてゐたり、石が出てゐたり
 しました。
 三404 ある日はまを通ると、
 子どもが大ぜいでかめをつか
 まへて、おもちゃにしてゐます。
 三413 それから二三日たつて、
 うらしまが舟にのつてつりを
 してゐますと、大きなかめが
 出てきて、**〈略〉**。
 三437 うらしまはおもしろがつて、
 うちへかへるのもわすれてゐ
 ましたが、**〈略〉**。
 三458 **〈略〉**、うちもなくなつて
 ゐて、村のやうすもすつかり
 かはつてゐます。
 三461 **〈略〉**、村のやうすもすつ
 かりかはつてゐます。
 三461 しつてゐるものは一人
 もありません。
 三488 大キナ家が三ムネ、「コ」
 ノ字ナリニタツテ **■**マス。

三497 キヨネンデキ上ツタ新道
ハ、村ヲ東カラ西ヘ、マツス
グニツキヌイテヰマス。
三525 〇「おい、長いさををふり
まはして、何をしてゐるの
だ。」
三528 〇「星を二つ三つはたき
おとさうとしてゐるのだ。」
三536 あるばん、弟がにはへ
出て、「二つ二つ」とかぞへてゐ
ました。
三537 〇「おまへ、何をかぞへて
ゐるのだ。」
三541 〇 弟星をかぞへてゐま
す。
三548 わかいとき字をならひま
したが、うまく書けませんので、
こまつてゐました。
三554 あるとき、〇略、しだれや
なぎのえだへ、かへるがとび
つかうとしてゐます。
三583 色ガウスケテ、ヌレテヰ
ルヤウニ見エマス。
三584 見テヰルウチニ、チヂン
デヰタハネモダンダンノビテ、
〇略。
三585 見テヰルウチニ、チヂン
デヰタハネモダンダンノビテ、
〇略。
三588 〇略、モウリツパニセミ
ニナツテヰマス。
三592 コノ大キナモノガ、ヨク

アノカラノ中ニハイツテヰタ
モノダトオモヒマシタ。
三601 今ニハノ木ニセミガ
ウルサイホドナイテヰマス。
三602 アノセミモコノ中ニヰ
ルノデセウ。
三605 〇略、小川の水はきれい
にすぎとほつてゐます。
三607 風がしづかにふいて来て、
きしのさがさらさらとおと
をたててゐます。
三636 草のはにとまつてゐた
てふてふが おどろいてとびたち
ました。
三674 池ノ水デタメシテミル
ト、ウマク出来テヰテ、高ク上
ゲルト、ヤネノ上マデトドキ
マス。
三686 〇略、センヲヌイテ見ル
ト、キレガトレテヰマシタ。
三744 〇「私ハカラダガネズミ
ニニテヰルカラ、ケダモノダ。」
三768 〇略、ヒルハ木ノウロ
ヤアナノ中ニカクレテヰテ、
クラクナツテカラ〇略。
三775 十五やの月がざしきの
まん中までさしてゐます。
三788 だれか川上の方で、さ
きほどからふえを吹いてゐま
す。
三797 〇「ふみ子もこんやはき
つとあちらでこの月を見て

あませう。」
三831 日はよくてつてゐて、ふ
じの山はいつもよりなほき
れいに見えました。
三837 〇略、れふしがぼんやりと
海をながめてゐました。
三842 〇略、松の木に美しい
物がかかつてゐました。
三902 れふしが見とれてゐます
と、天人は〇略。
四15 大きな字を書いたのほり
がすみきつた空に立つてゐま
す。
四22 鳥ゐのあたりは、道の
りやうがはに、いろいろな店が
ならんでゐます。
四26 ほほづきやふうせん玉を
賣る店も出てゐます。
四27 又あめややくわしやでは、
はやし立てておきやくをよんで
ゐます。
四32 ちやうど人の出さかりで、
お宮のすずがひつきりなしに
なつてゐます。
四36 お宮のうらではすまふ
がはじまつてゐて、「わあわあ」
とはやすこゑがきこえます。
四75 私の木の枝がをれる
ほどなつてゐます。
四77 きのお一つ取つてみまし
たら、もう黒くごまをふいて
ゐました。

四122 鳥ニヰタ 白ウサギガ、
〇略、クフウヲシテヰマシタ。
四124 〇略、海ヲワタルクフウ
ヲシテヰマシタ。
四126 アル日ハマバへ出て見
ルト、ワニザメガ居マシタカラ、
〇略。」トイヒマシタ。
四163 〇略、一バンシマヒニ居
タノガ、白ウサギノ毛ヲミン
ナムシリ取ツテシマヒマシタ。
四166 白ウサギハイタクテタマ
リマセンカラ、ハマベニ立ツテ、
ナイテ居マシタ。
四174 〇「ソレナラ海ノ水ヲ
アビテ、ネテ居ルガヨイ。」
四178 白ウサギハ〇略、クルシガ
ツテ居マシタ。
四243 前の畠の柿の木は、
はがまつかになつてゐて、〇略。
四245 〇略、二つ三つとりのこし
てある柿が、赤い玉のやう
に光つてゐます。
四247 えんさきのささんくわに、
目白が二は来てゐて、枝から
枝へとんでゐます。
四248 えんさきのささんくわに、
目白が二は来てゐて、枝から
枝へとんでゐます。
四291 又町はづれに大きな工場
のふしんがはじまつて居ます。
四307 友だちでも居るのかと
おもつて、「おうい」とよぶと、

「おうい」といひ、〈略〉。

四三六 〈略〉向ふの方へ行つて
みました、だれも居ませんで
した。

四三二 図 「それは山びこです。だ
れも居るのではありません。」

四三六 一 〈略〉、森ヤ林ノヒクイ
木ノ枝ニトマツテ、ボンヤリト
シテ居ルコトガアリマス。

四三六 三 図 「ア、ニクイヤツガ居
ル。」

四三七 六 ソレデモフクロフハ〈略〉
キョトキョトシテ居ルバカリデ
ス。

四四三 花子はねこをだいてう
ろろして居ましたので、「〈略〉。」
といはれました。

四四六 四 おとうさんがおかへり
なつた時には、家の内も外
もきれいになつて居ましたので、
みんながほめられました。

四四八 友一のうちでかるた取
がはじまつて居ます。

四四七 三 〈略〉かるた取がはじまつ
て居ます。〈略〉。今ちらしで取
つて居ます。

四五六 圖 今に見てゐる、僕
だつて、見上げるほどの大木
になつて見せずにおくもの
か。」

四五八 一 私ノウチデハ此ノゴロ
土ザウノフシンガハジマツテ

居マス。

四五八 三 〈略〉大工サンガ毎日其
ノ中デ仕事ヲシテ居マス。

四五八 七 ドンナサムイ日デモ、大
工サンハ〈略〉、キセイヨクハ
タライテ居マス。

四五九 七 私ハカンナヲカケテ居
ルノヲ見ルコトガスキデス。

四六一 三 屋島のたたかひに、げん
じはをか、へいけは海で、向
ひあつて居ました時、〈略〉。

四六二 一 一人のくわんちよが其の
下に立つて、まねいて居ます。

四六二 五 扇は風に吹かれて、くる
くるまはつて居ます。

四六三 四 空をとんで居る鳥で
も、三羽ねらへば、二羽だけは
きつといおとすほどの上手で
ございます。

四六五 三 よーは心の中で、もし
これをいそこなつたら、生きて
は居まいとかくごをきめて、
〈略〉。

四六八 二 〈略〉、私の手からゑを
たべるほどになつて居ました。

四六八 七 〈略〉、うちのものは朝
までしらずに居ました。

四六九 七 〈略〉、まだあれが生きて
居るだらうか、足のきずはど
うしたらうかと思はないこと
はありません。

四七〇 四 私ドモ二人ハ色モナリ

モヨクニテ居マス。

四七一 五 シカシ二人トモ大セツナ
モノデ、ドナタノウチニモ、ナ
カマノモノガ大テイ行ツテ居
マス。

四七二 一 もう二百年あまりもここ
に立つて居ます。

四七二 八 私は長生をして居ます
ので、〈略〉みんな見て知つて居
ます。

四七四 一 〈略〉みんな見て知つて居
ます。

四七四 四 私は〈略〉を其のわかい
時から知つて居ました。

四七七 此の人は〈略〉、うちの
仕事もせず、ゑばつてばかり居
ました。

四七八 二 それからどこへ行つて
居たか、村にもひさしく居ませ
んでした。

四七八 二 〈略〉、村にもひさしく居
ませんでした。

四七八 五 かへつて来た時には、ひ
どいみなりをして居ました。

四七八 六 私の下で、長い間しよ
んぼりとして居まして、日がく
れてから村へはいりました。

四八〇 七 昨日〈略〉、軍たいに居る
に皆さんの所へ出かけました。

四八二 二 てつけうへかかつた時、
河を見たら、たいそう水が出
て居ました。

四八二 七 ちやうど大きな船がおき
を通つて居ました。

四八三 一 そばに乗つて居た人の
話では、軍かんだといふこと
でした。

四八三 四 むかふのてい車場へ着い
たら、にさんがむかへに来て
居ました。

四八四 七 今オキクトオヒナ様ノ
前ニスワツテナガメテ居マス。

四八五 三 図 ダイリ様ノ下ノダン
ニ、弓ヤ矢ヲ持ツテ居ル人
ハ何デセウ。

四八六 四 図 オキク「五人バヤシノ一
番右ニ居ル人ハ何ヲスル
ノデセウ。」

四八六 六 図 扇ヲ持ツテ居ル人デ
スカ。

四八七 一 二人ガオ話ヲシテ居ル
所へ、オ花ノオカアサンガ來
マシタ。

四九二 三 けれどもかたきのくどう
は、〈略〉、いつも大ぜいの家來
をつれて居ます。

四九三 五 かたきのくどうもよりと
ものおともをして行つて居ま
す。

四九五 四 ふみこんで見ると、くどう
はよくね入つて居ます。

四九五 五 ね入つて居るものをきる
はひけふと、「〈略〉。」と名のり
ました。

五三_一 四月四日の朝、當番で僕が机の上をふいてゐると、先生が知らない生徒を一人つれてお出でになりました。

五三_五 「略。」といつて、此の間からあいてゐたせきをおさしになりました。

五四_八 中村君は色が黒くて、まるまると太つてゐます。

五五_一 氣がさつぱりしてゐて、二三日たつと、前からの友だちのやうになりました。

五五_三 中村君がこれまで居た所は日本の南の方で、略。

五五_八 何でも汽車に二日二ばん乗通して、こちらへ着いたのださうですから、何百里かはなれてゐるのでせう。

五六_四 ある日、僕がうんどう場へ出て見ると、中村君が泣いてゐました。

五八_二 みことは此の川上にも人がすんでゐるにちがひないとおかんがへになつて、略。

五八_五 略、おちいさんとおぼあさんが、一人の娘を中において泣いてゐました。

五_{一〇}_四 略、せ中には、ひのきや杉の木が生えてゐます。」

五_{一三}_三 學校からかへつて見ると、廣田君からゑはがきが來てゐました。

五_{一三}_五 囲 うめやも、やさくらがみな一しよにさいてゐます。

五_{一四}_五 かへりみちに、はなれ馬がとんで來ましたので、どうしようかと思つてゐますと、よそのをぢさんが大手を廣げてとめて下さいました。

五_{一五}_二 ぼちが昨日から病氣で、ごはんをたべませんので、學校に居てもしんばいでしたが、略。

五_{一五}_三 略、もうよくなつてゐて、尾をふつてむかへに出来ました。

五_{一七}_五 金の鳥がついてゐますね。」

五_{一七}_七 略、それで金鵒勳章といふのだが、鵒のついてゐるわけは知つてゐるだらう。

五_{一七}_七 略、それで金鵒勳章といふのだが、鵒のついてゐるわけは知つてゐるだらう。

五_{一九}_五 略、わるものどもは目を明けてゐることが出來ず、おそれてみんなにげてしまつたさうだ。

五_{二〇}_八 ゆふべの雨がはれて、青葉の上に日が氣持よくつてゐます。

五_{二二}_三 美しいびらで、一月も前から廣告してゐた島屋の大賣出しは、いよく今日からはじまりました。

五_{二二}_八 島屋の前には、人が黒山のやうにあつまつてゐました。

五_{二四}_二 入口の左手には、小切やえりや帶あげなどがたくさん下げてあつて、それを見てゐる人も大ぜいあります。

五_{二四}_六 略、番頭さんたちは、お客

から注文をうけては、小ぞうさんたちさしづをしてゐます。

五_{二五}_五 略、店のしるしのついた手ぬぐひと物さしが景物にはいつてゐました。

五_{二七}_二 ツバメハコチラニ居ル間ニ、人ノ家ニスヲツテ、ヒナヲソダテマス。

五_{二八}_一 こんな所にと思ふやうな村外れに、家が一けん立つてゐます。

五_{二八}_五 庭さきのもみぢの木は、前の川に美しいかげをうつしてゐます。

五_{二八}_七 うら一めんの林は私のうちのもので、此のごろは栗の花がたくさんさいてゐます。

五_{三四}_二 せまい中庭から、屋根の上に頭を出してゐるひよる松は、葉がほこりだらけでした。

五_{三五}_五 遠足のしたくをして學校へ行くと、もう級のものが大分來てゐて、先生もお出でになつてゐました。

五_{三五}_六 略、もう級のものが大分來てゐて、先生もお出でになつてゐました。

五_{三六}_一 平尾山のすそへ行くと、わらびやぜんまいが、すつかり葉になつてゐました。

五_{三六}_三 いたどりは私どものせいほどにのびてゐました。

五_{三七}_二 一匹は目に、一匹は口に、一匹は耳に手をあててゐます。

五_{三八}_三 ちやうどかまを明けたところ

で、白いけむりが立つてゐました。

五_{四〇}_二 略、べんたうをたべてゐると、さつきの學校の小使さんが麥ゆを持つて來て下さいました。

五_{四〇}_四 のどがかわいてゐたので、みんな大よろこびで飲みました。

五_{四八}_二 まぶしには、かさくといふ音がしてゐますが、これは蠶が動くからです。

五_{四八}_五 早いのはもう繭を作り上げてゐます。

五_{四九}_一 早いのはもう繭を作り上げてゐます。略、一生けんめいにはたらいてゐるのもあります。

五_{四九}_二 まだ繭をかける場所をさがしてゐるのもあります。

五_{四九}_三 今桑をたべてゐる蠶も、明日の朝までには、たいてい上つてしまふさうです。

五_{五三}_三 山から薪を取つて來て、それを賣つて、くらしを立ててゐました。

五_{五三}_六 それで山へ行くにも、へうたを腰に着けてゐて、かへりに酒を買つて來ては、おとうさんを喜ばせてゐました。

五_{五三}_七 略、おとうさんを喜ばせてゐました。

五_{五四}_三 略、石の中から酒にいた物がわいてゐます。

五_{五六}_七 松島は大小三三百の島が、海上三四里の間にちらばつてゐて、略。

五56 8 〈略〉、島といふ島には、枝ぶりのよい松がしげつてゐます。

五58 2 其の洲の白い砂の上に、青い松が一面に立つてゐて、長い橋のやうに見えます。

五58 6 宮島はまはりが七里もある島で、島の山には鹿がたくさんすんでいます。

五60 2 鯛 あれく、虹が立つてゐる。

五63 5 園 「おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、まだ一里半もあるのですか。」

五65 2 園 あれは製絲工場で、女工が四百人も絲を取つてゐる。

五66 5 園 「うちの方では、田に水がないと言つて、さわいでゐますのに、此の村にはよく水がありますね。」

五67 4 園 來年あたりから掘ることになつてゐる。

五67 7 園 「用水池には大きな鯉が居ませうね。」

五67 8 園 「鯉も居るが、それよりもつとお前に聞かせて置きたい話がある。」

五77 2 〈略〉、庄屋の妻は子どもをつれて里へ歸つてゐた。

五78 8 昔の貧乏村は、今、郡の中でもゆびをりの金持村だと言はれてゐる。

五79 1 今年のひでりにも、此の用水池にはあんなに水がたまつてゐる。

五89 5 私は町の辻に立つてゐる郵便

函であります。

五89 7 雨が降つても、風が吹いても、夜でも、晝でも、此所に立通しに立つてゐますが、〈略〉。

五90 7 私のやくめは、〈略〉郵便物を大切にあげかつてゐて、これをあつてに來る人に渡すのであります。

五91 6 作物の種や商品の見本も入れてよいことになつてゐますが、私はまだそれをあつたことはありません。

五94 1 いつか大そう雨のふるばんに、年取つたおぢいさんが、遠方に居るむすこの所へ出した封書や、〈略〉には、私もはらわたがちぎれるやうに思ひました。

五94 3 〈略〉、かついで足をほらしてゐる書生さんが、お友だちへ出した葉書には、私もはらわたがちぎれるやうに思ひました。

五94 8 〈略〉、それは人にもらしてはならないことになつてゐます。

五96 1 庭サキノブドウ棚ニ、今、夕日ガサシテヰマス。

五96 4 モウアマクナツテヰマセウ。

五96 7 ソレニハ黒ミノアルムラサキ色ノ實ガナツテヰマス。

五98 2 一人はもうにげる間がないので、地にたふれて、死んだふりをしてゐました。

五98 3 熊は死人には手を着けないと聞いてゐたからでございます。

五98 8 此の時、木に上つてゐた者が下りて來て、「〈略〉。」

五99 2 園 僕は木の上から見て、びく／＼してゐた。

五101 1 向つて右が入口、左が出口で、まん中が帝室用になつてゐます。

六2 5 今どこうちへ行つて見ても、俄の山が出來てゐます。

六3 1 昨日までに二山出來て、もう三つ目の山が出來かゝつてゐます。

六4 3 土間でこぼれもみを拾つてゐたにはとりが、俄の山へ上つてときを作りました。

六5 1 園 「さうさ、中ほどまでは降つてゐるかも知れない。〈略〉、内地第一の高山だから。」

六5 8 園 臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、此の山のいたゞきには、いつもつもつてゐるといふことだ。

六7 8 園 印度のヒマラヤ山は世界一で、たしか三万尺近いとおぼえてゐる。

六8 3 園 奈良の春日山や三笠山は千尺そこ／＼だが、白根や槍岳よりも知られてゐるし、京都の東山にしてもさうだ。

六13 4 園 モシセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ、イツデモ光ツテヰマス。

六13 5 園 銅ハ人ニ使ハレテヰテモ、時々青イ物ヲ出シマス。

六14 4 松山の入口で、赤くなつてゐ

たぐみを一枝折ると、〈略〉。

六14 8 僕がぐみをたべてゐる間に、にいはんは初音を五六本取つたやうでした。

六16 7 〈略〉、大きなこぎりで板をひいてゐました。

六16 8 何の木か、おがくづが大そうよくにはつてゐました。

六18 5 〈略〉、小さなしめちが列を作つて出てゐました。

六20 1 もとより舟は一そうも出てゐません。

六27 3 ひよどりは元氣な鳥だ。こんな寒い日にも、朝早くから、高い木の上をとびまはつて鳴いてゐる。

六28 3 虎が見まはしましたが、だれも居ません。

六28 7 なるほど、ごまつぶ程の蟻が一匹虎を見上げてゐます。

六31 7 町ハマダヒツソリトシテ、ネムツテヰタ。

六33 2 少シ行クト、呉服屋ノ小ゾウガ表ヲハイテヰタ。

六34 1 ベンタウヲサゲテ來ル女工ハ、サツキカラ汽テキノ鳴ツテヰル工場ヘ急グノデアラウ。

六34 5 停車場デキツブヲ買ツテヰルト、郵便物ヲツンダ車ガサセイヨクカケテ來タ。

六34 8 屋島の合戦に、義經が小わきにはさんでゐた弓を海へ落しました。

六39 7 園 昨日はとなり村から來てゐ

る歩兵の音吉君と二人で町を見物した。

六404 囀 〈略〉、私の村から、今歩兵になつて来てゐるのは私一人だけなのだ。

六407 囀 正作君と大工の松さんは工兵、力松君は砲兵、役場につとめてゐられた下村さんは騎兵、〈略〉。

六411 囀 〈略〉、私を入れて村からは五人も出てゐるが、兵種がちがふと、兵舎のあり場所もちがふので、〈略〉。

六415 囀 どの町村からも、歩兵が一番多く出てゐるのに、ふしぎと私の村からは私一人だ。

六418 囀 其の代り輜重兵の外は各種の兵が出てゐる。

六428 囀 軍隊へ来て、學校でなまけてゐた者は人一倍苦勞をする。

六475 囀 〈略〉、シバラク其ノアタリニ番ヲシテサテ、ソレカラ海へ歸ル。

六513 こまつてゐる所へ、御殿に仕へてゐる萬じゆがよからうと申し出た者があつた。

六514 こまつてゐる所へ、御殿に仕へてゐる萬じゆがよからうと申し出た者があつた。

六555 囀 〈略〉、木曾の家につたはつてゐた大切な刀を送つてよしました。

六561 かへつて、はだみはなさず持つてゐた刀を見つられてしまひました。

六586 さて萬じゆは、だれか母の事

をいひ出す者はないかと氣をつけてゐますが、十日たつても二十日たつても、母の名をいふ者がありません。

六612 月の光にすかして、あちらこちらさがしますと、松の一むら立つてゐる中に、石のらうがりました。

六653 昨日ニイサンガ釘箱ヲ火鉢ノフチニ置イテ、手工ヲシテサタ時、〈略〉。

六662 囀 〈略〉、果シテ磁石ノサキニ釘ガタクサンツイテサタ。

六672 或物持の所へ行くと、下男がまだ使へる小繩を捨てたと言つて、主人がひどくしかつてゐた。

六693 京都を北から南へ流れてゐる川を賀茂川といひます。

六708 囀 〈略〉、川は昔のまゝに清く美しく流れてゐます。

六721 川の西は水のすぐそばから、すき間もなく家が立ちならんでゐます。

六724 此の電車道から東山のすそへかけて、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、〈略〉。

六728 人通の多いのは此の大橋で、これには電車も通つてゐます。

六731 義經・辨慶の五條の大橋は此の川下にかゝつてゐるのでございませう。

六737 賀茂川は〈略〉水がいたつてきれいで、染物にむいてゐます。

六743 囀 「春子、オ前ハ着物ヤ帶ノ

地ハ何ノ絲デオルカ知ツテサマスカ。」

六751 囀 サウ、ヨク知ツテサマシタ。

六758 囀 「ネエサンガ今ヌツテサマル此ノ帶ハ。」

六778 男の生徒もゐれば、女の生徒もゐる。

六778 男の生徒もゐれば、女の生徒もゐる。

六781 先生もゐれば、軍人もゐる。

六782 又西洋人もゐる。

六784 みんな水靴を着けて、思ひくすべり方をしてゐる。

六792 いろく／＼な曲すべりをやる者もあり、ころんではかりゐる者もある。

六868 象つかひが乗つてゐて、口上をのべては、らつぱを吹かせたり、ごぼんの上へ乗らせたりした。

六874 象が大きな桶を鼻で頭の上へまき上げると、乗つてゐた象つかひは桶の中へはいつてしやがんだ。

六884 子どもの手がやつと合つてゐた。

六891 囀 御らの通り大きなからだをしてゐますが、氣立はしごくやさしうございませう。

六931 番兵がゆだんをしてゐると、城兵が切りこんで来て、旗をうばつて引上げた。

六954 ふみとまつてゐたのは、み

んな薬人形であつた。

六972 賊が千早城一つを持餘してゐると、方々で官軍が賊のひやうらう道をふさいだので、賊は人馬ともにつかれた。

六1008 囀 〈略〉と、おかあさんが誰かにおつしやつてゐる時、私は庭へ出ました。

六1012 雨あがりの庭はぼうつとけむつてゐました。

六1014 池のはたへ行つて見ると、しやうぶが小指程に芽を出してゐました。

六1015 うちの人はみんな知らずに居るから、一つ取つて行つて見せようと思つて、〈略〉。

六1022 ねえさんは赤いたすきをかけて、手洗鉢の水をかへてゐました。

六1028 こんなことを思ひ出して垣根の方へ行くと、しやくやくが赤い芽を出してゐました。

七94 もやが水の上をこめてゐる。

七136 舟で来た人も、をから来た人も入りまじつて、何百人か数へきれない程ゐる。

七144 女の人のはたすきをかけて、手ぬぐひをねえさんかぶりにしてゐる。

七146 妹やお松は何があつたのか、笑ひながらしきりに取つてゐる。

七152 妹とお松のさるには、やどかりがたぐさんゐた。

七159 川口にかゝつた時ふりかへつ

て見たら、もう廣い海には誰もゐなかつた。

七173 麥畠やなたね畠の間にさいてゐるのは、ことに目立つて美しい。

七175 道ばたや土手にさいてゐるのはこぼれ種であらう。

七194 〈略〉、北の山手には木戸を立てて、數萬の兵が之を守つてゐます。

七203 さて、心の中に、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をほろぼさうとしてゐます。

七207 すると、これまで潮の満ちてゐた稻村崎は、其の夜の月の入る頃に、二十餘町にはかに干上つて砂地にかはり、〈略〉。

七222 賊のそなへは忽ちくづれて、防ぐにも防がれず、たゞあわてさわいでゐます。

七233 みきが二かゝへもあつて、枝が傘をひろげたやうに出てゐるので、村の人は之を傘松と呼んでゐる。

七234 〈略〉、村の人は之を傘松と呼んでゐる。

七241 晒木綿のづきんをかぶつて、雨ざらしになつていらつしやるが、何時もお花が上つてゐる。

七241 時々は線香の上つてゐることもある。

七246 茶屋にはおばあさんが一人ほつちで菓子やわらちを賣つてゐる。

七249 此のおばあさんにむすこが一人あるのださうだがずつと前から南

アメリカへ行つてゐるといふことだ。

七254 塚の前に馬頭觀世音とほつた石が立つてゐて、〈略〉。

七255 〈略〉、其の前に時時新しい馬のくつが上つてゐる。

七279 我が國の馬は西洋諸國の馬にくらべると、せいも低く、體格もおとつてゐたが、〈略〉。

七365 目ぬきの所には三階建・四階建の石造や煉瓦造の家が軒をならべて立つてゐるので、〈略〉。

七366 日本のの町よりはかへつて西洋の都會に似てゐるといひます。

七382 第一第二第三と三つならんでゐて、たくさんな大船をいどきに横づけにすることが出來ます。

七417 年は六十四五でもあらうか、腰に小さなふろしきづつみをむすびつけてゐる。

七418 一太郎やあい。其の船に乗つてゐるなら、鐵砲を上げる。」

七436 ある時謙信が山の手に陣を取つてゐると、信玄は兵を二手に分けて、はさみうちしようとした。

七503 鎌ヲキタヘテヲタコトモアリマス。

七505 鍬ヲ打ツテヲタコトモアリマス。

七506 ナタヲ打ツテヲタコトモアリマスシ、車ノ輪ヲ打ツテヲタコトモアリマス。

七507 〈略〉、車ノ輪ヲ打ツテヲタコトモアリマス。

七514 夏ノドンナ暑イ日デモ、アセヲ流シナガラ、日ノクレルマデ働イテキマシタ。

七517 其ノ時分マデ、ヨソヘ奉公ニ行ツテヲタ若イムスコガ、今デハ其ノ後ヲツイデ、〈略〉。

七519 〈略〉、トンテンカン、トンテンカント、働イテキマス。

七531 私は年中航海をしてゐるものですから、少し其のお話を致します。

七534 私の乗つてゐる太平丸といふのは、〈略〉。

七538 先づいかりをあげて港を出て行きますと、港に立並んでゐる人家は、だん／＼小さくなつて行きます。

七552 時には鯨が高く潮を吹いてゐるのを見ることがあります。

七559 外國の港に着くと、見なれない形の家が並んで立つてゐます。

七559 其所にゐる人は、私どもとはまるでちがつた風をして、まるでちがつた言葉で話をしてゐます。

七562 其所にゐる人は、私どもとはまるでちがつた風をして、まるでちがつた言葉で話をしてゐます。

七581 〈略〉、かねや汽笛を鳴らすのは、外の船に自分等の船の居ることを知らせ、衝突をさけるため

あります。

七587 又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、それにたよつて方角を知ること出來るし、〈略〉。

七642 此の時見すばらしいなりをした一人の男が、人夫と渡賃を高いやういと言つてあらそつてゐましたが、〈略〉。

七649 〈略〉、革の財布が落ちてゐました。

七651 取上げると大そうおもくて、中には小判がどつさりはいつてゐました。

七685 〈略〉、目からはなみだがひつきりなしにこぼれてゐます。

七763 〈略〉、織田信長の草履取をしてゐた時のことである。

七796 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤ其ノ外イロ／＼ノ動物ガスタンデ居リ、又サマザモノ植物モ生エテ居ル。

七804 魚類ニハ、カレヒ・ヒラメナドノヤウニ、底ニ沈ンデキルモノモアル。

七807 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タコ・イカナダガスタンデキル。

七815 アサリヤ蛤ハ砂ヤ泥ノ中ニ居リ、カキヤアヒハ岩ニツイテキル。

七827 虫類モタクサン居ル。

七829 中デ面白イノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテキル。

七834 又物ヲ洗ツタリファイタリスル

時ニ使フ海綿モ、ヤハリ海ノ底ノ岩

ニ取リツイテ^{キル}蟲ノ骨デアル。

七85 海ニハ又獸類ガスデ^{キル}。

七85 岸ニ近イ淺イ所カラニ

三百尺グラ^キノ所マデニハ、海藻ガ生エテ^{キル}。

七86 海藻ノ形ハ様々デ、^略枝

ノ様ニナツテ^{キル}ノモアリ、ニハトリノサカニ似タノモアル。

七87 ^略、茶色ノモノハ其ノ中間

ニ生エテ^{キル}ノデアル。

七88 七 こまつてゐますと、「では水を一ぱい下さい。」と兵士が言ひました。

七91 七 ^略「これ、おばあさん、お前は知つてゐるだらう。」

七93 何だか少しむし暑いやうだが、空には雲もなくて、まことによく晴れてゐた。

八18 ^略、つるうめもどきが美しい實をならべてゐる。

八23 谷間の水はすきとほるやうにすんでゐる。

八41 しゃうじを明けて見ると、小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれてゐる。

八42 あまりかはいらしいので、僕はしばらくそれを見てゐた。

八43 すると其のうちに、僕の見てゐるのに氣がついたと見えて、^略、ちよこくやつて來た。

八52 ^略、二匹ともくつぬぎに手

をついて、ぎやうぎよく僕のすることを見てゐる。

八78 五人の騎手は神に勝利をいのつて、第二のあひづを待ちかまへてゐる。

八82 五箇村の人々は ^略、口々に勢をつけてゐる。

八86 馬の頭をそろへて、三番太鼓を今やおそしと待ちかまへてゐる。

八141 ^略「多勢の方はゆだんをしてゐるが、小勢の方はみんな心を合はせて、一生けんめいになつてゐる。」

八143 ^略「小勢の方はみんな心を合はせて、一生けんめいになつてゐる。」

八152 くやし泣きに泣くと、そばに居た松平正綱が「^略。」といつてなぐさめると、頼宣は顔色をかへて、^略。

八243 呉鳳は ^略、もう一年、もう一年とのばさせてゐましたが、四年目になると、^略。

八244 ^略「もう、どうしても待つてゐられません。」

八252 翌日蕃人どもが、役所の近くに集つてゐますと、果して赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着た人が來ました。

八254 待ちかまへてゐた蕃人どもは、すぐに其の人を殺して、首を取りました。

八264 さうして今も其の通りにして

ゐるのだといひます。

八295 太郎は毎日炭を焼く煙を遠くに見てゐるが、まだ一度も其所へ行つて見たことがない。

八329 ^略、今から千何百年も前から栽培することになつたのだとつたへてゐます。

八336 昔朝鮮に一人の婦人があつて、子どもをおさづけ下さるやうに、朝晩神様にいのつてゐました。

八343 さうして教へられた場所へ行つて見ますと、望の赤子は居ませんでした、^略。

八344 ^略、見なれない草に、眞赤な美しい實が一つなつてゐました。

八389 ^略、餘程つかれてゐたものと見えて、何時の間にか、ぐつすりねこんでしまひました。

八394 包の中には白木綿が五十反ばかりはいつてゐたのでございます。

八464 其の後どうかと案じてゐましたが、手紙を見て安心しました。

八479 金アミノ中ニ飼ハレテ、ジツト止リ木ニ止ツテ^{キル}ノヲ見テモ、^略、強ミガ全身ニミチミチテ^{キル}。

八481 ^略、怒ツテ^{キル}肩、サキノ曲ツタ大キナクチバシ、^略、強ミガ全身ニミチミチテ^{キル}。

八482 ^略、サキノ曲ツタ大キナクチバシ、スルドクテ落着イテ^{キル}目、^略、強ミガ全身ニミチミチテ^{キル}。

八486 第十三 鷲 ^略、強ミガ全

身ニミチミチテ^{キル}。

八487 マシテ自由ノ天地ニ居テ、自在ニ空ヲトブ様ハ、實ニ勇マシイモノデアル。

八497 ^略、マレニハ庭先ニ遊ンデ^{キル}子ドモヲサラツテ行クコトモアル。

八511 はね起きて見ると、土間の大釜の上に積んであるせいろからは、盛にゆげが上つてゐた。

八517 にいさんが奥の間に、餅を並べる所をこしらへてゐた。

八544 始のうちは勢がよかつたが、間もなく腰がふらつき出して、ふみしめてゐる兩足が、きねをふり上げるたぎに動いた。

八657 サンフランシスコには、日本人がたくさんゐて、いろ／＼な商賣をしてゐます。

八658 サンフランシスコには、日本人がたくさんゐて、いろ／＼な商賣をしてゐます。

八661 ^略、日本人の家には、鯉のぼりが立つてゐました。

八666 ^略、今では前よりもかへつてりつぱになつてゐます。

八676 ^略、氣候がよくて、其の上地味が肥えてゐますから、いろいろな農産物に富んでゐます。

八678 ^略、いろいろな農産物に富んでゐます。

八681 日本人は八萬人餘も居て、

子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、略。

八六五 園 略、歸つて來ると、又日本人の立てた學校へ行つて、日本語で學問をしてゐます。

八六六 園 つまりお前たちよりもよくに勉強してゐるわけです。

八七〇 園 長く滞在してゐたシカゴ市を立つて、略 ニューヨーク市に着きました。

八七三 園 地上の鐵道には勿論、高架鐵道にも、地下鐵道にも、電車や汽車が終日終夜、休なしに運轉してゐます。

八七四 園 アメリカ人は大きいこと、廣いこと、高いこと、早いこと、何でも世界一になるやうに心掛けてゐるといひますが、何しろ大した勢です。

八八二 園 もと僕のうちに奉公してゐた信吉が、昨日の朝三年ぶりでハワイから歸つて來た。

八八四 園 「とよちゃんかね。丈夫でゐるよ。」

八八五 園 あちらでも、あの子のことばかりが、氣にかゝつてゐたのでございました。

八八五 園 私はこちらに御やくかいになつてゐる松木とよの父でございます。

八八七 園 わしはあちらに居ても、お前の事ばかり心配してゐた。

八八七 園 わしはあちらに居ても、お前の事ばかり心配してゐた。

八九〇 園 略、おとよは何も言はないで、信吉の顔を見てゐる。

八九一 園 おとよは信吉の口を、中までのぞきこむやうにしてゐたが、略。

八九二 園 おとよは話し方ばかりでなく、書き方も算術も裁縫も料理も習つてゐる、大それたやうだから、略。

八九三 園 げんに此の學校の卒業生で、商店の番頭になつてゐる者もあれば、裁縫の先生に略。

八九三 園 略、裁縫の先生になつてゐる者もあるなどと話された。

八九四 園 信吉はとりのぼせたやうにうれしがつて、娘の顔と先生の顔を、かはりばんこに見てゐた。

八九七 園 此所では女の先生が、生徒に五十音の發音を教へてゐられた。

八九九 園 略、先生は根氣よく、何度もく教へてゐられた。

九〇四 園 信吉は略、應接室に待つてゐた娘の手を取つて、幾度も先生におじぎをした。

九〇七 園 略 「杉野はいづこ、杉野は居すや。」

九〇九 園 僕等はふだんいそがしく働いてゐますのに、君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、少しも僕等の爲につくさない。

九〇九 園 略、君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、少しも僕等の爲につくさない。

九〇五 園 僕はたゞ坐つてゐて物を食ふだけの者ではありません。

九〇七 園 今になつて始めて、考違をしてゐたことがお分りになるでせう。

九〇八 園 マツチの製造所へ行つて見ると、職工が大勢居つて、それ／＼手分をして働いてゐる。

九一四 園 材木を機械にかけて軸木をこしらへてゐる者もあり、軸木を火で乾かす者もあり、略。

九一四 園 大將の父は長府藩主に仕へて、江戸で若君のお守役をしてゐたが、略。

九一四 園 當時大將の體は、もうこれだけ丈夫になつてゐたのである。

九一六 園 略、武士の魂と呼ばれる物は、何時もきら／＼光つてゐたといふことである。

九一五 園 叔父さんも相かはらず丈夫で島々を廻つてゐるから、安心して下さい。

九一四 園 暑さも年中此のくらゐのものださうで、かねて思つてゐたとは違ひ、なか／＼住みよいところのやうです。

九一四 園 それに此の邊一帶の島々は我が國の支配に屬してゐるので、内地から移つて來た人も多く、少しもさびしくはありません。

九一七 園 略、其の葉の根本には、大人の頭ぐらゐの實がす／＼なりにな

九一七 園 略、其の葉の根本には、大人の頭ぐらゐの實がす／＼なりにな

つてゐます。

九一六 園 まだ十分にじゆくしてゐない實は、中にきれいな水があります。

九一六 園 又パンの木も所々に美しい林をつくつてゐます。

九一七 園 これ等の植物が思ふ／＼に茂つてゐる様子は實に見事です。

九一八 園 海の中もなか／＼きれいです。水のすんでゐる事はかくべつで、略。

九一八 園 土人はまだよく開けてゐませんが、性質はおとなしく、略。

九一九 園 此の間も十ぐらゐの少女が「君が代」をうたつてゐました。

九二〇 園 中デモ面白／＼、或動物ノ體色がマハリノ物ノ色ニ似テキルトデアル。

九二一 園 保護色ヲモツテキルト、マハリノ色ニマギレテ、容易ニ他ノ動物ニ見ツケラレナイ。

九二二 園 沙漠地方ニ居ルラクダハ灰色デ、雪ノ中ニ住ム北極熊ハ眞白デアル。

九二三 園 保護色ヲモツテキルトモノノ中ニハ、略 モノモアル。

九二四 園 北國ニ住ム野ウサギヤ高山ノ上ニ居ル雷鳥ハ、夏ハ褐色デ、略。

九二五 園 略 雷鳥ハ、夏ハ褐色デ、枯葉ヤ土ノ色ニ似テキルトガ、略。

九二六 園 例ヘバ雨蛙ハ緑色ノ葉ノ上ニ居ル時ハ緑色デアルガ、枯木ニ移レ

バ枯木ニ似タ色ニナル。

九181 保護色ヲモツテキル上ニ、其ノ動物ノ姿勢ニヨツテ、形マデマハリノ物ニ似テ見エルモノモアル。

九184 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、
ハ、
略。

九185 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、其ノ色ガ桑ノ木ニ似テキルバカリデナク、
略。

九188 所ニヨツテ此ノ蟲ヲドビンワリト呼ンデキルノハ、
略。
トイフ意味デアラウ。

九193 又沖縄ニ産スル木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シイ色ドリガアルガ、裏ハ枯葉ニ似テキルノデ、
略。

九194 又沖縄ニ産スル木ノ葉蝶ハ、
略。
羽ヲトデテサカサニ草木ノ枝ニ止ツテキルト、マルデ枯葉ガ引掛ツテキルヤウニ見エル。

九196 又沖縄ニ産スル木ノ葉蝶ハ、
略。
マルデ枯葉ガ引掛ツテキルヤウニ見エル。

九198 シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出来テキルノハ、印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。

九207 此ノ蟲ハ主ニ蘭ニ止ツテキテ、外ノ蟲ヲトツテ食フモノデアルガ、
略。

九202 此ノ蟲ハ
略。
羽ヲ廣ゲテキルト、全ク蘭ノ花ト同ジヤウデ、ナカ／＼見分ケガツカナイサウデア

ル。

九205 又或動物ハ保護色トハ反對ニ、マハリノ物トマギレナイヤウナ鮮カナ體色ヲモツテキル。

九206 コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐レル武器ヲソナヘテキルカ、イヤガル味ヤニホヒノアルモノデ、
略。

九210 例ヘバ毒ヲモツテキル蜂ノ體色ガ黄ト黒ノダンダラニナツテヨリ、
略。
ヤウナモノデアル。

九219 病みつかれた六十ばかりの老人ガ、
略。
熱心ニ何か言聞かせてゐる。

九2110 少年はひざに両手をついて、老人の顔をじつと見つめながら聞いてゐる。

九257 此の方々のお書きになつたものは、大てい此所に持つてゐる。九276 古人も『志ある者は事終に成る。』と言つてゐる。

九277 目に涙を一ぱいためて聞いてゐた少年は、固い決心を顔にあらはして、實行をちかつた。

九301 瀧は、落口にあるゴート島といふ小島の爲に二つに分れてゐます。九321 何時もはうす暗い程茂り合つてゐる兩がはの木立も、まだ若葉だけに、下草まで見えるぐらゐ明るい。

九329 かん／＼とこずゑをてらしてゐる十時過ぎの日かげが、若葉の色を下に投げるのか、
略。

九341 空ははてもなくすんで、所々

にちぎれ雲が飛んでゐる。

九343 みねからすそにかけての若々しいこずゑの色は、強い日光を浴びて、一面に煙つてゐる。

九344 道端の切りかぶに腰かけて、ひたひの汗をふいてゐると、
略。

九354 やうやく清水まで来て、手の切れるやうにつめたいのを二三ぱいづけ様に飲んでゐると、大きな青大將ガ、
略。

九357 それをじつと見送つてゐると、
略。
聲をかけた者がある。

九503
略。
四五人の若い人々がぬかだらけになつて働いてゐました。

九504 社長さんは餘程の年よりらしいが、にこにこしてゐる元氣な方です。九544 けれども社長さんは、
略。
といつて、笑つてゐた。

九5410 人々の同情は集つてゐるし、商賣の仕方は十分心得てゐるので、毎朝引いて出た荷が、夕方には必ず空になるといふ景氣。

九551 人々の同情は集つてゐるし、商賣の仕方は十分心得てゐるので、毎朝引いて出た荷が、夕方には必ず空になるといふ景氣。

九569 正一の家でも、親子三人、庭にすゑた打臺の前に並んで、麥を打つてゐる。

九572
略。
莖の先についてゐる穗が、敷いてあるむしろの上に面白い

やうに飛散る。

九589
略。
黄色い麥の穗が一面に廣げられて、まぶしいやうな夏の日にかゞやいてゐる。

九593 正一のうちの人たちに手つだひもまじつて、
略。
穀竿で麥を打つてゐる。

九604 日はかん／＼と照つてゐる。九605 庭のすみにはほうせん花が眞赤に咲いてゐる。

九609 東の空が明るくなると、今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壯大な姿が、だん／＼にあらはれて来る。

九611
略。
望遠鏡を持つた信號兵が遠くを見張つてゐる。

九612 舷門には、銃を手にした番兵が近くを警戒してゐる。九614 千數百人の乗員は、今もなお安らかに眠を續けてゐる。

九656 其の様は、まるで雨後の蛙がむらがり飛んでゐるやうである。九679 ずゑ分こんでゐたが、みんながゆづり合つてくれたので、二人とも腰を掛けることが出来た。

九688 昔は一面の荒野であつたが、今は方々に町や村が出来てゐる。

九693 目がさめると、もう夜が明けてゐて、汽車は果もなく續いてゐる。青田の中を走つてゐた。

九694 目がさめると、もう夜が明けてゐて、汽車は果もなく續いてゐる

青田の中を走つてゐた。

九六九 〆略、汽車は果もなく續いてゐる青田の中を走つてゐた。

九七〇 光堂ともいつて、昔は金光りに光りかゝやいてゐたさうだ。

九七二 〆略、八百年前の建物で、今も鞘堂の中に其のまゝ保存されてゐる。

九七三 〆略、義經の居た高館のあとも右手に見えたはずだが、もう通過してしまつた。

九七四 〆略、辨慶が立往生をしたと傳へられてゐる衣川は、すぐ此の先にある。

九七五 〆略、此所まで来ると川幅がかなりせまくなつてゐる。

九七六 〆略、南部富士といはれるだけあつて、ちよつと形が似てゐるね。

九七七 〆略、此の邊から野邊地あたりまでの間には、所所に放し飼の馬の群れてゐるのが見えた。

九七八 〆略、黒・白・茶色、大小さまゝの馬が、林のかげや沼のほとりを元氣よくかけ廻つてゐる様は、實に勇ましい。

九七九 〆略、青々とした波の上に、點々と白帆が浮んでゐるのは、野や山ばかり見て来た目に殊さらうれしかつた。

九八〇 〆略、これこそ僕たちが、一週間も前から、毎日々々待つてゐた命令だつたので、〆略。

九八一 〆略、枯れかゝつて一面に黄色になつたじやがいも畑を、午後の日が

んくく照らしてゐる。

九八二 〆略、僕はわり合にしつかりしてゐる一本の莖を握つて、ぐつと引張つた。

九八三 〆略、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。

九八四 〆略、いや、何月何日の何時には、何所に何星が見えるといふ事が、學問上ではわかつてゐるから、はかられない事はない。

九八五 〆略、あれごらん、〆略、ひしやくのやうな形になつて、七つの星が並んでゐるのが見えるだらう。

九八六 〆略、あの柄でない方の端にある二つの星を結びつけて、其の線を、ひしやくの口の向いてゐる方へのぼして行くと、〆略、かなり大きい星があるだらう。

九八七 〆略、北斗七星は何時もあんなにひしやくの形をしてゐて、〆略、すぐに北極星を見つけた事が出来る。

九八八 〆略、それにあの星は何時も眞北に居るから、〆略、すぐ方角を知る事が出来る。

九八九 〆略、〆にいさんく、〆略、もう一つ、小さい北斗七星のやうなものが出てゐますね。

九九〇 〆略、あゝ、よく氣がついたね。並び方が全く似てゐるだらう。

九九一 〆略、西洋では昔から、〆略、それ〆小星座・大星座といふ名をつ

けてゐる。

九九二 〆略、私も餘程前に讀んだのですから、くはしい事はおぼえてゐませんがね。

九九三 〆略、白馬岳が飛驒山脈中の有名な山だといふ事は知つてゐましたが、くはしい事は今日始めてうかゞひました。

九九四 〆略、雪溪は谷を埋めた雪の坂で、〆略、頂上近くまで續いてゐます。

九九五 〆略、眞夏の日中でも、杖を握つてゐる手などは、何時の間にかつめなくなつてしまひます。

九九六 〆略、あの雷鳥といふ珍しい鳥も、此のあたりから頂上へ登る途中のはひ松の間に居るのです。

九九七 〆略、お話が頂上のながめに移ると、いよくはずんで来て、岡田さんは目の前に見てゐるやうな様子で説明なさるので、〆略。

九九八 〆略、僕等も何時の間にか、山の上に居るやうな氣持になつて聞きました。

九九九 〆略、いづれおとらぬ高山が、南から西へ連なつて、互に雄姿を競つてゐます。

一〇〇〇 〆略、戸隠連山は東北の方に、呼べば答へるばかり近くそばだつてゐます。

一〇〇一 〆略、かばちや島を見廻ると、〆略、今日はもう熟しきつたやうな顔をして、へそを日にさらしてゐる。

一〇〇二 〆略、黒みがかつた紫色の莖が見事に延びて、大きな葉をゆらゆらと風に動かしてゐる姿は、誠に氣持がよい。

一〇〇三 〆略、其の隣の畠にしやうがが、〆略、ぎやうぎよく並んでゐるのも美しい。

一〇〇四 〆略、二百十日を無事に越した田には稻の穂先がもう大分重みを見せてゐる。

一〇〇五 〆略、たんぼの中程を流れてゐる小川は、いつもより水が多い。

一〇〇六 〆略、蛙が〆略。やがて〆略、眞青な空をじつとながめてゐる。

一〇〇七 〆略、ざるを持つた子供が、川下の方に集つてさわいでゐるのは、鮒やどちやうを取るのだらう。

一〇〇八 〆略、空には赤とんぼが幾つともなく飛んでゐる。

一〇〇九 〆略、うちの方をふりかへると、井戸端の柿の木に柿がすゝなりになつてゐるのが目につく。

一〇一〇 〆略、北風の主人は〆略、まるで我が子のやうに大事にしてゐた。

一〇一一 〆略、北風は自分の信じてゐる中尉が乗つてゐてくれるので、〆略、勇ましく活動した。

一〇一二 〆略、北風は自分の信じてゐる中尉が乗つてゐてくれるので、〆略。

一〇一三 〆略、兵士たちはめいめい馬のそばに立つて、今か〆と命令の下るの

を待つてゐた。

九一四 月が西の空にうす白く残り、野には朝つゆがしつとりと置いてゐた。

九一四 中尉はひらりと北風にまたがつて、亂れてゐたたてがみをそろへ、
《略》。

九一四 馬は《略》、乗手のあひづが下るのを待ちかまへてゐた。

九一六 數分の後には、北風はもう列の先頭に立つて進んでゐた。

九一七 谷一つへだてた向ふの岡に、敵の砲兵が放列をしいてゐる。

九一八 砲口はかはるがはるいなづまのやうな砲火をはいては、耳もつぶれさうにほえ立ててゐる。

九一八 中尉は始終先頭に立つて進んでゐたが、《略》と叫んだ。

九一九 しかし主人をうしなつたと思ふと、今まで張りつめてゐた勇氣もくじけて、ゆめからさめたやうにあたりを見廻した。

九二〇 《略》、地上には、人馬の死がいがあちらにもこちらにも重り合つてゐる。

九二一 中尉はあをのけになつて倒れてゐる。

九二二 戦争なれた北風は、此の聲の意味をよく知つてゐた。

九二六 或日我が軍艦高千穂の一水兵が、女手の手紙を読みながら泣いてゐた。

九二五 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、
《略》、其の手紙を差出した。

九二九 〇おあさんは、『略。』と言つてゐられるが、まだ其の折に出會はないのだ。

九二九 豊島沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念に思つてゐる。

九二九 水兵は頭を下げて聞いてゐたが、やがて手をあげて敬禮して、につこりと笑つて立去つた。

九三〇 道雄が今朝起キテミルト、商用デ四國ノ方へ旅行シテキタ父ガ、夜汽車デ歸ツタコロデアツタ。

九三〇 シカシ今度ノ候補者ノ中ニ、實ニリツバナ考ヲ持ツテキ、アノ人ナラバト思ハレル人ガアルカラ、
《略》。

九三〇 《略》、オトウサンハ最初カラチヤント其ノ人ニキメテキタ。

九三〇 當選スルシナイハ別ニシテ、メイノ自分ノ適當ト信ジテキル人ニ投票スルノガ、ホンタウノ選舉トイフモノダ。

九三〇 世間ニハ、イロ／＼ノ事情ノ爲ニ、或ハ信用モシテキナイ人ニ投票シタリ、或ハ棄權シテシマツタリスル人モアルガ、《略》。

九三〇 世間ニハ、《略》スル人モアルガ、ソナナ事ヲスルノハ、選舉ノ趣意ニソムイテキル。

九三〇 道雄ノ學校デハ、《略》選舉ヲスルコトニナツテキルノデアツタ。

九三〇 道雄ハ誰ガ何ト言ツテモ、自分デ一番適當ダト信ジテキル中村君ヲ選舉シヨウト決心シタ。

九三〇 全身砂ぼこりにまみれた王は、町はづれを流れてゐるきれいな川にはいつて水浴をした。

九三〇 醫師は皆、《略》、たゞ經過を見守つてゐるばかりである。

九三〇 フィリップが薬を調査しに別室へ退いた後、王の日頃信頼してゐるバルメニオ將軍から、王にアてた密書が届いた。

九三〇 それにはフィリップが敵から大金をもらふ約束で王を毒殺しようとしてゐるといふ風説があるから、用心するやうにと書いてあつた。

九三〇 《略》、王は信頼の情を面にあはして、フィリップを見下してゐた。

九三〇 熱い番茶にのどをうるほして休んでゐる所へ、《略》高橋さんが來られた。

九三〇 高橋さんは、あちらで長らく教育に従事してゐる人である。

九三〇 高橋さんは、すぐ前に居る順太郎君を見て、『略。』

九三〇 《略》、とかく無責任な事ばかりしてゐました。

九三〇 私が今度歸つて來て、はじめて青年團の規約を見た時は、其のと、のつてゐるのに驚いて、《略》。

九三〇 《略》、これがまじめに實行されてゐるかどうかと、少し氣になつたのでした。

九三〇 《略》、あちらの教育に關係してゐる私どもは、非常に喜んでをります。

九三〇 ちやうど此の頃、此所の名物の馬市が始つてゐるといふので、
《略》見物に行きました。

九三〇 廣さは二町四方ぐらゐで、せり場を中央にして、其の周圍は馬つなぎ場になつてゐます。

九三〇 《略》、どの子馬も皆かはいらしい顔をして、おとなしくつながれてゐます。

九三〇 中には、母馬がつきそつて來てゐるのもたくさんあります。

九三〇 子馬には大い飼主の一族がついて來て、親切に世話をしてゐます。

九三〇 中には、《略》、くびや背をなでたりしてゐるものもあります。

九三〇 それを見ると、成程、こんなにかはいがられて居れば、馬も從順で人になつてくわけだと、しみ／＼思ひました。

九三〇 せり場の一方に高い臺があつて、其の上に掛の人が居る。

九三〇 《略》、黒山のやうに集つてゐる買手は、自分の見込で思ひ／＼の直をつけて、次第にせり上げる。

九三〇 私は今日此所來て、飼主

九三〇 《略》、これがまじめに實行されてゐるかどうかと、少し氣になつたのでした。

九三〇 《略》、あちらの教育に關係してゐる私どもは、非常に喜んでをります。

九三〇 ちやうど此の頃、此所の名物の馬市が始つてゐるといふので、
《略》見物に行きました。

九三〇 廣さは二町四方ぐらゐで、せり場を中央にして、其の周圍は馬つなぎ場になつてゐます。

九三〇 《略》、どの子馬も皆かはいらしい顔をして、おとなしくつながれてゐます。

九三〇 中には、母馬がつきそつて來てゐるのもたくさんあります。

九三〇 子馬には大い飼主の一族がついて來て、親切に世話をしてゐます。

九三〇 中には、《略》、くびや背をなでたりしてゐるものもあります。

九三〇 それを見ると、成程、こんなにかはいがられて居れば、馬も從順で人になつてくわけだと、しみ／＼思ひました。

九三〇 せり場の一方に高い臺があつて、其の上に掛の人が居る。

九三〇 《略》、黒山のやうに集つてゐる買手は、自分の見込で思ひ／＼の直をつけて、次第にせり上げる。

九三〇 私は今日此所來て、飼主

たちがあんなにかはいがつてゐたのを見て、〈略〉と、心からいのりました。

十 23 4 団 歸りに散歩がてら町を歩いて見ると、賣つてゐる菓子もおもちやも、多くは馬にちなんだ物で、〈略〉。

十 23 7 団 成程、此の邊は馬でもつてゐる處だと思ひました。

十 24 5 其の一角にそびえてゐる燈臺に、年とつた燈臺守が、妻と娘と三人で、わびしく其の日を送つて居た。

十 24 6 〈略〉燈臺守が、妻と娘と三人で、わびしく其の日を送つて居た。

十 26 3 窓 私は、とても人の死ぬのをじつと見ては居られません。

十 31 1 〈略〉、パナマ地峡といつて、地形がきはめて細長くなつてゐる。

十 31 4 パナマ地峡は一體に小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。

十 31 9 そこで此の運河は、非常に變つた仕組に出來てゐるのである。

十 31 10 先づ地峡の山地を流れてゐる河の水をせき止めて、湖を二つ造つた。

十 33 6 しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。

十 33 9 上手にも水門があるので、船は大きな箱の中に浮いてゐる形である。

十 35 5 〈略〉、湖上に點々と散在して

ゐる島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。

十 35 6 〈略〉、湖上に點々と散在してゐる島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。

十 38 4 父は毎日、兄や木びきの力藏さんと、朝早くから行つて、夕方おそくまで働いてゐる。

十 39 4 兄はそこらに散らばつてゐる木の根や、小枝などを拾ひ集めて來て、たき火を始めた。

十 40 3 力藏さんも、〈略〉、昨日からひきかけてゐるけやきの太木を、大のこぎりでひき始めた。

十 42 8 しばらくの間めい／＼がこんな風に働いてゐると、〈略〉、山鳥が一羽飛立つた。

十 44 1 力藏さんのひいてゐたけやきの太木も、見事に根本から切倒された。

十 44 6 日はもう西にかたむいてゐる。

十 44 8 ふと見上げると、庭の柿の木には、すゞなりになつた實が夕日を浴びて、珊瑚珠のやうにかゞやいてゐる。

十 44 9 喜三右衛門は餘りの美しさにうつとりと見とれてゐたが、〈略〉、又窯場の方へとつて返した。

十 45 7 日頃から自然の色にあこがれてゐた彼は、〈略〉、もう立つても居ても居られなくなつたのである。

十 45 8 〈略〉、もう立つても居ても居られなくなつたのである。

十 45 8 〈略〉、もう立つても居ても居られなくなつたのである。

十 48 2 喜三右衛門は、血走つた目を見張つて、しばらく火の色を見つめてゐたが、〈略〉。

十 48 5 其の夜喜三右衛門は〈略〉夜の明けるのを待つてゐた。

十 48 6 一番鶏の聲を聞いてからは、もうじつとしては居られない。

十 49 1 喜三右衛門は、一つ又一つと窯から皿を出してゐたが、不意に「これだ。」と大聲をあげた。

十 49 8 柿右衛門は今から三百年ばかり前、肥前の有田にゐた陶工である。

十 50 2 柿右衛門はひとり我が國內において古今の名工とたゞへられてゐるばかりでなく、其の名は遠く西洋諸國にまで聞えてゐる。

十 50 3 柿右衛門は〈略〉、其の名は遠く西洋諸國にまで聞えてゐる。

十 53 3 窓 世の中にはお金の有餘つてゐる人もあるが、〈略〉。

十 53 4 窓 世の中には〈略〉何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。

十 53 5 窓 銀行は有餘つてゐる人からお金を預つて、資金の足らぬ人に貸附けるのだ。

十 55 4 〈略〉傳書鳩の改良に力を用ひ、其の飼養を奨勵してゐる。

十 60 6 窓 「お、降つたは／＼。世

に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。」

十 68 7 窓 かやうに落ちぶれてはゐるものの、御らん下さい、〈略〉。

十 74 1 団 京城の市街は、もと石でたゞんだ高い城壁で圍まれ、その處々にかういふ門があつて、出入口になつてゐたのださうです。

十 74 3 団 今でも城壁は大部分昔の面影を留めてゐますし、門も主なものは残つてゐます。

十 74 5 団 〈略〉、門も主なものは残つてゐます。

十 75 2 団 南大門の東南の方に南山といふ山があつて、公園になつてゐます。

十 75 9 団 市街の周圍を取圍んだ山々は地はだが白く、それに松がまばらに生えてゐる。

十 76 4 団 其の手前は一帯に朝鮮家屋で、其の又手前には〈略〉などのりつばな洋館がそびえてゐる。

十 78 8 団 こちらでは昔から之を三寒四温といつてゐるさうです。

十 80 3 〈略〉、じつと目をつぶつてゐるうちに、何時の間にか、地下九百尺の坑底に着きました。

十 80 6 〈略〉、周圍の壁は皆石炭で、それが電燈の光に物すごく光つてゐます。

十 80 7 此處から方々へ坑道が通じてゐて、廣い坑道には、電氣機關車が

炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

十809 〈略〉、電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

十813 室の中には、大きなポンプが幾つも、すさまじい勢で活動してゐます。

十816 〈略〉、こんな大きなポンプを備へ附けてゐる處は、世界でも珍しいさうです。

十823 図 「坑内には、ねずみがたくさん居て困ります。」

十826 二三十匹の馬がまぐさを食つてゐます。

十826 坑内に馬が居るのは不思議だと思つて、聞いてみると、〈略〉。

十828 〈略〉、これは石炭を運ぶために飼はれてゐるのださうです。

十8210 馬屋の前を通つてだん／＼奥深く進むと、いよいよ石炭を掘つてゐる處へ來ました。

十833 暗やみの中にかすかに安全燈が光つてゐる。

十836 近づいて見ると、坑夫が汗だらけになつて、元氣よく石炭を掘つてゐます。

十841 石炭の壁は安全燈の光に照らされて、黒光りに光つてゐます。

十842 探炭坑夫は四人づつ一組になつてゐて、〈略〉。

十849 図 〈略〉、たき火をしてゐると、そばの黒い岩に火がつき、煙をあげ

て燃出しました。

十857 〈略〉、あの坑内でたえず活動してゐる坑夫の仕事は、たふといものに思ひました。

十868 それで、印度支那半島あたりから年々輸入してゐる。

十874 それで、機械類もまだかなり多く輸入されてゐる。

十875 我が國は種々の品物を輸入してゐるばかりでなく、〈略〉。

十914 幾度もくりかへしてゐる中に、太郎は生麥生米生卵と、早口にす

ら／＼言へるやうになつた。

十922 図 「おとうさんは、もつと言ひにくい言葉を知つてゐる。」

十936 太郎は前から父に、「〈略〉。」と固く禁ぜられてゐたのであるが、〈略〉。

十939 さいはひ附近の田で働いてゐた村の人々に助けられ、〈略〉家に歸つた。

十944 父は「お前はどうかしたのだ。〈略〉。」とたづねたが、太郎はだまつてゐた。

十947 図 『いゝえ、僕は止められてゐるから渡りません。』

十1013 〈略〉、まるで春の國に居るやうだ。

十1014 図 あゝ、咲いてゐる、く。

十1014 図 あゝ、咲いてゐる、く。

十1019 たくさん咲いてゐる中で一番美しいのは、〈略〉の花である。

十1021 〈略〉一番美しいのは、たれ

下つた莖に、幾つも咲いてゐる薄紅色の花である。

十1026 葉の先からつるを出して、五六寸の細長い袋をつるしてゐる。

十1029 図 中をのぞいて御らん、何かはいつてゐるやうだから。

十1032 〈略〉、そつとのぞいて見ると、はへのやうな蟲が二匹、底の水の中で、動けなくなつてゐる。

十1039 中には、まるで花かと思はれる紅色の葉が、莖の上の方に群がつて出でゐるものもある。

十1041 次の室には大きい熱帶植物類が並んでゐる。

十1042 椰子・バナ・コーヒー・ゴムの木などは名を聞いてゐたが、實物を見るのは始めてである。

十1045 図 其處から熱い湯を管で各室へ送つて、適當に暖めるやうになつてゐるのだ。

十1053 図 此の温室は南を受けてゐる上に、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに早く咲くのだ。

十1054 図 此の温室は南を受けてゐる上に、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに早く咲くのだ。

十10510 其の枝の先にしよんぽりと止つてゐる鳥の姿も、見るから寒さうだ。

十1131 甲板に立つてゐた船長を始め十人許の乗組員は、ひとしく目を其

の方向に向けた。

十1149 今まで勢よく引出されてゐた網もやゝゆるんで來た。

十1155 〈略〉、氣長くあしらつてゐるうちに、さすがの鯨も次第に弱つて、〈略〉。

十1177 〈略〉、沿道の家は大い天満宮にちなんだ物を賣つてゐる。

十1181 何百年も経たであらうと思はれる樟の太木が茂り合つてゐる。

十1185 うや／＼しく拜んでさて頭を上げると、神前の大きな神鏡が、きら／＼とか／＼やいてゐて神々しい。

十1188 社殿の後に廻ると、其處は廣々とした梅林で、幾百本とも知れない古木の梅が咲續いてゐる。

十1191 掛茶屋に休んで名物の餅を食べてゐると、不意にかん高い鳥の聲が聞えた。

十1196 地圖を便りにして進んで行くと、山畑の其處此處に野梅の咲きこぼれてゐるのも面白く、〈略〉。

十1197 〈略〉、霜よけのわらの間から、黄色い夏みかんがちら／＼見えてゐるのも珍らしい。

十1207 冬の日はもう暮れかゝつてゐる。

十1209 あちらこちらの村々からは細い煙が立上つてゐる。

十1210 停車場に着いた時は午後の六時を過ぎてゐた。

十1229 図 はきはししてゐて、禮儀を

わきまへてゐることも、それですつかり分りました。

十129 窓 はきはきしてゐて、禮儀（ぎぎ）をわきまへてゐることも、それですつかり分りました。

十123 7 窓 〈略〉、齒（は）もよくみがいてゐました。

十123 8 窓 〈略〉、爪（つめ）はみじかく切つてゐました。

十123 10 窓 外の者は着物だけは美しかったが、爪（つめ）の先は眞黒になつてゐる者が多くございました。

十124 1 窓 かういふ點から、いろ／＼の美質をもつてゐることをよく見定めて、あの青年をやとふことにしたのです。

十118 〈略〉、之を形造つてゐるものは、液體（えきたい）に近い氣體であらうといふ。

十121 1 〈略〉、其の容積は地球の百三十萬倍に當つてゐる。

十122 9 望遠鏡で見ると、太陽の表面は全部が一樣にかゞやいてゐるのではなく、〈略〉。

十134 さうして其の數や大きさは、凡そ十一年餘を週期として増減してゐる。

十138 つまり此の宇宙（うちうち）には、あの太陽のほかに、これと同じやうなものがなほ數限りもなく存在してゐるが、〈略〉。

十141 しかも我々に最も近いあの

太陽でさへ、地球からは凡そ三千八百萬里も離れてゐる。

十1410 窓 少時より學問に勵み、長じて後魯の君に仕へ、大いに治績（しじき）を擧げしかども、奸臣（けんしん）の爲にさまたげられ、久しく其の職に居ることあたはずして魯を去りぬ。

十1810 〈略〉、これ等は租界といふ特別の區域内に住んでゐる。

十192 租界といふのは〈略〉、自治制を布いてゐる處である。

十194 租界には皮膚の色違ひ、言語・風俗の違つた幾多の人種が入交つてゐるので、〈略〉。

十197 〈略〉、電車・馬車・自動車等が絶間なく往來してゐる。

十199 〈略〉、銀行・會社等のりっぱな建物がそびえてゐる。

十101 其の外〈略〉等の娛樂機關が到處に散在してゐる。

十106 唯商業の取引の盛な部分は、〈略〉、趣（おもむき）がやゝ變つてゐる。

十109 此の地は交通上重要な位置を占めてゐて、〈略〉、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。

十112 〈略〉、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。

十114 貿易上最も重要な關係をもつてゐるのは、日・英・米三國で、〈略〉。

十116 〈略〉、我が居留民の數は、

外國人中第一位を占めてゐる。

十117 上海は専ら商業の都市として知られてゐるが、〈略〉。

十119 〈略〉、紡績・造船・製粉・製紙其の他の諸工場が勢よく黒煙を立ててゐる。

十144 〈略〉、さうぢもよく行届いてゐるし、總べてがきちんとしてゐました。

十145 〈略〉、總べてがきちんとしてゐました。

十149 〈略〉、お取込があつたため、今まで延びてゐたのださうです。

十166 窓 「こんなによく整頓（せいどん）してゐる中で勉強したら、どんなに氣持がよいだらう。」

十167 「〈略〉。」と思ひつゞけてゐると、そこへ弟さんが雑誌を二三さつ持つて來て、〈略〉。

十169 〈略〉、弟さんが雑誌を二三さつ持つて來て、本棚に並んでゐる雑誌の間へそれ／＼お入れになりました。

十179 此の一事で、家の中がどんなによく整頓されてゐるかが想像されます。

十189 約束は固く守らなければならぬ、他人に害を加へてはならぬなどといふことは、我々が十分心得てゐる事である。

十216 かういふ風に、三回くりかへして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、つまり裁判を念入にするためである。

十354 障子（しほ）をあけてみるとまだ雨が降つてゐる。

十358 〈略〉、山の背を通つてゐる小路を中にはさんで、四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるの

十359 〈略〉、四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるのが、目に見えるやうな氣がする。

十366 地圖の中の薄緑に染めてゐるのが〈略〉、それから次々といろ／＼の印がついてゐる。

十383 〈略〉、木が競争するやうに、しんを立ててすくすくと延びてゐるのを見ると、非常にうれし。

十389 〈略〉、今まで兩方の枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて如何にも氣持よさうに見える。

十406 〈略〉、一番早く伐るとしても、其の時は僕がおとうさんくらの年になつてゐるわけだ。

十411 ぼんやりいろ／＼の事を考へてゐるうちに、いつか夕方の色が四方にたゞよつて、〈略〉。

十4610 窓 〈略〉、畫師は前の如く夜もすがら寝ねずして、明日はかく畫がかななど獨言（ひとりごと）してゐたりければ、〈略〉。

十4910 此の液の取れる木を普通に

十4910 此の液の取れる木を普通に

十4910 此の液の取れる木を普通に

十4910 此の液の取れる木を普通に

十4910 此の液の取れる木を普通に

十4910 此の液の取れる木を普通に

十4910 此の液の取れる木を普通に

十4910 此の液の取れる木を普通に

- 十一512 南洋は〈略〉、ゴムの木の發育には最もよく適してゐる。
 十一513 〈略〉、日本人の經營してゐるゴム園もたくさんにある。
 十一546 昔、アフリカの或港に一その船がとまつてゐた時の話である。
 十一548 熱帶の暑さにたへかねてゐた船員等は、船長から泳を許されたので、我先にと海に飛込んだ。
 十一5410 船には船長と老砲手だけが残つてゐた。
 十一551 船員等は、如何にも氣持よささうに泳ぎ廻つてゐたが、中にもうれしさうに見えたのは、十三四になる二人の少年であつた。
 十一554 二人は外の者からずつと離れて、沖のうきを目當に泳ぎくらししてゐた。
 十一555 初は十間以上も相手をぬいてゐたが、〈略〉、一二間も後れてしまつた。
 十一557 これまでにこゝしてながめてゐた老砲手は、〈略〉、甲板からしきりに勵ました。
 十一566 老砲手は氣ちがひのやうになつて、「逃げるく。」と聲を限りに叫んでゐるが、〈略〉。
 十一567 〈略〉、二人の耳にははいらぬのか、夢中で泳ぎくらしを續けてゐる。
 十一572 驚いて一しやうけんめい逃げようとしてあせつてゐるが、もう遅い。
 十一574 ふかはは十數メートルの近くにせまつてゐる。
 十一581 ふかの口はもうほとんど子供に届いてゐる。
 十一591 老砲手は大砲にもたれて、無言のまゝじつとそれを見つめてゐる。
 十一596 市街は此の眞直な路によつて基盤の目のやうに正しく割られてゐる。
 十一599 〈略〉、銅像なども立つてゐる。
 十一601 〈略〉、總べてが大規模でのびくとしてゐる。
 十一619 〈略〉、大平野がはるばると續いて、末は青い大空に接してゐる。
 十一635 畠にしても、〈略〉、うねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。
 十一638 中にはトラクターを用ひて全く大農式にやつてゐる處もある。
 十一655 〈略〉、人々は自由な大氣を呼吸しながら、土の香に親しんで樂しげに働いてゐる。
 十一658 「人は火を用ひる動物。」といはれてゐるやうに、〈略〉。
 十一669 此の方法は各國民の間に、廣く又極めて長い間行はれてゐたものであるが、〈略〉すたつて來た。
 十一678 〈略〉、石炭の火は〈略〉を動かすのに大切なものとなつてゐる。
 十一695 末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。
 十一698 隣に坐つてゐた僧が之を聞いて、「無言の行に口をきくといふ事があるか。」
 十一709 若い頃から讀書がすきで、將來學問を以て身を立てたいと、一心に勉強してゐた。
 十一742 宣長は〈略〉、どこことなく才氣のひらめいてゐる篤學の壯年。
 十一743 年こそちがへ、二人は同じ學問の道をたどつてゐるのである。
 十一744 だんく話してゐるうちに、眞淵は〈略〉、非常にたのしく思つた。
 十一763 家々の戸はもう皆とぎざれてゐる。
 十一773 有名な古事記傳といふ大著述は此の研究の結果で、我が國文學の上に不滅の光を放つてゐる。
 十一775 我々の普通に金錢といつてゐる物の中には、〈略〉がある。
 十一779 我我はこれらの貨幣や紙幣を用ひて物品を賣買し、其の他いろく用の辨じてゐる。
 十一783 此のやうに便利なものも、其の使用に馴れきつてしまつてゐる我々は、これについて事新しく便利を感じることもなく、〈略〉。
 十一837 空には眞夏の日がきら／＼とかゞやきわたつてゐる。
 十一851 ふと見ると、さしわたし六七寸もある大きなくらげが、ふわりく／＼と浮いてゐる。
 十一857 その中、先に進んでゐた者が二三人列から離れて船に上つた。
 十一871 波打際には大勢の人が〈略〉と叫んでゐる。
 十一8810 弟はそれを見てしばらく考へてゐたが、〈略〉
 十一896 弟は尚あちらこちらをくつてゐるうち、ふと「八十八夜」の文字に目を止めて、「〈略〉」
 十一905 僕はこれまで〈略〉とばかり考へてゐたので、此の話を聞いて珍しく感じた。
 十一923 國 〈略〉、日本では明治五年まで太陰曆を用ひてゐたが、其の翌年から太陽曆を用ひた。
 十一931 國 〈略〉、普通四年毎に一日の閏をおくことになつてゐる。
 十一941 國 こんな不便な曆でも長い間の習慣で、今でも使つてゐるものがあるやうだ。
 十一944 國 こんな重寶なものがあるのに、それを利用しないのであるのは寶の持ちぐされだ。
 十一953 それは三方が丸太の壁で、一方は明けはなしになつてゐて、戸も窓も床もないものであつた。
 十一958 父が木を伐れば自分は〈略〉といふ風にかひがひしく働いてゐた。
 十一964 唯通りがかりの旅人から珍

しい話を聞いては、僅かに心をなぐさめてゐた。

十一96 5 かうしてゐるうちに、知識を得たいといふ彼の欲望は益々強くなり、《略》。

十一97 2 學校は四哩餘りも離れてゐたが、《略》、毎日毎日元氣よく通學した。

十一98 9 熱心なリンカーンは、書物を持つてゐる人の所には遠近を問はず借りに行つた。

十一99 5 リンカーンはかね／＼此の偉人を非常にしたつてゐたので、《略》一心に讀續けた。

十一100 2 壁のすき間をもつた雨のために、本がすつかりぬれてゐたので、《略》。

十一100 10 リンカーンは《略》何度も／＼讀返してゐるうちに、此の偉人の品性に深く感化された。

十一115 7 本當に自治の精神に富んでゐる者は、《略》、決して私心をもたないのである。

十一117 8 昔イギリスの或大きな農場で、農場主が大勢の人の耕作するのを監督してゐた。

十一118 1 農場主はせつかくよく出来てゐる麥を、たくさんの馬や犬にふみあらされてはたまらないと思つて、《略》。

十一118 2 農場主は《略》、そばに居た自分の子に、「《略》。」と言ひつけ

た。

十一119 3 因 僕はおとうさんから、《略》と言ひつけられてゐるのです。

十一120 5 ジョージは、かねてウェリントン公爵が勲功も高く、りつぱな人物であるといふ事を聞いてゐたので、《略》。

十一120 10 因 僕は、《略》とおとうさんに言はれてゐるのです。

十一121 10 《略》職工が珪砂にソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。

十一122 4 こんなところで毎日働いてゐる人たちは、どんなにつらいことであらうと思つた。

十一122 10 とけたガラスが中でぎら／＼かがやいてゐる。

十一123 2 窯の周囲には、八九人の職工が汗を流して働いてゐる。

十一123 5 細長い管の一端を、とけたガラスの中に突つこんで引出すと、先に赤い玉がくつついてゐる。

十一123 8 見てゐるうちに大きなフラスコが出来た。

十一123 10 何が出来るであらうかと思つてゐると、《略》コップになつた。

十一124 1 《略》、いろ／＼扱つてゐるうちに臺付のコップになつた。

十一124 5 調べかほの廻るにつれて、石や木や金の圓板が車輪のやうに廻つてゐる。

十一124 7 エプロンをかけた職工が

《略》、みがきをかけたりしてゐる。

十一124 9 隣の室では、《略》模様をつけてゐる。

十一125 2 皿・《略》などがきれいに並んでゐた。

十一125 1 《略》、貝殻や鑽石などを室内に並べては一人で楽しんでゐた。

十一125 4 《略》、先生にもむしろ中以下の生徒と思はれてゐた。

十一125 9 又いろ／＼の鳥を注意して見ると、それ／＼違つた面白い習性をもつてゐるので、見れば見る程興味がわき、《略》。

十一125 14 温順な彼は父の命に従つて勉強してゐたが、《略》。

十一125 19 或日彼が古木の皮をむくと、珍しい甲蟲が二匹ゐた。

十一125 24 《略》山畑には、蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。

十一125 27 どれを見ても、枝といふ枝にはもう黄金色に色づいた實が鈴なりになつてゐる。

十一125 29 黒い程こい緑の葉の間から、其の一つ／＼が日の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。

十一125 25 《略》一三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。

十一125 30 昔は個人の利益を營むのが商業であると思はれてゐた。

十一125 31 因 此處はさすがに藝術の都として世界に聞えてゐるだけあつて、建物なども一般に壯麗です。

十一125 37 因 世界最美の街路といはれてゐるシャンゼリゼーの大通には、《略》。

十一125 31 因 《略》、車道と人道との間には、緑したゝる街路樹が目もはるかに連なつてゐます。

十一125 33 因 眺望臺で眺めると、道を往來してゐる人間や自動車などは、まるで蟻のはふやうに見えるし、《略》。

十一125 33 9 因 山も森も村も皆焼野が原と變つてゐます。

十一125 34 3 因 私は今《略》ベルダンの戦跡に立つてゐます。

十一125 35 1 因 《略》工場といふ工場には盛に黒煙が上つてゐました。

十一125 35 5 因 やがてベルリンに入つて見ても、勤儉の美風が市民の間にあふれてゐて、《略》全く敬服しました。

十一125 35 7 因 《略》自國の疲弊を回復するため盛に活動してゐるのには全く敬服しました。

十一125 35 9 因 世界の公園といはれてゐるスイスは、到る處我が日本のやうに景色がよい。

十一125 36 3 因 私は《略》、ジュネーブ湖上の風光に見とれてゐます。

十一125 36 9 因 久しく單調平凡な景色にあきてゐた私には、如何にも心地よく眺められます。

十一125 37 9 二人は戸外にたゞずんでし

ばらく耳をすましてゐたが、〈略〉。

十二384 〈略〉、情ないやうにいつてゐるのは若い女の聲である。

十二392 薄暗いらふそくの火のもとで、色の青い元氣のなさうな若い男が靴を縫つてゐる。

十二393 其のそばにある舊式のピヤノによりかゝつてゐるのは妹であらう。

十二417 一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか彼自らも覺えないやうである。

十二419 きやうだいは唯うつとりとして感に打たれてゐる。

十二426 しかしベートーベンはずだまつてうなだれてゐる。

十二4210 ベートーベンはかういつて、さつき娘がひいてゐた曲を又ひき始めた。

十二438 「それでは此の月の光を題に一曲。」といつて、彼はしばらくすみきつた空を眺めてゐたが、〈略〉。

十二498 十和田湖は〈略〉に屬してゐる。

十二503 湖岸線は大體單調であるが、東南岸だけは二つの半島が並んで突出してゐるためにやゝ複雑になつてゐる。

十二504 湖岸線は〈略〉やゝ複雑になつてゐる。

十二505 岸は絶壁になつてゐる處が多く、〈略〉。

十二506 〈略〉、殊に兩半島にはさまれてゐる中湖の東岸の如きは、絶壁の高さが二百メートル以上もある。

十二5110 これは主として周圍が山で、流れ込む川に大きいのがないのに原因してゐる。

十二521 三十年ばかり前までは、此の湖には魚類が全く居なかつた。

十二523 これは奥入瀬川を十町餘り下つた處に大きな瀧があつて、魚類のさかのぼる道を絶つてゐるからである。

十二527 暗い箱の中にしまひ込まれてゐた小さな鐵のねちが、〈略〉、明るい處へ出された。

十二534 自分の置かれたのは、仕事臺の上に乗つてゐる小さなふたガラスの中で、〈略〉。

十二535 〈略〉、そばには小さな心棒や齒車やぜんまいなどが並んでゐる。

十二537 〈略〉さまゝの道具も、同じ臺の上に横たはつてゐる。

十二538 周圍の壁やガラス戸棚には、いろ／＼な時計がたくさん並んでゐる。

十二543 ねぢは、〈略〉などと考へてゐる中に、ふと自分の身の上に考へ及んだ。

十二547 窓 〈略〉、形も大きさもそれ／＼違つてゐるが、どれを見ても自分よりは大きく、自分よりはえらさうである。

十二555 二人は其處らを見廻してゐたが、男の子はやがて仕事臺の上の物をあれこれといぢり始めた。

十二557 女の子は唯じつと見まもつてゐたが、やがてかの小さなねちを見附けて、〈略〉。

十二577 窓 ねぢは「此處に居ます。」と叫びたくてたまらないが、口がきけない。

十二581 其の時、今まで雲の中に居た太陽が顔を出したので、日光が店一ぱいにさし込んで來た。

十二584 仕事臺のそばに、ふさぎこんで下を見つめてゐた女の子がそれを見附けて、思はず「あら。」と叫んだ。

十二5810 さうして一つの懷中時計を出してそれをいぢつてゐたが、やがてピンセットで〈略〉。

十二593 龍頭を廻すと、今まで死んだやうになつてゐた懷中時計が、忽ち愉快さうにかち／＼と音を立て始めた。

十二602 窓 ねぢが一本いたんでゐましたから、取りかへて置きました。

十二605 窓 「自分もほんたうに役に立つてゐるのだ。」

十二655 〈略〉、ちよつとした事にも怒り易くなつてゐた。

十二659 〈略〉、妹はかねてフランス王の后になることにきまつてゐた。

十二6510 王は其の治めてゐるイギリ

スを三分して娘たちに與へ、〈略〉と決心した。

十二677 窓 私も姉上と同じ心で、——ほんたうに姉上は私の思つてゐる通りをおつしやいました。

十二682 コーデリヤは王が一番かはいがつてゐる娘であつた。

十二684 王は満面に笑みをたゝへながら、今や遅しと其の答を待受けてゐる。

十二695 窓 「父上、私は唯ほんたうの事を申し上げてゐるのでございませう。」

十二709 〈略〉、コーデリヤの簡単な答の中にも十分眞心のこもつてゐるのを認め、〈略〉。

十二718 ところがリガンは、まだ父上を迎へる準備が整つてゐないといふのを口實にして、〈略〉。

十二727 王は〈略〉、何時の間にかもう發狂してゐた。

十二7210 それは父が姉たちの爲に虐待されてゐるといふことであつた。

十二733 家來は荒野にさまよつてゐたりや王を見附けて、コーデリヤの許に連れて來た。

十二736 コーデリヤは眠つてゐる父の衰へ果てた姿をつくづくと見て、〈略〉。

十二747 窓 一體わしは今までどうしてゐたのだらう。

十二74 10 やがて眠から覺めた王は、

「略」、そばに居るコーデリヤを見て、

十二75 6 窓 お前はわたしをうらんでゐるはずだが。

十二75 9 王は尚あらぬ言葉を口走つてはゐたが、其の言葉の端端にも、

「略」眞心がこもつてゐた。

十二76 1 「略」眞心がこもつてゐた。

十二76 8 だいたい網は身網と垣網と二つの部分から成つてゐて、非常に大きなものである。

十二76 10 これを海中に張つた形はちやうど大きなひしやくに似てゐる。

十二78 2 「略」、漁夫が絶えずまぐろの來るのを見張つてゐる。

十二78 6 「略」、網口の近くに番をしてゐる漁夫が急いで網口をしめてしまふ。

十二79 2 「略」、まぐろは水面に渦巻を起したり、背びれを水上に現したりして泳ぎ廻つてゐる。

十二88 10 討議の形式は、「略」の三度の會議を経ることになつてゐる。

十二90 5 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。

十二91 5 ぼろを着た農夫は玉のやうな汗をかいて田をすき起し、牛はつかれ果ててあへぎあへぎ働いてゐる。

十二91 6 木陰からじつと見てゐた彼は、しみぐと自分の身の上に思ひ

比べて、「略」。

十二93 4 師を求めてあちらこちらさまよつてゐるうちに、マガダ國の首府王舎城の附近に來た。

十二93 6 かねて釋迦の徳をしたつてゐたマガダ國王は、「略」。

十二94 8 そこで彼は先づ近處の河に浴し、たまぐ其處にゐた少女のさへげた牛乳を飲んで元氣を回復した。

十二95 7 彼は夜もすがら靜坐してひたすら思をこらしてゐると、「略」。

十二95 10 彼は此の心境の尊さに數日の間唯うつとりとしてゐたが、「略」。

十二96 1 「略」此の尊い心境を世界の人々と共にせずにはゐられぬといふ慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。

十二97 9 或時の如きは、釋迦が山の下にゐるのを見附けて、上の方から大石をころがしたが、「略」。

十二98 3 釋迦は「略」、各地を巡つて道を傳へてゐたが、「略」。

十二98 7 いやく臨終が近づいた時、釋迦は泣きしんでゐる人たちに、「略」。

十二105 1 此の青のくさり戸にさしかゝる手前、「略」、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。

十二105 4 「略」口もとは意志の強さが現れてゐる。

十二106 4 之を見た村人たちは、彼を

氣違扱ひにして相手にもせず、唯物笑の種にしてゐた。

十二106 4 子どもらは仕事をしてゐる老僧のまはりに集つて、「氣違よく」とはやし立て、「略」。

十二106 8 しかし僧はふりかへりもせず、唯黙々としてのみを振るつてゐた。

十二107 3 しかし僧は唯黙々としてのみを振るつてゐた。

十二107 8 出来る氣づかひはないと見くびつてゐた岩山の掘抜も、これではどうにか出來さうである。

十二110 10 今では「略」舊態を改めてはゐるが、一部は尚昔の面目を留めて、「略」。

十二111 1 「略」、一部は尚昔の面目を留めて、禪海一生の苦心を永久に物語つてゐる。

十二115 10 諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力もだんく電氣に變つて、工業界の一大革新をうながしてゐます。

十二116 6 「略」、急流や瀑布に富んでゐる我が國では、將來益々水力電氣の利用をはからなければならぬことを力説した。

十二118 5 「略」、遠い處の音楽・演説・講話などを居ながら聞くことが出来る「略」。

十二118 7 「略」、進行中の汽車が無線電話機を備へ附けてゐたために危険

を免れたこと「略」。

十二118 8 「略」、無線電話で子守歌を聞かせて赤ん坊を寝つかせてゐることなどの耳新しい話に、博士は満堂の會衆を喜ばせた。

十二120 3 窓 「小山はどうしてゐるだらうか。」

十二125 1 徳川方も「略」、ものすごい緊張を示してゐる。

十二125 4 慶喜から官軍に對する交渉の全權を委任せられてゐた舊幕府の陸軍總裁勝安方は、「略」を計つてゐた。

十二125 6 「略」勝安方は、かねてから百万畫策して時局の圓滿な解決を計つてゐた。

十二126 8 屋敷の附近は、官軍の兵士がすき間もなく警衛してゐる。

十二126 10 安芳がはいつて行かうとすると、門を守つてゐた兵士等が「略」行くてをさへぎつた。

十二127 5 窓 安芳は高音に「西郷はどこに居る。」と叫んだ。

十二127 8 一室に通されて待つてゐると、やがて西郷が出來て來た。

十二127 10 しかし二人は互に信じ合つてゐる仲なので、話はおだやかに運ばれる。

十二128 5 窓 「略」、うかくと兄弟垣にせめいでゐたら、「略」事にならぬとは決して申されませぬ。

十二129 1 相手は大きな眼でじつと安

芳の顔を見つめながら、だまつて聴いてゐる。

十二130 西郷はしばらくじつと考へてゐたが、「よろしい。〈略〉。」

十二131 警衛の兵士等は、〈略〉、西郷が後に續いてゐるのを見て、一同恭しく捧げ銃の禮をした。

十二134 6 しかし此の事情は一面に國民の短所をもなしてゐる。

十二134 8 狭い島國に育ち、生活の安易な樂土に平和を樂しんでゐた我が國民は、〈略〉、遊惰安逸に流れるかたむきがある。

十二138 4 〈略〉 我が國民は、其の長所として廉恥を貴び、潔白を重んずる美德を發揮してゐる。

十二138 5 しかし其の半面には、物にあき易く、あきらめ易い性情がひそんでゐないか。

十二138 7 堅忍不拔あくまでも初一念を通すねばり強さが缺けてはゐないか。

いる「射」(上二) 9 イル いる 射る「イ・イヨ・イル」

二33 7 ユミヲイルコトガスキデ、〈略〉。

二35 2 〇「オソナヘノモチヨマトニシテ、イテミマセウカ。」

二35 7 〇「モチハ〈略〉、イテハイケマセン。」

二36 2 トモダチハ「〈略〉、イテハイケマセン。」ト、トメマシタガ、

キカナイデイマシタ。

四62 2 さをの先の扇をいよといふのでせう。

五80 1 〈略〉、兩耳の間をねらつて、頭の上をすれ／＼にいました。

六81 8 通有も左のかたを射られたが、少しも屈せず、刀をふるつて進んだ。

六91 7 〈略〉、賊のさわぐ所をさんざんに射た。

六94 3 さうして、これをよけようとして賊のさわぐ所を射させて、又々五千人餘もころした。

いる「入」(下二) 2 入る「イレ」

九14 3 くだきたる貝殻を器に入れてあたふるに、これには餌の時のやうに集らず。

九14 7 妹の置きて行きたる餌箱に入れて持歸り、茶の間の戸棚の中にしまふ。

いるか「海豚」(名) 2 イルカ いるか

七55 3 何萬とも知れないいるかが、はね上つてはおよぎ、はね上つてはおよぎして行くのを見ることもあり

ます。

七83 8 陸ノ獸ニ似タモノニハ、〈略〉ナドガアリ、魚ニ似タモノニハ、イルカヤ鯨ガアル。

いれ (名) 1 とりいれ

いれものしだい「人物次第」(名) 1

いれ物次第

八82 1 水にはこれといふ形がない。

いれ物次第で、圓くもなれば、四角にもなる。

いれる「入」(下二) 46 イレル

いれる 入レル 入れる 容れる「イレ・レ」

いれる・のりいれる・やといれる・よびいれる

二36 イマ、ツナヒキノマツサイチュウデス。ゴランナサイ、ミンナガチカラワイレテ、一シヤウケンメイデス。

二48 3 オヂイサンハヨロコンデ、ソノハヒヲザルニ入レテ、

「〈略〉。」トヨンデアルクマシタ。

二60 4 二ガイナラ、オサタウヲ入レテオアガリナサイ。

三55 ケサオカアサンガタマゴヲ入レテオヤリニナリマシタ。

三76 2 ソノ時カウモリガケダモノノ方ヘ行キマス、ト、〈略〉、

ナカマヘ入レテクレマセン。

四47 8 「ねんにはねんを入れ。」

五11 1 酒が出来ると、みことはそれを八つのをけに入れさせて、八岐の大蛇の来るのを待つていらつしやいました。

五11 4 間もなく大蛇が来て、八つの頭を八つのをけに入れて、其の強い酒を飲みました。

五46 5 「上のうすには、どうして

米を入れる。」

五89 8 〈略〉、葉書や封書などを入れる人の外は、私のからだにさはる者がありません。

五91 2 毎日かならず新聞を入れに来る方も四五人はあります。

五91 5 作物の種や商品の見本も入れてよいことになってゐますが、私はまだそれをあづかつたことはありません。

五92 5 其のあつて来る頃に、急ぎの封書を入れに来る者が、途中で人と立話でもはじめると、私は氣がもめてたまりません。

六34 今日庭にほしてあるもみをすつて、俵に入れてつんだら、三つ目の山は出来上りませう。

六40 8 〈略〉、私を入れて村からは五人も出てゐるが、〈略〉、めつたに一しよになることはない。

六56 5 さあ、此の女にはゆだんが出来ぬといふ事になつて、石のらうを造つて、それに入れました。

六62 2 萬じゆはとびらのすきから手を入れて、「おなつかしや、母様。木曾の萬じゆでございます。」

七27 2 〈略〉、近くは乃木大將も、馬は煉瓦造の小屋に入れて置かれたのである。

七67 8 五十兩は黄色なきれにつゝんであつて、百兩は小さなふくろに入れてあります。

七70ノ「略」といって、財布の中
に手を入れました。
七71ノ「略」、仲間の者が國へ送る
金をあづかつて、此の財布に入れて
來たのでございます。
七76 信長は「略」藤吉郎を草履取
から引上げて役人の數に入れた。
七94ノ「略」、おちいさんはかぼちや
棚につつかい棒を入れたり、菊の鉢
を軒下に運んだりされた。
七104ノ「略」、清正は「あのせいの低
いのが石田だ。通してやれ。」とい
つて、三成を入れてやりました。
七113ノ「略」それで十字だから、うちの
屋がうのカネキを入れて、此の頼信
紙に書きこんでごらん。
八18ノ「略」、將軍は長四郎を大きな袋へ入
れて、「略」、袋の口を封じて柱に掛
けた。
八83ノ「略」信吉にはおとよといふ今年十
一になる女の子があるが、「略」、啞
の學校に入れてある。
八100ノ「略」さうしてそれから後は、「略」、
手は食物を口へ入れることを止め、
足は食堂へ行くことを止めました。
八105ノ「略」、乾かしたのをそろへて
マツチの箱に入れる者もあり、箱に
入れたのを十づつ集めて包紙に包む
者もある。
八105ノ「略」、箱に入れたのを十づつ
集めて包紙に包む者もある。
九78ノ「略」先生も大きな箱を持つて來て、

ほつたいものは此の中へ入れるやうに
とおつしやつた。
十10ノ「略」王は讀終つて、そつと手紙を
まくらの下へ入れた。
十57ノ「略」鳩に手紙を運ばせるには、
「略」、又は胸に袋を掛けさせて、其
の中に入れるのである。
十84ノ「略」二人が石炭を掘削すと、
他の二人がそれをさるで運んで炭車
に入れる。
十一15ノ「略」のぶ子さんは、成績物が返
るとすぐ紙の袋へ入れておいて、學
年の終におまとめになるのださうで
す。
十一53ノ「略」集めた液は「略」、次に藥
品を入れて固まらせ、機械で薄くの
して乾かすのである。
十一65ノ「略」農業者は多く古い習慣に
なづみやすいものであるが、此の邊
では新しい知識をいれて、「略」土
地を開いて行く。
十一96ノ「略」、父に對して是非學校
に入れてもらひたいと願つたけれど
も、「略」、なか／＼許してくれなか
つた。
十一107ノ「略」之を機械にかけて皮を
除き、袋に入れて外國に輸出する由
に候。
十一121ノ「略」職工が珪砂にソーダ
灰や石灰石の粉を入れてかきまぜて
ゐた。
十一123ノ「略」こちらを見ると、そこでは

ちよつと吹いて型に入れ、又吹いて
型から出す。
十二58ノ「略」時計師は「略」、大事さう
にもとのふたガラスの中へ入れた。
十二71ノ「略」ところがリガンは、「略」、
すげなくも王を内に入れなかつた。
十二135ノ「略」其の結果「略」、人を信じ
人を容れる度量に乏しい。
十二136ノ「略」支那・印度の文明を入れ、
更に西洋の文明を入れて長足の進歩
を成し遂げた日本國民は、「略」。
十二136ノ「略」、更に西洋の文明を入
れて長足の進歩を成し遂げた日本國
民は、賢明な機敏な國民である。
いろ「色」(名) 51 いろ 色 じあか
いろ・うすかばいろ・うすすみいろ・
うすべにいろ・かおいろ・きいろ・き
んいろ・ぎんいろ・ぎんねすみいろ・
こがねいろ・こげちやいろ・こんい
ろ・しろちやいろ・ちやいろ・つちい
ろ・どうぶつのいろとかたち・なまり
いろ・ねすみいろ・はいいろ・べにい
ろ・みどりいろ・むらさきいろ・るり
いろ
三18ノ「略」この人はどんないろ
のきものをきてゐますか。
三28ノ「略」ゆふべの雨でくさや
木のみどりいろますなつの
あさ、「略」。
三58ノ「略」アブラゼミデス。色ガウ
スケテ、ヌレテキルヤウニ見エ
マス。

三58ノ「略」見テキルウチニ、チヂン
デキタハネモダンダンノビテ、
色モシダイニコクナツテキマ
シタ。
三90ノ「略」、はごろもの色は日
の光にかがやきました。
四70ノ「略」私ドモ二人ハ色モナリ
モヨクニテ居マス。
五48 中村君は色が黒くて、まるま
ると太つてゐます。
五30ノ「略」つゆや時雨が色よくそめた
うらの小山に秋風吹けば、木々
のしづくもきのことなつて、 ばん
のごはんのおかずにもまじる。
五61ノ「略」赤・黄・みどりやむらさき
と、七つの色をならべて、空の
ゑぎぬへ一筆に、だれがかいたか、
虹の橋。
六54ノ「略」之を聞くと、頼朝のかほの色
はさつとかはりました。
七18ノ「略」色が美しい上に、姿がやさし
いので、つみ草の時には、誰も之を
取つて花たばにする。
七54ノ「略」けれども日の出や日の入に
は、日光が波にうつつて、水の色が
金色になりますし、「略」。
七86ノ「略」海藻ノ形ハ様々デ、「略」。色
モ一様デハナイ。
八31ノ「略」さうして煙出から出る煙の色
で焼加減を見て、かまの外へ引出し、
「略」。
八101ノ「略」かうして二三日たちますと、

- 〈略〉、顔の色も青くなつて来て、からだに全く力がなくなりました。
- 九1510 中デモ面白イノハ、或動物ノ體色ガマハリノ物ノ色ニ似テキルコトデアル。
- 九162 保護色ヲモツテキルト、マハリノ色ニマギレテ、容易ニ他ノ動物ニ見ツケラレナイ。
- 九172 〈略〉、季節ニヨツテマハリノ物ノ色ガカハレバ、ソレニツレテ同ジヤウナ色ニカハルモノモアル。
- 九173 〈略〉、季節ニヨツテマハリノ物ノ色ガカハレバ、ソレニツレテ同ジヤウナ色ニカハルモノモアル。
- 九175 北國ニ住ム野ウサギヤ高山ノ上ニ居ル雷鳥ハ、夏ハ褐色^{カシヨウ}デ、枯葉ヤ土ノ色ニ似テキルガ、〈略〉。
- 九177 又〈略〉、何時デモマハリノ物ノ色ガカハレバ、間モナクソレト似タ色ニカハルモノモアル。
- 九178 〈略〉、何時デモマハリノ物ノ色ガカハレバ、間モナクソレト似タ色ニカハルモノモアル。
- 九1710 例ヘバ雨蛙ハ緑色ノ葉ノ上ニ居ル時ハ緑色デアルガ、枯木ニ移レバ枯木ニ似タ色ニナル。
- 九185 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、其ノ色ガ桑ノ木ニ似テキルバカリデナク、〈略〉。
- 九197 シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出来テキルノハ、印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。

- 九209 此ノ類ノ色ヲ警戒色トイフ。
- 九213 動物ノ形ヤ色デモ、注意シテ調べテミルト、コノヤウニイロくフシギナ事ガアル。
- 九3210 かんくとしずゑをてらしてゐる十時過ぎの日かげが、若葉の色を下に投げるのか、手もうす緑、足もうす緑、帶も着物も皆うす緑。
- 九342 みねからすそにかけての若々しいこずゑの色は、強い日光を浴びて、一面に煙つてゐる。
- 十4410 窓「あゝ、きれいだ。あの色をどうかして出したいものだ。」
- 十456 日頃から自然の色にあこがれてゐた彼は、〈略〉、もう立つても居ても居られなくなつたのである。
- 十457 日頃から自然の色にあこがれてゐた彼は、目のさめるやうな柿の色^シの美しさに打たれて、〈略〉。
- 十461 かししく工夫をこらしても、目ざす柿の色^シの美しさは出て来ない。
- 十474 彼の頭の中にあるものは、唯夕日を浴びた柿の色であつた。
- 十482 喜三右衛門は、血走つた目を見張つて、しばらく火の色を見つめてゐたが、〈略〉。
- 十495 かうして柿の色を出す事に成功した喜三右衛門は、程なく名を柿右衛門と改めた。
- 十10010 とりくゝの花の色、むせ返るやうな強い香、〈略〉、まるで春の國

- に居るやうだ。
- 十10410 にほひのよいのや、色の美しいのや、形のかはいらしいのや、どれを見てどれを見て、一枝髪にさしてみたい。
- 十一93 租界には皮膚の色の違い、言語・風俗の違つた幾多の人種が入交つてゐるので、〈略〉。
- 十一412 〈略〉、いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。
- 十一576 ものすごい程青白くかはつた老砲手の顔には、決心の色が浮んだ。
- 十一847 だんく沖の方へ進んで行くと、水の色はものすごい程濃い紺色だ。
- 十二208 黒い程こい緑の葉の間から、其の一つくが日の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。
- 十二391 薄暗いあふそくの火のもとで、色の青い元氣のなささうな若い男が靴を縫つてゐる。
- 十二643 窓 イタリヤの國旗は、〈略〉。
- 〈略〉、其の家の紋章の色なる白と赤とに、統一の成功を祈る希望の色として緑を加へ、〈略〉。
- 十二644 窓 〈略〉、統一の成功を祈る希望の色として緑を加へ、更に王家の紋章を配したるものなり。
- 十二801 漁夫の顔は得意の色に輝いて、〈略〉。

- 十二952 それから釋迦はブツダガヤの緑色濃き木陰に靜坐しておもむろに思をこらした。
- 十二995 窓 〈略〉 奈良の都も、色移り香失せて年既に久しく、今は〈略〉。
- 十二117 窓 〈略〉 光の色が太陽に似て、しかも比較的熱をとまふことの少い電燈さへも發明されました。
- 十二1381 日本人ほどあつさりした色や味はひを好むものはあるまい。
- いろいろ「色色」(形状) 42 イロイロイロく いろいろ いろく
- 二25 イロイロナハタガカゼニヒラヒラシデキマス。
- 二632 私ノ目ハ〈略〉。〈略〉、センセイノ見セテクダサルイロイロナモノモ見ルノデス。
- 三428 〈略〉、毎日 いろいろなごちそうをしたり、さまざまなあそびをして見せたりしました。
- 四22 鳥ゐのあたりは、道のりやうがはに、いろいろな店がならんでゐます。
- 四378 フクロフノ鳴キゴエハ所ニヨツテイロイロニイヒマス。
- 四415 にはへいたやむしろをして、そこへ火ばちや机や本箱やいろいろな物がはこび出されました。
- 四423 だい所でいろいろな物をのけると、子ねずみが一ぴき

とび出しました。

四46ノ〈略〉 ふきさうぢがすんで、すつかり いろいろな物をもとの所へなほしたら、夕方近くなりました。

五24ノ 小ぞうさんたちは、土ざうからいろいろな反物や帯地をかついで来て、お客の前につみ上げます。

五71ノ 土を掘る、石を運ぶ、種をうめる、土手をつく、いろいろの工事に、村の人は普請方のさしづをうけてはたらいだ。

五97ノ ブダウニハ、マダイロノ種類ガアルトイヒマス。

五101ノ 〈略〉、此の外に中央郵便局の分室もあれば、兩替店や、いろいろの賣店もあります。

六10ノ 金ヤ銀ハ 〈略〉、其ノ外イロノナカザリ物ニナリマスカ、〈略〉。

六79ノ いろいろな曲すべりをやる者もあり、ころんではかりある者もある。

七79ノ 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤ其ノ外イロノ動物ガスデ居リ、又サマザマノ植物モ生エテ居ル。

八29ノ 或日炭を焼く男が太郎のうちへ来て、ゐろりのはたでいろいろの話をした。

八65ノ 団 サンフランシスコには、日本人がたくさんゐて、いろいろな商賣をしてゐます。

八67ノ 州 〈略〉、此の州は合衆國の中でも、氣候がよくて、其の上土地味が肥えてゐますから、いろいろな農産物に富んでゐます。

八80ノ 軍隊や、裁判所や、外國のつきあひや、其の他いろいろの費用になるのです。

八92ノ 先生はいろいろな事を信吉に話して聞かされた。

九26ノ わたしも 〈略〉、いろいろの差支があつて、實行が出来ずにしまた。

九53ノ 社長さんが銀行の頭取になつてからちやうど十年目の秋、いろいろの手違から、銀行が破産しなればならぬ事になつた。

九66ノ 火縄一本の煙草ぼんのまはりには、人の山が出来て、いろいろの話が出る。

九78ノ 當番が農具小屋から、鍬・シヤベルなどいろいろの道具を出して来た。

九92ノ 僕今夜はいろいろの事をおぼえて、ほんたうにうれしかった。

九96ノ いろいろの珍しい高山植物が紅・黄・紫と咲亂れて、何ともいはれない美しさだ。

九126ノ 世間ニハ、イロノ事情ノ爲ニ、〈略〉スル人モアルガ、ソナナ事ヲスルノハ、選舉ノ趣意ニソムイテナル。

十31ノ 其の外にもいろいろの理由が

あるので、〈略〉ことは到底出来ぬ事であつた。

十54ノ 此の愛らしい小鳥が、〈略〉、いろいろの困難をわして、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、誰でも驚かない者はあるまい。

十58ノ 飛行機の不時着陸地點を知らせたり、〈略〉、いろいろに利用する事が出来る。

十124ノ かういふ點から、いろいろの美質をもつてゐることをよく見定めて、あの青年をやとふことにしたので。

十一36ノ 地圖の中の薄緑に染めてあるのが 〈略〉、それから次々といろいろの印がついてゐる。

十一41ノ ぼんやりいろいろの事を考へてゐるうちに、〈略〉、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。

十一69ノ 小僧一人だけ自由に室内に入らせて、いろいろの用を足させた。

十一77ノ 我我はこれらの貨幣や紙幣を用ひて物品を賣買し、其の他いろいろの用を辨じてゐる。

十一79ノ しかしこれらの物は、〈略〉、其の他いろいろの缺點がある。

十一124ノ 隣の室では、〈略〉、ガラス器にいろいろの模様をつけてゐる。

十二10ノ 又いろいろの鳥を注意して見ると、それ違つた面白い習性をもつてゐるので、〈略〉。

十二52ノ ねぢは驚いてあたりを見廻したが、いろいろの物音、いろいろの物の形がごとくと耳にはいり目にはいるばかりで、〈略〉。

十二52ノ 〈略〉、いろいろの物音、いろいろの物の形がごとくと耳にはいり目にはいるばかりで、〈略〉。

十二53ノ 周囲の壁やガラス戸棚には、いろいろな時計がたくさん並んでゐる。

十二54ノ あんまりいろいろの道具、〈略〉、どれを見ても自分よりは大きく、自分よりはえらさうである。

いろいろ 「色色」 27 イロノいろいろ いろいろ おせわになりました。

三44ノ いろいろ おせわになりました。

五69ノ 〈略〉、此の村の庄屋が、村のことをいろいろと考へたすゑ、〈略〉と思つた。

五73ノ 庄屋は村の者にいろいろ言つて聞かせて、土手をつきなほしたが、〈略〉。

五93ノ 〈略〉、封書には、いろいろこみ入つた事が書いてあります。

六95ノ 金ニハイロノアリマスカ、中デ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デアラウト思ヒマス。

七40ノ 後便に又いろいろ申し上げませう。

七85ノ 海藻ニハイロノアル。

八36ノ 時の町奉行は 〈略〉、いろいろ

る調べますが、どちらも實母だといひはります。

八425 しばらくして、其の中のおも立つた者が出て、いろ／＼おわびを致しますと、《略》。

九158 多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、イロ／＼珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。

九214 動物ノ形ヤ色デモ、注意シテ調べテミルト、コノヤウニイロ／＼フシギナ事ガアル。

九85ノ図 信吉は夏休にて歸り居たる兄に向ひて、いろ／＼と星の説明を求めたり。

九1032 戦地ではいろ／＼つらい事もあつたが、戦場をかけ廻るのは、北風にとつて愉快な事であつた。

九1169ノ図 村の方々は、朝に夕にいろ／＼とやさしく御世話下され、《略》。と、親切におほせ下され候。

十164ノ図 久々で皆様という／＼お話をして、非常に愉快でした。

十667ノ図 私はもと鉢の木がすきで、いろ／＼集めた事もありましたが、《略》。

十789ノ図 お知らせしたい事はまだいろ／＼ありますが、大分長くなりましてから、今日は此のくらゐにして置きます。

十1019 先に立つたにいさんが、《略》。と、いろ／＼説明して下さい。

十1099ノ図 當地に御住まひの頃度度參上致し、大兄と共にいろ／＼御話を承り候事など、今更のやうに思ひ出され候。

十一7310 眞淵はもう七十歳に近く、いろ／＼つばな著書もあつて、天下に聞えた老大家。

十一907ノ図 暦を見れば、まだいろ／＼大切な事がわかる。

十二12310 何が出来るであらうかと思つてゐると、いろ／＼扱つてゐるうちに臺付のコツプになつた。

十二766 まぐろを取る方法はいろ／＼あるが、だいたい網で取るほど勇壯なものはあるまい。

十二1058 さていろ／＼と思索したあげく、《略》着手したのであつた。

十二120ノ図 本日突然上田君に出會ひ、久しぶりにて郷里の様子をいろ／＼承り申候處、先生には何時も御壯健の由、何よりのことに御座候。

十二1359 其の原因はいろ／＼あらうが、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、其の主たるものであらう。

十二1389 我が國民の長所・短所を數へたならば、まだ外にもいろ／＼あるらう。

いろづきかく「色付掛」(下二) 1色づきかく《一ヶ》

十43ノ図 御殿は質素なる平屋にて、御庭の此所彼所に、下葉の色づきか

けたるはぎ茂れり。
いろづ／＼「色付」(五) 2 色づく

《一ヶ》
八13 此の間三度降つた雨に、山の木の葉は目立つて色づいた。

十二206 どれを見ても、枝といふ枝にはもう黄金色に色づいた實が鈴なりになつてゐる。

いろどり「彩」(名) 3 色どり 色どり
五624ノ圖 あのあざやかな色どりもしだい／＼にうすくなり、小山の方はもう見えぬ。

九19ノ図 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シイ色ドリガアルガ、裏ハ《略》。

九212 例ヘバ《略》、惡味ヤ惡臭ノアル蝶ノ羽ニハ美シイ色ドリガアルヤウナモノデアル。

いろはにほへと《略》(いろは) 1 いろはにほへと《略》

四515 いろはにほへと《略》(第五卷付録參照)

いろめ「色目」(名) 1 色目
十二1052 身には色目も見えぬ破れ衣をまとひ、《略》、きつと結んだ口もとには意志の強さが現れてゐる。

いろり「罍裏」(名) 5 いろり
六502ノ圖 あろりのはたに縄なふ父はすぎしくさの手がらを語る。

八297 或日炭を焼く男が太郎のうちへ來て、あろりのはたでいろ／＼の

話をした。
十656ノ図 三人はあろりを圍みて坐せり。

十656ノ図 あろりの火は次第におとろへ行きて、ひまもる夜風はだへをさすが如し。

十673ノ図 主人は三本の鉢の木を切りてあろりにたきぬ。

いろりび「罍裏火」(名) 2 いろり火
六498ノ圖 あろり火はとろ／＼、外は吹雪。

六506ノ圖 あろり火はとろ／＼、外は吹雪。

いわ「色」(名) 15 岩
六197 うちよせて來る波は、岩をかみ、小じやりととばしては、さあつと引いて行きます。

七802 魚類ニハ《略》、タヒ・アナゴ・ハモナドノヤウニ、若ノカゲヤ海藻ノ間ヲ泳グモノガアリ、《略》。

七815 アサリヤ蛤ハ砂ヤ泥ノ中ニ居リ、カキヤアハビハ若ニツイテキル。

七816 アハビハ若ヲハナレテ動クコトガアルケレドモ、カキハ一度ツイタラ決シテハナレナイ。

七833 又物ヲ洗ツタリワイタリスル時ニ使フ海綿モ、ヤハリ海ノ底ノ岩ニ取リツイテキル蟲ノ骨デアル。

七877 タマハナレナイヤウニ、岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲナスモノデ、《略》。

十25ノ 一 一そうの船が、俄の嵐におそはれて、此の島に近い岩に乗上げた。
 十25ノ 岩の上に残つた船體には、十人許の船員がすがり附いて、聲を限りに救を求めたが、何のかひもなかつた。
 十27ノ 岩の附近は波がいよく荒れくるふ。
 十27ノ 打ちよせる大波、打返すさか波、危く岩に打付けられ、忽ち死の口に吞まれようとする。
 十84ノ 或日、〈略〉、たき火をしてゐると、そばの黒い岩に火がつき、煙をあげて燃出しました。
 十85ノ 驚いて調べてみると、あたりは同じ眞黒な岩ばかりでした。
 十11ノ 圖 二 荒の山もと 木深き處、大谷の奔流、岩打つほとり、〈略〉。
 十24ノ 急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、〈略〉。
 十104ノ 豊前の中津から南へ三里、激流岩をかむ山國川を右に見て、川沿の道をたどつて行くと、〈略〉。
 いわい 〔祝〕 (名) 3 祝 ↓ おいおい・おいおい
 五42ノ お着きになりますと、間もなくたけるが新しい家を造つて、人々をあつめて、其の祝をしました。
 八106ノ 父が今年八十八になりましたので、〈略〉、ほんの心ばかりの祝

を致したいと存じます。
 八110ノ 又まことに申しかねますが、當日祝の歌を一首いたゞきたうございます。
 いわ・う 〔祝〕 (五) 1 イハフ
 四96 キノフハ日本國中ノ人ガミンナ天皇ヘイカノバンザイライハツタノデス。
 いわお 〔巖〕 (名) 1 いはは
 八81ノ 器にはしがひながら、いはほをも とほすは水の力なりけり。
 いわく 〔巨〕 (名) 15 いはく
 十97ノ 其の友之を止めていはく、〈略〉。
 十97ノ 天祥きかずしていはく、〈略〉。
 十98ノ 敵將張弘範如何にもして之を降らしめんとし、文天祥に命じていはく、〈略〉。
 十98ノ 天祥固くこぼみていはく、〈略〉。
 十98ノ 張弘範、文天祥に説きていはく、〈略〉。
 十99ノ 或人又なじりていはく、〈略〉。
 十99ノ 天祥いはく、〈略〉。
 十99ノ 天祥いはく、〈略〉。
 十100ノ 天祥刑せらるゝにのぞみ、從容としていはく、「臣が事終る。」と。

十100ノ 元帝歎じていはく、「文天祥は眞の男子なり。」と。
 十一67ノ 孔子は正義の念強き人なりき。其の言にいはく、〈略〉。
 十一79ノ かつて自らいはく、〈略〉。
 十一130ノ 福田行誠かつて鐵眼の事業を感歎していはく、〈略〉。
 十二63ノ 時に天照大神の使者建御雷命此の地に來りていふやう、「大神の勅にいはく、〈略〉。」と。
 十二66ノ 大國主命答へていはく、〈略〉。
 いわざる 〔言張〕 (名) 1 いはざる
 五37ノ 一匹は目に、一匹は口に、一匹は耳に手をあててゐます。見ざる・いはざる・聞かざるといふのださうです。
 いわし 〔鱗〕 (名) 2 イワシ
 七79ノ 魚類ニハイワシ・アヂ・カツヲナドノヤウニ、水ノ表面ニ近イ所ヲ泳グモノガアリ、〈略〉。
 七79ノ イワシ
 いわてさん 〔岩手山〕 (地名) 1 岩手山
 九73ノ あれは岩手山だ。南部富士といはれるだけあつて、ちよつと形が似てゐるね。
 いわば 〔言〕 (副) 1 いはば
 十二44ノ 一轉すると、今度は如何にもものすごい、いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生にをど

るやう、〈略〉。
 いわや 〔岩屋〕 (名) 1 イハヤ
 二72ノ ソノ上イハヤニコモツテキマシタカラ、ナカナカタイヂスルコトガデキマセンデシタ。
 いわやま 〔岩山〕 (名) 3 岩山
 十二104ノ 路をさへぎつて立つ岩山に、〈略〉穴を掘つてゐる僧があつた。
 十二105ノ 一身をさへぎつて此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、〈略〉。
 十二107ノ 出来る氣づかひはないと見くびつてゐた岩山の掘抜きも、これではどうにか出來さうである。
 いわゆる 〔所謂〕 (連体) 1 いはゆる
 十一62ノ 十勝川の流域一帯の廣野はいはゆる十勝平原で、其の中心をなすものは帶廣の町である。
 いわれ 〔謂〕 (名) 3 いはれ
 五19ノ 其のいはれで、〈略〉勲章に、金の鶏をおつけになつたのだ。
 七73ノ たとひ親子の者がうゑ死をするやうなことがあつても、人からいはれなく金をもらはうとは思ひません。
 八116ノ 此の父母の下に、此の家に育つた乃木大將が、終生忠誠質素でおし通して、武人の手本と仰がれるやうになつたのは、まことにいはれのあることである。
 いん 〔印〕 (名) ↓ ひびけいんおうなつ

- いん「員」(名) いさんじかいいん・じ
むいん・しゅうぎいんぎいん・じょう
りくいん・つうしんいん・でんれい
いん・とくはいん・のりくみいん
いん「院」(名) 1 院 いちいん・
こうそいん・だいしんいん
十二89 2 かうして其の院で可決す
ば、其の案を他院に移す。
いん「陰」(名) 1 陰
十二107 1 さうして陰に陽に仕事のじ
やまをする者も少くなかつた。
いんが「因果」(名) 1 いんぐわ
八76 陰 私は三年ぶりに此の子にあ
ふのでございますが、何のいんぐわ
で、ひさしぶりに歸つた私に、一口
も口をきくことが出来ないのござ
いませう。
いんきよ(名) いんきよさま
イングランド「地名」 1 イングラン
ド
十二61 10 陰 イギリスの國旗は、
「略」、先づイングランドとスコット
ランドと合するや、白地に赤十字の
徽章ある前者の國旗と、藍地に斜白
十字の徽章ある後者の國旗とを合し
て一旗となし、「略」。
イングランドスコットランドアイルラン
ドさんこく
十二61 8 陰 元來イギリスは、イン
グランド・スコットランド・アイル
ランド三國の合同して成れる國家に
して、「略」。
いんさつ「印刷」(名) 4 印刷
十二129 9 陰「略」、此の度は製版・印
刷の業着々として進みたり。
十二146 6 陰 されば珍しき事件の起り
し時、之を記述して印刷に附し、廣
く發賣することは古より行はれたり
しが、「略」。
十二158 8 陰「略」、相當に名ある新聞
は、通信に、印刷に、あらゆる文明
の利器を用ふるを以て、「略」。
十二185 5 陰「略」、機械は電力により
て働き、印刷も切斷も人手を要せず、
一臺よく一分間に四百五十枚を印刷
すといふ。
いんさつき「印刷機」(名) 1 印刷機
十二177 7 陰 校正終れば紙型に取り、
更に之をもととして鉛版を造り、印
刷機にかく。
いんさつじゅつ「印刷術」(名) 2 印
刷術
十二147 7 陰「略」、印刷術の幼稚なる
時代にありては、唯をりく興味ある
特殊の事件を報道するに過ぎざり
き。
十二149 9 陰 されど人智の進歩と印刷
術の發達とは、何時までもかく單純
にして遊戲的なものに満足すべく
もあらず、「略」。
いんさつす「印刷」(サ変) 3 印刷
す「シースーセ」
十二16 1 陰 然らばかくの如き新聞は
如何にして編輯せられ、印刷せられ、
讀者に配布せらるゝか。
十二187 7 陰 殊に驚くべきは輪轉機の
能力なり。「略」、一臺よく一分間に
四百五十枚を印刷すといふ。
十二19 1 陰 但し大新聞にありては、
比較的早く印刷したるものをば地方
版として遠隔の地方へ送り、「略」。
いんさつぶ「印刷部」(名) 2 印刷部
十二174 4 陰 さて編輯部にては刻々集
り來る原稿を選擇整理し、繪畫・寫
眞等と共に之を印刷部に送る。
十二174 4 陰 印刷部にては直に所要の
活字を拾ひて之を組み、校正刷を刷
りて校正部に廻す。
インディアナ「地名」 1 イン
ディアナ州
十一94 10 陰 リンカーンが七歳の時、一
家はインディアナ州に移つたが、
「略」。
インド「地名」 7 印度 印度 きた
インド・らんりょううひがしインド
六76 6 陰 印度のヒマラヤ山は世界一
で、「略」。
六89 4 陰 印度の國はいたつてあつう
ございしますので、「略」。
七85 5 陰 しかして、綿は印度より、
砂糖はオーストラリヤより來る物多
し。
九19 8 陰 シカシサラニコレヨリモ色ヤ
形ガウマク出來テキルノハ、印度ニ
産スルカマキノ一種デアラウ。
十88 1 陰 綿花は主に印度やアメリカ合
衆國から輸入し、「略」。
十88 4 陰 これらの製品は我々の使ひ料
にもなるが、又支那・印度其の他の
東洋諸國へ輸出される。
十二136 6 陰 支那・印度の文明を入れ、
更に西洋の文明を入れて長足の進歩
を成し遂げた日本國民は、「略」。
インドしなはんとあたり(名) 1
印度支那半島あたり
十86 7 陰 米は我が國でずるぶん多くと
れるが、「略」。それで、印度支那半
島あたりから年々輸入してゐる。
インドよう「地名」 2 印度洋
七16 6 陰 海を分けて太平洋・大西
洋・印度洋とし、陸を分けて、「略」。
七3 3 陰 印度洋
いんのしょう「院庄」(地名) 1 院
庄
十131 10 陰「主上はや院庄に入らせ
給ふ」。
いんりょうすい「飲料水」(名) 3 飲
料水
九78 8 陰 水の乏しい此の島々では、
其の雨水がまた大切な飲料水となる
のです。
九43 10 陰 飲料水ニ不自由ナキ土地ニ
アリテハ、金錢ヲツヒヤシテ、水ヲ
買フナドトイフハ、思ヒモヨラヌ事
ナリ。
九44 2 陰 然レドモ飲料水ノ得ガタキ
所ニテハ、一手桶何程トイフ代價ヲ
ハラヒテ水ヲ買フ。

う

う 2 う

八937 第二十二 啞の学校 〈略〉。

此所では女の先生が、生徒に五十音の發音を教へてゐられた。「い」を「う」と間違へたり、「う」を「え」と間違へたりするのを、先生は根氣よく、何度もくく教へてゐられた。

八938 第二十二 啞の学校 〈略〉。

此所では女の先生が、生徒に五十音の發音を教へてゐられた。「い」を「う」と間違へたり、「う」を「え」と間違へたりするのを、先生は根氣よく、何度もくく教へてゐられた。

う 「得」(下) 24 得 《ウ・エ》

七78 横濱は〈略〉、いかなる大船もきしに横づけにすることを得。

七33 くに武士と獅子とはわかれざるを得ることとなりぬ。

八198 汽船ハ河口ヨリオヨソ四百五十里、小舟ハオヨソ九百里サカノボルコトヲ得。

八972 天守閣ニハ棟ノ兩端ニ金ノシヤチホコアリ。〈略〉、遠ク數里ノ外ヨリ望ミ見ルコトヲ得ベシ。

九424 圖 一人の我が子それ

くく、死所を得たるを喜べり。これぞ武門の面目。』と、大將答力あり。

九444 同ジ物ニテモ、意ノ如クニ

得ラルレバ價ナク、得ガタケレバ價アルナリ。

九448 例ヘバコ、ニ一ツノ石アリ

トセヨ。ソレガ〈略〉、タヤスク得ラレザル物ナリトモ、用ヒヤウナケレバ、誰モ之ヲ買フ者ナク、シタガツテ價アルコトナシ。

九452 カクノ如ク物ニ價アルハ、

其ノ物ガ人ノ爲ニ有用ナルト、意ノ如クニ得ラレザルトニヨルナリ。

十107 男ばかりの御兄弟の中に、

此の度始めて妹を得られ候事、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十136 勾踐は呉に捕へられぬ。

後からうじて歸國することを得しが、〈略〉。

十138 勾踐此のうらみ忘れ

がたく、范蠡といふ忠臣の助を得て報復の計を立て、再び呉と戦ひて遂に之を亡しぬ。

十一58 しかも遂に志を達することを得ざりしかば、

老後は専ら力を教育と著述とに用ひたり。

十一65 論語は、曾參と有若との

門人等が孔子及び其の高弟の言行を集録したるものにして、最もよく此の大聖の面目をうかゞふを得べし。

十一74 朝に道を聞くことを

得ば、夕に死すとも可なり。』十一28 二十日の月は上りぬ。退却軍は少しく之にたよりを得たれども、秀吉の軍は、追撃すること頗る急なり。

十一30 清正刀を抜かんとするに、

身のはたき自由ならず。正國得たりと、力足をふん張りてはねかへさんとせしが、〈略〉。

十一48 先に畫がきたる櫓、

何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、東國へ下る路すがら、箱根山中にてよき枝ぶりの櫓を見て、其の意を得たれば、かき添へんために歸りしなり。』

十一126 廣く各地をめぐり

て資金をつること數年、やうやくにして之をととのふる事を得たり。

十一127 すなはち喜捨せる人々に

其の志を告げて同意を得、資金を悉く救助の用に當てたりき。

十二6 此の時事代主命はすなだ

りのため美保崎といふ處にありしが、使を得て急ぎ歸り、父君に申すやう、〈略〉。

十二82 樺太が離れ島にして大陸

の地續にあらざることは、此の探検によりて略々知ることを得たれども、〈略〉。

十二113 初め彼は紙に炭素を塗り

て試みしが、思はしき結果を得ず。

十二114 彼は直に竹を以て炭素線

を作りて實驗せしに、豫想以上の好結果を得たり。

十二114 エヂソンの發明せるは

極めて多く、アメリカにて特許を得たるものみにても其の數實に千餘に及ぶ。

う (助動) 278 う 《ウ》

一462 オバアサンガモモヲキラ

ウトシマス、モモガニツニワレテ、〈略〉。

二137 木ノエダニ、コトリガ

十バトマツテキマシタ。人ガテツパウデ、一ドニニバウチオトシマシタ。木ニマダナンバトマツテキマセウカ。

二197 コチラノクライモリノ

中ニミエルノハ、ドコノウチノアカリデセウ。

二206 ユフベカゼガフイタカ

ラ、キツトクリガオチデキマス。サガシテミマセウ。

二217 ソレデハムカフニ木

ガアリマスカラ、アノ木ノ下ヘイツテミマセウ。

二292 大キナスズヲネ

コノクビニツケテオイデ、ソノオトガキコエタラ、ニゲルコトニシテハドウデセウ。

二332 「オ年ダマニハナニヲ

アゲマセウ。」

二352 アル日トモダチニユミ

ノジマンヲシテ、「オソナヘノモチヲマトニシテ、イテミマセウカ。」トイヒマシタ。

二48 〇オヂイサンハ「略」、花サカヂヂイ、花サカヂヂイ、カレ木ニ花ヲサカセマセウ。」トヨンデアルキマシタ。

二61 〇「ソレナラ、ソソナニスコシツツノマナイデ、モツトタクサンオアガリニナツタラ、ハヤクナホリマセウ。」「イイエ。サウ一ドニノンデハイケマセン。略。」

二71 〇アレアレアンナニヒカウキガ。略。ダンダンチカヨルオ日サマニ。アンナニトンダラユクワイダラウ。

三51 ハヤクカホヲアラツテ、ニイサント一シヨニオサラヒヲシマセウ。

三91 ヒヨコハ「略」。タベモノデモサガスノデセウ、キイロイクチバシデ、トキドキデメンヲツツキマス。

三16 〇それではあしのゆびのなをしつてゐますか。「おなじことではせう。「まあ、いつてごらん。」

三18 〇この人はどんないろのきものをきてゐますか。「あかいきものをきてゐます。「それではをんなでせう。「いい

え。」

三19 〇「どんなかほをしてゐますか。「かほちゆうひげだらけです。「それではてもあしもないでせう。「はい。」

三27 〇あれはいまにさを竹にでもなるのでせう。

三30 〇「さ、いきませう。」ときやうだいはがくかうさしていそぎゆく。

三37 〇小二郎「又わかれ道のところへきました。まはりつこをしてみませうか。」正「してみませう。」

三38 〇小二郎「又わかれ道のところへきました。まはりつこをしてみませうか。」正「してみませう。」

三41 〇「うらしまさん、このあひだはありがたうございました。そのおれいにりゆうぐうへつれていつて上げませう。」

三44 〇「うらしまは略、おとひめに略。あまり長くなりますから、もうおいとまにいたしませう。」といひました。

三50 〇今ソノミセノマヘニニ車ガトマリマシタ。車ヲヒイテキタ人ガベンタウデモタベルノデセウ。

三51 〇ドコカヲカノ下デ、ニハトリガナキマス。モウオヒルニナツタノデセウ。

三52 〇「おい、長いさををふり

まはして、何をしてゐるのだ。「星を二つ三つはたきおとさうとしてゐるのだ。」

三55 〇あるとき、略、たうふうが略、池のはたを通りますと、しだれやなぎのえだへ、かへるがとびつかうとしてゐます。

三56 〇かへるはやなぎのつゆを虫とでもおもつたのでせう、略、何べんも何べんもとびつかうとします。

三58 〇かへるは略、とんではおち、とんではおち、何べんも何べんもとびつかうとします。

三60 〇今ニハノ木ニセミガウルサイホドナイテキマス。アノセミモコノ中ニキルノデセウ。

三61 〇「二郎さん、又今日も舟をながしてあそびませう。」

三62 〇「又はしりくらをさせませう。」

三65 〇「みよ子、私はかちまけを見る人になりませう。」

三66 〇五郎さんの舟には、てふてふのせんだうさんがのつたから、かつたのでせう。

三69 〇ソノウチニ、ニイサングコシラヘテヤラウ。

三76 〇又鳥ノ方へ行キマス

ト、「オ前ハケダモノダラウ。」

トイツテ、アヒデニシマセン。

三79 〇おばあさんが「ふみ子もこんやはきつとあらでこの月を見てゐませう。」と、略、おつしやいました。

三82 〇むかし一人のれふしが「今日はまあ、何といふよいお天きだらう。」といひながら、みほの松原を通りました。

三84 〇「略」。ひろつて家のたからにしよう。」といつて、持つてかへらうとしますと、見たこ

ともない美しい女が來ました。三87 〇「おれいにまひをまひませう。」

三88 〇「いやいや、おかへし申したら、まはずに空へお上りになりませう。「いや、天人はうそをいひません。」

四13 〇「ワニザメハソレハオモビカラウ。」トイツテ、スグニナカマヲ大ゼイツレテ來マシタ。

四15 〇白ウサギハ「略」、イマ一足デヲカヘ上ラウトイフトコロデ、略。トイツテワラヒマシタ。

四29 〇さうなつたら町はどんなにべんりになるでせう。

四32 〇「父」ごむまりをかべになげつけると、はねかへるでせう。「正「はい。」

四六二 一人のくわんちよが其の下に立つて、まねいて居ます。さをの先の扇をいよといふのでせう。

四六六 〈略〉あるばんねずみに足のゆびをくひきられました。どんなにか鳴いたのでせうが、うちのものは朝までしらずに居ました。

四六八 きずを見てやらうと思つて、私がかごの戸を明けますと、山がらは〈略〉うらの山へとんで行つてしまひました。

四六九 〈略〉今でも山がらのこゑをきくと、まだあれが生きて居るだらうか、足のきずはどうしたらうかと思はないことはありません。

四六九 〈略〉今でも山がらのこゑをきくと、〈略〉足のきずはどうしたらうかと思はないことはありません。

四七六 私ドモハ何ト何デセウ。
四七八 今の村長さんも子どもの時からすなほで、なさけぶかい人でした。あのうちは此の上よくなるばかりでせう。

四八四 〈略〉河を見たら、たいそう水が出て居ました。「此のよいお天氣に、どうしたのでせう。」とたづねましたら、〈略〉。
四八七 〈略〉、「河上の方で雪

がとけはじめたのだらう。」といふことでした。

四八六 ダイリ様ノ下ノダンニ、弓ヤ矢ヲ持ツテ居ル人ハ何デセウ。

四八六 オキク「略、弓ヤ矢ヲ持ツテ居ル人ハ何デセウ。」
オ花「クワンデヨノリヤウワキニカザツテアルノデセウ。〈略〉。」

四八六 オキク「五人バヤシノ一番右ニ居ル人ハ何ヲスルノデセウ。」

四九四 母は泣きながら二人の子どもに、「何といふくやしい事だらう。〈略〉。」といひました。

四九八 曾我兄弟は〈略〉、早く強くなつて、かたきを取らうと心がけました。

四九六 すけつねも〈略〉、まくらもとの刀を取つておき上らうとしました。

五〇八 何でも汽車に二日二ばん乗通して、こちらへ着いたのださうですから、何百里かはなれてゐるのでせう。

五一〇 「よし。其の大蛇をたいちしてやらう。強い酒をたくさんつくれ。」とおいひつけになりました。

五一三 「をぢさん、勲章がふえましたね。一番こつちは金鶏勲章でせう。」

五二八 「これは鶏だよ。〈略〉、鶏のついてゐるわけは知つてゐるだらう。」「いゝえ。」

五三八 なみくの者なら、「あつ」とさけんで死にませうが、たけるも熊襲のかしらだけあつて、「〈略〉。」といひました。

五四六 カウ毎日降雨ハドウナツテシマフノデセウ。

五五八 〈略〉。あのたんぼの中に、ちよつとした森があるだらう。あれは神明様の森だが、〈略〉。」

五六八 「神明様のこちらにある白壁造の家は工場ですか。」「あの青田の中にあるのだらう。あれは製絲工場で、女王が四百人も絲を取つてゐる。〈略〉。」

五七三 「私どもの村では、どうして池を掘らないのでせう。」

五七六 「用水池には大きな鯉が居ませうね。」

五八四 「そんな大きな池がいるだらうか。」と言つて、首をひねる者もあつたといふが、〈略〉。

五八八 親のほねをりが子の時になつてあらはれたのであらう、あの家にはよい事がつゞいて、身代は前よりもよくなつた。

五九四 フサノト下ツタウスムラサキノ實ハ、美シイ玉ノヤウニ見エマス。モウアマクナツテキマセウ。

五九六 熊が来て、からだ中かぎまは

しましたが、ほんたうの死人だと思つたのでせう、其のまま行つてしまひました。

五九九 此の時、木に上つてゐる者が下りて来て、「どんなにこはかつたらう。僕は木の上から見て、びく／＼してゐた。〈略〉。」

六一五 「さうです。新田が大へんよく出来ました。來年もやはりあの稻を作りませう。」

六三六 昨日までに二山出來て、もう三つ目の山が出來かゝつてゐます。今日〈略〉、三つ目の山は出來上りませう。

六四七 「朝晩めつきり寒くなつた。高い山はもう雪だらう。」

六四八 「にいさん、富士山はまつ白でせうね。」「さうさ、中ほどまでは降つてゐるかも知れない。〈略〉。」

六九七 金ニハイロノアリマスガ、中デ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デアラウト思ヒマス。

六九五 ナルホド、銅ハタクサンアツテ、役ニモ立チマセウガ、モツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。

六二六 〈略〉、モツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。

六二六 庭の菊も白い花びらに赤みがさして來た、霜にあたつたからだらう。

六292 〇「何で笑つた。」「だつて分り切つた事でせう。略。私どもだつて、大ぜいしてかゝれば、あなた方に負けません。」
 六301 虎はおこつて、蟻をふみつぶさうとしました。
 六315 一番汽車二乗ラウトイフノデ、父ト五時半頃ニ家ヲ出タ。
 六324 〇橋ノタモトニ人力車ガ一ダイアツテ、車夫ガ「ダンナ、マキリマセウ。」ト言ツタ。
 六342 ベンタウヲサゲテ來ル女工ハ、サツキカラ汽デキノ鳴ツテキル工場ヘ急グノデアラウ。
 六386 義經に此の名を惜しむ心があつたので、何時の戦にも勝つたのでございませう。
 六402 〇お前はなぜ自分の村の人と見物しなかつたかと思ふだらうが、略、私の村から、今歩兵になつて來てゐるのは私一人だけなのだ。
 六421 〇其の代り輜重兵の外は各種の兵が出てゐる。輜重兵にも其の中にだれか出るだらう。
 六425 〇お前は今の分では大男になりさうだから、砲兵が騎兵になれるだらう。
 六455 叔父サンニ鮭ノ話ヲ聞イタカラ、ワスレナイ中ニ書イテ置カウ。
 六484 〇略、「之ヲ鮭ノ里歸トデモ言ツタヲヨカラウ。」ト叔父サンガ言ハレタ。

六514 こまつてゐる所へ、御殿に仕へてゐる萬じゆがよからうと申し出た者がありました。
 六541 〇翌日頼朝は萬じゆを呼出して、「略。ほうびはのぞみにまかせて取らせるであらう。」と言ひました。
 六602 之を聞いた萬じゆの喜はどんなであつたでございませう。
 六687 〇「全くだ。あんな小言を言ふ程だから、此の義捐が出来たのだらう。」「さうだ、く。」といひ合つた。
 六698 〇略「おくげ様方や、略」お姫様方の姿を、此の川の水はいくたびとなくうつしたことでございませう。
 六705 〇略「武士の刀や、なぎなたの光も、いくたびとなく此の川の水にうつたことでございませう。
 六715 今、三條の大橋に立つて、川下を見ると致しませう。
 六747 〇「マダアリマス。」「麻絲。」「マダアリマセウ。」
 六755 〇「ソレタケデスカ。」「セルモサウデセウカ。」「サウデス。略。」
 六756 〇「セルモサウデセウカ。」「サウデス。マダアリマセウ。」「モウ知リマセン。」
 六761 〇「ネエサンガ今ヌツテキル此ノ帶ハ。」「ソレハメリンスデ、絹デセウ。」「イ、エ、ヤハリ毛絲デオ

ツタ物デス。略。」
 六766 〇「其ノキレイナモヤウハ、ドウシテツケルノデセウカ。」
 六772 〇「略。コレゴラン、表ダケデ、ウラノ方ハ染メテナイデセウ。」
 六775 二三日ひどく寒かつたので、湖の水が大へんあつくなつた。一尺ぐらゐもあらう。
 六842 おそれ多くも龜山^{かめやま}上皇は、御身をもつて國難に代らうと、おいのりになつた。
 六848 此のまごころが神のおぼしめしになつたのであらう、一夜大暴風雨がおこつて、海はわかへつた。
 六957 もう此の上は、しやにむに攻落さうといふので、賊は大きなはしごを作つて、之を城の堀に渡して橋にした。
 七176 道はたや土手にさいてゐるのはこぼれ種であらう。しやうの強いもので、一度種が地に落ちれば、年年其所で花がさく。
 七202 〇略、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條^{ほうじょう}をほろぼさうとしてゐます。
 七358 〇町に略、日露戦争の時の大將方の名を取つてつけてあるのは面白いでせう。
 七406 〇後便に又いろく申し上げませう。
 七415 年は六十四五でもあらうか、

腰に小さなふろしきづつみをむすびつけてゐる。
 七533 〇私は年中航海をしてゐるものですから、少し其のお話を致します。皆さんは海を御存じでせう。
 七534 〇私は年中航海をしてゐるものですから、少し其のお話を致します。略。汽船も軍艦も御存じでせう。
 七608 〇こんなことでは、どうして海國の民といはれませう。
 七611 〇皆さんのうちには、大きくなつてから、商用其の他で、外國へ出かける人もありませう。
 七612 〇皆さんのうちには、大きくなつてから、略。漁業や航海業に従事する人もありませう。
 七635 大ぜいの人々が口々に人夫を呼んでは我先に渡らうとしますし、略。
 七643 〇略「一人の男が、人夫と略」あらそつてゐましたが、相談は出來ないものと見きつたのでせう、着物をぬいで頭にのせ、一人で川へはいつて行きました。
 七693 〇いよくない時には、川の中へとびこんで死んでしまはうと、かくごをして來たのでございます。
 七707 人夫は之を見て、「略。」といつて、歸らうとしました。
 七735 〇たとひ親子の者がうゑ死をするやうなことがあつても、人から

いはれなく金をもらはうとは思ひません。

七779 図 「いつも人より一時前に参つて居ります。」「一時も前に。」
《略》。「寒からうが。」「少しも寒くはございません。」

七912 図 「おい娘、兵士が一人來たらう。」「いゝえ。」

七917 図 《略》、敵は《略》、「これ、おばあさん、お前は知つてゐるだらう。」「すると兵士のおばあさんが、「はい、よいお天氣でございます。」
七984 此の人だけは自分のために心配してくれるであらうと思つたのでございます。

七1028 図 「お庭先の御門を守る者がございませぬ。某の手で固めませう。」と清正がいひますと、秀吉はうなづきました。

七1065 図 明國の使者、《略》、「《略》。生けどつた者は皆かへせ。命ばかりは助けてやらう。」などの廣言。

七1068 図 「小西は日本の大將ならず、まことは堺の町人、道案内の者故にげも致したであらう。《略》。」

七1072 図 此の清正こそはまことの將、四十萬の軍勢は此所へ向けよ。切つてく切りまくり、其の勢で明の都へおしよせ、四百餘州をやきはらはう。」と返書をつかはしました

七1102 図 「おとうさん、電報が來ま

した。」「どこからだらう。」「シンとあります。」

七1106 図 「ハナシデキタイツクルヘン。」「さうか。それでは明日の一番で立たう。」

七1139 図 《略》 縞物三十反、本日無事に着きました。地もがらまことに當地向で、賣行もよからうと思ひます。

八35 第一 山の秋 《略》。うさぎの毛も間もなく白くなるだらう。

八69 図 或年選ばれた子どもの中に、すぐれて上手なものが二人あつた。
《略》。「今年の競馬はさぞ見ものだらう。」といつて、《略》、おびた

八169 《略》、長四郎がそつと屋根づたひに行つて、もう少しで雀の巢へ手が届かうとした時、《略》。

八178 図 「いや、きつと頼まれたであらう。」「いゝえ、頼まれたのではございませぬ。」

八189 図 將軍はあとで、御臺所に、「長四郎があのおで大きくなつたら、竹千代には無二の忠臣であらう。」

八357 幾年かの後、里子を返してもらはうとすると、《略》。

八427 図 《略》、越前守は「しからは許してつかはすであらうが、《略》。」と命じました。

八652 図 ハワイから出した繪葉書は

見ましたらうね。

八668 図 アメリカ人の元氣なことは、これだけ聞いてもわかりませう。

八759 図 「大洋を西へく」と航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がだらうか。」

八768 《略》、「諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立ててごらんない。」といひました。人々は《略》、やつて見ましたが、もとより立たうはずはございません。

八774 図 「諸君、これも人のした後では、何のさうさもない事でございませう。」

八784 図 此の切符に、『一月二十日限り當役場へ納付』とありませう。

今日までに納めないと、役場にいけない手数をかけることになります。

八792 図 「さうです。此の一枚には徴税令書とありませう。これは村の税で、村の學校や役場の費用などになるのです。」

八796 図 ごらん、これには徴税傳令書とありませう。これは縣の税で、《略》。それからこれは國の税で、《略》。

八812 図 「どのうちでも、納める金高は同じですか。」「いや、《略》違ひます。くはしいことは又學校で習ふでせう。

八878 図 《略》、何のいんぐわで、《略》私に、一口も口をきくことが

出來ないのでございませう。

八891 図 「先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしいのに。」

八943 図 先生、私の娘にもあゝして教へて下さつたのでせうか。

八1019 図 《略》、僕が若し食物をこなさなかつたなら、からだを養ふ所の血がどうして出來ませう。

八1027 図 今になつて始めて、考慮をしてゐたことがお分りになるでせう。
八1032 図 こんなわけですから、これから後は互に親しみ合つて暮しませう。

八1039 しかし之を一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。

八1046 それではマッチは、どうして誰が造るのであらう。

八1082 図 《略》、お晝前にいらつしやい。面白いことをして遊びませう。
九94 図 いづれ又近い中に便りをしませう。

九1810 所ニヨツテ此ノ蟲ヲドビンワリト呼ンデキルノハ、《略》トイフ意味デアラウ。

九1910 シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出來テキルノハ、印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。

九207 コレ等ハ《略》、之ニ近ヅカウトスルモノガナイカラ、タヤスク見トメラレル方ガカヘツテ安全ナノデアアル。

九二七〇 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、さぞ心細くもあらう、〈略〉。

九二七一 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、〈略〉、又つらい事もあるであらうが、〈略〉。

九三五二 腹が大分すいて来た。もうお晝頃だらう。

九五〇八 〇略、おとうさんに「あの精米會社の社長さんはえらい方なんです。」と言ふと、〈略〉。

九五二八 〇それはわたしの十五六の時分だつたらう。

九五四八 〇町の人々は之を見かねて、『略』といつて、資本を出さうとする者もあつたが、〈略〉。

九六九〇 窓から吹きこむ朝風のひやりとするのは、餘程北へ進んだ爲だらう。

九七一六 〇「仙臺から三つ目の松島驛で下りるのだ。歸りに見物して行かう。」

九七七五 〇略、先生はこゝして、「今日はこれくらいもほりをしませう。〈略〉。」とおつしやつた。

九八三七 〇「何時頃までに出来ますか。」「來春まではかゝるだらう。」

九八六二 〇星がそんなに位置の變るものなら、目當にならないでせう。

九八七一 〇「でも、あんなにたくさんある星ですもの、それを見つづけるのに大變でせう。」「それにはまた都合

のよい事がある。〈略〉。」

九八七〇 〇「略」。あれごらん、〈略〉、七つの星が並んでゐるのが見えるだらう。」「え、見えます。」

九八八三 〇略、今結んだ二つの星のへだたりの五倍ばかりのところに、かなり大きい星があるだらう。あれが今話した北極星だ。

九八九一 〇「あ、あの一番高い杉の眞上の所にあるのが北極星でせう。」「さうだ。〈略〉。」

九九〇一 〇「あ、よく氣がついたね。並び方が全く似てゐるだらう。〈略〉。」

九九一八 〇其の中に、子供のアルカスは〈略〉、或日大熊を見つけたので、それを射殺さうとしました。

九九六七 〇お花島は雪溪を登りつめた所にあります。雪溪が冬の世界ならば、此所は春の國でせう。

九一〇〇 〇山のすその方があちらこちら白いのは、蕎麥の花であらう。

九一〇九 〇ざるを持った子供が、川下の方に集つてさわいでゐるのは、鮒やどちやうを取るであらう。

九一〇三 〇北風は驚いてすぐに立止らうとしたが、〈略〉。

九一一五 〇私には妻も子も有りません。私も日本男子です。何で命を惜しませう。

九一二三 〇我が高千穂艦の名をあげよう。

九一二三 〇一月モカ、ルヤウナオ話ダツタノニ、ドウシテコンナニ早くオ歸リニナツタノダラウト思ツテ聞イテミタ。

九一二九 〇「ソナエライ方ナラ、オトウサンガワザ／＼オ歸リニナラナクツテモ大丈夫デセウ。」

九一二八 〇どれ、私もお茶を一つ御ちそうになりませう。

九一二五 〇おとうさん、早く助けに行きませう。

九一二四 〇さあ、行きませう。

九一二二 〇大勢の人に利子を拂ふだけでは、銀行が損をしないでせうか。

九一二四 〇略、又何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。

九一二七 〇「お、降つたは／＼。世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。」

九一二七 〇お泊め申してはいかゞでございませう。

九一二〇 〇ではお泊め申さう。

九一二六 〇「なう／＼、旅のお方、おもどり下さい。お宿致します。」

九一二六 〇「お連れ申しはしたが、差上げる物はあらうか。」

九一二二 〇ちやうど有合はせの粟の飯、召上るならと妻が申してをりますが、いかゞでございませう。

九一二三 〇「それはけつこう、頂きま

せう。」

九一二二 〇略、今夜は之をたいて、あなたのおもてなしに致します。

九一二二 〇それ程おつしやるなら、恥かしながら申し上げませう。

九一二七 〇時頼は尚一同に向ひて、『略』、訴訟ある者は申し出るがよい。理非を正して裁斷致すであらう。」

九一二七 〇殊に秋晴の美しさはかくべつで、遠足好きの君なら、毎日何處へか出かけたてたまらないだらうと思ひました。

九一二九 〇「おとうさん、こんなに言ひにくい言葉は外に無いでせう。」

九一二二 〇「本道は遠いから近道を通らう。」と正雄が言ふと、良一はすぐ賛成した。

九一二五 〇みよ子、ずあぶん珍しい花があるだらう。

九一二三 〇どうだ、美しいだらう。

九一二四 〇もりが體內深くくひ込んで、破裂矢が見事に破裂したのであらう。もりにつけた長い綱はぐんぐん引張られて、三百メートル許もくり出された。

九一二〇 〇何百年も経たであらうと思はれる樟の大木が茂り合つてゐる。

九一二四 〇宮中の御宴の事を思ひ出して詩を作られたのも此處であらう。

九一二七 〇これほど我々に重大な關係のある太陽とは、一體どんなもので

あらう。

十一19 〈略〉太陽とは、一體どんなものであらう。一口にいへば、〈略〉一大火球で、之を形造つてゐるものは、液體に近い氣體であらうといふ。

十一32 此の黒點は多分表面に生ずるうづ巻であらうといふ。

十一149 私が來たので、すぐしまはうとなさるのを強ひて止めてお手傳をしましたが、〈略〉。

十一167 図 「こんなによく整頓してゐる中で勉強したら、どんなに氣持がよいだらう。」

十一228 若し裁判が無いとしたら、人々相互の争がはてしなく行はれて、しかも其の争は、力の強い者やわるがしこい者が勝つことになるであらう。

十一2210 若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、せつかくの法律もねうちが無くなり、我々は安心して生活することが出来ぬであらう。

十一381 植付けた苗木の枯れた處へ補植をするのは、翌年一回だけといふから、今年はどうしなくともよいのであらう。

十一403 僕がお手傳して植ゑたあの杉や檜は、何時になつたら伐るのだらう。

十一497 一體ゴムは何からどうして造るのであらうか。

十一616 〈略〉、突如として眼前に展開せられた風景は、雄大といはうか豪壯といはうか、〈略〉。

十一616 〈略〉、突如として眼前に展開せられた風景は、雄大といはうか豪壯といはうか、〈略〉。

十一617 〈略〉、突如として眼前に展開せられた風景は、〈略〉、恐らく全道第一の壯觀であらう。

十一622 畫がけるが如く美しき山の、或は右に或は左にあらはれるのは、サホロ嶽の連峯の一つであらう。

十一661 一體人は最初どうして火を得たであらうか。

十一664 思ふに〈略〉、〈略〉自然の火から、火種を取つたものであらう。十一689 將來は又どんなものが發明されて、今のガスや電氣にかはることであらうか。

十一725 図 「後を追つて御いになつたら、大たい追ひつけませう。」

十一759 図 あなたはまだお若いから、〈略〉、きつと此の研究を大成することが出来ませう。

十一8510 僕も急に元氣がなくなつて、一所に船に上らうかと思つたが、〈略〉。」と、自ら勵まして進んで行つた。

十一908 図 此の頃の日の出や日の入は何時だらう、満月は何日頃だらう。こんな事を知るには『日出』『日入』『月齡』を見る。

十一909 図 此の頃の日の出や日の入は何時だらう、満月は何日頃だらう。こんな事を知るには『日出』『日入』『月齡』を見る。

十一1208 図 ウェリントン公爵ともいはれるえらいお方が、おとうさんの言ひつけに背けとおつしやらうとは、どうしても考へられませんか。

十一126 こんなところで毎日働いてゐる人たちは、どんなにつらいことであらうと思つた。

十一12310 何が出来るであらうかと思つてゐると、いろ／＼扱つてゐるうちに臺付のコツプになつた。

十一111 又いろ／＼の鳥を注意して見ると、〈略〉、見れば見る程興味がわき、人はなぜみんな鳥類の研究をしないだらうと思ふやうになつた。

十一216 〈略〉、かごを首に掛けた三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。さつきの歌の主であらう。

十一219 ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。あれは港の親船へ蜜柑を運んで行くのであらう。

十二244 彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。

十二328 図 ルーブル博物館も一覽しましたが、りつばな繪畫・彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。

十二381 図 にいさん、まあ何といふよい曲なでせう。

十二388 図 「はいつてみよう。さうして一曲ひいてやらう。」ベートーベンに急に戸をあけてはいつて行つた。

十二393 其のそばにある舊式のピヤノによりかゝつてゐるのは妹であらう。

十二403 図 まあ一曲ひかせていたゞきませう。

十二448 図 「先生、又お出で下さいませうか。」きやうだいは口を揃へていつた。

十二4410 図 「参りませう。」

十二542 ねぢは、〈略〉、あれは何の役に立つのであらう、これはどんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、〈略〉。

十二543 ねぢは、〈略〉、あれは何の役に立つのであらう、これはどんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、〈略〉。

十二545 図 自分は何といふ小さい情ない者であらう。

十二552 図 あゝ、何といふ情ない身の上であらう。

十二559 男の子は指先でそれをつままうとしたが、餘り小さいのでつまめなかつた。

十二662 王は其の治めてゐるイギリスを三分して娘たちに與へ、自分は

〈略〉三人の娘の許に身を寄せ、餘生を安樂に送らうと決心した。

十二673 昔からあつた孝子のどの人よりも厚い真心をもつて、父上にお仕へ致します。

十二721 全領地を二分して與へてやつた二人の娘が、揃ひも揃つてこれ程の不孝者であらうとは。

十二746 ながて眠から覺めた王は、〈略〉、「此處は何處だらう。一體わしは今までどうしてゐたのだらう。」といつてあたりを見廻し、

〈略〉。

十二748 ながて眠から覺めた王は、〈略〉、「此處は何處だらう。一體わしは今までどうしてゐたのだらう。」といつてあたりを見廻し、

〈略〉。

十二751 ながて眠から覺めた王は、〈略〉、そばに居るコーデリヤを見て、

「これはどなたであらうな。〈略〉。」

十二757 何でうらむわけがございませう。何でうらむわけがございませう。

十二758 何でうらむわけがございませう。何でうらむわけがございませう。

十二926 「人は何の爲に此の世に生れて來たのか。我々の行末はどうなるだらうか。」

十二937 かねて釋迦の徳をしたつてゐたマガダ國王は、〈略〉、自分の國

をゆづらうとまで申し出たが、〈略〉。

十二988 釋迦は泣き悲しんでゐる人たちに、「私は行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと思つたことを語り盡くした。〈略〉。」と諭して靜かに眼を閉ぢた。

十二988 私行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと思つたことを語り盡くした。

十二1047 昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。

十二1061 我が命のある限り、一身をさへげて此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、〈略〉。

十二10610 あれは山師坊主で、あのやうなまねをして、人をろうらくするのであらうといふはさが立つた。

十二1204 小山はどうしてゐるだらうか。

十二1269 安芳がはいつて行かうとすると、〈略〉。

十二1294 一寸の蟲にも五分の魂。徳川侍のなまくら刀にも少しは切れる所がございませう。

十二13510 其の原因はいろくあらうが、〈略〉。

十二1361 其の原因はいろくあらうが、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、其の主た

るものであらう。

十二1363 かくいふ短所はやがて我が國民から消去するであらうが、〈略〉。

十二13610 しかし此の半面にもまた短所がうかゞはれないであらうか。

十二1374 習、性となつては、遂に日本人には獨創力がないであらうと自らも輕んじ、外國人からも侮られる。

十二13810 我が國民の長所・短所を數へたならば、まだ外にもいろいろあらう。

うう (感) 1 う、

八271 軒下にはらばへる黒き犬、にくらしき黒と思へば、黒もまた、意地悪き人と見るらん。はをむきて、うゝとなりて、垣を出て行く。

うう 植 (下) 1 植う 《一エ》

十二1251 桑を植えて蠶を飼ふ者多く、殊に一村鶏を飼はざる家なし。

うう 飢 (下) 1 うう 《一エ》

十二1274 喜捨を受けたる此の金、之を一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ふるも、〈略〉。

うえ 上 (名) 128 ウへ 上 ↓あにうえ・あにうえさま・あねうえ・おじうえさま・おばうえさま・おんちうえさま・おんはうえさま・このうえは・そのうえ・ちちうえ・まうえ・みのうえ

一404 一バンボシミツケタ。ア

レアノモリノスギノキノウヘニ。

一412 二バンボシミツケタ。アレアドテノヤナギノキノウヘニ。

一417 三バンボシミツケタ。アレアノヤマノマツノキノウヘニ。

一143 犬ガサカナヲクハヘテ、ハシノウヘヲトホリマシタ。

一186 月ガデハジメマシタ。〈略〉。モウスツカリ木ノ上ヘデマシタ。

一236 ドコカラキタノカ、トンデキタ木ノハ、ヒラヒラマツテキテ、イケノ上ニオチテ、〈略〉。

一386 サイタサイタハナガ、マツ白ナハナガ。〈略〉。タケノハノ上ニ。

一447 ヨイオヂイサンハタイソウカナシガツテ、犬ヲウヅメテ、ソノ上ニ小サナマツノ木ヲウエマシタ。

一697 アレアレアガル、ヒカウキガ。〈略〉。ズンズンアガル、クモノ上。

一222 一ムギ畠ノ上ニハアサハヤクカラヒバリガサヘヅツテキマス。

一454 うらしまは、又かめ

のせ中につて、海の上へ出てきました。

三48ノ上二天ジンサマ

ノオミヤガアリマス。

三62ノみよ子はささの小えだ

を手にもつて、土ぼしの上

三67ノ上マデトドキマス。

三80ノ二十五ふじの山あた

三90ノれふしが見とれてゐます

と、天人はまひながら松原の

上をだんだん高く上つて、

四14ノオマヘタチノセ中ノ

上ヲアルイテ、カゾヘテミルカ

ラ、ムカフノヨカマデナランデ

ミヨ。

四20ノ略、ガマノホヲシイ

テ、ソノ上ニコロガレ。

四40ノおかあさんが略、着物

の上にとりよけを着て、略

おはたらきになりました。

四60ノヨクキレルカンナガスウ

ツト板ノ上ヲ通ルト、略。

四66ノ赤い扇は略、空に高

くまひ上つて、略、なみの上

におちました。

四69ノ略、山がらはとび出して、

竹がきの上にとまつて、略。

四75ノ又私のかたの上で、お

星様が光りはじめるころにな

つて、略。

四76ノあのうちは此の上よく

なるばかりでせう。

五28ノ四月四日の朝、當番で僕が机

の上をふいてゐると、略。

五20ノゆふべの雨がはれて、青葉の

上に日が氣持よくつてゐます。

五22ノ其のたびに、鯉のかげが地の

上をおよぎます。

五34ノせまい中庭から、屋根の上に

頭を出してゐるひよろ松は、葉がほ

こりだらけでした。

五40ノ先づ拜禮をして、拜殿のよこ

の芝の上で、べんたうをたべてゐる

と、略。

五43ノ「米をつくのに、上にもう

すをさかさにつるしておけば、きね

の上げ下しに米がつける。」

五46ノ「米をつくのに、上にもう

すをさかさにつるしておけば、きね

の上げ下しに米がつける。」

五58ノ其の洲の白い砂の上に、青い

松が一面に立つてゐて、長い橋のや

うに見えます。

五62ノ略、用ありさうに天と

地の遠きをつなぐ雲の上。だれ

が渡るか、虹の橋。

五71ノ土手は長さが三百間、高さが

六間半、幅は一番上で三間といふ大

きなもくろみであつた。

五76ノ家屋敷もなくつた上に、夫

に死なれたので、略。

五80ノいころすのめかはいさうだと

思つて、兩耳の間をねらつて、頭の

上をすれ／＼にいました。

五97ノ略、木の上へにげりまし

た。

五99ノ僕は木の上から見、びく

／＼してゐた。

六26ノ略、俵の山が出来てゐます。

うちでも土間に丸太を置いて、其の

上につんであります。

六27ノ一番下は四俵、一番上は一俵

で、一山は十俵つです。

六24ノ不意を討たれた平家方は、上

を下への大さわざ、略。

六25ノ略、馬の上には人、人の上

には馬、かさなりかさなつて、略。

六25ノ略、馬の上には人、人の上

には馬、かさなりかさなつて、略。

六26ノ屋根の上に霜がまつ白だ。

六27ノひよどりは元氣な鳥だ。こん

な寒い日にも、朝早くから、高い木

の上をとびまはつて鳴いてゐる。

六35ノ義経は馬の上にうつぶしにな

つて、むちのさきでそれをかきよせ

ようとしします。

六43ノ「海の上でも歩けさうだ。」

六47ノ一匹デシ三千粒毛産ムトイフ

ガ、産デシマフト、其ノ上ニ砂ヤ

小石ヲカブセル。

六51ノ頼朝は一目見た上で、萬じ

ゆを呼出しましたが、略。

六58ノかげひななくはたらく上に、

人の仕事まで引きうけるやうにしま

したので、略。

六64ノ頼朝は唐糸をゆるした上に、

萬じゆにはたくさんほうびをあ

へましたので、略。

六68ノ略、「略。」と言つて、た

くさん金を出した上に、初や豆の種

を分けて上げてよいと言つた。

六77ノ湖の上は朝からひじやうな人

出である。

六87ノ象つかひが乗つてゐて、口上

をのべては、らつばを吹かせたり、

ごぼんの上へ乗らせたりした。

六87ノ象が大きな桶を鼻で頭の上へ

まき上げると、略。

六94ノ賊が之を聞いて、くやしがつ

て攻めよせると、正成は高いがけの

上から大木を落させた。

六96ノ略、賊は大きなはしごを作

つて、略、橋にした。廣さが一丈

五尺、長さが二十丈、其の上を賊が

我先に渡つた。

六96ノすると正成は、略、たくさ

んなたいまつを出して、之に火をつ

けて、橋の上に投げさせた。

六96ノすると正成は、略、之に火

をつけて、橋の上に投げさせた。さ

うして其の上へ油をふりかけさせた。

七4ノ地球の上には大小合はせて

六十餘國あり。

七9ノもやが水の上をこめてゐる。

- 七182 色が美しい上に、姿がやさしいので、つみ草の時には、誰も之を取つて花たばにする。
- 七421 すると甲板かんぱの上で鐵砲を上げた者がある。
- 七557 又ある時にはとび魚が甲板の上へとび上ることもあります。
- 七659 三四里行つて、大きな峠へかゝりますと、上から片はだぬいで、
《略》、かけ下りて来る者があります。
- 七892 あまり急ぎましたので、水がすの上にあつたおばあさんのづきにこぼれました。
- 七1079 清正はつけひもの頃から、此の方のひざの上でそだつたので、何時か見習つたものと見える。
- 八39 しゃうじを明けて見ると、小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれてゐる。
- 八112 つきそひの者や見物人はかけよつて来て、《略》、上を下へのさわぎである。
- 八315 さて山の木をきり倒して、四五尺の長さになりそろへ、それをぎつしりとかまの中に立て並べ、よくもえるやうに其の上下にそだを置き、又其の上にねつたかま土を置いて、打固める。
- 八495 《略》、スウツト下りて来て、急ニツバサヲチャメ、風ヲ切ツテマツシクラニエモノノ上ニツカミカ、ル。
- 八502 巢ハ《略》、《略》老木ノ上ニ、タテ横ニ小枝ヲ並べ、其ノ上ニヤハラカナコケヲ置クダケデアル。
- 八503 巢ハ《略》、《略》、タテ横ニ小枝ヲ並べ、其ノ上ニヤハラカナコケヲ置クダケデアル。
- 八509 《略》、土間の大金の上に積んであるせいろからは、《略》。
- 八512 おかあさんは取粉をのし板の上にひろげて、《略》。
- 八594 ヨリテ看板ノ如キモ、《略》、キソヒテ小屋根ノ上ニカ、グルニ至レリ。
- 八763 之を聞いたコロンブスは、つと立つて、食卓の上のうで卵を取り、
《略》。
- 八977 荒波洗ふデツキの上に、やみをつらぬく中佐の叫。
- 九54 椰子ハ、《略》。鳥の羽に似た大きな葉が、幹の上の方に集つてついてをり、《略》。
- 九115 敷、きぬの敷物八枚を波の上に敷重ね、其の上に飛下り給へり。
- 九115 敷、きぬの敷物八枚、敷皮八枚、きぬの敷物八枚を波の上に敷重ね、其の上に飛下り給へり。
- 九174 北國ニ住ム野ウサギヤ高山ノ上ニ居ル雷鳥ハ、《略》。
- 九179 例ヘバ雨蛙ハ緑色ノ葉ノ上ニ居ル時ハ緑色デアルガ、《略》。
- 九181 保護色ヲモツテキル上ニ、其ノ動物ノ姿勢ニヨツテ、形マデマハリノ物ニ似テ見エルモノモアル。
- 九217 病みつかれた六十ばかりの老人が、ふとんの上に起直つて、
《略》。
- 九573 《略》、莖の先についてゐる穂が、敷いてあるむしろの上に面白いやうに飛散る。
- 九587 庭に敷きつめたむしろの上に、黄色い麥の穂が一面に廣げられて、
《略》。
- 九719 《略》、叔父さんは近く左に見える山を指さして、「あの上に名高い金色堂がある。
- 九754 青々とした波の上に、點々と白帆が浮んでゐるのは、
《略》。
- 九875 《略》、あれごらん、向ふの杉林の上の所に、
《略》、七つの星が並んでゐるのが見えるだらう。
- 九981 お話が頂上のながめに移ると、
《略》、僕等も何時の間にか、山の上に居るやうな氣持になつて聞きました。
- 九984 《略》、日本海の波の上にはるかに浮ぶ能登半島、
《略》。
- 九991 富士山も、晴れた日には、白雲の上にかすかに見える事があるさうです。
- 九108 北風は、主人の體がくらの上でぐらつとゆれるのを感じた。
- 十37 平生きはめて御質素にわたらせられし御有様、一つ／＼の御品の上にうかゞはれて、無量の感に打たれたり。
- 十141 朝のかゝりはおそいし、晩のしまひは早い上に、とかく無責任な事はかりしてゐました。
- 十206 せり場の一方に高い臺があつて、其の上に掛の人が居る。
- 十253 岩の上に残つた船體には、
《略》。
- 十314 パナマ地峡は一體に小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。
- 十322 高い土地の上に水をたゝへたのであるから、湖の水面は海面よりずつと高い。
- 十1039 中には、まるで花かと思はれる紅色の葉が、莖の上の方に群がつて出でゐるものもある。
- 十1054 此の温室は南を受けてゐる上に、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに早く咲くのだ。
- 十1127 マストの上の見張人が不意に「鯨、鯨。」と聲高く叫んで、北の方を指さした。
- 十1231 私ほわざと一さつての書物を床の上に投げて置きました。
- 十1234 《略》、あの青年ははいるとすぐに書物を取上げて、テーブルの上に置きました。
- 十1132 たどりつきたる峠の上に、菜の花にほふ里見下して、笑ひさゞめくひるげのむしろ。
- 十116 《略》、のぶ子さんは上の棚

を指さして、「略。」とおつしやいました。

十一193 略、裁判所は兩者の言分を聴いた上で、貸主の主張を正當とみとめれば、其の借金を返すやうに借主に命ずる。

十一585 砲手はその結果を見るのをおそれるやうに、手で顔をおほつて大砲の上につつ伏した。

十一772 有名な古事記傳といふ大著述は略、我が國文學の上に不滅の光を放つてゐる。

十一793 略、形の上に種々の工夫をこらして、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。

十一838 砂の上を歩いて行くと、足の裏が焼けるやうだ。

十一867 船の上からはしきりに勵ましてくれる。

十一1122 圖 天下を定むる三分の計、たなそこの上に指さすがごと。

十二86 圖 此の棒を此の板の上にたきりをもむが如く廻せば、摩擦によりて火を生ず。

十二474 圖 されど何れも美しき光澤を有するが上に、もみは柔かにして工作に便なれば、略、つがは堅くして久しきに耐ふるが故に、略。

十二533 自分の置かれたのは、仕事臺の上に乗つてゐる小さなふたガラスの中で、略。

十二537 きりやねち廻しやピンセツ
うえ 〔飢〕(名) 1 飢

トや小さな槌やさまの道具も、同じ臺の上に横たはつてゐる。

十二555 略、男の子はやがて仕事臺の上の物をあれこれといぢり始めた。

十二566 時計師は略、仕事臺の上を見て、出して置いたねぢの無いのに氣が附いた。

十二568 圖 誰だ、仕事臺の上をかき廻したのは。

十二654 生れつき烈しい氣性の上に、年とともに老の氣短さが加はつて、略。

十二6710 圖 略、——私は略、ひたすら父上を大事に致すのを此の上もない仕合はせと存じてをります。

十二785 其の時魚見やぐらの上で旗を掲げて、まぐろの群が網にはいつたといふ合圖をすると、略。

十二861 圖 木の枝を伐りて地上に立て、上を木の皮にておほひ、八人一所にうづくまりて僅かに雨露をしのご。

十二979 略、釋迦が山の下にあるのを見附けて、上の方から大石をころがしたが、略。

十二1334 東海の島に據つた日本は、國家を建設する上に頗る有利であつた。

十二1377 我々は略、世界文明の上に大いに貢獻したいものである。

十二983 釋迦は略、なほつづれをまとひ飢と戦ひつゝ、略。

うえ 〔植〕ひたうえ・はちうえ
うえかえ 〔植代〕(名) 1 植替

七106 圖 農家ニテハ種蒔・株分・植替・接木・刈込・取入レ等ヲナスニ、略。

うえき 〔植木〕(名) 1 ウエ木
三677 略、ニハニ水ヲウツタリ、ウエ木ニ水ヲカケタリシマシタ。

うえこ・む 〔植込〕(四) 2 植込む
《一ミーム》

十五7 圖 略、新に植込みたる木の數、實に十數萬本に及べり。

十六7 圖 大方は國民の眞心こめたる獻木にて、略。ひつきやう掘取る者、運ぶ者、植込む者、略。

うえさま 〔上様〕(名) 2 上様
七1016 圖 加藤清正これまで參上仕る上様をはじめ皆様、おしの下になつては居られぬかと存じ、略。

七1042 圖 清正は上様へお目通がかなはぬはず。

うえじに 〔飢死〕(名) 1 うえ死
七734 圖 たとひ親子の者がうえ死をするやうなことがあつても、略。

うえじに・する 〔飢死〕(サ変) 1 うえ死する 《一スル》
十695 圖 かし此のまゝに日を送つては、唯空しくうえ死する外はござ

いません。
うえすぎがた 〔上杉方〕(名) 3 上杉方

七467 翌日武田方からは安間彦六といふ大の男が、略、大の馬に打乗つて、上杉方の陣へ向つた。

七468 上杉方からは小さな馬に乗つた小さな鎧武者が一人あらはれて、「略。」と名のつた。

七483 上杉方はどつとときの聲をあげた。

うえすぎけんしん 〔上杉謙信〕(人名) 1 上杉謙信

七434 越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄が、たびたび信濃の川中島で戦つた。

ウエストミンスター・じいん (名) 1 ウエストミンスター寺院

十二296 圖 略、國會議事堂・大英博物館・ウエストミンスター寺院、其の他見る物聞く物唯々驚く外はありません。

うえだくん 〔上田君〕(人名) 1 上田君

十二11910 圖 本日突然上田君に出會ひ、久しぶりにて郷里の様子をいろく承り申候處、略。

うえつけ 〔植付〕(名) 2 植付
十一357 圖 「あそこは一昨年植付をした地藏山だ。」
十一361 圖 「あそここの植付をした時はまだ寒かつた。」

うえつけもうす「植付申」(四) 1

植付け申「一(シ)」

十一1102(腰) 燃えあとは取片附けて
畠とし、コーヒー・わたの木などを
植付け申候。

うえつ・ける「植付」(下) 4 植付

ける「一ケ・ケル」

十一364 地圖の中の薄緑に染めてあ
るのが一昨年植付けた處、〈略〉。

十一369 一昨年植付けた時の覺書だ。

十一379 植付けた苗木の枯れた處へ
補植するのは、〈略〉、今年はもう
しなくともよいのであらう。

十一517 此の邊でゴムを栽培するに
は、〈略〉、其のあとに種をまくか、
又は苗木を植付けるのであるが、
〈略〉。

うえて「植手」(名) 1 植手

九476(目) 〈略〉、おとなりからの手つ
だひと合はせて、植手が八人になつ
て、にぎやかでした。

うえのえき「上野駅」(名) 1 上野驛

九678 午後六時、叔父さんと一所に、
上野驛から青森行の列車に乗った。

ウエリントン (人名) 1 ウエリント
ン

十一1202(腰) 私は公爵ウエリント
ンだ。

ウエリントンこうしゃく「人名」 3

ウエリントン公爵

十一1204 ジョージは、かねてウエリ
ントン公爵が勲功も高く、りつぱな

人物であるといふ事を聞いてあとの
で、〈略〉。

十一1207(腰) ウエリントン公爵ともい

はれるえらいお方が、おとうさんの
言ひつけに背けとおつしやらうとは、
〈略〉。

十一1214(腰) ジョージは後を見送つて、
帽子を振りながら叫んだ。「ウエリ
ントン公爵萬歳。」

ウエリントンと少年

ウエリントンと少年

十一1173 第二十六課 ウエリントン
と少年

十一1176 第二十六課 ウエリントン
と少年

う・える「植」(下) 16 ウエル 植
ゑる「一エ・エル」

一293 ヤマニハ、キガウエテア
リマス。

二451 ヨイオヂイサン ハ〈略〉、
犬ヲウツメテ、ソノ上ニ小サ

ナマツノ木ヲウエマシタ。

三511 ツイコノアヒタ ウエタ田
ガ、モウアンナニ青クナリマシ
タ。

五786 此の山の杉も庄屋が先に立つ
て植ゑたのださうだ。

六984(腰) 村の學校のげんくわんの
向つて右の落葉松は、わたしの子
どもが植ゑたので、〈略〉。

六991(腰) あの學校がたつた時、
〈略〉 死んだあの子が掘取つて、

かついで行つて植ゑたのだ。

六998(腰) 「わたしの植ゑた落葉松
が あんなに高くなりました。」

七361(目) 通は廣くて平で、歩道と車
道の間に並木が植ゑてありますが、
〈略〉。

九472(目) あの降りつゞいた雨のおか
げで、山田の高い所まで一息に植ゑ
ることが出来ました。

十一374(腰) 早く間伐して細材を取る
目的のところでは、一坪に二本も三
本も植ゑるが、〈略〉。

十一375(腰) 〈略〉、此の邊では太材を
取る方が利益だから、かう間をおい
て植ゑるのだ。

十一376(腰) 今に御らん、此のくらゐ
離して植ゑても、十五六年目には間
伐をしなければならぬやうになる
から。

十一384 〈略〉、斜面などに植ゑた木
は、〈略〉。

十一402 僕がお手傳して植ゑたあの
杉や檜は、何時になつたら伐るのだ
らう。

十一407 今年伐るはずのは、おとう
さんの子供の時植ゑたのだといふが、
〈略〉。

十一409(腰) 「植林は貯金のやうなも
ので、植ゑてさへおけば、年々太つ
て利息が附いて行く。」

うお「魚」(名) 9 魚 ↓とびうお

六456 鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ

魚デモアル。

六456 鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ
魚デモアル。

六473 サウシテ外ノ魚ガ其所ヘ來ナ
イヤウニ、〈略〉。

六485 鮭ハ寒イ國ノ魚デ、〈略〉。

七792 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤ其ノ外イ
ロノ動物ガスタンデ居リ、又サマ
ザマノ植物モ生エテ居ル。

七837 陸ノ獸ニ似タモノニハ、〈略〉
ナドガアリ、魚ニ似タモノニハ、イ
ルカヤ鯨ガアル。

九85(目) 青・緑・紅・紫、目のさめ
るやうに美しい魚の群が、珊瑚の林
や海藻の間をぬつて泳いで行く。

十一679 燈火としては、初め松の木
や魚・獸の油などをたいたのであつ
たが、〈略〉。

十二787 これでもう魚は逃出すこと
が出来ない。

うおみやぐら「魚見槽」(名) 2 魚見
やぐら

十二7710 身網の外側や陸上の高い處
に魚見やぐらが設けてあつて、漁夫
が絶えずまぐろの來るのを見張つて
ゐる。

十二785 其の時魚見やぐらの上で旗
を揚げて、まぐろの群が網にはいつ
たといふ合圖をすると、〈略〉。

うかうか(副) 1 うかう

十二1284(腰) 〈略〉、今日日本の周圍に
は諸外國が様々の考を持つて見てを

るので、うか／＼と兄弟垣にせめいであたら、日本全國にのしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。

うかがい・みる 「伺見」(上一) 1 うかゞひ見る 《一ミレ》

十一472 其の後又夜更けてうかゞひ見れば、《略》鶴の臥したる様をなせり。

うかが・う 「窺」(四・五) 7 うかゞふ 《一ハーフ》

十37 平生きはめて御質素にわたらせられし御有様、一つ／＼の御品の上にうかゞはれて、《略》。

十1316 行幸餘りに遅かりしかば、人をしてうかゞはしむるに、《略》。

十一65 論語は、《略》、最もよく此の大聖の面目をうかゞふを得べし。

十一263 盛政直に物見の兵を出してうかゞはしむるに、《略》。

十一469 かくて次の夜は如何にとうかゞふに、畫師は前の如く夜もすがら寝ねずして、明日はかく畫がか

んなど獨言してゐたりければ、《略》。

十二133 四周の海が天然の城壁となつて、容易に外敵のうかゞふことを許さないから、《略》、國內はおほむね平和であつた。

十二136 《略》、實に我が國民性の一

大長所である。しかし此の半面にもまた短所がうかゞはれないであらうか。

うかが・う 「伺」(五) 4 うかゞふ

《一ツ・ヒ》 ↓ おんうかがいもうしあぐ

五83 父 おとうさんにうかゞひますと、叔母さんの町に大水が出たさうです。

七97 おとうさんにうかゞつたら、かもめだとおつしやつた。

九70 《略》、私がゆめの中に通過した驛々のお話をうかゞつた。

九94 白馬岳が飛驒山脈中の有名な山だといふ事は知つてゐましたが、くはしい事は今日始めてうかゞひました。

うが・つ 「穿」(五) 3 うがつ 《一チ・ツ・ツ》

八82 雨だれでも石をうがつ。

十37 《略》、ほとんどあらゆる文明の利器を運用して、山をくづし、地をうがち、河水をせき止めた事など、《略》。

十二110 洞門の長さは實に三百八間、高さ二丈、幅三丈、川に面した方には處々にあかり取りの窓さへうがつである。

うか・ぶ 「浮」(四・五) 11 うかぶ 浮ぶ 《一ビ・ブ・ベ・ン》

五30 うちの前には小川が流れ、舟もうかべば、あひるもうかぶ。

五30 うちの前には小川が流れ、舟もうかべば、あひるもうかぶ。

五30 うちの前には小川が流れ、舟もうかべば、あひるもうかぶ。

五30 うちの前には小川が流れ、舟もうかべば、あひるもうかぶ。

九75 青々とした波の上に、點々と

白帆が浮んでゐるのは、《略》。

九98 《略》、日本海の波の上にはるかに浮ぶ能登半島、《略》。

九116 中尉の顔には満足らしいあみが浮んだ。

十297 しろ／＼と、朝霧 野山をこめて、月のごと、日輪 ほのかに浮ぶ。

十349 かうして前後三段に上つた船は、海面より約二十六メートルも高い水面に浮ぶのである。

十358 今度は前と反對に、順次に三段を下つて、海と同じ水面に浮ぶ。

十一577 ものすごい程青白くかはつた老砲手の顔には、決心の色が浮んだ。

十一106 大勢の人々が熟したるコーヒーの實を手にてこき落し、之を集めてみぞに投入し候へば、まじりたる石・砂などは沈み、實のみ浮びて流れ候を、《略》。

十二364 るり色の水に浮ぶルソー島、《略》。

うか・べる 「浮」(下二) 2 浮べる 《一ベル》

七195 又南の海上にはひしひしと軍船を浮べて、《略》。

十二859 《略》、河・湖に出づればまた舟を浮べて進む。

うき 「浮」(名) 1 うき

十一553 二人は外の者からずつと離れて、沖のうきを目當に泳ぎくらを

してゐた。

うきあが・る 「浮」(五) 4 浮上る 《一ツ・リ・ール》

八105 信作は《略》池の中へころげこんだ。《略》、一たん沈んで又浮上つた信作のえりを引つつかんで、ぐつと岸へ引上げた。

十330 底の水道から水がわき出て、船は次第に高く浮上る。

十343 前と同じ方法で、船はもう一段高く浮上り、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。

十1148 やがて鯨は再びはるか彼方に浮上つた。

うきだ・す 「浮出」(五) 1 浮出す 《一シ》

十766 すみきつた空氣の中に煉瓦の赤色や、松の緑色などが鮮かに浮出して見えるのは實にきれいです。

うき・でる 「浮出」(下二) 1 浮出る 《一デ》

十二209 《略》、蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。《略》實が鈴なりになつてゐる。黒い程こい緑の葉の間から、其の一つ／＼が日の色にはえてくつきりと浮出でゐるのが見える。

うきぼり 「浮彫」(名) 1 浮きぼり

十1114 浮きぼり、ひねもす見れどもあかざる宮局。浮きぼり・毛ぼりの柱にけたに、振るひしの

みので 巧をきはめ、《略》。

うきよ 「浮世」(名) 2 うき世 浮世

十一111ノ図 〇 〇 うき世をよそなるしづ
けき住居、〈略〉。

十二135ノ 〇 〇 略、昔から此の島國で荒
い浮世を知らずに過して來たことが、
其の主たるものであらう。

う・く 「浮」(五) 4 ウク 浮く「一
イ」

二243 〇 〇 略、コヒハエサカ
ト ウイテクル。

五593 〇 〇 ことにしほのみちた時は、杜
殿や廻廊が海の中に浮いて、〈略〉。
十三39 〇 〇 上手にも水門があるので、船
は大きな箱の中に浮いてゐる形であ
る。

十一8410 〇 〇 ふと見ると、さしわたし六
七寸もある大きなくらげが、ふわり
くくと浮いてゐる。

う・く 「受」(下二) 2 受く「一」ク
ル・一ケ

十一1274 〇 〇 喜捨を受けたる此の金
〈略〉。

十二486 〇 〇 略、かしは最も堅くし
て彈力に富むが故に、櫓・車・運動
器具の如き強烈なる力を受くるもの
を製作するに適せり。

う・く いす 「鶯」(名) 1 ウグヒス

二677 〇 〇 ケサ ウグヒス ガウメノ
木 デ、ホウホケキヨウト ナキマ
シタ。

うけたまわりお・り 「承居」(ラ変) 1
承り居り「一」リ

十1095 〇 〇 承り候へば、御祖母様に

は〈略〉、去る十九日遂に御死去遊
ばされ候由、〈略〉。平生甚だ御達者
にて、近來は殊に御元氣のやうに承
り居り候事とて、〈略〉。

うけたまわりもう・す 「承申」(四) 1

承り申「一」(シ)

十二120ノ 〇 〇 本日突然上田君に出會
ひ、久しぶりにて郷里の様子をいろ
く承り申候處、先生には何時も御
壯健の由、何よりのことに御座候。

うけたまわ・る 「承」(四・五) 8 うけ
たまはる 承る「一」リール

七72ノ 〇 〇 私は此所から百里さきの
紀州の者でございます。〈略〉。其の
上あなたのお名前をうけたまはりた
うございます。〈略〉。人夫は之を
聞いて、首をふりました。

九1137 〇 〇 昨年僕の學校より、君の
學校へ御轉任なされ候佐野先生、先
頃より御病氣の由承り候。

十728 〇 〇 時頼は尚一同に向ひて、
「〈略〉。」一同謹んで承る中に、常世
は有難さ身にしみ、喜にみちて御前
を退きけりとぞ。

十1069 〇 〇 さて御父上様の御葉書な
らびに御前様の御手紙により、御母
上様には去る二日御安産にて、玉の
様なる女の御子御生れの由承り、
〈略〉。〈略〉。叔母より さち子どの
を早く承りたく、御知らせ待ち
上げ候。

十109ノ 〇 〇 承り候へば、御祖母様に

は先日より御病氣の處、御養生のか
ひもなく、去る十九日遂に御死去遊
ばされ候由、誠に驚き入り候。〈略〉

みよ子 叔母上様

十10910 〇 〇 當地に御住まひの頃度度
參上致し、大兄と共にいろく御話
を承り候事など、今更のやうに思ひ
出され候。

十一295 〇 〇 秀吉はるかに之を望み、
旗本の若武者どもをきつと見て、
「〈略〉。」と大首聲。「承る。」と、
〈略〉。荒武者ども、勇みに勇んで突
進す。

うけつ・ぐ 「受繼」(五) 1 うけつぐ
「一」ギ

十一7610 〇 〇 宣長は眞淵の志をうけつぎ、
三十五年の間努力に努力を續けて、
遂に古事記の研究を大成した。

うけつけ 「受付」(名) 1 受付

七112 〇 〇 受付 午 時 分

うけとる 「受取」(四・五) 7 うけ取
る 受取る「一」ツ・一リール

四237 〇 〇 おばあさんは〈略〉、ふろし
きづつみをうけ取つて、〈略〉。

七718 〇 〇 略、此の金をあなたにさ
し上げましても、おしかりになるこ
とはあるまいと思ひます。どうぞ之
を受取つて、私の氣がすむやうにし
て下さい。

九32 〇 〇 三月二十五日お出しのお手
紙を昨日受取りました。〈略〉 叔父

から 松太郎殿

十105 〇 〇 程なくフィリップは〈略〉、
うやくしく薬のコップを王にささ
げた。王は片手にそれを受取り、
〈略〉。

十一7810 〇 〇 石・貝・家畜・獸皮・布・
農産物などが、〈略〉。しかしこれら
の物は、受取る者にそれが不用であ
つたり、〈略〉。

十二194 〇 〇 略、同じ新聞にても、
發行地にて受取るものと他地方にて
受取るものとは、〈略〉。

十二194 〇 〇 略、同じ新聞にても、
發行地にて受取るものと他地方にて
受取るものとは、〈略〉。

うけもち 「受持」(名) 2 受持

九64ノ 〇 〇 上甲板洗は水兵の受持で、
〈略〉。

十一5210 〇 〇 ゴム園の人は毎朝暗いうち
に起きて、受持の木に此の切付をし
て廻る。

う・ける 「受」(下二) 14 うける 受
ける「一」ケ・一ケル」↓おひきうけも
うす・おみうけもうす・ひきうける・
まちうける

五245 〇 〇 略、番頭さんたちは、お客
から注文をうけては、小ぞうさんた
ちにさしづをしてゐます。

五714 〇 〇 略、いろくノ工事に、村
の人は普請方のさしづをうけてはた
らいた。

七745 〇 〇 かの男がわけを話して、どう

- 二402 ワタクシ ハネエサン ニ、
ユキデ ウサギ ヲ コシラヘテイ
タダキマシタ。
八34 うさぎの毛も間もなく白くな
るだらう。
八496 狐・狸・兎・犬・豚ナドハ彼
ノ求メル物デアルガ、〈略〉。
うし「生」(名) 5 ウシ 牛 じおや
うし・おやうしとこうし・こうし
一51 ウシガキマス。
一53 ウシトウマガキマス。
十一605 見渡す限り果もない原野に、
放牧の馬や牛がいうく草をはむ
様や、〈略〉。
十二914 ぼろを着た農夫は玉のやう
な汗をかいて田をすき起し、牛はつ
かれ果ててあへぎあへぎ働いてゐる。
十二917 〈略〉、農夫や牛の勞苦を思
ひやると共に、蟲の運命をあはれん
だ。
うし「丑」じひのとうし・みずのとう
し
うじ じやましろうじ
うじがみ「氏神」(名) 1 氏神
八59 昔或氏神のお祭に、競馬の
神事といふ事があつた。
うじがみさま「氏神様」(名) 1 うち
がみさま
四12 うじがみさまの森で、あ
さからたいこのおとがします。
うしぐるま「牛車」(名) 1 牛車
六696 〈略〉、きれいな着物を着て、
牛車に乗つたお姫様方の姿を、〈略〉。
うじこ「氏子」(名) 1 氏子
八61 昔或氏神のお祭に、競馬の
神事といふ事があつた。それは氏子
の五箇村から、〈略〉。
うじな「字品」(地名) 1 字品
十一345 瀬戸内海の沿岸には大
阪・神戸・尾道・宇品・高松・多度
津・高濱等良港多く、〈略〉。
うしないたまう「失給」(四) 1 う
しなひ給ふ「一七」
九421 鱷 たち正していひ出で
ぬ、「此の方面の戦鬪に 二子をう
しなひ給ひつる 閣下の心如何に
ぞ。」と。
うしなう「失」(四・五) 7 うしなふ
失ふ「一ッ・ヒ・フ」
九1095 しかし主人をうしなつたと思
ふと、今まで張りつめてゐた勇氣も
くじけて、〈略〉。
十639 降積む雪に道を失ひ、進み
もやらずたゞずみたる様は、〈略〉。
十956 前年のやうな弱蟲には、ひ
よつとすると命を失ふやうなあふな
い時でも、〈略〉。
十1321 衆皆力を失ひて散り
くになりぬ。
十一1269 たましく大阪に出水あり。
死傷頗る多く、家を流し産を失ひて、
路頭に迷ふ者数を知らず。
十二236 即ち一人の貿易商が外人の
信用を失ふやうな事をすれば、〈略〉。
十二1048 〈略〉、昔から之を渡らうと
して水中に落ち、命を失つた者が幾
百人あつたか知れない。
うじはし「宇治橋」(名) 1 宇治橋
六1046 午後外宮へ参り、今
日内宮へ参つた。宇治橋を渡つて神
苑に入り、〈略〉。
うしろ「後」(名) 19 うしろ 後 ↓
あと
四416 たんすをうごかすと、其
のうしろから物さしと花子の
お手玉が出ました。
四723 「それ、もう日がくれる
ぞ。一本杉のうしろへお日様
がおはいりになつた。」
五588 朱ぬりの社殿が山のみどりを
後にして、たいそうきれいに見えま
す。
六237 其の夜のことで、義仲はひ
そかにみ方の者を敵の後へまはらせ
て、〈略〉。
六252 暗さは暗し、道はなし、平家
方はにげ場がなくて、後のくりから
谷へ、なだれをうつて落ちました。
六333 少シ行クト、呉服屋ノ小ゾウ
ガ表ヲハイテキタ。自轉車ガ後カラ
來テ、カケヌケテ行ツタ。
七304 昔一匹の獅子、森の中に
眠りしに、後の暗きやぶかげより大
いなる蛇つと出でて、〈略〉。
七452 信玄の家來は之を見て、後か
らやりで謙信をついたが、あたらな
い。
八311 かまは〈略〉、高さが四五尺
ぐらゐで、前には三尺に一尺程のか
ま口を造り、後の方に煙出の口を明
けるのである。
八885 信吉はびつくりして、二足三
足後へ下つたが、「略。」といつて、
娘を引きよせて、〈略〉。
九186 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリ
ハ、〈略〉、體ノ後ノ端ヲ木ニツケテ、
體ヲナ、メニツキ出スト、〈略〉。
九569 正一の家でも、親子三人、庭
にすゑた打臺の前に並んで、麥を打
つてゐる。後には麥の束が山と積ん
である。
九575 後には麥の束が山と積んであ
る。〈略〉。後の山がだんだん低くな
るにつれて、前の麥の山が見る
く高くなる。
九782 〈略〉、めい／＼身輕になつて、
校舎の後の菜園に集つた。
九1076 それでも誰一人敵に後を見せ
る者はない。
十7510 北の方の山のすそには、松
林を後にして右に昌徳宮、左に景
福宮の壯大な構がある。
十1044 此の後にかまがある。
十1187 社殿の後に廻ると、其處は
廣々とした梅林で、幾百本とも知れ
ない古木の梅が咲續いてゐる。
十1274 〈略〉、大戦艦陸奥は、海を
後にして悠然と横たはれり。

うしろあし ↓あとあし

うしろかげ 「後影」(名) 1 後影

十610 図 すくくと立去る僧の後影を見送りたる妻は、やがて夫に向ひて、「略。」

うしろむき 「後向」(名) 1 後向

六247 不意を討たれた平家方は、上を下への大さわぎ、略、後向に乗る者もあれば、一匹の馬に二人乗る者もあります。

うしわかまる 「牛若丸」(課名) 2 ウシワカマル

二目5 四 ウシワカマル

二117 四 ウシワカマル

うしわかまる 「牛若丸」(人名) 3 ウシワカマル

二116 ウシワカマル ハヒラリト

ランカン ヘトピアガリマシタ。

二125 ペンケイ ハトウトウ カウ

サンシテ、ウシワカマル ノケライ

ニナリマシタ。

四437 僕は牛わかまるになつて、

はねまはつて たたかひましたら、

略。

うす 「目」(名) 11 ウス うす 白

↓ひきりうす・ひとうす・ふたうす

め・みうすめ・ようすめ

一166 カニガシニマシタ。略。

ハチガキテ、ナクワケヲタツ

ネマシタ。略。ウスモ キイテ

オコリマシタ。

一197 ウスガオチテキテ、サル

ヲオシツケマシタ。

二455 ヨイオヂイサン ハソノ木

ヲキツテ、ウスヲ コシラヘマシ

タ。

二457 ソノウスデ米ヲツキマ

スト、略。

二461 略、ウスノ中カラ、マ

タオカネ ヤタカラモノ ガデマ

シタ。

二464 ワルイオヂイサン ハ又コ

ノウスヲカリニキマシタ。

二471 又オコツテ、ソノウスヲ

ワツテ、火ニクベテシマヒマシ

タ。

五463 図 「米をつくの、上にもう

すをさかさにつるしておけば、きね

の上げ下しに米がつける。」

五465 図 「上のうすには、どうして

米を入れる。」

五871 図 略、うちでも下の雨戸が

たふれて、中からうすやたらひがぼ

かばか流れ出すほどで、略。

八524 つき上ると、おばあさんが餅

を臼の中で丸めて、おかあさんの所

へ持つていらつしやつた。

う・す 「失」(下二) 2 うす 失す

《一セ》

八991 図 今とはボートにうつれる

中佐、飛來る彈丸に忽ちうせて、

旅順港外うらみぞ深き、軍神廣瀬

と其の名残れど。

十二995 図 略、咲く花のほふが

如しと誇りし奈良の都も、色移り香

失せて年既に久しく、略。

うす ↓あらうす

うすあかい 「薄赤」(形) 2 ウスア

カイ 《一イ・ーク》

三33 トヲアケルト、ムカフノ

ソラガ ウスアカク ナツテ キマ

ス。略。「ア、日ガ出ハジメタ。

略。」

六471 卵ハ小豆程ノ大キサデ、ウス

アカイ玉ノヤウニ見エル。

うす・い 「薄」(形) 5 ウスイ うす

い 薄い 《一イ・ーク》

三583 アブラゼミデス。色ガウ

スクテ、ヌレテ キルヤウニ見エ

マス。

五485 又うすい吉野紙のやうな作り

かけの繭の中で、略。

五625 図 あれく、虹がきえて行く。

あのあざやかな色どりも しだい

くくにくすくなり、小山の方ほも

う見えぬ。

九795 第十七 いもほり 略。

略、どれも皆、絹のやうなうすい

皮がはち切れさうに、よく實がいつ

てある。

十一534 集めた液は之を工場に持つ

て行き、略、機械で薄くにして乾

かすのである。

うすかばいろ 「薄蒲色」(名) 1 うす

かば色

九132 図 白・黒・うすかば色、十幾

羽の鶏一つにかたまり、略。

うすくまる 「蹲」(四) 2 うづくま

る 《一リール》

八273 図 えんがはにうづくまる三

毛のねこ、略。

十二861 図 木の枝を伐りて地上に立

て、上を木の皮にておほひ、八人一

所にうづくまりて僅かに雨露をしの

ぐ。

うすぐらい 「薄暗」(形) 8 ウスグ

ライ うす暗い 薄暗い 《一イ・ー

ウ・ーク》

三28 マダウスグラウゴザイマス

ガ、ケサコソニイサンヨリサ

キニオキテミヨウトオモツテ、

略。

七742 見れば年取つた父といふのが、

うす暗い小窓の下で、わらちを作つ

て居りまして、略。

八118 略、大將の父はうす暗い中

に大將を起して、略 泉岳寺へよ

く連れて行つた。

九221 まくらもとに置いてある行燈

の光はうす暗く、略。

九321 何時もはうす暗い程茂り合つ

てゐる兩がはの木立も、まだ若葉だ

けに、下草まで見えるぐらゐる明い。

十二374 月のさえた冬の夜友人と二

人町へ散歩に出て、薄暗い小路を通

り、或小さいみすばらしい家の前ま

で來ると、略。

十二391 友人も續いてはいつた。薄

- 暗いらふそくの火のもとで、〈略〉
 若い男が靴を縫つてゐる。
 十二〇八 〈略〉、時には夜半までも薄暗い燈を便りに、經文をととなへながら一心にのみを振るふことさへあつた。
- うずしお 〔渦潮〕(名) 1 渦潮
 十二八五 圖 裸島より渦潮見れば、胸も波打ち眼もくらむ。
 うすじろい 〔薄白〕(形) 1 うす白
 い 〔一ク〕
 九〇四 月が西の空にうす白く残り、野には朝つゆがしつとりと置いてゐた。
 うすずみいろ 〔薄墨色〕(名) 1 薄墨色
 十一四二 〈略〉、いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。
 うずたか・し 〔堆〕(形) 1 うづたかし 〔一キ〕
 十二二四 圖 〔略〉、うづたかき積荷の中に 海山の寶を載せて、船は今靜かに歸る、懷かしき故郷の港。
 うすべに 〔薄紅〕(名) 1 うす紅
 九三六 〈略〉、若葉のにほひが〈略〉。
 うす紅のかへで、銀ねずみ色の櫓、黄の勝つた緑のけやき、どの木を見てもなつかしい。
 うすべにいろ 〔薄紅色〕(名) 1 薄紅色
- 十〇二 たくさん咲いてゐる中で一番美しいのは、たれ下つた莖に、幾つも咲いてゐる薄紅色の花である。
 うずまき 〔渦巻〕(名) 2 うづ巻 渦巻
 十一三二 此の黒點は多分表面に生ずるうづ巻であらうといふ。
 十二七九 〈略〉、まぐろは水面に渦巻を起したり、背びれを水上に現したりして泳ぎ廻つてゐる。
 うずまる 〔埋〕(五) 2 埋まる
 〔一ツ・一リ〕
 六二五 〔略〉、馬の上には人、人の上には馬、かさなりかさなつて、ずぶん深いぐりから谷が、平家の人馬で埋まりました。
 十四三 圖 〔略〉、來年の秋はもう眞白な蕎麥の花で、此の地面が埋まつてしまふのだ。
 うすみどり 〔薄緑〕(名) 5 うす緑 薄緑
 九一二 圖 井戸に近き柿の木の、日ましにのびゆく若芽のうす緑、見るに氣持よし。
 九三二 かんくんとこずゑをてらしてゐる十時過ぎの日かげが、若葉の色を下に投げるのか、手もうす緑、
 九三二 〔略〉、日かげが、若葉の色を下に投げるのか、手もうす緑、足も
 うす緑、帶も着物も皆うす緑。
 九三三 〔略〉、日かげが、若葉の色を下に投げるのか、手もうす緑、足も
- 下に投げるのか、手もうす緑、足も
 うす緑、帶も着物も皆うす緑。
 十一三六 地圖の中の薄緑に染めてあるのが一昨年植付けた處、〈略〉。
 うすむらさき 〔薄紫〕(名) 1 ウスムラサキ
 五九二 庭サキノブドウ棚ニ、今、夕日ガサシテキマス。フサ／＼ト下ツタウスムラサキノ實ハ、〈略〉。
 うずめる 〔埋〕(下) 1 ウヅメル
 〔一メ〕
 二四六 ヨイオヂイサンハ〈略〉、大ヲウヅメテ、ソノ上ニ小サナマツノ木ヲウエマシタ。
 うすらさむい 〔薄寒〕(形) 2 うすら寒い 〔一イ〕
 七九五 第四 潮干狩 〈略〉。大川を下つて行く舟の中はうすら寒い。
 十二三三 圖 私は今落日に對して、うすら寒い秋風を浴びながら、山鳩の聲さびしきベルダンの戦跡に立つてゐます。
 うすれゆく 〔薄行〕(五) 1 薄れゆく 〔一ク〕
 十一五八 立ちこめた砲煙の薄れゆくにつれて、先づ目に入つたのは、大きなふかの死體であつた。
 うそ 〔嘘〕(名) 1 うそ
 三八八 圖 「いいや、天人はうそをいひません。」
 うた 〔歌〕(名) 9 ウタ うた 歌
 ↓こもりうた・ふなうた・みうた・み
- かんとりうた
 三三二 〈略〉、いつもきげんよく
 うたをうたふぢいさんです。
 四八六 圖 オ花「扇ヲ持ツテ居ル人デスカ。アレハウタヲウタフ人ダサウデス。」
 六二六 木びきの力藏さんがうたをうたひながら、大きなのこぎりで板をひいてゐました。
 八二〇 圖 又まことに申しかねますが、當日祝の歌を一首いたゞきたうございます。
 九八五 何所からかにぎやかな歌が聞えて来る。
 九八七 赤いたすきを掛けた女たちがよい聲で歌をうたふと、〈略〉。
 十二九 娘の勇ましい行爲は、歌に歌はれ、其の肖像畫は到る處の店頭飾られた。
 十一八〇 圖 生れて潮に浴して、浪を子守の歌と聞き、千里寄せる海の氣を 吸ひてわらべとなりにけり。
 十二二六 さつきの歌の主であらう。
 うたいだす 〔歌出〕(五) 1 うたひ出す 〔一シ〕
 七二〇 三 にいさんが「我は海の子」をうたひ出して、丸山君が合唱した。
 うたう 〔歌〕(四・五) 14 ウタフ うたふ 歌フ 歌ふ 〔一ツ・一ハ・一ヒ・一フ〕
 二二七 「ユフヤケ コヤケ、アシタ

テンキニナアレ。」子ドモガ
大ゼイ、オモテデ一シヨニウタ
ツテキマス。

三134 あかちやんがなき出すと、
《略》、「《略》。」とかはいらしいこ
ゑで、子もりうたをうたひます。

三318 図 「からすのなかない日
はあつても、五一ちいさんがう
たはない日はない。」

三322 《略》、いつもきげんよく
うたをうたふちいさんです。

三337 《略》。「五一ちいさんの
うたふこゑがきこえます。」

四867 図 オ花「扇ヲ持ツテ居ル
人デスカ。アレハウタヲウタ
フ人ダサウデス。」

五297 圖 もえる木のめに春風吹けば、
《略》、人も来て見る、小鳥もう
たふ。

六166 木びきの力蔵さんがうたをう
たひながら、大きなのこぎりで板を
ひいてゐました。

八973 図 名古屋市ハ此ノ城アルニヨ
リテ名高ク、「尾張名古屋ハ城持
ツ。」ト歌ハレタリ。

九93 田 此の間も十ぐらゐの少女が
「君が代」をうたつてゐました。

九597 赤いたすきを掛けた女たちが
よい聲で歌をうたふと、《略》。

十1510 やがて暮近くなつたので、一
同は元氣よく團歌を歌ひながら、夕
日を浴びて歸途についた。

十293 娘の勇ましい行爲は、歌に歌
はれ、其の肖像畫は到る處の店頭
に飾られた。

十二108 図 げにや「めぐらせる青垣
山に、こもれる大和うるはし。」と
歌ひしにそむかず。

うたがい「疑」(名)3 ウタガヒ
うたがひ 疑

九1210 図 イヤ、其ノ人が當選スルコ
トハウタガヒナイガ、《略》。

十91 醫師は皆、投藥してもし萬一
の事があれば、毒殺のうたがひを受
けはしないかと恐れて、《略》。

十一203 《略》、裁判所は、犯罪の疑
のある者を十分に取調べて適當公平
な裁判をする。

うたが・う「疑」(五)1 疑ふ「一
フ」

十二686 王は自分の耳を疑ふかのや
うに目を見張つた。

うたがわけんずい「宇田川玄隨」(人
名)1 宇田川玄隨

九285 信淵は《略》、間もなく江戸
へ出て、宇田川玄隨・大槻玄澤など
の人々をたよつて、一心に西洋の學
問を勉強した。

うたがわしい「疑」(形)1 うたが
はしい「一イ」

八401 図 其の方の申す所では、どう
やら其の地蔵がうたがはしい。

うち「内」(名)177 ウチ うち 中
内 ↓おじさんのうち・そのうち・わ

たくしのうち

一383 オチヨサンノウチデハ、
オザシキニアカリガツイテキ
マス。

二196 コチラノクライモリノ
中ニミエルノハ、ドコノウチ
ノアカリデセウ。

二645 私ノウチニハオヤ牛ト
子牛ガキマス。

三57 メンドリハ《略》、見デキ
ルウチニ、タマゴヲハラノ下
ニダイテシマヒマシタ。

三105 圖 うちの子ねこは かは
いい子ねこ、《略》。

三113 圖 うちの子ねこは かは
いい子ねこ、《略》。

三218 二人がびつくりして見て
ゐますと、それは小二郎のう
ちのいぬでした。

三236 小二郎がうちへかへつて
みますと、犬は《略》、かけて
きてとびつきました。

三342 いつかうちのおとうさん
が道で、「《略》。」とおつしやつ
たら、《略》。

三435 うらしまはおもしろがつて、
うちへかへるのもわすれてゐ
ましたが、《略》。

三456 うちへかへつてみると、
おどろきました、《略》。

三457 《略》、うちもなくなつて
ゐて、村のやうすもすつかり

かはつてゐます。

三584 見デキルウチニ、チデン
デキタハネモダンダンノビテ、
色モシダイニコクナツテキマ
シタ。

三658 私ノウチヘキノフヲケ
ヤガ來テ、手ヲケヤトラヒノ
タガヲカケカヘマシタ。

三702 今日 は うちの虫ほしで
す。

三776 夕はんがすむと、うちの
ものはみんなえんがはへ出ま
した。

四166 おひるすぎに、をばさんの
うちからおとよさんと太郎
さんが來ましたので、《略》。

四48 私のうちには柿の木
が五本あります。

四221 山一つむかふの村にを
ぢさんのうちがあります。

四224 をぢさんのうちでは、に
はいいもみがほしてあつて、
足のふみばもないくらゐでし
た。

四226 をぢさんのうちでは、
《略》。うちの人はみんなたん
ぽへ出て、おばあさんが《略》。

四281 《略》大きな店はいくつ
も電とうをつけました。《略》。

四286 電話も近い中に私ども
の町へかかるさうです。

四三^一7 うちへかへつて、父にこのことを話しますと、〈略〉。
 四四^一4 昨日はうちのすすきはきでした。
 四六^一4 〈略〉、家の内も外もきれいになつて居ましたので、みんながほめられました。
 四六^一7 友一のうちでかるた取がはじまつて居ます。
 四七^一7 私ノウチデハ此ノゴロ土ザウノフシシガハジマツテ居マス。
 四七^一8 私のうちに山がらが一羽かつてありました。
 四八^一6 どんなにか鳴いたのでせうが、うちのものは朝までしらずに居ました。
 四九^一4 〈略〉、ドナタノウチニモ、ナカマノモノガ大テイ行ツテ居マス。
 四九^一7 せいの高い私の目にも、まだお日様が見えない中から、くはやかまを持つてたんぼへ行きました。
 五〇^一2 〈略〉、小さなわらぶきのうちへかへつて行きました。
 五〇^一6 〈略〉、稲も麥もよそのよりはよく出来ました。それでだんだんうちがよくなりました。
 五一^一8 あのうちは此の上よくなるばかりでせう。
 五二^一3 それは西の村で、一番

目の金持だといはれたうち
 に生れた人のでした。
 五二^一6 此の人は〈略〉、大きくなつても、うちの仕事もせず、ゐぼつてばかり居ました。
 五三^一7 園 もう此の子一人になりましたのに、近い中に又其の大蛇がたべにまゐります。
 五三^一2 うちへかへつて、ふろしきを明けて見ましたら、〈略〉。
 五三^一1 こんな所にと思ふやうな村外れに、家が一けん立つてゐます。これが私のうちです。
 五四^一6 うら一めんの林は私のうちのもので、此のごろは栗の花がたくさんさいてゐます。
 五四^一5 園 〈略〉、うちのまはりのうめ・もも・さくら、かはるゝに花さきみだれ、〈略〉。
 五五^一8 園 うちの前には小川が流れ、舟もうかべば、あひるもうかぶ。
 五五^一4 私の中の表通は〈略〉。
 五五^一3 此の時の氣もなく自分のうちを見て、その小さいのおどろきでした。
 五六^一4 私のうちの右どなりは小間物屋で、左どなりは時計屋です。
 五六^一8 昨日からうちの蠶が上りはじめました。
 五六^一2 園 うちの繭もあの工場で生絲になつたはずだ。
 五六^一4 園 うちの方では、田に水がな

いと言つて、さわいでゐますのに、此の村にはよく水がありますね。
 五八^一2 園 〈略〉、うちには大した事もありませんでした、中々のさわぎでした。
 五八^一8 園 〈略〉、うちでも下の雨戸がたふれて、中からうすやたらひがぼかばか流れ出すほどで、〈略〉。
 五八^一2 園 うちでも一時は飲水やたべ物にこまりましたが、今ではあとかたづけも大がいすみました。
 五九^一5 叔父サンノウチニモ、ブダウ棚ガゴザイマス。
 五九^一7 ウチノブダウトハ種ガチガフノダサウデス。
 六〇^一16 今日はずの者がみんなたんぼへ稲こぎに行きました。
 六〇^一24 今どこのうちへ行つて見ても、俵の山が出来てゐます。
 六一^一5 うちでも土間に丸太を置いて、其の上につんであります。
 六一^一4 園 「左足が沈まない中に右足を出し、右足が沈まない中に左足を出し、右足が沈まない中に左足を出し。」
 六一^一2 園 「左足が沈まない中に右足を出し、右足が沈まない中に左足を出し。」
 六一^一5 叔父サンニ蛙ノ話ヲ聞イタカラ、ワスレナイ中ニ書イテ置カウ。
 六一^一2 十二人いるうち、十一人まではありましたが、あとの一人がありません。

六二^一8 やがてうばをも呼入れて、三人は其の夜をなみだの中に明かしました。
 六三^一7 園 あの學校がたつた時、うちの畠にあつたのを、死んだあの子が掘取つて、かついで行つて植ゑたのだ。
 六四^一4 うちの人はみんな知らずに居るから、一つ取つて行つて見せようと思つて、手を出すと、〈略〉。
 六四^一8 園 うちにも村にも、かはつた事はありません。
 六五^一2 園 地球の上には大小合はせて六十餘國あり。其の中我が大日本帝國と、〈略〉を世界の五大強國といふ。
 六五^一9 さて、心の中に、〈略〉と念じて、〈略〉。
 六六^一7 園 人口はおよそ十一萬、其の日本人は五萬人、支那人は六萬人ですが、〈略〉。
 六六^一3 園 うちのことはしんぱいするな。
 六七^一8 トンテンカン、トンテンカント、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音ガ聞エマシタ。
 六七^一9 何時カ私ノウチノツルベノ金タガガコハレタ時、〈略〉。
 六八^一9 園 皆さんのうちには、大きくなつてから、商用其の他で、外國へ出かける人もありませう。
 六八^一9 園 「しばらく、うちのおばあ

さんにおなりなさい。」

七〇二 秀吉が之を聞いて、「略」と心の中で喜びました

七二九 略、うちの屋がうのカネキを入れて、此の頼信紙に書きこんでござん。

八二九 或日炭を焼く男が太郎のうへ来て、ゐるりのはたでいろくの話をした。

八三六 山野に生ずる草木の中には、薬用にするものが多くありますが、其の中貴重なもの一つは朝鮮人蔘です。

八四二 いよくにいさんがつき出した。始のうちは勢がよかつたが、略。

八五五 おしまひの一日には、小豆やきな粉をつけて、うちでもたべ、近所へも配つた。

八七二 うちには何事もないさうで安心しました。

八七二 是非今日のうちに納めなければなりません。

八七九 「それをみんなうちで納めるのですか。」

八八〇 「どのうちでも、納める金高は同じですか。」

八八三 役場のひけないうちに行つて来よう。

八八三 もと僕のうちに奉公してゐた信吉が、昨日の朝三年ぶりでハワイから歸つて来た。

八八五 信吉にはおとよといふ今年十一になる女の子があるが、略、僕のうでで世話して、啞の學校に入れている。

八八九 略、大將の父はうす暗い中に大將を起して、往復一里餘もある高輪の泉岳寺へよく連れて行つた。

八八五 實に鐵は熱いうちにきたへなければならぬ。

八九四 いづれ又近い中に便りをしませう。

九一五 となりの内に入りて見るに、敷藁の中に見事なる卵二つころがれり。

九三〇 「此の坂を下りて、あの清水の所まで行くと、石井君のうちが見えるはずだ。」

九四八 においさん、昨日でうちの田植がすつかりすみました。

九四九 うちの事はすべて御安心下さい。

九五二 さて商賣を始めると、略、店はだんだん繁昌して、十年もたぬ中に、町でも屈指の財産家となつた。

九五二 うちのおぢいさんはあの人とは前から友だちだったので、略。

九五八 正一のうちの人たちに手つたひもまじつて、略、ばたんばたん

と穀竿で麥を打つてゐる。

九六三 数分の内に艦内はすつかり整頓する。

九八〇 うちの方をふりかへると、井戸端の柿の木に柿がすなりになつてゐるのが目につく。

九八二 近き中に頂上に上りたく候に付き、何日頃がよろしく候や、御知らせ下されたく、御願ひ申し上げます。

九八六 取引の成立つた馬は、其の日の中に買手に引渡されてしまひます。

九八八 村はづれにある、うちの雑木山を開墾し始めてから、もう一月餘りになる。

九八八 「朝のうちに此のけやきだけぶつ倒したいと思つてね。」

九八八 一年と過ぎ二年とたつうちに、其の日の暮しにも困るやうになつた。

九八八 お金といふものは、うちにしまつて置くものではない。

九八八 うちに置くと、火事にあつたり、盗人に取られたりする危険があるからね。

九八八 日の暮れない中に、一足も早くお出かけなさい。

九八八 とても明るいうちに山本まではお着きになれますまい。

九八八 一同謹んで承る中に、常世は有難さ身にしみ、喜にみちて御前を退きけりとぞ。

九八八 安全燈の取手を握りしめて、じつと目をつぶつてゐるうちに、何時の間にか、地下九百尺の坑底に着きました。

九八八 採炭坑夫は四人づつ一組になつてゐて、其の内の二人が石炭を掘崩すと、略。

九八八 幾度もくりかへしてゐる中に、太郎は生麥生米生卵。と、早口にすら言へるやうになつた。

九八八 綱を巻いてはのぼし、のぼしては巻いて、氣長くあしらつてゐるうちに、さすがの鯨も次第に弱つて、船から五十メートルぐらゐの處まで引寄せられた。

九八八 今日、のぶ子さんのうちへ始めて遊びに行きました。

九八八 琵琶湖のほとりに十三箇所のとりでを構へ、略。

九八八 十三箇所のうちなる大岩山のとりでより、略。

九八八 清秀は討死してとりでは落ち、戦は午前のうちに終りぬ。

九八八 直に組合ひたる二人の勇士、ねぢ合ひ押合ひ争ふうちに、清正やがて正國をねぢ伏せたり。

九八八 「地藏山の内、二町三段五畝、峯通り檜苗、其の他總べて杉苗。一坪一本の割。」

九八八 ぼんやりいろくの事を考へてゐるうちに、いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。

九八八 ゴム園の人は毎朝暗いうち

ききました。

九八八 採炭坑夫は四人づつ一組になつてゐて、其の内の二人が石炭を掘崩すと、略。

九八八 幾度もくりかへしてゐる中に、太郎は生麥生米生卵。と、早口にすら言へるやうになつた。

九八八 綱を巻いてはのぼし、のぼしては巻いて、氣長くあしらつてゐるうちに、さすがの鯨も次第に弱つて、船から五十メートルぐらゐの處まで引寄せられた。

九八八 今日、のぶ子さんのうちへ始めて遊びに行きました。

九八八 琵琶湖のほとりに十三箇所のとりでを構へ、略。

九八八 十三箇所のうちなる大岩山のとりでより、略。

九八八 清秀は討死してとりでは落ち、戦は午前のうちに終りぬ。

九八八 直に組合ひたる二人の勇士、ねぢ合ひ押合ひ争ふうちに、清正やがて正國をねぢ伏せたり。

九八八 「地藏山の内、二町三段五畝、峯通り檜苗、其の他總べて杉苗。一坪一本の割。」

九八八 ぼんやりいろくの事を考へてゐるうちに、いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。

九八八 ゴム園の人は毎朝暗いうち

ききました。

九八八 採炭坑夫は四人づつ一組になつてゐて、其の内の二人が石炭を掘崩すと、略。

九八八 幾度もくりかへしてゐる中に、太郎は生麥生米生卵。と、早口にすら言へるやうになつた。

に起きて、受持の木に此の切付をし
て廻る。

十一742 宣長はまだ三十歳餘り、温
和なひとりのうちに、どことな
く才氣のひらめいてゐる篤學の壯年。
十一744 だん／＼話してゐるうちに、
眞淵は宣長の學識の尋常でないこと
をさとつて、非常にたのしく思つ
た。

十一896 弟は尚あちらこちら暦をく
つてゐるうち、ふと「八十八夜」の
文字に目を止めて、「略」。

十一935 略、太陽暦とくひちが
つて來て、三年にならないうちに一
箇月の間をおかなければならない。

十一965 略、リンカーンは十歳頃
までは本を讀むことなどは殆ど出來
なかつた。唯通りがかりの旅人から
珍しい話を聞いては、僅かに心をな
ぐさめてゐた。かうしてゐるうちに、
知識を得たいといふ彼の欲望は益々
強くなり、「略」。

十一10010 リンカーンは其の本をてい
ねいに乾かして、其の後何度も／＼
讀返してゐるうちに、此の偉人の品
性に深く感化された。

十一1238 見てゐるうちに大きなフラ
スコが出來た。

十一1241 何が出来るであらうかと思
つてゐると、いろ／＼扱つてゐるう
ちに臺付のコップになつた。

十二543 ねぢは、これ等の道具や時

計をあれこれと見比べて、「略」と
考へてゐる中に、ふと自分の身のう
に考へ及んだ。

十二665 略 お前たちのうちで誰が一
番此の父を大事に思つてくれるか、
わしはそれが知りたいのだ。

十二713 二週間もたゝぬ中にもう王
に無愛想な仕向をした。

十二719 ところがリガンは、「略」、
すげなくも王を内に入れなかつた。

十二934 師を求めてあちらこちらさ
まよつてゐるうちに、マガダ國の首
府王舎城の附近に來た。

十二1074 かくて又幾年かたつうちに、
穴はだん／＼奥行を加へて、既に何
十間といふ深さに達した。

十二1083 略、老僧の命のあるうち
に其の志を遂げさせると共に、「略」。
十二10810 かうして又幾年か過すうち
に、村の人々は此の仕事にあきて來
た。

十二1215 略 毎晩賣上高の勘定を致
す時など、仲間のうちにて計算は私
が一番達者なりとて、何時もほめら
れ申候。

うち 「打」 しいつきうち・えだうち・
かたきうち・くみうち・なみうち・
わ・ねうち・はさみうち・むぎうち
うちあ・う 「打合」 (五) 1 打合ふ
「一ツ」

十694 略、眞先かけて敵の大軍
に割つて入り、これぞと思ふ敵と打

合つて、あつばれてがらを立てるか
く。

うちあわ・せる 「打合」 (下二) 1 打
合はせる 「一セ」

十一667 それから少し進むと、石や
金を打合はせて火を出す法を考へる
やうになつた。

うちうなず・く 「打領」 (四) 1 うち
うなづく 「一キ」

十648 略、「お連れ申しはしたが、
差上げる物はあらうか。」「栗飯なら
ございませうが。」主人はうちうなづ
きて出來り、僧に向ひて、「略」。

うちうみ 「内海」 (名) 2 内海
十一327 略 此の四海峽に包まれたる
細長き内海を瀬戸内海といふ。

十一348 略 内海の沿岸及び島々には
名勝の地少からず。
うちおとす 「打落」 (五) 2 ウチオ
トス 「一シ」

十二124 マタキリツケルト、トビノ
イテ、ペンケイノナギナタヲウ
チオトシマシタ。

十二135 木ノエダニ、コトリガ
十バトマツテキマシタ。人ガテ
ツパウデ、一ドニ三バウチオト
シマシタ。

うちおろ・す (四・五) 2 打下す 「一
ス・一セ」
七317 略 武士は太刀をぬきて馬より
とび下り、満身の力をこめて、蛇の
胴中目がけて打下せば、「略」。

九601 分家の金次叔父さんは、軍隊
歸のたくましい腕で、すとい／＼と
打下す。

うちかえ・す 「打返」 (五) 3 うちか
へす 打返す 「一ス」

五953 略 一足々々、遠い所へ進み行
き、一／＼／＼、廣いたんぽをう
ちかへす。

十268 打返す磯波にまき込まれたか
と思へば、忽ち大波にゆり上げ、ゆ
り下げられながら、沖へ／＼とつき
進む。

十273 打ちよせる大波、打返すさか
波、危く岩に打付けられ、忽ち死の
口に吞まれようとする。

うちかた・める 「打固」 (下二) 1 打
固める 「一メル」

八315 略、又其の上になつたかま
土を置いて、打固める。
うちがわ 「内側」 (名) 1 内がは

九58 略 實の中にはかたい殻があつ
て、其の内がはに白い肉のやうなも
のがあります。

うちくだ・く 「打砕」 (四) 1 打ちく
だく 「一ク」

九141 略 物置の前なるあき箱より、
し／＼の殻を取出し、細かに打ちく
だく。
うちしず・む 「打沈」 (四) 1 打沈む
「一ミ」
十608 略 感がいに打沈みてと／＼と
歩を運ぶ。

うちじに「討死」(名) 1 討死

十二137 10 〈略〉古の武士が玉とくだける討死を無上の名譽としたのがそれである。

うちじに・す「討死」(サ変) 1 討死す「一シ」

十一24 10 〇 〈略〉清秀は討死してとりでは落ち、戦は午前のうちに終りぬ。

うちじに・する「討死」(サ変) 1 討死する「一サ」

七18 7 〇 「大將も討死されました。」

うちじゅう「内中」(名) 5 うち中

五47 7 今日のお晝頃はうち中、目がまはるほどいそがしうございました。

六102 5 しやうぶ湯を立ててうち中の者がはいつた。

七16 2 〇 昨日おかあさんにするすをしていただいて、うち中の者が潮干狩に参りました。

八113 9 大將が何か食物の中にきらひな物があると見れば、〈略〉大將が馴れるまで、うち中の者がそればかり食べるやうにした。

九48 6 〇 うち中が丈夫で、仲よく

かせぐ、こんな仕合なことはない。

うちす・ぐ「打過」(上二) 3 打過ぐ「一ギ」

十一41 6 〇 久しく御無音に打過ぎ、失禮仕候。

十一107 10 〇 森林地開墾の様子を觀察致居候ため、しばらく無沙汰に打

過ぎ候。

十二119 4 〇 誠に御無沙汰に打過ぎ、申しわけもこれな候。

うちだい「打台」(名) 2 打臺

九56 8 正一の家でも、親子三人、庭にすゑた打臺の前に並んで、麥を打つてゐる。

九57 1 〈略〉両手で根本の所をつかんで、打臺にぱたくとたゝきつけると、莖の先についてゐる穂が、〈略〉飛散る。

うちだ・す「打出」(五) 2 うち出す打出す「一サ・一シ」

五85 6 〇 〈略〉間もなく火の見で半しやうをうち出しました。

十115 10 其の時、二番もりが打出された。

うちつ・ける「打付」(下二) 2 うちつける打付ける「一ケ」

八77 1 此の時コロンブスは、こつんと卵のはしを食卓にうちつけ、何の苦もなく立てて申しました。

十27 4 打ちよせる大波、打返すさか

波、危く岩に打付けられ、忽ち死の口に吞まれようとする。

うちつづ・く「打続」(四) 2 うちつづく打續く「一ク」

十二5 7 〇 やがて打續く松並木の間を過ぎて境内に入り、先づ拜殿の前にぬかづく。

十二103 2 〇 そのかみ金殿玉樓相望みてうちつづく都大路を、大宮人の櫻

かざし紅葉かざして往來しけむ、

うちつづ・ける「打続」(下二) 1 打續ける「一ケル」

九60 3 男も女もひたひの汗を、ほこりだらけの腕でふきながら、にぎやかに打續ける。

うちつれゆく「打連行」(四) 1 うち連れ行く「一カ」

十一12 4 〇 いざや、我が友うち連れ行かん。

うちつ・れる「打連」(下二) 1 打連れる「一レ」

八8 3 二番太鼓の「並べ」のあひづに、五人の騎手は打連れて、拜殿のそばの大きな立石の前に並んだ。

うちと・く「打解」(下二) 2 うちとく「一ケ」

九41 6 〇 昨日の敵は今日の友、語る言葉もうちとけて、我はたゝへつ、彼の防備。

十70 2 〇 始は〈略〉、〈略〉宿をことわりし常世も、一夜の物語にうちとけては、名残なく盡きず。

うちと・る「討取」(四・五) 2 うち取る討取る「一ツ」

四96 5 二人はすかさずうち取つて、十郎は二十一、五郎は二十、〈略〉めでたくのぞみをとげました。

十一31 7 〇 福島正則以下の六人、またそれ／＼に名ある勇士を討取つて、

武名を天下にとゞろかせり。

うちのこねこ「課名」 2 うちの子ねこ

三目5 四 うちの子ねこ
三10 4 四 うちの子ねこ

うちのる「打乗」(五) 2 うち乗る打乗る「一ツ」

七46 7 翌日武田方からは安間彦六といふ大の男が、物の具見事に着かざり、大の馬に打乗つて、上杉方の陣へ向つた。

十69 2 〇 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、〈略〉、やせたりともあの馬にうち乗つて一番にはせ参じ、〈略〉。

うちはらう「打払」(四) 3 打拂ふ「一ヒ・一フ」

十60 4 〇 折から、たもとの雪を打拂ひくく、此方へ來かかれるは、此

の家の主人なるべし。
十60 4 〇 折から、たもとの雪を打拂ひくく、此方へ來かかれるは、此の家の主人なるべし。

十64 1 〇 駒とめて袖打拂ふかげもなし、佐野のわたりの雪の夕暮。

うちゅう「宇宙」(名) 1 宇宙

十一3 7 つまり此の宇宙には、あの太陽のほかに、これと同じやうなものがなほ数限りもなく存在してゐるが、〈略〉。

うちよす「打寄」(下二) 1 打寄す「一スル」

十二9 5 〇 なぎさに立ちて昔をしの

べば、〈略〉、打寄する波の音さへ何事かを語るに似たり。

うちよせる 「打寄」(下二) 2 うちよせる 打ちよせる 《一セ・一セル》

六197 うちよせて来る波は、岩をかみ、小じやりをとばしては、さあつと引いて行きます。

十273 打ちよせる大波、打返すさか波、危く岩に打付けられ、忽ち死の口に吞まれようとする。

うちわ 「團扇」(名) 5 うちわ 團扇

ふぐんばいうちわ

六898 すると象は鼻で、其所にあつたうちは拾つて、子どもの顔をあふぎ出した。

八1064 うちをは造るにしても、時計を造るにしても、家を建てるにしても、皆これによるのである。

十一882 父は空をながめて、「略」

と、團扇を使ひながら言つた。

十二1138 図 〈略〉、ふと見れば机上に形珍しき一本の團扇あり。

十二1131 図 彼の眺め入りしは繪にあらず紙にあらず、實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

う・つ 「打」(四五) 30 ウツ うつ

打ツ 打つ 討つ 《一タ・一チ・一ツ・一ツ・一テ》

三677 ウレシクテタマリマセンノデ、ニハニ水ヲウツタリ、ウエ木ニ水ヲカケタリシマシタ。

四112 圖 おやはかへして、子は

くれうつて、廣いたんぼの麥まきすまず。

六241 不意を討たれた平家方は、上を下への大さわぎ、〈略〉。

六253 暗さは暗し、道はなし、平家方はにげ場がなくて、後のくりから谷へ、なだれをうつつ落ちました。

六877 みんな手をうつてかつさいした。

六946 或朝、夜明頃、城中からうつて出て、どつときと聲をあげた。

七439 信玄は不意を打たれておどろいたが、忽ち陣立をかへて、敵を引受けた。

七448 謙信は馬に一むちくれて、信玄の本陣に切りこみ、大太刀をふりかざして、信玄に打つてかゝつた。

七499 トンテンカン、トンテンカント、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音ガ聞エマシタ。

七504 歟ヲ打ツテキタコトモアリマス。

七506 ナタヲ打ツテキタコトモアリマスシ、車ノ輪ヲ打ツテキタコトモアリマス。

七507 ナタヲ打ツツテキタコトモアリマスシ、車ノ輪ヲ打ツツテキタコトモアリマス。

七944 〈略〉、風がだん／＼はげしくなつて来た。〈略〉。まして稲田は大波が打つ。

八521 圖 今四時を打つたばかりだ。

九566 今日天気がよいので、朝から麥を打つ音が方々で聞える。

九569 正一の家でも、親子三人、庭にすゑた打臺の前に並んで、麥を打つてゐる。

九592 〈略〉、七八人の男や女が向ひ合つて、〈略〉、ばたんばたんど穀竿で麥を打つてゐる。

十377 図 平生きはめて御質素にわたらせられし御有様、一つ／＼の御品の上にうかゞはれて、無量の感に打たれたり。

十214 図 〈略〉、掛の人が其の直で賣渡すといふあひづに手を打つて、取引が成立ちます。

十458 〈略〉彼は、目のさめるやうな柿の色の美しさに打たれて、もう立つても居ても居られなくなつたのである。

十1111 圖 二荒の山もと 木深き處、大谷の奔流 岩打つほとり、

〈略〉、ひねもす見れども あかざる宮居。

十1138 右に左に鯨を追ひつつ 〈略〉、破裂矢をしかけたもりを打つ。

十一249 図 されども不意を討たれし俄の軍に、清秀等の奮戦其のかひなく、〈略〉。

十一273 図 〈略〉秀吉は、持ちたる箸を投捨て、「すは勝つたるぞ。」と手を打つて喜び、〈略〉。

十一395 〈略〉、枝を打てば、山火事

の危険を防ぎ、又空氣の流通がよくなつて蟲がつかなくなるさうだ。

十一957 〈略〉、父が畠を打てば自分は種をまくといふ風にかひがひしく働いてゐた。

十一1096 圖 〈略〉、〈略〉大木を伐るに、三抱も四抱もあるものが地ひゞきを打つて倒る様、壯快言語に絶し候。

十一1112 圖 とき世をよそなるしづけき住居、出でては日毎煙を打ち、入りては机に書をひもとく。

十二419 きやうだいは唯うつとりとして感に打たれてゐる。

十二867 図 土人等怒りて林蔵の頭を打ち、強ひて酒を飲ましめんとす。

う・つ 「討」(四五) 4 うつ 討つ 《一タ・一ツ》

四967 〈略〉、十郎は二十一、五郎は二十、父がうたれてから十八年目にめでたくのぞみをとげました。

六976 〈略〉、〈略〉賊も、しまひには十萬騎に減じ、前後から官軍にうたれて、残少になつて退いた。

七488 圖 鬼神の如き彦六が、あれ程の小兵に討たれたは味方の不運。

十一235 図 〈略〉、柴田勝家、先づ佐久間盛政をして一萬五千の兵を率ゐ、近江の柳瀬に討つて出でしむ。

うっかり (副) 1 うっかり
十一696 末席に坐つてゐた僧は、そ

れが氣になつてしかたがない。うつかり口をきいてしまつた。

うつくし「美」(形) 8 うつくし

美し「シーキーシク」

八287図 又筆一本にて美しき繪をゑがき、〈略〉、人を感じしむるも、手の働なり。

九119図 昨日は美しきお話の本御送り下され、誠に有難く存じ候。

十901図 耕地整理のあとうつくし、並ぶ田の面に氷きらめき、〈略〉。

十一6110 畫がけるが如く美しき山の、或は右に或は左にあらはれるのは、サホロ嶽の連峯の一つであらう。

十二473図 もみ・つがは〈略〉用途甚だ狭し。されど何れも美しき光澤を有するが上に、〈略〉。

十二482図 中にもけやきはもくめ美しく、〈略〉。

十二1022図 〈略〉古の奈良の都は、そもく如何に美しく、如何に盛なりしぞ。

十二1038図 愛すべく美しき山野は、更に太古以來の歴史と結び文學と結びて、感じよく深きを覺ゆ。

うつくし「美」(形) 37 美シイ

美しい「イーイ・カッ・ーク」

三841図 〈略〉、松の木に美しい物が かつてゐました。

三848図 〈略〉、見たこともない美しい女が來ました。

五223 美しいびらで、一月も前から

廣告してゐた島屋の大賣出しは、いよく今日からはじまりました。

五284 庭さきのもみぢの木は、前の

川に美しいかげをうつしてゐます。

五607図 さてく、虹は美しい。

五963 二十四 ブダウ 〈略〉。フサ

く、ト下ツタウスムラサキノ實ハ、

美シイ玉ノヤウニ見エマス。

六98図 金や銀ハ美シクテ、オアシ

ニナツタリ、指ワニナツタリ、其ノ

外イロく、ナカザリ物ニナリマスガ、

〈略〉。

六516 頼朝は一目見た上と、萬じ

ゆを呼出しましたが、かほも美しく

すがたも上品に見えましたので、

〈略〉。

六708 〈略〉、川は昔のまゝに清く美

しく流れてゐます。

六737 ああ美しい友禪染は、もと此

の川べりで出來たのでございます。

七174 麥晶やなたね晶の間にさいて

ゐるのは、ことに目立つて美しい。

七182 色が美しい上に、姿がやさし

いので、つみ草の時には、誰も之を

取つて花たばにする。

七362図 〈略〉、此の頃は其の葉の美

しいさかりです。

七548図 けれども日の出や日の入に

は、日光が波にうつつて、水の色が

金色になりますし、月夜には波が銀

色に光つて、其の美しいことは何と

もいひやうがありません。

七824 指輪や襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアル

ノデアル。

八12 秋は山が美しい。

八17 〈略〉、日當りのよい所には、

つるうめもどきが美しい實をならべ

てゐる。

八34 〈略〉、見られない草に、眞赤

な美しい實が一つなつてゐました。

九66図 又パンの木も所々に美しい

林をつくつてゐます。

九82図 〈略〉、美しい海底のありさ

まが手に取るやうによく見えます。

九84図 青・緑・紅・紫、目のさめ

るやうに美しい魚の群が、珊瑚の林

や海藻の間をぬつて泳いで行く。

九191 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、

其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シイ色ドリガ

アルガ、〈略〉。

九212 例ヘバ 〈略〉、惡味ヤ惡臭ノ

アル蝶ノ羽ニハ美シイ色ドリガアル

ヤウナモノデアル。

九335 〈略〉、急にかん高い音を立て

て、美しい小鳥が二三羽、身がるに

枝移りした。

九913図 おかあさんのカリストは、

大そう美しい人だつたので、〈略〉。

九1006 其の隣の晶にしやうがが、根

ぎはの赤い所を少し土からあらはし

て、ぎやうぎよく並んでゐるのも美

しい。

十542 〈略〉、美しい羽毛に包まれた

圓い胸、鳩は見るからに愛らしいものである。

十10110 たくさん咲いてゐる中で一番

美しいのは、たれ下つた莖に、幾つ

も咲いてゐる薄紅色の花である。

十1037 成程、〈略〉葉もあれば、赤

や黄や青や紫のまだらの美しいのも

ある。

十10410 にほひのよいのや、色の美し

いのや、形のかはいらしいのや、

〈略〉、一枝髪にさしてみたい。

十1053図 どうだ、美しいだらう。此

の温室は 〈略〉、こんなに早く咲く

のだ。

十11810 白梅は今ちやうど眞盛りであ

るが、其の間に咲きかけの紅梅が

點々と交つて美しい。

十1239図 外の者は着物だけは美しか

つたが、爪の先は眞黒になつてゐる

者が多うございました。

十一1252 取分け美しかつたのは電燈

の笠で、赤・黄・紫・緑とりどりに

目もさめるばかりであつた。

十二318図 世界最美の街路といはれ

てゐるシャンゼリゼーの大通には、

五六層もある美しい建物が道路の兩

側に並び、〈略〉。

十二1343 其の上我が國の美しい風景

や温和な氣候は、〈略〉。

十二13410 温和な氣候や美しい風景は、

人の心をやさしくし、優美にはする

が、〈略〉。

うつくしさ 「美」(名) 6 美しさ

九69 園 いろいろの珍しい高山植物が紅・黄・紫と咲亂れて、何ともいられない美しさです。

十44 8 〈略〉、庭の柿の木には、すゞなりになった實が夕日を浴びて、

〈略〉かゞやいてゐる。喜三右衛門は餘りの美しさにうつとりと見とれてゐたが、〈略〉。

十45 7 〈略〉、目のさめるやうな柿の色の美しさに打たれて、〈略〉。

十46 2 しかしいくら工夫をこらしても、目ざす柿の色の美しさは出て来ない。

十77 7 殊に秋晴の美しさはかくべつで、〈略〉。

十二9 3 折から日は地平線に近づきて、雲も水も金色に輝き、美しさいふばかりなし。

うつしたてまつる 「移奉」(四) 1

うつし奉る 《一ル》

十130 2 元弘二年三月、北條高時、後醍醐天皇を隠岐にうつし奉る。

うつす 「写」(四) 1 寫す 《一シ》

十一104 4 園 略、繪巻書を〈略〉

送り申候。其の中に有名なアマゾン河や、イグアスの大瀑布の壯觀を寫したるものもこれあり候。

うつす 「映」(四・五) 3 うつつ

《一シ》

五28 5 庭さきのみぢの木は、前の

川に美しいかけをうつしてゐます。

六69 7 〈略〉、〈略〉おくげ様方や、

〈略〉お姫様方の姿を、此の川の水はいくたびとなくうつしたことでございませう。

十二100 1 興福寺は〈略〉、尚三重五重の塔、猿澤の池水に影をうつして南都第一の美觀たり。

うつす 「移」(四・五) 4 うつつ 移す 《一サ・一ス》

五47 4 十三 蠶 〈略〉。もう桑の葉をたべないで、頭を上げて、繭をかける所をさがします。それをひろつて、まぶしへうつすのですが、〈略〉。

十120 1 公は此處にうつされてから一歩も外へは出ないで、三年の歳月を送られたさうである。

十130 10 然るに今主上隠岐にうつされ給ふと聞き、高德一族共を集めていへるやう、〈略〉。」と。

十二89 3 かうして其の院で可決すれば、其の案を他院に移す。

うつたえる 「訴」(下) 8 うつた

へる 訴へる 《一ヘーヘル》

七74 9 男はしあんにくれて、役所へうつたへて出ました。

八35 9 幾年かの後、里子を返しても

らはうとすると、〈略〉返しませんが、

困つて町奉行へ訴へて出ました。

八39 6 目をさまして見ると、ふろし

きつみがありません。〈略〉。困つて町奉行へ訴へて出ました。

九110 8 北風は〈略〉、訴へるやうな

目付で主人の顔を見下し、左右の耳をそばだててみた。

十一19 3 其の場合に貸主から借主を裁判所に訴へると、〈略〉。

十一19 6 〈略〉を民事裁判といひ、

訴へた方を原告、訴へられた方を被告といふ。

十一19 6 〈略〉を民事裁判といひ、

訴へた方を原告、訴へられた方を被告といふ。

十一19 6 〈略〉を民事裁判といひ、

訴へた方を原告、訴へられた方を被告といふ。

十一20 6 〈略〉を刑事裁判といふ。

此の場合には訴へられた者が被告で、

検事といふ役人が原告に當るのである。

うって 「討手」(名) 1 討手

六22 7 木曾義仲が都へせめ上ると聞いて、平家はあわてて討手をさしむ

けました。

うっとり (副) 3 うっとり

十44 8 喜三右衛門は餘りの美しさに

うつとりと見とれてゐたが、〈略〉、

又窯場の方へとつて返した。

十二41 8 きやうだいは唯うつとりと

して感に打たれてゐる。

十二95 10 彼は此の心境の尊さに數日

の間唯うつとりとしてゐたが、〈略〉。

うつのみや 「宇都宮」(地名) 1 宇都宮

九68 3 園 「宇都宮」と驛夫の呼ぶ聲

に、〈略〉。

うつぶし 「俯」(名) 1 うつぶし

六35 3 義經は馬の上にうつぶしにな

つて、むちのさきでそれをかきよせ

ようとしています。

うつぼ 「歎」(名) 2 うつぼ

五79 6 義家はせ中のうつぼから、か

りまたをぬいて狐を追つかけてました。

五81 6 さて宗任がかりまたをぬき取

つて、義家にかへしますと、義家は

〈略〉、うつぼへさへしました。

うつぼかずら 「歎」(名) 1 うつぼ

かつら

十102 2 それから少し行くと、うつぼ

かつらといふものがある。葉の先か

らつるを出して、五六寸の細長い袋

をつるしてゐる。

うつむく 「俯」(五) 1 うつむく

《一イ》

十二68 4 コーデリヤは唯うつむいて、

「父上、私はどう申し上げてよいかわかりません。」

うつむけ 「俯」(名) 1 うつむけ

五53 8 或日山の中で、こけに足をす

べらせて、うつむけにたふれました。

うつり ↓えだうつりする

うつる 「移」(四・五) 7 うつる 移

ル 移る 《一ツ・一リ・一ル・一レ》

八98 5 園 〈略〉、船は次第に波間

に沈み、敵彈いよくあたりにし

げし。今はとボートにうつれる中

佐、〈略〉。

九44 4 園 それに此の邊一帶の島々は

我が國の支配に屬してゐるので、内

地から移つて来た人も多く、〈略〉。

九179 例へば雨蛙ハ緑色ノ葉ノ上ニ居ル時ハ緑色デアルガ、枯木ニ移レバ枯木ニ似タ色ニナル。

九542 図 さうして全く無一物になつて、親子三人町外れの裏長屋に移つてしまつた。

九976 お話が頂上のながめに移ると、いよくはずんで来て、〈略〉。

十一9410 〈略〉リンカーンは、〈略〉ケンタッキー州の片田舎の貧しい家に生れた。リンカーンが七歳の時、一家はインディアナ州に移つたが、〈略〉。

十二995 図 〈略〉、咲く花のにはふが如しと誇りし奈良の都も、色移り香失せて年既に久しく、〈略〉。

うつる 〔映〕 (五) 2 うつつ

《一ツ》

六703 〈略〉、〈略〉武士の刀や、なぎなたの光も、いくたびとなく此の川の水にうつつたことをごさいますえう。

七545 図 けれども日の出や日の入には、日光が波にうつつて、水の色が金色になりますし、〈略〉。

うつわ 〔器〕 (名) 3 器

八817 図 器にはしたがひながら、いはほをも とほすは水の力なりけり。

九143 図 くだきたる貝殻を器に入れてあたるに、これには餌の時のやうに集らず。

うに集らず。

九299 物すごいひびきは萬雷の如く、大地もふるひ、數百歩はなれた所でも、器に盛つた水が波紋を多かく程です。

うで 〔腕〕 (名) 4 うで 腕

三293 圖 足すべらせてこけかかるおととをかばふあねのうで。

六881 牙は象牙かひの腕よりも太かつた。

九601 分家の金次叔父さんは、軍隊歸のたくましい腕で、すといくと打下す。

九602 男も女もひたひの汗を、ほこりだらけの腕でふきながら、にぎやかに打續ける。

うでたまご 〔如卵〕 (名) 1 うで卵

八763 之を聞いたコロンブスは、つと立つて、食卓の上のうで卵を取り、〈略〉。といひました。

うでどけい 〔腕時計〕 (名) 1 腕時計

九1058 やがて中尉はちよつと腕時計を見て、いつものやうにすんだ聲で號令をかけた。

う・でる 〔茹〕 (下二) 1 うでる 《一デ》

四238 〈略〉、とだなからうでたくりをおぼんに一ぱい持つて来て下さいました。

うどん 〔饅飩〕 (名) 3 ウドン ヅゼン

八596 図 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、

〈略〉、せきぞ (キソバ)・すぜん

(ウドン)・あるま (シルコ)・あし (スシ)・勢んぞん (センペイ) ナドト記シテ、軒二下ゲタルモアリ。

八596 図 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、〈略〉、せきぞ (キソバ)・すぜん (ウドン)・〈略〉。

八60 図 ヅゼン

うながす 〔促〕 (五) 2 うながす 《一サ・シ》

十一1243 橋本君にうながされて、次の室にはいつた。

十二11510 諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力もだんく電氣に變つて、工業界の一大革新をうながしてゐます。

うなづく 〔頷〕 (四・五) 4 うなづく 《一イ・キ・ク》

七785 「寒からうが。」「少しも寒くはございません。」「寒くはない。」「はい。〈略〉。」「信長はかるくうなづいたが、〈略〉。

七1029 〈略〉。」「清正がいひますと、秀吉はうなづきました。

九811 図 看板が 往來の人の目につきて、〈略〉。「あゝ、あの角の石屋か。」と、誰もうなづく工場あり。

十二12910 安方は更に「〈略〉。」西郷はだまつてうなづいた。

うなだれる 〔項垂〕 (下二) 1 うなだれる 《一レ》

十二426 ベートーベンはひく手を止めた。〈略〉、清い月の光が〈略〉、ピアノとひき手の顔を照らした。しかしベートーベンは唯だまつてうなだれてゐる。

うなばら 〔海原〕 (名) 1 海原

十二41 図 海原はみどりに晴れて、濱松のこずゑさやかにふれる白雪。うなりごえ 〔唸声〕 (名) 1 うなり聲

十一641 トラクターは〈略〉、ガソリンの發動機が取付けてある。これが〈略〉、ものすごいうなり聲を立てながらのそりくと歩き廻ると、〈略〉。

うなる 〔唸〕 (四・五) 3 うなる 《一ツ・ーリ》

六195 風がひゆうつとうなつて来るたびに、濱の松は身をふるはせて、頭を地に着けさうにします。

六311 虎はうんくうなつて、かけまはるより外、どうすることも出来ません。

八271 図 軒下にはらばへる黒き犬 〈略〉。はをむきて、うゝとうなりて、垣を出て行く。

うね 〔畝〕 (名) 2 うね

十一635 畠にしても、〈略〉、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。

十一636 こんな廣い畠であるから、耕すにも、うねを作るにも、種を蒔くにも、大てい機械と馬の力による。

うねうね (副) 2 うねく

九32 6 しつとりとしめりを帯びた一すぢの道が、足もとからうねく／＼とつゞいて、〈略〉。

十一35 6 〈略〉、うねく／＼と續く岡が雨に煙つて、ぼんやりと遠く見える。

うねびやま 〔畝傍山〕〔地名〕1 畝傍山

十二103 5 〔畝傍山〕大和平野の盡くる處はるかに畝傍山・耳成山・天の香久山の三山まゆの如く、〈略〉山々連なるを見る。

うねり (名) 1 うねり

十112 6 昨夜の風雨は名残なくをさまつたが、海面にはまだ波のうねりが高い。

うねる (五) 1 うねる 《一ツ》

九35 5 〈略〉、大きな青大將が、向ふの水たまりの所をうねつて、のろのろと草の中にかくれて行く。

うば 〔乳母〕(名) 6 うば

六57 1 これが萬じゆの姫で、〈略〉、うばをつれて、鎌倉をさして上りました。

六57 8 〈略〉、それから頼朝の御殿へ行つて、うばと二人で御ほうこうをねがつたのでございます。

六60 5 萬じゆは其の夜ひそかにうばをつれて、石のらうをたづねました。

六60 7 うばを門のわきに立たせて置いて、姫は中はいりました。

六62 7 やがてうばをも呼入れて、三

人は其の夜をなみだの中に明かしました。

六63 1 これから後萬じゆは、うばと心を合はせて、折々らう屋をたづねては、母をなくさめて居りました。

うばいたてまつる 〔奪奉〕(四) 1 奪ひ奉る 《一リ》

十131 2 〔畝〕然るに今主上隠岐にうつされ給ふと聞き、高德一族共を集めていへるやう、〈略〉。いでや、行幸の路に待受け、君を奪ひ奉りて義軍を起さん。」と。

うばう 〔奪〕(五) 4 うばふ 奪ふ 《一ツ・一ハ》

六93 2 番兵がゆだんをしてゐると、城兵が切りこんで来て、旗をうばつて引上げた。

十46 6 工夫にばかり心をうばはれては、とかく家業もおろそかになる。

十68 3 〔畝〕佐野源左衛門常世と申して、もとは佐野三十餘郷の領主、それが一族ともに所領を奪はれて、〈略〉。

十71 8 〔畝〕さて一族ともに奪はれた佐野三十餘郷は、理非明らかなるによつて汝に返しあたへる。

うばもるとも 〔乳母諸共〕(名) 1 うばもるとも

六64 5 〈略〉、親子は、うばもるともに、喜び勇んで木曾へ歸りました。

うべ 〔宜〕(副) 1 うべ

十112 3 〔畝〕美術の光の かゞやく此の地、山皆緑に 水また清く、樂

園日本の たへなる花と、 とつ國人さへ めづるもうべぞ。

うま 〔馬〕〔課名〕2 馬

七目9 第八馬

七25 8 第八馬

うま 〔正〕ひのえうま・みずのえうま

うま 〔馬〕(名) 70 ウマ うま 馬

ひくらべうま・くろうま・こうま・こうまども・たけうま・たねうま・ばしやうま・はなれうま・ははうま・やせうま

一52 ウマガキマス。

一54 ウシトウマガキマス。

三23 3 そのとき正一のおぢいさんが、たぎぎをうまにつけてそこへきました。

四65 4 よ一は〈略〉、馬にまたがつて、海の中へのり入れました。

四67 3 をかの方では大しやうよしつねをはじめ、みんなが馬のくらをたたいてよろこびました。

六24 5 不意を討たれた平家方は、上を下への大さわぎ、〈略〉、人の馬には自分が乗り、自分の馬には人が乗り、〈略〉。

六24 6 不意を討たれた平家方は、上を下への大さわぎ、〈略〉、人の馬には自分が乗り、自分の馬には人が乗り、〈略〉。

六24 8 不意を討たれた平家方は、上

を下への大さわぎ、〈略〉、後向に乗る者もあれば、一匹の馬に二人乗る者もあります。

六25 5 〈略〉、馬の上には人、人の上には馬、かさなりかさなつて、〈略〉、平家の人馬で埋まりました。

六25 5 〈略〉、馬の上には人、人の上には馬、かさなりかさなつて、〈略〉、平家の人馬で埋まりました。

六35 3 義経は馬の上にうつぶしになつて、むちのさきでそれをかきよせようとしています。

六91 3 之をかこんだ賊は百萬騎といふ大軍で、城の四方二三里の間は、人や馬でふさがつた。

七19 8 義貞は馬から下りてかぶとをぬぎ、はる／＼と海上を拜しました。

七25 5 塚の前に馬頭觀世音とほつた石が立つてゐて、其の前に時時新しい馬のくつが上つてゐる。

七25 5 これは馬がけがをしないやうに、馬方が上げるのださうだ。

七25 9 馬はたいそう元氣のよい動物で、生れた日からすぐ歩く。

七27 1 畠山重忠はひよりごえのさか落しに、馬をしよつて下りたといふし、〈略〉。

七27 2 〈略〉、近くは乃木大將も、馬は煉瓦造の小屋に入れて置かれたのである。

七27 4 馬の高さは前足の所ではかる。

七27 8 我が國の馬は〈略〉、せいも

低く、體格もおとつてゐたが、〈略〉、大いに改良されて、いたる所に良馬を見るやうになつた。

七二八 我が國の馬は西洋諸國の馬にくらべると、せいも低く、體格もおとつてゐたが、〈略〉。

七三九 武士の馬はおどろきて、後足にて立上り、おそれて其所に近づかんとせず。

七四〇 武士は太刀をぬきて馬よりとび下り、満身の力をこめて、蛇の胸中目がけて打下せば、〈略〉。

七四一 謙信は馬に一むちくれて、信玄の本陣に切りこみ、大太刀をふりかざして、信玄に打つてかゝつた。

七四二 力一はいに謙信の馬をなぐりつけた。

七四三 馬はおどろいてとび上つたので、信玄はあぶない所を助かつた。

七四四 翌日武田方からは安間彦六といふ大の男が、物の具見事に着かざり、大の馬に打乗つて、上杉方の陣へ向つた。

七四五 上杉方からは小さな馬に乗つた小さな鎧武者が一人あらはれて、〈略〉。と名のつた。

七四六 二人はたがひに馬を乗りよせて、馬上のまゝでむんずと組み、兩馬の間にどうと落ちた。

七四七 信長はよく夜明前から馬場へ出て馬を乗りならした。

人々につきそはれ、しづ／＼と馬を歩ませて、鳥居の中に集つて來た。

八八五 馬の頭をそろへて、三番太鼓を今やおそしと待ちかまへてゐる。

八八七 三番太鼓が鳴るが早いか、五匹の馬は一さんかけ出した。

八九七 〈略〉、中程まで行つた時、信作の馬はつまづいて、前足を折つた。

八四四 耕造は驚いて、ひらりと馬からとび下り、〈略〉。

八五五 信作が落ちたのかまはず馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、〈略〉。

八八六 其の時大將は江戸から大阪まで、馬やかごに乗らず、兩親と共に歩いて行つた。

九四三 又コ、二匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、〈略〉。

九四四 其ノ五人ハ、各其ノ馬ガ他人ノ手ニ渡ランコトヲ恐レテ、争ヒテ高キ價ヲツク。

九四五 かくて價ハ次第ニ高クナリテ、馬ハ最も高キ價ヲツケタル人ノ物トナル。

九四六 之ニ反シテ、同ジヤウナル馬五匹アリ、〈略〉。

九四七 五人ノ持主各其ノ馬ノ賣レザランコトヲ恐レテ、争ヒテ價ヲ下グ。

九四八 かくて價ハ次第ニ安クナリテ、最も價ヲ下ゲタル持主、其ノ馬

ヲ賣ルコトナル。

九五〇 此の邊から野邊あたりまでの間には、所所に放し飼の馬の群れてゐるのが見えた。

九五二 黒・白・茶色、大小さま／＼の馬が、林のかげや沼のほとりを元氣よくかけ廻つてゐる様は、實に勇ましい。

九五四 兵士たちはめい／＼馬のそばに立つて、今かくと命令の下るのを待つてゐた。

九五六 馬はどれも皆張りきつて、くつわをかんだり、前がきをしたり、頭をふり上げたりしながら、乗手のあひづが下るのを待ちかまへてゐた。

九五七 人はいよく／＼勇み、馬はますます／＼はやる。

九六〇 だん／＼市場に近づく、本通も横町も皆馬でいっぱいです。

九六一 なれない私は、〈略〉、やはり馬のそばを通るのが危険なやうな氣がしてならなかつたが、〈略〉。

九六二 馬も誠に従順で、けたりかみついたりするやうな事は決してしません。

九六三 こんなかはいがられて居れば、馬も従順で人になつくわけだと、しみ／＼思ひました。

九六四 取引の成立つた馬は、其の日の中に買手に引渡されてしまひます。

九六五 これ等の馬が日本全國に散

らばつて、或は軍馬になり、或は馬車馬になり、或は耕馬になるのださうです。

九六六 賣つてゐる菓子もおもちゃも、多くは馬にちなんだ物で、〈略〉。

九六七 店の看板にも馬がかいてゐるのがよく目につきました。

九六八 成程、此の邊は馬でもつてゐる處だと思ひました。

九六九 これに具足一領、長刀一ふり、又あれには馬を一匹ないでもつてをります。

九七〇 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、〈略〉、やせたりともあの馬にうち乗つて一番にはせ參じ、〈略〉。

九七一 二三十匹の馬がまぐさをつてゐます。

九七二 坑内に馬が居るのは不思議だと思つて、聞いてみると、〈略〉。

九七三 炭車ががいになり、馬方がそれを馬に引かせて、電氣機關車の通ふ道まで運んで行きます。

九七四 新道つたひ車重げに ひき來る馬のつく息白し。

九七五 幾頭かの馬をひきて余吾湖のほとりに下り來れる七八人の兵卒あり。

九七六 水際に寄つて馬の足を冷さんとする折しも、〈略〉。

九七七 秀吉は、〈略〉、「者ども續け。」と馬にむちうつて近江

に向ふ。

十一605 見渡す限り果もない原野に、放牧の馬や牛がいうく／＼と草をはむ様や、〈略〉。

十一637 こんな廣い畠であるから、耕すにも、うねを作るにも、種を蒔くにも、大てい機械と馬の力による。

十一1181 農場主はせつかよく出来てゐる麥を、たくさんの馬や犬にふみあらされてはたまらないと思つて、〈略〉。

十二716 王は胸も張裂けんばかりに怒り、早速馬にむちうつて次女リガンの許に走つた。

うまい「甘」(形) 13 ウマイ うまい「イ・イ・ク」

二362 ヤハ ウマク アタリマシタ。

三547 わかいとき字をならひました、うまく書けませんので、こまつてゐました。

三673 池ノ水 デタメシテミルト、ウマク 出来テ キテ、高ク上ゲルト、ヤネノ上 マデ トドキマス。

三692 サウシテセンヲヒキマシタガ、水ガウマク ハイリマセン。

四156 〇オマヘタチ ハウマクワタシニダマサレタナ。

五754 人の一心といふものはえらいもので、三度目に土手の工事はうまくいった。

六955 ふみとどまつてゐたのは、み

んな菓子人形であつた。賊はうまくはかられたのである。

九63 〇 まだ十分にじゆくしてゐない實は、中にきれいな水があります。これがなか／＼うまいもので、私たちもよく取つて飲みます。

九198 シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出来テキルノハ、印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。

九666 一時間餘りも活動した後であるから、食事のうまいことはいふまでもない。

十539 〇 「〈略〉。貸附の利子は預金の利子より高くしてあるから、其の差だけが銀行の収入になるのだ。」

「成程、うまく出来たものですね。」

十一1241 〈略〉、いろ／＼扱つてゐるうちに臺付のコツプになつた。實にうまいものである。

十二376 〇 あゝ、あれは僕の作つた曲だ。聴き給へ。なか／＼うまいではないか。

うまいち「馬市」(名) 1 馬市

十166 〇 ちやうど此の頃、此所の名物の馬市が始つてゐるといふので、今日は朝から、〈略〉見物に行きました。

うまいちけんぶつ「馬市見物」(課名)

2 馬市見物

十目5 第四 馬市見物

十162 第四 馬市見物

うまうま (感) 1 ウマウマ

二265 ワタクシガアヤシテアゲルト、ミヨチャンハ〈略〉、ウマウマトイヒマス。

うまかた「馬方」(名) 2 馬方

七256 これは馬がけがをしないやうに、馬方が上げるのださうだ。

十844 炭車が一ぱいになると、馬方がそれを馬に引かせて、電気機關車の通ふ道まで運んで行きます。

うまつなぎば「馬繫場」(名) 2 馬つなぎ場

十179 〇 廣さは二町四方ぐらゐで、せり場を中央にして、其の周圍は馬つなぎ場になつてゐます。

十183 〇 まだせりが始るの間にあらるといふので、馬つなぎ場を見て廻つたが、〈略〉。

うまや「馬屋」(名) 2 馬屋

十825 其のうちに馬屋の前に出ました。二三十匹の馬がまぐさを食つてゐます。〈略〉、これは石炭を運ぶために飼はれてゐるのださうです。

十829 馬屋の前を通つてだん／＼奥深く進むと、いよいよ石炭を掘つてゐる處へ來ました。

うまゐる「生」(下二) 4 生る「一レ」

十1073 〇 〇 私とてもかはゆらしきめひの生れ候と聞きては、何よりうれしく、一日も早く御顔を見たく存じ候。

十1257 〇 村長は村の舊家に生れ、

〈略〉。

十一48 〇 孔子は今より凡そ二千五百年前、當時の魯即ち今の山東省の地に生れたり。

十一805 〇 〇 生れて潮に浴して、浪を子守の歌と聞き、千里寄せる海の氣を吸ひてわらべとなりにけり。

うまれ 〇 おんうまれ

うまれつき「生付」(名) 1 生れつき

十二102 九歳の時始めて學校にはいつたが、餘りすばしい生れつきでなかつたので、〈略〉。

うまれつき「生付」(副) 3 生れつき

八835 信吉にはおとよといふ今年十一になる女の子があるが、生れつき咄なので、〈略〉。

十二653 生れつき烈しい氣性の上に、年とともに老の氣短さが加はつて、〈略〉。

十二911 釋迦は生れつき同情の念に厚く、何事も深く考へ込むたちであつた。

うまゐる「生」(下二) 12 ウマレル

生レル 生れる「一レ」

一467 〈略〉、モモガニツニワレテ、ナカカラオホキナヲトコノコガウマレマシタ。

二647 子牛ハコノアヒダウマレタノデス。

四53 これは私が生れた年、おぢいさんが私のぶんにつき

木をして下さつたのださうです。

四七三 〔略〕、東の村や西の村に、人が生れたり、死んだり、〔略〕、水が出たりしたこと〔略〕。

四七四 それは西の村で、二番目の金持だといはれたうちに生れた人でした。

六四二 〔略〕、フシギニ自分ノ生レタ川へ歸ツテ來ルサウデ、〔略〕。

七二五 馬はたいそう元氣のよい動物で、生れた日からすぐ歩く。

一七七 昔ヨーロッパにアレクサンドル大王といふ王があつた。マケドニヤといふ小さな國の王子と生れ、〔略〕。

一四八 〔略〕リンカーンは、今から百年餘り前、ケンタッキー州の片田舎の貧しい家に生れた。

一三九 八 チャールス、ダーウィンは今から百年餘り前イギリスに生れた。十二九〇 釋迦は〔略〕、北インドのヒマラヤ山のふもとカピラバスト王國の太子として生れた。

一三二 九 五 人は何の爲に此の世に生れて來たのか。

うみ 〔海〕〔課名〕 2 海

六目六 第五 海

六四二 第五 海

うみ 〔海〕(名) 78 海 じうちうみ・なかのうみ・よこのうみ・われはうみ

のこ

三四八 うらしまは〔略〕、子どもからそのかめをかつて、海へはなしてやりました。

三四三 〔略〕、かめはだんだん海の中へはいつていつて、まもなくうゆうぐうへつきました。

三四五 うらしまは玉手箱をもらつて、又かめのせ中にのつて、海の上へ出てきました。

三三七 あまりけしきがよいので、れふしがぼんやりと海をながめてゐました。

四二四 島ニキタ 白ウサギガ、〔略〕、海ヲワタルクフウヲシテキマシタ。

四一三 〔略〕ソレナラ海ノ水ヲアビテ、ネテ居ルガヨイ。

四一六 白ウサギハスグ海ノ水ヲアビマシタガ、〔略〕。

四一四 〔略〕「日は山から出て、山へはいる。」〔略〕「いや、海から出て、海へはいる。」

四一三 屋島のたたかひに、げんじはをか、へいけは海で、向ひあつて居ました時、〔略〕。

四六五 よ一は〔略〕、馬にまたがつて、海の中へ入れました。

四六四 海の方でもへいけ方がふなばたをたたいて、一度にど

つとほめました。

四八二 トンネルを出て、海を見下した時には、いつ見てもよいけしきだと思ひました。

五五三 カウシテ流レル水ハ、ミゾカラ小川へ、小川カラ大河へ、流れくテ海へ行キマス。

五五三 ことにしほのみちた時は、社殿や廻廊が海の中に浮いて、〔略〕。

五五九 社前の海に、日本一の大鳥居があります。

五九七 ちりがつもつて山となり、しづくがよつて海となる。

六二四 冬の海には、よくこんなことがあります。

六二二 空もみどり、海もみどり、空につゞく海のみどり、海につゞく空のみどり、すみきつて、かゞみとかゞみ。

六二一 空もみどり、海もみどり、空につゞく海のみどり、海につゞく空のみどり、すみきつて、かゞみとかゞみ。

六二四 空もみどり、海もみどり、空につゞく海のみどり、海につゞく空のみどり、すみきつて、かゞみとかゞみ。

六三五 屋島の合戦に、義経が小わきにはさんでゐた弓を海へ落しました。

六四七 〔略〕「海の上でも歩けさうだ。」

足を出す。」

六四五 鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ魚デモアル。

六四七 其ノワケハ、川デ卵カラカヘツテ、海デ大キクナルカラダ。

六四六 大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬ニカケテ、海カラ川ヘ上ツテ來ル。

六四五 サウシテ外ノ魚ガ其所ヘ來ナイヤウニ、シバラク其ノアタリニ番ヲシテキテ、ソレカラ海ヘ歸ル。

六四八 翌年ノ春ニナツテ、卵カラカヘツタ鮭ハ、川ヲ下ツテ海ヘ行ク。

六四八 〔略〕、一夜大暴風雨がおこつて、海はわきかへつた。

六八二 敵の船はこつぱみぢんにくだけて、敵兵は海のそこに沈んでしまつた。

七一四 地球の表面には、海と陸とありて、海の廣さはおよそ陸の二倍半なり。

七一四 地球の表面には、海と陸とありて、海の廣さはおよそ陸の二倍半なり。

七一六 海を分けて太平洋・大西洋・印度洋とし、〔略〕。

七二二 潮がずんく下がるので、舟はすすと進んで、たちまち海へ出た。

七二五 僕が一番先に海へ下りた。

七三二 潮がすっかり落ちて、海はをかのやうになつた。

七五八 川口にかゝつた時ふりかへつ

をかつて、海へはなしてやり ました。	うらしま太郎
三412 それから二三日たつて、 うらしまが舟にのつてつりを してゐますと、〈略〉。	三397 むかし うらしま太郎とい ふ人がありました。
三421 うらしまがよろこんでか めにのると、かめはだんだん 海の中へはいつていつて、ま もなくりゆうぐうへつきました。	うらて 「裏手」(名) 1 うら手 五866 囲 うら手で助けてくれ助けて くれと呼ぶこゑが聞えましたが、 〈略〉、どうすることも出来ませんで した。
三426 りゆうぐうのおとひめは うらしまのきたのをよろこん で、〈略〉。	うらながや 「裏長屋」(名) 1 裏長屋 九542 図 さうして全く無一物になつ て、親子三人町外れの裏長屋に移つ てしまつた。
三434 うらしまはおもしろがつて、 うちへかへるのもわすれてゐ ましたが、そのうちにかへりた くなつて、おとひめに「〈略〉。」 といひました。	うらみ 「恨」(名) 2 うらみ 〴〵みう らみ 八992 図 〴〵 〴〵 中佐、飛來る彈丸 に忽ちうせて、旅順港外うらみぞ 深き、軍神廣瀬と其の名残れど。
三453 うらしまは玉手箱をもら つて、又かめのせ中へのつて、 海の上へ出てきました。	十1337 図 〴〵 〴〵 勾踐は呉に捕へられ ぬ。後からうじて歸國することを得 しが、勾踐此のうらみ忘れがたく、 〈略〉。
三466 〴〵、うらしまはたちまち 白がのおぢいさんになつてし まひました。	うらむ 「恨」(五) 3 うらむ 〴〵 ム・イン 〴〵 十二755 〴〵 お前はわたしをうらんで ゐるはずだが。
うらしまさん 「浦島」(人名) 1 うら しまさん	十二757 〴〵 何でうらむわけがござい ませう。
三415 〴〵 うらしまさん、このあひ だはありがとうございました。	十二757 〴〵 何でうらむわけがござい ませう。
うらしまたろう 「浦島太郎」(課名) 2	うららか 「麗」(形状) 1 うらゝか 十一122 〴〵 〴〵 鳴くやひばりの聲う らゝかに、かげろふもえて野は晴
うらしまたろう 「浦島太郎」(人名) 1	れわたる。 うり 〴〵にうりや・はかりうり・ものう り うりあげだか 「売上高」(名) 1 売上 高 十二1214 〴〵 毎晩賣上高の勘定を致 す時など、〈略〉、何時もほめられ申 候。
	*うりかい 〴〵ばいばい うりだし 〴〵おおうりだし うりつ・ける 「売付」(下) 1 賣付 ける 〴〵ケ 十二228 買ふ人の無智に乗じて安い 品を高く賣付け、〈略〉、實際の注文 に對しては粗惡なものを送るやうな 事は、〈略〉。
	うりはらう 「売払」(五) 1 賣りは らふ 〴〵ツ 五751 よい身代であつたが、其のた めに田を賣り、畠を賣り、家も土藏 もみんな賣りはらつた。
	うりよう 「雨量」(名) 1 雨量 十一511 南洋は一年中温度が高く、 雨量が多いので、ゴムの木の發育に は最もよく適してゐる。
	うりわたす 「売渡」(五) 1 賣渡す 〴〵ス 十213 〴〵 〴〵、掛の人が其の直で賣 渡すといふあひづに手を打つて、取 引が成立します。
	うる 「売」(四五) 15 賣ル 賣る 〴〵ツ・リール 〴〵
	四25 ほほづきやふうせん玉を 賣る店も出てゐます。
	五532 山から薪を取つて來て、それ を賣つて、くらしを立ててゐました。
	五748 よい身代であつたが、其のた めに田を賣り、畠を賣り、家も土藏 もみんな賣りはらつた。
	五748 よい身代であつたが、其のた めに田を賣り、畠を賣り、家も土藏 もみんな賣りはらつた。
	七245 茶屋にはおばあさんが一人ぼ つちで菓子やわらちを賣つてゐる。
	八209 〴〵 其ノ家ヲ出デテヨリ、イカ ダヲトキテ木材ヲ賣ルニ至ルマデ、 〴〵。
	八576 〴〵 下駄買ふ人も、賣る人も、 下駄屋にありし人は皆、彼の姿 を見送りぬ、〈略〉。
	八583 〴〵 學校用具ヲ賣ル店ニ、〴〵、 〴〵 看板ヲ出セルハ、ヨク人ノ知 ル所ナルベシ。
	八595 〴〵 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、 〴〵、〴〵 ナドト記シテ、軒ニ下 ゲタルモアリ。
	八104 かりに造れたとしても、それ を十錢ぐらゐで賣つてはまうかるま い。
	八1062 したがつて一包のマツチを十 錢ぐらゐで賣つても、さうおうにま うかるのである。
	九462 〴〵 カクテ價ハ次第二安クナリ テ、最モ價ヲ下ゲタル持主、其ノ馬

ヲ賣ルコトナル。

十233図 〈略〉、賣つてゐる菓子もおもちゃも、多くは馬にちなんだ物で、〈略〉。

十1177 青銅の大鳥居をくゞつて進むと、沿道の家は大い天満宮にちなんだ物を賣つてゐる。

十1253図 又池・沼を利用して鯉・鮒を養ふことも盛にして、大てい二年毎に之を賣るに、其の利益少しとせず。

うるう 〔閏〕(名) 2 閏 閏

十一931図 〈略〉、便宜上三百六十五日を一年とし、普通四年毎に一日の閏をおくことになつてゐる。

十一936図 ところが太陰暦は〈略〉、三年にならないうちに一箇月の閏をおかなければならない。

うるおす 〔潤〕(五) 2 うるほす

《一シ》

八25 小鳥は時々此の清水にのどをうるほしては、こずゑでさへづるのである。

十121 熱い番茶にのどをうるほして休んでゐる所へ、〈略〉。

ウルグアイ (地名) 1 ウルグアイ

うるさ・い 〔煩〕(形) 1 ウルサイ

《一イ》

三598 今ニハノ木ニセミガ

ウルサイ ホド ナイテ キマス。

うるし 〔漆〕(名) 1 うるし

九1026 北風はたけが五尺二寸もある

黒馬で、毛はうるしのやうにつや

〈しく〉、〈略〉。

うるむ 〔潤〕(四・五) 2 うるむ

《一ム》

三868 天人はしをしをして、なみだにうるむ目で空を見上げました。

十303図 しみやかに、夜の霧 ちまたをつゝみ、立並ぶ家々、とも

しびうるむ。

うるわ・し 〔麗〕(形) 3 うるはし

《一シ・シキ・シク》

十1332図 主上は詩の心を御さとりありて、天顔殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。

十二1037図 めぐらせる青垣山に、こもれる大和うるはし。

十二12310図 うるはしき眞玉・白玉にほひよき木の實、草の實、う

づたかき積荷の中に 海山の寶を載せて、〈略〉。

うれしい 〔憂〕(名) 2 うれひ 憂

十一799図 發憤しては食を忘れ、

楽しんでうれひを忘れ、老の將に至らんとするを知らず。

十二469図 光澤と香氣とを有し、ねばり強くして、割れ、そる等の憂極

めて少く、〈略〉。

うれ・う 〔憂〕(上二) 1 うれふ 《一ヒ》

十一53図 當時支那は數國に分れて

互に相争ひ、戦亂止むことなかりしかば、孔子大いに之をうれひ、〈略〉。

うれ・う 〔憂〕(下二) 1 うれふ 《一ヘ》

十971図 宋の臣文天祥大いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。

うれ・し 〔嬉〕(形) 4 うれし 《一シキ・シク》

十1069図 〈略〉、御母上様には去る二日御安産にて、玉の様な女の御子御生れの由承り、誠にめでたくうれしき限りと存じ候。

十1074図 私とてもかはゆらしきめひの生れ候と聞きては、何よりうれしく、一日も早く御顔を見たく存じ候。

十一125図 今日のはうれしき遠足の日よ。

十一135図 今日のはうれしき遠足の日よ。

うれ・しい 〔嬉〕(形) 20 ウレシイ

うれ・しい 《一・イ・ウ・カッ・ク》

三676 池ノ水デタメシテミルト、ウマク 出来テキテ、〈略〉。ウ

レシクテタマリマセンノデ、〈略〉。

五935 おめでたい事やたのしさうな事が書いてありますと、私もうれし

いと思ひますが、〈略〉。

七529図 で、今日此のなつかしい學校に來て、皆さんにお話するのは、

何よりもうれしいのでございます。

八904図 「おとよ、おとうさんが歸つて來て、うれしいか。」

八915図 「おとよ、おとうさんが歸つて、うれしいか。」

八918図 はい、うれしうございます。

九561 僕は今日其のえらい社長さんに會つて來たのだと思ふと、何となくうれしい氣がしました。

九756 青々とした波の上に、點々と白帆が浮んでゐるのは、野や山ばかり見て來た目に殊さらうれしかつた。

九799 第十七 いもほり 〈略〉。あ

ちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲。

九9210図 僕今夜はいろ／＼の事をおぼえて、ほんたうにうれしかつた。

九1057 北風は、主人の手がかうしてくびすぢにさはるのが何より好きだつたから、うれしくて、〈略〉。

十138図 郷里の青年諸君がこんなにまじめになつて來たのは、何よりうれしい事です。

十153図 私は此の村の青年諸君が、かうして修養にも實行にも、骨を折つてをられるのを、うれしく思ひます。

十721図 又寒夜に秘藏の鉢の木を切つてたい志は、何よりもうれしく思ふぞ。

十一383 〈略〉、それでも木が競争するやうに、しんを立ててすくすくと

延びてゐるのを見ると、非常にうれし。

十一55 船員等は、如何にも氣持よささうに泳ぎ廻つてゐたが、中にもうれしさうに見えたのは、十三四になる二人の少年であつた。

十一83 今日のは初めての遠泳だと思ふと、何だかうれしいやうな心配なやうな氣がする。

十二57 ねぢは之を聞いて、飛上るやうにうれしかつた。

十二59 ねぢは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出来たのだと思ふと、うれしくてうれしくてたまらなかつた。

十二59 ねぢは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出来たのだと思ふと、うれしくてうれしくてたまらなかつた。

うれしがる 「嬉」(五) 1 うれしがる 「ッ」

八93 信吉はとりのぼせたやうにうれしがつて、娘の顔と先生の顔を、かはりばんこに見てゐた。

うれしげ 「嬉」(形状) 1 うれしげ 七31 獅子はうれしげに一聲高くほえ、たてがみをふるひ、四足をのばして後、略。

うれしなき 「嬉」(名) 1 うれし泣き 六63 二人がたがひに取りついて、

うれし泣きに泣いた時には、略。

うれゆき 「売」(名) 1 賣行 七113 地もがらもまことに當地向で、賣行もよからうと思ひます。

うれる 「売」(下二) 2 賣レル 賣れる 「レ・レレル」

八103 しかし之を一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。

九45 五人ノ持主各其ノ馬ノ賣レザランコトヲ恐レテ、争ヒテ價ヲ下グ。

うろ 「空」(名) 2 ウロ うろ

三76 ソコデカウモリハシカタ

ナシニ、ヒルハ木ノウロヤ

アナノ中ニカクレテキテ、

略。

九36 すると木のうろから、栗鼠が一匹、けろりとした顔を出したが、

略、急にまた穴にかくれてしまつた。

うろ 「雨露」(名) 1 雨露

十二86 木の枝を伐りて地上に立て、上を木の皮にておほひ、八人一所にうづくまりて僅かに雨露をしのぐ。

うろろろする (サ変) 1 うろろろする 「ーシ」

四44 花子はねこをだいてうろろして居ましたので、略。

といはれました。

うわさ 「噂」(名) 1 うはさ

十二106 其のうちに誰言ふとなく、

あれは山師坊主で、あのやうなまねをして、人をうろろろするのであらうといふうはさが立つた。

うん 「運」(名) 2 運

五73 運の悪い時には悪いもので、其の年のつゆに、又土手がくづれて、略。

十27 一進一退、たゞ運を天にまかせて、二人はボートをあやつつた。

うん (感) 3 うん

五92 郵便函といつたのはこれだ。とひとりごとを言つて行く者があります。

五99 熊が君の耳の所へ口を持つて行つたやうだが、何か言つたのか。「うん。『あぶない時に、友だちをすててにげるやうな者には、これからつきあふな。』と言つた。」

十38 私とは思はず、「やあ、すつかり變つた。」と聲をあげると、兄は「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」といつて、略。

うん (副) 1 うん

六31 虎はうん／＼うなつて、かけまはるより外、どうすることも出来ません。

うんが 「運河」(名) 6 運河 ↓ パナマ

うんが・パナマうんがだんめんりやくず・パナマうんがへいめんず

十31 此の地峽に造つた運河が、世界に名高いパナマ運河である。

十38 そこで此の運河は、非常に變

つた仕組に出来てゐるのである。

十33 今太平洋の方から此の運河を通るとする。

十35 運河は全長五十哩餘り、凡そ十時間前後で之を航することが出来る。

十36 パナマ地峽に運河を造る事は、數百年來ヨーロッパ人のしば／＼計畫したところで、略。

十36 米國が此の運河を造るに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。

うんてんする 「運転」(サ変) 1 運轉する 「ーシ」

八73 地上の鐵道には勿論、高架鐵道にも、地下鐵道にも、電車や汽車が終日終夜、休なしに運轉してゐます。

うんどう 「運動」(名) 1 うんどう

五72 中村君は學問もよく出来るし、うんどうも上手です。

うんどうかい 「運動会」(課名) 2 ウンドウクワイ

二目2 一 ウンドウクワイ

二21 一 ウンドウクワイ

うんどうかい 「運動会」(名) 1 ウンドウクワイ

二23 コレハ ウンドウクワイノエデス。

うんどうきぐ 「運動器具」(名) 1 運動器具

十二48 櫓・車・運動器具

の如き強烈なる力を受くるものを製作するに適せり。

うんどうば 「運動場」(名) 2 うんどう場 運動場

五63 ある日、僕がうんどう場へ出て見ると、中村君が泣いてゐました。七526 図 私も子どもの時には、毎日此の學校へ通つて、皆さんと同じやうに、あの運動場で遊んだり、此の講堂でお話を聞いたり致しました。

うんめい 「運命」(名) 1 運命

十二918 折から飛下りて來た鳥が鐵に傷つけられた蟲をついばんだ。木陰からじつと見てゐた彼は、
蟲の運命をあはれんだ。

うんよう・する 「運用」(サ変) 3 運用する 《一・シ・スル》

十373 《略》、ほとんどあらゆる文明の利器を運用して、山をくづし、地をうがち、河水をせき止めた事など、
《略》。

十一1173 制度を運用するのは人である。

十一1173 自治制も、之を運用する人民に自治の精神が乏しければ、
《略》。

え

え 2 え

七112 図 マとコ、ユとエ、レとン、

《略》、ハと八等は書方にて間違ひ易し。

八938 第二十二 啞の學校 《略》。此所では女の先生が、生徒に五十音の發音を教へてゐられた。「い」を「う」と間違へたり、「う」を「え」と間違へたりするのを、
《略》。

え 「江」(名) 1 江

八214 図 揚子江ハ水量ツネニ豐ニシテ、洋々ト流ルレドモ、夏季ハコトニ増水シテ、濁流江ニミナギリ、
《略》。

え 「柄」(名) 6 エ え 柄

三668 ソレカラ ホソイ竹ヲエニシテ、ソノサキニキレヲマキツケテ、センヲコシラヘマシタ。七451 ぐんばいうちはでふせいだが、えが折れて、肩先へ切りつけられた。

九879 図 あれが北斗七星だ。あの柄でない方の端にある二つの星を結びつけて、
《略》。

九897 図 にいさんく、あの北極星がひしやくの柄の先になつて、
《略》。

十一1004 図 先づ柄の長さ一間もあるなにて灌木を伐拂ひ、
《略》。

十二772 だいはう網は《略》ひしやくに似てゐる。即ち水のはいる處に當る部分が身網で、柄に當る部分が垣網である。

え 「重」 ↓はぶたえ・やえ

え 「絵」(名) 10 エ 畫 繪 ↓かけ

一221 ニイサンガエヲカイトキマス。

二24 コレハウンドウクワイノエデス。

二631 コレデ本ノ中ノジモ、エモ、
《略》見ルノデス。

八866 見せ物小屋で象を見た。
《略》、一切繪で見た通りであつた。

八287 図 又筆一本にて美しき繪をゑがき、
《略》。

十756 図 僕はもう南山へ何度も上りましたが、此處からは京城の市街がまるで繪のやうに見えます。

十一129 図 右に見ゆるは名高き御寺、左に遠くかすむは古城、春は繪のごと我等をめぐる。

十一4410 図 君は畫を以て一家を成せる人なるに、數年の間一度も筆を取り給ひし事なし。

十二44 図 松江を發したる汽車は風光繪の如き六道湖畔を走ること約四十分、
《略》。

十二1139 図 彼の眺め入りしは繪にあらず紙にあらず、實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

え 「餌」(名) 7 エ 餌

三61 エヤ水ヲヤツテモ、見ムキモシナイデ、タマゴヲアタタメテキマス。

四355 《略》、ホカノ鳥ヲイデメタリ、ツカミコロシテエニシタリシテアバレマハリマス。

四682 たいそうよくなれて、私の手からゑをたべるほどになつて居ました。

九129 図 妹は餌をつかみて、
《略》まきちらせば、鶏はあわてて其の方へ行く。

九133 図 白・黒・うすかば色、十幾羽の鶏一つにかたまり、頭と頭とをつきはせて、いそがしげに餌を拾ふ。

九144 図 くだきたる貝殻を器に入れてあたふるに、これには餌の時のやうに集らず。

九154 図 出がけにとやの方を見れば、めんどりはせはしげに幾度か土をかきちらして、餌をあさるにいそがしく、
《略》。

え (感) 1 え

十二409 図 ベートーベンは、「え、樂譜がない。それでどうして。」といひさして、ふと見ると、かはいさうに妹はめくらである。

えい ↓にちえいべいさんごく

えい えん 「永遠」(名) 1 永遠

十二991 図 私のなくなつた後も、めいゝが其の教をまじめに行ふ所に私は永遠に生きてをる。

えいきゅう 「永久」(名) 3 永久

十二628 図 即ち赤・白合はせて十三條の横筋は、
《略》、永久に變化することあらざれども、
《略》。

十二1111 今では此の洞門を掘りひろ

げ、處々に手を加へて舊態を改めてはるるが、一部は尚昔の面目を留めて、禪海一生の苦心を永久に物語つてゐる。

十二133 随つて國民は「略」、又其の誇を永久に持續しようとする心掛けも出て、「略」。

えいきょう 「影響」(名) 2 影響

十一113 地球上に存在するもので、太陽の影響を受けぬものは一つもない。

十二235 外國貿易に至つては、之に従事する者の心掛け如何の影響が更に大きい。

えいぎょう 「營業」(名) 1 營業
十二165 編輯・營業の二局ありて、「略」、販賣・廣告に關することは後者を擔當す。

えいご 「英語」(名) 1 英語
八682 日本人は八萬人餘も居て、子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、英語で勉強しますが、「略」。

えいこく 「英國」(地名) 1 英國
十二24 英國の東海岸にロングストーンといふ島がある。

えいこくじん 「英國人」(名) 1 英國人
十一507 「略」、英國人はマレイ半島の領地にパラゴムの木を移植するに至つた。

えいし 「英姿」(名) 1 英姿
十一113 王は問もなく健康を回復して、再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出来た。

えいせい 「衛生」(名) 2 衛生
十3610 衛生の設備をよくして危険な病氣を根絶し、「略」。

十一1165 例へば教育・衛生等の自治團體の事業は、「略」。

えいそくする 「永続」(サ変) 1 永續する 《一スル》
十二232 「略」、かやうな仕方は唯一の利益を得るに止つて、永續することが出来ないから、「略」。

えいたろう じしもだえいたろう
えいへいたい 「衛兵隊」(名) 1 衛兵隊
九6610 「略」、衛兵隊は銃の敬禮を行ひ、「略」、軍艦旗に敬禮する。

えいゆう 「英雄」(名) 4 英雄
十710 昔ヨーロッパにアレクサンドル大王といふ王があつた。「略」、わづか十數年の間に四方の國々を征服して、當時世界に類のない大國を建設した英雄である。

十89 陣頭に立つては百萬の敵を物とも思はぬ英雄も、病氣は如何ともすることが出来ない。

十二95 「略」、そのかみ此處にかめしく向ひあひけん英雄の姿、「略」。

十二282 歴史は長し 七百年、

興亡すべて ゆめに似て、英雄墓は こけむしぬ。
ええ (感) 1 ええ
九878 「略」、七つの星が並んでゐるのが見えるだらう。」
「ええ、見えます。」

えがお 「笑顔」(名) 2 えがお
六224 沖ものどか、濱ものどか、沖へ急ぐ兄の小舟、濱へ歸る父の小舟、すれ合つて、えがほとえがほ。

六224 沖ものどか、濱ものどか、沖へ急ぐ兄の小舟、濱へ歸る父の小舟、すれ合つて、えがほとえがほ。

六224 沖ものどか、濱ものどか、沖へ急ぐ兄の小舟、濱へ歸る父の小舟、すれ合つて、えがほとえがほ。

えがく 「描」(四・五) 14 エガク えがく 畫がく 《一カーキ・ーク・一ケ》
八287 又筆一本にて美しき繪をえがき、「略」。

八604 看板ニハマタ商品ヲエガキタルモノアリ。
八606 洋物屋ノ看板ニ、シャツ・襟・襟飾ノ類ヲエガキ、「略」。

八608 金物屋ノ看板ニ、鍋・釜・庖丁ヲエガクノ類ナリ。
九299 「略」、器に盛つた水が波紋をえがく程です。

十5810 あゝ、あのかはい、鳩が、「略」、勇ましく高空に輪を畫がきながら、しかと方向を見定め、「略」。

十一447 或畫師久しく寄食してありけるが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を経たり。
十一458 さらば謝恩の爲に何か畫がきて參らすべし。
十一467 其の畫がく所皆鶴にして、筆勢非凡、丹青の妙言ふべからず。
十一4610 「略」、畫師は前の如く夜もすがら寝ねずして、明日はかく畫がかなど獨言してゐたりければ、「略」。

十一482 此の一言を聞くや、畫師「略」、唯杉戸に繪一本を畫がきて東國へ出立しぬ。

十一488 先に畫がきたる繪、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、「略」。

十一610 畫がけるが如く美しき山の、或は右に或は左にあらはれるのは、「略」。

十二612 雪白の地に紅の日の丸をえがける我が國の國旗は、「略」。

えがたい 「得難」(形) 1 得がたい 《一ク》
十二125 其の要領は遂に得がたく、兩人は翌日の再會を期して別れた。

えがたし 「得難」(形) 4 得がたし 得がたし 《一キ・一ケレ》
九442 然レドモ飲料水ノ得ガタキ所ニテハ、一手桶何程トイフ代價ヲハラヒテ水ヲ買フ。

えがたし 「得難」(形) 4 得がたし 得がたし 《一キ・一ケレ》
九442 然レドモ飲料水ノ得ガタキ所ニテハ、一手桶何程トイフ代價ヲハラヒテ水ヲ買フ。

えがたし 「得難」(形) 4 得がたし 得がたし 《一キ・一ケレ》
九442 然レドモ飲料水ノ得ガタキ所ニテハ、一手桶何程トイフ代價ヲハラヒテ水ヲ買フ。

えがたし 「得難」(形) 4 得がたし 得がたし 《一キ・一ケレ》
九442 然レドモ飲料水ノ得ガタキ所ニテハ、一手桶何程トイフ代價ヲハラヒテ水ヲ買フ。

九44 同ジ物ニテモ、意ノ如クニ得ラルレバ價ナク、得ガタケレバ價アルナリ。

九46 得ガタキ物ニテモ、有用ナラヌ物ハ價ナシ。

十一25 9 されば古は、支那より渡來せるものの僅かに世に存するのみにて、學者其の得がたきに苦しみた

えかんばん 「絵看板」(名) 1 繪看板

八61 6 略、芝居又ハ活動寫真ナドノ興行場ニハ、繪看板アリ、

えき 「液」(名) 6 液 ↓ ゴムえき

十一49 8 ゴムは、熱帶地方に産する或植物からとる白色の液を原料として、製造したものである。

十一49 9 此の液の取れる木を普通にゴムの木といつてある。

十一52 3 切付といふのは、ゴムの木から液をとるために、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。

十一53 2 それがすむと、今度はバケツを持つてコップにたまつた液を集めて歩くのである。

十一53 2 集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不純な物を取り除き、次に薬品を入れて固まらせ、機械で薄くして乾かすのである。

十二12 2 投込まれた蟲は苦しまぎれに恐しく辛い液を出したので、略。

えき 「駅」(名) 1 驛 ↓ うえのえき・たいしやえき・なんだいもんえき・ふつかいちえき・まつしまえき

九71 7 次の平泉といふ驛を出て間もなく、略。

えきえき 「駅驛」(名) 1 驛々

九70 2 顔を洗つて来て、ビスケットを食べながら、私がゆめの中に通過した驛々のお話をうかゞつた。

えきたい 「液体」(名) 1 液體

十一1 8 一口にいへば、白熱の状態にある一大火球で、之を形造つてあるものは、液體に近い氣體であらうといふ。

えぎぬ 「絵絹」(名) 1 えぎぬ

五61 3 略、空のゑぎぬへ一筆に、だれがかいたか、虹の橋。

えきふ 「駅夫」(名) 1 驛夫

九68 3 「宇都宮」と驛夫の呼ぶ聲に、略。

えきまえ 「駅前」(名) 1 驛前

十一6 8 汽車で二日市驛に着いたのは午前の八時、驛前で太宰府行の輕便鐵道に乗つた。

エクアドル 「地名」 1 エクアドル

十一10 略 エクアドル

えこのり 「恵胡海苔」(名) 2 エゴノリ

七85 9 略、トコロテンヤカンテンニスルモノニハ、テングサヤエゴノリガアル。

七85 略 エゴノリ

えさ 「餌」(名) 1 エサ

二24 2 略 ドコカラキタノカ、トンデキタ木ノハ、略、ナミニユラレテ、ユラユラスレバ、コヒハエサカトウイテクル。

えし 「絵師」(名) 13 畫師

十一44 6 昔、泉州堺のなにがし寺に、或畫師久しく寄食してありけるが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を経たり。

十一44 8 住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、「略」といへば、略。

十一45 6 略、畫師「略」として、心構せし様なりしが、尚筆も取らで數日を過しぬ。

十一46 1 略 彼處に行きて、彼の畫師のする様を見給へ。

十一46 2 略、畫師は障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ、寝起する様なり。

十一46 6 翌朝畫師は常にもあらず早く起出で、ふすまに向ひてしきりに筆を動かしたるなり。

十一46 9 略、畫師は前の如く夜もすがら寝ねずして、明日はかく畫がかななど獨言してあたりければ、略。

十一47 4 夜明けて住持、畫師に向ひて、「略」と、夜中に畫師のしたる様をまねて見るに、略。

十一47 6 略、夜中に畫師のしたる様をまねて見るに、略。

十一47 6 略、畫師驚きて、「略」と問ふ。

十一48 1 此の一言を聞くや、畫師又かのふすまの鶴に筆を取らず、唯杉戸に繪一本を畫がきて東國へ出立しぬ。

十一48 3 未だ一月もたゞざるに、かの畫師は突然歸り來れり。

十一48 7 住持驚きて、「略」と問へば、畫師「略」とて一枝かき添へ、又別れを告げて立去れりといふ。

エジソン 「人名」 3 エジソン ↓ トマスエジソン

十二113 6 エジソンは例の如く實驗室に閉ぢこもりて研究に餘念なかりしが、ふと見れば机上に形珍しき一本の團扇あり。

十二114 8 エジソンの發明せるは電話・電燈・略など極めて多く、アメリカにて特許を得たるもののみにも其の數實に千餘に及ぶ。

十二116 10 エチソンが炭素線の電燈を發明したのは四十年ばかり前のことであつたが、略。

えしのくしん 「課色」 2 畫師の苦心

十一12 第十一課 畫師の苦心

十一44 5 第十一課 畫師の苦心

えぞ 「蝦夷」(地名) 1 蝦夷

九9 9 景行天皇の皇子日本武

尊、蝦夷を平げよとの勅命を奉じて、東國の方に下り給ひき。

えだ「枝」(名) 30 エダ えだ 枝

↓こえだ・したえだ・ひとえだ

二132 木ノエダニ、コトリガ

十バトマツテキマシタ。

二385 園 サイタサイタハナガ、

マツ白ナハナガ。マツノ木ノ

エダニ、タケノハノ上ニ。

二477 スルト、ニハノカレ木ノ

エダニ、キレイナ花ガサキマシ

タ。

三553 略、しだれやなぎのえだ

へ、かへるがとびつかうとし

てゐます。

四73 私の木も枝がをれる

ほどなつてゐます。

四247 えんさきのさざんくわに、

目白が二は来てゐて、枝から

枝へとんでゐます。

四247 えんさきのさざんくわに、

目白が二は来てゐて、枝から

枝へとんでゐます。

四358 略、森ヤ林ノヒクイ

木ノ枝ニトマツテ、ボンヤリト

シテ居ルコトガアリマス。

五322 園 本のおさらひすました後は

枝につるしたぶらんこ遊。

六146 園 略、ぐみを一枝折ると、

「そんな大きな枝を。」と、にいさん

に注意されました。

七232 みきが二かゝへもあつて、枝

が傘をひろげたやうに出てゐるので、村の人は之を傘松と呼んでゐる。

七828 中デ面白イノハサンゴデ、タ

クサン集ツテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲ

シテキル。

七864 海藻ノ形ハ様々デ、略、全

體ガ細カニ分レテ、枝ノ様ニナツテ

キルノモアリ、略。

九194 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、

略、羽ヲトデテサカサニ草木ノ枝

ニ止ツテキルト、マルデ枯葉ガ引掛

ツテキルヤウニ見エル。

九959 園 下山の時には、木の枝など

を櫓にして、此の雪溪をすべつて下

る人があります。

十418 兄は私に「略。」といひな

がら、生木の枝で雑木を束ねて見せ

た。

十1059 其の枝の先にしよんぼりと止

つてゐる鳥の姿も、見るから寒さう

だ。

十一309 園 清正刀を抜かんとするに、

かぶとのしころつゝじの枝に引つ

かゝりて、身のはたらき自由ならず。

十一313 園 清正手早くかぶとのをを

切つたりければ、かぶとはつゝじの

枝に残つて、略。

十一389 略、今まで兩方の枝と枝

と組合つてゐたのが急に間がすいて

如何にも氣持よささうに見える。

十一389 略、今まで兩方の枝と枝

と組合つてゐたのが急に間がすいて

如何にも氣持よささうに見える。

十一395 略、枝を打てば、山火事

の危険を防ぎ、又空氣の流通がよく

なつて蟲がつかなくなるさうだ。

十一399 生きた枝でも枯れた枝でも、

其のまゝにしておくと、木が太るに

つれて其の枝を包んで行くために、

其處が節になるのだといふ。

十一399 生きた枝でも枯れた枝でも、

其のまゝにしておくと、略。

十一3910 略、木が太るにつれて其

の枝を包んで行くために、其處が節

になるのだといふ。

十一662 略、密生した樹木の枝と

枝がすれあつて起つたりした自然の

火から、火種を取つたものであらう。

十一662 略、密生した樹木の枝と

枝がすれあつて起つたりした自然の

火から、火種を取つたものであらう。

十二205 どれを見ても、枝といふ枝

にはもう黄金色に色づいた實が鈴な

りになつてゐる。

十二205 どれを見ても、枝といふ枝

にはもう黄金色に色づいた實が鈴な

りになつてゐる。

十二8510 園 木の枝を伐りて地上に立

て、上を木の皮にておほひ、八人一

所にうづくまりて僅かに雨露をしの

ぐ。

えだうち「枝打」(名) 2 枝打

十一387 毎年春の初か冬の半ばにす

などてつる草を拂ひ、下枝を伐落し

て行くと、略。

十一398 それから始めて聞いて面白

いと思つたのは、枝打をしないと木

に節が出来ることである。

えだうつり・する「枝移」(サ変) 1

枝移りする「一シ」

九335 略、美しい小鳥が二三羽、

身がるに枝移りした。

えだしやくとり「枝尺取」(名) 1 エ

ダシヤクトリ

九184 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリ

ハ、其ノ色ガ桑ノ木ニ似テキルバカ

リデナク、體ノ後ノ端ヲ木ニツケテ、

體ヲナメニツキ出スト、形ガ桑ノ

小枝ニ寸分違ハナイ。

えだぶり「枝振」(名) 2 枝ぶり

五567 略、島といふ島には、枝ぶ

りのよい松がしげつてゐます。

十一4810 園 略、箱根山中にてよ

き枝ぶりの檜を見て、其の意を得た

れば、かき添へんために歸りしなり。

えたり「得」(感) 1 得たり

十二123 投込まれた蟲は苦しまぎれ

に恐しく辛い液を出したので、思は

ず吐出すと、蟲は得たりと逃げてし

まつた。

えちご「越後」(地名) 2 越後 越後

七434 一「騎打 越後の上杉謙信

と甲斐の武田信玄が、略。

十二105 僧は名を禪海といつてもと

越後の人、諸國の靈場を拜み巡つた

末、〈略〉。

えちぜん ↓ おおおかえちぜんのかみ
えちぜんのかみ 「越前守」(名) 7 越

前守

八36 越前守はじつと考へましたが、
「〈略〉。」といひました。

八37 〈略〉、越前守は聲をかけて、
「これ女、其の手を放せ。〈略〉。」と
申し渡したので、里親は恐れ入
つたといひます。

八38 越前守は手代の言ふ所を聞い
て、「〈略〉。」といつて、下役の者に
石地藏をしばつて来るやうに命じま
した。

八41 越前守は早速門をしめさせて、
見物人一同の所名前を書取らせ、さ
ておごそかに、「〈略〉。」と申し渡し
ました。

八42 しばらくして、其の中のおも
立つた者が出て、いろ／＼おわびを
致しますと、越前守は「〈略〉。」と
命じました。

八43 越前守は呉服屋の手代を呼出
して、其の中に盗まれた品のありな
しを調べさせました。

八43 越前守は再び一同を呼出して、
さきに納めさせた白木綿を返し、つ
いでに石地藏を、もとの所へもどし
たと申します。

えつ 「越」(地名) 2 越

十133 昔支那に呉・越とて相隣れ
る一國ありき。

十133 勾踐越の王となるに

及び、呉の勢盛にして越軍大いに破
れ、勾踐は呉に捕へられぬ。

えつぐん 「越軍」(名) 1 越軍

十133 勾踐越の王となるに
及び、呉の勢盛にして越軍大いに破
れ、勾踐は呉に捕へられぬ。

えつさえつさ (感) 1 えつさく
十二79 船がまぐろで一ぱいになる
と、大れふ旗を風になびかせながら、
えつさく／＼と陸の方へ漕歸つて来る。

えつちゅう 「越中」(地名) 2 越中
九98 もやの底にかすかに見える
越中の平野、〈略〉。

十72 其の返禮として加賀に梅田、
越中に櫻井、上野に松井田、合は
せて三箇所の地を汝に授ける。

えつちゅうのくに 「越中国」(地名) 1
越中の國

六22 大將は平維盛で、十万騎を
引きつれて、越中の國の礪波山に
ちんを取りました。

エッフェルとう (名) 1 エッフェル
塔

十二32 又エッフェル塔にも登つ
て見ました。

えど 「江戸」(地名) 11 江戸

八35 昔江戸で、夫に死なれた女が、
乳飲子を里子にやつて奉公に出まし
た。

八40 物見高いは江戸のくせで、
〈略〉。

八62 保己一の家は今の東京、其

の頃の江戸の番町にありて、〈略〉。

八11 大將の父は長府藩主に仕へ
て、江戸で若君のお守役をしてゐた
が、〈略〉。

八14 其の時大將は江戸から大阪ま
で、馬やかごに乗らず、両親と共に
歩いて行つた。

九27 〈略〉、すぐに江戸へ出て、
りつばな學者を先生にして、一心に
學問をはげむがよい。

九28 信淵は父の門人たちの情で、
形ばかりの葬式をすますと、間もな
く江戸へ出て、〈略〉。

十一71 あなたがよく會ひたいと
御話になる江戸の賀茂眞淵先生が、
先程御見えになりました。

十二12 月の十五日を期して總攻撃
を行ひ、一舉に江戸を乗つ取る手は
ずである。

十二13 又延いては徳川家及び江
戸百萬の民の仕合はせ、これは申す
までもござりませぬ。

十二13 〈略〉、江戸の市民も徳川家
もわざはひを免れて、〈略〉。

えのきでら 「榎寺」(名) 2 榎寺

十11 途中、太宰府といふ昔の役所
の跡などを見て、榎寺といふ處に
立寄つた。

十12 榎寺を出て二日市の停車場へ
急いだ。

えのぐ 「絵具」(名) 1 繪具

八58 學校用具ヲ賣ル店ニ、手
帳・筆・墨・繪具ナドト記シタル看
板ヲ出シ、〈略〉。

えはがき 「絵葉書」(課名) 2 えはが
き

四目2 十三 えはがき
四52 十三 えはがき

えはがき 「絵葉書」(名) 10 えはがき
え葉書 繪葉書

四52 勝太郎、東京のをちさん
からお前の所へえはがきが
來ました。

四53 此のあひだひかうせん
が東京の空をとびました。こ
れは其のえはがきです。

五13 學校からかへつて見ると、廣
田君からえはがきが來てゐました。

五16 海軍のをちさんがお出でにな
つて、春子にはえ葉書とリボン、
〈略〉をおみやげに下さいました。

八65 ハワイから出した繪葉書は
見ましたらうね。

八70 此の繪葉書は此所へ來る途
中、汽車の窓から見た牧場の實景で
す。

八74 其のうちに繪葉書や寫真帖
を送りますから、ゆつくりごらん。
九92 〈略〉、岡田さんは高山植物や
雷鳥の繪葉書を、たくさん出して見
せて下さいました。

十23 別封の繪葉書も歸りに買つ

たのです。

十一103 〇 此の手紙と一しよに、
繪葉書をたくさん小包にて送り申候。

えびこ 〔餌箱〕(名) 2 餌箱 餌箱

九128 〇 妹は餌箱を持ちて、とやの
前に来る。

九147 〇 妹の置きて行きたる餌箱に
入れて持歸り、茶の間の戸棚の中に
しまふ。

えび 〔蝦〕(名) 3 エビ

七80 6 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タ
コ・イカナドガステンデキル。

七80 7 エビノピン／＼ハネタリ、カ
ニノ横ニハツテアルク様子ハ、〈略〉。

七80 〇 エビ

えふで 〔繪筆〕(名) 1 繪筆

十111 7 〇 丹青まばゆき 格天井
に、心をこめたる 繪筆ぞにほふ。

エプロン (名) 1 エプロン

十一124 5 エプロンをかけた職工が
〈略〉模様をほりつけたり、みがき
をかけたりにあはる。

エポナイト (名) 1 エポナイト

十一54 1 電氣の機械や、蓄音機の圓
盤などに用ひるエポナイトといふも
のゴムから造る。

えま 〔絵馬〕(名) 1 繪馬

五40 6 先生が拜殿にかけてある繪馬
のお話をして下さいましてから、
〈略〉。

えまどう 〔絵馬堂〕(名) 1 繪馬堂

十118 2 〇 繪馬堂の前を通つて樓

門をくぐると、本殿の前に出る。

えみ 〔笑〕(名) 2 えみ 笑み

九111 6 中尉の顔には満足らしいえみ
が浮んだ。

十二68 3 王は満面に笑みをたゝへな
がら、今や遅しと其の答を待受けて
ゐる。

えむ 〔笑〕(四・五) 2 えむ 笑む

《一マーム》

八27 栗のいがのゑむのも今である。

十132 〇 主上は詩の心を御さとりあ
りて、天顔殊にうるはしく笑ませ給
ひぬ。

えもの 〔獲物〕(名) 4 エモノ え物

獲物

七14 9 めい／＼ざるをかしげて、え
物を見せ合つた。妹とお松のざるに
は、やどかりがたくさんゐた。

八49 3 サウシテ何カ地上ニエモノヲ
發見スルト、〈略〉。

八49 5 〇 スウツト下リテ來テ、
急ニツバサヲチャメ、風ヲ切ツテマ
ツシクラニエモノノ上ニツカミカ、
ル。

十57 9 〇 漁業者が沖から獲物の
多少や難船の有様を通知したり、
〈略〉。

えらい 〔偉〕(形) 15 エライ えら
い 《一ーイ》

四21 5 ソノ後大國主ノ神ハ、白
ウサギノイッタ通り、エライオ
方ニオナリニナリマシタ。

五73 僕は自分よりえらい友だちを
大ぜいしていぢめるのは、男らしく
ないと思ひます。

五75 3 人の一心といふものはえらい
もので、三度目に土手の工事はうま
くいった。

六97 8 正成は實にえらい人である。

八114 〇 感心だ、感心だ。えらい子
だ。

八117 〇 信作が落ちたのにかまはず
馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、
人の命にはかへられないと思つて、
相手を助けてやつたのはえらい。

八113 6 大將の母もまたえらい人であ
つた。大將が何か食物の中にきらひ
な物があると見れば、三度三度の食
事に、必ず其のきらひな物ばかり出
して、大將が馴れるまで、うち中の
者がそればかり食べるやうにした。

九50 4 僕は何となくえらさうな人だ
と思ひました。

九50 7 〇 「あの精米會社の社長さん
はえらい方なんぞでせう。」

九53 1 〇 「ほんたうにえらい人です
ね。」

九53 2 〇 「いや、これから先があの
人のほんたうにえらい所だ。」

九55 10 僕は今日其のえらい社長さん
に會つて來たのだと思ふと、何とな
くうれしい氣がしました。

九121 8 〇 「ソナエライ方ナラ、オ
トウサンガワザ／＼オ歸リニナラナ
クツテモ大丈夫デセウ。」

十一120 7 〇 ウェリントン公爵ともい
はれるえらいお方が、〈略〉とおつ
しやらうとは、どうしても考へられ
ません。

十二54 8 〇 あのいろいろの道具、た
くさんの時計、〈略〉、どれを見ても
自分よりは大きく、自分よりはえら
さうである。

えらぶ 〔選〕(四・五) 4 えらぶ 《一
バーブーン》

八66 〇 或年選ばれた子どもの中に、
すぐれて上手なものが二人あつた。

十32 〇 又日々に奉る供へ物には、
御生前殊に御好みありし品々を選ぶ
由なるが、〈略〉。

十一90 10 〇 おとうさんが毎年潮干狩
によい日を選ぶのも『月齡』を見て
知るのだ。

十二77 6 〇 先づ岸近くまぐろの寄つて
來る場所を選んで、〈略〉長く垣網
を張り、其の先へ身網を張る。

えり 〔襷〕(名) 4 えり 襷 襷

五24 1 〇 入口の左手には、小切やえり
や帯あげなどがたくさん下げであつ
て、〈略〉。

八10 6 〇 耕造は驚いて、〈略〉、一たん
沈んで又浮上つた信作のえりを引つ
つかんで、ぐつと岸へ引上げた。

八60 6 〇 洋物屋ノ看板ニ、シヤツ・
襟・襟飾ノ類ヲエガキ、〈略〉。

十二99 8 〇 然れども春日の社頭、朱

の廻廊^{くわいりやう}山の緑にはえて、森嚴自ら人の襟を正さしめ、^略。

えりかざり「襟飾」(名) 1 襟飾

八606 洋物屋ノ看板ニ、シャツ・襟・襟飾ノ類ヲエガキ、^略。

えりどめ「襟留」(名) 1 襟留

七824 指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。

える「得」(下) 12 得る 《エ・エル》^レこころえる・さとりえる

十一661 一體人は最初どうして火を得たであらうか。

十一665 ^略、木片と木片をこすりあはせて火を得る法をさとするやうになつた。

十一867 これに力を得て、又一しやうけんめいに泳いで行く。

十一9510 一家の暮し向は誠にあはれなもので、食物なども自由には得られず、^略。

十一965 かうしてゐるうちに、知識を得たいといふ彼の欲望は益々強くなり、^略。

十一1174 自治制も、之を運用する人民に自治の精神が乏しければ、よい結果を得ることは到底望まれない。

十二133 グーウィンは^略、満足な結果を得るまでは決して中途でやめなかつた。

十二232 ^略、かやうな仕方は唯一時の利益を得るに止つて、永續する

ことが出来ないから、^略。

十二729 ^略 コーデリヤは、やがていたましい報知を得た。

十二969 かつて釋迦を見捨てた彼等も、其の慈悲圓滿の姿を見ては、思はず其の前にひざまづかざるを得なかつた。

十二984 釋迦は^略、遂に病を得てクシナガラ附近の林中に留つた。

十二1264 安芳は今日こそ最後の確答を得ようと決心して、西郷をおとづれたのである。

えん「円」^レごせんえん・しせんえん・すうじゅうおくえん・はちおくえん

えん「宴」^レぎょえん

えん「園」^レがっこうえん・コーヒール・えん・コーヒールえんけんぶつ・ゴムえん

えん「縁」(名) 2 えん

三118 園 うちの子ねこは かわいい子ねこ、^略、まりとざれては えんからおちる。

七179 石垣の間でも、地藏様のかげでも、辻堂^{つじだう}のえんの下でもさく。

えんいんいた・す「延引」(四) 1 延引致す 《ーシ》

十二1197 園 當地に参りて以來、一度手紙を以て御様子御伺ひ申上げたしとは存じながら、^略、一日々々と延引致し、今日に相成り申候。

えんえい「遠泳」(課名) 2 遠泳

十一目7 第二十課 遠泳

十一834 第二十課 遠泳

えんえい「遠泳」(名) 1 遠泳

十一835 今日始めての遠泳だと思ふと、何だかうれしいやうな心配なやうな氣がする。

えんかく「遠隔」(名) 1 遠隔

十二191 但し大新聞にありては、比較的早く印刷したるものをば地方版として遠隔の地方へ送り、^略。

えんかく「円覚」(名) 1 圓覺

十二284 園 建長・圓覺 古寺の山門高き松風に、昔の音やこもるらん。

えんがわ「縁側」(名) 6 えんがは

三777 夕はんがすむと、うちのものはみんなえんがはへ出ました。

三777 えんがはには、夕方からいもやだんごをつくゑにのせて、お月さまにそなへてあります。

四228 ^略、おばあさんが日あたりのよいえんがはでつぎ物をしていらつしやいました。

八49 僕がえんがはへ机を持出して、おさらひをはじめると、^略。

八273 園 えんがはにうづくまる三毛のねこ、^略。

十一878 夕食をすましてから、縁がはへ出て涼む。

えんがん「沿岸」(名) 3 沿岸

八219 園 揚子江ノ流域ハ^略、米・茶・綿等ノ産物多シ。又沿岸ニハ上海・漢口等アリテ、^略。

十一345 園 瀬戸内海の沿岸には大阪・神戸・尾道・宇品・高松・多度津・高濱等良港多く、^略。

十一348 園 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。

えんきん「遠近」(名) 2 遠近

十一989 熱心なリンカーンは、書物を持つてゐる人の所には遠近を問はず借りに行つた。

十二189 園 かくて刷りたる新聞は、直に販賣部を経て遠近に發送せらる。

えんこ「縁故」(名) 1 縁故

十一1152 ^略、決して親族・縁故其の他私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。

えんさき「縁先」(名) 2 えんさき

四246 えんさきのさざんくわに、目白が二は來てゐて、枝から枝へとんでゐます。

十444 寒場から出て來た喜三右衛門は、縁先に腰を下して、つかれた體を休めた。

えんせい「遠征」(名) 1 遠征

十81 其の大王が東方諸國の遠征に出かけた時の事である。

えんぜつ「演説」(名) 1 演説

十二1185 ^略、遠い處の音楽・演

説・講話などを居ながら聞くことが出来ることや、〈略〉。

えんせん じほつかいどうてつどうえん
せんちゅう

えんそうかい 「演奏会」(名) 2 演奏會

十二38図 ほんたうに一度でもよいから、演奏會へ行つて聴いてみたい。

十二40図 〈略〉、——あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふお話でしたね。

えんそく 「遠足」(課名) 4 遠足

五目11 十 遠足

五34 十 遠足

十一目5 第四課 遠足

十一110 第四課 遠足

えんそく 「遠足」(名) 7 遠足

五35 遠足のしたくをして學校へ行くと、〈略〉。

五39 2 図 「皆さん、遠足かね。」

九84 1 図 今朝遠足にとく起きて、

石屋の前を通りに、〈略〉。

十一12 5 図 鳴くやひばりの聲うらゝかに、かげろふもえて野は晴

れわたる。いざや、我が友うち連れ行かん。今日はうれしき遠足の日よ。

十一12 10 図 右に見ゆるは名高き御寺、左に遠くかすむは古城、春は

繪のごと我等をめぐる。今日はたのしき遠足の日よ。

十二13 5 図 だどりつきたる峠の上

に、菜の花にほふ里見下して、笑ひさめくひるげのむしろ。今日

はうれしき遠足の日よ。

十一13 10 図 風は音なくやなぎをわたり、船は静かに我等をのせて、

行くは何處ぞ、桃さく村へ。今日はたのしき遠足の日よ。

えんそくずき 「遠足好」(名) 1 遠足好き

十七7 8 図 〈略〉、遠足好きの君なら、毎日何處へか出かけたてたまらな

いだらうと思ひました。

えんちよう 「延長」(名) 1 延長

十一10 7 上海が黄浦江に臨む部分は延長八哩、六十餘の波止場がある。

えんどう 「沿道」(名) 2 沿道

十一17 5 青銅の大鳥居をくゞつて進むと、沿道の家は大い天満宮にちな

んだ物を賣つてゐる。

十二34 9 図 汽車でドイツの國內にはいつたのは朝まだほの暗い頃でした

が、もう沿道の田畑には農夫が鎌を振るつてをり、又工場といふ工場に

は盛に黒煙が上つてゐました。

えんとつ 「煙突」(名) 5 エントツ

三4 3 又一シキリキテキガナツテ、エントツカラムクムクトマ

ツクロナケムリガ出マス。

四29 1 もう高いえんとつは大方出来上りました。

四82 8 ぼほしらが二本、えんとつ

が四本の船です。

七28 7 図 今ハ商工業サカンニシテ、大工場多ク、エントツノ煙ツネニ空

ヲオホヘリ。

八70 1 図 此所は工業地で、煙突の煙で空は眞黒だが、〈略〉。

えんない 「園内」(名) 1 園内

十一9 2 茶屋のおばあさんに尋ねると、それは園内に飼つてある鶴の聲であ

つた。

えんばん 「圓板」(名) 2 圓板

十一124 4 調べかはの廻るにつれて、石や木や金の圓板が車輪のやうに廻

つてゐる。

十一124 6 エプロンかけた職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板

にあてて模様をほりつけたたり、みがきをかけたたりしてゐる。

えんばん 「圓盤」(名) 1 圓盤

十一54 1 電氣の機械や、蓄音機の圓盤などに用ひるエボナイトといふものもゴムから造る。

えんばん 「鉛版」(名) 1 鉛版

十二17 6 図 校正終れば紙型に取り、更に之をもととして鉛版を造り、印刷機にかく。

えんびつ 「鉛筆」(名) 3 エンピツ

えんびつ 鉛筆

一36 2 オハナガエンピツデアサガホヲカキマシタ。

五16 7 海軍のをちさんが出でになつて、〈略〉、僕には小刀とえんびつ

をおみやげに下さいました。

十一97 6 鉛筆や紙も自由には買へなかつたから、〈略〉。

えんべい 「援兵」(名) 1 援兵

十58 4 又戦争の時戦線から戦状を報じたり、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。

えんぼう 「遠方」(名) 3 遠方

五94 1 いか大そう雨のふるばんに、年取つたおぢいさんが、遠方に居る

むすこの所へ出した封書や、〈略〉。

九11 1 ちやうど其の時、はるか遠方で味方の萬歳の聲がわき起つた。

十64 4 図 臺灣・樺太など、遠方より送り來れるもあれば、〈略〉。

エンマヌエルおう 「人名」 1 エンマヌエル王

十二64 3 図 これイタリヤ中興の主エンマヌエル王、國土統一の時、其の家の紋章の色なる白と赤とに、統一の成功を祈る希望の色として緑を加へ、更に王家の紋章を配したるものなり。

えんまん 「圓滿」(形状) 2 圓滿

じひえんまん

十一116 2 〈略〉、一般の人民の後援がなければ自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。

十二125 6 〈略〉舊幕府の陸軍總裁勝安芳は、かねてから百万畫策して時局の圓滿な解決を計つてゐた。

エンミツヒ 「人名」 1 エンミツヒ

九37 図 エンミツヒ

エンミツヒしょうぐん (人名) 4 エンミツヒ將軍

九36 3 図 <略>、エンミツヒ將軍のひきまたるドイツの大軍を物ともせず、

勇ましく防ぎ戦ひたり。

九37 5 図 後日レマン將軍が捕虜としてエンミツヒ將軍の前に引出されし時、<略>。

九37 6 図 <略>、エンミツヒ將軍はみづから進んで握手を求め、「<略>。」と感歎せるに、<略>。

九38 7 図 やがてレマン將軍は、<略>帶劔をときて渡さんとするを、エンミツヒ將軍は「<略>。」と、強ひて之をおし止めたり。

えんやえんや (感) 1 えんやく十二78 9 そこで数そのの船に分乗した漁夫が、えんやくと掛聲を掛けながら身網を一方からたぐつて行く。

えんやらや (感) 3 エンヤラヤ一54 3 圖 クルマ ニツンダタカラモノ、イヌガヒキダス エンヤラヤ。

一54 5 圖 サルガアトオス エンヤラヤ。

一54 6 圖 キジガツナヒク エンヤラヤ。

えんようこうかい 「遠洋航海」(名) 1 遠洋航海

七52 2 図 遠洋航海を終へて、郷里に歸り來れる太平丸の船長は、<略>。

えんりょ 「遠慮」(名) 1 えんりょ

九117 1 図 村の方々は、<略>『<略>。何にてもえんりょなく言へ。』と、親切におほせ下され候。

お

お [尾](名) 16 を 尾

三22 2 犬ははなをくんくんいはせ、ををやたらにふつて、小二郎のそばへよつてきました。

五10 2 圖 「頭が八つ、尾が八つある大蛇で、<略>。」

五12 1 尾をお切りになった時、つるぎのはがこぼれました。

五12 2 ふしぎに思つて、尾をさいてごらんになりますと、つるぎが一ふり出しました。

五15 4 ぼちが<略>、尾をふつてむかへに出しました。

五21 6 <略>、鯉が大きな口で、思ふぞんぶん風をのんで、家のむねよりも高く尾を上げます。

五21 6 六 鯉のぼり <略>。其の尾を下して来て、さ着けるかと思ふと、又はらをふくらませて、をどり上ります。

五82 1 かりまたは、矢じりがつばめの尾のやうにわた、たいそうするどい矢で、<略>。

六30 7 さうして虎の目・鼻・耳・口、所きらず食ひつきました、頭のでつべんから尾のさきまで、<略>。

六46 7 キレイナ水ガサラ／＼流れ、川ソコニ小石ノ多イ所ガアルト、頭ヤ尾デ穴ヲ掘ツテ、其ノ中ヘ卵ヲ産ム。

六86 5 見せ物小屋で象を見た。<略>。<略>、それから太い足、細い尾、一切繪で見た通りであつた。

八44 <略>、小さな犬ころが二匹、<略>じやれてゐる。<略>、尾をふりながら、ちよこくやつて來た。

八27 6 圖 えんがはにうづくまる三毛のねこ、<略>。尾を立てて、のどを鳴らして、我にすりよる。

八48 4 <略>、鷺ハタシカニ鳥類ノワデアル。<略>、アクマデモガンジヨウナツバサ・尾、何所ニ一分ノスキモノク、強ミガ全身ニミチミチデキル。

九33 7 <略>、栗鼠が一匹、<略>、太い尾をちらりと見せて、急にまた穴にかくれてしまつた。

十116 5 船員は手早く鯨の尾をくさりて船はたにつないで、威勢よく根據地に引上げる。

お [男] ↓ますらお

お [緒](名) 3 を ↓はな

三30 4 圖 かばふはずみにあねはまた足だのはなをふつりと。<略> あねは手ばやくをを

たてて、小川の水で手をあらひ、<略>。

十一26 8 圖 盛政は勝つてかぶとのををしめざりし油斷を悔いつゝ、<略>。

十一31 2 圖 清正手早くかぶとのをを切つたりければ、かぶとはつゝじの枝に残つて、<略>。

おあいていたす 「御相手」(五) 1 お相手致す 《一ス》

七47 2 圖 「これは長谷川與五左と申す者、小兵なれどもお相手致す。」

おあかし下さる 「御明下」(五) 1 お明かし下さる 《一イ》

十67 10 圖 「いや、名前を申し上げる程の者ではございません。」<略>。僧は重ねて「<略>。是非お明かし下さい。」

おあがりくださる 「御上」(五) 1 オアガリクダサル 《一イ》

二63 3 圖 オハナハオチヨヲザシキヘトホシテ、オチャトオクワシヲダシマシタ。「ドウゾオアガリクダサイ。」

おあがりなさる 「御上」(五) 1 オアガリナサル 《一イ》

二60 4 圖 「オカアサン、ソノオクスリハニガウゴザイマスカ。ニガイナラ、オサタウヲ入レテオアガリナサイ。」

おあがる 「御上」(五) 1 オアガル

《一リ》

二61 4 圖 「ソレナラ、ソナンニス

<p>コシヅツノマナイデ、モットタクサン オアガリ ニナツタラ、ハヤク ナホリマセウ。」</p>	<p>支度をして、學校園へお集りなさい。おあらためる「御改」(下二) 1 お改める「一メ」</p>	<p>まはして、何をしてゐるのだ。」</p>	<p>おいしゃさま「御医者様」(名) 1 オイシヤサマ</p>
<p>おあけなさる「御開」(五) 1 おあけなさる「一イ」</p>	<p>5558 又まことにめでたい事だというので、年がうを養老とお改めになつたと申します。</p>	<p>7912 図「おい娘、兵士が一人來たらう。」</p>	<p>2621 図 オクスリハ、オイシヤサマノ オツシヤルトホリニシテノ マナケレバ ナリマセン。</p>
<p>3451 図 それではこの玉手箱を上げます。どんなことがあつても、ふたをおあけなさいますな。</p>	<p>おありなさる「御在」(五) 1 おありなさる「一ラ」</p>	<p>9105 3 図「おい北風、今日は大分手ごたへがあるぞ。しつかり頼むよ。」</p>	<p>おいそがしい「御忙」(形) 1 おいそがしい「一イ」</p>
<p>おあげなさる「御上」(五) 1 お上げなさる「一イ」</p>	<p>5448 図「われは天皇の皇子やまとをぐな。」あゝ、たゞ人ではおありなさらなかつた。〈略〉。といつて、息がたえました。</p>	<p>5107 図「おいさんとおばあさんが、一人の娘を中において泣いてゐました。〈略〉よし。其の大蛇をたいおしてやらう。強い酒をたくさんつくれ。」とおいひつけになりました。</p>	<p>おいだす「追出」(五) 1 追出す「一シ」</p>
<p>おあ・げる「御上」(下二) 1 お上げる「一ゲ」</p>	<p>5453 図 自分にまさる者はないので、たけると申して居りましたが、みやこには強いお方がおありになつた。</p>	<p>9557 図 そこで間もなく片手間に精米所を始め、追追に大きくして、あんまりつばな會社にしたのだ。</p>	<p>おいたわしい「御芳」(形) 1 おいたわしい「一イ」</p>
<p>5125 自分の物にしてはならぬとおぼしめして、天照大神へお上げになりました。</p>	<p>おある・く「御歩」(五) 1 オアルク「一キ」</p>	<p>11848 図 だんく沖の方へ進んで行くと、水の色はものすごい程濃い紺色だ。波も追々大きくなつた。</p>	<p>10622 図 すぐく立去る僧の後影を見送りたる妻は、やがて夫に向ひて、「あゝ、おいたはしいお姿。〈略〉。」</p>
<p>おあし(名) 3 オアシ</p>	<p>2577 十九 ナゾ〈略〉。〈略〉、アナタガ オアルキニナレバ、ワタクシモ アルキマス。</p>	<p>12121 2 図 参りし當座は何事もわからず、唯氣をもむのみにて、我ながら情なく存じ候ひしが、〈略〉、追々店の様子もわかり、お客様の方にもなれて、仕事に興味を覺ゆるやう相成り申候。</p>	<p>おいつ・ける「追付」(下二) 2 追ひつける「一ケ」</p>
<p>698 図 金や銀ハ美シクテ、オアシニナツタリ、指ワニナツタリ、〈略〉。</p>	<p>11710 図「發憤しては食を忘れ、樂しんではうれひを忘れ、老の將に至らんとするを知らず。」</p>	<p>12286 図「おいきたる「追來」(四) 1 追來る「一ル」</p>	<p>11724 図「後を追つて御いでになつたら、大い追ひつけませう。」</p>
<p>6106 図 銅ハ〈略〉、シタガツテネダンモ安ウゴザイマス。ソレデ、オアシニナルコトモ出來レバ、針金ニナルコトモ出來マス。</p>	<p>12654 生れつき烈しい氣性の上に、年とともに老の氣短さが加はつて、ちよつとした事にも怒り易くなつてゐた。</p>	<p>11286 図「おい、長いさををふり</p>	<p>117210 図 次の宿のさきまで行つてみたが、やはり追ひつけなかつた。</p>
<p>6124 図 今デハ鐵ハオアシノ仲間ニハハイレマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ銅以上デス。</p>	<p>12524 図「おい、長いさををふり</p>	<p>11286 図「おい、長いさををふり</p>	<p>おいいて 〴〵ここにおいて・において</p>
<p>おあつまりなさる「御集」(五) 1</p>	<p>お集りなさる「一イ」</p>	<p>11286 図「おい、長いさををふり</p>	<p>おいいて 〴〵ここにおいて・において</p>

おいで「御出」(名) 2 お出で

八〇八 〇 海軍のお出でになりました。
 どうか同日午前十時頃までに、お出でを願ひたうございます。

八〇九 〇 父が今年八十八になりましたので、来る二十五日に、お心やすい方にお出でを願つて、ほんの心ばかりの祝を致したいと存じます。

おいでくださる「御出下」(五) 1

お出で下さる「一い」

十二四四 〇 ベートーベンは立つて出かけた。「先生、又お出で下さいませうか。」

おいでなさる「御出」(五) 1 お出

デナサル「一い」

四八七 〇 略、オ花ノオカアサン

ガ来マシタ。「ヨバサン、今日ハ。」

「オキクサンデスカ。略、学校ガヒケトラ、スグアソビニ

オ出デナサイ。

おいでる「御出」(下二) 12 オイデ

ル おいでる お出デル お出でる

御いでる「一デ」

一四三 〇 「モモトラウサン、モモトラウサン、アナタハドチラヘ

オイデニナリマスカ。」

四一八 〇 ソコヘ大國主ノ神ガオ出

デニナリマシタ。

四二五 〇 おばあさんが「略」。も

つとあそんで お出で。」といつて

おとめになりましたが、「略」。

五三二 〇 略、先生が知らない生徒を

一人つれてお出でになりました。

五一六 〇 海軍のお出でになりました。

つて、略。

五三二 〇 「おあさん、お天気は。」

と、とこの中からおきゝすると、

「よいお天気です。早く起きてお出で。」

五三五 〇 遠足のしたくをして學校へ行

くと、もう級のものが大分来てゐて、

先生もお出でになつてゐました。

六一八 〇 歸りがけに、力蔵さんにお

禮を言ひましたら、「一雨降つたら、

又お出で。」と言ひました。

八七六 〇 「おとうさん、此の雪降り

に、何所へお出でになりますか。」

八八五 〇 父は「略、僕に、「お前も

一しよに行つてお出で。」といつた。

十一一七五 〇 しばらくたつと、おあ

さんが臺所の方から、「メリンスの

ふろしきを持つておいで。」とおつ

しやいました。

十一七二 〇 「後を追つて御いでにな

つたら、大い追ひつけませう。」

おいとま「御暇」(名) 1 おいとま

三四四 〇 あまり長くなりますか

ら、もう おいとまにいたしませ

う。

おいとまこい「御暇請」(名) 1 おい

とまこひ

九九四 〇 略、もう夕方になつたので、

僕等はおいとまこひをして歸りまし

た。

おいとまする「御暇」(サ変) 1 お

暇する「一し」

十一一八 〇 お暇してから、私はひとり

で歩きながら自分の始末のわるいこ

とを考へて、つくづく恥づかしくな

りました。

おいのち「御命」(名) 1 御命

六三七 〇 陸へ上つた時、家來が「た

とひ金銀で作つた弓でも、御命には

代へられませぬ。」と申しますと、

義經は笑つて、「略。」と言つたと

申します。

おいのる「御祈」(五) 1 おいのる

「一り」

六八四 〇 おそれ多くも龜山天皇は、御

身をもつて國難に代らうと、おいの

りになつた。

おいらせがわ「奥入瀬川」(地名) 3

奥入瀬川 奥入瀬川

十二五四 〇 湖の水は東岸から奥入瀬川

となつて流れ出るのであるが、一年

を通じて水位の變化は極めて少い。

十二五一 〇 奥入瀬川

十二五二 〇 これは奥入瀬川を十町餘り

下つた處に大きな瀧があつて、略。

おいれる「御入」(下二) 3 お入れ

る「一レ」

五九〇 〇 私のやくめは、御承知の通り、

皆様私の口へお入れになる郵便物

を大切にあげてゐて、略。

十一一六 〇 略、そこへ弟さんが雑誌

を「略」、本棚に並んでゐる雑誌の

間へそれゝお入れになりました。

十一一七 〇 聞けば、雑誌の類は「略、

取出したら後できつともの場所へ

お入れになるのださうです。

おいわい「御祝」(名) 1 おいはひ

四四五 〇 今年田がよく出来た

ので、ぼんにはそのおいわひ

の花火が上るさうです。

おいわいび「御祝日」(名) 1 オイハ

ヒ日

四八五 〇 キノフハ十月三十一日デ、

天長節ノオイハヒ日デシタ。

おう「王」(名) 40 王↓エンマヌエ

ルおう・かんちゅうおう・ちちおう・

フランスおう・リヤおう・リヤおうも

のがたり

八四七 〇 大キサカライツテモ、強サカ

ライツテモ、驚ハタシカニ鳥類ノ王

デアル。

十七六 〇 昔ヨーロッパにアレクサンド

ル大王といふ王があつた。

十八二 〇 或日王は部下の精兵を引連れ、

焼けつくやうに熱い平原を横ぎつて、

タルススといふ町に着いた。

十八四 〇 全身砂ぼこりにまみれた王は、

町はづれを流れてゐるきれいな川に

はいつて水浴をした。

十八七 〇 此の水浴が體にさはつたもの

か、王は俄にはげしい熱病にかつ

た。

十九五 〇 此の有様を見て、フィリップ

といふ醫師が、一命をなげうつても

王を助けようと決心した。

十97 王はこゝろよく之を許した。

十98 〈略〉、王の日頃信頼してゐる
パルメニオ將軍から、王にあてた密
書が届いた。

十99 〈略〉、王の日頃信頼してゐる
パルメニオ將軍から、王にあてた密
書が届いた。

十101 〈略〉フィリップが〈略〉王
を毒殺しようとしてゐるといふ風説
があるから、〈略〉。

十102 王は讀終つて、そつと手紙を
まぐらの下へ入れた。

十105 程なくフィリップは病室には
いつて来て、うやく／＼しく藥のコッ
プを王にさへげた。

十105 王は片手にそれを受取り、片
手にかの密書を取り出して、靜かに
フィリップに渡した。

十108 一口又一口、平然と藥を飲む
王、一行又一行、おそれと興奮に眼
かゞやくフィリップ。

十110 やがて讀終つたフィリップが、
眞青な顔をして王を見上げると、
〈略〉。

十111 〈略〉、王は信頼の情を面にあ
らはして、フィリップを見下してゐ
た。

十113 王は間もなく健康を回復して、
再び其の英姿を陣頭にあらはす事が
出來た。

十134 四 〈略〉、勾踐越の王となるに

及び、呉の勢盛にして越軍大いに破
れ、勾踐は呉に捕へられぬ。

十一104 八國 アマゾン河は全長五千
五百キロメートル、世界の河の王と
いはれ居候。

十二65 7 王にはゴネリル・リガン・
コーデリヤといふ三人の娘があつた。

十二65 10 王は其の治めてゐるイギリ
スを三分して娘たちに與へ、自分は
百人の家來を連れて月代りに三人の
娘の許に身を寄せ、餘生を安樂に送
らうと決心した。

十二66 3 さて領地をゆづる日に、王
は娘たちを面前に呼んで、「〈略〉。」
と尋ねた。

十二67 4 長女の言葉に満足した王は、
地圖を指さしながら領地の三分の一
を與へた。

十二68 1 王はリガンにも三分の一を
與へた。

十二68 2 コーデリヤは王が一番かは
いがつてゐる娘であつた。

十二68 3 王は満面に笑みをたゞへな
がら、今や遅しと其の答を待受けて
ゐる。

十二68 6 王は自分の耳を疑ふかのや
うに目を見張つた。

十二69 2 娘の言葉を物足りなく思つ
た王は、やゝせきこんで、「〈略〉。」
十二69 7 娘の答に失望した王は、例
の烈しい氣性から、苦り切つて、
「〈略〉。」と言渡した。

十二70 2 家來の中にはしきりに王を
なだめた者もあつたが、〈略〉。

十二70 2 〈略〉、王の怒はいよく／＼つ
のつて、もうどうすることも出來な
い。

十二71 3 ゴネリルは決して氣だての
やさしい女ではなかつた。二週間も
たゞぬ中にもう王に無愛想な仕向を
した。

十二71 4 其の上王に百人の家來を五
十人に減するやうにといつた。

十二71 6 王は胸も張裂けんばかりに
怒り、早速馬にむちうつて次女リガ
ンの許に走つた。

十二71 9 ところがリガンは、〈略〉、
すげなくも王を内に入れなかつた。

十二72 1 王は男泣きに泣いた。

十二72 3 怒と失望と後悔とに身も魂
もくだけ果てた王は、我にもあらず
荒野の末にさまよひ出た。

十二72 5 王は二三の忠臣にかしづか
れて、とある小屋に一夜を明かした
が、何時の間にかもう發狂してゐた。

十二74 4 やがて眠から覺めた王は、
幾分氣も靜まつたのか、「〈略〉。」と
いつてあたりを見廻し、そばに居る
コーデリヤを見て、「〈略〉。」

十二75 9 王は尚あらぬ言葉を口走つ
てはゐるが、〈略〉。
おう (感) 2 おう
四23 6 四 おばあさんは〈略〉、「お
う、三ちゃんか。よく來たね。」

といつて、〈略〉。

八86 6 信吉は「おう、おとよ。」
といつて、娘の手をはなして、頭の
先から足の爪先までながめたが、
〈略〉。

おう 「負」(四・五) 3 負ふ 《ハ・
ーヒ・ーフ》

八13 4 徳川家康が幼時家來に負はれ
て、安倍川原へ石合戦を見に行つた。

十一34 2 海うみの靜かなることは鏡の
如く、朝日夕日を負ひて、島がぐれ
行く白帆の影ものどかなり。

十二80 6 阿波あはと淡路あはぢのはざまの海
は、此處あはぢを名に負ふ鳴門の潮路。
おう 「追」(四・五) 9 追ふ 《ウ・
ーッ・ハ・ーヒ》

九60 6 鶏が麥のこぼれを食ひに來て
は、追はれて逃げて行く。

九109 3 北風は〈略〉、後からかけて
來る味方に追はれて、思はず其の場
から數十間も進んでしまつた。

十63 2 主人は僧の後を追ひて外に
出でぬ。

十113 6 右に左に鯨を追ひつつ四五十
メートルまで近づいた時、〈略〉、破
裂矢をしかけたもりを打つ。

十127 7 萬事此の有様なれば、一村
は誠に平和にして、年を追うて其の
繁榮を増すばかりなり。

十一54 4 ゴムの用途は、年を追うて
益々廣くなるばかりである。

十一72 3 「後を追つて御いにな

つたら、大てい追ひつけませう。」
宣長は、大急ぎで眞淵の様子を聞き
とつて、後を追つたが、〈略〉。
十一728 宣長は、大急ぎで眞淵の様
子を聞きとつて、後を追つたが、
〈略〉。

十二1197 國圀 〈略〉、なれぬこととて
仕事に追はれ、一日々々と延引致し、
今日に相成り申候。

おう 〈終〉 (下二) 3 終ふ 《一へ》
七522 遠洋航海を終へて、郷里に
歸り來れる太平丸の船長は、〈略〉。
九152 朝飯を終へて、妹と共に學
校に行く。

十905 國 村の社の掃除を終へし、
はうき手にく此方をさして 語
りつゝ來る若き人々、〈略〉。

おうい (感) 3 オウイ おうい
三38 國 「ア、日ガ出ハジメタ。
キレイダ。ニイサン、ニイサン。」
「オウイ」トキドバタデ、ニイサ
ンノコエガシマス。

四308 國 友だちでも居るのか
とおもつて、「おうい」とよぶと、
「おうい」といひ、〈略〉。

四308 國 友だちでも居るのか
とおもつて、「おうい」とよぶと、
「おうい」といひ、〈略〉。

おううちほう 「奥羽地方」〔地名〕1
奥羽地方

十二493 國 松に至りては産地極めて
廣くして、奥羽地方より九州に至る

まで殆ど之を見ざる處なく、〈略〉。

おうぎ 〔扇〕(名) 8 扇
四617 〈略〉、其のさをの先には、
ひらいた赤い扇がつけてありま
す。

四621 さをの先の扇をいよ
といふのでせう。

四624 扇は風に吹かれて、くる
くるまはつて居ます。

四632 國 「だれかあの扇をいお
とすものはないか。」
四662 〈略〉、神様にいのつてか
ら目をひらいて見ると、今度
は扇が少しおちついて見えま
す。

四666 赤い扇はかなめのきは
をいきられて、空に高くまひ上
つて、ひらひらと二つ三つまは
つて、なみの上におちました。

四866 國 扇ヲ持ツテ居ル人デ
スカ。

八959 國 商工業盛ニシテ、焼物・塗
物・扇・綿絲・織物等ノ産出頗ル多
シ。

おうぎのまと 〔課名〕2 扇のまと
四目6 十七 扇のまと
四611 十七 扇のまと

おうぎや 〔扇屋〕(名) 1 扇屋
八609 國 又足袋屋・蠟燭屋・時計
屋・扇屋・櫛屋等ニハ、商品ヲ大キ
クセル模型ヲカ、グル風アリ。

おうけ 〔王家〕(名) 2 王家

十二642 國 イタリアの國旗は、緑・
白・赤の三色を縦に染分け、中央の
白地中に王家の紋章を表せり。

十二645 國 〈略〉、其の家の紋章の色
なる白と赤とに、〈略〉緑を加へ、
更に王家の紋章を配したるものなり。

おうこく 〱カピラバストおうこく
おうじ 〔王子〕(名) 1 王子
十七7 マケドニヤといふ小さな國の
王子と生れ、〈略〉、當時世界に類の
ない大國を建設した英雄である。

おうじ 〔皇子〕(名) 3 皇子
九99 國 景行天皇の皇子日本武
尊、蝦夷を平げよとの勅命を奉じ
て、東國の方に下り給ひき。

九111 國 われ皇子の御身代りとな
りて海に入り、神の御心をなだむべ
し。

九112 國 皇子は勅命を果して、め
でたく都に歸り給へ。

おうしやじょう 〔王舍城〕〔地名〕1
王舍城
十二935 師を求めてあちらこちらさ
まよつてゐるうちに、マガダ國の首
府王舍城の附近に來た。

おうしゅうたいせん 〔欧州〕(名) 1
歐洲大戰
十五51 ところが、先年の歐洲大戰で、
やはり此のやさしい、しかも勇まし
い通信者の働の偉大な事が證明せら
れたので、〈略〉。

おうじょう 〱たちおうじょう

おうずる 〔応〕(サ変) 1 應ずる
《一ジ》
十一539 之をそれぐ用途に應じて、
更に加工するのである。

おうせつしつ 〔應接室〕(名) 2 應接
室 應接室
八859 小使は僕等を應接室へ通して
出て行つたが、〈略〉。

八954 信吉は〈略〉、應接室に待つ
てゐた娘の手を取つて、幾度も先生
におじぎをした。

おうなつ 〱ひつけいんおうなつ
おうばくさんまんぶくじ 〔黄檗山万福
寺〕(名) 1 黄檗山万福寺
十一1261 國 今より二百數十年前、山
城宇治の黄檗山萬福寺に鐵眼といふ
僧ありき。

おうふく 〔往復〕(名) 2 往復
七294 國 市中ニハ電車ノ往復シゲク、
港ニハ船ノ出入タエズ。

八1119 國 〈略〉、大將の父はうす暗い中
に大將を起して、往復一里餘もある
高輪の泉岳寺へよく連れて行つた。

おうふくする 〔往復〕(サ変) 1 往
復する 《一シ》
十五71 鳩は〈略〉飛ぶ力があるから、
四五十キロメートルの處を往復して
食事するぐるは何でも無い。

おうふくつうしん 〔往復通信〕(名) 1
往復通信
十五56 〱しかし此の外に、往復通信の
方法もある。〈略〉、飼養所から食事

方法もある。〈略〉、飼養所から食事

多く輸入されてゐる。

十 87 7 我が國は〈略〉、國內で出来た物を外國へ輸出することもない。

十 123 10 外の者は着物だけは美しかったが、爪の先は眞黒になつてゐる者が多うございました。

十 18 10 こゝには外國人の居留する者が非常に多く、これ等は租界といふ特別の區域内に住んでゐる。

十 49 6 〈略〉、數へてみるとゴムで造つたものは實に多い。

十 49 10 これには種類が多く、一番よいのはパラゴムといふのである。

十 51 1 南洋は一年中温度が高く、雨量が多いので、ゴムの木の發育には最もよく適してゐる。

十 91 6 圈 それから雨雪の量は何處が一番多いか、又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。

十 91 6 圈 それから雨雪の量は何處が一番多いか、又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。

十 32 6 圈 〈略〉、りつばな繪畫・彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。

十 50 5 岸は絶壁になつてゐる處が多く、〈略〉。

おいしい 「大石」(名) 2 大石 六 95 2 〈略〉、城から大石を四五十、一度に落したので、又何百人かころ

された。

十 29 10 或時の如きは、釋迦が山の下にあるのを見附けて、上の方から大石をころがしたが、〈略〉。

おおいせんせい 「大井先生」(人名) 1 大井先生 十 122 3 圈 二月二十日 小山文太郎 大井先生

おおいそぎ 「大急」(名) 4 大急ぎ 七 88 9 マリーが大急ぎでコップに水を汲んで來ました。

七 90 2 かう言つて、又大急ぎでおばあさんの着物を着せてやりました。

九 77 10 さうして大急ぎで學校道具をかばんにしまひ、めいゝく身輕になつて、校舎の後の菜園に集つた。

十 172 6 宣長は、大急ぎで眞淵の様子を聞きとつて、後を追つたが、〈略〉。

おおいちやう 「大銀杏」(名) 1 大い 十 26 6 圈 上るや石のきざはしの左に高き大いてふ、問はばや遠き世々の跡。

おおいに 「大」(副) 12 大いに 七 28 1 我が國の馬は〈略〉、大いに改良されて、いたる所に良馬を見るやうになつた。

八 33 9 婦人は大いに喜んで、夜の明けのを待つて、すぐに其の山へ上りました。

十 15 7 圈 それにつけても、諸君にも

大いに奮發していただきたいのです。

十 97 1 圈 宋の臣文天祥、大いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。

十 98 1 圈 たまゝく元の大軍至るに及んで天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。

十 133 5 圈 〈略〉、勾踐越の王となるに及び、呉の勢盛にして越軍大いに破れ、勾踐は呉に捕へられぬ。

十 49 9 圈 少時より學問に勵み、長じて後魯の君に仕へ、大いに治績を挙げしかども、〈略〉。

十 53 3 圈 當時支那は數國に分れて互に相爭ひ、戰亂止むことなかりしかば、孔子大いに之をうれひ、〈略〉。

十 117 1 圈 〈略〉、地方人民は大いにこれ等の事業に力を盡くさねばならぬ。

十 126 6 圈 鐵眼大いに喜び、將に出版に着手せんとす。

十 108 8 其の後は〈略〉、仕事は大いにはかどつて來た。

十 137 7 我々は何時かは〈略〉、世界文明の上に大いに貢獻したいものである。

おおいわやま 「大岩山」(地名) 4 大岩山 十 24 1 圈 〈略〉、十三箇所のうちなる大岩山のとりでより、〈略〉余吾湖のほとりになり來れる七八人の兵卒あり。

おおう 「覆」(四・五) 5 オホフ おほふ 《一ツ・ハ・ヒ》 六 79 7 博多の沖は見渡すかぎり、元からおしよせた船でおほはれた。

七 28 8 圈 今ハ商工業サカンニシテ、大工場多ク、エントツノ煙ツネニ空ヲオホヘリ。

九 14 4 圈 あらゆるものはやみといふ 黒きとばりにおほはれて、安き眠に入れるなり。

十 58 5 圈 砲手はその結果を見るのを おそれるやうに、手で顔をおほつて 大砲の上につつ伏した。

十 86 1 圈 木の枝を伐りて地上に立て、上を木の皮にておほひ、八人一所にうづくまりて僅かに雨露をしのぐ。

おおう 「御追」(五) 1 おおふ 《一ヒ》 四 25 2 にはとりが時時もみをかき出します。おばあさんが「ほうほう」といつておおひになりますと、〈略〉。

おおうりだし 「大売出」(課名) 2 大賣出し 五 目 8 七 大賣出し

五22 七 大賣出し

おおうりだし 「大売出」(名) 1 大賣出し

五22 4 美しいびらで、一月も前から廣告してゐた島屋の大賣出しは、いよく今日からはじまりました。

おおえやま 「大江山」(課名) 2 大江山

二目13 二十五 大江山

二71 4 二十五 大江山

おおえやま 「大江山」(地名) 2 大江山

二71 5 ムカシ 大江山 ニシユテン
ドウジトイフ ワルモノ ガキマシタ。

二74 1 ライクワウ ハケライドモト、山ブシ ニスガタヲカヘテ、大江山へムカヒマシタ。

おおおかえちぜんのかみ 「大岡越前守」

「人名」 1 大岡越前守

八36 1 時の町奉行は名高い大岡越前守で、
「略」、いろいろ調べますが、
「略」。

おおおかさばき 「大岡裁」(課名) 2

大岡さばき

八目15 第十一 大岡さばき

八35 3 第十一 大岡さばき

おおおとこ 「大男」(名) 1 大男
六42 4 圀 お前は今の分では大男になりさうだから、砲兵が騎兵になれるだらう。

おおがき 「大垣」(地名) 1 大垣

十一27 1 圀 これより先、秀吉は織田信孝を攻めて大垣にありしが、二十日の正午大岩山の敗報至る。

おおかじ 「大火事」(名) 1 大火事

六66 6 或村に大火事があつて、一村ほとんど丸やけになつた。

おおかせ 「大風」(名) 2 大風

七93 7 「略」、二百十日といふのは立春の日から二百十日目の日のことで、

此の日はよく大風が吹くから、
「略」、御船少しも進まず、今にもくつがへらんばかりなりき。

おおかた 「大方」(副) 5 大方

四29 2 もう高いえんとつは大方出来上りました。

八66 4 圀 此の港には、十五六年前に大地震があつて、町は大方こはれたのですが、
「略」。

十五10 圀 大方は國民の眞心こめたる獻木にて、中には小學生の奉りたるものも少からず。

十一15 8 「成績物は「略」、皆一生の記念になるのだ。」と思ふと、私も急に一年からのをまとめたくなりまして、私の「略」、大方なくなつてしまひました。

十一24 5 圀 あわてて逃げんとすれども時既におそく、大方はやには斬倒されたり。

おおがち 「大勝」(形状) 1 大勝

八11 5 圀 信作が落ちたのかまはず

馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、
「略」。

おおがま 「大釜」(名) 2 大釜

八50 9 はね起きて見ると、土間の大釜の上に積んであるせいろうからは、盛にゆげが上つてゐた。

八51 5 おぢいさんは大釜の火をたいていらつしやる。

おおかわ 「大川」(名) 1 大川

七9 5 大川を下つて行く舟の中はうすら寒い。

おおきい 「大」(形) 29 オホキイ

大キイ 大きい 『イー・イク』

一47 4 モモトラウ ハダングン オホキク ナツテ、タイソウ ツヨク ナリマシタ。

二45 3 ソノ マツノ 木 ハズンズン 大キク ナリマシタ。

二65 2 子牛 ハコノ アヒダ ウマレタノ デス。モウ ヨホド 大キク ナリマシタ。

四77 5 此の人は「略」、大きくなくつても、うちの仕事もせず、ゐばつてばかり居ました。

四90 5 圀 お前たちが大きくなたら、此のかたきを取つておくれ。

六45 7 其ノワケハ、川デ卵カラカヘツテ、海デ大キクナルカラダ。

六46 1 大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬ニカケテ、海カラ川へ上ツテ來ル。

六47 8 四五年モタツト、大キクナツ

テ、今度ハ自分ガ卵ヲ産ミニ川へ上ツテ來ルガ、
「略」。

七60 9 圀 皆さんのうちには、大きくなつてから、商用其の他で、外國へ出かける人もありませう。

七83 9 鯨ハカラダガ甚ダ大キイ。

七84 3 陸ニスムモノデハ、象ガ先ヅ一番大キイガ、
「略」。

七112 圀 數字は大きく

八18 8 圀 長四郎があゝの心で大きくなつたら、竹千代には無二の忠臣であらう。

八61 1 圀 又足袋屋・蠟燭屋・時計屋・扇屋・櫛屋等ニハ、商品ヲ大キクセル模型ヲカ、ゲル風アリ。

八73 2 圀 アメリカ人は大きいこと、廣いこと、
「略」、何でも世界一になるやうに心掛けてゐるといひますが、
「略」。

八86 9 圀 おとよ、大きくなつたなあ。

九55 8 圀 そこで間もなく片手間に精米所を始め、追追に大きくして、あんまりつばな會社にしたのだ。

九88 3 圀 「略」、今結んだ二つの星のへだたりの五倍ばかりのところ、かなり大きい星があるだらう。

九91 6 圀 其の中に、子供のアルカスはだん／＼大きくなつて、狩人になりましたが、
「略」。

九112 8 圀 先日遊びに上り候節御約束致し候三毛の子猫、もはや大きくなり候事と存じ候。

十132 図 あなたもずるぶる大きくなり
ましたね。
十103 10 次の室には大きい熱帯植物類
が並んである。
十一385 〈略〉、斜面などに植ゑた木
は、低い處にあるもの程早く大きく
なつて、〈略〉。
十一633 此の邊の農業は總べて規模
が大きい。
十一848 波も追々大きくなつた。
十一1237 細長い管の一端を、とけた
ガラスの中に突つこんで引出すと、
先に赤い玉がくつゝいてゐる。一端
に口を當てて息を吹きこむと、ぶう
つとふくれる。〈略〉。いよく大き
くなる。
十二235 外國貿易に至つては、之に
従事する者の心掛け如何の影響が
更に大きい。
十二519 これは主として周圍が山で、
流れ込む川に大きいのがないのに原
因してゐる。
十二547 図 〈略〉、どれを見ても自分
よりは大きく、自分よりはえらさう
である。
おおきさ 「大」(名) 4 大キサ 大き
さ
六468 卵ハ小豆程ノ大キサデ、ウス
アカイ玉ノヤウニ見エル。
八477 大キサカライツテモ、強サカ
ライツテモ、驚ハタシカニ鳥類ノ王
デアル。

十一333 さうして其の數や大きさは、
凡そ十一年餘を週期として増減して
ゐる。
十二546 図 あのいろいろの道具、た
くさんの時計、形も大きさもそれ
ゝ違つてはゐるが、〈略〉。
おおきな 「大」(連体) 92 オホキナ
大キナ 大きな
一352 圖 オホキナガンハ サキ
ニ、チヒサナガンハ アトニ、
ナカヨク ワタレ。
一452 オバアサンガセンタクヲ
シテキマス、オホキナモモガ
ナガレテキマシタ。
一466 〈略〉、モモガ二ツニワレ
テ、ナカカラ オホキナヲトコノ
コガウマレマシタ。
一532 モモトラウハ カタナヲヌ
イテ、一バン オホキナオニニム
カヒマシタ。
二77 図 ワタクシハアノアカイ
大キナハナガスキデス。
二284 図 大キナ スズヲネコノ
クビニツケテオイテ、〈略〉。
二393 ニイサンガオトモダチト、
ニハニ大キナ ユキダルマヲコ
シラヘマシタ。
二551 図 サア、犬デス。大キナ口
ヲアイテ、ワンワン。
二694 圖 アレアレアガル、ヒカウ
キガ。大キナトビガ、トブラ
ウダ。
二757 ソノ大キナカホハ火ノ
ヤウニアカク、イビキハカミナ
リノヤウデシタ。
三346 〈略〉、五一ちいさんは
「略」といつて、大きな手で
あたまをなでました。
三413 〈略〉、大きなかめが出て
きて、「略」といひました。
三487 大キナ家ガ三ムネ、「コ」
ノ字ナリニタツテキマス。
三591 コノ大キナモノガ、ヨク
アノカラノ中ニハイツテキタ
モノダトオモヒマシタ。
四14 大きな字を書いたのぼり
がすみきつた空に立つてゐま
す。
四122 島ニキタ白ウサギガ、ム
カフノ大キナヲカヘ行ツテ見
タイトオモツテ、〈略〉。
四232 おばあさんはもう耳が
遠いので、大きなこゑで、「おば
あさん、今日は。」といふと、
〈略〉。
四274 〈略〉、そのほか大きな店
はいくつも電とうをつけまし
た。
四288 又町はずれに大きな工場
のふしんがはじまつて居ます。
四365 鳥ハ大キナコエデワル
口ヲイヒ、太イクチバシデッ
ツキマス。
四375 ソレデモフクロフハシ方

ガナイノデ、大キナ目ヲ見ハ
ツテキヨトキヨトシテ居ルバカ
リデス。
四826 ちやうど大きな船がおき
を通つて居ました。
五198 図 其のいはれで、戦争の時、
大きな手がらを立てた軍人に下さる
勲章に、金の鶏をおつけになつたの
だ。
五212 〈略〉、鯉が大きな口で、思ふ
ぞんぶん風をのんで、家のむねより
も高く尾を上げます。
五395 八幡様の高い石だんを上りつ
めた所に、しめをはつた大きな杉の
木がありました。
五668 図 此の村には、向ふの杉山の
すそに、大きな用水池があつて、其
所から水を引くからだ。
五677 図 用水池には大きな鯉が居ま
せうね。
五695 どうしても大きな用水池を掘
らなければならぬと考へた。
五698 村の人々には中々大きな仕事だ
とは思つたが、〈略〉、みんな賛成し
たといふことだ。
五716 土手は長さが三百間、高さが
六間半、幅は一番上で三間といふ大
きなもくろみであつた。
五718 図 そんな大きな池があるのだら
うか。
五955 圖 一針々々、金糸・銀糸でぬ
ひをぬひ、一こてく、大きな土

蔵の壁をぬる。

五〇四 階下の入口には、左右に大きな待合室があつて、〈略〉。

六二二 其の外、釘や針ノヤウナ小サイ物カラ、キクワン車・軍艦ノヤウナ大キナ物マデ、〈略〉。

六四六 松山の入口で、赤くなつてゐたぐみを一枝折ると、「そんな大きな枝を。」と、〈略〉。

六六七 木びきの力蔵さんがうたをうたひながら、大きなのぎりで板をひいてゐました。

六二五 大きな虎が山おくで、「〈略〉。」とひとりごとを言ひました。

六四八 町ノ叔父サンカラ、オ年玉ニ大キナ磁石ヲイタバイタ。

六七五 此の電車道から東山のすへかけて、〈略〉、青い松の間に、五重の塔や大きな寺の屋根が見えます。

六八四 〈略〉、鐵のくさりで船をつなぎ合はせた。まるで大きな島が出来たやうなものである。

六八八 見せ物小屋で象を見た。先づ大きなにおどろいた。

六八三 象が大きな桶を鼻で頭の上へまき上げると、乗つてゐた象つかひは桶の中へはいつてしやがんだ。

六八九 御らんの通り大きなからだをしてゐますが、氣立はしごくやさしうございます。

六九三 すると象は鼻で、其所にあ

つたうちを拾つて、子どもの顔をあふぎ出した。此の時、「大きなお守さんだ。」と誰かがいつたので、〈略〉。

六九六 〈略〉、城のやぐらから大きな石を投落して、賊のさわぐ所をさんざんに射た。

六九八 〈略〉、賊は大きなしごを作つて、之を城の堀に渡して橋にした。七二二 時々手ごたへがして大きな蛤が出た。

七三三 何時か知らない人とも話し合ふやうになつて、大きな蛤や馬刀貝でも取ると、おたがひに見せ合ふ。

七四四 此の蛤は私どもの拾つた中から、大きなのをよつたのでございます。

七五三 それを通りぬけて四五町上ると、道ばたに大きな松が一本ある。

七五九 来て先づ誰でもおどろくのは、波止場の大きなことです。七六九 三四里行つて、大きな峠へかゝりますと、〈略〉、かけ下りて来る者があります。

七八四 二番太鼓の「並べ」のあひづに、五人の騎手は打連れて、拜殿のそばの大きな立石の前に並んだ。

八八七 將軍は長四郎を大きな袋へ入れて、「〈略〉。」といつて、袋の口を封じて柱に掛けた。

八八七 呉服屋の手代が、大きなふろしきづつみを石地藏の前におろして

休みましたが、〈略〉。

八四八 第十三 驚 〈略〉。〈略〉、サキノ曲ツタ大キナクチバシ、〈略〉、何所ニ一分ノスキモナク、強ミガ全身ニミチミチテキル。

八七二 〈略〉、大きな公園が幾つもあるから、健康には害がなさうです。

八八七 長い間かゝらなくても、工夫して大仕掛に水を落せば、大きな仕事をやる。

八九六 信吉は 〈略〉、娘の耳に口をよせて、「〈略〉。」と大きな聲で言つたが、〈略〉。

八九三 信吉は「〈略〉。」といつて、大きな涙をばた／＼落した。

九五四 鳥の羽に似た大きな葉が、幹の上の方に集つてついてをり、〈略〉。

九二五 廣さが千數百方里もある、海のやうな湖から流れる大きな河が、〈略〉。

九三六 〈略〉、大きな青大將が、向ふの水たまりの所をうねつて、のろのろと草の中にかくれて行く。

九五一 主人の家が大きな醬油屋だつたので、〈略〉。

九七二 其の中に汽車は山の間を出て、大きな川の見える所に出た。

九七六 先生も大きな箱を持つて来て、ほつたいものは此の中へ入れるやうにとおつしやつた。

九七三 大人の握りこぶし程の大きなものあれば、雀の卵ぐらゐなかなはいらしいものもあるが、〈略〉。

九八三 黒みがかつた紫色の莖が見事に延びて、大きな葉をゆらゆらと風に動かしてゐる姿は、誠に氣持がよい。

九三三 上手にも水門があるので、船は大きな箱の中に浮いてゐる形である。

九三六 ガツン湖といつて、廣さが霞が浦の二倍以上もある大きな人造湖で、〈略〉。

九三三 しかしパナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり、したがつて世界の航路に大きな變動を生じたのである。

九三七 此の停車場を出て大通を東北に進むと、二町ばかりで大きな門の前へ出ます。

九八一 室の中には、大きなポンプが幾つも、すさまじい勢で活動してゐます。

九八五 〈略〉、こんな大きなポンプを備へ附けてゐる處は、世界でも珍しいさうです。

九八四 うや／＼しく拜んでて頭を上げると、神前の大きな神鏡が、きら／＼とかざやいてゐて神々しい。

九三五 ところが此の大きな太陽も、夜の空に銀の砂をまいたやうに見える小さな星の一つと同じものだとい

ふ。

十一184 図 これまで自分の不整頓の

ために、むだに費した時間と努力は

大きなものであつた。

十一562 老砲手が驚いて向ふを見る

と、船から三四メートルの處に、

大きなふかの頭が見える。

十一587 立ちこめた砲煙の薄れゆく

につれて、先づ目に入つたのは、大

きなふかの死體であつた。

十一603 市外の眞駒内及び月寒に

は、大きな牧場がある。

十一6310 これが大きな鋤を何本も引

いて、〈略〉。

十一849 ふと見ると、さしわたし六

七寸もある大きなくらげが、ふわり

くくと浮いてゐる。

十一1177 昔イギリスの或大きな農場

で、農場主が大勢の人の耕作するの

を監督してゐた。

十一1238 見てゐるうちに大きなフラ

スコが出来た。

十二248 文明の進んだ今日尚此のや

うな考を持つのは、大きな誤といは

ねばならぬ。

十二335 図 眺望臺で眺めると、〈略〉、

さしもの大きなバリー市も殆ど一

目に見えます。

十二522 これは奥入瀬川を十町餘り

下つた處に大きな瀧があつて、魚類

のさかのぼる道を絶つてゐるからで

ある。

十二563 此の時大きなせきはらひが

聞えて、父の時計師がはいつて來た。

十二769 だいはう網は身網と垣網と

二つの部分から成つてゐて、非常に

大きなものである。

十二7610 これを海中に張つた形はち

やうど大きなひしやくに似てゐる。

十二12810 相手は大きな眼でじつと安

芳の顔を見つめながら、だまつて聽

いてゐる。

おおくに「大」(副) 1 大きに

四453 図 此のころは大さうちが

やかましくなつたから、すすはき

は 大きにらくになりました。

おおくに「大君」(名) 1 大君

九412 図 乃木大將はおこそかに、

御めぐみ深き大君の 大みことの

りつたふれば、彼かしこみて謝し

まつる。

おおく「多」(名) 13 多ク 多く

五571 松島は大小二三百の島が、海

上三四里の間にちらはつてゐて、

〈略〉。あたりの高い所からもながめ

ますが、多くは舟に乗つて、島の間

を通過つて見物します。

七292 図 又多クノ堀アリテ、川ト川

トヲツナナリ。

八72 やがて五人の騎手は多くの

人々につきそはれ、しづく馬を

歩ませて、鳥居の中に集つて來た。

八506 ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒

クテ、家畜ヲサラフノモ多クハ此ノ

時デアル。

八628 図 保己一は五歳の時めくらと

なりしが、〈略〉、後には名高き學者

となりて、多くの書物をあらはせり。

八631 図 〈略〉、多くの弟子保己一に

つきて學びたれば、〈略〉。

九158 多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、

イロ／＼珍シイ事ガアルノニ氣ガツ

ク。

十234 図 〈略〉、賣つてゐる菓子も

もちやも、多くは馬にちなんだ物で、

〈略〉。

十一1074 図 コーヒー園には多くの

日本人が働き居候。

十二164 図 これも社によりて多少の

相違はあれども、多くは總務局あり

て全體を統べ、編輯・營業の二局あ

りて、編輯に關することは前者之を

司どり、販賣・廣告に關することは

後者之を擔當す。

十二1134 図 こゝにおいて再び炭素線

の研究に没頭したれども、徒に多く

の時日と金錢とを費したるに過ぎざ

りき。

十二1163 図 〈略〉、石炭の火力による

蒸氣力は、多くの場合之に敵するこ

とが出来なくなりました。

十二1177 図 〈略〉、活動寫眞のフィルム

がアーク燈の熱の爲に發火して、多

くの死傷者を出した話などを附加へ

た。

おおく「多」(副) 2 多ク

七81 図 輸出品の主なる物は、生絲

と羽二重にして、生絲は多くアメ

リカ合衆國に、羽二重はフランス・

イギリス等に送る。

十一6410 農業者は多く古い習慣に

なづみやすいものであるが、〈略〉。

おおくに「大鯨」(名) 1 大鯨

十1161 二十メートルもある大鯨が今

は全く息たえて、小山のやうな體を

水面に横たへる。

おおくにぬしのかみ「天国主神」(人

名) 3 大國主ノ神

四181 ソコヘ大國主ノ神ガオ出

デニナリマシタ。

四205 ヨロコンデ大國主ノ神ノ

トコロヘオレイニ行ツテ、〈略〉。

四214 ソノ後大國主ノ神ハ、白

ウサギノイツタ通り、エライオ

方ニオナリニナリマシタ。

おおくにぬしのみこと「大國主神」(人

名) 4 大國主命 大國主命

十二510 図 昔、大國主命賊を平げ

民をなつて、威勢四隣に並ぶもの

なし。

十二66 図 大國主命答へていはく、

「〈略〉。」

十二72 図 こゝにおいて大國主命、

「〈略〉。」と申して恭しく國土をたて

まつりぬ。

十二91 図 かの建御雷命が大國主命

と會見せられしは此處なりといふ。

おおく「大熊」(名) 3 大熊

九〇三 西洋では昔から、〈略〉、北斗七星と其の近所の星を一しよにして大熊の形を想像して、〈略〉。
 九一七 其の中に、子供のアルカスは〈略〉、或曰大熊を見つけたので、それを射殺さうとしました。
 九一八 此の大熊こそは、先にジュノーに形を變へられたおあさんのカリストだつたのですが、〈略〉。
 おおくまざー 「大熊座」(名) 3 大熊座
 九〇四 西洋では昔から、〈略〉、北斗七星と其の近所の星を一しよにして大熊の形を想像して、それ／＼小
 熊座・大熊座といふ名をつけてゐる。
 九〇五 小熊座と大熊座について、面白い昔話があるはずだから、ねえ
 さんに聞いてごらん。
 九二五 神様が、〈略〉、すぐに親子の者を天へ連れていつて、大
 熊座と小熊座になさつたのださうで
 す。
 おおくりくださる 「御送下」(五) 1
 お送り下さる 「イ」
 七二四 あたちで子ども向の品を
 もう五十反、至急お送り下さい。
 おおくる 「御遅」(下二) 1 オオ
 クレル 「一レ」
 四一五 兄様ガタノオトモヲシ
 テ、フクロヲカツイデイラツシ
 ヤツタノデ、オオクレニナツタ
 ノデス。
 おおけやき 「大樗」(名) 1 大けやき

九三三 目じるしの大けやきの所まで
 来た時、〈略〉。
 おおこえ 「大声」(名) 2 大聲
 七四四 清正は大聲で申しました。
 十四九 喜三右衛門は、〈略〉、不意に
 「これだ。」と大聲をあげた。
 おおさか 「大阪」(課名) 2 大阪
 七二〇 第九 大阪
 七二八 第九 大阪
 おおさか 「大阪」(地名) 6 大阪
 七二八 大阪ハ昔ニ徳天皇ノ都シタ
 マヒシ所ニシテ、〈略〉。
 七二六 大阪ノ西十里ニ神戸アリ。
 七三八 大連の貿易高は横濱や神戸
 よりは少し下で、大てい大阪ぐらゐ
 だといひます。
 八四五 其の時大將は江戸から大阪ま
 で、馬やかごに乗らず、兩親と共に
 歩いて行つた。
 十一三四 瀬戸内海の沿岸には大
 阪・神戸・尾道・宇品・高松・多度
 津・高濱等良港多く、〈略〉。
 十一二六 たま／＼大阪に出水あり。
 おおさかこうべかん 「大阪神戸間」
 (名) 1 大阪神戸間
 七三〇 大阪神戸間ノ交通ノ便利ナ
 ルコト、東京横濱間ノ如シ。
 おおさかじょう 「大阪城」(名) 1 大
 阪城
 八四八 徳川家康が大阪城を攻めた時、
 〈略〉。
 おおさめる 「御修」(下二) 1 お修

める 「一メ」
 九二六 四代前の歡庵様が、
 〈略〉、始めて農學をお修めになり、
 りつばな書物もお書きになつた。
 おおさわぎ 「大騒」(名) 3 大さわぎ
 六二四 不意を討たれた平家方は、上
 を下への大さわぎ、〈略〉。
 八四二 一同は驚いて、泣くやらなげ
 くやら、大さわぎでございます。
 十一一六 私は學校で習ふ本でさへ
 時々見失つて、大さわぎをすること
 があります。
 おおし 「多」(形) 25 多シ 多し
 「一カリ・一カル・一キ・一ク・一ケレ・一
 シ」
 七八四 又輸入品は綿もつとも多く、
 砂糖これに次ぐ。
 七八七 しかして、綿は印度より、
 砂糖はオーストラリヤより来る物多
 し。
 七二八 今ハ商工業サカンニシテ、
 大工場多く、エントツノ煙ツネニ空
 ヲホヘリ。
 七二八 農家ニテハ種時・〈略〉等
 ヲナスニ、彼岸ヲ目アテトシテ、日
 ヲ定ムルコト多シ。
 八二九 揚子江ノ流域ハ地味スコブ
 ルコエ、米・茶・綿等ノ産物多シ。
 八五六 老婆の前を右左、行き
 かふ男女多けれど、〈略〉。
 八六八 看板ノ種類ハキハメ
 テ多シ。

八六三 昔はあきめくらも多かりし
 に、まことのめくらにして、大學者
 となりし人あり。
 八九六 商工業盛ニシテ、焼物・塗
 物・扇・綿絲・織物等ノ産出頗ル多
 シ。
 九三六 將卒は多く戦死せり。
 九四三 カクノ如ク、品物多クシテ、
 之ヲ望ム者少ケレバ、其ノ物ノ價安
 クナリ、〈略〉。
 九四四 品物少クシテ、之ヲ
 望ム者多ケレバ、其ノ物ノ價高クナ
 ル。
 一〇三四 其らの品を社務所
 になつさへ来て、神前にさ／＼げたし
 と願ひ出づる者數多しといふ。
 一〇六五 遠方より送り來れ
 るもあれば、枯損するもの多かるべ
 きに、〈略〉。
 一〇七〇 又御造營の半ば頃より、
 各地方青年團の御手つたひを願ひ出
 づる者數多かりしかば、〈略〉。
 一〇八五 桑を植ゑて蠶を飼ふ
 者多く、殊に一村鵲を飼はざる家な
 し。
 一一三四 瀬戸内海の沿岸には大
 阪・神戸・尾道・宇品・高松・多度
 津・高濱等良港多く、〈略〉。
 一一〇五 此の邊は南米中、日本
 人の最も多く住める處にて、〈略〉。
 一一二五 しかも其の卷數幾千の多
 きに上り、これが出版は決して容易

の業に非ず。

十一126 8 図 死傷頗る多く、家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らず。

十一129 9 図 〈略〉、喜んで寄附するもの意外に多く、此の度は製版・印刷の業着々として進みたり。

十二45 8 図 我が國に産する木材は其の種類頗る多し。

十二46 5 図 殊に杉は〈略〉、其の需要の多きこと我が國の木材中第一位にあり。

十二49 2 図 ひばは津輕半島に最も多く産す。

十二114 9 図 エヂソンの發明せるは電話・電燈・電信・電車・活動寫眞・蓄音機に關するものなど極めて多く、〈略〉。

おおじ 「大路」(名) 3 大路 ↓ すぐくおおじ・みやこおおじ
十30 4 図 影のごと、人去り 人來る大路、ほろ／＼と聞ゆる 笛の音いづこ。

十二101 10 図 〈略〉、朱雀^{すざく}の大路南に走りて、南端に羅城門をふまへたる古の奈良の都は、〈略〉。

十二102 9 図 〈略〉、東西に走る三筋の路は、北より數へて古の一條・二條・三條の大路の名残とす。
おおし・える 「御教」(下二) 1 オヲシヘル 《一へ》

四17 5 ワケヲ申シ上ゲマスト、

「略」。ト オヲシヘニナリマシタ。

おおじかけ 「大仕掛」(名) 4 大じかけ 大仕掛

四29 2 これは大じかけでれんぐわをやく工場です。

八82 6 長い間かゝらなくても、工夫して大仕掛に水を落せば、大きな仕事をやる。

十36 3 パナマ地峽に運河を造る事は、〈略〉、實地に大仕掛の工事を行つた事もあつたが、成功を見るに至らなかつた。

十二111 8 図 然れどもこは今日のアイク燈に類するものにして、〈略〉、室内に用ふるには、大仕掛にして光力強きに過ぎ、實用に適せず。

おおじしん 「大地震」(名) 2 大地震 七99 8 ところが或夜大地震が起つて、人家堂塔一時に倒れ、人々の泣叫ぶ聲は天地にひびきました。

八66 3 図 此の港には、十五六年前に大地震があつて、町は大方こはれたのですが、〈略〉。

おおしま 「大島」(地名) 2 大島

十一86 9 目ざす大島はもうそこに見える。

十二87 2 とう／＼大島について。
おおす 「仰」(四) 1 仰す 《一せ》

十二120 4 図 私のこと御心にかげ下され、常に「略」と仰せらるゝ由、いよく御なつかしく存じ奉り

候。〈略〉 小山文太郎 大井先生

オーストラリヤ 「地名」 2 オーストラリヤ

七8 6 図 しかして、綿は印度より、砂糖はオーストラリヤより來る物多し。

十86 10 又毛織物の原料になる羊毛は、〈略〉、オーストラリヤ・南部アフリカなどから輸入する。

おおせ 「仰」(名) 3 おほせ 仰 五41 3 昔熊襲のかしらに川上のたけるといふ者があつて、天皇のおほせにしたがひませんでした。

十一43 9 図 今少しく日もたゞば、轉地するもよからんと醫師も申居候に付、或は仰に従ひ、其の中御地へ参り候やもはかり難く候。

十二7 1 図 時に天照大神の使者建御雷^{たけみかづ}命此の地に來りていふやう、〈略〉。大國主命答へていはく、

「略」。我が子事代主とはかりて答へ申さん。此の時事代主命は〈略〉、仰のまゝにたてまつり給へ。」

おおぜい 「大勢」(名) 18 大ぜい 大勢

二17 6 子ドモガ大ぜい、オモテデーシヨニウタツテキマス。

二72 3 タイヘン力ガツヨク、テシタモ大ぜいアリマシタ。

三40 2 ある日はまを通ると、子どもが大ぜいでかめをつか

まへて、おもちゃにしてゐます。

四13 4 ワニザメハ「ソレハオモ白カラウ。」トイツテ、スグニナカマヲ大ぜいツレテ來マシタ。

四58 2 ニハニ大工小屋ヲタテ、大ぜいノ大工サンガ毎日其ノ中デ仕事ヲシテ居マス。

四92 3 けれどもかたきのくどうは、〈略〉、いつも大ぜいの家來をつれて居ます。

五7 3 僕は自分よりえらい友だちを大ぜいしていちめるのは、男らしくないと思ひます。

五24 2 〈略〉、それを見てゐる人も大ぜいあります。

五42 6 大ぜいの女どもにまじつていらつしやいますと、〈略〉。

六29 7 図 私どもだつて、大ぜいしてかゝれば、あなた方に負けません。

七63 3 大ぜいの人々が口々に人夫を呼んで我先に渡らうとしますし、〈略〉。

八104 7 マツチの製造所へ行つて見ると、職工が大勢居つて、それ／＼手分をして働いてゐる。

十53 1 図 大勢の人に利子を拂ふだけでは、銀行が損をしないでせうか。

十一18 10 しかし大勢の中にはそれを守らない人もある。

十一86 9 波打際には大勢の人が旗を振つたり帽子を振つたりして、「萬歳々々。」と叫んでゐる。

十一106 7 園 大勢の人々が熟したる

コーヒの實を手にてこき落し、之を集めてみぞに投入れ候へば、〈略〉。

十一117 7 昔イギリスの或大きな農場で、農場主が大勢の人の耕作するのを監督してゐた。

十二86 4 園 土人等林蔵を珍しがりて之を他の家に連行き、大勢にて取囲みながら、〈略〉。

おおせくださる「仰下」(下二) 1

おほせ下さる「一レ」

九117 2 園 村の方々は、〈略〉、「略」と、親切におほせ下され候。母は其の方々の顔を見る毎に、〈略〉。

おおせつ・ける「仰付」(下二) 1 オホセツケル「一ケ」

二73 4 ソコデ 天子サマカラ、ライクワウトイフツヨイ大シヤウ

ニ、シユテンドウジヲタイヂセヨト、オホセツケニナリマシタ。

おお・せる「仰」(下二) 5 オホセルおほせる「一セ」

二49 5 トノサマガオトホリニナツテ、〈略〉。花ヲサカセテミ

ヨ。」トオホセニナリマシタ。

二52 4 〈略〉、トノサマガオトホリニナツテ、「モウ一ド花ヲサ

カセテミヨ。」トオホセニナリマシタ。

五41 5 天皇は日本武尊にこれを征伐せよとおほせられました。

五55 7 いつか此の事が天皇のお耳に

入りまして、〈略〉。〈略〉、「略」とおほせになりました。

十61 1 園 旅僧が一夜の宿を頼むとおほせられて、あなたのお歸を待つていらつしやいます。

おおそうじ「大掃除」(名) 1 大さうぢ

四45 1 園 此のころは大さうぢがやかましくなつたから、すすきは

は大きになつて居りました。

おおぞら「大空」(名) 7 大空

三90 5 〈略〉、天人は〈略〉、ふじの山よりも高い大空のかす

みの中へはいつて行きました。

五60 4 園 森も小山も下に見て、向ふの田から大空の雲までとゞく弓

のなり。

九109 7 大空には、午後の日が大砲の煙や砂ぼこりにさへぎられて、どん

よりとかゝり、〈略〉。

十一61 9 〈略〉、眼下には廣々とした十勝の太平洋がはるばると續いて、

末は青い大空に接してゐる。

十二11 5 園 浅緑すみわたりたる大空のひろきをおの心がともがな。

十二11 7 園 大空にそびえて見ゆるたかねにも、のぼればのぼる道は

ありけり。

おおぞん「大損」(名) 1 大損

十二23 3 又單に損益の點から見ても〈略〉、つまりは小利をむさぼつて大

損を招く結果になる。

おおたき ↓イグアススーおおたき

おおだち「大太刀」(名) 1 大太刀

七44 7 謙信は馬に一むちくれて、信玄の本陣に切りこみ、大太刀をふり

かざして、信玄に打つてかゝつた。

おおちようちん「大提灯」(名) 1 大提灯

七100 8 秀吉は城の庭にしき物をのべさせ、〈略〉、大提灯をとぼして、

御臺所やおそばの女どもと居りました。

おおつきげんたく「大槻玄沢」(人名)

1 大槻玄沢

九28 5 信淵は〈略〉、宇田川玄隨・大槻玄澤などの人々をたよつて、一

心に西洋の學問を勉強した。

おおで「大手」(名) 2 大手

五14 6 〈略〉、はなれ馬がとんで來ましたので、〈略〉、よそのをちさんが

大手を廣げてとめて下さいました。

十一29 10 園 正國も〈略〉、俄に槍を投捨てて大手をひろげ、「組打。」と

叫ぶ。

おおどおり「大通」(名) 4 大通

十73 6 園 此の停車場を出て大通を東北に進むと、二町ばかりで大きな門

の前へ出ます。

十一59 8 〈略〉、市街の中央を東西に貫ぬく幅六十間の大通は、むしろ公園ともいふべきもので、花壇が設け

てあり、銅像なども立つてゐる。

十二31 8 園 世界最美の街路といはれ

てゐるシャンゼリゼーの大通には、

五六層もある美しい建物が道路の兩側に並び、車道と人道との間には、

緑したゝる街路樹が目もはるかに連なつてゐます。

十二32 2 園 有名な凱旋門は此の大通の起點にあります。

おおとりい「大鳥居」(名) 5 大鳥居

五59 7 社前の海に、日本一の大鳥居があります。

十一16 園 第一 明治神宮參拜 〈略〉。橋を渡り、大鳥居をくゞりて南參道

に入る。

十117 4 青銅の大鳥居をくゞつて進むと、沿道の家は大てい天満宮にちな

んだ物を賣つてゐる。

十二53 園 第二課 出雲大社 〈略〉。旅行にはよき日なりなど思ひつゝ、

參詣人の群にまじりて行けば大鳥居あり、巨人の如く我がゆくてに立つ。

十二55 園 七十五尺の大鳥居とは、これなるべし。

おおなぎなた「大長刀」(名) 2 大ナギナタ 大なぎなた

二11 3 ベンケイガ大ナギナタデキリツケマシタ。

四43 6 手つだひの今吉がおどけて、はうきを大なぎなたのやうに持つて、べんけいのまねをしました。

おおなみ「大波」(名) 5 大波 大波

七94 4 〈略〉、風がだん／＼はげしく

なつて来た。〈略〉。まして稲田は大波が打つ。

十252 船は二つにくだけて、船尾の方は見るく大波にさらはれてしまつた。

十269 やがてボートは岸をはなれた。〈略〉、忽ち大波にゆり上げ、ゆり下げられながら、沖へくつき進む。十273 打ちよせる大波、打返さずか波、危く岩に打付けられ、忽ち死の口に吞まれようとする。

十一617 右手には遠く日高境の山々が大浪のやうに連なり、〈略〉。

おおのこぎり 「大鋸」(名) 1 大のこぎり

十403 力蔵さんも、〈略〉、昨日からひきかけてゐるけやきの大木を、大のこぎりできき始めた。

おおはし 「大橋」(名) 1 大橋 ↓ じょうのおおはし・さんじょうのおおはし・しじょうのおおはし

六727 四條の大橋はすぐ其所に見えます。人通の多いのは此の大橋で、これには電車も通つてゐます。

おおはらしんきち 「大原信吉」(人名)

1 オホハラシンキチ

七112 受信人居所氏名〈略〉オホハラシンキチ

おおひらばし 「大平橋」(名) 2 大平橋

五376 大平橋を渡つてから左へをれて、松山の下へ瓦やきを見に行きま

した。

五37 大平橋

おおひろま 「大広間」(名) 1 大廣間 七105 翌日諸大名が伏見城の大廣間へつめました。

おおぶね 「大船」(名) 4 大船 六806 敵は高いやぐらのある大船、こつちはつり舟のやうな小舟であつた。

七77 港には防波堤ありて、風波のおそれ少く、水深くして、いかなる大船もきしに横づけにすることを得。

七382 第一第二第三と三つならんでゐて、たくさん大船を二どきに横づけにすることが出来ます。

十一8210 いで、大船を乗出して、我は拾はん、海の富。

おおまぐろ 「大鰯」(名) 1 大まぐろ 十二796 三四十貫、時には百貫以上もある大まぐろがどたりくと船中へ投込まれる光景は、〈略〉。

おおまわりする 「大回」(サ変) 1 大廻りする 「一シ」

十376 昔、太平・大西兩洋の間を往來する船は、はるか南アメリカの南端を大廻りしなければならなかつた。

おおみかみ 「大御神」(名) 2 大神 ↓ あまてらすおおみかみ

十二63 時に天照大神の使者建御雷命此の地に來りていふやう、大神の勅にいはいく、〈略〉。』と。

十二75 大神其の眞心の厚きを賞して、命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。

おおみことのり 「大詔」(名) 1 大みことのり

九413 乃木大將はおこそかに、御めぐみ深き大君の 大みことのりつたふれば、彼かしこみて謝しまつる。

おおみず 「大水」(名) 2 大水 五832 おとうさんにうかゞひますと、叔母さんの町に大水が出たさうです。

五847 大水が出なければよいがと心ばいして、夜中に手をけやき物まですつかり二階へ上げました。

おおみたま 「大御霊」(名) 1 おほみたま

十255 明治天皇・昭憲皇太后、御二方のおほみたま、とこしへに此所にしづまりましますと思へば、〈略〉。

おおみやびと 「大宮人」(名) 1 大宮人

十二1032 そのかみ金殿玉樓相望みてうちつぐ都大路を、大宮人の櫻かざし紅葉かざして往來しけむ、〈略〉。

おおむね 「大旨」(副) 1 おほむね

十二1338 〈略〉、國內はおほむね平和であつた。 おおもふ 「御思」(五) 1 お思ふ

《一七》

十二739 〈略〉、此の白い髪や髭を御覽になつたら、姉上もお氣の毒とお思ひになりさうなものだのに、〈略〉。

おおももしげるさま 「大森茂様」(人名) 1 大森茂様 十1108 二月六日 小林梅吉 大森茂様

おおやまとおり 「大山通」(地名) 1 大山通 七356 町に大山通・乃木町・奥町・兒玉町などと、日露戦争の時の大將方の名を取つてつてあるのは面白いでせう。

おおゆき 「大雪」(名) 5 大雪 七572 又きりがかつたり、大雪が降つたりして、一寸先も見えなくなることもあります。

七768 或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、「誰か居るか。」と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て來た。

十6010 此の大雪に、どうして出かけたのか。

十6210 此の大雪、まだ遠くは行かれない。 十716 これは何時ぞやの大雪に宿を借りた旅僧であるぞ。

おおよう 「大様」(形状) 1 大やう

十二539 ちかちかと氣ぜはしいのは置時計で、かつたりくと大やうなのは柱時計である。

おおよろこび 「大喜」(名) 1 大よろこび

五40 4 のどがかわいてゐたので、みんな大よろこびで飲みました。

オール(名) 1 オール

十28 2 親子は「略」、人々をボートに收容し、又あらん限りの力をオールに注いで、我が家へと向つた。

おか「丘」(名) 15 ヲカ をか 岡

三48 2 學校ノ北ニ小高イヲカガアリマス。

三48 3 ヲカノ上ニ天ジンサマノオミヤガアリマス。

三51 3 ドコカヲカノ下デ、ニハトリガナキマス。

四12 3 島ニキタ白ウサギガ、ムカフノ大キナヲカヘ行ツテ見

タイトオモツテ、「略」。

四14 4 「略」、ムカフノヲカマデナランデミヨ。

四15 4 白ウサギハ「略」、イマー足デヲカヘ上ラウトイフト

コロデ、「略」。

四15 8 「略」。

四61 2 屋島のたたかひに、げんじはをか、へいけは海で、向

ひあつて居ました時、「略」。

四67 2 をかの方では大しやうよしつねをはじめ、みんなが馬

のくらをたたいてよろこびま

した。

六8 6 「略」 奈良の春日山や三笠山は千

尺そこくだが、白根や槍岳よりも知られてゐるし、京都の東山にして

もさうだ。「略」、先づ高い岡だと思

へばよい。

七13 3 潮がすっかり落ちて、海はをかのやうになつた。

七13 4 舟で来た人も、をかから来た人も入りまじつて、何百人か数へき

れない程ある。

七15 7 舟は上げ潮に乗つて、をかの方へ動きはじめた。

九107 1 谷一つへだてた向ふの岡に、敵の砲兵が放列をしいてゐる。

十一35 6 「略」、うねくと續く岡が雨に煙つて、ぼんやりと遠く見える。

おかあさん「御母」(名) 41 オカアサン おかあさん

二6 6 「略」 オカアサン、オカアサンハドノハナガ一バン オスキデ

スカ。

二6 6 「略」 オカアサン、オカアサンハドノハナガ一バン オスキデ

スカ。

二7 2 「略」 オカアサンハアノシロイハナガスキデス。オマヘハ。

二24 5 ミヨチャンガイマ オカアサンニダカレテ、オチチヲノン

デキマス。

二59 2 太郎ノオカアサンハカゼヲヒイテネテキマス。

二59 4 太郎ハイマ、オカアサン

ガオクスリヲノムトコロヘキテ、「略」。

二59 7 「略」 オカアサン、ソノオクスリハニガウゴザイマス。

三5 4 ケサオカアサンガタマゴヲ入レテオヤリニナリマシタ。

三6 3 オカアサンニ、「略」。

トキキマス、ト「略」。

トオツシヤイマシタ。

三6 8 アルアサ、オカアサンガ「ヒヨコガカヘツタ」トオツシ

ヤツタノデ、「略」。

三12 4 お花はがくからからかへると、「略」、おかあさんのおて

つだひをします。

三13 6 「略」 おかあさん、あかちゃんにおちちをのませてちやうだい。

三14 1 それでもまだあかちゃん

がなくときには、「略」、だつこをしておかあさんのところへ

つれていきます。

三71 7 「略」、ねずみ色のもんつきはおかあさんのです。

四40 4 おかあさんがあたまに手ぬぐひをかぶり、着物の上に

ちりよけを着て、下女や手つたひのものに、おさしづをして

おはたらきになりました。

四84 3 お花ハオカアサンニオヒ

ナ様ヲカザツテイタダキマシタ。

四87 2 二人ガオ話ヲシテ居ル所へ、お花ノオカアサンガ来

マシタ。

五22 6 おひるすぎおかあさんにつれられて、買物に行きました。

五34 8 「略」 遠足「おかあさん、お天氣は。」と、とこの中からお

き、すると、「略」。

五49 4 さつきおかあさんが、「略」。

と、ねえさんにおつしやいました。

五49 8 おかあさんもねえさんも、此の五六日は夜もろくおやすみに

ならないのです。

五88 6 「略」 おとうさんやおかあさんには、取りまぎれてまだ手紙も上げず

に居ります。「略」 叔母から 竹子様

六100 8 「略」。

と、おかあさんが誰かにおつしやつてゐる時、私は庭へ

出ました。

七16 1 「略」 昨日おかあさんにするすをしていただいて、うち中の者が潮干狩

に参りました。

八51 2 おかあさんは取粉をのし板の上にひろげて、餅のつき上るのを待つていらつしやる。

八52 5 つき上ると、おばあさんが餅を臼の中で丸めて、おかあさんの所へ持つていらつしやつた。

八52 6 おかあさんはそれを二つにち

ぎつて、ぐるぐるまはしていらつしやつたが、忽ちきれいなおそなへになつた。

八四五 囲 おかあさんによろしく。

一月十八日 父から 太郎どの 子どもの

九四五 囲 おとうさんやおかあさんによろしく。 四月十日 叔父から

松太郎殿

九四七 囲 私は苗くばりをして、「お前もたしかに半人前だ。」と、おかあさんにほめられました。

九六三 略、何時かおかあさんと日光見物に來た時のことを思ひ出した。

九六一 囲 昔カリストといふおかあさんと、アルカスといふ子供がありました。

九一二 囲 おかあさんのカリストは、大そう美しい人だつたので、略。

九一九 囲 此の大熊こそは、先にジュノーに形を變へられたおかあさんの

カリストだつたのですが、略。

九九八 囲 おかあさんと茄子をもちに出たついでに、かぼちや畠を見廻ると、略。

九一八 囲 大尉は之を讀んで、略、

水兵の手を握つて、「わたしが悪かつた。おかあさんの精神は感心の外はない。略。」と言聞かせた。

九一八 囲 おかあさんは、『一命を捨てて君恩に報いよ。』と言つてゐられるが、略。

九一九 四 此のわけをよくおかあさんに言つてあげて、安心なさるやうにするがよい。

十九四 四 中には、君ぐらゐの子供や、

其のおかあさんらしい人が、今日の別れを惜しんで、泣きながら豆やにんじんをやつたり、くびや背をなでたりしてゐるのがあります。

十一一七 四 しばらくたつと、おかあさんが臺所の方から、「略。」とおつしやいました。

おかえしくださる 「御返下」 (五) 2

おかし下さる 「一い」

三六五 四 「夫人のはごろもなら、なほさらかへすことは出來ません。略。」「略」。どうぞ おかし下さいませ。」

三六八 四 そのはごろもをおかし下さいませ。

おかえしもうす 「御返申」 (五) 2

おかし申す 「一い」

三六七 四 あまり おかしさうです。から、おかし申します。

三六八 四 いやいや、おかし申したら、まはずに空へお上りになりませう。

おかえり 「御帰」 (名) 4 オカヘリ

お歸 御歸り

二五五 四 ワルイ オヂイサン ハコノ ハナシヲ キイテ、略、トノサマノ オカヘリヲ マツテ キマシタ。 九四九 四 みんなでにいさんのお歸を

待つてをります。

十六一 四 旅僧が一夜の宿を頼むとおほせられて、あなたのお歸を待つていらつしやいます。

十一一七 二 さうして新上屋の主人に、萬一御歸りに又泊れることがあつたら、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。

おかえる 「御帰」 (五) 6 おかしへる

オ歸ル お歸る 「一い」

四六三 四 おとうさんがおかしへりになつた時には、略。

九四七 四 一昨日海軍のにいさんが、休暇でお歸りになつたので、略。

九三九 二 いさんのお友だちの岡田さんが旅行からお歸りになつたと聞いて、略。

九二〇 三 略、ドウシテコンナニ早クオ歸リニナツタノダラウト思ツテ聞イテミタ。「オトウサン、御用ハモウスンダノデスカ。」

九二〇 四 ドウシテオ歸リニナツタノデスカ。

九二一 四 ソンナエライ方ナラ、オトウサンガワザノオ歸リニナラナクツテモ大丈夫デセウ。

おかしく 「御書」 (五) 2 お書く 「一い」

九二二 四 略、四代前の歡庵様が、略、始めて農學をお修めになり、

りつばな書物もお書きになつた。 九二五 四 此の方々のお書きになつた

ものは、大てい此所に持つてゐる。

おがくず 「大鋸屑」 (名) 1 おがくづ 六六八 何の木か、おがくづが大そうよくにほつてゐました。

おかげ 「御陰」 (名) 6 おかげ

三六七 四 おかげで天へかへることが出來ます。

八二四 四 耕造さんのおかげで、信作の命が助かりました。

八二六 四 これは呉鳳といふ人のおかげだと申します。

九四七 四 あの降りつづいた雨のおかげで、山田の高い所まで一息に植ゑることが出來ました。

九五八 四 「正一も大分役に立つやうになつたなあ。略、母も略、略。おかげで今日中には大がいかたづきます。」と言ひながら、略。

一二二 四 これも全く先生方のおかげと深く感謝致居り候。

おかげさま 「御陰様」 (名) 1 オカゲサマ

四二〇 四 ヨロコデ 大國主ノ神ノ トコロヘ オレイニ 行ツテ、「オカゲサマデ、カラダハコノ 通りニナホリマシタ。略。」ト 申シ上ゲマシタ。

おかし 「御菓」 (名) 1 オカザリ

二二二 四 正月ノ オカザリニハ、ドンナコトヲ シマスカ。

おかし 「御菓子」 (名) 1 オクワシ

二六ノ オハナハ オチヨラザシキ

ヘトホシテ、オチヤト オクワシ
ヲダシマシタ。

おかし「可笑」(形) 1 をかし「
シキ」

十一〇三ノ 國 此のブラジル國は、
《略》唯をかしきは日本の秋が春、
日本の冬が夏といふ様に季節の相反
する事に候。

おかし「可笑」(形) 1 をかし「
一カッ」

十二四四 其の言方が如何にもをかし
かつたので、言つた者も聞いた者も
思はずにつこりした。

おかす (四・五) 5 をかす「一サ・
一シ」

九二四 其のアルカスに親殺の大罪
ををかさせてはならぬ。

十二八ノ 親子は非常な危険ををかして
人々をボートに收容し、《略》。

十五四 此の愛らしい小鳥が、《略》、
いろ／＼の困難ををかして、遠い處
まで使者の役目を務めると聞いては、
《略》。

十九六ノ 支那の宋朝の末、北方に元
といふ國おこり、勢日々に盛にして、
宋の領地ををかして、《略》。

十二八三ノ それより一年ばかりの間
風波をしのぎ、飢寒と戦ひ、非常な
る困難ををかして《略》ナニヲと
いふ處にたどり着きたり。

おかず「御数」(名) 1 おかず

五三三ノ 《略》、木々のしづくもき
のことなつて、ばんのごはんのお
かずにまじる。

おかた「御方」(名) 8 オ方 オ方
御方

四二一ノ アナタハ オナサケブカイ
オ方デスカラ、後ニハ キツト
オシアハセノ ヨイコトガゴザ
イマス。

四二五 ソノ後 大國主ノ神ハ、白
ウサギノ イツタ 通り、エライオ
方ニ オナリニナリマシタ。

五四五 自分にまさる者はないので、
たけると申して居りましたが、みや
こには強いお方がおありになつた。

七六九 それがあなたのやうな正直
なお方に拾はれて、財布をいたゞか
せてもらひましたが、《略》。

十六四 なる／＼、旅のお方、おも
どり下さい。

十六七 御見受け申す所、たゞのお
方とも思はれません。

十一二〇七 ウェリントン公爵ともい
はれるえらいお方が、おとうさんの
言ひつけに背けとおつしやうとは、
《略》。

十二四二 一體あなたはどいふ御
方でございますか。

おかださん「岡田」(人名) 4 岡田さ
ん

九三九 にいさんのお友だちの岡田さ
んが旅行からお歸りになつたと聞い

て、《略》。

九三九 ちやうど岡田さんは四五人の
お友だちに、白馬登山のお話をなさ
つていらつしやる所でした。

九七二「《略》。」と言つて、岡田さん
は高山植物や雷鳥の繪葉書を、たく
さん出して見せて下さいました。

九七九 お話が頂上のながめに移ると、
いよくはずんで来て、岡田さんは
目の前に見てゐるやうな様子で説明
なさるので、《略》。

おかたづけなさる「御片付」(五) 1
おかたづけなさる「一イ」

四四七 花子も 自分のおもちや
だけ、ちゃんと おかたづけなさ
い。

おかね「御金」(名) 15 オカネ お金
二四三「《略》、土ノ中カラ、オカ
ネヤタカラモノガタクサンデ
マシタ。

二四六 ソノウスデ米ヲツキマ
スト、ウスノ中カラ、マタオ
カネヤタカラモノガデマシタ。

七二五 もしお金をもらつたら、あ
なたの氣はそれですむかも知れませ
んが、私の氣がすみません。

十五〇 銀行といへば、おとうさん
は、何時かも銀行へ行つてお金を預
けて來るとおつしやいましたね。

十五一 銀行はお金を預ける處です
か。

十五三 一體、なぜお金を預けるの

ですか。

十五四 お金といふものは、うちに
しまつて置くものではない。

十五七 さうで無くても、餘分のお
金があると、ついむだな事に使つて
しまふ。

十五八 だから、少しでも餘つたお
金があつたら必ず預金にして置くも
のだ。

十六一 預けたお金は何時でも返し
てもらへますか。

十五九 だから當分使ふ見込のない、
まとまつたお金は定期預金にした方
がよいのだ。

十六〇 一體、銀行は人からお金を
預つてそれをどうするのですか。

十六三 世の中にはお金の有餘つて
ゐる人もあるが、又何か事業を起さ
うと思つてゐる人で、お金のない人
がある。

十六四 世の中にはお金の有餘つて
ゐる人もあるが、又何か事業を起さ
うと思つてゐる人で、お金のない人
がある。

十六五 銀行は有餘つてゐる人から
お金を預つて、資金の足らぬ人に貸
附けるのだ。

おがみめぐる「拜巡」(五) 1 拜み
巡る「一ツ」

十二〇五 僧は名を禪海といつてもと
越後の人、諸國の靈場を拜み巡つた
末、《略》。

おがむ「拜」(五) 3 をがむ 拜む

「ミーム・ーン」

四34 私どももすすをならしてをがみました。

八94 信吉は教室を出ると、「略。」

といつて、先生を廊下でをがむやうにした。

十118 うやくしく拜んでさて頭を

上げると、神前の大きな神鏡が、きらくとかがやいてゐて神々しい。

おからだ「御体」(名) 1 お體

十二73 略、——まあ、此のお

體であのひどい嵐の中を——。

おかりもうす「御借申」(五) 1 お

借り申す「シ」

八95 先生は「何なら、あのお子

を今日一日お連れになつてもようございます。」といはれた。信吉は

「略、すぐ」では、一日お借り申します。

おがわ「はちじゅうにおがわのう

おかわいそう「御可哀相」(形状) 1

おかはいさう

三87 天人はしをしをとして、

なみだにうるむ目で空を見上げました。れふしはきのどくにな

りました。「あまり おかはいさうです から、おかへし申します。

「略。」

おかわり「御変」(名) 1 御かはり

十73 皆様御かはりはありませんか。

おかんがえ「御考」(名) 1 お考

九25 略、一すちに國の爲、民

の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ事で、これが佐藤の家の學

問の精神である。

おかんがえる「御考」(下二) 1 お

かんがへる「一へ」

五83 みことは此の川上にも人がす

んでゐるにちがひないとおかんがへ

になつて、略。

おき「隠岐」(地名) 2 隠岐 隠岐

十130 元弘二年三月、北條高時、

後醍醐天皇を隠岐にうつし奉る。

十130 然るに今主上隠岐にうつさ

れ給ふと聞き、高德一族を集めて

いへるやう、「略」と。

おき「沖」(名) 17 おき 沖 ほう

とうおきのかいせん

三83 おきの方はかすんで、空

と水が一つになつて見えま

す。

四82 ちやうど大きな船がおき

を通過して居ました。

六20 いつも通る汽船も、高波をよ

けて、沖を通ると見えて、汽てきの音は少しも聞えませぬ。

六21 沖もどか、濱ものどか、

沖へ急ぐ兄の小舟、濱へ歸る父の小舟、すれ合つて、ゑがほとゑがは。

おき「起」 ねおき・ねおきする・は

やおき

おき「置」 うちにちおき・ものおき

おきあい「沖合」(名) 1 沖合

十25 略、荒れくるふ海上を見渡

したグレース親子は、ふとはるかの

沖合に、かの難破船を見とめた。

おきあがる「起上」(五) 1 おき上

る「一ラ」

四96 すけつねも人に知られた

さむらひ、「心えた。」と、まくら

もとの刀を取つて おき上らう

としました。

おきいず「起出」(下二) 2 起出づ

「一デ」

九27 起出で、勇まし

く我もはげまん、今日の業。

十一46 翌朝畫師は常にもあらず

早く起出で、ふすまに向ひてしきりに筆を動かしたり。

おききする「御聞」(サ変) 2 お

ききする お聞きする「一シースル」

五35 「おかあさん、お天氣は。」と、とこの中からおきくと、略。

八84 母が「略。」といふと、信吉は「略、略。」それをお聞きして安心致しました。略。」といつて、すぐ出かけようとした。

おききなさる「御聞」(五) 1 おききなさる「一イ」

五45 又中村君には、「これは級

長の山田さんです。分らないことは此の方におききなさい。」とおつしやいました。

おきく「話手」2 オキク

四八五 〇キク「マア、キレイデスコト。〈略〉」

四八六 オキク「五人バヤシノ一番右ニ居ル人ハ何ヲスルノデセウ。」

おきく「人名」1 オキク

四八六 今 オキクト オヒナ様ノ前ニスワツテ ナガメテ 居マス。

おきくさん「人名」1 オキクサン

四八七 〇「ヲバサン、今日ハ。」「オキクサンデスカ。〈略〉」

おきく「御氣付」(五) 1 おきく「御氣付」(五) 1 おきく

九二五 〇「略」、四代前の歎庵様が、國利民福の本は農業を盛にするにあるとお氣づきになつて、〈略〉。

おきて「旋」(名) 1 おきて

九四二 〇「厚意謝するに餘りあり。軍のおきてにしたがひて、他日我が手に受領せば、長くいたはり養はん。」

おきどけい「置時計」(名) 1 置時計

一二五三 〇「かち／＼と氣ぜはしいのは置時計で、かつたり／＼と大やうなのは柱時計である。」

おきな・う「補」(五) 1 補ふ

《一ツ》

一二三九 〇「略」、又常に其の短所に注

意し、之を補つて大國民たるにそむかぬりつばな國民とならねばならぬ。おきな・おる「起直」(五) 1 起直る

《一ツ》

九二八 〇「病みつかれた六十ばかりの老人が、ふとんの上に起直つて、十五六の少年に、熱心に何か言聞かせてゐる。」

おきな・る「置」(五) 1 おきな・る「一い」

四四九 〇「まん中へふせておきなさい。」

おきな・る「沖繩」(地名) 1 沖繩

九一八 〇「又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、〈略〉。」

おきにいり「御氣入」(名) 2 おきにいり

四九二 〇「けれどもかたきのくどうは、みなもとのよりともといふ大將のお氣に入りで、〈略〉。」

七九七 〇「三成は秀吉のお氣に入りですから、秀吉は之を信じて、清正に歸國を命じました。」

おきのどく「御氣毒」(形状) 3 おきの毒

六八八 〇「さて主人に火事の話をして、義捐金のことをいひ出すと、『それはお氣の毒だ。』と言つて、〈略〉。」

一六六五 〇「御覽の通りの見苦しさ、お氣の毒ながら、とてもお泊め申す事は出来ません。」

一二七三 〇「略」、此の白い髪や髭を

御覽になつたら、姉上もお氣の毒とお思ひになりさうなものなのに、〈略〉。

おきばし「置場所」(名) 1 置場所

一一一五 〇「略」、私の置場所をきめておかなかつたので、大方なくなつてしまひました。」

おきやく「御客」(名) 4 オキヤク

おきやく「お客」

二四六 〇「オチヨガ オキヤク ニナツテキマシタ。」

四二七 〇「又あめややくわしやでは、はやし立てて おきやくをよんでゐます。」

五二四 〇「店の中へはいつて見ますと、番頭さんたちは、お客から注文をうけては、小ぞうさんたちにさしづをしてゐます。」

五二四 〇「小ぞうさんたちは、土さうからいろ／＼な反物や帶地をかついで来て、お客の前につみ上げます。」

おきやく・あそび「御客遊」(課名) 2

オキヤクアソビ

二四三 〇「オキヤクアソビ

二四一 〇「オキヤクアソビ

おきやく・あそび「御客遊」(名) 1 オキヤクアソビ

二四三 〇「オハナト オチヨガ オキヤクアソビ ヲシテキマス。」

おきやく・さま「御客様」(名) 1 お客様

一二二〇 〇「略」、追々店の様子も

わかり、お客様の扱方にもなれて、仕事に興味を覺ゆるやう相成り申候。おき・る「御切」(五) 2 お切る《一リ》

五一一 〇「略」、みことはこしのつるぎをぬいて、大蛇をずたずたにお切りになりました。」

五二二 〇「尾をお切りになつた時、つるぎのはがこぼれました。」

お・きる「起」(上) 9 オキル おきる

起キル 起きる 《一キ・一キヨ・一キル》↓とびおきる・はねおきる

三三〇 〇「略」、ケサコソ ニイサン ヨリサキ ニ オキテ ミヨウト オモツテ、ソツト ネドコヲ 出マシタ。」

四九七 〇「略」、「おきよ、すけつね。曾我兄弟がまゐつた。」と名のりました。

五三二 〇「早く起きてお出で。」

七六八 〇「或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、『誰か居るか。』と呼ぶと、〈略〉。」

七九二 〇「略」と、おとうさんは朝起きるとすぐ空を仰いでかうおつしやつた。

九六一 〇「間もなく甲板士官や傳令員が起きて来る。」

九六三 〇「これ等の仕事は、陸上の家で、毎朝起きると先づ夜具をかたづけ、雨戸をくるのかはりはないが、

〈略〉。

九119 道雄ガ今朝起キテミルト、商

用デ四國ノ方へ旅行シテキタ父ガ、
夜汽車デ歸ツタトコロデアツタ。

十一52 10 ゴム園の人は毎朝暗いうち
に起きて、受持の木に此の切付をし
て廻る。

おく〔奥〕(名) 4 オク おく 奥
↓やまおく

五23 2 二かいのまどに萬國旗がつる
してあつて、おくの方からたえずち
くおんきの音が聞えて來ます。

六33 4 豆腐屋ノラツパヤ煮豆屋ノリ
ンガ小路ノオクニ聞エテ來テ、町ハ
ダンくニギヤカニナツテ來タ。

八85 8 「〈略〉。」といふ間も、信吉は
のび上るやうにして奥の方を見た。

十二55 3 不意にぱた／＼と音がして
小さな子どもが二人奥からかけ出し
て來た。

おく〔置〕(四・五) 69 オク おく
置ク 置く 《イー・カー・キーク・
ーケ》

二28 7 大キナスズヲネコノ
クビニツケテオイテ、〈略〉。

四57 2 今に見てゐる、僕
だつて、見上げるほどの大木
になつて見せずにおくもの
か。

五8 5 〈略〉、おちいさんとおばあさ
んが、一人の娘を中において泣いて
ゐました。

五38 6 〈略〉、先生が〈略〉、私ども
を道に待たせておいて、學校へおよ
りになりました。

五46 4 米をつくの、上にもうす
をさかさにつるしておけば、きねの
上げ下しに米がつける。

五68 1 鯉も居るが、それよりも、
もつとお前に聞かせて置きたい話が
ある。

五80 8 ほとつて置け、今に生かかへ
る。

六2 5 うちでも土間に丸太を置いて、
其の上につんであります。

六45 5 叔父サンニ鮭ノ話ヲ聞イタカ
ラ、ワスレナイ中ニ書イテ置カウ。

六60 8 うばを門のわきに立たせて置
いて、姫は中にはいりました。

六65 2 昨日ニイサンガ釘箱ヲ火鉢ノ
フチニ置イテ、手工ヲシテキタ時、
〈略〉。

六76 7 コレハ、ハジメ白地ニオツ
テ置イテ、後デカタヲ置イテ染メル
ノデ、〈略〉。

六76 8 コレハ、ハジメ白地ニオツ
テ置イテ、後デカタヲ置イテ染メル
ノデ、〈略〉。

六87 6 象がそれを下して來て地に置
くと、象つかひがぬつと桶の中で立
上つた。

六92 4 先づ谷川のほとりに三千人の
番兵を置いて、城兵が汲みに來られ
ないやうにした。

六96 4 すると正成は、何時の間に用
意して置いたか、たくさんないま
つを出して、〈略〉。

六106 8 棟にはかつを木がならべて
あり、棟の兩はしには千木が置いて
ある。

七27 2 〈略〉、近くは乃木大將も、馬
は煉瓦造の小屋に入れて置かれたの
である。

七60 1 さておしまひに一ついつて
置きたい事があります。

七61 3 どうか今から十分海になれ
て置くやうにしてもらひたいのであ
ります。

七95 6 物賣は になへる
我が荷下に置き、掛聲高くおして
やる。

八20 4 イカダノ大ナルモノハ長サ
六七十間、幅三四十間、コレニ土ヲ
置キテ野菜ヲ作り、〈略〉。

八23 4 ちやうど蕃人が、其の前の年
に取つた首が四十餘ありましたので、
それをしまつて置かせて、其の後の
お祭には、毎年其の首を一つづつ供
へさせました。

八31 4 〈略〉、よくもえるやうに其の
上下にそだを置き、又其の上にねつ
たかま土を置いて、打固める。

八31 5 〈略〉、又其の上にねつたかま
土を置いて、打固める。

八36 5 其の子を二人の真中に置いて、
兩方から子どもの手を取つて引

合へ。

八50 3 果ハ至ツテソマツナモノデ、
〈略〉、其ノ上ニヤハラカナコケヲ置
クダケデアル。

九14 7 妹の置きて行きたる餌箱に
入れて持歸り、茶の間の戸棚の中に
しまふ。

九22 1 まくらもとに置いてある行燈
の光はうす暗く、〈略〉。

九27 2 父の此の願だけは、
しかと心にとめて置いて、必ず仕と
げてもらひたい。

九85 7 どの星かを見おぼえて置い
てごらん、寝る頃にはもう位置が變
つて見えるから。

九99 10 〈略〉、かぼちや畠を見廻ると、
此の前まだ少し早いと言つて残して
置いたのが、〈略〉。

九104 5 月が西の空にうす白く残り、
野には朝つゆがしつとりと置いてゐ
た。

十39 1 〈略〉、兄は〈略〉、かついで
來たつるはしを下へ置いた。

十51 4 お金といふものは、うちに
しまつて置くものではない。

十51 5 うちに置くと、火事にあつ
たり、盗人に取られたりする危険が
あるからね。

十51 9 だから、少しでも餘つたお
金があつたら必ず預金にして置くも
のだ。

十56 3 それは、豫め甲乙の二地をき

めて置いて、一方を飼養所、一方を食事所とし、飼養所から食事所へ通つて食物を取るやうに馴らして、其の往來を利用するのである。

十67ノ圖 しかし此の二本だけは、其の頃のかたみとして、大切に殘して置いたのでございますが、〈略〉。

十79ノ圖 〈略〉、大分長くなりましたから、今日は此のくらゐにして置きます。

十94ノ圖 かねてあぶないといつて置いた、あの橋を渡つたのでは無いか。

十101ノ圖 熱帯地方から持つて來たのだから、かうして年中六七十度以上の暖さの處に置かなければいけないのだ。

十116ノ圖 まだ芽の出ないはずの木の間を通り、霜の眞白に置いた田の中を走る。

十123ノ圖 私はわざと一さつの書物を床の上に投げて置きました。

十123ノ圖 〈略〉、あの青年ははいるとすぐに書物を取上げて、テーブルの上に置きました。

十153 のぶ子さんは、成績物が返るとすぐ紙の袋へ入れておいて、學年の終におまとめになるのださうです。

十158 〈略〉、私のは置場所をきめておかなかつたので、大方なくなつてしまひました。

十164ノ圖 成程、かういふ風に分類

してそろへておけば、いつ取出すのにも便利だ。

十1610 聞けば、雑誌の類は號の順に並べておいて、取出したら後できつともとの場所へお入れになるのださうです。

十136ノ圖 〈略〉、さつきおとうさんのいひついで、明日の用意に出しておいた植林地の書付を開いて見る。

十137ノ圖 こんなに間をおいてよいのですか。

十137ノ圖 〈略〉、此の邊では太材を取るのが利益だから、かう間をおいて植ゑるのだ。

十139 生きた枝でも枯れた枝でも其のまゝにしておくと、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十140ノ圖 植林は貯金のやうなもので、植ゑてさへおけば、年々太つて利息が附いて行く。

十164ノ圖 〈略〉、立木や切株の根本を掘つておいて、それにくさりをつけて此のトラクターで引くと、〈略〉。

十173ノ圖 さうして新上屋の主人に、〈略〉、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。

十193ノ圖 〈略〉、便宜上三百六十五日を一年とし、普通四年毎に一日の閏をおくことになつてゐる。

十193ノ圖 ところが太陰曆は〈略〉、三年にならないうちに一箇月の閏を

おかなければならない。

十198ノ圖 大事なことは拾ひ集めた木片などに書留めて忘れないやうにしておく。

十199 燈が盡きると翌朝すぐ手に取れるやうに、まくらもとの壁際に置く。

十115ノ圖 市町村長や議員を選挙するには、専ら其の人物に重きをおいて、決して親族・縁故其の他私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。

十124ノ圖 それ故大多數の商人は、自己の利益を除いては、殆ど何物をも眼中に置かず、忍耐も努力も要するに皆自己の爲であつた。

十153ノ圖 自分の置かれたのは、仕事臺の上に乗つてゐる小さなふたガラスの中で、〈略〉。

十154ノ圖 ねぢは、〈略〉、これはどんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、〈略〉。

十156ノ圖 時計師は〈略〉、出して置いたねぢの無いのに氣が附いた。

十159ノ圖 一日おいて町長さんが來た。

十160ノ圖 ねぢが一本いたんであましたから、取りかへて置きました。

十1100ノ圖 社寺の壯麗はしばらくおき、何の山、何の川、一木一草に至るまでも歴史あり古歌あり、〈略〉。

十1131ノ圖 よく此の胸を見覚えておいてくれ。

おく [起] (上) 2 起く 《一キ》

九110ノ圖 朝早く起きて、井戸端に出づ。

九84ノ圖 今朝遠足にとく起きて、石屋の前を通りしに、〈略〉。

おくげさまがた [御公家様方] (名) 1 おくげ様方

六69ノ圖 〈略〉、冠をかぶつて太刀をはいたおくげ様方や、〈略〉お姫様方の姿を、此の川の水はいくたびとなくうつしたことでございませう。

おくさま [奥様] (名) 1 奥様

八83ノ圖 信吉は〈略〉、「奥様、あのとは。」と、さも心配さうにたづねた。

おくすり [御薬] (課色) 2 オクスリ

二目8 二十 オクスリ

二59ノ圖 二十 オクスリ

おくすり [御薬] (名) 3 オクスリ

二59ノ圖 太郎 ハイマ、オカアサン

ガ オクスリ ヲノム トコロ ヘキテ、〈略〉。

二59ノ圖 オカアサン、ソノ オクスリ

リ ハ ニガウ ゴザイマス カ。

二61ノ圖 オクスリ ハ、オイシヤサ

マノ オツシャル トホリ ニシテ

ノ マナケレバ ナリマセン。

おくに [御国] (名) 1 御國

九116ノ圖 一人の子が御國の爲にくさに出でし事なれば、定めて不自由なる事もあらん。

おくのま [奥間] (名) 1 奥の間

後れて、〈略〉。

八91 〔略〕、つゞいて三騎までも後れて、もはや信作と耕造の二人だけの競走となつた。

十一556 初は十間以上も相手をぬいてゐたが、どうしたのか急に相手にぬかれて、一二間も後れてしまつた。

おくれる 〔御畏〕（下二）3 おくれる 〔一レ〕

四906 母は泣きながら二人

の子どもに、〔略〕。お前たちが大きくなつたら、此のかたきを取つておくれ。』といひました。

八88 〔略〕 信吉はびつくりして、〔略〕

「〔略〕。もう一つ何とか言つておくれ。」といつて、娘を引きよせて、〔略〕。

八897 〔略〕 聞えるなら、もう一つ何か言つておくれ。

おけ 〔桶〕（名）7 をけ 桶 けておけ・ひとておけ

五108 酒が出来ると、みことはそれを八つのをけに入れて、八岐の大蛇の来るのを待つていらつしやいました。

五113 間もなく大蛇が来て、八つの頭を八つのをけに入れて、其の強い酒を飲みました。

六873 象が大きな桶を鼻で頭の上へまき上げると、乗つてゐた象つかひは桶の中へはいつてしやがんだ。

六874 象が大きな桶を鼻で頭の上へ

まき上げると、乗つてゐた象つかひは桶の中へはいつてしやがんだ。

六876 象がそれを下して来て地に置くと、象つかひがぬつと桶の中で立上つた。

九653 下士官が、甲板の吐水口からふき出る海水を、桶に汲んでほとんど

く流すと、〔略〕。

十二466 〔略〕 家屋・橋梁・船舶・電柱より桶・たる・曲物の類に至るまで、一として杉を用ひざるなし。

おけいこ 〔御稽古〕（名）3 オケイコ おけいこ

三363 タイサウノトキアルキ出スノハ左ノ足デ、オケイコ

ノトキアゲルノハ右ノ手デス。

五164 學校からかへつて、新しい筆で書き方のおけいこをしました。

十1085 〔略〕 御前様御ひまの折裁縫のおけいこに御仕立て下された候。

おけが 〔御怪我〕（名）1 おけが

五833 〔略〕 皆様におけがもございませんでしたか、お見舞を申し上げます。

九月七日 竹子 叔母上様

おけや 〔桶屋〕（名）1 ヲケヤ

三658 私ノウチヘキノフヲケヤガ来テ、手ヲケヤタラヒノ

おける けておける

おげんき 〔御元氣〕（形状）2 お元氣

御元氣

九333 〔略〕 おとうさんはじめ皆様お元氣で何よりです。

十1094 〔略〕 平生甚だ御達者にて、近來は殊に御元氣のやうに承り居り候事とて、〔略〕。

おこ 〔御子〕（名）2 お子

八908 先生は「あなた、此のお子

が返事をしないのは、あなたの口が見えないからです。〔略〕。」と言はれた。

八946 先生は「何なら、あのお子

を今日一日お連れになつてもようございます。」といはれた。

おこころざし 〔御志〕（名）2 お志

九228 〔略〕 それから元庵様・不昧軒様二代つゞいて、其のお志をおつぎに

なり、一そう研究を進められた。

十665 〔略〕 僧は驚きて、「お志は有難いが、そんなりつばな鉢の木をたく

のは、どうぞ止めて下さい。」

おこころやす・い 〔御心安〕（形）1

お心やすい 〔一イ〕

八1095 父が今年八十八になりましたので、来る二十五日に、お心やすい方にお出でを願つて、ほんの心ばかりの祝を致したいと存じます。

おこし けそういんおこし

おこし 〔御腰〕（名）1 オコシ

一486 〔略〕 「オコシノモノハナン

デスカ。」「ニツポン」ノキビダンゴ。」

おこす 〔起〕（四・五）8 起す 〔一

サ・シ・ス〕

七201 さて、心の中に、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をほろぼさうとしてゐます。

八1119 〔略〕、大將の父はうす暗い中に大將を起して、往復一里餘もある高輪の泉岳寺へよく連れて行つた。

十534 〔略〕 世の中にはお金の有餘つてゐる人もあるが、又何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。

十11310 もうくくと立ちこめる白煙の間から見ると、すさまじい波を起して、鯨は海底深く沈んだ。

十1312 〔略〕 いでや、行幸の路に待受け、君を尊び奉りて義軍を起さん。

十一785 〔略〕、〔略〕我々は、〔略〕又之を考案した昔の人々に對して別段感謝の念を起すこともない。

十一1168 又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、〔略〕。

十二791 〔略〕、まぐろは水面に渦巻を起したり、背びれを水上に現したりして泳ぎ廻つてゐる。

おごそか 〔厳〕（形状）4 おごそか

八418 越前守は早速門をしめさせて、見物人一同の所名前を書取らせ、さておごそかに、〔略〕。」と申し渡しました。

九411 〔略〕 乃木大將はおごそかに、御めぐみ深き大君の 大みことの

りつたふれば、彼かしこみて謝しまつる。

九674 朝日にかぐやく軍艦旗が、海風にひらめきながら、しづく上つて行く様は、實におこそかなものである。

十一1124 蜀漢 いしずゑ固めし蜀漢の國、漢中王はおこそかに帝の位をふませ給ひぬ。

おこたり 「怠」(名) 1 怠
十一238 待ちまうけたる秀吉は、琵琶湖のほとりに十三箇所のとりでを構へ、諸將を配置して防備をささ意なし。

おこたゝる 「怠」(四) 2 怠る 《一ラ》

九8210 ぢいさん「略」、大いなる石横たへて、なほ怠らずこつくと、何をか常に刻みある、《略》。

十二874 略、かゝる中にありても、彼は土地の事情を研究することゝ怠らざりき。

おことば 「御言葉」(名) 1 御言葉
九1157 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、《略》、「それは餘りな御言葉です。《略》。」と言つて、《略》。

おこどもしゅう 「御子供衆」(名) 2
お子どもしゅう

六893 なれますれば、お子どもしゅうのお守も致します。

六895 略、お子どもしゅうは此の腹の下でお晝ねをなさると申します。

おこない 「行」(名) 2 行
十一1244 りつばな人の紹介状よりも、何よりも、本人の行がたしかな保證です。

十一199 又他人の物を盗んだといふやうな犯罪があつた場合には、國家は其のやうな不法な行が再びされないやうに、《略》。

おこないつくす 「行尽」(五) 1 行ひ盡くす 《一シ》
十二988 私が行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと思つたことを語り盡くした。

おこなう 「行」(四・五) 19 行ふ
ふ 《一ッ・ハ・ヒ・フ》
七1095 彼岸ハ七日ノ間ニシテ、其ノ中日ニ、春ハ春季皇靈祭、秋ハ秋季皇靈祭ヲ行ハセラル。

九671 此の時《略》、衛兵隊は捧銃の敬禮を行ひ、《略》。

十一549 鳩を通信に使つたのは、餘程古い時代からの事で、殊に一時は非常に盛に行はれたが、《略》。

十一2010 裁判は事件の輕重によつて、最初區裁判所又は地方裁判所で行はれる。

十一213 又地方裁判所で行はれた最初の裁判に不服な者は、控訴院・大審院にと順次に上訴する。

十一217 裁判を行ふのは判事の職務であり、《略》。

十一224 此の世を不道理や罪惡の行はれない、平和な、秩序正しい世の中にするのが其の目的である。

十一226 若し裁判が無いとしたら、人々相互の争がはてしく行はれて、しかも其の争は、力の強い者やわがしこい者が勝つことになるであらう。

十一228 若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、せつかくの法律もねうちが無くなり、我々は安心して生活することが出来ぬであらう。

十一519 略、これが成長して、切付を行ふまでには五六年もかゝる。

十一537 かうして出来たゴムは、各國の工場に運んで加硫法を行ふ。

十一543 近來床の敷物や、道路にもゴムを用ひることが行はれて來た。

十一669 此の方法は各國民の間に、廣く又極めて長い間行はれてゐたものであるが、《略》。

十二147 されば珍しき事件の起りし時、之を記述して印刷に附し、廣く發賣することは古より行はれたりしが、《略》。

十二988 私が行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと思つたことを語り盡くした。

十二991 私のなくなつた後も、めいゝが其の教をまじめに行ふ所に

私は永遠に生きてをる。

十二1249 月の十五日を期して總攻撃を行ひ、一舉に江戸を乗つ取るはずである。

十二1263 翌十四日の會見は、芝、田町の薩摩屋敷で行はれた。

おこなわゝる 「行」(下二) 1 行はる 《一ル》

十一1304 此世に鐵眼版と稱せらるゝものにして、一切經の廣く我が國に行はるゝは、實に此の時よりの事なりとす。

おこまる 「御困」(五) 1 おこまる 《一リ》

五185 むかし神武天皇がわるものどもをごせいばつになつた時、わるものどもが強く、おこまりになつたことがある。

おこめ 「御米」(名) 2 オ米

二355 モチハタイセツナオ米デコシラヘタモノデスカラ、イデハイケマセン。

二366 ソレカラコノ人ノ田ニハ、オ米ガスコシモデキナクナツタトイヒマス。

おこる 「怒」(五) 11 オコル おこる 《一ッ・ーリ》

一163 カニガシニマシタ。コガニガナイテキマシタ。ハチガキテ、ナクワケヲタツネマシタ。

ハチガキテオコリマシタ。
一165 クリモキイテオコリマシ

タ。

一167 ウスモキイテ オコリマシタ。

二471 ワルイオヂイサンハ又コノウスヲカリニキマシタ。サウシテ米ヲツイテミマシタガ、ヤツパリキタナイモノバカリデマシタ。又オコツテ、ソノウスヲワツテ、火ニクベテシマヒマシタ。

二76 ライクワウハ〈略〉、タチヲスリトヌイテキリツケマシタ。シユテンドウジハオコツテクルヒマハリマシタ。

三101 ネコデモソバヘクルト、オヤドリハオコツテケヲサカダテマス。

四162 白ウサギハ〈略〉、「オマヘタチハウマクワタシニダマサレタナ。〈略〉。」トイツテワラヒマシタ。ワニザメハソレヲキクト、タイソウオコツテ、一パンシマヒニ居タノガ、白ウサギノ毛ヲミンナムシリ取ツテシマヒマシタ。

四312 友だちでも居るのかとおもつて、「おうい」とよぶと、「おうい」といひ、「だれだ」といふと、「だれだ」と答へます。正太郎がおこつて、「ほか」といひますと、又向ふで、「ほか」といひますねをします。

四336 図 それが山びこです。こ

ちらでやさしくいへば、向ふでもやさしく答へ、おこつていへば、おこつて答へるのです。

四336 図 こちらでやさしくいへば、向ふでもやさしく答へ、おこつていへば、おこつて答へるのです。

六301 「何で笑つた。」「〈略〉。私どもだつて、大ぜいしてかゝれば、あなた方に負けません。」虎はおこつて、蟻をふみつぶさうとしました。

おこる 「起」(四・五) 19 おこる 起る 《ツ・ラ・リ・ル・レ》

六848 此のまごころが神のおぼしめしにかなつたのであらう、一夜大暴風雨がおこつて、海はわきかへつた。

七998 ところが或夜大地震が起つて、人家堂塔一時に倒れ、人々の泣叫ぶ聲は天地にひびきました。

九281 これは今から百三十年ばかり前に、下野の國足尾山中の旅人宿で起つた事で、〈略〉。

九3610 図 レマン將軍も、火藥の爆發によりて起れるガスの爲に窒息し居たるを、〈略〉。

九664 火繩一本の煙草ぼんのまはりには、人の山が出来て、いろいろの話が出る。笑ひ聲も起る。

十968 図 支那の宋朝の末、北方に元といふ國おこり、勢日々に盛にして、〈略〉。

十1279 図 折しも起る「君が代」の奏樂。

十13310 図 高德此の故事をひきて、やがて忠臣の起りて勤王の兵を擧げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなり。

十一588 喜の聲はどつと起つた。

十一663 〈略〉、密生した樹木の枝と枝がすれあつて起つたりした自然の火から、火種を取つたものであらう。

十一828 図 海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ、驚かじ。

十一828 図 海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ、驚かじ。

十一828 図 海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ、驚かじ。

十一1285 図 然るに、此の度は近畿地方に大飢饉起り、人々の困苦は前の出水の比に非ず。

十二146 図 されば珍しき事件の起りし時、〈略〉。

十二152 図 〈略〉、やがてあまねく内外の事件を報ずると共に時事を論ずるもの起りて、こゝに始めて我等の生活に切實なる關係を有するものとはなりぬ。

十二159 図 〈略〉、今や遠くヨーロッパに起りし事件も僅か一兩日にして讀者に報道せらる。

十二172 図 此の外、〈略〉特派員又は通信員ありて、事件起れば直に電話又は電信にて通知し来る。

十二954 さうして日夜次々に起つて来る心の迷をしりぞけて唯一筋に悟

の道を求めた。

十二1358 そこで海外に移住しても外人から思ひ掛けぬ誤解を受けて排斥されるやうなことも起つて来る。

おこるよりよ ねんねんころりよおこるよりよ

おこわ 「御強」(名) 1 おこは

八1075 図 〈略〉、母が私に、お友だちをお呼びなさい、おこはでもふかして上げようと申します。

おさ・える 「押」(下) 3 おさへる

《一へ》

四911 〈略〉、十郎はなみだをおさへて、「きつと此のかたきを取つて見せます。」と答へました。

七125 浅い水たまりを歩くと足のうらがぬるりとした。おさへて見たら、小さなかれひであつた。

七672 人夫は其の男のたもとをおさへて、「まあ、お待ちなさい。落した物は。」

おさおさ (副) 1 をさをさ

十一237 図 待ちまうけたる秀吉は、琵琶湖のほとりに十三箇所のとりでを構へ、諸將を配置して防備をさをさ怠なし。

おさしき 「御座敷」(名) 1 オザシキ

一384 オチヨサンノウチデハ、オザシキニアカリガツイテキマス。

おさしず 「御指図」(名) 1 おさしづ

四407 おかあさんが〈略〉、下女

や手つだひのものに、おさしづをしておはたらきになりました。

おさしだし「御差出」(名) 1 お差出し

し

七1137園 去る三日にお差出しの稿物

三十反、本日無事に着きました。

おさ・す「御差」(五) 1 おさす

シ

五35 「略」。せきはあれにします。

す。」といつて、此の間からあいて

ゐたせきをおさしになりました。

おさずけくださる「御授下」(五) 2

おさづけ下さる「一ツ・ール」

八335 昔朝鮮に一人の婦人があつて、

子どもをおさづけ下さるやうに、朝

晩神様にいのつてあました。

八345 婦人は、これは珍しい、神様

がおさづけ下さつたのはこれに違ひ

ないと思つて、略。

おさとう「御砂糖」(名) 1 オサタウ

二603園 オカアサン、ソノオクス

リハニガウゴザイマスカ。ニガ

イナラ、オサタウヲ入レテオア

ガリナサイ。

おさまる「治」(五) 2 をさまる

「一ツ」

十287 二日たつて、天気も晴れ、波

浪をもさまつた。

十1125 昨夜の風雨は名残なくをさま

つたが、海面にはまだ波のうねりが

高い。

おさ・む「治」(下二) 2 治む「一ム

ル・一ム」

十一54園 略、孔子大いに之をう

れひ、如何にもして國家を治め、萬

民の苦を救はんものと、略。

十二14園 古のふみ見るたびに思

ふかな、おのが治むる國はいかに

と。

おさむ「修」(下二) 1 修む「一

メ」

十一77園 おのれを修めて人を安

んず。

おさ・める「収」(下二) 10 納める

「一メ・メル・一メレ」

八439 越前守は再び一同を呼出して、

さきに納めさせた白木綿を返し、

略。

八778園 「おとうさん、此の雪降り

に、何所へお出でになりますか。」

「役場へ税を納めに。」

八782園 是非今日のうちに納めなけ

ればなりません。

八784園 今日までに納めないと、役

場によけいな手数をかけることにな

ります。

八789園 それをみんなうちで納める

のですか。

八803園 國の税は勿論、縣の税も村

の税もみんな大事なもので、之を納

めることは國民の務です。

八805園 縣や國の税も、村の役場へ

納めれば、よいのですか。

八807園 村役場で、村内の家々から

納めるのをまとめて、それへ送

るのです。

八809園 どのうちでも、納める金高

は同じですか。

九631 それにつれて、つり床は正し

く一定の場所に納められる、すべて

の窓や出入口は開かれる。

おさ・める「治」(下二) 1 治める

「一メ」

十二6510 王は其の治めてゐるイギリ

スを三分して娘たちに與へ、略。

おさめる「修」↓おさめる

おさらい「御凌」(名) 4 オサラヒ

おさらひ

三48 ハヤクカホヲアラツテ、

ニイサント一シヨニオサラヒヲ

シマセウ。

五142 朝、おさらひをすましてから、

春子とつくしをつみに行きました。

五321園 本のおさらひすました後は

枝につるしたぶらんこ遊。

八49 僕がえんがはへ机を持出して、

おさらひをはじめると、略。

おさわり「御障」(名) 1 おさはり

六1033園 其の後おさはりもございま

せんか。

おし「押」(名) 1 おし↓しりお

し・ひとおし

七1016園 上様をはじめ皆様、おしの

下になつては居られぬかと存じ、家

来ども二百人に梃を持たせてかけつ

けました。

おし「啞」(名) 2 啞

八835 信吉にはおとよといふ今年十

一になる女の子があるが、生れつき

啞なので、略。

八836 信吉にはおとよといふ今年十

一になる女の子があるが、略、啞

の學校に入れてある。

おし「惜」(形) ↓なごりおし

おじ「伯父」(名) 2 叔父

六377園 叔父爲朝の弓のやうな強い

弓なら、略。

九96園 四月十日 叔父から 松太

郎殿

おしあう ↓ねじあいおしあう

おしあわせ「御幸」(名) 1 オシアハ

セ

四211園 アナタハオナサケブカイ

オ方デスカラ、後ニハキツト

オシアハセノヨイコトガゴザ

イマス。

おし・い「惜」(形) 4 をしい 惜し

い「一イ・一カッ・一ク」↓おなごり

おいしい

五761 そこで一年まじに田がふえた

が、をしいことに、庄屋は池が出来

上つた年の冬、死んでしまつた。

六375園 いやく、弓が惜しかった

のではない。

九1148園 命が惜しくなつたか、妻子

がこひしくなつたか。

十一721園 「略」、さつき御出かけ

の途中〈略〉、御立寄り下さいました。」それは惜しいことをした。どうかして御目にかゝりたいものだが。」

おじいさま 「御祖父様」(名) 1 おぢい様

九253 〇 歡庵様は佐藤の家の農學の本をお開きなされ、元庵様はおもに氣候と農業との關係をお調べなされたが、おぢい様の不昧軒様はまた、地質や鑛物の方で新しい發見をなされた。

おじいさん 「御祖父」(名) 43 オヂイサン おぢいさん

一393 ハヤクカヘラナイト、オヂイサン ヤ オバアサン ガ シンパイ ナ サイマス。

一441 ムカシムカシ、オヂイサン ト オバアサン ガ アリマシタ。

一444 オヂイサン ハ ヤマヘ シバカリ ニ、オバアサン ハ カハヘ

センタク ニ イキマシタ。

一471 オヂイサン ハ ソノ コニ、モモタラウ ト イフ ナ ヲ ツケマシタ。

二412 ムカシムカシ、ヨイ オヂイサン ト ワルイ オヂイサン ガ アリマシタ。

二413 ムカシムカシ、ヨイ オヂイサン ト ワルイ オヂイサン ガ アリマシタ。

二414 ヨイ オヂイサン ハ 犬ヲ

一ビキカツテ、タイソウカハイガツテ キマシタ。

二426 ヨイ オヂイサン ガ ソコヲ ホツテ ミマス ト、土ノ 中カラ、オカネ ヤ タカラ モノ ガ タクサンデマシタ。

二433 ワルイ オヂイサン ハ ソレヲ キイテ、ソノ 犬ヲ カリ ニ キマシタ。

二442 オヂイサン ハ ハラヲ タテテ、ソノ 犬ヲ コロシテ シマヒマシタ。

二445 ヨイ オヂイサン ハ タイソウ カナシガ ツテ、犬ヲ ウツメテ、ソノ 上ニ 小サナ マツノ 木ヲ ウエマシタ。

二454 ヨイ オヂイサン ハ ソノ 木ヲ キツテ、ウスヲ コシラヘマシタ。

二463 ワルイ オヂイサン ハ 又コノ ウスヲ カリ ニ キマシタ。

二473 ヨイ オヂイサン ハ ソノ ハヒヲ モラツテ キテ、ニハニマキマシタ。

二481 オヂイサン ハ ヨロコンデ、ソノ ハヒヲ ザル ニ 入レテ、

「〈略〉。」ト ヨンデ アル キマシタ。

二507 ワルイ オヂイサン ハ コノ ハナシヲ キイテ、ノコツテ キタ

ハヒヲ カキアツメテ、カレ木ニ

ノボツテ、トノサマノ オカヘリ

ヲ マツテ キマシタ。

二535 〈略〉、ワルイ オヂイサン ハ

トウトウ シバラレテ シマヒマシタ。

三145 ゆふはんが すんだあとで、おぢいさんが 二郎 に たづねました。

三167 おぢいさんは わらひながら、〈略〉。」とをしへて やりました。

三232 そのとき 正一 の おぢいさんが、たきぎを うまにつけてそこへきました。

三234 二人は よろこんで、おぢいさんについて かへりました。

三282 〈略〉ほそい竹の子は、いまに竹になつたら、おぢいさんに、あれで 竹うまを こしらへていただくつもりです。

三466 〈略〉、うらしまは たちまち白が、おぢいさんになつてしまひました。

四54 〈略〉、おぢいさんが 私のぶんに つぎ木をして 下さつたのださうです。

四57 おぢいさんが この 柿の木をついで いらつしやる時、

四64 その時 おぢいさんは「孫へのこしてやるのさ。」とおつしやつたといふことです。

四78 この二十五日は おぢいさんの めい日ですから、たくさん

取つてそなへるつもりです。

四468 よみ手は おぢいさんで、取手は〈略〉四人と、友一と友一のあねの道子です。

四743 私は 東の村の今の村長さんのおぢいさんや おばあさんを其のわかい時から知つて居ました。

五84 〈略〉、おぢいさんとおばあさんが、一人の娘を中において泣いてゐました。

五88 「なぜ泣くか。」とおたづねになりますと、おぢいさんが、「私どもにはもと娘が八人ございました。〈略〉。」

五388 此の時私どもの村へよく物賣に来るおぢいさんが、紺のふろしきづつみをしよつて来て、「皆さん、遠足かね。」といつて通りました。

五941 いつか大そう雨のふるばんに、年取つたおぢいさんが、遠方に居るむすこの所へ出した封書や、〈略〉。

六18 おるす居はおぢいさんと私だけです。

六21 おぢいさんが庭にほしてあるもみをかへしていらつしやると、卵買が来て、卵を七つ買つて行きました。

六38 〈略〉、おぢいさんが庭で腰をのばして、「もうお晝かな。」とおつしやいました。

七935 おぢいさんにきいたら、〈略〉、

此の日はよく大風が吹くから、厄日
といつて、農家ではことに心配する
のださうだ。

七94「どうかひどい風にならなけ
ればよいが。」と、おちいさんが言
つていらつしやつたが、〈略〉。

七96「困つた風だ。」とおつしやつ
て、おちいさんはかぼちや棚につつ
かい棒を入れたり、菊の鉢を軒下に
運んだりされた。

八51 おちいさんは大釜の火をたい
ていらつしやる。

八53 四日目の時は、おちいさんも
手つだつてつかれた。

八56 其の時にいさんが「私にもつ
かせてみて下さい。」といひ出すと、
おちいさんが「とてもまだ。」とお
つしやつたが、〈略〉。

九52 うちのおちいさんはあの人
とは前から友だちだったので、よく
其の話をなすつては、大へんほめて
いらつしやつたものだ。

おし・う 「教」(下二) 1 教ふ「
へ」

八63 或夜弟子をあつめて、書物
を教へし時、風にはかに吹きて、と
もし火きえたり。

おじうえさま 「伯父上様」(名) 2 伯
父上様 叔父上様

七16 四月二十三日 正男 叔父
上様

九12 九月二十日 正男 伯父

上様

おしえ 「教」(名) 7 教

十一76 其の後官長は絶えず文通し
て眞淵の教を受け、師弟の關係は日
一日と親密の度を加へたが、〈略〉。

十一125 一切經は、佛教に關する
書籍を集めたる一大叢書にして、此
の教に志ある者の無二の寶として貴
ぶところなり。

十二92 此の上は聖賢を訪うて教
を受ける外はない。

十二96 彼等は釋迦の教を聽いて即
座に弟子となつた。

十二98 危篤の報が傳はると、これ
まで教を受けた人々が四方から集つ
て別れを惜しんだ。

十二98 これまで説いた教そのも
のが私の命である。

十二99 私になくなつた後も、め
いゝが其の教をまじめに行ふ所に
私は永遠に生きてをる。

おし・える 「教」(下二) 15 ヲシヘル
をしへる 教へる「へ」↓おお
しえる

二42 アル日犬ハ畠ノスミ
デ、「ココホレ、ワンワン。ココ
ホレ、ワンワン。」トヲシヘマシタ。

二56 コレカラユビノクミカ
タヲヲシヘマスカラ、ミンナデ
ヤツテゴランナサイ。

三17 おちいさんはわらひなが
ら、「二郎、〈略〉。あしのゆびは、

おやゆびとこゆびのほかには
ながないのです。」とをしへて
やりました。

四20 スルト神様ハ「略」。早ク

川へ行ツテ、シホケノナイ水
デカラダヲアラツテ、ガマノ
ホヲシイテ、ソノ上ニコロガ
レ。」トヲシヘテ下サイマシタ。

四32 父は「それは山び
こです。〈略〉。」とをしへました。

六18 いさんが「略」、「此の近く
に、しめちの出る所はありません
か。」とたづねますと、〈略〉、栗林
の下のくぼ地を教へてくれました。

八30 此の時太郎が、炭はどうして
焼くのかときくと、其の男はていね
いに教へてくれた。

八34 すると或夜ゆめの中に、明日
何山の何所へ行けば、望のものをさ
づけてやるという神様のお告があり
ました。〈略〉。さうして教へられた
場所へ行つて見ますと、〈略〉。

八93 第二十二 啞の学校 〈略〉。
此所では女の先生が、生徒に五十音
の發音を教へてゐられた。

八93 「い」を「う」と間違へたり、
「う」を「え」と間違へたりするの
を、先生は根氣よく、何度も「教
へてゐられた。

八94 先生、私の娘にもあゝして
教へて下さつたのでせうか。

九73 午後六時、叔父さんと一所に、

上野驛から青森行の列車に乗った。

「あれが北上川だ。汽車は此
の邊からあの川について、北へく
と走るのだ。」と教へて下さつた。

十42 兄は私に「莊吉、お前はおと
うさんのかつた雜木を、かういふ風
に束ねて運んでくれ。」といひなが
ら、生木の枝で雜木を束ねて見せた。

「略」。私は教へられた通り、雜木を
束ねては運び、運んでは又束ねて、
精一ぱいに働いた。

十104 いさんは「此の後のかまが
ある。其處から熱い湯を管で各室へ
送つて、適當に暖めるやうになつて
ゐるのだ。」と教へて下さつた。

十一91 かういふやうに、曆はわ
たしたちに日日の事を教へてくれる
大切なものだ。

おしかる 「御叱」(五) 1 おしかる
「り」

七71 略、だんなはなさけ深い
方ですから、此の金をあなたにさし
上げましても、おしかりになること
はあるまいと思ひます。

おじぎ 「御辞儀」(名) 2 おじぎ

五47 又中村君には、「これは級長
の山田さんです。〈略〉。」とおつし
やいました。私も二人はていねい
におじぎをしました。

八95 信吉は「略」、應接室に待つ
てゐた娘の手を取つて、幾度も先生
におじぎをした。

おじけ「怖気」(名) 1 おぢけ

九〇九 大空には、午後の日が〈略〉、
どんよりとかがり、地上には、人馬
の死がいが〈略〉重り合つてゐる。
北風は俄におぢけがついた。

おしこめる「押込」(下二) 1 おし
こめる《一メ》

六五八 案の中には石のらうがあつ
て、唐糸様がおしこめられて居られ
ます。

おじさま「伯父様」(名) 1 伯父様
十六三 宮本の伯父様の所に着いた
のは昨夜七時でした。

おじさん「伯父」(名) 27 ヲヂサン
をぢさん 叔父サン 叔父さん ↓き
んじおじさん

二五二 ヲヂサン、コンヤモマタ
カゲエヲシテ見セテクダサイ。
二五九 ヲヂサン、ハヤクセンド
ウサンヲ見セテクダサイ。

四二八 山一つむかふの村にを
ぢさんのうちがあります。

四二四 をぢさんのうちでは、に
は一ぱいもみがほしてあつて、
足のふみばもないくらゐでし
た。

四二七 今日 はこんなにもみが
ほしてあるから、をぢさん も
をばさん も早く かへります。

四二二 勝太郎、東京のをぢさん
からお前の所へゑはがきが
來ました。

五二五 かへりみちに、はなれ馬がと
んで來ましたので、どうしようかと
思つてゐますと、よそのをぢさんが
大手を廣げてとめて下さいました。

五二六 海軍のをぢさんがお出にな
つて、春子には系葉書とリボン、僕
には小刀とえんぴつをおみやげに下
さいました。

五二七 をぢさん、勲章がふえま
したね。

五二八 「〈略〉。此の勲章には功一
級から功七級まである。」をぢさん
のは。

五二九 「をぢさんのは。」をぢさ
んのは功七級だ。

五三〇 叔父さんは大へんだ土手が
切れたといつて、すぐ屋根へ出まし
た。

五三一 叔父サンノウチニモ、ブダウ
棚ガゴザイマス。

五三二 叔父サンニ蛙ノ話ヲ聞イタカ
ラ、ワスレナイ中ニ書イテ置カウ。
五三三 「〈略〉。」之ヲ蛙ノ里歸トデモ
言ツタヨカラウ。」ト叔父サンガ
言ハレタ。

五三四 町ノ叔父サンカラ、才年玉ニ
大キナ磁石ヲイタバイタ。

五三五 おとうさんは昨日分家の叔
父さんと、夜汽車で伊勢参宮に立
れました。

五三六 叔父さんも相かはらず夫
で島々を廻つてゐるから、安心して

下さい。

五三七 午後六時、叔父さんと一所に、
上野驛から青森行の列車に乗つた。

五三八 叔父さんが「此の邊が有名な
那須野が原だ。〈略〉。」とおつしや
つた。

五三九 叔父さん、此所は何所です
か。

五四〇 叔父さんはなほ言葉を續けて、
「〈略〉。」

五四一 次の平泉といふ驛を出て間
もなく、叔父さんは近く左に見える
山を指さして、「〈略〉。」

五四二 「海に向ふに遠く見えるのが
下北半島だ。」と、叔父さんがおつ
しやつた。

五四三 叔父さんのお話によると、此
所は名高い温泉場で、海水浴も出
来るさうだ。

五四四 私は叔父さんに連れられて宿
に着いた。

五四五 叔父さんが「〈略〉、そんなに
遠い所に來たやうな氣がしない
ね。」とおつしやつた。

おじさんのうち「課名」 2 をぢさん
のうち

四二六 をぢさんのうち
四二七 をぢさんのうち
おしたく「御支度」(名) 1 おしたく
七二八 船頭が「皆さん、そろ／＼
おしたく。」と言つたので、みん
な羽織をぬいで、着物のすそをはし

よつた。

おしだす「押出」(五) 1 おし出す
《一シ》

五二九 〈略〉、其の年のつゆに、又土
手がくづれて、池のたまり水が村の
中へおし出した。

おしつける「押付」(下二) 1 オシ
ツケル《一ケ》

一三〇 ウスガオチテキテ、サル
ヲオシツケマシタ。

おして「押」(副) 1 推して
一二三 何分今一應の御評議を推
して御願ひ申す次第でござります。

おしとおす「押通」(五) 1 おし通
す《一シ》

八二四 〈略〉乃木大將が、終生忠誠
質素でおし通して、武人の手本と仰
がれるやうになつたのは、〈略〉。

おしとどむ「押止」(下二) 1 おし
止む《一メ》

九二五 やがてレマン將軍は、〈略〉
かすかにふるふ手に帶劔をときて渡
さんとするを、エンミツヒ將軍は
〈略〉、強ひて之をおし止めたり。

おしのがっこう「課名」 2 啞の學校
八二六 第二十二 啞の學校
八二七 第二十二 啞の學校
おしまい「御仕舞」(名) 3 おしまひ
七二九 さておしまひに一ついつて
置きたい事があります。

八三〇 おしまひの一日には、小豆や
きな粉をつけて、うちでもたべ、近

所へも配つた。

十一 913 図 父は曆を持つて来て、「これは略本曆だ。〈略〉。」「略」父は更に「もつとおしまひの方をあけて御らん。〈略〉。」

おしまいなさる 「御仕舞」 (五) 1

おしまひなさる 《一イ》

六 358 図 源氏の者どもは〈略〉、「捨てておしまひなさい。」「お捨てなさい。」と口々に言ひます。それでも

義経は、〈略〉、とうとう弓を拾ひ上げました。

おし・む 「惜」 (四・五) 8 惜しむ

《一ミ・ム・ーン》

六 384 義経に此の名を惜しむ心があつたので、何時の戦にも勝つたのでございませう。

九 1159 図 私には妻も子も有りません。私も日本男子です。何で命を惜しませう。

十 196 図 中には、君ぐらゐの子供や、其のおかあさんらしい人が、今日の別れを惜しんで、泣きながら豆やにんじんをやつたり、くびや背をなでたりしてゐるのがあります。

十 210 図 〈略〉、飼主が泣いて別れを惜しむのも、もつともな事です。

十 289 〈略〉元氣を回復した人々は、〈略〉、名残を惜しんで此の島を去つた。

十 999 図 元の皇帝深く文天祥を惜しみ、ねんごろに諭して元に仕へしめんとす。

んとす。

十二 471 図 〈略〉檜を以て第一とすべし。〈略〉、建築材として最も重んぜらる。唯杉に比して産額少く、増殖や、困難なるは惜しむべし。

十二 986 危篤の報が傳はると、これまで教を受けた人々が四方から集つて別れを惜しんだ。

おしょう りほいていおしょう

おしょうがっ 「御正月」 (課名) 2 オ

正月

二月 14

十三

オ正月

二 305

十三

オ正月

おしょうがっ 「御正月」 (名) 4 オ正

月

二 307 図

オトウサン、モウイクツ

ネトラ、オ正月 デスカ。

二 311 図

モウ五ツ ネレバ、オ正月

デス。

二 312 図

オ正月 ノ オカザリ ニハ、

ドンナ コトラ シマス カ。

二 325 図

オ正月 ガクルト、オマ

ヘ ハイイクツ ニナリマス カ。

おしよ・す 「押寄」 (下二) 1 おしよ

す 《一セ》

七 1061 図

『大明の軍勢四十萬、勢は

げしくおしよせたるに、日本の大將小西行長は一たまりもなくにげ落ち、もはや朝鮮に日本の武士は一人も居らぬ。〈略〉。』

おしよ・せる 「押寄」 (下二) 10 おしよ

よせる 押寄せる 《一セ・一セル》

六 234 兩方からおしよせて、ぢんの

間がわづか三町ばかりになりました。

六 796 博多の沖は見渡すかぎり、元

からおしよせた船でおほはれた。

六 805 我が武士は敵の攻めよせるのを待ちきれず、こつちからおしよ

せた。

六 811 草野の次郎の如きは夜敵の船

におしよせて、首二十一取つて、敵

の船に火をかけて引上げた。

六 823 此の時河野の通有は、たつた

小舟二艘で向つた。〈略〉。いよ

くおしよせたが、敵の船は高くて

上ることが出来ない。

六 836 其の後も攻めよせる者がたえ

ないので、敵は一先づ沖の方へしり

ぞいたが、又おしよせて来るのは明

らかである。

六 948 〈略〉、城中からうつて出て、

どつとときの聲をあげた。賊は「そ

れ、敵が出た。一騎も餘すな。」と

おしよせた。

六 952 城兵はさつと引上げたが、二

三十人はふもとでまつた。賊が四方

から之を目がけておしよせると、

〈略〉。

七 1071 図 〈略〉、『略』。切つてく

切りまくり、其の勢で明の都へおし

よせ、四百餘州をやきはらう。』

と返書をつかはしましたが、〈略〉。

十二 1313 警衛の兵士等は、安芳の姿

を見ると一時に押寄せて來たが、

〈略〉。

おしらせ・する 「御知」 (サ変) 1 お

知らせする 《一シ》

十 789 図 お知らせしたい事はまだい

ろくありませんが、〈略〉、今日は此

のくらゐにして置きます。

おしらべなさ・れる 「御調」 (下二) 1

お調べなさる 《一レ》

九 252 図 〈略〉、元庵様はおもに氣候

と農業との關係をお調べなされたが、

〈略〉。

おしわ・ける 「押分」 (下二) 1 おし

分ける 《一ケ》

七 414 〈略〉、「ごめんなさい。

く。』といひく、見送人をおし

分けて、前へ出るおはあさんがある。

お・す 「押」 (五) 3 オス おす 推

す 《一サー・シー・ス》

一 544 圖 クルマ ニツンダ タカラ

モノ、イヌ ガヒキダス エンヤラ

ヤ。サル ガアト オス エンヤラヤ。

七 957 図 夏の眞晝の坂道に、重

き荷車ひきかめる 人を見かねて、

物賣は 〈略〉、掛聲高くおしてや

る。

九 526 図 さうして人々に推されて、

町の銀行の頭取になつた。

おすがた 「御姿」 (名) 1 お姿

十 622 図 すごくと立去る僧の後影

を見送りたる妻は、〈略〉、「あゝ、

おいたはしいお姿。〈略〉。」

おすき 「御好」 (形状) 2 オスキ

二六七 〇「オカアサン、オカアサン
ハドノ ハナガ一バン オスキデ
スカ。」
二八七 〇「アレデスカ。アノ キク
ハ オトウサン モ タイソウ オス
キデス。」
おすてなさる 「御捨」 (五) 1 お捨
てなさる 《一イ》
六三六 〇 源氏の者どもは《略》、
「《略》。」「お捨てなさい。」と口々に
言ひます。
おすわりなさる 「御座」 (五) 1 オ
スワリナサル 《一イ》
二五八 〇 「ヲヂサン、《略》。」「ソレ
デハ シヤウジノ ムカフ ニ オス
ワリナサイ。《略》。」
おせつく 「御節句」 (名) 3 オセツク
お節供
四八七 〇 明日 ハ オセツク デスカ
ラ、學校 ガ ヒケタラ、スグ アソ
ビ ニ オ出デ ナサイ。オチヨサン
モ オ松サン モ 來マス。
六〇一 〇 「義一さん、それはお節供
に使うのですよ。」
八六五 〇 おとうさんが着いた日は、
ちやうど五月のお節供の日で、日本
人の家には、鯉のぼりが立つてゐま
した。
おせわ 「御世話」 (名) 1 おせわ
三四二 〇 うらしまは《略》、おとひ
めに「いろいろ おせわになりま
した。《略》。」といひました。

おせわさま 「御世話様」 (名) 1 お世
話様
八八四 〇 あゝ、あなたが先生でいら
つしやいますか。娘が大そうお世話
様になります。
おそい 「遅」 (形) 5 おそい 遅い
《一イ・カッ・ーク》
四二六 〇 おばあさんが《略》おとめ
になりましたが、おそく になると
おもつて、いただいたくりを持
つて かへりました。
七〇三 〇 「ずあぶんおそく來たもの
だ。」
一〇三 〇 朝のかゝりはおそいし、晩
のしまひは早い上に、とかく無責任
な事ばかりしてゐました。
一五二 〇 驚いて一しやうけんめい逃
げようとしてあせつてゐるが、もう
遅い。ふかははや十數メートルの近
くにせまつてゐる。
一〇一 〇 リンカーンがふと目を覺し
た時はもう遅かつた。壁のすき間を
もつた雨のために、本がすつかりぬ
れてゐたので、《略》。
おそく 「遅」 (五) 5 オソク おそ
く 遅
九一六 〇 シタガツテ敵ニオソハレル心
配モ少ク、又コチカラ敵ヲオソフ
ノニモ都合ガヨイノデアル。
九一六 〇 シタガツテ敵ニオソハレル心
配モ少ク、又コチカラ敵ヲオソフ
ノニモ都合ガヨイノデアル。

九〇七 〇 中尉は《略》、敵陣が間近
になつたのを見て、《略》、「そら、
もう一息だぞ。襲へく。」と叫ん
だ。
九〇七 〇 「そら、もう一息だぞ。襲
へく。」と叫んだ。
一四一 〇 「その島の船が、俄の嵐におそ
はれて、此の島に近い岩に乘上げた。
おそろしき 「御葬式」 (名) 1 おさう
式
四七二 〇 此の間さびしいおさう式
が私の前を通りました。
おそく 「遅」 (名) 1 おそく
一三三 〇 父は毎日、兄や木びきの力藏
さんと、朝早くから行つて、夕方お
そくまで働いてゐる。
おそし 「遅」 (形) 4 おそし 遅し
《一カリ・ーク・ーシ》
八八五 〇 馬の頭をそろへて、三番太鼓
を今やおそしと待ちかまへてゐる。
一〇六 〇 行幸餘りに遅かりしかば、
人をしてうかゞはしむるに、《略》。
一四二 〇 あわてて逃げんとすれど
も時既におそく、大方はやにはに斬
倒されたり。
一六八 〇 王は満面に笑みをたゝへな
がら、今や遅しと其の答を待受けて
ゐる。
おそなえ 「御供」 (名) 4 オソナヘ
おそなへ
二二二 〇 「オソナヘノモチモカ
ザリマス。」

二三五 〇 「オソナヘノモチヲマ
トニシテ、イテミマセウカ。」
八五二 〇 おかあさんはそれを二つにち
ぎつて、ぐるぐるまはしていらつし
やつたが、忽ちきれいなおそなへに
なつた。
八五二 〇 二目目で小さなおそなへが幾
かさねか出来、三目目からは、のし
餅が出来た。
おそば 「御側」 (名) 1 おそば
七〇九 〇 秀吉は城の庭にしき物をのべ
させ、《略》、御臺所やおそばの女ど
もと居りました。
おそらく 「恐」 (副) 2 恐らく
一六一 〇 《略》、突如として眼前に展
開せられた風景は、《略》、恐らく全
道第一の壯觀であらう。
一三二 〇 ルーブル博物館も一覽し
ましたが、りつぱな繪畫・彫刻の多
いことは恐らく世界第一であらうと
思ひました。
おそる 「恐」 (下二) 7 おそる 恐
ル 恐る 《一レ》
七三〇 〇 獅子の目は火の如くにもえ、
怒りてさけぶ聲には、百獸おそれて
にげまどへど、《略》。
七三〇 〇 《略》、蛇はますく強くし
めつたり。今や獅子の息はたえん
とす。《略》。武士の馬はおどろきて、
後足にて立上り、おそれて其所に近
づかんとせず。
七三二 〇 獅子はもとより武士にした

がひて行かんとせり。しかるに船長はおそれて之をゆるさず。

九367 図 〈略〉、正義の念と愛國の情とに死を恐れざるベルギー軍の防戦も、〈略〉。

九4510 図 〈略〉、五人ノ持主各其ノ馬ノ賣レザランコトヲ恐れテ、争ヒテ價ヲ下グ。

十一826 図 浪にたゞよふ氷山も、來らば來れ、恐れんや。

十二836 図 〈略〉、山を越えて東海岸に出でんとすれば、従者の土人等ゆくての危険を恐れて従ふことをがへんぜず。

おそろおそろ 「恐恐」(副) 2 おそろ

く 恐る恐る

六542 萬じゆはおそろく、「べつにのぞみはございませんが、唐糸の身代りに立ちたうございます。」と申しました。

十二426 しばらくして兄は恐る恐る近寄つて、〈略〉、「一體あなたはど

ういふ御方でございますか。」
おそれ 「恐」(名) 2 おそれ

七76 図 港には防波堤ありて、風波のおそれ少く、水深くして、いかなる大船もきしに横づけにすることを

得。
十108 一口又一口、平然と藥を飲む王、一行又一行、おそれと興奮に眼

かゞやくフィリップ。
おそれいゝる 「恐入」(五) 3 恐れ入

る 《一ツ・ール》

八384 図 〈略〉、越前守は聲をかけて、「これ女、其の手を放せ。泣くのも

かまはず力まかせに引くとは、情を知らぬ不屈者。手を放した女が實母にきまつた。」と申し渡しましたので、里親は恐れ入つたといひます。

八943 図 「先生、私の娘にもあゝして教へて下さつたのでせうか。どうも恐れ入つたことだ。」

九382 図 〈略〉、レマン將軍は靜かに、「おほめにあづかつて恐れ入る。

〈略〉。」と答へたり。
おそれおおい 「恐多」(形) 2 おそれ多い 《一・イ・ーク》

六841 図 おそれ多くも龜山上皇は、御身をもつて國難に代らうと、おいのりになつた。

六1073 図 何のかざりもない御神殿を拜して、まことにおそれ多い氣がした。

おそれる 「恐」(下二) 8 オソレル
おそれる 恐レル 恐れる 《一・レ・ール》

二763 ソノ大キナカホハ火ノヤウニアカク、イビキハカミナリノヤウデシタ。ライクワウハ

スコシモ オソレズ、タチヲスルリトヌイテキリツケマシタ。
五196 図 鶏の光がまるでいなびかり

のやうで、わるものどもは目を明けてゐることが出來ず、おそれてみん

なにげてしまつたさうだ。

六813 草野の次郎の如きは夜敵の船におしよせて、首二十一取つて、敵の船に火をかけて引上げた。敵は此のいきほひにおそれて、鐵のくさりで船をつなぎ合はせた。

七603 図 それは日本は海國でありながら、まだ海を恐れる人もあるといふことで、〈略〉。

九206 コレ等ハ大デイ他ノ動物ノ恐レル武器ヲソナヘテキルカ、イヤガ

ル味ヤニホヒノアルモノデ、〈略〉。
九455 図 〈略〉、其ノ五人ハ、各其ノ馬ガ他人ノ手ニ渡ランコトヲ恐れテ、

争ヒテ高キ價ヲツク。
十92 醫師は皆、投藥してもし萬一の事があれば、毒殺のうたがひを受けはしないかと恐れて、たゞ経過を見守つてゐるばかりである。

十一584 砲手はその結果を見るのを

おそれるやうに、手で顔をおほつて大砲の上につつ伏した。
おそろしい 「恐」(形) 7 おそろしい 恐しい 《一・イ・ーク》

六786 片足でおそろしい程早くする者もあれば、人の手にすがつて、こはごはする者もある。

七567 図 航海といふものは、かういふ面白いものですが、たまには恐しい目にもあひます。急に暴風雨が來ると、山のやうな波が立つて、船は今にも沈むかと思ふやうになります。

九103 6 戦場の光景は實に恐しいものであつたが、〈略〉。

九10310 しかしとうく 恐しい日が來た。
十二122 投込まれた蟲は苦しまぎれに恐しく辛い液を出したので、思はず吐出すと、〈略〉。

十二1044 これからが世に恐しい青のくさり戸である。
十二10710 一念こつた不斷の努力は恐しいものであると思ひつくと、〈略〉。

おそろしがゐる 「恐」(五) 1 恐しがる 《一・ル》

七606 図 海の波を見たばかりで、もう恐しがる人もあります。
おたがい 「御互」(名) 2 おたがひ

お互 七139 何時か知らない人とも話し合ふやうになつて、大きな蛤や馬刀貝でも取ると、おたがひに見せ合ふ。

九1193 図 其の時にはお互に目ざまし

い働をして、我が高千穂艦の名をあげよう。

おだし 「御出」(名) 1 お出し
九32 図 三月二十五日出しのお手紙を昨日受取りました。

おたずねる 「御尋」(下二) 3 オタズネル おたづねる 《一・ネ》
四171 ソコへ神様ガタガト通リガカリニナツテ、「ナゼナクノカ。」トオタツネニナリマシ

タ。

四九一 コノ神様モ、「ナゼナクノカ。」トオタツネニナリマシタ。

五八八 みことは〈略〉、だんだん山おくへおはいりになりますと、おちいさんとおばあさんが、一人の娘在中において泣いてゐました。「なぜ泣くか。」とおたづねになりますと、おちいさんが、〈略〉。

おたちよりくださる「御立寄下」(五)

一 御立寄り下さる「一イ」

一一七〇 〇略、先生がどうしてこちらへ。〇略、さつき御出かけの途中「何か珍しい本はないか。」と、御立寄り下さいました。

おたち「御立」(五) 三 オタツ お立つ「一チ」

二五五 アナタガオタチニナレバ、ワタクシモタチ、〈略〉。

五三七 ある朝早く、おとうさんがたびへお立ちになった時、お見送をして表へ出て見ました。

六四七 朝、〈略〉、月と日が居りません。宿の者にきくと、「もうとうにお立ちになりました。」と言ひます。

おたっしや「御達者」(形状) 二 おたっしや 御達者

三三四 〇略、「いつもおたっしやなこと。」とおつしやつたら、五一ちいさんは〈略〉。

一〇九四 〇略 平生甚だ御達者にて、近

來は殊に御元氣のやうに承り居り候事として、此の度の御報は全く夢かと存ぜられ候。

おたづね「御尋」(名) 一 おたづね

五九六 「それにはどんな事が書いてあつたか。」といふおたづねが出るかも知れませんが、〈略〉。

おたち「御立」(下二) 一 お立てる「一テ」

八五三 〇略 「殿はまだお若くて、これから功名をお立てになる折はいくらもございます。」

おだのぶたか「織田信孝」(人名) 一 織田信孝

一一二六 〇略 これより先、秀吉は織田信孝を攻めて大垣にありしが、二十日の正午大岩山の敗報至る。

おだのぶなが「織田信長」(人名) 一 織田信長

七七二 豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎といつて、織田信長の草履取をしてゐた時のことである。

おだまき 〇しずのおだまき

おだやか「穩」(形状) 四 おだやか 九一七 〇ふしぎや、今まで荒れに荒れぬる大海、おのづから静まりて、おだやかなる風となり、〈略〉。

一一八七 〇略 大層大氣がおだやかになつたね。

一二八 〇略 しかし二人は互に信じ合つてゐる仲なので、話はおだやかに運ばれる。

一二三〇 〇略、特別の御仁慈を以ておだやかに事のもとまるやう今一應御評議下さることにありますれば、〈略〉。

おちあう「落合」(五) 二 オチアフ

おちあふ「一ツ・ヒ」

三九三 ヤクバノヨコデ、川ガ二ツ オチアツテ、マガリクネツテ、南ノ方ヘナガレテイキマス。

四五五 東京の宿屋で、山國のもの、島國のものがおちあひました。

おちいりやすい「陥易」(形) 一 おちいり易い「一ク」

一二三六 狭い島國に育ち、生活の安易な樂土に平和を樂しんでゐた我が國民は、とく引込み思案におちいり易く、奮闘努力の精神に乏しく、遊惰安逸に流れるかたむきがある。

おちい「落」(五) 二 おちいる「一ツ」

一五八 〇略、登山者が路に迷つて危険におちいつた時、救を求めたり、いろ／＼に利用する事が出来る。

一〇三 〇略 すると橋はまん中から折れて、三人は水中におちいつた。

おちぐち「落口」(名) 一 落口

九二九 〇略 瀧は、落口にあるゴート島といふ小島の爲に二つに分れてゐます。

おちこむ「落込」(五) 一 落込む「一ン」

一三二 〇略、湖の水は瀧のやうに掘

割へ落込んで、とても船を通すことは出来ないから、〈略〉。

おちち「御乳」(名) 二 オチチ おちち

二二四 ミヨチャンガイマオカアサンニダカレテ、オチチヲノンデキマス。

三三三 〇略 「おかあさん、あかちゃんにおちちをのませてちやうだい。」

おちつく「落着」(五) 四 おちつく 落ちつく 落着ク 落着く「一イ」

四六三 〇略、舟がゆれて、まどがさだまりません。〇略、今度は扇が少しおちついて見えます。

八四二 〇略、鷺ハタシカニ鳥類ノ王デアル。〇略、スルドクテ落着イテ

キル目、〇略、何所ニ一分ノスキモナク、強ミガ全身ニミチミチテキル

一三三 〇略 砲手の落ちついた力のこもつた號令に、船ははや方向を轉じた。

一二五 〇略 しかしだん／＼落着いて見ると、此處は時計屋の店であることがわかつた。

おちば「落葉」(名) 二 落葉

一六六 〇略 それからいさんと、ざぶ木林へはいつて、じめ／＼した落葉をふんで、ねずみ草を少し取りました。

一三三 〇略 あたりは如何にも静かで、たまに散る落葉の音が、かきり／＼と聞える。

おちはじめる「落始」(下二) 一 お

ちはじめる 《一メ》

三267 石がきの下へ出たのは、かはがおちはじめて、竹になりかかつてゐます。

おちぶれる 「落」(下) 2 落ちぶれる 《一レ》

十668 私はもと鉢の木がすきで、いろく集めた事もありましたが、かう落ちぶれては、それも無用の物好と思ひ、《略》。

十687 かうに落ちぶれてはゐるものの、御らん下さい、《略》。

おちや 「御茶」(名) 3 オチャ お茶

二61 オハナハ オチヨ ヲザシキ
ヘトホシテ、オチヤト オクワシ
ヲダシマシタ。

十127 どれ、私もお茶を一つ御ちそうになりませう。

十136 高橋さんは、お茶を一口飲んで、《略》。

おちよ 「人名」 3 オチヨ

二42 オハナト オチヨ ガ オキヤ
クアソビ ヲシテ キマス。

二46 オチヨ ガ オキヤク ニナツ
テ キマシタ。

二56 オハナハ オチヨ ヲザシキ
ヘトホシテ、オチヤト オクワシ
ヲダシマシタ。

おちよさん 「人名」 3 オチヨサン

一382 オチヨサン ノ ウチデハ、
オザシキ ニ アカリ ガ ツイテ キ
マス。

二53 奥 オチヨサン デスカ、ヨ

ク イラツシヤイマシタ。
四876 奥 オチヨサン モ オ松サン
モ 来マス。

おちる 「落」(上) 29 オチル お

ちる 落ちる 《一チ・一チル・一チレ》
しころおちる・すべりおちる・なが
れおちる・にげおちる・みなぎりおち
る

一191 ウスガ オチテ キテ、サル
ヲ オシツケマシタ。

二156 大ガサカナ ヲクハヘテ、
ハシノウヘ ヲトホリマシタ。
《略》。ホエルト、口ガアイテ、
クハヘテ キタ サカナハ、川ノ
ナカヘ オチテ シマヒマシタ。

二205 コノ山ニハ、クリノ木
ガタクサン アリマス。ユフベカ
ゼ ガフイタカラ、キツトクリ
ガ オチテ キマス。

二236 ドコカラ キタノカ、
トンデ キタ木ノハ、ヒラヒラ
マツテ キテ、イケノ上ニ オチ
テ、ナミニ ユラレテ、ユラユラ
スレバ、《略》。

三118 うちの子ねこは かは
いい子ねこ、《略》、まりとざ
れては えんから おちる。

三327 村はづれに 水車やがあり
ます。《略》。ざぶざぶ おちる 水
のおと、とんとん ひびくきねの
おと、《略》。

三556 《略》、しだれやなぎの えだ

へ、《略》、とんでは おち、とん
では おち、何べんも 何べんも
とびつかうとします。

三557 かへるは 《略》、とんでは
おち、とんでは おち、何べんも
何べんも とびつかうとします。

四668 赤い扇は かなめの きは
を いきられて、空に 高く まひ上
つて、《略》、なみの 上におちま
した。

五514 庭へ降ル雨モ、庭ノ高イ所カ
ラ、低イ方へ流レテ行キマス。《略》、
ソレガダンくアツマツテ、ミゾニ
オチル頃ニハ、《略》。

六253 暗さは暗し、道はなし、平家
方はにげ場がなくて、後のくりから
谷へ、なだれをうつて落ちました。

六254 《略》、後のくりから谷へ、な
だれをうつて落ちました。親が落ち
れば其の子も落ち、弟が落ちれば兄
も落ち、馬の上には人、人の上には
馬、かさなりかさなつて、ずるぶん
深いくりから谷が、平家の人馬で埋
まりました。

六254 親が落ちれば其の子も落ち、
弟が落ちれば兄も落ち、《略》。

六254 親が落ちれば其の子も落ち、
弟が落ちれば兄も落ち、《略》。

六255 親が落ちれば其の子も落ち、
弟が落ちれば兄も落ち、《略》。

六968 橋はまん中からえ切れて、

谷そこへどうと落ちた。

七132 潮がすつかり落ちて、海はを
かのやうになつた。

七177 しやうの強いもので、一度種
が地に落ちれば、年年其所で花がさ
く。

七211 《略》、落ちて行く潮にさは
れて、賊の軍船はことごとく沖へ流
れてしまひました。

七477 二人はたがひに馬を乗りよせ
て、馬上のまゝでむんずと組み、兩
馬の間にどうと落ちた。

七649 《略》、先程渡賃をあらそつた
所へ行つて見ますと、革の財布が落
ちてゐました。

八31 きこのむらがつて出るのも、
しひの實が落ちて、くぼたまりにこ
ろがり合ふのも今である。

八114 信作が落ちたのかまはず
馬をかせせたら、大勝に勝つのに、
人の命にはかへられないと思つて、
相手を助けてやつたのはえらい。

八171 日が暮れてから、長四郎がそ
つと屋根づたひに行つて、もう少し
で雀の巢へ手が届かうとした時、ふ
み外して軒下へどうと落ちた。

八823 水にはこれといふ形がない。
《略》。落ちる時の勢が加はると、長
い間には、思ひの外の手をする。

九574 《略》、打臺にぱた／＼とた
きつけると、莖の先についてゐる穂
が、敷いてあるむしろの上に面白い

やうに飛散る。束を廻して又たゝき、穂が残らず落ちてしまふと、〈略〉。

九〇七 敵弾は前後左右へ雨のやうに落ちて来る。

十〇八 地下水のしづくが、四方から雨のやうに落ちて来る。

十二〇四 それは山國川に沿うて連なる屏風のやうな絶壁をたよりに、見るから危げな數町のかけはしを造つたものであるが、昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。

おつ 〔二〕 ↓こうおつ

おつ 〔落〕 (上) 3 落つ 《一チ》

↓ころびおつ

十〇七 然るに元軍の勢いよく盛にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝・皇后も遂に敵手に落ちぬ。

十〇八 主上さきに笠置におはせし時早くも義兵を挙げしが、〈略〉笠置も落ちたる由風聞ありしかば、力なくて止みたり。

十一二四 されども不意を討たれし俄の軍に、〈略〉、清秀は討死してとりでは落ち、戦は午前のうちに終りぬ。

おついでに 〔御序〕 (副) 1 おついでに

十〇九 どうか御兩親様によろしく。おついでに野田君や山口君にもよろしく。

おつかい 〔御使〕 (名) 3 おつかひ

お使

三二二 お花は〈略〉、おつかひに

いつたり、にはをはいたりして、

おあさんのおてつだひをします。

四二二 山一つむかふの村にを

おさんのうちがあります。私は

きのふふろしきづつみを持つて、おつかひに行きました。

九四九 僕は今日學校から歸るとすぐ、

おとうさんのお手紙を持って、精米

會社へお使に行つて來ました。

おつかえいたす 〔御仕〕 (五) 1 お

仕へ致す 《一シ》

十二六七 昔からあつた孝子のどの

人よりも厚い眞心をもつて、父上に

お仕へ致します。

おつかえもうす 〔御仕申〕 (五) 1

お仕へ申す 《一ス》

五二二 大日本、大日本、われら

國民七千萬は 天皇陛下を神ともあ

ふぎ、おやともしたひてお仕へ申

す。

おつかける 〔追掛〕 (下) 3 追つ

かける 《一ケ》

五七九 義家はせ中のうつぽから、か

りまたをぬいて狐を追つかけました。

七六五 氣の毒なことだと思つて、人

夫はすぐ川を渡つて、かの男を追っ

かけました。

七八八 かくして下さい。敵が追

つかけて來ます。」

おつき 〔御就〕 (名) 1 おつき

八六三 松平正綱の子信綱は幼名を長

四郎といつた。九つ時から將軍の

若君竹千代のおつきになつた。

おつきさま 〔御月様〕 (名) 2 お月さ

ま お月様

三八一 えんがには、夕方から

いもやだんごをつくゑにのせて、お月さまにそなへてありま

す。

四七六 一本杉のふところから

お月様が お上りになつた。

おつく 〔御笑〕 (五) 1 おつく 《一

キ》

五四三 此の時尊はふところのつるぎ

を出して、たけるのむねをおつきに

なりました。

おつく 〔御着〕 (五) 2 お着く 《一

キ》

五四一 天皇は日本武尊にこれを

征伐せよとおほせられました。尊は

〈略〉、いさみ立つてお出かけになり

ました。お着きになりますと、〈略〉。

十六四 すぐと立去る僧の後影

を見送りたる妻は、〈略〉、〈略〉。

とても明るいうちに山本まではお着

きになれますまい。〈略〉。

おつく 〔御継〕 (五) 1 おつく 《一

ギ》

九二八 四代前の歡庵様が、

〈略〉、始めて農學をお修めになり、

りつばな書物もお書きになつた。そ

れから元庵様・不昧軒様、二代つゞ

いて、其のお志をおつきになり、一

そう研究を進められた。

おつけ 〔御告〕 (名) 1 お告

八三九 すると或夜ゆめの中に、明日

何山の何所へ行けば、望のものをさ

づけてやるといふ神様のお告があり

ました。

おつける 〔御付〕 (下) 1 おつけ

る 《一ケ》

五二〇 其のいはれて、戦争の時、

大きな手がらを立てた軍人に下さる

勲章に、金の鵞をおつけになつたの

だ。

おつしやりた・りる 〔仰足〕 (上) 1

おつしやり足る 《一リ》

十二六七 次にリガンは〈略〉、

——ほんたうに姉上は私の思つてゐ

る通りをおつしやいました。唯少し

おつしやり足りませぬばかりで、

——〈略〉。

おつしやる 〔仰〕 (五) 42 オツシヤ

ル おつしやる 《一イ・ツ・ー・ラ・ー

ル》

二六二 オクスリハ、オイシヤサ

マノ オツシヤルトホリニシテ

ノ マナケレバ ナリマセン。

二六五 センセイノ オツシヤルコ

トヤ、ミンナノ イフコトヲキ

キオトスヤウナコトハアリマ

セン。

三六七 オカアサンニ、「イツヒヨ

コガ出マスカ。」トキキマス、ト
「二十日バカリタツト出マス。」
トオツシヤイマシタ。

三二二 アルアサ、オカアサンガ
「ヒヨコガカヘツタ。」トオツシ
ヤツタノデ、見ニイキマス、ト
《略》。

三三四 いつかうちのおとうさん
が道で、「いつもおたつしやな
こと。」とおつしやつたら、五
一ぢいさんは《略》。といつて、
大きな手であたまをなでまし
た。

三八一 おばあさんが「ふみ子も
こんやはきつとあちらでこの
月を見てゐませう。」と、ひとり
ごとのやうにおつしやいました。
四六七 《略》、下男の太七がわら
ひながら、「《略》。」といったさ
うです。その時おぢいさんは
「孫へのこしてやるのさ。」と
おつしやつたといふことです。

五四三 《略》、先生が知らない生徒を
一人つれてお出でになりました。
《略》。さうして「山田さん」とおよ
びになりましたから、「はい」と答
へますと、「此の方は中村さんとい
ふ人で、《略》。」とおつしやいまし
た。

五四六 又中村君には、「これは級長
の山田さんです。《略》。」とおつし
やいました。

五二九 此の間町のをばさんがいらつ
しやつて、「こんなしづかな所でく
らしてみたい。」とおつしやいまし
た。

五三三 「おかあさん、お天気は。」と、
とこの中からおきゝすると、「よい
お天気です。早く起きてお出で。」
とおつしやつたので、はね起きまし
た。

五三九 「さしわたしは八尺もある。」
と先生がおつしやいました。

五四八 さつきおかあさんが、「民子、
いよく今夜一ばんになつたよ。あ
れで八分通だ。」と、ねえさんにお
つしやいました。

五四二 《略》、おぢいさんが庭で腰を
のぼして、「もうお晝かな。」とおつ
しやいました。

六〇五 昨日學校で校長に、あの
木の事を話したら、はじめて聞い
た記念の木、大事にするとおつし
やつた。

六〇八 「一雨々々暖になつて、よい
あんばいです。」と、おかあさんが
誰かにおつしやつてゐる時、私は庭
へ出ました。

七〇七 おとうさんにうかゞつたら、
かもめだとおつしやつた。

七二八 よいあんばいだ。此のもやう
なら、今日は大したことはあるま
い。」と、おとうさんは朝起きると
すぐ空を仰いでかうおつしやつた。

七九四 やはり二百十日だ。風が出て
来た。」と、又おとうさんがおつし
やつた。

七九六 「困つた風だ。」とおつしやつ
て、おぢいさんはかぼちや棚につつ
かい棒を入れたり、菊の鉢を軒下に
運んだりされた。

八五八 其の時にいさんが「私にもつ
かせてみて下さい。」といひ出すと、
おぢいさんが「とてもまだ。」とお
つしやつたが、《略》。

八六一 其の時にいさんが「私にもつ
かせてみて下さい。」といひ出すと、
《略》、おばあさんは「まあ、ついて
みるがよい。」とおつしやつた。

八五七 おとうさんが「せいは高くて
も、まだだめだ。」とおつしやつた
が、それでもとう／＼一白だけはつ
き上げた。

九四二 〇 おとうさんは今朝も、「も
う二番茶もつまなくてはならない。
それがすむとやがて夏蠶の上りだ。
にいらんたちの分もわたしは働くの
だ。」とおつしやつて、大そう元氣
です。

九五一 《略》、おとうさんは「お前に
もさう見えるかね。」とおつしやつ
て、あの方の小さい時分からのお話
をして下さいました。

九六九 叔父さんが「此の邊が有名な
那須野が原だ。《略》。」とおつしや
つた。

九六九 「叔父さん、此所は何所です
か。」と聞くと、「仙臺はとつくに過
ぎて、やがて一關だ。よくねた
ね。」とおつしやつた。

九七二 《略》、叔父さんは近く左に見
える山を指して、「あの上に名高い
金色堂がある。《略》。辨慶が立往生
をしたと傳へられてゐる衣川は、
すぐ此の先にある。」とおつしやつ
た。

九七三 汽車が盛岡を出て少し進むと、
遠く左に見えるかくかうのよい山を
指さして、「あれは岩手山だ。《略》。
あのふもとに有名な小岩井農場があ
るのだ。」とおつしやつた。

九七五 「海に向ふに遠く見えるのが
下北半島だ。」と、叔父さんがおつ
しやつた。

九七二 叔父さんが「東京から此所ま
では四百五十六哩もあるのだが、か
うたやすく来てみると、そんなに遠
い所に來たやうな氣がしないね。」
とおつしやつた。

九七八 五時間目の授業がすむと、先
生はにこ／＼して、「今日はこれか
らいもほりをしませう。皆いつもの
やうに、此所で支度をして、學校園
へお集りなさい。」とおつしやつた。

九七八 先生も大きな箱を持って来て、
ほつたいものは此の中へ入れるやうに
とおつしやつた。

九八九 〇 いさん、やつぱりにいさ

んのおつしやつたやうに、星の位置は變りますね。

十50 銀行といへば、おとうさんは、何時かも銀行へ行つてお金を預けて來るとおつしやいましたね。

十68 僧は重ねて「お見受け申す所、たゞのお方とも思はれません。是非お明かし下さい。」それ程おつしやるなら、恥かしながら申し上げませう。《略》

十102 先に立つたにいさんが、《略》。と、いろ／＼説明して下さる。《略》。「此の袋で蟲をとるのだ。中をのぞいて御らん、何かはいつてるやうだから。」とおつしやるから、そつとのぞいて見ると、《略》。

十116 3 「《略》。」と尋ねてみると、のぶ子さんは上の棚を指さして、「あすこに全部學年別にしてのせてあります。」とおつしやいました。

十117 5 しばらくたつと、おかあさんが臺所の方から、「メリンスのふろしきを持つておいで。」とおつしやいました。

十140 10 おとうさんは、よく「植林は貯金のやうなもので、植ゑてさへおけば、年々太つて利息が附いて行く。」とおつしやるが、ほんたうにさうだ。

十1120 8 ウェリントン公爵ともいはれるえらいお方が、おとうさんの言ひつつけに背けとおつしやらうとは、

どうしても考へられません。

十二67 7 私も姉上と同じ心で、——ほんたうに姉上は私の思つてゐる通りをおつしやいました。

おって「追」(副) 1 追つて十二130 10 其餘の事は拙者の一存にはまゐりませぬから、追つての沙汰をお待ち下さい。

おと「夫」(名) 4 夫五76 6 家屋敷もなくなつた上に、夫に死なれたので、庄屋の妻は子どもをつれて里へ歸つてゐた。

八35 5 昔江戸で、夫に死なれた女が、乳飲子を里子にやつて奉公に出ました。

十62 1 0 す／＼と立去る僧の後影を見送りたる妻は、やがて夫に向ひて、《略》。

十二73 1 1 そこでコーデリヤは夫に請うて共に家來を連れてイギリスに渡つた。

おととせい「臘腸」(名) 2 ラツトセイ

七83 6 海ニハ又獸類ガスンデキル。陸ノ獸ニ似タモノニハ、ラツコ・ラツトセイ・アザラシナドガアリ、《略》。

七83 7 ラツトセイ

おつれもうす「御連申」(五) 1 お連れ申す《一シ》

十64 6 6 からうじて僧をとまひ歸れる主人は、《略》、「お連れ申しは

したが、差上げる物はあらうか。」おつれる「御連」(下) 1 お連れする《一レ》

八94 6 先生は「何なら、あのお子を今日一日お連れになつてもよろこびます。」といはれた。

おでかけ「御出掛」(名) 1 御出かけ十一71 9 10 《略》、さつき御出かけの途中「何か珍しい本はないか。」と、御立寄り下さいました。

おでかけなさる「御出掛」(五) 1 お出かけなさる《一イ》

十61 8 8 されど主人は、「《略》。此處から十八町程先に、山本といふ宿場があります。日の暮れない中に、一足も早くお出かけ下さい。」といふに、僧は返す言葉もなく出て行きぬ。

おでか・ける「御出掛」(下) 1 お出かける《一ケ》

五41 8 8 天皇は日本武尊にこれを征伐せよとおほせられました。尊は《略》、いさみ立つてお出かけになりました。

おてがみ「御手紙」(名) 3 お手紙

五83 8 8 お手紙をありがたう。《略》叔母から 竹子様

九3 2 2 三月二十五日お出しのお手紙を昨日受取りました。《略》叔父から 松太郎殿

九49 9 9 僕は今日學校から歸るとすぐおとうさんのお手紙を持つて、精米

會社へお使に行つて來ました。

おてだま「御手玉」(名) 1 お手玉四41 7 7 たんすをうごかすと、其のうしろから物さしと花子のお手玉が 出ました。

おてつだい「御手伝」(名) 2 おてつだひ お手傳

三12 4 4 お花は《略》、おつかひにいつたり、にはをはいたりして、おかあさんのおてつだひをします。

十114 10 10 のぶ子さんはちやうど、五年生の時の成績物に表紙をつけて、とちていらつしやる所でした。《略》。私が來たので、すぐしまはうとなさるのを強ひて止めてお手傳をしました。《略》。

おてつだい・する「御手伝」(サ変) 1 お手傳する《一シ》

十1140 2 2 僕がお手傳して植ゑたあの杉や檜は、何時になつたら伐るのだらう。

おてら「御寺」(名) 3 オテラ オ寺

御寺

一73 3 オテラ ガアリマス。

三51 5 5 オ寺 ノカネ モナリ出シマシタ。

十1127 7 7 右に見ゆるは名高き御寺、左に遠くかすむは古城、春は繪のごと我等をめぐる。

おてらまいり「御寺参」(名) 1 お寺まゐり

三714 おばあさんはあれをしめて、よくお寺まゐりにいらつしやいます。

おてんき [御天気] (名) 5 お天気

三825 図 「今日はまあ、何といふよい お天気だらう。」

四813 図 「此のよいお天気に、どうしたのでせう。」

五348 図 「おかあさん、お天気は。」と、とこの中からおきゝすると、

五352 図 「略。」と、とこの中からおきゝすると、「よいお天気です。」

七919 図 すると兵士のおばあさんが、「はい、よいお天気でございます。」

おと [音] (名) 41 オト おと 音

おと・ものおと

二287 図 大キナ スズヲネコノ

クビ ニツケテ オイテ、ソノ オト

ガ キコエタラ、ニゲル コト ニ

シテ ハドウ デセウ。

三327 ざぶざぶ おちる 水のおと、

とんとん ひびく きねのおと、

三328 ざぶざぶ おちる 水のおと、

とんとん ひびく きねのおと、

をたててゐます。

三833 風はしづかで、なみもおとをたてません。

四133 うちがみさまの森で、あさからたいこのおとがします。

四42 あちらこちらに子どものならすらつばやふえの音もして、たいそうにぎやかです。

四792 さむい日のことで、略、私が風の音をこつとさせてやりましたら、略。

五234 二かいのまどに萬國旗がつるしてあつて、おくの方からたえずちくおんきの音が聞えて來ます。

五282 それはくしづかな所で、風の音と水の音より外には、何の音も聞えませんが、

五282 それはくしづかな所で、風の音と水の音より外には、何の音も聞えませんが、

五283 それはくしづかな所で、風の音と水の音より外には、何の音も聞えませんが、

五482 まぶしには、かさくといふ音がしてゐますが、これは騒が動くからです。

五854 図 夜明け方になつて、雨も風もやみますと、急に川水の音がこくく聞えて來て、略。

六203 いつも通る汽船も、高波をよけて、沖を通ると見えて、汽てきの音は少しも聞えませんが、

六321 マツ先二出アツタノハ牛乳配達デ、車ノ音ヲ高クサセテ、ハシツテ行ツタ。

七499 トンテンカン、トンテンカント、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音が聞エマシタ。

七615 図 船長は略、一だん聲をはり上げて、「略。」とむすびたる時は、拍手の音しばらくはやまざりき。

八37 庭のすみで、先程からちやらくとすゝの音が聞える。

八53 ふと、垣根の外でちやらくとすゝの音が聞えた。

八508 餅をつく音に目がさめた。

九141 図 略、しゝみの殻を取出し、細かに打ちくだく。其の音を聞きつけてかけ來り、略、すばやくついはみたるは眞白なるめんどりなり。

九566 さんくくく、さんくくく。今日は天氣がよいので、朝から麥を打つ音が方々で聞える。

九1034 ラツパのひびきや大砲の音に、北風の心は先づ勇みたつ。

九1049 やがてあたりの静かさを破つて、大砲の音がとろろき始めた。

十393 あたりは如何にも静かで、たまに散る落葉の音が、かさくく聞える。

十411 ずいこくといふのこぎりの音が、あたりの静かさを破る。

十4210 略、谷向ふのくさむらの中

から、けたゝましい羽ばたきの音を立てて、山鳥が一羽飛立つた。

十431 同時に獵銃の音が續けざまに二發聞えた。

十8210 つるはしの音がこつたり／＼聞える。

十1287 図 一秒又一秒、七百尺に近き大船體は、寸、尺、間と音もなくすべり出つ。

十137 図 風は音なくやなぎをわたり、船は靜かに我等をのせて、略。

十1583 とたんに、ずどんと一發すさまじい大砲の音がとろろき渡つた。

十1648 又開墾する場合には、立木や切株の根本を掘つておいて、それにくさりをつけて此のトラクターで引くと、めり／＼と音を立てて根こぎにされてしまふ。

十296 図 なぎさに立ちて昔をしのべば、略、打寄する波の音さへ何事かを語るに似たり。

十2217 あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよん／＼と聞える。

十287 図 建長・圓覺 古寺の山門高き松風に、昔の音やこもるらん。

十375 略、或小さいみすばらしい家の前まで來ると、中からピアノの音が聞える。

十3710 略、やがてピアノの音が

はたと止んで、〈略〉。

十二53 不意にばたくと音がして、小さな子どもが二人奥からかけ出して来た。

十二59 龍頭を廻すと、〈略〉懐中時計が、忽ち愉快さうにかち／＼と音を立て始めた。

おとうさん「御父」(名) 65 オトウサン おとうさん

二87 図 アノキクハオトウサン モタイソウオスキデス。

二30 図 オトウサン、モウイクツネトラ、オ正月デスカ。

三32 いつかうちのおとうさんが道で、「いつもおたつしやなこと。」とおつしやつたら、五

一ぢいさんは〈略〉。

三70 7 そのとなりの三つもんのはおりとしまのはかまはおとうさんのです。

四46 3 おとうさんがおかへりになつた時には、〈略〉。

四75 8 今の村長さんのおとうさんもおとなしい人で、小さい時からよくはたらきました。

四80 6 昨日おとうさんと朝九時の汽車で、軍たいに居るに

さんの所へ出かけました。

五32 7 ある朝早く、おとうさんがたびへお立ちになつた時、お見送をして表へ出て見ました。

五53 3 此の人に年取つたおとうさん

がありまして、酒がすきでございしました。

五53 6 それで山へ行くにも、〈略〉、かへりに酒を買つて来ては、おとうさんを喜ばせてゐました。

五54 8 喜んで、それからは毎日其の酒をくんで来て、おとうさんに上げました。

五63 5 図 「おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、まだ一里半もあるのですか。」

五83 1 図 おとうさんにうかゞひますと、叔母さんの町に大水が出たさうです。

五83 8 図 おとうさんへ電報で御返事をいたしたやうに、〈略〉。叔母から 竹子様

五88 6 図 おとうさんやおかあさんには、取りまぎれてまだ手紙も上げずに居ります。〈略〉叔母から 竹子様

六103 4 図 おとうさんは昨日分家の叔父さんと、夜汽車で伊勢参宮に立たれました。

七9 6 おとうさんにうかゞつたら、かもめだとおつしやつた。

七11 7 僕が一番先に海へ下りた。〈略〉。おとうさんも、にいさんも、丸山君も、妹も、お松も、みんな下りた。

七92 7 「よいあんばいだ。〈略〉。」と、おとうさんは朝起きるとすぐ空を仰

いでかうおつしやつた。

七93 4 「やはり二百十日だ。風が出て来た。」と、又おとうさんがおつしやつた。

七110 1 図 「おとうさん、電報が来ました。」

七110 7 図 「おとうさん、ヘンとは何のことですか。」

八51 3 おとうさんはきね、おばあさんはこねどり。おぢいさんは大金の火をたいいていらつしやる。

八54 5 おとうさんが「せいは高くても、まだだめだ。」とおつしやつたが、それでもとう／＼一白だけはつき上げた。

八65 2 図 おとうさんは一昨日の正午無事にサンフランシスコへ着きました。横濱を出てから、ちやうど十五日目です。

八65 8 図 おとうさんが着いた日は、ちやうど五月のお節供の日で、日本人の家には、鯉のぼりが立つてゐました。

八71 3 図 〈略〉、おとうさんは最大急行の列車に乗つて、たつた十八時間着きました。

八77 6 図 おとうさん、此の雪降りに、何所へお出でになりますか。

八88 3 図 「此の方はどなたですか。」するとおとよは、にこつた聲で、ゆつくりと、「わたくしのおとうさん。」と答へた。

八90 4 図 信吉は〈略〉、娘の耳に口をよせて、「おとよ、おとうさんが

歸つて来て、うれしいか。」と大きな聲で言つたが、〈略〉。

八91 5 図 信吉は少しはなれて、〈略〉、「おとよ、おとうさんが歸つて、うれしいか。」と言つた。

九3 3 図 おとうさんはじめ皆様お元氣で何よりです。〈略〉叔父から 松太郎殿

九9 4 図 おとうさんやおかあさんによろしく。四月十日 叔父から 松太郎殿

九46 10 図 「今年ほど水の都合のよかつた事はない。」と、おとうさんが喜んでいらつしやいます。

九48 2 図 其の時おとうさんがにいと、「世の中は何でも一生けんめいに働く者が勝だ。〈略〉。」と話していらつしやいました。

九48 9 図 おとうさんは今朝も、「〈略〉。にいさんたちの分もわたしが働くのだ。」とおつしやつて、大そう元氣です。

九49 9 僕は今日學校から歸るとすぐおとうさんのお手紙を持つて、精米會社へお使に行つて来ました。

九50 6 お返事をお渡しした後で、おとうさんに「〈略〉。」と言ふと、

九50 9 〈略〉、おとうさんは「お前にもさう見えるかね。」とおつしやつ

て、あの方の小さい時分からのお話をして下さいました。

九53 4 おとうさんはすぐ言葉をついで、「略」。全くあんな人は珍しい。」とお話になりました。

九120 5 おとうさん、御用ハモウスンダノデスカ。

九121 7 おとうさんハ誰ニ投票ナサルノデス。

九121 4 略、おとうさんハ最初カラチャント其ノ人ニキメテキタ。

九121 8 略、「ソナエライ方ナラ、オトウサンガワザ／＼オ歸リニナラナクツテモ大丈夫デセウ。」

十13 2 高橋さんは、すぐ前に居る順太郎君を見て、「あなたもずるぶるん大きくなりましたね。おとうさんの若い時そっくりです。略。」

十13 3 私も、あなたのおとうさんなどと一しよに、よく道ぶしんに出たものでした。

十25 9 娘は驚いて、「まあ、かはいさうに。おとうさん、早く助けに行きませう。早く／＼。」

十41 6 兄は私に「壯吉、お前はおとうさんのかつた雑木を、かういふ風に束ねて運んでくれ。」といひながら、略。

十50 5 おとうさん、今度役場の隣にりつぱな建物が出来ましたね。

十50 9 銀行といへば、おとうさんは、何時かも銀行へ行つてお金を預

けて来るとおつしやいましたね。

十91 8 おとうさん、こんなに言ひにくい言葉は外に無いでせう。

十92 1 略、父はにこ／＼笑ひながら、「おとうさんは、もつと言ひにくい言葉を知つてゐる。」

十36 2 略、さつきおとうさんのいひつけで、明日の用意に出しておいた植林地の書付を開いて見る。

十36 9 略、「とおとうさんの手で記してある。」

十37 2 略、おとうさんが「略」今に御らん、此のくらゐ離して植ゑても、十五六年目には間伐をしなればならないやうになるから。」といひつて笑つてをられた。

十39 4 おとうさんのお話によると、枝を打てば、山火事の危険を防ぎ、又空氣の流通がよくなつて蟲がつかなくなるさうだ。

十40 5 略、一番早く伐るとしても、其の時は僕がおとうさんくらゐの年になつてゐるわけだ。

十40 6 今年伐るはずのは、おとうさんの子供の時植ゑたのだといふが、略。

十40 8 おとうさんは、よく「植林は貯金のやうなもので、植ゑてさへおけば、年々太つて利息が附いて行く。」とおつしやるが、ほんたうにさうだ。

十18 3 すると弟が「おとうさん、

二百十日は立春から二百十日目に當るのですね。」と言つて、日數を數へてみようとした。

十190 9 父はなほ言葉をつづけて、「略」。おとうさんが毎年潮干狩によい日を選ぶのも「月齡」を見て知るのだ。」

十119 7 僕はおとうさんから、誰が来てても此の門をあけてはならないと言ひつけられてゐるのです。

十119 8 略、「おとうさんは、誰が来ても此の門をあけてはならないと僕に言ひつけました。」

十120 7 略、ウェリントン公爵ともいはれるえらいお方が、おとうさんの言ひつけに背けとおつしやらうとは、略。

十120 10 僕は、誰が来ても此の門をあけてはならないとおとうさんに言はれてゐるのです。

おとうと「弟」話手 1 弟

三54 1 兄が「略」とたづねますと、弟「星」をかぞへてゐます。」

おとうと「弟」名 14 弟

三53 5 三 星のかず あるばん、弟がにはへ出て、「一つ二つ」とかぞへてゐました。

四18 3 コノ神様ハサキホドオ通りニナツタ神様ガタノ弟ノ方デス。

四83 7 略、弟へへいたいばう

をおみやげに買つて、夕方の汽車でかへりました。

四89 7 曾我兄弟は兄を十郎、弟を五郎といひました。

四91 6 略、兄が弓をひけば、弟はたちをふりまはし、早く強くなつて、かたきを取らうと心がけました。

五76 天照大神の弟の方に、すさのをのみことと申す神様がございました。

六25 4 親が落ちれば其の子も落ち、弟が落ちれば兄も落ち、略。

六65 3 略、弟ガ釘箱ヲ火鉢ノ中ヘヒツクリカヘシテ、手ヲ灰ダラケニシテ拾ヒハジメタ。

九102 4 午後には弟と天神山へきのこ取りに行くのだ。

十28 6 略、盛政は略、此の時までも飯浦坂にふみ留つて、追來る敵を防ぎ居し弟勝政に引きあげを命じたり。

十188 2 すると弟が「おとうさん、二百十日は立春から二百十日目に當るのですね。」と言つて、日數を數へてみようとした。

十188 9 父は曆を持つて来て、「略」。かういつて弟の手に渡した。

十188 9 弟はそれを見てしばらく考へてゐたが、すぐ二百十日の通日から立春の前日の通日を引去つて、「成程、二百十日目だ。」

十一 89 4 弟は尚あちらこちら暦をくつてゐるうち、ふと「八十八夜」の文字に目を止めて、「略」、これは何ですか。」

おとうとからあにへ 「課名」 2 弟から兄へ

九目 13 第十一 弟から兄へ

九 46 7 第十一 弟から兄へ

おとうとさん 「弟」 (名) 2 弟さん

十一 16 8 第五課 のぶ子さんの家「略」。略、そこへ弟さんが雑誌を

二三さつ持つて来て、本棚に並んでゐる雑誌の間へそれへお入れになりました。

十一 17 2 弟さんまでが、あんなに氣をつけていらつしやるとは實に感心なことです。

おとしなさる 「御通」 (五) 1 お通しなさる 《一レ》

七 103 2 間もなく石田三成が城に登つて参りました。「石田でござる。お通しなされ。

おとorigがかる 「御通掛」 (五) 1

オ通りガカル 《一リ》

四 16 7 白ウサギハ「略」、ハマベ

ニ立ツテ、ナイテ居マシタ。ソコ

へ神様ガタガオ通りガカリニ

ナツテ、略。

おとおる 「御通」 (五) 4 オトホル

オ通ル お通る 《一リ》

二 49 1 オヂイサンハヨロコンデ、

ソノハヒヲザルニ入レテ、

「略」。トヨンデアルキマシタ。トノサマガオトホリニナツテ、略。

二 51 7 ワルイオヂイサンハ「略」、

カレ木ニノボツテ、トノサマノ

オカヘリヲマツテキマシタ。ソ

ノウチニ、トノサマガオトホリ

ニナツテ、略。

四 18 2 コノ神様ハサキホドオ通

リニナツタ神様ガタノ弟ノ

方デス。

五 7 8 「略」、すさのをのみこと申す神様がございました。ある時、出

雲の國のひの川のはたをお通りになりますと、略。

おときちくん 「音吉君」 (人名) 1 音

吉君

六 39 7 昨日はとなり村から来てゐる歩兵の音吉君と二人で町を見物した。

おときばなし 「御伽話」 (名) 1 おと

ぎばなし

九 8 6 青・緑・紅・紫、目のさめるやうに美しい魚の群が、珊瑚の林

や海藻の間をぬつて泳いで行く。何

だかおときばなしの世界にでもまよ

ひこんだやうです。

おときい 「御得意」 (名) 1 お得意

八 56 5 米屋の小ぞうお得意へ

米運びし歸り途、略。

おどける 「戯」 (下) 1 おどける

四 43 5 手つだひの今吉がおどけて、はうきを大なぎなたのやうに持つて、べんけいのまねをしました。

おとこ 「男」 (名) 28 ヲトコ をとこ

男はおおとこ・こおとこ

一 46 6 「略」、モモガニツニワレ

テ、ナカカラオホキナヲトコノ

コガウマレマシタ。

三 19 1 「それではをとこの子で

すか。」「いいえ。としよりです。」

三 61 6 男の子三人はささのをはをとつて、舟をこしらへました。

五 6 7 日本ニッポンの男は泣くものではない。

六 77 8 男の生徒もあれば、女の生徒もある。

七 46 6 翌日武田方からは安間彦六といふ大の男が、物の具見事に着ざり、大の馬に打乗つて、上杉方の陣

へ向つた。

七 64 1 此の時見すばらしいなりをした一人の男が、人夫と渡賃を高いや

すいと言つてあらそつてゐましたが、略、着物をぬいで頭にのせ、一人

で川へはいつて行きました。

七 65 7 「略」、人夫はすぐ川を渡つて、

かの男を追かけました。

七 66 2 見れば先の男でございます。

七 67 1 人夫は其の男のたもとをおさ

へて、「略」。

七 68 3 かの男はゆめかとはばかり喜ん

で、財布を幾度かいたゞきましたが、目からはなみだがひつきりなしにこぼれてゐます。

七 70 7 かの男は「どうぞしほらく。」といつて引きとめました。

七 73 7 かの男は「それではこまる、ぜび。」といひながら、人夫の後に

ついて來ましたが、とうく又川を渡つて、人夫の家へ参りました。

七 74 4 かの男がわけを話して、どうかお禮を受けてくれといひますと、略。

七 74 9 男はしあんにくれて、役所へうつたへて出ました。

七 75 4 紀州の男は急いで國へ歸つて、其の金をまちがひなくとゞけるやうに致せ。

八 29 7 或日炭を焼く男が太郎のうちへ来て、ゐろりのはたでいろくの話をした。

八 29 9 此の時太郎が、炭はどうして焼くのかときくと、其の男はていねいに教へてくれた。

八 75 6 「略」、一人の男が「大洋を西へく」と航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がらだらうか。」

といつて冷笑しました。

九 58 10 「略」、七八人の男や女が向ひ合つて、片足をふみ出し、掛簪を合

はせながら、ばたんばたんと殺竿で麥を打つてゐる。

九 60 2 男も女もひたひの汗を、ほこ

りだらけの腕でふきながら、にぎやかに打續ける。

十106 國 男ばかりの御兄弟の中に、此の度始めて妹を得られ候事、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十123 國 それで注意深い男だといふことを知りました。

十二21 5 ふと見ると、ついそばの木の下では、かごを首に掛けた三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。

十二39 2 薄暗いらふそくの火のもとで、色の青い元氣のなささうな若い男が靴を縫つてゐる。

十二55 4 不意にぱた／＼と音がして、小さな子どもが二人奥からかけ出して來た。男の子と女の子である。

十二55 5 二人は其處らを見廻してゐたが、男の子はやがて仕事臺上の物をあれこれといぢり始めた。

十二55 9 男の子は指先でそれをつままうとしたが、餘り小さいのでつまめなかつた。

おとこなき 「男泣」(名) 1 男泣き

十二72 1 王は男泣きに泣いた。

おとこらし 「男」(形) 1 男らし

十一100 2 國 かゝる處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、其の有様は如何にも男らしく勇ましきものに候。

おとこらしい 「男」(形) 1 男らし

い「ク」

五74 僕は自分よりえらい友だちを大ぜいしていぢめるのは、男らしくないと思ひます。

おとし 「落」 ↓ さかおとし

おとし 「御年」(名) 1 お年
四62 國 「いんきよさま、そのお年でつぎ木をなさるのですか。」

おとし「こゝろたつのおとし」
おとしだま 「御年玉」(名) 2 年玉
マ 年玉

二33 1 國 「年玉ニハナニヲアゲマセウ。」
六64 8 町ノ叔父サンカラ、年玉ニ

大キナ磁石ヲイタバイタ。
おとしもの 「落物」(名) 1 落し物
七66 9 國 「なんで又さうあわてて引つかへします。」落し物をしましたから。」

おとしろう 「音」(郎) (人名) 3 音二郎
四47 1 國、取手はみよ子ちよ子國太郎音二郎の四人と、友

一と友一のあねの道子です。
四48 3 音二郎はい、とりました。」
四51 1 國、音二郎が六まい、友

一はたつた二まいでした。
おとす 「落」(四・五) 15 おとす 落
ス 落す 《「サ・シー・セ」

六35 1 屋島の合戦に、義経が小わきにはさんでゐた弓を海へ落しました。

六59 1 母はもう此の世の人ではないのかと、力をおとして居りました。

六94 1 賊が之を聞いて、くやしがつて攻めよせると、正成は高いがけの上から大木を落させた。

六95 3 賊が四方から之を目がけておしよせると、城から大石を四五十、一度に落したので、又何百人かころされた。

七65 2 國、革の財布が落ちてゐました。《略》。これはあの人落して行つたにちがひないが、《略》。

七67 3 國 人夫は其の男のたもとをおさへて、「まあ、お待ちなさい。落した物は。」《革の財布で》。

七68 8 國 まして人通の多い渡場で落しましたから、たとひとんで行つて見た所で、もうあるまいと思ひましたが、《略》。

八82 7 雨だれでも石をうがつ。長い間かゝらなくても、工夫して大仕掛に水を落せば、大きな仕事をする。

八92 3 信吉は「もう／＼何所へも行きはしない。」といつて、大きな涙をばた／＼落した。

九18 9 國、農夫ナドが小枝ト見違へテ、ドピンヲ掛ケ、落シテワルトイフ意味デアラウ。

九117 10 大尉は之を讀んで、思はずも涙を落し、水兵の手を握つて、「わ

たしが悪かつた。《略》。」と言聞かせた。

十二25 5 國 寄手の大將佐久間盛政は、今日の戦に勝ちほこり、明日は進んで賤嶽のとりでをおとし、一舉に敵をみぢんにせんと、《略》。

十二73 1 宣長は力を落して、すぐ／＼とどつて來た。

十二56 1 やつとつまんだと思ふと直に落してしまつた。《略》。ねち仕事臺の脚の陰にころがつた。

十二81 8 國 船頭勇まし、此の潮筋を落し漕ぎゆく、木の葉舟。
おとす 「舊」(五) 1 おとす 《シ》

十一119 5 すると、ジョージは、「《略》。」と言つてどうしてもあけない。騎馬の人たちは、あけないとなぐるぞと言つておどしたり、あけてくれ／＼とお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。

おとす・れる 「訪」(下二) 1 おとづれる 《「レ」

十二126 5 安芳は今日こそ最後の確答を得ようと決心して、西郷をおとづれたのである。

おとたちばなひめ 「弟橘媛」(課名) 2 弟橘媛

九目4 第三 弟橘媛
九98 第三 弟橘媛

おとたちばなひめ 「弟橘媛」(人名) 1 弟橘媛

九107 國 其の時、御供にしたがひ給へる弟橘媛、尊の御身危しと見

給ひ、「これ海神のたゞりならん。
《略》。」といひて、菅筵八枚、敷皮
八枚、きぬの敷物八枚を波の上に敷
重ね、其の上に飛下り給へり。

おとと 「弟」(名) 2 おとと

三二九 圖 《略》、つつみ かかへて
がくかうへ つれだち いそぐあ
ね おとと。

三二九 圖 足すべらせて こけかかる
おととを かばふ あねのうで。

おととい 「昨日」(名) 2 一昨日
九四七 圖 一昨日海軍のいさんが、
休暇でお歸りになったので、《略》。

十二三二 圖 一昨日朝ロンドンを出發
して午後早くバリーに着きました。

おととし 「昨年」(名) 3 一昨年
十一三五 圖 「あそこは一昨年植付を
した地蔵山だ。」と思ふと、《略》。

十一三六 圖 地圖の中の薄緑に染めてあ
るのが一昨年植付けた處、《略》。

十一三六 一昨年植付けた時の覺書だ。

おとな 「大人」(名) 3 大人

七八六 《略》、象牙鯨ニクラベルト、
赤子ト大人トヨリモ、モツトチガフ。

九五六 圖 コ、椰子は、高いのは七八
間もあります。《略》、其の葉の根本
には、大人の頭ぐらゐの實がすゞな
りになつてゐます。

九七九 第十七 いもほり 《略》。大
人の握りこぶし程の大きなもあれ
ば、雀の卵ぐらゐなはいらしいの
もあるが、《略》。

おとなし・い 「大人」(形) 3 おとな
しい 《イ・イク》

四七五 今 の村長さんのおとう
さんもおとなしい人で、小さい
時からよくはたらきました。

九八九 圖 土人はまだよく開けてゐま
せんが、性質はおとなしく、我々に
もよくなつき、《略》。

十八四 圖 《略》、どの子馬も皆かはい
らしい顔をして、おとなしくつなが
れてゐます。

おとなり 「御隣」(名) 1 おとなり
九四七 圖 《略》、おとなりからの手つ
だひと合はせて、植手が八人になつ
て、にぎやかでした。

おとひめ 「乙姫」(名) 4 おとひめ
三二六 図 ゆうぐうのおとひめは
うらしまのきたのをよろこん
で、毎日いろいろなごちそうを
したり、さまざまなあそびをし
て見せたりしました。

三二四 図 うらしまは《略》、おとひめ
に「いろいろおせわになりました。
《略》。」といひました。

三二五 図 おとひめは「それはまこ
とにおなごりをしいことでござ
います。《略》。」といつて、きれい
な箱をわたしました。

三二六 圖 《略》、おとひめのいつた
こともわすれて、玉手箱をあけ
ました。

おとまる 「御泊」(五) 1 御泊る

《一リ》
十一七一 圖 《略》、「先生がどうして
こちらへ。」《略》。あの新上屋に
御泊りになつて、さつき《略》、御
立寄り下さいました。」

おとめもうす 「御泊申」(五) 3 お
泊め申す 《一サ・シ・ス》

十一六六 圖 されど主人は、「御覽の通
りの見苦しさ、お氣の毒ながら、と
てもお泊め申す事は出来ません。
《略》。」といふに、僧は返す言葉も
なくて出行きぬ。

十一六六 圖 すぐと立去る僧の後影
を見送りたる妻は、やがて夫に向ひ
て、「《略》。お泊め申してはいかゞ
でございませう。」

十一六六 圖 同情深き妻の言葉に、主人
はいたく心動きて、「ではお泊め申
さう。《略》。」

おとめる 「御止」(下) 1 おとめ
る 《一メ》

四二六 図 おばあさんが「《略》。もつ
とあそんでお出で。」といつて
おとめになりましたが、《略》。

おとも 「御供」(名) 4 オトモ おと
も

一四九 圖 「ニツポン一ノキビダン
ゴ。」「一ツクダサイ、オトモヲ
シマス。」

二五二 圖 トノサマヤオトモノ人
ノ目モ、口モ、耳モハヒダラ
ケニナリマシタ。

四一八 四 兄様 ガタノオトモヲシ
テ、フクロヲカツイデイラツシ
ヤツタノデ、《略》。

四九三 五 かたきのかどうもよりと
もの おともをして行つて 居ま
す。

おともだち 「御友達」(名) 6 オトモ
ダチ お友だち

二二九 一 ニイサンガオトモダチト、
ニハニ大キナユキダルマヲコ
シラヘマシタ。

二五三 図 ワタクシハアナタノオト
モダチデス。

五九三 《略》、かついで足をはらして
ゐる書生さんが、お友だちへ出した
葉書には、《略》。

八〇七 四 圖 《略》、母が私に、お友だち
をお呼びなさい、おこはでもふかし
て上げようと申します。

九三三 図 いさんのお友だちの岡田さ
んが旅行からお歸りになつたと聞い
て、《略》。

九三三 図 ちやうど岡田さんは四五人の
お友だちに、白馬登山のお話をなさ
つていらつしやる所でした。

おとよ 「人名」 15 おとよ

八三三 四 信吉にはおとよといふ今年十
一になる女の子があるが、生れつき
啞なので、僕のうちに世話して、啞
の學校に入れてある。

八八二 《略》、間もなく黒い服を着た
先生が、女生徒を一人つれて、はい

つて來られた。生徒はおとよであつた。

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

おとりこみ 「御取込」(名) 1 お取込

十一 148 三月の末になさるはずであつたのが、お取込があつたため、今まで延びてゐたのださうです。

おどりこむ 「踊込」(五) 1 をどりこむ 《一》

六八三 通有はほばしらをたふして、之をはしこにして、敵の船へをどりこんだ。

おとる 「劣」(四・五) 4 おとる 劣

七二九 我が國の馬は西洋諸國の馬にくらべると、せいも低く、體格もおとつてゐたが、《略》。

九八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

九八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

九八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

九八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

九八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

九八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

九八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

九八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

の拜觀者の胸は、まさに始らんとする進水式の壯快なる光景を豫想して、唯をどりにをどる。

十 178 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

十一 765 老學者の言に深く感激した宣長は、未來の希望に胸ををどらせながら、ひっそりした町すぢを我が家へ向つた。

十二 442 《略》、やがて指がピアノの鍵にふれたと思ふと、《略》、今度は如何にもものすごい、いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生にをどるやう、最後は又急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、

おとろえゆく 《一》

哀ふ 《一》

十 96 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

十一 435 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の前から足の爪先までながめたが、

勢衰へず、遂に肺炎を引き起し申候。

おとろえゆく 《一》

哀へ果てる 《一》

十二 736 コーデリヤは眠つてゐる父の衰へ果てた姿をつくづく見て、

おとろえゆく 《一》

十 657 火は次第におとろ

へ行きて、ひまもる夜風はだへをさすが如し。

おどろきえる「哀」(下二) 1 哀へる

《一へ》ひやせおどろえる

十二65 6 リヤ王はもう八十の坂を越えた。《略》。それに近來はめつきり元氣が衰へて、もう政務にもたへられなくなつて來た。

おどろかす「驚」(四・五) 2 驚かす

《一サ・一シ》

九112 2 園 園 園 あの中にて一番面白き話をよくおぼえ置き、來週學校にて話し方の時間に話し、同級の人々を驚かさんと楽しみ居り候。

十二117 8 園 電信や電話の發明は其の當時實に全世界を驚かしたものであります。《略》。

おどろき「驚」(名) 1 驚

十二44 3 《略》、やがて指がビヤノの鍵にふれたと思ふと、やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が次第々々にやみの世界を照らすやう、一轉すると、今度は如何にもものすごい、いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生にをどるやう、最後は又急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、《略》。

おどろきあわてる「驚慌」(下二) 1

驚きあわてる《一テ》

十一56 3 ちやうど其の時、「ふかだく。」「といふ船長のけたゝましい

叫び聲が聞えた。《略》。人人は叫び聲に驚きあわてて、我先にと船へもどつて來る。

おどろきいゝる「驚入」(四) 2 驚き

入る 驚入《一リ》

十109 3 園 園 承り候へば、御祖母様には先日より御病氣の處、御養生のかひもなく、去る十九日遂に御死去遊ばされ候由、誠に驚き入り候。

十一41 10 園 園 《略》、貴兄には去月以來御病氣にて、しかも一時は大分御重態なりし由、誠に意外の事に驚入候。

おどろきお・り「驚居」(ラ変) 1 驚

き居り《一リ》

十110 1 園 園 承り候へば、御祖母様には《略》、去る十九日遂に御死去遊ばされ候由、《略》。《略》。兩親も非常に驚き居り、あつく御悔申し上げ候やうにと申し出で候。

おどろく「驚」(四・五) 46 おどろく

驚く《一イ・一カ・一キ・一ク・一ケ》

三45 6 うちへかへつてみると、おどろきました、父も母もしんでしまつて、うちもなくなつてゐて、村のやうすもすつかりかはつてゐます。しつてゐるものは一人もありません。

三63 7 三人は舟とならんで、川のふちをかけて行きます。草のはにとまつてゐたてふてふがおどろいてとびたちました。

五33 6 此の時の氣もなく自分のうちを見て、その小さいのおどろきました。

六85 8 見せ物小屋で象を見た。先づ大きなのおどろいた。

七30 6 園 《略》、後の暗きやぶかげより大なる蛇つと出でて、獅子のからだにまきつきたり。獅子はおどろきてふりはなさんとしたれど、蛇はますくかたくしめつたり。

七31 4 園 《略》、後の暗きやぶかげより大なる蛇つと出でて、獅子のからだにまきつきたり。《略》。此の時此所に來りしは一人の武士なり。武士の馬はおどろきて、後足にて立上り、おそれて其所に近づかんとせす。

七37 8 園 船で來れば、神戸から三晝夜、門司からは二晝夜で當地へ着きますが、來て先づ誰でもおどろくのは、波止場の大きなことです。

七44 1 謙信はそれをさとつて、夜の間に進んで信玄の陣へ攻入つた。信玄は不意を打たれておどろいたが、忽ち陣立をかねて、敵を引受けた。

七45 4 信玄の家來は之を見て、後からやうで謙信をついたが、あたらな。力一ぱいに謙信の馬をなぐりつけた。馬はおどろいてとび上つたので、信玄はあぶない所を助かつた。

七77 7 「いつも人より一時間前に參つて居ります。」「一時も前に。」とい

つて信長は驚いた。

七103 6 「石田でござる。お通しなされ。」「石田といふ者ださうだ。」「ずるぶんおそく來たものだ。」「通さないことにしよう。」などと清正の家來どもが申します。三成は驚いて、

「今天下に此の石田を知らぬ者はあるまい。《略》。」

八10 3 《略》、信作の馬はつまづいて、前足を折つた。信作はつるりとすべり落ちて、其のはずみに、ころくころくの中へころげこんだ。しかも其所は深い所である。耕造は驚いて、ひらりと馬からとび下り、《略》。

八14 6 後に此の話を聞いた者は、皆家康の年に似合はずかしこいのに驚いた。

八37 4 二人の女は《略》、兩方から引合ひましたが、子どもがいたがつて、わつと泣出しますと、實母の方は驚いて手を放しました。

八39 4 目をさまして見ると、ふろしきづつみがありません。《略》。驚いてあたりをさがしても見當らず、《略》。

八42 3 越前守は早速門をしめさせて、見物人一同の所名前を書取らせ、さておごそかに、「此所は天下の役所なるに、許しもなくて亂入するとは不届しこく。もはや歸すことは相成らぬ。」と申し渡しました。一同は驚いて、泣くやらなげくやら、大さ

わざでございます。

八七四回 シカゴを立つ日に、お前たちの年始状が着きました。二人とも字が上手になつたのに驚きました。

九七九回 あちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲。

九八三回 圖「毘沙門天を刻むのだ。」
「何時頃までに出来ますか。」「來春まではかゝるだらう。」「來春までも。」と驚けば、〈略〉。

九八五回 信吉は感心して、熱心に空を仰ぎあしが、驚けるやうに聲をあげて、「にいさんく、あの北極星がひしやくの柄の先になつて、もう一つ、小さい北斗七星のやうなものが出てゐますね。」

九八二回 北風は、主人の體がくらの上でぐらつとゆれるのを感じた。と、たづなが急にゆるんで、中尉は後方にころげ落ちた。北風は驚いてすぐに立止らうとしたが、〈略〉。

九八四回 ふと通るかゝつた某大尉が之を見て、〈略〉。〈略〉。〈略〉。其の有様は何事だ。兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。」と、言葉鋭くしかつた。水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、〈略〉。

十六六回 臺灣・樺太など、遠方より送り來れるもあれば、枯損するもの多かるべきに、ほとんど皆勢よく根づきたるは、誠に驚くべき事なら

ずや。

十十四回 私が今度歸つて來て、はじめて青年團の規約を見た時は、其のとのつてゐるのに驚いて、これがまじめに實行されてゐるかどうかと、少し氣になつたのでした。

十二十五回 〈略〉、荒れくるふ海上を見渡したグレース親子は、ふとはるかの沖合に、かの難破船を見とめた。娘は驚いて、「まあ、かはいさうに。おとうさん、早く助けに行きませう。早くく。」

十五十四回 此の愛らしい小鳥が、他の方法では全く通信が出来なくなつた場合でも、いろ／＼の困難ををかして、遠い處まで使者の役目を務めるに聞いては、誰でも驚かない者はあるまい。

十六十六回 〈略〉。あの鉢の木をたいて、せめてものおもてなしにしよう。」とて主人の持來れるは、秘藏の梅・松・櫻の鉢植なり。僧は驚きて、〈略〉、どうぞ止めて下さい。」

十八十四回 或日、此の附近の山へ薪をとりに來た百姓が、たき火をしてゐると、そばの黒い岩に火がつき、煙をあげて燃出しました。驚いて調べてみると、〈略〉。

十一十五回 〈略〉、成績物を一枚も無くなさずにそろへていらつしやるのに驚きました。

十一四七回 夜明けて住持、畫師に向

ひて、「今日かき給はん鶴の姿はかやうなるべし。」と、夜中に畫師のしたる様をまねて見するに、畫師驚きて、「我が心に思ひ構へし事を如何にして知り給へるか。」と問ふ。

十一四八回 未だ一月もたゞざるに、かの畫師は突然歸り來れり。住持驚きて、「東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。」と問へば、〈略〉。

十一五十六回 ちやうど其の時、「ふかだく。」といふ船長のけたゝましい叫び聲が聞えた。老砲手が驚いて向ふを見ると、〈略〉。

十一五十六回 其のうちに二人はふかの來るのに氣がついた。驚いて一しやうけんめい逃げようとしてあせつてゐるが、もう遅い。

十一七十五回 〈略〉、主人は愛想よく迎へて、「どうも残念なことでした。あなたがよく會ひたいと御話になる江戸の賀茂眞淵先生が、先程御見えになりました。」といふ。あまり思ひがけのない言葉に宣長は驚いて、「先生がどうしてこちらへ。」

十一八二回 圖 海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ、驚かし。

十一一四九回 圖 アマゾン河は〈略〉、世界の河の王といはれ居候。河幅は驚く程の廣さにて、河口の處にては、三百二十キロメートルもこれある由、略、東京・豊橋間の距離に當り候。

十二十五回 我が國にてかゝる新聞の現れたるは維新前後にして、其の後數十年の間に驚くべき發達を遂げた

り。

十二十七回 殊に驚くべきは輪轉機

の能力なり。

十二二九回 〈略〉、其の他見る物聞く物唯々驚く外はありません。

十二三五回 〈略〉、私は今更ながらドイツ人の勤勉なのに驚きました。

十二三九回 二人は不意の來客にさも驚いたらしい様子。

十二五二回 暗い箱の中にしまひ込まれてゐた小さな鐵のねちが、〈略〉、明るい處へ出された。ねぢは驚いてあたりを見廻したが、〈略〉。

十二七八回 群をなして寄せて來たまぐろは、先づ垣網に驚き、之に沿うて

沖へ逃げようとして身網の中へはい

る。

十二九四回 〈略〉、彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。そこで彼は先づ近處の河に浴し、たま

く其處にゐた少女のさゝげた牛乳を飲んで元氣を回復した。ところが此の新たな態度に驚いた五人の友は、

釋迦が全く修行を止めてしまつたものと思ひ、彼を捨てて去つた。

十二一〇七回 此の洞穴と、十年一日の如く黙々としてのみの手を休めない僧の根氣とを見た村の人々は、今更のやうに驚いた。

十二116 〇 殊に近年は水力電氣の驚くべき發達にともなひ、〈略〉。

おなか 「御中」(名) 1 おなか

五92 〇 郵便物をあつめる人は、毎日きまつた時刻に来て、私のおなかを明けて持つて行きます。

おなごりおしい 「御名残惜」(形) 1

おなごりをしい 《一イ》

三44 〇 おとひめは「それはまことに おなごりをしい ことでございます。〈略〉。」といつて、きれいな箱をわたしました。

おなさけぶかい 「御情深」(形) 1

オナサケブカイ 《一イ》

四20 〇 ヨロコデ大國主ノ神ノ

トコロへオレイニ行ツテ、「オカゲサマデ、カラダハコノ通り

ニナホリマシタ。アナタハオナサケブカイオ方デスカラ、〈略〉。」ト申シ上デマシタ。

おなじ 「同」(形状) 3 同ジ 同ジ

六76 〇 コレハ、ハジメ白地ニオツ

テ置イテ、後デカタヲ置イテ染メルノデ、縮緬ノ友禪ト同ジデス。

八80 〇 「どのうちでも、納める金高は同じですか。」

十一114 〇 其の土地に廣い狭いがあり、其の組織に繁簡の差があるにしても、地方自治の精神に基づいて其の團體

の幸福を進め、國運の發展を期することは皆同じである。

おなじ 「同」(連体) 21 おなじ 同ジ

同じ 三16 〇 「おまへはてのゆびのなをしつてゐますか。」「しつてゐます。〈略〉。」「さうです。それではあしのゆびのなをしつてゐますか。」「おなじ こととせう。」

三22 〇 小一郎は正一とうらの山へわらびをとりにいきました。〈略〉。又とりはじめて、二人はたくさんとつて からくらべてみました。どちらもたいいていおなじくらゐで、かちまけはありませんでした。

六44 〇 月と日と雷が同じ宿屋にとまりました。

七52 〇 私も子どもの時には、毎日の學校へ通つて、皆さんと同じやうに、あの運動場で遊んだり、此の講堂でお話を聞いたり致しました。

九13 〇 毎日世話し居ることといづれの鶏も皆かはゆき中に、ひよこは一そうかはゆく思はる。妹も同じ心にや、〈略〉。

九17 〇 保護色ヲツテキルモノノ中ニハ、季節ニヨツテマハリノ物ノ色ガカハレバ、ソレニツレテ同ジヤウナ色ニカハルモノモアル。

九20 〇 此ノ蟲ハ〈略〉、羽ヲ廣ゲテキルト、全ク蘭ノ花ト同ジヤウデ、ナカ／＼見分ケガツカナイサウデア

ル。

九25 〇 〈略〉、一すちに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ事で、これが佐藤の家の學問の精神である。

九51 〇 あの社長さんはもと上方の人で、此の町へ始めて奉公に來たのは、ちやうどお前と同じ十二年だつたさうだ。

九103 〇 或年戰爭が始つたので、北風も外の軍馬と同じやうに、主人にしたがつて戦地へ向つた。

十22 〇 私は今此所に来て、飼主たちがあんなにかはいがつてゐたのを見て、此の子馬共を買つた人たち

も、どうか同じやうにやさしく扱つてくれ、ばよいと、心からいのりしました。

十34 〇 前と同じ方法で、船はもう一段高く浮上り、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。

十35 〇 今度は前と反對に、順次に三段を下つて、海と同じ水面に浮ぶ。

十84 〇 〈略〉、たき火をしてゐると、そばの黒い岩に火がつき、煙をあげて燃出しました。驚いて調べてみると、あたりは同じ眞黒な岩ばかりでした。

十88 〇 綿花は主に印度やアメリカ合衆國から輸入し、それに加工して綿

絲や綿織物を造る。これらの製品は我々の使ひ料にもなるが、又支那・印度其の他の東洋諸國へ輸出される。

支那の豚の毛が輸入されて日本でブラシに造られ、又支那へ輸出されるなども同じ例である。

十一36 〇 ところが此の大きな太陽も、夜の空に銀の砂をまいたやうに見える小さな星の一つと同じものだといふ。

十一37 〇 つまり此の宇宙には、あの太陽のほかに、これと同じやうなものがあるが、數限りもなく存在してゐるが、〈略〉。

十一74 〇 年こそちがへ、二人は同じ學問の道をたどつてゐるのである。

十二53 〇 自分の置かれたのは、仕事臺の上に乗つてゐる小さなふたガラ

スの中で、〈略〉。きりやねぢ廻しやピンセットや小さな槌やさま／＼の道具も、同じ臺の上に横たはつてゐる。

十二67 〇 私も姉上と同じ心で、——ほんたうに姉上は私の思つてゐる通りをおつしやいました。

十二89 〇 〈略〉、兩院の意見が一致すれば、最後に議決した議院の議長から國務大臣を経て奏上する。又貴衆

兩院の何れから提出された案は、他の一院のみで討議し、可決すれば

同じ手續によつて奏上する。

おなじ 「同」(形) 4 オナジ 同ジ

同じ 《一ジ—ジク》

五26 〇 ハ ツバメ 〈略〉。ガントオナジク、ワタリ鳥デ、アタ、カニナ

ツテ、ガンガ北ノ國ヘカヘルコロ、南ノ國カラワツテ來マス。

九443 同ジ物ニテモ、意ノ如クニ得ラルレバ價ナク、得ガタケレバ價アルナリ。

九458 之ニ反シテ、同ジヤウナル馬五匹アリ、〈略〉。

十二193 されば同一日附の同じ新聞にても、〈略〉、記事に多少の相違あるを常とす。

おなじく 〔同〕 2 おなじく 同じく

六232 大將は平維盛で、〈略〉、越中の國の礪波山にちんを取りました。義仲は五万騎を引きつれて、これもおなじく礪波山のふもとにちんを取りました。

八68 一人は信作、一人は耕造といつて、年は同じく十五歳。

おなつかし 〔御懷〕 (形) 1 おなつかし 一シ

六623 〔おなつかしや、母様。木曾の萬じゆでございます。〕

おなまえ 〔御名前〕 (名) 2 お名前 七721 其の上あなたのお名前をうけたまはりたうございます。

十675 僧は〈略〉、さて「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」

「いや、名前を申し上げる程の者ではございません。」主人はけんそんして言はず。

おなりなさる 〔御成〕 (五) 1 おな

りなさる 一イ

七90 〔略〉、マリーはおばあさんのづきんを取つて、兵士の頭にかぶせました。「しばらく、うちのおばあさんにおなりなさい。」

おなる 〔御成〕 (五) 1 オナル 一リ

四215 ソノ後大國主ノ神ハ、白ウサギノイツタ通り、エライオ方ニオナリニナリマシタ。

おに 〔鬼〕 (名) 3 オニ おに 鬼

一533 モモタラウハカタナヲヌイテ、一バンオホキナオニニムカヒマシタ。

四482 十二 かるた取 〔略〉「おににかなぼう。」音一郎「はい、とりました。」

十一996 或時近邊の人からワシントン傳を借りたことがある。リンカーンはかねて此の偉人を非常にしたつてゐたので、鬼の首でも取つた氣になつて一心に讀續けた。

おにがしま 〔鬼島〕 (名) 2 オニガシマ

一484 〔略〉、アナタハドチラヘオイデニナリマスカ。」「オニガシマヘオニセイバツニ。」

一513 オニガシマヘツイテミマスト、〈略〉。

おにこっこ 〔鬼〕 (名) 1 おにこっこ 六793 第二十 氷すべり 〔略〉。はた拾まり送、おにこっこ、何でも

なれてしまへば、少しも陸上とかはらない。

おにせいばつ 〔鬼征伐〕 (名) 1 オニセイバツ

一484 〔略〉、アナタハドチラヘオイデニナリマスカ。」「オニガシマヘオニセイバツニ。」

おにども 〔鬼共〕 (名) 2 オニドモ 一514 〔略〉、オニドモハテツノモンヲシメテ、シロヲマモツテキマス。

一535 オニドモハカウサンシテ、ダイジナタカラモノヲダシマシタ。

おにわさき 〔御庭先〕 (名) 1 お庭先 七1027 〔略〉「お庭先の御門を守る者がございませぬ。某の手で固めませう。」と清正がいひますと、秀吉はうなづきました。

おねがい 〔御願〕 (名) 2 お願 御願 八457 〔略〉、まことに勝手がましい御願でございしますが、もう四五日の所おひまを願ひたうございます。〈略〉

浅吉 御主人様 八1102 〔略〉、當日祝の歌を一首いたゞきたうございます。これは年よりからのお願でございます。〈略〉

小野田國男 澤勝五郎様 八1102 〔略〉、當日祝の歌を一首いたゞきたうございます。これは年よりからのお願でございます。〈略〉

おねがいもうす 〔御願申〕 (五) 1 御願ひ申す 一ス

十二1306 安芳は尚言葉續けて、

〔略〉。何分今一應の御評議を推し

て御願ひ申す次第でござります。」西郷はしばらくじつと考へてゐたが、

おねんぶつ 〔御念仏〕 (名) 1 おねんぶつ

七722 其の上あなたのお名前をうけたまはりたうございます。妻や子どもに、朝晩おねんぶつのかはりにとなへさせます。

おの 〔室〕 (名) 1 をの

十一1005 〔略〉、次にをのを振るつて大木を伐るに、〈略〉。

おの 〔己〕 (代名) 2 おの 十二114 〔略〉、次をのを振るつて大木を伐るに、〈略〉。

古のふみ見るたびに思ふかな、おのが治むる國はいかにと。

十二116 〔略〉、第一課 明治天皇御製 〔略〉。浅緑すみわたたりたる大空のひろきをおのが心とがな。

おのおの 〔各〕 (名) 4 各

八78 五箇村の人々は各自分の村の騎手に向つて、〈略〉。などと、口々に勢をつけてゐる。

九454 〔略〉、其ノ五人ハ、各其ノ馬ガ他人ノ手ニ渡ランコトヲ恐レテ、争ヒテ高キ價ヲツク。

九4510 〔略〉、五人ノ持主各其ノ馬ノ賣レザランコトヲ恐レテ、争ヒテ價ヲ下グ。

十二4710 〔略〉、ひばは抵抗力を有し、松は彈力に富み、落葉松は一種の品位を有する等、各其の特性を具へたり。

おのずから 「目」 (副) 3 おのづから
自ら

九116 図 ふしぎや、今まで荒れに荒
れるたる大海、おのづから静まりて、
おだやかなる風となり、〈略〉。
十二997 図 然れど春日の社頭、朱の
廻廊山の緑にはえて、森厳自らの人
襟を正さしめ、〈略〉。

十二134 4 〈略〉美しい風景や温和な
氣候は、自ら國民の性質を穩健なら
しめ、〈略〉。

おのだくにお 「小野田國男」 (人名) 1
小野田國男
八110 4 図 三月十二日 小野田國男
澤勝五郎様

おののとうふう 「小野道風」 (課名) 2
をののたうふう

三目6 十八 をののたうふう
三54 4 十八 をののたうふう
おののとうふう 「小野道風」 (人名) 1
をののたうふう

三54 5 むかしをののたうふうと
いふ人がありました。

おのぼる 「御上」 (五) 2 お上る
《一り》

三88 6 図 「いやいや、おかへし申し
たら、まはずに空へお上りに
なりませう。」「いや、天人はう
そをいひません。」

四72 6 図 〈略〉、西の村では
「略」。一本杉のふところから
お月様がお上りになつた。」な

どと申します。

おのみち 「尾道」 (地名) 1 尾道

十一34 5 図 瀬戸内海の沿岸には大
阪・神戸・尾道・宇品・高松・多度
津・高濱等良港多く、〈略〉。

おのりなさる 「御乗」 (五) 1 おの
りなさる 《一い》

三41 8 図 〈略〉、うらしまが舟に
のつてつりをしてゐますと、
大きなかめが出てきて、「略」。
私のせ中へおのりなさい。」と
いひました。

おのれ 「己」 (代名) 5 おのれ 己

七96 6 図 共同助力は人の道、お
のれの利のみかへりみず、〈略〉。
十60 2 図 されど婦人は、〈略〉、僧を
ば待たせ置き、おのれは主人を迎へ
にとて外に行きけり。

十一76 図 孔子は他人を正す前に先
づおのれを正し、近きより遠きに及
すを以て其の主義としたり。

十一77 図 図 「おのれを修めて人を
安んず。」とは、彼が簡明に此の意
をあらはせる語なり。

十二84 5 図 たましくコーニが交易の
ため大陸に渡らんとするに際し、林
藏は〈略〉、切に己をとまはんこ
とを求む。

おのるやま 「尾野路山」 (地名) 3 尾
野路山

十一25 7 図 寄手の大將佐久間盛政は、
〈略〉、自らは尾野路山に野營し、大

岩山・鉢峯などの要所々にそれ
く將卒を配置したり。

十一25 図 尾野路山

十一26 2 図 こはたゞ事ならじと、尾
野路山の本營に急報すれば、〈略〉。

おば 「伯母」 (名) 2 叔母
五89 2 図 九月十五日 叔母から 竹
子様

十108 8 図 五月五日 叔母より さ
ち子どの

おばあさん 「御祖母」 (名) 32 オバア
サン おばあさん

一39 4 ハヤクカヘラナイト、オヂ
イサンヤオバアサンガシンパイ
ナサイマス。

一44 2 ムカシムカシ、オヂイサン
トオバアサンガアリマシタ。

一44 5 オヂイサンハヤマヘシバ
カリニ、オバアサンハカハヘ
センタクニイキマシタ。

一45 1 オバアサンガセンタクヲ
シテキマス、オホキナモモガ
ナガレテキマシタ。

一45 4 オバアサンハソノモモヲ
ヒロツテカヘリマシタ。

一46 1 オバアサンガモモヲキラ
ウトシマス、ト、〈略〉。

三71 3 そちらの〈略〉おびはね
えさんので、はばのせまい黒

いのはおばあさんのです。

三71 3 おばあさんはあれをしめ
て、よくお寺まゐりにいらつし

やいます。

三79 4 おばあさんが「ふみ子も
こんやはきつとあちらでこの
月を見てゐませう。」と、ひとり
ごとのやうにおつしやいました。

四22 7 うちの人はみんなたん
ぽへ出て、おばあさんが日あた
りのよいえんがはでつぎ物を
していらつしやいました。

四23 2 おばあさんはもう耳が
遠いので、大きなこゑで、「おば
あさん、今日は。」といふと、ふ
りかへつて、「おう、三ちゃんか。
よく来たね。」といつて、ふろし
きつみえをうけ取つて、とだな
からうでたくりをおぼんに一
ぱい持つて来て下さいました。

四23 4 図 「おばあさん、今日は。」
四25 1 おばあさんが「ほうほう」
といつておおひになりますと、
にはとりよりさきに、すずめが
くらのやねへにげて行きます。

四25 5 おばあさんが「略」。もつ
とあそんでお出で。」といつて
おとめになりましたが、〈略〉。

四74 3 私東の村の今の村
長さんのおぢいさんやおばあ
さんを其のわかい時から知つ
て居ました。

五8 4 〈略〉、おぢいさんとおばあ
さんが、一人の娘を中において泣いて
ゐました。

七24 茶屋にはおばあさんが一人ばつちで菓子やわらぢを賣つてゐる。
 七26 此のおばあさんにむすこが一人あるのださうだがずつと前から南アメリカへ行つてゐるといふことだ。
 七41 4 〈略〉、「ごめんなさい。く。」といひく、見送人をおし分けて、前へ出るおばあさんがある。
 七42 2 おばあさんは又さけんだ。
 七42 7 おばあさんは「やれく。」といつて、其所へすわつた。
 七89 3 あまり急ぎましたので、水がすの上にあつたおばあさんのづきんにこぼれました。
 七89 6 「あ、さうだ。」と言つて、マリーはおばあさんのづきんを取つて、兵士の頭にかぶせました。
 七89 9 園 「しばらく、うちのおばあさんにおなりなさい。」
 七90 2 「〈略〉。」かう言つて、又大急ぎでおばあさんの着物を着せてやりました。
 七91 5 〈略〉、敵はあちこち見まはしましたが、おばあさんの肩に手をかけて、「〈略〉。」
 七91 7 園 〈略〉、おばあさんの肩に手をかけて、「これ、おばあさん、お前は知つてゐるだらう。」
 七91 8 すると兵士のおばあさんが、「はい、よいお天氣でございます。」
 八51 4 おとうさんはきね、おばあさんはこねどり。

八52 4 つき上ると、おばあさんが餅を臼の中で丸めて、おかあさんの所へ持つていらつしやつた。
 八53 8 〈略〉、おばあさんは「まあ、ついてみるがよい。」とおつしやつた。
 十119 2 茶屋のおばあさんに尋ねると、それは園内に飼つてある鶴の聲であつた。
 おはいりなさる 「御入」(五) 1 おはいりなさる 《一イ》
 三61 3 園 三郎「又はしりくらをさせませう。五郎さんもなかまにおはいりなさい。」
 おはいり 「御入」(五) 3 おはいり 《一リ》
 四72 3 園 東の村では「〈略〉。」一本杉のうしろへお日様がおいりになつた。」といひ、〈略〉。
 五8 3 みことは此の川上にも人がすんでゐるにちがひないとおかんがへになつて、だんだん山おくへおはいりになりますと、〈略〉。
 五42 5 尊はかみをといて、女のすがたになり、つるぎをふところにかくして、其の家の中へおはいりになりました。
 おばうえさま 「伯母上様」(名) 2 伯母上様 叔母上様
 五83 6 園 九月七日 竹子 叔母上様
 九113 3 園 九月二十日 みよ子 伯母上様

おはきもの 「御履物」(名) 1 御はきもの
 八60 園 御はきもの
 おばさん 「伯母」(名) 6 ラバサンをばさん 叔母さん
 三72 7 私どもはあれを着て、をばさんの村のお祭によばれて行くのです。
 四1 6 おひるすぎに、をばさんのうちからおとよさんと太郎さんが來ましたので、〈略〉。
 四25 7 園 おばあさんが「今日はこんなにもみがほしてあるから、をぢさんをもをばさんも早くかへります。〈略〉。」といつておとめになりましたが、〈略〉。
 四87 3 園 二人ガオ話ヲシテ居ル所へ、オ花ノオカアサンガ來マシタ。「ラバサン、今日ハ。」
 「オキクサンデスカ。〈略〉。」
 五28 8 此の間町のをばさんがいらつしやつて、「こんなしづかな所でくらししてみたい。」とおつしやいました。
 五83 1 園 おとうさんにうかゞひますと、叔母さんの町に大水が出たさうです。
 おはたらき 「御働」(五) 1 おはたらき 《一キ》
 四40 8 おかあさんが〈略〉、下女や手つだひのものに、おさしづをしておはたらきになりました。

た。
 おはな 「花」(課名) 2 お花
 三目6 五 お花
 三12 1 五 お花
 おはな 「花」(話手) 2 お花
 四85 7 オ花「クワンデヨノリヤウワキニカザツテアルノデセウ。〈略〉。」
 四86 6 オ花「扇ヲ持ツテ居ル人デスカ。〈略〉。」
 おはな 「人名」 7 オハナ オ花 お花
 一36 1 オハナガエンピツデアサガホヲカキマシタ。
 二4 2 オハナトオチヨガオキヤクアソビヲシテキマス。
 二5 6 オハナハオチヨヲザシキヘトホシテ、オチャトオクワシヲダシマシタ。
 三12 2 お花はがくかうからかへると、おつかひにいつたり、にはをはいたりして、おかあさんのおてつだひをします。
 三14 3 お花はこしし九つです。
 四84 3 オ花ハオカアサンニオヒナ様ヲカザツテイタダキマシタ。
 四87 1 二人ガオ話ヲシテ居ル所へ、オ花ノオカアサンガ來マシタ。
 おはな 「御花」(名) 1 お花
 七23 9 其の松の下に石できざんだ地藏様が立つていらつしやる。〈略〉、

何時もお花が上つてゐる。

おはなし「御話」(名) 21 オハナシ
お話 お話

三81 ヒヨコガナクト、オヤドリハ
オハナシデモスルヤウニ、
コココトイツテキマシタ。

四87 二人ガオ話ヲシテ居ル
所へ、オ花ノオカアサンガ来
マシタ。

五40 先生が拜殿にかけてある繪馬
のお話をして下さいましてから、
〈略〉。

五59 ことにしほのみちた時は、社
殿や廻廊が海の中に浮いて、お話
にある龍宮はこれかと思はれます。

七52 此の學校へ通つて、皆さんと同じや
うに、あの運動場で遊んだり、此の
講堂でお話を聞いたり致しました。

七52 〇で、今日此のなつかしい學
校に来て、皆さんにお話をするのは、
何よりもうれいのでございます。

七53 〇 私は年中航海をしてゐるも
のですから、少し其のお話を致しま
す。

九51 〇 〈略〉、おとうさんは「〈略〉。」
とおつしやつて、あの方の小さい時
分からの話をして下さいました。

九70 顔を洗つて来て、ビスケット
を食べながら、私がゆめの中に通過
した驛々のお話をうかつた。

九76 叔父さんのお話によると、此

所は名高い温泉場で、海水浴も出來
るさうだ。

九93 〇 ちやうど岡田さんは四五人の
お友だちに、白馬登山のお話をなさ
つていらつしやる所でした。

九94 〇 中でも面白かつたのは大雪溪
のお話です。

九96 〇 お話を聞いて、僕もすべつて
見たくなりました。

九96 〇 それから、お花畠のお話も面
白うございました。

九97 〇 お話が頂上のながめに移ると、
いよくはずんで来て、岡田さんは
目の前に見てゐるやうな様子で説明
なさるので、〈略〉。

九99 〇 面白いお話がまだたくさんあ
りさうでしたが、〈略〉。

九111 〇 昨日は美しきお話の本御
送り下され、誠に有難く存じ候。

〇 正男 伯父上様
九120 〇 一月モカ、ルヤウナオ話ダツ
タノニ、ドウシテコンナニ早クオ歸
リニナツタノダラウト思ツテ聞イテ
ミタ。

十16 〇 久々で皆様というくお話
をして、非常に愉快でした。

十一39 〇 おとうさんのお話によると、
枝を打てば、山火事の危険を防ぎ、
又空氣の流通がよくなつて蟲がつか
なくなるさうだ。

十二40 〇 〈略〉、——あなたは演奏
會へ行つてみたいとかいふお話でし
たね。
おはなしふたつ「課名」2 お話二つ
四目3 十四 お話二つ
四53 〇 十四 お話二つ
おはなし「御話」(五) 2 お話す
御話す「一シ」
九55 〇 おとうさんはすぐ言葉をつい
で、「〈略〉。全くあんな人は珍し
い。」とお話になりました。
十一71 〇 〈略〉、宣長はかねて買ひ
つけの古本屋に行くと、主人は愛想
よく迎へて、「〈略〉。あなたがよく
會ひたいと御話になる江戸の賀茂
眞淵先生が、先程御見えになりました。
た。」といふ。
おはなし「御花畑」(名) 2 お花
畠
九96 〇 それから、お花畠のお話も面
白うございました。
九96 〇 お花畠は雪溪を登りつめた
所にあります。
おはなし「御花見」(名) 1 お花見
六60 〇 三月二十日、今日はお花見と
いふので、御殿は人少でございます。
おはよう「御早」(感) 2 お早う
八51 〇 「お早う。」といふと、「よ
く目がさめたね。〈略〉。」と、にい
さんがいつた。
九65 〇 其の中に上陸員が歸艦する。
其所此所で、「お早う」が言ひかは
される。
おひ「帯」(名) 7 おひ 帯

三71 〇 そちらのはばの廣い光
るおひはねえさんので、〈略〉。
五23 〇 下のかざりまどには、〈略〉、
きれいな帯や、すゞしさうな浴衣地
がかざつてあります。

六74 〇 「春子、オ前ハ着物ヤ帶ノ
地ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマス
カ。」

六75 〇 「ネエサンガ今ヌツテキル
此ノ帯ハ。」「ソレハメリンスデ、絹
デセウ。」

七86 〇 海藻ノ形ハ様々デ、帶ノ様ニ
廣クテ長イノモアレバ、〈略〉。
八28 〇 著を持つことも出來ず、帶
を結ぶことも出來ず、〈略〉。

九33 〇 〈略〉日かげが、若葉の色を
下に投げるのか、手もうす緑、足も
うす緑、帯も着物も皆うす緑。

おひあげ「帯揚」(名) 1 帯あげ
五24 〇 入口の左手には、小切やえり
や帯あげなどがたくさん下げてあつ
て、〈略〉。

おひきあわせ「御引合」(名) 1 御引
合はせ
六60 〇 八幡様の御引合はせか、門の
戸は細めに明いて居りました。

おひきうけもうす「御引受申」(五)
1 御引受け申す「一シ」

十二130 〇 西郷はしばらくじつと考
へてゐたが、「よろしい。とにかく
明日の總攻撃見合はせの一事だけは、
拙者一命にかけて御引受け申します。

おひさま 「御日様」(名) 3 オ日サマ
お日様

二71ノ圖 アレアレ アンナニ ヒカ
ウキガ。小サナ トンボガ トブ
ヤウダ。ダンダン チカヨル オ
日サマニ。

四72ノ圖 東の村では「略」。一
本杉のうしろへお日様がにおは
いりになった。」といひ、西の
村では「略」。などと申します。
四74ノ せいの高私の目にも、
まだお日様が見えない中から、
「略」。

おびじ 「帯地」(名) 1 帯地

五24ノ 小ぞうさんたちは、土さうか
らいろくゝな反物や帯地をかついで
来て、お客の前につみ上げます。

おびただし 「影」(形) 1 おびた
し「一シク」

十一26ノ圖 「略」、美濃路の方面に當
りてたいまつ光おびたしく、何
とも知らぬ物音さわくとして夜の
静けさを破る。

おびただし「い」 「影」(形) 1 おびた
だし「一イ」

八69ノ 「略」、祭の當日には、おびた
だしい見物人が、朝早くから宮の境
内へつめかけた。

おひなさま 「御雛様」(名) 2 オヒナ
様

四84ノ 3 オ花 ハオカアサンニ オヒ
ナ様ヲ カザツテ イタダキマシタ。

四84ノ 6 今オキクト オヒナ様ノ
前ニ スワツテ ナガメテ 居マス。

おびひろ 「帯広」(地名) 1 帯廣

十一62ノ 十勝川の流域一帯の廣野は
いはゆる十勝平原で、其の中心をな
すものは帯廣の町である。

おひま 「御暇」(名) 2 おひま

八44ノ 手紙 一 小ぞうから主人
へ「略」。取分けおひまがしい中を、
一週間もおひまをいただきまして、
「略」。

八45ノ 團 「略」、もう四五日の所おひ
まを願ひたうございます。「略」 浅
吉 御主人様

おひめさまがた 「御姫様方」(名) 1

お姫様方

六69ノ 「略」、きれいな着物を着て、
牛車に乗つたお姫様方の姿を、「略」。
おびやかす 「脅」(五) 1 おびやか
す「一ス」

十二13ノ 7 「略」、國家の存立を危くし、
國民の生活をおびやかすやうな危機
は絶無であり、「略」。

おひらきなさる 「御開」(五) 1 お
開きなさる「一レ」

九24ノ 歡庵様は佐藤の家の農學の
本をお開きなされ、元庵様はおもに
氣候と農業との關係をお調べなされ
たが、おおい様の不味軒様はまた、
地質や礦物の方で新しい發見をなさ
れた。

おひる 「御昼」(名) 2 オヒル お晝

三51ノ 4 モウ オヒル ニ ナツタノ
デセウ。

六4ノ 圖 「略」、おぢいさんが庭で腰
をのばして、「もうお晝かな。」とお
つしやいました。

お・びる 「帯」(上) 2 帯びる「一
ビ」

九32ノ 5 しつとりとしめりを帯びた一
すぢの道が、「略」。

十一10ノ 5 唯商業の取引の盛な部分は、
相當に活氣を帯びてをり、西洋風の
建物もあつて、趣がやゝ變つてゐる。

おひるごろ 「御昼頃」(名) 2 お晝頃

五47ノ 7 今日のお晝頃はうち中、目が
まはるほどいそがしうございました。

九35ノ 2 もうお晝頃だらう。

おひるすぎ 「御昼過」(名) 3 おひる
すぎ お晝すぎ

四16ノ おひるすぎに、をばさんの
うちからおとよさんと太郎
さんが來ましたので、三人で
お宮へまゐりました。

五22ノ 6 おひるすぎおかあさんにつれ
られて、買物に行きました。

六14ノ 3 二三日降りつづいた雨がから
りとはれたので、昨日のお晝すぎ、
にいさんときのご取に行きました。

おひるね 「御昼寝」(名) 1 お晝ね

六89ノ 6 印度の國はいたつてあつう
ございますので、お子どもしゆうは
此の腹の下でお晝ねをなさると申し
ます。

おひるまえ 「御昼前」(名) 1 お晝前
八108ノ 團 もし天氣がよかつたら、三
郎さんを連れて、お晝前にいらつし
やい。「略」。

おへんじ 「御返事」(名) 1 お返事

九50ノ 6 僕は「略」、おとうさんのお
手紙を持つて、精米會社へお使いに
行つて來ました。「略」。社長さんは
「略」、にこにこしてゐる元氣な方
です。「略」。お返事をお渡しした後で、
おとうさんに「あの精米會社の社長
さんはえらい方なでせう。」と言
ふと、「略」。

おぼえ 「覚」(名) 1 おぼえ ↓みお
ぼえ

八35ノ 7 幾年かの後、里子を返しても
らはうとすると、先方はあづかつた
おぼえがないといつて返しませぬ。

おぼえおく 「覚置」(四) 1 おぼえ
置く「一キ」

九112ノ 圖 案の中に一番面白き話
をよくおぼえ置き、來週學校にて話
し方の時間に話し、同級の人々を驚
かさんと楽しみ居り候。

おぼえがき 「覚書」(名) 1 覺書

十一36ノ 10 「地蔵山の内、二町三段五
畝、峯通り檜苗、其の他總べて杉
苗、一坪一本の割。」とおとうさん
の手で記してある。一昨年植付けた
時の覺書だ。

おぼえる 「覚」(下) 5 おぼえる
覺える「一エーエ」 ↓みおぼえ

おぼえる 「覚」(下) 5 おぼえる
覺える「一エーエ」 ↓みおぼえ

る

六77図 印度のヒマラヤ山は世界一で、たしか三万尺近いとおぼえてゐる。

九911図 私も餘程前に讀んだのですから、くはしい事はおぼえてゐませんかね。

九9210図 僕今夜はいろ／＼の事をおぼえて、ほんたうにうれしかった。

十二132 ダーウィンは興味を覺える、と、あくまでそれにこる性質で、〈略〉。

十二418 一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか彼自らも覺えないやうである。

おほしさま 「御星様」(名) 1 お星様
四751 又私のかたの上で、お星様が光りはじめるころになつて、〈略〉。

おほしめし 「思召」(名) 2 おほしめし 思召

六847 此のまごころが神のおほしめしにかなつたのであらう、〈略〉。

十四10図 昔の武蔵野の姿を此所に残さんとの皇太后の思召のまゝに、今も人工を加へずといふ。

おほしめしどおり 「思召通」(名) 1 思召通り

十二1294図 安方は更に「〈略〉」官軍方の思召通り一押にはゆかぬかも知れませぬ。〈略〉。

おほしめす 「思召」(五) 2 おほし

めす 《一サ・シ》

五16圖 大日本、大日本、神のみすゑの天皇陛下 われら國民七千萬をわが子のやうに おほしめされる。

五125 天照大神の弟の方に、すさのをのみことと申す神様がございました。〈略〉。これはめづらしいつるぎだ。自分の物にしてはならぬとおほしめして、天照大神へお上げになりました。

おほめ 「御營」(名) 1 おほめ
九382図 〈略〉、エンミツヒ將軍はみづから進んで握手を求め、「〈略〉。」と感歎せるに、レマン將軍は靜かに、「おほめにあづかつて恐れ入る。〈略〉。」と答へたり。

おほめる 「御營」(下二) 1 オホメル 《一メ》

二505 トノサマガオトホリニナツテ、〈略〉。トオホセニナリマシタ。〈略〉。「コレハメツラシイ。ミゴト、ミゴト。」トオホメニナツテ、ゴホウビヲタクサンクダサイマシタ。

おほゆ 「寛」(下二) 3 おほゆ 覺ゆ 《一ユ・ユル》

十二8図 明治天皇・昭憲皇太后、御二方のおほみたま、とこしへに此所にしづまりましますと思へば、かしこさ殊に身にしみておほゆ。

十二1039図 愛すべく美しき山野は、

更に太古以來の歴史と結び文學と結びて、感いよく深きを覺ゆ。

十二1214圖 追々店の様子もわかり、お客様の扱方にもなれて、仕事に興味を覺ゆるやう相成り申候。

おぼろ 「臚」(形状) 1 おぼろ
十301圖 谷間よりはひ出で、木の幹ぬらし、しら／＼と、おぼろに朝霧流る。

おぼん 「御盆」(名) 1 おぼん
四238 〈略〉、とだなからうでたくりをおぼんに一ぱい持つて來て下さいました。

おまえ 「御前」(代名) 32 オマへ おまへ 才前 前前
二74図 「オカアサンハアノシロイハナガスキデス。オマへハ。」

二325図 「オ正月ガクルト、オマヘハイクツニナリマスカ。」
三147図 〈略〉、おちいさんが二郎にたづねました。「おまへはてのゆびのなをしつてゐますか。」

三168図 おちいさんはわらひながら、「二郎、おまへはそのゆびで人をさしますか。〈略〉。」とをしへてやりました。

三537図 兄が「おまへ、何をかぞへてゐるのだ。」とたづねますと、弟〈略〉。

三761図 ソノ時カウモリガケダ

モノノ方へ行キマス、ト、「才前ハ鳥デハナイカ。」トイツテ、

三764図 又鳥ノ方へ行キマス、ト、「才前ハケダモノダラウ。」トイツテ、〈略〉。

四127図 〈略〉 白ウサギガ、〈略〉、海ヲワタルクフウヲシテキマシタ。〈略〉、ワニザメガ居マシタカラ、「オマヘノナカマトワタシノナカマト、ドツチガ多イカ、クラベテミヨウ。」トイヒマシタ。

四137図 白ウサギハコレヲ見テ、「ナルホド、オマヘノナカマハズキブン多イ。〈略〉。」トイヒマシタ。

四338図 父〈略〉。向ふで「ばか」といつたのも、お前が先に「ばか」といつたからです。」

四523図 勝太郎、東京のをぢさんから お前の所へゑはがきが來ました。

四546図 お前はたいそうとんちがある、と聞いた。

五678図 作太郎は父につれられて、はじめて町に行きました。〈略〉。

六398図 第十一 入營した兄から話がある。」

「略」。お前はなぜ自分の村の人と見物しなかつたかと思ふだらうが、
 六四二 第十一 入營した兄から
 「略」。お前は今の分では大男になりさうだから、砲兵が騎兵になれるだらう。
 六七二 「春子、才前ハ着物や帶ノ地ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマスカ。」
 七九七 「略」、敵はあちこち見まはしましたが、
 「略」、「これ、おばあさん、お前は知つてゐるだらう。」
 八五九 父は「略」、僕に、「お前も一しよに行つてお出で。」といった。
 八八七 信吉は「略」、娘の手をはなして、
 「略」、「わしはあちらに居ても、お前の事ばかり心配してゐた。」といつて、
 八八六 信吉はびつくりして、
 「や、口をきいたぞ。おとよ、お前はものが言へるやうになつたのか。」
 「略」といつて、娘を引きよせて、
 「略」。

九四七 私は苗くぼりをして、
 「お前もたしかに半人前だ。」と、おあさんにほめられました。
 九五〇 「略」、おとうさんは「お前にもさう見えるかね。」とおつしやつて、
 「略」。
 九五一 「略」、此の町へ始めて奉公に來たのは、ちやうどお前と同じ十二の年だつたさうだ。
 九八三 大尉は之を讀んで、思はずも涙を落し、水兵の手を握つて、
 「略」。お前の残念がるのももつともだ。
 「略」と言聞かせた。
 一〇四六 兄は私に「壯吉、お前はおとうさんのかつた難木を、かういふ風に束ねて運んでくれ。」といひながら、
 「略」。
 一〇九二 父は「お前はどうしたのだ。」
 「略」とたづねたが、太郎はだまつてゐた。
 一〇九五 前前のやうな弱蟲には、ひよつとすると命を失ふやうなあぶない時でも、言出すことの出来ない程
 「略」。
 一一一〇 五 チャールス、ダーウィンは今から百年餘り前イギリスに生れた。
 「略」。又父には「お前のやうに犬の世話やねずみを取ることにばかり熱心では困るではないか。」といつて叱られたことがあつた。
 一二六九 娘の答に失望した王は、
 「略」、「お前にはもう何もやらぬぞ。」

永の勘當だ。」と言渡した。
 一二七五 コーデリヤは父の手を取つて泣きながら、
 「略」、「略」。
 お前はわたしをうらんでゐるはずだ
 が、
 おまえさま 「御前様」(代名) 5 御前様
 一〇六四 御前様にも日々學校に御通ひなされ候由、安心致し候。
 「略」
 叔母より さち子どの
 一〇六六 さて御父上様の御葉書ならびに御前様の御手紙により、御母上様には去る二日御安産にて、玉の様な女の御子御生れの由承り、
 「略」。
 一〇七四 男ばかりの御兄弟の中に、此の度始めて妹を得られ候事、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。
 一〇七七 御母上様はまだ御やすみにて、御前様には御家事御手つたひのため、何かと御いそがしき事と察し申し候。
 一〇八四 「略」、御前様御ひまの折裁縫のおけいこに御仕立て下された
 候。
 おまえさま 「御前達」(代名) 10 オマヘタチ お前たち 御前たち
 一〇八四 白ウサギハコレヲ見て、
 「略」。オマヘタチノセ中ノ上ヲアルイテ、カゾヘテミルカラ、
 「略」。「トイヒマシタ。
 一〇八六 白ウサギハ「略」、「オマ

ヘタチハウマクワタシニダマサレタナ。
 「略」。「トイツテワラヒマシタ。
 四九四 母は泣きながら二人の子どもに、
 「略」。お前たちが大きくなつたら、此のかたきを取つておくれ。」といひました。
 八八五 つまりお前たちよりもよけいに勉強してゐるわけです。
 「略」
 父から 太郎どの さち子どの
 八八七 お前たちもせいゝ勉強なさい。
 八七九 シカゴを立つ日に、お前たちの年始状が着きました。
 「略」 父から 太郎どの さち子どの
 九一八 「略」、おとうさんは「略」お話を下さいました。
 「略」。
 「略」、おろしに歩き廻つたものださうだが、其のつらさはとてもお前たちにわかるものではない。
 一一一〇 第二十三課 南米より(父の通信) 「略」。殊に日本人の小學校ありて、御前たちくらゐの子供が通學し居るを見ては、
 「略」。
 一二六四 さて領地をゆづる日に、王は娘たちを面前に呼んで、「今日はお前たちに一つ聞いてみたい事がある。
 「略」。」と尋ねた。
 一二六六 お前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、わしはそれが知りたいのだ。
 おまけに (接) 1 おまけに

六77 6 今日曜日、おまけに日本晴だ。湖の上は朝からひじやうな人出である。

おまちくださる「御待下」(五) 3

お待ち下さる「一い」

五44 2 なみくくの者なら、「あつ」とさけんで死にませうが、たけるも熊襲のかしらだけあつて、「しばらくお待ち下さい。略。」といひました。

八64 2 保己一はそれとも知らず、話をつづけたれば、弟子どもは「先生、少しお待ち下さいませ。略。」と言ひしに、略。

十二131 1 西郷はしばらくじつと考へてゐたが、「略」。其餘の事は拙者の一存にはまゐりませぬから、追つての沙汰をお待ち下さい。」

おまちなさる「御待」(五) 1 お待ちなさる「一い」

七67 3 落し物をしましたから。」といひくかけ出します。人夫は其の男のたもとをおさへて、「まあ、お待ちなさい。略。」

おまつ「松」(人名) 3 お松

七11 7 おとうさんも、にいさんも、丸山君も、妹も、お松も、みんな下りた。

七14 5 妹やお松は何があつたのか、笑ひながらしきりに取つてゐる。

七15 1 妹とお松のざるには、やどかりがたくさんゐた。

おまつさん「松」(人名) 1 オ松サン

四87 7 「ラバサン、今日ハ。」

「略」。略、スケアソビニオ出デナサイ。オチヨサンモオ松サンモ来マス。」

おまつ「御祭」(課名) 2 お祭

四目2 一 お祭

四1 一 お祭

おまつ「御祭」(名) 7 お祭

三72 8 私どもはあれを着て、をばさんの村のお祭によばれて行くのです。

四1 3 うちがみさまの森で、あさからたいこのおとがします。今日は お祭 です。

八5 9 昔或氏神のお祭に、競馬の神事といふ事があつた。

八6 4 それは略、勝つた子どもを出した村が、次の年のお祭の日まで、五箇村の頭になるといふ定めであつた。

八22 3 臺灣の蕃人には、お祭に人の首を取つて供へる風がありますが、略。

八23 5 略、其の後のお祭には、毎年其の首を一つづつ供へせました。

八24 1 鳳凰はお祭の爲に人を殺すのはよくないといふことを説聞かせて、略。

おまつ「御祭」(サ変) 1 おまつりする

まつりする「一い」

十75 3 此處には天照大神をおまつりした京城神社があり、又其の近くに朝鮮總督府があります。

おまつ「御纏」(下二) 1 おまつめる「一い」

十一15 3 のぶ子さんは、成績物が返るとすぐ紙の袋へ入れておいて、學年の終におまつめになるのださうです。

おみうけもうす「御見受申」(五) 1

お見受け申す「一い」

十67 9 主人はけんそんして言はず、僧は重ねて「お見受け申す所、たゞのお方とも思はれません。略。」

おみえる「御見」(下二) 1 御見える「一い」

十一71 3 或夏の半ば、宣長はかねて買ひつけの古本屋に行くと、主人は愛想よく迎へて、「略」。江戸の賀茂眞淵先生が、先程御見えになりました。」といふ。

おみおくり「御見送」(名) 1 お見送

五32 8 ある朝早く、おとうさんがたびへお立ちになった時、お見送をして表へ出て見ました。

おみこみ「御見込」(名) 1 お見込

十121 7 後日、人が主人に向つて、どういふお見込で、あの青年をお用ひになつたのかと尋ねた。

おみせくださる「御見下」(五) 1

お見せ下さる「一い」

三87 5 れふしはきのどくになりまして、「略」。そのかほりに

天人のまひといふものを お見せ下さいませ。」

おみまい「御見舞」(名) 1 お見舞

五83 4 皆様におげもございませんでしたか、お見舞を申し上げます。

九月七日 竹子 叔母上様

おみみ「御耳」(名) 1 お耳

五55 2 いか此の事が天皇のお耳に入りまして、略。

おみや「御宮」(名) 5 おみや お宮

一7 1 オミヤガアリマス。オテラガアリマス。

三48 3 ヲカノ上ニ天ジンサマノオミヤガアリマス。

四1 8 略、三人でお宮へまゐりました。

四2 8 ちやうど人の出さかりで、お宮のすずがひつきりなしになつてゐます。

四3 5 お宮のうらではすまふがはじまつてゐて、「わあわあ」とはやすこゑがきこえます。

おみやげ「御土産」(名) 3 おみやげ

四83 7 略、弟へへいたいばうをおみやげに買つて、夕方の汽車でかへりました。

五16 8 海軍のをちさんがお出でになつて、春子には糸葉書とリボン、僕には小刀とえんぴつをおみやげに下さいました。

六107 7 参拜をすましてから、二見浦を見に行つて、おみやげに貝細工

斥^せされるやうなことも起つて来る。

おもいかまう「思構」(下二) 1 思
い構ふ「一へ」

十一478図「略」、畫師驚きて、
「我が心に思ひ構へし事を如何にし
て知り給へるか。」と問ふ。

おもいくらべる「思比」(下二) 1
思い比べる「一へ」

十二917「略」彼は、しみぐと自
分の身の上に思ひ比べて、農夫や牛
の勞苦を思ひやると共に、蟲の運命
をあはれんだ。

おもいだす「思出」(五) 7 おもひ
出す 思ひ出す 思ひ出す「一シ」

三792 時々すずしい風が吹いて
來ると、おもひ出したやうに
くつわ虫がなきます。

六1026 なるほど、去年鯉のぼりを立
てた時、しやうぶとよもぎを軒へさ
した。「略」。こんなことを思ひ出し
て垣根の方へ行くと、「略」。

九684「宇都宮」と驛夫の呼ぶ聲に、
何時かおかあさんと日光見物に來た
時のことを思ひ出した。

九1231 道雄ハ此ノ時、フト學校ノ級
長選舉ノ事ヲ思ヒ出シタ。

十1203 宮中の御宴の事を思ひ出して
詩を作られたのも此處であらう。

十一361「あそこの植付をした時は
まだ寒かった。」と思ひ出しながら、
「略」。

十一921 僕はよく年寄の人が新の幾

日とか舊の幾日とかいふのを思ひ出
して、其の事を父に尋ねた。

おもいたつ「思立」(四・五) 3 思ひ
立つ 思立つ「一チ・一ツ」

十一1263図「略」、山城宇治の黄檗山
萬福寺に鐵眼といふ僧ありき。一代
の事業として一切經を出版せん事を
思立ち、「略」、廣く各地をめぐりて
資金をつのること數年、やうやくに
して之をととのふる事を得たり。

十一1272図「略」我が一切經の出版を思
立ちたるは「略」、ひつきや
う人を救はんが爲なり。

十二9210「略」、「此の上は聖賢を訪
うて教を受ける外はない。」と思ひ
立つに至つた。

おもいつく「思付」(五) 2 思ひつ
く「一キ・一ク」

十一792 それで金屬を用ひることを
思ひつき、形の上に種々の工夫をこ
らして、遂に今のやうな貨幣を造つ
たのである。

十二10710「略」村の人々は、今更の
やうに驚いた。「略」。一念こつた不
斷の努力は恐いものであると思ひ
つく、「略」。

おもいつづける「思統」(下二) 1
思ひつづける「一ケ」

十一167「こんなによく整頓してあ
る中で勉強したら、どんなに氣持が
よいだらう。」と思ひつづけてゐる
と、「略」。

おもいで「思出」(名) 1 思出

十二1235図「略」はやて吹くやみにたゞ
よひ、寄るべき海にさすらひ、
思出の深き船路や、「略」。

おもいとどまる「思止」(五) 1 思
ひ止る「一ラ」

十二936「略」マガダ國王は、修行
を思ひ止らせようとして、自分の國
をゆづらうとまで申し出たが、「略」。

おもいもうす「思申」(四) 1 思ひ
申す「一サ」

九1177図「略」母も人間なれば、我が子
にくしとはつゆ思ひ申さず。

おもいやる「思遣」(五) 1 思ひや
る「一ル」

十二918「略」彼は、しみぐと自
分の身の上に思ひ比べて、農夫や牛
の勞苦を思ひやると共に、「略」。

おもふ「思」(四・五) 150 オモフ お
もふ 思フ 思ふ「一ッ・一ハ・一ヒ・
一フ・一ヘ」

二753 シュテンドウジハ ホンタウ
ノ山ブシダト オモツテ、トメ
テヤリマシタ。

三32「略」、ケサコソニイサン
ヨリサキニオキテミヨウトオ
モツテ、ソツトネドコヲ出マシ
タ。

三406 うらしまは かはいさうに
おもつて、子どもからそのかめ
をかつて、海へはなしてやり
ました。

三556 かへるはやなぎのつゆ
を虫とでもおもつたのでせう、
「略」。

三592 コノ大キナモノガ、ヨク
アノカラノ中ニハイツテキタ
モノダトオモヒマシタ。

三688 又マキナホシテ、コンドハ
水デツパウヲジヨウロノカハ
リニシヨウトオモツテ、フシ
ニ小サナアナヲタクサンアケ
マシタ。

四123 島ニキタ白ウサギガ、ム
カフノ大キナヲカヘ行ツテ見
タイトオモツテ、海ヲワタル
クフウヲシテキマシタ。

四262「略」、おそくなるとおも
つて、いただいたくりを持つて
かへりました。

四307「略」、向ふの方で、「ぼち
ぼち」と口まねをするものが
あります。友だちでも居るの
かとおもつて、「おうい」とよぶ
と、「おうい」といひ、「だれだ」
といふと、「だれだ」と答へま
す。

四688 きずを見てやらうと思
つて、私がかごの戸を明けま
すと、「略」。

四701「略」、今でも山がらのこ
ゑをきくと、まだあれが生き
て居るだらうか、足のきずは
どうしたらうかと思はないこ

とはありません。

四82 6 トンネルを出て、海を見下した時には、いつ見てもよいけしきだと思ひました。

四94 4 今夜かぎりのいのちと思つて、〈略〉二人はたいまつを上げて、つくづくとかほを見合ひました。

五7 4 僕は自分よりえらい友だちを大ぜいしていぢめるのは、男らしくないと思ひます。

五12 2 尾をお切りになつた時、つるぎのはがこぼれました。ふしぎに思つて、尾をさいてごらんになりますと、〈略〉。

五13 6 四 〈略〉、廣田君から急はがきが来てゐました。〈略〉。これだけはお目にかけたと思ひます。と書いてありました。

五14 5 かへりみちに、はなれ馬がとんで來ましたので、どうしようかと思つてゐますと、〈略〉。

五21 7 其の尾を下して來て、さに着けるかと思ふと、又はらをふくませて、をどり上ります。

五25 8 ツバメハトブコトガ上手ナ鳥デ、ツブテノヤウニトンデ來テ、物ニツキアタルカト思フト、カルクミヲカハシテ、矢ヨリモ早クトンデ行キマス。

五27 8 こんな所にと思ふやうな村外れに、家が一けん立つてゐます。

五34 1 〈略〉、これで間敷が七つもあるとは、どうしても思はれませんでした。

五54 2 すると酒のほひがしますので、ふしぎに思つて、見ましますと、〈略〉。

五59 5 ことにしほのみちた時は、〈略〉、お話にある龍宮はこれかと思はれます。

五69 3 〈略〉、此の村の庄屋が、〈略〉、どうかして村のあれ地を田地にして、米がとれるやうにしたいものだと思つた。

五69 8 村の人々は中々大きな仕事だとは思つたが、〈略〉。

五79 8 いころすのめかはいさうだと思つて、兩耳の間をねらつて、頭の上をすれ／＼にいました。

五93 6 おめでたい事やたのしさうな事が書いてありますと、私もうれしいと思ひますが、〈略〉。

五94 4 いつか大そう雨のふるばんに、年取つたおぢいさんが、遠方に居るむすこの所へ出した封書や、かついで足をはらしてゐる書生さんが、お友だちへ出した葉書には、私もはらわたがぢぎれるやうに思ひました。

五98 6 熊が來て、からだ中かきまはしましたが、ほんたうの死人だと思つたのでせう、其のまま行つてしまひました。

六8 6 四 ふとん着て、ねたるすがた

や東山。で、先づ高い岡だと思へばよい。

六9 7 四 金ニハイロ／＼アリマスガ、中デ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デアラウト思ヒマス。

六11 6 四 〈略〉、モツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。

六39 3 四 洋服は着なれなかつたので、はじめは寒いやうに思つたが、もうなれた。

六40 2 四 お前はなぜ自分の村の人と見物しなかつたかと思ふだらうが、〈略〉。

六63 5 親を思ふ孝子の心には、頼朝もかんしんして、石のらうから唐糸を出して、萬じゆに渡しました。

六94 4 此の上はひやうらう攻にしやうと思つて、賊は城へ攻めよせないことにした。

六101 6 〈略〉、しやうぶが小指程に芽を出してゐました。うちの人はみんな知らずに居るから、一つ取つて行つて見せようと思つて、手を出すと、〈略〉。

六104 8 四 〈略〉、千年もたつたかと思ふ老木の下へ行つた時には、〈略〉。

七11 5 僕が一番先に海へ下りた。水は思つたよりつめたかつた。

七39 4 四 まだ來て二三箇月で、よくはわかりませんが、氣候も思つたよりよくて、快晴の日が多いやうです。

七48 5 上杉方はどつとときの聲をあげた。無念に思つて、武田方から十騎ばかり、木戸を開いて切つて出ようとした。

七56 9 四 急に暴風雨が來ると、山のやうな波が立つて、船は今にも沈むかと思ふやうになります。

七65 6 もし此の大金がなかつたら、氣がちがつて死ぬやうな事になるかも知れぬ。氣の毒なことだと思つて、人夫はすぐ川を渡つて、かの男を追つかけた。

七68 9 四 まして人通の多い渡場で落しましたから、たとひとんで行つて見た所で、もうあるまいとは思ひましたが、〈略〉。

七71 8 四 〈略〉、だんなはなけ深い方ですから、此の金をあなたにさし上げましても、おしかりになることはあるまいと思ひます。

七73 6 四 たとひ親子の者がうゑ死をするやうなことがあつても、人からいはれなく金をもらはうとは思ひません。

七78 3 四 これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません。

七88 5 マリーはどうかしてかくしてやりたいと思ひました。

七98 4 此の人だけは自分のために心配してくれるであらうと思つたのでございます。

七114 1 四 地もがらもまことに當地向

で、賣行もよからうと思ひます。

八116 〇 〇 略、人の命にはかへられないと思つて、相手を助けてやつたのはえらい。

八23 〇 〇 鳳凰は役人になつた時から、どうかして首取の惡風を止めさせたものだと思ひました。

八26 〇 〇 軒下にはらばへる黒き犬、にくらしき黒と思へば、黒もまた、意地悪き人に見るらん。〇 略。

八27 〇 〇 〇 えんがはにうづくまる三毛のねこ、愛らしき三毛と思へば、三毛もまた、したはしき人に見るらん。〇 略。

八34 〇 〇 婦人は、これは珍しい、神様がおさづけ下さつたのはこれに違ひないと思つて、其の實を取つて来て、庭先の畠の中にまきました。

八76 〇 〇 人々は何の爲にこんなことをいひ出したかと思ひながら、やつて見ましたが、〇 略。

八100 〇 〇 僕等は一同申し合はせて、今日からは働かないことにしたから、さう思つてくれ給へ。

八111 〇 〇 大將の父は〇 略、自分の子がかう弱虫の泣虫では、第一藩主に對しても申しわけがない、どうかして大將の體を丈夫にし、氣を強くしなければならぬと思つた。

九4 〇 〇 冬でも春でもこちらではちやうど内地の夏のやうです。暑さも年中此のくらゐのものださうで、か

ねて思つてゐたとは違ひ、なか／＼住みよいところのやうです。

九7 〇 〇 〇 これ等の植物が思ふまゝに茂つてゐる様子は實に見事です。

九13 〇 〇 〇 毎日世話し居ることといづれの鶏も皆かはゆき中に、ひよこは一そうかはゆく思はる。

九23 〇 〇 〇 そこで此の父も、何とぞ此の學問を大成したいと、四十餘年の間、寢食を忘れて其の道の書物を讀み、國々の實地を調べ、本もあらはし、出来るだけは骨折つたつもりである。しかし思ふ程に仕事は出來ず、〇 略。

九24 〇 〇 〇 しかし此の分では、わたしの命は、とても仕事の出來上るまでもつまいと思ふ。

九26 〇 〇 〇 しかしたしの四十年の骨折は、農學の進歩の爲には決してむだでなかつたと思ふ。

九32 〇 〇 〇 「もう一息だ。」さう思ひながら足を早める。

九50 〇 〇 〇 僕は何となくえらさうな人だと思ひました。

九56 〇 〇 〇 僕は今日其のえらい社長さんに會つて來たのだと思ふと、何となくうれしい氣がしました。

九68 〇 〇 〇 まだ日が暮れたばかりのやうに思つたが、もう八時半であつた。

九78 〇 〇 〇 僕は〇 略、一本の莖を握つて、ぐつと引張つた。やはらい黒い土がむく／＼盛上つたと思ふと、四方

へくづれる。

九95 〇 〇 〇 雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて來て、〇 略。

九95 〇 〇 〇 雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて來て、〇 略。

九109 〇 〇 〇 〇 しかし主人をうしなつたと思ふと、今まで張りつめてゐた勇氣もくじけて、〇 略。

九110 〇 〇 〇 北風はもう一度あの勇ましい號令が聞きたいと思つて、訴へるやうな目付で主人の顔を見下し、左右の耳をそばだててみた。

九114 〇 〇 〇 或日我が軍艦高千穂の一本兵が、女手の手紙を讀みながら泣いてゐた。ふと通りかゝつた某大尉が之を見て、餘りにめ／＼しいふるまひと思つて、「〇 略。」と、言葉鋭くしかつた。

九114 〇 〇 〇 軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、其の有様は何事だ。

九116 〇 〇 〇 母は如何にも殘念に思ひ候。

九119 〇 〇 〇 豐島沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同殘念に思つてゐる。

九120 〇 〇 〇 一月モカ、ルヤウナオ話ダツタノニ、ドウシテコンナニ早クオ歸リニナツタノダラウト思ツテ聞イテミタ。

九121 〇 〇 〇 シカシ今度ノ候補者ノ中ニ、

實ニリツバナ考ヲ持ツテキテ、アノ人ナラバト思ハレル人ガアルカラ、〇 略。

十17 〇 〇 〇 兩がはに木立すき間もなく茂りて、新しき宮の境内とは思はれず。

十27 〇 〇 〇 明治天皇・昭憲皇太后、御二方のおほみたま、とこしへに此所にしづまりましますよと思へば、かしこさ殊に身にしてみておぼゆ。

十8 〇 〇 〇 陣頭に立つては百萬の敵を物とも思はぬ英雄も、病氣は如何ともすることが出來ない。

十15 〇 〇 〇 私は此の村の青年諸君が、かうして修養にも實行にも、骨を折つてをられるのを、うれしく思ひます。

十20 〇 〇 〇 〇 それを見ると、成程、こんなにかはいがられて居れば、馬も從順で人になつくわけだと、しみ／＼思ひました。

十23 〇 〇 〇 〇 賣つてゐる菓子もおもちゃも、多くは馬にちなんだ物で、店の看板にも馬がかいてあるのがよく目につきました。成程、此の邊は馬でもつてゐる處だと思ひました。

十26 〇 〇 〇 〇 やがてボートは岸をはなれた。打返す磯波にまき込まれたかと思へば、忽ち大波にゆり上げ、ゆり下げられながら、〇 略。

十40 〇 〇 〇 〇 「朝のうちに此のけやきだけぶつ倒したいと思つてね。」

十534 〔略〕、又何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。

十542 〔略〕、紅をさしたかと思はれるやさしくちばし、〔略〕、鳩は見るからに愛らしいものである。

十601 〔略〕、されど婦人は、氣の毒と思ひけん、〔略〕。

十669 〔略〕、私はもと鉢の木がすきで、いろ／＼集めた事もありましたが、かう落ちぶれては、それも無用の物好と思ひ、大てい人にやつてしまひました。

十679 〔略〕、お見受け申す所、たゞのお方とも思はれません。

十693 〔略〕、眞先かけて敵の大軍に割つて入り、これぞと思ふ敵と打合つて、あつぱれてがらを立てるかぐ。

十721 〔略〕、又寒夜に秘藏の鉢の木を切つてたい志は、何よりもうれしく思ふぞ。

十775 〔略〕、こちらへ來てもう三月餘りになりますが、よくも續くと思ふくらゐの天氣續きで、〔略〕。

十779 〔略〕、殊に秋晴の美しさはかくべつで、遠足好きの君なら、毎日何處へか出かけたてたまらないだらうと思ひました。

十821 〔略〕、不意に足もとからねずみが一匹飛出しました。はつと思つて立止ると又一匹。

十827 〔略〕、坑内に馬が居るのは不思議だと思つて、聞いてみると、〔略〕。

十857 〔略〕、坑外に出ると、急に夜が明けたやうで、〔略〕、あの坑内でたえず活動してゐる坑夫の仕事を、たふといものに思ひました。

十1036 〔略〕、成程、緑色の絹糸で作つたのかと思はれるやうな葉もあれば、〔略〕。

十1038 〔略〕、中には、まるで花かと思はれる紅色の葉が、莖の上の方に群がつて出てゐるものもある。

十11710 〔略〕、何百年も経たであらうと思はれる樟の大木が茂り合つてゐる。

十1226 〔略〕、人に親切なことはこれでも知れると思ひました。

十1264 〔略〕、生徒は皆よく之になつて課業にはげみ、學校を思ふ心あつく、〔略〕。

十1157 〔略〕、成績物は一つ一つ自分の力のこもつたもので、皆一生の記念になるのだ。と思ふと、〔略〕。

十1164 〔略〕、成程、かういふ風に分類してそろへておけば、いつ取出すのにも便利だ。と思ひました。

十1185 〔略〕、整頓といふのは體裁をつくることではなくて、むだをなくすことだ。と思ひました。

十1355 〔略〕、障子をあけてみるとまだ雨が降つてゐる。「これでは明日の山廻りはだめだ。」と思ひながら、〔略〕。

十1358 〔略〕、「あそこは一昨年植付をした地蔵山だ。」と思ふと、〔略〕。

十1398 〔略〕、それから始めて聞いて面白いつたのは、枝打をしないと木に節が出来ることである。

十1448 〔略〕、住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、「〔略〕。」といへば、〔略〕。

十1464 〔略〕、さまたげせんも心なしと思ひて、住持は其のまゝ、寢間に入れり。

十15910 〔略〕、未開の土地を切開いて、思ふまゝに設計して造つた町であるから、總べてが大規模でのび／＼としてゐる。

十1746 〔略〕、だん／＼話してゐるうちに、眞淵は官長の學識の尋常でないことをさとつて、非常にたのもしく思つた。

十1747 〔略〕、私はかね／＼古事記を研究したいと思つてをります。

十17810 〔略〕、しかしこれらの物は、〔略〕、思ふやうに分割することが出来なかつたり、其の他いろ／＼の缺點がある。

十1835 〔略〕、今日は始めての遠泳だと思ふと、何だかうれしいやうな心配なやうな氣がする。

十1852 〔略〕、竹島を越したと思ふと、急に水が冷たくなつた。

十18510 〔略〕、僕も急に元氣がなくなつて、一所に船に上らうかと思つたが、

〔略〕。と、自ら勵まして進んで行つた。

十1875 〔略〕、「あゝ、五海里の海上を僕も泳ぎきることが出来たのだ。」かう思ふ瞬間、つかれも何も忘れてしまつて、〔略〕。

十11089 〔略〕、森林には大木すき間もなく繁茂し、其の根本には、つる草・灌木など思ふまゝにはびこり居候。

十11182 〔略〕、農場主はせつかくよく出来てゐる麥を、たくさん馬や犬にふみあらされてはたまらないと思つて、そばに居た自分の子に、

「ジョージ、早く行つて農場の門をしめろ。〔略〕。」と言ひつけた。

十11226 〔略〕、こんなところで毎日働いてゐる人たちは、どんなにつらいことであらうと思つた。

十112310 〔略〕、何が出来るであらうかと思つてゐると、いろ／＼扱つてゐるうちに臺付のコップになつた。

十11271 〔略〕、鐵眼此の状を目撃して悲しみにたへず。つらく／＼思ふに、

「我が一切經の出版を思立ちたるは〔略〕、〔略〕、ひつきやう人を救はんが爲なり。〔略〕。」と。

十113 〔略〕、古のふみ見るたびに思ふかな、おのが治むる國はいかにと。

十1251 〔略〕、旅行にはよき日なりなど思ひつゝ、參詣人の群にまじりて行

けば大鳥居あり、〈略〉。

十二104 〈略〉、餘りすばしい生れつきでなかつたので、先生にもむしろ中以下の生徒と思はれてゐた。

十二111 〈略〉、人はなぜみんな鳥類の研究をしないだらうと不思議に思ふやうになつた。

十二112 父はターウィンを醫者にしようと思つて大學へやつた。

十二2310 昔は個人の利益を營むのが商業であると思はれてゐた。

十二303 陳列品の多種多様で、しかも其の數量の數限りもないのは、さすがに世界の大博物館といはれるだけあると思ひました。

十二328 ルーブル博物館も一覽しましたが、りつばな繪畫・彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。

十二399 ベートーベンも我ながら餘りだしぬけだと思つたらしく、口ごもりながら、「〈略〉。」

十二421 折から燈がぼつと明るくなつたと思ふと、ゆらくと動いて消えてしまつた。

十二438 〈略〉、やがて指がピアノの鍵にふれたと思ふと、〈略〉。

十二5510 やつとつまんだと思ふと直に落してしまつた。

十二596 ねぢは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出来たのだと思ふ

と、〈略〉。

十二614 雪白の地に紅の日の丸をゑがける我が國の國旗は、〈略〉さながら旭日昇天の勢あるを思はしむ。

十二614 更に思へば、白地は我が國民の純正潔白なる性質を示し、日の丸は熱烈燃ゆるが如き愛國の至誠を表すものともいふべきか。

十二665 前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、わしはそれが知りたいのだ。

十二676 ほんたうに姉上は私の思つてゐる通りをおつしやいました。

十二6810 唯私は子としての務を盡くしたいと思ふばかりでございます。

十二692 娘の言葉を物足りなく思つた王は、やゝせきこんで、「〈略〉。」

十二752 「これはどなたであらうな。笑つて下さるな、どうも娘のコーデリヤのやうに思はれてならぬが。」

十二9410 ところが此の新たな態度に驚いた五人の友は、釋迦が全く修行を止めてしまつたものと思ひ、彼を捨てて去つた。

十二988 私は行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと思つたことを語り盡くした。

十二988 私は行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと思つたことを語り盡くした。

十二103 3 其のかみ〈略〉都大路を、

大宮人の櫻がざし紅葉がざして往来しけむ、今にして思へば唯一場の夢に過ぎず。

十二1371 自分で思ふまゝに造り出す創造力は、十分に發揮せられたことがなく、〈略〉。

おもろぞんぶん 「思存分」(副) 2 思ふぞんぶん

四558 思ふぞんぶんはびこつた山のふもととのしひの木は、根もとへ草もよせつけぬ。

五213 〈略〉、鯉が大きな口で、思ふぞんぶん風をのんで、家のむねよりも高く尾を上げます。

おもろに 「思」(副) 1 思ふに

十一661 一體人は最初どうして火を得たであらうか。思ふに落雷の爲に樹木が燃えたり、密生した樹木の枝と枝がすれあつて起つたりした自然の火から、火種を取つたものであらう。

おもかげ 「面影」(名) 2 面影

十743 今でも城壁は大部分昔の面影を留めてゐますし、門も主なものは残つてゐます。

十二999 〈略〉、東大寺の金堂は天空高くそびえて、五丈三尺の大佛一千二百年の面影を残せり。

おもき 「重」(名) 1 重き

十一1151 市町村長や議員を選擧するには、専ら其の人物に重きをおいて、〈略〉。

おもげ 「重」(形状) 1 重げ

十903 新道つたひ車重げに ひき来る馬のつく息白し。

おもし 「重」(形) 2 重し 一キーク

七954 夏の眞晝の坂道に、重き荷車ひきかぬる 人を見かねて、〈略〉。

十596 雪の日の夕暮に近き頃、上州佐野の里に、つかれし足の歩重くたどり着きたる旅僧あり。

おもしろい 「面白」(形) 33 オモシロイ おもしろい オモ白イ 面白イ 面白

カラ・ク 二493 〈略〉、カレ木ニ花ヲサカセマセウ。」トヨンデ

アルキマシタ。トノサマガオトホリニナツテ、「オモシロイコトダ。花ヲサカセテミヨ。」〈略〉。

三176 このはの中に、おもしろい人がゐます。

三316 五いちは おもしろい ちいさんです。

四133 〈略〉、「オマヘノナカマトワタシノナカマト、ドツチガ多イカ、クラベテミヨウ。」ト

イヒマシタ。ワニザメハ「ソレハオモ白カラウ。」トイツテ、〈略〉。

四343 フクロフハ オモ白イカツカウノ鳥デス。

五615 鯛 さてく、虹はおもしろい。

雨のはれ間にちよつと出て、用ありさうに天と地の 遠きをつなぐ雲の上。

六527 〈略〉、其の中でことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございまして。此の時には頼朝もおもしろくなつて、いつしよに舞を舞ひました。

七119 小さい熊手で砂をかくと、おもしろいやうにあさりが出た。

七358 町に〈略〉などと、日露戦争の時の大將方の名を取つてつけてあるのは面白いでせう。

七566 航海といふものは、かういふ面白いものですが、たまには恐しい目にもあひます。

七812 〈略〉、タコヤイカガ、アシヲソロヘテ泳グ様ハ、マコトニ面白イ。七827 虫類モタクサン居ル。中デ面白イノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテキル。

八108 1 団 もし天氣がよかつたら、三郎さんを連れて、お晝前にいらつしやい。面白いことをして遊びませう。

九159 多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、イロく珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。中デモ面白イノハ、或動物ノ體色ガマハリノ物ノ色ニ似テキルコトデアル。

九214 動物ノ形ヤ色デモ、〈略〉、コノヤウニイロくフシギナ事ガアル。ホンタウニ面白イデハナイカ。

九315 〈略〉、下手へ廻つて、カナダの方からはるかに全景を見渡すのも面白い。

九573 〈略〉、莖の先についてゐる穂が、敷いてあるむしろの上に面白いやうに飛散る。

九652 甲板洗はいかにも勇ましく面白いものである。

九682 汽車が進むにつれて、關東平野はだんく夜の景色にかはつて、見なれた所も面白く感じた。

九748 〈略〉、谷間に白い山ゆりの花のまばらに見えるのも面白い。

九802 ふと氣がつくと、校長先生と山田先生が、箱のそばへ来て、面白さうに僕等の仕事を見ていらつしやつた。

九905 小熊座と大熊座について、面白い昔話があるはずだから、ねえさんに聞いてごらん。

九927 団 〈略〉、大熊座と小熊座になさつたのださうです。」「あ、面白かつた。〈略〉。」「

九943 中でも面白かつたのは大雪溪のお話です。

九965 それから、お花畠のお話も面白うございました。

九993 面白いお話がまだたくさんありさうでしたが、もう夕方になったので、僕等はおいとまごひをして歸りました。

十607 団 「お、降つたはく。世

に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。」「

十783 団 面白いのは、〈略〉、寒さと暖さがほとんど規則正しく交替することです。

十1196 〈略〉、山畑の其處此處に野梅の咲きこぼれてゐるのも面白く、〈略〉。

十一386 木でも見下されるのがいやなのか、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少なくなつて行くのも面白い。

十一387 毎年春の初か冬の半ばにする枝打は、面白いものだ。

十一397 それから始めて聞いて面白いつと思つたのは、枝打をしないと木に節が出来ることである。

十二109 又いろく鳥の注意して見ると、それく違つた面白い習性をもつてゐるので、〈略〉。

おもしろがる「面白」(五) 2 オモシロガル おもしろがる「一ツ」

二345 ユミヲイルコトガスキデ、トリヤケダモノヲイコロシテ、オモシロガツテキマシタ。

三434 りゆうぐうのおとひめは〈略〉、毎日いろいろなごちそうをしたり、さまざまなあそびをして見せたりしました。うらしま

はおもしろがつて、うちへかへるのもわすれてゐましたが、

〈略〉。

おもしろさ「面白」(名) 1 面白さ

十二395 団 私は音楽家ですが、面白さについてり込まれて参りました。おもしろし「面白」(形) 2 おもしろし「面白」《一カリ・キ》

九1110 団 案の中に一番面白き話をよくおぼえ置き、〈略〉。

十二1206 団 〈略〉、小学校の前を通りては、郷里の學校のおもしろかりしことなど思ひ出し申候。

おもだか「沢瀉」(名) 1 おもだか九1015 蛙がばかんく飛込んで

すうつと泳いで行く。やがておもだかの莖や芹の葉などにつかまつて、〈略〉。

おもだつ「主立」(五) 1 おも立つ「一ツ」

八425 しばらくして、其の中のおも立つた者が出て、いろくおわびを致しますと、越前守は「〈略〉。」と命じました。

おもちいる「御用」(上二) 1 お用ひる「一ヒ」

十二1218 〈略〉、或一人の青年をやとひ入れた。後日、人が主人に向つて、どういふお見込で、あの青年をお用ひになつたのかと尋ねた。

おもちゃ「玩具」(名) 4 おもちゃ三403 ある日はまを通ると、子どもが大ぜいのかめをつかまへて、おもちゃにしてゐます。

四445図 「花子も自分の おもち

やだけ、ちゃんと おかたづけな
さい。」

十234図 歸りに散歩がてら町を歩い
て見ると、賣つてゐる菓子もおもち
やも、多くは馬にちなんだ物で、
《略》。

十一623 是るかの下に一條の白煙を
たなびかせて見えがくれする上り列
車は、ちやうどおもちやのやうに見
える。

おもちゃや 「玩具屋」(名) 1 おもち
やや

四22 おもちやや にはらつばや
かたなやひかうきなどがなら
べてあります。

おもて 「表」(名) 9 オモテ 表

二176 子ドモガ大ゼイ、オモテ

デーシヨニウタツテキマス。

三24 カゼモアタタカデ、オモ

テデアソブニハ一バンヨイト
キデス。

五328 ある朝早く、おとうさんがた
びへお立ちになつた時、お見送をし
て表へ出て見ました。

五504 此ノ頃ハ雨ガ降りツイテ、

表デ遊ブ日ガアリマセン。

五857図 其の時表で水だくとさけ
ぶこゑがしましたので、二階のまど
からのぞいて見ますと、《略》。

五861図 《略》、二階のまどからのぞ
いて見ますと、水が表の通をさつと

洗ひました。

六332 少し行クト、呉服屋ノ小ゾウ
ガ表ヲハイテキタ。

六771図 コレゴラン、表ダケデ、ウ
ラノ方ハ染メテナイデセウ。

九191 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、
其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シイ色ドリガ
アルガ、《略》。

おもて 「面」(名) 1 面

十一111 《略》、王は信頼の情を面にあ
らはして、フィリップを見下してゐ
た。

おもてどおり 「表通」(名) 2 表通

五324 私のうちの表通は電車や自轉
車が引切なしに通つて、りやうがは
の歩道に人通のたえることがありま
せん。

九554図 それにあの人の事だから、
《略》、後には表通へ店を出すまでに
なつた。

おもてなし 「御持成」(名) 2 おもて
なし

十661図 「《略》。あの鉢の木をたい
て、せめてものおもてなしにしよ
う。」とて主人の持來れるは、秘藏
の梅・松・櫻の鉢植なり。

十672図 「《略》。《略》、今夜は之を
たいて、あなたのおもてなしに致し
ませう。」主人は三本の鉢の木を切
りてゐるりにたきぬ。

おもどりくださる 「御戻下」(五) 1
おもどり下さる 《一イ》

十634図 主人は僧の後を追ひて外に
出でぬ。「なうく、旅のお方、お
もどり下さい。お宿致しませう。」

おもに 「主」(副) 7 おもに 主ニ
主に 重に

八322 炭に焼く木は、主にならとく
ぬぎで、くぬぎの炭の方が火持ちが
よい。

九1910 此ノ蟲ハ主ニ蘭ニ止ツテキデ、
外ノ蟲ヲツツテ食フモノデアルガ、
《略》。

九251図 《略》、元庵様はおもに氣候
と農業との關係をお調べなされたが、
《略》。

九262 わたしも此の精神にもとづい
て、主に海産物や水利の事を調べて、
くはしく計畫を立てた事もあるが、
《略》。

十865 種々の品物が遠く外國から輸
入されるのは、主にこれ等の事情か
らである。

十881 綿花は主に印度やアメリカ合
衆國から輸入し、《略》。

十1015 此處は重に蘭の類を集めてあ
る處だ。

おもみ 「重」(名) 1 重み

九1011 二百十日を無事に越した田に
は稻の穂先がもう大分重みを見せて
ゐる。

おもむき 「趣」(名) 2 趣

十一106 租界の外に出ると大ていは
支那風の町で、町幅も狭く、あまり

きれいでない。唯商業の取引の盛な
部分は、相當に活氣を帯びてをり、
西洋風の建物もあつて、趣がやゝ變
つてゐる。

十一344図 月影のさゞなみにくだけ、
漁火の波間に出没する夜景もまた一
段の趣あり。

おもむく 「赴」(四) 1 おもむく
《一ケ》

十二829図 《略》、同年七月林藏は單
身にてまた樺太におもむけり。

おもむるに 「徐」(副) 1 おもむるに
十二953 それから釋迦はブツダガヤ
の綠色濃き木陰に靜坐しておもむる
に思をこらした。

おもり 「重」(名) 1 重り

十二7710 潮に流されないやうに、身
網にも垣網にも土俵や石などが重り
に附けてある。

おもり 「御守」(名) 2 オモリ お守

二261 ミヨチャンハマダ一ツデ
ス。ミヨチャンハワタクシノイ
モウトデ、《略》。ワタクシハマ
イ日ミヨチャンノオモリヲシ
テアゲマス。

六893図 なれますすれば、お子どもし
ゆうのお守も致します。

おもりさん 「御守」(名) 1 お守さん

六903図 すると象は鼻で、《略》、子
どもの顔をあふぎ出した。此の時、
「大きなお守さんだ。」と誰かがいつ
たので、《略》。

おもりやく 「御守役」(名) 1 お守役

八四四 大將の父は長府藩主に仕へて、江戸で若君のお守役をしてゐたが、〈略〉。

おもわし 「思」(形) 1 思はし 《シキ》

十二一三 初め彼は紙に炭素を塗りて試みしが、思はしき結果を得ず。

おもわす 「思」(副) 13 思はず

八四七 或年の冬、大將が思はず「寒い。」といった。

九四三 北風は驚いてすぐに立止らうとしたが、後からかけて来る味方に追はれて、思はず其の場から数十間も進んでしまつた。

九四七 大尉は之を讀んで、思はずも涙を落し、水兵の手を握つて、〈略〉。

十三八 〈略〉、まだあらごなしの開墾地は、まるで足のふみ場も無い有様である。私は思はず、「やあ、すっかり變つた。」と聲をあげると、〈略〉。

十一五八 ふかの口はもうほとんど子供に届いてゐる。「あつ。」と、思はず人々が叫んだ。

十一八七 から思ふ瞬間、つかれも何も忘れてしまつて、僕も思はず「萬歳」と叫んだ。

十二一二 投込まれた蟲は苦しまぎれに恐しく辛い液を出したので、思はず吐出すと、〈略〉。

十二四〇 其の言方が如何にもをかし

かつたので、言つた者も聞いた者も思はずにつこりした。

十二四三 「あゝ、あなたはベートーベン先生ですか。」きやうだいは思はず叫んだ。

十二五六 やつとつまんだと思ふと直に落してしまつた。子どもは思はず顔を見合はせた。

十二五八 仕事臺のそばに、ふさぎこんで下を見つめてゐた女の子がそれを見附けて、思はず「あら。」と叫んだ。

十二九六 かつて釋迦を見捨てた彼等も、其の慈悲圓滿の姿を見ては、思はず其の前にひざまづかざるを得なかつた。

十二四六 其の勢に吞まれて兵士等は思はず道を開いた。

おもわすしらず 「思知」(副) 1 思はず知らず

八四五 〈略〉、四五百人のものが、ぞろ／＼と車の後について、思はず知らず役所の門内へ入りこみました。

おもんず 「重」(サ変) 1 重んず 《一ゼ》

十二四六 然れども材の優良にして美麗なるは檜を以て第一とすべし。〈略〉、建築材として最も重んぜらる。

おもんずる 「重」(サ変) 3 重んずる 《一ズル・一ゼ》

十二四六 これはひつきやう文明の程度が低いために、〈略〉、商人の人格

が重んぜられなかつたからである。

十二三〇 市街を見物して私の特に感心したのは、市民が交通道德を重んずることです。

十二三六 〈略〉 我が國民は、其の長所として廉恥を貴び、潔白を重んずる美德を發揮してゐる。

おや 「親」(名) 13 おや 親 じさと おや

四一〇 おやはかへして、子はくれうつて、廣いたんぼの麥まきすまます。

五二二 大日本、大日本、われら國民七千萬は 天皇陛下を神ともあふぎ、おやとしたひてお仕へ申す。

五七八 親のほねをりが子の時になつてあらはれたのであらう、〈略〉。

六二四 親が落ちれば其の子も落ち、〈略〉、ずるぶん深いくりから谷が、平家の人馬で埋まりました。

六三三 國はどこ、又親の名は何と申す。

六六五 親を思ふ孝子の心には、頼朝もかんしんして、石のらうから唐糸を出して、萬じゆに渡しました。

七〇三 〈略〉、某は四つ五つの頃から親にはなれて、姓も存じませんので、御威光を借りて豊臣と記したのでございます。

八二九 たいそう蕃人のかはいがりましたので、蕃人からは親のやうにし

たはれました。

九二六 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、〈略〉。

九二九 〈略〉、アルカスはそれと知りませんから、あぶなく親身の親を射殺すところでした。

十二七三 たとひ我が親でないにしても、〈略〉、姉上もお氣の毒とお思ひになりさうなものなのに、〈略〉。

十二八二 此の上はいよく仕事に勵み、一日も早く一人前の商人となりて、親に安心致させたと存じ居り候。〈略〉 小山文太郎 大井先生

十二九〇 君と親とに眞心を捧げ盡くして仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、〈略〉。

おや (感) 1 おや

九二七 おや、北斗七星が半分杉林にかくれてしまつた。

おやうし 「親牛」(名) 4 オヤ牛

二六五 私ノウチニハ オヤ牛ト子牛ガキマス。

二六六 オヤ牛ハ子牛ヲタイソウカイガリマス。

二六七 オヤ牛ヲソトヘ出スト、子牛モツイテイキマス。

二六八 チヨットハハナレマスガ、スゲ オヤ牛ノトコロヘキマス。

おやうしとこうし (課名) 2 オヤ牛ト子牛

二二二 オヤ牛ト子牛

二二二 オヤ牛ト子牛

二二二 オヤ牛ト子牛

二64 4 二十一 オヤ牛 ト子牛
おやくそくする 「約束」(サ変) 1 御
約束する 《一シ》

十73 3 何時か御約束した通り、今日は當地の様子を少しばかり申し上げ
ます。

おやこ 「親子」(名) 12 おや子 親子
四10 8 風 に吹かれて、なま土ふ
んで、今日も朝からせい 出す
おや子。

六62 6 《略》、「おなつかしや、母様。
木曾の萬じゆでございます。」「何、
萬じゆ。《略》。」と、親子は手を取
合つて泣きました。

六64 4 《略》、親子は、うばもろとも
に、喜び勇んで木曾へ歸りました。
七73 4 たとひ親子の者がうゑ死を
するやうなことがあつても、《略》。

九54 1 園 さうして全く無一物になつ
て、親子三人町外れの裏長屋に移つ
てしまつた。

九56 8 正一の家でも、親子三人、庭
にすゑた打臺の前に並んで、麥を打
つてゐる。

九92 4 園 ところがめぐみ深いジュビ
ターといふ神様が、《略》、すぐに親
子の者を天へ連れていつて、大熊座
と小熊座になさつたのださうです。

十26 10 親子は死力を盡くして漕ぎに
漕いだ。
十27 10 親子は非常な危険ををかし
て、人々をボートに收容し、又あらん限

りの力をオールに注いで、我が家へ
と向つた。
十28 3 つかれ果てた人々も、親子の
勇ましい働にはげまされて、我も
くゝと力をそへる。

十28 9 《略》、全く元氣を回復した
人々は、親子にあつく再生の恩を謝
し、名残を惜しんで此の島を去つた。
十二57 7 親子は總掛りで探し始めた。

おやこうこう 「親孝行」(名) 1 親孝
行
五55 5 園 これは親孝行のほうびに、
神々がさづけられたにちがひない。

おやごろし 「親殺」(名) 1 親殺
九92 4 園 《略》。あのアルカスに親
殺の大罪ををかさせてはならぬ。』

おやす・む 「御休」(五) 1 おやすむ
《一ミ》
五50 2 おかあさんもねえさんも、此
の五六日は夜もろくろくおやすみに
ならないのです。

おやたけ 「親竹」(名) 1 おや竹
三27 5 又あそこここにわらを
むすびつけてあるのは、《略》、
のばして おや竹にするのださ
うです。

おやど 「御宿」(名) 1 お宿
十64 9 園 お宿は致しても、さて何も
差上げる物はないません。

おやどいた・す 「御宿」(五) 1 お宿
致す 《一シ》
十63 5 園 主人は僧の後を追ひて外に

出でぬ。「なうく、旅のお方、お
もどり下さい。お宿致しませう。」
おやどり 「親鳥」(名) 5 オヤドリ
三73 《略》、オヤドリノムネノ
トコロカラ、ヒヨコガ小サナア
タマヲ出シテ、ビヨビヨトナイ
テキマシタ。

三8 1 ヒヨコガナクト、オヤド
リハオハナシデモスルヤウニ、
コココトイツテ キマシタ。

三8 4 一三日 タツト、オヤドリ
ハヒヨコヲニハヘツレ出シマ
シタ。

三9 4 オヤドリハナンニモタベ
ナイデ、コココトイヒナガラ、
ソノヘンヲ見マハリマス。

三9 8 ネコデモソバヘクルト、
オヤドリハオコツテケヲサカ
ゲタマス。

おやどりども 「親鳥共」(名) 1 親ど
りども
九12 8 園 妹は餌箱を持ちて、とやの
前に来る。親どりどもすぐに見つけ
て、其の足もとにむらがる。

おやね 「御屋根」(名) 1 お屋根
六106 2 園 一切白木造で、お屋根はか
やでふいてある。

おやねこ 「親猫」(名) 1 オヤネコ
一9 1 オヤネコトコネコガキマ
ス。

おやぶね 「親船」(名) 1 親船
十二21 9 ふもとの川を白帆が二つ三

つ通つて行く。あれは港の親船へ蜜
柑を運んで行くのであらう。

おやめなさ・る 「御止」(五) 1 おや
めなさる 《一イ》
七70 3 園 しばらくして、《略》。つ
いては此の中の金を半分だけお禮の
しるしにさし上げます。」といつて、
財布の中に手を入れました。人夫は
之を見て、「おやめなさい。《略》。」
といつて、歸らうとしました。

おやゆび 「親指」(名) 4 おやゆび
三15 1 園 一ばんふとのがおや
ゆびで、一ばんほそいのがこ
ゆびです。

三15 6 園 《略》、中ゆびとおやゆび
のあひだにあるのが人さし
ゆび、《略》。

三16 6 園 「さうです。それではあ
しのゆびのなをしつてゐま
すか。」「おなじことせう。」「
まあ、いつてごらん。」「おやゆび、
人さしゆび。」

三17 1 園 あしのゆびは、おやゆ
びとこゆびのほかにはなが
ないのです。

おや・る 「御遣」(五) 3 オヤル お
やる 《一リ》
三5 5 一三日 マヘカラメンドリ
ガスニツキマシタ。ケサオカア
サンガタマゴヲ入レテオヤリ
ニナリマシタ。

五15 8 《略》、すゑめが教室の中へと

びこみました。先生がまどをすつかり明けて、出しておやりになりました。

七15 小ぶくろの方は私どものだんなが國へおやりになる金ですが、
〔略〕。

おゆ 〔御湯〕(名) 1 お湯
六37 私がたんばへお湯を持つて行つてくると、〔略〕。

おゆみ 〔御己〕(名) 1 お弓
五18 其の時〔略〕、金色の鶏が一羽とんで来て、天皇のお弓の先にとまつた。

おゆる・める 〔御緩〕(下二) 1 おゆるめる
《一メ》

五44 此の時尊はふところのつぎを出して、たけるのむねをおつきになりました。〔略〕、「しばらくお待ち下さい。申したいことがあります。」といひました。尊は手をおゆるめになりました。

およぎ 〔泳〕(名) 2 およぎ 泳
五30 うちの前には小川が流れ、〔略〕。つりも出来るし、およぎも出来て、あつい夏でもすくしくらす。

十一54 熱帯の暑さにたへかねてゐた船員等は、船長から泳を許されたので、我先にと海に飛込んだ。

およぎき・る 〔泳切〕(五) 1 泳ぎきる
《一ル》
十一87 〔あ、五海里の海上を

僕も泳ぎきることが出来たのだ。]

およぎくら 〔泳競〕(名) 2 泳ぎくら
十一55 二人は外の者からずつと離れて、沖のうきを目當に泳ぎくらをしてゐた。

十一56 〔略〕、二人の耳にはいらぬのか、夢中で泳ぎくらを續けてゐる。

およぎ・つく 〔泳着〕(四) 1 およぎつく
《一カ》

七37 獅子はかなしげにほえて、〔略〕、つと海の中にをどり入たり。船におよぎつかんとてなり。

およぎまわる 〔泳回〕(五) 2 泳ぎ廻る
《一ツ》

十一55 船員等は、如何にも氣持よささうに泳ぎ廻つてゐたが、〔略〕。
十二79 〔略〕、まぐろは水面に渦巻を起したり、背びれを水上に現したりして泳ぎ廻つてゐる。

およ・ぐ 〔泳〕(五) 10 オヨグ およぐ 泳ぐ
《一イ・ギ・グ》
一30 アヒルガ オヨイデキマス。

五22 六 鯉のぼり 〔略〕。其のたびに、鯉のかげが地の上をおよぎます。

七55 何萬とも知れないいるかが、はね上つてはおよぎ、はね上つてはおよぎして行くのを〔略〕。

七55 〔略〕、いるかが、はね上つてはおよぎ、はね上つてはおよぎし

て行くのを見ることもあります。

七80 魚類ニハイワシ・アヂ・カツヲナドノヤウニ、水ノ表面ニ近イ所ヲ泳グモノガアリ、〔略〕。

七83 〔略〕、タヒ・アナゴ・ハモナドノヤウニ、岩ノカゲヤ海藻ノ間ヲ泳グモノガアリ、〔略〕。

七82 〔略〕、タコヤイカガ、アシヲソロヘテ泳グ様ハ、マコトニ面白イ。

九86 〔略〕、目のさめるやうに美しい魚の群が、珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。

九104 蛙がぼかんと飛込んで、はすうつと泳いで行く。

十一86 船の上からはしきりに勵ましてくれる。これに力を得て、又一しやうけんめいに泳いで行く。

およそ 〔凡〕(副) 14 オヨソ およそ 凡そ

七15 地球の表面には、海と陸とありて、海の廣さはおよそ陸の二倍半なり。

七89 汽車はおよそ三十分毎に、電車はおよそ十分毎に發着す。

七91 汽車はおよそ三十分毎に、電車はおよそ十分毎に發着す。

七36 人口はおよそ十一萬、〔略〕。

八19 汽船ハ河口ヨリオヨソ四百五十里、小舟ハオヨソ九百里サカノボルコトヲ得。

八19 汽船ハ河口ヨリオヨソ四百五十里、小舟ハオヨソ九百里サカノ

ボルコトヲ得。

十35 運河は全長五十里餘り、凡そ十時間前後で之を航することが出来る。

十一33 さうして其の數や大きさは、凡そ十一年餘を週期として増減してゐる。

十一310 しかも我々に最も近いあの太陽でさへ、地球からは凡そ三千八百萬里も離れてゐる。

十一47 孔子は今より凡そ二千五百年前、當時の魯即ち今の山東省の地に生れたり。

十一437 しかし幸に經過良好にて、熱も凡そ二週間餘にて全く相去り申候。

十二46 今其の主要なるものを擧ぐれば、杉・檜・もみ・つが・ひば・松・落葉松・けやき・栗・かし・なら・くぬぎ等なり。凡そこれ等の木材は、其の有する性質によりて各種の用に供すべく、随つて何れも重要なるはなけれど、〔略〕。

十二90 釋迦は今から凡そ二千五百年前、北インドのヒマラヤ山のふもととカピラバスト王國の太子として生れた。

十二111 電燈の發明せられたるは、今より凡そ百十餘年前のことなり。

および 〔及〕(接) 9 及び 及

七18 陸を分けて、アジア・ヨーロッパ・アフリカ・南

アメリカ洲・北アメリカ洲・及び大洋洲とす。

七43図 其の中我が大日本帝國と、イギリス・フランス・イタリヤ及びアメリカ合衆國を世界の五大強國といふ。

七112図 郵便切手貼付及日附印押捺場所

十一63図 論語は、曾參と有若との門人等が孔子及び其の高弟の言行を集録したるものにして、〈略〉。

十一339図 兩岸及び島島、見渡す限り田園よく開けて、毛氈を敷けるが如く、白壁の民家其の間に點在す。

十一348図 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。

十一603 市外の眞駒内及び月寒には、大きな牧場がある。

十二463図 〈略〉、中にも其の用途の廣きは杉及び檜なり。

十二1304図 又延いては徳川家及び江戸百萬の民の仕合はせ、これは申すまでもござりませぬ。

および・する 「御呼」(サ変) 1 お呼びする 《一スル》

八1076図 〈略〉、母が私に、お友だちをお呼びなさい、おこはでもふかして上げようと申します。お呼びするのは大に近所の人で、あなたが知つていらつしやる方ばかりです。

およびなさる 「御呼」(五) 1 お呼びなさる 《一イ》

八1075図 〈略〉、母が私に、お友だちをお呼びなさい、おこはでもふかして上げようと申します。

およ・ぶ 「及」(四五) 18 及ぶ 《一バ・ビ・ブ・ベ・ーン》

八123図 もう改めて勝負をするには及びません。

八196図 第五 揚子江 〈略〉。我が國第一ノ長流鴨綠江ノ如キハ實ニ其ノ支流ニモ及バザルナリ。

八467図 こちらのの方はどうでもなるから、心配するには及びません。

八949図 先生は「何なら、あのお子をお今日一日お連れになつてもよいございます。」といはれた。信吉は「いや、何、それには及びません。」

九389図 やがてレマン將軍は、〈略〉、帶劔をときて渡さんとするを、エンミツヒ將軍は「いや、それには及ばん。〈略〉。」と、強ひて之をおし止めたり。

十510図 〈略〉、新に植込みたる木の數、實に十數萬本に及び。

十987図 たま／＼元の大軍至るに及んで天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。

十1335図 〈略〉、勾踐越の王となるに及び、呉の勢盛にして越軍大いに破れ、勾踐は呉に捕へられぬ。

十一46図 支那幾千年の人物中、大聖として長く後人に敬はれ、徳化の

尚今日に著しきもの、孔子に及ぶはなし。

十一72図 孔子常に中正不偏を貴び、〈略〉、「過ぎたるは及ばざるが如し。」ともいへり。

十一259図 夜ふけに及んで、鉢峯を守る兵卒の一人、ふと東南の方を望み見るに、〈略〉。

十一425図 何分田舎にて萬事不便には候へども、若し御光來相成候はば、及ぶ限りの御便宜相計り申すべく候。

十一746 話が古事記のことに及ぶと、宣長は「略。」

十一12810図 〈略〉、其の資金を以て力の及ぶ限り廣く人々を救ひ、又もや一錢をも留めざるに至れり。

十二79図 此の社は規模の大なるを以て世に知られ、本殿の如き其の高さ實に八十尺に及ぶ。

十二623図 〈略〉、先づイングランドとスコットランドと合するや、〈略〉前者の國旗と、藍地に斜白十字の徽章ある後者の國旗とを合して一旗となし、更にアイルランドの加はるに及び、白地に斜赤十字の徽章ある其の國旗を合はせて、遂に今日の如き形式をなすに至れり。

十二982 釋迦は八十歳の高年に及んでも、なほつゞれをまとい飢と戦ひつゝ、各地を巡つて道を傳へてゐたが、〈略〉。

十二11410図 エヂソンの發明せるは〈略〉極めて多く、アメリカにて特許を得たるもののみにても其の數實に千餘に及ぶ。

およ・ぶ 「御呼」(五) 1 およぶ 《一ビ》

五36 〈略〉、先生が知らない生徒を一人つれてお出でになりました。

〈略〉。さうして「山田さん」とおよびになりましたから、「はい」と答へますと、〈略〉。

およ・す 「及」(四) 1 及す 《一ス》

十一77図 孔子は他人を正す前に先づおのれを正し、近きより遠きに及すを以て其の主義としたり。

およめ 「御嫁」(名) 2 およめ

三802 ねえさんは遠いところへおよめにやつていらつしやるのです。

四764 西の村一番の金持のむすめさんが、此の人の所へおよめに來ましたが、〈略〉。

およ・る 「御寄」(五) 1 およる 《一リ》

五386 此所を出て、となり村の學校の前へ行くと、先生が〈略〉、學校へおよびになりました。

おり 「降」のりおり・のりおりする

おり 「折」(名) 6 折ひとおり・ほねおり・ゆびおり

八154図 殿はまだお若くて、これ

から功名をお立てになる折はいくらもございます。」

九118 9 園 おかあさんは、『一命を捨てて君恩に報いよ。』と言つてゐられるが、まだ其の折に出會はないのだ。

十59 10 園 〈略〉、一夜の宿を貸し給へとこへば、〈略〉氣品高き婦人立出でて、『折あしく主人が留守でございますので。』とことわりぬ。

十106 4 園 寒さきびしき折から皆様には御障もなく、御前様にも日々學校に御通ひなされ候由、安心致し候。

十108 4 園 〈略〉、御前様御ひまの折裁縫のおけいこに御仕立て下された候。

十二86 8 園 土人等怒りて林蔵の頭を打ち、強ひて酒を飲ましめんとす。折よく同行の樺太人來りて土人等を叱し、林蔵を救ひ出しぬ。

おりー「居」(ラ変) 3 居り 居「一

ラー」(リ) 〓うけたまわりおり・おどろきおり・かんしやいたしおり・こまりおり・しさついたしおり・じゅうじいたしおり・せわしおり・ぞくしおり・ぞんじおり・たのしみおり・ちつそくしおり・つうがくしおり・つとめおり・はたらきおり・はつきりいたしおり・はびこりおり・ひきこもりおり・べんきょうしおり・まいりおり・もうしおり

十一69 9 園 富貴は人のねがふ所な

り。然れども正しき道によるに非ざれば、我之に居らず。

十一104 9 園 アマゾン河は全長五千五百キロメートル、世界の河の王といはれ居候。

十一108 3 園 原野は大い牧場にて、牛馬は放し飼にせられ居候。

おりおり「折折」(副) 4 をりをりをりく 折々

六63 2 これから後萬じゆは、うぼと心を合はせて、折々らう屋をたづねては、母をなくさめて居りました。

九22 4 園 これまでも折々話した通り、〈略〉。

九74 4 北上川はまだをりをり見えるが、いよくせまくなつて、とうく谷川になつてしまつた。

十二14 8 園 〈略〉、印刷術の幼稚なる時代にありては、唯をりく興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。

おりかえし「折返」(副) 1 折りかへし

六55 3 頼朝が木曾義仲をせめようとしたり、木曾の家來手塚太郎光盛の娘が〈略〉、之をさとつて、すぐに義仲の所へ知らせました。義仲からは折りかへし返事があつて、〈略〉。

十60 4 園 〈略〉、僧をば待たせ置き、おのれは主人を迎へにとて外に出行きけり。折から、たもとの雪を打拂

ひくくつゝ此方へ來かかれるは、此の家の主人なるべし。

十二9 2 園 境内を出でて海岸に到る。〈略〉。折から日は地平線に近づきて、雲も水も金色に輝き、美しいふばかりなし。

十二42 1 園 〈略〉、一同夢に夢見る心地。折から燈がぱつと明るくなつたと思ふと、ゆらくと動いて消えてしまつた。

十二91 5 ぼろを着た農夫は玉のやうな汗をかいて田をすき起し、牛はつかれ果ててあへぎあへぎ働いてゐる。折から飛下りて來た鳥が歟に傷つけられた蟲をついばんだ。

おりきたる「降來」(四) 1 下り來る「一レ」

十一24 2 園 〈略〉、十三箇所のうちなる大岩山のとりでより、幾頭かの馬をひきて余吾湖のほとりに下り來れる七八人の兵卒あり。

おりしも「折」(副) 2 折しも

十127 9 園 〈略〉、場に満ちたる十幾萬の拜觀者の胸は、まさに始らんとする進水式の壯快なる光景を豫想して、唯をどりにをどる。折しも起る「君が代」の奏樂。

十一24 3 園 水際に寄りて馬の足を冷さんとする折しも、思ひもよらぬ敵の一隊、湖に沿ひたる一筋路を急ぎに急ぎて進み來る。

おりもの「織物」(名) 1 織物 〓け

おりもの・めんおりもの
八96 1 園 第二十三 名古屋市 〈略〉。商工業盛ニシテ、焼物・塗物・扇・綿絲・織物等ノ産出頗ル多シ。

おりる「降」(上二) 18 下りル 下りる 降りる 「一リ・一リル」 〓かけおりる・とびおりる

五66 1 二人は峠を下りて、となり村へはいりました。

五98 8 此の時、木に上つてゐた者が下りて來て、「略。」

五102 6 はじめて東京見物に來て、此の停車場へ降りる人は、大てい先づ第一に宮城をさしてまゐります。

七11 5 船頭がさをつき立てて、それに舟をつないだ。〈略〉。僕が一番先に海へ下りた。

七11 8 僕が一番先に海へ下りた。〈略〉。おとうさんも、にいさんも、丸山君も、妹も、お松も、みんな下りた。

七19 8 義貞は馬から下りてかぶとをぬぎ、はるく海上を拜しました。七27 1 畠山重忠はひよどりごえのさか落しに、馬をしよつて下りたといふし、〈略〉。

八4 6 僕が庭へ下りて、かはるく頭をなでてやると、〈略〉。
八49 4 〈略〉、空中ヲノシテ行ク。サウシテ〈略〉、スウツト下リテ來テ、急ニツバサヲチヌメ、風ヲ切ツテマツシクラニエモノノ上ニツカミカ、

ル。

八567 圖 米屋の小ぞう〈略〉、ひらりと下りて自轉車を 角の下駄屋にあづけ置き、すぐに老婆をみちびきぬ。

九349 圖 「此の坂を下りて、あの清水の所まで行くと、石井君のうちが見えるはずだ。」と、此の前來た時の事を考へながら、〈略〉。

九689 圖 間もなく西那須野に着いた。叔父さんが「略」。紅葉と温泉で名高い塩原へ行くには、此所を下りるのだ。」とおしやつた。

九70 圖 仙臺に着いたのは午前の三時で、少しは下りた人も乗つた人もあつた。

九715 圖 「松島は。」「仙臺から三つ目の松島驛で下りるのだ。〈略〉。」

十一4 圖 青山の神宮前停留場にて電車を下り、廣き参道を行くこと十町ばかりにして神宮橋に達す。

十736 圖 汽車で京城へ来る人は通常南大門驛で下りるのです。

十802 昇降器がすさまじい勢で下りて行くので、目がまはりさうです。

十805 昇降器を下りて、あたりを見まはすと、〈略〉。

おる 「折」(五) 6 折る 《一ツ・一リ・ール》

六145 松山の入口で、赤くなつてみたぐみを一枝折ると、〈略〉、にいさんに注意されました。

六495 圖 〈略〉母は 春の遊の樂しきかたる。居ならぶ子どもは指を折りつつ、日数かぞへて、喜び勇む。

八98 〈略〉、中程まで行つた時、信作の馬はつまづいて、前足を折つた。

八1029 圖 君等が若し僕に食物を送る爲に働いたといふなら、僕もまた君等を養ふ爲に骨を折つたといひます。

九351 〈略〉、出後のわらびを一本折つて、又歩き出す。

十152 圖 私は此の村の青年諸君が、かうして修養にも實行にも、骨を折つてをられるのを、うれしく思ひます。

おる 「居」(五) 46 ヲル をる 居ル 居る 《一ツ・一ラ・一リ・ール》

五452 圖 自分にまさる者はないので、たけると申して居りましたが、みやこには強いお方がおありになつた。

五805 圖 かけよつて見て、宗任が「矢はあたつて居りませぬのに、狐は死んで居ります。」と言ふと、義家が「〈略〉。」と言ひました。

五806 圖 「矢はあたつて居りませぬのに、狐は死んで居ります。」

五888 圖 おとうさんやおかあさんには、取りまぎれてまだ手紙も上げずに居ります。〈略〉 叔母から 竹子様

六446 朝、雷が目をさまして見ると、月と日が居りません。

六552 〈略〉、木曾の家来手塚太郎光盛の娘が頼朝に仕へて居りましたが、〈略〉。

六568 これが萬じゆの姫で、木曾に住んで居りましたが、〈略〉。

六591 あゝ、母はもう此の世の人ではないのかと、力をおとして居りました。

六593 或日のこと、萬じゆが御殿のうらへ出て、何の氣もなくあたりをながめて居りますと、〈略〉。

六598 圖 「あの中には石のらうがあつて、唐糸様がおしこめられて居られます。」

六607 八幡様の御引合はせか、門の戸は細めに明いて居りました。

六633 これから後萬じゆは、うばと心を合はせて、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。

七676 圖 「まあ、お待ちなさい。落した物は。」「革の財布で。」「中には。」「小判が百五十兩はいつて居ります。」

七712 圖 私は〈略〉紀州の者でございます。房州へ出かせぎに行つて、

七743 見れば年取つた父といふのが、うす暗い小窓の下で、わらちを作つて居りまして、〈略〉。

七744 〈略〉、妻はろばたでぼろをつゞつて居ります。

七766 圖 毎朝げんくわんへ出て、

「誰か居るか。」と呼ぶと、いつも藤吉郎が眞先に出て來た。

七769 圖 或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、「誰か居るか。」と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て來た。

七774 圖 「そち一人か。」「はい。」「いつもより早いのに、よく参つて居つた。」

七775 圖 「いつも人より一時間に参つて居ります。」

七794 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤ其ノ外イロノ動物ガステンデ居リ、又サマザマノ植物モ生エテ居ル。

七814 アサリヤ蛤ハ砂ヤ泥ノ中ニ居リ、カキヤアハビハ岩ニツイテキル。

七981 當時秀吉は伏見の城に居つたのでございます。

七1011 秀吉は城の庭にしき物をのべさせ、〈略〉、御臺所やおそぼの女どもと居りました。

七1013 まだ誰一人城に登つて居りません。

七1017 圖 上様をはじめ皆様、おしの下になつては居られぬかと存じ、〈略〉。

七1063 圖 〈略〉、日本の大將小西行長は一たまりもなくにげ落ち、もはや朝鮮に日本の武士は一人も居らぬ。

八116 〈略〉、眞赤になつたつたが、松の木にからまつてをり、日當りのよい所には、つるうめもどきが美しい實をならべてゐる。

八449 小ぞうから主人へ「略」。病中の祖母も大そう喜びまして、ありがた涙をこぼして居ります。
八104 マツチの製造所へ行つて見ると、職工が大勢居つて、それ／＼手分をして働いてゐる。
九55 コ、椰子は、高いのは七八間もあります。鳥の羽に似た大きな葉が、幹の上の方に集つてついてをり、其の葉の根本には、大人の頭ぐらゐの實がすゞなりになつてゐます。
九21 例へば毒ヲモツテキル蜂ノ體色ガ黄ト黒ノダンタラニナツテヨリ、惡味ヤ惡臭ノアル蝶ノ羽ニハ美シイ色ドリガアルヤウナモノデアル。
九49 夏休も近くなりました。みんなでいさんのお歸を待つてをります。
十12 「略」、此の頃墓参りのために朝鮮から歸つてをられる高橋さんが來られた。
十152 私は此の村の青年諸君が、かうして修養にも實行にも、骨を折つてをられるのを、うれしく思ひます。
十156 朝鮮の青年も、近頃はなか／＼頭が進んで來ましたので、あちらの教育に關係してゐる私どもは、非常に喜んでをります。
十65 主人はうちうなづきて出來り、僧に向ひて、「略」。ちやうど有合はせの粟の飯、召上るならと妻

が申してをりますが、「略」。
十689 かやうに落ちぶれてはゐるものの、御らん下さい、「略」、又あれには馬を一匹つないでもつてをります。
十一105 唯商業の取引の盛な部分は、相當に活氣を帯びてをり、西洋風の建物もあつて、趣がやゝ變つてゐる。
十一378 「略」、おとうさんが「略」といつて笑つてをられた。
十一597 主な通にはアカシヤの並木が青々と茂つてをり、「略」。
十一747 話が古事記のことに及ぶと、宣長は「私はかね／＼古事記を研究したいと思つてをります。略」。
十二3410 汽車でドイツの國內にはいつたのは朝まだほの暗い頃でしたが、もう沿道の田畑には農夫が鍬を振るつてをり、又工場といふ工場には盛に黒煙が上つてゐました。
十二6710 次にリガンは「略」私は「略」、ひたすら父上を大事に致すのを此の上もない仕合はせと存じてをります。
十二991 釋迦は泣悲しんでゐる人たちに、「略」。私のなくなつた後も、めい／＼が其の教をまじめに行ふ所に私は永遠に生きてをる。」と論じて靜かに眼を閉ぢた。
十二1284 「略」、今日日本の周圍には諸外國が様々の考を持つて見てを

るので、「略」。
おる「折」(五) 4 オル 《一ツ一ル》
六742 「春子、オ前ハ着物ヤ帶ノ地ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマスカ」。
六751 毛絲デオツタ物ニハ、ドンナ物ガアリマスカ。
六762 イ、エ、ヤハリ毛絲デオツタ物デス。
六767 コレハ、ハジメ白地ニオツテ置イテ、後デカタヲ置イテ染メルノデ、「略」。
おる「降」 ↓とびおりたまう・とびおる
おる「折」(下) 2 折る 《一レ》
十一8 左に折れて第二の鳥居を過ぎ、又右に折れて第三の鳥居の前に出づ。
十一8 左に折れて第二の鳥居を過ぎ、又右に折れて第三の鳥居の前に出づ。
おるすい「御留守居」(名) 1 おるす居
六18 今日うちの者がみんなたんぼへ稻こきに行きました。おるす居はおちいさんと私だけです。
おれ ↓なおれ
おれい「御礼」(名) 7 オレイ おれい
三416 うらしまさん、このあひだはありがたうございました。

そのおれいにりゆうぐうへつれていつて上げませう。
三878 おかげで天へかへることが出來ます。おれいにまひをまひませう。
四206 白ウサギガソノ通りニシマス、カラダハスツカリモトノヤウニナホリマシタ。ヨロコンデ大國主ノ神ノトコロヘオレイニ行ツテ、「オカゲサマデ、カラダハコノ通りニナリマシタ。略」ト申シ上ゲマシタ。
六187 「略」、栗林の下のくぼ地を教へてくれました。略。歸りがけに、力藏さんにお禮を言ひましたら、「二雨降つたら、又お出で。」と言ひました。
七698 それがあなたのやうな正直なお方に拾はれて、財布をいたゞかせてもらひましたが、「略」。つては此の中の金を半分だけお禮のしるしにさし上げます。
七744 かのお禮を話して、どうかお禮を受けてくれといひますと、「略」。
十一119 騎馬の人たちは、「略」、あけてくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。
おれる「折」(下) 7 をれる 折レル 折れる 《一レ一レル》
四73 私の木も枝がをれるほどなつてゐます。

五37 8 大平橋を渡つてから左へをれて、松山の下へ瓦やきを見に行きました。

六66 3 二三返クリカヘシタラ、釘ハ残ラズ取レテ、其ノ上、折レタ針ヤ、サビタ針金マデツイテ來タ。

七45 1 ぐんばいうちはでふせいだが、えが折れて、肩先へ切りつけられた。

十93 8 すると橋はまん中から折れて、三人は水中におちいつた。

十103 10 建物は此處から右に折れる。

十104 8 其處から又右に折れると、細長い室一ぱいに、目もさめるやうな草花が並べてある。

おろし ↓ あげおろし

おろす 「降」(五) 9 おろす 下す

《一サ・一シ》

五21 7 六 鯉のぼり 《略》。其の尾を下して来て、さをに着けるかと思ふと、《略》。

六87 5 象がそれを下して来て地に置くと、《略》。

八38 8 呉服屋の手代が、大きなふろしきづつみを右地藏の前におろして休みましたが、《略》。

九51 7 主人の家が大きな醬油屋

だつたので、始は近在の小賣店へ、《略》、おろしに歩き廻つたものださうだが、《略》。

十39 9 父は腰から鎌をぬきながら、《略》、たき火のそばの切りかぶに腰を下し、鎌をときにかゝつた。

十44 4 窯場から出て來た喜三右衛門は、縁先に腰を下して、つかれた體を休めた。

十一56 8 昔、アフリカの或港に一そこの船がとまつてゐた時の話である。《略》。救ひのボートは下された。

十二43 6 彼は再びピアノの前に腰を下した。

十二110 4 かうして、老僧が始めてのみを絶壁に下してからちやうど三十年目に、《略》。

おろそか 「疎」(形状) 1 おろそか 十46 7 工夫にばかり心をうばはれては、とかく家業もおろそかになる。

おろち 「大蛇」(名) 7 大蛇 ↓ やまたのおろち

五9 7 園 もう此の子一人になりましたのに、近い中に又其の大蛇がたべにまゐります。

五10 1 園 「どんな大蛇か。」

五10 2 園 「頭が八つ、尾が八つある大蛇で、目はほづきのやうに赤く、

世中には、ひのきや杉の木が生えてゐます。」

五10 5 園 其の大蛇をたいぢしてやらう。

五11 3 間もなく大蛇が来て、八つの頭を八つのをけに入れて、其の強い酒を飲みました。

五11 5 飲みほして、大蛇がよひつづれますと、《略》。

五11 6 《略》、みことはこしのつるぎ

をぬいて、大蛇をずたずたにお切りになりました。

おろちたいじ 「大蛇退治」(課名) 2

大蛇たいぢ

五目 4 三 大蛇たいぢ

五7 5 三 大蛇たいぢ

おろちたいじ 「大蛇退治」(名) 1 をろち退治

十二4 7 園 「此の川は古の鰐川にして、かのろち退治の傳説あるは此の川の川上なり。」

おわか・い 「御若」(形) 2 お若い 《一イ・一ク》

八15 3 園 「殿はまだお若くて、これから功名をお立てになる折はいくらもございます。」

十一75 7 園 あなたはまだお若いから、しつかり努力なさつたら、きつと此の研究を大成することが出来ませう。

おわか・る 「御分」(五) 1 お分る 《一リ》

八102 7 園 これは全く君等が自分で招いたのであります。今になつて始めて、考慮をしてゐたことがお分りになるでせう。

おわしま・す 「御座」(四) 1 おはします 《一ス》

十二25 6 園 極樂寺坂越え行けば、

長谷觀音の堂近く、露坐の大佛おはします。

おわ・す 「御座」(サ変) 2 おはす 《一ス・一セ》

十130 7 園 主上さきに笠置におはせし時早くも義兵を擧げしが、《略》。

十一45 2 園 住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、「《略》。《略》、何時までもかくておはすべきにあらねば、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。《略》。」といへば、《略》。

おわたし・する 「御渡」(サ変) 1 お渡しする 《一シ》

九50 6 僕は《略》、おとうさんのお手紙を持つて、精米會社へお使に行つて來ました。《略》。お返事をお渡しした後で、おとうさんに「《略》。」と言ふと、《略》。

おわび 「御詫」(名) 2 おわび

八18 5 晝頃、御臺所のおわびによつて、長四郎はやつと袋から出された。

八42 5 しばらくして、其の中のおも立つた者が出て、いろいろおわびを致しますと、越前守は「《略》。」と命じました。

おわら・う 「御笑」(五) 1 お笑ふ 《一ヒ》

十105 7 にいさんも足を止めて、

《略》。一度此の中にはいると、また寒い處へ出るのがいやになるね。」とお笑ひになつた。

おわり 「終」(名) 14 ヲハリ をはり

一54 7 ヲハリ

二78 3 ヲハリ

- 三907 をはり
四969 をはり
五1029 をはり
六1085 をはり
七112図 〔略〕此處又は本文の終へ片假名にて記すこと
七1147 をはり
八1163 をはり
九1236 をはり
十1343 終
十一153 のぶ子さんは、成績物が返るとすぐ紙の袋へ入れておいて、學年の終におまともになるのださうです。
十一1309 尋常國語讀本卷十二終
十二1394 尋常國語讀本卷十二終
おわりなごや 〔尾張名古屋〕〔地名〕1
尾張名古屋
八973 圖 名古屋市ハ此ノ城アルニヨリテ名高ク、「尾張名古屋ハ城デ持つ。」ト歌ハレタリ。
おわる 〔終〕(四) 6 終る 《一リ・ール・レ》 ↓ あらいおわる・ひきおわる・よみおわる
十1004 圖 天祥刑せらるゝにのぞみ、從容としてはいく、「臣が事終る。」と。
十一25ノ図 されども不意を討たれし俄の軍に、〔略〕、清秀は討死してとりでは落ち、戦は午前のうちに終りぬ。
十一1103 圖 ブラジルの視察も大體
終り候間、程なく歸國致すべく候。
十二176 圖 校正終れば紙型に取り、更に之をもととして鉛版を造り、印刷機にかく。
十二875 圖 コーニ等の交易は七日にして終りぬ。
十二1133 圖 次いで白金其の他の金屬の針金を以て様々の實驗を重ねしが、これまた失敗に終りぬ。
おん ↓ いちおん・ごじゅうおん
おん 〔恩〕(名) 2 恩 ↓ ごおん
十289 〔略〕、全く元氣を回復した人々は、親子にあつく再生の恩を謝し、名残を惜しんで此の島を去つた。
十二973 續いて釋迦は〔略〕、父王・妻子を始め國民を教化して故郷の恩に報いた。
おんありさま 〔御有様〕(名) 1 御有様
十36 圖 第一 明治神宮參拜 〔略〕。寶物殿に到りて御遺物を拜觀す。平生きはめて御質素にわたらせられし御有様、一つくの御品の上にかゝはれて、無量の感に打たれたり。
おんいそがし 〔御忙〕(形) 1 御いそがし 《一シキ》
十1078 圖 〔略〕、御前様には御家事御手つだひのため、何かと御いそがしき事と察し申し候。〔略〕 叔母より さち子どの
おんいでなさる 〔御出〕(下二) 1 御出でなさる 《一レ》
九1167 圖 母は如何にも残念に思ひ候。何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。
おんうかがいもうしあふ 〔御伺申上〕(下二) 1 御伺ひ申上ぐ 《一ゲ》
十二1196 圖 第二十四課 舊師に呈す 〔略〕。當地に參りて以來、一度手紙を以て御様子御伺ひ申上げたしとは存じながら、〔略〕。
おんうまれ 〔御生〕(名) 1 御生れ
十1068 圖 〔略〕、御母上様には去る二日御安産にて、玉の様な女の子御生れの由承り、〔略〕。〔略〕 叔母より さち子どの
おんおくりいたす 〔御送〕(四) 1 御送り致す 《一シ》
十1084 圖 今日小包にて粗末なる物、赤さんの御着物にもと御送り致し候間、〔略〕。〔略〕 叔母より さち子どの
おんおくりくださる 〔御送下〕(下二) 2 御送り下さる 《一レ》
九1119 圖 昨日は美しきお話の本御送り下され、誠に有難く存じ候。〔略〕 正男 伯父上様
十一433 圖 尚又結構なる葛粉御送り下され、御厚情の程深く謝し奉り候。〔略〕 春田延太郎 馬場要助様
おんおくりもうしあふ 〔御送申上〕(下二) 2 御送り申し上ぐ 御送り申上 《一ゲ》
十1104 圖 尚御生前御好物なりしや
うかん一折、小包便にて御送り申し上げ候間、御佛前へ御供へ下された候。〔略〕 小林梅吉 大森茂様
十一427 圖 尚當地産の葛粉少御見舞の印までに御送り申上候間、御受納下され度候。〔略〕 馬場要助 春田延太郎様
おんかお 〔御顔〕(名) 1 御顔
十1074 圖 私とてもかはゆらしきめひの生れ候と聞きては、何よりうれしく、一日も早く御顔を見たく存じ候。〔略〕 叔母より さち子どの
おんがく 〔音楽〕(名) 1 音楽
十二1185 〔略〕此の無線電話の應用が極めて廣く、遠い處の音楽・演説・講話などを居ながら聞くことが出来ることや、〔略〕。
おんがくか 〔音楽家〕(名) 2 音楽家
十二372 ドイツの有名な音楽家ベートーベンがまだ若い時分のことであった。
十二395 圖 「御免下さい。私は音楽家ですが、面白さについてり込まれて参りました。」とベートーベンがいつた。
おんがくどう 〔音楽堂〕(名) 1 音楽堂
十二332 圖 塔の中には賣店もあり、音楽堂・食堂なども設けられてあります。
おんかじ 〔御家事〕(名) 1 御家事
十1077 圖 御母上様はまだ御やすみ

にて、御前様には御家事御手つたひのため、何かと御いそがしき事と察し申し候。〈略〉叔母より さち子どもの

おんかよいなさる 「御通」 (下二) 1
御通ひなさる 《一レ》

十106 5 園 寒さきびしき折から皆様には御障もなく、御前様にも日々學校に御通ひなされ候由、安心致し候。〈略〉叔母より さち子どもの

おんきもの 「御着物」 (名) 1 御着物
十108 3 園 今日小包にて粗末なる物、赤さんの御着物にもと御送り致し候間、〈略〉叔母より さち子どもの

おんくやみもうしあ・ぐ 「御悔申上」 (下二) 2 御悔申し上ぐ 《一ゲ》

十110 1 園 両親も非常に驚き居り、あつく御悔申し上げ候やうにと申し出で候。〈略〉小林梅吉 大森茂様

十110 5 園 承り候へば、御祖母様には先日より御病氣の處、〈略〉。〈略〉。先は右とりあへず御悔申し上げ候。二月六日 小林梅吉 大森茂様

おんけん 「穩健」 (形状) 1 穩健
十二134 4 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、自ら國民の性質を穩健ならしめ、〈略〉。

おんこ 「御子」 (名) 1 御子
十106 8 園 〈略〉、御母上様には去る二日御安産にて、玉の様な女の御子御生れの由承り、〈略〉。〈略〉叔

母より さち子どもの

おんこう 〓ちやくじつおんこう
おんこころ 「御心」 (名) 1 御心
十二120 3 園 〈略〉、先生には何時も御壯健の由、何よりのことに御座候。私のこと御心にかけ下され、〈略〉。

おんこのみ 「御好」 (名) 1 御好み
十三2 園 第一 明治神宮參拜 〈略〉。又日々奉る供へ物には、御生前殊に御好みありし品々を選ぶ由なるが、〈略〉。

おんさつくださる 「御察下」 (下二) 1 御察し下さる 《一レ》
九117 9 園 母も人間なれば、我が子にくしとはつゆ思ひ申さず。如何ばかりの思にて此の手紙をしたゝめしか、よくよく御察し下されたく候。

おんさつしもうしあ・ぐ 「御察申上」 (下二) 1 御察し申し上ぐ 《一ゲ》
十109 7 園 大兄をはじめ皆様方の御悲歎、如何ばかりかと御察し申し上げ候。〈略〉小林梅吉 大森茂様

おんさと 「御佐」 (名) 1 御さと
十133 1 園 主上は詩の心を御さととりありて、天顔殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。

おんさわり 「御障」 (名) 1 御障
十106 4 園 寒さきびしき折から皆様には御障もなく、御前様にも日々學校に御通ひなされ候由、安心致し候。〈略〉叔母より さち子どもの

おんしたてくださる 「御仕立下」 (下二) 1 御仕立て下さる 《一レ》
十108 5 園 今日小包にて粗末なる物、赤さんの御着物にもと御送り致し候間、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。〈略〉叔母より さち子どもの

おんしつ 「温室」 (名) 3 温室
八105 3 〈略〉、薬をつけた軸木を温室で乾かす者もあり、〈略〉。
十100 9 〈略〉、一足温室の中にはいると、全く別の世界に來たやうな心持がする。

十105 3 園 にいさんも足を止めて、〈略〉。此の温室は南を受けてゐる上に、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに早く咲くのだ。〈略〉。とお笑ひになつた。

おんしつのなか 「課色」 2 温室の中
十目6 第十九 温室の中
十100 7 第十九 温室の中
おんしな 「御品」 (名) 1 御品
十三3 園 第一 明治神宮參拜 〈略〉。平生きはめて御質素にわたらせられし御有様、一つ／＼の御品の上にかゝはれて、〈略〉。

おんじゅん 「溫順」 (形状) 1 溫順
十二113 溫順な彼は父の命に従つて勉強してゐたが、何時の間にか好きな博物學の研究が主となつてしまつた。

おんじょう 〓だいおんじょう
おんしらせ 「御知」 (名) 1 御知らせ

十107 6 園 御名は何と付けられ候や、これも早く承りたく、御知らせ待ち上げ候。〈略〉叔母より さち子どもの

おんしらせくださる 「御知下」 (下二) 1 御知らせ下さる 《一レ》
九112 10 園 近き中に頂きに上りたく候に付き、何日頃がよろしく候や、御知らせ下されたく、御願ひ申し上げ候。九月二十日 みよ子 伯母上様

おんしらせもうしあ・ぐ 「御知申上」 (下二) 1 御知らせ申上 《一ゲ》
十二122 1 園 先づは御無沙汰の御わびかた／＼近況御知らせ申上候。〈略〉小山文太郎 大井先生

おんすまい 「御住」 (名) 1 御住まひ
十109 8 園 承り候へば、御祖母様には〈略〉、去る十九日遂に御死去遊ばされ候由、〈略〉。當地に御住まひの頃度度參上致し、大兄と共にいろいろ御話を承り候事など、〈略〉。

おんせわ 「御世話」 (名) 1 御世話
十107 10 園 〈略〉、御前様には御家事御手つたひのため、何かと御いそがしき事と察し申し候。近き處ならば早速上り候て御世話も致すべく候へども、〈略〉。〈略〉叔母より さち子どもの

おんせわくださる 「御世話下」 (下二) 1 御世話下

おんせわくださる 「御世話下」 (下二) 1 御世話下

1 御世話下さる 《一レ》

九116 9 園 村の方々は、朝に夕にいろくくやさしく御世話下され、

『一人の子が御國の爲いくさに出でし事なれば、定めて不自由なる事もあらん。何にてもゑんりよなく言へ。』と、親切におほせ下され候。

おんせん 「温泉」(名) 2 温泉

九68 9 園 叔父さんが「略」。紅葉と温泉で名高い塩原へ行くには、此所で下りるのだ。とおつしやつた。

十一42 3 園 御承知の通り當地には温泉これあり、病後の保養には特に宜しき由に候。

おんせんば 「温泉場」(名) 1 温泉場

九76 3 叔父さんのお話によると、此所は名高い温泉場で、海水浴も出来るさうだ。

おんそなえくささる 「御供下」(下二)

1 御供へ下さる 《一レ》

十110 4 園 尚御生前御好物なりしやうかん一折、小包便にて御送り申し上げ候間、御佛前へ御供へ下されたく候。《略》 小林梅吉 大森茂様

おんたい 「温帯」(名) 1 温帯

十一103 5 園 《略》、殊に温帯に属する南部の諸州にては、四季の變化も日本の如くはつきり致居候由、《略》。

おんだいじ 「御大事」(名) 1 御大事

十68 10 園 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、《略》一番にはせ参じ、《略》、あつばれてがらを立てるかく

じ。

おんため 「御為」(名) 1 御ため

七20 1 さて、心の中に、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をほろぼさうとしてゐます。

おんち 「御地」(名) 2 御地

十一41 7 園 さて昨日御地より歸村せられたる河井氏の御話によれば、《略》。

十一43 10 園 《略》、轉地するもよからんと醫師も申居候に付、或は仰に従ひ、其の中御地へ参り候やもはかり難く候。

おんちちうえさま 「御父上様」(名) 1

御父上様

十106 6 園 さて御父上様の御葉書ならびに御前様の御手紙により、《略》。

《略》 叔母より さち子どの おんつたえくささる 「御伝下」(下二)

1 御傳へ下さる 《一レ》

十108 6 園 皆様へよろしく御傳へ下されたく願ひ上げ候。《略》 叔母より さち子どの

おんてかず 「御手数」(名) 1 御手数

九113 9 園 若し御承知に候はば、御手数ながら至急御報知下されたく、願ひ上げ候。《略》 下田英太郎 吉野萬吉君

おんてがみ 「御手紙」(名) 4 御手紙

十106 3 園 御手紙有難く拜見致し候。《略》 叔母より さち子どの 十106 7 園 さて御父上様の御葉書な

らびに御前様の御手紙により、御母上様には去る二日御安産にて、玉の様な女の御子御生れの由承り、

《略》。《略》 叔母より さち子どの 十一43 2 園 御親切なる御手紙有難く拜見仕候。《略》 春田延太郎 馬場要助様

十一101 8 園 第二十三課 南米より(父の通信) 一 御手紙拜見致候。

おんてつだい 「御手伝」(名) 2 御手つだい

十6 9 園 第一 明治神宮参拜 《略》。又御造營の半ば頃より、各地方青年團の御手つだひを願ひ出づる者數多かりしかば、《略》。

十107 8 園 御母上様はまだ御やすみにて、御前様には御家事御手つだひのため、何かと御いそがしき事と察し申し候。《略》 叔母より さち子どの

おんど 「温度」(名) 3 温度

十一2 7 第一課 太陽 《略》。温度は表面で約六千度、内部に入るに随つて益々高い。

十一51 7 南洋は一年中温度が高く、雨量が多いので、ゴムの木の發育には最もよく適してゐる。

十一85 5 竹島を越したと思ふと、急に水が冷たくなつた。《略》。しかし又しばらくすると、もとの水の温度にかへつた。

おんとし 「御年」(名) 1 御年

五41 7 尊は其のころ、やまとをぐなといふ御名で、御年はわづかに十六でいらつしやいましたが、《略》。

おんとも 「御供」(名) 1 御供

九10 6 園 其の時、御供にしたがひ給へる弟橘媛、尊の御身危しと見給ひ、《略》。

おんどり 「雄鳥」(名) 1 をんどり

九15 4 園 出がけにとやの方を見れば、《略》、をんどりは箱のふちをふまへて、首をすゑ、むねを張り、今やと

きをつくらんとする様なり。 おんな 「女」(名) 22 をんな 女

三18 7 園 「あかい きものをきてゐます。」「それではをんなでせう。」

三84 8 《略》、見たこともない美しい女が來ました。

五42 3 尊はかみをといて、女のすがたになり、《略》。

六56 3 さあ、此の女にはゆだんが出來ぬといふ事になつて、《略》。

六56 6 唐糸といふのは此の女のことでございます。

六59 4 或日のこと、《略》、下仕の女が來て、「あの門の中へ、はいつてはなりません。」と申しました。

六77 8 湖の上は朝からひじやうな人出である。男の生徒もゐれば、女の生徒もゐる。

七14 2 女の人のはたすきをかけて、手ぬぐひをねえさんかぶりにしてゐる。

八35 昔江戸で、夫に死なれた女が、乳飲子を里子にやつて奉公に出ました。

八36 二人の女は「かしこまりました。」と、両方から引合ひましたが、
《略》。

八37 里親の方は《略》、子どもを引きよせますと、越前守は聲をかけて、「これ女、其の手を放せ。《略》。」と申し渡しましたので、
《略》。

八38 越前守は聲をかけて、「《略》。手を放した女が實母にきまつた。」と申し渡しましたので、
《略》。

八39 信吉にはおとといふ今年十一になる女の子があるが、生れつき
啞なので、
《略》。

八93 此所では女の先生が、生徒に五十音の發音を教へてゐられた。

九58 《略》、七八人の男や女が向ひ合つて、片足をふみ出し、掛聲を合はせながら、ばたんばたと鼓竿で奏を打つてゐる。

九60 男も女もひたひの汗を、ほこりだらけの腕でふきながら、にぎやかに打續ける。

十106 《略》、御母上様には去る二日御安産にて、玉の様な女の子御生れの由承り、誠にめでたくうれしき限りと存じ候。

十二38 《略》、《略》。ほんたうに一度でもよいから、演奏會へ行つて

聴いてみたい。」と、情ないやうにいつてゐるのは若い女の聲である。

十二55 不意にばた／＼と音がして、小さな子どもが二人奥からかけ出して來た。男の子と女の子である。

十二56 女の子は唯じつと見まもつてゐたが、やがてかの小さなねちを見附けて、「まあ、かはい、ねち。」

十二58 仕事臺のそばに、ふさぎこんで下を見つめてゐた女の子がそれを見附けて、思はず「あら。」と叫んだ。

十二71 ゴネリルは決して氣だてのやさしい女ではなかつた。

おんな「御名」(名) 3 御名
五41 尊は其のころ、やまとをぐなといふ御名で、御年はわづかに十六でいらつしやいましたが、
《略》。

五45 「われは天皇の皇子やまとをぐな。」
《略》。今御名をさし上げます。日本武皇子と申したまへ。」といつて、息がたえました。

十107 御名は何と付けられ候や、これも早く承りたく、御知らせ待ち上げ候。
《略》。叔母より、さち子どものおんなたち「女達」(名) 1 女たち

九59 赤いたすきを掛けた女たちがよい聲で歌をうたふと、
《略》。

おんなつかし「御懷」(形) 1 御なつかし「一シク」
十二120 《略》、先生には何時も御壯健の由、何よりのことに御座候。

私のこと御心にかけ下され、常に「小山はどうしてゐるだらうか。」と仰せらるゝ由、いよく御なつかしく存じ奉り候。

おんなで「女手」(名) 1 女手
九114 或日我が軍艦高千穂の一水兵が、女手の手紙を読みながら泣いてゐた。

おんなども「女共」(名) 2 女ども
五42 大ぜいの女どもにまじつていらつしやいますと、たけるは尊を見つけて、自分のそばへ呼びました。

七100 秀吉は城の庭にしき物をのべさせ、
《略》。御臺所やおそばの女どもと居りました。

おんにわ「御庭」(名) 3 御庭
十310 第一 明治神宮參拜
《略》。何れも、御在世中しばらく行幸・行啓ありし所にて、當時の御殿・御庭などの、今も其のまゝに保存せらるゝなりとぞ。

十43 《略》、まづ社務所の隣なる舊御殿を拜觀す。御殿は質素なる平屋にて、御庭の此所彼所に、下葉の色づきかけたるはぎ茂れり。

十132 高德《略》、夜にまぎれて行在所の御庭にしのび入り、大いなる櫻の幹をけづりて、大文字に詩の句を書きつけたり。

おんねがいもうしあゝ「御願申上」(下二) 1 御願ひ申し上げ「一ゲ」
九113 《略》三毛の子猫、もは

や大きくなり候事と存じ候。近き中に頂きに上りたく候に付き、何日頃がよろしく候や、御知らせ下されたく、御願ひ申し上げ候。九月二十

日 みよ子 伯母上様
おんはがき「御葉書」(名) 1 御葉書
十106 《略》さて御父上様の御葉書ならびに御前様の御手紙により、御母上様には去る二日御安産にて、玉の様な女の子御生れの由承り、
《略》。

《略》。叔母より、さち子どものおんはなし「御話」(名) 2 御話
十109 承り候へば、御祖母様には先日より御病氣の處、
《略》。去る十九日遂に御死去遊ばされ候由、誠に驚き入り候。
《略》。

《略》。大兄と共にいろいろ御話を承り候事など、今更のやうに思ひ出され候。

十一41 昨日御地より歸村せられたる河井氏の御話によれば、
《略》。

おんはうえさま「御母上様」(名) 2 御母上様
十106 《略》、御母上様には去る二日御安産にて、玉の様な女の子御生れの由承り、
《略》。

叔母より、さち子どものおんはなし「御話」(名) 1 御話
十108 《略》、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下された

おんひま「御暇」(名) 1 御ひま
十108 《略》、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下された

く候。〈略〉 叔母より さち子どもの
おんふたかた 「御二万」 (名) 1 御二
方

十24図 明治天皇・昭憲皇太后御二
方のおほみたま、とこしへに此所に
しづまりましますと思へば、〈略〉。

おんまえ 「御前」 (名) 3 御前

十70図 やがて命ありて御前に召さ
れぬ。〈略〉、最明寺入道時頼はる
かの上座より、〈略〉。

十713図 〈略〉、常世はちぎれたる具
足を着け、〈略〉、進みて御前にかし
こまれば、最明寺入道時頼はるか
の上座より、〈略〉。

十729図 一同謹んで承る中に、常世
は有難き身にしみ、喜にみちて御前
を退きけりとぞ。

おんみ 「御身」 (名) 3 御身

六841 おそれ多くも龜山上皇は、御
身をもつて國難に代らうと、おいの
りになった。

九108図 其の時、御供にしたがひ給
へる弟橘媛、尊の御身危しと見給
ひ、〈略〉。

十9810図 〈略〉、張弘範、文天祥に
説きていはく、「宋」びぬ。御身の
忠義を盡くすべき所なし。〈略〉。

おんみがわり 「御身代」 (名) 1 御身
代り

九111図 其の時、御供にしたがひ
給へる弟橘媛、尊の御身危しと見

給ひ、「これ海神のたゞりならん。
われ皇子の御身代りとなりて海に入
り、神の御心をなだむべし。〈略〉。」
といひて、〈略〉。

おんみまい 「御見舞」 (名) 3 御見舞

九1137図 〈略〉 佐野先生、先頃よ
り御病氣の由承り候。早速御見舞に
參上致したく存じ候へども、御住所
不明にて困り居り候。〈略〉 下田英
太郎 吉野萬吉君

十一427図 尚當地産の葛粉少々御
見舞の印までに御送り申上候間、御
受納下され度候。〈略〉 馬場要助
春田延太郎様

十一428図 先づは御見舞までかく
の如くに御座候。

おんもよう 「御模様」 (名) 1 御もや
う

六1058図 御門の前でうやうやしく拜
禮してから、神殿の御もやうを拜し
た。

おんやくそくいたす 「御約束」 (四)

1 御約束致す 《一シ》

九1127図 先日遊びに上り候節御約
束致し候三毛の子猫、もはや大きく
なり候事と存じ候。近き中に頂きに
上りたく候に付き、〈略〉。九月二
十日 みよ子 伯母上様

おんやしる 「御仕」 (名) 1 御やしる

十二264図 由比の濱邊を 右に見
て、雪の下道 過行けば、八幡宮
の 御やしる。

おんやすみ 「御休」 (名) 1 御やすみ

十1077図 〈略〉、御母上様には去る
二日御安産にて、〈略〉。〈略〉。御母
上様はまだ御やすみにて、〈略〉。

おんゆるしくださる 「御許下」 (下二)

1 御許し下さる 《一レ》

十二1198図 第二十四課 舊師に呈
す。〈略〉。失禮の段御許し下された
く候。

おんよろこび 「御喜」 (名) 1 御喜

十1071図 男ばかりの御兄弟の中に
此の度始めて妹を得られ候事、御前
様の御喜さぞかしと察し申し候。
〈略〉 叔母より さち子どもの

おんれい 「御礼」 (名) 1 御禮

十一441図 御親切なる御手紙有難
く拜見仕候。尚又結構なる葛粉御送
り下され、〈略〉。〈略〉。先づは取り
あへず御禮まで。〈略〉 春田延太郎
馬場要助様

おんわ 「溫和」 (形状) 3 溫和

十一741 宣長はまだ三十歳餘り、溫
和なひと、なりのうちに、どことな
く才氣のひらめいてゐる篤學の壯年。

十二1343 其の上我が國の美しい風景
や溫和な氣候は、〈略〉。

十二13410 溫和な氣候や美しい風景は、
人の心をやさしくし、〈略〉。

おんわび 「御詫」 (名) 1 御わび

十二12110図 先づは御無沙汰の御わ
びかたぐ近況御知らせ申上候。
〈略〉 小山文太郎 大井先生

か

か 「火」 (名) 4 火

十一89図 六日 火 海王星衝 かのえ
いぬ

十一89図 一日 火 ○望前六時三十分
きのえいぬ

十一89図 四日 火 かのえたつ

十一89図 二十五日 火 ○望前十時十
六分

か 「香」 (名) 4 香

十1011図 〈略〉、一足温室の中にはいる
と、〈略〉。とりぐの花の色、むせ
返るやうな強い香、〈略〉。

十一654 はてしなく續く廣野の中で、
人々は自由な大氣を呼吸しながら、
土の香に親しんで樂しげに働いてゐ
る。

十一8010図 高く鼻つくいその香に、
不斷の花のかをりあり。

十二995図 〈略〉、咲く花のにはふが
如しと誇りし奈良の都も、色移り香
失せて年既に久しく、〈略〉。

か 「家」 〓おんがくか・ぎじゅつか・
ざいさんか・すみか

か 「實」 〓せいどうか・はくどうか

か 「箇」 〓いつかげつ・ごかそん・さ
んかしよ・じゅうさんかしよ・じゅう
にかげつ・にさんかげつ

か「課」↓だいいつか・だいくか・だ
いごか・だいさんか・だいしか・だ
いしか・だいじつか・だいじゅうい
つか・だいじゅううか・だいじゅう
うか・だいじゅうさんか・だいじゅう
うか・だいじゅうしちか・だいじゅう
うか・だいじゅうはつか・だいじゅう
ろつか・だいじゅういつか・だいじゅう
ごか・だいにじゅうさんか・だいにじ
ゅうしか・だいにじゅうしちか・だいに
じゅうにか・だいにじゅうはつか・だ
いにじゅうろつか・だいはつか・だ
いろうつか

か「可」(形状) 2 可

十一74(四) 朝に道を聞くことを得
ば、夕に死すとも可なり。

十二115(二) 今日文明の利器と稱せら
るゝものにして、直接間接に彼の天
才によらざるもの殆どなしといひて
可なり。

か(副助) 116 か ↓いつか・どう
にか・どころか・なにかと・なんだ
か・なんとか

一30(二) ナンバキルカ、カゾヘテ
ゴラン ナサイ。

二20(七) モウ人ガヒロツタノ
カ、サツバリアリマセン。

二27(三) 略、ネコニトラレテ
コマルガ、ナニカヨイクフウ
ハアルマイカ。

二64(二) ナニカキカレマスト、コ

ノロデハツキリコタヘマス。
三51(三) ドコカヲカノ下デ、ニ
ハトリガナキマス。

三78(七) だれか川上の方で、さ
きほどからふえを吹いてゐま
す。

三83(八) どこからかよいにほひ
がして來ますので、(略)。

四11(七) 「やつとすんだ」と見
上げる空に、あすも天気か、
夕日が赤い。

四12(八) 略、ドツチガ多イカ、
クラブテミヨウ。

四14(一) ワタシタチノ方ガ少
イカモシレナイ。

四57(三) 何百年かたつた後、
(略)。

四63(二) だれかあの扇をいお
とすものはないか。

四68(六) どんなにか鳴いたのでせ
うが、うちのものは朝まで
しらずに居ました。

四78(二) それからどこへ行つて
居たか、村にもひさしく居ませ
んでした。

五5(八) 略、何百里かはなれてゐる
のでせう。

五60(六) だれがかけたか、虹の橋。
五61(四) 略、空の多きぬへ一筆

に、だれがかいたか、虹の橋。
五62(二) だれが渡るか、虹の橋。

五62(七) だれがけすのか、虹の橋。

五94(六) 「(略)。」といふおたづねが出
るかも知れませんが、(略)。

五99(四) 熊が君の耳の所へ口を持つ
て行つたやうだが、何か言つたのか。
六5(一) さうさ、中ほどまでは降つ
てゐるかも知れない。

六16(八) 何の木か、おがくづが大そう
よくはつてゐました。

六17(七) さあ、まだ早いかも知れな
いがね。

六29(四) 人間があなた方を生けど
りするには、いく人かで力を合はせ
るではありませんか。

六41(八) 輜重兵にも其の中にだれか
出るだらう。

六42(三) 分家の萬藏君などは小男だ
から、ひよつとすると輜重輪卒にあ
たるかも知れない。

六58(五) さて萬じゆは、だれか母の事
をいひ出す者はないかと氣をつけて
ゐますが、(略)。

六60(六) 八幡様の御引合はせか、門の
戸は細めに明いて居りました。

六67(六) 「さうかも知れない。」
六74(三) 春子、オ前ハ着物ヤ帶ノ地

ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマスカ。
六90(四) 此の時、「(略)。」と誰かがい
つたので、みんなが一度にふき出し

た。
六95(三) (略)、城から大石を四五十、
一度に落したので、又何百人かころ

された。

六96(四) すると正成は、何時の間に用
意して置いたか、たくさんなたいま
つを出して、(略)。

六96(八) 又賊は何千人か死傷した。
六100(八) 「(略)。」と、おかあさんが誰
かにおつしやつてゐる時、私は庭へ
出ました。

七13(五) (略)、何百人か数へきれない
程ゐる。

七14(五) 妹やお松は何があつたのか、
笑ひながらしきりに取つてゐる。

七15(五) 潮がだんだんさして來て、何
時の間にか洲が見えなくなつた。

七32(七) かくて幾年かすぎし後、武
士は海をこえてふるさとへ歸ること
となれり。

七65(六) もし此の大金がなかつたら、
氣がちがつて死ぬやうな事になるか
も知れぬ。

七68(三) かの男はゆめかとばかり喜ん
で、財布を幾度かいたゞきましたが、
(略)。

七72(六) もしお金をもらつたら、あ
なたの氣はそれですむかも知れませ
んが、私の氣がすみません。

七73(一) (略)、どうかすると、其の
日のくらしにこまるやうなこともあ
ります、(略)。

七76(六) 「誰か居るか。」
七76(九) 「誰か居るか。」

八8(七) 三番太鼓が鳴るが早い、五
匹の馬は一さんかけ出した。

八237 四十餘年はいつの間にか過ぎて、もう供へる首がなくなりました。
 八356 幾年かの後、里子を返してもらはうとすると、〈略〉。
 八389 〈略〉、何時の間にか、ぐつすりねこんでしまひました。
 八472 此の爲替はほんのわづかですが、何か好きな物を買つて上げて下さい。
 八493 サウシテ何力地上ニエモノヲ發見スルト、〈略〉。
 八529 二目目で小さなおそなへが幾かさねか出来、三目目からは、のし餅が出来た。
 八88 信吉はびつくりして、〈略〉。「略」。もう一つ何とか言つておくれ。」といつて、娘を引きよせて、〈略〉。
 八897 聞えるなら、もう一つ何か言つておくれ。
 八1067 分業で仕事をする時、誰か一人の手ぎはが惡いと、全體の出来までも惡くなる。
 八1137 大將が何か食物の中にきらひな物があると見れば、〈略〉。
 九153 〈略〉、めんどりはせはしげに幾度か土をかきちらして、餌をあるにいとそがしく、〈略〉。
 九218 病みつかれた六十ばかりの老人が、〈略〉、十五六の少年に、熱心に何か言聞かせてゐる。
 九283 信季は其の後幾日かたつて、

とうく此の宿でなくなつた。
 九3210 〈略〉十時過ぎの日かげが、若葉の色を下に投げるのか、手もうす緑、足もうす緑、帯も着物も皆うす緑。
 九585 何所からかにぎやかな歌が聞えて来る。
 九748 陸中と陸奥との境にある幾つかのトンネルをくぐると、廣い原野がだんくく開けて来る。
 九817 廣き工場の片すみに、安ぢいさんはせぐぐまり、常に何をか刻みある、めがねを掛けてはつび着て。
 九831 ぢいさん〈略〉、なほ怠らずこつくと、何をか常に刻みある、めがねを掛けてはつび着て。
 九856 どの星かを見おぼえて置いてごらん、寝る頃にはもう位置が變つて見えるから。
 九958 眞夏の日中でも、杖を握つてゐる手などは、何時の間にかつまくなつてしまひます。
 九9710 〈略〉、僕等も何時の間にか、山の上に居るやうな氣持になつて聞きました。
 九1008 昨夜雨が降つたせゐか、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近く見える。
 九1178 如何ばかりの思にて此の手紙をしたゝめしか、よくよく御察し下されたく候。

十87 此の水浴が體にさはつたものか、王は俄にはげしい熱病にかつた。
 十129 誰かが力石をころがして来て、土をはらつて高橋さんの爲に席を作つた。
 十413 何處からか、ほがらかなひよどりの聲が聞える。
 十534 〈略〉、又何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。
 十778 遠足好きの君なら、毎日何處へか出かけたてたまらないだらうと思ひました。
 十804 〈略〉、じつと目をつぶつてゐるうちに、何時の間にか、地下九百尺の坑底に着きました。
 十1028 中をのぞいて御らん、何かはいつてゐるやうだから。
 十1058 外はさつきよりも一そう風が強くなつたのか、ガラス越しに見える向ふの木がひどくゆれる。
 十1179 此の一事で、家の中がどんなによく整頓されてゐるかが想像されます。
 十1202 ところで、どういふ事をすれば罪になるか、其の制裁としてどのやうな刑罰を受けるかは、法律で明かに定めてあるから、〈略〉。
 十1202 〈略〉、其の制裁としてどのやうな刑罰を受けるかは、法律で明かに定めてあるから、〈略〉。

十一241 〈略〉、幾頭かの馬をひきて余吾湖のほとりに下り來れる七八人の兵卒あり。
 十一384 木でも見下されるのがいやなのか、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。
 十一413 あ、西の空がほんのり明るい。明日は晴かも知れない。
 十一457 さらば謝恩の爲に何か畫がきて參らすべし。
 十一556 初は十間以上も相手をぬいてゐたが、どうしたのか急に相手にぬかれて、一二間も後れてしまつた。
 十一567 老砲手は「逃げろく。」と聲を限りに叫んでゐるが、二人の耳にはいらぬのか、夢中で泳ぎくらを續けてゐる。
 十一719 「先生がどうしてこちらへ。」「略」。さつき御出かけの途中『何か珍しい本はないか。』と、御立寄り下さいました。
 十一748 〈略〉、宣長は「略」。それについて何か御注意下さることはございますまいか。」
 十一755 そこで先づ順序として萬葉集の研究を始めたところが、何時の間にか年をとつてしまつて、〈略〉。
 十一1006 「辨しやうすることが出来ませんから、其の代りに何か仕事をさせて下さい。」と願つた。

十一118 8 ジョージがとんで行つて門の戸にくわぬきをさすが早いか、騎馬の人たちはもう門の外まで乗りつけた。

十二96 図 なぎさに立ちて昔をしのべば、〈略〉、打寄する波の音さへ何事かを語るに似たり。

十二115 温順な彼は父の命に従つて勉強してゐたが、何時の間に好きな博物學の研究が主となつてしまつた。

十二124 此の時にはもう三番目の蟲はどこへ行つたかわからなかつた。

十二133 ダーウィンは〈略〉、一度何かをし始めたなら、満足な結果を得るまでは決して途中でやめなかつた。

十二170 図 〈略〉、原稿締切時刻より刷出まで其の間僅かに數十分、以て其の如何に速なるかを知るべし。

十二402 図 實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが、——あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふお話をしたね。

十二416 ベートーベンの兩眼は異様に輝いて、彼の身には俄に何者かが乗移つたやう。

十二417 一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか彼自らも覺えないやうである。

十二666 図 お前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、わしはそれが知りたいのだ。

十二685 図 コーデリヤは唯うつむいて、「父上、私はどう申し上げてよいかわかりません。」

十二686 王は自分の耳を疑ふかのやうに目を見張つた。

十二687 図 なに、どう申し上げてよいかわからぬ。

十二727 王は二三の忠臣にかしづかれて、とある小屋に一夜を明かしたが、何時の間にかもう發狂してゐた。

十二745 やがて眠から覺めた王は、幾分氣も靜まつたのか、「此處は何處だらう。〈略〉。」といつてあたりを見廻し、そばに居るコーデリヤを見て、「これはどなたであらうな。〈略〉。」

十二886 法律を制定するには、政府又は貴衆兩院の何れかが其の案を作成して議會に提出する。

十二895 又貴衆兩院の何れから提出された案は、他の一院のみで討議し、可決すれば同じ手續によつて奏上する。

十二978 殊にデーバダッタは、〈略〉、かねてから釋迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。

十二1048 〈略〉、昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。

十二1074 かくて又幾年かたつうちに、穴はだん／＼奥行を加へて、既に何十間といふ深さに達した。

十二1089 かうして又幾年か過すうちに、村の人々は此の仕事にあきて來た。

十二1103 老僧の終始一貫した根氣は、遂に村人を恥ぢさせたものか、仕事を助ける者が又ぼつ／＼と出來て來た。

十二1282 図 安芳がいふ、「官軍方の御意見はどのやうなものか存じませんが、拙者の考へる所では、〈略〉。」

十二1294 図 官軍方の思召通り一押にはゆかぬかも知れませぬ。

十二1316 図 安芳は自分の胸を指さして、「次第によつては、或は君等の銃先にかゝつて死ぬかも知れぬ。〈略〉。」といひながら、〈略〉。

か (係助) 1 か
十二333 図 1 づ方に志してか、日盛りの やけたる道を蟻の行くらむ。

六304 さあ大へん、何千匹か何萬匹か、數かぎりもない蟻がまつ黒になつて、出て來ました。

六304 さあ大へん、何千匹か何萬匹か、數かぎりもない蟻がまつ黒になつて、出て來ました。

六425 図 お前は今の分では大男になりさうだから、砲兵か騎兵になれるだらう。

七631 水になれた人夫の肩に乗るか、手をひいてもらふかして渡るのでございます。

七631 水になれた人夫の肩に乗るか、手をひいてもらふかして渡るのでございます。

九206 コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐レル武器ヲソナヘテキルカ、イヤガル味ヤニホヒノアルモノデ、〈略〉。

十148 図 私が今度歸つて來て、はじめて青年團の規約を見た時は、〈略〉、これがまじめに實行されてゐるかどうかと、少し氣になつたのでした。

十148 図 〈略〉、これがまじめに實行されてゐるかどうかと、少し氣になつたのでした。

十575 鳩に手紙を運ばせるには、足にアルミニウムカセルロイドの細いくだを附け、〈略〉。

十一387 毎年春の初か冬の半ばにする枝打は、面白いものだ。

十一516 此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあとに種をまくか、又は苗木を植付けるのであるが、〈略〉。

十一616 〈略〉、突如として眼前に展開せられた風景は、雄大といはうか豪壯といはうか、恐らく全道第一の壯觀であらう。

十一616 〈略〉、雄大といはうか豪壯といはうか、恐らく全道第一の壯觀であらう。

か (終助) 201 カ かゝじゅうしさいのときかにどあるか・ものか
一213 図 デンデンムシムシ カタツ

五392 図 〈略〉よく物賣に來るおぢいさんが、〈略〉、「皆さん、遠足かね。」といつて通りました。

五595 ことにしほのみちた時は、〈略〉、お話にある龍宮はこれかと思はれます。

五636 図 おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、まだ一里半もあるのですか。

五646 図 神明様のこちらにある白壁造の家は工場ですか。

五684 図 昔此の村はひどく貧乏で、此の村の名を言ふと、「あゝ、あの貧乏村か。」と言はれたものだからだ。

五718 図 「そんな大きな池があるだらうか。」と言つて、首をひねる者もあつたといふが、〈略〉。

五834 図 おとうさんにうかゞひますと、叔母さんの町に大水が出たさうです。皆様におけがもございませんでしたか、お見舞を申し上げます。

九月七日 竹子 叔母上様

五945 図 「それにはどんな事が書いてあつたか。」といふおたづねが出るかも知れませんが、〈略〉。

五994 図 熊が君の耳の所へ口を持つて行つたやうだが、何か言つたのか。

六411 図 〈略〉、おぢいさんが庭で腰をのばして、「もうお晝かな。」とおつしやいました。

六75 図 外國には、新高山より、も

つと高い山がありますか。

六87 図 高くて名高いのは、どの山ですか。

六128 図 ヤクワンハ之ヲ聞イテ、「ソレデモ鐵ハデキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」ト言ヒマシタ。

六175 図 此の近くに、しめぢの出る所はありませんか。

六296 図 だつて分り切つた事でせう。人間があなた方を生けどりにするには、いく人かで力を合はせるではありませんか。私もだつて、大ぜいしてかゝれば、あなた方に負けません。

六402 図 お前はなぜ自分の村の人と見物しなかつたかと思ふだらうが、〈略〉。

六586 図 さて萬じゆは、だれか母の事をいひ出す者はないかと氣をつけてゐますが、〈略〉。

六591 図 あゝ、母はもう此の世の人ではないのかと、力をおとして居りました。

六617 図 萬じゆがかげよつて、らうのとびらに手をかけますと、「たれか。」と、らうの中から申しました。

六625 図 「何、萬じゆ。木曾の萬じゆか。」と、親子は手を取合つて泣きました。

六743 図 春子、オ前ハ着物ヤ帶ノ地ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマスカ。

六752 図 毛絲デオツタ物ニハ、ドンナ物ガアリマスカ。

六754 図 「ラシャトフランネル。」

「ソレダケデスカ。」

六755 図 「セルモサウデセウカ。」

六766 図 其ノキレイナモヤウハ、ドウシテツケルノデセウカ。

六1034 図 一 入營中の兄へ 其の後おさはりもございませんか。〈略〉。

うちにも村にも、かはつた事はありません。三月十八日 千太 兄上様

六1048 図 宇治橋を渡つて神苑に入り、千年もたつたかと思ふ老木の下へ行つた時には、〈略〉。

七55 図 八百萬の小學生、四列になりて歩かんか、八十萬間つくべし。

七415 図 年は六十四五でもあらうか、腰に小さなふろしきづつみをむすびつけてゐる。

七569 図 急に暴風雨が來ると、山のやうな波が立つて、船は今にも沈むかと思ふやうになります。

七666 図 「あなたは今朝一人で川をこした方ではありませんか。」

七683 図 〈略〉、人夫は財布を出して渡しました。かの男はゆめかとおばかり喜んで、財布を幾度かいたゞきましたが、〈略〉。

七766 図 毎朝げんくわんへ出て、「誰か居るか。」と呼ぶと、いつも藤

吉郎が眞先に出て來た。

七769 図 或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、「誰か居るか。」と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て來た。

七772 図 「そち一人か。」

七906 図 「かうですか。」

七1018 図 上様をはじめ皆様、おしの下になつては居られぬかと存じ、〈略〉。

七1039 図 御門を守る者は誰か。

七1057 図 小西程の者を堺の町人とのゝしり、又明國への返書に豊臣清正と記したといふが、それはまことの事か。

七1106 図 「あゝ、信吉からだ。よんでごらん。」「ハナシデキタイツクルヘン。」「さうか。それでは明日の一番で立たう。」

七1107 図 「おとうさん、ヘンとは何のことですか。」

八156 図 〈略〉、頼宣は顔色をかへて、「やあ、正綱、十四歳の時が二度あるか。」といった。

八299 図 此の時太郎が、炭はどうして焼くのかときくと、其の男はていねいに教へてくれた。

八464 図 二 主人から小ぞうへ 其の後どうかと案じてゐましたが、手紙を見て安心しました。

八759 図 〈略〉、一人の男が「大洋を西へく」と航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がらだらう

か。」といって冷笑しました。

八七六 人々は何の爲にこんなことをいひ出したかと思ひながら、やつて見ましたが、〈略〉。

八七七 〇とうさん、此の雪降りに、何所へお出でになりますか。」

八七八 〇明日にでもなつて、雪がはれてからではいけませんか。」

八七九 〇今手に持つていらつしやるのは、みんな切符ですか。」

八八〇 〇それをみんなうちで納めるのですか。」

八八一 〇縣や國の税も、村の役場へ納めれば、よいのですか。」

八八二 〇どのうちでも、納める金高は同じですか。」

八八三 〇水にはこれといふ形がない。〈略〉。それでは弱いものかといふに、さうではない。

八八四 〇母が「とよちゃんかね。丈夫であるよ。」といふと、〈略〉。

八八五 〇あゝ、あなたが先生でいらつしやいますか。娘が大そうお世話様になります。

八八六 〇先生はおとよに、低い聲で言われた。「此の方はどなたですか。」

八八七 〇おとよ、お前はものが言へるやうになつたのか。ありがたい。

八八八 〇おとよ、わしの言つてるところがわかるか。わしの聲が聞えるか。

八八九 〇わしの聲が聞えるか。聞えるなら、もう一つ何か言つておくれ。

八九〇 〇信吉は〈略〉、〈略〉、〇おとよ、おとうさんが歸つて来て、うれしか。」と大きな聲で言つたが、〈略〉。

八九一 〇信吉は少しはなれて、〈略〉、〇おとよ、おとうさんが歸つて、うれしか。」と言つた。

八九二 〇先生、私の娘にもあつて教へて下さつたのでせうか。どうも恐れ入つたことだ。」

八九三 〇此の時胃は一同に向つて言ひました。「君等はいかなることは知らなかつたのですか。」

八九四 〇しかし之を一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。

八九五 〇ホンタウニ面白イデハナイカ。

八九六 〇おとうさんは「お前にもさう見えるかね。」とおつしやつて、〈略〉。

八九七 〇副長もはや上甲板にあらはれて、今日の天氣はどうかと空をながめる。

八九八 〇叔父さん、此所は何所で

八九九 〇「あゝ、あの角の石屋か。」と、誰もうなづく工場あり。

九〇〇 〇「ちいさん、今度は何ですか。」

九〇一 〇何時頃までに出來ますか。」

九〇二 〇「にいさん、空にはあんなにたくさん星が見えますが、少しも動かないのですか。」

九〇三 〇それでも航海をする人などが、よく星を見て船の位置をはかるといふではありませんか。

九〇四 〇それは何といふ星ですか。

九〇五 〇それはまた都合のよい事がある。何かといふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九〇六 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九〇七 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九〇八 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九〇九 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九一〇 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九一一 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九一二 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九一三 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九一四 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九一五 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九一六 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九一七 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九一八 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九一九 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九二〇 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

九二一 〇雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。

ノデスカ。」

九二二 〇醫師は皆、投薬してもし萬一の事があれば、毒殺のうたがひを受けはしないかと恐れて、〈略〉。

九二三 〇打返す磯波にまき込まれたかと思へば、忽ち大波にゆり上げ、ゆり下げられながら、沖へくつき進む。

九二四 〇或日の夕方、喜三右衛門はあわたとしく窯場から走り出た。

九二五 〇薪は無い。薪は無い。

九二六 〇薪は無い。薪は無い。

九二七 〇薪は無い。薪は無い。

九二八 〇薪は無い。薪は無い。

九二九 〇薪は無い。薪は無い。

九三〇 〇薪は無い。薪は無い。

九三一 〇薪は無い。薪は無い。

九三二 〇薪は無い。薪は無い。

九三三 〇薪は無い。薪は無い。

九三四 〇薪は無い。薪は無い。

九三五 〇薪は無い。薪は無い。

九三六 〇薪は無い。薪は無い。

九三七 〇薪は無い。薪は無い。

九三八 〇薪は無い。薪は無い。

九三九 〇薪は無い。薪は無い。

九四〇 〇薪は無い。薪は無い。

九四一 〇薪は無い。薪は無い。

九四二 〇薪は無い。薪は無い。

九四三 〇薪は無い。薪は無い。

九四四 〇薪は無い。薪は無い。

九四五 〇薪は無い。薪は無い。

九四六 〇薪は無い。薪は無い。

九四七 〇薪は無い。薪は無い。

九四八 〇薪は無い。薪は無い。

九四九 〇薪は無い。薪は無い。

九五〇 〇薪は無い。薪は無い。

九五一 〇薪は無い。薪は無い。

九五二 〇薪は無い。薪は無い。

差上げる物はあらうか。」

十715 園 〈略〉、最明寺入道時頼はるかの上座より、「それなるは佐野源左衛門常世か。〈略〉。」

十732 園 皆様御かはりはありませんか。

十923 園 「何といふ言葉ですか。」

十926 園 大變やさしい言葉ではありませんか。どうしてそんなに言ひにくいのです。

十943 園 父は「〈略〉。かねてあふないといつて置いた、あの橋を渡つたのでは無いか。」とたづねたが、太郎はだまつてゐた。

十948 園 父は「なぜ其の時『〈略〉』と、きつぱりことわらなかつたのか。」

十963 園 「それ御らん。『はい。』も言ひにくい言葉では無いか。」

十1036 成程、緑色の絹糸で作つたのかと思はれるやうな葉もあれば、〈略〉。

十1038 中には、まるで花かと思はれる紅色の葉が、莖の上の方に群がって出てゐるものもある。

十1096 園 〈略〉、此の度の御報は全く夢かと存ぜられ候。

十1097 園 大兄をはじめ皆様方の御悲歎、如何ばかりかと御察し申し上げ候。

十1218 後日、人が主人に向つて、どういふお見込で、あの青年をお用ひ

になつたのかと尋ねた。

十1314 園 〈略〉、さらばとて備前と播磨との境なる舟坂山にかくれ、今かくと待ち奉れり。

十1314 園 〈略〉、今かくと待ち奉れり。

十1510 園 「本や帳面はどうしていらつしやいますか。」

十1331 園 船の其の間を行く時、島かと見れば岬なり。岬かと見れば島なり。

十1332 園 岬かと見れば島なり。

十1371 園 あの時、「こんなに間をおいてよいのですか。」と僕が聞いたら、〈略〉。

十1478 園 〈略〉、畫師驚きて、「我が心に思ひ構へし事を如何にして知り給へるか。」と問ふ。

十1497 一體ゴムは何からどうして造るのであらうか。

十1661 一體人は最初どうして火を得たであらうか。

十1689 將來は又どんなものが發明されて、今のガスや電気にかはることであらうか。

十1699 園 隣に坐つてゐた僧が之を聞いて、「無言の行に口をきくといふ事があるか。」

十1719 園 〈略〉、さつき御出かけの途中『何か珍しい本はないか。』と、御立寄り下さいました。

十1749 園 それについて何か御注意

下さることはございますまいか。

十18510 僕も急に元氣がなくなつて、一所に船に上らうかと思つたが、〈略〉。

十1899 園 弟は尚あちらこちらをくつてゐるうち、〈略〉、「こゝに『八十八夜』とありますが、これは何ですか。」

十1902 僕はこれまで暦といふと、今年は紀元何年であるか、何月何日は何曜日であるか、祝祭日・土用・彼岸・入梅・日食・月食が何時になるかといふやうな事を見るものとはばかり考へてゐたので、〈略〉。

十1903 園 〈略〉、何月何日は何曜日であるか、〈略〉。

十1904 園 〈略〉、祝祭日・土用・彼岸・入梅・日食・月食が何時になるかといふやうな事を見るものとはばかり考へてゐたので、〈略〉。

十1916 園 それから雨雪の量は何處が一番多いか、又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。

十1916 園 〈略〉、又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。

十1926 園 「どうして太陽暦を用ひるやうになつたのですか。」

十11142 一體自治の精神とは何であるか。

十112310 何が出来るであらうかと思

つてゐると、いろ／＼扱つてゐるうちに臺付のコツプになつた。

十12106 園 又父には「お前のやうに犬の世話やねずみを取ることにばかり熱心では困るではないか。」といつて叱られたことがあつた。

十12162 園 然らばかくの如き新聞は如何にして編輯せられ、印刷せられ、讀者に配布せらるゝか。

十12197 園 沖を走るは丸屋の船か、丸にやの字の帆が見える。

十12377 園 聴き給へ。なか／＼うまいではないか。

十12386 園 「そんなことをいつたつて仕方がない。家賃さへも拂へない今の身の上ではないか。」と兄の聲。

十12428 園 しばらくして兄は恐る恐る近寄つて、〈略〉、「一體あなたは どういふ御方でございますか。」

十12432 園 「あゝ、あなたはベートーベン先生ですか。」きやうだいは思はず叫んだ。

十12448 園 「先生、又お出で下さいませうか。」きやうだいは口を揃へていつた。

十12601 園 一日おいて町長さんが來た。「時計は直りましたか。」

十12616 園 更に思へば、白地は我が國民の純正潔白なる性質を示し、日の丸は熱烈燃ゆるが如き愛國の至誠を表すものともいふべきか。

十12688 園 それでは返事にならぬで

はないか。

十二75 〇 「涙をこぼしてくれるのか。お前はわたしをうらんでゐるはずだが。」

十二92 〇 「人は何の爲に此の世に生れて來たのか。我々の行末はどうなるだらうか。」

十二92 6 〇 我々の行末はどうなるだらうか。

十二105 7 僧は名を禪海^{ぜんかい}といつてもと越後の人、^略、たま／＼此の難處を通つて幾多のあはれな物語を耳にし、どうにか仕方はないものかと深く心をなやました。

十二108 5 そこで人々はいつそ我々も出來るだけ此の仕事を助けて、一日も早く洞門を開通し、老僧の命のあるうちに其の志を遂げさせると共に我々もあのくさり戸を渡る難儀をのがれようではないかと相談して、^略。

十二120 4 〇 私のこと御心にかけ下され、常に「小山はどうしてゐるだらうか。」と仰せらるゝ由、^略。

十二136 5 ^略、出來る限り早く之を一掃することは我々の務ではあるまいか。

十二136 10 しかし此の半面にもまた短所がうかゞはれないであらうか。

十二138 6 しかし其の半面には、物にあき易く、あきらめ易い性情がひそんでゐるはないか。^略。こゝにもま

た我々の反省すべき短所があるやうである。

十二138 7 堅忍不拔あくまでも初一念を通すねばり強さが缺けてはゐないか。

が [画] ↓しようにぞうが

が (格助) 2231 が が ↓いなむらがさき・おにがしま・かすみがうら・きみがよ・しずがたけ・しずがたけふきんのず・しちりがはま・じゅうしさいのときがにどあるか・すすきがはら・なすのがはら・のりくらがだけ・はちがみね・はるがきた・ふたみがうら・やけのがはら・やりがたけ・やりがだけ

— 4 1 カラスガキマス。

— 4 3 スズメガキマス。

— 5 1 ウシガキマス。

— 5 2 ウマガキマス。

— 5 4 ウシトウマガキマス。

— 6 1 ハサミガアリマス。

— 6 3 モノサシガアリマス。

— 7 1 オミヤガアリマス。

— 7 3 オテラガアリマス。

— 8 1 イヌガキマス。

— 8 5 シロイイストクロイイスガキマス。

— 9 2 オヤネコトコネコガキマス。

— 9 4 コネコガニヒキキマス。

— 10 1 サルガカキノタネヲカ

ニニヤリマシタ。

— 10 4 カニガニギリメシヲサル

ニヤリマシタ。

— 13 2 〇 ハヤクミガナレ。

— 14 1 ミガナリマシタ。

— 14 2 サルガミツケテトリマシ

タ。

— 15 1 カニガシニマシタ。

— 15 2 コガニガナイテキマス。

— 15 5 ハチガキテ、ナクワケヲ

タツネマシタ。

— 16 1 ハチガキテオコリマシ

タ。

— 17 3 クリガトビツキマシタ。

— 17 5 サルガヤクドヲシマシタ。

— 18 1 サルガミツツケニイ

キマス、ハチガチクリトサシ

マシタ。

— 18 4 サルガミヅツケニイ

キマス、ハチガチクリトサシ

マシタ。

— 18 6 サルガニゲダシマシタ。

— 19 1 ウスガオチテキテ、サル

ヲオシツケマシタ。

— 19 4 コガニガサルノクビヲ

ハサミキリマシタ。

— 20 1 アメガヤミマシタ。

— 20 2 ヒガテリダシマシタ。

— 20 5 スズシイカゼガフイテ、

ヨイココロモチデス。

— 21 3 〇 デンデンムシムシ カタツ

ムリ、アタマガアルカ、メガ

アルカ。

— 21 4 〇 デンデンムシムシ カタツ

ムリ、アタマガアルカ、メガアルカ。

— 22 1 ニイサンガエヲカイト

キマス。

— 22 3 ネエサンガジヲカイト

キマス。

— 22 5 マサヲガソバデミテキ

マス。

— 23 1 ホタルガトンデキマス。

— 23 6 アチラニモ、コチラニモ、

ホタルヲヨブコエガシマス。

— 24 2 ハスノハニツユガタマ

ツテキマス。

— 24 4 カゼガフクト、コロコロ

コロガリマス。

— 25 1 ヘチマノハナガサキマシ

タ。

— 25 7 イマニナガイミガナリマ

ス。

— 29 2 ヤマニハ、キガウエテア

リマス。

— 29 6 カハニハ、ハシガカケテ

アリマス。

— 30 1 〇 アヒルガオヨイデキマ

ス。

— 32 1 ヒノミノカネガナツテ

キマス。

— 32 3 ヒケシガトンディキマス。

— 33 2 ハシゴノアトカラマトヒ

ガイキマス。

— 33 6 マトヒノアトカラポンプ

ガイキマス。

- 341 ガンガトンデキマス。
 361 オハナガエンビツデアサガホヲカキマシタ。
 385 オチヨサンノウチデハ、オザシキニアカリガツイテキマス。
 395 ハヤクカヘラナイト、オヂイサンヤオバアサンガシンパイナサイマス。
 443 ムカシムカシ、オヂイサントオバアサンガアリマシタ。
 451 オバアサンガセントクヲシテキマス、オホキナモモガナガレテキマシタ。
 453 オバアサンガセントクヲシテキマス、オホキナモモガナガレテキマシタ。
 461 オバアサンガモモヲキラウトシマス、略。
 464 略、モモガニツニワレテ、ナカカラオホキナヲトコノコガウマレマシタ。
 466 略、ナカカラオホキナヲトコノコガウマレマシタ。
 502 イヌヲケライニシテイキマス、サルガキマシタ。
 506 コンドハキジガキマシタ。
 542 罎 クルマニツンダタカラモノ、イヌガヒキダスエンヤラヤ。
 544 罎 サルガアトオスエンヤラヤ。
 545 罎 キジガツナヒクエンヤラヤ。
 25 イロイロナハタガカゼニヒラヒラシテキマス。
 35 ゴランナサイ、ミンナガチカラヲイレテ、一シヤウケンメイデス。
 43 オハナトオチヨガオキヤクアソビヲシテキマス。
 46 オチヨガオキヤクニナツテキマシタ。
 67 罎 「オカアサン、オカアサンハドノハナガ一バンオスキデスカ。」
 74 罎 オカアサンハアノシロイハナガスキデス。
 77 罎 「ワタクシハアノアカイ大キナハナガスキデス。」
 113 ベンケイガ大ナギナタデキリツケマシタ。
 132 木ノエダニ、コトリガ十パトマツテキマシタ。
 134 人ガテツパウデ、一ドニ三パウチオトシマシタ。
 142 犬ガサカナヲクハヘテ、ハシノウヘヲトホリマシタ。
 146 シタヲミルト、川ノナカニモサカナヲクハヘタ犬ガキマス。
 154 ホエルト、口ガアイデ、クハヘテキタサカナハ、川ノナカヘオチテシマヒマシタ。
 162 七 ユフヤケ 日ガハイリマシタ。
 164 人ガボツボツタンボカラカヘツテキマス。
 167 アチラノソラガマツカニナリマシタ。
 176 子ドモガ大ゼイ、オモテデ一シヨニウタツテキマス。
 183 ネエサン、デテゴランナサイ、月ガデハジメマシタ。
 184 マツノ木ノアヒダガダンアカルクナツテキマス。
 202 罎 コノ山ニハ、クリノ木ガタクサンアリマス。
 204 罎 ユフベカゼガフイタカラ、キツトクリガオチテキマス。
 205 罎 ユフベカゼガフイタカラ、キツトクリガオチテキマス。
 207 罎 モウ人ガヒロツタノカ、サツパリアリマセン。
 213 罎 ムカフニ大キナ木ガアリマスカラ、略。
 245 ミヨチヤンガイマオカアサンニダカレテ、オチチヲノンデキマス。
 262 ワタクシガアヤシテアゲルト、略。
 271 罎 コノゴロナカマノモノガ、ネコニトラレテコマルガ、ナニカヨイクフウハアルマイカ。
 275 略。「ト、年トツタネズミガナカマノモノニイヒマシタ。
 277 ソノトキ一ピキノ子ネズミガマヘデテイヒマシタ。
 283 罎 ヨイクフウガアリマス。
 291 罎 大キナスズヲネコノクビニツケテオイテ、ソノオトガキコエタラ、ニゲルコトニシテハドウデセウ。
 296 スルト年トツタネズミガ、略。「トイヒマシタノデ、ミンナダマツテシマヒマシタ。
 297 罎 ソレモヨイガ、ダレガソノスズヲツケニイクカ。
 325 罎 オ正月ガクルト、オマヘハイクツニナリマスカ。
 336 ムカシアルトコロニ、田ヤハタケヲタクサンモツテキタ人ガアリマシタ。
 337 ユミヲイルコトガスキデ、トリヤケダモノヲイコロシテ、オモシロガツテキマシタ。
 366 ソレカラコノ人ノ田ニハ、オ米ガスコシモデキナクナツタトイヒマス。
 372 罎 フルフルユキガ、マツ白ナユキガ。
 373 罎 フルフルユキガ、マツ白ナユキガ。
 376 罎 ツモルツモルユキガ、マツ白ナユキガ。
 377 罎 ツモルツモルユキガ、

マツ白ナユキガ。

二38 三 三 サイタサイタハナガ、

マツ白ナハナガ。

二38 四 三 サイタサイタハナガ、

マツ白ナハナガ。

二39 一 ニイサンガオトモダチト、

ニハニ大キナユキダルマヲコ

シラヘマシタ。

二41 三 ムカシ、ヨイオヂイサント

ワルイオヂイサンガアリマシタ。

二42 六 ヨイオヂイサンガソコヲ

ホツテミマス、ト、略。

二43 二 略、土ノ中カラ、オカ

ネヤタカラモノガタクサンデ

マシタ。

二46 二 略、ウスノ中カラ、マ

タオカネヤタカラモノガデマ

シタ。

二48 一 スルト、ニハノカレ木ノ

エダニ、キレイナ花ガサキマシ

タ。

二49 一 トノサマガオトホリニナ

ツテ、略。花ヲサカセテミ

ヨ。トオホセニナリマシタ。

二49 七 ハヒヲマキマス、ト、カレ

木ニ花ガサイテ、一メンニ花

ザカリニナリマシタ。

二51 七 ソノウチニ、トノサマガ

オトホリニナツテ、略。ト

オホセニナリマシタ。

二52 六 コンドハイクラハヒヲ

マイテモ、スコシモ花ガサキマ

セン。

二57 五 アナタガオタチニナレバ、

ワタクシモタチ、略。

二57 六 略、アナタガオアルキ

ニナレバ、ワタクシモアルキマ

ス。

二58 三 略、日ヤ月ガデテキ

ナカツタリ、アカリガツイテキ

ナカツタリスレバ、略。

二58 四 略、日ヤ月ガデテキ

ナカツタリ、アカリガツイテキ

ナカツタリスレバ、略。

二59 四 太郎ハイマ、オカアサン

ガオクスリヲノムトコロヘキ

テ、略。

二64 六 私ノウチニハオヤ牛ト

子牛ガキマス。

二67 五 ウメノ花ガサキ出シマシ

タ。

二67 七 ケサウグヒスガウメノ

木デ、ホウホケキヨウトナキマ

シタ。

二68 三 サクラガサクノハコレ

カラデス。

二68 五 ナノ花ガサクノモコ

レカラデス。

二68 六 テフテフガマフノモコ

レカラデス。

二69 三 三 アレアレアガル、ヒカウ

キガ。

二69 四 大キナトビガ、トブラ

ウダ。

二70 四 三 アレアレアンナニヒカ

ウキガ。

二70 五 三 小サナトンボガトブ

ヤウダ。

二71 六 ムカシ大江山ニシユテン

ドウジトイフワルモノガキマ

シタ。

二72 二 タイヘン力ガツヨク、テ

シタモ大ゼイアリマシタ。

二72 六 略、ナカナカタイヂスル

コトガデキマセンデシタ。

二76 七 タチガヒカレバ、目モヒ

カル。

二77 五 略、トウトウライクワウ

ガカチマシタ。

二77 一 ミチバタニハスミレヤタ

ンボボガサイテキルシ、略。

二77 二 略、ムギ畠ノ上ニハア

サハヤクカラヒバリガサヘヅ

ツテキマス。

二77 七 コウバノキテキガナツテ

キマス。

二77 三 トヲアケルト、ムカフノ

ソラガウスアカクナツテキマ

ス。

二77 四 カラスガ二三バナキナガ

ラトンデイキマス。

二77 六 三 ア、日ガ出ハジメタ。キ

レイダ。ニイサン、ニイサン。

二77 一 一 「オウイ」トキドバタデ、

ニイサンノコエガシマス。

二77 二 又一シキリキテキガナツ

テ、エントツカラムクムクトマ

ツクロナケムリガ出マス。

二77 四 略、エントツカラムクム

クトマツクロナケムリガ出マス。

二77 五 三 コウバデハモウシゴトガ

ハジマツテキルラシイ。

二77 三 一 二三日マヘカラメンドリ

ガスニツキマシタ。

二77 四 三 ケサオカアサンガタマゴ

ヲ入レテオヤリニナリマシタ。

二77 六 三 オカアサンニ、「イツヒ

ヨコガ出マスカ。」トキキマス

ト、略。

二77 八 三 アルアサ、オカアサンガ

「ヒヨコガカヘツタ。」トオツシ

二77 一 三 アルアサ、オカアサンガ

「ヒヨコガカヘツタ。」トオツシ

二77 二 三 ヤツタノデ、略。

二77 五 略、ヒヨコガ小サナア

タマヲ出シテ、ヒヨコトナイ

テキマシタ。

二77 一 三 ヒヨコガナクト、オヤド

リハオハナシデモスルヤウニ、

コココトイツテキマシタ。

二77 三 三 私ハガクカウカラカヘツ

テ、ヒヨコヲ見ルノガタノシ

ミデス。

二77 五 三 あかちゃんがなき出すと、

略。

二77 四 三 それでもまだあかちゃん

がなくときには、略。

二77 四 三 それでもまだあかちゃん

三145 ゆふはんがすんだあとで、おちいさんが二郎にたづねました。
 三146 〈略〉、おちいさんが二郎にたづねました。
 三151 一ばんふといのがおやゆびで、一ばんほそいのがこゆびです。
 三152 〈略〉、一ばんほそいのがこゆびです。
 三155 それから、一ばんないのが中ゆびで、中ゆびとおやゆびのあひだにあるのが人さしゆび、中ゆびとこゆびのあひだにあるのがくすりゆびです。
 三157 〈略〉、中ゆびとおやゆびのあひだにあるのが人さしゆび、中ゆびとこゆびのあひだにあるのがくすりゆびです。
 三158 〈略〉、中ゆびとこゆびのあひだにあるのがくすりゆびです。
 三172 あしのゆびは、おやゆびとこゆびのほかにはながないのです。
 三176 このはこの中に、おもしろい人があります。
 三204 八 わらびとり 〈略〉。よけいにとつたはうがかちだといつて、〈略〉。
 三207 太くてやはらかなわらび

がたくさんはえてゐました。
 三211 二人がむちゆうになつてとつてゐますと、〈略〉。
 三215 〈略〉、下のほうからかさかさいはせてかけ上つてくるものがあります。
 三216 二人がびつくりして見てゐますと、それは小二郎のうちのいぬでした。
 三232 そのとき正一のおちいさんが、たぎぎをうまにつけてそこへきました。
 三236 小二郎がうちへかへつてみますと、〈略〉。
 三252 この二三日の雨で、竹の子がこんなに出ました。
 三254 むぐらもちでもとほつたやうに、土がところどころもち上つてゐます。
 三255 そこから竹の子が出るのです。
 三266 石がきの下へ出たのは、かはがおちはじめ、竹になりかかつてゐます。
 三312 村はづれに水車やがあります。
 三314 五一ちいさんがその水車のばんをしてゐるからです。
 三318 からのすのなかない日はあつても、五一ちいさんがうたはない日はない。

三341 五一ちいさんのうたふこゑがきこえます。
 三342 いつかうちのおとうさんが道で、「いつもおたつしやなこと。」とおつしやつたら、〈略〉。
 三356 足ニモ 右左ガアリ、目ニモ 耳ニモ 右左ガアリマス。
 三357 足ニモ 右左ガアリ、目ニモ 耳ニモ 右左ガアリマス。
 三361 キモノノソデニモ、タビニモ、手ブクロニモ、クツニモ 右左ガアリマス。
 三374 ソレカラ、道ヲアルクトキニハ、左ガハラ通ルノガヨイコトニナツテキマス。
 三392 ちか道の方は、道がこはれてゐたり、石が出てゐたりしました。
 三392 ちか道の方は、道がこはれてゐたり、石が出てゐたりしました。
 三394 それでとほい本道をまはつた小二郎の方が、正一よりもかへつてさきにつきました。
 三397 むかしうらしま太郎といふ人がありました。
 三402 ある日はまを通ると、子どもが大ぜいのかめをつかまへて、おもちゃにしてゐます。
 三412 それから二三日たつて、うらしまが舟にのつてつりを

してゐますと、〈略〉。
 三414 〈略〉、大きなかめが出てきて、「略。」といひました。
 三421 うらしまがよるこんでかめにのると、〈略〉。
 三448 おとひめは「略」。どんなことがあつても、ふたをおあけなさいますな。」といつて、〈略〉。
 三465 あけると、箱の中から白いけむりがぱつと出て、〈略〉。
 三471 日ノ出ル方ガ東デ、日ノハイル方ガ西デス。
 三472 日ノ出ル方ガ東デ、日ノハイル方ガ西デス。
 三475 東ヘムイテリヤウ手ヲヒロゲルト、右ノ手ノ方ガ南デ、左ノ手ノ方ガ北デス。
 三476 東ヘムイテリヤウ手ヲヒロゲルト、〈略〉、左ノ手ノ方ガ北デス。
 三482 學校ノ北ニ小高イヨカガアリマス。
 三484 ヲカノ上ニ天ジンサマノオミヤガアリマス。
 三487 大キナ家ガ三ムネ、「コ」ノ字ナリニタツテキマス。
 三492 學校ノ東ドナリニ二カイヅクリノヤクバガアリマス。
 三493 ヤクバガアリマス。ヤクバノヨコデ、川ガ二ツオチアツテ、マガリクネツテ、南ノ方ヘ

ナガレテイキマス。

三50ノ新道ノリヤウガハニハ、

新シイ家ガ七八ケンデキマシタ。

三50今ソノミセノマヘニニ

車ガトマリマシタ。

三50車ヲヒイテキタ人ガベ

ンタウデモタベルノデセウ。

三51ツイコノアヒダウエタ

田ガ、モウアンナニ青クナリマシ

タ。

三51ドコカヲカノ下デ、ニ

ハトリガナキマス。

三51子どもがそら一めんの星

を見て、「ああわかつた。〈略〉」

三52あの光るところが雨

のふるあなだ。

三53星のかず あるばん、弟

がにはへ出て、「一つ二つ」と

かぞへてゐました。

三53兄が「おまへ、何をかぞ

へてゐるのだ。」とたづねます

と、弟「略。」

三54兄「こんなくらいばんに

かぞへないで、ひるかぞへるが

よい。」

三54むかしをののたうふうと

いふ人がありました。

三55あるとき、雨のふる日

に、たうふうがにはへ出て、池

のはたを通りますと、〈略〉。

三54〈略〉、しだれやなぎのえだ

へ、かへるがとびつかうとし

てゐます。

三56〈略〉、このかへるのやう

に、こんきがよければ、何ごと

もできないことはない〈略〉。

三57ずんずん手が上つて、の

ちには名高い書手となりまし

た。

三57ニハノモモノ木ノネモ

トカラ、カラヲキタセミガハ

ヒ上ツテキマス。

三58アブラゼミデス。色ガウ

スクテ、ヌレテキルヤウニ見え

マス。

三59コノ大キナモノガ、ヨク

アノカラノ中ニハイツテキタ

モノダトオモヒマシタ。

三59今ニハノ木ニセミガ

ウルサイホドナイテキマス。

三60日の光がやはらかにさ

して、小川の水はきれいにす

きとほつてゐます。

三60風がしづかにふいて来て、

きしのさがさらさらとおと

をたててゐます。

三60風がしづかにふいて来て、

きしのさがさらさらとおと

をたててゐます。

三62みよ子「さあ、私がおま

をかけたしたら、みなさん一しよ

に舟を出すのですよ。一、二、

三。」

三63草のはにとまつてゐた

てふてふがおどろいてとびたち

ました。

三64みよ子「あら、てふてふが

五郎さんの舟にとまりまし

た。」

三64みよ子「五郎さんの舟

には、てふてふのせんどろさん

がのつたから、かつたのでせう。

〈略〉」

三65私ノウチヘキノフヤケ

ヤガ来て、手ヲケヤタラヒノ

タガヲカケカヘマシタ。

三65アトヘ竹ノキレヲノコ

シテ行キマシタガ、ソノ中ニ

フシガ一ツアツテ、水デツパウ

ニナリサウナノガアリマシタ。

三65〈略〉、ソノ中ニフシガ

一ツアツテ、水デツパウニナリ

サウナノガアリマシタ。

三62ソノウチニ水ガ出ナク

ナツタノデ、センヲヌイテ見ル

ト、キレガトレテキマシタ。

三62〈略〉、キレガトレテキマ

シタ。

三62サウシテセンヲヒキマシ

タガ、水ガウマクハイリマセン。

三66ソノウチニ、ニイサン

ガコシラヘテヤラウ。

三73ムカシ鳥トケダモノガ

ケンクワヲシタコトガアリマ

ス。

三73ムカシ鳥トケダモノガ

ケンクワヲシタコトガアリマ

ス。

三74ソノ中ニケダモノガカ

チサウニナツタノデ、〈略〉。

三74私ハカラダガネズミ

ニニテキルカラ、ケダモノダ。

三74スコシタツテ、コンドハ

鳥ガカチサウニナリマシタ。

三75スルトカウモリハ「私

ハ羽ガアルカラ、鳥ダ。」ト

イツテ、〈略〉。

三75イツマデタツテモシヨウ

ブガツカナイノデ、中ナホリヲ

シマシタ。

三75ソノ時カウモリガケダモ

ノノ方ヘ行キマス、ト、〈略〉。

三74十五やの月がざしきの

まん中までさしてゐます。

三76夕はんがすむと、うちの

ものはみんなえんがはへ出ま

した。

三78今日私が川の土手から

とつて来たすきも、〈略〉。

三79時々すずしい風が吹いて

来ると、〈略〉。

三79〈略〉、おもひ出したやうに

くつわ虫がなきます。

三79おばあさんが「ふみ子も

こんやはきつとあちらでこの

月を見てゐませう。」と、ひとり

ごとのやうにおつしやいました。

三82むかし一人のれふしが

「今日はまあ、何といふよいお天きだらう。」といひながら、みほの松原を通りました。

三83 5 おきの方はかすんで、空と水が一つになつて見えません。

三83 6 あまりけしきがよいので、れふしがぼんやりと海をながめてゐました。

三83 6 〈略〉、れふしがぼんやりと海をながめてゐました。

三83 8 どこからかよいにほひがして來ますので、見上げますと、〈略〉。

三84 2 〈略〉、松の木に美しい物がかつてゐました。

三84 5 5 これはよい物がある。

三84 8 〈略〉、見たこともない美しい女が來ました。

三85 3 5 いや、これは私が今ここでひろつたのです。

三86 4 5 5 それがなくは、天へかへることが出來ません。

三86 5 5 5 それがなくは、天へかへることが出來ません。

三87 7 5 5 おかげで天へかへることが出來ます。

三89 4 5 5 れふしがはごろもをかへしますと、天人はそれを着て、まひはじめました。

三90 2 5 5 れふしが見とれてゐますと、〈略〉。

四1 3 5 5 うちがみさまの森で、あさからたいこのおとがします。

四1 4 5 5 大きな字を書いたのぼりがすみきつた空に立つてゐます。

四1 7 5 5 おひるすぎに、をばさんのうちからおとよさんと太郎さんが來ましたので、〈略〉。

四2 2 5 5 鳥ゐのあたりは、道のりやうがはに、いろいろな店がならんでゐます。

四2 4 5 5 おもちややにはらつばやかたなやひかうきなどがならべてあります。

四3 1 5 5 ちやうど人の出さかりで、お宮のすずがひつきりなしになつてゐます。

四3 6 5 5 お宮のうらではすまふがはしまつてゐて、「わあわあ」とはやすこゑがきこえます。

四3 8 5 5 〈略〉、「わあわあ」とはやすこゑがきこえます。

四4 4 5 5 今年には田がよく出來たので、ばんにはそのおいはひの花火が上るさうです。

四4 5 5 5 〈略〉、ばんにはそのおいはひの花火が上るさうです。

四4 8 5 5 私のうちには柿の木が五本あります。

四5 1 5 5 しぶ柿が三本、あま柿が二本で、その中に私の木が一本あります。あま柿です。

四5 1 5 5 しぶ柿が三本、あま柿が二本で、〈略〉。

四5 2 5 5 〈略〉、その中に私の木が一本あります。

四5 3 5 5 これは私が生れた年、おぢいさんが私のぶんにつき木をして下さつたのださうです。

四5 4 5 5 〈略〉、おぢいさんが私のぶんにつき木をして下さつたのださうです。

四5 7 5 5 おぢいさんがこの柿の木をついでいらつしやる時、〈略〉。

四5 8 5 5 〈略〉、下男の太七がわらひながら、「ごいんきよさま、そのお年でつき木をなさるのですか。」といったさうです。

四7 1 5 5 今年には柿のあたり年で、どの木にもよくみがなりました。

四7 3 5 5 私の木も枝がをれるほどなつてゐます。

四8 5 5 5 學校ノ式ガスデカラ、トモダチトムカフノ山ヘ上リマシタ。

四9 1 5 5 村ノ方ヲ見ルト、ドノ家ニモコクキガ出シテアリマシタ。

四9 3 5 5 谷ソコノ一ケンヤニモ、川ヲ下ツテ行ク小サナ舟ニモ、コクキガ出シテアリマシタ。

四9 5 5 5 キノフハ日本國中ノ人ガミンナ天皇ヘイカノバンザイヲイハツタノデス。

四11 8 5 5 5 「やつとすんだ。」と見上げる空に、あすも天氣が、夕日が赤い。

四12 2 5 5 島ニキタ白ウサギガ、ムカフノ大キナヲカヘ行ツテ見タイトオモツテ、海ヲワタルクフウヲシテキマシタ。

四12 6 5 5 アル日ハマバヘ出テ見ルト、ワニザメガ居マシタカラ、〈略〉。」トイヒマシタ。

四12 8 5 5 5 オマヘノナカマトワタシノナカマト、ドツチガ多イカ、クラベテミヨウ。

四13 8 5 5 5 ワタシタチノ方ガ少イカモシレナイ。

四16 3 5 5 5 〈略〉、一バンシマヒニ居タノガ、白ウサギノ毛ヲミンナムシリ取ツテシマヒマシタ。

四16 7 5 5 5 ソコヘ神様ガタガオ通リガカリニナツテ、〈略〉。

四17 4 5 5 5 ソレナラ海ノ水ヲアビテ、ネテ居ルガヨイ。

四18 1 5 5 5 ソコヘ大國主ノ神ガオ出デニナリマシタ。

四20 3 5 5 5 白ウサギガソノ通りニシマス、カラダハスツカリモトノヤウニナホリマシタ。

四21 2 5 5 5 アナタハオナサケブカイオ方デスカラ、後ニハキツト

オシアハセノヨイコトガゴザイマス。

四二一 山一つむかふの村にを
おさんのうちがあります。

四二五 をおさんのうちでは、に
は一ぱいもみがほしてあつて、
足のふみばもないくらゐでし
た。

四二七 〈略〉、おばあさんが日あた
りのよいえんがはでつき物を
していらつしやいました。

四二三 おばあさんはもう耳が
遠いので、大きなこゑで、「おば
あさん、今日は。」といふと、
〈略〉。

四二四 前の畠の柿の木は、
はがまつかになつてゐて、〈略〉。
四二四 〈略〉、二つ三つとりのこし
てある柿が、赤い玉のやう
に光つてゐます。

四二六 えんさきのさざんくわに、
目白が二は来てゐて、枝から
枝へとんでゐます。

四二八 にはとりが時時もみを
かき出します。

四二九 おばあさんが「ほうほう」
といつておおひになりますと、
〈略〉。

四二三 〈略〉、にはとりよりさき
に、すずめがくらのやねへに
げて行きます。

四二五 おばあさんが「略」。もつ

とあそんでお出で。」といつて
おとめになりましたが、〈略〉。

四二六 今日ほんなんにもみが
ほしてあるから、をちさんも
をばさんも早くかへります。

四二六 私どもの町でも、この
あひだから電とうがつくやう
になりました。

四二八 町やくばも、けいさつしよ
も、いうびんきよくも、みんなの
きらんぶが電とうにかはりまし
た。

四二九 又町はづれに大きな工場
のふしんがはじまつて居ます。

四二九 これが出来上るころには、
てつだうが私どもの町を通
つて、工場の近くにていしや場
が出来るさうです。

四二九 〈略〉、てつだうが私ども
の町を通つて、〈略〉。
四二九 〈略〉、工場の近くにてい
しや場が出来るさうです。

四三〇 正太郎が犬をつれて、山
道を通りました。

四三〇 犬のすがたが見えなく
なつたので、「ぼちぼち」とよび
ますと、〈略〉。

四三〇 〈略〉、向ふの方で、「ぼち
ぼち」と口まねをするものが
あります。

四三一 正太郎がおこつて、「ぼか」
といひますと、又向ふで、「ぼ

か」と口まねをします。

四三二 そこへぼちが来ました
ので、一しよに向ふの方へ行
つてみました。〈略〉。

四三三 父「人のこゑも山の
中では、〈略〉、かへつて来るこ
とがあります。〈略〉。」

四三三 向ふで「ぼか」といつた
のも、お前が先に「ぼか」と
いつたからです。

四三五 夜ニナルト、ホカノ鳥
ハ大ガイ目ガ見エナクナルノ
ニ、此ノ鳥ハ見エルノデ、
〈略〉。

四三五 其ノ中ニ夜ガ明ケルト、
目ガ見エナクナルノデ、〈略〉。

四三五 其ノ中ニ夜ガ明ケルト、
目ガ見エナクナルノデ、〈略〉。

四三六 〈略〉、森ヤ林ノヒクイ
木ノ枝ニトマツテ、ボンヤリト
シテ居ルコトガアリマス。

四三六 スルトホカノ鳥ガ見ツ
ケテ、「ア、ニクイヤツガ居
ル。」トイハナイバカリニ、ヨツ
テタカツテイデメカヘシマス。

四三七 ソレデモフクロフハシ方
ガナイノデ、〈略〉。

四三八 フクロフガ鳴クト、其ノ
明クル日ハ天氣ガヨイカラ、
〈略〉。

明クル日ハ天氣ガヨイカラ、
〈略〉。

四三八 ある時、日と風が力く
らべをしました。

四三八 たび人のぐわいたうをぬ
がせた方が勝といふことに
きめて、〈略〉

四三九 するとたび人は、風が吹
けば吹くほど、ぐわいたうをし
つかりとからだにくつつけまし
た。

四四〇 おかあさんがあたまに手
ぬぐひをかぶり、着物の上に
ちりよけを着て、〈略〉。

四四一 一番先にしやうじや
らかみが外へ出されました。

四四一 〈略〉、そこへ火ばちや机
や本箱やいろいろな物がはこ
び出されました。

四四一 たんすをうごかすと、其
のうしろから物さしと花子の
お手玉が出ました。

四四二 だい所でいろいろな物を
のけると、子ねずみが一ぴき
とび出しました。

四四二 下女がびつくりして、「き
やつ」といつたので、後でみん
なにわらはれました。

四四二 ばたばた、ばたばた、いよい
よさうちがはじまりました。
四四三 手つだひの今吉がおどけ
て、はうきを大なぎなたのやう

お月様がお上りになつた。」な
どと申します。

四三ノ私は、東の村や西の村に、人が生れたり、死んだり、水が出たりしたところをみんな見て知つて居ます。

四七二 〔略〕、家がたつたり、こは
れたり、〔略〕、水が出たりした
ことをみんな見て知つて居ま
す。

四七三 〔略〕、火事があつたり、水
が出たりしたことをみんな
見て知つて居ます。

四七四 〔略〕、火事があつたり、水
が出たりしたことをみんな
見て知つて居ます。

四七 せい の 高い 私の 目にも
まだ お日様 が 見えない 中から、
〔略〕。

四七五 又私のかたの上で、お星様が光りはじめるころになつて、〈略〉。

四七五 四七六
7 3
それで 西の村一番の金持の
だんだんうちがよ
くなりまして。

四七 此の間さびしいおさう式

四七六 私の下で、長い間しょんぼりとして居まして、日がくれてから村へはいました。

四792 〈略〉、私が風の音をこ
うつとさせてやりましたら、〈略〉。

四七九³ 〈略〉、送つて行く人が「此の人も一本杉の外にないてくれるものがなくなつた。」といひました。

四七九五会 此の人一本杉の外
にないてくれるものがなくな
つた。

四八二 てつけうへにかかつた時、
河を見たら、たいそう水が出
て居ました。

四816 河上の方で雪がとけはじめたのだらう。

を
通
つ
て
居
ま
し
た
。

四
八
二
七
ほ
ぼ
し
ら
が
一
本
、
え
ん
と
つ
が
四
本
の
船
で
す
。

四82 8 ほぼしらが二本、えんとつ
四83 4 が四本の船です。
むかふのてい車場へ着い

四844 モモノ花ガ花イケニサ
たら、にいさんがむかへに來て
居ました。

シテアリ、ヒシモチモモウソナ
ヘテアリマス。

所へ、オ花ノオカアサンが來
マシタ。

四八七 二人ガオ話ヲシテ居ル所へ、オ花ノオカアサンガ來マシタ。

四875会 明日ハオセツクデスカ
ラ、學校ガヒケタラ、スグアソ

ビニオ出デナサイ。
四八二 春が来た、春が来た、
どこに来た。

四 88 2 韻 春が来た、春が来た、
どこに来た。
四 88 6 韻 花がさく、花がさく、

どこにさく。
 四八八六 韻 花がさく、花がさく、
 どこにさく。

四 89 2 韻 鳥が鳴く、鳥が鳴く、
どこで鳴く。

四八八 十郎が五つ、五郎が三つの年に、父はくどうすけつね

にころされました。

にころされました。

四九〇五 母は「略」、「略」。お前
 たちが大きくなつたら、此のか

たきを取つておくれ。」といひました。

四九一六 〈略〉、遊事にも、兄が弓

をひけば、弟はたちをふりま
はし、〈略〉。

弟も東へ行き、西へ行けば、
西へ行き、長い間つけねらひま
したが、〈略〉。


四九五八回 おきよ、すけつね。曾我兄弟がまゐつた。

四九七 〈略〉父がうたれてから十八年目にめでたくのぞみをとげました。

五二六 韻 大日本、大日本、〔略〕、
月日とともに、國の光がかがやき
まはる。

五二八 四月四日の朝、當番で僕が机の上をふいてゐると、〈略〉。

五三十一 〈略〉、先生が知らない生徒を

一人つれてお出でになりました。
 533  ここがあなたの教室です。
 548 中村君は色が黒くて、まるま

五五 / 氣がさつぱりしてゐて、二二三
日たつと、前からの友だちのやうに

なりました。

553 中村君がこれまで居た所は日本の南の方で、〈略〉。

554 〈略〉、冬でもめつたに雪のふ
ることがなく、うめやさくらも、こ
ちらよりはずつと早くさくさうです

五63 ある日、僕がうんどう場へ出て見ると、中村君が泣いてゐました

て見ると、中村君が泣いてゐました。
五64 聞けば級のものが二三人で、
中村君を生いきだといつて、いぢめ

たのださうです。
あまてらすおほみかろ
五七 天照大神の弟の方に、すさ
のをのみことと申す神様がございま

- した。
- 五八〇 略、川上から箸が流れて來ました。
- 五八二 みことは此の川上にも人がすんでゐるにちがひないとおかんがへになつて、略。
- 五八五 略、おちいさんとおばあさんが、一人の娘を中において泣いてゐました。
- 五八八 「なぜ泣くか。」とおたづねになりますと、おちいさんが、「略。」もう此の子一人になりましたのに、近い中に又其の大蛇がたべにまゐります。」
- 五九一 略 私どもにはもと娘が八人ございました。
- 五九三 略 それを八岐の大蛇が來て、毎年一人づつたべました。
- 五九八 略 もう此の子一人になりましたのに、近い中に又其の大蛇がたべにまゐります。
- 五九二 略 頭が八つ、尾が八つある大蛇で、略。
- 五九四 略 頭が八つ、尾が八つある大蛇で、略。
- 五九六 略、せ中には、ひのきや杉の木が生えてゐます。
- 五九八 酒が出來ると、みことはそれを八つのをけに入れて、略。
- 五九九 間もなく大蛇が來て、八つの頭を八つのをけに入れて、其の強い酒を飲みました。
- 五九一 飲みほして、大蛇がよひつづれますと、略。
- 五九七 略、みことはこしのつるぎをぬいて、大蛇をずたずたにお切りになりました。ひの川が血になつて流れました。
- 五九八 尾をお切りになつた時、つるぎのはがこぼれました。
- 五九九 ふしぎに思つて、尾をさいてごらんになりますと、つるぎが一ふり出しました。
- 六〇〇 學校からかへつて見ると、廣田君からゑはがきが來てゐました。
- 六〇一 略 北國にも春が來ました。
- 六〇二 略 うめやも、やさくらがみな一しよにさいてゐます。
- 六〇三 かへりみちに、はなれ馬がとんで來ましたので、どうしようかと思つてゐますと、略。
- 六〇四 略、よそのをちさんが大手を廣げてとめて下さいました。
- 六〇五 略 ぼちが昨日から病氣で、ごはんをたべませんので、學校に居てもしんはいでしたが、略。
- 六〇六 略 つるぎ方の時間に、すぐめが教室の中へとびこみました。
- 六〇七 先生がまどをすつかり明けて、出しておやりになりました。
- 六〇八 夕方から雨がふり出しました。
- 六〇九 海軍のをちさんがお出でになつて、略。
- 六一〇 略 をちさん、勲章がふえましたね。
- 六一一 金の鳥がついてゐますね。
- 六一二 略 むかし神武天皇がわるものどもをこせいばつになつた時、わるものどもが強く、おこまりになつたことがある。
- 六一三 略、わるものどもが強く、おこまりになつたことがある。
- 六一四 略、わるものどもが強く、おこまりになつたことがある。
- 六一五 略 其の時一天にはかにかき曇つて、ひょうがひどくふり出すと、略。
- 六一六 略、金色の鶏が一羽とんで來て、天皇のお弓の先にとまつた。
- 六一七 略 鶏の光がまるでいなびかりのやうで、略。
- 六一八 略、わるものどもは目を明けてゐることが出來ず、おそれてみんなにげてしまつたさうだ。
- 六一九 略 ゆふべの雨ははれて、青葉の上に日が氣持よくつてゐます。
- 六二〇 略 ゆふべの雨ははれて、青葉の上に日が氣持よくつてゐます。
- 六二一 略 さをの先の矢車ががらと鳴ると、略。
- 六二二 略、鯉が大きな口で、思ふぞんぶん風をのんで、家のむねよりも高く尾を上げます。
- 六二三 略 其のたびに、鯉のかげが地の土をおよぎます。
- 六二四 略 島屋の前には、人が黒山のやうにあつまつてゐました。
- 六二五 二かいのまどに萬國旗がつるしてあつて、おくの方からたえずちくおんきの音が聞えて來ます。
- 六二六 略、おくの方からたえずちくおんきの音が聞えて來ます。
- 六二七 略 下のかざりまどには、目のさめるやうなちりめんや、きれいな帶や、すゞしさうな浴衣地がかざつてあります。
- 六二八 入口の左手には、小切やえりや帶あげなどがたくさん下げてあつて、それを見てゐる人も大ぜいあります。
- 六二九 略、店のしるしのついた手ぬぐひと物さしが景物にはいつてゐました。
- 六三〇 略 ツバメハトブコトガ上手な鳥で、略。
- 六三一 略、アタ、カニナツテ、ガング北ノ國ヘカヘルコロ、南ノ國カラワタツテ來マス。
- 六三二 略、ガングソロノワタツテ來ルコロ、南ノ國ヘカヘツテ行キマス。
- 六三三 略 こんな所にと思ふやうな村外れに、家がけん立つてゐます。
- 六三四 略、これが私のうちです。
- 六三五 略、此のころは栗の花がたくさんさいてゐます。
- 六三六 略 此の間町のをばさんがいらつしやつて、「略。」とおつしやいま

した。

五29 8 うちの前には小川が流れ、

舟もうかべば、あひるもうかぶ。

五30 7 づゆや時雨が色よくそめた

うらの小山に秋風吹けば、〈略〉。

五31 4 松をのこして木の葉がちれ

ば、庭は一日日がよくあたる。

五31 5 松をのこして木の葉がちれ

ば、庭は一日日がよくあたる。

五32 4 私のうちの表通は電車や自轉

車が引切なしに通つて、〈略〉。

五32 6 〈略〉、りやうがはの歩道に人

通のたえることがあります。

五32 7 ある朝早く、おとうさんがた

びへお立ちになった時、お見送をし

て表へ出て見ました。

五33 3 晝あれほどにぎやかな通に、

新聞配達と四五人の人のすがたが見

えるだけでした。

五33 8 店・客間・居間・勝手など、

これで間数が七つもあるとは、どう

しても思はれませんでした。

五34 3 せまい中庭から、屋根の上に

頭を出してゐるひよる松は、葉がほ

こりだらけでした。

五34 6 時計屋の前に電車の停留場が

あります。

五35 5 遠足のしたくをして学校へ行

くと、もう級のものが大分来てゐて、

五35 8 平尾山のすそへ行くと、わら

びやぜんまいが、すっかり葉になつ

てゐました。

五36 8 大道へ出て、となり村の入口

へ行くと、道ばたの立石にさるが三

匹ほつてありました。

五38 2 ちやうどかまを明けたところ

で、白いけむりが立つてゐました。

五38 5 〈略〉、先生が「ちよつと用が

あるから。」といつて、私どもを道

に待たせておいて、学校へおよりに

なりました。

五38 5 ちよつと用があるから。

五38 8 此の時私どもの村へよく物賣

に来るおちいさんが、紺のふろしき

づつみをしよつて来て、「皆さん、

五39 5 八幡様の高い石だんを上りつ

めた所に、しめをはつた大きな杉の

木がありました。

五39 6 御神木ださうです。私どもが

六人で、やつとかかへました。

五39 7 園 さしわたしが八尺もあ

る。」と先生がおつしやいました。

五39 8 〈略〉。」と先生がおつしやい

ました。

五40 3 〈略〉、さつきの学校の小使

さんが麥ゆを持つて来て下さいまし

た。

五40 4 のどがかわいてゐたので、み

んな大よろこびで飲みました。

五40 6 先生が拜殿にかけてある繪馬

のお話をして下さいましてから、た

んぼの小道へ出て、三時ごろ学校へ

かへりました。

五41 3 昔熊襲のかしらに川上のたけ

るといふ者があつて、天皇のおほせ

にしたがひませんでした。

五42 1 お着きになりますと、間もな

くたけるが新しい家を造つて、人々

をあつめて、其の祝をしました。

五43 1 夜がふけて、人々はかへりま

した。

五44 2 〈略〉、たけるも熊襲のかし

らだけあつて、「〈略〉。申したいこ

とがあります。」といひました。

五45 3 〈略〉、みやこには強いお方

がおありになつた。

五45 5 〈略〉、日本武皇子と申し

たまへ。」といつて、息がたえまし

た。

五46 4 米をつくの、上にもうす

をさかさにつるしておけば、きねの

上げ下しに米がつける。

五46 8 昨日からうちの蠶が上りはじ

めました。

五47 1 上る頃には、蠶のからだがす

き通るやうになります。

五47 6 〈略〉、ちつともゆだんが出來

ません。

五47 7 今日のお晝頃はうち中、目が

まはるほどいそがしうございました。

五48 2 まぶしには、かさくといふ

音がしてゐますが、これは蠶が動く

からです。

音がしてゐますが、これは蠶が動く

からです。

五49 5 さつきおかあさんが、「〈略〉。

あれで八分通だ。」と、ねえさんに

おつしやいました。

五50 4 此ノ頃ハ雨ガ降リツゞイテ、

表デ遊ブ日ガアリマセン。

五50 4 此ノ頃ハ雨ガ降リツゞイテ、

表デ遊ブ日ガアリマセン。

五50 7 カラカサニ降ル雨ガ四方ヘ流

レオチルヤウニ、水ハ低イ方ヘ低イ

方ヘト流レテ行キマス。

五51 3 ハジメハ糸スデホドノ流デス

ガ、ソレガダンくアツマツテ、ミ

ゾニオチル頃ニハ、〈略〉。

五51 7 本流ガアリマス。

五51 7 支流ガアリマス。

五53 1 昔美濃の國にまづしい人があ

りました。

五53 4 此の人に年取つたおとうさん

がありまして、酒がすきでございま

した。

五53 4 此の人に年取つたおとうさん

がありまして、酒がすきでございま

した。

五54 1 すると酒のにほひがしますの

で、ふしぎに思つて、見まします

と、〈略〉。

五54 3 〈略〉、石の中から酒にた物

がわいてゐます。

五54 4 なめてみると、酒のあちがい

たします。

五55 5 図 これは親孝行のほうびに、
 神々がさづけられたにちがひない。
 五56 3 日本の國には、景色のよい所
 がたくさんありますが、〈略〉。
 五56 6 松島は大小二百の島が、海
 上三四里の間にちらばつてゐて、
 〈略〉。
 五56 8 〈略〉、島といふ島には、枝ぶ
 りのよい松がしげつてゐます。
 五58 1 其の洲の白い砂の上に、青い
 松が一面に立つてゐて、長い橋のや
 うに見えます。
 五58 4 宮島はまはりが七里もある島
 で、〈略〉。
 五58 5 〈略〉、島の山には鹿がたくさ
 んすんでゐます。
 五58 7 島の東北に嚴島神社があり
 ます。
 五58 8 朱ぬりの社殿が山のみどりを
 後にして、たいそうきれいに見えま
 す。
 五59 3 ことにしほのみちた時は、社
 殿や廻廊が海の中に浮いて、〈略〉。
 五59 7 杜前の海に、日本一の大島居
 があります。

五63 4 村さかひの峠へ上りますと、
 もう町が目の下に見えます。
 五63 5 図 おとうさん、町があんなに
 近く見えてゐて、まだ一里半もある
 のですか。
 五63 8 図 あのだんぼの中に、ちよつ
 とした森があるだらう。
 五64 2 図 あれは神明様の森だが、あ
 れまでが半道で、あれから町まで一
 里ある。
 五65 1 図 あれは製絲工場で、女工が
 四百人も絲を取つてゐる。
 五65 5 図 あ、町の方へ馬車が二だい
 かけて行きます。
 五66 4 図 うちの方では、田に水がな
 いと言つて、さわいでゐますのに、
 此の村にはよく水がありますね。
 五66 5 図 〈略〉、此の村にはよく水が
 ありますね。
 五66 7 図 よく氣がついた。
 五66 8 図 此の村には、向ふの杉山の
 すそに、大きな用水池があつて、其
 所から水を引くからだ。
 五67 7 図 用水池には大きな鯉が居ま
 せうね。
 五68 1 図 鯉も居るが、それよりも、
 もつとお前に聞かせて置きたい話が
 ある。
 五69 1 〈略〉、此の村の庄屋が、村
 のことをいろ／＼と考へたすゑ、ど
 うかして村のあれ地を田地にして、
 米がとれるやうにしたものだと思

つた。
 五69 2 〈略〉、どうかして村のあれ地
 を田地にして、米がとれるやうにし
 たいものだと思つた。
 五69 4 田地にするには、水がいるが、
 引いて来る川がない。
 五69 4 田地にするには、水がいるが、
 引いて来る川がない。
 五71 5 土手は長さが三百間、高さが
 六間半、幅は一番上で三間といふ大
 きなもくろみであつた。
 五71 5 土手は長さが三百間、高さが
 六間半、幅は一番上で三間といふ大
 きなもくろみであつた。
 五71 8 図 「そんな大きな池があるだ
 らうか。」と言つて、首をひねる者
 もあつたといふが、〈略〉。
 五72 5 翌年の春、大雨がふりつゝい
 て、せつかくつき上げた土手が、半
 分ほどもくづれてしまつた。
 五72 6 〈略〉、せつかくつき上げた土
 手が、半分ほどもくづれてしまつた。
 五72 8 図 もくろみが悪い。
 五73 1 図 工夫がたりない。
 五73 4 すると、「〈略〉」などと言ふ
 者が出て来て、〈略〉。
 五73 8 〈略〉、其の年のつゆに、又土
 手がくづれて、池のたまり水が村の
 中へおし出した。
 五74 1 〈略〉、池のたまり水が村の中
 へおし出した。
 五74 6 其の賃錢をみんな庄屋が自分

のふところから出した。
 五75 7 一冬こして、春には池の水が
 一ぱいになつた。
 五76 1 そこで一年まじに田がふえた
 が、〈略〉。
 五76 2 〈略〉、をしいことに、庄屋は
 池が出来上つた年の冬、死んでしま
 つた。
 五76 3 長い間の苦勞が病氣のもとで
 あつたといふことだ。
 五77 7 あ、白壁造の土蔵のある家が
 それだ。
 五77 8 親のほねをりが子の時になつ
 てあらはれたのであらう、〈略〉。
 五78 2 〈略〉、あの家にはよい事が
 つゞいて、身代は前よりもよくなつ
 た。
 五78 4 土手の此の記念碑に、今話し
 た事がくはしく書いてある。
 五78 5 此の山の杉も庄屋が先に立つ
 て植ゑたのださうだ。
 五79 1 今年のひでりにも、此の用水
 池にはあんなに水がたまつてゐる。
 五79 4 八幡太郎義家が或日安倍宗任
 をつれて廣い野原を通りますと、
 〈略〉。
 五79 5 〈略〉、狐が一匹とんで出まし
 た。
 五80 4 かけよつて見て、宗任が
 「〈略〉、狐は死んで居ります。」と言
 ふと、〈略〉。
 五80 7 〈略〉、義家が「〈略〉。ほつて

置け、今に生きかへる。」と言ひました。

五八三 さて宗任がかりまたをぬき取
つて、義家にかへしますと、〈略〉。

五八八 かりまたは、矢じりがつばめの尾のやうにわれた、たいそうするどい矢で、〈略〉。

五八四 〔会略〕。もし宗任に悪い心があつたら。」と、義家の家來どもはひやくしたといひます。

五⁸³2(五) おとうさんにうかゝひます
と、叔母さんの町に大水が出たさう
です。

五八七 大水が出なければよいがと
心ばいして、〈略〉。

五五4 〔略〕、急に川水の音がごう
く」と聞えて来て、間もなく火の見
で半しようをうち出しました。

五五七 其の時表で水だくとさけぶこゑがしましたので、二階のまどからのぞいて見ますと、〈略〉。

586 Ⅲ 〈略〉、水が表の通をさつと洗ひました。

五八三 叔父さんは大へんだ土手が切れたといつて、すぐ屋根へ出ました。

五864 匁 たちまち水が二尺になり、
三尺になり、五尺にもなりました。
五867 匁 うら手で助けてくれ助けて

くれと呼ぶこゑが聞えましたが、
 〈略〉、どうすることも出来ませんでした。

五八六(三) 〔略〕、うちでも下の雨戸が
たふれて、中からうすやたらひがぼ
かぼか流れ出すほどで、〔略〕。

五八七 〔手〕 〈略〉、うちでも下の雨戸がたふれて、中からうすやたらひがぼかぼか流れ出すほどで、〈略〉。

五874 其のうちに、どうやら水が二階にもつきさうになつたので、
 〈略〉。

五八六 雨が降つても、風が吹いても
夜でも、晝でも、此所に立通しに立
つてゐますが、〈略〉。

五八六 雨が降つても、風が吹いても
夜でも、晝でも、此所に立通しに立
つてゐますが、〈略〉。

590 I 〈略〉、葉書や封書などを入れる人の外は、私のからだにさはる者がありません。

5904 時々〈略〉、「うん、郵便函と
いつたのはこれだな。」とひとりご
とを言つて行く者があります。

595 私のやくめは、〈略〉、皆様が私の口へお入れになる郵便物を大切にあげかつてゐて、〈略〉。

五914 たまには雑誌や寫眞がはいる
こともあります。

の外はきつと切手がはつてあります
5922 それも品と目方によつて切手
の賣がちがひます。

五九二六 其のあつめに來る頃に、急ぎの封書を入れに來る者が、途中で人

と立話でもはじめると、〈略〉。

五九二七 〈略〉、私は氣がもめてたまりません。

五⁹³2 葉書には、大ていちよつとし
た用事が書いてありますが、〈略〉。
五⁹³4 〈略〉、封書には、いろいろこ

み入った事が書いてあります。

五937 〈略〉、悲しい事や苦しさうな事が書いてありますと、もらひ泣き

をいたします。

五941 つか大そう雨のふるばんに
年取つたおぢいさんが、遠方に居る

むすこの所へ出した封書や、〈略〉。
五43 〈略〉、かついで足をはらして
ある書生さんが、お友だちへ出した

葉書には、〈略〉。

五44 〈略〉、私もはらわたがちぎれるやうに思ひました。

5945 ㊦ それにはどんな事が書いてあつたか。

あつたか。」といふおたづねが出る
 かも知れませんが、〈略〉。

しづくがよつて海となる。

五九六 庭サキノブダウ棚ニ、今、夕
日ガサシテキマス。

五九六五 叔父サンノウチニモ、ブダウ

棚ガゴザイマス。
五966 ソレニハ黒ミノアルムラサキ

色ノ實ガナツテキマス。
五九七 ウチノブダウトハ種ガチガフ
ノダサウデス。

五九七 種類ガアルトイヒマス。

熊くまが出て來ました。
五977 二人の者が山の中を通ると、
熊くまが出て來ました。

598 / 一人はもうにげる間がないの
で、地にたふれて、死んだふりをし
てゐました。

五九八 熊が來て、からだ中かぎまは
しましたが、〈略〉。

五九八 この時、木に上つてゐた者が

下りて來て、「どんなにこはかつた
らう。〈略〉」

て行つたやうだが、何か言つたのか
五〇六 赤れんぐわの三階造で、間口
が百八十四間もあります。

5007 向つて右が入口、左が出口で
まん中が帝室用になつてゐます。
5008 向つて右が入口、左が出口で

まん中が帝室用になつてゐます。
5008 向つて右が入口、左が出口で
まん中が帝室用になつてゐます。

五階下の入口には、左右に大きな待合室があつて、〈略〉。

五〇二 此の停車場から、毎日七八千
人づつの人が乗降りします。
五〇三 汽車の發着時刻が近づくと、
《略》。
五〇四 《略》、自動車・馬車・人力車
がいくだいたなく、入口・出口によ
つて來ます。
六一四 新田が大へんよく出來まし
た。
六一六 朝飯の時こんな話が出ました。
六一七 今日はずちの者がみんなたん
ぽへ稻こきに行きました。
六二一 おちいさんが庭にほしてある
もみをかへしていらつしやると、
《略》。
六二二 《略》、卯買が來て、卯を七つ
買つて行きました。
六二四 今どこのうちへ行つて見ても、
俵の山が出來てゐます。
六二八 昨日までに二山出來て、もう
三つ目の山が出來かゝつてゐます。
六三七 私がたんぽへお湯を持つて行
つてくると、《略》。
六三八 《略》、おちいさんが庭で腰を
のぼして、「もうお晝かな。」とおつ
しやいました。
六四三 土間でこぼれもみを拾つてゐ
たにはとりが、俵の山へ上つてとき
を作りました。
六五六 臺灣ではめつたに雪が降ら
ないさうだが、《略》。
六六四 いや、二番も三番も臺灣に

あつて、四番目が富士山だ。
六七五 外國には、新高山より、も
つと高い山がありますか。
六七八 しかし三郎、高い山がかな
らず名高い山だとはかぎらない。
六九二 或晩人ガネシツマツテカラ、
《略》。
六九三 《略》、金物屋ノ店デ、ヤクワ
ントテツビンガ、ジマン話ヲシ合ヒ
マシタ。
六九四 先ツヤクワンガ言ヒマスニハ、
「《略》。」
六二二 其ノ外、《略》小サイ物カ
ラ、《略》大キナ物マデ、皆鐵ガナ
ケレバ造ルコトガ出來マセン。
六二二 《略》、皆鐵ガナケレバ造ル
コトガ出來マセン。
六三二 其ノ時鐵ビシハ「私タチノ
サビルノハ人ガ使ハナイカラデス。
《略》。」ト言ツテ、中々マケマセン
デシタ。
六三六 銅ハ人ニ使ハレテキテモ、
時々青イ物ヲ出シマス。アレガヤハ
リサビデス。
六四二 二三日降りつゝいた雨がから
りとはれたので、《略》。
六四八 僕がぐみをたべてゐる間に、
にいさんは初苜を五六本取つたやう
でした。
六五二 僕が紅色のきれいなきのこを
取つて、にいさんに見せましたら、
《略》。

六五六 《略》、「あゝ、それは紅茸だ。
毒だよ。《略》。」と、にいさんが言
ひました。
六六六 木びきの力藏さんがうたをう
たひながら、大きなこぎりで板を
ひいてゐました。
六六八 何の木か、おがくづが大そう
よくにほつてゐました。
六七一 にいさんが「今日は。」と言
つて、「此の近くに、しめぢの出る
所はありませんか。」とたづねます
と、《略》。
六八四 《略》、それでも、小さなしめ
ぢが列を作つて出てゐました。
六九五 風がひゆうつとうなつて來る
たびに、濱の松は身をふるはせて、
頭を地に着けさうにします。
六二四 冬の時の海には、よくこんなこ
とがあります。
六二六 《略》、「これが五日もつゞ
くと、ひぼしだ。」と言ふれふしの
こゑが、其所此所にします。
六二七 こんな時には、「《略》。」と言
ふれふしのこゑが、其所此所にしま
す。
六二六 木曾義仲が都へせめ上ると聞
いて、平家はあわてて討手をさしむ
けました。
六三六 兩方からおしよせて、ちんの
間がわづか三町ばかりになりました。
六四六 不意を討たれた平家方は、上
を下への大さわぎ、《略》、人の馬に

は自分が乗り、自分の馬には人が乗
り、《略》。
六四七 《略》、人の馬には自分が乗り、
自分の馬には人が乗り、《略》。
六五二 《略》、平家方にはげ場がなく
て、後のくりから谷へ、なだれをう
つて落ちました。
六五四 親が落ちれば其の子も落ち、
弟が落ちれば兄も落ち、《略》。
六五五 親が落ちれば其の子も落ち、
弟が落ちれば兄も落ち、《略》。
六五七 《略》、ずゑん深いくりから
谷が、平家の人馬で埋まりました。
六六四 屋根の上に霜がまつ白だ。
六六五 庭の菊も白い花びらに赤みが
さして來た、霜にあたつたからだら
う。
六六七 うめもどきの實がいつもより
目立つて見える。
六六七 大きな虎が山おくて、「《略》。」
とひとりごとを言ひました。
六六八 どうも分らないのは、あの
弱い人間がわれわれの仲間を生けど
りにすることだ。
六六八 其の時「あはゝ。」と笑ふも
のがありました。
六六八 虎が見まはしましたが、だれ
も居ません。
六六八 なるほど、ごまつぶ程の蟻が
一匹虎を見上げてゐます。
六六八 人間があなた方を生けどりに
するには、いく人かで力を合はせ

六592 或日のこと、萬じゆが御殿のうらへ出て、何の氣もなくあたりをながめて居りますと、〈略〉。
 六594 〈略〉、下仕の女が来て、「あの門の中へ、はいつてはなりませぬ。」と申しました。
 六597 〇 あの中には石のらうがあつて、唐糸様がおしこめられて居られます。
 六597 〇 あの中には石のらうがあつて、唐糸様がおしこめられて居られます。
 六612 〈略〉、松の一むら立つてゐる中に、石のらうがありました。
 六614 萬じゆがかけよつて、らうのとびらに手をかけますと、〈略〉。
 六637 二人がたがひに取りついて、うれし泣きに泣いた時には、〈略〉。
 六651 町ノ叔父サンカラ、オ年玉ニ大キナ磁石ヲイタバイタ。鐵ヲ引ク力ガ強イ。
 六652 昨日ニイサンガ釘箱ヲ火鉢ノフチニ置イテ、手工ヲシテキタ時、〈略〉。
 六653 〈略〉、弟ガ釘箱ヲ火鉢ノ中ヘヒツクリカヘシテ、手ヲ灰ダラケニシテ拾ヒハジメタ。
 六661 サウシテ灰ノ中ヲカキマハシテ、上ゲテ見ルト、果シテ磁石ノサキニ釘ガタクサツツイテキタ。
 六666 或村に大火事があつて、一村ほとんど丸やけになった。

六667 其のとなり村の青年たちが見かねて、方々へ義捐金をつのりに出た。
 六671 或物持の所へ行くと、下男がまだ使へる小縄を捨てたと言つて、主人がひどくしかつてゐた。
 六672 〈略〉、下男がまだ使へる小縄を捨てたと言つて、主人がひどくしかつてゐた。
 六687 〇 あんな小言を言ふ程だから、此の義捐が出来たのだらう。
 六711 賀茂川には橋がたくさんかけてあります。
 六721 川の西は水のすぐそばから、すき間もなく家が立ちならんでゐます。
 六722 東の方は此の橋のたもとから、川にそつて電車が出ます。
 六724 此の電車道から東山のすそへかけて、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、〈略〉。
 六725 〈略〉、青い松の間に、五重の塔や大きな寺の屋根が見えます。
 六732 又三條の大橋から川上を見ると、川原が遠く北につゞいて、〈略〉。
 六734 〈略〉、其のさきにやさしい姿の山がかすんで見えます。
 六735 賀茂川は水が多くないので、船は通りませんが、〈略〉。
 六736 〈略〉、其の代りに水がいたつてきれいで、染物にむいてゐます。
 六752 〇 毛糸デオツタ物ニハ、ドン

ナ物ガアリマスカ。
 六758 〇 ネエサンガ今ヌツテキル此ノ帯ハ。
 六763 〇 ラシヤヤフランネルトチガツテ、絲ガ細イカラ、氣ガツカナイノデス。
 六764 〇 ラシヤヤフランネルトチガツテ、絲ガ細イカラ、氣ガツカナイノデス。
 六774 二三日ひどく寒かつたので、湖の水が大へんあつくなつた。
 六814 まるで大きな島が出来たやうなものである。
 六826 いや／＼おしよせたが、敵の船は高くて上ることが出来ない。
 六835 其の後も攻めよせる者がたえないので、敵は一先づ沖の方へしりぞいたが、〈略〉。
 六845 全く上下の者が心を一にして、國難にあたつたのである。
 六847 此のまごころが神のおぼしめしにかなつたのであらう、〈略〉。
 六848 〈略〉、一夜大暴風雨がおこつて、海はわきかへつた。
 六868 象つかひが乗つてゐて、口上をのべては、らつばを吹かせたり、ごぼんの上へ乗せたりした。
 六873 象が大きな桶を鼻で頭の上へまき上げると、〈略〉。
 六875 象がそれを下して来て地に置くと、象つかひがぬつと桶の中で立上つた。

六876 〈略〉、象つかひがぬつと桶の中で立上つた。
 六878 象の鼻は手の用をなすもので、實に力がある。
 六882 自分たち程の子どもが出て来て、象の前足にだきついて見せた。
 六883 自分たち程の子どもが出て来て、象の前足にだきついて見せた。
 六884 象つかひが「此の太い足で、どざり／＼と歩きます。」といふと、長い鼻をふら／＼させて歩き出した。
 六887 何だか地ひゞきでもするやうな氣がした。
 六897 〈略〉、今の子どもが象の腹の下へねころんだ。
 六904 此の時、「大きなお守さんだ。」と誰かがいつたので、みんなが一度にふき出した。
 六904 〈略〉、みんなが一度にふき出した。
 六907 楠木正成が守つた千早城は、〈略〉。
 六908 楠木正成が守つた千早城は、〈略〉、まはりが一里にも足らず、總勢わづか千人ばかり。
 六914 こんな山城一つ、何程の事があるものかと、賊が城の門まで攻上ると、〈略〉。
 六915 こんな山城一つ、何程の事があるものかと、賊が城の門まで攻上ると、〈略〉。

六924 先づ谷川のほとりに三千人の番兵を置いて、城兵が汲みに来られないやうにした。
 六927 城中には十分水の用意がしてあった。
 六931 番兵がゆだんをしてゐると、城兵が切りこんで来て、旗をうばつて引上げた。
 六932 番兵がゆだんをしてゐると、城兵が切りこんで来て、旗をうばつて引上げた。
 六936 賊が之を聞いて、くやしがつて攻めよせると、〈略〉。
 六947 賊は「それ、敵が出た。一騎も餘すな。」とおしよせた。
 六951 賊が四方から之を目がけておしよせると、〈略〉。
 六961 廣さが一丈五尺、長さが二十丈、其の上を賊が我先に渡つた。
 六962 廣さが一丈五尺、長さが二十丈、其の上を賊が我先に渡つた。
 六962 廣さが一丈五尺、長さが二十丈、其の上を賊が我先に渡つた。
 六972 賊が千早城一つを持餘してゐると、〈略〉。
 六973 〈略〉、方々で官軍が賊のひやうらう道をふさいだので、賊は人馬ともにつかれた。
 六984 村の學校のげんくわんの向つて右の落葉松は、わたしの子どもが植ゑたので、其の子はとうに戦死した。

六986 あの學校がたつた時、〈略〉。
 六988 死んだあの子が掘取つて、かついで行つて植ゑたのだ。
 六994 それが今では學校の二階のまどにとゞいてる。
 六996 學校の前でふりかへり、〈略〉。
 六998 わたしの植ゑた落葉松が、あんなに高くなりました。
 六1008 池のはたへ行つて見ると、しやうぶが小指程に芽を出してゐました。
 六1018 義一さん、それはお節供に使ふのですよ。」といふねえさんの聲がしました。
 六1025 しゃうぶ湯を立ててうち中の者がはいつた。
 六1027 こんなことを思ひ出して垣根の方へ行くと、しゃくやくが赤い芽を出してゐました。
 六1051 何となく心持がかはつて、一そうありがたくなつた。
 六1065 棟にはかつを木がならべてあり、棟の兩はしには千木が置いてある。
 六1068 棟の兩はしには千木が置いてある。
 六1073 何のかざりもない御神殿を

拜して、まことにおそれ多い氣がした。
 七12 われらが住む世界は、其の形まるくして、球の如し。
 七47 一年生を先頭に、二・三・四・五・六年が 四列になりて歩く時、〈略〉。
 七94 舟が岸をはなれた。
 七94 もやが水の上をこめてゐる。
 七96 不意に白い鳥がもやの中からとび立つた。
 七99 川口近くになると、潮干狩の舟がいくそうもよつて來た。
 七101 潮がずん／＼下がるので、舟はすすと進んで、たちまち海へ出た。
 七103 にいさんが「我は海の子」をうたひ出して、丸山君が合唱した。
 七104 にいさんが「我は海の子」をうたひ出して、丸山君が合唱した。
 七105 だん／＼潮が引いて、もう其所所に洲が見え出した。
 七105 〈略〉、もう其所所に洲が見え出した。
 七106 船頭が「皆さん、そろ／＼おしたくだ。」と言つたので、〈略〉。
 七111 船頭がさをつき立てて、それに舟をつないだ。
 七114 皆さん、これが目じるしだよ。
 七115 僕が一番先に海へ下りた。
 七121 小さい熊手で砂をかくと、お

もしろいやうにあざりが出た。
 七122 時々手ごたへがして大きな蛤が出た。
 七122 時々手ごたへがして大きな蛤が出た。
 七124 浅い水たまりを歩くと足のうらがぬるりとした。
 七132 潮がすつかり落ちて、海はをかやうになつた。
 七142 日は暖で、風はなし、むされるやうな氣がする。
 七145 妹やお松は何があつたのか、笑ひながらしきりに取つてゐる。
 七147 其のうちに潮がさしはじめたので、みんな舟にもどつた。
 七151 妹とお松のざるには、やどかりがたくさんゐた。
 七153 珍しかつたのは、丸山君のざるに、たつのおとしごが一つあつたことであつた。
 七154 潮がだんだんさして来て、何時の間にか洲が見えなくなつた。
 七155 〈略〉、何時の間にか洲が見えなくなつた。
 七156 船頭がさをぬいた。
 七162 昨日おあさんにするすをしていただいて、うち中の者が潮干狩に参りました。
 七177 しゃうの強いもので、一度種が地に落ちれば、年年其所で花がさく。
 七178 〈略〉、一度種が地に落ちれば、

年々其所で花がさく。

七182 色が美しい上に、姿がやさしいので、〈略〉。

七182 色が美しい上に、姿がやさしいので、〈略〉。

七182 色が美しい上に、姿がやさしいので、〈略〉。

七185 図「極樂寺坂の味方があやふうございます。」といふ使の後から、〈略〉。

七188 〈略〉、「大將も討死されました。」といふ使が来たが、〈略〉。

七194 〈略〉、北の山手には木戸を立てて、數萬の兵が之を守つてゐます。

七195 又南の海上にはひしひしと軍船を浮べて、岸には大木がきりたふしてあります。

七197 鎌倉へは海陸ともに攻めこむすぎがありません。

七223 此の時義貞が方々へ火をかけさせますと、濱風が之をあふり立てたからたまりません。

七224 此の時義貞が方々へ火をかけさせますと、濱風が之をあふり立てたからたまりません。

七229 村の西にくぬぎ林がある。

七231 それを通りぬけて四五町上ると、道はたに大きな松が一本ある。

七232 みきが二かゝへもあつて、枝が傘をひろげたやうに出てゐるので、〈略〉。

七232 〈略〉、枝が傘をひろげたやうに出てゐるので、村の人は之を傘松と呼んでゐる。

七235 其の松の下に石でござんだ地蔵様が立つていらつしやる。

七241 其の松の下に石でござんだ地蔵様が立つていらつしやる。〈略〉、何時もお花が上つてゐる。

七243 傘松の四五間さきに、小さな茶屋が一軒ある。

七244 茶屋にはおばあさんが一人ほつちで菓子やわらちを賣つてゐる。

七247 此のおばあさんにむすこが一人あるのださうだがずつと前から南アメリカへ行つてゐるといふことだ。

七253 茶屋から二三町行つた所の右手に、まんぢゆう笠をふせたやうな塚がある。

七254 塚の前に馬頭觀世音とほつた石が立つてゐて、〈略〉。

七255 塚の前に馬頭觀世音とほつた石が立つてゐて、其の前に時時新しい馬のくつが上つてゐる。

七255 これは馬がけがをしないやうに、馬方が上げるのださうだ。

七256 これは馬がけがをしないやうに、馬方が上げるのださうだ。

七262 走ることがはやくて、乗用としてこれにまさる動物がない。

七263 走ることがはやくて、乗用としてこれにまさる動物がない。

七263 又力が強いので、荷物をつけたり、荷車をひかせたり、田や畠の耕作に使つたりする。

七361 図 通は廣くて平で、歩道と車

道の間に並木が植ゑてありますが、此の頃は其の葉の美しいさかりです。

七364 図 目ぬきの所には三階建・四階建の石造や煉瓦造の家が軒をならべて立つてゐるので、〈略〉。

七383 図 第一第二第三と三つならんでゐて、たくさん大船を一どきに横づけにすることが出来ます。

七386 図 船から陸あげした荷物は、すぐ其所から汽車にのせて、ハルビンへでも北京へでも送ることが出来ます。

七389 図 輸出品は豆粕が第一で、輸入品は綿布が一番多いといふことです。

七391 図 輸出品は豆粕が第一で、輸入品は綿布が一番多いといふことです。

七395 図 〈略〉、氣候も思つたよりよくて、快晴の日が多いやうです。

七398 図 〈略〉、私も中學の二年生が修學旅行に行つて、白玉山上の表忠塔をあふぎ、又〈略〉二百三高地にも上つて歸りました。

七399 図 〈略〉、又我が忠勇の士が血を流して取つた二百三高地にも上つて歸りました。

七412 軍人をのせた御用船が今しも港を出ようとした其の時、〈略〉。

七415 〈略〉、「ごめんなさい。く。」といひく、見送人をおし分けて、前へ出るおばあさんがある。

七422 すると甲板の上で鐵砲を上げた者があつた。

七426 すると、又鐵砲を上げたのがかすかに見えた。

七434 越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄が、たびたび信濃の川中島で戦つた。

七436 ある時謙信が山の手陣を取つてゐると、信玄は兵を一手に分けて、はさみうちしようとした。

七449 信玄は刀をぬくひまがない。

七451 ぐんばいうちにはふせいだが、えが折れて、肩先へ切りつけられた。

七457 川中島で前後五回戦つたが、まだ勝負がつかなくつた。

七461 図 〈略〉、信玄から謙信へ、「戦をはじめから十二年、今に勝負がきまらない。〈略〉。」と申しこんだ。

七463 図 よつて明日たがひに勇士を一人づつ出して組討をさせ、勝つた方のものが川中島を取ることにしては。

七466 翌日武田方からは安間彦六といふ大の男が、物の具見事に着ざり、大の馬に打乗つて、上杉方の陣へ向つた。

七469 上杉方からは小さな馬に乗つた小さな鎧武者が一人あらはれて、「〈略〉。」と名のつた。

七479 彦六が與五左衛門を組みふせた。

七48 武田方が之を見て、聲をあけて喜ぶと、〈略〉。

七48 此の時信玄は之を止めて、「鬼神の如き彦六が、あれ程の小兵に討たれたは味方の不運。〈略〉。」といったので、めでたく中なほりが出来た。

七49 2 〈略〉、めでたく中なほりが出来た。

七49 4 私ノ近所二年ヨリノカデ屋ガアリマシタ。

七49 5 セイガ高ク、目ガスルドクテ、チヨツト見ルト、コハイヤウデシタガ、〈略〉。

七49 5 セイガ高ク、目ガスルドクテ、チヨツト見ルト、コハイヤウデシタガ、〈略〉。

七49 9 トンテンカント、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音ガ聞エマシタ。

七51 何時カ私ノウチノツルベノ金タガガコハレタ時、ツクロヒヲタノンダラ、〈略〉。

七51 7 其ノ時分マデ、ヨソヘ奉公ニ行ツテキタ若イムスコガ、今デハ其ノ後ヲツイデ、朝カラ晩マデ、相カハラズ、トンテンカン、トンテンカント、働イテキマス。

七53 5 私の乗つてゐる太平丸といふのは、長さが六十間程もある汽船で、〈略〉。

七54 5 けれども日の出や日の入に

は、日光が波にうつつて、水の色が金色になりますし、〈略〉。

七54 6 〈略〉、日光が波にうつつて、水の色が金色になりますし、〈略〉。

七54 7 〈略〉、月夜には波が銀色に光つて、其の美しいことは何ともいひやうがありません。

七54 9 〈略〉、其の美しいことは何ともいひやうがありません。

七55 1 時には鯨が高く潮を吹いてゐるのを見ることがあります。

七55 2 時には鯨が高く潮を吹いてゐるのを見ることがあります。

七55 4 何萬とも知れないいるかが、はね上つてはおよぎ、はね上つてはおよぎして行くのを見ることがあります。

七55 6 又ある時にはとび魚が甲板の上へとび上ることもあります。

七55 8 外國の港に着くと、見なれない形の家が並んで立つてゐます。

七56 3 見るもの聞くものが、總べて皆珍しいのであります。

七56 8 急に暴風雨が来ると、山のやうな波が立つて、船は今にも沈むかと思ふやうになります。

七56 8 急に暴風雨が来ると、山のやうな波が立つて、船は今にも沈むかと思ふやうになります。

七57 2 又きりがかゝつたり、大雪が降つたりして、一寸先も見えなくなることもあります。

七57 2 又きりがかゝつたり、大雪が降つたりして、〈略〉。

七57 6 こんな時には、悪くすると浅瀬へ乗上げたり、外の船に衝突したりするやうなまちがひが出来ます。

七58 3 一たい船にはらしんぎといふ物があつて、それで方角をとつて進みますから、〈略〉。

七58 5 〈略〉、いくらきりが深くても、まるでちがつた方へ行くやうなことはありません。

七58 7 又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、〈略〉。

七59 1 又海岸には所々に燈臺がありますから、それを見ると、あれは何所だといふことが分ります。

七59 2 〈略〉、それを見ると、あれは何所だといふことが分ります。

七60 1 さておしまひに一ついつて置きたい事があります。

七60 5 ちよつと渡船に乗つてさへ、こはがる者があります。

七62 1 連日の雨で、川といふ川には水があふれました。

七62 6 〈略〉、「それ、川が渡れる。」といふことになりますと、〈略〉。

七63 3 大ぜいの人々が口々に人夫を呼んで我先に渡らうとしますし、〈略〉。

七64 1 此の時見すばらしいなりをし

た一人の男が、人夫と渡賃を高いや

すいと言つてあらそつてゐましたが、相談は出来ないものと見きつたのでせう、着物をぬいで頭にのせ、一人で川へはいつて行きました。

七64 9 かの入夫は、〈略〉、先程渡賃をあらそつた所へ行つて見ますと、革の財布が落ちてゐました。

七65 1 取上げると大そうおもくて、中には小判がどつさりはいつてゐました。

七65 2 これはあの人が落して行つたにちがひないが、〈略〉。

七65 3 〈略〉、渡賃が高いといつて、此のあぶない川を一人でこしたほどの人である。

七65 5 もし此の大金がなかつたら、氣がちがつて死ぬやうな事になるかも知れぬ。

七65 5 もし此の大金がなかつたら、氣がちがつて死ぬやうな事になるかも知れぬ。

七66 2 〈略〉、上から片はだぬいで、右手につゑをついて、かけ下りて来る者があります。

七67 6 「革の財布で。」「中には。」「小判が百五十兩はいつて居ります。」

七67 9 小判が百五十兩はいつて居ります。〈略〉。外にまだ手紙が七八本。

七68 4 〈略〉、目からはなみだがひつ

きりなしにこぼれてゐます。

七69 4 園 いよくない時には、川の中へとびこんで死んでしまはうと、かくごをして來たのでございます。

それがあなたのやうな正直なお方に拾はれて、財布をいたゞかせてもらひましたが、〈略〉。

七70 4 園 あなたから一文でももらふ氣があるくらゐなら、此所まで持つて來はしません。

七71 2 園 〈略〉、仲間の者が國へ送る金をあづかつて、此の財布に入れて來たのでございます。

七71 5 園 小ぶくろの方は私どものだんなが國へおやりになる金ですが、〈略〉。

七71 9 園 どうぞ之を受取つて、私の氣がすむやうにして下さい。

七72 6 園 〈略〉、あなたの氣はそれですむかも知れませんが、私の氣がすみません。

七72 9 園 家には七十近い父と、三十になる妻と、三つになる子どもがあるの、〈略〉。

七73 4 園 たとひ親子の者がうゑ死をするやうなことがあつても、〈略〉。

七73 4 園 たとひ親子の者がうゑ死をするやうなことがあつても、〈略〉。

七74 2 見れば年取つた父といふのが、うす暗い小窓の下で、わらちを作つて居りまして、〈略〉。

七74 4 かの男がわけを話して、どう

かお禮を受けてくれといひますと、〈略〉。

七76 2 豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎といつて、織田信長の草履取をしてゐた時のことである。

七76 7 毎朝げんくわんへ出て、「誰か居るか。」と呼ぶと、いつも藤吉郎が眞先に出て來た。

七77 1 或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、「誰か居るか。」と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て來た。

七78 3 園 これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません。

七78 7 これがそもく藤吉郎出世のいとぐちである。

七79 4 海ノ生物 一 動物 海ノ中ニハ魚や貝や其ノ外イロくノ動物ガスンデ居リ、又サマザマノ植物モ生エテ居ル。

七80 1 魚類ニハイワシ・アヂ・カツヲナドノヤウニ、水ノ表面ニ近イ所ヲ泳グモノガアリ、〈略〉。

七80 3 〈略〉、タヒ・アナゴ・ハモナドノヤウニ、岩ノカゲヤ海藻ノ間ヲ泳グモノガアリ、〈略〉。

七80 7 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タコ・イカナドガスンデキル。

七81 1 〈略〉、タコヤイカガ、アシヲソロヘテ泳グ様ハ、マコトニ面白イ。

七81 7 アハビハ岩ヲハナレテ動クコトガアルクレドモ、カキハ一度ツイタラ決シテハナレナイ。

七82 3 又眞珠貝トイフモノガアル。

七83 5 海ニハ又獸類ガスンデキル。

七83 7 陸ノ獸ニ似タモノニハ、ラツコ・ワツトセイ・アザラシナドガアリ、〈略〉。

七83 8 〈略〉、魚ニ似タモノニハ、イルカや鯨ガアル。

七83 9 鯨ハカラダガ甚ダ大キイ。

七84 2 陸ニスムモノデハ、象ガ先ヅ一番大キイガ、〈略〉。

七85 2 〈略〉、岸ニ近イ淺イ所カラニ三百尺グラキノ所マデニハ、海藻ガ生エテキル。

七85 6 先ヅタベルモノニハ、コンブ・ワカメ・アラメ・ヒジキ・アマノリ・アラノリ・モヅクナドガアリ、〈略〉。

七85 8 〈略〉、糊ニスルモノニハ、フノリヤツノマタガアリ、〈略〉。

七86 1 〈略〉、トコロテンヤカンテンニスルモノニハ、テングサヤエゴノリガアル。

七86 2 此ノ他海藻ニハマダタクサンナ種類ガアツテ、中ニハ肥料ニスルモノモアル。

七86 4 海藻ノ形ハ様々デ、帶ノ様ニ廣クテ長イノモアレバ、全體ガ細ク二分レテ、枝ノ様ニナツテキルノモアリ、〈略〉。

七87 5 海藻ハ花ガ咲カナイ。

七88 2 あわたゞしくかけこんで來た者があります。

七88 4 園 敵が追つかけて來ます。

七88 9 こまつてゐますと、「では水を一ぱい下さい。」と兵士が言ひました。

七88 9 マリーが大急ぎでコップに水を汲んで來ました。

七89 2 あまり急ぎましたので、水がいの上にあつたおばあさんのづきにこぼれました。

七90 9 此の時どやくと四五人の敵兵がはいつて來ました。

七91 2 園 おい娘、兵士が一人來たらう。

七91 8 すると兵士のおばあさんが、「はい、よいお天氣でございます。」

七93 1 何だか少しむし暑いやうだが、空には雲もなく、まことによく晴れてゐた。それが、朝飯がすむと間もなく、稻の葉がさわくし出した。

七93 1 それが、朝飯がすむと間もなく、稻の葉がさわくし出した。

七93 1 それが、朝飯がすむと間もなく、稻の葉がさわくし出した。

七93 1 それが、朝飯がすむと間もなく、稻の葉がさわくし出した。

七93 3 園 「〈略〉。風が出て來た。」と、又おとうさんがおつしやつた。

七93 4 「〈略〉。」と、又おとうさんがおつしやつた。

七93 7 〈略〉、此の日はよく大風が吹くから、厄日といつて、農家ではこ

とに心配するのださうだ。

七94 1 「どうかひどい風にならなければよいが。」と、おちいさんが言

つていらつしやつたが、〈略〉。

七94 2 「〈略〉、其の中に南の空が黄色になつて、風がだん／＼はげしくなつて来た。

七94 2 〈略〉、其の中に南の空が黄色になつて、風がだん／＼はげしくなつて来た。

七94 4 まして稲田は大波が打つ。

七94 9 仕合はせに午後は風が弱つた。

七96 2 因幡 村の役場に三十年、勤めつゞけし小使の 年のよりしがあはれさに、人々物を出し合ひて、

樂なくらしにかへてやる。

七97 3 豊臣秀吉が朝鮮へ向はせた先手の大將は加藤清正・小西行長の兩人でした。

七98 4 とところが長盛がろく／＼あいさつもせず、石田と中直りをしなければ太閤の御きげんは直るまいと申しました。

七99 1 因 たとひ數年の軍功がみとめられず、此のまゝ切腹を命ぜられても、石田めとは中直りは致さぬ。

七99 5 正直者の清正は人づきあひが下手なので、〈略〉。

七99 6 〈略〉、誰一人清正を秀吉にとりなす者がなく、とう／＼太閤のお目通へ出ることを禁ぜられました。

七99 8 とところが或夜大地震が起つて、人家堂塔一時に倒れ、人々の泣叫ぶ聲は天地にひゞきました。

七101 2 其所へ清正がかけつけました。

七102 2 秀吉が之を聞いて、「さて

／＼、早く参つた。」と心の中で喜びました。

七102 5 さうして清正のやせた姿、日にやけた顔を見ては、怒がとけて、涙ぐみました。

七102 7 因 お庭先の御門を守る者がございませぬ。

七102 9 「〈略〉。某の手で固めませう。」と清正がいひますと、秀吉はうなづきました。

七103 1 間もなく石田三成が城に登つて参りました。

七103 6 「〈略〉。」「〈略〉。」「〈略〉。」など清正の家來どもが申します。

七104 2 因 清正は上様へお目通がかなはぬはず。

七104 4 因 何故にお目通がかなひませぬ。

七104 5 秀吉が之を聞いて、幕の中から、「もうよい。通してやれ。」といひましたので、〈略〉。

七104 8 因 〈略〉、清正は「あのせいの低いのが石田だ。通してやれ。」といつて、三成を入れてやりました。

七105 1 翌日諸大名が伏見城の大廣間へつめました。

七105 4 因 其の方は無分別者で、大名になつてもまだ仲間げんくわのくせがぬけぬ。

七107 8 因 秀吉は感心して、「それは皆此の方がやりさうな事。〈略〉。」

といつて、〈略〉。

七108 3 因 もと此の方には近い親類の者、豊臣と名のつたのも差支がない。

七110 1 因 おとうさん、電報が來ました。

七111 3 因 電報はなるべくみじかい方がよい。

七111 7 因 十五字までが一音信だが、〈略〉。

七112 因 判りにくい配達がまどります。

八11 2 秋は山が美しい。

八11 6 林の中へはいると、眞赤になつたつたが、松の木にからまつてをり、〈略〉。

八11 7 因 〈略〉、日當りのよい所には、つるうめもどきが美しい實をならべてゐる。

八13 1 きこのこのむらがつて出るのも、しひの實が落ちて、くぼたまりにころがり合ふのも今である。

八13 8 庭のすみで、先程からちや／＼とすゞの音が聞える。

八13 9 しやうじを明けて見ると、小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれてゐる。

八14 3 すると其のうちに、僕の見えてゐるのに氣がついたと見えて、〈略〉。

八14 6 僕が庭へ下りて、かはる／＼頭をなでてやると、〈略〉。

八14 9 僕がえんがはへ机を持出して、おさらひをはじめると、〈略〉。

八15 3 ふと、垣根の外でちや／＼とすゞの音が聞えた。

八15 6 仲間がふえたので、又一しきりじやれ合ひをはじめた。

八15 9 昔或氏神のお祭に、競馬の神事といふ事があつた。

八16 3 因 〈略〉、勝つた子どもを出した村が、次の年のお祭の日まで、五箇村の頭になるといふ定めであつた。

八16 7 或年選ばれた子どもの中に、すぐれて上手なものが二人あつた。

八17 1 因 〈略〉、祭の當日には、おびた

だしい見物人が、朝早くから宮の境内へつめかけた。

八17 5 神主は先づ神前で祝詞を上げて、それがすむと、〈略〉。

八18 7 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一さんかけ出した。

八18 7 三番太鼓が鳴るが早い、五匹の馬は一さんかけ出した。

八19 2 さうしてそれが同時に決勝點へ着いた。

八11 4 因 信作が落ちたのにかまはず馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、〈略〉。

八11 8 因 相手の信作があゝの通りだから、いづれ又改めてやり直しをしてもらはなければなるまい。

八12 4 因 あなたの方の村が勝つたのです。

八12 5 因 耕造さんのおかげで、信作の命が助かりました。

八127 図 どうか今日から一年の間、

あなたの方の村が五箇村の頭になつて下さい。

八134 徳川家康が幼時家來に負はれて、安倍川原へ石合戦を見に行つた。

八138 家來があやしんで、其のわけをたづねると、「略。」といった。

八144 間もなく合戦が始ると、果して小勢の方が勝つた。

八145 間もなく合戦が始ると、果して小勢の方が勝つた。

八148 徳川家康が大坂城を攻めた時「略。」

八149 「略」、其の子頼宣は戦が始つたと聞いて、先陣へかけつけたが、「略。」

八152 くやし泣きに泣くと、そばに居た松平正綱が「殿はまだお若くて、略。」といつてなぐさめると、「略。」

八156 図 「略」、頼宣は顔色をかへて、「やあ、正綱、十四歳の時が二度あるか。」といった。

八164 長四郎が十一歳の時のことである。

八165 竹千代が軒ばに雀の巢を見つけて、「長四郎、雀の子を取つて参れ。」と命じた。

八168 日が暮れてから、「略。」

八168 「略」、長四郎がそつと屋根つたひに行つて、もう少しで雀の巢へ手が届かうとした時、ふみ外して軒

下へどうと落ちた。

八169 「略」、もう少しで雀の巢へ手が届かうとした時、ふみ外して軒下へどうと落ちた。

八172 將軍秀忠が刀を取つて出て見ると、長四郎であつた。

八175 図 「何しに此所へ参つた。」

「雀の子がほしくて参りました。」

八184 翌日になつて、將軍が又たづねたが、始のやうに答へた。

八188 図 將軍はあとで、御臺所に、「長四郎があのおで大きくなつたら、略。」といつたといふことである。

八215 図 「略」、夏季ハコトニ増水シテ、濁流江ニミナギリ、河口ヨリ海上百里ノ間、海水コレガタメニ赤シトイフ。

八224 臺灣の蕃人には、お祭に人の首を取つて供へる風がありますが、「略。」

八225 「略」、亞里山の蕃人だけでは、此の悪い風が早くから止みました。

八233 ちやうど蕃人が、其の前の年に取つた首が四十餘ありましたので、「略。」

八233 ちやうど蕃人が、其の前の年に取つた首が四十餘ありましたので、「略。」

八238 四十餘年はいつの間にか過ぎて、もう供へる首がなくなりました。

八238 そこで蕃人どもが呉鳳へ、首を取ることを許してくれといつて出

ました。

八246 図 呉鳳は「それ程首がほしいなら、明日の晝頃、略」、此所を通る者の首を取れ。」といひました。

八251 翌日蕃人どもが、役所の近くに集つてゐますと、「略。」

八254 「略」、果して赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着た人が來ました。

八296 太郎は毎日炭を焼く煙を遠くに見てゐるが、まだ一度も其所へ行つて見たことがない。

八297 或日炭を焼く男が太郎のうちへ來て、ゐろりのはたでいろ／＼の話をした。

八298 此の時太郎が、炭はどうして焼くのかときくと、其の男はていねいに教へてくれた。

八307 かまはさしわたしが一丈ぐらゐ、高さが四五尺ぐらゐで、「略。」

八307 かまはさしわたしが一丈ぐらゐ、高さが四五尺ぐらゐで、「略。」

八319 「略」、かた炭が出來上るのである。

八323 炭に焼く木は、主にならとくぬぎで、くぬぎの炭の方が火持がよい。

八323 炭に焼く木は、主にならとくぬぎで、くぬぎの炭の方が火持がよい。

八323 炭に焼く木は、主にならとくぬぎで、くぬぎの炭の方が火持がよい。

八326 山野に生ずる草木の中には、薬用にするものが多くありますが、「略。」

八335 昔朝鮮に一人の婦人があつて、子どもをおさづけ下さるやうに、朝晩神様にいのつてゐました。

八339 すると或夜ゆめの中に、「略」、望のものをさづけやるといふ神様のお告がありました。

八344 「略」、見なれない草に、眞赤な美しい實が一つなつてゐました。

八345 婦人は、これは珍しい、神様がおさづけ下さつたのはこれに違ひないと思つて、「略。」

八348 間もなくそれから芽が出來したので、婦人は之を我が子のやうに育てました。

八349 これが人夢で、此の婦人は長生をしましたが、「略。」

八352 「略」、此の婦人は長生をしましたが、一生の間仕合はせのよい事がつづいたと申します。

八355 昔江戸で、夫に死なれた女が、乳飲子を里子にやつて奉公に出ました。

八358 幾年かの後、里子を返してもらはうとすると、先方はあづかつたおぼえがないといつて返しません。

八372 二人の女は「略」、兩方から引合ひましたが、子どもがいたがつて、わつと泣出しますと、「略。」

八382 図 手を放した女が實母にきまつた。

八387 呉服屋の手代が、大きなふろしきづつみを石地藏の前におろして

休みましたが、〈略〉。

八392 目をさまして見ると、ふろしきつつみがありません。

八393 包の中には白木綿が五十反ばかりはいつてゐたのでございます。

八399 其の方の申す所では、どうやら其の地蔵がうたがはしい。

八405 下役の者が石地蔵に荒縄を掛けて、車に積んで参ります。

八411 地蔵様が縄にかゝつていらつしやる。

八414 〈略〉、四五百人のものが、そろ／＼と車の後について、思はず知らず役所の門内へ入りこみました。

八425 しばらくして、其の中のおも立つた者が出て、いろ／＼おわびを致しますと、越前守は「〈略〉。」と命じました。

八438 〈略〉、とうとう罪人がわかりました。

八451 始は熱が高くて心配致しましたが、〈略〉。

八452 昨朝あたりから熱が下つて、食事進むやうになりました。

八485 鷺ハタシカニ鳥類ノ王デアル。

〈略〉、強ミガ全身ニミチミチテキル。

八505 ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒クテ、家畜ヲサラフノモ多クハ此ノ時デアル。

八508 餅をつく音に目がさめた。

八511 はね起きて見ると、土間の大

釜の上に積んであるせいろからは、盛にゆげが上つてゐた。

八516 にいさんが奥の間に、餅を並べる所をこしらへてゐた。

八521 〇「お早う。」といふと、「よく目がさめたね。〈略〉。」と、にいさんがいつた。

八523 〇「よく目がさめたね。今四時を打つたばかりだ。」と、にいさんがいつた。

八524 つき上ると、おぼあさんが餅を臼の中で丸めて、おかあさんの所へ持つていらつしやつた。

八529 二臼目で小さなおそなへが幾かさねか出来、三臼目からは、のし餅が出来た。

八531 〇「三臼目からは、のし餅が出来た。」

八533 二かさね目のせいろうから、ゆげが上るまでに、少し間があつた。

八534 二かさね目のせいろうから、ゆげが上るまでに、少し間があつた。

八534 其の時にいさんが「私にもつかせてみて下さい。」といひ出すと、

八536 〇「おちいさんが「とてもまだ。」とおつしやつたが、〈略〉。

八539 〇「おぼあさんは「まあ、ついてみるがよい。」とおつしやつた。

八542 いよく／＼にいさんがつき出した。

八543 始のうちは勢がよかつたが、

八543 〇「間もなく腰がふらつき出して、ふみしめてゐる兩足が、きねをふり上げるたびに動いた。

八544 〇「間もなく腰がふらつき出して、ふみしめてゐる兩足が、きねをふり上げるたびに動いた。

八545 おとうさんが「せいは高くても、まだだめだ。」とおつしやつたが、

八592 〇「見物人ノ外ハ、町ノ兩側ヲナガメテ、ユル／＼歩クガ如キ者ナシ。

八593 〇「ヨリテ看板ノ如キモ、タヤスク人目ヲヒカシメンガ爲ニ、キノヒテ小屋根ノ上ニカ、グルニ至レリ。

八643 〇「弟子どもは「先生、少しお待ち下さいませ。今風であかりがきえました。」と言ひしに、

八656 〇「サンフランシスコには、日本人がたくさんゐて、いろ／＼な商賣をしてゐます。

八658 〇「おとうさんが着いた日は、ちやうど五月のお節供の日で、

八661 〇「日本人の家には、鯉のぼりが立つてゐました。

八663 〇「此の港には、十五六年前に大地震があつて、町は大方こはれたのですが、

八674 〇「此の州は合衆國の中

でも、氣候がよくて、其の上地味が肥えてゐますから、

八676 〇「其の上地味が肥えてゐますから、いろいろな農産物に富んでゐます。

八679 〇「ことに野菜や果物が有名です。

八702 〇「此所は工業地で、煙突の煙で空は眞黒だが、大きな公園が幾つもあるから、健康には害がなさうです。

八703 〇「健康には害がなさうです。

八725 〇「地上の鐵道には勿論、高架鐵道にも、地下鐵道にも、電車や汽車が終日終夜、休なしに運轉してゐます。

八741 〇「シカゴを立つ日に、お前たちの年始状が着きました。

八741 〇「二人とも字が上手になつたのに驚きました。

八752 〇「ロンブスがアメリカを發見して歸つた時、

八755 〇「一日祝賀會の席上で、人々がかはる／＼立つて、

八757 〇「一人の男が「これ程の手がらだらうか。」といつて冷笑しました。

八759 〇「大洋を西へ／＼と航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がらだらうか。

八七九 明日にでもなつて、雪がは

れてからではいけませんか。

八八一 明治天皇の御製に、〈略〉といふ御歌がある。

八八二 水にはこれといふ形がない。

八八三 落ちる時の勢が加はると、長い間には、思ひの外の事をする。

八八二 もと僕のうちに奉公してゐた信吉が、昨日の朝三年ぶりでハワイから歸つて来た。

八八四 信吉にはおとよといふ今年十一になる女の子があるが、〈略〉。

八八三 母が「とよちゃんかね。丈夫であるよ。」といふと、〈略〉。

八八五 どちらでも、あの子のことばかりが、氣にかゝつてゐたのでございまして。

八八四 學校へ行つて案内をこふと、小使が出て来た。

八八六 先生が、問もなく黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。

八八三 先生が、問もなく黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。

八八三 先生が、問もなく黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。

八八四 娘が大そうお世話様になります。

八八七 先生が、問もなく黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。

八八七 先生が、問もなく黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。

八八六 先生が、問もなく黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。

八八六 先生が、問もなく黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。

るやうになつたのか。

八八九 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八八九 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八八九 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八八九 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八九二 信吉はまだ先生の言はれたことがわからなかつたと見えて、〈略〉。

八九四 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八九四 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八九八 先生は「あなた、此のお子が見えないからです。〈略〉。」と言はれた。

八九九 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八九九 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八九九 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八九九 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八九九 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八九九 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八九九 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八九九 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

八九九 先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。

すには、「〈略〉。」といひました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

八九九 かうして三日たちますと、〈略〉、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりました。

分をして働いてゐる。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

八九五 分業で造ると、其の出來がよいばかりでなく、出來高がたいそう多くて、〈略〉。

墓がある。

八127 或年の冬、大將が思はず「寒い。」といった。

八136 大將が何か食物の中にきらひな物があると見れば、〈略〉。

八137 大將が何か食物の中にきらひな物があると見れば、〈略〉。

八139 〈略〉、三度三度の食事に、必ず其のきらひな物ばかり出して、大將が馴れるまで、うち中の者がそればかり食べるやうにした。

八139 〈略〉、大將が馴れるまで、うち中の者がそればかり食べるやうにした。

八142 其の爲、大將には全く食物に好ききらひといふものがないやうになつた。

八144 大將が十歳の年、大將の一家は郷里へ歸ることになつた。

八154 郷里の家は六疊・三疊・二疊の三間と、二疊の板の間が一つだけの、至つてせまい、そまつな家であつた。

八158 此の父母の下に、此の家に育つた乃木大將が、終生忠誠質素でおし通して、武人の手本と仰がれるやうになつたのは、まことにいはれのあることである。

九54 鳥の羽に似た大きな葉が、幹の上の方に集つてついでをり、〈略〉。

九56 団 〈略〉、其の葉の根本には、

大人の頭ぐらゐの實がすぐなりになつてゐます。

九57 団 實の中にはかたい殻があつて、其の内がはに白い肉のやうなものがあります。

九58 団 實の中にはかたい殻があつて、其の内がはに白い肉のやうなものがあります。

九62 団 まだ十分にじゆくしてゐない實は、中にきれいな水があります。

九63 団 これがなか／＼うまいもので、私たちもよく取つて飲みます。

九72 団 これ等の植物が思ふまゝに茂つてゐる様子は實に見事です。

九74 団 殊に毎日のやうに降るにはか雨が、非常な勢で木を洗ひ草を洗つて通り過ぎた後の、〈略〉。

九78 団 水の乏しい此の島々では、其の雨水がまた大切な飲料水となるのです。

九83 団 〈略〉、美しい海底のありさまが手に取るやうによく見えます。

九85 団 青・緑・紅・紫、目のさめるやうに美しい魚の群が、珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。

九92 団 此の間も十ぐらゐの少女が「君が代」をうたつてゐました。

九159 多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、イロ／＼珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。

九159 多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、イロ／＼珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。

九159 多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、イロ／＼珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。

九159 多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、イロ／＼珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。

九159 多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、イロ／＼珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。

ク。

九1510 中デモ面白イノハ、或動物ノ體色ガマハリノ物ノ色ニ似テキルコトデアル。

九164 シタガツテ敵ニオソハレル心配モ少ク、又コチラカラ敵ヲオソフノニモ都合ガヨイノデアル。

九172 〈略〉、季節ニヨツテマハリノ物ノ色ガカハレバ、ソレニツレテ同ジヤウナ色ニカハルモノモアル。

九175 北國ニ住ム野ウサギヤ高山ノ上ニ居ル雷鳥ハ、〈略〉、冬ニナツテ雪ガ降りツモルト、眞白ニナル。

九177 〈略〉、何時デモマハリノ物ノ色ガカハレバ、間モナクソレト似タ色ニカハルモノモアル。

九185 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、其ノ色ガ桑ノ木ニ似テキルバカリデナク、〈略〉。

九187 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、〈略〉、體ノ後ノ端ヲ木ニツケテ、體ヲナ、メニツキ出スト、形ガ桑ノ小枝ニ寸分違ハナイ。

九188 所ニヨツテ此ノ蟲ヲドビンワリト呼ンデキルノハ、農夫ナドガ小枝ト見違ヘテ、ドビンヲ掛ケ、落シテワルトイフ意味デアラウ。

九192 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シイ色ドリガアルガ、〈略〉。

九195 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、〈略〉、羽ヲトデサカサニ草木ノ枝

ニ止ツテキルト、マルデ枯葉ガ引掛ツテキルヤウニ見エル。

九197 シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出来テキルノハ、印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。

九203 此ノ蟲ハ〈略〉、羽ヲ廣ゲテキルト、全ク蘭ノ花ト同ジヤウデナカ／＼見分ケガツカナイサウデア

ル。

九208 コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐れル武器ヲソナヘテキルカ、イヤガ味ヤニホヒノアルモノデ、之ニ近ヅカウトスルモノガナイカラ、〈略〉。

九209 〈略〉、タヤスク見トメラレル方ガカヘツテ安全ナノデアル。

九210 例ヘバ毒ヲモツテキル蜂ノ體色ガ黃ト黒ノダングラニナツテヤリ、惡味ヤ惡臭ノアル蝶ノ羽ニハ美シイ色ドリガアルヤウナモノデアル。

九212 例ヘバ〈略〉、惡味ヤ惡臭ノアル蝶ノ羽ニハ美シイ色ドリガアルヤウナモノデアル。

九214 動物ノ形ヤ色デモ、注意シテ調べテミルト、コノヤウニイロ／＼フシギナ事ガアル。

九217 病みつかれた六十ばかりの老人が、ふとんの上に起直つて、十五六の少年に、熱心に何か言聞かせてゐる。

九222 〈略〉、たて切つてあるしやうじのやぶれを、秋風がはたはたとあふる。

九二二四 略、四代前の歡庵様が、

國利民福の本は農業を盛にするにあるとお氣づきになつて、始めて農學をお修めになり、りつばな書物もお書きになつた。

九二三二 略、しかし此の農學といふ學問は、種々様々の事を、實地と學理の兩方から調べて行かねばならぬので、三代かゝつても、まだ全く手の着かない事が少くなかつた。

九二六一 略、大體一身一家の爲でなく、一すぢに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ事で、これが佐藤の家の學問の精神である。

九二六四 略、わたしも略、くはしく計畫を立てた事もあるが、いろいろの差支があつて、實行が出来ずにしまつた。

九二六四 略、くはしく計畫を立てた事もあるが、略、實行が出来ずにしまつた。

九二六九 略、此の四代の苦心の後を受けて、國家の爲に、此の學問を大成するのがお前の役目だ。

九二七〇 略、十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、さぞ心細くもあらう、又つらい事もあるであらうが、略。

九二七三 略、それにはわたし死んでも國へ歸らずに、略。

九二七五 略、それにはわたし死んでも

國へ歸らずに、すぐに江戸へ出て、りつばな學者を先生にして、一心に學問をばけむがよい。

九二七八 略、さうして終に當代第一の農學の大家となつて、國家の爲に富源を開發することが甚だ多かつた。

九二九四 略、廣さが千數百方里もある、海のような湖から流れる大きな河が、略。

九二九五 略、廣さが千數百方里もある、海のような湖から流れる大きな河が、略。

九二九六 略、物すごいひびきは萬雷の如く、大地もふるひ、數百歩はなれた所でも、器に盛つた水が波紋を多かく程です。

九三〇二 略、右にあるのがアメリカカ瀧、左にあるのがカナダ瀧で、略。

九三〇二 略、右にあるのがアメリカカ瀧、左にあるのがカナダ瀧で、略。

九三〇六 略、瀧の幅は、アメリカカ瀧が百餘丈、カナダ瀧が三百餘丈、略。

九三〇六 略、瀧の幅は、アメリカカ瀧が百餘丈、カナダ瀧が三百餘丈、略。

九三二九 略、かんくとしずゑをてらしてゐる十時過ぎの日かげが、若葉の色を下に投げるのか、略。

九三三一 略、あたりの空氣までが何となくぼうつとして、略。

九三三二 略、ふろしき包をしよつたせなかがじつとりと汗ばんで来る。

九三三五 略、急にかん高い音を立てて、美しい小鳥が二三羽、身がるに枝移りした。

九三三六 略、すると木のうろから、栗鼠が一匹、けろりとした顔を出したが、略。

九三三九 略、道がだんく上りになつたと見えて、略。

九三三九 略、谷のこずゑごしに、遠い湖がちらく見えて来た。

九三四一 略、空ははてもなくすんで、所々にちぎれ雲が飛んでゐる。

九三四五 略、そよくと吹く風につれて、若葉のにはひがひしくと身にせまつて来る。

九三四六 略、此の坂を下りて、あの清水の所まで行くと、石井君のうちが見えるはずだ。

九三五二 略、腹が大分すいて来た。

九三五五 略、大きな青大将が、向ふの水たまりの所をうねつて、のろのろと草の中にかくれて行く。

九三五九 略、それを見送つてゐると、

「やあ、加藤君、よく来てくれたね。」と、聲をかけた者がある。

九三七四 略、後日レマン將軍が捕虜としてエンミツヒ將軍の前に引出されし時、略。

九四四七 略、ソレガ如何ニマレニシテ、タヤスク得ラレザル物ナリトモ、略。

九四五一 略、カクノ如ク物ニ價アルハ、其ノ物ガ人ノ爲ニ有用ナルト、意ノ如クニ得ラレザルトニヨルナリ。

九四五四 略、其ノ五人ハ、各其ノ馬ガ他人ノ手ニ渡ランコトヲ恐レテ、争ヒテ高キ價ヲツク。

九四六八 略、にいさん、昨日でうちの田植がすつかりすみました。

九四六八 略、にいさん、昨日でうちの田植がすつかりすみました。

九四七三 略、今年ほど水の都合のよかつた事はない。」と、おとうさんが喜んでいらつしやいます。

九四七三 略、あの降りつゝいた雨のおかげで、山田の高い所まで一息に植ゑることが出来ました。

九四七四 略、一昨日海軍のにいさんが、休暇でお歸りになつたので、略。

九四七六 略、おとなりからの手つだひと合はせて、植手が八人になつて、にぎやかでした。

九四七六 略、おとなりからの手つだひと合はせて、植手が八人になつて、にぎやかでした。

九四八二 略、其の時おとうさんがにいさんと、「略。」と話していらつしやいました。

九四八三 略、世の中は何でも一生けんめいに働く者が勝た。

九四八三 略、米が出来るのも、麥が取れるのも、略。

九四四 米が出来るのも、麥が取れるのも、〈略〉。

九四五 土といふありがた

いものが、めい／＼の骨折に對して、御ほうびを下さるのだ。

九四六 うち中が丈夫で、仲よく

かせぐ、こんな仕合なことはない。

九四七 もう二番茶もつまなくて

はならない。それがすむとやがて夏

蠶の上りだ。

九四八 おとうさんは今朝も、

「略」。にいらしたちの分もわたし

が働くのだ。」とおつしやつて、大

そう元氣です。

九五〇 會社では、幾臺もある精米機

械が電力で勢よく廻り、〈略〉。

九五二 會社では、〈略〉、四五人の若

い人々がぬかだらけになつて働いて

ゐました。

九五三 主人の家が大きな醬油屋

だつたので、〈略〉。

九五四 いや、これから先があの人

のほんたうにえらい所だ。

九五五 おとうさんはすぐ言葉をつ

いで、「社長さんが銀行の頭取にな

つてからちやうど十年目の秋、〈略〉。

九五六 銀行が破産しなければならぬ事にな

つた。

九五七 毎朝引いて出た荷が、

夕方には必ず空になるといふ景氣。

九五六 それからだん／＼商賣の手

を廣げて、六十五六の時にはもう餘

程の財産が出来た。

九五六 僕は今日其のえらい社長さん

に會つて來たのだと思ふと、何とな

くうれしい氣がしました。

九五六 今日天氣がよいので、朝か

ら麥を打つ音が方々で聞える。

九五六 朝から麥を打つ音が

方々で聞える。

九五六 後には麥の束が山と積んであ

る。

九五六 莖の先についてゐる穂

が、敷いてあるむしろの上に面白い

やうに飛散る。

九五六 束を廻して又たゝき、穂が残

らず落ちてしまふと、〈略〉。

九五六 後の山がだんだん低くなるに

つて、前の麥葉の山が見る／＼高

くなる。

九五六 前の麥葉の山が見る

／＼高くなる。

九五六 あみ笠をかぶつた父がふり向

くと、〈略〉。

九五六 何所からかにぎやかな歌が聞

えて来る。

九五六 庭に敷きつめたむしろの上に、

黄色い麥の穂が一面に廣げられて、

まぶしいやうな夏の日にかゞやいて

ゐる。

九五六 七八人の男や女が向ひ

合つて、片足をふみ出し、掛聲を合

はせながら、ばたんばたと穀竿で

麥を打つてゐる。

九五六 のきが飛ぶ、穂がはねる。

九五六 のきが飛ぶ、穂がはねる。

九五六 ふり上げた棒の先が、強い日

光にきらり／＼と光る。

九五六 赤いたすきを掛けた女たちが

よい聲で歌をうたふと、〈略〉。

九五六 へうきんな五平ぢいさ

んが、時時へんな掛聲をして皆を笑

はせる。

九五六 庭のすみにはほうせん花が真

赤に咲いてゐる。

九五六 鶏が麥のこぼれを食ひに來て

は、追はれて逃げて行く。

九五六 東の空が明るくなると、〈略〉。

九五六 今まで軍港のやみに包

まれてゐた軍艦の壯大な姿が、だん

／＼にあらはれて来る。

九五六 艦橋には當直將校の姿が見え、

其のそばには、〈略〉。

九五六 其のそばには、望遠

鏡を持つた信號兵が遠くを見張つ

てゐる。

九五六 舷門には、銃を手にした番兵

が近くを警戒してゐる。

九五六 人の顔がやつと見分けられる

やうになつた頃、〈略〉。

九五六 時鐘番兵がこと／＼

と艦橋の下へ來て、「總員起し五分

前。」と當直將校に報告する。

九五六 間もなく甲板士官や傳令員が

起きて来る。

九五六 やがて午前五時の鐘が鳴ると、

當直將校が元氣のよい聲で號令をか

ける。

九五六 當直將校が元氣のよい

聲で號令をかける。

九五六 「總員起し。」此の號令で、朝

の静かさが忽ち破られ、起床ラッパ

は勇ましくひびき、〈略〉。

九五六 これから號令が雨のやうに下

る。

九五六 千數百人の乗員が號令

にしたがつて、規律正しく活動する

其の様は、如何にも目ざましい。

九五六 そこで五分間の休けいがあつ

て、上甲板洗となる。

九五六 上甲板洗は水兵の受持で、先

づ「兩舷直、整列。」のラッパが一

きは高くひびき渡ると、〈略〉。

九五六 はだしのままの水兵が

後甲板にはせ集つて、ずらりと整列

する。

九五六 間もなく當直將校から威勢の

よい號令がかかる。

九五六 下士官が、甲板の吐水口から

ふき出る海水を、桶に汲んでほとん

／＼流すと、〈略〉。

九五六 プラシを持つた數十人

の水兵が、甲板をこすりながら頭を

並べて進んで行く。

九五六 其の様は、まるで雨後の蛙が

むらがり飛んでゐるやうである。

九六五 甲板洗がすむと、「總員顔洗へ。」「煙草ぼん出せ。」の令が下る。
 九六五 九 略、「總員顔洗へ。」「煙草ぼん出せ。」の令が下る。
 九六五 一〇 其の中に上陸員が歸艦する。
 九六五 一〇 其所此所で、「お早う」が言ひかはされる。
 九六六 二 火縄一本の煙草ぼんのまはりには、人の山が出来て、いろいろの話が出る。
 九六六 三 略、いろいろの話が出る。
 九六六 五 間もなく食事用意のラツパがひびく。
 九六六 九 午前八時になると、艦尾の旗竿に軍艦旗があげられる。
 九六七 三 朝日にかゞやく軍艦旗が、海風にひらめきながら、しづくと上つて行く様は、略。
 九六七 九 ずみ分こんでゐたが、みんながゆづり合つてくれたので、二人とも腰を掛けることが出来た。
 九六七 一〇 略、二人とも腰を掛けることが出来た。
 九六八 一 汽車が進むにつれて、關東平野はだん／＼夜の景色にかはつて、見なれた所も面白く感じた。
 九六八 四 まだ日が暮れたばかりのやうに思つたが、もう八時半であつた。
 九六八 六 叔父さんが「此の邊が有名な那須野が原だ。略。」とおつしやつた。
 九六八 七 此の邊が有名な那須野が原

だ。
 九六八 八 昔は一面の荒野であつたが、今は方々に町や村が出来てゐる。
 九六九 三 目がさめると、もう夜が明けてゐて、汽車は果もなく續いてゐる青田の中を走つてゐた。
 九六九 三 目がさめると、もう夜が明けてゐて、略。
 九七〇 一 顔を洗つて来て、ビスケットを食べながら、私がゆめの中に通過した驛々のお話をうかゞつた。
 九七〇 四 昔、能因といふ人が、『都をば、かすみと共に立ちしかど、略。』とよんだのは其所のことで、略。
 九七一 九 案の上の名高い金色堂がある。
 九七二 六 辨慶が立往生をしたと傳へられてゐる衣川は、すぐ此の先にある。
 九七二 一〇 案が北上川だ。略。
 九七三 五 略、此所まで来ると川幅がかなりせまくなつてゐる。
 九七三 七 汽車が盛岡を出て少し進むと、略。
 九七四 一 案は岩手山だ。南部富士といはれるだけあつて、ちよつと形が似てゐるね。
 九七四 二 案のふもとに有名な小岩井農場があるのだ。
 九七四 九 略、幾つかのトンネルをくぐると、廣い原野がだん／＼に開

けて来る。
 九七五 一 此の邊から野邊地あたりまでの間には、所所に放し飼の馬の群れてゐるのが見えた。
 九七五 二 黒・白・茶色、大小さまざまの馬が、林のかげや沼のほとりを元氣よくかけ廻つてゐる様は、實に勇ましい。
 九七五 四 野邊地で始めて海が見えた。
 九七五 五 青々とした波の上に、點々と白帆が浮んでゐるのは、略。
 九七五 七 海に向ふに遠く見えるのが下北半島だ。」と、叔父さんがおつしやつた。
 九七五 八 「略。」と、叔父さんがおつしやつた。
 九七五 九 淺蟲近くになると、汽車が海岸を走るので、陸奥灣の風光が手に取るやうに見えた。
 九七五 一〇 略、陸奥灣の風光が手に取るやうに見えた。
 九七六 一 遠くにはかすかに津輕半島が横たはり、近くには形のよい島々などもあつて、略。
 九七六 八 叔父さんが「略、そんなに遠い所に來たやうな氣がしないね。」とおつしやつた。
 九七七 一 略、かうたやすく來てみると、そんなに遠い所に來たやうな氣がしないね。
 九七七 四 五時間目の授業がすむと、先生はにこ／＼して、「略。」とおつ

しやつた。
 九七七 八 これこそ僕たちが、一週間も前から、毎日々々待つてゐた命令だつたので、略。
 九七八 三 枯れかゝつて一面に黄色になつたじやがいも畑を、午後の日がかん／＼と照らしてゐる。
 九七八 五 當番が農具小屋から、鍬・シヤベルなどいろ／＼の道具を出して來た。
 九七八 一〇 やはらかい黒い土がむく／＼盛上つたと思ふと、四方へくづれる。
 九七九 二 中からみづ／＼しい白茶色の玉が、じゅずつなぎになつてころ／＼と出て來た。
 九七九 五 略、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。
 九七九 五 略、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。
 九七九 六 となりでは、莖がくさつて引きぬけないのを、略。
 九七九 七 となりでは、莖がくさつて引きぬけないのを、星野君が根氣よくほつて、ほつたいもを一つ一ついねいにならべて行く。
 九八〇 一 ふと氣がつくと、校長先生と山田先生が、箱のそばへ來て、略。
 九八〇 一 略、校長先生と山田先生が、箱のそばへ來て、面白さうに僕等の仕事を見ていらつしやつた。

九八〇 石安工場と筆太に、小屋根に上げし看板が 往來の人の目につきて、〈略〉。

九八四 月はまだ出でざれども、空よく晴れて、満天の星は寶石をちりばめたるが如し。

九八五 空にはあんなにたくさん星が見えますが、少しも動かないのですか。

九八五 かし地球が廻るために、我々の目には動くやうに見える。

九八七 どの星かを見おぼえて置いてごらん、寝る頃にはもう位置が變つて見えるから。

九八五 それでも航海をする人などが、よく星を見て船の位置をはかるといふではありませんか。

九八五 星がそんなに位置の變るものなら、日當にならないでせう。

九八六 いや、何月何日の何時には、何所に何星が見えるといふ事が、〈略〉。

九八六 いや、何月何日の何時には、何所に何星が見えるといふ事が、學問上ではわかつてゐるから、〈略〉。

九八六 それに、たくさん星の星の中に一つだけ、年中ほとんど位置の變らないのがあるから、〈略〉。

九八七 〈略〉、まことに都合がよいのだ。

九八七 それにはまた都合のよい事がある。

九八七 何かといふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 〈略〉、向ふの杉林の上の所に、ひしやくのやうな形になつて、七つの星が並んでゐるのが見えるだらう。

九八七 〈略〉、向ふの杉林の上の所に、ひしやくのやうな形になつて、七つの星が並んでゐるのが見えるだらう。

九八七 あれが北斗七星だ。

九八八 〈略〉、今結んだ二つの星のへだたりの五倍ばかりのところに、かなり大きい星があるだらう。

九八八 あれが今話した北極星だ。

九八八 〈略〉、あの星を本にして、すぐに北極星を見つける事が出来る。

九八九 あゝ、あの一番高い杉の眞上の所にあるのが北極星でせう。

九八九 〈略〉、道に迷つた時などにもすぐ方角を知る事が出来る。

九八九 さんにいさんく、あの北極星がひしやくの柄の先になつて、〈略〉。

九八九 〈略〉、もう一つ、小さい北斗七星のやうなものが出来てゐますね。

九八九 あゝ、よく氣がついたね。

九八九 並び方が全く似てゐるだらう。

九九〇 小熊座と大熊座について、面白い昔話があるはずだから、ねえ

さんに聞いてごらん。

九九一 昔カリストといふおかあさんと、アルカスといふ子供がいました。

九九一 〈略〉、ジュノーといふ神様がそれをねたんで、〈略〉。

九九二 ところがめぐみ深いジュピターといふ神様が、それを見て、『あゝ、かはいさうだ。〈略〉』と、すぐに親子の者を天へ連れていつて、大熊座と小熊座になさつたのださうです。

九九二 おや、北斗七星が半分杉林にかくれてしまつた。

九九三 にいさんのお友だちの岡田さんが旅行からお歸りになつたと聞いて、〈略〉。

九九三 白馬岳が飛驒山脈中の有名な山だといふ事は知つてゐましたが、〈略〉。

九九五 雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて來て、〈略〉。

九九五 時には一寸先も見えないやうなことがあります。

九九五 下山の時には、木の枝などを權にして、此の雪溪をすべつて下る人があります。

九九六 雪溪が冬の世界ならば、此所は春の國でせう。

九九六 いろいろの珍しい高山植物が紅・黄・紫と咲亂れて、何ともい

はれない美しさです。

九九七 お話が頂上のながめに移るといよくはすんで來て、〈略〉。

九九八 眼前には杓子岳や鐘岳がぬつとそびえ、〈略〉。

九九八 〈略〉、遠くには〈略〉、いづれおとらぬ高山が、南から西へ連なつて、互に雄姿を競つてゐます。

九九九 富士山も、晴れた日には、白雲の上にかすかに見える事があるさうです。

九九九 面白いお話がまだたくさんありさうでしたが、〈略〉。

九九九 〈略〉、かぼちや畠を見廻ると、此の前まだ少し早いと言つて残して置いたのが、今日はもう熟しきつたやうな顔をして、へそを日にさらしてゐる。

九九九 向ふの畠には、たうのいもが作つてある。

九九九 黒みがかつた紫色の莖が見事に延びて、〈略〉。

九九九 黒みがかつた紫色の莖が見事に延びて、大きな葉をゆらゆらと風に動かしてゐる姿は、誠に氣持がよい。

九九九 其の隣の畠にしゃうがが、根ぎは赤い所を少し土からあらはして、ぎやうぎよく並んでゐるのも美しい。

九九九 昨夜雨が降つたせゐか、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近

く見える。

九〇八 昨夜雨が降つたせいか、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近く見える。

九〇九 昨夜雨が降つたせいか、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近く見える。

九一〇 山のすその方があちらこちら白いのは、蕎麥の花であらう。

九一一 二十日を無事に越した田には稲の穂先がもう大分重みを見せてゐる。

九一二 たんぼの中程を流れてゐる小川は、いつもより水が多い。

九一三 蛙がぼかん／＼と飛込んで、すう／＼と泳いで行く。

九一四 ざるを持った子供が、川下の方に集つてさわいでゐるのは、鮒やどちやうを取るであらう。

九一五 空には赤とんぼが幾つともなく飛んでゐる。

九一六 うちの方をふりかへると、井戸端の柿の木に柿がす／＼なりになつてゐるのが目につく。

九一七 井戸端の柿の木に柿がす／＼なりになつてゐるのが目につく。

九一八 北風はたけが五尺二寸もある黒馬で、略。

九一九 或年戦争が始つたので、略。

九二〇 やがて「進め」の號令がかゝると、たゞ愉快にたゞ一生けんめい

九二一 略、北風は自分の信じてゐる中尉が乗つてゐてくれるので、略。

九二二 しかしとう／＼恐しい日が来る。

九二三 東の空がほんのりと白む頃、略。

九二四 月が西の空にうす白く残り、野には朝つゆがしつとりと置いてゐた。

九二五 月が西の空にうす白く残り、野には朝つゆがしつとりと置いてゐた。

九二六 中尉の固く結んだ口もと、す

九二七 利口な北風はすぐそれに気がついた。

九二八 やがてあたりの静かさを破つて、大砲の音がとゞろき始めた。

九二九 おい北風、今日は大分手ごたへがあるぞ。

九三〇 北風は、主人の手がかうしてくびすちにさはるのが何より好きだつたから、略。

九三一 北風は、主人の手がかうしてくびすちにさはるのが何より好きだつたから、略。

九三二 馬は、略、乗手のあひづが

九三三 谷一つへだてた向ふの岡に、敵の砲兵が放列をしいてゐる。

九三四 やがてとう／＼と上る白煙の間から、怪獸のやうな大砲と、其のまはりにむらがる人かげが見えて来る。

九三五 中尉は始終先頭に立つて進んでゐたが、敵陣が間近になつたのを見て、略。

九三六 ちやうど其の時、敵の砲弾が近くで破れつして、略。

九三七 ちやうど其の時、敵の砲弾が近くで破れつして、其の破片がびゅつと北風のためがみをかすめた。

九三八 北風は、主人の體がくらの上でぐらつとゆれるのを感じた。

九三九 と、たづなが急にゆるんで、中尉は後方にころげ落ちた。

九四〇 大空には、午後の日が大砲の煙や砂ぼこりにさへぎられて、どん

九四一 略、地上には、人馬の死がい

九四二 北風は俄におちけがついた。

九四三 さうして主人がこひしくなつて、今来た方へ一散にかけもどつた。

九四四 北風はもう一度あの勇ましい號令が聞きたいと思つて、略。

九四五 ちやうど其の時、はるか遠方で味方の萬歳の聲がわき起つた。

九四六 中尉の顔には満足らしい多みが浮んだ。

九四七 近き中に頂きに上りたく

候に付き、何日頃がよろしく候や、略。

九四八 或日我が軍艦高千穂の一水兵が、女手の手紙を読みながら泣いてゐた。

九四九 ふと通りかゝつた某大尉が之を見て、餘りにめ／＼しいふるまひと思つて、「こら、どうした。略。」と、言葉鋭くしかつた。

九五〇 命が惜しくなつたか、妻子がこひしくなつたか。

九五二 大尉はそれを取つて見ると、次のやうな事が書いてあつた。

九五三 村の方々は、略、

『二人の子が御國の爲い／＼に出でし事なれば、定めて不自由なる事もあらん。略。』と、親切におほせ

下され候。

九五五 母は其の方々の顔を見る毎に、そなたのふがひなき事が思ひ

出されて、此の胸は張りさくるばかりにて候。

九五七 八幡様に日參致し候も、そなたがあつたばれなるてがらを立て

候やうとの心願に候。

九五九 わたしが悪かつた。

九六〇 總べて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。九六一 豊島沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念に思つてゐる。

しかしこれも仕方がない。

九119 5 此のわけをよくおかあさんに言つてあげて、安心なさるやうにするがよい。

九119 10 道雄ガ今朝起キテミルト、
〈略〉。

九120 1 道雄ガ今朝起キテミルト、商用デ四國ノ方ヘ旅行シテキタ父ガ、夜汽車デ歸ツタコロデアツタ。

九121 4 〇 シカシ今度ノ候補者ノ中ニ、實ニリツバナ考ヲ持ツテキテ、アノ人ナラバト思ハレル人ガアルカラ、
〈略〉。

九121 8 〇 ソンナエライ方ナラ、オトウサンガワザ／＼オ歸リニナラナクツテモ大丈夫デセウ。

九121 10 〇 イヤ、其ノ人ガ當選スルコトハウタガヒナイガ、〈略〉。

九122 5 〇 當選スルシナイハ別ニシテ、メイ／＼自分ノ適當ト信ジテキル人ニ投票スルノガ、ホンタウノ選舉トイフモノダ。

九123 2 〇 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長ガ轉校シタノデ、〈略〉。

九123 4 〇 道雄ハ誰ガ何ト言ツテモ、
〈略〉。

十4 4 〇 はぎの御茶屋といふ名のあ
るも之がためなるべし。

十7 6 〇 昔ヨーロッパにアレクサンドル大王といふ王があつた。

十8 1 〇 其の大王が東方諸國の遠征に出かけた時の事である。

十8 7 〇 此の水浴が體にさはつたものか、王は俄にはげしい熱病にかゝつた。

十8 9 〇 陣頭に立つては百萬の敵を物とも思はぬ英雄も、病氣は如何ともすることが出来ない。

十9 1 〇 醫師は皆、投薬してもし萬一の事があれば、毒殺のうたがひを受けはしないかと恐れて、〈略〉。

十9 4 〇 此の有様を見て、フィリップといふ醫師が、一命をなげうつても王を助けようとした。

十9 8 〇 フィリップが藥を調合しに別室へ退いた後へ、〈略〉。

十9 10 〇 〈略〉、王の日頃信頼してゐるパルメニオ將軍から、王にあてた密書が届いた。

十9 10 〇 それにはフィリップが敵から大金をもらふ約束で王を毒殺しようとしてゐるといふ風説があるから、
〈略〉。

十10 2 〇 それにはフィリップが敵から大金をもらふ約束で王を毒殺しようとしてゐるといふ風説があるから、
用心するやうにと書いてあつた。

十10 10 〇 やがて讀終つたフィリップが、眞青な顔をして王を見上げると、
〈略〉。

十11 4 〇 王は間もなく健康を回復して、再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出来た。

十11 8 〇 總員三十二人が四組に分れて、

それ／＼仕事の持場に向つた。

十12 3 〇 〈略〉、此の頃墓参りのために朝鮮から歸つてをられる高橋さんが來られた。

十12 9 〇 誰かが力石をころがして來て、土をはらつて高橋さんの爲に席を作つた。

十13 7 〇 高橋さんは、〈略〉、「郷里の青年諸君がこんなにまじめになつて來たのは、何よりうれしい事です。〈略〉。」

十14 4 〇 皆さんの前に立つと、其の頃の心掛が恥づかしくなりません。

十14 6 〇 私が今度歸つて來て、はじめて青年團の規約を見た時は、〈略〉。

十14 8 〇 〈略〉、これがまじめに實行されてゐるかどうかと、少し氣になつたのでした。

十15 2 〇 私は此の村の青年諸君が、かうして修養にも實行にも、骨を折つてをられるのを、うれしく思ひます。

十15 4 〇 朝鮮の青年も、近頃はなか／＼頭が進んで來ましたので、〈略〉。

十16 6 〇 ちやうど此の頃、此所の名物の馬市が始つてゐるといふので、
〈略〉。

十17 2 〇 ねれない私は、〈略〉、やはり馬のそばを通るのが危険なやうな氣がしてならなかつたが、〈略〉。

十17 2 〇 〈略〉、やはり馬のそばを通るのが危険なやうな氣がしてならな

かつたが、〈略〉。

十18 1 〇 私の行つた時には、もう其所にすぎ間も無く子馬がつないでありました。

十18 2 〇 まだせりが始るのに間があるといふので、〈略〉。

十18 2 〇 まだせりが始るのに間があるといふので、馬つなぎ場を見て廻つたが、〈略〉。

十18 6 〇 中には、母馬がつきそつて來てゐるのたくさんあります。

十18 9 〇 子馬には大てい飼主の一族がついて來て、親切に世話をしてゐます。

十19 5 〇 中には、君ぐらゐの子供や、其のおかあさんらしい人が、今日の別れを惜しんで、泣きながら豆やにんじんをやつたり、くびや背をなでたりしてゐるのもあります。

十20 6 〇 せり場の一方に高い臺があつて、其の上に掛の人が居る。

十20 7 〇 せり場の一方に高い臺があつて、其の上に掛の人が居る。

十20 7 〇 子馬が頭づつ中央の廣場に引出されると、〈略〉。

十21 2 〇 さうして、もうこれが最高の直だを見ると、〈略〉。

十21 3 〇 さうして、もうこれが最高の直だと見ると、掛の人が其の直で賣渡すといふあひづに手を打つて、
取引が成立ちます。

十21 4 〇 〈略〉、取引が成立ちます。

十218 二年の年月苦勞して育てて来たものが、急に見ず知らずの人の手に渡つてしまふのだから、〈略〉。
 十2110 飼主が泣いて別れを惜しむのも、もつともな事です。
 十222 此の町では、二歳駒の市が十日間も續いて、〈略〉。
 十223 其の間には千頭からの賣買があり、〈略〉。
 十224 此の町では、二歳駒の市が十日間も續いて、其の間には千頭からの賣買があり、直段も一頭四千圓・五千圓といふ高いがあるさうです。
 十225 此等の馬が日本全國に散らばつて、或は軍馬になり、或は馬車馬になり、或は耕馬になるのださうです。
 十228 私は今日此所に来て、飼主たちがあんなにかはいがつてゐたのを見て、〈略〉。
 十235 店の看板にも馬がかいてあるのがよく目につきました。
 十236 店の看板にも馬がかいてあるのがよく目につきました。
 十239 別封の繪葉書も歸りに買つたのです。市場の様子がよくわかるから、引合はせて見て下さい。
 十244 英國の東海岸にロングストーンといふ島がある。
 十246 其の一角にそびえてゐる燈臺に、年とつた燈臺寺が、妻と娘と三

人で、わびしく其の日を送つて居た。
 十2410 一その船が、俄の嵐におそはれて、此の島に近い岩に乘上げた。
 十253 岩の上に残つた船體には、十人許の船員がすがり附いて、聲を限りに救を求めたが、〈略〉。
 十256 夜がほのくときけた頃、〈略〉。
 十272 岩の附近は波がいよゝ荒れくるふ。
 十309 北アメリカが南アメリカに續く部分は、〈略〉。
 十311 北アメリカが南アメリカに續く部分は、パナマ地峡といつて、地形がきはめて細長くなつてゐる。
 十312 此の地峡に造つた運河が、世界に名高いパナマ運河である。
 十314 パナマ地峡は一體に小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。
 十315 パナマ地峡は一體に小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。
 十316 其の外にもいろいろの理由があるの、〈略〉。
 十326 此の湖へ兩方の海から掘割が通じてある。
 十336 しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。
 十337 近づくと、門の戸びらは左右に開いて、船が中はいり、戸びらはしめる。

十338 上手にも水門があるので、船は大きな箱の中に浮いてゐる形である。
 十339 底の水道から水がわき出て、船は次第に高く浮上る。
 十3310 と、上手の水門が開いて、船は次の箱の中へはいる。
 十345 此の湖を横ぎると又水門があつて、船はさらに一段高くなる。
 十354 ガツン湖といつて、廣さが霞が浦の二倍以上もある大きな人造湖で、〈略〉。
 十361 運河は全長五十哩餘り、凡そ十時間前後で之を航することが出来る。
 十369 米國が此の運河を造るに成功したのは、〈略〉。
 十377 しかしパナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり、〈略〉。
 十3810 兄は「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」といつて、〈略〉。
 十393 あたりは如何にも静かで、たまに散る落葉の音が、かさりくと聞える。
 十397 父は腰から鎌をぬきながら、〈略〉。指の先がしびれるやうだ。」といつて、〈略〉。
 十401 力蔵さんも、「しかし天氣が續いてよいあんばいだ。」と誰に言ふともなく言つて、〈略〉。
 十411 ずいこゝといふのこぎりの

音が、あたりの静かさを破る。
 十412 向ふの山の頂に日の光が赤々とさして来た。
 十413 何處からか、ほがらかなひよどりの聲が聞える。
 十428 しばらくの間めい／＼がこんな風に働いてゐると、〈略〉。
 十4210 谷向ふのくさむらの中から、けた／＼しい羽ばたきの音を立てて、山鳥が羽飛立つた。
 十431 同時に獵銃の音が續けざまに二發聞えた。
 十433 高い／＼青空を、ひわの一群が身輕さうに飛んで行く。
 十436 父は「略、來年の秋はもう眞白な蕎麥の花で、此の地面が埋まつてしまふのだ。」と樂しさうに言つた。
 十441 九時頃にはもう數坪の地面が新しく開かれた。
 十447 ふと見上げると、庭の柿の木には、すゞなりになつた實が夕日を浴びて、〈略〉。
 十478 彼は氣がくるつた様にそこらをかけ廻つた。
 十488 いや／＼夜が明けた。
 十489 朝日のさわやかな光が、木立をもれて塞場にさし込んだ。
 十505 おとうさん、今度役場の隣にりつばな建物が出来ましたね。
 十516 うちに置くと、火事にあつたり、盗人に取られたりする危険が

あるからね。

十517 ㊦ さうで無くても、餘分のお金があると、ついむだな事に使つてしまふ。

十518 ㊦ だから、少しでも餘つたお金があつたら必ず預金にして置くものだ。

十522 ㊦ 銀行の預金には定期預金といふのと當座預金といふのがある。

十522 ㊦ 當座の方は何時でも引出すことが出来るが、(略)。

十524 ㊦ (略)、定期の方は、預けた日から半年とか一年とかきまつた期限が来ないと引出すことが出来ない。

十524 ㊦ (略)一年とかきまつた期限が来ないと引出すことが出来ない。

十526 ㊦ それでは當座預金の方が便利ですね。

十527 ㊦ 便利だが、その代り利子が安い。

十528 ㊦ 定期の方には利子がずっと多く附く。

十529 ㊦ だから當分使ふ見込のない、まとまつたお金は定期預金にした方がよいのだ。

十531 ㊦ 大勢の人に利子を拂ふだけでは、銀行が損をしないでせうか。

十535 ㊦ (略)、又何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。

十537 ㊦ 貸附の利子は預金の利子より高くしてあるから、其の差だけが

銀行の収入になるのだ。

十544 ㊦ 此の愛らしい小鳥が、(略)、いろいろの困難ををかして、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、(略)。

十544 ㊦ (略)、他の方法では全く通信が出来なくなつた場合でも、(略)。

十5410 ㊦ (略)、無線電信などが發明せられて以來、自然輕んぜられるやうになつた。

十552 ㊦ ところが、先年の歐洲大戰で、やはり此のやさしい、しかも勇ましい通信者の働の偉大な事が證明せられたので、(略)。

十557 ㊦ それ故鳩の體に手紙を附けて放せば、容易に通信が出来るのである。

十5610 ㊦ 鳩は一分間に約一キロメートルも飛ぶ力があるから、(略)。

十579 ㊦ (略)、漁業者が沖から獲物の多少や難船の有様を通知したり、(略)。

十5710 ㊦ (略)、登山者が路に迷つて危険におちいつた時、救を求めたり、(略)。

十582 ㊦ (略)、登山者が路に迷つて危険におちいつた時、救を求めたり、いろいろに利用する事が出来る。

十585 ㊦ 殊に要塞が敵にかこまれて、(略)。

十589 ㊦ あ、あのかはい、鳩が、(略)、勇ましく高空に輪を畫がきな

がら、しかと方向を見定め、矢のやうに目的地へ向つて飛んで行くのを見たならば、(略)。

十5910 ㊦ (略)、(略)婦人立出でて、「折あしく主人が留守でございますので。」とことわりぬ。

十606 ㊦ 世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。

十611 ㊦ 旅僧が一夜の宿を頼むとおほせられて、あなたのお歸を待つていらつしやいます。

十617 ㊦ 此處から十八町程先に、山本といふ宿場があります。

十651 ㊦ ちやうど有合はせの粟の飯召上るならと妻が申してをりますが、いかゞでございます。

十657 ㊦ あろりの火は次第におとろへ行きて、ひまもる夜風はだへをさすが如し。

十667 ㊦ 私はもと鉢の木がすきで、いろいろ集めた事もありましたが、(略)。

十683 ㊦ 佐野源左衛門常世と申して、もとは佐野三十餘郷の領主、それが一族どもに所領を奪はれて、此の通りの始末でございます。

十726 ㊦ 時頼は尚一同に向ひて、(略)諸侍の中に、訴訟ある者は申し出るがよい。(略)。

十738 ㊦ 此の門が南大門です。

十7310 ㊦ 京城の市街は、もと石でたゞんだ高い城壁で圍まれ、その

處々にかういふ門があつて、出入口になつてゐるのださうです。

十748 ㊦ 南大門通から本町通・鍾路通にかけての一帶が、京城で一番にぎやかな處です。

十751 ㊦ 南大門の東南の方に南山といふ山があつて、公園になつてゐます。

十753 ㊦ 此處には天照大神をおまつりした京城神社があり、又其の近くに朝鮮總督府があります。

十754 ㊦ 此處には天照大神をおまつりした京城神社があり、又其の近くに朝鮮總督府があります。

十756 ㊦ 僕はもう南山へ何度も上りましたが、此處からは京城の市街がまるで繪のやうに見えます。

十758 ㊦ 市街の周圍を取圍んだ山々は地はだが白く、それに松がまばらに生えてゐる。

十758 ㊦ (略)、それに松がまばらに生えてゐる。

十761 ㊦ 北の方の山のすそには、松林を後にして右に昌徳宮、左に景福宮の壯大な構がある。

十764 ㊦ (略)、其の又手前には朝鮮ホテル・朝鮮銀行・京城郵便局・天主教會堂などのりつぱな洋館がそびえてゐる。

十765 ㊦ すみきつた空氣の中に煉瓦の赤色や、松の緑色などが鮮かに浮出して見えるのは實にきれいです。

- 十767 国 京城の西南部に龍山といふ處があります。
 十7610 国 龍山は〈略〉、京城の發展するに連れて次第に廣がり、兩方が町續きになつて、〈略〉。
 十773 国 此處には軍司令部や龍山停車場などがあります。
 十785 国 面白いのは、三日四日續いて寒ければ、其の次には又其のくらの間暖さが續くといふやうに、〈略〉。
 十786 国 面白いのは、〈略〉、寒さと暖さがほとんど規則正しく交替することです。
 十7910 合圖のかねが鳴るとすぐ動き出す。
 十7910 地下水のしづくが、四方から雨のやうに落ちて来る。
 十801 昇降器がさまざまの勢で下りて行くので、目がまはりさうです。
 十802 〈略〉、目がまはりさうです。
 十806 〈略〉、周囲の壁は皆石炭で、それが電燈の光に物すごく光つてゐます。
 十807 此處から方々へ坑道が通じてゐて、〈略〉。
 十808 〈略〉、廣い坑道には、電気機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。
 十811 室の中には、大きなポンプが幾つも、さまざまの勢で活動してゐます。
 十8110 安全燈をたよりに歩いて行く、と、不意に足もとからねずみが一匹飛出しました。
 十823 国 事務員は平氣で、「坑内には、ねずみがたくさん居て困ります。」と言つて笑ひました。
 十825 二三十匹の馬がまぐさを食つてゐます。
 十826 坑内に馬が居るのは不思議だと思つて、聞いてみると、〈略〉。
 十831 つるはしの音がこつくり／＼聞える。
 十833 暗やみの中にかすかに安全燈が光つてゐる。
 十834 近づいて見ると、坑夫が汗だらけになつて、元氣よく石炭を掘つてゐます。
 十837 つるはしの先がきらりと光る。
 十837 石炭ががさりと崩れる。
 十842 探炭坑夫は四人づつ一組になつてゐて、其の内の二人が石炭を掘崩すと、〈略〉。
 十843 〈略〉、其の内の二人が石炭を掘崩すと、他の二人がそれをざるで運んで炭車に入れる。
 十844 炭車が一ぱいになると、〈略〉。
 十844 炭車が一ぱいになると、馬方がそれを馬に引かせて、電気機關車の通ふ道まで運んで行きます。
 十848 国 或日、此の附近の山へ薪をとりに來た百姓が、たき火をしてゐると、〈略〉。
 十849 国 〈略〉、たき火をしてゐると、そばの黒い岩に火がつき、煙をあげて燃出しました。
 十852 国 それから「燃える石」といふやうばんが高くなつて、〈略〉。
 十854 国 これがつまり此の炭坑の始ださうです。
 十855 坑外に出ると、急に夜が明けたやうで、〈略〉。
 十859 事務所の湯にはいつて服を改めると、更に生きかへつたやうな氣持がしました。
 十861 我々が今日生活して行くには、我が國で出来る品物ばかりでは用が足らない。
 十862 〈略〉、我が國で出来る品物ばかりでは用が足らない。
 十863 〈略〉、時には外國の品を使ふ方が都合のよい事もある。
 十864 種々の品物が遠く外國から輸入されるのは、主にこれ等の事情からである。
 十873 〈略〉、物によつては、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。
 十873 〈略〉、物によつては、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。
 十873 〈略〉、物によつては、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。
 十873 〈略〉、物によつては、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。
 十885 支那の豚の毛が輸入されて日本でブラシに造られ、又支那へ輸出されるなども同じ例である。
 十889 輸出入の額の増加して行くのは國家が次第に盛になる印である。
 十929 国 父は「誠にやさしいやうだが、それで中々言ひにくい場合があるのだ。」
 十9210 翌日太郎が友だちの正雄・良一と三人連で、學校から歸る時の事であつた。
 十932 「本道は遠いから近道を通らう。」と正雄が言ふと、良一はすぐ賛成した。
 十934 〈略〉、途中にはかなり深い小川にかけ渡した一本橋がある。
 十9410 すると、しまひに皆が僕の事を弱蟲だといつて笑ひました。
 十952 国 〈略〉、何此のくらの事がこはいものかと、自分から先に立つて渡つたのです。
 十955 国 人の言ふことに對して『いゝえ。』と言切るのは、ほんたうの勇氣がある。
 十959 国 それから又、晝間私が聞いた時、なぜすなほに『はい。』といはなかつたのだ。
 十961 国 僕何だかきまりが悪くつて、さう言へなかつたのです。
 十966 太郎は〈略〉、「はい。」と「いゝえ。」の言ひにくいわけをさることが出來た。
 十973 国 其の友之を止めてはいく、「羊の虎に向ふが如し。危し。」と。
 十1004 国 天祥刑せらるゝにのぞみ、從容としてはいく、「臣が事終る。」

と。

十100 10 〈略〉、冬枯の小道を通つて来て、一足温室の中に入ると、全く別の世界に來たやうな心持がする。

十101 3 先に立つたにいさんが、「あゝ、咲いてゐる、く。〈略〉。」と、いろ／＼説明して下さる。

十101 5 園 みよ子、ずるぶん珍しい花があるだらう。

十102 3 それから少し行くと、うつぽかつらといふものがある。

十103 1 〈略〉、そつとのぞいて見ると、はへのやうな蟲が二匹、底の水の中で、動けなくなつてゐる。

十103 8 中には、まるで花かと思はれる紅色の葉が、莖の上の方に群がつて出でゐるものもある。

十104 1 次の室には大きい熱帯植物類が並んでゐる。

十104 4 園 にいさんは「此の後にカメラがある。〈略〉。」と教へて下さつた。

十104 9 其處から又右に折れると、細長い室一ぱいに、目もさめるやうな草花が並べてある。

十105 4 園 此の温室は南を受けてゐる上に、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに早く咲くのだ。

十105 6 園 にいさんも足を止めて、「略」。一度此の中に入ると、また寒い處へ出るのがいやになるね。」とお笑ひになつた。

十105 7 外はさつきよりも一そう風が

強くなつたのか、ガラス越しに見える向ふの木がひどくゆれる。

十105 8 〈略〉、ガラス越しに見える向ふの木がひどくゆれる。

十112 6 昨夜の風雨は名残なくをさまつたが、海面にはまだ波のうねりが高い。

十112 6 一隻の捕鯨船が、勇ましく波を切つて進んで行く。

十112 7 マストの上の見張人が不意に「鯨、鯨。」と聲高く叫んで、北の方を指さした。

十113 3 はるかあなたに白い水煙が見える。

十114 3 もりが體內深くくひ込んで、破裂矢が見事に破裂したのであらう。

十114 4 〈略〉、破裂矢が見事に破裂したのであらう。

十115 2 しかしまだなかなか勢が強いので、〈略〉。

十115 9 其の時、二番もりが打出された。

十116 1 二十メートルもある大鯨が今は全く息たえて、小山のやうな體を水面に横たへる。

十116 3 あたりには流れ出る血に、紅の波がたゞよふ。

十118 1 何百年も経たであらうと思はれる樟の大木が茂り合つてゐる。

十118 4 〈略〉、神前の大きな神鏡が、きら／＼とかゞやいてゐて神々しい。十118 8 社殿の後に廻ると、其處は

廣々とした梅林で、幾百本とも知れない古木の梅が咲續いてゐる。

十118 10 白梅は今ちやうど眞盛りであるが、其の間に咲きかけの紅梅が點々と交つて美しい。

十119 1 掛茶屋に休んで名物の餅を食べてゐると、不意にかん高い鳥の聲が聞えた。

十119 7 〈略〉、霜よけのわらの間から、黄色い夏みかんがちら／＼見えてゐるのも珍しい。

十119 10 低いじめ／＼した松林の中に小さな社がある。

十120 9 あちらこちらの村々からは細い煙が立上つてゐる。

十121 7 後日、人が主人に向つて、どういふお見込で、あの青年をお用ひになつたのかと尋ねた。

十121 10 主人は答へて、「あの青年が私の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、はいると靜かに戸をしめました。〈略〉。」といった。

十122 3 園 談話の最中に一人の老人がはいつて來ましたが、〈略〉。

十122 7 園 あいさつをしてもていねいで、少しも生意氣な風が無く、〈略〉。

十123 2 園 外の者は少しも氣がつかないらしかつたが、〈略〉。

十123 10 園 外の者は着物だけは美しかつたが、爪の先は眞黒になつてゐる者が多うございました。

十124 4 園 りつばな人の紹介状よりも、

何よりも、本人の行がたしかな保證です。

十125 8 園 村長は村の舊家に生れ、きはめて親切公平にして、常に力を一

村の幸福の爲に盡くすが故に、〈略〉。十126 3 園 其の他の教員も、校長を模範として専心職務につとむるが故に、〈略〉。

十129 5 園 拍手かつさい、天地をとどろかす萬歳の叫、勇壯なる軍樂の調、工場といふ工場、船といふ船の汽笛が一せいにあぐる歡呼の聲。

十114 太陽の光と熱とがなくては、我々人間は勿論、あらゆる生物、一として生存することは出来ない。

十129 望遠鏡で見ると、太陽の表面は全部が一樣にかゞやいてゐるのではなく、〈略〉。

十138 つまり此の宇宙には、あの太陽のほかに、これと同じやうなものがなほ數限りもなく存在してゐるが、〈略〉。

十163 園 論語は、曾參と有若との門人等が孔子及び其の高弟の言行を

集録したるものにして、〈略〉。

十172 園 孔子常に中正不偏を貴び、〈略〉、「過ぎたるは及ばざるが如し。」ともいへり。

十178 園 「おのを修めて人を安んず。」とは、彼が簡明に此の意をあらはせる語なり。

十189 こゝには外國人の居留する

者が非常に多く、これ等は租界といふ特別の区域内に住んでゐる。

十一 91 租界といふのは居留地の一種で、居留民が支那政府の手を離れて、自治制を布いてゐる處である。

十一 94 租界には皮膚の色の違ひ、言語・風俗の違つた幾多の人種が入交つてゐるので、〈略〉。

十一 96 アスファルトや石を敷いた道が縦横に通じ、〈略〉。

十一 97 〈略〉、電車・馬車・自動車等が絶間なく往來してゐる。

十一 98 街路をさしはさんで大商店が軒をつらね、〈略〉。

十一 99 〈略〉、河岸には領事館・税關を始め、銀行・會社等のりつぱな建物がある。

十一 101 其の外各種の學校や、博物館・圖書館等の修養機關、公園・競馬場・劇場等の娛樂機關が到る處に散在してゐる。

十一 106 唯商業の取引の盛な部分は、相當に活氣を帯びてをり、西洋風の建物もあつて、趣がやゝ變つてゐる。

十一 107 上海が黃浦江に臨む部分は延長八哩、六十餘の波止場がある。

十一 108 上海が黃浦江に臨む部分は延長八哩、六十餘の波止場がある。

十一 112 〈略〉、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。

十一 119 〈略〉、紡績・造船・製粉・製紙其の他の諸工場が勢よく黒煙を

立ててゐる。

十一 143 通された部屋には、古いたんすや戸棚などが並べてありました、〈略〉。

十一 144 〈略〉、さうぢもよく行届いてゐるし、總べてがきちんとしてゐました。

十一 148 三月の末になさるはずであつたのが、お取込があつたため、今まで延びてゐたのださうです。

十一 148 〈略〉、お取込があつたため、今まで延びてゐたのださうです。

十一 149 私が來たので、すぐしまはうとなさるのを強ひて止めてお手傳をしましたが、〈略〉。

十一 152 のぶ子さんは、成績物が返るとすぐ紙の袋へ入れておいて、〈略〉。

十一 166 私は學校で習ふ本でさへ時々見失つて、大さわざをすることあります。

十一 167 〇「こんなによく整頓してゐる中で勉強したら、どんなに氣持がよいだらう。」と思ひつゞけてゐると、〈略〉。

十一 168 〈略〉、そこへ弟さんが雑誌を二三つ持つて來て、本棚に並んでゐる雑誌の間へそれ／＼お入れになりました。

十一 172 弟さんまでが、あんなに氣をつけていらつしやるとは實に感心なことです。

十一 174 しばらくたつと、おかあさんが臺所の方から、「〈略〉。」とおつしやいました。

十一 177 見れば引出にはみんな札がはつてあつて、「ふろしき」「ハンケチ」などと一々書いてあります。

十一 179 此の一事で、家の中がどんなによく整頓されてゐるかが想像されます。

十一 1710 此の一事で、家の中がどんなによく整頓されてゐるかが想像されます。

十一 189 約束は固く守らなければならぬ、他人に害を加へてはならぬなどといふことは、我々が十分心得てゐる事である。

十一 191 例へば、借りた金を、返す約束の日が來ていくら催促されても、返さない人がある。

十一 192 例へば、借りた金を、返す約束の日が來ていくら催促されても、返さない人がある。

十一 198 又他人の物を盗んだといふやうな犯罪があつた場合には、〈略〉。

十一 199 〈略〉、國家は其のやうな不法な行が再びされないやうに、其の犯罪者をこらし、又世間の人々のいましめにもせねばならぬ。

十一 206 此の場合には訴へられた者が被告で、檢事といふ役人が原告に當るのである。

が被告で、檢事といふ役人が原告に當るのである。

十一 208 裁判所は國家が設ける機關で、これに區裁判所・地方裁判所・控訴院・大審院の四階級がある。

十一 209 〈略〉、これに區裁判所・地方裁判所・控訴院・大審院の四階級がある。

十一 221 〈略〉、刑事裁判では、不當な刑罰が加へられぬやうに被告を保護するために辯護士といふものがある。

十一 222 又民事裁判では、原告・被告の相談相手・附添人又は代理人となつて其の主張を助け、刑事裁判では、〈略〉被告を保護するために辯護士といふものがある。

十一 225 此の世を不道徳や罪惡の行はれない、平和な、秩序正しい世の中にするのが其の目的である。

十一 226 若し裁判が無いとしたら、人々相互の争がはてしく行はれて、〈略〉。

十一 227 若し裁判が無いとしたら、人々相互の争がはてしく行はれて、しかも其の争は、力の強い者やわがしこい者が勝つことになるであらう。

十一 228 若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、〈略〉。

十一 22 9 若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、せつかくの法律もねうちが無くなり、〈略〉。

十一 22 10 〈略〉、我々は安心して生活することが出来ぬであらう。

十一 30 8 ねぢ伏せられながら正國、清正がよろひのすそをしつかとつかむ。

十一 33 4 一島未だ去らざるに、一島更にあらはれ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

十一 33 8 春は島山かすみに包まれて眠るが如く、夏は山海皆緑にして目覺むるばかり鮮かなり。

十一 34 1 図 兩岸及び島島、見渡す限り田園よく開けて、毛氈を敷けるが如く、白壁の民家其の間に點在す。

十一 35 4 障子をあけてみるとまだ雨が降つてゐる。

十一 35 6 〈略〉、うねくくと續く岡が雨に煙つて、ぼんやりと遠く見える。

十一 35 9 〈略〉、山の背を通つてゐる小路を中にはさんで、四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるのが、目に見えるやうな氣がする。

十一 35 10 〈略〉、四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるのが、目に見えるやうな氣がする。

十一 35 10 〈略〉、目に見えるやうな氣がする。

十一 36 4 地圖の中の薄緑に染めてゐるのが一昨年植付けた處、〈略〉。

十一 36 5 〈略〉、朱線で圍んでゐるのが今年伐採する處、〈略〉。

十一 36 6 〈略〉、朱線で圍んでゐるのが今年伐採する處、それから次々といろくくの印がついてゐる。

十一 37 2 あの時、「こんなに間を置いてよいのですか。」と僕が聞いたら、〈略〉。

十一 37 2 あの時、〈略〉、おとうさんが「〈略〉。」といつて笑つてをられた。

十一 37 4 図 〈略〉、此の邊では太材を取る方が利益だから、かう間を置いて植ゑるのだ。

十一 38 2 〈略〉、それでも木が競争するやうに、しんを立ててすくすくと延びてゐるのを見ると、非常にうれし。

十一 38 4 木でも見下されるのがいやなのか、〈略〉。

十一 38 5 〈略〉、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

十一 38 9 〈略〉、今まで兩方の枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて如何にも氣持よささうに見える。

十一 38 9 〈略〉、〈略〉急に間がすいて如何にも氣持よささうに見える。

十一 39 1 いつかにもいさんが、「杉の散髪だ。」といつてみんなを笑はせたことがある。

十一 39 4 いつかにもいさんが、〈略〉みんなを笑はせたことがある。

十一 39 6 おとうさんのお話によると、枝を打てば、〈略〉、又空氣の流通がよくなつて蟲がつかなくなるさうだ。

十一 39 7 〈略〉、又空氣の流通がよくなつて蟲がつかなくなるさうだ。

十一 39 8 それから始めて聞いて面白と思つたのは、枝打をしないと木に節が出来ることである。

十一 39 10 生きた枝でも枯れた枝でも、其のまゝにしておくと、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、〈略〉。

十一 40 1 生きた枝でも枯れた枝でも、其のまゝにしておくと、〈略〉、其處が節になるのだといふ。

十一 40 2 僕がお手傳して植ゑたあの杉や檜は、〈略〉。

十一 40 5 〈略〉、一番早く伐るとしても、其の時は僕がおとうさんくらゐの年になつてゐるわけだ。

十一 40 8 今年伐るはずのは、〈略〉、もう幹のまはりの三尺餘りもあるものが大分見える。

十一 40 9 図 植林は貯金のやうなもので、植ゑてさへおけば、年々太つて利息が附いて行く。

十一 41 2 〈略〉、いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。

十一 41 3 あ、西の空がほんのり明るい。

十一 49 10 これには種類が多く、一番よいのはパラゴムといふのである。

十一 50 3 此の種のゴムが、昔主として南米ブラジルのパラ州から産出したので、パラゴムの名が生じたわけである。

十一 50 4 〈略〉、パラゴムの名が生じたわけである。

十一 50 7 〈略〉、近年ゴムの需要が激増したために、英國人はマレイ半島の領地にパラゴムの木を移植するに至つた。

十一 51 1 南洋は一年中温度が高く、雨量が多いので、ゴムの木の發育には最もよく適してゐる。

十一 51 1 南洋は一年中温度が高く、雨量が多いので、〈略〉。

十一 51 8 此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあとに種をまくか、又は苗木を植付けるのであるが、これが成長して、切付を行ふまでには五六年もかゝる。

十一 52 7 元來ゴム液は〈略〉乳管組織といふ所から出るものであるから、此の組織の所まで小刀が届いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。

十一 53 1 それがすむと、今度はバケツを持つてコップにたまつた液を集めて歩くのである。

十一 53 6 こゝまでが原産地における

仕事である。

十一 53 8 加硫法とは、ゴムに硫黄をまぜる事で、かうするとゴムが非常に弾力を増して来る。

十一 54 3 近來床の敷物や、道路にもゴムを用ひることが行はれて來た。

十一 54 6 昔、アフリカの或港に一そ

うの船がとまつてゐた時の話である。
十一 54 10 船には船長と老砲手だけが残つてゐた。

十一 56 1 ちやうど其の時、「ふかだく」といふ船長のけた、ましい叫び聲が聞えた。

十一 56 1 老砲手が驚いて向ふを見ると、船から三四百メートルの處に、大きなふかの頭が見える。

十一 56 2 〈略〉、船から三四百メートルの處に、大きなふかの頭が見える。

十一 56 10 其のうちに二人はふかの來るのに氣がついた。

十一 57 7 ものすごい程青白くかはつた老砲手の顔には、決心の色が浮んだ。

十一 58 2 「あつ。」と、思はず人々が叫んだ。

十一 58 3 とたんに、ずどんと一發すさまじい大砲の音がとろろき渡つた。

十一 59 4 札幌に來て先づ感ずることは、街路が眞直で幅の非常に廣いことである。

十一 59 7 主な通にはアカシヤの並木が青々と茂つてをり、〈略〉。

十一 59 9 〈略〉、市街の中央を東西に貫ぬく幅六十間の大通は、むしろ公園ともいふべきもので、花壇が設けてあり、銅像なども立つてゐる。

十一 60 1 未開の土地を切開いて、思ふまゝに設計して造つた町であるから、總べてが大規模でのびくとしてゐる。

十一 60 4 市外の眞駒内及び月寒には、大きな牧場がある。

十一 60 5 見渡す限り果もない原野に、放牧の馬や牛がいくと草をはむ様や、〈略〉。

十一 61 1 此の峠には長いトンネルがあつて、其のあたりは海拔約千八百尺、〈略〉。

十一 61 7 右手には遠く日高境の山々が大浪のやうに連なり、〈略〉。

十一 61 8 〈略〉、眼下には廣々とした十勝の大平野がはるばると續いて、

末は青い大空に接してゐる。

十一 61 10 畫がけるが如く美しき山の、或は右に或は左にあらはれるのは、サホロ嶽の連峯の一つであらう。

十一 62 8 明治十六年こゝに十三戸の農家が移住して來たのが此の町の始まりであつた。

十一 62 8 明治十六年こゝに十三戸の農家が移住して來たのが此の町の始まりであつた。

十一 63 1 それが今は人口約二萬、戸數約四千を算するりつばな町となつ

たのである。

十一 63 3 此の邊の農業は總べて規模が大きい。

十一 63 5 畠にしても、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。

十一 63 10 トラクターはちやうど軍用のタンクのやうな形で、ガソリンの發動機が取付けてある。

十一 63 10 これが大きな鋤を何本も引いて、ものすごいやうな聲を立てながらのそりくときき廻ると、〈略〉。

十一 66 2 思ふに落雷の爲に樹木が燃えたり、〈略〉。

十一 66 2 〈略〉、密生した樹木の枝と枝がすれあつて起つたりした自然の火から、〈略〉。

十一 66 4 其のうちだんく人智が發達するにつれて、〈略〉。

十一 66 10 〈略〉、マッチの使用が廣まるにつれてすたつて來た。

十一 67 3 〈略〉、時代が進んで燃料の種類が増すにつれて、〈略〉。

十一 67 3 〈略〉、時代が進んで燃料の種類が増すにつれて、火の用途もだんく廣くなつて來た。

十一 67 6 〈略〉、石炭の火は木炭の火よりずつと熱度が高いので、〈略〉。

十一 67 10 燈火としては、〈略〉、其の

後らふそくや種油がともされ、〈略〉。

十一 68 1 燈火としては、〈略〉、其の後らふそくや種油がともされ、石油のランプが之に代り、〈略〉。

十一 68 1 燈火としては、〈略〉、今はガス燈や電燈が到る處にかゞやき渡る時代となつた。

十一 68 8 將來は又どんなものが發明されて、今のガスや電氣にかはることであらうか。

十一 69 1 或山寺で、四人の僧が一室に閉ぢこもつて、七日間の無言の行を始めた。

十一 69 4 夜が更けるにつれて燈がだんく暗くなり、今にも消えさうになつた。

十一 69 4 夜が更けるにつれて燈がだんく暗くなり、〈略〉。

十一 69 5 末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。

十一 69 6 末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。うつかり口をきいてしまつた。

十一 69 8 隣に坐つてゐた僧が之を聞いて、「無言の行に口をきくといふ事があるか。」

十一 69 9 無言の行に口をきくといふ事があるか。

十一 69 10 第二座の僧は、二人とも規則を破つたのが不快でたまらない。

十一 70 3 〈略〉、上座の老僧がもつた

いらしい顔をして、「物を言はない

のはわしばかりだ。」

十一708 若い頃から讀書がすきで、將來學問を以て身を立てたいと、一心に勉強してゐた。

十一712 〔略〕、主人は愛想よく迎へて、「略」。あなたがよく會ひたいと御話しになる江戸の賀茂眞淵先生が、「略。」といふ。

十一713 〔略〕あなたがよく會ひたいと御話しになる江戸の賀茂眞淵先生が、先程御見えになりました。

十一716 〔略〕宣長は驚いて、「先生がどうしてこちらへ。」

十一717 〔略〕何でも山城・大和方面の御旅行がすんで、これから參宮をなさるのださうです。

十一732 〔略〕萬一御歸りに又泊られることがあつたら、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。

十一735 望がかなつて、宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出来たのは、それから数日の後であつた。

十一735 〔略〕宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出来たのは、〔略〕。

十一737 〔略〕宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出来たのは、〔略〕。

十一746 話が古事記のことに及ぶと、宣長は「略。」

十一7410 〔略〕それはよいところに氣がつかしました。

十一752 〔略〕、どうも古い言葉がよくわからないと十分なこととは出来ない。

十一756 〔略〕、古事記に手を延ばすことが出来なくなりました。

十一758 〔略〕あなたはまだお若いから、しつかり努力なさつたら、きつと此の研究を大成することが出来ませう。

十一776 我々の普通に金銭といつてゐる物の中には、金貨を始め、銀貨・白銅貨・青銅貨がある。

十一777 又此の外に貨幣の代りに用ひられる紙幣がある。

十一788 石・貝・家畜・獸皮・布・農産物などが、時代により場所によつて、それ／＼貨幣の役目をしたこともあつた。

十一7810 しかしこれらの物は、受取る者にそれが不用であつたり、思ふやうに分割することが出来なかつたり、其の他いろ／＼の缺點がある。

十一791 しかしこれらの物は、〔略〕思ふやうに分割することが出来なかつたり、〔略〕。

十一792 しかしこれらの物は、〔略〕其の他いろ／＼の缺點がある。

十一836 今日始はじめての遠泳だと思ふと、何だかうれしいやうな心配なやうな氣がする。

十一837 空には眞夏の目がきら／＼とかゞやきわたつてゐる。

十一838 砂の上を歩いて行くと、足

の裏が焼けるやうだ。

十一8410 ふと見ると、さした六七寸もある大きなくらげが、ふわり／＼と浮いてゐる。

十一852 竹島を越したと思ふと、急に水が冷たくなつた。

十一856 手足が大分くたびれて來た。

十一858 その中、先に進んでゐた者が二三人列から離れて船に上つた。

十一859 僕も急に元氣がなくなつて、一所に船に上らうかと思つたが、〔略〕。

十一861 〔略〕、「いや、こゝがまんのだ。」と、自ら勵まして進んで行つた。

十一8610 波打際には大勢の人が旗を振つたり帽子を振つたりして、「萬歳々々。」と叫んでゐる。

十一873 〔略〕「あ、五海里の海上を僕も泳ぎきることが出来たのだ。」かう思ふ瞬間、〔略〕。

十一8710 父は空をながめて、「大層天氣がおだやかになつたね。〔略〕。」と、團扇を使ひながら言つた。

十一882 すると弟が「おとうさん、〔略〕。」と言つて、日數を數へてみようとした。

十一904 僕はこれまで暦といふと、〔略〕、祝祭日・土用・彼岸・入梅・日食・月食が何時になるかといふやうな事を見るものばかり考へてゐたので、〔略〕。

十一907 〔略〕暦を見れば、まだいろ／＼大切な事がわかる。

十一9010 〔略〕おとうさんが毎年潮干狩によい日を選ぶのも『月齡』を見て知るのだ。

十一914 〔略〕『各地の氣候』といふ所がある。

十一916 〔略〕それから雨雪の量は何處が一番多いか、〔略〕、こんなことも記してある。

十一916 〔略〕それから雨雪の量は〔略〕、又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。

十一918 〔略〕もつとくはしいことは本暦を見るがよい。

十一9110 僕はよく年寄の人が新の幾日とか舊の幾日とかいふのを思ひ出して、〔略〕。

十一927 〔略〕太陽暦の方がよく季節にあつて都合がよいからだ。

十一927 〔略〕太陽暦の方がよく季節にあつて都合がよいからだ。

十一939 〔略〕、太陰暦になると三十日もちがふことがある。

十一941 〔略〕こんな不便な暦でも長い間の習慣で、今でも使つてゐるものがあるやうだ。

十一943 〔略〕こんな重寶なものがあるのに、それを利用しないのであるのは寶の持ちぐされだ。

十一9410 リンカーンが七歳の時、一家はインディアナ州に移つたが、

〈略〉。

十一951 〈略〉、さしあたり家がなくてはならぬので、父は自分で木を切出して小さな家をつつた。

十一952 それは三方が丸太の壁で、

一方は明けはなしになつてゐて、戸も窓も床もないものであつた。

十一954 家が出来てから次に土地を開きにかゝつた。

十一956 父が木を伐れば自分は雑草をかり取る、〈略〉。

十一957 〈略〉、父が畠を打てば自分は種をまくといふ風にかひがひしく働いてゐた。

十一968 〈略〉、父は學校へ行つて時間をつぶすよりも畠に出て働いた方がよいといつて、なか／＼許してくれなかつた。

十一9610 ところが母のとりなしで終に學校に入ることが出来たので、リンカーンの喜は一通りでなかつた。

十一979 シャベルが數字で眞黒になると、それをふいては又書く。

十一987 ところが家に書物がないばかりでなく、近くに圖書館もないので、〈略〉。

十一9810 さうして其の本の内容がすつかりわかつてしまふまでは何度でも讀む。

十一994 或時近邊の人からワシントン傳を借りたことがある。

十一998 晝の仕事の合間に讀むのは

勿論、夜は床に就いてから燈が盡きるまで讀む。

十一998 燈が盡きると翌朝すぐ手に取るやうに、まくらもとの壁際に置く。

十一9910 ところが或夜、夜中に激しい雨が降つたことがある。

十一9910 ところが或夜、夜中に激しい雨が降つたことがある。

十一9910 リンカーンがふと目を覺した時はもう遅かつた。

十一1002 壁のすき間をもつた雨のため、本がすつかりぬれてゐたので、〈略〉。

十一1005 辨しやうすることが出来ませんから、其の代りに何か仕事をさせて下さい。

十一1013 彼が他日大統領となり、世界の偉人として萬人に仰がれるやうになつたのは、〈略〉。

十一1037 國圖 〈略〉、唯をかしくは日本の秋が春、日本の冬が夏といふ様に季節の相反する事に候。

十一1037 國圖 〈略〉、唯をかしくは日本の秋が春、日本の冬が夏といふ様に季節の相反する事に候。

十一1062 國圖 殊に日本人の小學校ありて、御前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては、〈略〉。

十一1067 國圖 大勢の人々が熟したるコーヒーの實を手にてこき落し、之を集めてみぞに投入れ候へば、〈略〉。

十一1074 國圖 コーヒー園には多くの日本人が働き居候。

十一1075 國圖 中にも十三四ばかりの子供が、各國人の間にまじりてかひ／＼しく立働ける様を見ては、〈略〉。

十一1091 國圖 かゝる處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、〈略〉。

十一1096 國圖 〈略〉、三抱も四抱もあるものが地ひゞきを打つて倒る様、壯快言語に絶し候。

十一1116 國圖 〈略〉、劉備が三顧のこよなき知遇、我が身をすてて報いんと、起ちてぞ出でぬる、草のいほりを。

十一1122 國圖 天下を定むる三分の計、たなそこの上に指さすがごと。

十一1133 我が國の地方自治團體には、府・縣・市・町・村の別がある。

十一1134 其の土地に廣い狭いがあり、其の組織に繁簡の差があるにしても、〈略〉。

十一1134 其の土地に廣い狭いがあり、其の組織に繁簡の差があるにしても、〈略〉。

十一1142 地方人民が協同一致して自ら地方公共の事に當り、誠意其の團體の爲に力を盡くす精神が即ちそれである。

十一1144 地方人民が協同一致して自ら地方公共の事に當り、誠意其の團體の爲に力を盡くす精神が即ちそれである。

十一1145 一般人民が府縣市町村會議員を選擧するにも、府縣市會で參事會員を選擧するにも、市町村會で市町村長を選擧するにも、皆此の精神を本としなければならぬ。

十一1148 又市町村長が其の事務を處理するにも、〈略〉、常に此の公平な精神をもつてしなければならぬ。

十一1149 〈略〉、議員が豫算を議するにも、常に此の公平な精神をもつてしなければならぬ。

十一1153 市町村長や議員を選擧するには、専ら其の人物に重きをおいて、決して親族・縁故其の他私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。

十一1161 〈略〉、一般の人民の後援がなければ自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。

十一1166 例へば教育・衛生等の自治團體の事業は、地方人民が一般に之を尊重し、之に協力することによつて、〈略〉。

十一1167 例へば教育・衛生等の自治團體の事業は、地方人民が一般に之を尊重し、之に協力することによつて、〈略〉。

十一1174 自治制も、之を運用する人民に自治の精神が乏しければ、よい結果を得ることは到底望まれぬ。

十一1177 昔イギリスの或大きな農場

で、農場主が大勢の人の耕作するのを監督してゐた。

十一117 〇 略、銃獵に出たらしいりつばな騎馬の人たちが、眞一文字にこちらへかけて来る。

十一118 〇 人が何と言つても決してあけるな。

十一118 7 ジョージがとんで行つて門の戸にくわんぬきをさすが早いか、
〇 略。

十一118 7 ジョージがとんで行つて門の戸にくわんぬきをさすが早いか、
〇 略。

十一119 〇 僕はおとうさんから、誰が来て此の門をあけてはならないと言ひつけられてゐるのです。

十一119 8 〇 おとうさんは、誰が来て此の門をあけてはならないと僕に言ひつけました。

十一120 〇 最後に目つきのやさしい老紳士が言つた。

十一120 4 ジョージは、かねてウェリントン公爵が勲功も高く、りつばな人物であるといふ事を聞いてゐたので、
〇 略。

十一120 7 〇 ウェリントン公爵ともいはれるえらいお方が、おとうさんの言ひつけに背けとおつしやらうとは、どうしても考へられませんか。

十一120 9 〇 僕は、誰が来て此の門をあけてはならないとおとうさんに言はれてゐるのです。

十一121 〇 公爵はひどく此の答が気に入つた。

十一121 9 〇 略、マスクをかけた職工が珪砂にソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。

十一122 〇 シャベルでざく／＼かきまぜると、白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、目も口もあけられない。

十一122 8 〇 次の建物にはいると、こゝには熔解窯がある。

十一122 9 〇 とけたガラスが中でざく／＼かがやいてゐる。

十一123 〇 窯の周囲には、八九人の職工が汗を流して働いてゐる。

十一123 5 〇 細長い管の一端を、とけたガラスの中に突つこんで引出すと、先に赤い玉がくつ／＼ついてゐる。

十一123 8 〇 見てゐるうちに大きなフラスコが出来た。

十一123 10 〇 何が出来るであらうかと思つてゐると、
〇 略。

十一124 5 〇 調べかのはの廻るにつれて、石や木や金の圓板が車輪のやうに廻つてゐる。

十一124 5 〇 エプロンかけた職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板にあてて模様をほりつけたり、みかきをかけたりしてゐる。

十一124 8 〇 隣の室では、職工が五六人ならんで、ガラス器にいろ／＼の模様をつけてゐる。

十一125 〇 皿・コップをはじめ、鉢・びん・花瓶・水さしなどがきれいに並んでゐた。

十一125 7 〇 しかも其の巻數幾千の多きに上り、これが出版は決して容易の業に非ず。

十一127 2 〇 〇 思ふに、「我が一切經の出版を思立ちたるは佛教を盛にせんが爲、佛教を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんが爲なり。
〇 略。」と。

十一127 3 〇 〇 略、佛教を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんが爲なり。

十一129 10 〇 かくて天和元年鐵眼が初度の募集を始めてより十八年の後に至りて、
〇 略。

十一121 4 〇 〇 古のふみ見るたびに思ふかな、おのが治むる國はいかにと。

十一121 6 〇 〇 浅緑すみわたる大空のひろきをおのが心とがな。

十一128 7 〇 〇 此の棒を此の板の上にてきりをもむが如く廻せば、摩擦によりて火を生ず。

十一129 1 〇 〇 かの建御雷命が大國主命と會見せられしは此處なりといふ。

十一129 5 〇 〇 略、そのかみ此處にかめしく向ひあひけん英雄の姿、今までのあたり見るが如く、打寄する波の音さへ何事かを語るに似たり。

十一129 10 〇 〇 略、又物を集めることが

すきで、貝殻や鑽石などを室内に並べては一人で楽しんでゐた。

十二10 7 〇 又父には「
〇 略。」といつて叱られたことがあつた。

十二10 10 〇 又いろ／＼の鳥を注意して見ると、
〇 略、見れば見る程興味がわき、
〇 略。

十二11 5 〇 温順な彼は父の命に従つて勉強してゐたが、何時の間にか好きな博物學の研究が主となつてしまつた。

十二11 8 〇 或日彼が古木の皮をむくと、珍しい甲蟲が二匹ゐた。

十二11 9 〇 或日彼が古木の皮をむくと、珍しい甲蟲が二匹ゐた。

十二11 10 〇 早速兩手に一匹づつかむと、又一匹變つたのが見えた。

十二12 5 〇 彼が探檢船ビーグル號に乗込んで意氣揚々と本國を出發したのは、二十三歳の時である。

十二12 10 〇 此の航海によつて彼の博物學者としての基礎が十分に出来、一生の方針がはつきりとしまつた。

十二12 10 〇 此の航海によつて
〇 略、一生の方針がはつきりとしまつた。

十二13 9 〇 ダーウィンの後半生は病氣がちであつたが、
〇 略、七十四歳の長壽を保つことが出来た。

十二14 2 〇 これが有名な進化論で、學

界を根本から動かしたものである。

十二198 罇 沖を走るは丸屋の船か、丸にやの字の帆が見える。

十二199 調子のよい蜜柑取歌がすみきつた晩秋の空気をふるはして、何處からともなくのどかに聞えて来る。

十二203 〈略〉、幾段にも幾段にもきづき上げられた山畑には、蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。

十二206 それを見て、枝といふ枝にはもう黄金色に色づいた實が鈴なりになつてゐる。

十二208 黒い程こい緑の葉の間から、其の一つくが日の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。

十二210 黒い程こい緑の葉の間から、其の一つくが日の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。

十二215 ふと見ると、ついそばの木の下では、かごを首に掛けた二三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。

十二217 あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよきんくんと聞える。

十二218 ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。

十二2110 小春日和の暖さにとけて、其處からも夢のやうに船歌が聞えて来る。

十二232 又單に損益の點から見ても、かやうな仕方は唯一時の利益を得る

に止つて、永續することが出来ないから、〈略〉。

十二235 外國貿易に至つては、之に従事する者の心掛け如何の影響が更に大きい。

十二235 即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、〈略〉。

十二2310 昔は個人の利益を営むのが商業であると思はれてゐた。

十二243 彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。

十二244 これはひつきやう文明の程度が低いために、共同生活の意義が明らかでなく、随つて商業の本質が理解されず、商人の人格が重んぜられなかつたからである。

十二245 〈略〉、共同生活の意義が明らかでなく、〈略〉。

十二246 〈略〉、随つて商業の本質が理解されず、〈略〉。

十二246 〈略〉、商人の人格が重んぜられなかつたからである。

十二306 市街を見物して私の特に感心したのは、市民が交通道德を重んずることです。

十二308 往來の頻繁な街上でも、よく警官の指揮に従つて、混亂することがなく、〈略〉。

十二318 世界最美の街路といはれてゐるシャンゼリゼーの大通には、五六層もある美しい建物が道路の兩側に並び、〈略〉。

十二3110 〈略〉、車道と人道との間には、緑したゝる街路樹が目もはるかに連なつてゐます。

十二331 此の塔は世界最高の建物で、高さが三百メートルもあるさうです。

十二3410 〈略〉、もう沿道の田畑には農夫が鍬を振るつてをり、又工場といふ工場には盛に黒煙が上つてゐました。

十二351 〈略〉、又工場といふ工場には盛に黒煙が上つてゐました。

十二355 やがてベルリンに入つて見ても、勤儉の美風が市民の間にあふれてゐて、〈略〉。

十二355 〈略〉、彼等が大戦後における自國の疲弊を回復するため盛に活動してゐるのには全く敬服しました。

十二3510 世界の公園といはれてゐるスイスは、到る處我が日本のやうに景色がよい。

十二372 ドイツの有名な音楽家ベートーベンがまだ若い時分のことであつた。

十二375 〈略〉、或小さいみすばらしい家の前まで来ると、中からピアノの音が聞える。

十二3710 二人は戸外にたゞずんでしばらく耳をすましてゐたが、やがてピアノの音がはたと止んで、〈略〉。

十二385 「そんなことをいつたつ

て仕方がない。〈略〉。」と兄の聲。

十二392 薄暗いふそくの火のもとで、色の青い元氣のなささうな若い男が靴を縫つてゐる。

十二397 「御免下さい。〈略〉。」とベートーベンがいつた。

十二404 其の言方が如何にもをかしかつたので、言つた者も聞いた者も思はずにつこりした。

十二408 「有難うございます。〈略〉。」と兄がいつた。

十二409 ベートーベンは、「え、樂譜がない。それでどうして。」といひさして、〈略〉。

十二414 其の最初の一言が既にきやうだいの耳には不思議にひびいた。

十二416 ベートーベンの兩眼は異様に輝いて、彼の身には俄に何者かが乗移つたやう。

十二421 折から燈がぱつと明るくなつたと思ふと、ゆらくと動いて消えてしまつた。

十二423 友人がそつと立つて窓の戸をあけると、〈略〉。

十二424 〈略〉、清い月の光が流れるやうに入込んで、ピアノとひき手の顔を照らした。

十二4210 ベートーベンはかういつて、さつと娘がひいてゐた曲を又ひき始めた。

十二438 〈略〉、彼はしばらくすみきつた空を眺めてゐたが、やがて指が

ピアノの鍵にふれたと思ふと、〈略〉。

十二43 9 〈略〉、やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が次第々々にやみの世界を照らすやう、〈略〉。

十二44 1 〈略〉、一轉すると、今度は如何にもものすごい、いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生にをどるやう、〈略〉。

十二46 10 光澤と香氣とを有し、ねばり強くして、割れ、そる等の憂極めて少く、又よく濕氣に耐ふるが故に、建築材として最も重んぜらる。

十二47 4 図 されど何れも美しき光澤を有するが上に、〈略〉。

十二47 6 図 つがは堅くして久しきに耐ふるが故に、家屋の柱・土臺となすに宜し。

十二48 3 図 中にもけやきはもくめ美しく、磨けば美麗なる光澤を生じ、又くるひ少きが故に裝飾材として珍重せられ、〈略〉。

十二48 6 図 〈略〉、かしは最も堅くして弾力に富むが故に、櫓・車・運動器具の如き強烈なる力を受くるものを製作するに適せり。

十二50 2 〈略〉、東南岸だけは二つの半島が並んで突出してゐるためにやゝ複雑になつてゐる。

十二50 5 岸は絶壁になつてゐる處が多く、〈略〉。

十二50 7 〈略〉、殊に兩半島にはさまれてゐる中湖の東岸の如きは、絶

壁の高さが二百メートル以上もある。

十二50 9 中湖は深さが三百七十八メートル、此の湖中で一番深い處である。

十二51 9 これは主として周圍が山で、流れ込む川に大きいのがないのに原因してゐる。

十二51 10 これは主として周圍が山で、流れ込む川に大きいのがないのに原因してゐる。

十二52 1 三十年ばかり前までは、此の湖には魚類が全く居なかつた。

十二52 3 これは奥入瀬川を十町餘り下つた處に大きな瀧があつて、魚類のさかのぼる道を絶つてゐるからである。

十二52 7 暗い箱の中にしまひ込まれてゐた小さな鐵のねちが、不意にピセンセットにはさまれて、明るい處へ出された。

十二52 10 〈略〉、いろ／＼の物音、いろいろの物の形がごと／＼と耳にはいり目にはいるばかりで、〈略〉。

十二53 1 ねちが驚いてあたりを見廻したが、〈略〉、何が何やらさつぱりわからなかつた。

十二53 3 しかしだん／＼落着いて見ると、此處は時計屋の店であることがわかつた。

十二53 5 〈略〉、そばには小さな心棒や齒車やぜんまいなどが並んでゐる。

十二53 8 周圍の壁やガラス戸棚には、

いろ／＼な時計がたくさん並んでゐる。

十二54 10 唯自分だけが此のやうに小さくて、何の役にも立ちさうにな

い。

十二55 3 不意にぱた／＼と音がして、小さな子どもが二人奥からかけ出して來た。

十二55 3 〈略〉、小さな子どもが二人奥からかけ出して來た。

十二56 3 此の時大きなせきばらひが聞えて、父の時計師がはいつて來た。

十二56 3 此の時大きなせきばらひが聞えて、父の時計師がはいつて來た。

十二56 7 時計師は〈略〉、出して置いたねちの無いのに氣が附いた。

十二56 8 図 「ねちが無い。〈略〉。探せ、探せ。」

十二56 10 図 あれが無いと町長さんの懷、中時計が直せない。探せ、探せ。

十二56 10 図 あれが無いと町長さんの懷、中時計が直せない。

十二57 3 それでは自分のやうな小さな者でも役に立つことがあるのかしらと、夢中になつて喜んだが、〈略〉。

十二57 5 〈略〉、此のやうな處にころげ落ちてしまつて、若し見附からなかつたらと、それが又心配になつて來た。

十二57 8 ねちは「此處に居ます。」と叫びたてたまらないうが、口がきけない。

十二58 1 其の時、今まで雲の中に居た太陽が顔を出したので、日光が店

一ぱいにさし込んで來た。

十二58 2 〈略〉、日光が店一ぱいにさし込んで來た。

十二58 4 仕事臺のそばに、ふさぎこんで下を見つめてゐた女の子がそれを見附けて、思はず「あら。」と叫んだ。

十二59 4 龍頭を廻すと、今まで死んだやうになつてゐた懷中時計が、忽ち愉快さうにかち／＼と音を立て始めた。

十二59 5 ねちは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出來たのだと思ふと、〈略〉。

十二59 5 ねちは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出來たのだと思ふと、〈略〉。

十二59 6 ねちは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出來たのだと思ふと、〈略〉。

十二59 10 一日おいて町長さんが來た。

十二60 2 図 ねちが一本いたんでゐましたから、取りかへて置きました。

十二61 6 図 〈略〉、日の丸は熱烈燃ゆるが如き愛國の至誠を表すものとも

いふべきか。

十二635 國 フランスの國旗が縦に三色を分ちたるに對して、〈略〉。

十二637 國 國旗の色彩が其の國の人類を表すものに、支那の國旗あり。

十二654 生れつき烈しい氣性の上に、年とともに老の氣短さが加はつて、ちよつとした事にも怒り易くなつてゐた。

十二656 それに近來はめつきり元氣が衰へて、もう政務にもたへられなくなつて來た。

十二657 王にはゴネリル・リガン・コーデリヤといふ三人の娘があつた。

十二664 國 〈略〉、王は娘たちを面前に呼んで、「今日はお前たちに一つ聞いてみたい事がある。〈略〉。」と尋ねた。

十二665 國 お前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、わしはそれが知りたいのだ。

十二666 國 お前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、わしはそれが知りたいのだ。

十二682 コーデリヤは王が一番かはいがつてゐる娘であつた。

十二689 國 私は胸にある事が十分に言へないのでございます。

十二693 國 どうしたのだ、コーデリヤ。何とか言方がありさうなものだ。

十二718 ところがリガンは、まだ父上を迎へる準備が整つてゐないとい

ふのを口實にして、〈略〉。

十二7110 全領地を二分して與へてやつた二人の娘が、揃ひも揃つてこれ程の不孝者であらうとは。

十二729 それは父が姉たちの爲に虐待されてゐるといふことであつた。

十二757 國 何でうらむわけがございませう。

十二757 國 何でうらむわけがございませう。

十二7510 〈略〉、其の言葉の端端にも、前非を悔い、自分を責めて娘にわびる眞心がこもつてゐた。

十二762 コーデリヤはそれを聞いて腸をちぎられるやうな思がした。

十二771 即ち水のはいる處に當る部分が身網で、柄に當る部分が垣網である。

十二773 即ち水のはいる處に當る部分が身網で、柄に當る部分が垣網である。

十二7710 潮に流されないやうに、身網にも垣網にも土俵や石などが重りに附けてある。

十二781 身網の外側や陸上の高い處に魚見やぐらが設けてあつて、漁夫が絶えずまぐろの來るのを見張つてゐる。

十二781 〈略〉、漁夫が絶えずまぐろの來るのを見張つてゐる。

十二785 其の時魚見やぐらの上で旗

を揚げて、まぐろの群が網にはいつたといふ合圖をすると、〈略〉。

十二787 〈略〉、網口の近くに番をしてゐる漁夫が急いで網口をしめてしまふ。

十二788 これでもう魚は逃出すことが出來ない。

十二789 そこで數そのの船に分乗した漁夫が、えんや／＼と掛聲を掛けながら身網を一方からたぐつて行く。

十二7810 かうしてだん／＼網の中が狭められるに隨つて、〈略〉。

十二793 網の中がいよいよ狭くなると、其の周圍を船で取巻いてしまふ。

十二797 三四十貫、時には百貫以上もある大まぐろがどたり／＼と船中へ投込まれる光景は、〈略〉。

十二799 船がまぐろで一ぱいになると、〈略〉。

十二826 國 樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざること、〈略〉。

十二828 國 〈略〉、更によく之を確めんがために、同年七月林蔵は單身にまた樺太におもむけり。

十二843 國 たま／＼コーニが交易のため大陸に渡らんとするに際し、〈略〉。

十二846 國 容貌の異なる汝が彼の地に行かば、必ずや人に怪しまれ、〈略〉。

十二879 國 林蔵が一回の探検によりて、樺太は大陸の一部にあらざること明白となりしのみならず、〈略〉。

と明白となりしのみならず、〈略〉。

十二886 法律を制定するには、政府又は貴衆兩院の何れかが其の案を作成して議會に提出する。

十二894 〈略〉、兩院の意見が一致すれば、最後に議決した議院の議長から國務大臣を経て奏上する。

十二897 そこで天皇が之を裁可せられ、公布せしめられると、始めて法律が出來上るのである。

十二898 〈略〉、始めて法律が出來上るのである。

十二899 法律の外に勅令・閣令・省令・府縣令等の命令がある。

十二903 唯法律は必ず帝國議會の協賛を経なければならぬが、命令には其の事がない。

十二904 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出來るといはれてゐる。

十二905 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出來るといはれてゐる。

十二913 或時、父王と共に城外に出て、農夫の働く様を見廻つたことがある。

十二915 折から飛下りて來た鳥が錨に傷つけられた蟲をついばんだ。

十二9310 彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聴いたが、どれにも満足することが出來ない。

十二949 〈略〉五人の友は、釋迦が

全く修行を止めてしまつたものと思ひ、彼を捨てて立去つた。

十二95 7 〈略〉、やがて一點の明星がきらめいて、夜はほの／＼と明けそめた。

十二95 8 其の刹那、彼は迷の雲がかりりと晴れて、はつきりとまことの道を悟り得た。

十二96 2 〈略〉、やがて此の尊い心境を世界の人々と共にせずにはゐられぬといふ慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。

十二97 9 或時の如きは、釋迦が山の下にゐるのを見附けて、〈略〉。

十二98 4 危篤の報が傳はると、これまで教を受けた人々が四方から集つて別れを惜しんだ。

十二98 5 〈略〉、これまで教を受けた人々が四方から集つて別れを惜しんだ。

十二98 6 いよく臨終が近づいた時、釋迦は泣きしんでゐる人たちに、「略。」と諭して静かに目を閉じた。

十二98 10 これまで説いた教そのものが私の命である。

十二98 10 私のなくなつた後も、めい／＼が其の教をまじめに行ふ所に私は永遠に生きてゐる。

十二99 4 七代七十餘年の帝都として、咲く花のにはふが如しと誇りし奈良の都も、〈略〉。

十二104 4 これからが世に恐しい青の

くさり戸である。

十二104 8 〈略〉、昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。

十二105 1 〈略〉、路をさへぎつて立つ岩山に、毎日々々根氣よくのみを振るつて、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。

十二105 4 〈略〉、きつと結んだ口もどには意志の強さが現れてゐる。

十二107 1 其のうちに誰言ふとなく、あれは山師坊主で、あのやうなまねをして、人をろうらくするのであらうといふはさが立つた。

十二108 1 〈略〉、此の見る影もない老僧の姿が、急に尊いものに見え出した。

十二109 1 手傳をする者が一人へり二人へりして、はては又村人全體が此の老僧から離れるやうになつた。

十二109 2 〈略〉、はては又村人全體が此の老僧から離れるやうになつた。

十二110 3 〈略〉、仕事を助ける者が又ぼつ／＼と出來て來た。

十二110 4 かうして、老僧が始めてのみを絶壁に下してからちやうど三十年目に、〈略〉。

十二110 5 〈略〉、彼が一生をさへげた大工事が見事に成就した。

十二110 5 〈略〉、彼が一生をさへげた大工事が見事に成就した。

十二112 5 彼が稀代の天才はこゝに

も遺憾なく發揮せられて、〈略〉。

十二115 5 二十五日午後一時から、學校の講堂で村崎工學博士の「電氣の世の中」と題する講演があつた。

十二116 3 〈略〉、石炭の火力による蒸氣力は、多くの場合之に敵するところが出來なくなりました。

十二116 10 エジソンが炭素線の電燈を發明したのは四十年ばかり前のことであつたが、〈略〉。

十二117 2 〈略〉、今では更に進んで光の色が太陽に似て、しかも比較的热をとまふことの少い電燈さへも發明されました。

十二117 6 〈略〉、活動寫眞のフィルムがアーク燈の熱の爲に發火して、多くの死傷者を出した話などを附加へた。

十二117 9 〈略〉、其の後無線電信が發明されて、〈略〉。

十二117 10 〈略〉、陸上でも海上でも自由に消息を交換することが出来るやうになりました。

十二118 1 最近無線電話が發明されましたが、〈略〉。

十二118 2 又最近無線電話が發明されましたが、今やそれが盛に利用される機運となりました。

十二118 4 アメリカにおいては此の無線電話の應用が極めて廣く、〈略〉。

十二118 5 〈略〉、遠い處の音楽・演説・講話などを居ながら聞くことが

出来ることや、〈略〉。

十二118 6 〈略〉、進行中の汽車が無線電話機を備へ附けてゐたために危険を免れたことや、〈略〉。

十二121 1 何事も忍耐が第一とのかねての御教訓に従ひ、一心に働き候ため、〈略〉。

十二121 5 毎晩賣上高の勘定を致す時など、仲間のうちにて計算は私が一番達者なりとて、何時もほめられ申候。

十二126 7 屋敷の附近は、官軍の兵士がすき間もなく警衛してゐる。

十二126 9 安芳がはいつて行かうとする、〈略〉。

十二127 1 〈略〉、門を守つてゐた兵士等が「それ勝が來た、勝が來た。」とひしめきながら、一せいに銃劍を取直して行くてをさへぎつた。

十二127 2 勝が來た、勝が來た。十二127 3 勝が來た、勝が來た。十二127 8 一室に通されて待つてゐると、やがて西郷が出來て來た。

十二127 9 次の間には官軍の荒武者共がひかへて、何となく物々しい。

十二128 1 安芳がいふ、〈略〉。

十二128 3 本日日本の周圍には諸外國が様々の考を持つて見てゐるので、〈略〉。

十二129 3 徳川侍のなまくら刀にも少しは切れる所がござりませう。

十二129 7 拙者は、此の談判がよし

どのやうに決着するにもせよ、〈略〉。
十二131 4 警衛の兵士等は、〈略〉、西郷が後に續いてゐるのを見て、一同恭しく捧げ銃の禮をした。

十二132 2 安芳が一命をかけた努力と、西郷の果斷によつて、〈略〉。

十二132 7 我が國が世界無比の國體を有し、三千年の光輝ある歴史を展開し來つて、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、〈略〉。

十二132 10 〈略〉、主として我々國民にそれだけすぐれた素質があつたからである。

十二133 1 君と親とに眞心を捧げ盡くして仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、今更いふまでもない。

十二133 3 忠孝は實に我が國民性の根本をなすもので、之に附隨して幾多の良性・美德が發達した。

十二133 5 四周の海が天然の城壁となつて、容易に外敵のうかゞふことを許さないから、〈略〉。

十二133 9 随つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、又其の誇を永久に持續しようとする心掛けも出來て、〈略〉。

十二134 5 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、自ら國民の性質を穩健ならしめ、自然美を愛好するやさしい性情を育成するのに與つて力があつた。

十二134 9 〈略〉我が國民は、とかく

引込み思案におちいり易く、奮闘努力の精神に乏しく、遊惰安逸に流れるかたむきがある。

十二135 8 すべて日本人の短所として、性質が小さく狭く出來たきらひがある。

十二135 9 すべて日本人の短所として、性質が小さく狭く出來たきらひがある。

十二136 1 其の原因はいろいろあらうが、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、其の主たるものであらう。

十二136 1 今日我が國が列強の間に立つて世界的の地歩を占めた以上、〈略〉。

十二136 10 しかし此の半面にもまた短所がかゞはれないであらうか。

十二137 2 自分で思ふまゝに造り出す創造力は、十分に發揮せられたことがなく、昔から殆ど摸倣のみを事として來た觀がある。

十二137 3 〈略〉、昔から殆ど摸倣のみを事として來た觀がある。

十二137 3 習、性となつては、遂に日本人には獨創力がないであらうと自らも輕んじ、外國人からも侮られる。

十二137 8 我が國民には潔いこと、あつさりしたことを好む風がある。

十二137 9 櫻の花の一時に咲き一時に散る風情を喜ぶのがそれでであり、古の武士が玉とくだけの討死を無上の

名譽としたのがそれである。
十二137 10 〈略〉、古の武士が玉とくだけの討死を無上の名譽としたのがそれである。

十二138 1 〈略〉、古の武士が玉とくだけの討死を無上の名譽としたのがそれである。

十二138 5 しかし其の半面には、物にあき易く、あきらめ易い性情がひそんでゐるないか。

十二138 7 堅忍不拔あくまでも初一念を通すねばり強さが缺けてはゐないか。

十二138 8 こゝにもまた我々の反省すべき短所があるやうである。

十二138 8 (接助) 365 ガが↓ところが

十二138 8 コノゴロナカマノモノガ、ネコニトラレテコマルガ、ナニカヨイクフウハアルマイカ。

十二138 8 ソレモヨイガ、ダレガソノスズヲツケニイクカ。

十二138 8 トモダチハ「モチハ〈略〉、イテハイクマセン。」ト、トメマシタガ、キカナイデイマシタ。

十二138 8 〈略〉、ソコヨホツテミマシタガ、キタナイドロ水バカリシカデマセン。

十二138 8 サウシテ米ヲツイテミマシタガ、ヤツバリキタナイモノバカリデマシタ。

十二138 8 イツモアナタニツイテキ

マスガ、日ヤ月ガデテキナカツタリ、アカリガツイテキナカツタリ、スレバ、ワタクシハアナタカラハナレマス。

十二138 8 チヨツトハハナレマスガ、スグオヤ牛ノトコロヘキマス。

十二138 8 山ハケハシク、ミチハワカリマセンデシタガ、トウトウタヅネアテテ、トメテクレトタノミマシタ。

十二138 8 ドチラモマケズニタカヒマシタガ、トウトウライクワウガカチマシタ。

十二138 8 マダウスグラウゴザイマスガ、ケサコソニイサンヨリサキニオキテミヨウトオモツテ、ソツトネドコヲ出マシタ。

十二138 8 メンドリハヘンナコエヲタテテキマシタガ、見テキルウチニ、タマゴヲハラノ下ニダイテシマヒマシタ。

十二138 8 うらしまはおもしろがつて、うちへかへるのもわすれてゐましたが、そのうちにかへりたくなつて、おとひめに「いろいろお世話になりました。〈略〉。」といひました。

十二138 8 わかいとき字をならひましたが、うまく書けませんので、こまつてゐました。

十二138 8 アトヘ竹ノキレヲノコシテ行キマシタガ、ソノ中ニ

十二138 8 アトヘ竹ノキレヲノコシテ行キマシタガ、ソノ中ニ

十二138 8 アトヘ竹ノキレヲノコシテ行キマシタガ、ソノ中ニ

フシガ一ツアツテ、水デツパウ
ニナリサウナノガアリマシタ。
三六二 サウシテセンヲヒキマシ
タガ、水ガウマクハイリマセン。
四一五 白ウサギハ一ツ二ツト
カゾヘテ、ワタツテ行キマシタガ、
イマ一足デヨカヘ上ラウト
イフトコロデ、「オマヘタチハ
ウマクワタシニダマサレタナ。
《略》。」トイツテワラヒマシタ。
四一七 白ウサギハスグ海ノ水
ヲアビマシタガ、前ヨリモカ
ヘツテイタクナツテ、クルシガツ
テ居マシタ。
四二六 一 おばあさんが「《略》。もつ
とあそんでお出で。」といつて
おとめになりましたが、おそく
なるとおもつて、いただいたく
りを持つてかへりました。
四三二 一 そこへぼちが来ました
ので、一しよに向ふの方へ行
つてみましたが、だれも居ま
せんでした。
四三六 一 モズハ小サイガ、マケヌ
氣ノ鳥デスカラ、《略》。
四三七 一 スズメハヨワイ鳥デス
ガ、ソバヘヨツテ、ヲドツタリ
サヘツタリシテバカニシマス。
四四七 一 「此のころは《略》、すすは
きは大きになくになりましたが、
それと今吉がいひましたが、
それでもふきさうちがすんで、

すつかりいろいろな物をもと
の所へなほしたら、夕方近くな
りました。
四四八 一 よ一はじたいしましたが、
よしつねがゆるしません。
四四九 一 一 どんなんにか鳴いたのでせ
うが、うちのものは朝まで
しらずに居ました。
四五〇 一 これは私が七つの年
のことでしたが、今でも山が
らのこゑをきくと、まだあれ
が生きて居るだらうか、足の
きずはどうしたらうかと思
はないことはありません。
四五五 一 雪ノヤウニ白ウゴザイ
マスガ、雪ノヤウニツメタク
ハナク、又日ニテラサレテモ
トケマセン。
四六一 一 一人ハタイソウ皆サンニ
スカレマスガ、一人ハアマリ
スカレマセン。
四六四 一 西の村一番の金持の
むすめさんが、此の人の所へ
およめに來ましたが、其の時
はなかなかにぎやかなこと
でした。
四六八 一 五郎はまだ小さくて、何
も分りませんでした。が、十郎は
なみだをおさへて、「きつと此
のかたきを取つて見せます。」
と答へました。
四七二 一 一 くだうが東へ行けば、兄

弟も東へ行き、西へ行けば、
西へ行き、長い間つけねらひま
したが、手を出すすきはあり
ませんでした。
四七三 一 一 こちらは今さくらさかりで
すが、あちらでは、もうとうにちつ
てしまつたさうです。
四七四 一 一 ぼちが昨日から病氣で、こは
んをたべませんので、學校に居ても
しんばいでしたが、かへつて來ると、
もうよくなつてゐて、尾をふつてむ
かへに出ました。
四七五 一 一 これは鶏だよ。それで金鶏
勲章といふのだが、鶏のついてゐる
わけは知つてゐるだらう。
四七八 一 一 尊は其のころ、《略》、御年は
わづかに十六でいらつしやいました
が、いさみ立つてお出かけになりま
した。
四七九 一 一 なみくの者なら、「あつ」
とさけんで死にませうが、たけるも
熊襲のかしらだけあつて、「しばら
くお待ち下さい。申したいことがあ
ります。」といひました。
四八〇 一 一 自分にまさる者はないので、
たけると申して居りましたが、みや
こには強いお方がおありになつた。
四八四 一 一 それをひろつて、まふしへう
つすのですが、少しでもおくれると
かこのうらや棚のすみなどで、繭を
かけはじめますから、ちつともゆだ
んが出來ません。

四八二 一 一 まふしには、かさくといふ
音がしてゐますが、これは蟹が動く
からです。
四八三 一 一 ハジメハ糸スデホドノ流デス
ガ、ソレガダン／＼アツマツテ、ミ
ゾニオチル頃ニハ、流モ早クナリ、
水ノカサモ多クナリマス。
四八四 一 一 日本の國には、景色のよい所
がたくさんありますが、松島・天の
橋立・宮島の三つを、昔から日本三
景と申します。
四八五 一 一 あたりの高い所からもながめ
ますが、多くは舟に乗つて、島の間
を通つて見物します。
四八六 一 一 あれは神明様の森だが、あ
れまでが半道で、あれから町まで一
里ある。
四八七 一 一 少しまはり道だが、となり
村の用水池を見て行くことにしよう。
四八八 一 一 鯉も居るが、それよりも、
もつとお前に聞かせて置きたい話
がある。
四八九 一 一 田地にするには、水がいるが、
引いて來る川がない。
四九〇 一 一 村の人々は中大きな仕事だ
とは思つたが、さうでもしなければ、
外に村のさかえる工夫はあるまいと
いふので、みんな賛成したといふこ
とだ。
四九一 一 一 「そんな大きな池がいるだら
うか。」と言つて、首をひねる者も
あつたといふが、一年ばかりの間は、

べつだんくじやうも出なかつた。

五73 庄屋は村の者にいろ／＼言つて聞かせて、土手をつきなほしたが、運の悪い時には悪いもので、其の年のつゆに、又土手がくづれて、池のたまり水が村の中へおし出した。

五74 よい身代であつたが、其のたに田を賣り、畠を賣り、家も土藏もみんな賣りはらつた。

五76 ところで一年まじに田がふえたが、をしいことに、庄屋は池が出来上つた年の冬、死んでしまつた。

五84 おとうさんへ電報で御返事をいたしたやうに、うちには大した事ありませんでしたが、中々のさわざでした。

五85 九月にはいつては雨つゞきでしたが、四日の日は朝からひどい雨で、夕方から風もはげしくなりました。

五86 うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、うちでも下の雨戸がたふれて、中からうすやたらひがばかばか流れ出すほどで、どうすることも出来ませんでした。

五87 仕合はせに水はそれからふえませんでした、町は大い水につかつて、人家も七八軒流れました。
五88 うちでも一時は飲水やたべ物にこまりましたが、今ではあとかたづけも大がいますみしました。

五89 雨が降つても、風が吹いても、夜でも、晝でも、此所に立通しに立つてゐますが、葉書や封書などを入れる人の外は、私のからだにさはる者がありません。

五91 作物の種や商品の見本も入れてよいことになつてゐますが、私はまだそれをあづかつたことはありません。

五93 葉書には、大ていちよつとした用事が書いてありますが、封書には、いろ／＼こみ入つた事が書いてあります。

五96 おめでたい事やたのしさうな事が書いてありますと、私もうれしいと思ひますが、悲しい事や苦しうな事が書いてありますと、もらひ泣きをいたします。

五94 「それにはどんな事が書いてあつたか。」といふおたづねが出るかも知れませんが、それは人にもらしてはならないことになつてゐます。

五97 私ドモハブダウノ實ヲ生デタベマスガ、タクサン作ル所デハ、ブダウ酒ヲ造ツタリ、ホシブダウニシタリスルト申シマス。

五98 熊が来て、からだ中かぎまはしましたが、ほんたうの死人だと思つたのでせう、其のまま行つてしまひました。

五99 熊が君の耳の所へ口を持つて行つたやうだが、何か言つたのか。

六57 臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、此の山のいたゞきには、いつもつもつてゐるといふことだ。

六82 奈良の春日山や三笠山は千尺そこ／＼だが、白根や槍岳よりも知られてゐるし、京都の東山にしてもさうだ。

六95 金ニハイロ／＼アリマスガ、中デ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デアラウト思ヒマス。

六102 金や銀ハ美シクテ、オアシニナツタリ、指ワニナツタリ、其ノ外イロ／＼ナカザリ物ニナリマスガ、ドチラモタクサンアリマセンカラ、ネダンモ高ウゴザイマス。

六115 ナルホド、銅ハタクサンアツテ、役ニモ立チマセウガ、モツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。

六124 今デハ鐵ハオアシノ仲間ニハイレマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ銅以上デス。

六184 行つて見ますと、なるほど少し早すぎましたが、それでも、小さなしめぢが列を作つて出てゐました。

六283 虎が見まはしましたが、だれも居ません。
六38 叔父爲朝の弓のやうな強い弓なら、わざと敵にやつてもよいが、此の弱い弓を取られて、『これが義經の弓だ。』などと言はれては、源

氏の名折れになるからだ。
六393 洋服は着なれなかつたので、はじめは寒いやうに思つたが、もうなれた。

六402 お前はなぜ自分の村の人と見物しなかつたかと思ふだらうが、兵には歩・騎・砲・工・輜重の五種があつて、私の村から、今歩兵になつて來てゐるのは私一人だけなのだ。

六41 へ略、私を入れて村からは五人も出てゐるが、兵種がちがふと、兵舎のあり場所もちがふので、めつたに一しよになることはない。

六472 一匹デ三四千粒モ産ムトイフガ、産ンデシマフト、其ノ上ニ砂ヤ小石ヲカブレル。

六482 四五年モタツト、大キクナツテ、今度ハ自分ガ卵ヲ産ミニ川ヘ上ツテ來ルガ、フシギニ自分ノ生レタ川ヘ歸ツテ來ルサウデ、「之ヲ鮭ノ里歸トデモ言ツタラヨカラウ。」ト叔父サンガ言ハレタ。

六512 十二人いるうち、十一人まではありましたが、あとの一人がありません。

六516 頼朝は一目見た上でと、萬じゆを呼出しましたが、かほも美しくすがたも上品に見えたので、さつそく舞姫にきめました。

六525 一番二番三番と、十二番の舞がめでたくすみました、其の中で

ことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。

六五三 会 べつにのぞみはございませ
んが、からいと唐糸の身代りに立ちたうござ
います。

六五二 頼朝が木曾義仲をせめようと
した頃、木曾の家来手塚太郎光盛
の娘が頼朝に仕へて居りましたが、
之をさとつて、すぐに義仲の所へ知
らせました。

六五八 光盛の娘は其の後、夜晝頼朝をねらひましたが、少しもすきがありません。

六五七 / これが萬じゆの姫で、木曾に住んで居りましたが、風のたよりに此の事を聞いて、うばをつれて、鎌倉をさして上りました。

六五八 さて萬じゆは、だれか母の事をいひ出す者はないかと氣をつけてゐますが、十日たつても二十日たつても、母の名をいふ者がありません。

六六五 其の歸り途で、青年たちは「こまかな人だが、出す時には出すね。」「略。」「略。」といひ合つた。

六〇七 こんな人、こんな姿は、とう
の昔にきえましたが、川は昔のまゝ
に清く美しく流れてゐます。

六724 此の電車道から東山のすそへ
かけて、やはり人家がこみ合つて立
つてゐますが、青い松の間に、五
重の塔や大きな寺の屋根が見えま
す。

す。

六三六 賀茂川は水が多くないので、船は通りませんが、其の代りに水がいたつてきれいで、染物にむいてゐます。

六八二 通有も左のかたを射られたが、
少しも屈せず、刀をふるつて進んだ。
六八四 いよくおしよせたが、敵の

船は高くて上ることが出来ない。
六八三六 〈略〉、敵は一先づ沖の方へし

りぞいたが、又おしよせて来るのは明らかである。

六八九²会 御らんの通り大きなからだ
をしてゐますが、氣立はしごくやさ
しうございます。

六〇八 〔略〕千早城は、けはしい金
剛山がうさん上にはあるが、まほりが一里ちりに

も足らず、總勢わづか千人ばかり。
六951 城兵はさつと引上げたが、二二

三十人はふみとどまつた。
七十八 「極樂寺坂の味方があやふう

「大將も討死されました。」といふ使が来たが、總大將の新田義貞はびくともしません。

七三九 其の松の下に石できざんだ地蔵様が立つていらつしやる。晒木綿のづきんをかぶつて、雨ざらしに

なつていらつしやるが、何時もお花が上つてゐる。

七248 此のお婆あさんにむすこが一人あるのださうだがずつと前から南

アメリカへ行つてゐるといふことだ。

七279 我が國の馬は西洋諸國の馬にくらべると、せいも低く、體格もおとつてゐたが、近年外國から種馬を輸入したので、大いに改良されて、

いたる所に良馬を見るやうになつた。
 7336 ㊦ 獅子はかなしげにほえて、
 濱べに立上りたりしが、つと海の中

にをどり入りたり。

七三六ノ_三 通は廣くて平で、歩道と車

道の間に並木が植ゑてありますが、此の頃は其の葉の美しいさかりです。

七三六九 人口はおよそ十一萬、其の中日本人は五萬人、支那人は六萬人ですが、日本人は年々ふえるばかり

ださうです。

七三六 モジ 船で来れば、神戸から三晝

夜、門司からは二晝夜で當地へ着きますが、來て先づ誰でもおどろくのはと

は、波止場の大きなことです。

はわかりませんが、氣候も思つたよりよくて、快晴の日が多いやうです
七44 / 信玄は不意を打たれておどろいたが、忽ち陣立をかねて、敵を引

受けた。

七451 ぐんばいうちはでふせいだが
えが折れて、肩先へ切りつけられた

七453 信玄の家來は之を見て、後からやりで謙信をついたが、あたらない。

745 川中島で前後五回戦つたが、

まだ勝負がつかない。

七⁴⁹6 セイガ高ク、目ガスルドクテ、
チヨツト見ルト、コハイヤウデシタ
ガ、イタツテ正直デ、氣立ノヤサシ
イ老人デシタ。

セシイカニモ丈夫サウナ老人デシ
タガ、去年ノクレニ死ンデシマヒマ
シタ。

七五七 航海といふものは、かういふ面白いものですが、たまには恐し

い目にもあひます。

七六六 中でも安倍川の宿は一そうの

人ごみであつたと申しますが、一それ、川が渡れる。」といふことになりますと、我もくと先をあらそつ

て渡りました。

た一人の男が、人夫と渡賃を高いや
すいと言ってあらそつてゐましたが、
相談は出来ないものと見きつたので
せう、着物をぬいで頭にのせ、一人

で川へはいつて行きました。

七653 これはあの人^のが落して行つたにちがひないが、渡賃が高いといつて、此のあぶない川を一人でこした

ほどの人である。もし此の大金がなかつたら、氣がちがつて死ぬやうな事になるかも知れぬ。

七684 かの男はゆめかとばかり喜んで、財布を幾度かいたゞきましたが目からはなみだがひつきりなしにこぼれてゐます。

七68 9 園 〈略〉、たとひとんで行つて

見た所で、もうあるまいとは思ひましたが、此のまゝ歸ることも出来ませんので、引つかへして参りました。

七69 6 園 それがあなたのやうな正直なお方に拾はれて、財布をいたゞかせてもらひましたが、いたゞいたのは財布ではなくて、私の命でございます。

七71 2 園 房州へ出かせぎに行つて、れふを致して居りましたが、仲間の者が國へ送る金をあづかつて、此の財布に入れて來たのでございます。

七71 5 園 小ぶくろの方は私どものだんなが國へおやりになる金ですが、だんなはなさせ深い方ですから、此の金をあなたにさし上げまして、おしかりになることはあるまいと思ひます。

七72 6 園 もしお金をもらつたら、あなたの氣はそれですむかも知れませんが、私の氣がすみません。

七73 2 園 〈略〉、どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともあります、心にすまないことはまだ一度もした事はありません。

七73 9 かの男は「それではこまる、ぜび。」といひながら、人夫の後について來ましたが、とう／＼又川を渡つて、人夫の家へ参りました。

七74 6 〈略〉、年よりはちよつとふりかへりましたが、何ともいはず、す

ぐ又仕事をつゞけました。

七78 5 信長はかるくうなづいたが、其の後間もなく藤吉郎を草履取から引上げて役人の數に入れた。

七81 1 エビノピン／＼ハネタリ、カニノ横ニハツテアルク様子ハ、池ヤ川ニスムモノトチガハナイガ、タコヤイカガ、アシヲソロヘテ泳グ様ハ、マコトニ面白イ。

七84 3 陸ニスムモノデハ、象ガ先ツ一番大キイガ、象ヲ鯨ニクラベルト、赤子ト大人トヨリモ、モツトチガフ。

七85 1 コンナ所ニハ、動物モゴクマレデ、植物ハ全クナイガ、岸ニ近イ淺イ所カラ二三百尺グラキノ所マデニハ、海藻ガ生エテキル。

七87 1 一ガニイフコトハ出來ナイガ、先ツ綠色ノモノハ淺イ所ニ、紅色ノモノハ深イ所ニ、茶色ノモノハ其ノ中間ニ生エテキルノデアル。

七91 5 「たしかに來たはずだ。」と言つて、敵はあちこち見まはしましたが、おばあさんの肩に手をかけて、「これ、おばあさん、〈略〉。」

七92 9 何だか少しむし暑いやうだが、空には雲もなく、まことによく晴れてゐた。

七94 1 「どうかひどい風にならなければよいが。」と、おぢいさんが言つていらつしやつたが、其の中に南の空が黄色になつて、風がだん／＼はげしくなつて來た。

七105 6 園 秀吉は清正を召出して、「略」。小西程の者を堺の町人とのしり、又明國への返書に豊臣清正と記したといふが、それはまことの事か。」とたづねました。

七107 3 園 御威光にもかゝはる所と存じ、「略。」と返書をつかはしました、某は四つ五つの頃から親になれて、姓も存じませんので、御威光を借りて豊臣と記したのでございます。

七111 7 園 十五字までが一音信だが、にごりのある字は二字に數へるのだから、それでは十七字になる。

七112 4 園 それでもよいが、電報はさうていねいにはなくてもよい。

八5 4 二匹はいちもくさんにかけて行つたが、間もなくかはいらしいのを一匹つれて來た。

八8 9 始の間はあまり甲乙はなかつたが、半分程の所から一騎後れ、二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、もはや信作と耕造の二人だけの競走となつた。

八9 6 今度の競走も五分々々に進んで行つたが、中程まで行つた時、信作の馬はつまづいて、前足を折つた。

八13 7 見物人は争つて、多勢の方へ行つたが、家康は小勢の方へ行けと命じた。

八14 1 園 多勢の方はゆだんをしてゐるが、小勢の方はみんな心を合はせ

て、一生けんめいになつてゐる。

八14 9 〈略〉、其の子頼宣は戦が始つたと聞いて、先陣へかけつけたが、もう間に合はなかつた。

八18 4 翌日になつて、將軍が又たづねたが、始のやうに答へた。

八22 4 臺灣の蕃人には、お祭に人の首を取つて供へる風がありますが、亞里山の蕃人にだけは、此の悪い風が早くから止まりました。

八24 3 呉鳳はお祭の爲に人を殺すのはよくないといふことを説聞かせてもう一年、もう一年とのぼさせてゐましたが、四年目になると、「もう、どうしても待つてゐられません。」といつて來ました。

八29 5 太郎は毎日炭を焼く煙を遠くに見てゐるが、まだ一度も其所へ行つて見たことがない。

八32 6 山野に生ずる草木の中には、藥用にするものが多くありますが、其の中貴重なもの一つは朝鮮人蔘です。

八32 8 これはもと野生のものでしたが、今から千何百年も前から栽培することになつたのだとつたてゐます。

八34 3 さうして教へられた場所へ行つて見ますと、望の赤子は居ませんでした、見なれない草に、眞赤な美しい實が一つなつてゐました。

八35 1 これが人蔘で、此の婦人は長

生をしましたが、一生の間仕合はせ
のよい事がつゝいたと申します。

八363 時の町奉行は名高い大岡越
前守で、一人の子どもに二人の實
母はないはずといつて、いろいろ調
べますが、どちらも實母だといひは
ります。

八364 越前守はじつと考へましたが、
「其の子を二人の真中に置いて、兩
方から子どもの手を取つて引合へ。
勝つた方へ其の子を渡す。」といひ
ました。

八372 二人の女は「かしこまりまし
た。」と、兩方から引合ひましたが、
子どもがいたがつて、わつと泣出し
ますと、實母の方は驚いて手を放し
ました。

八388 呉服屋の手代が、大きなふろ
しきつつみを石地蔵の前におろして
休みましたが、餘程つかれてゐたも
のと見えて、何時の間にか、ぐつす
りねこんでしまひました。

八427 略、越前守は「しからば
許してつかはすであらうが、其の代
りと致して、白木綿を一反づつ、名
札をつけて、三日の間に間違なく持
參致せ。」と命じました。

八452 始は熱が高くて心配致しま
したが、昨朝あたりから熱が下つて、
食事に進むやうになりましたので、
やつと安心致しました。

八458 主に勝手がましい御願

でございすが、もう四五日の所お
ひまを願ひたうございすが。十二
月十四日 淺吉 御主人様

八464 其の後どうかと案じてゐま
したが、手紙を見て安心しました。

八472 此の爲替はほんのわづかで
すが、何か好きな物を買つて上げて
下さい。

八496 狐・狸・兎・犬・豚ナドハ彼
ノ求メル物デアルガ、マレニハ庭先
ニ遊ンデキル子ドモヲサラツテ行ク
コトモアル。

八527 おかあさんはそれを二つにち
ぎつて、ぐるぐるまはしていられし
やつたが、忽ちきれいなおそなへに
なつた。

八538 略、おちいさんが「とても
まだ。」とおつしやつたが、おばあ
さんは「まあ、ついてみるがよ
い。」とおつしやつた。

八543 始のうちは勢がよかつたが、
間もなく腰がふらつき出して、ふみ
しめてゐる兩足が、きねをふり上げ
るたびに動いた。

八547 おとうさんが「せいは高く
ても、まだだめだ。」とおつしやつた
が、それでもとう／＼一白だけはつ
き上げた。

八626 保己一は五歳の時めくらと
なりしが、人に書物をよませると
心に之を聞き、後には名高き學者と
なりて、多くの書物をあらはせり。

八664 此の港には、十五六年前に
大地震があつて、町は大方こはれた
のですが、今では前よりもかへつて
りつぱになつてゐます。

八672 サンフランシスコはカリ
フォルニア州にあるのですが、此の
州は合衆國の中でも、氣候がよくて、
其の上地味が肥えてゐますから、い
ろいろな農産物に富んでゐます。

八683 日本人は八萬人餘も居て、
子どもは、アメリカ人の立てた學校
へ行つて、英語で勉強しますが、歸
つて來ると、又日本人の立てた學校
へ行つて、日本語で學問をしてゐま
す。

八702 此所は工業地で、煙突の煙
で空は眞黒だが、大きな公園が幾つ
もあるから、健康には害がなささう
です。

八713 シカゴとニューヨークの間
は九百八十哩もありますが、おとう
さんは最大急行の列車に乗つて、た
つた十八時間で着きました。

八734 アメリカ人は大きいこと、
廣いこと、高いこと、早いこと、何
でも世界一になるやうに心掛けてゐ
るといひますが、何しろ大した勢で
す。

八736 此所は有名な商業地ですが、
りつぱな學校もありますし、博物
館や圖書館などもたくさんありま
す。

八768 人々は略、やつて見まし
たが、もとより立たうはすはござい
ません。

八835 信吉にはおとよといふ今年十
一になる女の子があるが、生れつき
啞なので、僕のうちに世話して、啞
の學校に入れた。

八849 父は「相かはらずせつかちだ
ね。」といつたが、別に止めようと
もせず、僕に、「お前も一しよに行
つてお出で。」といつた。

八861 小使は僕等を應接室へ通して
出て行つたが、間もなく黒い服を着
た先生が、女生徒を一人つれて、は
いつて來られた。

八868 信吉は「おう、おとよ。」と
いつて、娘の手をはなして、頭の先
から足の爪先までながめたが、しば
らくして、「おとよ、大きくなつた
なあ。略。」といつて、略。

八875 私 は三年ぶりに此の子にあ
ふのでございすが、何のいんぐわ
で、ひさしぶりに歸つた私に、一口
も口をきくことが出來ないのでござ
いませう。

八885 信吉はびつくりして、二足三
足後へ下つたが、「略」。もう一つ
何とか言つておくれ。」といつて、
娘を引きよせて、「先生、どうして
口がきけたんでせう、略。」

八906 信吉は略、娘の耳に口を
よせて、「おとよ、おとうさんが歸

つて来て、うれしか。」と大きな聲で言つたが、おとよは何も言はないで、信吉の顔を見てゐる。

八917 おとよは信吉の口を、中までのぞきこむやうにしてゐたが、「はい、うれしうございます。〈略〉。」と、はつきり答へた。

八951 信吉は「いや、何、それには及びません。」といったが、すぐ「では、一日お借り申します。〈略〉。」といつて、應接室に待つてゐた娘の手を取つて、幾度も先生におじぎをした。

八108 来る二十五日に、亡母の三回忌の法事を致します。まことに御苦勞様ですが、どうか同日午前十時頃までに、お出でを願ひたうございます。

八109 又まことに申しかねますが、當日祝の歌を一首いたゞきたうございます。

八110 幼名を無人といつたが、寒いといつては泣き、暑いといつては泣き、朝晩よく泣いたので、近所の人には大將のことを、無人ではない、泣人だといつたといふことである。

八111 大將の父は長府藩主に仕へて、江戸で若君のお守役をしてゐたが、自分の子がかう弱虫の泣虫では、第一藩主に對しても申しわけがない、〈略〉と思つた。

九88 土人はまだよく開けてゐま

せんが、性質はおとなしく、我々にもよくなつき、〈略〉、子供等はなか／＼上手に日本語を話します。

九175 北國三住ム野ウサギヤ高山ノ上ニ居ル雷鳥ハ、夏ハ褐色デ、枯葉ヤ土ノ色ニ似テキルガ、冬ニナツテ雪ガ降りツモルト、眞白ニナル。

九179 例ヘバ雨蛙ハ緑色ノ葉ノ上ニ居ル時ハ緑色デアルガ、枯木ニ移レバ枯木ニ似タ色ニナル。

九192 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シイ色ドリガアルガ、裏ハ枯葉ニ似テキルノデ、羽ヲトヂテサカサニ草木ノ枝ニ止ツテキルト、マルデ枯葉ガ引掛ツテキルヤウニ見エル。

九201 此ノ蟲ハ主ニ蘭ニ止ツテキテ、外ノ蟲ヲトツテ食フモノデアルガ、羽ヲ廣ゲテキルト、全ク蘭ノ花ト同ジヤウデ、ナカ／＼見分ケガツカナイサウデアル。

九253 歡庵様は佐藤の家の農學の本をお開きなされ、元庵様はおもに氣候と農業との關係をお調べなされたが、おちい様の不味軒様はまた、地質や礦物の方で新しい發見をなされた。

九259 其の本については、後に又言聞かせるが、大體一身一家の爲でなく、一すぢに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ事で、〈略〉。

九264 わたしも此の精神にもとづいて、主に海産物や水利の事を調べて、くはしく計畫を立てた事もあるが、いろ／＼の差支があつて、實行が出来ずにしまつた。

九271 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、さぞ心細くもあらう、又つらい事もあるであらうが、父の此の願だけは、しかと心にとめて置いて、必ず仕とげてもらひたい。

九337 すると木のうろから、栗鼠が一匹、けろりとした顔を出したが、僕の姿を見ると、太い尾をちらりと見せて、急にまた穴にかくれてしまつた。

九503 社長さんは餘程の年よりらしいが、にこにこしてゐる元氣な方です。

九517 主人の家が大きな醬油屋だつたので、始は近在の小賣店へ、毎日々々、降つても照つても、おろしに歩き廻つたものださうだが、其のつらさはとてもお前たちにわかるものではない。

九539 世間にはこんな場合に、なるだけ自分の負擔を軽くしようとする者もあるが、あの人は反對に、少しでも他人の負擔を軽くしようとして、自分の財産を残らず差出した。

九548 町の人々は之を見かねて、『そんな事までなさらないでね。』と

いつて、資本を出さうとする者もあつたが、社長さんは、『自分の力でやれる所までやつてみます。』といつて、夜を日について働いた。

九635 これ等の仕事は、陸上の家で、毎朝起きると先づ夜具をかたづけ、雨戸をくるのかかはりはないが、千數百人の乗員が號令にしたがつて、規律正しく活動する其の様は、如何にも目ざましい。

九679 〈略〉、上野驛から青森行の列車に乗つた。ずる分こんでゐたが、みんながゆづり合つてくれたので、二人とも腰を掛けることが出来た。

九685 まだ日が暮れたばかりのやうに思つたが、もう八時半であつた。

九688 昔は一面の荒野であつたが、今は方々に町や村が出来てゐる。

九725 義經の居た高館のあとも右手に見えたはずだが、もう通過してしまつた。

九735 停車場にはいる手前でまた北上川を見たが、此所まで来ると川幅がかなりせまくなつてゐる。

九745 北上川はまだをりをり見るが、いよ／＼せまくなつて、とう／＼谷川になつてしまつた。

九7610 叔父さんが「東京から此所までは四百五十六哩もあるのだが、かうたやすく来てみると、そんなに遠い所に來たやうな氣がしないね。」とおつしやつた。

九七九 大人の握りこぶし程の大きな

のもあれば、雀の卵ぐらゐなかい
らしいものもあるが、どれも皆、「略」、
よく實がいつてゐる。

九八五 空にはあんなに
たくさん星が見えますが、少しも動
かないのですか。

九八九 信吉は感心して、熱心に空
を仰ぎあしが、驚けるやうに聲をあ
げて、「にいさんく、「略」。」

九九一 其の中に、子供のアルカス
はだんく大きくなつて、狩人にな
りましたが、或日大熊を見つけたの
で、それを射殺さうとしました。

九九九 此の大熊こそは、先にジュ
ノーに形を變へられたおかあさんの
カリストだつたのですが、アルカス
はそれと知りませんから、あぶなく

親身の親を射殺すところでした。
九四一 白馬岳が飛驒山脈中の有名な
山だといふ事は知つてゐましたが、

くはしい事は今日始めてうかゞひま
した。

九五〇 下山の時には、木の枝など
を櫓にして、此の雪溪をすべつて下
る人があります。僕も其の通りにし

て見ましたが、急な坂を矢のやうに
早くすべるのですから、實に壮快で
した。

九九三 面白いお話がまだたくさんあ
りさうでしたが、もう夕方になつた
ので、僕等はおいとまごひをして歸

りました。

九〇二 まだ青いが早く甘くなるたち
だから、もう直に食べられる。

九〇三 戦地ではいろくつらい事も
あつたが、戦場を駆け廻るのは、北
風にとつて愉快な事であつた。

九〇七 戦場の光景は實に恐しいもの
であつたが、北風は「略」、砲彈の
雨の中でも、銃剣の林の中でも、び

くともせずに勇ましく活動した。
九一四 中尉は始終先頭に立つて進ん
でゐたが、敵陣が間近になつたのを

見て、一だん高く軍刀をふりかざし
いつものはれくとした聲で、「そ
ら、もう一息だぞ。襲へく。」と
叫んだ。

九一八 北風は驚いてすぐに立止らう
としたが、後からかけて来る味方に
追はれて、思はず其の場から數十間

も進んでしまつた。
九二六 水兵は驚いて立上つて、しば
らく大尉の顔を見つめてゐたが、や

がて頭を下げて、「それは餘りな御
言葉です。「略」。」と言つて、其の
手紙を差出した。

九二九 おかあさんは、『一命を捨
てて君恩に報いよ。』と言つてゐら
れるが、まだ其の折に出會はないの

だ。
九三七 水兵は頭を下げて聞いてゐた
が、やがて手をあげて敬禮して、に
っこりと笑つて立去つた。

九四〇 イヤ、其ノ人が當選スルコ

トハウタガヒナイガ、自分ノタフト
イ選舉權ヲ棄テルトイフ事ハ、選舉
人トシテカリソメニモスベキ事デハ

ナイカラ、カウシテワザく歸ツテ
來タノダ。
九四八 世間ニハ、イロくノ事情

ノ爲ニ、或ハ信用モシテキナイ人ニ
投票シタリ、或ハ棄權シテシマツタ
リスル人モアルガ、ソナナ事ヲスル

ノハ、選舉ノ趣意ニソムイテキル。
九五二 又日々に奉る供へ物には、
御生前殊に御好みありし品々を選ぶ

由なるが、それらの品を社務所にた
づさへ来て、神前にさゝげたしと願
ひ出づる者數多しといふ。

九五六 今通つて見て來ましたが、
大そうりつぱになりました。
九六三 なれない私は、大丈夫とい

はれても、やはり馬のそばを通るの
が危険なやうな氣がしてならなかつ
たが、土地の人は一向平氣で、三四

歳の子供でも、腹の下などを自由に
くゞつて歩きます。
九六八 「略」、馬つなぎ場を見て廻

つたが、どの子馬も皆かはらしい
顔をして、おとなしくつながらてゐ
ます。

九七四 岩の上に残つた船體には、十
人許の船員がすがり附いて、聲を限
りに救を求めたが、何のかひもなか
つた。

九八〇 あの波を御らん。かはいさ

うだが、とても人間業では救へない。
九八四 パナマ地峽に運河を造る事は、
數百年來ヨーロッパ人のしばく計

畫したところで、實地に大仕掛の工
事を行つた事もあつたが、成功を見
るに至らなかつた。

九八六 父は「力藏さん、まあ、一服
やつてから始めなさい。」といった
が、力藏さんは見向きもせずに、元

氣な聲で、「「略」。」と答へて、止め
ようとしなない。
九八九 喜三右衛門は餘りの美しさに

うつとりと見とれてゐたが、やがて
「「略」。あの色をどうかして出した
いものだ。」とつぶやきながら、又

窯場の方へとつて返した。
九九三 人は此の有様を見て、たはけ
とあざけり、氣ちがひと罵つたが、

少しもとんちやくしない。
九九八 喜三右衛門は、血走つた目を見
張つて、しばらく火の色を見つめ

てゐたが、やがて「よし。」と叫ん
で火を止めた。
一〇〇一 喜三右衛門は、一つ又一つと

窯から皿を出してゐたが、不意に
「これだ。」と大聲をあげた。
一〇〇八 あれは銀行だよ。今までは

横町の小さい家だつたが、今度は
あゝいふりつぱなのを建てたのだ。
一〇一四 當座の方は何時でも引出す
ことが出来るが、定期の方は、預け

た日から半年とか一年とかきまつた期限が来ないと引出すことが出来ない。

十527 〇「それでは當座預金の方が便利ですね。」「便利だが、その代り利子が安い。〈略〉」

十533 〇世の中にはお金の有餘つてゐる人もあるが、又何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。

十549 〇鳩を通信に使つたのは、餘程古い時代からの事で、殊に一時は非常に盛に行はれたが、無線電信などが發明せられて以來、自然輕んぜられるやうになつた。

十646 〇〈略〉主人は、物かげに妻を呼びて、「お連れ申しはしたが、差上げる物はあらうか。」

十651 〇ちやうど有合はせの粟の飯、召上るならと妻が申してをりますが、いかゞでございませう。

十659 〇だんく／＼寒くなつて來たが、あやにくしも盡きてしまつた。

十665 〇僧は驚きて、「お志は有難いが、そんなりつぱな鉢の木をたくのは、どうぞ止めて下さい。」

十668 〇私はもと鉢の木がすきで、いろ／＼集めた事もありましたが、〈略〉、大いの人にやつてしまひました。

十671 〇しかし此の三本だけは、其の頃のかたみとして、大切に殘して

置いたのでございますが、今夜は之をたいて、あなたのおもてなしに致しませう。

十685 〇「それ程おつしやるなら、恥かしながら申し上げませう。〈略〉」といひて目をふせしが、主人はやがて語氣を改めて、「かやうに落ちぶれてはゐるものの、御らん下さい、これに具足一領、長刀一ふり、又あれには馬を一匹つないでもつてをります。〈略〉」

十755 〇僕はもう南山へ何度も上りましたが、此處からは京城の市街がまるで繪のやうに見えます。

十769 〇龍山はもと漢江にのぞんだ小さな町であつたが、京城の發展するに連れて次第に廣がり、兩方が町續きになつて、今では龍山も京城の中に編入されたのださうです。

十775 〇こちらへ來てもう三月餘りになりますが、よくも續くと思ふくらゐの天氣續きで、雨といふものはごくたまにしか降りません。

十781 〇お知らせしたい事はまだいろ／＼ありますが、大分長くなりましたから、今日は此のくらゐにして置きます。

十866 〇米は我が國ですゑぶん多くとれるが、全く外國米の足しをへ受けぬわけには行かない。

十872 〇機械類は、近年我が國でも盛に製造されるやうになつたが、物に

よつては、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。

十884 〇これらの製品は我々の使ひ料にもなるが、又支那・印度其の他の東洋諸國へ輸出される。

十928 〇『はい。』『いゝえ。』大變やさしい言葉ではありませんか。〈略〉。父は「誠にやさしいやうだが、それで中々言ひにくい場合があるのだ。」

十936 〇太郎は前から父に、「あの橋は危険だから決して渡つてはならぬ。」と固く禁ぜられてゐたのであるが、友だちのすゝめをことわりかねて、一所に渡り出した。

十944 〇父は「お前はどうしたのだ。かねてあぶないといつて置いた、あの橋を渡つたのでは無いか。」とたづねたが、太郎はだまつてゐた。

十1042 〇椰子・バナ・コーヒー・ゴムの木などは名を聞いてゐたが、實物を見るのは始めてである。

十1125 〇昨夜の風雨は名残なくをさまつたが、海面にはまだ波のうねりが高い。

十1189 〇白梅は今ちやうど眞盛りであるが、其の間に咲かけの紅梅が點々と交つて美しい。

十1244 〇談話の最中に一人の老人がはいつて來ましたが、それを見るとすぐに立つて、椅子をゆづりました。

十1233 〇外の者は少しも氣がつか

いらしがつたが、あの青年はいるとすぐに書物を取上げて、テーブルの上に置きました。

十1239 〇外の者は着物だけは美しかつたが、爪の先は眞黒になつてゐる者が多うございました。

十1307 〇主上さまに笠置におはせし時早くも義兵を擧げしが、事のいまだ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、力なくて止みたり。

十1334 〇年久しく相争ひて互に勝敗ありしが、勾踐越の王となるに及び、呉の勢盛にして越軍大いに破れ、勾踐は呉に捕へられぬ。

十1336 〇〈略〉、勾踐は呉に捕へられぬ。後からうじて歸國することを得しが、勾踐此のうらみ忘れがたく、范蠡といふ忠臣の助を得て報復の計を立て、再び呉と戦ひて遂に之を亡しぬ。

十1338 〇つまり此の宇宙には、あの太陽のほかに、これと同じやうなものがなほ數限りもなく存在してゐるが、たゞ其の距離の遠いために、あんなに小さく見えるのである。

十1117 〇上海は専ら商業の都市として知られてゐるが、近時工業も次第に盛になつて、紡績・造船・製粉・製紙其の他の諸工場が勢よく黒煙を立ててゐる。

十1144 〇通された部屋には、古いた

んすや戸棚などが並べてありました
が、さうぢもよく行届いてゐるし、
總べてがきちんとしてゐました。

十一1410 私が出来たので、すぐしまは
うとなさるのを強ひて止めてお手傳
をしましたが、成績物を一枚も無く
なさにそろへていらつしやるのに
驚きました。

十一158 「成績物は〈略〉、皆一生の
記念になるのだ。」と思ふと、私も
急に一年からのをまとめたくなりま
したが、私のは〈略〉、大方なくな
つてしまひました。

十一2710 此より先、秀吉は織田
信孝を攻めて大垣にありしが、二十
日の正午大岩山の敗報至る。

十一285 明くれば二十一日の朝、
盛政は賤嶽より西北に當れる高地に
兵を引きまとめたりしが、此の時ま
でも飯浦坂にふみ留つて、追來る敵
を防ぎ居し弟勝政に引きあげを命じ
たり。

十一2910 正國も槍を合はせ、しば
らく防ぎ戦ひしが、俄に槍を投捨て
て大手をひろげ、「組打。」と叫ぶ。

十一3110 正國得たりと、力足をふ
ん張りてはねかへさんとせしが、ふ
みそこねてあはや谷底へ轉び落ちん
とす。

十一374 早く間伐して細材を取る
目的のところでは、一坪に二本も三
本も植ゑるが、此の邊では太材を取

る方が利益だから、かう間をおいて
植ゑるのだ。

十一382 下刈はいつも土用中にする
ので、ずるぶん苦しいが、それでも
木が競争するやうに、しんを立てて
すくすくと延びてゐるのを見ると、
非常にうれしい。

十一407 今年伐るはずのは、おとう
さんの子供の時植ゑたのだといふが、
もう幹のまはりの三尺餘りもあるも
のが大分見える。

十一4010 おとうさんは、よく「植林
は貯金のやうなもので、植ゑてさへ
おけば、年々太つて利息が附いて行
く。」とおつしやるが、ほんたうに
さうだ。

十一447 昔、泉州堺^{さかい}のなにがし
寺に、或畫師久しく寄食してありけ
るが、何一つ畫がくこともなく、毎
日遊び暮して既に數年を経たり。

十一459 畫師「〈略〉。さら
ば謝恩の爲に何か畫がきて參らすべ
し。」とて、心構せし様なりしが、
尚筆も取らずで數日を過しぬ。

十一489 畫師「先に畫が
きたる檜、何となく物足らぬ所あり
て氣にかゝりしが、東國へ下る路す
がら、箱根山中にてよき枝ぶりの檜
を見て、其の意を得たれば、かき添
へんために歸りしなり。」とて一枝
かき添へ、又別れを告げて立去れり
といふ。

十一506 ブラジル邊でゴムを製造す
るには、山野に自生するゴムの木か
ら原料をとるのであるが、近年ゴム
の需要が激増したために、英國人は
マレイ半島の領地にパラゴムの木を
移植するに至つた。

十一518 此の邊でゴムを栽培するに
は、先づ森林を焼拂つて、其のあと
に種をまくか、又は苗木を植付け
るのであるが、これが成長して、切付
を行ふまでには五六年もかかる。

十一551 船員等は、如何にも氣持よ
ささうに泳ぎ廻つてゐたが、中にも
うれしさうに見えたのは、十三四に
なる二人の少年であつた。

十一555 〈略〉、沖のうきを目當に泳
ぎくらをしてゐた。〈略〉。初は十間
以上も相手をぬいてゐたが、どうし
たのか急に相手にぬかれて、一二間
も後れてしまつた。

十一566 老砲手は氣ちがひのやうに
なつて、「逃げろく。」と聲を限り
に叫んでゐるが、二人の耳にははい
らぬのか、夢中で泳ぎくらを續けて
ゐる。

十一572 驚いてししやうけんめい逃
げようとしてあせつてゐるが、もう
遅い。

十一651 農業者は多く古い習慣に
なづみやすいものであるが、此の邊
では新しい知識をいれて、新式の農
具を用ひ、新式の方法によつてどし

く土地を開いて行く。

十一669 此の方法は各國民の間に、
廣く又極めて長い間行はれてゐたも
のであるが、マツチの使用が廣まる
につれてすたつて來た。

十一673 火の熱は、初め主として食
物を調理するのに用ひたもののやう
であるが、時代が進んで燃料の種類
が増すにつれて、火の用途もだん
く廣くなつて來た。

十一6710 燈火としては、初め松の木
や魚・獸の油などをたいたのであつ
たが、其の後らふそくや種油がとも
され、石油のランプが之に代り、今
はガス燈や電燈が到る處にかゝやき
渡る時代となつた。

十一728 宣長は、大急ぎで眞淵の様
子を聞きとつて、後を追つたが、松
坂の町はづれまで行つても、それら
しい人は見えない。

十一7210 次の宿のさきまで行つてみ
たが、やはり追ひつかなかつた。

十一752 私も實は我が國の古代精
神を知りたいといふ希望から、古事
記を研究しようとしたが、どうも古
い言葉がよくわからないと十分なこ
とは出来ない。

十一768 其の後宣長は絶えず文通し
て眞淵の教を受け、師弟の關係は日
一日と親密の度を加へたが、面會の
機會は松坂の一夜以後とくく來な
かつた。

十一795 かうして出来た貨幣は極めて使用に便利ではあるが、尚場合によつては持運びに不便なので、更に貨幣の代りになる紙幣といふ物を案出した。

十一8510 僕も急に元氣がなくなつて、一所に船に上らうかと思つたが、「いや、こゝががまんのだころだ。〈略〉。」と、自ら勵まして進んで行つた。

十一8810 弟はそれを見てしばらく考へてゐたが、すぐ二百十日の通日から立春の前日の通日を引去つて、「成程、二百十日目だ。」

十一899 弟は〈略〉、ふと「八十八夜」の文字に目を止めて、「こゝに『八十八夜』とありますが、これは何ですか。」

十一924 曆には太陽曆と太陰曆とあつて、日本では明治五年まで太陰曆を用ひてゐたが、其の翌年から太陽曆を用ひた。

十一9210 其の間は約三百六十五日と四分の一だが、便宜上三百六十五日を一年とし、普通四年毎に一日の閏をおくことになつてゐる。

十一934 ところが太陰曆は月のみちたりかけたりする變化を本としてこしらへたもので、通例十二箇月を一年とするが、此の一年は一回歸年より約十一日少いから、太陽曆とくちがつて来て、三年にならないう

ちに二箇月の閏をおかなければならない。

十一938 したがつて二百十日も太陽曆なら大が九月一日で、ちがつても一日ぐらゐるものだが、太陰曆になると三十日もちがふことがある。

十一951 リンカーンが七歳の時、一家はインディアナ州に移つたが、さしあたり家がなくてはならぬので、父は自分で木を切出して小さな家を造つた。

十一973 學校は四哩餘りも離れてゐたが、路の遠いのは少しもいとはず、毎日毎日元氣よく通學した。

十一986 それから又父の援助をしたり、人にやとはれたりすることになつたが、本を讀みたいといふ心は少しも變らなかつた。

十二610 此の時時代主命はすなどりのため美保崎といふ處にありしが、使を得て急ぎ歸り、父君に申すやう、「かしこし。仰のまゝにたてまつり給へ。」

十二102 九歳の時始めて學校にはいつたが、餘りすばらしい生れつきでなかつたので、先生にもむしろ中以下の生徒と思はれてゐた。

十二114 温順な彼は父の命に従つて勉強してゐたが、何時の間にか好きな博物學の研究が主となつてしまつた。

十二137 ダーウィンの後半生は病氣

がちであつたが、此の規則正しい生活とふだんの養生によつて、七十四歳の長壽を保つことが出来た。

十二147 されば珍しき事件の起りし時、之を記述して印刷に附し、廣く發賣することは古より行はれたりしが、印刷術の幼稚なる時代にありては、唯をり／＼興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。

十二325 ルーブル博物館も一覽しましたが、りつぱな繪畫・彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。

十二349 汽車でドイツの國內にはいつたのは朝まだほの暗い頃でしたが、もう沿道の田畑には農夫が鋤を振るつてをり、又工場といふ工場には盛に黒煙が上つてゐました。

十二3710 二人は戸外にたゞずんでしばらく耳をすましてゐたが、やがてピヤノの音がはたと止んで、「にいさん、まあ何といふよい曲なんですか。〈略〉。」と、情ないやうにいつてゐるのは若い女の聲である。

十二395 「御免下さい。私は音楽家ですが、面白さについてり込まれて參りました。」とベートーベンがいつた。

十二401 實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが、——あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふお話でしたな。

十二438 「それでは此の月の光を題に一曲。」といつて、彼はしばらくすみきつた空を眺めてゐたが、やがて指がピヤノの鍵にふれたと思ふと、〈略〉。

十二501 湖岸線は大體單調であるが、東南岸だけは二つの半島が並んで突出してゐるためにやゝ複雑になつてゐる。

十二515 湖の水は東岸から奥入瀬川となつて流れ出るのであるが、一年を通じて水位の變化は極めて少い。

十二529 ねぢは驚いてあたりを見廻したが、いろ／＼の物音、いろいろの物の形が／＼と耳にはいり目にはいりばかりで、何が何やらさつぱりわからなかつた。

十二547 ああいろいろの道具、たくさんの時計、形も大きさもそれ／＼違つてゐるが、どれを見ても自分よりは大きく、自分よりはえらさうである。

十二555 二人は其處らを見廻してゐたが、男の子はやがて仕事臺の上の物をあれこれといぢり始めた。

十二557 女の子は唯じつと見まもつてゐたが、やがてかの小さなねぢを見附けて、「まあ、かはい、ねぢ。」

十二559 男の子は指先でそれをつまもうとしたが、餘り小さいのでつまめなかつた。

十二574 それでは自分のやうな小さ

な者でも役に立つことがあるのかしらと、夢中になつて喜んだが、此のやうな處にころげ落ちてしまつて、若し見附からなかつたらと、それが又心配になつて來た。

十二57 ねぢは「此處に居ます。」

と叫びたくてたまらないが、口がきけない。

十二58 10 さうして一つの懷中時計を出してそれをいぢつてゐたが、やがてピンセットでねぢをはさんで機械の穴にさし込み、小さなねぢ廻しでしつかりとしめた。

十二70 2 家來の中にはしきりに王をなだめた者もあつたが、王の怒はいよくつて、もうどうすることも出来ない。

十二72 7 王は二三の忠臣にかしづかれて、とある小屋に一夜を明かしたが、何時の間にかもう發狂してゐた。

十二75 9 王は尚あらぬ言葉を口走つてはゐたが、其の言葉の端端にも、前非を悔い、自分を責めて娘にわびる眞心がこもつてゐた。

十二76 6 まぐろを取る方法はいろ／＼あるが、だいぼう網で取るほど勇壯なものはあるまい。

十二87 3 林蔵の怪しみもてあそばるゝこと、此處にては更に甚だしかりしが、かゝる中にありても、彼は土地の事情を研究することを怠らざりき。

十二90 3 唯法律は必ず帝國議會の協賛を経なければならぬが、命令には其の事がない。

十二93 7 かねて釋迦の徳をしたつてゐたマガダ國王は、修行を思ひ止らせようとして、自分の國をゆづらうとまで申し出たが、彼の決心はどうしても動かかなかつた。

十二93 9 彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聴いたが、どれにも満足することが出来ない。

十二95 10 彼は此の心境の尊さに數日の間唯うつとりしてゐたが、やがて此の尊い心境を世界の人々と共にせずにはゐられぬといふ慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。

十二97 5 今や釋迦は衆星の中の満月の如く國中から仰がれる身となつたが、中には彼をそねむあまり、反抗するばかりでなく、迫害を加へようとするものさへも出て來た。

十二97 10 或時の如きは、釋迦が山の下にあるのを見附けて、上の方から大石をころがしたが、石は釋迦の足を傷つけただけで、目的を果すことは出来なかつた。

十二98 3 釋迦は八十歳の高年に及んでも、〈略〉、各地を巡つて道を傳へてゐたが、遂に病を得てクシナガラ附近の林中に留つた。

十二104 7 それは〈略〉絶壁をたよりに、見るから危げな數町のかげはし

を造つたものであるが、昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。

十二105 3 身には色目も見えぬ破れ衣をまとひ、日にやけ仕事にやつれて年の頃もよくわからぬくらゐであるが、きつと結んだ口もとには意志の強さが現れてゐる。

十二110 10 今では此の洞門を掘りひろげ、處々に手を加へて舊態を改めてはゐるが、一部は尚昔の面目を留めて、禪海一生の苦心を永久に物語つてゐる。

十二111 5 當時は單に理化學の實驗用として使用せらるるに過ぎざりしが、次第に改良せられて、四五十年の後には燈臺などにすゑ附けらるゝに至りぬ。

十二112 9 彼が稀代の天才はこゝにも遺憾なく發揮せられて、着々成功の域に進みしが、唯心に至りては彼の最も苦心したる所なりき。

十二113 1 初め彼は紙に炭素を塗って試みしが、思はしき結果を得ず。

十二113 2 次いで白金其の他の金屬の針金を以て様々の實驗を重ねしが、これまた失敗に終りぬ。

十二113 7 7 エヂソンは例の如く實驗室に閉ちこもりて研究に餘念なかりしが、ふと見れば机上に形珍しき一本の團扇あり。

十二114 5 5 こゝにおいて彼は人を世界の各地につかはして竹を採集せしめ、其のもたらせるものに就いて綿密に研究せしが、日本の竹最も適當なりしかば、専ら之によりて心を製出せり。

十二116 5 5 そればかりでなく、石炭は早晚使ひ盡くされてしまふが、水力は無限といつてよい。

十二117 1 1 エヂソンが炭素線の電燈を發明したのは四十年ばかり前のことであつたが、今では更に進んで光の色が太陽に似て、しかも比較的熱をとらぬふことの少い電燈さへも發明されました。

十二117 9 電信や電話の發明は其の當時實に全世界を驚かしたものでありますが、其の後無線電信が發明されて、陸上でも海上でも、自由に消息を交換することが出来るやうになりました。

十二118 2 2 又最近無線電話が發明されましたが、今やそれが盛に利用される機運となりました。

十二121 1 1 國 参りし當座は何事もわからず、唯氣をもむのみにて、我ながら情なく存じ候ひしが、〈略〉、追々店の様子もわかり、お客様の扱方にもなれて、仕事に興味を覺ゆるやう相成り申候。

十二125 9 西郷は早速承知して、芝、高輪の薩摩屋敷で會見したが、其の日要領は遂に得がたく、兩人は翌日

の再會を期して別れた。

十二128 安芳がいふ、「官軍方の御意見はどのやうなもののか存じませんが、拙者の考へる所では、**〈略〉**、うかくと兄弟垣にせめいでゐたら日本全國にのしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。**〈略〉**」

十二128 之に比べれば、幕臣の身としては如何がな申分ではあるが、徳川家の存亡などは言ふにも足らぬ小事でござります。

十二128 拙者は、**〈略〉**、さやうな事になれかしとは毛頭考へませぬが、大勢は人力の如何ともしやうのないもので――。

十二130 西郷はしばらくじつと考へてゐたが、「よろしい。とにかく明日の總攻撃見合はせの一事だけは、拙者一命にかけて御引受け申します**〈略〉**」

十二131 警衛の兵士等は、安芳の姿を見ると一時に押寄せて來たが、西郷が後に續いてゐるのを見て、一同恭しく捧げ銃の禮をした。

十二131 温和な氣候や美しい風景は、人の心をやさしくし、優美にはするが、雄大豪壯の氣風を養成するには適しない。

十二131 其の原因はいろ／＼あらうが、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、其の主た

るものであらう。

十二133 **〈略〉**、かういふ短所はやがて我が國民から消去するであらうが、出來る限り早く之を一掃することは我々の務ではあるまいか。

が (終助) 12 が

五84 大水が出なければよいがと心ばいして、夜中に手をけやはき物まですつかり二階へ上げました。

六17 **〈略〉**、「さあ、まだ早いかも知れないがね。」と言つて、栗林の下のくぼ地を教へてくれました。

七74 妻もまた「せつかくですが。」といつて、相手になりません。

七77 **〈略〉**「寒からうが。」「少しも寒くはございません。」

七93 **〈略〉**「どうかひどい風にならないければよいが。」と、おぢいさんが言つていらつしやつたが、**〈略〉**。

九91 私も餘程前に讀んだのですから、くはしい事はおぼえてあませんがね。

十60 **〈略〉**。世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。」感がいに打沈みてとぼくと歩を運ぶ。

十64 **〈略〉**「お連れ申しましたのが、差上げる物はあらうか。」粟飯ならございますが。」

十一72 **〈略〉**。どうかして御目にかゝりたいものだ。」後を追つて御いになつたら、大たい追ひつ

けませう。」

十二40 **〈略〉**。それに樂譜もございせんが。」と兄がいふ。

十二75 これはどなたであらうな。笑つて下さるな、どうも娘のコーデリヤのやうに思はれてならぬが。

十二75 **〈略〉**「涙をこぼしてくれるのか。お前はわたしをうらんでゐるはずだが。」何でうらむわけがございませう。**〈略〉**」

かあさん おおかあさん
かい **〔甲斐〕** (地名) 2 甲斐
六67 内地では甲斐の白根で、一万五百尺。

七43 越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄が、たびたび信濃の川中島で戦つた。

かい **〔云〕** ううんどうかい・えんそう
かい・さんじかい・しちようそん
かい・しゆくがかい・てんらんかい・ふけんしがい

かい **〔回〕** ういっかい・ごかい・さん
かい・さんかい・だいさんかい・だ
いろいろかいめ・にかい

かい **〔貝〕** (名) 4 貝 うしんじゆがい・まてがい

七79 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤ其ノ外イロ／＼ノ動物ガスンデ居リ、又サマザマノ植物モ生エテ居ル。

七82 又眞珠貝トイフモノガアル。指輪ヤ襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデア

ル。

九14 **〈略〉**、しづみの殻を取出し、細かに打ちくだく。其の音を聞きつけてかけ來り、飛びちりたる貝のかけを、すばやくついばみたるは眞白なるめんどりなり。

十一78 石・貝・家畜・獸皮・布・農産物などが、時代により場所によつて、それ／＼貨幣の役目をしたこともあつた。

かい **〔界〕** うこうぎようかい
かい **〔海〕** うにつぽんかい
かい **〔階〕** うごじゅうごかい・さんがいでて・さんがいづくり・しかいだて・じつかい・にかい・にかいづくり・にじつかい

かい **〔買〕** うたまごかい
かい **〔飼〕** うはなしがい
かい **〔權〕** うろかい

かい **〔甲斐〕** (名) 3 かひ
十25 岩の上に残つた船體には、十人許の船員がすがり附いて、聲を限りに救を求めたが、何のかひもなかつた。

十109 承り候へば、御祖母様には先日より御病氣の處、御養生のかひもなく、去る十九日遂に御死去遊ばされ候由、誠に驚き入り候。

十一24 されども不意を討たれし俄の軍に、清秀等の奮戦其のかひなく、清秀は討死してとりでは落ち、戦は午前のうちに終りぬ。

がい「害」(名) 2 害

八七〇三 此所は工業地で、煙突の煙で空は眞黒だが、大きな公園が幾つもあるから、健康には害がなさうです。

十一八八 約束は固く守らなければならぬ、他人に害を加へてはならぬなどといふことは、我々が十分心得てゐる事である。

かいおうせいしょう「海王星衝」(名)

1 海王星衝

十一八九 六日火海王星衝かえ

いぬ「略」

かいが「階下」(名) 1 階下

五〇三 停車場の階上には、役所もホテルもあります。階下の入口には、左右に大きな待合室があつて、

かいが「絵画」(名) 2 絵画

十二一七三 図 さて編輯部にては刻々集り来る原稿を選択整理し、繪畫・寫眞等と共に之を印刷部に送る。

十二三二六 図 ルーブル博物館も一覽しましたが、りつばな繪畫・彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。

かいがい「海外」(名) 2 海外

十二一三二 殊に徳川幕府二百餘年の鎖國は、國民をして海外に發展する意氣を消磨せしめ、

十二一三六 図 そこで海外に移住しても外國人から思ひ掛けぬ誤解を受けて排

斥されるやうなことも起つて来る。

かいがいし「甲斐甲斐」(形) 1 か

ひくし「一シク」

十一一〇七六 図 中にも十三四ばかりの子供が、各國人の間にまじりてかひなく立働ける様を見ては、如何にもけなげに存せられ候。

かいがいし「甲斐甲斐」(形) 2

かひがひしい「一ク」

九六四 水兵はくもの子を散らすやうに八方へ散つて、かひがひしくズボンと袖をまくり上げ、身輕な姿となつて分隊毎に甲板洗を始める。

十一九五七 父が木を伐れば自分は雜草をかり取る、父が畠を打てば自分は種をまくといふ風にかひがひしく働いてゐた。

かいがら「貝殻」(名) 2 貝殻 貝殻

九一四三 図 くだきたる貝殻を器に入れてあたるに、これには餌の時のやうに集らず。

十二二九一〇 ごく小さい時分から動植物に深い趣味を持ち、又物を集めることがすきで、貝殻や鑽石などを室内に並べては一人で楽しんでゐた。

かいがん「海岸」(名) 6 海岸 ↓

七五三九 図 海岸の松原や、いその小山も次第に遠くなつて、しまひにはもう何も見えなくなります。

七五八九 図 又海岸には所々に燈臺がありますから、それを見ると、あれは

何所だといふことが分ります。

九一五九 淺蟲近くになると、汽車が海岸を走るので、陸奥灣の風光が手に取るやうに見えた。

十二八一〇 図 境内を出でて海岸に到る。

十二二七七 先づ岸近くまぐるの寄つて来る場所を選んで、海岸から沖の方へ二三百間も長く垣網を張り、

十二八二五 図「略」、林蔵は幕府の命によつて、松田傳十郎と共に樺太の海岸を探検せり。

かいがらんちほう「海岸地方」(名) 1

海岸地方

十一一〇三四 図 此のブラジル國は、

かいぎ「会議」(名) 1 會議

十二二八八 討論の形式は、普通第一讀會・第二讀會・第三讀會の三度の會議を経ることになつてゐる。

かいきゅう「いしかいきゅう」

かいきょう「いきたんかいきょう・しかいきょう・しものせきかいきょう・なるとかいきょう・ほうよかいきょう・まみやかいきょう

かいきょうじん「回疆人」(名) 1 回疆人

代表するなり。

かいぐん「海軍」(名) 2 海軍

五一六六 海軍のちやうさんがお出でになつて、春子には彗星書とリボン、僕には小刀とえんぴつをおみやげに下さいました。

九四七四 図 海軍のいさんが、休暇でお歸りになつたので、

かいぐんだいじん「海軍大臣」(名) 1 海軍大臣

十一一七二〇 図 海軍大臣の命名書朗讀、工廠長の進水命令、

かいけつ「解決」(名) 1 解決

十二一四六 図「略」舊幕府の陸軍總裁勝安芳は、かねてから百方畫策して時局の圓滿な解決を計つてゐた。

かいけつず「解決」(サ変) 1 解決す「一シ」

十二二八二 図 然るに其の實際を調査して此の疑問を解決したる人、遂に我が日本人の中より現れぬ。

かいけん「會見」(名) 3 會見 ↓

九三九六 図 旅順開城約成りて、敵の將軍ステッセル 乃木大將と會見の所はいづこ、水師營。

十二一四八 図「略」、安芳は三月十三日官軍の參謀西郷隆盛に會見を求めた。

十二一四六 図 翌十四日の會見は、芝、田町の薩摩屋敷で行はれた。

かいけんす「会見」(サ変) 1 會見す「一セ」

十二9ノ図 かの建御雷命が大國主命と會見せられしは此處なりといふ。

かいけん・する「会見」(サ変) 1 會見する「一シ」

十二129 西郷は早速承知して、芝、高輪の薩摩屋敷で會見したが、〈略〉。

かいこ「蚕」(課名) 2 蠶

五日14 十三 蠶

五467 十三 蠶

かいこ「蚕」(名) 5 蠶

五468 昨日からうちの蠶が上りはじめました。

五471 上る頃には、蠶のからだがつき通るやうになります。

五483 まぶしには、かさくといふ音がしてゐますが、これは蠶が動くからです。

五493 今桑をたべてゐる蠶も、明日の朝までには、たいてい上つてしまふさうです。

十125ノ図 〈略〉、近年は作物も改良せられ、桑を植ゑて蠶を飼ふ者多く、殊に一村鶏を飼はざる家なし。

かいこく「海国」(名) 2 海國

七602 図 それは日本は海國でありながら、まだ海を恐れる人もあるといふことで、〈略〉。

七607 図 こんなことでは、どうして海國の民といはれませう。

がいこく「外国」(名) 16 外國 ↓

しょうがいこく

六74 図 外國には、新高山より、もつと高い山がありますか。

六855 それからこゝに六百餘年、まだ一度も外國から攻められたことはない。

七279 〈略〉、近年外國から種馬を輸入したので、大いに改良されて、いたる所に良馬を見るやうになった。

七558 図 外國の港に着くと、見なれない形の家が並んで立つてゐます。

七61ノ図 皆さんのうちには、大きくなつてから、商用其の他で、外國へ出かける人もあります。

七616 図 かくて船長は外國より持歸りたる寫眞帖を學校に寄附して去れり。

八79ノ図 軍隊や、裁判所や、外國とのつきあひや、其の他いろいろの費用になるのです。

十863 又國內で出来るものを使ふよりも、時には外國の品を使ふ方が都合のよい事もある。

十864 種々の品物が遠く外國から輸入されるのは、主にこれ等の事情からである。

十872 機械類は、近年我が國でも盛に製造されるやうになつたが、物によつては、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。

十876 我が國は〈略〉、國內で出来た物を外國へ輸出することもある。

が多い。

十8710 又外國から原料を輸入し、それに加工して、更に外國へ輸出する事も少くない。

十8710 〈略〉、更に外國へ輸出する事も少くない。

十1212 外國の或商會で、新聞紙に店員入用の廣告を出した。

十一109 第三課 上海 〈略〉此の地は交通上重要な位置を占めてゐて、外國との貿易ばかりでなく、支那の各地との取引にもきはめて便利であるから、〈略〉。

十一1072 圖用 〈略〉コーヒーの實を手にてこき落し、〈略〉之を機械にかけて皮を除き、袋に入れて外國に輸出する由に候。

がいこくじん「外国人」(名) 3 外國人

十一89 第三課 上海 〈略〉こゝには外國人の居留する者が非常に多く、これ等は租界といふ特別の區域内に住んでゐる。

十二1356 そこで海外に移住しても外國人から思ひ掛けぬ誤解を受けて排斥されるやうなことも起つて来る。

十二1374 習、性となつては、遂に日本人には獨創力がないであらうと自らも輕んじ、外國人からも侮られる。

がいこくじんちゅう「外國人中」(名) 1 外國人中

十一115 第三課 上海 〈略〉貿易

上最も重要な關係をもつてゐるのは、日・英・米三國で、我が居留民の數は、外國人中第一位を占めてゐる。

がいこくほうえき「外國貿易」(名) 1 外國貿易

十二234 外國貿易に至つては、之に従事する者の心掛け如何の影響が更に大きい。

がいこくほうえきぎようしや「外國貿易業者」(名) 1 外國貿易業者

十二238 外國貿易業者はかへすく深く此の點に注意しなければならぬ。

がいこくまい「外國米」(名) 1 外國米

十866 米は我が國でずるぶん多くとれるが、全く外國米の足しまへを受けぬわけには行かない。

かいこん「開墾」(課名) 2 開墾

十109 第八 開墾

十3710 第八 開墾

かいこん「開墾」(名) 1 開墾 ↓

十一1092 圖 かゝる處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、其の有様は如何にも男らしく勇ましきものに見え候。

かいこんしはじめる「開墾始」(下二) 1 開墾し始める「一メ」

十38ノ村はづれにある、うちの雑木山を開墾し始めてから、もう一月餘りになる。

かいこん・する「開墾」(サ変) 1 開

墾する「一スル」

十一64又開墾する場合に、立木や切株の根本を掘つておいて、それにくさりをつけて此のトラクターで引くと、めりくくと音を立てて根こぎにされてしまふ。

かいこんち「開墾地」(名) 1 開墾地は、まるで足のふみ場も無い有様である。

かいざいく「貝細工」(名) 1 貝細工六1077参拜をすましてから、二見浦を見に行つて、おみやげに貝細工を買つた。

かいさき「買先」(名) 1 買先八436そこで其の反物を出した者を呼出して、買先をたゞし、それからそれと調べましたので、とうとう罪人がわかりました。

かいさんぶつ「海産物」(名) 1 海産物九262図 わたしも此の精神にもとづいて、主に海産物や水利の事を調べて、くはしく計畫を立てた事もあるが、〈略〉。

かいしゃ「会社」(名) 3 会社 ↓ せいまいがいしゃ

九4910 會社では、幾臺もある精米機械が電力で勢よく廻り、四五人の若い人々がぬかだらけになつて働いてゐました。

九558図 そこで間もなく片手間に精

米所を始め、追追に大きくして、あんなりつばな會社にしたのだ。全くあんな人は珍しい。」とお話しになりました。

十一98 街路をさしはさんで大商店が軒をつらね、河岸には領事館・税關を始め、銀行・會社等のりつばな建物そびえてゐる。

かいしゅう「会衆」(名) 1 會衆十二1189 〈略〉などの耳新しい話に、博士は滿堂の會衆を喜ばせた。

かいじゅう「怪獸」(名) 1 怪獸九1078 やがてもうくと上る白煙の間から、怪獸のやうな大砲と、其のまはりにむらがる人かげが見えて来る。

がいしゅつ「外出」(名) 1 外出六396 入營後はじめて此の前の日曜日に外出をゆるされた。

かいじょう「海上」(名) 9 海上五566 松島は大小三百の島が、海上三四里の間にちらばつてゐて、〈略〉。

七194 又南の海上にはひしひしと軍船を浮べて、岸には大木がきりたふしてあります。

七199 義貞は馬から下りてかぶとをぬぎ、はるくと海上を拜しました。八215図 〈略〉、夏季ハコトニ増水シテ、濁流江ニミナギリ、河口ヨリ海上百里ノ間、海水コレガタメニ赤シトイフ。

十256 夜がほのくと明けた頃、荒れくるふ海上を見渡したグレース親子は、ふとはるかの沖合に、かの難破船を見とめた。

十一84 長崎を出た汽船は、海上を走ること約四百海里で揚子江の河口に達する。

十一352図 我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、世界における海上の一大公園なりといへり。

十一873図 あゝ、五海里の海上を僕も泳ぎきることが出来たのだ。

十二11710図 〈略〉、其の後無線電信が發明されて、陸上でも海上でも、自由に消息を交換することが出来るやうになりました。

かいじょう「開城」 ↓ りょじゅんかいじょう

かいじょう「階上」(名) 1 階上五1012 停車場の階上には、役所もホテルもあります。

がいじょう「街上」(名) 1 街上十二307 往來の頻繁な街上でも、よく警官の指揮に従つて、混亂することがなく、〈略〉。

かいじん「海神」(名) 2 海神七203 海神ねがはくは潮を退けて、道を開かせたまへと念じて、黄金作の太刀を取つて、海の中に投入しました。

九1010図 其の時、御供にしたがひ

給へる弟橋姫、〈略〉、「これ海神のたゝりならん。〈略〉。」といひて、〈略〉。

がいじん「外人」(名) 1 外人十二235 即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、〈略〉。

がいす「害」(サ変) 1 害す「一シ」

十二978 殊にデーバダッタは、〈略〉、かねてから釋迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。

かいすい「海水」(名) 2 海水八215図 〈略〉、夏季ハコトニ増水シテ、濁流江ニミナギリ、河口ヨリ海上百里ノ間、海水コレガタメニ赤シトイフ。

九653 下士官が、甲板の吐水口からふき出る海水を、桶に汲んではどんく流すと、ブラシを持った數十人の水兵が、甲板をこすりながら頭を並べて進んで行く。

かいすいよく「海水浴」(名) 1 海水浴

九763 叔父さんのお話によると、此所は名高い温泉場で、海水浴も出来るさうだ。

かいする「解」(サ変) 1 解する「一セ」

十二1355 其の結果今日も尚國民は眞の社交を解せず、人を信じ人を容れる度量に乏しい。

かいせい「快晴」(名) 1 快晴

七39 5 国 まだ来て二三箇月で、よくはわかりませんが、氣候も思つたよりよくて、快晴の日が多いやうです。

かいせん 〔改選〕(名) 1 改選

十125 9 国 村長は「略」、深く村民に敬愛せられて、幾度の改選にも重ねて選挙せられ、「略」。

かいせん 〔海戦〕「ほうとうおきのかいせん」

かいぜん 〔改善〕(名) 1 改善

十一116 9 略、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、皆公共心の發動であつて、「略」。

がいせん 〔凱旋〕(名) 1 凱旋

十二80 1 漁夫の顔は得意の色に輝いて、まるで凱旋の將士のやうに見える。

がいせんもん 〔凱旋門〕(名) 1 凱旋門

十二32 1 国 有名な凱旋門は此の大通の起點にあります。

かいそう 〔海草〕(名) 8 海藻

七80 2 略、タヒ・アナゴ・ハモナドノヤウニ、岩ノカゲヤ海藻ノ間ヲ泳グモノガアリ、「略」。

七85 2 略、岸ニ近イ淺イ所カラ二三尺グラキノ所マデニハ、海藻ガ生エテキル。

七85 4 海藻ニハイロくアル。

七86 1 此ノ他海藻ニハマダタクサンナ種類ガアツテ、中ニハ肥料ニスル

モノモアル。

七86 3 海藻ノ形ハ様々デ、帶ノ様ニ廣クテ長イノモアレバ、全體ガ細カニ分レテ、枝ノ様ニナツテキルノモアリ、ニハトリノトサカニ似タノモアル。

七87 5 海藻ハ花ガ咲カナイ。

七87 8 略、海藻ハ養分ヲ其ノ體ノ全面カラ吸取ルノデアル。

九8 5 国 青・緑・紅・紫、目のさめるやうに美しい魚の群が、珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。

かいだし 〔買出〕(名) 1 買出し

六32 8 カラノ荷車ヲヒイテ行クノハ、八百屋ヤサカナ屋デ、買出シニ行クノラシイ。

かいちゅう 〔海中〕(名) 2 海中

五57 6 天の橋立は海中へつき出た細長い洲で、長さは一里、はゞは四五十間。

十二76 9 第十五課 まぐろ網「略」。

これを海中に張つた形はちやうど大きなひしやくに似てゐる。

かいちゅうどけい 〔懷中時計〕(名) 3

懷中時計 懷中時計

十二56 10 國 あれが無いと町長さんの懷中時計が直せない。

十二58 10 さうして一つの懷中時計を出してそれをいぢつてゐたが、「略」。

十二59 3 龍頭を廻すと、今まで死んだやうになつてゐた懷中時計が、忽ち愉快さうにかちくとい音を立て

始めた。

かいつういらい 〔開通以來〕(名) 1

開通以來

十37 7 しかしバナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり、したがつて世界の航路に大きな變動を生じたのである。

かいつう・する 〔開通〕(サ変) 1 開通する「し」

十二108 3 そこで人々はいつそ我々も出来るだけ此の仕事を助けて、一日も早く洞門を開通し、「略」。

かいつけ 〔買付〕(名) 1 買ひつけ

十一70 10 或夏の半ば、宣長はかねて買ひつけの古本屋に行くと、主人は愛想よく迎へて、「略」といふ。

かいて 〔買手〕(名) 3 買手

十20 9 国 子馬が「略」引出されると、黒山のやうに集つてゐる買手は、「略」思ひくゝの直をつけて、次第にせり上げる。

十20 10 其の間、買手の競争する聲と掛の人の聲と入亂れて、非常ににぎやかです。

十21 6 国 取引の成立つた馬は、其の日の中に買手に引渡されてしまひます。

かいてい 〔海底〕(名) 2 海底

九8 2 国 「略」ふなばたからのぞいて見ると、美しい海底のありさまが手に取るやうによく見えます。

十113 10 略、すさまじい波を起して、

鯨は海底深く沈んだ。

がいてき 〔外敵〕(名) 1 外敵

十二133 5 四周の海が天然の城壁となつて、容易に外敵のうかゞふことを許さないから、「略」。

かいどう ひはまかいどう

がいう 〔外套〕(名) 3 ぐわいたう

四38 6 たび人のぐわいたうをぬがせた方が勝といふことにきめて、「略」。

四39 3 するとたび人は、風が吹けば吹くほど、ぐわいたうをしつかりとからだにくつつけました。

四40 1 たび人はだんだんよい心持になつて、しまひにはぐわいたうをぬぎました。

かいな 〔腕〕(名) 1 腕

十一82 1 國 幾年こゝにきたへたる鐵より堅き腕あり。

かいぬし 〔飼主〕(名) 2 飼主

十18 9 国 子馬には大てい飼主の一家族がついて来て、親切に世話をしてゐます。

十21 9 略、飼主が泣いて別れを惜しむのも、もつともな事です。

かいぬしたち 〔飼主達〕(名) 1 飼主たち

十22 8 国 私は今日此所に来て、飼主たちがあんなにかはいがつてゐたのを見て、「略」。

かいばつ 〔海拔〕(名) 1 海拔

十一612 此の峠には長いトンネルがあつて、其のあたりは海拔約千八百尺、北海道鐵道沿線の最高所である。

かいはいつする「開発」(サ変) 1 開発する「一スル」

九288 さうして終に當代第一の農學の大家となつて、國家の爲に富源を開發することが甚だ多かつた。

かいはんす「改版」(サ変) 1 改版す「一シ」

十二192 但し大新聞にありては、
「略」、新しき事件ある毎に改版して、最後の最も新しきものを市内版とす。

かいふくする「回復」(サ変) 4 回復する「一シ・一スル」

十一13 王は間もなく健康を回復して、再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出来た。

十288 グレースの眞心こめた看護によつて、全く元氣を回復した人々は、
「略」。

十二356 彼等が大戦後における自國の疲弊を回復するため盛に活動してゐるのには全く敬服しました。

十二948 そこで彼は「略」、たまたく其處にゐた少女のさげた牛乳を飲んで元氣を回復した。

かいほう ↓ごかいほう

がいほうぶ「外報部」(名) 1 外報部
十二167 しかして編輯局は更に編

輯部・政治部・經濟部・社會部・通信部・外報部・學藝部・寫眞部・校正部等に分れ、
「略」。

かいめん「海面」(名) 4 海面

十324 高い土地の上に水をたへたのであるから、湖の水面は海面よりずっと高い。

十347 かうして前後三段に上つた船は、海面より約二十六メートルも高い水面に浮ぶのである。

十1125 昨夜の風雨は名残なくをさまつたが、海面にはまだ波のうねりが高い。

十二499 此の邊は一體に山地で、湖面は海面より四百メートルも高く、
「略」。

かいめん「海綿」(名) 2 カイメン
海綿

七82 カイメン

七83 又物ヲ洗ツタリフィットリスル時ニ使フ海綿モ、ヤハリ海ノ底ノ岩ニ取リツイテキル蟲ノ骨デアル。

かいもどす「買戻」(五) 1 買ひもどす「一シ」

五774 其の後村の人は、庄屋の家屋敷や田地を買ひもどして、妻や子どもに、もとの家へ歸つてもらつた。

かいもの「買物」(名) 2 買物

五226 おひるすぎおかあさんにつれられて、買物に行きました。
五657 今日買物もあるし、歸りには馬車に乗つて、此の下まで来て

もよい。

かいり ↓ごかいり・じつかいり・じつかいり・じつかいりあまり・やくしひやくかいり

かいりく「海陸」(名) 1 海陸

七196 鎌倉へは海陸ともに攻めこむすぎがありません。

かいりよう「改良」(名) 1 改良
十553 「略」、今では各國共に盛に傳書鳩の改良に力を用ひ、其の飼養を奨勵してゐる。

かいりようす「改良」(サ変) 2 改良す「一セ」

十124 「略」、近年は作物も改良せられ、桑を植ゑて蠶を飼ふ者多く、殊に一村鶏を飼はざる家なし。

十二115 電燈の發明せられたるは、今より凡そ百十餘年前のことなり。
「略」、次第に改良せられて、
「略」。

かいりようす「改良」(サ変) 2 改良する「一サ・一シ」

七281 我が國の馬は西洋諸國の馬にくらべると、せいも低く、體格もおとつてゐるが、
「略」、大いに改良されて、いたる所に良馬を見るやうになつた。

九24 「略」、此所の銅の製法を改良したり、新しい鑛山を開いたりする爲に、此の山中へ來たのである。

がい「街路」(名) 4 街路

十一97 街路をさしはさんで大商店が軒をつらね、
「略」。

十一594 札幌に來て先づ感ずること
は、街路が眞直で幅の非常に廣いことである。

十二317 世界最美の街路といはれてゐるシャンゼリゼーの大通には、
「略」。

十二117 然れどもこは今日のアーケ燈に類するものにして、公園・街路等の照明用としては適當なれども、
「略」。

かいろう「回廊」(名) 3 廻廊 廻廊

五593 ことにしほのみちた時は、社殿や廻廊が海の中に浮いて、お話にある龍宮はこれかと思はれます。

十一10 「略」、拜殿・廻廊など總べて白木造にて、神々しさたとへん方なし。

十二997 然れども春日の社頭、朱の廻廊山の緑にはえて、森嚴自ら人の襟を正さしめ、
「略」。

がいりじゅ「街路樹」(名) 1 街路樹
十二310 「略」、車道と人道との間には、緑したる街路樹が目もはるかに連なつてゐます。

かう「交」↓ゆきかう

かう「買」(四・五) 21 かふ 買フ
買ふ「一ツ・一ハーフ・一」

三407 うらしまは「略」、子どもからそのかめをかつて、海へはなしてやりました。

四838 「略」、弟へへいたいばう

をおみやげに買つて、夕方の
汽車で かへりました。

五25 しばらく待つて、私どもは浴
衣地とこんがすりを買つて外へ出ま
した。

五56 〈略〉、かへりに酒を買つて来
ては、おとうさんを喜ばせてあまし
た。

六23 おぢいさんが〈略〉もみをか
へしていらつしやると、卵買が来て、
卵を七つ買つて行きました。

六34 停車場デキツプヲ買ツテキル
ト、郵便物ヲツンダ車ガキセイヨク
カケテ来タ。

六107 参拜をすましてから、二見
浦を見に行つて、おみやげに貝細工
を買つた。

八47 主人から小ぞうへ其
の後どうかと案じていましたが、
〈略〉此の爲替はほんのわづかです
が、何か好きな物を買つて上げて下
さい。

八57 下駄買ふ人も、賣る人も、
下駄屋にありし人は皆、彼の姿
を見送りぬ、〈略〉。

八103 マッチはちよつとした物で、
價も安く、一包十箱が十錢ぐらゐで
買はれる。

九44 飲料水ニ不自由ナキ土地ニ
アリテハ、金錢ヲツヒヤシテ、水ヲ
買フナドトイフハ、思ヒモヨラス事
ナリ。

九44 然レドモ飲料水ノ得ガタキ
所ニテハ、一手桶何程トイフ代價ヲ
ハラヒテ水ヲ買フ。

九44 用ヒヤウナケレバ、
誰モ之ヲ買フ者ナク、シタガツテ價
アルコトナシ。

九45 又コ、二匹ノ馬アリテ、
之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、
〈略〉。

九45 同ジヤウナル馬五匹
アリ、其ノ持主ハ別々ニテ、買ハ
ントスル人タゞ一人ナルトキハ、〈略〉。

九71 一關で辨當を買つた。
十22 此の子馬共を買つた
人たちも、どうか同じやうにやさし
く扱つてくれ、ばよいと、〈略〉。

十23 別封の繪葉書も歸りに買つ
たのです。

十87 機械類は、〈略〉、物によつて
は、やはり外國の品を買つた方が得
な場合が少くない。

十一97 鉛筆や紙も自由には買へな
かつたから、家で算術の練習をする
には、木のシャベルと炭を用ひた。

十二22 買ふ人の無智に乗じて安い
品を高く賣付け、見本には精良な品
を使つて、實際の注文に對しては粗
惡なものを送るやうな事は、〈略〉。

かう 飼 (四・五) 8 カフ かふ
飼フ 飼ふ 《一ツ・ハ・ヒ・フ》
二41 ヨイオヂイサンハ犬ヲ
一ピキカツテ、タイソウカハイガ

ツテキマシタ。
四67 私のうちに山がらが一
羽かつてありました。

八20 又小屋ヲ建テテ豚・
鶏等ヲカヒ、一家コトゴトクコレ
ニ乘リテ、流ニシタガヒテ下ル。

八47 第十三 鷲 〈略〉。金アミノ
中ニ飼ハレテ、ジツト止リ木ニ止ツ
テキルノヲ見テモ、〈略〉。

十82 坑内に馬が居るのは不思議だ
と思つて、聞いてみると、これは石
炭を運ぶために飼はれてゐるのださ
うです。

十119 茶屋のおばさんに尋ねると、
それは園内に飼つてある鶴の聲であ
つた。

十125 近年は作物も改良せ
られ、桑を植ゑて蠶を飼ふ者多く、
殊に一村鶏を飼はざる家なし。

十125 殊に一村鶏を飼はざる
家なし。

かう 〔変〕(下二) 1 變ふ 《一へ》
十一46 書師は障子に身を
寄せて、様々に姿を變へつゝ、寝起す
る様なり。

かえ けうえかえ・きがえ
かえし けうりかえし
かえしあたへる 〔返与〕(下二) 1

返しあたへる 《一へル》
十七9 さて一族どもに奪はれた佐
野三十餘郷は、理非明らかなるによ
つて汝に返しあたへる。

かえす 〔歸〕(四) 1 歸す 《一ス》
八42 此所は天下の役所なるに、
許しもなくて亂入するとは不届しく
く。もはや歸すことは相成らぬ。

かえす 〔返〕(四・五) 16 かへす 返
す 《一サ・一シ・一ス・一セ》けいじめ
かえす・うちかえす・おかえしくださ
る・おかえしもうす・くりかえす・
とつてかえす・はねかえす・ひきかえ
す・ひつかえす・ひつくりかえす・ほ
りかえしはじめる・よみかえす

三86 天人のはごろもなら、
なほさらかへすことは出来ませ
ん。

三86 れふしはかへしませんで
した。

三89 れふしがはごろもをかへ
しますと、天人はそれを着て、
まひはじめました。

四11 おやはかへして、子は
くれうつて、廣いたんぼの
麥まきすまます。

五81 さて宗任がかりまたをぬき取
つて、義家にかへしますと、義家は
〈略〉、うつばへさへしました。

六21 おぢいさんが庭にほしてある
もみをかへしていらつしやると、
〈略〉。

七106 明國の使者、某の陣中に參
り、《略》。生けどつた者は皆かへ
せ。《略》。などとの廣言。

八35 幾年かの後、里子を返しても

らはうとすると、先方はあづかつたおぼえがないといつて返しませぬ。
 八35 8 〈略〉、先方はあづかつたおぼえがないといつて返しませぬ。
 八44 1 越前守は再び一同を呼出して、さきに納めさせた白木綿を返し、〈略〉。
 十51 10 預けたお金は何時でも返してもらへますか。
 十61 9 図 されど主人は、〈略〉、お氣の毒ながら、とてもお泊め申す事は出来ません。〈略〉。といふに、僧は返す言葉もなく出て行きぬ。
 十一19 1 例へば、借りた金を、返す約束の日が来ていくら催促されても返さない人がある。
 十一19 2 例へば、借りた金を、〈略〉、返さない人がある。
 十一19 4 〈略〉、裁判所は〈略〉、貸主の主張を正當とみとめれば、其の借金を返すやうに借主に命ずる。
 十二27 2 図 若宮堂の舞の袖、しづのをだまきくりかへし かへしし人をしをのびつ。
 かえす 〔解〕 (五) 1 カヘス 《一ス》
 八50 5 春ノ初二三ノ卯ヲ産ミ、五週間程アタメテ、ヒナニカヘス。
 かえすがえす 〔返返〕 (副) 1 かへすく
 十二23 8 外國貿易業者はかへすく、深く此の點に注意しなければならぬ。

かえって 〔反〕 (副) 8 カヘツテ かへつて
 三39 4 それで とはい 本道を まはつた小二郎の方が、正一よりもかへつてさきにつきました。
 四17 7 白ウサギハスグ海ノ水ヲアビマシタガ、前ヨリモカヘツテイタクナツテ、〈略〉。
 六55 8 光盛の娘は其の後、夜晝頼朝をねらひましたが、少しもすぎがありません。かへつて、はだみはなさず持つてゐた刀を見つけられてしまひました。
 七36 5 図 第十二 大連だより 〈略〉、日本の町よりはかへつて西洋の都會に似てゐるといひます。
 八66 5 図 此の港には、十五六年前に大地震があつて、町は大方こはれたのですが、今では前よりもかへつてりつぱになつてゐます。
 八62 3 図 君等は僕を苦しめようとして、此の數日の間少しも食物を送つてよこしませんでした。其の爲に新しい血が出来なくなつて、かへつて君等は自分で苦しむやうになつたのです。
 九20 9 コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐レル武器ヲソナヘテキルカ、イヤガル味ヤニホヒノアルモノデ、之ニ近ヅカウトスルモノガナイカラ、タヤスク見トメラレル方ガカヘツテ安全ナノデアル。

十二84 2 図 〈略〉、對岸の大陸に渡りて其の地の模様を探るは、かへつて目的を達するに便なることを知りぬ。
 かえで 〔楓〕 (名) 2 かへで
 八1 4 黄色なのはならやくぬぎで、赤いのはかへでや櫻やぬるである。
 九34 6 うす紅のかへで、銀ねずみ色の檜 黄の勝つた緑のけやき、どの木を見てもなつかしい。
 かえり 〔帰〕 (名) 6 かへり 歸り
 けいきかえり・おかえり・ぐんたいがえり・さとがえり
 五53 6 それで山へ行くにも、へうたんの腰に着けてゐて、かへりに酒を買つて來ては、〈略〉。
 五65 7 図 今日は買物もあるし、歸りには馬車に乗つて、此の下まで來てもよい。
 九71 5 図 「松島は。」「仙臺から三つ目の松島驛で下りるのだ。歸りに見物して行かう。」
 十23 3 図 第四 馬市見物 〈略〉。
 歸りに散歩がてら町を歩いて見ると、〈略〉。
 十23 8 図 別封の繪葉書も歸りに買ったのです。
 十119 4 第二十三 太宰府まうで 〈略〉。歸りは二日市まで歩くことにした。
 かえり・いる 〔帰居〕 (上二) 1 歸り居る 《一キ》
 九85 1 図 信吉は夏休にて歸り居たる

兄に向ひて、いろくゝと星の説明を求めたり。
 かえりがけ 〔帰掛〕 (名) 2 歸りがけ
 六18 6 〈略〉、かご一ぱい取つて歸りました。歸りがけに、力藏さんにお禮を言ひましたら、〈略〉。
 十一124 10 第二十七課 ガラス工場 〈略〉。歸りがけに事務所の陳列棚を見せてもらつた。
 かえりきたる 〔帰来〕 (四) 2 歸り來る 《一レ》
 七52 2 図 遠洋航海を終へて、郷里に歸り來れる太平丸の船長は、〈略〉。
 十一48 3 図 〈略〉、唯杉戸に櫓一本を畫がきて東國へ出立しぬ。未だ一月もたゝざるに、かの畫師は突然歸り來れり。
 かえりたまふ 〔帰給〕 (四) 1 歸り給ふ 《一ヘ》
 九11 3 図 皇子は勅命を果して、めでたく都に歸り給へ。
 かえりつく 〔帰着〕 (五) 1 歸り着く 《一イ》
 十28 5 かうしてボートは再び荒波を切りぬけて、燈臺に歸り着いたのである。
 かえりみち 〔帰道〕 (名) 3 かへりみち 歸り途
 五14 3 朝、〈略〉、春子とつくしをつみに行きました。かへりみちに、はなれ馬がとんで來ましたので、〈略〉。
 六68 4 さて主人に火事の話をして、

義捐金のことをいひ出すと、〈略〉。
其の歸り途で、青年たちは「略。」
といひ合つた。

八五六 田 米屋の小ぞうお得意へ
米を運びし歸り途、ひらりと下り
て自轉車を 角の下駄屋にあづけ置
き、すぐに老婆をみちびきぬ。

かえり・みる 「顧」(上一) 2 かへり
みる 顧みる 「一三」

七九六 共同助力は人の道、お
のれの利のみかへりみず、力を分
ち、物をさき、苦しむ者を、泣く
者を、助けて共に樂しまん。

十二八六 ながて酒食を出したれど
も、林蔵は其の心をはかりかねて顧
みず。

かえる 「蛙」(名) 6 かへる 蛙 ↓
あまがえる・つちがえる

三三三 〈略〉、しだれやなぎのえだ
へ、かへる がとびつかうとし
てゐます。

三三三 かへる はやなぎのつゆ
を虫とでもおもつたのでせう、
とんではおち、とんでは おち、
何べんも 何べんもとびつかう
とします。

三五六 〈略〉、この かへる のやう
に、こんき がよければ、〈略〉。

七三六 田の面は水の廣々と、
蛙の聲もにぎはしく、谷あひの家
窓明けて、夜に親しむ時は來ぬ。

九六六 其の様は、まるで雨後の蛙が

むらがり飛んでゐるやうである。
九四四 蛙がぽかん／＼と飛込んで
すうつと泳いで行く。

かえる 「返」(五) 3 かへる 返る
《一ツ・ール》いきかえる・はねか
える・ふりかえる・むせかえる・わき
かえる

四三三 人のこゑも山の中
では、〈略〉、かへつて來ること
があります。

十一五二 のぶ子さんは、成績物が返
るとすぐ紙の袋へ入れておいて、學
年の終におまとめになるのださうで
す。

十一八五 しかし又しばらくすると、
もとの水の温度にかへつた。

かえる 「帰」(四・五) 78 カヘル か
へる 歸ル 歸る 《一ツ・ラ・ーリ・

ール・レ》いそぎかえる・おかえ
る・こぎかえる・とびかえる・ともな
いかえる・もちかえる

一三九 ハヤクカヘラナイト、オヂ
イサンヤオバアサンガシンパイ
ナサイマス。

一四五 オバアサン ハソノモモヲ
ヒロツテ カヘリマシタ。

二六五 人ガボツボツタンボカラ
カヘツテ キマス。

三二二 私ハガクカウカラカヘツ
テ、ヒヨコヲ見ルノガタノシ
ミデス。

三二二 お花はかくかうからかへ

ると、〈略〉、おかあさんのおて
つだひをします。

二三五 一人はよろこんで、おちい
さんについて かへりました。

二三六 小二郎がうちへ かへつて
みますと、〈略〉。

二三七 〈略〉、犬はもうとつくと
かへつてゐて、かけてきてとび
つきました。

三三六 うらしまはおもしろがつて、
うちへかへるのもわすれてゐ
ましたが、〈略〉。

三三六 うらしまはおもしろがつて、
うちへかへるのもわすれてゐ
ましたが、そのうちにかへりた
くなつて、〈略〉。

三四六 うちへかへつてみると、
おどろきました、〈略〉。

三八七 「略。」といつて、持つて
かへらうとしますと、見たこと
もない美しい女が來ました。

三五四 持つて かへつて家のた
からにします。

三六四 それがなくては、天へ
かへることが出來ません。

三八七 おかげで天へかへる
ことが出來ます。

四二五 今日 は〈略〉、をちさん
もをばさんも早くかへります。

四二六 〈略〉、おそくなるとおも
つて、いただいたくりを持つて
かへりました。

四三二 うちへかへつて、父にこ
のことを話しますと、〈略〉。

四七三 〈略〉、小さなわらぶきの
うちへかへつて行きました。

四七四 それからどこへ行つて
居たか、村にもひさしく居ませ
んでした。かへつて來た時には、
〈略〉。

四八八 〈略〉、夕方の汽車でかへ
りました。

五三二 學校からかへつて見ると、廣
田君からゑはがきが來てゐました。

五五三 〈略〉、學校に居てもしんばい
でしたが、かへつて來ると、もうよ
くなつてゐて、〈略〉。

五五三 學校からかへつて、新しい筆
で書き方のおけいこをしました。

五五二 うちへかへつて、ふるしきを
明けて見ましたら、〈略〉。

五二五 〈略〉、アタ、カニナツテ、ガ
ンガ北ノ國ヘカヘルコロ、南ノ國カ
ラワタツテ來マス。

五二七 サウシテダン／＼スバシクナ
ツテ、ガンガソロ／＼ワタツテ來ル
コロ、南ノ國ヘカヘツテ行キマス。

五二八 〈略〉、たんぼの小道へ出て、
三時ごろ學校へかへりました。

五三二 夜がふけて、人々はかへりま
した。

五二七 〈略〉、目二見エナイ水蒸氣
ニナツテ、空ヘカヘルノモアルサウ
デス。

る。

十二453 彼は急いで家に歸つた。

十二876 歸途一行は黒龍江を下りて河口に達し、海を航してノテトに歸れり。

十二972 續いて釋迦は〈略〉、更にカピラバストに歸つて、父王・妻子を始め國民を教化して故郷の恩に報いた。

十二12210 かもめ飛ぶ海をすべりて、船は今靜かに歸る、懷かしき故郷の港。

十二1237 船は今靜かに歸る、懷かしき故郷の港。

十二1244 海山の寶を載せて、船は今靜かに歸る、懷かしき故郷の港。

かえる 〔解〕 (五) 3 カヘル

《一ツ》

三71 鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ

六457 鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ

六477 翌年ノ春ニナツテ、卵カラカ

ヘツタ鮭ハ、川ヲ下ツテ海ヘ行ク。

かえる 〔代〕 (下) 2 かへる 代へる 《一》 ↓ かけかえる・きかえる・つくりかえる・とりかえる・ひきかえる

六372 陸へ上つた時、家來が「たとひ金銀で作つた弓でも、御命には

代へられませぬ。」と申しますと、

《略》。

八116 信作が落ちたのかまはず

馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、人の命にはかへられないと思つて、

かえる 〔変〕 (下) 6 カヘル かへる 變へる 《一》

二737 ライクワウハケライドモ

ト、山ブシニスガタヲカヘテ、

大江山ヘムカヒマシタ。

六1021 ねえさんは赤いたすきをかけ

て、手洗鉢の水をかへてみました。

七442 信玄は不意を打たれておどろ

いたが、忽ち陣立をかへて、敵を引

受けた。

七964 村の役場に三十年、勤

めつゞけし小使の 年のよりしがあ

はれさに、人々物を出し合ひて、

樂なくらしにかへてやる。

八155 頼宣は顔色をかへて、

「やあ、正綱、十四歳の時が二度あ

るか。」といった。

九919 此の大熊こそは、先にジュ

ノーに形を變へられたおあさんの

カリストだったのですが、《略》。

がえんず 〔肯〕 (サ変) 1 がへんず

《一》

十二837 山を越えて東海岸

に出でんとすれば、従者の土人等ゆ

くての危険を恐れて従ふことをがへ

んぜず。

かお 〔顔〕 (名) 46 カホ かほ 顔

↓ あさがお・えがお・おんかお

二264 伊カホヲシテ、小サナテヲダ

シテ、ウマウマトイヒマス。

二757 ソノ大キナカホハ火ノ

ヤウニアカク、イビキハカミナ

リノヤウデシタ。

三47 ハヤクカホヲアラツテ、

ニイサント一シヨニオサラヒヲ

シマセウ。

三193 どんなかほをしてゐま

すか。

四34 カホハネコノヤウデ、

其ノ上ネズミヲトツテクフノ

デ、《略》。

四368 モズハ高イ所カラ

トンデ來ガケニ、フクロフノ

カホヲケツテ、「キイキイ」ト

カチドキヲアゲマス。

四396 日は雲のあひだからや

さしい かほを出して、あたたか

な光をおくりました。

四945 今夜かぎりのいのちと

思つて、十郎五郎、かほを見せ

よ。五郎兄上。

四948 二人はたいまつを上げて、

つくづくとかほを見合ひました。

六516 頼朝は萬じゆを呼出

しましたか、かほも美しく、すがた

も上品に見えましたので、《略》。

六545 之を聞くと、頼朝のかほの色

はさつとかはりました。

六901 すると象は鼻で、其所にあつ

たうちをは拾つて、子どもの顔をあ

ふぎ出した。

七1025 さうして清正のやせた姿、日

にやけた顔を見ては、怒がとけて、

涙ぐみました。

八863 おとはは信吉の顔を見ると、

かけよつて來て、いきなり信吉にだ

きついて泣いた。

八907 信吉の顔を見てゐる。

八914 信吉は少しはなれて、今度は

おとよの顔を見ながら、「おとよ、

おとうさんが歸つて、うれしい

か。」と言つた。

八933 信吉はとりのぼせたやうにう

れしがつて、娘の顔と先生の顔を、

かはりばんこに見てゐた。

八934 娘の顔と先生の顔を、

かはりばんこに見てゐた。

八1011 かうして二三日たちますと、

《略》、顔の色も青くなつて來て、か

らだに全き力がなくなりました。

九122 顔を洗ひをはりて、いつも

の如く、庭のすみなるとやの戸を開

く。

九219 少年はひざに兩手をついて、

老人の顔をじつと見つめながら聞い

てゐる。

九278 目に涙をいばいたためて聞いて

ゐる少年は、固い決心を顔にあらは

して、實行をちかつた。

九三三 すると木のうろから、栗鼠^{リス}が一匹、けろりとした顔を出したが、
《略》。

九六五 人の顔がやつと見分けられるやうになつた頃、《略》。

九六八 甲板洗がすむと、「總員顔洗へ。」「煙草ぼん出せ。」の令が下る。

九六九 そこで始めて乗員は顔を洗ふ。
九七〇 窓から吹きこむ朝風のひやりとするのは、餘程北へ進んだ爲だらう。顔を洗つて来て、ビスケットを

食べながら、私がゆめの中に通過した驛々のお話をうかゞつた。

九九〇 《略》、かぼちや鼠を見廻ると、
《略》、今日はもう熟しきつたやうな顔をして、へそを日にさらしてゐる。

九一〇 北風は、もう一度鼻先をなでてもらひたくなつて、そつと顔を主人の肩のあたりへすりよせた。

九一〇 北風は《略》、訴へるやうな目付で主人の顔を見下し、左右の耳をそばだててみた。

九一一 中尉の顔には満足らしい多みが浮んだ。

九一五 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、
《略》。

九一七 母は其の方々の顔を見る毎に、そなたのふがひなき事が思ひ出されて、此の胸は張りさくるばかりにて候。

りにて候。

一〇一〇 やがて讀終つたフィリップが、眞青な顔をして王を見上げると、
《略》。

一〇一四 《略》、どの子馬も皆かはらしい顔をして、おとなしくつながられてゐます。

一〇一七 《略》、住持は尚知らぬ顔して過ししに、十日餘りにして、ふすまの鶴は二十四羽となりぬ。

一〇二〇 ものすごい程青白くかはつた老砲手の顔には、決心の色が浮んだ。

一〇二四 砲手はその結果を見るのをおそれるやうに、手で顔をおほつて大砲の上につつ伏した。

一〇二七 三人とも物を言つてしまつたので、上座の老僧がもつたいらしい顔をして、「物を言はないのはわしばかりだ。」

一〇三〇 妹の顔はさつと赤くなつた。
一〇三二 《略》、清い月の光が流れるやうに入込んで、ピヤノとひき手の顔を照らした。

一〇三六 子どもは思はず顔を見合はせた。

一〇三八 其の時、今まで雲の中に居た太陽が顔を出したので、日光が店一ぱいにさし込んで来た。

一〇四〇 漁夫の顔は得意の色に輝いて、まるで凱旋の將士のやうに見える。

一二八 相手は大きな眼でじつと安芳の顔を見つめながら、だまつて聴いてゐる。

一二九 安芳は自分の胸を指さして、
《略》。といひながら、西郷と顔を見合はせてにつこり笑つた。

かおいろ 《顔色》(名) 1 顔色
八五五 《略》、頼宣は顔色をかへて、「やあ、正綱、十四歳の時が二度あるか。」といつた。

かおく 《家屋》(名) 3 家屋 ↓ちようせんかおく
一二六 家屋・橋梁・船舶・電柱より桶・たる・曲物の類に至るまで、一として杉を用ひざるなし。

一二七 《略》、つがは堅くして久しきに耐ふるが故に、家屋の柱・土臺となすに宜し。

一二八 《略》、栗は耐久・耐濕の性殊に著しきを以て、家屋の土臺、鐵道のまくら木等の用に供せられ、
《略》。

かおじゅう 《顔中》(名) 1 かほぢゅう
三一九 かほぢゅう ひげだらけです。

かおり 《香》(名) 1 かをり
一八二 高く鼻つくいその香に、
不斷の花のかをりあり。

かが 《加賀》(地名) 1 加賀
一七二 其の返禮として加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、合は

せて三箇所の地を汝に授ける。

かかえ りふたかかえ・みかかえ・よかかえ
かえ
かかえだす 《抱出》(五) 1 かゝへ出す 《―シ》

九二四 中に入りてひよこの箱をかゝへ出し、軒下なるかこひの中にひよこを放つ。

かかえる 《抱》(下) 2 かかへる
《―へ》

三二八 《略》、つつみかかへてがくかうへ つれだちいそぐあねおとと。

五三六 《略》、しめをはつた大きな杉の木がありました。《略》。私どもが六人で、やつとかかへました。

かかぐ 《掲》(下) 2 カ、ゲ
《―ゲル》

八五九 ヨリテ看板ノ如キモ、タヤスク人目ヲヒカシメンガ爲ニ、キノヒテ小屋根ノ上ニカ、ゲルニ至レリ。

八六二 又足袋屋・蠟燭屋・時計屋・扇屋・櫛屋等ニハ、商品ヲ大キクセル模型ヲカ、ゲル風アリ。

かがのくに 《加賀国》(地名) 1 加賀の國
六二五 大將維盛は命からく、加賀の國へにげました。

かがみ 《鏡》(名) 3 かゞみ 鏡
六二六 空もみどり、海もみどり、空につゞく海のみどり、海につゞく空のみどり、すみきつて、

かゞみとかゞみ。

六216 圖 〈略〉、すみきつて、かゞみとかゞみ。

十一342 図 海の静かなることは鏡の如く、朝日夕日を負ひて、島がくれば行く白帆の影ものどかなり。

かがやかす 「輝」 (五) 1 輝かす

《一シ》

十二127 かくて世界の各地をめづつて、歡喜の眼を輝かしながら、〈略〉。

かがやきまさる 「輝勝」 (五) 1 かがやきまさる 《一ル》

五26 圖 大日本、大日本、神代此の方一度もてきに 負けたことなく、

月日とともに、國の光がかがやきまさる。

かがやきわたる 「輝渡」 (五) 2

かゞやきわたる かゞやき渡る

《一ツ・一ル》

十一681 〈略〉、今はガス燈や電燈が到る處にかゞやき渡る時代となつた。

十一837 空には眞夏の日がきら／＼とかゞやきわたつてゐる。

かがや・く 「輝」 (四・五) 16 カガヤク カゞヤク かがやく かゞやく 輝く 《一イ・一キ・一ク》 ↓ ひかりかがやく

三901 はごろもの袖はかるく風にまひ、はごろもの色は日の光にかがやきました。

六343 朝日ガバツト西ガハノ家ノガラス戸ニカガヤイタ。

八971 図 其ノ高サ八尺五寸、朝日・夕日ニカゞヤキテ、遠ク數里ノ外ヨリ望ミ見ルコトヲ得ベシ。

九588 〈略〉、黄色い麥の穂が一面に廣げられて、まぶしいやうな夏の日にかゞやいてゐる。

九672 朝日にかゞやく軍艦旗が、海風にひらめきながら、しづ／＼と上つて行く様は、〈略〉。

十109 〈略〉、一行又一行、おそれと興奮に眼かゞやくフィリップ。

十432 日は大分高くなつてさわやかにかゞやき、高い／＼青空を、ひわの一群が身輕さうに飛んで行く。

十447 ふと見上げると、庭の柿の木には、すゞなりになつた實が夕日を浴びて、珊瑚珠のやうにかゞやいてゐる。

十1118 圖 美術の光のかゞやくこの地、〈略〉、とつ國人さへめづるもうべぞ。

十1184 〈略〉、神前の大きな神鏡が、きら／＼とかゞやいてゐて神々しい。

十一229 望遠鏡で見ると、太陽の表面は全部がかゞやいてゐるのではなく、〈略〉。

十一1229 とけたガラスが中でぎら／＼かがやいてゐる。

十二93 圖 折から日は地平線に近づきて、雲も水も金色に輝き、美しさいふばかりなし。

十二416 ベートーベンの兩眼は異様に輝いて、彼の身には俄に何者かが乗移つたやう。

十二801 漁夫の顔は得意の色に輝いて、まるで凱旋の將士のやうに見える。

十二1139 圖 何心なく手に取りて眺めるたりし彼の眼は異様に輝きぬ。

かかり 「掛」 (名) 4 掛 ↓ そうがかり・とおりがかり

十206 圖 セリ場の一方に高い臺があつて、其の上に掛の人が居る。

十217 圖 其の間、買手の競争する聲と掛の人の聲と入亂れて、非常ににぎやかです。

十213 圖 〈略〉、掛の人が其の直で賣渡すといふあひづに手を打つて、取引が成立ちます。

十二168 圖 しかして編輯局は更に編輯部・政治部・經濟部・〈略〉校正部等に分れ、各部にそれ／＼掛の記者又は技術家ありて、〈略〉。

かかり 「掛」 (名) 1 かゝり

十1310 圖 朝のかゝりはおそいし、晩のしまひは早い上に、とかく無責任な事ばかりしてゐました。

かかりたまう 「掛給」 (四) 1 かゝり給ふ 《一ヒ》

十1317 圖 行幸餘りに遅かりしかば、人をしてうかゞはしむるに、播磨の今宿といふ處より、山陰道にかゝり給ひし由なり。

かがりび 「篝火」 (名) 2 かゞり火

十一276 圖 五十人の兵は行く／＼百姓をつのり、かゞり火をたかせ、糧、食の用意をなさしむ。

十一278 圖 夜に入れば、見渡す限りのかゞり火書をあざむく中を、〈略〉。

かかる 「斯」 (連体) 3 かゝる

十一1091 圖 森林には大木すき間もなく繁茂し、其の根本には、つる草・灌木など思ふまゝにはびこり居候。かゝる處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、〈略〉。

十二154 圖 〈略〉、やがてあまねく内外の事件を報ずると共に時事を論ずるもの起りて、こゝに始めて我等の生活に切實なる關係を有するものとはなりぬ。我が國にてかゝる新聞の現れたるは維新前後にして、〈略〉。

十二873 圖 林蔵の怪しみもてあそばさるゝこと、此處にては更に甚だしかりしが、かゝる中にありても、彼は土地の事情を研究することを怠らざりき。

かかる 「掛」 (四・五) 39 カカル カゝル かかる かゝる 《一ツ・一

ラ・一リ・一ル・一レ》 ↓ おとおりがかかる・かれかかる・きかかる・くれかかる・くろみがかかる・こけかかる・さしかかる・つかみかかる・できかかる・とおろかかる・とりかかる・なりかかる・ひっかかる・よりかかる

二225 圖 〈略〉、トンデキタ木ノハ、〈略〉、クモノスニカカ

リ、カゼ ニフカレテ、ヒラヒ
ラスレバ、〈略〉。

三842 〈略〉、見上げますと、松の
木に美しい物が かかつてゐ
ました。

四287 電話も近い中に私ども
の町へかかるさうです。

四817 てつけうへかかつた時、
河を見たら、たいそう水が出
て居ました。

六297 窓 私どもだつて、大ぜいして
かゝれば、あなた方に負けません。

六731 義經・辨慶の五條の大橋は此
の川下にかゝつてゐるのでございま
す。

七157 川口にかゝつた時ふりかへつ
て見たら、もう廣い海には誰もゐな
かつた。

七448 謙信は馬に一むちくれて、信
玄の本陣に切りこみ、太太刀をふり
かざして、信玄に打つてかゝつた。

信玄は刀をぬくひまがない。

七572 窓 又きりがかゝつたり、大雪
が降つたりして、一寸先も見えなく
なることもあります。

七659 三四里行つて、大きな峠へ
かゝりますと、上から片はだぬいで、
〈略〉、かけ下りて来る者があります。

八411 窓 地蔵様が縄にかゝつていら
つしやる。

八826 長い間かゝらなくても、工夫
して大仕掛に水を落せば、大きな仕

事をする。

八845 窓 あちらでも、あの子のこと
ばかりが、氣にかゝつてゐたのでこ
ざいました。

九231 窓 しかし此の農學といふ學問
は、〈略〉、三代かゝつても、まだ全
く手の着かない事が少くなかつた。

九647 間もなく當直將校から威勢の
よい號令がかかる。

九788 皆は一せいにほりにかかる。

九837 窓 「何時頃までに出来ま
すか。」「來春まではかゝるだらう。」

九1035 やがて「進め」の號令がか
ると、たゞ愉快にたゞ一生けんめい
にかけ出す。

九1088 大空には、午後の日が大砲の
煙や砂ぼこりにさへぎられて、どん
よりとかゝり、地上には、〈略〉。

九1202 〈略〉、商用デ四國ノ方へ旅行
シテキタ父ガ、夜汽車デ歸ツタトコ
ロデアツタ。一月モカ、ルヤウナオ
話ダツタノニ、〈略〉。

十88 此の水浴が體にさはつたもの
か、王は俄にはげしい熱病にかゝつ
た。

十143 窓 そんな風でしたから、ぼん
の道ぶしんなどは、何時も二日は
かゝつたものでした。

十264 窓 命を捨ててかゝつたら、救
へないことはありますまい。

十3910 父は〈略〉、たき火のそばの
切りかぶに腰を下し、鎌をときに

かゝつた。

十466 研究の爲には、少からぬ費用
もかゝる。

十489 彼はふるふる足をふみしめて
塞をあけにかゝつた。

十一43 今かりに一時間五十里の速
度で飛ぶ飛行機に乗つて行つたとし
ても、太陽に到着するには八十七年
かゝるのである。

十一293 窓 秀吉はるかに之を望み、
〈略〉、「てがらは仕勝ちぞ。かゝれ
く。」

十一293 窓 かゝれく。

十一299 窓 中にも加藤清正は、山際
のがけ路にて敵將山路正國に出であ
ひ、片鎌槍をしごいて突いてかゝる。

十一489 窓 先に畫がきたる檣、何
となく物足らぬ所ありて氣にかゝり
しが、〈略〉。

十一5110 〈略〉、これが成長して、切
付を行ふまでには五六年もかゝる。

十一611 瀧川から根室行の汽車に乗
ると、約五時間後に石狩と十勝の境
にある狩勝の峠にかゝる。

十一721 窓 どうかして御目にかゝり
たいものだが。

十一954 家が出来てから次に土地を
開きにかゝつた。

十二46 窓 松江を發したる汽車は
〈略〉、やがて新川を渡り更に進みて
斐伊川の鐵橋にかゝる。

ばかゝれ、我が命のある限り、一身
をさへげて此の岩山を掘抜き、萬人
の爲に安全な路を造つてやらうと、
〈略〉。

十二1059 〈略〉、たとへ何十年かゝら
ばかゝれ、〈略〉。

十二1316 窓 次第によつては、或は君
等の銃先にかゝつて死ぬかも知れぬ。
かかわる「係」(五) 1 かゝはる
《ール》

七1065 窓 御威光にかゝはる所と存
じ、《略》。』と返書をつかはしまし
たが、〈略〉。

かがん「河岸」(名) 2 河岸
十一98 〈略〉、河岸には領事館・税
關を始め、銀行・會社等のりつばな
建物がそびえてゐる。

十二858 窓 それより山を越え、河を
下り、湖を渡りて黒龍江の河岸な
るキチーに出づ。

かき「柿」(課名) 2 柿
四目3 二 柿
四47 二 柿

かき「垣」(名) 2 垣 ↓あおがきや
ま・いしがき・おおがき・たけがき
八272 窓 はをむきて、うゝとな
りて、垣を出て行く。

十二1284 窓 〈略〉、うかくと兄弟垣
にせめいでゐたら、日本全國にのし
をつけてどこぞの國へやつてしまふ
やうな事にならぬとは決して申され
ませぬ。

かき「柿」(名) 15 カキ 柿 ↓あまがき・しぶがき
 一101 サルガカキノタネヲカニニヤリマシタ。
 一113 圖 ハヤクメヲダセ、カキノタネ。ダサスト、ハサミデハサミキル。
 四48 私のうちには柿の木が五本あります。
 四57 おぢいさんがこの柿の木をついでいらつしやる時「略」。
 四68 今年は柿のあたり年で、どの木にもよくみがなりました。
 四24 前の畠の柿の木は、はがまつかになつてゐて、「略」。
 四24 「略」、二つ三つとりのこしてある柿が、赤い玉のやうに光つてゐます。
 九110 図 井戸に近き柿の木、日ましにのびゆく若芽のうす緑、見るに氣持よし。
 九101 うちの方をふりかへると、井戸端の柿の木に柿がすゞなりになつてゐるのが目につく。
 九101 「略」、井戸端の柿の木に柿がすゞなりになつてゐるのが目につく。
 十446 ふと見上げると、庭の柿の木には、すゞなりになつた實が夕日を浴びて、珊瑚珠のやうにかゞやいてゐる。

十457 日頃から自然の色にあこがれてゐた彼は、目のさめるやうな柿の色、の美しさに打たれて、「略」。
 十461 しかしいくら工夫をこらしても、目ざす柿の色、の美しさは出て来ない。
 十474 彼の頭の中にあるものは、唯夕日を浴びた柿の色であつた。
 十495 かうして柿の色を出す事に成功した喜三右衛門は、程なく名を柿右衛門と改めた。
 かき「書」 ↓おぼえがき
 かき「搔」 ↓まえがき
 かき「牡蠣」(名) 4 カキ
 七815 アサリヤ蛤ハ砂ヤ泥ノ中ニ居リ、カキヤアハビハ岩ニツイテキル。
 七817 アハビハ岩ヲハナレテ動クコトガアルケレドモ、カキハ一度ツイタラ決シテハナレナイ。
 七818 カキハ又スグフエルモノデ、軍艦ヤ汽船ハ時々之ヲカキオトサナケレバナラナイホドデアル。
 七81 図 カキ
 かき「夏季」(名) 1 夏季
 八214 図 「略」、夏季ハコトニ増水シテ、濁流江ニミナギリ、河口ヨリ海上百里ノ間、海水コレガタメニ赤シトイフ。
 かき「鉤」(名) 2 カギ 鉤
 八482 「略」、鷺ハタシカニ鳥類ノ王デアル。「略」、トガツテカギノ如クニ見エル瓜。「略」。

十二794 漁夫はめい／＼手に一ちやうづつの鉤を持ち、狂ひ廻るまぐろを引つけ、「略」船中に引上げる。
 かきあ・ける「書上」(下二) 1 書きあげる「一ゲ」
 十二454 さうして其の夜はまんじりともせず机に向つて、かの曲を譜に書きあげた。
 かきあつめる「搔集」(下二) 1 カキアツメル「一メ」
 二513 ワルイオヂイサンハコノハナシヲキイテ、ノコツテキタハヒヲカキアツメテ、カレ木ニノボツテ、「略」。
 かきあみ「垣網」(名) 5 垣網
 十二768 だいたい網は身網と垣網と二つの部分から成つてゐて、非常に大きなものである。
 十二773 即ち水のはいる處に當る部分が身網で、柄に當る部分が垣網である。
 十二778 「略」、海岸から沖の方へ二三百間も長く垣網を張り、其の先へ身網を張る。
 十二779 潮に流されないやうに、身網にも垣網にも土俵や石などが重りに附けてある。
 十二783 群をなして寄せて来たまぐろは、先づ垣網に驚き、之に沿うて沖へ逃げようとして身網の中へはい入る。
 かきえもん「柿右衛門」(人名) 3 柿

右衛門 ↓とうこうかきえもん
 十496 かうして柿の色を出す事に成功した喜三右衛門は、程なく名を柿右衛門と改めた。
 十497 柿右衛門は今から三百年ばかり前、肥前の有田にゐた陶工である。
 十4910 柿右衛門はひとり我が國內において古今の名工とたゞへられてゐるばかりでなく、其の名は遠く西洋諸國にまで聞えてゐる。
 かきえもんふう「柿右衛門風」(名) 1 柿右衛門風
 十499 彼は「略」、世に柿右衛門風といはれる精巧な陶器を製作するに至つた。
 かきおと・す「搔落」(五) 1 カキオトス「一サ」
 七821 カキハ又スグフエルモノデ、軍艦ヤ汽船ハ時々之ヲカキオトサナケレバナラナイホドデアル。
 かきかた「書方」(名) 3 書き方 書方
 五163 學校からかへつて、新しい筆で書き方のおけいこをしました。
 七112 図 「略」、ワとツ、ニと二、ハと八等は書方にて間違ひ易し
 八925 おとよは話し方はかりでなく、書き方も算術も裁縫も料理も習つてゐる、「略」。
 かきかたちゅうい「書方注意」(名) 1 書方注意
 七112 図 書方注意

かきくもる [搔曇] (五) 1 かき曇る「一ッ」
 五187図 其の時一天にはかにかき曇つて、ひようがひどくふり出すと、
 〈略〉。
 かきこむ [書込] (五) 1 書きこむ「一ッ」
 七113図 それで十字だから、うちの屋がうのカネキを入れて、此の頼信紙に書きこんでこらん。
 かきそう [書添] (下二) 2 かき添ふ「一ッ」
 十一4810図 〈略〉、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、かき添へんために歸りしなり。
 十一492図 〈略〉、畫師「〈略〉。」とて一枝かき添へ、又別れを告げて立去れりといふ。
 かきだす [搔出] (五) 1 かき出す「一ッ」
 四248 にはとりが時時もみをかき出します。
 かきたてる [搔立] (下二) 1 かきたてる「一ッ」
 十一697図 小僧、早く燈心をかきたててくれ。
 かきたまう [書給] (四) 1 かき給ふ「一ッ」
 十一475図 夜明けて住持、畫師に向ひて、「今日かき給はん鶴の姿はかやうなるべし。」と、〈略〉。
 かきちらす [搔散] (四) 1 かきちらす「一ッ」

らす「一ッ」
 九154図 出がけにとやの方を見れば、めんどりはせはしげに幾度か土をかきちらして、餌をあさるにいそがしく、〈略〉。
 かきつく [書付] (下二) 1 書きつく「一ッ」
 十1327図 高德〈略〉、大いなる櫻の幹をけづりて、大文字に詩の句を書きつけたり。
 かきつけ [書付] (名) 1 書付
 十一363 〈略〉、さつきおとうさんのいひついで、明日の用意に出しておいた植林地の書付を開いて見る。
 かきて [書手] (名) 1 書手
 三573 ずんずん手が上つて、のちには名高い書手となりました。
 かきとめる [書留] (下二) 1 書留める「一ッ」
 十一9710 大事なことは拾ひ集めた木片などに書留めて忘れないやうにしておく。
 かきとる [書取] (五) 1 書取る「一ッ」
 八418 越前守は早速門をしめさせて、見物人一同の所名前を書取らせ、〈略〉。
 かきなおす [書直] (五) 1 カキナホス「一ッ」
 一366 オハナガエンビツデアサガホヲカキマシタ。ナンベンモ

カキナホシテ、ニイサンニミセマシタ。
 かきね [垣根] (名) 6 カキネ かきね 垣根
 二93圖 ミゴトニサイタ カキネ ノコギク、〈略〉。
 二103圖 ミゴトニサイタ カキネ ノコギク、〈略〉。
 三262 このあひだかきねのそばへ出たのは、もう私のせいより高くなりました。
 六1027 こんなことを思ひ出して垣根の方へ行くと、しやくやくが赤い芽を出してゐました。
 七943 〈略〉、風がだん／＼はげしくなつて来た。垣根も倒れば、しをり戸も外れる。
 八53 ふと、垣根の外でちやらくとすゞの音が聞えた。
 かきま・せる [搔混] (下二) 2 かきまぜる「一ッ」
 十一12110 〈略〉、マスクをかけた職工が珪砂にソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。
 十一12110 シャベルでぞく／＼かきまぜると、白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、目も口もあけられない。
 かきまわす [搔回] (五) 2 カキマハス かき廻す「一ッ」
 六657 サウシテ灰ノ中ヲカキマハシテ、上ゲテ見ルト、果シテ磁石ノサ

キニ釘ガタクサンツイテキタ。
 十二568図 ねちが無い。誰だ、仕事臺の上をかき廻したのは。
 かきまわす [嗅回] (五) 1 かきまはす「一ッ」
 五985 熊が来て、からだ中かきまはしましたが、〈略〉、其のまま行つてしまひました。
 かきゆう ひいちだいかきゆう
 かぎよう [家業] (名) 2 家業
 十467 工夫にばかり心をうばはれては、とかく家業もおろそかになる。
 十1255図 かくの如くなれば全村頗る豊にして、村民皆其の家業を楽しめり。
 かぎよう [課業] (名) 1 課業
 十1264図 〈略〉、生徒は皆よく之になつて課業にはげみ、學校を思ふ心あつく、〈略〉。
 かきよ・せる [搔寄] (下二) 1 かきよせる「一ッ」
 六354 弓は潮に引かれて流れて行きます。義経は馬の上にうつぶしになつて、むちのさきでそれをかきよせようとしています。
 かぎり [限] (名) 17 かぎり 限り
 ↓あらんかぎり・いちがつはつかかぎり・かずかぎり・こんやかぎり
 六796 博多の沖は見渡すかぎり、元からおしよせた船でおほはれた。
 十48図 前には横長き池をひかへ、池のめぐりは見渡す限りの木立・く

さむらにて、さながら別天地に遊ぶ
思あり。

十 63 図 種類は大てい我が國に産
する限りを盡くし、産地は日本全國
にわたれり。

十 25 4 岩の上に残つた船體には、十
人許の船員がすがり附いて、聲を限
りに救を求めたが、何のかひもなか
つた。

十 63 6 主人は聲を限りに呼べど、
はるかに行過ぎたる僧は、聞えぬに
や、ふりかへらず。

十 106 9 図 略、御母上様には去る
二日御安座にて、玉の様な女御
子御生れの由承り、誠にめでたくう
れしき限りと存じ候。

十 13 8 つまり此の宇宙には、あの
太陽のほかに、これと同じやうなも
のがなほ數限りもなく存在してある
が、略。

十 27 8 図 夜に入れば、見渡す限り
のかぎり火畫をあざむく中を、略。

十 33 10 図 兩岸及び島島、見渡す限
り田園よく開けて、毛氈を敷けるが
如く、白壁の民家其の間に點在す。

十 42 5 図 何分田舎にて萬事不便
には候へども、若し御光來相成候は
ば、及ぶ限りの御便宜相計り申すべ
く候。

十 56 6 老砲手は氣ちがひのやうに
なつて、「逃げろく。」と聲を限り
に叫んでゐるが、略。

十 60 4 見渡す限り果もない原野に、
略。

十 128 10 図 鐵眼こゝにおいて再び意
を決し、略、其の資金を以て力の
及ぶ限り廣く人々を救ひ、略。

十 30 1 図 陳列品の多種多様で、し
かも其の數量の數限りもないのは、
略。

十 90 1 これ等の命令も國の規則で
あつて、略、其の制定も出来る限
り慎重な手續を経る。

十 106 10 略、我が命のある限り、
一身をさへげて此の岩山を掘抜き、
略。

十 136 4 略、出来る限り早く之を
一掃することは我々の務ではあるま
いか。

かぎる「限」(四・五) 4 かぎる 限
る「一ラ・一リ」↓みかぎる
六 8 1 図 しかし三郎、高い山がかな
らず名高い山だとはかぎらない。

十 7 1 図 略、何れも十日間を限
りて土木に従事せしめたるに、略。

十 101 6 図 佐保・佐紀の連岡に北を
限り、春日・高圓の山々を東に、矢
田山・生駒山を西にひかへて、略。

十 120 6 図 する其のうちには又思
の外な尻押なども現れて、事めんだ
うな筋合にならぬとも限りませぬ。
かく「角」↓いっかく
かく「閣」↓てんしゅかく
かく「下矩」↓もくせいかく

かく「斯」(副) 11 カク かく
七 59 8 図 「略」此の星を見分ける
ことや、燈臺のあかりを知ることは、
船に乗る者に取つて、はなはだ大切
なことなのであります。」船長はか
くいひて後、一だん聲をはり上げて、
略。

八 57 2 図 「年の若きに感心な。」
かくいふ聲を後にして、小ぞうは
乗りぬ、自轉車に。

九 45 1 図 例へばコ、ニ一ツノ石アリ
トセヨ。ソレガ如何ニマレニシテ、
タヤスク得ラレザル物ナリトモ、用
ヒヤウナケレバ、誰も之ヲ買フ者ナ
ク、シタガツテ價アルコトナシ。カ
クノ如ク物ニ價アルハ、其ノ物ガ人
ノ爲ニ有用ナルト、意ノ如クニ得ラ
レザルトニヨルナリ。

九 46 3 図 之ニ反シテ、同じヤウナル
馬五匹アリ、其ノ持主ハ別々ニテ、
買ハントスル人タマ一人ナルトキハ、
五人ノ持主各其ノ馬ノ賣レザランコ
トヲ恐レテ、争ヒテ價ヲ下ゲ。カク
テ價ハ次第ニ安クナリテ、最モ價ヲ
下ゲタル持主、其ノ馬ヲ賣ルコトト
ナル。カクノ如ク、品物多クシテ、
之ヲ望ム者少ケレバ、其ノ物ノ價安
クナリ、品物少クシテ、之ヲ望ム者
多ケレバ、其ノ物ノ價高クナル。

十 125 4 図 略、近年は作物も改良せ
られ、桑を植ゑて蠶を飼ふ者多く、
殊に一村鶏を飼はざる家なし。又

池・沼を利用して鯉・鮒を養ふこと
も盛にして、大てい二年毎に之を賣
るに、其の利益少しとせず。かくの
如くなれば全村頗る豊にして、村民
皆其の家業を樂しめり。

十 42 8 図 先づは御見舞までかく
の如くに御座候。敬具。

十 46 10 図 略、畫師は前の如く夜
もすがら寝ねずして、明日はかく畫
がかななど獨言してゐたりければ、
略。

十 14 10 図 略、唯をりく興味あ
る特殊の事件を報道するに過ぎざり
き。されど人智の進歩と印刷術の發
達とは、何時までもかく單純にして
遊戲的なものに満足すべくもあら
ず、略。

十 16 1 図 略、相當に名ある新聞
は、略、今や遠くヨーロッパに起
りし事件も僅か一兩日にして讀者に
報道せらる。然らばかくの如き新聞
は如何にして編輯せられ、印刷せら
れ、讀者に配布せらるゝか。

十 17 8 図 さて編輯部にては刻々集
り來る原稿を選擇整理し、繪畫・寫
眞等と共に之を印刷部に送る。印刷
部にては略、校正刷を刷りて校
正部に廻す。校正終れば紙型に取り、
更に之をもととして鉛版を造り、印
刷機にかく。かくいへば、頗る繁雜
にして多大の時間を要する如くなれ
ども、略。

十二646 図 かくの如く各國の國旗は、或は其の建國の歴史を暗示し、或は其の國民の理想・信仰を表すものなれば、〈略〉。

かく 〈欠〉(四) 1 缺く 《一ク》

十二1014 図 人なつかしげに寄り来る鹿の、〈略〉人の眠をさますも、奈良には缺くべからざる風情なるべし。

かく 〈五〉 1 かく 《一イ》

十二914 ぼろを着た農夫は玉のやうな汗をかいて田をすき起し、牛はつかれ果ててあへぎあへぎ働いてゐる。

かく 〈書〉(五) 23 カク かく 書く 《一イ・キ・ク》 〓 おか

く

― 222 ニイサンガエヲカイト

キマス。

― 224 ネエサンガジヲカイト

キマス。

― 364 オハナガエンピツデアサ

ガホヲカキマシタ。

― 376 図 ハナハソレデヨイカラ、ハヲチヒサクシテ、モウ一

ペンカイトゴランナサイ。

四14 大きな字を書いたのぼりがすみきつた空に立つてゐます。

四547 図 からかみにかいてある

とらをしぼつて見せよ。

五138 學校からかへつて見ると、廣

田君からゑはきが来てゐました。

〈略〉。と書いてありました。

五516 雨水ノ流レル道ハ地圖ニカイ

タ川ヲ見ルヤウデス。
五614 図 赤・黄・みどりやむらさきと、七つの色をならべて、空のゑぎぬへ一筆に、だれがかいたか、虹の橋。
五785 土手の此の記念碑に、今話した事がくはしく書いてある。
五932 葉書には、大ていちよつとした用事が書いてありますが、〈略〉。
五934 図 〈略〉、封書には、いろ／＼こみ入つた事が書いてあります。
五935 おめでたい事やたのしさうな事が書いてありますと、私もうれしいと思ひますが、〈略〉。
五937 図 〈略〉、悲しい事や苦しうな事が書いてありますと、もらひ泣きをいたします。
五945 図 「それにはどんな事が書いてあつたか。」といふおたづねが出るかも知れませんが、〈略〉。
六455 叔父サンニ蛙ノ話ヲ聞イタカラ、ワスレナイ中ニ書イテ置カウ。七112 図 文字はハッキリと 亂雑に書くと思ひます
九1162 図 〈略〉、其の手紙を差出した。大尉はそれを取つて見ると、次のやうな事が書いてあつた。
十102 図 〈略〉、王にあてた密書が届いた。それには〈略〉、用心するやうにと書いてあつた。
十235 図 歸りに散歩がてら町を歩い

て見ると、〈略〉、店の看板にも馬がかいてあるのがよく目につきました。
十1237 図 又字を書く時に指先を見ると、爪はみじかく切つてゐました。
十一178 見れば引出にはみんな札がはつてあつて、「ふろしき」「ハンケチ」などと一々書いてあります。
十一9710 シャベルが数字で眞黒になると、それをふいては又書く。
かく 〈搔〉(四・五) 2 かく 《一ク》 〓 ひつかきまわる
七119 小さい熊手で砂をかくと、おもしろいやうにあさがりが出た。
八283 図 〈略〉、帯を結ぶことも出来ず、かゆき所をかくことも出来ず、いたき所をさすることも出来ざるべし。
かく 〈掛〉(下二) 7 かく 掛く 掛く 《一ク・一クル・一ケ》 〓 あびせ かく・いろづきかく・でかく・みかく・めかく
八614 図 第十六 看板 〈略〉。此ノ他宿屋ニハ、掛行燈ニ旅人宿何屋ト記シテ掛クルモアリ、〈略〉。
九818 図 〈略〉、安ちいさんはせぐくまり、常に何をか刻みある、めがねを掛けてはつづ着て。
九832 図 〈略〉、なほ怠らずこつ／＼と、何をか常に刻みある、めがねを掛けてはつづ着て。
九846 図 〈略〉、安ちいさんは一心に 毘沙門天を刻みある、めが

ねを掛けてはつづ着て。
十一1071 図 之を機械にかけて皮を除き、袋に入れて外國に輸出する由に候。
十二177 図 校正終れば紙型に取り、更に之をもととして鉛版を造り、印刷機にかく。
十二1013 図 人なつかしげに寄り来る鹿の、〈略〉、秋より冬にかけて哀音しきりに人の眠をさますも、〈略〉。
かく 〓 ちしつがく・はくぶつがく・りかがく
かく 〈案〉(名) 1 案
十一813 図 ながさの松に吹く風を、いみじき案と我は聞く。
かく 〈額〉(名) 3 がく 額
四412 かけ物やがくもはづされました。
十888 最近における我が國の輸出入總額は數十億圓の多額で、之を十年前の額に比べると、實に十數倍である。
十889 輸出入の額の増加して行くのは國家が次第に盛になる印である。かくうんてい 「隔雲亭」(名) 2 隔雲亭 隔雲亭
十477 図 〈略〉、程なく小さき建物の前に出づ。名を隔雲亭といふ由なり。
十五 隔雲亭
かくげいぶ 「芸芸部」(名) 1 學藝部
十二168 図 しかして編輯局は更に編輯部・〈略〉學藝部・寫眞部・校正

部等に分れ、〈略〉。
かくこ「覚悟」(名) 5 かくこ 覚悟

四653 よーは心の中で、もしこれをいそこなつたら、生きては居まいと かくこをきめて、〈略〉。

六843 武士といふ武士は必死のかくこでふせいだ。

七693 図 いや／＼ない時には、川の中へとびこんで死んでしまはうと、かくこをして來たのでございます。

十694 図 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、〈略〉、あつばれてがらを立てるかくこ。

十二1251 徳川方も事こゝに至つては、あくまでも戦ふ覺悟をきめて、ものすごい緊張を示してゐる。

かくこくみん「各国民」(名) 1 各國民

十一668 此の方法は各國民の間に、廣く又極めて長い間行はれてゐたものであるが、〈略〉。

かくさくする「画策」(サ変) 1 畫策する「一シ」

十二1255 〈略〉舊幕府の陸軍總裁勝安芳は、かねてから百万畫策して時局の圓滿な解決を計つてゐた。

かくしき「学識」(名) 1 學識

十一745 〈略〉、眞淵は宣長の學識の尋常でないことをさとして、非常にたのもしく思つた。

かくしつ「各室」(名) 1 各室

十1044 図 其處から熱い湯を管で各室へ送つて、適當に暖めるやうになつてゐるのだ。

かくして「斯」(接) 2 かくして
十一335 図 船の其の間を行く時、島かと見れば岬なり。岬かと見れば島なり。一島未だ去らざるに、一島更にあらはれ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。

十一682 燈火としては、初め松の木や魚・獸の油などをたいたのであつたが、其の後らふそくや種油がともされ、石油のランプが之に代り、今はガス燈や電燈が到る處にかゞやき渡る時代となつた。かくして人は、暗黒の世界からだん／＼光明の世界へと、みちびかれて來たのである。

かくしや「學者」(名) 4 學者 ↓だいがくしや・はくぶつがくしや・ろうがくしや

八628 図 保己一は五歳の時めくらとなりしが、〈略〉、後には名高き學者となりて、多くの書物をあらはせり。

九274 図 〈略〉、すぐに江戸へ出て、りつばな學者を先生にして、一心に學問を上げむがよい。

十一1259 図 されば古は、支那より渡來せるものの僅かに世に存するのみにて、學者其の得がたきに苦しみたりき。

十二938 彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聴いたが、どれにも満足することが出来ない。

かくしゆ「各種」(名) 3 各種
六417 図 其の代り輜重兵の外は各種の兵が出てゐる。

十一99 其の外各種の學校や、〈略〉、公園・競馬場・劇場等の娛樂機關が到る處に散在してゐる。

十二461 図 凡そこれ等の木材は、其の有する性質によりて各種の用に供すべく、〈略〉。

かくしよ「各所」(名) 1 各所
十一3210 図 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、大小無數の島々各所に散在す。

かくしん ↓いちだいかくしん
かくす「隠」(五) 3 かくす「一シ」

五424 尊はかみをといて、〈略〉、つるぎをふところにかくして、其の家の中へおはいりになりました。

七884 図 見れば自國の兵士です。「かくして下さい。敵が追つかけて來ます。」

七885 マリーはどうかしてかくしてやりたいと思ひました。

かくち「各地」(名) 8 各地 ↓こくないかくち
十978 図 文天祥命を奉じ、各地に轉戦して元軍を破る。

十一1010 此の地は交通上重要な位置

を占めてゐて、〈略〉、支那の各地との取引にもきはめて便利であるから、〈略〉。

十一913 図 もつとおしまひの方をあけて御らん。『各地の氣候』といふ所がある。

十一1264 図 一代の事業として一切經を出版せん事を思立ち、〈略〉、廣く各地をめぐるに資金をつること數年、〈略〉。

十二126 かくて世界の各地をめぐるて、〈略〉。

十二871 図 デレンは各地の人々來り集りて交易をなす處なり。

十二983 釋迦は八十歳の高年に及んでも、〈略〉、各地を巡つて道を傳へてゐたが、〈略〉。

十二1143 図 こゝにおいて彼は人を世界の各地につかはして竹を採集せしめ、〈略〉。

かくちほうせいねんだん「各地方青年団」(名) 1 各地方青年團
十69 図 又御造營の半ば頃より、各地方青年團の御手つだひを願ひ出づる者數多かりしかば、〈略〉。

かくて「斯」(副) 2 かくて
十705 図 今一日留り給へとすゝめて止まざりき。旅僧もまた主人夫婦の情心にしみて、そゞろに別れがたき思あり。されどかくて何時まで留るべき身ぞと、心強くも立去りけり。

十一452 図 君は畫を以て一家を成

せる人なるに、數年の間一度も筆を取り給ひし事なし。〈略〉、何時までもかくておはすべきにあらねば、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。

かくて「斯」(接) 11 カクテ かくて七327図 これより獅子は日夜武士につきしたがひてはなれず、武士には無二の従者となれり。かくて幾年かすぎし後、武士は海をこえてふるさとへ歸ることとなれり。

七616図 〈略〉、「略。」とむすびたる時は、拍手の音しばらくはやまざりき。かくて船長は外國より持歸りたる寫眞帖を學校に寄附して去れり。

九455図 又コ、ニ一匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、其ノ五人ハ、各其ノ馬ガ他人ノ手ニ渡ランコトヲ恐レテ、爭ヒテ高キ價ヲツク。カクテ價ハ次第二高クナリテ、馬ハ最モ高キ價ヲツケタル人ノ物トナル。

九461図 之ニ反シテ、同ジヤウナル馬五匹アリ、其ノ持主ハ別々ニテ、買ハントスル人タゞ一人ナルトキハ、五人ノ持主各其ノ馬ノ賣レザランコトヲ恐レテ、爭ヒテ價ヲ下グ。カクテ價ハ次第二安クナリテ、最モ價ヲ下ゲタル持主、其ノ馬ヲ賣ルコトトナル。

十一468図 翌朝畫師は常にもあらず早く起出で、ふすまに向ひてしきり

に筆を動かしまたり。〈略〉。かくて次の夜は如何にとうかゞふに、〈略〉。十一1297図 二度資を集めて二度散じたる鐵眼は、終に奮つて第三回の募集に着手せり。〈略〉、此の度は製版・印刷の業着々として進みたり。かくて天和元年鐵眼が初度の募集を始めてより十八年の後に至りて、一切經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられたり。

十二126 彼が探檢船ビーグル號に乗込んで意氣揚々と本國を出發したのは、二十三歳の時である。かくて世界の各地をめぐる、〈略〉、博物學や地質學の實地研究につとめ、種々の材料を集めて本國に歸つたのはそれから五年の後である。

十二188図 〈略〉、機械は電力によりて働き、〈略〉、一臺よく一分間に四百五十枚を印刷すといふ。かくて刷上りたる新聞は、直に販賣部を経て遠近に發送せらる。

十二932 〈略〉、「此の上は聖賢を訪うて教を受ける外はない。」と思ひ立つに至つた。父のいさめも妻のなげきも、此の決心をひるがへすことは出来なかつた。かくて彼は二十九歳の或夜、人知れず宮殿を出て修行の途に上つた。

十二1074 さうして陰に陽に仕事のじやまをする者も少くなかつた。しかし僧は唯黙々としてのみを振るつて

ゐた。かくて又幾年かたつうちに、穴はだん／＼奥行を加へて、既に何十間といふ深さに達した。

十二1342 〈略〉、いざといへば、學國一致國難に當る氣風を生じた。萬世一系の皇室を中心として團結した國民は、かくていよいよ結束を固くし、熱烈な愛國心を養成した。

かくとう「確答」(名) 1 確答

十二1264 安方は今日こそ最後の確答を得ようと決心して、西郷をおとづれたのである。

かくねん「学年」(名) 1 學年

十一153 のぶ子さんは、成績物が返るとすぐ紙の袋へ入れておいて、學年の終におまとめになるのださうです。

かくねんべつ「学年別」(名) 1 學年別

十一162図 あすこに全部學年別にしつてのせてあります。

かくぶ「各部」(名) 1 各部

十二168図 しかして編輯局は更に編輯部・政治部・經濟部・社會部・通信部・外報部・學藝部・寫眞部・校正部等に分れ、各部にそれ／＼掛の記者又は技術家ありて、〈略〉。

かくぶ「樂譜」(名) 2 樂譜 樂譜なピヤノで。それに樂譜もございませんが。」と兄がいふ。

十二409図 ベートーベンは、「え、

樂譜がない。それでどうして。」といひさして、〈略〉。

かくべつ「格別」(形状) 3 かくべつ かく別

九817図 水のすんでゐる事はかくべつで、〈略〉、美しい海底のありさまが手に取るやうによく見えます。

九1165圖 聞けば、そなたは〈略〉、又八月十日の威海衛攻撃とやらにも、かく別の働なかりきとのこと。

十777図 殊に秋晴の美しさはかくべつで、〈略〉。

かくもん「學問」(名) 14 學問

五72 中村君は學問もよく出来るし、うんどうも上手です。

六426図 からだをちやうぶにして、よく學問をべんきやうしなさい。

〈略〉 兄から 千太どの

八684図 日本人は八萬人餘も居て、子どもは、〈略〉、歸つて來ると、又日本人の立てた學校へ行つて、日本語で學問をしてゐます。

九2210図 しかし此の農學といふ學問は、種々様々の事を、實地と學理の兩方から調べて行かねばならぬので、〈略〉。

九233図 そこで此の父も、何とぞ此の學問を大成したいと、〈略〉。

九2617図 〈略〉、これが佐藤の家の學問の精神である。

九269図 此の四代の苦心の後を受けて、國家の爲に、此の學問を大成す

略

二目6 十八 カゲエ
 二54 十八 カゲエ
 かげえ「影絵」(名) 1 カゲエ
 二54 3 園 ヲヂサン、コンヤモ マタ
 カゲエヲシテ見セテクダサイ。
 かけお・りる「駆降」(上二) 1 かけ
 下りる「一リ」
 七66 1 「略」、大きな峠へかゝります
 と、上から片はだぬいで、右手につ
 ゑをついて、かけ下りて来る者があ
 ります。
 かけか・える「掛替」(下二) 1 カケ
 カヘル「一へ」
 三66 1 私ノウチヘキノフヲケ
 ヤガ来テ、手ヲケヤタラヒノ
 タガヲカケカヘマシタ。
 かけきた・る「駆来」(四) 1 かけ来
 る「一リ」
 九14 1 園 其の音を聞きつけてかけ来
 り、飛びちりたる貝のかけを、すば
 やくついでみたるは眞白なるめんど
 りなり。
 かけくださる「掛下」(下二) 1 か
 け下さる「一レ」
 十二120 3 園 私のこと御心にかけ下
 され、常に「小山はどうしてゐるだ
 らうか。」と仰せらるゝ由、
 かけこえ「掛声」(名) 4 掛聲
 七95 7 園 夏の眞晝の坂道に、重
 き荷車ひきかぬる 人を見かねて、
 物賣は「略」、掛聲高くおしてや
 る。

九59 1 「略」、七八人の男や女が向ひ
 合つて、
 かけこ・る「掛合」(名) 1 掛合
 ばたんばたんとかき打つてゐ
 る。
 九59 9 「略」女たちがよい聲で歌を
 うたふと、へうきんな五平ぢいさん
 が、時時へんな掛聲をして皆を笑は
 せる。
 十二78 9 そこで数そのの船に分乗し
 た漁夫が、えんや／＼と掛聲を掛け
 ながら身網を一方からたぐつて行く。
 かけこ・る「掛合」(名) 1 かけこ
 七98 8 園 「略」、戦一つ出来ず、人の
 かげことばかりいふ石田めとは、此
 の清正一生中直りは致さぬ。
 かけこ・む「駆込」(五) 1 かけこむ
 「一ン」
 七88 2 あわた／＼しくかけこんで来た
 者があります。
 かけだ・す「駆出」(五) 5 カケ出ス
 かけ出す「一し・一ス」
 二65 7 子牛ハコノアヒダウマレ
 タノデス。
 スグビツクリシテ、カケ出シマス。
 七67 1 「落し物をしましたから。」と
 いひ／＼かけ出します。
 八88 三番太鼓が鳴るが早い、五
 匹の馬は一さんにかけ出した。
 九103 6 やがて「進め」の號令がかゝ
 ると、たゞ愉快にたゞ一生けんめい
 にかけ出す。
 十二55 4 不意にばた／＼と音がして、

小さな子どもが二人奥からかけ出し
 て来た。
 かけぢや「掛茶屋」(名) 1 掛茶屋
 十一18 10 掛茶屋に休んで名物の餅を食
 べてゐると、不意にかん高い鳥の聲
 が聞えた。
 かけつ・ける「駆付」(下二) 4 かけ
 つける「一ケ」
 七100 4 此の時清正は、地震と共に
 ね起き、
 かけつ・ける「略」、一さんに伏見の城へ
 かけつけました。
 七101 2 其所へ清正がかけつけました。
 七101 9 園 上様をはじめ皆様、おしの
 下になつては居られぬかと存じ、家
 来ども二百人に梃を持たせてかけつ
 けました。
 八14 9 徳川家康が大坂城を攻めた時、
 其の子頼宣は戦が始つたと聞いて、
 先陣へかけつけたが、
 かけつ・する「可決」(サ変) 2 可決
 する「一スレ」
 十二89 2 かうして其の院で可決すれ
 ば、其の案を他院に移す。
 十二89 6 又貴衆兩院の何れから提
 出された案は、他の一院のみで討議
 し、可決すれば同じ手續によつて奏
 上する。
 かけぬ・ける「駆抜」(下二) 1 カケ
 スケル「一ケ」
 六33 3 自轉車ガ後カラ来テ、カケヌ
 ケテ行ツタ。
 かけはし「掛橋」(名) 1 かけはし

十二104 6 それは山國川に沿うて連な
 る屏風のやうな絶壁をたよりに、
 見るから危げな數町のかけはしを造
 つたものであるが、
 かけはし・める「掛始」(下二) 1 か
 けはしめる「一メ」
 五47 6 「略」、少しでもおけると、
 かごのうらや棚のすみなどで、繭を
 かけはじめますから、
 かけひな「陰日向」(名) 1 かけひ
 なた
 六58 1 かけひなはたなくはたらく上に、
 人の仕事まで引きうけるやうにし
 したので、
 かけまわ・る「駆回」(四・五) 6 かけ
 まはる「一ツ・一リ・一ル」
 三22 4 それからそのへんをむ
 やみに かけまはりました。
 六31 1 虎はうん／＼うなつて、かけ
 まはるより外、どうすることも出来
 ません。
 九12 6 園 綿毛に包まれたるひよこど
 も、小さき聲を立てつゝ、ちよこ
 くとかけ廻る。
 九75 3 「略」、大小さま／＼の馬が、
 林のかけや沼のほとりを元氣よくか
 け廻つてゐる様は、實に勇ましい。
 九103 2 戦地ではいろ／＼つらい事も
 あつたが、戦場をかけ廻るのは、北
 風にとつて愉快な事であつた。
 十47 8 「薪は無い。薪は無い。」
 彼は氣がくるつた様にそこをかけ

廻つた。

がけみち「崖道」(名) 1 かけ路

十一298 中にも加藤清正は、山際

のかけ路にて敵將山路正國に出であ
ひ、片鎌槍をしごいて突いてかゝる。

かけもどる「駆戻」(五) 1 かけも
どる「一ツ」

九101 さうして主人がこひしくなつ
て、今來た方へ一散にかけもどつた。

かけもの「掛物」(名) 1 かけ物

四412 一番先にしやうじやか
らかみが外へ出されました。か
け物やがくもはづされました。

かけよる「駆寄」(五) 4 かけよる
「一ツ」

五804 略、狐はころりとたふれま
した。かけよつて見て、宗任が

「略」と言ふと、略。

六614 略、松の一むら立つてゐる

中に、石のらうがありました。萬じ
ゆがかけよつて、らうのとびらに手

をかけますと、略。

八109 つきそひの者や見物人はかけ
よつて來て、信作に水をはかせるや

ら、醫者を呼びに走るやら、上を下
へのさわぎである。

八863 おとよは信吉の顔を見ると、

かけよつて來て、いきなり信吉にだ
きついて泣いた。

かける「欠」(下二) 2 かける 缺
ける「一ケ」

十一932 ところが太陰曆は月のみ

ちたりかけたりする變化を本として
こしらへたもので、略。

十二1387 堅忍不拔あくまでも初一念

を通すねばり強さが缺けてはゐない
か。

かける「書」(下二) 1 書ける「一
ケ」

三547 わかいとき字をならひま
したが、うまく書けませんので、
こまつてゐました。

かける「掛」(下二) 51 カケル か
ける 掛ケル 掛ける「一ケ・一ケ

ル」あひせかける・おっかける・お
でかけなざる・おでかける・おもいが
けない・おもいかける・こころがけ

る・こしかける・しかける・つめかけ
る・でかける・ひきかける・ひっかけ
る・ふりかける・めがける・よびかけ

る 一297 カハニハ、ハシガカケテ
アリマス。

三334 騒 しごと なされよ、きり
きりしやんと、かけたたすきの
きれるほど。

三624 みよ子「さあ、私がこゑ
をかけたしたら、みなさん一しよ
に舟を出すのですよ。一、二、
三。」

三677 略、ニハニ水ヲウツタ
リ、ウエ木ニ水ヲカケタリシ
マシタ。

三704 たんすやつづらから着物

を出して、風通しのよいとこ
ろにかけてあります。

四553 しばつて お目 にかけま
す。

四596 私ハカンナヲカケテ居
ルノヲ見ルコトガスキデス。

五136 略、これだけはお目にか
けたと思ひます。と書いてあり
ました。

五406 先生が拜殿にかけてある繪馬
のお話をして下さいましてから、
略。

五473 もう桑の葉をたべないで、頭
を上げて、繭をかける所をさがしま
す。

五492 まだ繭をかける場所をさがし
てゐるのがあります。

五606 だれがかけたか、虹の橋。

五697 此の事を村の相談にかけた。

五706 物なれた人には相談をかけた。

五758 六月の田植時から七月・八月
にかけて、水はありあまつた。

六461 大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬
ニカケテ、海カラ川へ上ツテ來ル。

六616 萬じゆがかけよつて、らうの
とびらに手をかけますと、「たれ
か。」と、らうの中から申しました。

六711 賀茂川には橋がたくさんかけ
てあります。

六723 此の電車道から東山のすそへ
かけて、やはり人家がこみ合つて立
つてゐますが、略。

六812 草野の次郎の如きは夜敵の船

におしよせて、首二十一取つて、敵

の船に火をかけて引上げた。

六1021 ねえさんは赤いたすきをかけ
て、手洗鉢の水をかへてゐました。

七143 女の人はたすきをかけて、手
ぬぐひをねえさんかぶりにしてゐる。

七223 此の時義貞が方々へ火をかけ
させますと、濱風が之をあふり立て
たからたまりません。

七904 向ふむきになつて、此のい
すにかけていらつしやい。

七916 略、敵はあちこち見まはし
ましたが、おばあさんの肩に手をか
けて、略。

八183 將軍は長四郎を大きな袋へ入
れて、略、袋の口を封じて柱に掛
けた。

八319 略、焼加減を見て、かまの
外へ引出し、消粉をかけて消せば、
かた炭が出来上るのである。

八378 略、越前守は聲をかけて、
「これ女、其の手を放せ。略。」と
申し渡しましたので、略。

八406 下役の者が石地藏に荒縄を掛
けて、車に積んで参ります。

八785 今日までに納めないと、役
場によけいな手数をかけることにな
ります。

八1049 材木を機械にかけて軸木をこ
しらへてゐる者もあり、略。

九189 所ニヨツテ此ノ蟲ヲドビンワ

リト呼ンデキルノハ、農夫ナドガ小枝ト見違ヘテ、ドビシヲ掛ケ、落シテワルトイフ意味デアラウ。

九30 瀧の上手にかけた石橋を渡り、
《略》。

九34 2 みねからすそにかけての若々しいこずゑの色は、強い日光を浴びて、一面に煙つてゐる。

九35 9 《略》、「やあ、加藤君、よく来てくれたね。」と、聲をかけた者がある。

九59 6 赤いたすきを掛けた女たちがよい聲で歌をうたふと、《略》。

九62 2 やがて午前五時の鐘が鳴ると、當直將校が元氣のよい聲で號令をかける。

九67 10 ずる分こんでゐたが、みんながゆづり合つてくれたので、二人とも腰を掛けることが出来た。

九68 9 やがて中尉はちよつと腕時計を見て、いつものやうにすんだ聲で號令をかけた。

十57 6 鳩に手紙を運ばせるには、
《略》、又は胸に袋を掛けさせて、其の中に入れるのである。

十74 7 南大門通から本町通・鐘路通にかけての一帶が、京城で一番にぎやかな處です。

十113 6 砲手は此の時早く船首の砲後に立つて、其の引金に手をかけた。

十118 1 池にかけてある二つの太鼓橋を渡り、繪馬堂の前を通つて樓門を

くざると、本殿の前に出る。

十一121 9 《略》、マスクをかけた職工が珪砂にソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。

十一124 5 エプロンをかけた職工がガラスの皿やコップなどを、
《略》。

十一124 7 エプロンをかけた職工がガラスの皿やコップなどを、
《略》、みがきをかけたりしてゐる。

十二21 4 《略》、かごを首に掛けた二人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。

十二41 3 《略》、ベーターベンはピヤノの前に腰を掛けて直にひき始めた。

十二78 9 そこで数そうの船に分乗した漁夫が、えんや／＼と掛聲を掛けながら身網を一方からたぐつて行く。

十二130 9 西郷はしばらくじつと考へてゐたが、「よろしい。とにかく明日の總攻撃見合はせの一事だけは、拙者一命にかけて御引受け申します。
《略》。」

十二132 2 安芳が一命をかけた努力と、西郷の果斷によつて、
《略》。

かける「駈」(下二) 10 カケルかける「一ケ」

三23 7 小二郎がうちへかへつてみますと、犬はもうとつとにかへつてゐて、かけてきてとびつきました。

三63 4 三人は舟とならんで、川の流れを掛けて行きます。

五65 5 町の方へ馬車が二だいかけて行きます。

六34 6 停車場デキツブラ買ツテキルト、郵便物ヲツンダ車ガキセイヨクカケテ來タ。

八5 4 二匹はいちもくさんにかけて行つたが、間もなくかはいらしいのを一匹つれて來た。

八11 5 信作が落ちたのにかまはず馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、
《略》。

九10 3 北風は驚いてすぐに立止らうとしたが、後からかけて來る味方に追はれて、
《略》。

十69 2 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、
《略》、眞先かけて敵の大軍に割つて入り、
《略》。

十71 7 其の時の言葉にたがはず、眞先かけて参つたは感心の至り。

十一117 10 《略》、銃獵に出たらしいりつばな騎馬の人たちが、眞一文字にこちらへかけて來る。

かぜろ「陽炎」(名) 1 かぜろふ

十一12 3 鳴くやひばりの聲うらゝかに、かぜろふもえて野は晴れわたる。

かけわたす「掛渡」(五) 1 かけ渡す「一シ」

十一89 三日月 下弦後九時四十分水星東方離隔つちのとう
《略》

かげん ↓ やきかげん

かこ「籠」(名) 3 かこ

四69 1 きずを見てやらうと思つて、私がかこの戸を明けますと、
《略》。

五47 5 《略》、少しでもおくれると、かこのうらや棚のすみなどで、繭をかけはじめますから、
《略》。

十二21 4 《略》、かごを首に掛けた二人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。

かこ「駕籠」(名) 1 かこ

八114 6 其の時大將は江戸から大阪まで、馬やかこに乗らず、兩親と共に歩いて行つた。

かこい「罫」(名) 1 かこひ

九12 5 中に入りてひよこの箱をかゝへ出し、軒下なるかこひの中にひよこを放つ。

かこいぎわ「罫際」(名) 1 かこひぎは

九13 5 《略》、中なるひよこどもは小さき口を開きて、ぴよくと鳴きつゝかこひぎはに集る。

かこいちかく「罫近」(副) 1 かこひ近く

九13 4 妹はやがてかこひ近く歩みよれば、中なるひよこどもは小さき口を開きて、
《略》。

かこいっぱい「籠一杯」(名) 1 かこ

一ぱい

六185 〈略〉、小さなしめぢが列を作つて出てゐました。ふまないやうに注意して、かこ一ぱい取つて歸りました。

かこう 「河口」(名) 5 河口

八197 汽船ハ河口ヨリオオソ四百五十里、小舟ハオオソ九百里サカノボルコトヲ得。

八215 夏、夏季ハコトニ増水シテ、濁流江ニミナギリ、河口ヨリ海上百里ノ間、海水コレガタメニ赤シトイフ。

十一85 長崎を出た汽船は、海上を走ること約四百海里で揚子江の河口に達する。

十一104 阿マゾン河は全長五千五百キロメートル、〈略〉。河幅は驚く程の廣さにて、河口の處にては、三百二十キロメートルもこれある由〈略〉。

十二87 歸途一行は黒龍江を下りて河口に達し、海を航してノテトに歸れり。

かここう 「罫」(五) 1 かこふ 「ハ」

七100 秀吉は城の庭にしき物をのべさせ、幕やびやうぶでまはりをかこはせ、〈略〉。

かこう・する 「加工」(サ変) 3 加工する 「ーシ・ースル」

十87 又外國から原料を輸入し、そ

れに加工して、更に外國へ輸出する事も少くない。

十88 綿花は主に印度やアメリカ合衆國から輸入し、それに加工して綿糸や綿織物を造る。

十一53 之をそれ／＼用途に應じて、更に加工するのである。

かこうば 「加工場」(名) 1 加工場

十一124 橋本君にうながされて、次の室にはいつた。こゝは加工場である。

かこむ 「罫」(四・五) 5 かこむ 圍む 「マー・ミー・ン」

六91 楠木正成が守つた千早城は、〈略〉、まはりが一里にも足らず、總勢わづか千人ばかり。之をかこんだ賊は百萬騎といふ大軍で、〈略〉。

十58 殊に要塞が敵にかこまれて、〈略〉。

十65 三人はゐろりを圍みて坐せり。

十73 京城の市街は、もと石でたゞんだ高い城壁で圍まれ、〈略〉。

十一36 地圖の中の薄緑に染めてあるのが一昨年植付けた處、朱線で圍んであるのが今年伐採する處、〈略〉。

かさ 「笠」(名) 2 カサ 笠 ↓ あみがさ・すががさ・まんじゅうがさ

一32 ハナ ハト マメ マス ミ

ノ カサ カラカサ

十一125 取分け美しかつたのは電燈の笠で、赤・黄・紫・緑とりどりに

目もさめるばかりであつた。

かさ 「傘」(名) 2 傘 ↓ からかさ

七23 みが二かゝへもあつて、枝が傘をひろげたやうに出てゐるので、村の人は之を傘松と呼んでゐる。

八58 履・傘ナドト、大字ニテ目立ツヤウニ記シタル看板ヲ出セルハ、〈略〉。

かさ 「嵩」(名) 1 カサ

五51 流毛早クナリ、水ノカサモ多クナリマス。

かさかさ (副) 2 かさかさ かさ

三21 下のはうからかさかさいはせてかけ上つてくるものがあります。

五48 まぶしには、かさ／＼といふ音がしてゐますが、これは蠶が動くからです。

かさぎ 「笠置」(地名) 2 笠置 笠置

十130 主上さきに笠置におはせし時早くも義兵を擧げしが、〈略〉。

十138 主上さきに笠置におはせし時早くも義兵を擧げしが、事のいまだ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、力なくて止まり。

かさす 「翳」(四) 2 かざす 「ーシ」 ↓ ふりかざす

十二103 そのかみ金殿玉樓相望みてうちつゞく都大路を、大宮人の櫻

かざし紅葉かざして往來しけむ、〈略〉。

十二103 大宮人の櫻かざし紅葉かざして往來しけむ、〈略〉。

かさなりあう 「重合」(五) 1 重り合ふ 「ーツ」

九100 地上には、人馬の死がいがあるにもこちらにも重り合つてゐる。

かさなりかさなる 「重合」(五) 1

かさなりかさなる 「ーツ」

六25 馬の上には人、人の上には馬、かさなりかさなつて、〈略〉。

かさ・ぬ 「重」(下二) 3 重ぬ 「ーネ」 ↓ しきかさぬ

十一127 苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も残らずなりぬ。

十二61 イギリスの國旗は、今日の形式を具ふるまでに幾多の變化を重ねたるものなり。

十二113 次いで白金其の他の金屬の針金を以て様々の實驗を重ねしが、これまた失敗に終りぬ。

かさね ↓ いくかさね・ふたかさねめかさねて 「重」(副) 2 重ねて

十67 僧は其の厚意を深く謝し、さて「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」〈略〉主人はけんそんして言はず。僧は重ねて「〈略〉。是非お明かし下さい。」

十125 村長は〈略〉、幾度の改選

にも重ねて選舉せられ、既に二十餘年勤續せり。

かさねる「重」(下二) 1 重ねる

《一ネ》

十498 彼は此の後も尚研究に研究を重ね、工夫に工夫を積んで、《略》。

かさねる「傘履物」(名) 1 傘はき物

八60図 傘はき物

かさまつ「傘松」(課名) 2 傘松

七目8 第七 傘松

七228 第七 傘松

かさまつ「傘松」(名) 2 傘松

七233 みきが二かゝへもあつて、枝が傘をひろげたやうに出てゐるので、村の人は之を傘松と呼んでゐる。

七243 傘松の四五間さきに、小さな茶屋が一軒ある。

かさり「飾」(名) 1 かさり ↓えり

かさり・おかざり

六1068 何のかざりもない御神殿を拜して、まことにそれ多し氣がした。

かさりかさり(副) 1 かさりく

十393 あたりは如何にも静かで、たまに散る落葉の音が、かさりくと聞える。

がざりと(副) 1 がざりと

十837 つるはしの先がきらりと光る。石炭ががざりと崩れる。

がざりまど「飾窓」(名) 1 がざりまど

五236 下のかざりまどには、《略》、きれいな帯や、すゞしさうな浴衣地がかざつてあります。

かざりもの「飾物」(名) 1 カザリ物

六101図 金や銀ハ美シクテ、《略》、其ノ外イロくナカザリ物ニナリマ

スガ、《略》。

かざる「飾」(四・五) 7 カザル かざる 飾る 《一ツ・一ラ・一リ・一ル・一レ》 ↓きかざる

二324図 オソナヘノモチモカザリマス。

四843 オ花ハオカアサンニオヒナ様ヲカザツテイタダキマシタ。

四861図 オ花「クワンチヨノリヤウキニカザツテアルノデセウ。《略》。」

五238 下のかざりまどには、目のさめるやうなちりめんや、きれいな帯や、すゞしさうな浴衣地がかざつてあります。

九8110図 店に飾れる石燈籠、皆

《略》、玉をふくめるこま犬も、皆

ぢいさんののみのあと。

十294 娘の勇ましい行爲は、歌に歌はれ、其の肖像畫は到る處の店頭

に飾られた。

十二293 図 テームス川を飾るタワー

橋・ロンドン橋を始め、《略》。

かし「壓」(名) 6 かし ↓しいのき

四564 圖 山の中からころげ出て、

人にふまれたかしのみが、しひを見上げてかういつた。

四575 圖 何百年かたつた後、山

のふもとの大木は、あのしひの木か、かしの木か。

十二4510 図 今其の主要なるものを舉ぐれば、杉・檜・《略》栗・かし・

なら・くぬぎ等なり。

十二481 図 けやき・栗・かしは何れも甚だ堅く、もくめこまやかなり。

十二485 図 《略》、栗は耐久・耐濕の性殊に著しきを以て、家屋の土臺、

鐵道のまくら木等の用に供せられ、かしは最も堅くして彈力に富むが故に、櫓・車・運動器具の如き強烈な

力を受くるものを製作するに適せり。

十二488 図 かしは又なら・くぬぎと共に薪炭材として重要なものなり。

かし「菓上」(名) 2 菓子 ↓おかし

七245 茶屋にはおばあさんが一人ぼ

つちで菓子やわらわちを賣つてゐる。

十234 図 歸りに散歩がてら町を歩いて見ると、賣つてゐる菓子もおも

ちやも、多くは馬にちなんだ物で、《略》。

かし(終助) 1 かし

十二128 図 拙者は、《略》、さやうな

事になれかしとは毛頭考へませぬが、《略》。

かじ「火事」(名) 3 火事 ↓おおかじ・やまかじ

四733 私ハ長生をして居ます

ので、東の村や西の村に、《略》、火事があつたり、水が出たりしたことをみんな見て知

つて居ます。

六677 さて主人に火事の話をして、

義捐金のことをいひ出すと、《略》。

十515 図 うちに置くと、火事にあつたり、盗人に取られたりする危険があるからね。

かじ「家事」(名) 1 家事 ↓おんかじ

十一983 しかしせつかく始めた學校通ひも、家事のために僅か一年足らずで止めねばならなくなつた。

かしかん「下士官」(名) 1 下士官

九652 下士官が、甲板の吐水口から

ふき出る海水を、桶に汲んではどん

く流すと、《略》。

かしける「傾」(下二) 1 かしげる

《一ゲ》

七149 めいぐさるをかしげて、え

物を見せ合つた。

かしこ「彼処」(代名) 1 彼處 ↓こ

こかしこ 十一461 図 或夜小僧、住持の居間に來りて、「彼處に行きて、彼の畫師のする様を見給へ。」とさゝやきければ、《略》。

かしこ「畏」(感) 1 かしこ

十1007 圖 御手紙有難く拝見致し候。《略》。かしこ。五月五日 叔母よ

り さち子どもの

かしこい「賢」(形) 1 かしこい

「一い」↓わかるがしこい

八146 後に此の話を聞いた者は、皆家康の年に似合はずかしこいのに驚いた。

かしこさ「賢」(名) 2 かしこさ

十27 明治天皇・昭憲皇太后、御二方のおほみたま、とこしへに此所にしづまりましますと思へば、かしこさ殊に身にしみておぼゆ。

十592 あ、あのかはい、鳩が、

「略」、矢のやうに目的地へ向つて飛んで行くのを見たならば、何人も其のかしこさと勇ましさに感心しない者はあるまい。

かしこし「畏」(形) 1 かしこし

「一し」

十二77 此の時事代主命は「略」、父君に申すやう、「かしこし。仰のまゝにたてまつり給へ。」

かしこまる「畏」(四・五) 2 かしこまる 「一りーレ」

八369 二人の女は「かしこまりました。」と、両方から引合ひました

が、「略」。

十713 常世は「略」、わろびれたる様もなく、進みて御前にかしこまれば、最明寺入道時頼はるかの上座より、「略」。

かしこむ「畏」(四) 1 かしこむ

「一し」

九414 乃木大將はおごそかに、

御めぐみ深き大君の 大みことのりつたふれば、彼かしこみて謝しまつる。

かしづく「傳」(五) 1 かしづく

「一カ」

十二726 王は二三の忠臣にかしづかれて、とある小屋に一夜を明かしたが、何時の間にかもう發狂してゐた。かしたまう「貸給」(四) 1 貸し給ふ 「一へ」

十597 ところあるあばら家の門口に杖を止めて、一夜の宿を貸し給へとこへば、「略」。

かしつけ「貸付」(名) 1 貸附

十536 貸附の利子は預金の利子より高くしてあるから、其の差だけが銀行の収入になるのだ。

かしつける「貸付」(下二) 1 貸附ける 「一ケル」

十536 銀行は有餘つてゐる人からお金を預つて、資金の足らぬ人に貸附けるのだ。

かしぬし「貸主」(名) 2 貸主

十一192 其の場合に貸主から借主を裁判所に訴へると、「略」。

十一193 「略」、貸主の主張を正當とみとめれば、其の借金を返すやうに借主に命ずる。

かしまし「罵」(形) 1 かしまし

「一シキ」

九814 石碑を刻む、文字をほる、

槌音のみ音かしましき 廣き工場

の片すみに、「略」。

かしや「菓子屋」(名) 1 くわしや

四26 又あめややくわしやでは、はやし立てて おきやくをよんでゐます。

かじや「鍛冶屋」(課名) 2 カヂ屋

七目3 第十五 カチ屋

七493 第十五 カチ屋

かじや「鍛冶屋」(名) 1 カヂ屋

七494 私ノ近所二年ヨリノカヂ屋ガアリマシタ。

かしら「頭」(名) 5 かしら 頭 ↓

あたま

五412 昔熊襲のかしらに川上のたけるといふ者があつて、天皇のおほせにしたがひませんでした。

五447 「略」、たけるも熊襲のかしら

だけあつて、「しばらくお待ち下さい。」「略」といひました。

八64 「略」、勝つた子どもを出した

村が、次の年のお祭の日まで、五箇村の頭になるといふ定めであつた。

八85 馬の頭をそろへて、三番太鼓

を今やおそしと待ちかまへてゐる。

八128 どうか今日から一年の間、

あなた方の村が五箇村の頭になつて下さい。

かしら(終助) 1 かしら

十二574 それでは自分のやうな小さな者でも役に立つことがあるのかしらと、夢中になつて喜んだが、「略」。

かしわもち「柏餅」(名) 1 かしはもち

六102 しゃうぶ湯を立ててうち中の者がはいった。かしはもちをこしらへていたといいた。

かす「粕」↓まめかす

かす「貸」(四・五) 3 かす 貸す

「一シース」

三178 そのほをかしてくだ

さい。

八564 身なりいやしき

老婆には、手をかす人もあらざり

き。

十一1003 「略」、本がすっかりぬれて

ゐたので、「略」、其の晩はとうく眠れなかつた。翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、「略」。

かず「数」(名) 12 数 ↓おんてかず ↓てかず・ひかず・ほしのかず・ま

かず

七786 信長はかるくうなづいたが、

其の後間もなく藤吉郎を草履取から引上げて役人の数に入れた。

十344 「略」、これらの品を社務所

にたづさへ来て、神前にさげたと願ひ出づる者数多しといふ。

十599 「略」、新に植込みたる木の

数、實に十數萬本に及び。

十610 又御造營の半ば頃より、

各地方青年團の御手つだひを願ひ出づる者数多かりしかば、「略」。

十一33 さうして其の数や大きさは、

凡そ十一年餘を週期として増減してゐる。

十一38 つまり此の宇宙には、あの太陽のほかに、これと同じやうなものがなほ数限りもなく存在してゐるが、〈略〉。

十一115 〈略〉、我が居留民の数は、外國人中第一位を占めてゐる。

十二126 死傷頗る多く、家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らず。

十二30 陳列品の多種多様で、しかも其の數量の數限りもないのは、〈略〉。

十二62 藍地中の星章は、常に州の數と一致せしむるを定めとす。

十二62 現今は星章の數四十八個なり。

十二114 エヂソンの發明せるは〈略〉、アメリカにて特許を得たるもののみにて其の數實に千餘に及ぶ。

ガス (名) 2 ガス、せきさんガス
九36 レマン將軍も、火藥の爆發によりて起れるガスの爲に窒息したるを、ドイツ兵に發見せられて、〈略〉。

十一68 將來は又どんなものが發明されて、今のガスや電氣にかはることであらうか。

かすい 〔河水〕 (名) 1 河水
十37 山をくづし、地をうが

ち、河水をせき止めた事など、一としてそれならぬものは無い。

かすか 〔幽〕 (形状) 7 かすか
七42 すると、又鐵砲を上げたのがかすかに見えた。

九38 やがてレマン將軍は、萬感胸にみちて、かすかにふるふ手に帶劔をときて渡さんとするを、〈略〉。

九75 遠くにはかすかに津輕半島が横たはり、〈略〉。

九98 もやの底にかすかに見える越中の平野、〈略〉。

九99 富士山も、晴れた日には、白雲の上にかすかに見える事があるさうです。

九110 しかし聞えるのはかすかな息づかひばかりであつた。

十83 暗やみの中にかすかに安全燈が光つてゐる。

かすが 〔春日〕 (地名) 3 春日
十二99 十課 奈良 〈略〉。然れども春日の社頭、朱の廻廊山の緑にはえて、〈略〉。

十二100 〈略〉、秋は春日の社神さび、手向山の紅葉夕日にはゆる様殊に見所あり。

十二106 佐保・佐紀の連岡に北を限り、春日・高圓の山々を東に、〈略〉。

つて、出て來ました。

かすがじんじや 〔春日神社〕 (名) 1
春日神社
十二102 春日神社
かすがやま 〔春日山〕 (地名) 2 春日山 春日山

六8 奈良の春日山や三笠山は千尺そこくだが、白根や槍岳よりも知られてゐるし、〈略〉。

十二102 春日山
かすさのくに 〔上総国〕 (地名) 2 上総の國 上總の國

九10 相模の國より上總の國へこえんとて、今の浦賀のあたりより海を渡り給へり。

九118 〈略〉、尊はつゝがなく上總の國に着き給ひきといふ。

ガスとう (名) 1 ガス燈
十一68 〈略〉、今はガス燈や電燈が到る處にかゝりやき渡る時代となつた。

かすみ 〔霞〕 (名) 5 かすみ 霞
三82 霞、かすみのすそを遠くひく、ふじは日本一の山。

三95 〈略〉、天人はまひながら〈略〉、ふじの山よりも高い大空のかすみの中へはいつて行きました。

九75 昔能因といふ人が、『都をば、かすみと共に立ちしかど、秋風ぞ吹く、白河の關。』とよんだのは其所のことで、〈略〉。

十一33 春は島山かすみに包まれて眠るが如く、夏は山海皆緑にして目覺むるばかり鮮かなり。

十二100 春は若草山の芝緑にもえたち、三月堂・二月堂霞につゝまれてさながら夢の如く、〈略〉。

かすみがうら 〔霞浦〕 (地名) 1 霞が浦

十35 ガン湖といつて、廣さが霞が浦の二倍以上もある大きな人造湖で、〈略〉。

かすむ 〔霞〕 (四・五) 3 かすむ
《ムーン》
三83 おきの方はかすんで、空と水が一つになつて見えま

六73 又三條の大橋から川上を見ると、川原が遠く北につゞいて、其のさきにやさしい姿の山がかすんで見えます。

十一12 右に見ゆるは名高き御寺、左に遠くかすむは古城、春は繪のごと我等をめぐる。

かすめる 〔翳〕 (下二) 1 かすめる
《メ》

九108 〈略〉、敵の砲彈が近くで破れつして、其の破片がびゅつと北風のたがみをかすめた。

かすやたけのり 〔糟屋武則〕 (人名) 1
糟屋武則

十一29 秀吉はるかに之を望み、旗本の若武者どもをきつと見て、

「略」。「と大音聲。「承る。」と、
 〈略〉・糟屋武則・片桐且元等の荒武
 者ども、勇みに勇んで突進す。

かざら じうつばかずら

かすり 〔緋〕(名) 1 かすり じこん
 がすり

三二七 1 こちらのかすりのつつそ
 では太郎のあはせで、〈略〉。
 か・する 〔嫁〕(サ変) 1 嫁する「一
 シ」

十二六五 姉二人は既にさる貴族に嫁
 し、妹はかねてフランス王の后にな
 ることにきまつてゐた。

かぜ 〔風〕(名) 47 カゼ 風 じあき
 かぜ・あさかぜ・うみかぜ・おおか
 ぜ・かみかぜ・きたかぜ・しおかぜ・
 なみかぜ・はまかぜ・はるかぜ・ひと
 かぜ・まつかぜ・よかぜ

一四四 スズシイカゼ ガファイテ、
 ヨイ ココロモチデス。

一四四 カゼ ガフクト、コロコロ
 コロガリマス。

二二六 イロイロナハタガカゼ ニ
 ヒラヒラシテ キマス。

二二六 ユフベ カゼ ガファイタカ
 ラ、キツトクリガオチテ キマス。

二二六 罫 ドコカラキタノカ、
 トンデキタ木ノハ、〈略〉、カ
 ゼ ニフカレテ、ヒラヒラスレバ、
 〈略〉。

二五九 太郎ノオカアサンハカゼ
 フヒイテネテキマス。

三二四 カゼモアタタカデ、オモ
 テデアソブニハ一パンヨイト
 キデス。

三六五 風がしづかにふいて来て、
 きしのさがさらさらとおと
 をたててゐます。

三六八 舟は風にゆられながら、
 土ぼしの方へながれて行きま
 す。

三七九 1 時々すずしい風が吹いて
 来ると、おもひ出したやうに
 くつわ虫がなきます。

三八三 風はしづかで、なみも
 おとをたてません。

三八八 はごろもの袖はかるく
 風にまひ、〈略〉。

四一〇 風に吹かれて、なま土
 ふんで、今日も朝からせい
 出すおや子。

四三五 ある時、日と風が力く
 らべをしました。

四三八 たび人のぐわいたうをぬ
 がせた方が勝といふことに
 きめて、先づ風からはじめまし
 た。

四三九 風は「何、一まくりにし
 て見せよう。」とはげしく吹立て
 ました。

四三九 するとたび人は、風が吹
 けば吹くほど、ぐわいたうをし
 っかりとからだにくつつけまし
 た。

四四二 そこで、風の負になりま
 した。

四六四 風ガ吹クト、カンナクツ
 ガ小屋中マツテアルキマス。

四六四 扇は風に吹かれて、くる
 くるまはつて居ます。

四九二 〈略〉、私が風の音をこ
 うつとさせてやりましたら、〈略〉。

五二四 〈略〉、鯉が大きな口で、思ふ
 ぞんぶん風をのんで、家のむねより
 も高く尾を上げます。

五二八 それはくしづかな所で、風
 の音と水の音より外には、何の音も
 聞えません。

五八六 九月にはいつては雨つゞき
 でしたが、四日の日は朝からひどい
 雨で、夕方から風もはげしくなりま
 した。

五八三 夜明け方になつて、雨も風
 もやみますと、〈略〉。

五八六 雨が降つても、風が吹いても、
 夜でも、晝でも、此所に立通しに立
 つてゐますが、〈略〉。

六一九 風がひゅうつとうなつて来る
 たびに、濱の松は身をふるはせて、
 頭を地に着けさうにします。

六五七 これが萬じゆの姫で、〈略〉、
 風のたよりに此の事を聞いて、うば
 をつれて、鎌倉をさして上りました。

七一四 日は暖で、風はなし、むされ
 るやうな氣がする。

七三二 風 なはてつたひに來る風も、

若葉のほひかんばしく、〈略〉。
 七九三 〔「やはり二十十日だ。風が
 出て來た。」と、又おとうさんがお
 つしやつた。〕

七九三 〔「どうかひどい風にならな
 ければよいが。」と、おちいさんが
 言つていらつしやつたが、〈略〉。〕

七九二 〈略〉、其の中に南の空が黄色
 になつて、風がだんくはげしくな
 つて來た。

七九四 〔「困つた風だ。」とおつしや
 つて、おちいさんは〈略〉、菊の鉢
 を軒下に運んだりされた。〕

七九四 仕合はせに午後は風が弱つた。
 七九五 夕方からは雨になつて、風は
 全く止んだ。

八四九 サウシテ何カ地上ニエモノヲ
 發見スルト、〈略〉、風ヲ切ツテマツ

シクラニエモノノ上ニツカミカ、ル。
 八六三 或夜弟子をあつめて、書物
 を教へし時、風にはかに吹きて、と
 もし火きえたり。

八六二 〔略〕、弟子どもは「先生、
 少しお待ち下さいませ。今風であか
 りがきえました。」と言ひしに、
 〈略〉。

九三四 〔略〕、そよくと吹く風につ
 れて、若葉のほひがひしくと身
 にせまつて來る。

九四四 黒みがかつた紫色の莖が見事
 に延びて、大きな葉をゆらゆらと風
 に動かしてゐる姿は、誠に氣持がよ

い。

十1057 外はさつきよりも一そう風が

強くなつたのか、ガラス越しに見える向ふの木がひどくゆれる。

十一137 風は音なくやなぎをわたり、船は静かに我等をのせて、行くは何處ぞ、桃さく村へ。

十一812 なぎさの松に吹く風を、いみじき樂と我は聞く。

十一1115 雪降りみだるゝ冬のあしたに、風なほ冷たき春のゆふべに、

十二35 はるゝと風のゆくへの見ゆるかな、すゝきがはらの秋の夜の月。

十二79 大れふ旗を風になびかせながら、えつさゝと陸の方へ漕歸つて来る。

かせぎ じでかせぎ

かせぎ 〔稼〕(五) 1 かせぐ

九487 うち中が丈夫で、仲よくかせぐ、こんな仕合なことはない。

かせとおし 〔風通〕(名) 1 風通し

三703 たんすやつづらから着物を出して、風通しのよいところにかけてあります。

かぞ・う 〔数〕(下二) 1 數ふ

十二1028 遠く連なる田園の間に東西に走る三筋の路は、北より數へて古の一條・二條・三條の大路

の名残とす。

かぞえき・れる 〔数切〕(下二) 1 數へきれる

七136 舟で来た人も、をから来た人も入りまじつて、何百人か數へきれない程ある。

かぞえる 〔数〕(下二) 19 カゾヘル

一302 ナンバキルカ、カゾヘテゴランナサイ。

三536 星のかず あるばん、弟がにはへ出て、「一つ二つ」とかぞへてゐました。

三537 兄が「おまへ、何をかぞへてゐるのだ。」とたづねますと、弟「星をかぞへてゐます。」

三541 弟「星をかぞへてゐます。」

三542 兄「こんなくらいばんにかぞへないで、ひるかぞへるがよい。」

三543 〔略〕、ひるかぞへるがよい。

四143 オマヘタチノセ中ノ上ヲアルイテ、カゾヘテミルカラ、ムカフノヨカマデナランドミヨ。

四152 白ウサギハ一ツニツトカゾヘテ、ワタツテ行キミシタガ、

六496 居ならぶ子どもは 指を折

りつつ、日數かぞへて、喜び勇む。

六853 生きてかへつた者は數へる程しかなかつたといふ。

七1118 十五字までが一音信だが、にぎりのある字は二字に數へるのだから、それでは十七字になる。

十一349 嚴島は古より日本三景の一到に數へられて殊に名高く、

十一495 自動車・自轉車のタイヤ、

〔略〕・ゴム風船など、數へてみるとゴムで造つたものは實に多い。

十一885 すると弟が「〔略〕。」と云つて、日數を數へてみようとした。

十一887 父は曆を持つて来て、「〔略〕。この中にある『通日』で數へて御らん。これは一月一日から數へた日數だ。」

十一888 これは一月一日から數へた日數だ。

十一8910 それも立春から數へると八十八日目で、稻をはじめ大ていの物の種をまく目安になる日だ。

十二1328 我が國が世界無比の國體を有し、

〔略〕、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、

十二1389 我が國民の長所・短所を數へたならば、まだ外にもいろいろあらう。

かぞく じいちかぞく

ガソリン (名) 1 ガソリン

十一639 トラクターはちやうど重用のタンクのやうな形で、ガソリンの

發動機が取付けてある。

かた 〔方〕(名) 16 方 じあけがた・あつかひかた・あなたがた・あにさまがた・いいかた・いずかた・うえすぎがた・うごきかた・うまかた・おおかた・おかた・おくげさまがた・おひめさまがた・おんふたかた・かきかた・かきかたちゆうい・かみがた・かみさまがた・かみよこのかた・かんぐんがた・くみかた・こうぞうがた・しかた・しかたなしに・じょうかんばんあらいかた・しんさくがた・すべりかた・せんせいがた・たいしょうがた・たかときいかほうじようがた・ただがた・つくりかた・つづりかた・とくがわがた・ならびかた・はなしかた・ふしんかた・へいけがた・ほうじようがた・みかた・みなさまがた・めかた・ゆうがた・よあけがた

四183 コノ神様ハサキホドオ通リニナツタ神様ガタノ弟ノ方デス。

五38 此の方は中村さんといふ人で、今度遠い所から来て、今日から此の級へはいる方です。

五41 〔略〕、今日から此の級へはいる方です。

五45 これは級長の山田さんです。分らないことは此の方におききなさい。

五76 天照大神の弟の方に、すさのをのみことと申す神様がございま

した。

五九三 毎日かならず新聞を入れに来る方も四五人はあります。

七六五 園 あなたは今朝一人で川をこした方ではありませんか。

七七一 園 〈略〉、だんなはなまけ深い方ですから、〈略〉、おしかりになることはあるまいと思ひます。

八八八 園 〈略〉、先生はおとよに、低い聲で言われた。「此の方はどなたですか。」

八八八 園 お呼びするのは大い近所の人で、あなたが知つていらつしやる方ばかりです。〈略〉 春子 松子様

八八八 園 〈略〉、来る二十五日に、お心やすい方にお出でを願つて、ほんの心ばかりの祝を致したいと存じます。

九五〇 社長さんは餘程の年よりらしいが、にこにこしてゐる元氣な方です。

九五七 園 〈略〉、おとうさんに「あの精米會社の社長さんはえらい方なんではう。」と言ふと、〈略〉。

九五一 園 〈略〉、おとうさんは〈略〉、あの方の小さい時分からのお話をし下さいました。

九二八 園 ソンナエライ方ナラ、オトウサンガワザくオ歸リニナラナクツテモ大丈夫デセウ。

一〇二二 園 〈略〉、拜殿・迴廊など總

べて白木造にて、神々しさたとへん方なし。

かた「肩」(名) 7 かた 肩 四七五 又私のかたの上で、お星様が光りはじめるころになつて、〈略〉。

六八八 通有も左のかたを射られたが、少しも屈せず、刀をふるつて進んだ。

七六九 水になれた人夫の肩に乗るか、手をひいてもらふかして渡るのでございませう。

七九六 園 〈略〉、おばあさんの肩に手をかけて、「これ、おばあさん、お前は知つてゐるだらう。」

八二二 耕造方の人々は耕造の肩をたいて、「感心だ、感心だ。えらい子だ。〈略〉」などといった。

八四八 第十三 驚 〈略〉、怒ッテキル肩、〈略〉。

九一〇 北風は、もう一度鼻先をなでてもらひたくなつて、そつと顔を主人の肩のあたりへすりよせた。

かた「型」(名) 3 カタ 型 型 六七六 園 コレハ、ハジメ白地ニオツテ置イテ、後デカタヲ置イテ染メルノデ、縮緬ノ友禪ト同ジデス。

一一三九 こちらを見ると、そこではちよつと吹いて型に入れ、又吹いて型から出す。

一一四三 こちらを見ると、そこではちよつと吹いて型に入れ、又吹いて型から出す。

かた「瀉」↓とおひがた かたあし「片足」(名) 2 片足

六八六 片足でおそろしい程早くする者もあれば、人の手にすがつて、こはこはする者もある。

九八〇 園 〈略〉、七八人の男や女が向ひ合つて、片足をふみ出し、〈略〉、ばたんばたんと穀竿で麥を打つてゐる。

かた「堅」(形) 9 かた「固い 堅い」《一・一・ク》

九五七 園 實の中にはかたい殻があつて、其の内がはに白い肉のやうなものがあります。

九二七 目に涙をいっぱいためて聞いてゐた少年は、固い決心を顔にあらはして、實行をちかつた。

九四六 中尉の固く結んだ口もと、するどい目の光、其の様子がどうも一通りでない。

一〇三六 バナマ地峡は一體に小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。

一〇九六 太郎は前から父に、「あの橋は危険だから決して渡つてはならぬ。」と固く禁ぜられてゐたのであるが、〈略〉。

一一一八 約束は固く守らなければならぬ、〈略〉。

一二〇六 園 〈略〉、萬人の爲に安全な路を造つてやうと、神佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。

一二〇九 彼の初一念は年と共に益々

固く、時には夜半までも薄暗い燈を便りに、經文をとへながら一心にのみを振るふことさへあつた。

一二一四 萬世一系の皇室を中心として團結した國民は、かくていよいよ結束を固くし、熱烈な愛國心を養成した。

かた「難」↓ありがたい・ありがたい・ありがたなみだ・ありがたうございます・えがたい・しがた

かた「田舎」(名) 1 片田舎 一四八 園 〈略〉、リンカーンは、今から百年餘り前、ケンタッキー州の片田舎の貧しい家に生れた。

かた「肩掛」(名) 1 肩かけ 七九三 園 〈略〉、又大急ぎでおばあさんの着物を着せてやりました。肩かけや前だれまで。

かた「方」(名) 3 方々 九二五 園 此の方々のお書きになつたものは、大い此所に持つてゐる。

九四八 園 村の方々は、朝に夕にいろ／＼とやさしく御世話下され、〈略〉。

九四八 園 母は其の方々の顔を見る毎に、そなたのふがひなき事が思ひ出されて、此の胸は張りさくるばかりにて候。

かた「助」(副助) 1 かた 十二二〇 園 先づは御無沙汰の御わびかた／＼近況御知らせ申上候。

かたかな「片假名」(名) 1 片假名

七112図 發信人の居所氏名を受信人

に知らする必要があるときは此處又は本文の終へ片假名にて記すこと

かたかまやリ 「片鎌槍」(名) 1 片鎌槍

十一29図 中にも加藤清正は、山際

のがけ路にて敵將山路正國に出であひ、片鎌槍をしこいて突いてかゝる。

かたき 「敵」(名) 5 かたき

四90図 お前たちが大きくなつたら、此のかたきを取つておくれ。

四91図 「略」、十郎はなみだを

おさへて、「きつと此のかたきを取つて見せます。」と答へました。

四918 「略」、遊事にも、兄が弓

をひけば、弟はたちをふりまはし、早く強くなつて、かたきを取らうと心がけました。

四92 「略」、いづも大ぜいの家來

をつれて居ます。

四93 「略」、かたきのくどうもよりとものおともをして行つて居ます。

かたきうち 「敵討」(名) 1 カタキウチ

一17 「カタキウチヲスルコトニナリマシタ。

かたぎりかつもと 「片桐且元」(人名)

1 片桐且元

十一29 「承る。」と、福島正則・

加藤清正・「略」片桐且元等の荒武者ども、勇みに勇んで突進す。

かたさき 「肩先」(名) 1 肩先

七45 「ぐんばいうちはでふせいだが、えが折れて、肩先へ切りつけられた。

かたし 「堅」(形) 7 かたし 固し

堅し 《キーク》

七30 「獅子のからだにまきつきたり。獅子はおどろきてふりはなさんとしたれど、蛇はますく／＼かたくしめつけたり。

十98 「天祥固くこぼみていはく、

「我、國を救ふことあたはず。いづくんぞ人をいざなひてそむかしめんや。」と。

十一82 「幾年こゝにきたへたる

鐵より堅き腕あり。

十二47 「つがは堅くして久

しきに耐ふるが故に、家屋の柱・土臺となすに宜し。

十二47 「ひば・松・落葉松は何れ

も堅くして、耐久・耐濕の性あるを以て建築・土木・造船等其の用途頗る廣し。

十二48 「けやき・栗・かしは何れ

も甚だ堅く、もくめこまやかなり。

十二48 「略」、かしは最も堅くし

て彈力に富むが故に、櫓・車・運動器具の如き強烈な力を受くるものを製作するに適せり。

かたし 「難」 ↓ ありがたし・いいがた

し・えがたし・しがたし・つくしがた

し・はかりがたし・わかれがたし・わすれがたし

かたすみ 「片隅」(名) 1 片すみ

九81 「櫓、槌音のみ音かしましき 廣き工場の片すみに、安

ぢいさんはせぐま、略。

かたすみ 「堅炭」(名) 1 かた炭

八31 「焼加減を見て、かまの外へ引出し、消粉をかけて消せば、かた炭が出来上るのである。

かたち 「形」(名) 27 かたち 形 ↓

どうぶつのいろとかたち

七12 「われらが住む世界は、其の形まるくして、球の如し。

七17 「四角な田には四角に、細長い田には細長く、田の形其のまゝに紅紫のまうせんをしきつめたやうに見える。

七58 「外國の港に着くと、見なれ

ない形の家が並んで立つてゐます。

七82 「中デ面白ノハサンゴデ、タ

クサン集ツテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテキル。

七86 「海藻ノ形ハ様々デ、略。

八82 「水にはこれといふ形がない。

九18 「保護色ヲモツテキル上ニ、其ノ動物ノ姿勢ニヨツテ、形マデマハ

リノ物ニ似テ見エルモノモアル。

九18 「桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリ

ハ、略、形ガ桑ノ小枝ニ寸分違ハナイ。

九19 「シカシサラニコレヨリモ色ヤ

形ガウマク出来テキルノハ、印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。

九21 「動物ノ形ヤ色デモ、注意シテ調ベテミルト、コノヤウニイロクフシギナ事ガアル。

九28 「信淵は父の門人たちの情で、形ばかりの葬式をすまずと、間もなく江戸へ出て、略。

九41 「かたち正していひ出でぬ、『此の方面の戦鬪に、二子をうしなひ給ひつる 閣下の心如何にぞ。』と。

九74 「南部富士といはれるだけあ

つて、ちよつと形が似てゐるね。

九76 「略」、近くには形のよい島々

などもあつて、大そう景色のよい所であつた。

九87 「あれごらん、向ふの杉林の

上の所に、ひしやくのやうな形になつて、七つの星が並んでゐるのが見えるだらう。

九88 「北斗七星は何時もあるんな

ひしやくの形をしてゐて、北極星との關係も常に變らないから、略。

九90 「西洋では昔から、あの七つ

の星と其の近所の星を一しよにして小熊の形を想像し、略。

九90 「略」、北斗七星と其の近所

の星を一しよにして大熊の形を想像して、略。

九91 「此の大熊こそは、先にジュ

ノーに形を變へられたおかあさんの

カリストだったのですが、〈略〉。
 十339 上手にも水門があるので、船は大きな箱の中に浮いてゐる形である。

十10410 にはひのよいのや、色の美しいのや、形のかはいらしいのや、どれを見てもどれを見ても、一枝髪にさしてみたい。

十一639 トラクターはちやうど軍用のタンクのやうな形で、ガソリンの發動機が取付けてある。

十一792 それで金屬を用ひることを思ひつき、形の上に種々の工夫をこらして、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。

十二5210 〈略〉、いろ／＼の物音、いろいろの物の形がごと／＼と耳にはいり目にはいるばかりで、〈略〉。

十二546 図 あのような道具、たくさん時計、形も大きさもそれ／＼違つてはゐるが、〈略〉。

十二769 これを海中に張つた形はちやうど大きなひしやくに似てゐる。

十二1137 図 〈略〉、ふと見れば机上に形珍しき一本の團扇あり。

かたちづくる「形作」(五) 1 形造る「一ツ」

十一118 一口にいへば、〈略〉一大火球で、之を形造つてゐるものは、液體に近い氣體であらうといふ。

かたづ・く「片付」(五) 1 かたづくる「一キ」

九582 図 おかげで今日中には大がいかたづきます。

かたづけ ↓あとかたづけ
 かたづける「片付」(下二) 1 かたづける「一ケ」↓とりかたづける

九634 これ等の仕事は、陸上の家で、毎朝起きると先づ夜具をかたづけ、雨戸をくるのかはりはないが、〈略〉。

かたつむり「蝸牛」(名) 1 カタツムリ

一212 圖 デンデンムシムシ カタツムリ、アタマガアルカ、メガアルカ。

かたて「片手」(名) 2 片手

十105 王は片手にそれを受取り、片手にかの密書を取り出して、靜かにフィリップに渡した。

十106 王は片手にそれを受取り、片手にかの密書を取り出して、靜かにフィリップに渡した。

かたて「片手間」(名) 1 片手間
 九557 図 そこで間もなく片手間に精米所を始め、追追に大きくして、あんなりつばな會社にしたのだ。

かたな「刀」(名) 12 カタナ かたな刀 ↓こがたな・なまくらがたな

一531 モモトラウハ カタナヲヌイテ、一バン オホキナ オニニムカヒマシタ。

四23 おもちややにはらつばや かたなやひかうきなどがなら

べてあります。
 四964 すけつねも人に知られたさむらひ、「心えた。」と、まくらもとの刀を取つておきしらうとしました。

六556 義仲からは折りかへし返事があつて、〈略〉、木曾の家にたはつてゐた大切な刀を送つてよこしました。

六561 かへつて、はだみはなさず持つてゐた刀を見つけられてしまひました。

六562 頼朝は其の刀に見おぼえがあつたのでございます。

六702 〈略〉、よろひかぶとの勇ましいなりをした武士の刀や、なぎなたの光も、いくたびとなく此の川の水にうつたことございませう。

六822 通有も左のかたを射られたが、少しも屈せず、刀をふるつて進んだ。

七449 信玄は刀をぬくひまがない。

八172 將軍秀忠が刀を取つて出で見ると、長四郎であつた。

八1155 けれども刀・槍・薙刀など、武士の魂と呼ばれる物は、何時もきら／＼光つてゐたといふことである。

十一308 図 清正刀を抜かんとするに、かぶとのしころつゝ、じの枝に引つかゝりて、身のはたらき自由ならず。かたはだ「片肌」(名) 1 片はだ
 七661 〈略〉、上から片はだぬいで、右手につゑをついて、かけ下りて來

る者があります。
 かたま・る「固」(四・五) 2 かたまる固まる「一ラ・一リ」

九132 図 〈略〉、十幾羽の鶏一つにかたまり、頭と頭をつき合はせて、いそがしげに餌を拾ふ。

十一534 集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不純な物を取り除き、次に藥品を入れて固まらせ、〈略〉。

かたみ「形見」(名) 1 かたみ
 十6610 図 しかし此の三本だけは、其の頃のかたみとして、大切に殘して置いたのでございますが、〈略〉。

かた・む「固」(下二) 2 固む「一メ」
 十691 図 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、ちぎれたりとも、此の具足に身を固め、さびたりとも長刀を持ち、〈略〉。

十一1123 図 いしずゑ固めし蜀漢の國、漢中王はおこそかに帝の位をふませ給ひぬ。

かたむき「傾」(名) 1 かたむき
 十二1349 〈略〉我が國民は、とかく引込み思案におちいり易く、奮闘努力の精神に乏しく、遊惰安逸に流れるかたむきがある。

かたむ・く「傾」(五) 1 かたむく「一イ」

十445 日はもう西にかたむいてゐる。かたむける「傾」(下二) 1 かたむ

ける「一ヶ」

六505 圖「略」父は すぎしくさ
の手がらを語る。居ならば子ども
はねむさ忘れて、耳をかたむけ、
こぶしをにぎる。

かた・める「固」(下二) 1 固める

「一ヶ」↓うちかためる

七102 圖「お庭先の御門を守る者が
ございません。某の手で固めませ
う。」と清正がいひますと、「略」。

かたり Ⅱソップものがたり・むかし
がたり・ものがたり・リヤおうものが
たり

かたりつくす「語尽」(五) 1 語り
盡くす「一シ」

十二98 圖 私は行はうと思つたこと
を行ひ盡くし、語らうと思つたこと
を語り盡くした。

かた・る「語」(四・五) 8 かたる 語

る「一ラ・一リ・一ル」↓ものがたる
六493 圖 ともし火近く 衣ぬふ母は
春の遊の 樂しさかたる。

六503 圖 ろりのはたに縄なふ父は
すぎしくさの手がらを語る。

九416 圖 昨日の敵は今日の友
語る言葉もうちとけて、我はたゝ
へつ、彼の防備。彼はたゝへつ、
我が武勇。

九111 4 圖「又自分の最愛の主人に
味方の勝利を語るやうに、一聲高く
天に向つていなゝいた。

十74 圖 途中、先生は「此の境内は

廣さ約二十二萬坪。「略」。」と語ら
れたり。

十907 圖 村の社の掃除や終へし、
はうき手にく此方をさして 語
りつゝ来る若き人々、今朝とく出
でし兄も交れり。

十二96 圖 なぎさに立ちて昔をしの
べば、「略」、打寄する波の音さへ何
事かを語るに似たり。

十二98 圖 私は行はうと思つたこと
を行ひ盡くし、語らうと思つたこと
を語り盡くした。

かたわら「傍」(名) 2 傍

九907 圖 信吉は傍なる姉に向ひて、
「ねえさん、どうぞ其の話を聞かせ
て下さい。」と頼みたり。

十二46 圖 松江を發したる汽車は
「略」斐伊川の鐵橋にかゝる。傍な
る人のいふやう、「略」。

かだん「花壇」(名) 1 花壇

十一599 圖「略」、市街の中央を東西に
貫ぬく幅六十間の大通路は、「略」、花
壇が設けてあり、銅像なども立つて
ゐる。

かだん「果斷」(名) 1 果斷

十二132 圖 安芳が一命をかけた努力と、
西郷の果斷によつて、「略」。

かち「勝」(名) 4 かち 勝 ↓いち

ばんがち・おおがち・しがち

三204 よけいにとつたほうがか

ちだといつて、「略」。

四387 たび人のぐわいたうをぬ

がせた方が勝といふことに
きめて、先づ 風からはじめまし
た。

四497 圖 十二 かるた取「略」

「略」。さあ、つぎのをよみま
す。「負けるは勝。」

九483 圖 世の中は何でも一生けん
めいに働く者が勝た。

かち Ⅱびようきがち

かちかち「副」3 かちく

九18 圖 夜をいましむる夜まはり
の 拍子木のごとかちく」と、さ
びしく時をきざみ行く。

十二538 かちく」と氣ぜはしいのは
置時計で、かつたりく」と大やうな
のは柱時計である。

十二594 圖「略」、今まで死んだやうに
なつてゐた懷中時計が、忽ち愉快さ
うにかちく」と音を立て始めた。

かちく「家畜」(名) 2 家畜

八506 ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒
クテ、家畜ヲサラフノモ多クハ此ノ
時デアル。

十一788 石・貝・家畜・獸皮・布・
農産物などが、時代により場所によ
つて、それ／＼貨幣の役目をしたこ
ともあつた。

かちどき「勝鬨」(名) 2 カチドキ

かちどき

四371 モズハ「略」、フクロ
フノカホヲケツテ、「キイキ
イ」トカチドキヲアゲマス。

十二807 圖 八重の高潮かちどき揚げ
て、海の誇のあるところ。

かちほこる「勝誇」(四) 1 勝ちほ
こる「一リ」

十一253 圖 寄手の大將佐久間盛政は、
今日の戦に勝ちほこり、明日は進ん
で賤嶽のとりでをおとし、一舉に敵
をみちにせんと、「略」。

かちまけ「勝負」(名) 2 かちまけ

三228 どちらもたいていおなじ
くらゐで、かちまけはありませ
んでした。

三614 圖 みよ子「私はかちまけを
見る人になりませう。」

かつ「勝」(人名) 2 勝

十二1272 圖 安芳がいつて行かうと
すると、門を守つてゐた兵士等が
「それ勝が来た、勝が来た。」とし
めきながら、「略」。

十二1272 圖 それ勝が来た、勝が来た。

かつ「且」(接) 1 かつ

十二883 法律は、國家といふ共同生
活を、秩序ありかつ幸福なものにす
るための規則であるから、「略」。

かつ「勝」(四・五) 16 カツ かつ

勝つ「一チ・一ツ・一ツ」

二775 ドチラモマケズニタカ
ヒマシタガ、トウトウライクワウ
ガカチマシタ。

三654 圖 みよ子「五郎さんの舟
には、てふてふのせんどうさん
がのつたから、かつたのでせう。

がのつたから、かつたのでせう。

〈略〉。

三742 ソノ中ニケダモノガカ

チサウニナツタノデ、〈略〉。

三748 スコシタツテ、コンドハ

鳥ガカチサウニナリマシタ。

六385 義經に此の名を惜しむ心があ

つたので、何時の戦にも勝つたので

ございませう。

七463 図 よつて明日たがひに勇士を

一人づつ出して組討をさせ、勝つた

方のものが川中島を取ることにして

は。

八63 〈略〉、子どもの騎手を一人づ

つ出して、社の横の池のまはりで競

走させて、勝つた子どもを出した村

が、〈略〉。

八79 五箇村の人々は各自自分の村

の騎手に向つて、「ぜひ勝つてく

れ。」〈略〉などと、口々に勢をつけ

てゐる。

八115 信作が落ちたのにかまはず

馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、

〈略〉。

八124 図 あなた方の村が勝つたので

す。

八145 間もなく合戦が始ると、果し

て小勢の方が勝つた。

八366 図 越前守はじつと考へました

が、「〈略〉、両方から子どもの手を

取つて引合へ。勝つた方へ其の子を

渡す。」といひました。

九347 うす紅のかへで、銀ねずみ色

の櫓、黄の勝つた緑のけやき、どの
木を見てもなつかしい。

十一227 若し裁判が無いとしたら、

人々相互の争がはてしなく行はれて、

しかも其の争は、力の強い者やわる

がしこい者が勝つことになるであら

う。

十一267 盛政は勝つてかぶとのを

をしめざりし油断を悔いつゝ、俄に

やみの中を退却しはじめたり。

十一273 図 〈略〉 秀吉は、持ちた

る箸を投捨て、「すは勝つたる

ぞ。」と手を打つて喜び、〈略〉。

がつ いちがつ・いちがつじゅうはち

にち・いちがつついたち・いちがつは

つかかぎり・くがつ・くがついつか・

くがつじゅうごにち・くがつじゅうさ

んじゅうにち・くがつついたち・くが

つなか・くがつはつか・げんこうに

ねんさんがつ・ごがつ・ごがついつ

か・ごがつだいさんじゅういちにち・

ごがつなか・ごがつにじゅうはちに

ち・ごがつようか・さんがつ・さんが

つじゅうくにち・さんがつじゅうさん

にち・さんがつじゅうににち・さんが

つじゅうはちにち・さんがつにじゅう

ごにち・さんがつはつか・しがつ・し

がつとおか・しがつにじゅういちに

ち・しがつにじゅうごにち・しがつに

じゅうさんにち・しがつにじゅうしち

にち・しがつにじゅうににち・しがつ

にじゅうよつか・しがつにじゅうろく

にち・しがつよつか・しがつ・じゅ

ういちがつふつか・じゅうがつさん

じゅういちにち・じゅうがつじゅうさ

んにち・じゅうがつじゅうににち・

じゅうがつにじゅうごにち・じゅうに

がつじゅうごにち・じゅうにがつじゅ

うよつか・じゅうにがつじゅうろくに

ち・じゅうにがつじゅうはちにち・て

んしょうじゅういちねんしがつはつ

か・どうねんくがつ・どうねんしが

つ・なんがつなんにち・にがつはつ

か・にがつむいか・はちがつ・はちが

つとおか・ぶんかろくねんろくがつ・

めいじがねんさんがつ・ろくがつ・

ろくがつじゅうごにち・ろくがつとお

か

かついえ「勝家」(人名) 1 勝家 ↓

しばたかついえ

十一238 図 やがて勝家また自ら五萬

の兵を督し、來りて盛政の軍に合す。

かつお「鯉」(名) 2 カツヲ

七798 魚類ニハイワシ・アヂ・カツ

ヲナドノヤウニ、水ノ表面ニ近イ所

ヲ泳グモノガアリ、〈略〉。

七79 図 カツヲ

かつおぎ「鯉木」(名) 1 かつを木

六1065 図 棟にはかつを木がならべて

あり、棟の兩はしには千木が置いて

ある。

かつか「閣下」(名) 3 閣下

九379 図 〈略〉、エンミツヒ將軍はみ

づから進んで握手を求め、「閣下の

防戦はまことに見事であつた。」と
感謝せるに、レマン將軍は靜かに、

「〈略〉。」と答へたり。

九389 図 閣下の劍は軍人の魂として

少しも名譽をきずつけなかつた。

九422 図 閣下 たち正していひ出で

ぬ、「此の方面の戦闘に 二子をう

しなひ給ひつる 閣下の心如何に

ぞ。」と。

がつかい「学界」(名) 1 学界

十二142 これが有名な進化論で、學

界を根本から動かししたものである。

がつかりする(サ変) 2 がつかりす

る『一シ』

十二579 三人はさんぐく探し廻つて

見附からないのがつかりした。

十二579 ねちもがつかりした。

かつき「活気」(名) 1 活気

十一104 唯商業の取引の盛な部分は、

相當に活氣を帯びてをり、〈略〉。

かつぐ「担」(五) 5 カツグ かつ

ぐ『一イ』

一326 ヒケシガトンデイキマス。

トビグチヲカツイデイキマス。

四185 兄様ガタノオトモヲシ

テ、フクロヲカツイデイラツシ

ヤツタノデ、〈略〉。

五247 小ぞうさんたちは、土さうか

らいろくな反物や帶地をかついで

來て、お客の前につみ上げます。

六991 圖 あの學校がたつた時、う

ちの畠にあつたのを 死んだあの子

が掘取つて、かついで行つて植ゑたのだ。

十39ノ「略」、兄は「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」といつて、かついで来たつるはしを下へ置いた。

かけ「脚気」(名) 1 かけ

五94ノ「略」、かけで足をほらしてゐる書生さんが、お友だちへ出した葉書には、「略」。

かけ「格好」(名) 2 カツカウかくかう

四34ノ「略」、フクロフハオモ白イカツカウノ鳥デス。

九73ノ「略」、遠く左に見えるかくかうのよい山を指さして、「あれは岩手山だ。」とおつしやつた。

かけ「学校」(名) 66 ガクカウかくかう 学校 ↓ おしのがっこう・こうとうがっこう・しょうがっこう

三10ノ「略」、私ハガクカウカラカヘツテ、ヒヨコヲ見ルノガタノシミデス。

三12ノ「略」、お花はかくかうからかへると、「略」、おかあさんのおてつだひをします。

三28ノ「略」、つつみかかへてかくかうへ つれだちいそぐあねおとと。

三30ノ「略」、「さ、いきませう。」ときやうだいは かくかうさして いそぎゆく。

三48ノ「略」、学校ノ北ニ小高いヨカガアリマス。

三48ノ「略」、村ノ中デ、一バン目ダツノハ私ドモノ学校デス。

三48ノ「略」、学校ノ東ドナリニ二カイヅクリノヤクバガアリマス。

四8ノ「略」、学校ノ式ガスンデカラ、トモダチトムカフノ山ヘ上リマシタ。

四8ノ「略」、学校の行きかへりに道草をくつたり、石をなげたり、生物をころしたりするやうな子どもは、「略」。

四87ノ「略」、明日ハオセツクデスカラ、学校ガヒケトラ、スゲアソビニオデナサイ。

五13ノ「略」、学校からかへつて見ると、廣田君からゑはがきが来てゐました。

五15ノ「略」、ぼちが昨日から病氣で、ごはんをたべませんので、学校に居てもしんばいでしたが、「略」。

五16ノ「略」、学校からかへつて、新しい筆で書き方のおけいこをしました。

五35ノ「略」、遠足のしたくをして学校へ行くと、もう級のものが大分来てゐて、先生もお出でになつてゐました。

五35ノ「略」、学校の門を出て西へ向ひました。

五37ノ「略」、学校

五38ノ「略」、此所を出て、となり村の学校の前へ行くと、先生が「略」、私どもを道に待たせておいて、学校へおよ

りになりました。

五40ノ「略」、べんたうをたべてゐると、さつきの学校の小使さんが麥ゆを持つて来て下さいました。

五40ノ「略」、先生が拜殿にかけてある繪馬のお話をして下さいましてから、「略」、三時ごろ学校へかへりました。

六42ノ「略」、軍隊へ来て、学校でなまけてゐた者は人一倍苦勞をする。

五38ノ「略」、先生が「略」、私どもを道に待たせておいて、学校へおよ

りになりました。

五40ノ「略」、べんたうをたべてゐると、さつきの学校の小使さんが麥ゆを持つて来て下さいました。

五40ノ「略」、先生が拜殿にかけてある繪馬のお話をして下さいましてから、「略」、三時ごろ学校へかへりました。

六42ノ「略」、軍隊へ来て、学校でなまけてゐた者は人一倍苦勞をする。

六98ノ「略」、村の学校のげんくわんの向つて右の落葉松は、「略」。

六98ノ「略」、あの学校がたつた時、「略」。

六99ノ「略」、それが今では学校の二階のまどにとゞいてゐる。

六99ノ「略」、あの子がいくさに行く時に、学校の前でふりかへり、「わたしの植ゑた落葉松が あんなに高くなりました。」

六100ノ「略」、昨日学校で校長に、あの木の事を話したら、「略」。

七64ノ「略」、三萬近き学校に 分れて學ぶわれ／＼の 望に向ふ足なみは 皆一せいにそろふなり。

七52ノ「略」、遠洋航海を終へて、郷里に歸り來れる太平丸の船長は、一日其の町の學校へまねかれて、航海の話

をなせり。

七52ノ「略」、私も「略」、毎日此の學校へ通つて、「略」、あの運動場で遊ん

だり、此の講堂でお話を聞いたり致しました。

七52ノ「略」、今日此のなつかしい學校に來て、皆さんにお話するのは、何よりもうれしいのでございます。

七61ノ「略」、かくて船長は外國より持歸りたる寫眞帖を學校に寄附して去れり。

八68ノ「略」、日本人は八萬人餘も居て、子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、英語で勉強しますが、「略」。

八68ノ「略」、日本人は八萬人餘も居て、子どもは、「略」、歸つて來ると、又日本人の立てた學校へ行つて、日本語で學問をしてゐます。

八73ノ「略」、此所は有名な商業地ですが、りつばな學校もありますし、博物館や圖書館などもたくさんあります。

八79ノ「略」、これは村の税で、村の學校や役場の費用などになるのです。

八79ノ「略」、これは縣の税で、縣立の學校や病院や、其他道路などの費用になります。

八81ノ「略」、くはしいことは又學校で習ふでせう。

八83ノ「略」、信吉にはおととい今年十一になる女の子があるが、生れつき啞なので、「略」、啞の學校に入

八85ノ「略」、學校へ行つて案内をこふと、

小使が出て来た。

八92 7 おとよは〈略〉、もう二年たつて、此の學校を卒業する頃には、りつぱに一人前の事が出来るやうになる。

八92 9 げんに此の學校の卒業生で、商店の番頭になつてゐる者もあれば、裁縫の先生になつてゐる者もあるなどと話された。

八95 6 さうしてみんな一しよに學校の門を出た。

九8 10 園 〈略〉、殊に近年我が國で學校をそここゝに立てたので、子供等はなか／＼上手に日本語を話します。

九15 2 園 朝飯を終へて、妹と共に學校に行く。

九49 9 僕は今日學校から歸るとすぐ、おとうさんのお手紙を持って、精米會社へお使に行つて来ました。

九112 1 園 園 あの中に一番面白き話をよくおぼえ置き、來週學校にて話し方の時間に話し、同級の人々を驚かさんと楽しみ居り候。九月二十日 正男 伯父上様

九113 5 園 園 昨年僕の學校より、君の學校へ御轉任なされ候佐野先生、先頃より御病氣の由承り候。

九113 5 園 園 昨年僕の學校より、君の學校へ御轉任なされ候佐野先生、〈略〉。

九123 1 道雄ハ此ノ時、フト學校ノ級長選舉ノ事ヲ思ヒ出シタ。

九123 2 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長ガ轉校シタノデ、近々後任ノ選舉ヲスルコトニナツテキルノデアツタ。

十78 1 園 此の頃は十分寒くなつて、〈略〉、學校へ行く途中などは、寒いといふよりもいたいやうに感じます。

十92 10 翌日太郎が友だちの正雄・良一と三人連で、學校から歸る時の事であつた。

十106 5 園 寒さきびしき折から皆様には御障もなく、御前様にも日々學校に御通ひなされ候由、安心致し候。

十125 6 園 役場と學校とは村の中央にあり。

十126 4 園 〈略〉、生徒は皆よく之になつて課業にはげみ、學校を思ふ心あつく、卒業後も尚學校の門に出入することを樂しみとせり。

十126 5 園 〈略〉、卒業後も尚學校の門に出入することを樂しみとせり。

十126 7 園 其の利益は、大部分を學校の基本金とし、〈略〉。

十一9 9 其の外各種の學校や、博物館・圖書館等の修養機關、〈略〉、娯樂機關が到る處に散在してゐる。

十一16 5 私は學校で習ふ本でさへ時々見失つて、大さわぎをすることがあります。

十一96 6 〈略〉、父に對して是非學校に入れてもらひたいと願つたけれども、〈略〉。

十一96 7 〈略〉、父は學校へ行つて時

間をつぶすよりも畠に出て働いた方がよいといつて、なか／＼許してくれなかつた。

十一96 9 ところが母のとりなしで終に學校に入ることが出来たので、リンカーンの喜は一通りでなかつた。

十一97 1 學校は四哩餘りも離れてゐたが、路の遠いのは少しもいとはず、毎日毎日元氣よく通學した。

十二10 2 九歳の時始めて學校にはいつたが、〈略〉、先生にもむしろ中以下の生徒と思はれてゐた。

十二115 4 二十五日午後一時から、學校の講堂で村崎工學博士の「電氣の世の中」と題する講演があつた。

十二120 6 園 園 〈略〉、小学校の前を通りては、郷里の學校のおもしろかりしことなど思ひ出し申候。

がつこうえん 〔學校園〕(名) 1 學校園

九77 6 園 今日はいくらもほりをしませう。皆いつものやうに、此所で支度をして、學校園へお集りなさい。

がつこうがよい 〔學校通〕(名) 1 學校通

十一98 3 しかしせつかく始めた學校通ひも、家事のために僅か一年足らずで止めねばならなくなつた。

がつこうどうぐ 〔學校道具〕(名) 1 學校道具

九77 10 さうして大急ぎで學校道具を

かばんにしまひ、めい／＼身輕になつて、校舎の後の菜園に集つた。

がつこうようぐ 〔學校用具〕(名) 1 學校用具

八58 3 園 學校用具ヲ賣ル店ニ、手帳・筆・墨・繪具ナドト記シタル看板ヲ出シ、〈略〉。

かつこく 〔各國〕(名) 4 各國 ↓ せいかいかつこく

十55 3 〈略〉、今では各國共に盛に傳書鳩の改良に力を用ひ、其の飼養を獎勵してゐる。

十一56 園 〈略〉、孔子大いに之をうれひ、如何にもして國家を治め、萬民の苦を救はんものと、廣く各國をめぐりて、用ひられんことを求めぬ。

十一53 7 かうして出來たゴムは、各國の工場に運んで加硫法を行ふ。

十二64 6 園 かくの如く各國の國旗は、或は其の建國の歴史を暗示し、或は其の國民の理想・信仰を表すものなれば、〈略〉。

かつこくじん 〔各國人〕(名) 1 各國人

十一107 5 園 中にも十三四ばかりの子供が、各國人の間にまじりてかひ／＼しく立働ける様を見ては、〈略〉。

かつさい・する 〔喝采〕(サ変) 1 かつさいする 《ーシ》

六87 7 みんな手をうつてかつさいした。

かつじ「活字」(名) 1 活字

十二175図 印刷部にては直に所要の活字を拾ひて之を組み、校正刷を刷りて校正部に廻す。

がつしゅうこく「合衆国」(地名) 1 合衆国 ↓アメリカがつしゅうこく

八673図「略」、此の州は合衆国の中でも、氣候がよくて、其の上地味が肥えてゐますから、略。

がつしゅうこくし「合衆国史」(名) 1 合衆国史

十一992 かうしてイソップ物語やロビンソン、クルーソーや合衆国史等を讀んだ。

がつしゅうする「合唱」(サ変) 1 合唱する「一し」

七104 にいさんが「我は海の子」をうたひ出して、丸山君が合唱した。

かつしよく「褐色」(名) 1 褐色

九174 北國二住ム野ウサギヤ高山ノ上ニ居ル雷鳥ハ、夏ハ褐色デ、枯葉土ノ色ニ似テキルガ、略。

がつす「合」(サ変) 4 合す「一シースースル」

十一239図 やがて勝家また自ら五萬の兵を督し、來りて盛政の軍に合す。

十一283図「略」、秀吉の軍は、此の時既に處々のとりでより來れる守兵と合して、追撃すること頗る急なり。

十二610図「略」、先づイングランドとスコットランドと合するや、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、

藍地に斜白十字の徽章ある後者の國旗とを合して一旗となし、略。

十二622図「略」、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、藍地に斜白十字の徽章ある後者の國旗とを合して一旗となし、略。

かつせん「合戦」(名) 1 合戦 ↓いしがつせん・やしまのかつせん

八144 間もなく合戦が始ると、果して小勢の方が勝つた。

かつたりかつたり (副) 1 かつたり

十二539 かちくと氣ぜはしいのは置時計で、かつたりくと大やうなのは柱時計である。

かつたろう「勝太郎」(人名) 1 勝太郎

四522図 勝太郎、東京のをぢさんからお前の所へゑはがきが來ました。

かつて「勝手」(名) 2 勝手

四433「略」、ひさしうらのくものすを取る、勝手のすすをはらふ、まるでいくさのやうでした。

五337 店・客間・居間・勝手など、これで間数が七つもあるとは、どうしても思はれませんでした。

かつて「嘗」(副) 3 かつて

十一79図 かつて自らいはく、「略」、老の將に至らんとするを知らず。」と。

十一1307図 福田行誡かつて鐵眼の事業を感歎してはいはく「鐵眼は一生に三度一切經を刊行せり。」と。

十二965 かつて釋迦を見捨てた彼等も、其の慈悲圓滿の姿を見ては、思はず其の前にひざまづかざるを得なかつた。

かつてがましい「勝手」(形) 1 勝手がましい「一イ」

八457図 まことに勝手がましい御願でございますが、もう四五日の所おひまを願ひたうございます。

かつどうしゃしん「活動写真」(名) 3 活動寫眞

八615図「略」、芝居又ハ活動寫眞ナドノ興行場ニハ、繪看板アリ、略。

十二1148図 エヂソンの發明せるは電話・電燈・電信・電車・活動寫眞・蓄音機に關するものなど極めて多く略。

十二1176「略」、活動寫眞のフィルムがアーク燈の熱の爲に發火して、多くの死傷者を出した話などを附加へた。

かつどうする「活動」(サ変) 7 活動する「一シースル」

九636「略」、千數百人の乗員が號令にしたがつて、規律正しく活動する其の様は、如何にも目ざましい。

九665 一時間餘りも活動した後であるから、食事のうまいことはいふまでもない。

九1039「略」、北風は略、砲彈の雨の中でも、銃劍の林の中でも、びくともせずに勇ましく活動した。

十812 室の中には、大きなポンプが幾つも、すさまじい勢で活動してゐます。

十856 坑外に出ると、略、あの坑内であえず活動してゐる坑夫の仕事

を、たふといものに思ひました。

十二357図「略」、彼等が大戦後における自國の疲弊を回復するため盛に活動してゐるのには全く敬服しました。

十二596 ねちは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出來たのだと思ふと、略。

かつのぐん ↓あきたけんかつのぐん かつまさ「勝政」(人名) 2 勝政

十一286図「略」、盛政は略、此の時までも飯浦坂にふみ留つて、追來る敵を防ぎ居し弟勝政に引きあげを命じたり。

十一288図「略」、秀吉、勝政の引足になりたるを見て、すかさず鐵砲組に合圖して銃火をあげせかけたれば、略。

かつもと ↓かたぎりかつもと かつやすよし「勝安芳」(人名) 1 勝安芳

十二1255 慶喜から官軍に對する交渉

の全權を委任せられてゐた舊幕府の陸軍總裁勝安芳は、かねてから百万畫策して時局の圓滿な解決を計つてゐた。

かつやすよしとさいごうたかもり〔課

名〕2 勝安芳と西郷隆盛

十二目13 第二十六課 勝安芳と西郷隆盛

隆盛

十二24 6 第二十六課 勝安芳と西郷隆盛

ガツン

ガツンこ〔地名〕3 ガツン湖

十34 図 ガツン湖

十34 図 ガツン湖

十35 3 ガツン湖といつて、廣さが霞が浦の二倍以上もある大きな人造湖で、〈略〉。

かてい

かてい〔家庭〕(名) 1 家庭

十二119 7 最後に博士は〈略〉、家庭における電氣の利用に就いて興味ある話をして壇を下つた。

かてい

かてい〔過程〕(名) 1 過程

十二137 5 しかし摸倣はやがて創造の過程でなくてはならぬ。

がてら

かど〔角〕(名) 2 角

八56 8 図 米屋の小ぞうお得意へ米を運びし歸り途、ひらりと下りて自轉車を角の下駄屋にあづけ置き、〈略〉。

九80 10 圖 〔略〕、「あゝ、あの角の石屋か。」と、誰もうなづく工場あり。

かど〔廉〕(名) 1 廉 ↓ひととかど

七112 図 取扱上不都合の廉あらば口頭又は無料郵便にて申越されたし

かとう

かとう〔下等〕(名) 1 下等

十二13 10 〔略〕、生物は總べて長年月の間には次第に變化し、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。

かとうきよまさ

かとうきよまさ〔加藤清正〕(課名) 2

加藤清正

七目13 第二十三 加藤清正

七97 2 第二十三 加藤清正

かとうきよまさ

かとうきよまさ〔加藤清正〕(人名) 6

加藤清正

七97 3 豊臣秀吉が朝鮮へ向はせた先手の大將は加藤清正・小西行長の兩人でした。

七101 5 清正は大聲で申しました。「加藤清正これまで参上仕る。〈略〉。」

七104 1 図 加藤清正の家來でございます。

八96 7 図 此所ニ名高キ名古屋城アリ。〔略〕、其ノ天守閣ハ加藤清正ノキヅキシ所ナリ。

十一29 6 図 〔承る。〕と、福島正則・加藤清正・同嘉明・平野長泰・脇坂安治・糟屋武則・片桐且元等の荒武者ども、勇みに勇んで突進す。

十一29 8 図 中にも加藤清正は、山際のがけ路にて敵將山路正國に出であひ、片鎌槍をしこいて突いてかゝる。

かとうくん

かとうくん〔加藤君〕(人名) 1 加藤君

九35 8 図 やあ、加藤君、よく來てくれたね。

かどぐち

かどぐち〔門口〕(名) 2 門口

十59 7 図 とあるあばら家の門口に杖を止めて、一夜の宿を貸し給へといへば、〈略〉。

十二40 1 図 實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが、〈略〉。

かどまつ

かどまつ〔門松〕(名) 1 カドマツ

二31 5 図 「モウ五ツネレバ、お正月デス。お正月ノオカザリニハ、ドンナコトヲシマスカ。」「カドマツヲタテマス。」

かな

かな〔仮名〕(名) 1 假名 ↓かたかな

七112 図 数字は大きく 小さいと假名と間違ひます

かな

かな〔終助〕2 かな

十二1 3 図 古のふみ見るたびに思ふかな、おのが治むる國はいかにと。

十二3 5 図 是るくく風のゆくへの見ゆるかな、すゝきがはらの秋の夜の月。

かなあみ

かなあみ〔金網〕(名) 1 金アミ

八47 8 第十三 鷺 〔略〕。金アミノ中ニ飼ハレテ、ジツト止リ木ニ止ツテキルノヲ見テモ、〈略〉。

かないい

かないいちどう

かないいちどう〔家内一同〕(名) 1 家内一同

九84 8 図 信吉の家にては、夕飯後庭先に涼み臺を出して、家内一同涼みたり。

かなう

かなう〔適〕(四・五) 6 かなふ

《ツ・ハ・ヒ・フ》

六84 7 此のまごころが神のおぼしめしにかなつたのであらう、〈略〉。

七33 8 図 船におよぎつかんとてなり。されどかなふべくもあらず。

七104 2 図 清正は上様へお目通がかなはぬはず。

七104 4 図 何故にお目通がかなはぬ。

十一73 5 望がかなつて、宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出来たのは、それから数日の後であつた。

十二61 3 図 雪白の地に紅の日の丸をゑがける我が國の國旗は、最もよく我が國號にかなひ、〈略〉。

かなしい

かなしい〔悲〕(形) 3 かなしい

悲しい 《イ・イク》

三46 2 〔略〕、父も母もしんでしまつて、うちもなくなつてゐて、村のやうすもすつかりかはつてゐます。〈略〉。かなしくて

かなしくてたまりませんから、おとひめのいつたこともわすれて、玉手箱をあけました。

三46 2 かなしくて かなしくてたまりませんから、〈略〉。

五93 6 〔略〕、悲しい事や苦しうな事が書いてありますと、もらひ泣き

をいたします。

かなしがる「悲」(五) 1 カナシガ
ル「悲」

二44 6 オヂイサン ハハラヲタテ
テ、ソノ犬ヲコロシテシマヒマ
シタ。ヨイ オヂイサン ハタイソ

ウカナシガツテ、犬ヲウヅメテ、
ソノ上ニ小サナマツノ木ヲ
ウエマシタ。

かなしげ「悲」(形状) 1 かなしげ
七33 5 獅子はかなしげにほえて、
濱べに立上りたりしが、つと海の中
にをどり入りたり。

かなしみ「悲」(名) 1 悲しみ
十一127 1 図 たまぐ大阪に出水あり。
死傷頗る多く、家を流し産を失ひて、
路頭に迷ふ者數を知らず。鐵眼此の
状を目撃して悲しみにたへず。

かなしむ「悲」(四) 1 悲しむ「
ミ」ひなきかなしむ
十130 3 図「略」、北條高時、後醍醐天
皇を隠岐にうつし奉る。京中の貴賤
男女、此の行幸を悲しみて涙と共に
見送り奉り、「略」。

かなた「彼方」(代名) 1 彼方
十114 8 やがて鯨は再びはるか彼方に
浮上つた。

カナダ「地名」 2 カナダ
九29 4 世界一といはれるナイヤガラ
の瀧は、アメリカ合衆國とカナダと
の國境にあります。

九31 4 「略」、下手へ廻つて、カナダ
の方からはるかに全景を見渡すのも
面白い。

かなたが「金箍」(名) 1 金タガ
七50 9 何時カ私ノウチノツルベノ金
タガガコハレタ時、ツクロヒヲタノ
ンダラ、「略」。

カナダたき「地名」 2 カナダ瀧
九30 3 右にあるのがアメリカ瀧、左
にあるのがカナダ瀧で、此の二つを
合はせてナイヤガラと瀧といふので
す。

九30 6 瀧の幅は、アメリカ瀧が百餘
丈、カナダ瀧が三百餘丈、高さはど
ちらも十五六丈あります。

かなだら「金盃」(名) 1 金タラヒ
六10 8 図 金タラヒニモナレバ、私ノ
ヤウナヤクワンニモナリマス。

かなつんぼ「金盃」(名) 1 かなつん
七92 2 図「略」、「これ、おばあさん、
お前は知つてゐるだらう。」すると
兵士のおばあさんが、「はい、よい
お天氣でございます。」敵はどつと
笑ひました。さうして、「こいつ、
かなつんぼだな。」と言つて、みん
な出て行つてしまひました。

かなぼう「金棒」(名) 1 かなぼう
四48 2 図 十二 かるた取「略」「お
ににかなぼう。」音二郎「はい、と
りました。」

かなめ「要」(名) 1 かなめ
四66 6 赤い扇はかなめのきは

をいきられて、「略」。

かなものや「金物屋」(名) 2 金物屋
六9 2 或晩人ガネシツマツテカラ、
金物屋ノ店デ、ヤクワントテツピン
ガ、ジマン話ヲシ合ヒマシタ。

八60 7 図「略」、金物屋ノ看板ニ、
鍋・釜・庖丁ヲエガクノ類ナリ。

かならず「必」(副) 11 かならず 必
ず

五91 2 毎日かならず新聞を入れに來
る方も四五人はあります。

六7 8 図 しかし三郎、高い山がかな
らず名高い山だとはかぎらない。

八113 8 大將が何か食物の中にきらひ
な物があると見れば、三度三度の食
事に、必ず其のきらひな物ばかり出
して、「略」。

九27 2 図「略」、父の此の願だけは、
しかと心にとめて置いて、必ず仕と
げてもらひたい。

九55 2 図「略」、毎朝引いて出た荷が、
夕方には必ず空になるといふ景氣。

十51 8 図 だから、少しでも餘つたお
金があつたら必ず預金にして置くも
のだ。

十134 1 図 高德此の故事をひきて、や
がて忠臣の起りて勤王の兵を挙げ、
必ず御心を安んじ奉るべきことを聞
え上げたるなり。

十二84 6 図 容貌の異なる汝が彼の
地に行かば、必ずや人に怪しまれ、
なぶりものにせられて、或は命も危

かるべし。

十二85 2 図 我若し彼の地にて死し
たりと聞かば、汝必ず之を白主に持
歸りて日本の役所に差出すべし。

十二88 5 法律は、「略」するための
規則であるから、いやしくも國民た
る者は必ず之を守らなければならぬ。

十二90 2 唯法律は必ず帝國議會の協
賛を経なければならぬが、命令には
其の事がない。

かなり「可成」(副) 4 かなり
九73 5 停車場にはいる手前でまた北
上川を見たが、此所まで來ると川幅
がかなりせまくなつてゐる。

九88 2 図「略」、今結んだ二つの星の
へだたりの五倍ばかりのところに、
かなり大きい星があるだらう。

十87 4 図 それで、機械類もまだかなり
多く輸入されてゐる。

十93 3 其の近道といふのは田のあぜ
道で、途中にはかなり深い小川にか
け渡した一本橋がある。

かに「蟹」(名) 7 カニ「こがに
一10 2 サルガカキノタネヲカ
ニニヤリマシタ。

一10 4 カニガニギリメシヲサル
ニヤリマシタ。

一14 6 アライノヲカニニナゲ
ツケマシタ。

一15 1 カニガシニマシタ。

七80 6 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タ
コ・イカナダガスンデキル。

七80 8 エビノピンノハネタリ、カ

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、池ヤ
川ニスムモノトチガハナイガ、〈略〉。

七80 図 カニ

かぬ ↓はかりかぬ・ひきかぬ・まちか

ぬ・みかぬ・ゆきかぬ・よみかぬ
かね「金」(名) 14 金 ↓おかね・こ

がねいろ・こがねづくり・しろがね・
はりがね・ひきがね

六95 図 金ニハいろくアリマスガ、

中デ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモ
ノ仲間ノ銅デアラウト思ヒマス。

六82 さて主人に火事の話をして、

義捐金のことをいひ出すと、〈略〉、
たくさん金を出した上に、初や豆の

種を分けて上げててもよいと言つた。

七69 8 図 ついては此の中の金を半分

だけお禮のしるしにさし上げます。

七71 2 図 〈略〉、仲間の者が國へ送る

金をあづかつて、此の財布に入れて

來たのでございます。

七71 5 図 小ぶくろの方は私どものだ

んなが國へおやりになる金ですが、

〈略〉。

七71 6 図 〈略〉、だんなは〈略〉、此

の金をあなたにさし上げましても、
おしかりになることはあるまいと思

ひます。

七73 5 図 〈略〉、人からいはれなく金

をもらはうとは思ひません。

七75 5 図 紀州の男は急いで國へ歸つ

て、其の金をまちがひなくとける

やうに致せ。

七75 8 〈略〉、人夫にほうびの金をた

くさんやつたと申します。

九52 2 図 〈略〉、三千ぐらゐの時、年

來の貯金と主人からもらつた金を資
本にして、小さい米屋を始めた。

十一19 1 例へば、借りた金を、返す

約束の日が來ていくら催促されても、

返さない人がある。

十一66 7 それから少し進むと、石や

金を打合はせて火を出す法を考へる

やうになつた。

十一124 4 調べかのは廻るにつれて、

石や木や金の圓板が車輪のやうに廻

つてゐる。

十一127 4 図 喜捨を受けたる此の金、

之を一切經の事に費すも、うゑたる
人々の救助に用ふるも、歸する所は

一にして二にあらず。

かね「鐘」(名) 6 カネ かね 鐘

一32 1 ヒノミノカネガナツテ

キマス。

三51 5 オ寺ノカネモナリ出シマ

シタ。

七57 7 図 それゆゑたえず海の深さを

はかつたり、かねや汽笛を鳴らした
ります。

七57 9 図 〈略〉、かねや汽笛を鳴らす

のは、外の船に自分等の船の居るこ
とを知らせ、衝突をさけるためで

あります。

九62 1 やがて午前五時の鐘が鳴ると、

當直將校が元氣のよい聲で號令をか

ける。

十79 9 合圖のかねが鳴るとすぐ動き

出す。

かねがね「兼兼」(副) 2 かね

十一74 7 図 〈略〉、宣長は「私はかね

が古事記を研究したいと思つてを

ります。

十一99 5 リンカーンはかねが此の

偉人を非常にしたつてゐたので、鬼

の首でも取つた氣になつて一心に讀

續けた。

かねき(名) 2 カネキ

七112 図 發信人の居所氏名を受信人に

知らせる必要あるときは此處又は本
文の終へ片假名にて記すこと カネ

キ

七113 1 図 それで十字だから、うちの

屋がうのカネキを入れて、此の頼信

紙に書きこんでござん。

*かねだか ↓きんだか

かねだきいちろう「金田喜一郎」(人

名) 1 金田喜一郎

七112 図 發信人は自己の居所氏名を成

へく本字にて此處に記すこと 〈略〉

金田喜一郎

かねて「兼」(副) 10 かねて

九4 1 図 暑さも年中此のくらゐのも

のださうで、かねて思つてゐたとは
違ひ、なか／＼住みよいところのや

うです。

十94 2 図 父は「略」。かねてあぶな

いといつて置いた、あの橋を渡つた

のでは無いか。」とたづねたが、

〈略〉。

十一70 10 或夏の半ば、宣長はかねて

買ひつけの古本屋に行くと、主人は

愛想よく迎へて、「略。」といふ。

十一120 4 ジョージは、かねてウエリ

ントン公爵が勲功も高く、りつばな

人物であるといふ事を聞いてゐたの

で、〈略〉。

十二65 8 姉二人は既にさる貴族に嫁

し、妹はかねてフランス王の后にな

ることにきまつてゐた。

十二93 5 かねて釋迦の徳をしたつて

ゐたマガダ國王は、〈略〉。

十二97 7 殊にデーバダッタは、〈略〉、

かねてから釋迦の名望をねたみ、幾
度か彼を害しようとした。

十二112 1 図 かねて此の希望をみたさ

んと思ひゐたるトマス、エヂソンは、

〈略〉。

十二121 1 図 〈略〉、何事も忍耐が第

一とのかねての御教訓に従ひ、一心

に働き候ため、〈略〉。

十二125 5 〈略〉舊幕府の陸軍總裁勝

安芳は、かねてから百万畫策して時

局の圓滿な解決を計つてゐた。

かねもち「金持」(名) 2 金持

四76 2 西の村一番の金持の

むすめさんが、此の人の所へ

およめに來ましたが、〈略〉。

四77 3 それは西の村で、二番

目の金持だといはれたうちに生れた人のでした。

かねもちむら 「金持村」(名) 1 金持村

五七 昔の貧乏村は、今、郡の中でもゆびをりの金持村だと言はれてゐる。

かねる ↓ことわりかねる・たえかねる・みかねる・もうしかねる

かの「彼」(連体) 23 かの 彼

六五 其の五番目の舞姫といふのは、かの萬じゆの姫であつたのでござい

ます。

七六 かの入夫は、少ししてから、何の氣もなく、先程渡賃をあらそつた所へ行つて見ますと、
七五 此の時見すばらしいみなりをした一人の男が、入夫と渡賃を高いやういと言つてあらそつてゐました

が、
七四 川を渡つて、かの男を追つかけました。

七三 かの男はゆめかとはばかり喜んで、財布を幾度かいたゞきましたが、

七二 かの男は「どうぞしばらく」といつて引きとめました。

七 かの男は「それではこまる、ぜび。」といひながら、
七 かの男がわけを話して、どう

「略」。

八五 又マレニハナゾヲ用フルモアリ。彼ノ燒諸屋ノ看板ニ、八里半ト記セルモノ如キハコレニシテ、

八二 彼の水力電氣の如きはそれで、電燈・電車等に用ひる電氣も、もとをたゞせば水の力である。

九四 昨日の敵は今日の友、

へつ、彼の防備。彼はたゞへつ、我が武勇。

一〇 王の日頃信頼してゐるバルメニオ將軍から、王にあてた密書が届いた。

一 程なくフィリップは病室にはいつて来て、うやくしく藥のこップを王にさゝげた。王は片手にそれを受取り、片手にかの密書を取り出して、靜かにフィリップに渡した。

二五 岩の上に残つた船體には、十人許の船員がすがり附いて、聲を限りに救を求めたが、何のかひもなかつた。

略、荒れくるふ海上を見渡したグレース親子は、ふとはるかの沖合に、かの難破船を見とめた。

二八 からうじてボートはかの難破船にたどり着いた。

四六 或夜小僧、住持の居間に來りて、「彼處に行きて、彼の畫師のする様を見給へ。」とさゝやき

ければ、

一四 畫師又かのふすまの鶴に筆を取らず、唯杉戸に

一八 未だ一月もたゞざるに、かの畫師は突然歸り來れり。

二四 傍なる人のいふやう、「此の川は古の蔵川にして、かのをろち退治の傳説あるは此の川の川上なり。」と。

二九 稻佐の濱といふ處なり。かの建御雷命が國主命と會見せられしは此處なりといふ。

四五 「それでは此の月の光を題に一曲。」

五七 暗い箱の中にしまひ込まれてゐた小さな鐵のねちが、不意にピセンセットにはさまれて、明るい處へ出された。

略。女の子は唯じつと見まもつてゐたが、やがてかの小さなねちを見附けて、「まあ、かはい、ねち。」

八四 たま／＼コーニが交易のため大陸に渡らんとするに際し、林藏は

略、切に己をともしなはんことを求む。コーニは「容貌の異なる汝が彼の地に行かば、必ずや人に怪しまれ、なぶりものにせられて、或は命も危かるべし。」とて、

八四 我若し彼の地にて死したりと聞かば、汝必ず之を白主に持

歸りて日本の役所に差出すべし

二九六 さうして此處で父王の心盡くしから送られた五人の友と、六年の間種々の苦行を試みた。

略。釋迦は世を救ふ手始として先づかの五人の友をたづねた。

かのえいぬ 「庚戌」(名) 1 かのえいぬ

一八 六日火海王星衝かのえいぬ

かのえたつ 「庚辰」(名) 1 かのえたつ

一八 四日火かのえたつ

かのとみ 「辛巳」(名) 1 かのとみ

一八 五日水かのとみ

かばう 「庇」(五) 3 かばう

足すべらせてこけかかる

かばふ はずみにあねは

かばん 「匏」(名) 1 かばん

さうして大急ぎで學校道具をかばんにしまひ、めい／＼身輕にな

つて、校舎の後の菜園に集つた。

かひ 「可否」(名) 1 可否

十二89 「略」、第三讀會で法律案全體の可否を議決する。

カピラバスト 「地名」 1 カピラバスト

十二97 續いて釋迦は「略」、更にカピラバストに歸つて、父王・妻子を始め國民を教化して故郷の恩に報いた。

カピラバストおうこく 「地名」 1 カピラバスト王國

十二90 釋迦は今から凡そ二千五百年前、北インドのヒマラヤ山のふもとカピラバスト王國の太子として生れた。

かびん 「花瓶」(名) 1 花びん

十一125 歸りがけに事務所の陳列棚を見せてもらった。皿・コップをはじめ、鉢・びん・花びん・水さしなどがきれいに並んでゐた。

かぶ ↓きりかぶ

かぶ・せる 「被」(下) 2 カブセル

かぶせる 《一セーセル》
六47 一匹三四千粒毛産ムトイフガ、産ンデシマフト、其ノ上ニ砂ヤ小石ヲカブセル。

七89 「あゝ、さうだ。」と言つて、マリイはおばあさんのづきんを取つて、兵士の頭にかぶせました。

かぶと 「兜」(名) 7 かぶと ↓よろいかぶと

六35 敵は船の中から熊手を出して、義經のかぶとに引つけかけようとしま

す。

七19 義貞は馬から下りてかぶとをぬぎ、はるく海上を拜しました。

十一26 盛政は勝つてかぶとのををしめざりし油斷を悔いつゝ、俄にやみの中を退却しはじめたり。

十一30 清正刀を抜かんとするに、かぶとのしころつゝ、じの枝に引つ

かりて、身のはたき自由ならず。

十一31 清正手早くかぶとのをを切つたりければ、かぶとはつゝ、じの枝に残つて、略。

十一33 清正手早くかぶとのをを切つたりければ、かぶとはつゝ、じの枝に残つて、略。

十二30 我が日本のよろひ・かぶと其の他の武器類もたくさん集めてあります。

かぶり ↓ねえさんかぶり

かぶる 「被」(五) 6 かぶる

《一ツーリ》
四40 おかあさんがあたまに手ぬぐひをかぶり、着物の上にちりよけを着て、略。

六69 京都は長い間の都ですから、冠をかぶつて太刀をはいたおかげ様方や、略。

七23 晒木綿のづきんをかぶつて、雨ざらしになつていらつしやるが、何時もお花が上つてゐる。

八24 呉鳳は「それ程首がほしいなら、明日の晝頃、赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」といひました。

八25 果して赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着た人が來ました。

九57 あみ笠をかぶつた父がふり向くと、略。

かぶわけ 「株分」(名) 1 株分

七106 農家ニテハ種時・株分・植替・接木・刈込・取入レ等ヲナスニ、彼岸ヲ目アテトシテ、日ヲ定ムルコト多シ。

かべ 「壁」(名) 9 かべ 壁 ↓しらかべ・しらかべづくり

四32 父「ごむまりをかべになげつけると、はねかへるでせう。」

四33 人のこゑも山の中では、かべにあたつたごむまりのやうに、かへつて來ることがあります。

五95 一針々々、金糸・銀糸でぬひをぬひ、一こてく、大きな土藏の壁をぬる。

八28 大工の家を建て、左官の壁を塗り、船頭の舟をこぎ、農夫の田畑を耕すも、皆手の働なり。

十80 昇降を下りて、あたりを見まはすと、周囲の壁は皆石炭で、それが電燈の光に物すごく光つてゐます。

十83 石炭の壁は安全燈の光に照らされて、黒光りに光つてゐます。

十一95 それは三方が丸太の壁で、一方は明けはなしになつてゐて、戸も窓も床もないものであつた。

十一100 壁のすき間をもつた雨のために、本がすつかりぬれてゐたので、略。

十二53 周囲の壁やガラス戸棚には、いろくな時計がたくさん並んでゐる。

かへい 「貨幣」(課名) 2 貨幣

十一目5 第十八課 貨幣

十一74 第十八課 貨幣

かへい(名) 10 貨幣

十一76 我々の普通に金錢といつてゐる物の中には、金貨を始め、銀貨・白銅貨・青銅貨がある。これらを總べて貨幣といふ。

十一77 又此の外に貨幣の代りに用ひられる紙幣がある。

十一78 我々はこれらの貨幣や紙幣を用ひて物品を賣買し、其の他いろいろの用を辨じてゐる。

十一79 我々は殆ど貨幣・紙幣なくして一日も生活することは出来ぬといつてもよいからである。

十一78 しかし今日の貨幣や紙幣を案出するまでには、人間は實に種々様々なるものを使用してゐたのである。

十一79 石・貝・家畜・獸皮・布・農産物などが、略、それ／＼貨幣

の役目をしたこともあつた。

十一793 それで金屬を用ひることを思ひつき、形の上に種々の工夫をこらして、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。

十一794 かうして出来た貨幣は極めて使用に便利ではあるが、尚場合によつては持運びに不便なので、更に貨幣の代りになる紙幣といふ物を案出した。

十一796 〈略〉、更に貨幣の代りになる紙幣といふ物を案出した。

十一797 今では世界各國、貨幣・紙幣を用ひない國はないのである。

かべぎわ〔壁際〕(名) 1 壁際
十一999 燈が盡きると翌朝すぐ手に取れるやうに、まくらもとの壁際に置く。

かぼちゃだな〔南瓜棚〕(名) 1 かぼちや棚

七946 〈略〉、おちいさんはかぼちや棚につつかい棒を入れたり、菊の鉢を軒下に運んだりされた。

かぼちやばたけ〔南瓜畑〕(名) 1 かぼちや畠

九998 おかあさんと茄子^{なす}をもぎに出たついでに、かぼちや畠を見廻ると、
〈略〉。

かま〔釜〕(名) 3 カマ かま 釜^{かま}

おおがま

六117 飯ヲタクカマモ、物ヲニルナベモ、湯ヲワカス私モ、私ノ乗ル

ゴトクモ鐵デス。

八607 釜・釜・庖丁ヲエガクノ類ナリ。

十1044 にいさんは「此の後にかまへ送つて、〈略〉。」と教へて下さつた。

かま〔釜〕(名) 11 かま 釜^{かま} 窯^{かま} じよう

五382 ちやうどかまを明けたところ

八305 次に其の小屋のそばへ土と石でかまをつく。

八306 かまはさしわたしが一丈ぐらゐ、高さが四五尺ぐらゐで、前には三尺に一尺程のかま口を造り、後の方に煙出の口を明けるのである。

八313 さて山の木をきり倒して、四五尺の長さにきりそろへ、それをぎつしりとかまの中に立て並べ、よくもえるやうに其の上下にそだを置き、又其の上になつたかま土を置いて、打固める。

八318 さうして煙出から出る煙の色で焼加減を見て、かまの外へ引出し、消粉をかけて消せば、かた炭が出来上るのである。

十4710 さうして手當り次第に、何でもひつつかんで行つては窯の中へ投込んだ。

十484 其の夜喜三右衛門は窯の前を離れないで、もどかしやうに夜の明

けるのを待つてゐた。

十487 胸ををどらせながら窯のまはりぐるぐる廻つた。

十489 彼はふるふる足をふみしめて窯をあけにかゝつた。

十491 喜三右衛門は、一つ又一つと窯から皿を出してゐたが、不意に「これだ。」と大聲をあげた。

十一1210 窯の周囲には、八九人の職工が汗を流して働いてゐる。

かま〔鎌〕(名) 6 かま 鎌^{かま} しかた

四747 せいの高い私の目にも、まだお日様が見えない中から、くはやかまを持つてたんぼへ行きました。

七503 鎌ヲキタヘテキタコトモアリマス。

十395 父は腰から鎌をぬきながら、
〈略〉、たき火のそばの切りかぶに腰を下し、鎌をときにかゝつた。

十399 〈略〉、たき火のそばの切りかぶに腰を下し、鎌をときにかゝつた。

十414 やがて父は、鎌を手にして雑木のやぶへはいって行つた。

十一388 なたや鎌などでする草を拂ひ、下枝を伐落して行くと、
〈略〉。

がま〔蒲〕(名) 1 ガマ
四198 早ク川へ行ツテ、シホケノナイ水デカラダヲアラツテ、ガマノホヲシイテ、ソノ上ニコロガレ。

かま・う〔構〕(五) 2 かまふ

八115 信作が落ちたのかまはず馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、
〈略〉。

八381 泣くのもかまはず力まかせに引くとは、情を知らぬ不屈者。

かま・う〔構〕(下二) 1 構ふ

十一237 待ちまうけたる秀吉は、琵琶湖のほとりに十三箇所のとりでを構へ、諸將を配置して防備をさせ怠なし。

かま・え〔構〕(名) 1 構ふ

十761 北の方の山のすそには、松林を後にして右に昌徳宮、左に景福宮の壯大な構がある。

かまきり〔蟻螂〕(名) 1 カマキリ
九199 シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出来テキルノハ、印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。

かまぐち〔窯口〕(名) 2 かま口
八309 かまはさしわたしが一丈ぐらゐ、高さが四五尺ぐらゐで、前には三尺に一尺程のかま口を造り、後の方に煙出の口を明けるのである。

八316 次にかま口から火をつけて、四五日の間、中の木をむし焼にする。

かまくら〔鎌倉〕(課名) 2 鎌倉
十二目8 第七課 鎌倉

十二249 第七課 鎌倉

かまくら 「鎌倉」〔地名〕7 鎌倉 鎌倉

六572 これが萬じゆの姫で、〈略〉うばをつれて、鎌倉をさして上りました。

六574 二人は野をすぎ、山をこえ、なれない道を一月あまりも歩きつゝけて、やうく鎌倉に着きました。

七196 鎌倉へは海陸ともに攻めこむすぎがありません。

七218 義貞は之を見て、「ものども進め。」と、其の遠干がたを眞一文

字に鎌倉として攻めこみました。

七224 鎌倉は一面火の海になつて、賊の大將高時以下北條方は、此の火の中はろびてしまひました。

十689 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、〈略〉。

十708 頃しも鎌倉より、勢ぞろへの沙汰俄に國々に傳はりぬ。

かまくらぐう 「鎌倉宮」(名) 1 鎌倉宮

十二273 鎌倉宮にまうでては、盡きせぬ親王のみうらみに、悲憤の涙わきぬべし。

かまくらげめ 「鎌倉攻」〔課名〕2 鎌倉攻

七目7 第六 鎌倉攻

七184 第六 鎌倉攻

かまつち 「薫土」(名) 1 かまつち

八315 さて山の木をきり倒して、四

五尺の長さにきりそろへ、それをぎつしりとかまの中に立て並べ、よくもえるやうに其の上下にそだを置き、又其の上にねつたかまつちを置いて、打固める。

かまば 「窯場」(名) 4 窯場 窯場

十444 窯場から出て来た喜三右衛門は、縁先に腰を下して、つかれた體を休めた。

十453 喜三右衛門は餘りの美しさにうつとりと見とれてゐたが、〈略〉、又窯場の方へとつて返した。

十476 或日の夕方、喜三右衛門はあわたしく窯場から走り出た。

十4810 朝日のさわやかな光が、木立をもれて窯場にさし込んだ。

がまん 「我慢」(名) 1 がまん

十一861 いや、こゝががまんのしどころだ。

かみ 「上」↓かわかみ・そのかみ

かみ 「守」↓えちぜんのかみ・おおかみ

かみ 「神」(名) 6 神 ↓あまてらす

おおかみ・うじがみ・うじがみさま・おおくにぬしのかみ・おおかみ

五13 大日本、大日本、神のみ

すゑの天皇陛下 われら國民七千萬をわが子のやうに おぼしめされる。

五21 大日本、大日本、われら國民七千萬は 天皇陛下を神ともあふぎ、おやとしたひてお仕へ申

す。

六847 このまごころが神のおぼしめしにかなつたのであらう、一夜大暴風雨がおこつて、海はわきかへつた。

八77 五人の騎手は神に勝利をいのつて、第二のあひづを待ちかまへてゐる。

八262 さて蕃人どもは、呉鳳を神にまつて、其の前で、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。

九112 われ皇子の御身代りとなりて海に入り、神の御心をなだむべし。

かみ 「紙」(名) 4 紙 ↓おてがみ・おんてがみ・からかみ・つつみがみ・てがみ・ひとをまねくてがみ・よしがみ

十一152 のぶ子さんは、成績物が返るとすぐ紙の袋へ入れておいて、學年の終におまともになるのださうです。

十一976 鉛筆や紙も自由には買へなかつたから、家で算術の練習をするには、木のシャベルと炭を用ひた。

十二112 初め彼は紙に炭素を塗って試みしが、思はしき結果を得ず。

十二113 彼の眺め入りしは繪にあらざ紙にあらず、實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

かみ 「髪」(名) 3 かみ 髪 ↓たてがみ

五423 尊はかみをといて、女のすがたになり、〈略〉。

十1051 〈略〉、どれを見てもどれを見ても、一髪髪にさしてみたい。

十二738 〈略〉、此の白い髪や髭を御覽になつたら、姉上もお氣の毒とお思ひになりさうなものなのに、〈略〉。

かみかぜ 「神風」〔課名〕2 神風

六目9 第二十一 神風

六795 第二十一 神風

かみがた 「上方」(名) 1 上方

九513 あの社長さんはもと上方の人で、此の町へ始めて奉公に來たのは、ちやうどお前と同じ十二の年だつたさうだ。

かみがみ 「神神」(名) 2 神々

五555 これは親孝行のほうびに、神々がさづけられたにちがひない。

七988 神々も照覽あれ、戦一つ出來ず、人のかげごばかりいふ石田めとは、此の清正一生中直りは致さぬ。

かみきたぐん ↓あおりけんかみきたぐん

かみさま 「神様」(名) 10 神様

四182 コノ神様 ハサキホド オ通

リニナツタ 神様 ガタノ 弟ノ方 デス。

四187 コノ神様 モ、「ナゼ ナクノカ。」ト オタツネ ニナリマシタ。

四193 スルト 神様 ハ「〈略〉。」ト

六71図 賀茂神社

かもまぶちせんせい 「賀茂真淵」(人

名) 1 賀茂真淵先生

十一713図 あなたがよく會ひたいと

御話になる江戸の賀茂真淵先生が、

先程御見えになりました。

かもめ 「鷗」(名) 2 かもめ

七97 おとうさんにうかぶつたら、

かもめだとおつしやつた。

十二1229図 かもめ飛ぶ海をすべり

て、船は今靜かに歸る、懐かしき

故郷の港。

かや 「茅」(名) 1 かや

六1063図 一切白木造で、お屋根はか

やでふいてある。

かやく 「火薬」(名) 1 火薬

九3610図 レマン將軍も、火薬の爆發

によりて起れるガスの爲に窒息し居

たるを、〈略〉。

かゆし 「痒」(形) 1 かゆし 《キ》

八282図 〈略〉、かゆき所をかくこと

も出來ず、いたき所をさすることも

出來ざるべし。

かよい 小おんかよいなさる・がつこう

がよい

かよう 「火曜」(名) 1 火曜

五148 四月二十四日 火曜 晴

かよう 「斯様」(形状) 3 かやう

十687図 かやうに落ちぶれてはゐる

ものの、御らん下さい、〈略〉。

十一475図 夜明けて住持、畫師に

向ひて、「今日かき給はん鶴の姿は

かやうなるべし。」と、夜中に畫師

のしたる様をまねて見するに、〈略〉。

十二231 買ふ人の無智に乗じて安い

品を高く賣付け、見本には精良な品

を使つて、實際の注文に對しては粗

惡なものを送るやうな事は、人とし

て爲すべからざる事である。又單に

損益の點から見ても、かやうな仕方

は唯一時の利益を得るに止つて、永

續することが出來ないから、〈略〉。

かよう 「通」(五) 4 通ふ 《一ツ・

一ハーフ》

七525図 私も子どもの時には、毎日

此の學校へ通つて、〈略〉、あの運動

場で遊んだり、此の講堂でお話を聞

いたり致しました。

十317 〈略〉、此の地峽を切通し、平

かな掘割を造つて、太平・大西兩洋

の水を通はせることは到底出來ぬ事

であつた。

十566 〈略〉、飼養所から食事所へ通

つて食物を取るやうに馴らして、其

の往來を利用するのである。

十845 炭車が一ぱいになると、馬方

がそれを馬に引かせて、電氣機關車

の通ふ道まで運んで行きます。

から 「空」(名) 2 カラ 空

六327 カラノ荷車ヲヒテ行クノハ、

八百屋ヤサカナ屋デ、買出しニ行ク

ノラシイ。

九552図 毎朝引いて出た荷が、夕方

には必ず空になるといふ景氣。

から 「殻」(名) 6 カラ 殻 ↓かい

がら

三576 ニハノモモノ木ノネモ

トカラ、カラヲキタセミガハ

ヒ上ツテキマス。

三581 チャウド私ノ目ノ前デ

トマツテ、カラヲヌギハジメマ

シタ。

三591 コノ大キナモノガ、ヨク

アノカラノ中ニハイツテキタ

モノダトオモヒマシタ。

七825 指輪ヲ樹留ナドニハメル美シ

イ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアル

ノデアル。

九57図 實の中にはかたい殻があつ

て、其の内がはに白い肉のやうなも

のがあります。

九1310図 物置の前なるあき箱より、

しづみの殻を取出し、細かに打ちく

だく。

から (格助) 486 カラ から ↓おとう

とからあにへ・おりから・けいじよう

のともから・こぞうからしゅじんへ・

これから・サンフランシスコから・シ

カゴから・しゅじんからこぞうへ・

ジュネーブから・それから・ちちか

ら・とうきようからあおもりまで・と

うげからまちへ・ニューヨークから・

にゆうえいしたあにから・パリーか

ら・ベルダンから・ベルリンから・み

るから・ロンドンから

一331 ハシゴノアトカラマトヒ

ガイキマス。

一335 マトヒノアトカラポンプ

ガイキマス。

一466 〈略〉、モモガニツニワレ

テ、ナカカラオホキナヲトコノ

コガウマレマシタ。

二165 人ガボツボツタンボカラ

カヘツテキマス。

二222図 ドコカラキタノカ、

トンデキタ木ノハ、〈略〉。

二233図 ドコカラキタノカ、

トンデキタ木ノハ、〈略〉。

二431 ヨイオヂイサンガソコロ

ホツテミマス、土ノ中カラ、

オカネヤタカラモノガタクサン

デマシタ。

二461 ソノウスデ米ヲツキマ

スト、ウスノ中カラ、マタオ

カネヤタカラモノガデマシタ。

二566図 コレカラユビノクミカ

タヲヲシヘマスカラ、ミンナデ

ヤツテゴランナサイ。

二586 〈略〉、日ヤ月ガデテキ

ナカツタリ、アカリガツイテキ

ナカツタリスレバ、ワタクシハ

アナタカラハナレマス。

二684 サクラガサクノハコレ

カラデス。

二686 ナノ花ガサクノモコ

レカラデス。

二687 テフテフガマフノモコ

レカラデス。

二717 ムカシ 大江山 ニシユテン
ドウジ トイフワルモノガキマ
シタ。山カラ出テ、モノヲトツ
タリ、略。
二731 ソコデ天子サマカラ、ラ
イクワウトイフツヨイ大シヤウ
ニ、シユテンドウジヲタイヂセ
ヨト、オホセツケニナリマシタ。
三14 テフテフハ花カラ花ヘ
ヒラヒラトマヒ、ハチハセツセ
トミツヲアツメテキマス。
三22 略、ムギ畠ノ上ニハア
サハヤクカラヒバリガサヘツ
ツテキマス。
三43 又一シキリキテキガナツ
テ、エントツカラムクムクトマ
ツクロナケムリガ出マス。
三53 二三日マヘカラメンドリ
ガスニツキマシタ。
三74 略、オヤドリノムネノ
トコロカラ、ヒヨコガ小サナア
タマヲ出シテ、ピヨピヨトナイ
テキマシタ。
三102 私ハガクカウカラカヘツ
テ、ヒヨコヲ見ルノガタノシ
ミデス。
三118 うちの子ねこは かは
いい子ねこ、略、まりとざ
れては えんからおちる。
三122 お花はがくかうからかへ
ると、略、おかあさんのおて
つだひをします。

三213 略、下のほうからかさ
かさいはせてかけ上つてくるも
のがあります。
三227 又とりはじめて、二人は
たくさんとつてからくらべてみ
ました。
三255 むぐらもちでもとほつた
やうに、土がところどころもち
上つてゐます。そこから竹の子
が出るのです。
三321 「略」。と村の人から
いはれるほど、いつもきげんよ
くうたをうたふぢいさんです。
三331 略、そのにぎやかな中
から、「略」。五ぢいさんの
うたふこゑがきこえます。
三406 うらしまはかはいさうに
おもつて、子どもからそのかめ
をかつて、海へはなしてやり
ました。
三412 それから二三日たつて、
略。
三465 あけると、箱の中から
白いけむりがぱつと出て、うら
しまはたちまち白がのおぢい
さんになつてしまひました。
三497 キヨネンデキ上ツタ新道
ハ、村ヲ東カラ西ヘ、マツス
グニツキヌイテキマス。
三571 それからは一しやうけん
めいになつて、毎日字をならひ
ました。

三576 ニハノモモノ木ノネモ
トカラ、カラヲキタセミガハ
ヒ上ツテキマス。
三587 スコシタツテカラ又来テ
見マス、モウリツパニセミ
ニナツテキマス。
三703 たんすやつづらから着物
を出して、風通しのよいとこ
ろにかけてあります。
三768 ソコデカウモリハシカタ
ナシニ、略、クラクナツテカ
ラ空ヲトビマハルヤウニナツ
タトイヒマス。
三778 えんがには、夕方から
いもやだんごをつくゑにのせ
て、お月さまにそなへてありま
す。
三782 今日私が川の土手から
とつて来たすすきも、花いけ
にさしてそなへてあります。
三787 だれか川上の方で、さ
きほどからふえを吹いてゐま
す。
三838 どこからかよいにほひ
がして來ますので、見上げます
と、略。
四12 うちがみさまの森で、あ
さからたいこのおとがします。
四16 おひるすぎに、をぼさんの
うちからおとよさんと太郎
さんが來ましたので、略。
四86 學校ノ式ガステンデカラ、

トモダチトムカフノ山へ上リ
マシタ。
四107 風に吹かれて、なま土
ふんで、今日も朝からせい
出すおや子。
四238 略、とだなからうでた
くりをおぼんに一ぱい持つて
來て下さいました。
四247 えんさきのさざんくわに、
目白が二は來てゐて、枝から
枝へとんでゐます。
四265 私どもの町でも、この
あひだから電とうがつくやう
になりました。
四368 モズハ小サイガ、マケヌ
氣ノ鳥デスカラ、高イ所カラ
トンデ來ガケニ、フクロフノ
カホヲケツテ、略。
四388 たび人のぐわいたうをぬ
がせた方が勝といふことに
きめて、先づ風からはじめまし
た。
四396 日は雲のあひだからや
さしいかほを出して、あたたか
な光をおくりました。
四416 たんすをうごかすと、其
のうしろから物さしと花子の
お手玉が出來ました。
四504 これから友一はだんだん
あせり出しました。
四523 勝太郎、東京のをちさん
からお前の所へゑはがきが

来ました。

四53 山國のものが「日は山から出て、山へはいる。」といへば、〈略〉。

四54 島國のものが「いや、海から出て、海へはいる。」といつてあらそひます。

四54 そこへ宿屋のていしゆが来て、「へええ、日は屋根から出て、屋根へはいるものではございませんか。」

四56 山の中からころげ出て、人にふまれたかしのみが、しひを見上げてかういつた。

四60 私ハ昨日大工サンカラ木ノキレヲタクサンモラツテ、〈略〉。

四61 屋島のたたかひに、〈略〉へいけ方から舟を一そうこぎ出して来ました。

四66 しばらく目をつぶつて、神様にいのつてから目をひらいて見ると、〈略〉。

四68 たいそうよくなれて、私の手から糸をたべるほどになつて居ました。

四72 一本杉のふところからお月様がお上りになつた。

四74 私は東の村の今の村長さんのおぢいさんやお婆あさんを其のわかい時から知つて居ました。

四74 せいの高い私の目にも、まだお日様が見えない中からはやかまを持つてたんぼへ行きました。

四76 今の村長さんのおとうさんもおとなしい人で、小さい時からよくはたらきました。

四76 今の村長さんも子どもの時からすなほで、なげけぶかい人でした。

四77 此の人は小さい時からいたづらもので、〈略〉。

四78 私の下で、長い間しょんぼりとして居まして、日がくれてから村へはいました。

四83 ひるのごはんをたべてから、へいえいを見せてもらひ、〈略〉。

四91 九つとなり、七つとなつたころからは、遊事にも、兄が弓をひけば、弟はたちをふりまはし、〈略〉。

四96 二人はすかさずうち取つて、〈略〉、父がうたれてから十八年目にめでたくのぞみをとげました。

五35 「〈略〉。せきはあれにします。」といつて、此の間からあいていたせきをおさしになりました。

五41 此の方は中村さんといふ人で、今度遠い所から来て、今日から此の級へはいる方です

五41 〈略〉、今日から此の級へはいる方です。

五52 氣がさつぱりしてゐて、二三日たつと、前からの友だちのやうになりました。

五81 ある時、出雲の國のひの川のはたをお通りになりまして、川上から箸が流れて来ました。

五13 今日から日記をつけることにしました。

五13 學校からかへつて見ると、廣田君から糸がきて来てゐました。

五13 學校からかへつて見ると、廣田君から糸がきて来てゐました。

五14 朝、おさらひをすましてから、春子とつくしをつみに行きました。

五15 ぼちが昨日から病氣で、ごはんをたべませんので、學校に居てもしんばいでしたが、〈略〉。

五16 夕方から雨がふり出しました。

五16 學校からかへつて、新しい筆で書き方のおけいこをしました。

五20 此の勳章には功一級から功七級まである。

五22 美しいびらで、一月も前から廣告してゐた島屋の大賣出しは、いよく今日からはじまりました。

五22 〈略〉、いよく今日からはじまりました。

五24 番頭さんたちは、お客から注文をうけては、小ぞうさんたちにさしづをしてゐます。

五24 小ぞうさんたちは、土さうからいろ／＼な反物や帶地をかついで来て、お客の前につみ上げます。

五26 ガントオナジク、ワタリ鳥デ、アタ、カニナツテ、ガンガ北ノ國ヘカヘルコロ、南ノ國カラワツツテ来マス。

五34 せまい中庭から、屋根の上に頭を出してゐるひよる松は、葉がほこりだらけでした。

五35 「おかあさん、お天氣は。」と、とこの中からおき、すると、〈略〉。

五37 大平橋を渡つてから左へをれて、松山の下へ瓦やきを見に行きました。

五40 先生が拜殿にかけてある繪馬のお話をして下さいますから、たんぼの小道へ出て、三時ごろ學校へかへりました。

五45 これから後やまとをぐなの皇子を日本武尊と申し上げることになりました。

五46 昨日からうちの蠶が上りはじめました。

五51 庭へ降ル雨モ、庭ノ高イ所カラ、低イ方へ流れテ行キマス。

五52 カウシテ流れル水ハ、ミゾカラ小川へ、小川カラ大河へ、流れ／＼テ海へ行キマス。

五523 〈略〉、小川カラ大河へ、流れ
くテ海へ行キマス。
五532 山から薪を取つて来て、それ
を賣つて、くらしを立ててゐました。
五543 〈略〉、石の中から酒にた物
がわいてゐます。
五545 喜んで、それから毎日其の
酒をくんで来て、おとうさんに上げ
ました。
五553 いつか此の事が天皇のお耳に
入りまして、わざ／＼奈良の都から
美濃の國へ行幸になりました。
五564 〈略〉、松島・天の橋立・宮島
の三つを、昔から日本三景と申しま
す。
五571 あたりの高い所からもながめ
ますが、多くは舟に乗つて、島の間
を通つて見物します。
五604 森も小山も下に見て、向
ふの田から大空の雲までとゞく弓
のなり。
五642 あれは神明様の森だが、あ
れまでが半道で、あれから町まで一
里ある。
五668 此の村には、向ふの杉山の
すそに、大きな用水池があつて、其
所から水を引くからだ。
五674 來年あたりから掘ることに
なつてゐる。
五688 ところが、今から百三十年
前に、〈略〉。
五704 着手は來年からといふことに

なつて、庄屋は方々の村へ用水池を
見に出た。
五708 いや／＼其の年になつて、庄
屋は普請方をよそからつれて來た。
五744 方々から人夫をやとつて来て、
もう一度土手をつきなほした。
五747 其の賃金をみんな庄屋が自分
のふところから出した。
五757 六月の田植時から七月・八月
にかけて、水はありあまつた。
五796 義家はせ中のうつぽから、か
りまたをぬいて狐を追つかけました。
五845 九月にはいつては雨つゞき
でしたが、四日の日は朝からひどい
雨で、夕方から風もはげしくなりま
した。
五846 夕方から風もはげし
くなりました。
五858 二階のまどからのぞ
いて見ますと、水が表の通をさつと
洗ひました。
五871 うちでも下の雨戸が
たふれて、中からうすやたらひがぼ
かばか流れ出すほどで、〈略〉。
五877 仕合はせに水はそれからふ
えませんでした、町は大い水に
つかつて、〈略〉。
五991 僕は木の上から見て、びく
／＼してゐた。
五998 あぶない時に、友だちをす
ててにげるやうな者には、これから
つきあふな。

五1022 此の停車場から、毎日七八千
人づつの人が乗降りします。
六555 臺灣の新高山さ。これは一
万三千尺からある。
六92 或晩人ガネシヅマツテカラ、
金物屋ノ店デ、ヤクワントテツピン
ガ、ジマン話ヲシ合ヒマシタ。
六121 其ノ外、釘ヤ針ノヤウナ小
サイ物カラ、キクワン車・軍艦ノヤ
ウナ大キナ物マデ、〈略〉。
六234 兩方からおしよせて、ぢんの
間がわづか三町ばかりになりました。
六237 〈略〉、義仲はひそかにみ方の
者を敵の後へまはらせて、兩方から
一度にとつとときのこゑをあげさせ
ました。
六272 こんな寒い日にも、朝早くか
ら、高い木の上をとびまはつて鳴い
てゐる。
六302 蟻は虎の指のまたからくゞつ
て、仲間の者にあひづをしました。
六307 さうして虎の目・鼻・耳・口、
所きらはず食ひつきました、頭のて
つぺんから尾のさきまで、からだ中
すき間もなく。
六333 自轉車が後カラ來テ、カケヌ
ケテ行ツタ。
六338 ベンタウヲサゲテ來ル女工ハ、
サツキカラ汽テキノ鳴ツテキル工場
ヘ急グノデアラウ。
六355 敵は船の中から熊手を出して、
義經のかぶとに引つけようとしま

す。
六397 昨日はとなり村から來てゐ
る歩兵の音吉君と二人で町を見物し
た。
六404 〈略〉、私の村から、今歩兵
になつて來てゐるのは私一人だけな
のだ。
六411 〈略〉、私を入れて村からは
五人も出てゐるが、兵種がちがふと、
兵舎のあり場所もちがふので、めつ
たに一しよになることはない。
六414 どの町村からも、歩兵が一
番多く出てゐるのに、ふしぎと私の
村からは私一人だ。
六416 〈略〉、ふしぎと私の村から
は私一人だ。
六433 十二月十五日 兄から 千
太どの
六457 其ノワケハ、川デ卵カラカヘ
ツテ、海デ大キクナルカラダ。
六461 大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬
ニカケテ、海カラ川ヘ上ツテ來ル。
六461 大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬
ニカケテ、海カラ川ヘ上ツテ來ル。
六477 翌年ノ春ニナツテ、卵カラカ
ヘツタ鮭ハ、川ヲ下ツテ海ヘ行ク。
六553 義仲からは折りかへし返事が
あつて、〈略〉。
六618 萬じゅがかけよつて、らうの
とびらに手をかけますと、「たれ
か。」と、らうの中から申しました。
六621 萬じゅはとびらのすきから手

を入れて、「おなつかしや、母様。木曾の萬じゅでございます。」

六63 1 これから後萬じゅは、〈略〉、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。

六63 6 親を思ふ孝子の心には、頼朝もかんしんして、石のらうから唐糸を出して、萬じゅに渡しました。

六64 8 町ノ叔父サンカラ、幼年玉ニ大キナ磁石ヲイタビイタ。

六69 3 京都を北から南へ流れてゐる川を賀茂川といひます。

六71 7 川の西は水のすぐそばから、すき間もなく家が立ちならんであります。

六72 2 東の方は此の橋のたもとから、川にそつて電車が出来ます。

六72 3 此の電車道から東山のすそへかけて、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、〈略〉。

六73 2 又三條の大橋から川上を見るに、〈略〉。

六77 7 湖の上は朝からひじやうな人出である。

六79 6 博多の沖は見渡すかぎり、元からおしよせた船でおほはれた。

六80 5 我が武士は敵の攻めよせるのを待ちきれず、こつちからおしよせた。

六83 2 味方は後からくつとづいた。

六83 2 味方は後からくつとづいた。

六85 5 それからこゝに六百餘年、ま

だ一度も外國から攻められたことはない。

六85 6 それからこゝに六百餘年、まだ一度も外國から攻められたことはない。

六86 1 見せ物小屋で象を見た。先づ大きなのにおどろいた。たけは一丈からあつた。

六91 5 〈略〉、賊が城の門まで攻上ると、城のやぐらから大きな石を投落して、賊のさわぐ所をさんざんに射た。

六91 7 賊は坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。

六94 1 賊が之を聞いて、くやしがつて攻めよせると、正成は高いがけの上から大木を落させた。

六94 6 或朝、夜明頃、城中からうつて出て、どつとききの聲をあげた。

六95 2 賊が四方から之を目かけておしよせると、城から大石を四五十、一度に落したので、〈略〉。

六95 2 〈略〉、城から大石を四五十、一度に落したので、又何百人かころされた。

六96 7 橋はまん中からもえ切れて、谷そこへどうと落ちた。

六97 6 〈略〉、はじめ百萬騎といった賊も、しまひには十萬騎に減じ、前後から官軍にうたれて、殘少になつて退いた。

六103 6 参拜をすましてから、京都へ出て、二三日見物して歸られるさうです。

六105 7 御門の前でうやうやしく拜禮してから、神殿の御もやうを拜した。

六107 6 参拜をすましてから、二見浦を見に行つて、おみやげに貝細工を買つた。

六108 3 三月十九日 父から 千太どの

七9 6 不意に白い鳥がもやの中からとび立つた。

七13 4 舟で來た人も、をから來た人も入りまじつて、何百人か數へきれない程ゐる。

七16 4 此の蛤は私どもの拾つた中から、大きなのをよつたのでござい

ます。

七18 6 「極樂寺坂の味方があやふうございします。」といふ使の後から、「大將も討死されました。」といふ使が來たが、〈略〉。

七19 8 義貞は馬から下りてかぶとをぬぎ、はるく海上を拜しました。

七24 8 此のおおあさんにむすこが一人あるのださうだがずつと前から南

アメリカへ行つてゐるといふことだ。

七25 2 茶屋から二三町行つた所の右手に、まんちゆう笠をふせたやうな塚がある。

七25 9 馬はたいそう元氣のよい動物で、生れた日からすぐ歩く。

七26 7 武人は昔から之を愛養して、いざといふ時には、それに乗つて出かけた。

七27 9 〈略〉、近年外國から種馬を輸入したので、大いに改良されて、いたる所に良馬を見るやうになつた。

七35 3 大連へ來てから、もうかれこれ七八十日、町のもやうも大分わかつて來ました。

七37 3 船で來れば、神戸から三晝夜、門司からは二晝夜で當地へ着きますが、〈略〉。

七37 4 船で來れば、神戸から三晝夜、門司からは二晝夜で當地へ着きますが、〈略〉。

七38 4 船から陸あげした荷物は、

七38 5 船から陸あげした荷物は、すぐ其所から汽車にのせて、ハルビンへでも北京へでも送ることが出来る。

七42 8 聞けば今朝から五里の山道を、わらちがけで急いで來たのださうだ。

七45 2 信玄の家來は之を見て、後からやりで謙信をついたが、あたらな

い。

七45 8 第六回目にいたつて、信玄から謙信へ、〈略〉、勝つた方のものが川中島を取ることにして

は。」と申しこんだ。

七46 1 戦をはじめてから十二年、

今に勝負がきまらない。

- 七46 翌日武田方からは安間彦六といふ大の男が、〈略〉、上杉方の陣へ向つた。
- 七46 上杉方からは小さな馬に乗つた小さな鎧武者が一人あらはれて、「〈略〉」と名のつた。
- 七48 無念に思つて、武田方から十騎ばかり、木戸を開いて切つて出ようとした。
- 七49 トンテンカン、トンテンカント、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音ガ聞エマシタ。
- 七51 〈略〉、朝カラ晩マデ、相カラズ、トンテンカン、トンテンカント、働イテキマス。
- 七53 私の乗つてゐる太平丸といふのは、〈略〉、乗組人員だけでも二百人からあります。
- 七60 皆さんのうちには、大きくなつてから、商用其の他で、外國へ出かける人もありませう。
- 七61 どうか今から十分海になれて置くやうにしてもらひたいのであります。
- 七64 かの入夫は、少ししてから、何の氣もなく、先程渡賃をあらそつた所へ行つて見ますと、〈略〉。
- 七65 三四里行つて、大きな峠へかゝりますと、上から片はだぬいで、右手につゑをついて、かけ下りて来る者があります。
- 七68 かの男はゆめかとばかり喜んで、財布を幾度かいたゞきました、が、目からはなみだがひつきりなしにこぼれてゐます。
- 七70 あなたから一文でももらふ氣があるくらゐなら、此所まで持つて来はしません。
- 七70 私は此所から百里さきの紀州の者でございます。
- 七73 たとひ親子の者がうゑ死をするやうなことがあつても、人からいはれなく金をもらはうとは思ひません。
- 七75 入夫には此方から手あてを致す。
- 七76 信長はよく夜明前から馬場へ出て馬を乗りなした。
- 七78 信長はかるくうなづいたが、其の後間もなく藤吉郎を草履取から引上げて役人の數に入れた。
- 七85 〈略〉、岸ニ近イ淺イ所カラ二三百尺グラキノ所マデニハ、海藻ガ生エテキル。
- 七87 〈略〉、海藻ハ養分ヲ其ノ體ノ全面カラ吸取ルノデアル。
- 七93 〈略〉、二百十日といふのは立春の日から二百十日目の日のことで、〈略〉。
- 七94 夕方からは雨になつて、風は全く止んだ。
- 七104 秀吉が之を聞いて、幕の中から、「もうよい。通してやれ。」といひましたので、〈略〉。

- 七103 〈略〉、某は四つ五つの頃から親にはなれて、姓も存じませんので、〈略〉。
- 七107 清正はつけひもの頃から、此の方のひざの上でそだつたので、何時か見習つたものと見える。
- 七110 「おとうさん、電報が來ました。」どこからだらう。」
- 七114 あゝ、信吉からだ。
- 八37 庭のすみで、先程からちやらくとすゑの音が聞える。
- 八61 それは氏子の五箇村から、子どもの騎手を一人づつ出して、社の横の池のまはりで競走させて、〈略〉。
- 八71 〈略〉、祭の當日には、おびただしい見物人が、朝早くから宮の境内へつめかけた。
- 八89 始の間はあまり甲乙はなかつたが、半分程の所から一騎後れ、二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、〈略〉。
- 八10 耕造は驚いて、ひらりと馬からとび下り、〈略〉。
- 八12 どうか今日から一年の間、あなたの方の村が五箇村の頭になつて下さい。
- 八15 殿はまだお若くて、これから功名をお立てになる折はいくらもございます。
- 八16 松平正綱の子信綱は幼名を長四郎といつた。九つ時から將軍の若君竹千代のおつきになつた。

- 八16 日が暮れてから、長四郎がそつと屋根つたひに行つて、〈略〉。
- 八18 晝頃、御臺所のおわびによつて、長四郎はやつと袋から出された。
- 八25 〈略〉、亞里山の蕃人にだけは、此の悪い風が早くから止みました。
- 八27 呉鳳は今から二百年程前の人で、亞里山の役人でした。
- 八29 たいそう蕃人のかはいがりましたので、蕃人からは親のやうにしたられました。
- 八23 呉鳳は役人になつた時から、どうかして首取の惡風を止めさせたものだと思ひました。
- 八31 次にま口から火をつけて、四五日の間、中の木をむし焼にする。
- 八31 さうして煙出から出る煙の色で焼加減を見て、〈略〉。
- 八32 これはもと野生のものでしたが、今から千何百年も前から栽培することになつたのだとつてゐます。
- 八32 〈略〉、今から千何百年も前から栽培することになつたのだとつてゐます。
- 八34 間もなくそれから芽が出ましたので、〈略〉。
- 八36 其の子を二人の眞中に置いて、兩方から子どもの手を取つて引合へ。
- 八37 二人の女は「かしこまりました。」と、兩方から引合ひましたが、

〈略〉。

八437 そこで其の反物を出した者を呼出して、買先をたゞし、それからそれと調べましたので、〈略〉。

八452 囲 〈略〉、昨朝あたりから熱が下つて、食事に進むやうになりましたので、やつと安心致しました。

八477 大キサカライツテモ、強サカライツテモ、鷲ハタシカニ鳥類ノ王デアル。

八477 大キサカライツテモ、強サカライツテモ、〈略〉。

八509 はね起きて見ると、土間の大釜の上に積んであるせいろうからは、盛にゆげが上つてゐた。

八531 二日目で小さなおそなへが幾かさねか出来、三日目からは、のし餅が出来た。

八533 二かさね目のせいろうから、ゆげが上るまでに、少し間があつた。

八651 囲 ハワイから出した繪葉書は見ましたらうね。

八654 囲 横濱を出てから、ちやうど十五日目です。

八695 囲 サンフランシスコから三日二晩汽車に乗通して、今日此のシカゴに着きました。

八704 囲 此の繪葉書は此所へ来る途中、汽車の窓から見た牧場の實景です。

八717 囲 ニューヨークは人口からいへば、ロンドンに次ぐ大都會で、七

百萬以上もあるといひます。

八779 囲 「役場へ税を納めに。」「明日にでもなつて、雪がはれてからではいけませんか。」

八807 囲 村役場で、村内の家々から納めるのをまとめて、それ／＼へ送るのです。

八833 もと僕のうちに奉公してゐた信吉が、昨日の朝三年ぶりでハワイから歸つて來た。

八867 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の先から足の爪先までながめたが、〈略〉。

八1001 囲 僕等は一同申し合はせて、今日からは働かないことにしたから、さう思つてくれ給へ。

八1003 さうしてそれから後は、耳は食事の知らせを聞いても、聞かないふりをし、目は食物を見ても、見ないふりをし、手は食物を口へ入れることを止め、足は食堂へ行くことを止めました。

八1031 囲 こんなわけですから、これから後は互に親しみ合つて暮しませう。

八1102 囲 これは年よりからのお願でございます。

八1118 そこで大將が四五歳の時から、大將の父はうす暗い中に大將を起して、往復一里餘もある高輪の泉岳寺へよく連れて行つた。

八1133 すると大將の父は 〈略〉、大

將を井戸端へ連れて行つて、着物をぬがせて、頭から冷水を浴びせかけた。

八1134 大將はこれから後、一生の間「寒い。」とも「暑い。」ともいはなかつたといふ。

八1145 其の時大將は江戸から大阪まで、馬やかごに乗らず、兩親と共に歩いて行つた。

九37 囲 此のトラック島へ來てからもう三月になるので、土地の様子も一通りはわかりました。

九44 囲 それに此の邊一帶の島々は我が國の支配に屬してゐるので、内地から移つて來た人も多く、〈略〉。

九48 囲 内地から來て先づ目につくのは植物で、其の中でも殊に珍しいのはコ、椰子の木やパンの木などです。

九59 囲 實の中にはかたい殻があつて、其の内がはに白い肉のやうなものがあります。これから椰子油を取り、石鹼・蠟燭なども造るのださうです。

九82 囲 〈略〉、波の靜かな所でふなばたからのぞいて見ると、〈略〉。

九164 シタガツテ敵ニオソハレル心配モ少ク、又コチラカラ敵ヲオソフノニモ都合ガヨイノデアル。

九2210 囲 しかし此の農學といふ學問は、種々様々の事を、實地と學理の兩方から調べて行かねばならぬので、

〈略〉。

九239 囲 それから諸國を歩き廻つたすゑ、〈略〉、此の山中へ來たのである。

九2710 これは今から百三十年ばかり前に、下野の國足尾山中の旅人宿で起つた事で、〈略〉。

九295 廣さが千數百里もある、海のやうな湖から流れる大きな河が、〈略〉。

九312 〈略〉、もう／＼と立ちこめる水煙の間から近く瀧をながめるのもよく、〈略〉。

九314 〈略〉、下手へ廻つて、カナダの方からはるかに全景を見渡すのも面白い。

九316 殊に遊覽船に乗つて、頭から雨のやうなしぶきを浴びながら、瀧つぽを見物して廻るのは、實に壯快です。

九326 しつとりとしめりを帶びた一すぢの道が、足もとからうね／＼とつゞいて、やがて茂みの中にかくれてしまふ。

九336 すると木のうろから、栗鼠が一匹、けろりとした顔を出したが、〈略〉。

九342 みねからすそにかけての若々しいこずゑの色は、強い日光を浴びて、一面に煙つてゐる。

九475 囲 〈略〉、おとなりからの手つだひと合はせて、植手が八人になつ

て、にぎやかでした。

九四九 僕は今日學校から歸るとすぐ、
おとうさんのお手紙を持って、精米
會社へお使に行つて來ました。

九五一 〈略〉、おとうさんは〈略〉、
あの方の小さい時分からのお話をし
て下さいました。

九五一〇 〈略〉、やうく一人前の番
頭になり、それから又長い間忠實に
勤めて、〈略〉。

九五二 〇 〈略〉、三十ぐらゐの時、年
來の貯金と主人からもらつた金を資
本にして、小さい米屋を始めた。

九五二 〇 うちのおぢいさんはあの人
とは前から友だちだつたので、〈略〉。

九五三 〇 いや、これから先があの人
のほんたうにえらい所だ。

九五三 〇 社長さんが銀行の頭取にな
つてからちやうど十年目の秋、〈略〉。
銀行が破産しなければならぬ事にな
つた。

九五五 〇 それからだんく商賣の手
を廣げて、〈略〉。

九五六 〇 今日は天氣がよいので、朝か
ら麥を打つ音が方々で聞える。

九五八 〇 何所からかにぎやかな歌が聞
えて來る。

九六四 〇 間もなく當直將校から威勢の
よい號令がかかる。

九六五 〇 下士官が、甲板の吐水口から
ふき出る海水を、桶に汲んでほとん

く流すと、〈略〉。

九六七 〇 軍艦旗を仰いで、心の底まで
清められた乗員は、これから訓練に
取掛るのである。

九六八 〇 午後六時、叔父さんと一所に、
上野驛から青森行の列車に乗つた。

九六九 〇 窓から吹きこむ朝風のひやり
とするのは、餘程北へ進んだ爲だら
う。

九七一 〇 「松島は」「仙臺から三つ
目の松島驛で下りるのだ。〈略〉」

九七二 〇 汽車は此の邊からあの川に
ついて、北へくと走るのだ。

九七四 〇 此の邊から野邊地あたりまで
の間には、所所に放し飼の馬の群れ
であるのが見えた。

九七六 〇 北海道に渡る人は、停車場に
續いた乗船所から汽船に乗るのであ
る。

九七六 〇 東京から此所までは四百五
十六哩もあるのだが、〈略〉。

九七七 〇 今日はいくらもほりを
しませう。

九七八 〇 これこそ僕たちが、一週間も
前から、毎日々々待つてゐた命令だ
つたので、〈略〉。

九七九 〇 當番が農具小屋から、鎌・シ
ヤベルなどいろいろの道具を出して
來た。

九七九 〇 中からみづくしい白茶色の
玉が、じゅずつなぎになつてころ
くと出て來た。

九九〇 〇 西洋では昔から、あの七つ
の星と其の近所の星を一しよにして

小熊の形を想像し、北斗七星と其の
近所の星を一しよにして大熊の形を
想像して、それく小熊座・大熊座
といふ名をつけてゐる。

九九五 〇 いきさんのお友だちの岡田さ
んが旅行からお歸りになつたと聞い
て、〈略〉。

九九六 〇 雪溪は〈略〉、ふもとの村
から三里ばかり登つた所から始つて、
頂上近くまで續いてゐます。

九九七 〇 〈略〉、ふもとの村から三里
ばかり登つた所から始つて、頂上近
くまで續いてゐます。

九九八 〇 あの雷鳥といふ珍しい鳥も、
此のあたりから頂上へ登る途中のは
ひ松の間に居るのです。

九九八 〇 〈略〉、いづれおとらぬ高山
が、南から西へ連なつて、互に雄姿
を競つてゐます。

一〇〇〇 〇 其の隣の畠にしやうがが、根
ぎはの赤い所を少し土からあらはし
て、ぎやうぎよく並んでゐるのも美
しい。

一〇〇一 〇 味方は其の正面から眞一文字
に進んで行く。

一〇〇二 〇 やがてもうくと上る白煙の
間から、怪獸のやうな大砲と、其
のまはりにむらがる人かげが見えて
來る。

一〇〇三 〇 北風は〈略〉、後からかけて

來る味方に追はれて、思はず其の場
から數十間も進んでしまつた。

一〇〇四 〇 〈略〉、思はず其の場から數十
間も進んでしまつた。

一〇〇六 〇 〈略〉、今まで張りつめてゐた
勇氣もくじけて、ゆめからさめたや
うにあたりを見廻した。

一〇一五 〇 〈略〉、オトウサンハ最初カ
ラチャント其ノ人ニキメテキタ。

一〇二六 〇 今日投票ノ爲ニ歸ツタノモ
出發ノ時カラ豫定ナノダ。

一九九 〇 〈略〉、王の日頃信賴してゐる
パルメニオ將軍から、王にあてた密
書が届いた。

一九一〇 〇 それにはフィリップが敵から
大金をもらふ約束で王を毒殺しよう
としてゐるといふ風説があるから、
〈略〉。

一九一二 〇 〈略〉、此の頃墓参りのために
朝鮮から歸つてをられる高橋さんが
來られた。

一九一五 〇 高橋さんの熱心な話は、それ
からそれへと續いて、團員に強い感
動をあたへた。

一九一六 〇 〈略〉、今日は朝から、義雄
君に案内してもらつて見物に行きま
した。

一九二二 〇 此の町では、二歳駒の市が
十日間も續いて、其の間には千頭か
らの賣買があり、〈略〉。

一九二三 〇 〈略〉、此の子馬共を買つた
人たちも、どうか同じやうにやさし

く扱つてくれ、ばよいと、心からのりました。

十247 十一月十二日 兄から信吉どの

十325 此の湖へ兩方の海から掘割が通じてある。

十334 今太平洋の方から此の運河を通るとする。

十335 船は先づ海から廣い掘割にはいる。

十339 底の水道から水がわき出て、船は次第に高く浮上る。

十358 此處から又掘割を走つて、終に洋々たる太西洋に出るのである。

十381 村はづれにある、うちの雜木山を開墾し始めてから、もう一月餘りになる。

十383 父は毎日、兄や木びきの力藏さんと、朝早くから行つて、夕方おそくまで働いてゐる。

十395 父は腰から鎌をぬきながら、
〈略〉。

十402 力藏さんも、
〈略〉、昨日からひきかけてゐるけやきの大木を、大のこぎりでひき始めた。

十405 父は「力藏さん、まあ、一服やつてから始めなさい。」といったが、
〈略〉。

十413 何處からか、ほがらかなひよどりの聲が聞える。

十429 〈略〉、谷向ふのくさむらの中から、けたゝましい羽ばたきの音を

立てて、山鳥が一羽飛立つた。

十442 力藏さんのひいてゐたけやきの大木も、見事に根本から切倒された。

十444 窯場から出て來た喜三右衛門は、縁先に腰を下して、つかれた體を休めた。

十455 日頃から自然の色にあこがれてゐた彼は、
〈略〉。

十4510 喜三右衛門は、其の日から赤色の焼付に熱中した。

十476 或日の夕方、喜三右衛門はあわたしく窯場から走り出た。

十486 一番鶏の聲を聞いてからは、もうじつとしては居られない。

十491 喜三右衛門は、一つ又一つと窯から皿を出してゐたが、不意に「これだ。」と大聲をあげた。

十497 柿右衛門は今から三百年ばかり前、肥前の有田にゐた陶工である。

十523 定期の方は、預けた日から半年とか一年とかきまつた期限が來ないと引出すことが出來ない。

十5210 一體、銀行は人からお金を預つてそれをどうするのですか。

十535 銀行は有餘つてゐる人からお金を預つて、資金の足らぬ人に貸附けるのだ。

十548 鳩を通信に使つたのは、餘程古い時代からの事で、
〈略〉。

十559 普通傳書鳩を使用する方法は、一定の飼養所から他の土地に連れて

行つて、飛歸らせるのである。

十565 〈略〉、飼養所から食事所へ通つて食物を取るやうに馴らして、其の往來を利用するのである。

十579 〈略〉、漁業者が沖から獲物の多少や難船の有様を通知したり、
〈略〉。

十583 又戦争の時戦線から戦状を報じたり、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。

十616 此處から十八町程先に、山本といふ宿場があります。

十746 南大門通から本町通・鍾路通にかけての一帶が、京城での一番にぎやかな處です。

十756 僕はもう南山へ何度も上りましたが、此處からは京城の市街がまるで繪のやうに見えます。

十787 こちらでは昔から之を三寒四温といつてゐるさうです。

十7910 地下水のしづくが、四方から雨のやうに落ちて來る。

十807 此處から方々へ坑道が通じてゐて、
〈略〉。

十818 ポンプ室を出てから小道へはいりました。

十8110 安全燈をたよりに歩いて行くと、不意に足もとからねずみが一匹飛出しました。

十847 今から四百年許前の事ださうです。

十851 それから『燃える石』とい

ふひやうばんが高くなつて、
〈略〉。

十864 種々の品物が遠く外國から輸入されるのは、主にこれ等の事情からである。

十865 種々の品物が遠く外國から輸入されるのは、主にこれ等の事情からである。

十868 それで、印度支那半島あたりから年々輸入してゐる。

十8610 又毛織物の原料になる羊毛は、
〈略〉、オーストラリア・南部アフリカなどから輸入する。

十8710 又外國から原料を輸入し、それに加工して、更に外國へ輸出する事も少くない。

十882 綿花は主に印度やアメリカ合衆國から輸入し、それに加工して綿糸や綿織物を造る。

十9210 翌日太郎が友だちの正雄・良一と三人連で、學校から歸る時の事であつた。

十934 太郎は前から父に、「あの橋は危険だから決して渡つてはならぬ。」と固く禁ぜられてゐたのであるが、
〈略〉。

十938 すると橋はまん中から折れて、三人は水中におちいつた。

十952 僕は殘念でたまらなくなつたので、
〈略〉、自分から先に立つて渡つたのです。

十1016 熱帯地方から持つて來たのだから、かうして年中六七十度以上

の暖さの處に置かなければいけないのだ。

十102 葉の先からつるを出して、五

十103 建物に此處から右に折れる。

十104 其處から熱い湯を管で各室

へ送つて、適當に暖めるやうになつてゐるのだ。

十104 其處から又右に折れると、細

長い室一ぱいに、目もさめるやうな草花が並べてある。

十106 寒さきびしき折から皆様

には御障もなく、御前様にも日々學校に御通ひなされ候由、安心致し候。

十113 もうくち立ちこめる白煙の間から見ると、すさまじい波を起して、鯨は海底深く沈んだ。

十115 さすがの鯨も次第に弱つて、船から五十メートルぐらゐの處まで引寄せられた。

十119 霜よけのわらの間から、黄色い夏みかんがちら／＼見えてゐるのも珍しい。

十120 公は此處にうつされてから一歩も外へは出ないで、三年の歳月を送られたさうである。

十120 8 あちらこちらの村々からは細い煙が立上つてゐる。

十124 かいふ點から、いろ／＼の美質をもつてゐることをよく見定めて、略。

十130 しかも我々に最も近いあの

太陽でさへ、地球からは凡そ三千八百萬里も離れてゐる。

十185 揚子江の河口に達する。それから五十海里ばかりさかのぼつて、黄浦江といふ支流に入り、略。

十115 一年生の時からの成績物も見せていたゞいて、其の始末のよいのに感心してしまひました。

十115 7 「成績物は略、皆一生の記念になるのだ。」と思ふと、私も急に一年からのをまとめたくなりましたが、略。

十117 しばらくたつと、おかあさんが臺所の方から、「メリンスのふろしきを持つておいで。」とおつしやいました。

十117 6 のぶ子さんはすぐたんすの小引出から取出して、持つていらつしやいました。

十118 お暇してから、私はひとりで歩きながら自分の始末のわるいことを考へて、つく／＼恥づかしくなりました。

十119 其の場合に貸主から借主を裁判所に訴へると、略。

十140 使ひみちによつて、三十年目から五六十年目ぐらゐの間に伐るのださうだから、略。

十149 一體ゴムは何からどうして造るのであらうか。

十149 8 ゴムは、熱帯地方に産する

或植物からとる白色の液を原料として、製造したものである。

十150 2 今日世界におけるゴムの大部分は、此の木から取つたものである。

十150 3 此の種のゴムが、昔主として南米ブラジルのパラ州から産出したので、パラゴムの名が生じたわけである。

十150 6 ブラジル邊でゴムを製造するには、山野に自生するゴムの木から原料をとるのであるが、略。

十152 3 切付といふのは、ゴムの木から液をとるために、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。

十152 6 元來ゴム液は、幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るものであるから、略。

十152 8 此の傷から出て来るゴム液は、流れて下のコップにたまるのである。

十154 2 電氣の機械や、蓄音機の圓盤などに用ひるエポナイトといふものもゴムから造る。

十154 8 熱帯の暑さにたへかねてゐた船員等は、船長から泳を許されたので、我先にと海に飛込んだ。

十155 3 二人は外の者からずつと離れて、沖のうきを目當に泳ぎくらをしてゐた。

十155 8 これまでにこ／＼してながめてゐた老砲手は、略、甲板から

しきりに勵ました。

十156 1 老砲手が驚いて向ふを見ると、船から三四百メートルの處に、大きなふかの頭が見える。

十160 9 瀧川から根室行の汽車に乗ると、約五時間後に右狩と十勝の境にある狩勝の峠にかゝる。

十166 3 略、自然の火から、火種を取つたものであらう。

十166 10 マツチは今から約百年前に發明されたものである。

十168 2 かくして人は、暗黒の世界からだん／＼光明の世界へと、みちびかれて來たのである。

十168 4 人は生活上の必要から發火法を工夫し、燃料を研究し、火の熱と光とをあらゆる方面に利用することを考へて來た。

十170 7 若い頃から讀書がすきで、將來學問を以て身を立てたいと、一心に勉強してゐた。

十171 7 略、御旅行がすんで、これから參宮をなさるのだそうです。

十173 8 望がかなつて、宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出來たのは、それから數日の後であつた。

十175 1 私も實は我が國の古代精神を知りたいといふ希望から、古事記を研究しようとしたが、略。

十185 8 その中、先に進んでゐた者が二三人列から離れて船に上つた。

十186 7 船の上からはしきりに勵ま

- してくれる。
- 十一87 夕食をすましてから、縁がはへ出て涼む。
- 十一88 園 おとうさん、二百十日は立春から二百十日目に當るのですね。
- 十一88 園 これは一月一日から數へた日數だ。
- 十一88 弟は〈略〉、すぐ二百十日の通日から立春の前日の通日を引去つて、「成程、二百十日目だ。」
- 十一89 園 それも立春から數へると八十八日目で、稻をはじめ大ていの物の種をまく目安になる日だ。
- 十一92 4 園 〈略〉、日本では明治五年まで太陰暦を用ひてゐたが、其の翌年から太陽暦を用ひた。
- 十一92 8 園 太陽暦は春分から春分までを一回歸年といつて、それを本としてこしらへたものだ。
- 十一94 7 〈略〉リンカーンは、今から百年餘り前、ケンタッキー州の片田舎の貧しい家に生れた。
- 十一95 4 家が出來てから次に土地を開きにかゝつた。
- 十一95 5 リンカーンは其の頃からもう父の手助をしなければならなかつた。
- 十一96 3 唯通りがかりの旅人から珍しい話を聞いては、僅かに心をなぐさめてゐた。
- 十一98 4 それからは又父の手助をしたり、人にやとはれたりすることに
- なつたが、〈略〉。
- 十一98 8 ところが家に書物がないばかりでなく、近くに圖書館もないので、どうしても人から借りて讀む外はなかつた。
- 十一99 4 或時近邊の人からワシントン傳を借りたことがある。
- 十一99 7 晝の仕事の合間に讀むのは勿論、夜は床に就いてから燈が盡きるまで讀む。
- 十一119 1 園 僕はおとうさんから、誰が來ても此の門をあけてはならないと言ひつけられてゐるのです。
- 十一123 9 こちらを見ると、そこではちよつと吹いて型に入れ、又吹いて型から出す。
- 十一29 8 チャールス、ダーウィンは今から百年餘り前イギリスに生れた。
- 十二9 9 ごく小さい時分から動植物に深い趣味を持ち、又物を集めることが好きで、貝殻や鑽石などを室内に並べては一人で楽しんでゐた。
- 十二12 9 かくて世界の各地をめぐるつて、歡喜の眼を輝かしながら、博物學や地質學の實地研究につとめ、種々の材料を集めて本國に歸つたのはそれから五年の後である。
- 十二14 1 さうして廣く動植物を研究して、生物は總べて〈略〉、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。
- 十二14 2 これが有名な進化論で、學界を根本から動かしただものである。
- 十二19 10 調子のよい蜜柑取歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはして、何處からともなくのどかに聞えて來る。
- 十二20 7 黒い程こい緑の葉の間から、其の一つ／＼が日の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。
- 十二21 10 小春日和の暖さにとけて、其處からも夢のやうに船歌が聞えて來る。
- 十二23 1 又單に損益の點から見ても、かやうな仕方は〈略〉、永續することが出來ないから、〈略〉。
- 十二37 5 〈略〉、或小さいみすぼらしい家の前まで來ると、中からピアノの音が聞える。
- 十二51 4 湖の水は東岸から奥入瀬川となつて流れ出るのであるが、〈略〉。
- 十二55 3 不意にぱた／＼と音がして、小さな子どもが二人奥からかけ出して來た。
- 十二59 8 時計師は仕上げた時計をちよつと耳に當ててから、ガラス戸棚の中につり下げた。
- 十二60 6 ねぢは、「〈略〉。」と心から満足した。
- 十二66 7 園 先づ姉のゴネリルから言つてみよ。
- 十二67 1 園 昔からあつた孝子のどの人よりも厚い眞心をもつて、父上にお仕へ致しませう。
- 十二69 7 娘の答に失望した王は、例
- の烈しい氣性から、苦り切つて、「〈略〉。永の勘當だ。」と言渡した。
- 十二74 4 やがて眠から覺めた王は、〈略〉。
- 十二76 8 だいたい網は身網と垣網と二つの部分から成つてゐて、非常に大きなものである。
- 十二77 7 〈略〉、海岸から沖の方へ二三百間も長く垣網を張り、其の先へ身網を張る。
- 十二78 9 そこで數そこの船に分乗した漁夫が、えんや／＼と掛聲を掛けながら身網を一方からたぐつて行く。
- 十二88 7 政府から提出された案は先づ議會の一院で討議される。
- 十二89 4 〈略〉、兩院の意見が一致すれば、最後に議決した議院の議長から國務大臣を経て奏上する。
- 十二89 5 又貴衆兩院の何れから提出された案は、他の一院のみで討議し、可決すれば同じ手續によつて奏上する。
- 十二90 9 釋迦は今から凡そ二千五百年前、北インドのヒマラヤ山のふもとカピラバスト王國の太子として生れた。
- 十二91 6 木陰からじつと見てゐた彼は、〈略〉。
- 十二92 7 こんな事を次から次へと考へては、遂に心の苦しみにたへられなくなつて、「〈略〉。」と思ひ立つに至つた。

十二93 さうして此處で父王の心盡くしから送られた五人の友と、六年の間種々の苦行を試みた。
 十二97 今や釋迦は衆星の中の満月の如く國中から仰がれる身となつたが、略。
 十二97 殊にデーバダッタは、略、かねてから釋迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。
 十二97 或時の如きは、釋迦が山の下にゐるのを見附けて、上の方から大石をころがしたが、略。
 十二98 危篤の報が傳はると、これまで教を受けた人々が四方から集つて別れを惜しんだ。
 十二101 豊前の中津から南へ三里、激流岩をかむ山國川を右に見て、川沿の道をたどつて行くと、略。
 十二104 略、左手の山は次第に頭上にせまり、遂には路の前面に突立つて人のゆくてをさへぎつてしまふ。これからは世に恐しい青のくさり戸である。
 十二104 略、昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。
 十二109 手傳をする者が一人へり二人へりして、はては又村人全體が此の老僧から離れるやうになつた。
 十二110 かうして、老僧が始めてのみに絶壁に下してからちやうど三十年目に、略。

十二115 二十五日午後一時から、學校の講堂で村崎工學博士の「電氣の世の中」と題する講演があつた。
 十二125 慶喜から官軍に對する交渉の全權を委任せられてゐた舊幕府の陸軍總裁勝安芳は、略。
 十二125 略 舊幕府の陸軍總裁勝安芳は、かねてから百万畫策して時局の圓滿な解決を計つてゐた。
 十二135 そこで海外に移住しても外國人から思ひ掛けぬ誤解を受けて排斥されるやうなことも起つて來る。
 十二135 其の原因はいろ／＼あらうが、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、其の主たるものであらう。
 十二136 略、かういふ短所はやがて我が國民から消去するであらうが、略。
 十二137 略、昔から殆ど摸倣のみを事として來た觀がある。
 十二137 習、性となつては、遂に日本人には獨創力がないであらうと自らも輕んじ、外國人からも侮られるから（接助）略 から、略 それであるから、だから
 一374 略 ハナハソレデヨイカラ、ハヲチヒサクシテ、モウーペンカイトゴランナサイ。
 一497 略 「一ツクダサイ、オトモヲシマス。」「ソレナラヤルカラ、ツイテコイ。」

二204 略 ユフベカゼガフイタカラ、キツトクリガオチデキマス。
 二214 略 ソレデハムカフニ木ガアリマスカラ、アノ木ノ下ヘイツテミマセウ。
 二356 略 モチハタイセツナオミデコシラヘタモノデスカラ、イデハイケマセン。
 二567 略 コレカラユビノクミカタヲヲシヘマスカラ、ミンナデヤツテゴランナサイ。
 二725 タイヘン力ガツヨク、テシタモ大ゼイアリマシタ。ソノ上イハヤニコモツテキマシタカラ、ナカナカタイデスルコトガデキマセンデシタ。
 三315 五一ちいさんがその水車のばんをしてゐるからです。
 三443 略 あまり長くなりますから、もうおいとまにいたします。
 三463 かなしくてかなしくてたまりませんから、おとひめのいつたこともわすれて、玉手箱をあけました。
 三654 略 みよ子「五郎さんの舟には、てふてふのせんだうさんがのつたから、かつたのでせう。略。」
 三737 略 ソノトキカウモリハ「私ハ鳥デモケダモノデモナ

イカラ。」トイツテ、ドチラヘモツキマセンデシタ。
 三745 略 私ハカラダガネズミニニテキルカラ、ケダモノダ。
 三752 略 私ハ羽ガアルカラ、鳥ダ。
 三873 略 あまりおかはいさうですから、おかへし申します。
 四81 この二十五日はおちいさんのめい日ですから、たくさん取つてそなへるつもりです。
 四126 アル日ハマベヘ出テ見ルト、ワニザメガ居マシタカラ、略。」トイヒマシタ。
 四144 略 オマヘタチノセ中ノ上ヲアルイテ、カゾヘテミルカラ、ムカフノヲカマデナランデミヨ。
 四165 白ウサギハイタクテタマリマセンカラ、ハマベニ立ツテ、ナイテ居マシタ。
 四211 略 アナタハオナサケブカイオ方デスカラ、後ニハキツトオシアハセノヨイコトガゴザイマス。
 四257 略 今日はこんなにもみがおほしてあるから、をぢさんをもはさん早くかへります。
 四341 略 向ふで「ばか」といつたのも、お前が先に「ばか」といつたからです。
 四367 モズハ小サイガ、マケヌ

氣ノ鳥デスカラ、〈略〉、フクロ
フノカホヲケツテ、「キイ
イ」トカチドキヲアゲマス。

四三八 一 フクロフガ鳴クト、其ノ
明クル日ハ天氣ガヨイカラ、
「ノリツケホウセ」ト鳴クノダ
トイフ所モアリマス。

四四三 此のころは大さうちが
やかましくなつたから、すすきは
は大きになつた。

四七五 此の人たちの田や畠
の作り方はていねいでしたか
ら、稲も麥もよそのよりは
よく出来ました。

四七九 一 さむい日のことで、あま
り氣のどくでしたから、私が
風の音をこつとさせてやり
ましたら、〈略〉。

四八七 一 明日ハオセツクデスカ
ラ、學校ガヒケトラ、スグアソ
ビニオ出デナサイ。

五三七 さうして「山田さん」とおよ
びになりましたから、「はい」と答
へますと、〈略〉。

五五七 何でも汽車に二日二ばん乗通
して、こちらへ着いたのださうで
すから、何百里かはなれてゐるの
でせう。

五七五 ツバメハ田や畠ノ作物ニツク
虫ヲ取ツテタバマスカラ、人ノヤク
ニ立ツ鳥デス。

五八五 此所を出て、となり村の學

校の前へ行くと、先生が「ちよつと
用があるから。」といつて、私ども
を道に待たせておいて、學校へおよ
りになりました。

五七六 一 〈略〉、少しでもおけると、
かごのうらや棚のすみなどで、繭を
かけはじめますから、ちつともゆた
んが出来ません。

五八三 まぶしには、かさ／＼といふ
音がしてゐますが、これは蠶が動く
からです。

五八七 一 此の村にはよく水
がありますね。〈略〉。此の村には、
向ふの杉山のすそに、大きな用水池
があつて、其所から水を引くから
だ。」

五九三 一 其のあつめに來る頃に、急ぎ
の封書を入りに來る者が、途中で人
と立話でもはじめると、私は氣がも
めてたまりません。もし間に合はな
いと、向ふへ大そうおくれて着くか
らです。

五九八 一 一人は〈略〉、地にたふれて、
死んだふりをしてゐました。熊は死
人には手着けないと聞いてゐたか
らでございます。

六〇三 一 さうさ、中ほどまでは降つ
てゐるかも知れない。何しろ一万二
千五百尺もあつて、内地第一の高山
だから。

六一〇 一 金や銀ハ〈略〉、ドチラモ
タクサンアリマセンカラ、ネダンモ

高ウゴザイマス。

六一五 一 銅ハソレニヒキカヘテ、金
や銀ヨリモタクサンアリマセンカラ、
シタガツテネダンモ安ウゴザイマス。

六二二 一 私タチノサビルノハ人ガ使
ハナイカラデス。

六二六 一 庭の菊も白い花びらに赤みが
さして來た、霜にあたつたからだら
う。

六三三 一 いや／＼、弓が惜しかつた
のではない。〈略〉、此の弱い弓を取
られて、『これが義經の弓だ。』など
と言はれては、源氏の名折れになる
からだ。

六四二 一 分家の萬藏君などは小男だ
から、ひよつとすると輜重輪卒にあ
たるかも知れない。

六四五 一 お前は今の分では大男にな
りさうだから、砲兵か騎兵になれる
だらう。

六四八 一 叔父サンニ蛙ノ話ヲ聞イタカ
ラ、ワスレナイ中ニ書イテ置カウ。

六五八 一 蛙ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ
魚デモアル。其ノワケハ、川デ卵カ
ラカヘツテ、海デ大キクナルカラダ。

六六六 一 あんな小言を言ふ程だから、
此の義捐が出来たのだらう。

六六九 一 京都は長い間の都ですから、
冠をかぶつて太刀をはいたおかげ
様方や、きれいな着物を着て、牛車
に乗つたお姫様方の姿を、此の川の
水はいくたびとなくうつしたことで

ございませう。

六七三 一 ラシヤヤフランネルトチガ
ツテ、絲ガ細イカラ、氣ガツカナ
イデス。

六八五 一 うちの人はみんな知らずに居
るから、一つ取つて行つて見せよう
と思つて、手を出すと、〈略〉。

七二四 一 此の時義貞が方々へ火をかけ
させますと、濱風が之をあふり立て
たからたまりません。

七三二 一 私は年中航海をしてゐるも
のですから、少し其のお話を致しま
す。

七五八 一 一たい船にはらしんぎとい
ふ物があつて、それで方角をとつて
進みますから、いくらきりが深くて
も、まるでちがつた方へ行くやうな
ことはありません。

七五九 一 又海岸には所々に燈臺があ
りますから、それを見ると、あれは
何所だといふことが分ります。

七六六 一 「なんで又さうあわてて引
つかへします。」「落し物をしました
から。」といひ／＼かけ出します。

七六八 一 まして人通の多い渡場で落
しましたから、たとひとんで行つて
見た所で、もうあるまいとは思ひま
したが、〈略〉。

七七一 一 だんなはななけ深い
方ですから、此の金をあなたにさし
上げまして、おしかりになること
はあるまいと思ひます。

七九七 〔略〕、此の日はよく大風が吹くから、厄日といって、農家ではこくに心配するのださうだ。

七九七 三成は秀吉のお氣に入りですから、秀吉は之を信じて、清正に歸國を命じました。

七九八 十五字までが一音信だが、にごりのある字は二字に數へるのだから、それでは十七字になる。

七九八 それで十字だから、うちの屋がうのカネキを入れて、此の頼信紙に書きこんでござん。

八〇一 相手の信作があゝの通りだから、いづれ又改めてやり直しをしてもらはなければなるまい。

八〇二 こちらの方はどうでもなるから、心配するには及びません。

八〇三 祖母一人孫一人の事だから、五日でも十日でも、一人で寝起の出来るまで、ゆつくり看病してお上げなさい。

八〇四 〔略〕、此の州は合衆國の中でも、氣候がよくて、其の土地味が肥えてゐますから、いろいろな農産物に富んでゐます。

八〇五 此所は工業地で、煙突の煙で空は眞黒だが、大きな公園が幾つもあるから、健康には害がなさうです。

八〇六 其のうちに繪葉書や寫眞帖を送りますから、ゆつくりござらん。

八〇七 あなた、此のお子が返事を

しないのは、あなたの口が見えないからです。

八〇八 おとよは〔略〕、大そうりこうだから、もう二年たつて、此の學校を卒業する頃には、りつぱに一人前の事が出来るやうになる。

八〇九 僕等は一同申し合はせて、今日からは働かないことにしたから、さう思つてくれ給へ。

八一〇 こんなわけですから、これから後は互に親しみ合つて暮しませう。

八一〇 来る十六日は私の誕生日で、ちやうど日曜日ですから、母が私にお友だちをお呼びなさい、おこはでもふかして上げようと思します。

八一〇 叔父さんも相かはらず丈夫で島々を廻つてゐるから、安心して下さい。

八一〇 コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐れ武器ヲソナヘテキルカ、イヤガル味ヤニホヒノアルモノデ、之ニ近ツカウトスルモノガナイカラ、タヤスク見トメラレル方ガカヘツテ安全ナノデアル。

八一〇 廣さが千數百方里もある、海のやうな湖から流れる大きな河が、一大絶壁をみなぎり落ちるのですから、其の壯觀はとても筆や口にはつくされません。

八一〇 それにあの人の事だから、決してあせらず、一軒二軒と得意先

をまして行つて、後には表通へ店を出すまでになつた。

八一〇 一時間餘りも活動した後であるから、食事のうまいことはいふまでもない。

八一〇 どの星かを見おぼえて置いてござらん、寝る頃にはもう位置が變つて見えるから。

八一〇 いや、何月何日の何時には、何所に何星が見えるといふ事が、學問上ではわかつてゐるから、はかられない事はない。

八一〇 それに、たくさん星の中に一つだけ、年中ほとんど位置の變らないのがあるから、まことに都合がよいのだ。

八一〇 北斗七星は何時もあんなにひしやくの形をしてゐて、北極星との關係も常に變らないから、あの星を本にして、すぐに北極星を見つかる事が出来る。

八一〇 それにあの星は何時も眞北に居るから、あれを見つければ、道に迷つた時などにもすぐ方角を知る事が出来る。

八一〇 小熊座と大熊座について、面白い昔話があるはずだから、ねえさんに聞いてござらん。

八一〇 私も餘程前に讀んだのですから、くはしい事はおぼえてゐません。

八一〇 〔略〕、アルカスはそれと知

りませんから、あふなく親身の親を射殺すところでした。

九一六 僕も其の通りになつて見ましたが、急な坂を矢のやうに早くすべるのですから、實に壯快でした。

九一七 まだ青いが早く甘くなるたちだから、もう直に食べられる。

九一八 北風は、主人の手がかうしてくびすぢにささるのが何より好きだつたから、うれしくて、得意さうに頭を高くあげた。

九一九 今日ハ衆議院議員ノ總選舉ダカラ、投票ノ爲ニ歸ツテ來タノダ。

九二〇 シカシ今度ノ候補者ノ中ニ、實ニリツパナ考ヲ持ツテキテ、アノ人ナラバト思ハレル人ガアルカラ、オトウサンハ最初カラチャント其ノ人ニキメテキタ。

九二一 〔略〕、自分ノタフトイ選舉權ヲ棄テルトイフ事ハ、選舉人トシテカリソメニモスベキ事デハナイカラ、カウシテワザ／＼歸ツテ來タノダ。

九二二 それにはフィリップが敵から大金をもらふ約束で王を毒殺しようとしてゐるといふ風説があるから、用心するやうにと書いてあつた。

九二三 そんな風でしたから、ほんの道ふしんなどは、何時も二日はかゝつたものでした。

九二四 二年の年月苦勞して育てて來たものが、急に見ず知らずの人の

手に渡つてしまふのだから、飼主が泣いて別れを惜しむのも、もつともな事です。

十239 市場の様子がよくわかるから、引合はせて見て下さい。

十323 高い土地の上に水をたゝへたのであるから、湖の水面は海面よりずっと高い。

十331 所で、此の高い湖と低い掘割を何の仕掛なしに連結すれば、湖の水は龍のやうに掘割へ落込んで、とても船を通すことは出来ないから、掘割の處處に水門を設けて、たくみに船を上下する様にしてある。

十3610 米國が此の運河を造るに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。

十516 うちに置くと、火事にあつたり、盗人に取られたりする危険があるからね。

十537 貨附の利子は預金の利子より高くしてあるから、其の差だけが銀行の収入になるのだ。

十5610 鳩は一分間に約一キロメートルも飛ぶ力があるから、四五十キロメートルの處を往復して食事するぐらゐは何でも無い。

十7810 告知せしめたい事はまだいろいろありますが、大分長くなりましたから、今日は此のくらゐにして置きます。

十8610 又毛織物の原料になる羊毛は、

我が國ではほとんど産しないから、オーストラリア・南部アフリカなどから輸入する。

十931 本道は遠いから近道を通らう。」と正雄が言ふと、良一はすぐ賛成した。

十935 あの橋は危険だから決して渡つてはならぬ。

十947 父は「なぜ其の時『いゝえ、僕は止められてゐるから渡りません。』と、きつぱりことわらなかつたのか。」

十1016 熱帯地方から持つて來たのだから、かうして年中六七十度以上の暖さの處に置かなければいけないのだ。

十1029 中をのぞいて御らん、何かはいつてゐるやうだから。

十10210 「略」。中をのぞいて御らん、略。」とおつしやるから、そつとのぞいて見ると、略。

十1054 此の温室は南を受けてゐる上に、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに早く咲くのだ。

十111 此の地は交通上重要な位置を占めてゐて、略、支那の各地との取引にもきはめて便利であるから、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。

十1203 ところで、どういふ事をすれば罪になるか、其の制裁としてどのような刑罰を受けるかは、法律で

明かに定めてあるから、裁判所は、犯罪の疑のある者を十分に取調べて適當公平な裁判をする。

十1375 略、此の邊では太材を取る方が利益だから、かう間をおいて植ゑるのだ。

十1377 今に御らん、此のくらゐ離して植ゑても、十五六年目には間伐をしなればならないやうになるから。

十13710 植付けた苗木の枯れた處へ補植するのは、翌年一回だけだといふから、今年はどうしなくともよいのであらう。

十1404 使ひみちによつて、三十年前から五六十年目ぐらゐの間に伐るのださうだから、一番早く伐るとしても、其の時は僕がおとうさんくらゐの年になつてゐるわけだ。

十1526 元來ゴム液は、幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るものであるから、此の組織の所まで小刀が届いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。

十15910 未開の土地を切開いて、思ふまゝに設計して造つた町であるから、總べてが大規模でのび／＼としてゐる。

十1634 畠にしても、小路によつて細かく仕切ることをしてないから、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と

續いてゐるのが少くない。

十1636 こんな廣い畠であるから、耕すにも、うねを作るにも、種を蒔くにも、大てい機械と馬の力による。

十1757 あなたはまだお若いから、しつかり努力なさつたら、きつと此の研究を大成することが出來ませう。

十1761 これは學問の研究には特に必要ですから、先づ土臺を作つて、それから一步一步高く登り、最後の目的に達するやうになさい。

十1927 どうして太陽暦を用ひるやうになつたのですか。」太陽暦の方がよく季節にあつて都合がよいからだ。略。」

十1935 ところが太陽暦は略、通例十二箇月を一年とするが、此の一年は一回歸年より約十一日少いから、太陽暦とくちがたつて來て、三年にならないうちに一箇月の閏をおかなければならない。

十1961 一家の暮し向は誠にあはれなもので、食物なども自由には得られず、略。かういふ有様であつたから、リンカーンは十歳頃までは本を読むことなどは殆ど出來なかつた。

十1978 鉛筆や紙も自由には買へなかつたから、家で算術の練習をするには、木のシャベルと炭を用ひた。

十1981 大事なことは拾ひ集めた木片などに書留めて忘れないやうにしておく。かういふ心掛であつたから、

成績は何時も優等であつた。

十一100 5 図 辨しやうすることが出来ませんから、其の代りに何か仕事をさせて下さい。

十一117 1 又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、〈略〉たりするのは、皆公共心の發動であつて、自治の精神を養成し、自治團體を助長するものであるから、地方人民は大いにこれ等の事業に力を盡くさねばならぬ。

十一120 2 図 私は公爵ウエリントンだ。よい子だから私の頼をきいてくれ。

十二23 2 〈略〉、かやうな仕方は唯一時の利益を得るに止つて、永續することが出来ないから、つまりは小利をむさぼつて大損を招く結果になる。

十二24 7 彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。これはひつきやう文明の程度が低いために、共同生活の意義が明らかでなく、随つて商業の本質が理解されず、商人の人格が重んぜられなかつたからである。

十二38 2 図 ほんたうに一度でもよいから、演奏會へ行つて聴いてみたい。

十二52 3 三十年ばかり前までは、此の湖には魚類が全く居なかつた。これは奥入瀬川を十町餘り下つた處に大きな瀧があつて、魚類のさかのぼる道を絶つてゐるからである。

十二60 2 図 ねちが一本いたんであましたから、取りかへて置きました。

十二88 4 法律は、國家といふ共同生活、秩序ありかつ幸福なものにするための規則であるから、いやしくも國民たる者は必ず之を守らなければならぬ。

十二90 1 これ等の命令も國の規則であつて、廣い意味でいふ場合にはやはり法律であるから、其の制定も出来る限り慎重な手續を経る。

十二130 10 図 其餘の事は拙者の一存にはまゐりませぬから、追つての沙汰をお待ち下さい。

十二132 10 我が國が〈略〉、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、主として我々國民にそれだけすぐれた素質があつたからである。

十二133 6 四周の海が天然の城壁となつて、容易に外敵のうかがふことを許さないから、國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國內はおほむね平和であつた。

から 〔柄〕(名) 1 がら
七113 8 図 去る三日にお差出しの縞物三十反、〈略〉。地もがらもまことに當地向で、賣行もよからうと思ひます。

から い 〔辛〕(形) 1 辛い 一イ
十二12 2 投込まれた蟲は苦しまぎれに恐ろしく辛い液を出したので、〈略〉。

からいと 〔唐糸〕(人名) 5 唐糸 唐糸

六54 3 図 萬じゆはおそろく、〈略〉、唐糸の身代りに立ちたうございます。

六56 5 唐糸といふのは此の女のごとでございます。

六56 7 唐糸には其の時十二になる娘がありました。

六63 6 親を思ふ孝子の心には、頼朝もかんしんして、石のらうから唐糸を出して、萬じゆに渡しました。

六64 3 頼朝は唐糸をゆるした上に、萬じゆにはたくさんほうびをあたへましたので、〈略〉。

からいとさま 〔唐糸様〕(人名) 1 唐糸様

六59 7 図 あの中には石のらうがあつて、唐糸様がおしこめられて居られます。

からかさ 〔唐傘〕(名) 2 カラカサ 一33 ハナ ハト マメ マス ミ

五50 7 カラカサニ降ル雨ガ四方ヘ流レオチルヤウニ、水ハ低イ方ヘ低イ方ヘト流レテ行キマス。

からかみ 〔唐紙〕(名) 2 からかみ 四41 1 一番先にしやうじや

四54 7 図 此のからかみにかいてあるとらをしばつて見せよ。

からがら しいのちからがら

がらがら (副) 1 がらがら 五20 8 さをの先の矢車ががらがらと鳴ると、鯉が大きな口で、思ふぞんぶん風をのんで、〈略〉。

からざお 〔穀竿〕(名) 1 穀竿 九59 2 〈略〉、七八人の男や女が向ひ合つて、片足をふみ出し、掛聲を合はせながら、ばたんばたと穀竿で麥を打つてゐる。

からしし 〔唐獅子〕(名) 1 唐獅子 九82 3 図 店に飾れる石燈籠、〈略〉、ぼたんにくるふ唐獅子も、玉をふくめるこま犬も、皆ちいさんののみのあと。

からす 〔烏〕(名) 5 カラス からす 烏 一4 1 カラスガキマス。

三3 4 カラスガ二三バナキナガラトンデイキマス。

三31 7 図 からすのなかない日はあつても、五一ちいさんがうたはない日はない。

四36 5 烏ハ大キナコエデワル口ライヒ、太イクチバシデツツキマス。

十105 10 其の枝の先にしよんぼりと止つてゐる烏の姿も、見るから寒さうだ。

ガラス (名) 3 ガラス しいふたガラス 十一12 9 とけたガラスが中でぎらくかがやいてゐる。

十一123 3 細長い管の一端を、とけた

ガラスの中に突つこんで引出すと、先に赤い玉がくつついてゐる。

十一124 6 エプロンをかけた職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板にあてて模様をほりつけたたり、みかきかけたりしてゐる。

ガラスき (名) 1 ガラス器

十一124 8 隣の室では、職工が五六人ならんで、ガラス器にいろ／＼の模様をつけてゐる。

ガラスこうば (課名) 2 ガラス工場

十一124 14 第二十七課 ガラス工場

十一121 5 第二十七課 ガラス工場

ガラスこうば (名) 1 ガラス工場
十一121 6 昨日橋本君と一しよに町はづれのガラス工場を見に行つた。

ガラスこし (名) 1 ガラス越し

十105 8 外はさつきよりも一そう風が強くなつたのか、ガラス越しに見える向ふの木がひどくゆれる。

ガラスど (名) 2 ガラス戸

六34 3 朝日ガバツト西ガハノ家ノガラス戸ニカガイタ。

十30 6 窓ぎはにはひ寄り、ガラス戸ぬらし、しめやかに、ひそかに 夜の霧流る。

ガラスとだな (名) 2 ガラス戸棚

十二53 7 周囲の壁やガラス戸棚には、いろ／＼な時計がたくさん並んでゐる。

十二59 8 時計師は仕上げた時計をちよつと耳に當ててから、ガラス戸棚

の中につり下げた。

ガラスやね (名) 1 ガラス屋根

十101 1 略、ガラス屋根を通して来るやはらかい日の光、まるで春の國に居るやうだ。

からだ (名) 30 カラダ からだ

體といふからだ・おからだ

三36 7 又オモイモノヲ右ノ手ニ持ツトキニハ、カラダヲ左ノ方ヘマゲ、略。

三37 1 略、左ノ手ニオモイモノヲ持ツトキニハ、カラダヲ右ノ方ヘマゲマス。

三74 4 略 私ハカラダガネズミニニテキルカラ、ケダモノダ。

三81 2 略 青空 高くそびえたち、からだにゆきの着物着て、かすみのすそを遠くひく、ふじは日本一の山。

四19 7 略 早ク川ヘ行ツテ、シホケノナイ水デカラダヲアラツテ、ガマノホヲシイテ、ソノ上ニコロガレ。

四20 3 白ウサギガソノ通りニシマス、カラダハスツカリモトノヤウニナホリマシタ。

四20 7 略 オカゲサマデ、カラダハコノ通りニナホリマシタ。

四34 4 フクロフハオモ白イカツカウノ鳥デス。フクレタカラダ、マンマルナ目。

四39 4 するとたび人は、風が吹

けば吹くほど、ぐわいたうをしつかりと からだにくつつけました。

五47 1 上る頃には、蠶のからだがすき通るやうになります。

五48 7 略 繭の中で、きゆうくつさうにからだをまげて、一生けんめいにはたらいてゐるのもあります。

五89 8 略、葉書や封書などを入れる人の外は、私のからだにさはる者がありません。

六42 6 略 からだをちやうふにして、よく學問をべんきやうしなさい。

六89 1 略 御らの通り大きなからだをしてゐますが、氣立はしごくやさしうございます。

七30 6 略、後の暗きやぶかげより大いなる蛇つと出でて、獅子のからだにまきつきたり。

七83 9 略 鯨ハカラダガ甚タ大キイ。

七87 9 略、海藻ハ養分ヲ其ノ體ノ全面カラ吸取ルノデアル。

八101 1 かうして二三日たちますと、略、からだに全く力がなくなりまして。

八101 8 略、僕が若し食物をこなさなかつたなら、からだを養ふ所の血がどうして出来ませう。

八110 7 乃木大將は幼少の時、體が弱く、其の上臍病であつた。

八111 6 大將の父は略、どうかして大將の體を丈夫にし、氣を強くし

なければならぬと思つた。

八114 8 當時大將の體は、もうこれだけ丈夫になつてゐたのである。

九18 6 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、略、體ノ後ノ端ヲ木ニツケテ、體ヲナ、メニツキ出スト、形ガ桑ノ小枝ニ寸分違ハナイ。

九18 6 略、體ヲナ、メニツキ出スト、形ガ桑ノ小枝ニ寸分違ハナイ。

九108 10 北風は、主人の體がぐらの上でぐらつとゆれるのを感じた。

十8 7 此の水浴が體にさはつたものか、王は俄にはげしい熱病にかゝつた。

十44 5 寒場から出て來た喜三右衛門は、縁先に腰を下して、つかれた體を休めた。

十55 6 それ故鳩の體に手紙を附けて放せば、容易に通信が出来るのである。

十116 2 二十メートルもある大鯨が今は全く息たえて、小山のやうな體を水面に横たへる。

十一101 9 略 勉強も大切なれど、體にも精々御注意なさるべく候。

からだじゅう (名) 2 からだ中

五98 5 熊が來て、からだ中かぎまはしました、ほんたうの死人だと思つたのでせう、其のまま行つてしまひました。

六30 7 さうして虎の目・鼻・耳・口、

所からはず食ひつきました、頭のてつぺんから尾のさきまで、からだ中すき間もなく。

からふと「樺太」〔地名〕11 樺太 樺太

六485 鮭ハ寒イ國ノ魚デ、我ガ國デハ樺太ト北海道ガオモナ産地ダサウダ。

十644 臺灣・樺太など、遠方より送り來れるもあれば、枯損するもの多かるべきに、〔略〕。

十一914 そこを見ると、臺灣や樺太のやうな遠い所の氣候までも大體分る。

十二8110 樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。

十二825 〔略〕、林蔵は幕府の命によつて、松田傳十郎と共に樺太の海岸を探検せり。

十二826 樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざることは、此の探検によりて略々知ることを得たれども〔略〕。

十二829 〔略〕、同年七月林蔵は單身にてまた樺太におもむけり。

十二8210 先づ樺太の南端なる白主といふ處に渡り、此處にて土人を雇ひて従者となし、小舟に乘じていよく探検の途に上りぬ。

十二833 〔略〕、非常なる困難ををかして樺太の北端に近きナニヤーと

いふ處にたどり着きたり。

十二85 樺太

十二879 林蔵が二回の探検によりて、樺太は大陸の一部にあらざること明白となりしのみならず、〔略〕。

からふとじん「樺太人」〔名〕1 樺太人

十二868 折よく同行の樺太人來りて土人等を叱し、林蔵を救ひ出しぬ。からふとりやくず「樺太略図」〔名〕1

樺太略圖

十二85 樺太略圖 からまつ「唐松」〔名〕6 落葉松 落葉松

六983 村の學校のげんくわんの向つて右の落葉松は、わたしの子どもが植ゑたので、其の子はとうに戦死した。

六992 〔略〕 あの子は十二、落葉松はあの子のせいより低かつた。

六998 〔略〕 あの子がいくさに行く時に、學校の前でふりかへり、「わたしの植ゑた落葉松が あんなに高くなりました。」

十二459 今其の主要なるものを舉ぐれば、杉・檜・もみ・つが・ひば・松・落葉松・〔略〕くぬぎ等なり。

十二477 〔略〕 ひば・松・落葉松は何れも堅くして、耐久・耐濕の性あるを以て建築・土木・造船等其の用途頗る廣し。

十二479 〔略〕 ひばは抵抗力を有し、松は彈力に富み、落葉松は一種の品位を有する等、各其の特性を具へたり。からまる「絡」〔五〕2 からまる

十二479 〔略〕 ひばは抵抗力を有し、松は彈力に富み、落葉松は一種の品位を有する等、各其の特性を具へたり。からまる「絡」〔五〕2 からまる

三111 〔略〕 うちの子ねこは かはいい子ねこ、〔略〕、すそにからまり、たもとにすぎる。

八16 林の中へはいると、眞赤になつたつたが、松の木にからまつてをり、〔略〕。

からりと〔副〕2 からりと 六142 二三日降りつゞいた雨がからりと降つたので、昨日のお晝すぎ、にいさんときこの取に行きました。

十二958 其の刹那、彼は迷の雲がかかりと晴れて、はつきりとまことの道を悟り得た。

がらん「伽藍」〔名〕1 伽藍 十二9910 興福寺は伽藍半ば廢れたれど、尚三重五重の塔、猊尊の池水に影をうつして南都第一の美觀たり。

かり「刈」↓したがり・しばかり かり「狩」↓さくらがりする・しおひがり・まきがり

かりかち「狩勝」〔地名〕1 狩勝 十一6010 瀧川から根室行の汽車に乗ると、約五時間後に石狩と十勝の境にある狩勝の峠にかゝる。

かりかちのてんぼう「題名」1 狩勝の展望

十一608 狩勝の展望

かりこみ「刈込」〔名〕1 刈込

七1006 農家ニテハ種蒔・株分・植替・接木・刈込・取入レ等ヲナスニ、彼岸ヲ目アテトシテ、日ヲ定ムルコト多シ。

カリスト「人名」4 カリスト 九911 昔カリストといふおおかさんと、アルカスといふ子供がありました。

九913 おかあさんのカリストは、大そう美しい人だつたので、〔略〕。

九915 〔略〕、ジュノーといふ神様がそれをねたんで、とうとうカリストを熊にしてしまひました。

九919 此の大熊こそは、先にジュノーに形を變へられたおかあさんのカリストだつたのですが、〔略〕。

かりそめにも「仮初」〔副〕1 カリストメニモ

九122 〔略〕、自分ノタフツイ選舉權ヲ棄テルトイフ事ハ、選舉人トシテカリソメニモスベキ事デハナイカラ、〔略〕。

かりとる「刈取」〔五〕3 かり取る「ツ・ール」

十385 かり取つた雜木、切倒した大木、掘起した木の根や石ころ、まだあらごなしの開墾地は、〔略〕。

十4110 さうして兄は〔略〕、父のかり取つたあとを元氣よくつるはして掘返し始めた。

十一956 父が木を伐れば自分は雜草

をかり取る、父が畠を打てば自分は種をまくといふ風に〈略〉。

かりに「仮」(副) 2 かりに

八〇四 3 たとひ休まず働いても、一人で一日に一包は造れまい。かりに造れたとしても、それを十錢ぐらゐで賣つてはまうかるまい。

十一 4 1 今かりに一時間五十里の速度で飛ぶ飛行機に乗つて行つたとしても、太陽に到着するには八十七年かかるのである。

かりぬし「借主」(名) 2 借主

十一 19 2 其の場合に貸主から借主を裁判所に訴へると、〈略〉、貸主の主張を正當とみとめれば、其の借金を返すやうに借主に命ずる。

十一 19 5 〈略〉、裁判所は兩者の言分を聴いた上で、貸主の主張を正當とみとめれば、其の借金を返すやうに借主に命ずる。

カリフォルニアしゅう「地名」1 カリフォルニア州

八 66 9 国 サンフランシスコはカリフォルニア州にあるのですが、此の州は合衆國の中でも、氣候がよくて、其の土地味が肥えてゐますから、いろいろな農産物に富んでゐます。

かりまた「雁股」(名) 3 かりまた

五 79 6 義家は世中のうつばから、かりまたをぬいて狐を追つかけてました。五 81 3 さて宗任がかりまたをぬき取つて、義家にかへしますと、〈略〉。

五 81 7 かりまたは、矢じりがつばめの尾のやうにわたれた、たいそうするどい矢で、〈略〉。

かりゅう「下流」(名) 1 下流

十一 106 10 國 大勢の人々が熟したるコーヒーの實を手にてこき落し、之を集めてみぞに投入し候へば、まじりたる石・砂などは沈み、實のみ浮びて流れ候を、下流にてすくひ上げ、之を廣きほし場にて乾かし候。

かりゅうど「狩人」(名) 1 狩人

九 91 6 國 其の中に、子供のアルカスはん／＼大きくなつて、狩人になりましたが、或日大熊を見つけたので、それを射殺さうとしました。

かりゅうほう「加硫法」(名) 2 加硫法

十一 53 7 かうして出来たゴムは、各國の工場に運んで加硫法を行ふ。

十一 53 7 加硫法とは、ゴムに硫黄をまぜる事で、かうするとゴムが非常に弾力を増して来る。

かりよく「火力」(名) 1 火力

十二 116 2 國 〈略〉、電力は頗る廉價に供給されるので、石炭の火力による蒸氣力は、多くの場合之に敵するこ

かゝる「借」(上二) 10 カルル

りる 借りる 《一リール》
二 43 5 ワルイオヂイサン ハソレヲキイテ、ソノ犬ヲカリニキマシタ。

二 46 4 ワルイオヂイサン ハ又コノウスヲカリニキマシタ。

七 107 4 國 〈略〉、某は四つ五つの頃から親にはなれて、姓も存じませんので、御威光を借りて豊臣と記したのでございます。

九 54 5 國 社長さんは早速荷車を一臺借りて来て、醬油のはかり賣を始め

た。

十一 19 1 例へば、借りた金を、返す約束の日が来ていくら催促されても、返さない人がある。

十一 63 1 〈略〉、殆ど交通の便もなく、唯僅かに十勝川を上下するアイヌの丸木舟の便をかりるに過ぎなかつた。

十一 98 8 ところが家に書物がないばかりでなく、近くに圖書館もないので、どうしても人から借りて讀む外はなかつた。

十一 98 10 熱心なリンカーンは、書物を持つてゐる人の所には遠近を問はず借りに行つた。

十一 99 4 或時近邊の人からワシントン傳を借りたことがある。

かる「輕」(下二) 2 かる 《一ツール》

十 41 6 國 兄は私に「壯吉、お前はおとうさんのかつた難木を、かういふ風に束ねて運んでくれ。」といひな

がら、〈略〉。

十 43 9 かる、切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不乱に働くので、仕事は豫想以上にはかどり、〈略〉。

かる「いたがる・いやがる・うれしが

る・おそろしが

る・かわいが

る・くやしが

る・くわが

る・さんねん

る・めずらし

かる「輕」(形) 7 カルイ

かるい 《一ウーク》

三 18 4 國 たいそうかるうございま

すね。

三 89 8 はごろもの袖はかるく

風にまひ、はごろもの色は日

の光にかがやきました。

五 26 1 ツバメハトブコトガ上手ナ鳥

デ、ツブテノヤウニトンデ來テ、物

ニツキアタルカト思フト、カルクミ

ヲカハシテ、〈略〉。

七 78 5 信長はかるくうなづいたが、

其の後間もなく藤吉郎を草履取から

引上げて役人の數に入れた。

九 53 8 國 世間にはこんな場合に、な

るだけ自分の負擔を軽くしようとし

る者もあるが、〈略〉。

九 53 10 國 〈略〉、あの人は反對に、少

しも他人の負擔を軽くしようとし

て、自分の財産を残らず差出した。

九 105 1 中尉はひらりと北風にまたが

つて、亂れてゐたたがみをそろへ、

くびすちを軽くたゝきながら、〈略〉。

かるたとり 「歌留多取」〔課名〕2 か

るた取

四目13 十一 かるた取

四46 6 十一 かるた取

かるたとり 「歌留多取」〔名〕1 かる

た取
四46 7 友一のうちで かるた取
がはじまつて 居ます。

かれ 「枯」ひふゆがれ

かれ 「彼」〔代名〕52 彼

八49 6 第十三 驚「略」。狐・狸・

兎・犬・豚ナドハ彼ノ求メル物デ

アルガ、〈略〉。

八57 5 〇 〇 〇 小ぞうは乗りぬ、

自轉車に。國に母をを残すらん、

彼のまふたにつゆありき。

八57 8 〇 〇 〇 下駄買ふ人も、賣る人も、

下駄屋にありし人は皆、彼の姿

を見送りぬ、〈略〉。

九41 4 〇 〇 〇 旅順開城約成りて、敵

の將軍ステッセル 乃木大將と會見

の 所はいづこ、水師營。〈略〉。

乃木大將はおごそかに、御めぐみ

深き大君の 大みことのりつたふれ

ば、彼かしこみて謝しまつる。

九41 8 〇 〇 〇 彼はたゝへつ、我が武勇

十43 9 かる、切る、掘る、運ぶ、誰

も彼も一心不亂に働くので、仕事は

豫想以上にはかどり、〈略〉。

十45 7 喜三右衛門は餘りの美しさに

うつとりと見とれてゐたが、〈略〉。
日頃から自然の色にあこがれてゐた

彼は、目のさめるやうな柿の色の美
しさに打たれて、もう立つても居て

も居られなくなつたのである。

十46 3 毎日焼いてはくどき、焼いて

はくどきして、歎息する彼の様子は、

實に見る目もいたましい程であつた。

十47 3 彼の頭の中にあるものは、唯

夕日を浴びた柿の色であつた。

十47 8 彼は氣がくるつた様にそこら

をかけ廻つた。

十48 8 彼はふるふる足をふみしめて

窯をあけにかゝつた。

十49 8 柿右衛門は今から三百年ばか

り前、肥前の有田にゐた陶工である。

彼は此の後も尚研究に研究を重ね、

工夫に工夫を積んで、世に柿右衛門

風といはれる精巧な陶器を製作する

に至つた。

十一7 8 〇 〇 〇 孔子は他人を正す前に先

づおのれを正し、近きより遠きに及

すを以て其の主義としたり。「おの

れを修めて人を安んず。」とは、彼

が簡明に此の意をあらはせる語なり。

十一96 5 〇 〇 〇 リンカーンは十歳頃

までは本を讀むことなどは殆ど出来

なかつた。〈略〉。かうしてゐるうち

に、知識を得たいといふ彼の欲望は

益々強くなり、〈略〉。

十一101 3 〇 〇 〇 リンカーンは父の助手をし

て忠實に働くと共に、非常な熱心と

努力とをもつて勉強を續けた。彼が

他日大統領となり、世界の偉人とし

て萬人に仰がれるやうになつたのは、

〈略〉。

十二11 3 彼は父の命に従つて勉強し

てゐたが、何時の間にか好きな博物

學の研究が主となつてしまつた。

十二11 8 或日彼が古木の皮をむくと、

珍しい甲蟲が二匹ゐた。

十二12 5 彼が探検船ビーグル號に乗

込んで意氣揚々と本國を出發したの

は、二十三歳の時である。

十二12 9 此の航海によつて彼の博物

學者としての基礎が十分に出来、一

生の方針がはつきりとしまつた。

十二37 8 〇 〇 〇 ドイツの有名な音楽家ベ

ートベンがまだ若い時分のことであ

つた。〈略〉。「あゝ、あれは僕の

作つた曲だ。聴き給へ。なか／＼う

まいではないか。」彼は突然かうい

つて足を止めた。

十二41 6 〇 〇 〇 ベートーベンの両眼は異様

に輝いて、彼の身には俄に何者かが

乗移つたやう。

十二43 5 〇 〇 〇 ひき終るとベートーベンは、

つと立上つた。三人は「どうかもう

一曲。」としきりに頼んだ。彼は再

びピアノの前に腰を下した。

十二43 7 〇 〇 〇 「それでは此の月の光を題

に一曲。」といつて、彼はしばらく

すみきつた空を眺めてゐたが、〈略〉。

十二45 3 〇 〇 〇 ベートーベンは、ちよつと

ふりかへつてめくらの娘を見た。彼

は急いで家に歸つた。

十二87 4 〇 〇 〇 林蔵の怪しみもてあそば

るゝこと、此處にては更に甚だし

かりしが、〈略〉、彼は土地の事情を研

究することを怠らざりき。

十二91 6 〇 〇 〇 木陰からじつと見てゐた彼

は、しみ／＼と自分の身の上に思ひ

比べて、農夫や牛の勞苦を思ひやる

と共に、蟲の運命をあはれんだ。

十二91 9 〇 〇 〇 彼はだん／＼物思に沈むや

うになつた。

十二91 10 〇 〇 〇 それを見てひどく氣をもん

だ父王は、彼に妃を迎へ、目もまば

ゆい宮殿に住まはせて、國政にも與

らせようとした。

十二92 1 〇 〇 〇 しかし彼は城外に出る毎に、

杖にすがるあはれな老人や、息もた

えだえの病人、さては野邊に送られ

る死者をまのあたり見て、益々世の

はかなさを感じた。

十二93 2 〇 〇 〇 かくて彼は二十九歳の或夜、

人知れず宮殿を出て修行の途に上つ

た。

十二93 7 〇 〇 〇 かねて釋迦の徳をしたつて

ゐたマガダ國王は、修行を思ひ止ら

せようとして、自分の國をゆづらう

とまで申し出たが、彼の決心はどう

しても動かかなかつた。

十二93 8 〇 〇 〇 彼は更に其の邊の名高い學

者を探ね廻つて説を聞いたが、どれ

にも満足することが出来ない。

十二93 10 〇 〇 〇 彼は遂に「もう人にはたよ

るまい。自分一人で修行をしよう

う。」と決心して、或静かな森へ行つた。

十二94 6 次第にやせ衰へて、物にすがらなければ立てない程になつた時、彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。

十二94 7 そこで彼は先づ近處の河に浴し、たま／＼其處にゐた少女のさ／＼げた牛乳を飲んで元氣を回復した。

十二94 10 〈略〉五人の友は、釋迦が全く修行を止めてしまつたものと思ひ、彼を捨てて立去つた。

十二95 6 彼は夜もすがら静坐してひたすら思をこらしてゐると、〈略〉。

十二95 8 其の刹那、彼は迷の雲がかりと晴れて、はつきりとまことの道を悟り得た。

十二95 9 彼は此の心境の尊さに數日の間唯うつとりとしてゐたが、やがて此の尊い心境を世界の人々と共にせずにはゐられぬといふ慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。

十二97 5 今や釋迦は衆星の中の満月の如く國中から仰がれる身となつたが、中には彼をそねむあまり、反抗するばかりでなく、迫害を加へようとするものさへも出て來た。

十二97 8 殊にデーバダッタは、〈略〉、かねてから釋迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。

十二106 3 〈略〉、餘念なく穴を掘つて

ゐる僧があつた。〈略〉。之を見た村人たちは、彼を氣違ひにして相手にもせず、唯物笑の種にしてゐた。

十二109 6 彼の初一念は年と共に益々固く、〈略〉。

十二110 5 かうして、老僧が始めてのみを絶壁に下してからちやうど三十年目に、彼が一生をさ／＼げた大工事が見事に成就した。

十二112 5 かねて此の希望をみたさ／＼と思ひゐたるトマス、エヂソンは、〈略〉、更に進んで新しき電燈の發明に従事したり。彼が稀代の天才はこゝにも遺憾なく發揮せられて、〈略〉。

十二112 10 〇 〇 唯心に至りては彼の最も苦心したる所なりき。

十二112 10 〇 〇 初め彼は紙に炭素を塗つて試みしが、思はしき結果を得ず。

十二113 9 〇 〇 何心なく手に取りて眺めゐたりし彼の眼は異様に輝きぬ。

十二113 9 〇 〇 彼の眺め入りしは繪にあらず紙にあらず、實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

十二114 2 〇 〇 彼は直に竹を以て炭素線を作りて實驗せしに、豫想以上の好結果を得たり。

十二114 3 〇 〇 〇 〇 において彼は人を世界の各地につかはして竹を採集せしめ、〈略〉、綿密に研究せしが、日本の竹最も適當なりしかば、専ら之によりて心を製出せり。

十二115 1 〇 〇 〇 〇 今日文明の利器と稱せらるゝものにして、直接間接に彼の天才によらざるもの殆どなしといひて可なり。

かれい「鰈」(名) 3 カレヒ くれひ
七12 5 おさへて見たら、小さなくれひであつた。

七12 7 〇 〇 「丸山君、くれひだ。」と言つて、つかんで見せると、ふりかへつたのは知らない人であつた。

七80 3 魚類ニハ〈略〉、カレヒ・ヒラメナドノヤウニ、底ニ沈ンデキルモノモアル。

かれかかゝる「枯掛」(五) 1 枯れかゝる「一ツ」

九78 2 枯れかゝつて一面に黄色になつたじやがいも畑を、午後の日がかん／＼と照らしてゐる。

かれき「枯木」(名) 6 カレ木 枯木
二47 6 スルト、ニハノ カレ木 ノエダニ、キレイナ花ガサキマシタ。

二48 5 〇 〇 花サカヂヂイ、花サカヂヂイ、カレ木ニ花ヲサカセマセウ。

二49 6 ハヒヲマキマスト、カレ木ニ花ガサイテ、一メンニ花ザカリニナリマシタ。

二51 3 ワルイオヂイサンハ〈略〉、ノコツテキタハヒヲカキアツメテ、カレ木ニノボツテ、トノサマノオカヘリヲマツテキマシタ。
九17 9 例ヘバ雨蛙ハ緑色ノ葉ノ上ニ

居ル時ハ緑色デアルガ、枯木ニ移レバ枯木ニ似タ色ニナル。

九17 10 〈略〉、枯木ニ移レバ枯木ニ似タ色ニナル。

かれこれ「彼是」(副) 1 くれこれ
七35 3 〇 〇 大連へ來てから、もうかれこれ七八十日、町のもやうも大分わかつて來ました。

かれそん／＼「枯損」(サ変) 1 枯損ず「一ズル」

十6 5 〇 〇 〇 〇 臺灣・樺太など、遠方より送り來れるもあれば、枯損するもの多かるべきに、ほとんど皆勢よく根づきたるは、〈略〉。

かれは「枯葉」(名) 3 枯葉
九17 4 北國ニ住ム野ウサギヤ高山ノ上ニ居ル雷鳥ハ、夏ハ褐色デ、枯葉ヤ土ノ色ニ似テキルガ、〈略〉。

九19 2 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、〈略〉、裏ハ枯葉ニ似テキルノデ、〈略〉。

九19 5 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、〈略〉、羽ヲトヂテサカサニ草木ノ枝ニ止ツテキルト、マルデ枯葉ガ引掛ツテキルヤウニ見エル。

かれみずから「彼目」(代名) 1 彼自ら

十二41 8 ベートーベンの兩眼は異様に輝いて、彼の身には俄に何者かが乗移つたやう。一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか彼自らも覺えないやうである。

かれら「彼等」(代名) 4 彼等

十二243 それ故大多數の商人は、

《略》、忍耐も努力も要するに皆自己の爲であつた。彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。

十二355 団 やがてベルリンに入つて

見ても、勤儉の美風が市民の間にあふれてゐて、彼等が大戦後における自國の疲弊を回復するため盛に活動してゐるのには全く敬服しました。

十二966 釋迦は世を救ふ手始として

先づかの五人の友をたづねた。かつて釋迦を見捨てた彼等も、其の慈悲圓滿の姿を見ては、思はず其の前にひざまづかざるを得なかつた。

十二969 彼等は釋迦の教を聽いて即座に弟子となつた。

かゝれる「枯」(下二) 2 枯れる 《一レ》

十一379 植付けた苗木の枯れた處へ

補植するのは、翌年一回だけだといふから、今年はもうしなくともよいのであらう。

十一399 生きた枝でも枯れた枝でも、

其のまゝにしておくと、《略》、其處が節になるのだといふ。

かろうじて「辛」(副) 3 からうじて

十278 からうじてボートはかの難破船にたどり着いた。

十644 降積む雪に道を失ひ、進み

もやらずたゞみたる様は、古歌に《略》。といへるにも似たりけり。か

らうじて僧をともしぬ歸れる主人は、

《略》。

十1336 勾踐は呉に捕へられぬ。後からうじて歸國することを得しが、《略》。

かるんずる「輕」(サ変) 2 輕んずる 《一ジ・一ゼ》

十540 鳩を通信に使つたのは、餘程古い時代からの事で、《略》、無線電信などが發明せられて以來、自然輕んぜられるやうになつた。

十二1374 習、性となつては、遂に日

本人には獨創力がないであらうと自らも輕んじ、外國人からも侮られる。

かわ「川」(名) 57 カハ 川 河 ↓

あべかわのしゆく・アマゾンがわ・おいらせがわ・おおかわ・かみがわ・きたかみがわ・こがわ・ころもがわ・さほがわ・しらかわ・しんかわ・たにがわ・テームスがわ・とかちがわ・ひいがわ・ひのかわ・やまかわ・やまくにがわ・よどがわ・ラブラタがわ

一287 コノヒクイトコロハカハ

デス。

一295 カハニハ、ハシガカケテ

アリマス。

一446 オデイサンハヤマヘシバ

カリニ、オバアサンハカハヘ

センタクニイキマシタ。

二144 シタヨミルト、川ノナ

カニモサカナヨクハヘタ犬ガ

キマス。

二155 ホエルト、ロガイイテ、

クハヘテキタサカナハ、川ノ

ナカヘオチテシマヒマシタ。

三493 ヤクバノヨコデ、川ガ

二ツオチアツテ、マガリクネツテ、

南ノ方ヘナガレテイキマス。

三634 三人は舟とならんで、川

のふちをかけて行きます。

三782 今日私が川の土手から

とつて來たすきも、花いけ

にさしてそなへてあります。

四92 谷ソコノ一ケンヤニモ、

川ヲ下ツテ行ク小サナ舟ニモ、

コクキガ出シテアリマシタ。

四195 早ク川ヘ行ツテ、シホ

ケノナイ水デカラダヲアラ

ツテ、《略》。

四81 てつけうへかかつた時、

河を見たら、たいそう水が出

て居ました。

五284 庭さきのみちの木は、前の

川に美しいかげをうつしてゐます。

五516 雨水ノ流れル道ハ地圖ニカイ

タ川ヲ見ルヤウデス。

五694 田地にするには、水がいるが、

引いて來る川がない。

六456 鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ

魚デモアル。

六457 其ノワケハ、川デ卵カラカヘ

ツテ、海デ大キクナルカラダ。

六462 大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬

ニカケテ、海カラ川ヘ上ツテ來ル。

六477 翌年ノ春ニナツテ、卵カラカ

ヘツタ鮭ハ、川ヲ下ツテ海ヘ行ク。

六481 四五年モタツト、大キクナツ

テ、今度ハ自分ガ卵ヲ産ミニ川ヘ上

ツテ來ルガ、フシギニ自分ノ生レタ

川ヘ歸ツテ來ルサウデ、《略》。

六482 《略》、フシギニ自分ノ生レタ

川ヘ歸ツテ來ルサウデ、「之ヲ鮭ノ

里歸トデモ言ツタヨカラウ。」ト

叔父サンガ言ハレタ。

六693 京都を北から南へ流れてゐる

川を賀茂川といひます。

六697 京都は長い間の都ですから、

《略》おくげ様方や、《略》お姫様方

の姿を、此の川の水はいくたびとな

くうつしたことでございませう。

六703 又いくさのあつた時には、

《略》武士の刀や、なぎなたの光も、

いくたびとなく此の川の水にうつつ

たことでございませう。

六707 こんな人、こんな姿は、とう

の昔にきえましたが、川は昔のまゝ、

に清く美しく流れてゐます。

六715 川の西は水のすぐそばから、

すき間もなく家が立ちならんであま

す。

六722 東の方は此の橋のたもとから、

川にそつて電車が出ます。

七289 市中ヲ流ル、川ヲ淀川トイ

フ。

七292 又多クノ堀アリテ、川ト川

トヲツナゲリ。

ては えんから おちる。

十54 寶玉をちりばめたやうなかは
いゝ目、〈略〉、鳩は見るからに愛ら
しいものである。

十58 9 あゝ、あのかはいゝ鳩が、一
度任務を命ぜられると、勇ましく高
空に輪を畫がきながら、しかと方向
を見定め、矢のやうに目的地へ向つ
て飛んで行くのを見たならば、〈略〉。

十二55 8 女の子は唯じつと見まも
つてゐたが、やがてかの小さなねぢ
を見附けて、「まあ、かはいゝね
ぢ。」

かわいがる「可愛」(五) 8 カハイ
ガル かはいがる 《一ッ・ラーリ》

二41 7 ヨイ オヂイサン ハ犬ヲ
一ピキ カツテ、タイソウ カハイガ
ツテ キマシタ。

二66 2 オヤ牛 ハ子牛 ヲタイソウ
カハイガリマス。

六58 3 〈略〉、「萬じゆく。」と、
人々にかはいがられました。

八22 8 呉鳳は〈略〉、亞里山の役人
でした。たいそう蕃人をかはいが
りましたので、蕃人からは親のやうに
したはれました。

九102 9 北風の主人は若い騎兵中尉で、
たいそう北風をかはいがつて、まる
で我が子のやうに大事にしてゐた。

十20 2 国 それを見ると、成程、こん
なにかはいがられて居れば、馬も従
順で人になつくわけだと、しみぐ
思ひました。

十22 9 国 私は今日此所に来て、飼主
たちがあんなにかはいがつてゐたの
を見て、此の子馬共を買つた人たち
も、〈略〉。

十二68 2 コーデリヤは王が一番かは
いがつてゐる娘であつた。

かわいけ「川池」(名) 1 河池

十五 国 河池

かわいし「河井氏」(人名) 1 河井氏
十一41 7 国 きて昨日御地より歸村
せられたる河井氏の御話によれば、
〈略〉。

かわいせんせい「河井先生」(人名) 1
河井先生

十一2 国 十月十二日、我等五年生一
同は、河井先生にみちびかれて、東
京代々木の明治神宮に参拜せり。

かわいそう「可哀相」(形状) 8 カハ
イサウ かはいさう じおかわいさう

三40 5 うらしまは かはいさうに
おもつて、子どもからそのかめ
をかつて、海へはなして やり
ました。

四19 4 国 スルト 神様 ハ「ソレハ
カハイサウダ。〈略〉。」トヲシハ
テ下サイマシタ。

四68 4 私のうち山がらが一
羽かつてありました。〈略〉。それ
が かはいさうに、ある ばんね
ずみに足のゆびをくひきられ
ました。

五79 8 義家はせ中のうつばから、か
りまたをぬいて狐を追つかけました。
いころすのもかはいさうだと思つて、
〈略〉。

九92 3 国 ところがめぐみ深いジュビ
ターといふ神様が、それを見て、
『あゝ、かはいさうだ。あのアルカ
スに親殺の大罪ををかさせてはなら
ぬ。』と、〈略〉。

十25 9 国 〈略〉、ふとはるかの沖合に、
かの難破船を見とめた。娘は驚いて、
『まあ、かはいさうに。おとうさん、
早く助けに行きませう。早くく。』

十26 1 国 あの波を御らん。かはいさ
うだが、とても人間業では救へない。
十二40 10 ベートーベンは、〈略〉。」
といひさして、ふと見ると、かはい
さうに妹はめくらである。

かわいらしい「可愛」(形) 7 カハ
イラシイ かはいらしい 《一・一
ウ》

二40 6 ワタクシハネエサンニ、
ユキ デウサギヲ コシラヘテイ
タダキマシタ。〈略〉。アカイ小サ
ナ目デ、カハイラシウゴザイマ
ス。

三13 3 あかちやんが なき出すと、
すぐそばへよつて、〈略〉。」
とかはいらしいこゑで、子もり
うたをうたひます。

八4 1 〈略〉、小さな犬ころが二匹、
上になり下になりしてじやれてゐる。
あまりかはいらしいので、僕はしば

らくそれを見てゐた。

八5 5 二匹はいちもくさんにかけて
行つたが、間もなくかはいらしいの
を一匹つれて来た。

九79 4 大人の握りこぶし程の大きな
のもあれば、雀の卵ぐらゐなかは
らしいのもあるが、〈略〉。

十18 4 国 〈略〉、どの子馬も皆かはい
らしい顔をして、おとなしくつなが
れてゐます。

十104 10 〈略〉、目もさめるやうな草花
が並べてある。にはひのよいのや、
色の美しいのや、形のかはいらしい
のや、どれを見てもどれを見ても、
一枝髪にさしてみたい。

かわかす「乾」(五) 7 乾かす 《一
シ・ス》

八105 1 材木を機械にかけて軸木をこ
しらへてゐる者もあり、軸木を火で
乾かす者もあり、〈略〉。

八105 1 〈略〉、軸木を火で乾かす者も
あり、乾かした軸木の先に薬をつけ
る者もあり、〈略〉。

八105 3 〈略〉、乾かした軸木の先に薬
をつける者もあり、薬をつけた軸木
を温室で乾かす者もあり、〈略〉。

八105 3 〈略〉、薬をつけた軸木を温室
で乾かす者もあり、乾かしたのをそ
ろへてマツチの箱に入れる者もあり、
〈略〉。

十一53 4 集めた液は之を工場に持つ
て行き、〈略〉、次に薬品を入れて固

まらせ、機械で薄くのして乾かすのである。

十一1009 リンカーンは其の本をていねいに乾かして、其の後何度もく讀返してゐるうちに、〈略〉。

十一1071 國圀 〈略〉、實のみ浮びて流れ候を、下流にすすくひ上げ、之を廣きほし場にて乾かし候。

かわかみ 「川上」(名) 6 川上 河上三787 だれか川上の方で、さきほどからふえを吹いてゐます。

四816 國 河上の方で雪がとけはじめたのだらう。

五78 ある時、出雲の國のひの川のはたをお通りになりますと、川上から箸が流れて來ました。

五82 みことは此の川上にも人がすんでゐるにちがひないとおかんがへになつて、〈略〉。

六732 又三條の大橋から川上を見ると、川原が遠く北につゞいて、其のさきにやさしい姿の山がかすんで見えます。

十二47 國圀 此の川は古の簸川にして、かのをろち退治の傳説あるはこの川の川上なり。

かわかみのたける 「川上梟帥」(人名)

1 川上のたける

五412 昔熊襲のかしらに川上のたけるといふ者があつて、天皇のおほせにしたがひませんでした。

かわく 「乾」(五) 2 かわく 乾く

《一イ・ーク》

五404 のどがかわいてゐたので、みんな大よるこびで飲みました。

十一1097 國圀 伐倒したる木は乾くまで其のまゝに致置き、〈略〉。

かわぐち 「川口」(名) 1 川口

七157 舟は〈略〉、をかの方へ動きはじめた。川口にかゝつた時ふりかへつて見たら、もう廣い海には誰もゐなかつた。

かわぐちちかく 「川口近」(名) 1 川口近く

七99 大川を下つて行く舟の中はうすら寒い。〈略〉。川口近くになると、潮干狩の舟がいくそうもよつて來た。

かわしも 「川下」(名) 3 川下

六713 今、三條の大橋に立つて、川下を見ると致しませう。

六731 義經・辨慶の五條の大橋は此の川下にかゝつてゐるのでございませう。

九1017 ざるを持つた子供が、川下の方に集つてさわいでゐるのは、鮒やどちやうを取るのだらう。

かわす 「交」↓いいかわす

かわ・す 「縣」(五) 1 カハス 《一シ》

五261 ツバメハトブコトが上手ナ鳥デ、ツブテノヤウニトンデ來テ、物

ニツキアタルカト思フト、カルクミヲカハシテ、矢ヨリモ早クトンデ行

キマス。

かわせ 「為替」(名) 1 爲替

八471 國 此の爲替はほんのわづかですが、何か好きな物を買つて上げて下さい。

かわぞい 「川沿」(名) 1 川沿

十二1042 豊前の中津から南へ三里、激流岩をかむ山國川を右に見て、川沿の道をたどつて行くと、〈略〉。

かわそこ 「川底」(名) 1 川ソコ

六466 キレイナ水ガサラ／＼流レテ、川ソコニ小石ノ多イ所ガアルト、

〈略〉。

かわなかじま 「川中島」(課名) 1 川中島

七目15 第十四 川中島

かわなかじま 「川中島」(地名) 4 川中島

七435 越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄が、たびたび信濃の川中島で戦つた。

七457 川中島で前後五回戦つたが、まだ勝負がつかなくつた。

七463 國 よつて明日たがひに勇士を一人づつ出して組討をさせ、勝つた方のものが川中島を取ることにしては。

七489 國 約束の川中島は謙信に渡す。かわなかじまのたたかい 「川中島戦」

〔課名〕 1 川中島の戦

七432 第十四 川中島の戦 かわばた 「川端」(名) 1 川ばた

七727 國 私は川ばたの人夫で、名前をいふ程の者ではありません。

かわはば 「川幅」(名) 2 川幅 河幅

九735 停車場にはいる手前でまた北上川を見たが、此所まで來ると川幅がかなりせまくなつてゐる。

十一1049 國圀 アマゾン河は〈略〉、世界の河の王といはれ居候。河幅は驚く程の廣さにて、河口の處にては、三百二十キロメートルもこれある由、

〈略〉。

かわべ 「川辺」(名) 2 川べ

七623 橋のないところでは五日も十日も水のひくのを待たなければならず、川べの宿はとめきれない程の客でございました。

七637 〈略〉、川べはひじやうなさわぎでございました。

かわべり 「川縁」(名) 1 川べり

六738 あめしい友禪染は、もと此の川べりで出來たのでございます。

かわみず 「川水」(名) 1 川水

五854 國 夜明け方になつて、雨も風もやまずと、急に川水の音がごう／＼と聞えて來て、〈略〉。

かわゆし 「可愛」(形) 2 かはゆし

《一キーク》

九137 國 毎日世話し居ることといづれの鶏も皆かはゆき中に、ひよこは一そうかはゆく思はる。

九137 國 〈略〉、ひよこは一そうかはゆく思はる。

かわゆらしし「可愛」(形) 1 かはゆらし「一シキ」

十1072(略) 私とてもかはゆらしきめ

ひの生れ候と聞きては、(略)。

かわら「河原」(名) 1 川原 ↓あべかわら

六732 又三條の大橋から川上を見る

と、川原が遠く北につゞいて、(略)。
かわらやき「瓦焼」(名) 1 瓦やき

五381 大平橋を渡つてから左へをれて、松山の下へ瓦やきを見に行きました。

かわり「代」(名) 11 カハリ かはり

代り ↓おんみがわり・つきがわり・みがわり

三687 (略)、コンドハ水デツパウ
ヲジョウロノカハリニシヨウトオモツテ、(略)。

三874(略) あまり おかはいさうですから、おかへし申します。その

かはりに天人のまひと いふものを お見せ下さいませ。

六416(略) どの町村からも、歩兵が一番多く出てるのに、ふしぎと私の

村からは私一人だ。其の代り輜重兵の外は各種の兵が出てゐる。

六736 賀茂川は水が多くないので、船は通りませんが、其の代りに水が

いたつてきれいで、染物にむいてゐます。

七722(略) 其の上あなたのお名前をうけたまはりました。妻や子

ともに、朝晩おねんぶつのかはりにとなへさせます。

八428(略) しからば許してつかはすであらうが、其の代りと致して、白木

綿を一反づつ、名札をつけて、三日の間に間違なく持参致せ。

十527(略) 「それでは當座預金の方が便利ですね」「便利だが、その代り

利子が安い。(略)。」
十853(略) それから『燃える石』とい

ふひやうばんが高くなつて、附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。

十二777 又此の外に貨幣の代りに用ひられる紙幣がある。

十一796 かうして出来た貨幣は(略)、尚場合によつては持運びに不便なので、更に貨幣の代りになる紙幣といふ物を案出した。

十一1005(略) 辨しやうすることが出来ませんから、其の代りに何か仕事をさせて下さい。

かわり「変」(名) 1 かはり ↓おかわり

九634 これ等の仕事は、陸上の家で、毎朝起きると先づ夜具をかたづけ、

雨戸をくるのかはりはないが、(略)。

かわりあ・う「代台」(五) 1 代り合ふ「一ツ」

五708 村の人は代り合つて、一日置に普請の手つだひをすることになつ

た。

かわりばんこ「代番」(名) 1 かはりばんこ

八934 信吉はとりのぼせたやうにうれしがつて、娘の顔と先生の顔を、

かはりばんこに見てゐた。
かわる「代」(五) 3 かはる 代る

「一ラ・一ルール」
六842 おそれ多くも亀山上皇は、御

身をもつて國難に代らうと、おいのりになつた。

十一681 燈火としては、(略)、其の後らふそくや種油がともされ、石油

のランプが之に代り、今はガス燈や電燈が到る處にかゞやき渡る時代となつた。

十一688 將來は又どんなものが發明されて、今のガスや電氣にかはることであらうか。

かわる「変」(五) 27 カハル かはる 變る「一ツ・一ラ・一ルール・一レ」

三461 うちへかへつてみると、おどろきました、(略)、村のやう

すもすつかりかはつてゐます。
四271 町やくばも、けいさつしよ

も、いうびんきよくも、みんなのきらんぶが電とうにかはりまし

た。
六546 之を聞くと、頼朝のかほの色

はさつとかはりしました。
六546 かはるも道理、これには深い

わけがあつたのでございます。

六794 はた拾、まり送、おにごつこ、何でもなれてしまへば、少しも陸上とかはらない。

六1088(略) うちにも村にも、かはつた事はありません。三月十八日 千

太 兄上様
六1081(略)、千年もたつたかと思

ふ老木の下へ行つた時には、何となく心持がかはつて、一そうありがた

くかんじた。
七211 すると、これまで潮の満ちて

ゐた稻村崎は、(略)、二十餘町にはかに干上つて砂地にかはり、(略)。

九172 保護色ヲモツテキルモノノ中ニハ、季節ニヨツテマハリノ物ノ色

ガカハレバ、ソレニツレテ同ジヤウナ色ニカハルモノモアル。

九173 (略)、ソレニツレテ同ジヤウナ色ニカハルモノモアル。

九176 又季節ニヨツテカハルクラキデナク、何時デモマハリノ物ノ色ガ

カハレバ、間モナクソレト似タ色ニカハルモノモアル。

九177 (略)、何時デモマハリノ物ノ色ガカハレバ、間モナクソレト似タ

色ニカハルモノモアル。
九178 (略)、間モナクソレト似タ色

ニカハルモノモアル。
九682 汽車が進むにつれて、關東平

野はだん／＼夜の景色にかはつて、見なれた所も面白く感じた。

九85 どの星かを見おぼえて置いてごらん、寝る頃にはもう位置が變つて見えるから。
 九86 星がそんなに位置の變るものなら、目當にならないでせう。
 九86 それに、たくさん星の中に一つだけ、年中ほとんど位置の變らないのがあるから、
 九87 北斗七星は何時もあんなにひしやくの形をしてゐて、北極星との關係も常に變らないから、
 九89 におさん、やつぱりにいさんのおつしやつたやうに、星の位置は變りますね。
 十31 ところで此の運河は、非常に變つた仕組に出來てゐるのである。
 十38 壑地は、まるで足のふみ場も無い有様である。私は思はず、「やあ、すっかり變つた。」と聲をあげると、
 十一10 唯商業の取引の盛な部分は、相當に活氣を帯びてをり、西洋風の建物もあつて、趣がやゝ變つてゐる。
 十一57 ものすごい程青白くはつた老砲手の顔には、決心の色が浮んだ。
 十一98 本を讀みたいといふ心は少しも變らなかつた。
 十二11 早速兩手に一匹づつつかむと、又一匹變つたのが見えた。
 十二33 あゝ、此のむざんな光景

を御らんない。山も森も村も皆焼野が原と變つてゐます。
 十二110 諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力もだんく電氣に變つて、
 かわるがわる「代」4 かはるがはる かはる
 五29 うちのまはりのうめ・もも・さくら、かはるに花さきみだれ、
 八46 小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれてゐる。
 八75 一日祝賀會の席上で、人々がかはるぐ立つて、コロンブスの成功を祝しますと、
 九107 砲口はかはるがはるいなづまのやうな砲火をはいては、耳もつぶれさうにほえてゐる。
 かん「冠」1 冠
 十二13 君と親とに眞心を捧げ盡くして仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、今更いふまでもない。
 かん「巻」↓ろくせんくひやくごじゅうろつかん
 かん「間」(名) 6 間 ↑あいだ ↓いっしゅうかん・いっぶんかん・おさかこうべかん・ごしゅうかん・ごふんかん・しじゅうにちかん・とうきょうとはしかん・とうきょうよこはまかん・とおかかん・なかかん・に

しゅうかん・にねんかん・みつかかん
 八21 河口ヨリ海上百里ノ間、海水コレガタメニ赤シトイフ。
 十一33 瀬戸内海には、大小無數の島々各所に散在す。船の其の間を行く時、
 十一34 兩岸及び島島、見渡す限り田園よく開けて、毛氈を敷けるが如く、白壁の民家其の間に點在す。
 十二17 原稿締切時刻より刷出まで其の間僅かに數十分、
 十二85 それより山を越え、河を下り、湖を渡りて、
 十二102 遠く連なる田園の間に東西に走る三筋の路は、
 かん「貫」↓さんしじっかん・ひゃっかんいじょう
 かん「感」(名) 4 感
 十三7 平生きはめて御質素にわたらせられし御有様、一つくの御品の上にうかゞはれて、無量の感に打たれたり。
 十118 此の神社は菅公の御墓所に建てたものだといひ、一層感を深くした。
 十二41 一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか彼自らも覺えないやうである。きやうだいは唯うつとりとして感に打たれてゐる。

十二103 愛すべく美しき山野は、更に太古以來の歴史と結び文學と結びて、感いよく深きを覺ゆ。
 かん「管」↓ゴムかん
 かん「館」↓だいいはいくぶつかん・だいはくぶつかん・としよかん・はくぶつかん・りようじかん・ループルはくぶつかん
 かん「観」(名) 1 観
 十二137 自分で思ふまゝに造り出す創造力は、十分に發揮せられたことがなく、昔から殆ど摸倣のみを事として來た觀がある。
 かん「鑑」(名) 4 鑑 ↓たかちほかん
 九115 兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。
 九115 兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。
 十128 拜觀者の目は、一せいに艦にそゝがれぬ。
 十129 見る艦は速力を増して、白波高く海にをどり入る。
 かん「岸」↓とうなんがかん
 かん「雁」(名) 8 雁
 一34 ガンガトンデキマス。一二三四五六七八九十、十バトンデキマス。
 一35 ガンガンワタレ。
 一35 ガンガンワタレ。
 一32 オホキナガンハサキニ、チヒサナガンハアトニ、

ナカヨク ワタレ。
 一354 圖 オホキナガンハ サキニ、チヒサナガンハ アトニ、ナカヨク ワタレ。
 五263 ハ ツバメ 〈略〉。ガントオナジク、ワタリ鳥デ、アタ、カニナツテ、ガンガ北ノ國ヘカヘルコロ、南ノ國カラワタツテ来マス。
 五264 〈略〉。アタ、カニナツテ、ガンガ北ノ國ヘカヘルコロ、南ノ國カラワタツテ来マス。
 五267 サウシテダンくスバシクナツテ、ガンガソロくワタツテ来ルコロ、南ノ國ヘカヘツテ行キマス。
 かんあんいらい 「歓庵以来」(名) 1
 歓庵以来
 九2810 歓庵以来代々力をつくして来た農學は、信季の望通り、信淵に至つて大成したのである。
 かんあんさま 「歓庵様」(人名) 2
 歓庵様 歓庵様
 九224 圖 〈略〉、四代前の歓庵様が、國民利福の本は農業を盛にするにあるとお氣づきになつて、始めて農學をお修めになり、りつばな書物もお書きになつた。
 九2410 圖 歓庵様は佐藤の家の農學の本をお開きなされ、元庵様はおもに氣候と農業との關係をお調べなされたが、〈略〉。
 がい 「願意」(名) 1 願意
 十二1327 西郷は軍令を出して翌日の

進軍を中止させた。さうして〈略〉、とうく徳川方の願意をとほさせた。
 かんえんそうしんゆうじやくら 「顔淵曾参有若等」(人名) 1 顔淵・曾参・有若等
 十一617 圖 門人三千人、其の最もすぐれたるもの、顔淵・曾参・有若等七十二人なりき。
 がんか 「眼下」(名) 2 眼下
 十一618 右手には遠く日高境の山々が大浪のやうに連なり、眼下には廣々とした十勝の太平洋がはるばると續いて、〈略〉。
 十二1024 圖 今若草山に登りて古京の跡を展望すれば、眼下に横たはる奈良市街の西、遠く連なる田園の間に東西に走る三筋の路は、〈略〉。
 かんがい 「感慨」(名) 1 感がい
 十608 圖 「お、降つたはく。世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。」感がいに打沈みてとほく／＼と歩を運ぶ。
 かんがえ 「考」(名) 4 カンガヘ考
 ↓おかんがえ
 二293 圖 「ナルホドヨイカンガヘダ。」トイッテ、ミンナカンシンシマシタ。
 九1213 圖 シカシ今度ノ候補者ノ中ニ、實ニリツパナ考ヲ持ツテキテ、アノ人ナラバト思ハレル人ガアルカラ、〈略〉。
 十二247 文明の進んだ今日尚此のや

うな考を持つのは、大きな誤といはねばならぬ。
 十二1284 圖 〈略〉、今日日本の周圍には諸外國が様々の考を持つて見てをるので、〈略〉。
 かんがえおよぶ 「考及」(五) 1 考へ及ぶ 《一》
 十二544 ねぢは、〈略〉などと考へてゐる中に、ふと自分の身の上に考へ及んだ。
 かんがえこむ 「考込」(五) 1 考へ込む 《一》
 十二917 釋迦は生れつき同情の念に厚く、何事も深く考へ込むたちであつた。
 かんがえちがい 「考違」(名) 1 考違
 八1026 圖 今になつて始めて、考違をしてゐたことがお分りになるでせう。
 かんがえもの 「考物」(課名) 4 カンガヘモノ カンがへもの
 二目6 五 カンガヘモノ
 二137 五 カンガヘモノ
 三目8 七 カンがへもの
 三175 七 カンがへもの
 かんがえる 「考」(下) 18 かんがへる 考へる 《一》《一》ヘル ↓おかんがえる
 五466 圖 「上のうすには、どうして米を入れる。」それまではまだかんがへなかつた。
 五697 〈略〉、此の村の庄屋が、村のことをいろ／＼と考へたすゑ、ど

うかして村のあれ地を田地にして、米がとれるやうにしたいものだと思つた。
 五696 どうしても大きな用水池を掘らなければならぬと考へた。
 八364 越前守はじつと考へましたが、「〈略〉。」といひました。
 九3410 〈略〉、此の前來た時の事を考へながら、出後のわらびを一本折つて、又歩き出す。
 十一182 お暇してから、私は〈略〉自分の始末のわるいことを考へて、つく／＼恥づかしくなりました。
 十一417 ぼんやりいろ／＼の事を考へてゐるうちに、いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。
 十一668 それから少し進むと、石や金を打合はせて火を出す法を考へるやうになつた。
 十一686 人は〈略〉、火の熱と光とをあらゆる方面に利用することを考へて來た。
 十一8810 弟はそれを見てしばらく考へてゐたが、〈略〉、「成程、二百十日目だ。」
 十一905 僕はこれまで暦といふと、今年は紀元何年であるか、何月何日は何曜日であるか、祝祭日・土用・彼岸・入梅・日食・月食が何時になるかといふやうな事を見るものばかり考へてゐたので、〈略〉。

十一115 8 本當に自治の精神に富んでゐる者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を擧げることだけを考へて、
 略。

十一120 9 園 ウェリントン公爵ともいはれるえらいお方が、おとうさんの言ひつけに背けとおつしやらうとはどうしても考へられませんか。

十二54 3 ねぢは、これ等の道具や時計をあれこれと見比べて、あれは何の役に立つのであらう、これはどんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、
 略。

十二92 7 「人は何の爲に此の世に生れて來たのか。我々の行末はどうなるだらうか。」こんな事を次から次へと考へては、遂に心の苦しみにたへられなくなつて、
 略。

十二128 3 園 略、拙者の考へる所では、
 略、うか／＼と兄弟垣にせめてゐたら、日本全國にのしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。

十二129 8 拙者は、此の談判がよしどのやうに決着するにもせよ、さやうな事になれかしとは毛頭考へませぬが、
 略。

十二130 7 西郷はしばらくじつと考へてゐたが、「よろしい。
 略。」
 かんかする「感化」(サ変) 1 感化する「一サ」
 十一101 1 リンカーンは
 略、其の

後何度もく讀返してゐるうちに、此の偉人の品性に深く感化された。
 かんかん (副) 3 かんく
 九32 8 かんく／＼とこずゑをてらしてゐる十時過ぎの日かげが、若葉の色を下に投げるのか、
 略。

九60 4 日はかんく／＼と照つてゐる。
 九78 3 枯れかゝつて一面に黄色になつたじやがいも畑を、午後の日がかんく／＼と照らしてゐる。

かんき「歡喜」(名) 1 歡喜
 十二12 7 略、歡喜の眼を輝かしながら、博物學や地質學の實地研究につとめ、種々の材料を集めて本國に歸つたのはそれから五年の後である。

かんきよう「感興」(名) 1 感興
 十一34 10 園 略、屋島・壇浦は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。

かんきよう「鑑橋」(名) 2 鑑橋
 九60 10 鑑橋には當直將校の姿が見え、其のそばには、望遠鏡を持つた信號兵が遠くを見張つてゐる。

九61 6 人の顔がやつと見分けられるやうになつた頃、時鐘番兵がこと／＼と鑑橋の下へ來て、「總員起し五分前。」と當直將校に報告する。

かんぐん「官軍」(名) 7 官軍
 六97 3 賊が千早城一つを持餘してゐると、方々で官軍が賊のひやうらう道をふさいだので、賊は人馬ともにつかれた。

六97 6 略、はじめ百萬騎といつた賊も、
 略、前後から官軍にうたれて、殘少になつて退いた。

十二124 7 明治元年三月徳川慶喜征討の官軍は諸道より並び進んで、東海道先鋒は品川に、東山道先鋒は板橋に着いた。

十二125 4 慶喜から官軍に對する交渉の全權を委任せられてゐた舊幕府の陸軍總裁勝安芳は、
 略。

十二125 8 略、安芳は三月十三日官軍の參謀西郷隆盛に會見を求めた。
 十二126 7 屋敷の附近は、官軍の兵士がすき間もなく警衛してゐる。

十二127 9 次の間には官軍の荒武者共がひかへて、何となく物々しい。
 かんぐんがた「官軍方」(名) 2 官軍方

十二128 2 園 官軍方の御意見はどのやうなものか存じませんが、拙者の考へる所では、
 略。

十二129 4 園 徳川侍のなまくら刀にも少しは切れる所がござりませう。官軍方の思召通り一押にはゆかぬかも知れませぬ。

かんけい「關係」(名) 8 關係
 九25 2 園 略、元庵様はおもに氣候と農業との關係をお調べなされたが、
 略。
 九46 6 園 スナハチ物ノ價ノ高下ハ、主トシテ需要ト供給トノ關係ニヨルナリ。

九88 6 園 北斗七星は何時もあんなにひしやくの形をしてゐて、北極星との關係も常に變らないから、
 略。

十一1 6 これほど我々に重大な關係のある太陽とは、一體どんなものであらう。

十一11 3 第三課 上海 略。貿易上最も重要な關係をもつてゐるのは、日・英・米三國で、我が居留民の數は、外國人中第一位を占めてゐる。

十一76 8 其の後宣長は絶えず文通して眞淵の教を受け、師弟の關係は一日と親密の度を加へたが、
 略。

十一115 2 市町村長や議員を選擧するには、
 略、決して親族・縁故其他私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。

十二15 3 園 第四課 新聞 略。
 略、こゝに始めて我等の生活に切實なる關係を有するものとはなりぬ。

かんけい・する「關係」(サ変) 2 關係する「一シ」
 十一15 5 園 朝鮮の青年も、近頃はなか／＼頭が進んで來ましたので、あちらの教育に關係してゐる私どもは、非常に喜んでをります。

十二23 6 即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、忽ち國全體の商品の信用に關係して、
 略。
 かんげき「感激」(名) 1 感激
 十二44 3 略、最後は又急流の岩に

激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、〈略〉。

かんげき・する 「感激」(サ変) 1 感激する 《一シ》

十一764 老學者の言に深く感激した宣長は、〈略〉。

かんこ 「歓呼」(名) 2 歡呼

十一142 「命中、々々。」一同は歡呼の聲をあげた。

十一255 第二十六 進水式 〈略〉。

〈略〉、工場といふ工場、船といふ船の汽笛が一せいにあぐる歡呼の聲。

かんこ 「看護」(名) 1 看護

十一288 グレースの眞心こめた看護によつて、全く元氣を回復した人々は、〈略〉。

かんこう 「菅公」(人名) 2 菅公菅公

十一1185 此の神社は菅公の御墓所に建てたものだと聞いて、一層感を深くした。

十一1199 此處は菅公配所の跡である。かんこう 「漢口」(地名) 1 漢口

八219 又沿岸ニハ上海・漢口等アリテ、我が國トノ貿易甚ダ盛ナリ。

かんこう 「漢江」(地名) 1 漢江

十一768 龍山はもと漢江にのぞんだ小さな町であつたが、〈略〉。

かんこう・す 「刊行」(サ変) 1 刊行す 《一セ》

十一1308 福田行誠かつて鐵眼

の事業を感歎してはく、「鐵眼は一生に三度一切經を刊行せり。」と。かんざし 「簪」(名) 1 カンザシ

七829 カンザシノ玉ヤ根ガケノ玉ニスルサンゴハ、皆此ノ蟲ノ骨デアル。

かんざ・ぶ 「神」(上) 1 神さぶ

十二1010 〈略〉、秋は春日の社神さび、手向山の紅葉夕日にはゆる様殊に見所あり。

かんじき 「櫓」(名) 1 かんじき

九955 登山者はんじきをはいて、石づきの付いた金剛杖や薦口を力に、此の坂を登るのです。

かんしゃ 「甘蔗」(名) 1 甘蔗

十一1065 世界に名高きブラジルコーヒーの主要なる産地も此の邊にて、甘蔗・綿花・米等もよく出来る由に候。

かんしゃ 「感謝」(名) 1 感謝

十一784 〈略〉、其の使用に馴れきつてしまつてゐる我々は、〈略〉、又之を考案した昔の人々に對して別段感謝の念を起すこともない。

かんしゃいたしお・り 「感謝致居」(ラ変) 1 感謝致居り 《一リ》

十二1217 これも全く先生方のおかげと深く感謝致居り候。

かんしゅ 「艦首」(名) 1 艦首

十一288 艦首につるしたるくす玉ばつとわれて、紅白の紙片花ぶききの如くに散る中を、羽音高く舞上る數

羽の鳩。

かんじよ 「官女」(名) 2 クワンヂヨ

くわんぢよ

四618 一人のくわんぢよが其の下に立つて、まねいて居ます。

四857 オ花「クワンヂヨノリヤウワキニカザツテアルノデセウ。〈略〉。」

かんじよう 「勘定」(名) 1 勘定

十二1214 毎晩賣上高の勘定を致す時など、〈略〉、何時もほめられ申候。

がんじよう 「頑丈」(形状) 1 ガンジヨウ

八483 第十三 驚 〈略〉、アクマデモガンジヨウナツバサ・尾、何所ニ一分ノスキモナク、強ミガ全身ニミチミチテキル。

かん・じる 「感」(上) 2 感じる

十一856 坑外に出ると、急に夜が明けたやうで、日光の有難さをしみく感じると共に、〈略〉。

十一1011 とりくの花の色、むせ返るやうな強い香、ぼうつと身を感じる暖さ、〈略〉、まるで春の國に居るやうだ。

かんしん 「奸臣」(名) 1 奸臣

十一49 長じて後魯の君に仕へ、大いに治績を挙げしかども、奸臣の爲にさまたげられ、久しく其の職に居ることあたはずして魯を去

りぬ。

かんしん 「感心」(名) 2 感心

九1182 おかあさんの精神は感心の外はない。

十一717 其の時の言葉にたがはず、眞先かけて參つたは感心の至り。

かんしん 「感心」(形状) 4 感心

八114 感心だ、感心だ。えらい子だ。〈略〉、人の命にはかへられないと思つて、相手を助けてやつたのはえらい。

八114 感心だ、感心だ。

八571 米屋の小ぞうお得意へ米を運びし歸り途、〈略〉、すぐに老婆をみちびきぬ。「年の若きに感心な。」かくいふ聲を後にして、小ぞうは乗りぬ、自轉車に。

十一173 弟さんまでが、あんなに氣をつけていらつしやるとは實に感心なことです。

かんじん 「漢人」(名) 1 漢人

十二639 即ち赤・黄・藍・白・黒の五色を横に並べたるものにて、赤は漢人、黄は滿洲人、藍は蒙古人、白は回疆人、黒は西藏人を代表するなり。

かんしんいた・す 「感心」(五) 1 かんしん致す 《一シ》

七754 さてく、二人ともまことに心がけのよい者。近頃かんしん致した。

かんしん・する 「感心」(サ変) 10 カ

ンシンスル かんしんする 感心する

《一シースル》

二294 「ナルホド ヨイカンガヘ
ダ。」トイッテ、ミンナ カンシン
シマシタ。

六448 雷はかんしんして、「あゝ、
月日の立つのは早いものだ。自分は
夕立にしよう。」

六635 親を思ふ孝子の心には、頼朝
もかんしんして、石のらうから唐糸
を出して、萬じゆに渡しました。

七1077 《略》、べんぜつさわやかに申
し開きました。秀吉は感心して、
《略》。

八1034 之を聞いて、手足等一同は、
なるほどと感心したといひます。

九799 あちらでもこちらでも、驚く
聲、感心する聲、うれしさうな聲。

九895 図「さうだ。《略》、道に迷つ
た時などにもすぐ方角を知る事が出
来る。」信吉は感心して、熱心に空
を仰ぎあしが、驚けるやうに聲をあ
げて、「《略》。」

十593 《略》、何人も其のかしこさと
勇ましさに感心しない者はあるまい。

十一155 一年生の時からの成績物も
見せていたゞいて、其の始末のよい
のに感心してしまひました。

十二305 市街を見物して私の特に
感心したのは、市民が交通道德を重
んずることです。

かんすー 関〔サ変〕5 関す 《一ス

ル》

十一1255 図 一切経は、佛教に關する
書籍を集めたる一大叢書にして、此
の教に志ある者の無二の寶として貴
ぶところなり。

十二165 図 《略》、編輯・營業の二局
ありて、編輯に關することは前者之
を司どり、販賣・廣告に關すること
は後者之を擔當す。

十二166 図 《略》、販賣・廣告に關す
ることは後者之を擔當す。

十二1122 図 《略》トマス、エヂソン
は、既に電話機に關する發明に成功
したるを以て、《略》。

十二1149 図 エヂソンの發明せるは電
話・電燈・電信・電車・活動寫眞・
蓄音機に關するものなど極めて多く
《略》。

かんすー 感〔サ変〕1 感ず 《一
ぜ》

八288 図 又筆一本にて美しき繪をあ
がき、のみ一ちやうにて見事なるほ
り物をほりて、人を感じしむるも、
手の働なり。

かんすー 観〔サ変〕1 観ず 《一
ジ》

十二1354 殊に徳川幕府二百餘年の鎖
國は、《略》、徒に此の小天地を理想
郷と觀じて、世界の大勢を知らぬ國
民とならしめた。

かんすー 卷數〔名〕1 卷數

十一1257 図 一切経は、佛教に關する

書籍を集めたる一大叢書にして、此
の教に志ある者の無二の寶として貴
ぶところなり。しかも其の卷數幾千
の多きに上り、《略》。

かんすー 感〔サ変〕8 かんずる

感ずる 《一ジーズル》

六1053 図 宇治橋を渡つて神苑に入り、
千年もたつたかと思ふ老木の下へ行
つた時には、《略》、一そうありがた
くかんじた。

九682 汽車が進むにつれて、關東平
野はだんく夜の景色にかはつて、
見なれた所も面白く感じた。

九1091 北風は、主人の體がくらの上
でぐらつとゆれるのを感じた。

十783 図 《略》、學校へ行く途中など
は、寒いといふよりもいたいやうに
感じます。

十一594 札幌に來て先づ感ずること
は、街路が眞直で幅の非常に廣いこ
とである。

十一783 此のやうに便利なものも、
其の使用に馴れきつてしまつてある
我々は、これについて事新しく便利
を感ずることもなく、《略》。

十一905 僕は《略》、此の話を聞いて
珍しく感じた。

十二924 しかし彼は城外に出る毎に、
杖にすがるあはれな老人や、息もた
えだえの病人、さては野邊に送られ
る死者をまのあたり見て、益々世の
はかなさを感じた。

かんせいす 完成〔サ変〕1 完成

す 《一セ》

十一1302 図 《略》、一切経六千九百五
十六卷の大出版は遂に完成せられた
り。

かんせいす 完成〔サ変〕1 完
成する 《一シ》

十一687 しかし火の利用法は、決し
てこれで完成したといふわけではあ
るまい。

かんぜおん じばとうかんぜおん
がんせき 岩石〔名〕1 岩石

十315 パナマ地峡は一體に小山が起
伏してゐる上に、地層にはかたい岩
石が多い。

かんせつ じちよくせつつかんせつ
かんせつ 關節〔名〕1 關節

十二839 手や足の關節を曲げたり延
ばしたりして、出發の號令を待つ。

かんぜん 完全〔形状〕1 完全

十一1167 例へば教育・衛生等の自治
團體の事業は、《略》、始めて其の効
果を完全に擧げることが出来る。

かんぜん 眼前〔名〕2 眼前
九984 図 《略》、眼前には杓子岳や
鐘岳がぬつとそびえ、《略》。

十一615 しばらく暗黒の中を通つて
再び光明の世界に出た時、突如とし
て眼前に展開せられた風景は、《略》。
かんたかい 甲高〔形〕2 かん高
い 《一イ》

九334 《略》、急にかん高い音を立て

て、美しい小鳥が二三羽、身がるに枝移りした。

十119 掛茶屋に休んで名物の餅を食べてみると、不意にかん高い鳥の聲が聞えた。

かんたん「簡単」(形状) 1 簡単

十二708 略、コーデリヤの簡単な答の中にも十分真心のこもつてゐるのを認め、略。

かんたん・す「感嘆」(サ変) 2 感嘆す「シ・セ」

九38 後日レマン將軍が捕虜としてエンミツヒ將軍の前に引出されし時、エンミツヒ將軍はみづから進んで握手を求め、「閣下の防戦はまことに見事であつた。」と感嘆せるに、略。

十一1307 福田行誠(ぎやうせい)かつて鐵眼の事業を感嘆してはいはく、「鐵眼は一生に三度一切經を刊行せり。」と。

かんちゅう「眼中」(名) 1 眼中
十二242 それ故大多數の商人は、自己の利益を除いては、殆ど何物をも眼中に置かず、略。

かんちゅう「いちどう」[艦中一同](名) 1 艦中一同
九118 豊島沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念に思つてゐる。

かんちゅう「おう」[漢中王](名) 1 漢中王
十一1124 蜀(しゆ)の國、漢中王はおごそかに帝の

位をふませ給ひぬ。

かんちゅう「艦長」(名) 1 艦長

九67 略、艦長をはじめ乗員一同は、皆姿勢を正して、軍艦旗に敬禮する。

かんてん「寒天」(名) 1 カンテン

七858 略、トコロテンヤカンテンニスルモノニハ、テングサヤエゴノリガアル。

かんど「勘当」(名) 1 勘當
十二699 娘の答に失望した王は、略、「お前にはもう何もやらぬぞ。永の勘當だ。」と言渡した。

かんど「感動」(名) 1 感動
十五9 高橋さんの熱心な話は、それからそれへと續いて、團員に強い感動をあたへた。

かんど「す」[感動](サ変) 1 感動す「セ」

十一1297 鐵眼の深大なる慈悲心と、あくまで初一念をひるがへさざる熱心とは、強く人々を感動せしめしにや、喜んで寄附するもの意外に多く、略。

かんど「する」[勘當](サ変) 1 勘當する「シ」

十二707 リヤ王はフランス王を其の場と呼んで、コーデリヤを勘當したことを告げた。

かんと「うへい」[關東平野](地名) 1
關東平野
九68 汽車が進むにつれて、關東平

野はだんく夜の景色にかはつて、見なれた所も面白く感じた。

かんと「くする」[監督](サ変) 1 監督する「シ」

十一1178 昔イギリスの或大きな農場で、農場主が大勢の人の耕作するのを監督してゐた。

かん「鉋」(名) 3 カンナ
四593 略、カンナデ板ヲケツルモノモアリマス。

四596 私ハカンナヲカケテ居ルヲ見ルコトガスキデス。

四601 ヨクキレルカンナガスウツト板ノ上ヲ通ルト、略。

かん「ない」[艦内](名) 2 艦内
九614 艦内は深山のやうな静かさである。

九638 數分の内に艦内はすっかり整頓する。

かん「なくず」[鉋屑](名) 2 カンナクヅ

四602 ヨクキレルカンナガスウツト板ノ上ヲ通ルト、カンナクヅガヒトリデニクルリトマハツテスベリオチマス。

四604 風ガ吹クト、カンナクヅガ小屋中マツテアルキマス。

かん「ぬき」[門](名) 1 ぐわんぬき

十一1187 ジョージがとんで行つて門の戸にくわんぬきをさすが早いか、騎馬の人たちはもう門の外まで乗りつけた。

かんぬし「神主」(名) 2 神主

八75 神主は先づ神前で祝詞を上げて、それがすむと、「支度」といふあひづの一番太鼓を鳴らした。

八94 略、神主は二人の者だけで、もう一度競走させることにした。

がんねん「ん」でねんがねん・めいじがねんさんがつ

かん「のん」はせかんのん

かん「ばしい」[芳](形) 1 かんばしい

七343 なはてつたひに來る風も、若葉のにはひかんばしく、空一ぱいの星は皆、涼しく金にまた、けり。

かん「ばつ」[間伐](名) 1 間伐

十一376 略、此のくらゐ離して植ゑても、十五六年目には間伐をしなればならないやうになるから。

かん「ばつ・する」[間伐](サ変) 1 間伐する「シ」

十一373 早く間伐して細材を取る目的のところでは、一坪に二本も三本も植ゑるが、略。

かん「ばん」[看板](課名) 2 看板

八目5 第十六 看板
八582 第十六 看板

かん「ばん」[看板](名) 12 看板

八584 學校用具ヲ賣ル店ニ、手帳・筆・墨・繪具ナドト記シタル看板ヲ出シ、略。

八58 5 図 〈略〉、ハキ物屋ニ下駄・草履・傘ナドト、大字ニテ目立ツヤウニ記シタル看板ヲ出セルハ、ヨク人ノ知ル所ナルベシ。

八58 6 図 スベテ看板ハ商品又ハ職業ノ名、屋號等ヲ記シテ、人目ニツキヤスカラシメントスルモノナリ。

八59 2 図 ヨリテ看板ノ如キモ、タヤスク人目ヲヒカシメンガ爲ニ、キンヒテ小屋根ノ上ニカ、グルニ至レリ。

八59 9 図 彼ノ燒諸屋ノ看板ニ、八里半ト記セルモノノ如キハコレニシテ、其ノ味クリニ近シトイフ意ナリ。

八60 4 図 看板ニハマタ商品ヲエガキタルモノアリ。

八60 5 図 洋物屋ノ看板ニ、シヤツ・襟・襟飾ノ類ヲエガキ、〈略〉。

八60 7 図 〈略〉、金物屋ノ看板ニ、鍋・釜・庖丁ヲエガクノ類ナリ。

八61 7 図 〈略〉、寫眞屋ニハ、寫眞ノ看板モアリテ、看板ノ種類ハキハメテ多シ。

八61 8 図 〈略〉、看板ノ種類ハキハメテ多シ。

九80 7 図 石安工場と筆太に、小屋根に上げし看板が 往來の人の目につきて、〈略〉。

十23 5 図 歸りに散歩がてら町を歩いて見ると、〈略〉、店の看板にも馬が書いてあるのがよく目につきました。

かんばん 〔甲板〕(名) 6 甲板 甲板

じようかんばんあらい・じようかんばんあらいかた

七42 1 すると甲板の上で鐵砲を上げた者がある。

七55 7 図 又ある時にはとび魚が甲板の上へとび上ることもあります。

九65 2 下士官が、甲板の吐水口からふき出る海水を、桶に汲んではどんく流すと、〈略〉。

九65 4 図 〈略〉、ブラシを持った數十人の水兵が、甲板をこすりながら頭を並べて進んで行く。

十113 1 甲板に立つてゐた船長を始め十人許の乗組員は、ひとしく目を其の方向に向けた。

十一55 8 これまでにこくしてながめてゐた老砲手は、〈略〉、「しつかりしろ。負けるな」と、甲板からしきりに勵ました。

かんばんあらい 〔甲板洗〕(名) 3 甲板洗

九65 1 水兵はくもの子を散らすやうに八方へ散つて、〈略〉、身輕な姿となつて分隊毎に甲板洗を始める。

九65 1 甲板洗はいかにも勇ましく面白いものである。

九65 7 甲板洗がすむと、「總員顔洗へ。」「煙草ばん出せ。」の令が下る。

かんばんしかん 〔甲板士官〕(名) 1 甲板士官

九61 8 間もなく甲板士官や傳令員が起きて来る。

かんび 〔艦尾〕(名) 1 艦尾

九66 8 午前八時になると、艦尾の旗竿に軍艦旗があげられる。

かんびようする 〔看病〕(サ変) 1 看病する 《一シ》

八46 9 図 祖母一人孫一人の事だから、五日でも十日でも、一人で寝起の出来るまで、ゆつくり看病して上げなさい。

かんぼう 〔感冒〕(名) 1 感冒

十一43 4 図 實は去月十日頃より感冒の心地にて引きこもり居候處、〈略〉、遂に肺炎を引起し申候。

かんぼく 〔灌木〕(名) 2 灌木 灌木

十一108 8 図 森林には大木すき間もなく繁茂し、其の根本には、つる草・灌木など思ふまゝにはびこり居候。

十一109 4 図 先づ柄の長さ一間もあるなにて灌木を伐拂ひ、〈略〉。

かんむり 〔冠〕(名) 1 冠

六69 4 京都は長い間の都ですから、冠をかぶつて太刀をはいたおかげ様方や、〈略〉。

かんめい 〔簡明〕(形状) 1 簡明

十一7 8 図 「おのれを修めて人を安んず。」とは、彼が簡明に此の意をあらはせる語なり。

かんや 〔寒夜〕(名) 1 寒夜

十一71 9 図 又寒夜に秘藏の鉢の木を切つてたい志は、何よりもうれしく

思ふぞ。

かんゆうする 〔勧誘〕(サ変) 1 勧誘する 《一スル》

十一115 4 市町村長や議員を選挙するには、〈略〉私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。まして威力によつて強制するとか、私利によつて勧誘するとかいふやうな手段を用ひたり、〈略〉。

がんらい 〔元來〕(副) 2 元來

十一52 4 元來ゴム液は、幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るのであるから、〈略〉。

十二61 8 図 元來イギリスは、イングラント・スコットランド・アイルランド三國の合同して成れる國家にして、〈略〉。

き

き 〔木〕(名) 100 キ 木

き かつおぎ・かれき・きねんのき・くさき・ゴムのき・しいのきとかしのみ・じくぎ・しらきづくり・ぞうき・ぞうきやま・たちき・ちぎ・つきき・つみき・とまりき・なえぎ・なまき・なみき・はちのき・バラゴムのき・はんぎ・パンのき・ひょうしぎ・まくらぎ・まつなみき・まるきぶね・わかぎ

一12 3 圖 ハヤク キ ニナレ。ナ

ラヌト、ハサミデ ハサミキル。
 一 131 キニナリマシタ。
 一 292 ヤマニハ、キガウエテアリマス。
 一 403 罎 アレアノモリノスギノキノウヘニ。
 一 411 罎 アレアノドテノヤナギノキノウヘニ。
 一 416 罎 アレアノヤマノマツノキノウヘニ。
 一 132 木 ノエダニ、コトリガ十バトマツテキマシタ。
 一 136 木 ニマダナンバトマツテキマセウカ。
 一 184 マツノ木ノアヒダガダンダンアカルクナツテキマス。
 一 186 モウスツカリ木ノ上ヘデマシタ。
 一 202 罎 コノ山ニハ、クリノ木ガタクサンアリマス。
 一 213 「ソレデハムカフニ大キナ木ガアリマスカラ、アノ木ノ下ヘイツテミマセウ。」
 一 215 罎 「略」、アノ木ノ下ヘイツテミマセウ。」
 一 223 罎 ドコカラキタノカ、トンデキタ木ノハ、略。
 一 234 罎 ドコカラキタノカ、トンデキタ木ノハ、略。
 一 385 罎 サイタサイタハナガ、マツ白ナハナガ。マツノ木ノエダニ、タケノハノ上ニ。

二 447 ヨイオヂイサンハ略小サナマツノ木ヲウエマシタ。
 二 452 ソノマツノ木ハズンズン大キクナリマシタ。
 二 455 ヨイオヂイサンハソノ木ヲキツテ、ウスヲコシラヘマシタ。
 二 677 ケサウグヒスガウメノ木デ、ホウホケキヨウトナキマシタ。
 三 286 罎 ゆふべの雨でくさや木のみどりいろますなつのあさ、略。
 三 576 ニハノモモノ木ノネモトカラ、カラヲキタセミガハヒ上ツテキマス。
 三 597 今ニハノ木ニセミガウルサイホドナイテキマス。
 三 767 ソコデカウモリハシカタナシニ、ヒルハ木ノウロヤアナノ中ニカクレテキテ、略。
 三 841 略、松の木に美しい物がかがつてゐました。
 四 48 私のうちには柿の木が五本あります。
 四 52 しぶ柿が三本、あま柿が二本で、その中に私の木が一本あります。
 四 57 おちいさんがこの柿の木を、ついでいらつしやる時、下の男の太七がわらひながら、

「略」といつたさうです。
 四 68 今年は柿のあたり年で、どの木にもよくみがなりました。
 四 73 私の木も枝がをれるほどなつてゐます。
 四 242 前の畠の柿の木は、はがまつかになつてゐて、略。
 四 358 略、森ヤ林ノヒクイ木ノ枝ニトマツテ、ボンヤリトシテ居ルコトガアリマス。
 四 561 罎 略、しひの木は、根もとへ草もよせつけぬ。
 四 575 罎 何百年かたつた後、山のふもとの大木はあのしひの木か、かしの木か。
 四 575 罎 何百年かたつた後、山のふもとの大木はあのしひの木か、かしの木か。
 四 588 ノコギリデ木ヲキルモノモアリ、略。
 四 606 私ハ昨日大工サンカラ木ノキレヲタクサンモラツテ、友ダチトツミ木ヲシテアソビマシタ。
 五 104 罎 「頭が八つ、尾が八つある大蛇で、略、せ中には、ひのきや杉の木が生えてゐます。」
 五 284 庭さきのもみぢの木は、前の川に美しいかげをうつしてゐます。
 五 294 罎 もえる木のために春風吹けば、うちのまはりのため・もも・さく

ら、略。
 五 314 罎 松をのこして木の葉がちれば、庭は一日がよくあたる。
 五 395 八幡様の高い石だんを上りつめた所に、しめをはつた大きな杉の木がありました。
 五 686 略、其の杉山なんぞは、木もろくにない草山だつたといふことだ。
 五 978 一人は早く見つけて、木の上へにげ上りました。
 五 988 此の時、木に上つてゐた者が下りて来て、「どんなにこはかつたらう。略。」
 五 991 罎 僕は木の上から見て、びく／＼してゐた。
 六 168 何の木か、おがくづが大そうよくにほつてゐました。
 六 272 こんな寒い日にも、朝早くから、高い木の上をとびまはつて鳴いてゐる。
 六 1003 罎 昨日學校で校長に、あの木の事を話したら、はじめて聞いた記念の木、大事にするとおつしやつた。
 六 1004 罎 略、はじめて聞いた記念の木、大事にするとおつしやつた。
 七 828 中デ面白イノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテキル。
 八 113 此の間三度降つた雨に、山

の木の葉は目立つて色づいた。
八16 林の中へはいると、眞赤になつたが、松の木にからまつてをり、〈略〉。

八312 さて山の木をきり倒して、四五尺の長さいきりそろへ、〈略〉。

八317 次にかま口から火をつけて、

四五日の間、中の木をむし焼にする。八322 炭に焼く木は、主にならなくぬぎで、くぬぎの炭の方が火持がよい。

九52 団 〈略〉殊に珍しいのはコ、椰子の木やパンの木などです。

九74 団 殊に毎日のやうに降るには雨が、非常な勢で木を洗ひ草を洗つて通り過ぎた後の、あざやかな緑の世界は、〈略〉。

九110 団 井戸に近き柿の木の、日ましにのびゆく若芽のうす緑、見るに氣持よし。

九120 団 妹は餌をつかみて、わざと少しはなれたるきりの木のあたりにまきちらせば、鶏はあわてて其の方へ行く。

九167 田二住ム土蛙ハ土色、木ノ葉ニ宿ル雨蛙ハ緑色。

九184 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、其ノ色ガ桑ノ木ニ似テキルバカリデナク、〈略〉。

九185 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、其ノ色ガ桑ノ木ニ似テキルバカリデナク、〈略〉。

九185 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、其ノ色ガ桑ノ木ニ似テキルバカリデナク、〈略〉。

九186 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、〈略〉、體ノ後ノ端ヲ木ニツケテ、體ヲナ、メニツキ出スト、形ガ桑ノ小枝ニ寸分違ハナイ。

九323 其所の木のかげ、此所の石のそばには、〈略〉も見える。

九336 すると木のうろから、栗鼠が一匹、けるりとした顔を出したが、

九347 うす紅のかへで、〈略〉、どの木を見てもなつかしい。

九398 団 庭に一本なつめの木、彈丸あともいちじく、くづれ残れる民屋に、いまぞ相見る二將軍。

九958 団 下山の時には、木の枝などを櫓にして、此の雪溪をすべつて下る人があります。

九1010 うちの方をふりかへると、井戸端の柿の木に柿がすなりになつてゐるのが目につく。

十五8 団 〈略〉、新に植込みたる木の數、實に十數萬本に及べり。

十2910 団 谷間よりはひ出で、木の幹ぬらし、しらぐと、おぼろに 朝霧流る。

十385 かり取つた雑木、切倒した大木、掘起した木の根や石ころ、まだあらごなしの開墾地は、まるで足のふみ場も無い有様である。

十394 兄はそこらに散らばつてゐる木の根や、小枝などを拾ひ集めて来て、たき火を始めた。

十446 ふと見上げると、庭の柿の木には、すゞなりになつた實が夕日を浴びて、〈略〉。

十897 団 こずゑ明るき林を行けば、やぶかうじの實木の根に赤く、霜柱たつやぶかげの路、ふめばさくく銀みだる。

十1058 〈略〉、ガラス越しに見える向ふの木がひどくゆれる。

十11610 まだ芽の出ないはぜの木の間を通り、霜の眞白に置いた田の中を走る。

十一382 〈略〉、それでも木が競争するやうに、しんを立ててすくすくと延びてゐるのを見ると、非常にうれし。

十一383 木でも見下されるのがいやなのか、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

十一384 〈略〉、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

十一398 それから始めて聞いて面白いと想つたのは、枝打をしないと木に節が出来ることである。

十一3910 〈略〉、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十一499 此の液の取れる木を普通に

ゴムの木といつてゐる。
十一502 今日世界におけるゴムの大部分は、此の木から取つたものである。

十一523 切付といふのは、〈略〉、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。

十一5210 ゴム園の人は毎朝暗いうちに起きて、受持の木に此の切付をして廻る。

十一679 燈火としては、初め松の木や魚・獸の油などをたいたのであつたが、〈略〉。

十一951 〈略〉、父は自分で木を切出して小さな家を造つた。

十一956 父が木を伐れば自分は雜草をかり取る、〈略〉。

十一978 〈略〉、家で算術の練習をするには、木のシャベルと炭を用ひた。

十一1097 団 伐倒したる木は乾くまで其のまゝに致置き、〈略〉。

十一1101 団 燃えあとは取片附けて畠とし、コーヒー・わたの木などを植付け申候。

十一1244 調べかはの廻るにつれて、石や木や金の圓板が車輪のやうに廻つてゐる。

十二203 〈略〉山畑には、蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。

十二212 どの山を見てもどの谷を見ても、蜜柑の木でない處はない。
十二214 ふと見ると、ついそばの木

浪を子守の歌と聞き、千里寄せくる海の氣を 吸ひてわらべとなりにけり。

十一83 6 今日始めての遠泳だと思ふと、何だかうれしいやうな心配なやうな氣がする。

十一86 5 やうやく月島の横を通り越す頃には、もうつかれきつて氣も遠くなるばかりだ。

十一99 6 リンカーンは〈略〉、鬼の首でも取つた氣になつて一心に讀續けた。

十一121 1 公爵はひどく此の答が氣に入つた。

十二56 7 時計師は〈略〉、出して置いたねちの無いのに氣が附いた。

十二74 5 やがて眠から覺めた王は、幾分氣も靜まつたのか、「此處は何處だらう。〈略〉」

十二91 10 彼はだんく物思に沈むやうになつた。それを見てひどく氣をもんだ父王は、〈略〉。

十二120 10 參りし當座は何事もわからず、唯氣をもむのみにて、我ながら情なく存じ候ひしが、〈略〉。

き [忌] じさんかいき
き [来] じゆきき
き [黄] (名) 9 黄

四10 2 圖 ならやくぬぎのはは黄にそまり、廣いたんぽに北風あれる。

五61 1 圖 さてく、虹は美しい。

赤・黄・みどりやむらさきと、〈略〉。

九20 10 此ノ類ノ色ヲ警戒色トイフ。例ヘバ毒ヲモツテキル蜂ノ體色が黄ト黒ノダンダラニナツテヲリ、〈略〉。

九34 7 うす紅のかへで、銀ねずみ色の櫓、黄の勝つた緑のけやき、どの木を見てもなつかしい。

九96 8 圖 いろいろの珍しい高山植物が紅・黄・紫と咲亂れて、何ともいはれない美しさでずす。

十103 7 成程、緑色の絹絲で作つたのかと思はれるやうな葉もあれば、赤や黄や青や紫のまだらの美しいものもある。

十一125 2 取分け美しかつたのは電燈の笠で、赤・黄・紫・緑とりどりに目もさめるばかりであつた。

十二63 8 國旗の色彩が其の國の人種を表すものに、支那の國旗あり。即ち赤・黄・藍・白・黒の五色を横に並べたるものにて、〈略〉。

十二63 9 圖 即ち赤・黄・藍・白・黒の五色を横に並べたるものにて、赤は漢人、黄は滿洲人、〈略〉を代表するなり。

き [旗] じぐんかんき・ばんこつき
き [器] じガラスき
き [機] じいんさつき・しょうこうき・せんぶうき・ちくおんき・でんわき・はつどうき・ひこうき・むせんでんしんき・むせんでんわき・りんてん

き [騎] (名) 1 騎 じいっきうち・ごまんき・さんき・じつき・じゅうまんき・にき・ひやつき・にまんき・ひやくまんき・ひやつき

六40 2 圖 〈略〉、兵には歩・騎・砲・工・輜重の五種があつて、〈略〉。

き (助動) 130 キ き 《キ・シ・シカ》六50 3 圖 ろろりのはたに縄なふ父はすぎしいくさの手がらを語る。

七28 4 圖 大阪ハ昔仁徳天皇ノ都シタマヒシ所ニシテ、〈略〉。

七28 6 圖 〈略〉天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノ貧シキヲアハレミタマヒキ。

七30 4 圖 昔一匹の獅子、森の中に眠りしに、後の暗きやぶかげより大いなる蛇と出でて、獅子のからだにまきつきたり。

七31 3 圖 此の時此所に來りしは一人の武士なり。

七32 7 圖 かくて幾年かすぎし後、武士は海をこえてふるさとへ歸ることとなり。

七33 6 圖 獅子はかなしげにほえて、濱べに立上りたりしが、つと海の中にをどり入りたり。

七61 6 圖 どうか今から十分海になれて置くやうにしてもらひたいのであります。」とむすびたる時は、拍手の音しばらくはやまざりき。

七96 1 圖 村の役場に三十年、勤

めつゞけし小使の 年のよりしがあはれさに、人々物を出し合ひて、樂なくらしにかへてやる。

七96 2 圖 村の役場に三十年、勤めつゞけし小使の 年のよりしがあはれさに、〈略〉。

八56 4 圖 〈略〉、身なりいやしき老婆には、手をかす人もあらざりき。

八56 6 圖 米屋の小ぞうお得意へ米を運びし歸り途、〈略〉。

八57 5 圖 國に母をを残すらん、彼のまぶたにつゆありき。

八57 7 圖 下駄買ふ人も、賣る人も、下駄屋にありし人は皆、彼の姿を見送りぬ、〈略〉。

八57 9 圖 〈略〉、彼の姿を見送りぬ、さとすべき子にさとされし小さき梅をいだきつ。

八62 3 圖 昔はあきめくらも多かりしに、まことのめくらにして、大學者となりし人あり。

八62 4 圖 〈略〉、まことのめくらにして、大學者となりし人あり。

八62 6 圖 保己一は五歳の時めくらとなりしが、〈略〉、多くの書物をあらはせり。

八63 7 圖 或夜弟子をあつめて、書物を教へし時、風にはかに吹きて、ともし火きえたり。

八64 4 圖 〈略〉、弟子どもは「先生、少しお待ち下さいませ。今風であか

りがきえました。」と言ひしに、保己一は笑ひて、「略。」と言ひたりとぞ。

八96図 略、其ノ天守閣ハ加藤清正ノキヅキシ所ナリ。

九910図 景行天皇の皇子日本武尊、略、東國の方に下り給ひき。

九101図 駿河の賊を亡し給ひし後、略、海を渡り給へり。

九103図 既に大海に出で給ひしに、大風俄に吹來りて、波すさまじく荒れくるひ、御船少しも進まず、今にもくつがへらんばかりなりき。

九106図 略、御船少しも進まず、今にもくつがへらんばかりなりき。

九118図 略、尊はつゝがなく上總の國に着き給ひきといふ。

九376図 後日レマン將軍が捕虜としてエンミツヒ將軍の前に引出されし時、エンミツヒ將軍はみづから進んで握手を求め、略。

九392図 レマン將軍の目には涙ありき。

九437図 砲音たえし砲臺にひらめき立てり、日の御旗。

九705図 都をば、かすみと共に立ちしかど、秋風ぞ吹く、白河の關。

九807図 石安工場と筆太に、小屋根に上げし看板が 往來の人の目につきて、略。

九822図 略、腹のふくれし布

袋和尚、ぼたんにくるふ唐獅子も、玉をふくめるこま犬も、皆ぢいさんのみのあと。

九842図 今朝遠足にとく起きて、石屋の前を通りしに、廣き工場にたゞ一人、略。

九845図 略、安ちいさんは一心に 毘沙門天を刻みるき、めがねを掛けてはつづ着て。

九895図 信吉は感心して、熱心に空を仰ぎあしが、驚けるやうに聲をあけて、略。

九1166図 聞けば、そなたは略、かく別の働なかりきとのこと。

九11610図 一人の子が御國の爲にくさに出でし事なれば、定めて不自由なる事もあらん。

九1178図 如何ばかりの思にて此の手紙をしたゝめしか、よくよく御察し下されたく候。

十32図 又日々奉る供へ物には、御生前殊に御好みありし品々を選ぶ由なるが、略。

十36図 平生きはめて御質素にわたらせられし御有様、一つくの御品の上にうかゞはれて、略。

十39図 何れも、御在世中しばく行幸・行啓ありし所に、略。

十57図 略、立木きはめて少かりしかば、新に植込みたる木の數、實に十數萬本に及べり。

十610図 又御造營の半ば頃より、

各地方青年團の御手つだひを願ひ出づる者數多かりしかば、略。

十595図 雪の日の夕暮に近き頃、上州佐野の里に、つかれし足の歩重くたどり着きたる旅僧あり。

十685図 略、といひて目をふせしが、主人はやがて語氣を改めて、略。

十702図 始は略、宿をことわりし常世も、一夜の物語にうちとけては、名残なかく盡きず。

十704図 今一日留り給へとすゝめて止まざりき。

十707図 降積みし雪もあと無くきえて、山河草木喜にあふるゝ春とはなれり。

十905図 村の社の掃除や終へし、はうき手にく此方をさして

略、はうき手にく

十908図 略、はうき手にく此方をさして 語りつゝ來る若き人々、今朝とく出でし兄も交れり。

十969図 略、元といふ國おこり、勢日々に盛にして、宋の領地をかし、かば、宋は次第におとろへて、略。

十989図 張世傑等の奮戦も大勢を轉ずることあたはずして、宋遂に亡びしかば、略。

十1103図 尚御生前御好物なりしやうかん一折、小包便にて御送り申し上げ候間、御佛前へ御供へ下された

候。先は右とりあへず御悔申し上げ候。

十1115図 浮きばり・毛ばりの柱にけたに、振るひしのみので 巧をきはめ、略。

十12410図 村の財産家にて事業に熱心なる人、みづから先んじて耕作・養蠶・養鶏・養魚等の模範をしめししを以て、近年は作物も改良せられ、略。

十1307図 主上さきに笠置におはせし時早くも義兵を擧げしが、略。

十1307図 主上さきに笠置におはせし時早くも義兵を擧げしが、略。

十1309図 笠置も落ちたる由風聞ありしかば、力なくて止みたり。

十1316図 行幸餘りに遅かりしかば、人をしてうかゞはしむるに、略。

十1318図 略、人をしてうかゞはしむるに、播磨の今宿といふ處より、山陰道にかゝり給ひし由なり。

十1319図 略、けはしき山路をふみわけてたどり着きたりしに、略。

と人の言へば、衆皆力を失ひて散りくになりぬ。

十1333図 昔支那に呉・越とて相隣れる二國ありき。

十1334図 年久しく相争ひて互に勝敗ありしが、勾踐越の王となるに及び、略。

十1336図 後からうじて歸國することを得しが、勾踐此のうらみ忘れがた

く、〈略〉。

十一49図 少時より學問に勵み、長じて後魯の君に仕へ、大いに治績を擧げしかども、奸臣の爲にさまたげられ、〈略〉。

十一53図 當時支那は數國に分れて互に相争ひ、戰亂止むことなかりしかば、孔子大いに之をうれひ、〈略〉。

十一59図 しかも遂に志を達することを得ざりしかば、老後は専ら力を教育と著述とに用ひたり。

十一62図 門人三千人、其の最もすぐれたるもの、〈略〉等七十二人なりき。

十一67図 孔子は正義の念強き人なりき。

十一249図 されども不意を討たれし俄の軍に、清秀等の奮戰其のかひなく、〈略〉。

十一268図 盛政は勝つてかぶとのをしめざりし油斷を悔いつゝ、俄にやみの中を退却しはじめたり。

十一271図 これより先、秀吉は織田信孝を攻めて大垣にありしが、二十日の正午大岩山の敗報至る。

十一285図 明くれば二十一日の朝、

盛政は賤嶽より西北に當れる高地に兵を引きまとめたりしが、〈略〉。

十一286図 明くれば二十一日の朝、盛政は〈略〉、此の時までも飯浦坂にふみ留つて、追來る敵を防ぎ居し弟勝政に引きあげを命じたり。

十一288図 今まで賤嶽の山上より、また、きもせず戰況を見居たりし秀吉、勝政の引足になりたるを見て、〈略〉。

十一2910図 正國も槍を合はせ、しばらく防ぎ戦ひしが、俄に槍を投捨てて大手をひろげ、「組打。」と叫ぶ。

十一317図 正國得たりと、力足をふん張りてはねかへさんとせしが、ふみそこねてあはや谷底へ轉び落ちんとす。

十一318図 武器は皆槍なりしかば、世に之を稱して賤嶽の七本槍といふ。

十一419図 貴兄には去月以來御病氣にて、しかも一時は大分御重態なりし由、誠に意外の事に驚入候。

十一457図 君は畫を以て一家を成せる人なるに、數年の間一度も筆を取り給ひし事なし。

十一459図 〈略〉、畫師「〈略〉。さらば謝恩の爲に何か畫がきて參らすべし。」とて、心構せし様なりしが、〈略〉。

十一459図 〈略〉、心構せし様なりしが、尚筆も取らで數日を過しぬ。

十一477図 〈略〉、住持は尚知らぬ顔して過ししに、十日餘りにして、ふすまの鶴は二十四五羽となりぬ。

十一478図 「我が心に思ひ構へし事を如何にして知り給へるか。」
十一485図 「東國へ行き給ふと聞

きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。」

十一485図 「東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。」

十一489図 「先に畫がきたる槍、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、東國へ下る路すがら、〈略〉、其の意を得たれば、かき添へんために歸りしなり。」

十一497図 「〈略〉、かき添へんために歸りしなり。」

十一1123図 いしずゑ固めし蜀漢の國、漢中王はおごそかに 帝の位をふませ給ひぬ。

十一1128図 二代の帝に盡くす真心、強敵ひしぎて世をしづめんと、三軍進めし五丈原頭、〈略〉。

十一1129図 〈略〉、はかなく露と消えしかど、其の名はくちせず、諸葛孔明。

十一12510図 されば古は、支那より渡來せるものの僅かに世に存するのみにて、學者其の得がたきに苦しみた

りき。

十一1262図 今より二百數十年前、
〈略〉鐵眼といふ僧ありき。

十一1279図 すなはち喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、資金を悉く救助の用に當てたりき。
十一1298図 鐵眼の深大なる慈悲心と、あくまで初一念をひるがへさざる熱

心とは、強く人々を感動せしめしにや、喜んで寄附するもの意外に多く、〈略〉。

十二610図 此の時事代主命はすなどりのため美保嶋といふ處にありしが、使を得て急ぎ歸り、〈略〉

十二92図 かの建御雷命が大國主命と會見せられしは此處なりといふ。

十二146図 されば珍しき事件の起りし時、之を記述して印刷に附し、廣く發賣することは古より行はれたりしが、〈略〉。

十二147図 されば珍しき事件の起りし時、之を記述して印刷に附し、廣く發賣することは古より行はれたりしが、〈略〉。

十二149図 〈略〉、印刷術の幼稚なる時代において、唯をりく興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。

十二159図 〈略〉、今や遠くヨーロッパに起りし事件も僅か一兩日にして讀者に報道せらる。

十二252図 七里が濱のいそ傳ひ、
稻村が崎、名將の 劍投ぜし古戰場。

十二272図 若宮堂の舞の袖、しづのをだまきくりかへし かへしし人をしのびつゝ。

十二827図 權太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。

十二873 図 林蔵の怪しみもてあそばるゝこと、此處にては更に甚だしかりしが、〈略〉。

十二874 図 〈略〉、かゝる中にありても、彼は土地の事情を研究することを怠らざりき。

十二8710 図 林蔵が二回の探検によりて、樺太は大陸の一部にあらずること明白となりしのみならず、〈略〉。

十二995 図 七代七十餘年の帝都として、咲く花のほふが如しと誇りし奈良の都も、〈略〉古の名残を留むるのみ。

十二1022 図 〈略〉古の奈良の都は、そもゝ如何に美しく、如何に盛なりしぞ。

十二1038 図 げにや「〈略〉大和うるはし。」と歌ひしにぞむかす。

十二1115 図 當時は單に理化學の實驗用として使用せらるるに過ぎざりしが、次第に改良せられて、〈略〉。

十二1110 図 これ等の缺點なき電燈の出現は當時の人の最も希望する所なりき。

十二1129 図 彼が稀代の天才はこゝにも遺憾なく發揮せられて、着々成功の域に進みしが、〈略〉。

十二11210 図 〈略〉、唯心に至りては彼の最も苦心したる所なりき。

十二1131 図 初め彼は紙に炭素を塗りて試みしが、思はしき結果を得ず。

十二1132 図 次いで白金其の他の金屬

の針金を以て様々の實驗を重ねしが、これまた失敗に終りぬ。

十二1135 図 〈略〉、徒に多くの時日と金錢とを費したるに過ぎざりき。

十二1136 図 或日のことなりき。

十二1137 図 エヂソンは例の如く實驗室に閉ぢこもりて研究に餘念なかりしが、ふと見れば机上に形珍しき一本の團扇あり。

十二1139 図 何心なく手に取りて眺めゐたりし彼の眼は異様に輝きぬ。

十二1139 図 彼の眺め入りしは繪にあらず紙にあらず、實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

十二1142 図 彼は直に竹を以て炭素線を作りて實驗せしに、豫想以上の好結果を得たり。

十二1145 図 〈略〉竹を採集せしめ、其のもたらせるものに就いて綿密に研究せしが、日本の竹最も適當なりしかば、専ら之によりて心を製出せり。

十二1145 図 〈略〉、日本の竹最も適當なりしかば、専ら之によりて心を製出せり。

十二1207 図 主人の使などにまゐる途中、小学校の前を通りては、郷里の學校のおもしろかりしことなど思ひ出し申候。

十二1209 図 私の勤め居り候家は呉服店にて、なかゝ忙しく御座候。

十二1211 図 参りし當座は何事もわからず、〈略〉。

十二1226 図 夢にのみ見し山川も、あけくれにしたひし家も、まのあたり近く迫りぬ。

十二1227 図 夢にのみ見し山川も、あけくれにしたひし家も、〈略〉。

十二1311 図 義を見てせざるは勇なきなり。

十二13110 図 さうして直に静岡の大總督府にはせつけて議をまとめ、更に京都に上つて勅裁を仰ぎ、とうゝ徳川方の願意をとほさせた。

きいきい (感) 1 キイキイ

四371 図 モズハ〈略〉、高イ所カラトシデ來ガケニ、フクロフノカホヲケツテ、「キイキイ」ト

カチドキヲアゲマス。

きいちさん 「義」 (人名) 1 義一さん

六1017 図 〈略〉、手を出すと、「義一さん、それはお節供に使ふのですよ。」といふねえさんの聲がしました。

きいちろう ↓かねだきいちろう

きいと 「生糸」 (名) 4 生絲

五653 図 うちの繭もあの工場で生絲になつたはずだ。

七79 図 輸出品の主なる物は、生絲と羽二重とにして、〈略〉。

七81 図 輸出品の主なる物は、生絲と羽二重とにして、生絲は多くアメリカ合衆國に、〈略〉送る。

十877 輸出品の主なる物は、生絲・〈略〉などで、〈略〉。

きいろ 「黄色」 (名) 2 黄色

七942 図 〈略〉、其の中に南の空が黄色になつて、風がだんゝはげしくなつて來た。

九782 図 枯れかゝつて一面に黄色になつたじやがいも畑を、午後の日がかんゝと照らしてゐる。

きいろ 「黄色」 (形状) 4 キイロ

二95 図 ミゴトニサイタ カキネノコギク、一ツトリタイ、キイロナハナヲ、〈略〉。

七677 図 五十兩は黄色なきれにつゝんであつて、百兩は小さなふくろに入れてあります。

八13 図 〈略〉、山の木の葉は目立つて色づいた。黄色なのはならやくぬぎで、赤いのはかへでや櫻やぬるでである。

九167 黄色ナ蝶ハ菜ノ花ニムラガリ、白イ蝶ハ大根ノ花ニ集ル。

きいろい 「黄色」 (形) 4 キイロイ

黄色い 《一イ》

二84 図 ソノツギハ、アノタク
サンサイデキル、小サナキイロ
イキクデス。

三91 タベモノデモサガスノデ
セウ、キイロイクチバシデ、トキ
ドキデメンヲツツキマス。

九58 庭に敷きつめたむしろの上に、
黄色い麥の穂が一面に廣げられて、
《略》。

十119 地圖を便りにして進んで行く
と、《略》、霜よけのわらの間から、
黄色い夏みかんがちら／＼見えてゐ
るのも珍しい。

きがいん 議員 (名) 3 議員 ↓しゅ
うきがいんきいん・ふけんしちようそん
かいきいん

十一114 9 《略》、議員が豫算を議する
にも、常に此の公平な精神をもつて
しなければならぬ。

十一115 1 市町村長や議員を選挙する
には、専ら其の人物に重きをおいて、
《略》。

十一115 10 公吏・議員等、直接間接に
公共の事務に當る者は、《略》。

きがいん 議院 (名) 1 議院
十二89 4 《略》、兩院の意見が一致す
れば、最後に議決した議院の議長か
ら國務大臣を経て奏上する。

きうん 機運 (名) 1 機運
十二118 2 図 又最近無線電話が發明さ
れましたが、今やそれが盛に利用さ
れる機運となりました。

きえさる 消去 (五) 1 消去る
《一ル》
十二136 3 《略》、かういふ短所はやが
て我が國民から消去るであらうが、
《略》。

きえる 消 (下二) 5 きえる 消
える 《一エ》
五62 3 圖 あれ／＼、虹がきえて行く。
六70 6 こんな人、こんな姿は、とう
の昔にきえましたが、川は昔のまゝ
に清く美しく流れてゐます。

八64 3 圖 今風であかりがきえました。
十一69 4 夜が更けるにつれて燈がだ
ん／＼暗くなり、今にも消えさうに
なつた。

十二42 2 折から燈がぱつと明るくな
つたと思ふと、ゆら／＼と動いて消
えてしまつた。

きえん 義捐 (名) 2 義捐 ↓けん
やくとぎえん
六67 4 圖 「こまかなんだ。これでは
とても義捐はしてくれまい。」

六68 7 圖 「全くだ。あんな小言を言
ふ程だから、此の義捐が出来たのだ
らう。」

きえんきん 義捐金 (名) 2 義捐金
六66 8 其のとなり村の青年たちが見
かねて、方々へ義捐金をつのりに出
た。

六67 7 さて主人に火事の話をして、
義捐金のことをいひ出すと、《略》。
きかい 機台 (名) 1 機台

十一76 8 其の後《略》、面會の機
は松坂の一夜以後とう／＼來なかつ
た。

きかい 機械 (名) 8 機械 ↓しよ
きかい・せいまいきかい
八104 9 材木を機械にかけて軸木をこ
しらへてゐる者もあり、《略》。

十一53 4 集めた液は之を工場に持つ
て行き、《略》、機械で薄くして乾
かすのである。
十一54 1 電氣の機械や、《略》など
に用ひるエボナイトといふものもゴ
ムから造る。

十一63 7 こんな廣い畠であるから、
《略》、大てい機械と馬の力による。
十一67 7 《略》、石炭の火は《略》、
汽車や汽船や工場の重い機械を動か
すのに大切なものとなつてゐる。

十一107 1 圖 之を機械にかけて皮を
除き、袋に入れて外國に輸出する由
に候。

十二18 4 圖 殊に驚くべきは輪轉機の
能力なり。《略》、機械は電力により
て働き、《略》、一臺よく一分間に四
百五十枚を印刷すといふ。

十二59 1 《略》、やがてピンセットで
ねぢをはさんで機械の穴にさし込み、
小さなねぢ廻しでしつかりとした。

きかい 奇怪 (形状) 1 奇怪
十二44 1 《略》、一轉すると、今度は
如何にもものすごい、いはば奇怪な
物の精が寄集つて、夜の芝生にをど

るやう、《略》。
きかい 議會 (名) 2 議會 ↓てい
こきかい

十二88 7 法律を制定するには、政府
又は貴衆兩院の何れかが其の案を作
成して議會に提出する。

十二88 8 政府から提出された案は先
づ議會の一派で討議される。
きかい 機械類 (名) 2 機械類
十87 1 機械類は、近年我が國でも盛
に製造されるやうになつたが、《略》。
十87 3 それで、機械類もまだかなり
多く輸入されてゐる。

きがえ 着替 (名) 1 着がへ
五75 2 《略》、其のために田を賣り、
畠を賣り、家も土藏もみんな賣りは
らつた。しまひには妻や子どもの着
がへまでもないやうになつた。

きかえる 着替 (下二) 1 着かへ
る 《一ヘ》
十79 8 事務所で坑内服に着かへ、
《略》昇降器に乗りました。

きかかゝる 来掛 (四) 1 來かか
る 《一レ》
十60 4 圖 折から、たもとの雪を打拂
ひ／＼つゝ、此方へ來かかれるは、此
の家の主人なるべし。

きがけ 来掛 (名) 1 來ガケ
四36 8 モズハ《略》、高イ所カラ
トンデ來ガケニ、フクロフノ
カホヲケツテ、「キイキイ」ト
カチドキヲアゲマス。

きかざる 「聞猿」(名) 1 聞かざる
 五372 一匹は目に、一匹は口に、一匹は耳に手をあててゐます。見ざる・いはざる・聞かざるといふのさうです。
 きかざる 「着飾」(五) 1 着かざる
 「一リ」
 七467 翌日武田方からは安間彦六といふ大の男が、物の具見事に着かざり、大の馬に打乗つて、上杉方の陣へ向つた。
 きか・す 「聞」(五) 1 聞かす
 「サ」
 八924 先生はいろいろな事を信吉に話して聞かされた。
 きか・せる 「聞」(下二) 6 きかせる
 聞かせる 「一セ」 ↓ いいきかせる・とききかせる
 五678 「鯉も居るが、それよりも、もつとお前に聞かせて置きたい話がある。」
 五736 庄屋は村の者にいろいろ言つて聞かせて、土手をつきなほしたが、
 「略」。
 八1124 大將の父は途々義士のことを大將に話してきかせて、其の墓に参詣したのである。
 九908 「ねえさん、どうぞ其の話を聞かせて下さい。」
 十675 「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」
 十二118 「略」、無線電話で子守歌を

聞かせて赤ん坊を寝つかせてゐることなどの耳新しい話に、博士は満堂の會衆を喜ばせた。
 きかん 「飢寒」(名) 1 飢寒
 十二832 「それより一年ばかりの間、風波をしのぎ、飢寒と戦ひ、非常なる困難ををかして「略」ナニヲといふ處にたどり着きたり。」
 きかん 「機関」(名) 1 機関 ↓ ころきかん・しゅうようきかん
 十一208 裁判所は國家が設ける機関で、これに「略」四階級がある。
 きかんしや 「機関車」(名) 1 キクワン車 ↓ でんききかんしや
 六121 「其の外、
 「略」、キクワン車・軍艦ノヤウナ大キナ物マデ、皆鐵ガナクレバ造ルコトガ出來マセン。
 きかん・する 「帰艦」(サ変) 1 歸艦する
 「一スル」
 九6510 其の中に上陸員が歸艦する。
 きき 「危機」(名) 2 危機
 十二1257 しかし大勢は如何ともしがたく、危機は既に目前に迫つたので、
 「略」。
 十二1337 「略」、國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國內はおほむね平和であつた。
 きき 「木々」(名) 1 木々
 五312 「つゆや時雨が色よくそめたうらの小山に秋風吹けば、木々のしづくもきのこととなつて、ばん

のごはんのおかずまじる。
 ききいゝ 「聞居」(上二) 1 聞きあ
 る「一キ」
 十699 「一語々々、心の底よりほどばしり出づる主人の物語に、いたく動かされたる旅僧は、兩眼に涙をたへて聞きあたり。」
 ききおと・す 「聞落」(五) 1 キキオ
 トス「一ス」
 二636 センセイノオツシヤルコトヤ、ミンナノイフコトヲキキオトスヤウナコトハアリマセン。
 ききただ・す 「聞實」(五) 2 ききたす 聞きたす「一サ・一シ」
 十945 父は「お前はどうかしたのだ。
 「略」。」とたづねたが、太郎はだまつてゐた。其の夜又父に強く聞きたゞされて、太郎はやつと今日の次第を有りのまゝに話した。
 十二708 しかしフランス王は一部始終をよくききたゞして、コーデリヤの簡單な答の中にも十分眞心のこもつてゐるのを認め、
 「略」。
 ききたまう 「聞給」(五) 1 聴き給ふ「一へ」
 十二376 「あゝ、あれは僕の作つた曲だ。聴き給へ。なか／＼うまいではないか。」
 ききつ・く 「聞付」(下二) 1 聞きつく「一ケ」
 九141 「略」、しづみの殻を取出し、

細かに打ちくだく。其の音を聞きつけてかけ來り、飛びちりたる貝のかけを、すばやくついばみたるは眞白なるめんどりなり。
 ききとゝる 「聞取」(五) 1 聞きとる「一ツ」
 十一727 宣長は、大急ぎで眞淵の様子を聞きとつて、後を追つたが、
 「略」、それらしい人は見えない。
 ききん ↓ だいききん
 きく (人名) ↓ おきく・おきくさん
 きく 「菊」(名) 4 キク 菊 ↓ こぎく
 二85 「ソノツギハ、アノタクサンサイテキル、小サナキイロイキクデス。」
 二86 アノキクハオトウサンモタイソウオスキデス。
 六265 庭の菊も白い花びらに赤みがさして來た、霜にあたつたからだらう。
 七947 「困つた風だ。」とおつしやつて、おぢいさんは「略」、菊の鉢を軒下に運んだりされた。
 きく 「利」(五) 4 きく「一イ・一ク」
 八877 「略」、何のいんぐわで、ひさしぶりに歸つた私に、一口も口をきくことが出來ないのでございませう。
 八886 や、口をきいたぞ。
 十一69 うつかり口をきいてしまつ

た。
十一 69 9 園 「無言の行に口をきくといふ事があるか。」

きく 〔聞〕(四・五) 98 キク きく
聞ク 聞ク 聴ク 《イー・カ・キ・クーケ》 ↓ おききする・おききなさる

一 16 2 ハチガ キイテ オコリマシタ。

一 16 4 クリモ キイテ オコリマシタ。

一 16 6 ウスモ キイテ オコリマシタ。

二 36 1 トモダチハ「モチハ〈略〉イテハイクマセン。」ト、トメマシタガ、キカナイデイマシタ。

二 43 4 ワルイ オヂイサン ハソレヲ キイテ、ソノ犬ヲカリニキマシタ。

二 51 1 ワルイ オヂイサン ハコノハナシヲ キイテ、ノコツテキタハヒヲカキアツメテ、〈略〉。

二 64 2 ナニカ キカレマスト、コノ口デハツキリコタヘマス。

三 6 5 オカアサン ニ、〈略〉。トキキマスト、〈略〉。トオツシヤイマシタ。

三 80 7 園 〈略〉、かみなりさまを下にきく、ふじは日本一の山。

四 16 2 ワニザメ ハソレヲ キクト、タイソウ オコツテ、〈略〉。

四 54 7 園 お前はたいそうとんちがある。と聞いた。

四 69 6 〈略〉、今でも山がらのこゑをきくと、まだあれが生きて居るだらうか、〈略〉と思はないことはありません。

五 6 4 聞けば級級のものが三人で、中村君を生いきたといつて、いぢめたのださうです。

五 90 1 時々道を人にきいて来た者と見えて、〈略〉。とひとりごとを言つて行く者があります。

五 98 3 熊は死人には手を着けないと聞いてゐたからでございます。

六 12 6 ヤクワンハ之ヲ聞イテ、「ソレデモ鐵ハデキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」ト言ヒマシタ。

六 22 6 木曾義仲が都へせめ上ると聞いて、平家はあわてて討手をさしむけました。

六 44 7 宿の者にきくと、「もうとうにお立ちになりました。」と言ひます。

六 45 4 叔父サンニ蛙ノ話ヲ聞イタカラ、ワスレナイ中ニ書イテ置カウ。

六 54 5 之を聞くと、頼朝のかほの色はさつとかはりました。

六 57 1 〈略〉、風のたよりに此の事を聞いて、うばをつれて、鎌倉をさして上りました。

六 60 1 之を聞いた萬じゆの喜はどんなであつたでございます。

六 67 3 青年たちは之を聞いて、さ、やき合つた。

六 93 7 賊が之を聞いて、くやしがつて攻めよせると、正成は高いがけの上から大木を落させた。

六 100 4 園 昨日學校で校長に、あの木の事を話したら、はじめて聞いた記念の木、大事にするとおつしやつた。

七 42 8 聞けば今朝から五里の山道を、わらちがけで急いで来たのださうだ。

七 52 7 園 私も子どもの時には、〈略〉、此の講堂でお話を聞いたに致しました。

七 56 2 園 見るもの聞くものが、總べて皆珍しいのであります。

七 72 4 人夫は之を聞いて、首をふりました。

七 93 5 おぢいさんにきいたら、二百十日といふのは〈略〉ださうだ。

七 102 2 秀吉が之を聞いて、「さてく、早く参つた。」と心の中で喜びました。

七 104 5 秀吉が之を聞いて、幕の中から、「もうよい。通してやれ。」といひましたので、〈略〉。

八 12 2 信作方の人々は之を聞いて、「〈略〉。」といったので、さうきまつたといふことである。

八 14 5 後に此の話を聞いた者は、皆家康の年に似合はずかしこいのに驚いた。

八 14 9 徳川家康が大坂城を攻めた時、其の子頼宣は戦が始つたと聞いて、先陣へかけつけたが、もう間に合はなかつた。

八 15 7 家康は之を聞いて、「今の一言は、先陣の功名にもまさる。」といつて喜んだ。

八 29 9 此の時太郎が、炭はどうして焼くのかときくと、其の男はていねいに教へてくれた。

八 39 5 驚いてあたりをさがしても見當らず、近所の人にきいても知らぬ知らぬと申します。

八 39 8 越前守は手代の言ふ所を聞いて、〈略〉、下役の者に石地蔵をしぼつて来るやうに命じました。

八 62 7 園 保己一は五歳の時めくらとなりしが、人に書物をよませて、一心に之を聞き、〈略〉、多くの書物をあらはせり。

八 63 4 園 保己一の家は今の東京、其の頃の江戸の番町にありて、多くの弟子保己一につきて學びたれば、時の人番町で目あきめくらに道をきい。と言ひたりといふ。

八 66 7 園 アメリカ人の元氣なことは、これだけ聞いてもわかりませう。

八 76 2 之を聞いたコロンブスは、〈略〉といひました。

八 87 9 〈略〉、先生はおとよに、低い聲でかかれた。「此の方はどなたですか。」

八〇〇 4 さうしてそれから後は、耳は食事の知らせを聞いても、聞かないふりをし、〈略〉。

八〇〇 4 さうしてそれから後は、耳は食事の知らせを聞いても、聞かないふりをし、〈略〉。

八〇〇 4 之を聞いて、手足等一同は、なるほどと感心したといひます。

九二一 〇 少年はひざに両手をついて、老人の顔をじつと見つめながら聞いてゐる。

九二七 7 目に涙を一ぱいたため聞いてゐた少年は、固い決心を顔にあらはして、實行をちかつた。

九六九 6 「叔父さん、此所は何所ですか。」と聞くと、「〈略〉。」とおつしやつた。

九九〇 六 小熊座と大熊座について、面白い昔話があるはずだから、ねえさんに聞いてごらん。

九九三 六 〈略〉岡田さんが旅行からお歸りになったと聞いて、今日にいと二人で遊びに行きました。

九九六 3 お話を聞いて、僕もすべて見たくなりました。

九九八 一 〈略〉、僕等も何時の間にか、山の上に居るやうな氣持になつて聞きました。

一〇〇八 北風はもう一度あの勇ましい號令が聞きたいと思つて、〈略〉、左右の耳をそばだててみた。

一〇一六 四 大尉はそれを取つて見る

と、次のやうな事が書いてあつた。

「聞けば、そなたは豊島沖の海戦にも出ず、〈略〉、かく別の働なりきとのこと。」

九一九 7 水兵は頭を下げて聞いてゐたが、〈略〉、につこりと笑つて立去つた。

九二〇 3 〈略〉、ドウシテコンナニ早クオ歸リニナツタノダラウト思ツテ聞イテミタ。「オトウサン、御用ハモウスンダノデスカ。」

一〇二七 二 〇 御手つだひを願ひ出づる者數多かりしかば、〈略〉土木に従事せしめたるに、通常の入夫にもまさりて仕事ははかりたりと聞く。

一〇四八 六 一番鶏の聲を聞いてからは、もうじつとしては居られない。

一〇五四 六 此の愛らしい小鳥が、〈略〉、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、誰でも驚かない者はあるまい。

一〇八二 七 坑内に馬が居るのは不思議だと思つて、聞いてみると、これは石炭を運ぶために飼はれてゐるのださうです。

一〇九五 九 〇 それから又、晝間私が聞いた時、なぜすなほに『はい。』といはなかつたのだ。

一〇九七 三 〇 其の友之を止めてはいはく、「羊の虎に向ふが如し。危し。」と。天祥きかずしてはいはく、「我もとよ

り之を知る。唯國家の危きを如何せん。」と。

一〇九九 二 〇 〈略〉、張弘範、文天祥に説きてはいはく、「〈略〉。今より心を改めて元に仕へば、富貴は意の如くならん。」と。天祥きかず。

一〇四二 〇 椰子・バナ・コーヒー・ゴムの木などは名を聞いてゐたが、實物を見るのは始めてである。

一〇七三 〇 〇 私とてもかはゆらしきめひの生れ候と聞きては、何よりうれしく、一日も早く御顔を見たく存じ候。

一〇八六 〇 此の神社は菅公の御墓所に建てたものだといひ、一層感を深くした。

一〇二七 〇 〈略〉、何を聞いても、一々明白に答へて、しかもよいいなことは言ひません。

一〇三〇 〇 然るに今主上隱岐にうつされ給ふと聞き、高德一族共を集めていへるやう、〈略〉。」と。

一〇七四 〇 朝に道を聞くことを得ば、夕に死すとも可なり。

一一一六 〇 〇 聞けば、雑誌の類は號の順に並べておいて、取出したら後できつともとの場所へお入れになるのださうです。

一一一九 〇 〇 〈略〉、裁判所は兩者の言分を聴いた上で、貸主の主張を正當とみとめれば、其の借金を返すやうに借主に命ずる。

一一三二 〇 〇 あの時、「こんなに間を聞いてよいのですか。」と僕が聞いたら、おとうさんが〈略〉。

一一三九 〇 〇 それから始めて聞いて面白いと思つたのは、枝打をしないと木に節が出来ることである。

一一四八 〇 〇 住持「昨夜のぞき見て知りたり。」此の一言を聞くや、畫師又かのふすまの鶴に筆を取らず、唯杉戸に檜一本を畫がきて東國へ出ししぬ。

一一四八 五 〇 〇 「東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。」

一一六九 〇 〇 「小僧、早く燈心をかきたててくれ。」隣に坐つてゐた僧が之を聞いて、「無言の行に口をきくといふ事があるか。」

一一八〇 六 〇 〇 生れて潮に浴して、浪を子守の歌と聞き、〈略〉。

一一八三 〇 〇 〇 なぎさの松に吹く風を、いみじき樂と我は聞く。

一一九〇 五 〇 〇 僕は〈略〉とばかり考へてゐたので、此の話を聞いて珍しく感じた。

一一九六 〇 〇 唯通りがかりの旅人から珍しい話を聞いては、僅かに心をなぐさめてゐた。

一二〇二 〇 〇 〇 よい子だから私の頬をきいてくれ。

一二〇五 〇 〇 〇 ジョージは、かねてウエリントン公爵が勲功も高く、りつぱな

七109 2 図 〈略〉、夜ノ長クナルニツレテ、氣候ハ次第ニ寒シ。

八67 4 図 〈略〉、此の州は合衆國の中でも、氣候がよくて、其の上地味が肥えてゐますから、〈略〉

九25 1 図 〈略〉、元庵様はおもに氣候と農業との關係をお調べなされたが、〈略〉。

十一91 3 図 『各地の氣候』といふ所がある。

十一91 5 図 そこを見ると、臺灣や樺太のやうな遠い所の氣候までも大體分る。

十二134 4 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、自ら國民の性質を穩健ならしめ、〈略〉。

十二134 10 温和な氣候や美しい風景は、人の心をやさしくし、〈略〉。

きこえあぐー「聞上」(下二) 1 聞え上ぐ 〈一ゲ〉

十134 1 図 高德此の故事をひきて、やがて忠臣の起りて勤王の兵を挙げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなり。

きこえる「聞」(下二) 34 キコエル きこえる 聞エル 聞える 《一エ・一エル》

二29 1 図 大キナスズヲネコノクビニツケテオイテ、ソノオト

ガキコエタラ、ニゲルコトニシテハドウデセウ。

二63 4 耳モヨクキコエマス。

三34 1 五一ぢいさんのうたふこゑがきこえます。

四3 8 お宮のうらではすまふがはじまつてゐて、「わあわあ」とはやすこゑがきこえます。

五23 4 〈略〉、おくの方からたえずちくおんきの音が聞えて來ます。

五28 3 それはくしづかな所で、風の音と水の音より外には、何の音も聞えません。

五85 5 図 〈略〉、急に川水の音がごくくく聞えて來て、間もなく火の見で半しようをうち出しました。

五86 7 図 うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、〈略〉。

六20 3 〈略〉、汽てきの音は少しも聞えません。

六31 8 其所此所ニニハトリノコエガ聞エタ。

六33 5 豆腐屋ノラツパヤ煮豆腐ノリソノ小路ノオクニ聞エテ來テ、町ハダンくニギヤカニナツテ來タ。

七49 9 トンテンカン、トンテンカント、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音が聞エマシタ。

八3 8 第二犬ころ庭のすみで、先程からちやらくとすゞの音が聞える。

八5 3 ふと、垣根の外でちやらくとすゞの音が聞えた。

八89 6 図 わしの聲が聞えるか。

八89 6 図 わしの聲が聞えるか。聞えるなら、もう一つ何か言つておくれ。

八89 9 図 いや、聲が聞えるのではありません。

九56 7 今日天気がよいので、朝から麥を打つ音が方々で聞える。

九58 5 何所からかにぎやかな歌が聞えて來る。

九110 10 しかし聞えるのはかすかな息づかひばかりであつた。

十39 3 〈略〉落葉の音が、かさりくく聞える。

十41 3 何處からか、ほがらかなひよどりの聲が聞える。

十43 1 同時に獵銃の音が續けざまに二發聞えた。

十50 3 柿右衛門は〈略〉、其の名は遠く西洋諸國にまで聞えてゐる。

十83 1 つるはしの音がこつりくく聞える。

十119 1 掛茶屋に休んで名物の餅を食べてゐると、不意にかん高い鳥の聲が聞えた。

十一56 1 ちやうど其の時、〈略〉けたゝましい叫び聲が聞えた。

十一74 1 眞淵はもう七十歳に近く、いろくりつばな著書もあつて、天下に聞えた老大家。

十二19 10 調子のよい蜜柑取歌が〈略〉のどこかに聞えて來る。

十二21 7 あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよきんくくと聞える。

十二21 10 小春日和の暖さにとけて、其處からも夢のやうに船歌が聞えて來る。

十二31 4 図 此處はさすがに藝術の都として世界に聞えてゐるだけあつて、建物なども一般に壯麗です。

十二37 5 月のさえた冬の夜友人と二人町へ散歩に出て、薄暗い小路を通り、或小さいみすばらしい家の前まで來ると、中からピアノの音が聞える。

十二56 3 此の時大きなせきばらひが聞えて、父の時計師がはいつて來た。

きこく「帰國」(名) 1 歸國 七97 8 〈略〉、秀吉は之を信じて、清正に歸國を命じました。

きこくいたす「帰國」(四) 1 歸國 致す 《一ス》

十一110 3 圖 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

きこくす「帰國」(サ変) 1 歸國す 《一スル》

十133 6 図 〈略〉、勾踐は呉に捕へられぬ。後からうじて歸國することを得しが、〈略〉。

きこゆ「聞」(下二) 2 聞ゆ 《一エ・一ユル》

十30 5 圖 影のごと、人去り人來る大路、ほろくくと聞ゆる 笛の音いづこ。

十63 7 図 主人は聲を限りに呼べど、

はるかに行過ぎたる僧は、聞えぬにや、ふりかへらず。

きこりごや 「樵小屋」(名) 1 木こり小屋

七88 6 けれども貧しい木こり小屋で、戸棚一つもありません。

きさき 「巨」(名) 2 后

十二65 9 「略」、妹はかねてフランス王の后になることにきまつてゐた。

十二70 10 しかしフランス王は「略」、本國にとまなひ歸つて約束の如く自分の后とした。

きさはし 「階」(名) 1 きさはし

十二26 5 「圖」 上るや石のきさはしの左に高き大いてふ、問はばや遠き世々の跡。

きさみ・いる 「刻居」(上二) 3 刻みある 「一・一・キル」

九81 7 「圖」 「略」、安ちいさんはせぐくまり、常は何をか刻みある、めがねを掛けてはつび着て。

九83 1 「圖」 ちいさん「略」、なほ怠らずこつくと、何をか常に刻みある、めがねを掛けてはつび着て。

九84 5 「圖」 「略」、安ちいさんは一心に 毘沙門天を刻みある、「略」。

きさみゆ・く 「刻行」(四) 1 きさみ行く 「一・ク」

九1 9 「圖」 夜をいましむる夜まはりの 拍子木のごとかちくと、さ

びしく時をきさみ行く。

きさむ 「刻」(四・五) 5 きさむ 刻

む 「ミーム・イン」

七23 5 其の松の下に石できさん地蔵様が立つていらつしやる。

九2 1 「圖」 きさみくゝて、明方の鶏鳴けば、夜のとばり しづかにあきて、ほのくゝと 東の窓はしらみたり。

九2 1 「圖」 きさみくゝて、明方の鶏鳴けば、「略」。

九81 3 「圖」 石碑を刻む、文字をほる、「略」。

九83 5 「圖」 「毘沙門天を刻むのだ。」

きし 「岸」(名) 9 きし 岸 けむこうぎし

三60 6 風がしづかにふいて来て、きしのささがさらさらとおとをたててゐます。

七7 7 「圖」 「略」、水深くして、いかなる大船もきしに横づけにすることを得。

七9 4 舟が岸をはなれた。

七19 5 又南の海上にはひしひしと軍船を浮べて、岸には大木がきりたふしてあります。

七85 1 「略」、岸二近イ浅イ所カラ二三百尺グラキノ所マデニハ、海藻が生エテキル。

八10 7 耕造は「略」信作のえりを引つつかんで、ぐつと岸へ引上げた。

十26 8 やがてボートは岸をはなれた。

十二44 3 「略」、最後は又急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調

に、三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、「略」。

十二50 4 岸は絶壁になつてゐる處が多く、「略」。

きじ 「雉」(名) 4 キジ

一50 6 コンドハ キジガキマシタ。

一50 7 キジモダンゴヲモラツテ、ケライニナリマシタ。

一52 3 キジハツツキマハリ、サルハヒツカキマハリ、イヌハカミツキマハリマス。

一54 5 「圖」 キジガツナヒクエンヤラヤ。

きじ 「記事」(名) 1 記事

十二19 5 「図」 されば同一日附の同じ新聞にても、「略」、記事に多少の相違あるを常とす。

きし 「義士」(名) 1 義士

八112 3 大將の父は途々義士のことを大將に話してきかせて、其の墓に参詣したのである。

きしちかく 「岸近く」(副) 1 岸近く

十二77 4 先づ岸近くまぐろの寄つて来る場所を選んで、海岸から沖の方へ二三百間も長く垣網を張り、其の先へ身網を張る。

きじどう じこつかいぎじどう

きしや 「汽車」(名) 34 キシヤ 汽車

四80 6 昨日おとうさんと朝九時の汽車で、軍たいに居るに皆さんの所へ出かけました。

四83 8 ひるのごはんを たべてから、「略」、夕方の 汽車で かへりました。

五5 6 何でも汽車に二日二ばん乗通して、こちらへ着いたのださうですから、何百里かはなれてゐるのでせう。

五102 3 汽車の發着時刻が近づくと、自動車・馬車・人力車がいくだいたなく、入口・出口によつて來ます。

七8 8 「圖」 横濱と東京との間には汽車・電車の便あり。

七8 9 「圖」 汽車はおよそ三十分毎に、電車はおよそ十分毎に發着す。

七38 5 「圖」 船から陸あげした荷物は、すぐ其所から汽車にのせて、ハルビンへでも北京へでも送ることが出來ます。

七39 6 「圖」 旅順へは汽車で一時間で行けます。

七110 9 「圖」 「アシタノアサーバンノキシヤデタツテイキマス。」

七111 4 「圖」 「アシタバンノキシヤデイクマス。」

八69 6 「圖」 サンフランシスコから三日二晩汽車に乘通して、今日此のシカゴに着きました。

八70 4 「圖」 此の繪葉書は此所へ來る途中、汽車の窓から見た牧場の實景です。

八71 6 「圖」 日本にはまだこんな早い汽車はありません。

八七五 〔略〕、電車や汽車が終日終

夜、休なしに運轉してゐます。

九六八 汽車が進むにつれて、關東平

野はだん／＼夜の景色にかはつて、

見なれた所も面白く感じた。

九六九 目がさめると、もう夜が明け

てゐて、汽車は果もなく續いてゐる

青田の中を走つてゐた。

九七二 其の中に汽車は山の間を出て、

大きな川の見える所に出た。

九七二 〔略〕「あれが北上川だ。汽車は

此の邊からあの川について、北へ

／＼と走るのだ。」

九七三 汽車が盛岡を出て少し進むと、

〔略〕とおつしやつた。

九七四 汽車は野を過ぎ山を越えて進

む。

九七五 淺蟲近くになると、汽車が海

岸を走るので、陸奥灣の風光が手に

取るやうに見えた。

九七五 午後二時二十分、汽車は青森

に着いた。

九七六 〔略〕 今日午後四時ノ汽車デ又出

カケルノダ。

九七五 〔略〕 汽車で京城へ来る人は通常

南大門驛で下りるのです。

九七六 汽車で二日市驛に着いたのは

午前の八時、〔略〕。

九七六 十五分許で汽車は太宰府町に

着いた。

九七六 瀧川から根室行の汽車に乗

ると、約五時間後に石狩と十勝の境

にある狩勝の峠にかゝる。

十一六三 汽車は密林の間をあへぎ

／＼通り抜けて、やがてトンネルに

はいる。

十一六九 汽車は無人の境を曲折して

下る。

十一六七 〔略〕、石炭の火は木炭の火

よりずつと熱度が高いので、汽車や

汽船や工場の重い機械を動かすのに

大切なものとなつてゐる。

十二四四 〔略〕松江を發したる汽車は風

光繪の如き六道湖畔を走ること約四

十分、やがて〔略〕。

十二三四 〔略〕 汽車でドイツの國內には

いつたのは朝まだほの暗い頃でした

が、〔略〕。

十二四五 〔略〕 電車は次第に汽車の領分

までも侵略し、〔略〕。

十二八六 〔略〕 進行中の汽車が無線

電話機を備へ附けてゐたために危険

を免れたことや、〔略〕。

きしゃ 〔記者〕 (名) 1 記者

十二一六 〔略〕、各部にそれ／＼掛

の記者又は技術家ありて、或は出で

て材料を取り、或は社内において編

輯事務にたづさはる。

きしゃ 〔喜捨〕 (名) 1 喜捨

十一一七四 〔略〕 喜捨を受けたる此の金、

之を一切經の事に費すも、うゑたる

人々の救助に用ふるも、歸する所は

一にして二にあらず。

きしゃ・す 〔喜捨〕 (サ変) 2 喜捨す

《一七》

十一一七八 〔略〕 すなはち喜捨せる人々に

其の志を告げて同意を得、資金を悉

く救助の用に當てたりき。

十一一七八 〔略〕 鐵眼こゝにおいて再び意

を決し、喜捨せる人々に説きて出版

の事業を中止し、〔略〕。

きしゃ・する 〔喜捨〕 (サ変) 1 喜捨

する 《一スル》

十二一〇八 其の後は老僧と共に洞穴の

中でのみを振るふ者もあり、費用を

喜捨する者もあつて、仕事は大いに

はかどつて來た。

きしゃのたび 〔課名〕 2 汽車のたび

四目二二 二十一 汽車のたび

四八五 二十一 汽車のたび

きしゅ 〔騎手〕 (名) 5 騎手

八六一 それは氏子の五箇村から、子

どもの騎手を一人づつ出して、〔略〕

といふ定めであつた。

八七二 やがて五人の騎手は〔略〕、

鳥居の中に集つて來た。

八七七 五人の騎手は神に勝利をいの

つて、第二のあひづを待ちかまへて

ゐる。

八七九 五箇村の人々は各自分の村の

騎手に向つて、〔略〕、口々に勢をつ

けてゐる。

八八三 二番太鼓の「並べ」のあひづ

に、五人の騎手は打連れて、拜殿の

そばの大きな立石の前に並んだ。

きしゅう 〔紀州〕 (地名) 2 紀州 紀

州

七七〇 〔略〕 私は此所から百里さきの紀

州の者でございます。

七七四 〔略〕 紀州の男は急いで國へ歸つ

て、其の金をまちがひなくとゞける

やうに致せ。

きしゅうりょういん 〔貴衆兩院〕 (名)

2 貴衆兩院

十二八八 法律を制定するには、政府

又は貴衆兩院の何れかが其の案を作

成して議會に提出する。

十二八九 又貴衆兩院の何れから提

出された案は、他の一院のみで討議

し、〔略〕。

ぎじゅつか 〔技術家〕 (名) 1 技術家

十二一六 〔略〕、各部にそれ／＼掛

の記者又は技術家ありて、或は出で

て材料を取り、或は社内において編

輯事務にたづさはる。

きじゅつ・す 〔記述〕 (サ変) 1 記述

す 《一シ》

十二一四 〔略〕 されば珍しき事件の起り

し時、之を記述して印刷に附し、廣

く發賣することは古より行はれたり

しが、〔略〕。

きしょう 〔氣性〕 (名) 2 氣性

十二六五 生れつき烈しい氣性の上に、

年とともに老の氣短さが加はつて、

〔略〕。

十二六九 娘の答に失望した王は、例

の烈しい氣性から、苦り切つて、

「お前にはもう何もやらぬぞ。永の

六20 2 いつも通る汽船も、高波をよけて、沖を通ると見えて、〈略〉。
 七53 3 汽船も軍艦も御存じでせう。
 七53 5 私の乗つてゐる太平丸といふのは、長さが六十間程もある汽船で、乗組人員だけでも二百人からあります。
 七81 9 カキハ又スグフェルモノデ、軍艦や汽船ハ時々之ヲカキオトサナケレバナライホドデアル。
 八19 6 汽船ハ河口ヨリオヨソ四百五十里、小舟ハオヨソ九百里サカノボルコトヲ得。
 九76 6 北海道に渡る人は、停車場に續いた乗船所から汽船に乗るのである。
 十一8 4 長崎を出た汽船は、海上を走ること約四百海里で揚子江の河口に達する。
 十一34 6 瀬戸内海の沿岸には〈略〉等良港多く、汽船絶えず通航して、遠く近く黒煙の青空にたなびくを見る。
 十一67 7 〈略〉、石炭の火は木炭の火よりずつと熱度が高いので、汽車や汽船や工場の重い機械を動かすのに大切なものとなつてゐる。
 きせんだんじょ 「貴賤男女」(名) 1
 貴賤男女
 十130 3 京中の貴賤男女、此の行幸を悲しみて涙と共に見送り奉り、〈略〉。

きそ 「木曾」(人名) 2 木曾
 六54 8 〈略〉、木曾の家來手塚太郎光盛の娘が頼朝に仕へて居りましたが、〈略〉。
 六55 5 義仲からは〈略〉と、木曾の家につたはつてゐた大切な刀を送つてよこしました。
 きそ 「木曾」(地名) 4 木曾
 六56 8 これが萬じゆの姫で、木曾に住んで居りましたが、〈略〉。
 六62 3 「おなつかしや、母様。木曾の萬じゆでございます。」
 六62 5 「何、萬じゆ。木曾の萬じゆか。」
 六64 5 〈略〉、親子は、うばもろとも、喜び勇んで木曾へ歸りました。
 きそ 「基礎」(名) 1 基礎
 十二12 10 此の航海によつて彼の博物學者としての基礎が十分に出来、一生の方針がはつきりときまつた。
 きそ 「う」 「競」(四・五) 2 キソフ 競ふ「一ツ・一ヒ」
 八59 3 ヨリテ看板ノ如キモ、タヤスク人目ヲヒカシメンガ爲ニ、キノヒテ小屋根ノ上ニカ、グルニ至レリ。
 九98 7 高山が、南から西へ連なつて、互に雄姿を競つてゐます。
 きそ 「えもん」 「喜左右衛門」(人名) 10
 喜三右衛門 喜三右衛門
 十44 4 窯場から出て來た喜三右衛門は、縁先に腰を下して、つかれた體を休めた。

十44 8 喜三右衛門は餘りの美しさにうつとりと見とれてゐたが、〈略〉。
 十45 10 喜三右衛門は、其の日から赤色の焼付に熱中した。
 十46 10 喜三右衛門はそれでも研究を止めようとしなない。
 十47 5 喜三右衛門はあわたくしく窯場から走り出た。
 十48 1 喜三右衛門は、血走つた目を見張つて、しばらく火の色を見つめてゐたが、〈略〉。
 十48 4 其の夜喜三右衛門は窯の前を離れないで、もどかしさうに夜の明けるのを待つてゐた。
 十48 10 喜三右衛門は、一つ又一つと窯から皿を出してゐたが、不意に「これだ。」と大聲をあげた。
 十49 4 「出来た。」と皿をさげた。
 十49 5 喜三右衛門は、こをどりして喜んだ。
 十49 5 かうして柿の色を出す事に成功した喜三右衛門は、程なく名を柿右衛門と改めた。
 きそ 「規則」(名) 3 規則
 十一69 10 第二座の僧は、二人とも規則を破つたのが不快でたまらない。
 十二88 4 法律は、國家といふ共同生活、秩序ありかつ幸福なものにするための規則であるから、〈略〉。
 十二89 10 これ等の命令も國の規則であつて、廣い意味でいふ場合にはやはり法律であるから、〈略〉。

きそ 「貴族」(名) 1 貴族
 十二65 8 姉二人は既にさる貴族に嫁し、〈略〉。
 きそ 「ただし」 「規則正」(形) 3
 規則正しい「一・一・一」
 十78 6 面白いのは、〈略〉、寒さと暖さがほとんど規則正しく交替することです。
 十二13 4 しかも日常生活は極めて規則正しく、〈略〉。
 十二13 7 〈略〉、此の規則正しい生活とふだんの養生とによつて、七十四歳の長壽を保つことが出来た。
 きそ 「木曾産」(名) 2 木曾産
 十二10 先生の説明によれば、當社の用材は主として木曾産の檜なりとぞ。
 十二48 10 〈略〉、檜は木曾産の聲響高く近時臺灣阿里山の檜また有名なきそ 「生蕎麦」(名) 5 キソバ 生蕎麦 生そば
 八59 6 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、今ナホ古風ヲ守リテ、生そば(キノバ)・ウゼン(ウドン)・〈略〉ナドト記シテ、軒下ゲタルモアリ。
 八59 6 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、〈略〉、生そば(キノバ)・ウゼン(ウドン)・〈略〉ナドト記シテ、
 八60 生そば
 八60 生そば
 八60 生そば

八60 生そば

きそよしなか 「木曾義仲」(人名) 2

木曾義仲

六22 木曾義仲が都へせめ上ると聞いて、平家はあわてて討手をさしむけました。

六54 頼朝が木曾義仲をせめようとした頃、
略。

きそんず 「帰村」(サ変) 1 歸村す

《一セ》

十一41 國 さて昨日御地より歸村せられたる河井氏の御話によれば、

略。

きた 「北」(名) 18 北 ↓ まきた

三47 東へムイテリヤウ手ヲヒロゲルト、
略、左ノ手ノ

方ガ北デス。

三47 東西南北ヲ四方トイヒマス。

三48 學校ノ北ニ小高イヲカガアリマス。

五26 ガントオナジク、ワタリ鳥デ、アタ・カニナツテ、ガンガ北ノ國ヘカヘルコロ、南ノ國カラワタツテ來マス。

六69 京都を北から南へ流れてゐる川を賀茂川といひます。

六73 川原が遠く北についで、其のさきにやさしい姿の山がすすんで見えます。

七19 賊のそなへを見渡し、

すと、北の山手には木戸を立てて、

數萬の兵が之を守つてゐます。

九69 窓から吹きこむ朝風のひやりとするのは、餘程北へ進んだ爲だらう。

九73 汽車は此の邊からあの川について、北へくと走るのだ。

九73 汽車は此の邊からあの川について、北へくと走るのだ。

十5 北

十75 北の方の山のすそには、松林を後にして右に昌徳宮、左に景福宮の壯大な構がある。

十112 マストの上の見張人が不意に「鯨 鯨。」と聲高く叫んで、北の方を指さした。

十二83 北は波荒くして舟を進むべくもあらず、
略。

十二85 文化六年六月の末、コーニ・林蔵等の一行八人は、
略、デカストリー灣の北に上陸したり。

十二101 佐保・佐紀の連岡に北を限り、春日・高圓の山々を東に、矢田山・生駒山を西にひかへて、
略。

十二101 北に大内裏の宮殿を仰ぎ、
略、古の奈良の都は、そもく如何に美しく、如何に盛なりしぞ。

十二102 眼下に横たはる奈良市街の西、遠く連なる田園の間に東西に走る三筋の路は、北より數へて古の一條・二條・三條の大路の名残とす。

きたアメリカ (地名) 1 北アメリカ

十30 北アメリカが南アメリカに續く部分は、パナマ地峽といつて、
略。

きたアメリカしゅう (地名) 2 北アメリカ

七18 陸を分けて、
略、北アメリカ洲・及び大洋洲とす。

七2 北アメリカ洲

きた 「氣體」(名) 1 氣體

十一18 一口にいへば、
略、液體に近い氣體であらうといふ。

きた 「希代」(形状) 1 稀代

十二112 彼が稀代の天才はこゝにも遺憾なく發揮せられて、
略。

きた インド (地名) 1 北インド

十二90 釋迦は北インドのヒマラヤ山のふもとカピラバスト王國の太子として生れた。

きた う 「鍛」(下二) 1 きたふ 《一へ》

十一81 幾年こゝにきたへたる鐵より堅き腕あり。

きた える 「鍛」(下二) 2 キタヘル

きた へる 《一へ》

七50 鎌ヲキタヘテキタコトモアリマス。鉄ヲ打ツテキタコトモアリマス。

八15 實に鐵は熱いうちにきたへなければならぬ。

きたかぜ 「北風」(名) 3 北風

四10 風ならやくぬぎのはは

黄にそまり、廣いたんぼに

北風 あれる。

八56 老婆の前を右左、行きかふ男女多けれど、北風寒き町の辻、身なりいやしき老婆には、手をかす人もあらざりき。

十100 寒い北風に吹かれながら、冬枯の小道を通つて來て、一足温室の中にはいると、
略。

きたかぜ 「北風」(名) 20 北風

九102 北風は、見るからに強さうな軍馬である。

九102 北風の主人は若い騎兵中尉で、
略。

九102 北風の主人は、たいそう北風をかはいがつて、まるで我が子のやうに大事にしてゐた。

九102 北風も外の軍馬と同じやうに、主人にしたがつて戦地へ向つた。

九103 戰場をかけ廻るのは、北風にとつて愉快な事であつた。

九103 ラツパのひびきや大砲の音に、北風の心は先づ勇みたつた。

九103 北風は、砲彈の雨の中でも、銃剣の林の中でも、びくとせず、勇ましく活動した。

九104 北風は外の軍馬と一所に、露營のテントの前に、列を正して並んだ。

九104 利口な北風はすぐそれに氣がついた。

十472 人は此の有様を見て、たはけとあざけり、氣ちがひと罵つたが、
《略》。

十一565 老砲手は氣ちがひのやうになつて、「逃げろく。」と聲を限りに叫んでゐるが、《略》。

十二1065 子どもらは仕事をしてゐる老僧のまはりに集つて、「氣違よく。」とはやし立て、《略》。

十二1065 園 《略》、「氣違よく。」とはやし立て、《略》。

きちがいあつかい 「氣違扱」(名) 1 氣違扱ひ

十二1063 之を見た村人たちは、彼を氣違扱ひにして相手にもせず、唯物笑の種にしてゐた。

きちやくす 「帰着」(サ変) 1 歸着す 《一シ》

十二878 園 此處にて林藏はコーニ等に別れを告げ、同年九月の半ば、白主に歸着しぬ。

きちよう 「貴重」(形状) 1 貴重

八326 山野に生ずる草木の中には、薬用にするものが多くありますが、其の中貴重なもの一つは朝鮮人蔘です。

きちよう 「議長」(名) 1 議長

十二894 《略》、最後に議決した議院の議長から國務大臣を経て奏上するきちんと (副) 1 きちんと

十一144 《略》、さうぢもよく行届いてゐるし、總べてがきちんとしてゐ

ました。
きづかい 「氣遣」(名) 1 氣づかひ

十二1078 出来る氣づかひはないと見くびつてゐた岩山の掘抜も、《略》。きづく 「氣付」(五) 1 氣附く 《一カ》おきづく

十二445 《略》、三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、唯ほうつとして、ひき終つたのも氣附かぬくらゐ。

きつしり (副) 1 きつしり

八313 さて山の木をきり倒して、四五尺の長さにきりそろへ、それをきつしりとかまの中に立て並べ、《略》。

きつて 「切手」(名) 2 切手 じゆうびんきつてはりつけ

五921 私の口にはいる物は、はがきの外はきつと切手がはつてあります。五922 それも品と目方によつて切手の價がちがひます。

きつと (副) 11 キット きつと

二204 園 ユフベカゼガフィタカラ、キツトクリガオチテキマス。三795 園 「ふみ子もこんやはきつとあちらでこの月を見てゐませう。」

四211 園 アナタハオナサケブカイオ方デスカラ、後ニハキツトオシアハセノヨイコトガゴザイマス。

四638 園 《略》、三羽ねらへば、二羽だけはきつといおとすほど

の上手でございます。
四912 園 「きつと此のかたきを取つて見せます。」

五918 私の口にはいる物は、はがきの外はきつと切手がはつてあります。八178 園 「誰にも頼まれは致しません。」「いや、きつと頼まれたであらう。」

十一171 聞けば、雑誌の類は《略》、取出したら後できつともとの場所へお入れになるのださうです。

十一291 園 秀吉はかに之を望み、旗本の若武者どもをきつと見て、《略》。」と大音聲。

十一758 園 あなたはまだお若いからしつかり努力なさつたら、きつと此の研究を大成することが出来ませう。

十二1053 《略》、きつと結んだ口もとは意志の強さが現れてゐる。

きつね 「狐」(名) 7 キツネ 狐 狐 狐

二553 園 コンドハキツネ、コンコン。

五795 八幡太郎義家が《略》廣い野原を通りますと、狐が一匹とんで出ました。

五797 義家はせ中のうつぼから、かりまたをぬいて狐を追つかけました。

五801 矢は狐の鼻のさきの地面につつ立つて、狐はころりとたふれました。

五802 矢は狐の鼻のさきの地面につ

つ立つて、狐はころりとたふれました。
五805 園 「矢はあたつて居りませぬのに、狐は死んで居ります。」

八496 狐・狸・兎・犬・豚・ナドハ彼ノ求メル物デアルガ、《略》子ドモヲサラツテ行クコトモアル。

きつぱり (副) 1 きつぱり

十948 園 「なぜ其の時『いゝえ、僕は止められてゐるから渡りませせん。』と、きつぱりことわらなかつたのか。」

きつぷ 「切符」(名) 4 キツプ 切符 切符

六345 停車場デキツプヲ買ツテキルト、郵便物ヲツンダ車ガキセイヨクカケテ來タ。

八783 園 此の切符に、『一月二十日限り當役場へ納付』とありませう。

八786 園 「今手に持つていらつしやるのは、みんな切符ですか。」

八788 園 「さうです。三枚とも切符です。」「それをみんなうちで納めるのですか。」「さうです。此の一枚には徴税令書とありませう。《略》。」

きてき 「汽笛」(名) 7 キテキ 汽テキ 汽テキ

三27 コウバノキテキガナツテキマス。

三42 又一シキリキテキガナツテ、《略》ケムリガ出マス。

六203 いつも通る汽船も、高波をよ

けて、沖を通ると見えて、汽てきの音は少しも聞えません。

六34 1 ベンタウヲサゲテ來ル女工ハ、サツキカラ汽テキノ鳴ツテキル工場へ急グノデアラウ。

七57 7 図 それゆゑたえず海の深さはかつたり、かねや汽笛を鳴らしたりします。

七57 9 図 〈略〉、かねや汽笛を鳴らすのは、外の船に自分等の船の居ることを知らせて、衝突をさけるためであります。

十129 4 図 〈略〉、工場といふ工場、船といふ船の汽笛が一せいにあぐる歡呼の聲。

きてん 「起点」(名) 1 起点

十二32 2 図 有名な凱旋門は此の大通の起点にあります。

きてん 「機転」↓マリーのきてん

きてん 「帰途」(名) 3 歸途

十16 1 1 やがて暮近くなつたので、〈略〉、夕日を浴びて歸途についた。

十84 6 歸途、事務員は次のやうな事を話してくれました。

十二87 5 図 歸途一行は黒龍江を下りて河口に達し、海を航してノテトに歸れり。

きてん 「木戸」(名) 2 木戸

七19 3 図 〈略〉、北の山手には木戸を立てて、數萬の兵が之を守つてゐます。

七48 5 無念に思つて、武田方から十騎ばかり、木戸を開いて切つて出よ

うとした。

きとく 「危篤」(名) 1 危篤

十二98 4 危篤の報が傳はると、これまで教を受けた人々が四方から集つて別れを惜しんだ。

きない 「畿内」(地名) 1 畿内

十二99 6 図 〈略〉奈良の都も、〈略〉今は唯畿内の一都市として僅かに古の名残を留むるのみ。

きながい 「氣長」(形) 1 氣長い

《一ク》

十115 4 しかしまだなかなか勢が強いので、綱を巻いてはのぼし、のぼしては巻いて、氣長くあしらつてゐるうちに、さすがの鯨も次第に弱つて、〈略〉。

きなき 「黄粉」(名) 1 きなき粉

八55 1 おしまひの一日には、小豆やきなき粉をつけて、うちでもたべ、近所へも配つた。

きなれる 「着慣」(下二) 1 着なれる

六39 2 図 洋服は着なれなかつたので、はじめは寒いやうに思つたが、もうなれた。

きにゆうしおく 「記入置」(四) 1

記入し置く 《一ク》

九15 1 図 〈略〉、日記をも渡されたれば、鶏の事は總べて之に記入し置くなり。

きにゆうす 「記入」(サ変) 1 記入

す 《一ス》

九14 9 図 机の引出より養鶏日記を出し、「四月二十五日朝、卵二つ。」と記入す。

きぬ 「衣」(名) 1 衣

六49 1 圖 ともし火近く 衣ぬふ母は春の遊の 樂しさかたる。

きぬ 「絹」(名) 3 きぬ 絹 ↓えぎぬ

六76 1 図 「ソレハメリンスデ、絹デセウ。」

九11 4 図 〈略〉、めでたく都に歸り給へ。」といひて、菅簾八枚、敷皮八枚、きぬの敷物八枚を波の上に敷重ね、其の上に飛下り給へり。

九79 4 図 〈略〉、どれも皆、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。

きぬいと 「絹糸」(名) 2 絹糸 絹糸

六74 4 図 「春子、オ前ハ着物ヤ帶ノ地ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマス

カ。」「絹絲ト木綿絲デス。」

十103 6 成程、緑色の絹絲で作つたのかと思はれるやうな葉もあれば、〈略〉。

きね 「杵」(名) 4 きね ↓ひきりぎね

三32 8 ざぶざぶおちる水のおと、とんとんひびくきねのおと、〈略〉。

五46 4 図 「米をつくのに、上にもうすをさかさにつるしておけば、きねの上げ下しに米がつける。」

八51 4 おとうさんはきね、おばあさんはこねどり。

八54 4 図 〈略〉、ふみしめてゐる兩足が、きねをふり上げるたびに動いた。

きねん 「記念」(名) 3 記念

六100 4 圖 昨日學校で校長に、あの木の事を話したら、はじめて聞いた記念の木、大事にするとおつしやつた。

九42 10 図 兩將畫食共にして、なほもつきせぬ物語。『我に愛する良馬あり。今日の記念に獻ずべし。』

十一15 6 図 「成績物は一つ一つ自分の力のこもつたもので、皆一生の記念になるのだ。」

きねんさいはんべいせつぶん 「祈念祭班幣節分」(名) 1 祈年祭班幣節分

十一89 図 四日 日 祈年祭班幣節分

星西方離隔つちのえさる〈略〉

きねんのき 「課名」 2 記念の木

六目12 第二十四 記念の木

六98 1 第二十四 記念の木

きねんひ 「記念碑」(名) 1 記念碑

五78 4 土手の此の記念碑に、今話した事がくはしく書いてある。

きのう 「昨日」(名) 25 キノフ きのふ 昨日 ↑さくじつ

三65 8 私ノウチヘキノフヲケヤガ來テ、〈略〉。

四7 5 きのふ一つ取つてみまし

たら、もう黒くごまをふいて

みました。

四84 キノフハ十月三十一日デ、

天長節ノオイハヒ日デシタ。

四95 キノフハ日本國中ノ人

ガミンナ天皇ヘイカノバンザ

イヲイハツタノデス。

四22 私 はきのふふろしきづつ

みを持つて、おつかひに行きま

した。

四40 昨日はうちのすすはき

でした。

四60 私ハ昨日へ略、友ダチト

ツミ木ヲシテアソビマシタ。

四80 昨日へ略にいさんの所

へ出かけました。

五15 四月二十四日 火曜 晴

ぼちが昨日から病氣で、ごはんをたべ

ませんので、へ略。

五46 昨日からうちの蠶が上りはじ

めました。

六28 へ略、一山は十俵つつです。

昨日までに二山出来て、へ略。

六14 へ略、昨日のお晝すぎ、にい

さんときのご取に行きました。

六65 昨日ニイサンガ釘箱ヲ火鉢ノ

フチニ置イテ、手工ヲシテキタ時、

へ略。

六100 昨日學校で校長に、あの

木の事を話したら、へ略。

六103 父さんと、夜汽車で伊勢參宮に立

れました。

六104 昨日正午にこちらへ着いて、

午後外宮へ参り、今日内宮へ参つた。

七16 昨日おかあさんにするすをし

ていただいて、うち中の者が潮干狩

に参りました。

八83 信吉が、昨日の朝三年

ぶりでハワイから歸つて來た。

九32 三月二十五日お出しのお手

紙を昨日受取りました。

九14 敷藁の中に見事なる

卵二つころがれり。昨日の午後に産

みたるなるべし。

九41 昨日の敵は今日の友、

語る言葉もうちとけて、我はた、

へつ、彼の防備。

九46 植がすつかりすみしました。

十40 力藏さんも、へ略、昨日から

ひきかけてゐるけやきの大木を、大

のこぎりでひき始めた。

十一12 昨日橋本君と一しよに町は

づれのガラス工場を見に行つた。

十二29 昨日大英博物館を一覽し

ました。

きのえいぬ [甲戌] (名) 1 きのえい

ぬ

十一89 一日火 ○望前六時三十分

きのえいぬへ略

きのえたつ [甲辰] (名) 1 きのえた

つ

十一89 きのえたつへ略

きのこ [茸] (名) 3 きのこ

五31 木々のしづくもき

のことなつて、ぼんのごはんのお

かずにまじる。

六15 僕が紅色のきれいなきのこを

取つて、にいさんに見せましたら、

へ略。

八28 きのこのむらがつて出るのも、

へ略、今である。

きのことり [茸取] (課名) 2 きのこ

取

六目5 第四 きのこ取

六14 第四 きのこ取

きのことり [茸取] (名) 2 きのこ取

り きのこ取

六14 へ略、昨日のお晝すぎ、にい

さんときのご取に行きました。

九102 午後には弟と天神山へきのこ

取りに行くのだ。

きのしたとうきちろう [木下藤吉郎]

〔課名〕 2 木下藤吉郎

七目6 第十八 木下藤吉郎

七76 第十八 木下藤吉郎

きのしたとうきちろう [木下藤吉郎]

〔人名〕 1 木下藤吉郎

七76 豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎と

いつて、織田信長の草履取をしてゐ

た時のことである。

きのとい [乙亥] (名) 1 きのとあ

十一89 二日水 きのとあへ略

きのどく [氣毒] (形状) 4 きのどく

きのどく 氣の毒 〴〵おきのどく

三87 天人はしをしをして、

なみだにうるむ目で空を見

上げました。れふしはきのどくに

なりました。「あまりおかはいさ

うですから、おかへし申します。

へ略。」

四79 其の後間もなく死んだ

のです。さむい日のことであ

り、あまり氣のどくでしたから、

へ略。

七65 もし此の大金がなかつたら、

氣がちがつて死ぬやうな事になるか

も知れぬ。氣の毒なことだと思つて、

へ略。

十60 ところあるあば家の門口に杖

を止めて、一夜の宿を貸し給へとこ

へば、へ略、婦人立出でて、「折あし

く主人が留守でございますので。」

とことわりぬ。されど婦人は、氣の

毒と思ひけん、へ略。

きのとみ [乙巳] (名) 1 きのとみ

十一89 きのとみへ略

きののは [課名] 2 木ノハ

二目11 十木ノハ

二22 十木ノハ

きのもと [木之本] [地名] 4 木ノ本

木之本

十一25 木ノ本

十一26 降つてわいたる敵

の大軍、木之本の邊に満ちたり

と報じ來る。

十一26 木之本には秀吉の來れる

なり。

十二279図 〈略〉、一萬五千の軍勢ま
つしくらに進軍して、夜半の頃には
既に木之本に到着したり。

きば「牙」(名) 2 牙

六864 〈略〉、長い牙、小さな目、そ
れから太い足、細い尾、一切繪で見
た通りであつた。

六881 牙は象つかひの腕よりも太か
つた。

きば「騎馬」(名) 3 騎馬

十一1179 ふと向ふを見ると、銃獵に
出たらしいつばな騎馬の人たちが、
眞一文字にこちらへかけて来る。

十一1188 ジョージがとんで行つて門
の戸にくわぬきをさすが早いか、
騎馬の人たちはもう門の外まで乗り
つけた。

十一1194 騎馬の人たちは、あけない
となぐるぞと言つておどしたり、
〈略〉。

きばや「氣早」(形状) 1 氣早

五723 氣早な者は自分の持地を田に
造りかへたといふことだ。

きびし「敵」(形) 1 きびし「一
キ」

十1063図 寒さきびしき折から皆様
には御障もなく、〈略〉、安心致し候。

きびし「敵」(名) 1 きびし

十781図 此の頃は太分寒くなつて、
朝は攝氏零度以下十何度といふきび
しさ、〈略〉。

きびだんこ「吉備団子」(名) 1 キビ

きびだんこ「吉備団子」(名) 1 キビ

ダンゴ

一492図 「オコシノモノハナン
デスカ。」「ニッポン一ノキビダ
ンゴ。」

きひん「氣品」(名) 1 氣品

十598図 〈略〉、身なりはそまつなれ
ど氣品高き婦人立出でて、「〈略〉。」
とことわりぬ。

きびん「機敏」(形状) 1 機敏

十二1367 〈略〉日本國民は、賢明な
機敏な國民である。

きふ「あべかわのきふ」

きふう「氣風」(名) 2 氣風

十二1341 随つて國民は〈略〉、いざ
といへば、舉國一致國難に當る氣風
を生じた。

十二1351 温和な氣候や美しい風景は、
〈略〉、雄大豪壯の氣風を養成するに
は適しない。

きふくする「起伏」(サ変) 1 起伏

十314 パナマ地峡は一體に小山が起
伏してゐる上に、地層にはかたい岩
石が多い。

きふす「寄付」(サ変) 1 寄附す

七617図 かくて船長は外國より持歸
りたる寫眞帖を學校に寄附して去れ
り。

きふする「寄付」(サ変) 1 寄附す

十二1288図 二度資を集めて二度散じ
る「一スル」

十二1288図 二度資を集めて二度散じ
る「一スル」

たる鐵眼は、終に奮つて第三回の募
集に着手せり。〈略〉、喜んで寄附す
るもの意外に多く、此の度は製版・
印刷の業着々として進みたり。

きへい「騎兵」(名) 2 騎兵

六408図 正作君と大工の松さんは工
兵、力松君は砲兵、役場につとめて
ゐられた下村さんは騎兵、〈略〉。

六425図 お前は今の分では大男にな
りさうだから、砲兵か騎兵になれる
だらう。

ぎへい「義兵」(名) 2 義兵

十971図 宋の臣文天祥大いに之を
うれへ、義兵を集めて國難を救はん
とす。

十1307図 主上さきに笠置におはせし
時早くも義兵を擧げしが、〈略〉。

きへいちゆうい「騎兵中尉」(名) 1

九1028 北風の主人は若い騎兵中尉で、
たいそう北風をかはいがつて、まる
で我が子のやうに大事にしてゐた。

きぼ「規模」(名) 2 規模「だいき
ぼ」

十一633 此の邊の農業は總べて規模
が大きい。

十二78図 此の社は規模の大なるを
以て世に知られ、〈略〉。

きぼう「希望」(名) 4 希望

十一751図 私も實は我が國の古代精
神を知りたいといふ希望から、古事
記を研究しようとしたが、〈略〉。

十一751図 私も實は我が國の古代精
神を知りたいといふ希望から、古事
記を研究しようとしたが、〈略〉。

十一764 老學者の言に深く感激した
宣長は、未來の希望に胸ををどらせ
ながら、ひっそりした町すちを我が
家へ向つた。

十二644図 イタリアの國旗は、〈略〉。

〈略〉、統一の成功を祈る希望の色と
して緑を加へ、更に王家の紋章を配
したるものなり。

十二1121図 かねて此の希望をみたさ
んと思ひるたるトマス、エヂソンは、
〈略〉。

きぼうす「希望」(サ変) 1 希望す

十二1110図 これ等の缺點なき電燈の
出現は當時の人の最も希望する所な
りき。

きほんきん「基本金」(名) 1 基本金

十1267図 其の利益は、大部分を學校
の基本金とし、〈略〉。

きまり「決」(名) 1 きまり

十961図 「僕何だかきまりが悪くつ
て、さう言へなかつたのです。」

きまる「決」(五) 7 きまる

五923 郵便物をあつめる人は、毎日
きまつた時刻に来て、私のおなかを
明けて持つて行きます。

七461図 戦をはじめてから十二年、
今に勝負がきまらない。

八129 信作方の人々は〈略〉といつ
たので、さうきまつたといふこと
である。

八129 信作方の人々は〈略〉といつ
たので、さうきまつたといふこと
である。

八129 信作方の人々は〈略〉といつ
たので、さうきまつたといふこと
である。

八38 2 図 手を放した女が實母にきまつた。」と申し渡しましたので、里親は恐れ入つたといひます。

十52 4 図 〈略〉、定期の方は、預けた日から半年とか一年とかきまつた期限が来ないと引出すことが出来ない。

十二13 1 此の航海によつて彼の博物學者としての基礎が十分に出来、一生の方針がはつきりときまつた。

十二65 9 〈略〉、妹はかねてフランス王の后になることにきまつてゐた。

きみ 「君」(名) 5 君 おおきみ・ちちきみ・わかきみ

九116 8 図 何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。一命を捨てて君の御恩に報ゆる爲には候はずや。

十131 2 図 いでや、行幸の路に待受け、君を奪ひ奉りて義軍を起さん。

十132 4 図 高德せめては此の所存を君に知らせ奉らばやとて、夜にまぎれて行在所の御庭にしのび入り、〈略〉。

十一4 8 図 少時より學問に勵み、長じて後魯の君に仕へ、〈略〉。

十二132 10 君と親とに眞心を捧げ盡くして仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、今更いふまでもない。

きみ 「君」(代名) 10 君

五6 7 図 「君、しつかりしたまへ。日本の男は泣くものではない。」

五99 2 図 熊が君の耳の所へ口を持つて行つたやうだが、何か言つたのか。

七5 7 図 君、此の長き行列の中

の一人は君にして、中の一人は僕なるぞ。

七5 8 図 君、此の長き行列の中の一人は君にして、中の一人は僕なるぞ。

八99 8 図 僕等はふだんいそがしく働いてゐますのに、君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、少しも僕等の爲につくさない。

九113 5 図 昨年僕の學校より、君の學校へ御轉任なされ候佐野先生、先頃より御病氣の由承り候。

十19 2 図 中には、君ぐらゐの子供や、其のおかあさんらしい人が、〈略〉してゐるのもあります。

十77 8 図 〈略〉、遠足好きの君なら、毎日何處へか出かけたてたまらないだらうと思ひました。

十一44 10 図 君は畫を以て一家を成せる人なるに、數年の間一度も筆を取り給ひし事なし。

十一45 3 図 〈略〉、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。

きみがよ 「君代」(名) 3 君が代

九9 2 図 此の間も十ぐらゐの少女が「君が代」をうたつてゐました。

九66 10 此の時信號兵は「君が代」のラッパを吹き、〈略〉。

十127 9 図 折しも起る「君が代」の奏樂。

きみじかさ 「氣短」(名) 1 氣短さ

十二65 4 〈略〉、年とともに老の氣短

さが加はつて、ちよつとした事にも怒り易くなつてゐた。

きみら 「君等」(代名) 7 君等

八101 4 図 君等はかうなることは知らなかつたのですか。

八102 1 図 君等は僕を苦しめようとして、此の數日の間少しも食物を送つてよこしませんでした。

八102 4 図 其の爲に新しい血が出来なくなつて、かへつて君等は自分で苦しむやうになつたのです。

八102 5 図 これは全く君等が自分で招いたのであります。

八102 7 図 君等が若し僕に食物を送る爲に働いたといふなら、僕もまた〈略〉といひます。

八102 9 図 君等が〈略〉といふなら、僕もまた君等を養ふ爲に骨を折つたといひます。

十二131 6 図 次第によつては、或は君等の銃先にかゝつて死ぬかも知れぬ。

きめる 「決」(下二) 8 キメル きめる「一メ」よりきめる

四38 7 たび人のぐわいたうをぬがせた方が勝といふことにきめて、先づ風からはじめました。

四65 4 よ一は〈略〉かくごをきめて、馬にまたがつて、海の中へ入りました。

六51 8 頼朝は一目見た上でと、萬じゆを呼出しましたが、〈略〉、さつそ

く舞姫にきめました。

九121 5 図 〈略〉、アノ人ナラバト思ハレル人ガアルカラ、オトウサンハ最初カラチャント其ノ人ニキメテキタ。

十56 3 それは、豫め甲乙の二地をきめて置いて、一方を飼養所、一方を食事所とし、〈略〉、其の往來を利用するのである。

十一15 8 〈略〉、私も急に一年からのをまとめたくなりましたが、私ののは置場所をきめておかなかつたので、大方なくなつてしまひました。

十二13 5 しかも日常生活は極めて規則正しく、毎日きめた時間割通りに仕事を進めて、〈略〉。

十二125 1 徳川方も事ここに至つては、あくまでも戦ふ覺悟をきめて、ものすごい緊張を示してゐる。

きもち 「氣持」(名) 10 氣持

五20 7 ゆふべの雨がはれて、青葉の上に日が氣持よくてつてゐます。

九7 7 図 〈略〉、あざやかな緑の世界は、何ともしやうのない、氣持のよいものです。

九12 1 図 井戸に近き柿の木、日ましのびゆく若芽のうす緑、見るに氣持よし。

九98 1 お話が頂上のながめに移ると、〈略〉、僕等も何時の間にか、山の上に居るやうな氣持になつて聞きました。

九100 4 黒みがかつた紫色の莖が見事

に延びて、大きな葉をゆらゆらと風に動かしてゐる姿は、誠に氣持がよい。

十859 事務所の湯にはいつて服を改めると、更に生きかへつたやうな氣持がしました。

十一167 〇「こんなによく整頓してゐる中で勉強したら、どんなに氣持がよいだらう。」

十一3810 〇略、下枝を伐落して行くと、今まで兩方の枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて如何にも氣持よさうに見える。

十一551 船員等は、如何にも氣持よさうに泳ぎ廻つてゐたが、〇略。

十二853 竹島を越したと思ふと、急に水が冷たくなつた。何だか氣持の悪いものだ。

きもの「着物」(名) 20 キモノ きの着物 ↓ おんきもの

三185 〇 この人はどんないろ

のきものをきてゐますか。

三186 〇 「あかいきものをきてゐます。」

三357 キモノ ソデ ニモ、タビ

ニモ、手ブクロ ニモ、クツ ニモ

右左 ガアリマス。

三703 たんす やつづら から 着物

を出して、風通しのよいところ

にかけてあります。

三812 〇 靑空 高く そびえたち、

からだにゆきの 着物 着て、

〇略、ふじは日本一の山。

三844 そはへよつて見ますと、見たこともないきれいな着物でした。

三852 〇 「それは私の着物でございます。」

四406 おかあさんがあたまに手ぬぐひをかぶり、着物の上にちりよけを着て、〇略、おはたきになりました。

六696 〇略、きれいな着物を着て、牛車に乗つたお姫様方の姿を、此の川の水はいくたびとなくうつしたとでございませう。

六742 〇 「春子、オ前ハ着物ヤ帶ノ地ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマスカ。」

七108 船頭が「〇略。」と言つたので、みんな羽織をぬいで、着物のすそをはしよつた。

七643 此の時見すばらしいなりをした一人の男が、〇略、着物をぬいで頭にのせ、一人で川へはいつて行きました。

七902 〇略、大急ぎでおばあさんの着物を着せてやりました。

八247 〇 「それ程首がほしいなら、明日の晝頃、赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」

八253 〇略、果して赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着た人が來ました。

八1132 すると大將の父は〇略、大將を井戸端へ連れて行つて、着物をぬがせて、頭から冷水を浴びせかけた。

九331 〇略、手もうす緑、足もうす緑、帯も着物も皆うす緑。

十1210 〇 あの青年が私の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、はいると靜かに戸をしめました。

十1236 〇 着物は粗末ながら、さつぱりしたものを着て、〇略。

十1239 〇 外の者は着物だけは美しかつたが、爪の先は眞黒になつてゐる者が多うございしました。

きもん「疑問」(名) 2 疑問

十二821 〇 樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。

十二822 〇 〇略、此の疑問を解決したる人、遂に我が日本人の中より現れぬ。

きやく「客」(名) 1 客 ↓ おきやく・おきやくあそび・おきやくさま

七624 〇略、川べの宿はとめきれない程の客でございました。

きやく「規約」(名) 1 規約

十146 〇 私が今度歸つて來て、はじめて青年團の規約を見た時は、其のとゝつてゐるのに驚いて、〇略。

きやく「虐待」(サ変) 1

十二7210 虐待する「虐待」(サ変) 1

十二7210 それは父が姉たちの爲に

虐待されてゐるといふことであつた。

きやくま「客間」(名) 1 客間

五337 店・客間・居間・勝手など、これで間数が七つもあるとは、どうしても思はれませんでした。

きやく「感」1 きやく

四425 〇略、子ねずみが一ぴきとび出しました。下女がびつくりして、「きやく」といつたので、〇略。

ギヤナ「地名」1 ギヤナ

十一102 〇 ギヤナ

き・ゆ「消」(下二) 4 きゆ 消ゆ

八638 〇 或夜弟子をあつめて、書物を教へし時、風にはかに吹きて、ともし火きえたり。

十298 〇 野路を行く人影 たゞちにきえて、けたゝまし、もずの音、こずゑはいづこ。

十707 〇 降積みし雪もあと無くきえて、山河草木喜にあふるゝ春とはなれり。

十一1129 〇 〇略、はかなく露と消えしかど、其の名はくちせず、諸葛孔明。

きゆう「旧」(名) 2 舊

十一9110 僕はよく年寄の人が新の幾日とか舊の幾日とかいふのを思ひ出して、其の事を父に尋ねた。

十一922 〇 新は新曆、舊は舊曆のこ

とだ。

きゅう 「急」(名) 1 急

十一247 図 危く逃延びたる一二の兵卒、はせもどつて急を告ぐれば、とりでの守將中川清秀、士卒を指揮して防ぎ戦ふ。

きゅう 「宮」 ↓けいふくきゅう・しゅうとくきゅう

きゅう 「級」(名) 3 級 ↓こういっきゅう・こうきゅう・こうしちきゅう

五41 図 「此の方は中村さんといふ人で、今度遠い所から来て、今日から此の級へはいる方です。」

五64 聞けば級のものが三人で、中村君を生いきだといつて、いぢめたのださうです。

五354 遠足のしたくをして學校へ行くとき、もう級のものが大分来てゐて、先生もお出でになつてゐました。

きゅう 「急」(形状) 20 急

五755 それを見て、村の人は急にあれ地を田にしました。

五854 図 夜明け方になつて、雨も風もやみますと、急に川水の音がごう／＼と聞えて来て、〈略〉。

六337 停車場近クニナルト、急二人通ガ多クナツタ。

七567 図 急に暴風雨が来ると、山のやうな波が立つて、船は今にも沈むかと思ふやうになります。

八494 サウシテ何カ地上ニエモノヲ

発見スルト、スウツ下リテ来テ、急ニツバサヲチマメ、〈略〉。

九334 目じるしの大けやきの所まで来た時、急にかん高い音を立てて、美しい小鳥が二三羽、身がるに枝移りした。

九338 すると木のうろから、栗鼠が一匹、けろりとした顔を出したが、僕の姿を見ると、太い尾をちらりと見せて、急にまた穴にかくれてしまつた。

九961 図 僕も其の通りになつて見ましたが、急な坂を矢のやうに早くするのですから、實に愉快でした。

九1091 と、たづなが急にゆるんで、中尉は後方にころげ落ちた。

十一218 図 二年の年月苦勞して育てて来たものが、急に見ず知らずの人の手に渡つてしまふのだから、〈略〉。

十855 坑外に出ると、急に夜が明けたやうで、〈略〉。

十一157 成績物は〈略〉、皆一生の記念になるのだ。」と思ふと、私も急に一年からのをまとめたくなりましたが、〈略〉。

十一283 図 〈略〉、秀吉の軍は、〈略〉、追撃すること頗る急なり。

十一389 〈略〉、下枝を伐落して行くとき、今まで兩方の枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて〈略〉。

十一556 〈略〉、どうしたのか急に相手にぬかれて、一二間も後れてしまつた。

十一557 これまでにこ／＼してながめてゐた老砲手は、急に氣をもんで「略。」と、甲板からしきりに勵ました。

十一852 竹島を越したと思ふと、急に水が冷たくなつた。

十一859 僕も急に元氣がなくなつて、一所に船上らうかと思つたが、〈略〉。

十二389 ベートーベンは急に戸をあけてはいつて行つた。

十二1081 一念こつた不斷の努力は恐しいものであると思ひつくと、〈略〉老僧の姿が、急に尊いものに見え出した。

きゅうか 「旧家」(名) 1 舊家

十1256 図 村長は村の舊家に生れ、きはめて親切公平にして、〈略〉、既に二十餘年勤續せり。

きゅうか 「休暇」(名) 1 休暇

九474 図 一昨日海軍のにいさんが、休暇でお歸りになつたので、〈略〉。

きゅうぎょえん 「旧御苑」(名) 5 舊御苑

十38 図 それより社務所に行き、舊御苑・舊御苑の拜觀を願ふ。

のぞきては、立木きはめて少かりしかば、〈略〉。

十五 図 舊御苑

きゅうくつ 「窮屈」(形状) 1 きゅうくつ

五487 又うすい吉野紙のやうな作りかけの繭の中で、きゅうくつさうにからだをまげて、一生けんめいにはたいてゐるのがあります。

きゅうけい 「休憩」(名) 1 休けい

九6310 數分の内に艦内はすつかり整頓する。そこで五分間の休けいがあるつて、上甲板洗となる。

きゅうこう ↓さいだいきゅうこう

きゅうこうてん 「旧御殿」(名) 4 舊御殿

十38 図 それより社務所に行き、舊御殿・舊御苑の拜觀を願ふ。

十42 図 案内の人にみちびかれて、まづ社務所の隣なる舊御殿を拜觀す。

十53 図 舊御苑と舊御殿の邊とのぞきては、立木きはめて少かりしかば、〈略〉。

十五 図 舊御殿

きゅうさい 「九歳」(名) 1 九歳

十二102 九歳の時始めて學校にはいつたが、〈略〉

きゅうしき 「旧式」(名) 1 舊式

十二392 其のそばにある舊式のビヤノによりかゝつてゐるのは妹であらう。

きゅうしにていす 「課名」 2 舊師に

呈す

十二11 第二十四課 舊師に呈す

十二119 第二十四課 舊師に呈す

きゅうしゅう「九州」(地名) 4 九州

六80 四國・九州の武士は博多の濱にあつまつた。

十二32 本土の西、近く九州と相接せんとする處、下關海峽あり。

十二32 四國の西には佐田岬長く突出で、九州にせまりて豊豫海峽をなす。

十二49 松に至りては産地極めて廣くして、奥羽地方より九州に至るまで殆ど之を見ざる處なく、(略)。

*きゅうじゅう ↓くじゅう

きゅうしゅうみいけ「九州三池」(地名) 1 九州三池

十79 此の間、九州三池の或炭坑を見物しました。

きゅうじょ「救助」(名) 3 救助

十一127 喜捨を受けたる此の金、之を一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ふるも、歸する所は一にして二にあらず。

十一127 すなはち喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、資金を悉く救助の用に當てたりき。

十一128 幕府は處々に救小屋を設けて救助に力を用ふれども、(略)。

きゅうじょう「宮城」(名) 2 宮城

五100 東京停車場は東洋第一の大停

車場で、宮城の東にあります。

五102 はじめて東京見物に来て、此の停車場へ降りる人は、大てい先づ第一に宮城をさしてまゐります。

きゅうそく「休息」(名) 1 休息

十二95 今度は程よく食物も取り、休息もした。

きゅうたい「旧態」(名) 1 舊態

十二110 今では此の洞門を掘りひろげ、處々に手を加へて舊態を改めてはるが、(略)。

きゅうちゅう「宮中」(名) 1 宮中

十120 此處は昔公配所の跡である。(略)。宮中の御宴の事を思ひ出して詩を作られたのも此處であらう。

きゅうちよう「級長」(名) 2 級長

五44 これは級長の山田さんです。

九122 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長ガ轉校シタノデ、近々後任ノ選舉ヲスルコトニナツテキルノデアツタ。

きゅうちようせんきょ「級長選舉」(名) 1 級長選舉

九123 道雄ハ此ノ時、フト學校ノ級長選舉ノ事ヲ思ヒ出シタ。

きゅうでん「宮殿」(名) 4 宮殿

十二76 大神其の眞心の厚きを賞して、命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。

十二91 それを見てひどく氣をもんだ父王は、彼に妃を迎へ、目もまばゆい宮殿に住まはせて、國政にも與らせようとした。

十二93 かくて彼は二十九歳の或夜、人知れず宮殿を出て修行の途に上つた。

十二101 北に大内裏の宮殿を仰ぎ、朱雀の大路南に走りて、南端に羅城門をふまへたる古の奈良の都は、(略)。

きゅうにゅう「牛乳」(名) 1 牛乳

十二94 そこで彼は(略)少女のさへげた牛乳を飲んで元氣を回復した。

きゅうにゅうはいたつ「牛乳配達」(名) 1 牛乳配達

六32 マツ先ニ出アツタノハ牛乳配達デ、車ノ音ヲ高クサセテ、ハシツテ行ツタ。

きゅうば「牛馬」(名) 1 牛馬

十一108 原野は大てい牧場にて、牛馬は放し飼にせられ居候。

きゅうばくふ「旧幕府」(名) 1 舊幕府

十二125 慶喜から官軍に對する交渉の全權を委任せられてゐた舊幕府の陸軍總裁勝安芳は、(略)。

きゅうひやくしゃく「九百尺」(名) 1 九百尺

十80 (略)、何時の間にか、地下九百尺の坑底に着きました。

きゅうひやくはちじゅうマイル(名) 1 九百八十哩

八71 シカゴとニューヨークの間は九百八十哩もありますが、(略)。

たつた十八時間で着きました。

きゅうひやくり「九百里」(名) 1 九百里

八19 汽船ハ河口ヨリオヨソ四百五十里、小舟ハオヨソ九百里サカノボルコトヲ得。

きゅうほうす「急報」(サ変) 1 急報

十一26 ことはたゞ事ならじと、尾野路山の本營に急報すれば、(略)。

きゅうりゅう「急流」(名) 2 急流

十二44 最後は又急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で一ぱになつて、(略)。

十二116 博士は先づ「(略)。」といつて、急流や瀑布に富んでゐる我が國では、(略)ことを力説した。

きゅうりよう「丘陵」(名) 1 丘陵

十五 丘陵

きゅうれき「旧曆」(名) 2 舊曆

十一92 新は新曆、舊は舊曆のことだ。

十一92 それから太陰曆を舊曆、太陽曆を新曆といふやうになつた。

きよい「清」(形) 2 清い

六70 川は昔のまゝに清く美しく流れてゐます。

十二42 友人がそつと立つて窓の戸をあけると、清い月の光が流れるやうに入込んで、(略)。

きょう「今日」(課名) 2 今日
 九目2 第一 今日
 九11 第一 今日
 きょう「京」(地名) 1 京 ↓へいじょうきようあと
 十一454(文) 愚僧も所用ありて京に上り、或は二年滞在せんもはかり難し。
 きょう「郷」↓りそうきよう
 きょう「経」↓いっさいきよう・てつげんのいっさいきよう
 きょう「境」↓ひだかきよう
 きょう「鏡」↓ほうえんきよう
 きょう「今日」(名) 63 今日 ↑こんち
 三608(文) 二郎「三郎さん、又今日も舟をながしてあそびませう。」
 三702 今日 はうちの虫ぼしです。
 三782 今日 私が川の土手からとつて来たすすきも、花いけにさしてそなへてあります。
 三825(文) 「今日はまあ、何といふよいお天きだらう。」
 四13 今日はお祭です。
 四107(文) 風に吹かれて、なま土ふんで、今日も朝からせい出すおや子。
 四256(文) 今日「は略」をちさんもをばさんも早くかへります。
 五41(文) 「此の方は中村さんといふ人で、今度遠い所から来て、今日か

ら此の級へはいる方です。」
 五131 四月二十一日 土曜 雨 今日から日記をつけることにしました。
 五224 (略) 島屋の大賣出しは、いよく今日からはじまりました。
 五477 今日のお晝頃はうち中、目がまはるほどいそがしいございました。
 五657(文) 「今日は買物もあるし、歸りには馬車に乗つて、此の下まで來てもよい。」
 六16 今日 はうちの者がみんなたんぼへ稻こきに行きました。
 六32 今日庭にほしてあるもみをすつて、俵に入れてつんだら、三つ目の山は出来上りませう。
 六603 三月二十日、今日はお花見といふので、御殿は人少でございます。
 六776 今日 は日曜日で、おまけに日本晴だ。
 六1046(文) 昨日正午にこちらへ着いて、午後外宮へ参り、今日内宮へ参つた。
 七528(文) で、今日此のなつかしい學校に來て、皆さんにお話をするのは、何よりもうれいのでございます。
 七925(文) 「よいあんばいだ。此のもやうなら、今日は大したことはあるまい。」
 八126(文) どうか今日から一年の間、あなたの方の村が五箇村の頭になつて下さい。
 八697(文) サンフランシスコから三日二晩汽車に乗通して、今日此のシカ

ゴに着きました。
 八709(文) 長く滞在してゐたシカゴ市を立つて、今日「略」ニューヨーク市に着きました。
 八782(文) 是非今日のうちに納めなければなりません。
 八784(文) 今日までに納めないと、役場によけいな手数をかけることになります。
 八946(文) 「何なら、あのお子をお今日一日お連れになつてもよろこびます。」
 八1001(文) 僕等は一同申し合はせて、今日からは働かないことにしたから、さう思つてくれ給へ。
 九28(文) いざ、起出でて、勇ましく我もはげまん、今日の業。
 九415(文) 昨日の敵は今日の友、語る言葉もうちとけて、我はた、へつ、彼の防備。
 九4210(文) 『我に愛する良馬あり。今日の記念に獻すべし。』
 九499 僕は今日學校から歸るとすぐ「略」お使に行つて來ました。
 九5510 僕は今日其のえらい社長さんに會つて來たのだと思ふと、何となくうれしい氣がしました。
 九566 今日 は天氣がよいので、朝から麥を打つ音が方々で聞える。
 九6110 副長もはや上甲板にあらはれて、今日の天氣はどうかと空をながめる。

九775(文) 今日 はこれからのほりをしませう。
 九936 (略) 岡田さんが旅行からお歸りになつたと聞いて、今日にいと二人で遊びに行きました。
 九942 (略) くはしい事は今日始めてうかゞひました。
 九9910 (略) かぼちや畠を見廻ると、此の前まだ少し早いと言つて残して置いたのが、今日 はもう熟しきつたやうな顔をして、「略」。
 九1053(文) おい北風、今日は大分手ごたへがあるぞ。
 九1206(文) 今日午後四時ノ汽車デ又出カケルノダ。
 九1209(文) 「今日ハ衆議院議員ノ總選舉ダカラ、投票ノ爲ニ歸ツテ來タノダ。」
 九1216(文) 今日投票ノ爲ニ歸ツタノモ出發ノ時カラノ豫定ナノダ。
 十1410(文) しかし、「略」、今日の働を見て、大そう心強くなりました。
 十167(文) (略)、今日は朝から、義雄君に案内してもらつて見物に行きました。
 十195(文) 子馬には大い飼主の一家族がついて來て、「略」(略)、今日の別れを惜しんで、泣きながら豆やにんじんをやつたり、くびや背をなでたりしてゐるのもあります。
 十228(文) 私は今日此所來て、飼主たちがあんなにかはいがつてゐたの

を見て、〈略〉。

十384 今日私は私もついて行つて見た。

十733 何時か御約束した通り、今日は當地の様子を少しばかり申し上げます。

十7810 お知らせしたい事はまだいろいろありますが、大分長くなりましてから、今日は此のくらゐにして置きます。

十946 其の夜又父に強く聞きたゞされて、太郎はやつと今日の次第を有りのまゝに話した。

十1273 〇 今日を晴と満艦飾をほどこされたる三萬四千噸の大戦艦陸奥は、〈略〉。

十125 〇 ござや、我が友うち連れ行かん。今日はうれしき遠足の日よ。

十1210 〇 〈略〉、春は繪のごと我等をめぐる。今日はたのしき遠足の日よ。

十1135 〇 〈略〉、笑ひさゞめくひるげのむしろ。今日はうれしき遠足の日よ。

十11310 〇 〈略〉、行くは何處ぞ、桃さく村へ。今日はたのしき遠足の日よ。

十1142 今日、のぶ子さんのうちへ始めて遊びに行きました。

十253 〇 寄手の大將佐久間盛政は、今日の戦に勝ちほこり、明日は進んで賤嶽のとりでをおとし、一舉に敵

をみぢんにせんと、〈略〉。

十265 〇 味方は今日の戦に將卒共につかれ果てて、物の用に立つべくもあらず。

十475 〇 〇 「今日かき給はん鶴の姿はかやうなるべし。」

十835 今日始めての遠泳だと思ふと、何だかうれしいやうな心配なやうな気がする。

十843 今日殊に波も静かだ。

十1264 〇 今日はお前たちに一つ聞いてみたい事がある。

十1236 〇 〈略〉、寄るべなき海にさすらひ、思出の深き船路や、つゝがなく今日しも果てて、船は今静かに歸る、懐かしき故郷の港。

十1264 安芳は今日こそ最後の確答を得ようと決心して、西郷をおとづれたのである。

きょう 〔器用〕(形状) 1 器用

十215 〇 〈略〉一三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。

きょう 〔行〕(名) 2 行 〇 いちぎよう・むごんのぎよう

十692 或山寺で、四人の僧が一室に閉ぢこもつて、七日間の無言の行を始めた。

十699 〇 「無言の行に口をきくといふ事があるか。」

きょう 〔業〕(名) 2 業 〇 こうかいぎよう・しょうこうぎよう

十1268 〇 しかも其の巻数幾千の多

きに上り、これが出版は決して容易の業に非ず。

十12010 〇 〈略〉、此の度は製版・印刷の業着々として進みたり。

きょう 〇 〇 教育 (名) 4 教育

十123 高橋さんは、あちらで長らく教育に従事してゐる人である。

十155 〇 朝鮮の青年も、〈略〉、あちらの教育に關係してゐる私どもは、非常に喜んでをります。

十159 〇 〈略〉、老後は専ら力を教育と著述とに用ひたり。

十1165 例へば教育・衛生等の自治團體の事業は、〈略〉によつて、始めて其の効果を完全に擧げることが出来る。

きょう 〇 〇 教員 (名) 1 教員

十1262 〇 其の他の教員も、校長を模範として専心職務につとむるが故に、生徒は皆よく之になつてゐる。

きょう 〇 〇 教化 (サ変) 1 教化する 〇 〇 〇

十973 續いて釋迦は〈略〉、父王・妻子を始め國民を教化して故郷の恩に報いた。

きょう 〇 〇 行儀 (名) 3 ぎやうぎ

行儀 〇 〇 〇

八51 〇 〈略〉、二匹ともくつぬぎに手をついて、ぎやうぎよく僕のすることを見てゐる。

九1006 其の隣の島にしやうがが、〈略〉、ぎやうぎよく並んでゐるのも美しい。

十203 今登つて来た方を振返つて見ると、〈略〉、蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。

きょう 〇 〇 供給 (名) 1 供給

九466 〇 スナハチ物ノ價ノ高下ハ、主トシテ需要ト供給トノ關係ニヨルナリ。

きょう 〇 〇 供給 (サ変) 2

十224 商人たる者は、〈略〉、品質のよい品物なるべく安價になるべく敏速に供給して、廣く公衆の爲を計らなければならぬ。

十1162 〇 殊に近年は水力電氣の驚くべき發達にとまなひ、電力は頗る廉價に供給されるので、〈略〉。

きょう 〇 〇 行啓 (名) 1 行啓

十399 〇 何れも、御在世中しばしば行幸・行啓ありし所にて、當時の御殿・御庭などの、今も其のまゝに保存せらるゝなりとぞ。

きょう 〇 〇 行幸 (名) 5 行幸

五553 いつか此の事が天皇のお耳に入りまして、わざ／＼奈良の都から美濃の國へ行幸になりました。

十399 〇 何れも、御在世中しばしば行幸・行啓ありし所にて、〈略〉。

十130 3 京中の貴賤男女、此の行幸

を悲しみて涙と共に見送り奉り、警固の武士もさすがによりほの袖をしぼりけり。

十131 1 図 義を見てせざるは勇なきなり。いでや、行幸の路に待受け、君を奪ひ奉りて義軍を起さん。」

十131 6 行幸餘りに遅かりしかば、人をしてうかゞはしむるに、略、山陰道にかゝし由なり。

きょうこく くだいききょうこく

きょうさん 協賛 (名) 1 協賛

十二90 2 唯法律は必ず帝國議會の協賛を経なければならぬが、命令には其の事がない。

きょうしつ 教室 (名) 4 教室

五33 3 ところがあなたの教室です。せきはあれにします。」

五15 6 四月二十五日 水曜 曇

つゞり方の時間に、すゞめが教室の中へとびこみました。

八93 5 それから先生は、僕等を一年生の教室に連れて行かれた。

八93 9 信吉は教室を出ると、「略。」といつて、先生を廊下でをがむやうにした。

ぎょうしゃ ぐがいこくぼうえきぎょうしゃ

きょうじゅう 京中 (名) 1 京中

十130 3 京中の貴賤男女、此の行幸を悲しみて涙と共に見送り奉り、略。

きょうじゅう 今日中 (名) 1 今日

九58 1 図 おかげで今日中には大がいかたづきます

きょうす 供 (サ変) 2 供す 《一ス・一セ》

十二46 2 凡それ等の木材は、其の有する性質によりて各種の用に供すべく、随つて何れも重要ならざるはなけれど、略。

十二48 5 略、栗は耐久・耐濕の性殊に著しきを以て、家屋の土臺、鐵道のまくら木等の用に供せられ、略。

きょうせい 強制 (サ変) 1 強制する 《一スル》

十一115 4 市町村長や議員を選挙するには、略。まして威力によつて強制するとか、略。は、自治の精神に全く反するものである。

きょうそう 競走 (名) 2 競走

八92 始の間はあまり甲乙はなかつたが、略。もはや信作と耕造の二人だけの競走となつた。

八96 今度の競走も五分々々に進んで行つたが、略。

きょうそう 競走 (下) 2 競走させる 《一セ・一セル》

八62 昔或氏神のお祭に、競馬の神事といふ事があつた。それは略、子どもの騎手を一人づつ出して、社の横の池のまはりで競走させ

て、略。

八95 略、神主は二人の者だけで、もう一度競走させることにした。きょうそう 競走 (サ変) 2 競争する 《一スル》

十20 10 其の間、買手の競争する聲と掛の人の聲と入亂れて、非常ににぎやかです。

十一38 2 略、それでも木が競争するやうに、しんを立ててすすくと延びてゐるのを見ると、非常にうれ

しい。

きょうだい 兄弟 (課名) 2 きやうだい 三目 十 きやうだい 三8 5 十 きやうだい

きょうだい 兄弟 (名) 9 きやうだい 兄弟 ぐきやうだい・そがきやうだい

三30 6 略、「さ、いきませう。」ときやうだいは かくかう

四92 6 くだうが東へ行けば、兄弟も東へ行き、略。

四93 5 兄弟は今度こそはと、略、ふじのすそ野へ急ぎました。

四95 1 兄弟はくだうのやかたへふみこみました

十二41 4 其の最初の一言が既にきやうだいの耳には不思議にひびいた。十二41 8 きやうだいは唯うつとりと

して感に打たれてゐる。

十二43 3 「あ、あなたはベートーベン先生ですか。」きやうだいは思はず叫んだ。

十二44 9 「先生、又お出で下さいませうか。」きやうだいは口を揃へていつた。

十二28 4 略、今日日本の周圍には諸外國が様々の考を持つて見てをるので、うかくと兄弟垣にせいでゐたら、日本全國にのしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。

きょうちゅう 胸中 (名) 1 胸中

十二96 2 略、此の尊い心境を世界の人々と共にせずにはゐられぬといふ慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。

きょうてき 強敵 (名) 1 強敵

十一112 7 二代の帝に盡くす真心、強敵ひしぎて世をしづめんと、三軍進めし五丈原頭、略。

きょうと 京都 (地名) 7 きやうと 京都

六83 3 しかし三郎、高い山がかならず名高い山だとはかぎらない。略、京都の東山にしてもさうだ。

六69 3 京都を北から南へ流れてゐる川を賀茂川といひます。

六69 4 京都は長い間の都ですから、略。

六71 図 きやうと

六〇三 参拜をすましてから、京都へ出て、二三日見物して歸られるさうです。

六〇二 夕方京都へ立つ。三月十九日 父から 千太どの

十二三二 さうして直に静岡の大總督府にはせつけて議をまとめ、更に京都に上つて勅裁を仰ぎ、〈略〉。

きょうどう じいっそんなきょうどう

きょうどういつち・する 「協同一致」

(サ変) 2 協同一致する 《—シ》

十一一四 地方人民が協同一致して自ら地方公共の事に當り、〈略〉。

十一一六 それであるから人々は常に自治制の本旨を辨へ、協同一致して團體の福利を増進することを心掛けねばならない。

きょうどうじょりょく 「共同助力」

(名) 1 共同助力

七九六 共同助力は人の道、おのれの利のみかへりみず、力を分かち、物をさき、〈略〉。

きょうどうせいにかつ 「共同生活」 (名)

3 共同生活

十二二二 商人たる者は、よく共同生活の眞意義を辨へ、〈略〉、廣く公衆の爲を計らなければならぬ。

十二二四 これはひつきやう文明の程度が低いために、共同生活の意義が明らかでなく、随つて商業の本質が理解されず、〈略〉。

十二八三 法律は、國家といふ共同生

活を、秩序ありかつ幸福なものにするための規則であるか、〈略〉。

きょうほう 「享保」 (名) 1 享保

十二一〇四 享保の頃の事であつた。〈略〉、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。

きょうみ 「興味」 (名) 5 興味

十二一〇 又いろ／＼の鳥を注意して見ると、〈略〉、見れば見る程興味がわき、〈略〉。

十二一三 ダーウィンは興味を覺える

と、あくまでそれにこる性質で、〈略〉。

十二一四 印刷術の幼稚なる時代にありては、唯をり／＼興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。

十二一九 最後に博士は〈略〉、家庭における電氣の利用に就いて興味ある話をして壇を下つた。

十二二一 追々店の様子もわかり、お客様の扱方にもなれて、仕事に興味を覺ゆるやう相成り申候。

きょうもん 「経文」 (名) 1 経文

十二一〇九 〈略〉、時には夜半までも薄暗い燈を便りに、經文をとこなへながら一心にのみを振るふことさへあつた。

きょうり 「郷里」 (名) 6 郷里

七五二 遠洋航海を終へて、郷里に歸り來れる太平丸の船長は、〈略〉。

八一四 大將が十歳の年、大將の一家

は郷里へ歸ることになつた。

八一五 郷里の家は〈略〉、至つてせまい、そまつな家であつた。

十三七 郷里の青年諸君がこんなにまじめになつて來たのは、何よりうれしき事です。

十二一〇 本日突然上田君に出會ひ、久しぶりにて郷里の様子をいろ／＼承り申候處、〈略〉。

十二二六 主人の使などにまゐる途中、小学校の前を通りては、郷里の學校のおもしろかりしことなど思ひ出し申候。

きょうりょう 「橋梁」 (名) 1 橋梁

十二四六 家屋・橋梁・〈略〉の類に至るまで、一として杉を用ひざるなし。

きょうりょく・する 「協力」 (サ変) 1

協力する 《—スル》

十一一六 例へば教育・衛生等の自治團體の事業は、地方人民が一般に之を尊重し、之に協力することによつて、始めて其の効果を完全に擧げることが出来る。

きょうれつ 「強烈」 (形状) 1 強烈

十二四八 〈略〉、かしは最も堅くして彈力に富むが故に、櫓・車・運動器具の如き強烈なる力を受くるものを製作するに適せり。

きょうれつ 「行列」 (名) 1 行列

ながぎきょうれつ 君、此の長き行列の中

の一人は君にして、中の一人は僕なるぞ。

ぎょえん 「御宴」 (名) 1 御宴

十二二 宮中の御宴の事を思ひ出して詩を作られたのも此處であらう。

ぎょか 「漁火」 (名) 1 漁火

十一三四 月影のさゞなみにくだけ、漁火の波間に出没する夜景もまた一段の趣あり。

ぎょぎょう 「漁業」 (名) 2 漁業

七六二 漁業や航海業に従事する人もありませう。

十二八三 網をすき、舟を漕ぎ、漁業の手傳などして土人に親しみ、〈略〉。

ぎょぎょうしゃ 「漁業者」 (名) 1 漁業者

十五九 〈略〉、漁業者が沖から獲物の多少や難船の有様を通知したり、〈略〉、いろ／＼に利用する事が出来る。

きょく 「曲」 (名) 5 曲 じいっきょく・げつこうのきょく

十二三七 あゝ、あれは僕の作つた曲だ。

十二三八 にいさん、まあ何といふよい曲なんぞでせう。

十二四二 ベートーベンはかういつて、さつき娘がひいてゐた曲を又ひき始めた。

十二四五 さうして其の夜はまんじり

ともせず机に向つて、かの曲を譜に書きあげた。

十二456 ベートーベンの「月光の曲」といつて、不朽の名聲を博したのは此の曲である。

きよく 「局」 ↓けいじょうゆうびん
きよく・そうむきよく・ちゅうおうゆうびんきよく・にきよく・へんしゅうきよく・ゆうびんきよく

きよくじつしゅうてん 「旭日昇天」(名) 1 旭日昇天

十二614 雪白の地に紅の日の丸をゑがける我が國の國旗は、最もよく我が國號にかなひ、皇威の發揚、國運の隆昌^{きりやう}ながら旭日昇天の勢あるを思はしむ。

きよくすべり 「曲滑」(名) 1 曲すべり
六791 いろ／＼な曲すべりをやる者もあり、ころんでばかりゐる者もある。

きよくせつする 「曲折」(サ変) 1 曲折する 「一シ」
十一6110 汽車は無人の境を曲折して下る。

きよくろう ↓きんでんきよくろう
きよげつ 「五月」(名) 1 去月
十一434 實は去月十日頃より感冒^{ぼう}の心地にて引きこもり居候處、
「略」。

きよげつらい 「去月以来」(副) 1 去月以來

十一418 貴兄には去月以來御病氣にて、しかも一時は大分御重態なりし由、誠に意外の事に驚入候。

きよくいっち 「挙国一致」(名) 1 舉國一致

十二1310 随つて國民は「略」、いざといへば、舉國一致國難に當る氣風を生じた。

きよし 「清」(形) 1 清し 「一ク」
十二112 美術の光の かゞやく此の他、山皆緑に 水また清く、
「略」。

きよしめい 「居所氏名」(名) 2 居所氏名 ↓じゅしんにんきよししめい

七112 發信人の居所氏名を受信人に知らする必要があるときは「略」

七112 發信人は自己の居所氏名を成へく本字にて此處に記すこと

きよじん 「巨人」(名) 1 巨人

十二53 參詣人の群にまじりて行けば大鳥居あり、巨人の如く我がゆくてに立つ。

きよせい 「御製」(名) 1 御製 ↓めいじてんのうぎよせい

八816 明治天皇の御製に、「略」。といふ御歌がある。

きよときよと 「サ変」 1 キヨトキヨトスル 「一シ」
四376 ソレデモ フクロフハ「略」、
大キナ目ヲ見ハツテ キヨトキヨ

トシテ 居ル バカリデス。
きよねん 「去年」(名) 4 キヨネン 去年

三496 キヨネン デキ上ツタ 新道ハ、村ヲ東カラ西ヘ、マツスグニツキヌイテ キマス。

六13 今の分では去年より七八俵よけいに取れさうだ。

六102 なるほど、去年鯉のぼりを立てた時、しやうぶとよもぎを軒へさした。

七515 イカニモ丈夫サウナ老人デシタガ、去年ノクレニ死ンデシマヒマシタ。

きよひで 「清秀」(人名) 1 清秀 ↓なかがわきよひで

十一2410 清秀等の奮戦其のかひなく、清秀は討死してとりでは落ち、戦は午前のうちに終りぬ。

きよひでら 「清秀等」(人名) 1 清秀等

十一249 清秀等の奮戦其のかひなく、清秀は討死してとりでは落ち、戦は午前のうちに終りぬ。

きよふ 「漁夫」(名) 5 漁夫
十二781 魚見やぐらが設けてあつて、漁夫が絶えずまぐろの來るのを見張つてゐる。

十二787 合圖を見ると、網口の近くに番をしてゐる漁夫が急いで網口をしめてしまふ。

十二788 そこで數そのの船に分乘した漁夫が、「略」身網を一方からたぐつて行く。

十二794 漁夫はめい／＼手に一ちやうづつの釣を持ち、「略」。

十二7910 漁夫の顔は得意の色に輝いて、まるで凱旋の將士のやうに見える。

きよまさ 「清正」(人名) 27 清正 ↓かとうきよまさ・とよとみきよまさ

七974 行長は清正の軍功をねたみ、「略」、清正のことを秀吉にざんげんしました。

七975 清正のことを秀吉にざんげんしました。

七978 三成は秀吉のお氣に入りですから、秀吉は之を信じて、清正に歸國を命じました。

七978 清正は朝鮮を立つて、伏見へ參りました。

七982 清正は先づ増田長盛をたづねました。

七987 清正は腹を立てて、「略」。

七989 神々も照覽あれ、戦一つ出來ず、人のかげごばかりいふ石田めとは、此の清正一生中直りは致さぬ。

七994 正直者の清正は人づきあひが下手なので、「略」。

七995 誰一人清正を秀吉にとりなす者がなく、「略」。

七1001 此の時清正は、地震と共に

ね起き、家來の者二百人に梃こてを持たせて、一さんに伏見の城へかけつけました。

七101 秀吉は城の庭にしき物をのべさせ、〈略〉、御臺所やおそばの女どもと居りました。其所へ清正がかけつけました。

七1013 清正は大聲で申しました。

七1024 さうして清正のやせた姿、日にやけた顔を見ては、怒がとけて涙ぐみました。

七1029 「お庭先の御門を守る者がございません。某の手で固めませう。」と清正がいひますと、秀吉はうなづきました。

七1036 「石田といふ者ださうだ。」

「〈略〉。」「通さないことにしよう。」

などと清正の家來どもが申します。

七1042 何と申す。清正は上様へ

お目通がかなはぬはず。」

七1047 〈略〉、清正は「あのせいの低

いのが石田だ。通してやれ。」とい

つて、三成を入れてやりました。

七1052 秀吉は清正を召出して、

「〈略〉。」とたづねました。

七1058 清正はつゝしんで、〈略〉申し開きました。

七1068 此の清正こそはまことの太

將、四十萬の軍勢は此所へ向けよ。

七1078 清正はつけひもの頃から、

此の方のひざの上でそだつたので、何時か見習つたものと見える。

七1084 秀吉は感心して、「〈略〉。」といつて、軍功の賞として、清正に名刀をあたへました。

十一306 直に組合ひたる二人の勇士、ねぢ合ひ押合ひ争ふうちに、清正やがて正國をねぢ伏せたり。

十一308 ねぢ伏せられながら正國、清正がよろひのすそをしつかとつかむ。

十一308 清正刀を抜かんとするに、かぶとのしころつゝじの枝に引つかゝりて、身のはたらき自由ならず。

十一312 清正手早くかぶとのを切つたりければ、〈略〉。

十一316 正國の首は終に清正の手に入りぬ。

きよみずでら 「清水寺」(名) 1 清水寺

六11 清水寺

きよ・む 「清」(下二) 1 清む

十一9 水屋の水に手を清め口をすすぎて南神門を入れ、〈略〉。

きよ・める 「清」(下二) 1 清める

九675 軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は、〈略〉。

きより 「距離」(名) 2 距離

十一39 〈略〉、たゞ其の距離の遠い

ために、あんなに小さく見えるのである。

十一105 河幅は驚く程の廣さに

て、〈略〉、略々東京・豊橋間の距離に當り候。

きよりゆう・する 「居留」(サ変) 1

居留する 《一スル》

十一89 こゝには外國人の居留する者が非常に多く、〈略〉。

きよりゆう・ち 「居留地」(名) 1 居留地

十一91 租界といふのは居留地の一種で、〈略〉。

きよりゆう・みん 「居留民」(名) 2 居留民

十一91 租界といふのは居留地の一種で、居留民が支那政府の手を離れて、自治制を布いてゐる處である。

十一115 貿易上最も重要な關係をもつてゐるのは、日・英・米三國で、我が居留民の数は、外國人中第一位を占めてゐる。

きよるい 「魚類」(名) 4 魚類

七797 魚類ニハイワシ・アヂ・カツ

ヲナドノヤウニ、水ノ表面ニ近イ所

ヲ泳グモノガアリ、〈略〉。

七806 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タ

コ・イカナドガスタンデキル。

十二521 三十年ばかり前までは、此

の湖には魚類が全く居なかつた。

十二523 これは〈略〉大きな龍があ

つて、魚類のさかのぼる道を絶つて

ゐるからである。

きら 「綺羅」(名) 1 きら

十一71 諸國の大名・小名きら星の

如く並べる中に、常世は〈略〉、進みて御前にかしこまれば、〈略〉。

きらい 「嫌」(名) 1 きらひ ↓ すき

十二1359 すべて日本人の短所として、性質が小さく狭く出来たきらひがある。

きらい 「嫌」(形状) 2 きらひ

八1137 大將が何か食物の中にきらひな物があると見れば、〈略〉、うち中の者がそればかり食べるやうにした。

八1138 〈略〉、必ず其のきらひな物ばかり出して、大將が馴れるまで、うち中の者がそればかり食べるやうにした。

きら・う 「嫌」(五) 1 きらふ 《ハ》

六306 〈略〉、数かぎりもない蟻がまつ黒になつて、出て來ました。さうして虎の目・鼻・耳・口、所きは

ず食ひつきました、〈略〉。

きらきら (副) 3 きら／＼

八1156 けれども〈略〉、武士の魂と呼ばれる物は、何時もきら／＼光つてゐたといふことである。

十1184 〈略〉、神前の大きな神鏡が、

きら／＼とかやいてゐて神々しい。

十一837 空には眞夏の日がきら／＼とかやきわたつてゐる。

きらぎら (副) 1 きら／＼

十一129 とけたガラスが中でぎら／＼かがやいてゐる。

きらめく 「煙」(四・五) 2 きらめく
 「イーキ」
 十90 ㊦ 耕地整理のあとつづく、
 並ぶ田の面に氷きらめき、
 略。
 十二95 ㊦ 略、やがて一點の明星が
 きらめいて、夜はほのく、と明けそ
 めた。
 きらりきらり (副) 1 きらりく
 九59 ㊦ ふり上げた棒の先が、強い日
 光にきらりく、と光る。
 きらりと (副) 1 きらりと
 十83 ㊦ つるはしの先がきらりと光る。
 きり 「霧」(課色) 2 霧
 十目7 第六 霧
 十29 ㊦ 第六 霧
 きり 「桐」(名) 1 きり
 九12 ㊦ 妹は餌をつかみて、わざと
 少しはなれたるきりの木のあたりに
 まきちらせば、略。
 きり 「錐」(名) 3 きり
 三66 ㊦ 略、フシノマン中ニ、
 キリデ小サナアナヲアケマシ
 タ。
 十二86 ㊦ 此の棒を此の板の上に
 きりをもむが如く廻せば、摩擦によ
 りて火を生ず。
 十二53 ㊦ きりやねぢ廻しや略さ
 まぐの道具も、同じ臺の上に横た
 はつてゐる。
 きり 「霧」(名) 5 きり 霧 ↓あさ
 ぎり

七57 ㊦ 又きりがかゝつたり、大雪
 が降つたりして、一寸先も見えな
 なることもあります。
 七58 ㊦ 一たい船にはらしんぎとい
 ふ物があつて、略、いくらきりが
 深くても、まるでちがつた方へ行く
 やうなことはありません。
 九95 ㊦ 雲や霧がわいたかと思へば
 散じ、散じたかと思へば又わいて来
 て、略。
 十30 ㊦ しめやかに、夜の霧 ち
 またをつゝみ、立並ぶ家々、とも
 しびうるむ。
 十30 ㊦ 略、しめやかに、ひ
 そかに 夜の霧流る。
 きりおとす 「切落」(五) 1 伐落す
 「一シ」
 十一38 ㊦ なたや鎌などでつる草を拂
 ひ、下枝を伐落して行くと、略
 間がすいて如何にも氣持よさうに
 見える。
 きりかぶ 「切株」(名) 3 切りかぶ
 切株
 九34 ㊦ 道端の切りかぶに腰かけて、
 ひたひの汗をふいてゐると、略。
 十39 ㊦ 父は略、たき火のそばの
 切りかぶに腰を下し、鎌をとき
 にかゝつた。
 十一64 ㊦ 又開墾する場合には、立木
 や切株の根本を掘つておいて、それ
 にくさりをつけて此のトラクターで
 引くと、略。

きりきりしやんと (副) 1 きりきり
 しやんと
 三33 ㊦ 「しごと」なされよ、きり
 きりしやんと、かけた たすきの
 きれるほど。
 きりこむ 「切込」(五) 2 切りこむ
 「ミーン」
 六93 ㊦ 番兵がゆだんをしてゐると、
 城兵が切りこんで来て、旗をうばつ
 て引上げた。
 七44 ㊦ 謙信は馬に一むちくれて、信
 玄の本陣に切りこみ、略。
 きりそろへる 「切揃」(下) 1 き
 りそろへる 「一へ」
 八31 ㊦ さて山の木をきり倒して、四
 五尺の長さにきりそろへ、それをぎ
 つしりとかまの中に立て並べ、略。
 きりたおす 「切倒」(四・五) 6 きり
 たふす きり倒す 切倒す 伐倒す
 斬倒す 「サ・一シ」
 七19 ㊦ 又南の海上にはひしひしと軍
 船を浮べて、岸には大木がきりたふ
 してあります。
 八31 ㊦ さて山の木をきり倒して、四
 五尺の長さにきりそろへ、略。
 十38 ㊦ かり取つた難木、切倒した大
 木、略、まるで足のふみ場も無い
 有様である。
 十44 ㊦ 力蔵さんのひいてゐたけやき
 の大木も、見事に根本から切倒され
 た。
 十一24 ㊦ あわてて逃げんとすれど

も時既におそく、大方はやには斬
 倒されたり。
 十一109 ㊦ 伐倒したる木は乾くま
 で其のまゝに致置き、さて四方より
 火を放てば、略。
 きりだす 「切出」(四・五) 2 キリ出
 ス 切出す 「一シ」
 八19 ㊦ 此ノ河ノ上流地方ヨリ木材
 ヲキリ出シ、之ヲイカダニ組ミテ河
 ヲ下スコトアリ。
 十一95 ㊦ リンカーンが七歳の時、
 略、父は自分で木を切出して小さ
 な家を造つた。
 きりつけ 「切付」(名) 4 切付
 十一51 ㊦ 此の邊でゴムを栽培するに
 は、略、又は苗木を植付けるので
 あるが、これが成長して、切付を行
 ふまでには五六年もかゝる。
 十一52 ㊦ 切付といふのは、ゴムの木
 から液をとるために、木の幹に小刀
 で傷をつけることをいふのである。
 十一52 ㊦ 切付には餘程熟練を要する。
 十一53 ㊦ ゴム園の人は毎朝暗いうち
 に起きて、受持の木に此の切付をし
 て廻る。
 きりつける 「切付」(下) 4 キリ
 ツケル 切りつける 「一ケ・一ケル」
 二11 ㊦ ベンケイガ大ナギナタデ
 キリツケマシタ。
 二12 ㊦ マタキリツケルト、トビノ
 イテ、ベンケイノナギナタヲウ
 チオトシマシタ。

二765 ライクワウ ハスコシモオ
ソレズ、タチヲ スルリト ヌイテ
キリツケマシタ。

七451 ぐんばいうちはでふせいだが、
えが折れて、肩先へ切りつけられた。
きりつたらしい「規律正」(形) 1

規律正しい「一ク」

九636 〈略〉、千數百人の乗員が號令
にしたがつて、規律正しく活動する
其の様は、如何にも目ざましい。

きりとおす「切通」(五) 3 切通す

「一シ・ース」

十316 〈略〉、此の地峽を切通し、平
かな掘割を造つて、太平・大西兩洋
の水を通はせることは到底出来ぬ事
であつた。

十351 これは高い山地を切通したも
ので、此處を切通すのは非常な難工
事であつたといふ事である。

十352 〈略〉、此處を切通すのは非常
な難工事であつたといふ事である。
きりぬける「切抜」(下二) 1 切り
ぬける「一ケ」

十285 かうしてボートは再び荒波を
切りぬけて、燈臺に歸り着いたので
ある。

きりはらう「切払」(四) 1 伐拂ふ

「一ヒ」

十一1094 園田 先づ柄の長さ一間もあ
るなにて灌木を伐拂ひ、〈略〉。

きりひらく「切開」(五) 1 切開く
「一イ」

十一5910 未開の土地を切開いて、思
ふまゝに設計して造つた町であるか
ら、〈略〉。

きりまくる「切捲」(五) 2 切りま
くる「一ッ・ーリ」

六832 さんぐに切りまくつて、其
の船の大將を生けどりにして引上げ
た。

七1069 切つてく切りまくり、其
の勢で明の都へおしよせ、四百餘州
をやきはらはう。

きる「切」(四・五) 22 キル きる

切ル 切る 伐る 「一ッ・ーラ・ーリ・
ール・ーレ」 ↓ いきる・おきる・お
よぎる・くいきる・しきる・じゆく
しきる・すみきる・たてきる・ちぎ
る・つかれる・なれる・にがりき
る・のぼりきる・はさみきる・はりき
る・ひきりうす・ひきりぎね・みき
る・よこぎる・わかりきる

一462 オバアサンガモモヲキラ
ウトシマスト、モモガニツニ
ワレテ、ナカカラオホキナヲト
コノコガウマレマシタ。

二455 ヨイオヂイサンハソノ木
ヲキツテ、ウスヲコシラヘマシ
タ。

四588 ノコギリデ木ヲキルモ
ノモアリ、〈略〉、カンナデ板
ヲケツルモノモアリマス。

四956 ね入つて居るものをきる
はひけふと、「〈略〉。」と名のり

ました。

七486 無念に思つて、武田方から十
騎ばかり、木戸を開いて切つて出よ
うとした。

七1069 切つてく切りまくり、其
の勢で明の都へおしよせ、四百餘州
をやきはらはう。

七1069 切つてく切りまくり、
〈略〉。

八494 〈略〉、急ニツバサヲチメ、
風ヲ切ツテマツシクラニエモノノ上
ニツカミカル。

十439 かる、切る、掘る、運ぶ、誰
も彼も一心不乱に働くので、〈略〉。

十673 主人は三本の鉢の木を切り
てあろりにたきぬ。

十7110 又寒夜に秘藏の鉢の木を切
つてたいた志は、何よりもうれしく
思ふぞ。

十1127 一隻の捕鯨船が、勇ましく波
を切つて進んで行く。

十1238 又字を書く時に指先を見る
と、爪はみじかく切つてゐました。

十1285 やがて工廠長のふりかざし
たる金色の槌は、〈略〉繫索をはつ
しと切る。

十一312 清正手早くかぶとのをを
切つたりければ、〈略〉。

十一403 僕がお手傳して植ゑたあの
杉や檜は、何時になつたら伐るのだ
らう。

十一404 使ひみちによつて、三十年

目から五六十年目くらゐの間に伐る
のださうだから、〈略〉。

十一404 〈略〉、一番早く伐るとして
も、其の時は僕がおとうさんくらゐ
の年になつてゐるわけだ。

十一406 今年伐るはずのは、おとう
さんの子供の時植ゑたのだといふが、
〈略〉。

十一956 父が木を伐れば自分は雜草
をかり取る、〈略〉。

十一1095 園田 〈略〉、次にをのを振る
つて大木を伐るに、三抱も四抱もあ
るものが地ひゞきを打つて倒るる様
壯快言語に絶し候。

十二8510 木の枝を伐りて地上に立
て、上を木の皮にておほひ、八人一
所にうづくまりて僅かに雨露をし
る。

きる「着」(上一) 18 キル きる 着
る「キ」

三185 この人はどんないろ
のきものをきてゐますか。

三186 あかいきものをきてゐ
ます。

三324 長いはんてんをきて、
〈略〉、こぬかだらけになつては
たらくおいさんです。

三577 ニハノモモノ木ノネモ
トカラ、カラヲキタセミガハ
ヒ上ツテキマス。

三727 私どもはあれを着て、
をばさんの村のお祭によばれ

て行くのです。

三812 罫 青空 高くそびえたち、からだにゆきの着物着て、かすみのすそを遠くひく、ふじは日本一の山。

三896 れふしがはごろもをかへしますと、天人はそれを着て、まひはじめました。

四406 おかあさんがあたまたに手ぬぐひをかぶり、着物の上にちりよけを着て、〈略〉。

六85 罫 ふうん着て、ねたるすがたや東山。

六696 〈略〉、きれいな着物を着て、牛車に乗ったお姫様方の姿を、此の川の水はいくたびとなくうつしたことでございませう。

八247 罫 「それ程首がほしいなら、明日の晝頃、赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」

八253 〈略〉、果して赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着た人が来ました。

八861 〈略〉、間もなく黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて来られた。

九818 罫 〈略〉、安ちいさんはせぐくまり、常に何をか刻みある、めがねを掛けてはつび着て。

九832 罫 〈略〉、なほ怠らずつくと、何をか常に刻みある、めがねを掛けてはつび着て。

九846 罫 〈略〉、安ちいさんは一心に 毘沙門天を刻みあるき、めがねを掛けてはつび着て。

十1236 罫 着物は粗末ながら、さつぱりしたものを着て、齒もよくみがいてゐました。

十二913 ぼろを着た農夫は玉のやうな汗をかいて田をすき起し、〈略〉。

きれ [切] (名) 5 キレ きれ ↓こぎれ

三662 アトへ竹ノキレヲノコシテ行キマシタガ、〈略〉、水デツパウニナリサウナノガアリマシタ。

三671 ソレカラホソイ竹ヲエニシテ、ソノサキニキレヲマキツケテ、センヲコシラヘマシタ。

三685 ソノウチニ水ガ出ナクナツタノデ、センヲヌイテ見ルト、キレガトレテキマシタ。

四606 私ハ昨日大工サンカラ木ノキレヲタクサンモラツテ、友ダチトツミ木ヲシテアソビマシタ。

七677 罫 五十兩は黄色なきれにつゝんであつて、百兩は小さなふくろに入れてあります。

きれい [奇麗] (形状) 25 キレイ きれい

二477 スルト、ニハノカレ木ノエダニ、キレイナ花ガサキマシタ。

三36 罫 ア、日ガ出ハジメタ。キレイダ。

三452 おとひめは「〈略〉。」といつて、きれいな箱をわたしました。

三605 日の光がやはらかにさして、小川の水はきれいにすきとほつてゐます。

三832 日はよくてつてゐて、ふじの山はいつもよりなほきれいに見えました。

三843 〈略〉、見たこともないきれいな着物でした。

四464 おとうさんがおかへりになつた時には、家の内も外もきれいになつて居ましたので、〈略〉。

四851 罫 今オキクトオヒナ様ノ前ニスワツテナガメテ居マス。オキク「マア、キレイデスコト。

五237 下のかざりまどには、〈略〉、きれいな帯や、すゞしさうな浴衣地がかざつてあります。

五591 朱ぬりの社殿が山のみどりを後にして、たいそうきれいに見えます。

六152 僕がぐみをたべてゐる間に、にいさんは初茸を五六本取つたやうでした。僕が紅色のきれいなきのこを取つて、にいさんに見せましたら、〈略〉。

六466 キレイナ水ガサラ／＼流レテ、

川ソコニ小石ノ多イ所ガアルト、〈略〉、其ノ中ヘ卵ヲ産ム。

六695 〈略〉、きれいな着物を着て、牛車に乗ったお姫様方の姿を、此の川の水はいくたびとなくうつしたことでございませう。

六736 賀茂川は〈略〉水がいたつてきれいで、染物にむいてゐます。

六765 罫 「其ノキレイナモヤウハ、ドウシテツケルノデセウカ。」

八527 おかあさんはそれを二つにちぎつて、ぐるぐるまはしていらつしやつたが、忽ちきれいなおそなへになつた。

九62 罫 まだ十分にじゆくしてゐない實は、中にきれいな水があります。

九710 罫 海の中もなか／＼きれいです。

九1008 昨夜雨が降つたせゐか、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近く見える。

十85 全身砂ほりにまみれた王は、町はづれを流れてゐるきれいな川にはいつて水浴をした。

十4410 罫 「あゝ、きれいだ。あの色をどうかして出したいものだ。」

十766 罫 すみきつた空氣の中に煉瓦の赤色や、松の緑色などが鮮かに浮出して見えるのは實にきれいです。

十103 罫 「さあ、今度は葉のきれいな植物を集めてある處だ。」

十一103 租界の外に出ると大ていは

支那風の町で、町幅も狭く、あまりきれいでない。

十一125 皿・コップをはじめ、鉢・びん・花びん・水さしなどがきれいに並んでゐた。

きれいずき 「奇麗好」(形状) 1 きれいずき

十122 窓 きれいずきで、つゝしみ深いことは、それでよく分りました。

き・れる 「切」(下二) 5 キレル きれ 切れる 《一レ・一レル》 ↓ かぞえきれる・ちぎれる・とめきれる・はちきれる・まちきれる・もえきれる

三33 罎 「しごと」なされよ、きりきりしやんと、かけたたすきのきれるほど。」

四60 1 ヨクキレルカンナガスウツト板ノ上ヲ通ルト、《略》。

五86 3 罎 叔父さんは大へんだ土手が切れたといつて、すぐ屋根へ出ました。

九35 3 やうやく清水まで来て、手の切れるやうにつめたいのを二三ばいづけ様に飲んでゐると、《略》。

十二129 3 罎 徳川侍のなまくら刀にも少しは切れる所がござりませう。

きろく 「記録」(名) 1 記録 十二84 9 罎 出發の日近づくや、林蔵はこれまでの記録一切を取りまとめ、之を従者に渡していふやう、《略》。」と。

キロメートル ↓ ごせんごひやくキロ

メートル・さんびやくにじつキロメートル・しごじつキロメートル・やくいちキロメートル・やくろくじつぼうキロメートル

きわ 「際」(名) 1 きは ↓ かこいぎわ・かべぎわ・てぎわ・なみうちぎわ・ねぎわ・ひときわ・まどぎわ・みぎわ・やまぎわ

四66 6 赤い扇はかなめのきはをいきられて、空に高くまひ上つて、《略》。

きわまる 「窮」(四) 1 きはまる 《一ル》

十一33 4 罎 一島未だ去らざるに、一島更にあらはれ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

きわみ 「窮」(名) 1 極み 十二79 8 《略》 大まぐるがどたり

く《と船中へ投込まれる光景は、實に壮快の極みである。

きわむ 「窮」(下二) 1 きはむ 《一メ》

十111 5 罎 浮きぼり・毛ぼりの柱にけたに、振るひしのみので 巧をきはめ、《略》。

きわめて 「極」(副) 17 キハメテ きはめて 極めて

七26 7 戦争の時には乗用としても、輸送用としても、きはめて大切なものである。

八61 8 罎 《略》、看板ノ種類ハキハメテ多シ。

十35 罎 平生きはめて御質素にわたらせられし御有様、一つくくの御品の上にうかゞはれて、《略》。

十55 罎 舊御苑と舊御殿の邊をのぞきては、立木きはめて少かりしかば、《略》。

十31 1 北アメリカが南アメリカに續く部分は、《略》、地形がきはめて細長くなつてゐる。

十125 7 罎 村長は村の舊家に生れ、きはめて親切公平にして、《略》。

十一72 罎 又きはめて學問に熱心にして、其の好學の念の切なる、《略》。」といふに至れり。

十一11 1 此の地は《略》、支那の各地との取引にもきはめて便利であるから、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。

十一23 2 《略》、判事・検事・辯護士の任務は極めて重大なものといふべきである。

十一66 9 此の方法は各國民の間に、廣く又極めて長い間行はれてゐたものであるが、《略》。

十一79 4 かうして出來た貨幣は極めて使用に便利ではあるが、《略》。

十二13 4 しかも日常生活は極めて規則正しく、《略》、たとへ十分、十五分の餘暇でも無益に費すことがなかつた。

十二46 9 罎 光澤と香氣とを有し、ねばり強くして、割れ、そる等の憂極

めて少く、又よく濕氣に耐ふるが故に、《略》。

十二49 2 罎 松に至りては産地極めて廣くして、《略》。

十二51 6 湖の水は《略》、一年を通じて水位の變化は極めて少い。

十二114 9 罎 エジソンの發明せるは電話・電燈・電信・電車・活動寫眞・蓄音機に關するものなど極めて多く《略》。

十二118 4 アメリカにおいては此の無線電話の應用が極めて廣く、遠い處の音楽・演説・講話などを居ながら聞くことが出来ることや、《略》。

きん 「金」(名) 9 金 ↓ ぎえんきん・きほんきん

五17 5 罎 「金の鳥がついてゐますね。」これは鴝だ。それで金鴝勲章といふのだが、《略》。

五20 1 罎 其のいはれで、戦争の時、大きな手がらを立てた軍人に下さる勲章に、金の鴝をおつけになつたのだ。

六9 8 罎 金や銀ハ美シクテ、オアシニナツタリ、指ワニナツタリ、其ノ外イロくナカザリ物ニナリマスガ、《略》。

六10 4 罎 銅ハソレニヒキカヘテ、金ヤ銀ヨリモタクサンアリマスカラ、シタガツテネダンモ安ウゴザイマス。

七34 5 罎 《略》、空一ぱいの星は皆、涼しく金にまたゝけり。

八96 8 図 天守閣ニハ棟ノ兩端ニ金ノ

シヤチホコアリ。

十一89 図 二日金 ○望前〇時五十三

分 ひのえうま〈略〉

十一89 図 七日金 みつのとひつし

〈略〉

十二63 6 図 〈略〉、黒・赤・金の三色

を横に染分けたるものはドイツの國旗なり。

ざん 「銀」(名) 3 銀

六98 図 金ヤ銀ハ美シクテ、オアシ

ニナツタリ、指ワニナツタリ、〈略〉。

六104 図 銅ハソレニヒカヘテ、金

ヤ銀ヨリモタクサンアリマスカラ、

シタガツテネダンモ安ウゴザイマス。

十一35 ところが此の大きな太陽も、

夜の空に銀の砂をまいたやうに見える

小さな星の一つと同じものだとい

ふ。

きんいろ 「金色」(名) 4 金色

五18 8 図 其の時〈略〉、金色の鶏が

一羽とんで来て、天皇のお弓の先に

とまつた。

七54 6 図 けれども日の出や日の入に

は、日光が波にうつつて、水の色が

金色になりますし、〈略〉。

十128 3 図 やがて工廠長のふりがざし

たる金色の槌は、〈略〉、切斷臺上の

繫索をはつと切る。

十二93 図 折から日は地平線に近づ

きて、雲も水も金色に輝き、美しさ

いふばかりなし。

きんいろ 「銀色」(名) 1 銀色

七54 7 図 〈略〉月夜には波が銀色に

光つて、其の美しいことは何ともい

ひやうがありません。

きんか 「金貨」(名) 2 金貨

十一77 5 我々の普通に金銭といつて

ゐる物の中には、金貨を始め、銀

貨・白銅貨・青銅貨がある。

十一119 6 騎馬の人たちは、〈略〉、あ

けてくれ、ばお禮に金貨をやると言

つてすかしたりした。

きんか 「銀貨」(名) 1 銀貨

十一77 6 我々の普通に金銭といつて

ゐる物の中には、金貨を始め、銀

貨・白銅貨・青銅貨がある。

きんきちほう 「近畿」(地名) 1 近畿

地方

十一128 5 図 然るに、此の度は近畿地

方に大飢饉^{きん}起り、人々の困苦は前の

出水の比に非ず。

きんきよう 「近況」(名) 1 近況

十二121 10 図 先づは御無沙汰の御わ

びかたぐ近況御知らせ申上候。

きんぎん 「金銀」(名) 1 金銀

六36 8 図 「たとひ金銀で作つた弓で

も、御命には代へられませぬ。」

きんぎんしゆぎよく 「金銀珠玉」(名)

1 金銀珠玉

十111 2 図 大谷の奔流^だ 岩

打つほとり、金銀珠玉を ちりば

めなして、ひねもす見れどもあ

かざる宮居。

きんけん 「勤儉」(名) 1 勤儉

十二35 4 図 やがてベルリンに入つて

見ても、勤儉の美風が市民の間にあ

ふれてゐて、〈略〉。

ぎんこう 「銀行」(課名) 2 銀行

十目11 第十 銀行

十50 4 第十 銀行

ぎんこう 「銀行」(名) 13 銀行

ちようせんぎんこう

九52 7 図 さうして人々に推されて、

町の銀行の頭取になつた。

九53 5 図 社長さんが銀行の頭取にな

つてからちやうど十年目の秋、〈略〉。

九53 6 図 〈略〉、いろ／＼の手違から、

銀行が破産しなければならぬ事にな

つた。

十50 7 図 あれは銀行だよ。今までは

横町の小さい家だつたが、今度は

あゝいふりつばなのを建てたのだ

十50 9 図 銀行といへば、おとうさん

は、何時かも銀行へ行つてお金を預

けて來るとおつしやいましたね。

十50 9 図 銀行といへば、おとうさん

は、何時かも銀行へ行つてお金を預

けて來るとおつしやいましたね。

十50 10 図 銀行はお金を預ける處です

か。

十52 1 図 銀行の預金には定期預金と

いふのと當座預金といふのがある。

十52 10 図 一體、銀行は人からお金を

預つてそれをどうするのですか。

十53 1 図 大勢の人に利子を拂ふだけ

では、銀行が損をしないでせうか。

十53 5 図 銀行は有餘つてゐる人から

お金を預つて、資金の足らぬ人に貸

附けるのだ。

十53 7 図 貸附の利子は預金の利子よ

り高くしてあるから、其の差だけが

銀行の収入になるのだ。

十一9 8 〈略〉、河岸には領事館・税

關を始め、銀行・會社等のりつばな

建物がそびえてゐる。

きんざい 「近在」(名) 1 近在

九51 6 図 〈略〉、始は近在の小賣店へ、

毎日々々、降つても照つても、おろ

しに歩き廻つたものださうだが、

〈略〉。

きんし 「金糸」(名) 1 金糸

五95 4 図 一針々々、金糸・銀絲でぬ

ひをぬひ、一こてく、大きな土

藏の壁をぬる。

きんじ 「近時」(名) 2 近時

十一11 7 上海は〈略〉、近時工業も

次第に盛になつて、〈略〉諸工場が

勢よく黒煙を立ててゐる。

十二49 1 図 〈略〉、檜は木曾産の聲響

高く近時臺灣阿里山の檜また有名な

り。

ぎんし 「銀糸」(名) 1 銀糸

五95 4 図 一針々々、金糸・銀絲でぬ

ひをぬひ、一こてく、大きな土

藏の壁をぬる。

きんじおじさん 「金次伯父」(人名) 1

金次叔父さん

九59 10 分家の金次叔父さんは、軍隊
歸のたくましい腕で、すといくと
打下す。

きんしくんしょう 「金鶏勲章」〔課名〕

2 金鶏勲章

五目6 五 金鶏勲章

五17 1 五 金鶏勲章

きんしくんしょう 「金鶏勲章」〔名〕 2

金鶏勲章 金鶏勲章

五17 3 図 一番こつちは金鶏勲章でせ
う。

五17 6 図 それで金鶏勲章といふのだ
が、鶏のついてゐるわけは知つてゐ
るだらう。

きんじょ 「近所」〔名〕 9 近所 近處

七49 4 私ノ近所二年ヨリノカヂ屋ガ
アリマシタ。

八39 5 驚いてあたりをさがしても見
當らず、近所の人にきいても知らぬ
知らぬと申します。

八55 1 おしまひの一日には、小豆や
きな粉をつけて、うちでもたべ、近
所へも配つた。

八95 2 図 「では、一日お借りしま
す。近所の者に見せてやりたい。」

八107 7 図 お呼びするのは大い近所
の人で、あなたが知つていらつしや
る方ばかりです。

八111 1 略、朝晩よく泣いたので、
近所の人は大將のことを、無人では
ない、泣人だといったといふことで
ある。

九90 1 図 西洋では昔から、あの七つ
の星と其の近所の星を一しよにして
小熊の形を想像し、略。

九90 3 図 略、北斗七星と其の近所
の星を一しよにして大熊の形を想像
して、略。

十二94 7 そこで彼は先づ近處の河に
浴し、略。

きんずる 「禁」〔サ変〕 2 禁ずる
「一せ」

七99 7 正直者の清正は略、とう
く太閤のお目通へ出ることを禁ぜ
られました。

十93 6 太郎は前から父に、「あの橋
は危険だから決して渡つてはなら
ぬ。」と固く禁ぜられてゐたのであ
るが、略。

きんせいせいほうりかく 「金星西方離
隔」〔名〕 1 金星西方離隔

十一89 図 四日 祈年祭班幣節分金
星西方離隔つちのえさる略

きんせん 「金銭」〔名〕 3 金銭
九43 10 図 飲料水ニ不自由ナキ土地ニ
アリテハ、金銭ヲツヒヤシテ、水ヲ
買フナドトイフハ、思ヒモヨラヌ事
ナリ。

十一77 5 我々の普通に金銭といつて
ゐる物の中には、金貨を始め、銀
貨・白銅貨・青銅貨がある。

十二113 4 図 こゝにおいて再び炭素線
の研究に没頭したれども、徒に多く
の時日と金銭とを費したるに過ぎざ

りき。
きんぞく 「金属」〔名〕 2 金属
十一79 2 それで金属を用ひることを
思ひつき、略。

十二113 2 図 次いで白金其の他の金属
の針金を以て様々の實驗を重ねしが、
これまた失敗に終りぬ。

きんぞくす 「勤続」〔サ変〕 1 勤續
す「一せ」

十125 10 図 村長は村の舊家に生れ、
略、既に二十餘年勤續せり。

きんだか 「金高」〔名〕 1 金高
八80 9 図 「どのうちでも、納める金
高は同じですか。」

きんちょう 「緊張」〔名〕 1 緊張
十二125 1 徳川方も略、ものすご
い緊張を示してゐる。

きんでんぎよくろう 「金殿玉楼」〔名〕
1 金殿玉楼

十二103 1 図 そのかみ金殿玉楼相望み
てうちつゞく都大路を、大宮人の櫻
かさし紅葉かざして往來しけむ、今
にして思へば唯一場の夢に過ぎず。

ぎんねずみいろ 「銀鼠色」〔名〕 1 銀
ねずみ色

九34 6 うす紅のかへで、銀ねずみ色
の櫓、黄の勝つた緑のけやき、どの
木を見てもなつかしい。

きんねん 「近年」〔名〕 7 近年
七27 9 略、近年外國から種馬を輸
入したので、大いに改良されて、い
たる所に良馬を見るやうになつた。

八58 9 図 近年人々ノ生活次第第二イソ
ガシクナリテ、略、ユルく歩ク
ガ如キ者ナシ。

九8 10 図 略、殊に近年我が國で學
校をそこゝに立てたので、子供等
はなか／＼上手に日本語を話します。

十87 1 機械類は、近年我が國でも盛
に製造されるやうになつたが、略。

十124 10 図 略、近年は作物も改良せ
られ、桑を植ゑて蠶を飼ふ者多く、
殊に一村鶏を飼はざる家なし。

十一50 6 略、近年ゴムの需要が激
増したために、英國人はマレイ半島
の領地にパラゴムの木を移植するに
至つた。

十二116 1 図 殊に近年は水力電氣の驚
くべき發達にとともに、電力は頗る
廉價に供給されるので、略。

きんのう 「勤王」〔名〕 1 勤王
十133 10 図 高德此の故事をひきて、や
がて忠臣の起りて勤王の兵を挙げ、
略。

きんぴかり 「金光」〔名〕 1 金光り
九71 10 図 光堂ともいつて、昔は金
光りに光りかゝやいてゐたさうだ。

きんべん 「勤勉」〔名〕 1 勤勉
十二35 3 図 略、私は今更ながらド
イツ人の勤勉なのに驚きました。

きんべん 「近辺」〔名〕 1 近邊
十一99 4 或時近邊の人からワシント
ン傳を借りたことがある。

ぎんみ 「吟味」〔名〕 1 ぎんみ

八402 〇「其の方の申す所では、どうやら其の地蔵がうたがはしい。召しとつてきんみをしよう。」

きんよう 「金曜」(名) 1 金曜

五165 四月二十七日 金曜 晴

きんらい 「近來」(名) 3 近來

十1094 〇 平生甚だ御達者にて、近來は殊に御元氣のやうに承り居り候事として、略。

十一542 近來床の敷物や、道路にもゴムを用ひることが行はれて來た。

十二655 それに近來はめつきり元氣が衰へて、もう政務にもたへられなくなつて來た。

く

く 1 ク

七112 〇 略、フとク、ワとツ、ニと二、ハと八等は書方にて間違ひ易し

く 「九」課名 13 九

二目10 九 クリヒロヒ

二201 九 クリヒロヒ

三目10 九 竹の子

三251 九 竹の子

四目5 四 麥まき……九

四目10 九 フクロフ

四342 九 フクロフ

五目10 九 私のうち

五276 九 私のうち

六目4 第三 ヤクワントテツピン……九

七目5 第四 潮干狩……九

九目4 第三 弟橘媛……九

十二目4 第三課 チャールス、ダーウィン……九

く 「九」(名) 1 九 じごくじしじゅうしちふん・ししやくすん・だいく・だいく・どうねんくがつ

一344 一二三四五六七八九十、十パトンドキマス。

く 「区」 じとうきようこうじまちくたけひらちよういち

く 「句」(名) 1 句

十1327 〇 高德せめては此の所存を君に知らせ奉らばやとて、略、大文字に詩の句を書きつけたり。

く 「苦」(名) 3 苦

八771 此の時コロンブスは、こつんと卵のはしを食卓にうちつけ、何の苦もなく立てて申しました。

九543 〇 けれども社長さんは、それを少しも苦にしないで、『なあに、もう一度出直すのです。』といつて、笑つてゐた。

十一555 〇 略、孔子大いに之をうれひ、如何にもして國家を治め、萬民の苦を救はんものと、廣く各國をめぐりて、用ひられんことを求めぬ。

く 「来」(カ変) 4 来 《キ・クル・コ》 じたずさく・ひきく・よせく・より

く 七342 〇 なはてつたひに來る風も、若葉のにほひかんばしく、空一ぱいの星は皆、涼しく金にまた、けり。

七351 〇 田の面は水の廣々と、蛙の聲もにぎはしく、谷あひの家窓明けて、夜に親しむ時は來ぬ。

十907 〇 略、はうき手にく 此方をさして 語りつゝ來る若き人々、今朝とく出でし兄も交れり。

十一485 〇 東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。

く じものぐ

ぐ あい 「具合」(名) 1 工合

十二603 〇 ねぢが一本いたんであましたから、取りかへて置きました。

く 工合の悪いのは其の爲でした。

く い 「悔」(名) 1 悔

八581 〇 略、さとすべき子にさとされし 小さき悔をいだきつゝ。

く いきない 「区域内」(名) 1 区域内

十一810 〇 略、これ等は租界といふ特別の區域内に住んでゐる。

く いきる 「食切」(五) 1 くひきる

く いーラ

四685 〇 略、あるばんねずみに足のゆびをくひきられました。

く いこむ 「食込」(五) 1 くひ込む

く いーン

十1143 〇 もりが體內深くくひ込んで、

破裂矢が見事に破裂したのであらう。いちがう 「食違」(五) 1 くひち

がふ 「一ツ」

十一935 〇 ところが太陰曆は略、太陽曆とくひちがつて來て、三年にならないうちに一箇月の間をおかなければならない。

く いつく 「食付」(五) 1 食ひつく

く いーキ

六306 さうして虎の目・鼻・耳・口、所きらはず食ひつきました、略。

く いる 「悔」(上) 1 悔いる 《一イ》

十二7510 王は尚あらぬ言葉を口走つてはゐたが、其の言葉の端端にも、前非を悔い、自分を責めて娘にわびる眞心がこもつてゐた。

く う 「食」(五) 9 クフ くふ 食

フ 食ふ 《一ツ・ハ・ヒ・フ》

四346 カホハネコノヤウデ、其ノ上ネズミヲトツテクフノデ、略。

四802 學校の行きかへりに道草をくつたり、略、するやうな子どもは、大ていろくなものになりません。

八998 〇 僕等はふだんいそがしく働いてゐますのに、君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、少しも僕等の爲につくさない。

八1015 〇 僕はたゞ坐つてゐて物を食ふだけの者ではありません。

八〇六 食つた物をこなし、之を

血の製造場へ送るのが僕の役目であつて、〈略〉。

九二〇 此ノ蟲ハ主ニ蘭ニ止ツテキテ、外ノ蟲ヲツテ食フモノデアルガ、〈略〉。

九六五 鶏が麥のこぼれを食ひに來ては、追はれて逃げて行く。

八二六 二三十匹の馬がまぐさを食つてゐます。

一一九五 一家の暮し向は誠にあはれなもので、〈略〉、時には生のじやが、いもしか食はれないこともあつた。

ぐう ぐう まくらぐう・てんまんぐう・はちまんぐう

くうき 〔空氣〕(名) 4 空氣

九三三 あたりの空氣までが何となくぼうつとして、〈略〉。

七六四 すみきつた空氣の中に煉瓦の赤色や、松の緑色などが鮮かに浮出して見えるのは實にきれいです。

一一三九 枝を打てば、山火事の危険を防ぎ、又空氣の流通がよくなつて蟲がつかなくなるさうだ。

一二一九 調子のよい蜜柑歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはして、〈略〉。

くうちゅう 〔空中〕(名) 1 空中

八四九 スナハチ一間餘モアルツバサヲハツテ、數分ノ間羽バタキ一ツセズ、空中ヲノシテ行く。

くがく 〔リ〕ンカーンのくがく

くがつ 〔九月〕(名) 1 九月

五八四 九月にはいつては雨つゞきでしたが、四日の日は朝からひどい雨で、夕方から風もはげしくなりました。

くがついつか 〔九月五日〕(名) 1 九月五日

八七〇 此の繪葉書は此所へ來る途中、汽車の窓から見た牧場の實景です。 九月五日

くがつじゅうごにち 〔九月十五日〕(名) 1 九月十五日

五八九 どうぞよろしく申して下さい。 九月十五日 叔母から 竹子

くがつしょうさんじゅうにち 〔九月小三十日〕(名) 1 九月小三十日

一一八九 九月小三十日 通日 月齡 月出 月入

くがついつち 〔九月一日〕(名) 1 九月一日

一一九三 したがつて二十日も太陽曆なら大が九月一日で、〈略〉。

くがつなか 〔九月七日〕(名) 1 九月七日

五八五 皆様におげもごさいませんでしたか、お見舞を申し上げます。

くがついつか 〔九月二十日〕(名) 3 九月二十日 竹子 叔母上様

九二四 〔略〕、同級の人々を驚かさんと楽しみ居り候。 九月二十日

正男 伯父上様

九一三 〔略〕、御願ひ申し上げ候。 九月二十日 みよ子 伯母上様

九一四 〔略〕、願ひ上げ候。草々。 九月二十日 下田英太郎 吉野萬吉君

くき 〔莖〕(名) 7 莖

九五七 〔略〕、打臺にばた／＼とたきつけると、莖の先についてゐる穂が、敷いてあるむしろの上に面白いやうに飛散る。

九七九 僕はわり合にしつかりしてゐる一本の莖を握つて、ぐつと引張つた。

九七九 となりでは、莖がくさつて引きぬけないのを、星野君が根氣よくほつて、〈略〉。

九一〇 黒みがかった紫色の莖が見事に延びて、〈略〉。

九一〇 やがておもだかの莖や芹の葉などにつかまつて、後足を長く延ばし、眞青な空をじつとながめてゐる。

一〇一〇 たくさん咲いてゐる中で一番美しいのは、たれ下つた莖に、幾つも咲いてゐる薄紅色の花である。

一〇三 中には、まるで花かと思はれる紅色の葉が、莖の上の方に群がつて出てゐるものもある。

くぎ 〔釘〕(名) 3 釘

六二二 其ノ外、釘ヤ針ノヤウナ小サイ物カラ、キクワン車・軍艦ノヤウナ大キナ物マデ、皆鐵ガナケレバ

造ルコトガ出來マセン。

六六 〔略〕、果シテ磁石ノサキニ釘ガタクサンツイテキタ。

六六 二三返クリカヘシトラ、釘ハ殘ラズ取レテ、〈略〉。

くぎばこ 〔釘箱〕(名) 2 釘箱

六六二 昨日ニイサンガ釘箱ヲ火鉢ノフチニ置イテ、手工ヲシテキタ時、〈略〉。

六六三 〔略〕、弟ガ釘箱ヲ火鉢ノ中ヘヒツクリカヘシテ、手ヲ灰ダラケニシテ拾ヒハジメタ。

くぎょう 〔苦行〕(名) 2 苦行

一二九四 さうして、六年の間種々の苦行を試みた。

一二九六 〔略〕、彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。

くぐる 〔括〕(五) 1 くぐる 《一ル》

九六九 すると乗員は、一せいに飛起きて、手早くつり床をくぐる。

くぐる 《一ツ・リール》

三二〇 〔略〕、二人はまつやつつじのあひだをあちらこちらへくぐつてとりました。

六三〇 蟻は虎の指のまたからくつて、仲間の者にあひづをしました。

九七四 陸中と陸奥との境にある幾つかのトンネルをくぐると、廣い原野がだん／＼に開けて來る。

一六六 橋を渡り、大鳥居をくぐり

て南參道に入る。

十174 〔略〕、やはり馬のそばを通るのが危険なやうな気がしてならなかったが、土地の人は一向平氣で、三四歳の子供でも、腹の下などを自由にくづつて歩きます。

十117 青銅の大鳥居をくづつて進むと、沿道の家は大い天満宮にちなんだ物を賣つてゐる。

十118 〔略〕、繪馬堂の前を通つて樓門をくづると、本殿の前に出る。

くげ ↓おくげさまがた

くさ 〔草〕(名) 12 くさ 草 ↓した

くさ・たのくさと・つみくさ・つるくさ・てんぐさ・まぐさ・みちくさ

三286 〔略〕 ゆふべの雨でくさや木のみどりいろますなつの

あさ、〔略〕。

三635 草のはにとまつてゐたてふてふがおどろいてとびたち

ました。

四562 〔略〕しひの木は、根

もとへ草もよせつけぬ。

八344 さうして教へられた場所へ行

つて見ますと、〔略〕、見なれない草

に、眞赤な美しい實が一つなつてゐ

ました。

九75 〔略〕 にはか雨が、非常な

勢で木を洗ひ草を洗つて通り過ぎた

後の、あざやかな緑の世界は、〔略〕。

九356 〔略〕、大きな青大將が、向ふ

の水たまりの所をうねつて、のろの

ろと草の中にかくれて行く。

十1032 ほんたうに不思議な草だ。

十一521 其の間草をとつたり、虎や

象の荒しに來るのを防いだり、苦心

はなか／＼と通りでない。

十一605 〔略〕、放牧の馬や牛がいう

／＼と草をはむ様や、〔略〕様は、

實にのどかである。

十一1008 〔略〕、願に任せて三日間畠

の草をとらせ、さうして本は其の

ま、リンカーンにやつた。

十一1118 〔略〕、風なほ冷たき

春のゆふべに、劉備が三顧のこよ

なき知遇、我が身をすてて報いん

と、起ちてぞ出でぬる、草のいほ

りを。

十二124 〔略〕 うるはしき眞玉・白玉

にほひよき木の實、草の實、う

づたかき積荷の中に 海山の寶を載

せて、〔略〕。

くさいばんしよ 〔區裁判所〕(名) 3

區裁判所

十一208 裁判所は國家が設ける機關

で、これに區裁判所・〔略〕の四階

級がある。

十一2010 裁判は事件の輕重によつて、

最初區裁判所又は地方裁判所で行は

れる。

十一211 ところで、區裁判所の裁判

に不服な者は地方裁判所に上訴し、

〔略〕。

くさき 〔草木〕(名) 2 草木

八325 山野に生ずる草木の中には、

藥用にするものが多くありますが、

〔略〕。

九194 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、

〔略〕、羽ヲトゲテサカサニ草木ノ枝

ニ止ツテキルト、マルデ枯葉ガ引掛

ツテキルヤウニ見エル。

くさち 〔草地〕(名) 1 草地

五37 〔略〕 草地

くさなぎのつるぎ 〔草薙劍〕(名) 1

草薙劍

八974 〔略〕 市ノ南部ニ熱田神宮アリ。

草薙 劍ヲマツル。

くさなのじろう 〔草野次郎〕(人名) 1

草野の次郎

六808 草野の次郎の如きは夜敵の船

におしよせて、首二十一取つて、敵

の船に火をかけて引上げた。

くさばな 〔草花〕(名) 1 草花

十1049 其處から又右に折れると、細

長い室一ぱいに、目もさめるやうな

草花が並べてある。

くさむら 〔草薙〕(名) 2 くさむら

十48 〔略〕 前には横長き池をひかへ、

池のめぐりは見渡す限りの木立・く

さむらにて、さながら別天地に遊ぶ

思あり。

十429 〔略〕、谷向ふのくさむらの中

から、けたましい羽ばたきの音を

立てて、山鳥が二羽飛立つた。

くさやま 〔草山〕(名) 1 草山

五687 此のあたりの青田も、〔略〕、

木もろくにない草山だつたといふこ

とだ。

くさり 〔鎖〕(名) 3 くさり ↓あお

のくさりど

六813 敵は此のいきほひにおそれて、

鐵のくさりて船をつなぎ合はせた。

十1165 〔略〕、々々。船員は手早く

鯨の尾をくさりて船はたにつないで、

威勢よく根據地に引上げる。

十一646 〔略〕、立木や切株の根本を

掘つておいて、それにくさりをつけ

て此のトラクターで引くと、めり

／＼と音を立てて根こぎにされてし

まふ。

くさりど 〔鎖戸〕(名) 1 くさり戸

十二1084 〔略〕、我々もあのくさり戸

を渡る難儀をのがれようではないか

と相談して、其の方法も取りきめ

た。

くさ・る 〔腐〕(五) 1 くさる

《一ツ》

九796 となりでは、莖がくさつて引

きぬけないのを、星野君が根氣よく

ほつて、〔略〕。

くされ ↓もちぐされ

くじ 〔九時〕(名) 1 九時

四806 昨日おとうさんと朝 九時

の汽車で、軍たいに居るにい

さんの所へ出かけました。

くじける 〔挫〕(下二) 2 くじける

《一ヶ》

五744 それでも庄屋はくじけなかつ

た。

九109 6 しかし主人をうしなつたと思ふと、今まで張りつめてゐた勇氣もくじけて、ゆめからさめたやうにあたりを見廻した。

くじごろ 「九時頃」(名) 1 九時頃

十43 10 「略」、仕事は豫想以上にはかどり、九時頃にはもう数坪の地面が新しく開かれた。

クシナガラふきん (名) 1 クシナガラ附近

十二98 4 釋迦は「略」、遂に病を得てクシナガラ附近の林中に留つた。

くしや 「櫛屋」(名) 1 櫛屋

ハ60 9 又足袋屋・「略」・櫛屋等二ハ、商品ヲ大キクセル模型ヲカ、ゲル風アリ。

くじゅう 「九士」(課名) 2 九十

六目11 第二十三 千早城……………九十

十二目6 第十九課 釋迦……………九十

くじゅういち 「九十二」(課名) 1 九十一

十目4 第十七 言ひにくい言葉……………九十一

くじゅうく 「九十九」(課名) 3 九十

八目17 第二十五 胃とからだ……………九十九

九目9 第二十一 初秋……………九十九

十二目7 第二十課 奈良……………九十

くじゅうご 「九十五」(課名) 4 九十

五

五目11 二十三 一足タタ……………九十

五目12 二十四 ブダウ……………九十五

七目12 第二十二 助力……………九十五

八目15 第二十三 名古屋市……………九十五

くじゅうさん 「九十三」(課名) 1 九十三

九目8 第二十 白馬岳……………九十三

くじゅうし 「九十四」(課名) 1 九十四

十一目9 第二十二課 リンカーンの苦學……………九十四

くじゅうしち 「九十七」(課名) 3 九十七

五目13 二十五 熊のさゝやき……………九十七

七目13 第二十三 加藤清正……………九十七

八目16 第二十四 廣瀬中佐……………九十七

くじゅうに 「九十二」(課名) 1 九十二

七目11 第二十一 二百十日……………九十二

くじゅうはち 「九十八」(課名) 1 九十八

六目12 第二十四 記念の木……………九十八

くじゅうろく 「九十六」(課名) 1 九十六

十目5 第十八 文天祥……………九十六

くじょう 「九条」(名) 1 九条

十二101 9 「略」、九條の條坊井然として、北に大内裏の宮殿を仰ぎ、朱雀の大路南に走りて、「略」。

くじょう 「苦情」(名) 1 くじやう

五72 2 「そんな大きな池があるだらうか。」と言つて、首をひねる者もあつたといふが、一年ばかりの間は、べつだなくじやうも出なかつた。

くじら 「鯨」(名) 12 鯨 ↓ おおくじら

七55 1 「略」 時には鯨が高く潮を吹いてゐるのを見ることがあります。

七83 8 「略」、魚ニ似タモノニハ、イルカや鯨ガアル。

七83 8 鯨ハカラダガ甚ダ大キイ。

七84 4 「略」、象牙鯨ニクラベルト、赤子ト大人トヨリモ、モツトチガフ。

十112 9 「略」 マストの上の見張人が不意に「鯨、鯨。」と聲高く叫んで、北の方を指さした。

十112 9 「略」 マストの上の見張人が不意に「鯨、鯨。」と聲高く叫んで、北の方を指さした。

十113 6 右に左に鯨を追ひつつ四五十メートルまで近づいた時、「略」、破裂矢をしかけたもりを打つ。

十113 10 もうくくと立ちこめる白煙の間から見ると、すさまじい波を起して、鯨は海底深く沈んだ。

十114 8 やがて鯨は再びはるか彼方に浮上つた。

十114 10 綱を次第々々にくりもどすと、鯨は刻一刻船に近よつて来る。

十115 6 「略」、さすがの鯨も次第に弱つて、船から五十メートルぐらゐる處まで引寄せられた。

十116 5 「萬歳、々々。」船員は手早く鯨の尾をくさりで船ばたにつないで「略」。

浮上つた。

十114 10 綱を次第々々にくりもどすと、鯨は刻一刻船に近よつて来る。

十115 6 「略」、さすがの鯨も次第に弱つて、船から五十メートルぐらゐる處まで引寄せられた。

十116 5 「萬歳、々々。」船員は手早く鯨の尾をくさりで船ばたにつないで「略」。

くしん 「苦心」(名) 7 苦心 ↓ えしのくしん・ごだいのくしん

九26 8 「略」 此の四代の苦心の後を受けて、國家の爲に、此の學問を大成するのをお前の役目だ。

十128 4 「略」 植は、二年間の苦心を此の一揮にこめて、切斷臺上の繫索をはつと切る。

十一52 2 其の間草をとつたり、虎や象の荒しに來るのを防いだり、苦心はなか／＼一通りでない。

十一101 5 彼が「略」やうになつたのは、實に此の少年時代の苦心のためものである。

十一127 10 「略」 苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も残らずなりぬ。

十一127 10 「略」 苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も残らずなりぬ。

十二111 1 今では「略」舊態を改めてはゐるが、一部は尚昔の面目を留めて、禪海一生の苦心を永久に物語つ

てゐる。

くしんす「苦心」(サ変) 1 苦心す

《一シ》

十二112 図 彼が稀代の天才はこゝにも遺憾なく發揮せられて、着々成功の域に進みしが、唯心に至りては彼の最も苦心したる所なりき。

くす「樟」(名) 1 樟

十117 何百年も経たであらうと思はれる樟の太木が茂り合つてゐる。

くす ↓ おがくす・かなくす

くすこ「葛粉」(名) 2 葛粉 葛粉

十一42 6 図 尚當地産の葛粉少々御見舞の印までに御送り申上候間、御受納下され度候。

十一43 3 図 尚又結構なる葛粉御送り下され、御厚情の程深く謝し奉り候。

くず・す「崩」(五) 1 くづす 《一シ》 ↓ ほりくずす

十37 3 略、ほとんどあらゆる文明の利器を運用して、山をくづし、地をうがち、河水をせき止めた事など、

略。くすだま「葉玉」(名) 1 くす玉

十128 8 図 艦首につるしたるくす玉ばつとわれて、略、羽音高く舞上る數羽の鳩。

くすのきまさしげ「楠木正成」(人名) 1 楠木正成

六90 7 楠木正成が守つた千早城は、けはしい金剛山上にはあるが、略。

くすり「薬」(名) 6 薬 ↓ おくすり

八105 2 材木を機械にかけて軸木をこしらへてゐる者もあり、軸木を火で乾かす者もあり、乾かした軸木の先に薬をつける者もあり、略。

八105 2 略、軸木を火で乾かす者もあり、乾かした軸木の先に薬をつける者もあり、薬をつけた軸木を温室で乾かす者もあり、略。

十9 8 フィリップが薬を調合しに別室へ退いた後へ、略、王にあてた密書が届いた。

十10 5 程なくフィリップは病室にはいつて来て、うやくしく薬のコップを王にさへげた。

十10 8 一口又一口、平然と薬を飲む王、一行又一行、おそれと興奮に眼かきやくフィリップ。

十二73 5 フランス王の侍醫はとりあへず老王に薬を與へて靜かに眠らせ

た。くすりや「葉屋」(名) 1 くすり屋

四27 3 略、くすり屋 さか屋 さかな屋、そのほか大きな店はいくつも電とうをつけました。

くすりゆび「葉指」(名) 1 くすりゆび

三15 8 図 「それから」「それから」略、中ゆびとこゆびのあひだにあるのがくすりゆびです。

くずる「崩」(下二) 1 崩る 《一レ》

十一28 10 図 略、敵は見る間にはた

くづれのこる「崩残」(四) 1 くづれ残る 《一レ》

九39 10 図 庭に一本なつめの木、彈丸あともいちじるく、くづれ残れる民屋に、いまだ相見る二將軍。

くずれる「崩」(下二) 5 くづれる崩れる 《一レ・一レル》 ↓ なきくづれる

五72 6 翌年の春、大雨がふりついで、せつかくつき上げた土手が、半分ほどもくづれてしまつた。

五73 8 略、其の年のつゆに、又土手がくづれて、池のたまり水が村の中へおし出した。

七22 1 賊のそなへは忽ちくづれて、防ぐにも防がれず、たゞあわてさわいでゐます。

九79 1 僕は略、一本の莖を握つて、ぐつと引張つた。やはらかい黒い土がむくく盛上つたと思ふと、四方へくづれる。

十83 8 石炭ががさりと崩れる。

くすん「九寸」(名) 1 九寸

七27 4 馬の高さは前足の所ではかる八寸・九寸などといふのは、四尺八寸・四尺九寸などのことで、略。

くせ「癖」(名) 2 くせ

七105 4 其の方は無分別者で、大名になつてもまだ仲間げんくわのくせがぬけぬ。

八40 7 物見高いは江戸のくせで、略。

ぐそう「愚僧」(名) 1 愚僧

十一45 4 愚僧も所用ありて京に上り、或は二年滞在せんもはかり難し。

ぐそく「具足」(名) 3 具足

十68 8 略、御らん下さい、これに具足一領、長刀一ふり、又あれには馬を一匹つないでもつてをります。

十68 10 図 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、ちぎれたりとも、此の具足に身を固め、さびたりとも長刀を持ち、略。

十71 2 図 略、常世はちぎれたる具足を着け、さび長刀を横たへ、わるびれたる様もなく、進みて御前にかしこまれば、略。

くだ「簞」(名) 3 くだ 管

十57 6 鳩に手紙を運ばせるには、足にアルミニウムカセルロイドの細いくだを附け、略、其の中に入れるのである。

十104 4 其處から熱い湯を管で各室へ送つて、適當に暖めるやうになつてゐるのだ。

十一123 2 細長い管の一端を、とけたガラスの中に突つこんで引出すと、先に赤い玉がくつついてゐる。

くだく「砕」(四・五) 3 くだく 《一キ》 ↓ うちくだく

九14 3 図 くだきたる貝殻を器に入れ

てあたふるに、これには餌の時のやうに集らず。

十462 毎日焼いてはくだき、焼いてはくだきして、歎息する彼の様子は、實に見る目もいたましい程であつた。

十463 毎日焼いてはくだき、焼いてはくだきして、〈略〉。

くだ・く「砕」(下二) 1 くたく「ケ」

十一343 月影のさゞなみにくだけ、漁火の波間に出没する夜景もまた一段の趣あり。

くだけは・てる「碎果」(下二) 1 くだけ果てる「一テ」

十二723 怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた王は、我にもあらず荒野の末にさまよひ出た。

くだ・ける「碎」(下二) 4 くだけける「一ケ・ケル」

六852 敵の船はこつぱみちんにくだけて、敵兵は海そこに沈んでしまつた。

十251 船は二つにくだけて、船尾の方は見る／＼大波にさらはれてしまつた。

十二443 〈略〉、最後は又急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、〈略〉。

十二1710 〈略〉、古の武士が玉とくだける討死を無上の名譽としたのがそれである。

ください ↓ごめんください
くださる「下」(四・五) 39 クダサル

くださる 下サル 下さる「一・一ツ・ール」 ↓おあかしくださる・おあがりくださる・おいでくださる・おおくりくださる・おおせくださる・おかえしくださる・おさずけくださる・おたちよりくださる・おまちくださる・おみせくださる・おもどりくださる・おんおくりくださる・おんさつしくださる・おんしたてくださる・おんしらせくださる・おんせわくださる・おんそなえくださる・おんつたえくださる・おんゆるしくださる・かけくださる・ごあんしんくださる・ごじゅのうくださる・ごちゅういくくださる・ごひようぎくださる・ごほうちくださる・ごらんくださる

一372 二「ニイサン、ミテクダサイ」

一493 三「ニツポン一ノキビダンゴ」一「ツクダサイ、オトモヲシマス。」

二506 四「略」トオホメニナツテ、ゴホウビヲタクサンクダサイマシタ。

二544 五「ヲヂサン、コンヤモマタカゲエヲシテ見セテクダサイ。」

二562 六「ヲヂサン、ハヤクセンドウサンヲ見セテクダサイ。」

二63 七コレデ〈略〉、センセイノ

見セテクダサルイロイロナモノモ見ルノデス。

三178 八「そのはこをかしてください。」

四55 九これは私が生れた年、おぢいさんが私のぶんにつき木をして下さつたのださうです。

四202 スルト神様ハ「略」トヲシヘテ下サイマシタ。

四241 〈略〉、とだなからうでたくりを おほんに 一ぱい 持つて来て 下さいました。

四555 十「しばつて お目 にかけて下さい。どうぞ ここへ 追出して 下さいませ。」

五146 かへりみちに、はなれ馬がとんで來ましたので、〈略〉、よそのをぢさんが大手を廣げてとめて下さいました。

五168 海軍のをぢさんがお出でになつて、春子には糸葉書とリボン、僕には小刀とえんぴつをおみやげに下さいました。

五201 其のいはれで、戦争の時、大きな手がらを立てた軍人に下さる勲章に、金の鐫をおつけになつたのだ。

五403 〈略〉、さつきの學校の小使さんが麥ゆを持つて來て下さいました。

五407 先生が拜殿にかけてある繪馬

のお話をして下さいましてから、〈略〉學校へかへりました。

五891 十一 どうぞよろしく申して下さい。

七119 十二 どうぞ之を受取つて、私の氣がすむやうにして下さい。

七884 十三 「かくして下さい。敵が追つかけて來ます。」

七888 十四 「では水を一ぱい下さい。」

八128 十五 どうか今日から一年の間、あなた方の村が五箇村の頭になつて下さい。

八473 十六 此の爲替はほんのわづかですが、何か好きな物を買つて上げて下さい。

八535 十七 「私にもつかせてみて下さい。」

八919 十八 「はい、うれしうございます。もう何所へも行つて下さいませ。」

八942 十九 「先生、私の娘にもあゝして教へて下さつたのでせうか。どうも恐れ入つたことだ。」

九336 二十 叔父さんも相かはらず丈夫で島々を廻つてゐるから、安心して下さい。

九486 二十一 米が出来るのも、麥が取れるのも、土といふありがたいものが、めい／＼の骨折に對して、御ほうびを下さるのだ。

九512 二十二 〈略〉、おとうさんは

あの方の小さい時分からのお話をし

- て下さいました。
- 九七三 〔あれが北上川だ。《略》。〕と教へて下さった。
- 九七八 〔ねえさん、どうぞ其の話を聞かせて下さい。〕
- 九七三 《略》、岡田さんは高山植物や雷鳥の繪葉書を、たくさん出して見せて下さいました。
- 二二三 別封の繪葉書も歸りに買つたのです。市場の様子がよくわかるから、引合はせて見て下さい。
- 二六六 〔お志は有難いが、そんなりっぱな鉢の木をたくのは、どうぞ止めて下さい。〕
- 二一〇 先に立つたにさんが、《略》と、いろいろ説明して下さい。
- 二一〇五 《略》。といつて、にさんは次の室へ案内して下さい。
- 二一〇七 にさんは《略》と教へて下さった。
- 二一〇六 翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、〔辨しやうすることが出来ませんから、其の代りに何か仕事をさせて下さい。〕と願つた。
- 二二四二 〔まあ待つて下さい。〕
- 二二七五 〔これはどなたであらうな。笑つて下さるな、どうも娘のコーデリヤのやうに思はれてならぬが。〕
- くだされる じごすいさつくだされる くだす 〔下〕(四) 1 下ス 《一ス》
- 二二〇 此ノ河ノ上流地方ヨリ木材ヲキリ出シ、之ヲイカタニ組ミテ河ヲ下スコトアリ。
- くたびれる 〔草臥〕(下) 1 くだびれる 《一レ》
- 二一八五 手足が大分くたびれて來た。
- くだもの 〔果物〕(名) 1 果物
- 二六九 〔略〕、いろいろな農産物に富んでゐます。ことに野菜や果物が有名です。
- くだりたもう 〔下〕(四) 1 下り給ふ 《一ヒ》
- 二九一〇 景行天皇の皇子日本武尊、《略》、東國の方に下り給ひき。
- くだる 〔下〕(四・五) 16 下ル 下る 降る 《一ッ・ラー・リール》
- 二九二 谷ソコノ一ケンヤニモ、川ヲ下ツテ行ク小サナ舟ニモ、コクキガ出シテアリマシタ。
- 二四七 翌年ノ春ニナツテ、卵カラカヘツタ鮭ハ、川ヲ下ツテ海ヘ行ク。
- 二七五 大川を下つて行く舟の中はうすら寒い。
- 二二〇七 《略》、一家コトゴトコレニ乗リテ、流ニシタガヒテ下ル。
- 二六二〇 これから號令が雨のやうに下る。
- 二六五 甲板洗がすむと、〔總員顔洗へ。〕〔煙草はん出せ。〕の令が下る。
- 二九五 下山の時には、木の枝などを權にして、此の雪溪をすべつて下る人があります。
- 二四四 兵士たちは《略》、今かくと命令の下るのを待つてゐた。
- 二四六 馬はどれも皆張りきつて、《略》、乗手のあひづが下るのを待ちかまへてゐた。
- 二四八 敵將張弘範如何にもして之を降らしめんとし、《略》。
- 二四九 《略》、東國へ下る路すがら、箱根山にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、《略》。
- 二六一〇 汽車は無人の境を曲折して下る。
- 二五二 これは奥入瀬川を十町餘り下つた處に大きな瀧があつて、魚類のさかのぼる道を絶つてゐるからである。
- 二五七 それより山を越え、河を下り、湖を渡りて《略》キチーに出づ。
- 二五七 歸途一行は黒龍江を下りて河口に達し、海を航してノテトに歸れり。
- 二五九 最後に博士は《略》興味ある話をして壇を下つた。
- くち 〔口〕(名) 38 口 じあみぐち・いとぐち・いりぐち・おちぐち・かどぐち・かまぐち・かわぐち・でいりぐち・でぐち・とびぐち・はやくち・ひとくち・ひとくちばなし・ふたくち・まぐち・めとみとくち・わるくち
- 二五五 ホエルト、口ガイデ、クハヘテキタサカナハ、川ノ
- ナカヘオチテシマヒマシタ。
- 二五三 トノサマヤオトモノ人ノ目モ、口モ、耳モハヒダラケニナリマシタ。
- 二五二 大キナ口ヲアイデ、ワンワン。
- 二六三 ナニカキカレマス、コノ口デハツキリコトヘマス。
- 二五三 さをの先の矢車ががらんと鳴ると、鯉が大きな口で、思ふぞんぶん風をのんで、家のむねよりも高く尾を上げます。
- 二五七 一匹は目に、一匹は口に、一匹は耳に手をあててゐます。
- 二五五 私のやくめは、御承知の通り、皆様が私の口へお入れになる郵便物を大切にあげかつてゐて、《略》。
- 二五九 いかな日でも葉書の百枚や封書の三十通ぐらゐるは、私の口にはいらないことはありません。
- 二五八 私の口にはいる物は、はがきの外はきつと切手をはつてあります。
- 二五九 熊が君の耳の所へ口を持つて行つたやうだが、何か言つたのか。
- 二六〇 さうして虎の目・鼻・耳・口、所きらはず食ひつきました、《略》。
- 二六三 將軍は長四郎を大きな袋へ入れて、《略》、袋の口を封じて柱に掛けた。
- 二六一 かまは《略》、後の方に煙出の口を明けるのである。
- 二八七 《略》、何のいんぐわで、ひ

さしぶりに歸つた私に、一口も口をきくことが出来ないのをごいませう。

八八六 図 や、口をきいたぞ。おとよ、お前はものが言へるやうになつたのか。

八八九 図 「先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。」

八八九 図 「指であひづをしたのは昔のこと、今は口を見せてものを言はせます。」

八八九 図 「いや、聲が聞えるのではありません。口の動き方を見てさとのです。」

八九〇 三 信吉は「略」、娘の耳に口をよせて、「略」と大きな聲で言つたが、「略」。

八九〇 九 図 あなた、此のお子が返事をしないのは、あなたの口が見えないからです。

八九一 六 おとよは信吉の口を、中までのぞきこむやうにしてゐたが、「略」と、はつきり答へた。

八九五 或時、口・耳・目・手・足等が申し合はせて、胃に向つていひますには、「略」といひました。

八〇〇 六 さうしてそれから後は、「略」、目は食物を見ても、見ないふりをし、手は食物を口へ入れることを止め、足は食堂へ行くことを止めました。

九一三 五 図 「略」、中なるひよこどもは

小さき口を開きて、びよ／＼と鳴きつゝかこひぎはに集る。

九二九 七 「略」、其の壯觀はとても筆や口にはつくされません。

九八七 一〇 図 あつた柄でない方の端にある二つの星を結びつけて、其の線を、ひしやくの口の向いてゐる方へのぼして行くと、「略」。

一〇九 九 図 水屋の水に手を清め口をすすぎて南神門を入れば、「略」。

一〇七 五 打ちよせる大波、打返すさか波、危く岩に打付けられ、忽ち死の口に吞まれようとする。

一四七 三 図 其の後又夜更けてうかゞひ見れば、今度はひぢを張り、足をのべ、手を口に當てて鶴の臥したる様をなせり。

一五七 一〇 ふかの口はもうほとんど子供に届いてゐる。

一六九 六 うつかり口をきいてしまつた。

一六九 九 図 「無言の行に口をきくといふ事があるか。」

一二〇 六 ジョージは、「略」、帽子をぬいで恭しく敬禮して、さて静かに口を開いた。

一一二 二 シャベルでざく／＼かきまぜると、白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、目も口もあけられない。

一一三 五 一端に口を當てて息を吹きこむと、ぷうつとふくくる。

一二二 一 これも逃しては大變と、いきなり右の手の蟲を口の中へ投込んだ。

一二四 九 きやうだいは口を揃へていつた。

一二五 八 ねぢは「此處に居ます。」と叫びたくてたまらないが、口がきけない。

くちぐち 「口口」(名) 3 口々

六三六 二 源氏の者どもは義經をかばひながら、「捨てておしまひなさい。」

七六三 大ぜいの人々が口々に人夫を呼んで我先に渡らうとしますし、「略」。

八八二 五箇村の人々は各自自分の村の騎手に向つて、「ぜひ勝つてくれ。」

「負けたら村のはぢになるぞ。」「しつかりやつてくれ。」などと、口々に勢をつけてゐる。

くちこもる 「口籠」(五) 1 口こもり

一二三 一〇 ベートーベンも我ながら餘りだしぬけだと思つたらしく、口こもりながら、「實はその、「略」。」

くちす 「朽」(サ変) 1 くちす「セ」

一一一 三 図 「略」、はかなく露と消えしかど、其の名はくちせず、諸葛孔明。

くちばし 「嘴」(名) 5 クチバシ くちばし 口バシ

二五五 図 コレハトビ、口バシヲグランナサイ。

三九 一 「略」、キイロイクチバシデ、トキドキデメンヲツツキマス。

四三六 六 鳥ハ大キナコエデワル口ライヒ、太イクチバシデツツキマス。

八四八 一 第十三 驚「略」。「サキノ曲ツタ大キナクチバシ、スルドクテ落着イテキル目、略」。

一五四 二 「略」、紅をさしたかと思はれるやさしくちばし、「略」、鳩は見るからに愛らしいものである。

くちばし 「口走」(五) 1 口走る「一ツ」

一二七 九 王は尚あらぬ言葉を口走つてはゐたが、「略」。

くちまね 「口真似」(名) 2 口まね

四三〇 五 「略」、「ぼちぼち」とよびますと、向ふの方で、「ぼちぼち」と口まねをするものがあります。

四三三 三 正太郎がおこつて、「ほか」といひますと、又向ふで、「ほか」と口まねをします。

くちもと 「口元」(名) 2 口もと

九一四 六 中尉の固く結んだ口もと、するどい目の光、其の様子がどうも一通りでない。

一二〇 四 身には色目も見えぬ破れ衣をまとい、「略」、きつと結んだ口もとには意志の強さが現れてゐる。

くつ〔靴〕(名) 3 クツ くつ 靴
 〽こおりぐつ・ごむぐつ

三三五 キモノノソデ ニモ、タビ
 ニモ、手ブクロ ニモ、クツ ニモ
 右左 ガアリマス。

七二五 塚の前に馬頭觀世音とほつ
 た石が立つてゐて、其の前に時新
 しい馬のくつが上つてゐる。

十二三九 〔略〕、色の青い元氣のなさ
 さうな若い男が靴を縫つてゐる。

くつがえる〔覆〕(四) 1 くつがへ
 る 〔一ラ〕

九一〇四 〔略〕、波すさまじく荒れく
 るひ、御船少しも進まず、今にもく
 つがへらんばかりなりき。

くつきり (副) 1 くつきり
 十二二〇九 〔略〕黄金色に色づいた實
 が鈴なりになつてゐる。黒い程こい
 緑の葉の間から、其の一つくが日
 の色にはえてくつきりと浮出てゐる
 のが見える。

くつし〔屈指〕(名) 2 屈指
 八九五八 名古屋市ハ我が國屈指ノ大
 都會ニシテ、人口四十餘萬アリ。

九五二五 〔略〕さて商賣を始めると、〔略〕、
 十年もたゝぬ中に、町でも屈指の財
 産家となつた。

くつす〔屈〕(サ変) 1 屈す 〔一
 セ〕

十一一八 然れども鐵眼少しも屈せ
 ず、再び募集に着手して〔略〕。

ぐつすり (副) 1 ぐつすり

八三八 呉服屋の手代が、〔略〕、餘程
 つかれてゐたものと見えて、何時の
 間にか、ぐつすりねこんでしまひま
 した。

くつする〔屈〕(サ変) 1 屈する
 〔一セ〕

六八二 通有も左のかたを射られたが、
 少しも屈せず、刀をふるつて進んだ。

くつつく (五) 2 クツツク くつつ
 く 〔一イーク〕

七八七 根ノヤウナ所モ、〔略〕。タマ
 ハナレナイヤウニ、岩ナリ石ナリヘ
 クツツクダケノ用ヲナスモノデ、海
 藻ハ養分ヲ其ノ體ノ全面カラ吸取ル
 ノデアル。

十一一三 細長い管の一端を、とけた
 ガラスの中に突つこんで引出すと、
 先に赤い玉がくつついてゐる。

くつつける (下) 1 くつつける
 〔一ケ〕

四三九 するとたび人は、風が吹
 けば吹くほど、ぐわいたうをし
 つかりとからだにくつつけまし
 た。

ぐつと (副) 2 ぐつと
 八一〇 耕造は〔略〕、一たん沈んで
 又浮上つた信作のえりを引つつか
 んで、ぐつと岸へ引上げた。

九七八 僕はわり合にしつかりしてゐ
 る一本の莖を握つて、ぐつと引張つ
 た。

くつつぬぎ 〔沓脱〕(名) 1 くつつぬぎ

八五一 僕がえんがはへ机を持出して、
 おさらひをはじめると、二匹ともく
 つぬぎに手をついて、〔略〕。

くつわ〔轡〕(名) 1 くつわ
 九一〇六 馬はどれも皆張りきつて、く
 つわをかんたり、前がきをしたり、
 頭をふり上げたりしながら、〔略〕。

くつわむし〔轡虫〕(名) 1 くつわむし
 三七九 時時すずしい風が吹いて
 來ると、おもひ出したやうに
 くつわ虫がなきます。

くどう〔工藤〕(人名) 6 くどう
 四九二 けれどもかたきのくどう
 は、みなものよりともといふ
 大將のお氣に入りで、〔略〕。

四九二 くだうが東へ行けば、兄
 弟も東へ行き、〔略〕、長い間
 つけねらひましたが、手を出す
 すきはありませんでした。

四九四 かたきのくどうもよりと
 ものおともをして行つて居ま
 す。

四九四 〔略〕、二人はたいまつで
 道をてらしてくどうのやかた
 へ向ひました。

四九五 兄弟はくどうのやかた
 へふみこみました。

四九五 ふみこんで見ると、くどう
 はよくね入つて居ます。

くどうすけつね〔工藤祐経〕(人名) 1
 くどうすけつね

四九一 十郎が五つ、五郎が三つ

の年に、父はくどうすけつね
 にころされました。

くに〔国〕(名) 74 國 〽あしはらの
 なかつくに・いずものくに・いせのく
 に・えつちゅうのくに・おくに・かが
 のくに・かずさのくに・きたぐに・さ
 がみのくに・しまぐに・しもつけのく
 に・でわのくに・とつくに・とつくに
 びと・みのくに・やまぐに・わがく
 にだいいち・わがくにのむくざい

三八二 〔天人のはごろもなら、
 なほさらかへすことは出來ませ
 ん。國のたからにいたします。〕

五二六 大日本、大日本、〔略〕、
 月日とともに、國の光ががやき
 まさる。

五二六 〔略〕、ガンガ北ノ國ヘカヘル
 コロ、〔略〕。

五二六 〔略〕、ガンガ北ノ國ヘカヘル
 コロ、南ノ國カラワタツテ來マス。

五二七 〔略〕、ガンガソノノワタツ
 テ來ルコロ、南ノ國ヘカヘツテ行キ
 マス。

五五六 日本の國には、景色のよい所
 がたくさんありますが、〔略〕。

六三八 國では初雪が降つたさうだ
 ね。

六三九 〽こつちは國よりよほどあ
 たゝかだ。

六四八 蛙ハ寒イ國ノ魚デ、〔略〕。

六四八 蛙ハ寒イ國ノ魚デ、我が國デ
 ハ樺太ト北海道ガオモナ産地ダサウ

ダ。

六五三〇 さて、此のたびの舞は日本一の出来。國はどこ、又親の名は何と申す。

六八三 實に我が國にとつては、これまでにない大難であつた。

六八九四 印度の國はいたつてあつた。ごさいますので、〈略〉。

七二七 我が國の馬は西洋諸國の馬にくらべると、せいも低く、〈略〉。

七二八 仲間の者が國へ送る金をあつかつて、此の財布に入れて來たのでございます。

七二九 小ぶくろの方は私どものだんなが國へおやりになる金ですが、〈略〉。

七五五 紀州の男は急いで國へ歸つて、其の金をまちがひなくとゞけるやうに致せ。

八一九四 揚子江ハ、〈略〉、我が國ノ最南端ヨリ最北端ニ至ル長サヨリモ長シ。

八二二 又沿岸ニハ上海・漢口等アリテ、我が國トノ貿易甚ダ盛ナリ。

八五七四 國に母をを残すらん、彼のまぶたにつゆありき。

八七九 一枚は縣の税で、一枚は國の税です。

八八〇 それからこれは國の税で、納税告知書としてあります。

八八〇二 國の税は勿論、縣の税も村の税もみんな大事なもので、〈略〉。

八八〇五 「縣や國の税も、村の役場へ納めれば、よいのですか。」

八九五八 名古屋市ハ我が國屈指ノ大都會ニシテ、人口四十餘萬アリ。

九四四 それに此の邊一帯の島々は我が國の支配に屬してゐるので、〈略〉。

九八〇 殊に近年我が國で學校をそこゝに立てたので、子供等はなか／＼上手に日本語を話します。

九二八 役人ににくまれて、終には國を立ちのかねばならぬやうになつた。

九二九 一すぢに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ事で、〈略〉。

九二七 それにはわたしが死んでも國へ歸らずに、〈略〉、一心に學問を上げむがよい。

九六七 雪溪が冬の世界ならば、此所は春の國でせう。

十六三 種類は大てい我が國に産する限りを盡くし、産地は日本全國にわたれり。

十七七 マケドニアといふ小さな國の王子と生れ、〈略〉。

十九二 名は、程なく國の内外に傳はつた。

十八六 我々が今日生活して行くには、我が國で出来る品物ばかりでは用が足らない。

十八六 米は我が國でずるぶん多くと

れるが、全く外國米の足しまへを要し、けぬわけには行かない。

十八六 又毛織物の原料になる羊毛は、我が國ではほとんど産しないから、〈略〉輸入する。

十八七 機械類は、近年我が國でも盛に製造されるやうになつたが、〈略〉。

十八七 我が國は種々の品物を輸入してゐるばかりでなく、〈略〉輸出することゝもなかなが多い。

十八八 最近における我が國の輸出入總額は數十億圓の多額で、〈略〉。

十九六 支那の宋朝の末、北方に元といふ國おこり、勢日々に盛にして、宋の領地ををかし、かば、〈略〉。

十九八 「我、國を救ふことあたはず。いづくんぞ人をいざなひてそむかしめんや。」

十〇二 ガラズ屋根を通して來るやはらかい日の光、まるで春の國に居るやうだ。

十一三五 我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、〈略〉といへり。

十一七五 私も實は我が國の古代精神を知りたいといふ希望から、古事記を研究しようとしたが、〈略〉。

十一七二 有名な古事記傳といふ大著述は此の研究の結果で、我が國文學の上に不滅の光を放つてゐる。

十一七九 今では世界各國、貨幣・紙幣を用ひない國はないのである。

十一八三 いで、軍艦に乘組みて、私は護らん、海の國。

十一一〇二 此のブラジル國は、廣さ我が國の十三倍もこれあり、〈略〉。

十一一二三 漢中王はおごそかに帝の位をふませ給ひぬ。

十一一三三 我が國の地方自治團體には、府・縣・市・町・村の別がある。

十一一四四 これ世に鐵眼版と稱せらるゝものにして、一切經の廣く我が國に行はるゝは、實に此の時よりの事なりとす。

十一一四四 古のふみ見るたびに思ふかな、おのが治むる國はいかにと。

十二二七 よきを取りあしきを捨てて、とつ國に おとらぬ國となすよしもがな。

十二六四 「大神の勅にいはいく、『此の葦原の中つ國は皇孫之をしろしめすべし。』と。快く此の國をたてまつり給ふや如何に。」

十二一五 我が國にてかゝる新聞の現れたるは維新前後にして、〈略〉。

十二一五 勿論今日我が國にて發行せらるゝ新聞中にも大小種種ありて、一がいには言難けれども、〈略〉。

十二四五 我が國に産する木材は其の種類頗る多し。

十二四六 殊に杉は〈略〉、其の需要の多きこと我が國の木材中第一位

にあり。

十二49 松に至りては産地極めて

廣くして、略、其の豊富なること我が國の木材中の首位を占む。

十二51 我が國の湖沼中此の湖より深いものは秋田縣の田澤湖だけである。

十二60 今我が國を始め主なる諸外國の國旗に就いて述べん。

十二61 雪白の地に紅の日の丸を系がける我が國の國旗は、最もよく我が國號にかなひ、略。

十二63 國旗の色彩が其の國の人種を表すものに、支那の國旗あり。

十二88 林藏が二回の探検によりて、略、此の地方の事情も始めて我が國に知らるゝに至れり。

十二89 これ等の命令も國の規則であつて、廣い意味でいふ場合にはやはり法律であるから、略。

十二90 我々は常に略國の品位を高めることにつとめなければならぬ。

十二93 かねて釋迦の徳をしたつてゐたマガダ國王は、略、自分の國をゆづらうとまで申し出たが、略。

十二116 略、急流や瀑布に富んでゐる我が國では、將來益々水力電氣の利用をはからなければならぬことを力説した。

十二128 略、日本全國にのしを付けてどこぞの國へやつてしまふや

うな事にならぬとは決して申されませぬ。

十二132 我が國が世界無比の國體を有し、三千年の光輝ある歴史を展開し來つて、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、略。

十二133 随つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、略。

十二134 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、略。

十二136 今日我が國が列強の間に立つて世界的の地歩を占めた以上、略。

くにおくにおのどくにお

くにごに 国 名 4 國々九23 國々 略、そこ此の父も、略、國々の實地を調べ、本もあらはし、

出来るだけは骨折つたつもりである。十七8 略、わづか十數年の間に四方の國々を征服して、當時世界に類のない大國を建設した英雄である。

十七9 頃しも鎌倉より、勢ぞろへの沙汰俄に國々に傳はりぬ。

十二60 今一國家を形成する國々にして、國旗の制定せられざる所なし。

くにごに 国 名 1 國中

十二97 今や釋迦は衆星の中の満月の如く國中から仰がれる身となつたが、略。

くにごに 国 名 1 國全體

十二23 即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、忽ち國全體の商品の信用に關係して、略。

くにとらう 国 話 1 國太郎

四47 「ちりつもつて山となる。」國太郎はい。

くにとらう 国 名 2 國太郎

四47 よみ手はおちいさんで、取手はみよ子ちよ子 國太郎音二郎の四人と、略。

四50 道子が十二まい、みよ子が十まい、國太郎が九まい、略、友一はたつた一まいでした。

くぬぎ 櫟 名 7 くぬぎ四10 櫟ならやくぬぎのはは黄にそまり、廣いたんぼに北風あれる。

八14 黄色なのはならやくぬぎで、赤いのはかへでや櫻やぬるである。

八2 炭に焼く木は、主にならとくぬぎで、くぬぎの炭の方が火持がよい。

八32 略、くぬぎの炭の方が火持がよい。

十二45 今其の主要なるものを舉ぐれば、杉・略・くぬぎ等なり。

十二48 かしは又なら・くぬぎと

共に薪炭材として重要なものなり。くぬぎばやし 櫟 名 1 くぬぎ

七22 村の西にくぬぎ林がある。

くねる しまがりくねるくばり しまえくばり

くばる 配 五 1 配る 一ツ 八55 おしまひの一日には、小豆やきな粉をつけて、うちでもたべ、近所へも配つた。

くび 首 名 23 くび 首

一19 コガニガサルノクビヲハサミキリマシタ。

二28 大キナスズヲネコノクビニツケテオイテ、ソノオトガキコエタラ、略。

三10 うちの子ねこは かしい子ねこ、くびのこすずをちりちりならし、略。

三15 うちの子ねこは かしい子ねこ、くびのこすずをちりちりならし、略。

五72 「そんな大きな池がいるだらうか。」と言つて、首をひねる者もあつたといふが、略。

六81 草野の次郎の如きは夜敵の船におしよせて、首二十一取つて、敵の船に火をかけて引上げた。

七48 武田方が之を見て、聲をあげて喜ぶと、與五左衛門は忽ちはねかへして、彦六を組みしき、手早く首を取つてさし上げた。

て行つたやうだが、何か言つたのか。
九15 図 おかあさんのカリストは、
大そう美しい人だつたので、ジュ
ノーといふ神様がそれをねたんで、
とうとうカリストを熊にしまひ
ました。

くまい 「九枚」(名) 1 九まい
四58 道子が十二まい、みよ子
が十まい、國太郎が九まい、
《略》でした。

くまそ 「熊襲」(名) 2 熊襲 熊襲
五41 昔熊襲のかしらに川上のたけ
るといふ者があつて、天皇のおほせ
にしたがひませんでした。

五43 《略》、たけるも熊襲のかしら
だけあつて、「しばらくお待ち下さ
い。申したいことがあります。」と
いひました。

くまそせいばつ 「熊襲征伐」(課名) 2
熊襲征伐
五目12 十一 熊襲征伐
五41 十一 熊襲征伐

くまで 「熊手」(名) 3 熊手 熊手
六35 敵は船の中から熊手を出して、
義經のかぶとに引っかけようとしま
す。

六36 4 それでも義經は、太刀で熊手
をふせぎ、とうとう弓を拾ひ上
げました。

七11 9 小さい熊手で砂をかくと、お
もしろいやうにあさが出た。

くまなし 「限無」(形) 1 くまなし

《一く》
八98 1 図 船内くまなくたづぬる三
度、呼べど答へず、さがせど見え
ず、《略》。

くまのささやき 「課名」 2 熊のさ
やき
五目13 二十五 熊のささやき
五97 6 二十五 熊のささやき

くみ ぐみてつぼうぐみ・ひとくみ・ふた
くみ・よくみ
ぐみ 「胡顔子」(名) 4 ぐみ

六14 5 松山の入口で、赤くなつてあ
たぐみを一枝折ると、「そんな大き
な枝を。」と、に皆さんに注意され
ました。

六14 8 僕がぐみをたべてゐる間に、
にいさんは初草を五六本取つたやう
でした。

六15 4 図 「あゝ、それは紅耳だ。毒
だよ。其の手でぐみをたべてはいけ
ない。」

六15 7 僕はびつくりして、ぐみも紅
草も地面へなげつけました。

くみあい ぐみさんぎようくみあい
くみあう 「組合」(四・五) 2 組合ふ
《一ッ・ヒ》

十一30 3 図 直に組合ひたる二人の勇
士、ねち合ひ押合ひ争ふうちに、清
正やがて正國をねち伏せたり。

十一38 9 なたや鎌などでつる草を拂
ひ、下枝を伐落して行くと、今まで
両方の枝と枝と組合つてゐたのが急

に間がすいて《略》。
くみうち 「組討」(名) 2 組打 組討
七46 3 図 よつて明日たがひに勇士を
一人づつ出して組討をさせ、勝つた
方のものが川中島を取ることにして
は。

十一30 2 図 正國も槍を合はせ、
《略》、俄に槍を投捨てて大手をひろ
げ、「組打。」と叫ぶ。

くみかた 「組方」(名) 1 クミカタ
二56 6 図 コレカラユビノクミカ
タヲヲシヘマスカラ、ミンナデ
ヤツテゴランナサイ。

くみしく 「組敷」(五) 1 組みしく
《一キ》

七48 2 《略》、與左衛門は忽ちはねか
へして、彦六を組みしき、手早く首
を取つてさし上げた。

くみだす 「汲出」(五) 1 汲出す
《一ス》

十81 4 これは炭坑内の地下水を坑外
へ汲出す爲で、こんな大きなポンプ
を備へ附けてゐる處は、世界でも珍
しいさうです。

くみふせる 「組伏」(下二) 1 組み
ふせる 《一セ》

七47 9 彦六が與五左衛門を組みふせ
た。

くむ 「汲」(五) 5 くむ 汲む 《一
ミーン》

五54 7 喜んで、それからは毎日其の
酒をくんで来て、おとうさんに上げ

ました。
六92 5 先づ谷川のほとりに三千人の
番兵を置いて、城兵が汲みに來られ
ないやうにした。

六93 1 二日たつても三日たつても汲
みに來ない。

七89 1 マリイが大急ぎでコップに水
を汲んで來ました。

九65 3 下士官が、甲板の吐水口から
ふき出る海水を、桶に汲んでどん
く流すと、《略》。

くむ 「組」(四・五) 4 組ム 組む
《一ミ》のりくむ

七47 7 二人はたがひに馬を乗りよせ
て、馬上のまゝでむんずと組み、兩
馬の間にどうと落ちた。

八20 1 図 此ノ河ノ上流地方ヨリ木材
ヲキリ出シ、之ヲイカダニ組ミテ河
ヲ下スコトアリ。

十一31 4 図 《略》、二人はしつかと組
みたるまゝころ／＼と轉び落つるこ
と三十間許。

十二17 5 図 印刷部にては直に所要の
活字を拾ひて之を組み、校正刷を刷
りて校正部に廻す。

ぐむ ぐみなみだぐむ
くも 「雲」(名) 11 クモ 雲 ぐしら
くも・ちぎれぐも

二69 7 図 ズンズンアガル、クモ
ノ上。

三78 5 空は水のやうにすみき
つて、雲一つありません。

三805 罎 あたまを雲の上に
し、〈略〉。

四396 日は雲のあひだからや
さしいかほを出して、あたたか
な光をおくりました。

五605 罎 森も小山も下に見て、向
ふの田から大空の雲までとく弓
のなり。

五621 罎 雨のはれ間にちよつと出て、
用ありさうに天と地の遠きをつ
なぐ雲の上。

七929 何だか少しむし暑いやうだが、
空には雲もなく、まことによく晴
れてゐた。

九951 罎 雲や霧がわいたかと思へば
散じ、散じたかと思へば又わいて來
て、〈略〉。

十二922 罎 折から日は地平線に近づ
きて、雲も水も金色に輝き、美しさ
いふばかりなし。

十二581 其の時、今まで雲の中に居
た太陽が顔を出したので、日光が店
一ぱいにさし込んで來た。

十二958 其の刹那、彼は迷の雲がか
らりと晴れて、はつきりとまことの
道を悟り得た。

くも 「蜘蛛」(名) 2 クモ くも
二231 罎 〈略〉、トンデキタ木ノ
ハ、クルクルマハツテ、クモ
ノスニカカリ、カゼニフカレ
テ、ヒラヒラスレバ、クモハム
シカトヨツテクル。

九649 水兵はくもの子を散らすやう
に八方へ散つて、〈略〉分隊毎に甲
板洗を始める。

くものす 「蜘蛛巢」(名) 2 クモノス
くものす

二225 罎 ドコカラキタノカ、
トンデキタ木ノハ、クルクル
マハツテ、クモノスニカカリ、
〈略〉。

四432 天じやうをはらふ、たたみ
をたたく、ひさしうらのくも
のすを取る、〈略〉。

くもり 「曇」(名) 1 曇
五155 四月二十五日 水曜 曇
くもる ↓かきくもる

くやしい 「悔」(形) 1 くやしい
「イ」

四904 罎 「何といふくやしい事
だらう。お前たちが大きくなつ
たら、此のかたきを取つておく
れ。」

くやしがる 「悔」(五) 1 くやしが
る 「一ツ」

六937 正成は此の旗を城門に立てて、
さんぐに賊を惡口させた。賊が之
を聞いて、くやしがつて攻めよせる
と、〈略〉。

くやしなき 「悔泣」(名) 1 くやし泣
き

八151 罎 〈略〉、其の子頼宣は戦が始つ
たと聞いて、先陣へかけつけたが、
もう間に合はなかつた。くやし泣き

に泣くと、〈略〉。

くやみ ↓おんくやみもうしあぐ
くゆ 「悔」(上二) 1 悔ゆ 「イ」

十一268 罎 盛政は勝つてかふとのを
をしめざりし油斷を悔いつゝ、俄に
やみの中を退却しはじめたり。

くら 「倉」(名) 1 くら
四253 罎 〈略〉、にはとりよりさき
に、すずめがくらのやねへに
げて行きます。

くら 「鞍」(名) 2 くら
四673 罎 〈略〉、みんなが馬のくら
をたたいてよろこびました。

九10810 北風は、主人の體がくらの上
でぐらつとゆれるのを感じた。

くら 「競」 ↓およぎくら・はしりくら
くら 「暗」 ↓まっくら

くらい 「位」(名) 3 位
十78 マケドニヤといふ小さな國の
王子と生れ、二十一で位につき、
〈略〉。

十978 罎 〈略〉、宋軍到る處に敗れ、
皇帝・皇后も遂に敵手に落ちぬ。
こゝにおいて皇兄位をつぐ。

十一1125 罎 いしずゑ固めし蜀漢
の國、漢中王はおごそかに帝の
位をふませ給ひぬ。

くらい (副助) 14 クラキ くらゐ
三228 どちらもたいてい おなじ
くらゐで、かちまけはありませ
んでした。

四226 をぢさんのうちでは、

〈略〉、足のふみばもないくら
ゐでした。

七704 罎 あなたから一文でももらふ
氣があるくらゐなら、此所まで持つ
て來はしません。

九310 罎 暑さも年中此のくらゐのも
のださうで、〈略〉。

九176 又季節ニヨツテカハルクラサ
デナク、何時デモマハリノ物ノ色ガ
カハレバ、間モナクソレト似タ色ニ
カハルモノモアル。

十775 罎 〈略〉、よくも續くと思ふく
らゐの天氣續きで、雨といふものは
ごくたまにしか降りません。

十784 罎 面白いのは、三日四日續い
て寒ければ、其の次には又其のくら
ゐの間暖さが續くといふやうに、
〈略〉。

十791 罎 〈略〉、大分長くなりました
から、今日は此のくらゐにして置き
ます。

十951 罎 僕は 〈略〉、何此のくらゐ
の事がこはいものかと、自分から先
に立つて渡つたのです。

十一376 罎 今に御らん、此のくらゐ
離して植ゑても、十五六年目には間
伐をしなければならぬやうになる
から。

十一405 罎 〈略〉、一番早く伐るとして
も、其の時は僕がおとうさんくらゐ
の年になつてゐるわけだ。

十一781 我々は殆ど貨幣・紙幣なく

して一日も生活することは出来ぬといつてもよいくらいである。

十二44 〇 略、唯ほうつとして、ひき終つたのも氣附かぬくらゐ。

十二105 〇 略、日にやけ仕事にやつて年の頃もよくわからぬくらゐであるが、きつと結んだ口もとは意志の強さが現れてゐる。

くらい 暗 (形) 9 クライ くらい 暗イ 暗い 《—イ・—ク》 〇うす くらい・ほのぐらい

二19 〇 コチラノ クライ モリノ 中ニミエルノハ、ドコノウチノアカリデセウ。

三54 〇 兄 こんなくらいばんにかぞへないで、ひる かぞへるがよい。

三76 〇 ソコデ カウモリ ハ 略、クラク ナツテカラ 空ヲ トビマ ハルヤウニナツタ トイヒマス。七48 〇 略、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音ガ聞エマシタ。

七58 〇 又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、それにたよつて方角を知ること出来るし、略。

十57 〇 又暗い時の飛行に馴れさせて、夜間に使ふ事も出来るし、略。

十一52 〇 ゴム園の人は毎朝暗いうちに起きて、受持の木に此の切付をして廻る。

十一69 〇 夜が更けるにつれて燈がだ

んく暗くなり、今にも消えさうになつた。

十二52 〇 暗い箱の中にしまひ込まれてゐた小さな鐵のねちが、略、明るい處へ出された。

ぐらい (副助) 23 グラキ ぐらゐ

五91 〇 いかな日でも葉書の百枚や封書の三十通ぐらゐは、私の口にはいらないことはありません。

六77 〇 二三日ひどく寒かつたので、湖の水が大へんあつくなつた。一尺ぐらゐあらう。

七38 〇 大連の貿易高は横濱や神戸よりは少し下で、大てい大阪ぐらゐだといひます。

七85 〇 略、岸ニ近い淺イ所カラ二三百尺グラキノ所マデニハ、海藻ガ生エテキル。

八30 〇 かまはさしたしが一丈ぐらゐ、高さが四五尺ぐらゐで、略。

八30 〇 かまはさしたしが一丈ぐらゐ、高さが四五尺ぐらゐで、略。

八103 〇 マツチはちよつとした物で、價も安く、一包十箱が十錢ぐらゐで買はれる。

八104 〇 かりに造れたとしても、それを十錢ぐらゐで賣つてはまうかるまい。

八106 〇 したがつて一包のマツチを十錢ぐらゐで賣つても、さうおうにまうかるのである。

九56 〇 略、其の葉の根本には、

大人の頭ぐらゐの實がすゞなりになつてゐます。

九92 〇 此の間も十ぐらゐの少女が「君が代」をうたつてゐました。

九32 〇 略、木立も、まだ若葉だけに、下草まで見えるぐらゐ明い。

九52 〇 略、三十ぐらゐの時、年來の貯金と主人からもらつた金を資本にして、小さい米屋を始めた。

九79 〇 大人の握りこぶし程の大きなものあれば、雀の卵ぐらゐなはいらしいものがあるが、略。

十13 〇 略、私どもの若い時分には、かういふ仕事になると、あなたの方の半分ぐらゐしか働きませんでした。

十17 〇 略、廣さは二町四方ぐらゐで、略。

十19 〇 中には、君ぐらゐの子供や、其のおかあさんらしい人が、略、くびや背をなでたりしてゐるのもあります。

十57 〇 鳩は 略、四五十キロメートルの處を往復して食事するぐらゐは何でも無い。

十115 〇 略、さすがの鯨も次第に弱つて、船から五十メートルぐらゐの處まで引寄せられた。

十一40 〇 使ひみちによつて、三十年前から五六十年目ぐらゐの間に伐るのださうだから、略。

十一64 〇 略、二間幅ぐらゐに耕されて行く。

十一93 〇 したがつて二百十日も太陽曆なら大が九月一日で、ちがつても一日ぐらゐのものだが、略。

十一106 〇 略、殊に日本人の小學校ありて、御前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては、略。

くらげ 「水母」 (名) 1 くらげ

十一84 〇 ふと見ると、さしたし六七寸もある大きなくらげが、ふわりくくと浮いてゐる。

くらさ 「暗」 (名) 1 暗さ 六25 〇 暗さは暗し、道はなし、平家方にはげ場がなく、後のくりから谷へ、なだれをうつて落ちました。

くらし 「暮」 (名) 4 くらし 暮し 五53 〇 山から薪を取つて来て、それを賣つて、くらしを立ててゐました。

七73 〇 略、どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともあります。

七96 〇 略、小使の 年のよりしがあはれさに、人々物を出し合ひて、樂なくらしにかへてやる。

十46 〇 一年と過ぎ二年とたつうちに、其の日の暮しにも困るやうになつた。

くらし 「暗」 (形) 2 暗し 《—キ・—シ》

六25 〇 暗さは暗し、道はなし、平家方にはげ場がなく、略。

七30 〇 略、後の暗きやぶかげより大いなる蛇つと出でて、獅子のからだにまきつきたり。

くらしむき 「暮回」(名) 1 暮し向
 十一959 一家の暮し向は誠にあはれ
 なもので、(略)。
 くらす 「暮」(五) 3 くらす 暮す
 《—シ—ス》 ↓ あそびくらす
 五291 図 「こんなしづかな所でくら
 してみたい。」
 五306 圖 つりも出来るし、およぎも
 出来て、あつい夏でもすゞしく
 らす。
 八103 2 図 こんなわけですから、これ
 から後は互に親しみ合つて暮しませ
 う。
 ぐらと (副) 1 ぐらとと
 九108 10 北風は、主人の體がぐらの上
 でぐらとゆれるのを感じた。
 くらべ ↓ ちからくらべ
 くらべうま 「競馬」(課名) 2 競馬
 八目4 第三 競馬
 八58 第三 競馬
 くらべうま 「競馬」(名) 2 競馬
 競馬
 八59 昔或氏神のお祭に、競馬の
 神事といふ事があつた。
 八68 圖 「今年の競馬はさぞ見もの
 だらう。」
 くらべもの 「比物」(名) 1 比べもの
 八106 1 分業で造ると、(略)、一
 人々々別々になつて造るのは比べ
 もものにならない。
 くらべる 「比」(下二) 6 クラベル
 くらべる 比べる 《—べ—ベル—

—べレ》 ↓ おもいくらべる・みくらべ
 る
 三227 又とりはじめて、二人は
 たくさんとつてからくらべてみ
 ました。
 四128 圖 「オマヘノナカマトワ
 タシノナカマト、ドツチガ多
 イカ、クラベテミヨウ。」
 七278 我が國の馬は西洋諸國の馬に
 くらべると、せいも低く、體格もお
 とつてゐたが、(略)。
 七84 4 (略)、象牙鯨ニクラベルト、
 赤子ト大人トヨリモ、モツトチガフ。
 十888 最近における我が國の輸出入
 總額は數十億圓の多額で、之を十年
 前の額に比べると、實に十數倍であ
 る。
 十二128 7 圖 之に比べれば、(略)、徳
 川家の存亡などは言ふにも足らぬ小
 事でござります。
 くらむ 「眩」(四・五) 2 くらむ 暗
 む 《—ミ—ム》
 八100 8 かうして三日たちますと、
 耳は鳴り、目は暗み、(略)、顔の色
 も青くなつて來て、からだに全く力
 がなくなりました。
 十二816 圖 裸島より渦潮見れば、
 胸も波だち眼もくらむ。
 くらやみ 「暗闇」(名) 1 暗やみ
 十83 1 暗やみの中にかすかに安全燈
 が光つてゐる。
 くり 「栗」(名) 12 クリ くり 栗

一164 クリモ キイテオコリマシ
 タ。
 一173 クリガトビツキマシタ。
 二202 圖 コノ山ニハ、クリノ木
 ガタクサンアリマス。
 二204 圖 ユフベカゼガフィタカ
 ラ、キツトクリガオチテキマス。
 四238 おばあさんは(略)、とだな
 からうでたくりをおぼんに
 一ぱい 持つて來て下さいました。
 四262 (略)、いただいたくりを
 持つてかへりました。
 五287 うら一めんの林は私のうちの
 もので、此のころは栗の花がたくさ
 んさいてゐます。
 八27 栗のいがの多むのも今である。
 八60 2 圖 彼ノ燒諸屋ノ看板ニ、八里
 半ト記セルモノノ如キハコレニシテ、
 其ノ味クリニ近シトイフ意ナリ。
 十二45 10 圖 今其の主要なるものを擧
 ぐれば、(略)・栗・かし・なら・く
 ぬぎ等なり。
 十二48 1 圖 けやき・栗・かしは何れ
 も甚だ堅く、もくめこまやかなり。
 十二48 3 圖 (略)、栗は耐久・耐濕の
 性殊に著しきを以て、家屋の土臺、
 鐵道のまくら木等の用に供せられ、
 (略)。
 くりかえす 「繰返」(四・五) 4 クリ
 カエス くりかへす くり返す 《—
 シ—ス》
 六66 2 二三返クリカヘシタラ、釘ハ

殘ラズ取レテ、(略)。
 九83 9 圖 「來春まではかゝるだら
 う。」「來春までも。」と驚けば、
 「來春までは。」とくりかへす。
 十914 幾度もくりかへしてゐる中に、
 太郎は生麥生米生卵。と、早口にす
 らく言へるやうになつた。
 十一214 かういふ風に、三回くりか
 へして裁判してもらふ事の出来る組
 織になつてゐるのは、(略)。
 十一119 10 しかしジョージは依然とし
 て、(略)。」とくり返すばかりであ
 った。
 十二27 1 圖 若宮堂の舞の袖、し
 づのをだまきくりかへし かへしし
 人をしのびつ。
 くりからだに 「俱利迦羅色」(課名) 2
 くりから谷
 六目9 第六 くりから谷
 六22 5 第六 くりから谷
 くりからだに 「俱利迦羅色」(地名) 2
 くりから谷
 六25 2 暗さは暗し、道はなし、平家
 方はにげ場がなくて、後のくりから
 谷へ、なだれをうつて落ちました。
 六25 6 (略)、ずゐぶん深いくりから
 谷が、平家の人馬で埋まりました。
 くりだす 「繰出」(五) 1 くり出す
 《—サ》
 十114 7 もりにつけた長い綱はぐんぐ
 ん引張られて、三百メートル許もく
 り出された。

くりばやし 「栗林」(名) 1 栗林
 六八^一 「略」、「さあ、まだ早いからも
 知れないがね。」と言つて、栗林の
 下のくぼ地を教へてくれました。
 くりひろい 「栗拾」(課名) 2 クリヒ
 ロヒ
 二目¹⁰ 九 クリヒロヒ
 二二⁷ 九 クリヒロヒ
 くりもどす 「繰戻」(五) 1 くりも
 どす 「一ス」
 十一¹⁰ 綱を次第々々にくりもどすと、
 鯨は刻一刻船に近よつて来る。
 くる 「繰」(五) 2 くる 「一ツ・一
 ル」↓たぐる
 九六⁴ これ等の仕事は、陸上の家で、
 毎朝起きると先づ夜具をかたづけ、
 雨戸をくるのとかはりはないが、
 「略」。
 十一⁸⁹ 弟は尚あちらこちら暦をく
 つてゐるうち、ふと「八十八夜」の
 文字に目を止めて、「略」。
 くる 「来」(カ変) 377 クル くる 来
 ル 来る 《キ・クル・クレ・コ・コイ》
 ↓はるがきた
 一五⁵ ハチガキテ、ナクワケヲ
 タツネマシタ。
 一九¹ ウスガオチテキテ、サル
 ヲオシツケマシタ。
 三十一⁵ 「マタ一ハキマシタ。」
 三十四¹ ガンガトンデキマス。
 三十四⁷ 一二三四五六七八九
 十、十パトンデキマス。

一四³ 「略」、オホキナモモガナ
 ガレテキマシタ。
 一四九⁷ 「ソレナラヤルカラ、ツ
 イテコイ。」
 一五〇² イヌヲケライニシテイ
 キマス、サルガキマシタ。
 一五〇⁷ コンドハキジガキマシタ。
 一五一¹ オチヨガオキヤクニナツ
 テキマシタ。
 一五六⁶ 人がボツボツタンボカラ
 カハツテキマス。
 一五八⁵ マツノ木ノアヒダガダ
 ンダンアカルクナツテキマス。
 一五九² ドコカラキタノカ、
 トンデキタ木ノハ、
 一六〇³ ドコカラキタノカ、
 トンデキタ木ノハ、
 一六二² 「略」、クモハムシカ
 トヨツテクル。
 一六三³ ドコカラキタノカ、
 トンデキタ木ノハ、
 一六四⁴ ドコカラキタノカ、
 トンデキタ木ノハ、
 一六五⁵ 「略」木ノハ、ヒラヒラ
 マツテキテ、イケノ上ニオ
 チテ、
 一六六⁶ 「略」、イケノ上ニオ
 チテ、ナミニユラレテ、ユラユ
 ラスレバ、コヒハエサカト
 ウイテクル。
 一六七⁷ 「オ正月ガクルト、オマ
 ヘハイクツニナリマスカ。」

二四⁵ ワルイオヂイサンハソレ
 ヲキイテ、ソノ犬ヲカリニキ
 マシタ。
 二四六⁴ ワルイオヂイサンハ又コ
 ノウスヲカリニキマシタ。
 二四七⁴ ヨイオヂイサンハソノハ
 ヒヲモラツテキテ、ニハニマ
 キマシタ。
 二四九⁵ 太郎ハイマ、オカアサン
 ガオクスリヲノムトコロヘキ
 テ、「略」。
 二五〇⁶ オヤ牛ヲソトヘ出スト、
 子牛モツイテイキマス。チヨツ
 トハハナレマスガ、スグオヤ牛
 ノトコロヘキマス。
 二五二⁷ ダンダンアタタカニナツテ
 キマシタ。
 二五三⁸ ナノハヤコ米ヲヤルト、
 ヒヨコハミンナヨツテキテタ
 ベマス。
 二五四⁹ ネコデモソバヘクルト、
 オヤドリハオコツテケヲサカ
 ダテマス。
 二五五¹⁰ 一人がむちゆうになつて
 とつてゐますと、下のはうか
 らかさかさいはせてかけ上つて
 くるものがあります。
 二五七² 犬は「略」、小二郎のそば
 へよつてきました。
 二五八³ そのとき正一のおぢいさ
 んが、「略」そこへきました。
 二五九⁴ 「略」、犬はもうとつくに

かへつてゐて、かけてきてとび
 つきました。
 二六〇⁵ 又わかれ道のところへ
 きました。
 二六一⁶ 「略」、大きなかめが出て
 きて、「略」といひました。
 二六二⁷ りゆうぐうへつきました。
 りゆうぐうのおとひめはうらし
 まのきたのをよろこんで、
 「略」。
 二六四⁵ うらしまは「略」、又かめ
 のせ中につて、海の上へ
 出てきました。
 二六五⁶ 車ヲヒイテキタ人ガベ
 ンタウデモタベルノデセウ。
 二六六⁷ ニハノモモノ木ノネモ
 トカラ、カラヲキタセミガハ
 ヒ上ツテキマス。
 二六七⁸ 見テキルウチニ、「略」、
 色モシダイニコクナツテキマ
 シタ。
 二六八⁹ スコシタツテカラ又來テ
 見マス、モウリツパニセミ
 ニナツテキマス。
 二六九¹⁰ 風がしづかにふいて來て、
 きしのさがさがさららとおと
 をたててゐます。
 二七〇⁸ 私ノウチヘキノフヲケ
 ヤガ來テ、「略」。
 二七一³ 今日私が川の土手から
 とつて來たすすきも、花いけ
 にさしてそなへてあります。

三79 2 時時 ずしい風が吹いて
来ると、おもひ出したやうに
くつわ虫がなきます。
三83 8 どこからかよいにほひ
がして来ますので、見上げます
と、〈略〉。
三84 8 〈略〉、見たこともない美
しい女が来ました。
四17 〈略〉おとよさんと太郎
さんが来ましたので、三人で
お宮へまゐりました。
四13 5 ワニザメハ〈略〉、スゲニ
ナカマヲ大ゼイツレテ来マシタ。
四15 8 ワタシハコノヲカヘ
来タカツタノダ。
四23 6 四「おう、三ちゃんか。よく
来たね。」
四24 1 〈略〉うでたくりをおぼん
に一ぱい持つて来て下さいま
した。
四24 7 えんさきのささんくわに、
目白が二は来てゐて、〈略〉。
四31 4 そこへぼちが来ました
ので、一しよに向ふの方へ行
つてみましたが、〈略〉。
四33 3 人のこゑも山の中
では、かべにあたつたごむまり
のやうに、かへつて来ること
があります。
四52 4 勝太郎、東京のをちさん
からお前の所へゑはがきが
来ました。

四54 3 そこへ宿屋のていしゆ
が来て、「〈略〉」。
四61 5 〈略〉、へいけ方から舟を
一そうこぎ出して来ました。
四76 4 西の村一番の金持の
むすめさんが、此の人の所へ
およめに来ました。が、〈略〉。
四78 4 かへつて来た時には、ひ
どいみなりをして居ました。
四83 4 むかふのてい車場へ着い
たら、にいさんがむかへに来て
居ました。
四87 2 二人ガオ話ヲシテ居ル
所へ、オ花ノオカアサンガ来
マシタ。
四87 7 四 オチヨサンモオ松サン
モ来マス。
四88 2 四 春が来た、春が来た、
どこに来た。
四88 2 四 春が来た、春が来た、
どこに来た。
四88 3 四 春が来た、春が来た、
どこに来た。
四88 4 四 山に来た、里に来た、
野にも来た。
四88 4 四 山に来た、里に来た、
野にも来た。
四88 5 四 山に来た、里に来た、
野にも来た。
五41 四 「此の方は〈略〉、今度遠い
所から来て、今日から此の級へはい
る方です。」

五81 1 ある時、〈略〉、川上から箸^{はし}が
流れて来ました。
五93 四 それを八岐の大蛇^{やまた}が来て、
毎年一人づつたべました。
五11 1 酒が出来ると、〈略〉、八岐の
大蛇の来るのを待つていらつしやい
ました。
五11 3 間もなく大蛇が来て、〈略〉、
其の強い酒を飲みました。
五13 3 學校からかへつて見ると、廣
田君からゑはがきが来てゐました。
五13 4 四 北國にも春が来ました。
五14 4 かへりみちに、はなれ馬がと
んで来ましたので、どうしようかと
思つてゐますと、〈略〉。
五15 3 ぼちが昨日から病氣で、〈略〉、
學校に居てもしんばいでしたが、か
へつて来ると、もうよくなつてゐて、
尾をふつてむかへに出ました。
五18 8 四 其の時〈略〉、金色の鶏が
一羽とんで来て、天皇のお弓の先に
とまつた。
五21 7 其の尾を下して来て、さをに
着けるかと思ふと、又はらをふくら
ませて、をどり上ります。
五23 4 〈略〉、おくの方からたえずち
くおんきの音が聞えて来ます。
五24 8 小ぞうさんたちは、土ざうか
らしいく、な反物や帶地をかついで
来て、お客の前につみ上げます。
五25 8 ツバメハ〈略〉、ツブテノヤ
ウニトンデ来テ、物ニツキアタルカ

ト思フト、〈略〉。
五26 6 〈略〉、ガンガ北ノ國ヘカヘル
コロ、南ノ國カラワタツテ来マス。
五26 8 〈略〉、ガンガソロ／＼ワタツ
テ来ルコロ、南ノ國ヘカヘツテ行キ
マス。
五29 7 四 〈略〉、かはる／＼に花さ
きみだれ、人も来て見る、小鳥も
うたふ。
五35 5 遠足のしたくをして學校へ行
くと、もう級のものが大分来てゐて、
先生もお出でになつてゐました。
五38 8 此の時私どもの村へよく物賣
に来るおちいさんが、紺のふろしき
づつみをしよつて来て、〈略〉。
五39 1 〈略〉おちいさんが、紺のふ
ろしきづつみをしよつて来て、「皆
さん、遠足かね。」といつて通りま
した。
五40 3 〈略〉、べんたうをたべてゐる
と、さつきの學校の小使^{こし}さんが麥
ゆを持つて来て下さいました。
五53 2 山から薪を取つて来て、それ
を賣つて、くらしを立ててゐました。
五53 6 〈略〉、かへりに酒を買つて来
ては、おとうさんを喜ばせてゐまし
た。
五54 8 喜んで、それからは毎日其の
酒をくんで来て、おとうさんに上げ
ました。
五65 8 四 「今日は買物もあるし、歸
りには馬車に乗つて、此の下まで来

てもよい。」

五69 田地にするには、水がいるが、引いて来る川がない。

五70 いよく、其の年になつて、庄屋は普請方をよそからつれて来た。

五73 すると、「もくろみが悪い。」

「略。」などと言ふ者が出て来て、手つだひに出る者は日ましにへつた。

五74 方々から人夫をやとつて来て、もう一度土手をつきなほした。

五85 急に川水の音がごろ／＼と聞えて来て、間もなく火の見

五90 時々道を人にきいて来た者と見えて、「略。」とひとりごとを言

つて行く者があります。

五90 私のおくめは、「略」郵便物を大切にあづかつてゐて、これをあ

つめに来る人に渡すのであります。

五91 毎日かならず新聞を入りに来る方も四五人はあります。

五92 郵便物をあつめる人は、毎日きまつた時刻に来て、私のおなかを

明けて持つて行きます。

五92 其のあつめに来る頃に、急ぎの封書を入りに来る者が、途中で人

と立話でもはじめると、「略」。

五92 急ぎの封書を入りに来る者が、途中で人と立話でもはじめると、「略」。

五97 二人の者が山の中を通ると、熊が出て来ました。

五98 熊が来て、からだ中かぎまは

しましたが、「略」、其のまま行つてしまひました。

五98 此の時、木に上つてゐた者が下りて来て、「略」。

五102 自動車・馬車・人力車がいくだいとなく、入口・出口によ

つて来ます。

五102 はじめて東京見物に来て、此の停車場へ降りる人は、大い先づ

第一に宮城をさしてまゐります。

六22 「略」、卵買が来て、卵を七つ買つて行きました。

六37 私がたんばへお湯を持つて行

つてくると、「略」。

六19 鉛色の空は次第々々に低くな

つて来ます。

六19 風がひゆうつとうなつて来るたびに、濱の松は身をふるはせて、

「略」。

六19 うちよせて来る波は、岩をかみ、小じやりとばしては、さあつ

と引いて行きます。

六26 庭の菊も白い花びらに赤みがさして来た、霜にあたつたからだら

う。

六30 さあ大へん、何千匹か何萬匹か、数かぎりもない蟻がまつ黒にな

つて、出て来ました。

六33 自轉車が後カラ来テ、カケヌ

ケテ行ツタ。

六35 豆腐屋ノラツパヤ煮豆腐ノリ

ンガ小路ノオクニ聞エテ来テ、「略」。

六33 「略」、町ハダン／＼ニギヤカニナツテ来タ。

六33 ペンタウヲサゲテ来ル女工ハ、「略」工場へ急グノデアラウ。

六34 「略」、郵便物ヲツンダ車ガキ

セイヨクカケテ来タ。

六39 昨日はとなり村から来てゐる歩兵の音吉君と二人で町を見物し

た。

六40 「略」、私の村から、今歩兵になつて来てゐるのは私一人だけ

なのだ。

六42 軍隊へ来て、學校でなまけてゐた者は人一倍苦勞をする。

六42 大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬ニカケテ、海カラ川へ上ツテ来ル。

六46 ダン／＼上流ニサカノボツテ、

時ニハセ中ガ出ル程ノ淺イ所マデ上ツテ来ル。

六46 コレハ卵ヲ産ム場所ヲ見ツケ

ニ来ルノデアル。

六47 サウシテ外ノ魚ガ其所ヘ来ナイヤウニ、シバラク其ノアタリニ番

ヲシテキテ、ソレカラ海ヘ歸ル。

六48 四五年モタツト、大キクナツ

テ、今度ハ自分ガ卵ヲ産ミニ川へ上ツテ来ルガ、「略」。

六48 「略」、フシギニ自分ノ生レタ

川ヘ歸ツテ来ルサウデ、「略」。

六59 「略」、下仕の女が来て、「あ

の門の中へ、はいつてはなりませ

ぬ。」と申しました。

六65 僕ハ「待テ、待テ。」トイツテ、磁石ヲ持つテ来タ。

六66 「略」、其ノ上、折レタ針ヤ、サビタ針金マデツイテ来タ。

六83 「略」、敵は一先づ沖の方へし

りぞいたが、又おしよせて来るのは明らかである。

六87 象がそれを下して来て地に置くと、象つかひがぬつと桶の中で立

上つた。

六88 自分たち程の子どもが出て来て、象の前足にだきついて見せた。

六92 先づ谷川のほとりに三千人の

番兵を置いて、城兵が汲みに来られないやうにした。

六93 二日たつても三日たつても汲みに来ない。

六93 番兵がゆだんをしてゐると、

城兵が切りこんで来て、旗をうばつて引上げた。

七10 川口近くになると、潮干狩の

舟がいくそうもよつて来た。

七13 舟で来た人も、をから来た人も入りまじつて、何百人か數へき

れない程ゐる。

七13 舟で来た人も、をから来た人も入りまじつて、「略」。

七15 潮がだんだんさして来て、何

時の間にか洲が見えなくなつた。

七18 「略」といふ使の後から、「略」

といふ使が来たが、總大將

の新田義貞はびくともしません。

七35 大連へ来てから、もうかれこれ七八十日、町のもやうも大分わかたて来ました。

七35 町のもやうも大分わかたて来ました。

七37 船で来れば、神戸から三晝夜、

七37 門司からは二晝夜で當地へ着きますが、来て先づ誰でもおどろくのは、波止場の大きなことです。

七39 まだ来て三箇月で、よくはわかりませんが、氣候も思つたよりよくて、快晴の日が多いやうです。

七42 聞けば今朝から五里の山道を、わらちがけで急いで来たのださうだ。

七52 で、今日此のなつかしい學校に来て、皆さんにお話をするのは、何よりもうれしいのでございます。

七56 急に暴風雨が来ると、山のやうな波が立つて、船は今にも沈むかと思ふやうになります。

七66 三四里行つて、大きな峠へかゝりますと、上から

七68 「安心しなさい。此所へ持つて来ました。」

七69 いやよくない時には、川の中へとびこんで死んでしまはうと、かくこをして来たのでございます。

七70 あなたから一文でもらふ

氣があるくらゐなら、此所まで持つて来はしません。

七71 仲間の者が國へ送る金をあづかつて、此の財布に入れて来たのでございます。

七73 かの男は「略」といひながら、人夫の後について来ましたが、

七76 「誰か居るか。」と呼ぶと、いつも藤吉郎が眞先に出て来た。

七77 或大雪の朝、

七82 あわたしくかけこんで来た者があります。

七88 「かくして下さい。敵が追つかけて来ます。」

七89 マリーが大急ぎでコップに水を汲んで来ました。

七91 此の時どやくと四五人の敵兵がはいつて来ました。

七92 「おい娘、兵士が一人来たらう。」

七94 「たしかに来たはずだ。」

七93 「やはり二百十日だ。風が出て来た。」

七94 風がだんくはげしくなつて来た。

七103 「ずるぶんおそく来たものだ。」

七110 「おとうさん、電報が来ました。」

七110 「ハナシデキタイツクルへン。」

八45 じやれ合ふのを止めて、尾をふりながら、ちよこくやつて来た。

八55 二匹は、間もなくかはいらしいのを二匹つれて来た。

八74 やがて五人の騎手は多くの人々につきそはれ、

八11 つきそひの者や見物人はかけよつて来て、

八24 呉鳳は、もう一年、もう一年とのばせてゐましたが、四年目になると、「もう、どうしても待つてゐられません。」といつて来ました。

八25 果して赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着た人が来しました。

八29 或日炭を焼く男が太郎のうちへ来て、

八34 婦人は、これは珍しい、神様がおさづけ下さつたのはこれに違ひないと思つて、其の實を取つて来て、庭先の畠の中にまきました。

八40 越前守は、下役の者に石地蔵をしぼつて来るやうに命じました。

八49 サウシテ何カ地上ニエモノヲ發見スルト、スウツト下リテ来テ、

「略」エモノノ上ニツカミカハル。

八68 子どものは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、英語で勉強しますが、歸つて来ると、又日本人の立てた學校へ行つて、

八70 此の繪葉書は此所へ来る途中、汽車の窓から見た牧場の實景です。

八81 役場のひけないうちに行つて来よう。

八83 信吉が、昨日の朝三年ぶりでハワイから歸つて来た。

八87 信吉は僕の両親に歸つて来たあいさつをすまずと、

八85 學校へ行つて案内をこふと、小使が出て来た。

八86 間もなく黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて来られた。

八86 おとよは信吉の顔を見ると、かけよつて来て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八90 「おとよ、おとうさんが歸つて来て、うれしいか。」

八101 かうして三日たちますと、顔の色も青くなつて来て、からだに全く力がなくなりました。

九37 此のトラック島へ来てからもう三月になるので、土地の様子も一通りはわかりました。

九45 それに此の邊一帯の島々は、内地から移つて来た人も多く、

少しもさびしくはありません。

九49回 内地から来て先づ目につくのは植物で、〈略〉。

九23回 それから諸國を歩き廻つたすゑ、あの毎日見舞に來てくれる門人たちに頼まれて、〈略〉、此の山中へ來たのである。

九24回 それから諸國を歩き廻つたすゑ、〈略〉、此の山中へ來たのである。

九28回 歡庵以來代々力をつくして來た農學は、信季の望通り、信淵に至つて大成したのである。

九33回 〈略〉、ふろしき包をしよつたせなかがじつとりと汗ばんで來る。

九33回 目じるしの大けやきの所まで來た時、〈略〉、美しい小鳥が二三羽身がるに枝移りした。

九33回 道がだん／＼上りになつたと見えて、谷のこずゑごしに、遠い湖がちら／＼と見えて來た。

九34回 〈略〉、若葉のにほひがひし／＼と身にせまつて來る。

九34回 「此の坂を下りて、〈略〉。」と、此の前來た時の事を考へながら、〈略〉、又歩き出す。

九35回 腹が大分すいて來た。

九35回 やうやく清水まで來て、手の切れるやうにつめたいのを二三ぱいづゞけ様に飲んでみると、〈略〉。

九35回 「やあ、加藤君、よく來てくれたね。」

九49回 僕は〈略〉、精米會社へお使

に行つて來ました。

九51回 「あの社長さんは〈略〉、此の町へ始めて奉公に來たのは、ちやうどお前と同じ十二の年だつたさうだ。〈略〉。」

九54回 社長さんは早速荷車を二臺借りて來て、醬油のはかり賣を始め

た。

九56回 僕は今日其のえらい社長さんに會つて來たのだと思ふと、何となくうれしい氣がしました。

九58回 何所からかにぎやかな歌が聞えて來る。

九60回 鶏が麥のこぼれを食ひに來ては、追はれて逃げて行く。

九60回 〈略〉、今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壯大な姿が、だん／＼にあらはれて來る。

九61回 〈略〉、時鐘番兵がこと／＼と艦橋の下へ來て、「〈略〉。」と當直將校に報告する。

九61回 間もなく甲板士官や傳令員が起きて來る。

九68回 「宇都宮」と驛夫の呼ぶ聲に、何時かおかあさんと日光見物に來た

時のことを思ひ出した。

九69回 顔を洗つて來て、〈略〉、〈略〉お話をうかゞつた。

九73回 停車場にはいる手前でまた北上川を見たが、此所まで來ると川幅

がかなりせまくなつてゐる。

九74回 〈略〉幾つかのトンネルをくぐると、廣い原野がだん／＼に開

けて來る。

九75回 青々とした波の上に、點々と白帆が浮んでゐるのは、野や山ばかり見て來た目に殊さらうれしかつた。

九76回 〈略〉、かうたやすく來てみると、そんなに遠い所に來たやうな氣がしないね。」

九77回 〈略〉、そんなに遠い所に來たやうな氣がしないね。」

九78回 當番が農具小屋から、鍬・シヤベルなどいろ／＼の道具を出して來た。

九78回 先生も大きな箱を持つて來て、ほつたものは此の中へ入れるやうにとおつしやつた。

九79回 中からみづ／＼しい白茶色の玉が、じゆずつなぎになつてころ／＼と出て來た。

九80回 ふと氣がつくと、校長先生と山田先生が、箱のそばへ來て、面白

さうに僕等の仕事を見ていらつしやつた。

九95回 雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて來て、〈略〉。

九97回 お話が頂上のながめに移ると、いよ／＼はずんで來て、〈略〉。

九103回 しかしとう／＼恐しい日が來た。

九104回 だん／＼明るくなつて來た。

九107回 敵弾は前後左右へ雨のやうに落ちて來る。

九107回 〈略〉、怪獸のやうな大砲と、其のまはりにむらがる人がかげが見えて來る。

九109回 北風は〈略〉、後からかけて來る味方に追はれて、思はず其の場から數十間も進んでしまつた。

九110回 さうして主人がこひしくなつて、今來た方へ一散にかけもどつた。

九120回 「〈略〉、投票ノ爲ニ歸ツテ來タノダ。」

九123回 〈略〉、選舉權ヲ棄テルトイフ事ハ、〈略〉スベキ事デハナイカラ、カウシテワザ／＼歸ツテ來タノダ。

九104回 程なくフィリップは病室にはいつて來て、うやく／＼しく藥のコツプを王にさ／＼げた。

九123回 熱い番茶にのどをうるほして休んでゐる所へ、〈略〉高橋さんが來られた。

九125回 今通つて見て來ましたが、大そうりつぱになりました。

九129回 誰かが力石をころがして來て、土をはらつて高橋さんの爲に席を作つた。

九137回 郷里の青年諸君がこんな

まじめになつて來たのは、何よりうれしい事です。

九146回 私が今度歸つて來て、はじめて青年團の規約を見た時は、〈略〉。

九146回 私が今度歸つて來て、はじめて青年團の規約を見た時は、〈略〉。

九146回 私が今度歸つて來て、はじめて青年團の規約を見た時は、〈略〉。

九146回 私が今度歸つて來て、はじめて青年團の規約を見た時は、〈略〉。

十154 朝鮮の青年も、近頃はなか

く頭が進んで來ましたので、〈略〉

私も、非常に喜んでをります。

十186 中には、母馬がつきそつて

來てゐるのもたくさんあります。

十1810 子馬には大い飼主の一家

族がついて來て、親切に世話をし

てゐます。

十218 二年の年月苦勞して育てて

來たものが、急に見ず知らずの人の

手に渡つてしまふのだから、〈略〉。

十228 私は今日此所來て、飼主

たちがあんなにかはいがつてゐたの

を見て、〈略〉。

十304 影のごと、人去り 人來

る大路、ほろく〜と聞ゆる 笛の

音いづこ。

十391 〈略〉、兄は「〈略〉。」といつ

て、かついで來たつるはしを下へ置

いた。

十395 兄はそこらに散らばつてゐる

木の根や、小枝などを拾ひ集めて來

て、たき火を始めた。

十412 向ふの山の頂に日の光が赤々

とさして來た。

十444 窯場から出て來た喜三右衛門

は、〈略〉。

した。

十524 〈略〉、定期の方は、預けた

日から半年とか一年とかきまつた期

限が來ないと引出すことが出來ない。

十659 だんく〜寒くなつて來たが、

あやにく薪も盡きてしまつた。

十735 汽車で京城へ來る人は通常

南大門驛で下りるのです。

十774 こちらへ來てもう三月餘り

になりますが、〈略〉。

十801 地下水のしづくが、四方から

雨のやうに落ちて來る。

十808 〈略〉、廣い坑道には、電氣機

關車が炭車を引いて往つたり來たり

してゐます。

十8210 〈略〉奥深く進むと、いよいよ

よ石炭を掘つてゐる處へ來ました。

十848 或日、此の附近の山へ薪を

とりに來た百姓が、たき火をしてゐ

ると、〈略〉。

十1008 寒い北風に吹かれながら、冬

枯の小道を通つて來て、一足温室の

中にはいると、全く別の世界に來た

やうな心持がする。

十1009 〈略〉、一足温室の中にはいる

と、全く別の世界に來たやうな心持

がする。

十1012 とりぐ〜の花の色、〈略〉、ガ

の暖さの處に置かなければいけない

のだ。

十1149 今まで勢よく引出されてゐた

綱もやゝゆるんで來た。

十1151 綱を次第々々にくりもどすと、

鯨は刻一刻船に近よつて來る。

十1213 申し込んで來た者は五十人許

もあつて、〈略〉。

十1214 〈略〉、中には知名の人の紹介

状を持つて來た者や、りつばな學歴

のある者もあつたのに、〈略〉。

十1223 談話の最中に一人の老人が

はいつて來ましたが、〈略〉。

十1149 私が來たので、すぐしまは

うとなさるのを強ひて止めてお手傳

をしました、が、〈略〉。

十1168 〈略〉、そこへ弟さんが雑誌

を二三さつ持つて來て、本棚に並ん

でゐる雑誌の間へそれ〜お入れに

なりました。

十1191 例へば、借りた金を、返す

約束の日が來ていくら催促されても、

返さない人がある。

十1152 其の間草をとつたり、虎や

象の荒しに來るのを防いだり、苦心

はなか〜一通りでない。

十11528 此の傷から出て來るゴム液

は、流れて下のコップにたまるので

がある。

十11539 〈略〉、かうするとゴムが非

常に彈力を増して來る。

十11543 近來床の敷物や、道路にも

ゴムを用ひることが行はれて來た。

十11563 人人は叫び聲に驚きあわて

て、我先にと船へもどつて來る。

十115610 其のうちに二人はふかの來

るのに氣がついた。

十11589 二人の少年はボートに乗せ

られて歸つて來る。

十11594 札幌に來て先づ感ずること

は、街路が眞直で幅の非常に廣いこ

とである。

十11628 明治十六年こゝに十三戸の

農家が移住して來たのが此の町の始

りであつた。

十116610 此の方法は〈略〉、マツチ

の使用が廣まるにつれてすたつて來

た。

十11674 〈略〉、火の用途もだんく〜

廣くなつて來た。

十11683 かくして人は、暗黒の世界

からだんく〜光明の世界へと、みち

びかれて來たのである。

十11686 人は〈略〉、火の熱と光と

をあらゆる方面に利用することを考

へて來た。

十11731 宣長は力を落して、すこ

く〜ともどつて來た。

十11769 〈略〉、面會の機會は松坂の

一夜以後とう〜來なかつた。

十11856 手足が大分くたびれて來た。

十11863 僕も急に元氣がなくなつて、

一所に船に上らうかと思つたが、

「〈略〉。」と、自ら勵まして進んで行

つた。しかし月島はなかなか来ない。やうやく月島の横を通り越す頃には、もうつかれきつて氣も遠くなるばかりだ。

十一88 父は曆を持つて来て、

「略」。かういつて弟の手に渡した。

十一93 ところが太陰曆は略、太陽曆とくちがつて来て、三年にならないうちに一箇月の間をおかなければならない。

十二117 騎馬の人たちが、眞一文字にこちらへかけて来る。

十二119 僕はおうさんから、誰が来てこの門をあけてはならないと言ひつけられてゐるのです。

十二119 8 おとうさんは、誰が来てこの門をあけてはならないと僕に言ひつけました。」

十二120 僕は、誰が来てこの門をあけてはならないとおとうさんに言はれてゐるのです。

十二119 調子のよい蜜柑取歌が略、何處からともなくのどかに聞えて来る。

十二20 今登つて来た方を振返つて見ると、略。

十二21 小春日和の暖さにとけて、其處からも夢のやうに船歌が聞えて来る。

十二37 或小さいみすばらしい家の前まで来ると、中からピヤノの音が聞える。

十二43 月は益々えわたつて来る。

十二55 不意にばた／＼と音がして、小さな子どもが二人奥からかけ出して来た。

十二56 此の時大きなせきばらひが聞えて、父の時計師がはいつて来た。

十二57 略、此のやうな處にころげ落ちてしまつて、若し見附からなかつたらと、それが又心配になつて来た。

十二58 其の時、略、日光が店一ぱいにさし込んで来た。

十二59 一日おいて町長さんが来た。

十二65 それに近來はめつきり元氣が衰へて、もう政務にもたへられなくなつて来た。

十二73 家來は略、リヤ王を見附けて、コーデリヤの許に連れて来た。

十二77 先づ岸近くまぐろの寄つて来る場所を選んで、略、垣網を張り、其の先へ身網を張る。

十二78 略、漁夫が絶えずまぐろの来るのを見張つてゐる。

十二78 群をなして寄せて来たまぐろは、先づ垣網に驚き、略。

十二79 船がまぐろで一ぱいになると、略、陸の方へ漕歸つて来る。

十二91 折から飛下りて来た鳥が蹴に傷つけられた蟲をついばんだ。

十二92 人は何の爲に此の世に生れて来たのか。

十二93 師を求めてあちらこちらさまよつてゐるうちに、マガダ國の首府王舎城の附近に来た。

十二95 さうして日夜次々に起つて来る心の迷をしりぞけて唯一筋に悟の道を求めた。

十二97 略、中には彼をそねむあまり、略、迫害を加へようとするものさへも出て来た。

十二108 略、仕事は大いにはかどつて来た。

十二108 かうして又幾年か過すうちに、村の人々は此の仕事にあきて来た。

十二110 略、仕事を助ける者が又ぼつ／＼と出来て来た。

十二127 略、それが勝が来た、勝が来た。

十二127 略、それが勝が来た、勝が来た。

十二127 一室に通されて待つてゐると、やがて西郷が出て来た。

十二131 警衛の兵士等は、安芳の姿を見ると一時に押寄せて来たが、略。

十二135 そこで略、思ひ掛けぬ誤解を受けて排斥されるやうなことも起つて来る。

十二136 略、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して来たことが、其の主たるものであらう。

十二137 略、昔から殆ど摸倣のみを事として来た觀がある。

くるい 「狂」(名) 1 くるひ

十二48 中にもけやきはもくめ美しく、磨けば美麗なる光澤を生じ、又くるひ少きが故に裝飾材として珍重せられ、略。

くるいまわる 「狂回」(五) 2 クルヒマハル 狂ひ廻る 《一リール》

二76 シュテンドウジ ハオコツテ クルヒマハリマシタ。

十二79 漁夫はめい／＼手に「ちやうづつ」の鈎を持ち、狂ひ廻るまぐろを引っかけ、略。

くるう 「狂」(四・五) 2 くるふ 《一ッ・フ》 あれくるう

九82 略、ぼたんにくるふ唐獅子も、玉をふくめるこま犬も、皆ちいさんののみのあと。

十47 「薪は無い。薪は無い。」彼は氣がくるつた様にそこらをおかけ廻つた。

クルーソー ↓ロビンソンクルーソー

くるくる (副) 2 クルクル くるくる

二24 ドコカラ キタノカ、トンデキタ木ノハ、クルクルマハツテ、クモノスニカカリ、略。

四62 扇は風に吹かれて、くるくるまはつて居ます。

くるくる (副) 1 ぐるぐる ぐる

八52 おかあさんはそれを二つにち

ぎつて、ぐるぐるまはしていらつし
やつたが、忽ちきれいなおそなへに
なつた。

十487 胸ををどらせながら窯のまは
りをぐる／＼廻つた。

くるしい [苦] (形) 2 苦しい

《一・一イ》 ↓みぐるし

五936 《略》、悲しい事や苦しうな
事が書いてありますと、もらひ泣き
をいたします。

十一381 下刈はいつも土用中にする
ので、ずる／＼苦しいが、《略》。

くるしがる [苦] (五) 1 クルシガ
ル 《一ツ》

四178 白ウサギハ《略》、前ヨリ
モカヘツテイタクナツテ、クル
シガツテ居マシタ。

くるしまぎれ [苦紛] (名) 1 苦し
まぎれ

十二121 《略》、いきなり右の手の蟲
を口の中へ投込んだ。投込まれた蟲
は苦しまぎれに恐しく辛い液を出し
たので、《略》。

くるしみ [苦] (名) 2 くるしみ 苦
しみ

十一1287 幕府は處々に救小屋を設
けて救助に力を用ふれども、人々の
くるしみは日々にまさりゆくばかり
なり。

十二927 こんな事を次から次へと考
へては、遂に心の苦しみにたへられ
なくなつて、「《略》。」と思ひ立つに

至つた。

くるしむ [苦] (四・五) 4 苦しむ

《一・一ム》

七968 共同助力は人の道、お
のれの利のみかへりみず、力を分
ち、物をさき、苦しむ者を、泣く
者を、助けて共に樂しまん。

八1024 其の爲に新しい血が出来な
くなつて、かへつて君等は自分で苦
しむやうになつたのです。

十一993 汝大勢の如何とすべか
らざるを知つて、何ぞいたづらに苦
しむことの甚だしきや。

十一12510 されば古は、支那より渡
來せるものの僅かに世に存するのみ
にて、學者其の得がたきに苦しみた
りき。

くるしめる [苦] (下二) 2 苦しめ
る 《一メ》

六922 これにこりて、賊は城の水を
たやして苦しめようとはかつた。

八1021 君等は僕を苦しめようとし
て、《略》食物を送つてよこしませ
んでした。

くるま [車] (名) 9 クルマ 車 ↓
うしぐるま・ごいちぐるま・にぐる
ま・はぐるま・やぐるま

一541 クルマ ニツンダ タカラ
モノ、イヌガ ヒキダス エンヤラ
ヤ。

三505 車ヲヒイテキタ人ガベ
ンタウ デモ タベルノ デセウ。

六321 マツ先ニ出アツタノハ牛乳

配達デ、車ノ音ヲ高クサセテ、ハシ
ツテ行ツタ。

六346 停車場デキツブヲ買ツテキル
ト、郵便物ヲツンダ車ガキセヨク
カケテ来タ。

七507 ナタヲ打ツテキタコトモアリ
マスシ、車ノ輪ヲ打ツテキタコトモ
アリマス。

八406 下役の者が石地藏に荒縄を掛
けて、車に積んで参ります。

八415 物見高いは江戸のくせで、
《略》、四五百人のものが、ぞろ／＼
と車の後について、思はず知らず役
所の門内へ入りこみました。

十903 新道つたひ車重
げに ひき来る馬のつく息白し。

十二486 《略》、かしは最も堅くし
て彈力に富むが故に、櫓・車・運動
器具の如き強烈なる力を受くるもの
を製作するに適せり。

くるりと (副) 2 クルリト くるり
と

四603 《略》、カンナクヅガヒトリ
デニクルリトマハツテスベリオ
チマス。

五816 さて宗任がかりまたをぬき取
つて、義家にかへしますと、義家は
せ中をくるりとむけて、うつぽへ
さゝせました。

くれ [塊] (名) 1 くれ
四112 おやはかへして、子は

くれ うつて、廣いたんぼの
麦まきすます。

くれ [暮] (名) 1 クレ ↓あけく
れ・ゆうぐれ

七515 イカニモ丈夫サウナ老人デシ
タガ、去年ノクレニ死ンデシマヒマ
シタ。

グレース (人名) 1 グレース
十287 グレースの眞心こめた看護に
よつて、全く元氣を回復した人々は、
親子にあつく再生の恩を謝し、《略》。

グレースおやこ (人名) 1 グレース
親子

十257 《略》、荒れくるふ海上を見渡
したグレース親子は、ふとはるかの
沖合に、かの難破船を見とめた。

グレースダーリング (人名) 2 グ
レース、ダーリング

十249 《略》、老夫婦のなぐさめとな
るものは、氣だてのやさしい一人娘
のグレース、ダーリングであつた。

十291 今まで人にも知られなかつた
燈臺守の娘グレース、ダーリングの
名は、程なく國の内外に傳はつた。

くれかか・る [暮掛] (五) 1 暮れ
か・る 《一ツ》

十1207 冬の日はもう暮れかゝつてあ
る。
くれたまう [呉給] (五) 1 くれ給
ふ 《一へ》
八1002 僕等は一同申し合はせて、
今日からは働かないことにしたから、

さう思つてくれ給へ。

くれちかく「暮近」(副) 1 暮近く

159 やがて暮近くなつたので、一同は「略」、夕日を浴びて歸途についた。

くない「紅」(名) 2 紅

1162 あたりには流れ出る血に、紅の波がたゞよふ。

12612 雪白の地に紅の日の丸を多がける我が國の國旗は、「略」。

クレブラ「地名」 1 クレブラ

13410 それから船はクレブラの掘割を通る。

クレブラほりわり「地名」 2 クレブラ掘割

134 掘割

134 掘割

くれ「具」(下) 34 クレル

れる「レ・レ・レ・レ・レ」よく

2747 「略」、トウトウタツネアテ

3762 ソノ時カウモリガケタモノ

ノノ方へ行キマス、ト「オ前

ハ鳥デハナイカ。」トイツテ、

ナカマへ入レテクレマセン。

4794 「此の人も一本杉の外

にないてくれるものがなくなつた。」

5866 囲 うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、「略」。

5867 囲 うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、「略」。

6133 囲 モシセイ出シテ使ツテクレ

サヘスレバ、イツデモ光ツテキマス。

6181 にいさんが「今日は。」と言つて、「略」とたづねますと、

「略」、栗林の下のくぼ地を教へてくれました。

6675 囲 「こまかな人だ。これではとても義捐はしてくれまい。」

7447 謙信は馬に一むちくれて、信玄の本陣に切りこみ、「略」。

7512 何時カ「略」、ツクロヒヲタ

ノンダラ、翌日スグニナホシテクレ

マシタ。

7745 かの男がわけを話して、どうかお禮を受けてくれといひますと、「略」。

7983 此の人だけは自分のために心配してくれるであらうと思つたのでございませう。

879 囲 「ぜひ勝つてくれ。」

881 囲 「しつかりやつてくれ。」

8239 そこで蕃人どもが呉鳳へ、首を取ることを許してくれといつて出ました。

8301 此の時太郎が、炭はどうして焼くのかときくと、其の男はいねいに教へてくれた。

92310 囲 それから諸國を歩き廻つたすゑ、あの毎日見舞に來てくれる門

人たちに頼まれて、「略」、此の山中へ來たのである。

9358 囲 「やあ、加藤君、よく來てくれたね。」

96710 ずゑ分こんでゐたが、みんながゆづり合つてくれたので、二人とも腰を掛けることが出來た。

9874 囲 何かといふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

91038 「略」、北風は自分の信じてゐる中尉が乗つてゐてくれるので、「略」、びくともせずに勇ましく活動した。

10231 囲 「略」、此の子馬共を買つた人たちも、どうか同じやうにやさしく扱つてくれ、ばよいと、心からいのりました。

10417 囲 「壯吉、お前はおとうさんのかつた雜木を、かういふ風に束ねて運んでくれ。」

10846 歸途、事務員は次のやうな事を話してくれました。

11697 囲 「小僧、早く燈心をかきたててくれ。」

11867 船の上からはしきりに勵ましてくれる。

11919 囲 かういふやうに、曆はわたしたちに日日の事を教へてくれる大切なものだ。

11969 「略」、父に對して是非學校に入れてもらひたいと願つたけれど

も、父は「略」皇に出て働いた方がよいといつて、なか／＼許してくれなかつた。

111004 翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、「略」と願つた。

111195 騎馬の人たちは、「略」おどしたり、あててくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかししたりした。

111203 囲 よい子だから私の頼をきいてくれ。

12665 囲 お前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、わしはそれが知りたいのだ。

12755 囲 「涙をこぼしてくるのか。お前はわたしをうらんでゐるはずだが。」

121317 囲 「次第によつては、或は君等の銃先にかゝつて死ぬかも知れぬ。よく此の胸を見覚えておいてくれ。」

くれ「暮」(下) 8 クレル

れる「暮」(下) 8 クレル

4722 囲 それ、もう日がくれるぞ。

4786 私の下で、長い間しよんぼりとして居まして、日がく

れてから村へはいりました。

7514 夏ノドンナ暑イデモ、「略」、日ノクレルマデ働イデキマシタ。

7749 男はしあんにくられて、役所へうつたへて出ました。

八168 日が暮れてから、長四郎がそ

つと屋根つたひに行つて、〈略〉。

九684 まだ日が暮れたばかりのやう

に思つたが、もう八時半であつた。

十617 日の暮れない中に、一足も

早くお出かけなさい。

十一412 〈略〉、向ふの山も薄墨色に

暮れて行く。

くろ 「黒」(名) 6 黒 ↓まっくろ

九131 白・黒・うすかば色、十幾

羽の鶏一つにかたまり、〈略〉。

九2010 例へば毒ヲモツテキル蜂ノ體

色ガ黄ト黒ノダンダラニナツテリ、

〈略〉。

九751 黒・白・茶色、大小さまざま

の馬が、〈略〉かけ廻つてゐる様は、

實に勇ましい。

十二635 黒・赤・金の三色

を横に染分けたるものはドイツの國

旗なり。

十二638 國旗の色彩が其の國の人

種を表すものに、支那の國旗あり。

即ち赤・黄・藍・白・黒の五色を横

に並べたるものにて、〈略〉。

十二639 白は回疆人、黒

は西藏人を代表するなり。

くろ 「黒」(名) 2 黒

八268 軒下にはらばる黒き犬、

にくらしき黒と思へば、黒もま

た、意地悪き人と見るらん。

八269 意地悪き人と見るらん、

思へば、黒もまた、意地悪き人と

見るらん。

くろい 「黒」(形) 10 クロイ 黒い

《イーク》

一84 シロイイヌトクロイイヌ

ガキマス。

三705 この黒いもめんのもんつ

きは私のです。

三712 そちらのはばの廣い光

るおびはねえさんの、はば

のせまい、黒いのはおばあさん

のです。

四766 きのお一つ取つてみまし

たら、もう黒くごまをふいて

あました。

五48 中村君は色が黒くて、まるま

ると太つてゐます。

八861 〈略〉、間もなく黒い服を着た

先生が、女生徒を一人つれて、はい

つて來られた。

九7810 やはらかい黒い土がむくく

盛上つたと思ふと、四方へくづれる。

十849 或日、〈略〉百姓が、たき

火をしてゐると、そばの黒い岩に火

がつき、煙をあげて燃出しました。

十一31 望遠鏡で見ると、〈略〉、又

所々に黒點といつて黒く見える所も

ある。

十二207 黒い程こい緑の葉の間から、

其の一つくが日の色にはえてくつ

きりと浮出てるのが見える。

くろろ 「苦勞」(名) 2 苦勞 ↓くろろ

ろろ・くろろさま

五763 長い間の苦勞が病氣のもとで

あつたといふことだ。

六431 軍隊へ來ても、學校でなま

けてゐた者は人一倍苦勞をする。

くろろする 「苦勞」(サ変) 1 苦勞

する 《ーシ》

十217 二年の年月苦勞して育てて

來たものが、急に見ず知らずの人の

手に渡つてしまふのだから、〈略〉。

くろろま 「黒馬」(名) 1 黒馬

九102 北風はたけが五尺二寸もある

黒馬で、〈略〉、見るからに強さうな

軍馬である。

くろし 「黒」(形) 2 黒し 《ーキ》

八267 軒下にはらばる黒き犬、

〈略〉。

九14 あらゆるものはやみとい

ふ、黒きとばりにおほはれて、安

き眠に入れるなり。

くろびかり 「黒光」(名) 1 黒光り

十841 石炭の壁は安全燈の光に照ら

されて、黒光りに光つてゐます。

くろみ 「黒」(名) 1 黒ミ

五966 ソレニハ黒ミノアルムラサキ

色ノ實ガナツテキマス。

くろみがかる 「黒味掛」(五) 1 黒

みがかる 《ーツ》

九102 黒みがかつた紫色の莖が見事

に延びて、大きな葉をゆらゆらと風

に動かしてゐる姿は、誠に氣持がよ

い。

くろむ 「黒」(四) 1 黒む 《ーミ》

十一822 吹く潮風に黒みたる

はだは赤銅さながらに。

くろやま 「黒山」(名) 2 黒山

五227 島屋の前には、人が黒山のや

うにあつまつてゐました。

十208 子馬が一頭づつ中央の廣場

に引出されると、黒山のやうに集つ

てゐる買手は、自分の見込で思ひ

くくの直をつけて、次第にせり上げ

る。

くわ 「桑」(名) 6 桑

五472 もう桑の葉をたべないで、頭

を上げて、繭をかける所をさがしま

す。

五493 今桑をたべてゐる蠶も、明日

の朝までには、たいてい上つてしま

ふさうです。

九184 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリ

ハ、〈略〉。

九185 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリ

ハ、其ノ色ガ桑ノ木ニ似テキルバカ

リデナク、〈略〉。

九187 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリ

ハ、〈略〉、體ノ後ノ端ヲ木ニツケテ、

體ヲナ、メニツキ出スト、形ガ桑ノ

小枝ニ寸分違ハナイ。

十124 近年は作物も改良せ

られ、桑を植ゑて蠶を飼ふ者多く、

殊に一村鶏を飼はざる家なし。

くわ 「鵜」(名) 5 くは 鵜 ↓ひと

四747 〈略〉、くはやかまを持つ

てたんぼへ行きました。

七50 鎌ヲキタヘテキタコトモアリマス。鎌ヲ打ツテキタコトモアリマス。

九78 當番が農具小屋から、鎌・シヤベルなどいろ／＼の道具を出して來た。

十二34 朝まだほの暗い頃でしたが、もう沿道の田畑には農夫が鎌を振るつてをり、略。

十二91 折から飛下りて來た鳥が鎌に傷つけられた蟲をついばんだ。

くわ・う [加] (下二) 2 加ふ へ

十五1 昔の武藏野の姿を此所に殘さんとの皇太后の思召のまゝに、今も人工を加へずといふ。

十二64 伊タリヤの國旗は、略。

略、其の家の紋章の色なる白と赤とに、統一の成功を祈る希望の色として緑を加へ、略。

くわ・える [加] (下二) 7 加へる

へ つけくわえる

十一18 他人に害を加へてはならぬなどといふことは、我々が十分心得てゐる事である。

十一22 刑事裁判では、不當な刑罰が加へられぬやうに被告を保護するために辯護士といふものがある。

十一76 其の後、師弟の關係は日一日と親密の度を加へたが、

略。

十二41 一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか彼自らも覺えないやうである。

十二97 中には彼をそねむあまり、反抗するばかりでなく、迫害を加へようとするものさへも出て來た。

十二107 かくて又幾年かたつうちに、穴はだん／＼奥行を加へて、既に何十間といふ深さに達した。

十二110 今では此の洞門を掘りひろげ、處々に手を加へて舊態を改めてはるが、略。

くわ・える [銜] (下二) 3 クハヘル

へ

二14 犬ガサカナヲクハヘテ、ハシノウヘヲトホリマシタ。

二14 5 シタヲミルト、川ノナカニモサカナヲクハヘタ犬ガキマス。

二15 4 ホエルト、口ガアイテ、クハヘテキタサカナハ、川ノナカヘオチテシマヒマシタ。

くわ・い [詳] (形) 8 くはしい

《一イーク》

五78 土手の此の記念碑に、今話した事がくはしく書いてある。

六43 其の中にくはしい事を知らせよう。

七75 男はしあんにくれて、役所へうつたへて出ました。役人はわけを

くはしくたづね、人夫をも呼出して、略。

八12 くいしいことは又學校で習ふでせう。

九26 わたしも略、くはしく計畫を立てた事もあるが、略、實行が出来ずにしまつた。

九90 私も餘程前に讀んだのですから、くはしい事はおぼえてゐませんかね。

九94 といふ事は知つてゐましたが、くはしい事は今日始めてうかひました。

十一91 もつとくはしいことは本曆を見るがよい。

くわ・て [企] (名) 1 くはだて

十一126 一代の事業として一切經を出版せん事を思立ち、略、此のくはだてを成就せんと、廣く各地をめぐりて資金をつのること數年、略。

くわ・る [加] (四・五) 3 加はる

《一ツール》

八82 落ちる時の勢が加はると、長い間には、思ひの外の事をする。雨だれでも石をうがつ。

十二62 イギリスの國旗は、略、更にアイルランドの加はるに及び、白地に斜赤十字の徽章ある其の國旗を合はせて、遂に今日の如き形式をなすに至れり。

十二65 生れつき烈しい氣性の上に、

年とともに老の氣短さが加はつて、ちよつとした事にも怒り易くなつてゐた。

くん ↓ あいさくくん・いしくん・うえだくん・おときくん・かとうくん・じゅんたろうくん・しようさくくん・なかむらくん・のだくん・はしもとくん・ひろたくん・ほしのくん・まるやまくん・まんぞうくん・みずのたけじろくん・やまぐちくん・よしおくん・よしのまんきくくん・りきまつくん

くん [軍] (名) 3 軍 ↓ いちぐん・えつぐん・げんぐん・さんぐん・そうぐん・たいきやくぐん・ベルギーぐん

九43 軍のおきてにしたがひて、他日我が手に受領せば、長くいたはり養はん。

十一23 やがて勝家また自ら五萬の兵を督し、來りて盛政の軍に合す。

十一28 秀吉の軍は、此の時既に處々のとりでより來れる守兵と合して、追撃すること頗る急なり。

くん [郡] (名) 1 郡 ↓ あおもりけんかみきたぐん・あきたけんかづのぐん

五78 昔の貧乏村は、今、郡の中でもゆびをりの金持村だと言はれてゐる。

くん [群] ↓ いちぐん
くんおん [君恩] (名) 1 君恩
九18 一命を捨てて君恩に報い

よ。』

ぐんがく 「軍楽」(名) 1 軍樂

十1293図 〈略〉、勇壯なる軍樂の調、

工場といふ工場、船といふ船の汽笛が一世いにあぐる歡呼の聲。

ぐんかん 「軍艦」(名) 8 軍かん 軍艦

四831 そばに乗つて居た人の話では、軍かんだといふことでした。

六122図 其ノ外、釘ヤ針ノヤウナ小サイ物カラ、キクワン車・軍艦ノヤウナ大キナ物マデ、皆鐵ガナケレバ造ルコトガ出来マセン。

七533図 汽船も軍艦も御存じでせう。

七819 カキハ又スグフェルモノデ、軍艦ヤ汽船ハ時々之ヲカキオトサナケレバナライホドデアル。

九609 東の空が明るくなると、今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壯大な姿が、だんくにあらはれて来る。

九617 軍艦の起床時間は、夏は五時冬は六時である。

九1144 或日我が軍艦高千穂の一水兵が、女手の手紙を読みながら泣いてゐた。

十一832図 いで、軍艦に組みみて、我は護らん、海の國。

ぐんかんき 「軍艦旗」(名) 4 軍艦旗

九669 午前八時になると、艦尾の旗竿に軍艦旗があげられる。

九672 〈略〉、艦長をはじめ乗員一同

は、皆姿勢を正して、軍艦旗に敬禮する。

九673 朝日にかゞやく軍艦旗が、海風にひらめきながら、しづくと上つて行く様は、〈略〉。

九675 軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は、〈略〉。

ぐんかんせい かつのあさ 「課名」 2 軍艦生活の朝

九目3 第十五 軍艦生活の朝

九607 第十五 軍艦生活の朝

くんくん (副) 1 くんくん

三221 犬ははなをくんくんいはせ、ををやたらにふつて、小二郎のそばへよつてきました。

ぐんぐん (副) 1 ぐんぐん

十1145 もりにつけた長い綱はぐんぐん引張られて、三百メートル許もくり出された。

くんこう 「勲功」(名) 1 勲功

十一1204 ジョージは、かねてウエリントン公爵が勲功も高く、りつぱな人物であるといふ事を聞いてゐたので、〈略〉。

ぐんこう 「軍功」(名) 3 軍功

七975 行長は清正の軍功をねたみ、〈略〉、清正のことを秀吉にざんげんしました。

七991図 たとひ數年の軍功がみとめられず、此のまゝ切腹を命ぜられても、石田めとは中直りは致さぬ。

七1084 秀吉は〈略〉、軍功の賞として、清正に名刀をあたへました。

ぐんこう 「軍港」(名) 1 軍港

九608 東の空が明るくなると、今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壯大な姿が、だんくにあらはれて来る。

くんしょう 「勲章」(名) 4 クンシャウ

ウ 勲章 勲章 ↓きんしくんしょう

二101圖 ミゴトニサイタ カキネノコギク、一ツトリタイ、キイ

ロナハナヲ、ヘイタイアソビノクンシャウニ。

五172図 をちさん、勲章がふえましたね。

五201図 其のいはれで、戦争の時、大きな手がらを立てた軍人に下さる勲章に、金の鶏をおつけになつたのだ。

五203図 此の勲章には功一級から功七級まである。

ぐんしらいぶ 「軍司令部」(名) 1 軍司令部

十772圖 此處には軍司令部や龍山停車場などがあります。

ぐんしん 「軍神」(名) 1 軍神

八993圖 〈略〉、旅順港外うらみぞ深き、軍神廣瀬と其の名残れど。

ぐんじん 「軍人」(名) 5 軍人

五201図 〈略〉、大きな手がらを立てた軍人に下さる勲章に、金の鶏をおつけになつたのだ。

六781 先生もゐれば、軍人もゐる。

七411 軍人をのせた御用船が今しも港を出ようとした其の時、〈略〉。

九389圖 閣下の劍は軍人の魂として少しも名譽をきずつてなかつた。

九1149圖 軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、其の有様は何事だ。

ぐんぜい 「軍勢」(名) 4 軍ぜい 軍勢

七189 手もとの軍ぜい二萬騎を引きつれて、たゞちに極樂寺坂へ向ひました。

七1059圖 大明の軍勢四十萬、勢はげしくおしよせたるに、〈略〉。

七1069圖 此の清正こそはまことの大将、四十萬の軍勢は此所へ向けよ。

十一278圖 夜に入れば、〈略〉、一萬五千の軍勢まつしくらに進軍して、夜半の頃には既に木之本に到着したり。

ぐんせん 「軍船」(名) 2 軍船

七195 又南の海上にはひしひしと軍船を浮べて、岸には大木がきりたふしてあります。

七212 すると、〈略〉、落ちて行く潮にさそはれて、賊の軍船はここごとく沖へ流れてしまひました。

ぐんたい 「軍隊」(名) 3 軍たい 軍隊

四807 昨日おとうさんと朝九時の汽車で、軍たいに居るにい

さんの所へ出かけました。

六四七回 軍隊へ来ても、學校でなま

けてゐた者は人一倍苦勞をする。

八七九回 軍隊や、裁判所や、外國と

のつきあひや、其の他いろ／＼の費

用になるのです。

ぐんたいがえり「軍隊帰」(名) 1 軍

隊歸

九六〇 分家の金次叔父さんは、軍隊

歸のたくましい腕で、すとい／＼と

打下す。

ぐんちょう「郡長」(名) 1 郡長

七四九 郡長をはじめ、見送の人々は

みんな泣いたといふことである。

ぐんとう「軍刀」(名) 1 軍刀

九〇八 中尉は「略」、一だん高く軍

刀をふりかざし、いつものはれ／＼

とした聲で、「略」と叫んだ。

ぐんば「軍馬」(名) 4 軍馬

九一〇 北風は「略」、見るからに強

さうな軍馬である。

九一〇 或年戦争が始つたので、北風

も外の軍馬と同じやうに、主人にし

たがつて戦地へ向つた。

九一四 東の空がほんのりと白む頃、

北風は外の軍馬と一所に、露營のテ

ントの前に、列を正して並んだ。

十二二六回 これ等の馬が日本全國に散

らばつて、或は軍馬になり、或は馬

車馬になり、或は耕馬になるのださ

うです。

ぐんばいうちわ「軍配団扇」(名) 1

ぐんばいうちわ

七四九 信玄は刀をぬくひまがない。

ぐんばいうちはでふせいだが、えが

折れて、肩先へ切りつけられた。

ぐんよう「軍用」(名) 1 軍用

十一六三 トラクターはちやうど軍用

のタンクのやうな形で、ガソリンの

發動機が取り付けである。

ぐんれい「軍令」(名) 1 軍令

十二三九 西郷は軍令を出して翌日の

進軍を中止させた。

くんれん「訓練」(名) 1 訓練

九六六 軍艦旗を仰いで、心の底まで

清められた乗員は、これから訓練に

取掛るのである。

け

け「毛」(名) 5 ケ 毛 ↓わたげ

三〇一 ネコデモソバヘクルト、

オヤドリハオコツテケヲサカ

ダテマス。

四一六 ワニザメハ「略」、白ウサギ

ノ毛ヲミンナムシリ取ツテシ

マヒマシタ。

八三四 うさぎの毛も間もなく白くな

るだらう。

九一〇 北風はたけが五尺二寸もある

黒馬で、毛はうるしのやうにつや

／＼しく、見るからに強さうな軍馬

である。

十八五 支那の豚の毛が輸入されて日

本でブラシに造られ、「略」。

け「氣」↓おじけ・しおけ・ゆげ

け「家」↓とくがわけ

げ ↓あやうげ・いそがしげ・うれし

げ・おもげ・かなしげ・せわしげ・た

のしげ・ひととなつかしげ

けい「計」(名) 2 計

十三三回「略」、范蠡といふ忠臣の助

を得て報復の計を立て、再び呉と戦

ひて遂に之を亡しぬ。

十一二回「略」天下を定むる三分の計、

たなそこの上に指すがごと。

けいあいす「敬愛」(サ変) 1 敬愛

す「一セ」

十二八回 村長は「略」、深く村民に

敬愛せられて、幾度の改選にも重ね

て選舉せられ、既に二十餘年勤続せ

り。

けい「敬意」(名) 1 敬意

十二六回 故に我等は、自國の國旗

を尊重すると同時に、諸外國の國旗

に對しても、常に敬意を表せざるべ

からず。

けい「経営」↓ようぎけい

けい「警衛」(名) 1 警衛

十二三三 警衛の兵士等は、安芳の姿

を見ると一時に押寄せて來たが、

「略」。

けい「一する」[経営] (サ変) 1 經

營する「一シ」

十一五三 マレイ半島・蘭領東印度等

には、日本人の經營してゐるゴム園

もたくさんある。

けい「一する」[警衛] (サ変) 1 警

衛する「一シ」

十二二八 屋敷の附近は、官軍の兵士

がすき間もなく警衛してゐる。

けい「経過」(名) 1 経過

十九二 醫師は皆、「略」、たゞ経過を

見守つてゐるばかりである。

けい「一しく」[警戒色] (名) 1 警

戒色

九二〇 此ノ類ノ色ヲ警戒色トイフ。

けい「一する」[警戒] (サ変) 1 警

戒する「一シ」

九六二 鉈門には、銃を手にした番兵

が近くを警戒してゐる。

けい「一計」[計画] (名) 2 計畫 計

畫

九二六 わたしも「略」、くはしく

計畫を立てた事もあるが、いろ

／＼の差支があつて、實行が出来ず

にしまつた。

十二八回 其の利益は、大部分を學校

の基本金とし、其の殘部を一村共同

の有益なる事業の費用にあつる計畫

なり。

けい「一する」[計画] (サ変) 1 計

畫する「一シ」

十三六 パナマ地峽に運河を造る事は、

數百年來ヨーロッパ人のしば／＼計

畫したところで、「略」。

けいかりょうこう 「経過良好」(形状)
 1 経過良好
 十一436 〇 しかし幸に経過良好にて、熱も凡そ二週間餘にて全く相去り申候。
 けいかん 「警官」(名) 1 警官
 十二307 〇 往來の頻繁な街上でも、よく警官の指揮に従つて、混亂することがなく、〈略〉。
 けいき 「景気」(名) 1 景氣
 九552 〇 〈略〉、毎朝引いて出た荷が、夕方には必ず空になるといふ景氣。
 けいぐ 「敬具」(感) 2 敬具
 十一429 〇 拜啓。〈略〉。先づは御見舞までかくの如くに御座候。敬具。
 十二122 〇 拜啓。〈略〉。先づは御無沙汰の御わびかた／＼近況御知らせ申上候。敬具。
 けいこ 〇 おけいこ
 けいこ 「警固」(名) 2 警固
 十1304 〇 京中の貴賤男女、此の行幸を悲しみて涙と共に見送り奉り、警固の武士もさすがによりほの袖をしぼりけり。
 十13210 〇 翌朝警固の武士ども之を見つけて、讀みかねて上間に達したり。
 けいこうてんのう 「景行天皇」(人名)
 1 景行天皇
 九99 〇 景行天皇の皇子日本武尊、〈略〉、東國の方に下り給ひき。
 けいさ 「埴砂」(名) 1 埴砂
 十一1219 〇 〈略〉、マスクをかけた職工

が埴砂にソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。
 けいさいぶ 「経済部」(名) 1 經濟部
 十二167 〇 しかして編輯局は更に編輯部・政治部・經濟部・〈略〉等に分れ、〈略〉。
 けいさく 「緊索」(名) 1 緊索
 十1284 〇 やがて工廠長のふりかざしたる金色の槌は、〈略〉、切斷臺上の緊索をはつと切る。
 けいさつしよ 「警察署」(名) 1 けいさつしよ
 四267 〇 町やくばも、けいさつしよも、いうびんきよくも、みんなのきらんぶが電とうにかはりました。
 けいさん 「計算」(名) 1 計算
 十二1215 〇 毎晩賣上高の勘定を致す時など、仲間のうちに計算は私が一番達者なりとて、何時もほめられ申候。
 けいしき 「形式」(名) 4 形式
 十二617 〇 イギリスの國旗は、今日の形式を具ふるまでに幾多の變化を重ねたるものなり。
 十二624 〇 〈略〉、更にアイルランドの加はるに及び、白地に斜赤十字の徽章ある其の國旗を合はせて、遂に今日の如き形式をなすに至れり。
 十二88 〇 討議の形式は、普通第一讀會・第二讀會・第三讀會の三度の會議を経ることになつてゐる。

十二89 〇 此處でも同様の形式で討議し、兩院の意見が一致すれば、最後に議決した議院の議長から國務大臣を経て奏上する。
 けいじさいばん 「刑事裁判」(名) 3
 刑事裁判
 十一205 〇 此の犯罪者を罰するための裁判を刑事裁判といふ。
 十一217 〇 裁判を行ふのは判事の職務であり、刑事裁判で、國家を代表して犯罪者の處罰を求めるのは検事の職務である。
 十一2110 〇 又〈略〉、刑事裁判では、不當な刑罰が加へられぬやうに被告を保護するために辯護士といふものがある。
 げいじゅつ 「芸術」(名) 1 藝術
 十二314 〇 此處はさすがに藝術の都として世界に聞えてゐるだけあつて、建物なども一般に壯麗です。
 けいじょう 「京城」(地名) 7 京城
 十735 〇 汽車で京城へ来る人は通常南大門驛で下りるので。
 十738 〇 京城の市街は、もと石でたゞんだ高い城壁で圍まれ、〈略〉。
 十748 〇 南大門通から本町通・鍾路通にかけての一帶が、京城での一番にぎやかな處です。
 十756 〇 〈略〉、此處からは京城の市街がまるで繪のやうに見えます。
 十767 〇 京城の西南部に龍山といふ處があります。

十769 〇 龍山はもと〈略〉小さな町であつたが、京城の發展するに連れて次第に廣がり、兩方が町續きになつて、今では龍山も京城の中に編入されたのださうです。
 十771 〇 〈略〉、今では龍山も京城の中に編入されたのださうです。
 けいじょう 「刑場」(名) 1 刑場
 十1003 〇 帝其の志の動かすべからざるを知り、之を刑場に送らしむ。
 けいじょうじんじや 「京城神社」(名) 1 京城神社
 十753 〇 此處には天照大神をおまつりした京城神社があり、又其の近くに朝鮮總督府があります。
 けいじょうのと么から 「課名」 2 京城の友から
 十目14 〇 第十三 京城の友から
 十7210 〇 第十三 京城の友から
 けいじょうゆうびんきよく 「京城郵便局」(名) 1 京城郵便局
 十763 〇 其の手前には朝鮮家屋で、其の又手前には朝鮮ホテル・朝鮮銀行・京城郵便局・天主教會堂などのりつばな洋館がそびえてゐる。
 けい・す 「刑」(サ変) 1 刑す
 十1003 〇 天祥刑せらるゝにのぞみ、從容としてはいく、「臣が事終る。」と。
 けいせい・する 「形成」(サ変) 1 形成する
 〇「スル」

十二608 図 今日一國家を形成する國々にして、國旗の制定せられざる所なし。

けいだい「境内」(名) 8 境内

八71「略」(名) 8 境内には、おびただしい見物人が、朝早くから宮の境内へつめかけた。

十一7 図 兩がはに木立すき間もなく茂りて、新しき宮の境内とは思はず。

十五3 図 此の境内は廣さ約二十二萬坪。

十一7 團員は、午前七時八幡神社の境内に集つた。

十一10 午後四時、豫定の仕事を終へて、再び境内に集つた。

十一8 間もなく神社の廣い境内にはいつた。

十二58 図 やがて打續く松並木の間を過ぎて境内に入り、先づ拜殿の前にぬかつく。

十二810 図 境内を出でて海岸に到る。

けいちよう「輕重」(名) 1 輕重
十一209 裁判は事件の輕重によつて、最初區裁判所又は地方裁判所で行はれる。

けいと「毛糸」(名) 3 毛糸

六748 図 「マダアリマセウ。」「毛糸デス。」

六751 図 毛糸デオッタ物ニハ、ドンナ物ガアリマスカ。

六762 図 イ、エ、ヤハリ毛糸デオツ

タ物デス。

けいばじよう「競馬場」(名) 1 競馬場

十一910 其の外各種の學校や、博物館・圖書館等の修養機關、公園・競馬場・劇場等の娯樂機關が到る處に散在してゐる。

けいばつ「刑罰」(名) 2 刑罰

十一202「略」、其の制裁としてどのやうな刑罰を受けるかは、法律で明かに定めてあるから、「略」。

十一2110「略」、刑事裁判では、不當な刑罰が加へられぬやうに被告を保護するために辯護士といふものがある。

けいふくきゆう「景福宮」(名) 1 景福宮

十七510 図 北の方の山のすそには、松林を後にして右に昌德宮、左に景福宮の壯大な構がある。

けいふくする「敬服」(サ変) 1 敬服する「一シ」

十二357 図「略」、彼等が大戦後における自國の疲弊を回復するため盛に活動してゐるのには全く敬服しました。

けいぶつ「景物」(名) 1 景物

五254「略」、店のしるしのついた手ぬぐひと物さしが景物にはいつてありました。

けいべんてつどう「輕便鐵道」(名) 1 輕便鐵道

十一169「略」、驛前で太宰府行の輕便鐵道に乗つた。

けいれい「敬礼」(名) 1 敬礼

九671「略」、衛兵隊は捧銃の敬礼を行ひ、艦長をはじめ乗員一同は、皆姿勢を正して、軍艦旗に敬礼する。

けいれいする「敬礼」(サ変) 3 敬礼する「一シ・スル」

九672「略」、艦長をはじめ乗員一同は、皆姿勢を正して、軍艦旗に敬礼する。

九1198 水兵は「略」、やがて手をあげて敬礼して、につこりと笑つて立去つた。

十一1206 ジョージは、「略」、帽子をぬいで恭しく敬礼して、さて靜かに口を開いた。

けおりもの「毛織物」(名) 1 毛織物

十868 又毛織物の原料になる羊毛は、我が國ではほとんど産しないから、「略」。

けが「怪我」(名) 1 けが

七256 塚の前に馬頭觀世音とほつた石が立つてゐて、其の前に時時新しい馬のくつが上つてゐる。これは馬がけがをしないうちに、馬方が上げるのださうだ。

けがす「汚」(五) 1 けがす「一サ」

九383 図 しかし部下の者は、最後までベルギーの名譽をけがさなかつたつもりである。

げきじよう「劇場」(名) 1 劇場

十一910 其の外「略」、公園・競馬場・劇場等の娯樂機關が到る處に散在してゐる。

げきする「激」(サ変) 1 激する

十二442「略」、最後は又急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で一ぱになつて、唯ぼうつとして、ひき終つたのも氣附かぬくらゐ。

げきぞうする「激増」(サ変) 1 激増する「一シ」

十一507「略」、近年ゴムの需要が激増したために、英國人はマレイ半島の領地にパラゴムの木を移植するに至つた。

げきやく「劇薬」(名) 1 劇薬

十95 方法は或劇薬を用ひる外になかつたので、フィリップは眞心こめて此の事を申し出た。

げきりゆう「激流」(名) 1 激流

十二1041 豊前の中津から南へ三里、激流岩をかむ山國川を右に見て、川沿の道をたどつて行くと、「略」。

げくう「外宮」(名) 1 外宮

六1046 図 昨日正午にこちらへ着いて、午後外宮へ参り、今日内宮へ参つた。

けさ「今朝」(名) 11 ケサ 今朝

二677 ケサウグヒスガウメノ木デ、ホウホケキヨウトナキマシタ。

三二八 〔略〕、ケサ コソ ニイサン
ヨリサキニ オキテ ミヨウト オ
モツテ、ソツト ネドコヲ 出マシ
タ。
三五四 ケサ オカアサン ガタマゴ
ヲ入レテ オヤリ ニナリマシタ。
六二六 今朝は大そう寒い。
七四八 聞けば今朝から五里の山道を、
わらちがけで急いで来たのださうだ。
七六五 〔あなたは今朝一人で川を
こした方ではありませんか。〕
九四九 囲 おとうさんは今朝も、
〔略。〕とおつしやつて、大そう元
氣です。
九八四 〔略〕 今朝遠足にとく起きて、
石屋の前を通りしに、〔略〕。
九八九 道雄が今朝起キテミルト、
〔略〕 父方、夜汽車デ歸ツタコロ
デアツタ。
一〇三九 〔略〕 あゝ、今朝はなか／＼寒い。
一〇九八 〔略〕 はうき手に／＼
此方をさして 語りつゝ来る若き
人々、今朝とく出でし兄も交れり。
げざん 〔下山〕(名) 1 下山
九九八 〔略〕 下山の時には、〔略〕、此の
雪溪をすべつて下る人があります。
けし けしけし
けしき 〔景色〕(名) 10 けしき 景色
三三六 あまりけしきがよいので、
れふしがばんやりと海をなが
めてゐました。
四八二 トンネルを出て、海を見

下した時には、いつ見てもよ
いけしきだと思ひました。
五五三 日本の國には、景色のよい所
がたくさんありますが、〔略〕。
五七四 晴れた日、月の夜、雪の朝、
いつ見てもよい景色です。
九六八 汽車が進むにつれて、關東平
野はだん／＼夜の景色にかはつて、
見なれた所も面白く感じた。
九七六 〔略〕、大そう景色のよい所で
あつた。
九八二 〔略〕 頂上に立つて四方をながめ
た景色は、全く雄大です。
一〇二九 〔略〕 目下滞在中のネーロ市
は、ブラジル國の首府にて非常に景
色よく、港としても有名な處に候。
一二三 〔略〕 世界の公園といはれてゐ
るスイスは、到る處我が日本のやう
に景色がよい。
一二六 〔略〕 久しく單調平凡な景色に
あきてゐた私には、如何にも心地よ
く眺められます。
けしこ 〔消粉〕(名) 1 消粉
八三三 さうして煙出から出る煙の色
で焼加減を見て、かまの外へ引出し
消粉をかけて消せば、かた炭が出来
上るのである。
けしゴム 〔名〕 1 消しゴム
一四九 〔略〕・消しゴム・〔略〕な
ど、數へてみるとゴムで造つたもの
は實に多い。
げじょ 〔下女〕(名) 2 下女

四四六 おかあさんが〔略〕、下女
や手つだひのものに、おさしづ
をして おはたらきになりました。
四四四 下女がびつくりして、「き
やつ」といつたので、〔略〕。
けす 〔消〕(五) 2 けす 消す
スーセ
五二七 〔略〕 だれがけすのか、虹の橋。
八三九 〔略〕、かまの外へ引出し、消
粉をかけて消せば、かた炭が出来上
るのである。
けずる 〔削〕(四・五) 2 ケズル け
づる 〔削〕
四九三 〔略〕、カンナデ板ヲケツ
ルモノモアリマス。
一〇二七 〔略〕 高德〔略〕、大いなる櫻の
幹をけづりて、大文字に詩の句を書
きつけた。
けた 〔柅〕(名) 1 けた
一〇一四 〔略〕 浮きぼり・毛ぼりの 柱
にけたに、振るひしのみで 巧
をきはめ、〔略〕。
けた 〔下駄〕(名) 2 下駄
八五七 〔略〕 下駄買ふ人も、賣る人も、
下駄屋にありし人は皆、彼の姿
を見送りぬ、〔略〕。
八五八 〔略〕、ハキ物屋ニ下駄・草
履・傘ナドト、大字ニテ目立ツヤウ
ニ記シタル看板ヲ出セルハ、ヨク人
ノ知ル所ナルベシ。
けたたまし 〔形〕 1 けたたまし

《一シ》
一〇二九 〔略〕 野路を行く人影 たゞち
にきえて、けたたまし、もずの音、
こずあはいづこ。
けたたましい 〔形〕 2 けたたましい
《一イ》
一四二 〔略〕、谷向ふのくさむらの中
から、けたたましい羽ばたきの音を
立てて、山鳥が一羽飛立つた。
一五五 〔略〕 ちやうど其の時、「ふかだ
く」といふ船長のけたたましい
叫び聲が聞えた。
けだもの 〔獸〕(名) 8 ケダモノ
二四二 〔略〕、トリヤケダモノヲ
イコロシテ、オモシロガツテキマ
シタ。
三七三 ムカシ鳥トケダモノガ
ケンクワヲシタコトガアリマ
ス。
三七六 〔略〕 私ハ鳥デモケダモノ
デモナイカラ。
三七二 ソノ中ニケダモノガカ
チサウニナツタノデ、〔略〕。
三七五 〔略〕 私ハカラダガネズミ
ニニテキルカラ、ケダモノダ。
三七六 ソノ中ニケダモノガカ
チサウニナツタノデ、〔略〕。
トイツテ、ケダモノノミカタニ
ナリマシタ。
三七七 ソノ時カウモリガケダモ
ノノ方ヘ行キマス、〔略〕。
三七四 〔略〕 「オ前ハケダモノダラ

ウ。

げたや「下駄屋」(名) 2 下駄屋

八56 8 図 角の下駄屋にあづけ置き、

自轉車を 角の下駄屋にあづけ置き、

すぐに老婆をみちびきぬ。

八57 7 図 下駄買ふ人も、賣る人も、

下駄屋にありし人は皆、彼の姿

を見送りぬ、〈略〉。

げつ「月」(名) 2 月 ↓いっかげ

つ・じゅうにかげつ・にさんかげつ

十一89 図 五日 月 立春 つちのとと

り〈略〉

十一89 図 三日 月 ○下弦後九時四十

七分水星東方離隔 つちのとう〈略〉

けっか「結果」(名) 7 結果 ↓こう

けっか

十一58 4 砲手はその結果を見るのを

おそれるやうに、手で顔をおほつて

大砲の上につつ伏した。

十一77 2 有名な古事記傳といふ大著

述は此の研究の結果で、〈略〉。

十一117 4 自治制も、之を運用する人

民に自治の精神が乏しければ、よい

結果を得ることは到底望まれない。

十二135 5 其の結果今日も尚國民は眞

の社交を解せず、人を信じ人を容れ

る度量に乏しい。

けつこう「結構」(形状) 1 けつこう

十65 3 図 ちやうど有合はせの粟の飯、

〈略〉、いかゞでございませう。」「そ

れはけつこう、頂きませう。」

十一43 3 図 尚又結構なる葛粉御送

り下され、御厚情の程深く謝し奉り

候。

げつこうのきよく「課名」 2 月光の

曲

十二目10 第九課 月光の曲

十二37 1 第九課 月光の曲

げつこうのきよく「題名」 1 月光の

曲

十二45 5 ベートーベンの「月光の

曲」といつて、不朽の名聲を博した

のは此の曲である。

けつして「決」(副) 15 決シテ 決し

て

七81 8 〈略〉、カキハ一度ツイタラ決

十17 6 馬も誠に從順で、けたりか

みついたりするやうな事は決してし

ません。

十93 5 図 「あの橋は危険だから決し

て渡つてはならぬ。」

十一22 3 裁判の目的は、決して人を

争はせ、又は人を罰することではな

い。

十一68 6 しかし火の利用法は、決し

てこれで完成したといふわけではあ

るまい。

十一115 2 市町村長や議員を選挙する

には、〈略〉、決して親族・縁故其の

他私交上の關係の爲に心を迷はずや

うなことがあつてはならない。

十一115 8 本當に自治の精神に富んで

ゐる者は、〈略〉、決して私心をもた

ないのである。

十一118 5 人が何と言つても決して

あけるな。

十一125 7 図 しかも其の巻數幾千の多

きに上り、これが出版は決して容易

事にならぬとは決して申されませぬ。

けつしようてん「決勝点」(名) 1 決

勝点

八9 3 さうしてそれが同時に決勝點

へ着いた。

げつしよく「月食」(名) 1 月食

十一90 3 僕はこれまで暦といふと、

〈略〉、祝祭日・土用・彼岸・入梅・

日食・月食が何時になるかといふや

うな事を見るものとはばかり考へてゐ

たので、〈略〉。

けっしん「決心」(名) 4 決心

九27 7 目に涙をいばいたためて聞いて

ゐた少年は、固い決心を顔にあらは

して、實行をちかつた。

十一57 6 ものすごい程青白くかはつ

た老砲手の顔には、決心の色が浮ん

だ。

十二93 1 父のいさめも妻のなげきも、

此の決心をひるがへすことは出来な

かつた。

十二93 7 〈略〉、彼の決心はどうして

も動かなかつた。

けっしんする「決心」(サ変) 5 決

心スル 決心する 《ーシ》

九123 5 道雄ハ誰ガ何ト言ツテモ、

〈略〉中村君ヲ選舉シヨウト決心シ

タ。

十9 5 此の有様を見て、フィリップ

といふ醫師が、一命をなげうつても

王を助けようと決心した。

十二66 2 王は其の治めてゐるイギリ

ア

ア

ア

ア

ア

ア

ア

ア

ア

ア

ア

ア

スを三分して娘たちに與へ、〈略〉、餘生を安樂に送らうと決心した。

十二94 彼は遂に「もう人にはたよるまい。自分一人で修行をしよう。」と決心して、或靜かな森へ行つた。

十二126 安芳は今日こそ最後の確答を得ようとして、西郷をおとづれたのである。

けっす「決」(サ変) 2 決す「シ―セ」

十二128 鐵眼こゝにおいて再び意を決し、喜捨せる人々に説きて出版の事業を中止し、〈略〉。

十二84 〇 コーニは〈略〉、しきりに止むれども林藏きかず、遂に同行することに決せり。

けっす「決」(サ変) 1 決する「シ―セ」

十二105 〇 さていろ／＼と思索したあげく、遂に心を決して、たとへ何十年かゝらばかれ、〈略〉、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、神佛に堅くちかつて〈略〉。

けっす「結束」(名) 1 結束

十二134 〇 萬世二系の皇室を中心として團結した國民は、かくていよく結束を固くし、熱烈な愛國心を養成した。

けっす「決着」(サ変) 1 決着する「スル」

十二129 〇 拙者は、此の談判がよし

どのやうに決着するにもせよ、さやうな事になれかしとは毛頭考へませぬが、〈略〉。

けっす「欠点」(名) 2 缺點

十二179 〇 しかしこれらの物は、受取る者にそれが不用であつたり、〈略〉、其の他いろ／＼の缺點がある。

十二111 〇 これ等の缺點なき電燈の出現は當時の人の最も希望する所なりき。

けっす「潔白」(名) 1 潔白 ↓

じゅんせい けっす

十二133 〇 あつさりしたこと、潔いことを好む我が國民は、其の長所として廉恥を貴び、潔白を重んずる美德を發揮してゐる。

けつよう「月曜」(名) 1 月曜

五14 〇 四月二十三日 月曜 晴

けつれい「月齡」(名) 4 月齡

十一89 〇 五月三十一日 通日 月齡

月出 月入

十一89 〇 九月三十日 通日 月齡

月出 月入

十一90 〇 こんな事を知るには『日出』『日入』『月齡』を見る。

十一90 〇 おとうさんが毎年潮干狩によい日を選ぶのも『月齡』を見て知るのだ。

けなげ「健気」(形状) 2 けなげ

十二26 〇 〈略〉。さあ、行きませう。

命を捨ててかゝつたら、救へないことはありますまい。」此のけなげな

言葉は遂に父を動かした。

十一107 〇 中にも十三四ばかりの子供が、各國人の間にまじりてかひなく立働ける様を見ては、如何にもけなげに存ぜられ候。

げなん「下男」(名) 2 下男

四5 〇 〈略〉、下男の太七がわらひながら、「〈略〉。」といったさうです。

六67 〇 或物持の所へ行くと、下男がまだ使へる小繩を捨てたと言つて、主人がひどくしかつてゐた。

げにや「害」(副) 1 げにや

十二103 〇 更に首を回らして南を望めば、〈略〉、其の南に一きは高く多武峯・吉野山の山々連なるを見る。

げにや「めぐるせる青垣山に、こもれる大和うるはし。」と歌ひしにそむかず。

けぼり「毛彫」(名) 1 毛ぼり

十一14 〇 浮きぼり・毛ぼりの柱にけたに、振るひしのみで巧をきはめ、〈略〉。

*けむ(助動) ↓ けん

けむだし「煙出」(名) 2 煙出

八31 〇 かまは〈略〉、前には三尺に一尺程のかま口を造り、後の方に煙出の口を明けるのである。

八31 〇 さうして煙出から出る煙の色で焼加減を見て、〈略〉。

けむり「煙」(名) 15 ケムリ けむり

煙もしおけむり・みずけむり

三44 〈略〉、エントツカラムクム

クトマツクロナケムリガ出マス。

三46 〇 あけると、箱の中から

白いけむりがばつと出て、〈略〉。

五38 〇 ちやうどかまを明けたところ

で、白いけむりが立つてゐました。

七28 〇 〈略〉、其ノ頃天皇ハ立上ル

煙ノ少キヲ見テ、民ノ貧シキヲハ

レミタマヒキ。

七28 〇 今ハ商工業サカンニシテ、

大工場多ク、エントツノ煙ツネニ空

ヲオホヘリ。

八33 〇 炭を焼く煙も所々に立ち

めた。

八29 〇 太郎は毎日炭を焼く煙を遠く

に見てゐるが、まだ一度も其所へ行

つて見たことがない。

八31 〇 さうして煙出から出る煙の色

で焼加減を見て、〈略〉。

八70 〇 此所は工業地で、煙突の煙

で空は眞黒だが、〈略〉。

九98 〇 淺間山は煙をなびかせて、

東南の空はるかにそびえ、〈略〉。

九107 〇 大空には、午後の日が大砲の

煙や砂ぼこりにさへぎられて、どん

よりとかゝり、〈略〉。

十84 〇 或日、〈略〉百姓が、たき

火をしてゐると、そばの黒い岩に火

がつき、煙をあげて燃出しました。

十120 〇 あちらこちらの村々からは細

い煙が立上つてゐる。

十一80 〇 〈略〉、煙たなびくと

まやこそ、我がなつかしき住家なれ。

十一121 シヤベルでざく／＼かきまぜると、白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、目も口もあけられない。

けむる「煙」(五) 3 けむる 煙る

六101 雨あがりの庭はほうつとけむつてゐました。

九343 みねからすそにかけての若々しいこずゑの色は、強い日光を浴びて、一面に煙つてゐる。

十一356 略、机によりかゝつて向ふの方をながめると、うね／＼と續く岡が雨に煙つて、ぼんやりと遠く見える。

けもの「獣」(名) 2 獣

七836 陸ノ獸ニ似タモノニハ、ラツコ・ヲツトセイ・アザラシナドガアリ、略。

十一679 燈火としては、初め松の木や魚・獸の油などをたいたたのであつたが、略。

けやき「樺」(名) 7 けやき けやおお

九347 うす紅のかへで、銀ねずみ色の櫓 黄の勝つた緑のけやき、どの木を見てもなつかしい。

十403 力藏さんも、略、昨日からひきかけてゐるけやきの大木を、大のこぎりでひき始めた。

十408 朝のうちに此のけやきだけぶつ倒したいと思つてね。」

十442 力藏さんのひいてゐたけやきの大木も、見事に根本から切倒された。

十二459 今其の主要なるものを擧ぐれば、略・けやき・栗・かし・なら・くぬぎ等なり。

十二481 けやき・栗・かしは何れも甚だ堅く、もくめこまやかなり。

十二482 中にもけやきはもくめ美しく、磨けば美麗なる光澤を生じ、又くるひ少きが故に裝飾材として珍重せられ、略。

けらい「家来」(名) 21 ケライ 家来 ↓こけらい

一501 イヌヲケライニシテイキマスト、サルガキマシタ。

一504 サルモダンゴヲモラツテケライニナリマシタ。

一512 キジモダンゴヲモラツテケライニナリマシタ。

二126 ベンケイハトウトウカウサンシテ、ウシワカマルノケライニナリマシタ。

二776 ライクワウノケライモ、シユテンドウジノテシタヲノコラズタイヂシテシマヒマシタ。

四628 げんじの大しやうよしつねは家来に向つて、「略。」とたづねました。

四634 其の時一人の家来がす

すみ出て、「略。」といひました。

四923 けれどもかたきのくどうは、略、いつも大ぜいの家来をつれて居ます。

六367 陸へ上つた時、家来が「略。」と申しますと、略。

六551 頼朝が木曾義仲をせめようとした頃、木曾の家来手塚太郎光盛の娘が頼朝に仕へて居りましたが、略。

七452 信玄の家来は之を見て、後からやりで謙信をついたが、あたらな

七1002 此の時清正は、地震と共にね起き、家来の者二百人に梃を持たせて、一さんに伏見の城へかけつけました。

七1041 御門を守る者は誰か。「加藤清正の家来でございます。」

八134 徳川家康が幼時家来に負はれて、安倍川原へ石合戦を見に行つた。

八138 家来があやしんで、其のわけをたづねると、略。

十二661 略、自分は百人の家来を連れて月代りに三人の娘の許に身を寄せ、餘生を安樂に送らうと決心した。

十二702 家来の中にはしきりに王をなだめた者もあつたが、王の怒はい

よく／＼つとつて、もうどうすることも出来ない。

十二711 リヤ王は百人の家来を連れ

て先づ姉娘ゴネリルの許に身を寄せた。

十二714 其の上王に百人の家来を五十人に減するやうにといつた。

十二731 そこでコーデリヤは夫に請うて其々に家来を連れてイギリスに渡つた。

十二733 家来は荒野にさまよつてゐたりヤ王を見附けて、コーデリヤの許に連れて來た。

けらいども「家来共」(名) 4 ケライドモ 家来ども

二736 ライクワウハケライドモト、山ブシニスガタヲカヘテ、

大江山へムカヒマシタ。

五826 略。」と、義家の家来どもはひやく／＼といひます。

七1018 上様をはじめ皆様、おしの下になつては居られぬかと存じ、家来ども二百人に梃を持たせてかけつけました。

七1036 略。」などと清正の家来どもが申します。

けり(助動) 14 けり 《ケリ・ケル・ケレ》

八818 器にはしたがひながら、いはほをも とほすは水の力なりけり。

十603 されど婦人は、略、僧をば待たせ置き、おのれは主人を迎へにとて外に出行けり。

十643 降積む雪に道を失ひ、進み

もやらずたゝずみたる様は、古歌に

《略》といへるにも似たりけり。

十706 〇 されどかくて何時まで留るべき身ぞと、心強くも立去りけり。

十729 〇 一同謹んで承る中に、常世は有難き身にしみ、喜にみちて御前を退きけりとぞ。

十1305 〇 《略》、警固の武士もさすがによろひの袖をしぼりけり。

十1313 〇 心ある者ども何れも同意しければ、さらばとて《略》舟坂山にかくれ、今かくと待ち奉れり。

十1313 〇 清正手早くかぶとのをを切つたりければ、かぶとはつゝじの枝に残つて、《略》。

十1447 〇 昔、泉州^{なかつ}堺のなにがし寺に、或畫師久しく寄食してありけるが、《略》。

十1462 〇 或夜小僧、住持の居間に來りて、「《略》。」とさゝやきければ、住持ひそかに行きて見るに、《略》。

十14610 〇 《略》、畫師は前の如く夜もすがら寝ねずして、明日はかく畫がかんなど獨言してゐたりければ、住持は尚知らぬ顔して過ししに、《略》。

十1808 〇 《略》、千里寄せくる海の氣を吸ひてわらべとなりにけり。

十221 〇 《略》 大空にそびえて見ゆるたかねにも、のぼればのぼる道はありけり。

十二255 〇 《略》 さし昇る朝日の如く、さわやかに もたまほしきは心なりけり。

ける「蹴」(五) 1 ケル 《ケツ》

四371 〇 モズハ《略》、フクロフノカホヲケツテ、「キイキイ」トカチドキヲアゲマス。

ける「蹴」(下二) 1 ける 《ケ》

十175 〇 馬も誠に從順で、けたりかみついたりするやうな事は決してしません。

けれども (接) 9 ケレドモ けれども

二653 〇 子牛ハコノアヒダウマレタノデス。モウヨホド大キクナリマシタ。ケレドモマダツノハハエマセン。

四918 〇 《略》、早く強くなつて、かたきを取らうと心がけました。

けれども かたきのくどうは、《略》、いつも大ぜいの家來をつれて居ます。

六807 〇 敵は高いやぐらのある大船、こつちはつり舟のやうな小舟であつた。けれども我が武士は、船の大小などは少しも氣にしなかつた。

七543 〇 どちらを向いても青い水ばかりです。けれども《略》、月夜には波が銀色に光つて、其の美しいことは何ともいひやうがありません。

七569 〇 《略》、船は今にも沈むかと思ふやうになります。けれども船は

なか／＼沈むものではありません。

七886 〇 マリーはどうかしてかくしてやりたいと思ひました。けれども貧しい木こり小屋で、戸棚一つもありません。

八115 〇 郷里の家は《略》、至つてせまい、そまつな家であつた。けれども刀・《略》など、武士の魂と呼ばれる物は、何時もきら／＼光つてゐたといふことである。

九542 〇 さうして全く無一物になつて、《略》。けれども社長さんは、それを少しも苦にしないで、《略》。

十二1095 〇 《略》、はては又村人全體が此の老僧から離れるやうになつた。けれども老僧は更にとんちやぐしな

い。

けれども (接助) 2 ケレドモ けれども

七817 〇 アハビハ岩ヲハナレテ動クコトガアルケレドモ、カキハ一度ツイタラ決シテハナレナイ。

十一967 〇 《略》、父に對して是非學校に入れてもらひたいと願つたけれども、父は《略》、なか／＼許してくれなかつた。

けるりと (副) 1 けるりと

九336 〇 すると木のうろから、栗鼠^{リス}が一匹、けるりとした顔を出したが、《略》。

けわし [陰] (形) 1 けはし 《ーシキ》

十1319 〇 さらば美作^{みまさか}の杉坂に待ち奉らんとて、けはしき山路をふみわけてたどり着きたりしに、《略》。

けわし・い [陰] (形) 2 ケハシイ

けはしい 《ーイ・ーク》

二743 〇 山ハケハシク、ミチハワカリマセンデシタガ、《略》。

六907 〇 楠木正成^{きふぎのただなり}が守つた千早城は、けはしい金剛^{きんぎょう}山上にはあるが、《略》。

けん [眞] (名) 5 縣 ↓ あおもりけんかみきたぐん・あきたけん・あきたけんかつのぐん・ふけん・ふけんしかい・ふけんしちようそんかいぎん・ふけんれい

八795 〇 一枚は縣の税で、一枚は國の税です。

八796 〇 これは縣の税で、縣立の學校や病院や、其の他道路などの費用になります。

八802 〇 國の税は勿論、縣の税も村の税もみんな大事なもので、《略》。

八805 〇 「縣や國の税も、村の役場へ納めれば、よいのですか。」

十一1133 〇 我が國の地方自治團體には、府・縣・市・町・村の別がある。

けん [劍] (名) 1 劍

九389 〇 閣下の劍は軍人の魂として少しも名譽をきずつけなかつた。

けん [軒] ↓ いっけん・いっけんや・さんげんや・しちはけん・にけん

けん [間] (名) 1 間 ↓ いちにけん・いっけん・いっけんや・さんげん

ん・さんしじっけん・さんじっけん・さんびやくはっけん・さんびやくけん・しごけんさき・しごじっけん・しちちけん・じっけんいじょう・すうじっけん・なんじっけん・にけんはば・にさんびやくけん・はちじっけん・はちじゅうまんけん・ひやくはちじゅうしけん・ろくしちじっけん・ろくじっけん・ろっけんはん

十1287 図 一秒又一秒、七百里に近き大船體は、寸、尺、間と音もなくすべり出づ。

けん「権」せんきよけん
けん「鍵」(名) 1 鍵

十二438 略、やがて指がピアノの鍵にふれたと思ふと、やさしい沈んだ調は、
けん (助動) 3 けん 《ケム・ケン》

十601 図 されど婦人は、氣の毒と思ひけん、僧をば待たせ置き、おのれは主人を迎へにとて外に出行きけり。

十二95 図 略、そのかみ此處にかめしく向ひあひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如く、
十二103 3 図 略、大宮人の櫻かざし紅葉かざして往來しけむ、今にして思へば唯一場の夢に過ぎず。

げん「元」(地名) 7 元

六796 博多の沖は見渡すかぎり、元からおしよせた船でおほはれた。
六802 元の兵は一人も上陸させぬと

いふ意氣こみで、濱べに石垣をきつて守つた。

十96 図 支那の宋朝の末、北方に元といふ國おこり、勢日々盛にして、宋の領地ををかし、
十98 1 図 たまぐ、元の大軍至るに及んで天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。

十99 1 図 今より心を改めて元に仕へば、富貴は意の如くならん。
十99 9 図 元の皇帝深く文天祥を惜しみ、ねんごろに諭して元に仕へしめんとす。

十99 10 図 元の皇帝深く文天祥を惜しみ、ねんごろに諭して元に仕へしめんとす。

げん「言」(名) 2 言い、いげん

十一67 図 孔子は正義の念強き人なりき。其の言にいはく、
十一76 4 老學者の言に深く感激した宣長は、

げんあんさま「元庵様」(人名) 2 元庵様

九227 図 それから元庵様・不昧軒様、二代つゞいて、其のお志をおつぎになり、一そう研究を進められた。
九25 1 図 略、元庵様はおもに氣候と農業との關係をお調べなされたが、

げんいん「原因」(名) 1 原因

十二135 9 すべて日本人の短所として、性質が小さく狭く出来たきらひがあ

る。其の原因はいろいろあらうが、
げんいんする「原因」(サ変) 1 原因する「ーシ」

十二51 10 これは主として周圍が山で、流れ込む川に大きいのがないのに原因してある。

けんか「喧嘩」(名) 1 ケンクワ
なまげんか
三73 3 ムカシ鳥トケダモノガケンクワヲシタコトガアリマ

げんかん「玄関」(名) 2 げんくわん
六98 2 圖 村の學校のげんくわんの向つて右の落葉松は、
七76 5 毎朝げんくわんへ出て、「誰か居るか。」と呼ぶと、いつも藤吉郎が眞先に出来た。

げんき「元氣」(名) 12 元氣
七25 9 馬はたいそう元氣のよい動物で、生れた日からすぐ歩く。

九62 1 やがて午前五時の鐘が鳴ると、當直將校が元氣のよい聲で號令をかける。

九75 3 黒・白・茶色、大小さまぐの馬が、林のかげや沼のほとりを元氣よくかけ廻つてゐる様は、實に勇ましい。

十15 10 やがて暮近くなつたので、一同は元氣よく團歌を歌ひながら、夕日を浴びて歸途についた。
十28 8 グレースの眞心こめた看護に

よつて、全く元氣を回復した人々は、
略、名残を惜しんで此の島を去つた。

十41 10 さうして兄は略、父のかり取つたあとを元氣よくつるはしで掘返し始めた。

十83 5 近づいて見ると、坑夫が汗だらけになつて、元氣よく石炭を掘つてゐます。

十一85 9 僕も急に元氣がなくなつて、一所に船上らうかと思つたが、
略。

十一97 5 學校は四哩餘りも離れてゐたが、略、毎日毎日元氣よく通學した。

十二39 1 薄暗いふそくの火のもとで、色の青い元氣のなさうな若い男が靴を縫つてゐる。

十二65 6 それに近來はめつきり元氣が衰へて、もう政務にもたへられなくなつて來た。

十二94 8 そこで彼は先づ近處の河に浴し、略、少女のさぐれた牛乳を飲んで元氣を回復した。

げんき「元氣」(形状) 5 元氣
六27 1 ひよりは元氣な鳥だ。
八66 6 図 アメリカ人の元氣なことは、これだけ聞いてもわかりませう。
九49 2 図 おとうさんは今朝も、
略、にいさんたちの分もわたしが働くのだ。」とおつしやつて、大

そう元氣です。

九50 4 社長さんは餘程の年よりらしいが、にこにこしてゐる元氣な方です。

十40 6 〈略〉、力藏さんは見向きもせず、元氣な聲で、「〈略〉。」と答へて、止めようとしめない。

けんきゅう 「研究」(名) 14 研究 ↓
じゅっけんきゅう

九22 9 〇 〈略〉、二代つゞいて、其のお志をおつきになり、一そう研究を進められた。

十46 5 研究の爲には、少からぬ費用もかゝる。

十47 1 喜三衛門はそれでも研究を止めようとしめない。

十49 8 彼は此の後も尚研究に研究を重ね、工夫に工夫を積んで、〈略〉。

十49 8 彼は此の後も尚研究に研究を重ね、〈略〉。

十一75 5 〇 そこで先づ順序として萬葉集の研究を始めたところが、何時の間にか年をとつてしまつて、〈略〉。

十一75 8 〇 あなたはまだお若いから、〈略〉、きつと此の研究を大成することが出来ませう。

十一75 10 〇 これは學問の研究には特に必要ですから、〈略〉。

十一77 1 〇 宣長は眞淵の志をうけつぎ、三十五年の間努力に努力を續けて、遂に古事記の研究を大成した。

十一77 2 有名な古事記傳といふ大著

述は此の研究の結果で、我が國文學の上に不滅の光を放つてゐる。

十二11 1 〇 〈略〉、人はなぜみんな鳥類の研究をしないだらうと思ふに思ふやうになつた。

十二11 5 〇 〈略〉、何時の間にか好きな博物學の研究が主となつてしまつた。

十二113 3 〇 こゝにおいて再び炭素線の研究に没頭したれども、徒に多くの時日と金錢とを費したるに過ぎざりき。

十二113 7 〇 エチソンは例の如く實驗室に閉ぢこもりて研究に餘念なかりしが、〈略〉。

けんきゅうす 「研究」(サ変) 1 研究す 《一せ》

十二114 5 〇 こゝにおいて彼は〈略〉、其のもたらせるものに就いて綿密に研究せしが、〈略〉。

けんきゅうする 「研究」(サ変) 5 研究する 《一シ・スル》

十一68 5 〇 人は生活上の必要から發火法を工夫し、燃料を研究し、〈略〉。

十一74 7 〇 私はかね／＼古事記を研究したいと思つてをります。

十一75 2 〇 私も實は我が國の古代精神を知りたいといふ希望から、古事記を研究しようとしたが、〈略〉。

十二13 9 〇 さうして廣く動植物を研究して、生物は〈略〉、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。

十二87 4 〇 〈略〉、彼は土地の事情を研究することを怠らざりき。

げんぐん 「元軍」(名) 4 元軍
十97 5 〇 天祥きかずしてはいはく、「我もとより之を知る。唯國家の危きを如何せん。」と。出でて元軍に當る。

十97 6 〇 然るに元軍の勢いよく盛にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝・皇后も遂に敵手に落ちぬ。

十97 8 〇 文天祥命を奉じ、各地に轉戦して元軍を破る。

十98 3 〇 時に宋の勇將張世傑よく戦ひて元軍を防ぐ。

げんこ 「言語」(名) 2 言語
十一9 3 〇 租界には皮膚の色の違い、言語・風俗の違つた幾多の人種が入交つてゐるので、〈略〉。

十一109 7 〇 〈略〉、次にをのを振るものが地ひゞきを打つて倒るる様壯快言語に絶し候。

けんこう 「健康」(名) 3 健康
八70 2 〇 此所は工業地で、煙突の煙で空は眞黒だが、大きな公園が幾つもあるから、健康には害がなさうです。

十一11 3 〇 王は間もなく健康を回復して、再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出来た。

十37 2 〇 〈略〉、幾萬の従業者の健康をはかつた事や、〈略〉など、一とし

てそれならぬものは無い。

げんこう 「言」(名) 1 言行

十一64 〇 〇 論語は、曾參と有若との門人等が孔子及び其の高弟の言行を集録したるものにして、〈略〉。

げんこう 「原稿」(名) 1 原稿
十二17 3 〇 〇 さて編輯部にては刻々集り來る原稿を選擇整理し、繪畫・寫眞等と共に之を印刷部に送る。

げんこうしめきりじこく 「原稿締切時刻」(名) 1 原稿締切時刻

十二17 9 〇 〈略〉、原稿締切時刻より刷出まで其の間僅かに數十分、以て其の如何に速なるかを知るべし。

げんこうにねんさんがつ 「元弘二年三月」(名) 1 元弘二年三月

十130 2 〇 〇 元弘二年三月、北條高時、後醍醐天皇を隠岐にうつし奉る。

けんこく 「建國」(名) 1 建國
十二64 〇 〇 かくの如く各國の國旗は、或は其の建國の歴史を暗示し、或は其の國民の理想・信仰を表すものなれば、〈略〉。

げんこく 「原告」(名) 3 原告
十一19 6 〇 〇 此のやうに、人々相互の間の訴訟を裁判するのを民事裁判といひ、訴へた方を原告、訴へられた方を被告といふ。

十一20 6 〇 〇 此の犯罪者を罰するための裁判を刑事裁判といふ。此の場合には訴へられた者が被告で、檢事といふ役人が原告に當るのである。

- 十一219 又民事裁判では、原告・被告の相談相手・附添人又は代理人となつて其の主張を助け、〈略〉ために辯護士といふものがある。
- げんこん 「現今」(名) 2 現今
- 十二6210 現今は星章の數四十八個なり。
- 十二1156 現今における電氣の利用は實にめざましいものです。
- げんざえもん ↓さのげんざえもんつねよ
- げんさんち 「原産地」(名) 1 原産地
- 十一536 こゝまでが原産地における仕事である。
- けんじ 「検事」(名) 3 検事
- 十一206 此の場合には訴へられた者が被告で、検事といふ役人が原告に當るのである。
- 十一218 〈略〉、刑事裁判で、國家を代表して犯罪者の處罰を求めるのは検事の職務である。
- 十一231 〈略〉、判事・検事・辯護士の任務は極めて重大なものといふべきである。
- げんじ 「源氏」(人名) 4 げんじ源氏
- 四612 屋島のたたかひに、げんじはをか、へいけは海で、向ひあつて居ました時、〈略〉。
- 四628 げんじの大しやうよしつねは家來に向つて、「〈略〉。」とたづねました。
- 六356 源氏の者どもは義經をかばひながら、「〈略〉。」「お捨てなさい。」と口々に言ひます。
- 六383 〇〇〇、此の弱い弓を取られて、「これが義經の弓だ。」などと言はれては、源氏の名折れになるからだ。
- けんじつ 「堅実」(名) 1 堅實
- 十二226 これ即ち世間の信用を博して堅實に自己の事業を發展させる道である。
- けんしん 「謙信」(人名) 8 謙信 ↓うえずぎけんしん
- 七436 ある時謙信が山の手陣を取つてゐると、〈略〉。
- 七438 謙信はそれをさとして、夜の間に進んで信玄の陣へ攻入つた。
- 七446 謙信は馬に一むちくれて、信玄の本陣に切りこみ、〈略〉。
- 七452 信玄の家來は之を見て、後からやりで謙信をついたが、あたらな
- い。
- 七453 力一ぱいに謙信の馬をなぐりつけた。
- 七458 第六回目にあたつて、信玄から謙信へ、「〈略〉。」と申しこんだ。
- 七465 謙信はこれに同意した。
- 七489 〇〇〇 約束の川中島は謙信に渡す。
- けんず 「猷」(サ変) 1 猷ず 《一ズ》
- 九4210 〇〇〇 『我に愛する良馬あり。今日の記念に猷ずべし。』
- げんずい ↓うだがわけんずい
- げんずる 「減」(サ変) 2 減ずる
- 《ジーズル》
- 六976 百騎にげ、二百騎にげして、はじめ百萬騎といつた賊も、しまひには十萬騎に減じ、〈略〉。
- 十二714 其の上王に百人の家來を五十人に減ずるやうにといつた。
- けんせつずる 「建設」(サ変) 2 建設する 《シースル》
- 十七9 〈略〉、當時世界に類のない大國を建設した英雄である。
- 十二134 東海の島に據つた日本は、國家を建設する上に頗る有利であつた。
- けんそんず 「謙遜」(サ変) 1 けんそんず 《シーシ》
- 十678 〇〇〇 「いや、名前を申し上げる程の者ではございません。」主人はけんそんして言はず。
- げんたく ↓おおつきげんたく
- ケンタッキーしゅう (地名) 1 ケンタッキー州
- 十一948 〈略〉リンカーンは、今から百年餘り前、ケンタッキー州の片田舎の貧しい家に生れた。
- けんちく 「建築」(名) 1 建築
- 十二478 〇〇〇 ひば・松・落葉松は何れも堅くして、耐久・耐濕の性あるを以て建築・土木・造船等其の用途頗る廣し。
- けんちくさい 「建築材」(名) 1 建築材
- 十二4610 然れども材の優良にして美麗なるは檜を以て第一とすべし。〈略〉、又よく濕氣に耐ふるが故に、建築材として最も重んぜらる。
- けんちよう 「建長」(名) 1 建長
- 十二284 〇〇〇 建長・圓覺 古寺の山門高き松風に、昔の音やこもるらん。
- げんてい 「元帝」(名) 1 元帝
- 十1006 〇〇〇 元帝歎じていはく、「文天祥は眞の男子なり。」と。
- げんどうりよく 「原動力」(名) 1 原動力
- 十二1159 〇〇〇 諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力もだんく電氣に變つて、〈略〉。
- げんに 「現」(副) 1 げんに
- 八929 げんに此の學校の卒業生で、商店の番頭になつてゐる者もあれば、裁縫の先生になつてゐる者もあるなどと話された。
- けんになふばつ 「堅忍不拔」(名) 1 堅忍不拔
- 十二1386 堅忍不拔あくまでも初一念を通すねばり強さが缺けてはゐないか。
- けんぶつ 「見物」(名) 1 見物 ↓うまいけんぶつ・コーヒーえんけんぶつ・とうきやうけんぶつ・につこうけんぶつ・まいけんぶつ
- 十168 〇〇〇 ちやうど此の頃、此所の名

物の馬市が始つてゐるといふので、今日は朝から、義雄君に案内してもらつて見物に行きました。

けんぶつ・する「見物」(サ変) 9 見物する「〜シ」

四八五 三人で町を見物しました。五五三 あたりの高い所からもながめますが、多くは舟に乗つて、島の間を通つて見物します。

六三九 昨日はとなり村から來てゐる歩兵の音吉君と二人で町を見物した。

六四〇 前回はなぜ自分の村の人と見物しなかつたかと思ふだらうが、〈略〉。

六四七 参拜をすましてから、京都へ出て、二三日見物して歸られるさうです。

九三八 殊に遊覧船に乗つて、頭から雨のやうなしぶきを浴びながら、瀧つぽを見物して廻るのは、實に壯快です。

九七六 松島は。「仙臺から三つ目の松島驛で下りるのだ。歸りに見物して行かう。」

一七九 此の間、九州三池の或炭坑を見物しました。

一二三〇 市街を見物して私の特に感心したのは、市民が交通道德を重んずることです。

けんぶつにん「見物人」(名) 4 見物人

八七一 〈略〉、祭の當日には、おびたらしい見物人が、朝早くから宮の境内へつめかけた。

八四九 つきそひの者や見物人はかけよつて來て、信作に水をはかせるやら、醫者を呼びに走るやら、〈略〉。

八三六 見物人は争つて、多勢の方へ行つたが、家康は小勢の方へ行くと命じた。

八五八 近年人々ノ生活次第ニイソガシクナリテ、見物人ノ外ハ、町ノ兩側ヲナガメテ、ユル／＼歩クガ如キ者ナシ。

けんぶつにんいちどう「見物人一同」(名) 1 見物人一同

八四七 越前守は早速門をしめさせて、見物人一同の所名前を書取らせ、さておごそかに、「〈略〉。」と申し渡しました。

げんべい「源平」(人名) 1 源平 十一三四 屋島・壇浦は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。

けんぼく「献木」(名) 1 献木 十六六 大方は國民の眞心こめたる献木にて、中には小學生の奉りたるものも少からず。

けんめい「賢明」(形状) 1 賢明 一二三六 支那・印度の文明を入れて、更に西洋の文明を入れて長足の進歩を成し遂げた日本國民は、賢明な機敏な國民である。

けんめい「懸命」(い) 1 けんめい

げんもん「鉋門」(名) 1 鉋門 九六二 鉋門には、銃を手にした番兵が近くを警戒してゐる。

げんや「原野」(名) 5 原野 九七九 陸中と陸奥との境にある幾つかのトンネルをくぐると、廣い原野がだん／＼に開けて來る。

十一六四 見渡す限り果もない原野に、放牧の馬や牛がう／＼と草をはむ様や、〈略〉様は、實にのどかである。

十一六九 當時此のあたりは未開の原野で、殆ど交通の便もなく、〈略〉。

十一一〇 原野は何處へ参りても果なき原野と森林とに候。

十一一〇二 原野は大い牧場にて、牛馬は放し飼にせられ居候。

けんやくとぎえん「課金」 2 けんやくと義捐 六目五 第十七 けんやくと義捐 六六五 第十七 けんやくと義捐

けんりつ「県立」(名) 1 縣立 八七九 これは縣の税で、縣立の學校や病院や、其の他道路などの費用になります。

げんりよう「原料」(名) 5 原料 一八八 又毛織物の原料になる羊毛は、〈略〉、オーストラリア・南部アフリカなどから輸入する。

一八七 又外國から原料を輸入し、それに加工して、更に外國へ輸出する

事も少くない。 十一四九 ゴムは、熱帶地方に産する或植物からとる白色の液を原料として、製造したものである。

十一五〇 ブラジル邊でゴムを製造するには、山野に自生するゴムの木から原料をとるのであるが、〈略〉。

十一二八 最初にはいつたのは原料を調合するところで、マスクをかけた職工が珪砂にソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。

こ

こ 一 コ 七二二 マとコ、ユとエ、レとン、〈略〉、ハと八等は書方にて間違ひ易し

こ「子」(名) 49 コ子 貝あかご・うじこ・おこ・おやこ・おんこ・グレースおやこ・さとこ・すずめこ・たけのこ・たつのおとしこ・ちのみご・われはうみのこ

一四六 〈略〉、モモガニツニワレテ、ナカカラオホキナヲトコノコガウマレマシタ。

一四七 オヂイサンハソノコニ、モモトラウトイフナヲツケマシタ。

三三 ぼうやはよい子だ、

ねんねしな。

三一九 図 「それではをとこの子で
すか。」

三六一 男の子三人はさきのは
をとつて、舟をこしらへました。

四一一 図 おやはかへして、子は
くれうつて、廣いたんぼの
麥まきすま。

四九七 私 は略、どういふ子
はどういふ人になるといふ
ことを見ぬきます。

五一五 図 大日本、大日本、神のみ
すゑの天皇陛下 われら國民七千萬
をわが子のやうに おぼしめされ
る。

五九五 図 もう此の子一人になりまし
たのに、近の中に又其の大蛇がたべ
にまゐります。

五七八 親のほねをりが子の時になつ
てあらはれたのであらう、略。

六二五 図 親が落ちれば其の子も落ち、
弟が落ちれば兄も落ち、略。

六九五 図 略、落葉松は、わたしの
子どもが植ゑたので、其の子はと
うに戦死した。

六九八 図 あの學校がたつた時、う
ちの島にあつたのを、死んだあの子
が掘取つて、かついで行つて植ゑ
たのだ。

六九二 図 あの子は十二、落葉松は
あの子のせいより低かつた。

六九三 図 あの子は十二、落葉松は
あの子のせいより低かつた。

あの子のせいより低かつた。

六九九 図 あの子がいくさに行く時に、
學校の前でふりかへり、「略。」

八一一 図 感心だ、感心だ。えらい子
だ。

八四八 徳川家康が大坂城を攻めた時、
其の子頼宣は戦が始つたと聞いて、
先陣へかけつけたが、略。

八六二 松平正綱の子信綱は幼名を長
四郎といつた。

八六六 図 「長四郎、雀の子を取つて
参れ。」

八七五 図 「雀の子がほしくて参りま
した。」

八三九 略、婦人は之を我が子のや
うに育てました。

八三六 図 其の子を二人の眞中に置い
て、兩方から子どもの手を取つて引
合へ。

八三七 図 勝つた方へ其の子を渡す。
八五九 図 略、さとすべき子に
さとされし、小さき悔をいだきつゝ、

八八三 信吉にはおとよといふ今年十
一になる女の子があるが、略。

八八四 図 あちらでも、あの子のこと
ばかりが、氣にかゝつてゐたのでご
ざいました。

八八七 図 私は三年ぶりに此の子にあ
ふのでございますが、略。

八八八 図 大將の父は略、自分の子
がかう弱虫の泣虫では、第一藩主に
對しても申しわけがない、略と

思つた。

九二八 略、此の老人こそは出羽の
國の醫者佐藤信季、少年は其の子信
淵である。

九四三 図 二人の我が子それぐ
に、死所を得たるを喜べり。

九六四 水兵はくもの子を散らすやう
に八方へ散つて、略、甲板洗を始
める。

九八二 略、たいそう北風をかは
がつて、まるで我が子のやうに大事
にしてゐた。

九八八 図 私には妻も子も有りません。
九八九 図 一人の子が御國の爲い
くさに出でし事なれば、定めて不自
由なる事あらん。

九八七 図 母も人間なれば、我が子
にくしとはつゆ思ひ申さず。

一〇二六 図 校長も着實温厚なる人にし
て、生徒を愛すること子の如く、
略。

一一五四 一人は老砲手の子である。
一一七〇 図 我は海の子、白波の
さわぐいそべの松原に、略。

一一八三 農場主は略、そばに居
た自分の子に、「略。」と言ひつけ
た。

一二〇二 図 よい子だから私の頼をき
いてくれ。

一二六七 図 「我もとよいいなみ奉
る心なし。我が子事代主とはかて答
へ申さん。」

一二五五 男の子と女の子である。

一二五五 男の子と女の子である。

一二五五 略、男の子はやがて仕事
臺の上の物をあれこれといぢり始め
た。

一二五五 女の子は唯じつと見まもつ
てゐたが、略。

一二五五 男の子は指先でそれをつま
まうとしたが、餘り小さいのでつま
めなかつた。

一二五八 略、女の子がそれを見附
けて、思はず「あら。」と叫んだ。

一二六八 図 唯私は子としての務を盡
くしたいと思ふばかりでございます。

こ「粉」 ↓きなきこ・くずこ・けしこ・
しるこ・とりこ

こ「個」 ↓しじゅうはつこ

こ「蚕」 ↓なつこ

こ「湖」 ↓ガツンこ・じんぞうこ・た
ざわこ・とわだこ・びわこ

こ「願」 ↓さんこ

こ「是」(代名) 3 こ

一一二六 図 こはたゝ事ならじと、尾
野路山の本營に急報すれば、略。

一一二六 図 略、こは如何に、降つ
てゐたる敵の大軍、木之本の邊に
満ちくたりと報じ来る。

一二二六 図 然れどもこは今日のアー
ク燈に類するものにして、略、實
用に適せず。

こ ↓かわりばんこ・まわりっこ

ゑがきこえます。

三34 四 〈略〉、五一ちいさんは

「〈略〉。」といつて、大きな手で
あたまをなでました。

三34 八 五一ちいさんはことし六
十九ださうです。

こいつ 「此奴」(代名) 1 こいつ
七92 二 四 さうして、「こいつ、かな
つんぽだな。」

こいのぼり 「鯉職」(課名) 2 鯉のぼ
り

五日7 六 鯉のぼり
五20 六 鯉のぼり

こいのぼり 「鯉職」(名) 2 鯉のぼり
六102 三 なるほど、去年鯉のぼりを立
てた時、しやうぶとよもぎを軒へさ
した。

八66 一 四 〈略〉、日本人の家には、鯉
のぼりが立ってあました。

こいぶつ 「御遺物」(名) 1 御遺物
十35 五 四 寶物殿に到りて御遺物を拜
観す。

こいわいのうじょう 「小岩井農場」
(名) 1 小岩井農場

九74 二 四 あのふもとに有名な小岩井
農場があるのだ。

こいんきよさま 「御隠居様」(名) 1
こいんきよさま

四62 二 四 「こいんきよさま、その
お年でつき木をなさるのです
か。」

こう 「工」(名) 1 工

六40 三 四 〈略〉、兵には歩・騎・砲・

工・輜重の五種があつて、〈略〉。

こう 「公」(名) 1 公 ↓ かんこう
十120 一 公は此處にうつされてから一
歩も外へは出ないで、三年の歳月を
送られたさうである。

こう 「功」(名) 1 功
九118 四 四 しかし今の戦争は昔と違つ
て、一人で進んで功を立てるやうな
ことは出来ない。

こう 「江」 ↓ おうりよくこう・こうほ
こう・こくりゆうこう・ようすこう

こう 「効」(名) 2 効
十99 五 四 父母の病あつければ、醫
藥の効なきを知りても、尚治療につ
とむるは人情の常にあらずや。

十二94 六 四 〈略〉、彼はいくら苦行をし
ても更に効のないことを知った。

こう 「港」 ↓ いちだいぼうえきこう
こう 「斯」(副) 34 カウ かう

三14 一 四 それでもまだあかちゃん
がなくときには、「〈略〉。」かう
いつて、だつこをして〈略〉。

三26 四 四 そこから竹の子が出る
のです。〈略〉私のせいより高
くなりました。かうのびてはと
てもたべられませんか。

四56 五 四 四 〈略〉かしのみが、し
ひを見上げてかういつた。「今
に見てゐろ、僕だつて、〈略〉。」

五50 五 四 此ノ頃ハ雨ガ降りツイテ、
〈略〉。カウ毎日降ル雨ハドウナツテ

シマフノデセウ。

五74 二 四 〈略〉、運の悪い時には悪いも
ので、其の年のつゆに、又土手がく
づれて、池のたまり水が村の中へお
し出した。かうなつては、もう庄屋
の悪口を言ふ者はかりで、〈略〉。

七56 六 四 航海といふものは、かうい
ふ面白いものですが、たまには恐し
い目にもあひます。

七73 七 四 「〈略〉。」かういつて、さつさ
と歸つて参ります。

七90 二 四 「しばらく、うちのおばあさ
んにおなりなさい。」かう言つて、
又大急ぎでおばあさんの着物を着せ
てやりました。

七96 六 四 「向ふむきになつて、此の
いすにかけていらつしやい。」かう
ですか。「あ、さうです。

七92 八 四 「よいあんばいだ。〈略〉。」と、
おとうさんは朝起きるとすぐ空を仰
いでかうおつしやつた。

八101 四 四 かうして三日たちますと、
耳は鳴り、目は暗み、手足はなえて
しまつて動くことが出来ず、顔の色
も青くなつて来て、からだに全く力
がなくなりました。此の時胃は一同
に向つて言ひました。「君等はかう
なることは知らなかつたのですか。

八106 六 四 すべてかういふやうに、手分
をして別々に仕事をすることを分業
といふ。

八111 四 四 〈略〉、自分の子がかう弱虫の

泣虫では、第一藩主に對しても申し
わけがない、〈略〉と思つた。

九76 10 四 東京から此所までは四百五
十六哩もあるのだが、かうたやすく
來てみると、そんなに遠い所に來た
やうな氣がしないね。

九105 六 四 北風は、主人の手がかうして
くびすぢにさはるのが何より好きだ
つたから、〈略〉。

九122 三 四 〈略〉、自分ノタフイ選舉
權ヲ棄テルトイフ事ハ、選舉人トシ
テカリソメニモスベキ事デハナイカ
ラ、カウシテワザ／＼歸ツテ來タノ
ダ。

十139 九 四 〈略〉、あなたのおとうさん
などと一しよに、よく道ぶしんに出
たものでした。」高橋さんは、お茶
を一口飲んで、「〈略〉。私どもの若
い時分には、かういふ仕事になると、
あなた方の半分ぐらゐしか働きませ
んでした。

十416 六 四 「壯吉、お前はおとうさん
のかつた雜木を、かういふ風に束ね
て運んでくれ。」

十66 八 四 私はもと鉢の木がすきで、
いろ／＼集めた事もありましたが、
かう落ちふれては、それも無用の物
好と思ひ、〈略〉。

十73 10 四 此の門が南大門です。京城
の市街は、もと石でたゝんだ高い城
壁で圍まれ、その處々にかういふ門
があつて、出入口になつてゐたのだ

さうです。

十124 1 図 かういふ點から、いろ／＼の美質をもつてゐることをよく見定めて、あの青年をやとふことにしたのです。

十一16 3 図 「本や帳面はどうしていらつしやいますか。」と尋ねてみると、〈略〉。「あすこに全部學年別にしておつてあります。」とおつしやいました。「成程、かういふ風に分類してそろへておけば、いつ取出すのにも便利だ。」

十一21 4 ところで、區裁判所の裁判に不服な者は地方裁判所に上訴し、尚其の裁判に不服な者は更に大審院に上訴する。又地方裁判所で行はれた最初の裁判に不服な者は、控訴院・大審院にと順次に上訴する。かういふ風に、三回くりかへして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、〈略〉。

十一37 5 図 早く問伐して細材を取る目的のところでは、一坪に二本も三本も植ゑるが、此の邊では太材を取る方が利益だから、かう間をおいて植ゑるのだ。

十一53 8 加硫法とは、ゴムに硫黄をまぜる事で、かうするとゴムが非常に弾力を増して来る。

十一87 5 「あゝ、五海里の海上を僕も泳ぎきることが出来たのだ。」かう思ふ瞬間、つかれも何も忘れてしまつて、〈略〉。

しまつて、〈略〉。

十一88 9 父は曆を持つて来て、「〈略〉。」かういつて弟の手に渡した。

十一91 8 図 かういふやうに、曆はわたしたちに日日の事を教へてくれる大切なものだ。

十一96 1 一家の暮し向は誠にあはれなもので、〈略〉。かういふ有様であつたから、リンカーンは十歳頃までは本を読むことなどは殆ど出来なかつた。

十一96 5 リンカーンは〈略〉。唯通りがかりの旅人から珍しい話を聞いては、僅かに心をなぐさめてゐた。かうしてゐるうちに、知識を得たいといふ彼の欲望は益々強くなり、〈略〉。

十一98 1 大事なことは拾ひ集めた木片などに書留めて忘れないやうにしておく。かういふ心掛であつたから成績は何時も優等であつた。

十二37 8 「あゝ、あれは僕の作つた曲だ。聴き給へ。なか／＼うまいではないか。」彼は突然かういつて足を止めた。

十二42 10 「まあ待つて下さい。」ベートーベンはかういつて、さつき娘がひいてゐた曲を又ひき始めた。

十二136 2 今日我が國が列強の間に立つて世界的の地歩を占めた以上、かういふ短所はやがて我が國民から消去であらうが、〈略〉。

こう「請」(四・五) 5 こふ 請ふ

「ウー・ヒ・フーへ」

八85 4 學校へ行つて案内をこふと、小使が出て来た。

十59 8 図 とあるあばら家の門口に杖を止めて、一夜の宿を貸し給へといへば、身なりはそまつなれど氣品高き婦人立出でて、「〈略〉。」とことわりぬ。

十61 4 図 僧は改めて主人に一宿をこへり。

十69 10 図 翌朝僧は暇をこひて又行くへ知らぬ旅に出でんとす。

十二73 1 そこでコーデリヤは夫に請うて其々に家來を連れてイギリスに渡つた。

こう「号」(名) 1 號 ↓きたかぜこう・でんいちこう・ビートルこう

十一16 10 聞けば、雑誌の類は號の順に並べておいて、取出したら後できつともとの場所へお入れになるのださうです。

こう「郷」↓さんじゅうよう・なかのこう

こうあん・する「考案」(サ変) 1 考案する「一シ」

十一78 4 此のやうに便利なものも、〈略〉便利を感じることもなく、又之を考案した昔の人々に對して別段感謝の念を起すこともない。

こうい「行為」(名) 1 行為

十29 3 娘の勇ましい行為は、歌に歌

はれ、其の肖像畫は到る處の店頭に飾られた。

こうい「厚意」(名) 2 厚意

九43 1 図 饌「我に愛する良馬あり。今日の記念に獻ずべし。」『厚意

謝するに餘りあり。

十67 4 図 主人は三本の鉢の木を切りてゐるりにたきぬ。僧は其の厚意を深く謝し、さて「〈略〉。」

こうい「皇威」(名) 1 皇威

十二61 3 図 〈略〉我が國の國旗は、最もよく我が國號にかなひ、皇威の發揚、國運の隆昌さながら旭日昇天の勢あるを思はしむ。

こうい「功」(名) 1 功

一級

五20 3 図 此の勲章には功一級から功七級まである。

こうえき「交易」(名) 3 交易

十二84 3 図 たま／＼コニーが交易のため大陸に渡らんとするに際し、林藏は〈略〉、切に己をとまはんとを求む。

十二87 2 図 デレンは各地の人々來り集りて交易をなす處なり。

十二87 5 図 コーニ等の交易は七日にして終りぬ。

こうえん「公園」(名) 6 公園 ↓いちだいこうえん

八70 2 図 此所は工業地で、煙突の煙で空は眞黒だが、大きな公園が幾つもあるから、健康には害がなさう

です。

十752 南大門の東南の方に南山といふ山があつて、公園になつてゐます。

十一910 其の外各種の學校や、《略》公園・競馬場・劇場等の娯樂機關が到る處に散在してゐる。

十一598 主な通にはアカシヤの並木が青々と茂つてをり、市街の中央を東西に貫ぬく幅六十間の大通は、むしろ公園ともいふべきもので、《略》。

十二359 世界の公園といはれてゐるスイスは、到る處我が日本のやうに景色がよい。

十二117 然れどもこは今日のアーケ燈に類するものにして、公園・街路等の照明用としては適當なれども、《略》。

こうえん 〔後援〕(名) 1 後援

十一116 公吏・議員等、直接間接に公共の事務に當る者は、《略》、一般の人民の後援がなければ自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。

こうえん 〔講演〕(名) 1 講演

十二115 二十五日午後一時から、《略》「電氣の世の中」と題する講演があつた。

こうおつ 〔甲乙〕(名) 2 甲乙

八88 始の間はあまり甲乙はなかつたが、《略》、もはや信作と耕造の二人だけの競走となつた。

十562 それは、豫め甲乙の二地をき

めて置いて、《略》、其の往來を利用するのである。

こうか 〔効果〕(名) 2 効果

十一1167 例へば教育・衛生等の自治團體の事業は、地方人民が一般に之を尊重し、之に協力することによつて、始めて其の効果を完全に擧げることが出来る。

十一1282 然れども鐵眼少しも屈せず、再び募集に着手して努力すること更に數年、効果空しからずして宿志の果さるゝも近きにあらんとす。

こうかい 〔後悔〕(名) 1 後悔

十二723 怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた王は、《略》。

こうかい 〔航海〕(名) 5 航海 ↓ えんようこうかい

七523 《略》太平丸の船長は、一日其の町の學校へまねかれて、航海の話なせり。

七531 私には年中航海をしてゐるものですから、少し其のお話を致します。

七566 航海といふものは、かういふ面白いものですが、たまには恐しい目にもあひます。

九859 それでも航海をする人などが、よく星を見て船の位置をはかるといふではありませんか。

十二129 此の航海によつて彼の博物學者としての基礎が十分に出来、一生の方針がはつきるときまつた。

こうがい 〔坑外〕(名) 2 坑外

十814 これは炭坑内の地下水を坑外へ汲出す爲で、《略》。

十855 坑外に出ると、急に夜が明けたやうで、《略》。

こうがい 〔港外〕 ↓ りよじゅんこうがい

こうかいぎよう 〔航海業〕(名) 1 航海業

七612 漁業や航海業に従事する人もあります。

こうかい・する 〔後悔〕(サ変) 1 後悔する 《―スル》

十964 太郎はつくぐと自分の惡かつた事を後悔すると共に、《略》。

こうかい・する 〔航海〕(サ変) 1 航海する 《―シ》

八758 「大洋を西へく」と航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がだらうか。」

こうかいのはなし 〔課名〕 2 航海の話

七目4 第十六 航海の話

七521 第十六 航海の話

こうがい 〔工学〕 ↓ むらさきこうがい

こうがい 〔好學〕(名) 1 好學

十一73 又きはめて學問に熱心にして、其の好學の念の切なる、「朝に道を聞くことを得ば、夕に死すとも可なり。」といふに至れり。

こうかてつどう 〔高架鉄道〕(名) 1

高架鐵道

八724 地上の鐵道には勿論、高架鐵道にも、地下鐵道にも、電車や汽車が終日終夜、休なしに運轉してゐます。

こうかん・する 〔交換〕(サ変) 1 交換する 《―スル》

十二1170 《略》、陸上でも海上でも、自由に消息を交換することが出来るやうになりました。

こうかんばん 〔後甲板〕(名) 1 後甲板

九64 《略》「兩舷直、整列。」のラツパが一きは高くひゞき渡ると、はだしのままの水兵が後甲板にはせ集つて、ずらりと整列する。

こうき 〔光輝〕(名) 1 光輝

十二137 我が國が世界無比の國體を有し、三千年の光輝ある歴史を展開し來つて、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、《略》。

こうき 〔好機〕(名) 1 好機

十二844 たま／＼コーニが交易のため大陸に渡らんとするに際し、林藏は好機至れりとひそかに喜び、切に己をともしはんことを求む。

こうき 〔香氣〕(名) 1 香氣

十二468 然れども材の優良にして美麗なるは檜を以て第一とすべし。光澤と香氣とを有し、《略》。

こうきよう 〔公共〕(名) 1 公共 ↓ ちほうこうきよう

十一115 公吏・議員等、直接間接に公共の事務に當る者は、〈略〉。

こうぎょう 「工業」(名) 1 工業

十一117 上海は専ら商業の都市として知られてゐるが、近時工業も次第に盛になつて、〈略〉。

こうぎょうかい 「工業界」(名) 1 工業界

十二115 諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力もだん／＼電氣に變つて、工業界の一大革新をうながしてゐます。

こうぎょうしん 「公共心」(名) 1 公共心

十一116 又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、皆公共心の發動であつて、〈略〉。

こうぎょうち 「工業地」(名) 1 工業地

八70 此所は工業地で、煙突の煙で空は眞黒だが、〈略〉。

こうぎょうば 「興行場」(名) 1 興行場

八61 芝居又は活動寫眞ナドノ興行場ニハ、繪看板アリ、〈略〉。

こうげ 「高下」(名) 1 高下

九46 スナハチ物ノ價ノ高下ハ、主トシテ需要ト供給トノ關係ニヨルナリ。

こうけい 「口径」(名) 1 口径

こうけい 「光景」(名) 6 光景

九106 戦場の光景は實に恐しいものであつたが、北風は〈略〉、びくともせずに勇ましく活動した。

十177 場に満ちたる十幾萬の拜觀者の胸は、まさに始らんとする進水式の壯快なる光景を豫想して、唯をどりにをどる。

十一109 伐倒したる木は乾くまで其のまゝに致置き、さて四方より火を放てば、天をもこがすばかりのほのほをあげて燃ゆる光景は、實にすさまじきものに候。

十二33 此のむざんな光景を御らんさない。

十二35 これはイギリスやフランスなどでは見られぬ光景で、私は今更ながらドイツ人の勤勉なのに驚きました。

十二79 三四十貫、時には百貫以上もある大まぐろがどたり／＼と船中へ投込まれる光景は、實に壯快の極みである。

こうけい 「皇兄」(名) 1 皇兄

十97 此において皇兄位をつぐ。

こうげき いかい いきこうげき・そうこうげき

こうけつ 「好結果」(名) 1 好結果

十二114 彼は直に竹を以て炭素線を作りて實驗せしに、豫想以上の好結果を得たり。

こうげん 「廣言」(名) 1 廣言

七106 「明國の使者、某の陣中に参り、〈略〉」などの廣言。

こうげん・する 「貢獻」(サ変) 1 貢獻する

十二137 我々は〈略〉、世界文明の上に大いに貢獻したいものである。

こうこう いかやこうこう

こうこう 「皇后」(名) 1 皇后

十97 然るに元軍の勢いよく盛にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝・皇后も遂に敵手に落ちぬ。

こうこう 「轟轟」(副) 1 轟轟

五85 夜明け方になつて、雨も風もやみますと、急に川水の音がこう／＼と聞えて來て、間もなく火の見で半しようをうち出しました。

こうこうしい 「神神」(形) 1 神々しい

十118 うやく／＼拜んでさて頭を上げると、神前の大きな神鏡が、きら／＼とかがやいてゐて神々しい。

こうこうしさ 「神神」(名) 1 神々しさ

十二7 水屋の水に手を清め口をすすぎて南神門を入れば、拜殿・廻廊など總べて白木造にて、神々しさとへん方なし。

こうこうへいか 「皇后陛下」(名) 1 皇后陛下

十179 皇后陛下の臨御と共に、式は始りぬ。

こうききゅう 「功五級」(名) 1 功五級

五18 功五級

こうこく 「廣告」(名) 2 廣告

十121 外國の或商會で、新聞紙に店員入用の廣告を出した。

十二16 編輯・營業の二局ありて、編輯に關することは前者之を司り、販賣・廣告に關することは後者之を擔當す。

こうこくする 「廣告」(サ変) 1 廣告する

五22 美しいびらで、一月も前から廣告してゐた島屋の大賣出しは、いよく今日からはじまりました。

こうさく 「工作」(名) 1 工作

十二47 〃もみは柔かにして工作に便なれば、諸種の箱を作るに用ひられ、〈略〉。

こうさく 「耕作」(名) 2 耕作

七26 第八馬 〃。又力が強いので、荷物をつけたり、荷車をひかせたり、田や畠の耕作に使つたりする。

十124 村の財産家にて事業に熱心なる人、みづから先んじて耕作・養蠶・養鶏・養魚等の模範をしめししを以て、近年は作物も改良せられ、〈略〉。

こうさくする 「耕作」(サ変) 1 耕作する

十一117 昔イギリスの或大きな農場

で、農場主が大勢の人の耕作するのを監督してゐた。

こうざん 「高山」(名) 4 高山 ↓
につぼんのこうざん

六五三 何しろ一万二千五百尺もあつて、内地第一の高山だから。

六五四 「それでは日本一の高山は。」

九一七 北國ニ住ム野ウサギヤ高山ノ上ニ居ル雷鳥ハ、
モルト、眞白ニナル。

九八七 「頂上に立つて四方をながめた景色は、全く雄大です。
いづれおとらぬ高山が、南から西へ連なつて、互に雄姿を競つてゐます。

こうざん 「鉱山」(名) 1 鉱山
九二四 「
たりする爲に、此の山中へ來たのである。

こうざん しょくぶつ 「高山植物」(名) 2 高山植物
九六八 いろいろの珍しい高山植物が紅・黄・紫と咲亂れて、何ともいはれないう美しさで。

九七二 「
は高山植物や雷鳥の繪葉書を、たくさん出して見せて下さいました。

こうざん・する 「降参」(サ変) 3 カウサンシル かうさんする 「一シ」
一五三 オニドモ ハカウサンシテ、ダイジナタカラモノヲダシマシタ。

二一五 ベンケイハトウトウカウサンシテ、ウシワカマルノケライニナリマシタ。

五八二 「
にかうさんしたてきの大將なのです。

こうし 「孔子」(課名) 2 孔子
二一四 第二課 孔子

こうし 「孔子」(人名) 7 孔子 孔子
二一四 支那幾千年の人物中、大聖として長く後人に敬はれ、徳化の

尚今日に著しきもの、孔子に及ぶはなし。

二一四 孔子は今より凡そ二千五百年前、當時の魯即ち今の山東省の地に生れたり。

二一五 當時「
となかりしかば、孔子大いに之をうれひ、
論語は、曾參と有若との門人等が孔子及び其の高弟の言行を集録したるものにして、
孔子は正義の念強き人なりき。

二一七 孔子常に中正不偏を貴び、「中庸は徳の至れるものなり。」といひ、
孔子は他人を正す前に先づおのれを正し、近きより遠きに及すを以て其の主義としたり。

こうし 「子牛」(名) 4 子牛 ↓おやうしとこうし

二六六 私ノウチニハオヤ牛ト子牛ガキマス。

二六七 子牛ハコノアヒダウマレタノデス。

二六八 オヤ牛ハ子牛ヲタイソウカハイガリマス。

二六九 オヤ牛ヲソトヘ出スト、子牛モツイテイキマス。

こうし 「孝子」(名) 2 孝子
六三 親を思ふ孝子の心には、頼朝もかんしんして、石のらうから唐糸を出して、萬じゆに渡しました。

二六七 昔からあつた孝子のどの人よりも厚い眞心をもつて、父上にお仕へ致します。

こうし 「工事」(名) 4 工事 ↓だいこうじ・なんこうじ
二七三 「
の人は普請方のさしづをうけてはたらい。

二七四 人の一心といふものはえらいもので、三度目に土手の工事はうまくいった。

二七五 パナマ地峡に運河を造る事は、數百年來ヨーロッパ人のしばしば計画したところで、實地に大仕掛の工事を行つた事もあつたが、成功を見るに至らなかつた。

二七六 最後にアメリカ合衆國は、國家事業として此の工事に着手し、
「
路、遂に之を造り上げたのである。

こうし 「小路」(名) 1 小路

六三三 豆腐屋ノラツバヤ煮豆屋ノリンガ小路ノオクニ聞エテ來テ、町ハダンノニギヤカニナツテ來タ。

こうし 「柑子」 ↓やぶこうじ
こうしちきゅう 「功七級」(名) 3 功七級

五二〇 功七級 此の勲章には功一級から功七級までである。

五二五 「をちさんのは功七級だ。」
こうしつ 「皇室」(名) 1 皇室

二一四 萬世一系の皇室を中心として團結した國民は、
こうじつ 「口実」(名) 1 口實

二一八 ところがリガンは、まだ父上を迎へる準備が整つてゐないといふのを口實にして、すげなくも王を内に入れなかつた。

こうして 「斯」(接) 17 カウシテかうして

五二二 低クテ廣イ所ニタマルト、池ノヤウニナリ、高イ所ニ行キアタルト、其所ヲヨケテ流レマス。カウシテ流レル水ハ、ミゾカラ小川ヘ、小川カラ大河ヘ、流レテ海ヘ行キマス。

五二四 「
小川カラ大河ヘ、流レテ海ヘ行キマス。雨水ハタマカウシテ流レルバカリデハアリマセン。

八〇八 さうしてそれから後は、耳は食事の知らせを聞いても、聞かない

ふりをし、目は食物を見ても、見ないふりをし、手は食物を口へ入れることを止め、足は食堂へ行くことを止めました。かうして三日たちますと、〈略〉、からだに全く力がなくなりました。

十152 図 しかし、此の間夜學を參觀した時の皆さんの熱心な様子や、今日の働を見て、大そう心強くなりました。私は此の村の青年諸君が、かうして修養にも實行にも、骨を折つてをられるのを、うれしく思ひます。

十284 親子は非常な危険ををかし、人々をボートに收容し、又あらん限りの力をオールに注いで、我が家へと向つた。〈略〉。かうしてボートは再び荒波を切りぬけて、燈臺に歸り着いたのである。

十346 船は〈略〉。しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。近づくと、門の戸びらは左右に開いて、船が中はいり、戸びらはしめる。上手にも水門があるので、船は大きな箱の中に浮いてゐる形である。底の水道から水がわき出て、船は次第に高く浮上る。と、上手の水門が開いて、船は次の箱の中へはいる。前と同じ方法で、船はもう一段高く浮上り、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。此の湖を横ぎると又水門があつて、船はさらに一段高くなる。かうして前後三段に上

つた船は、海面より約二十六メートルも高い水面に浮ぶのである。

十435 図 かうしてみんな手をそろへて働けば、來年の秋はもう眞白な蕎麥の花で、此の地面が埋まつてしまふのだ。

十475 喜三右衛門はそれでも研究を止めようとしなない。人は此の有様を見て、たはけとあざけり、氣ちがひと罵つたが、少しもとんちやくしなない。彼の頭の中にあるものは、唯夕日を浴びた柿の色であつた。かうして五六年はたつた。

十495 かうして柿の色を出す事に成功した喜三右衛門は、程なく名を柿右衛門と改めた。

十1016 図 此處は重に蘭の類を集めてある處だ。熱帯地方から持つて來たのだから、かうして年中六七十度以上の暖さの處に置かなければいけないのだ。

十一536 集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不純な物を取除き、次に薬品を入れて固まらせ、機械で薄くのして乾かすのである。〈略〉。かうして出來たゴムは、各國の工場に運んで加硫法を行ふ。

十一794 それで金屬を用ひることを思ひつき、形の上に種々の工夫をこらして、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。かうして出來た貨幣は極めて使用に便利ではあるが、尚場

合によつては持運びに不便なので、更に貨幣の代りになる紙幣といふ物を出出した。

十一991 熱心なリンカーンは、書物を持つてゐる人の所には遠近を問はず借りに行つた。さうして其の本の内容がすつかりわかつてしまふまでは何度でも讀む。かうしてイソップ物語やロビンソン、クルーソーや合衆國史等を讀んだ。

十二7810 〈略〉。そこで數そりの船に分乗した漁夫が、えんや／＼と掛聲を掛けながら身網を一方からたぐつて行く。かうしてだん／＼網の中が狭められるに随つて、まぐろは水面に渦巻を起したり、背びれを水上に現したりして泳ぎ廻つてゐる。

十二892 即ち第一讀會で其の案を大體に調査し、第二讀會で逐條に審議し、第三讀會で法律案全體の可否を議決する。かうして其の院で可決すれば、其の案を他院に移す。

十二1089 其の後は老僧と共に洞穴の中でのみを振るふ者もあり、費用を喜捨する者もあつて、仕事は大にはかどつて來た。しかし人は物にうみ易い。かうして又幾年か過すうちに、村の人々は此の仕事にあきて來た。

十二1103 老僧の〈略〉根氣は、遂に村人を恥ぢさせたものか、仕事を助ける者が又ぼつ／＼と出來て來た。

かうして、老僧が始めてのみを絶壁に下してからちやうど三十年目に、彼が一生をさへげた大工事が見事に成就した。

こうじまちく とうきようこうじまちく たけひらちやういち

こうしや 〔後者〕(名) 2 後者
十二166 図 〈略〉、編輯・營業の二局ありて、〈略〉、販賣・廣告に關することは後者之を擔當す。

十二622 図 〈略〉、先づイングランドとスコットランドと合するや、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、藍地に斜白十字の徽章ある後者の國旗とを合して一旗となし、〈略〉。
こうしや 〔校舍〕(名) 1 校舍
九781 〈略〉、めい／＼／＼身輕になつて、

こうしやく 〔公爵〕(名) 2 公爵
公爵 公爵 ウェリントンこうしやく
十一1202 図 私は公爵 ウェリントンだ。

十一1211 公爵はひどく此の答が氣に入つた。
こうしやく 〔公衆〕(名) 1 公衆
十二225 商人たる者は、〈略〉、廣く公衆の爲を計らなければならぬ。

こうしよ さいこうしよ
こうしよ 〔交渉〕(名) 1 交渉
十二1254 慶喜から官軍に對する交渉の全權を委任せられてゐた舊幕府の陸軍總裁勝安方は、〈略〉。

陸軍總裁勝安方は、〈略〉。

- こうじょう 「口上」(名) 1 口上
六87 象つかひが乗つてゐて、口上をのべては、らつばを吹かせたり、ごほんの上へ乗らせたりした。
こうじょう 「工場」 ↓だいこうじょう
こうじょう 「工場」 ↓こうば
こうじょう 「厚情」 ↓こうじょう
こうじょうちよう 「工場長」(名) 2
工場長 工場長
十127 海軍大臣の命名書朗讀、工場長の進水命令、略。
十128 図 やがて工場長のふりかざしたる金色の槌は、略、切斷臺上の繫索をはつと切る。
こうじょうく ↓ちほうこうじょうく
こうじん 「後人」(名) 1 後人
十一45 支那幾千年の人物中、大聖として長く後人に敬はれ、徳化の尚今日に著しきもの、孔子に及ぶはなし。
こうす 「航」(サ変) 1 航す「シ」
十187 図 歸途一行は黒龍江を下りて河口に達し、海を航してノテトに歸れり。
こうする 「航」(サ変) 1 航する
《一スル》
十35 10 運河は全長五十哩餘り、凡そ十時間前後で之を航することが出来る。
こうせい 「校正」(名) 1 校正
十二17 図 校正終れば紙型に取り、更に之をもととして鉛版を造り、印刷機にかく。
こうせいずり 「校正刷」(名) 1 校正刷
十二17 5 印刷部にては直に所要の活字を拾ひて之を組み、校正刷を刷りて校正部に廻す。
こうせいふ 「校正部」(名) 2 校正部
十二16 8 図 しかして編輯局は更に編輯部・政治部・略・校正部等に分れ、略。
十二17 5 印刷部にては直に所要の活字を拾ひて之を組み、校正刷を刷りて校正部に廻す。
こうせき 「鉱石」(名) 1 鉱石
十二9 10 ごく小さい時分から略、貝殻や鑽石などを室内に並べては一人で楽しんでゐた。
こうせん 「勾踐」(人名) 4 勾踐 勾踐
十132 8 圖 天、勾踐を空しうするなかれ。
十133 4 図 略、勾踐越の王となるに及び、呉の勢盛にして越軍大いに破れ、勾踐は呉に捕へられぬ。
十133 5 図 略、勾踐は呉に捕へられぬ。
十133 7 図 後からうじて歸國することを得しが、勾踐此のうらみ忘れがたく、略、再び呉と戦ひて遂に之を亡しぬ。
こうせん 「光線」(名) 1 光線
十二58 2 其の時、略、日光が店一ぱいにさし込んで来た。するとねちが其の光線を受けてぴかりと光つた。
こうそいん 「控訴院」(名) 2 控訴院 控訴院
十一20 9 裁判所は國家が設ける機關で、これに區裁判所・地方裁判所・控訴院・大審院の四階級がある。
十一21 3 又地方裁判所で行はれた最初の裁判に不服な者は、控訴院・大審院にと順次に上訴する。
こうぞう 「甲蔵」 ↓むらおこうぞう
こうぞう 「耕造」(人名) 4 耕造
八67 一人は信作、一人は耕造といつて、年は同じく十五歳。
八9 1 略、もはや信作と耕造の二人だけの競走となつた。
八10 3 耕造は驚いて、ひらりと馬からとび下り、略。
八11 3 耕造方の人々は耕造の肩をたゝいて、「略」などといつた。
こうそう 「豪壯」(形状) 1 豪壯 ↓ゆうだいこうそう
十一61 6 略、突如として眼前に展開せられた風景は、雄大といはうか豪壯といはうか、恐らく全道第一の壯觀であらう。
こうぞうがた 「耕造方」(名) 1 耕造方
八11 3 耕造方の人々は耕造の肩をたゝいて、「略」などといつた。
こうぞうさん 「耕造」(人名) 2 耕造さん
八12 4 図 耕造さんのおかげで、信作の命が助かりました。
八12 5 図 耕造さんの心掛は實に見上げたものです。
こうそん 「皇孫」(名) 2 皇孫
十二63 図 此の葦原の中つ國は皇孫之をしろしめすべし。
十二73 図 此の葦原の中つ國を皇孫にたてまつりて、とこしへに天つ日嗣を護りまつらん。
こうだい 「高大」(形状) 1 高大
十二7 10 図 千木のほとりを飛ぶ鳩の、さながら雀の如く見ゆるも、社殿の高大なる爲なるべし。
こうたいこう 「皇太后」(名) 1 皇太后 ↓ししょうけんこうたいこう
十4 10 図 昔の武藏野の姿を此所に残さんとの皇太后の思召のまゝに、今も人工を加へずといふ。
こうたいする 「交替」(サ変) 1 交替する「一スル」
十78 6 図 面白いのは、略、寒さと暖さがほとんど規則正しく交替することです。
こうたく 「光沢」(名) 3 光澤
十二46 8 図 光澤と香氣とを有し、略、又よく濕氣に耐ふるが故に、建築材として最も重んぜらる。
十二47 4 図 されど何れも美しき光澤を有するが上に、もみは略、つがは略。

十二482図 中にもけやきはもくめ美しく、磨けば美麗なる光澤を生じ、
《略》。

こうち 「高地」(名) 2 高地 ↓にひやくさんこうち

十一285図 明くれば二十一日の朝、盛政は賤嶽より西北に當れる高地に兵を引きまとめたりしが、《略》。

十一1034図 此のブラジル國は、《略》、中央の高地や海岸地方の大半は割合に涼しく、《略》。

こうちせいり 「耕地整理」(名) 1 耕地整理

十901図 耕地整理のあとつづく、並ぶ田の面に水きらめき、新道つたひ車重げに ひき来る馬のつく息白し。

こうちゅう 「甲虫」(名) 1 甲虫
十二119 或日彼が古木の皮をむくと、珍しい甲蟲が二匹ゐた。

こうちよう 「校長」(名) 4 校長
六1002圖 昨日學校で校長に、あの木の事を話したら、はじめて聞いた記念の木、大事にするとおつしやつた。

十12510図 校長も着實温厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く、
《略》。

十1261図 《略》、生徒も校長をしたふこと父母の如し。

十1262図 其の他の教員も、校長を模範として専心職務につとむるが故に、

生徒は皆よく之になつて課業にはげみ、《略》。
こうちようせんせい 「校長先生」(名) 1 校長先生

九801 ふと氣がつくと、校長先生と山田先生が、《略》僕等の仕事を見ていらつしやつた。

こうつう 「交通」(名) 2 交通
七301図 大阪神戸間ノ交通ノ便利ナルコト、東京横濱間ノ如シ。

十一629 當時此のあたりは未開の原野で、殆ど交通の便もなく、唯僅かに十勝川を上下するアイヌの丸木舟の便をかりるに過ぎなかつた。

こうつうじよう 「交通上」(名) 1 交通上
十一108 此の地は交通上重要な位置を占めてゐて、《略》。

こうつうどうとく 「交通道德」(名) 1 交通道德
十二306図 市街を見物して私の特に感心したのは、市民が交通道德を重んずることです。

こうつけ 「上野」(地名) 1 上野
十722図 其の返禮として加賀に梅田、越中(おちゅう)に櫻井、上野に松井田、合はせて三箇所(さんか所)の地を汝に授ける。

こうつと (副) 1 こうつと
四792 《略》、私が風の音をこうつとさせてやりましたら、送つて行く人が「《略》。」といひました。

こうてい 「坑底」(名) 1 坑底
十804 安全燈の取手(とけ)を握りしめて、じつと目をつぶつてゐるうちに、
《略》、地下九百尺の坑底に着きました。

こうてい 「皇帝」(名) 2 皇帝
十977図 然るに元軍の勢いよく盛にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝・皇后も遂に敵手に落ちぬ。

十999図 元の皇帝深く文天祥を惜しみ、ねんごろに論(ぎ)して元に仕へしめんとす。

こうてい 「高弟」(名) 1 高弟
十一63図 論語は、曾參と有若との門人等が孔子及び其の高弟の言行を集録したるものにして、《略》。

こうてき 「号笛」(名) 2 號笛
九625 《略》、傳令員は號笛を吹きながら、「總員起し。」と呼んで、つり床の間をぬつて行く。

十1282図 《略》、續いて造船部長の指揮につれて吹く進水主任の號笛を合圖に、着々と進み行く進水作業。
こうてんじよう 「格天井」(名) 1 格天井

十1116図 第二十一 日光山 《略》、丹青まばゆき 格天井に、心をこめたる 繪筆ぞにほふ。

こうとう 「口頭」(名) 1 口頭
七112図 取扱上不都合の廉あらば口頭又は無料郵便にて申越されたし

こうとう 「高等」(形状) 1 高等

十二141 《略》、生物は總べて長年月の間には次第に變化し、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。

こうどう 「坑道」(名) 3 坑道
十807 此處から方々へ坑道が通じてゐて、廣い坑道には、電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

十807 《略》、廣い坑道には、電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

十8010 坑道を少し行つて、ポンプ室の前に出ました。

こうどう 「講堂」(名) 2 講堂
七527図 「私も子どもの時には、《略》、あの運動場で遊んだり、此の講堂でお話を聞いたり致しました。

十二1154 二十五日午後一時から、學校の講堂で《略》講演があつた。

こうとうがっこう 「高等學校」(名) 1 高等學校
九712図 仙臺は東北第一の都會で、大學も高等學校もある。

こうどうする 「合同」(サ変) 1 合同する 《一シ》
十二619図 元來イギリスは、イングランド・スコットランド・アイルランド三國の合同して成れる國家にして、《略》。

こうない 「坑内」(名) 3 坑内
十823図 坑内には、ねずみがたくさ

- ん居て困ります。
- 十82 6 坑内に馬が居るのは不思議だと思つて、聞いてみると、これは石炭を運ぶために飼はれてゐるのだからです。
- 十85 6 坑外に出ると、急に夜が明けたやうで、〈略〉、あの坑内でたえず活動してゐる坑夫の仕事を、たふといものに思ひました。
- こうない「港内」(名) 1 港内
- 十一11 1 此の地は交通上重要な位置を占めてゐて、〈略〉、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。
- こうないふく「坑内服」(名) 1 坑内服
- 十79 8 事務所で坑内服に着かへ、安全燈を持つて、〈略〉。
- こうにん「後任」(名) 1 後任
- 九123 3 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長ガ轉校シタノデ、近々後任ノ選舉ヲスルコトニナツテキルノデアツタ。
- こうねん「高年」(名) 1 高年
- 十二98 2 釋迦は八十歳の高年に及んでも、なほ〈略〉、各地を巡つて道を傳へてゐたが、〈略〉。
- このののみちあり「河野通有」(人名)
- 1 河野の通有
- 六81 6 第二十一 神風 〈略〉。此の時河野の通有は、たつた小舟二そうで向つた。
- こうば「工場」(名) 17 コウバ 工場
- ↓いしやすこうば・ガラスこうば・しょこうば・せいしこうば
- 三2 7 コウバノキテキガナツテキマス。
- 三4 5 コウバデハモウシゴトガハジマツテキルラシイ。
- 四28 8 又町はづれに大きな工場のふしんがはじまつて居ます。
- 四29 3 これは大じかけでれんぐわをやく工場です。
- 四29 5 〈略〉、てつだうが私どもの町を通つて、工場の近くにいていしや場が出来るさうです。
- 五64 5 神明様のこちらにある白壁造の家は工場ですか。
- 五65 3 うちの繭もあの工場で生絲になつたはずだ。
- 六34 1 ベンタウヨサゲテ來ル女工ハ、サツキカラ汽テキノ鳴ツテキル工場へ急ゲノデアラウ。
- 九81 1 図鑑 〈略〉看板が 往來の人の目につきて、〈略〉、「あゝ、あの角の石屋か。」と、誰もうなづく工場あり。
- 九81 5 図鑑 石碑を刻む、文字をはる、槌音のみ音かしましき 廣き工場の片すみに、安ぢいさんはせぐくまり、〈略〉。
- 九84 3 図鑑 〈略〉、石屋の前を通りしに、廣き工場にたゞ一人、安ぢいさんは一心に 毘沙門天を刻みあき、〈略〉。
- 十129 3 図鑑 拍手かつさい、〈略〉、工場といふ工場、船といふ船の汽笛が一せいにあぐる歡呼の聲。
- 十129 4 図鑑 〈略〉、工場といふ工場、船といふ船の汽笛が〈略〉。
- 十一53 3 集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不純な物を取除き、次に藥品を入れて固まらせ、機械で薄くして乾かすのである。
- 十一53 7 かうして出來たゴムは、各國の工場に運んで加硫法を行ふ。
- 十一67 7 〈略〉、石炭の火は〈略〉、汽車や汽船や工場の重い機械を動かすのに大切なものとなつてゐる。
- 十二34 10 図鑑 〈略〉、又工場といふ工場には盛に黒煙が上つてゐました。
- 十二34 10 図鑑 〈略〉、又工場といふ工場には盛に黒煙が上つてゐました。
- こうば「耕馬」(名) 1 耕馬
- 十22 7 図鑑 これ等の馬が〈略〉、或は軍馬になり、或は馬車馬になり、或は耕馬になるのださうです。
- こうばい「紅梅」(名) 1 紅梅
- 十118 10 〈略〉、其の間に咲きかけの紅梅が點々と交つて美しい。
- こうはく「厚薄」(名) 1 厚薄
- 十二90 4 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。
- こうはく「紅白」(名) 1 紅白
- 十128 8 図鑑 艦首につるしたるくす玉ばつとわれて、紅白の紙片花ぶゞきの
- 如くに散る中を、〈略〉。
- こうはん ちちようこうはん
- こうはんせい「後半生」(名) 1 後半生
- 十二13 7 ダーウィンの後半生は病氣がちであつたが、〈略〉、七十四歳の長壽を保つことが出來た。
- こうびん「後便」(名) 1 後便
- 七40 6 図鑑 後便に又いろく申し上げませう。六月十五日 良助 愛作 君
- こうふ「坑夫」(名) 2 坑夫 ↓さいたんこうふ
- 十83 4 近づいて見ると、坑夫が汗だらけになつて、元氣よく石炭を掘つてゐます。
- 十85 7 〈略〉、あの坑内でたえず活動してゐる坑夫の仕事を、たふといものに思ひました。
- こうふく「幸福」(名) 2 幸福
- 十125 8 図鑑 村長は〈略〉、常に力を一村の幸福の爲に盡くすが故に、深く村民に敬愛せられて、〈略〉。
- 十一113 5 我が國の地方自治團體には、府・縣・市・町・村の別がある。
- 〈略〉、地方自治の精神に基づいて其の團體の幸福を進め、〈略〉。
- こうふく「幸福」(形状) 2 幸福
- 十二88 3 法律は、國家といふ共同生活、秩序ありかつ幸福なものにするための規則であるから、〈略〉。
- 十二90 6 我々は常に國法にしたがつ

鳥ガカチサウニナリマシタ。
スルトカウモリハ「私ハ羽ガ
アルカラ、鳥ダ。」トイツテ、鳥
ノ方ニツキマシタ。

三75 6 ソノ時カウモリガケダモ
ノノ方ヘ行キマス、ト、「オ前
ハ鳥デハナイカ。」トイツテ、
ナカマヘ入レテクレマセン。

三76 6 ソコデカウモリハシカタ
ナシニ、ヒルハ木ノウロヤ
アナノ中ニカクレテキテ、ク
ラクナツテカラ空ヲトビマハ
ルヤウニナツタトイヒマス。

こうや「広野」(名) 2 廣野

十一62 6 十勝川の流域一帯の廣野は
いはゆる十勝平原で、其の中心をな
すものは帶廣の町である。

十一65 3 はてしなく續く廣野の中で、
人々は〈略〉、土の香に親しんで樂
しげに働いてゐる。

こうや「荒野」(名) 3 荒野

九68 7 昔は一面の荒野であつたが、
今は方々に町や村が出来てゐる。

十二72 4 怒と失望と後悔とに身も魂
もくだけ果てた王は、我にもあらず
荒野の末にさまよひ出た。

十二73 3 家來は荒野にさまよつてあ
たりヤ王を見附けて、〈略〉。

こうよう「孝養」(名) 1 孝養

十二76 3 其の後老王はコーデリヤの
孝養によつて餘生を安樂に送つたと
いふ。

こうらい ↓こうらいあいなる
こうり「公吏」(名) 1 公吏

十一115 10 公吏・議員等、直接間接に
公共の事務に當る者は、〈略〉。

こうりてん「小売店」(名) 1 小賣店

九51 6 主人の家が大きな醬油屋
だつたので、始は近在の小賣店へ、
毎日々々、降つても照つても、おろ
しに歩き廻つたものださうだが、
〈略〉。

こうりよく「光力」(名) 1 光力

十二111 9 然れどもこは今日のアー
ク燈に類するものにして、〈略〉、室
内に用ふるには、大仕掛にして光力
強きに過ぎ、實用に適せず。

こうれい「号令」(名) 11 號令

九62 2 やがて午前五時の鐘が鳴ると、
當直將校が元氣のよい聲で號令をか
ける。

九62 4 「總員起し。」此の號令で、朝
の静かさが忽ち破られ、〈略〉。

九62 9 これから號令が雨のやうに下
る。

九63 5 〈略〉、千數百人の乗員が號令
にしたがつて、規律正しく活動する

其の様は、如何にも目ざましい。
九64 7 間もなく當直將校から威勢の
よい號令がかかる。

九103 5 やがて「進め」の號令がかゝ
ると、たゞ愉快にたゞ一生けんめい
にかけ出す。

九105 9 やがて中尉はちよつと腕時計

を見て、いつものやうにすんだ聲で
號令をかけた。

九110 8 北風はもう一度あの勇ましい
號令が聞きたいと思つて、〈略〉、左
右の耳をそばだててみた。

十一13 4 砲手の落ちついた力のこもつ
た號令に、船ははや方向を轉じた。

十一83 9 手や足の關節を曲げたり延
ばしたりして、出發の號令を待つ。

十一84 1 やがて「進め」の號令と
共に、三十人の一組は二列になつて、
順々に水の中へとはいつて行く。

こうれいさい ↓しゅうきこうれいさい
こうろ「航路」(名) 1 航路

十37 8 しかしパナマ運河の開通以來
は、此の不便が無くなり、したがつ
て世界の航路に大きな變動を生じた
のである。

こうわ「講話」(名) 1 講話

十二118 5 アメリカにおいては此の無
線電話の應用が極めて廣く、遠い處
の音楽・演説・講話などを居ながら
聞くことが出来る〈略〉。

こえ「声」(名) 64 コエ こゑ 聲

↓うなりごえ・おおごえ・かけごえ・
さけびごえ・ときのごえ・なきごえ・
ひとこえ・わらいごえ

一23 6 アチラニモ、コチラニモ、
ホタルヲヨブコエガシマス。

三3 8 「オウイ」トキドバタデ、
ニイサンノコエガシマス。

三5 6 メンドリハヘンナコエヲ
タテキマシタガ、〈略〉、タマ
ゴヲハラノ下ニダイテシマ
ヒマシタ。

三13 3 あかちゃんがなき出すと、
〈略〉かはいらしいこゑで、子も
りうたをうたひます。

三33 8 五一ぢいさんのうたふこ
ゑがきこえます。

三62 3 三みよ子「さあ、私がこゑ
をかけましたら、みなさん一しよ
に舟を出すのですよ。一、二、
三。」

四3 8 お宮のうらではすまふ
がはじまつてゐて、「わあわあ」
とはやすこゑがきこえます。

四23 3 おばあさんはもう耳が
遠いので、大きなこゑで、「おば
あさん、今日は。」といふと、
〈略〉。

四33 1 人のこゑも山の中
では、かべにあたつたごむまり
のやうに、かへつて來ること
があります。

四36 5 鳥ハ大キナコエデワル
口ヲイヒ、太イクチバシデツ
ツキマス。

四69 6 〈略〉、今でも山がらのこ
ゑをきくと、まだあれが生きて
居るだらうか、〈略〉と思は
ないことはありません。

五85 7 其の時表で水だくとさけ

ぶこゑがしましたので、二階のまどからのぞいて見ますと、〈略〉。

五86 7 団 うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、

〈略〉、どうすることも出来ませんでした。

六20 7 こんな時には、「これが五日もつづくと、ひばしだ。」と言ふれふしのこゑが、其所此所にします。

六31 7 其所此所ニハトリノコエガ聞エタ。

六101 8 〈略〉、手を出すと、〈略〉。」といふねえさんの聲がしました。

七30 9 団 獅子の目は火の如くにもえ怒りてさげぶ聲には、百獸おそれにげまどへど、蛇はますく強くしめつけたり。

七34 7 団 田の面は水の廣々と、蛙の聲もにぎはしく、谷あひの家窓明けて、夜に親しむ時は來ぬ。

七48 1 彦六が與五左衛門を組みふせた。武田方が之を見て、聲をあげて喜ぶと、與五左衛門は〈略〉。

七59 9 団 船長はかくいひて後、一だん聲をはり上げて、〈略〉。」とむすびたる時は、〈略〉。

七63 6 〈略〉、年よりや子どもは聲を立てて呼びますので、川べはひじやうなさわぎでございました。

七99 9 ところが或夜大地震が起つて、〈略〉、人々の泣叫ぶ聲は天地にひびきました。

八2 1 〈略〉、秋の山は小鳥の聲でにぎやかである。

八25 9 蕃人どもは聲を上げて泣きました。

八37 8 里親の方は「それ見よ。」といはぬばかりに、子どもを引きよせますと、越前守は聲をかけて、「〈略〉。」と申し渡しましたので、里親は恐れ入つたといひます。

八57 2 団 年の若きに感心な。」かくいふ聲を後にして、小ぞうは乗りぬ、自轉車に。

八87 9 〈略〉、先生はおとよに、低い聲でしかれた。

八88 2 するとおとよは、にごつた聲で、ゆつくりと、「わたくしのおとうさん。」と答へた。

八89 6 団 おとよ、わしの言つてることがわかるか。わしの聲が聞えるか。

八89 9 団 「いや、聲が聞えるのではありません。口の動き方を見てさとのです。」

八90 6 信吉は〈略〉、娘の耳に口をよせて、「〈略〉。」と大きな聲で言つたが、〈略〉。

九12 6 団 綿毛に包まれたるひよこども、小さき聲を立てつゝ、ちよこくとかけ廻る。

九35 9 それをじつと見送つてゐると、〈略〉。」と、聲をかけた者がある。

九59 7 赤いたすきを掛けた女たちがよい聲で歌をうたふと、〈略〉。

九62 2 やがて午前五時の鐘が鳴ると、當直將校が元氣のよい聲で號令をかける。

九68 3 「宇都宮」と驛夫の呼ぶ聲に、何時かおかあさんと日光見物に來た時のことを思ひ出した。

九79 9 あちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲。

九79 9 あちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲。

九89 6 団 信吉は感心して、熱心に空を仰ぎるしが、驚けるやうに聲をあげて、「にいさんく、〈略〉。」

九105 9 やがて中尉はちよつと腕時計を見て、いつものやうにすんだ聲で號令をかけた。

九108 6 中尉は〈略〉、いつものはれくとした聲で、「そら、もう一息だぞ。襲へく。」と叫んだ。

九111 1 ちやうど其の時、はるか遠方で味方の萬歳の聲がわき起つた。

九112 2 戦争なれた北風は、此の聲の意味をよく知つてゐた。

十21 1 団 其の間、買手の競争する聲と掛の人の聲と入亂れて、非常ににぎやかです。

十25 4 岩の上に残つた船體には、十

人許の船員がすがり附いて、聲を限りに救を求めたが、何のかひもなかつた。

十38 9 私は思はず、「やあ、すつかり變つた。」と聲をあげると、兄は〈略〉。

十40 6 〈略〉、力藏さんは見向きもせず、元氣な聲で、「〈略〉。」と答へて、止めようとしめない。

十41 3 何處からか、ほがらかなひよどりの聲が聞える。

十48 5 一番鶏の聲を聞いてからは、もうじつとしては居られない。

十63 6 団 主人は聲を限りに呼べど、はるかに行過ぎたる僧は、聞えぬにや、ふりかへらず。

十112 10 マストの上の見張人が不意に「鯨、鯨」と聲高く叫んで、北の方を指さした。

十114 2 「命中、々々。」一同は歡呼の聲をあげた。

十119 1 掛茶屋に休んで名物の餅を食べてゐると、不意にかん高い鳥の聲が聞えた。

十119 3 茶屋のおばさんに尋ねると、それは園内に飼つてある鶴の聲であつた。

十129 6 団 拍手かつさい、〈略〉、工場といふ工場、船といふ船の汽笛が一せいにあぐる歡呼の聲。

十122 2 団 鳴くやひばりの聲うらゝかに、かげろふもえて野は晴

れわたる。

十一565 老砲手は氣ちがひのやうになつて、「逃げろく。」と聲を限りに叫んでゐるが、二人の耳にははいらぬのか、〈略〉。

十一588 喜の聲はどつと起つた。

十二347 囲 私は今〈略〉、山鳩の聲さびしきベルダンの戦跡に立つてゐます。

十二384 ピヤノの音がはたと止んで、「略。」と、情ないやうにいってゐるのは若い女の聲である。

十二387 「そんなことをいつたつて仕方がない。〈略〉。」と兄の聲。

十二427 しばらくして兄は恐る恐る近寄つて、力のこもつた、しかも低い聲で、「一體あなたはどうか御方でございますか。」

こえだ「小枝」(名) 6 小えだ 小枝

三618 みよ子はささの小えだを手にもつて、土ぼしの上にたちました。

三646 みよ子はさつとささの小えだを上げて、「一ばんがち、五郎さんの舟。」

八502 果へ至つてソマツナモノデ、

〈略〉、タテ横ニ小枝ヲ並べ、其ノ上ニヤハラカナコケヲ置クダケデアル。

九187 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリ

ハ、〈略〉、體ヲナ、メニツキ出スト、形ガ桑ノ小枝ニ寸分違ハナイ。

九188 所ニヨツテ此ノ蟲ヲドビンワ

リト呼ンデキルノハ、農夫ナドガ小枝ト見違ヘテ、ドビンヲ掛ケ、落シテワルトイフ意味デアラウ。

十394 兄はそこらに散らばつてゐる木の根や、小枝などを拾ひ集めて来て、たき火を始めた。

こえゆ・く「越行」(四) 1 越え行く

《一ケ》

十二253 図 極樂寺坂越え行けば、

長谷觀音の堂近く、露坐の大佛おはします。

こえる「肥」(下) 1 肥える 《一エ》

八676 囲 〈略〉、此の州は合衆國の中

でも、氣候がよくて、其の土地味が肥えてゐますから、いろいろな農産物に富んでゐます。

こえる「越」(下) 3 こえる 越える 《一エ》

六573 二人は野をすぎ、山をこえ、

〈略〉、やうく鎌倉に着きました。

九744 汽車は野を過ぎ山を越えて進む。

十二653 リヤ王はもう八十の坂を越えた。

こーデリア「人名」 17 こーデリア

十二657 王にはゴネリル・リガン・

こーデリアといふ三人の娘があつた。

十二682 こーデリアは王が一番かはいがつてゐる娘であつた。

十二684 こーデリアは唯うつむいて、「父上、私はどう申し上げてよいか

わかりません。」

十二693 図 「どうしたのだ、こーデリア。何とか言方がありさうなものだ。」

十二704 こーデリアはすくく父

の許を去らなければならなかつた。

十二706 リヤ王はフランス王を其の場と呼んで、こーデリアを勸當したことを告げた。

十二708 しかしフランス王は一部始終をよくくきゝたゞして、こーデリアの簡単な答の中にも十分真心のこもつてゐるのを認め、〈略〉。

十二728 父の身の上を案じながらフランスに行つたこーデリアは、やがていたましい報知を得た。

十二7210 そこでこーデリアは夫に請うて共に家來を連れてイギリスに渡つた。

十二733 家來は荒野にさまよつてゐたリヤ王を見附けて、こーデリアの許に連れて來た。

十二736 こーデリアは眠つてゐる父の衰へ果てた姿をつくづくと見て、

〈略〉、よと泣きくづれた。

十二7410 やがて眠から覺めた王は、

〈略〉、そばに居るこーデリアを見て、

「略。」

十二752 図 笑つて下さるな、どうも

娘のこーデリアのやうに思はれてならぬが。

十二753 こーデリアは父の手を取つ

て泣きながら、「〈略〉。」

十二754 図 「其のこーデリアでございます。」

十二761 こーデリアはそれを聞いて腸をちぎられるやうな思がした。

十二763 其の後老王はこーデリアの孝養によつて餘生を安樂に送つたといふ。

こおとこ「小男」(名) 1 小男

六422 囲 分家の萬藏君などは小男だから、ひよつとすると輦重輸卒にあたるかも知れない。

ゴートとう「地名」 2 ゴート島

九2910 瀧は、落口にあるゴート島といふ小島の爲に二つに分れてゐます。

九3010 瀧の上手にかけた石橋を渡り、木立の深いゴート島に行つて、もうくくと立ちこめる水煙の間から近く瀧をながめるのもよく、〈略〉。

こおとり・する「小躍」(サ変) 2 こ

をどりする 小をどりする 《一シ》

九7710 これこそ僕たちが、一週間も前から、毎日々々待つてゐた命令だ

つたので、皆一せいに小をどりして喜んだ。

十494 「出来たく。」皿をさゝげた

喜三右衛門は、こをどりして喜んだ。

コーニ「人名」 4 コーニ

十二838 図 止むなく〈略〉、酋長

コーニの宅に留りてしばらく時機の至るを待ちぬ。

十二843 図 たましくコーニが交易の

ため大陸に渡らんとするに際し、林蔵は〈略〉、切に己をとまはんとを求む。

十二845 園 コーニは「〈略〉。」とて、しきりに止むれども林蔵きかず、遂に同行することに決せり。

十二855 園 文化六年六月の末、コーニ・林蔵等の一行八人は、〈略〉、デカストリー灣の北に上陸したり。

コーニら 「人名」2 コーニ等

十二875 園 コーニ等の交易は七日にして終りぬ。

十二877 園 此處にて林蔵はコーニ等に別れを告げ、同年九月の半ば、白主に歸着しぬ。

コーヒー (名) 3 コーヒー

十104 園 椰子・バナ・コーヒー・ゴムの木などは名を聞いてゐたが、實物を見るのは始めてである。

十一106 園 大勢の人々が熟したるコーヒーの實を手にてこき落し、之を集めてみぞに投入し候へば、〈略〉。

十一110 園 燃えあとは取片附けて畠とし、コーヒー・わたの木などを植付け申候。

コーヒーえん (名) 1 コーヒー園

十一107 園 コーヒー園には多くの日本人が働き居候。

コーヒーえんけんぶつ (名) 1 コーヒー園見物

十一106 園 昨日知人に誘はれてコーヒー園見物に出掛け候。

こおり 「氷」(名) 3 氷

六77 二三日ひどく寒かつたので、湖の水が大へんあつくなつた。

十86 氷は意外に冷たくて、まるで氷のやうであつた。

十90 園 耕地整理のあとつづくし、並ぶ田の面に氷きらめき、新道つたひ車重げに ひき来る馬のつく息白し。

こおりぐつ 「氷靴」(名) 1 氷靴

六78 2 みんな氷靴を着けて、思ひくくのすべり方をしてゐる。

こおりすべり 「氷滑」(課名) 2 氷すべり

六目8 第二十 氷すべり

こおりやま 「郡山」(地名) 2 こほりやま 郡山

十二102 園 大極殿の跡はるかに指點すべく、南の方郡山の町の東に羅城門の跡今も残りといふ。

十二102 園 こほりやま

こおりやま 「郡山町」(地名) 1

十二102 園 郡山町

ごおん 「御恩」(名) 1 御恩

九116 園 一命を捨てて君の御恩に報ゆる爲には候はずや。

佐野のわたりの雪の夕暮。といへるにも似たりけり。

十二100 園 〈略〉、一木一草に至るまでも歴史あり古歌あり、人をして低回する能はざらしむ。

こがい 「戸外」(名) 1 戸外

十二37 9 二人は戸外にたゞずんでしばらく耳をすましてゐたが、〈略〉。

こかい 「五回」(名) 1 五回

七45 7 川中島で前後五回戦つたが、まだ勝負がつかなかつた。

こかい 「誤解」(名) 1 誤解

十二135 7 そこで海外に移住しても外人から思ひ掛けぬ誤解を受けて排斥されるやうなことも起つて来る。

こかいほう 「御快方」(名) 1 御快方

十一41 園 しかし此の頃は、餘程御快方に向はれ候とか。

こかいり 「五海里」(名) 2 五海里

十一84 4 此の分ならば五海里や十海里は何でもない。

十一87 3 園 「あゝ、五海里の海上を僕も泳ぎきることが出来たのだ。」

こかげ 「木陰」(名) 2 木陰

火を放てば、天をもこがすばかりのほのほをあげて燃ゆる光景は、實にすさまじきものに候。

こがそん 「五箇村」(名) 4 五箇村

八6 1 それは氏子の五箇村から、子どもの騎手を一人づつ出して、〈略〉、勝つた子どもを出した村が、次の年のお祭の日まで、五箇村の頭になるといふ定めであつた。

八6 4 〈略〉、勝つた子どもを出した村が、次の年のお祭の日まで、五箇村の頭になるといふ定めであつた。

八7 8 五箇村の人々は各自分の村の騎手に向つて、〈略〉などと、口々に勢をつけてゐる。

八12 7 園 どうか今日から一年の間、あなたの方の村が五箇村の頭になつて下さい。

こがたな 「小刀」(名) 3 小刀

五16 7 海軍のをちさんが出でになつて、春子には糸葉書とリボン、僕には小刀とえんぴつをおみやげに下さいました。

十一52 3 切付といふのは、ゴムの木から液をとるために、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。

十一52 6 元來ゴム液は、〈略〉乳管組織といふ所から出るものであるから、此の組織の所まで小刀が届いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。

こがつ 「五月」(名) 2 五月

こがつ 「五月」(名) 2 五月

こがつ 「五月」(名) 2 五月

八659 園 おとうさんが着いた日は、
 ちやうど五月のお節供の日で、〈略〉。
 十二517 即ち水位の一番高い五月と
 一番低い一月との差は、僅かに三十
 ハセンチメートルに過ぎない。
 こがついつか 「五月五日」(名) 2 五
 月五日
 十108 園 五月五日 叔母よりさ
 ち子どの
 十一4210 園 五月五日 馬場要助
 春田延太郎様
 こがつだいさんじゅういちにち 「五月
 大三十一日」(名) 1 五月大三十
 日
 十一89 園 五月大三十一日 通日月齡
 月出月入
 こがつなか 「五月七日」(名) 1 五
 月七日
 八68 園 五月七日 父から 太郎ど
 の
 こがつにじゅうはちにち 「五月二十八
 日」(名) 1 五月二十八日
 四941 五月二十八日、〈略〉、二人
 はたいまつで道をてらしてく
 どののやかたへ向ひました。
 こがつようか 「五月八日」(名) 1 五
 月八日
 十一443 園 五月八日 春田延太郎
 馬場要助様
 こがに 「小蟹」(名) 2 コガニ
 一152 コガニガナイテ キマシタ。
 一194 コガニガサルノクビヲ

ハサミキリマシタ。
 こがねいろ 「黄金色」(名) 1 黄金色
 十二205 どれを見ても、枝といふ枝
 にはもう黄金色に色づいた實が鈴な
 りになつてゐる。
 こがねづくり 「黄金作」(名) 1 黄金
 作。
 七205 海神ねがはくは潮を退けて、
 道を開かせたまへと念じて、黄金
 作の太刀を取つて、海の中に投入
 しました。
 こがわ 「小川」(名) 7 小川
 三305 園 あねは手ばやくをを
 たてて、小川の水で手をあ
 らひ、〈略〉。
 三604 日の光がやはらかにさ
 して、小川の水はきれいにす
 きとほつてゐます。
 五298 園 うちの前には小川が流れ、
 舟もうかべば、あひるもうかぶ。
 五522 カウシテ流レル水ハ、ミゾカ
 ラ小川へ、小川カラ大河へ、流れ
 く、テ海へ行キマス。
 五523 カウシテ流レル水ハ、ミゾカ
 ラ小川へ、小川カラ大河へ、流れ
 く、テ海へ行キマス。
 九1013 たんぼの中程を流れてゐる小
 川は、いつもより水が多い。
 十934 其の近道といふのは田のあぜ
 道で、途中にはかなり深い小川にか
 け渡した一本橋がある。
 こがんせん 「湖岸線」(名) 1 湖岸線

十二507 湖岸線は大體單調であるが、
 東南岸だけは〈略〉や、複雑になつ
 てゐる。
 こき いねこき・ねこき
 こき 「語氣」(名) 1 語氣
 十685 園 「略。」といひて目をふせ
 し、主人はやがて語氣を改めて、
 「かやうに落ちぶれてはゐるものの、
 御らん下さい、〈略〉」。
 こきおとす 「扱落」(四) 1 こき落
 す 「一シ」
 十一106 園 大勢の人々が熟したる
 コーヒーの實を手にてこき落し、之
 を集めてみぞに投入れ候へば、〈略〉。
 こきかえる 「漕帰」(五) 1 漕歸る
 《一ツ》
 十二7910 船がまぐろで一ぱいになる
 と、〈略〉、えつさくと陸の方へ漕
 歸つて来る。
 こぎく 「小菊」(名) 2 コギク
 二93 園 ミゴトニサイタ カキネ
 ノコギク、一ツトリタイ、キイ
 ロナハナヲ、〈略〉。
 二103 園 ミゴトニサイタ カキネ
 ノコギク、一ツトリタイ、マツ
 シロナハナヲ、〈略〉。
 こぎげん 「御機嫌」(名) 1 御きげん
 七986 ところが長盛がろくくあい
 さつもせず、石田と中直りをしなけ
 れば太閤の御きげんは直るまいと申
 しました。
 こぎだす 「漕出」(五) 1 こぎ出す

《一シ》
 四614 〈略〉、へいけ方から舟を
 一そうこぎ出して來ました。
 こきゅうする 「呼吸」(サ変) 1 呼
 吸する 《一シ》
 十一654 はてしなく續く廣野の中で、
 人々は自由な大氣を呼吸しながら、
 土の香に親しんで樂しげに働いてゐ
 る。
 こぎゆく 「漕行」(四) 1 漕ぎゆく
 《一ク》
 十二818 園 船頭勇まし、此の潮筋を
 落し漕ぎゆく、木の葉舟。
 こきよう 「故京」(名) 1 古京
 十二1023 園 今若草山に登りて古京の
 跡を展望すれば、〈略〉。
 こきよう 「故郷」(名) 4 故郷
 十二973 續いて釋迦は〈略〉、父
 王・妻子を始め國民を教化して故郷
 の恩に報いた。
 十二1231 園 かもめ飛ぶ海をすべり
 て、船は今靜かに歸る、懐かしき
 故郷の港。
 十二1238 園 〈略〉、つゝがなく今
 日しも果てて、船は今靜かに歸る、
 懐かしき故郷の港。
 十二1245 園 〈略〉、うづたかき積
 荷の中に 海山の實を載せて、船
 は今靜かに歸る、懐かしき故郷の
 港。
 こきょうくん 「御教訓」(名) 1 御教
 訓

十二(121)ノ(國)主 (略)、何事も忍耐が第一とのかねての御教訓に従ひ、一心に働き候ため、(略)、仕事に興味を覺ゆるやう相成り申候。

ごきようだい 「御兄弟」(名) 1 御兄弟

十(106)ノ(園)主 男ばかりの御兄弟の中に此の度始めて妹を得られ候事、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

こぎれ 「小切」(名) 1 小切

五(23)8 入口の左手には、小切やえりや帯あげなどがたくさん下げてあつて、それを見てゐる人も大ぜいあります。

こく 「国」 ↓アメリカがつしゅうこく・アルゼンチンこく・イングランドスコットランドアイルランドさんごく・えいこく・がつしゅうこく・がつしゅうこくし・すうこく・にこく・にちえいべいさんごく・につぽんこく・につぽんこくじゅう・ブラジルこく・べいこく・マガダこく・みんこく・ろくじゅうよこく

こく 「刻」 ↓こくいっこく

こくぐ 「漕」(四・五) 5 コグ こぐ

漕ぐ 《イー・ギ》

二(56)5 窓 ハイ、コレハセンドウサン、ナガイ竹ノサラデフネ

ヲ コギマス。

八(82)6 窓 大工の家を建て、左官の壁を塗り、船頭の舟をこぎ、農夫の田畑を耕すも、皆手の働なり。

十27ノ 親子は死力を盡くして漕ぎに漕いだ。
 十27ノ 親子は死力を盡くして漕ぎに漕いだ。
 十二8310 網をすき、舟を漕ぎ、漁業の手傳などして土人に親しみ、さてさま／＼の物語を聞くに、〈略〉。
 ごく【獄】(名) 1 獄
 十98 天祥はいく、〈略〉。事既にこゝに至る。天祥唯死せんのみ。』と。遂に獄に投ぜらる。
 ごく【極】(副) 3 ゴク ごく
 七849 コンナ所ニハ、動物モゴクマレデ、植物ハ全クナイガ、〈略〉。
 十776 こちらへ來てもう三月餘りになります、が、〈略〉、雨といふものはごくたまにしか降りません。
 十二99 チャールス、ダーウインは今から百年餘り前イギリスに生れた。ごく小さい時分から動植物に深い趣味を持ち、〈略〉。
 こくいっこく 【刻一刻】(副) 1 刻一刻
 十11410 綱を次第々々にくりもどすと鯨は刻一刻船に近よつて来る。
 こくうん 【国連】(名) 3 國連
 十一1141 略、地方自治の精神に基づいて其の團體の幸福を進め、國連の發展を期することは皆同じである。
 十二237 即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、〈略〉貿易の不振を招き國連の發展をもさ

またげることになる。

十二613 ㊦ 雪白の地に紅の日の丸を
ゑがける我が國の國旗は、最もよく
我が國號にかなひ、皇威の發揚、國
運の隆昌^{きやうしょう}さながら旭日昇天の勢あ
るを思はしむ。

こくえん 〔黒煙〕(名) 3 黒煙

十一119 上海は〈略〉、近時工業も
次第に盛になつて、〈略〉其他の
諸工場が勢よく黒煙を立ててゐる。

十一346 ㊦ 瀬戸内海の沿岸には
〈略〉等良港多く、汽船絶えず通航
して、遠く近く黒煙の青空にたなび
くを見る。

十二357 ㊦ 汽車でドイツの國內には
いつたのは朝まだほの暗い頃でした
が、〈略〉工場といふ工場には盛に
黒煙が上つてゐました。

こくおう ↓マガダこくおう

こくこ ↓じんじょうしょうがくこくこ
とくほんまきじゅういち・じんじょう
しょうがくこくことくほんまきじゅう
に

こくこう 〔国号〕(名) 1 國號

十二613 ㊦ 雪白の地に紅の日の丸を
ゑがける我が國の國旗は、最もよく
我が國號にかなひ、皇威の發揚、國
運の隆昌^{きやうしょう}さながら旭日昇天の勢あ
るを思はしむ。

こくこく 〔刻刻〕(副) 1 刻々 ↓じ
じこくこく

十二173 ㊦ さて編輯部にては刻々集

り来る原稿（草稿）を選擇（チョウダツ）整理し、繪畫・寫眞等と共に之を印刷部に送る。

ごくじしじゅうしちふん 〔後九時四十七分〕（名） 1 後九時四十七分

十一89図 三日 月 〇下弦後九時四十七分水星東方離隔 つちのとう 〈略〉

こくじん 〔國人〕（名） 1 國人

十一509 他の國人も之にならつて、南洋におけるゴムの栽培は頗る盛になつた。

こくせい 〔國政〕（名） 1 國政

十二927 それを見てひどく氣をもんだ父王は、彼に妃を迎へ、〈略〉、國政にも與らせようとした。

こくたい 〔國體〕（名） 1 國體

十二1327 我が國が世界無比の國體を有し、三千年の光輝ある歴史を展開し來つて、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、〈略〉。

こくち 1 下のうぜいこくちしよ

こくてん 〔黒点〕（名） 2 黒点

十一371 望遠鏡で見ると、太陽の表面は〈略〉、又所々に黒点といつて黒く見える所もある。

十一32 此の黒點は多分表面に生ずるうづ巻であらうといふ。

こくど 〔國土〕（名） 1 國土

十二75図 こゝにおいて大國主命、「此の葦原の中つ國を皇孫にたてまつりて、〈略〉。」と申して恭しく國土をたてまつりぬ。

こくどというつ 〔國土統一〕（名） 1

國土統一

十二643 國 イタリアの國旗は、〈略〉。
これイタリア中興の主エンマヌエル王、國土統一の時、〈略〉を配したるものなり。

こくない 〔国内〕(名) 5 国内

十507 柿右衛門はひとり我が國內において古今の名工とたゞへられてゐるばかりでなく、〈略〉。

十862 又國內で出来るものを使ふよりも、時には外國の品を使ふ方が都合のよい事もある。

十876 我が國は〈略〉、國內で出来た物を外國へ輸出することもなかなか多い。

十二346 汽車でドイツの國內にはいつたのは朝まだほの暗い頃でした、が、〈略〉。

十二1338 〈略〉、國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國內はおほむね平和であつた。

こくないかくち 〔国内各地〕(名) 1 国内各地

十二1610 此の外、國內各地は勿論、世界各國主要の地に特派員又は通信員ありて、〈略〉。

こくなん 〔国難〕(名) 4 國難

六841 おそれ多くも龜山上皇は、御身をもつて國難に代らうと、おいのりになつた。

六845 全く上下の者が心を一にして、

國難にあたつたのである。

十971 宋の臣文天祥大いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。

十二1310 〈略〉、いざといへば、舉國一致國難に當る氣風を生じた。

こくほう 〔国法〕(名) 2 國法

十二904 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。

十二906 我々は常に國法にしたがつて幸福な生活を營み、あはせて國の品位を高めることにつとめなければならぬ。

こぐま 〔小熊〕(名) 1 小熊

九902 西洋では昔から、あの七つの星と其の近所の星を一しよにして小熊の形を想像し、〈略〉。

こぐまざ 〔小熊座〕(名) 3 小熊座
九904 西洋では昔から、あの七つの星と其の近所の星を一しよにして

小熊の形を想像し、〈略〉、それ／＼小熊座・大熊座といふ名をつけてゐる。

九905 小熊座と大熊座について、面白い昔話があるはずだから、ねえさんに聞いてごらん。

九925 ところがめぐみ深いジュピターといふ神様が、〈略〉、すぐに親子の者を天へ連れていつて、大熊座と小熊座になさつたのださうです。

こくみん 〔国民〕(名) 28 國民 しか

くこくみん・だいくこみん・につぼん

こくみん

五14 大日本、大日本、神のみすゑの天皇陛下、われら國民七千萬をわが子のやうに おぼしめされる。

五18 大日本、大日本、われら國民七千萬は、天皇陛下を神ともあふぎ、おやとしたひてお仕へ申す。

八803 國の税は勿論、縣の税も村の税もみんな大事なもので、之を納めることは國民の務です。

九129 世間ニハ、〈略〉、或ハ信用モシテキナインニ投票シタリ、或ハ棄權シテシマツタリスル人モアルガ、〈略〉。國民トシテ恥ヅベキ事ダ。

十六7 大方は國民の眞心こめたる献木にて、中には小學生の奉りたるものも少からず。

十二22 ほど／＼に心を盡くす國民の、ちからぞやがてわが力なる。

十二615 更に思へば、白地は我が國民の純正潔白なる性質を示し、日の丸は熱烈燃ゆるが如き愛國の至誠を表すものともいふべきか。

十二647 かくの如く各國の國旗は、或は其の建國の歴史を暗示し、或は其の國民の理想・信仰を表すものなれば、〈略〉。

十二647 かくの如く各國の國旗は、〈略〉、國民の之に對する尊敬は、即

ち其の國家に對する忠愛の情の發露なり。

十二884 法律は、〈略〉、いやしくも國民たる者は必ず之を守らなければならぬ。

十二904 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。

十二973 續いて釋迦は〈略〉、父王・妻子を始め國民を教化して故郷の恩に報いた。

十二1329 我が國が〈略〉、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、主として我々國民にそれだけすぐれた素質があつたからである。

十二1337 〈略〉、國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國內はおほむね平和であつた。

十二1338 随つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、〈略〉。

十二1342 萬世一系の皇室を中心として團結した國民は、かくていよいよ結束を固くし、熱烈な愛國心を養成した。

十二1344 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、自ら國民の性質を穩健ならしめ、自然美を愛好するやさしい性情を育成するのに與つて力があつた。

十二1346 しかし此の事情は一面に國民の短所をもなしてゐる。

十二134 〔略〕我が國民は、とかく

引込み思案におちいり易く、〔略〕、

遊惰安逸に流れるかたむきがある。

十二135 殊に徳川幕府二百餘年の鎖

國は、國民をして海外に發展する意

氣を消磨せしめ、〔略〕、世界の大勢

を知らぬ國民となしめた。

十二136 〔略〕、世界の大勢を知らぬ

國民となしめた。

十二137 其の結果今日も尙國民は眞

の社交を解せず、人を信じ人を容れ

る度量に乏しい。

十二138 〔略〕、かういふ短所はやが

て我が國民から消去であらうが、

〔略〕。

十二139 〔略〕日本國民は、賢明な

機敏な國民である。

十二140 我が國民には潔いこと、あ

つさりしたことを好む風がある。

十二141 あつさりしたこと、潔いこ

とを好む我が國民は、其の長所とし

て廉恥を貴び、潔白を重んずる美德

を發揮してゐる。

十二142 我が國民の長所・短所を數

へたならば、まだ外にもいろいろあ

らう。

十二143 我々は常に其の長所を知つ

て、之を十分に發揮すると共に、又

常に其の短所に注意し、之を補つて

大國民たるにそむかぬりつばな國民

とならねばならぬ。

こくみんせい 〔國民性〕(名) 2 國民

性 〴〵わがこくみんせいのちようしよ

たんしよ

十二144 忠孝は實に我が國民性の根

本をなすもので、之に附隨して幾多

の良性・美德が發達した。

十二145 他國の文明を消化して、之

を巧みに自國のものとすることは、

實に我が國民性の一大長所である。

こくむだいじん 〔國務大臣〕(名) 1

國務大臣

十二146 〔略〕、兩院の意見が一致す

れば、最後に議決した議院の議長か

ら國務大臣を経て奏上する。

こくらくじざか 〔極樂寺坂〕(地名) 3

極樂寺坂 極樂寺坂

七15 〔略〕「極樂寺坂の味方があやふ

うございます。」

七16 手もとの軍ぜい二萬騎を引き

つれて、たゞちに極樂寺坂へ向ひま

した。

十二147 〔略〕極樂寺坂越え行けば、

長谷觀音の堂近く、露坐の大佛

おはします。

こくりみんぶく 〔國利民福〕(名) 1

國利民福

九22 〔略〕歡庵様が、國利民福

の本は農業を盛にするにあるとお氣

づきになつて、〔略〕。

こくりゆうこう 〔黒龍江〕(地名) 3

黒龍江 黒龍江

十二148 〔略〕それより山を越え、河を

下り、湖を渡りて黒龍江の河岸な

るキチーに出づ。

十二149 黒龍江

十二150 歸途一行は黒龍江を下り

て河口に達し、海を航してノトに

歸れり。

こくろう 〔御苦勞〕(形状) 1 御苦勞

十二151 〔略〕やあ、皆さん御苦勞です

ね。こくろうさま 〔御苦勞様〕(形状) 1

御苦勞様

八107 〔略〕來る二十五日に、亡母の三

回忌の法事を致します。まことに御

苦勞様ですが、どうか同日午前十時

頃までに、お出でを願ひたうござい

ます。

こけ 〔苔〕(名) 2 コケ こけ

五53 或日山の中で、こけに足をす

べらせて、うつむけにたふれました。

八54 果ハ〔略〕、タテ横ニ小枝ヲ

並べ、其ノ上ニヤハラカナコケヲ置

クダケデアル。

こけかかる 〔転掛〕(五) 1 こけか

かる 〔一ル〕

三29 〔略〕足すべらせてこけかかる

おととを かばふ あね のうで。

こげちやいろ 〔焦茶色〕(形状) 1 コ

ゲ茶色

八43 〔略〕鷲ハタシカニ鳥類ノ王

デアル。〔略〕、コゲ茶色ノ羽、アク

マデモガンジヨウナツバサ・尾、

〔略〕。

こけむす 〔苔生〕(四) 1 こけむす

《一シ》

十二152 〔略〕歴史は長し 七百年、

興亡すべて ゆめに似て、英雄

墓は こけむしぬ。

ごけらい 〔御家来〕(名) 1 ゴ家来

四86 〔略〕オ花「クワンデヨノリヤ

ウワキニカザツテアルノデセ

ウ。ズキジンデス。ダイリ様ノ

ゴ家来ダサウデス。」

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

ここ 〔此處〕(代名) 85 ココ コ、

六八五 第二十一 神風〈略〉。それからこゝに六百餘年、まだ一度も外國から攻められたことはない。

七三三 此の時此所に來りしは一人の武士なり。

七三二 獅子はもとより武士にしたがひて行かんとせり。しかるに船長はおそれて之をゆるさず。こゝに武士と獅子とはわかれざるを得ざることとなりぬ。

七六一 落した物は。」「革の財布で。」「中には。」「略。」「安心しなさい。此所へ持つて來ました。」「

七〇四 あなたから一文でももらふ氣があるくらゐなら、此所まで持つて來はしません。

七〇九 私は此所から百里さきの紀州の者でございます。

七〇六 此の清正こそはまことの太將、四十萬の軍勢は此所へ向けよ。

七一二 發信人の居所氏名を受信人に知らする必要があるときは此處又は本文の終へ片假名にて記すこと

七一二 發信人は自己の居所氏名を成へく本字にて此處に記すこと

八七四 何しに此所へ參つた。」「雀の子がほしくて參りました。」「

八二四 其れ程首がほしいなら、明日の晝頃、赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」「

八四九 此所は天下の役所なるに、

許しもなくして亂入するとは不屈しく。

八六九 此所は工業地で、煙突の煙で空は眞黒だが、略。

八七〇 此の繪葉書は此所へ來る途中、汽車の窓から見た牧場の實景です。

八七三 此所は有名な商業地ですが、りつぱな學校もありますし、略。

八九六 それから先生は、僕等を一年生の教室に連れて行かれた。此所では女の先生が、生徒に五十音の發音を教へてゐられた。

八九六 名古屋市ハ略。略。此所二名高キ名古屋城アリ。

九二四 それから諸國を歩き廻つたすゑ、略、此所の銅の製法を改良したり、新しい鑛山を開いたりする爲に、此の山中へ來たのである。

九二五 此の方々のお書きになつたものは、大てい此所に持つてゐる。

九三二 其所の木のかげ、此所の石のそばには、略、春蘭のつぼみのふくらんだのも見える。

九四四 得ガタキ物ニテモ、有用ナラヌ物ハ價ナシ。例ヘバコ、ニ一ツノ石アリトセヨ。略、用ヒヤウナケレバ、誰モ之ヲ買フ者ナク、シタガツテ價アルコトナシ。

九四三 又コ、ニ一匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、略、争ヒテ高キ價ヲツク。

九六八 此の邊が有名な那須野が原だ。略。紅葉と温泉で名高い塩原へ行くには、此所で下りるのだ。」

九六九 「叔父さん、此所は何所ですか。」

九七五 停車場にはいる手前でまた北上川を見たが、此所まで來ると川幅がかなりせまくなつてゐる。

九七六 叔父さんのお話によると、此所は名高い温泉場で、海水浴も出来るさうだ。

九七九 「東京から此所までは四百五十六哩もあるのだが、かうたやすく來てみると、そんなに遠い所に來たやうな氣がしないね。」

九七六 皆いつものやうに、此所で支度をして、學校園へお集りなさい。

九六九 雪溪が冬の世界ならば、此所は春の國でせう。

九二六 明治天皇・昭憲皇太后、御二方のおほみたま、とこしへに此所にしづまりますよと思へば、かしこさ殊に身にしてみておぼゆ。

九四四 此所を出でて舊御苑に入り、木立の間の細道をたどれば、程なく小さき建物の前に出づ。

九四四 昔の武藏野の姿を此所に残さんとの皇太后の思召のまゝに、今も人工を加へずといふ。

九六六 ちやうど此の頃、此所の名物の馬市が始つてゐるといふので、略、見物に行きました。

九二八 私は今日此所に來て、飼主たちがあんなにかはいがつてゐたのを見て、略、心からいのりました。

九三五 それから船はクレブラの掘割を通る。これは高い山地を切通したもので、此處を切通すのは非常な難工事であつたといふ事である。

九三五 ガツン湖といつて、略、人造湖で、湖上に點々と散在してゐる島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。

九三三 今度は前と反對に、順次に三段を下つて、海と同じ水面に浮ぶ。此處から又掘割を走つて、終に洋々たる太西洋に出るのである。

九六一 此處から十八町程先に、山本といふ宿場があります。

九二五 南大門の東南の方に南山といふ山があつて、公園になつてゐます。此處には天照大神をおまつりした京城神社があり、略。

九二五 僕はもう南山へ何度も上りましたが、此處からは京城の市街がまるで繪のやうに見えます。

九二二 龍山は略。此處には軍司令部や龍山停車場などがあります。

九八七 略、地下九百尺の坑底に着きました。略。此處から方々へ坑道が通じてゐて、廣い坑道には、電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

九八八 ポンプ室を出てから小道へは

いりました。此處は電燈も無いので、眞暗です。

十997図 心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。事既にこゝに至る。天祥唯死せんのみ。

十1015図 みよ子、ずるぶん珍しい花があるだらう。此處は重に蘭の類を集めてある處だ。

十10310 建物は此處から右に折れる。次の室には大きい熱帶植物類が並んでゐる。

十1199 略、櫻寺といふ處に立寄つた。此處は菅公配所の跡である。

十1201 此處は菅公配所の跡である。略。公は此處にうつされてから一歩も外へは出ないで、三年の歳月を送られたさうである。

十1204 宮中の御宴の事を思ひ出して詩を作られたのも此處であらう。

十1189 上海は略。こゝには外國人の居留する者が非常に多く略。

十1485図 未だ一月もたゞざるに、かの畫師は突然歸り來れり。住持驚きて、「東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。」と問へば、略。

十1536 ゴム園の人は略切付をして廻る。それがすむと、今度はバケツを持つてコップにたまつた液を集めて歩くのである。集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不

純な物を取除き、次に薬品を入れて固まらせ、機械で薄くして乾かすのである。こゝまでが原産地における仕事である。

十1627 略 帶廣の町である。明治十六年こゝに十三戸の農家が移住して來たのが此の町の始まりであつた。

十18110図 幾年こゝにきたへたる鐵より堅き腕あり。

十1861図 僕も急に元氣がなくなつて、一所に船上らうかと思つたが、「いや、こゝがまんのだころだ。略。」と、自ら勵まして進んで行つた。

十1899図 弟は尚あちらこちら曆をくつてあるうち、略、「こゝに『八十八夜』とありますが、これは何ですか。」

十11191図 「皆さん、此處は通れません。僕はおとうさんから、誰が來ても此の門をあけてはならないと言ひつけられてゐるのです。」

十11227 次の建物にはいと、こゝには熔解窯がある。

十11243 橋本君にうながされて、次の室にはいつた。こゝは加工場である。

十1192図 稻佐の濱といふ處なり。かの建御雷命が大國主命と會見せられしは此處なりといふ。

十1194図 なぎさに立ちて昔をしのべば、そのかみ此處にいかめしく向

ひあひけん英雄の姿、今までのあたり見るが如く、打寄する波の音さへ何事かを語るに似たり。

十1152図 略、やがてあまねく内外の事件を報ずると共に時事を論ずるもの起りて、こゝに始めて我等の生活に切實なる關係を有するものとはなりぬ。

十12314図 昨日朝ロンドンを出發して午後早くパリに着きました。此處はさすがに藝術の都として世界に聞えてゐるだけあつて、略。

十12532 ねぢは略、何が何やらさつぱりわからなかつた。しかしだん／＼落着いて見ると、此處は時計屋の店であることがわかつた。

十12565図 略、父の時計師がはいつて來た。時計師は「此處で遊んではいけない。」といひながら仕事臺の上を見て、略。

十12577図 ねぢは「此處に居ます。」と叫びたくてたまらないが、口がきけない。

十12595 時計師は略。さうして一つの懐中時計を出して略、やがてピンセットでねじをほさんで機械の穴にさし込み、小さなねぢ廻しでしつかりとした。略。ねぢは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出來たのだと思ふと、うれしくてうれしくてたまらなかつた。

十12746図 「此處は何處だらう。一體わしは今までどうしてゐたのだから。」

十12806圖 阿波と淡路のはさまの海は、此處を名に負ふ鳴門の潮路。

十128210図 先づ樺太の南端なる白主といふ處に渡り、此處にて土人を雇ひて從者となし、略。

十12873図 デレンは各地の人々來り集りて交易をなす處なり。林藏の怪しみもてあそぶること、此處にては更に甚だしかりしが、略。

十12876図 歸途一行は略、海を航してノテトに歸れり。此處にて林藏はコーニ等に別れを告げ、同年九月の半ば、白主に歸着しぬ。

十12893 かうして其の院で可決すれば、其の案を他院に移す。此處でも同様の形式で討議し、兩院の意見が一致すれば、略。

十12942 彼は略、或靜かな森へ行つた。さうして此處で父王の心盡くしから送られた五人の友と、六年の間種々の苦行を試みた。

十121126図 略、トマス、エヂソンは、既に電話機に関する發明に成功したるを以て、更に進んで新しき電燈の發明に従事したり。彼が稀代の天才はこゝにも遺憾なく發揮せられて、略。

十1212410 月の十五日を期して總攻撃を行ひ、一舉に江戸を乗つ取る手は

ずである。徳川方も事ここに至つては、あくまでも戦ふ覺悟をきめて、ものすごい緊張を示してゐる。

十二138 7 しかし其の半面には、物にあき易く、あきらめ易い性情がひそんでゐないか。堅忍不拔あくまでも初一念を通すねばり強さが缺けてはゐないか。ここにもまた我々の反省すべき短所があるやうである。

「こ」 「午後」(名) 8 午後 じゅうごにちごいちじ

六104 5 昨日正午にこちらへ着いて、午後外宮へ参り、今日内宮へ参つた。

七94 9 仕合はせに午後は風が弱つた。

九146 四 「略」見事なる卯二つころがれり。昨日の午後に産みたるなるべし。

九78 3 枯れかゝつて一面に黄色になつたじやがいも畑を、午後の日がかんくゝと照らしてゐる。

九102 4 午後には弟と天神山へきのこ取りに行くのだ。

九109 7 大空には、午後の日が太砲の煙や砂ぼこりにさへぎられて、どんよりとかゝり、〈略〉。

十二120 9 停車場に着いた時は午後の六時を過ぎてゐた。

十二312 二 昨日朝ロンドンを出發して午後早くパリに着きました。

「ここうじょう」 「御厚情」(名) 1 御厚情

十一43 3 尚又結構なる葛粉御送

り下され、御厚情の程深く謝し奉り候。

「ここうぶつ」 「御好物」(名) 1 御好物 十一110 3 尚御生前御好物なりしやうかん一折、小包便にて御送り申し上げ候間、御佛前へ御供へ下されたく候。

「ここうらいあいなる」 「御光來相成」(四) 1 御光來相成 《一(リ)》

十一42 5 何分田舎にて萬事不便には候へども、若し御光來相成候はば、及ぶ限りの御便宜相計り申すべく候。

「こかしこ」 「此処彼処」(代名) 1 此所彼所

十一43 四 御殿は質素なる平屋にて、御庭の此所彼所に、下葉の色づきかけたるはき茂れり。

「ここ」(感) 1 コココ

三95 オヤドリハナンニモタバナイデ、コココトイヒナガラ、ソノヘンヲ見マハリマス。

「こここ」(感) 1 ココココ

三82 ヒヨコガナクト、オヤドリハオハナシデモスルヤウニ、コココトイツテキマシタ。

「こち」 「心地」(名) 3 心地

十一43 4 實は去月十日頃より感冒の心地にて引きこもり居候處、其の後とかく病勢衰へず、遂に肺炎を引起し申候。

十二36 9 久しく單調平凡な景色に

あきてゐた私には、如何にも心地よく眺められます。

十二41 10 ベートーベンの友人も全く我を忘れて、一同夢に夢見る心地。ことと「小言」(名) 1 小言

六68 6 全くだ。あんな小言を言ふ程だから、此の義捐が出来たのだらう。

「こにおいて」 「此処」(接) 5 こにおいて

十一97 7 然るに元軍の勢いよく盛にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝・皇后も遂に敵手に落ちぬ。ここにおいて皇兄位をつぐ。

十一128 8 然るに、此の度は、近畿地方に大飢饉起り、〈略〉、人々のくるしみは日々にまさりゆくばかりなり。鐵眼はここにおいて再び意を決し、〈略〉。

十二72 四 此の時事代主命は〈略〉、使を得て急ぎ歸り、父君に申すやう「かしこし。仰のまゝにたてまつり給へ。」ここにおいて大國主命、〈略〉と申して恭しく國土をたてまつりぬ。

十二113 3 心に至りては彼の最も苦心したる所なりき。初め彼は紙に炭素を塗りて試みしが、思はしき結果を得ず。次いで白金其の他の金屬の針金を以て様々の實驗を重ねしが、これまた失敗に終りぬ。ここにおいて再び炭素線の研究に没頭し

たれども、〈略〉。

十二114 3 彼は直に竹を以て炭素線を作りて實驗せしに、豫想以上の好結果を得たり。ここにおいて彼は人を世界の各地につかはして竹を採集せしめ、〈略〉。

「こにじにじつぶん」 「午後二時二十分」(名) 1 午後二時二十分

九76 5 午後二時二十分、汽車は青森に着いた。

「このつ」 「九」(名) 4 九ツ 九つ

二32 7 「オ正月ガクルト、オマヘハイクツニナリマス。」

「九ツニナリマス。」

三14 3 お花はことし九つです。

四91 5 十郎が五つ、五郎が三つの年に、父はくどうすけつねにころされました。〈略〉。九つとなり、七つとなつたころからは、〈略〉、早く強くなつて、かたきを取らうと心がけました。

八16 3 松平正綱の子信綱は幼名を長四郎といつた。九つの時から將軍の若君竹千代のおつきになつた。

「こはちじ」 「午後八時」(名) 1 午後八時

十一89 四 星座午後八時子午線通過

「ここめ」 「小米」(名) 1 コ米

三93 ナノハヤコ米ヲヤルト、ヒヨコハミンナヨツテキテタベマス。

「ここやし」(名) 2 コ、椰子 コ、椰

子

九52回 内地から来て先づ目につく

のは植物で、其の中でも殊に珍しいのはコ、椰子の木やパンの木などです。

九53回 コ、椰子は、高いのは七八間もあります。

ごごよじ 「午後四時」(名) 2 午後四時

九120回 今日午後四時ノ汽車デ又出カケルノダ。

十110 午後四時、豫定の仕事を終へて、再び境内に集つた。

こころ 「心」(名) 47 心 心おこころ やすい・おんこころ・こころとこころ・こどもこころ・なにこころない・まごころ・みこころ

四65回 よ一は心の中で、もしこれをいそこなつたら、生きては居まいとかくごをきめて、
《略》。

五82回 さて宗任がかりまたをぬき取つて、義家にかへしますと、義家はせ中をくりりとむけて、うつばへさへしました。《略》。「あぶないことだ。もし宗任に悪い心があつたら。」と、義家の家来どもはひやくしたといひます。

六38回 義經に此の名を惜しむ心があつたので、何時の戦にも勝つたのでございませう。

六63回 これから後萬じゆは、うばと

心を合はせて、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。

六63回 親を思ふ孝子の心には、頼朝もかんしんして、石のらうから唐糸を出して、萬じゆに渡しました。

六84回 おそれ多くも龜山上皇は、御身をもつて國難に代らうと、おいのりになった。武士といふ武士は必死のかくごでふせいだ。百しやうも一生けんめいで、ひやうらうをはこんだ。全く上下の者が心を一にして、國難にあたつたのである。

七19回 さて、心の中に、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をはろぼさうとしてゐます。海神ねがはくは潮を退けて、道を開かせたまへと念じて、《略》。

七73回 《略》、どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともありますが、心にすまないことはまだ一度もした事はありません。

七102回 秀吉が之を聞いて、「さてく、早く参つた。」と心の中で喜びました。

八14回 「多勢の方はゆだんをしてゐるが、小勢の方はみんな心を合はせて、一生けんめいになつてゐる。」

八18回 「長四郎があのお心で大きくなつたら、竹千代には無二の忠臣であらう。」

八109回 父が今年八十八になりまして、
たので、《略》、ほんの心ばかりの祝

を致したいと存じます。

九13回 《略》いづれの鶏も皆かはゆき中に、ひよこは一そうかはゆく思はる。妹も同じ心にや、しばし見とれてひよこのそばをはなれず。

九27回 《略》、父の此の願だけは、しかと心にとめて置いて、必ず仕とげてもらひたい。

九42回 《略》『此の方面の戦鬪に二子をうしなひ給ひつる 閣下の心如何にぞ。』

九67回 軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は、これから訓練に取掛るのである。

九103回 ラツパのひびきや大砲の音に、北風の心は先づ勇みたつ。

十67回 《略》、枯損するもの多かるべきに、ほとんど皆勢よく根づきたるは、誠に驚くべき事ならずや。ひつきやう掘取る者、運ぶ者、植込む者、一様に心を盡くして、大切に取扱ひたるによるならん。

十23回 《略》、此の子馬共を買つた人たちも、どうか同じやうにやさしく扱つてくれ、ばよいと、心からのりました。

十46回 工夫にばかり心をうばはれては、とかく家業もおろそかになる。
十62回 とても明るいうちに山本まではお着きになりますまい。お泊め申してはいかゞでございませう。」同情深き妻の言葉に、主人はいたく

心動きて、「ではお泊め申さう。

十69回 一語々々、心の底よりほどぼしり出づる主人の物語に、いたく動かされたる旅僧は、兩眼に涙をたへて聞きたり。

十70回 旅僧もまた主人夫婦の情心にしみて、そゞろに別れがたき思あり。

十99回 《略》「末じゆぬ。御身の忠義を盡くすべき所なし。今より心を改めて元に仕へば、富貴は意の如くならん。」

十100回 近き處ならば早速上り候て御世話も致すべく候へども、何分百里の山川をへだてたる事とて、それも心に任せず、甚だ残念に存じ居り候。

十111回 《略》、丹青まばゆき格天井に、心をこめたる 繪筆ぞにほふ。

十126回 《略》、生徒は皆よく之になつて課業にはげみ、學校を思ふ心あつく、卒業後も尚學校の門に入出することを楽しみとせり。

十131回 然るに今主上隱岐にうつされ給ふと聞き、高德一族共を集めていへるやう、《略》。」と。心ある者ども何れも同意しなければ、《略》。

十133回 主上は詩の心を御さとりありて、天顔殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。
十147回 《略》「我が心に思ひ構へし

事を如何にして知り給へるか。」

十一 96 4 〈略〉、リンカーンは十歳頃までは本を読むことなどは殆ど出来なかつた。唯通りがかりの旅人から珍しい話を聞いては、僅かに心をなぐさめてゐた。

十一 98 6 しかしせつかく始めた學校通ひも、〈略〉止めねばならなくなつた。〈略〉、本を読みたいといふ心は少しも變らなかつた。

十一 115 3 市町村長や議員を選挙するには、〈略〉、決して親族・縁故其の他私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。

十二 116 6 淺緑すみわたたりたる大空のひろきをおのが心とものがな。

十二 22 2 國の ちからぞやがてわが力なる國民の ちからぞやがてわが力なる。

十二 22 5 國 ちからぞやがてわが力なる國民の ちからぞやがてわが力なる。

十二 67 6 國 私も姉上と同じ心で、

——ほんたうに姉上は私の思つてゐる通りをおつしやいました。

十二 86 6 土人等 〈略〉。やがて酒食を出したれども、林蔵は其の心をはかりかねて顧みず。

十二 92 7 「人は何の爲に此の世に生れて來たのか。我々の行末はどうなるだらうか。こんな事を次から次へと考へては、遂に心の苦しみにたへられなくなつて、」〈略〉。と思ひ立つに至つた。

十二 95 4 さうして日夜次々に起つて來る心の迷をしりぞけて唯一筋に悟の道を求めた。

十二 96 2 彼は 〈略〉此の尊い心境を世界の人々と共にせずにはゐられぬといふ慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。

十二 105 7 僧は 〈略〉幾多のあはれな物語を耳にし、どうにか仕方はないものかと深く心をなやました。

十二 105 8 さていろくと思案したあげく、遂に心を決して、〈略〉此の仕事に着手したのであつた。

十二 134 10 温和な氣候や美しい風景は、人の心をやさしくし、優美にはするが、雄大豪壯の氣風を養成するには適しない。

こころう 「心得」(下二) 1 心得
《一エ》
十一 44 8 昔、泉州堺のなにがし寺に、或畫師久しく寄食してありけ

るが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を経たり。住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、「〈略〉。」といへば、畫師 〈略〉。

こころえる 「心得」(下二) 3 心える 心得る 《一エ》
四 96 3 國 〈略〉、「おきよ、すけつね。曾我兄弟がまゐつた。」と名のりました。すけつねも人に知られたさむらひ、「心えた。」と、まくらもとの刀を取つておきしらうとしました。

九 55 1 國 人々の同情は集つてゐるし、商賣の仕方は十分心得てゐるので、毎朝引いて出た荷が、夕方には必ず空になるといふ景氣。

十一 18 9 約束は固く守らなければならぬ、他人に害を加へてはならぬなどといふことは、我々が十分心得てゐる事である。

こころがけ 「心掛」(名) 6 心がけ 心掛
七 75 3 國 さてく、二人ともまことに心がけのよい者。

八 11 8 國 信作が落ちたのにかまはず馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、〈略〉、相手を助けてやつたのはえらい。如何にも見上げた心掛だ。

八 12 6 國 耕造さんの心掛は實に見上げたものです。

十 14 4 國 朝のかゝりはおそいし、晩

のしまひは早い上に、とかく無責任な事ばかりしてゐました。〈略〉。皆さんの前に立つと、其の頃の心掛が恥づかしくてなりません。

十一 98 1 シャベルが數字で眞黒になると、それをふいては又書く。大事なことは拾ひ集めた木片などに書留めて忘れないやうにしておく。かういふ心掛であつたから、成績は何時も優等であつた。

十二 133 10 随つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、又其の誇を永久に持續しようとする心掛けも出來て、〈略〉。

こころがけいかん 「心掛如何」(名) 1 心掛け如何
十二 23 4 外國貿易に至つては、之に従事する者の心掛け如何の影響が更に大きい。

こころがける 「心掛」(下二) 3 心がける 心掛ける 《一ケ》
四 91 8 〈略〉、早く強くなつて、かたきを取らうと心がけました。

八 73 4 國 アメリカ人は大きいこと、廣いこと、高いこと、早いこと、何でも世界一になるやうに心掛けてゐるといひますが、何しろ大した勢です。

十一 116 4 それであるから人々は常に自治制の本旨を辨へ、協同一致して團體の福利を増進することを心掛けねばならない。

「ござそうろう」 「御座候」 (四) 3 御座候 《一フ》

十一 429 園 先づは御見舞までかくの如くに御座候。

十二 1202 園 《略》、先生には何時も御壯健の由、何よりのことに御座候。

十二 1209 園 私の勤め居り候家は呉服屋にて、なか／＼忙しく御座候。

ござぶろう りやまぐちござぶろう

ござる 「御座」 (五) 113 ゴザルござる 《一イ・リール》 ↓ ありがとうございます

二 407 アカイ小サナ目デ、カハイラシウゴザイマス。

二 601 園 オカアサン、ソノオクスリハニガウゴザイマス。

三 28 マダウスグラウゴザイマシタ。

三 182 園 「このはの中に、おもしろい人があります。あててござるなさい。」 《略》 「ふつてもよいございますか。」

三 184 園 たいそうかるうございますね。

三 416 園 うらしまさん、このあひだはありがたうございました。

三 447 園 それはまことにおなごりをしいことでございます。

三 852 園 「それは私の着物でございます。」

四 212 園 アナタハオナサケブカイ

オ方デスカラ、後ニハキツトオシアハセノヨイコトガゴザイマス。

四 284 電 とうは《略》、その上火のようじんもようございます。

四 324 園 正山びことは何のことでございますか。

四 545 園 「へええ、日は屋根から出て、屋根へはいるものではございせんか。」

四 636 園 なすのよーと申すものがございます。

四 643 園 空をとんで居る鳥でも、三羽ねらへば、二羽だけきつといおとすほどの上手でございます。

四 704 雪ノヤウニ白ウゴザイマスガ、雪ノヤウニツメタクハナク、《略》。

五 77 天照大神の弟の方に、すさのをのみことと申す神様がございました。

五 92 園 私どもにはもと娘が八人ございました。

五 478 今日のお晝頃はうち中、目がまはるほどいそがしうございました。

五 534 此の人に年取つたおとうさんがありまして、酒がすきでございました。

五 833 園 皆様におげもございせんでしたか、お見舞を申し上げます。

五 965 叔父サンノウチニモ、ブダウ

棚ガゴザイマス。

五 984 熊は死人には手を着けないと聞いてゐたからでございます。

六 103 園 金や銀ハ《略》、ネタンモ高ウゴザイマス。

六 106 園 銅ハ《略》ネタンモ安ウゴザイマス。

六 386 義経に此の名を惜しむ心があつたので、何時の戦にも勝つたのでございませう。

六 521 萬じゆは當年やうやく十三、舞姫の中では一番年わかでございます。

六 526 一番二番三番と、十二番の舞がめでたくすみましたが、其の中でことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。

六 532 其の五番目の舞姫といふのは、かの萬じゆの姫であつたのでございませう。

六 543 園 べつにのぞみはございませんが、唐糸の身代りに立ちたうございます。

六 544 園 《略》、唐糸の身代りに立ちたうございます。

六 547 かはるも道理、これには深いわけがあつたのでございます。

六 563 頼朝は其の刀に見おぼえがあつたのでございます。

六 566 唐糸といふのは此の女のことでございます。

六 581 先づ《略》、それから頼朝の

御殿へ行つて、うばと二人で御ほうこうをねがつたのでございます。

六 602 之を聞いた萬じゆの喜はどんなであつたのでございませう。

六 604 三月二十日、今日はお花見といふので、御殿は人少でございます。

六 623 園 「おなつかしや、母様。木曾の萬じゆでございます。」

六 634 さうして其の明るる年の春、舞姫に出ることになつたのでございませう。

六 698 京都は長い間の都ですから、《略》おくげ様方や、《略》お姫様方の姿を、此の川の水はいくたびとなくうつしたことでございませう。

六 704 又いくさのあつた時には、《略》、なぎなたの光も、いくたびとなく此の川の水にうつつたことでございませう。

六 712 名高いのは三條・四條・五條の三つの橋でございます。

六 731 義経・辨慶の五條の大橋は此の川下にかゝつてゐるのでございませう。

六 738 あの美しい友禪染は、もと此の川べりで出来たのでございます。

六 892 園 御らの通り大きなからだをしてゐますが、氣立はしごくやさしうございます。

六 894 園 印度の國はいたつてあつたございませう、《略》。

六 1033 園 其の後おさほりもございま

せんか。

七164 囀 此の蛤は私どもの拾つた中から、大きなのをよつたのでございます。

七185 囀 「極樂寺坂の味方があやふうでございます。」

七531 囀 で、今日此のなつかしい學校に来て、皆さんにお話をするのは、何よりもうれしいのでございます。

七624 囀 川べの宿はとめきれない程の客でございました。

七632 水になれた人夫の肩に乗るか手をひいてもらふかして渡るのでございます。

七638 囀 川べはひじやうなさわぎでございました。

七662 囀 かけ下りて来る者があります。見れば先の男でございます。

七687 囀 家の中で見えなくした物でも、中々出ないものでございます。

七694 囀 いよいよない時には、川の中へとびこんで死んでしまはうと、かくごをして來たのでございます。

七697 囀 いたゞいたのは財布ではなくて、私の命でございます。

七709 囀 私は此所から百里さきの紀州の者でございます。

七714 囀 仲間の者が國へ送る金をあづかつて、此の財布に入れて來たのでございます。

七721 囀 其の上あなたのお名前をうけたまはりたうございます。

七781 囀 「少しも寒くはございません。」

七784 囀 これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません。

七919 囀 「はい、よいお天氣でございます。」

七981 當時秀吉は伏見の城に居つたのでございます。

七984 此の人だけは自分のために心配してくれるであらうと思つたのでございます。

七1005 夜はまだ深うございます。

七1027 囀 お庭先の御門を守る者がございませぬ。某の手で固めませう。

七1032 囀 「石田でござる。お通しなされ。」

七1041 囀 御門を守る者は誰か。「加藤清正の家來でございます。」

七1075 囀 某は四つ五つの頃から親にはなれて、姓も存じませんので、御威光を借りて豊臣と記したのでございます。

八154 囀 「殿はまだお若くて、これから功名をお立てになる折はいくらもございます。」

八179 囀 「いゝえ、頼まれたのではございません。」

八258 見ると、それは呉鳳の首でございませぬ。

八394 包の中には白木綿が五十反ばかりはいつてゐたのでございます。

八424 一同は驚いて、泣くやらなげ

くやら、大さわぎでございます。

八456 囀 しかし醫者の申す所では、老體のこと故、餘程大事にしなければならぬとのことでございます。

八458 囀 まことに勝手がましい御願でございますが、もう四五日の所おひまを願ひたうございます。

八459 囀 囀、もう四五日の所おひまを願ひたうございます。

八768 人々は 囀、やつて見ましたが、もとより立たうはずはございません。

八774 囀 「諸君、これも人のした後では、何のさうさもない事でございませう。」

八845 囀 あちらでも、あの子のことばかりが、氣にかゝつてゐたのでございませぬ。

八856 囀 私はこちらに御やくかいになつてゐる松木とよの父でございませぬ。

八875 囀 私は三年ぶりに此の子にあふでございませぬが、 囀。

八877 囀 囀、何のいんぐわで、ひさしぶりに歸つた私に、一口も口をきくことが出来ないでございませぬ。

八918 囀 はい、うれしうございます。

八947 囀 先生は「何なら、あのお子を今日一日お連れになつてもよろうございます。」といはれた。

八1089 囀 まことに御苦勞様ですが、

どうか同日午前十時頃までに、お出でを願ひたうございます。

八1101 囀 又まことに申しかねますが、當日祝の歌を一首いたゞきたうございます。

八1102 囀 これは年よりからのお願でございます。

九965 それから、お花晶のお話も面白うございました。

十5910 囀 「折あしく主人が留守でございませぬ。」

十627 囀 お泊め申してはいかゞでございませぬ。

十647 囀 「粟飯ならでございますが。」

十649 囀 お宿は致しても、さて何も差上げる物はございません。

十651 囀 ちやうど有合はせの粟の飯、 囀、いかゞでございませぬ。

十671 囀 しかし此の三本だけは、其の頃のかたみとして、大切に殘して置いたのでございますが、 囀。

十676 囀 「いや、名前を申し上げる程の者でございませぬ。」

十684 囀 囀、もとは佐野三十餘郷の領主、それが一族ともに所領を奪はれて、此の通りの始末でございませぬ。

十696 囀 しかし此のまゝに日を送つては、唯空しくゑ死する外はございません。

十12310 囀 外の者は着物だけは美しかつたが、爪の先は眞黒になつてゐる

者が多くございました。

十一74回 それについて何か御注意
下さることはございますまいか。

十二40回 「有難うございます。し
かし誠に粗末なビヤノで。それに樂
譜もございせんが。」

十二42回 「一體あなたはとういふ
御方でございますか。」

十二68回 私は胸にある事が十分に
言へないのでございます。

十二69回 唯私は子としての務を盡
くしたいと思ふばかりでございます。

十二69回 「父上、私は唯ほんたう
の事を申し上げてゐるのでございま
す。」

十二75回 コーデリヤは父の手を取
つて泣きながら、「其のコーデリヤ
でございます。」

十二75回 「何でうらむわけがござ
いませう。何でうらむわけがござ
いませう。」

十二75回 「何でうらむわけがござ
いませう。何でうらむわけがござ
いませう。」

十二78回 「何でうらむわけがござ
いませう。何でうらむわけがござ
いませう。」

十二79回 之に比べれば、
川家の存亡などは言ふにも足らぬ小
事でござります。

十二80回 徳川侍のなまくら刀にも
少しは切れる所がございませう。
十二130回 〈略〉今一應御評議下さ
ることになりますれば、誠に日本國
の幸でござります。

十二130回 又延いては徳川家及び江
戸百萬の民の仕合せ、これは申す
までもござりませぬ。

十二130回 何分今一應の御評議を推
して御願ひ申す次第でござります。

こし 「腰」(名) 13 こし 腰 ↓おこ
し

三30回 「ねえさんこれをあげま
す。」と、こしにはさんだ手ぬ
ぐひのはしひきさいてさし出
せば、
五11回 〈略〉、みことはこしのつるぎ
をぬいて、大蛇をずたずたにお切り
になりました。

五53回 それで山へ行くにも、へうた
んを腰に付けてゐて、かへりに酒を
買つて来ては、おとうさんを喜ばせ
てゐました。

六38回 〈略〉、おちいさんが庭で腰を
のぼして、「もうお晝かな。」とおつ
しやいました。

七41回 年は六十四五でもあらうか、
腰に小さなふろしきづつみをむすび
つけてゐる。

八54回 始のうちは勢がよかつたが、
間もなく腰がふらつき出して、ふみ
しめてゐる兩足が、きねをふり上げ
るたびに動いた。

九67回 ずの分こんでゐたが、みんな
がゆづり合つてくれたので、二人と
も腰を掛けることが出来た。

十39回 父は腰から鎌をぬきながら、

〈略〉腰を下し、鎌をときにかゝつ
た。

十39回 父は〈略〉、たき火のそばの
切りかぶに腰を下し、鎌をときに
かゝつた。

十41回 さうして兄は腰の手ぬぐひを
取つて鉢まきにし、
十44回 窯場から出て来た喜三右衛門
は、縁先に腰を下して、つかれた體
を休めた。

十二41回 〈略〉、ベーターベンはビヤ
ノの前に腰を掛けて直にひき始めた。
十二43回 彼は再びビヤノの前に腰を
下した。

こし 「越」 ↓ガラスこし・こずえこし
こし 「濃」(形) 1 濃し 「キ」

十二95回 それから釋迦はブツダガヤ
の緑色濃き木陰に靜坐しておもむろ
に思をこらした。

こじ 「故事」(名) 1 故事
十130回 〈略〉、勾踐此のうらみ忘れ
がたく、
十二95回 〈略〉、再び呉と戦ひて遂に
之を亡しぬ。高徳此の故事をひきて、
やがて忠臣の起りて勤王の兵を挙げ、
必ず御心を安んじ奉るべきことを聞
え上げたるなり。

こじ 「五時」(名) 1 五時
九61回 軍艦の起床時間は、夏は五時、
冬は六時である。

こしかける 「腰掛」(下) 1 腰か
ける 《一ヶ》

九34回 道端の切りかぶに腰かけて、
ひたひの汗をふいてゐると、
若葉のほひがひし／＼と身にせま
つて来る。

こじかんめ 「五時間目」(名) 1 五時
間目

九77回 五時間目の授業がすむと、先
生はにこ／＼して、「
しやつた。

こじき 「古事記」(名) 5 古事記
十一74回 話が古事記のことに及ぶと、
宣長は「
十一74回 私はかね／＼古事記を研
究したいと思つてをります。

十一75回 私のも實は我が國の古代精
神を知りたいといふ希望から、古事
記を研究しようとしたが、どうも古
い言葉がよくわからないと十分なこ
とは出来ない。

十一75回 そこで先づ順序として萬
葉集の研究を始めたところが、何時
の間にか年をとつてしまつて、古事
記に手を延ばすことが出来なくな
りました。

十一77回 宣長は眞淵の志をうけつぎ、
三十五年の間努力に努力を續けて、
遂に古事記の研究を大成した。

こじきでん 「古事記伝」(名) 1 古事
記傳

十一77回 有名な古事記傳といふ大著
述は此の研究の結果で、我が國文學
の上に不滅の光を放つてゐる。

十一77回 有名な古事記傳といふ大著
述は此の研究の結果で、我が國文學
の上に不滅の光を放つてゐる。

「御死去遊」(四)

1 御死去遊はす 《一サ》

十109 3 〇 承り候へば、御祖母様に

は先日より御病氣の處、御養生のか

ひもなく、去る十九日遂に御死去遊

ばされ候由、誠に驚き入り候。

こしじ 「越路」(地名) 1 越路

十一23 4 〇 越路の雪も解初めたれば、

柴田勝家、〇略、近江の柳瀬に討

つて出でしむ。

こじつ 「後日」(名) 2 後日

九37 4 〇 レマン將軍も、〇略、野戰

病院に送られたり。後日レマン將軍

が捕虜として〇略。

十121 7 〇 主人はそれ等の人々をさしお

いて、或一人の青年をやとひ入れた。

後日、人が主人に向つて、どういふ

お見込で、あの青年をお用ひになつ

たのかと尋ねた。

こじつかいり 「五十海里」(名) 1 五

十海里

十一8 5 〇 それから五十海里ばかりさ

かのぼつて、黄浦江といふ支流に

入り、〇略。

ごしつそ 「御質素」(形状) 1 御質素

十3 5 〇 平生きはめて御質素にわた

らせられし御有様、一つくの御品

の上にかゝはれて、無量の感に打

たれたり。

ごじつたん 「五十反」(名) 2 五十反

七114 2 〇 去る三日にお差出しの稿物

三十反、本日無事に着きました。

〇略。あのたちで子ども向の品をも

う五十反、至急お送り下さい。

八39 3 〇 包の中には白木綿が五十反ば

かりはいつてゐたのでございます。

ごじはんごろ 「五時半頃」(名) 1 五

時半頃

六31 5 〇 一番汽車ニ乗ラウトイフノデ、

父ト五時半頃ニ家ヲ出タ。

ごじふん 「午時分」(名) 2 午時分

七112 〇 受付午 時 分

七112 〇 送信午 時 分

こじま 「小島」(名) 1 小島

九29 10 〇 瀧は、落口にあるゴート島と

いふ小島の爲に二つに分れてゐます。

こじまたかのり 「児島高德」(課名) 2

児島高德

十目15 〇 第二十七 児島高德

十130 1 〇 第二十七 児島高德

こじまたかのり 「児島高德」(人名) 1

児島高德

十130 6 〇 此の頃備前に児島高德とい

ふ武士あり。

ごしやく 「五尺」(名) 2 五尺 〇い

ちじようごしやく

五86 5 〇 叔父さんは大へんだ土手が

切れたといつて、すぐ屋根へ出まし

た。たちまち水が二尺になり、三尺

になり、五尺にもなりました。

七27 6 〇 馬の高さは前足の所ではかる。

〇略、五尺あると、十寸といふ。

ごしやくにすん 「五尺二寸」(名) 1

五尺二寸

九102 6 〇 北風はたけが五尺二寸もある

黒馬で、〇略、見るからに強さうな

軍馬である。

こじやり 「小砂利」(名) 1 小じやり

六19 7 〇 うちよせて来る波は、岩をか

み、小じやりをとばしては、さあつ

と引いて行きます。

ごしゆ 「五種」(名) 1 五種

六40 3 〇 〇略、兵には歩・騎・砲・

工・輜重の五種があつて、私の村

から、今歩兵になつて來てゐるのは

私一人だけなのだ。

ごじゅう 「五十」(課名) 4 五十

五目2 〇 十四 雨……………五十

六目3 〇 第十五 萬じゆの姫……………五

十

八目3 〇 第十四 餅つき……………五十

十目11 〇 第十 銀行……………五十

ごじゅういち 「五十二」(課名) 1 五

十一

三目5 〇 十七 一口ばなし……………五十

一

ごじゅうおん 「五十音」(名) 1 五十

音

八93 6 〇 此所では女の先生が、生徒に

五十音の發音を教へてゐられた。

ごしゅうかん 「五週間」(名) 1 五週

間

八50 4 〇 春ノ初三三ノ卯ヲ産ミ、五

週間程アタ、メテ、ヒナニカヘス。

ごじゅうく 「五十九」(課名) 3 五十

九

二目8 〇 二十 オクスリ……………五十九

十目13 〇 第十一 鉢の木……………五十九

十一目15 〇 第十四課 北海道……………五

十九

ごじゅうご 「五十五」(課名) 2 五十

五

四目4 〇 十五 しひの木とかし

のみ……………五十五

八目4 〇 第十五 町の辻……………五十五

ごじゅうこかい 「五十五階」(名) 1

五十五階

八72 3 〇 高い建物のあることは世界

第一で、〇略。中で最も高いのは五

十五階もあります。

ごじゅうごメートル (名) 1 五十五

メートル

十一105 4 〇 次にイグアススーの瀧

は、〇略、高さ五十五メートル、幅

三千六百メートル、其の壯觀實に筆

舌に盡くし難く候。

ごじゅうさん 「五十三」(課名) 2 五

十三

四目3 〇 十四 お話二つ……………五十

三

十目12 〇 第十一 傳書鳩……………五十三

ごじゅうさん (名) 〇いぜんれいじこ

じゅうさんぶん

ごじゅうし 「五十四」(課名) 3 五十

四

二目4 〇 十八 カゲエ……………五十四

三目4 〇 十八 をののたうふう……………

…五十四

十一目14 第十三課 ふか……………五十	兵に旨をふくめて先發せしめ、〈略〉近江に向ふ。	十兩	の三つの橋でございます。
ごじゅうしち 「五十七」〔課名〕 3 五十七	十二276 五十人の兵は行く／＼百姓をつのり、かゞり火をたかせ、糧食の用意をなさしむ。	七66 小判が百五十兩はいつて居ります。五十兩は黄色なきれにつゝんであつて、百兩は小さなふくろに入れてあります。	ごじょうげんとう 「五丈原頭」(名) 1
二目7 十九 ナゾ……………五十七	十二714 ゴネリルは決して氣だてのやさしい女ではなかつた。〈略〉其の上王に百人の家來を五十人に減ずるやうにといつた。	ごじゅうろく 「五十六」〔課名〕 2 五十六	十一1128 文頭 〈略〉、三軍進めし五丈原頭、はかなく露と消えしかど、其の名はくちせず、諸葛孔明。
三目7 十九 セミ……………五十七	ごじゅうのとう 「五重塔」(名) 1 五重の塔	五目4 十六 日本三景……………五十六	ごじょうさんじやく 「五丈三尺」(名) 1 五丈三尺
四目5 十六 大工小屋……………五十七	ごじゅうのうち 「御承知」(名) 3 御承知	九目2 第十四 麥打……………五十六	十二999 〇 〈略〉、東大寺の金堂は天空高くそびえて、五丈三尺の大佛一千二百年の面影を残せり。
ごじゅうしち 「御住所」(名) 1 御住所	ごじゅうはち 「五十八」〔課名〕 1 五十八	ごしゅじんさま 「御主人様」(名) 1	ごしうち 「御承知」(名) 3 御承知
九113 〇 早速御見舞に參上致したく存じ候へども、御住所不明にて困り居り候。	十一419 〇 貴兄には去月以來御病氣にて、しかも一時は大分御重態なりし由、誠に意外の事に驚入候。	八462 〇 十二月十四日 淺吉 御主人様	五905 私のおくめは、御承知の通り、皆様が私の口へお入れになる郵便物を大切にあげかつてゐて、これをあつめに來る人に渡すのであります。
ごじゅうたい 「御重態」(名) 1 御重態	ごじゅうに 「五十二」〔課名〕 4 五十二	ごじゅうのうくださる 「御受納下」(下)	九1139 〇 若し御承知に候はば、御手數ながら至急御報知下されたく、願ひ上げ候。
二	四目2 十三 ゑはがき……………五十二	ごしよ 「御所」(名) 1 御所	十一422 〇 御承知の通り當地には温泉これあり、病後の保養には特に宜しき由に候。
五目3 十五 養老……………五十二	七目4 第十六 航海の話……………五十二	六11 〇 御所	ごしうちゅう 「湖沼中」(名) 1 湖沼中
二	十二113 第十二課 小さなねぢ……………五十二	ごじょう 「古城」(名) 1 古城	十二517 我が國の湖沼中此の湖より深いものは秋田縣の田澤湖だけである。
ごじゅうにん 「五十人」(名) 4 五十人	ごじゅうり 「五十里」(名) 1 五十里	十一128 〇 右に見ゆるは名高き御寺、左に遠くかすむは古城、春は繪のご我等をめぐる。	ごじょうのおおはし 「五条大橋」(名) 2 五条の大橋 五条大橋
十二123 申し込んで來た者は五十人許もあつて、〈略〉。	十一47 今かりに一時間五十里の速度で飛ぶ飛行機に乗つて行つたとしても、太陽に到着するには八十七年かゝるのである。	ごじょう 「湖上」(名) 1 湖上	六71 〇 五條大橋
十二274 〇 あたかも晝食の膳に向ひ居たる秀吉は、〈略〉、先づ五十人の	ごじゅうりよう 「五十両」(名) 1 五	十355 ガツン湖といつて、〈略〉大きな人造湖で、湖上に點々と散在してゐる島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。	六728 義經・辨慶の五條の大橋は此の川下にかゝつてゐるのでございま

す。

ごしょく「五色」(名) 1 五色

十二63 国旗の色彩が其の國の人の種を表すものに、支那の國旗あり。即ち赤・黄・藍・白・黒の五色を横に並べたるものにて、(略)。

こしらへる「拵」(下二) 14 コシラ

ヘル こしらへる「拵」(下二) 14 コシラ

二35 6 拵 ハタイセツナオ米

デコシラヘタモノデスカラ、イテハイケマセン。

二39 5 ニイサンガオトモダチト、

ニハニ大キナユキダルマヲコシラヘマシタ。

二40 2 ワタクシハネエサンニ、

ユキデウサギヲコシラヘテイタダキマシタ。

二45 6 ヨイオダイサンハソノ木ヲキツテ、ウスヲコシラヘマシタ。

二28 3 (略)、おちいさんに、あれ

で竹うまをこしらへていただくつもりです。

三61 7 男の子三人はささのはをとつて、舟をこしらへました。

三67 2 ソレカラホソイ竹ヲエ

ニシテ、ソノサキニキレヲマキツケテ、センヲコシラヘマシタ。

三69 6 (略)「コンナニアナヲタクサンアケテハダメダ。ソノウチ

ニ、ニイサンガコシラヘテヤラウ。」

六102 6 かしはもちをこしらへていた。

七110 8 (略)「おとうさん、ヘンとは何

のことですか。」「返事のことだ。一つこしらへてごらん。」

八51 6 にいさんが奥の間に、餅を並べる所をこしらへてゐた。

八104 9 材木を機械にかけて軸木をこ

しらへてゐる者もあり、(略)。

十一92 9 太陽暦は春分から春分までを一回歸年といつて、それを本と

してこしらへたものだ。

十一93 3 (略)ところが太陰暦は月のみ

ちたりかけたりする變化を本としてこしらへたもので、(略)。

こじろう「小二郎」(話手) 2 小二郎

三37 7 小二郎「又わかれ道のところへきました。まはりつこをし

てみませうか。」

三38 5 小二郎「それではぼくは

左の本道を通ります。」

こじろう「小二郎」(人名) 5 小二郎

三20 2 小二郎は正一とうらの山へわらびをとりにいきまし

た。

三21 8 二人がびつくりして見てゐますと、それは小二郎のう

ちのいぬでした。

三22 2 犬ははなをくんくんいはせ、ををやたらにふつて、小

二郎のそばへよつてきました。小二郎がうちへかへつて

みますと、犬はもうとつくに

かへつてゐて、かけてきてとび

つきました。

三39 4 それでとはい本道をまはつた小二郎の方が、正一より

もかへつてさきにつきました。

こじん「古人」(名) 1 古人

九27 5 古人も『志ある者は事終に

成る。』と言つてゐる。

こじん「個人」(名) 1 個人

十二23 10 個人の利益を營むのが商業

であると思はれてゐた。

こじん「御仁慈」(名) 1 御仁慈

十二130 1 (略)此の邊の事情をよく御推察下されて、特別の御仁慈を以

ておだやかに事のまとまるやう今一

應御評議下さることにありますれば、誠に日本國の幸でござります。

こしんせつ「御親切」(形状) 1 御親切

十一43 2 (略)御親切なる御手紙有難

く拜見仕候。

こしんでん「御神殿」(名) 1 御神殿

六107 1 (略)何のかざりもない御神殿を拜して、まことにそれ多い氣がし

た。

ごしんぼく「御神木」(名) 1 御神木

五39 5 八幡様の高い石だんを上りつ

めた所に、しめをはつた大きな杉の木がありました。御神木ださうです。

こす「越」(五) 6 こす 越す「一

シ」↓とおりこす・もうしこす

五75 6 一冬こして、春には池の水が

一ぱいになった。

七65 4 これはあの人落して行つたにちがひないが、渡賃が高いといつ

て、此のあぶない川を一人でこした

ほどの人である。

七66 5 「あなたは今朝一人で川を

こした方ではありませんか。」

九101 1 二百十日を無事に越した田には稻の穂先がもう大分重みを見せて

ある。

十34 3 前と同じ方法で、船はもう一段高く浮上り、次の水門を越して、

小さい人造湖に出る。

十一85 2 竹島を越したと思ふと、急に水が冷たくなつた。

こす「濾」(五) 1 こす「一シ」

十一53 3 集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不純な物を取

除き、(略)。

こすいさつくださ・れる「御推察下」

(下二) 1 御推察下される「一レ」

十二130 1 (略)此の邊の事情をよく御推察下されて、特別の御仁慈を以

ておだやかに事のまとまるやう今一

應御評議下さることにありますれば、(略)。

こすう「戸数」(名) 2 戸数

十124 7 (略)我が村には戸数三百、人口千四百餘あり。

十一63 1 それが今は人口約二萬、戸

數約四千を算するりつばな町となつ

たのである。

こずえ「梢」(名) 7 こずゑ

八25 小鳥は時々此の清水にのどをうるほしては、こずゑでさへづるのである。

九329 かんくんとこずゑをてらしてゐる十時過ぎの日かげが、若葉の色を下に投げるのか、〈略〉。

九342 みねからすそにかけての若々しいこずゑの色は、強い日光を浴びて、一面に煙つてゐる。

十299 野路を行く人影 たゞちにきえて、けたましまし、もずの音にきえて、

こずゑはいづこ。

十896 図 こずゑ明るき林を行けば、やぶかうじの實木の根に赤く、〈略〉。

十一385 木でも見下されるのがいやなのか、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

十二42 図 海原はみどりに晴れて、濱松の こずゑさやかにふれる白雪。

こずえこし「梢越」(名) 1 こずゑこし

九339 道がだんく上りになつたと見えて、谷のこずゑこしに、遠い湖がちらく／＼と見えて來た。

こすず「小鈴」(名) 2 こすず

三107 図 うちの子ねこは かわいい子ねこ、くびのこすずを

ちりちりならし、すそにからまり、たもとにすがる。

三115 図 〈略〉、くびのこすずをちりちりならし、まりとざれては えんから おちる。

こすりあわ・せる「擦合」(下二) 1 こすりあはせる「一せ」

十一665 其のうち 〈略〉、木片と木片をこすりあはせて火を得る法をさとするやうになつた。

こす・る「擦」(五) 2 コスル こする「一ツ・ーリ」

四192 白ウサギ 八目ヲ コスツテ、又ソノワケヲ 申シ上ゲマシタ。

九654 〈略〉、ブラシを持った數十人の水兵が、甲板をこすりながら頭を並べて進んで行く。

こせい「小勢」(名) 3 小勢

八137 見物人は争つて、多勢の方へ行つたが、家康は小勢の方へ行けど命じた。

八141 図 多勢の方はゆだんをしてゐるが、小勢の方はみんな心を合はせて、一生けんめいになつてゐる。

八144 間もなく合戦が始ると、果して小勢の方が勝つた。

こせいぜん「御生前」(名) 2 御生前

十31 図 又日々に奉る供へ物には、御生前殊に御好みありし品々を選ぶ由なるが、〈略〉。

十110 2 図 尚御生前御好物なりしやうかん一折、〈略〉、御佛前へ御供へ

下されたく候。

こせいばつ「御征伐」(名) 1 こせい

五184 図 むかし神武天皇がわるものどもをこせいばつになつた時、わるものどもが強く、おこまりになつたことがある。

こぜん「午前」(名) 3 午前 じつごぜんじゅうじごろ・どうじつごぜんじゅういちじ

九70 図 仙臺に着いたのは午前の三時で、少しは下りた人も乗つた人もあつた。

十116 8 汽車で二日市驛に着いたのは午前の八時、驛前で太宰府行の輕便鐵道に乗つた。

十一24 10 図 〈略〉、戦は午前のうちに終りぬ。

こぜん「御前」 じおんまえ

こせんえん「五千円」(名) 1 五千圓

十224 図 此の町では、二歳駒の市が十日間も續いて、〈略〉、直段も一頭四千圓・五千圓といふ高いのがあるさうです。

こぜんかいなさる「御全快」(下二) 1 御全快なさる「一レ」

十一422 図 何とぞ十分の御養生ありて、一日も早く御全快なされ候様切に祈申候。

こぜんこじ「午前五時」(名) 1 午前五時

九621 やがて午前五時の鐘が鳴ると、

當直將校が元氣のよい聲で號令をかける。

こせんこひやくキロメートル (名) 1

五千五百キロメートル

十一1046 図 アマゾン河は全長五千五百キロメートル、世界の河の王といはれ居候。

こぜんしちじ「午前七時」(名) 1 午前七時

十117 團員は、午前七時八幡神社の境内に集つた。

こせんじよう「古戦場」(名) 1 古戦場

十二252 図 七里が濱のいそ傳ひ、稲村が崎、名將の 劍投せし古戰場。

こせんにんよ「五千余人」(名) 1 五千餘

六943 さうして、これをよけようとして賊のさわぐ所を射させて、又々五千餘もころした。

こぜんはちじ「午前八時」(名) 2 午前八時

九668 午前八時になると、艦尾の旗竿に軍艦旗があげられる。

九733 午前八時盛岡に着いた。

こそ(係助) 11 コソ こそ

三28 マダウスグラウゴザイマスガ、ケサコソニイサンヨリサキニオキテミヨウトオモツテ、ソツトネドコヲ出マシタ。

四936 〈略〉、長い間つけねらひま

したが、手を出すすきはあり
ませんでした。ある年、よりも
は日本中のさむらひを引きつ
れて、ふじのまきがりをいたし
ました。かたきのくどうもより
とものおともをして行つて居
ます。兄弟は今度こそはと、
母にいとまごひをして、ふじ
のすそ野へ急ぎました。

六九三 〔略〕、賊は大きなしこを作
つて、之を城の堀に渡して橋にした。
廣さが一丈五尺、長さが二十丈、其
の上を賊が我先に渡つた。今度こそ
は千早城もあやふく見えた。

七〇八 小西は日本の大將ならず、
まことは堺の町人、道案内の者故、
にげも致したであらう。此の清正こ
そはまことの太將、四十萬の軍勢は
此所へ向けよ。

九二八 病みつかれた六十ばかりの老
人が、ふとんの上に起直つて、十五
六の少年に、熱心に何か言聞かせて
ゐる。〔略〕、此の老人こそは
出羽の國の醫者佐藤信季、少年は其
の子信淵である。

九七八 五時間目の授業がすむと、先
生はこくして、「〔略〕」とおつ
しやつた。これこそ僕たちが、一週
間も前から、毎日々々待つてゐた命
令だつたので、〔略〕。

九八八 〔略〕、とうとうカリストを
熊にしてしまひました。其の中に、

子供のアルカスはだん／＼大きくな
つて、狩人になりましたが、或日大
熊を見つけたので、それを射殺さう
としました。此の大熊こそは、先に
ジュノーに形を變へられたおかさ
んのカリストだつたのですが、〔略〕。

七〇九 頃しも鎌倉より、勢ぞろへ
の沙汰俄に國々に傳はりぬ。常世は、
時こそ来れと、やせ馬にむちうつて
はせつけたり。

七四三 眞淵は〔略〕、天下に聞え
た老大家。宣長は〔略〕、篤學の壯年。
年こそちがへ、二人は同じ學問の道
をたどつてゐるのである。

八〇二 〔略〕、煙たなびくと
まやこそ、我がなつかしき住家な
れ。

一二六 會見したが、其の日
要領は遂に得がたく、兩人は翌日の
再會を期して別れた。翌十四日の會
見は、芝、田町の薩摩屋敷で行はれ
た。安芳は今日こそ最後の確答を得
ようと決心して、西郷をおとつた
のである。

こそう 「小僧」(名) 6 小ゾウ 小ぞ
う 小僧 じしゅじんからこそうへ
六三二 少シ行クト、呉服屋ノ小ゾウ
ガ表ヲハイテキタ。

八五六 米屋の小ぞうお得意へ
米を運びし歸り途、ひらりと下り
て自轉車を 角の下駄屋にあづけ置
き、すぐに老婆をみちびきぬ。

八五三 〔略〕「年の若きに感心な。」
かくいふ聲を後にして、小ぞうは
乗りぬ、自轉車に。

一四五 或夜小僧、住持の居間に
來りて、「〔略〕。」とさゝやきければ、
住持ひそかに行きて見るに、〔略〕。

一六九 或山寺で、〔略〕無言の行
を始めた。小僧一人だけ自由に室内
に出入させて、いろ／＼の用を足さ
せた。

一六九 小僧、早く燈心をかき
たててくれ。」

一六九 又御造營の半ば頃より、
各地方青年團の御手つだひを願ひ出
づる者數多かりしかば、〔略〕。

こそうからしゅじんへ 「題名」 2 小
ぞうから主人へ

八四九 第十二 手紙 一 小ぞうか
ら主人へ

こそうけん 「御壯健」(形状) 1 御壯
健

一二二 先生には何時も
御壯健の由、何よりのことに御座候。

こそうさんたち 「小僧達」(名) 2 小
ぞうさんたち

五二五 店の中へはいつて見ますと、
番頭さんたちは、お客から注文をう
けては、小ぞうさんたちにさしづ
してゐます。

五二六 小ぞうさんたちは、土さうか
らいろ／＼な反物や帶地をかついで
來て、お客の前につみ上げます。

こそぼさま 「御祖母様」(名) 1 御祖
母様

一〇九 承り候へば、御祖母様に
は先日より御病氣の處、御養生のか
ひもなく、去る十九日遂に御死去遊
ばされ候由、誠に驚き入り候。

こぞんじ 「御存」(名) 2 御存じ

七五三 皆さんは海を御存じでせう。
七五四 汽船も軍艦も御存じでせう。

ごだいきょうこく 「五大強國」(名) 1
五大強國

七四三 其の中我が大日本帝國と、
イギリス・フランス・イタリア及び
アメリカ合衆國を世界の五大強國と
いふ。

ごたいこく じせかいごたいこく
ごだいてんのう 「後醍醐天皇」(人
名) 1 後醍醐天皇

一三〇 元弘二年三月、北條高時、
後醍醐天皇を隱岐にうつし奉る。

ごだいせいしん 「古代精神」(名) 1
古代精神

一一五 私も實は我が國の古代精
神を知りたいといふ希望から、古事
記を研究しようとしたが、〔略〕。

ごだいのくしん 「課名」 2 五代の苦
心

九一七 第六 五代の苦心
九二六 第六 五代の苦心

こた・う 「答」(下二) 3 答ふ 《一へ》

八98 2 図 杉野はいづこ、杉野は居ずや。」船内くまなくたづぬる三度、呼べど答へず、さがせど見えず、《略》。

九38 5 図 《略》 エンミツヒ將軍はみづから進んで握手を求め、《略》。」と感歎せるに、レマン將軍は靜かに、《略》。」と答へたり。

十二6 6 図 《略》 建御雷命此の地に來りていふやう、「大神の勅にいはいく、此の葦原の中つ國は皇孫之をしらしめすべし。」と。快く此の國をたてまつり給ふや如何に。」大國主命答へてはいく、「我もとよりいなみ奉る心なし。我が子事代主とはかりて答へ申さん。」

こたえ 「答」(名) 6 答ふてこたえ

九42 6 図 なたち正していひ出でぬ、『此の方面の戰鬪に二子をうしなひ給ひつる 閣下の心如何にぞ。』と。『一人の我が子それゝに、死所を得たるを喜べり。これぞ武門の面目。』と、大將答ふあり。

十二66 9 《略》、《略》。先づ姉のゴ

ネリルから言つてみよ。」と尋ねた。ゴネリルの答は如何にも言葉巧みであつた。

十二68 3 王は満面に笑みをたゝへながら、今や遅しと其の答を待受けてゐる。

十二69 7 娘の答に失望した王は、《略》、《略》。永の勘當だ。」と言渡した。

十二70 8 しかしフランス王は《略》、コデーリヤの簡単な答の中にも十分眞心のこもつてゐるのを認め、《略》。こたえもうす 「答申」(四) 1 答へ申す 《一サ》

十二68 8 図 快く此の國をたてまつり給ふや如何に。」大國主命答へてはいく、「我もとよりいなみ奉る心なし。我が子事代主とはかりて答へ申さん。」

こたえ 「答」(下二) 14 コタヘル

答へる 《一へーヘル》

ニ64 3 ナニカキカレマス、コノ口デハツキリコタヘマス。

四31 1 《略》、「だれだ」といふと、「だれだ」と答へます。

四33 6 図 こちらでやさしくいへば、向ふでもやさしく答へ、《略》。

四37 7 図 こちらで《略》、おこつていへば、おこつて答へるのです。

四91 4 母は泣きながら二人の子どもに、《略》。お前たちが大

きくなつたら、此のかたきを取つて おくれ。」といひました。

《略》、十郎はなみだをおさへて「きつと此のかたきを取つて見せます。」と答へました。

五3 7 さうして「山田さん」とおよびになりましたから、「はい」と答へますと、《略》。

六60 1 わけをたづねますと、「あの中には石のらうがあつて、唐糸様がおしこめられて居られます。」と答へました。

八18 5 「いゝえ、頼まれたのではございせん。」將軍は長四郎を大きな袋へ入れて、「ありのまゝに申すまでは出さぬ。」といつて、袋の口を封じて柱に掛けた。翌日になつて、將軍が又たづねたが、始のやうに答へた。

八88 4 《略》、先生はおとよに、低い聲できかれた。「此の方はどなたですか。」するとおとよは、《略》、「わたくしのおとよさん。」と答へた。

八92 1 信吉は《略》、「おとよ、おとよさんが歸つて、うれしいか。」と言つた。おとよは《略》、「はい、うれしうございます。もう何所へも行つて下さいますな。」と、はつきり答へた。

九98 9 図 浅間山は煙をなびかせて、東南の空はるかにそびえ、戸隠連山は東北の方に、呼べば答へるばかり

り近くそばだつてゐます。

十40 10 父は「力蔵さん、まあ、一服やつてから始めなさい。」といったが、力蔵さんは《略》、「朝のうちに此のけやきだけぶつ倒したいと思つてね。」と答へて、止めようとし

ない。

十121 9 後日、人が主人に向つて、どういふお見込で、あの青年をお用ひになつたのかと尋ねた。主人は答へて、《略》。」といった。

十122 8 図 あいさつをしてもていねいで、少しも生意氣な風が無く、何を聞いても、一々明白に答へて、しかもよけいなことは言ひません。

こだかい 「小高」(形) 1 小高イ 《一イ》

三48 2 學校ノ北ニ小高イヲカガアリマス。

こたこた (副) 1 こた／＼

十二52 10 ねぢは驚いてあたりを見廻したが、いろ／＼の物音、いろいろの物の形がこた／＼と耳にはいり目にはいるばかりで、何が何やらさつぱりわからなかつた。

こだち 「木立」(名) 6 木立

九30 10 瀧の上手にかけた石橋を渡り、木立の深いゴート島に行つて、もうく／＼と立ちこめる水煙の間から近く瀧をながめるのもよく、《略》。

九32 2 何時もはうす暗い程茂り合つてゐる兩がはの木立も、まだ若葉だ

けに、下草まで見えるぐらゐ明るい。
 十一6 両がはに木立すき間もなく茂りて、新しき宮の境内とは思はれず。
 十四5 此所を出でて舊御苑に入り、木立の間の細道をたどれば、程なく小さき建物の前に出づ。
 十四8 前には横長き池をひかへ、池のめぐりは見渡す限りの木立・くさむらにて、さながら別天地に遊ぶ思あり。
 十四9 朝日のさわやかな光が、木立をもれて窯場にさし込んだ。
 こだまちょう 「児玉町」〔地名〕1 児玉町
 七35 町に〈略〉・児玉町などと、日露戦争の時の大將方の名を取つてつけてあるのは面白いでせう。
 こち ↓あちこち
 こちそう 「御馳走」(名) 4 ゴチソウ
 こちそう 御ちそう
 二107 〇ミゴトニサイタ カキネ
 ノコギク、一ツトリタイ、マツシロナハナヲ、ママゴトアソビノ ゴチソウ ニ。
 三42 りゆうぐうのおとひめは〈略〉いろいろなこちそうをしたたり、さまざまあそびをして見せたりしました。
 九48 田植がすんだので、昨夜は手つたひの人たちを呼んで、こちそうをしました。

十二7 どれ、私もお茶を一つ御ちそうになりませう。
 こちゅう 「湖中」(名) 1 湖中
 十二50 中湖は深さが三百七十八メートル、此の湖中で一番深い處である。
 こちゅういくださる 「御注意下」(五)
 1 御注意下さる 《—ル》
 十一74 〇「私がかねぐ古事記を研究したいと思つてをります。それについて何か御注意下することはございますまいか。」
 こちゅういなさる 「御注意」(下二)
 1 御注意なさる 《—ル》
 十一101 〇 勉強も大切なれど、體にも精々御注意なさるべく候。
 こちよう 「五町」(名) 1 五町
 十一63 〇〈略〉、一枚の皇でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。
 こちら 「此方」(代名) 25 コチラ
 ちら ↓あちらこちら
 一23 〇 アチラ ニモ、コチラ ニモ、ホタルヲヨブコエガシマス。
 二19 〇 コチラ ノクライモリノ中ニミエルノハ、ドコノウチノアカリデセウ。
 二37 〇 フルフルユキガ、マツ白ナユキガ。アチラノ山ニ、コチラノモリニ。
 二39 〇 マツクロナ目ヲシテ、コチラヲニランデキマス。

三72 〇 それから、あの赤いじゅばんはねえさんので、〈略〉。こちらのかすりのつつそでは太郎のあはせで、〈略〉。
 四33 〇 それが山びこです。こちらでやさしくいへば、向ふでもやさしく答へ、〈略〉。
 五55 〇 中村君がこれまで居た所は日本の方で、〈略〉、うめやさくらも、こちらよりはずつと早くさくさうです。
 五57 〇 何でも汽車に二日「ばん乗通」して、こちらへ着いたのださうですから、何百里かはなれてゐるのでせう。
 五58 〇 中村君がこれまで居た所は日本の方で、〈略〉。〈略〉。こちらは今さくらのさかりですが、あちらでは、もうとうにちつてしまつたさうです。
 五27 〇 〈略〉、ガンガソロくワタツテ來ルコロ、南ノ國ヘカヘツテ行キマス。ツバメハコチラニ居ル間ニ、人ノ家ニスラ作ツテ、ヒナヲソダテマス。
 五64 〇 「神明様のこちらにある白壁造の家は工場ですか。」
 六104 〇 昨日正午にこちらへ着いて、午後外宮へ参り、今日内宮へ参つた。
 八46 〇 其の後どうかと案じてゐましたが、手紙を見て安心しました。こちらの方はどうでもなるから、心

配するには及びません。〈略〉、ゆつくり看病してお上げなさい。
 八85 〇 學校へ行つて案内をこふと、小使が出て來た。「私はこちらに御やくかいになつてゐる松木とよの父でございます。」
 九39 〇 此のトラツク島へ來てからもう三月になるので、土地の様子も一通りはわかりました。冬でも春でもこちらではちやうど内地の夏のやうです。
 九16 〇 保護色ヲモツテキルト、〈略〉。シタガツテ敵ニオソハレル心配モ少ク、又コチラカラ敵ヲオソフノニモ都合ガヨイノデアル。
 九79 〇 あちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲。
 九109 〇 〈略〉、地上には、人馬の死がいがある。こちらにもこちらにも重り合つてゐる。
 十73 〇 皆様御かはりはありませんか。こちらも一同無事です。
 十77 〇 第十三 京城の友から〈略〉。こちらへ來てもう三月餘りになります。が、〈略〉、雨といふものはごくたまにしか降りません。
 十78 〇 第十三 京城の友から〈略〉。こちらでは昔から之を三寒四温といつてゐるさうです。
 十一71 〇 〈略〉、主人は愛想よく迎へて、「〈略〉」江戸の賀茂眞淵先生が、先程御見えになりました。」といふ。

あまり思ひがけない言葉に宣長は驚いて、「先生がどうしてこちらへ。」

十一117 10 ふと向ふを見ると、銃獵に出たらしりつばな騎馬の人たちが、眞一文字にこちらへかけて来る。

十一123 8 まるであめ細工のやうである。見てゐるうちに大きなフラスコが出来た。こちらを見ると、そこではちよつと吹いて型に入れ、又吹いて型から出す。

十二21 6 あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよきんく〜と聞える。

こっか「国家」(名) 14 国家 じいちこっか

九26 8 此の四代の苦心の後を受けて、國家の爲に、此の學問を大成するのが前目の役目だ。

九28 8 さうして終に當代第一の農學の大家となつて、國家の爲に富源を開發することが甚だ多かつた。

十88 9 輸出入の額の増加して行くのは國家が次第に盛になる印である。

十97 4 四「我もとより之を知る。唯國家の危きを如何せん。」

十一5 4 四「略」、孔子大いに之をうれひ、如何にもして國家を治め、萬民の苦を救はんものと、廣く各國をめぐりて、用ひられんことを求めぬ。

十一19 9 又他人の物を盗んだといふやうな犯罪があつた場合には、國家は其のやうな不法な行が再びされな

いやうに、其の犯罪者をこらし、又世間の人々のいましめにもせねばならぬ。

十一20 8 裁判所は國家が設ける機關で、これに「略」の四階級がある。

十一21 7 「略」、刑事裁判で、國家を代表して犯罪者の處罰を求めるのは檢事の職務である。

十二60 9 國旗は實に國家を代表する標識にして、其の徽章・色彩にはそれ／＼深き意義あり。

十二61 10 元來イギリスは、イングランド・スコットランド・アイルランド三國の合同して成れる國家にして、「略」。

十二64 8 かくの如く各國の國旗は、「略」、國民の之に對する尊敬は、即ち其の國家に對する忠愛の情の發露なり。

十二88 3 法律は、國家といふ共同生活、秩序ありかつ幸福なものにするための規則であるから、「略」。

十二133 4 東海の島に據つた日本は、國家を建設する上に頗る有利であつた。

十二133 6 四周の海が天然の城壁となつて、容易に外敵のうかゞふことを許さないから、國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、「略」。

こづかい「小使」(名) 3 小使

七96 1 四 村の役場に三十年、勤

めつゞけし小使の 年のよりしがあはれさに、人々物を出し合ひて、樂なくらしにかへてやる。

八85 4 學校へ行つて案内をこふと、小使が出て来た。

八85 9 小使は僕等を應接室へ通して出て行つたが、間もなく黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。

こづかいぎじどう「國會議事堂」(名) 1 國會議事堂

十二29 5 四 テームス川を飾るタワー橋・ロンドン橋を始め、國會議事堂・略、其の他見る物聞く物唯々驚く外はありません。

こづかいさん「小使」(名) 1 小使さん

五40 2 「略」、べんたうをたべてゐると、さつきの學校の小使さんが麥ゆを持つて來て下さいました。

こづかじぎやう「國家事業」(名) 1 國家事業

十36 5 最後にアメリカ合衆國は、國家事業として此の工事に着手し、「略」、遂に之を造り上げたのである。

こっき「國旗」(課名) 2 國旗

十二目14 第十三課 國旗

十二60 7 第十三課 國旗

こっき「國旗」(名) 20 コクキ 國旗

四9 7 村ノ方ヲ見ルト、ドノ

家ニモ コクキガ出シテアリマシタ。

四9 3 谷ソコノ一ケンヤニモ、川ヲ下ツテ行ク小サナ舟ニモ、コクキガ出シテアリマシタ。

十二60 8 今「國家を形成する國々にして、國旗の制定せられざる所なし」。

十二60 9 國旗は實に國家を代表する標識にして、其の徽章・色彩にはそれ／＼深き意義あり。

十二61 1 今我が國を始め主なる諸外國の國旗に就いて述べん。

十二61 2 雪白の地に紅の日の丸をゑがける我が國の國旗は、最もよく我が國號にかなひ、「略」。

十二61 7 イギリスの國旗は、今日の形式を具ふるまでに幾多の變化を重ねたるものなり。

十二62 1 元來イギリスは、「略」三國の合同して成れる國家にして、先づイングランドとスコットランドと合するや、「略」前者の國旗と、「略」後者の國旗とを合して一旗となし、「略」。

十二62 2 「略」前者の國旗と、「略」後者の國旗とを合して一旗となし、「略」。

十二62 4 「略」、更にアイルランドの加はるに及び、白地に斜赤十字の徽章ある其の國旗を合はせて、遂に今日の如き形式をなすに至れり。

十二62 6 アメリカ合衆國の國旗は一定不變の部分と、變化を許された

る部分とより成る。

十二63 国 藍・白・赤三色を以て縦に染分けられたるは、フランスの国旗なり。

十二65 国 フランスの国旗が縦に三色を分ちたるに對して、黒・赤・金の三色を横に染分けたるものはドイツの国旗なり。

十二66 国 〈略〉、黒・赤・金の三色を横に染分けたるものはドイツの国旗なり。

十二67 国 国旗の色彩が其の國の人類を表すものに、支那の国旗あり。

十二68 国 国旗の色彩が其の國の人類を表すものに、支那の国旗あり。

十二69 国 イタリアの国旗は、緑・白・赤の三色を縦に染分け、中央の白地に王家の紋章を表せり。

十二64 国 かくの如く各國の国旗は、或は其の建國の歴史を暗示し、或は其の國民の理想・信仰を表すものなれば、〈略〉。

十二64 9 国 故に我等は、自國の国旗を尊重すると同時に、諸外國の国旗に對しても、常に敬意を表せざるべからず。

十二64 10 国 故に我等は、〈略〉、諸外國の国旗に對しても、常に敬意を表せざるべからず。

こっきょう 「国境」(名) 1 國境
九29 4 世界一といはれるナイヤガラ
の瀧は、アメリカ合衆國とカナダと

の國境にあります。

こつこ ↓おにこつこ

こつこつ 「元元」(副) 1 こつこ

九82 10 国 ぢいさん今年六十の坂を越えたる足もとに、大いなる石横たへて、なほ怠らずこつこつと、何をか常に刻みある、〈略〉。

こつち 「此方」(代名) 4 こつち
五17 2 国 「をちさん、勲章がふえま
したね。一番こつちは金鶏勲章でせ
う。」

六38 8 国 第十一 入營した兄から
國では初雪が降つたさうだね。こつ
ちは國よりよほどあたゝかだ。

六80 5 我が武士は敵の攻めよせるの
を待ちきれず、こつちからおしよせ
た。

六80 6 敵は高いやぐらのある大船、
こつちはつり舟のやうな小舟であつ
た。

こつつみ 「小包」(名) 2 小包
十108 2 国 今日本小包にて粗末なる物、
赤さんの御着物にもと御送り致し候
間、〈略〉。

十一103 10 国 此の手紙と一しよに、
繪葉書をたくさん小包にて送り申候。
こつつみびん 「小包便」(名) 1 小包
便

十110 3 国 尚御生前御好物なりしや
うかん一折、小包便にて御送り申し
上げ候間、御佛前へ御供へ下された
く候。

こつつりこつつり (副) 1 こつつり

く

十83 1 〈略〉、いよいよ石炭を掘つて
ある處へ來ました。つるはしの音が
こつつりこつつり聞える。

こつぱみじん 「木端微塵」(名) 1 こ
つぱみじん

六85 1 敵の船はこつぱみじんにくだ
けて、敵兵は海のそこに沈んでしま
つた。

コップ (名) 8 コップ コップ
七56 4 国 船長はコップの水を一口飲
みて、又其の話をうけたり。

七88 9 マリーが大急ぎでコップに水
を汲んで來ました。

十10 5 程なくフィリップは病室には
いつて來て、うやくしく藥のコッ
プを王にさへげた。

十一52 9 此の傷から出て來るゴム液
は、流れて下のコップにたまるので
ある。

十一53 2 それがすむと、今度はバケ
ツを持つてコップにたまつた液を集
めて歩くのである。

十一124 1 何が出来るであらうかと思
つてあると、いろ／＼扱つてあるう
ちに臺付のコップになつた。

十一124 6 エプロンをかけた職工がガ
ラスの皿やコップなどを、此の圓板
にあてて模様をほりつけたり、み
ぎをかけたたりしてゐる。
十一124 10 皿・コップをはじめ、〈略〉

などがきれいに並んでゐた。

こつん (副) 1 こつん

八76 9 此の時コロンブスは、こつん
と卵のはしを食卓にうちつけ、何の
苦もなく立てて申しました。

こて ↓ひとこて
こてん 「御殿」(名) 6 御殿 ↓きゅ
うこてん

六51 3 〈略〉、御殿に仕へてゐる萬じ
ゆがよからうと申し出た者がありま
した。

六57 7 〈略〉頼朝の御殿へ行つて、
うばと二人で御ほうこうをねがつた
のでございます。

六59 2 或日のこと、萬じゆが御殿の
うらへ出て、何の氣もなくあたりを
ながめて居りますと、〈略〉。

六60 3 三月二十日、今日はお花見と
いふので、御殿は人少でございます。
十3 10 国 第一 明治神宮參拜 〈略〉。
〈略〉、當時の御殿・御庭などの、今
も其のまゝに保存せらるゝなりとぞ。

十4 2 国 御殿は質素なる平屋にて、
御庭の此所彼所に、下葉の色づきか
けたるはぎ茂れり。

こてんにんなさる 「御転任」(下二)
1 御轉任なさる 《一レ》
九113 5 国 昨年僕の學校より、君の
學校へ御轉任なされ候佐野先生、先
頃より御病氣の由承り候。

こと 「言」 ↓かげごと・こと・ひと
りごと

こと「事」(名) 582 コト こと 事
 ↓あそびごと・しごと・しごととなる・しごとば・ただごと・できごと・なにごと・ままごとあそび・みごと
 一172 カタキウチヲスルコトニナリマシタ。
 二291 大キナスズヲネコノクビニツケテオイテ、ソノオトガキコエタラ、ニゲルコトニシテハドウデセウ。
 二313 正月ノオカザリニハ、ドンナコトヲシマスカ。
 二337 ユミヲイルコトガスキデ、トリヤケダモノヲイコロシテ、オモシロガツテキマシタ。
 二493 「オモシロイコトダ。花ヲサカセテミヨ。」
 二635 センセイノオツシヤルコトヤ、ミンナノイフコトヲキキオトスヤウナコトハアリマセン。
 二636 センセイノオツシヤルコトヤ、ミンナノイフコトヲキキオトスヤウナコトハアリマセン。
 二637 センセイノオツシヤルコトヤ、ミンナノイフコトヲキキオトスヤウナコトハアリマセン。
 二726 ソノ上イハヤニコモツテキマシタカラ、ナカナカタイデスルコトガデキマセンデシタ。

三164 「さうです。それではあしのゆびのなをしつてゐますか。」「おなじことせう。」
 三343 「いつもおたつしやなことで。」
 三374 ソレカラ、道ヲアルクトキニハ、左ガハヲ通ルノガヨイコトニナツテキマス。
 三446 それはまことにおなごりをしいことでございます。
 三448 それではこの玉手箱を上げます。どんなことがあつても、ふたをおあけなさいますな。
 三463 かなしくてたまりませんから、おとひめのいつたこともわすれて、玉手箱をあけました。
 三532 「星を二つ三つはたきおとさうとしてゐるのだ。」「はかなことをいふ。
 三568 たうふうはこれを見て、このかへるのやうに、こんきがよければ、何ごとでもできないことはないときとりました。
 三698 コマツテニイサンニ見テモラヒマシタラ、「コンナニアナヲタクサンアケテハダメダ。《略》。」トイフコトデシタ。
 三734 ムカシ鳥トケダモノガケンクワヲシタコトガアリマス。
 三843 そばへよつて見ますと、

見たこともないきれいな着物でした。
 三848 《略》、見たこともない美しい女が來ました。
 三862 天人のはころもなら、なほさらかへすことは出來ません。
 三864 それがなくては、天へかへることが出來ません。
 三877 おかげで天へかへることが出來ます。
 三892 「ああ、はづかしいことを申しました。」
 四67 その時 おちいさんは「《略》。」とおつしやつたといふことです。
 四212 アナタハオナサケブカイオ方デスカラ、後ニハキツトオシアハセノヨイコトガゴザイマス。
 四317 うちへかへつて、父にこのことを話しますと、父は「それは山びこです。《略》。」とをしへました。
 四324 正「山びこは何のこととでございますか。」
 四333 父「人のこゑも山の中では、かべにあたつたごむまりのやうに、かへつて來ることがあります。
 四361 《略》ヒクイ木ノ枝ニトマツテ、ボンヤリトシテ居ルコト

トガアリマス。
 四387 たび人のぐわいたうをぬがせた方が勝といふことにきめて、先づ風からはじめました。
 四495 さうひつぱりあつてはいけません。まん中へふせておきなさい。こんど取つた人がそれも取ることにします。
 四598 私ハカンナヲカケテ居ルノヲ見ルコトガスキデス。
 四626 いくら弓の名人でも、これを一矢でいおとすことは、なかなかむづかしさうです。
 四695 これは私が七つの年のことでしたが、《略》。
 四701 これは私が七つの年のことでしたが、今でも《略》と思はないことはありません。
 四741 私は長生をして居ますので、東の村や西の村に、人が生れたり、死んだり、家がたつたり、こはれたり、火事があつたり、水が出たりしたことをみんな見て知つて居ます。
 四765 《略》、其の時はなかなかにぎやかなことでした。
 四791 其の後間もなく死んだのです。さむい日のことで、あまり氣のどくでしたから、《略》。
 四798 私は《略》、どういふ子

はどういふ人になるといふことを見ぬきます。

四八八 「此のよいお天氣に、どうしたのでせう。」とたづねましたら、「河上の方で雪がとけはじめたのだらう。」といふことでした。

四八二 ちやうど大きな船がおきを通つて居ました。〈略〉。そばに乗つて居た人の話では、軍かんだといふことでした。

四九四 父はくどうすけつねにころされました。母は〈略〉、「何といふくやしい事だらう。〈略〉。」といひました。

四九二 けれどもかたきのくどうは、〈略〉、いつも大ぜいの家來をつれて居ます。二人のものはなかなかそばへよることも出来ません。

四九四 五月二十八日、雨のふるばんの事です、二人はたいまつで道をてらしてくどうのやかたへ向ひました。

五二五 大日本、大日本、神代此の方一度もてきに 負けたことなく月日とともに、國の光がかがやきまさる。

五四四 「これは級長の山田さんです。分らないことは此の方におききなさい。」

五五四 中村君がこれまで居た所は日

本の南の方で、冬でもめつたに雪のふることがなく、うめやさくらも、こちらよりはずつと早くさくさうです。

五三九 今日から日記をつけることにしました。

五八六 むかし神武天皇がわるものどもをこせいばつになつた時、わるものどもが強く、おこまりになつたことがある。

五九六 鶏の光がまるでいなびかりのやうで、わるものどもは目を明けてゐることが出来ず、おそれてみんなにげてしまつたさうだ。

五二七 ツバメハトブコトガ上手ナ鳥デ、〈略〉。

五三六 〈略〉、りやうがはの歩道に人通のたえることがあります。

五四二 「しばらくお待ち下さい。申したいことがあります。」

五四七 これから後やまとをぐなの皇子を日本武尊と申し上げることにになりました。

五四八 「日本一の事をくふうした。」

五五二 いつか此の事が天皇のお耳に入りまして、わざく奈良の都から美濃の國へ行幸になりました。

五五八 又まことにめでたい事だといふので、年がうを養老とお改めになつたと申します。

五七四 「私どもの村では、どうし

て池を掘らないのでせう。」「來年あたりから掘ることになつてゐる。

五七六 少しまはり道だが、となり村の用水池を見て行くことにしよう。

五八七 〈略〉、其の杉山なんぞは、木もろくにない草山だつたといふことだ。

五八九 〈略〉、此の村の庄屋が、村のことをいろく／＼と考へたすゑ、〈略〉と思つた。

五九七 どうしても大きな用水池を掘らなければならぬと考へた。此の事を村の相談にかけた。

五七二 村の人々は〈略〉、みんな賛成したといふことだ。

五七四 着手は來年からといふことになつて、庄屋は方々の村へ用水池を見に出た。

五七一 村の人は代り合つて、一日置に普請の手つだひをすることになつた。

五七四 氣早な者は自分の持地を田に造りかへたといふことだ。

五七六 〈略〉、をしいことに、庄屋は池が出来上つた年の冬、死んでしまつた。

五七六 長い間の苦勞が病氣のもとであつたといふことだ。

五八二 〈略〉、あの家にはよい事がつゞいて、身代は前よりもよくなつた。

五八四 土手の此の記念碑に、今話し

た事がくはしく書いてある。

五八四 さて宗任がかりまたをぬき取つて、義家にかへしますと、義家はせ中をくるりとむけて、うつほへさゝせました。〈略〉。「あぶないことだ。もし宗任に悪い心があつたら。」と、義家の家來どもはひや／＼したといひます。

五八二 おとうさんへ電報で御返事をいたしたやうに、うちには大した事ありませんでしたが、中々のさわぎでした。

五八二 うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、〈略〉、どうすることも出来ませんでした。

五九一 いかな日でも葉書の百枚や封書の三十通ぐらゐは、私の口にはいらないことはありません。

五九四 たまには雑誌や寫眞がはいることもあります。

五九五 作物の種や商品の見本も入れてよいことになつてゐますが、〈略〉。

五九六 〈略〉、私はまだそれをあづかつたことはありません。

五九四 〈略〉、封書には、いろ／＼こみ入つた事が書いてあります。

五九四 おめでたい事やたのしさうな事が書いてありますと、私もうれしいと思ひますが、〈略〉。

五九五 おめでたい事やたのしさうな事が書いてありますと、私もうれし

いと思ひますが、〈略〉。

五93 6 〈略〉、悲しい事や苦しうな事が書いてありますと、もらひ泣きをいたします。

五93 7 〈略〉、悲しい事や苦しうな事が書いてありますと、もらひ泣きをいたします。

五94 5 図 「それにはどんな事が書いてあつたか。」

五94 7 「それにはどんな事が書いてあつたか。」といふおたづねが出るかも知れませんが、それは人にもましてはならないことになつてゐます。

六5 8 図 臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、此の山のいたゞきには、いつもつもつてゐるといふことだ。

六10 6 図 銅ハ〈略〉。ソレデ、オアシニナルコトモ出来レバ、針金ニナルコトモ出来マス。

六10 7 図 銅ハ〈略〉。ソレデ、オアシニナルコトモ出来レバ、針金ニナルコトモ出来マス。

六12 3 図 其ノ外、〈略〉、皆鐵ガナケレバ造ルコトガ出来マセン。

六12 5 図 今デハ鐵ハオアシノ仲間ニハハイレマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ銅以上デス。

六20 4 一 しけ 〈略〉。〈略〉、汽てきの音は少しも聞えません。冬時の海には、よくこんなことがあります。

六23 6 其の夜のことです、義仲は

〈略〉、兩方から一度にどつとときのことゑをあげさせました。

六27 7 図 「どうも分らないのは、あの弱い人間がわれわれの仲間を生けどりにすることだ。」

六29 1 図 だつて分り切つた事でせう。六31 2 虎はうん／＼うなつて、かけまはるより外、どうすることも出来ません。

六41 4 図 〈略〉、兵種がちがふと、兵舎のあり場所もちがふので、めつたに一しよになることはない。

六43 2 図 其の中に又くはしい事を知らせよう。

六50 8 源 頼朝が鶴岡の八幡宮へ舞を奉納する事になつて、舞姫をあつめました。

六56 4 さあ、此の女にはゆだんが出来ぬといふ事になつて、石のらうを造つて、それに入れました。

六56 6 唐糸といふのは此の女のことでございます。

六57 1 これが萬じゆの姫で、木曾に住んで居りましたが、風のたよりに此の事を聞いて、うばをつれて、鎌倉をさして上りました。

六58 5 さて萬じゆは、だれか母の事をいひ出す者はないかと氣をつけてゐますが、〈略〉。

六59 2 或日のこと、萬じゆが御殿のうらへ出て、何の氣もなくあたりをながめて居りますと、〈略〉。

六63 4 さうして其の明くる年の春、舞姫に出ることになつたのでござい

ます。六67 7 さて主人に火事の話をして、義捐金のことをいひ出すと、「それはお氣の毒だ。」と言つて、たくさん金を出した上に、〈略〉と言つた。

六69 8 〈略〉を、此の川の水はいくたびとなくうつしたことでございませう。

六70 4 又〈略〉も、いくたびとなく此の川の水にうつつたことでございませう。

六82 6 いや／＼おしよせたが、敵の船は高くて上ることが出来ない。

六85 6 それからこゝに六百餘年、まだ一度も外國から攻められたことはない。

六86 2 自由にうごかすことの出来る長い鼻、〈略〉、一切繪で見た通りであつた。

六91 4 こんな山城一つ、何程の事があるものかと、賊が城の門まで攻上ると、〈略〉。

六94 5 此の上はひやうらう攻にしようと思つて、賊は城へ攻めよせないことにした。

六100 3 圖 昨日學校で校長に、あの木の事を話したら、はじめて聞いた記念の木、大事にするとおつしやつた。

六102 6 なるほど、去年鯉のぼりを立

てた時、しやうぶとよもぎを軒へさした。〈略〉。こんなことを思ひ出して垣根の方へ行くと、しやくやくが赤い芽を出してゐました。

六104 1 図 うちにも村にも、かはつた事はありません。

七7 8 図 港には防波堤ありて、風波のおそれ少く、水深くして、いかなる大船もきしに横づけにすることを

得。

七15 3 珍しかつたのは、丸山君のさるに、たつのおとしごが一つあつたことであつた。

七24 1 時々は線香の上つてゐることもある。

七24 9 此のおばあさんにむすこが一人あるのださうだがずつと前から南アメリカへ行つてゐるといふことだ。

七26 2 馬は〈略〉。走ることがはやくて、〈略〉。

七27 5 馬の高さは前足の所ではかる。八寸・九寸などといふのは、四尺八寸・四尺九寸などのことで、〈略〉。

七29 8 図 神戸ハ一大貿易港ニシテ、輸出入ノサカンナルコト横濱ニユツラズ。

七30 1 図 大阪神戸間ノ交通ノ便利ナルコト、東京横濱間ノ如シ。

七32 9 図 かくて幾年かすぎし後、武士は海をこえてふるさとへ歸ること

となれり。

七33 3 図 こゝに武士と獅子とはわか

れざるを得ざることとなりぬ。

七38ノ㊦ 〈略〉、来て先づ誰でもおどろくのは、波止場の大きなことです。

七38ノ㊦ 〈略〉、たくさん大船を一度きに横づけにすることが出来ます。

七38ノ㊦ 船から陸あげした荷物は、すぐ其所から汽車にのせて、ハルビンへでも北京へでも送ることが出来ます。

七39ノ㊦ 輸出品は豆粕が第一で、輸入品は綿布が一番多いといふことです。

七41ノ㊦ 日露戦争當時のことである。

七42ノ㊦ うちのことはいしんばいするな。

七43ノ㊦ 郡長をはじめ、見送の人々はみんな泣いたといふことである。

七46ノ㊦ よつて明日たがひに勇士を一人づつ出して組討をさせ、勝つた方のものが川中島を取ることにしては。

七50ノ㊦ 一日モ休ンダコトハアリマセシ。

七50ノ㊦ 鎌ヲキタヘテキタコトモアリマス。

七50ノ㊦ 鎌ヲ打ツテキタコトモアリマス。

七50ノ㊦ ナタヲ打ツテキタコトモアリマス。

七50ノ㊦ 車ノ輪ヲ打ツテキタコトモアリマス。

七50ノ㊦ 〈略〉、車ノ輪ヲ打ツテキタコトモアリマス。

七50ノ㊦ 〈略〉、車ノ輪ヲ打ツテキタコトモアリマス。

七54ノ㊦ 〈略〉、月夜には波が銀色に光つて、其の美しいことは何ともいひやうがありません。

七55ノ㊦ 時には鯨が高く潮を吹いてゐるのを見ることがあります。

七55ノ㊦ 何萬とも知れないいるかが、はね上つてはおよぎ、はね上つてはおよぎして行くのを見ることがあります。

七57ノ㊦ 又ある時にはとび魚が甲板の上へとび上ることもあります。

七57ノ㊦ 又きりがかゝつたり、大雪が降つたりして、一寸先も見えなくなることもあります。

七58ノ㊦ 〈略〉、かねや汽笛を鳴らすのは、外の船に自分等の船の居ることを知らせて、衝突をさけるためであります。

七58ノ㊦ 〈略〉、いくらきりが深くて、まるでちがつた方へ行くやうなことはありません。

七58ノ㊦ 又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、それにたよつて方角を知ることが出来るし、〈略〉。

七58ノ㊦ 又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、それにたよつて方角を知ることが出来るし、〈略〉。

七59ノ㊦ 又海岸には所々に燈臺がありますから、それを見ると、あれは何所だといふことが分ります。

七59ノ㊦ 此の星を見分けることや、燈臺のあかりを知ることが、船に乗

る者に取つて、はなはだ大切なことなのであります。

七59ノ㊦ 此の星を見分けることや、燈臺のあかりを知ることが、〈略〉。

七59ノ㊦ 此の星を見分けることや、燈臺のあかりを知ることが、船に乗る者に取つて、はなはだ大切なことなのであります。

七60ノ㊦ さておしまひに一ついつて置きたい事があります。

七60ノ㊦ それは日本は海國でありながら、まだ海を恐れる人もあるといふことで、〈略〉。

七60ノ㊦ 〈略〉、まだ海を恐れる人もあるといふことで、これは實に残念な事であります。

七60ノ㊦ こんなことでは、どうして海國の民といはれませう。

七61ノ㊦ 百八十九年昔の事であります。

七62ノ㊦ 中でも安倍川の宿は一そうの人ごみであつたと申しますが、

「それ、川が渡れる。」といふことになりますと、我もくゝと先をあらそつて渡りました。

七62ノ㊦ 渡るといつても、自分一人では渡ることは出来ません。

七65ノ㊦ もし此の大金がなかつたら、氣がちがつて死ぬやうな事になるかも知れぬ。

七65ノ㊦ 氣の毒なことだと思つて、人夫はすぐ川を渡つて、かの男を追つかけました。

七69ノ㊦ 〈略〉、此のまゝ歸ることも出来ませんので、引つかへして参りました。

七71ノ㊦ 〈略〉、だんなはなげ深い方ですから、此の金をあなたにさし上げましても、おしかりになることはあるまいと思ひます。

七73ノ㊦ 〈略〉、どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともあります。

七73ノ㊦ 〈略〉、どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともあります。

七73ノ㊦ 〈略〉、どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともあります。

七73ノ㊦ 〈略〉、心にすまないことはまだ一度もした事はありません。

七73ノ㊦ 〈略〉、たとひ親子の者がゑ死をするやうなことがあつても、人からいはれなく金をもらはうとは思ひません。

七76ノ㊦ 豊臣秀吉がまだ 〈略〉、織田信長の草履取をしてゐた時のことである。

七81ノ㊦ アハビハ岩ヲハナレテ動クコトガアルケレドモ、カキハ一度ツイタラ決シテハナレナイ。

七87ノ㊦ 「よいあんばいだ。此のもやうなら、今日は大したことはあるまい。」

七92ノ㊦ 〈略〉、二百十日といふのは立

七93ノ㊦ 〈略〉、二百十日といふのは立

七93ノ㊦ 〈略〉、二百十日といふのは立

七93ノ㊦ 〈略〉、二百十日といふのは立

七93ノ㊦ 〈略〉、二百十日といふのは立

七93ノ㊦ 〈略〉、二百十日といふのは立

春の日から二百十日目の日のことで、此の日はよく大風が吹くから、厄日といつて、農家ではことに心配するのださうだ。

七97 行長は清正の軍功をねたみ、石田三成に頼んで、清正のことを秀吉にざんげんしました。

七99 正直者の清正は「略」、とう／＼太閤のお目通へ出ることを禁ぜられました。

七103 石田でござる。お通しなされ。「石田といふ者ださうだ。」

「ずるぶんおそく来たものだ。」「通さないことにしよう。」

七105 小西程の者を堺の町人とのしり、略といふが、それはまことの事か。

七107 それは皆此の方がやりさうな事。

七109 農家ニテハ種時・略等ヲナスニ、彼岸ヲ目アテトシテ、日ヲ定ムルコト多シ。

七110 「おとうさん、ヘンとは何のことですか。」「返事のことだ。」

七111 「おとうさん、ヘンとは何のことですか。」「返事のことだ。」

七112 發信人の居所氏名を受信人に知らする必要があるときは此處又は本文の終へ片假名にて記すこと

七112 發信人は自己の居所氏名を成へく本字にて此處に記すこと

七112 濁音半濁音文字の下は一字あ

けること

八52 略、二匹ともくつぬぎに手をついて、ぎやうぎよく僕のするのを見てゐる。

八59 昔或氏神のお祭に、競馬の神事といふ事があつた。

八95 略、神主は二人の者だけで、もう一度競走させることにした。

八129 略、といつたので、さうきまつたといふことである。

八164 長四郎が十一歳の時のことである。

八191 將軍はあとで、御臺所に、「略」といつたといふことである。

八198 汽船ハ河口ヨリオヨソ四百五十里、小舟ハオヨソ九百里サカノボルコトヲ得。

八201 此ノ河ノ上流地方ヨリ木材ヲキリ出シ、之ヲイカダニ組ミテ河ヲ下スコトアリ。

八211 其ノ家ヲ出デテヨリ、イカダヲトキテ木材ヲ賣ルニ至ルマデ、一年ノ長キニワタルコト珍シカラズトイフ。

八216 揚子江ノ大ナルコトコレニテモ知ルベシ。

八239 そこで蕃人どもが呉鳳へ、首を取ることを許してくれといつて出ました。

八242 呉鳳はお祭の爲に人を殺すのはよくないといふことを説聞かせて、もう一年、もう一年とのばさせてあ

ましたが、略。

八282 もし手なくば、我等は如何に不自由ならん。箸を持つことも出

八282 箸を持つことも出来ず、帶を結ぶことも出来ず、略。

八283 箸を持つことも出来ず、帶を結ぶことも出来ず、かゆき所をかくことも出来ず、いたき所をさすことも出来ざるべし。

八284 略、いたき所をさすことも出来ざるべし。

八296 太郎は毎日炭を焼く煙を遠くに見てゐるが、まだ一度も其所へ行

八328 これはもと野生のものでしたが、今から千何百年も前から栽培することになつたのだとつたへてあ

八352 これが人蔘で、此の婦人は長生をしましたが、一生の間仕合はせ

八412 これは珍しい。地藏様でも悪いことをなさつたと見える。」

八421 もはや歸すことは相成らぬ。

八455 しかし醫者の申す所では、老體のこと故、餘程大事にしなければならぬといふことでございます。

八466 略、餘程大事にしなければならぬといふことでございます。

八467 祖母一人孫一人の事だから、略、ゆつくり看病してお上げなさ

い。

八498 略、マレニハ庭先ニ遊ンデキル子ドモヲサラツテ行クコトモアル。

八667 アメリカ人の元氣なことは、これだけ聞いてもわかりませう。

八719 高い建物のあることは世界第一で、十階・二十階の家はいくらもあります。

八732 アメリカ人は大きいこと、

八732 アメリカ人は大きいこと、

八732 アメリカ人は大きいこと、

八732 アメリカ人は大きいこと、

八732 アメリカ人は大きいこと、

八732 アメリカ人は大きいこと、

八732 アメリカ人は大きいこと、

八732 アメリカ人は大きいこと、

八732 アメリカ人は大きいこと、

八732 アメリカ人は大きいこと、

八732 アメリカ人は大きいこと、

八732 アメリカ人は大きいこと、

八七四 此の時コンブスは、こつ

んと卵のはしを食卓にうちつけ、何の苦もなく立てて申しました。「諸君、これも人のした後では、何のさうさもない事でございませう。」

八七五 今目までに納めないと、役場によけいな手数をかけることになります。

八八〇 國の税は勿論、縣の税も村の税もみんな大事なもので、之を納めることは國民の務です。

八八二 どのうちでも、納める金高は同じですか。「いや、略。くはしいことは又學校で習ふでせう。

八八四 水にはこれといふ形がない。略。落ちる時の勢が加はると、長い間には、思ひの外の事をする。雨だれでも石をうがつ。

八八四 ちちらでも、あの子のことばかりが、氣にかゝつてゐたのでございまして。

八八七 ひとつよ、大きくなつたなあ。わしはあちらに居ても、お前の事ばかり心配してゐた。」

八八七 略、何のいんぐわで、ひさしぶりに歸つた私に、一口も口をきくことが出来ないのございませう。

八八九 指であひづをしたのは昔のこと、今は口を見せてものを言はせませう。」

八九六 ひとつよ、わしの言つてること

とがわかるか。

八九二 先生はこゝして、「いや、聲が聞えるのではありません。口の動き方を見てさとのです。」信吉はまだ先生の言はれたことがわからなかつたと見えて、娘の耳に口をよせて、略。

八九四 先生はいろいろな事を信吉に話して聞かされた。

八九八 略、此の學校を卒業する頃には、りつぱに一人前の事が出来るやうになる。

八九九 先生、私の娘にもあつて教へて下さつたのでせうか。どうも恐れ入つたことだ。」

九〇一 天守閣ニハ棟ノ兩端ニ金ノシヤチホコアリ。略、遠ク數里ノ外ヨリ望ミ見ルコトヲ得ベシ。

九〇二 僕等は一同申し合はせて、今日からは働かないことにしたから、さう思つてくれ給へ。

九〇六 さうしてそれから後は、略、手は食物を口へ入れることを止め、足は食堂へ行くことを止めました。

九〇六 略、足は食堂へ行くことを止めました。

九〇九 略、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、顔の色も青くなつて来て、からだに全く力がなくなりました。

九一〇 君等はいかなることは知らなかつたのですか。

九一七 今になつて始めて、考違をしてゐたことがお分りになるでせう。

九一七 すべてかういふやうに、手分をして別々に仕事をすることを分業といふ。

九一八 天気がよくつたら、三郎さんを連れて、お晝前にいらつしやい。面白いことをして遊びませう。

九二〇 幼名を無人といつたが、略、朝晩よく泣いたので、近所の人は大將のことを、無人ではない、泣人だといつたといふことである。

九二二 略、近所の人は大將のことを、無人ではない、泣人だといつたといふことである。

九二四 大將の父は途々義士のことを大將に話してきかせて、其の墓に参詣したのである。

九二四 大將が十歳の年、大將の一家は郷里へ歸ることになつた。

九二七 略、武士の魂と呼ばれる物は、何時もきら／＼光つてゐたといふことである。

九二八 此の父母の下に、此の家に育つた乃木大將が、終生忠誠質素でおし通して、武人の手本と仰がれるやうになつたのは、まことにいはれのあることである。

九二九 海の中もなか／＼きれいで、水のすんでゐる事はかくべつで、略。

九三六 毎日世話し居ることとい

づれの鶏も皆かはゆき中に、ひよこは一そうかはゆく思はる。

九三五 父上の命にて、養鶏は今年より僕等の仕事となり、日記をも渡されたれば、鶏の事は總べて之に記入し置くなり。

九三八 多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、イロ／＼珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。

九四〇 中デモ面白イノハ、或動物ノ體色ガマハリノ物ノ色ニ似テキルトデアル。

九四四 動物ノ形ヤ色デモ、注意シテ調べテミルト、コノヤウニイロ／＼フシギナ事ガアル。

九四六 かし此の農學といふ學問は、種々様々の事を、實地と學理の兩方から調べて行かねばならぬので、略。

九四八 かし此の農學といふ學問は、略、三代かゝつても、まだ全く手の着かない事が少くなかつた。

九五〇 略、其の上政治上の事で度々殿様に上書した爲、役人にくまれて、終には國を立ちのかねばならぬやうになつた。

九五二 略、一すぢに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ事で、これが佐藤の家の學問の精神である。

九五三 わたしも此の精神にもとづいて、主に海産物や水利の事を調べ

る。

て、くはしく計畫を立てた事もあるが、〈略〉。

九263 〇 〈略〉、くはしく計畫を立てた事もあるが、いろ／＼の差支があつて、實行が出来ずじまつた。

九265 〇 〈略〉、實行が出来ずじまつた。これはまことに残念な事である。

九271 〇 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、〈略〉。つらい事もあるであらうが、〈略〉。

九276 〇 『志ある者は事終に成る。』九281 〇 これは今から百三十年ばかり前に、下野の國足尾山中の旅人宿で起つた事で、〈略〉。

九288 〇 さうして終に當代第一の農學の大家となつて、國家の爲に富源を開發することが甚だ多かつた。

九3410 〇 「此の坂を下りて、あの清水の所まで行くと、石井君のうちが見えるはずだ。」と、此の前來た時の事を考へながら、〈略〉、又歩き出す。

九441 〇 飲料水ニ不自由ナキ土地ニアリテハ、金錢ヲツヒヤシテ、水ヲ買フナドトイフハ、思ヒモヨラス事ナリ。

九449 〇 ソレガ如何ニマレニシテ、タヤスク得ラレザル物ナリトモ、用ヒヤウナケレバ、誰モ之ヲ買フ者ナク、シタガツテ價アルコトナシ。

九455 〇 又コ、ニ一匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、

其ノ五人ハ、各其ノ馬ガ他人ノ手ニ渡ランコトヲ恐レテ、争ヒテ高キ價ヲツク。

九4510 〇 之ニ反シテ、同ジヤウナル馬五匹アリ、其ノ持主ハ別々ニテ、買ハントスル人タゞ一人ナルトキハ、五人ノ持主各其ノ馬ノ賣レザランコトヲ恐レテ、争ヒテ價ヲ下グ。

九462 〇 カクテ價ハ次第二安クナリテ、最モ價ヲ下ゲタル持主、其ノ馬ヲ賣ルコトトナル。

九4610 〇 『今年ほど水の都合のよかつた事はない。』

九473 〇 あの降りつゞいた雨のおかげで、山田の高い所まで一息に植ゑることが出来ました。

九487 〇 うち中が丈夫で、仲よくかせぐ、こんな仕合なことはない。

九493 〇 うちの事はすべて御安心下さい。

九537 〇 〈略〉、いろ／＼の手違から、銀行が破産しなければならぬ事になつた。

九547 〇 社長さんは早速荷車を一臺借りて来て、醬油のはかり賣を始めた。町の人々は之を見かねて、『そんな事までなさなくても。』といつて、資本を出さうとする者もあつたが、〈略〉。

九553 〇 それにあの人の事だから、決してあせらず、一軒一軒と得意先をまして行つて、〈略〉。

九646 〇 兩舷直といふのは、特別の務のあるものをぞいた外の水兵のことである。

九666 〇 一時間餘りも活動した後であるから、食事のうまいことはいふまでもない。

九6710 〇 ずる分こんでゐたが、〈略〉、二人とも腰を掛けることが出来た。

九684 〇 「宇都宮」と驛夫の呼ぶ聲に、何時かおかあさんと日光見物に來た時のことを思ひ出した。

九707 〇 昔能因といふ人が、『略』とよんだのは其所のことで、此の關所は濱街道の勿來の關と共に、有名なものであつた。

九864 〇 いや、何月何日の何時には、何所に何星が見えるといふ事が、學問上ではわかつてゐるから、はかられない事はない。

九865 〇 いや、何月何日の何時には、何所に何星が見えるといふ事が、學問上ではわかつてゐるから、はかられない事はない。

九872 〇 それにはまた都合のよい事がある。何かといふと、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九889 〇 〈略〉、あの星を本にして、すぐに北極星を見つける事が出来る。

九894 〇 〈略〉、あれを見つけさへすれば、道に迷つた時などにもすぐ方角を知る事が出来る。

九9010 〇 私も餘程前に讀んだのですから、くはしい事はおぼえてゐませんかね。

九9210 〇 僕今夜はいろ／＼の事をおぼえて、ほんたうにうれしかつた。

九9310 〇 白馬岳が飛驒山脈中の有名な山だといふ事は知つてゐましたが、〈略〉。

九941 〇 〈略〉、くはしい事は今日始めてうかゞひました。

九954 〇 〈略〉、時には一寸先も見えないやうなことがあります。

九991 〇 富士山も、晴れた日には、白雲の上にかすかに見える事があるさうです。

九1032 〇 戦地ではいろ／＼つらい事もあつたが、戦場をかけ廻るのは、北風にとつて愉快な事であつた。

九1033 〇 〈略〉、戦場をかけ廻るのは、北風にとつて愉快な事であつた。

九10310 〇 或朝の事であつた。

九1128 〇 先日遊びに上り候節御約束致し候三毛の子猫、もはや大きくなり候事と存じ候。

九1162 〇 大尉はそれを取つて見ると、次のやうな事が書いてあつた。

九1166 〇 聞けば、そなたは豊島沖の海戦にも出ず、又八月十日の威海衛攻撃とやらにも、かく別の働なりきとのこと。

九11610 〇 一人の子が御國の爲にくさに出でし事なれば、定めて不

由なる事もあらん。

九一七〇図 一人の子が御國の爲い
くさに出でし事なれば、定めて不自
由なる事もあらん。

九一七三図 母は其の方々の顔を見る
毎に、そなたのふがひなき事が思ひ
出されて、此の胸は張りさくるばか
りにて候。

九一八五図 しかし今の戦争は昔と違つ
て、一人で進んで功を立てるやうな
ことは出来ない。

九一八〇図 豊島沖の海戦に出なかつた
ことは、艦中一同残念に思つてゐる。

九二〇二図 ソレハ誰ニモ言フベキ事デ
ハナイ。

九二一〇図 イヤ、其ノ人が當選スルコ
トハウタガヒナイガ、略。

九二二一図 略、自分ノタフトイ選舉
權ヲ棄テルトイフ事ハ、選舉人トシ
テカリソメニモスベキ事デハナイカ
ラ、略。

九二二二図 略、自分ノタフトイ選舉
權ヲ棄テルトイフ事ハ、選舉人トシ
テカリソメニモスベキ事デハナイカ
ラ、略。

九二二九図 世間ニハ、略、或ハ信用
モシテキナイ人ニ投票シタリ、或ハ
棄權シテシマツタリスル人モアルガ、
ソナナ事ヲスルノハ、選舉ノ趣意ニ
ソムイデキル。

九二二〇図 國民トシテ恥ツベキ事ダ。
九二二一 道雄ハ此ノ時、フト學校ノ級

長選舉ノ事ヲ思ヒ出シタ。

九二二三 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長
ガ轉校シタノデ、近々後任ノ選舉ヲ
スルコトニナツテキルノデアツタ。

九二二五図 青山の神宮前停留場にて電
車を下り、廣き參道を行くこと十町
ばかりにして神宮橋に達す。

九二二六図 略、枯損するもの多か
るべきに、ほとんど皆勢よく根づき
たるは、誠に驚くべき事ならずや。

九二二七 其の大王が東方諸國の遠征に
出かけた時の事である。

九二二八 陣頭に立つては百萬の敵を物
とも思はぬ英雄も、病氣は如何とも
することが出来ない。

九二二九 醫師は皆、投薬してもし萬一
の事があれば、毒殺のうたがひを受
けはしないかと恐れて、略。

九二三〇 方法は或劇薬を用ひる外にな
かつたので、フィリップは眞心こめ
て此の事を申し出た。

九二三一 王は間もなく健康を回復して、
再び其の英姿を陣頭にあらはす事が
出来た。

九二三二 郷里の青年諸君がこんな
まじめになつて來たのは、何よりう
れしい事です。

九二三三 朝のかゝりはおそいし、晩
のしまひは早い上に、とかく無責任
な事ばかりしてゐました。

九二三四 馬も誠に從順で、けたりか
みついたりするやうな事は決してし

ません。

九二三五 略、飼主が泣いて別れを
惜しむのも、もつともな事です。

九二三六 或秋の夜の事である。
九二三七 さあ、行きませう。命を捨
ててかゝつたら、救へないことはあ
りますまい。

九二三八 略、此の地峽を切通し、平
かな掘割を造つて、太平・大西兩洋
の水を通はせることは到底出来ぬ事
であつた。

九二三九 略、太平・大西兩洋の水を
通はせることは到底出来ぬ事であつ
た。

九二四〇 所で、此の高い湖と低い掘割
を何の仕掛もなしに連結すれば、湖
の水は瀧のやうに掘割へ落込んで、
とても船を通すことは出来ないから、
掘割の處處に水門を設けて、たくみ
に船を上下する様にしてある。

九二四一 略、此處を切通すのは非常
な難工事であつたといふ事である。

九二四二 運河は全長五十哩餘り、凡そ
十時間前後で之を航することが出来
る。

九二四三 パナマ地峽に運河を造る事は、
數百年來ヨーロッパ人のしばく計
畫したところで、略。

九二四四 パナマ地峽に運河を造る事は、
略、實地に大仕掛の工事を行つた
事もあつたが、成功を見るに至らな
かつた。

九二四五 衛生の設備をよくして危険な
病氣を根絶し、幾萬の従業者の健康
をはかつた事や、略など、一と
してそれならぬものは無い。

九二四六 略、ほとんどあらゆる文明
の利器を運用して、山をくづし、地
をうがち、河水をせき止めた事など、
一としてそれならぬものは無い。

九二四七 かうして柿の色を出す事に成
功した喜三右衛門は、程なく名を柿
右衛門と改めた。

九二四八 さうで無くても、餘分のお
金があると、ついむだな事に使つて
しまふ。

九二四九 當座の方は何時でも引出す
ことが出来るが、略。

九二五〇 略、定期の方は、略
期限が來ないと引出すことが出来な
い。

九二五一 鳩を通信に使つたのは、餘程
古い時代からの事で、略。

九二五二 ところが、先年の歐洲大戰で、
やはり此のやさしい、しかも勇まし
い通信者の働の偉大な事が證明せら
れたので、略。

九二五三 又暗い時の飛行に馴れさせて、
夜間に使ふ事も出来るし、略。

九二五四 略、飼養所を移動し、其處
を見覚えさせて飛歸らせるやうにす
る事も出来る。

九二五五 飛行機の不時着陸地點を知ら
せたり、略、いろ／＼に利用する

事が出来る。

十607回 「お、降つたはく。世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。」

十616回 御覽の通りの見苦しき、お氣の毒ながら、とてもお泊め申す事は出来ません。

十667回 私はもと鉢の木がすきで、いろ／＼集めた事もありましたが、〈略〉。

十786回 面白いのは、〈略〉、寒さと暖さがほとんど規則正しく交替することです。

十789回 お知らせしたい事はまだいろ／＼ありますが、〈略〉、今日は此のくらゐにして置きます。

十846 歸途、事務員は次のやうな事を話してくれました。

十847回 今から四百年許前の事ださうです。

十864 又國內で出来るものを使ふよりも、時には外國の品を使ふ方が都合のよい事もある。

十876 我が國は〈略〉、國內で出来た物を外國へ輸出することもなかなか多い。

十881 又外國から原料を輸入し、それに加工して、更に外國へ輸出する事も少くない。

十931 翌日太郎が友だちの正雄・良一と三人連で、學校から歸る時の事であつた。

十9410回 すると、しまひに皆が僕の事を弱蟲だといつて笑ひました。

十951回 僕は〈略〉、何此のくらゐの事がこはいものかと、自分から先に立つて渡つたのです。

十954回 人の言ふことに對して『いゝえ。』と言切るには、ほんたうの勇氣がいる。

十957回 お前のやうな弱蟲には、ひよつとすると命を失ふやうなあぶない時でも、言出すことの出来ない程、『いゝえ。』といふ言葉は言ひにくいのだ。

十964 太郎はつく／＼と自分の惡かつた事を後悔すると共に、〈略〉。

十966 太郎は〈略〉、「はい。」と「いゝえ。」の言ひにくいわけをさすることが出来た。

十9710回 されど宋軍の大勢日々に非にして、天祥の誠忠を以てしても如何ともすることあたはず。

十986回 我、國を救ふことあたはず。

十988回 張世傑等の奮戦も大勢を轉ずることあたはずして、宋遂に亡びしかば、〈略〉。

十994回 汝大勢の如何ともすべからざるを知つて、何ぞいたづらに苦しむことの甚だしきや。

十997回 心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。
十997回 心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。

ふことあたはざるは天命なり。事既にこゝに至る。天祥唯死せんのみ。

十1004回 天祥刑せらるゝにのぞみ、從容としてはいく、「臣が事終る。」と。

十1071回 男ばかりの御兄弟の中に、此の度始めて妹を得られ候事、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十1079回 〈略〉、御前様には御家事御手つだひのため、何かと御いそがしき事と察し申し候。

十1081回 〈略〉、何分百里の山川をへだてたる事とて、それも心に任せず、甚だ殘念に存じ居り候。

十1095回 平生甚だ御達者にて、近來は殊に御元氣のやうに承り居り候事とて、此の度の御報は全く夢かと存ぜられ候。

十10910回 〈略〉、大兄と共にいろ／＼御話を承り候事など、今更のやうに思ひ出され候。

十1194 歸りは二日市まで歩くことにした。

十1203 宮中の御宴ぎやんの事を思ひ出して詩を作られたのも此處であらう。

十122回 きれいずきで、つゝしみ深いことは、それでよく分りました。

十125回 人に親切なことはこれでも知れると思ひました。

十128回 あいさつをしてもいいねいで、〈略〉、しかもよけいなことは言ひません。

十1229回 はきはきしてゐて、禮儀れいぎをわきまへてゐることも、それですつかり分りました。

十1235回 それで注意深い男だといふことを知りました。

十124回 かういふ點から、いろ／＼の美質をもつてゐることをよく見定めて、あの青年をやとふことにしたのです。

十1242回 かういふ點から、〈略〉、あの青年をやとふことにしたのです。

十1252回 又池・沼を利用して鯉・鮒ふなを養ふことも盛にして、〈略〉、其の利益少しとせず。

十1261回 校長も着實温厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く、生徒も校長をしたふこと父母の如し。

十1267回 〈略〉、生徒も校長をしたふこと父母の如し。

十1265回 〈略〉、生徒は〈略〉、卒業後も尚學校の門に出入することを樂しみとせり。

十1307回 主上さきに笠置かきにおはせし時早くも義兵を擧げしが、事のいまだ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、力なくて止みたり。

十1336回 後からうじて歸國することを得しが、〈略〉。

十1341回 高德〈略〉、やがて忠臣の起りて勤王の兵を擧げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げた

なり。

十一15 太陽の光と熱とがなくては、我々人間は勿論 あらゆる生物、一として生存することは出来ない。

十一40 略、長じて後魯の君に仕へ、大いに治績を挙げしかども、奸臣の爲にさまたげられ、久しく其の職に居ることあたはずして魯を去りぬ。

十一52 當時支那は數國に分れて互に相争ひ、戦亂止むことなかりしかば、略。

十一57 略、孔子大いに之をうれひ、如何にもして國家を治め、萬民の苦を救はんものと、廣く各國をめぐるて、用ひられんことを求めぬ。

十一58 しかも遂に志を達することを得ざりしかば、老後は専ら力を教育と著述とに用ひたり。

十一74 略、朝に道を聞くことを得ば、夕に死すとも可なり。」

十一84 長崎を出た汽船は、海上を走ること約四百海里で揚子江の河口に達する。

十一16 私は學校で習ふ本でさへ時々見失つて、大さわざをすることがあります。

十一17 弟さんまでが、あんなに氣をつけていらつしやるとは實に感心なことです。

十一18 お暇してから、略、自分の始末のわるいことを考へて、つく

く恥づかしになりました。

十一18 5 整頓といふのは體裁をつくることではなくて、むだをなくすることだ。

十一18 5 整頓といふのは體裁をつくることではなくて、むだをなくすることだ。

十一18 9 約束は固く守らなければならぬ、他人に害を加へてはならぬなどといふことは、我々が十分心得てゐる事である。

十一18 9 約束は固く守らなければならぬ、略、などといふことは、我々が十分心得てゐる事である。

十一20 ところで、どういふ事をすれば罪になるか、略、は、法律で明かに定めてあるから、略。

十一21 5 かういふ風に、三回くりかへして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、つまり裁判を急人にするためである。

十一22 3 裁判の目的は、決して人を争はせ、又は人を罰することではない。

十一22 8 若し裁判が無いとしたら、人々相互の争がはてしなく行はれて、しかも其の争は、力の強い者やわがしこい者が勝つことになるであらう。

十一22 10 若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、略、我々は安心して生活することが出来ぬであらう。

十二28 3 略、秀吉の軍は、此の時既に處々のとりでより來れる守兵と合して、追撃すること頗る急なり。

十一31 4 略、二人はしつかと組みたるまゝころ／＼と轉び落つること三十間許。

十一34 2 海の静かなることは鏡の如く、朝日夕日を負ひて、島がぐれ行く白帆の影のどかなり。

十一34 10 略、屋島・壇浦は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。

十一39 4 いつかにもいさんが、「杉の散髪だ。」といつてみんなを笑はせたことがある。

十一39 8 それから始めて聞いて面白いつつたのは、枝打をしないと木に節が出来ることである。

十一41 1 ぼんやりいろ／＼の事を考へてゐるうちに、いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。

十一41 9 略、貴兄には去月以來御病氣にて、しかも一時は大分御重態なりし由、誠に意外の事に驚入候。

十一44 7 昔、泉州堺のなにがし寺に、或畫師久しく寄食してありけるが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を経たり。

十一44 8 住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、「略。」といへば、

略。

十一45 1 君は畫を以て一家を成せる人なるに、數年の間一度も筆を取り給ひし事なし。

十一45 7 略、そはいと名残をしき事なり。

十一47 8 略、我が心に思ひ構へし事を如何にして知り給へるか。

十一52 4 切付といふのは、ゴムの木から液をとるために、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。

十一53 8 加硫法とは、ゴムに硫黄をまぜる事で、略。

十一54 3 近來床の敷物や、道路にもゴムを用ひることが行はれて來た。

十一59 4 札幌に來て先づ感ずることは、街路が眞直で幅の非常に廣いことである。

十一59 5 札幌に來て先づ感ずることは、街路が眞直で幅の非常に廣いことである。

十一63 4 鼠にしても、小路によつて細かく仕切ることをしてないから、一枚の鼠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。

十一68 6 人は生活上の必要から發火法を工夫し、燃料を研究し、火の熱と光とをあらゆる方面に利用すること考へて來た。

十一68 9 將來は又どんなものが發明されて、今のガスや電氣にかはることであらうか。

- 十一 69 9 図 「無言の行に口をきくといふ事があるか。」
- 十一 71 2 図 どうも残念なことでした。〈略〉 江戸の賀茂眞淵先生が、先程御見えになりました。
- 十一 72 1 図 それは惜しいことをした。
- 十一 73 2 図 〈略〉、萬一御歸りに又泊られることがあつたら、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。
- 十一 73 7 図 望がかなつて、宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出来たのは、それから数日の後であつた。
- 十一 74 5 図 〈略〉、眞淵は宣長の學識の尋常でないことをさとつて、非常にたのしく思つた。
- 十一 74 6 図 話が古事記のことに及ぶと、宣長は「略。」
- 十一 74 8 図 それについて何か御注意下さることはございますまいか。
- 十一 75 3 図 私も〈略〉、古事記を研究しようとしたが、どうも古い言葉がよくわからないと十分なこととは出来ない。
- 十一 75 6 図 そこで先づ順序として萬葉集の研究を始めたところが、〈略〉、古事記に手を延ばすことが出来なくなりました。
- 十一 75 8 図 あなたはまだお若いから、しつかり努力なさつたら、きつと此の研究を大成することが出来ませう。
- 十一 75 10 図 たゞ注意しなければならぬのは、順序正しく進むといふこ

- とです。
- 十一 77 10 図 我々は殆ど貨幣・紙幣なくして一日も生活することは出来ぬといつてもよいからである。
- 十一 78 4 図 此のやうに便利なものも、其の使用に馴れきつてしまつてゐる我々は、これについて事新しく便利を感じることもなく、〈略〉。
- 十一 78 5 図 此のやうに便利なものも、其の使用に馴れきつてしまつてゐる我々は、〈略〉之を考案した昔の人々に對して別段感謝の念を起すこともない。
- 十一 78 9 図 石・貝・家畜・獸皮・布・農産物などが、時代により場所によつて、それ／＼貨幣の役目をしたこともあつた。
- 十一 79 1 図 しかしこれらの物は、〈略〉思ふやうに分割することが出来なかつたり、其の他／＼の缺點がある。
- 十一 79 2 図 それで金屬を用ひることを思ひつき、〈略〉、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。
- 十一 86 1 図 「いや、こゝががまんのだ。」
- 十一 87 3 図 「あゝ、五海里の海上を僕も泳ぎきることが出来たのだ。」
- 十一 90 4 図 僕はこれまで暦といふと、今年は紀元何年であるか、何月何日は何曜日であるか、祝祭日・土用・

- 彼岸・入梅・日食・月食が何時になるかといふやうな事を見るものにとばかり考へてゐたので、〈略〉。
- 十一 90 7 図 暦を見れば、まだい／＼大切な事がわかる。
- 十一 90 9 図 此の頃の出や日の入は何時だらう、満月は何日頃だらう。こんな事を知るには『日出』『日入』『月齡』を見る。
- 十一 91 7 図 それから雨雪の量は何處が一番多いか、又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。
- 十一 91 7 図 もつとくはしいことは本暦を見るがよい。
- 十一 91 9 図 かういふやうに、暦はわたしたちに日日の事を教へてくれる大切なものだ。
- 十一 92 1 図 僕はよく年寄の人が新の幾日とか舊の幾日とかいふのを思ひ出して、其の事を父に尋ねた。
- 十一 92 2 図 新は新暦、舊は舊暦のことだ。
- 十一 93 1 図 〈略〉、普通四年毎に一日の閏をおくことになつてゐる。
- 十一 93 9 図 したがつて、〈略〉、太陰暦になると三十日もちがふことがある。
- 十一 96 1 図 〈略〉、時には生のじやがいもしか食はれないこともあつた。
- 十一 96 2 図 〈略〉、リンカーンは十歳頃までは本を読むことなどは殆ど出来

- なかつた。
- 十一 96 10 図 ところが母のとりなしで終に學校に入ることが出来たので、リンカーンの喜は一通りでなかつた。
- 十一 97 10 図 大事なことは拾ひ集めた木片などに書留めて忘れないやうにしておく。
- 十一 98 5 図 それからは又父の手助をしたり、人にやとはれたりすることになつたが、本を讀みたいといふ心は少しも變らなかつた。
- 十一 99 4 図 或時近邊の人からワシントン傳を借りたことがある。
- 十一 99 10 図 ところが或夜、夜中に激しい雨が降つたことがある。
- 十一 100 5 図 辨しやうすることが出来ませんから、其の代りに何か仕事をさせて下さい。
- 十一 102 10 図 目下滞在中のネーロ市は、〈略〉。町のりつぱなる事も、文明諸國の大都會に比して少しも劣る所これなく候。
- 十一 103 8 図 〈略〉、唯をかしきは日本の秋が春、日本の冬が夏といふ様に季節の相反する事に候。
- 十一 114 1 図 〈略〉、地方自治の精神に基づいて其の團體の幸福を進め、國運の發展を期することは皆同じである。
- 十一 114 3 図 地方人民が協同一致して自ら地方公共の事に當り、〈略〉。
- 十一 115 3 図 市町村長や議員を選擧するには、〈略〉親族・縁故その他私交

上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。

十一115 8 本當に自治の精神に富んでゐる者は、公平無私、地方公職の爲の適任者を擧げることだけを考へて、〈略〉。

十一116 2 公吏・議員等、直接間接に公共の事務に當る者は、〈略〉、一般の人民の後援がなければ自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。

十一116 4 それであるから人々は常に自治制の本旨を辨へ、協同一致して團體の福利を増進することを心掛けねばならない。

十一116 6 〈略〉自治團體の事業は、地方人民が一般に之を尊重し、之に協力することによつて、始めて其の効果を完全に擧げることが出来る。

十一116 7 例へば教育・衛生等の自治團體の事業は、地方人民が一般に之を尊重し、之に協力することによつて、始めて其の効果を完全に擧げることが出来る。

十一117 4 自治制も、之を運用する人民に自治の精神が乏しければ、よい結果を得ることは到底望まれない。

十一120 5 ジョージは、かねてウェリントン公爵が勲功も高く、りつぱな人物であるといふ事を聞いてゐたので、〈略〉。

十一122 5 こんなところで毎日働いてゐる人たちは、どんなにつらいこと

であらうと思つた。

十一126 3 〇 一代の事業として一切經を出版せん事を思立ち、〈略〉。

十一126 5 〇 〈略〉、廣く各地をめぐるに資金をつのること數年、やうやくにして之をとゝのふる事を得たり。

十一126 5 〇 〈略〉、廣く各地をめぐるに資金をつのること數年、やうやくにして之をとゝのふる事を得たり。

十一127 4 〇 喜捨を受けたる此の金、之を一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ふるも、歸する所は一にして二にあらず。

十一127 6 〇 一切經を世にひろむるはもとより必要の事なれども、〈略〉。

十一128 2 〇 然れども鐵眼少しも屈せず、再び募集に着手して努力すること更に數年、〈略〉。

十一130 4 〇 〈略〉、一切經の廣く我が國に行はるゝは、實に此の時よりの事なりとす。

十二4 5 〇 松江を發したる汽車は風光繪の如き宍道湖畔を走ること約四十十分、やがて〈略〉鐵橋にかゝる。

十二9 10 チャールス、ダーウィンは〈略〉。ごく小さい時分から動植物に深い趣味を持ち、又物を集めることがすきで、〈略〉。

十二10 5 〇 「お前のやうに犬の世話やねずみを取ることにばかり熱心では困るではないか。」

十二10 7 又父には「〈略〉。」といつ

て叱られたことがあつた。

十二11 7 〈略〉、何時の間にか好きな博物學の研究が主となつてしまつた。此の頃のことであつた。

十二13 6 〈略〉、たとへ十分、十五分の餘暇でも無益に費すことがなかつた。

十二13 9 ダーウィンの後半生は病氣がちであつたが、〈略〉、七十四歳の長壽を保つことが出来た。

十二14 1 さうして廣く動植物を研究して、生物は總べて長年月の間には次第に變化し、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。

十二14 7 〇 されば珍しき事件の起りし時、之を記述して印刷に附し、廣く發賣することは古より行はれたりしが、〈略〉。

十二16 5 〇 〈略〉、編輯・營業の二局ありて、編輯に關することは前者之を司どり、〈略〉。

十二16 6 〇 〈略〉、編輯・營業の二局ありて、〈略〉、販賣・廣告に關することは後者之を擔當す。

十二22 10 買ふ人の無智に乗じて安い品を高く賣付け、見本には精良な品を使つて、實際の注文に對しては粗惡なものを送るやうな事は、人として爲すべからざる事である。

十二22 10 〈略〉は、人として爲すべからざる事である。

十二23 2 〈略〉、かやうな仕方は唯一時の利益を得るに止つて、永續することが出来ないから、つまりは小利をむさぼつて大損を招く結果になる。

十二23 6 即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、〈略〉國運の發展をもさまたげることになる。

十二23 8 即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、〈略〉國運の發展をもさまたげることになる。

十二30 6 〇 市街を見物して私の特に感心したのは、市民が交通道德を重んずることです。

十二30 8 〇 往來の頻繁な街上でも、よく警官の指揮に従つて、混亂することがなく、〈略〉。

十二30 9 〇 〈略〉、地下鐵道・乗合自動車などの乗り下りにも、むやみに先を爭ふやうなことはありません。

十二32 6 〇 ルーブル博物館も一覽しましたが、りつぱな繪畫・彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。

十二37 3 ドイツの有名な音楽家ベートーベンがまだ若い時分のことであつた。

十二38 5 〇 「そんなことをいつたつて仕方がない。家賃さへも拂へない今の身の上ではないか。」

十二46 5 〇 殊に杉は〈略〉、其の需

要の多きこと我が國の木材中第一位にあり。

十二472 〇 もみ・つがは共にそり又は伸び縮みすること著しきを以て、〈略〉。

十二494 〇 松に至りては〈略〉、其の豊富なること我が國の木材中の首位を占む。

十二533 〇 しかしだん／＼落着いて見ると、此處は時計屋の店であることがわかつた。

十二573 〇 それでは自分のやうな小さな者でも役に立つことがあるのかしらと、夢中になつて喜んだが、〈略〉。

十二596 〇 ねぢは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出来たのだと思ふと、〈略〉。

十二629 〇 即ち赤・白合はせて十三條の横筋は、獨立當時の十三州を表すものにして、永久に變化することあらざれども、〈略〉。

十二655 〇 〈略〉、年とともに老の氣短さが加はつて、ちよつとした事にも怒り易くなつてゐた。

十二659 〇 〈略〉、妹はかねてフランス王の後になることにきまつてゐた。

十二664 〇 今日はお前たちに一つ聞いてみたい事がある。

十二689 〇 私は胸にある事が十分に言へないのでございます。

十二695 〇 「父上、私は唯ほんたう

の事を申し上げてゐるのでございませう。」

十二703 〇 〈略〉、王の怒はいよ／＼つにつて、もうどうすることも出来な

い。

十二707 〇 リヤ王はフランス王を其の場と呼んで、コーデリヤを勸當したことを告げた。

十二7210 〇 それは父が姉たちの爲に虐待されてゐるといふことであつた。

十二788 〇 これでもう魚は逃出すことが出来ない。

十二827 〇 樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざることとは、此の探検によりて略／＼知ることが得たれども、〈略〉。

十二827 〇 樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざることとは、此の探検によりて略／＼知ることが得たれども、〈略〉。

十二837 〇 〈略〉、従者の土人等ゆくでの危険を恐れて従ふことをがへんぜず。

十二843 〇 〈略〉、對岸の大陸に渡りて其の地の模様を探るは、かへつて目的を達するに便なることを知りぬ。

十二845 〇 たま／＼コーニが交易のため大陸に渡らんとするに際し、林蔵は〈略〉、切に己をとまはんとを求む。

十二848 〇 コーニは「〈略〉。」とて、

しきりに止むれども林蔵きかず、遂に同行することに決せり。

十二8510 〇 夜は野宿すること少からず。

十二8610 〇 翌日此の地を去り、河をさかのぼること五日、遂に目的地なるデレンに着せり。

十二872 〇 林蔵の怪しみもてあそぶること、此處にては更に甚だしかりしが、かゝる中にありても、彼は土地の事情を研究することを怠らざりき。

十二874 〇 〈略〉、彼は土地の事情を研究することを怠らざりき。

十二8710 〇 林蔵が二回の探検によりて、樺太は大陸の一部にあらざること明白となりしのみならず、〈略〉。

十二889 〇 討議の形式は、普通〈略〉の三度の會議を経ることになつてゐる。

十二903 〇 唯法律は必ず帝國議會の協賛を経なければならぬが、命令には其の事がない。

十二905 〇 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。

十二907 〇 我々は常に國法にしたがつて幸福な生活を営み、あはせて國の品位を高めることにつとめなければならぬ。

十二913 〇 或時、父王と共に城外に出て、農夫の働く様を見廻つたことが

ある。

十二927 〇 「人は何の爲に此の世に生れて來たのか。〈略〉。」こんな事を次から次へと考へては、遂に心の苦しみにたへられなくなつて、〈略〉。

十二931 〇 父のいさめも妻のなげきも、此の決心をひるがへすことは出来なかつた。

十二939 〇 彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聴いたが、どれにも満足することが出来ない。

十二946 〇 〈略〉、彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。

十二956 〇 或時のことである。

十二981 〇 〈略〉、石は釋迦の足を傷つけただけで、目的を果すことは出来なかつた。

十二988 〇 私は行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと思つたことを語り盡くした。

十二989 〇 私は〈略〉、語らうと思つたことを語り盡くした。

十二1049 〇 享保の頃の事であつた。

十二10910 〇 〈略〉、時には夜半までも薄暗い燈を便りに、經文をとこなへながら一心にのみを振るふことさへあつた。

十二1113 〇 電燈の發明せられたるは、今より凡そ百十餘年前のことなり。

十二1136 〇 或日のことなりき。

十二1163 〇 殊に近年は〈略〉、電力は頗る廉價に供給されるので、石炭

の火力による蒸氣力は、多くの場合之に敵することが出来なくなりました。

十二二六 博士は〈略〉、將來益々水力電氣の利用をはからなければならぬことを力説した。

十二二七 Edison が炭素線の電燈を發明したのは四十年ばかり前のことであつたが、今では更に進んで〈略〉。

十二二八 今では更に進んで光の色が太陽に似て、しかも比較的熱をとるふことの少い電燈さへも發明されました。

十二二九 無線電信が發明されて、陸上でも海上でも、自由に消息を交換することが出来るやうになりました。

十二三〇 遠い處の音楽・演説・講話などを居ながら聞くことが出来ることや、〈略〉などの耳新しい話に、博士は満堂の會衆を喜ばせた。

十二三一 遠い處の音楽・演説・講話などを居ながら聞くことが出来ることや、〈略〉。

十二三二 進行中の汽車が無線電話機を備へ附けてゐたために危険を免れたことや、〈略〉などの耳新しい話に、博士は満堂の會衆を喜ばせた。

十二三三 〈略〉、無線電話で子守歌を

聞かせて赤ん坊を寝つかせてゐることなどの耳新しい話に、博士は満堂の會衆を喜ばせた。

十二三四 當地に参りて以來、一度手紙を以て御様子御伺ひ申上げたしとは存じながら、なれぬこととして事に追はれ、一日々と延引致し、今日に相成り申候。

十二三五 〈略〉、先生には何時も御壯健の由、何よりのことに御座候。

十二三六 私のこと御心にかけ下され、常に「小山はどうしてゐるだらうか。」と仰せらるゝ由、〈略〉。

十二三七 小学校の前を通りては、郷里の學校のおもしろかりしことなど思ひ出し申候。

十二三八 月の十五日を期して總攻撃を行ひ、一舉に江戸を乗取手はずである。徳川方も事ここに至つては、あくまでも戦ふ覺悟をきめて、〈略〉。

十二三九 本日日本の周圍には諸外國が様々の考を持つて見てゐるので、うかくと兄弟垣にせめいでゐたら、日本全國のしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。

十二四〇 すると其のうちには又思ふの外な尻押なども現れて、事めんだうな筋合にならぬとも限りませぬ。拙者は、此の談判がよしどのやうに決着するにもせよ、さやうな事

になれかしとは毛頭考へませぬが、〈略〉。

十二四一 特別の御仁慈を以ておだやかに事のまとまるやう今一應御評議下さることにいたしますれば、誠に日本國の幸でございます。

十二四二 特別の御仁慈を以ておだやかに事のまとまるやう今一應御評議下さることにいたしますれば、〈略〉。

十二四三 とにかく明日の總攻撃見合はせの一事だけは、拙者一命にかけて御引受け申します。其餘の事は拙者の一存にはまゐりませぬから、〈略〉。

十二四四 君と親とに眞心を捧げ盡くして仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、今更いふまでもない。

十二四五 四周の海が天然の城壁となつて、容易に外敵のうかがふことを許さないから、〈略〉、國內はおほむね平和であつた。

十二四六 随つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、〈略〉。

十二四七 外國人から思ひ掛けぬ誤解を受けて排斥されるやうなことも起つて来る。

十二四八 其の原因はいろ／＼あらうが、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、其の主たるものであらう。

十二四九 〈略〉、かういふ短所はやが

て我が國民から消去するであらうが、出来る限り早く之を一掃することは我々の務ではあるまいか。

十二五〇 他國の文明を消化して、之を巧みに自國のものとするとは、實に我が國民性の一大長所である。

十二五一 自分で思ふまゝに造り出す創造力は、十分に發揮せられたことがなく、〈略〉。

十二五二 昔から殆ど模倣のみを事として來た觀がある。

十二五三 我が國民には潔いこと、あつさりしたことを好む風がある。

十二五四 我が國民には、其の長所として廉恥を貴び、〈略〉。

十二五五 あつさりしたこと、潔いことを好む我が國民は、〈略〉。

十二五六 異（形状）1 異
十二五七 「容貌の異なる汝が彼の地へ行かば、必ずや人に怪しまれ、なぶりものにせられて、或は命も危かるべし。」

こと（終助）1 コト
四八五 〇キク「マア、キレイデスコト。ダイリ様ノ下ノダンニ、

こと「毎（名）3 毎（さん）じつぶんこと・じつぶんこと・ねんこと・ひごと・ひとあめこと・ぶんたいこ

と・よねんこと

九一七〇圖 村の方々は、〈略〉。母は其の方々の顔を見る毎に、そなたのふがひなき事が思ひ出されて、〈略〉。

十二一九二圖 但し大新聞にありては、〈略〉、新しき事件ある毎に改版して、最後の最も新しきものを市内版とす。

十二九二二 しかし彼は城外に出る毎に、杖にすがるあはれな老人や、息もたえだえの病人、さては野邊に送られる死者をまのあたり見て、益々世のはかなさを感じた。

こと（助動）5 ごと 《一》
九一八〇圖 夜をいましむる夜まはりの拍子木のことかちくと、さびしく時をきざみ行く。

十二九七〇圖 しらくと、朝霧 野山をこめて、月のごと、日輪 ほのかに浮ぶ。

十三〇四〇圖 影のごと、人去り 人來る大路、〈略〉。

十一一二九圖 右に見ゆるは名高き御寺、左に遠くかすむは古城、春は繪のごと我等をめぐる。

十一一二二圖 天下を定むる三分の計、たなそこの上に指さすがごと。

ことあたらしい「事新」(形) 1 事新しい《一》

十一七八三 我々は始ど貨幣・紙幣なくして一日も生活することは出来ぬといつてもよいからである。此のやうに便利なものも、其の使用に馴れ

きつてしまつてゐる我々は、これについて事新しく便利を感じることもなく、〈略〉。

ことく「五徳」(名) 1 ゴトク 六一一八圖 飯ヲタクカマモ、物ヲニルナベモ、湯ヲワカス私モ、私ノ乗ルゴトクモ鐵デス。

ことごとく (副) 1 ことごとく 九六一六 〈略〉、時鐘番兵がことごとく艦橋の下へ來て、「總員起し五分前。」と當直將校に報告する。

ことごとく「尽」(副) 3 ゴトゴトク ことごとく 悉く 七二二二 〈略〉、落ちて行く潮にさそはれて、賊の軍船はことごとく沖へ流れてしまひました。

八二〇六圖 イカダノ大ナルモノハ長サ六七十間、幅三四十間、コレニ土ヲ置キテ野菜ヲ作り、〈略〉、一家コトゴトクコレニ乗りテ、流ニシタガヒテ下ル。

十一一二九圖 すなはち喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、資金を悉く救助の用に當てたりき。

ことさら「殊更」(副) 1 殊さら 九七五六 野邊地で始めて海が見えた。青々とした波の上に、點々と白帆が浮んでゐるのは、野や山ばかり見て來た目に殊さらうれしかつた。

ことし「今年」(名) 17 ことし 今年 三三三 小花はことし九つです。

三三八 五一ぢいさんはことし六

十九ださうです。

四四四 今年には田がよく出來たので、ばんにはそのおいはひの花火が上るさうです。

四六八 今年には柿のあたり年で、どの木にもよくみが なりました。

五七八 今年のひでりにも、此の用水池にはあんなに水がたまつてゐる。

六一二圖 今年にはほんたうにほう年だ。

八六八圖 今年の競馬はさぞ見ものだらう。

八八四 信吉にはおとといふ今年十一になる女の子があるが、〈略〉。

八四四圖 父が今年八十八になりましたので、〈略〉、ほんの心ばかりの祝を致したいと存じます。

九一四〇圖 父上の命にて、養鶏は今年より僕等の仕事となり、日記をも渡されたれば、〈略〉。

九四九圖 今年ほど水の都合のよかつた事はない。

九八二七圖 ちいさん今年六十の坂を越えたる足もとに、大いなる石横たへて、〈略〉。

九一〇二圖 井戸端の柿の木に柿がすゞなりになつてゐるのが目につく。今年にはなり年なのだ。

十一三六五 地圖の中の薄緑に染めてあるのが一昨年植付けた處、朱線で圍んでゐるのが今年伐採する處、〈略〉。

十一三七〇 植付けた苗木の枯れた處へ

補植をするのは、翌年一回だけといふから、今年はどうしなくともよいのであらう。

十一四〇六 今年伐るはずのは、おとうさんの子供の時植ゑたのだといふが、〈略〉。

十一九〇二 僕はこれまで暦といふと、今年には紀元何年であるか、〈略〉といふやうな事を見るものとばかり考へてゐたので、〈略〉。

ごとし (助動) 58 如シ 如シ 《ゴトキ・ゴトク・ゴトシ》

六八一 けれども我が武士は、船の大小などは少しも氣になかつた。草野の次郎の如きは夜敵の船におしよせて、首二十一取つて、敵の船に火をかけて引上げた。

七一一三圖 われらが住む世界は、其の形まるくして、球の如し。

七三〇二圖 大阪神戸間ノ交通ノ便利ナルコト、東京横濱間ノ如シ。

七三〇八圖 獅子の目は火の如くにもえ、怒りてさけぶ聲には、百獸おそれてにげまどへど、〈略〉。

七四八八圖 鬼神の如き彦六が、あれ程の小兵に討たれたは味方の不運。

八一九六圖 揚子江ハ〈略〉。我が國第一ノ長流鴨綠江ノ如キハ實ニ其ノ支流ニモ及バザルナリ。

八四八三 〈略〉、驚ハタシカニ鳥類ノ王デアル。〈略〉、スルドクテ落着イテキル目、トガツテカギノ如ク二見エ

ル爪、〈略〉。

ハ592 近人々ノ生活次第ニイソガシクナリテ、見物人ノ外ハ、町ノ兩側ヲナガメテ、ユル／＼歩クガ如キ者ナシ。

ハ592 〇略、ユル／＼歩クガ如キ者ナシ。ヨリテ看板ノ如キモ、タヤスク人目ヲヒカシメンガ爲ニ、キソヒテ小屋根ノ上ニカ、グルニ至レリ。ハ601 〇彼ノ燒葺屋ノ看板ニ、八里半ト記セルモノノ如キハコレニシテ、其ノ味クリニ近シトイフ意ナリ。

ハ828 長い間かゝらなくても、工夫して大仕掛に水を落せば、大きな仕事をする。彼の水力電氣の如きはそれで、電燈・電車等に用ひる電氣も、もとをたゞせば水の力である。

九122 〇顔を洗ひをはりて、いつもの如く、庭のすみなるとやの戸を開く。

九298 物すごいひびきは萬雷の如く、大地もふるひ、〈略〉。

九444 〇同じ物ニテモ、意ノ如クニ得ラルレバ價ナク、得ガタケレバ價アルナリ。

九451 〇カクノ如ク物ニ價アルハ、其ノ物ガ人ノ爲ニ有用ナルト、意ノ如クニ得ラルレザルトニヨルナリ。

九452 〇カクノ如ク物ニ價アルハ、其ノ物ガ人ノ爲ニ有用ナルト、意ノ如クニ得ラルレザルトニヨルナリ。

九463 〇カクノ如ク、品物多クシテ、

之ヲ望ム者少ケレバ、其ノ物ノ價安クナリ、品物少クシテ、之ヲ望ム者多ケレバ、其ノ物ノ價高クナル。

九8410 〇略、満天の星は寶石をちりばめたるが如し。

十658 〇あろりの火は次第におとろへ行きて、ひまもる夜風はだへをさすが如し。

十711 〇諸國の大名・小名きら星の如く並べる中に、〈略〉。

十973 〇「羊の虎に向ふが如し。危し。」

十991 〇今より心を改めて元に仕へば、富貴は意の如くならん。

十1254 〇桑を植ゑて蠶を飼ふ者多く、殊に一村鶏を飼はざる家なし。又池・沼を利用して鯉・鮒を養ふことも盛にして、〈略〉。かくの如くなれば全村頗る豊にして、〈略〉。

十1261 〇校長も着實温厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く、生徒も校長をしたふこと父母の如し。

十1262 〇略、生徒も校長をしたふこと父母の如し。

十1289 〇艦首につるしたるくす玉ばつとわれて、紅白の紙片花ぶゞきの如くに散る中を、羽音高く舞上る數羽の鳩。

十一72 〇過ぎたるは及ばざるが如し。

十一334 〇略、一島更にあらはれ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

ち開く。

十一338 〇春は島山がすみに包まれて眠るが如く、〈略〉。

十一341 〇兩岸及び島島、見渡す限り田園よく開けて、毛氈を敷けるが如く、白壁の民家其の間に點在す。

十一342 〇海の靜かなることは鏡の如く、〈略〉。

十一428 〇先づは御見舞までかくの如くに御座候。

十一469 〇かくて次の夜は如何にとうかゞふに、畫師は前の如く夜もすがら寝ねずして、明日はかく畫がかんなど獨言してゐたりければ、〈略〉。

十一6110 〇狩勝の展望 〈略〉。畫がけるが如く美しき山の、或は右に或は左にあらはれるのは、サホロ嶽の連峯の一つであらう。

十一1036 〇此のブラジル國は、〈略〉、殊に温帯に屬する南部の諸州にては、四季の變化も日本の如くはつきり致居候由、〈略〉。

十二24 〇さし昇る朝日の如く、さわやかに もたまほしきは心なりけり。

十二44 〇松江を發したる汽車は風光繪の如き穴道湖畔を走ること約四十分、〈略〉。

十二410 〇停車場の外に出づれば、秋晴の空はあくまですみ、暖さ春の如し。

十二53 〇略、參詣人の群にまじりて行けば大鳥居あり、巨人の如く我がゆくにて立つ。

十二78 〇此の社は規模の大なるを以て世に知られ、本殿の如き其の高さ實に八十尺に及ぶ。

十二710 〇千木のほとりを飛ぶ鳩の、さながら雀の如く見ゆるも、社殿の高大なる爲なるべし。

十二87 〇此の樺を此の板の上にてきりをもむが如く廻せば、摩擦によりて火を生ず。

十二95 〇なぎさに立ちて昔をしのべば、そのかみ此處にいかめしく向ひあひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如く、打寄する波の音さへ何事をか語るに似たり。

十二161 〇略、相當に名ある新聞は、通信に、印刷に、あらゆる文明の利器を用ふるを以て、今や遠くヨーロッパに起りし事件も僅か一兩日にして讀者に報道せらる。然らばかくの如き新聞は如何にして編輯せられ、印刷せられ、讀者に配布せらるゝか。

十二178 〇かくいへば、頗る繁雜にして多大の時間を要する如くなれども、原稿締切時刻より刷出まで其の間僅かに數十分、〈略〉。

十二486 〇略、かしは最も堅くして彈力に富むが故に、櫓・車・運動器具の如き強烈なる力を受くるものを製作するに適せり。

十二486 〇略、かしは最も堅くして彈力に富むが故に、櫓・車・運動器具の如き強烈なる力を受くるものを製作するに適せり。

十二507 岸は絶壁になつてゐる處が多^{おほく}、殊に兩半島にはさまれてゐる中湖の東岸の如きは、絶壁の高さが二百メートル以上もある。

十二616 更に思へば、白地は

〈略〉、日の丸は熱烈燃ゆるが如き愛國の至誠を表すものともいふべきか。

十二624 図 イギリスの國旗は、〈略〉。遂に今日の如き形式をなすに至れり。

十二646 かくの如く各國の國旗は、或は其の建國の歴史を暗示し、或は其の國民の理想・信仰を表すものなれば、〈略〉。

十二7010 しかしフランス王は〈略〉、本國にともなひ歸つて約束の如く自分の后とした。

十二974 今や釋迦は衆星の中の満月の如く國中から仰がれる身となつたが、〈略〉。

十二979 或時の如きは、釋迦が山の下にゐるのを見附けて、上の方から大石をころがしたが、〈略〉。

十二994 図 七代七十餘年の帝都として、咲く花のほふが如しと誇りし奈良の都も、〈略〉。

十二1009 図 春は若草山の芝緑にもえたち、三月堂・二月堂霞につままれてさながら夢の如く、〈略〉。

十二1035 図 更に首を回らして南を望めば、〈略〉 畝傍山・耳成山・天の香久山の三山まゆの如く、〈略〉。

十二1076 此の洞穴と、十年一日の如く黙々としてのみの手を休めない僧の根氣とを見た村の人々は、今更のやうに驚いた。

十二1136 図 エヂソンは例の如く實驗室に閉ぢこもりて研究に餘念なかりしが、〈略〉。

ことしろぬし 「事代主」(人名) 1 事代主

十二67 図 我もとよりいなみ奉る心なし。我が子事代主とはかりて答へ申さん。

ことしろぬしのみこと 「事代主命」(人名) 1 事代主命

十二69 図 此の時事代主命はすなごりのため美保崎といふ處にありしが、使を得て急ぎ歸り、父君に申すやう、〈略〉。

ことに 「殊」(副) 30 コトニ ことに 殊に

五592 朱ぬりの社殿が山のみどりを後にして、たいそうきれいに見えます。ことにしほのみちた時は、〈略〉、お話にある龍宮はこれかと思はれます。

六525 一番二番三番と、十二番の舞がめでたくすみましたが、其の中でことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。

七174 〈略〉 れんげさうの花ざかりである。〈略〉 麥畠やなね畠の間にさいてゐるのは、ことに目立つて

美しい。

七938 おちいさんにきいたら、二百十日といふのは〈略〉、厄日といって、農家ではことに心配するのださうだ。

八214 図 揚子江ハ水量ツネニ豐ニシテ、洋々ト流レドモ、夏季ハコトニ増水シテ、〈略〉。

八678 図 サンフランシスコはカリフォルニア州にあるのですが、此の州は〈略〉、いろいろな農産物に富んでゐます。ことに野菜や果物が有名です。

九51 図 内地から來て先づ目につくのは植物で、其の中でも殊に珍しいのはコ、椰子の木やパンの木などです。

九73 図 これ等の植物が思ふまゝに茂つてゐる様子は實に見事です。殊に毎日のやうに降るにはか雨が、〈略〉通り過ぎた後の、あざやかな緑の世界は、何とものとへやうのない、氣持のよいものです。

九89 図 土人は〈略〉、性質はおとなしく、我々にもよくなつき、殊に近年我が國で學校をそこゝに立てたので、子供等はなか／＼上手に日本語を話します。

九315 〈略〉 水煙の間から近く龍をながめるのもよく、下手へ廻つて、〈略〉 全景を見渡すのも面白い。殊に遊覧船に乗つて、頭から雨のやう

なしぶきを浴びながら、龍つぽを見物して廻るのは、實に壯快です。

十二27 図 明治天皇・昭憲皇太后、御二方のおほみたま、とこしへに此所にしづまりましますと思へば、かしこさ殊に身にしてみておぼゆ。

十三1 図 又日々に奉る供へ物には、御生前殊に御好みありし品々を選ぶ由なるが、〈略〉。

十五49 鳩を通信に使つたのは、餘程古い時代からの事で、殊に一時は非常に盛に行はれたが、〈略〉。

十五85 又戦争の時戦線から戦状を報じたり、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。殊に要塞に敵にかこまれて、〈略〉、全く方法の盡きた場合などには、此の勇ましい小傳令使にたよるより外はない。

十七7 図 こちらへ來てもう三月餘りになりますが、〈略〉、雨といふものはごくたまにしか降りません。殊に秋晴の美しさはかくべつで、〈略〉。

十八94 図 平生甚だ御達者にて、近來は殊に御元氣のやうに承り居り候事とて、〈略〉。

十八125 図 〈略〉、近年は作物も改良せられ、桑を植ゑて蠶を飼ふ者多く、殊に一村鎮を飼はざる家なし。

十八132 図 主上は詩の心を御さとりありて、天顏殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。

十八349 図 嚴島は古より日本三景

ひぬ。

の一に數へられて殊に名高く、〈略〉。

十一843 今日殊に波も静かだ。

十一1035 園 此のブラジル國は、

〈略〉、殊に温帯に屬する南部の諸州にては、四季の變化も日本の如くはつきり致居候由、〈略〉。

十一1067 園 此の邊は南米中、日本人の最も多く住める處にて、何處に行きても日本人を見かけ候は甚だ愉快に候。殊に日本人の小學校ありて、御前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては、殆ど身の南米に在るを忘れ候。

十二1710 園 〈略〉其の間僅かに數十分、以て其の如何に速なるかを知るべし。殊に驚くべきは輪轉機（リニア）の能力なり。

十二463 園 凡そこれ等の木材は、〈略〉、中にも其の用途の廣きは杉及び檜なり。殊に杉は人爲によりて容易に増殖せらるゝ點において檜にまさり、〈略〉。

十二484 園 〈略〉、栗は耐久・耐濕の性殊に著しきを以て、家屋の土臺、鐵道のまくら木等の用に供せられ、〈略〉。

十二505 岸は絶壁になつてゐる處が多く、殊に兩半島にはさまれてゐる中湖の東岸の如きは、絶壁の高さが二百メートル以上もある。

十二977 今や釋迦は衆星の中の満月の如く國中から仰がれる身となつた

が、中には彼をそねむあまり、反抗するばかりでなく、迫害を加へようとするものさへも出て來た。殊に

デーバダッタは、いとこの身でありながら、かねてから釋迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。

十二1017 園 〈略〉、秋は春日の社神さび、手向山の紅葉夕日にはゆる様殊に見所あり。

十二1167 園 諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力もだん／＼電氣に變つて、工業界の一大革新をうながしてゐます。殊に近年は水力電氣の驚くべき發達にとまなひ、電力は頗る廉價に供給されるので、石炭の火力による蒸氣力は、多くの場合之に敵することが出来なくなりました。

十二1352 温和な氣候や美しい風景は、人の心をやさしくし、優美にはするが、雄大豪壯の氣風を養成するには適しない。殊に徳川幕府二百餘年の鎖國は、國民をして海外に發展する意氣を消磨せしめ、徒に此の小天地を理想郷と觀じて、世界の大勢を知らぬ國民とならしめた。

ことば 「言葉」(名) 27 言葉 いろいろにいいことば・おことば

七562 園 其所にゐる人は、私どもとはまるでちがつた風をして、まるでちがつた言葉で話をしてゐます。

九416 園 昨日の敵は今日の友、語る言葉もうちとけて、我はた、

へつ、彼の防備。

九534 「いや、これから先があの人

のほんたうにえらい所だ。」おとうさんはすぐ言葉をついて、「〈略〉。」

九709 叔父さんはなほ言葉を續けて、「仙臺に着いたのは午前の三時で、〈略〉。」

九1153 ふと通りかゝつた某大尉が之を見て、〈略〉、〈略〉。軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、其の有様は何事だ。兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。」と、言葉鋭くしかつた。

十266 「〈略〉。さあ、行きませう。命を捨ててかゝつたら、救へないことはありますまい。」此のけなげな言葉は遂に父を動かした。

十619 園 されど主人は、〈略〉、とてもお泊め申す事は出来ません。〈略〉。日の暮れない中に、一足も早くお出かけなさい。」といふに、僧は返す言葉もなく出て行きぬ。

十628 園 〈略〉、「あゝ、おいたはいお姿。〈略〉。お泊め申してはいかゞでございませう。」同情深き妻の言葉に、主人はいたく心動きて、

「〈略〉。」

十918 園 幾度もくりかへしてゐる中に、太郎は生麥生米生卵。と、早口にすらく／＼言へるやうになつた。太郎は得意になつて、「おとうさん、こんなに言ひにくい言葉は外に無いでせう。」といふと、〈略〉

十927 園 「おとうさんは、もつと言ひにくい言葉を知つてゐる。」

十923 園 「何といふ言葉ですか。」

十924 園 「はい。」といふ言葉と、「いゝえ。」といふ言葉だ。

十925 園 「はい。」といふ言葉と、「いゝえ。」といふ言葉だ。大變やさしい言葉ではありませんか。

十958 園 お前のやうな弱蟲には、〈略〉、言出すことの出来ない程「いゝえ。」といふ言葉は言ひにくいのだ。

十963 園 それから又、晝間私が聞いた時、なぜすなほに『はい。』といはなかつたのだ。『〈略〉。』「それ御らん。『はい。』も言ひにくい言葉では無いか。」

十一715 園 〈略〉、主人は愛想よく迎へて、「どうも残念なことでした。あなたがよく會ひたいと御話になる江戸の賀茂眞淵先生が、先程御見えになりました。」といふ。あまり思ひがけない言葉に宣長は驚いて、「先生がどうしてこちらへ。」

十一752 園 私も實は〈略〉、古事記

を研究しようとしたが、どうも古い言葉がよくわからないと十分なことは出来ない。

十一753 古い言葉を調べるのに一番よいのは萬葉集です。

十一906 父はなほ言葉をつづけて、「暦を見れば、まだいろ／＼大切な事がわかる。〈略〉」

十一945 最後に父は「暦は實に重寶なものだ。〈略〉利用しないであるのは寶の持ちぐされだ。」と言葉をそへた。

十二674 長女の言葉に満足した王は、地圖を指さしながら領地の三分の一を與へた。

十二692 娘の言葉を物足りなく思つた王は、やゝせきこんで、「どうしたのだ、コーデリヤ。何とか言方がありさうなものだ。」

十二759 王は尚あらぬ言葉を口走つてはゐたが、其の言葉の端端にも、前非を悔い、自分を責めて娘にわびる眞心がこもつてゐた。

十二759 〈略〉、其の言葉の端端にも、前非を悔い、自分を責めて娘にわびる眞心がこもつてゐた。

十二1210 〈略〉、大勢は人力の如何ともしやうのないもので——。西郷はだまつてうなづいた。安芳は尚言葉を續けて、「〈略〉」

ことばたくみ 「言葉巧」(形状) 1 言葉巧み

十二669 ゴネリルの答は如何にも言葉巧みであつた。

ことめんだう 「事面倒」(形状) 1 事めんだう

十二1206 官軍方の思召通り一押にはゆかぬかも知れませぬ。すると其のうちに又思の外な尻押なども現れて、事めんだうな筋合にならぬとも限りませぬ。

こども 「子供」(名) 45 子ドモ 子ドモ 子供 ↓おこどもしゅう

二176 「ユフヤケ コヤケ、アシタ テンキ ニ ナアレ。」子ドモ ガ大ゼイ、オモテデー シヨニウタ ツテ オマス。

三402 ある日はまを通ると、子どもが大ぜいでかめをつかまへて、おもちゃにしてゐます。三406 うらしまはかはいさうにおもつて、子どもからそのかめをかつて、海へはなしてやりました。

三518 子どもがそら一めんの星を見て、「ああわかつた。あの光るところが雨のふるあなだ。」

四41 あちらこちらに子どものならすらつばやふえの音もして、たいそうにぎやかです。

四766 今の村長さんも子どもの中からすなほで、なさけぶかい人でした。

四796 私は長い間に子どもをたくさん見ましたので、どういふ子はどういふ人になるといふことを見ぬきます。

四803 学校の行きかへりに〈略〉するやうな子どもは、大いらくなものになりません。

四903 母は泣きながら二人の子どもに、「〈略〉。」といひました。

五751 よい身代であつたが、〈略〉みんな賣りはらつた。しまひには妻や子どもの着がへまでもないやうになつた。

五771 家屋敷もなくつた上に、夫に死なれたので、庄屋の妻は子どもをたれて里へ歸つてゐた。

五774 其の後村の人は、庄屋の家屋敷や田地を買ひもどして、妻や子どもに、もとの家へ歸つてもらつた。

六494 ともし火近く 衣ぬふ母は 春の遊の 楽しさかたる。 居ならぶ子どもは 指を折りつつ、 日數かぞへて、 喜び勇む。

六504 ありりのはたに縄なふ父は すぎしくさの手がらを語る。 居ならぶ子どもはねむさ忘れて、 耳をかたむけ、こぶしをにぎる。

六882 自分たち程の子どもが出て来て、象の前足にだきついて見せた。

六883 自分たち程の子どもが出て来て、象の前足にだきついて見せた。 子どもの手がやつと合つてゐた。

六897 〈略〉、今の子どもが象の腹の下へねころんだ。

六901 すると象は鼻で、其所にあつたうちを拾つて、子どもの顔をあふぎ出した。

六984 村の学校のげんくわんの向つて右の落葉松は、わたしの子どもが植ゑたので、其の子はとうに戦死した。

七525 私も子どもの時には、毎日此の學校へ通つて、〈略〉。

七635 〈略〉、年よりや子どもは聲を立てて呼びますので、川べはひじやうなさわぎでございました。

七722 妻や子どもに、朝晩おねんぶつのかはりにとなへさせます。七729 家には七十近い父と、三十になる妻と、三つになる子どもがあるの、どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともあります。が、〈略〉。

八61 それは氏子の五箇村から、子どもの騎手を一人づつ出して、社の横の池のまはりで競走させて、〈略〉といふ定めであつた。

八63 それは〈略〉、勝つた子どもを出した村が、次の年のお祭の日まで、五箇村の頭になるといふ定めであつた。

八66 或年選ばれた子どもの中に、すぐれて上手なものが二人あつた。

八335 昔朝鮮に一人の婦人があつて、

子どもをおさづけ下さるやうに、朝晩神様にいのつてあました。

八36ノ「略」、一人の子どもに二人の實母はないはずといつて、いろいろ調べますが、どちらも實母だといひはります。

八36ノ「略」 其の子を二人の眞中に置いて、兩方から子どもの手を取つて引合へ。

八37ノ二人の女は「略」、兩方から引合ひましたが、子どもがいたがつて、わつと泣出しますと、實母の方は驚いて手を放しました。

八37ノ里親の方は「それ見よ。」といはぬばかりに、子どもを引きよせますと、「略」。

八49ノ狐・狸・兎・犬・豚ナドハ彼ノ求メル物デアルガ、マレニハ庭先ニ遊ンデキル子ドモヲサラツテ行クコトモアル。

八68ノ「略」 日本人は八萬人餘も居て、子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、英語で勉強しますが、「略」。

九91ノ「略」 昔カリストといふおかあさんと、アルカスといふ子供がありまして。

九91ノ「略」 其の中に、子供のアルカスはだん／＼大きくなつて、狩人になりましたが、「略」。

九101ノ「略」 ざるを持つた子供が、川下の方に集つてさわいであるのは、鮎や

どちやうを取るであらう。

十17ノ「略」 なれない私は、「略」馬のそばを通るのが危険なやうな氣がしてならなかつたが、土地の人は一向平氣で、三四歳の子供でも、腹の下などを自由に／＼つて歩きます。

十19ノ「略」 中には、君ぐらゐの子供や、其のおかあさんらしい人が、「略」、くびや背をなでたりしてゐるのもあります。

十40ノ「略」 今年伐るはずのは、おとうさんの子供の時植ゑたのだといふが、もう幹のまはりの三尺餘りもあるものが大分見える。

十57ノ「略」 ふかの口はもうほとんど子供に届いてゐる。

十106ノ「略」 殊に日本人の小學校ありて、御前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては、殆ど身の南米に在るを忘れ候。

十107ノ「略」 中にも十三四ばかりの子供が、各國人の間にまじりてかひ／＼しく立働ける様を見ては、如何にもけなげに存ぜられ候。

十二55ノ「略」 不意にばた／＼と音がして、小さな子どもが二人奥からかけ出して來た。

十二56ノ「略」 二度、三度。やつとつまんだと思ふと直に落してしまつた。子どもは思はず顔を見合はせた。

十二58ノ「略」 父も喜んだ、子どもも喜んだ。

こどもあそい 「子供争」 「題名」 2

子ども争

八目16 一 子ども争

八35ノ「略」 一 子ども争

こどもごころ 「子供心」 (名) 1 子供心

十一100ノ「略」 壁のすき間をもつた雨のため、本がすつかりぬれてゐたので、子供心にも大變心配して、其の晩はとう／＼眠れなかつた。

こどもむき 「子供向」 (名) 1 子ども向

七114ノ「略」 地もがらまことに當地向で、賣行もよからうと思ひます。あのたちで子ども向の品をもう五十反、至急お送り下さい。

こどもら 「子供等」 (名) 2 子どもら

九9ノ「略」 殊に近年我が國で學校をそこ／＼に立てたので、子供等はなか／＼上手に日本語を話します。

十二106ノ「略」 子どもらは仕事をしてゐる老僧のまはりに集つて、「氣違よ／＼。」とはやし立て、「略」。

ことり 「小鳥」 (名) 6 コトリ 小鳥

二13ノ「略」 木ノエダニ、コトリガ

十パトマツテキマシタ。

五29ノ「略」 もえる木のめに春風吹けば、

「略」、人も來て見る、小鳥も

たふ。

八19ノ「略」 四十雀・目白・ひよどり・も

ず・ひわ、秋の山は小鳥の聲でにぎ

やかである。

八23ノ「略」 小鳥は時々此の清水にのどをうるほしては、こずあでさへづるのである。

九33ノ「略」 急にかん高い音を立てて、美しい小鳥が二三羽、身がるに枝移りした。

十54ノ「略」 此の愛らしい小鳥が、「略」、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、誰でも驚かない者はあるまい。

ことわりか・ねる 「断兼」 (下二) 1

ことわりかねる 《一ネ》

十93ノ「略」 太郎は前から父に、「あの橋は危険だから決して渡つてはならぬ。」と固く禁ぜられてゐたのであるが、友だちのすゝめをことわりかねて、一所に渡り出した。

ことわる 「断」 (四・五) 4 ことわる

《一ツ・一ツ・一ツ》

十60ノ「略」 とあるあばら家の門口に杖を止めて、一夜の宿を貸し給へといへば、「略」婦人立出でて、「折あしく主人が留守でございますので。」とことわりぬ。

十70ノ「略」 始は「略」宿をことわりし

常世も、一夜の物語にうちとけては、名残なか／＼盡きず。

十94ノ「略」 なぜ其の時『いゝえ、僕は止められてゐるから渡りません。』と、きつぱりことわらなかつたのか。

十94ノ「略」 僕は再三ことわつたのです。

十94ノ「略」 僕は再三ことわつたのです。

十94ノ「略」 僕は再三ことわつたのです。

こな 「粉」(名) 2 粉

十一129 〔略〕、マスクをかけた職工が珪砂にソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。

十一122 1 シャベルでざく／＼かきまぜると、白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、目も口もあけられない。

こなし ↓あらごなし

こなす 「熟」(五) 2 こなす 《一サ—シ》

八101 6 此の時胃は一同に向つて言ひました。「略」。食つた物をこなして、之を血の製造場へ送るのが僕の役目であつて、「略」。

八101 8 〔略〕、僕が若し食物をこなさなかつたなら、からだを養ふ所の血がどうして出来ませう。

こなた 「此方」(代名) 4 此方

七19 2 手もとの軍ぜい二萬騎を引きつれて、たゞちに極樂寺坂へ向ひました。稻村崎の此方に着いて、賊のそなへを見渡しますと、「略」。

七75 6 役人は「略」、「略」。紀州の男は急いで國へ歸つて、其の金をまちがひなくとどけるやうに致せ。

人夫には此方から手あてを致す。」と申し渡して、人夫にはうびの金をたくさんやつたと申します。

十60 4 折から、たもとの雪を打拂ひ／＼、此方へ來かかれるは、此の家の主人なるべし。

十90 6 〔圖〕 村の社の掃除や終へし、はうき手に／＼此方をさして 語りつゝ來る若き人々、今朝とく出でし兄も交れり。

こなわ 「小縄」(名) 1 小縄

六67 1 或物持の所へ行くと、下男がまだ使へる小縄を捨てたと言つて、主人がひどくしかつてゐた。

こにし 「小西」(人名) 2 小西

七105 4 小西程の者を堺の町人とし、又明國への返書に豊臣清正と記したといふが、それはまことの事か。

七106 6 小西は日本の大將ならず、まことは堺の町人、道案内の者故、にげも致したであらう。

こにしゆきなが 「小西行長」(人名) 2

小西行長

七97 4 豊臣秀吉が朝鮮へ向はせた先手の大將は加藤清正・小西行長の兩人でした。

七106 2 〔略〕、日本の大將小西行長は一たまりもなくにげ落ち、もはや朝鮮に日本の武士は一人も居らぬ。

ごにん 「五人」(名) 10 五人

六41 1 〔略〕、私を入れて村からは五人も出てゐるが、兵種がちがふと兵舎のあり場所もちがふので、めつたに一しよになることはない。

八7 2 やがて五人の騎手は多くの人々につきそはれ、しづ／＼と馬を歩ませて、鳥居の中を集つて來た。

八7 7 五人の騎手は神に勝利をいのつて、第二のあひづを待ちかまへてゐる。

八8 3 二番太鼓の「並べ」のあひづに、五人の騎手は打連れて、拜殿のそばの大きな立石の前に並んだ。

九45 3 〔圖〕 又コ、二一匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、其ノ五人ハ、〔略〕、争ヒテ高キ價ヲツク。

九45 4 〔圖〕 又コ、二一匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、其ノ五人ハ、〔略〕。

九45 9 〔圖〕 之二反シテ、同ジャウナル馬五匹アリ、其ノ持主ハ別々ニテ、買ハントスル人タゞ一人ナルトキハ、五人ノ持主〔略〕、争ヒテ價ヲ下グ。

十二94 3 さうして此處で父王の心盡くしから送られた五人の友と、六年の間種々の苦行を試みた。

十二94 9 ところが此の新たな態度に驚いた五人の友は、〔略〕、彼を捨てて立去つた。

十二96 4 釋迦は世を救ふ手始として先づかの五人の友をたづねた。

ごにんばやし 「五人囃子」(名) 1 五人バヤシ

四86 4 〔圖〕 オキク「五人バヤシ」一番右ニ居ル人ハ何ヲスルノデセウ。」

こぬかだらけ 「小糠」(名) 1 こぬかだらけ

三32 5 長いはんてんをきて、みじかいももひきをはいて、こぬかだらけになつてはたらくぢいさんです。

こねこ 「小猫」(名) 7 コネコ 子ねこ 子猫 ↓うちのこねこ

一9 2 オヤネコト コネコガキマス。

一9 4 コネコガニヒキキマス。

三10 5 〔圖〕 うちの子ねこは かは

三10 6 〔圖〕 うちの子ねこは かは

三11 3 〔圖〕 うちの子ねこは かは

三11 4 〔圖〕 うちの子ねこは かは

三11 4 〔圖〕 うちの子ねこは かは

九112 8 〔圖〕 先日遊びに上り候節御約束致し候三毛の子猫、もはや大きくなり候事と存じ候。

こねずみ 「子鼠」(名) 2 子ネズミ 子ねずみ

二27 7 ソノトキ一ピキノ子ネズミガマヘデテイヒマシタ。

四42 4 だい所でいろいろな物をのけると、子ねずみが一ぴきとび出しました。

こねどり 「捏得」(名) 1 こねどり 八51 4 第十四 餅つき 〔略〕。おとうさんはきね、おばあさんはこねどり。

ゴネリル (人名) 5 ゴネリル

十二657 王にはゴネリル・リガン・
 コーデリヤといふ三人の娘があつた。
 十二666 先づ姉のゴネリルから言
 つてみよう。
 十二669 ゴネリルの答は如何にも言
 葉巧みであつた。
 十二711 リヤ王は百人の家來を連れ
 て先づ姉娘ゴネリルの許に身を寄せ
 た。
 十二712 ゴネリルは決して氣だての
 やさしい女ではなかつた。
 ごねん「五年」(名) 1 五年
 十二129 かくて世界の各地をめづつ
 て、略 本國に歸つたのはそれか
 ら五年の後である。
 ごねんせい「五年生」(名) 2 五年生
 十一12 十月十二日、我等五年生一
 同は、河井先生にみちびかれて、東
 京代々木の明治神宮に参拜せり。
 十一146 のぶ子さんはちやうど、五
 年生の時の成績物に表紙をつけて、
 とちていらつしやる所でした。
 この「此」(連体) 399 この 此
 ノ 此の 此
 一283 コレハワタクシノハコニ
 ハデス。コノタカイトコロハ
 ヤマデス。
 一285 コレハワタクシノハコニ
 ハデス。略。コノヒクイトコ
 ロハカハデス。
 二202 図 コノ山ニハ、クリノ木
 ガタクサンアリマス。

二365 トモダチハ「モチハタイ
 セツナオミデコシラヘタモノ
 デスカラ、イテハイクマセン。」
 ト、トメマシタガ、キカナイディ
 マシタ。ヤハウマクアタリマシ
 タ。略。ソレカラコノ人ノ
 田ニハ、オミガスコシモデキナ
 クナツタトイヒマス。
 二464 ヨイオデイサンハソノ木
 ヲキツテ、ウスヲコシラヘマシ
 タ。ソノウスデ米ヲツキマス
 ト、ウスノ中カラ、マタオカネ
 ヤタカラモノガデマシタ。ウル
 イオデイサンハ又コノウスヲ
 カリニキマシタ。
 二507 ワルイオデイサンハコノ
 ハナシヲキイテ、ノコツテキタ
 ハヒヲカキアツメテ、カレ木ニ
 ノボツテ、略。
 二642 耳モヨクキコエマス。
略。ナニカキカレマス、コ
 ノ口デハツクリコタヘマス。
 三176 図「このはの中に、お
 もしろい人がゐます。あててご
 らんなさい。」
 三184 図 この人はどんないろ
 のきものをきてゐますか。
 三252 この二三日の雨で、竹の
 子がかんなんに出来ました。
 三447 図 それではこの玉手箱を
 上げます。
 三565 かへるは略、とんでは

おち、とんではおち、何べんも
 何べんもとびつかうとします。
略、とうとうやなぎにとびつ
 きました。たうふうはこれを見
 て、このかへるのやうに、こん
 きがよければ、何こともできな
 いことはない、とさとりました。
 三591 スコシタツテカラ又來テ
 見マス、モウリツパニセミ
 ニナツテキマス。コノ大キナモ
 ノガ、ヨクアノカラノ中ニ
 ハイツテキタモノダトオモヒ
 マシタ。
 三601 今ニハノ木ニセミガ
 ウルサイホドナイテキマス。ア
 ノセミモコノ中ニキルノデ
 セウ。
 三705 この黒いもめんのもんつ
 きは私のです。
 三796 図「ふみ子もこんやはき
 つとあちらでこの月を見て
 るませう。」
 四57 これは私が生れた年、
 おぢいさんが私のぶんにつき
 木をして下さつたのださう
 です。おぢいさんがこの柿の
 木をついでいらつしやる時、
略。
 四78 この二十五日はおぢいさ
 んのめい日ですから、たくさん
 取つてそなへるつもりです。
 四157 図「オマヘタチハウマク

ワタシニダマサレタナ。ワタシ
 ハコノヲカヘ來タカツタノ
 ダ。」
 四182 コノ神様ハサキホドオ通
 リニナツタ神様ガタノ弟ノ
 方デス。
 四187 ソコへ大國主ノ神ガオ出
 デニナリマシタ。略。コノ神
 様モ、「ナゼナクノカ。」トオ
 タヅネニナリマシタ。
 四207 図 オカゲサマデ、カラダハ
 コノ通りニナホリマシタ。
 四317 略向ふで、「ほか」と口
 まねをします。略向ふの方
 へ行つてみましたが、だれも
 居ませんでした。うちへかへつ
 て、父にこのことを話します
 と、父は「それは山びこです。
略。」とをしへました。
 四352 九 フクロフ略。夜ニ
 ナルト、ホカノ鳥ハ大ガイ目
 ガ見エナクナルノニ、此ノ鳥
 ハ見エルノデ、略。
 四547 図「お前はたいそうとんち
 がある、と聞いた。此のからか
 みにかいてあるとらをしぼつ
 て見せよ。」
 四753 此の人たちの田や畠
 の作り方はていねいでしたか
 ら、稲も麥もよそのよりは
 よく出来ました。
 四763 今の村長さんのおとう

さんもおとなしい人で、〈略〉。
西の村一番の金持のむすめ
さんが、此の人の所へおよめ
に來ましたが、〈略〉。

四七六 今の村長さんも子ども
の時からすなほで、なさげぶか
い人でした。あのうちは此の
上よくなるばかりでせう。

四七七 それは西の村で、一番
目の金持だといはれたうち
に生れた人のでした。此の人
は小さい時からいたづらもの
で、〈略〉。

四七九 此の人も一本杉の外
にないてくれるものがなくな
った。

四八三 てつけうへかかった時、
河を見たら、たいそう水が出
て居ました。「此のよいお天氣
に、どうしたのでせう。」

四九〇 父はくどうすけ
つねにころされました。母は
〈略〉。「お前たちが大きく
なつたら、此のかたきを取つて
おくれ。」といひました。

四九二 「きつと此のかたきを
取つて見せます。」

五三八 此の方は中村さんといふ人
で、〈略〉、今日から此の級へはいる
方です。

五四一 〈略〉、今日から此の級へは
いる方です。

五四五 これは級長の山田さんです。
分らないことは此の方におきなさ
い。

五八一 〈略〉、川上から箸が流れて來
ました。みことは此の川上にも人が
すんでゐるにちがひないとおかんが
へになつて、〈略〉。

五九五 「私どもにはもと娘が八人
ございました。それを八岐の大蛇が
來て、毎年一人づつたべました。も
う此の子一人になりましたのに、
〈略〉。」

五二〇 〈略〉、大きな手がらを立て
た軍人に下さる勲章に、金の鵄をお
つけになつたのだ。此の勲章には功
一級から功七級まである。

五三三 此の時の氣もなく自分のう
ちを見て、その小さいのにおどろき
ました。

五三八 〈略〉、先生が〈略〉、私ども
を道に待たせておいて、學校へおよ
りになりました。此の時私どもの村
へよく物賣に來るおぢいさんが、
〈略〉通りました。

五四三 夜がふけて、人々はかへりま
した。たけるも酒によつてねむりま
した。此の時尊はふところのつるぎ
を出して、たけるのむねをおつきに
なりました。

五五〇 おかあさんもねえさんも、此
の五六日は夜もろくろくおやすみに
ならないのです。

五五三 昔美濃の國にまづしい人があ
りました。〈略〉。此の人に年取つた
おとうさんがありまして、酒がすぎ
てございました。

五五五 喜んで、それから毎日其の
酒をくんで來て、おとうさんに上げ
ました。いつか此の事が天皇のお耳
に入りまして、〈略〉。

五五八 「今日は買物もあるし、歸
りには馬車に乗つて、此の下まで來
てもよい。」

五六五 うちの方では、田に水がな
いと言つて、さわいでゐますのに、
此の村にはよく水がありますね。

五六七 此の村には、向ふの杉山の
すそに、大きな用水池があつて、其
所から水を引くからだ。

五八三 昔此の村はひどく貧乏で、此
の村の名を言ふと、「あゝ、あの貧
乏村か。」と言はれたものださうだ。

五八五 昔此の村はひどく貧乏で、此
の村の名を言ふと、〈略〉。

五八五 此のあたりの青田も、其の頃
は大いであれ地で、〈略〉といふこ
とだ。

五八八 ところが、今から百三十年
前に、此の村の庄屋が、〈略〉、米
がとれるやうにしたものだと思つ
た。

五九七 どうしても大きな用水池を掘
らなければならぬと考へた。此の
事を村の相談にかけた。

五七四 土手の此の記念碑に、今話し
た事がくはしく書いてある。

五七五 此の山の杉も庄屋が先に立つ
て植ゑたのださうだ。

五七九 今年のひでりにも、此の用水
池にはあんなに水がたまつてゐる。

五九八 一人は〈略〉、木の上へにげ
上りました。一人は〈略〉、地にた
ふれて、死んだふりをしてゐました。
〈略〉。熊が來て、からだ中かきまは
しましたが、〈略〉、其のまま行つて
しまひました。此の時、木に上つて
ゐた者が下りて來て、「〈略〉。」

五九〇 階下の入口には、左右に大き
な待合室があつて、此の外に中央郵
便局の分室もあれば、兩替店や、い
ろ／＼の賣店もあります。

五九二 二六六 東京停車場 〈略〉。
此の停車場から、毎日七八千人づつ
の人が乗降りします。

五九六 はじめて東京見物に來て、此
の停車場へ降りる人は、大い先づ
第一に宮城をさしてまゐります。

六〇五 臺灣の新高山さ。〈略〉。臺
灣ではめつたに雪が降らないさうだ
が、此の山のいたゞきには、いつも
つもつてゐるといふことだ。

六一四 「此の近くに、しめぢの出
る所はありませんか。」

六三三 〈略〉強い弓なら、わざと
敵にやつてもよいが、此の弱い弓を
取られて、『これが義經の弓だ。』な

どと言はれては、〈略〉。

六38 4 〈略〉、『これが義經の弓だ。』

などと言はれては、源氏の名折れになるからだ。』と言つたと申します。義經に此の名を惜しむ心があつたので、何時の戦にも勝つたのでございませう。

六39 5 入營後はじめて此の前の日曜日に外出をゆるされた。

六52 6 一番二番三番と、十二番の舞がめでたくすみましたが、其のことで人に人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。此の時には頼朝もおもしろくなつて、いつしよに舞を舞ひました。

六56 3 光盛の娘は其の後、夜晝頼朝をねらひましたが、少しもすぎがありません。かへつて、はだみはなさず持つてゐた刀を見つけられてしまひました。〈略〉。さあ、此の女にはゆだんが出来ぬといふ事になつて、〈略〉。

六56 6 さあ、此の女にはゆだんが出来ぬといふ事になつて、〈略〉。唐糸といふのは此の女のごさいます。

六57 1 唐糸には其の時十二になる娘がありました。〈略〉、風のたよりに此の事を聞いて、うばをつれて、鎌倉をさして上りました。

六68 6 図 「こまかな人だが、出す時には出すね。」「全くだ。あんな小言

を言ふ程だから、此の義経が出来たのだらう。」

六69 7 京都を北から南へ流れてゐる川を賀茂川といひます。京都は長い間の都ですから、〈略〉を、此の川の水はいくたびとなくうつしたことでございませう。

六70 3 又いくさのあつた時には、〈略〉、いくたびとなく此の川の水にうつたことでございませう。

六72 1 今、三條の大橋に立つて、川下を見ると致しませう。〈略〉。東の方は此の橋のたもとから、川にそつて電車が出来ます。

六72 2 東の方は此の橋のたもとから、川にそつて電車が出来ます。此の電車道から東山のすそへかけて、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、〈略〉。

六72 7 四條の大橋はすぐ其所に見えます。人通の多いのは此の大橋で、これには電車も通つてゐます。

六72 8 義経・辨慶の五條の大橋は此の川下にかゝつてゐるのでございませう。

六73 8 賀茂川は〈略〉、染物にむいてゐます。あの美しい友禪染は、もと此の川べりで出来たのでございませう。

六75 8 図 「ネエサンガ今ヌツテキル此ノ帯ハ。」

六81 2 草野の次郎の如きは夜〈略〉、

敵の船に火をかけて引上げた。敵は此のいきほひにおそれて、鐵のくさ

りて船をつなぎ合はせた。

六81 6 敵は此のいきほひにおそれて、鐵のくさりで船をつなぎ合はせた。〈略〉。此の時河野の通有は、たつた小舟二そうで向つた。

六84 7 全く上下の者が心を一にして、國難にあたつたのである。此のまごころが神のおぼしめしにかなつたのであらう、〈略〉。

六88 5 象つかひが「此の太い足で、どさり／＼と歩きます。」といふと、

長い鼻をふら／＼させて歩き出した。六89 5 図 印度の國はいたつてあつう

ございしますので、お子どもしゆうは此の腹の下でお晝ねをなさると申します。

六90 1 すると象は鼻で、其所にあつたうちを拾つて、子どもの顔をあふぎ出した。此の時、「大きなお守さんだ。」と誰かがいつたので、みんなが一度にふぎ出した。

六93 4 番兵がゆだんをしてゐると、城兵が切りこんで来て、旗をうばつて引上げた。正成は此の旗を城門に立てて、さん／＼に賊を惡口させた。

七5 7 図 君、此の長き行列の 中の一人は君にして、 中の一人は僕なるぞ。

七16 3 図 此の蛤は私どもの拾つた中から、大きなのをよつたのでござい

ます。四月二十三日 正男 叔父上様

七22 3 賊のそなへは忽ちくづれて、防ぐにも防がれず、たゞあわてさわいでゐます。此の時義貞が方々へ火をかけさせますと、〈略〉。

七22 6 鎌倉は一面火の海になつて、賊の大將高時以下北條方は、此の火の中にほろびてしまひました。

七24 6 茶屋にはおばあさんが一人ほつちで菓子やわらちを賣つてゐる。此のおばあさんにむすこが一人あるのださうだが〈略〉。

七31 3 図 今や獅子の息はたえんとす。此の時此所に來りしは一人の武士なり。

七48 6 無念に思つて、武田方から十騎ばかり、木戸を開いて切つて出ようとした。此の時信玄は之を止めて、「〈略〉。」といったので、めでたく中なほりが出来た。

七52 5 図 私も子どもの時には、毎日此の學校へ通つて、〈略〉。

七52 7 図 私も子どもの時には、毎日此の學校へ通つて、〈略〉、此の講堂でお話を聞いたり致しました。

七52 8 図 で、今日此のなつかしい學校に來て、皆さんにお話をするのは、何よりもうれしいのでございます。

七59 2 図 〈略〉、星が出てゐれば、それによつて方角を知ること出来るし、〈略〉。又海岸には所々に燈臺

がありますから、〈略〉。此の星を見分けることや、燈臺のあたりを知ることは、船に乗る者に取つて、はなはだ大切なことなのであります。

七63 〇 〈略〉、川べはひじやうなさわぎでございました。此の時見すほらしいなりをした一人の男が、〈略〉、一人で川へはいつて行きました。

七65 〇 これはあの人が落して行つたにちがひないが、渡賃が高いといつて、此のあふない川を一人でこしたほどの人である。

七65 〇 もし此の大金がなかつたら、氣がちがつて死ぬやうな事になるかも知れぬ。

七68 〇 〈略〉、たとひとんで行つて見た所で、もうあるまいとは思ひましたが、此のまゝ、歸ることも出来ませんので、引つかへして参りました。

七69 〇 ついては此の中の金を半分だけお禮のしるしにさし上げます。

七71 〇 〈略〉、仲間の者が國へ送る金をあづかつて、此の財布に入れて來たのでございます。

七71 〇 〈略〉、だんなはななけ深い方ですから、此の金をあなたにさし上げましても、おしかりになることはあるまいと思ひます。

七82 〇 又眞珠貝トイフモノガアル。指輪や襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデア

七83 〇 中デ面白イノハサンゴデ、

〈略〉。カンザシノ玉ヤ根ガケノ玉ニスルサンゴハ、皆此ノ蟲ノ骨デアル。

七86 〇 此ノ他海藻ニハマダタクサンナ種類ガアツテ、中ニハ肥料ニスルモノモアル。

七90 〇 「向ふむきになつて、此のいすにかけていらつしやい。」

七90 〇 此の時どやくと四五人の敵兵がはいつて來ました。

七92 〇 「よいあんばいだ。此のまゝやうなら、今日は大事なことはあるまい。」

七93 〇 〈略〉、二百十日といふのは立春の日から二百十日目の日のことで、

此の日はよく大風が吹くから、〈略〉。

七98 〇 清正は先づ増田長盛をたづねました。此の人だけは自分のために心配してくれるであらうと思つたのでございます。

七98 〇 神々も照覽あれ、戦一つ出來ず、人のかげごとばかりいふ石田めとは、此の清正一生中直りは致さぬ。

七99 〇 たとひ數年の軍功がみとめられず、此のまゝ切腹を命ぜられても、石田めとは中直りは致さぬ。

七100 〇 ところが或夜大地震が起つて、〈略〉。此の時清正は、地震と共にね起き、〈略〉、一さんに伏見の城へかけつけました。

七108 〇 今天下に此の石田を知らぬ

者はあるまい。

七108 〇 小西は日本の大將ならず、まことは堺の町人、〈略〉。此の清正こそはまことの將、四十萬の軍勢は此所へ向けよ。

七108 〇 彼岸ハ春ト秋トニアリテ、此ノ頃ハ晝夜ノ長サホトンド相等シク、〈略〉。

七113 〇 それで十字だから、うちの屋がうのカネキを入れて、此の頼信紙に書きこんでござらん。

八24 〇 小鳥は時々此の清水にのどをうるほしては、こずゑでさへづるのである。

八14 〇 〈略〉、「多勢の方はゆだんをしてゐるが、小勢の方はみんな心を合はせて、一生けんめいになつてゐる。」といつた。〈略〉。後に此の話を聞いた者は、皆家康の年に似合はずかしこいのに驚いた。

八19 〇 第五 楊子江 〈略〉。此ノ河ノ上流地方ヨリ木材ヲキリ出シ、之ヲイカダニ組ミテ河ヲ下スコアリ。

八22 〇 臺灣の蕃人には、お祭に人の首を取つて供へる風がありますが、亞里山の蕃人には、此の悪い風が早くから止みました。

八26 〇 さて蕃人どもは、呉鳳を神にまつて、其の前で、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。

八29 〇 或日炭を焼く男が太郎のうち

へ來て、あろりのはたでいろ／＼の話をした。此の時太郎が、炭はどうして焼くのかときくと、〈略〉。

八35 〇 〈略〉、其の實を取つて來て、庭先の畠の中にまきました。間もなくそれから芽が出ましたので、婦人は之を我が子のやうに育てました。これが人蔘で、此の婦人は長生をしました。が、一生の間仕合はせのよい事がつづいたと申します。

八47 〇 此の爲替はほんのわづかですが、何か好きな物を買つて上げて下さい。

八50 〇 ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒クテ、家畜ヲサラフノモ多クハ此ノ時デアル。

八61 〇 第十六 看板 〈略〉。此ノ他宿屋ニハ、掛行燈ニ旅人宿何屋ト記シテ掛クルモアリ、〈略〉。

八66 〇 〇 サンフランシスコには、〈略〉。〈略〉。此の港には、十五六年前に大地震があつて、〈略〉。

八67 〇 〇 サンフランシスコはカリフォルニア州にあるのですが、此の州は合衆國の中でも、氣候がよくて、其の上土地味が肥えてあますから、〈略〉。

八69 〇 〇 サンフランシスコから三日二晩汽車に乘通して、今日此のシカゴに着きました。

八70 〇 〇 此の繪葉書は此所へ來る途中、汽車の窓から見た牧場の實景で

す。

八七四 諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立ててごらんさい。」

八七六 人々は「略」、やつて見ましたが、もとより立たうはずはございません。此の時コンブスは、こつんと卵のはしを食卓にうちつけ、何の苦もなく立てて申しました。

八七六 そうですね、此の雪降りに何所へお出でになりますか。

八七三 是非今日のうちに納めなければなりません。此の切符に、『一月二十日限り當役場へ納付』とありませう。

八七九 此の一枚には徴税令書とありませう。

八七五 私とは三年ぶりに此の子にあふのですが、略。

八八八 此の方はどなたですか。

八九八 あなた、此のお子が返事をしないのは、あなたの口が見えないからです。

八九二 おとよは「略」、もう二年たつて、此の學校を卒業する頃には、りつぱに一人前の事が出来るやうになる。

八九九 げんに此の學校の卒業生で、商店の番頭になつてゐる者もあれば、

八九二 此所二名高キ名古屋城アリ。略。名古屋市ハ此ノ城アルニヨリテ名高ク、「尾張名古屋ハ城持

ツ。」ト歌ハレタリ。

八八二 かうして二三日たちますと、略、からだに全く力がなくなりました。此の時胃は一同に向つて言ひました。

八八二 君等は僕を苦しめようとして、此の数日の間少しも食物を送つてよこしませんでした。

八八八 此の父母の下に、此の家に育つた乃木大將が、終生忠誠質素でおし通して、武人の手本と仰がれるやうになつたのは、まことにいはれのあることである。

八八八 此の父母の下に、此の家に育つた乃木大將が、略。

九三七 此のトラク島へ来てからもう三月になるので、土地の様子も一通りはわかりました。

九三〇 冬でも春でもこちらではちやうど内地の夏のやうです。暑さも年中此のくらゐのものださうで、略。

九四三 第一トラク島便り略。それに此の邊一帶の島々は我が國の支配に屬してゐるので、内地から移つて来た人も多く、少しもさびしくはありません。

九四七 珍しい植物は此の外にもまだたくさんあります。

九四七 水の乏しい此の島々では、其の雨水がまた大切な飲料水となるのです。

九一七 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、略。所ニヨツテ此ノ蟲ヲドビンワリト呼ンデキルノハ、略。

九一〇 シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出来テキルノハ、印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。此ノ蟲ハ主ニ蘭ニ止ツテキテ、略。

九二〇 又或動物ハ略、マハリノ物トマガレナイヤウナ鮮カナ體色ヲモツテキル。略。此ノ類ノ色ヲ警戒色トイフ。

九二一 動物ノ形ヤ色デモ、注意シテ調べテミルト、コノヤウニイロクフシギナ事ガアル。

九二二 此の農學といふ學問は、略、まだ全く手の着かない事が少くなかつた。

九二三 そこで此の父も、略、出来るだけは骨折つたつもりである。

九二三 そこで此の父も、何とぞ此の學問を大成したいと、略。

九二四 それから諸國を歩き廻つたすゑ、略、此の山中へ来たのである。

九二四 しかし此の分では、わたしの命は、とても仕事の出来るまでもつまいと思ふ。

九二五 歡庵様は「略」、元庵様は「略」、おちい様の不昧軒様はまた、地質や礦物の方で新しい發見をなされた。此の方々のお書きになつたものは、大てい此所に持つてゐる。

九二六 略、大體一身一家の爲でなく、一すぢに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ事で、これが佐藤の家の學問の精神である。わたしも此の精神にもとづいて、略。

九二六 此の四代の苦心の後を受けて、國家の爲に、此の學問を大成するのがお前の役目だ。

九二六 此の四代の苦心の後を受けて、國家の爲に、此の學問を大成するのがお前の役目だ。

九二六 此の四代の苦心の後を受けて、國家の爲に、此の學問を大成するのがお前の役目だ。

九二七 略、父の此の願だけは、しかと心にとめて置いて、必ず仕とげてもらひたい。

九二八 これは今から百三十年ばかり前に、下野の國足尾山中の旅人宿で起つた事で、此の老人こそは出羽の國の醫者佐藤信季、少年は其の子信淵である。

九二八 信季は其の後幾日かたつて、とうく此の宿でなくなつた。

九三〇 右にあるのがアメリカ龍、左にあるのがカナダ龍で、此の二つを合はせてナイヤガラ龍といふのである。

九三九 此の坂を下りて、あの清水の所まで行くと、石井君のうちが見えるはずだ。

九四〇 「略。」と、此の前來た時の事を考へながら、略、又歩き出す。

九四〇 此の方面の戰闘に

二子をうしなひ給ひつる 閣下の心如何にぞ。」

九513 図 あつ社長さんのもと上方の人で、此の町へ始めて奉公に來たのは、ちやうどお前と同じ十二の年だつたさうだ。

九624 「總員起し。」此の號令で、朝の静かさが忽ち破られ、〈略〉。

九669 午前八時になると、艦尾の旗竿に軍艦旗があげられる。此の時信號兵は「君が代」のラツパを吹き、〈略〉。

九687 図 此の邊が有名な那須野が原だ。

九707 図 昔能因といふ人が、『都をば、〈略〉』とよんだのは其所のことで、此の關所は濱街道の勿來の關と共に、有名なものであつた。

九727 図 辨慶が立往生をしたと傳へられてゐる衣川は、すぐ此の先にある。

九7210 図 「あれが北上川だ。汽車は此の邊からあの川について、北へくゝと走るのだ。」

九7410 此の邊から野邊地あたりまでの間には、所所に放し飼の馬の群れてゐるのが見えた。

九787 先生も大きな箱を持つて來て、ほつたいものは此の中へ入れるやうにとおつしやつた。

九918 図 〈略〉、或日大熊を見つけたので、それを射殺さうとしました。

此の大熊こそは、先にジュノーに形を變へられたおかあさんのカリストだつたのですが、〈略〉。

九956 図 雪溪は谷を埋めた雪の坂で、〈略〉。登山者はんじきをはいて、石づきの付いた金剛杖や鳶口を力に、此の坂を登るのです。

九959 図 下山の時には、木の枝などを櫓にして、此の雪溪をすべつて下る人があります。

九9610 図 あつ雷鳥といふ珍しい鳥も、此のあたりから頂上へ登る途中のはひ松の間に居るのです。

九999 〈略〉、かぼちや畠を見廻ると、此の前まだ少し早いと言つて残して置いたのが、今日はもう熟しきつたやうな顔をして、へそを日にさらしてゐる。

九1112 ちやうど其の時、はるか遠方で味方の萬歳の聲がわき起つた。戦争なれた北風は、此の聲の意味をよく知つてゐた。

九1174 図 母は其の方々の顔を見る毎に、そなたのふがひなき事が思ひ出されて、此の胸は張りさくるばかりにて候。

九1178 図 如何ばかりの思にて此の手紙をしたゝめしか、よくよく御察し下されたく候。

九1194 図 しかし今の戦争は昔と違つて、一人で進んで功を立てるたてるやうなことは出来ない。〈略〉。豊島

沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念に思つてゐる。しかしこれも仕方がない。〈略〉。此のわけをよくおかあさんに言つてあげて、安心なさるやうにするがよい。

九1231 世間ニハ、イロ／＼ノ事情ノ爲ニ、或ハ信用モシテキナイ人ニ投票シタリ、或ハ棄權シテシマツタリスル人モアルガ、ソナナ事ヲスルノハ、選舉ノ趣意ニソムイテキル。國民トシテ恥ツベキ事ダ。」道雄ハ此ノ時、フト學校ノ級長選舉ノ事ヲ思ヒ出シタ。

十53 図 此の境内は廣さ約二十二萬坪。

十87 全身砂ぼこりにまみれた王は、〈略〉水浴をした。〈略〉。此の水浴が體にさはつたものか、王は俄にはげしい熱病にかゝつた。

十94 醫師は皆、投藥してもし萬一の事があれば、毒殺のうたがひを受けないかと恐れて、たゞ経過を見守つてゐるばかりである。此の有様を見て、フィリップといふ醫師が、一命をなげうつても王を助けようと決心した。

十97 方法は或劇薬を用ひる外になかつたので、フィリップは眞心こめて此の事を申し出た。

十151 図 私は此の村の青年諸君が、かうして修養にも實行にも、骨を折つてをられるのを、うれしく思ひま

す。

十222 図 此の町では、二歳駒の市が十日間も續いて、其の間には千頭からの賣買があり、〈略〉。

十229 図 私は〈略〉、此の子馬共を買つた人たちも、どうか同じやうにやさしく扱つてくれ、ばよいと、心からいのりました。

十236 図 成程、此の邊は馬でもつてゐる處だと思ひました。

十247 波風の外には友とするものもない此の島で、老夫婦のなくさめとなるものは、〈略〉であつた。

十251 一そのの船が、俄の嵐におそはれて、此の島に近い岩に乘上げた。

十266 「私は、とても人の死ぬのをじつと見ては居られません。さあ、行きませう。命を捨ててかゝつたら、救へないことはありませんまい。」此のけなげな言葉は遂に父を動かした。

十2810 グレースの眞心こめた看護によつて、全く元氣を回復した人々は、親子にあつく再生の恩を謝し、名残を惜しんで此の島を去つた。

十311 北アメリカが南アメリカに續く部分は、パナマ地峽といつて、〈略〉。此の地峽に造つた運河が、世界に名高いパナマ運河である。

十316 〈略〉、此の地峽を切通し、平かな掘割を造つて、太平・大西洋の水を通はせることは到底出来ぬ事であつた。

十318 そこで此の運河は、非常に變

つた仕組に出来てゐるのである。

十325 高い土地の上に水をたゝへたのであるから、湖の水面は海面よりずつと高い。此の湖へ兩方の海から掘割が通じてある。

十327 所で、此の高い湖と低い掘割を何の仕掛もなしに連結すれば、湖の水は瀧のやうに掘割へ落込んで、〈略〉。

十334 今太平洋の方から此の運河を通るとする。

十344 此の湖を横ぎると又水門があつて、船はさらに一段高くなる。

十356 掘割を通して船は又湖に出る。ガッソ湖といつて、〈略〉。大きな人造湖で、〈略〉。此の湖を渡つて又水門を通過する。

十366 パナマ地峡に運河を造る事は、〈略〉、成功を見るに至らなかつた。

最後にアメリカ合衆國は、國家事業として此の工事に着手し、〈略〉、遂に之を造り上げたのである。

十369 米國が此の運河を造るに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。

十377 昔、太平・大西兩洋の間を往來する船は、はるか南アメリカの南端を大廻りしなければならなかつた。しかしパナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり、〈略〉。

十408 朝のうちに此のけやきだ

けぶつ倒したいと思つてね。」

十436 父は「かうしてみんな手をそろへて働けば、來年の秋はもう眞白な蕎麥の花で、此の地面が埋まつてしまふのだ。」と楽しさうに言つた。

十469 弟子たちも此の主人を見限つて、一人逃げ二人逃げ、今は手助する人さへも無くなつた。

十471 一年と過ぎ二年とたつうちに、其の日の暮しにも困るやうになつた。〈略〉、今は手助する人さへも無くなつた。喜三右衛門はそれでも研究を止めようとしな

い。見て、たはけとあざけり、氣ちがひと罵つたが、少しもとんちやくしな

い。十498 かうして柿の色を出す事に成功した喜三右衛門は、程なく名を柿右衛門と改めた。〈略〉。彼は此の後

も尚研究に研究を重ね、〈略〉。十544 〈略〉、鳩は見るからに愛らしいものである。此の愛らしい小鳥が、〈略〉、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、〈略〉。

十551 〈略〉此のやさしい、しかも勇ましい通信者の働の偉大な事が證明せられたので、今では各國共に盛に傳書鳩の改良に力を用ひ、〈略〉。

十561 普通傳書鳩を使用する方法は、一定の飼養所から他の土地に連れて行つて、飛歸らせるのである。しか

し此の外に、往復通信の方法もある。

十588 殊に要塞が敵にかこまれて、〈略〉、全く方法の盡きた場合などには、此の勇ましい小傳令使にたよるより外はない。

十605 折から、たもとの雪を打拂ひくつゝ此方へ來かかれるは、此の家の主人なるべし。

十6010 ふと我が妻を見つけて、「此の大雪に、どうして出かけたのか。」

十6210 「ではお泊め申さう。此の大雪、まだ遠くは行かれまい。」

十6610 〈略〉主人の持來れるは、秘藏の梅・松・櫻の鉢植なり。〈略〉「略」。しかし此の三本だけは、其の頃のかたみとして、大切に殘して置いたのでございますが、〈略〉。」

十684 佐野源左衛門常世と申して、もとは佐野三十餘郷の領主、それが一族どもに所領を奪はれて、此の通りの始末でございます。

十6810 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、ちぎれたりとも、此の具足に身を固め、〈略〉、あつぱれてがらを立てるかぐ。

十695 しかし此のまゝに日を送つては、唯空しくうゑ死する外はございません。

十736 汽車で京城へ來る人は通常南大門驛で下りるのです。此の停車場を出て大通を東北に進むと、二町

ばかりで大きな門の前へ出ます。

十738 此の停車場を出て大通を東北に進むと、二町ばかりで大きな門の前へ出ます。此の門が南大門です。十791 お知らせしたい事はまだいろ／＼ありますが、大分長くなりま

したから、今日は此のくらゐにして置きます。

十847 或日、此の附近の山へ薪をとりに來た百姓が、たき火をしてゐると、そばの黒い岩に火がつき、煙をあげて燃出しました。

十854 これがつまり此の炭坑の始ださうです。

十951 すると、しまひに皆が僕の事を弱蟲だといつて笑ひました。僕は殘念でたまらなくなつたので、何此のくらの事がこはいものかと、自分から先に立つて渡つたのです。

十1027 それから少し行くと、うつぽかつらといふものがある。葉の先からつるを出して、五六寸の細長い袋をつるしてゐる。「此の袋で蟲をとるのだ。」

十1044 次の室には大きい熱帶植物類が並んでゐる。〈略〉。にいさんは「此の後にかががある。其處から熱い湯を管で各室へ送つて、〈略〉。」と教へて下さつた。

十1053 どうだ、美しいだらう。此の温室は南を受けてゐる上に、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに

早く咲くのだ。

十105 〇 一度此の中にはいると、また寒い處へ出るのがいやになるね。

十111 〇 美術の光の かがやく此の地、山皆緑に 水また清く、
〈略〉。

十113 〇 はるかあなたに白い水煙が見える。砲手の落ちついた力のこもった號令に、船ははや方向を轉じた。砲手は此の時早く船首の砲後に立つて、其の引金に手をかけた。

十118 〇 第二十三 太宰府まうで
〈略〉。此の神社は菅公の御墓所に建てたものだと聞いて、一層感を深くした。

十126 〇 青年團の事業の一として、杉・檜の植林を營めり。其の利益は、大部分を學校の基本金とし、其の殘部を一村共同の有益なる事業の費用にあつる計畫なり。萬事此の有様なれば、一村は誠に平和にして、年を追うて其の繁榮を増すばかりなり。

十128 〇 〇 着々と進み行く進水作業。やがて工廠長のふりかざしたる金色の槌は、二年間の苦心を此の一揮にこめて、切斷臺上の緊索をはつと切る。

十130 〇 元弘二年三月、北條高時、後醍醐天皇を隱岐にうつし奉る。京中の貴賤男女、此の行幸を悲しみて涙と共に見送り奉り、〈略〉。
十136 〇 〇 此の頃備前に兒島高

徳といふ武士あり。

十132 〇 〇 義を見てせざるは勇なきなり。いでや、行幸の路に待受け、君を奪ひ奉りて義軍を起さん。と。〇 高徳せめては此の所存を君に知らせ奉らばやとて、夜にまぎれて行在所の御庭にしのび入り、〈略〉。

十133 〇 昔支那に呉・越とて相隣れる二國ありき。〇 勾踐は呉に捕へられぬ。後からうじて歸國することを得しが、勾踐此のうらみ忘れがたく、〇 再び呉と戦ひて遂に之を亡しぬ。

十133 〇 〇 勾踐此のうらみ忘れがたく、范蠡といふ忠臣の助を得て報復の計を立て、再び呉と戦ひて遂に之を亡しぬ。高徳此の故事をひきて、やがて忠臣の起りて勤王の兵を擧げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなり。

十137 〇 望遠鏡で見ると、〇 黒點といつて黒く見える所もある。此の黒點は多分表面に生ずるうづ巻であらうといふ。

十135 〇 ところが此の大きな太陽も、夜の空に銀の砂をまいたやうに見える小さな星の一つと同じものだといふ。

十137 〇 つまり此の宇宙には、あの太陽のほかに、これと同じやうなものがある。これと存在してゐる

が、〈略〉。

十164 〇 論語は、曾參と有若との門人等が孔子及び其の高弟の言行を集録したるものにして、最もよく此の大聖の面目をうかがふを得べし。

十165 〇 論語は、〇 最もよく此の大聖の面目をうかがふを得べし。今此の書によりて其の一端を述べん。

十178 〇 孔子は他人を正す前に先づおのれを正し、近きより遠きに及すを以て其の主義としたり。〇 おのれを修めて人を安んず。とは、彼が簡明に此の意をあらはせる語なり。

十182 〇 かつて自らいはく、「發憤しては食を忘れ、樂しんではうれひを忘れ、老の將に至らんとするを知らず。」と。其の身を忘れ、よはひを忘れて、人生の爲に盡くしたる大聖の面目、よく此の語にあらはれたりといふべし。

十188 〇 上海が黃浦江に臨む部分は延長八哩、六十餘の波止場がある。此の地は交通上重要な位置を占めてゐて、〇 〇 〇

十179 〇 見れば引出にはみんな札がはつてあつて、「ふろしき」「ハンケチ」などと一々書いてあります。此の一事で、家の中がどんなによく整頓されてゐるかが想像されます。

十195 〇 例へば、借りた金を、返す約束の日が来ていくら催促されても、返さない人がある。其の場合に貸主

から借主を裁判所に訴へると、裁判所は兩者の言分を聞いた上で、貸主の主張を正當とみとめれば、其の借金を返すやうに借主に命ずる。此のやうに、人々相互の間の訴訟を裁判するのを民事裁判といひ、〇 〇

十204 〇 ところで、どういふ事をすれば罪になるか、其の制裁としてどのやうな刑罰を受けるかは、法律で明かに定めてあるから、裁判所は、犯罪の疑のある者を十分に取調べて適當公平な裁判をする。此の犯罪者を罰するための裁判を刑事裁判といふ。

十205 〇 此の犯罪者を罰するための裁判を刑事裁判といふ。此の場合には訴へられた者が被告で、檢事といふ役人が原告に當るのである。

十266 〇 味方は今日の戦に將卒共につかれ果てて、物の用に立つべくもあらず。此のまゝ、新卒の兵を迎へては、萬に一つの勝算もなし。

十282 〇 〇 夜半の頃には既に木之本に到着したり。二十日の月は上りぬ。退却軍は少しく之にたよりを得たれども、秀吉の軍は、此の時既に處々のとりでより來れる守兵と合して、追撃すること頗る急なり。

十285 〇 明くれば二十一日の朝、盛政は賤嶽より西北に當れる高地に兵を引きまとめたりしが、此の時までも飯浦坂にふみ留つて、追來る敵

を防ぎ居し弟勝政に引きあげを命じたり。

十一326 此の四海峽に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。

十一351 我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、世界における海上の一大公園なりといへり。

十一374 早く間伐して細材を取る目的のところでは、一坪に二本も三本も植ゑるが、此の邊では太材を取る方が利益だから、かう間をおいて植ゑるのだ。

十一376 今に御らん、此のくらゐ離して植ゑても、十五六年目には間伐をしなげばならないやうになるから。

十一481 住持「昨夜のぞき見て知りたり。」此の一言を聞くや、畫師又かのふすまの鶴に筆を取らず、〈略〉。

十一499 ゴムは、熱帶地方に産する或植物からとる白色の液を原料として、製造したものである。此の液の取れる木を普通にゴムの木といつてゐる。

十一502 今日世界におけるゴムの大部分は、此の木から取つたものである。

十一502 此の種のゴムが、昔主として南米ブラジルのパラ州から産出したので、パラゴムの名が生じたわけ

である。

十一515 此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあとに種をまくか、又は苗木を植付けけるのであるが、〈略〉。

十一526 元來ゴム液は、幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るものであるから、此の組織の所まで小刀が届いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。

十一528 此の傷から出て来るゴム液は、流れて下のコップにたまるのである。

十一5210 ゴム園の人は毎朝暗いうちに起きて、受持の木に此の切付をして廻る。

十一595 札幌に來て先づ感ずることは、街路が眞直で幅の非常に廣いことである。市街は此の眞直な路によつて碁盤の目のやうに正しく割られてゐる。

十一611 瀧川から根室行の汽車に乗ると、〈略〉狩勝の峠にかゝる。此の峠には長いトンネルがあつて、〈略〉。

十一628 明治十六年こゝに十三戸の農家が移住して來たのが此の町の始まりであつた。

十一629 當時此のあたりは未開の原野で、〈略〉。

十一633 此の邊の農業は總べて規模

が大きい。

十一646 又開墾する場合には、立木や切株の根本を掘つておいて、それにくさりをつけて此のトラクターで引くと、めり／＼と音を立てて根こぎにされてしまふ。

十一651 農業者は多く古い習慣になづみやすいものであるが、此の邊では新しい知識をいれて、〈略〉どし／＼土地を開いて行く。

十一668 それから少し進むと、石や金を打合はせて火を出す法を考へるやうになつた。此の方法は各國民の間に、廣く又極めて長い間行はれてゐたものであるが、〈略〉。

十一758 あなたはまだお若いから、しつかり努力なさつたら、きつと此の研究を大成することが出來ませう。

十一772 宣長は眞淵の志をうけつぎ、三十五年の間努力に努力を續けて、遂に古事記の研究を大成した。有名な古事記傳といふ大著述は此の研究の結果で、〈略〉。

十一777 これらを總べて貨幣といふ。又此の外に貨幣の代りに用ひられる紙幣がある。

十一782 我々は殆ど貨幣・紙幣なくして一日も生活することは出來ぬといつてもよいからである。此のやうに便利なものも、其の使用に馴れきつてしまつてゐる我々は、〈略〉。

十一844 今日殊に波も靜かだ。此

の分ならば五海里や十海里は何でもない。

十一887 此は略本曆だ。この中にある「通日」で數へて御らん。

十一905 僕はこれまで曆といふと、〈略〉とばかり考へてゐたので、此の話を聞いて珍しく感じた。

十一934 ところが太陰曆は〈略〉、此の一年は一回歸年より約十一日少いから、太陽曆とくちがたつて來て、〈略〉。

十一995 或時近邊の人からワシントン傳を借りたことがある。リンカーンはかね／＼此の偉人を非常にしたつてゐたので、〈略〉。

十一10010 リンカーンは〈略〉、其の後何度も／＼讀返してゐるうちに、此の偉人の品性に深く感化された。

十一1015 彼が他日大統領となり、世界の偉人として萬人に仰がれるやうになつたのは、實に此の少年時代の苦心のたまものである。

十一1032 此のブラジル國は、廣さ我が國の十三倍もこれあり、〈略〉。

十一10310 此の手紙と一しよに、繪葉書をたくさん小包にて送り申候。

十一1059 桑パウロ市に參り居候。此の邊は南米中、日本人の最も多く住める處にて、〈略〉。

十一1065 世界に名高きブラジルコーヒーの主要なる産地も此の邊にて、〈略〉。

十一114 地方人民が協同一致して自ら地方公共の事に當り、誠意其の團體の爲に力を盡くす精神が即ちそれである。此の精神は實に自治制の根本であり、又其の生命である。

十一114 一般人民が府縣市町村會議員を選擧するにも、〈略〉にも、皆此の精神を本としなければならぬ。

十一114 又市町村長が其の事務を處理するにも、議員が豫算を議するにも、常に此の公平な精神をもつてしなければならない。

十一115 まして威力によつて強制するとか、私利によつて勧誘するとかいふやうな手段を用ひたり、又此の手段に動かされたりするのは、自治の精神に全く反するものである。

十一119 僕はおとうさんから、誰が來ても此の門をあけてはならないと言ひつけられてゐるのです。

十一119 8 おとうさんは、誰が來ても此の門をあけてはならないと僕に言ひつけました。

十一120 僕は、誰が來ても此の門をあけてはならないとおとうさんに言はれてゐるのです。

十一121 「ウェリントン公爵ともいはれるえらいお方が、おとうさんの言ひつけに背けとおつしやらうとは、どうしても考へられません。〈略〉。」公爵はひどく此の答が氣に入つた。

十一124 6 エプロンをかけた職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板にあてて模様をほりつけたたり、みがきをかけたたりしてゐる。

十一125 6 一切經は、佛教に關する書籍を集めたる一大叢書にして、此の教に志ある者の無二の寶として貴ぶところなり。

十一126 3 今より二百數十年前、〈略〉鐵眼といふ僧ありき。一代の事業として一切經を出版せん事を思立ち、如何なる困難を忍びても、ちかつて此のくはだてを成就せんと、廣く各地をめぐるに資金をつつること數年、〈略〉。

十一126 10 たま／＼大阪に出水あり。鐵眼此の状を目撃して悲しみにたへず。

十一127 4 喜捨を受けたる此の金、之を一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ふるも、歸する所は一にして二にあらず。

十一130 4 一切經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられたり。これ世に鐵眼版と稱せらるゝものにして、一切經の廣く我が國に行はるゝは、實に此の時よりの事なりとす。

十一130 4 此の版本は今も萬福寺に保存せられ、三棟百五十坪の倉庫に滿ち／＼たり。

十一24 6 此の川は古の簸川に

して、かのをろち退治の傳説あるは此の川の川上なり。

十一24 7 かのをろち退治の傳説あるは此の川の川上なり。

十一26 2 時に天照大神の使者建御雷命此の地に來りていふやう、〈略〉。

十一26 3 『此の葦原の中つ國は皇孫之をしろしめすべし。』

十一26 4 快く此の國をたてまつり給ふや如何に。

十一26 9 大國主命答へていはく、〈略〉。我が子事代主とはかりて答へ申さん。此の時事代主命はすなどりのため美保崎といふ處にありしが、使を得て急ぎ歸り、〈略〉。

十一27 3 こゝにおいて大國主命「此の葦原の中つ國を皇孫にたてまつりて、とこしへに天つ日嗣を護りまつらん。」と申して恭しく國土をたてまつりぬ。

十一27 8 これ即ち出雲大社の起原なり。此の社は規模の大なるを以て世に知られ、本殿の如き其の高さ實に八十尺に及ぶ。

十一28 5 寶物殿に入りて拜觀するに、火きりぎね・火きりうすといふものあり。〈略〉。此の棒を此の板の上にてきりをもむが如く廻せば、摩擦によりて火を生ず。

十一28 6 此の棒を此の板の上にてきりをもむが如く廻せば、摩擦によりて火を生ず。

りて火を生ず。

十一28 8 第二課 出雲大社 〈略〉。此の社にては、今も太古の法に従ひ、之によりて火を作るといふ。

十一211 7 父はダーウインを醫者にしようと思つて大學へやつた。〈略〉。何時の間にか好きな博物學の研究が主となつてしまつた。此の頃のことであつた。

十一212 3 これも逃しては大變と、いきなり右の手の蟲を口の中へ投込んだ。投込まれた蟲は苦しまぎれに恐しく辛い液を出したので、思はず吐出すと、蟲は得たりと逃げてしまつた。此の時にはもう三番目の蟲はどこへ行つたかわからなかつた。

十一212 9 彼が探検船ビーグル號に乗込んで意氣揚々と本國を出發したのは、二十三歳の時である。〈略〉。此の航海によつて彼の博物學者としての基礎が十分に出來、〈略〉。

十一213 7 しかも日常生活は極めて規則正しく、〈略〉。ダーウインの後半生は病氣がちであつたが、此の規則正しい生活とふだんの養生とによつて、七十四歳の長壽を保つことが出來た。

十一216 10 しかして編輯局は更に編輯部・〈略〉等に分れ、各部にそれぞれ掛の記者又は技術家ありて、〈略〉。此の外、國內各地は勿論、世界各國主要の地に特派員又は通信員

ありて、事件起れば直に電話又は電信にて通知し来る。

十二23 即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、〈略〉國運の發展をもさまたげることになる。外國貿易業者はかへすく深く此の點に注意しなければならぬ。

十二24 昔は個人の利益を營むのが商業であると思はれてゐた。〈略〉。文明の進んだ今日尚此のやうな考を持つのは、大きな誤といはねばならぬ。

十二32 1 団 〈略〉シャンゼリゼーの大通には、〈略〉。有名な凱旋門は此の大通の起點にあります。

十二32 10 団 又エツフェル塔にも登つて見ました。此の塔は世界最高の建物で、高さが三百メートルもあるさうです。

十二33 8 団 あゝ、此のむざんな光景を御らんない。山も森も村も皆焼野が原と變つてゐます。

十二43 6 団 月は益々さえたつて来る。「それでは此の月の光を題に一曲。」といつて、〈略〉。

十二45 5 曲 ベートーベンの「月光の曲」といつて、不朽の名聲を博したのは此の曲である。

十二49 8 十和田湖は〈略〉。此の邊は一體に山地で、湖面は海面より四百メートルも高く、〈略〉。

十二50 10 中湖は深さが三百七十八

メートル、此の湖中で一番深い處である。

十二51 1 我が國の湖沼中此の湖より深いものは秋田縣の田澤湖だけである。

十二52 1 三十年ばかり前までは、此の湖には魚類が全く居なかつた。

十二54 10 団 ねじは、〈略〉。ふと自分の身の上に考へ及んだ。「〈略〉。唯自分だけが此のやうに小さくて、何の役にも立ちさうにない。」

十二56 3 ねぢは仕事臺の脚の陰にころがつた。此の時大きなせきばらひが聞えて、父の時計師がはいつて来た。

十二57 4 ねぢは之を聞いて、飛上るやうにうれしかつた。〈略〉。夢中になつて喜んだが、此のやうな處にころげ落ちてしまつて、若し見附からなかつたらと、それが又心配になつて来た。

十二59 5 ねぢは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出来たのだと思ふと、うれしくてうれしくてたまらなかつた。

十二63 3 団 藍・白・赤三色を以て縦に染分けられたるは、フランスの國旗なり。此の三色は、自由・平等・博愛を表すものと稱せらる。

十二66 5 団 お前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、

わしはそれが知りたいのだ。

十二67 10 団 〈略〉私はありとあらゆる身の樂しみを退けても、ひたすら父上を大事に致すのを此の上もない仕合はせと存じてをります。

十二73 8 団 たとひ我が親でないにしても、此の白い髪や髭を御覧になつたら、〈略〉。

十二73 10 団 「〈略〉。——まあ、此のお體であのひどい嵐の中を——」

十二81 7 団 船頭勇まし、此の潮筋を落し漕ぎゆく、木の葉舟。

十二82 2 団 樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。然るに其の實際を調査して此の疑問を解決したる人、遂に我が日本人の中より現れぬ。

十二82 7 団 樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざること、此の探検によりて略々知ることを得たれども、〈略〉。

十二86 10 団 翌日此の地を去り、河をさかのぼること五日、遂に目的地なるデレンに着せり。

十二87 10 団 林蔵が二回の探検によりて、樺太は大陸の一部にあらざること明白となりしのみならず、此の地方の事情も始めて我が國に知らるゝに至れり。

十二93 1 父のいさめも妻のなげきも、此の決心をひるがへすことは出来なかつた。

かつた。

十二94 9 〈略〉、彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。そこで彼は先づ近處の河に浴し、たまたま其處にゐた少女のさくげた牛乳を飲んで元氣を回復した。ところが此の新たな態度に驚いた五人の友は、〈略〉、彼を捨てて去つた。

十二95 10 其の刹那、彼は迷の雲がかりと晴れて、はつきりとまことの道を悟り得た。彼は此の心境の尊さに數日の間唯うつとりしてゐたが、〈略〉。

十二96 1 〈略〉、やがて此の尊い心境を世界の人々と共にせずにはゐられぬといふ慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。

十二104 9 此の青のくさり戸にさしかゝる手前、路をさへぎつて立つ岩山に、〈略〉、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。

十二105 6 僧は名を禪海といつて〈略〉、たま／＼此の難處を通つて幾多のあはれな物語を耳にし、どうにか仕方はないものかと深く心をなやました。

十二105 10 〈略〉、一身をさへぎつて此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、神佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。

十二106 1 〈略〉、神佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。

しとは毛頭考へませぬが、〈略〉。
西郷はだまつてうなづいた。

せいより高くなりました。

した。
此の間、九州三池の或炭坑かうを

五286 うらめんの林は私のうちの
居マス。

もので、此のころは栗の花がたくさ
んさいてゐます。

五五〇 此ノ頃ハ雨ガ降りツバイテ、
表デ遊ブ日ガアリマセン。

七六九 此の頃はれんげさうの花ざか
りである。

七三六 通は廣くて平で、歩道と車
道の間に並木が植ゑてありますが、

此の頃は其の葉の美しいさかりです。
十二ノ 熱い番茶にのどをうるほして

休んでゐる所へ、此の頃墓参りのた
めに朝鮮から歸つてをられる高橋さ
んが來られた。

十六五 ちやうど此の頃、此所の名
物の馬市が始つてゐるといふので、

〈略〉見物に行きました。

十七七 此の頃は半分寒くなつて、
〈略〉寒いといふよりもいたいやう
に感じます。

十一四一 しかし此の頃は、餘程
御快方に向はれ候とか。

十一九〇 此の頃の日の出や日の入
は何時だらう、満月は何日頃だらう。

このじなり (名) 一「コ」ノ字ナリ
三三八 大キナ家ガ三ムネ、「コ」
ノ字ナリニタツテキマス。

このたび 「此度」 (名) 五 此のたび
此の度

六五五 さて、此のたびの舞は
日本一の出来。

十〇六 男ばかりの御兄弟の中に、
此の度始めて妹を得られ候事、御前

様の御喜さぞかしと察し申し候。

十〇五 平生甚だ御達者にて、近
來は殊に御元氣のやうに承り居り候
事とて、此の度の御報は全く夢かと
存ぜられ候。

十一二五 然るに、此の度は近畿地
方に大飢饉起り、人々の困苦は前の
出水の比に非ず。

十一二九 二度資を集めて二度散じ
たる鐵眼は、終に奮つて第三回の募
集に着手せり。〈略〉喜んで寄附す
るもの意外に多く、此の度は製版・
印刷の業着々として進みたり。

このはちよう 「木葉蝶」 (名) 一 木ノ
葉蝶

九八〇 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、
〈略〉マルデ枯葉ガ引掛ツテキルヤ
ウニ見エル。

このはぶね 「木葉舟」 (名) 一 木の葉
舟

十二八八 船頭勇まし、此の潮筋を
落し漕ぎゆく、木の葉舟。

このほう 「此方」 (代名) 三 此の方
七〇八 秀吉は感心して、「それは
皆此の方がやりさうな事。〈略〉」
といつて、〈略〉。

七〇九 清正はつけひもの頃から、
此の方のひぎの上でそだつたので、
何時か見習つたものと見える。

七〇八 清正は〈略〉。もと此の方
には近い親類の者、豊臣と名のつた
のも差支がない。

このみ ↓おんこのみ

このむ 「好」 (五) 三 好む 《一ム》
十二一七 我が國民には潔いこと、あ
つさりしたことを好む風がある。

十二一八 日本人ほどあつさりした色
や味はひを好むものはあるまい。

十二一三 かつさりしたこと、潔いこ
とを好む我が國民は、其の長所とし
て〈略〉。

このよ 「此世」 (名) 三 此の世
世

六五八 あゝ、母はもう此の世の人で
はないのかと、力をおとして居りま
した。

十一二四 裁判の目的は、〈略〉。此の
世を不道理や罪惡の行はれない、平
和な、秩序正しい世の中にするのが
其の目的である。

十二九二 人は何の爲に此の世に生
れて來たのか。我々の行末はどうな
るだらうか。

ごばい 「五倍」 (名) 一 五倍
九八二 あれが北斗七星だ。あの柄
でない方の端にある二つの星を結び
つけて、其の線を、ひしやくの口の
向いてゐる方へのはして行くと、今
結んだ二つの星のへだたりの五倍ば
かりのところに、かなり大きい星が
あるだらう。

ごばむ 「拒」 (四) 一 ごばむ 《一
ミ》

十九六 敵將張弘範〈略〉、文天祥

に命じてはいく、「書をしたゝめて
張世傑を招け。」と。天祥固くこば
みてはいく、〈略〉。」と。

こばやしうめきち 「小林梅吉」 (人名)
一 小林梅吉

十〇七 二月六日 小林梅吉 大
森茂様

こはるびより 「小春日和」 (名) 一 小
春日和

十二二九 小春日和の暖さにとけて、
其處からも夢のやうに船歌が聞えて
來る。

こはん 「湖畔」 (名) 一 湖畔 ↓しん
じこはん

十二三六 湖のり色の水に浮ぶルソー
島 湖畔に連なる緑樹・白壁、〈略〉。

こばん 「小判」 (名) 二 小判、小判
七六五 取上げると大そうおもくて、
中には小判がどつさりはいつてゐま
した。

七六六 「中には。」「小判が百五十
兩はいつて居ります。

ごはん 「御飯」 (名) 四 ごはん 一
ごはん

三三五 ゴハンヲタベルトキニ、
ハシヲモツ方ノ手ハ右デ、
〈略〉。

四八五 ひるのごはんをたべて
から、へいえいを見せてもらひ、
〈略〉、夕方、汽車でかへりまし
た。

五五五 ぱちが昨日から病氣で、こは

んをたべませんので、學校に居ても
しんばいでしたが、〈略〉。

五三三 團 つゆや時雨が色よくそめた
うらの小山に秋風吹けば、木々
のしづくもきのことなつて、 ばん
のごはんのおかずにまじる。

ごぼん 「基盤」(名) 2 ごぼん 基盤
六八七 象つかひが乗つてゐて、口上
をのべては、らつばを吹かせたり、
ごぼんの上へ乗らせたりした。

十一五五 市街は此の眞直な路によつ
て基盤の目のやうに正しく割られて
ゐる。

ごぼんめ 「五番目」(名) 2 五番目
六五二 一番、二番三番と、十二番の舞
がめでたくすみましたが、其の中で
ことに人のほめ立てたのは五番目の
舞でございました。

六五二 其の五番目の舞姫といふのは、
かの萬じゆの姫であつたのでござい
ます。

ごびき 「木挽」(名) 2 木びき
六四六 木びきの力藏さんがうたをう
たひながら、大きなのこぎりで板を
ひいてゐました。

十三八 父は毎日、兄や木びきの力藏
さんと、朝早くから行つて、夕方お
そくまで働いてゐる。

ごひき 「五匹」(名) 2 五匹
八八七 三番太鼓が鳴るが早い、五
匹の馬は一人にかけ出した。

九四八 之ニ反シテ、同ジヤウナル

馬五匹アリ、其ノ持主ハ別々ニテ、
買ハントスル人タゞ一人ナルトキハ、
〈略〉。

こひきだし 「小引出」(名) 1 小引出
十一一七 六 のぶ子さんはすぐたんすの
小引出から取出して、持つていらつ
しやいました。

ごひたん 「御悲嘆」(名) 1 御悲歎
十四七 大兄をはじめ皆様方の御
悲歎、如何ばかりかと御察し申し上
げ候。

こひやく 「五百」(名) 1 500
十一一〇 五百

こひよう 「小兵」(名) 2 小兵
七四七 「これは長谷川與五左と申
す者、小兵なれどもお相手致す。」

七四八 鬼神の如き彦六が、あれ程
の小兵に討たれたは味方の不運。

ごひようぎ 「御評議」(名) 1 御評議
十二一〇 何分今一應の御評議を推
して御願ひ申す次第でござります。

ごひようき 「御病氣」(名) 3 御病氣
九一三 昨年僕の學校より、君の
學校へ御轉任なされ候佐野先生、先
頃より御病氣の由承り候。

十〇〇 承り候へば、御祖母様に
は先日より御病氣の處、御養生のか
ひもなく、去る十九日遂に御死去遊
ばされ候由、誠に驚き入り候。

十一四一 貴兄には去月以
來御病氣にて、しかも一時は大分御
重態なりし由、誠に意外の事に驚人

候。

ごひようきくださる 「御評議下」(五)

一 御評議下さる 《一ル》

十二一三 〇 〇 〇 おだやかに事のま
とまるやう今一應御評議下さること
になりますれば、誠に日本國の幸で
ござります。

ごぶ 「五分」(名) 1 五分
十二二二 しかしたとへにも申す通
り、一寸の蟲にも五分の魂。徳川侍
のなまくら刀にも少しは切れる所が
ござりませう。

ごぶいん 「御無音」(名) 1 御無音
十一四六 久しく御無音に打過ぎ、
失禮仕候。

こふう 「古風」(名) 1 古風
八五九 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、
今ナホ古風ヲ守リテ、せせせ(キン
バ)・せぜん(ウドン)・〈略〉ナド
ト記シテ、軒ニ下ゲタルモアリ。

こぶかし 「木深」(形) 1 木深し
《一キ》

十一一〇 二荒の山もと 木深き處、
大谷の奔流 岩打つほとり、〈略〉。

ごふくてん 「呉服店」(名) 1 呉服店
↓しまやごふくてん

十二二八 私の勤め居り候家は呉
服店にて、なかく忙しく御座候。

ごふくや 「呉服屋」(名) 4 ごふく屋
呉服屋 呉服屋

うをつけました。

六三二 少シ行クト、呉服屋ノ小ゾウ
ガ表ヲハイテキタ。

八三八 呉服屋の手代が、大きなふろ
しきづつみを右地藏の前におろして
休みましたが、〈略〉。

八四三 越前守は呉服屋の手代を呼出
して、其の中に盗まれた品のありな
しを調べさせました。

こぶくろ 「小袋」(名) 1 小ぶくろ
七四四 小ぶくろの方は私どものだ
んなが國へおやりになる金ですが、
〈略〉。

ごぶごぶ 「五分五分」(名) 1 五
分々々

八九六 今度の競走も五分々々に進ん
で行つたが、中程まで行つた時、信
作の馬はつまづいて、前足を折つた。

ごぶさた 「御無沙汰」(名) 2 御無沙
汰

十二一四 誠に御無沙汰に打過ぎ、
申しわけもこれなく候。

十二二〇 先づは御無沙汰の御わ
びかたぐ近況御知らせ申上候。

ごぶさたいたす 「御無沙汰」(五) 1
御無沙汰致す 《一シ》

十三七 しばらく御無沙汰致しまし
た。皆様御かはりはありませんか。

こぶし 「拳」(名) 1 こぶし ↓にぎ
りこぶし

六五五 居なれば子どもはねむさ忘
れて、耳をかたむけ、こぶしをに

きる。

こぶつぜん 「御仏前」(名) 1 御佛前

十1104 園 尚御生前御好物なりしや

うかん一折、小包便にて御送り申し上げ候間、御佛前へ御供へ下された候。

こぶね 「小船」(名) 7 小舟

六227 園 沖ものどか、濱ものどか、

沖へ急ぐ兄の小舟、濱へ歸る父の小舟、すれ合つて、ゑがほとゑがほ。

六222 園 沖ものどか、濱ものどか、

沖へ急ぐ兄の小舟、濱へ歸る父の小舟、^略。

六806 敵は高いやぐらのある大船、

こつちはつり舟のやうな小舟であつた。

六816 此の時河野の通有は、たつた

小舟二そうで向つた。

八197 園 汽船ハ河口ヨリオヨソ四百

五十里、小舟ハオヨソ九百里サカノボルコトヲ得。

十二837 園 先づ樺太の南端なる白主

といふ處に渡り、^略、小舟に乗じていよく探検の途に上りぬ。

十二855 園 ^略 一行八人は、小舟

に乗じて今の間宮海峡を横ぎり、デカストリー灣の北に上陸したり。

こぶり 「小降」(名) 1 小降り

八813 園 雪も小降りになつた。

こふんかん 「五分間」(名) 1 五分間

九6310 數分の内に艦内はすっかり整

頓する。そこで五分間の休けいがあつて、上甲板洗となる。

こふんまえ 「五分前」(名) 1 五分前

九616 園 「總員起し五分前」

こへいじいさん 「五平祖父」(人名) 1 五平ぢいさん

九598 赤いたすきを掛けた女たちがよい聲で歌をうたふと、へうきんな

五平ぢいさんが、時々へんな掛聲をして皆を笑はせる。

こべんぎ 「御便宜」(名) 1 御便宜

十一426 園 何分田舎にて萬事不便には候へども、若し御光來相成候は

ば、及ぶ限りの御便宜相計り申すべく候。

こへんじ 「御返事」(名) 1 御返事

五847 園 おとうさんへ電報で御返事をいたしたやうに、うちには大した

事もありませんでした、中々のさわぎでした。

ごほう 「呉鳳」(課名) 2 呉鳳

八目10 第六 呉鳳

八222 第六 呉鳳

ごほう 「呉鳳」(人名) 8 呉鳳 呉鳳

八225 これは呉鳳といふ人のおかげだと申します。

八227 呉鳳は今から二百年程前の人で、亞里山の役人でした。

八237 呉鳳は役人になつた時から、どうかして首取の惡風を止めさせた

いものだと思ひました。

八238 そこで蕃人どもが呉鳳へ、首

を取ることを許してくれといつて出ました。

八247 呉鳳はお祭の爲に人を殺すのはよくないといふことを説聞かせて、

もう一年、もう一年とのばさせてゐましたが、^略。

八245 呉鳳は「それ程首がほしいなら、明日の晝頃、赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」といひました。

八257 待ちかまへてゐた蕃人どもは、すぐに其の人を殺して、首を取りました。見ると、それは呉鳳の首でございました。

八262 さて蕃人どもは、呉鳳を神にまつて、其の前で、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。

ごほう 「御報」(名) 1 御報

十1096 園 平生甚だ御達者にて、近來は殊に御元氣のやうに承り居り候事とて、此の度の御報は全く夢かと存ぜられ候。

ごほうこう 「御奉公」(名) 2 御ほうこう 御奉公

六578 ^略 頼朝の御殿へ行つて、うばと二人で御ほうこうをねがつたのでございます。

七783 園 「はい。これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません。」

ごほうこうする 「御奉公」(サ変) 1 御ほうこうする 《一スル》

七424 園 うちのことはしんばいするな。天子様によく御ほうこうするだよ。

ごほうちくださる 「御報知下」(下二) 1 御報知下さる 《一レ》

九11310 園 若し御承知に候はば、御手數ながら至急御報知下されたく願ひ上げ候。

ごほうび 「御褒美」(名) 2 ゴホウビ 御ほうび

二505 「コレハメツラシイ。ミゴト、ミゴト。」トオホメニナツテ、

ゴホウビヲタクサンクダサイマシタ。

九486 園 米が出来るのも、麥が取れるのも、土といふありがたいものが、めいくの骨折に對して、御ほうびを下さるのだ。

こぼく 「古木」(名) 2 古木

十1188 社殿の後に廻ると、^略、幾百本とも知れない古木の梅が咲續いてゐる。

十二1118 或日彼が古木の皮をむくと、珍しい甲蟲が二匹ゐた。

ごぼしよ 「御墓所」(名) 1 御墓所

十1185 此の神社は菅公の御墓所に建てたものだと聞いて、一層感を深くした。

こぼす 「露」(五) 2 こぼす 《一シ》

八449 園 病中の祖母も大そう喜びまして、ありがた涙をこぼして居りま

す。

十二75 〇 「涙をこぼしてくれるのか。お前はわたしをうらんであるはずだが。」

こぼれ 〔零〕(名) 1 こぼれ九60 鶏が麥のこぼれを食ひに來ては、追はれて逃げて行く。

こぼれだね 〔零種〕(名) 1 こぼれ種七17 道ばたや土手にさいてゐるのはこぼれ種であらう。

こぼれもみ 〔零種〕(名) 1 こぼれもみ六42 土間でこぼれもみを拾つてゐたにはとりが、俵の山へ上つてときを作りました。

こぼれる 〔零〕(下一) 2 こぼれる『一レ』 ↓ さきこぼれる

七68 〇 〈略〉、目からはなみだがひつきりなしにこぼれてゐます。

七89 〇 あまり急ぎましたので、水がすの上にあつたおばあさんのづきにこぼれました。

こぼれる 〔毀〕(下一) 1 こぼれる『一レ』

五12 〇 尾をお切りになつた時、つるぎのはがこぼれました。

こほん 〔五本〕(名) 1 五本四48 私のうちには柿の木が五本あります。

こま 〔駒〕(名) 1 駒 ↓ あらこま・にさいこま

十64 〇 駒とめて袖打拂ふかげも

なし、佐野のわたりの雪の夕暮。

こま 〔胡麻〕(名) 1 こま

四76 今年には柿のあたり年で、〈略〉。〈略〉。きのふ一つ取つてみましたら、もう黒くこまをふいてゐました。

こまいぬ 〔狢犬〕(名) 1 こま犬

九82 〇 〇 店に飾れる石燈籠、〈略〉、玉をふくめるこま犬も、皆ぢいさんののみのあと。

こまか 〔細〕(形状) 4 こまか 細か細か

六67 〇 或物持の所へ行くと、下男がまだ使へる小繩を捨てたと言つて、主人がひどくしかつてゐた。青年たちは之を聞いて、さゝやき合つた。

「こまかな人だ。これではとても義捐はしてくれまい。」

六68 〇 其の歸り途で、青年たちは「こまかな人だが、出す時には出すね。」「略。」「さうだ、く。」といひ合つた。

七86 〇 海藻ノ形ハ様々デ、帶ノ様ニ廣クテ長イノモアレバ、全體ガ細カニ分レテ、枝ノ様ニナツテシルノモアリ、〈略〉。

九13 〇 〇 物置の前なるあき箱より、しゝみの殻を取出し、細かに打ちくだく。

こまかい 〔細〕(形) 1 細かい『一ク』

十一63 〇 畠にしても、小路によつて

細かく仕切ることをしてないから、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。

こまつぶ 〔胡麻粒〕(名) 1 こまつぶ六28 なるほど、こまつぶ程の蟻が一匹虎を見上げてゐます。

こまど 〔小窓〕(名) 1 小窓

七74 〇 見れば年取つた父といふのが、うす暗い小窓の下で、わらちを作つて居りまして、〈略〉。

こまものや 〔小間物屋〕(名) 2 小ま物屋 小間物屋

四27 〇 米屋 ごふく屋 小ま物屋 〈略〉、そのほか大きな店はいくつとも電とうをつけました。

五34 〇 私のうちの右どなりは小間物屋で、左どなりは時計屋です。

こまやか 〔細〕(形状) 1 こまやか十二48 〇 けやき・栗・かしは何れも甚だ堅く、もくめこまやかなり。こまより 〔困居〕(ラ変) 1 困り居り『一リ』

九13 〇 〇 早速御見舞に參上致したく存じ候へども、御住所不明にて困り居り候。

こまる 〔困〕(五) 15 コマル こまる 困る 『一ッ・一リ・一ル』 ↓ おこまる

二27 〇 〇 「コノゴロナカマノモノガ、ネコニトラレテコマルガ、ナニカヨイクフウハアルマイカ。」

三19 〇 七 かんがへもの 〈略〉「どうもこまりました。どんなかほをしてゐますか。」

三54 〇 わかいとき字をならひましたが、うまく書けませんので、こまつてゐました。

三69 〇 サウシテセンヲヒキマシタガ、水ガウマクハイリマセン。コマツテニイサンニ見テモラヒマシタラ、〈略〉。

五88 〇 〇 うちでも一時は飲水やたべ物にこまりましたが、今ではあとかたづけも大がいます。

六51 〇 〇 舞姫をあつめました。十二人いるうち、十一人まではありましたが、あとの一人がありません。こまつてゐる所へ、〈略〉と申し出た者がありました。

七73 〇 〇 家には七十近い父と、三十になる妻と、三つになる子どもがあるの、どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともあります。が、〈略〉。

七73 〇 〇 人夫は之を聞いて、首をふりました。〔略〕、人からいはいれなく金をもらはうとは思ひません。〔略〕。かの男は「それではこまる、ぜひ。」といひながら、〈略〉。

七88 〇 〇 「かくして下さい。敵が追つかけて來ます。」マリーはどうかしでかくしてやりたいと思ひました。けれど貧しい木こり小屋で、戸棚

一つありません。こまつてゐますと、〈略〉。

七94図「困った風だ。」とおつしやつて、おぢいさんはかぼちや棚につつかい棒を入れたり、菊の鉢を軒下に運んだりされた。

八35 幾年かの後、里子を返してもらはうとすると、先方はあづかつたおぼえがないといつて返しません。困つて町奉行へ訴へて出ました。

八39 目をさまして見ると、ふろしきづつみがあります。〈略〉。困つて町奉行へ訴へて出ました。

十46 一年と過ぎ二年とたつうちに、其の日の暮しにも困るやうになつた。十82 図「坑内には、ねずみがたくさん居て困ります。」

十二10 図「お前のやうに犬の世話やねずみを取ることにはばかり熱心では困るではないか。」

ごまん「五万」(名) 1 五萬

十一23 図 やがて勝家また自ら五萬の兵を督し、來りて盛政の軍に合す。

ごまんき「五万騎」(名) 1 五万騎

六23 義仲は五万騎を引きつれて、これもおなじく礪波山のおもとにちんを取りました。

ごまんにん「五万人」(名) 1 五萬人
七36 図 人口はおよそ十一萬、其の日本人は五萬人、〈略〉。

こみ いいきこみ・おとりこみ・おみこみ・かりこみ・ひとこみ・みこみ

こみあう「込合」(五) 1 こみ合ふ
《一ツ》

六72 此の電車道から東山のすそへかけて、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、〈略〉。

こみいる「込入」(五) 1 こみ入る
《一ツ》

五93 葉書には、大いぢよつとした用事が書いてありますが、封書には、いろ／＼こみ入つた事が書いてあります。

こみち「小道」(名) 6 小道 小路
五40 先生が拜殿にかけてある繪馬のお話をして下さいましてから、たんぼの小道へ出て、三時ごろ學校へかへりました。

十81 ポンプ室を出てから小道へはいりました。
十100 寒い北風に吹かれながら、冬枯の小道を通つて來て、一足温室の中にはいると、〈略〉。

十一35 図「あそこは一昨年植付をした地藏山だ。」と思ふと、山の背を通つてゐる小路にはさんで、四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるのが、目に見えるやうな氣がする。

十一63 皇にしても、小路によつて細かく仕切ることをしてないから、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。

十二37 月のさえた冬の夜友人と二

人町へ散歩に出て、薄暗い小路を通り、或小さいみすばらしい家の前まで來ると、中からビヤノの音が聞える。

こむ「込」(五) 1 こむ 《一ツ》
いりこむ・うえこむ・おちこむ・おどりこむ・かきこむ・かけこむ・かんがえこむ・きりこむ・くいこむ・ころげこむ・さしこむ・しまいこむ・しみこむ・せきこむ・せめこむ・つつこむ・つりこむ・とびこむ・ながれこむ・なげこむ・ねこむ・のぞきこむ・のりこむ・ふきこむ・ふさぎこむ・ふみこむ・まきこむ・まよいこむ・もうしこむ

九67 午後六時、叔父さんと一所に、上野驛から青森の列車に乗つた。ずる分こんでゐたが、〈略〉、二人とも腰を掛けることが出來た。

こむ「込」(下二) 5 こむ 《一ツ》

七31 図 武士は太刀をぬきて馬よりとび下り、満身の力をこめて、蛇の胴中目にかけて打下せば、〈略〉。

十六7 図 大方は國民の眞心こめたる獻木にて、中には小學生の奉りたるものも少からず。

十29 図 しら／＼と、朝霧 野山をこめて、月のごと、日輪 ほのかに浮ぶ。

十11 図 丹青まばゆき 格天井に、心をこめたる 繪筆ぞにほふ。

十12 図 やがて工廠長のふりかさしたる金色の槌は、二年間の苦心を此の一揮にこめて、切斷臺上の繫索をはつしと切る。

十128 図 十12 課 ゴム
十一49 第十課 ゴム
十一49 第十課 ゴム
ゴム(名) 15 ゴム けしゴム・パラゴム

十一49 自動車・自轉車のタイヤ、〈略〉など、數へてみるとゴムで造つたものは實に多い。

十一49 一體ゴムは何からどうして造るのであらうか。

十一49 ゴムは、熱帶地方に産する或植物からとる白色の液を原料として、製造したものである。

十一50 今日世界におけるゴムの大部分は、此の木から取つたものである。

十一50 此の種のゴムが、昔主として南米ブラジルのパラ州から産出したので、パラゴムの名が生じたわけである。

十一50 ブラジル邊でゴムを製造するには、山野に自生するゴムの木から原料をとるのであるが、〈略〉。

十一50 近年ゴムの需要が激増したために、英國人はマレイ半島の領地にパラゴムの木を移植するに至つた。

十一50 他の國人も之にならつて、

南洋におけるゴムの栽培は頗る盛になつた。

十一515 此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあとに種をまくか、又は苗木を植付けるのであるが、〈略〉。

十一537 かうして出来たゴムは、各國の工場に運んで加硫法を行ふ。

十一538 加硫法とは、ゴムに硫黄をまぜる事で、〈略〉。

十一538 加硫法とは、〈略〉、かうするとゴムが非常に弾力を増して来る。

十一542 電氣の機械や、蓄音機の圓盤などに用ひるエポナイトといふものもゴムから造る。

十一543 近來床の敷物や、道路にもゴムを用ひることが行はれて來た。

十一544 ゴムの用途は、年を追うて益々廣くなるばかりである。

ゴムえき (名) 2 ゴム液

十一525 元來ゴム液は、幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るものであるから、〈略〉。

十一528 此の傷から出て来るゴム液は、流れて下のコップにたまるのである。

ゴムえん (名) 2 ゴム園

十一513 マレイ半島・蘭領東印度等には、日本人の經營してあるゴム園もたくさんにある。

十一5210 ゴム園の人は毎朝暗いうちに起きて、受持の木に此の切付をし

て廻る。

ゴムかん (名) 1 ゴム管

十一495 〈略〉・ゴム管・ゴム風船など、數へてみるとゴムで造つたものは實に多い。

ゴムぐつ (名) 1 ゴム靴

十一494 〈略〉・ゴム靴・ゴム管・ゴム風船など、數へてみるとゴムで造つたものは實に多い。

ゴムにんぎょう (名) 1 ゴム人形

十一494 自動車・自轉車のタイヤ、ゴムまり・ゴム人形・〈略〉など、數へてみるとゴムで造つたものは實に多い。

ゴムのき (名) 5 ゴムの木

十一410 椰子・バナ・コーヒー・ゴムの木などは名を聞いてゐたが、實物を見るのは始めてである。

十一4910 此の液の取れる木を普通にゴムの木といつてゐる。

十一505 ブラジル邊でゴムを製造するには、山野に自生するゴムの木から原料をとるのであるが、〈略〉。

十一512 南洋は一年中温度が高く、雨量が多いので、ゴムの木の發育には最もよく適してゐる。

十一522 切付といふのは、ゴムの木から液をとるために、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。

ゴムふうせん (名) 1 ゴム風船

十一495 〈略〉・ゴム風船など、數へてみるとゴムで造つたものは實に多

い。

ゴムまり (名) 3 ゴムまり ごむまり

四326 〇 ごむまりをかべになげつけると、はねかへるでせう。

四332 〇 人のこゑも山の中

では、かべにあたつたごむまりのやうに、かへつて來ることがあります。

十一494 自動車・自轉車のタイヤ、

ゴムまり・〈略〉など、數へてみるとゴムで造つたものは實に多い。

こめ 「米」 (名) 12 米 ↓ おこめ・こめ・なまこめ

二457 ソノウスデ米 ヲツキマスト、ウスノ中カラ、マタオカネ ヤタカラモノ ガデマシタ。

二465 サウシテ米 ヲツイデミマシタガ、ヤツバリ キタナイモノ バカリ デマシタ。

四285 よこ町に電氣の力で、米をつく家も出來ました。

五463 〇 「米をつくのには、上にもうすをさかさにつるしておけば、きねの上げ下しに米がつける。」

五464 〇 「〈略〉、きねの上げ下しに米がつける。」

五465 〇 「上のうすには、どうして米を入れる。」

五692 〇 〈略〉、此の村の庄屋が、村のことをいふ／＼と考へたすゑ、ど

うかして村のあれ地を田地にして、

米がとれるやうにしたいものだと思つた。

八218 〇 揚子江ノ流域ハ地味スコブルコエ、米・茶・綿等ノ産物多シ。

八566 〇 米屋の小ぞうお得意へ米を運びし歸り途、〈略〉。

九483 〇 米が出来るのも、麥が取れるのも、土といふあたりがたいものが、めい／＼の骨折に對して、御ほうびを下さるのだ。

十866 米は我が國でずゑぶん多くとれるが、全く外國米の足しまへを受

けぬわけには行かない。

十一1065 〇 世界に名高きブラジル

コーヒーの主要なる産地も此の邊にて、甘蔗・綿花・米等もよく出来る

由に候。

こめや 「米屋」 (名) 3 米屋

四272 米屋〈略〉、そのほか大きな店はいくつも電とうをつ

けました。

八565 〇 米屋の小ぞうお得意へ米を運びし歸り途、〈略〉。

九522 〇 〈略〉、三十ぐらゐの時、年

來の貯金と主人からもらつた金を資本にして、小さい米屋を始めた。

こめる 「込」 (下) 4 こめる 一

メ 〇 おしこめる・たちこめる。

七94 もやが水の上をこめてゐる。

十96 此の有様を見て、フィリップといふ醫師が、一命をなげうつても王を助けようと決心した。方法は或

劇薬を用ひる外になかつたので、
フィリップは眞心こめて此の事を申
し出した。

十28 8 グレースの眞心こめた看護に
よつて、全く元氣を回復した人々は、
《略》。

十一57 8 つと大砲のそばへ寄つて、
急いで彈丸をこめ、ねらひを定めた。

こめん 〔湖面〕(名) 1 湖面
十二49 8 此の邊は一體に山地で、湖
面は海面より四百メートルも高く、
其の面積は約六十方キロメートルあ
る。

こめんください 〔御免下〕(感) 2 ゴ
メンクダサイ 御免下さい

二52 2 〇ハナト オチヨ ガ オキ
ヤクアソビ ヲ シテ キマス。《略》。

〔ゴメンクダサイ。〕

十二39 5 〔御免下さい。私は音楽
家ですが、面白さについてり込まれ
て参りました。〕とベートーベンが
いった。

こめんなさい 〔御免〕(感) 2 こめん
なさい

七41 3 〔軍人をのせた御用船が今し
も港を出ようとした其の時、〕こめ
んなさい。く。といひく、見
送人をおし分けて、前へ出るおばあ
さんがある。

七41 3 〔略〕、こめんなさい。

く。といひく、《略》。

こもり 〔子守〕(名) 1 子守

十一80 6 〔圖〕生れて潮に浴して、
浪を子守の歌と聞き、《略》。

こもりうた 〔子守歌〕(名) 2 子もり
うた 子守歌

三13 3 あかちゃん なき出すと、
すぐそばへよつて、〔ねんねん
ころりよ、おころりよ。《略》。〕

とかはいらしいこゑで、子もり
うたをうたひます。

十二118 7 《略》、無線電話で子守歌を
聞かせて赤ん坊を寝つかせてゐるこ
となどの耳新しい話に、博士は満堂
の會衆を喜ばせた。

こもる 〔籠〕(四・五) 8 コモル こ
もる 《ツ・ール・ール》ひくちこも
る。たてこもる。とじこもる。ひきこ
もりおり

二72 4 ソノ上イハヤニコモツテ
キマシタカラ、ナカナカタイヂ
スルコトガデキマセンデシタ。

十113 4 砲手の落ちついた力のこもつ
た號令に、船ははや方向を轉じた。

十一15 6 〔圖〕成績物は一つ一つ自分の
力のこもつたもので、皆一生の記念
になるのだ。

十二28 7 〔圖〕建長・圓覺 古寺の
山門高き松風に、昔の音やこもる
らん。

十二42 7 しばらくして兄は恐る恐る
近寄つて、力のこもつた、しかも低
い聲で、「一體あなたはどいふ御
方でございますか。」

十二70 9 かしフランス王は《略》、

コーデリヤの簡單な答の中にも十分
眞心のこもつてゐるのを認め、《略》。

十二75 10 王は《略》、其の言葉の端
端にも、前非を悔い、自分を責めて
娘にわびる眞心がこもつてゐた。

十二103 7 〔圖〕めぐらせる青垣山に、
こもれる大和うるはし。〕

こもん 〔御門〕(名) 3 御門

六105 5 〔圖〕御門の前でうやうやしく拜
禮してから、神殿の御もやうを拜し
た。

七102 7 〔圖〕お庭先の御門を守る者が
ございません。某の手で固めませ
う。〕

七103 9 〔圖〕「今天下に此の石田を知ら
ぬ者はあるまい。御門を守る者は誰
か。」

こや 〔小屋〕(名) 5 小屋 ひきこり
こや・すくいこや・だいくこや・のう
ぐこや・みせものこや

七27 2 《略》乃木大將も、馬は煉瓦
造の小屋に入れて置かれたのである。

八20 5 〔圖〕イカダノ大ナルモノハ長サ
六七十間、幅三四十間、コレニ土ヲ
置キテ野菜ヲ作り、又小屋ヲ建テテ
豚・鶏・等ヲカヒ、一家コトゴトク
コレニ乘リテ、流ニシタガヒテ下ル。

八30 3 先づよい場所を見立てて、炭
を焼く間ねとまりをするための小屋
を建てる。

八30 4 次に其の小屋のそばへ土と石

でかまをつく。

十二72 6 王は二三の忠臣にかしづか
れて、とある小屋に一夜を明かした
が、何時の間にかもう發狂してゐた。

こやけ ひゅうやけこやけ

こやじゅう 〔小屋中〕(名) 1 小屋中
四60 4 風ガ吹クト、カンナクツ
ガ小屋中 マツテアルキマス。

こやっかい 〔御厄介〕(名) 1 御やく
かい

八85 5 〔圖〕學校へ行つて案内をこふと、
小使が出て來た。「私はこちらに御
やくかいになつてゐる松木とよの父
でございます。」

こやね 〔小屋根〕(名) 2 小屋根

八59 3 〔圖〕ヨリテ看板ノ如キモ、タヤ
スク人目ヲヒカシメメンガ爲ニ、キノ
ヒテ小屋根ノ上ニカ、グルニ至レリ。

九80 7 〔圖〕石安工場と筆太に、小
屋根に上げし看板が 往來の人の目
につきて、《略》。

こやま 〔小山〕(人名) 1 小山

十二120 3 〔圖〕私のこと御心にかけ下さ
れ、常に「小山はどうしてゐるのだら
うか。」と仰せらるゝ由、いよく
御なつかしく存じ奉り候。

こやま 〔小山〕(名) 6 小山

五31 1 〔圖〕つゆや時雨が色よくそめた
うらの小山に秋風吹けば、木々
のしづくもきのことなつて、《略》。

五60 3 〔圖〕森も小山も下に見て、向
ふの田から大空の 雲までとゞく弓

のなり。

五62 6 鯛 ああざやかな色どりも

しだい／＼にうすくなり、小山の
方はもう見えぬ。

七53 9 図 海岸の松原や、いその小山
も次第に遠くなつて、しまひにはも
う何も見えなくなります。

十31 4 パナマ地峡は一體に小山が起
伏してゐる上に、地層にはかたい岩
石が多い。

十116 1 二十メートルもある大鯨が今
は全く息たえて、小山のやうな體を
水面に横たへる。

こやまぶんたろう 「小山文太郎」〔人

名〕 1 小山文太郎

十二122 2 圖 二月二十日 小山文太
郎 大井先生

こ・ゆ 〔肥〕〔下二〕 1 コユ 《一エ》

八21 8 図 揚子江ノ流域ハ地味スコブ
ルコエ、米・茶・綿等ノ産物多シ。

こ・ゆ 〔越〕〔下二〕 6 こゆ 越ゆ

《一エ》

七32 8 図 かくて幾年かすぎし後、武
士は海をこえてふるさとへ歸ること
となれり。

九10 1 図 〔略〕、相模の國より上總の

國へこえんとて、今の浦賀のあたり
より海を渡り給へり。

九82 8 図 ぢいさん今年六十の坂
を越えたる足もとに、大いなる石
横たへて、〔略〕。

十二83 5 図 〔略〕、山を越えて東海岸

に出でんとすれば、従者の土人等ゆ
くての危険を恐れて従ふことをがへ
んぜず。

十二85 7 図 それより山を越え、河を
下り、〔略〕キチーに出づ。

十二85 9 図 其の間、山にさしかゝれ
ば舟を引きて之を越え、〔略〕。

こゆび 〔小指〕〔名〕 4 こゆび 小指
三15 2 図 一ばんふといのがおや
ゆびで、一ばんほそいのがこ
ゆびです。

三15 8 図 〔略〕、中ゆびとこゆび
のあひだにあるのがくすりゆ
びです。

三17 2 図 あしのゆびは、おやゆ
びとこゆびのほかにはなが
ないので。

六101 3 池のはたへ行つて見ると、し
やうぶが小指程に芽を出してゐまし
た。

こよう 〔御用〕〔名〕 1 御用
九120 5 図 「オトウサン、御用ハモウ
スンダノデスカ。」

こようじよう 〔御養生〕〔名〕 2 御養
生

十109 2 図 承り候へば、御祖母様に
は先日より御病氣の處、御養生のか
ひもなく、去る十九日遂に御死去遊
ばされ候由、誠に驚き入り候。

十一42 1 図 何とぞ十分の御養生あ
りて、一日も早く御全快なされ候様
切に祈申候。

こようす 〔御様子〕〔名〕 1 御様子

十二119 5 図 當地に参りて以來、一
度手紙を以て御様子御伺ひ申上げた
しとは存じながら、〔略〕。

こようせん 〔御用船〕〔名〕 2 御用船
七41 1 日露戦争當時のことである。
軍人をのせた御用船が今しも港を出
ようとした其の時、〔略〕。

七41 7 御用船を見つけると、「一太
郎やあい。〔略〕。」とさげんだ。

こよな・し 〔形〕 1 こよなし 《一キ》
十一111 6 図 雪降りみだるゝ冬のあ
したに、風なほ冷たき春のゆふべ
に、劉備が三顧のこよなき知遇、
我が身をすてて報いんと、起ちて
ぞ出でぬる、草のいほりを。

こよみ 〔曆〕〔名〕 8 曆

十一88 5 父は曆を持つて來て、「こ
れは略本曆だ。〔略〕。」かういつて
弟の手に渡した。

十一89 5 弟は尚あちらこちら曆をく
つてあるうち、ふと「八十八夜」の
文字に目を止めて、「〔略〕。」

十一90 2 僕はこれまで曆といふと、
今年は紀元何年であるか、〔略〕と
いふやうな事を見るものとばかり考
へてゐたので、〔略〕。

十一90 7 曆を見れば、まだいろ
／＼大切な事がわかる。

十一91 8 図 かういふやうに、曆はわ
たしたちに日日の事を教へてくれる
大切なものだ。

十一92 2 図 曆には太陽曆と太陰曆と
あつて、日本では明治五年まで太陰
曆を用ひてゐたが、其の翌年から太
陽曆を用ひた。

十一93 10 図 こんな不便な曆でも長い
間の習慣で、今でも使つてゐるも
のがあつたやうだ。

十一94 3 図 曆は實に重寶なものだ。
こよみのはなし 〔課名〕 2 曆の話

十一87 7 第二十一課 曆の話

こら 〔感〕 1 こら

九114 8 図 ふと通るかゝつた某大尉が
〔略〕、「こら、どうした。命が惜し
くなつたか、妻子がこひしくなつた
か。〔略〕。」と、言葉鋭くしかつた。

こらいしゃ 〔御來車〕〔名〕 1 御來車

八109 8 図 父が今年八十八になりまし
たので、〔略〕、ほんの心ばかりの祝
を致したいと存じます。同日午前十
一時までに、どうぞ御來車を願ひま
す。

こらくきかん 〔娛樂機關〕〔名〕 1 娛
樂機關

十一91 10 其の外〔略〕、公園・競馬
場・劇場等の娛樂機關が到る處に散
在してゐる。

こらす 〔疑〕〔五〕 4 こらす 《一
シ》

十46 1 しかしいくら工夫をこらして
も、目ざす柿の色の美しさは出て來
ない。

十一793 〈略〉、形の上に種々の工夫をこらして、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。

十二953 それから釋迦はブツダガヤの綠色濃き木陰に靜坐しておもむろに思をこらした。

十二957 彼は夜もすがら靜坐してひたすら思をこらしてゐると、やがて一點の明星がきらめいて、夜はほの／＼と明けそめた。

こらす 「懲」(五) 1 こらす 《—シ》

十一1910 又他人の物を盗んだといふやうな犯罪があつた場合には、〈略〉、其の犯罪者をこらし、又世間の人々のいましめにもせねばならぬ。

ごらん 「御覽」(名) 26 ゴラン ごらん 御らん 御覽

二554 〈略〉カゲエヲシテ見セテクダサイ。」「〈略〉。コンドハキツネ、コンコン。耳ヲゴラン。〈略〉。」

三165 〈略〉「さうです。それではあしのゆびのなをしつてゐますか。」「おなじことではせう。」「まあ、いつてごらん。」

四525 〈略〉「勝太郎、東京のをぢさんからお前の所へゑはがきが來ました。よんでごらん。」

五122 ふしぎに思つて、尾をさいてごらんになりますと、つるぎが一ふり出ました。

五554 いつか此の事が天皇のお耳に入りまして、〈略〉。酒の出る所を御らんになつて、「〈略〉。」とおほせになりました。

六771 〈略〉コレハ、ハジメ白地ニオツテ置イテ、後デカタヲ置イテ染メルノデ、〈略〉。コレゴラン、表タケデ、ウラノ方ハ染メテナイデセウ。

六891 〈略〉御らんの通り大きなからだをしてゐますが、氣立はしごくやさしうございます。

七1104 〈略〉「おとうさん、電報が來ました。」「〈略〉「あゝ、信吉からだ。よんでごらん。」

七1108 〈略〉「返事のことだ。一つこしらへてごらん。」

七1113 〈略〉電報はなるべくみじかい方がよい。もつとつめてごらん。

七1119 〈略〉十五字までにしてごらん。

七1127 〈略〉もつと工夫してごらん。七1132 〈略〉、此の頼信紙に書きこんでごらん。

八745 〈略〉シカゴを立つ日に、お前たちの年始状が着きました。〈略〉。其のうちに繪葉書や寫眞帖を送りますから、ゆつくりごらん。

八795 〈略〉一枚は縣の税で、一枚は國の税です。ごらん、これには徴税傳令書とあります。

九857 〈略〉しかし地球が廻るために、我々の目には動くやうに見える。どの星を見おぼえて置いてごらん、

寝る頃にはもう位置が變つて見えるから。

九874 〈略〉あれごらん、向ふの杉林の上の所に、ひしやくのやうな形になつて、七つの星が並んでゐるのが見えるだらう。

九906 〈略〉小熊座と大熊座について、面白い昔話があるはずだから、ねえさんに聞いてごらん。

十261 〈略〉あの波を御らん。かはいさうだが、とても人間業では救へない。

十615 〈略〉御覽の通りの見苦しさ、お氣の毒ながら、とてもお泊め申す事は出來ません。

十963 〈略〉「それ御らん。『はい。』も言ひにくい言葉では無いか。」

十1028 〈略〉「此の袋で蟲をとるのだ。中をのぞいて御らん、何かはいつてゐるやうだから。」

十一375 〈略〉今に御らん、此のくらゐ離して植ゑても、十五六年目には間伐をしなればならないやうになるから。

十一887 〈略〉これは略本曆だ。この中にある『通日』で數へて御らん。

十一913 〈略〉もつとおしまひの方をあけて御らん。『各地の氣候』といふ所がある。

十二738 〈略〉たとひ我が親でないにしても、此の白い髪や髭を御覽になつたら、姉上もお氣の毒とお思ひになりさうなものだに、〈略〉。

ごらんくださる 「御覽下」(五) 2 御らん下さる 御覽下さる 《—イ》

九11510 〈略〉水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、やがて頭を下げて、「〈略〉。どうぞ之を御覽下さい。」と言つて、其の手紙を差出した。

十687 〈略〉かやうに落ちぶれてはゐるものの、御らん下さい、これに具足一領、長刀一ふり、又あれには馬を一匹つないでもつてをります。

ごらんなさる 「御覽」(五) 11 ゴランナサル ごらんなさる 御らんなさる 《—イ》

一303 〈略〉「アヒルガオヨイデキマス。ナンバキルカ、カゾヘテゴランナサイ。」

一377 〈略〉「ヨクデキマシタ。〈略〉、モウ一ペンカイテゴランナサイ。」

二34 イマ、ツナヒキノマツサイチュウデス。ゴランナサイ、ミンナガチカラヲイレテ、一シヤウケンメイデス。

二182 ネエサン、デテゴランナサイ、月ガデハジメマシタ。

二556 〈略〉十八 カゲエ 〈略〉「〈略〉。コレハトビ、ロバシヲゴランナサイ。」

二571 〈略〉コレカラユビノクミカタヲヲシヘマスカラ、ミンナデヤツテゴランナサイ。

三177 図 「このはこの中に、おもしろい人がゐます。あててごらんなさい。」

三65 図 みよ子「五郎さんの舟には、てふてふのせんどうさんがのつたから、かつたのでせう。もう一どやつてごらんなさい。」

八76 4 図 諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立ててごらんなさい。

八91 1 図 先生は「あなた、此のお子が返事をしないのは、あなたの口が見えないからです。よく見えるやうにして、もう一度しづかに言つてごらんなさい。」と言はれた。

十二33 8 図 あゝ、此のむざんな光景を御らんなさい。山も森も村も皆焼野が原と變つてゐます。

こり「五里」(名) 1 五里

七42 8 聞けば今朝から五里の山道を、わらちがけで急いで來たのださうだ。

こりようしんさま「御両親様」(名) 1

御兩親様

十79 1 図 どうか御兩親様によろしく。

こりよう「御旅行」(名) 1 御旅行

十一71 7 図 「先生がどうしてこちらへ。」「何でも山城・大和方面の御旅行がすんで、これから參宮をなさるのださうです。」

こりる「懲」(上) 1 1 こりる「一リ」

六92 1 賊は坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。これにこ

りて、賊は城の水をたやして苦しめようとはかつた。

こる「疑」(五) 2 こる「一ツー」

十二13 2 ダーウィンは興味を覺える

と、あくまでそれにこる性質で、

《略》。

十二107 9 一念こつた不斷の努力は恐

しいものであると思ひつくと、此の

見る影もない老僧の姿が、急に尊い

ものに見え出した。

これ「此」(代名) 306 コレ これ之

↓あれこれ・かれこれ

一28 1 コレ ハワタクシノハコニ

ハデス。

二2 3 コレ ハウンドウクワイノ

エデス。

二50 3 図 ハヒヲマキマス、カ

レ木ニ花ガサイテ、《略》。「コ

レハメツラシイ。ミゴト、ミゴ

ト。》《略》。

二53 3 図 「コレハニセモノダ。ニ

クイヤツダ。」

二55 5 図 十八 カゲエ 《略》「《略》。

コレハトビ、口バシヲゴラン

ナサイ。」

二56 3 図 ハイ、コレハセンドウ

サン、ナガイ竹ノサラデフネ

ヲコギマス。

二56 6 図 コレカラユビノクミカ

タヲヨシヘマスカラ、ミンナデ

ヤツテゴランナサイ。

二62 7 私ノ目ハイツモハツキ

リシテキテ、ヨク見エマス。コレ

デ本ノ中ノジモ、《略》見ル

ノデス。

二68 3 サクラガサクノハコレ

カラデス。

二68 5 ナノ花ガサクノモコ

レカラデス。

二68 7 テフテフガマフノモコ

レカラデス。

二29 6 圖 「ねえさんこれをあげ

ます。」と、こしにはさんだ手

ぬぐひのはしひきさいてさし

出せば、《略》。

二30 3 圖 「ねえさんこれをあげ

ます。」と、《略》、「正さんこれ

はありがたう。」

二56 4 かへるは《略》、とんでは

おち、何べんも何べんもとびつ

かうとします。《略》、とうとう

やなぎにとびつきました。たうふ

うはこれを見て、《略》とさとり

りました。

二84 5 図 そばへよつて見ますと、

見たこともないきれいな着物

でした。「これはよい物がある。

ひろつて家のたからにしよ

う。」《略》。

二85 3 図 いや、これは私が今

ここでひろつたのです。

四5 3 これは私が生れた年、

おちいさんが私のぶんにつき

木をして下さつたのださう

です。

四13 5 ワニザメハ《略》ナカマヲ

大ゼイツレテ來マシタ。白ウサ

ギハコレヲ見テ、《略》。

四29 2 又町はづれに大きな工場

のふしんがはじまつて居ます。

《略》。これは大じかけでれんぐ

わをやく工場です。

四29 4 これは大じかけでれんぐ

わをやく工場です。これが出

來上るころには、てつだうが私

どもの町を通過して、《略》。

四50 4 「負けるは勝。」道子「はい、

取りました。せんのも私が取

りますよ。」「なきつらにはち。」

道子「はい。」これから友一はだ

んだんあせり出しました。

四53 1 図 此のあひだひかうせん

が東京の空をとびました。こ

れは其のゑはがきです。

四62 6 扇は風に吹かれて、くる

くるまはつて居ます。いくら弓

の名人でも、これを一矢でい

おとすことは、なかなかむづか

しさうです。

四65 2 よ一は心の中で、もし

これをいそこなつたら、生きて

は居まいとかくごをきめて、

《略》。

四69 5 《略》、私がかこの戸を

明けますと、山がらはとび出し

て、〈略〉とんで行つてしまひました。これは私が七つの年のことでした、〈略〉。

五44 又中村君には、「これは級長の山田さんです。分らないことは此の方におききなさい。」とおつしやいました。

五53 中村君がこれまで居た所は日本の南の方で、〈略〉。

五124 ふしぎに思つて、尾をさいてごらんになりますと、つるぎが一ふり出ました。これはめづらしいつるぎだ。自分の物にしてはならぬとおぼしめして、天照大神へお上げになりました。

五136 北國にも春が來ました。うめやも、やさくらがみんな一しよにさいてゐます。これだけはお目にかきたいと思ひます。

五176 「金の鳥がついてゐますね。」これは鶏だよ。それで金鶏勲章といふのだが、〈略〉。

五281 こんな所にと思ふやうな村外れに、家が一けん立つてゐます。これが私のうちです。

五337 店・客間・居間・勝手など、これで間数が七つもあるとは、どうしても思はれませんでした。

五414 昔熊襲のかしらに川上のたけるといふ者があつて、〈略〉。天皇は日本武尊にこれを征伐せよとおほせられました。

五455 今御名をさし上げます。日本武皇子と申したまへ。」といつて、息がたえました。これから後やまとをぐなの皇子を日本武尊と申し上げることになりました。

五482 まぶしには、かさくといふ音がしてゐますが、これは蠶が動くからです。

五555 酒の出る所を御らんになつて、「これは親孝行のほうびに、神々がさづけられたにちがひない。」とおほせになりました。

五595 ことにしほのみちた時は、社殿や廻廊が海の中に浮いて、お話にある龍宮はこれかと思はれます。

五637 「おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、まだ一里半もあるのですか。」さう。これで中々近くはない。〈略〉。

五903 「うん、郵便函といつたのはこれだな。」

五907 私のやくめは、御承知の通り、皆様が私の口へお入れになる郵便物を大切にあげかつてゐて、これをあつめに來る人に渡すのであります。

五998 「あぶない時に、友だちをすててにげるやうな者には、これからつきあふな。」

六555 臺灣の新高山さ。これは一万三千尺からある。

六126 テツピンハ「〈略〉。今デハ鐵ハオアシノ仲間ニハハイレマセンガ、

人ノ役ニ立ツコトハ銅以上デス。」ヤクワンハ之ヲ聞イテ、「〈略〉。」ト言ヒマシタ。

六206 一しけ 〈略〉。こんな時には、「これが五日もつくと、ひびしだ。」と言ふれふしのこゑが、其所此所にします。

六232 大將は平維盛で、〈略〉。礪波山にちんを取りました。義仲は五万騎を引きつれて、これもおなじく礪波山のふもとにちんを取りました。

六382 〈略〉。強い弓なら、わざと敵にやつてもよいが、此の弱い弓を取られて、『これが義經の弓だ。』などと言はれては、源氏の名折れになるからだ。

六464 大キクナツタ蛙ハ、秋カラ冬ニカケテ、海カラ川ハ上ツテ來ル。〈略〉。コレハ卵ヲ産ム場所ヲ見ツケニ來ルノデアル。

六483 〈略〉、フシギニ自分ノ生レタ川ヘ歸ツテ來ルサウデ、「之ヲ蛙ノ里歸トデモ言ツタラヨカラウ。」ト叔父サンガ言ハレタ。

六545 萬じゆはおそろく、〈略〉。唐糸の身代りに立ちたうございます。」と申しました。之を聞くと、頼朝のかほの色はさつとかはりました。

六546 之を聞くと、頼朝のかほの色はさつとかはりました。かはるも道理、これには深いわけがあつたので

ございます。

六552 頼朝が木曾義仲をせめようとした頃、木曾の家來手塚太郎光盛の娘が頼朝に仕へて居りましたが、之をさとつて、すぐに義仲の所へ知らせました。

六568 唐糸には其の時十二になる娘がありました。これが萬じゆの姫で、〈略〉。

六601 わけをたづねますと、「あの中には石のらうがあつて、唐糸様がおしこめられて居られます。」と答へました。之を聞いた萬じゆの喜はどんなであつたでございませう。

六631 〈略〉、三人は其の夜をなみだの中に明しました。これから後萬じゆは、うばと心を合はせて、〈略〉。母をなぐさめて居りました。

六673 或物持の所へ行くと、下男がまだ使へる小繩を捨てたと云つて、主人がひどくしかつてゐた。青年たちは之を聞いて、さ、やき合つた。

六674 「こまかな人だ。これではとても義捐はしてくれまい。」

六727 四條の大橋はすぐ其所に見えます。人通の多いのは此の大橋で、これには電車も通つてゐます。

六767 「其ノキレイナモヤウハ、ドウシテツケルノデセウカ。」コレハ、ハジメ白地ニオツテ置イテ、後デカタヲ置イテ染メルノデ、〈略〉。六771 コレゴラン、表ダケデ、ウ

ラノ方ハ染メテナイデセウ。

六82 通有はほばしらをたふして、之をはしこにして、敵の船へをどりこんだ。

六83 實に我が國にとつては、これまでにない大難であつた。

六91 楠木正成が守つた千早城は、《略》。之をかこんだ賊は百萬騎といふ大軍で、《略》。

六92 賊が城の門まで攻上ると、《略》。賊は坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。これにこりて、賊は城の水をたやして苦しめようとはかつた。

六93 正成は此の旗を城門に立てて、さんぐに賊を惡口させた。賊が之を聞いて、くやしがつて攻めよせると、《略》。

六94 賊が之を聞いて、くやしがつて攻めよせると、正成は高いがけの上から大木を落させた。さうして、これをよけようとして賊のさわぐ所を射させて、又々五千人餘もころした。

六95 城兵はさつと引上げたが、二三十人はふみとどまつた。賊が四方から之を目がけておしよせると、《略》。

六98 もう此の上は、しやにむに攻落さうといふので、賊は大きなはしごを作つて、之を城の堀に渡して橋にした。

六96 すると正成は、《略》、たくさんなたいまつを出して、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。

七13 われらが住む世界は、其の形まるくして、球の如し。ゆゑに之を地球といふ。

七84 又輸入品は綿もつとも多く、砂糖これに次ぐ。

七114 さうしてさの先に、赤いしるしのあるはんでんをしぼりつけて、「皆さん、これが目じるしだよ。」と言つた。

七183 第五 れんげさう 《略》。色が美しい上に、姿がやさしいので、つみ草の時には、誰も之を取つて花ばににする。

七194 《略》、賊のそなへを見渡し、すど、北の山手には木戸を立てて、數萬の兵が之を守つてゐます。

七207 すると、これまで潮の満ちてゐた稻村崎は、《略》干上つて砂地にかはり、《略》。

七215 すると、これまで潮の満ちてゐた稻村崎は、《略》砂地にかはり、落ちて行く潮にさそはれて、賊の軍船はことごとく沖へ流れてしまひました。義貞は之を見て、「ものども進め。」と、其の速干がたを眞一文字に鎌倉さして攻めこみました。

七224 此の時義貞が方々へ火をかけさせますと、濱風が之をあふり立てたからたまりません。

七233 《略》、道ばたに大きな松が一本ある。みきが二かゝへもあつて、枝が傘をひろげたやうに出てゐるので、村の人は之を傘松と呼んでゐる。

七255 塚の前に馬頭觀世音とほつた石が立つてゐて、其の前に時時新しい馬のくつが上つてゐる。これは馬がけがをしないやうに、馬方が上げるのださうだ。

七262 馬は《略》。走ることがはやくて、乗用としてはこれにまさる動物がない。

七267 第八 馬 《略》。武人は昔から之を愛養して、いざといふ時には、それに乗つて出かけた。

七323 これより獅子は日夜武士につきしたがひてはなれず、武士には無二の從者となれり。

七332 獅子はもとより武士にしたがひて行かんとせり。しかるに船長はおそれて之をゆるさず。

七452 信玄は刀をぬくひまがない。《略》、肩先へ切りつけられた。信玄の家來は之を見て、後からやりで謙信をついたが、あたらない。

七465 《略》、信玄から謙信へ、《略》。よつて明日たがひに勇士を一人づつ出して組討をさせ、勝つた方のものが川中島を取ることにしては。」と申しこんだ。謙信はこれに同意した。

七471 「これは長谷川與五左と申す者、小兵なれどもお相手致す。」

七481 彦六が與五左衛門を組みふせた。武田方が之を見て、聲をあげて喜ぶと、《略》。

七486 無念に思つて、武田方から十騎ばかり、木戸を開いて切つて出ようとした。此の時信玄は之を止めて、《略》。といったので、めでたく中なほりが出來た。

七603 それは日本は海國でありながら、まだ海を恐れる人もあるといふことで、これは實に残念な事であります。

七652 《略》、革の財布が落ちてゐました。《略》。これはあの人が落して行つたにちがひないが、《略》。

七702 しばらくして、《略》。ついで此の中の金を半分だけお禮のしるしにさし上げます。」といつて、財布の中に手を入れました。人夫は之を見て、「おやめなさい。《略》。」といつて、歸らうとしました。

七718 どうぞ之を受取つて、私の氣がすむやうにして下さい。

七724 人夫は之を聞いて、首をふりました。

七783 「はい。これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません。」

七787 これがそもく藤吉郎出世のいとぐちである。

七821 カキハ又スグフェルモノデ、

軍艦や汽船ハ時々ワカキオトサナ
ケレバナライホドデアル。

七97 行長は「略」、清正のことを
秀吉にさんげんしました。「略」、秀
吉は之を信じて、清正に歸國を命じ
ました。

七101 加藤清正これまで参上仕る。
七102 「加藤清正これまで参上仕る。

「略」。秀吉が之を聞いて、「さて
く、早く参つた。」と心の中で喜
びました。

七104 「加藤清正の家來でございま
す。」「何と申す。清正は上様へお目
通がかなはぬはず。」「何故にお目通
がかなひませぬ。」秀吉が之を聞い
て、幕の中から、「もうよい。通し
てやれ。」といひましたので、「略」。

八122 耕造方の人々は「略」、「略」。
相手の信作があつたから、いづ
れ又改めてやり直しをしてもらはな
ければなるまい。」などといった。

信作方の人々は之を聞いて、「もう
改めて勝負をするには及びません。
八153 殿はまだお若くて、これか
ら功名をお立てになる折はいくらも
ございます。

八157 「略」、頼宣は顔色をかへて、
「やあ、正綱、十四歳の時が二度あ
るか。」といった。家康は之を聞い
て、「略」といつて喜んだ。

八199 此ノ河ノ上流地方ヨリ木材
ヲキリ出シ、之ヲイカダニ組ミテ河
ヲ下スコトアリ。

八204 伊カダノ大ナルモノハ長サ
六七十間、幅三四十間、コレニ土ヲ
置キテ野菜ヲ作り、「略」。

八206 伊カダノ大ナルモノハ長サ
六七十間、幅三四十間、「略」、一家
コトゴトコレニ乗リテ、流ニシタ
ガヒテ下ル。

八215 揚子江ハ「略」、夏季ハコ
トニ増水シテ、濁流江ニミナギリ、
河口ヨリ海上百里ノ間、海水コレガ
タメニ赤シトイフ。

八216 揚子江ハ「略」、海水コレ
ガタメニ赤シトイフ。揚子江ノ大ナ
ルコトコレニテモ知ルベシ。

八225 「略」、亞里山の蕃人^{ありん}にだけは、
此の悪い風が早くから止みました。
これは呉鳳^{ごふう}といふ人のおかげだと申
します。

八327 「略」、其の中貴重なものの一
つは朝鮮人^{ちんせん}参です。これはもと野生
のものでしたが、「略」。

八345 さうして教へられた場所へ行
つて見ますと、「略」、見なれない草
に、眞赤な美しい實が一つなつてあ
りました。婦人は、これは珍しい、神
様がおさづけ下さつたのはこれに違
ひないと思つて、「略」。

八346 婦人は、これは珍しい、神様
がおさづけ下さつたのはこれに違ひ
ないと思つて、其の實を取つて来て、
庭先の畠の中にまきました。

八348 間もなくそれから芽が出まし
たので、婦人は之を我が子のやうに
育てました。

八349 間もなくそれから芽が出まし
たので、婦人は之を我が子のやうに
育てました。これが人参で、「略」。

八412 「地蔵様が縄にかゝつてい
らつしやる。」「これは珍しい。地蔵
様でも悪いことをなさつたと見え
る。」

八601 又マレニハナゾヲ用フルモ
アリ。彼ノ焼諸屋ノ看板ニ、八里半
ト記セルモノノ如キハコレニシテ、
其ノ味クリニ近シトイフ意ナリ。

八625 昔はあきめくらも多かりし
に、まことのめくらにして、大學者
となりし人あり。塙保己一これな
り。

八627 保己一は五歳の時めくらと
なりしが、人に書物をよませて、一
心に之を聞き、後には名高き學者と
なりて、多くの書物をあらはせり。

八667 此の港には、十五六年前に
大地震があつて、町は大方こはれた
のですが、今では前よりもかへつて
りつぱになつてゐます。アメリカ人
の元氣なことは、これだけ聞いても
わかりませう。

八762 「略」、一人の男が「略」。
といつて冷笑しました。之を聞いた
コロンブスは、つと立つて、食卓の
上ので卵を取り、「略」といひ

ました。

八773 此の時コロンブスは、こつ
んと卵のはしを食卓にうちつけ、何
の苦もなく立てて申しました。「諸
君、これも人のした後では、何のざ
うさもない事でございます。」

八792 此の一枚には徴税^{ちくぜい}令書と
ありませう。これは村の税で、村の
學校や役場の費用などになるのです。

八795 ござらん、これには徴税^{ちくぜい}令
書とありませう。

八796 ござらん、これには徴税^{ちくぜい}傳令
書とありませう。これは縣の税で、
縣立の學校や病院や、其の他道路な
どの費用になります。

八798 それからこれは國の税で、
納税告知書としてあります。

八803 國の税は勿論、縣の税も村
の税もみんな大事なもので、之を納
めることは國民の務です。

八821 水にはこれといふ形がない。
八1016 食つた物をこなし、之を
血の製造場へ送るのが僕の役目であ
つて、「略」。

八1025 君等は「略」食物を送つて
よこしませんでした。「略」、かへつ
て君等は自分で苦しむやうになつた
のです。これは全く君等が自分で招
いたのであります。

八1031 こんなわけですから、これ
からは互に親しみ合つて暮しませ
う。

八〇三 之を聞いて、手足等一同は、

なるほどと感心したといひます。

八〇八 マツチは〈略〉、一包十箱が十錢ぐらゐで買はれる。しかし之を一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。

八〇六 分業はマツチの製造ばかりではない。うちを造るにしても、時計を造るにしても、家を建てるにしても、皆これによるのである。

八二〇 又まことに申しかねますが、當日祝の歌を一首いたゞきたうございます。これは年よりからのお願でございます。

八二四 すると大將の父は〈略〉、頭から冷水を浴びせかけた。大將はこれから後、一生の間「寒い」とも「暑い」ともいはなかつたといふ。

八四八 其の時大將は江戸から大阪まで、馬やかごに乗らず、両親と共に歩いて行つた。當時大將の體は、もうこれだけ丈夫になつてゐたのである。

九五九 實の中にはかたい殻があつて、其の内がはに白い肉のやうなものがあつた。これから椰子油を取り、〈略〉。

九六二 まだ十分にじゆくしてゐない實は、中にきれいな水があります。これがなくくうまいもので、私たちもよく取つて飲みます。

九一〇 大風俄に吹來りて、

波すさまじく荒れくるひ、御船少しも進まず、今にもくつがへらんばかりなりき。〈略〉、「これ海神のたゝりならん。われ皇子の御身代りとなりて海に入り、神の御心をなだむべし。」

九一四 くだきたる目殻を器に入れたあふるに、これには餌の時のやうに集らず。

九一五 父上の命にて、養鶏は今年より僕等の仕事となり、日記をも渡されたれば、鶏の事は總べて之に記入し置くなり。

九一七 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、〈略〉。シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出来テキルノハ、印度ニ産スルカマキノ一種デアラウ。

九二〇 コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐レル武器ヲソナヘテキルカ、イヤガル味ヤニホヒノアルモノデ、之ニ近ヅカウトスルモノガナイカラ、〈略〉。

九二四 これまでも折々話した通り、四代前の歡庵様が、〈略〉。

九二六 一すちに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ事で、これが佐藤の家の學問の精神である。

九二六 わたしも〈略〉計畫を立てた事もあるが、いろ／＼の差支があつて、實行が出来ずにしまつた。これはまことに残念な事である。

九二七 目に涙を一ぱいためて聞いて

ゐた少年は、固い決心を顔にあらはして、實行をちかつた。〈略〉。これは今から百三十年ばかり前に、下野の國足尾山中の旅人宿で起つた事で、〈略〉。

九三九 やがてレマン將軍は、萬感胸にみちて、かすかにふるふ手に帶劔をときて渡さんとするを、エンミツヒ將軍は「いや、それには及ばん。〈略〉。」と、強ひて之をおし止めたり。

九四二 二人の我が子それ／＼に、死所を得たるを喜べり。これぞ武門の面目。』

九四九 例へばコ、ニ一ツノ石アリトセヨ。ソレガ如何ニマレニシテ、タヤスク得ラレザル物ナリトモ、用ヒヤウナケレバ、誰モ之ヲ買フ者ナク、シタガツテ價アルコトナシ。

九四三 又コ、ニ一匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、〈略〉。

九四八 カクテ價ハ次第二高クナリテ、〈略〉。之ニ反シテ、同ジヤウナル馬五匹アリ、其ノ持主ハ別々ニテ、買ハントスル人タゞ一人ナルトキハ、〈略〉。争ヒテ價ヲ下グ。

九四九 カクノ如ク、品物多クシテ、之ヲ望ム者少ケレバ、其ノ物ノ價安クナリ、〈略〉。

九四四 カクノ如ク、〈略〉、品物少クシテ、之ヲ望ム者多ケレバ、其ノ

物ノ價高クナル。

九五二 「ほんたうにえらい人ですね。」いや、これから先があの人のはんたうにえらい所だ。」

九五四 社長さんは早速荷車を一臺借りて來て、醬油のはかり賣を始めた。町の人々は之を見かねて、〈略〉。

九六二 すると乗員は、一せいに飛起きて、手早くつり床をくぐる。これから號令が雨のやうに下る。

九六五 軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は、これから訓練に取掛るのである。

九七五 今日はいくらもほりをしませう。

九七八 五時間目の授業がすむと、先生はにこ／＼して、「〈略〉。」とおつしやつた。これこそ僕たちが、一週間も前から、毎日々々待つてゐた命令だつたので、〈略〉。

九八三 ちやうど其の時、はるか遠方で味方の萬歳の聲がわき起つた。戦争なれた北風は、此の聲の意味をよく知つてゐた。さうして之に合はせるやうに、一聲高く天に向つていな／＼いた。

九八六 或日我が軍艦高千穂の一水兵が、女手の手紙を読みながら泣いてゐた。ふと通りかゝつた某大尉が之を見て、〈略〉。

九八八 私も日本男子です。何で命を惜しみませう。どうぞ之を御覽下

さい。」と言つて、其の手紙を差出した。

九一七〇 大尉は之を讀んで、思はずも涙を落し、〈略〉。

九一九〇 豊島沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念に思つてゐる。

しかしこれも仕方がない。

一四四〇 御殿は質素なる平屋にて、御庭の此所彼所に、下葉の色づきかけたるはぎ茂れり。はぎの御茶屋といふ名のあるも之がためなるべし。

一七三〇 又御造營の半ば頃より、各地方青年團の御手つだひを願ひ出づる者數多かりしかば、何れも十日間を限りて土木に従事せしめたるに、通常の入夫にもまさりて仕事ははかりたりと聞く。これも真心の致す所なるべし。

一九七 方法は或劇薬を用ひる外になかつたので、フィリップは眞心こめて此の事を申し出た。王はこゝろよく之を許した。

一四七〇 私が今度歸つて來て、はじめて青年團の規約を見た時は、其のとつてゐるのに驚いて、これがまじめに實行されてゐるかどうかと、少し氣になつたのでした。

二二二〇 さうして、もうこれが最高の直だを見ると、掛の人が其の直で賣渡すといふあひづに手を打つて、取引が成立します。

一三五〇 それから船はクレブラの掘割

を通る。これは高い山地を切通したもので、〈略〉。

一三五〇 運河は全長五十哩餘り、凡そ十時間前後で之を航することが出来る。

一三六〇 最後にアメリカ合衆國は、國家事業として此の工事に着手し、

〈略〉、遂に之を造り上げたのである。

一三八〇 私は思はず、「やあ、すっかり變つた。」と聲をあげると、兄は「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」といつて、〈略〉。

一四九〇 喜三右衛門は、一つ又一つと窓から血を出してゐたが、不意に「これだ。」と大聲をあげた。

一六七〇 しかし此の三本だけは、其の頃のかたみとして、大切に殘して置いたのでございますが、今夜は之をたいて、あなたのおもてなしに致しませう。

一六八〇 かやうに落ちぶれてはゐるものの、御らん下さい、これに具足一領、長刀一ふり、又あれには馬を一匹つないでもつてをります。

一六九〇 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、〈略〉、眞先かけて敵の大軍に割つて入り、これぞと思ふ敵と打合つて、あつばれてがらを立てるか

くご。

一七五〇 それなるは佐野源左衛門常世か。これは何時ぞやの大雪に宿を借りた旅僧であるぞ。

一七七八 面白いのは、三四日續いて寒ければ、其の次には又其のくらの間暖さが續くといふやうに、〈略〉。こちらでは昔からの之を三寒四温といつてゐるさうです。

一八一〇 室の中には、大きなポンプが幾つも、すさまじい勢で活動してゐます。これは炭坑内の地下水を坑外へ汲出す爲で、〈略〉。

一八二〇 坑内に馬が居るのは不思議だと思つて、聞いてみると、これは石炭を運ぶために飼はれてゐるのださうです。

一八五〇 それから『燃える石』といふやうばんが高くなつて、附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。

一八五〇 それから『燃える石』といふやうばんが高くなつて、〈略〉。これがつまり此の炭坑の始ださうです。

一八八〇 最近における我が國の輸出入總額は數十億圓の多額で、之を十年前の額に比べると、實に十數倍である。

一九七〇 〈略〉、宋は次第におとろへて、ほとんど亡びんとするに至れり。宋の臣文天祥大いに之をうれへ、

〈略〉。

一九七二 宋の臣文天祥大いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。其の友之を止めていはく、

「羊の虎に向ふが如し。危し。」と。

一九七四 天祥きかずしていはく、「我もとより之を知る。唯國家の危きを如何せん。」と。

一九八四 時に宋の勇將張世傑よく戦ひて元軍を防ぐ。敵將張弘範如何にもして之を降らしめんとし、〈略〉。

一〇〇二 天祥いはく、「〈略〉。願はくは我に死をたまへ。」と。帝其の志の動かすべからざるを知り、之を刑場に送らしむ。

一〇七五 御名は何と付けられ候や、これも早く承りたく、御知らせ待ち上げ候。

一〇二五 〈略〉すぐに立つて、椅子をゆつりました。人に親切なことはこれでも知れると思ひました。

一〇五三 又池・沼を利用して鯉・鮒を養ふことも盛にして、大てい二年毎に之を賣るに、其の利益少しとせず。

一〇六三 其の他の教員も、校長を模範として専心職務につとむるが故に、生徒は皆よく之になつて課業にはげみ、〈略〉。

一〇七〇 高德〈略〉、大いなる櫻の幹をけづりて、大文字に詩の句を書きつけたり。〈略〉。翌朝警固の武士ども之を見つけて、讀みかねて上間に達したり。

一〇七八 〈略〉、勾踐此のうらみ忘れがたく、范蠡といふ忠臣の助を得て

報復の計を立て、再び呉と戦ひて遂に之を亡しぬ。

十一16 太陽の光と熱とがなくては、我々人間は勿論、あらゆる生物、一として生存することは出来ない。これほど我々に重大な関係のある太陽とは、一體どんなものであらう。

十一18 一口にいへば、白熱の状態にある一大火球で、之を形造つてゐるものは、液體に近い氣體であらうといふ。

十一24 光の強さに至つては非常なもので、之を燭光でいへば一三の下に零を二十六もつけて表さねばならぬ。

十一37 つまり此の宇宙には、あの太陽のほかに、これと同じやうなものがなほ数限りもなく存在してゐるが、〈略〉。

十一53 當時支那は數國に分れて互に相争ひ、戦亂止むことなかりしかば、孔子大いに之をうれひ、〈略〉。

十一69 富貴は人のねがふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之に居らず。

十一6 貧賤は人のいとふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之を去らず。

十一18 これまで自分の不整頓のために、むだに費した時間と努力は大きなものであつた。〈略〉。」と思ひました。

十一20 裁判所は國家が設ける機關で、これに〈略〉の四階級がある。

十一26 木之本には秀吉の來れるなり。これより先、秀吉は織田信孝を攻めて大垣にありしが、〈略〉。

十一28 二十日の月は上りぬ。退却軍は少しく之にたよりを得たれども、〈略〉。

十一29 敵は見る間にぼた／＼と倒れて、一軍今や崩れんとす。秀吉はるかに之を望み、〈略〉。

十一31 正國の首は終に清正の手に入りぬ。福島正則以下の六人、またそれぞれに名ある勇士を討取つて、武名を天下にとゞろかせり。武器は皆槍なりしかば、世に之を稱して賤獄の七本槍といふ。

十一35 障子をあけてみるとまだ雨が降つてゐる。「これでは明日の山廻りはだめだ。」と思ひながら、〈略〉。向ふの方をながめると、〈略〉。

十一42 御承知の通り當地には温泉これあり、病後の保養には特に宜しき由に候。

十一49 此の液の取れる木を普通にゴムの木といつてゐる。これには種類が多く、一番よいのはパラゴムといふのである。

十一50 近年ゴムの需要が激増したために、英國人はマレイ半島の領地にパラゴムの木を移植するに至つた。他の國人も之にならつて、

〈略〉。

十一51 此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあとに種をまくか、又は苗木を植付けけるのであるが、これが成長して、切付を行ふまでには五六年もかかる。

十一53 集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不純な物を取除き、〈略〉。

十一59 加硫法とは、ゴムに硫黄をまぜる事で、かうするとゴムが非常に弾力を増して来る。之をそれ／＼用途に應じて、更に加工するのである。

十一55 初は十間以上も相手をぬいてゐたが、どうしたのか急に相手にぬかれて、一二間も後れてしまつた。これまでにこ／＼してながめてゐた老砲手は、急に氣をもんで、〈略〉。

十一63 トラクターは、ガソリンの發動機が取付けてある。これが大きな鋤を何本も引いて、〈略〉。

十一68 燈火としては、〈略〉、其の後らふそくや種油がともされ、石油のランプが之に代り、〈略〉。

十一68 人は、火の熱と光とをあらゆる方面に利用することを考へて來た。しかし火の利用法は、決してこれで完成したといふわけではあるまい。

十一69 「小僧、早く燈心をかきたててくれ。」隣に坐つてゐた僧が之

を聞いて、「〈略〉。」

十一71 何でも山城・大和方面の御旅行がすんで、これから參宮をなさるのださうです。

十一75 注意しなければならぬのは、順序正しく進むといふことです。これは學問の研究には特に必要ですから、〈略〉。

十一78 我々は殆ど貨幣・紙幣なくして一日も生活することは出来ぬといつてもよいからである。此のやうに便利なものも、〈略〉我々は、これについて事新しく便利を感じることもなく、〈略〉。

十一78 此のやうに便利なものも、〈略〉我々は、これについて事新しく便利を感じることもなく、又之を考案した昔の人々に對して別段感謝の念を起すこともない。

十一86 船の上からはしきりに勵ましてくれる。これに力を得て、又一しやうけんめいに泳いで行く。

十一87 大層天氣がおだやかになつたね。二十十日もこれで無事ですんだ。」

十一88 父は曆を持つて來て、「これは略本曆だ。」

十一88 「これは略本曆だ。この中にある『通日』で數へて御らん。これは一月一日から數へた日數だ。」

十一89 「こゝに『八十八夜』とありますが、これは何ですか。」

十一902 僕はこれまで磨といふと、
〈略〉、祝祭日・土用・彼岸・〈略〉
が何時になるかといふやうな事を見る
ものとはばかり考へてゐたので、
〈略〉。

十一103 町ノのりつばなる事も、
文明諸國の大都會に比して少しも劣
る所これなく候。

十一103 此のブラジル國は、廣
さ我が國の十三倍もこれあり、〈略〉。

十一104 其の中に有名なアマ
ゾン河や、イグアッスの大瀑布の
壯觀を寫したるものもこれあり候。

十一105 河幅は驚く程の廣さに
て、河口の處にては、三百二十キロ
メートルもこれある由、〈略〉。

十一106 大勢の人々が熟したる
コーヒの實を手にてこき落し、之
を集めてみぞに投入れ候へば、〈略〉。
十一106 實のみ浮びて流
れ候を、下流にてすくひ上げ、之を
廣きほし場にて乾かし候。

十一107 實のみ浮びて流
れ候を、下流にてすくひ上げ、之を
廣きほし場にて乾かし候。之を機械
にかけて皮を除き、袋に入れて外國
に輸出する由に候。

十一116 例へば教育・衛生等の自治
團體の事業は、地方人民が一般に之
を尊重し、之に協力することによつ
て、〈略〉。

十一116 例へば教育・衛生等の自治

團體の事業は、地方人民が一般に之
を尊重し、之に協力することによつ
て、〈略〉。

十一117 自治制も、之を運用する人
民に自治の精神が乏しければ、よい
結果を得ることは到底望まれない。

十一125 一切經は、佛教に關する
書籍を集めたる一大叢書にして、
〈略〉。〈略〉、これが出版は決して容
易の業に非ず。

十一126 一代の事業として一切經
を出版せん事を思立ち、〈略〉、廣く
各地をめぐるに資金をつのること數
年、やうやくにして之をとゝのふる
事を得たり。

十一127 喜捨を受けたる此の金、
之を一切經の事に費すも、うあたる
人々の救助に用ふるも、〈略〉。

十一130 かくて、一切經六
千九百五十六卷の大出版は遂に完成
せられたり。これ世に鐵眼版と稱せ
らるゝものにして、〈略〉。

十二55 參詣人の群にまじ
りて行けば大鳥居あり、〈略〉。七十
五尺の大鳥居とは、これなるべし。

十二63 『此の草原の中つ國は
皇孫之をしろしめすべし。』

十二77 大神其の眞心の厚きを賞
して、命の爲に壯大なる宮殿を造ら
しめ給ふ。これ即ち出雲大社の起原
なり。

十二89 火きりぎね・火き

りうすといふものあり。〈略〉。此の
社にては、今も太古の法に従ひ、之
によりて火を作るといふ。

十二110 早速兩手に一匹づつかむ
と、又一匹變つたのが見えた。これ
も逃しては大變と、〈略〉。

十二142 生物は、生物は、下等
なものから高等なものへと進むもの
であるといふことを證明した。これ
が有名な進化論で、〈略〉。

十二146 されば珍しき事件の起り
し時、之を記述して印刷に附し、廣
く發賣することは古より行はれたり
しが、〈略〉。

十二163 先づ社の組織について述
べん。これも社によりて多少の相違
はあれども、〈略〉。

十二165 編輯・營業の二局
ありて、編輯に關することは前者之
を司どり、販賣・廣告に關すること
は後者之を擔當す。

十二166 編輯・營業の二局
ありて、販賣・廣告に關する
ことは後者之を擔當す。

十二174 さて編輯部にては刻々集
り來る原稿を選擇整理し、繪畫・寫
眞等と共に之を印刷部に送る。

十二175 印刷部にては直に所要の
活字を拾ひて之を組み、〈略〉。

十二176 校正終れば紙型に取り、
更に之をもととして鉛版を造り、印
刷機にかく。

十二183 殊に驚くべきは輪轉機の
能力なり。巻取紙とて幅三尺六寸、
長さ一萬六千餘りのものを之に取
りつくれば、〈略〉。

十二22 商業は之に従事する商人だ
けを利するたものではない。

十二225 商人たる者は、〈略〉、廣く
公衆の爲を計らなければならぬ。こ
れ即ち世間の信用を博して堅實に自
己の事業を發展させる道である。

十二234 外國貿易に至つては、之に
従事する者の心掛け如何の影響が
更に大きい。

十二244 彼等が町人といつて賤しめ
られたのも其の爲であらう。これは
〈略〉、商人の人格が重んぜられなかつ
たからである。

十二35 ベルリンから 〈略〉、又
工場といふ工場には盛に黒煙が上つ
てゐました。これはイギリスやフラ
ンスなどでは見られぬ光景で、〈略〉。

十二41 「略」。しかし誠に粗末
なビヤノで。それに樂譜もございま
せんが。」と兄がいふ。ベートーベ
ンは、〈略〉。「いや、これでたくさ
んです。」といひながら、〈略〉。

十二49 松に至りては産地極めて
廣くして、奥羽地方より九州に至る
まで殆ど之を見ざる處なく、〈略〉。

十二519 即ち水位の 〈略〉 差は、僅
かに三十八センチメートルに過ぎな
い。これは 〈略〉、流れ込む川に大

きいのがないのに原因してゐる。

十二52 三十年ばかり前までは、此の湖には魚類が全く居なかつた。これは〈略〉大きな龍があつて、魚類のさかのぼる道を絶つてゐるからである。

十二54 ねぢは、これ等の道具や時計をあこれと見比べて、あれは何の役に立つのであらう、これはどんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、〈略〉。

十二54 9 どのいろいろな道具、たぐさんの時計、〈略〉。一かどの役目を勤めて世間の役に立つのに、どれもこれも不足は無ささうである。

十二57 2 「ねぢが無い。〈略〉。あれが無いと町長さんの懐中時計が直せない。探せ、探せ。」ねぢは之を聞いて、飛上るやうにうれしかつた。

十二64 2 図 イタリヤの國旗は、緑・白・赤の三色を縦に染分け、中央の白地中に王家の紋章を表せり。これ〈略〉エンマヌエル王、國土統一の時、其の家の紋章の色なる白と赤とに、〈略〉緑を加へ、更に王家の紋章を配したるものなり。

十二64 8 図 〈略〉各國の國旗は、〈略〉、或は其の國民の理想・信仰を表すものなれば、國民の之に對する尊敬は、即ち其の國家に對する忠愛の情の發露なり。

十二72 1 ところがリガンは、〈略〉、

すげなくも王を内に入れなかつた。〈略〉二人の娘が、揃ひも揃つてこれ程の不孝者であらうとは。

十二75 1 図 やがて眠から覺めた王は、〈略〉、そばに居るコーデリヤを見て、「これはどなたであらうな。

十二76 9 だいぼう網は〈略〉、非常に大きなものである。これを海中に張つた形はちやうど大きなひしやくに似てゐる。

十二78 3 群をなして寄せて來たまぐろは、先づ垣網に驚き、之に沿うて沖へ逃げようとして身網の中へはい

十二78 7 〈略〉、まぐろの群が網にはいつたといふ合圖を見ると、〈略〉漁夫が急いで網口をしめてしまふ。これでもう魚は逃出することが出来ない。

十二82 1 図 樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。

十二82 3 図 然るに其の實際を調査して此の疑問を解決したる人、遂に我が日本人の中より現れぬ。間宮林藏これなり。

十二82 8 図 樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざること、此の探檢によりて略く知ることを得たれども、更によく之を確めんがために、〈略〉。十二83 4 図 〈略〉、非常なる困難をを

いふ處にたどり着きたり。これより北は波荒くして舟を進むべくもあらず、〈略〉。

十二84 9 図 出發の日近づくや、林藏はこれまでの記録一切を取りまとめ、〈略〉。

十二84 10 図 出發の日近づくや、林藏はこれまでの記録一切を取りまとめ、之を從者に渡していふやう、〈略〉。

十二85 2 図 林藏はこれまでの記録一切を取りまとめ、之を從者に渡していふやう、「我若し彼の地にて死したりと聞かば、汝必ず之を白主に持歸りて日本の役所に差出すべし。」と。

十二85 9 図 其の間、山にさしかゝれば舟を引き之を越え、〈略〉。

十二86 4 図 土人等林藏を珍しがりて之を他の家に連行き、〈略〉。

十二88 5 法律は、〈略〉、いやしくも國民たる者は必ず之を守らなければならぬ。

十二89 7 又貴衆兩院の何れから提出された案は、〈略〉、可決すれば同じ手續によつて奏上する。そこで天皇が之を裁可せられ、公布せしめられると、〈略〉。

十二98 5 危篤の報が傳はると、これまで教を受けた人々が四方から集つて別れを惜しんだ。

十二98 9 図 私は行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと思つたこと

を語り盡くした。これまで説いた教そのものが私の命である。

十二104 4 〈略〉、左手の山は次第に頭上にせまり、遂には路の前面に突立つて人のゆくてをさへぎつてしまふ。これからが世に恐しい青のくさり戸である。

十二104 7 これからが世に恐しい青のくさり戸である。〈略〉、昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。

十二106 3 僧は名を禪海といつてもと越後の人、〈略〉、一身をさゝげて此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、神佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。之を見た村人たちは、〈略〉。

十二107 9 〈略〉、穴はだん／＼奥行きを加へて、既に何十間といふ深さに達した。〈略〉。出来る氣づかひはないと見くびつてゐた岩山の掘抜も、これではどうにか出來さうである。

十二113 2 図 次いで白金其の他の金屬の針金を以て様々の實驗を重ねしが、

これまた失敗に終りぬ。

十二114 6 図 〈略〉、日本の竹最も適當なりしかば、専ら之によりて心を製出せり。

十二116 3 図 〈略〉、電力は頗る廉價に供給されるので、石炭の火力による蒸氣力は、多くの場合之に敵するこ

とが出来なくなりました。

十二194 園 拜啓。誠に御無沙汰に打過ぎ、申しわけもこれなく候。

十二1216 園 略、仲間のうちに計算は私が一番達者なりとて、何時もほめられ申候。これも全く先生方のおかげと深く感謝致居り候。

十二1287 園 略、日本全国にのしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。之に比べれば、略、徳川家の存亡などは言ふにも足らぬ小事でござります。

十二1305 園 又延いては徳川家及び江戸百萬の民の仕合はせ、これは申すまでもござりませぬ。

十二1333 忠孝は實に我が國民性の根本をなすもので、之に附隨して幾多の良性・美德が發達した。

十二1364 略、かういふ短所はやがて我が國民から消去するであらうが、出来る限り早く之を一掃することは我々の務ではあるまいか。

十二1368 他國の文明を消化して、之を巧みに自國のものとするこは、實に我が國民性の一大長所である。

十二13810 我々は常に其の長所を知つて、之を十分に發揮すると共に、略。

十二1391 我々は略、又常に其の短所に注意し、之を補つて大國民たるにそむかぬりつばな國民とならね

ばならぬ。

これ(感)2 これ

七917 園 略、敵は略、おぼあさんの肩に手をかけて、「これ、おぼあさん、お前は知つてゐるだらう。」

八379 園 略、越前守は聲をかけて、「これ女、其の手を放せ。」

これから「此」(課色)2 コレカラ

二目11 二十三 コレカラ

二673 二十三 コレカラ
これより「維盛」(人名)1 維盛 ↓
たいらのこれより

六258 略、ずいぶん深いくから谷が、平家の人馬で埋まりました。大將維盛は命からく、加賀の國へにげました。

これら「此等」(代名)15 これらコレ等

九72 園 珍しい植物は此の外にもまだたくさんあります。これ等の植物が思ふまゝに茂つてゐる様子は實に見事です。

九205 又或動物ハ保護色トハ反對ニ、略、鮮カナ體色ヲモツテキル。コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐レル武器ヲソナヘテキルカ、イヤガル味ヤニホヒノアルモノデ、略。

九632 これから號令が雨のやうに下る。それにつれて、つり床は正しく一定の場所に納められる、すべての窓や出入口は開かれる。これ等の仕

事は、略。

十二225 園 此の町では、二歳の市が十日間も續いて、其の間には千頭からの賣買があり、略。これ等の馬が日本全國に散らばつて、略。

十865 又略、時には外國の品を使ふ方が都合のよい事もある。種々の品物が遠く外國から輸入されるのは、主にこれ等の事情からである。

十883 綿花は主に印度やアメリカ合衆國から輸入し、それに加工して綿絲や綿織物を造る。これらの製品は我々の使ひ料にもなるが、略。

十一810 こゝには外國人の居留する者が非常に多く、これ等は租界といふ特別の區域内に住んでゐる。

十一776 我々の普通に金錢といつてゐる物の中には、金貨を始め、銀貨・白銅貨・青銅貨がある。これらを總べて貨幣といふ。

十一778 これらを總べて貨幣といふ。又此の外に貨幣の代りに用ひられる紙幣がある。我々はこれらの貨幣や紙幣を用ひて物品を賣買し、略。

十一789 石・貝・略などが、略、それゝ貨幣の役目をしたこともあつた。しかしこれらの物は、略、其の他いろゝの缺點がある。

十一1171 略、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、皆公共心の發動であつて、略、地方人民は大いにこれ

等の事業に力を盡くさねばならぬ。

十二461 園 今其の主要なるものを舉ぐれば、杉・檜・略、くぬぎ等なり。凡そこれ等の木材は、其の有する性質によりて各種の用に供すべく、略。

十二541 周囲の壁やガラス戸棚には、いろゝな時計がたくさん並んでゐる。略、ねぢは、これ等の道具や時計をあれこれと見比べて、略。

十二899 法律の外に勅令・閣令・省令・府縣令等の命令がある。これ等の命令も略、廣い意味でいふ場合にはやはり法律であるから、略。

十二1119 園 然れどもこは今日のアーケ燈に類するものにして、略、室内に用ふるには、大仕掛にして光力強きに過ぎ、實用に適せず。これ等の缺點なき電燈の出現は當時の人の最も希望する所なりき。

ころ「頃」(名)36 コロ ころ 頃 ↓いつころ・おひるころ・くじころ・ごじはんころ・このころ・さきころ・さんじころ・じつさいころ・じゅうじころ・ちかころ・どうじつごぜんじゅうじころ・とおかころ・なかばころ・なんにちころ・はちじころ・ひころ・ひるころ・よあけころ

四294 これが出来上るころには、つたうが私どもの町を通つて、工場の近くにいていしや場が出来るさうです。

四七五 二 〈略〉、お星様が光りはじめ
るころになつて、小さなわらぶ
きのうちへかへつて行きまし
た。

四十九ととなり、七つとなつたころからは、〈略〉、早く強くなつて、かたきを取らうと心がけました。

五265 ガントオナジク、ワタリ鳥デ
アタ、カニナツテ、ガンガ北ノ國ヘ
カヘルコロ、南ノ國カラワタツテ來
マス。

五
ツテ、
コロ、
五
尊は其のころ、やまとをぐな

といふ御名で、(略)。

五47 / 上る頃には、蠶のからだがつき通るやうになります。

五51 4 ハジメハ糸スヂホドノ流デス

五685 此のあたりの青田も、其の頃
ガ、略、ミゾニオチル頃ニハ、流
モ早クナリ、水ノカサモ多クナリマ
ス。

は大ていあれ地で、〈略〉。

五⁹²5 其のあつめに來る頃に、急ぎの封書を入れに來る者が、途中で人と立話でもはじめると、〈略〉。

六五八 頼朝が木曾義仲をせめようと
した頃、木曾の家來手塚太郎光盛
の娘が頼朝に仕へて居りましたが、
略。

七209 すると、〈略〉稻村崎は、其の夜の月の入る頃に、二十餘町にはかに干上つて砂地にかはり、〈略〉。

七285 大阪ハ昔ニ徳天皇ノ都シタ

マヒシ所ニシテ、其ノ頃天皇ハ立上
ル煙ノ少キヲ見テ、民ノ貧シキヲア
ハレミタマヒキ。

ら親にはなれて、姓も存じませんの
で、御威光を借りて豊臣と記したの
でございます。

此の方のひざの上でそだつたので、
何時か見習つたものと見える。

七108 7 ㊦ 彼岸ハ春ト秋トニアリテ、
此ノ頃ハ晝夜ノ長サホトンド相等シ

ハ629 ㊦ 保己一の家は今の東京、其の頃の江戸の番町にありて、略。

ハ928 おとよは略、此の學校を

卒業する頃には、りつぱに一人前の事が出来るやうになる。

九六五 人の顔がやつと見分けられるやうになつた頃、時鐘番兵がこと

く」と艦橋の下へ来て、〈略〉。
九八五(六) どの星かを見おぼえて置いてごらん、寝る頃にはもう位置が變つて見えるから。

九104 東の空がほんのりと白む頃、北風は外の軍馬と一所に、露營のテントの前に、列を正して並んだ。

十144 皆さんの前に立つと、其の

頃の心掛が恥づかしくてなりません。
 十256 夜がほのぐと明けた頃、
 〈略〉グレース親子は、ふとはるか
 の沖合に、かの難破船を見とめた。

十6610 雪の日の夕暮に近き頃、上州佐野の里に、つかれし足の歩重くたどり着きたる旅僧あり。

の頃のかたみとして、大切に殘して置いたのでございますが、〈略〉。

を承り候事など、今更のやうに思ひ
出され候。
十1306㊦ 此の頃備前に兒島高德とい
ふ武士あり。

十一 279 夜に入れば、略、一萬五千の軍勢まつくらに進軍して、夜半の頃には既に木之本に到着したり。

十一 707 若い頃から讀書がすきで、
將來學問を以て身を立てたいと、一
心に勉強してゐた。

十一 864 やうやく月島の横を通り越

す頃には、もうつかれきつて氣も遠くなるばかりだ。

十二 955 リンカーンは其の頃からもう父の手助をしなければならなかつ

た。
十二108 十歳の頃には昆虫採集を始めた。
十二117 此の頃のことであつた。或

日彼が古木の皮をむくと、珍しい甲蟲が二匹ゐた。

十二1049 享保きやうほうの頃の事であつた。
 〔略〕、路をさへぎつて立つ岩山に、
 〔略〕、餘念なく穴を掘つてゐる僧が

あつた。

十二¹⁰⁵³ 身には色目も見えぬ破れ衣をまとい、日にやけ仕事にやつれて年の頃もよくわからぬくらゐである

ろ ↓いしころ・いぬころ
ろ う 〔五郎〕〔話手〕 2 五郎
三 645 五郎「ほうら、もうちきし
が、〈略〉。

ようぶだ。」

四946 十郎「五郎、かほを見せよ。」五郎「兄上。」

ろ う 「五郎」(人名) 5 五郎 じさ

わかつごろうさま
四897 曾我兄弟は兄を十郎、弟
を五郎といひました。
四898 十郎が五つ、五郎が三つ

の年に、父はくどうすけつねにころされました。

四九六 二人はすかさずうち取つ
 よ。」
 四九四 十郎「五郎、かほを見せ
 会」
 四九三 十郎「五郎、かほを見せ
 会」

<p>て、十郎は二十二、五郎は二十、父がうたれてから十八年目にめでたくのぞみをとげました。</p> <p>ごろうさん 「五郎」(人名) 6 五郎さん</p> <p>三612 五郎さんもなかに</p> <p>おはいりなさい。</p> <p>三641 五郎さん、てふてふが五郎さんの舟にとまりました。</p> <p>三648 「一ばんがち、五郎さんの舟」</p> <p>三651 二「五郎さん ばんざい。」</p> <p>三652 三「五郎さん ばんざい。」</p> <p>三653 五郎さんの舟には、てふてふのせんだうさんがのつたから、かつたのでせう。</p> <p>ころがす 「転」(五) 2 ころがす</p> <p>「シ」</p> <p>十129 誰かが力石をころがして来て、土をはらつて高橋さんの爲に席を作った。</p> <p>十二97 或時の如きは、釋迦が山の下にあるのを見附けて、上の方から大石をころがしたが、 「略」。</p> <p>ころがりあう 「転合」(五) 1 ころがり合ふ 「一フ」</p> <p>八31 「略」、しひの實が落ちて、くぼたまりにころがり合ふのも今である。</p>	<p>ころがる 「転」(四・五) 4 コロガル</p> <p>ころがる 「一ツ・リー・レ」</p> <p>一247 ハスノハニツユガタマツテキマス。カゼガフクト、コロコロコロガリマス。</p> <p>四201 「略」、シホケノナイ水デカラダヲアラツテ、ガマノホヲシテ、ソノ上ニコロガシ。</p> <p>九146 となりの内に入りて見るに、敷藁の中に見事なる卵二つころがれり。</p> <p>十二562 ねぢは仕事臺の脚の陰にころがった。</p> <p>ごろくじゅうねんめ 「五六十年目」(名) 1 五六十年目</p> <p>十一403 使ひみちによつて、三十年目から五六十年目ぐらゐの間に伐るのなさうだから、 「略」。</p> <p>ごろくすん 「五六寸」(名) 1 五六寸</p> <p>十102 葉の先からつるを出して、五六寸の細長い袋をつるしてゐる。</p> <p>ごろくせんじん 「五六千人」(名) 1 五六千人</p> <p>六918 賊は坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。</p> <p>ごろくそう 「五六層」(名) 1 五六層</p> <p>十二318 「略」シャンゼリゼーの大通には、五六層もある美しい建物が道路の兩側に並び、 「略」。</p> <p>ごろくにち 「五六日」(名) 1 五六日</p> <p>五501 おかあさんもねえさんも、此</p>	<p>の五六日は夜もろくろくおやすみにならないのです。</p> <p>ごろくにん 「五六人」(名) 1 五六人</p> <p>十一1248 隣の室では、職工が五六人ならんで、ガラス器にいろ／＼の模様をつけてゐる。</p> <p>ごろくねん 「五六六」(名) 2 五六六</p> <p>十475 彼の頭の中にあるものは、唯夕日を浴びた柿の色であつた。かうして五六六はたつた。</p> <p>十一5110 「略」、これが成長して、切付を行ふまでには五六六もかゝる。</p> <p>ころげおちる 「転落」(上二) 3 ころげ落ちる 「一チ」</p> <p>六917 賊は坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。</p> <p>九1092 と、たづなが急にゆるんで、中尉は後方にころげ落ちた。</p> <p>十二574 「略」、此のやうな處にころげ落ちてしまつて、若し見附からなかつたらと、それが又心配になつて来た。</p> <p>ころげこむ 「転込」(五) 1 ころげこむ 「一ン」</p> <p>八99 信作はつるりとすべり落ちて、其のほずみに、ころ／＼と池の中へころげこんだ。</p> <p>ころげこむ 「転出」(下二) 1 ころげこむ 「一デ」</p> <p>四563 山の中からころげ出て、人にふまれたかしのみが、しひを見上げてかういつた。</p>	<p>ころころ (副) 4 コロコロ ころころ</p> <p>一246 カゼガフクト、コロコロコロガリマス。</p> <p>八99 信作はつるりとすべり落ちて、其のほずみに、ころ／＼と池の中へころげこんだ。</p> <p>九792 中からみづ／＼しい白茶色の玉が、じゅず／＼になつてころ／＼と出て来た。</p> <p>十一314 「略」、二人はしつかと組みたるまゝ、ころ／＼と轉び落つるころと三十間許。</p> <p>ころし ↓おやころし</p> <p>ころしも 「頃」(副) 1 頃しも</p> <p>十708 「略」、山河草木喜にあふる、春とはなれり。頃しも鎌倉より、勢ぞろへの沙汰俄に國々に傳はりぬ。</p> <p>ころす 「殺」(五) 7 コロス ころす 殺す 「一サ・一シ・ス」 ↓いころす・つかみころす</p> <p>二444 オヂイサンハハラヲタテテ、ソノ犬ヲコロシテシマヒマシタ。</p> <p>四802 「略」、生物をころしたりするやうな子どもは、大ていろくなものになりません。</p> <p>四901 十郎が五つ、五郎が三つの年に、父はくどうすけつねにころされました。</p> <p>六943 さうして、これをよけようとて賊のさわぐ所を射させて、又々</p>
--	--	--	---

ことではないとさりました。

八93 8 〈略〉、「う」を「え」と間違

へたりするのを、先生は根氣よく、何度もくく教へてゐられた。

九79 7 となりでは、莖がくさつて引きぬけないのを、星野君が根氣よくほつて、〈略〉。

十二104 10 〈略〉、路をさへぎつて立つ岩山に、毎日々々根氣よくのみを振るつて、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。

十二107 7 此の洞穴と、十年一日の如く黙々としてのみの手を休めない僧の根氣とを見た村の人々は、〈略〉。

十二110 2 老僧の終始一貫した根氣は、遂に村人を恥ぢさせたものか、仕事を助ける者が又ぼつくと出来て来た。

こんきょち 〔根拠地〕(名) 1 根拠地

十116 6 船員は手早く鯨の尾をくさり、船ばたにつないで、威勢よく根拠地に引上げる。

こんく 〔困苦〕(名) 1 困苦

十一128 5 然るに、此の度は近畿地方に大飢饉起り、人々の困苦は前の出水の比に非ず。

こんごうさんじょう 〔金剛山上〕(名) 1 金剛山上

六90 7 楠木正成が守つた千早城は、けはしい金剛山上にはあるが、まはりが一里にも足らず、總勢わづか千人ばかり。

こんごうづえ 〔金剛杖〕(名) 1 金剛杖

杖

九95 5 登山者はかんじきをはいて、石づきの付いた金剛杖や鳶口を力に、此の坂を登るのです。

こんこん (感) 1 コンコン

二55 4 4 4 コンド ハ キツネ、コンコン。

こんじきどう 〔金色堂〕(名) 1 金色堂

九71 9 6 6 あの上に名高い金色堂がある。光堂ともいつて、昔は金光りに光りかゞやいてゐたさうだ。

こんじょう 〔紺青〕(名) 1 紺青

十二36 6 6 6 紺青の空にそびえて雪をいたゞくアルプの連峯。

こんぜつする 〔根絶〕(サ変) 1 根絶する

十37 1 衛生の設備をよくして危険な病氣を根絶し、幾萬の従業者の健康をはかつた事や、〈略〉。

こんちゅうさいしゅう 〔昆虫採集〕(名) 1 昆虫採集

十二110 8 十歳の頃には昆虫採集を始めた。

こんど 〔今度〕(名) 29 コンド こんど 今度

一50 6 サルモダンゴヲモラツテ、ケライニナリマシタ。コンドハ

キジガキマシタ。

二52 4 4 4 〔略〕、トノサマガオトホリニナツテ、「モウ」下花ヲサ

カセテミヨ。」トオホセニナリマシタ。コンド ハイクラハヒヲ

マイテモ、スコシモ花ガサキマセン。

二55 3 3 3 サア、犬デス。大キナ口ヲアイテ、ワンワン。コンドハ

キツネ、コンコン。

三68 6 6 6 〔略〕、センヲヌイテ見ルト、キレガトレテキマシタ。又

マキナホシテ、コンドハ水デツパウヲジョウロノカハリニシヨウトオモツテ、〈略〉。

三74 8 8 8 ソノ中ニケダモノガカチサウニナツタノデ、〈略〉、ケ

ダモノノミカタニナリマシタ。スコシタツテ、コンドハ鳥ガ

カチサウニナリマシタ。

四39 5 5 5 するとたび人は、風が吹けば吹くほど、ぐわいたうをし

つかりとからだにくつつけました。こんどは日の番になりました。

四49 4 4 4 道子「私が取つたのです。」友「いいえ。僕が取つたのです。」

四66 2 2 2 〔略〕、まん中へふせておきなさい。こんど取つた人がそれも取ることにします。

四66 2 2 2 〔略〕、向ふを見わたすと、舟がゆれて、まどがさだまりません。

四66 2 2 2 〔略〕、神様にいのつてから目をひらいて見ると、今度は扇が少しおちついて見えま

す。

四93 6 6 6 〔略〕、長い間つけねらひましたが、手を出すすきはありませんでした。〔略〕。兄弟は今度こそはと、

五38 8 8 8 〔略〕、ふじのすそ野へ急ぎました。

五38 8 8 8 〔略〕、此の方は中村さんといふ人で、今度遠い所から来て、今日から此の級へはいる方です。」

五17 4 4 4 〔略〕「をちさん、勲章がふえましたね。一番こつちは金鶏勲章でせう。」

六48 1 1 1 〔略〕、卵カラカヘツタ蛙ハ、川ヲ下ツテ海ヘ行ク。四五年モタツト、大キクナツテ、今度ハ自分ガ卵ヲ産ミニ川ヘ上ツテ來ルガ、

六96 2 2 2 〔略〕、賊は大きなしごを作つて、之を城の堀に渡して橋にした。

八96 6 6 6 〔略〕、今度こそは千早城もあやふく見えた。

八96 6 6 6 〔略〕、神主は二人の者だけで、もう一度競走させることにした。今度の競走も五分々に進んで行つたが、

八87 2 2 2 〔略〕、信吉は「おとよ、大きくつたなあ。〔略〕。」といつて、今度は先生に向つて、

八91 3 3 3 先生は「あなた、此のお子が返事をしないのは、あなたの口が見えないからです。〔略〕。」と言はれた。信吉は少しはなれて、

今度はお

とよの顔を見ながら、〈略〉。

九24 老人は一口飲んで横になつた。少したつて、今度は寝たまゝぼつくと話し出した。

九34 圓窓 「ぢいさん、今度は何ですか。」「毘沙門天を刻むのだ。」

九42 2 窓 シカシ今度ノ候補者ノ中ニ、實ニリツバナ考ヲ持ツテキテ、アノ人ナラバト思ハレル人ガアルカラ、〈略〉。

十14 6 窓 私が今度歸つて来て、はじめて青年團の規約を見た時は、其のととのつてゐるのに驚いて、〈略〉。

十35 7 かうして前後三段に上つた船は、海面より約二十六メートルも高い水面に浮ぶのである。〈略〉。今度は前と反對に、順次に三段を下つて、海と同じ水面に浮ぶ。

十50 5 窓 おとうさん、今度役場の隣にりつばな建物が出来ましたね。

十50 8 窓 今までは横町の小さい家だつたが、今度はあゝいふりつばなのを建てたのだ。

十72 5 窓 時頼は尚一同に向ひて、「今度の勢ぞろへに集つた諸侍の中に、訴訟ある者は申し出るがよい。」

十103 3 窓 「さあ、今度は葉のきれいな植物を集めてある處だ。」といつて、にいさんは次の室へ案内して下さる。

十一47 3 窓 其の後又夜更けてうかゞひ見れば、今度はひちを張り、足を

のべ、手を口に當てて鶴の臥したる様をなせり。

十一53 1 それがすむと、今度はバケツを持つてコツアにたまつた液を集めて歩くのである。

十二43 10 〈略〉、やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が次第々々にやみの世界を照らすやう、一轉すると、今度は如何にもものすごい、いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生にをどるやう、〈略〉。

十二95 3 〈略〉、彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。〈略〉。それから釋迦は〈略〉木陰に靜坐しておもむろに思をこらした。今度は程よく食物も取り、休息もした。

こんどう 「金堂」(名) 1 金堂

十二99 8 窓 〈略〉、東大寺の金堂は天空高くそびえて、五丈三尺の大佛一千二百年の面影を残せり。

こんな (形状) 42 コンナ こんな

三25 2 この一二日の雨で、竹の子がこんなに出来ました。むぐらもちでもとほつたやうに、土がところどころもち上つてゐます。

三54 2 窓 〈略〉、弟星をかぞへてゐます。」兄「こんなくらいばんにかぞへないで、ひるかぞへるがよい。」

三69 5 窓 〈略〉、コンド ハ水デツバ

ウヲジヨウロニシヨウトオモツテ、フシニ小サナアナヲタクサンアケマシタ。〈略〉。コマツテニイサンニ見テモラヒマシタラ、「コンナニアナヲタクサンアケテハダメダ。

四25 6 窓 〈略〉、には一ぱいもみがほしてあつて、足のふみばもないくらゐでした。〈略〉。おばあさんが「今日はこんなにもみがほしてあるから、をちさんもをばさんも早くかへります。

五27 8 こんな所にと思ふやうな村外れに、家が一けん立つてゐます。

五28 8 窓 それはくしづかな所で、風の音と水の音より外には、何の音も聞えませんが、〈略〉。此の間町のをばさんが〈略〉、「こんなしづかな所でくらしみたい。」とおつしやいました。

五73 2 窓 〈略〉、せつかくつき上げた土手が、半分ほどむくづれてしまつた。すると、「〈略〉。」「こんなむだな仕事をすれば、貧乏村はいよいよ貧乏になる。」などと言ふ者が出て来て、〈略〉。

六1 6 「〈略〉。新田が大へんよく出来ました。來年もやはりあの稻を作りますせう。」朝飯の時こんな話が出ました。

六20 4 いつも通る汽船も、高波をよけて、沖を通ると見えて、汽てきの

音は少しも聞えませんが、冬時の海には、よくこんなことがあります。

六20 5 冬時の海には、よくこんなことがあります。こんな時には、「〈略〉。」と言ふれふしのこゑが、其所此所にします。

六27 1 屋根の上に霜がまつ白だ。〈略〉。ひよどりは元氣な鳥だ。こんな寒い日にも、朝早くから、高い木の上をとびまはつて鳴いてゐる。

六70 5 又いくさのあつた時には、よろひかぶとの勇ましいなりをした武士の刀や、なぎなたの光も、いくたびとなく此の川の水にうつつたことでごいませう。こんな人、こんな姿は、どうの昔にきえましたが、〈略〉。

六70 5 こんな人、こんな姿は、どうの昔にきえましたが、〈略〉。

六91 4 楠木正成が守つた千早城は、〈略〉、總勢わづか千人ばかり。〈略〉。

こんな山城一つ、何程の事があるものかと、賊が城の門まで攻上ると、〈略〉。

六102 6 なるほど、去年鯉のぼりを立てた時、しやうぶとよもぎを軒へさした。〈略〉。こんなことを思ひ出して垣根の方へ行くと、〈略〉。

七57 4 窓 又〈略〉、一寸先も見えなくなることもあります。こんな時には、悪くすると〈略〉、外の船に衝突したりするやうなまちがひが出来

ます。

七607 海の波を見たばかりで、もう恐しがる人もあります。こんなことでは、どうして海國の民といはれませう。

七84 海ノ深い所ハ何萬尺モアル。コンナ所ニハ、動物モゴクマレデ、植物ハ全クナイガ、〈略〉。

八715 〇 シカゴとニューヨークの間は九百八十哩もありますが、〈略〉、たつた十八時間で着きました。日本にはまだこんな早い汽車はありません。

八766 之を聞いたコロンブスは、〈略〉、「諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立ててごらん下さい。」といひました。人々は何の爲にこんなことをいひ出したかと思ひながら、〈略〉。

八103 〇 君等が若し僕に食物を送る爲に働いたといふなら、僕もまた君等を養ふ爲に骨を折つたといひます。こんなわけですから、これから後は互に親しみ合つて暮しませう。

八103 〇 マツチは〈略〉、一包十箱が十錢ぐらゐで買はれる。しかし之を一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。

九15 〇 中デモ面白イノハ、或動物ノ體色ガマハリノ物ノ色ニ似テキルコトデアル。コンナ體色ヲ保護色トイフ。

九487 〇 うち中が丈夫で、仲よくかせぐ、こんな仕合なことはない。

九537 〇 〈略〉、いろ／＼の手違から、銀行が破産しなければならぬ事になつた。世間にはこんな場合に、なるたけ自分の負擔を軽くしようとする者もあるが、〈略〉。

九120 〇 〈略〉、父ガ、夜汽車デ歸ツタトコロデアツタ。一月モカ、ルヤウナオ話ダツタノニ、ドウシテコンナニ早くオ歸リニナツタノダラウト思ツテ聞イテミタ。

十126 〇 やあ、皆さん御苦勞ですね。今通つて見て來ましたが、大そうりっぱになりました。よくこんなに早く出來ましたね。

十137 〇 郷里の青年諸君がこんなにまじめになつて來たのは、何よりうれしい事です。

十207 〇 〈略〉、今日の別れを惜しんで、泣きながら〈略〉、くびや背をなでたりしてゐるのもあります。それを見ると、成程、こんなにかはいがられて居れば、馬も從順で人になつくわけだと、しみ／＼思ひました。

十428 〇 さうして兄は〈略〉、〈略〉つるはして掘返し始めた。私は教へられた通り、〈略〉、精一ぱいに働いた。しばらくの間めい／＼がこんな風に働いてゐると、〈略〉。

十815 〇 〈略〉、大きなポンプが幾つも、すさまじい勢で活動してゐます。

〈略〉、こんな大きなポンプを備へ附けてゐる處は、世界でも珍しいさうです。

十918 〇 〈略〉、太郎は生麥生米生卵と、早口にすら／＼言へるやうになつた。太郎は得意になつて、「おとうさん、こんなに言ひにくい言葉は外に無いでせう。」

十1054 〇 此の温室は南を受けてゐる上に、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに早く咲くのだ。

十1166 〇 「成程、かういふ風に分類してそろへておけば、いつ取出すのにも便利だ。」と思ひました。

〈略〉、「こんなによく整頓してゐる中で勉強したら、どんなに氣持がよいだらう。」

十137 〇 〈略〉。「一坪一本の割。」とおとうさんの手で記してある。一昨年植付けた時の覺書だ。あの時、「こんなに間をおいてよいのですか。」と僕が聞いたら、〈略〉。

十163 〇 〈略〉、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。こんな廣い畠であるから、耕すにも、うねを作るにも、種を蒔くにも、大てい機械と馬の力による。

十190 〇 此の頃の出や日の入は何時だらう、満月は何日頃だらう。こんな事を知るには『日出』『日入』『月齡』を見る。

十191 〇 それから雨雪の量は何處

が一番多いか、又一年中で何時頃が一番多いか、こんなことも記してある。

十193 〇 したがつて二百十日も〈略〉、太陰曆になると三十日もちがふことがある。〈略〉。こんな不便な曆でも長い間の習慣で、今でも使つてゐるものがあるやうだ。

十194 〇 曆は實に重寶なものだ。こんな重寶なものがあるのに、それを利用しないのであるのは寶の持ちぐされだ。」

十1123 〇 〈略〉、白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、目も口もあけられない。こんなところで毎日働いてゐる人たちは、どんなにつらいことであらうと思つた。

十192 〇 「人は何の爲に此の世に生れて來たのか。我々の行末はどうなるだらうか。」こんな事を次から次へと考へては、〈略〉。

こんなん 〔困難〕(名) 5 困難 十465 〇 〈略〉、歎息する彼の様子は、實に見る目もいたましい程であつた。

困難はそればかりで無かつた。 十545 〇 此の愛らしい小鳥が、〈略〉、いろ／＼の困難ををかして、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、〈略〉。

十1126 〇 一代の事業として一切經を出版せん事を思立ち、如何なる困難を忍びても、ちかつて此のくはだ

てを成就せんと、〈略〉。

十二47 唯杉に比して産額少く、

増殖や、困難なるは惜しむべし。

十二83 3 図 〈略〉、飢寒と戦ひ、非常

なる困難ををかりて樺太の北端に近

きナニヲーといふ處にたどり着きた

り。

こんにち 「今日」 (名) 17 今日 ↓

きょう

十86 我々が今日生活して行くには、

我が國で出来る品物ばかりでは用が

足らない。

十108 2 図 今日小包にて粗末なる物、

赤さんの御着物にもと御送り致し候

間、〈略〉。

十一46 支那幾千年の人物中、大

聖として長く後人に敬はれ、徳化の

尚今日に著しきもの、孔子に及ぶは

なし。

十一50 1 今日世界におけるゴムの大

部分は、此の木から取つたものであ

る。

十一78 5 しかし今日の貨幣や紙幣を

案出するまでには、人間は實に種々

様々なものを使用してみたのである。

十二156 勿論今日我が國にて發行

せらるゝ新聞中にも大小種種ありて、

〈略〉。

十二24 7 文明の進んだ今日尚此のや

うな考を持つのは、大きな誤といは

ねばならぬ。

十二52 4 今日鱒の産地として世に知

られるやうになつたのは養魚經營の

賜である。

十二60 8 今日一國家を形成する

國々にして、國旗の制定せられざる

所なし。

十二61 7 図 イギリスの國旗は、今日

の形式を具ふるまでに幾多の變化を

重ねたるものなり。

十二62 4 図 〈略〉、白地に赤十字の徽

章ある前者の國旗と、藍地に斜白十

字の徽章ある後者の國旗とを合して

一旗となし、〈略〉、白地に斜赤十字

の徽章ある其の國旗を合はせて、遂

に今日の如き形式をなすに至れり。

十二111 7 図 然れどもこは今日のアー

ク燈に類するものにして、〈略〉。

十二114 10 今日文明の利器と稱せら

るゝものにして、直接間接に彼の天

才によらざるもの殆どなしといひて

可なり。

十二119 8 圖 當地に参りて以來、一

度手紙を以て御様子御伺ひ申上げた

しとは存じながら、〈略〉、今日に相

成り申候。

十二128 3 図 〈略〉、今日日本の周圍に

は諸外國が様々の考を持つて見てを

るので、〈略〉、日本全國にのしをつ

けてどこぞの國へやつてしまふやう

な事にならぬとは決して申されませ

ぬ。

十二135 其の結果今日も尚國民は眞

の社交を解せず、人を信じ人を容れ

る度量に乏しい。

十二136 1 今日我が國が列強の間に立

つて世界的の地歩を占めた以上、か

ういふ短所はやがて我が國民から消

去るであらうが、〈略〉。

こんにち 「今日」 (感) 3 今日

四23 4 図 おばあさんはもう耳が

遠いので、大きなこゑで、「お

ばあさん、今日は。」といふと、

〈略〉。

四87 3 図 「ババサン、今日ハ。」「オ

キクサンデスカ。

六17 2 図 にいさんが「今日は。」と

言つて、「此の近くに、しめちの出

る所はありませんか。」とたづねま

すと、〈略〉。

こんぶ 「昆布」 (名) 3 コンブ

七84 図 コンブ

七85 5 先ツタベルモノニハ、コン

ブ・ワカメ・アラメ・ヒジキ・アマ

ノリ・アヲノリ・モツクナダガアリ、

〈略〉。

七86 8 ミルヤモツクノ様ニ緑色ノモ

ノモアレバ、コンブヤアラメノヤウ

ニ茶色ノモノモアリ、〈略〉。

こんぼん 「根本」 (名) 3 根本

十一114 5 此の精神は實に自治制の根

本であり、又其の生命である。

十二14 2 これが有名な進化論で、學

界を根本から動かしたものである。

十二133 2 忠孝は實に我が國民性の根

本をなすもので、之に附隨して幾多

の良性・美德が發達した。

こんや 「今夜」 (名) 5 コンヤ こん

や 今夜

二54 2 図 「ヲヂサン、コンヤモマ

タカゲエヲシテ見セテクダサ

イ。」

三79 5 図 「ふみ子も こんやはき

つとあちらで この月を見て

ゐませう。」

五49 6 図 「民子、いよく今夜一ぱ

んになつたよ。あれで八分通だ。」

九92 10 図 僕今夜はいろ／＼の事をお

ぼえて、ほんたうにうれしかった。

十67 1 図 〈略〉、今夜は之をたいて、

あなたのおもてなしに致します。

こんやかぎり 「今夜限」 (名) 1 今夜

かぎり

四94 4 今夜 かぎりのいのちと

思つて、十郎「五郎、かほを見せ

よ。」五郎「兄上。」

こんらん 「混乱」 (名) 1 混乱

十二125 2 しかし市中の混乱は蜂の巣

を突いたやうなさわざである。

こんらん・する 「混乱」 (サ変) 1 混

亂する 《一スル》

十二30 7 往來の頻繁な街上でも、

よく警官の指揮に従つて、混乱する

ことがなく、〈略〉。

こんろ ↓でんきこんろ

律が出来上るのである。

さいき 「才氣」(名) 1 才氣

十一742 宣長はまだ三十歳餘り、温和なひとりのうちに、どこことなく才氣のひらめいてゐる篤學の壯年。

さいきん 「最近」(名) 2 最近

十887 最近における我が國の輸出入總額は數十億圓の多額で、之を十年前の額に比べると、實に十數倍である。

十二118 又最近無線電話が發明されましたが、今やそれが盛に利用される機運となりました。

さいく さいめさいく・かいさいく

さいくまにちようめじゅうごばんち

「細工町二丁目十五番地」(地名) 1

細工町二丁目十五番地

七112 發信人は自己の居所氏名を成

へく本字にて此處に記すこと 細工

町二丁目十五番地

さいげつ 「歳月」(名) 2 歳月

十366 最後にアメリカ合衆國は、

「略」、十年の歳月と八億圓の費用とを費して、我が大正三年、遂に之を造り上げたのである。

十1202 公は此處にうつされてから一

歩も外へは出ないで、三年の歳月を送られたさうである。

さいご 「最後」(名) 11 最後

九383 しかし部下の者は、最後まで

でベルギーの名譽をけがさなかつた

つもりである。

九1069 中でも一番目ざましかつたのは最後の襲撃。

十365 パナマ地峡に運河を造る事は、

數百年來「略」。最後にアメリカ合衆國は、國家事業として此の工事に着手し、「略」、遂に之を造り上げたのである。

十一762 これは學問の研究には特に必要ですから、先づ土臺を作つて、

それから一步一步高く登り、最後の目的に達するやうになさい。

十一942 最後に父は「曆は實に重寶

なものだ。「略。」と言葉をそへた。

十一11910 しかしジョージは依然として、「略。」とくり返すばかりであつた。最後に目つきのやさしい老紳

士が言つた。

十二192 但し大新聞にありては、

「略」、新しき事件ある毎に改版して、

最後の最も新しきものを市内版とす。

十二442 「略」、一轉すると、今度は

「略」、最後は又急流の岩に激し、荒

波の岸にくだけるやうな調に、三人

の心は「略」、ひき終つたのも氣附

かぬくらゐ。

十二894 此處でも同様の形式で討議

し、兩院の意見が一致すれば、最後

に議決した議院の議長から國務大臣

を経て奏上する。

十二11810 最後に博士は「略」など、

家庭における電氣の利用に就いて興

味ある話をして壇を下つた。

十二1264 安芳は今日こそ最後の確答

を得ようと決心して、西郷をおとづ

れたのである。

さいこう 「最高」(名) 1 最高 ↓せ

かいさいこう

十212 さうして、もうこれが最高

の直だと見ると、掛の人が其の直で

賣渡すといふあひづに手を打つて、

取引が成立します。

さいこう 「西郷」(人名) 11 西郷 ↓

かつやすよしとさいこうたかもり

十二1258 西郷は早速承知して、芝高

輪の薩摩屋敷で會見したが、「略」。

十二1265 安芳は今日こそ最後の確答

を得ようと決心して、西郷をおとづ

れたのである。

十二1275 安芳は高音に「西郷はど

こに居る。」と叫んだ。

十二1278 一室に通されて待つてゐる

と、やがて西郷が出て來た。

十二12910 西郷はだまつてうなづいた。

十二1307 西郷はしばらくじつと考へ

てゐたが、「よろしい。「略」。」

十二1312 やがて安芳は西郷に見送ら

れて門を出た。

十二1314 警衛の兵士等は、「略」、西

郷が後に續いてゐるのを見て、一同

恭しく捧げ銃の禮をした。

十二1318 安芳は自分の胸を指さして、

「略」といひながら、西郷と顔を

見合はせてにつこり笑つた。

十二1319 西郷は軍令を出して翌日の

進軍を中止させた。

十二1322 安芳が一命をかけた努力と、

西郷の果斷によつて、「略」、維新の大事業もそこほりなく成し遂げられるやうになつた。

さいこうしょ 「最高所」(名) 1 最高

所

十一612 此の峠には長いトンネルがあつて、其のあたりは海拔約千八百尺、北海道鐵道沿線の最高所である。

さいこうたかもり 「西郷隆盛」(人名)

1 西郷隆盛

十二1258 「略」、安芳は三月十三日官

軍の參謀西郷隆盛に會見を求めた。

さいさん 「再三」(副) 1 再三

十949 僕は再三こつたのです。

さいさん 「財産」(名) 3 財産

八811 いや、それは財産や収入の

多少によつて違ひます。

九5310 「略」、あの人は反對に、少

しでも他人の負擔を軽くしようとし

て、自分の財産を残らず差出した。

九556 それからだんだん商賣の手

を廣げて、六十五六の時にはもう餘

程の財産が出来た。

さいさんか 「財産家」(名) 2 財産家

九526 「略」、店はだんだん繁昌し

て、十年もたぬ中に、町でも屈指

の財産家となつた。

十1248 村の財産家にて事業に熱心

なる人、みづから先んじて耕作・養

蠶・養鶏・養魚等の模範をしめししを以て、〈略〉。

さいし「妻子」(名) 2 妻子

九114 命が惜しくなつたか、妻子がこひしくなつたか。

十二97 續いて釋迦は〈略〉、更にカピラバストに歸つて、父王・妻子を始め國民を教化して故郷の恩に報いた。

さいしゅう ↓こんちゅうさいしゅう
さいしゅう・す「採集」(サ変) 1 採集す「一セ」

十二114 〇こゝにおいて彼は人を世界の各地につかはして竹を採集せしめ、〈略〉。

さいしょ「最初」(名) 6 最初

九121 〇シカシ今度ノ候補者ノ中ニ、〈略〉人ガアルカラ、オトウサンハ最初カラチャント其ノ人ニキメテキタ。

十一20 裁判は事件の輕重によつて、最初區裁判所又は地方裁判所で行はれる。

十一21 又地方裁判所で行はれた最初の裁判に不服な者は、控訴院・大審院にと順次に上訴する。

十一66 一體人は最初どうして火を得たであらうか。

十一121 昨日〈略〉ガラス工場を見に行つた。最初にはいつたのは原料を調合するところで、〈略〉。

十二41 〇「ペーター・ベン」はピヤ

ノの前に腰を掛けて直にひき始めた。其の最初の一言が既にきやうだいの耳には不思議にひいた。

さいしん「最新」(名) 1 最新

十36 米國が此の運河を造るに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。

さい・す「際」(サ変) 1 際す「一シ」

十二84 〇たま／＼コーニが交易のため大陸に渡らんとするに際し、林藏は好機至れりとひそかに喜び、切に己をとまなはんことを求む。

さいせい「再生」(名) 1 再生

十28 〇グレースの眞心こめた看護によつて、全く元氣を回復した人々は、親子にあつく再生の恩を謝し、〈略〉。

さいせい ↓ございせいちゅう
さいそく・する「催促」(サ変) 1 催促する「一サ」

十一19 〇例へば、借りた金を、返す約束の日が來ていくら催促されても、返さない人がある。

さいだいきゅうこう「最大急行」(名)

1 最大急行
八71 〇「略」、おとうさんは最大急行の列車に乗つて、たつた十八時間着きました。

さいだんいた・す「裁斷」(五) 1 裁斷致す「一ス」

十72 〇「略」、訴訟ある者は申し出るがよい。理非を正して裁斷致す

であらう。」

さいたんこうふ「採炭坑夫」(名) 1

十84 〇採炭坑夫は四人づつ一組になつてゐて、其の内の二人が石炭を掘崩すと、他の二人がそれをざるで運んで炭車に入れる。

さいちゅう「最中」(名) 2 さい中最中 ↓まつさいちゅう
五66 〇道の兩がはは一面に青田で、ちやうど田の草取のさい中です。

十123 〇談話の最中に一人の老人がはいつて來ましたが、〈略〉。

さいなんたん「最南端」(名) 1 最南端
八19 〇揚子江ハ〈略〉、我が國ノ最南端ヨリ最北端ニ至ル長サヨリモ長シ。

さいにん「罪人」(名) 1 罪人
八43 〇そこで其の反物を出した者を呼出して、買先をたゞし、それからそれと調べましたので、とうとう罪人がわかりました。

さいばい「栽培」(名) 2 栽培
八33 〇「略」、其の中貴重なものの一は朝鮮人參です。〈略〉。さうして其の栽培については次のやうな話もあります。

十一50 〇他の國人も之にならつて、南洋におけるゴムの栽培は頗る盛になつた。

さいばい・する「栽培」(サ変) 2 栽

培する「一スル」

八32 〇これはもと野生のものでしたが、今から千何百年も前から栽培することになつたのだとつたへてゐます。

十一51 〇此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあとに種をまくか、又は苗木を植付けるのであるが、〈略〉。

さいばん「裁判」(課名) 2 裁判

十一目7 第六課 裁判

十一18 〇第六課 裁判

さいばん「裁判」(名) 12 裁判 ↓けいじさいばん・みんじさいばん

十一20 〇「略」、裁判所は、犯罪の疑のある者を十分に取調べて適當公平な裁判をする。

十一20 〇此の犯罪者を罰するための裁判を刑事裁判といふ。

十一20 〇裁判は事件の輕重によつて、最初區裁判所又は地方裁判所で行はれる。

十一21 〇ところで、區裁判所の裁判に不服な者は地方裁判所に上訴し、〈略〉。

十一21 〇「略」、地方裁判所に上訴し、尚其の裁判に不服な者は更に大審院に上訴する。

十一21 〇又地方裁判所で行はれた最初の裁判に不服な者は、控訴院・大審院にと順次に上訴する。

十一21 〇かういふ風に、三回くりか

へして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、つまり裁判を念入にするためである。

十一217 裁判を行ふのは判事の職務であり、〈略〉。

十一223 裁判の目的は、決して人を争はせ、又は人を罰することではない。

十一225 若し裁判が無いとしたら、人々相互の争がはてしなく行はれて、しかも其の争は、力の強い者やわるがしこい者が勝つことになるであらう。

十一228 若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、せつかくの法律もねうちが無くなり、我々は安心して生活することが出来ぬであらう。

十一2210 裁判は實に正義保護のための大切な仕事であり、〈略〉。

さいばんしょー「裁判所」(名) 5 裁判所 さいばんしょー・ちほうさいばんしょー

八799 軍隊や、裁判所や、外國とのつきあひや、其の他いろいろの費用になるのです。

十一192 其の場合に貸主から借主を裁判所に訴へると、裁判所は兩者の言分を聞いた上で、〈略〉、其の借金を返すやうに借主に命ずる。

十一193 〈略〉、裁判所は兩者の言分を聞いた上で、貸主の主張を正當とみとめれば、其の借金を返すやうに

借主に命ずる。

十一203 ところで、〈略〉は、法律で明かに定めてあるから、裁判所は、犯罪の疑のある者を十分に取調べて適當公平な裁判をする。

十一208 裁判所は國家が設ける機關で、これに區裁判所・地方裁判所・控訴院・大審院の四階級がある。

さいばん・す「裁判」(サ変) 2 裁判する 《シー・スル》

十一195 此のやうに、人々相互の間の訴訟を裁判するのを民事裁判といひ、訴へた方を原告、訴へられた方を被告といふ。

十一215 かういふ風に、三回くりかへして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、つまり裁判を念入にするためである。

さいび さいかいさいび

さいふ 「財布」(名) 8 財布 財布

七649 かの入夫は、〈略〉、先程渡貨をあらそつた所へ行つて見ますと、革の財布が落ちてゐました。

七674 〇「まあ、お待ちなさい。落した物は。」「革の財布で。」

七682 「〈略〉」といつて、入夫は財布を出して渡しました。

七683 かの男はゆめかとはかり喜んで、財布を幾度かいたゞきました、が、〈略〉。

七695 〇それがあなたのやうな正直なお方に拾はれて、財布をいたゞか

せてもらひましたが、〈略〉。

七697 〇「〈略〉、いたゞいたのは財布ではなくて、私の命でございます。

七701 ついては此の中の金を半分だけお禮のしるしにさし上げます。」といつて、財布の中に手を入れました。

七713 〇「〈略〉、仲間の者が國へ送る金をあづかつて、此の財布に入れて來たのでございます。

さいほう 「裁縫」(名) 3 裁縫 裁縫 八926 おとよは話し方ばかりでなく、書き方も算術も裁縫も料理も習つてゐる、〈略〉。

八931 げんに此の學校の卒業生で、〈略〉者もあれば、裁縫の先生になつてゐる者もあるなどと話された。

十1084 〇「今日小包にて粗末なる物、赤さんの御着物にもと御送り致し候間、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

さいほくたん 「最北端」(名) 1 最北端

八194 〇「揚子江ハ、〈略〉、我が國ノ最南端ヨリ最北端ニ至ル長サヨリモ長シ。

さいみょうじにゆうどうときより「最明寺入道時頼」(人名) 1 最明寺入道時頼

十714 〇「〈略〉、進みて御前にかしこまれば、最明寺入道時頼はるかの上座より、「それなるは佐野源左衛

門當世か。〈略〉。」

さいもく 「材木」(名) 1 材木 八1048 材木を機械にかけて軸木をこしらへてゐる者もあり、〈略〉。

ざいりょう 「材料」(名) 2 材料 十二128 かくて世界の各地をめぐつて、〈略〉、博物學や地質學の實地研究につとめ、種々の材料を集めて本國に歸つたのはそれから五年の後である。

十二169 〇「〈略〉、各部にそれ／＼掛の記者又は技術家ありて、或は出でて材料を取り、或は社内において編輯事務にたづさはる。

さいわい 「幸」(形状) 2 幸 十一436 〇「しかし幸に經過良好にて、熟も凡そ二週間餘にて全く相去り申候。

十二1303 〇「〈略〉今一應御評議下さることにありますれば、誠に日本國の幸でございます。

さいわい 「幸」(副) 1 さいはひ 十938 すると橋はまん中から折れて、三人は水中におちいつた。さいはひ附近の田で働いてゐた村の人々に助けられ、〈略〉。

さえ (副助) 16 サへ さへ 六133 〇「モセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ、イツデモ光ツテキマス。

七605 〇「ちよつと渡船に乗つてさへ、こはが者があります。

九893 〇「それにあの星は何時も眞北

に居るから、あれを見つけさへすれば、道に迷つた時などにもすぐ方角を知る事が出来る。

十46 10 〈略〉、今は手助する人さへも無くなつた。

十112 3 文 美術の光の かゞやく此の地、山皆緑に、水また清く、樂園日本の たへなる花と、とつ國人さへ めづるもうべぞ。

十一3 10 しかも我々に最も近いあの太陽でさへ、地球からは凡そ三千八百萬里も離れてゐる。

十一16 5 私は學校で習ふ本でさへ時々見失つて、大さわぎをすることがあります。

十一40 9 園 植林は貯金のやうなもので、植ゑてさへおけば、年々太つて利息が附いて行く。

十二9 6 園 〈略〉、打寄する波の音さへ何事かを語るに似たり。

十二38 5 園 家賃さへも拂へない今の身の上ではないか。

十二97 6 〈略〉、中には彼をそねむあまり、反抗するばかりでなく、迫害を加へようとするものさへも出て來た。

十二106 6 子どもらは〈略〉、「氣違よく」とはやし立て、中には古わらぢや小石を投げつける者さへあつた。

十二110 1 〈略〉、時には夜半までも〈略〉一心にのみを振るふことさへ

あつた。

十二110 7 洞門の長さは實に三百八間、川に面した方には處々にあかり取りの窓さへうがつてある。

十二115 8 園 電車は次第に汽車の領分までも侵略し、尚進んで電氣機關車さへも用ひられるやうになりました。

十二117 3 園 〈略〉、今では更に進んで〈略〉熱をとみなふことの少い電燈さへも發明されました。

さえぎる「遮」(五) 5 さへぎる

「ツール」

九109 8 大空には、午後の日が大砲の煙や砂ぼこりにさへぎられて、どんよりとかうり、〈略〉。

十33 6 しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。

十二104 4 〈略〉、左手の山は次第に頭上にせまり、遂には路の前面に突立つて人のゆくてをさへぎつてしまふ。

十二104 10 〈略〉、路をさへぎつて立つ岩山に、毎日々々根氣よくのみを振るつて、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。

十二127 4 〈略〉、門を守つてゐた兵士等が〈略〉、一せいに銃劍を取直して行くてをさへぎつた。

さえずる「囀」(五) 3 サヘヅル

三22 2 〈略〉、ムギ畠ノ上ニハアサハヤクカラヒバリガサヘツツテキマス。

四37 3 スズメハ〈略〉、ソバヘヨツテ、ヲドツタリサヘツツタリシテバカニシマス。

八2 6 小鳥は時々此の清水にのどをうるほしては、こずゑでさへぎるのである。

さえる「牙」(下) 2 さえる「エ」

十二21 6 あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよきんくんと聞える。

十二37 3 月のさえた冬の夜友人と二人町へ散歩に出て、〈略〉。

さえた「牙渡」(五) 1 さえた

十二43 6 月は益々さえたたつて來る。さお「竿」(名) 10 サヲ さを ↓ くらざお・はたざお

二56 4 園 ハイ、コレハセンドウサン、ナガイ竹ノサラデフネヲコギマス。

三52 4 園 「おい、長いさををふりまはして、何をしてゐるのだ。」

四61 6 見ればへさきに長いさをを立てて、〈略〉。

四61 6 見れば〈略〉、其のさをの先には、ひらいた赤い扇がつけてあります。

四62 1 さをの先の扇をいよといふのでせう。

五20 8 さをの先の矢車ががらがらと

鳴ると、鯉が大きな口で、思ふぞんぶん風をのんで、〈略〉。

五21 7 其の尾を下して來て、さをに着けるかと思ふと、〈略〉。

七11 1 船頭がさををつき立てて、それに舟をつないだ。

七11 2 さうしてさをの先に、赤いしるしのあるはんでんをしぼりつけて、「〈略〉。」と言つた。

七15 6 船頭がさををぬいた。

さおだけ「竿竹」(名) 1 さを竹

三26 8 石がきの下へ出たのは、〈略〉、竹になかなかつてゐます。あれはいまにさを竹にでもなるのでせう。

さか「坂」(名) 7 坂 さいいうらざか・ごくらくじざか・だらだらざか

六91 7 賊は坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。

九34 9 園 「此の坂を下りて、あの清水の所まで行くと、石井君のうちが見えるはずだ。」

九82 8 文 ちいさん今年六十の坂を越えたる足もとに、大いなる石横たへて、〈略〉。

九94 5 園 雪溪は谷を埋めた雪の坂で、ふもとの村から三里ばかり登つた所から始つて、〈略〉。

九95 6 園 登山者はかんじきをはいて、〈略〉、此の坂を登るのです。

九96 1 園 〈略〉、急な坂を矢のやうに早くすべるのですから、實に壯快で

した。
 十二65 3 リヤ王はもう八十の坂を越えた。
 さかい「塚」(地名) 2 塚 塚 ↓ せんしゅうさかい
 七105 5 小西程の者を塚の町人とのしり、(略)。
 七106 7 小西は日本の大将ならず、まことは塚の町人、道案内の者故、にげも致したであらう。
 さかい「境」(名) 7 界 境 ↓ むらざかい
 九74 8 陸中と陸奥との境にある幾つかのトンネルをくぐると、(略)。
 十131 4 (略)、さらばとて備前と播磨との境なる舟坂山にかくれ、(略)。
 十一60 10 (略)、約五時間後に石狩と十勝の境にある狩勝の峠にかゝる。
 十一61 10 汽車は無人の境を曲折して下る。
 十一105 4 次イグアススーの瀧は、ブラジル國と隣のアルゼンチン國との境にある大瀑布にて、(略)。
 十二102 府縣の界
 十二102 市の界
 さか・える「栄」(下二) 2 さかえる
 榮える「エー・エル」
 五70 1 (略)、さうでもしなければ、外に村のさかえる工夫はあるまいといふので、(略)。
 十60 6 お、降つたはく。世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面

白い事であらうが。
 さかおとし「逆落」(名) 1 さか落し
 七26 9 畠山重忠はひよどりごえのさか落しに、馬をしよつて下りたといふし、(略)。
 さかさ「逆」(形状) 2 サカサ さかさ
 五46 3 米をつくの、上にもうすをさかさにするしておけば、きねの上げ下しに米がつける。
 九19 3 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、(略)、羽ヲトヂテサカサニ草木ノ枝ニ止ツテキルト、(略)。
 さがしはじめる「捜始」(下二) 1 探し始める「エー」
 十二57 7 親子は總掛りで探し始めた。さがしまわる「捜回」(五) 1 探し廻る「エー」
 十二57 9 ねぢは「此處に居ます。」と叫びたくてたまらないが、口がきけない。三人はさんぐ探し廻つて見附からないのでがっかりした。
 さが・す「捜」(四・五) 9 サガス さがす 探す「エー・ス・エー」
 二20 5 ユフベカゼガフイタカラ、キツトクリガオチデキマス。
 サガシテミマセウ。
 三8 8 タベモノデモサガスノデセウ、キイロイクチバシデ、トキドキデメンヲツツキマス。
 五47 3 もう桑の葉をたべないで、頭を上げて、繭をかける所をさがしま

す。
 五49 2 まだ繭をかける場所をさがしてゐるのもあります。
 六61 1 月の光にすかして、あちらこちらさがしますと、(略)、石のらうがありました。
 八39 5 目をさまして見ると、ふろしきづつみがありません。(略)。驚いてあたりをさがしても見當らず、(略)。
 八98 2 杉野はいづこ、杉野は居ずや。」船内くまなくたづぬる三度、呼べど答へず、さがせど見えず、(略)。
 十二56 10 あれが無いと町長さんの懐、中時計が直せない。探せ、探せ。
 十二57 1 あれが無いと町長さんの懐、中時計が直せない。探せ、探せ。
 さかだ・てる「逆立」(下二) 1 サカダテル「エー」
 三10 1 ネコデモソバヘクルト、オヤドリハオコツテケヲサカダテマス。
 さかな「魚」(名) 4 サカナ
 二14 2 犬ガサカナヲクハヘテ、ハシノウヘヲトホリマシタ。
 二14 5 シタヲミルト、川ノナカニモサカナヲクハヘタ犬ガキマス。
 二14 6 ソノサカナモホシクナツテ、ワントーコエホエマシタ。
 二15 5 (略)、クハヘテキタサカナ

ハ、川ノナカヘオチテシマヒマシタ。
 さかなみ「逆波」(名) 1 さか波
 十27 3 打ちよせる大波、打返すさか波、(略)。
 さかなや「魚屋」(名) 2 サカナ屋
 さかな屋
 四27 3 米屋(略)さか屋さかな屋、そのほか大きな店は(略)。
 六32 8 カラノ荷車ヲヒイテ行クノハ、八百屋ヤサカナ屋デ、買出しニ行クノラシイ。
 さかのぼる「溯」(四・五) 6 サカノボル さかのぼる「エー・ール」
 六46 2 大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬ニカケテ、海カラ川ヘ上ツテ來ル。ダン／＼上流ニサカナボツテ、(略)。
 八19 8 汽船ハ河口ヨリオヨソ四百五十里、小舟ハオヨソ九百里サカナボルコトヲ得。
 十一8 5 それから五十海里ばかりさかのぼつて、黄浦江といふ支流に入り、(略)。
 十一8 6 (略)、黄浦江といふ支流に入り、更に十里餘りさかのぼると、其の西岸にある上海に着く。
 十二52 3 これは(略)大きな瀧があつて、魚類のさかのぼる道を絶つてゐるからである。
 十二86 10 翌日此の地を去り、河をさかのぼること五日、遂に目的地なるデレンに着せり。

さかみち 「坂道」(名) 1 坂道

七953 図 夏の眞晝の坂道に、重き荷車ひきかぬる 人を見かねて、物質は「略」。

さがみのくに 「相模国」(地名) 1 相模の國

九101 図 駿河の賊を亡し給ひし後、相模の國より上總の國へこえんとて、「略」。

さかや 「酒屋」(名) 2 さか屋 酒屋

四273 米屋「略」さか屋さかな屋、そのほか大きな店は「略」。

六331 病院ノ前ノ酒屋デハ雨戸ヲ明ケハジメタ。

さかり 「盛」(名) 2 さかり ↓でさかり・はなざかり・ひざかり・まっさかり

五61 こちらは今さくらさかりですが、あちらでは、もうとうにちつてしまつたさうです。

七362 図 「略」、歩道と車道の間に並木が植ゑてありますが、此の頃は其の葉の美しいさかりです。

さがる 「下」(五) 6 下ル 下がる

四623 舟はなみにゆられて、上つたり下つたりします。

五962 フサく下ツタウスムラサキノ實ハ、美シイ玉ノヤウニ見エマス。

七101 潮がずん／＼下がるので、舟はすつと進んで、たちまち海へ出

た。

八452 図 「略」、昨朝あたりから熱が下つて、食事進むやうになりましたので、「略」。

八885 信吉はびつくりして、二足三足後へ下つたが、「や、口をきいたぞ。「略」。」といつて、娘を引きよせて、「略」。

十357 今度は前と反對に、順次に三段を下つて、海と同じ水面に浮ぶ。

さかん 「左官」(名) 1 左官

八285 図 大工の家を建て、左官の壁を塗り、船頭の舟をこぎ、農夫の田畑を耕すも、皆手の働なり。

さかん 「盛」(形状) 24 サカン 盛

七286 図 今ハ商工業サカンニシテ、大工場多ク、エントツノ煙ツネニ空ヲオホヘリ。

七298 図 神戸ハ一太貿易港ニシテ、輸出入ノサカンナルコト横濱ニユツラズ。

八221 図 「略」、我が國トノ貿易甚ダ盛ナリ。

八511 図 「略」、土間の大金の上に積んであるせいろうからは、盛にゆげが上つてゐた。

八959 図 商工業盛ニシテ、焼物・塗物・扇・綿絲・織物等ノ産出頗ル多シ。

九225 図 「略」、四代前の歡庵様が、國民利福の本は農業を盛にするにあるとお氣づきになつて、「略」。

十549 鳩を通信に使つたのは、餘程古い時代からの事で、殊に一時は非常に盛に行はれたが、「略」。

十553 図 「略」、今では各國共に盛に傳書鳩の改良に力を用ひ、其の飼養を奨勵してゐる。

十871 機械類は、近年我が國でも盛に製造されるやうになつたが、「略」。

十8810 輸出入の額の増加して行くのは國家が次第に盛になる印である。

十969 図 支那の宋朝の末、北方に元といふ國おこり、勢日々に盛にして、宋の領地ををかし、かば、「略」。

十976 図 然るに元軍の勢いよく盛にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝・皇后も遂に敵手に落ちぬ。

十1252 図 又池・沼を利用して鯉・鮒を養ふことも盛にして、「略」。

十1335 図 「略」、勾踐越の王となるに及び、呉の勢盛にして越軍大いに破れ、勾踐は呉に捕へられぬ。

十一104 唯商業の取引の盛な部分は、相當に活氣を帯びてをり、「略」。

十一118 上海は「略」、近時工業も次第に盛になつて、「略」諸工場が勢よく黒煙を立ててゐる。

十一511 他國人も之にならつて、南洋におけるゴムの栽培は頗る盛になつた。

十一1091 圖 かくる處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、「略」。

十一1272 圖 我が一切經の出版を思

立ちたるは佛教を盛にせんが爲、佛教を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんが爲なり。

十一1273 圖 「略」、佛教を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんが爲なり。

十二351 図 「略」、又工場といふ工場には盛に黒煙が上つてゐました。

十二356 図 「略」、彼等が大戦後における自國の疲弊を回復するため盛に活動してゐるのには全く敬服しました。

十二1022 図 「略」古の奈良の都は、そも／＼如何に美しく、如何に盛なりしぞ。

十二1182 圖 又最近無線電話が發明されましたが、今やそれが盛に利用される機運となりました。

さき 「佐紀」(地名) 2 佐紀

十二1016 図 佐保・佐紀の連岡に北を限り、春日・高圓の山々を東に、「略」。

十二102 圖 佐紀

さき 「先」(名) 44 サキ さき 先

↓いっすんさき・えんさき・おにわさき・かいさき・かたさき・しごけんさき・たびさき・つつさき・つまさき・とくいさき・にわさき・はなさき・ひやくりさき・へさき・ほさき・まつさき・ゆしゅつさき・ゆびさき・われさきに

一353 圖 オホキナガンハ サキ

ニ、チヒサナガンハ アトニ、
ナカヨク ワタレ。

三三〇 略、ケサコソニイサン
ヨリサキニオキテミヨウトオ
モツテ、略。

三三九 それで略、小二郎の方
が、正一よりもかへつてさき
につきました。

三六七 ソレカラホソイ竹ヲエ
ニシテ、ソノサキニキレヲマ
キツケテ、略。

四二五 略、にはとりよりさき
に、すずめがくらのやねへに
げて行きます。

四三八 向ふで「ほか」といつた
のも、お前が先に「ほか」と
いつたからです。

四四一 一番先にしやうじやか
らかみが外へ出されました。

四六六 見ればへさきに長いさを
を立てて、其のさをの先には、
ひらいた赤い扇がつけてあり
ます。

四六二 さをの先の扇をいよ
といふのでせう。

五一九 略、金色の鶏が一羽とん
で来て、天皇のお弓の先にとまつた。

五二八 さをの先の矢車ががらりと
鳴ると、鯉が大きな口で、略。
五七五 此の山の杉も庄屋が先に立つ
て植ゑたのださうだ。
五八二 矢は狐の鼻のさきの地面につ

つ立つて、狐はころりとたふれまし
た。

六三〇 略、所きらはず食ひつきま
した、頭のでつべんから尾のさきま
で、からだ中すき間もなく。

六三五 義経は馬の上になうつぶしにな
つて、むちのさきでそれをかきよせ
ようとします。

六六六 略、果シテ磁石ノサキニ釘
ガタクサンツイテキタ。

六七三 略、川原が遠く北についで、
其のさきにやさしい姿の山がか
すんで見えます。

七一一 さうしてさをの先に、赤いし
るしのあるはんでんをしぼりつけて
略。

七二五 僕が一番先に海へ下りた。

七二七 略、「それ、川が渡れ
る。」といふことになりますと、我
もくと先をあらそつて渡りました。

七六六 略、人夫はすぐ川を渡つて、
かの男を追つかけました。略。見
れば先の男でございます。

八四八 略、怒ツテキル肩、サキノ
曲ツタ大キナクチバシ、スルドクテ
落着イテキル目、略。

八八七 信吉は略、娘の手をはな
して、頭の前から足の爪先までなが
めたが、略。
八九二 略、乾かした軸木の先に薬
をつける者もあり、略。
九五三 略、いや、これから先があの人

のほんたうにえらい所だ。

九五七 略、打臺にぱた／＼とた
きつけると、莖の先についてゐる穂
が、略。

九五四 ふり上げた棒の先が、強い日
光にきら／＼と光る。

九七二 略、衣川は、すぐ此の先
にある。」とおつしやつた。

九八七 略、あの北極星がひしや
くの柄の先になつて、もう一つ、小
さい北斗七星のやうなものが出来て
ゐますね。

九一八 此の大熊こそは、先にジュ
ノーに形を變へられたおかあさんの
カリストだつたのですが、略。

一〇三九 あ、今朝はなか／＼寒い。
指の先がしびれるやうだ。

一〇六一 此處から十八町程先に、山
本といふ宿場があります。

一〇八六 つるはしの先がきらりと光る。
一〇九二 僕は略、自分から先に
立つて渡つたのです。

一〇一〇 先に立つたにいきさんが、
「あ、咲いてゐる、／＼。」

一〇二四 葉の先からつるを出して、五
六寸の細長い袋をつるしてゐる。
一〇五九 其の枝の先にしよんぼりと止
つてゐる鳥の姿も、見るから寒さう
だ。
一〇三九 外の者は略、爪の先は
眞黒になつてゐる者が多うございま
した。

十一二六 略、これより先、秀吉は織田
信孝を攻めて大垣にありしが、略。

十一七二 次の宿のさきまで行つてみ
たが、やはり追ひつかなかつた。

十一八五 その中、先に進んでゐた者
が二三人列から離れて船に上つた。

一二一五 細長い管の一端を、とけた
ガラスの中に突つこんで引出すと、
先に赤い玉がくつついてゐる。

一二三〇 略、地下鐵道・乗合自
動車などの乗り下りにも、むやみに
先を争ふやうなことはありません。

一二七八 先づ岸近くまぐろの寄つて
来る場所を選んで、海岸から沖の方
へ二三百間も長く垣網を張り、其の
先へ身網を張る。

さき「崎」↓いなむらがさき・みほの
さき
さきかけ「咲掛」(名) 1 咲きかけ
一〇八九 白梅は今ちやうど眞盛りであ
るが、其の間に咲きかけの紅梅が
點々と交つて美しい。

さきこぼれる「咲溢」(下二) 1 咲
きこぼれる「一レ」

一〇九五 略、山畑の其處此處に野梅
の咲きこぼれてゐるのも面白く、
略。

さきころ「先頃」(名) 1 先頃
九一三 略、御轉任なされ候佐
野先生、先頃より御病氣の由承り候。

さきだす「咲出」(五) 1 サキ出ス
《一シ》

赤に咲いてゐる。

十1014 園 あゝ、咲いてゐる、く。

みよ子、ずぶん珍しい花があるだらう。此處は重に蘭の類を集めてある處だ。

十1014 園 あゝ、咲いてゐる、く。

十1019 たくさん咲いてゐる中で一番美しいのは、たれ下つた莖に、幾つ

も咲いてゐる薄紅色の花である。

十10110 園 略、たれ下つた莖に、幾つ

も咲いてゐる薄紅色の花である。

十1055 園 此の温室は 略、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに早く咲くのだ。

十1139 園 略、船は靜かに我等をのせて、行くは何處ぞ、桃さく村へ。

十1193 園 櫻の咲く季節でも霜の降る季節でも、やはりさうである。

十1299 4 園 七代七十餘年の帝都として、咲く花のにはふが如しと誇りし奈良の都も、略。

十12137 9 櫻の花の一時に咲き一時に散る風情を喜ぶのがそれであり、略。

さく 裂 四・五 2 さく 《一・一キ》ひびきさく

五12 2 ふしぎに思つて、尾をさいてごらんになりますと、つるぎが一ふり出ました。

七967 園 共同助力は人の道、おのれの利のみかへりみず、力を分

ち、物をさき、苦しむ者を、泣く者を、助けて共に樂しまん。

さく 裂 下二 1 1 はりさく

さく 下 下二 3 下グ 《一ゲ・一ゲ》

一ゲ

八598 園 ヨリテ看板ノ如キモ、略、小屋根ノ上ニカ、グルニイタレリ。

サレド食物ヲ賣ル店ニハ、略、軒

二下ゲタルモアリ。

九461 園 之ニ反シテ、略、五人ノ持主各其ノ馬ノ賣レザランコトヲ恐

レテ、争ヒテ價ヲ下グ。

九462 園 カクテ價ハ次第二安クナリテ、最モ價ヲ下ゲタル持主、其ノ馬

ヲ賣ルコトナル。

さくさく 副 1 さくく

十899 園 略、霜柱たつやぶかげの路、ふめばさくく銀みだる。

さくさく 副 1 さくく

十一12110 園 職工が珪砂にソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。シャベルでさくくかきまぜると、略。

さくじつ 昨日 名 4 昨日 上き

六396 園 昨日はとなり村から來てある歩兵の音吉君と二人で町を見物した。

九1119 園 昨日は美しきお話の本御送り下され、誠に有難く存じ候。

十一416 園 さて昨日御地より歸村せられたる河井氏の御話によれば、

貴兄には去月以來御病氣にて、略。

十一1066 園 昨日知人に誘はれてコーヒー園見物に出掛け候。

さくせいする 作成 サ変 1 作成する 《一シ》

十二887 法律を制定するには、政府

又は貴衆兩院の何れかが其の案を作

成して議會に提出する。

さくたろう 作太郎 人名 1 作太郎

五632 作太郎は父につれられて、は

じめて町へ行きました。

さくちようあたり 昨朝辺 名 1 昨朝あたり

八452 園 略、昨朝あたりから熱が

下つて、食事進むやうになりましたので、略。

さくねん 昨年 名 1 昨年

九1135 園 昨年僕の學校より、君の

學校へ御轉任なされ候佐野先生、先

頃より御病氣の由承り候。

さくまもりまさ 佐久間盛政 人名 2 佐久間盛政 佐久間盛政

十一234 園 略、柴田勝家、先づ佐

久間盛政をして一萬五千の兵を率ゐ、

近江の柳瀬に討つて出でしむ。

十一252 園 寄手の大將佐久間盛政は、

今日の戦に勝ちほこり、略。

さくもつ 作物 名 3 作物

五274 ツバメハ田ヤ畠ノ作物ニツク

虫ヲ取ツテタバマスカラ、人ノヤク

ニ立ツ鳥デス。

五914 作物の種や商品の見本も入れてよいことになつてゐますが、私はまだそれをあづかつたことはありません。

十12410 園 略、近年は作物も改良せられ、桑を植ゑて蠶を飼ふ者多く、殊に一村鶏を飼はざる家なし。

さくや 昨夜 名 2 昨夜 上ゆう

十1125 昨夜の風雨は名残なくをさま

つたが、海面にはまだ波のうねりが

高い。

十一4710 園 住持「昨夜のぞき見て知りたり。」

さくら 桜 名 12 サクラ さくら

二683 サクラガサクノハコレカラデス。

三112 イマハサクラヤナタネノ花ザカリデス。

五55 略、うめやさくらも、こちらよりはつと早くさくさうです。

五61 こちらは今さくらのさかりですが、あちらでは、もうとうにちつてしまつたさうです。

五135 園 うめやも、やさくらがみんな一しよにさいてゐます。

五295 園 もえる木のめに春風吹けば、うちのまはりのうめ・もも・さくら、かはるくくに花さきみだれ、略。

八14 黄色なのはならやくぬぎで、

赤いのはかへでや櫻やぬるである。
 十663 図 〈略〉主人の持来れるは、秘蔵の梅・松・櫻の鉢植なり。

十132 6 図 高德〈略〉、大いなる櫻の幹をけづりて、大文字に詩の句を書きつけたり。

十一93 9 図 櫻の咲く季節でも霜の降る季節でも、やはりさうである。

十二103 2 図 そのかみ〈略〉都大路を、大宮人の櫻かざし紅葉かざして往来しけむ、〈略〉。

十二137 9 櫻の花の一時に咲き一時に散る風情を喜ぶのがそれであり、〈略〉。

さくらい 「桜井」〔地名〕1 櫻井

十72 2 図 其の返禮として加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、合はせて三箇所の地を汝に授ける。

さくらがりす 「桜狩」〔サ変〕1 櫻がります 「一スル」

十二33 2 図 荒駒を馴らしがてらに、野邊遠く 櫻がりますますらのとも。

さぐる 「探」〔四〕2 探る 「一リール」

十二84 2 図 〈略〉、對岸の大陸に渡りて其の地の模様を探るは、かへつて目的を達するに便なることを知りぬ。

十二86 5 図 土人等林蔵を珍しがりて之を他の家に連行き、大勢にて取囲みながら、或は抱き或は懷を探り、或は手足をもてあそびなす。

さけ 「鮭」〔課名〕2 鮭

六目16 第十三 鮭

六45 3 第十三 鮭

さけ 「酒」〔名〕13 サケ 酒

二75 6 ソノバン シュテンドウジ ハサケ ニヨツテ ネマシタ。

五10 6 図 強い酒をたくさんつくれ。五10 8 酒が出来ると、みことはそれを八つのをけに入れさせて、〈略〉。

五11 4 間もなく大蛇が来て、〈略〉、其の強い酒を飲みました。五43 2 たけるも酒によつてねむりました。

五53 4 此の人に年取つたおとうさんがありまして、酒がすきでございまして。五53 6 〈略〉、かへりに酒を買つて来ては、おとうさんを喜ばせてゐました。

五54 1 すると酒のほひがしますので、ふしぎに思つて、見まはしますと、〈略〉。

五54 3 〈略〉、ふしぎに思つて、見まはしますと、石の中から酒にた物がわいてゐます。五54 4 なめてみると、酒のあぢがいたします。

五54 7 喜んで、それから毎日其の酒をくんで来て、おとうさんに上げました。

五55 4 酒の出る所を御らんになって、〈略〉。とおほせになりました。

十二86 7 図 土人等怒りて林蔵の頭を打ち、強ひて酒を飲ましめんとす。

さけ 「鮭」〔名〕6 鮭

六45 4 叔父サンニ鮭ノ話ヲ聞イタカラ、ワスレナイ中ニ書イテ置カウ。

六45 6 鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ魚デモアル。

六46 1 大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬ニカケテ、海カラ川ヘ上ツテ來ル。

六47 7 翌年ノ春ニナツテ、卵カラカヘツタ鮭ハ、川ヲ下ツテ海ヘ行ク。

六48 3 図 四五年モタツト、〈略〉歸ツテ來ルサウデ、「之ヲ鮭ノ里歸トデモ言ツタヲヨカラウ。」ト叔父サンガ言ハレタ。

六48 5 鮭ハ寒イ國ノ魚デ、我が國デハ樺太ト北海道ガオモナ産地ダサウダ。

さけび 「叫」〔名〕2 叫

八97 8 図 〈略〉、やみをつらぬく中佐の叫。「杉野はいつこ、杉野は居すや。」

十120 2 図 拍手かつさい、天地をとどろかす萬歳の叫、勇壯なる軍樂の調、〈略〉一せいにあぐる歡呼の聲。

さけびこえ 「叫声」〔名〕2 叫び聲

十一56 1 ちやうど其の時、「ふかだく。」といふ船長のけたゝましい叫び聲が聞えた。

十一56 3 人人は叫び聲に驚きあわて、我先にと船へもどつて来る。

さけぶ 「叫」〔四・五〕18 さけぶ 叫

ぶ 《一ピーブーン》ひなきさけぶ

五43 7 なみくの者なら、「あつ」とさけんで死にませうが、〈略〉。

五85 7 図 其の時表で水だくときさけぶこゑがしましたので、〈略〉。

七30 9 図 獅子の目は火の如くにもえ、怒りてさけぶ聲には、百獸おそれてにげまどへど、〈略〉。

七42 1 御用船を見つけると、「一太郎やあい。其の船に乗つてゐるなら、鐵砲を上げろ。」とさけんだ。

七42 2 おばあさんは又さけんだ。九100 8 中尉は〈略〉、いつものはれぐとした聲で、「そら、もう一息だぞ。襲へく。」と叫んだ。

十48 2 喜三右衛門は、〈略〉、やがて「よし。」と叫んで火を止めた。十112 10 マストの上の見張人が不意に「鯨 鯨。」と聲高く叫んで、北の方を指さした。

十一30 3 図 正國も〈略〉、俄に槍を投捨てて大手をひろげ、「組打。」と叫ぶ。

十一56 6 老砲手は氣ちがひのやうになつて、「逃げろく。」と聲を限りに叫んでゐるが、〈略〉。

十一58 2 「あつ。」と、思はず人々が叫んだ。

十一86 10 波打際には大勢の人が旗を振つたり帽子を振つたりして、「萬歳々々。」と叫んでゐる。

十一87 6 〈略〉、僕も思はず「萬

歳。」と叫んだ。

十一1213 ジョージは後を見送つて、帽子を振りながら叫んだ。「ウェリントン公爵萬歳。」

十二433 「あゝ、あなたはベートーベン先生ですか。」きやうだいは思はず叫んだ。

十二577 ねちは「此處に居ます。」と叫びたくてたまらないが、口がきけない。

十二585 〈略〉女の子がそれを見附けて、思はず「あら。」と叫んだ。

十二1276 安方は大音に「西郷はどこに居る。」と叫んだ。

さける 「裂」 ↓ はりさける

さける 「避」 (下二) 1 さける 《一ル》

七581 図 〈略〉、かねや汽笛を鳴らすのは、外の船に自分等の船の居ることを知らせて、衝突をさけるためであります。

さける 「下」 (下二) 3 下げる 《一ゲ》 ↓ つりさげる・ゆりさげる

五241 入口の左手には、小切やえりや帯あげなどがたくさん下げたてあつて、それを見てゐる人も大ぜいあります。

九1156 水兵は〈略〉、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、やがて頭を下げて、「〈略〉。」と言つて、其の手紙を差出した。

九1197 水兵は頭を下げて聞いてゐた

が、やがて手をあげて敬禮して、につこりと笑つて立去つた。

さける 「提」 (下二) 1 サゲル 《一ゲ》

六338 ペンタウヲサゲテ來ル女工ハ、サツキカラ汽テキノ鳴ツテキル工場へ急グノデアラウ。

ささく 「鎖国」 (名) 1 鎖國

十二1352 殊に徳川幕府二百餘年の鎖國は、國民をして海外に發展する意氣を消磨せしめ、徒に此の小天地を理想郷と觀じて、世界の大勢を知らぬ國民とならしめた。

ささ 「笹」 (名) 4 ささ

三606 風がしづかにふいて來て、さしのささがさらさらとおとをたててゐます。

三616 男の子三人はささのはをとつて、舟をこしらへました。

三618 みよ子はささの小えだを手にもつて、土ぼしの上にたちました。

三646 みよ子はさつとささの小えだを上げて、「二ばんがち、五郎さんの舟。」

ささ・ぐ 「捧」 (下二) 1 ささぐ 《一ゲ》

十333 図 又日々に奉る供へ物には、御生前殊に御好みありし品々を選ぶ由なるが、それらの品を社務所にたづさへ來て、神前にさ上げたしと願ひ出づる者數多しといふ。

ささげつくす 「捧尽」 (五) 1 捧げ盡くす 《一シ》

十二13210 君と親とに眞心を捧げ盡くして仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、今更いふまでもない。

ささげつつ 「捧銃」 (名) 2 捧銃 捧げ銃

九671 此の時信號兵は「君が代」のラッパを吹き、衛兵隊は捧銃の敬禮を行ひ、〈略〉。

十二1314 警衛の兵士等は、〈略〉、西郷が後に續いてゐるのを見て、一同恭しく捧げ銃の禮をした。

ささ・げる 「捧」 (下二) 5 ささげる 《一ゲ》

十105 程なくフィリップは病室にはいつて來て、うやくしく藥のコップを王にさ上げた。

十494 皿をさ上げた喜三右衛門は、こをどりして喜んだ。

十二948 そこで彼は〈略〉、たまぐ其處にゐた少女のさ上げた牛乳を飲んで元氣を回復した。

十二10510 〈略〉、たとへ何十年かゝらばかゝれ、我が命のある限り、一身をさ上げて此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、〈略〉。

十二1105 かうして、〈略〉ちやうど三十年目に、彼が一生をさ上げた大工事が見事に成就した。

ささなみ 「小波」 (名) 1 ささなみ

十一343 図 月影のさなみにくだけ、漁火の波間に出没する夜景もまた一段の趣あり。

ささふね 「世舟」 「課名」 2 ささ舟 三目8 二十 ささ舟

三603 二十 ささ舟

ささめく ↓ わらいささめく

ささやき ↓ くまのささやき

ささやきあ・う 「囁合」 (五) 1 さ、やき合ふ 《一ツ》

六673 青年たちは之を聞いて、さ、やき合つた。

ささやく 「囁」 (四) 1 ささやく 《一キ》

十一462 図 或夜小僧、住持の居間に來りて、「〈略〉。」とささやきければ、住持ひそかに行きて見るに、〈略〉。

ささんか 「山茶花」 (名) 1 ささんくわ

四246 えんさきのささんくわに、目白が二は來てゐて、枝から枝へとんでゐます。

さし ↓ ひとさしゆび・みずさし・ものさし

さしあ・げる 「差上」 (下二) 6 さし上げる 差上げる 《一ゲル》

五453 図 今御名をさし上げます。

七483 〈略〉、與五左衛門は忽ちはねかへして、彦六を組みしき、手早く首を取つてさし上げた。

七699 図 ついては此の中の金を半分だけお禮のしるしにさし上げます。

七七一〇 〇略、だんなは〇略、此

の金をあなたにさし上げましても、おしかりになることはあるまいと思ひます。

十646 〇お連れ申ししたが、差上

げる物はあらうか。」「粟飯ならござ

十649 〇お宿は致しても、さて何も

差上げる物はございません。

さしあたり 〔差出〕(副) 1 さしあ

り

十一95 〇リンカーンが七歳の時、一

家はインディアナ州に移つたが、さ

しあたり家がなくてはならぬので、

父は自分で木を切出して小さな家を

造つた。

さしだす 〔差出〕(四) 1 差出す

《一ス》

十二854 〇略、林蔵はこれまでの

の記録一切を取りまとめ、之を従者

に渡していふやう、〇略、汝必ず

之を白主に持歸りて日本の役所に差

出すべし。』と。

ば舟を引きて之を越え、河・湖に出

づればまた舟を浮べて進む。

十二1049 此の青のくさり戸にさし

かゝる手前、路をさへぎつて立つ岩

山に、〇略。

さしき 〔座敷〕(名) 2 ザシキ ざし

き 〇おさしき

二57 〇オハナハ オチヨザシキ

ヘトホシテ、オチャト オクワシ

ヲダシマシタ。

三774 十五やの月がさしきの

まん中まで さしてゐます。

さしこむ 〔差込〕(五) 3 さし込む

《一ミーン》

十4810 朝日のさわやかな光が、木立

をもれて窯場にさし込んだ。

十二582 其の時、今まで雲の中に居

た太陽が顔を出したので、日光が店

一ぱいにさし込んで来た。

十二591 〇略、やがてピンセットで

差出す 《一シーセ》

三302 〇「ねえさん、これをあげま

す。」と、こしにはさんだ手ぬ

ぐひのはしひきさいてさし出

せば、〇略。」

九5310 〇略、少しでも他人の負擔

を軽くしようとして、自分の財産を

残らず差出した。

九1161 どうぞ之を御覽下さい。」と

言つて、其の手紙を差出した。

さしつかえ 〔差支〕(名) 2 差支

七1083 〇もと此の方には近い親類の

者、豊臣と名のつたのも差支がな

い。』といつて、〇略。

九264 〇わたしも〇略、くはしく

計畫を立てた事もあるが、いろ

く〇差支があつて、實行が出来ず

にしまつた。

さしのぼる 〔差上〕(四) 1 さし昇

る 《一ル》

むける 《一ケ》

六227 木曾義仲が都へせめ上ると聞

いて、平家はあわてて討手をさしむ

けました。

さしも 〔副〕 1 さしも

十二335 〇眺望臺で眺めると、〇略、

さしもの大きなバリー市も殆ど一目

に見えます。

さしわたし 〔差渡〕(名) 4 さしわた

し

五397 〇私どもが六人で、やつとか

かへました。「さしわたしは八尺も

ある。」と先生がおつしやいました。

八306 かまはさしわたしが一丈ぐら

ゐ、高さが四五尺ぐらゐで、〇略。

十一119 さうして其のさしわたしは

三十五萬四千里、即ち地球の百九倍

餘りに當り、其の容積は〇略。

十一849 ふと見ると、さしわたし六

七寸もある大きなくらげが、ふわり

く

と浮いてゐる。

さす 〔止〕 〇いさす

さす 〔刺〕(四・五) 7 サス さす

《一サ・一シ・一ス》

一185 サルガミツ ヲツケ ニイ

キマス ト、ハチガチクリト サシ

マシタ。

三783 〇略、すすきも、花いけに

さしてそなへてあります。

四845 モモノ花 ガ花 イケ ニサ

シテアリ、ヒシモチモ モウソナ

ヘテアリマス。

さしあたりーさす

さしあたりーさす

さしあたりーさす

さしあたりーさす

さしあたりーさす

さしあたりーさす

さしあたりーさす

5817 さて宗任がかりまたをぬき取つて、義家にかへしますと、義家は世をくるりとむけて、うつばへさゝせました。

61024 なるほど、去年鯉のぼりを立てた時、しやうぶとよもぎを軒へさした。

10657 図 めろりの火は次第におとろへ行きて、ひまもる夜風はだへをさすが如し。

10651 略、どれを見てもどれを見ても、一髪にさしてみたい。

さす「点」(五) 1 さす 《一シ》

10541 略、紅をさしたかと思はれるやさしくばし、略、鳩は見るからに愛らしいものである。

さす「差」(四・五) 13 サス さす

《一シ・ス》 ↓ おさす・ゆびさす

10171 図 二郎、おまへはそのゆびで人をさしますか。

10307 圖 略、「さ、いきませう。」ときやうだいは かくかうさして いそぎゆく。

10604 日の光がやはらかにさして、小川の水はきれいにすきとほつてゐます。

10775 十五やの月がさしきのまん中までさしてゐます。

10961 庭サキノブダウ棚二、今、夕日ガサシテキマス。

105027 はじめて東京見物に來て、此の停車場へ降りる人は、大てい先づ

第一に宮城をさしてまゐります。

10265 庭の菊も白い花びらに赤みがさして來た、霜にあたつたからだらう。

106572 これが萬じゆの姫で、略、うばをつれて、鎌倉をさして上りました。

10755 潮がだんだんさして來て、何時の間にか洲が見えなくなつた。

107219 義貞は之を見て、「ものども進め。」と、其の遠干がたを眞一文字に鎌倉さして攻めこみました。

10412 向ふの山の頂に日の光が赤々とさして來た。

10892 圖 冬の朝日のさす軒下に、依あむ手のいそがしげなる 父と母とに暇を告げて、略。

10906 圖 略、はうき手にく

10906 圖 略、はうき手にく 此方をさして 語りつゝ來る若き人々、略。

さす「鎖」(五) 1 さす 《一ス》

101187 ジョージがとんで行つて門の戸にくわぬきをさすが早いか、騎馬の人たちはもう門の外まで乗りつけた。

さす「座」(四) 1 坐す 《一セ》

10656 圖 三人はめろりを圍みて坐せり。

さすが「流石」(副) 4 さすが 101155 略、氣長くあしらつてゐるうちに、さすがの鯨も次第に弱つて、船から五十メートルぐらゐの處まで

引寄せられた。

101304 圖 京中の貴賤男女、此の行幸を悲しみて涙と共に見送り奉り、警固の武士もさすがによろひの袖をしぼりけり。

102302 圖 陳列品の多種多様で、しかも其の數量の數限りもないのは、さすがに世界の大博物館といはれるだけあると思ひました。

102314 圖 此處はさすがに藝術の都として世界に聞えてゐるだけあつて、建物なども一般に壯麗です。

さす「ける」授「(下) 3 さづける

授ける 《一ケ・ケル》 ↓ おさずけくださる 5555 圖 「これは親孝行のほうびに、神々がさづけられたにちがひない。」

108338 すると或夜ゆめの中に、明日何山の何所へ行けば、望のものをさづけてやるといふ神様のお告がありました。

10723 圖 其の返禮として 略、合はせて三箇所の地を汝に授ける。

さすらう「流離」(四) 1 さすらふ

《一ヒ》 121234 圖 はやて吹くやみにたゞよひ、寄るべき海にさすらひ、思出の深き船路や、略。

さする「摩」(四) 1 さする 《一ル》

108283 圖 もし手なくば、略。略、かゆき所をかくことも出來ず、いた

き所をさすることも出來ざるべし。

さ・せる「為」(下) 5 サセル させる 《一セ》 ↓ あつこうさせる・きようそうさせる・じようりくさせる・ちゆうしさせる・でいりさせる・はってんさせる・ぶらぶらさせる

103612 圖 二郎 略 舟をながして あそびませう。」三郎 又はしりくらをさせませう。

104792 略、私が風の音をこつとさせてやりましたら、送つて行く人が「略。」といひました。

106322 マツ先ニ出アツタノハ牛乳配達デ、車ノ音ヲ高くサセテ、ハシツテ行ツタ。

107463 圖 よつて明日たがひに勇士を一人づつ出して組討をさせ、勝つた方のものが川中島を取ることにしては。

1011006 圖 辨しやうすることが出來ませんから、其の代りに何か仕事をさせて下さい。

させる(助動) 19 させる 《サセ・サセル》

105111 酒が出來ると、みことはそれを八つのをけに入れさせて、略。

106238 其の夜のことで、義仲は 略、兩方から一度にどつとときのことゝあげさせました。

106943 さうして、これをよけようとして賊のさわぐ所を射させて、又々

五千人餘もころした。

六96 すると正成は、〈略〉、たくさんなたいまつを出して、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。

六96 7 さうして其の上へ油をふりかけさせた。

七22 3 此の時義貞が方々へ火をかけさせますと、濱風が之をあふり立てたからたまりません。

七72 3 妻や子どもに、朝晩おねんぶつのかはりにとなへさせます。

七100 7 秀吉は城の庭にしき物をのべさせ、幕やびやうぶでまはりをはせ、〈略〉。

八115 信作が落ちたのにかまはず馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、〈略〉。

八23 2 呉鳳は役人になつた時から、どうかして首取の悪風を止めさせたものだと思ひました。

八23 6 〈略〉、其の後のお祭には、毎年其の首を一つづつ供へさせました。

八41 7 越前守は早速門をしめさせて、見物人一同の所名前を書取らせ、さておごそかに、「〈略〉。」と申し渡しました。

八43 4 越前守は呉服屋の手代を呼出して、其の中に盗まれた品のありなしを調べさせました。

八43 9 越前守は再び一同を呼出して、さきに納めさせた白木綿を返し、〈略〉。

十57 2 又暗い時の飛行に馴れさせて、夜間に使ふ事も出来るし、〈略〉。

十57 4 〈略〉、飼養所を移動し、其處を見覚えさせて飛歸らせるやうにする事も出来る。

十57 6 鳩に手紙を運ばせるには、〈略〉、又は胸に袋を掛けさせて、其の中に入れるのである。

十二108 4 そこで人々は〈略〉、老僧の命のあるうちに其の志を遂げさせると共に、〈略〉。

十二110 2 老僧の終始一貫した根氣は、遂に村人を恥ぢさせたものか、仕事を助ける者が又ぼつくと出来て来た。

さそ 「無」(副) 3 さぞ

八68 8 今年の競馬はさぞ見ものだらう。」

九26 10 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、さぞ心細くもあらう、又つらい事もあるであらうが、〈略〉。

十60 7 世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。

さそ・う 「誘」(四・五) 2 さそふ 誘ふ 《一八》

七21 2 すると、〈略〉、落ちて行く潮にさそはれて、賊の軍船はことごとく沖へ流れてしまひました。

十一106 6 園 昨日知人に誘はれてコーヒー園見物に出掛け候。
さぞかし 「無」(副) 1 さぞかし

十107 2 園 〇 〇 〈略〉、此の度始めて妹を得られ候事、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

さた 「沙汰」(名) 2 沙汰 ↓ごぶさた・ぶさた

十70 8 頃しも鎌倉より、勢ぞろへの沙汰俄に國々に傳はりぬ。

十二130 10 其の餘の事は拙者の一存にはまゐりませぬから、追つての沙汰をお待ち下さい。

さだきち ↓たかだやさだきちのの
さだまる 「定」(五) 1 さだまる

《一リ》

四65 8 弓をとりなほして、向ふを見わたすと、舟がゆれて、まどがさだまりません。

さたみさき 「佐田岬」(地名) 1 佐田岬

十一32 2 四國の西には佐田岬長く突出で、九州にせまりて豊後海峡をなす。

さだむ 「定」(下二) 3 定ム 定む 《ムル・一メ》

七109 7 農家ニテハ種時・〈略〉取入レ等ヲナスニ、彼岸ヲ目アテトシテ、日ヲ定ムルコト多シ。

十一81 6 丈餘のろかい操りて、行手定めぬ浪まくら、百尋・千尋海の底、遊びなれたる庭廣し。

十一112 7 天下を定むる三分の計、たなそこの上に指すがごと。
さだめ 「定」(名) 2 定め

八64 それは〈略〉、勝つた子どもを出した村が、〈略〉、五箇村の頭になるといふ定めであつた。

十二62 10 即ち赤・白合はせて十三條の横筋は、〈略〉、永久に變化することあらざれども、藍地中の星章は、常に州の數と一致せしむるを定めとす。

さだめて 「定」(副) 1 定めて

九117 1 一人の子が御國の爲いくさに出でし事なれば、定めて不自由なる事もあらん。

さだめる 「定」(下二) 4 さだめる 定める 《一メ》 ↓みさだめる

四66 4 よ一は弓に矢をつがへ、よくねらひをさだめて、ひようといはなしました。

十一113 7 〈略〉、ねらひを定めて、ずどんと一發、破裂矢をしかけたもりを打つ。

十一20 3 ところで、どういふ事をすれば罪になるか、〈略〉、法律で明かに定めてあるから、裁判所は、〈略〉。

十一57 9 つと大砲のそばへ寄つて、急いで彈丸をこめ、ねらひを定めた。

さちこのの 「人名」 3 さち子このの
八69 7 五月七日 父から 太郎どの さち子このの
八74 9 一月十八日 父から 太郎どの さち子このの

十108 9 五月五日 叔母より さち子このの

さつ ↓ いっさつ・にさんさつ

さつき 「先」(名) 8 サツキ さつき

五402 〈略〉、べんたうをたべてゐると、さつきの學校の小使さんが麥ゆを持つて来て下さいました。

五494 さつきおかあさんが、「民子〈略〉。」と、ねえさんにおつしやいました。

六338 ベンタウヲサゲテ來ル女工ハ、サツキカラ汽デキノ鳴ツテキル工場へ急グノデアラウ。

十1057 外はさつきよりも一そう風が強くなつたのか、ガラス越しに見える向ふの木がひどくゆれる。

十二362 〈略〉、さつきおとうさんのいひつけで、明日の用意に出しておいた植林地の書付を開いて見る。

十一719 園 あの新上屋に御泊りになつて、さつき御出かけの途中『〈略〉』と、御立寄り下さいました。十二215 ふと見ると、〈略〉蜜柑を採つてゐる。さつきの歌の主であらう。

十二4210 ベートーベンはかういつて、さつき娘がひいてゐた曲を又ひき始めた。

さつさと (副) 1 さつさと

七737 人夫は之を聞いて、首をふりました。「〈略〉。」かういつて、さつさと歸つて参ります。

ざっし 「雑誌」(名) 4 雑誌 雑誌 五913 たまには雑誌や寫眞がはい

こともあります。

十一168 〈略〉、そこへ弟さんが雑誌を二三持つて来て、〈略〉。

十一169 〈略〉、そこへ弟さんが雑誌を二三持つて来て、本棚に並んでゐる雑誌の間へそれ／＼お入れになりました。

十一1610 聞けば、雑誌の類は號の順に並べておいて、〈略〉。

さつしもうす 「察申」(四) 2 察し申す 「一シ」

十1072 園 〈略〉、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十1079 園 〈略〉、御前様には御家事御手つだひのため、何かと御いそがしき事と察し申し候。

さつす ↓ おんさつしくださる・おんさつしもうしあぐ

ざつそう 「雑草」(名) 1 雑草

十一956 父が木を伐れば自分は雑草をかり取る、〈略〉といふ風にかひがひしく働いてゐた。

さつそく 「早速」(副) 10 さつそく早速

六517 頼朝は一目見た上でと、萬じゆを呼出しましたが、〈略〉、さつそく舞姫にきめました。

八417 越前守は早速門をしめさせて、見物人一同の所名前を書取らせ、〈略〉。

九545 園 社長さんは早速荷車を一臺借りて来て、醬油のはかり賣を始め

た。

九1137 園 〈略〉、先頃より御病氣の由承り候。早速御見舞に参上致したく存じ候へども、〈略〉。

十266 二人は早速ボートを出す支度に取りかゝつた。

十1079 園 近き處ならば早速上り候て御世話も致すべく候へども、〈略〉。

十二119 〈略〉、珍しい甲蟲が二匹ゐた。早速兩手に一匹づつつかむと、

又一匹變つたのが見えた。

十二588 時計師は早速ピンセットでねぢをはさみ上げて、大事さうにもとのふたガラスの中へ入れた。

十二716 王は胸も張裂けんばかりに怒り、早速馬にむちうつて次女リガンの許に走つた。

十二1259 〈略〉、安方は三月十三日官軍の參謀西郷隆盛に會見を求めた。西郷は早速承知して、芝、高輪の薩摩屋敷で會見したが、〈略〉。

さつと 「颯」(副) 5 さつと

三646 みよ子は さつと ささの小えだを上げて、「一ばんがち、五郎さんの舟。」

五867 園 〈略〉、二階のまどからのぞいて見ますと、水が表の通をさつと洗ひました。

六546 之を聞くと、頼朝のかほの色はさつとかはりました。

六948 城兵はさつと引上げたが、二十三人はふみとゞまつた。

十二397 妹の顔はさつと赤くなつた。

さつぱり (副) 2 サツパリ さつぱり

二217 園 「モウ人ガヒロツタノカ、サツパリアリマセン。」

十二537 ねぢは驚いてあたりを見廻したが、〈略〉、何が何やらさつぱりわからなかつた。

さつぱりする (サ変) 2 さつぱりする 「一シ」

五571 氣がさつぱりしてゐて、二三日たつと、前からの友だちのやうになりました。

十1236 園 着物は粗末ながら、さつぱりしたものを着て、齒もよくみがいてゐました。

さつぼろ 「札幌」(地名) 1 札幌

十一594 札幌に來て先づ感ずることは、街路が真直で幅の非常に廣いことである。

さつぼろ 「札幌」(題名) 1 札幌

十一593 第十四課 北海道 札幌 さつまやしき 「薩摩屋敷」(名) 2 薩摩屋敷 薩摩屋敷

十二1259 西郷は早速承知して、芝、高輪の薩摩屋敷で會見したが、〈略〉。

十二1263 翌十四日の會見は、芝、田町の薩摩屋敷で行はれた。

さて 「扱」(接) 21 さて

五813 かけよつて見て、宗任が「〈略〉。」と言ふと、義家が「〈略〉。」と言ひました。さて宗任がかりまた

をぬき取つて、義家にかへしますと、
《略》。

六五八 〇《略》、人々にかはいがられま
した。さて萬じゆは、だれか母の事
をいひ出す者はないかと氣をつけて
ゐますが、《略》。

六六七 青年たちは之を聞いて、さ
やき合つた。「《略》」「《略》」さて
主人に火事の話をして、義捐金のこ
とをいひ出すと、《略》。

七一九 義貞は《略》、はる／＼と海
上を拜しました。さて、心の中に、
《略》と念じて、《略》太刀を取つて、
海の中に投入れました。

七六〇 〇船長はかくいひて後、一だ
ん聲をほり上げて、「さておしまひ
に一ついつて置きたい事があります。
八二六 〇蕃人どもは聲を上げて泣きま
した。さて蕃人どもは、呉鳳を神に
まつて、《略》とちかひました。

八三二 次に其の小屋のそばへ土と石
でかまをつく。かまは《略》、高さ
が四五尺ぐらゐで、《略》、後の方に
煙出の口を明けるのである。さて山
の木をきり倒して、四五尺の長さに
きりそろへ、それをぎつしりとかま
の中に立て並べ、《略》。

八四八 越前守は早速門をしめさせて、
見物人一同の所名前を書取らせ、さ
ておごそかに、「《略》。」と申し渡し
ました。

九五三 〇《略》、それから又長い間忠

實に勤めて、三十ぐらゐの時、《略》
小さい米屋を始めた。さて商賣を始
めると、あの人ならといふ信用はあ
るし、《略》。

十六四 〇お宿は致しても、さて何も
差上げる物はございません。

十六七 〇僧は其の厚意を深く謝し、
さて「失禮ながらお名前を聞かせて
頂きたい。」

七一九 〇《略》、眞先かけて参つたは
感心の至り。さて一族ともに奪はれ
た佐野三十餘郷は、《略》汝に返し
あたへる。

十〇六 〇御手紙有難く拜見致し候。
《略》。さて御父上様の御葉書ならび
に御前様の御手紙により、御母上様
には去る二日御安産にて、玉の様な
る女の御子御生れの由承り、《略》。

十一八 〇うや／＼しく拜んでさて頭を
上げると、神前の大きな神鏡が、き
ら／＼とか／＼やいてゐて神々しい。
十一四一 〇久しく御無音に打過ぎ、
失禮仕候。さて昨日御地より歸村せ
られたる河井氏の御話によれば、貴
兄には去月以來御病氣にて、《略》。

十一〇八 〇伐倒したる木は乾くま
で其のまゝに致置き、さて四方より
火を放てば、《略》燃ゆる光景は、
實にすさまじきものに候。

十一二〇 〇ジョージは、《略》、帽子を
ぬいで恭しく敬禮して、さて静かに
口を開いた。

十二一七 〇此の外、《略》、事件起れ
ば直に電話又は電信にて通知し来る。
さて編輯部にては刻々集り来る原稿
を選擇整理し、繪畫・寫眞等と共に
之を印刷部に送る。

十二六六 〇王は其の治めてゐるイギリ
スを三分して娘たちに與へ、《略》、
餘生を安樂に送らうと決心した。さ
て領地をゆづる日に、王は娘たちを
面前に呼んで、《略》。

十二八四 〇網をすき、舟を漕ぎ、漁
業の手傳などして土人に親しみ、さ
てさま／＼の物語を聞くに、《略》
ことを知りぬ。

十二〇八 〇僧は《略》、どうにか仕方
はないものかと深く心をなやました。
さていろ／＼と思索したあげく、遂
に心を決して、《略》。

さてさて（感）六 さて／＼
五六〇 〇 さて／＼、虹は美しい。
《略》、七つの色をならばせて、空
のあざぬへ一筆に、だれがかいた
か、虹の橋。

五六一 〇 さて／＼、虹はおもしろい。
《略》、用ありそうに天と地の
遠きをつなぐ雲の上。だれが渡る
か、虹の橋。

六五三 〇 翌日頼朝は萬じゆを呼出し
て、「さて／＼、此のたびの舞は日
本一の出来。
七五三 〇 役人はわけをくはしくたづ
ね、人夫をも呼出して、「さて／＼、

二人ともまことに心がけのよい者。
近頃かんしん致した。

七〇二 〇 秀吉が之を聞いて、「さて
／＼、早く参つた。」と心の中で喜
びました。

八六四 〇 《略》、弟子どもは「先生、
少しお待ち下さいませ。今風であか
りがきえました。」と言ひしに、保
己一は笑ひて、「さて／＼、目あき
といふものは不自由なものだ。」と
言ひたりとぞ。

さては（接）一 さては
十二九二 〇 しかし彼は城外に出る毎に、
杖にすがるあはれな老人や、息もた
えだえの病人、さては野邊に送られ
る死者をまのあたり見て、益々世の
はかなさを感じた。

さと「里」（名）六 里 〇 じようしゅ
うさのさと・ひとさと・ふるさと
四八四 〇 山に來た、里に來た、
野にも來た。

四八八 〇 山にさく、里にさく、
野にもさく。

四八九 〇 山で鳴く、里で鳴く、
野でも鳴く。

五七二 〇 《略》、夫に死なれたので、庄
屋の妻は子どもをつれて里へ歸つて
ゐた。
六六五 〇 《略》、山の中でも、三軒
家でも、住めば都よ、わが里よ。
木びきの力藏さんがうたをうたひな
がら、《略》。

十一 133 図 だどりつきたる峠の上
に、菜の花にほふ里見下して、笑
ひさゝめくひるげのむしろ。

さとう 「佐藤」(人名) 2 佐藤

九 24 10 図 歎庵様は佐藤の家の農學の
本をお開きなされ、略。

九 26 1 図 略、一すぢに國の爲、民
の爲につくすといふお考は、どなた
も皆同じ事で、これが佐藤の家の學
問の精神である。

さとう 「砂糖」(名) 2 砂糖 砂糖
↓おさとう

七 8 4 図 又輸入品は綿もつとも多く、
砂糖これに次ぐ。

七 8 6 図 しかし、綿は印度より、
砂糖はオーストラリヤより来る物多
し。

さとうのぶすえ 「佐藤信季」(人名) 1
佐藤信季

九 28 2 略、此の老人こそは出羽の
國の醫者佐藤信季、少年は其の子信
淵である。

さとおや 「里親」(名) 2 里親

八 37 5 略、實母の方は驚いて手を
放しました。里親の方は「それ見
よ。」といはぬばかりに、子どもを
引きよせますと、略。

八 38 4 略、越前守は聲をかけて、
「略。」と申し渡しましたので、里
親は恐れ入ったといひます。

さとがえり 「里帰」(名) 1 里歸
六 48 3 図 四五年モタツト、大キクナ

ツテ、今度ハ自分ガ卵ヲ産ミニ川へ
上ツテ來ルガ、フシギニ自分ノ生レ
タ川へ歸ツテ來ルサウデ、「之ヲ鮭
ノ里歸トデモ言ツタヲヨカラウ。」
ト叔父サンガ言ハレタ。

さとこ 「里子」(名) 2 里子

八 35 5 昔江戸で、夫に死なれた女が、
乳飲子を里子にやつて奉公に出まし
た。

八 35 6 幾年かの後、里子を返しても
らはうとすると、略。

さと・す 「論」(四・五) 4 さとす 論
す 論す 《一サ・シ》

八 57 9 図 略、下駄屋にありし
人は皆、彼の姿を見送りぬ、さと
すべき子にさとされし 小さき悔を
いだきつ。

八 57 9 図 略、さとすべき子に
さとされし 小さき悔をいだきつ。

十 99 9 図 元の皇帝深く文天祥を惜し
み、ねんごろに論して元に仕へしめ
んとす。

十二 99 2 略、釋迦は泣悲しんであ
る人たちに、「略。」略、めい
くが其の教をまじめに行ふ所に私
は永遠に生きてをる。」と論して靜
かに眼を閉ちた。

さととり 「悟」(名) 1 悟 ↓おんさと
り

十二 95 5 さうして日夜次々に起つて
來る心の迷をしりぞけて唯一筋に悟
の道を求めた。

さととり・える 「悟得」(下二) 1 悟り
得る 《一エ》

十二 95 9 其の刹那、彼は迷の雲がか
らりと晴れて、はつきりとまことの
道を悟り得た。

さとる 「悟」(五) 7 さとる

《一ツ・リール》

三 56 8 たうふうはこれを見て、
このかへるのやうに、こんき
がよければ、何ごともできない
ことはない、さとりました。

六 55 2 頼朝が木曾義仲をせめようと
した頃、木曾の家來手塚太郎光盛
の娘が頼朝に仕へて居りましたが、
之をさとつて、すぐに義仲の所へ知
らせました。

七 43 8 ある時略、信玄は兵を二
手に分けて、はさみうちにしよう
とした。謙信はそれをさとつて、夜の
間に進んで信玄の陣へ攻入つた。

八 90 1 図 「いや、聲が聞えるのでは
ありません。口の動き方を見てさと
るのです。」

十 96 5 太郎は略後悔すると共に、
「はい。」と「いゝえ。」の言ひに
いわけをさとることが出來た。

十一 66 5 其のうちだんく人智が發
達するにつれて、木片と木片をこす
りあはせて火を得る法をさとるやう
になつた。

十一 74 5 だんく話してゐるうちに、
眞淵は官長の學識の尋常でないこと

をさとつて、非常にたのしく思つ
た。

さながら 「宛」(副) 5 さながら

十 4 9 図 前には横長き池をひかへ、
池のめぐりは見渡す限りの木立・く
さむらにて、さながら別天地に遊ぶ
思あり。

十一 82 3 図 吹く潮風に黒みたる
はだは赤銅さながらに。

十二 7 10 図 千木のほとりを飛ぶ鳩の、
さながら雀の如く見ゆるも、社殿の
高大なる爲なるべし。

十二 61 3 図 雪白の地に紅の日の丸を
系がける我が國の國旗は、略、皇
威の發揚、國運の隆昌さながら旭
日昇天の勢あるを思はしむ。

十二 100 9 図 春は略、三月堂・二
月堂霞につまれてさながら夢の如
く、秋は略。

さの 「佐野」(地名) 3 佐野 ↓じよ
うしゅうさののさと

十 64 2 図 駒どめて袖打拂ふかげも
なし、佐野のわたりの雪の夕暮。

十 68 2 図 佐野源左衛門常世と申して、
もとは佐野三十餘郷の領主、略。

十 71 8 図 さて一族ともに奪はれた佐
野三十餘郷は、理非明らかなるによ
つて汝に返しあたへる。
さのげんざえもんつねよ 「佐野源左衛
門常世」(人名) 2 佐野源左衛門常
世 佐野源左衛門常世
十 68 2 図 略、恥かしながら申し上

げませう。佐野源左衛門常世と申して、もとは佐野三十餘郷の領主、

〈略〉。

十七15 図 それなるは佐野源左衛門常世か。

まのせんせい 「佐野先生」 「人名」 1

佐野先生

九113 6 図 昨年僕の學校より、君の學校へ御轉任なされ候佐野先生、先頃より御病氣の由承り候。

さばき ↓おおかさばき

さばくちほう 「砂漠地方」 〈名〉 1 沙漠地方

九16 8 沙漠地方ニ居ルラクダハ灰色デ、雪ノ中ニ住ム北極熊ハ眞白デアル。

さび 「錆」 〈名〉 2 サビ

六13 6 図 銅ハ〈略〉、時々青イ物ヲ出シマス。アレガヤハリサビデス。

六13 6 図 シカモ其ノサビハ大ソウ毒ナ物デス。

さびし 「寂」 〈形〉 2 さびし 《一シキ・シク》

九19 図 夜をいましむる夜まはりの拍子木のごとかちくと、さびしく時をきざみ行く。

十二34 1 図 私は今落日に對して、うすら寒い秋風を浴びながら、山鳩の聲さびしきベルダンの戦跡に立つてゐます。

さびしい 「寂」 〈形〉 2 さびしい 《一イ・イク》

四77 1 此の間さびしいおさう式が私の前を通りました。

九45 図 それに此の邊一帯の島々は

〈略〉、内地から移つて來た人も多く少しもさびしくはありません。

さびなきた 「錆長刀」 〈名〉 1 さび長刀

十七12 図 〈略〉、常世はちぎれたる具足を着け、さび長刀を横たへ、わるびれたる様もなく、進みて御前にかしこまれば、〈略〉

さ・びる 「錆」 〈上二〉 3 サビル 《一ビ・ビル》

六12 7 図 「ソレデモ鐵ハデキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」

六13 2 図 其ノ時鐵ビンハ「私タチノサビルノハ人ガ使ハナイカラデス。六66 3 〈略〉、釘ハ殘ラズ取レテ、其ノ上、折レタ針ヤ、サビタ針金マデツイテ來タ。

さ・ぶ 「錆」 〈上二〉 1 さぶ 《一ビ》 ↓かんさぶ

十69 1 図 〈略〉、ちぎれたりとも、此の具足に身を固め、さびたりとも長刀を持ち、やせたりともあの馬にうち乗つて一番にはせ參じ、〈略〉。

さぶさぶ (副) 1 さぶさぶ 三32 7 さぶさぶ おちる水のおと、とんとんひびくきねのおと、そのにぎやかな中から、〈略〉。

さぶろう 「三郎」 「話手」 2 三郎 三61 2 三郎「又はしりくらをさせ

ませう。〈略〉。」

三65 2 三郎「五郎さんばんざい。」

さぶろう 「三郎」 「人名」 1 三郎 六78 図 しかし三郎、高い山がかならず名高い山だとはかぎらない。

さぶろうさん 「三郎」 「人名」 2 三郎さん

三60 8 図 二郎「三郎さん、又今日も舟をながしてあそびませう。」 八107 9 図 もし天氣がよかつたら、三郎さんを連れて、お晝前にいらつしやい。

さへいた ↓すぎもとさへいたさま

さほ 「佐保」 「地名」 2 佐保

十二101 6 図 佐保・佐紀の連岡に北を限り、春日・高圓の山々を東に、矢田山・生駒山を西にひかへて、〈略〉。

十二102 図 佐保

さほがわ 「佐保川」 「地名」 1 佐保川 十二102 図 佐保川

さほろだけ 「佐幌岳」 「地名」 1 サホロ嶽

十一62 1 畫がけるが如く美しき山の、或は右に或は左にあらはれるのは、サホロ嶽の連峯の一つであらう。

さま 「様」 〈名〉 18 様 ↓あにうえさま・あにさまがた・ありさま・うえさま・うじがみさま・おいしやさま・おもりしげるさま・おかげさま・おきやくさま・おくげさまがた・おくさま・おじいさま・おじうえさま・おじさま・おせわさま・おつきさま・おば

うえさま・おひさま・おひなさま・おひめさまがた・おほしさま・おまえさま・おんありさま・おんちちうえさま・おんははうえさま・かみさま・かみさまがた・かみなりさま・からいとさま・かんあんさま・げんあんさま・ごいんきよさま・ごくろうさま・ごしゅじんさま・ごそぼさま・ごりようしんさま・さわかつころうさま・じぞうさま・しんめいさま・すぎもとさへいたさま・せんだいさま・だいらさま・たけこさま・つづげさま・てんしさま・てんじんさま・とのさま・はちまんさま・ははさま・ばばようすけさま・はるたのぶたろうさま・ふまいけんさま・まつこさま・みなさま・みなさまがた

七81 2 〈略〉、タコヤイカガ、アシヲソロヘテ泳グ様ハ、マコトニ面白イ。

八48 8 マシテ自由ノ天地ニ居テ、自在ニ空ヲトブ様ハ、實ニ勇マシモノデアル。

九15 6 図 出がけにとやの方を見れば、〈略〉、をんどりは箱のふちをふまへて、首をすゑ、むねを張り、今やときをつくらんとする様なり。

九63 7 〈略〉、千數百人の乗員が號令にしたがつて、規律正しく活動する其の様は、如何にも目ざましい。

九65 5 其の様は、まるで雨後の蛙がむらがり飛んでゐるやうである。 九67 4 朝日にかゞやく軍艦旗が、海

風にひらめきながら、しづ／＼と上つて行く様は、實におごそかなものである。

九七三 黒・白・茶色、大小さまざまの馬が、林のかげや沼のほとりを元氣よくかけ廻つてゐる様は、實に勇ましい。

十二六〇 降積む雪に道を失ひ、進みもやらずたゞみたる様は、古歌に「略」といへるにも似たりけり。

十一七三 〔略〕、常世はちぎれたる具足を着け、さび長刀を横たへ、わるびれたる様もなく、進みて御前にかしこまれば、〔略〕

十一四六 〔略〕 彼處に行きて、彼の畫師のする様を見給へ。

十一四七 〔略〕、今度はひぢを張り、足をのべ、手を口に當てて鶴の臥したる様をなせり。

十一四六 〔略〕 夜明けて住持、畫師に向ひて、〔略〕、夜中に畫師のしたる様をまねて見するに、畫師驚きて、「〔略〕。」と問ふ。

十一六〇 見渡す限り果もない原野に、放牧の馬や牛が／＼と草をはむ様や、緑草の間に羊の群をなして遊ぶ様は、實にのどかである。

十一六〇 〔略〕、緑草の間に羊の群をなして遊ぶ様は、實にのどかである。十一一〇六 〔略〕 中にも十三四ばかりの子供が、各國人の間にまじりてかひ／＼しく立働ける様を見ては、如何

にもけなげに存ぜられ候。

十一一〇七 〔略〕、三抱も四抱もあるものが地ひゞきを打つて倒る様、壯快言語に絶し候。

十二九三 或時、父王と共に城外に出て、農夫の働く様を見廻つたことがある。

十二一〇一 〔略〕、秋は春日の社神さび、手向山の紅葉夕日にはゆる様殊に見所あり。

さまざま 〔様様〕 (形状) 9 サマザマ

さまざま さまざま 様々 ↓しゅじゅさまざま

三四三 いろいろぐうのおとひめは〔略〕、毎日いろいろなごちそうをしたり、さまざまなあそびをして見せたりしました。

七九四 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤ其ノ外イロ／＼ノ動物ガスンデ居リ、又サマザマノ植物モ生エテ居ル。

七八六 海藻ノ形ハ様々デ、帶ノ様ニ廣クテ長イノモアレバ、全體ガ細カニ分レテ、枝ノ様ニナツテキルノモアリ、ニハトリノトサカニ似タノモアル。

九七二 黒・白・茶色、大小さまざまの馬が、〔略〕元氣よくかけ廻つてゐる様は、實に勇ましい。

十一四六 〔略〕、畫師は障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ、寝起する様なり。十二五三 きりやねち廻しやピンセツ

トや小さな槌やさまざまの道具も、同じ臺の上に横たはつてゐる。

十二八四 網をすき、舟を漕ぎ、漁業の手傳などして土人に親しみ、さてさまざまの物語を聞くに、〔略〕。

十二一三 次いで白金其の他の金屬の針金を以て様々の實驗を重ねしが、これまた失敗に終りぬ。

十二二八 〔略〕、今日日本の周圍には諸外國が様々の考を持つて見てをるので、〔略〕。

さまざま 〔寛〕 (四・五) 4 さます 覺す 《—シ—ス》

六四六 朝、雷が目をさまして見ると、月と日が居りません。八三九 目をさまして見ると、ふろしきづつみがありません。

十一一〇 リンカーンがふと目を覺した時はもう遅かつた。十二一〇 人なつかしげに寄り來る鹿の、〔略〕哀音しきりに人の眠をさますも、奈良には缺くべからざる風情なるべし。

さまざま 〔妨〕 (下二) 1 さまたぐ 《—ゲ》

十一四九 〔略〕、大いに治績を挙げしかども、奸臣の爲にさまたげられ、久しく其の職に居ることあたはずして魯を去りぬ。

さまざま 〔サ変〕 1 さまたげす 《—セ》 十一四六 〔略〕、畫師は障子に身を

寄せて、様々に姿を變へつゝ寝起する様なり。さまたげせんも心なしと思ひて、住持は其のまゝ寝間に入れり。

さまざま 〔妨〕 (下二) 1 さまたげる 《—ゲル》

十二二三 即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、〔略〕、貿易の不振を招き國連の發展をもさまたげることになる。

さまざま 〔迷出〕 (下二) 1 さまたよひ出る 《—デ》

十二七二 怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた王は、我にもあらず荒野の末にさまざまひ出た。

さまざま 〔迷〕 (五) 2 さまたよう 《—ツ》

十二七三 家來は荒野にさまざまつてゐたりヤ王を見附けて、〔略〕。十二九四 師を求めてあちらこちらさまよつてゐるうちに、〔略〕。

さむい 〔寒〕 (形) 25 サムイ さむい 寒い 《—イ—イ—カッ—カラ—ク—ケレ》 ↓うすらさむい

四五八 ドンナサムイ日デモ、大工サンハミンナシルシバンテンヲスイデ、キセイヨクハタライテ居マス。四七八 さむい日のことで、あまり氣のどくでしたから、〔略〕。六四六 朝晩つきり寒くなつた。

六263 今朝は大そう寒い。
 六271 こんな寒い日にも、朝早くから、高い木の上をとびまはつて鳴いてゐる。
 六393 洋服は着なれなかつたので、はじめは寒いやうに思つたが、もうなれた。
 六485 蛙ハ寒イ國ノ魚デ、我ガ國デハ樺太ト北海道ガオモナ産地ダサウダ。
 六774 二三日ひどく寒かつたので、湖の水が大へんあつくなつた。
 七779 「寒からうが」「少しも寒くはございません。」
 七781 「少しも寒くはございません。」
 七782 「寒くはない。」「はい。これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません。」
 七784 「はい。これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません。」
 八1108 幼名を無人といつたが、寒いといつては泣き、暑いといつては泣き、朝晩よく泣いたので、〈略〉。
 八1127 或年の冬、大將が思はず「寒い。」といつた。
 八1131 「よし。寒いなら、暖くなるやうにしてやる。」
 八1134 大將はこれから後、一生の間「寒い。」とも「暑い。」ともいひなかつたといふ。

十397 「あゝ、今朝はなか／＼寒い。指の先がしびれるやうだ。」
 十659 だん／＼寒くなつて来たが、あやにく薪も盡きてしまつた。
 十7710 此の頃は太分寒くなつて、朝は攝氏零度以下十何度といふきびしさ、〈略〉。
 十782 「略」、朝は攝氏零度以下十何度といふきびしさ、學校へ行く途中などは、寒いといふよりもいたいやうに感じます。
 十784 面白いの、三日四日續いて寒ければ、其の次には又其のくらゐの間暖さが續くといふやうに、〈略〉。
 十1008 寒い北風に吹かれながら、冬枯の小道を通つて来て、一足温室の中にはいると、〈略〉。
 十1055 一度此の中にはいると、また寒い處へ出るのがいやになるね。
 十10510 其の枝の先にしよんぼりと止つてゐる鳥の姿も、見るから寒さうだ。
 十一361 あそこの植付をした時はまだ寒かつた。
 さむさ 「寒」(名) 3 寒サ 寒さ
 七1093 故ニ「暑サ寒サモ彼岸マデ。」トイヘリ。
 十785 面白いの、〈略〉、寒さと暖さがほとんど規則正しく交替することです。
 十1063 寒さきびしき折から皆様

には御障もなく、御前様にも日々學校に御通ひなされ候由、安心致し候。
 さむし 「寒」(形) 2 寒シ 寒し
 「キ・シ」
 七1092 「略」、夜ノ長クナルニツレテ、氣候ハ次第ニ寒シ。
 八562 「略」、北風寒き町の辻、身なりいやしき老婆には、手をかす人もあらざりき。
 さむらい 「侍」(名) 2 さむらひ ↓ しょうらい・とくがわさむらい
 四932 ある年、よりともは日本中のさむらひを引きつれて、ふじのまきがりをいたしました。
 四962 すけつねも人に知られたさむらひ、「心えた。」と、〈略〉。
 さめ ↓ わにさめ
 さめる 「覚」(下) 10 さめる 覚める 《メーメル》
 五236 「略」、目のさめるやうなちりめんや、きれいな帯や、すゞしさうな浴衣地が〈略〉。
 八508 餅をつく音に目がさめた。
 八521 よく目がさめたね。今四時を打つたばかりだ。
 九84 青・緑・紅・紫、目のさめるやうに美しい魚の群が、〈略〉泳いで行く。
 九693 目がさめると、もう夜が明けてゐて、〈略〉。
 九1096 「略」、今まで張りつめてゐた勇氣もくじけて、ゆめからさめたや

うにあたりを見廻した。
 十457 日頃から自然の色にあこがれてゐた彼は、目のさめるやうな柿の色、美しさに打たれて、〈略〉。
 十1049 其處から又右に折れると、細長い室一ぱいに、目もさめるやうな草花が並べてある。
 十一1253 取分け美しかつたのは電燈の笠で、赤・黄・紫・緑とりどりに目もさめるばかりであつた。
 十二744 やがて眠から覺めた王は、幾分氣も静まつたのか、〈略〉。
 さも 「然」(副) 2 さも
 八839 信吉は〈略〉あいさつをすまして、「奥様、あのよは。」と、さも心配さうにたづねた。
 十二394 二人は不意の來客にさも驚いたらしい様子。
 さやか 「明」(形状) 1 さやか
 十二42 海原はみどりに晴れて、濱松のこずゑさやかにふれる白雪さやどう「鞠室」(名) 1 鞠室
 九721 八百年前の建物で、今も鞠室の中に其のまゝ保存されてゐる。
 さゆう 「左右」(名) 3 左右 ↓ ぜんごさゆう
 五1014 階下の入口には、左右に大きな待合室があつて、〈略〉。
 九1109 北風はもう一度あの勇ましい號令が聞きたいと思つて、〈略〉、左右の耳をそばだててみた。
 十337 近づくと、門の戸びらは左右

に開いて、船が中にはいり、戸びらはしまる。

さよう 「左様」(形状) 1 さやう

十二129 8 拙者は、此の談判がよしのやうに決着するにもせよ、さやうな事になれかしとは毛頭考へませぬが、〈略〉。

さようなら 「左様」(感) 1 さやうなら

十二44 6 図 「さやうなら。」ベーター・ペンは立つて出かけた。

さら 「皿」(名) 4 皿

十49 1 喜三右衛門は、一つ又一つと窯から皿を出してゐたが、〈略〉。

十49 4 「出来た。」皿をさへげた

喜三右衛門は、こをどりして喜んだ。

十一124 6 エプロンをかけた職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板にあてて模様をほりつけたり、〈略〉。

十一124 10 皿・コップをはじめ、鉢・びん・花びん・水さしなどがきれい

に並んでゐた。

さら 「更」 ↓いまさら・ことさら・なおさら

さらい ↓おさらい

さらう 「攫」(五) 4 サラフ さらに

ふ 《「ツ・ハ・フ」》

二72 1 山カラ出テ、モノヲトツタリ、人ヲサラツタリシマシタ。
八49 7 〈略〉、マレニハ庭先ニ遊ンデ
キル子ドモヲサラツテ行クコトモアル。驚ハ〈略〉。

八50 6 ヒナヲ育てル間ハ最モ氣ガ荒クテ、家畜ヲサラフノモ多クハ此ノ時デアル。

十25 2 船は二つにくだけて、船尾の方は見る／＼大波にさらはれてしまつた。

さらさら (副) 2 サラ／＼ さらに

三60 7 風がしづかにふいて来て、きしのさがさらさらとおとをたててゐます。

六46 6 キレイナ水ガサラ／＼流レテ、川ソコニ小石ノ多イ所ガアルト、〈略〉。

さらし ↓あまさらし

さらしめん 「晒木綿」(名) 1 晒木綿

七23 6 晒木綿のづきんをかぶつて、雨ざらしになつていらつしやるが、〈略〉。

さらす 「晒」(五) 1 さらす 《「シ」》

九100 1 〈略〉、今日はもう熟しきつたやうな顔をして、へそを日にさらしてゐる。

さらに 「更」(副) 32 サラニ さらに

更に
九19 7 シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出来テキルノハ、印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。
十34 5 此の湖を横ぎると又水門があつて、船はさらに一段高くなる。

十85 8 事務所の湯にはいつて服を改めると、更に生きかへつたやうな氣持がしました。

十87 10 又外國から原料を輸入し、それに加工して、更に外國へ輸出する事も少くない。

十一8 6 それから五十海里ばかりさかのぼつて、〈略〉支流に入り、更に十海里餘りさかのぼると、〈略〉上海に着く。

十一21 2 〈略〉、區裁判所の裁判に不服な者は地方裁判所に上訴し、尚其の裁判に不服な者は更に大審院に上訴する。

十二33 3 図 一島未だ去らざるに、一島更にあらはれ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

十一53 9 之をそれ／＼用途に應じて、更に加工するのである。

十一79 6 〈略〉、尚場合によつては持運びに不便なので、更に貨幣の代りになる紙幣といふ物を案出した。

十一91 2 〈略〉『月齡』を見て知るのだ。父は更に「もつとおしまひの方をあけて御らん。

十一127 7 図 一切經を世にひろむるはもとより必要の事なれども、人の死を救ふは更に必要なるに非ずや。

十一128 2 図 〈略〉、再び募集に着手して努力すること更に數年、効果空しからずして〈略〉。
十二4 5 図 松江を發したる汽車は

〈略〉 走ること約四十分、やがて新川を渡り更に進みて斐伊川の鐵橋にかゝる。

十二16 7 図 しかして編輯局は更に編輯部・政治部・經濟部・社會部・通信部・外報部・學藝部・寫眞部・校正部等に分れ、〈略〉。

十二17 6 図 校正終れば紙型に取り、更に之をもととして鉛版を造り、印刷機にかく。

十二23 5 外國貿易に至つては、之に従事する者の心掛け如何の影響が更に大きい。

十二61 4 図 更に思へば、白地は〈略〉、日の丸は〈略〉ともいふべきか。

十二62 3 図 元來イギリスは、〈略〉、先づイングランドとスコットランドと合するや、〈略〉を合して一旗となし、更にアイルランドの加はるに及び、〈略〉を合はせて、遂に今日の如き形式をなすに至れり。

十二64 5 図 〈略〉、國土統一の時、其の家の紋章の色なる白と赤とに、統一の成功を祈る希望の色として緑を加へ、更に王家の紋章を配したるものなり。

十二82 7 図 樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざることとは、此の探檢によりて略々知ることを得たれども、更によく之を確めんがために、〈略〉。
十二87 3 図 林藏の怪しみもてあそば

るゝこと、此處にては更に甚だしかりしが、〈略〉。

十二93 彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聴いたが、どれにも満足することが出来ない。

十二94 彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。

十二97 續いて釋迦はマガダ國王をたづねてねんごろに道を説聞かせ、更にカピラバストに歸つて、父王・妻子を始め國民を教化して故郷の恩に報いた。

十二103 今若草山に登りて古京の跡を展望すれば、〈略〉。更に首を回らして南を望めば、〈略〉。

十二108 愛すべく美しき山野は、更に太古以來の歴史と結び文學と結びて、感いよく深きを覺ゆ。

十二109 けれども老僧は更にとんちやくしない。

十二112 図 〈略〉 トマス、エヂソンは、既に電話機に關する發明に成功したるを以て、更に進んで新しき電燈の發明に従事したり。

十二117 図 エヂソンが炭素線の電燈を發明したのは四十年ばかり前のことであつたが、今では更に進んで光の色が太陽に似て、しかも比較的熱をとみなふことの少い電燈さへも發明されました。

十二120 相手は〈略〉、だまつて聴いてゐる。安芳は更に「しかし」と

へにも申す通り、〈略〉。」

十二131 西郷は〈略〉進軍を中止させた。さうして直に〈略〉議をまとめ、更に京都に上つて勅裁を仰ぎ、とうく徳川方の願意をとほさせた。

十二136 支那・印度の文明を入れ、更に西洋の文明を入れて長足の進歩を成し遂げた日本國民は、〈略〉。

さらば 〔然〕接 3 さらば

十二131 心ある者ども何れも同意しければ、さらばとて〈略〉舟坂山にかくれ、今かく待ち奉れり。

十二138 山陰道にかゝり給ひし由なり。さらば美作の杉坂に待ち奉らんとて、〈略〉。

十二145 とはいひ名残をしき事なり。さらば謝恩の爲に何か畫がきて參らすべし。

さらば 〔然〕感 1 さらば 九43 図 〔然〕感 1 『さらば』と、握手ねんごろに、別れて行くや右左。

さる 〔申〕 1 つちのえさる さる 〔猿〕 〔名〕 13 サル さる 1 わざる・きかざる・みざる

一10 1 サルガカキノタネヲカニニヤリマシタ。

一10 6 カニガニギリメシヲサルニヤリマシタ。

一14 2 ミガナリマシタ。サルガミツケテトリマシタ。

一17 5 サルガヤケドヲシマシタ。

一18 1 サルガミヅヲツケニイ

キマス、ト、ハチガチクリトサシマシタ。

一18 6 サルガニゲダシマシタ。

一19 2 ウスガオチテキテ、サルヲオシツケマシタ。

一19 5 コガニガサルノクビヲハサミキリマシタ。

一50 2 イヌヲケライニシテイキマス、ト、サルガキマシタ。

一50 3 サルモダンゴヲモラツテ、ケライニナリマシタ。

一52 4 キジハツツスキマハリ、サルハヒツカキマハリ、イヌハカミツキマハリマス。

一54 4 サルガアトオスエンヤラヤ。

五36 道はたの立石にさるが三匹ほつてありました。

さる 〔去〕 〔連体〕 4 さる 去る 七13 去る 三日にお差出しの續物

三十反、本日無事に着きました。

十106 御母上様には去る二日御安産にて、玉の様な女の御子御生れの由承り、〈略〉。

十109 承り候へば、〈略〉、去る十九日遂に御死去遊ばされ候由、誠に驚き入り候。

十二65 姉二人は既にさる貴族に嫁し、妹はかねてフランス王の后になることにきまつてゐた。

うす・きえさる・たちさる・ひきさる 七61 かくて船長は外國より持歸りたる寫眞帖を學校に寄附して去れり。

十28 全く元氣を回復した人々は、親子にあつく再生の恩を謝し、名残を惜しんで此の島を去つた。

十30 影のごと、人去り 人來る大路、ほろく／＼と聞ゆる 笛の音いづこ。

十一4 奸臣の爲にさまたげられ、久しく其の職に居ることあたはずして魯を去りぬ。

十一6 然れども正しき道によるに非ざれば、我之を去らず。

十一33 一島未だ去らざるに、一島更にあらはれ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

十一110 白雲い／＼去り又來る。

十二70 コーデリヤはす／＼と父の許を去らなければならなかつた。

十二86 翌日此の地を去り、河をさかのぼること五日、遂に目的地なるデレンに着せり。

十二100 一木一草に至るまでも歴史あり古歌あり、人をして低回する能はざらしむ。

さる 〔去〕 〔名〕 6 ザル ざる 二48 オヂイサンハヨロコンデ、ソノハヒヲザルニ入レテ、

「略。」トヨンデアルキマシタ。

七14 9 めい／＼さるをかしげて、え物を見せ合つた。

七15 1 妹とお松のさるには、やどかりがたくさんゐた。

七15 2 珍しかつたのは、丸山君のさるに、たつのおとしごが一つあつたことであつた。

九101 7 さるを持つた子供が、川下の方に集つてさわいであるのは、鮒やどちやうを取るであらう。

十84 3 〈略〉、其の内の二人が石炭を掘崩すと、他の二人がそれをさるで運んで炭車に入れる。

さるさわ 「猿沢」(地名) 1 猿澤

十二99 10 興福寺は〈略〉、尚三重五重の塔、猿澤の池水に影をうつして南都第一の美観たり。

さるさわのいけ 「猿沢池」(地名) 1 猿澤池

十二102 猿澤池

されど 「然」(接) 9 サレド されど七33 8 獅子は〈略〉、つと海の中にをどり入れたり。船におよぎつかんとてなり。されどかなふべくもあらず。

八59 5 図 ヨリテ看板ノ如キモ、タヤスク人目ヲヒカシメンガ爲ニ、キノヒテ小屋根ノ上ニカ、グルニ至レリ。サレド食物ヲ賣ル店ニハ、今ナホ古風ヲ守リテ、〈略〉ナドト記シテ、軒ニ下ゲタルモアリ。

九36 5 図 〈略〉ベルギーの勇將レマ

ンは、〈略〉、勇ましく防ぎ戦ひたり。されど比類なき四十二センチメートルの大口徑砲の威力に對しては、

〈略〉ベルギー軍の防戦も、終に如何ともしがたく、要塞は全く破くわいせられ、將卒は多く戦死せり。

十60 1 図 〈略〉、身なりはそまつなれど氣品高き婦人立出でて、「折あしく主人が留守でございますので。」とことわりぬ。されど婦人は、氣の毒と思ひけん、僧をば待たせ置き、おのれは主人を迎へにとて外に出行きけり。

十61 4 図 僧は改めて主人に一宿をこへり。されど主人は、「〈略〉、とて

もお泊め申す事は出来ません。〈略〉。日の暮れない中に、一足も早くお出かけなさい。」といふに、僧は返す言葉もなく出て行きぬ。

十70 5 図 旅僧もまた〈略〉、そぞろに別れがたき思あり。されどかくて何時まで留るべき身ぞと、心強くも立去りけり。

十97 9 図 文天祥命を奉じ、各地に轉戦して元軍を破る。されど宋軍の大勢日々に非にして、天祥の誠忠を以てしても如何とすることもあたはず。

十二14 9 図 〈略〉、唯をり／＼興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。されど人智の進歩と印刷術の發達とは、何時までもかく單純にして遊戲的なものに満足すべくもあら

ず、〈略〉。

十二47 3 図 もみ・つがは共にそり又は伸び縮みすること著しきを以て、杉・檜に比すれば用途甚だ狭し。されど何れも美しき光澤を有するが上に、もみは柔かにして工作に便なれば、諸種の箱を作るに用ひられ、つがは堅くして久しきに耐ふるが故に、

家屋の柱・土臺となすに宜し。されども 「然」(接) 1 されども

十一24 8 図 〈略〉、とりでの守將中川清秀、士卒を指揮して防ぎ戦ふ。されども不意を討たれし俄の軍に、清秀等の奮戦其のかひなく、清秀は討死してとりでは落ち、戦は午前のうちに終りぬ。

されば 「然」(接) 3 されば

十一125 8 図 〈略〉、これが出版は決して容易の業に非ず。されば古は、支那より渡來せるものの僅かに世に存するのみにて、學者其の得がたきに苦しみたりき。

十二14 5 図 世の出來事を速に知らんとするは人情の常なり。されば珍しき事件の起りし時、之を記述して印刷に附し、廣く發賣することは古より行はれたりしが、〈略〉。

十二19 3 図 但し大新聞にありては、〈略〉、新しき事件ある毎に改版して、最後の最も新しきものを市内版とす。されば同一日附の同じ新聞にても、發行地にて受取るものと他地方にて

受取るものとは、記事に多少の相違あるを常とす。

さ・れる 「戯」(下) 1 される 《一レ》

三11 7 圖 〈略〉まりとざれてはえんからおちる。

さわかつころうさま 「澤勝五郎様」(人名) 1 澤勝五郎様

八110 5 図 三月十二日 小野田國男

澤勝五郎様

さわぎ 「騒」(名) 4 さわぎ 〴〵おおさわぎ

五84 3 図 〈略〉、うちには大した事もありませんでした、中々のさわぎでした。

七63 8 大ぜいの人々が口々に人夫を呼んで我先に渡らうとしますし、年よりや子どもは聲を立てて呼び合いますので、川べはひじやうなさわぎでございました。

八11 2 〈略〉、信作に水をはかせるやら、醫者を呼びに走るやら、上を下へのさわぎである。

十二125 2 しかし市中の混亂は蜂の巣を突いたやうなさわぎである。

さわ・ぐ 「騒」(四・五) 5 さわぐ

《一イ・一グ》 〴〵あててさわぐ 五66 4 図 うちの方では、田に水がないと言つて、さわいでゐますのに、此の村にはよく水がありますね。 六91 6 〈略〉、城のやぐらから大きな石を投落して、賊のさわぐ所をさん

さんに射た。

六942 さうして、これをよけようと
して賊のさわぐ所を射させて、又々
五千人餘もころした。

九1018 ざるを持つた子供が、川下の
方に集つてさわいでゐるのは、鮒や
どちやうを取るのであらう。

十一801 図 我は海の子、白波の
さわぐいそべの松原に、煙たなび
くとまやこそ、我がなつかしき住
家なれ。

ざわざわ (副) 1 ざわく

十一261 図 略、美濃路の方面に當
りてたいまつ光おびたしく、何
とも知らぬ物音ざわくとして夜の
静けさを破る。

ざわざわしだす (五) 1 さわくし
出す 《一シ》

七932 それが、朝飯がすむと間もな
く、稻の葉がさわくし出した。

さわやか (爽) (形状) 5 さわやか
七1076 清正はつつしんで、《略》、
御威光を借りて豊臣と記したのでご
ざいます。」と、べんぜつさわやか
に申し開きました。

九25 図 よき日は明けぬ、さわや
かに。朝日は出でぬ、花やかに。

十432 日は大分高くなつてさわやか
にかゞやき、高いく青空を、ひわ
の一群が《略》。

十489 朝日のさわやかな光が、木立
をもれて窪場にさし込んだ。

十二24 図 さし昇る朝日の如く、

さわやかに もたまほしきは心なり
けり。

さわわり じおさわり・おんさわり
さわる (触) (五) 2 さはる 《一
ル》

五901 略、葉書や封書などを入れ
る人の外は、私のからだにさはる者
がありません。

九1056 北風は、主人の手がかうして
くびすちにさはるのが何より好きだ
つたから、《略》。

さわ・る (障) (五) 1 さはる
《一ツ》

十87 この水浴が體にさはつたもの
か、王は俄にはげしい熱病にかゝつ
た。

さん (三) (課名) 10 三 じだいさ
ん・だいさんか

二目4 三 キクノハナ
二目5 三 キクノハナ
三目4 三 ヒヨコ
三目5 三 ヒヨコ

四目4 三 十月三十一日
四目5 三 十月三十一日
五目4 三 大蛇たいぢ
五目5 三 大蛇たいぢ

八目3 第二 犬ころ……三
九目3 第一 トラック島便り……
三

さん (三) (名) 16 三 じげんこうに
ねんさんがつ・だいさんかい・だいさ

んどつかい・たいしょうさんねん・に
ちようさんたんごせ

一342 一二三四五六七八九
十、十パトンドキマス。

三534 十七 一口ばなし 《略》 三
星のかず

五323 九 私のうち 《略》 三
八目8 三 雀の子
八目29 第十八 アメリカだより

《略》 三 ニューヨークから
八161 第四 武将の幼時 《略》 三
雀の子

八707 第十八 アメリカだより
《略》 三 ニューヨークから

八1093 第二十七 人を招く手紙
《略》 三

九819 第十八 石安工場 《略》 三
九1134 第二十三 手紙 《略》 三

十一131 第四課 遠足 《略》 三
十一809 我は海の子 《略》 (三)
十一1057 第二十三課 南米より (父
の通信) 《略》 三

十二337 第八課 ヨーロッパの旅
《略》 三

十二814 第十六課 鳴門 《略》 三
十二1239 第二十五 港入 《略》 三

さん (山) じあかしさん・ありさん・
いわてさん・おうばくさんまんぶく
じ・こんごうさんじよう・さんざん・
なんざん・にっこうさん・はくさん・
ヒマラヤさん・ふじさん

さん (産) (名) 1 産 じそさん・

とうちさん

十一1269 図 死傷頗る多く、家を流し
産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知ら
ず。

さん じあかしさん・ありさん・うらしま
さん・おかあさん・おかださん・おき
くさん・おじいさん・おじさん・おち
よさん・おとうさん・おとうとさん・
おとよさん・おばあさん・おばさん・
おまつさん・おもりさん・ぎいちさ
ん・きんじおじさん・ごいちじいさ
ん・こうぞうさん・こぞうさんたち・
こづかいさん・ごへいじいさん・ごろ
うさん・さぶろうさん・じいさん・し
もむらさん・しやちようさん・しよせ
いさん・せんどうさん・そんちようさ
ん・だいくさん・たかはしさん・ただ
しさん・だるまさん・たろうさん・
ちようちようさん・なかむらさん・に
いさん・にいさんたち・ねえさん・ね
えさんかぶり・のぶこさん・のぶこさ
んのいえ・ばんとうさんたち・まつさ
ん・みなさん・むすめさん・ももたろ
うさん・やすじいさん・やまださん・
りきぞうさん

さんいんどう (山陰道) (地名) 1 山
陰道

十1317 図 《略》、播磨の今宿といふ
處より、山陰道にかゝり給ひし由な
り。

さんかい (三回) (名) 1 三回

十一214 かういふ風に、三回くりか

へして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、〈略〉。

さんかい 「山海」(名) 1 山海

十一338 春は島山がすみに包まれて眠るが如く、夏は山海皆緑にして目覺むるばかり鮮かなり。

さんかいき 「三回忌」(名) 1 三回忌

八〇八6 来る二十五日に、亡母の三回忌の法事を致します。

さんがいだて 「三階建」(名) 1 三階建

七363 目ぬきの所には三階建・四階建の石造や煉瓦造の家が軒をならべて立つてゐるので、〈略〉。

さんがいつくり 「三階造」(名) 1 三階造

五1005 赤れんぐわの三階造で、間口が百八十四間もあります。

さんがく 「産額」(名) 1 産額

十二471 唯杉に比して産額少く、増殖や、困難なるは惜しむべし。

さんかしよ 「三箇所」(名) 1 三箇所

十二722 其の返禮として加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、合はせて三箇所の地を汝に授ける。

さんがそうもく 「山河草木」(名) 1 山河草木

十707 降積みし雪もあと無くきえて、山河草木喜にあふる、春とはなれり。

さんがつ 「三月」(名) 1 三月 めいじがねんさんがつ

十一147 三月の末になさるはずであつたのが、〈略〉、今まで延びてゐたのださうです。

さんがつじゅうくにち 「三月十九日」(名) 1 三月十九日

六〇八3 三月十九日 父から 千太どの

さんがつじゅうさんにち 「三月十三日」(名) 1 三月十三日

十二1257 〈略〉、安芳は三月十三日官軍の参謀西郷隆盛に會見を求めた。

さんがつじゅうににち 「三月十二日」(名) 3 三月十二日

八〇八3 三月十二日 春子 松子様

八〇九1 三月十二日 廣澤連太郎 杉本佐平太様

八1104 三月十二日 小野田國男 澤勝五郎様

さんがつじゅうはちにち 「三月十八日」(名) 1 三月十八日

六1042 三月十八日 千太 兄上様

さんがつどう 「三月堂」(名) 2 三月堂

十二1008 春は若草山の芝緑にもえたち、三月堂・二月堂霞につゝまれ

十二102 三月堂

さんがつにじゅうごにち 「三月二十五日」(名) 1 三月二十五日

九32 三月二十五日お出しのお手紙を昨日受取りました。

さんがつはつか 「三月十日」(名) 1

三月二十日

六603 三月二十日、今日はお花見といふので、御殿は人少でございます。

さんかんしおん 「三寒四温」(名) 1 三寒四温

十787 こちらでは昔から之を三寒四温といつてゐるさうです。

さんかんする 「参観」(サ変) 1 参観する 《一シ》

十149 しかし、此の間夜學を参観した時の皆さんの熱心な様子や、〈略〉。

さんき 「三騎」(名) 1 三騎

八91 〈略〉、半分程の所から一騎後れ、二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、〈略〉。

さんぎよう 「産業」(名) 1 産業

十一1169 〈略〉、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、

風俗の改善等に務めたりするのは、皆公共心の發動であつて、〈略〉。

さんぎようくみあい 「産業組合」(名) 1 産業組合

十一1167 又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に

務めたりするのは、皆公共心の發動であつて、〈略〉。

さんぐう 「参宮」(名) 1 参宮

せさんぐう

十一717 何でも山城・大和方面の御旅行がすんで、これから参宮をな

さるのださうです。

さんぐん 「三軍」(名) 1 三軍

十一1128 強敵ひしきて世をしづめんと、三軍進めし五丈原頭、〈略〉。

さんけい じにつばんさんけい

さんけいする 「参詣」(サ変) 1 参詣する 《一シ》

八1125 大將の父は途々義士のことを大將に話してきかせて、其の墓に参詣したのである。

さんけいにん 「参詣人」(名) 1 参詣人

十二51 旅行にはよき日なりなど思ひつゝ、参詣人の群にまじりて行けば大鳥居あり、〈略〉。

さんげつ 「残月」(名) 1 残月

十一1107 白雲いづく去り又來る。西窓一片残月あはし。

さんげん 「三間」(名) 1 三間

五716 土手は長さが三百間、高さが六間半、幅は一番上で三間といふ大きなまぐろであつた。

さんげんする 「讒言」(サ変) 1 ざんげんする 《一シ》

七976 行長は清正の軍功をねたみ、石田三成に頼んで、清正のことを秀吉にざんげんしました。

さんげんや 「三軒家」(名) 1 三軒家

六164 山の中でも、三軒家でも、住めば都よ、わが里よ。

さんこ 「三顧」(名) 1 三顧

十一1116 雪降りみだるゝ冬のあしたに、風なほ冷たき春のゆふべに、劉備が三顧のこよなき知遇、
 さんごー 〔珊瑚〕(名) 4 サンゴ 珊瑚
 七827 中デ面白イノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテキル。
 七829 カンザシノ玉ヤ根ガケノ玉ニスルサンゴハ、皆此ノ蟲ノ骨デアル。
 七82 図 サンゴ
 九85 〔略〕魚の群が、珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。
 さんごく 〔イングラントスコットランドアイルランドさんごく・にちえいべいさんごく〕
 さんごじゅ 〔珊瑚珠〕(名) 1 珊瑚珠
 十447 〔略〕庭の柿の木には、すゞなりになつた實が夕日を浴びて、珊瑚珠のやうにかゞやいてゐる。
 さんさい・す 〔散在〕(サ変) 1 散在す 〔一ス〕
 十一3210 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、大小無數の島々各所に散在す。
 さんさい・する 〔散在〕(サ変) 2 散在する 〔一シ〕
 十355 〔略〕湖上に點々と散在してゐる島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。
 十一107 其の外各種の學校や、〔略〕修養機關、〔略〕娛樂機關が到る處

に散在してゐる。
 さんざん 〔三山〕(名) 1 三山
 十二1035 更に首を回らして南を望めば、大和平野の盡くる處はるかに畝傍山・耳成山・天の香久山の三山まゆの如く、〔略〕。
 さんざん 〔散散〕(副) 4 さんざんさんぐ
 六832 さんぐに切りまくつて、其の船の大將を生けどりにして引上げた。
 六916 〔略〕賊が城の門まで攻上ると、城のやぐらから大きな石を投落して、賊のさわぐ所をさんざんに射た。
 六935 正成は此の旗を城門に立てて、さんぐに賊を惡口させた。
 十二578 三人はさんぐ探し廻つて見附からないのでがつかりした。
 さんざんさん 〔感〕2 さんぐく
 九565 さんぐく、さんぐく。今日は天氣がよいので、朝から麥を打つ音が方々で聞える。
 九565 さんぐく、さんぐく。〔略〕朝から麥を打つ音が方々で聞える。
 さんじ 〔三時〕(名) 1 三時
 九70 仙臺に着いたのは午前の三時で、少しは下りた人も乗つた人もあつた。
 さんじかい いん 〔参事會員〕(名) 1 参事會員

十一1146 〔略〕府縣市會で参事會員を選挙するにも、〔略〕皆此の精神を本としなければならぬ。
 さんじころ 〔三時頃〕(名) 1 三時ころ
 五408 先生が拜殿にかけてある繪馬の、お話をして下さいましてから、たんぼの小道へ出て、三時ころ學校へかへりました。
 さんしさい 〔三四歳〕(名) 1 三四歳
 十173 〔略〕土地の人は一向平氣で、三四歳の子供でも、腹の下などを自由にぐつて歩きます。
 さんしじっかん 〔三四十貫〕(名) 1 三四十貫
 十二796 三四十貫、時には百貫以上もある大まぐろがどたりくと船中へ投込まれる光景は、〔略〕。
 さんしじっけん 〔三四十間〕(名) 1 三四十間
 八203 図 イカダノ大ナルモノハ長サ六七十間、幅三四十間、コレニ土ヲ置キテ野菜ヲ作り、〔略〕。
 さんしせんつぶ 〔三四千粒〕(名) 1 三四千粒
 六471 一匹デ三四千粒モ産ムトイフガ、〔略〕。
 さんじっけん 〔三十間〕(名) 1 三十間
 十一314 〔略〕二人はしつかと組みたるまゝ、ころくと轉び落つると三十間許。

さんじっさいあまり 〔三十歳余〕(名) 1 三十歳餘り
 十一747 宣長はまだ三十歳餘り、〔略〕篤學の壯年。
 さんじったん 〔三十反〕(名) 1 三十反
 七1137 去る三日にお差出しの編物三十反、本日無事に着きました。
 さんじつう 〔三十通〕(名) 1 三十通
 五917 いかな日でも葉書の百枚や封書の三十通ぐらゐるは、〔略〕。
 さんじつぶんごと 〔三十分毎〕(名) 1 三十分毎
 七917 図 汽車はおよそ三十分毎に、電車はおよそ十分毎に發着す。
 さんしひやくメートル 〔名〕 1 三四百メートル
 十一562 〔略〕船から三四百メートルの處に、大きなふかの頭が見える。
 さんじゃく 〔三尺〕(名) 3 三尺
 五865 図 たちまち水が二尺になり、三尺になり、五尺にもなりました。
 八308 かまはさしたしが一丈ぐらゐ、高さが四五尺ぐらゐで、前には三尺に一尺程のかま口を造り、〔略〕。
 十二85 図 太さ中指ほどなる細長き棒と、幅四五寸長さ三尺ばかりの厚板となり。
 さんじゃくあまり 〔三尺余〕(名) 1 三尺餘り
 十一407 今年伐るはずのは、〔略〕、

もう幹のまはりの三尺餘りもあるものが大分見える。	さんじゅうくすん 「三尺六寸」(名)	1 三尺六寸	十二182 巻取紙とて幅三尺六寸、長さ一萬六千尺餘りのものを之に取りつくれば、機械は〈略〉。	さんじゅう 「三十」(課名) 4 三十	二目14 十三 オ正月……………三十	四目9 八 山びこ……………三十	七目11 第十 獅子と武士……………三十	十目8 第七 パナマ運河……………三十	さんじゅう 「三十」(名) 2 三十	くがつしょうさんじゅうにち・ぜんろくじさんじゅうぶん	七728 家には七十近い父と、三十になる妻と、三つになる子どもがあるので、〈略〉。	九521 園 〈略〉、三十ぐらゐの時、年	來の貯金と主人からもらった金を資本にして、小さい米屋を始めた。	さんじゅういち 「三十一」(課名) 4	三十一	三目12 十一 五一ちいさん……………三十一	十一	六目12 第九 町ノ朝……………三十一	九目9 第八 若葉の山道……………三十一	十一	十一目9 第八課 瀬戸内海……………三十一	十一	さんじゅういち じごがつだいさんじゅういちにち・じゅうがつさんじゅういち	
ちにち	さんじゅうく 「三十九」(課名) 2 三十九	三目2 十四 うらしま太郎……………三十九	九目11 第十 水師營の會見……………三十九	さんじゅうく 「三十五」(課名) 3 三十五	三目13 十二 右ト左……………三十五	七目13 第十二 大連だより……………三十五	十一目10 第九課 植林……………三十五	さんじゅうく 「三十五」(名) 1 三十五	五	八目16 第十一 大岡さばき 一子	ども争……………三十五	さんじゅうくじゅう 「三重五重」(名)	1 三重五重	十二9910 園 〈略〉、尚三重五重の塔、	猿澤の池水に影をうつして南都第一の美觀たり。	さんじゅうごねん 「三十五年」(名) 1	三十五年	十一7610 宣長は眞淵の志をうけつぎ、	三十五年の間努力に努力を續けて、	遂に古事記の研究を大成した。	さんじゅうごまんしせんり 「三十五萬四千里」(名) 1 三十五萬四千里	十一119 さうして其のさしわたしは	三十五萬四千里、即ち地球の百九倍	餘りに當り、其の容積は〈略〉。
さんじゅうさん 「三十三」(課名) 1	三十三	二目15 十四 モチノマト……………三十三	さんじゅうし 「三十四」(課名) 4 三十四	四目10 九 フクロフ……………三十四	五目11 十 遠足……………三十四	六目13 第十 弓流し……………三十四	七目12 第十一 初夏の夜……………三十四	さんじゅうしち 「三十七」(課名) 4	三十七	二目3 十五 ユキ……………三十七	三目14 十三 まはりつこ……………三十七	七	十目9 第八 開墾……………三十七	十二目10 第九課 月光の曲……………三十七	さんじゅうに 「三十二」(課名) 1 三十二	八目14 第十 朝鮮人夢……………三十二	さんじゅうにち 「三十日」(名) 1 三十日	十一938 したがつて二百十日も太陽曆なら大が九月一日で、ちがつても一日ぐらゐのものが、太陰曆になると三十日もちがふことがある。	さんじゅうにん 「三十二人」(名) 1	三十二人	十一17 總員三十二人が四組に分れて、	それぐ仕事の持場に向つた。		
さんじゅうにん 「三十人」(名) 1 三十人	十一841 〈略〉、三十人の一組は二列になつて、順々に水の中へとはいつて行く。	さんじゅうねん 「三十年」(名) 2 三十年	七958 園 村の役場に三十年、勤めつづけし小使の 年のよりしがあはれさに、〈略〉。	十二521 三十年ばかり前までは、此の湖には魚類が全く居なかつた。	さんじゅうねんめ 「三十年目」(名) 2	三十年目	十一403 使ひみちによつて、三十年目から五六十年目ぐらゐの間に伐るのなさうだから、〈略〉。	十二1105 かうして、老僧が始めてのみを絶壁に下してからちやうど三十年目に、〈略〉 大工事が見事に成就した。	さんじゅうはち 「三十八」(課名) 3	三十八	二目17 十六 ユキダルマ……………三十八	八	四目11 十日と風……………三十八	六目14 第十一 入營した兄から……………三十八	さんじゅうはち 「三十八」(名) 1 三十八	八目17 第十一 大岡さばき 〈略〉	二 石地蔵……………三十八							

さんじゅうはっセンチメートル (名)

1 三十八センチメートル

十二518 即ち水位の一番高い五月と一番低い一月との差は、僅かに三十八センチメートルに過ぎない。

さんじゅうようこう 「三十余郷」 (名) 2

三十餘郷

十683 郷 〈略〉、もとは佐野三十餘郷の領主、それが一族どもに所領を奪はれて、此の通りの始末でござい

す。

十七18 郷 さて一族どもに奪はれた佐野三十餘郷は、理非明らかなるによつて汝に返しあたへる。

さんじゅうろうく 「三十」 (課名) 1

三十六

九目10 第九 兩將軍の握手………三十六

さんじゅうつ 「産出」 (名) 1 産出

八961 図 商工業盛ニシテ、焼物・塗物・扇・綿絲・織物等ノ産出頗ル多シ。

さんじゅうつ 「算術」 (名) 2 算術

算術

八926 おとよは話し方ばかりでなく、書き方も算術も裁縫も料理も習つてゐる、〈略〉。

十一978 鉛筆や紙も自由には買へなかつたから、家で算術の練習をするには、木のシャベルと炭を用ひた。

さんしゅうつする 「産出」 (サ変) 1

産出する 《一シ》

十二503 此の種のゴムが、昔主として南米ブラジルのパラ州から産出したので、〈略〉。

さんじょう 「三条」 (地名) 2 三條

六712 名高いのは三條・四條・五條の三つの橋でございます。

十二1028 図 〈略〉 古京の跡を展望すれば、〈略〉東西に走る三筋の路は、北より數へて古の一條・二條・三條の大路の名残とす。

さんじょう 「三丈」 (名) 1 三丈

十二1106 洞門の長さは實に三百八間、高さ二丈、幅三丈、〈略〉。

さんじょう 「三疊」 (名) 1 三疊

八1153 郷里の家は六疊・三疊・二疊の三間と、二疊の板の間が一つだけの、至つてせまい、そまつな家であつた。

さんじょう 「山上」 (名) 1 山上 ↓

はくぎよくさんじょう

十一287 図 今まで賤嶽の山上より、またゝきもせず戦況を見居たりし秀吉、〈略〉。

さんじょういたす 「参上」 (四) 2

参上致す 《一シ》

九1137 図 早速御見舞に参上致したく存じ候へども、御住所不明にて困り居り候。

十1099 図 當地に御住まいの頃度度参上致し、大兄と共にいろいろ御話を承り候事など、〈略〉。

さんじょうつかまつる 「参上仕」 (五)

1 参上仕る 《一ル》

七1015 図 加藤清正これまで参上仕る。さんじょうのおおはし 「三条大橋」 (名) 3 三條の大橋 三條大橋

六713 今、三條の大橋に立つて、川下を見ると致しませう。

六71 図 三條大橋

六732 又三條の大橋から川上を見る

と、〈略〉。

さんしよく 「三色」 (名) 4 三色 ↓

あいしろあかさんしよく

十二633 図 此の三色は、自由・平等・博愛を表すものと稱せらる。

十二635 図 フランスの國旗が縦に三色を分ちたるに對して、〈略〉。

十二636 図 〈略〉、黒・赤・金の三色を横に染分けたるものはドイツの國旗なり。

十二641 図 イタリヤの國旗は、緑・白・赤の三色を縦に染分け、〈略〉。

さんず 「産」 (サ変) 3 産す 《一スースル》

十633 図 種類は大てい我が國に産する限りを盡くし、産地は日本全國にわたれり。

十二458 図 我が國に産する木材は其の種類頗る多し。

十二492 図 ひばは津輕半島に最も多く産す。

さんず 「参」 ↓はせさんず

さんず 「散」 (サ変) 1 散ず 《一

ジ》

十一1292 図 二度資を集めて二度散じたる鐵眼は、終に奮つて第三回の募集に着手せり。

さんずる 「産」 (サ変) 4 産スル

産する 《一シースル》

九1810 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、〈略〉。

九199 〈略〉、印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。

十869 又毛織物の原料になる羊毛は、我が國ではほとんど産しないから、〈略〉。

十一498 ゴムは、熱帶地方に産する或植物からとる白色の液を原料として、製造したものである。

さんずる 「算」 (サ変) 1 算する

《一スル》

十一632 それが今は人口約二萬、戸數約四千を算するりつばな町となつたのである。

さんずる 「散」 (サ変) 2 散ずる

《一ジ》

九952 図 雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて來て、〈略〉。

九952 図 雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて來て、〈略〉。

さんせいする 「賛成」 (サ変) 2 賛成する 《一シ》

五702 村の人々は大中大きな仕事だ

とは思つたが、〈略〉、みんな賛成したといふことだ。

十932 「〈略〉。」と正雄が言ふと、良一はすぐ賛成した。

さんぜんにん 「三千人」(名) 2 三千人

六923 先づ谷川のほとりに三千人の番兵を置いて、〈略〉。

十一510 門人三千人、其の最もすぐれたるもの、顔淵・曾参・有若等七十二人なりき。

さんぜんねん 「三千年」(名) 1 三千年

十二1327 我が國が世界無比の國體を有し、三千年の光輝ある歴史を展開し來つて、〈略〉。

さんぜんはっぴやくまんり 「三千八百万里」(名) 1 三千八百万里

十一41 しかも我々に最も近いあの太陽でさへ、地球からは凡そ三千八百萬里も離れてゐる。

さんぜんろっびやくメートル (名) 1 三千六百メートル

十一1055 次にイグアッスーの瀧は、〈略〉、高さ五十五メートル、幅三千六百メートル、〈略〉。

さんだい 「三代」(名) 1 三代

九231 しかし此の農學といふ學問は、〈略〉、三代かゝつても、まだ全く手の着かない事が少くなかつた。

さんだん 「三段」(名) 2 三段

十347 かうして前後三段に上つた船

は、海面より約二十六メートルも高い水面に浮ぶのである。

十357 今度は前と反對に、順次に三段を下つて、海と同じ水面に浮ぶ。

さんち 「山地」(名) 3 山地

十3110 先づ地峽の山地を流れてゐる河の水をせき止めて、湖を二つ造つた。

十351 これは高い山地を切通したもので、〈略〉。

十二498 此の邊は一體に山地で、湖面は海面より四百メートルも高く、〈略〉。

さんち 「産地」(名) 5 産地

六486 蛙ハ寒イ國ノ魚デ、我が國デハ樺太ト北海道ガオモナ産地ダサウダ。

十639 種類は大てい我が國に産する限りを盡くし、産地は日本全國にわたれり。

十一1065 世界に名高きブラジルコーヒーの主要なる産地も此の邊にて、〈略〉。

十二492 松に至りては産地極めて廣くして、奥羽地方より九州に至るまで〈略〉。

十二524 今日鱒の産地として世に知られるやうになつたのは養魚經營の賜である。

さんちゃん 「三」(人名) 1 三ちゃん
四236 「おう、三ちゃんか。よく來たね。」

さんちゅう 「山中」(名) 1 山中

あしおさんちゅう・はこねさんちゅう
九242 新しい鑛山を開いたりする爲に、此の山中へ來たのである。

さんちゅうや 「三晝夜」(名) 1 三晝夜

七373 船で來れば、神戸から三晝夜、門司からは二晝夜で當地へ着きますが、〈略〉。

さんちよう 「三町」(名) 1 三町

六234 兩方からおしよせて、ぢんの間がわづか三町ばかりになりました。

さんど 「三度」(名) 4 三度

八981 船内くまなくたづぬる三度、呼べど答へず、さがせど見えず、〈略〉。

十一1308 鐵眼は一生に三度一切經を刊行せり。

十二5510 〈略〉、餘り小さいのでつまめなかつた。二度、三度。やつとつまんだと思ふと直に落してしまつた。

十二889 討議の形式は、普通第一讀會・第二讀會・第三讀會の三度の會議を経ることになつてゐる。

さんどう 「參道」(名) 1 參道

たさんどう・みなみさんどう
十一4 青山の神宮前停留場にて電車を下り、廣き參道を行くこと十町ばかりにして神宮橋に達す。
さんとうしょう 「山東省」(地名) 1 山東省

十一47 孔子は今より凡そ二千五百年前、當時の魯即ち今の山東省の地に生れたる。

さんどさんど 「三度三度」(名) 1 三度三度

八1137 〈略〉、三度三度の食事に、必ず其のきらひな物はかり出して、〈略〉。

さんどめ 「三度目」(名) 1 三度目

五753 人の一心といふものはえらいもので、三度目に土手の工事はうまかつた。

さんにん 「三人」(名) 17 三人

三616 男の子三人はささのはをとつて、舟をこしらへました。

三627 三人は一しよに舟を出しました。

三633 三人は舟とならんで、川のふちをかけて行きます。

四18 〈略〉おとさんと太郎さんが來ましたので、三人でお宮へまゐりました。

四835 三人で町を見物しました。

六627 やがてうばをも呼入れて、三人は其の夜をなみだの中に明かしました。

九541 さうして全く無一物になつて、親子三人町外れの裏長屋に移つてしまつた。
九568 正一の家でも、親子三人、庭にすゑた打臺の前に並んで、麥を打つてゐる。

九58 4 仕事は水入らずの三人の手で、ずん／＼はかどつて行く。
 十24 6 〈略〉、年とつた燈臺守が、妻と娘と三人で、わびしく其の日を送つて居た。
 十65 6 三人はゐろりを圍みて坐せり。
 十93 8 すると橋はまん中から折れて、三人は水中におちいつた。
 十二43 4 三人は「どうかもう一曲。」としきりに頼んだ。
 十二44 3 〈略〉、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、唯ぼうつとして、ひき終つたのも氣附かぬくらゐ。
 十二57 8 三人はさん／＼探し廻つて見附からないのがつかりした。
 十二65 7 王にはゴネリル・リガン・コーデリヤといふ三人の娘があつた。
 十二66 1 王は〈略〉月代りに三人の娘の許に身を寄せ、餘生を安樂に送らうと決心した。
 さんにんづれ 「三人連」(名) 1 三人連
 十92 10 翌日太郎が友だちの正雄・良一と三人連で、學校から歸る時の事であつた。
 さんにんとも 「三人共」(名) 1 三人とも
 十一70 3 三人とも物を言つてしまつたので、上座の老僧がもつたいらしい顔をして、「〈略〉。」

さんねん 「三年」(名) 2 三年
 十120 2 公は此處にうつされてから一歩も外へは出ないで、三年の歳月を送られたさうである。
 十一93 5 ところが太陰曆は〈略〉、通例十二箇月を一年とするが、此の一年は一回歸年より約十一日少いから、〈略〉、三年にならないうちに一箇月の間をおかなければならない。
 さんねん 「残念」(形状) 7 残念
 七60 4 それは〈略〉、まだ海を恐れる人もあるといふことで、これは實に残念な事であります。
 九26 5 〇〇〇、實行が出来ずにしまつた。これはまことに残念な事である。
 九116 6 〇〇〇 聞けば、〈略〉、かく別の働なかりきとのこと。母は如何にも残念に思ひ候。
 九119 1 〇〇〇 豊島沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念に思つてゐる。
 十94 10 〇〇〇 弱蟲だといつて笑ひました。僕は残念でたまらなくなつたので、〈略〉。
 十108 2 〇〇〇 〈略〉、それも心に任せず、甚だ残念に存じ居り候。
 十一71 2 〇〇〇 〈略〉、「どうも残念なことでした。あなたがよく會ひたいと御話しになる江戸の賀茂眞淵先生が、先程御見えになりました。」といふ。
 さんねんがる 「残念」(五) 1 残念がる 「一ル」

九118 3 〇〇〇 おかあさんの精神は感心の外はない。お前の残念がるのももつともだ。
 さんねんぶり 「三年振」(名) 2 三年ぶり
 八83 3 もと僕のうちに奉公してゐた信吉が、昨日の朝三年ぶりでハワイから歸つて來た。
 八87 4 〇〇〇 私は三年ぶりに此の子にあふのでございますが、〈略〉。
 さんば 「三羽」(名) 3 三バ 三羽
 一30 5 〇〇〇 「一ハ二ハ三バ四ハ、四ハキマス。」
 二13 4 人ガテツパウデ、一ドニ
 三パウチオトシマシタ。
 四63 7 〇〇〇 〈略〉、三羽ねらへば、二羽だけはきつといおとすほどの上手でございます。
 さんばい 「参拜」(名) 2 参拜 〇〇〇
 いじじんぐうさんばい
 六103 6 〇〇〇 おとうさんは〈略〉伊勢参宮に立たれました。参拜をすましてから、〈略〉。
 六107 5 〇〇〇 何のかざりもない御神殿を拜して、〈略〉。参拜をすましてから、〈略〉。
 さんばい・す 「参拜」(サ変) 1 参拜す 「一セ」
 十一13 〇〇〇 〈略〉、東京代々木の明治神宮に参拜せり。
 サンパウロ 「地名」 1 サンパウロ
 十一102 〇〇〇 サンパウロ

サンパウロし 「地名」 1 サンパウロ市
 十一105 8 〇〇〇 二週間ばかり前より南方のサンパウロ市に参り居候。
 さんばつ 「散髪」(名) 1 散髪
 十一39 2 〇〇〇 いつかにもいさんが、「杉の散髪だ。」といつてみんなを笑はせたことがある。
 さんばん 「三番」(名) 2 三番
 六63 〇〇〇 「いや、一番も三番も臺灣にあつて、四番目が富士山だ。」
 六52 4 一番二番三番と、十二番の舞がめでたくすみましたが、〈略〉。
 さんばんだいこ 「三番太鼓」(名) 2 三番太鼓
 八85 〇〇〇 馬の頭をそろへて、三番太鼓を今やおそしと待ちかまへてゐる。
 八87 〇〇〇 三番太鼓が鳴るが早いか、五匹の馬は一さん／＼にかけ出した。
 さんばんぼし 「三番星」(名) 1 三バンボシ
 一41 3 〇〇〇 三バンボシミツケタ。アレアノ ヤマノ マツノキノウヘニ。
 さんばんめ 「三番目」(名) 2 三番目
 六62 〇〇〇 一番は新高山、二番は富士山、三番目は。」
 十二12 3 此の時にはもう三番目の蟲はどこへ行つたかわからなかつた。
 さんびき 「三匹」(名) 1 三匹
 五36 8 〇〇〇 〈略〉、道ばたの立石にさるが三匹はつてありました。

さんまんしせんトニー (名) 1 三萬四千噸
 十173 図 今日を晴と満艦飾をほどこされたる三萬四千噸の大戦艦陸奥は、
 さんまんじゃくちか・い 「三万尺近」
 (形) 1 三万尺近い 《一イ》
 六77 図 印度のヒマラヤ山は世界一で、たしか三万尺近いとおぼえてゐる。
 さんまんちかく 「三万近」 (副) 1 三萬近く
 七63 図 日本中の小學校、三萬近くありといふ。
 さんまんちかし 「三万近」 (形) 1 三萬近し 《一キ》
 七64 図 三萬近き學校に 分れて學ぶわれくの 望に向ふ足なみは 皆一せいにそろふなり。
 さんみやく ひださんみやくちゆう
 さんもん 「山門」 (名) 1 山門
 十二28 図 建長・圓覺 古寺の山門高き松風に、昔の音やこもるらん。
 さんや 「山野」 (名) 3 山野
 八32 山野に生ずる草木の中には、薬用にするものが多くありますが、
 十一50 図 ブラジル邊でゴムを製造するには、山野に自生するゴムの木から原料をとるのであるが、
 十二103 図 愛すべく美しき山野は、

更に太古以來の歴史と結び文學と結びて、感いよく深きを覺ゆ。
 さんより 「三四里」 (名) 2 三四里
 五56 図 松島は大小二三百の島が、海上三四里の間にちらばつてゐて、
 七65 図 三四里行つて、大きな峠へかゝりますと、
 さんり 「三里」 (名) 2 三里
 九94 図 雪溪は、ふもとの村から三里ばかり登つた所から始つて、頂上近くまで續いてゐます。
 十二104 図 豊前の中津から南へ三里、激流岩をかむ山國川を右に見て、川沿の道をたどつて行くと、
 し 「四」 (課名) 14 四 だいし・だし
 二目3 二 オキヤクアソビ……四
 二目5 四 ウシワカマル……十一
 二目1 四 ウシワカマル
 三目5 四 うちの子ねこ
 三目4 四 うちの子ねこ
 四目3 二 柿……四
 四目5 四 麦まき……九
 四目8 四 麦まき
 五目5 四 松太郎の日記
 五目7 四 松太郎の日記

六目3 第二 日本の高山……四
 七目3 第二 長き行列……四
 十一目3 第二課 孔子……四
 十二目3 第二課 出雲大社……四
 し 「土」 (名) 1 土 じじゅうしちし・べんごし
 七39 図 《略》、又我が忠勇の士が血を流して取つた二百三高地にも上つて歸りました。
 し 「子」 じにし
 し 「氏」 じかわいし
 し 「四」 (名) 6 四
 一34 二 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十、十パトンデキマス。
 九82 図 第十八 石安工場 《略》 四
 十一13 図 第四課 遠足 《略》 四
 十一81 図 第十九 我は海の子 《略》 (四)
 十一107 図 第二十三課 南米より 《略》 四
 十二34 図 第八課 ヨーロッパの旅 《略》 四 ベルリンから
 し 「市」 (名) 3 市 じサンパウロし・シカゴし・ジュネーブし・なごやし・ならし・ニューヨークし・リオデジャネーロし・パリし・ふけんしかい・ふけんしちようそんかいぎいん
 八97 図 市ノ南部 二熱田神宮アリ。
 十一113 図 我が國の地方自治團體には、府・縣・市・町・村の別がある。
 十二102 図 市の界
 し 「史」 じがつしゅうこくし

し 「死」 (名) 4 死
 九36 図 《略》、正義の念と愛國の情とに死を恐れざるベルギー軍の防戦も、
 十27 図 打ちよせる大波、打返すさか波、危く岩に打付けられ、忽ち死の口に吞まれようとする。
 十100 図 願はくは我に死をたまへ。
 十一127 図 《略》、人の死を救ふは更に必要なるに非ずや。
 し 「使」 じしやうでんれいし・でんれいし
 し 「紙」 じしんぶんし・でんぼうらいしんし・まきとりし・らいしんし
 し 「師」 (名) 1 師 じえし・とけいし
 十二93 図 師を求めてあちらこちらさまよつてゐるうちに、マガダ國の首府王舍城の附近に來た。
 し 「詩」 (名) 3 詩
 十120 図 宮中の御宴の事を思ひ出して詩を作られたのも此處であらう。
 十132 図 《略》、大いなる櫻の幹をけづりて、大文字に詩の句を書きつけたり。
 十133 図 主上は詩の心を御さとりありて、天顔殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。
 し 「資」 (名) 1 資
 十一129 図 二度資を集めて二度散じたる鐵眼は、終に奮つて第三回の募集に着手せり。

し (副助) 1 し

十二123 6 図 略、思出の深き船

路や、つゝがなく今日しも果てて

船は今靜かに歸る、懐かしき故郷の港。

し (接助) 18 し

三21 ミチバタ ニハスミレヤタ

ンポポ ガサイテ キルシ、ムギ畠

ノ上 ニハアサ ハヤク カラヒ

バリ ガサハツツテ キマス。

五72 中村君は學問もよく出来るし、

うんどうも上手です。

五303 圖 つりも出来るし、およぎも

出来て、あつい夏でもすゞしく

五657 圖 今日は買物もあるし、歸り

には馬車に乗つて、此の下まで来て

もよい。

六83 圖 奈良の春日山や三笠山は千

尺そこくだが、白根や槍岳よりも

知られてゐるし、京都の東山にして

もさうだ。

七271 畠山重忠は 略、馬をしよ

つて下りたといふし、近くは乃木大

將も、馬は煉瓦造の小屋に入れて置

かれたのである。

七507 ナタヲ打ツテキタコトモアリ

マスシ、車ノ輪ヲ打ツテキタコトモ

アリマス。

七546 圖 けれども日の出や日の入に

は、略、水の色が金色になります

し、月夜には波が銀色に光つて、

略。

七58 8 圖 略、それにたよつて方角

を知ること出来るし、自分の船の

居場所を知ること出来る。

七635 大ぜいの人々が口々に人夫を

呼んでは我先に渡らうとしますし、

年よりや子どもは聲を立てて呼合ひ

ますので、略。

八737 圖 略、りつばな學校もあり

ますし、博物館や圖書館などもた

くさんあります。

九524 圖 略、あの人ならといふ信

用はあるし、それにわき目もふらず

働くので、店はだんだん繁昌して、

略。

九5410 圖 人々の同情は集つてゐるし、

商賣の仕方は十分心得てゐるので、

略。

十141 圖 朝のかゝりはおそいし、晩

のしまひは早い上に、とかく無責任

な事ばかりしてゐました。

十573 又暗い時の飛行に馴れさせて、

夜間に使ふ事も出来るし、飼養所を

移動し、其處を見覚えさせて飛歸ら

せるやうにする事も出来る。

十744 圖 今でも城壁は大部分昔の面

影を留めてゐますし、門も主なもの

は残つてゐます。

十一144 略、さうちもよく行届い

てゐるし、總べてがきちんとしてゐ

ました。

十二335 圖 略、道を往來してゐる

人間や自動車などは、まるで蟻のは

ふやうに見えるし、さしもの大きな

パリ市も殆ど一目に見えます。

じ [地] (名) 10 地 ↓ち ↓あい

じ・あいじちゅう・おびじ・しろじ・

しろじちゅう・すなじ・もちじ・ゆか

たじ

五221 其のたびに、鯉のかげが地の

上をおよぎます。

五525 地ノ中ニシミコンデ、井戸水

ヤ泉ノモトニナルノモアリ、略。

五982 一人はもうにげる間がないの

で、地にたふれて、死んだふりをし

てゐました。

六196 略、濱の松は身をふるはせ

て、頭を地に着けさうにします。

六742 圖 春子、オ前ハ着物や帶ノ地

ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマスカ。

六875 象がそれを下して来て地に置

くと、象つかひがぬつと桶の中で立

上つた。

七177 しゃうの強いもので、一度種

が地に落ちれば、年年其所で花がさ

く。

七1138 圖 地もがらもまことに當地向

で、賣行もよからうと思ひます。

十373 略、山をくづし、地をうが

ち、河水をせき止めた事など、略。

十二612 圖 雪白の地に紅の日の丸を

系がける我が國の國旗は、略。

じ [字] (名) 11 ジ 字 ↓いちじ・

このじなり・じゅうごじ・じゅうじ・

じゅうしちじ・なんじ・にじ

一223 ネエサン ガジヲカイテ

キマス。

二627 コレデ本ノ中ノジモ、

エモ、略、イロイロナモノモ

見ルノデス。

三546 わかいとき字をならひま

したが、うまく書けませんので、

略。

三572 それからは一しやうけん

めいになつて、毎日字をならひ

ました。

四14 大きな字を書いたのぼり

がすみきつた空に立つてゐま

す。

七1117 圖 略、にごりのある字は二

字に數へるのだから、それでは十七

字になる。

七112 圖 字

八622 圖 目は見ゆれども、字のよめ

ざる人をあきめくらといふ。

八741 圖 二人とも字が上手になつた

のに驚きました。

十1237 圖 又字を書く時に指先を見る

と、爪はみじかく切つてゐました。

十二198 圖 沖を走るは丸屋の船か、

丸にやの字の帆が見える。

じ [寺] ↓おうばくさんまんぶくじ・

こうふくじ・せんがくじ・とうだい

じ・にしほんがんに・ひがしほんがんに

じ・まんぶくじ

じ [事] ↓いちじ

じ 「時」 いちじ・くじ・くじごろ・

ごくじじゅうしちふん・ごくじにじ

じつふん・ごはちじ・ごよじ・ご

ごろくじ・ごじ・ごはんごろ・ごじ

ふん・ごぜんごじ・ごぜんしちじ・ご

ぜんはちじ・さんじ・さんじごろ・し

ちじ・じゅういちじまえ・じゅうじご

ろ・じゅうじすぎ・ぜんじゅうじゆ

うろつふん・ぜんれいじごじゅうさん

ぶん・ぜんろくじさんじつぶん・どう

じつごぜんじゅうじごろ・どうじつご

ぜんじゅういちじ・なんじ・にじゅう

ごにちごいちじ・はちじ・はちじご

ろ・はちじはん・よじ・ろくじ

じ 「路」 おおじ・こしじ・しおじ・

のじ・ふなじ・みのじ・みやこおお

じ・やまじ

おしあわせ

八35「略」、一生の間仕合はせのよ

い事がつづいたと申します。

十二67「略」、ひたすら父上を大

事に致すのを此の上もない仕合はせ

と存じてをります。

十二130「略」、又延いては徳川家及び江

戸百萬の民の仕合はせ、これは申す

までもござりませぬ。

しあわせ 「幸」 (形状) 3 仕合はせ

仕合

五87「略」、仕合はせに水はそれからふ

えませんでしたが、町は大てい水に

つかつて、
七94「略」、仕合はせに午後は風が弱つた。

九48「略」、うち中が丈夫で、仲よく

かせぐ、こんな仕合なことはない。

しあん 「思案」 (名) 1 しあん ↓

四57「略」、山のふもとの

大木は、あのしひの木か、か

しの木か。

八29「略」、きのこのむらがつて出るのも

しひの實が落ちて、くぼたまりにこ

ろがり合ふのも今である。

じい 「祖父」 ↓おじいさま

じいさん 「祖父」 (名) 6 ちいさん

↓おじいさん・ごいちじいさん・ごへ

いじいさん・やすじいさん

三31「略」、五いちいさんはおもしろい

ちいさんです。

三32「略」、いつもきげんよく

うたをうたふちいさんです。

三36「略」、こぬかだらけになつ

てはたらくちいさんです。

九82「略」、店に飾れる石燈籠、

「ジイツ」 トナイト、トンデ行キ

マシタ。

しいて 「強」 (副) 3 強ひて

九39「略」、やがてレマン將軍は、
帶劔をときて渡さんとするを、エン

ミツヒ將軍は「いや、それには及ば

ん。閣下の劔は軍人の魂として少し

も名譽をきずつてなかつた。」と、

強ひて之をおし止めたり。

十一14「略」、私が来たので、すぐしまは

うとなさるのを強ひて止めてお手傳

をしました、
十二86「略」、土人等怒りて林蔵の頭を

打ち、強ひて酒を飲ましめんとす。

しいのきとかしのみ 「課名」 2 しひ

の木とかしのみ

四目4 十五 しひの木とかし

ののみ

四55「略」、十五 しひの木とかし

ののみ

じいん ↓ウエストミンスターじいん

しお 「潮」 (名) 13 しほ 潮 ↓

あげしお・うずしお・たかしお・ひき

しお

五59「略」、ことにしほのみちた時は、社

殿や廻廊が海の中に浮いて、
六35「略」、弓は潮に引かれて流れて行き

ます。

七10「略」、潮がずん／＼下がるので、舟

はすすと進んで、たちまち海へ出

た。

七10「略」、だん／＼潮が引いて、もう其

ののみ

七10「略」、だん／＼潮が引いて、もう其

ののみ

七10「略」、だん／＼潮が引いて、もう其

しかく 「四角」(形状) 3 四角 四角

七16 9 四角な田には四角に、細長い田には細長く、田の形其のまゝに〈略〉。

七17 1 四角な田には四角に、〈略〉、田の形其のまゝに紅紫のもうせんをしきつめたやうに見える。

八82 2 いれ物次第で、圓くもなれば、四角にもなる。

しかけ 「仕掛」(名) 1 仕掛 おおじかけ

十32 8 所で、此の高い湖と低い掘割を何の仕掛もなしに連結すれば、湖の水は瀧のやうに掘割へ落込んで、〈略〉。

しかける 「仕掛」(下二) 1 しかける 〈一ケ〉

十113 8 〈略〉、ずどんと一發、破裂矢をしかけたもりを打つ。

シカゴ 「地名」 3 シカゴ

八69 8 団 サンフランシスコから三日二晩汽車に乗通して、今日此のシカゴに着きました。

八71 2 団 シカゴとニューヨークの間は九百八十哩もありますが、〈略〉。

八73 9 団 シカゴを立つ日に、お前たちの年始状が着きました。

シカゴから 「題名」 2 シカゴから

八目 9 第十八 アメリカだより

〈略〉 二 シカゴから

八69 2 第十八 アメリカだより

〈略〉 二 シカゴから

シカゴし 「地名」 1 シカゴ市

八70 8 団 長く滞在してゐたシカゴ市を立つて、今日いよく米國第一の大都會ニューヨーク市に着きました。

しかし (接) 54 シカシ しかし

四70 7 〈略〉、又日ニテラサレテモトケマセン。シカシ ユヤ水

ニハスグトケテシマヒマス。

四71 2 一人ハタイソウ皆サンニ

スカレマセン。シカシ二人トモ

大セツナモノデ、〈略〉。

六7 8 団 印度のヒマラヤ山は世界一で、たしか三万尺近いとおぼえてゐる。しかし三郎、高い山がかならず

名高い山だとはかぎらない。

八45 4 団 〈略〉、昨朝あたりから熱が下つて、食事進むやうになりましたので、やつと安心致しました。しかし醫者の申す所では、老體のこと

故、餘程大事にしなければならぬとのことでございます。

八103 8 マツチは 〈略〉、一包十箱が十錢ぐらゐで買はれる。しかし之を一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。

九19 6 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、〈略〉、マルデ枯葉ガ引掛ツテキルヤ

ウニ見エル。シカシサラニコレヨリ

モ色ヤ形ガウマク出来テキルノハ、

印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。

九22 9 団 それから 〈略〉、二代つゞいて、其のお志をおつきになり、一

そう研究を進められた。しかし此の

農學といふ學問は、〈略〉、三代かゝ

つても、まだ全く手の着かない事が

少くなかつた。

九23 6 団 そこで此の父も、〈略〉、出

來るだけは骨折つたつもりである。

しかし思ふ程に仕事は出來ず、其の上 〈略〉、役人ににくまれて、終に

は國を立ちのかねばならぬやうにな

つた。

九24 3 団 〈略〉、新しい鑛山を開い

たりする爲に、此の山中へ來たので

ある。しかし此の分では、わたしの

命は、とても仕事の出來上るまでも

つまいと思ふ。

九26 5 団 〈略〉、實行が出來ずにしま

つた。これはまことに残念な事であ

る。しかしわたしの四十年の骨折は、

農學の進歩の爲には決してむだでな

かつたと思ふ。

九38 2 団 おほめにあづかつて恐れ入

る。しかし部下の者は、最後までベ

ルギーの名譽をけがさなかつたつも

りである。

九85 5 団 さうだ。動かないのだ。し

かし地球が廻るために、我々の目には

は動くやうに見える。

とう／＼恐しい日が來た。

九109 4 北風は 〈略〉、思はず其の場

から數十間も進んでしまつた。しか

し主人をうしなつたと思ふと、今ま

で張りつめてゐた勇氣もくじけて、

ゆめからさめたやうにあたりを見廻

した。

九110 9 北風はもう一度あの勇ましい

號令が聞きたいと思つて、〈略〉、左

右の耳をそばだててみた。しかし聞

えるのはかすかな息づかひばかりで

あつた。

九118 3 団 おかあさんの精神は感心の

外はない。お前の殘念がるのももつ

ともだ。しかし今の戦争は昔と違つ

て、一人で進んで功を立てるやうな

ことは出來ない。

九119 1 団 豊島沖の海戦に出なかつた

ことは、艦中一同殘念に思つてゐる。

しかしこれも仕方がない。

九121 2 団 「オトウサンハ誰ニ投票ナ

サルノデス。」ソレハ誰ニモ言フベ

キ事デハナイ。シカシ今度ノ候補者

ノ中ニ、〈略〉、アノ人ナラバト思ハ

レル人ガアルカラ、オトウサンハ

〈略〉其ノ人ニキメテキタ。

十14 9 団 〈略〉、これがまじめに實行

されてゐるかどうかと、少し氣にな

つたのでした。しかし、此の間夜學

を參觀した時の皆さんの熱心な様子

や、今日の働を見て、大そう心強く

なりました。

十377 昔、太平・大西兩洋の間を往來する船は、はるか南アメリカの南端を大廻りしなければならなかつた。しかしパナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり、したがつて世界の航路に大きな變動を生じたのである。

十407 父は「略」、「あ、今朝はなか／＼寒い。指の先がしびれるやうだ。」といつて、「略」、鎌をときにかゝつた。力藏さんも、「しかし天氣が続いてよいあんばいだ。」と誰に言ふともなく言つて、「略」。

十467 喜三右衛門は、其の日から赤色の焼付に熱中した。しかしいくら工夫をこらしても、目ざす柿の色の美しさは出て來ない。

十5510 普通傳書鳩を使用する方法は、一定の飼養所から他の土地に連れて行つて、飛歸らせるのである。しかし此の外に、往復通信の方法もある。

十669 私はもと鉢の木がすきで、「略」、大い人にやつてしまひました。しかし此の三本だけは、其の頃のかたみとして、大切に殘して置いたのでございますが、「略」。

十694 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、「略」一番にはせ參じ、「略」、あつぱれてがらを立てるか／＼。しかし此のまゝに日を送つては、唯空しくうゑ死する外はございませぬ。

十1157 綱を次第々々にくりもどすと、鯨は刻一刻船に近よつて來る。しかしまだなかなか勢が強いので、綱を巻いてはのぼし、のぼしては巻いて、氣長くあしらつてあるうちに、「略」。

十11810 約束は固く守らなければならぬ、「略」などといふことは、我々が十分心得てゐる事である。しかし大勢の中にはそれを守らない人もある。

十14110 園生「略」、しかも一時は太分御重態なりし由、誠に意外の事に驚入候。しかし此の頃は、餘程御快方に向はれ候とか。

十1436 園生「略」、其の後とかく病勢衰へず、遂に肺炎を引き起し申候。しかし幸に經過良好にて、熱も凡そ二週間餘にて全く相去り申候。

十1564 人人は叫び聲に驚きあわて、我先にと船へもどつて來る。しかし二人の少年はまだ知らないらしい。

十1568 救ひのボートは下された。しかしとても間に合ひさうもない。

十1686 「略」、火の熱と光とをあらゆる方面に利用することを考へて來た。しかし火の利用法は、決してこれで完成したといふわけではあるまい。

十1785 「略」、又之を考案した昔の人々に對して別段感謝の念を起すこともない。しかし今日の貨幣や紙幣

を案出するまでには、人間は實に種々様々なるものを使用してゐたのである。

十1789 石・貝・家畜・獸皮・布・農産物などが、時代により場所によつて、それ／＼貨幣の役目をしたこともあつた。しかしこれらの物は、「略」、其の他いろいろの缺點がある。

十1854 竹島を越したと思ふと、急に水が冷たくなつた。何だか氣持の悪いものだ。しかし又しばらくすると、もとの水の温度にかへつた。

十1862 僕も急に元氣がなくなつて、一所に船上らうかと思つたが、「略」と、自ら勵まして進んで行つた。しかし月島はなかなか來ない。

十1983 「略」、成績は何時も優等であつた。しかしせつ／＼始めた學校通ひも、「略」止めねばならなくなつた。

十1196 騎馬の人たちは、「略」、あけてくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。しかしジョージは依然として、「略」とくり返すばかりであつた。

十1240 園生 有難うございます。しかし誠に粗末なピヤノで。

十1245 「略」、清い月の光が「略」、ピヤノとひき手の顔を照らした。しかしベートーベンに唯だまつてうなだれてゐる。

十12532 ねぢは驚いてあたりを見廻

したが、「略」、何が何やらさつぱりわからなかつた。しかしだん／＼落着いて見ると、此處は時計屋の店であることがわかつた。

十12707 リヤ王はフランス王を其の場と呼んで、コーデリヤを勸當したことを告げた。しかしフランス王は一部始終をよく／＼きゝたゞして、コーデリヤの簡單な答の中にも十分眞心のこもつてゐるのを認め、「略」。

十12927 それを見てひどく氣をもんだ父王は、「略」、國政にも與らせようとした。しかし彼は城外に出る毎に、「略」まのあたり見て、益々世のはかなさを感じた。

十121066 子どもらは「略」、中には古わらちや小石を投げつける者さへあつた。しかし僧はふりかへりもせず、唯々々としてのみを振るつてゐた。

十121072 さうして陰に陽に仕事のじやまをする者も少くなかつた。しかし僧は唯々々としてのみを振るつてゐた。

十121089 「略」、仕事は大いにはかどつて來た。しかし人は物にうみ易い。

十121252 徳川方も事／＼に至つては、「略」、ものすごい緊張を示してゐる。しかし市中の混亂は蜂の巣を突いたやうなさわざである。

十121256 「略」勝安芳は、かねてから「略」時局の圓滿な解決を計つて

ゐた。しかし大勢は如何ともしがたく、危機は既に目前に迫つたので、
《略》。

十二127 10 次の間には官軍の荒武者其がひかへて、何となく物々しい。しかし二人は互に信じ合つてゐる仲なので、話はおだやかに運ばれる。

十二129 2 之に比べれば、《略》、徳川家の存亡などは言ふにも足らぬ小事でござります。」相手は《略》、だまつて聴いてゐる。安方は更に「しかしたとへにも申す通り、一寸の蟲にも五分の魂。徳川侍のなまくら刀にも《略》。

十二134 6 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、《略》やさしい性情を育成するのに與つて力があつた。しかし此の事情は一面に國民の短所をもなしてゐる。

十二136 9 《略》、之を巧みに自國のものとすることは、實に我が國民性の一大長所である。しかし此の半面にもまた短所がうかゞはれないであらうか。

十二137 4 《略》摸倣^{もはけ}のみを事として來た觀がある。習、性となつては、遂に《略》自らも輕んじ、外國人からも侮られる。しかし摸倣はやがて創造の過程でなくてはならぬ。

十二138 4 《略》、潔白を重んずる美德を發揮してゐる。しかし其の半面には、物にあき易く、あきらめ易い性

情がひそんではないか。
しかして (接) 3 しかして

七85 図 又輸入品は綿もつとも多く砂糖^{さとう}これに次ぐ。しかして、綿は印度より、砂糖はオーストラリヤより來る物多し。

十二166 図 《略》、多くは總務局ありて全體を統べ、編輯・營業の二局ありて、編輯に關することは前者之を司どり、《略》。しかして編輯局は更に編輯部・政治部・經濟部・社會部・通信部・外報部・學藝部・寫眞部・校正部等に分れ、各部にそれ《略》。

十二114 6 図 《略》、日本の竹最も適當なりしかば、専ら之によりて心を製出せり。しかして其の電球は忽ち世界に廣まりぬ。
しかた [仕方] (名) 7 しかた シ方 仕方

四37 4 ソレデモフクロフハシ方 ガナイノデ、《略》キヨトキヨトシテ居ルバカリデス。
九55 1 図 《略》、商賣の仕方は十分心得てゐるので、《略》。

九119 1 図 《略》、艦中一同殘念に思つてゐる。しかしこれも仕方がない。其のうちには花々しい戦争もあるだらう。

十一69 6 末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。
十二23 1 《略》、かやうな仕方は唯一

時の利益を得るに止つて、永續することが出来ないから、《略》。

十二38 5 図 そんなことをいつたつて仕方がない。家賃さへも拂へない今の身の上ではないか。

十二105 7 《略》、たま／＼此の難處を通つて幾多のあはれな物語を耳にし、どうか仕方はないものと深く心をなやました。
しがたい [為難] (形) 1 しがたい 《一ク》
十二125 7 しかし大勢は如何ともしがたく、危機は既に目前に迫つたので、
《略》。

しがたし [為難] (形) 1 しがたし 《一ク》
九36 8 図 されど《略》大口徑砲の威力に對しては、《略》ベルギー軍の防戦も、終に如何ともしがたく、要塞は全く破くわいせられ、將卒は多く戦死せり。
しかたなしに [仕方無] (副) 1 シカタナシニ

三76 6 ソコデカウモリハシカタナシニ、ヒルハ木ノウロヤアナノ中ニカクレテキテ、
《略》。

しがち [仕勝] (名) 1 仕勝ち
十一29 3 図 ながらは仕勝ちぞ。かゝれく。

しがつ [四月] (名) 1 四月 ↓てんしょうじゅういちねんしがつはつか

十二82 4 図 《略》、即ち文化五年の四月に、林蔵は幕府の命によつて、松田傳十郎と共に樺太の海岸を探検せり。

しがつとおか [四月十日] (名) 1 四月十日
九96 図 四月十日 叔父から 松太郎殿

しがつにじゅういちにち [四月二十一日] (名) 1 四月二十一日
五12 8 四月二十一日 土曜 雨
しがつにじゅうごにち [四月二十五日] (名) 2 四月二十五日
五15 5 四月二十五日 水曜 曇
九14 9 図 四月二十五日朝、卯二つ。

しがつにじゅうさんにち [四月二十三日] (名) 2 四月二十三日
五14 7 四月二十三日 月曜 晴
七16 6 図 四月二十三日 正男 叔父 上様

しがつにじゅうしちにち [四月二十七日] (名) 1 四月二十七日
五16 5 四月二十七日 金曜 晴
しがつにじゅうににち [四月二十二日] (名) 1 四月二十二日
五14 1 四月二十二日 日曜 晴

しがつにじゅうよっか [四月二十四日] (名) 1 四月二十四日
五14 8 四月二十四日 火曜 晴
しがつにじゅうろくにち [四月二十六日] (名) 1 四月二十六日
五16 2 四月二十六日 木曜 雨

しがつにじゅうろくにち [四月二十六日] (名) 1 四月二十六日
五16 2 四月二十六日 木曜 雨

しがつよっか [四月四日] (名) 1 四

月四日

五28 四月四日の朝、當番で僕が机の上をふいてみると、先生が知らない生徒を一人つれてお出でになりました。

しかと [確] (副) 2 しかと

九27 父の此の願だけは、しかと心にとめて置いて、必ず仕上げてもらひたい。

十58 勇ましく高空に輪を畫がきながら、しかと方向を見定め、矢のやうに目的地へ向つて飛んで行くのを見たならば、
[略]。

しかも [然] (接) 17 シカモ しかも

六13 アレガヤハリサビデス。シカモ其ノサビハ大ソウ毒ナ物デス。

八10 ころ／＼と池の中へころげこんだ。しかも其所は深い所である。

十55 やはり此のやさしい、しかも勇ましい通信者の働の偉大な

事が證明せられたので、
[略]。

十99 心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。

十128 何を聞いても、一々明白に答へて、しかもよいなことと言ひません。

十一39 略、たゞ其の距離の遠いために、あんなに小さく見えるのである。しかも我々に最も近いあの太陽でさへ、地球からは凡そ三千八百

萬里も離れてゐる。

十一57 孔子大いに之をうれひ、
[略]、廣く各國をめぐるて、用ひられんことを求めぬ。しかも遂に志を達することを得ざりしかば、
[略]。

十二27 若し裁判が無いとしたら、人々相互の争がはてしなく行はれて、しかも其の争は、力の強い者やわるがしこい者が勝つことになるであらう。

十一41 貴兄には去月以來御病氣にて、しかも一時は大分御重態なりし由、
[略]。

十二52 此の組織の所まで小刀が届いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。

十二125 一切経は、
[略] 貴ぶところなり。しかも其の巻數幾千の多きに上り、これが出版は決して容易の業に非ず。

十二134 ダーウィンは興味を覺える
[略] 決して中途でやめなかつた。しかも日常生活は極めて規則正しく、
[略]、たとへ十分、十五分の餘暇でも無益に費すことがなかつた。

十二30 陳列品の多種多様で、しかも其の數量の數限りもないのは、さすがに
[略]。

十二42 しばらくして兄は
[略]、力のこもつた、しかも低い聲で、

「一體あなたは
[略]。

十二58 父も喜んだ、子どもも喜んだ。しかも一番喜んだのはねちであつた。

十二117 光の色が太陽に似て、しかも比較的熱をともしなふことの少い電燈さへも發明されました。

十二117 一體最も理想的な燈火は太陽の光のやうに明るくて、しかもほたるの光のやうに熱をともしないものである。

しからば [然] (接) 2 しからば 然らば

八42 しばらくして、
[略]、いろいろ「おわびを致しますと、越前守は

「しからば許してつかはすであらうが、其の代り」と致して、
[略] 持參致せ。」と命じました。

十二16 相當に名ある新聞は、通信に、印刷に、あらゆる文明の利器を用ふるを以て、今や遠くヨーロッパに起りし事件も僅か一兩日にして讀者に報道せらる。然らば

かくの如き新聞は如何にして編輯せられ、印刷せられ、讀者に配布せらるゝか。

しかる [叱] (五) 4 しかる 叱る

四44 僕は牛わかまるになつて、はねまはつてたたかひましたら、

六67 下男がまだ使へる小繩

を捨てたと言つて、主人がひどくしかつてゐた。

九115 其の有様は何事だ。兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。」と、言葉鋭くしかつた。

十二107 又父には「お前のやうに犬の世話やねずみを取ることにばかり熱心では困るではないか。」といつて叱られたことがあつた。

しかるに [然] (接) 5 しかるに 然るに

七33 獅子はもとより武士にしたがひて行かんとせり。しかるに船長はおそれて之をゆるさず。

十97 出でて元軍に當る。然るに元軍の勢いよく盛にして、宋軍到處に敗れ、
[略]。

十130 早くも義兵を擧げしが、
[略]、力なくて止みたり。然るに今主上隱岐にうつされ給ふと聞き、高德一族共を集めていへるやう、
[略]。

十一128 然れども鐵眼少しも屈せず、
[略] 宿志の果さるゝも近きにあらんとす。鐵眼の喜知るべきなり。然るに、此の度は近畿地方に大飢饉起り、人々の困苦は前の出水の比に非ず。

十二82 樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。然るに其の實際を調査して此の疑問を解決した

る人、遂に我が日本人の中より現れぬ。

しかれども 「然」(接) 7 然レドモ
然れども

九四二図 飲料水ニ不自由ナキ土地ニ
アリテハ、金錢ヲツヒヤシテ、水ヲ
買フナドトイフハ、思ヒモヨラヌ事
ナリ。然レドモ飲料水ノ得ガタキ所
ニテハ、一手桶何程トイフ代價ヲハ
ラヒテ水ヲ買フ。

十一六八図 富貴は人のねがふ所なり。
然れども正しき道によるに非ざれば、
我之に居らず。

十一六九図 貧賤は人のいとふ所なり。
然れども正しき道によるに非ざれば、
我之を去らず。

十一二八図 出版費は、遂に一
錢も残らずなりぬ。然れども鐵眼少
しも屈せず、再び募集に着手して努
力すること更に數年、(略)。

十二四六図 (略)・曲物の類に至るま
で、一として杉を用ひざるなし。然
れども材の優良にして美麗なるは檜
を以て第一とすべし。

十二九七図 (略) 奈良の都も、(略)、
今は唯畿内の一都市として僅かに古
の名残を留むるのみ。然れども春日
の社頭、(略)、森嚴自ら人の襟を正
さしめ、東大寺の金堂は(略)一千
二百年の面影を残せり。

十二四六図 (略) 燈臺などにすゑ附
けらるゝに至りぬ。然れどもこは今

日のアーク燈に類するものにして、
(略)、室内に用ふるには、(略)、實
用に適せず。

しかん しかん・かんばんしかん
じかん 「時間」(名) 5 時間 じいち

じかん・きしょうじかん・ごじかん
め・じゅうじかんぜんご・じゅうはち
じかん・にじかん・やくごじかん
五五 じつり方の時間に、すゑめが
教室の中へとびこみました。

九四二図 (略)、來週學校にて話し
方の時間に話し、同級の人々を驚か
さんと楽しみ居り候。

十一一八図 これまで自分の不整頓の
ために、むだに費した時間と努力は
大きなものであつた。

十一九六図 (略)、父は學校へ行つて時
間をつぶすよりも畠に出て働いた方
がよいといつて、なか／＼許してく
れなかつた。

十二一七図 かくいへば、頗る繁雜に
して多大の時間を要する如くなれど
も、原稿締切時刻より刷出まで其の
間僅かに數十分、以て其の如何に速
なるかを知るべし。

じかんわりどおり 「時間割通」(名) 1
時間割通り
十二一三 しかも日常生活は極めて規
則正しく、毎日きめた時間割通りに
仕事を進めて、(略)。

しき 「式」(名) 2 式 じしんすいし
き・だいのうしき

四八五 學校ノ式ガステンデカラ、
トモダチ トムカフノ山ヘ上リ
マシタ。

十一一七図 皇后陛下の臨御と共に、式
は始りぬ。

しき 「四季」(名) 1 四季

十一一〇六図 (略)、殊に温帯に屬す
る南部の諸州にては、四季の變化も
日本の如くはつきり致居候由、(略)。

しき 「指揮」(名) 2 指揮
十一一八図 (略)、續いて造船部長の指
揮につれて吹く進水主任の號笛を合
圖に、着々と進み行く進水作業。

十二三〇七図 (略)、よく警官の指揮に
従つて、混亂することがなく、(略)。

じき 「時機」(名) 1 時機

十二一八三図 (略)、酋長コニの宅に
留りてしばらく時機の至るを待ちぬ。
じき 「直」(副) 4 チキ ちき 直

三六五図 舟はだんだん土ぼしへ
近くなります。五郎「はうら、も
うちきしようぶだ。」

六二七図 ソレデモ鐵ハチキニサビテ、
赤クナルデハアリマセンカ。

九六九 僕は眠くなつたので、それか
ら直にねてしまつた。

九一〇三 まだ青いが早く甘くなるたち
だから、もう直に食べられる。

じぎ じおじぎ
しきかさぬ 「敷重」(下二) 1 敷重

九一五図 (略)、菅筵八枚、敷皮八
ぬ「一ネ」

枚、きぬの敷物八枚を波の上に敷重
ね、其の上に飛下り給へり。

しきがわ 「敷皮」(名) 1 敷皮

九一四図 (略)、菅筵八枚、敷皮八
枚、きぬの敷物八枚を波の上に敷重
ね、(略)。

しきさい 「色彩」(名) 2 色彩 色彩

十二六〇図 國旗は(略)、其の徽
章・色彩にはそれ／＼深き意義あり。
十二六三図 國旗の色彩が其の國の人
種を表すものに、支那の國旗あり。

しき・す 「指揮」(サ変) 1 指揮す
「一シ」

十一二四八図 (略)、とりでの守將中川
清秀、士卒を指揮して防ぎ戦ふ。

しきつ・める 「敷詰」(下二) 2 しき
つめる 敷きつめる 「一メ」

七二七図 (略)、田の形其のまゝに紅
紫のもうせんをしきつめたやうに
見える。

九五七 庭に敷きつめたむしろの上に、
黄色い麥の穂が一面に廣げられて、
(略)。

しきもの 「敷物」(名) 3 しき物 敷
物

七二〇六 秀吉は城の庭にしき物をのべ
させ、幕やびやうぶでまはりをかこ
はせ、(略)。

九一四図 (略)、菅筵八枚、敷皮八
枚、きぬの敷物八枚を波の上に敷重
ね、(略)。

十一五四 近來床の敷物や、道路にも

ゴムを用ひることが行はれて来た。

しきゅう [至急] (副) 2 至急

七114 2 国 あのためで子ども向の品をもう五十反、至急お送り下さい。

九113 9 候 若し御承知に候はば、御手数ながら至急御報知下されたく願ひ上げ候。

しきよ ↓ しきよあそはす

じぎょう [事業] (名) 10 事業 ↓

こつかじぎょう・じぜんじぎょう・だいじぎょう

十53 4 国 〈略〉、又何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。

十124 8 国 村の財産家にて事業に熱心なる人、みづから先んじて耕作・養蠶・養鶏・養魚等の模範をしめししを以て、〈略〉。

十126 6 国 青年團の事業の一として、杉・檜の植林を営めり。

十126 8 国 其の利益は、〈略〉、其の殘部を一村共同の有益なる事業の費用にあつる計畫なり。

十一116 5 例へば教育・衛生等の自治團體の事業は、地方人民が一般に之を尊重し、之に協力することによつて、始めて其の効果を完全に擧げることが出来る。

十一117 2 又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、〈略〉、自治團體

を助長するものであるから、地方人民は大いにこれ等の事業に力を盡くさねばならぬ。

十一126 2 国 一代の事業として一切經を出版せん事を思立ち、〈略〉。

十一128 9 国 〈略〉、喜捨せる人々に説きて出版の事業を中止し、其の資金を以て〈略〉。

十一130 7 国 福田行誠かつて鐵眼の事業を感歎していはく、「鐵眼は一生に三度一切經を刊行せり。」と。

十二22 6 これ即ち世間の信用を博して堅實に自己の事業を發展させる道である。

じぎよく [時局] (名) 1 時局

十二125 6 略 舊幕府の陸軍總裁勝安芳は、かねてから百万畫策して時局の圓滿な解決を計つてゐた。

しきり ↓ ひとしきり

しきりに [類] (副) 8 しきりに

七14 6 妹やお松は何があつたのか、笑ひながらしきりに取つてゐる。

十一46 7 国 翌朝畫師は常にもあらず早く起出で、ふすまに向ひてしきりに筆を動かしたり。

十一55 8 略 老砲手は、急に氣をもんで、「しつかりしろ。負けるなく。」と、甲板からしきりに勵ました。

十一86 7 「しつかりやれ。もう少しだ、もう少しだ。」船の上からはしきりに勵ましてくれる。

十二43 5 三人は「どうかもう一曲。」としきりに頼んだ。

十二70 2 家來の中にはしきりに王をなだめた者もあつたが、〈略〉。

十二84 7 国 コーニは「〈略〉、或は命も危かるべし。」とて、しきりに止むれども林藏きかず、〈略〉。

十二101 3 国 人なつかしげに寄り來る鹿の、〈略〉、秋より冬にかけて哀音しきりに人の眠をさますも、〈略〉。

しきる [仕切] (五) 1 仕切る 《一ル》

十一63 4 畠にしても、小路によつて細かく仕切ることをしてないから、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。

しきわら [敷藁] (名) 1 敷藁

九14 5 国 とやの内に入りにて見るに、敷藁の中に見事なる卵二つころがれり。

しきん [資金] (名) 4 資金

十53 6 国 銀行は有餘つてゐる人からお金を預つて、資金の足らぬ人に貸附けるのだ。

十一126 4 国 〈略〉、廣く各地をめぐりて資金をつのること數年、やうやくにして之をとゝのふる事を得たり。

十一127 8 国 すなはち喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、資金を悉く救助の用に當てたりき。

十一128 9 国 鐵眼こゝにおいて〈略〉出版の事業を中止し、其の資金を以

て力の及ぶ限り廣く人々を救ひ、又もや一錢をも留めざるに至れり。

し・く [敷] (五) 7 シク しく 布

敷く 《一イ・一ケ》 ↓ くみしく

四20 1 国 〈略〉、シホケノナイ水デカラダヲアラツテ、ガマノ

ホヲシイテ、ソノ上ニコロガレ。

四41 4 にはへいたやむしろをしいて、そこへ〈略〉いろいろな物がはこび出されました。

九57 2 略、莖の先についてゐる穂が、敷いてあるむしろの上に面白いやうに飛散る。

九107 2 谷一つへだたた向ふの岡に、敵の砲兵が放列をしてゐる。

十一9 2 略、居留民が支那政府の手を離れて、自治制を布いてゐる處である。

十一9 6 アスファルトや石を敷いた道が縦横に通じ、〈略〉。

十一34 1 国 〈略〉田園よく開けて、毛氈を敷けるが如く、白壁の民家其の間に點在す。

じくぎ [軸木] (名) 4 軸木 軸木

八104 9 材木を機械にかけて軸木をこしらへてゐる者もあり、〈略〉。

八105 1 材木を機械にかけて軸木をこしらへてゐる者もあり、軸木を火で乾かす者もあり、〈略〉。

八105 1 略、乾かした軸木の先に藥をつける者もあり、〈略〉。

- 五九三 郵便物をあつめる人は、毎日きまつた時刻に来て、私のおなかを明けて持つて行きます。
- しごけんさき 「四五間先」(名) 1 四五間さき
- 七二四 傘松の四五間さきに、小さな茶屋が一軒ある。
- しごさい 「四五歳」(名) 1 四五歳
- 八四八 そこで大將が四五歳の時から、大將の父は「略」よく連れて行つた。
- しごじっキロメートル (名) 1 四五十キロメートル
- 十五六 鳩は「略」、四五十キロメートルの處を往復して食事するぐらゐは何でも無い。
- しごじっけん 「四五十間」(名) 1 四五十間
- 五五八 天の橋立は海中へつき出た細長い洲で、長さは一里、はゞは四五十間。
- しごしゃく 「四五尺」(名) 3 四五尺
- 八三〇 かまはさしわしが一丈ぐらゐ、高さが四五尺ぐらゐで、「略」。
- 八三二 さて山の木をきり倒して、四五尺の長さにきりそろへ、「略」。
- 十一三五 「略」、山の背を通つてゐる小路の中にはさんで、四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるのが、「略」。
- しごじゅう 「四五十」(名) 1 四五十六九三 「略」、城から大石を四五十、一度に落したので、又何百人かころされた。
- しごじゅうねん 「四五十十年」(名) 1 四五十十年
- 十二四五 當時は單に理化學の實驗用として使用せらるるに過ぎざりしが、「略」、四五十年の後には燈臺などにすゑ附けらるゝに至りぬ。
- しごじゅうメートル (名) 1 四五十メートル
- 十四七 右に左に鯨を追ひつゝ四五十メートルまで近づいた時、「略」もりを打つ。
- しごすん 「四五寸」(名) 1 四五寸
- 十二八四 太さ中指ほどなる細長き棒と、幅四五寸長さ三尺ばかりの厚板となり。
- しごせんつうか 「子午線通過」(名) 1 子午線通過
- 十一八九 星座 午後八時子午線通過
- しごちよう 「四五町」(名) 1 四五町
- 七二三 それを通りぬけて四五町上ると、道ばたに大きな松が一本ある。
- しごと 「仕事」(名) 39 シゴト 仕事
- 三四五 コウバデハモウシゴトガハジマツテセルラシイ。
- 四五三 「略」、大ゼイノ大工サンガ毎日其ノ中デ仕事ヲシテ居マス。
- 四七六 「略」、大きくなつても、うちの仕事もせず、ゐばつてばかり居ました。
- 五六八 村の人々は中中大きな仕事だとは思つたが、さうでもしなれば、「略」。
- 五七三 こんなむだな仕事をすれば、貧乏村はいよいよ貧乏になる。
- 六五二 かげひなたなくはたらく上に、人の仕事まで引きうけるやうにしましたので、「略」。
- 七四七 「略」、年よりはちよつとふりかへりましたが、何ともいはず、すぐ又仕事をつづけました。
- 八二九 手はすべて仕事のもとにして、いそがしき時に、手の足らずといふは、働く人の少きをいふなり。
- 八二七 長い間かゝらなくても、工夫して大仕掛に水を落せば、大きな仕事をやる。
- 八四六 すべてかういふやうに、手分をして別々に仕事をするを分業といふ。
- 八四六 分業で仕事をする時、誰か一人の手ぎはが悪いと、全體の出来までも悪くなる。
- 九四四 父上の命にて、養鶏は今年より僕等の仕事となり、日記をも渡されたれば、「略」。
- 九三六 しかし思ふ程に仕事は出来ず、其の上政治上の事で度々殿様に上書した爲、「略」。
- 九四四 しかし此の分では、わたしの命は、とても仕事の出来るまでもつまゐと思ふ。
- 九八四 仕事は水入らずの三人の手で、ずん／＼はかどつて行く。
- 九六二 これ等の仕事は、陸上の家で、毎朝起きると先づ夜具をかたづけ、雨戸をくるのかはりはないが、「略」。
- 九八二 「略」、面白さうに僕等の仕事を見ていらつしやつた。
- 十七二 通常の入夫にもまさりて仕事ははかりたりと聞く。
- 十一八 總員三十二人が四組に分れて、それ／＼仕事の持場に向つた。
- 十一一〇 午後四時、豫定の仕事を終へて、再び境内に集つた。
- 十三九 私どもの若い時分には、かういふ仕事になると、あなたの方半分ぐらゐしか働かせませんでした。
- 十四三 かる、切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不乱に働くので、仕事は豫想以上にはかどり、九時頃にはもう數坪の地面が新しく開かれた。
- 十八五 「略」、あの坑内でたえず活動してゐる坑夫の仕事を、たふといものに思ひました。
- 十一二三 裁判は實に正義保護のための大切な仕事であり、「略」。
- 十一五三 こゝまでが原産地における仕事である。
- 十一九七 晝の仕事の合間に読むのは勿論、夜は床に就いてから燈が盡きるまで読む。
- 十一一〇六 辨しやうすることが出来ませんから、其の代りに何か仕事を

させて下さい。

十二135 〈略〉、毎日きめた時間割通りに仕事を進めて、たとへ十分、十五分の餘暇でも無益に費すことがなかった。

十二105 2 〈略〉、日にやけ仕事にやつれて年の頃もよくわからぬくらゐであるが、〈略〉。

十二106 1 〈略〉此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、神佛に堅くちかつかつて此の仕事に着手したのであつた。

十二106 4 子どもらは仕事をしてゐる老僧のまはりに集つて、〈略〉。

十二107 1 さうして陰に陽に仕事のじやまをする者も少くなかつた。

十二108 2 そこで人々はいつそ我々も出来るだけ此の仕事を助けて、一日も早く洞門を開通し、〈略〉。

十二108 8 其の後は老僧と共に洞穴の中でのみを振るふ者もあり、費用を喜捨する者もあつて、仕事は大いにはかどつて来た。

十二108 10 〈略〉、村の人々は此の仕事にあきて来た。

十二110 3 〈略〉、仕事を助ける者が又ぼつ／＼と出来て来た。

十二119 7 國圀 〈略〉、なれぬこととて仕事に追はれ、一日々と延引致し、今日に相成り申候。

十二121 3 國圀 〈略〉、追々店の様子もわかり、お客様の扱方にもなれて、

仕事に興味を覺ゆるやう相成り申候。

十二121 8 國圀 此の上はいよく仕事に勵み、一日も早く一人前の商人となりて、〈略〉。

しごとだい 「仕事」(名) 6 仕事臺 十二53 3 自分の置かれたのは、仕事臺の上に乗つてゐる小さなふたガラスの中で、〈略〉。

十二55 5 〈略〉、男の子はやがて仕事臺の上の物をあれこれといぢり始めた。

十二56 2 ねぢは仕事臺の脚の陰にころがつた。

十二56 6 時計師は「〈略〉。」といひながら仕事臺の上を見て、出して置いたねぢの無いのに氣が附いた。

十二56 8 國 誰だ、仕事臺の上をかき廻したのは。

十二58 3 仕事臺のそばに、ふさぎこんで下を見つめてゐた女の子がそれを見附けて、〈略〉。

しごとなさる 「仕事」(五) 1 しごとなさる 《一レ》

三33 2 國 しごと なされよ、きりきりしやんと、かけた たすきのきれるほど。

しごとば 「仕事場」(名) 1 仕事場 七50 2 私八時々々ノ仕事場へ行ツテ見マシタ。

しごにち 「四五日」(名) 2 四五日 八31 6 次にかま口から火をつけて、四五日の間、中の木をむし焼にする。

八45 8 國 〈略〉、もう四五日の所おひまを願ひたうございます。

しごにん 「四五人」(名) 5 四五人 五33 2 〈略〉、新聞配達と四五人の人のすがたが見えるだけでした。

五91 3 毎日かならず新聞を入れに来る方も四五人はあります。

七90 9 此の時どや／＼と四五人の敵兵がはいつて来ました。

九50 2 會社では、〈略〉、四五人の若い人々がぬかだらけになつて働いてゐました。

九93 7 ちやうど岡田さんは四五人のお友だちに、白馬登山のお話をなさつていらつしやる所でした。

しごねん 「四五年」(名) 1 四五年 六47 8 四五年モタツト、大キクナツテ、今度ハ自分ガ卵ヲ産ミニ川ヘ上ツテ來ルガ、〈略〉。

しごひやくにん 「四五百人」(名) 1 四五百人 八41 4 〈略〉、などといつて、四五百人のものが、ぞろ／＼と車の後について、思はず知らず役所の門内へ入りこみました。

しころ 「鑿」(名) 1 しころ 十一30 9 國 清正刀を抜かんとするに、かぶとのしころつゝ、じの枝に引つかゝりて、身のはたらき自由ならず。

じさい 「自在」(形状) 1 自在 八48 7 マシテ自由ノ天地ニ居テ、自在ニ空ヲトブ様ハ、實ニ勇マシイモノデアル。

しざつ 「視察」(名) 1 視察 十一110 3 國 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

しざつ 「視察」(名) 1 視察

しざつ 「視察」(名) 1 視察 十一110 3 國 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

しざつ 「視察」(名) 1 視察 十一110 3 國 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

しざつ 「視察」(名) 1 視察 十一110 3 國 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

しざつ 「視察」(名) 1 視察 十一110 3 國 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

しざつ 「視察」(名) 1 視察 十一110 3 國 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

しざつ 「視察」(名) 1 視察 十一110 3 國 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

しざつ 「視察」(名) 1 視察 十一110 3 國 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

しざつ 「視察」(名) 1 視察 十一110 3 國 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

しざつ 「視察」(名) 1 視察 十一110 3 國 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

しざつ 「視察」(名) 1 視察 十一110 3 國 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

手をなめたり。

七323 〇 これより獅子は日夜武士につきしたがひてはなれず、武士には無二の従者となれり。

七329 〇 獅子はもとより武士にしたがひて行かんとせり。

七333 〇 こゝに武士と獅子とはわかれざるを得ることとなりぬ。

七335 〇 獅子はかなしげにほえて、濱べに立上りたりしが、つと海の中にをどり入りたり。

七338 〇 獅子は武士の方を見まもりて、あはれ、波の底に入りぬ。

じじ 「時事」(名) 1 時事

十二152 〇 略、やがてあまねく内外の事件を報ずると共に時事を論ずるもの起りて、略。

じじい いはなさかじじい

じじこくこく 「時刻時刻」(副) 1

時々刻々

十810 ようだいは時々刻々に悪くなつて行く。

じじつ 「時旦」(名) 1 時旦

十二1134 〇 略、徒に多くの時旦と金銭とを費したるに過ぎざりき。

じじつちよう 「四十町」(名) 1 四十町

十二1018 〇 略、東西四十町、南北四十五町、九條の條坊井然として、略。

ししとぶし 「課名」 2 獅子と武士

七目11 第十 獅子と武士

七303 第十 獅子と武士

しじみ 「蜆」(名) 1 しじみ

九1310 〇 物置の前なるあき箱より、しじみの殻を取出し、細かに打ちくだく。

ししゃ 「死者」(名) 1 死者

十二923 〇 略、老人や、息もたえだえの病人、さては野邊に送られる死者をまのあたり見て、益々世のはかなさを感じた。

ししゃ 「使者」(名) 3 使者

七1059 〇 明國の使者、某の陣中に参り、略。命ばかりは助けてやらう。などの廣言。

十546 此の愛らしい小鳥が、略、いろくの困難ををかして、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、略。

十二61 〇 時に天照大神の使者建御雷命此の地に來りていふやう、略。

じしゃく 「磁石」(課名) 2 磁石

六目4 第十六 磁石

六647 第十六 磁石

じしゃく 「磁石」(名) 3 磁石

六648 町ノ叔父サンカラ、才年玉ニ大キナ磁石ライタマイタ。

六655 僕ハ「待テ、待テ。」トイツテ、磁石ヲ持ツテ來タ。

六661 〇 略、果シテ磁石ノサキニ釘ガタクサンツイテキタ。

ししゃくくすん 「四尺九寸」(名) 1

四尺九寸

七275 八寸・九寸などといふのは、四尺八寸・四尺九寸などのことで、略。

ししゃくはつすん 「四尺八寸」(名) 1 四尺八寸

七275 八寸・九寸などといふのは、四尺八寸・四尺九寸などのことで、略。

ししゅう 「四周」(名) 1 四周

十二1335 四周の海が天然の城壁となつて、容易に外敵のうかゞふことを許さないから、略。

しじゅう 「四十」(課名) 2 四十

四目12 十一 すすはき……四十

七目14 第十三 一太郎やあい……四十

しじゅう 「四十」(名) 1 40 ↓やく

しじぶん

十二85 〇 40

しじゅう 「始終」(副) 1 始終 ↓い

ちぶしじゅう

九1084 中尉は始終先頭に立つて進んでゐたが、略。

しじゅういち 「四十二」(課名) 3 四十二

二目5 十七 ハナサカヂヂイ……四十一

五目12 十一 熊襲征伐……四十一

十一目11 第十課 手紙……四十一

しじゅうから 「四十雀」(名) 2 四十雀

八19 四十雀・目白・ひよどり・もず・ひわ、秋の山は小鳥の聲でにぎやかである。

八2 〇 四十雀

しじゅうく 「四十九」(課名) 4 四十九

七目3 第十五 カヂ屋……四十九

九目14 第十三 老社長……四十九

十一目13 第十二課 ゴム……四十九

十二目12 第十一課 十和田湖……四十九

しじゅうこ 「四十五」(課名) 4 四十五

五目13 十二 一口話……四十五

六目16 第十三 蛙……四十五

七目2 第十四 川中島略二 中なほり……四十五

十二目11 第十課 我が國の木材……四十五

しじゅうこちよう 「四十五町」(名) 1 四十五町

十二1019 〇 略、東西四十町、南北四十五町、九條の條坊井然として、略。

しじゅうさん 「四十三」(課名) 3 四十三

六目15 第十二 笑ひ話……四十三

七目16 第十四 川中島 一 一騎打……四十三

九目12 第十一 物ノ價……四十三

しじゅうし 「四十四」(課名) 3 四十四

四

八目19 第十二 手紙 一 小ぞうか

ら主人へ………四十四

十目10 第九 陶工柿右衛門………四

十四

十一目12 第十一課 畫師の苦心………

…四十四

しじゅうしち 「四十七」〔課名〕 1 四

十七

八目2 第十三 驚………四十七

しじゅうしち (名) ↓こくじしじゅう

しちふん

しじゅうしちし 「四十七士」(名) 1

四十七士

八122 泉岳寺には名高い四十七士の

墓がある。

しじゅうと 「四十度」(名) 10 40°

七2図 40°

七2図 40°

七2図 40°

七2図 40°

七2図 40°

七2図 40°

七2図 40°

七2図 40°

七2図 40°

七2図 40°

七2図 40°

七2図 40°

七2図 40°

七2図 40°

しじゅうにセンチメートル (名) 1

四十二センチメートル

九365図 されど比類なき四十二セン

チメートルの大口徑砲の威力に對し

ては、〈略〉。

しじゅうにちかん 「四十日間」(名) 1

四十日間

十3810図 うん、これが四十日間の汗

のたまものさ。

しじゅうねん 「四十年」(名) 2 四十

年

九266図 しかしわたしの四十年の骨

折は、農學の進歩の爲には決してむ

だでなかつたと思ふ。

十二11610図 エヂソンが炭素線の電燈

を發明したのは四十年ばかり前のこ

とであつたが、今では更に進んで

〈略〉。

しじゅうはち 「四十八」〔課名〕 2 四

十八

三目4 十六 私ノ村………四十八

六目2 第十四 冬の夜………四十八

しじゅうはつこ 「四十八個」(名) 1

四十八個

十二6210図 現今は星章の數四十八個

なり。

しじゅうまん 「四十万」(名) 2 四十

万

七1059図 大明の軍勢四十萬、勢はげ

しくおしよせたるに、〈略〉。

七1068図 此の清正こそはまことの太

將、四十萬の軍勢は此所へ向けよ。

しじゅうよ 「四十余」(名) 1 四十餘

八233 ちやうど番人が、其の前の年

に取つた首が四十餘ありましたので、

〈略〉。

しじゅうよねん 「四十余年」(名) 2

四十餘年

八237 四十餘年はいつの間にか過ぎ

て、もう供へる首がなくなりました。

九233図 〈略〉、四十餘年の間、寢食

を忘れて其の道の書物を読み、國々

の實地を調べ、本もあらはし、〈略〉。

しじゅうよまん 「四十余万」(名) 1

四十餘萬

八959図 名古屋市ハ我が國屈指ノ大

都會ニシテ、人口四十餘萬アリ。

しじゅうろく 「四十六」〔課名〕 5 四

十六

三目3 十五 四方………四十六

四目13 十二 かるた取………四十六

五目14 十三 蠶………四十六

八目20 第十二 手紙〈略〉二主

人から小ぞうへ………四十六

九目13 第十二 弟から兄へ………四

十六

ししよ 「死所」(名) 1 死所

九424図 二人の我が子それく

に、死所を得たるを喜べり。

じじよ 「次女」(名) 1 次女

十二717 王は〈略〉、早速馬にむち

うつて次女リガンの許に走つた。

ししよ 「死傷」(名) 1 死傷

十一1268図 たましく大阪に出水あり。

死傷頗る多く、家を流し産を失ひて、

路頭に迷ふ者數を知らず。

しじょう 「四條」(地名) 1 四條

六712 名高いのは三條・四條・五條

の三つの橋でございます。

しじょう 「事情」(名) 7 事情

九1226図 世間ニハ、イロ／＼ノ事情

ノ爲ニ、或ハ信用モシテキナイ人ニ

投票シタリ、或ハ棄權シテシマツタ

リスル人モアルガ、〈略〉。

十865 種々の品物が遠く外國から輸

入されるのは、主にこれ等の事情か

らである。

十一1004 翌朝貸してくれた人の家に

行つて事情を述べ、〈略〉。」と願つ

た。

十二874図 〈略〉、かゝる中にありて

も、彼は土地の事情を研究すること

を怠らざりき。

十二8710図 〈略〉、此の地方の事情も

始めて我が國に知らるゝに至れり。

十二1301図 此の邊の事情をよくく

御推察下されて、〈略〉。

十二1346 しかし此の事情は一面に國

民の短所をもなしてゐる。

ししよしや 「死傷者」(名) 1 死傷

者

十二1177 〈略〉、活動寫眞のフィルム

がアーク燈の熱の爲に發火して、多

くの死傷者を出した話などを附加へ

た。

ししよしする 「死傷」(サ変) 1 死

傷する

《一シ》

六971 又賊は何千人か死傷した。

しじょうのおおはし 「四條大橋」(名)

2 四條の大橋 四條大橋

六71図 四條大橋

六72 四條の大橋はすぐ其所に見えます。

じしょうばんへい 「時鐘番兵」(名) 1 時鐘番兵

九61 人の顔がやつと見分けられるやうになつた頃、時鐘番兵が「略」。「総員起し五分前。」と當直將校に報告する。

しん 「私心」(名) 1 私心

十一115 本當に自治の精神に富んでゐる者は、公平無私、「略」、決して私心をもたないのである。

じしん 「地震」(名) 1 地震 ↓おおじしん

七100 此の時清正は、地震と共にねえ、一さんに伏見の城へかけつけました。

じしん 「自身」(名) 1 自身

十一121 さうして自身も帽子をぬいで答禮し、一同を引連れて立去つた。

しず 「死」(サ変) 4 死す ↑「シースーセ」

十99 事既にこゝに至る。天祥唯死せんのみ。

十100 うやくしく南、宋の方を拜して死す。

十一74 朝に道を聞くことを得ば、夕に死すとも可なり。

十二85 我若し彼の地にて死したりと聞かば、汝必ず之を白主に持歸りて日本の役所に差出すべし

しずおか 「静岡」(地名) 1 静岡

十二131 さうして直に静岡の大總督府にはせつけて議をまとめ、「略」。

しずか 「静」(形状) 23 しづか 静か 三60 風がしづかにふいて来て、きしのさがさらさらとおとをたててゐます。

三83 風はしづかで、なみもおとをたてません。

五28 それはしづかな所で、風の音と水の音より外には、何の音も聞えませんが。

五29 こんなしづかな所でくらしてみたい。

七32 獅子は「略」、しづかに近よりて武士の手をなめたり。

八91 よく見えるやうにして、もう一度しづかに言つてごらんさい。

九23 「略」、夜のどおりしづかにあきて、ほのくと東の窓はしらみたり。

九81 「略」、波の静かな所でふなばたからのぞいて見ると、美しい海底のありさまが「略」。

九38 「略」、エンミット將軍はみづから進んで握手を求め、「略」と感歎せるに、レマン將軍は静かに、「略」と答へたり。

九103 主人の姿を見つけると、静かに其のそばに立止つた。

十106 王は片手にそれを受取り、片手にかの密書を取り出して、静かにフィリップに渡した。

十39 あたりは如何にも静かで、たまに散る落葉の音が、かきりと聞える。

十二12 あ青年が私の室にはいる前、「略」、はいると静かに戸をしめました。

十一13 風は音なくやなぎをわたり、船は静かに我等をのせて、行くは何處ぞ、桃さく村へ。

十一34 海の静かなことは鏡の如く、朝日夕日を負ひて、島がくれ行く白帆の影ものどかなり。

十一84 今日には殊に波も静かだ。

十一120 ジョージは、「略」、帽子をぬいで恭しく敬禮して、さて静かに口を開いた。

十二73 フランス王の侍醫はとりあへず老王に藥を與へて静かに眠らせ

た。

十二94 彼は遂に「略」と決心して、或静かな森へ行つた。

十二99 「略」と諭して静かに眼を閉ぢた。

十二122 かもめ飛ぶ海をすべりて、船は今靜かに歸る、懐かしき故郷の港。

十二123 思出の深き船路や、つゝがなく今日しも果てて、船は今靜かに歸る、懐かしき故郷の港。

十二124 海山の實を載せて、船は今靜かに歸る、懐かしき故郷の港。

故郷の港。

しずかさ 「静」(名) 4 静かさ 九64 艦内は深山のやうな静かさである。

九62 「総員起し。」此の號令で、朝の静かさが忽ち破られ、起床ラツパは勇ましくひびき、「略」。

九104 やがてあたりの静かさを破つて、大砲の音がとろろき始めた。

十41 ずいこゝといふのこぎりの音が、あたりの静かさを破る。

しずがたけ 「賤ヶ岳」(地名) 5 賤嶽 十一25 寄手の大將佐久間盛政は、「略」、明日は進んで賤嶽のとりでを

おとし、一舉に敵をみぢんにせんと、「略」。

十一25 賤嶽 十一28 明くれば二十一日の朝、

盛政は賤嶽より西北に當れる高地に兵を引きまとめたりしが、「略」。

十一287 今まで賤嶽の山上より、また、きもせず戦況を見居たりし秀吉、「略」。

十一319 武器は皆槍なりしかば、世に之を稱して賤嶽の七本槍といふ。

しずがたけのしちほんやり 「課名」 2 賤嶽の七本槍 賤嶽の七本槍

十一目8 第七課 賤嶽の七本槍

十一23 第七課 賤嶽の七本槍

しずがたけふきんのず (題名) 1 賤嶽附近の圖

十一25 賤嶽附近の圖

じぞう
 八39ノ図 其の方の申す所では、どうやら其の地藏がうたがはしい。
 じぞうさま 「地藏様」(名) 4 地藏様
 七17ノ 石垣の間でも、地藏様のかげでも、辻堂つじどうのえんの下でもさく。
 七23ノ 其の松の下に石できざんだ地藏様が立つていらつしやる。
 八41ノ図 地藏様が縄にかゝつていらつしやる。
 八412ノ図 地藏様でも悪いことをなすつたと見える。
 じぞうやま 「地藏山」(地名) 2 地藏山
 十一35ノ図 あそこは一昨年植付をした地藏山だ。
 十一36ノ 地藏山の内、二町三段五畝ごぼ、峯通り檜苗、其の他總べて杉苗。
 しそく 「四足」(名) 1 四足
 七32ノ図 獅子は「略」、たてがみをふるひ、四足をのぼして後、しづかに近よつて「略」。
 じぞくする 「持統」(サ変) 1 持統する 《一シ》
 十二133ノ 随つて國民は「略」、又其の誇を永久に持續しようとする心掛けも出来て、「略」。
 しそつ 「士卒」(名) 1 士卒
 十一24ノ図 「略」、とりでの守將中川清秀、士卒を指揮して防ぎ戦ふ。
 した 「下」(名) 43 シタ 下りてした・のきした・ゆきのしたみち

二14ノ シタヲミルト、川ノナカニモ、サカナヲクハヘタ犬ガキマス。
 二21ノ図 「略」、アノ木ノ下ヘイツテミマセウ。
 三5ノ7 メンドリハ「略」、タマゴヲハラノ下ニダイテシマヒマシタ。
 三7ノ7 ハネノ下ニモ二三バキルヤウデシタ。
 三21ノ2 「略」、下のはうからかさかさいはせてかけ上つてくるものがあひます。
 三26ノ6 石がきの下へ出たのは、かはがおちはじめ、竹になりかかつてゐます。
 三51ノ3 ドコカヲカノ下デ、ニハトリガナキマス。
 三80ノ7圖 「略」、かみなりさまを下にきく、ふじは日本一の山。
 四61ノ8 見ればへさきに長いさをを立てて、「略」。一人のくわんちよが其の下に立つて、まねいて居ます。
 四78ノ5 私の下で、長い間しよんぼりとして居まして、「略」。
 四85ノ2圖 ダイリ様ノ下ノダンニ、弓ヤ矢ヲ持ツテ居ル人ハ何デセウ。
 五23ノ6 二かいのまどに「略」。下のかざりまどには、目のさめるやうな

ちりめんや、「略」がかざつてあります。
 五38ノ1 大平橋を渡つてから左へをれて、松山の下へ瓦やきを見に行きまして。
 五60ノ3圖 森も小山も下に見て、向ふの田から大空の雲までとゞく弓のなり。
 五63ノ4 村ざかひの峠へ上りますと、もう町が目の下に見えます。
 五65ノ8圖 「略」、歸りには馬車に乗つて、此の下まで来てよい。
 五86ノ8圖 「略」、うちでも下の雨戸がたふれて、中からうすやたらひがぼかぼか流れ出すほどで、「略」。
 六2ノ6 一番下は四俵、一番上は一俵で、一山は十俵づつです。
 六18ノ1 「略」、栗林の下のくぼ地を教へてくれました。
 六24ノ2 不意を討たれた平家方は、上を下への大さわぎ、「略」。
 六89ノ6圖 「略」、お子どもしゆうは此の腹の下でお晝ねをなさると申します。
 六89ノ7 「略」、今の子どもが象の腹の下へねころんだ。
 六104ノ8圖 「略」、千年もたつたかと思ふ老木の下へ行つた時には、何となく心持がかはつて、「略」。
 七18ノ1 石垣の間でも、地藏様のかげでも、辻堂つじどうのえんの下でもさく。
 七23ノ4 其の松の下に石できざんだ地

蔵様が立つていらつしやる。
 七38ノ8圖 大連の貿易高は横濱や神戸よりは少し下で、大てい大阪ぐらゐだといひます。
 七74ノ2 「略」、うす暗い小窓の下で、わらぢを作つて居りまして、「略」。
 七95ノ6圖 「略」、物賣は になへる我が荷下に置き、掛聲高くおしてやる。
 七101ノ7圖 上様をはじめ皆様、おしの下になつては居られぬかと存じ、「略」。
 七112ノ圖 濁音半濁音文字の下は一字あけること
 八3ノ9 「略」、小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれてゐる。
 八11ノ2 「略」、信作に水をはかせるやら、醫者を呼びに走るやら、上を下へのさわぎである。
 九32ノ10 「略」、日かげが、若葉の色を下に投げるのか、手もうす緑、足もうす緑、「略」。
 九61ノ6 「略」、時鐘しちう番兵がこゝくと艦橋の下へ来て、「略」。一と當直將校に報告する。
 十10ノ3 王は讀終つて、そつと手紙をまぐらの下へ入れた。
 十17ノ4圖 「略」、三四歳の子供でも、腹の下などを自由にぐゞつて歩きまします。
 十39ノ1 「略」、かついで來たつるはしを下へ置いた。

十一26 〈略〉、之を燭^{しよく}光^{くわう}でいへば
一三の下に零^{ひかり}を二十六もつけて表さ
ねばならぬ。

十一529 此の傷から出て来るゴム液
は、流れて下のコップにたまるので
ある。

十一622 はるかの下に一條の白煙を
たなびかせて見えがくれする上り列
車は、〈略〉。

十二214 〈略〉、ついそばの木の下で
は、かごを首に掛けた三人の男が、
〈略〉蜜柑を採つてゐる。

十二584 仕事臺のそばに、ふさぎこ
んで下を見つめてゐた女の子がそれ
を見附けて、〈略〉。

十二979 〈略〉、釋迦が山の下にある
のを見附けて、上の方から大石をこ
ろがしたが、〈略〉。

したい「死体」(名) 1 死體
十一587 〈略〉、先づ目に入つたのは、
大きなふかの死體であつた。

したい「次第」(名) 3 次第 ↓ いれ
ものしたい・あたりしたい
十946 〈略〉、太郎はやつと今日の次
第を有りのまゝに話した。

十二1306 何分今一應の御評議を推
して御願ひ申す次第でござります。

十二1316 次第によつては、或は君
等の銃先にかゝつて死ぬかも知れぬ。

じだい「時代」(名) 5 時代 ↓ しょ
うねんじだい・のきたいしよのよう
ねんじだい

十548 鳩を通信に使つたのは、餘程
古い時代からの事で、〈略〉。

十一673 火の熱は、初め〈略〉、時
代が進んで燃料の種類が増すにつれ
て、〈略〉。

十一682 燈火としては、初め〈略〉、
今はガス燈や電燈が到る處にかゝや
き渡る時代となつた。

十一788 石・〈略〉・農産物などが、
時代により場所によつて、それ〴〵
貨幣の役目をしたこともあつた。

十二148 印刷術の幼稚なる
時代にありては、唯をり〴〵興味あ
る特殊の事件を報道するに過ぎざり
き。

したいしだいに「次第次第」(副) 4
しだい〴〵に 次第々々に
五625 あれ〴〵、虹がきえて行く。
あのあざやかな色どりも しだい
〴〵にうすくなり、〈略〉。

六194 鉛色の空は次第々々に低く
なつて來ます。

十114 綱を次第々々にくりもどすと、
鯨は刻一刻船に近よつて來る。

十二43 ちやうど東の空に上
る月が次第々々にやみの世界を照ら
すやう、〈略〉。

じたいする「辞退」(サ変) 1 じた
いする 《一シ》
四648 よ一はじたいしましたが、
よしつねがゆるしません。

しだいに「次第」(副) 21 シダイニ

次第二 次第に

三586 見テキルウチニ、〈略〉、
色モ シダイニコクナツテキマ
シタ。

七541 海岸の松原や、いその小山
も次第に遠くなつて、しまひにはも
う何も見えなくなります。

七109 畫ノ長クナルニツレテ、氣
候ハ次第ニ暖ク、〈略〉。

七109 夜ノ長クナルニツレ
テ、氣候ハ次第ニ寒シ。

八589 近年人々ノ生活次第ニイソ
ガシクナリテ、〈略〉。

八983 船は次第に波間
に沈み、敵彈いよ〴〵あたりにし
げし。

九456 カクテ價ハ次第ニ高クナリ
テ、馬ハ最も高キ價ヲツケタル人ノ
物トナル。

九461 カクテ價ハ次第ニ安クナリ
テ、最も價ヲ下ゲタル持主、其ノ馬
ヲ賣ルコトトナル。

十20 買手は、自分の見込
で思ひ〴〵の直をつけて、次第にせ
り上げる。

十33 底の水道から水がわき出で、
船は次第に高く浮上る。

十656 ありの火は次第におとろ
へ行きて、ひまもる夜風はだへをさ
すが如し。

て次第に廣がり、兩方が町續きにな
つて、今では龍山も京城の中に編入
されたのださうです。

十889 輸出入の額の増加して行くの
は國家が次第に盛になる印である。

十969 北方に元といふ國お
こり、勢日々盛にして、宋の領地
ををかし、かば、宋は次第におとろ
へて、〈略〉。

十1156 氣長くあしらつてゐる
うちに、さすがの鯨も次第に弱つて、
〈略〉。

十一118 近時工業も次第に盛
になつて、〈略〉 其の他の諸工場が
勢よく黒煙を立ててゐる。

十二1310 生物は總べて長年月
の間には次第に變化し、下等なもの
から高等なものへと進む〈略〉。

十二945 六年の間種々の苦行
を試みた。次第にやせ衰へて、物に
すがらなければ立てない程になつた
時、〈略〉。

十二1042 川沿の道をたどつて
行くと、左手の山は次第に頭上にせ
まり、遂には路の前面に突立つて
〈略〉。

十二1115 當時は單に〈略〉に過ぎ
ざりしが、次第に改良せられて、四
五十年の後には〈略〉。

十二1157 電車は次第に汽車の領分
までも侵略し、尚進んで〈略〉。

した・う「慕」(四・五) 6 したふ

《一ツ・一ハ・一ヒーフ》

五二二 圖 《略》 天皇陛下を神ともあふぎ、おやともしたひてお仕へ申す。

八二二 九 《略》 蕃人からは親のやうにしたはれました。

十二六 一 圖 《略》 生徒も校長をしたふこと父母の如し。

十一 99 五 リンカーンはかね／＼此の偉人を非常にしたつてゐたので、《略》。

十二 93 五 かねて釋迦の徳をしたつてゐたマガダ國王は、《略》。

十二 122 七 圖 夢にのみ見し山川も、あけくれにしたひし家も、まのあたり近く迫りぬ。

したえだ 「下枝」(名) 1 下枝

十一 38 八 なたや鎌などでする草を拂ひ、下枝を伐落して行くと、《略》。
したがいたま・う 「從給」(四) 1 したがひ給ふ 《一へ》

九 10 六 圖 其の時、御供にしたがひ給へる弟橋姫 《略》。

したが・う 「從」(四・五) 16 シタガフしたがふ 從ふ 隨ふ 《一ツ・一ヒーフ》 じつとしたがう

五 41 三 《略》 川上のたけるといふ者があつて、天皇のおほせにしたがひませんでした。

七 33 一 圖 獅子はもとより武士にしたがひて行かんとせり。

八 20 七 圖 《略》、一家コトゴトクコレ

ニ乗リテ、流ニシタガヒテ下ル。

八 81 七 圖 器にはしたがひながら、いはほをも とほすは水の力なりけり。

九 43 二 圖 軍のおきてにしたがひて、他日我が手に受領せば、長ぐいたはり養はん。

九 63 六 《略》、千數百人の乗員が號令にしたがつて、規律正しく活動する其の様は、《略》。

九 103 一 《略》、主人にしたがつて戦地へ向つた。

十一 2 2 温度は表面で約六千度、内部に入るに随つて益々高い。

十一 43 九 圖 《略》、或は仰に従ひ、其の中御地へ参り候やもはかり難く候。

十二 8 八 圖 此の社にては、今も太古の法に従ひ、之によりて火を作るといふ。

十二 11 三 温順な彼は父の命に従つて勉強してゐたが、《略》。

十二 30 七 圖 《略》、よく警官の指揮に従つて、混亂することがなく、《略》。

十二 79 一 かうしてだん／＼網の中が狭められるに随つて、まぐろは水面に渦巻を起したり、《略》 泳ぎ廻つてゐる。

十二 83 七 圖 《略》、從者の土人等ゆくでの危険を恐れて從ふことをがへんぜず。

十二 90 六 我々は常に國法にしたがつ

て幸福な生活を営み、《略》。

十二 121 二 圖 《略》、何事も忍耐が第一とのかねての御教訓に従ひ、一心に働き候ため、《略》。

したがつて 「從」(接) 9 シタガツテしたがつて 随つて

六 10 五 圖 銅ハ 《略》、金や銀ヨリモタクサンアリマスカラ、シタガツテネダンモ安ウゴザイマス。

八 106 一 分業で造ると、《略》、出来高がたいそう多くて、《略》 比べものにならない。したがつて一包のマツチを十錢ぐらゐで賣つても、さうおうにまうかるのである。

九 16 三 保護色ヲモツテキルト、《略》 見ツケラレナイ。シタガツテ敵ニオソハレル心配モ少ク、又コチラカラ敵ヲオソフノニモ都合ガヨイノデア

ル。
九 44 九 圖 《略》、用ヒヤウナケレバ、誰モ之ヲ買フ者ナク、シタガツテ價アルコトナシ。

十 37 八 しかしバナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり、したがつて世界の航路に大きな變動を生じたのである。

十一 93 六 圖 ところが太陰歴は《略》、三年にならないうちに一箇月の間をおかなければならない。したがつて二百十日も《略》、太陰曆になると三十日もちがふことがある。

十二 24 五 これはひつきやう文明の程

度が低いために、共同生活の意義が明らかでなく、随つて商業の本質が理解されず、商人の人格が重んぜられなかつたからである。

十二 46 二 圖 凡そこれ等の木材は、其の有する性質によりて各種の用に供すべく、随つて何れも重要ならざるはなけれど、《略》。

十二 133 八 《略》、國家の存立を危くし、《略》やうな危機は絶無であり、國內はおほむね平和であつた。随つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、又其の誇を永久に持續しようとする心掛けも出來て、《略》。

したがリ 「下刈」(名) 1 下刈
十一 38 一 下刈はいつも土用中にするので、ずる／＼苦しいが、《略》。

したく 「支度」(名) 4 したく 支度
↓おしたく

五 35 四 遠足のしたくをして學校へ行くと、もう級のものが大分來てゐて、《略》。

八 7 六 《略》、それがすむと、「支度」といふあひづの一番太鼓を鳴らした。

九 77 六 圖 《略》、此所で支度をして、學校園へお集りなさい。

十 26 七 二人は早速ボートを出す支度に取にかゝつた。

したくさ 「下草」(名) 1 下草
九 32 二 《略》 兩がはの木立も、まだ若葉だけに、下草まで見えるぐらゐ明るい。

したしみあう「親合」(五) 1 親し み合ふ「一ツ」	かに連なつてゐます。 したて ↓ おんしたてくださる したば「下葉」(名) 1 下葉	七目4 第三 横濱……………七 十目3 第二 アレクサンドル大王と 醫師フリリップ……………七	家はインディアナ州に移つたが、 「略」。
八〇二〇「略」、これから後は互に親 しみ合つて暮しませう。	十43「略」、御庭の此所彼所に、 下葉の色づきかけたるはぎ茂れり。 したやく「下役」(名) 2 下役	しち「七」(名) 2 七 ↓ こうしち きゅう・ごぜんしちじ・だいしち・だ いしちか・どうねんしちがつ	しちじ「七時」(名) 1 七時 十163「宮本の伯父様の所に着いた のは昨夜七時でした。」
八七18「ニューヨークは人口からい へば、ロンドンに次ぐ大都會で、七 百萬以上もあるといひます。」	八403 越前守は手代の言ふ所を聞い て、「略」といつて、下役の者に 石地蔵をしぼつて來るやうに命じま した。	一343 ガンガトンデキマス。一 二三 四五六七八九十、十パ トンデキマス。	しちじっさい「七十歳」(名) 1 七十 歳
したしむ「親」(四・五) 3 親しむ 「ミームーン」	八405 下役の者が石地蔵に荒縄を掛 けて、車に積んで参ります。	十一829 第十九課 我は海の子 「略」。(七)	十一7310 眞淵はもう七十歳に近く、 いろくくりつぱな著書もあつて、天 下に聞えた老大家。
七35「略」、谷あひの家窓明 けて、夜に親しむ時は來ぬ。	しだれやなぎ「枝垂柳」(名) 1 しだ れやなぎ	じち「自治」(名) 5 自治 ↓ ちほう じち	しちじゅう「七十」(課名) 4 七十 三目10 二十一 虫ほし……………七十 四目8 十九 ナゾ……………七十
十一654「略」、人々は自由な大氣を 呼吸しながら、土の香に親しんで樂 しげに働いてゐる。	三553「略」、しだれやなぎの えだ へ、かへる がとびつかうとし てゐます。	十一1142 一體自治の精神とは何であ るか。	八目10 第十八 アメリカだより 「略」三 ニューヨークから…………… 七十
十二8310「網をすき、舟を漕ぎ、漁 業の手傳などして土人に親しみ、さ てさまぐの物語を聞くに、「略」。	したわし「慕」(形) 1 したはし 「シキ」	十一1156「略」、又此の手段に動かさ れたりするのは、自治の精神に全く 反するものである。	十一目4 第十七課 松坂の一夜…………… …七十
しだす「仕出」(五) 1 しだす「一 シ」	八275「略」、愛らしき三毛と 思へば、三毛もまた、したはしき 人と見るらん。	十一1157 本當に自治の精神に富んで ゐる者は、公平無私、「略」、決して 私心をもたないのである。	しちじゅういち「七十二」(課名) 2 七十一
五756「それを見て、村の人は急にあ れ地を田にしました。」	しち「七」(課名) 11 七	十一11610「略」、皆公共心の發動であ つて、自治の精神を養成し、自治團 體を助長するものであるから、「略」。	二目13 二十五 大江山……………七十一 四目9 二十一 一本杉……………七十一
したたむ「認」(下二) 2 したたむ 「メ」	二目8 七 ユフヤケ	十一1174 自治制も、之を運用する人 民に自治の精神が乏しければ、よい 結果を得ることは到底望まれない。	しちじゅうく「七十九」(課名) 5 七 十九
九1178「如何ばかりの思にて此の 手紙をしたためしか、よくよく御察 し下されたく候。	二目16 七 ユフヤケ	しちがつ「七月」(名) 1 七月	五目8 二十 八幡太郎……………七十九 六目9 第二十一 神風……………七十九
十985「書をしたためて張世傑を 招け。」	三目8 七 かんがへもの	五758 六月の田植時から七月・八月 にかけて、水はありあまつた。	七目8 第十九 海ノ生物 一 動物 ……………七十九
したたる「滴」(五) 1 したる 「ール」	三目17 七 かんがへもの	しちさい「七歳」(名) 1 七歳	十目15 第十四 炭坑……………七十九 十一目6 第十九課 我は海の子…………… …七十九
十二319「略」、車道と人道との間 には、緑したる街路樹が目もはる	四目8 七 私どもの町	十一9410 リンカーンが七歳の時、一	しちじゅう「七十五」(課名) 1 七
	四目26 七 私どもの町		
	五目4 三 大蛇たいぢ……………七		
	五目8 七 ……………二十二		
	五22 七 大賣出し		

十五	八目17 第十九 コロンブスの卵………七十五	七28 家には七十近い父と、〈略〉があるので、〈略〉。	十一116 3 〈略〉常に自治制の本旨を辨へ、協同一致して團體の福利を増進することを心掛けねばならない。	しちはちけん 「七八軒」(名) 2 七八
しちじゅうごしゃく	「七十五尺」(名)	しちじゅうに 「七十二」(課名) 1 七	十二	ケン 七八軒
1 七十五尺	十二54 四 七十五尺の大鳥居とは、これなるべし。	十目14 第十三 京城の友から………七十二	十一117 3 自治制も、之を運用する人民に自治の精神が乏しければ、〈略〉。	三50 1 新道ノリヤウガハニハ、新シイ家ガ七八ケンデキマシタ。
しちじゅうさん 「七十三」(課名) 1	七十三	しちじゅうににん 「七十二」(名) 1	しちせんまん 「七千万」(名) 2 七千万	五88 1 四 〈略〉、町は大てい水につかつて、人家も七八軒流れました。
三目17 二十三 カウモリ………七十	三	七十二人	五14 四 〈略〉われら國民七千萬をわが子のやうに おぼしめされる。	しちはちけん 「七八間」(名) 1 七八
しちじゅうし 「七十四」(課名) 1 七	十四	十一6 1 四 門人三千人、その最もすぐれたるもの、顔淵・〈略〉等七十人なりき。	五18 四 〈略〉、われら國民七千萬は 天皇陛下を神ともあふぎ、おやともしたひてお仕へ申す。	間 九53 四 コ、椰子は、高いのは七八間もあります。
六目7 第十九 メリンス………七十	十四	しちじゅうよねん 「七十余年」(名) 1	しちだい 「七代」(名) 1 七代	しちはちじゅうにち 「七八十日」(名) 1 七八十日
四	六目7 第十九 メリンス………七十	十二99 4 四 七代七十余年の帝都として、咲く花のにはふが如しと誇りし奈良の都も、〈略〉。	十二99 4 四 七代七十余年の帝都として、咲く花のにはふが如しと誇りし奈良の都も、〈略〉。	七35 3 四 大連へ来てから、もうかれこれ七八十日、町のもやうも大分わかつて來ました。
しちじゅうしさい 「七十四歳」(名) 1	七十四歳	しちじゅうろく 「七十六」(課名) 2	じちだんたい 「自治団体」(名) 3 自治團體 ↓ ちほうじちだんたい	しちはちにん 「七八人」(名) 2 七八人
十二13 8 〈略〉ふだんの養生によつて、七十四歳の長壽を保つことが出來た。	七十四歳	七十六	十一116 2 〈略〉、一般の人民の後援がなければ自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。	九58 10 正一のうちの人たちに手つだひもまじつて、七八人の男や女が向ひ合つて、〈略〉麥を打つてゐる。
しちじゅうしち 「七十七」(課名) 5	七十七	十二目2 第十五課 まぐる網………七十六	十一116 5 例へば教育・衛生等の自治團體の事業は、地方人民が一般に之を尊重し、〈略〉。	十一24 2 四 〈略〉、幾頭かの馬をひきて余吾湖のほとりに下り來れる七八人の兵卒あり。
三目12 二十四 十五や………七十七	三目12 二十四 十五や………七十七	しちじょうばし 「七条橋」(名) 1 七	十一116 10 〈略〉のは、皆公共心の發動であつて、自治の精神を養成し、自治團體を助長するものであるから、〈略〉。	しちはちひょう 「七八俵」(名) 1 七八俵
六目8 第二十 氷すべり………七十	六目8 第二十 氷すべり………七十	六71 四 七條橋	じちのせいしん 「課名」 2 自治の精神	六13 3 四 今の分では去年より七八俵よけいに取れさうだ。
八目12 第二十 税………七十七	八目12 第二十 税………七十七	じちせい ↓ ぼくとしちせい	十一92 租界といふのは居留地の一	しちはちほん 「七八本」(名) 1 七八本
九目5 第十七 いもほり………七十	九目5 第十七 いもほり………七十	十一92 自治制	種で、居留民が支那政府の手を離れて、自治制を布いてゐる處である。	七67 9 四 外にまだ手紙が七八本。
七	七	十一114 4 此の精神は實に自治制の根本であり、又其の生命である。	十一113 2 第二十五課 自治の精神	しちはっせんにな 「七八千人」(名) 1
しちじゅうちかい 「七十近」(形) 1	しちじゅうちかい 「七十近」(形) 1		七十二	七十八人
七十近い 「一イ」	七十近い 「一イ」			

- 五〇二 此の停車場から、毎日七八千人づつの人が乗降りします。
- しちひやくしゃく 「七百尺」(名) 1 七百尺
- 十287 図 一秒又一秒、七百尺に近き大船體は、寸、尺、間と音もなくすべり出づ。
- しちひやくねん 「七百年」(名) 1 七百年
- 十二277 図 歴史は長し 七百年 興亡すべて ゆめに似て、英雄墓は こけむしぬ。
- しちひやくまんいじょう 「七百万以上」(名) 1 七百萬以上
- 八718 ニューヨークは人口からいへば、ロンドンに次ぐ大都會で、七百萬以上もあるといひます。
- しちほんやり 「七本槍」(名) 1 七本槍 じしずがたけのしちほんやり
- 十一319 図 武器は皆槍なりしかば、世に之を稱して賤嶽の七本槍といふ。
- しちゅう 「市中」(名) 3 市中
- 七289 図 市中ヲ流ル、川ヲ淀川トイフ。
- 七294 図 市中ニハ電車ノ往復シゲク、港ニハ船ノ出入タエズ。
- 十二225 図 しかし市中の混亂は蜂の巣を突いたやうなさわざである。
- しちよう 「輜重」(名) 1 輜重
- 六403 図 「略」、兵には歩・騎・砲・工・輜重の五種があつて、「略」。
- しちようそんかい 「市町村会」(名) 1
- 市町村會
- 十一1147 一般人民が府縣市町村會議員を選挙するにも、「略」、市町村會で市町村長を選挙するにも、「略」。
- しちようそんちよう 「市町村長」(名) 3 市町村長
- 十一1147 一般人民が府縣市町村會議員を選挙するにも、「略」、市町村會で市町村長を選挙するにも、皆此の精神を本としなければならぬ。
- 十一1148 又市町村長が其の事務を處理するにも、「略」、常に此の公平な精神をもつてしなければならぬ。
- 十一1151 市町村長や議員を選挙するには、専ら其の人物に重きをおいて「略」。
- しちようへい 「輜重兵」(名) 2 輜重兵
- 六417 図 其の代り輜重兵の外は各種の兵が出てゐる。
- 六418 図 輜重兵にも其の中にだれか出るだらう。
- しちようゆそつ 「輜重輪卒」(名) 1 輜重輪卒
- 六422 図 「略」小男だから、ひよつとすると輜重輪卒にあたるかも知れない。
- しちり 「七里」(名) 1 七里
- 五584 宮島はまはりが七里もある島で、「略」。
- しちりがはま 「七里浜」(地名) 2 七里が濱
- 十二2410 図 七里が濱のいそ傳ひ、稻村が崎、名將の 劍投せし古戰場。
- 十二25 図 七里が濱
- しつ 「室」(名) 7 室 ↓おうせつしつ・じつけんしつ・ポンプしつ・まちないしつ
- 十8010 「略」、ポンプ室の前に出ました。室の中には、大きなポンプが幾つも、「略」活動してゐます。
- 十1035 「略」といつて、にいさんは次の室へ案内して下さる。
- 十10310 次の室には大きい熱帶植物類が並んでゐる。
- 十1048 「略」、細長い室一ぱいに、目もさめるやうな草花が並べてある。
- 十12110 図 あの青年が私の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、はいると靜かに戸をしめました。
- 十一1243 橋本君にうながされて、次の室にはいつた。
- 十一1247 隣の室では、職工が五六人ならんで、ガラス器にいろ／＼の模様をつけてゐる。
- じつ じいちりようじつ・いつさくじつ・じゅうねんいちじつ・しゆくさいじつ・すうじつ
- じっかい 「十階」(名) 1 十階
- 八721 図 高い建物のあることは世界第一で、十階・二十階の家はいくらもあります。
- じっかいり 「十海里」(名) 1 十海里
- 十一845 此の分ならば五海里や十海里は何でもない。
- じっかいりあまり 「十海里余」(名) 1 十海里餘り
- 十一86 「略」、更に十海里餘りさかのぼると、其の西岸にある上海に着く。
- しっかと 「確」(副) 2 しっかと
- 十一308 図 ねぢ伏せられながら正國、清正がよろひのすそをしっかとつかむ。
- 十一313 図 「略」、二人はしっかと組みたるまゝ、ころ／＼と轉び落つるこゝと三十間許。
- しっかり 「確」(副) 6 しっかり
- 四394 「略」、ぐわいたうをしっかりとからだにくつつけました。
- 八81 図 しっかりやつてくれ。
- 九1053 図 しっかり頼むよ。
- 十一757 図 あなたはまだお若いから、しっかり努力なすつたら、きつと此の研究を大成することが出来ませう。
- 十一866 図 しっかりやれ。
- 十二592 「略」、小さなねぢ廻しでしっかりとした。
- しっかりしたまふ 「確給」(五) 1 しっかりしたまふ 《一へ》
- 五67 図 君、しっかりしたまへ。
- しっかりする 「確」(サ変) 2 しっかりする 《一しーシロ》
- 九788 僕はわり合にしっかりしてゐる一本の莖を握つて、ぐつと引張つ

- た。
- 十一558 図 しつかりしろ。
- しっきー [「湿気」(名) 1 湿気]
- 十二469 図 <略>、又よく湿気に耐ふるが故に、建築材として最も重んぜらる。
- じっきー [「十騎」(名) 1 十騎]
- 七485 <略>、武田方から十騎ばかり、木戸を開いて切つて出ようとした。
- じっけい [「実景」(名) 1 實景]
- 八705 図 此の繪葉書は此所へ来る途中、汽車の窓から見た牧場の實景です。
- じっけん [「実験」(名) 1 實驗]
- 十二1132 図 次いで白金其の他の金属の針金を以て様々の實驗を重ねしが、<略>。
- じっけんじょう [「十間以上」(名) 1 十間以上]
- 十一555 初は十間以上も相手をぬいてゐたが、<略>。
- じっけんしつ [「実験室」(名) 1 實驗室]
- 十二1136 図 エヂソンは例の如く實驗室に閉ぢこもりて研究に餘念なかりしが、<略>。
- じっけんす [「実験」(サ変) 1 實驗す] 《一セ》
- 十二1142 図 彼は直に竹を以て炭素線を作りて實驗せしに、豫想以上の好結果を得たり。
- じっけんよう [「実験用」(名) 1 實驗用]
- 用
- 十二1114 図 當時は單に理化學の實驗用として使用せらるるに過ぎざりしが、<略>。
- じっこう [「実行」(名) 3 實行]
- 九264 図 <略>、くはしく計畫を立てた事もあるが、<略>、實行が出来ずにしめた。
- 九278 <略>、固い決心を顔にあらはして、實行をちかつた。
- 十152 図 <略>、かうして修養にも實行にも、骨を折つてをられるのを、<略>。
- じっこう・する [「実行」(サ変) 1 實行する] 《一サ》
- 十148 図 <略>、これがまじめに實行されてゐるかどうかと、少し氣になつたのでした。
- じっさい [「十歳」(名) 2 十歳]
- 八1144 大將が十歳の年、大將の一家は郷里へ歸ることになつた。
- 十二1108 十歳の頃には昆蟲採集を始めた。
- じっさい [「実際」(名) 2 實際]
- 十二229 <略>、見本には精良な品を使つて、實際の注文に對しては粗惡なものを送るやうな事は、<略>。
- 十二821 図 然るに其の實際を調査して此の疑問を解決したる人、遂に我が日本人の中より現れぬ。
- じっさいころ [「十歳頃」(名) 1 十歳頃]
- 十一962 <略>、リンカーンは十歳頃までは本を讀むことなどは殆ど出来なかつた。
- しっす [「叱」(サ変) 1 叱す] 《一シ》
- 十二868 図 折よく同行の樺太人來りて土人等を叱し、林藏を救ひ出しぬ。
- じっせん [「十銭」(名) 3 十銭]
- 八1038 マッチは<略>、價も安く、一包十箱が十銭ぐらゐで買はれる。
- 八1043 <略>、それを十銭ぐらゐで賣つてはまうかるまい。
- 八1062 したがつて一包のマッチを十銭ぐらゐで賣つても、さうおうにまうかるのである。
- しっそ [「質素」(形状) 1 質素] 《一しっそ・ちゅうせいしっそ
- 十42 図 御殿は質素なる平屋にて、<略>。
- じっち [「実地」(名) 3 實地]
- 九2210 図 <略>、種々様々の事を、實地と學理の兩方から調べて行かねばならぬので、<略>。
- 九235 図 <略>、四十餘年の間、寢食を忘れて其の道の書物を讀み、國々の實地を調べ、本もあらはし、<略>。
- 十363 <略>、數百年來ヨーロッパ人のしばく計畫したところで、實地に大仕掛の工事を行つた事もあつたが、成功を見るに至らなかつた。
- じっちけんきゅう [「実地研究」(名) 1 實地研究]
- 十二128 かくて世界の各地をめぐる、<略>、博物學や地質學の實地研究につとめ、<略>。
- じっちょう [「十町」(名) 2 十町]
- 十15 図 <略>、廣き參道を行くこと十町ばかりにして神宮橋に達す。
- 十一635 <略>、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。
- じっちょうあまり [「十町余」(名) 1 十町餘り]
- 十二522 これは奥入瀬川を十町餘り下つた處に大きな瀧があつて、<略>。
- じつづき [「地続」(名) 2 地續]
- 十二8110 図 樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、<略>。
- 十二826 図 樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざることとは、<略>。
- じっと (副) 14 ジット じっと
- 八364 越前守はじっと考へましたが、<略>。
- 八479 金アミノ中二飼ハレテ、ジツト止リ木ニ止ツテキルノヲ見テモ、<略>。
- 九219 少年はひぎに兩手をついて、老人の顔をじつと見つめながら聞いてゐる。
- 九356 それをじつと見送つてゐると、<略>。
- 九1016 <略>、後足を長く延ばし、眞青な空をじつとながめてゐる。
- 九1106 中尉の手はじつとして動かな

い。

十263 図 私、とても人の死ぬのをじつと見ては居られません。

十486 一番鶏の聲を聞いてからは、もうじつとしては居られない。

十803 安全燈の取手とてを握りしめて、じつと目をつぶつてゐるうちに、〈略〉。

十一5810 老砲手は大砲にもたれて、無言のまゝじつとそれを見つめてゐる。

十二556 女の子は唯じつと見まもつてゐたが、やがてかの小さなねちを見附けて、「略」。

十二916 木陰からじつと見てゐた彼は、〈略〉。

十二12810 相手は大きな眼でじつと安芳の顔を見つめながら、だまつて聴いてゐる。

十二1307 西郷はしばらくじつと考へてゐたが、「略」。

しっとり (副) 2 しっとり

九325 しっとりとしめりを帯びた一すぢの道が、〈略〉。

九1045 〈略〉、野には朝つゆがしつとりと置いてゐた。

じっとり (副) 1 じっとり

九333 〈略〉、ふろしき包をしよつたせなかがじつとりと汗ばんで来る。

しつない [室内] (名) 3 室内

十一692 小僧一人だけ自由に室内に出入させて、〈略〉。

十二910 〈略〉、貝殻や鑽石などを室内に並べては一人で楽しんでゐた。

十二1118 図 〈略〉、室内に用ふるには、大仕掛にして光力強きに過ぎ、實用に適せず。

じつに [実] (副) 41 實ニ 實に

六837 實に我が國にとつては、これまでにない大難であつた。

六878 象の鼻は手の用をなすもので、實に力がある。

六978 正成は實にえらい人である。七604 図 〈略〉、これは實に残念な事であります。

八126 図 耕造さんの心掛は實に見上げたものです。

八196 図 我が國ノ最南端ヨリ最北端ニ至ル長サヨリモ長シ。我が國第一ノ長流鴨緑江ノ如キハ實ニ其ノ支流ニモ及バザルナリ。

八488 マシテ自由ノ天地ニ居テ、自在ニ空ヲトブ様ハ、實ニ勇マシイモノデアル。

八1151 實に鐵は熱いうちにきたへなければならぬ。

九73 図 これ等の植物が思ふまゝに茂つてゐる様子は實に見事です。

九318 〈略〉しぶきを浴びながら、瀧つばを見物して廻るのは、實に愉快です。

九674 〈略〉、しづく／＼上つて行く様は、實におごそかなものである。

九753 〈略〉元氣よくかけ廻つてゐる様は、實に勇ましい。

九962 図 〈略〉、急な坂を矢のやうに早くするのですから、實に愉快でした。

九1036 戦場の光景は實に恐いものであつたが、〈略〉。

九1213 図 シカシ今度ノ候補者ノ中ニ、實ニリツバナ考ヲ持ツテモテ、アノ人ナラバト思ハレル人ガアルカラ、〈略〉。

十59 図 図 〈略〉、新に植込みたる木の數、實に十數萬本に及べり。

十463 〈略〉、歎息する彼の様子は、實に見る目もいたましい程であつた。

十766 図 〈略〉、松の緑色などが鮮かに浮出して見えるのは實にきれいです。

十888 〈略〉、之を十年前の額に比べると、實に十數倍である。

十一173 弟さんまでが、あんなに氣をつけていらつしやるとは實に感心なことです。

十一2210 裁判は實に正義保護のため大切な仕事であり、〈略〉。

十一496 〈略〉、數へてみるとゴムで造つたものは實に多い。

十一606 〈略〉、緑草の間に羊の群をなして遊ぶ様は、實にのどかである。

十一786 〈略〉案出するまでには、人間は實に種々様々なるものを使用してみたのである。

十一943 図 曆は實に重寶なものだ。

十一1015 彼が他日大統領となり、〈略〉萬人に仰がれるやうになつたのは、實に此の少年時代の苦心のたまものである。

十一1055 図 図 〈略〉、其の壯觀實に筆舌に盡くし難く候。

十一10910 図 図 〈略〉ほのほをあげて燃ゆる光景は、實にすさまじきものに候。

十一1144 此の精神は實に自治制の根本であり、又其の生命である。

十一1241 〈略〉、いろ／＼扱つてゐるうちに臺付のコツプになつた。實にうまいものである。

十一1304 図 〈略〉、一切經の廣く我が國に行はるゝは、實に此の時よりの事なりとす。

十二79 図 図 〈略〉、本殿の如き其の高さ實に八十尺に及ぶ。

十二609 図 國旗は實に國家を代表する標識にして、〈略〉。

十二797 〈略〉大まぐろがどたり／＼と船中へ投込まれる光景は、實に愉快の極みである。

十二1106 洞門の長さは實に三百八間、高さ二丈、幅三丈、〈略〉。

十二11310 図 彼の眺め入りしは繪にあらず紙にあらず、實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

十二11410 図 図 〈略〉、アメリカにて特許を得たるもののみにても其の數實に千餘に及ぶ。

十二115 6 図 現今における電氣の利用は實にめざましいものです。

十二117 8 図 電信や電話の發明は其の當時實に全世界を驚かしたものであります。〈略〉。

十二133 2 忠孝は實に我が國民性の根本をなすもので、〈略〉。

十二136 9 〆略、之を巧みに自國のものとするのは、實に我が國民性の一大長所である。

じつは「実」(副) 3 實は

十一43 4 図 御親切なる御手紙有難く拜見仕候。〈略〉。實は去月十日頃より感冒の心地にて引きこもり居候處。〈略〉。

十一74 10 図 私も實は我が國の古代精神を知りたいといふ希望から、古事記を研究しようとしたが、どうも古い言葉がよくわからないと十分なことは出来ない。

十二40 1 図 ベートーベンも〈略〉、口ごもりながら、「實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが、——〈略〉。」

じつぱ「十羽」(名) 3 十パ

一34 5 図 ガンガトンデキマス。一二三四五六七八九十、十パトンデキマス。

二13 2 木ノエダニ、コトリガ十バトマツテキマシタ。

三8 6 図 ヒヨコハミンナデ十パデス。

しっぱい「失敗」(名) 1 失敗

十二113 3 図 〆略、様々の實驗を重ねし、これまた失敗に終りぬ。

じつびよう「十俵」(名) 1 十俵

六2 7 一番下は四俵、一番上は一俵で、一山は十俵づつです。

じつぶつ「実物」(名) 1 實物

十104 2 〆略、ゴムの木などは名を聞いてゐるが、實物を見るのは始めてである。

じつぶん「十分」(名) 1 十分

十二13 6 〆略、たとへ十分、十五分の餘暇でも無益に費すことがなかつた。

じつぶんごと「十分毎」(名) 1 十分毎

七9 1 図 汽車はおよそ三十分毎に、電車はおよそ十分毎に發着す。

じつぽ「実母」(名) 4 實母

八36 2 〆略、一人の子どもに二人の實母はないはずといつて、いろいろ調べますが、〈略〉。

八36 3 〆略、いろいろ調べますが、どちらも實母だといひはります。

八37 3 〆略、子どもがいたがつて、わつと泣出しますと、實母の方は驚いて手を放しました。

八38 2 図 手を放した女が實母にきまつた。

しつぼう「失望」(名) 1 失望

十二72 3 怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた王は、〈略〉。

しつぼう・する「失望」(サ変) 1 失望する

望する「一シ」

十二69 7 娘の答に失望した王は、例の烈しい氣性から、〈略〉。

じつよう「実用」(名) 1 實用

十二111 9 図 〆略、室内に用ふるには、大仕掛にして光力強きに過ぎ、實用に適せず。

しつれい「失礼」(名) 2 失禮

十67 5 図 僧は其の厚意を深く謝し、さて「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」

十二119 8 図 〆略、一日々と延引致し、今日に相成り申候。失禮の段御許し下されたく候。

しつれいつかつまづる「失礼仕」(四) 1 失禮仕

十一41 6 図 久しく御無音に打過ぎ、失禮仕候。

して(格助) 2 して

五7 3 僕は自分よりえらい友だちを大ぜいしていちめるのは、男らしくないと思ひます。

六29 7 図 私どもだつて、大ぜいしてかゝれば、あなた方に負けません。

して(接助) 64 シテ して

七1 2 図 われらが住む世界は、其の形まるくして、球の如し。

七5 8 図 君、此の長き行列の 中の一人は君にして、中の一人は僕なるぞ。

七7 5 図 横濱は東京の西南八里半の

所にある一大貿易港にして、商船の出入たゆる時なし。

七7 7 図 港には防波堤ありて、風波のおそれ少く、水深くして、いかなる大船もきしに横づけにすることを得。

七7 9 図 輸出品の主なる物は、生絲と羽二重にして、生絲は多くアメリカ合衆國に、羽二重はフランス・イギリス等に送る。

七28 4 図 大阪ハ昔に徳天皇ノ都シタマヒシ所ニシテ、〈略〉。

七28 7 図 今ハ商工業サカンニシテ、大工場多ク、エントツノ煙ツネニ空ヲオホヘリ。

七29 7 図 神戸ハ一大貿易港ニシテ、輸出入ノサカンナルコト横濱ニユツラズ。

七109 4 図 彼岸ハ七日ノ間ニシテ、其ノ中日ニ、春ハ春季皇靈祭、秋ハ秋季皇靈祭ヲ行ハセラル。

八19 3 図 揚子江ハ支那第一ノ大河ニシテ、其ノ長サ一千三百里、〈略〉。

八21 3 図 揚子江ハ水量ツネニ豐ニシテ、洋々ト流ルレドモ、夏季ハコトニ増水シテ、〈略〉。

八29 1 図 手はすべて仕事のもとにして、いそがしき時に、手の足らずといふは、〈略〉。

八60 1 図 彼ノ焼諸屋ノ看板ニ、八里半ト記セルモノノ如キハコレニシテ、其ノ味クリニ近シトイフ意ナリ。

八六二四 〇 略、まことのめくらにし
て、大學者となりし人あり。
八九五八 〇 名古屋市ハ我が國屈指ノ大
都會ニシテ、人口四十餘萬アリ。
八九五九 〇 商工業盛ニシテ、焼物・塗
物・扇・綿絲・織物等ノ産出頗ル多
シ。
八九六六 〇 三百年前徳川家康ガ諸大名
ニ命ジテ造ラシメタルモノニシテ、
其ノ天守閣ハ加藤清正ノキヅキシ所
ナリ。
九四四八 〇 ソレガ如何ニマレニシテ、
タヤスク得ラレザル物ナリトモ、
〇 略。
九四六三 〇 カクノ如ク、品物多クシテ、
之ヲ望ム者少ケレバ、其ノ物ノ價安
クナリ、〇 略。
九四六四 〇 略、品物少クシテ、之ヲ
望ム者多ケレバ、其ノ物ノ價高クナ
ル。
九四六九 〇 略、北方に元といふ國お
こり、勢日々盛にして、宋の領地
ををかし、かば、〇 略。
九四七三 〇 天祥きかずしてはいはく、
〇 略。
九四七六 〇 然るに三元軍の勢いよく盛
にして、宋軍到る處に敗れ、〇 略。
九四七九 〇 されど宋軍の大勢日々に非
にして、天祥の誠忠を以てしても如
何ともすることあたはず。
九四八八 〇 張世傑等の奮戦も大勢を轉
ずることあたはずして、宋遂に亡び

しかば、〇 略。
一〇二五三 〇 略、鯉・鮒を養ふことも
盛にして、大てい二年毎に之を賣る
に、其の利益少しとせず。
一〇二五九 〇 かくの如くなれば全村頗る
豊にして、村民皆其の家業を樂しめ
り。
一〇二五七 〇 村長は村の舊家に生れ、き
はめて親切公平にして、常に力を一
村の幸福の爲に盡くすが故に、〇 略。
一〇二五〇 〇 校長も着實温厚なる人にし
て、生徒を愛すること子の如く、
〇 略。
一〇二五〇 〇 略、一村は誠に平和にし
て、年を追うて其の繁榮を増すばか
りなり。
一〇二五五 〇 略、呉の勢盛にして越軍
大いに破れ、勾踐は呉に捕へられぬ。
一〇二四〇 〇 略、久しく其の職に居
ることあたはずして魯を去りぬ。
一〇二四四 〇 論語は、〇 略、孔子及び
其の高弟の言行を集録したるものに
して、最もよく此の大聖の面目をう
かゞふを得べし。
一〇二七三 〇 又きはめて學問に熱心
にして、其の好學の念の切なる、
〇 略。
一〇二三四 〇 略、水路きはまるが如
くにして、また忽ち開く。
一〇二三八 〇 略、夏は山海皆緑にし
て目覺むるばかり鮮かなり。
一〇二四七 〇 其の畫かく所皆鶴にして、

筆勢非凡、丹青の妙言ふべからず。
一〇二四九 〇 略、畫師は前の如く夜
もすがら寝ねずして、明日はかく畫
がかんなど獨言してゐたりければ、
〇 略。
一〇二七七 〇 我々は殆ど貨幣・紙幣なく
して一日も生活することは出来ぬと
いつてもよいからである。
一〇二五五 〇 一切經は、佛教に關する
書籍を集めたる一大叢書にして、此
の教に志ある者の無二の寶として貴
ぶところなり。
一〇二七五 〇 略、うゑたる人々の
救助に用ふるも、歸する所は一にし
て二にあらず。
一〇二八二 〇 略、効果空しからずし
て宿志の果さるゝも近きにあらんと
す。
一〇二八三 〇 これ世に鐵眼版と稱せら
るゝものにして、一切經の廣く我が
國に行はるゝは、實に此の時よりの
事なりとす。
一〇二四七 〇 此の川は古の篠川に
して、かのをろち退治の傳説あるは
此の川の川上なり。
一〇二四〇 〇 略、何時までもかく單
純にして遊戲的なものに満足すべ
くもあらず、〇 略。
一〇二五五 〇 我が國にてかゝる新聞の
現れたるは維新前後にして、其の後
數十年の間に驚くべき發達を遂げた
り。

一〇二七八 〇 かくいへば、頗る繁雜に
して多大の時間を要する如くなれど
も、〇 略。
一〇二四六 〇 然れども材の優良にして
美麗なるは檜を以て第一とすべし。
一〇二四六 〇 略、ねばり強くして、
割れ、そる等の憂極めて少く、〇 略。
一〇二四七 〇 略、もみは柔かにして
工作に便なれば、諸種の箱を作るに
用ひられ、〇 略。
一〇二四七 〇 略、つがは堅くして久
しきに耐ふるが故に、家屋の柱・土
臺となすに宜し。
一〇二四七 〇 びば・松・落葉松は何れ
も堅くして、耐久・耐濕の性あるを
以て〇 略、其の用途頗る廣し。
一〇二四八 〇 略、かしは最も堅くし
て彈力に富むが故に、〇 略、強烈な
る力を受くるものを製作するに適せ
り。
一〇二四九 〇 松に至りては産地極めて
廣くして、奥羽地方より九州に至る
まで殆ど之を見ざる處なく、〇 略。
一〇二六〇 〇 今日一國家を形成する
國々にして、國旗の制定せられざる
所なし。
一〇二六〇 〇 國旗は實に國家を代表す
る標識にして、其の徽章・色彩には
それ〴〵深き意義あり。
一〇二六一 〇 イギリスの國旗は、〇 略。
元來イギリスは、〇 略、三國の合同
して成れる國家にして、先づ〇 略、

更にアイルランドの加はるに及び、
《略》其の国旗を合はせて、遂に今日
の如き形式をなすに至れり。

十二628 図 《略》、獨立當時の十三州
を表すものにして、永久に變化する
ことあらざれども、《略》。

十二826 図 樺太が離れ島にして大陸
の地續にあらざることは、《略》。

十二835 図 これより北は波荒くして
舟を進むべくもあらず、《略》。

十二1019 図 《略》、九條の條坊井然と
して、北に《略》、南端に羅城門を
ふまへたる古の奈良の都は、《略》。

十二1117 図 然れどもこは今日のアー
ク燈に類するものにして、公園・街
路等の照明用としては適當なれども
《略》。

十二1119 図 《略》、室内に用ふるには、
大仕掛にして光力強きに過ぎ、實用
に適せず。

十二1151 図 今日文明の利器と稱せら
るゝものにして、直接間接に彼の天
才によらざるもの殆どなしといひて
可なり。

十二1119 図 《略》、室内に用ふるには、
大仕掛にして光力強きに過ぎ、實用
に適せず。

十二1151 図 今日文明の利器と稱せら
るゝものにして、直接間接に彼の天
才によらざるもの殆どなしといひて
可なり。

十二1119 図 《略》、室内に用ふるには、
大仕掛にして光力強きに過ぎ、實用
に適せず。

十二1151 図 今日文明の利器と稱せら
るゝものにして、直接間接に彼の天
才によらざるもの殆どなしといひて
可なり。

十二1119 図 《略》、室内に用ふるには、
大仕掛にして光力強きに過ぎ、實用
に適せず。

十二1151 図 今日文明の利器と稱せら
るゝものにして、直接間接に彼の天
才によらざるもの殆どなしといひて
可なり。

十二1119 図 《略》、室内に用ふるには、
大仕掛にして光力強きに過ぎ、實用
に適せず。

十二1151 図 今日文明の利器と稱せら
るゝものにして、直接間接に彼の天
才によらざるもの殆どなしといひて
可なり。

ヤウナヤクワンニモナリマス。シテ
ミレバ銅ホド役ニ立ツ物ハアリマス
マイ。

じてんしゃ 「自転車」(名) 5 自転車
自動車 自転車

五324 私のうちの表通は電車や自転
車が引切なしに通つて、《略》。

六333 自転車ガ後カラ來テ、カケヌ
ケテ行ツタ。

八567 図 《略》、ひらりと下りて
自転車 角の下駄屋にあづけ置き
《略》。

八573 図 《略》、かくいふ聲を後にして、
小ぞうは乗りぬ、自転車に。

十一494 自動車・自転車のタイヤ、
ゴムまり・《略》・ゴム風船など、數
へてみるとゴムで造つたものは實に
多い。

してんず 「指點」(サ変) 1 指點す
《一ス》

十二10210 図 大極殿の跡はるかに指點
すべく、《略》。

じどうしゃ 「自動車」(名) 4 自動車
どのりあいじどうしゃ

五1024 汽車の發着時刻が近づくこと、
自動車・馬車・人力車がいくだいと
なく、入口・出口によつて來ます。

十一996 《略》、電車・馬車・自動車
等が絶間なく往來してゐる。

十一494 自動車・自転車のタイヤ、
ゴムまり・《略》・ゴム風船など、數
へてみるとゴムで造つたものは實に
多い。

十二334 図 《略》、道を往來してゐる
人間や自動車などは、まるで蟻のは
ふやうに見えるし、《略》。

しとげる 「為遂」(下二) 1 仕とげ
る 《一ゲ》

九272 図 《略》、父の此の願だけは、
しかと心にとめて置いて、必ず仕と
げてもらひたい。

しどころ 「為所」(名) 1 しどころ
十一861 図 いや、こゝががまんのし
どころだ。

多し。

十二334 図 《略》、道を往來してゐる
人間や自動車などは、まるで蟻のは
ふやうに見えるし、《略》。

しとげる 「為遂」(下二) 1 仕とげ
る 《一ゲ》

九272 図 《略》、父の此の願だけは、
しかと心にとめて置いて、必ず仕と
げてもらひたい。

しどころ 「為所」(名) 1 しどころ
十一861 図 いや、こゝががまんのし
どころだ。

しな 「支那」(地名) 12 支那

十878 《略》、輸出先はアメリカ合衆
國・支那・イギリス・フランス等
である。

十884 《略》、又支那・印度其の他の
東洋諸國へ輸出される。

十885 支那の豚の毛が輸入されて日
本でブラシに造られ、又支那へ輸出
されるなども同じ例である。

十886 《略》、又支那へ輸出されるな
ども同じ例である。

十968 図 支那の宋朝の末、北方に元
といふ國おこり、《略》。

十1333 図 昔支那に呉・越とて相隣れ
る二國ありき。

十一455 図 支那幾千年の人物中、
《略》、孔子に及ぶはなし。

十一511 図 當時支那は數國に分れて
互に相争ひ、戰亂止むことなかりし
かば、《略》。

十二1010 《略》、支那の各地との取引
にもきはめて便利であるから、《略》。

十二1258 図 されば古は、支那より渡
來せるものの僅かに世に存するのみ
にて、《略》。

十二637 図 國旗の色彩が其の國の人
種を表すものに、支那の國旗あり。

十二1366 支那・印度の文明を入れ、
更に西洋の文明を入れて長足の進歩
を成し遂げた日本國民は、《略》。

しな 「品」(名) 8 品 おんしな
五921 それも品と目方によつて切手
の價がちがひます。

七1142 図 あのため子ども同の品を
もう五十反、至急お送り下さい。

八434 《略》、其の中に盗まれた品の
ありなしを調べさせました。

十332 図 《略》、御生前殊に御好みあ
りし品々を選ぶ由なるが、それらの
品を社務所にたづさへ來て、《略》。

十863 又國內で出来るものを使ふよ
りも、時には外國の品を使ふ方が都
合のよい事もある。

十872 《略》、物によつては、やはり
外國の品を買つた方が得な場合が少
くない。

十二228 買ふ人の無智に乘じて安い
品を高く賣付け、《略》。

十二229 《略》、見本には精良な品を
使つて、實際の注文に對しては粗惡
なものを送るやうな事は、《略》。

しないばん 「市内版」(名) 1 市内版

十二229 《略》、見本には精良な品を
使つて、實際の注文に對しては粗惡
なものを送るやうな事は、《略》。

しないばん 「市内版」(名) 1 市内版

十二229 《略》、見本には精良な品を
使つて、實際の注文に對しては粗惡
なものを送るやうな事は、《略》。

しないばん 「市内版」(名) 1 市内版

ビ・ーベ」

十二94 ㊦ なぎさに立ちて昔をしのべば、〈略〉英雄の姿、今まのあたり見るが如く、打寄する波の音さへ何事をか語るに似たり。

十二272 ㊦ 若宮堂の舞の袖、しづのをだまきくりかへし かへしし人をしのびつゝ。

しば 「芝」(地名) 2 芝 芝

十二125 9 西郷は早速承知して、芝、高輪の薩摩屋敷で會見したが、〈略〉。

十二126 2 翌十四日の會見は、芝、田町の薩摩屋敷で行はれた。

しば 「芝」(名) 2 芝 芝

五40 1 〈略〉、拜殿のよこの芝の上で、べんたうをたべてゐると、〈略〉。

十二100 7 ㊦ 春は若草山の芝緑にもえたち、〈略〉。

しばい 「支配」(名) 1 支配

九44 ㊦ それに此の邊一帯の島々は我が國の支配に屬してゐるので、〈略〉。

しばい 「芝居」(名) 1 芝居

八61 5 ㊦ 〈略〉、芝居又ハ活動寫眞ナドノ興行場ニハ、繪看板アリ、〈略〉。

しばかり 「柴刈」(名) 1 シバカリ

一44 5 オヂイサンハママヘシバカリニ、オバアサンハカハヘセントクニイキマシタ。

しばし 「暫」(副) 1 しばし

九13 8 ㊦ 妹も同じ心にや、しばし見

とれてひよこのそばをはなれず。

しばしば 「屢」(副) 2 しばしば

十39 ㊦ 何れも、御在世中しばしば行幸・行啓ありし所にて、〈略〉。

十36 3 ㊦ 〈略〉、數百年來ヨーロッパ人のしばしば計畫したところで、〈略〉。しばしば「為始」(下二) 1 始める「メ」

十二13 3 ㊦ 〈略〉、一度何かをし始めた

ら、〈略〉。

じはだ 「地肌」(名) 1 地はだ

十75 8 ㊦ 市街の周圍を取圍んだ山々は地はだが白く、それに松がまばらに生えてゐる。

しばたか ㊦ 「柴田勝家」(人名) 1 柴田勝家

十一23 4 ㊦ 越路の雪も解初めれば、柴田勝家、先づ佐久間盛政をして〈略〉、近江の柳瀬に討つて出でしむ。

しばふ 「芝生」(名) 1 芝生

十二44 2 ㊦ 〈略〉、いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生にをどるやう、〈略〉。

しばらく 「暫」(副) 28 シバラク

しばらく しばらく目をつぶつて、四65 8 しばらく目をつぶつて、神様にいのつてから目をひらいて見ると、〈略〉。

五24 8 しばらく待つて、私どもは浴衣地とこんがすりを買つて外へ出ました。

五44 2 ㊦ しばらくお待ち下さい。申

したいことがあります。

六47 4 サウシテ外ノ魚ガ其所ヘ來ナイヤウニ、シバラク其ノアタリニ番ヲシテキテ、ソレカラ海ヘ歸ル。

七61 5 ㊦ 〈略〉、拍手の音しばらくはやまざりき。

七68 5 しばらくして、「〈略〉。」とい

つて、財布の中に手を入れました。

七70 8 ㊦ かの男は「どうぞしばらく。」といつて引きとめました。

七89 9 ㊦ しばらく、うちのおばあさんにおなりなさい。

八4 1 あまりかはいらしいので、僕はしばらくそれを見てゐた。すると其のうちに、〈略〉。

八42 4 しばらくして、其の中のおも立つた者が出て、〈略〉。

八86 8 ㊦ 〈略〉、頭の先から足の爪先までながめたが、しばらくして、

「〈略〉。」といつて、今度は先生に向つて、「〈略〉。」

九115 4 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、やがて頭を下げて、〈略〉。

十33 5 しばらく進むと水門があつて

行くてをさへぎつてゐる。十42 8 しばらくの間めいくがこんな風に働いてゐると、〈略〉。

十48 1 喜三右衛門は、血走つた目を見張つて、しばらく火の色を見つめてゐたが、やがて〈略〉。

十73 7 ㊦ しばらく御無沙汰致しました。

十一17 4 しばらくたつと、おかあさんが臺所の方から、〈略〉。

十一29 10 ㊦ 正國も槍を合はせ、しばらく防ぎ戦ひしが、俄に〈略〉。

十一61 4 しばらく暗黒の中を通過つて再び光明の世界に出た時、突如として〈略〉。

十一85 4 しかし又しばらくすると、

もとの水の温度にかへつた。

十一88 9 弟はそれを見てしばらく考へてゐたが、すぐ〈略〉

十一107 9 ㊦ 森林地開墾の様子を視察致居候ため、しばらく無沙汰に打

過ぎ候。十二37 9 二人は戸外にたゞずんでしばらく耳をすましてゐたが、やがて〈略〉。

十二42 6 しばらくして兄は恐る恐る

近寄つて、〈略〉

十二43 7 ㊦ 〈略〉、彼はしばらくすみき

つた空を眺めてゐたが、やがて〈略〉。

十二83 8 ㊦ 〈略〉、酋長コーニの宅に

留りてしばらく時機の至るを待ちぬ。十二100 2 ㊦ 社寺の壯麗はしばらくおき、何の山、何の川、一木一草に至るまでも歴史あり古歌あり、〈略〉。

十二130 7 西郷はしばらくじつと考へてゐたが、〈略〉。

しばりつける 「縛付」(下二) 1 し

<p>じひえんまん 「慈悲円満」(名) 1 慈悲</p>	<p>十一 109 6 圓困 〈略〉、三抱も四抱もあるものが地ひゞきを打つて倒れる様、 〈略〉。</p>	<p>四百餘州</p>	<p>五45 1 圓 自分にまさる者はないので、 たけると申して居りましたが、〈略〉。</p>
<p>じひん 「慈悲心」(名) 1 慈悲心</p>	<p>十一 102 圓 400 しひやくこじゅうり 「四百五十里」 (名) 1 四百五十里</p>	<p>七107 1 圓 〈略〉、其の勢で明の都へお しよせ、四百餘州をやきはらう。</p>	<p>五72 3 氣早な者は自分の持地を田に 造りかへたといふことだ。</p>
<p>じひん 「慈悲心」(名) 1 慈悲心</p>	<p>八19 7 圓 汽船ハ河口ヨリオヨソ四百 五十里、小舟ハオヨソ九百里サカノ ボルコトヲ得。</p>	<p>六26 一番下は四俵、一番上は一俵 で、一山は十俵づつです。</p>	<p>五74 6 其の貨錢をみんな庄屋が自分 のふところから出した。</p>
<p>じひん 「慈悲心」(名) 1 慈悲心</p>	<p>十二 18 7 圓 〈略〉、一臺よく一分間に 四百五十枚を印刷すといふ。</p>	<p>十39 7 圓 あゝ、今朝はなかく寒い。 指の先がしびれるやうだ。</p>	<p>六24 6 〈略〉、矢を取つた者は弓を取 らず、人の馬には自分が乗り、自分 の馬には人が乗り、〈略〉。</p>
<p>じひん 「慈悲心」(名) 1 慈悲心</p>	<p>十二 18 7 圓 〈略〉、一臺よく一分間に 四百五十枚を印刷すといふ。</p>	<p>四5 1 しぶ柿が三本、あま柿が 二本で、〈略〉。</p>	<p>六40 1 圓 お前はなぜ自分の村の人と 見物しなかつたかと思ふだらうが、 〈略〉。</p>
<p>じひん 「慈悲心」(名) 1 慈悲心</p>	<p>九76 9 圓 東京から此所までは四百五 十六哩もあるのだが、〈略〉。</p>	<p>しぶき 「飛沫」(名) 1 しぶき</p>	<p>六45 1 圓 あゝ、月日の立つのは早い ものだ。自分は夕立にしよう。</p>
<p>じひん 「慈悲心」(名) 1 慈悲心</p>	<p>十84 7 圓 今から四百年許前の事ださ うです。</p>	<p>四44 5 圓 花子も自分のおもちゃ だけ、ちゃんと おかたづけなさ い。</p>	<p>六48 1 圓 〈略〉、今度ハ自分ガ卵ヲ産ミ ニ川ヘ上ツテ來ルガ、〈略〉。</p>
<p>じひん 「慈悲心」(名) 1 慈悲心</p>	<p>十84 7 圓 今から四百年許前の事ださ うです。</p>	<p>五73 僕は自分よりえらい友だちを 大ぜいいていぢめるのは、男らしく ないと思ひます。</p>	<p>六48 2 圓 〈略〉、フシギニ自分ノ生レタ 川ヘ歸ツテ來ルサウデ、〈略〉。</p>
<p>じひん 「慈悲心」(名) 1 慈悲心</p>	<p>十84 7 圓 今から四百年許前の事ださ うです。</p>	<p>五12 4 これはめづらしいつるぎだ。 自分の物にしてはならぬとおぼしめ して、〈略〉。</p>	<p>七58 8 圓 〈略〉、星が出てゐれば、そ れにたよつて方角を知ること出來 るし、自分の船の居場所を知ること も出來ます。</p>
<p>じひん 「慈悲心」(名) 1 慈悲心</p>	<p>十84 7 圓 今から四百年許前の事ださ うです。</p>	<p>五33 5 此の時何の氣もなく自分のう ちを見て、その小さいのおどろき ました。</p>	<p>七62 8 渡るといつても、自分一人で は渡ることは出來ません。</p>
<p>じひん 「慈悲心」(名) 1 慈悲心</p>	<p>十84 7 圓 今から四百年許前の事ださ うです。</p>	<p>五42 7 〈略〉、たけるは尊を見つけて、 自分のそばへ呼びました。</p>	<p>七98 3 此の人だけは自分のために心 配してくれるであらうと思つたので ございます。</p>
<p>じひん 「慈悲心」(名) 1 慈悲心</p>	<p>十84 7 圓 今から四百年許前の事ださ うです。</p>	<p>五42 7 〈略〉、たけるは尊を見つけて、 自分のそばへ呼びました。</p>	<p>八79 五箇村の人々は各自自分の村の 騎手に向つて、〈略〉、口々に勢をつ けてゐる。</p>

八102 4 図 〈略〉、かへつて君等は自分

で苦しむやうになつたのです。

八102 5 図 これは全く君等が自分で招いたのであります。

八111 4 〈略〉、自分の子がかう弱虫の泣虫では、第一藩主に對しても申しわけがない、〈略〉。

九53 8 図 〈略〉、なるだけ自分の負擔を軽くしようとする者もあるが、〈略〉。

九53 10 図 〈略〉、少しでも他人の負擔を軽くしようとして、自分の財産を残らず差出した。

九54 8 図 自分の力でやれる所までやつてみます。

九103 7 〈略〉、北風は自分の信じてゐる中尉が乗つてゐてくれるので、〈略〉。

九111 3 〈略〉、又自分の最愛の主人に味方の勝利を語るやうに、〈略〉。

九118 7 図 總べて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。

九122 1 図 〈略〉、自分ノタフツイ選舉權ヲ棄テルトイフ事ハ、〈略〉。

九122 4 図 〈略〉、メイ／＼自分ノ適當ト信ジテキル人ニ投票スルノガ、ホントウノ選舉トイフモノダ。

九123 4 道雄ハ誰ガ何ト言ツテモ、自分デ一番適當ダト信ジテキル中村君ヲ選舉シヨウト決心シタ。

十20 9 図 〈略〉買手は、自分の見込で思ひ／＼の直をつけて、次第にせ

り上げる。

十55 6 鳩は〈略〉、矢のやうに自分の巢に飛歸る。

十95 2 図 〈略〉、何此のくらゐの事がこはいものかと、自分から先に立つて渡つたのです。

十96 4 太郎はつく／＼と自分の惡かつた事を後悔すると共に、〈略〉。

十一15 6 図 成績物は一つ一つ自分の力のこもつたもので、〈略〉。

十一18 1 〈略〉、私はひとりて歩きながら自分の始末のわるいことを考へて、〈略〉。

十一18 3 図 これまで自分の不整頓のために、むだに費した時間と努力は大きなものであつた。

十一95 1 〈略〉、父は自分で木を切出して小さな家を造つた。

十一95 6 父が木を伐れば自分は雜草をかり取る、父が畠を打てば自分は種をまくといふ風に〈略〉。

十一95 7 〈略〉、父が畠を打てば自分は種をまくといふ風に〈略〉。

十一118 2 農場主は〈略〉、そばに居た自分の子に、「〈略〉。」と言ひつけた。

十二53 3 自分の置かれたのは、仕事臺の上に乗つてゐる小さなふたガラ

スの中で、〈略〉。
十二54 3 ねぢは、〈略〉、ふと自分の身の上に考へ及んだ。
十二54 5 図 自分は何といふ小さい情

ない者であらう。

十二54 7 図 〈略〉、どれを見ても自分よりは大きく、自分よりはえらさうである。

十二54 7 図 〈略〉、どれを見ても自分よりは大きく、自分よりはえらさうである。

十二54 10 図 唯自分だけが此のやうに小さくて、何の役にも立ちさうにな

い。
十二57 3 それでは自分のやうな小さな者でも役に立つことがあるのかしらと、〈略〉。

十二59 5 ねぢは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出来たのだと思ふと、〈略〉。

十二60 5 図 ねぢは、「自分もほんたうに役に立つてゐるのだ。」と心から満足した。

十二66 1 王は其の治めてゐるイギリスを三分して娘たちに與へ、自分は〈略〉三人の娘の許に身を寄せ、餘

生を安樂に送らうと決心した。
十二67 1 図 〈略〉ほんたうに自分の命よりも父上を大事と存じます。

十二68 6 王は自分の耳を疑ふかのやうに目を見張つた。

十二70 10 しかしフランス王は〈略〉、本國にともなひ歸つて約束の如く自分の后とした。

十二75 10 〈略〉、前非を悔い、自分を

責めて娘にわびる眞心がこもつてゐた。

十二91 7 〈略〉、しみ／＼と自分の身の上に思ひ比べて、農夫や牛の勞苦を思ひやると共に、〈略〉。

十二93 7 〈略〉マカダ國王は、〈略〉、自分の國をゆづらうとまで申し出たが、〈略〉。

十二94 1 図 もう人にはたよるまい。自分一人で修行をしよう。

十二131 5 安芳は自分の胸を指さして、〈略〉。
十二137 1 自分で思ふまゝに造り出す創造力は、十分に發揮せられたことがなく、〈略〉。

じぶん 「時分」(名) 6 時分

七51 6 其ノ時分マデ、ヨソヘ奉公ニ行ツテキタ若イムスコガ、今デハ〈略〉。

九51 1 〈略〉、あの方の小さい時分からのお話をして下さいました。

九52 8 図 それはわたしの十五六の時分だつたらう。

十13 8 図 私どもの若い時分には、〈略〉、あなたの方の半分ぐらゐしか働

きませんでした。
十二9 9 ごく小さい時分から動植物に深い趣味を持ち、又物を集めることがすきで、〈略〉。

十二37 2 〈略〉ベートーベンがまだ若い時分のことであつた。

じぶんたち 「自分達」(名) 1 自分た

- 四163 〈略〉、一バンシマヒニ居
タノガ、白ウサギノ毛ヲミン
ナムシリ取ツテシマヒマシタ。
四401 たび人はだんだんよい心
持になつて、しまひにはぐわい
たうをぬぎました。
四505 みんなもしまひにはむち
ゆうになつて取りました。
五751 しまひには妻や子どもの着が
へまでもないやうになつた。
六975 〈略〉、はじめ百萬騎といつた
賊も、しまひには十萬騎に減じ、
〈略〉。
七541 〈略〉、いその小山も次第に
遠くなつて、しまひにはもう何も見
えなくなります。
十141 朝のかゝりはおそいし、晩
のしまひは早い上に、〈略〉。
十949 すると、しまひに皆が僕の
事を弱蟲だといつて笑ひました。
しまいこむ「仕舞込」(五) 1 しま
ひ込む《一マ》
十二527 暗い箱の中にしまひ込まれ
てゐた小さな鐵のねちが、〈略〉。
シマイルあまり(名) 1 四哩餘り
十一971 學校は四哩餘りも離れてゐ
たが、〈略〉。
しま・う「仕舞」(五) 81 シマフし
まふ 《一ッ・ハ・ヒ・フ》
まふ 《一ッ・ハ・ヒ・フ》
↓おしまいなさる
二156 〈略〉サカナハ、川ノナカ
へオチテシマヒマシタ。
二304 スルト年トツタネズミガ、
「〈略〉」トイヒマシタノデ、ミン
ナダマツテシマヒマシタ。
二444 〈略〉、ソノ犬ヲコロシテ
シマヒマシタ。
二472 〈略〉、ソノウスヲワツテ、
火ニクベテシマヒマシタ。
二536 〈略〉、ワルイオヂイサンハ
トウトウシバラレテシマヒマシ
タ。
二782 〈略〉ノコラズタイヂシテ
シマヒマシタ。
三58 〈略〉、見テキルウチニ、
タマゴヲハラノ下ニダイテ
シマヒマシタ。
三457 〈略〉、父も母もしんで
しまつて、うちもなくなつてあ
て、〈略〉。
三467 〈略〉、うらしまはたちまち
白がのおぢいさんになつてし
まひました。
三582 〈略〉、カラヲヌギハジメマ
シタ。マモナクヌイデシマヒマシ
タ。
四164 〈略〉、白ウサギノ毛ヲミ
ンナムシリ取ツテシマヒマシタ。
四694 〈略〉、それからうらの山
へとんで行つてしまひました。
四707 シカシユヤ水ニハスグ
トケテシマヒマシタ。
四781 それでとうとう家も土さ
うも田も畠も人の物にな
つてしまひました。
五62 こちらは今さくらのさかりで
すが、あちらでは、もうとうにちつ
てしまつたさうです。
五197 〈略〉、おそれてみんなにげ
てしまつたさうだ。
五494 今桑をたべてゐる蠶も、明日
の朝までには、たいてい上つてしま
ふさうです。
五506 カウ毎日降ル雨ハドウナツテ
シマフノデセウ。
五726 〈略〉、せつかくつき上げた土
手が、半分ほどくづれてしまつた。
五743 〈略〉、普請方はとう／＼にげ
てしまつた。
五762 〈略〉、をしいことに、庄屋は
池が出来上つた年の冬、死んでしま
つた。
五987 〈略〉、ほんたうの死人だと思
つたのでせう、其のまま行つてしま
ひました。
六472 一匹三四千粒モ産ムトイフ
ガ、産ンデシマフト、〈略〉。
六476 中ニハ其所デツカレテ死ンデ
シマフノモアル。
六562 かへつて、はだみはなさず持
つてゐた刀を見つけられてしまひま
した。
六794 〈略〉、何でもなれてしまへば、
少しも陸上とかはらない。
六852 〈略〉、敵兵は海のそこに沈ん
でしまつた。
七213 〈略〉、賊の軍船はことごとく
沖へ流れてしまひました。
七226 〈略〉、賊の大將高時以下北條
方は、此の火の中にほろびてしまひ
ました。
七515 イカニモ丈夫サウナ老人デシ
タガ、去年ノクレニ死ンデシマヒマ
シタ。
七693 〈略〉、川の中へとびこんで
死んでしまはうと、かくごをして來
たのでございます。
七923 さうして、「こいつ、かなつ
んぼだな。」と言つて、みんな出て
行つてしまひました。
八234 〈略〉、其の前の年に取つた首
が四十餘ありましたので、それをし
まつて置かせて、其の後のお祭には、
毎年其の首を一つづつ供へさせまし
た。
八391 〈略〉、何時の間にか、ぐつす
りねこんでしまひました。
八1009 かうして二三日たちますと、
耳は鳴り、目は暗み、手足はなえて
しまつて動くことが出來ず、〈略〉。
九148 〈略〉、茶の間の戸棚の中に
しまふ。
九264 〈略〉、いろ／＼の差支があ
つて、實行が出来ずにしまつた。
九327 〈略〉「すちの道が、足もと
からうね／＼とつゞいて、やがて茂
みの中にかくれてしまふ。
九338 〈略〉、僕の姿を見ると、太い

尾をちらりと見せて、急にまた穴にかくれてしまった。

九54 窓 さうして全く無一物になって、親子三人町外れの裏長屋に移ってしまった。

九57 窓 〈略〉、穂が残らず落ちてしまふと、束をむしろの向ふにばいと投げて、〈略〉。

九69 窓 僕は眠くなつたので、それから直にねてしまった。

九72 窓 〈略〉右手に見えたはずだが、もう通過してしまつた。

九74 窓 北上川は〈略〉、いよくせまくなつて、とうく谷川になつてしまつた。

九78 窓 〈略〉學校道具をかばんにしまひ、めいく身輕になつて、〈略〉。

九91 窓 〈略〉それをねたんで、とうとうカリストを熊にしてしまひました。

九92 窓 おや、北斗七星が半分杉林にかくれてしまつた。

九95 窓 眞夏の日中でも、杖を握つてゐる手などは、何時の間にかつめなくなつてしまひます。

九99 窓 〈略〉、思はず其の場から數十間も進んでしまつた。

九128 窓 〈略〉、或ハ信用モシテキナイ人ニ投票シタリ、或ハ棄權シテシマツタリスル人モアルガ、〈略〉。

十21 窓 取引の成立つた馬は、其の日の中に買手に引渡されてしまひます。

す。

十21 窓 二年の年月苦勞して育てて來たものが、急に見ず知らずの人の手に渡つてしまふのだから、〈略〉。

十25 窓 〈略〉、船尾の方は見るく大波にさらはれてしまつた。

十43 窓 かうしてみんな手をそろへて働けば、來年の秋はもう眞白な蕎麥の花で、此の地面が埋まつてしまふのだ。

十51 窓 お金といふものは、うちにしまつて置くものではない。

十51 窓 〈略〉、餘分のお金があると、ついむだな事に使つてしまふ。

十65 窓 だんく寒くなつて來たが、あやにく薪も盡きてしまつた。

十66 窓 私はもと鉢の木がすきで、いろく集めた事もありましたが、〈略〉、大てい人にやつてしまひました。

十14 窓 私が來たので、すぐしまはうとなさるのを強ひて止めてお手傳をしました、〈略〉。

十15 窓 〈略〉、其の始末のよいのに感心してしまひました。

十15 窓 〈略〉、私のは置場所をきめておかなかつたので、大方なくなつてしまひました。

十55 窓 〈略〉、どうしたのか急に相手にぬかれて、一二間も後れてしまつた。

十64 窓 〈略〉此のトラクターで引

くと、めりくと音を立てて根こぎにされてしまふ。

十69 窓 うつかり口をきいてしまつた。

十70 窓 三人とも物を言つてしまつたので、上座の老僧が〈略〉

十75 窓 〈略〉、何時の間にか年をとつてしまつて、古事記に手を延ばすことが出来なくなりました。

十78 窓 〈略〉、其の使用に馴れきつてしまつてゐる我々は、〈略〉感謝の念を起すこともない。

十87 窓 かう思ふ瞬間、つかれも何も忘れてしまつて、僕も思はず「萬歳。」と叫んだ。

十99 窓 さうして其の本の内容がすつかりわかつてしまふまでは何度でも讀む。

十11 窓 〈略〉、何時の間にか好きな博物學の研究が主となつてしまつた。

十12 窓 〈略〉、蟲は得たりと逃げてしまつた。

十42 窓 折から燈がぱつと明るくなつたと思ふと、ゆらくと動いて消えてしまつた。

十56 窓 やつとつまんだと思ふと直に落してしまつた。

十57 窓 〈略〉、此のやうな處にころげ落ちてしまつて、若し見附からなかつたらと、〈略〉。

十70 窓 さうして残りの領地を二分して、姉二人にやつてしまつた。

十78 窓 〈略〉番をしてゐる漁夫が急いで網口をしめてしまふ。

十79 窓 網の中がいよく狭くなる

十94 窓 〈略〉、釋迦が全く修行を止めてしまつたものと思ひ、彼を捨てて立去つた。

十104 窓 〈略〉、遂には路の前面に突立つて人のゆくてをさへぎつてしまふ。

十116 窓 〈略〉、石炭は早晚使ひ盡くされてしまふが、水力は無限といつてよい。

十128 窓 〈略〉、日本全國にのしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。

しまぐれゆくー「島隠行」(四) 1

十34 窓 〈略〉、朝日夕日を負ひて、島がくれ行く白帆の影ものどかなり

しまぐに「島國」(名) 4 島國

四53 窓 〈略〉、山國のものと、島國のものがおちあひました。

四58 窓 山國のものが「〈略〉。」といへば、島國のものが「〈略〉。」といつてあらそひます。

十134 窓 狭い島國に育ち、生活の安易な樂土に平和を樂しんでゐた我が國民は、〈略〉。

十135 窓 〈略〉、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、

其の主たるものであらう。

しまじま「島島」(名) 8 島島 島々

九35図 叔父さんも相かはらず丈夫で島々を廻つてゐるから、安心して下さい。

九43図 それに此の邊一帯の島々は我が國の支配に屬してゐるので、

「略」。

九78図 水の乏しい此の島々では、

其の雨水がまた大切な飲料水となるのです。

九761「略」、近くには形のよい島々などもあつて、大そう景色のよい所であつた。

十355「略」、湖上に點々と散在してゐる島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。

十一3210図「略」、灣あり、大小無数の島々各所に散在す。

十一339図 兩岸及び島島、見渡す限り田園よく開けて、「略」。

十一348図 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。

しまつ「始末」(名) 3 始末

十684図「略」、それが一族ともに所領を奪はれて、此の通りの始末でございます。

十一154 一年生の時からの成績物も見せていたゞいて、其の始末のよいのに感心してしまひました。

十一181「略」、私はひとりで歩きながら自分の始末のわるいことを考へ

て、「略」。

しまもの「稿物」(名) 1 稿物

七1137図 去る三日にお差出しの稿物三十反、本日無事に着きました。

しまや「島屋」(名) 2 島屋

五224「略」、一月も前から廣告してゐた島屋の大賣出しは、「略」。

五227 島屋の前には、人が黒山のやうにあつてゐました。

しまやこふくてん「島屋呉服店」(名) 1 島屋呉服店

五23図 島屋呉服店

しまやま「島山」(名) 1 島山

十一337図 春は島山かすみに包まれて眠るが如く、夏は山海皆緑にして目覺むるばかり鮮かなり。

しまる「締」(五) 1 しまる「一ル」

十338「略」、船が中にはいり、戸びらはしまる。

じまん「自慢」(名) 1 ジマン

二347 アル日トモダチニユミノジマンヲシテ、「略」。

じまんばなし「自慢話」(名) 1 ジマン話

六93「略」、ヤクワントテツピンガ、ジマン話ヲシ合ヒマシタ。

しみこむ「染込」(五) 1 シミコム

五525 地ノ中ニシミコンデ、井戸水ヤ泉ノモトニナルノモアリ、「略」。

しみじみ(副) 3 しみく

十203図「略」、馬も従順で人になつ

くわけだと、しみく思ひました。

十856「略」、日光の有難さをしみく感じると共に、「略」。

十二917「略」、しみくと自分の身の上に思ひ比べて、農夫や牛の勞苦を思ひやると共に、「略」。

しみず「清水」(名) 3 清水

八24 小鳥は時々此の清水にのどをうるはしては、こずゑでさへづるの

である。

九349図 此の坂を下りて、あの清水の所まで行くと、石井君のうちが見えるはずだ。

九353 やうやく清水まで来て、手の切れるやうにつめたいのを二三ばい

つづけ様に飲んでゐると、「略」。

しみん「市民」(名) 3 市民

十二305図 市街を見物して私の特に感心したのは、市民が交通道徳を重んずることです。

十二355図「略」、勤儉の美風が市民の間にあふれてゐて、彼等が「略」盛に活動してゐるのには全く敬服しました。

十二1323「略」、江戸の市民も徳川家もわざはひを免れて、維新の大事業も「略」。

しむ「染」(四) 3 しむ「一ミ」

十288図「略」御二万のおほみたま、とこしへに此所にしづまりまします

よと思へば、かしこさ殊に身にしみておぼゆ。

十704図 旅僧もまた主人夫婦の情心にしみて、そゞろに別れがたき思ひ

り。

十728図「略」、常世は有難さ身にし

み、喜にみちて御前を退きけりとぞ。

しむ「占」(下二) 1 占む「一ム」

十二494図 松に至りては「略」、其の豊富なること我が國の木材中の首位を占む。

しむ「締」(下二) 1 しむ「一メ」

十一268図 盛政は勝つてかぶとのをしめざりし油斷を悔いつゝ、「略」。

しむ(助動) 25 シム しむ「シム・シムル・シメ」

八288図「略」見事なるほり物をほりて、人を感じしむるも、手の働

り。

八588図 スベテ看板ハ「略」、屋號等ヲ記シテ、人目ニツキヤスカラシメントスルモノナリ。

八593図 ヨリテ看板ノ如キモ、タヤスク人目ヲヒカシメメンガ爲ニ、キソヒテ小屋根ノ上ニカ、グルニ至レリ。

八966図 三百年前徳川家康ガ諸大名ニ命ジテ造ラシメタルモノニシテ、「略」。

十771図「略」、何れも十日間を限りて土木に従事せしめたるに、通常の

の夫たにもまさりて「略」。

十984図 敵將張弘範如何にもして之

を降らしめんとし、文天祥に命じて
いはく、「略。」と。

十987図 我、國を救ふことあたはず。いつくんぞ人をいざなひてそむかしめんや。

十9910図 元の皇帝「略」、ねんごろに諭して元に仕へしめんとす。

十1003図 帝其の志の動かすべからざるを知り、之を刑場に送らしむ。

十1016図 行幸餘りに遅かりしかば、人をしてうかゞはしむるに、「略。」

十1236図 「略」、柴田勝家、先づ佐久間盛政をして一萬五千の兵を率ゐ、近江の柳瀬に討つて出でしむ。

十1263図 「略」、盛政直に物見の兵を出してうかゞはしむるに、こは如何に、「略。」

十1274図 「略」、先づ五十人の兵に旨をふくめて先發せしめ、やがて將卒のそろふをも待たず、「略。」

十1277図 五十人の兵は行く／＼百姓をつのり、かゞり火をたかせ、糧、食の用意をなさしむ。

十1297図 鐵眼の深大なる慈悲心と「略」熱心とは、強く人々を感動せしめしにや、「略。」

十12614図 「略」我が國の國旗は、最もよく我が國號にかなひ、「略」さながら旭日昇天の勢あるを思はしむ。

十126210図 「略」、藍地中の星章は、常に州の數と一致せしむるを定め

す。

十12867図 土人等怒りて林藏の頭を打ち、強ひて酒を飲ましめんとす。

十12898図 そこで天皇が之を裁可せられ、公布せしめられると、始めて法律が出来上るのである。

十12998図 然れども春日の社頭、朱の廻廊山の緑にはえて、森嚴自らの襟を正さしめ、「略。」

十121006図 「略」歴史あり古歌あり、人をして低回する能はざらしむ。

十121144図 こゝにおいて彼は人を世界の各地につかはして竹を採集せしめ、「略。」

十121344図 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、自ら國民の性質を穩健ならしめ、「略」性情を育成するのに與つて力があつた。

十121353図 殊に「略」鎖國は、國民をして海外に發展する意氣を消磨せしめ、「略」國民とならしめた。

十121354図 殊に「略」鎖國は、國民をして「略」、徒に此の小天地を理想郷と觀じて、世界の大勢を知らぬ國民とならしめた。

じむ 「事務」(名) 2 事務 ↓ へんしゅうじむ

十121149図 又市町村長が其の事務を處理するにも、議員が豫算を議するにも、「略。」

十1211510図 公吏・議員等、直接間接に公共の事務に當る者は、如何に其の

職務に忠實であつても、「略。」

じむいん 「事務員」(名) 3 事務員

十12799図 「略」、案内の事務員と一所に昇、降器に乗りました。

十12827図 はつと思つて立止ると又一匹。事務員は平氣で、「略。」と言つて笑ひました。

十12846図 歸途、事務員は次のやうな事を話してくれました。

じむけ 「仕向」(名) 1 仕向

十12714図 二週間もたゝぬ中にもう王に無愛想な仕向をした。其の上王に百人の家來を五十人に減ずるやうに

じむしよ 「事務所」(名) 3 事務所

十12798図 事務所で坑内服に着かへ、安全燈を持つて、案内の事務員と一所に昇降器に乗りました。

十12858図 事務所の湯にはいつて服を改めると、「略。」

十1212410図 歸りがけに事務所の陳列棚を見せてもらつた。

しめ 「標」(名) 2 シメ しめ

十12321図 「カドマツヲタテマス。」「ソレカラ。」シメヲハリマス。」

五394図 八幡様の高い石だんを上りつめた所に、しめをはつた大きな杉の木がありました。

しめい じきよししめい・じゆしんにんきよししめい

しめきり ↓ げんこうしめきりじこくしめじ 「湿地」(名) 3 しめぢ

六174図 此の近くに、しめぢの出る所はありませんか。

六17図 しめぢ

六184図 「略」、小さなしめぢが列を作つて出てゐました。

じめじめする (サ変) 2 じめくする 《一シ》

六161図 「略」、ざふ木林へはいつて、じめくした落葉をふんで、ねずみ茸を少し取りました。

十1211910図 低いじめくした松林の中に小さな社がある。

しめす 「示」(四・五) 3 しめす 示す 《一シ》

十1212410図 村の財産家に事業に熱心なる人、みづから先んじて「略」・養魚等の模範をしめししを以て、近年は作物も改良せられ、「略。」

十12615図 更に思へば、白地は我が國民の純正潔白なる性質を示し、日の丸は「略」至誠を表すものともいふべきか。

十121251図 徳川方も「略」覺悟をきめて、ものすごい緊張を示してゐる。

しめたまう (助動) 1 しめ給ふ 《シメタマフ》

十1276図 大神其の眞心の厚きを賞して、命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。

しめつく 「締付」(下二) 2 しめつく 《一ケ》

七308図 獅子は「略」、蛇はます

くかたくしめつけたり。

七三〇 〔略〕、蛇はますく強くしめつけたり。

しめやか (形状) 2 しめやか

十三〇 〔略〕 しめやかに、夜の霧ちまたをつみ、立並ぶ家々、としびうるむ。

十三〇 〔略〕 窓ぎにはひ寄り、ガラス戸ぬらし、しめやかに、ひそかに 夜の霧流る。

しめり 〔湿〕 (名) 1 しめり

九三二 ひとつりとしめりを帯びたすぢの道が、足もとからうねくとつゞいて、〔略〕。

しめる 〔占〕 (下二) 4 占める 一

十一一〇 此の地は交通上重要な位置を占めてゐて、〔略〕。

十一一五 〔略〕、我が居留民の数は、外國人中第一位を占めてゐる。

十二五五 ねぢは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出来たのだと思ふと、〔略〕。

十二三六 2 今日我が國が列強の間に立つて世界的の地歩を占めた以上、かういふ短所は〔略〕。

しめる 〔締〕 (下二) 7 シメルしめる 一『メーメロ』 ↓ にぎりしめる・ふみしめる

一五六 〔略〕、オニドモハテツノモンヲシメテ、シロヲマモツ

テキマス。

三七一 4 そちらの〔略〕おびはねえさんのので、〔略〕黒いのはお

ばあさんのです。おばあさんはあれをしめて、よくお寺まゐりにいらつしやいます。

八四七 越前守は早速門をしめさせて、見物人一同の所名前を書取らせ、

〔略〕。

十二二 〔略〕 あの青年が私の室にはいる前、〔略〕、はいると靜かに戸をしめ

十一一八 四 四 ジョージ、早く行つて農

場の門をしめる。人が何と言つても決してあけるな。

十二五二 〔略〕、小さなねぢ廻しでし

十二七八 〔略〕、網口の近くに番をし

てゐる漁夫が急いで網口をしめてしまふ。

じめん 〔地面〕 (名) 6 ゼメン 地面

三九一 〔略〕、キイロイクチバシデ、

トキドキ ゼメンヲツツキマス。

五八〇 矢は狐の鼻のさきの地面につ

つ立つて、狐はころりとたふれまし

た。

六五七 僕はびつくりして、ぐみも紅

草も地面へなげつけました。

十三九 2 地面は霜で眞白である。

十四三 六 〔略〕眞白な蕎麥の花で、

此の地面が埋まつてしまふのだ。

十四四 一 〔略〕、九時頃にはもう數坪の

地面が新しく開かれた。

しも 〔霜〕 (課名) 2 霜

六二〇 第七 霜

六二六 2 第七 霜

しも 〔下〕 ↓ かわしも

しも 〔霜〕 (名) 6 霜

六二六 4 屋根の上に霜がまつ白だ。

六二六 6 庭の菊も白い花びらに赤みが

さして来た、霜にあつたからだら

う。

六三二 東ガ白ンデ、屋根ノ霜が見エ

ルヤウニナツタ。

十三九 2 地面は霜で眞白である。

十四六 10 まだ芽の出ないはぜの木の

間を通り、霜の眞白に置いた田の中

を走る。

十一九三 9 櫻の咲く季節でも霜の降

る季節でも、やはりさうである。

しも (係助) 1 しも ↓ いましも・お

りしも・ころしも・さしも

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

しもきたはんとう 〔下北半島〕 (地名)

うらへ出て、〔略〕居りますと、下

仕の女が来て、〔略〕と申しまし

た。

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

しもつけのくに 〔下野国〕 (地名) 1

べん。

十二163 図 これも社によりて多少の相違はあれども、〈略〉。

しゃ [者] ↓ぎよぎようしゃ・こうほしゃ・しししやうしゃ・じゅうぎようしゃ・そうしんとうむしや・つうしんしゃ・てきにんしや・とざんしや・のうぎようしや・はいかんしや・はんざいしや

しゃおん [謝恩] (名) 1 謝恩

十一457 図 さらば謝恩の爲に何か書がきて参らすべし。

しゃか [釈迦] (課名) 2 釋迦

十二目6 第十九課 釋迦

十二908 第十九課 釋迦

しやか [釈迦] (人名) 15 釋迦 釋迦

十二909 釋迦は今から凡そ二千五百年前、〈略〉太子として生れた。

十二911 釋迦は生れつき同情の念に厚く、何事も深く考へ込むたちであつた。

十二935 かねて釋迦の徳をしたつてゐたマガダ國王は、〈略〉。

十二949 〈略〉五人の友は、釋迦が

全く修行を止めてしまつたものと思ひ、彼を捨てて立去つた。

十二952 それから釋迦はブッダガヤの綠色濃き木陰に靜坐しておもむろに思をこらした。

十二963 釋迦は世を救ふ手始として先づかの五人の友をたづねた。

十二966 かつて釋迦を見捨てた彼等

も、其の慈悲圓滿の姿を見ては、思はず其の前にひざまづかざるを得なかつた。

十二969 彼等は釋迦の教を聽いて即座に弟子となつた。

十二971 續いて釋迦はマガダ國王をたづねてねんごろに道を説聞かせ、更に〈略〉故郷の恩に報いた。

十二974 今や釋迦は衆星の中の満月の如く國中から仰がれる身となつたが、〈略〉。

十二978 殊にデーバダッタは、〈略〉かねてから釋迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。

十二979 或時の如きは、釋迦が山の下にあるのを見附けて、上の方から大石をころがしたが、〈略〉。

十二9710 〈略〉上の方から大石をころがしたが、石は釋迦の足を傷つけただけで、〈略〉。

十二982 釋迦は八十歳の高年に及んでも、〈略〉道を傳へてゐたが、遂に病を得てクシナガラ附近の林中に留つた。

十二986 いや／＼臨終が近づいた時、釋迦は泣悲しんでゐる人たちに、

「〈略〉。」と諭して靜かに眼を閉ぢた。しゃかいふ [社会部] (名) 1 社會部

十二167 図 しかして編輯局は更に編輯部・政治部・經濟部・社會部・通信部・外報部・學藝部・寫眞部・校

正部等に分れ、〈略〉。

じゃがいも [芋] (名) 1 じゃがいも

十一9510 〈略〉、時には生のじゃがいもしか食はれないこともあつた。

じゃがいもばたけ [芋畑] (名) 1 じゃがいも畑

九783 枯れかゝつて一面に黄色になつたじゃがいも畑を、午後の日が

ん／＼と照らしてゐる。しゃがむ (五) 1 しゃがむ 《一》

六875 〈略〉、乗つてゐた象つかひは桶の中へはいつてしゃがんだ。

しゃく [尺] (名) 1 尺 ↓いちぢよ

うごしゃく・いちまんごひやくしゃく・いちまんぜんじやく・いちまんじやく・いちまんじやく・ひやくしゃく・いちまんろくせんじやく・あまひやく・いちしやく・いちしやく・きゆうひやくしゃく・ごしゃく・ごしゃくにすん・ごじようさんじやく・さんじやく・さんじやく・あまひ・さんじやくろくすん・さんまんじやく・ちかい・しごしゃく・ししやく・しん・ししやくはつすん・しちじゅうごしゃく・しちひやくしゃく・せんじやく・そこそこ・なんまんじやく・にさん

びやくしゃく・にしゃく・はちじつしゃく・はつしゃく・はつしゃく・ごすん・やくせんはつびやくしゃく

十1287 図 一秒又一秒、七百里に近き大船體は、寸、尺、間と音もなくすべり出づ。

しゃくしだけ [杓子岳] (地名) 1

杓子岳

九985 図 〈略〉、眼前には杓子岳や鑓岳がぬつとそびえ、遠くには

〈略〉。

しゃくしよ [市役所] (名) 1 市役所

六71 図 市役所

しゃくどう [赤銅] (名) 1 赤銅

十一823 図 吹く潮風に黒みたるはだは赤銅さながらに。

しゃくとり ↓えだしやくとり

しゃくやく [芍薬] (名) 1 しゃくやく

六107 図 こんなことを思ひ出して垣根の方へ行くと、しゃくやくが赤い芽を出してゐました。

しゃこう [社交] (名) 1 社交

十二135 図 〈略〉國民は眞の社交を解せず、人を信じ人を容れる度量に乏しい。

しゃじ [社寺] (名) 1 社寺

十二1002 図 社寺の壯麗はしばらくおき、何の山、何の川、一木一草に至るまでも〈略〉。

しゃしたてまつる [謝奉] (四) 1 謝し奉る 《一》

十一434 図 尚又結構なる葛粉御送り下され、御厚情の程深く謝し奉り候。

しゃしまつる [謝] (四) 1 謝しまつる 《一》

九414 図 乃木大將はおごそかに、御めぐみ深き大君の 大みことの

りつたふれば、彼かしこみて謝しまつる。

しゃしん「写真」(名) 3 寫眞 寫眞

↓かつどうしゃしん
5914 たまには雑誌や寫眞がはいる
ことでもあります。

8617 〇「略」、寫眞屋ニハ、寫眞ノ
看板モアリテ、看板ノ種類ハキハメ
テ多シ。

12174 〇 さて編輯部にては「略」、
繪畫・寫眞等と共に之を印刷部に送
る。

しゃしんちよう「写真帳」(名) 2 寫
眞帖

7616 〇 かくて船長は外國より持歸
りたる寫眞帖を學校に寄附して去れ
り。

8744 〇 其のうちに繪葉書や寫眞帖
を送りますから、ゆつくりごらん。

しゃしんぶ「写真部」(名) 1 寫眞部
12168 〇 しかして編輯局は更に編
輯部・政治部・經濟部・社會部・通
信部・外報部・學藝部・寫眞部・校
正部等に分れ、「略」。

しゃしんや「写真屋」(名) 1 寫眞屋
8616 〇 「略」、寫眞屋ニハ、寫眞ノ
看板モアリテ、看板ノ種類ハキハメ
テ多シ。

しゃ・す「謝」(サ変) 3 謝す
ス・スル

9431 〇 厚意謝するに餘りあり。
9932 〇 信吉は兄と姉とに謝して、

樂しく其の夜のゆめに入れり。

1674 〇 僧は其の厚意を深く謝し、
さて「失禮ながらお名前を聞かせて
頂きたい。」

しゃ・する「謝」(サ変) 1 謝する
「し」

1289 〇 「略」、全く元氣を回復した
人々は、親子にあつく再生の恩を謝
し、「略」。

しゃせきじゅうじ「斜赤十字」(名) 1
斜赤十字

12623 〇 「略」、更にアイルランド
の加はるに及び、白地に斜赤十字の
徽章ある其の國旗を合はせて、「略」。

しゃぜん「社前」(名) 1 社前
5596 〇 社前の海に、日本一の大鳥居
があります。

しゃちほこ「鯨」(名) 1 シヤチホコ
8969 〇 天守閣ニハ棟ノ兩端ニ金ノ
シヤチホコアリ。

しゃちよう「しゃちようさん」(名) 8 社長
さん

9503 〇 社長さんは餘程の年よりらし
いが、にこにこしてゐる元氣な方だ
す。

9507 〇 あの精米會社の社長さんは
えらい方なでせう。

9513 〇 あの社長さんはもと上方の
人で、此の町へ始めて奉公に來たの
は、「略」だつたさうだ。

9535 〇 社長さんが銀行の頭取にな
つてからちやうど十年目の秋、「略」。

9542 〇 けれども社長さんは、それ
を少しも苦にしないで、「略」と
いつて、笑つてゐた。

9545 〇 社長さんは早速荷車を一臺
借りて來て、醬油のはかり賣を始め
た。

9548 〇 町の人々は之を見かねて、
『そんな事までなさなくても。』と
いつて、資本を出さうとする者もあ
つたが、社長さんは、「略」とい
つて、夜を日について働いた。

95510 〇 僕は今日其のえらい社長さん
に會つて來たのだと思ふと、何とな
くうれしい氣がしました。

シャツ(名) 1 シャツ
8606 〇 洋物屋ノ看板ニ、シャツ・
襟・襟飾ノ類ヲエガキ、「略」。
しゃつきん「借金」(名) 1 借金
11194 〇 「略」、貸主の主張を正當と
みとめれば、其の借金を返すやうに
借主に命ずる。
しゃでん「社殿」(名) 4 社殿
558 〇 朱ぬりの社殿が山のみどりを
後にして、たいそうきれいに見えま
す。
5593 〇 ことにしほのみちた時は、社
殿や廻廊が海の中に浮いて、「略」。
11187 〇 社殿の後に廻ると、其處は
廣々とした梅林で、「略」。
121710 〇 千木のほとりを飛ぶ鳩の、
さながら雀の如く見ゆるも、社殿の

高大なる爲なるべし。

しゃとう「社頭」(名) 1 社頭

12997 〇 然れども春日の社頭、朱
の廻廊山の緑にはえて、森嚴自ら人
の襟を正さしめ、「略」。

しゃどう「車道」(名) 2 車道
7359 〇 通は廣くて平で、歩道と車
道の間に並木が植ゑてありますが、
「略」。

12319 〇 「略」、車道と人道との間
には、緑したゝる街路樹が目もはる
かに連なつてゐます。

しゃない「社内」(名) 1 社内
121610 〇 「略」、或は出でて材料を
取り、或は社内にありて編輯事務に
たづさはる。

しゃにむに「遮」(無二)(副) 1 しや
にむに

957 〇 もう此の上は、しやにむに攻
落さうといふので、「略」。

しゃば「車馬」(名) 1 車馬
8557 〇 ゆききの車馬のたえざれ
ば、向ふの側へ行きかねつ。

しゃはくじゅうじ「斜白十字」(名) 1
斜白十字

12621 〇 「略」、白地に赤十字の徽
章ある前者の國旗と、藍地に斜白十
字の徽章ある後者の國旗とを合して
一旗となし、「略」。

しゃふ「車夫」(名) 1 車夫
6323 〇 橋ノタモトニ人力車ガ一ダイ
アツテ、車夫ガ「ダンナ、マキリマ

セウ。」ト言ツタ。

シャベル (名) 4 シャベル シャベ
ル

九七五 當番が農具小屋から、鍬・シ
ヤベルなどいろ／＼の道具を出して
來た。

十一九七八 〈略〉、家で算術の練習をす
るには、木のシャベルと炭を用いた。
十一九七九 シャベルが數字で眞黒にな
ると、それをふいては又書く。

十一九二一〇 シャベルでざく／＼かきま
ぜると、白い粉が一面に煙のやうに
立ちのぼつて、〈略〉。

じやま 「邪魔」(名) 1 じやま

十二一〇七一 さうして陰に陽に仕事のじ
やまをする者も少くなかつた。

しゃむしょ 「社務所」(名) 4 社務所
十三三三〇 〈略〉、それらの品を社務所
にたづさへ來て、神前にさ／＼げたし
と願ひ出づる者數多しといふ。

十三三八〇 それより社務所に行き、舊
御殿・舊御苑の拜觀を願ふ。

十四一四〇 〈略〉、まづ社務所の隣なる
舊御殿を拜觀す。

十五四 社務所

しゃめん 「斜面」(名) 1 斜面
十一三八四 〈略〉、斜面などに植ゑた木
は、低い處にあるもの程早く大きく
なつて、〈略〉。

じやり じこじやり

しゃりん 「車輪」(名) 1 車輪
十一一四五 〈略〉、石や木や金の圓板が

車輪のやうに廻つてゐる。

じやれあい 「戯合」(名) 1 じやれ合
ひ

八五五 仲間がふえたので、又一しき
りじやれ合ひをはじめた。
じやれあう 「戯合」(五) 1 じやれ
合ふ 《一フ》

八四三 〈略〉、じやれ合ふのを止めて、
尾をふりながら、ちよこ／＼やつて
來た。

じ・れる 「戯」(下二) 1 じやれる
《一レ》

八三九 〈略〉、小さな犬ころが二匹、
上になり下になりしてじやれてゐる。

しゃん じきりきりしゃんと

シャンゼリゼー 「地名」 1 シャンゼ
リゼー

十二三二七〇 世界最美の街路といはれ
てゐるシャンゼリゼーの大通には、
五六層もある美しい建物が道路の兩
側に並び、車道と人道との間には、
緑したゝる街路樹が目もはるかに連
なつてゐます。

シャンハイ 「上海」(課名) 2 上海

十一四四 第三課 上海

シャンハイ 「上海」(地名) 5 上海
上海 上海

八二一九〇 又沿岸ニハ上海・漢口等
アリテ、我が國トノ貿易甚ダ盛ナリ。

十一一八七 〈略〉、黄浦江といふ支流
に入り、〈略〉さかのぼると、其の

西岸にある上海に着く。

十一一八八 上海は支那第一の貿易場で、
百萬近くの人口を有する大都會であ
る。

十一一〇七 上海が黄浦江に臨む部分は
延長八哩、六十餘の波止場がある。

十一一〇七 上海は専ら商業の都市とし
て知られてゐるが、近時工業も次第
に盛になつて、〈略〉。

しゅ 「主」(名) 3 主 じのうじよう
しゅ

十二一一五 〈略〉、何時の間にか好きな
博物學の研究が主となつてしまつた。

十二六四二 〇 これイタリヤ中興の主エ
ンマヌエル王、國土統一の時、〈略〉。

十二一三六 〇 其の原因はいろ／＼あらう
が、〈略〉過して來たことが、其の
主たるものであらう。

しゅ 「首」 じいっしゅ

しゅ 「酒」 じぶどうしゅ

しゅ 「種」(名) 1 種 じいっしゅ・
ごしゅ

十一五〇三 此の種のゴムが、昔主とし
て南米ブラジルのパラ州から産出し
たので、〈略〉。

じゅ 「珠」 じさんごじゅ

じゅ 「樹」 じがいろじゅ

しゅい 「首位」(名) 1 首位
十二四九四 松に至りては〈略〉、其
の豊富なること我が國の木材中の首
位を占む。
しゅい 「趣意」(名) 1 趣意

九二二九〇 〈略〉、ソナナ事ヲスルノハ、
選舉ノ趣意ニソムイデキル。

しゅう 「州」(名) 2 州 じアジア
しゅう・アフリカしゅう・インディ
アしゅう・カリフォルニアしゅう・き
たアメリカしゅう・ケンタッキ
しゅう・しひやくよしゅう・じゅうさ
んしゅう・たいようしゅう・パラしゅ
う・みなみアメリカしゅう・ヨーロッ
パしゅう

八六七二 〇 サンフランシスコはカリ
フォルニア州にあるのですが、此の
州は合衆國の中でも、氣候がよくて、
〈略〉。

十二六二九 〇 〈略〉、藍地中の星章は、
常に州の數と一致せしむるを定めと
す。

しゅう 「周」 じししゅう

しゅう 「習」(名) 1 習

十二三三七 〇 〈略〉、昔から殆ど模倣の
を事として來た觀がある。習、性と
なつては、遂に日本人には獨創力が
ないであらうと自らも輕んじ、〈略〉。

しゅう 「遇」 じいっしゅうかん・ご
しゅうかん・にしゅうかん

しゅう 「衆」(名) 1 衆 じおこども
しゅう

十三三〇 〇 〈略〉、衆皆力を失ひて散り
／＼になりぬ。

しゅう 「集」 じまんようしゅう

じゅう 「十」(課名) 9 十

二目 十 十木ノハ

二22 十 木ノハ
 三目5 四 うちの子ねこ……十
 三目11 十 きやうだい
 三28 十 きやうだい
 四目11 十 日と風
 四38 十 日と風
 五目11 十 遠足
 五34 十 遠足
 じゅう 十 (名) 2 十 10 ↓ぜん
 じゅうじじゅうろつぶん・だいじつ
 か・だいじゅう・どうじつごぜんじゅう
 うじごろ
 一34 4 ガンガトンデキマス。一
 二三四五六七八九十、十パ
 トンデキマス。
 五37 10
 じゅう 十 [中] ↓いちねんじゅう・うち
 じゅう・かおじゅう・からだじゅう・
 きようじゅう・くにじゅう・こやじゅう
 う・につぽんこくじゅう・につぽん
 じゅう・ねんじゅう
 じゅう [重] ↓さんじゅうごじゅう
 じゅう [銃] (名) 1 銃
 九61 2 舷門には、銃を手にした番兵
 が近くを警戒してゐる。
 じゅう [自由] (名) 1 自由
 十二63 3 此の三色は、自由・平
 等・博愛を表すものと稱せらる。
 じゅう [自由] (形状) 9 自由 ↓ふ
 じゅう
 六86 1 自由にうごかすことの出来る
 長い鼻、箕のやうな耳、長い牙、

《略》。
 八48 6 マシテ自由ノ天地ニ居テ、自
 在ニ空ヲトブ様ハ、實ニ勇マシイモ
 ノデアル。
 十17 4 団 《略》、三四歳の子供でも、
 腹の下などを自由にぐつて歩きま
 す。
 十一30 10 団 《略》、かぶとのしころ
 つゝじの枝に引つかゝりて、身のは
 たらき自由ならず。
 十一65 3 はてしなく續く廣野の中で、
 人々は自由な大氣を呼吸しながら、
 土の香に親しんで樂しげに働いてゐ
 る。
 十一69 2 小僧一人だけ自由に室内に
 出入させて、いろ／＼の用を足させ
 た。
 十一95 9 《略》、食物なども自由には
 得られず、時には生のじやがいもし
 か食はれないこともあつた。
 十一97 6 鉛筆や紙も自由には買へな
 かつたから、《略》。
 十二117 10 団 《略》、陸上でも海上でも、
 自由に消息を交換することが出来る
 やうになりました。
 しゅうい [周囲] (名) 8 周囲
 十17 9 団 《略》、せり場を中央にして、
 其の周囲は馬つなぎ場になつてゐま
 す。
 十75 7 団 市街の周囲を取圍んだ山々
 は地はだが白く、それに松がまばら
 に生えてゐる。

十80 5 《略》、あたりを見まはすと、
 周囲の壁は皆石炭で、それが電燈の
 光に物すごく光つてゐます。
 十一122 10 窯の周囲には、八九人の職
 工が汗を流して働いてゐる。
 十二51 9 これは主として周囲が山で、
 流れ込む川に大きいのがないのに原
 因してゐる。
 十二53 7 周囲の壁やガラス戸棚には、
 いろ／＼な時計がたくさん並んでゐ
 る。
 十二79 3 網の中がいよ／＼狭くなる
 と、其の周囲を船で取巻いてしまふ。
 十二128 3 団 《略》、今日日本の周囲に
 は諸外國が様々の考を持つて見てを
 るので、《略》。
 じゅういくまん [十幾萬] (名) 1 十
 幾萬
 十127 6 団 《略》、場に滿ちたる十幾萬
 の拜觀者の胸は、《略》、唯をどりに
 をどる。
 じゅういくわ [十幾羽] (名) 1 十幾
 羽
 九13 2 団 白・黒・うすかば色、十幾
 羽の鶏一つにかたまり、頭と頭とを
 つきはせて、《略》。
 じゅういち [十二] (課名) 12 十一
 ↓だいじゅういち・だいじゅういっか
 二目5 四 ウシワカマル……十一
 二目12 十一 ミヨチヤン
 二目24 十一 ミヨチヤン
 三目12 十一 五いちさん

三31 1 十一 五いちさん
 四目12 十一 すすはき
 四40 3 十一 すすはき
 五目12 十一 熊襲征伐
 五41 1 十一 熊襲征伐
 九目5 第四 養鶏……十一
 十目4 第三 道ふしん……十一
 十一目5 第四課 遠足……十一
 じゅういち [十二] (名) 1 十一
 八83 4 信吉にはおとよといふ今年十
 一になる女の子があるが、《略》。
 じゅういちがつふつか [十一月二日]
 (名) 1 十一月二日
 十24 1 団 十一月二日 兄から 信吉
 どの
 じゅういちじまえ [十一時前] (名) 1
 十一時前
 九70 3 団 白河を通つたのは昨夜の十
 一時前であつた。
 じゅういちにん [十二人] (名) 1 十
 一人
 六51 2 十二人いるうち、十一人まで
 はありましたが、あとの一人があら
 ません。
 じゅういちねんよ [十一年余] (名) 1
 十一年余
 十一3 3 さうして其の數や大きさは、
 凡そ十一年餘を週期として増減して
 ある。
 じゅういちまん [十一萬] (名) 1 十
 一萬
 七36 7 団 人口はおよそ十一萬、其の

中日本人は五萬人、支那人は六萬人
ですが、〈略〉。

じゅういっさい 「十一歳」(名) 1 十
一歳

八六四 長四郎が十一歳の時のことで
ある。

じゅうおう 「縦横」(名) 1 縦横
十一九六 アスファルトや石を敷いた
道が縦横に通じ、〈略〉等が絶間な
く往来してゐる。

じゅうか 「銃火」(名) 1 銃火

十一二八九 銃火をあびせかけたれば、
合圖して銃火をあびせかけたれば、
〈略〉。

しゅうがくりよう 「修学旅行」(名)

1 修学旅行

七三九 修学旅行に行つて、白玉山の
表忠塔をあふぎ、〈略〉。

じゅうがつさんじゅういちにち 「十月
三十一日」(課名) 2 十月三十一日

四四四 三 十月三十一日

四八三 三 十月三十一日

じゅうがつさんじゅういちにち 「十月
三十一日」(名) 1 十月三十一日

四八四 キノフハ十月三十一日デ、

天長節ノオイハヒ日デシタ。

じゅうがつじゅうさんにち 「十月十三
日」(名) 1 十月十三日

七四四 十月十三日 山口屋小三郎

高田屋定吉殿

じゅうがつじゅうにち 「十月十二日」

(名) 1 十月十二日
十一二 十月十二日、我等五年生一
同は、〈略〉、東京代々木の明治神宮
に参拜せり。

じゅうがつじゅうごにち 「十月二十
五日」(名) 1 十月二十五日

十一六 十月二十五日は、青年團の道
ぶしんの日であつた。

しゅうかん 「習慣」(名) 2 習慣
十一六四 農業者は多く古い習慣に
なづみやすいものであるが、〈略〉。

十一九四 こんな不便な曆でも長い
間の習慣で、今でも使つてゐるも
のがあるやうだ。

しゅうかん 「週間」 ↓にしゅうかんあ
まり

しゅうき 「周期」(名) 1 週期

十一三三 さうして其の數や大きさは、
凡そ十一年餘を週期として増減して
ゐる。

しゅうぎいんぎん 「衆議院議員」

(名) 1 衆議院議員

九四九 今日ハ衆議院議員ノ總選舉
ダカラ、投票ノ爲ニ歸ツテ來タノダ。

しゅうきこうれいさい 「秋季皇靈祭」

(名) 1 秋季皇靈祭

七四八 彼岸ハ七日ノ間ニシテ、其
ノ中日ニ、〈略〉、秋ハ秋季皇靈祭ヲ
行ハセラル。

じゅうぎようしや 「従業者」(名) 1

從業者

十三七 衛生の設備をよくして危険な

病氣を根絶し、幾萬の従業者の健康
をはかつた事や、〈略〉。

じゅうく 「十九」(課名) 11 十九 ↓
だいじゅうく・だいじゅうくか

二目七 十九 ナゾ

二五二 十九 ナゾ

三目七 十九 セミ

三五五 十九 セミ

四目八 十九 ナゾ

四七二 十九 ナゾ

五目七 十九 用水池

五八二 十九 用水池

六目七 第五 海一 しけ……十

九

八目九 第五 揚子江……十九

十二目六 第五課 蜜柑山……十九

じゅうく (名) ↓さんがつじゅうくに
ち

じゅうくにち 「十九日」(名) 1 十九
日

十四二 承り候へば、〈略〉、去る
十九日遂に御死去遊ばされ候由、
〈略〉。

しゅうげき 「襲撃」(名) 1 襲撃

九四六 中でも一番目ざましかつたの
は最後の襲撃。

じゅうけん 「銃剣」(名) 2 銃剣

九四八 〈略〉、砲彈の雨の中でも、銃
劍の林の中でも、びくともしせずに勇
ましく活動した。

十二四三 〈略〉、門を守つてゐた兵士
等が〈略〉、一せいに銃剣を取直し

て行くてをさへぎつた。

じゅうご 「十五」(課名) 9 十五 ↓
だいじゅうご・だいじゅうごか

二目三 十五 ユキ

二三七 十五 ユキ

三目三 十五 四方

三六八 十五 四方

四目四 十五 しひの木とかし
のみ

四五七 十五 しひの木とかし
のみ

五目三 十五 養老

五五八 十五 養老

九目六 第五 動物ノ色ト形……十

五

じゅうご (名) ↓くがつじゅうごに
ち・さいくまにちようめじゅうごば
んち

じゅうごさい 「十五歳」(名) 1 十五
歳

八六八 一人は信作、一人は耕造とい
つて、年は同じく十五歳。

じゅうごじ 「十五字」(名) 3 十五字

七四六 「それで何字になる。」「十
五字です。」

七四七 「十五字までが一音信だが、
〈略〉、十五字までにしてもらん。」

七四九 「〈略〉、それでは十七字に
なる。十五字までにしてもらん。」

じゅうごにち 「十五日」(名) 1 十五
日 ↓じゅうにがつじゅうごにち・ろ
くがつじゅうごにち

- 十二249 月の十五日を期して總攻撃を行ひ、一舉に江戸を乗つ取る手はずである。
- じゅうごにちめ 「十五日」(名) 1 十五日
- 八654 横濱を出てから、ちやうど十五日目です。
- じゅうごふん 「十五分」(名) 2 十五分
- 十1171 十五分許で汽車は太宰府町に着いた。
- 十二136 〈略〉、たとへ十分、十五分の餘暇でも無益に費すことがなかつた。
- じゅうごや 「十五夜」(課名) 2 十五や
- 三目12 二十四 十五や
- 三773 二十四 十五や
- じゅうごや 「十五夜」(名) 1 十五や
- 三774 十五やの月がさしきのまん中までさしてゐます。
- じゅうごろく 「十五」(名) 2 十五
- 六
- 九218 病みつかれた六十ばかりの老人が、〈略〉、十五六の少年に、熱心に何か言聞かせてゐる。
- 九527 それはわたしの十五六の時分だつたらう。
- じゅうごろくじよう 「十五六丈」(名) 1 十五六丈
- 九307 瀧の幅は、〈略〉、高さはどちらとも十五六丈あります。
- じゅうごろくねんまえ 「十五六年前」(名) 1 十五六年前
- 八663 此の港には、十五六年前に大地震があつて、町は大方こはれたのですが、〈略〉。
- じゅうごろくねんめ 「十五六年目」(名) 1 十五六年目
- 十一376 今に御らん、〈略〉、十五六年目には間伐をしなければならないうやうになるから。
- じゅうさん 「十三」(課名) 10 十三
- いだいじゅうさん・だいじゅうさんか二目6 五 カンガヘモノ……十三
- 二目14 十三 正月
- 二305 十三 正月
- 三目14 十三 まはりつこ
- 三376 十三 まはりつこ
- 四目2 十三 あはがき
- 四521 十三 あはがき
- 五目14 十三 蠶
- 五467 十三 蠶
- 八目6 第四 武將の幼時 一 石合戦……十三
- じゅうさん 「十三」(名) 1 十三
- 六518 萬じゆは當年やうやく十三、舞姫の中では一番年わかでございました。
- じゅうさんかしよ 「十三箇所」(名) 2 十三箇所
- 十一237 待ちまうけたる秀吉は、琵琶湖のほとりに十三箇所のとりを構へ、〈略〉。
- 十一2310 〈略〉、十三箇所のうちなる大岩山のとりでより、〈略〉下り來れる七八人の兵卒あり。
- じゅうさんこ 「十三」(名) 1 十三
- 戸
- 十一628 明治十六年こゝに十三戸の農家が移住して來たのが此の町の始りであつた。
- じゅうさんし 「十三」(名) 2 十三
- 四
- 十一552 〈略〉、中にもうれしさうに見えたのは、十三四になる二人の少年であつた。
- 十一1075 中にも十三四ばかりの子供が、各國人の間にまじりてかひなくしく立働ける様を見ては、〈略〉。
- じゅうさんしゅう 「十三州」(名) 1 十三州
- 十二628 即ち赤・白合はせて十三條の横筋は、獨立當時の十三州を表すものにして、〈略〉。
- じゅうさんじよう 「十三条」(名) 1 十三條
- 十二627 即ち赤・白合はせて十三條の横筋は、獨立當時の十三州を表すものにして、〈略〉。
- じゅうさんにち いさんがつじゅうさんにち
- じゅうさんばい 「十三倍」(名) 1 十三倍
- 十一1032 此のブラジル國は、廣さ我が國の十三倍もこれあり、〈略〉。
- じゅうし 「十四」(課名) 14 十四
- だいじゅうし・だいじゅうし
- 二目2 十四 モチノマト
- 二目7 六 犬ノヨクバリ……十四
- 四
- 二333 十四 モチノマト
- 三目2 十四 うらしま太郎
- 三目7 六 ゆびのな……十四
- 三396 十四 うらしま太郎
- 四目3 十四 お話二つ
- 四533 十四 お話二つ
- 五目2 十四 雨
- 五503 十四 雨
- 六目5 第四 きのこ取……十四
- 八目7 第四 武將の幼時 〈略〉 二
- 十四歳の時が二度あるか……十四
- 四
- 十一目6 第五課 のぶ子さんの家……十四
- ……十四
- 十二目5 第四課 新聞……十四
- じゅうじ 「十字」(名) 1 十字
- しやせきじゅうじ・しやはくじゅうじ・せきじゅうじ
- 七1129 それで十字だから、うちの屋がうのカネキを入れて、此の賴信紙に書きこんでごらん。
- じゅうじ 「住持」(名) 8 住持
- 十一448 住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、〈略〉。
- 十一4510 或夜小僧、住持の居間に來りて、〈略〉。とさゝやきければ、住持ひそかに歩いて見るに、畫師は

《略》。

十一462 或夜小僧、住持の居間に來りて、「《略》。」とさゝやきければ、住持ひそかに行き見て見るに、畫師は《略》。

十一464 さまたげせんも心なしと思ひて、住持は其のまゝ寢間に入れり。

十一4610 《略》、住持は尚知らぬ顔して過しに、《略》。

十一474 夜明けて住持、畫師に向ひて、「《略》。」と、夜中に畫師のしたる様をまねて見るに、畫師驚きて、《略》。

十一479 住持「昨夜のぞき見て知りたり。」

十一483 住持驚きて、「《略》。」と問へば、畫師《略》。

じゅうじいたしおり「〔從事致居〕（ラ変）1 從事致居り『一リ』

十一1002 候 かくる處にても日本人が盛に開墾に從事致居り、其の有様は《略》。

しゅうしいうかん・する「〔終始一貫〕

（サ変）1 終始一貫する『一シ』

十二1102 老僧の終始一貫した根氣は、遂に村人を恥ぢさせたものか、《略》。

じゅうじかんぜん「〔十時間前後〕

（名）1 十時間前後
十3510 運河は全長五十哩餘り、凡そ十時間前後で之を航することが出来る。

じゅうじころ「〔十時頃〕（名）1 十時頃

十205 せりの始つたのは十時頃でした。

じゅうしさい「〔十四歳〕（名）1 十四歳

八156 やあ、正綱、十四歳の時が二度あるか。

じゅうしさいのときがにどあるか「〔題名〕2 十四歳の時が二度あるか

八目7 第四 武將の幼時《略》二
十四歳の時が二度あるか

八147 二 十四歳の時が二度あるか
じゅうじ・す「〔從事〕（サ変）2 從事す『一シ・一セ』

十71 《略》、何れも十日間を限りて土木に從事せしめたるに、《略》。

十二1124 《略》、更に進んで新しき電燈の發明に從事したり。

じゅうじすぎ「〔十時過〕（名）1 十時過ぎ

九329 かんくんとこずゑをてらしてある十時過ぎの日かげが、若葉の色を下に投げるのか、《略》。

じゅうじ・する「〔從事〕（サ変）4 從事する『一シ・スル』

七612 漁業や航海業に從事する人もありませう。

十124 高橋さんは、あちらで長らく教育に從事してゐる人である。

十二222 商業は之に從事する商人だけを利するためのものではない。

十二234 外國貿易に至つては、之に從事する者の心掛け如何の影響が更に大きい。

じゅうしち「〔十七〕（課名）10 十七
ふだいじゅうしち・だいいじゅうしちか

二目5 十七 ハナサカヂヂイ
二41 十七 ハナサカヂヂイ

三目6 十七 一口ばなし
三目8 七 かんがへもの……十七

三516 十七 一口ばなし
四目6 十七 扇のまと

四61 十七 扇のまと
五目5 十七 虹

五目6 五 金鐫勲章……十七
五60 十七 虹

じゅうしち「〔十七字〕（名）1 十七字

七1118 《略》、にごりのある字は二字に數へるのだから、それでは十七字になる。

しゅうじつしゅうや「〔終日終夜〕（名）1 終日終夜

八725 《略》、地下鐵道にも、電車や汽車が終日終夜、休なしに運轉してゐます。

じゅうしや「〔從者〕（名）4 從者

七326 此れより獅子は《略》、武士には無二の從者となれり。

十二831 《略》、此處にて土人を雇ひて從者となし、《略》いよく探検の途に上りぬ。

十二836 《略》、從者の土人等ゆく

ての危険を恐れて從ふことをがへんぜず。

十二8410 《略》、林藏はこれまでの記録一切を取りまとめ、之を從者に渡していふやう、《略》。」と。

じゅうじゅん「〔從順〕（形状）2 從順

十175 馬も誠に從順で、けたりかみついたりするやうな事は決してしません。

十202 《略》、成程、こんなにかはいがられて居れば、馬も從順で人になつくわけだと、《略》。

じゅうしよ「〔じゅうしよ〕

じゅうすうねん「〔十數年〕（名）1 十數年

十78 《略》、二十一で位につき、わづか十數年の間に四方の國々を征服して、《略》。

じゅうすうばい「〔十數倍〕（名）1 十數倍

十88 《略》、之を十年前の額に比べると、實に十數倍である。

じゅうすうまんぼん「〔十數万本〕（名）1 十數萬本

十59 《略》、新に植込みたる木の數、實に十數萬本に及べり。

じゅうすうメートル「（名）1 十數メートル

十一573 ふかはは十數メートルの近くにせまつてゐる。

しゅうせい「〔終生〕（名）1 終生
八1159 《略》乃木大將が、終生忠誠

質素でおし通して、武人の手本と仰 がれるやうになつたのは、〈略〉。	三目6 五 お花……十二	四目(名) 1 十二月十四日	八81/ 園 いや、それは財産や収入の 多少によつて違ひます。
しゅうせい「習性」(名) 1 習性	三目13 十二 右ト左	八46/ 園 十二月十四日 浅吉 御主 人様	十53/ 園 〈略〉、其の差だけが銀行の 収入になるのだ。
十二10/ 又いろ／＼の鳥を注意して 見ると、それ／＼違つた面白い習性 をもつてゐるので、〈略〉。	四目6 五 白ウサギ……十二	じゅうにがつじゅうはちにち「十二月 十八日」(名) 1 十二月十八日	じゅうにん「十人」(名) 2 十人
しゅうせい「衆星」(名) 1 衆星	四目13 十二 かるた取	十79/ 園 十二月十八日 原安雄 水	十25/ 岩の上に残つた船體には、十 人許の船員がすがり附いて、〈略〉。
十二97/ 今や釋迦は衆星の中の満月 の如く國中から仰がれる身となつた が、〈略〉。	四46/ 十二 かるた取	じゅうにがつじゅうろくにち「十二月 十六日」(名) 1 十二月十六日	十113/ 〈略〉船長を始め十人許の乗 組員は、ひとしく目を其の方向に向 けた。
じゅうたい「じゅうたい」	五目5 四……十二	八47/ 園 十二月十六日 村尾甲藏 浅吉殿	じゅうねん「十年」(名) 2 十年
じゅうだい「重大」(形状) 2 重大	五45/ 園 十二 一口話	じゅうににち「じゅうににち」	九52/ 園 〈略〉、店はだんだん繁昌し て、十年もたゝぬ中に、町でも屈指 の財産家となつた。
十一1/6 これほど我々に重大な關係 のある太陽とは、一體〈略〉。	じゅうに「十二」(名) 6 十二 12	じゅうににん「十二人」(名) 1 十二 人	十36/ 〈略〉、十年の歳月と八億圓の 費用とを費して、我が大正三年、遂 に之を造り上げたのである。
十一23/2 〈略〉、判事・検事・辯護士 の任務は極めて重大なものといふべ きである。	六56/ 唐糸には其の時十二になる娘 がありました。	六51/ 〈略〉、舞姫をあつめました。 十二人いるうち、十一人までであり ましたが、〈略〉。	じゅうねんあまり「十年余」(名) 1 十年餘り
しゅうちよう「酋長」(名) 1 酋長	六71/ 園 12	じゅうにねん「十二年」(名) 1 十二 年	九51/ 園 十年餘りもしんぼうして、 やう／＼一人前の番頭になり、〈略〉。
十二83/ 止むなく南方のノットと いふ處に引返し、酋長コーニの宅に 留りて〈略〉。	六99/ 園 あの子は十二、落葉松は あの子のせいより低かつた。	七46/ 園 戦をはじめから十二年、 今に勝負がきまらない。	じゅうねんいちじつ「十年一旦」(名) 1 十年一日
じゅうなんど「じゅうなんどいかじゅ うなんど」	九51/ 園 〈略〉、ちやうどお前と同じ 十二の年だつたさうだ。	じゅうにばん「十二番」(名) 1 十二 番	十二107/ 園 〈略〉、十年一日の如く黙々 としてのみの手を休めない僧の根氣 〈略〉。
じゅうなんまん「十何万」(名) 1 十 何萬	十二25/ 園 12	六52/ 一 一番二番三番と、十二番の舞 がめでたくすみました、〈略〉。	じゅうねんまえ「十年前」(名) 1 十 年前
六79/ 元からおしよせた船で おほはれた。十何萬といふ大軍であ る。	十二102/ 園 12	じゅうにまい「十二枚」(名) 1 十二 まい	十88/ 園 〈略〉、之を十年前の額に比べ ると、實に十数倍である。
じゅうに「十二」(課名) 11 十二 ↓ だいじゅうに・だいじゅうにか	じゅうにがつじゅうごにち「十二月十 五日」(名) 1 十二月十五日	四50/ 道子が十二まい、みよ子 が十まい、國太郎が九まい、 〈略〉でした。	じゅうねんめ「十年旦」(名) 1 十年 目
二目13 十二 ネズミノチエ	六43/ 園 十二月十五日 兄から 千 太どの	じゅうにゆう「収入」(名) 2 収入	
二26/ 十二 ネズミノチエ	じゅうにがつじゅうよつか「十二月十		

九53 6 図 社長さんが銀行の頭取にな

つてからちやうど十年目の秋、〈略〉。

じゅうはち 「十八」〔課名〕 11 十八

じだいじゅうはち・だいじゅうはつか

二目6 十八 カゲエ

二目9 八月……十八

二54 1 十八 カゲエ

三目6 十八 をののたうふう

三54 4 十八 をののたうふう

四目7 十八 山がら

四67 7 十八 山がら

五目6 十八 峠から町へ

五63 1 十八 峠から町へ

七目7 第六 鎌倉攻……十八

十一目7 第六課 裁判……十八

じゅうはち 「十八」〔名〕 2 18

六71 図 18

十二10 図 18

じゅうはちじかん 「十八時間」〔名〕 1

十八時間

八71 4 図 〈略〉、たつた十八時間で着

きました。

じゅうはちにち じいちがつじゅうはち

にち・さんがつじゅうはちにち・じゅ

うにがつじゅうはちにち

じゅうはちねん 「十八年」〔名〕 1 十

八年

十一130 1 図 〈略〉 鐵眼が初度の募集

を始めより十八年の後に至りて、

〈略〉。

じゅうはちねんめ 「十八年目」〔名〕 1

十八年目

四96 7 〈略〉、父がうたれてから

十八年目にめでたくのぞみを

とげました。

じゅうはちちよう 「十八町」〔名〕 1

十八町

十61 6 図 此處から十八町程先に、山

本といふ宿場があります。

じゅうひ 「獣皮」〔名〕 1 獣皮

十一78 8 石・貝・家畜・獣皮・布・

農産物などが、〈略〉、それ〴〵貨幣

の役目をしたこともあつた。

じゅうぶん 「十分」〔形状〕 9 十分

九5 10 図 まだ十分にじゅくしてゐな

い實は、〈略〉。

十一20 4 〈略〉、裁判所は、犯罪の疑

のある者を十分に取調べて適當公平

な裁判をする。

十一42 1 図 何とぞ十分の御養生あ

りて、一日も早く御全快なされ候様

切に祈申候。

十一75 3 図 〈略〉、どうも古い言葉が

よくわからないと十分なことは出来

ない。

十二12 10 〈略〉彼の博物學者として

の基礎が十分に出来、一生の方針が

はつきりときまつた。

十二68 9 図 私は胸にある事が十分に

言へないのでございます。

十二137 1 自分と思ふまゝに造り出す

創造力は、十分に發揮せられたこと

がなく、〈略〉。

十二137 6 〈略〉模倣の域を脱して十

分に獨創力を發揮し、〈略〉。

十二138 10 〈略〉其の長所を知つて、

之を十分に發揮すると共に、〈略〉。

じゅうぶん 「十分」〔副〕 6 十分

六92 6 城中には十分水の用意がして

あつた。

七61 3 図 どうか今から十分海になれ

て置くやうにしてもらひたいのであ

ります。

九55 1 図 〈略〉、商賣の仕方は十分心

得てゐるので、〈略〉。

十105 4 図 此の温室は南を受けてゐる

上に、十分熱い湯が通つてゐるから、

〈略〉。

十一18 9 〈略〉といふことは、我々

が十分心得てゐる事である。

十二70 9 しかしフランス王は〈略〉、

コーデリヤの簡單な答の中にも十分

真心のこもつてゐるのを認め、〈略〉。

じゅうまい 「十枚」〔名〕 1 十まい

四50 8 道子が十二まい、みよ子

が十まい、〈略〉、友一はたつた

二まいでした。

じゅうまん じいちたいじゅうまん

じゅうまんき 「十万騎」〔名〕 2 十万

騎 十萬騎

六22 8 大將は平維盛で、十万騎を

引きつれて、〈略〉ぢんを取りまし

た。

六97 6 〈略〉、はじめ百萬騎といつた

賊も、しまひには十萬騎に減じ、

〈略〉。

しゅうや じしゅうじつしゅうや

しゅうよう 「修養」〔名〕 1 修養

十15 2 図 〈略〉、かうして修養にも實

行にも、骨を折つてをられるのを、

〈略〉。

じゅうよう 「重要」〔形状〕 4 重要

十一10 9 此の地は交通上重要な位置

を占めてゐて、〈略〉。

十一11 3 貿易上最も重要な關係をも

つてゐるのは、日・英・米三國で、

〈略〉。

十二46 2 図 凡そこれ等の木材は、

〈略〉各種の用に供すべく、随つて

何れも重要ならざるはなけれど、

〈略〉。

十二48 8 かしは又なら・くぬぎと

共に新炭材として重要なものなり。

しゅうようきかん 「修養機關」〔名〕 1

修養機關

十一9 10 其の外各種の學校や、博物

館・圖書館等の修養機關、〈略〉等

の娛樂機關が到る處に散在してゐる。

しゅうようする 「收容」〔サ変〕 1

收容する 《—シ》

十28 1 親子は非常な危險ををかつて、

人々をボートに收容し、〈略〉。

じゅうよつか じしゅうにがつじゅう

よつか・よくじゅうよつか

じゅうり 「十里」〔名〕 1 十里

七29 6 図 大阪ノ西十里ニ神戸アリ。

じゅうりよう 「銃獵」〔名〕 1 銃獵

十一117 9 ふと向ふを見ると、銃獵に

出たらしりつばな騎馬の人たちが、
《略》。

じゅうるい 「獸類」(名) 1 獸類

七835 海ニハ又獸類ガスンデキル。

じゅうろう 「十郎」(話手) 1 十郎

四945 《略》、十郎「五郎、かほを
見せよ。」五郎「兄上。」

じゅうろう 「十郎」(人名) 4 十郎

四897 曾我兄弟は兄を十郎、弟
を五郎といひました。

四898 十郎が五つ、五郎が三つ
の年に、《略》。

四908 《略》、十郎はなみだをお
さへて、「《略》。」と答へました。

四966 《略》、十郎は二十二、五郎
は二十、《略》めでたくのぞみ
をとげました。

じゅうろく 「十六」(課名) 12 十六
↓だいじゅうろく・だいじゅうろつか

二目4 十六 ユキダルマ

二目8 七 ユフヤケ…………十六

二387 十六 ユキダルマ

三目4 十六 私ノ村

三481 十六 私ノ村

四目5 十六 大工小屋

四576 十六 大工小屋

五目4 十六 日本三景

五562 十六 日本三景

七目6 第五 れんげさう…………十六

八目8 第四 武將の幼時 《略》三

十目5 第四 馬市見物…………十六

じゅうろく 「十六」(名) 2 十六 ↓
ぜんじゅうじじゅうろつぶん・だい
じゅうろくだい・めいじじゅうろくね
ん

五417 尊は其のころ、《略》、御年は
わづかに十六でいらつしやいました
が、《略》。

九269 十六のお前が、旅費も乏し
い旅先で親に別れては、《略》。

じゅうろく・す 「集録」(サ変) 1 集
録す 《一シ》

十一64 論語は、《略》孔子及び
其の高弟の言行を集録したるもの
にして、《略》。

じゅうろくにち 「十六日」(名) 1 十
六日 ↓じゅうにがつじゅうろくにち
八1073 来る十六日は私の誕生日で、
ちやうど日曜日ですから、《略》。

しゅぎ 「主義」(名) 1 主義

十一77 孔子は他人を正す前に先
づおのれを正し、近きより遠きに及
すを以て其の主義としたり。

しゅぎよう 「修己」(名) 4 修行

十二933 《略》、人知れず宮殿を出て
修行の途に上つた。

十二936 かねて釋迦の徳をしたつて
ゐたマガダ國王は、修行を思ひ止ら
せようとして、《略》。

十二941 自分一人で修行をしよう。

十二9410 《略》、釋迦が全く修行を止
めてしまつたものと思ひ、《略》。

じゅぎよう 「授業」(名) 1 授業

九774 五時間目の授業がすむと、先
生はにこ／＼して、「《略》。」とおつ
しやつた。

しゅぎよく ↓きんぎんしゅぎよく

しゅく 「宿」(名) 2 宿 ↓あべ
かわのしゅく・いっしゅく・いまじゅ
く

七623 《略》、川べの宿はとめきれな
い程の客でございました。

十一729 次の宿のさきまで行つてみ
たが、やはり追ひつかなかつた。

しゅくがかい 「祝賀会」(名) 1 祝賀
會

八755 一日祝賀會の席上で、人々が
かはる／＼立つて、コロンブスの成
功を祝しますと、《略》。

しゅくさいじつ 「祝祭日」(名) 1 祝
祭日

十一903 僕はこれまで暦といふと、
《略》、祝祭日・土用・彼岸・入梅・
日食・月食が何時になるかといふや
うな事を見るものとはかり考へてゐ
たので、《略》。

しゅくし 「宿志」(名) 1 宿志

十一128 然れども鐵眼少しも屈せ
ず、再び募集に着手して努力するこ
と更に數年、効果空しからずして宿
志の果さるゝも近きにあらんとす。
じゅくしきる 「熟切」(五) 1 熟し
きる 《一ツ》

九9910 《略》、かばちや晶を見廻ると、
此の前まだ少し早いと言つて残して

置いたのが、今日はもう熟しきつた
やうな顔をして、《略》。

しゅくしやく ↓どうしゅくしやく

じゅく・す 「熟」(五) 1 じゅくす
《一シ》

九510 まだ十分にじゅくしてゐな
い實は、中にきれいな水があります。
じゅく・す 「熟」(サ変) 1 熟す 《一
シ》

十一1067 大勢の人々が熟したる
コーヒーの實を手にてこき落し、
《略》。

しゅく・する 「祝」(サ変) 1 祝する
《一シ》

八756 一日祝賀會の席上で、人々が
《略》、コロンブスの成功を祝します
と、《略》。

しゅくば 「宿場」(名) 1 宿場

十617 此處から十八町程先に、山
本といふ宿場があります。

じゅくれん 「熟練」(名) 1 熟練

十一524 切付には餘程熟練を要する。
しゅこう 「手工」(名) 1 手工

六652 昨日ニイサンガ釘箱ヲ火鉢ノ
フチニ置イテ、手工ヲシテキタ時、
《略》。

しゅじゅ 「種」(名) 6 種 種々
十864 種々の品物が遠く外國から輸
入されるのは、《略》。

十875 我が國は種々の品物を輸入し
てゐるばかりでなく、《略》。

十一793 《略》、形の上に種々の工夫

人

七112図 發信人の居所氏名を受信人

に知らする必要があるときは〈略〉

じゅしんにんきょしよしめい「受信人

居所氏名」(名) 1 受信人居所氏名

七112図 受信人居所氏名

しゅじんふうふ「主人夫婦」(名) 1

主人夫婦

十704図 旅僧もまた主人夫婦の情心

にしみて、そゝろに別れがたき思あ

り。

じゅずつなぎ「数珠繫」(名) 1 じゅ

ずつなぎ

九792 中からみづ／＼しい白茶色の

玉が、じゅずつなぎになつてころ

／＼と出て來た。

しゅせん「朱線」(名) 1 朱線

十一364 地圖の中の〈略〉、朱線で

圍んであるのが今年伐採する處、

〈略〉。

しゅだん「手段」(名) 2 手段

十一1155 まして威力によつて強制す

るとか、私利によつて勧誘するとか

いふやうな手段を用ひたり、〈略〉。

十一1155 〈略〉とかいふやうな手段

を用ひたり、又此の手段に動かされ

たりするのは、〈略〉。

しゅちよう「主張」(名) 2 主張

十一194 〈略〉、貸主の主張を正當と

みとめれば、其の借金を返すやうに

借主に命ずる。

十一2110 〈略〉、原告・被告の相談相

手・附添人又は代理人となつて其の

主張を助け、〈略〉。

じゅつ じゅいんさつじゅつ

しゅつげん「出現」(名) 1 出現

十二1110図 これ等の缺點なき電燈の

出現は當時の人の最も希望する所な

りき。

しゅつすい「出水」(名) 2 出水

十一1268図 たま／＼大阪に出水あり

十一1286図 〈略〉、人々の困苦は前の

出水の比に非ず。

しゅつせ「出世」(名) 1 出世

七787 これがそも／＼藤吉郎出世の

いとぐちである。

しゅつたつす「出立」(サ変) 1 出

立す「一シ」

十一482図 〈略〉、唯杉戸に檜一本

を畫がきて東國へ出立しぬ。

しゅつにゆう じゅしゅつにゆう

しゅつぱつ「出發」(名) 3 出發

九1216図 今日投票ノ爲ニ歸ツタノモ

出發ノ時カラノ豫定ナノダ。

十一839 手や足の關節を曲げたり延

ばしたりして、出發の號令を待つ。

十二849図 出發の日近づくや、林藏

はこれまでの記録一切を取りまとめ、

〈略〉。

しゅつぱつする「出發」(サ変) 2

出發する「一シ」

十二1216 彼が探檢船ビーグル號に乗

込んで意氣揚々と本國を出發したの

は、〈略〉。

十二312図 一昨日朝ロンドンを出發

して午後早くパリに着きました。

しゅつばん「出版」(名) 4 出版

だいしゅつばん

十一1257図 しかも其の巻數幾千の多

きに上り、これが出版は決して容易

の業に非ず。

十一1266図 鐵眼大いに喜び、將に出

版に着手せんとす。

十一1272図 我が一切經の出版を思

立ちたるは佛教を盛にせんが爲、

〈略〉。

十一1289図 〈略〉、喜捨せる人々に説

きて出版の事業を中止し、〈略〉。

しゅつばんす「出版」(サ変) 1 出

版す「一セ」

十一1262図 一代の事業として一切經

を出版せん事を思立ち、〈略〉。

しゅつばんひ「出版費」(名) 1 出版

費

十一12710図 苦心に苦心を重ねて集め

たる出版費は、遂に一錢も残らずな

りぬ。

しゅつぽつす「出沒」(サ変) 1 出

沒す「一スル」

十一344図 〈略〉、漁火の波間に出沒

する夜景もまた一段の趣あり。

しゅてんどうじ「酒吞童子」(人名) 6

シユテンドウジ

二715 ムカシ 大江山ニシユテン

ドウジトイフワルモノガキマ

シタ。

二733 ソコデ 天子 サマカラ、

〈略〉、シユテンドウジヲタイヂセ

ヨト、オホセツケニナリマシタ。

二751 シユテンドウジハホンタウ

ノ山ブシダトオモツテ、トメ

テヤリマシタ。

二755 ソノバンシユテンドウジ

ハサケニヨツテネマシタ。

二765 シユテンドウジハオコツテ

クルヒマハリマシタ。

二777 ライクワウノケライモ、

シユテンドウジノテシタヲノコ

ラズタイヂシテシマヒマシタ。

しゅとして「主」(副) 7 主トシテ

主として

九466図 スナハチ物ノ價ノ高下ハ、

主トシテ需要ト供給トノ關係ニヨル

ナリ。

十210図 〈略〉、當社の用材は主とし

て木曾産の檜なりとぞ。

十369 米國が此の運河を造るに成功

したのは、主として、最新の學理を

應用したからであつた。

十一503 此の種のゴムが、昔主とし

て南米ブラジルのパラ州から產出し

たので、〈略〉。

十一672 火の熱は、初め主として食

物を調理するのに用ひたもののやう

であるが、〈略〉。

十二519 これは主として周圍が山で、

流れ込む川に大きいのがないのに原

因してゐる。

十二132 9 〈略〉、主として我々國民にそれだけすぐれた素質があつたからである。

しゅにん じしんすいしゅにん

しゅぬり 「朱塗」(名) 1 朱ぬり

五58 8 朱ぬりの社殿が山のみどりを後にして、たいそうきれいに見えま

す。

ジュネーブから 「題名」 1 ジュネー

ブから

十二35 8 五 ジュネーブから

ジュネーブこじょう (名) 1 ジュ

ネーブ湖上

十二36 2 団 私は今ジュネーブ市のモ
ンブラン橋のてすりにもたれて、
ジュネーブ湖上の風光に見とれてあ
ます。

ジュネーブし (地名) 1 ジュネーブ

市

十二35 10 団 私は今ジュネーブ市のモ
ンブラン橋のてすりにもたれて、
〈略〉。

じゅのう じしんすいしゅにん

ジュノー (人名) 2 ジュノー

九91 4 団 おかあさんのカリストは、
大そう美しい人だつたので、ジュ
ノーといふ神様がそれをねたんで、
とうとうカリストを熊にしてしまひ
ました。

九91 9 団 此の大熊こそは、先にジュ
ノーに形を變へられたおかあさんの
カリストだつたのですが、〈略〉。

じゅばん 「襦袢」(名) 1 じゅばん

三71 6 〈略〉、あの赤いじゅばん
はねえさんのので、〈略〉。

ジュピター (人名) 1 ジュピター

九92 2 団 ところがぐみ深いジュピ
ターといふ神様が、それを見て、
〈略〉。

しゅふ 「首府」(名) 2 首府

十一102 9 團 目下滞在中のリオ、デ、
ジャーネーロ市は、ブラジル國の首府
にて非常に景色よく、〈略〉。

十二93 5 〈略〉、マгада國の首府王舎
城の附近に來た。

しゅへい 「守兵」(名) 1 守兵

十一28 3 団 〈略〉處々のとりでより
來れる守兵と合して、追撃すること
頗る急なり。

しゅみ 「趣味」(名) 1 趣味

十二9 9 ぐく小さい時分から動植物
に深い趣味を持ち、〈略〉。

じゅもく 「樹木」(名) 2 樹木

十一66 2 思ふに落雷の爲に樹木が燃
えたり、〈略〉。

十一66 2 〈略〉、密生した樹木の枝と
枝がすれあつて起つたりした自然の
火から、〈略〉。

しゅよう 「主要」(形状) 3 主要

十一106 4 團 世界に名高きブラジル
コーヒーの主要なる産地も此の邊に
て、〈略〉。

十二17 1 団 此の外、國內各地は勿論、
世界各國主要の地に特派員又は通信

員ありて、〈略〉。

十二45 8 団 今其の主要なるものを舉
ぐれば、杉・檜・〈略〉・なら・くぬ
ぎ等なり。

じゅよう 「需要」(名) 3 需要

九46 6 団 スナハチ物ノ價ノ高下ハ、
主トシテ需要ト供給トノ關係ニヨル
ナリ。

十一50 7 〈略〉、近年ゴムの需要が激
増したために、〈略〉。

十二46 5 団 殊に杉は〈略〉、其の需
要の多きこと我が國の木材中第一位
にあり。

じゅりようす 「受領」(サ変) 1 受
領す 《一セ》

九43 3 團 軍のおきてにしたがひ
て、他日我が手に受領せば、長く
いたはり養はん。

じゅりん 「樹林」(名) 1 樹林

十五 団 樹林

しゅるい 「種類」(名) 7 種類

五97 1 ブダウニハ、マダイロくノ
種類ガアルトイヒマス。

七86 2 此ノ他海藻ニハマダタクサン
ナ種類ガアツテ、〈略〉。

八61 8 団 此ノ他〈略〉、寫眞屋ニハ、
寫眞ノ看板モアリテ、看板ノ種類ハ
キハメテ多シ。

十六6 2 団 大方は〈略〉、獻木にて、
〈略〉。種類は大て我が國に産する
限りを盡くし、産地は日本全國にわ
たれり。

十一49 10 〈略〉ゴムの木といつてゐ
る。これには種類が多く、一番よい
のはパラゴムといふのである。

十一67 3 〈略〉、時代が進んで燃料の
種類が増すにつれて、火の用途もだ
んく廣くなつて來た。

十二45 8 団 我が國に産する木材は其
の種類頗る多し。

じゅん 「順」(名) 1 順

十一16 10 聞けば、雜誌の類は號の順
に並べておいて、〈略〉。

しゅんかん 「瞬間」(名) 1 瞬間

十一87 5 〈略〉。「かう思ふ瞬間、
つかれも何も忘れてしまつて、僕も
思はず「萬歳。」と叫んだ。

しゅんきこうれいさい 「春季皇靈祭」
(名) 1 春季皇靈祭

七109 4 団 彼岸ハ七日ノ間ニシテ、其
ノ中日ニ、春ハ春季皇靈祭、秋ハ
秋季皇靈祭ヲ行ハセラル。

じゅんじ 「順次」(副) 2 順次

十三5 7 今度は前と反對に、順次に三
段を下つて、海と同じ水面に浮ぶ。

十一21 4 〈略〉最初の裁判に不服な
者は、控訴院・大審院にと順次に上
訴する。

じゅんじゅん 「順順」(副) 1 順々
に

十一84 2 〈略〉、三十人の一組は二列
になつて、順々に水の中へとはいつ
て行く。

じゅんじょ 「順序」(名) 2 順序 順

序

十一754 図 そこで先づ順序として萬

葉集の研究を始めたところが、〈略〉。

十一759 図 たゞ注意しなければなら

ないのは、順序正しく進むといふこ
とです。

じゅんせいけつぱく 「純正潔白」(形

状) 1 純正潔白

十二615 図 〈略〉、白地は我が國民の

純正潔白なる性質を示し、〈略〉。

じゅんたろうくん 「順太郎君」(人名

1 順太郎君

十三1 高橋さんは、すぐ前に居る順

太郎君を見て、「〈略〉」。

じゅんび 「準備」(名) 1 準備

十二718 図 〈略〉、まだ父上を迎へる準

備が整つてゐないといふのを口實に
して、〈略〉。

しゅんぶん 「春分」(名) 2 春分

十一928 図 太陽暦は春分から春分ま

でを一回歸年といつて、〈略〉。

十一928 図 太陽暦は春分から春分ま

でを一回歸年といつて、〈略〉。

しゅんらん 「春蘭」(名) 1 春蘭

九324 図 〈略〉、やぶかうじの赤い實に

並んで、春蘭のつぼみのふくらん
だのも見える。

しよ 「所」 ↓ あんざいしよ・くさいば

んしよ・さいばんしよ・さんかしよ・

じむしよ・しやむしよ・じゅうさんか

しよ・じようせんじよ・しよくじ

じよ・せいぞうしよ・せいまいじよ・

せんめんじよ・ちほうさいばんしよ

しよ 「書」(名) 2 書 ↓ ちようぜい

でんれいしよ・のうぜいこくちしよ・

めいめいしよろうどく

十985 図 書をしたゝめて張世傑を

招け。

十一65 図 論語は、〈略〉面目をう

かゞふを得べし。今此の書によりて

其の一端を述べん。

しよ 「署」 ↓ けいさつしよ

しよいちねん 「初一念」(名) 3 初一

念

十一1295 図 鐵眼の深大なる慈悲心と、

あくまで初一念をひるがへさざる熱

心とは、〈略〉。

十二1096 彼の初一念は年と共に益々

固く、〈略〉。

十二1336 堅忍不拔あくまでも初一念

を通すねばり強さが缺けてはゐない

か。

しよう 「正」(話手) 2 正

四324 正「山びこは何のこと

でございますか。」「正太郎」の

略

四328 正「はい。」「正太郎」の略

しよう 「小」 ↓ くがつしようさんじゅ

うにち

しよう 「性」(名) 1 しやう

七176 しやうの強いもので、一度種

が地に落ちれば、年年其所で花がさ

く。

しよう 「将」 ↓ りようしよう

しよう 「商」 ↓ ほうえきしよう

しよう 「賞」(名) 1 賞

七1084 図 〈略〉、軍功の賞として、清正

に名刀をあてへました。

しよう 「衝」 ↓ かいおうせいしよう

しよう 「背負」(五) 3 しよふ

《一ツ》

五391 図 〈略〉物賣に來るおちいさん

が、紺のふろしきづつみをしよつて

來て、〈略〉。

七271 畠山重忠はひよどりごえのさ

か落しに、馬をしよつて下りたとい

ふし、〈略〉。

九332 図 〈略〉、ふろしき包をしよつた

せなががじつとりと汗ばんで來る。

しよう 「仕様」(名) 1 しやう

十二1299 図 〈略〉、大勢は人力の如何

ともしやうのないもので――。

しよう 「使用」(名) 3 使用

十一6610 図 〈略〉、マツチの使用が廣ま

るにつれてすたつて來た。

十一782 此のやうに便利なものも、

其の使用に馴れきつてしまつてゐる

我々は、〈略〉。

十一794 かうして出來た貨幣は極め

て使用に便利ではあるが、〈略〉。

しよう 「飼養」(名) 1 飼養

十554 図 〈略〉傳書鳩の改良に力を用

ひ、其の飼養を奨励してゐる。

じよう 「上」 ↓ がくもんじよう・こう

こうじよう・せいかつじよう・せいじ

じよう・せつだんだいじよう・ちきゅ

うじよう・とりあつかいじよう・ほう

えきじよう

じよう 「文」 ↓ いちじよう・いちじょ

うごしやく・さんじよう・さんびやく

よじよう・じゅうごろくじよう・に

じゅうじよう・にじよう・ひやくよ

じよう

じよう 「条」 ↓ じゅうさんじよう

じよう 「状」(名) 1 状 ↓ じようか

いじよう・ねんしじよう

十一1271 図 鐵眼此の状を目撃して悲

しみにたへず。

じよう 「城」 ↓ おうしやくじよう・おお

さかじよう・ちはやくじよう・なごや

じよう・ふしみじよう

じよう 「情」(名) 4 情

九367 図 〈略〉、正義の念と愛國の情

とに死を恐れざるベルギー軍の防戦

も、〈略〉。

十一111 図 〈略〉、王は信賴の情を面にあ

らはして、フィリップを見下してゐ

た。

十704 図 旅僧もまた主人夫婦の情心

にしてみ、そゞろに別れがたき思あ

り。

十二648 図 〈略〉、國民の之に對する

尊敬は、即ち其の國家に對する忠愛

の情の發露なり。

じよう 「場」 ↓ いちじよう・けいば

じよう

じょう 「置」 ↓さんじょう・にじょう・ろくじょう

しょういち 「正」 「話手」 1 正一

三38 / 正一「してみませう。ぼくは右のちか道の方をいつてみます。」

しょういち 「正二」 「人名」 7 正一

三20 / 小二郎は正一とうらの山へわらびをとりいきました。

三23 / そのとき正一のおちいさんが、たきぎをうまにつけてそこへきました。

三39 / 略「小二郎の方が、正一よりもかへつてさきにつきました。」

九56 / 正一の家でも、親子三人、庭にすゑた打臺の前に並んで、麥を打つてゐる。

九57 / 略「正一も大分役に立つやうになつたなあ。」

九58 / 略「母もすげ笠をそちらへ向けて、略、正一を見てにつこりした。」

九58 / 正一のうちの人たちに手つだひもまじつて、七八人の男や女が向ひ合つて、略。

じょういん 「乗員」 (名) 5 乗員
九61 / 千数百人の乗員は、今もなほ安らかに眠を續けてゐる。

九62 / すると乗員は、一せいに飛起きて、手早くつり床をくゐる。

九63 / 略「千数百人の乗員が號令にしたがつて、規律正しく活動する其の様は、略。」

九65 / そこで始めて乗員は顔を洗ふ。九67 / 軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は、これから訓練に取掛るのである。

じょういんいちどう 「乗員一同」 (名) 1 乗員一同
九67 / 略「艦長をはじめ乗員一同は、皆姿勢を正して、軍艦旗に敬禮する。」

しょうが 「生薑」 (名) 1 しょうが
九100 / 其の隣の島にしょうがが、根ぎはの赤い所を少し土からあらはして、ぎやうぎよく並んでゐるのも美しい。

じょうか 「城下」 (名) 1 城下
九71 / 略「昔は竹に雀の紋所で名高い仙臺様の城下であつた。」

じょうかい 「商会」 (名) 1 商会
十121 / 略「外國の或商會で、新聞紙に店員入用の廣告を出した。」

じょうがい 「城外」 (名) 2 城外
十二91 / 略「或時、父王と共に城外に出て、農夫の働く様を見廻つたことがある。」

十二92 / 略「しかし彼は城外に出る毎に、かなさを感じた。」

じょうかいじょう 「紹介状」 (名) 2
九62 / 紹介状 紹介状

十121 / 略「中には知名の人の紹介状を持つて來た者や、略。」
十124 / 略「りつばな人の紹介状よりも、何よりも、本人の行がたしかな保證です。」

しょうがく ↓じんじょうしょうがくくごくとうほんまきじゅういち・じんじょうしょうがくくごくとうほんまきじゅうに
しょうがくせい 「小学生」 (名) 3 小学生
七52 / 略「日本中の小學生、八百萬人ありといふ。」

七54 / 略「八百萬の小學生、四列になりて歩かんか、八十萬間つゞくべし。」

十61 / 略「大方は略」 献木にて、中には小學生の奉りたるものも少からず。

じょうかする 「消化」 (サ変) 1 消化する 《ーシ》
十二136 / 略「他國の文明を消化して、之を巧みに自國のものとすることは、略。」

しょうがつ ↓おしょうがつ
しょうがつこう 「小学校」 (名) 3 小学校
七62 / 略「日本中の小学校、三萬近くありといふ。」

十一106 / 略「殊に日本人の小學校ありて、御前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては、略。」

十二120 / 略「途中、小学校の前を通りては、郷里の學校のおもしろかりしことなど思ひ出し申候。」
じょうかん 「上官」 (名) 1 上官
九118 / 略「總べて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。」

じょうかんばん 「上甲板」 (名) 1 上甲板
九61 / 略「副長もはや上甲板にあらはれて、今日の天氣はどうかと空をながめる。」

じょうかんばんあらい 「上甲板洗」 (名) 2 上甲板洗
九63 / 略「そこで五分間の休けいがあつて、上甲板洗となる。」

九64 / 略「上甲板洗は水兵の受持で、先づ略」のラツパが一きは高くひゞき渡ると、略。」

じょうかんばんあらいかた 「上甲板洗方」 (名) 1 上甲板洗方
九64 / 略「間もなく當直將校から威勢のよい號令がかかる。上甲板洗の方。」

じょうぎ ↓すいじょうぎ
じょうぎょう 「商業」 (課名) 2 商業
十二22 / 略「第六課 商業」

じょうぎょう 「商業」 (名) 5 商業
十一104 / 略「唯商業の取引の盛な部分は、相當に活氣を帯びてをり、略。」

十一117 / 略「上海は専ら商業の都市として知られてゐるが、略。」

十二117 / 略「上海は専ら商業の都市として知られてゐるが、略。」

十二117 / 略「上海は専ら商業の都市として知られてゐるが、略。」

十二117 / 略「上海は専ら商業の都市として知られてゐるが、略。」

- 十二22 商業は之に従事する商人だ
けを利用するためのものではない。
- 十二23 昔は個人の利益を営むのが
商業であると思はれてゐた。
- 十二24 略、随つて商業の本質が
理解されず、商人の人格が重んぜら
れなかつたからである。
- しょうぎょうち 「商業地」(名) 1 商
業地
- 八73 6 此所は有名な商業地ですが、
りつばな学校もありますし、略。
- じょうきりよく 「蒸気力」(名) 2 蒸
気力
- 十二115 9 諸機械の原動力であつた
人力又は蒸気力もだんく電氣に變
つて、略。
- 十二116 3 略、石炭の火力による
蒸気力は、多くの場合之に敵するこ
とが出来なくなりました。
- しょうぐん 「將軍」(名) 6 將軍 ↓
エンミツとしょうぐん・にしょうぐ
ん・パルメニオしょうぐん・りよう
しょうぐんのあくしゅ・レマンしやう
ぐん
- 八16 3 九つの時から將軍の若君竹千
代のおつきになつた。
- 八17 1 將軍秀忠が刀を取つて出て見
ると、長四郎であつた。
- 八18 1 將軍は長四郎を大きな袋へ入
れて、「略。」といつて、袋の口を
封じて柱に掛けた。
- 八18 4 翌日になつて、將軍が又たつ
ねたが、始のやうに答へた。
- 八18 7 將軍はあとで、御臺所に、
「略。」といつたといふことである。
- 九39 5 略、敵の將軍ステッ
セル 乃木大將と會見の 所はいづ
こ、水師營。
- じようげ 「上下」(名) 2 上下
- 六84 5 全く上下の者が心を一にして、
國難にあたつたのである。
- 八31 4 さて山の本を略、きりそろ
へ、それを略、立て並べ、よくも
えるやうに其の上下にそだを置き、
又其の上に略。
- じようげする 「上下」(サ変) 2 上
下する 『スル』
- 十33 2 略、掘割の處處に水門を設
けて、たくみに船を上下する様にし
てある。
- 十一62 10 略、唯僅かに十勝川を上
下するアイヌの丸木舟の便をかりる
に過ぎなかつた。
- しょうけんこうたいこう 「昭憲皇太后」
(人名) 1 昭憲皇太后
- 十二24 4 明治天皇・昭憲皇太后、御
二方のおほみたま、とこしへに此所
に略。
- しょうこ 「小湖」(名) 2 小湖
- 十34 4 小湖
- 十34 4 小湖
- しょうご 「正午」(名) 3 正午
- 六104 5 昨日正午にこちらへ着いて、
午後外宮へ参り、今日内宮へ参つた。
- 八65 2 ひとりさんは一昨日の正午
無事にサンフランシスコへ着きまし
た。
- 十一27 1 略、二十日の正午大岩
山の敗報至る。
- じようこう 「將校」(名) 1 將校 ↓
とうちよくしやうこう
- 九118 5 將校も兵士も皆一つになつ
て働かなければならない。
- じようこう ↓かめやまじやうこう
- じようこうき 「昇降機」(名) 3 昇
降器 昇降器
- 十79 9 略、案内の事務員と一所に
昇降器に乗りました。
- 十80 1 昇降器がすさまじい勢で下り
て行くので、目がまはりさうです。
- 十80 5 昇降器を下りて、あたりを見
まはすと、周囲の壁は皆石炭で、
略。
- じようこうぎやう 「商工業」(名) 2
商工業
- 七28 6 今ハ商工業サカンニシテ、
大工場多ク、略。
- 八95 9 商工業盛ニシテ、焼物・塗
物・扇・綿絲・織物等ノ産出頗ル多
シ。
- じようざ 「上座」(名) 2 上座
- 十71 4 略、最明寺入道時頼は
るかの上座より、「それなるは佐野
源左衛門常世か。
- 十一70 3 三人とも物を言つてしまつ
たので、上座の老僧がもつたいらし
- い顔をして、「略。」
- じようざくくん 「正作君」(人名) 1
正作君
- 六40 6 正作君と大工の松さんは工
兵、力松君は砲兵、略。
- じようざん 「正」(人名) 1 正さん
- 三30 3 ねえさんこれをあげ
ます。」と、略、さし出せば、
「正さんこれはありがたう。」
- じようざん 「勝算」(名) 1 勝算
- 十一26 7 此のまゝ、新手の兵を迎へ
ては、萬に一つの勝算もなし。
- じようし 「將士」(名) 1 將士
- 十二80 1 略、まるで凱旋の將士の
やうに見える。
- じようじ 「小事」(名) 1 小事
- 十二128 9 略、徳川家の存亡など
は言ふにも足らぬ小事でござります。
- じようじ 「小時」(名) 1 少時
- 十一48 4 少時より學問に勵み、長
じて後魯の君に仕へ、略。
- じようじ 「障子」(名) 6 シヤウジ
しやうじ 障子
- 二54 5 ソレデハシヤウジノム
カフニオスワリナサイ。
- 四41 1 一番先にしやうじやか
らかみが外へ出されました。
- 八38 しやうじを明けて見ると、小
さな犬ころが二匹、略。
- 九22 2 略、たて切つてあるしやう
じのやぶれを、秋風がはたはたとあ
ふる。

- に大きな變動を生じたのである。
- 十一32 此の黒點は多分表面に生ずるうづ巻であらうといふ。
- 十一504 〈略〉パラ州から産出したので、パラゴムの名が生じたわけである。
- 十二1347 〈略〉、いざといへば、舉國一致國難に當る氣風を生じた。
- じょうずる 「乗」(サ変) 1 乗する
- 《一ジ》
- 十二228 買ふ人の無智に乗じて安い品を高く賣付け、〈略〉。
- しょうせん 「商船」(名) 1 商船
- 七75 図 〈略〉一大貿易港にして、商船の出入たゆる時なし。
- じょうせんじょ 「乗船所」(名) 1 乗船所
- 九76 6 〈略〉、停車場に續いた乗船所から汽船に乗るのである。
- しょうぞうが 「肖像画」(名) 1 肖像畫
- 十293 〈略〉、其の肖像畫は到る處の店頭に飾られた。
- しょうそく 「消息」(名) 1 消息
- 十二117 10 図 〈略〉、陸上でも海上でも自由に消息を交換することが出来るやうになりました。
- じょうそ・する 「上訴」(サ変) 3 上訴する 《一シースル》
- 十一217 ところで、區裁判所の裁判に不服な者は地方裁判所に上訴し、尚其の裁判に不服な者は〈略〉。
- 十一212 〈略〉地方裁判所に上訴し、尚其の裁判に不服な者は更に大審院に上訴する。
- 十一214 又地方裁判所で行はれた最初の裁判に不服な者は、控訴院・大審院にと順次に上訴する。
- しょうそつ 「將卒」(名) 5 將卒
- 九363 図 〈略〉勇將レマンは、部下の將卒をはげまし、〈略〉。
- 九369 図 〈略〉、要塞は全く破くわいせられ、將卒は多く戦死せり。
- 十一258 図 〈略〉要所々々にそれ／＼將卒を配置したり。
- 十一265 図 味方は今日の戦に將卒共につかれ果てて、物の用に立つべくもあらず。
- 十一274 図 〈略〉、やがて將卒のそろふをも待たず、「者ども續け。」と馬にむちうつて近江に向ふ。
- じょうたい 「状態」(名) 1 状態
- 十一17 一口にいへば、白熱の状態にある一大火球で、〈略〉。
- しょうたろう 「正太郎」(人名) 2 正太郎
- 四302 正太郎が犬をつれて、山道を通りました。
- 四312 正太郎がおこつて、「ばか」といひますと、又向ふで、「ばか」と口まねをします。
- しょうち じょうちょうち
- じょうちする 「承知」(サ変) 1 承知する 《一シ》
- 十二1259 〈略〉會見を求めた。西郷は早速承知して、芝、高輪の薩摩屋敷で會見したが、〈略〉。
- じょうちゅう 「城中」(名) 2 城中
- 六926 城中には十分水の用意がしてあつた。
- 六946 或朝、夜明頃、城中からうつて出て、どつとときの聲をあげた。
- じょうてん 「昇天」 じきよくじつしうてん
- じょうてん 「商店」(名) 1 商店 ↓ だいしじょうてん
- 八929 げんに此の學校の卒業生で、商店の番頭になつてゐる者もあれば、〈略〉。
- じょうてんち 「小天地」(名) 1 小天地
- 十二1353 〈略〉、徒に此の小天地を理想郷と觀じて、世界の大勢を知らぬ國民とならしめた。
- じょうてんれいし 「小伝令使」(名) 1 小傳令使
- 十588 〈略〉、此の勇ましい小傳令使にたよるより外はない。
- しょうとくきゅう 「昌徳宮」(名) 1 昌徳宮
- 十7510 図 〈略〉、松林を後にして右に昌徳宮、左に景福宮の壮大な構がある。
- しょうとつ 「衝突」(名) 1 衝突
- 七581 図 〈略〉、外の船に自分等の船の居ることを知らせて、衝突をさけるためであります。
- じょうとつする 「衝突」(サ変) 1 衝突する 《一シ》
- 七575 図 〈略〉、外の船に衝突したりするやうなまちがひが出来ます。
- しょうにん 「商人」(名) 5 商人
- 十二222 商業は之に従事する商人だけを利用するためのものではない。
- 十二223 商人たる者は、よく共同生活の眞意義を辨へ、〈略〉。
- 十二247 それ故大多數の商人は、自己の利益を除いては、殆ど何物をも眼中に置かず、〈略〉。
- 十二246 〈略〉、随つて商業の本質が理解されず、商人の人格が重んぜられなかつたからである。
- 十二1219 図 〈略〉、一日も早く一人前の商人となりて、〈略〉。
- しょうねん 「少年」(名) 8 少年 ↓ ウェリントンとしようねん
- 九218 病みつかれた六十ばかりの老人が、ふとんの上に起直つて、十五六の少年に、熱心に何か言聞かせてゐる。
- 九219 少年はひざに兩手をついて、老人の顔をじつと見つめながら聞いてゐる。
- 九245 少年はてつびんの湯をついで老人にすゝめた。
- 九277 目に涙を一ぱいたためて聞いてゐた少年は、固い決心を顔にあらはして、實行をちかつた。

- 十二142 さうして廣く動植物を研究して、生物は總べて〈略〉進むものであるといふことを證明した。
- しょうめいよう「照用」(名) 1 照用
- 十二1118図〈略〉、公園・街路等の照用としては適當なれども、〈略〉。
- しょうめん「正面」(名) 1 正面
- 九1072 味方は其の正面から眞一文字に進んで行く。
- じょうもん「城門」(名) 1 城門
- 六934 正成は此の旗を城門に立てて、さんくへ賊を惡口させた。
- しょうや「庄屋」(名) 11 庄屋 庄屋
- 五691 〈略〉、此の村の庄屋が、村のことをいろくと考へたすゑ、〈略〉。
- 五704 〈略〉、庄屋は方々の村へ用水池を見に出た。
- 五707 〈略〉、庄屋は普請方をよそからつれて来た。
- 五736 庄屋は村の者にいろく言つて聞かせて、土手をつきなほしたが、〈略〉。
- 五742 かうなつては、もう庄屋の惡口を言ふ者ばかりで、〈略〉。
- 五744 それでも庄屋はくじけなかつた。
- 五746 其の賃錢をみんな庄屋が自分のところから出した。
- 五762 〈略〉、をしいことに、庄屋は池が出来上つた年の冬、死んでしまつた。
- 五768 〈略〉、庄屋の妻は子どもをつれて里へ歸つてゐた。
- 五773 其の後村の人は、庄屋の家屋敷や田地を買ひもどして、〈略〉。
- 五785 此の山の杉も庄屋が先に立つて植ゑたのださうだ。
- しょうゆ「醬油」(名) 1 醬油
- 九545図 社長さんは〈略〉、醬油のはかり賣を始めた。
- しょうゆや「醬油屋」(名) 1 醬油屋
- 九515図 主人の家が大きな醬油屋だつたので、始は近在の小賣店へ、〈略〉。
- じょうよ「丈余」(名) 1 丈餘
- 十一815図 丈餘のろかい操りて、行手定めぬ浪まくら、〈略〉。
- しょうよう「商用」(名) 2 商用
- 七609図 〈略〉、大きくなつてから、商用其の他で、外國へ出かける人もありませう。
- 九11910 〈略〉、商用デ四國ノ方へ旅行シテキタ父ガ、〈略〉。
- しょうよう「從容」(形状) 1 從容
- 十1003図 天祥刑せらるゝにのぞみ、從容としてはいはく、「臣が事終る。」と。
- じょうよう「乗用」(名) 2 乗用
- 七262 走ることがはやくて、乗用としてはこれにまさる動物がない。
- 七266 戦争の時には乗用としても、輸送用としても、きはめて大切なものである。
- しょうらい「將來」(名) 3 將來
- 十一687 將來は又どんなものが發明されて、今のガスや電氣にかはることであらうか。
- 十一708 〈略〉、將來學問を以て身を立たたいと、一心に勉強してゐた。
- 十二1166 〈略〉、將來益々水力電氣の利用をはからなければならぬことを力説した。
- しょうらん「照覽」(名) 1 照覽
- 七988図 神々も照覽あれ、戦一つ出来ず、人のかげごとばかりいふ石田めとは、此の清正一生中直りは致さぬ。
- しょうり「小利」(名) 1 小利
- 十二233 〈略〉、つまりは小利をむさぼつて大損を招く結果になる。
- しょうり「勝利」(名) 3 勝利
- 八77 五人の騎手は神に勝利をいのつて、第二のあひづを待ちかまへてゐる。
- 八94 二人を出した村の者は、たがひに勝利をいひはるので、〈略〉。
- 九1114 〈略〉、又自分の最愛の主人に味方の勝利を語るやうに、一聲高く天に向つていなゝいた。
- じょうりくいん「上陸員」(名) 1 上陸員
- 九6510 其の中に上陸員が歸艦する。
- じょうりくさ・せる「上陸」(下) 1 上陸させる 《一セ》
- 六802 元の兵は一人も上陸させぬといふ意氣こみで、〈略〉。
- じょうりくす「上陸」(サ変) 1 上陸す 《一シ》
- 十二857図〈略〉、コーニ・林藏等の一行八人は、〈略〉間宮海峡を横ぎり、デカストリ一灣の北に上陸したり。
- じょうりゅう「上流」(名) 1 上流
- 六462 ダンく上流ニサカノボツテ、〈略〉淺イ所マデ上ツテ來ル。
- じょうりゅうちほう「上流地方」(名) 1 上流地方
- 八199図 此ノ河ノ上流地方ヨリ木材ヲキリ出シ、之ヲイカダニ組ミテ河ヲ下スコトアリ。
- しょうれい「省令」(名) 1 省令
- 十二89 法律の外に勅令・閣令・省令・府縣令等の命令がある。
- しょうれいする「奨励」(サ変) 1 奨励する 《一シ》
- 十554 〈略〉、今では各國共に盛に傳書鳩の改良に力を用ひ、其の飼養を奨励してゐる。
- じょうろ (名) 1 ジョウロ
- 三687 〈略〉水デツバウヲジョウロノカハリニシヨウトオモツテ、〈略〉。
- しょうろどおり「鐘路通」(地名) 1 鐘路通

十747 南大門通から本町通・鍾路通にかけての一带が、京城で一番にぎやかな處です。

ジョージー (人名) 7 ジョージー

十一118 4 ジョージー、早く行つて農場の門をしめろ。

十一118 7 ジョージーがとんで行つて門の戸にくわんぬきをさすが早いか、騎馬の人たちは「略」。

十一118 9 さうしてジョージーに早くあけて通すやうにと言つた。

十一118 10 するとジョージーは、「略」。

十一119 6 しかしジョージーは依然として、「略」とくり返すばかりであつた。

十一120 4 ジョージーは、かねて「略」聞いてゐたので、帽子をぬいで恭しく敬禮して、さて静かに口を開いた。

十一121 3 ジョージーは後を見送つて、帽子を振りながら叫んだ。

しよがいこく「諸外国」(名) 3 諸外国

十二61 1 今我が國を始め主なる諸外國の國旗に就いて述べん。

十二64 10 「略」、諸外國の國旗に對しても、常に敬意を表せざるべからず。

十二128 3 「略」、今日日本の周圍には諸外國が様々の考を持つて見てをるので、「略」。

しよかつこうめい「諸葛孔明」(人名)

1 諸葛孔明

十一113 1 「略」、其の名はくちせず、諸葛孔明。

しよきかい「諸機械」(名) 1 諸機械

十二115 8 諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力もだん／＼電氣に變つて、「略」。

しよく「色」 ↓ あいしろあかさんしよく・けいかいしよく・ごしよく・さんしよく・ほごしよく

しよく「食」(名) 1 食

十一79 9 「發憤しては食を忘れ、樂しんではうれひを忘れ、「略」。

しよく「飾」 ↓ まんかんしよく

しよく「職」(名) 1 職

十一410 4 「略」、久しく其の職に居ることあたはずして誓を去りぬ。

しよくかん「蜀漢」(地名) 1 蜀漢

十一112 3 蜀漢の國、漢中王はおごそかに帝の位をふませ給ひぬ。

しよくぎよう「職業」(名) 1 職業

八58 7 スベテ看板ハ商品又ハ職業ノ名、屋號等ヲ記シテ、「略」。

しよくじ「食事」(名) 4 食事

八45 2 「略」、昨朝あたりから熱が下つて、食事に進むやうになりましたので、「略」。

八100 3 「略」、耳は食事の知らせを聞いても、聞かないふりをし、「略」。

八113 8 「略」、三度三度の食事に、必ず其のきらひな物ばかり出して、

「略」。

九66 6 一時間餘りも活動した後であるから、食事のうまいことはいふまでもない。

しよくじよ「食事所」(名) 2 食事所

十56 4 「略」、一方を食事所とし、飼養所から食事所へ通つて食物を取るやうに馴らして、「略」。

十56 5 「略」、飼養所から食事所へ通つて食物を取るやうに馴らして、「略」。

しよくじよ「食事」(サ変) 1 食事する

十57 1 「略」、四五キロメートルの處を往復して食事するぐらゐは何でも無い。

しよくじよ「食事用意」(名) 1 食事用意

九66 4 間もなく食事用意のラツパがひびく。

しよくたく「食卓」(名) 2 食卓

八76 2 「略」、つと立つて、食卓の上のうで卵を取り、「略」。

八76 9 「略」、こつんと卵のはしを食卓にうちつけ、何の苦もなく立てて申しました。

しよくどう「食堂」(名) 3 食堂

五102 1 又洗面所もあれば、食堂もあります。

八100 6 さうしてそれから後は、耳は

「略」、足は食堂へ行くことを止めた。

十二33 2 塔の中には賣店もあり、音楽堂・食堂なども設けられてあります。

しよくぶつ「植物」(題名) 2 植物

七目9 第十九 海ノ生物「略」二植物

七84 7 二植物

しよくぶつ「植物」(名) 8 植物 ↓

七79 5 「略」イロ／＼ノ動物ガスンデ居リ、又サマザマノ植物モ生エテ居ル。

七84 9 コンナ所ニハ、動物モゴクマレデ、植物ハ全クナイガ、「略」。

七87 6 根ノヤウナ所モ、陸上ノ植物ノ様ニ養分ヲ吸取ルタメノモノデハナイ。

九51 1 「略」先づ目につくのは植物で、其の中でも殊に珍しいのはコ、椰子の木やパンの木などです。

九71 1 珍しい植物は此の外にもまだたくさんあります。

九72 2 これ等の植物が思ふまゝに茂つてゐる様子は實に見事です。

十103 3 「さあ、今度は葉のきれいな植物を集めてある處だ。」

十一49 8 ゴムは、熱帯地方に産する或植物からとる白色の液を原料として、製造したものである。

しょくむ 「職務」(名) 5 職務

九一八 〇 總べて上官の命令を守つて、

自分の職務に精を出すのが第一だ。

十一二六 〇 其の他の教員も、校長を模範として専心職務につとむるが故に、

「略」。

十一二七 〇 裁判を行ふのは判事の職務であり、「略」。

十一二八 〇 「略」、刑事裁判で、國家を代表して犯罪者の處罰を求めるのは検事の職務である。

十一二九 〇 公吏・議員等、直接間接に公共の事務に當る者は、如何に其の職務に忠實であつても、「略」。

しょくもつ 「食物」(名) 12 食物 ↑ たべもの

八五九 〇 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、今ナホ古風ヲ守リテ、せきぞ(キツバ)「略」ナドト記シテ、軒二下ゲタルモアリ。

八六〇 〇 さうしてそれから後は、耳は「略」、目は食物を見ても、見ないふりをし、「略」。

八六五 〇 さうしてそれから後は、耳は「略」、手は食物を口へ入れることを止め、足は食堂へ行くことを止めた。

八六八 〇 「略」、僕が若し食物をこなさなかつたなら、からだを養ふ所の血がどうして出來ませう。

八七二 〇 「略」、此の數日の間少しも食物を送つてよこしませんでした。

八八〇 〇 君等が若し僕に食物を送る爲に働いたといふなら、僕もまた君等を養ふ爲に骨を折つたといひます。

八八七 〇 大將が何か食物の中にきらひな物があると見れば、「略」。

八八八 〇 其の爲、大將には全く食物に好ききらひといふものがないやうになつた。

八八六 〇 「略」、飼養所から食事所へ通つて食物を取るやうに馴らして、「略」。

八八七 〇 火の熱は、初め主として食物を調理するのに用ひたもののやうであるが、「略」。

八八九 〇 一家の暮し向は誠にあはれなもので、食物なども自由には得られず、「略」。

八九〇 〇 今度は程よく食物も取り、休息もした。

しょくりよう 「食料」(名) 1 食料 九六八 〇 其の實は土人の一番大事な食料で、焼いて食べたり、餅にして食べたりします。

しょくりん 「植林」(課名) 2 植林 十一一〇 第九課 植林

十一一五 〇 第九課 植林 しょくりん 「植林」(名) 2 植林 十一二六 〇 青年團の事業の一として、杉・檜の植林を營めり。

十一四〇 〇 「植林は貯金のやうなもので、植ゑてさへおけば、年々太つて利息が附いて行く。」

しょくりんち 「植林地」(名) 1 植林地

十一三六 〇 「略」、明日の用意に出しておいた植林地の書付を開いて見る。

しょくん 「諸君」(代名) 3 諸君 ↓ せいねんしょくん 八七四 〇 諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立ててごらんさい。

八七三 〇 「諸君、これも人のした後では、何のさうさもない事でございませう。」

八七六 〇 それにつけても、諸君にも大いに奮發していただきたいのです。 じようこう 「女工」(名) 2 女工

八七九 〇 あれは製絲工場で、女工が四百人も絲を取つてゐる。

八八〇 〇 ベンタウワサゲテ來ル女工ハ、サツキカラ汽テキノ鳴ツテナル工場へ急グノデアラウ。

しょこうば 「諸工場」(名) 1 諸工場 十一一八 〇 上海は「略」、近時工業も次第に盛になつて、紡績・造船・製粉・製紙其の他の諸工場が勢よく黒煙を立ててゐる。

しょこく 「諸國」(名) 3 諸國 ↓ せいようしょこく・とうほうしょこく・とうようしょこく・ぶんめいしょこく 九二九 〇 それから諸國を歩き廻つたすゑ、「略」、此の山中へ來たのである。

十一一〇 〇 諸國の大名・小名きら星の如く並べる中に、常世はちぎれたる

具足を着け、「略」。

十二一〇 〇 僧は「略」もと越後の人、諸國の靈場を拜み巡つた末、「略」。

しよさむらい 「諸侍」(名) 1 諸侍 十二二五 〇 今度の勢ぞろへに集つた諸侍の中に、訴訟ある者は申し出るがよい。

しよしめ 「諸種」(名) 1 諸種 十二四七 〇 「略」、もみは柔かにして工作に便なれば、諸種の箱を作るに用ひられ、「略」。

しよしゅう 「諸州」(名) 1 諸州 十一一〇三 〇 「略」、此のブラジル國は、殊に溫帯に屬する南部の諸州にては、四季の變化も日本の如くはつきり致居候由、「略」。

しよしょう 「諸將」(名) 1 諸將 十二二七 〇 待ちまうけたる秀吉は、「略」、諸將を配置して防備をさせゑなし。

しよせいさん 「書生」(名) 1 書生さん 五九四 〇 「略」、かついで足をはらしてゐる書生さんが、お友だちへ出した葉書には、「略」。

じよせいと 「女生徒」(名) 1 女生徒 八八六 〇 「略」、間もなく黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。

しよせき 「書籍」(名) 1 書籍 十一一五 〇 一切經は、佛教に關する書籍を集めたる一大叢書にして、

《略》。

しょぞん 「所存」(名) 1 所存

十132 4 高徳せめては此の所存を君に知らせ奉らばやとて、《略》。

しよだいみょう 「諸大名」(名) 2 諸大名

七105 1 翌日諸大名が伏見城の大廣間へつめました。

八96 5 三百年前徳川家康が諸大名ニ命ジテ造ラシメタルモノニシテ、《略》。

じょちよう・する 「助長」(サ変) 1 助長する 《一スル》

十一117 1 又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、《略》、自治團體を助長するものであるから、《略》。

しよっこう 「燭光」(名) 1 燭光

十一2 5 光の強さに至つては非常なもので、之を燭光でいへば一三の下に零を二十六もつけて表さねばならぬ。

しよっこう 「職工」(名) 5 職工

八104 7 マツチの製造所へ行つて見ると、職工が大勢居つて、それ／＼手分をして働いてゐる。

十一121 9 《略》、マスクをかけた職工が珪砂にソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。

十一123 1 窯の周圍には、八九人の職工が汗を流して働いてゐる。

十一124 5 エプロンをかけた職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板にあてて模様をほりつけたり、みがきかけたりしてゐる。

十一124 8 隣の室では、職工が五六人ならんで、ガラス器にいろ／＼の模様をつけてゐる。

しよど 「初度」(名) 1 初度

十一129 10 かくて天和元年鐵眼が初度の募集を始めてより十八年の後に至りて、《略》。

しよどう 「諸道」(名) 1 諸道

十二124 7 《略》征討の官軍は諸道より並び進んで、東海道先鋒は品川に、東山道先鋒は板橋に着いた。

しよばつ 「処罰」(名) 1 處罰

十一21 8 《略》、刑事裁判で、國家を代表して犯罪者の處罰を求めるのは檢事の職務である。

しよもつ 「書物」(名) 9 書物

八62 6 保己一は五歳の時めくらとなりしが、人に書物をよませて、一心に之を聞き、《略》。

八62 8 《略》、後には名高き學者となりて、多くの書物をあらはせり。

八63 6 或夜弟子をあつめて、書物を教へし時、《略》。

九22 7 《略》、始めて農學をお修めになり、りつばな書物もお書きになつた。

九23 4 《略》、寢食を忘れて其の道の書物を読み、國々の實地を調べ、

本もあらはし、《略》。

十123 1 私はわざと一さつの書物を床の上に投げて置きました。

十123 3 《略》、あの青年ははいるとすぐに書物を取上げて、テーブルの上に置きました。

十一98 7 ところが家に書物がないばかりでなく、近くに圖書館もないので、どうしても人から借りて讀む外はなかつた。

十一98 9 熱心なリンカーンは、書物を持つてゐる人の所には遠近を問はず借りに行つた。

しよよう 「所用」(名) 1 所用

十一45 4 愚僧も所用ありて京に上り、或は二年滞在せんもはかり難し。

しよよう 「所要」(名) 1 所要

十二17 5 印刷部にては直に所要の活字を拾ひて之を組み、《略》。

しより・する 「処理」(サ変) 1 處理する 《一スル》

十一114 9 又市町村長が其の事務を處理するにも、《略》、常に此の公平な精神をもつてしなければならぬ。

しよりよう 「所領」(名) 1 所領

十68 3 《略》、それが一族どもに所領を奪はれて、此の通りの始末でございます。

じよりよく 「助力」(課名) 2 助力

七目12 第二十二 助力

七95 2 第二十二 助力

じよりよく 「助力」 ひきようどうじよりよく

しよんぼり (副) 2 しよんぼり

四78 6 私の下で、長い間しよんぼりとして居まして、《略》。

十105 9 其の枝の先にしよんぼりと止つてゐる鳥の姿も、見るから寒さうだ。

しらうめ 「白梅」(名) 1 白梅

十118 8 白梅は今ちやうど眞盛りであるが、其の間に咲きかけの紅梅が點々と交つて美しい。

しらが 「白髪」(名) 1 白が

三46 6 《略》、うらしまはたちまち白がのおぢいさんになつてしまひました。

しらかべ 「白壁」(名) 2 白壁

十一34 1 《略》、見渡す限り田園よく開けて、《略》、白壁の民家其の間に點在す。

十二36 6 《略》、湖畔に連なる緑樹・白壁、《略》雪をいたゞくアルプの連峯。

しらかべづくり 「白壁造」(名) 2 白壁造

五64 5 「神明様のこちらにある白壁造の家は工場ですか。」

五77 6 あの白壁造の土蔵のある家がそれだ。

しらかわ 「白河」(地名) 1 白河

九70 3 白河を通つたのは昨夜の十一時前であつた。

- しらかわのせき 「白河関」(名) 1 白河の關
- 九七〇六圖 都をば、かすみと共に立ちしかど、秋風ぞ吹く、白河の關。しらきづくり 「白木造」(名) 2 白木造
- 六四六二圖 一切白木造で、お屋根はかやでふいてある。
- 十一一〇圖 〈略〉、拜殿・廻廊など總べて白木造にて、神々しさととへん方なし。
- しらくも 「白雲」(名) 1 白雲
- 九九九一圖 富士山も、晴れた日には、白雲の上にかすかに見える事があるさうです。
- しらじら 「白々」(副) 2 しら／＼
- 十29六圖 しら／＼と、朝霧 野山をこめて〈略〉。
- 十30一圖 谷間よりはひ出で、木の幹ぬらし、しら／＼と、おぼろに 朝霧流る。
- しらす 「知」(下二) 1 知らす 《一スル》↓おんしらせくださる・おんしらせもうしあぐ
- 七112圖 發信人の居所氏名を受信人に知らせる必要あるときは〈略〉
- しらせ 「知」(名) 1 知らせ ↓おんしらせ
- 八104 〈略〉、耳は食事の知らせを聞いても、聞かないふりをし、〈略〉。しらせたてまつる 「知奉」(四) 1 知らせ奉る 《一ラ》
- 十132四圖 高德せめては此の所存を君に知らせ奉らばやとて、〈略〉。
- しらせる 「知」(下二) 6 知らせる 《一セ》↓おしらせする
- 六43二圖 其の中に又くはしい事を知らせよう。
- 六55三 〈略〉、木曾の家來手塚太郎光盛の娘が頼朝に仕へて居りました、之をさとつて、すぐに義仲の所へ知らせました。
- 七58一圖 〈略〉、かねや汽笛を鳴らすのは、外の船に自分等の船の居ることを知らせて、衝突をさけるためであります。
- 九87四圖 〈略〉、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。
- 十57九 飛行機の不時着陸地點を知らせたり、〈略〉、いろ／＼に利用する事が出来る。
- 十一73三 さうして新上屋の主人に、萬一御歸りに又泊られることがあつたら、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。
- しらたま 「白玉」(名) 1 白玉
- 十二123七圖 うるはしき眞玉・白玉にはひよき木の實、草の實、うづたかき積荷の中に 海山の寶を載せて、〈略〉。
- しらなみ 「白波」(名) 2 白波
- 十129七圖 見る／＼艦は速力を増して、白波高く海ををどり入る。
- 十一79一〇圖 我は海の子、白波のさわぐいそべの松原に、〈略〉。
- しらぬし 「白主」(地名) 4 白主 白主
- 十二82一〇圖 先づ樺太の南端なる白主といふ處に渡り、〈略〉。
- 十二85二圖 〈略〉、汝必ず之を白主に持歸りて日本の役所に差出すべし。
- 十二85圖 白主
- 十二87八圖 〈略〉、同年九月の半ば、白主に歸着しぬ。
- しらね 「白根」(地名) 2 白根
- 六67圖 「内地では甲斐の白根で、一万五百尺。」
- 六8二圖 奈良の春日山や三笠山は千尺そこ／＼だが、白根や槍岳よりも知られてゐるし、〈略〉。
- しらべ 「調」(名) 3 調
- 十129三圖 拍手かつさい、〈略〉萬歳の叫、勇壯なる軍樂の調、〈略〉一せいにあぐる歡呼の聲。
- 十二43九 〈略〉、やがて指がビヤノの鍵にふれたと思ふと、やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が次第々々にやみの世界を照らすやう、一轉すると、〈略〉。
- 十二44三 〈略〉、最後は又急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう驚と感激で一ぱいになつて、〈略〉。
- しらべかわ 「調車」(名) 1 調べかは
- 十一124四 調べかはの廻るにつれて、石や木や金の圓板が車輪のやうに廻つてゐる。
- しらべる 「調」(下二) 9 調べル
- 調べる 《一ベーベル》↓おしらべなされる・とりしらべる
- 八36三 〈略〉、一人の子どもに二人の實母はないはずといつて、いろいろ調べますが、どちらも實母だといひはります。
- 八43四 〈略〉、其の中に盗まれた品のありなしを調べさせました。
- 八43七 〈略〉、買先をたゞし、それからそれと調べましたので、とうとう罪人がわかりました。
- 九21三 動物ノ形や色デモ、注意シテ調べテミルト、コノヤウニイロ／＼フシギナ事ガアル。
- 九23一圖 しかし此の農學といふ學問は、種々様々の事を、實地と學理の兩方から調べて行かねばならぬので、〈略〉。
- 九23五圖 〈略〉其の道の書物を読み、國々の實地を調べ、本もあらはし、〈略〉。
- 九26三圖 〈略〉、主に海産物や水利の事を調べて、くはしく計畫を立てた事もあるが、〈略〉。
- 十84一〇圖 驚いて調べてみると、あたりは同じ眞黒な岩ばかりでした。
- 十一75三圖 古い言葉を調べるのに一番よいのは萬葉集です。

しらほ 「白帆」(名) 3 白帆
 九七五 青々とした波の上に、點々と
 白帆が浮んでゐるのは、〈略〉。
 十一三四図 〈略〉、朝日夕日を負ひて、
 島がくれば行く白帆の影ものどかなり。
 十二二八 ふもとの川を白帆が二つ三
 つ通つて行く。
 しら・む 「白」(四・五) 3 しらむ 白
 ム 白む 《一ミーム・ーン》
 六三二 東ガ白ンデ、屋根ノ霜ガ見え
 ルヤウニナツタ。
 九二四図 〈略〉、ほの／＼と 東の
 窓はしらみたり。
 九四一 東の空がほんのりと白む頃、
 〈略〉、列を正して並んだ。
 しらゆき 「白雪」(名) 1 白雪
 十二四二図 海原はみどりに晴れて、
 濱松の こずゑさやかにふれる白雪。
 しり 「尻」 ↓ やじり
 しり 「私利」(名) 1 私利
 十一一五 まして威力によつて強制す
 るとか、私利によつて勧誘するとか
 いふやうな手段を用ひたり、〈略〉。
 しりおし 「尻押」(名) 1 尻押
 十二四五図 すると其のうちには又思
 の外な尻押なども現れて、事めんだ
 うな筋合にならぬとも限りませぬ。
 しりぞく 「退」(四・五) 4 しりぞく
 退く 《一イ・キ》
 六八三 敵は一先づ沖の方へし
 りぞいたが、又おしよせて来るのは
 明らかである。

六九七 〈略〉、はじめ百萬騎といつた
 賊も、〈略〉、殘少になつて退いた。
 十九八 フィリップが藥を調合しに別
 室へ退いた後へ、〈略〉密書が届い
 た。
 十二二九図 〈略〉、常世は有難き身にし
 み、喜にみちて御前を退きけりとぞ。
 しりぞける 「退」(下二) 3 しりぞ
 ける 退ける 《一ケ》
 七二〇 海神ねがはくは潮を退けて、
 道を開かせたまへと念じて、〈略〉。
 十二六七図 〈略〉、——私がありとあ
 らゆる身の樂しみを退けても、ひた
 すら父上を大事に致すのを〈略〉。
 十二九五 さうして日夜次々に起つて
 来る心の迷をしりぞけて唯一筋に悟
 の道を求めた。
 しりたまう 「知給」(四) 1 知り給
 ふ 《一ヘ》
 十一四八図 「我が心に思ひ構へし
 事を如何にして知り給へるか。」
 しりゆう 「支流」(名) 3 支流
 五五七 雨水ノ流レル道ハ 〈略〉。本
 流ガアリマス。支流ガアリマス。
 八一九図 我が國第一ノ長流鴨緑江
 ノ如キハ實ニ其ノ支流ニモ及バザル
 ナリ。
 十一八六 〈略〉、黄浦江といふ支流
 に入り、更に十里餘りさかのぼる
 と、其の西岸にある上海に着く。
 しりよく 「死力」(名) 1 死力
 十六一〇 親子は死力を盡くして漕ぎに

漕いだ。
 しりん 「四隣」(名) 1 四隣
 十二六図 昔、大國主命賊を平げ
 民をなつて、威勢四隣に並ぶもの
 なし。
 しる 「知」(四・五) 68 しる 知ル
 知る 《一ツ・ラー・ール》 ↓ おも
 わずしらず・みずしらず
 三二四図 「おまへはてのゆびの
 なをしつてゐますか。」
 三二五図 「おまへはてのゆびの
 なをしつてゐますか。」しつ
 てゐます。
 三二六図 それではあしのゆび
 のなをしつてゐますか。
 三二七図 村のやうすもすつ
 かりかはつてゐます。しつてゐ
 るものは一人もありません。
 四六八 〈略〉、うちのものは朝
 までしらずに居ました。
 四七四 〈略〉、水が出たりしたこ
 とをみんな見て知つて居ます。
 四七五 私ハ 〈略〉おちいさんや
 おばあさんを其のわかい時か
 ら知つて居ました。
 四九六 すけつねも人に知られた
 さむらひ、〈略〉。
 五三〇 〈略〉、先生が知らない生徒を
 一人つれてお出でになりました。
 五三七図 〈略〉、鶏のついてゐるわけ
 は知つてゐるだらう。
 六八三 奈良の春日山や三笠山は千

尺そこ／＼だが、白根や槍岳よりも
 知られてゐるし、〈略〉。
 六四三図 「春子、お前ハ着物ヤ帶ノ
 地ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマス
 カ。」
 六四五図 「毛絲デス。」「サウ、ヨク
 知ツテキマシタ。」
 六五七図 「サウデス。マダアリマセ
 ウ。」「モウ知リマセン。」
 六八五 うちの人ハみんな知らずに居
 るから、一つ取つて行つて見せよう
 と思つて、〈略〉。
 七二九 〈略〉、つかんで見せると、ふ
 りかへつたのは知らない人であつた。
 七三〇 何時か知らない人とも話し合
 ふやうになつて、〈略〉。
 七三二図 〈略〉、星が出てゐれば、そ
 れにたよつて方角を知ること出來
 るし、自分の船の居場所を知ること
 も出來ます。
 七三三図 〈略〉、星が出てゐれば、そ
 れにたよつて 〈略〉、自分の船の居
 場所を知ること出來ます。
 七三四図 此の星を見分けることや、
 燈臺のあかりを知ること、船に乗
 る者に取つて、〈略〉。
 七三六図 「これ、おばあさん、お前
 は知つてゐるだらう。」
 七三七図 今天下に此の石田を知らぬ
 者はあるまい。
 八二七図 楊子江ノ大ナルコトコレニ
 テモ知ルベシ。

ぬぐひと物さしが景物にはいつてゐ

ました。

七112 さうしてさをの先に、赤いし
るしのあるはんてんをしぼりつけて、
「皆さん、これが目じるしだよ。」と
言つた。

七69 8 については此の中の金を半分
だけお禮のしるしにさし上げます。
十88 10 輸出入の額の増加して行くの
は國家が次第に盛になる印である。
十一36 6 〈略〉、朱線で圍んであるの
が今年伐採する處、それから次々と
いろ／＼の印がついてゐる。

十一42 7 國 尚當地産の葛粉少少御
見舞の印までに御送り申上候間、
〈略〉。

しるしばんてん 「印半纏」(名) 1 シ
ルシバンテン

四58 6 〈略〉、大工サンハミシナ
シルシバンテンヲヌイデ、サセイ
ヨクハタライテ居マス。

しるす 「記」(四・五) 13 記ス 記す

《一・シ・ス・一・セ》

七105 6 國 〈略〉、又明國への返書に豊
臣清正と記したといふが、それはま
ことの事か。

七107 5 國 〈略〉、御威光を借りて豊臣
と記したのでございます。

七112 國 發信人の居所氏名を受信人
に知らする必要あるときは此處又は
本文の終へ片假名にて記すこと

七112 國 發信人は自己の居所氏名を
成へく本字にて此處に記すこと

八58 3 國 學校用具ヲ賣ル店ニ、手
帳・筆・墨・繪具ナドト記シタル看
板ヲ出シ、〈略〉。

八58 5 國 〈略〉、ハキ物屋ニ下駄・草
履・傘ナドト、大字ニテ目立ツヤウ
ニ記シタル看板ヲ出セルハ、〈略〉。

八58 7 國 スベテ看板ハ商品又ハ職業
ノ名、屋號等ヲ記シテ、人目ニツキ
ヤスカラシメントスルモノナリ。

八59 7 國 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、
今ナホ古風ヲ守リテ、せきぞ(キソ
バ)・〈略〉・勢ん座(センベイ)

ナドト記シテ、軒ニ下ゲタルモアリ。
八59 9 國 彼ノ燒藁屋ノ看板ニ、八里
半ト記セルモノノ如キハコレニシテ、
〈略〉。

八61 4 國 此ノ他宿屋ニハ、掛行燈ニ
旅人宿何屋ト記シテ掛クルモアリ、
〈略〉。

十一36 9 國 〈略〉、其の他總べて杉苗
一坪一本の割。」とおとうさんの手
で記してある。

十一91 7 國 それから雨雪の量は何處
が一番多いか、又〈略〉、こんなこ
とも記してある。

しれい ぐんしれいぶ
しれる 「知」(下二) 16 シレル 知
れる 《一・レ・レ・ル》

四14 1 國 ワタシタチノ方ガ少
イカモシレナイ。

五94 6 國 〈略〉。」といふおたづねが出
るかも知れませんが、それは人にも

らしてはならないことになつてゐま
す。

六5 1 國 さうさ、中ほどまでは降つ
てゐるかも知れない。

六17 7 國 「さあ、まだ早いかも知れ
ないがね。」

六42 3 國 分家の萬藏君などは小男だ
から、ひよつとすると輜重輸卒にあ
たるかも知れない。

六67 6 國 「さうかも知れない。」
七55 3 國 何萬とも知れないいるかが、
〈略〉。

七65 6 國 もし此の大金がなかつたら、
氣がちがつて死ぬやうな事になるか
も知れぬ。

七72 6 國 〈略〉、あなたの氣はそれで
すむかも知れませんが、〈略〉。

十118 8 國 幾百本とも知れない古
木の梅が咲續いてゐる。

十122 5 國 人に親切なことはこれでも
知れると思ひました。

十一41 3 國 明日は晴かも知れない。
十二93 2 國 人知れず宮殿を出て
修行の途に上つた。

十二104 8 國 〈略〉、命を失つた者が幾百
人あつたか知れない。

十二129 4 國 官軍方の思召通り一押に
はゆかぬかも知れませぬ。

十二131 7 國 次第によつては、或は君
等の銃先にかゝつて死ぬかも知れぬ。

しる 「白」(名) 7 白 ぐあいしろあ
かさんしよく・まつしろ

九13 1 國 白・黒・うすかば色、十幾
羽の鶏一つにかたまり、〈略〉。

九75 1 國 黒・白・茶色、大小さま／＼
の馬が、林のかげや沼のほとりを
〈略〉。

十二62 7 國 即ち赤・白合はせて十三
條の横筋は、〈略〉。

十二63 8 國 即ち赤・黄・藍・白・黒
の五色を横に並べたるものにて、
〈略〉。

十二63 9 國 即ち赤・黄・藍・白・黒
の五色を横に並べたるものにて、
〈略〉。

十二64 1 國 イタリアの國旗は、緑・
白・赤の三色を縦に染分け、中央の
白地中に王家の紋章を表せり。

十二64 4 國 〈略〉、其の家の紋章の色
なる白と赤とに、統一の成功を祈る
希望の色として緑を加へ、〈略〉。

しる 「城」(名) 15 シロ 城 ぐやま
じろ

一51 6 國 〈略〉、オニドモハテツノ
モンヲシメテ、シロヲマモツ
テキマス。

六91 2 國 之をかこんだ賊は百萬騎とい
ふ大軍で、城の四方二三里の間は、
人や馬でふさがつた。

六91 5 國 〈略〉、賊が城の門まで攻上る
と、城のやぐらから大きな石を投落
して、〈略〉。

六91 5 國 〈略〉、賊が城の門まで攻上る

と、城のやぐらから大きな石を投落して、〈略〉。

六92 1 これにこりて、賊は城の水をたやして苦しめようとはかった。

六94 5 此の上はひやうらう攻にしようと思つて、賊は城へ攻めよせないことにした。

六95 2 〈略〉、城から大石を四五十、一度に落したので、又何百人かころされた。

六95 8 〈略〉、賊は大きなしごを作つて、之を城の堀に渡して橋にした。

七98 1 當時秀吉は伏見の城に居つたのでございませう。

七100 4 〈略〉、一さんに伏見の城へかけつけました。

七100 6 秀吉は城の庭にしき物をのべさせ、幕やびやうぶでまはりをかこはせ、〈略〉。

七101 3 まだ誰一人城に登つて居りません。

七103 1 間もなく石田三成が城に登つて参りました。

八97 2 名古屋市ハ此ノ城アルニヨリテ名高ク、「尾張名古屋ハ城デ持ツ。」ト歌ハレタリ。

八97 3 尾張名古屋ハ城デ持ツ。」

しろい「百」(形) 18 シロイ 白

イ・白い「イ・ウ・ク」あおじろい・うすじろい

一82 シロイイヌトクロイイヌガキマス。

二73 図 オカアサン ハアノ シロイハナガスキデス。

二36 3 アタルト、モチハ 白イトリニナツテ、パットトンディキマシタ。

三46 5 あけると、箱の中から白いけむりがばつと出て、〈略〉。

四70 4 雪ノヤウニ 白ウゴザイマスガ、〈略〉。

五38 2 ちやうどかまを明けたところで、白いけむりが立つてゐました。

五57 8 其の洲の白い砂の上に、青い松が一面に立つてゐて、〈略〉。

六26 5 庭の菊も白い花びらに赤みがさして来た、〈略〉。

七9 6 不意に白い鳥がもやの中からとび立つた。

八3 4 うさぎの毛も間もなく白くなるだらう。

九5 8 實の中にはかたい殻があつて、其の内がはに白い肉のやうなものがあります。

九16 8 黄色ナ蝶ハ菜ノ花ニムラガリ、白イ蝶ハ大根ノ花ニ集ル。

九74 7 〈略〉、谷間に白い山ゆりの花のまばらに見えるのも面白。

九100 10 山のすその方があちらこちら白いの、蕎麦の花であらう。

十75 8 市街の周囲を取圍んだ山々は地はだが白く、それに松がまばらに生えてゐる。

十113 3 はるかあなたに白い水煙が見える。

十一121 10 シヤベルでざく／＼かきまぜると、白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、目も口もあけられない。

十二73 8 〈略〉、此の白い髪や髭を御覧になつたら、姉上もお氣の毒とお思ひになりさうなものなのに、〈略〉。

見える。

じろう「二」(話手) 2 二郎

三60 8 二郎「三郎さん、又今日も舟をながしてあそびませう。」

三65 1 二郎「五郎さんばんさい。」

じろう「二」(人名) 2 二郎

三14 6 〈略〉、おちいさんが二郎にたづねました。

三16 8 二郎、おまへはそのゆびで人をさしますか。

じろう「次郎」↓くさのじろう

じろうさぎ「白」(課名) 2 白ウサギ

四12 1 五 白ウサギ

しろうさぎ「白」(名) 10 白ウサギ

四12 2 島ニキタ 白ウサギガ、ム

カフノ大キナヲカヘ行ツテ見タイトオモツテ、〈略〉。

四13 5 白ウサギハコレヲ見テ、

「略」トイヒマシタ。

四14 7 ワニザメハ 白ウサギノイフ通りニナラビマシタ。

四15 1 白ウサギハ一ツ二ツトカゾヘテ、ワタツテ行キマシタガ、

〈略〉。

四16 3 〈略〉、白ウサギノ毛ヲミンナムシリ取ツテシマヒマシタ。

四16 5 白ウサギハイタクテタマリマセンカラ、〈略〉。

四17 6 白ウサギハスグ海ノ水ヲアビマシタガ、〈略〉。

四19 1 白ウサギハ目ヲコスツテ、又ソノワケヲ申シ上ゲマシタ。

四20 3 白ウサギガソノ通りニシマス、ト、〈略〉。

四21 4 ソノ後大國主ノ神ハ、白ウサギノイツタ通り、エライオ方ニオナリニナリマシタ。

しろうまだけ「白馬岳」(課名) 2 白馬岳

九目8 第二十 白馬岳

九93 4 第二十 白馬岳

しろうまだけ「白馬岳」(地名) 1 白馬岳

九93 10 白馬岳が飛驒山脈中の有名な山だといふ事は知つてゐましたが、〈略〉。

しろうまとさん「白馬登山」(名) 1 白馬登山

九93 8 ちやうど岡田さんは〈略〉、白馬登山のお話をなさつていらつしやる所でした。

しろがね「銀」(名) 1 銀

十89 9 図 〈略〉、霜柱たつやぶかげの路、ふめばさく／＼銀みだる。

しろし「白」(形) 1 白し「一」

十904 図 略、新道つたひ車重
げに ひき来る馬のつく息白し。
しろじ 「白地」(名) 4 白地

六767 図 コレハ、ハジメ白地ニオツ
テ置イテ、後デカタヲ置イテ染メル
ノデ、略。

十二614 図 更に思へば、白地は我が
國民の純正潔白なる性質を示し、日
の丸は略。

十二621 図 略、先づイングランド
とスコットランドと合するや、白地
に赤十字の徽章ある前者の國旗と、
藍地に斜白十字の徽章ある後者の國
旗とを合して一旗となし、略。

十二623 図 略、更にアイルランド
の加はるに及び、白地に斜赤十字の
徽章ある其の國旗を合はせて、略。

しろじちゅう 「白地中」(名) 1 白地
中

十二642 図 イタリアの國旗は、緑・
白・赤の三色を縦に染分け、中央の
白地中に王家の紋章を表せり。

しろしめす 「知」(四) 1 しろしめ
す 「一ス」

十二633 図 「此の葦原の中つ國は
皇孫之をしろしめすべし。」

しろちやいろ 「白茶色」(名) 1 白茶
色

九791 中からみづくしい白茶色の
玉が、じゆずつなぎになつてころ
くと出て來た。
しろもめん 「白木綿」(名) 4 白木綿

八393 包の中には白木綿が五十反ば
かりはいつてゐたのでございます。
八428 図 略、其の代りと致して、
白木綿を一反づつ、名札をつけて、
略 持參致せ。

八432 三日の間に一同は白木綿を一
反づつ持つて參りました。

八441 越前守は再び一同を呼出して、
さきに納めさせた白木綿を返し、
略。

しわ 「四羽」(名) 2 四ハ
一305 図 「アヒルガオヨイデキマ
ス。略」「一ハ二ハ三ハ四ハ、
四ハキマス。」

一306 図 「一ハ二ハ三ハ四ハ、四
ハキマス。」

しん 「人名」 1 シン
七1103 図 「おとうさん、電報が來ま
した。」「どこからだらう。」「シンと
あります。」「あ、信吉からだ。
略。」

しん 「心」 ↓ あいこくしん・こうきょ
うしん・じひしん

しん 「臣」(名) 3 臣
十971 図 宋の臣文天祥大いに之を
うれへ、義兵を集めて國難を救はん
とす。

十9910 図 我は宋の臣なり。
十1004 図 天祥刑せらるゝにのぞみ、
從容としてはいはく、「臣が事終る。」
と。

しん 「心」(名) 3 しん 心 心

十一382 略、それでも木が競争す
るやうに、しんを立ててすくすくと
延びてゐるのを見ると、略。

十二1129 図 略、更に進んで新しき
電燈の發明に従事したり。略、唯
心に至りては彼の最も苦心したる所
なりき。

十二1146 図 略、日本の竹最も適當
なりしかば、専ら之によりて心を製
出せり。

しん 「神」(名) 1 神
十二417 一音は一音より妙を加へ神
に入つて、何をひいてゐるか彼自ら
も覺えないやうである。

しん 「眞」(名) 2 眞
十1006 図 文天祥は眞の男子なり。

十二1355 其の結果今日も尚國民は眞
の社交を解せず、人を信じ人を容れ
る度量に乏しい。

しん 「新」(名) 2 新
十一9110 僕はいく年寄の人が新の幾
日とか舊の幾日とかいふのを思ひ出
して、略。

十一922 図 新は新曆、舊は舊曆のこ
とだ。

じん ↓ アメリカじん・イスパニアじん・
えいこくじん・かいきょうじん・
がいこくじん・がいこくじんちゅう・
かつこくじん・からふとじん・しなじ
ん・せいようじん・チベットじん・ド
イツじん・につぽんじん・まんしゅう
じん・もうこじん・ヨーロッパじん

じん 「陣」(名) 6 ちん 陣
六231 大將は平維盛で、十万騎を
引きつれて、越中の國の礪波山に
ちんを取りました。

六233 義仲は五万騎を引きつれて、
これもおなじく礪波山のふもとにち
んを取りました。

六234 兩方からおしよせて、ちんの
間がわづか三町ばかりになりました。
七436 ある時謙信が山の手に陣を取
つてゐると、略。

七439 謙信はそれをさとつて、夜の
間に進んで信玄の陣へ攻入つた。

七468 翌日武田方からは安間彦六と
いふ大の男が、略、上杉方の陣へ
向つた。

じんい 「人為」(名) 1 人爲
十二463 図 殊に杉は人爲によりて容
易に増殖せらるゝ點において繪にま
さり、略。

しんいぎ 「眞意義」(名) 1 眞意義
十二223 商人たる者は、よく共同生
活の眞意義を辨へ、略。

じんいん ↓ のりくみじんいん
しんえん 「神苑」(名) 1 神苑
六1047 図 宇治橋を渡つて神苑に入り、
略。

じんか 「人家」(名) 3 人家
五881 図 略、町は大い水につか
つて、人家も七八軒流れました。

六724 此の電車道から東山のすそへ
かけて、やはり人家がこみ合つて立

つしくらに進軍して、夜半の頃には既に木之本に到着したり。

しんげん「信玄」(人名) 10 信玄 ↓ たけだしんげん

七43 6 ある時謙信が山の手に陣を取つてゐると、信玄は兵を二手に分けて、はさみうちしようとした。

七43 9 謙信はそれをさとつて、夜の間に進んで信玄の陣へ攻入つた。

七43 9 信玄は不意を打たれておどろいたが、忽ち陣立をかねて、敵を引受けた。

七44 7 謙信は馬に一むちくれて、信玄の本陣に切りこみ、(略)。

七44 8 謙信は馬に一むちくれて、信玄の本陣に切りこみ、大太刀をふりかざして、信玄に打つてかゝつた。

七44 8 信玄は刀をぬくひまがない。

七45 2 信玄の家来は之を見て、後からやりで謙信をついたが、あたらな

い。

七45 5 馬はおどろいてとび上つたので、信玄はあぶない所を助かつた。

七45 8 第六回目にいたつて、信玄から謙信へ、「(略)。」と申しこんだ。

七48 6 此の時信玄は之を止めて、「(略)。」約束の川中島は謙信に渡す。」といったので、めでたく中なほりが出来た。

しんげん「森厳」(形状) 1 森厳 十二99 7 然れども春日の社頭、朱の廻廊山の緑にはえて、森厳自ら人

の襟を正さしめ、(略)。

しんこう「信仰」(名) 1 信仰

十二64 7 かくの如く各國の國旗は、(略)、或は其の國民の理想・信仰を表すものなれば、(略)。

じんこう「人口」(名) 6 人口

七36 7 人口はおおよそ十二萬、其の中日本人は五萬人、支那人は六萬人ですが、(略)。

八71 7 ニューヨークは人口からいへば、ロンドンに次ぐ大都會で、七百萬以上もあるといひます。

八95 8 名古屋市ハ我が國屈指ノ大都會ニシテ、人口四十餘萬アリ。

十24 7 我が村には戸數三百、人口千四百餘あり。

十一8 8 上海は支那第一の貿易場で、百萬近くの人口を有する大都會である。

十一63 1 それが今は人口約二萬、戸數約四千を算するりつばな町となつたのである。

じんこう「人工」(名) 1 人工

十五1 昔の武蔵野の姿を此所に残さんとの皇太后の思召のまゝに、今も人工を加へずといふ。

しんこう「進行中」(名) 1 進行中

十二118 6 (略)、進行中の汽車が無線電話機を備へ附けてゐたために危険を免れたことや、(略)。

しんこう「信号兵」(名) 2 信號

兵

九61 艦橋には當直將校の姿が見え、其のそばには、望遠鏡を持つた信號兵が遠くを見張つてゐる。

九66 9 此の時信號兵は「君が代」のラッパを吹き、(略)。

しんさく「信作」(人名) 9 信作

八6 7 一人は信作、一人は耕造といつて、年は同じく十五歳。

八9 1 (略)、もはや信作と耕造の二人だけの競走となつた。

八9 7 (略)、中程まで行つた時、信作の馬はつまづいて、前足を折つた。

八9 8 信作はつるりとすべり落ちて、其のはずみに、ころ／＼と池の中へころげこんだ。

八10 6 耕造は驚いて、(略)、一たん沈んで又浮上つた信作のえりを引つつかんで、ぐつと岸へ引上げた。

八11 1 つきそひの者や見物人はかけよつて来て、信作に水をはかせるやら、(略)。

八11 4 信作が落ちたのにかまはず馬をかせせたら、大勝に勝つのに、(略)。

八11 8 相手の信作があつた通りだから、(略)。

八12 5 耕造さんのおかげで、信作の命が助かりました。

しんさく「信作方」(名) 1 信作方

八12 2 信作方の人々は之を聞いて、

「もう改めて勝負するには及びません。あなた方の村が勝つたのです。」

しんざん「深山」(名) 2 深山

八49 9 驚ハ遠ク人里ヲハナレテ深山ニスム。

九61 4 艦内は深山のやうな静かさである。

しんじ「神事」(名) 1 神事

八5 9 昔或氏神のお祭に、競馬の神事といふ事があつた。

しんじ「信合」(五) 1 信合

十二127 10 しかし二人は互に信じ合つてゐる仲なので、話はおだやかに運ばれる。

しんじ「新式」(名) 2 新式

十一65 2 (略)、此の邊では新しい知識をいれて、新式の農具を用ひ、新式の方法によつてどし／＼土地を開いて行く。

十一65 2 (略)、新式の農具を用ひ、新式の方法によつてどし／＼土地を開いて行く。

しんじ「雲道湖畔」(名) 1 雲道湖畔

十二4 4 松江を發したる汽車は風光綸の如き雲道湖畔を走ること約四十分、(略)。

しんじ「神社」(名) 2 神社

つくしましんじ「かすがしんじ」

かもじんじや・けいじょうじんじや・だざいふじんじや・たむけやまじんじや・はちまんじんじや
 十117 8 間もなく神社の廣い境内にはいつた。
 十118 5 此の神社は菅公の御墓所に建てたものだと聞いて、一層感を深くした。
 しんじゅ 「眞珠」(名) 1 眞珠
 七82 5 指輪や襟留ナドニハメル美シイ眞珠ハ、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。
 じんしゅ 「人種」(名) 2 人種 ↓ せかいじんしゅ
 十19 3 租界には皮膚の色の違ひ、言語・風俗の違つた幾多の人種が入交つてゐるので、其の有様は一見世界人種の展覧會のやうである。
 十二63 7 國旗の色彩が其の國の人種を表すものに、支那の國旗あり
 しんしゅう 「信州」(地名) 1 信州
 六7 2 信州の檜岳や赤石山で、どれも一万尺以上ある。
 しんじゅがい 「眞珠貝」(名) 2 眞珠貝
 七81 眞珠貝
 七82 2 又眞珠貝トイフモノガアル。
 じんじょう 「尋常」(形状) 1 尋常
 十174 5 「略」、眞淵は宣長の學識の尋常でないことをさとつて、非常にたのしく思つた。「じんじょうしようがくこくごとくほんま

きじゅういち 「尋常小学国語読本卷十二」(名) 2 尋常小学国語讀本卷十一
 十11 1 尋常小学国語讀本卷十一
 十1130 9 尋常小学国語讀本卷十一終
 じんじょうしようがくこくごとくほんまきじゅうに 「尋常小学国語讀本卷十二」(名) 2 尋常小学国語讀本卷十二
 十121 1 尋常小学国語讀本卷十二
 十1239 4 尋常小学国語讀本卷十二終
 しんじょうや 「新上屋」(名) 3 新上屋
 十171 8 新上屋にあの新上屋に御泊りになつて、「略」。
 十173 1 さうして新上屋の主人に、萬一御歸りに又泊れることがあつたら、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。
 十173 6 「略」、宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出来たのは、それから數日の後であつた。
 しんしよく 「寢食」(名) 1 寢食
 九23 4 ところで此の父も、「略」、四十餘年の間、寢食を忘れて其の道の書物を読み、國々の實地を調べ、本もあらはし、出来るだけは骨折つたつもりである。
 しんすいさぎょう 「進水作業」(名) 1 進水作業
 十128 2 「略」、進水主任の號笛を合圖に、着々と進み行く進水作業。
 しんすいしき 「進水式」(課名) 2 進水式

十目13 第二十六 進水式
 十127 2 第二十六 進水式
 しんすいしき 「進水式」(名) 1 進水式
 十127 7 「略」、まさに始らんとする進水式の壯快なる光景を豫想して、唯をどりにをどる。
 しんすいしゅにん 「進水主任」(名) 1 進水主任
 十128 1 「略」、續いて造船部長の指揮につれて吹く進水主任の號笛を合圖に、着々と進み行く進水作業。
 しんすいめいれい 「進水命令」(名) 1 進水命令
 十127 10 海軍大臣の命名書朗讀、工廠長の進水命令、續いて造船部長の指揮につれて吹く進水主任の號笛を合圖に、「略」。
 しんずる 「信」(サ変) 5 信ズル
 信ずる 《一ジ》
 七97 8 行長は「略」、清正のことを秀吉にさんげんしました。「略」、秀吉は之を信じて、清正に歸國を命じました。
 九103 7 「略」、北風は自分の信じてゐる中尉が乗つてゐてくれるので、「略」。
 九122 5 「略」、メイく自分ノ適當ト信ジテキル人ニ投票スルノガ、ホシタウノ選舉トイフモノダ。
 九123 5 「略」、自分デ一番適當ダト信ジテキル中村君ヲ選舉シヨウト決心

シタ。
 十二135 5 「略」、人を信じ人を容れる度量に乏しい。
 じんせい 「人生」(名) 1 人生
 十18 1 其の身を忘れ、よはひを忘れて、人生の爲に盡くしたる大聖の面目、「略」。
 しんせつ 「親切」(形状) 3 親切 ↓ じんせつ
 九117 2 村の方々は、朝に夕にいろくとかやさしく御世話下され、「略」。何にても多なりよなく言へ。」と、親切におほせ下され候。
 十18 10 子馬には大い飼主の一族がついて来て、親切に世話をしてゐます。
 十122 5 人に親切なことはこれでも知れると思ひました。
 しんせつこうへい 「親切公平」(形状) 1 親切公平
 十125 7 村長は村の舊家に生れ、きはめて親切公平にして、常に力を一村の幸福の爲に盡くすが故に、「略」。
 しんぜん 「神前」(名) 3 神前
 八7 5 神主は先づ神前で祝詞を上げて、「略」。
 十3 3 「略」、それらの品を社務所にたづさへ来て、神前にさへげたと願ひ出づる者數多しといふ。
 十118 4 「略」、神前の大きな神鏡が、きら／＼とかやいてゐて神々しい。
 じんぞうこ 「人造湖」(名) 2 人造湖

- 十344 〈略〉、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。
- 十354 ガツン湖といつて、廣さが霞が浦の二倍以上もある大きな人造湖で、〈略〉。
- しんぞく 「親族」(名) 1 親族
- 十一1152 〈略〉、決して親族・縁故其の他私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。
- しんだい 「身代」(名) 2 身代
- 五747 よい身代であつたが、其のために田を賣り、畠を賣り、家も土藏もみんな賣りはらつた。
- 五782 〈略〉、あの家にはよい事がつゞいて、身代は前よりもよくなつた。
- しんだい 「深大」(形状) 1 深大
- 十一1294 鐵眼の深大なる慈悲心と、あくまで初一念をひるがへさざる熱心とは、〈略〉。
- じんだて 「陣立」(名) 1 陣立
- 七442 信玄は不意を打たれておどろいたが、忽ち陣立をかねて、敵を引受けた。
- しんたんざい 「薪炭」(名) 1 薪炭材
- 十二488 かしは又なら・くぬぎと共に薪炭材として重要なものなり。
- じんち 「人知」(名) 2 人智
- 十一664 其のうちだん／＼人智が發達するにつれて、木片と木片をこすりあはせて火を得る法をさるとるやうになつた。
- 十二149 図 されど人智の進歩と印刷術の發達とは、何時までもかく單純にして遊戲的なものに満足すべくもあらず、〈略〉。
- じんちゅう 「陣中」(名) 1 陣中
- 七1059 圖 明國の使者、某の陣中に参り、〈略〉。などの廣言。
- しんちよう 「慎重」(形状) 1 慎重
- 十二901 〈略〉、其の制定も出来る限り慎重な手續を経る。
- しんでん 「神殿」(名) 1 神殿
- 六1057 圖 御門の前でうやうやしく拜禮してから、神殿の御もやうを拜した。
- しんでん 「新田」(名) 1 新田
- 六114 圖 新田が大へんよく出来まつた。
- しんどう 「新道」(名) 2 新道
- 三496 キョネン デキ上ツタ 新道ハ、村ヲ東カラ西ヘ、マツスグニツキスイテキマス。
- 三498 新道 ノリヤウガハニハ、新シイ家ガ七八ケンデキマシタ。
- じんとう 「陣頭」(名) 2 陣頭
- 十88 陣頭に立つては百萬の敵を物とも思はぬ英雄も、病氣は如何ともすることが出来ない。
- 十一113 王は問もなく健康を回復して、再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出来た。
- じんどう 「人道」(名) 1 人道
- 十二319 圖 〈略〉、車道と人道の間には、緑したる街路樹が目もはるかに連なつてゐます。
- しんどうづたい 「新道伝」(名) 1 新道つたひ
- 十903 圖 〈略〉、新道つたひ車重げに ひき来る馬のつく息白し。
- しんねん 「新年」(名) 1 新年
- 四527 圖 新年 おめでたう。
- じんば 「人馬」(名) 3 人馬
- 六257 〈略〉、ずぶぶん深いくりから谷が、平家の人馬で埋まりました。
- 六974 〈略〉、方々で官軍が賊のひやうらう道をふさいだので、賊は人馬ともにつかれた。
- 九1099 〈略〉、地上には、人馬の死がいがあちらにもこちらにも重り合つてゐる。
- しんぱい 「心配」(名) 1 心配
- 九163 シタガツテ敵ニオソハレル心配モ少ク、〈略〉。
- しんぱい 「心配」(形状) 4 しんぱい心配
- 五152 ぱちが昨日から病氣で、ごはんをたべませんので、學校に居てもしんぱいでしたが、〈略〉。
- 八839 信吉は〈略〉、「奥様、あのとよは。」と、さも心配さうにたづねた。
- 十一836 今日始はじめての遠泳だと思ふと、何だかうれしいやうな心配なやうな氣がする。
- 十二576 〈略〉、若し見附からなかつたらと、それが又心配になつて來た。しんぱいいたす 「心配」(五) 1 心配致す 《一シ》
- 八451 圖 始は熱が高くて心配致しましたが、〈略〉。
- しんぱい・する 「心配」(サ変) 7 しんぱいする 心配する 心配する 《一シ・スル》
- 五848 圖 大水が出なければよいがと心配いして、夜中に手をけやはき物まですつかり二階へ上げました。
- 七423 圖 うちのことはしんぱいするな。
- 七938 〈略〉、此の日はよく大風が吹くから、厄日といつて、農家ではことに心配するのださうだ。
- 七983 此の人だけは自分のために心配してくれるであらうと思つたのでございませう。
- 八466 圖 こちらのの方はどうでもなるから、心配するには及びません。
- 八871 圖 わしはあちらに居ても、お前の事はかり心配してゐた。
- 十一1003 壁のすき間をもつた雨のために、本がすつかりぬれてゐたので、子供心にも大變心配して、其の晩はとう／＼眠れなかつた。
- しんぱいなさる 「心配」(五) 1 しんぱいナサル 《一イ》
- 一396 ハヤクカヘラナイト、オヂイサンヤオバアサンガシンバイ

ナサイマス。

しんぶつ「神仏」(名) 1 神佛

十二106「略」、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、神佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。

しんぶつ「人物」(名) 2 人物

十一115「市町村長や議員を選挙するには、専ら其の人物に重きをおいて決して「略」私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。

十一120「ジョージは、かねてウェリントン公爵が勲功も高く、りつぱな人物であるといふ事を聞いてゐたので、略」。

しんぶつ「人物中」(名) 1 人物中

十一145「支那幾千年の人物中、大聖として長く後人に敬はれ、徳化の尚今日に著しきもの、孔子に及ぶはなし。

しんぶん「新聞」(課名) 2 新聞

十二目5 第四課 新聞

十二144 第四課 新聞

しんぶん「新聞」(名) 6 新聞 ↓だ

いしんぶん

五912 毎日かならず新聞を入れに来る方も四五人はあります。

十二154「我が國にてかゝる新聞の現れたるは維新前後にして、略」。

十二157「略」、相當に名ある新聞は、通信に、印刷に、あらゆる文明

の利器を用ふるを以て、略」。

十二16「然らばかくの如き新聞は如何にして編輯せられ、印刷せられ、讀者に配布せらるゝか。

十二18「かくて刷り上りたる新聞は、直に販賣部を経て遠近に發送せらる。

十二19「されば同一日附の同じ新聞にても、發行地に受取るものと他地方にて受取るものとは、記事に多少の相違あるを常とす。

しんぶん「新聞紙」(名) 1 新聞紙

十二12「外國の或商會で、新聞紙に店員入用の廣告を出した。

しんぶん「新聞中」(名) 1 新聞中

十二156「勿論今日我が國にて發行せらるゝ新聞中にも大小種種ありて、略」。

しんぶん「新聞配達」(名) 1 新聞配達

五332 晝あれほどにぎやかな通に、新聞配達と四五人の人のすがたが見えるだけでした。

しんぶ「進歩」(名) 3 進歩

九266「しかしわたしの四十年の骨折は、農學の進歩の爲には決してむだでなかつたと思ふ。

十二149「されど人智の進歩と印刷術の發達とは、何時までもかく單純にして遊戲的なものに満足すべくもあらず、略」。

十二136「支那・印度の文明を入れ、更に西洋の文明を入れて長足の進歩を成し遂げた日本國民は、賢明な機敏な國民である。

しんぼう「心棒」(名) 1 心棒

十二53「略」、そばには小さな心棒や齒車やぜんまいなどが並んでゐる。

しんぼう「辛抱」(サ変) 1 しんぼうする

九519「十年餘りもしんぼうして、やうく一人前の番頭になり、略」。

しんぼう「しんぼう」(名) 1 親身

九92「略」、アルカスはそれと知りませんから、あぶなく親身の親を射殺すところでした。

しんみつ「親密」(名) 1 親密

十二76「略」、師弟の關係は日一日と親密の度を加へたが、面會の機會は松坂の一夜以後となく來なかつた。

じんみん「人民」(名) 2 人民 ↓

十一116「公吏・議員等、直接間接に公共の事務に當る者は、略」、一般の人民の後援がなければ自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。

十一117「自治制も、之を運用する人民に自治の精神が乏しければ、よい結果を得ることは到底望まれぬ。

じんむてんのう「神武天皇」(人名) 1 神武天皇

五184「むかし神武天皇がわるもの

どもをこせいばつになつた時、略」。

しんめいさま「神明様」(名) 2 神明様

五64「あれは神明様の森だが、あれまでが半道で、あれから町まで一里ある。

五64「神明様のこちらにある白壁造の家は工場ですか。」

しんもん「しんもん・みなみしんもん」

しんよう「信用」(名) 5 信用

九52「略」、あの人ならといふ信用はあるし、それにわき目もふらず働くので、店はだんだん繁昌して、略」。

九127「世間ニハ、略」、或ハ信用モシテキナイ人ニ投票シタリ、或ハ棄權シテシマツタリスル人モアルガ、略」。

十二22「これ即ち世間の信用を博して堅實に自己の事業を發展させる道である。

十二23「即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、忽ち國全體の商品の信用に關係して、略」。

十二236「略」、忽ち國全體の商品の信用に關係して、貿易の不振を招き國運の發展をもまたげることになる。

しんらい「信賴」(名) 1 信賴

十11「やがて讀終つたフィリップが、

眞青な顔をして王を見上げると、王は信頼の情を面にあらはして、フィリップを見下してゐた。

しんらい・する 「信頼」 (サ変) 1 信頼する 《—シ》

十99 〈略〉、王の日頃信頼してゐるパルメニオ將軍から、王にあてた密書が届いた。

じんりきしゃ 「人力車」 (名) 2 人力車

五1024 〈略〉、自動車・馬車・人力車がいくだいたなく、入口・出口によつて來ます。

六323 橋ノタモトニ人力車がーダイアツテ、車夫ガ「ダンナ、マキリマセウ。」ト言ツタ。

しんりやく・する 「侵略」 (サ変) 1 侵略する 《—シ》

十二1157 電車は次第に汽車の領分までも侵略し、尚進んで電氣機關車さへも用ひられるやうになりました。

しんりよく 「心力」 (名) 1 心力
十996 心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。

じんりよく 「人力」 (名) 2 人力
十二1159 諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力もだん／＼電氣に變つて、工業界の一大革新をうながしてゐます。

十二1299 拙者は、〈略〉、さやうな事になれかしとは毛頭考へませぬが、大勢は人力の如何ともしやうのないもので――。

しんりん 「森林」 (名) 3 森林

十二515 此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあとに種をまくか、又は苗木を植付けるのであるが、〈略〉。

十二1081 園里 ブラジルは何處へ參りても果なき原野と森林とに候。

十一1003 園里 森林には大木すぎ間もなく繁茂し、其の根本には、つる草・灌木など思ふまゝにはびこり居候。

しんりんちかいこん 「森林地開墾」 (名) 1 森林地開墾

十一1079 園里 森林地開墾の様子を視察致居候ため、しばらく無沙汰に打過ぎ候。

しんるい 「親類」 (名) 1 親類

七1002 もと此の方には近い親類の者、豊臣と名のつたのも差支がない。

じんるい 「人類」 (名) 1 人類
十一659 〈略〉、火を使用するのは人類ばかりで、他の動物には見られない所である。

しんれき 「新曆」 (名) 2 新曆
十一922 新は新曆、舊は舊曆のことだ。

十一925 それから太陰曆を舊曆、太陽曆を新曆といふやうになつた。

す

す

七112 園里 〈略〉、ヌとス、フとク、ワとツ、ニと一、ハと八等は書方にて間違ひ易し

す 「州」 (名) 4 洲

五577 天の橋立は海中へつき出た細長い洲で、長さは一里、はゞは四五十間。

五578 其の洲の白い砂の上に、青い松が一面に立つてゐて、長い橋のやうに見えます。

七105 だん／＼潮が引いて、もう其所所に洲が見え出した。

七155 潮がだんだんさして來て、何時の間にか洲が見えなくなつた。

す 「巢」 (名) 7 ス 巢 ↓くものす
三53 二三日 マヘカラメンドリガス ニツキマシタ。

五272 ツバメハコチラニ居ル間ニ、人ノ家ニスヲ作ツテ、ヒナヲソダテマス。

八165 竹千代が軒ばに雀の巢を見つけて、「略。」と命じた。

八169 〈略〉、長四郎が〈略〉、もう少しで雀の巢へ手が届かうとした時、ふみ外して軒下へどうと落ちた。

八499 鷺ハ遠ク人里ヲハナレテ深山ニスム。巢ハ至ツテソマツナモノデ、
〈略〉。

十556 鳩は餘程遠い處で放しても、
〈略〉、矢のやうに自分の巢に飛歸る。
十二1252 しかし市中の混亂は蜂の巢を突いたやうなさわぎである。

す 「爲」 (サ変) 79 ス す 《シ・ス・スル・スレ・セ・セヨ》 ↓あいす・あいずす・あいせつす・あいはんす・あんじす・いっちす・いんさつす・おうらいす・おもんず・おんさつしくださる・かいけつす・かいけんす・がいす・かいはんす・かいりようす・がえんず・かくして・がつす・かれせんず・かんかす・かんこうす・かんす・かんず・かんせいす・かんだんす・かんどうす・きこくす・きしやす・きじゆつす・きしよくす・きす・きそんす・きちやくす・きにゆうしおく・きにゆうす・きふす・きほうす・きゆうしにていす・きゆうほうす・きようす・きんぞくす・くしんす・くちす・くつす・けいあいす・けいす・けつして・けつす・けんきゆうす・けんず・けんそんす・こうす・ところがまえす・さいしゆうす・さいす・さきんず・さくらがりす・さまたげす・さんざいす・さんす・さんず・さんばいす・しかして・しきす・しす・しつかりしたまう・じつけんす・しつす・してんす・しやししたてまつる・しやしまつる・しやす・じゅうじす・しゅうろ

十1254図 又池・沼を利用して鯉・鮒^{ふな}を養ふことも盛にして、大てい二年毎に之を賣るに、其の利益少しとせず。

十1262図 其の他の教員も、校長を模範として専心職務につとむるが故に〈略〉。

十1265図 〈略〉、生徒は〈略〉、學校を思ふ心あつく、卒業後も尚學校の門に出入することを樂しみとせり。

十1267図 其の利益は、大部分を學校の基本金とし、其の殘部を一村共同の有益なる事業の費用にあつる計畫なり。

十1274図 〈略〉大戦艦陸奥^{むつ}は、海を後にして悠然と横たはれり。

十1277図 〈略〉、拜觀者の胸は、まさに始らんとする進水式の壯快なる光景を豫想して、唯をどりにをどる。

十1311図 〈略〉、高德一族共を集めていへるやう、「義を見てせざるは勇なきなり。」

十1328図 天、勾踐^{こうせん}を空しうするなかれ。

十1544図 〈略〉、孔子大いに之をうれひ、如何にもして國家を治め、萬民の苦を救はんものと、廣く各國をめぐりて、用ひられんことを求めぬ。

十1777図 孔子は他人を正す前に先づおのれを正し、近きより遠きに及すを以て其の主義としたり。

十1710図 「發憤^{はつふん}しては食を忘れ、樂しんではうれひを忘れ、老の將に至らんとするを知らず。」

十1243図 水際に寄りて馬の足を冷さんとする折しも、〈略〉。

十1245図 あわてて逃げんとすれども時既におそく、大方はやには斬倒されたり。

十1256図 寄手の大將佐久間盛政は、〈略〉、明日は進んで賤嶽^{せんがく}のとりでをおとし、一舉に敵をみぢんにせんと、〈略〉。

十1261図 夜ふけに及んで、〈略〉、何とも知らぬ物音さわくとして夜の静けさを破る。

十1287図 今まで賤嶽^{せんがく}の山上より、また、きもせず戰況を見居たりし秀吉、勝政の引足になりたるを見て、〈略〉。

十12810図 〈略〉、敵は見る間にぼた／＼と倒れて、一軍今や崩れんとす。

十1309図 清正刀を抜かんとするに、かぶとのしころつゝ、じの枝に引つかうりて、身のはたき自由ならず。

十1311図 正國得たりと、力足をふん張りてはねかへさんとせしが、ふみそこねてあはや谷底へ轉び落ちんとす。

十1312図 正國得たりと、力足をふん張りてはねかへさんとせしが、ふみそこねてあはや谷底へ轉び落ちんとす。

十1321図 本土の西、近く九州と相接せんとする處、下關海峡^{しんがうかい}あり。

十1461図 或夜小僧、住持の居間に來りて、「彼處に行きて、彼の畫師のする様を見給へ。」とさゝやきければ、〈略〉。

十1471図 〈略〉、住持は尚知らぬ顔して過しに、十日餘りにして、ふすまの鶴は二十四五羽となりぬ。

十1476図 夜明けて住持、畫師に向ひて、〈略〉、夜中に畫師のしたる様をまねて見するに、〈略〉。

十1478図 〈略〉、畫師驚きて、「我が心に思ひ構へし事を如何にして知り給へるか。」と問ふ。

十11083圖 原野は大てい牧場にて、牛馬は放し飼にせられ居候。

十11101圖 燃えあとは取片附けて畠とし、コーヒー・わたの木などを植付け申候。

十11267図 鐵眼大いに喜び、將に出版に着手せんとす。

十11272図 我が一切經の出版を思立ちたるは佛教を盛にせんが爲、佛教を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんが爲なり。

十11273図 〈略〉、佛教を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんが爲なり。

十11273図 〈略〉、佛教を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんが爲なり。

十11283図 〈略〉、再び募集^{ぼくし}に着手して努力すること更に數年、効果空しからずして宿志の果さるゝも近きにあらんとす。

十11304図 〈略〉、一切經の廣く我が國に行はるゝは、實に此の時よりの事なりとす。

十1145図 世の出來事を速に知らんとするは人情の常なり。

十1161図 然らばかくの如き新聞は如何にして編輯せられ、印刷せられ、讀者に配布せらるゝか。

十1176図 校正終れば紙型^{しけい}に取り、更に之をもととして鉛版^{えんぱん}を造り、印刷機^{しゆつき}にかく。

十1193図 但し大新聞にありては、〈略〉、新しき事件ある毎に改版して、最後の最も新しきものを市内版とす。

十1195図 されば同一日附の同じ新聞にても、發行地にて受取るものと他地方にて受取るものとは、記事に多少の相違あるを常とす。

十12468図 然れども材の優良にして美麗なるは檜^{ひのき}を以て第一とすべし。

十124810図 杉は吉野杉・秋田杉を以て第一とし、檜は木曾産の聲響高く〈略〉。

十126210図 〈略〉、藍地中の星章は、常に州の數と一致せしむるを定めとす。

十128210図 樺太^{かまと}は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久し

く之を疑問としたりき。

十二83 図 〈略〉、山を越えて東海岸に出でんとすれば、從者の土人等ゆくての危険を恐れて従ふことをがへんぜず。

十二83 10 図 網をすき、舟を漕ぎ、漁業の手傳などして土人に親しみ、〈略〉。

十二84 4 図 たま／＼コニーが交易のため大陸に渡らんとするに際し、林藏は〈略〉、切に己をとまはんとことを求む。

十二84 7 図 「容貌の異なる汝が彼の地に行かば、必ずや人に怪しまれ、なぶりものにせられて、或は命も危かるべし。」

十二86 5 図 土人等〈略〉、大勢にて取圍みながら、或は抱き或は懷を探り、或は手足をもてあそびなどす。

十二86 8 図 土人等怒りて林藏の頭を打ち、強ひて酒を飲ましめんとす。

十二102 9 図 〈略〉、遠く連なる田園の間に東西に走る三筋の路は、北より數へて古の一條・二條・三條の大路の名残とす。

す (助動) 5 スす 《セ》

七109 5 図 彼岸ハ七日ノ間ニシテ、其ノ中日ニ、春ハ春季 皇靈祭、秋ハ秋季皇靈祭ヲ行ハセラル。

八62 7 図 保己一は五歳の時めくらとなりしが、人に書物をよませて、一心に之を聞き、〈略〉。

十36 図 寶物殿に到りて御遺物を拜

觀す。平生きはめて御質素にわたらせられし御有様、一つ／＼の御品の上にうかゞはれて、無量の感に打たれたり。

十一27 7 図 五十人の兵は行く／＼百姓をつのり、かゞり火をたかせ、糧食の用意をなさしむ。

十二121 9 圖 此の上はいよく仕事に勵み、一日も早く一人前の商人となりて、親に安心致させたと存じ居り候。

ず 〔圖〕 ↓しずがたけふきんのず・パナマうんがへいめんず

ず (助動) 147 ズず 《ザラ・ザリ・ザル・ザレ・ズ・ヌ・ネ》 ↓あいかわらず・おもわず・おもわずしらず・すかさず・たえず・とりあえず・のこらず・みずいらず・みずしらず

七29 5 図 市中ニハ電車ノ往復シゲク、港ニハ船ノ出入タエズ。

七29 9 図 神戸ハ一大貿易港ニシテ、輸出入ノサカンナルコト横濱ニユヅラズ。

七31 5 図 武士の馬は〈略〉、おそれて其所に近づかんとせす。

七32 5 図 これより獅子は日夜武士につきしたがひてはなれず、武士には無二の從者となれり。

七33 2 図 しかるに船長はおそれて之をゆるさず。

七33 3 図 こゝに武士と獅子とはわか

れざるを得ざることとなりぬ。

七33 3 図 こゝに武士と獅子とはわかれざるを得ざることとなりぬ。

七33 8 図 されどかなふべくもあらず。

七61 6 図 船長はかくいひて後、一だん聲をかり上げて、「〈略〉。」とむすびたる時は、拍手の音しばらくはやまさりき。

七96 6 図 共同助力は人の道、おのれの利のみかへりみず、力を分かち、物をさき、苦しむ者を、泣く者を、助けて共に樂しまん。

七106 6 図 小西は日本の大將ならず、まことは堺の町人、道案内の者故、にげも致したであらう。

八19 6 図 我が國第一ノ長流鴨緑江ノ如キハ實ニ其ノ支流ニモ及バザルナリ。

八21 1 図 其ノ家ヲ出デテヨリ、イカダヲトキテ木材ヲ賣ルニ至ルマデ、一年ノ長キニワタルコト珍シカラズトイフ。

八28 2 図 箸を持つことも出來ず、帶を結ぶことも出來ず、〈略〉、いたき所をさすることも出來ざるべし。

八28 2 図 〈略〉、帶を結ぶことも出來ず、かゆき所をかくことも出來ず、いたき所をさすることも出來ざるべし。

八28 3 図 〈略〉、かゆき所をかくことも出來ず、いたき所をさすることも出來ざるべし。

八28 3 図 〈略〉、かゆき所をかくことも出來ず、いたき所をさすることも

八28 4 図 〈略〉、かゆき所をかくことも出來ず、いたき所をさすることも出來ざるべし。

八29 2 図 手はすべて仕事のもとにして、いそがしき時に、手の足らずといふは、働く人の少きをいふなり。

八55 7 圖 ゆききの車馬のたえざれば、向ふの側へ行きかねつ。

八56 4 圖 〈略〉、身なりいやしき老婆には、手をかす人もあざりき。

八62 2 図 目は見ゆれども、字のよめざる人をあきめくらといふ。

八63 9 図 保己一はそれとも知らず、話をつづけたれば、弟子どもは「〈略〉。」と言ひしに、〈略〉。

八97 9 圖 〈略〉、やみをつらぬく中佐の叫。「杉野はいづこ、杉野は居ずや。」

八98 2 圖 船内くまなくたづぬる三度、呼べど答へず、さがせど見えず、〈略〉。

八98 2 圖 〈略〉、呼べど答へず、さがせど見えず、船は次第に波間に沈み、敵弾いよくあたりにしげし。

九10 4 図 〈略〉、御船少しも進まず、今にもくつがへらんばかりなりき。

九13 9 図 妹も同じ心にや、しばし見とれてひよこのそばをはなれず。

九14 4 図 くだきたる貝殻を器に入れてあたふるに、これには餌の時のや

うに集らず。

九364図〈略〉ベルギーの勇將レマ
ンは、部下の將卒をはげまし、
エンミツヒ將軍のひきゐるたるドイツ
の大軍を物ともせず、勇ましく防ぎ
戦ひたり。

九367図〈略〉正義の念と愛國の情
とに死を恐れざるベルギー軍の防戦
も、終に如何ともしがたく、〈略〉。
九428図 兩將畫食共にして、な
ほもつきせぬ物語。

九441図〈略〉金錢ヲツヒヤシテ、
水ヲ買フナドトイフハ、思ヒモヨラ
ヌ事ナリ。

九446図 得ガタキ物ニテモ、有用ナ
ラヌ物ハ價ナシ。

九448図 ソレガ如何ニマレニシテ、
タヤスク得ラレザル物ナリトモ、
〈略〉。

九452図 カクノ如ク物ニ價アルハ、
其ノ物ガ人ノ爲ニ有用ナルト、意ノ
如クニ得ラレザルトニヨルナリ。

九4510図〈略〉五人ノ持主各其ノ馬
ノ賣レザランコトヲ恐レテ、争ヒテ
價ヲ下グ。

九8210図 ぢいさん〈略〉、大いな
る石横たへて、なほ怠らずこつ
くくと、何をか常に刻みゐる、め
がねを掛けてはつび着て。

九849図 月はまだ出でざれども、空
よく晴れて、満天の星は寶石をちり
ばめたるが如し。

九1164図 聞けば、そなたは豊島沖
の海戦にも出ず、又八月十日の威海
衛攻撃とやらにも、かく別の働なか
りきとのこと。

九1168図 一命を捨てて君の御恩に
報ゆる爲には候はずや。

九1177図 母も人間なれば、我が子
にくしとはつゆ思ひ申さず。

十118図 兩がはに木立すき間もなく
茂りて、新しき宮の境内とは思はれ
ず。

十51図 昔の武藏野の姿を此所に残
さんとの皇太后の思召のまゝに、今
も人工を加へずといふ。

十62図 大方は國民の眞心こめた
る獻木にて、中には小學生の奉りた
るものも少からず。

十66図〈略〉、枯損するもの多か
るべきに、ほとんど皆勢よく根づき
たるは、誠に驚くべき事ならずや。

十638図 主人は聲を限りに呼べど、
はるかに行過ぎたる僧は、聞えぬに
や、ふりかへらず。

十638図 主人は聲を限りに呼べど、
はるかに行過ぎたる僧は、聞えぬに
や、ふりかへらず。

十639図 降積む雪に道を失ひ、進み
もやらずたゞずみたる様は、〈略〉。

十678図 主人はけんそんして言はず。
十6910図 翌朝僧は暇をこひて又行く
へ知らぬ旅に出でんとす。

十703図〈略〉常世も、一夜の物語

にうちとけては、名残なく盡き
ず。

十704図 今一日留り給へとすゝめて
止まざりき。

十717図 其の時の言葉にたがはず、
眞先かけて参つたは感心の至り。

十973図 天祥きかずしてはいく、
「我もとより之を知る。唯國家の危
きを如何せん。」と。

十9710図 されど宋軍の大勢日々非
にして、天祥の誠忠を以てしても如
何ともすることあたはず。

十987図 天祥固くこばみてはいく、
「我、國を救ふことあたはず。」

十988図 張世傑等の奮戦も大勢を轉
ずることあたはずして、宋遂に亡び
しかば、〈略〉。

十992図〈略〉、張弘範、文天祥に説
きてはいく、「略。」と。天祥きか
ず。

十993図 或人又なじりてはいく、
「汝大勢の如何ともすべからざるを
知つて、何ぞいたづらに苦しむこと
の甚だしきや。」と。

十996図 天祥はいく、「父母の病
あつければ、醫藥の効なきを知りて
も、尚治療につとむるは人情の常に
あらずや。」

十997図 心力を盡くしてしかも救
ふことあたはざるは天命なり。

十1002図 帝其の志の動かすべからざ
るを知り、之を刑場に送らしむ。

十1082図 近き處ならば早速上り候
て御世話も致すべく候へども、〈略〉、
それも心に任せず、甚だ残念に存じ
居り候。

十1113図 二荒の山もと 木深き處、
〈略〉、金銀珠玉を ちりばめなし
て、ひねもす見れども あかざる
宮居。

十1251図〈略〉、近年は作物も改良せ
られ、桑を植ゑて蠶を飼ふ者多く、
殊に一村鶏を飼はざる家なし。

十1254図 又池・沼を利用して鯉・鮒
を養ふことも盛にして、〈略〉、其の
利益少しとせず。

十1308図 主上さきに笠置におはせし
時早くも義兵を挙げしが、事のいま
だ成らざるに先だち、笠置も落ちた
る由風聞ありしかば、〈略〉。

十1311図〈略〉、高德一族共を集め
ていへるやう、「義を見てせざるは
勇なきなり。」

十1329図 時、范蠡無きにしもあら
ず。

十1410図〈略〉、奸臣の爲にさまた
げられ、久しく其の職に居ることあ
たはずして魯を去りぬ。

十158図 しかも遂に志を達するこ
とを得ざりしかば、老後は専ら力を
教育と著述とに用ひたり。

十168図 富貴は人のねがふ所な
り。然れども正しき道によるに非ざ
れば、我之に居らず。

十一69図 富貴は人のねがふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之に居らず。

十一610図 貧賤は人のいとふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之を去らず。

十一610図 貧賤は人のいとふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之を去らず。

十一72図 孔子常に中正不偏を貴び、略、「過ぎたるは及ばざるが如し。」ともいへり。

十一710図 「發憤しては食を忘れ、樂しんではうれひを忘れ、老の將に至らんとするを知らず。」と。

十一243図 略、思ひもよらぬ敵の一隊、湖に沿ひたる一筋路を急ぎに急ぎに進み来る。

十一261図 夜ふけに及んで、略、何とも知らぬ物音さわくとして夜の静けさを破る。

十一266図 味方は今日の戦に將卒共につかれ果てて、物の用に立つべくもあらず。

十一268図 盛政は勝つてかぶとのをしめざりし油断を悔いつ、略。

十一275図 略、秀吉は、略、やがて將卒のそろふを待たず、略、馬にむちうつて近江に向ふ。

十一287図 今まで賤嶽の山上より、またくきもせず戦況を見居たりし秀吉、勝政の引足になりたるを見て、

略。

十一3010図 清正刀を抜かんとするに、かぶとのしころつゝ、じの枝に引つかゝりて、身のはたらき自由ならず。

十一333図 一島未だ去らざるに、一島更にあらはれ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

十一336図 かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。

十一348図 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。

十一436図 實は去月十日頃より感冒の心地にて引きこもり居候處、其の後とかく病勢衰へず、遂に肺炎を引起し申候。

十一448図 住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、「略」といへば、略。

十一452図 我もとより衣食の費をいとふにあらざれど、略、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。

十一453図 略、何時までもかくておはすべきにあらねば、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。

十一466図 翌朝畫師は常にもあらず早く起出で、ふすまに向ひてしきりに筆を動かしたるなり。

十一468図 其の畫がく所皆鶴にして、筆勢非凡、丹青の妙言ふべからず。

十一469図 かくて次の夜は如何にと

うかゞふに、畫師は前の如く夜もすがら寝ねずして、明日はかく畫がかなど獨言してゐたりければ、略。

十一471図 略、住持は尚知らぬ顔して過ししに、十日餘りにして、ふすまの鶴は二十四五羽となりぬ。

十一482図 略、畫師又かのふすまの鶴に筆を取らず、唯杉戸に檜一本を畫がきて東國へ出立しぬ。

十一483図 未だ一月もたゞざるに、かの畫師は突然歸り來れり。

十一488図 「先に畫がきたる檜、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、略。」

十一816図 丈餘のろかい操りて、行手定めぬ浪まくら、百尋・千尋海の底、遊びなれたる庭廣し。

十一1131図 略、はかなく露と消えしかど、其の名はくちせず、諸葛孔明。

十一1258図 しかも其の巻數幾千の多きに上り、これが出版は決して容易の業に非ず。

十一12610図 死傷頗る多く、家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らず。

十一1271図 鐵眼此の状を目撃して悲しみにたへず。

十一1276図 略、之を一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ふるも、歸する所は一にして二にあらず。

十一1277図 一切經を世にひろむるはもとより必要の事なれども、人の死を救ふは更に必要なるに非ずや。

十一1281図 苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も残らずなりぬ。

十一1281図 然れども鐵眼少しも屈せず、再び募集に着手して努力すること更に數年、略。

十一1282図 略、再び募集に着手して努力すること更に數年、効果空しからずして宿志の果さるゝも近きにあらんとす。

十一1286図 然るに、此の度は近畿地方に大飢饉起り、人々の困苦は前の出水の比に非ず。

十一1291図 鐵眼 略、其の資金を以て力の及ぶ限り廣く人々を救ひ、又もや一錢をも留めざるに至れり。

十一1296図 鐵眼の深大なる慈悲心と、あくまで初一念をひるがへさざる熱心とは、略。

十一227図 よきを取りあしきを捨てて、とつ國に おとらぬ國となすよしもがな。

十一249図 略、印刷術の幼稚なる時代にありては、唯をりく興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。

十一251図 されど人智の進歩と印刷術の發達とは、何時までもかく單純にして遊戲的なものに満足すべく

もあらず、やがてあまねく内外の事件を報ずると共に時事を論ずるもの起りて、〈略〉。

十二186 図 〈略〉、機械は電力によりて働き、印刷も切斷も人手を要せず、一臺よく一分間に四百五十枚を印刷すといふ。

十二2210 〈略〉、實際の注文に對しては粗惡なものを送るやうな事は、人として爲すべからざる事である。

十二274 図 鎌倉宮にまうでては、盡きせぬ親王のみうらみに、悲憤の涙わきぬべし。

十二462 図 凡そこれ等の木材は、其の有する性質によりて各種の用に供すべく、随つて何れも重要ならざるはなけれど、〈略〉。

十二467 図 家屋・橋梁・船舶・電柱より桶・たる・曲物の類に至るまで、一として杉を用ひざるなし。

十二493 図 松に至りては産地極めて廣くして、奥羽地方より九州に至るまで殆ど之を見ざる處なく、〈略〉。

十二609 図 今日一國家を形成する國々にして、國旗の制定せられざる所なし。

十二629 図 即ち赤・白合はせて十三條の横筋は、獨立當時の十三州を表すものにして、永久に變化することあらざれども、〈略〉。

十二6410 図 故に我等は、〈略〉、諸外國の國旗に對しても、常に敬意を表

せざるべからず。

十二651 図 故に我等は、〈略〉、諸外國の國旗に對しても、常に敬意を表せざるべからず。

十二826 図 樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざることは、此の探検によりて略々知ることを得たれども、〈略〉。

十二835 図 これより北は波荒くして舟を進むべくもあらず、山を越えて東海岸に出でんとすれば、〈略〉。

十二837 図 〈略〉、山を越えて東海岸に出でんとすれば、從者の土人等ゆくての危険を恐れて從ふことをがへんぜず。

十二848 図 コーニは「略。」とて、しきりに止むれども林藏きかず、遂に同行することに決せり。

十二8510 図 夜は野宿すること少からず。

十二867 図 やがて酒食を出したれども、林藏は其の心をはかりかねて顧みず。

十二874 図 〈略〉、かゝる中にありても、彼は土地の事情を研究することゝを怠らざりき。

十二8710 図 林藏が二回の探検によりて、樺太は大陸の一部にあらざること明白となりしのみならず、〈略〉。

十二8710 図 〈略〉、樺太は大陸の一部にあらざること明白となりしのみならず、此の地方の事情も始めて我が

國に知らるゝに至れり。

十二969 かつて釋迦を見捨てた彼等も、其の慈悲圓満の姿を見ては、思はず其の前にひざまづかざるを得なかつた。

十二1006 図 〈略〉、何の山、何の川、一木一草に至るまでも歴史あり古歌あり、人をして低回去る能はざらむ。

十二1015 図 〈略〉、鹿の、〈略〉、秋より冬にかけて哀音しきりに人の眠をさますも、奈良には缺くべからざる風情なるべし。

十二1033 図 〈略〉、今にして思へば唯一場の夢に過ぎず。

十二1038 図 げにや「略。」と歌ひしにそむかず。

十二1115 図 當時は單に理化學の實驗用として使用せらるるに過ぎざりしが、〈略〉。

十二1119 図 然れどもこは「略」、室内に用ふるには、大仕掛にして光力強きに過ぎ、實用に適せず。

十二1131 図 初め彼は紙に炭素を塗りにて試みしが、思はしき結果を得ず。

十二1135 図 こゝにおいて再び炭素線の研究に没頭したれども、徒に多くの時日と金錢とを費したるに過ぎざりき。

十二11310 図 彼の眺め入りしは繪にあらず紙にあらず、實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

十二11310 図 彼の眺め入りしは繪にあらず紙にあらず、實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

十二1152 図 今日文明の利器と稱せらるゝものにして、直接間接に彼の天才によらざるもの殆どなしといひて可なり。

十二1197 圖 當地に參りて以來、一度手紙を以て御様子御伺ひ申上げたしとは存じながら、なれぬこととて仕事に追はれ、〈略〉。

十二1209 圖 參りし當座は何事もわからず、唯氣をもむのみにて、我ながら情なく存じ候ひしが、〈略〉。

すい「水」(名) 3 水いりりようすい・ちかすい

十一89 圖 二日 水きのとる「略」
十一89 圖 五日 水かのとみ「略」
十一89 圖 二十六日 水みつのとら「略」

すい「水位」(名) 2 水位
十二516 湖の水は東岸から奥入瀬川となつて流れ出るのであるが、一年を通じて水位の變化は極めて少い。

十二517 即ち水位の一番高い五月と一番低い一月との差は、僅かに三八センチメートルに過ぎない。

ずいこすいこ (感) 1 ずいこくく
十4010 ずいこくくといふのこぎりの音が、あたりの静かさを破る。

すいさつ じこすいさつくだされる
すいしえい「水師宮」(地名) 1 水師

營

九397 圖 旅順開城約成りて、敵

の將軍ステッセル 乃木大將と會見

の 所はいづこ、水師營。

すいしえいのかいけん (課名) 2 水

師營の會見

九目11 第十 水師營の會見

九393 第十 水師營の會見

すいじょう 「水上」(名) 1 水上

十二791 略、まぐろは水面に渦巻

を起したり、背びれを水上に現した

りして泳ぎ廻つてゐる。

すいじょうき 「水蒸氣」(名) 1 水

蒸氣

五526 略、井戸水や泉ノモトニナ

ルノモアリ、目ニ見エナイ水蒸氣

ニナツテ、空へカヘルノモアルサウ

デス。

ずいじん 「隨身」(名) 1 ズキジン

四862 圖 ダイリ様ノ下ノダン

ニ、弓矢ヲ持ツテ居ル人

ハ何デセウ。」オ花(略)。ズキジ

ンデス。ダイリ様ノゴ家來ダ

サウデス。」

スイス (地名) 1 スイス

十二359 圖 世界の公園といはれてゐ

るスイスは、到る處我が日本のやう

に景色がよい。

すいせいとうほうりかく 「水星東方離

角」(名) 1 水星東方離隔

十一89 圖 三日月 ○下弦後九時四十

七分水星東方離隔 つちのとう (略)

すいちゅう 「水中」(名) 2 水中

十938 すると橋はまん中から折れて、

三人は水中におちいつた。

十二1047 略、昔からのを渡らうと

して水中に落ち、命を失つた者が幾

百人あつたか知れない。

すいどう 「水道」(名) 1 水道

十339 底の水道から水がわき出て、

船は次第に高く浮上る。と、上手の

水門が開いて、船は次の箱の中へは

いる。

すいとる 「吸取」(五) 2 吸取ル

《一ル》

七876 根ノヤウナ所モ、陸上ノ植物

ノ様ニ養分ヲ吸取ルタメノモノデハ

ナイ。

七879 略、海藻ハ養分ヲ其ノ體ノ

全面カラ吸取ルノデアル。

ずいぶん 「随分」(副) 9 ズキブン

ずるぶん ずる分

四137 圖 ワニザメハ(略)、スグニ

ナカマヲ大ゼイツレテ來マシ

タ。白ウサギハコレヲ見テ、

「ナルホド、オマヘノナカマハ

ズキブン多イ。

六256 略、馬の上には人、人の上

には馬、かさなりかさなつて、ずる

ぶん深いから谷が、平家の人馬

で埋まりました。

七645 此の時(略) 一人の男が、

(略)、一人で川へはいって行きまし

た。さうしてずるぶんあぶない目に

あつて、やうやう向岸に着きました。

七1034 圖 「ずるぶんおそく來たもの

だ。」「通さないことにしよう。」

九679 ずるぶんこんでゐたが、みんな

がゆづり合つてくれたので、二人と

も腰を掛けることが出來た。

十132 圖 高橋さんは、すぐ前に居る

順太郎君を見て、「あなたもずるぶ

ん大きくなりましたね。

十866 米は我が國でずるぶん多くと

れるが、全く外國米の足しまへを受

けぬわけには行かない。

十1014 圖 あ、咲いてゐる、く。

みよ子、ずるぶん珍しい花があるだ

らう。

十一381 下刈はいつも土用中にする

ので、ずるぶん苦しいが、(略)。

すいはい 「水兵」(名) 8 水兵 しい

ちすいはい

九641 上甲板洗は水兵の受持で、

(略)、はだしのままの水兵が後甲板

にはせ集つて、ずらりと整列する。

九644 (略)、(略) ラツパが一きは

高くひゞき渡ると、はだしのままの

水兵が後甲板にはせ集つて、ずらり

と整列する。

九646 兩舷直といふのは、特別の務

のあるものをのぞいた外の水兵のこ

とである。

九649 水兵はくもの子を散らすやう

に八方へ散つて、(略)、身輕な姿と

なつて分隊毎に甲板洗を始める。

九654 (略)、ブラシを持った數十人

の水兵が、甲板をこすりながら頭を

並べて進んで行く。

九1154 水兵は驚いて立上つて、しば

らく大尉の顔を見つめてゐたが、や

がて頭を下げて、(略)、其の手紙を

差出した。

九11710 大尉は之を讀んで、思はず

も涙を落し、水兵の手を握つて、

「(略)」と言聞かせた。

九1197 水兵は頭を下げて聞いてゐた

が、やがて手をあげて敬禮して、に

っこりと笑つて立去つた。

すいはいのはは (課名) 2 水兵の母

九目12 第二十四 水兵の母

九1143 第二十四 水兵の母

すいめん 「水面」(名) 5 水面

十323 高い土地の上に水をたゝへた

のであるから、湖の水面は海面より

ずつと高い。

十348 かうして前後三段に上つた船

は、海面より約二十六メートルも高

い水面に浮ぶのである。

十358 今度は前と反對に、順次に三

段を下つて、海と同じ水面に浮ぶ。

十1162 二十メートルもある大鯨が今

は全く息たえて、小山のやうな體を

水面に横たへる。

十二791 (略)、まぐろは水面に渦巻

を起したり、背びれを水上に現した

りして泳ぎ廻つてゐる。

すいもん 「水門」(名) 13 水門

<p>十33 2 〈略〉、掘割の處處に水門を設けて、たくみに船を上下する様にしてある。</p> <p>十33 5 しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。</p> <p>十33 8 上手にも水門があるので、船は大きな箱の中に浮いてゐる形である。</p> <p>十33 10 底の水道から水がわき出て、船は次第に高く浮上る。と、上手の水門が開いて、船は次の箱の中へはいる。</p> <p>十34 3 前と同じ方法で、船はもう一段高く浮上り、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。</p> <p>十34 5 此の湖を横ぎると又水門があつて、船はさらに一段高くなる。</p> <p>十34 8 水門</p> <p>十34 8 水門</p> <p>十34 8 水門</p> <p>十34 8 水門</p> <p>十34 8 水門</p> <p>十35 6 此の湖を渡つて又水門を通過する。</p> <p>すいよう 「水曜」(名) 1 水曜</p> <p>五15 5 四月二十五日 水曜 曇</p> <p>すいり 「水利」(名) 1 水利</p> <p>九26 2 図 わたしも此の精神にもとづいて、主に海産物や水利の事を調べて、くはしく計畫を立てた事もあるが、〈略〉。</p>	<p>すいりよう 「水量」(名) 1 水量</p> <p>八21 3 図 揚子江ハ水量ツネニ豐ニシテ、洋々ト流レドモ、〈略〉。</p> <p>すいりよく 「水力」(名) 1 水力</p> <p>十二116 5 図 そればかりでなく、石灰は早晚使ひ盡くされてしまふが、水力は無限といつてよい。</p> <p>すいりよくでんき 「水力電気」(名) 3 水力電気</p> <p>八82 7 彼の水力電氣の如きはそれで、電燈・電車等に用ひる電氣も、もとをたゞせば水の力である。</p> <p>十二116 1 図 殊に近年は水力電氣の驚くべき發達にともなひ、電力は頗る廉價に供給されるので、〈略〉。</p> <p>十二116 7 博士は先づ〈略〉、急流や瀑布に富んでゐる我が國では、將來益々水力電氣の利用をはからなければならぬことを力説した。</p> <p>すいり 「水路」(名) 1 水路</p> <p>十一33 4 図 一島未だ去らざるに、一島更にあらはれ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。</p> <p>すう 「吸」(四) 1 吸ふ 《一ヒ》</p> <p>十一80 8 図 生れて潮に浴して、浪を子守の歌と聞き、千里寄せくる海の氣を 吸ひてわらべとなりにけり。</p> <p>すう 「据」(下二) 1 すう 《一エ》</p> <p>九15 5 図 〈略〉、をんどりは箱のふちをふまへて、首をすゑ、むねを張り、今やときをつくらんとする様なり。</p>	<p>すうこく 「数國」(名) 1 數國</p> <p>十一5 1 図 當時支那は數國に分れて互に相争ひ、戰亂止むことなかりしかば、〈略〉。</p> <p>すうじ 「数字」(名) 2 數字</p> <p>七112 8 圖 數字は大きく</p> <p>十一97 9 シャベルが數字で眞黒になると、それをふいては又書く。</p> <p>すうじつ 「数日」(名) 4 數日</p> <p>八102 1 図 君等は僕を苦しめようとして、此の數日の間少しも食物を送つてよこしませんでした。</p> <p>十一45 9 図 〈略〉、畫師「〈略〉。」として、心構せし様なりしが、尚筆も取らで數日を過しぬ。</p> <p>十一73 8 望がかなつて、宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出来たのは、それから數日の後であつた。</p> <p>十二95 10 彼は此の心境の尊さに數日の間唯うつとりしてゐたが、〈略〉。</p> <p>すうじっけん 「數十間」(名) 1 數十間</p> <p>九109 4 北風は驚いてすぐに立止らうとしたが、〈略〉、思はず其の場から數十間も進んでしまつた。</p> <p>すうじっぶん 「数十分」(名) 1 數十分</p> <p>十二17 9 図 〈略〉、原稿締切時刻より刷出まで其の間僅かに數十分、以て其の如何に速なるかを知るべし。</p> <p>すうじゅうおくえん 「数十億圓」(名) 1 數十億圓</p>	<p>十88 7 最近における我が國の輸出入總額は數十億圓の多額で、之を十年前の額に比べると、實に十數倍である。</p> <p>すうじゅうにん 「数十人」(名) 1 數十人</p> <p>九65 4 〈略〉、ブラシを持つた數十人の水兵が、甲板をこすりながら頭を並べて進んで行く。</p> <p>すうじゅうねん 「数十年」(名) 1 數十年</p> <p>十二15 5 図 我が國にてかゝる新聞の現れたるは維新前後にして、其の後數十年の間に驚くべき發達を遂げた。</p> <p>すうそう 「數艘」(名) 1 數艘</p> <p>十二78 8 そこで數艘の船に分乘した漁夫が、えんやくと掛聲を掛けながら身網を一方からたぐつて行く。</p> <p>すうちょう 「數町」(名) 1 數町</p> <p>十二104 6 それは山國川に沿うて連なる屏風のやうな絶壁をたよりに、見るから危げな數町のかけはしを造つたものであるが、〈略〉。</p> <p>すうと (副) 3 スウツト すうと</p> <p>四60 1 ヨクキレルカンナガスウツト板ノ上ヲ通ルト、〈略〉。</p> <p>八49 3 サウシテ何カ地上ニエモノヲ發見スルト、スウツト下リテ來テ、〈略〉。</p> <p>九101 4 蛙がぼかん／＼と飛込んではすうとと泳いで行く。</p>
--	---	--	---

四
30
3
犬
の
す
が
た
が
見
え
な
く

なつたので、「ほちほち」とよびますと、〈略〉。

五三三 晝あれほどにぎやかな通に、新聞配達と四五人の人のすがたが見えるだけでした。

五十二 尊はかみをといて、女のす
たになり、略、其の家の中へおは
いりになりました。

六八五 韻会 ふとん着て、ねたるすが
たや東山。

六五十六 頼朝は一目見た上で、萬じゆを呼出しましたが、かほも美しくすがたも上品に見えたので、さつそく舞姫にきめました。

六六九 七 〔略〕、牛車に乗つたお姫様方の姿を、此の川の水はいくたびとなぐうつしたことでございませう。

六705 こんな人、こんな姿は、とう
の昔にきえましたが、川は昔のまゝ
に清く美しく流れてゐます。

六三三 又三條の大橋から川上を見ると、川原が遠く北につゞいて、其のさきにやさしい姿の山がかすんで見えます。

七182 色が美しい上に、姿がやさしいので、つみ草の時には、誰も之を取つて花たばにする。

七1025 さうして清正のやせた姿、日にやけた顔を見ては、怒がとけて、涙ぐみました。

八五七八 文韻 下駄買ふ人も、賣る人も、
下駄屋にありし人は皆、彼の姿

を見送りぬ、略。

九三〇 〔略〕、栗鼠が一匹、〔略〕、僕
の姿を見ると、太い尾をちらりと見
せて、急にまた穴にかくれてしまつ
た。

九609 東の空が明るくなると、今ま
で軍港のやみに包まれてゐた軍艦の
壮大な姿が、だん／＼にあらはれて
来る。

九6010 艦橋には當直將校の姿が見え
其のそばには、望遠鏡ばうあんきやうを持つた信
號兵が遠くを見張つてゐる。

九六四 水兵は〈略〉、かひがひしくズボンと袖をまくり上げ、身軽な姿となつて分隊毎に甲板洗を始める。

九1004 黒みがかつた紫色の莖が見事に延びて、大きな葉をゆらゆらと風に動かしてゐる姿は、誠に氣持がよ

い。
九1103 主人の姿を見つけると、静かに其のそばに立止つた。

十49 ㊦ 昔の武藏野の姿を此所に殘
 さんとの皇太后の思召のまゝに、今
 も人工を加へずといふ。

十 其の枝の先にしよんぼりと止
105 10 つてゐる鳥の姿も、見るから寒さう
だ。

十一 463 〔略〕、住持ひそかに行き
て見るに、畫師は障子に身を寄せて
様々に姿を變へつゝ、寝起する様なり

十一 475 文会 「今日かき給はん鶴の
姿はかやうなるべし。」

十二 95 文 なぎさに立ちて昔をしの

べば、そのかみ此處にいかめしく向ひあひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如く、〈略〉。

の衰へ果てた姿をつくづくと見て、
 〈略〉。
 十二⁹⁶₈ かつて釋迦を見捨てた彼等

も、其の慈悲圓滿の姿を見ては、思はず其の前にひざまづかざるを得なかつた。

十二 108 1 〈略〉、此の見る影もない老僧の姿が、急に尊いものに見え出した。

十二¹³¹ 警衛の兵士等は、安芳の姿を見ると一時に押寄せて來たが、
〔略〕。

がむしろ 「菅筵」(名) 1 菅筵
 九114 ㊦ 〈略〉 弟橘媛、尊の御身
 危しと見給ひ、「略。」といひて、

菅筵かみむしろ八枚、敷皮八枚、きぬの敷物
八枚を波の上に敷重ね、其の上に飛
下り給へり。

がら ↓みちすがら・よもすがら
がりがりつく [紐付] (五) 1 すがり
附く 《一イ》

十254 岩の上に残つた船體には、十人許の船員がさがり附いて、聲を限りて救を求めたが、何のかひもなかりに

《一ツ・一ラ・一リ・一ル》

三十一₂ 韻
う ち の 子 ね こ
う ち の

子ねこは かわいい子ねこ、
 〈略〉、すそにからまり、たもと
 に すぎる。

六七八 片足でおそろしい程早くすべ

る者もあれば、人の手にすがつて、
こはごはすべる者もある。

八五五 文韻 雪どけ道のぬかるみを

杖にすがりてとぼくと、歩み來れる老婆あり。

老人や、息もたえだえの病人、さては野邊に送られる死者をまのあたり見て、〈略〉。

十二⁹⁴5 次第にやせ衰へて、物にす
がらなければ立てない程になつた時
《略》。

き [隙] (名) 6 スキ すき
四 92 8 〈略〉、長い間つけねらひま
したが、手を出すすきはあり

ませんでした。
六五四会 すきをねらつて、頼朝の命
を取れ。

六五八 光盛の娘は其の後、夜晝頼朝をねらひましたが、少しもすぎがありません。

六六二 萬じゆはとびらのすきから手
を入れて、〈略〉、親子は手を取合つ
て泣きました。

すきがありません。

ナツバサ・尾、何所ニ一分ノスキモ
ナク、強ミガ全身ニミチミチテナル。
すき「鋤」(名) 1 鋤。
十一63 10 これが大きな鋤を何本も引
いて、ものすごい声を立てな
がらのそり／＼と歩き廻ると、〈略〉。
すき「好」(形状) 11 スキ すき 好
き じえんそくすき・おすき・きれい
ずき・ものずき
二74 〇 オカアサン ハアノシロ
イハナガスキデス。
二77 〇 「ワタクシハアノアカイ
大キナハナガスキデス。」
二33 7 ユミヲイルコトガスキ
デ、トリヤケダモノヲイコロシ
テ、オモシロガツテキマシタ。
四59 8 私ハカンナヲカケテ居
ルノヲ見ルコトガスキデス。
五53 4 此の人に年取つたおとうさん
がありまして、酒がすきでございま
した。
八47 2 〇 此の爲替はほんのわづかで
すが、何か好きな物を買つて上げて
下さい。
九105 6 北風は、主人の手がかうして
くびすちにさはるのが何より好きだ
つたから、〈略〉。
十66 7 〇 私はもと鉢の木がすきで、
いろ／＼集めた事もありましたが、
〈略〉。
十一70 8 若い頃から讀書がすきで、
將來學問を以て身を立たいと、一

心に勉強してゐた。
十二9 10 ごく小さい時分から動植物
に深い趣味を持ち、又物を集めるこ
とがすきで、〈略〉。
十二11 5 温順な彼は父の命に従つて
勉強してゐたが、何時の間にか好き
な博物學の研究が主となつてしまつ
た。
すき「杉」(名) 16 スギ 杉 じあき
たすき・いっぽんすき・よしのすき
一40 3 〇 アレアノモリノ スギ
ノキノウヘニ。
五10 3 〇 「頭が八つ、尾が八つある
大蛇で、〈略〉、せ中には、ひのきや
杉の木が生えてゐます。」
五39 5 八幡様の高い石だんを上りつ
めた所に、しめをはつた大きな杉の
木がありました。
五78 5 此の山の杉も庄屋が先に立つ
て植ゑたのださうだ。
九88 10 〇 「あゝ、あの一、番高い杉の
眞上の所にあるのが北極星でせう。」
十126 6 〇 青年團の事業の一として、
杉・檜の植林を營めり。
十一35 9 〇 〈略〉、四五尺にのびた杉の
若木が勢よく立並んでゐるのが、目
に見えるやうな氣がする。
十一39 2 〇 いつかにもいさんが、
「杉の散髪だ。」といつてみんなを笑
はせたことがある。
十一40 2 〇 僕がお手傳して植ゑたあの
杉や檜は、何時になつたら伐るのだ

らう。
十二45 9 〇 今其の主要なるものを舉
ぐれば、杉・檜・もみ・つが・ひ
ば・松・落葉松・けやき・栗・か
し・なら・くぬぎ等なり。
十二46 3 〇 〈略〉、中にも其の用途の
廣きは杉及び檜なり。
十二46 3 〇 殊に杉は人爲によりて容
易に増殖せらるゝ點において檜にま
さり、〈略〉。
十二46 7 〇 家屋・橋梁・船舶・電
柱より桶・たる・曲物の類に至るま
で、一として杉を用ひざるなし。
十二46 10 〇 唯杉に比して産額少く、
増殖や、困難なるは惜しむべし。
十二47 3 〇 もみ・つがは共にそり又
は伸び縮みすること著しきを以て、
杉・檜に比すれば用途甚だ狭し。
十二48 10 〇 杉は吉野杉・秋田杉を以
て第一とし、檜は木曾産の聲響高く
近時臺灣阿里山の檜また有名なり。
すき「過」 じおひるすき・じゅうじす
き
すきおこす「鋤起」(五) 1 すき起
す「一シ」
十二91 4 〇 ぼろを着た農夫は玉のやう
な汗をかいて田をすき起し、牛はつ
かれ果ててあへぎあへぎ働いてゐる。
すききらい「好嫌」(名) 1 好ききらい
ひ
八114 2 〇 其の爲、大將には全く食物に
好ききらいといふものがないやうに

なつた。
すきさか「杉坂」(地名) 1 杉坂
十131 8 〇 さらば美作の杉坂に待ち牽
らんとて、けはしき山路をふみわけ
てたどり着きたりしに、〈略〉。
すきど「杉戸」(名) 1 杉戸
十一48 2 〇 〈略〉、畫師又かのふすま
の鶴に筆を取らず、唯杉戸に檜一
本を畫がきて東國へ出立しぬ。
すきとおる「透通」(五) 3 すきと
ほる すき通る「一ツ・イル」
三60 5 〇 日の光がやはらかにさ
して、小川の水はきれいにす
きとほつてゐます。
五47 1 〇 上る頃には、蠶のからだがす
き通るやうになります。
八2 2 〇 谷間の水はすきとほるやうに
すんでゐる。
すきなえ「杉苗」(名) 1 杉苗
十一36 8 〇 地藏山の内、二町三段五畝、
峯通り檜苗、其の他總べて杉苗。
すきの「杉野」(人名) 2 杉野
八97 9 〇 〇 荒波洗ふデツキの上に、
やみをつらぬく中佐の叫。「杉野
はいづこ、杉野は居ずや。」
八97 9 〇 〇 「杉野はいづこ、杉野
は居ずや。」
すぎばやし「杉林」(名) 2 杉林
九87 5 〇 〈略〉、向ふの杉林の上の所
に、ひしやくのやうな形になつて、
七つの星が並んでゐるのが見えるだ
らう。

九27 窓 おや、北斗七星が半分杉林にかくれてしまつた。
すきま 「透間」(名) 7 すき間
六30 8 さうして「略」、所きはす食ひつきました、頭のとつぺんから尾のさきまで、からだ中すき間もなく。
六71 7 川の西は水のすぐそばから、すき間もなく家が立ちならんでゐます。
十一7 窓 兩がはに木立すき間もなく茂りて、新しき宮の境内とは思はれず。
十一10 窓 私の行つた時には、もう其所にすき間も無く子馬がつないでありました。
十一100 1 壁のすき間をもつた雨のために、本がすつかりぬれてゐたので「略」。
十一108 3 窓 森林には大木すき間もなく繁茂し、其の根本には、つる草・灌木など思ふまゝにはびこり居候。
十二126 8 屋敷の附近は、官軍の兵士がすき間もなく警衛してゐる。
すきもとさへいたさま 「杉本佐平太様」(人名) 1 杉本佐平太様
八102 2 窓 三月十二日 廣澤連太郎 杉本佐平太様
すぎやま 「杉山」(名) 2 杉山
五66 7 窓 此の村には、向ふの杉山のすそに、大きな用水池があつて、其

所から水を引くからだ。
五68 6 此のあたりの青田も、其の頃は太ていあれ地で、其の杉山なんぞは、木もろくにない草山だつたといふことだ。
すぎゆ・く 「過行」(四) 1 過行く
「一ケ」
十二26 2 窓 由比の濱邊を 右に見て、雪の下道 過行けば、八幡宮の御やしろ。
す・ぎる 「過」(上二) 8 すぎる 過ぎる
「一ギ」 ↓とおり過ぎる・ながすぎる・はやすぎる
六57 3 二人は野をすぎ、山をこえ、なれない道を一月あまりも歩きつゞけて、やうく鎌倉に着きました。
八23 7 四十餘年はいつのか過ぎて、もう供へる首がなくなりました。
九69 7 窓 仙臺はとつくに過ぎて、やがて一關だ。
九74 4 汽車は野を過ぎ山を越えて進む。
十46 7 一年と過ぎ二年とたつうちに、其の日の暮しにも困るやうになつた。
十120 10 停車場に着いた時は午後の六時を過ぎてゐた。
十一63 1 當時此のあたりは未開の原野で、殆ど交通の便もなく、唯僅かに十勝川を上下するアイヌの丸木舟の便をかりるに過ぎなかつた。
十二51 8 即ち水位の一番高い五月と一番低い一月との差は、僅かに三十

八センチメートルに過ぎない。
ずきん 「頭巾」(名) 3 づきん
七23 7 晒木綿のづきんをかぶつて、雨ざらしになつていらつしやるが、何時もお花が上つてゐる。
七89 3 あまり急ぎましたので、水がいのすの上にあつたおばあさんのづきんにこぼれました。
七89 7 「あゝ、さうだ。」と言つて、マリーはおばあさんのづきんを取つて、兵士の頭にかぶせました。
す・く 「結」(四) 1 すく 「一キ」
十二83 10 窓 網をすき、舟を漕ぎ、漁業の手傳などして土人に親しみ、さてさまぐの物語を聞くに、「略」。
す・く 「好」(五) 2 スク 「一カ」
四71 1 一人ハタイソウ皆サンニ スカレマスガ、一人ハアマリ スカレマセン。
四71 2 一人ハタイソウ皆サンニ スカレマスガ、一人ハアマリ スカレマセン。
す・く 「空」(五) 3 すく 「一イ」
九35 2 腹が大部分すいて來た。
十一38 9 なたや鎌などでつる草を拂ひ、下枝を伐落して行くと、「略」急に間がすいて如何にも氣持よさうに見える。
十一85 7 手足が大分くたびれて來た。腹もすいた。
すぐ 「直」(副) 48 スグ すぐ 直 ↓まつすぐ

二65 6 ナンニデモ スグ ビツクリ シテ、カケ出シマス。
二66 6 チヨットハハナレマスガ、スグ オヤ牛ノトコロヘキマス。
三12 5 あかちゃんがなき出すと、すぐそばへよつて、「略」。
四13 4 ワニザメハ「ソレ」ハオモ白カラウ。」トイツテ、スグニナカマヲ大ゼイツレテ來マシタ。
四17 6 白ウサギハ スグ 海ノ水ヲアビマシタガ、「略」カヘツテイタクナツテ、クルシガツテ居マシタ。
四64 7 よしつねは「それをよべ。」と、すぐによ一をよび出しました。
四70 7 シカシユヤ水ニハ スグ トケテシマヒマス。
四87 5 窓 明日ハオセツクデスカラ、學校ガヒケトラ、スグ アソビニオ出デナサイ。
五86 3 窓 叔父さんは大へんだ土手が切れたといつて、すぐ屋根へ出ました。
六55 2 頼朝が木曾義仲をせめようとした頃、木曾の家來手塚太郎光盛の娘が頼朝に仕へて居りましたが、之をさとつて、すぐに義仲の所へ知らせました。
六71 6 川の西は水のすぐそばから、すき間もなく家が立ちならんでゐます。

六72 四條の大橋はすぐ其所に見えます。
 七26 馬はたいそう元氣のよい動物で、生れた日からすぐ歩く。
 七38 船から陸あげした荷物は、すぐ其所から汽車にのせて、ハルビンへでも北京へでも送ることが出来ます。
 七51 何時カ私ノウチノツルベノ金タガガコハレタ時、ツクロヒヲタノシタ。翌日スグニナホシテクレマシタ。
 七65 氣の毒なことだと思つて、人夫はすぐ川を渡つて、かの男を追つかけました。
 七74 年よりはちよつとふりかへりましたが、何ともいはず、すぐ又仕事をつづけました。
 七81 カキハ又スグフエルモノデ、軍艦や汽船ハ時々之ヲカキオトサナケレバナナイホドデアル。
 七92 「略」と、おとうさんは朝起きるとすぐ空を仰いでかうおつしやつた。
 八25 待ちかまへてゐた蕃人どもは、すぐに其の人を殺して、首を取りました。
 八34 婦人は大いに喜んで、夜の明けのを待つて、すぐに其の山へ上りました。
 八56 米屋の小ぞうへ、ひらりと下りて自轉車を 角の下駄屋

にあづけ置き、すぐに老婆をみちびきぬ。
 八84 信吉はほつと息をついて、「略」といつて、すぐ出かけようとした。
 八95 信吉は「いや、何、それには及びません。」といったが、すぐ「では、一日お借り申します。略」といつて、略。
 九12 親どりどもすぐに見つけて、其の足もとにむらがる。
 九27 それにはわたしが死んでも國へ歸らずに、すぐに江戸へ出て、略、一心に學問をはげむがよい。
 九49 僕は今日學校から歸るとすぐ、おとうさんのお手紙を持つて、精米會社へお使に行つて來ました。
 九53 おとうさんはすぐ言葉をついで、「略」とお話になりました。
 九72 辨慶が立往生をしたと傳へられてゐる衣川は、すぐ此の先にある。
 九88 略、あの星を本にして、すぐに北極星を見つける事が出来る。
 九89 略、あれを見つければ、道に迷つた時などにもすぐ方角を知る事が出来る。
 九92 ところがめぐみ深いジュピターといふ神様が、それを見て、略、すぐに親子の者を天へ連れていつて、大熊座と小熊座になさつたのださうです。

九104 利口な北風はすぐそれに氣がついた。
 九109 北風は驚いてすぐに立止らうとしたが、略、思はず其の場から數十間も進んでしまつた。
 十12 高橋さんは、すぐ前に居る順太郎君を見て、略。
 十79 合圖のかねが鳴るとすぐ動き出す。
 十93 「本道は遠いから近道を通らう。」と正雄が言ふと、良一はすぐ賛成した。
 十124 談話の最中に一人の老人がはいつて來ましたが、それを見るとすぐに立つて、椅子をゆづりました。
 十123 略、あの青年はいるとすぐに書物を取上げて、テーブルの上に置きました。
 十一14 私が來たので、すぐしまはうとなさるのを強ひて止めてお手傳をしましたが、略。
 十一15 のぶ子さんは、成績物が返るとすぐ紙の袋へ入れておいて、學年の終におまとめになるのださうです。
 十一17 のぶ子さんはすぐたんすの小引出から取出して、持つていらつしやいました。
 十一73 さうして新上屋の主人に、萬一御歸りに又泊られることがあつたら、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。

十一88 弟はそれを見てしばらく考へてゐたが、すぐ二百十日の通日から立春の前日の通日を引去つて、「略」。
 十一99 燈が盡きると翌朝すぐ手に取れるやうに、まくらもとの壁際に置く。
 十二41 略、ベーター・ベンはピヤノの前に腰を掛けて直にひき始めた。
 十二56 やつとつまんだと思ふと直に落してしまつた。
 十二131 さうして直に静岡の大總督府にはせつけて議をまとめ、略。
 すぐ「過」(上) 13 すぐ 過ぐ 過ぐ 《ギ・グレ》 うちすぐ・ゆきすぐ
 六53 ぬろりのはたに縄なふ父は、すきしくさの手がらを語る。
 七32 かくて幾年かすぎし後、武士は海をこえてふるさとへ歸ることとなれり。
 七108 彼岸ハ春ト秋トニアリテ、略、春ノ彼岸ヲ過グレバ、晝ヤウヤク長ク、秋ノ彼岸ヲ過グレバ、夜ヤウヤク長シ。
 七108 彼岸ハ春ト秋トニアリテ、略、春ノ彼岸ヲ過グレバ、晝ヤウヤク長ク、秋ノ彼岸ヲ過グレバ、夜ヤウヤク長シ。
 十一8 左に折れて第二の鳥居を過ぎ、又右に折れて第三の鳥居の前に出づ。

十一72図 孔子常に中正不偏を貴び、「略」といひ、「過ぎたるは及ばざるが如し」ともいへり。

十二49図 今市を過ぎ、大杜驛に着きぬ。

十二58図 やがて打續く松並木の間を過ぎて境内に入り、先づ拜殿の前にぬかづく。

十二149図 印刷術の幼稚なる時代にありては、唯をりく興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。

十二103図 略、今にして思へば唯一場の夢に過ぎず。

十二111図 當時は單に理化學の實驗用として使用せらるるに過ぎざりしが、略。

十二1119図 然れどもこは今日のアーケ燈に類するものにして、略、大仕掛にして光力強きに過ぎ、實用に適せず。

十二113図 こゝにおいて再び炭素線の研究に没頭したれども、徒に多くの時日と金錢とを費したるに過ぎざりき。

すくい「救」(名) 3 救ひ 救

十254 岩の上に残つた船體には、十人許の船員がすがり附いて、聲を限りて救を求めたが、何のかひもなかった。

十581 略、登山者が路に迷つて危険におちいつた時、救を求めたり、

いろく利用する事が出来る。

十一568 救ひのボートは下された。しかしとても間に合ひさうもない。

すくいあぐ「掬上」(下二) 1 すくひ上ぐ「一ゲ」

十一106図 略、實のみ浮びて流れ候を、下流にてすくひ上げ、之を廣きほし場にて乾かし候。

すくいこや「救小屋」(名) 1 救小屋

十一1286図 幕府は處々に救小屋を設けて救助に力を用ふれども、人々のくるしきは日々にまさりゆくばかりなり。

すくいだす「救出」(四) 1 救ひ出す「一シ」

十二869図 折よく同行の樺太人來りて土人等を叱し、林藏を救ひ出しぬ。

すくう「救」(四・五) 8 救ふ「一ハ・ヒ・ーフ」

十972図 宋の臣文天祥太いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。

十986図 天祥固くこばみてはいはく、「我、國を救ふことあたはず。略。」

十997図 心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。

十一554図 略、孔子大いに之をうれひ、略、萬民の苦を救はんものと、廣く各國をめぐりて、用ひられんことを求めぬ。

十一1273図 我が一切經の出版を思立ちたるは佛教を盛にせんが爲、佛

教を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんが爲なり。

十一1277図 一切經を世にひろむるはもとより必要の事なれども、人の死を救ふは更に必要なるに非ずや。

十一12810図 鐵眼 略、其の資金を以て力の及ぶ限り廣く人々を救ひ、又もや一錢をも留めざるに至れり。

十二963 釋迦は世を救ふ手始として先づかの五人の友をたづねた。

すくえる「救」(下二) 2 救へる「一へ」

十262図 かはいさうだが、とても人間業では救へない。

十265図 命を捨ててかゝつたら、救へないことはありますまい。

すくすく(副) 1 すくすく

十一382 略、それでも木が競争するやうに、しんを立ててすくすくと延びてゐるのを見ると、非常にうれしい。

すくない「少」(形) 12 少イ 少い

《一イ・カラ・ーク》↓のこりずくな・ひとずくな

四138図 ナルホド、オマヘノナカマハズギブン多イ。ワタシタチノ方ガ少イカモシレナイ。

九163 シタガツテ敵ニオソハレル心配モ少ク、又コチラカラ敵ヲオソフノニモ都合ガヨイノデアル。

九232図 しかし此の農學といふ學問は、略、三代かゝつても、まだ全

く手の着かない事が少くなかつた。

十465 研究の爲には、少からぬ費用もかかる。

十873 機械類は、略、物によつては、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。

十881 又外國から原料を輸入し、略、更に外國へ輸出する事も少くない。

十一386 木でも見下されるのがいやなのか、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

十一635 畠にしても、略、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。

十一934図 略、此の一年は一回歸年より約十一日少いから、太陽暦とくちがつて來て、三年にならないうちに一箇月の間をおかなければならない。

十二516 湖の水は東岸から奥入瀬川となつて流れ出るのであるが、一年を通じて水位の變化は極めて少い。

十二1072 さうして陰に陽に仕事のじやまをする者も少くなかつた。

十二1172図 略、今では略、しかも比較的熱をとまふことの少い電燈さへも發明されました。

すくなし「少」(形) 13 少シ 少し 《一カラ・一カリ・一キ・一ク・一ケレ・

—シ—

七76 港には防波堤ありて、風波のおそれ少く、水深くして、いかなる大船もきしに横づけにすることを得。

七28 大阪ハ昔仁徳天皇ノ都シタマヒシ所ニシテ、其ノ頃天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノ貧シキヲアハレミタマヒキ。

八29 手はすべて仕事のもとにして、いそがしき時に、手の足らずといふは、働く人の少きをいふなり。

九46 3 かくノ如ク、品物多クシテ、之ヲ望ム者少ケレバ、其ノ物ノ價安クナリ、〈略〉。

九46 4 品物少クシテ、之ヲ望ム者多ケレバ、其ノ物ノ價高クナル。

十五6 舊御苑と舊御殿の邊とをのぞきては、立木きはめて少かりしかば、新に植込みたる木の數、實に十數萬本に及べり。

十六2 大方は國民の眞心こめたる獻木にて、中には小學生の奉りたるものも少からず。

十二5 又池・沼を利用して鯉・鮒を養ふことも盛にして、大てい二年毎に之を賣るに、其の利益少しとせず。

十一34 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。

十二46 然れども材の優良にして

美麗なるは檜を以て第一とすべし。

〈略〉、割れ、そる等の憂極めて少く、又よく濕氣に耐ふるが故に、建築材として最も重んぜらる。

十二47 然れども材の優良にして美麗なるは檜を以て第一とすべし。〈略〉。唯杉に比して産額少く、増殖や、困難なるは惜しむべし。

十二48 中にもけやきはもくめ美しく、磨けば美麗なる光澤を生じ、又くるひ少きが故に裝飾材として珍重せられ、〈略〉。

十二85 夜は野宿すること少からず。

すぐる「優」(下二) 1 すぐる「一レ」

十一61 門人三千人、其の最もすぐれたるもの、顔淵・曾參・有若等七十二人なりき。

すぐる「優」(副) 1 すぐる「八66 昔或氏神のお祭に、競馬の神事といふ事があつた。〈略〉。或年選ばれた子どもの中に、すぐる上手なもの二人あつた。

すぐる「優」(下二) 1 すぐる「一レ」

十二132 我が國が〈略〉、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、主として我々國民にそれだけすぐれた素質があつたからである。

すがさ「菅笠」(名) 1 すが笠

九57 あみ笠をかぶつた父がふり向くと、母もすが笠をそちらへ向けて、

〈略〉、正一を見てにつこりした。

すけつね「栞註」(人名) 2 すけつね じくどうすけつね

四95 兄弟はくどうのやかたへふみこみました。〈略〉。ね入つて居るものをきるはひけふと、「おきよ、すけつね。曾我兄弟がまゐつた。」と名のりました。

四96 すけつねも人に知られたさむらひ、「心えた。」と、まぐらもとの刀を取つておき上らうとしました。

すげない(形) 1 すげない「一ク」

十二71 王は〈略〉次女リガンの許に走つた。ところがリガンは、まだ父上を迎へる準備が整つてゐないといふのを口實にして、すげなくも主を内に入れなかつた。

すごい じものすごい

すこし「少」(副) 35 スコシ 少

二61 太郎ハイマ、オカアサンガオクスリヲノムトコロヘ

ニスコシツツノマナイデ、モツトタクサンオアガリニナツタラ、ハヤクナホリマセウ。」

三58 マモナクヌイデシマヒマシタ。アブラゼミデス。〈略〉。スコシタツテカラ又來テ見マスト、モウリツパニセミニナツテキ

マス。

三74 ソノ中ニケダモノガカチサウニナツタノデ、〈略〉。スコシタツテ、コンドハ鳥ガカチサウニナリマシタ。

四66 神様にいのつてから目をひらいて見ると、今度は扇が少しおちついて見え

す。

五47 それをひろつて、まふしへうつすのですが、少しでもおくれるとかごのうらや棚のすみなどで、繭を

五67 少しまはり道だが、となり村の用水池を見て行くことにしよう。

六16 それからいさんと、ざぶ木林へはいつて、〈略〉、ねずみ草を少し取りました。

六18 行つて見ますと、なるほど少し早すぎましたが、それでも、小さなしめしが列を作つて出てあ

六33 病院ノ前ノ酒屋デハ雨戸ヲ明ケハジメタ。少シ行クト、呉服屋ノ小ゾウガ表ヲハイテキタ。

七38 大連の貿易高は横濱や神戸よりは少し下で、大てい大阪ぐらゐだといひます。

七53 私は年中航海をしてゐるものですから、少し其のお話を致し

す。

七64 かの入夫は、少ししてから、何の氣もなく、先程渡貨をあらそつ

た所へ行つて見ますと、〈略〉。

七92 何だか少しむし暑いやうだが、空には雲もなく、まことによく晴れてゐた。

八16 9 〈略〉、長四郎がそつと屋根つたひに行つて、もう少しで雀の巢へ手が届かうとした時、〈略〉。

八53 4 二かさね目のせいろうから、ゆげが上るまでに、少し間があつた。八64 2 先生、少しお待ち下さいませ。今風であかりがきえました。」

八91 3 信吉は少しはなれて、今度はおとよの顔を見ながら、「〈略〉。」と言つた。

九12 10 妹は餌をつかみて、わざと少しはなれたきりの木のあたりにまきちらせば、鶏はあわてて其の方へ行く。

九24 8 老人は一口飲んで横になつた。少したつて、今度は寝たまゝぼつと話し出した。

九53 9 先生、あの人は反對に、少しでも他人の負擔を軽くしようとして、自分の財産を残らず差出した。

九70 10 仙臺に着いたのは午前の三時で、少しは下りた人も乗つた人もあつた。

九73 7 汽車が盛岡を出て少し進むと、遠く左に見えるかくかうのよい山を指さして、「〈略〉。」とおつしやつた。

九99 9 〈略〉、かぼちや畠を見廻ると、此の前まだ少し早いと言つて残して

置いたのが、今日はもう熟しきつたやうな顔をして、〈略〉。

九100 5 其の隣の畠にしやうがが、根ぎはの赤い所を少し土からあらはして、ぎやうぎよく並んでゐるのも美しい。

十14 8 私が今度歸つて来て、はじめて青年團の規約を見た時は、〈略〉、これがまじめに實行されてゐるかどうかと、少し氣になつたのでした。

十51 8 だから、少しでも餘つたお金があつたら必ず預金にして置くものだ。

十73 4 何時か御約束した通り、今日は當地の様子を少しばかり申し上げます。

十80 10 坑道を少し行つて、ポンプ室の前に出ました。

十102 2 第十九 温室の中 〈略〉。それから少し行くと、うつぽかつらといふものがある。

十一66 7 第十五課 人と火 〈略〉。それから少し進むと、石や金を打合はせて火を出す法を考へるやうになつた。

十一86 6 先生、しつかりやれ。もう少しだ、もう少しだ。」

十一86 6 先生、しつかりやれ。もう少しだ、もう少しだ。」

十二21 1 又少し登る。どの山を見てもどの谷を見ても、蜜柑の木でない處はない。

十二67 7 先生、——ほんたうに姉上は私の思つてゐる通りをおつしやいました。唯少しおつしやり足りませぬばかりで、〈略〉。」

十二129 3 徳川侍のなまくら刀にも少しは切れる所がござりませう。

すこしく「少」2 少しく

十一28 1 二十日の月は上りぬ。退却軍は少しく之にたよりを得たれども、〈略〉。

十一43 8 今少しく日もたゞば、轉地するもよからんと醫師も申居候に付 〈略〉。

すこしも「少」(副) 24 スコシモ少しも

二36 6 ソレカラコノ人ノ田ニハ、オ米ガスコシモデキナクナツタトイヒマス。

二52 6 コンドハイクラハヒヲマイテモ、スコシモ花ガサキマセン。

二76 3 ライクワウハスコシモオソレズ、タチヲスルリトヌイテキリツケマシタ。

六20 3 いつも通る汽船も、高波をよけて、沖を通ると見えて、汽てきの音は少しも聞えませぬ。

六55 8 光盛の娘は其の後、夜晝頼朝をねらひましたが、少しもすぎがありません。

六79 4 はた拾、まり送、おにごつこ、何でもなれてしまへば、少しも陸上

とかはらない。

六80 8 けれども我が武士は、船の大小などは少しも氣にしまかつた。

六82 1 通有も左のかたを射られたが、少しも屈せず、刀をふるつて進んだ。

七78 1 寒からうが。」「少しも寒くはございません。」

七78 3 「はい。これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません。」

八99 8 先生、君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、少しも僕等の爲につくさない。

八102 2 君等は 〈略〉、此の數日の間少しも食物を送つてよこしませんでした。

九4 5 先生、内地から移つて來た人も多く、少しもさびしくはありません。

九10 4 先生、大風俄に吹來りて、波すさまじく荒れくるひ、御船少しも進まず、今にもくつがへらんばかりなりき。

九38 10 閣下の劍は軍人の魂として少しも名譽をきずつけなかつた。

九54 3 けれども社長さんは、それを少しも苦にしないで、『〈略〉。』といつて、笑つてゐた。

九85 4 先生、にいさん、空にはあんなにたくさん星が見えますが、少しも動かないのですか。」

十47 3 人は此の有様を見て、たはけ

とあざけり、氣ちがひと罵つたが、少しもとんちやくしない。
 十122 6 園 あいさつをしてもいいねいで、少しも生意氣な風が無く、〈略〉。
 十123 2 園 外の者は少しも氣がつかないらしかったが、あの青年は〈略〉。
 十197 3 〈略〉、路の遠いのは少しもいとはず、毎日毎日元氣よく通學した。
 十198 6 〈略〉、本を讀みたいといふ心は少しも變らなかつた。
 十1103 1 園 町のりつばなる事も、文明諸國の大都會に比して少しも劣る所これなく候。
 十1128 1 園 然れども鐵眼少しも屈せず、再び募集に着手して努力すること更に數年、〈略〉。
 すごす「過」(四・五) 4 過す「一シース」
 十145 9 園 〈略〉、畫師「〈略〉。」とて、心構せし様なりしが、尚筆も取らずで數日を過しぬ。
 十147 1 園 〈略〉、住持は尚知らぬ顔して過しに、十日餘りにして、ふすまの鶴は二十四五羽となりぬ。
 十1108 9 かうして又幾年か過すうちに、村の人々は此の仕事にあきて來た。
 十1135 10 〈略〉、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、其の主たるものであらう。
 すごす「(副) 3 すごく」

十61 10 園 〈略〉、僧は返す言葉もなくて出行きぬ。すくくと去る僧の後影を見送りたる妻は、〈略〉。
 十173 1 宣長は力を落して、すくくともどつて來た。
 十170 4 〈略〉、王の怒はいよくつものつて、もうどうすることも出來ない。コーデリヤはすくく父の許を去らなければならなかつた。
 スコットランド (地名) 1 スコットランド ینگランドスコットランドアイルランドさんごく
 十161 10 園 〈略〉、先づینگランドとスコットランドと合するや、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、藍地に斜白十字の徽章ある後者の國旗とを合して一旗となし、〈略〉。
 すこぶる「願」(副) 12 スコブル 頗ル 頗る
 八21 8 園 揚子江ノ流域ハ地味スコブルコエ、米・茶・綿等ノ産物多シ。
 八96 1 園 商工業盛ニシテ、燒物・塗物・扇・綿絲・織物等ノ産出頗ル多シ。
 十125 4 園 かくの如くなれば全村頗る豊にして、村民皆其の家業を樂しめり。
 十111 2 〈略〉、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。
 十128 3 園 〈略〉、秀吉の軍は、此の時既に處々のとりでより來れる守兵と合して、追撃すること頗る急なり。

十151 1 他の國人も之にならつて、南洋におけるゴムの栽培は頗る盛になつた。
 十1126 8 園 死傷頗る多く、家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らず。
 十117 8 園 かくいへば、頗る繁雜にして多大の時間を要する如くなれども、〈略〉。
 十1245 8 園 我が國に産する木材は其の種類頗る多し。
 十1247 8 園 ひば・松・落葉松は何れも堅くして、耐久・耐濕の性あるを以て建築・土木・造船等其の用途頗る廣し。
 十12116 2 園 殊に近年は水力電氣の驚くべき發達にとともに、電力は頗る廉價に供給されるので、〈略〉。
 十12133 4 東海の島に據つた日本は、國家を建設する上に頗る有利であつた。
 すざく「朱雀」(地名) 1 朱雀
 十12101 10 園 〈略〉、北に大内裏の宮殿を仰ぎ、朱雀の大路南に走りて、南端に羅城門をふまへたる古の奈良の都は、〈略〉。
 すざくおおい「朱雀大路」(地名) 1 朱雀大路
 十12102 園 朱雀大路
 すさのおのみこと「素戔鳴尊」(人名) 1 素さのをのみこと
 五7 6 天照大神の弟の方に、すさ

のをのみことと申す神様がございました。
 すさまじ「凄」(形) 2 すさまじ「キー・ーク」
 九10 3 園 既に大海に出で給ひしに、大風俄に吹來りて、波すさまじく荒れくるひ、〈略〉。
 十1109 10 園 〈略〉、天をもこがすばかりのほのほをあげて燃ゆる光景は、實にすさまじきものに候。
 すさまじい「凄」(形) 4 すさまじい「キー・ーク」ものすさまじい
 十80 1 昇降器がすさまじい勢で下りて行くので、目がまはりさうです。
 十81 2 室の中には、大きなポンプが幾つも すさまじい勢で活動してゐます。
 十113 9 もうくくと立ちこめる白煙の間から見ると、すさまじい波を起して、鯨は海底深く沈んだ。
 十158 2 とたんに、ずどんと一發すさまじい大砲の音がとろろき渡つた。
 すし「鮎」(名) 2 スシ 鮎し
 八59 7 園 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、今ナホ古風ヲ守リテ、〈略〉・あるホ(シルコ)・あし(スシ)・努ん屋(センベイ) ナドト記シテ、軒二下
 八59 7 園 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、今ナホ古風ヲ守リテ、〈略〉・あるホ(シルコ)・あし(スシ)・努ん屋(センベイ) ナドト記シテ、軒二下

ゲタルモアリ。

すじ ①いすじ・いとすじ・くびすじ・しおすじ・ひとすじ・ひとすじみち・まちすじ・みすじ・よこすじ

すじあい 「筋色」(名) 1 筋合

十二四六 ④ すると其のうちに又思の外な尻押なども現れて、事めんだうな筋合にならぬとも限りませぬ。

ずじょう 「頭上」(名) 1 頭上

十二四二 ④ 略、川沿の道をたどつて行くと、左手の山は次第に頭上にせまり、遂には路の前面に突立つて人のゆくてをさへぎつてしまふ。

すす 「煤」(名) 1 すす

四四三 ④ 略、ひさしうらのくものすを取る、勝手のすすをはらふ、まるでいくさのやうでした。

すす 「鈴」(名) 6 スズ すず すゞ

①こすず

二二八五 ④ 大キナ スズヲネコノクビニツケテオイテ、ソノオトガキコエタラ、ニゲルコトニシテハドウデセウ。

二二三〇 ④ 「ソレモヨイガ、ダレガソノ スズヲツケニイクカ。」

四二八 ちやうど人の出さかりで、お宮のすすがひつきりなしになつてゐます。

四三三 私どももすすをならしてをがみました。

八三七 第二 犬ころ 庭のすみで、

先程からちやらくとすすの音が聞える。

八五三 ふと、垣根の外でちやらくとすすの音が聞えた。

すすき 「薄」(名) 1 すすき

三七三 今日私が川の土手からとつて来たすすきも、花いけにさしてそなへてあります。

すすきがはら 「薄原」(名) 1 すゝきがはら

十二三六 ④ 略 はるく風風のゆくへの見ゆるかな、すすきがはらの秋の夜の月。

すすぐ 「漱」(四) 1 すずぐ 《一ギ》

十一九 ④ 水屋の水に手を清め口をすすぎて南門を入れば、《略》。

すすし 「涼」(形) 2 涼し 《一シク》

七三四 ④ 略 なはてつたひに来る風も、

若葉のにはひかんぼしく、空一ぱいの星は皆、涼しく金にまた、けり。

十一一〇三 ④ 略 此のブラジル國は、《略》、其の大部分は熱帯に屬し居候へども、中央の高地や海岸地方の大半は割合に涼しく、《略》。

すすしい 「涼」(形) 5 スズシイ スズシイ すずしい すゞしい 《一、一イーク》

一二〇三 スズシイカゼガフイテ、

ヨイコロモチデス。

三七九 ④ 略 時々すずしい風が吹いて来ると、おもひ出したやうにくつ虫がなきます。

五二三 ④ 下のかざりまどには、《略》、きれいな帯や、すすしさうな浴衣地がかざつてあります。

五二六 ④ 略 サウシテダンくスベシクナツテ、ガンガソロくワタツテ来ルコロ、南ノ國ヘカヘツテ行キマス。

五三〇 ④ 略 つりも出来るし、およぎも出来て、あつい夏でもすすしくくらす。

すすなり 「鈴生」(名) 4 すゞなり 鈴なり

九五六 ④ 略 コ、椰子は、《略》、其の葉の根本には、大人の頭ぐらゐの實がすすなりになつてゐます。

九一〇 ④ 略 うちの方をふりかへると、井戸端の柿の木に柿がすすなりになつてゐるのが目につく。

一四四六 ④ 略 ふと見上げると、庭の柿の木には、すすなりになつた實が夕日を浴びて、珊瑚珠のやうにかざやいてゐる。

一二二〇 ④ 略 どれを見ても、枝といふ枝にはもう黄金色に色づいた實が鈴なりになつてゐる。

すすはき 「煤掃」(課名) 2 すすはき

四四二 ④ 略 すすはき

四四三 ④ 略 すすはき

四四四 ④ 略 昨日はうちのすすはき

でした。

四四五 ④ 略 「此のころは大さうちがやかましくなつたから、すすはきは大きになつた。」

すすみ・いる 「涼」(上二) 1 涼みる 《一キ》

九八四 ④ 略 信吉の家にては、夕飯後庭先に涼み臺を出して、家内一同涼みめたり。

すすみきたる 「進米」(四) 1 進み来る 《一ル》

一一二四 ④ 略 思ひもよらぬ敵の一隊、湖に沿ひたる一筋路を急ぎに急ぎに進み来る。

すすみだい 「涼台」(名) 1 涼み臺

九八四 ④ 略 信吉の家にては、夕飯後庭先に涼み臺を出して、家内一同涼みめたり。

すすみでる 「進出」(下二) 1 すすみ出る 《一デ》

四六三 ④ 略 其の時一人の家來がすすみ出て、「なすのよ」と申すものがございます。《略》といひました。

すすみゆく 「進行」(五) 2 進み行く 《一キーク》

五九五 ④ 略 一足々々、遠い所へ進み行き、一くはく、廣いたんぼをうちあへす。

一〇二二 ④ 略 續いて造船部長の指

揮につれて吹く進水主任の號笛を合圖に、着々と進み行く進水作業。

すすむ「進」(四・五) 48 進む「マ・ミ・ム・メ・ン」↓つきますむ・ならびすすむ

六82 通有も左のかたを射られたが、少しも屈せず、刀をふるつて進んだ。

七102 潮がずん／＼下がるので、舟はすすと進んで、たちまち海へ出た。

七216 義貞は之を見て、「ものども進め。」と、《略》鎌倉さして攻めこみました。

七438 謙信はそれをさとつて、夜の間に進んで信玄の陣へ攻入つた。

七584 一たい船にはらしんぎといふ物があつて、それで方角をとつて進みますから、《略》。

八96 今度の競走も五分々々に進んで行つたが、中程まで行つた時、信作の馬はつまづいて、前足を折つた。

八453 昨朝あたりから熱が下つて、食事も進むやうになりましたので、やつと安心致しました。

九104 既に大海に出で給ひしに、大風俄に吹來りて、波すさまじく荒れくるひ、御船少しも進まず、《略》。

九377 昨朝あたりから熱が下つて、食事も進むやうになりましたので、やつと安心致しました。

九655 《略》、ブラシを持つた數十人の水兵が、甲板をこすりながら頭を

並べて進んで行く。

九681 汽車が進むにつれて、關東平野はだん／＼夜の景色にかはつて、見なれた所も面白く感じた。

九6910 窓から吹きこむ朝風のひやりとするのは、餘程北へ進んだ爲だらう。

九737 汽車が盛岡を出て少し進むと、遠く左に見えるかくかうのよい山を指さして、「《略》。」とおつしやつた。

九744 汽車は野を過ぎ山を越えて進む。

九1035 第二十二 北風號 《略》。やがて「進め」の號令がかゝると、たゞ愉快にたゞ一生けんめいにかける。

九1066 數分の後には、北風はもう列の先頭に立つて進んでゐた。

九1073 味方は其の正面から眞一文字に進んで行く。

九1084 中尉は始終先頭に立つて進んでゐたが、敵陣が間近になつたのを見て、一だん高く軍刀をふりかざし、《略》。

九1094 北風は《略》、後からかけて來る味方に追はれて、思はず其の場から數十間も進んでしまつた。

九1184 しかし今の戦争は昔と違つて、一人で進んで功を立てるやうなことは出来ない。

十二22 拜殿の前に進みて整列し、謹みて拜し奉る。

十154 朝鮮の青年も、近頃はなか／＼頭が進んで來ましたので、《略》

私どもは、非常に喜んでをります。

十335 船は先づ海から廣い掘割にはいる。しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。

十639 降積む雪に道を失ひ、進みもやらずたゞずみたる様は、古歌に《略》といへるにも似たりけり。

十713 《略》、常世はちぎれたる具足を着け、さび長刀を横たへ、わるびれたる様もなく、進みて御前にかしこまれば、《略》。

十737 此の停車場を出て大通を東北に進むと、二町ばかりで大きな門の前へ出ます。

十829 馬屋の前を通つてだん／＼奥深く進むと、いよいよ石炭を掘つてゐる處へ來ました。

十1127 一隻の捕鯨船が、勇ましく波を切つて進んで行く。

十1175 青銅の大鳥居をくゞつて進むと、沿道の家は大てい天満宮にちなんだ物を賣つてゐる。

十1195 歸りは二日市まで歩くことにした。地圖を便りにして進んで行く

と、《略》。

十一254 寄手の大將佐久間盛政は、《略》、明日は進んで賤嶽のとりでをおとし、一舉に敵をみぢんにせんと、《略》。

金を打合はせて火を出す法を考へるやうになつた。

十一673 《略》、時代が進んで燃料の種類が増すにつれて、火の用途もだん／＼廣くなつて來た。

十一7510 あなたは《略》、《略》、きつと此の研究を大成することが出來ませう。たゞ注意しなければなら

ないのは、順序正しく進むといふことです。

十一841 やがて「進め。」の號令と共に、三十人の一組は二列になつて、順々に水の中へとはいつて行く。

十一846 だん／＼沖の方へ進んで行くと、水の色はものすごい程濃い紺色だ。

十一857 その中、先に進んでゐる者が二三人列から離れて船上つた。

十一862 僕も急に元氣がなくなつて、一所に船上らうかと思つたが、「《略》。」と、自ら勵まして進んで行つた。

十一120 《略》、喜んで寄附するもの意外に多く、此の度は製版・印刷の業者々として進みたり。

十二45 松江を發したる汽車は《略》、やがて新川を渡り更に進みて斐伊川の鐵橋にかゝる。

十二141 《略》、生物は總べて長年月の間には次第に變化し、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。

十二247 文明の進んだ今日尚此のやうな考を持つのは、大きな誤といはねばならぬ。

十二835 図 これより北は波荒くして舟を進むべくもあらず、〈略〉。

十二8510 図 其の間、山にさしかれば舟を引きて之を越え、河・湖に出づればまた舟を浮べて進む。

十二1123 図 〈略〉トマス、エヂソンは、既に電話機に關する發明に成功したるを以て、更に進んで新しき電燈の發明に従事したり。

十二1129 図 彼が稀代の天才はこゝにも遺憾なく發揮せられて、着々成功の域に進みしが、〈略〉。

十二1157 図 電車は次第に汽車の領分までも侵略し、尚進んで電氣機關車さへも用ひられるやうになりました。

十二1171 図 エヂソンが炭素線の電燈を發明したのは四十年ばかり前のことであつたが、今では更に進んで光の色が太陽に似て、〈略〉熱をとまなふことの少い電燈さへも發明されました。

すすむ 〔進〕(下二) 1 進む 《一メ》

十一1128 図 二代の帝に盡くす真心、強敵ひしぎて世をしづめんと、三軍進めし五丈原頭、〈略〉。

すすむ 〔勸〕(下二) 1 すすむ 《一メ》

十703 図 〈略〉常世も、〈略〉、名残

なか／＼盡きず。今一日留り給へとすゝめて止まざりき。

すすむ 〔涼〕(五) 1 涼む 《一ム》

十一878 夕食をすましてから、縁がはへ出て涼む。

すすめ 〔勸〕(名) 1 すゝめ

十936 太郎は前から父に、〈略〉禁ぜられてゐたのであるが、友だちのすゝめをことわりかねて、一所に渡り出した。

すずめ 〔雀〕(名) 10 スズメ すずめ

すずめ 雀 ↓ たけにすずめ

一43 スズメ ガキマス。

四253 おばあさんが〈略〉おおひになりますと、〈略〉、すずめが

くらのやねへにげて行きます。

四372 スズメ ハヨワイ鳥 デスガ、ソバヘヨツテ、ヲドツタリ

サヘツツタリ シテバカニシマス。

五156 つゞり方の時間に、すゝめが教室の中へとびこみました。

八165 竹千代が軒ばに雀の果を見つけて、「長四郎、雀の子を取つて参れ」と命じた。

八166 図 「長四郎、雀の子を取つて参れ。」

八169 〈略〉、もう少しで雀の巢へ手が届かうとした時、ふみ外して軒下へどうと落ちた。

八175 図 「何しに此所へ参つた。」

九793 大人の握りこぶし程の大きな

のもあれば、雀の卵ぐらゐなかいらしいのもあるが、どれも皆、〈略〉、よく實がいつてゐる。

十二710 図 千木のほとりを飛ぶ鳩の、さながら雀の如く見ゆるも、社殿の高大なる爲なるべし。

すずめ 〔雀〕(名) 2 雀の子

八目8 第四 武將の幼時 〈略〉 三

八161 三 雀の子

すすめる 〔進〕(下二) 3 進める

《一メ》

九229 図 それから元庵様・不味軒様、二代つゞいて、其のお志をおつぎになり、一そう研究を進められた。

十一1141 〈略〉、其の組織に繁簡の差があるにしても、地方自治の精神に基づいて其の團體の幸福を進め、國運の發展を期することは皆同じである。

十二135 〈略〉、毎日きめた時間割通りに仕事を進めて、たとへ十分、十五分の餘暇でも無益に費することがなかつた。

すすめる 〔勸〕(下二) 1 すゝめる

《一メ》

九246 少年はてつびんの湯をついで老人にすゝめた。

すそ 〔裾〕(名) 10 すそ

三111 図 うちの子ねこは、かはいいい子ねこ、〈略〉、すそにか

らまり、たもとにすがる。

三821 図 〈略〉、かすみのすそを遠くひく、ふじは日本一の山。

五358 平尾山のすそへ行くと、わらびやぜんまいが、すつかり葉になつてゐました。

五668 図 此の村には、向ふの杉山のすそに、大きな用水池があつて、其所から水を引くからだ。

六723 此の電車道から東山のすそへかけて、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、〈略〉。

七108 船頭が「皆さん、そろ／＼おしたくだ。」と言つたので、みんな羽織をぬいで、着物のすそをはしよつた。

九342 みねからすそにかけての若々しいこずゑの色は、強い日光を浴びて、一面に煙つてゐる。

九1009 山のすその方があちらこちら

白いの、蕎麥の花であらう。

十759 図 北の方の山のすそには、松林を後にして右に昌徳宮、左に景福宮の壯大な構がある。

十一308 図 ねぢ伏せられながら正國

清正がよろひのすそをしつかとつかむ。

すその 〔裾野〕(名) 1 すそ野

四937 兄弟は今度こそはと、母にいとまごひをして、ふじ

のすそ野へ急ぎました。

ずたずた (形状) 1 ずたずた

五116 〈略〉、大蛇がよひつづれますと、みことはこしのつるぎをぬいて、大蛇をずたずたにお切りになりました。

すたる 「廃」 (五) 1 すたる

《一ツ》

十二6610 〈略〉、石や金を打合はせて火を出す法を考へるやうになった。

此の方法は〈略〉、マツチの使用が廣まるにつれてすたつて來た。

すたる 「廢」 (下二) 1 廢る 《一レ》

十二9910 興福寺は伽藍半ば廢れたれど、尚三重五重の塔、猿澤の池水に影をうつして南都第一の美觀たり。

すつ 「捨」 (下二) 3 すつ 捨つ 《一テ》 ↓ ながすつ

九1167 何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。一命を捨てて君の御恩に報ゆる爲には候はずや。

十一1117 劉備が三顧のこよなき知遇、我が身をすてて報いんと、起ちてぞ出でぬる、草のいほりを。

十二226 よきを取りあしきを捨てて、とつ國に おとらぬ國となすよしもがな。

ずつ (副助) 15 ツツ づつ

二613 「ソレナラ、ソソナニスコシツツノマナイデ、モツトタクサンオアガリニナツタラ、ハヤクナホリマセウ。」

五94 それを八岐の大蛇が來て、毎年一人づつたべました。

五102 此の停車場から、毎日七八千人づつの人が乗降ります。

六27 うちでも土間に丸太を置いて、其の上につんであります。一番下は四俵、一番上は一俵で、一山は十俵づつです。

七462 又つて明日たがひに勇士を一人づつ出して組討をさせ、勝つた方のものが川中島を取ることにしては。

八62 それは氏子の五箇村から、子どもの騎手を一人づつ出して、社の横の池のまはりで競走させて、〈略〉。

八235 〈略〉、其の後のお祭には、毎年其の首を一つづつ供へさせました。

八428 「略」、白木綿を一反づつ、名札をつけて、三日の間に間違なく持參致せ。」

八432 三日の間に一同は白木綿を一反づつ持つて參りました。

八1055 〈略〉、乾かしたのをそろへてマツチの箱に入れる者もあり、箱に入れたのを十づつ集めて包紙に包む者もある。

九5610 後には麥の束が山と積んである。それをてんで一束づつ取つては、兩手で根本の所をつかんで、打臺にぱた／＼とた／＼きつけると、〈略〉。

十207 子馬が一頭づつ中央の廣場

に引出されると、黒山のやうに集つてゐる買手は、〈略〉、次第にせり上げる。

十84 採炭坑夫は四人づつ一組になつてゐて、其の内の二人が石炭を掘崩すと、他の二人が〈略〉炭車に入れる。

十二119 〈略〉、珍しい甲蟲が二匹ゐた。早速兩手に一匹づつつかむと、又一匹變つたのが見えた。

十二794 漁夫はめい／＼手に一ちやうづつの鈎を持ち、狂ひ廻るまぐろを引かけ、〈略〉。

すつかり (副) 16 スツカリ すつかり

二186 ネエサン、デテゴランナサイ、月ガデハジメマシタ。〈略〉。

モウ スツカリ 木ノ上ヘデマシタ。

三345 〈略〉、五いちいさんは「もうすつかりよわりました。」といつて、大きな手であたまをなでました。

三458 〈略〉、うちもなくなつてゐて、村のやうすもすつかりかはつてゐます。

四204 白ウサギガソノ通りニシマス、カラダハスツカリモトノヤウニナホリマシタ。

四458 〈略〉、すつかりいろいろな物をもとの所へなほしたら、夕方近くなりました。

五157 先生がまどをすつかり明けて、

出しておやりになりました。

五358 平尾山のすへ行くと、わらびやぜんまいが、すつかり葉になつてゐました。

五851 大水が出なければよいがと心ばいして、夜中に手をけやはき物まですつかり二階へ上げました。

七132 潮がすつかり落ちて、海はをかのやうになつた。

八549 〈略〉、それでもとう／＼一白だけはつき上げた。八時頃には、すつかりすんだ。

九468 植がすつかりすみました。

九638 數分の内に艦内はすつかり整頓する。

十388 私は思はず、「やあ、すつかり變つた。」と聲をあげると、兄は「略」といって、かついで來たつるはしを下へ置いた。

十12210 はきはきしてゐて、禮儀をわきまへてゐることも、それですつかり分りました。

十一9810 さうして其の本の内容がすつかりわかつてしまふまでは何度でも讀む。

十一1002 壁のすき間をもつた雨のため、本がすつかりぬれてゐたので、〈略〉。

すつと (副) 1 すつと

七101 潮がずん／＼下がるので、舟はすつと進んで、たちまち海へ出

い人でした。

十959 図 それから又、晝間私が聞いた時、なぜすなほに『はい。』といはなかつたのだ。

すなじ 「砂地」(名) 1 砂地

七21 すると、これまで潮の満ちてゐた稻村崎は、其の夜の月の入る頃に、二十餘町にはかに干上つて砂地にかはり、〈略〉。

すなどり 「漁」(名) 1 すなどり

十二69 図 此の時事代主命はすなどりのため美保崎といふ處にありしが、〈略〉。

すなほこり 「砂埃」(名) 2 砂ほこり

九109 7 大空には、午後の日が大砲の煙や砂ほこりにさへぎられて、どんよりとかゝり、〈略〉。

十84 全身砂ほこりにまみれた王は、〈略〉きれいな川にはいつて水浴をした。

すなわち 「即」(接) 16 スナハチ すなはち 即ち

八49 1 第十三 驚 〈略〉。〈略〉、自在二空ヲトブ様ハ、實ニ勇マシイモノデアル。スナハチ一間餘モアルツバサヲハツテ、數分ノ間羽バタキ一ツセズ、空中ヲノシテ行ク。

九46 5 図 カクノ如ク、品物多クシテ、之ヲ望ム者少ケレバ、其ノ物ノ價安クナリ、品物少クシテ、之ヲ望ム者多ケレバ、其ノ物ノ價高クナル。スナハチ物ノ價ノ高下ハ、主トシテ需

要ト供給トノ關係ニヨルナリ。

十一110 さうして其のさしわたしは三十五萬四千里、即ち地球の百九倍餘りに當り、〈略〉。

十一47 図 孔子は今より凡そ二千五百年前、當時の魯即ち今の山東省の地に生れたり。

十一114 4 一體自治の精神とは何であるか。地方人民が協同一致して自ら地方公共の事に當り、誠意其の團體の爲に力を盡くす精神が即ちそれである。

十一127 7 図 鐵眼 〈略〉。つらく思ふに、〈略〉。一切經を世にひろむるはもとより必要の事なれども、人の死を救ふは更に必要なるに非ずや。」と。すなはち喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、資金を悉く救助の用に當てたりき。

十二77 7 図 大神其の眞心の厚きを賞して、命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。これ即ち出雲大社の起原なり。

十二22 5 商人たる者は、〈略〉、廣く公衆の爲を計らなければならぬ。これ即ち世間の信用を博して堅實に自己の事業を發展させる道である。

十二23 5 外國貿易に至つては、之に従事する者の心掛け如何の影響が更に大きい。即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、〈略〉、貿易の不振を招き國運の發展

をもさまたげることになる。

十二51 7 湖の水は〈略〉、一年を通じて水位の變化は極めて少い。即ち水位の一番高い五月と一番低い一月との差は、僅かに三十八センチメートルに過ぎない。

十二62 7 図 アメリカ合衆國の國旗は一定不變の部分と、變化を許された部分とより成る。即ち赤・白合はせて十三條の横筋は、〈略〉、永久に變化することあらざれども、藍地中の星章は、常に州の數と一致せしむるを定めとす。

十二63 8 図 國旗の色彩が其の國の人種を表すものに、支那の國旗あり。即ち赤・黄・藍・白・黒の五色を横に並べたるものにて、赤は漢人、黄は滿洲人、〈略〉、黒は西蔵人を代表するなり。

十二64 8 図 〈略〉國旗は、〈略〉、或は其の國民の理想・信仰を表すものなれば、國民の之に對する尊敬は、即ち其の國家に對する忠愛の情の發露なり。

十二76 10 だいがう網は〈略〉。これを海中に張つた形はちやうど大きなひしやくに似てゐる。即ち水のはいる處に當る部分が身網で、柄に當る部分が垣網である。

十二82 4 図 今より百二十年ばかり前、即ち文化五年の四月に、林藏は〈略〉、松田傳十郎と共に樺太の海岸

を探検せり。

十二88 10 討議の形式は、普通第一讀會・第二讀會・第三讀會の三度の會議を経ることになつてゐる。即ち第一讀會で其の案を大體に調査し、第二讀會で逐條に審議し、第三讀會で法律案全體の可否を議決する。

すばしこい (形) 1 すばしこい 《一い》

十二10 2 九歳の時始めて學校にはいつたが、餘りすばしこい生れつてきでなかつたので、先生にもむしろ中以下の生徒と思はれてゐた。

すばやし 「素早」(形) 1 すばやし 《一ク》

九14 2 図 其の音を聞きつけてかけ來り、飛びちりたる目のかけを、すばやくついばみたるは眞白なるめんどりなり。

すぶ 「統」(下) 1 統ぶ 《一べ》

十二16 4 図 これも社によりて多少の相違はあれども、多くは總務局ありて全體を統べ、〈略〉。

すべて 「総」(名) 2 總べて

十一14 4 〈略〉、さうちもよく行届いてゐるし、總べてがきちんとしてゐました。

十一60 1 未開の土地を切開いて、思ふまゝに設計して造つた町であるから、總べてが大規模でのび／＼としてゐる。

すべて 「総」(副) 16 スベテ すべて

總べて

七五三 見るもの聞くものが、總べて皆珍しいのであります。

八二九 手はすべて仕事のもとにして、いそがしき時に、手の足らずといふは、働く人の少きをいふなり。

八五八 すべて看板ハ商品又ハ職業ノ名、屋號等ヲ記シテ、人目ニツキヤスカラシメントスルモノナリ。

八〇三 世の中といふものは、すべて相持のものです。

八〇五 すべてかういふやうに、手分をして別々に仕事をするを分業といふ。

九一五 略、養鶏は今年より僕等の仕事となり、日記をも渡されたれば、鶏の事は總べて之に記入し置くなり。

九四三 うちの事はすべて御安心下さい。

九六三 それにつれて、つり床は正しく一定の場所に納められる、すべての窓や出入口は開かれる。

九八六 總べて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。

一〇一〇 略、拜殿・廻廊など總べて白木造にて、神々しさたとへん方なし。

一一三六 地蔵山の内、二町三段五畝、峯通り檜苗、其の他總べて杉苗。一坪一本の割。

一一六三 此の邊の農業は總べて規模

が大きい。

一一七六 略、金錢といつてゐる物の中には、金貨を始め、銀貨・白銅貨・青銅貨がある。これらを總べて貨幣といふ。

一二一〇 略、生物は總べて長年月の間には次第に變化し、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。

一二二八 歴史は長し 七百年、興亡すべて ゆめに似て、英雄墓は こけむしぬ。

一二三六 すべて日本人の短所として、性質が小さく狭く出來たきらひがある。

すべらせる 滑 下二 2 すべらせる 《一セ》

三二九 足すべらせて こけかかる おととを かばふ あねのうで。

五五八 或日山の中で、こけに足をすべらせて、うつむけにたふれました。

すべり じきよくすべり・こおりすべり すべりいず 滑出 下二 1 すべり出づ 《一ツ》

一〇二七 一秒又一秒、七百尺に近き大船體は、寸、尺、間と音もなくすべり出づ。

すべりおちる 滑落 上二 2 スベリオチル すべり落ちる 《一チ》

四六三 ヨクキレルカンナガスウツト板ノ上ヲ通ルト、カンナ

クツガヒトリデニクルリトマハ

ツテスベリオチマス。

八九八 信作はつるりとすべり落ちて、其のはずみに、ころ／＼と池の中へころげこんだ。

すべりかた 滑方 名 1 すべり方 六七八 みんな水靴を着けて、思ひ／＼のすべり方をしてゐる。

すべる 滑 四・五 9 すべる 《一ツ・リール》

六七八 みんな水靴を着けて、思ひ／＼のすべり方をしてゐる。すべる／＼、みんなすべる。

六七八 すべる／＼、みんなすべる。 六八五 すべる／＼、みんなすべる。

六八七 片足でおそろしい程早くすべる者もあれば、人の手にすがつて、こはこはすべる者もある。

六八九 略、人の手にすがつて、こはこはすべる者もある。

九五九 下山の時には、木の枝などを櫓にして、此の雪溪をすべつて下る人があります。

九六六 僕も其の通りにして見ましたが、急な坂を矢のやうに早くすべるのですから、實に壯快でした。

九六三 お話を聞いて、僕もすべつて見たくなりました。

一二二九 かもめ飛ぶ海をすべりて、船は今靜かに歸る、懷かしき故郷の港。

ズボン 名 1 ズボン 九六四 水兵は 略、かひがひしく

ズボンと袖をまくり上げ、身輕な姿となつて分隊毎に甲板洗を始める。

すまい 住 名 1 住居 じおんすまい

一一一一 とき世をよそなるしづきき住居、出でては日毎畑を打ち、入りては机に書をひもとく。

すま・う 住 五 1 住まふ 《ハ》

一二九二 略、父王は、彼に妃を迎へ、目もまばゆい宮殿に住まはせて、國政にも與らせようとした。

すま・す 落 五 8 すます 《一・ス・ス》

四一四 小やはかへして、子はくれうつて、廣いたんぼの麥まき すます。

五二四 朝、おさらひをすましてから、春子とつくしをつみに行きました。

五三二 本のおさらひすました後は枝につるしたぶらんこ遊。

六〇六 参拜をすましてから、京都へ出て、二三日見物して歸られるさうです。

六〇七 参拜をすましてから、二見浦を見に行つて、おみやげに貝細工を買つた。

八三三 信吉は僕の兩親に歸つて來たあいさつをすますと、略。

九二五 信淵は父の門人たちの情で、形ばかりの葬式をすますと、間もなく江戸へ出て、略。

十一878 夕食をすましてから、縁がはへ出て涼む。

すま・す 「澄」(五) 1 すます 《シ》

十二379 二人は戸外にたゝずんでしばらく耳をすましてゐたが、やがてピヤノの音がはたと止んで、《略》。

すみ 「炭」(課名) 2 炭

八目13 第九 炭

八29 4 第九 炭

すみ 「炭」(名) 8 炭 ↓かたずみ

八33 炭を焼く煙も所々に立ちほじめた。

八29 5 太郎は毎日炭を焼く煙を遠くに見てゐるが、まだ一度も其所へ行つて見たことがない。

八29 7 或日炭を焼く男が太郎のうへ来て、《略》いろ／＼の話をした。

八29 8 此の時太郎が、炭はどうして焼くのかときくと、《略》教へてくれた。

八30 2 先づよい場所を見立てて、炭を焼く間ねとまりをするための小屋を建てる。

八32 2 炭に焼く木は、主にならとくぬぎで、くぬぎの炭の方が火持がよい。

八32 3 炭に焼く木は、主にならとくぬぎで、くぬぎの炭の方が火持がよい。

十一978 鉛筆や紙も自由には買へなかつたから、家で算術の練習をする

すみ 「隅」(名) 5 スミ すみ ↓かたずみ

二42 2 アル日犬ハ畠ノスミ

デ、「ココホレ、ワンワン。ココ

ホレ、ワンワン。」トヲシヘマシタ。

五47 5 《略》、少しでもおくれると、

かごのうらや棚のすみなどで、繭を

かけはじめますから、ちつともゆだ

んが出来ません。

八37 庭のすみで、先程からちやら

く／＼とすゞの音が聞える。

九12 2 顔を洗ひをはりて、いつも

の如く、庭のすみなるとやの戸を開

く。

九60 4 庭のすみにはほうせん花が真

赤に咲いてゐる。

すみ 「墨」(名) 1 墨 ↓うすずみ

ろ

八58 3 学校用具ヲ賣ル店ニ、手

帳・筆・墨・繪具ナドト記シタル看

板ヲ出シ、《略》。

すみか 「住家」(名) 1 住家

十一80 3 煙たなびくと

まやこそ、我がなつかしき住家な

れ。

すみきる 「澄切」(五) 6 すみきる

《一ツ》

三78 5 空は水のやうにすみき

つて、雲一つありません。

四15 大きな字を書いたのほり

がすみきつた空に立つてゐま

す。

六21 5 空もみどり、海もみどり、

空につゞく海のみどり、海に

つゞく空のみどり、すみきつて、

かゞみとかゞみ。

十76 4 すみきつた空気の中に煉瓦

の赤色や、松の緑色などが鮮かに浮

出して見えるのは實にきれいです。

十二19 調子のよい蜜柑取歌がすみ

きつた晩秋の空気をふるはして、何

處からともなくのどかに聞えて来る。

十二43 7 「それでは此の月の光を題

に一曲。」といつて、彼はしばらく

すみきつた空を眺めてゐたが、《略》。

すみずみ 「隅隅」(名) 1 すみずみ

四28 2 電とうはらんぶとちがつ

て、へやのすみずみまであかる

く、《略》。

すみやか 「速」(形状) 2 速

十二14 5 世の出来事を速に知らん

とするは人情の常なり。

十二17 10 原稿締切時刻より

刷出まで其の間僅かに數十分、以て

其の如何に速なるかを知るべし。

すみよい 「住良」(形) 1 住みよい

《一イ》

九4 2 暑さも年中此のくらゐのも

のださうで、かねて思つてゐたとは

違ひ、なか／＼住みよいところのや

うです。

すみれ 「董」(名) 1 スミレ

三18 ミチバタニハスミレヤタ

ンボガサイテキルシ、《略》。

すみわたる 「澄渡」(四) 2 すみわ

たる すみ渡る 《一リ》

十127 5 果もなくすみ渡りたる大空、

はなやかに流るゝ日の光、《略》拜

觀者の胸は、《略》、唯をどりにをど

る。

十二15 浅緑すみわたりたる大

空のひろきをおのが心とがな。

す・む 「住」(四・五) 16 スム すむ

住ム 住む 《一ム・一メーン》

五8 2 みことは此の川上にも人がす

んでゐるにちがひないとおかんがへ

になつて、だんだん山おくへおはい

りになりますと、《略》。

五58 6 宮島はまはりが七里もある島

で、島の山には鹿がたくさんすんで

ゐます。

六16 5 山の中でも、三軒

家でも、住めば都よ、わが里よ。

六56 8 これが萬じゆの姫で、木曾に

住んで居りましたが、《略》。

七12 2 われらが住む世界は、其の

形まるくして、球の如し。

七79 4 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤ其ノ外イ

ロ／＼ノ動物ガスンデ居リ、又サマ

ザマノ植物モ生エテ居ル。

七80 7 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タ

コ・イカナダガスンデキル。

七80 9 エビノピン／＼ハネタリ、カ

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、池ヤ

川ニスムモノトチガハナイガ、《略》。

七83 海ニハ又獸類ガスンデキル。
 七83 陸ニスムモノデハ、象ガ先ヅ
 一番大キイガ、象ヲ鯨ニクラベルト、
 赤子ト大人トヨリモ、モツトチガフ。
 八49 驚ハ遠ク人里ヲハナレテ深山
 ニスム。
 九16 田ニ住ム土蛙ハ土色、木ノ葉
 ニ宿ル雨蛙ハ緑色。
 九16 沙漠地方ニ居ルラクダハ灰色
 デ、雪ノ中ニ住ム北極熊ハ眞白デ
 アル。
 九17 北國ニ住ム野ウサギヤ高山ノ
 上ニ居ル雷鳥ハ、〈略〉、冬ニナツテ
 雪ガ降りツモルト、眞白ニナル。
 十一8 此ニハ外國人の居留する
 者が非常に多く、これ等は租界とい
 ふ特別の區域内に住んでゐる。
 十一10 此の邊は南米中、日本
 人の最も多く住める處にて、何處に
 行きてても日本人を見かけ候は甚だ愉
 快に候。
 すむ「済」(五) 25 スム すむ「
 マーミ・ムーン」
 三14 ゆふはんがすんだあとで、
 おぢいさんが二郎にたづねまし
 た。
 三77 夕はんがすむと、うちの
 ものはみんなえんがはへ出ま
 した。
 四8 學校ノ式ガスンデカラ、
 トモダチトムカフノ山へ上り
 マシタ。

四11 〇〇〇 「やつとすんだ。」と
 見上げる空に、あすも天氣か、
 夕日が赤い。
 四48 〈略〉、それでもふきさうち
 がすんで、すつかりいろいろな
 物をもとの所へなほしたら、
 夕方近くになりました。
 四50 十一 かるた取 〈略〉。一ど
 すみました。道子が十二まい、
 みよ子が十まい、〈略〉。
 五88 うちでも一時は飲水やたべ
 物にこまりましたが、今ではあとか
 たづけも大がいですました。
 六52 一番二番三番と、十二番の舞
 がめでたくすみました、〈略〉人
 のほめ立てたのは五番目の舞でござ
 いました。
 七71 どうぞ之を受取つて、私の
 氣がすむやうにして下さい。
 七72 もしお金をもらつたら、あ
 なたの氣はそれですむかも知れませ
 んが、私の氣がすみません。
 七72 もしお金をもらつたら、
 〈略〉、私の氣がすみません。
 七73 〈略〉、其の日のくらしにこ
 まるやうなこともあります、心に
 すまないことはまだ一度もした事は
 ありません。
 七93 それが、朝飯がすむと間もな
 く、稻の葉がさわ／＼出した。
 八75 神主は先づ神前で祝詞を上げ
 て、それがすむと、「支度」といふ

あひづの一番太鼓を鳴らした。
 八54 第十四 餅つき 〈略〉。八時
 頃には、すつかりすんだ。
 九46 田植がいさん、昨日でうちの田
 植がすつかりすみました。
 九47 田植がすんだので、昨夜は
 手つだひの人たちを呼んで、ごちそ
 うをしました。
 九48 もう二番茶もつまなくて
 はならない。それがすむとやがて夏
 蠶の上りだ。
 九65 甲板洗がすむと、「總員顔洗
 へ。」「煙草ぼん出せ。」の令が下る。
 九74 五時間目の授業がすむと、先
 生は〈略〉、「略。」とおつしやつ
 た。
 九120 「オートウサン、御用ハモウ
 スンダノデスカ。」
 九120 「イヤ、マダスマナイ。今
 日午後四時ノ汽車デ又出カケルノ
 ダ。」
 十一53 ゴム園の人は〈略〉、受持
 の木に此の切付をして廻る。それが
 すむと、今度はバケツを持つてコッ
 プにたまつた液を集めて歩くのであ
 る。
 十一71 何でも山城・大和方面の
 御旅行がすんで、これから参宮をな
 さるのださうです。
 十一88 二百十日もこれで無事に
 すんだ。
 すむ「澄」(四・五) 6 すむ「ミ・

ー」
 八23 谷間の水はすきとほるやうに
 すんでゐる。
 九70 水のすんでゐる事はかくべ
 つで、〈略〉、美しい海底のありさま
 が手に取るやうによく見えます。
 九34 空ははてもなくすんで、所々
 にちぎれ雲が飛んでゐる。
 九100 昨夜雨が降つたせゐか、空が
 きれいにすんで、向ふの天神山が近
 く見える。
 九105 やがて中尉はちよつと腕時計
 を見て、いつものやうにすんだ聲で
 號令をかけた。
 十二40 停車場の外に出づれば、
 秋晴の空はあくまですみて、暖さ春
 の如し。
 すもう「相撲」(名) 1 すまふ
 四35 お宮のうらではすまふ
 がはじまつてゐて、「わあわあ」
 とはやすこゑがきこえます。
 すやすや(副) 1 すやく
 九27 父は安心した様子で、やがて
 すやくと眠つた。
 すらすら(副) 1 すらく
 十91 〈略〉、太郎は生麥生米生卵。
 と、早口にすらく／＼言へるやうにな
 った。
 ずらり(副) 1 ずらり
 九64 〈略〉、はだしのままの水兵が
 後甲板にはせ集つて、ずらりと整列
 する。

すり【刷】↓こうせいすり

すり【摺】↓てすり

すりあがる【刷上】(四) 1 刷上る

《一リ》

十二188図 かくて刷上りたる新聞は、直に販賣部を経て遠近に發送せらる。

すりだし【刷出】(名) 1 刷出

十二179図 略、原稿締切時刻より刷出まで其の間僅かに數十分、以て其の如何に速なるかを知るべし。

すりよ・せる【擦寄】(下二) 1 すりよせる 《一セ》

九1106 北風は、もう一度鼻先をなでてもらひたくなつて、そつと顔を主人の肩のあたりへすりよせた。

すりよ・る【擦寄】(四) 1 すりよる

《一ル》

八277図 略、三毛もまた、したはしき人と見るらん。尾を立てて、のどを鳴らして、我にすりよる。

す・る【刷】(四) 1 刷る 《一リ》

十二175図 印刷部にては直に所要の活字を拾ひて之を組み、校正刷を刷りて校正部に廻す。

す・る【擦】(五) 1 する 《一ツ》

六33 今日庭にほしてあるもみをすつて、俵に入れてつんだら、三つ目の山は出来上りませう。

する【為】(サ変) 521 スル する

《サ・シ・スル・スレ・セ・セヨ》↓あいこ
うする・あいようする・あつさりす

る・あんしゅつする・あんしんしなさ
る・あんしんする・あんずる・あんな
いする・いくせいする・いじゅうす
る・いしょくする・いちらんする・
いっそうする・いっちらする・いつてん
する・いどうする・いにんする・うえ
じにする・うちじにする・うりかいす
る・うろろする・うんでんする・う
んようする・えいぞくする・えだうつ
りする・おいとまする・おうずる・お
うふくする・おうようする・おうらい
する・おおまわりする・おききする・
おしらせする・おてつだいする・おま
つりする・おもんずる・おやくそくす
る・およびする・おわたしする・かい
けんする・かいこんしはじめる・かい
こんする・かいする・かいつうする・
かいはつする・かいふくする・かい
りようする・かくさくする・かけつす
る・かこうする・かする・がっかりす
る・かつさいする・がっしょうする・
かつどうする・かろんずる・かんけい
する・かんげきする・かんしんする・
かんずる・かんせいする・かんどうす
る・かんとくする・かんばんつする・か
んびようする・かんゆうする・きかん
する・ぎけつする・きけんする・き
しやする・ぎする・きふくする・きふ
する・ぎやくたいする・きようかす
る・きようきゆうする・きようせいす
る・きようそうする・きようどういっ
ちする・きようりよくする・きよくせ

つする・きよときよとする・きよりゆ
うする・きんずる・くつする・くふう
する・くろうする・けいえいする・け
いかいする・けいかくする・けいせい
する・けいふくする・けいれいする・
げきする・げきぞうする・けっしんす
る・けつする・けつちやくする・げん
いんする・けんきゆうする・げんず
る・けんせつする・けんぶつする・こ
うあんする・こうかいする・こうかん
する・こうけんする・こうこくする・
こうさくする・こうさんする・こうし
て・こうする・こうたいする・こうど
うする・こうふする・こおどりする・
こきゅうする・ごほうこうする・こん
ぜつする・こんらんする・さいかす
る・さいそくする・さいはいする・さ
いばんする・さくせいする・さつぱり
する・さわさわしだす・さんかんす
る・さんけいする・さんげんする・さ
んざいする・さんしゅつする・さんす
る・さんずる・さんせいする・さんぶ
んする・しあんする・ししょうする・
じせいする・じぞくする・じたいす
る・しつかりする・じっこうする・し
つぼうする・じめじめする・しやす
る・しゅうしつかんする・じゅうじ
する・しゅうようする・しゅくする・
しゅつぱつする・しゅとして・しゅう
かする・じょうげする・じょうじゅす
る・じょうしよする・じょうする・
じょうずる・じょうずる・じょうそす

る・しようちする・しようとつする・
しようめいする・しようれいする・
しよくじする・じちようする・しよ
りする・しんぎする・しんぐんする・
しんずる・しんばいする・しんぼうす
る・しんらいする・しんりやくする・
せいかつする・せいこうする・せいさ
くする・せいざする・せいぞうする・
せいぞんする・せいちようする・せい
ていする・せいとんする・せいばつす
る・せいふくする・せいつする・
せつけいする・せつする・せつめいす
る・せわする・せんきよする・せんし
する・ぞうかする・ぞうげんする・そ
うして・そうじようする・ぞうしんす
る・そうぞうする・そうだんする・ぞ
くする・そしきする・そつぎようす
る・そんざいする・ぞんずる・そん
ちようする・たいざいする・たいざす
る・たいじする・たいする・だいす
る・たいせいする・だいひようする・
たつする・だつする・だんけつする・
たんそくする・ちやくしゅする・ちゅ
ういする・ちゅうしする・ちようごう
する・ちようさする・ちようりする・
ちよつとした・つうがくする・つうか
する・つうずる・つうちする・てい
しゅつする・てきする・てきする・て
だすける・てんかいする・てんこう
する・てんずる・どういする・とうぎ
する・どうして・どうしても・とうせ
んする・とうちやくする・とうひよう

する・とうやくする・とうれいする・どくさつする・とんじやくする・にこにする・につこりする・にぶんする・にゆうえいしたあにから・ねおきする・ねっちゅうする・ねんずる・ねんねする・のりおりする・はいする・はいせきする・はいれいする・はいする・はきはきする・はくする・はさんする・はつかする・はつきする・はつきようする・はつきりする・はつけんする・はつさいする・はつする・はつたつする・はつてんする・はつめいする・はれつする・はんこうする・はんじようする・はんする・はんせいする・はんでいする・びくびくする・びつくりする・ひっそりする・ひやひやする・ひよつとすると・ひらひらする・ふうずる・ふずいする・ぶんかつする・ぶんじようする・ぶんせんする・ぶんつうする・ぶんないする・へんかする・べんきようしなさる・べんきようする・べんしようする・べんずる・へんにゆうする・ほうこうする・ほうこくする・ほうずる・ほうどうする・ほうのうする・ほごする・ほぞんする・まんぞくする・みえがくれする・みつせいする・めいずる・めんする・ゆあみする・ゆうする・ゆしゅつする・ゆにゆうする・ゆらゆらする・よういする・ようげきする・ようじんする・ようする・ようするに・ようせいする・よそうする・らんにゆうす

る・りかいする・りきせつする・りくあげする・りする・りようする・りようする・れいしようする・れんけつする・ろうらくする
 一 17 イ カタキウチヲ スル コトニ ナリマシタ。
 一 17 イ サル ガヤケドヲ シマシタ。
 一 23 イ アチヲ ニモ、コチヲ ニモ、ホタルヲ ヨブ コエガ シマス。
 一 37 イ ハナハソレデ ヨイカラ、ハヲ チヒサク シテ、モウ一ペン カイテゴラン ナサイ。
 一 45 イ オバアサンガ センタクヲ シテ キマス、オホキナ モモガ ナガレテ キマシタ。
 一 46 イ オバアサンガ モモヲ キラウト シマス、モモガ ニツニワレテ、略。
 一 49 イ 「一ツクダサイ、オトモヲ シマス。」
 一 50 イ イヌヲ ケライニ シテイ キマス、サルガ キマシタ。
 一 4 イ オハナト オチヨガ オキヤクアソビヲ シテ キマス。
 一 26 イ ワタクシ ハマイ日 ミヨチヤンノ オモリヲ シテ アゲマス。
 一 26 イ 略、ミヨチヤン ハカハイイカホヲ シテ、小サナテ ヲダシテ、ウマウマト イヒマス。
 一 29 イ 大キナ スズヲ ネコノクビ ニツケテ オイテ、ソノ オトガ キコエタラ、ニゲル コトニ

シテ ハドウデセウ。
 一 31 イ オ正月ノ オカザリ ニハ、ドンナ コトヲ シマスカ。
 一 34 イ アル日 トモダチ ニユミノ ジマンヲ シテ、略」トイヒマシタ。
 一 35 イ 「オソナヘノ モチヲマト ニシテ、イデミマセウカ。」
 一 39 イ 十六 ユキダルマ 略。マツクロナ目ヲ シテ、コチヲ ヲニランデ キマス。
 一 54 イ 「ヲヂサン、コンヤモマタ カゲエヲ シテ 見セテクダサイ。」
 一 58 イ 略、日ヤ月ガ デテキナカツタリ、アカリ ガツイテキナカツタリ スレバ、ワタクシハアナタカラ ハナレマス。
 一 62 イ オクスリハ、オイシヤサマノ オツシヤルトホリニ シテノ マナケレバ ナリマセン。
 一 72 イ 山カラ 出テ、モノヲ トツタリ、人ヲ サラツタリ シマシタ。
 一 4 イ 「オウイ」ト キドバタデ、ニイサンノ コエガ シマス。
 一 5 イ 略、ニイサント 一シヨニオサラヒヲ シマセウ。
 一 6 イ エヤ水ヲ ヤツテモ、見ムキモ シナイデ、タマゴヲ アタタメテ キマス。
 一 8 イ ヒヨコ ガナクト、オヤドリハ オハナシデモ スルヤウニ、

コココト イツテ キマシタ。
 一 12 イ お花は がくかう からかへると、略、にはを はいたりして、おかあさんの おてつだひをします。
 一 12 イ お花は 略、略、おかあさんのおてつだひをします。
 一 14 イ かういつて、だつこをして おかあさんの ところへつれていきます。
 一 19 イ どんな かほをしてゐますか。
 一 27 イ 略 わらを むすびつけてあるのは、ほりとらないしるしで、のばして おや竹にするのださうです。
 一 31 イ 五一ぢいさんが その水車やの ばんをしてゐるからです。
 一 37 イ 小二郎「又 わかれ道のところへ きました。まはりつこをして みませうか。」
 一 38 イ 正「して みませう。」
 一 39 イ 二人は かけ足で まはりつこを しました。
 一 39 イ ちか道の方は、道がこはれてゐたり、石が 出てゐたりしました。
 一 40 イ ある日はまを通ると、子どもが大ぜい でかめをつかまへて、おもちゃに してゐます。
 一 41 イ それから 二三日 たつて、

うらしまが舟にのつてつりを
してゐますと、〈略〉。

三43¹ りゆうぐうのおとひめは
〈略〉、毎日いろいろなごちそう
をしたり、さまざまなあそびを
して見せたりしました。

三43² りゆうぐうのおとひめは
〈略〉、毎日いろいろなごちそう
をしたり、さまざまなあそびを
して見せたりしました。

三43³ りゆうぐうのおとひめは
〈略〉、さまざまなあそびを
して見せたりしました。

三52⁵ 〇「おい、長いさををふり
まはして、何をしてゐるの
だ。」

三52⁸ 〇「星を二つ三つはたき
おとさうとしてゐるのだ。」

三55⁴ 〈略〉、しだれやなぎのえだ
へ、かへるがとびつかうとし
てゐます。

三55⁸ かへるは〈略〉、〈略〉、何べ
んも何べんもとびつかうとし
ます。

三59⁴ ツカマヘヨウトシテ手ヲ
出シマス、ト、〈略〉。

三66⁸ ソレカラホソイ竹ヲエ
ニシテ、ソノサキニキレヲマ
キツケテ、センヲコシラヘマシタ。
三67⁸ 〈略〉、ニハニ水ヲウツタ
リ、ウエ木ニ水ヲカケタリシ
マシタ。

三68⁷ 〈略〉、コンドハ水デツパウ
ヲジヨウロノカハリニシヨウ
トオモツテ、フシニ小サナア
ナヲタクサンアケマシタ。

三73⁴ ムカシ鳥トケダモノガ
ケンクワヲシタコトガアリマ
ス。

三75⁶ イツマデタツテモシヨウ
ブガツカナイノデ、中ナホリヲ
シマシタ。

三76⁵ 又鳥ノ方ヘ行キマス、ト、
「〈略〉。」トイツテ、アヒテニシ
マセン。

三83⁸ どこからかよいにほひ
がして來ますので、見上げます
と、〈略〉。

三84⁶ 〇「これはよい物がある。
ひろつて家のたからにしよ
う。」

三84⁷ 「〈略〉。」といつて、持つて
かへらうとしますと、見たこと
もない美しい女が來ました。

三85⁵ 〇持つてかへつて家のた
からにします。

三86⁸ 天人はしをしをして、
なみだにうるむ目で空を見
上げました。

四1³ うぢがみさまの森で、あ
さからたいこのおとがします。
四4² あちらこちらに子どもの
ならすらつばやふえの音も
して、たいそうにぎやかです。

四5⁵ これは私が生れた年、
おちいさんが私のぶんにつき
木をして下さつたのださう
です。

四12⁴ 島ニキタ白ウサギガ、
〈略〉、海ヲワタルクフウヲシ
テキマシタ。

四18⁴ 兄様ガタノオトモヲシ
テ、フクロヲカツイデイラツシ
ヤツタノデ、〈略〉。

四20³ 白ウサギガソノ通りニ
シマス、カラダハスツカリモ
トノヤウニナホリマシタ。

四23¹ 〈略〉、おばあさんが日あた
りのよいえんがはでつぎ物を
していらつしやいました。

四30⁶ 〈略〉、「ぼちぼち」とよび
ますと、向ふの方で、「ぼちぼ
ち」と口まねをするものがあ
ります。

四31³ 正太郎がおこつて、「ばか」
といひますと、又向ふで、「ば
か」と口まねをします。

四35⁵ 〈略〉、此ノ鳥ハ〈略〉、ホ
カノ鳥ヲイヂメタリ、ツカミコ
ロシテエニシタリシテアバレ
マハリマス。

四35⁵ 〈略〉、此ノ鳥ハ〈略〉、ホ
カノ鳥ヲイヂメタリ、ツカミコ
ロシテエニシタリシテアバレ
マハリマス。

四36¹ 其ノ中ニ夜ガ明ケルト、

〈略〉、森ヤ林ノヒクイ木ノ
枝ニトマツテ、ボンヤリトシテ
居ルコトガアリマス。

四37³ スズメハヨワイ鳥デス
ガ、ソバヘヨツテ、ヲドツタリ
サヘツツタリシテバカニシマス。

四37⁴ スズメハ〈略〉、〈略〉、ヲド
ツタリサヘツツタリシテバカニ
シマス。

四38⁵ ある時、日と風が力く
らべをしました。

四39¹ 〇風は「何、一まくり
にして見せよう。」とはげしく吹立
てました。

四40⁷ おかあさんが〈略〉、下女
や手つだひのものに、おさしづ
をしておはたらきになりまし
た。

四43⁷ 〈略〉今吉がおどけて、は
うきを大きなたのやうに持
つて、べんけいのまねをしまし
た。

四49⁵ 〇こんど取つた人がそれ
も取ることにします。

四58³ 〈略〉、大セイノ大工サン
ガ毎日其ノ中デ仕事ヲシテ
居マス。

四60⁸ 私ハ〈略〉、友ダチトツミ
木ヲシテアソビマシタ。
四62⁴ 舟はなみにゆられて、上
つたり下つたりします。
四69⁸ 〈略〉、今でも山がらのこ

糸をきくと、〈略〉、足のきずはどうしたらうかと思はないことはありません。

四72 8 私 は 長生 を して 居ます ので、〈略〉を みんな 見て 知つて 居ます。

四73 4 私 は 長生 を して 居ます ので、〈略〉、火事 が あつたり、水 が 出たり した こと を みんな 見て 知つて 居ます。

四77 6 此 の 人 は 〈略〉、大 きく な つても、うち の 仕事 も せず、ゐ ば つて ばかり 居 ました。

四78 5 か へ つて 來 た 時 に は、ひ どい み な り を して 居 ました。

四78 6 私 の 下 で、長 い 間 し ょ ん ぼ り と して 居 まして、日 が く れ て か ら 村 へ は い り ま した。

四80 3 學 校 の 行 き か へ り に 道 草 を く つ たり、石 を な げ たり、生 物 を こ ろ し たり する やう な 子 ど も は、〈略〉。

四81 3 此 の よい お 天 氣 に、ど う した の で せう。」

四86 5 園 オキク「五人バヤシノ一番右ニ居ル人ハ何ヲスルノデセウ。」

四87 1 二人ガオ話ヲシテ居ル所へ、オ花ノオカアサンガ來マシタ。

四93 5 か た き の く ど う も よ り と も の お と も を して 行 つて 居 ま

す。

四93 7 兄 弟 は 今 度 こ そ は と、母 に い と ま こ ひ を して、ふじのすそ野へ急ぎました。

四96 5 す け つ ね も 人 に 知 ら れ た さむらひ、〈略〉、ま くら も と の 刀 を 取 つて お き 上 ら う と し ま した。

五34 4 園 「こ が あ な た の 教 室 で す。せ き は あ れ に し ま す。」

五47 6 私 ど も 二 人 は て い ね い に お じ ぎ を し ま した。

五12 4 こ れ は め づ ら し い つ る ぎ だ。自 分 の 物 に し て は な ら ぬ と お ぼ し め して、天 照 大 神 へ お 上 げ に な り ま し た。

五13 1 今 日 か ら 日 記 を つ け る こ と に し ま した。

五14 4 か へ り み ち に、は な れ 馬 が と ん で 來 ま した の で、ど う し よ う か と 思 つて あ ま す と、〈略〉。

五16 4 學 校 か ら か へ つて、新 し い 筆 で 書 き 方 の お け い こ を し ま した。

五24 6 園、番 頭 さ ん た ち は、〈略〉、小 ぞ う さ ん た ち に さ し づ を し て あ ま す。

五32 8 あ る 朝 早 く、お と う さ ん が た び へ お 立 ち に な つ た 時、お 見 送 を し て 表 へ 出 て 見 ま した。

五35 4 遠 足 の し た く を して 學 校 へ 行 く と、〈略〉。

五40 1 先 づ 拜 禮 を して、拜 殿 の よ こ

の 芝 の 上 で、べ ん た う を た べ て る と、〈略〉。

五40 6 先 生 が 拜 殿 に か け て あ る 繪 馬 の お 話 を し て 下 さ い ま し て か ら、〈略〉、三 時 ご ろ 學 校 へ か へ り ま した。

五42 3 お 着 き に な り ま す と、間 も な く た け る が 新 し い 家 を 造 つて、人々 を あ つて、其 の 祝 を し ま した。

五46 5 園 「上 の う す に は、ど う して 米 を 入 れ る。」

五48 2 ま ふ し に は、か さ く とい ふ 音 が し て る ま す が、こ れ は 蠶 が 動 く か ら で す。

五54 2 す る と 酒 の に ほ ひ が し ま す の で、ふ し ぎ に 思 つて、見 ま は し ま す と、〈略〉。

五58 8 朱 ぬ り の 社 殿 が 山 の み ど り を 後 に し て、たい せ う き れ い に 見 え ま す。

五67 6 園 少 し ま は り 道 だ が、と な り 村 の 用 水 池 を 見 て 行 く こ と に し よ う。

五69 2 園、此 の 村 の 庄 屋 が、〈略〉、ど う か して 村 の あ れ 地 を 田 地 に し て、米 が と れ る やう に し た い も の だ と 思 つ た。

五69 2 園、此 の 村 の 庄 屋 が、〈略〉、ど う か して 村 の あ れ 地 を 田 地 に し て、米 が と れ る やう に し た い も の だ と 思 つ た。

五69 3 園、此 の 村 の 庄 屋 が、〈略〉、米 が と れ る やう に し た い も の だ と 思 つ た。

五69 4 田 地 に す る に は、水 が い る が、引 い て 來 る 川 が な い。

五69 8 村 の 人々 は 中 大 き な 仕 事 だ と 思 つ た が、さ う で も し な け れ ば、外 に 村 の さ か え る 工 夫 は あ る ま い と い ふ の で、〈略〉。

五71 1 村 の 人 は 代 り 合 つて、一 日 置 に 普 請 の 手 つ だ ひ を す る こ と に な つ た。

五73 2 園 「こ ん な む だ な 仕 事 を す れ ば、貧 乏 村 は い よ い よ 貧 乏 に な る。」

五85 8 園 其 の 時 表 で 水 だ く と さ け ぶ こ ゑ が し ま した の で、二 階 の ま じ ら の ぞ い て 見 ま す と、〈略〉。

五87 2 園 う ら 手 で 助 け て く れ 助 け て く れ と 呼 ぶ こ ゑ が 聞 え ま した が、〈略〉、ど う す る こ と も 出 來 ま せ ん で した。

五97 4 私 ドモハブダウノ實ヲ生デタベマスガ、タクサン作ル所デハ、〈略〉、ホシブダウニシタリスルト申シマス。

五97 4 園、タクサン作ル所デハ、〈略〉、ホシブダウニシタリスルト申シマス。

五98 2 一 人 は も う に げ る 間 が な い の で、地 に た ふ れ て、死 ん だ ふ り を し て あ ま した。

六84 4 園 奈良の春日山や二笠山は千尺そこくだが、白根や槍岳よりも知られてゐるし、京都の東山にして

- 六133 図 モシセイ出シテ使ツテクレ
サヘスレバ、イツデモ光ツテキマス。
- 六197 〈略〉、濱の松は身をふるはせて、頭を地に着けさうにします。
- 六207 こんな時には、「〈略〉。」と言ふれふしのこゑが、其所此所にします。
- 六277 図 「どうも分らないのは、あの弱い人間がわれわれの仲間を生けどりにすることだ。」
- 六293 図 人間があなた方を生けどりにするには、いく人かで力を合はせるではありませんか。
- 六301 虎はおこつて、蟻をふみつぶさうとしました。
- 六303 蟻は虎の指のまたからくどつて、仲間の者にあひづをしました。
- 六312 虎はうん／＼うなつて、かけまはるより外、どうすることも出来ません。
- 六316 町ハマダヒツソリトシテ、ネムツテキタ。
- 六354 義経は馬の上につつしななつて、むちのさきでそれをかきよせようとしています。
- 六356 敵は船の中から熊手を出して、義経のかぶとに引っかけようとしています。
- 六426 図 からだをちやうぶにして、よく學問をべんきやうしなさい。
- 六431 図 軍隊へ來ても、學校でなまけてゐた者は人一倍苦勞をする。
- 六452 図 朝、雷が目をさまして見ると、月と日が居りません。〈略〉。雷はかんしんして、「あゝ、月日の立つのは早いものだ。自分は夕立にしよう。」
- 六475 サウシテ〈略〉、シバラク其ノアタリニ番ヲシテキテ、ソレカラ海へ歸ル。
- 六548 頼朝が木曾義仲をせめようとした頃、木曾の家來手塚太郎光盛の娘が頼朝に仕へて居りましたが、〈略〉。
- 六582 かげひなたなくはたらく上に、人の仕事まで引きうけるやうにしたので、〈略〉。
- 六641 〈略〉、頼朝をはじめ、居合はせた者に、だれ一人もらひ泣きをした者はありませんでした。
- 六652 昨日ニイサンガ釘箱ヲ火鉢ノフチニ置イテ、手工ヲシテキタ時、〈略〉。
- 六654 〈略〉、弟ガ釘箱ヲ火鉢ノ中へヒツクリカヘシテ、手ヲ灰ダラケニシテ拾ヒハジメタ。
- 六674 図 「こまかな人だ。これではとても義捐はしてくれまい。」
- 六677 さて主人に火事の話をして、義捐金のことをいひ出すと、〈略〉。
- 六702 〈略〉、よろひかぶとの勇ましいなりをした武士の刀や、なぎなたの光も、〈略〉。
- 六765 図 「其ノキレイナモヤウハ、ドウシテツケルノデセウカ。」
- 六784 みんな氷靴を着けて、思ひ／＼のすべり方をしてゐる。
- 六808 けれども我が武士は、船の小などば少しも氣にしなかつた。
- 六831 通有はほばしらをたふして、之をはしごにして、敵の船へをどりこんだ。
- 六833 さん／＼に切りまくつて、其の船の大將を生けどりにして引上げた。
- 六845 全く上下の者が心を一にして、國難にあたつたのである。
- 六872 象つかひが乗つてゐて、〈略〉、ごぼんの上へ乗らせたりした。
- 六887 象つかひが「〈略〉。」といふと、〈略〉歩き出した。何だか地ひゞきでもするやうな氣がした。
- 六888 何だか地ひゞきでもするやうな氣がした。
- 六891 図 御らんの通り大きなからだをしてゐますが、氣立はしこくやさしうございます。
- 六926 先づ谷川のほとりに三千人の番兵を置いて、城兵が汲みに來られないやうにした。
- 六927 城中には十分水の用意がしてあつた。
- 六931 番兵がゆだんをしてゐると、城兵が切りこんで來て、旗をうばつて引上げた。
- 六942 さうして、これをよけようと
- して賊のさわぐ所を射させて、又々五千人餘もころした。
- 六944 此の上はひやうらう攻にしようと思つて、賊は城へ攻めよせないことにした。
- 六945 〈略〉、賊は城へ攻めよせないことにした。
- 六961 〈略〉、賊は大きなはしごを作つて、之を城の堀に渡して橋にした。
- 六975 百騎にげ、二百騎にげして、はじめ百萬騎といつた賊も、しまひには十萬騎に減じ、〈略〉。
- 六1005 圖 昨日學校で校長に、あの木の事を話したら、はじめて聞いた記念の木、大事にするとおつしやつた。
- 六1018 〈略〉、手を出すと、「〈略〉。」といふねえさんの聲がしました。
- 六1074 図 何のかざりもない御神殿を拜して、まことにおそれ多い氣がした。
- 六1078 図 〈略〉、おみやげに貝細工を買つた。こはさないやうにして持つて歸る。
- 七77 図 〈略〉、水深くして、いかなる大船もきしに横づけにすることを得。
- 七122 時々手ごたへがして大きな蛤が出た。
- 七124 浅い水たまりを歩くと足のうらがぬるりとした。
- 七142 日は暖で、風はなし、むされ

るやうな氣がする。

七14 4 女の人のはたすきをかけて、手ぬぐひをねえさんかぶりにしてゐる。

七16 1 国 昨日おあさんにするすをしていただいて、うち中の者が潮干狩に参りました。

七18 3 色が美しい上に、姿がやさしいので、つみ草の時には、誰も之を取つて花たばにする。

七18 9 〈略〉、總大將の新田義貞はびくともしません。

七20 2 〈略〉、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をほろぼさうとしてゐます。

七25 6 これは馬がけがをしないうやうに、馬方が上げるのださうだ。

七26 5 又力が強いので、荷物をつけたり、荷車をひかせたり、田や畠の耕作に使つたりする。

七38 3 国 〈略〉、たくさんな大船を—どきに横づけにすることが出来ます。

七41 2 軍人をのせた御用船が今しも港を出ようとした其の時、「〈略〉。

七43 7 ある時謙信が山の手に陣を取つてゐると、信玄は兵を二手に分けて、はさみうちしようとした。

七43 8 〈略〉、信玄は兵を二手に分けて、はさみうちにしようとした。

七46 4 国 よつて明日たがひに勇士を一人づつ出して組討をさせ、勝つた方のものが川中島を取ることにしては。

七48 6 〈略〉、武田方から十騎ばかり、木戸を開いて切つて出ようとした。

七52 9 国 〈略〉、皆さんにお話をするのは、何よりもうれしいのでございます。

七53 1 国 私は年中航海をしてゐるものですから、少し其のお話を致します。

七55 5 国 何萬とも知れないいるかが、はね上つてはおよぎ、はね上つてはおよぎして行くのを見ることもあります。

七56 1 国 其所にある人は、私どもとはまるでちがつた風をして、まるでちがつた言葉で話をしてゐます。

七56 2 国 其所にある人は、〈略〉、まるでちがつた言葉で話をしてゐます。

七57 3 国 〈略〉、大雪が降つたりして、一寸先も見えなくなることもあります。

七57 4 国 こんな時には、悪くすると淺瀬へ乗上げたり、外の船に衝突したりするやうなまちがひが出来ます。

七57 7 国 それゆゑたえず海の深さをはかつたり、かねや汽笛を鳴らしたりします。

七61 4 国 どうか今から十分海になれて置くやうにしてもらひたいのであります。

七63 2 水になれた人夫の肩に乗るか、手をひいてもらふかして渡るのでございませう。

七63 5 大ぜいの人々が口々に人夫を呼んで我先に渡らうとしますし、〈略〉。

七64 1 此の時見すばらしいなりをした一人の男が、人夫と渡賃を高いやういと言つてあらそつてゐましたが、〈略〉。

七64 7 かの入夫は、少ししてから、何の氣もなく、先程渡賃をあらそつた所へ行つて見ますと、〈略〉。

七66 9 国 「落し物をしましたから。」といひくかけ出します。

七68 5 しばらくして、「〈略〉。」といつて、財布の中に手を入れました。

七68 6 国 家の中で見えなくした物でも、中々出ないものでございます。

七69 4 国 いよくない時には、川の中へとびこんで死んでしまはうと、かくごをして來たのでございます。

七70 5 国 あなたから一文でももらふ氣があるくらゐなら、此所まで持つて來はしません。

七70 7 人夫は之を見て、「〈略〉。」といつて、歸らうとしました。

七71 9 国 どうぞ之を受取つて、私の氣がすむやうにして下さい。

七73 1 国 〈略〉、どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともありますが、心にすまないことはまだ

一度もした事はありません。

七73 3 国 〈略〉、心にすまないことはまだ一度もした事はありません。

七73 4 国 たとひ親子の者がうゑ死をするやうなことがあつても、〈略〉。

七76 3 豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎といつて、織田信長の草履取をしてゐた時のことである。

七82 8 中面面白イノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテキル。

七82 9 カンザシノ玉ヤ根ガケノ玉ニスルサンゴハ、皆此ノ蟲ノ骨デアル。

七83 2 又物ヲ洗ツタリフイタリスル時ニ使フ海綿モ、ヤハリ〈略〉蟲ノ骨デアル。

七85 7 〈略〉、糊ニスルモノニハ、フノリヤツノマタガアリ、〈略〉。

七85 9 〈略〉、トロコテンヤカンテンニスルモノニハ、テングサヤエゴノリガアル。

七86 2 此ノ他海藻ニハマダタクサンナ種類ガアツテ、中ニハ肥料ニスルモノモアル。

七88 5 マリーはどうかしてかくしてやりたいと思ひました。

七90 7 国 「あゝ、さうです。それから、つんぼのまねをしてね。」

七94 8 〈略〉、おちいさんはかぼちや棚につつかい棒を入れたり、菊の鉢を軒下に運んだりされた。

七98 5 ところが長盛がろくくあ

さつもせず、〈略〉と申しました。

七98 ところ、長盛が〈略〉、石田と中直りをしなければ太閤の御きげんは直るまいと申しました。

七103 通さないことにしよう。

七111 十五字までにしてごらん。

八39 〈略〉、小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれてゐる。

八52 〈略〉、二匹ともくつぬぎに手をつけて、ぎやうきよく僕のすることを見てゐる。

八95 〈略〉、神主は二人の者だけで、もう一度競走させることにした。

八119 相手の信作があゝの通りだから、いづれ又改めてやり直しをしてもらはなければなるまい。

八123 もう改めて勝負をするには及びません。

八141 「多勢の方はゆだんをしてゐるが、〈略〉。」

八171 〈略〉、屋根つたひに行つて、もう少しで雀の巢へ手が届かうとした時、ふみ外して軒下へどうと落ちた。

八174 「何しに此所へ参つた。」

八231 呉鳳は役人になつた時から、どうかして首取の悪風を止めさせたものだと思ひました。

八264 さうして今も其の通りにしてゐるのだといひます。

八298 或日炭を焼く男が太郎のうち

へ来て、〈略〉いろ／＼の話をした。

八299 此の時太郎が、炭はどうして焼くのかときくと、〈略〉。

八303 先づよい場所を見立てて、炭を焼く間ねとまりをするための小屋を建てる。

八317 次にかま口から火をつけて、四五日の間、中の木をむし焼にする。

八325 山野に生ずる草木の中には、薬用にするものが多くありますが、〈略〉。

八351 これが人蔘で、此の婦人は長生をしました、〈略〉。

八357 幾年かの後、里子を返してもらはうとすると、〈略〉。

八402 召しとつてぎんみをしよう。

八424 しばらくして、其の中のおも立つた者が出て、いろ／＼おわびを致しますと、〈略〉。

八456 しかし醫者の申す所では、老體のこと故、餘程大事にしなければならぬとのことでございます。

八492 スナハチ一間餘モアルツバサヲハツテ、數分ノ間羽バタキ一ツセズ、空中ヲノシテ行ク。

八657 サンフランシスコには、日本人がたくさんゐて、いろ／＼な商賣をしてゐます。

八685 子どもは、〈略〉、歸つて來ると、又日本人の立てた學校へ行つて、日本語で學問をしてゐます。

八773 「諸君、これも人のした後では、何のさうさもない事でございませう。」

八799 それからこれは國の税で、納税告知書としてあります。

八824 水にはこれといふ形がない。

〈略〉。落ちる時の勢が加はると、長い間には、思ひの外の手をする。

八827 長い間かゝらなくても、工夫して大仕掛に水を落せば、大きな仕事をする。

八847 〈略〉、信吉はほつと息をついて、〈略〉。といつて、すぐ出かけようとした。

八849 父は「相かはらずせつかちだね。」といつたが、別に止めようともせず、〈略〉。

八858 「〈略〉。」といふ間も、信吉はのび上るやうにして奥の方を見た。

八868 信吉は〈略〉、しばらくして、「おとよ、大きくなつたなあ。わしはあちらに居ても、お前の事ばかり心配してゐた。」といつて、〈略〉。

八892 「先生、どうして口がきけたんでせう、指であひづもしないのに。」

八893 「指であひづをしたのは昔のこと、今は口を見せてものを言はせませう。」

八908 あなた、此のお子が返事をしないのは、あなたの口が見えないからです。

八911 よく見えるやうにして、もう一度しづかに言つてごらんさい。

八917 おとよは信吉の口を、中までのぞきこむやうにしてゐたが、〈略〉。

八922 「もう／＼何所へも行きはしない。」

八938 「い」を「う」と間違へたり、「う」を「え」と間違へたりするのを、先生は〈略〉、何度も／＼教へてゐられた。

八942 先生、私の娘にもあゝして教へて下さつたのでせうか。

八944 信吉は教室を出ると、〈略〉、先生を廊下でをがむやうにした。

八955 信吉は〈略〉、幾度も先生におじぎをした。

八1001 僕等は一同申し合はせて、今日からは働かないことにしたから、さう思つてくれ給へ。

八1004 さうしてそれから後は、耳は食事の知らせを聞いても、聞かないふりをし、目は食物を見ても、見ないふりをし、〈略〉。

八1005 さうしてそれから後は、〈略〉、目は食物を見ても、見ないふりをし、

〈略〉。

八1021 君等は僕を苦しめようとして、此の數日の間少しも食物を送つてよこしませんでした。

八1026 今になつて始めて、考違をしてゐたことがお分りになるでせう。

八1039 しかし之を一人で造るとして、

こんなに安く賣れるであらうか。

八1043 かりに造れたとしても、それを十錢ぐらゐで賣つてはまうかるまい。

八1046 それではマツチは、どうして誰が造るのであらう。

ハ1048 マッチの製造所へ行つて見ると、職工が大勢居つて、それぐ手分をして働いてゐる。

八〇五六　すべてかういふやうに、手分をして別々に仕事をするを分業といふ。

81057 すべてかういふやうに、手分
をして別々に仕事をするを分業
といふ。

八〇六・五　うちはを造るにしても、時計を造るにしても、家を建てるにしても、皆これによるのである。

八1065 〈略〉、時計を造るにしても、

八〇六 〔略〕、時計を造るにしても、家を建てるにしても、皆これによるのである。

八〇六 分業で仕事をする時、誰か一人の手ぎはが惡いと、全體の出來までも惡くなる。

う。 81082 面白くして遊びませう。

八川⁴ 大將の父は長府藩主に仕へて、江戸で若君のお守役をしてゐたが、〈略〉。

大將の父は〈略〉、どうかし

て大將の體を丈夫にし、氣を強くしなければならぬと思つた。

八川六 大將の父は〈略〉、どうかして大將の體を丈夫にし、氣を強くしなければならぬと思つた。

八川 7 〈略〉、どうかして大將の體を
丈夫にし、氣を強くしなければなら
ぬと思つた。

八113 / ㊦ 「よし。寒いなら、暖くなるやうにしてやる。」

ち中の者がそればかり食べるやうにした。

九六〇手 其の實は土人の一番大事な

食料で、焼いて食べたり、餅にして食べたりします。

九六九 其の實は土人の一番大事な

食料で、〈略〉、餅にして食べたります。
九四三 いづれ又近い中に便りをし

ませう。
九二八 コレ等ハ〈略〉、イヤガル味
ヤニホヒノアルモノデ、之ニ近ツカ

ウトスルモノガナイカラ、**〈略〉**。
九25 **〔会〕** **〈略〉**、四代前の歡庵くわんあん様が
 國利民福の本は農業を盛にするに

るとお氣づきになつて、〈略〉。

九242 〔会〕 〈略〉、此所の銅の製法を改良したり、新しい鑛山くわうを開いたたり

する爲に、此の山中へ來たのである
九275 ㊦ へ略へ、すぐに江戸へ出て、
りつばな學者を先生にして、一心に

りつぱな學者を先生にして、一心に

學問をはげむがよい。

九332 あたりの空気が、何となく
ぼうつとして、〈略〉。
九337 すると木のうろから、栗鼠りすが

一四、けろりとした顔を出したが、
 〈略〉。
 九477 〔手〕 私は苗くぼりをして、

「略」と、おかあさんにほめられた。また、

手つだひの人たちを呼んで、ごちそうをしました。

とおつしやつて、あの方の小さい時
分からのお話をして下さいました。

來の貯金と主人からもらった金を密
本にして、小さい米屋を始めた。

るたけ自分の負擔を軽くしようとする者もあるが、〈略〉。

九538 ㊦ 世間にはこんな場合に、な

るたけ自分の負擔を軽くしようとする者もあるが、〈略〉。

九5310 〔略〕、あの人は反對に、少

て、自分の財産を残らず差出した。

しても他人の負擔を軽くしようとして、自分の財産を残らず差出した。

いつて、笑つてゐた。

『そんな事までなさらなくても。』といつて、資本を出さうとする者もある。

つたか、〔略〕
九五八〔会〕 そこで間もなく片手間に精
米所を始め、追追に大きくして、あ

んなりつはな會社にしたのだ。
九五五八會〈略〉、追追に大きくして、
あんなりつばな會社にしたのだ。

九五二 僕は今日其のえらい社長さん
に會つて來たのだと思ふと、何とな
くうれしい氣がしました。

九五九 〔略〕へうきんな五平ぢいさ
んが、時々へんな掛聲をして皆を笑
はせる。
げん

九六二 舷門には、銃を手にした番兵が近くを警戒してゐる。

とするのは、餘程北へ進んだ爲だ
う。

九七六回 辨慶が立往生をしたと傳へ

九七五 青々とした波の上に、點々とある。

白帆が浮んでゐるのは、野や山ばかり見て來た目に殊さうれしかつた。

五十六哩もあるのだが、略、そんなに遠い所に來たやうな氣がしないね。」

しませう。

九七六 皆いつものやうに、此所で

九八五 度をして、學校園へお集りなさい。

九八六 北斗七星は何時もあんなに

九八七 北斗七星は何時もあんなに

九八八 北斗七星は何時もあんなに

九八九 北斗七星は何時もあんなに

九九〇 北斗七星は何時もあんなに

九九一 北斗七星は何時もあんなに

九九二 北斗七星は何時もあんなに

九九三 北斗七星は何時もあんなに

九九四 北斗七星は何時もあんなに

九九五 北斗七星は何時もあんなに

九九六 北斗七星は何時もあんなに

九九七 北斗七星は何時もあんなに

九九八 北斗七星は何時もあんなに

九九九 北斗七星は何時もあんなに

を横にして、此の雪溪をすべつて下

九九五 僕も其の通りにして見まし

九九六 僕も其の通りにして見まし

九九七 僕も其の通りにして見まし

九九八 僕も其の通りにして見まし

九九九 僕も其の通りにして見まし

一〇〇〇 僕も其の通りにして見まし

一〇〇一 僕も其の通りにして見まし

一〇〇二 僕も其の通りにして見まし

一〇〇三 僕も其の通りにして見まし

一〇〇四 僕も其の通りにして見まし

一〇〇五 僕も其の通りにして見まし

一〇〇六 僕も其の通りにして見まし

一〇〇七 僕も其の通りにして見まし

一〇〇八 僕も其の通りにして見まし

一〇〇九 僕も其の通りにして見まし

一〇一〇 僕も其の通りにして見まし

い。

九一四 くら、どうした。命が惜し

九一五 くら、どうした。命が惜し

九一六 くら、どうした。命が惜し

九一七 くら、どうした。命が惜し

九一八 くら、どうした。命が惜し

九一九 くら、どうした。命が惜し

九二〇 くら、どうした。命が惜し

九二一 くら、どうした。命が惜し

九二二 くら、どうした。命が惜し

九二三 くら、どうした。命が惜し

九二四 くら、どうした。命が惜し

九二五 くら、どうした。命が惜し

九二六 くら、どうした。命が惜し

九二七 くら、どうした。命が惜し

九二八 くら、どうした。命が惜し

九二九 くら、どうした。命が惜し

九二三 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九二四 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九二五 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九二六 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九二七 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九二八 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九二九 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九三〇 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九三一 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九三二 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九三三 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九三四 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九三五 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九三六 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九三七 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九三八 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九三九 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九四〇 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九四一 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九四二 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九四三 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九四四 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九四五 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九四六 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九四七 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九四八 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九四九 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九五〇 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九五〇 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九五〇 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九五〇 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

九五〇 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

みついたりするやうな事は決してしません。

十178 廣さは二町四方ぐらゐで、せり場を中央にして、其の周圍は馬つなぎ場になつてゐます。

十184 略、どの子馬も皆かはいらしい顔をして、おとなしくつながれてゐます。

十191 子馬には大い飼主の一族がついて来て、親切に世話をしてゐます。

十1910 中には、略、今日の別れを惜しんで、略、くびや背をなでたりしてゐるのがあります。

十247 波風の外には友とするものもない此の島で、老夫婦のなぐさめとなるものは、略。

十275 略、危く岩に打付けられ、忽ち死の口に吞まれようとする。

十332 略、掘割の處處に水門を設けて、たくみに船を上下する様にしてある。

十334 今太平洋の方から此の運河を通るとする。

十371 衛生の設備をよくして危険な病氣を根絶し、幾萬の従業者の健康をはかつた事や、略。

十406 略、力藏さんは見向きもせず、元氣な聲で、「略。」と答へて、止めようともしない。
十4010 略、力藏さんは見向きもせず、元氣な聲で、「略。」と答へ

て、止めようともしない。

十414 やがて父は、鎌を手にして雜木のやぶへはいつて行つた。

十419 さうして兄は腰の手ぬぐひを取つて鉢まきにし、父のかり取つたあとを元氣よくつるはして掘返し始めた。

十4410 略「あゝ、きれいだ。あの色をどうかして出したいものだ。」

十463 毎日焼いてはくだし、焼いてはくだしして、歎息する彼の様子は、略。

十471 喜三右衛門はそれでも研究を止めようとしなない。

十486 一番鶏の聲を聞いてからは、もうじつとしては居られない。

十516 略、うちに置くと、火事にあつたり、盗人に取られたりする危険があるからね。

十519 略、だから、少しでも餘つたお金があつたら必ず預金にして置くものだ。

十529 略、だから、まとまつたお金は定期預金にした方がよいのだ。

十5210 略、銀行は人からお金を預つてそれをどうするのですか。
十532 略、大勢の人に利子を拂ふだけでは、銀行が損をしないでせうか。
十537 略、貸附の利子は預金の利子より高くしてあるから、其の差だけが銀行の収入になるのだ。

十565 それは、豫め甲乙の二地をき

めて置いて、一方を飼養所、一方を食事所とし、略。

十574 略、飼養所を移動し、其處を見覚えさせて飛歸らせるやうにする事も出来る。

十584 又戦争の時戦線から戦状を報じたり、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。

十646 略「お連れ申しましたが、差上げる物はあらうか。」

十662 略、あの鉢の木をたいて、せめてものおもてなしにしよう。

十7510 略、松林を後にして右に昌徳宮、左に景福宮の壯大な構がある。

十791 略、大分長くなりましたから、今日は此のくらゐにして置きます。

十808 略、廣い坑道には、電気機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

十848 略、或日、此の附近の山へ薪をとりに來た百姓が、たき火をしてゐると、略。

十859 略、服を改めると、更に生きかへつたやうな氣持がしました。

十942 略「お前はどうかしたのだ。略、あの橋を渡つたのでは無いか。」
十10010 略、一足温室の中にはいると、全く別の世界に來たやうな心持がする。

十1186 此の神社は菅公の御墓所に建てたものだといひ、一層感を深くした。

十1187 社殿の後に廻ると、其處は廣々とした梅林で、略。

十1194 歸りは二日市まで歩くことにした。

十1195 地圖を便りにして進んで行く、と、略。

十1226 略、あいさつをしてもいいので、少しも生意氣な風が無く、略。

十1243 略、かういふ點から、略、あの青年をやとふことにしたのです。

十133 さうして其の數や大きさは、凡そ十一年餘を週期として増減してゐる。

十142 今かりに一時間五十里の速度で飛ぶ飛行機に乗つて行つたとしても、略、八十七年かゝるのである。

十145 略、さうぢもよく行届いてゐるし、總べてがきちんとしてゐました。

十1410 私が來たので、すぐしまはうとなさるのを強ひて止めてお手傳をしましたが、略。

十1510 略「本や帳面はどうしていらつしやいますか。」
十162 略「あすこに全部學年別にしておてあります。」
十165 私は學校で習ふ本でさへ時々見失つて、大さわきをするこ

があります。

十一 19 / 〈略〉、國家は其のやうな不法な行が再びされないやうに、其の犯罪者をこらし、〈略〉。

十一 20 / 〈略〉、國家は〈略〉、其の犯罪者をこらし、又世間の人々のいましめにもせねばならぬ。

十一 20 / ところで、どういふ事をすれば罪になるか、其の制裁としてどのやうな刑罰を受けるかは、法律で明かに定めてあるから、〈略〉。

十一 20 4 / 〈略〉、裁判所は、犯罪の疑のある者を十分に取調べて適當公平な裁判をする。

十一 21 6 / かういふ風に、三回くりかへして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、つまり裁判を念人にするためである。

十一 22 5 / 此の世を〈略〉、平和な、秩序正しい世の中にするのが其の目的である。

十一 22 6 / 若し裁判が無いとしたら、人々相互の争がはてしなく行はれて、〈略〉。

十一 22 9 / 若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、せつかくの法律もねうちが無くなり、〈略〉。

十一 35 7 図 / 「あそこは一昨年植付をした地藏山だ。」

十一 35 10 / 〈略〉、四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるのが、目に見えるやうな氣がする。

十一 36 1 図 / 「あそここの植付をした時はまだ寒かつた。」

十一 37 7 図 / 今に御らん、此のくらゐ離して植えても、十五六年目には間伐をしなればならないやうになるから。

十一 37 9 / 植付けた苗木の枯れた處へ補植するのは、翌年一回だけだといふから、〈略〉。

十一 37 10 / 〈略〉補植するのは、翌年一回だけだといふから、今年はどうしなくともよいのであらう。

十一 38 1 / 下刈はいつも土用中にするので、ずるぶん苦しいが、〈略〉。

十一 38 7 / 毎年春の初か冬の半ばにする枝打は、面白いものだ。

十一 39 8 / それから始めて聞いて面白いつたのは、枝打をしないと木に節が出来ることである。

十一 39 9 / 〈略〉、其のまゝにしておくと、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十一 40 5 / 〈略〉、一番早く伐るとして、其の時は僕がおとうさんくらゐの年になつてゐるわけだ。

十一 52 8 / 切付には餘程熟練を要する。〈略〉、此の組織の所まで小刀が届いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。

十一 53 1 / ゴム園の人は毎朝暗いうちに起きて、受持の木に此の切付をし

て廻る。

十一 53 8 / 加硫法とは、ゴムに硫黄をまぜる事で、かうするとゴムが非常に弾力を増して来る。

十一 55 4 / 二人は外の者からずつと離れて、沖のうきを目當に泳ぎくらしをてゐた。

十一 55 5 / 初は十間以上も相手をぬいてゐたが、どうしたのか急に相手にぬかれて、一二間も後れてしまつた。

十一 57 1 / 驚いて一しやうけんめい逃げようとしてあせつてゐるが、もう遅い。

十一 60 1 / 未開の土地を切開いて、思ふまゝに設計して造つた町であるから、總べてが大規模でのびくとしてゐる。

十一 61 8 / 〈略〉、眼下には廣々とした十勝の大平野がはるばると續いて、末は青い大空に接してゐる。

十一 63 3 / 畠にしても、小路によつて細かく仕切ることをしてないから、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。

十一 63 4 / 畠にしても、小路によつて細かく仕切ることをしてないから、〈略〉。

十一 64 8 / 〈略〉、立木や切株の根本を掘つておいて、それにくさりをつけて此のトラクターで引くと、めりくゝと音を立てて根こぎにされてしまふ。

十一 66 1 / 一體人は最初どうして火を得たであらうか。

十一 66 3 / 〈略〉、密生した樹木の枝と枝がすれあつて起つたりした自然の火から、火種を取つたものであらう。

十一 67 5 / 木炭や石炭や石炭ガスの火は、部屋を暖めたり物を煮たりするに用ひられ、〈略〉。

十一 70 4 / 〈略〉、上座の老僧がもつたいらしい顔をして、「物を言はないのはわしばかりだ。」

十一 72 1 図 / それは惜しいことをした。十一 72 1 図 / どうかして御目にかゝりたいものだ。

十一 75 2 図 / 私も實は我が國の古代精神を知りたいといふ希望から、古事記を研究しようとしたが、〈略〉。

十一 78 9 / 石・貝・家畜・獣皮・布・農産物などが、時代により場所によつて、それ／＼貨幣の役目をしたこともあつた。

十一 83 6 / 今日のは初めての遠泳だと思ふと、何だかうれしいやうな心配なやうな氣がする。

十一 83 9 / 手や足の關節を曲げたり延ばしたりして、出發の號令を待つ。

十一 85 4 / しかし又しばらくすると、もとの水の温度にかへつた。

十一 86 10 / 波打際には大勢の人が旗を振つたり帽子を振つたりして、「萬歳々々。」と叫んでゐる。

十一 88 5 / すると弟が「〈略〉。」と言

- 十二88 法律は、國家といふ共同生活、秩序ありかつ幸福なものにするための規則であるから、〈略〉。
- 十二92 1 それを見てひどく氣をもんだ父王は、彼に妃を迎へ、〈略〉、國政にも與らせようとした。
- 十二93 かねて釋迦の徳をしたつてゐたマガダ國王は、修行を思ひ止らせようとして、〈略〉。
- 十二94 1 圖 もう人にはたよるまい。自分一人で修行をしよう。
- 十二94 6 〈略〉、彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。
- 十二95 4 今度は程よく食物も取り、休息もした。
- 十二95 10 彼は此の心境の尊さに數日の間唯うつとりしてゐたが、〈略〉。
- 十二96 1 〈略〉、やがて此の尊い心境を世界の人々と共にせずにはゐられぬといふ慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。
- 十二97 6 〈略〉、中には彼をそねむあまり、反抗するばかりでなく、迫害を加へようとするものさへも出て來た。
- 十二97 8 殊にデーバダッタは、〈略〉、かねてから釋迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。
- 十二104 7 〈略〉、昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。
- 十二105 7 僧は名を禪海と〈略〉、

- 〈略〉、たま／＼此の難處を通つて幾多のあはれな物語を耳にし、〈略〉。
- 十二106 3 之を見た村人たちは、彼を氣違扱ひにして相手にせず、〈略〉。
- 十二106 3 之を見た村人たちは、彼を氣違扱ひにして相手にせず、〈略〉。
- 十二106 4 之を見た村人たちは、彼を〈略〉、唯物笑の種にしてゐた。
- 十二106 4 子どもらは仕事をしてゐる老僧のまはりに集つて、「氣違よく／＼」とはやし立て、〈略〉。
- 十二106 7 しかし僧はふりかへりもせず、唯黙々としてのみを振るつてゐた。
- 十二106 10 〈略〉、あれは山師坊主で、あのやうなまねをして、人をろうらくするのであらうといふうはさが立つた。
- 十二107 1 さうして陰に陽に仕事のじやまをする者も少くなかつた。
- 十二108 10 手傳をする者が一人へり二人へりして、はては又村人全體が此の老僧から離れるやうになつた。
- 十二109 2 手傳をする者が一人へり二人へりして、〈略〉。
- 十二119 2 最後に博士は〈略〉、家庭における電氣の利用に就いて興味ある話をして壇を下つた。
- 十二120 3 圖 〈略〉、常に「小山はどうしてゐるだらうか。」と仰せらるゝ由、いよく御なつかしく存じ奉り候。

- 十二126 9 安芳がはいつて行かうとする、〈略〉兵士等が〈略〉、一せいに銃劍を取直して行くてをさへぎつた。
- 十二129 7 圖 拙者は、此の談判がよしのやうに決着するにもせよ、さやうな事になれかしとは毛頭考へませぬが、〈略〉。
- 十二131 5 警衛の兵士等は、〈略〉、一同恭しく捧げ銃の禮をした。
- 十二133 7 〈略〉、國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、〈略〉。
- 十二133 10 随つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、又其の誇を永久に持續しようとする心掛けも出來て、〈略〉。
- 十二134 1 萬世一系の皇室を中心として團結した國民は、かくていよく／＼結束を固くし、〈略〉。
- 十二134 2 〈略〉國民は、かくていよく／＼結束を固くし、熱烈な愛國心を養成した。
- 十二134 10 温和な氣候や美しい風景は、人の心をやさしくし、優美にはするが、〈略〉。
- 十二135 1 温和な氣候や美しい風景は、人の心をやさしくし、優美にはするが、〈略〉。
- 十二136 9 他國の文明を消化して、之を巧みに自國のものとすることは、實に我が國民性の一大長所である。

- 十二137 2 〈略〉、昔から殆ど模倣の事を事として來た觀がある。
- 十二138 1 〈略〉、古の武士が玉とくだける討死を無上の名譽としたのがそれである。
- するが「駿河」〔地名〕1 駿河
- 九9 10 圖 駿河の賊を亡し給ひし後、相模の國より上總の國へこえんとて、今の浦賀のあたりより海を渡り給へり。
- すると（接）27 スルト すると
- 二29 5 「ナルホドヨイカンガヘダ。」トイツテ、ミンナカンシンシマシタ。スルト年トツタネズミガ、「ソレモヨイガ、ダレガソノスズヨツケニイクカ。」トイヒマシタノデ、〈略〉。
- 二47 5 ヨイオヂイサンハソノハヒヲモラツテキテ、ニハニマキマシタ。スルト、ニハノカレ木ノエダニ、キレイナ花ガサキマシタ。
- 三75 1 〈略〉、コンドハ鳥ガカチサウニナリマシタ。スルトカウモリハ〈略〉、鳥ノ方ニツキマシタ。
- 四19 3 白ウサギハ目ヲコスツテ、又ソノワケヲ申シ上ゲマシタ。スルト神様ハ「〈略〉。」トヲシヘテ下サイマシタ。
- 四36 2 〈略〉、森ヤ林ノヒクイ木ノ枝ニトマツテ、ボンヤリト

シテ居ルコトガアリマス。スルトホカノ鳥ガ見ツケテ、「ア、ニクイヤツガ居ル。」トイハナイバカリニ、ヨツテタカツテイデメカヘシマス。

四39 風は「何、一まくりにして見せよう。」とはげしく吹立てました。するとたび人は、風が吹けば吹くほど、ぐわいたうをしつかりとからだにくつつけました。

五54 或目山の中で、こけに足をすべらせて、うつむけにたふれました。すると酒のほひがしますので、ふしぎに思つて、見まはしますと、
《略》。

五72 翌年の春、大雨がふりつゞいて、せつかくつき上げた土手が、半分ほどもくづれてしまつた。すると、「もくろみが悪い。」《略》。などと
言ふ者が出て来て、《略》。

六89 《略》、今の子どもが象の腹の下へねころんだ。すると象は鼻で、其所にあつたうちをは拾つて、子どもの顔をあふぎ出した。

六96 今度こそは千早城もあやふく見えた。すると正成は《略》、たくさんなたいまつを出して、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。

七20 海神ねがはくは潮を退けて、道を開かせたまへと念じて、《略》太刀を取つて、海の中に投入れまし

た。すると、これまで潮の満ちてゐた稻村崎は、《略》、二十餘町にはかに干上つて砂地にかはり、《略》。

七42 御用船を見つけると、《略》とさげんだ。すると甲板の上で鐵砲を上げた者がある。

七42 おばあさんは又さげんだ。《略》。わかつたらもう一度鐵砲を上げる。すると、又鐵砲を上げたのがかすかに見えた。

七91 《略》、敵は《略》、おばあさんの肩に手をかけて、「これ、おばあさん、お前は知つてゐるだらう。」すると兵士のおばあさんが、
「はい、よいお天氣でございます。」

八42 あまりかはいらしいので、僕はしばらくそれを見てゐた。すると其のうちに、《略》、尾をふりながら、ちよこくやつて来た。

八33 昔朝鮮に一人の婦人があつて、子どもをおさげ下さるやうに、朝晩神様にいのつてゐました。すると或夜ゆめの中に、《略》、神様のお告がありました。

八43 越前守は《略》、其の中に盗まれた品のありなしを調べさせました。すると其の中に二反ありました。

八88 《略》、先生はおとよに、低い聲でしかれた。「此の方はどなたですか。」するとおとよは、《略》、「わたくしのおとうさん。」と答へた。

八112 或年の冬、大將が思はず「寒

い。」といった。すると大將の父は「よし。寒いなら、暖くなるやうにしてやる。」といつて、《略》、頭から冷水を浴びせかけた。

九33 《略》、急にかん高い音を立てて、美しい小鳥が二三羽、身がるに枝移りした。すると木のうろから、栗鼠が一匹、けろりとした顔を出した。

九62 《略》、傳令員は號笛を吹きながら、「總員起し。」と呼んで、つり床の間をぬつて行く。すると乗員は、一せいに飛起きて、手早くつり床をくぐる。

十93 太郎は《略》、一所に渡り出した。すると橋はまん中から折れて、三人は水中におちいつた。

十94 僕は再三ことわつたのです。すると、しまひに皆が僕の事を弱蟲だといつて笑ひました。

十一88 父は《略》、《略》。二百十日もこれで無事にすんだ。」と、《略》言つた。すると弟が「おとうさん、二百十日は立春から二百十日目に當るのですね。」と言つて、日数を数へてみようとした。

十一118 さうしてジョージに早くあけて通すやうにと言つた。するとジョージは、《略》。と言つてどうしてもあけない。

十二58 其の時、《略》、日光が店一ぱいにさし込んで来た。するとねち

が其の光線を受けてぴかりと光つた。

十二125 官軍方の思召通り一押にはゆかぬかも知れませぬ。すると《略》又思の外な尻押なども現れて、事めんだうな筋合にならぬとも限りませぬ。

するどい「鋭」(形) 5 スルドイするどい 鋭い 《一イーク》

五82 かりまたをぬき取つて、義家にかへしますと、義家はせ中をくるりとむけて、うつぽへさへせました。かりまたは、矢じりがつばめの尾のやうにわれた、たいそうするどい矢で、《略》。

七49 セイガ高ク、目ガスルドクテ、チヨット見ルト、コハイヤウデシタガ、《略》。

八48 第十三 驚《略》、怒ツテキル肩、サキノ曲ツタ大キナクチバシ、スルドクテ落着イテキル目、《略》。

九104 中尉の固く結んだ口もと、するどい目の光、其の様子がどうも一通りでない。

九115 ふと通りかゝつた某大尉が之を見て、《略》、「《略》。」と、言葉鋭くしかつた。

するりと(副) 1 スルリト

二76 ライクワウハスコシモオソレズ、タチヲスルリトヌイテキリツケマシタ。

すれあう「擦合」(五) 2 すれあふすれ合ふ 《一ツ》

六223 圖 〈略〉、沖へ急ぐ兄の小舟、すれ合つて、濱へ歸る父の小舟、すれ合つて、ゑがほとゑがほ。

十一662 〈略〉、密生した樹木の枝と枝がすれあつて起つたりした自然の火から、火種を取つたものであらう。

すれすれ (形状) 1 すれく

五801 いころすのめはいさうだと思つて、兩耳の間をねらつて、頭の上をすれくにいきました。

すわ (感) 1 すは

十一273 圖 〈略〉秀吉は、持ちたる箸を投捨てて、「すは勝つたるぞ。」と手を打つて喜び、〈略〉。

すわゐる [座] (五) 6 スワル すわる

四847 今 オキクト オヒナ様ノ前ニ スワツテ ナガメテ 居マス。

七427 おばあさんは「やれく。」といつて、其所へすわつた。

八998 圖 〈略〉、君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、少しも僕等の爲につくさない。

八1015 圖 僕はたゞ坐つてゐて物を食ふだけの者ではありません。

十一695 末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。

十一698 隣に坐つてゐた僧が之を聞いて、「無言の行に口をきくといふ事があるか。」

すん [寸] (名) 1 寸 じいっすん・いっすん さき・くすん・ごしやくにす

ん・ごろくすん・さんじやくろくすん・しこすん・ししやくくすん・ししやくはつすん・ときいっすん・ときにすん・はつししやくくすん・はつすん・ろくしすん

十1287 圖 一秒又一秒、七百尺に近き大船體は、寸、尺、間と音もなくすべり出づ。

ずんずん (副) 5 ズンズン ずんずん ずんく

二452 ソノ マツノ 木 ハ ズンズン 大キク ナリ マシタ。

二696 圖 ズンズン アガル、クモノ上。ノツテ ミタイナ ヒカウ キニ。

三572 それからは一しやうけんめいになつて、毎日字をならひました。ずんずん 手が上つて、のちには 名高い 書手 となりました。

七101 潮がずんく下がるので、舟はすすと進んで、たちまち海へ出た。

九584 仕事は水入らずの三人の手で、ずんくはかどつて行く。

すんぶん [寸分] (副) 1 寸分

九187 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、〈略〉、形ガ桑ノ小枝ニ寸分違ハナイ。

せ

せ [背] (名) 2 背

十199 圖 子馬には大い飼主の一家族がついて来て、親切に世話をしてゐます。中には、〈略〉、くびや背をなでたりしてゐるのもあります。

十一358 〈略〉、山の背を通つてゐる小路を中にはさんで、四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるのが、目に見えるやうな氣がする。

せ [敵] じにちやうさんたんこせ

せ [瀬] じあさせ

せい [生] じいちねんせい・ごねんせい・しやうがくせい・そつぎやうせい・にねんせい

せい [姓] (名) 1 姓

七1074 圖 〈略〉、某は四つ五つの頃から親にはなれて、姓も存じませんので、御威光を借りて豊臣と記したのでございます。

せい [性] (名) 3 性 じこくみんせい

い・わがこくみんせいのちやうしよたんしよ

十二477 圖 ひば・松・落葉松は何れも堅くして、耐久・耐濕の性あるを以て建築・土木・造船等其の用途頗る廣し。

十二484 圖 〈略〉、栗は耐久・耐濕の

性殊に著しきを以て、家屋の土臺、鐵道のまくら木等の用に供せられ、〈略〉。

十二1373 習、性となつては、遂に日本人には獨創力がないであらうと自らも輕んじ、外國人からも侮られる。

せい [制] じちせい

せい [星] じほくとしちせい・ほつきよくせい

せい [背] (名) 8 セイ せい

三263 このあひだかきねのそばへ出たのは、もう私の せいより高くなりました。

四745 せいの高い私の 目にも、まだお日様が見えない中から、くはやかまを持つてたんぼへ行きました。

五362 いたどりは私どものせいほどにのびてゐました。

六993 圖 あの子は十二、落葉松はあの子のせいより低かつた。

七278 我が國の馬は西洋諸國の馬にくらべると、せいも低く、體格もおとつてゐたが、〈略〉

七494 私ノ近所二年ヨリノカヂ屋ガアリマシタ。セイガ高く、目ガスルドクテ、〈略〉。

七1048 圖 あの子の低いのが石田だ。通してやれ。

八546 圖 おとうさんが「せいは高くても、まだだめだ。」とおつしやつたが、〈略〉。

せい「製」↓ぎよせい・めいじてんのうぎよせい

せい「精」(名) 2 精

九118 総べて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。

十二44「略」、やがて指がピヤノの鍵にふれたと思ふと、「略」、一轉すると、今度は如何にもものすごい、いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生にをどるやう、「略」。

せい「所為」(名) 1 せる

九100 昨夜雨が降つたせゐか、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近く見える。

せい「税」(課名) 2 税

八112 第二十 税

八77 第二十 税

せい「税」(名) 10 税

八77 役場へ税を納めに。

八79 役場へ税で、村の學校

や役場の費用などになるのです。

八79 さいです。此の一枚には

徴、税令書とありませう。「略」。

「あとの二枚は」「一枚は縣の税で、一枚は國の税です。

八79 一枚は縣の税で、一枚は國の税です。

八79 これは縣の税で、縣立の學校や病院や、其の他道路などの費用になります。

八79 それからこれは國の税で、納税告知書としてあります。

八80 國の税は勿論、縣の税も村

の税もみんな大事なもの、之を納めることは國民の務です。

八80 國の税は勿論、縣の税も村

の税もみんな大事なもの、
「略」。

八80 國の税は勿論、縣の税も村

の税もみんな大事なもの、
「略」。

八80 縣や國の税も、村の役場

へ納めれば、よいのですか。」

せい「誠意」(名) 1 誠意

十一114 地方人民が協同一致して自

ら地方公共の事に當り、誠意其の團

體の爲に力を盡くす精神が即ちそれ

である。

せい「精一杯」(副) 1 精一

ぱい

十42 私「略」、雜木を束ねては

運び、運んでは又束ねて、精一ぱい

に働いた。

せい「生活」(名) 6 生活 ↓

きょうどうせい「かっ・ぐんかんせい」か

つのあさ・にちじょうせい「かっ

八58 近年人々ノ生活次第第二イン

ガシクナリテ、「略」、ユルく歩ク

ガ如キ者ナシ。

十二13 ダーウィンの後半生は病氣

がちであつたが、此の規則正しい生

活とふだんの養生によつて、七十

四歳の長壽を保つことが出来た。

十二15 第四課 新聞「略」。

「略」、やがてあまねく内外の事件を

報すると共に時事を論ずるもの起り

て、こゝに始めて我等の生活に切實

なる關係を有するものとはなりぬ。

十二90 我々は常に國法にしたがつ

て幸福な生活を営み、「略」。

十二13 國民の生活をおびや

かすやうな危機は絶無であり、國內

はおほむね平和であつた。

十二14 狭い島國に育ち、生活の安

易な樂土に平和を樂しんでゐる我が

國民は、「略」。

せい「生活」(名) 1 生

活上

十一68 人は生活上の必要から發火

法を工夫し、燃料を研究し、火の熱

と光とをあらゆる方面に利用するこ

とを考へて來た。

せい「生活」(サ変) 3 生

活する《一シ・スル》

十86 我々が今日生活して行くには、

我が國で出来る品物ばかりでは用が

足らない。

十一22 若し又裁判が公平に行はれ

ぬとしたら、「略」、我々は安心して

生活することが出来ぬであらう。

十一77 我々は殆ど貨幣・紙幣なく

して一日も生活することは出来ぬと

いつてもよいからである。

せい「西岸」(名) 1 西岸

十一87 「略」、黄浦江といふ支流

に入り、更に十里餘りさかのぼる

と、其の西岸にある上海に着く。

十一98 「略」、河岸には領事館・税

關を始め、銀行・會社等のりつぱな

建物がそびえてゐる。

せい「正義」(名) 2 正義

九36 「略」、正義の念と愛國の情

とに死を恐れざるベルギー軍の防戦

も、終に如何ともしがたく、「略」、

将卒は多く戦死せり。

十一67 孔子は正義の念強き人な

りき。

せい「正義保護」(名) 1 正義

保護

十一23 裁判は實に正義保護のため

の大切な仕事であり、「略」。

せい「生計」(名) 1 生計

十124 全村農業を以て生計を立つ。

せい「ちようせい」ちようせい・ちようせ

いけつ

せい「聖賢」(名) 1 聖賢

十二92 此の上は聖賢を訪うて教

を受ける外はない。

せい「成功」(名) 4 成功

八76 一日祝賀會の席上で、人々が

かはるゝ立つて、コロンブスの成

功を祝しますと、「略」。

十36 「略」、實地に大仕掛の工事を

行つた事もあつたが、成功を見るに

至らなかつた。

十二64 「略」エンマヌエル王、

「略」、其の家の紋章の色なる白と赤

とに、統一の成功を祈る希望の色と

して緑を加へ、「略」。

- 十二112 8 図 彼が稀代の天才はこゝに
も遺憾なく發揮せられて、着々成功
の域に進みしが、〈略〉。
- せいこう 「精巧」(形状) 1 精巧
- 十49 10 彼は〈略〉、工夫に工夫を積
んで、世に柿右衛門風といはれる精
巧な陶器を製作するに至つた。
- せいこう・す 「成功」(サ変) 1 成功
す 《一シ》
- 十二112 2 図 〈略〉トマス、エヂソン
は、既に電話機に關する發明に成功
したるを以て、更に〈略〉電燈の發
明に従事したり。
- せいこう・する 「成功」(サ変) 2 成
功する 《一シ》
- 十36 9 米國が此の運河を造るに成功
したのは、主として、最新の學理を
應用したからであつた。
- 十49 5 かうして柿の色を出す事に成
功した喜三右衛門は、程なく名を柿
右衛門と改めた。
- せいさい 「制裁」(名) 1 制裁
- 十一20 2 ところで、どういふ事をす
れば罪になるか、其の制裁としてど
のやうな刑罰を受けるかは、法律で
明かに定めてあるから、〈略〉。
- せいさく・す 「製作」(サ変) 1 製作
す 《一スル》
- 十二48 7 図 〈略〉、かしは〈略〉、
櫓・車・運動器具の如き強烈なる力
を受くるものを製作するに適せり。
- せいさく・する 「製作」(サ変) 1 製
作する 《一スル》
- 十49 10 彼は〈略〉、世に柿右衛門風
といはれる精巧な陶器を製作するに
至つた。
- せいざ 「星座」(名) 1 星座
- 十一89 図 星座 午後八時子午線通過
- せいざ・する 「静座」(サ変) 2 静坐
する 《一シ》
- 十二95 2 それから釋迦はブツダガヤ
の綠色濃き木陰に靜坐しておもむろ
に思をこらした。
- 十二95 6 彼は夜もすがら靜坐してひ
たすら思をこらしてゐると、〈略〉。
- せいし 「製紙」(名) 1 製紙
- 十一11 8 上海は〈略〉、近時工業も
次第に盛になつて、紡績・造船・製
粉・製紙其の他の諸工場が勢よく黒
煙を立ててゐる。
- せいしこうば 「製糸工場」(名) 1 製
絲工場
- 五64 8 図 あれは製絲工場で、女工が
四百人も絲を取つてゐる。
- せいじじょう 「政治上」(名) 1 政治
上
- 九23 7 図 しかし思ふ程に仕事は出來
ず、其の上政治上の事で度々殿様に
上書した爲、役人ににくまれて、
〈略〉。
- せいしつ 「性質」(名) 6 性質
- 九8 8 図 土人はまだよく開けてゐま
せんが、性質はおとなしく、我々に
もよくなつき、〈略〉。
- 十二13 2 ダーウィンは興味を覺える
と、あくまでそれにこる性質で、
〈略〉。
- 十二46 1 図 凡そこれ等の木材は、其
の有する性質によりて各種の用に供
すべく、〈略〉。
- 十二61 5 図 〈略〉、白地は我が國民の
純正潔白なる性質を示し、日の丸は
〈略〉愛國の至誠を表すものともい
ふべきか。
- 十二134 4 其の上我が國の美しい風景
や温和な氣候は、自ら國民の性質を
穩健ならしめ、〈略〉。
- 十二135 8 すべて日本人の短所として、
性質が小さく狭く出來たきらひがあ
る。
- せいじぶ 「政治部」(名) 1 政治部
- 十二16 7 図 しかして編輯局は更に編
輯部・政治部・經濟部・社會部・通
信部・外報部〈略〉・校正部等に分
れ、〈略〉。
- せいしゆつ・す 「製出」(サ変) 1 製
出す 《一セ》
- 十二114 6 図 〈略〉、日本の竹最も適當
なりしかば、専ら之によりて心を製
出せり。
- せいししょう 「星章」(名) 2 星章
- 十二62 9 図 アメリカ合衆國の國旗は
〈略〉。〈略〉、藍地中の星章は、常に
州の數と一致せしむるを定めとす。
- 十二62 10 図 現今は星章の數四十八個
なり。
- せいじょう 「性情」(名) 2 性情
- 十二134 5 其の上我が國の美しい風景
や温和な氣候は、〈略〉、自然美を愛
好するやさしい性情を育成するのに
與つて力があつた。
- 十二138 5 しかし其の半面には、物に
あき易く、あきらめ易い性情がひそ
んではゐないか。
- せいしん 「精神」(名) 15 精神 ↓こ
だいせいしん・じちのせいしん
- 九26 1 図 〈略〉、一すぢに國の爲、民
の爲につくすといふお考は、どなた
も皆同じ事で、これが佐藤の家の學
問の精神である。
- 九26 2 図 わたしも此の精神にもとづ
いて、〈略〉、くはしく計畫を立て
た事もあるが、〈略〉。
- 九118 2 図 わたしが惡かつた。おかあ
さんの精神は感心の外はない。
- 十一113 5 〈略〉、地方自治の精神に基
づいて其の團體の幸福を進め、國運
の發展を期することは皆同じである。
- 十一114 2 一體自治の精神とは何であ
るか。
- 十一114 4 地方人民が協同一致して自
ら地方公共の事に當り、誠意其の團
體の爲に力を盡くす精神が即ちそれ
である。
- 十一114 4 此の精神は實に自治制の根
本であり、又其の生命である。
- 十一114 8 一般人民が府縣市町村會議
員を選挙するにも、〈略〉、皆此の精

神を本としなければならない。

十一114 〇 〈略〉、議員が豫算を議するにも、常に此の公平な精神をもつてしなければならない。

十一115 〇 〈略〉、私利によつて勧誘するとかいふやうな手段を用ひたり、又此の手段に動かされたりするのは、自治の精神に全く反するものである。

十一115 〇 本當に自治の精神に富んでゐる者は、〈略〉、決して私心をもたないのである。

十一116 〇 〈略〉、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、〈略〉、自治の精神を養成し、自治團體を助長するものであるから、〈略〉。

十一117 〇 自治制も、之を運用する人民に自治の精神が乏しければ、よい結果を得ることは到底望まれない。

十二90 〇 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。

十二134 〇 〈略〉 我が國民は、〈略〉、奮闘努力の精神に乏しく、遊惰安逸に流れるかたむきがある。

せいぜい 〔精精〕 (副) 2 せいゝく 精々

八68 〇 〇 つまりお前たちよりもよくいに勉強してゐるわけです。お前たちもせいゝく勉強なさい。

十一101 〇 〇 勉強も大切なれど、體にも精々御注意なさるべく候。

せいせき 〔成績〕 (名) 1 成績

十一98 〇 〇 〈略〉、毎日元氣よく通學した。〈略〉。かういふ心掛であつたから、成績は何時も優等であつた。

せいせきぶつ 〔成績物〕 (名) 5 成績物
十一14 〇 〇 のぶ子さんはちやうど、五年生の時の成績物に表紙をつけて、とちていらつしやる所でした。

十一14 〇 〇 〈略〉、成績物を一枚も無くなさず、そへていらつしやるのに驚きました。

十一15 〇 〇 のぶ子さんは、成績物が返るとすぐ紙の袋へ入れておいて、〈略〉。

十一15 〇 〇 一年生の時からの成績物も見せていたといつて、其の始末のよいのに感心してしまひました。

せいぜん 〔生前〕 (副) せいぜん
せいぜん 〔井然〕 (形状) 1 井然
十二101 〇 〇 〈略〉、東西四十町、南北四十五町、九條の條坊井然として、北に大内裏の宮殿を仰ぎ、〈略〉、南端に羅城門をふまへたる古の奈良の都は、〈略〉。

せいそう 〔西窓〕 (名) 1 西窓
十一110 〇 〇 白雲いゝく去り又來る。西窓一片殘月あはし。

せいぞう 〔製造〕 (名) 1 製造

八106 〇 〇 分業はマッチの製造ばかりではない。

せいぞうじょ 〔製造所〕 (名) 1 製造所
八104 〇 〇 マッチの製造所へ行つて見ると、職工が大勢居つて、それゝく手分をして働いてゐる。

せいぞうする 〔製造〕 (サ変) 3 製造する
十87 〇 〇 機械類は、近年我が國でも盛に製造されるやうになつたが、〈略〉。

十一49 〇 〇 ゴムは、熱帶地方に産する或植物からとる白色の液を原料として、製造したものである。

十一50 〇 〇 ブラジル邊でゴムを製造するには、山野に自生するゴムの木から原料をとるのであるが、〈略〉。

せいぞうば 〔製造場〕 (名) 1 製造場
八107 〇 〇 食つた物をこなして、之を血の製造場へ送るのが僕の役目であつて、〈略〉。

せいぞろえ 〔勢揃〕 (名) 2 勢ぞろへ
十70 〇 〇 頃しも鎌倉より、勢ぞろへの沙汰俄に國々に傳はりぬ。

せいぞろへ 〔勢ぞろへ〕 (名) 1 勢ぞろへ
十72 〇 〇 時頼は尚一同に向ひて、「今度の勢ぞろへに集つた諸侍の中に、訴訟ある者は申し出るがよい。

せいぞんする 〔生存〕 (サ変) 1 生存する
十一15 〇 〇 太陽の光と熱とがなくては、我々人間は勿論、あらゆる生物、一として生存することは出来ない。

せいだす 〔精出〕 (五) 2 セイ出ス

せい出す 〔シー・ス〕
四10 〇 〇 風に吹かれて、なま土ふんで、今日も朝から せい出す おや子。

六13 〇 〇 其ノ時鐵ビシハ「私ヲチノサビルノハ人ガ使ハナイカラデス。モシセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ、イツデモ光ツテキマス。

せいちゅう 〔誠忠〕 (名) 1 誠忠
十97 〇 〇 されど宋軍の大勢日々に非にして、天祥の誠忠を以てしても如何ともすることあたはず。

せいちようする 〔成長〕 (サ変) 1 成長する
十一51 〇 〇 此の邊でゴムを栽培するには、〈略〉、又は苗木を植付けがあるのであるが、これが成長して、切付を行ふまでには五六年もかかる。

せいいてい 〔制定〕 (名) 1 制定
十二90 〇 〇 これ等の命令も〈略〉やはり法律であるから、其の制定も出来る限り慎重な手續を経る。

せいいていす 〔制定〕 (サ変) 1 制定す
十二60 〇 〇 今日一國家を形成する國々にして、國旗の制定せられざる所なし。

せいいていする 〔制定〕 (サ変) 1 制定する
十二88 〇 〇 法律を制定するには、政府又は貴衆兩院の何れかが其の案を作

せいいていする 〔制定〕 (サ変) 1 制定する
十二88 〇 〇 法律を制定するには、政府又は貴衆兩院の何れかが其の案を作

成して議會に提出する。

せいと 「生徒」 (名) 9 生徒 ↓じよ

せいと・ぜんこうせいと

五三ノ 四月四日の朝、〈略〉、先生が知らない生徒を一人つれてお出でになりました。

六七八 男の生徒もあれば、女の生徒もある。

六七八 男の生徒もあれば、女の生徒もある。

八八二 〈略〉、〈略〉先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。

生徒はおとよであつた。

八九六 此所では女の先生が、生徒に五十音の發音を教へてゐられた。

一〇二〇 校長も着實温厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く〈略〉。

一〇二一 〇 〈略〉、生徒も校長をしたふこと父母の如し。

一〇二三 〇 其の他の教員も、〈略〉専心職務につとむるが故に、生徒は皆よく之になつて課業にはげみ、〈略〉。

一二一〇 〇 〈略〉、先生にもむしろ以下

の生徒と思はれてゐた。

せいど 「制度」 (名) 1 制度

一一一七 〇 制度を運用するのは人である。自治制も、〈略〉。

せいとう 「征討」 ↓とくがわよしのぶ

せいとう 「正当」 (形状) 1 正當

十一一九 〇 〈略〉、裁判所は〈略〉、貸

主の主張を正當とみとめれば、其の借金を返すやうに借主に命ずる。

せいどう 「青銅」 (名) 1 青銅

一〇一四 〇 青銅の大鳥居をくゞつて進むと、沿道の家は大てい天満宮にちなんだ物を賣つてゐる。

せいどうか 「青銅貨」 (名) 1 青銅貨

一一一七 〇 我々の普通に金銭といつてゐる物の中には、金貨を始め、銀貨・白銅貨・青銅貨がある。

せいとん 「整頓」 (名) 1 整頓 ↓ふ

せいとん 十一一八 〇 整頓といふのは體裁をつくることではなくて、むだをなくすることだ。

せいとん・する 「整頓」 (サ変) 3 整頓する 整頓する 整頓する 《一サ・一シースル》

九六八 〇 數分の内に艦内はすっかり整頓する。

一一一六 〇 「こんなによく整頓してゐる中で勉強したら、どんなに氣持

がよいだらう。」

一一一七 〇 此の一事で、家の中がどんなによく整頓されてゐるかが想像されます。

せいなん 「西南」 (名) 1 西南

七四四 〇 横濱は東京の西南八里半の所にある一大貿易港にして、〈略〉。

せいなんぶ 「西南部」 (名) 1 西南部

一〇一七 〇 京城の西南部に龍山とい

ふ處があります。

せいねん 「青年」 (名) 6 青年

一〇一五 〇 朝鮮の青年も、近頃はなか／＼頭が進んで來ましたので、〈略〉

私どもは、非常に喜んでをります。

一〇一六 〇 〈略〉、主人はそれ等の人々をさしおいて、或一人の青年をやとひ入れた。

一〇一七 〇 後日、人が主人に向つて、どういふお見込で、あの青年をお用ひになつたのかと尋ねた。

一〇一八 〇 あの青年が私の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、はいると靜かに戸をしめました。

一〇一九 〇 〈略〉、あの青年ははいるとすぐに書物を取上げて、テーブルの上に置きました。

一〇二〇 〇 かういふ點から、いろいろの美質をもつてゐることをよく見定めて、あの青年をやとふことにしたのです。

せいねんしよくん 「青年諸君」 (名) 2

青年諸君

一〇二一 〇 高橋さんは、お茶を一口飲んで、「郷里の青年諸君がこんなにまじめになつて來たのは、何よりうれしい事です。

一〇二二 〇 私は此の村の青年諸君が、かうして修養にも實行にも、骨を折つてをられるのを、うれしく思ひます。

せいねんたち 「青年達」 (名) 3 青年

一〇二三 〇 其のとなり村の青年たちが見かねて、方々へ義捐金をつのりに出た。

六六三 〇 青年たちは之を聞いて、さゝやき合つた。

六六四 〇 其の歸り途で、青年たちは「こまかな人だが、出す時には出すね。」

たち

六六六 〇 其のとなり村の青年たちが見かねて、方々へ義捐金をつのりに出た。

六六七 〇 青年たちは之を聞いて、さゝやき合つた。

六六八 〇 其の歸り途で、青年たちは「こまかな人だが、出す時には出すね。」

せいねんだん 「青年団」 (名) 4 青年

一〇二四 〇 十月二十五日は、青年團の道ぶしんの日であつた。

一〇二五 〇 〈略〉、はじめて青年團の規約を見た時は、〈略〉、これがまじめに實行されてゐるかどうかと、少し氣になつたのでした。

一〇二六 〇 青年團の事業の一として、杉・檜の植林を營めり。

一〇二七 〇 〈略〉、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、〈略〉。

せいばつ ↓おにせいばつ・くまそせい

ばつ・ごせいばつ

せいばつ・する 「征伐」 (サ変) 1 征伐する 《一セヨ》

五四四 〇 天皇は日本武尊にこれを征伐せよとおほせられました。

せいはん 「製版」 (名) 1 製版

一〇二八 〇 〈略〉、喜んで寄附するもの意外に多く、此の度は製版・印刷

の意外に多く、此の度は製版・印刷

の業着々として進みたり。

せいひん 「製品」(名) 1 製品

十883 〈略〉、それに加工して綿絲や綿織物を造る。これらの製品は我々の使ひ料にもなるが、〈略〉。

せいふ 「政府」(名) 2 政府 ↓しな

せいふ 法律を制定するには、政府又は貴衆兩院の何れかが其の案を作成して議會に提出する。

十二887 政府から提出された案は先づ議會の一院で討議される。

せいふく・する 「征服」(サ変) 1 征服する 《一シ》

十79 マケドニアといふ小さな國の王子と生れ、二十一で位につき、わづか十數年の間に四方の國々を征服して、〈略〉。

せいぶつ 「生物」(名) 2 生物 ↓うみのせいぶつ

十一15 太陽の光と熱とがなくては、我々人間は勿論、あらゆる生物、一として生存することは出来ない。

十二1310 さうして〈略〉、生物は總べて長年月の間には次第に變化し、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。

せいふん 「製粉」(名) 1 製粉

十一118 上海は〈略〉、近時工業も次第に盛になつて、紡績・造船・製粉・製紙其の他の諸工場が勢よく黒煙を立ててゐる。

せいへい 「精兵」(名) 1 精兵

十82 或日王は部下の精兵を引連れ、タルススといふ町に着いた。

せいほう 「西方」 ↓きんせいせいほうりかく

せいほう 「製法」(名) 1 製法

九241図 〈略〉、此所の銅の製法を改良したり、新しい鑛山を開いたりする爲に、此の山中へ來たのである。

せいほく 「西北」(名) 1 西北

十一284図 明くれば二十一日の朝、盛政は賤嶽より西北に當れる高地に兵を引きまとめたりしが、〈略〉。

せいまいがいしや 「精米會社」(名) 2 精米會社

九4910 僕は今日學校から歸るとすぐ、〈略〉、精米會社へお使に行つて來ました。

九507図 「あの精米會社の社長さんはえらい方なんぞう。」

せいまいきかい 「精米機械」(名) 1 精米機械

九501 會社では、幾臺もある精米機械が電力で勢よく廻り、〈略〉。

せいまいじよ 「精米所」(名) 1 精米所

九557図 そこで間もなく片手間に精米所を始め、追追に大きくして、〈略〉。

政務にもたへられなくなつて來た。

せいめい 「生命」(名) 1 生命

十一1145 此の精神は實に自治制の根本であり、又其の生命である。

せいよ 「聲譽」(名) 1 聲譽

十二4810図 〈略〉、檜は木首座の聲譽高く近時臺灣阿里山の檜また有名なり。

せいやう 「西洋」(名) 4 西洋

七366図 〈略〉煉瓦造の家が軒をならべて立つてゐるので、日本の町よりはかへつて西洋の都會に似てゐるといひます。

九286 信淵は〈略〉、宇田川玄隨・大槻玄澤などの人々をたよつて、一心に西洋の學問を勉強した。

九901図 西洋では昔から、あの七つの星と其の近所の星を一しよにして小熊の形を想像し、〈略〉。

十二136 支那・印度の文明を入れ、更に西洋の文明を入れて長足の進歩を成し遂げた日本國民は、〈略〉。

せいようしよこく 「西洋諸國」(名) 2 西洋諸國

七278 我が國の馬は西洋諸國の馬にくらべると、せいも低く、體格もおとつてゐるが、〈略〉。

十502 柿右衛門はひとり我が國內において古今の名工とたへられてゐるばかりでなく、其の名は遠く西洋諸國にまで聞えてゐる。

せいやうじん 「西洋人」(名) 2 西洋人

人

六781 湖の上は朝からひじやうな人出である。〈略〉。先生もあれば、軍人もある。又西洋人もある。

十一351図 我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、世界における海上の一大公園なりといへり。

せいやうふう 「西洋風」(名) 1 西洋風

十一105 唯商業の取引の盛な部分は、相當に活氣を帯びてをり、西洋風の建物もあつて、趣がやゝ變つてゐる。

せいらい 「精良」(形状) 1 精良

十二229 〈略〉、見本には精良な品を使つて、實際の注文に對しては粗惡なものを送るやうな事は、〈略〉。

せいれつ 「整列」(名) 1 整列

九642 上甲板洗は水兵の受持で、先づ「兩舷直、整列。」のラツパがーきは高くひびき渡ると、〈略〉。

せいれつ・す 「整列」(サ変) 1 整列す 《一シ》

十二3図 拜殿の前に進みて整列し、謹みて拜し奉る。

せいれつ・する 「整列」(サ変) 1 整列する 《一スル》

九644 〈略〉、はだしのままの水兵が後甲板にはせ集つて、ずらりと整列する。

せいろう 「蒸籠」(名) 2 せいろう

八509 餅つき 〈略〉。はね起きて見ると、土間の大釜の上に積んであるせいろうからは、盛にゆげが上つてゐた。

八533 二かさね目のせいろうから、ゆげが上るまでに、少し間があつた。

せかい 「世界」(譯名) 2 世界

七目2 第一 世界

七11 第一 世界

せかい 「世界」(名) 32 世界 ↓ ぜんせかい

七12 図 われらが住む世界は、其の形まるくして、球の如し。

七43 図 其の中我が大日本帝國と、イギリス・フランス・イタリア及びアメリカ合衆國を世界の五大強國といふ。

七68 図 世界に比なき帝國の強き御民となるべしと。

九76 図 〈略〉にはか雨が、〈略〉通り過ぎた後の、あざやかな緑の世界は、〈略〉、氣持のよいものです。

九86 図 何だかおとぎばなしの世界にでもまよひこんだやうです。

九96 7 図 雪溪が冬の世界ならば、此所は春の國でせう。

十79 昔ヨーロッパにアレクサンドル大王といふ王があつた。〈略〉、當時世界に類のない大國を建設した英雄である。

十312 此の地峡に造つた運河が、世

界に名高いパナマ運河である。

十378 しかしパナマ運河の開通以來は、〈略〉世界の航路に大きな變動を生じたのである。

十816 〈略〉、こんな大きなポンプを備へ附けてゐる處は、世界でも珍しいさうです。

十1009 〈略〉、一足温室の中にはいると、全く別の世界に來たやうな心持がする。

十1352 図 我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、世界における海上の一大公園なりといへり。

十1501 今日世界におけるゴムの大部分は、此の木から取つたものである。

十1615 汽車は〈略〉、やがてトンネルにはいる。しばらく暗黒の中を通つて再び光明の世界に出た時、〈略〉。

十1682 燈火としては、〈略〉、今はガス燈や電燈が到る處にかゞやき渡る時代となつた。かくして人は、暗黒の世界からだん／＼光明の世界へと、みちびかれて來たのである。

十1683 かくして人は、暗黒の世界からだん／＼光明の世界へと、みちびかれて來たのである。

十11014 彼が他日大統領となり、世界の偉人として萬人に仰がれるやうになつたのは、〈略〉。

十11048 図 アマゾン河は全長五千五百キロメートル、世界の河の王といはれ居候。

十11064 図 世界に名高きブラジルコーヒーの主要なる産地も此の邊にて、甘蔗・綿花・米等もよく出来る由に候。

十1216 かくて世界の各地をめづつて、〈略〉、種々の材料を集めて本國に歸つたのはそれから五年の後である。

十1292 図 ロンドンは何と言つても世界の都會です。

十1302 図 昨日大英博物館を一覽しました。〈略〉、さすがに世界の大博物館といはれるだけあると思ひました。

十1314 図 此處はさすがに藝術の都として世界に聞えてゐるだけあつて、建物なども一般に壯麗です。

十1359 図 世界の公園といはれてゐるスイスは、到る處我が日本のやうに景色がよい。

十14310 〈略〉、やがて指がピアノの鍵にふれたと思ふと、やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が次第々々にやみの世界を照らすやう、〈略〉。

十18110 図 樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。

十12961 〈略〉、やがて此の尊い心境

を世界の人々と共にせずにはゐられぬといふ慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。

十11143 図 こゝにおいて彼は人を世界の各地につかはして竹を採集せしめ、〈略〉。

十11147 図 しかして其の電球は忽ち世界に廣まりぬ。

十11327 我が國が世界無比の國體を有し、〈略〉、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、〈略〉。

十11331 〈略〉、忠孝の美風が世界に冠たることは、今更いふまでもない。

十11354 殊に徳川幕府二百餘年の鎖國は、國民をして〈略〉、世界の大勢を知らぬ國民とならしめた。

せかい いち 「世界」(名) 3 世界 一六76 図 印度のヒマラヤ山は世界一で、たしか三万尺近いとおぼえてゐる。

八733 図 アメリカ人は大きいこと、廣いこと、〈略〉、何でも世界一になるやうに心掛けてゐるといひますが、〈略〉。

九293 世界一といはれるナイヤガラのは、アメリカ合衆國とカナダとの國境にあります。

せかい かくこく 「世界各國」(名) 2 世界各國

十1797 今では世界各國、貨幣・紙幣を用ひない國はないのである。

十12171 図 此の外、國內各地は勿論、

世界各國主要の地に特派員又は通信員ありて、〈略〉。

せかいごたいこく 「世界五大國」(名)

1 世界五大國

十二132 我が國が〈略〉、今や世界

五大國の一に數へられるやうになつたのは、〈略〉。

せかいさいこう 「世界最高」(名) 1

世界最高

十二3210 此の塔は世界最高の建物で、高さが三百メートルもあるさうです。

せかいさいび 「世界最美」(名) 1 世界最美

十二317 世界最美の街路といはれてゐるシャンゼリゼーの大通には、五六層もある美しい建物が道路の兩側に並び、〈略〉。

せかいじんしゅ 「世界人種」(名) 1

世界人種

十一94 租界には〈略〉幾多の人種が入交つてゐるので、其の有様は一見世界人種の展覽會のやうである。

せかいだいichi 「世界第一」(名) 2

世界第一

八721 高い建物のあることは世界第一で、十階・二十階の家はいくらもあります。

十二327 ルーブル博物館も一覽しました、りつぱな繪畫・彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。

せかいてき 「世界的」(形状) 1 世界的

十二1362 今日我が國が列強の間に立つて世界的の地歩を占めた以上、〈略〉。

せかいぶんめい 「世界文明」(名) 1

世界文明 十二1377 我々は何時かは〈略〉、世界文明の上に大いに貢獻したものである。

せき「石」 ↓せつかいせき

せき「席」(名) 3 せき 席

五33 〇「ここがあなたの教室です。せきはあれにします。」

五35 「〈略〉。」といつて、此の間からあいてゐたせきをおさしになりました。

十二1210 誰かが力石をころがして来て、土をはらつて高橋さんの爲に席を作つた。

せき「隻」 ↓いっせき・すうひやくせき

せき「関」 ↓しらかわのせき・なこそ

のせき せきこ・む 「急込」(五) 1 せきこむ

《一》 十二692 娘の言葉を物足りなく思つた王は、やゝせきこんで、「どうしたのだ、コーデリヤ。〈略〉。」

せきじゅうじ 「赤十字」(名) 1 赤十字 ↓しやせきじゅうじ

十二621 〇〈略〉、先づイングリランド

とスコットランドと合するや、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、〈略〉後者の國旗とを合して一旗となし、〈略〉。

せきしよ 「関所」(名) 1 關所

九707 〇〈略〉、此の關所は濱街道の勿來の關と共に、有名なものであつた。

せきじよう 「席上」(名) 1 席上

八75 一日祝賀會の席上で、人々がかはるゝ立つて、コロンブスの成功を祝しますと、〈略〉。

せきたん 「石炭」(名) 11 石炭

十806 〇〈略〉、周囲の壁は皆石炭で、それが電燈の光に物すごく光つてゐます。

十827 坑内に馬が居るのは不思議だと思つて、聞いてみると、これは石炭を運ぶために飼はれてゐるのださうです。

十8210 〇〈略〉だんく奥深く進むといよいよ石炭を掘つてゐる處へ來ました。

十835 〇〈略〉、坑夫が汗だらけになつて、元氣よく石炭を掘つてゐます。

十837 つるはしの先がきらりと光る。石炭ががさりと崩れる。

十839 石炭の壁は安全燈の光に照らされて、黒光りに光つてゐます。

十842 〇〈略〉、其の内の二人が石炭を掘崩すと、他の二人がそれをさるで運んで炭車に入れる。

十一674 木炭や石炭や石炭ガスの火は、部屋を暖めたり物を煮たりするに用ひられ、〈略〉。

十一676 〇〈略〉、石炭の火は木炭の火よりずつと熱度が高いので、〈略〉。

十二1162 〇殊に近年は〈略〉、石炭の火力による蒸氣力は、多くの場合之に敵することが出來なくなりまし

た。

十二1164 〇〈略〉、石炭は早晩使ひ盡くされてしまふが、水力は無限といつてよい。

せきたんガス (名) 1 石炭ガス

十一675 木炭や石炭や石炭ガスの火は、部屋を暖めたり物を煮たりするに用ひられ、〈略〉。

せきと・める 「塞止」(下二) 2 せき止める 《一》

十3110 先づ地峽の山地を流れてゐる河の水をせき止めて、湖を二つ造つた。

十373 〇〈略〉、山をくづし、地をうがち、河水をせき止めた事など、一としてそれならぬものは無い。

せきばらい 「咳払」(名) 1 せきばらひ

十二563 此の時大きなせきばらひが聞えて、父の時計師がはいつて來た。

せき「石碑」(名) 1 石碑

九813 〇石碑を刻む、文字をほる、植音のみ音かしましき 廣き工場

の片すみに、〈略〉。

せきゆ 「石油」(名) 1 石油

十一67頁 燈火としては、〈略〉、石油のランプが之に代り、今はガス燈や電燈が到る處にかゝりやき渡る時代となつた。

せぐくまゐる 「跼」(四) 1 せぐくまゐる 「一リ」

九81頁 〈略〉工場の片すみに、安ぢいさんはせぐくまり、常に何をか刻みある、めがねを掛けてはつび着て。

せけん 「世間」(名) 5 世間

九53頁 世間にはこんな場合に、なるたけ自分の負擔を軽くしようとする者もあるが、〈略〉。

九122頁 世間ニハ、〈略〉、或ハ信用モシテキナイ人ニ投票シタリ、或ハ棄權シテシマツタリスル人モアルガ、〈略〉。

十一19頁 〈略〉犯罪があつた場合には、〈略〉、其の犯罪者をこらし、又世間の人々のいましめにもせねばならぬ。

十二22頁 これ即ち世間の信用を博して堅實に自己の事業を發展させる道である。

十二54頁 一かどの役目を勤めて世間の役に立つのに、どれもこれも不足は無ささうである。

せたまゝ (助動) 4 せたまふ せ給ふ 「一ヒ・一フーへ」

七20頁 海神ねがはくは潮を退けて、道を開かせたまへと念じて、〈略〉。

十一131頁 〈略〉「主上はや院庄に入らせ給ふ。」

十一133頁 主上は詩の心を御さとりありて、天顔殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。

十一112頁 〈略〉 いしづ多固めし蜀漢の國、漢中王はおこそかに 帝の位をふませ給ひぬ。

せつ 「節」(名) 2 節 せつてんちよう せつ

九112頁 先日遊びに上り候節御約束致し候三毛の子猫、もはや大きくなり候事と存じ候。

十一43頁 其の節は何とぞ宜しく願上候。

せつ 「説」(名) 1 説

十二93頁 彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聴いたが、〈略〉。

せつ 「切」(形状) 4 切

十一73頁 又きはめて學問に熱心にして、其の好學の念の切なる、〈略〉。といふに至れり。

十一34頁 〈略〉、屋島・増浦は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。

十一42頁 何とぞ十分の御養生ありて一日も早く御全快なされ候様切に祈申候。

十二84頁 〈略〉、林蔵は好機至れりとひそかに喜びて、切に己をとま

はんことを求む。

せつかいせき 「石灰石」(名) 1 石灰石

十一121頁 〈略〉、マスクをかけた職工が珪砂にソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。

せつかく 「折角」(副) 5 せつかく

五72頁 翌年の春、大雨がふりつゞいて、せつかくつき上げた土手が、半分ほどもくづれてしまつた。

七74頁 かの男がわけを話して、どうかお禮を受けてくれといひますと、〈略〉。妻もまた「せつかくです

が。」といつて、相手になりません。十一22頁 若し裁判が無いとしたら、人々相互の争がはてしなく行はれて、しかも其の争は、力の強い者やわ

がしこい者が勝つことになるであらう。若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、せつかくの法律もねうちが無くなり、〈略〉。

せつ 「切」(形状) 1 切

十一98頁 しかしせつかく始めた學校通ひも、〈略〉止めねばならなくなつた。

十一117頁 農場主はせつかくよく出来てゐる麥を、たくさん馬や犬にふみあらされてはたまらないと思つて、〈略〉。

せつ 「形状」 1 せつ せつ

八84頁 父は「相かはらずせつ

だね。」といつたが、別に止めようともせず、〈略〉。

せつ せつ せつ

せつ せつ せつ

九94頁 雪溪は谷を埋めた雪の坂で、〈略〉、頂上近くまで續いてゐます。

九95頁 〈略〉、木の枝などを櫓にして、此の雪溪をすべつて下る人があります。

九96頁 お花晶は雪溪を登りつめた所にあります。

九96頁 雪溪が冬の世界ならば、此所は春の國でせう。

せつ せつ せつ

十一59頁 未開の土地を切開いて、思ふまゝに設計して造つた町であるから、〈略〉。

せつ せつ せつ

九59頁 これから椰子油を取り、石鰯・蠟燭なども造るのださうです。

せつ せつ せつ

十二15頁 〈略〉、やがてあまねく内外の事件を報ずると共に時事を論ずるもの起りて、こゝに始めて我等の生活に切實なる關係を有するものとはなりぬ。

せつ せつ せつ

十二28頁 安芳がいふ、〈略〉、拙者の考へる所では、〈略〉。之に比べれば、〈略〉、徳川家の存亡などは言ふにも足らぬ小事でござります。」

十二29頁 安芳は更に「〈略〉。拙者

は、〈略〉、さやうな事になれかしとは毛頭考へませぬが、〈略〉。」

十二130 西郷は〈略〉、「よろしい。とにかく明日の總攻撃見合はせの一事だけは、拙者一命にかけて御引受け申します。」

十二130 西郷は〈略〉、「〈略〉。其餘の事は拙者の一存にはまゐりませぬから、追つての沙汰をお待ち下さい。」

せっしれいどいかじゅうなんど「撰氏零度以下十何度」(名) 1 攝氏零度以下十何度

十七10 此の頃は十分寒くなつて、朝は攝氏零度以下十何度といふべきし、〈略〉。

せつす ↓ あいせつす

せつす「絶」(四) 1 絶す 《一シ》

十一109 園子 〈略〉、次にをのを振るつて大木を伐るに、〈略〉地ひびきを打つて倒る様、壯快言語に絶し候。

せつする「接」(サ変) 1 接する 《一シ》

十一61 9 〈略〉、眼下には廣々とした十勝の大平野がはるばると續いて、末は青い大空に接してゐる。

せつせと(副) 1 セツセト

三16 〈略〉、ハチハセツセトミツヲアツメテキマス。

せつだん「切断」(名) 1 切断

十二18 5 図 〈略〉、機械は電力により

て働き、印刷も切断も人手を要せず、一臺よく一分間に四百五十枚を印刷すといふ。

せつだんだいじよう「切断台上」(名) 1 切断臺上

十二128 4 図 やがて工廠長のふりかざしたる金色の槌は、〈略〉、切断臺上の繫索をはつしと切る。

せつな「刹那」(名) 1 刹那

十二129 8 〈略〉、やがて一點の明星がきらめいて、夜はほのく々と明けそめた。其の刹那、彼は迷の雲がかりと晴れて、〈略〉。

せつぱく「雪白」(名) 1 雪白

十二121 2 図 雪白の地に紅の日の丸をゑがける我が國の國旗は、最もよく我が國號にかなひ、〈略〉。

せつび「設備」(名) 1 設備

十136 10 衛生の設備をよくして危険な病氣を根絶し、〈略〉。

せつぷく「切腹」(名) 1 切腹

七99 2 図 たとひ 〈略〉、此のまゝ、切腹を命ぜられても、石田めとは中直りは致さぬ。

せつぶん ↓ きねんさいはんべいせつぶん

せつべき「絶壁」(名) 5 絶壁 ↓ いちだいぜつべき

八50 1 〈略〉、人ノヨリツケナイ絶壁ノ間や老木ノ上ニ、タテ横ニ小枝ヲ並べ、〈略〉。

十二150 4 岸は絶壁になつてゐる處が

多く、〈略〉。

十二150 7 〈略〉、殊に兩半島にはさまれてゐる中湖の東岸の如きは、絶壁の高さが二百メートル以上もある。

十二104 6 それは山國川に沿うて連なる屏風のやうな絶壁をたよりに、〈略〉かけはしを造つたものであるが、〈略〉。

十二110 4 かうして、老僧が始めてのみを絶壁に下してからちやうど三十年目に、〈略〉大工事が見事に成就した。

ぜつむ「絶無」(形状) 1 絶無

十二133 7 〈略〉、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國內はおほむね平和であつた。

せつめい「説明」(名) 2 説明

九85 2 図 信吉は夏休にて歸り居たる兄に向ひて、いろいろと星の説明を求めたり。

十二29 図 先生の説明によれば、當社の用材は主として木曾産の檜なりとぞ。

せつめいする「説明」(サ変) 1 説明する 《一シ》

十101 9 先に立つたにいさんが、「〈略〉。」と、いろいろ説明して下さる。

せつめいなさる「説明」(五) 1 説明なさる 《一ル》

九97 9 お話が頂上のながめに移ると、〈略〉、岡田さんは目の前に見てゐる

やうな様子で説明なさるので、〈略〉。

せとないかい「瀬戸内海」(課名) 2

瀬戸内海

十一目9 第八課 瀬戸内海

十一31 10 第八課 瀬戸内海

せとないかい「瀬戸内海」(地名) 4

瀬戸内海

十一32 7 図 此の四海峽に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。

十一32 9 図 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり、大小無數の島々各所に散在す。

十一34 5 図 瀬戸内海の沿岸には大阪・神戸・尾道・宇品・高松・多度津・高濱等良港多く、〈略〉。

十一35 1 図 我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、世界における海上の一大公園なりといへり。

せなか「背中」(名) 8 せなか 背中

三41 8 図 私 の せ 中 へ お の り な

さい。

三45 4 うらしまは玉手箱をもら

つて、又かめのせ中につて、

海の上へ出てきました。

四14 2 図 オマハタチノセ中ノ

上ヲアルイテ、カゾヘテミルカ

ラ、ムカフノヨカマデナランデ

ミヨ。

五10 3 図 頭が八つ、尾が八つある大

蛇で、目はほづきのやうに赤く、

せ中には、ひのきや杉の木が生えてゐます。

五79 義家はせ中のうつぽから、かりまたをぬいて狐を追つかけました。

五81 さて宗任がかりまたをぬき取つて、義家にかへしますと、義家は

せ中をくりりとむけて、うつぽへさへせました。

六46 3 ダン／＼上流ニサカノボツテ、時ニハセ中ガ出ル程ノ淺イ所マデ上ツテ來ル。

九33 2 〈略〉、ふろしき包をしよつたせなかがじつとりと汗ばんで来る。

せば・める「狭」(下二) 1 狭める

《一メ》

十二78 10 かうしてだん／＼網の中が狭められるに随つて、まぐろは水面に渦巻を起したり、〈略〉。

ぜひ「是非」(副) 5 ぜひ 是非

七73 8 かの男は「それではこまる、ぜひ。」といひながら、〈略〉。

八79 5 五箇村の人々は各自分の村の騎手に向つて、「ぜひ勝つてくれ。」

八78 2 是非今日のうちに納めなければなりません。

十67 10 〇「お見受け申す所、たゞのお方とも思はれません。是非お明かし下さい。」

十一96 6 かうしてあるうちに、知識を得たいといふ彼の欲望は益々強くなり、父に對して是非學校に入れて

もらひたいと願つたけれども、〈略〉。せびれ「背鰭」(名) 1 背びれ

十二79 1 〈略〉、まぐろは〈略〉、背びれを水上に現したりして泳ぎ廻つてゐる。

せまい「狭」(形) 9 せまい 狭い

《一イ・一ク》↓ひろいせまい 三71 2 そちらの〈略〉おびはねえさんので、はばのせまい黒いのはおばあさんのです。

五34 1 せまい中庭から、屋根の上に頭を出してゐるひよる松は、葉がほこりだけでした。

八115 4 郷里の家は〈略〉、至つてせまい、そまつな家であつた。

九73 6 〈略〉北上川を見たが、此所まで来ると川幅がかなりせまくなつてゐる。

九74 5 北上川は〈略〉、いよく／＼せまくなつて、とう／＼谷川になつてしまつた。

十一10 3 租界の外に出ると大いには支那風の町で、町幅も狭く、あまりきれいでない。

十二79 3 網の中がいよく／＼狭くなると、其の周圍を船で取巻いてしまふ。

十二134 7 狭い島國に育ち、生活の安易な樂土に平和を樂しんでゐた我が國民は、〈略〉。

十二135 9 すべて日本人の短所として、性質が小さく狭く出来たきらひがある。

せまし「狭」(形) 1 狭し 《一シ》

十二47 3 〇もみ・つがは〈略〉、杉・檜に比すれば用途甚だ狭し。

せまる「迫」(四五) 6 せまる 迫る 《一ツ・一リ》

九34 6 〈略〉、そよく／＼と吹く風につれて、若葉のほひがひし／＼と身にせまつて来る。

十一32 3 〇四國の西には佐田岬長く突出で、九州にせまりて豊豫海峡をなす。

十一57 4 ふかははや十數メートルの近くにせまつてゐる。

十二104 3 〈略〉、川沿の道をたどつて行くと、左手の山は次第に頭上にせまり、〈略〉人のゆくてをさへぎつてしまふ。

十二122 8 〇夢にのみ見し山川も、あけくれにしたひし家も、まのあたり近く迫りぬ。

十二125 7 しかし大勢は如何ともしがたく、危機は既に目前に迫つたので、〈略〉。

せみ「蟬」(課名) 2 セミ

三目7 十九 セミ

三57 5 十九 セミ

見マス、ト、モウリツパニセミ

ニナツテキマス。

三59 7 今ニハノ木ニセミガウルサイホドナイテキマス。

三60 1 アノセミモコノ中ニキルノデセウ。

せ・む「攻」(下二) 1 攻む 《一メ》

十一27 1 〇これより先、秀吉は織田信孝を攻めて大垣にありしが、〈略〉。

せめ「ひかまくらせめ・ひようろうぜめ せめいる」(攻入) (五) 1 攻入る 《一ツ》

七43 9 謙信はそれをさつて、夜の間に進んで信玄の陣へ攻入つた。

せめおと・す「攻落」(五) 1 攻落す 《一サ》

六95 7 もう此の上は、しやにむに攻落さうといふので、賊は大きなしごを作つて、之を城の堀に渡して橋にした。

せめ・ぐ「鬪」(五) 1 せめぐ 《一イ》

十二128 5 〇〈略〉、うかく／＼と兄弟垣にせめいでゐたら、日本全國にのしを付けてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。

せめこむ「攻込」(五) 3 セメコム

攻めこむ 《一ミ・一ム》

一52 2 モンヲヤブツテセメコミマシタ。

七19 6 鎌倉へは海陸ともに攻めこむ

すぎがありません。
 七219 義貞は之を見て、「ものども進め。」と、其の遠干がたを眞一文に鎌倉さして攻めこみました。
 せめて (副) 2 せめて
 十667 図 あつ鉢の木をたいて、せめてものおもてなしにしよう。
 十1323 図 高德せめては此の所存を君に知らせ奉らばやとて、〈略〉。
 せめのぼる「攻上」(五) 2 せめ上る 攻上る「ール」
 六226 木曾義仲が都へせめ上ると聞いて、平家はあわてて討手をさしむけました。
 六915 〈略〉、賊が城の門まで攻上ると、城のやぐらから大きな石を投落して、賊のさわぐ所をさんざんに射た。
 せめよ・せる「攻寄」(下二) 4 攻めよせる「セ・セル」
 六804 我が武士は敵の攻めよせるのを待ちきれず、こつちからおしよせた。
 六835 其の後も攻めよせる者がたえないので、敵は一先づ沖の方へしりぞいたが、〈略〉。
 六938 賊が之を聞いて、くやしがつて攻めよせると、〈略〉。
 六945 此の上はひやうらう攻にしようにと思つて、賊は城へ攻めよせないことにした。
 せ・める「攻」(下二) 3 せめる 攻

める「一メ」
 六548 頼朝が木曾義仲をせめようとしたり、〈略〉。
 六856 それからこゝに六百餘年、まだ一度も外國から攻められたことはない。
 八148 徳川家康が大阪城を攻めた時、〈略〉。
 せ・める「責」(下二) 1 責める「一メ」
 十二7510 〈略〉、其の言葉の端端にも、〈略〉、自分を責めて娘にわびる眞心がこもつてゐた。
 せり「芹」(名) 1 芹せり
 九1015 蛙が〈略〉泳いで行く。やがておもだかの莖や芹の葉などにつかまつて、後足を長く延ばし、〈略〉。
 せり「競」(名) 2 せり
 十182 図 まだせりが始るのに間があるといふので、馬つなぎ場を見て廻つたが、〈略〉。
 十205 図 せりの始つたのは十時頃でした。
 せりあ・げる「競上」(下二) 1 せり上げる「一ゲル」
 十2010 図 〈略〉、〈略〉買手は、自分の見込で思ひくゝの直をつけて、次第にせり上げる。
 せりば「競場」(名) 2 せり場
 十178 図 〈略〉、せり場を中央にして、其の周圍は馬つなぎ場になつてゐます。

十205 図 せり場の一方に高い臺があつて、其の上に掛の人が居る。
 セル (名) 1 セル
 六755 図 〈略〉。毛絲デオツタ物ニハ、ドンナ物がアリマスカ。」「〈略〉。」「〈略〉。」「セルモサウデセウカ。」「
 せる (助動) 57 セル せる「一セ・セル」
 二437 ワルイオヂイサンハ〈略〉。サウシテムリニ犬ヲナカセテ、ソコヲホツテミマシタガ、〈略〉。
 二485 図 「花サカヂヂイ、花サカヂヂイ、カレ木ニ花ヲサカセマセウ。」
 二494 図 トノサマガ〈略〉、「〈略〉。花ヲサカセテミヨ。」トオホセニナリマシタ。
 二522 図 〈略〉、トノサマガ〈略〉、「モウ一ド花ヲサカセテミヨ。」トオホセニナリマシタ。
 三138 図 おかあさん、あかちゃんにおちちをのませてちやうだい。
 三214 〈略〉、下のはうからかさかさいはせてかけ上つてくるものがあります。
 三222 犬ははなをくんくんいはせ、ををやたらにふつて、〈略〉。
 四386 たび人のぐわいたうをぬがせた方が勝といふことにきめて、先づ風からはじめました。

五218 〈略〉、又はらをふくらませてをどり上ります。其のたびに、鯉のかげが地の上をおよぎます。
 五386 〈略〉、先生が〈略〉、私どもを道に待たせておいて、學校へおよりになりました。
 五537 〈略〉、かへりに酒を買つて來ては、おとうさんを喜ばせてゐました。
 五612 圖 赤・黄・みどりやむらさきと、七つの色をならべて、空のゑぎぬへ一筆に、だれがかいたか、虹の橋。
 五817 さて宗任がかりまたをぬき取つて、義家にかへしますと、義家は〈略〉、うつばへさゝせました。
 六237 其の夜のことで、義仲はひそかにみ方の者を敵の後へまはらせて、〈略〉。
 六608 うばを門のわきに立たせて置いて、姫は中にはいりました。
 六871 象つかひが乗つてゐて、口上をのべては、らつばを吹かせたり、ごぼんの上へ乗らせたりした。
 六872 象つかひが乗つてゐて、〈略〉、ごぼんの上へ乗らせたりした。
 六941 〈略〉、正成は高いがけの上から大木を落させた。
 七264 馬はたいそう元氣のよい動物で、〈略〉。〈略〉。荷車をひかせたり、田や畠の耕作に使つたりする。

七69 6 図 それがあなたのやうな正直

なお方に拾はれて、財布をいたゞか

せてもらひましたが、〈略〉。

七97 3 豊臣秀吉が朝鮮へ向はせた先

手の大將は加藤清正・小西行長の兩
人でした。

七100 3 此の時清正は、〈略〉、家來の

者二百人に挺を持たせて、一さんに
伏見の城へかけつけました。

七100 8 秀吉は城の庭にしき物をのべ

させ、幕やびやうぶでまはりをかこ
はせ、〈略〉。

七101 9 図 「加藤清正これまで参上仕

る。〈略〉、家來ども二百人に挺を持
たせてかけつけました。」

八7 3 やがて五人の騎手は多くの

人々につきそはれ、しづ／＼と馬を
歩ませて、鳥居の中に集つて來た。

八11 1 つきそひの者や見物人はかけ

よつて來て、信作に水をはかせるや
ら、〈略〉、上を下へのさわぎである。

八23 4 呉鳳は〈略〉。ちやうど蕃人

が、其の前の年に取つた首が四十餘
ありましたので、それをしまつて置
かせて、〈略〉。

八24 3 呉鳳は〈略〉を説聞かせて、

もう一年、もう一年とのぼさせてゐ
ましたが、〈略〉。

八41 8 越前守は早速門をしめさせて、

見物人一同の所名前を書取らせ、
〈略〉。

八53 5 図 其の時にいさんが「私にも

つかせてみて下さい。」といひ出す
と、〈略〉。

八89 4 図 「指であひづをしたのは昔

のことで、今は口を見せてものを言
はせます。」

八113 3 〈略〉、着物をぬがせて、頭か

ら冷水を浴びせかけた。

九59 10 〈略〉、へうきんな五平おいさ

んが、時々へんな掛聲をして皆を笑
はせる。

九92 4 図 あのアルカスに親殺の大罪

をかかせてはならぬ。

九98 8 図 浅間山は煙をなびかせて、

東南の空はるかにそびえ、〈略〉。

十31 7 〈略〉、太平・大西兩洋の水を

通はせることは到底出来ぬ事であつ
た。

十48 7 胸ををどらせながら薫のまは

りをぐる／＼廻つた。

十55 10 普通傳書鳩を使用する方法は、

一定の飼養所から他の土地に連れて
行つて、飛歸らせるのである。

十57 4 〈略〉、飼養所を移動し、其處

を見覚えさせて飛歸らせるやうにす
る事も出来る。

十57 5 鳩に手紙を運ばせるには、足

にアルミニウムからセルロイドの細い
くだを附け、〈略〉。

十84 4 炭車が「ばい」になると、馬方

がそれを馬に引かせて、電気機關車
の通ふ道まで運んで行きます。

十一22 3 裁判の目的は、決して人を

争はせ、又は人を罰することではな
い。

十一39 3 いつかにもいさんが、

「〈略〉。」といつてみんなを笑はせた
ことがある。

十一53 4 集めた液は〈略〉、次に薬

品を入れて固まらせ、機械で薄くの
して乾かすのである。

十一62 2 はるかの下に一條の白煙を

たなびかせて見えがくれする上り列
車は、〈略〉。

十一69 3 小僧一人だけ自由に室内に

出入させて、いろ／＼の用を足させ
た。

十一76 5 〈略〉宣長は、未來の希望

に胸ををどらせながら、ひつそりし
た町すぢを我が家へ向つた。

十一100 8 其の人は〈略〉、願に任せ

て三日間畠の草をとらせ、さうして
本は其のまゝリンカーンにやつた。

十二40 3 図 ベートーベンも〈略〉、

口ごもりながら、「〈略〉。まあ一曲
ひかせていたゞきませう。」

十二73 5 フランス王の侍醫はとりあ

へず老王に薬を與へて靜かに眠らせ
た。

十二79 10 船がまぐろで一ぱいになる

と、大れふ旗を風になびかせながら、
〈略〉。

十二92 1 〈略〉父王は、彼に妃を迎

へ、目まばゆい宮殿に住まはせて、
〈略〉。

十二92 1 〈略〉父王は、彼に妃を迎
へ、〈略〉、國政にも與らせようとし
た。

十二93 6 かねて釋迦の徳をしたつて

ゐたマガダ國王は、修行を思ひ止ら
せようとして、〈略〉。

十二118 8 無線電話で子守歌を聞かせ

て赤ん坊を寝つかせてゐることなど
の耳新しき話に、〈略〉。

十二118 9 〈略〉、〈略〉などの耳新し

い話に、博士は滿堂の會衆を喜ばせ
た。

十二132 2 さうして〈略〉、とう／＼

徳川方の願意をとほさせた。

セルロイド (名) 1 セルロイド

十57 5 鳩に手紙を運ばせるには、足

にアルミニウムからセルロイドの細い
くだを附け、〈略〉。

せわ 「世話」 (名) 2 世話 せわ

わ・おせわさま・おんせわ・おんせわ
くださる

十19 1 図 子馬には大い飼主の一家

族がついて來て、親切に世話をして
ゐます。

十二10 5 図 「お前のやうに犬の世話

やねずみを取ることにばかり熱心で
は困るではないか。」

せわしい せきせわしい

せわしおり 「世話居」 (ラ変) 1 世

話し居り 《―ル》
九13 6 図 毎日世話し居ることとい
づれの鶏も皆かはゆき中に、〈略〉。

せわしげ「忙」(形状) 1 せはしげ

九153 図「略」、めんどりはせはしげに幾度か土をかきちらして、餌をあるにいがしく、「略」。

せわする「世話」(サ変) 1 世話する「シ」

八835 信吉にはおとよといふ今年十一になる女の子があるが、「略」、僕のうちで世話して、啞の學校に入れている。

せん「先」(名) 1 せん

四498 図「略」。こんど取つた人がそれも取ることにします。「略」。「負けるは勝。」道子はい、取りました。せんのも私が取りますよ。」

せん「栓」(名) 3 せん

三672 二十一 水デツパウ「略」。ソレカラホソイ竹ヲエニシテ、ソノサキニキレヲマキツケテ、センヲコシラヘマシタ。

三685 ソノウチニ水ガ出ナクナツタノデ、センヲヌイテ見ルト、キレガトレテキマシタ。

三691 サウシテセンヲヒキマシタガ、水ガウマクハイリマセン。

せん「船」↓じようせん・たんけんせん・なんばせん・ひこうせん・ほげいせん・ゆうらんせん

せん「銭」↓いっせん・じっせん

せん「線」(名) 1 線↓こがんせん・たんそせん・ちへいせん・てつど

うせん

九8710 図 あの「略」二つの星を結びつけて、其の線を、ひしやくの口の向いてある方へのぼして行くと、「略」。

せん「膳」(名) 2 膳ぜん

十654 図 やがて運び來れる貧しき膳に向ひ、僧は喜び箸を取りぬ。

十一272 図 あたかも晝食の膳に向ひ居たる秀吉は、持ちたる箸を投捨て、「略」。

せんいん「船員」(名) 3 船員

十253 岩の上に残つた船體には、十人許の船員がすがり附いて、「略」。

十279 生残つた船員は涙を流して喜んだ。

十1165 船員は手早く鯨の尾をくさりで船ばたにつないで、威勢よく根據地に引上げる。

せんいんら「船員等」(名) 2 船員等

十一548 熱帶の暑さにたへかねてゐた船員等は、「略」、我先にと海に飛込んだ。

十一551 船員等は、如何にも氣持よささうに泳ぎ廻つてゐたが、「略」。

せんえき「戦役」↓めいじにじゅうしちはんねんせんえき

ぜんかい「禅海」(人名) 2 禅海ぜんかい 禅海

十二1055 僧は名を禅海といつてもと越後の人、「略」、たま／＼此の難處を通つて幾多のあはれな物語を耳に

し、「略」。

十二11010 今では「略」舊態を改めてはるが、一部は尚昔の面目を留めて、禅海一生の苦心を永久に物語つてゐる。

ぜんかい「全快」↓ぜんかいなさる

せんがくじ「泉岳寺」(名) 2 泉岳寺せんがくじ

八1121 そこで大將が四五歳の時から、大將の父は「略」、往復一里餘もある高輪の泉岳寺へよく連れて行つた。

八1121 泉岳寺には名高い四十七士の墓がある。

せんかん「選挙」(名) 3 選挙↓

きゆうちようせんきよ・そうせんきよ

九1226 図「略」、メイ／＼自分ノ適當ト信ジテキル人ニ投票スルノガ、ホントウノ選挙トイフモノダ。

九1229 図 世間ニハ、「略」、或ハ棄權シテシマツタリスル人モアルガ、ソナナ事ヲスルノハ、選挙ノ趣意ニソムイテキル。

九1233 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長ガ轉校シタノデ、近々後任ノ選挙ヲスルコトニナツテキルノデアツタ。

せんきよう「戦況」(名) 1 戦況

十一287 図 今まで賤嶽の山上より、またゝきもせず戦況を見居たりし秀吉、「略」。

せんきよけん「選挙権」(名) 1 選挙権

九1221 図「略」、自分ノタフトイ選挙

權ヲ棄テルトイフ事ハ、選挙人トシテカリソメニモスベキ事デハナイカラ、「略」。

せんきよす「選挙」(サ変) 1 選挙す「一セ」

十1259 図 村長は「略」、幾度の改選にも重ねて選挙せられ、既に二十餘年勤続せり。

せんきよする「選挙」(サ変) 5 選挙スル 選挙する「一シースル」

九1235 道雄ハ誰ガ何ト言ツテモ、自分デ一番適當タト信ジテキル中村君ヲ選挙シヨウト決心シタ。

十一1146 一般人民ガ府縣市町村會議員ヲ選挙するにも、「略」、皆此の精神を本としなければならぬ。

十一1146 「略」、府縣市會で參事會員ヲ選挙するにも、「略」、皆此の精神を本としなければならぬ。

十一1147 「略」、市町村會で市町村長ヲ選挙するにも、皆此の精神を本としなければならぬ。

十一1151 市町村長及議員ヲ選挙するには、「略」、私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。

せんきよにん「選挙人」(名) 1 選挙人

九1221 図「略」、自分ノタフトイ選挙權ヲ棄テルトイフ事ハ、選挙人トシテカリソメニモスベキ事デハナイカラ

ラ、〈略〉。	ぜんこく じにっぽんぜんこく	千四百餘	じたり、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。
せんきょのひ 〔課名〕 2 選挙ノ日	ぜんごさゆう 〔前後左右〕 (名) 1 前後左右	千四百餘あり。	せんじょう 〔戦場〕 (名) 2 戦場 ↓
九目九 第二十五 選挙ノ日	九〇七 敵弾は前後左右へ雨のやうに落ちて来る。	せんじょう 〔前者〕 (名) 2 前者	こせんじょう
ぜんけい 〔全景〕 (名) 1 全景	せんし 〔戦士〕 (名) 1 戦士	十二六五 〔略〕、編輯・營業の二局ありて、編輯に關することは前者之を司どり、販賣・廣告に關することは後者之を擔當す。	九〇三 〔略〕、戦場をかけ廻るのは、北風にとつて愉快な事であつた。
九三九 第七 ナイガラの瀧 〈略〉。	十二九 見る／＼艦は速力を増して、白波高く海にをどり入る。あゝ、海の戦士の勇ましき誕生。	十二六二 〔略〕、先づイギリスとスコットランドと合するや、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、〈略〉後者の國旗とを合して一旗となし、〈略〉。	九〇六 戦場の光景は實に恐ろしいものであつたが、北風は〈略〉、びくともせずに勇ましく活動した。
〈略〉、下手へ廻つて、カナダの方からはるかに全景を見渡すのも面白い。	せんしす 〔戦死〕 (サ変) 1 戦死す	十二六二 〔略〕、先づイギリスとスコットランドと合するや、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、〈略〉後者の國旗とを合して一旗となし、〈略〉。	せんしん 〔専心〕 (副) 1 専心
ぜんけん 〔全権〕 (名) 1 全権	九三六 〔略〕、要塞は全く破くわいせられ、將卒は多く戦死せり。	せんじやくそこそこ 〔千尺〕 (名) 1 千尺そこ／＼	せんじん 〔先陣〕 (名) 2 先陣
十二二四 慶喜から官軍に對する交渉の全權を委任せられてゐた舊幕府の陸軍總裁勝安方は、〈略〉。	せんしする 〔戦死〕 (サ変) 1 戦死する	六八二 奈良の春日山や三笠山は千尺そこ／＼だが、白根や槍岳よりも知られてゐるし、〈略〉。	八四九 徳川家康が大坂城を攻めた時、其の子頼宣は戦が始つたと聞いて、先陣へかけつけたが、〈略〉。
ぜんご 〔前後〕 (名) 3 前後 ↓いし	六九八 〔略〕、はじめ百萬騎といつた賊も、前後から官軍にうたれて、殘少になつて退いた。	せんしゅ 〔船首〕 (名) 1 船首	八五八 家康は〈略〉、「今の一言は、先陣の功名にもまさる。」といつて喜んだ。
七四七 川中島で前後五回戦つたが、まだ勝負がつかなかつた。	せんじつ 〔先日〕 (名) 2 先日	十〇三 砲手は此の時早く船首の砲後に立つて、其の引金に手をかけた。	ぜんしん 〔全身〕 (名) 2 全身
十三六 かうして前後三段に上つた船は、海面より約二十六メートルも高い水面に浮ぶのである。	九一二 〔略〕 先日遊びに上り候節御約束致し候三毛の子猫、もはや大きくなり候事と存じ候。	せんしゅうさかい 〔泉州堺〕 (地名) 1 泉州堺。	八四八 第十三 鷲 〈略〉。〈略〉、何所二分ノスキモノナク、強ミガ全身ニミチミチテキル。
せんこう 〔線香〕 (名) 1 線香	十〇九 〔略〕、御祖母様には先日より御病氣の處、〈略〉、去る十九日遂に御死去遊ばされ候由、誠に驚き入り候。	十一四六 昔、泉州堺のなにがし寺に、或畫師久しく寄食してありけるが、〈略〉。	十八四 全身砂ぼこりにまみれた王は、〈略〉きれいな川にはいつて水浴をした。
七二四 其の松の下に石でござんだ地藏様が立つていらつしやる。〈略〉。	ぜんじつ 〔前日〕 (名) 1 前日	せんじゅうじじゅうろつぶん 〔前十時十六分〕 (名) 1 前十時十六分	せんすうひやくにん 〔千数百人〕 (名) 2 千数百人
ぜんこうせいと 〔全校生徒〕 (名) 1 全校生徒	十一八八 弟は〈略〉、すぐ二百十日の通日から立春の前日の通日を引去つて、〈略〉。	十一八九 二十五日 火 ○望前十時十六分	九六三 千数百人の乗員は、今もなほ安らかに眠を續けてゐる。
七四九 〔略〕 一年生を先頭に、二・三・四・五・六年が 四列になりて歩く時、全校生徒の八百は 八十八間もつゞくなり。	せんしひやくよ 〔千四百余〕 (名) 1	十五八 又戦争の時戦線から戦状を報	九六五 〔略〕、千数百人の乗員が號令

にしたがつて、規律正しく活動する
其の様は、如何にも目ざましい。

せんすうひゃくほうりー「千数百万里」

(名) 1 千数百万里

九29 廣さが千数百万里もある、海
のやうな湖から流れる大きな河が、
《略》。

せんせい「先生」(名) 37 センセイ

先生 ↓おおいせんせい・かもまぶち
せんせい・かわいせんせい・こうちよ
うせんせい・さのせんせい・ペートー
ベンせんせい・やまだせんせい

二63 コレデ本ノ中ノジモ、

エモ、センセイノ見セテクダサ
ルイロイロナモノモ見ルノデ
ス。

二63 センセイノオツシヤルコ
トヤ、ミンナノイフコトヲキ
キオトスヤウナコトハアリマ
セン。

五31 《略》、先生が知らない生徒を
一人つれてお出になりました。

五15 先生がまどをすつかり明けて、
出しておやりになりました。

五35 遠足のしたくをして學校へ行
くと、もう《略》、先生もお出でに
なつてゐました。

五38 《略》、となり村の學校の前へ
行くと、先生が「ちよつと用がある
から。」といつて、《略》。

五39 「さしわたしは八尺もある。」
と先生がおつしやいました。

五40 先生が拜殿にかけてある繪馬
のお話をして下さいましてから、
《略》、三時ごろ學校へかへりました。

六77 男の生徒もあれば、女の生徒
もある。先生もあれば、軍人もある。

八64 保己一は《略》、話をつゞ
けたれば、弟子どもは「先生、少し
お待ち下さいませ。《略》。」と言ひ
しに、《略》。

八86 《略》、間もなく黒い服を着た
先生が、女生徒を一人つれて、はい
つて來られた。

八87 信吉は「おう、おとよ。」と
いつて、《略》、今度は先生に向つて、
「あ、あなたが先生でいらつしや
いますか。」

八87 あ、あなたが先生でいら
つしやいますか。

八87 《略》、先生はおとよに、低い
聲で言かれた。

八89 信吉は《略》、娘を引きよ
せて、「先生、どうして口がきけた
んでせう、指であひづもしないの
に。」

八89 先生はにこ／＼して、「いや、
聲が聞えるのではありません。
《略》。」

八90 信吉はまだ先生の言はれたこ
とがわからなかつたと見えて、《略》。

八90 先生は《略》、よく見えるや
うにして、もう一度しづかに言つて
「ごんなさい。」と言はれた。

八92 先生はいろ／＼な事を信吉に
話して聞かされた。

八93 げんに此の學校の卒業生で、
《略》、裁縫の先生になつてゐる者も
あるなどと話された。

八93 信吉は《略》、娘の顔と先生
の顔を、かはりばんこに見てゐた。

八93 それから先生は、僕等を一年
生の教室に連れて行かれた。

八93 此所では女の先生が、生徒に
五十音の發音を教へてゐられた。

八93 《略》、先生は根氣よく、何度
も／＼教へてゐられた。

八94 先生、私の娘にもあ／＼して
教へて下さつたのでせうか。

八94 信吉は教室を出ると、「《略》。」
といつて、先生を廊下でをがむやう
にした。

八94 先生は「何なら、あのお子を
今日一日お連れになつてもよろこば
います。」といはれた。

八95 信吉は《略》、《略》、應接室
に待つてゐた娘の手を取つて、幾度
も先生におじぎをした。

九27 《略》、りつぱな學者を先生
にして、一心に學問をばげむがよい。

九74 五時間目の授業がすむと、先
生はにこ／＼して、「《略》。」とおつ
しやつた。

九76 先生も大きな箱を持つて來て、
ほつたいものは此の中へ入れるやうに
とおつしやつた。

十29 先生の説明によれば、當社
の用材は主として木曾産の檜なりと
ぞ。

十52 途中、先生は「《略》。」と
語られたり。

十一71 あまり思ひがけない言葉
に宣長は驚いて、「先生がどうして
こちらへ。」

十二10 九歳の時始めて學校にはい
つたが、《略》、先生にもむしろ中
下の生徒と思はれてゐた。

十二44 ペートーベン立つて出
かけた。「先生、又お出で下さいま
せうか。」きやうだいは口を揃へて
いつた。

十二120 《略》、久しぶりにて郷
里の様子をいろ／＼承り申候處、先
生には何時も御壯健の由、何よりの
ことに御座候。

せんせい「先生方」(名) 1 先生
方

十二121 これも全く先生方のお
かげと深く感謝致居候。

ぜんせかい「全世界」(名) 1 全世界

十二117 電信や電話の發明は其の
當時實に全世界を驚かしたものであ
りますが、《略》。

せんせき「戦跡」(名) 1 戦跡

十二34 私は今《略》、山鳩の聲
さびしきベルダンの戦跡に立つてゐ
ます。

せんせん「戦線」(名) 1 戦線

十583 又戦争の時戦線から戦状を報じたり、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。

せんそう 「戦争」(名) 7 戦争 戦争

にちろせんそう・にちろせんそうとうじ

五174 図 「をぢさん、〈略〉。一番こつちは金鶏勳章でせう。」「あゝ、今度の戦争でいたゞいた。」

五198 図 其のいはれで、戦争の時、大きな手がらを立てた軍人に下さる勳章に、金の鶏をおつけになつたのだ。

七266 戦争の時には乗用としても、輸送用としても、きはめて大切なものである。

九102 図 或年戦争が始つたので、北風も〈略〉、主人にしたがつて戦地へ向つた。

九118 4 図 しかし今の戦争は昔と違つて、一人で進んで功を立てるやうなことは出来ない。

九119 2 図 其のうちには花々しい戦争もあるだらう。

十583 又戦争の時戦線から戦状を報じたり、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。

せんそうなれる 「戦争慣」(下) 1

戦争なれる 《一レ》

九112 戦争なれた北風は、此の聲の意味をよく知つてゐた。

ぜんそん 「全村」(名) 2 全村

十124 7 図 全村農業を以て生計を立つ。十125 4 図 かくの如くなれば全村頗る豊にして、村民皆其の家業を楽しめり。

せんた 「千太」(人名) 1 千太

六104 2 図 三月十八日 千太 兄上様

せんたい 「船体」(名) 1 船体 ↓だ

いせんたい

十253 岩の上に残つた船體には、十人許の船員がすがり附いて、聲を限りに救を求めたが、〈略〉。

せんたい 「仙臺」(地名) 4 仙臺 仙臺

九69 7 図 仙臺はとつくに過ぎて、やがて一開だ。

九70 10 図 仙臺に着いたのは午前の三時で、少しは下りた人も乗つた人もあつた。

九71 1 図 仙臺は東北第一の都會で、大學も高等學校もある。

九71 5 図 仙臺から三つ目の松島驛で下りるのだ。

ぜんたい 「全体」(名) 4 全體 ↓く

にぜんたい・ほうりつあんぜんたい・むらびとぜんたい

七86 4 海藻ノ形ハ様々デ、〈略〉、全體ガ細カニ分レテ、枝ノ様ニナツテ

キルノモアリ、〈略〉。

八106 8 分業で仕事をする時、誰か一人の手ぎはが強いと、全體の出来までも悪くなる。

十二16 4 図 これも社によりて多少の

相違はあれども、多くは總務局ありて全體を統べ、〈略〉。

十二595 ねぢは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出来たのだと思ふと、〈略〉。

せんだいま 「仙臺様」(人名) 1 仙臺様

九71 3 図 昔は竹に雀の紋所で名高い仙臺様の城下であつた。

せんたく 「洗濯」(名) 2 センタク

一44 7 オヂイサン ハヤマヘシバカリニ、オバアサン ハカハヘ

センタク ニイキマシタ。

一45 1 オバアサン ガ センタク ヲ シテ キマス ト、オホキナ モモガ

ナガレテ キマシタ。

せんたくせいりす 「選択整理」(サ変) 1 選擇整理す 《一シ》

十二17 3 図 さて編輯部にては刻々集り来る原稿を選擇整理し、〈略〉。

せんたどの 「千太殿」(人名) 2 千太どの

六43 4 図 十二月十五日 兄から 千太どの

六108 4 図 三月十九日 父から 千太どの

せんち 「戦地」(名) 2 戦地

九103 1 或年戦争が始つたので、北風も〈略〉、主人にしたがつて戦地へ向つた。

九103 2 戦地ではいろ／＼つらい事も

あつたが、戦場を駆け廻るのは、北風にとつて愉快な事であつた。

センチメートル ↓さんじゅうはっセンチメートル・しじゅうにセンチメートル

せんちゅう 「船中」(名) 2 船中

十二796 漁夫は〈略〉、狂ひ廻るまぐろを引かけ、はねるはずみを利用して船中に引上げる。

十二797 三四十貫、時には百貫以上もある大まぐろがどたり／＼と船中へ投込まれる光景は、實に壯快の極みである。

せんちよう 「船長」(名) 9 船長

七33 2 図 しかるに船長はおそれて之をゆるさず。

七52 3 図 遠洋航海を終へて、郷里に歸り來れる太平丸の船長は、一日其の町の學校へまねかれて、航海の話

をなせり。

七56 4 図 船長はコップの水を一口飲み、又其の話をつゞけたり。

七59 8 図 船長はかくいひて後、一だん聲をはり上げて、〈略〉。

七61 6 図 かくて船長は外國より持歸りたる寫眞帖を學校に寄附して去れり。

十113 1 甲板に立つてゐた船長を始め

十人許の乗組員は、ひとしく目を其の方向に向けた。

十一54 8 〈略〉 船員等は、船長から泳を許されたので、我先にと海に飛

込んだ。

十一549 船には船長と老砲手だけが

残つてゐた。

十一5510 ちやうど其の時、「略。」

といふ船長のけたゝましい叫び聲が

聞えた。

ぜんちょう 「全長」(名) 2 全長

十359 運河は全長五十哩餘り、凡そ

十時間前後で之を航することが出来

る。

十一1046 國 アマゾン河は全長五千

五百キロメートル、世界の河の王と

いはれ居候。

せんとう 「千頭」(名) 1 千頭

十223 国 此の町では、二歳の市が

十日間も續いて、其の間には千頭か

らの賣買があり、略。

せんとう 「先頭」(名) 3 先頭

七46 國 一年生を先頭に、二・

三・四・五・六年が 四列になりて

歩く時、略。

九106 數分の後には、北風はもう列

の先頭に立つて進んでゐた。

九1084 中尉は始終先頭に立つて進ん

でゐたが、略。

せんとう 「戦闘」(名) 1 戦闘

九4110 國 此の方面の戦闘に

二子をうしなひ給ひつる 閣下的心

如何にぞ。」

せんどう 「船頭」(名) 5 船頭

七106 船頭が「皆さん、そろくお

したくだ。」と言つたので、みんな

羽織をぬいで、着物のすそをはしよ

つた。

七109 船頭がさをつき立てて、そ

れに舟をつないだ。

七156 船頭がさをぬいた。

八285 略、船頭の舟をこぎ、農

夫の田畑を耕すも、皆手の働なり。

十二817 船頭勇まし、此の潮筋を

落し漕ぎゆく、木の葉舟。

せんどうさん 「船頭」(名) 3 センド

ウサン せんどうさん

二561 國 「ワヂサン、ハヤクセンド

ウサンヲ見セテクダサイ。」

二563 國 ハイ、コレハセンドウ

サン、ナガイ竹ノサヲデフネ

ヲコギマス。

三654 國 五郎さんの舟には、て

ふてふのせんどうさんがのつ

たから、かつたのでせう。

ぜんどうだい いち 「全道第一」(名) 1

全道第一

十一616 略、突如として眼前に展

開せられた風景は、略、恐らく全

道第一の壯觀であらう。右手には遠

く日高境の山々が大浪のやうに連な

り、略。

せんない 「船内」(名) 1 船内

八981 國 船内くまなくたづねる三

度、呼べど答へず、さがせど見え

ず、略。

せんなんびやくねん 「千何百年」(名)

1 千何百年

八328 これはもと野生のものでした

が、今から千何百年も前から栽培す

ることになつたのだとつたへてあま

す。

せんにん 「千人」(名) 1 千人

六911 略、千早城は、略、まは

りが一里にも足らず、總勢わづか千

人ばかり。

せんねん 「千年」(名) 1 千年

六1047 国 宇治橋を渡つて神苑に入り、

千年もたつたかと思ふ老木の下へ行

つた時には、略。

せんねん 「先年」(名) 1 先年

十5511 ところが、先年の歐洲大戰で、

やはり此のやさしい、略、通信者

の働の偉大な事が證明せられたので、

略。

せんばく 「船舶」(名) 1 船舶

十二466 國 家屋・橋梁・船舶・電

柱より桶・たる・曲物の類に至るま

で、略。

せんばつす 「先発」(サ変) 1 先發

す「一セ」

十一274 國 略、秀吉は、略、先

づ五十人の兵に旨をふくめて先發せ

しめ、略。

せんはつびやく じやくせんはつびやく

しやく

せんび 「船尾」(名) 1 船尾

十252 船は二つにくだけて、船尾の

方を見るく大波にさらはれてしま

つた。

ぜんび 「前非」(名) 1 前非

十二7510 王は略、其の言葉の端

端にも 前非を悔い、自分を責めて

娘にわびる眞心がこもつてゐた。

ぜんぶ 「全部」(名) 2 全部

十一28 略、太陽の表面は全部が

一様にかゞやいてゐるのではなく、

略。

十一162 國 「あすこに全部學年別に

してのせてあります。」

せんぶうき 「扇風機」(名) 1 扇風機

十二1191 最後に博士は略、電氣

ストープ・扇風機など、家庭におけ

る電氣の利用に就いて興味ある話を

して略。

せんべい 「煎餅」(名) 2 センペイ

せんば

八597 國 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、

今ナホ古風ヲ守リテ、略、勢ん

ム(センペイ)ナドト記シテ、軒ニ

下ゲタルモアリ。又マレニハナゾヲ

用フルモアリ。

八597 國 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、

今ナホ古風ヲ守リテ、略、勢ん

ム(センペイ)ナドト記シテ、軒ニ

下ゲタルモアリ。

せんぼう 「先方」(名) 1 先方

八357 幾年の後、里子を返しても

らはうとすると、先方はあづかつた

おぼえがないといつて返しません。

せんぼう 「先鋒」じとうかいどうせん

ぼう・とうざんどうせんぼう

ぜんまい 〔微〕(名) 2 ぜんまい
五35 8 〈略〉、わらびやぜんまいが、
すつかり葉になつてゐました。
五36 図 ぜんまい
ぜんまい 〔発条〕(名) 1 ぜんまい
十二53 5 〈略〉、そばには小さな心棒
や歯車やぜんまいなどが並んでゐる。
ぜんめん 〔全面〕(名) 1 全面
七87 9 〈略〉、海藻ハ養分ヲ其ノ體ノ
全面カラ吸取ルノデアル。
ぜんめん 〔前面〕(名) 1 前面
十二104 3 〈略〉、左手の山は次第に頭
上にせまり、遂には路の前面に突立
つて人のゆくてをさへぎつてしまふ。
せんめんじょ 〔洗面所〕(名) 1 洗面
所
五101 8 又洗面所もあれば、食堂も
あります。
せんよ 〔千余〕(名) 1 千餘
十二114 10 図 〈略〉、アメリカにて特許
を得たるもののみにても其の數實に
千餘に及ぶ。
せんらん 〔戦乱〕(名) 1 戦亂
十一52 2 図 當時支那は數國に分れて
互に相争ひ、戰亂止むことなかりし
かば、〈略〉。
せんり 〔千里〕(名) 1 千里
十一80 7 図 〔略〕、千里寄せる
海の氣を 吸ひてわらべとなりけり。
ぜんりょうち 〔全領地〕(名) 1 全領
地

十二71 10 全領地を二分して與へてや
つた二人の娘が、揃ひも揃つてこれ
程の不孝者であらうとは。
ぜんれいじこじゅうさんぶん 〔前零時
五十三分〕(名) 1 前〇時五十三分
十一89 図 二日金 〇望前〇時五十
三分 ひのえうま 〈略〉
ぜんろくじさんじつぶん 〔前六時三十
分〕(名) 1 前六時三十分
十二89 図 一日火 〇望前六時三十分
きのえいぬ 〈略〉
そ
そ 〔其〕(代名) 1 そ
十一45 7 図 住持は 〈略〉、或日其
の畫師に、〈略〉。愚僧も所用あり
て京に上り、或は二年滞在せんも
はかり難し。』といへば、畫師「そ
はいと名残をしき事なり。
そ (副助) 1 ぞ 〇いつぞや・なんぞ
十二128 5 図 〈略〉、うか／＼と兄弟垣
にせめいでゐたら、日本全國にのし
をつけてどこぞの國へやつてしまふ
やうな事にならぬとは決して申され
ませぬ。
ぞ (係助) 13 ぞ
八99 2 図 〔略〕、旅順港外うらみ
ぞ深き、軍神廣瀬と其の名残れど。
九40 1 図 〔略〕、くづれ残れる民

屋に、いまぞ相見る二將軍。
九42 2 図 此の方面の戰鬪に 二
子をうしなひ給ひつる 閣下の心如
何にぞ。
九42 5 図 二人の我が子それ／＼
に、死所を得たるを喜べり。これ
ぞ武門の面目。
九70 6 図 都をば、かすみと共に
立ちしかど、秋風ぞ吹く、白河の
關。
十31 1 図 先生の説明によれば、當社
の用材は主として木曾産の檜なりと
ぞ。
十41 1 図 〈略〉、當時の御殿・御庭な
どの、今も其のまゝに保存せらるゝ
なりとぞ。
十72 9 図 〈略〉、常世は有難さ身にし
み、喜にみちて御前を退きけりとぞ。
十111 7 図 〔略〕、丹青まばゆき
格天井に、心をこめたる 繪筆ぞ
にほふ。
十一13 9 図 〔略〕、船は靜かに我
等をのせて、行くは何處ぞ、桃さ
く村へ。
十一111 8 図 〔略〕、我が身をすて
て報いんと、起ちてぞ出でぬる、
草のいほりを。
十二23 3 図 ほど／＼に心を盡くす
國民の ちからぞやがてわが力なる。
十二80 6 図 阿波と淡路のはさまの海
は、此處ぞ名に負ふ鳴門の潮路。
ぞ (終助) 20 ぞ

四72 3 図 それ、もう 日がくれる
ぞ。
七61 1 図 君、此の長き行列の 中
の一人は君にして、中の一人は僕
なるぞ。
八81 1 図 「負けたら村のはちになる
ぞ。」
八64 7 図 〈略〉、保己一は笑ひて、
「さて／＼、目あきといふものは不
自由なものだ。」と言ひたりとぞ。
八88 6 図 や、口をきいたぞ。おとよ、
お前はものが言へるやうになつたの
か。
九105 3 図 おい北風、今日は大部分こ
たへがあるぞ。しつかり頼むよ。
九108 7 図 「そら、もう一息だぞ。襲
へ／＼。」
九115 2 図 〈略〉大尉が之を見て、
〈略〉、「〈略〉。兵士の恥は艦の恥、
艦の恥は帝國の恥だぞ。」と、言葉
鋭くしかつた。
九116 7 図 母は如何にも殘念に思ひ
候。何の爲にいくさには御出でなさ
れ候ぞ。
十69 3 図 唯今にも鎌倉の御大事とい
ふ時は、〈略〉、これぞと思ふ敵と打
合つて、あつばれてがらを立てるか
くぞ。
十70 6 図 されどかくて何時まで留る
べき身ぞと、心強くも立去りけり。
十71 6 図 〈略〉、最明寺入道時頼は
るかの上座より、「〈略〉。これは何

時ぞやの大雪に宿を借りた旅僧であるぞ。

十72ノ図 又寒夜に秘蔵の鉢の木を切つてたい志は、何よりもうれしく思ふぞ。

十112ノ図 園 略、樂園日本のたへなる花と、とつ國人さへめづるもうべぞ。

十273ノ図 略 秀吉は、持ちたる箸を投捨て、「すは勝つたるぞ。」と手を打つて喜び、略。

十293ノ図 秀吉 略、「てがらは仕勝ちぞ。かゝれく。」と大音聲。

十486ノ図 住持驚きて、「東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。」と問へば、略。

十1195ノ図 騎馬の人たちは、あけないとなぐるぞと言つておどしたり、略。

十699ノ図 娘の答に失望した王は、略、「お前にはもう何もやらぬぞ。永の勘當だ。」と言渡した。

十1023ノ図 略 古の奈良の都は、そもく如何に美しく、如何に盛なりしぞ。

そあく 粗悪 (形状) 1 粗悪 十二229 略、見本には精良な品を使つて、實際の注文に對しては粗悪なものを送るやうな事は、略。

そい 治 かわぞい

そい 添 つけそい

そう 宋 地名 8 宋

十969ノ図 支那の宋朝の末、北方に元といふ國おこり、勢日々に盛にして、

宋の領地ををかし、かば、略。

十969ノ図 略、宋は次第におとろへて、ほとんど亡びんとするに至れり。

十971ノ図 宋の臣文天祥大いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。

十983ノ図 時に宋の勇將張世傑よく戦ひて元軍を防ぐ。

十989ノ図 張世傑等の奮戦も大勢を轉ずることあたはずして、宋遂に亡びしかば、略。

十9810ノ図 宋亡びぬ。御身の忠義を盡くすべき所なし。

十9910ノ図 天祥はいく、「我は宋の臣なり。略。」と。

十1004ノ図 天祥刑せらるゝにのぞみ、略。うやくしく南、宋の方を拜して死す。

そう 草 うれんげそう 十602ノ図 されど婦人は、氣の毒と思ひけん、僧をば待たせ置き、おのれは主人を迎へにとて外に出行けり。

十614ノ図 僧は改めて主人に一宿をこへり。

十619ノ図 されど主人は、「略。」といふに、僧は返す言葉もなく出て行くきぬ。

十6110ノ図 すぐくと立去る僧の後影

を見送りたる妻は、やがて夫に向ひて、「略。」

十632ノ図 主人は僧の後を追ひて外に出でぬ。

十637ノ図 主人は聲を限りに呼べど、はるかに行過ぎたる僧は、聞えぬにや、ふりかへらず。

十644ノ図 からうじて僧をとまひ歸れる主人は、物かげに妻を呼びて、「略。」

十648ノ図 主人はうちうなづきて出來り、僧に向ひて、「略。」

十654ノ図 やがて運び來れる貧しき膳に向ひ、僧は喜びて箸を取りぬ。

十664ノ図 僧は驚きて、「略、略」鉢の木をたぐのは、どうぞ止めて下さい。

十673ノ図 僧は其の厚意を深く謝し、さて「略」お名前を聞かせて頂きたい。

十678ノ図 僧は重ねて「略」。是非お明かし下さい。

十6910ノ図 翌朝僧は暇をこひて又行くへ知らぬ旅に出でんとす。

十691ノ図 或山寺で、四人の僧が一室に閉ちこもつて、七日間の無言の行を始めた。

十695ノ図 末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。

十698ノ図 隣に坐つてゐた僧が之を聞いて、「略。」

十6910ノ図 第二座の僧は、二人とも規

則を破つたのが不快でたまらない。

十一1262ノ図 今より二百數十年前、山城宇治の黄檗山萬福寺に鐵眼といふ僧ありき。

十二105ノ図 略、路をさへぎつて立つ岩山に、毎日々々根氣よくのみを振るつて、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。

十二105ノ図 僧は名を禪海といつてもと越後の人、略、たま／＼此の難處を通つて幾多のあはれな物語を耳にし、略。

十二1067ノ図 かし僧はふりかへりもせず、唯黙々としてのみを振るつてゐた。

十二1072ノ図 かし僧は唯黙々としてのみを振るつてゐた。

十二1077ノ図 此の洞穴と、十年一日の如く黙々としてのみの手を休めない僧の根氣とを見た村の人々は、略。

そう 層 ころくそう 十678ノ図 僧は重ねて「略」。是非お明かし下さい。

十6910ノ図 翌朝僧は暇をこひて又行くへ知らぬ旅に出でんとす。

十691ノ図 或山寺で、四人の僧が一室に閉ちこもつて、七日間の無言の行を始めた。

十695ノ図 末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。

十698ノ図 隣に坐つてゐた僧が之を聞いて、「略。」

十6910ノ図 第二座の僧は、二人とも規

則を破つたのが不快でたまらない。

鳥ガカチサウニナリマシタ。
四627 いくら弓の名人でも、こ

れを一矢でいおとすことは、
なかなかむづかしさうです。

五237 下のかざりまどには、〈略〉、
すゞしさうな浴衣地がかざつてあり
ます。

五487 又〈略〉繭の中で、きゆうく
つさうにからだをまげて、一生けん
めいにはたらいてゐるのもあります。

五617 雨のはれ間にちよつと出て、
用ありさうに天と地の 遠きをつ
なぐ雲の上。だれが渡るか、虹の
橋。

五875 其のうちに、どうやら水が
二階にもつきさうになつたので、
〈略〉。

五935 おめでたい事やたのしさうな
事が書いてありますと、私もうれし
いと思ひますが、〈略〉。

五936 〈略〉、悲しい事や苦しさうな
事が書いてありますと、もらひ泣き
をいたします。

六13 今分では去年より七八俵
よけいに取れさうだ。

六196 〈略〉、濱の松は身をふるはせ
て、頭を地に着けさうにします。

六424 前分は今の分では大男にな
りさうだから、砲兵か騎兵になれる
だらう。

六437 海の上でも歩けさうだ。」
七515 イカニモ丈夫サウナ老人デシ

タガ、去年ノクレニ死ンデシマヒマ
シタ。

七1078 それは皆此の方がやりさう
な事。

八703 此所は工業地で、〈略〉空
は眞黒だが、大きな公園が幾つもあ
るから、健康には害がなささうです。

八839 信吉は〈略〉、「奥様、あのと
よは。」と、さも心配さうにたづね
た。

九504 社長さんは〈略〉、にこにこ
してゐる元氣な方です。僕は何とな
くえらさうな人だと思ひました。

九795 〈略〉、どれも皆、絹のやうな
うすい皮がはち切れさうに、よく實
がいつてゐる。

九7910 あちらでもこちらでも、驚く
聲、感心する聲、うれしさうな聲。

九802 ふと氣がつくと、校長先生と
山田先生が、箱のそばへ来て、面白
さうに僕等の仕事を見ていらつしや
つた。

九993 面白いお話がまだたくさんあ
りさうでしたが、〈略〉。

九1027 北風は〈略〉、見るからに強
さうな軍馬である。

九1057 北風は、〈略〉、うれしくて、
得意さうに頭を高くあげた。

九1082 砲口はかはるがはるいなづま
のやうな砲火をはいては、耳もつぶ
れさうにはえ立ててゐる。
十433 〈略〉、高い／＼青空を、ひわ

の一群が身輕さうに飛んで行く。
十438 父は「〈略〉。」と楽しさうに
言つた。

十485 其の夜喜三右衛門は〈略〉、
もどかしさうに夜の明けるのを待つ
てゐた。

十802 昇降器がすさまじい勢で下り
て行くので、目がまはりさうです。

十10510 其の枝の先にしよんぼりと止
つてゐる鳥の姿も、見るから寒さう
だ。

十一3810 なたや鎌などでつる草を拂
ひ、下枝を伐落して行くと、〈略〉

急に間がすいて如何にも氣持よささ
うに見える。

十一551 船員等は、如何にも氣持よ
ささうに泳ぎ廻つてゐたが、〈略〉。

十一552 〈略〉、中にもうれしさうに
見えたのは、十三四になる二人の少
年であつた。

十一569 しかしとても間に合ひさう
もない。

十一695 夜が更けるにつれて燈がだ
ん／＼暗くなり、今にも消えさうに
なつた。

十二391 〈略〉、色の青い元氣のなさ
さうな若い男が靴を縫つてゐる。

十二548 〈略〉、どれを見ても自分
よりは大きく、自分よりはえらさう
である。
十二549 世間の役に立つの
に、どれもこれも不足は無ささうで

ある。
十二551 唯自分だけが此のやうに
小さくて、何の役にも立ちさうにな
い。

十二588 時計師は〈略〉、大事さう
にもとのふたガラスの中へ入れた。

十二594 〈略〉、懷中時計が、
忽ち愉快さうにがち／＼と音を立て
始めた。

十二693 、「どうしたのだ、コーデ
リヤ。何とか言方がありさうなもの
だ。」

十二739 、「〈略〉、此の白い髪や髭
を御覧になつたら、姉上もお氣の毒
とお思ひになりさうなものなのに、
〈略〉。」

十二1079 〈略〉、岩山の掘抜も、これ
ではどうにか出来さうである。

そう「相」(形状)61 サウ さう
三276 〈略〉、のぼしておや竹に
するのださうです。

三348 五いちはことはことし六
十九ださうです。

四46 今年田がよく出来た
ので、ぼんにはそのおいはひ
の花火が上るさうです。

四55 これは私が生れた年、
おちいさんが私のぶんにつき
木をして下さつたのださう
です。

四64 〈略〉、下男の太七がわら
ひながら、「〈略〉。」といつたさ

うです。

四287 電話も近い中に私どもの町へかかるさうです。

四296 〈略〉、工場の近くにいてしや場が出来るさうです。

四863 園 ズキジンデス。ダイリ様ノゴ家来ダサウデス。

四867 園 アレハウタヲウタフ人ダサウデス。

五56 中村君がこれまで居た所は〈略〉、うめやさくらも、こちらよりはずつと早くさくさうです。

五57 何でも汽車に二日二ばん乗通して、こちらへ着いたのださうですから、何百里かはなれてゐるのでせう。

五62 〈略〉、あちらでは、もうとうにちつてしまつたさうです。

五66 聞けば級級のものか三人で、中村君を〈略〉、いちめたのださうです。

五197 園 鶏の光がまるでいなびかりのやうで、わるものどもは〈略〉、おそれてみんなにげてしまつたさうだ。

五374 見ざる・いはざる・聞かざるといふのださうです。

五396 〈略〉、しめをはつた大きな杉の木がありました。御神木ださうです。

五494 〈略〉 蠶も、明日の朝までには、たいてい上つてしまふさうです。

五527 〈略〉、目二見エナイ水蒸氣^{ソウキ}ニナツテ、空へカヘルノモアルサウデス。

五685 昔此の村はひどく貧乏で、〈略〉、「〈略〉。」と言はれたもののださうだ。

五786 此の山の杉も庄屋が先に立つて植ゑたのださうだ。

五832 園 おとうさんにうかゞひますと、叔母さんの町に大水が出たさうです。

五968 ウチノブダウトハ種ガチガフノダサウデス。

五566 園 臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、〈略〉。

六388 園 國では初雪が降つたさうだね。

六483 〈略〉、フシギニ自分ノ生レタ川へ歸ツテ来ルサウデ、「〈略〉。」ト叔父サンガ言ハレタ。

六486 鮭ハ寒イ國ノ魚デ、我が國デハ樺太ト北海道ガオモナ産地ダサウダ。

六1038 園 参拜をすましてから、京都へ出て、二三日見物して歸られるさうです。

七247 此のおばあさんにむすこが一人あるのださうだが〈略〉。

七256 これは馬がけがをしないやうに、馬方が上げるのださうだ。

七369 園 人口はおよそ十一萬、〈略〉、日本人は年々ふえるばかりださうです。

す。

七429 聞けば今朝から五里の山道を、わらちがけで急いで来たのださうだ。

七938 おぢいさんにきいたら、〈略〉、此の日はよく大風が吹くから、〈略〉、農家ではことに心配するのださうだ。

七1033 園 「石田といふ者ださうだ。」八743 園 うちには何事もないさうで安心しました。

九417 園 暑さも年中此のくらゐのものださうで、〈略〉。

九510 園 これから椰子油を取り、石鹼・蠟燭なども造るのださうです。

九203 此ノ蟲ハ〈略〉、羽ヲ廣ゲテキルト、全ク蘭ノ花ト同ジヤウデ、ナカ／＼見分ケガツカナイサウデア

ル。

九515 園 あの社長さんは〈略〉、此の町へ始めて奉公に來たのは、ちやうどお前と同じ十二の年だつたさうだ。

九517 園 主人の家が大きな醬油屋だつたので、〈略〉、毎日々々、〈略〉、おろしに歩き廻つたものださうだが、〈略〉。

九7110 園 光堂ともいつて、昔は金光りに光りかゞやいてゐたさうだ。

九764 叔父さんのお話によると、此所は名高い温泉場で、海水浴も出来るさうだ。

九926 園 ところがめぐみ深いジュビターといふ神様が、それを見て、

〈略〉、大熊座と小熊座になつたのださうです。

九992 園 富士山も、晴れた日には、白雲の上にかすかに見える事があるさうです。

十182 園 皆一歳駒^{こま}ださうです。

十225 園 〈略〉、直段も一頭四千圓・五千圓といふ高いがあるさうです。

十227 園 これ等の馬が〈略〉、或は軍馬になり、或は馬車馬になり、或は耕馬になるのださうです。

十741 園 京城の市街は、〈略〉、高い城壁で圍まれ、その處々にかういふ門があつて、出入口になつてゐたのださうです。

十771 園 〈略〉、今では龍山も京城の中に編入されたのださうです。

十788 園 こちらは昔から之を三寒四温といつてゐるさうです。

十817 〈略〉、こんな大きなポンプを備へ附けてゐる處は、世界でも珍しいさうです。

十828 〈略〉、聞いてみると、これは石炭を運ぶために飼はれてゐるのださうです。

十847 園 歸途、事務員は次のやうな事を話してくれました。「今から四百年許前の事ださうです。

十854 園 これがつまり此の炭坑の始ださうです。

十1202 公は〈略〉一步も外へは出ないで、三年の歳月を送られたさうで

ある。

十一149 〈略〉、お取込があつたため、今まで延びてゐたのださうです。

十一153 のぶ子さんは、成績物が返るとすぐ紙の袋へ入れておいて、學年の終におまじめになるのださうです。

十一171 聞けば、雑誌の類は號の順に並べておいて、取出したら後できつともとの場所へお入れになるのださうです。

十一397 おとうさんのお話によると、枝を打てば、〈略〉、又空氣の流通がよくなつて蟲がつかなくなるさうだ。十一404 使ひみちによつて、三十年目から五六十年目ぐらゐの間に伐るのださうだから、〈略〉。

十一718 〈略〉、これから參宮をなさるのださうです。

十二331 此の塔は世界最高の建物で、高さが三百メートルもあるさうです。

そう 〔然〕(副) 40 サウ さう

二60 〔略〕。ニガイナラ、オサタウヲ入レテオアガリナサイ。」「イイエ。サウ ニガクハアリマセン。」

二61 〔略〕、モットタクサンオアガリニナツタラ、ハヤクナホリマセウ。」「イイエ。サウ一ドニノンデハイケマセン。

三162 〔略〕「それから、〈略〉、中ゆび

とこゆびのあひだにあるのがくすりゆびです。」「さうです。

四297 〈略〉、工場の近くにいていしや場が出来るさうです。さうなつたら町はどんなにべんりになるでせう。

四491 道子「略」友「いいえ。僕が取つたのです。」「さうひつぱりあつてはいけません。

五637 〔略〕「おとうさん、〈略〉、まだ一里半もあるのですか。」「さう。これで中々近くはない。

五698 村の人々は中大きな仕事だとは思つたが、さうでもしなければ、外に村のさかえる工夫はあるまいといふので、〈略〉。

六14 〔略〕「今年はほんたうにほう年だ。〈略〉。」「さうです。新田が大へんよく出来ました。

六51 〔略〕「にいさん、富士山はまっ白でせうね。」「さうさ、中ほどまでは降つてゐるかも知れない。

六84 〔略〕奈良の春日山や三笠山は千尺そこくだが、白根や槍岳よりも知られてゐるし、京都の東山にして

もさうだ。

六443 〔略〕「海の上でも歩けさうだ。」「どうして。」「〈略〉。」「なるほど、理くつはさうだ。」

六676 〔略〕「これではとても義捐はしてくれまい。」「さうかも知れない。」

六68 〔略〕、青年たちは「こまかな人だが、出す時には出すね。」

「〈略〉。」「さうだ、く。」「といひ合つた。

六68 〔略〕さうだ、く。

六75 〔略〕。毛糸デオツタ物ニハ、ドンナ物ガアリマスカ。」「

「〈略〉。」「ソレダケデスカ。」「セルモサウデセウカ。」

六756 〔略〕「セルモサウデセウカ。」「サウデス。

七667 〔略〕「あなたは今朝一人で川をこした方ではありませんか。」「さう

です。」「

七668 〔略〕、右手につゑをついて、かけ下りて来る者があります。〈略〉。

人夫は「もしく。」「と呼びかけて、たづねました。」「〈略〉。」「

「なんで又さうあわてて引つかへします。」

七89 〔略〕あまり急ぎましたので、水が

「あ、さうだ。」と言つて、マリーはおばあさんのづきんを取つて、

「〈略〉。

七907 〔略〕「かうですか。」「あ、さうです。

七1106 〔略〕「ハナシデキタイツクルヘン。」「さうか。それでは明日の一番

で立たう。」

七1125 〔略〕「アス—バンデタチマス。」「それでもよいが、電報はさういてい

ねいにはなくてもよい。

八129 信作方の人々は之を聞いて、「〈略〉。どうか今日から一年の間、

あなた方の村が五箇村の頭になつて下さい。」といつたので、さうきまつたといふことである。

八788 〔略〕「今手に持つていらつしやるのは、みんな切符ですか。」「さう

です。

八791 〔略〕「それをみんなうちで納めるのですか。」「さうです。

八807 〔略〕「縣や國の税も、村の役場へ納めれば、よいのですか。」「さう

です。

八823 それでは弱いものかといふに、さうではない。

八1002 〔略〕僕等は〈略〉、今日からは働かないことにしたから、さう思つてくれ給へ。

九328 「もう一息だ。」さう思ひながら足を早める。

九5010 〔略〕、おとうさんに「あの精米會社の社長さんはえらい方なん

でせう。」と言ふと、おとうさんは「お前にもさう見えるかね。」とおつ

しやつて、〈略〉。

九581 〔略〕「正一も大分役に立つやうになつたなあ。」「〈略〉、「ほんたうに

さうですね。

九855 〔略〕「にいさん、空にはあんなにたくさん星が見えますが、少しも動かないのですか。」「さうだ。動か

ないのだ。

九89 2 図 「あゝ、あの一番高い杉の眞上の所にあるのが北極星でせう。」さうだ。

十51 2 図 「略」。銀行はお金を預ける處ですか。「まあ、さうだね。」

十51 6 図 うちに置くと、略、盗人に取られたりする危険があるからね

と、ついむだな事に使つてしまふ。さうで無くても、餘分のお金がある

十66 1 図 さうだ。あの鉢の木をたいて、せめてものおもてなしにしよう。

十66 1 図 さうだ。あの鉢の木をたいて、せめてものおもてなしにしよう。

十96 1 図 「略」。なぜすなほに『はい。』といはなかつたのだ。

「僕何だかきまりが悪くつて、さう言へなかつたのです。」

十40 10 おとうさんは、よく「植林

は貯金のやうなもので、植ゑてさへおけば、年々太つて利息が附いて行く。」とおつしやるが、ほんたうにさうだ。

十93 10 図 したがつて二百十日も

「略」、略、太陰暦になると三十日もちがふことがある。櫻の咲く季節でも霜の降る季節でも、やはりさうである。

そう (感) 1 サウ

六75 1 図 「春子、才前ハ着物ヤ帶ノ

地ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマス

カ。」「略。」「マダアリマセウ。」

「毛絲デス。」「サウ、ヨク知ツテキマシタ。

そ。う 「沿」(四・五) 4 そふ 沿ふ

「ウーッーヒ」

六72 2 東の方は此の橋のたもとから、川にそつて電車が出来ます。

十24 4 図 「略」、略、敵の一隊、湖に沿ひたる一筋路を急ぎに急ぎに進み来る。

十二78 4 群をなして寄せて来たまぐろは、先づ垣網に驚き、之に沿うて沖へ逃げようとして身網の中へはい

十二104 5 それは山國川に沿うて連なる屏風^{びやうぶ}のやうな絶壁をたよりに、略。

そう 「添」(五) ↓つきそう

そう 「添」(下二) ↓かきそう

そう 「象」(課名) 2 象

六目10 第二十二 象

六85 7 第二十二 象

そう 「象」(名) 10 象

六85 8 見せ物小屋で象を見た。

六87 3 象が大きな桶を鼻で頭の上へ

まき上げると、乗つてゐた象つかひは桶の中へはいつてしやがんだ。

六87 5 象がそれを下して来て地に置くと、象つかひがぬつと桶の中で立

上つた。

六87 7 象の鼻は手の用をなすもので、

實に力がある。

六88 2 自分たち程の子どもが出て来て、象の前足にだきついて見せた。

六89 7 略、今の子どもが象の腹の下へねころんだ。

六89 8 すると象は鼻で、略、うち

はを拾つて、子どもの顔をあふぎ出した。

七84 1 陸ニスムモノデハ、象ガ先ヅ

一番大キイガ、略。

七84 3 略、象ヲ鯨ニクラベルト、赤子ト大人トヨリモ、モツトチガフ

十一52 1 略、虎や象の荒しに来るのを防いだり、苦心はなか／＼一通りでない。

そうい 「相違」(名) 2 相違

十二16 4 図 先づ社の組織について述べん。これも社によりて多少の相違

はあれども、略。

十二19 5 図 略、同じ新聞にても、發行地にて受取るものと他地方にて

受取るものとは、記事に多少の相違あるを常とす。

そういん 「総員」(名) 2 總員

九65 8 図 甲板洗がすむと、「總員顔洗へ。」「煙草ぼん出せ。」の令が下

る。

十11 7 總員三十二人が四組に分れて、それ／＼仕事の持場に向つた。

そういんおこし 「総員起」(名) 3 總員起し

九61 6 図 略、時鐘番兵が略、

「總員起し五分前。」と當直將校に報告する。

九62 3 図 「總員起し。」此の號令で、

朝の静かさが忽ち破られ、略。

九62 6 図 略、傳令員は略、「總員起し。」と呼んで、つり床の間をぬつて行く。

ぞうえい ↓ぞうえい

そうおう 「相応」(形状) 1 さうおう

八106 3 したがつて一包のマツチを十錢ぐらゐで賣つても、さうおうにま

うかるのである。

そうかい 「壯快」(形状) 5 壯快

九31 8 殊に遊覽船に乗つて、略、龍つぽを見物して廻るのは、實に壯

快です。

九96 2 図 略、急な坂を矢のやうに

早くすべるのですから、實に壯快で

した。

十127 7 図 略、略、拜觀者の胸は、まさに始らんとする進水式の壯快な

る光景を豫想して、唯をどりにをど

る。

十一109 7 図 略、大木を伐るに、三抱も四抱もあるものが地ひゞきを

打つて倒るる様、壯快言語に絶し候。十二79 8 略、大まぐろがどたり

と船中へ投込まれる光景は、實に壯快の極みである。

そうがかり 「総掛」(名) 1 總掛り

十二57 7 親子は總掛りで探し始めた。

そうがく 「奏樂」(名) 1 奏樂

十127 9 図 折しも起る「君が代」の奏樂。

そうがく 「総額」 ↓ ゆしゆつにゆうそうがく

そうか・する 「増加」 (サ変) 1 増加する 《—シ》

十88 9 輸出入の額の増加して行くのは國家が次第に盛になる印である。

そうかん 「壯観」 (名) 5 壯観

九29 6 《略》、海のやうな湖から流れる大きな河が、一大絶壁をみなぎり落ちるのですから、其の壯観はとも筆や口にはつくされません。

十111 3 《略》、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯観である。

十161 7 《略》、突如として眼前に展開せられた風景は、《略》、恐らく全道第一の壯観であらう。

十1104 4 図 其の中に有名なアマゾン河や、イグアッスーの大瀑布の壯観を寫したるものもこれあり候。

十1105 5 図 次にイグアッスーの瀧は、《略》大瀑布にて、《略》、幅三千六百メートル、其の壯観實に筆舌に盡くし難く候。

そうき 「雑木」 (名) 5 雑木

十38 5 かり取つた雑木、切倒した大木、掘起した木の根や石ころ、《略》。

十41 4 やがて父は、鎌を手にして雑木のやぶへはいつて行つた。

十41 6 図 「壯吉、お前はおとうさんのかつた雑木を、かういふ風に束ね

て運んでくれ。」

十41 8 兄は私に「《略》。」といひながら、生木の枝で雑木を束ねて見せた。

十42 3 私は教へられた通り、雑木を束ねては運び、運んでは又束ねて、精一ぱいに働いた。

そうきち 「壯吉」 (人名) 1 壯吉

十41 6 図 「壯吉、お前はおとうさんのかつた雑木を、かういふ風に束ねて運んでくれ。」

そうきばやし 「雑木林」 (名) 1 ざぶ木林

六15 8 それからにいとさんと、ざぶ木林へはいつて、じめくした落葉をふんで、ねずみ茸を少し取りました。

そうきやま 「雑木山」 (名) 1 雑木山

十38 7 村はづれにある、うちの雑木山を開墾し始めてから、もう一月餘りになる。

そうぐん 「宋軍」 (名) 2 宋軍

十97 6 図 然るに元軍の勢いよく盛にして、宋軍到る處に敗れ、《略》。

十97 9 図 されど宋軍の大勢日々に非にして、《略》如何ともすることあたはず。

そうけん ↓ こそうけん

ぞうげん・する 「増減」 (サ変) 1 増減する 《—シ》

十13 4 さうして其の數や大きさは、凡そ十一年餘を週期として増減してゐる。

そうこ 「倉庫」 (名) 1 倉庫

十1130 5 図 此の版本は今も萬福寺に保存せられ、三棟百五十坪の倉庫に満ちくたり。

そうご 「相互」 (名) 2 相互

十119 5 此のやうに、人々相互の間の訴訟を裁判するのを民事裁判といひ、《略》。

十122 6 若し裁判が無いとしたら、人々相互の争がはてしなく行はれて、《略》。

そうこうげき 「総攻撃」 (名) 2 總攻撃

十124 9 月の十五日を期して總攻撃を行ひ、一舉に江戸を乗つ取る手はずである。

十1230 8 図 とにかく明日の總攻撃見合はせの一事だけは、拙者一命にかけて御引受け申します。

ぞうさ 「造作」 (名) 1 ざうさ

八77 3 図 「諸君、これも人のした後では、何のさうさもない事でございませう。」

そうさい ↓ りくぐんそうさい

そうじ 「掃除」 (名) 3 さうち 掃除

↓ おおそうじ・ふきそうじ

四42 7 ぱたぱた、ぱたぱた、いよいよ さうち がはまりました。

十90 5 図 村の社の掃除や終へし、《略》若き人々、今朝とく出でし兄も交れり。

十114 4 《略》、さうちもよく行届い

てゐるし、總べてがきちんとしてゐました。

そうしき 「葬式」 (名) 1 葬式 ↓ おそうしき

九28 4 信淵は父の門人たちの情で、形ばかりの葬式をすますと、《略》。

そうして (接) 48 サウシテ さうして

二43 6 ワルイ オヂイサン ハ 《略》、ソノ犬ヲカリニキマシタ。サウシテ ムリニ犬ヲナカセテ、ソコヲホツテミマシタガ、《略》。

二46 5 ワルイ オヂイサン ハ又コノウスヲカリニキマシタ。サウシテ ミマシタガ、《略》。

三69 1 《略》、フシニ小サナアナヲタクサン アケマシタ。サウシテ センヲヒキマシタガ、水ガウマクハイリマセン。

五3 6 《略》、先生が《略》。「《略》。」といつて、此の間からあいてゐたせきをおさしになりました。さうして「山田さん」とおよびになりましたから、《略》。

五26 6 《略》、ガンガ北ノ國ヘカヘルコロ、南ノ國カラワタツテ來マス。サウシテ 《略》、ガンガソロ／＼ワタツテ來ルコロ、南ノ國ヘカヘツテ行キマス。

六30 5 《略》、數かぎりもない蟻がまつ黒になつて、出て來ました。さう

して虎の目・鼻・耳・口、所きはらず食ひつきました、〈略〉。

六473 〈略〉、産ンデシマフト、其ノ上ニ砂ヤ小石ヲカブセル。サウシテ外ノ魚ガ其所ヘ來ナイヤウニ、シバラク其ノアタリニ番ヲシテキテ、〈略〉。

六633 これから後萬じゆは、〈略〉、折々らう屋をたづねては、母をなくさめて居りました。さうして其の明くる年の春、舞姫に出ることになったのでございます。

六656 僕ハ「〈略〉、磁石ヲ持ツテ來タ。サウシテ灰ノ中ヲカキマハシテ上ゲテ見ルト、〈略〉」。

六941 〈略〉、正成は高いがけの上から大木を落させた。さうして、これをよけようとして賊のさわぐ所を射させて、〈略〉。

六966 すると正成は、〈略〉、たくさんないまつを出して、〈略〉、橋の上に投げさせた。さうして其の上へ油をふりかけさせた。

七111 船頭がさをつき立てて、それに舟をつないだ。さうしてさの先に、赤いしるしのあるはんでんをしぼりつけて、〈略〉。

七644 〈略〉男が、〈略〉、一人で川へはいって行きました。さうしてずるぶるあぶない目にあつて、やうやう向岸に着きました。

七921 敵はどつと笑ひました。さう

して、「こいつ、かなつんぼだな。」と言つて、みんな出て行つてしまひました。

七1024 秀吉が之を聞いて、「〈略〉。」と心の中で喜びました。さうして清正のやせた姿、日にやけた顔を見ては、怒がとけて、涙ぐみました。

八92 〈略〉、もはや信作と耕造の二人だけの競走となつた。さうしてそれが同時に決勝點へ着いた。

八264 さて蕃人どもは、〈略〉、此の後決して人の首を取らぬとちかひました。さうして今も其の通りにしてゐるのだといひます。

八317 次にかま口から火をつけて、四五日の間、中の木をむし焼にする。さうして〈略〉煙の色で焼加減を見て、かまの外へ引出し、〈略〉。

八329 これは〈略〉、今から千何百年も前から栽培することになったのだとつたへてゐます。さうして其の栽培については次のやうな話もあります。

八342 婦人は大いに喜んで、〈略〉、すぐに其の山へ上りました。さうして教へられた場所へ行つて見ますと、〈略〉。

八492 〈略〉、數分ノ間羽バタキ一ツセズ、空中ヲノシテ行ク。サウシテ何カ地上ニエモノヲ發見スルト、スウツ下リテ來テ、〈略〉。

八955 信吉は〈略〉、幾度も先生に

おじぎをした。さうしてみんな一しよに學校の門を出た。

八1003 或時、口・耳・目・手・足等が申し合はせて、胃に向つていひますには、「〈略〉。」といひました。さうしてそれから後は、〈略〉、足は食堂へ行くことを止めました。

九287 信淵は〈略〉、一心に西洋の學問を勉強した。さうして終に當代第一の農學の大家となつて、〈略〉。

九526 園 さて商賣を始めると、〈略〉、十年もたゝぬ中に、町でも屈指の財産家となつた。さうして人々に推されて、町の銀行の頭取になつた。

九541 園 〈略〉、あの人は反對に、〈略〉、自分の財産を残らず差出した。さうして全く無一物になつて、親子三人町外れの裏長屋に移つてしまつた。

九7710 〈略〉、皆一せいに小をどりして喜んだ。さうして大急ぎで學校道具をかばんにしまひ、〈略〉、校舎の後の菜園に集つた。

九10910 北風は俄におぢけがついた。さうして主人がこひしくなつて、今來た方へ一散にかけもどつた。

九1113 戦争なれた北風は、此の聲の意味をよく知つてゐた。さうして之に合はせるやうに、〈略〉、一聲高く天に向つていなゝいた。

十212 園 〈略〉買手は、〈略〉、次第にせり上げる。〈略〉。さうして、も

うこれが最高の直だと見ると、掛の人が其の直で賣渡すといふあひつに手を打つて、取引が成立ちます。

十418 兄は〈略〉、生木の枝で雜木を束ねて見せた。さうして〈略〉、父のかり取つたあとを元氣よくつるはして掘返し始めた。

十478 彼は〈略〉そこらをかけ廻つた。さうして手當り次第に、何でもひつつかんで行つては黨の中へ投込んだ。

十一19 〈略〉、之を形造つてゐるのは、液體に近い氣體であらうといふ。さうして〈略〉、其の容積は地球の百三十萬倍に當つてゐる。

十一32 此の黒點は多分表面に生ずるうづ巻であらうといふ。さうして其の數や大きさは、凡そ十一年餘を週期として増減してゐる。

十一731 宣長は〈略〉、すごくともどつて來た。さうして新上屋の主人に、〈略〉又泊られることがあつたら、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。

十一9810 熱心なリンカーンは、書物を持つてゐる人の所には遠近を問はず借りに行つた。さうして〈略〉何度でも讀む。

十一1008 其の人は〈略〉、願に任せて三日間鼠の草をとらせ、さうして本は其のまゝリンカーンにやつた。

十一118 〈略〉、騎馬の人たちはもう

門の外まで乗りつけた。さうしてジョージに早くあけて通すやうにと言った。

十一121 公爵はひどく此の答が気に入った。さうして《略》、一同を引連れて立去った。

十二139 《略》、七十四歳の長壽を保つことが出来た。さうして廣く動植物を研究して、生物は總べて《略》、下等なもののから高等なものへと進むものであるといふことを証明した。

十二388 図 「はいつてみよう。さうして一曲ひいてやらう。」

十二453 彼は急いで家に歸つた。さうして《略》、かの曲を譜に書きあげた。

十二589 時計師は《略》ねちをはさみ上げて、大事さうにもとのふたガラスの中へ入れた。さうして《略》、やがてピンセットでねちをはさんで機械の穴にさし込み、《略》。

十二6910 娘の答に失望した王は、《略》、「略。永の勘當だ。」と言渡した。さうして残りの領地を二分して、姉二人にやつてしまつた。

十二942 彼は《略》、或靜かな森へ行つた。さうして《略》五人の友と六年の間種々の苦行を試みた。

十二954 今度は程よく食物も取り、休息もした。さうして《略》唯一筋に悟の道を求めた。

十二1071 《略》、あれは山師坊主で、

《略》、人をろうらくするのであらうといふうはさが立つた。さうして陰に陽に仕事のじやまをする者も少くなかつた。

十二1319 西郷は《略》翌日の進軍を中止させた。さうして直に靜岡の大總督府にはせつけて議をまとめ、《略》。

そうしょ ↓ いちだいそうしょ
そうじようする 「奏上」 (サ変) 2
奏上する 《一スル》

十二895 《略》、兩院の意見が一致すれば、最後に議決した議院の議長から國務大臣を経て奏上する。

十二897 又貴衆兩院の何れから提出された案は、他の一院のみで討議し、可決すれば同じ手續によつて奏上する。

そうしょく 「増殖」 (名) 1 増殖
十二471 図 《略》材の優良にして美麗なるは檜を以て第一とすべし。《略》。唯杉に比して産額少く、増殖や、困難なるは惜しむべし。

そうしょくさい 「裝飾材」 (名) 1 裝飾材
十二483 図 中にもけやきはもくめ美しく、《略》、又くるひ少きが故に裝飾材として珍重せられ、《略》。

ぞうしょくす 「増殖」 (サ変) 1 増殖す 《一セ》

十二464 図 殊に杉は人爲によりて容易に増殖せらるゝ點において檜にま

さり、《略》。

そうしん 「曾參」 (人名) 1 曾參 ↓

十一63 図 論語は、曾參と有若との門人等が孔子及び其の高弟の言行を集録したるものにして、《略》。

そうしん 「送信」 (名) 1 送信
七12 図 送信午 時 分

ぞうしんする 「増進」 (サ変) 1 増進する 《一スル》

十一1164 《略》人々は常に自治制の本旨を辨へ、協同一致して團體の福利を増進することを心掛けねばならない。

そうしんとうむしゃ 「送信当務者」 (名) 1 送信當務者

七12 図 送信當務者
ぞうすいす 「増水」 (サ変) 1 増水ス 《一シ》

八214 図 揚子江ハ水量ツネニ豐ニシテ、洋々ト流ルレドモ、夏季ハコトニ増水シテ、濁流江ニミナギリ、《略》。

そうせい 「総勢」 (名) 1 總勢
六91 図 楠木正成が守つた千早城は、《略》、まはりが一里にも足らず、總勢わづか千人ばかり。

ぞうせん 「造船」 (名) 2 造船

十一118 《略》、近時工業も次第に盛になつて、紡績・造船・製粉・製紙其の他の諸工場が勢よく黒煙を立ててゐる。

十二478 図 ひば・松・落葉松は《略》建築・土木・造船等其の用途頗る廣し。

そうせんきょ 「総選挙」 (名) 1 總選舉

九1209 図 「今日ハ衆議院議員ノ總選舉ダカラ、投票ノ爲ニ歸ツテ來タノダ。」

ぞうせんぶちよう 「造船部長」 (名) 1 造船部長

十1281 図 《略》、續いて造船部長の指揮につれて吹く進水主任の號笛を合圖に、着々と進み行く進水作業。

そうそう 「草草」 (感) 1 草々
九11310 圖 拜啓。《略》。若し御承知に候はば、御手数ながら至急御報知下されたく、願ひ上げ候。草々。

そうぞう 「創造」 (名) 1 創造
十二1375 しかし模倣はやがて創造の過程でなくてはならぬ。

そうぞうする 「想像」 (サ変) 3 想像する 《一サ一シ》

九902 図 西洋では昔から、あの七つの星と其の近所の星を一しよにして小熊の形を想像し、《略》。

九904 図 西洋では昔から、《略》、北斗七星と其の近所の星を一しよにして大熊の形を想像して、《略》。

十一1710 此の一事で、家の中がどんなによく整頓されてゐるかが想像されます。

そうぞうりょく 「創造力」 (名) 1 創造力

造力

十二137 自分で思ふまゝに造り出す

創造力は、十分に發揮せられたことがなく、〈略〉。

そうだい 「壯大」(形状) 3 壯大

九609 東の空が明るくなると、今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壯大な姿が、だん／＼にあらはれて来る。

十7510 園 〈略〉、松林を後にして右に昌徳宮、左に景福宮の壯大な構がある。

十二76 園 大神〈略〉、命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。

そうたいしよう 「総大将」(名) 1 總

大將

七188 〈略〉、「大將も討死されました。」といふ使が来たが、總大將の新田義貞はびくともしません。

そうだん 「相談」(名) 3 相談

五697 此の事を村の相談にかけた。

五706 物なれた人には相談をかけた。

七642 〈略〉男が、人夫と渡賃を高いやすいと言つてあらそつてゐましたが、相談は出来ないものと見きつたのでせう、〈略〉、一人で川へいつて行きました。

そうだんあいて 「相談相手」(名) 1 相談相手

十一219 又民事裁判では、原告・被告の相談相手・附添人又は代理人となつて其の主張を助け、〈略〉。

そうだん・する 「相談」(サ変) 1 相談する

十二1085 ところで人々はいつそ我々も出来るだけ此の仕事を助けて、一日も早く洞門を開通し、〈略〉、我々もあのかさり戸を渡る難儀をのがれようではないかと相談して、〈略〉。

そうちよう 「宋朝」(名) 1 宋朝

十968 園 支那の宋朝の末、北方に元といふ國おこり、〈略〉。

ぞうつかい 「象遣」(名) 5 象つかひ

六868 象つかひが乗つてゐて、口上をのべては、らつばを吹かせたり、ごぼんの上へ乗らせたりした。

六874 〈略〉、乗つてゐた象つかひは桶の中へいつてしやがんだ。

六876 象がそれを下して来て地に置くと、象つかひがぬつと桶の中で立上つた。

六881 牙は象つかひの腕よりも太かつた。

六884 象つかひが「〈略〉。」といふと、長い鼻をぶら／＼させて歩き出した。

そうとう 「相当」(形状) 2 相当

十一104 唯商業の取引の盛な部分は、相當に活氣を帯びてをり、〈略〉。

十二157 園 〈略〉、一がいには言難けれども、相當に名ある新聞は、通信に、印刷に、あらゆる文明の利器を用ふるを以て、〈略〉。

そうとく くだいそうとくふ・ちようせ

んそうとくふ

そうねん 「壯年」(名) 1 壯年

十一743 宣長は〈略〉、どこことなく才氣のひらめいてゐる篤學の壯年。

そうばん 「早晚」(副) 1 早晚

十二1164 園 〈略〉、石炭は早晚使ひ盡くされてしまふが、水力は無限といつてよい。

そうむきよく 「総務局」(名) 1 總務局

十二164 園 これも社によりて多少の相違はあれども、多くは總務局ありて全體を統べ、〈略〉。

そうもく くだいそうもく

ぞうり 「草履」(名) 1 草履

八584 園 〈略〉、ハキ物屋ニ下駄・草履・傘ナドト、大字ニテ目立ツヤウニ記シタル看板ヲ出セルハ、〈略〉。

ぞうりとり 「草履取」(名) 2 草履取

草履取

七763 豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎といつて、織田信長の草履取をしてゐた時のことである。

七786 信長は〈略〉藤吉郎を草履取から引上げて役人の數に入れた。

そうれい 「壯麗」(名) 1 壯麗

十二1002 園 社寺の壯麗はしばらくおき、〈略〉、一木一草に至るまでも歴史あり古歌あり、〈略〉。

そうれい 「壯麗」(形状) 1 壯麗

十二315 園 此處は〈略〉、建物なども一般に壯麗です。

そうろう (助動) 124 候ふ 候

ハ・ヒ・フ・一へ くだいそうろう

九1110 園 昨日は美しきお話の本御送り下され、誠に有難く存じ候。

九1123 園 あの中に一番面白き話をよくおぼえ置き、〈略〉、同級の人々を驚かさんと楽しみ居り候。

九1127 園 先日遊びに上り候節御約束致し候三毛の子猫、もはや大きくなり候事と存じ候。

九1128 園 先日遊びに上り候節御約束致し候三毛の子猫、もはや大きくなり候事と存じ候。

九1128 園 〈略〉三毛の子猫、もはや大きくなり候事と存じ候。

九1128 園 〈略〉三毛の子猫、もはや大きくなり候事と存じ候。

九1129 園 近き中に頂きに上りたく候に付き、〈略〉。

九11210 園 〈略〉、何日頃がよろしく候や、御知らせ下されたく、御願ひ申し上げ候。

九1131 園 〈略〉、何日頃がよろしく候や、御知らせ下されたく、御願ひ申し上げ候。

九1136 園 昨年僕の學校より、君の學校へ御轉任なされ候佐野先生、先頃より御病氣の由承り候。

九1137 園 〈略〉佐野先生、先頃より御病氣の由承り候。

九1138 園 早速御見舞に參上致したく存じ候へども、御住所不明にて困

り居り候。

九一三 八 候 略、御住所不明にて困り居り候。

九一三 九 候 若し御承知に候はば、御手數ながら至急御報知下されたく願ひ上げ候。

九一三 一〇 候 若し御承知に候はば、御手數ながら至急御報知下されたく願ひ上げ候。

九一六 六 候 母は如何にも残念に思ひ候。

九一六 七 候 何の爲にいくさには御出でなされ候ぞ。

九一六 八 候 一命を捨てて君の御恩に報ゆる爲には候はずや。

九一七 二 候 村の方々は、略、

『略』と、親切におほせ下され候。

九一七 五 候 母は略、此の胸は張りさくるばかりにて候。

九一七 五 候 八幡様に日參致し候も、そなたがあつばれなるてがらを立て候やうとの心願に候。

九一七 六 候 略、そなたがあつばれなるてがらを立て候やうとの心願に候。

九一七 六 候 略、そなたがあつばれなるてがらを立て候やうとの心願に候。

九一七 九 候 如何ばかりの思にて此の手紙をしたゝめしか、よくよく御察し下されたく候。

九一七 一〇 候 御手紙有難く拜見致し候。

十 一〇五 候 略、御前様にも日々學校に御通ひなされ候由、安心致し候。

十 一〇六 候 略、御前様にも日々學校に御通ひなされ候由、安心致し候。

十 一〇六 候 略、玉の様な女の御子御生れの由承り、誠にめでたくうれしき限りと存じ候。

十 一〇七 候 男ばかりの御兄弟の中に、此の度始めて妹を得られ候事、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十 一〇七 候 略、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十 一〇七 候 略、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十 一〇七 候 略、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十 一〇七 候 略、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十 一〇七 候 略、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十 一〇七 候 略、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十 一〇七 候 略、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十 一〇七 候 略、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十 一〇七 候 略、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十 一〇七 候 略、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十 一〇七 候 略、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十 一〇七 候 略、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

十 一〇七 候 略、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。

赤さんの御着物にもと御送り致し候間、略。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇八 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

十 一〇九 候 略、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。

すべく候。

十一426 園 略、若し御光來相成候はば、及ぶ限りの御便宜相計り申すべく候。

十一427 園 尚當地産の葛粉少御見舞の印までに御送り申上候間、御受納下され度候。

十一428 園 尚當地産の葛粉少御見舞の印までに御送り申上候間、御受納下され度候。

十一432 園 御親切なる御手紙有難く拜見仕候。

十一434 園 尚又結構なる葛粉御送り下され、御厚情の程深く謝し奉り候。

十一435 園 實は去月十日頃より感冒の心地にて引きこもり居候處、略。

十一436 園 略、其の後とかく病勢衰へず、遂に肺炎を引起し申候。

十一438 園 しかし幸に經過良好にて、熱も凡そ二週間餘にて全く相去り申候。

十一439 園 今少しく日もたゞば、轉地するもよからんと醫師も申居候に付、略。

十一4310 園 略、或は仰に従ひ、其の中御地へ参り候やもはかり難く候。

十一4310 園 略、或は仰に従ひ、其の中御地へ参り候やもはかり難く候。

十一441 園 其の節は何とぞ宜しく願上候。

十一1018 園 御手紙拜見致候。

十一1019 園 二人ともよく勉強し居らる由、安心致候。

十一10110 園 勉強も大切なれど、體にも精々御注意なさるべく候。

十一10210 園 目下滞在中のリオ、デ、ジャーネーロ市は、略、港としても有名な處に候。

十一1032 園 町のりつばなる事も、文明諸國の大都會に比して少しも劣る所これなく候。

十一1033 園 此のブラジル國は、略、其の大部分は熱帶に屬し居候へども、略。

十一1036 園 略、殊に温帶に屬する南部の諸州にては、四季の變化も日本の如くはつきり致居候由、略。

十一1038 園 略、唯をかしくは日本の秋が春、日本の冬が夏といふ様に季節の相反する事に候。

十一1041 園 此の手紙と一しよに、繪葉書をたくさん小包にて送り申候。

十一1045 園 其の中に有名なアマゾン河や、イグアッスーの大瀑布の壯觀を寫したるものもこれあり候。

十一1049 園 アマゾン河は略、世界の河の王といはれ居候。

十一1052 園 河幅は略、河口の處にては、略、略、東京・豊橋間の距離に當り候。

十一1056 園 次にイグアッスーの瀧は、略、其の壯觀實に筆舌に盡くし難く候。

十一1059 園 二週間ばかり前より南方のサンパウロ市に参り居候。

十一1061 園 略、何處に行きても日本人を見かけ候は甚だ愉快に候。

十一1061 園 略、何處に行きても日本人を見かけ候は甚だ愉快に候。

十一1063 園 殊に日本人の小學校ありて、御前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては、殆ど身の南米に在るを忘れ候。

十一1066 園 略、甘蔗・綿花・米等もよく出来る由に候。

十一1067 園 昨日知人に誘はれてコーヒー園見物に出掛け候。

十一1069 園 大勢の人々が熟したるコーヒーの實を手にてこき落し、之を集めてみぞに投入れ候へば、略。

十一10610 園 略、實のみ浮びて流れ候を、下流にてすくひ上げ、之を廣きほし場にて乾かし候。

十一1071 園 略、之を廣きほし場にて乾かし候。

十一1073 園 之を機械にかけて皮を除き、袋に入れて外國に輸出する由に候。

十一1074 園 コーヒー園には多くの日本人が働き居候。

十一1077 園 中にも十三四ばかりの子供が、略、立働ける様を見ては、

如何にもけなげに存ぜられ候。

十一1079 園 森林地開墾の様子を視察致居候ため、しばらく無沙汰に打過ぎ候。

十一10710 園 森林地開墾の様子を視察致居候ため、しばらく無沙汰に打過ぎ候。

十一1082 園 ブラジルは何處へ参りても果なき原野と森林とに候。

十一1083 園 原野は大い牧場にて、牛馬は放し飼にせられ居候。

十一1091 園 略、つる草・灌木など思ふまゝにはびこり居候。

十一1093 園 かゝる處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、其の有様は如何にも男らしく勇ましきものに候。

十一1097 園 略、大木を伐るに、三抱も四抱もあるものが地ひゞきを打つて倒る様、壯快言語に絶し候。

十一10910 園 略、天をもこがすばかりのほのほをあげて燃ゆる光景は、實にすさまじきものに候。

十一1102 園 燃えあとは取片附けて畠とし、コーヒー・わたの木などを植付け申候。

十一1103 園 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

十一1104 園 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

十二1195 園 誠に御無沙汰に打過ぎ、申しわけもこれなく候。

十二119 8 園 略、なれぬこととて

仕事に追はれ、一日々と延引致し、今日に相成り申候。

十二119 9 園 失禮の段御許し下されたく候。

十二120 1 園 本日突然上田君に出會ひ、久しぶりにて郷里の様子をいろいろ承り申候處、略。

十二120 5 園 私のこと御心にかけ下され、常に「略」と仰せらるゝ由、いよく御なつかしく存じ奉り候。

十二120 7 園 主人の使などにまゐる途中、小学校の前を通りては、郷里の學校のおもしろかりことなど思ひ出し申候。

十二120 8 園 私の勤め居り候家は呉服店にて、なか／＼忙しく御座候。

十二120 10 園 参りし當座は何事もわからず、唯氣をもむのみにて、我ながら情なく存じ候ひしが、略。

十二121 2 園 略、何事も忍耐が第一とのかねての御教訓に従ひ、一心に働き候ため、追々店の様子もわかり、略。

十二121 4 園 略、追々店の様子もわかり、お客様の方にもなれて、仕事に興味を覺ゆるやう相成り申候。

十二121 6 園 略、仲間のうちにて計算は私が一番達者なりとて、何時もほめられ申候。

十二121 7 園 これも全く先生方のお

かげと深く感謝致居り候。

十二121 10 園 略、一日も早く一人前の商人となりて、親に安心致させたと存じ居り候。

十二122 1 園 先づは御無沙汰の御わびかた／＼近況御知らせ申上候。

そえる「添」(下) 2 そへる「へーへる」

十28 4 つかれ果てた人々も、親子の勇ましい働にはげまされて、我も／＼と力をそへる。

十一94 5 最後に父は「略」と言葉そへた。

ソーダばい(名) 1 ソーダ灰

十一121 9 略、マスクをかけた職工が珪砂にソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。

そかい「租界」(名) 4 租界

十一8 10 こゝには外國人の居留する者が非常に多く、これ等は租界といふ特別の区域内に住んでゐる。

十一9 1 租界といふのは居留地の一種で、居留民が支那政府の手を離れて、自治制を布いてゐる處である。

十一9 3 租界には皮膚の色の違ひ、言語・風俗の違つた幾多の人種が入交つてゐるので、略。

十一10 2 租界の外に出ると大ていは支那風の町で、町幅も狭く、あまりきれいでない。

そがきようだい「曾我兄弟」(課名) 2 曾我兄弟

四目13 二十四 曾我兄弟

四89 6 二十四 曾我兄弟 そがきようだい「曾我兄弟」(人名) 2

曾我兄弟 曾我兄弟 四89 7 曾我兄弟は兄を十郎、弟を五郎といひました。

四95 7 園「おきよ、すけつね。曾我兄弟がまるつた。」

そく ↓しそく

そく「族」↓いちぞくども

そく「賊」(名) 25 賊

六91 1 之をかこんだ賊は百萬騎といふ大軍で、略。

六91 5 こんな山城一つ、何程の事があるものかと、賊が城の門まで攻上ると、略。

六91 6 略、城のやぐらから大きな石を投落して、賊のさわぐ所をさんざんに射た。

六91 7 賊は坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。

六92 1 これにこりて、賊は城の水をたやして苦しめようとはかつた。

六93 6 正成は此の旗を城門に立てて、さん／＼に賊を惡口させた。

六93 6 賊が之を聞いて、くやしがつて攻めよせると、正成は高いがけの上から大木を落させた。

六94 2 さうして、これをよけようとして賊のさわぐ所を射させて、又々五千人餘もころした。

六94 4 此の上はひやうらう攻にしよ

うと思つて、賊は城へ攻めよせないことにした。

六94 7 賊は「それ、敵が出た。一騎も餘すな。」とおしよせた。

六95 1 賊が四方から之を目がけておしよせると、城から大石を四五十、一度に落したので、略。

六95 5 賊はうまくはかられたのである。

六95 8 略、賊は大きなしごを作つて、之を城の堀に渡して橋にした。

六96 2 略、其の上を賊が我先に渡つた。

六96 8 又賊は何千人か死傷した。

六97 2 賊が千早城一つを持餘してゐると、方々で官軍が賊のひやうらう道をふさいだので、略。

六97 3 略、方々で官軍が賊のひやうらう道をふさいだので、賊は人馬ともにつかれた。

六97 4 略、賊は人馬ともにつかれた。

六97 5 略、はじめ百萬騎といつた

賊も、しまひには十萬騎に減じ、略。

七19 2 稻村崎いさむらぎの此方に着いて、賊のそなへを見渡しますと、略。

七21 2 略、落ちて行く潮にさそはれて、賊の軍船はことごとく沖へ流れてしまひました。

七22 1 賊のそなへは忽ちくづれて、防ぐにも防がれず、たゞあわてさわ

いであります。

七225 鎌倉は一面火の海になつて、賊の大將高時以下北條方は、此の火の中にほろびてしまひました。

九910 駿河の賊を亡し給ひし後、

「略」、今の浦賀のあたりより海を渡り給へり。

十二510 昔、大國主命賊を平げ民をなつて、威勢四隣に並ぶものなし。

そくざ 「即座」(名) 1 即座

十二9610 彼等は釋迦の教を聽いて即座に弟子となつた。

そくしお「リ」 「属居」(ラ変) 1 属し居り

十一1033 此のブラジル國は、「略」、其の大部分は熱帯に属し居候へども、「略」。

そくしん 「賊臣」(名) 1 賊臣

七202 さて、心の中に、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をほろぼさうとしてゐます。

そくす 「属」(サ変) 1 属す

十一1035 國に「略」、殊に温帯に属する南部の諸州にては、四季の變化も

日本の如くはつきり致居候由、「略」。

そくする 「属」(サ変) 3 属する

「し」

九44 国 それに此の邊一帯の島々は我が國の支配に属してゐるので、内地から移つて來た人も多く、「略」。

十二497 十和田湖は一部分秋田縣鹿角郡に属し、其餘は青森縣上北郡に属してゐる。

十二498 「略」、其餘は青森縣上北郡に属してゐる。

そくど 「速度」(名) 1 速度

十一42 今かりに一時間五十里の速度で飛ぶ飛行機に乗つて行つたとしても、「略」。

そくりよく 「速力」(名) 1 速力

十1206 見るく艦は速力を増して、白波高く海にをどり入る。

そこ 「底」(名) 10 そこ 底 かわ

そこ・たにそこ

六852 敵の船はこつぱみぢんにくだけて、敵兵は海のそこに沈んでしまつた。

七339 獅子は武士の方を見まもりて、あはれ、波の底に入りぬ。

七804 魚類ニハ「略」、「略」、カレヒ・ヒラメナドノヤウニ、底ニ沈ンデキルモノモアル。

七833 又「略」海綿モ、ヤハリ海ノ底ノ岩ニ取リツイテキル蟲ノ骨デア

ル。

九675 軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は、これから訓練に取掛るのである。

九983 国 もやの底にかすかに見える越中の平野、「略」。

十339 底の水道から水がわき出て、船は次第に高く浮上る。

十697 一語々々、心の底よりほどばしり出づる主人の物語に、いたく動かされたる旅僧は、「略」。

十1031 「略」、はへのやうな蟲が二匹、底の水の中で、動けなくなつてゐる。

十一817 図 百尋・千尋海の底、遊びなれたる庭廣し。

そこ 「其処」(代名) 41 ソコ そこ 其所 其處

二427 アル日犬ハ畠ノスミ

デ、「略」。「トヲシヘマシタ。ヨイオヂイサンガソコヲホツテミマス、ト、「略」。

二437 サウシテムリニ犬ヲナカセテ、ソコヲホツテミマシタガ、

キタナイドロ水バカリシカデマセン。

三233 どちらもたいていおなじくらゐで、かちまけはありませんでした。そのとき正一のお

ちいさんが、たきぎをうまにつけてそこへきました。

三255 「略」、土がところどころもち上つてゐます。そこから竹

の子が出るのです。

三484 ヲカノ上ニ天ジンサマノオミヤガアリマス。ソコヘ

上ルト、私ノ村ハ一目ニ見エマス。

四166 白ウサギハ「略」、ナイテ居マシタ。ソコヘ神様ガタガ

オ通りガカリニナツテ、「略」。

四181 白ウサギハ「略」、前ヨリ

モカヘツテイタクナツテ、クルシガツテ居マシタ。ソコヘ大國

主ノ神ガオ出デニナリマシタ。

四314 正太郎がおこつて、「ばか」といひますと、又向ふで、「ばか」と口まねをします。そこへ

ぼちが來ましたので、「略」。

四414 にはへいたやむしろを

物ガはこび出されました。

四542 山國のものが「略」。

といへば、島國のものが「略」。

「略」といつてあらそひます。そこへ宿屋のていしゆが來て、「略」。

五521 「略」、高イ所ニ行キアタル、其所ヲヨケテ流レマス。

五668 此の村には、向ふの杉山のすそに、大きな用水池があつて、其所から水を引くからだ。

六474 「略」、産ンデシマフト、其ノ上ニ砂ヤ小石ヲカブセル。サウシテ

外ノ魚ガ其所ヘ來ナイヤウニ、シバラク其ノアタリニ番ヲシテキテ、

「略」。

六476 「略」、シバラク其ノアタリニ番ヲシテキテ、ソレカラ海ヘ歸ル。

中ニハ其所デツカレテ死ンデシマフ

ノモアル。

六726 四條の大橋はすぐ其所に見えます。

六89 すると象は鼻で、其所にあつ

たうちは拾つて、子どもの顔をあふき出した。

七17 しゃうの強いもので、一度種が地に落ちれば、年年其所で花がさく。

七31 今や獅子の息はたえんとす。

〈略〉。武士の馬はおどろきて、〈略〉、おそれて其所に近づかんとせず。

七38 船から陸あげした荷物は、すぐ其所から汽車にのせて、〈略〉。

七42 おばあさんは「やれく」といつて、其所へすわつた。

七55 外國の港に着くと、見なれない形の家が並んで立つてゐます。

其所にある人は、私どもとはまるでちがつた風をして、〈略〉。

七101 秀吉は城の庭にしき物をのべさせ、〈略〉、御臺所やおそばの女どもと居りました。其所へ清正がかけつけました。

八10 信作は〈略〉、ころく池の中へころげこんだ。しかも其所は深い所である。

八29 太郎は毎日炭を焼く煙を遠くに見てゐるが、まだ一度も其所へ行つて見たことがない。

九32 其所の木のかけ、此所の石のそばには、〈略〉、春蘭のつぼみのふくらんだのも見える。

九63 数分の内に艦内はすつかり整頓する。そこで五分間の休けいがある。

つて、〈略〉。

九65 甲板洗がすむと、「總員顔洗へ。」「煙草ぼん出せ。」の令が下る。そこで始めて乗員は顔を洗ふ。

九70 白河を通つたのは昨夜の十一時前であつた。昔能因といふ人が、『都をば、かすみと共に立ちしかど、秋風ぞ吹く、白河の關。』とよんだのは其所のことで、〈略〉。

十17 其の周囲は馬つなぎ場になつてゐます。私の行つた時には、もう其所にすぎ間も無く子馬がつないでありました。

十57 〈略〉、飼養所を移動し、其處を見覚えさせて飛歸らせるやうにする事も出来る。

十104 此の後にかまがある。其處から熱い湯を管で各室へ送つて、〈略〉。

十104 次の室には大きい熱帯植物類が並んでゐる。〈略〉。其處から又右に折れると、〈略〉。

十118 社殿の後に廻ると、其處は廣々とした梅林で、〈略〉。

十一16 「略。」と思ひつゞけてゐると、そこへ弟さんが雑誌を三三三つ持つて来て、〈略〉。

十一39 生きた枝でも枯れた枝でも、其のまゝにしておくと、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十一86 目ざす大島はもうそこに見える。

える。

十一91 『各地の氣候』といふ所がある。そこを見ると、臺灣や樺太のやうな遠い所の氣候までも大體分る。

十一123 こちらを見ると、そこではちよつと吹いて型に入れ、又吹いて型から出す。

十二21 あれは港の親船へ蜜柑を運んで行くのであらう。〈略〉、其處からも夢のやうに船歌が聞えて来る。

十二89 又貴衆兩院の何れから提出された案は、〈略〉、可決すれば同じ手續によつて奏上する。そこで天皇が之を裁可せられ、公布せしめられると、〈略〉。

十二94 そこで彼は先づ近處の河に浴し、たま／＼其處にゐた少女のさ／＼げた牛乳を飲んで元氣を回復した。

そこそこ「其処此処」(代名) 6 そここ、其所此所 其處此處

六20 こんな時には、「これが五日もつゞくと、ひぼしだ。」と言ふれふしのこゑが、其所此所にします。

六31 其所此所ニハトリノコエガ聞エタ。

七10 だん／＼潮が引いて、もう其所此所に洲が見え出した。

九8 殊に近年我が國で學校をそここに立てたので、子供等はなか／＼上手に日本語を話します。

九65 其所此所で、「お早う」が言ひかはされる。

十119 地圖を便りにして進んで行く、山畑の其處此處に野梅の咲きこぼれてゐるのも面白く、〈略〉。

そこそこ じせんじやくそこそこ

そこで(接) 16 ソコデ そこで

二73 〈略〉、ナカナカタイヂスルコトガデキマセンデシタ。ソコデ天子サマカラ、ライクワウト

イフツヨイ大シャウニ、シユテンドウジヲタイヂセヨト、オホセツクニナリマシタ。

三76 又鳥ノ方ヘ行キマスト、「オ前ハケダモノダラウ。」トイツテ、アヒテナシマセン。ソコデカウモリハシカタナシニ、

〈略〉、クラクナツテカラ空ヲトビマハルヤウニナツタトイヒマス。

四40 日は〈略〉、あたたかな光をおくりました。たび人は〈略〉、しまひにはぐわいたうをぬぎました。そこで、風の負になりました。

五75 六月の田植時から七月・八月にかけて、水はありあまつた。そこで一年まじに田がふえたが、〈略〉。

八23 〈略〉、もう供へる首がなくなりました。そこで蕃人どもが呉鳳へ、首を取ることを許してくれといつて出ました。

越前守は〈略〉、其の中に盗

まれた品のありなしを調べさせました。すると其の中に二反ありました。そこで其の反物を出した者を呼出して、買先をたゞし、〈略〉。

八川 大將の父は「略」、どうかして大將の體を丈夫にし、氣を強くしなければならぬと思つた。そこで大將が四五歳の時から、「略」、往復一里餘もある高輪たかぎらの泉岳寺へよく連れで行つた。

九三二 〔略〕三代かゝつても、まだ全く手の着かない事が少くなかつた。そこで此の父も、何とぞ此の學問を大成したいと、四十餘年の間、〔略〕出来るだけは骨折つたつもりである。

九五七〇〔略〕、六十五六の時にはもう餘程の財産が出来た。そこで間もなく片手間に精米所を始め、〔略〕。十三一八 〔略〕、平かな掘割を造つて、

太平・大西兩洋の水を通はせることは到底出来ぬ事であつた。そこで此の運河は、非常に變つた仕組に出来てゐるのである。

十一 75 ④ 古い言葉を調べるのに一番よいのは萬葉集です。そこで先づ順序として萬葉集の研究を始めたところ、〈略〉。

十二⁷²₁₀ それは父が姉たちの爲に虐待ぎやくされてゐるといふことであつた。そこでコーディネヤは夫に請うて

共々に家來を連れてイギリスに渡つた。

十二788 これでもう魚は逃出することが出来ない。そこで敷そうの船に分乗した漁夫が、〈略〉身網を一方からたぐつて行く。

十二947 〈略〉、彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。そこで彼は先づ近處の河に浴し、〈略〉牛乳を飲んで元氣を回復した。

十二1081 〈略〉、〈略〉老僧の姿が、

急に尊いものに見え出した。そこで人々は「略」、老僧の命のあるうちに其の志を遂げさせると共に、我々もあのくさり戸を渡る難儀（なんぎ）をのがれようではないかと相談して、「略」。

十二 136 〈略〉國民は眞の社交を解せず、人を信じ人を容れる度量に乏しい。そこで海外に移住しても外國人から〈略〉排斥（排斥）されるやうなことも起つて来る。

そこなう ↓いそこなう
 そこぬ ↓ふみそこぬ
 そこら 「其処」(代名) 3 そこら 其
 處ら

十394 兄はそこらに散らばつてゐる
木の根や、小枝などを拾ひ集めて來
て、たき火を始めた。

十478 彼は氣がくるつた様にそこら

をかけ廻つた。

物をあれこれといぢり始めた。
そしき **〔組織〕** (名) 4 組織

うかんそしき
十一²¹⁵ かういふ風に、三回くりかへして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、〈略〉。

十一 52 元來ゴム液は、(略)乳管組織といふ所から出るものであるから此の組織の所まで小刀が届いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなればならぬ。

十一¹¹³₄ 我が國の地方自治團體には
府・縣・市・町・村の別がある。
〈略〉、其の組織に繁簡の差があるに
しても、〈略〉。

十二¹¹⁶₃ ㊦ 第四課 新聞〈略〉。先

づ社の組織について述べん。
しき・する「組織」(サ変) 1 組織
する『一シ』
十一168 〈略〉、又は青年團を組織し
て産業の發達、風俗の改善等に務め

たりするのは、〈略〉。
 てしつ「素質」(名) 1 素質
 十二¹³²₁₀ 我が國が〈略〉、今や世界
 五大國の一に數へられるやうになつ

たのは、主として我々國民にそれだ
けすぐれた素質があつたからである
『訴訟』(名) 2 訴訟
せしやう 今度の勢ぞろへに集つた諸
士 725 会

侍の中に、訴訟ある者は申し出るがよい。

十一 195 此のやうに、人々相互の間

の訴訟を裁判するのを民事裁判といひ、〈略〉。

そそぐ 〔注〕(四・五) 3 ソ、グ
 そゝぐ 注ぐ 《イ・ガ・グ》
 七29ノ図 淀川ハイクスズニモ分レテ
 海ニソゝグ。

十282 親子は〈略〉、又あらん限りの力をオールに注いで、我が家へと向つた。
 十1286 ㊦ 拜觀者の目は、一せいに鑑にそゝがれぬ。

そぞろ〔漫〕(形状) 1 そぞろ
 十705㊦ 旅僧もまた主人夫婦の情心
 にしみて、そぞろに別れがたき思あ
 り。

そだ〔粗朶〕(名) 1 そだ

八三^四 さて山の木をきり倒して、四五尺の長さにきりそろへ、それをぎつしりとかまの中に立て並べ、よくもえるやうに其の上下にそだを置き（略）。

そだ・つ [育] (五) 3 そだつ 育つ
 《ーチ・ーツ》
 七¹⁰⁷9¹⁰⁸ 清正はつけひもの頃から、
 此の方のひぎの上でそだつたので、

八1158 此の父母の下に、此の家に育つた乃木大將が、〈略〉、武人の手本と仰がれるやうになつたのは、〈略〉

十二 1347 狭い島國に育ち、生活の安
易な樂土に平和を樂しんでゐた我が
國民は、〈略〉。

そだ・てる 「育」(下二) 4 ソダテル

育テル 育てる 《一・テ・テル》

五273 ツバメハコチラニ居ル間ニ、

人ノ家ニスヲ作ツテ、ヒナヲソダテマス。

八349 間もなくそれから芽が出ましたので、婦人は之を我が子のやうに育てました。

八505 ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒クテ、家畜ヲサラフノモ多クハ此ノ時デアル。

十218 馬は、其の日の中に買手に引渡されてしまひます。二年の年月苦勞して育てて來たものが、《略》人の手に渡つてしまふのだから、《略》。

そち 「其方」(代名) 1 そち

七772 或大雪の朝、信長は《略》「誰か居るか。」と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て來た。「そち一人か。」

そちら 「其方」(代名) 2 そちら

三711 この黒いもめんのもんつきは私のです。《略》。そちらのはばの廣い光るおびはねえさんので、《略》。

九5710 《略》父がふり向くと、母もすげ笠をそちらへ向けて、「《略》。」と言ひながら、正一を見てにつこりした。

そつぎようこ 「卒業後」(名) 1 卒業後

十1264 《略》、生徒は《略》、卒業

後も尚學校の門に出入することを樂しみとせり。

そつぎよう・する 「卒業」(サ変) 1 卒業する 《一・スル》

八927 おとよは《略》、此の學校を卒業する頃には、りつぱに一人前の事が出来るやうになる。

そつぎようせい 「卒業生」(名) 1 卒業生

八929 げんに此の學校の卒業生で、《略》、裁縫の先生になつてゐる者もあるなどと話された。

そつくり (形状) 1 そつくり

十133 あなたもずるぶん大きくなりましたね。おとうさんの若い時そつくりです。

そつと (副) 6 ソツト そつと

三32 《略》、ケサコソニイサンヨリサキニオキテミヨウトオモツテ、ソツトネドコヲ出マシタ。

八168 《略》、長四郎がそつと屋根つたひに行つて、もう少しで雀の巢へ手が届かうとした時、《略》。

九1105 北風は、《略》、そつと顔を主人の肩のあたりへすりよせた。

十103 王は讀終つて、そつと手紙をまぐらの下へ入れた。

十102 《略》、そつとのぞいて見ると、はへのやうな蟲が二匹、底の水の中で、動けなくなつてゐる。

十二423 友人がそつと立つて窓の戸

をあけると、《略》。

そで 「袖」(名) 6 ソデ 袖 ↓ つつ

そで

三357 キモノノソデニモ、タビニモ、手ブクロニモ、クツニモ右左ガアリマス。

三897 はごろもの袖はかるく風にまひ、はごろもの色は日の光にかがやきました。

九6410 水兵は《略》、かひがひしくズボンと袖をまくり上げ、身輕な姿となつて分隊毎に甲板洗を始める。

十641 駒とめて袖打拂ふかげもなし、佐野のわたりの雪の夕暮。

十1305 京中の貴賤男女、此の行幸を悲しみて涙と共に見送り奉り、警固の武士もさすがによろひの袖をしばらくけり。

十二268 若宮堂の舞の袖、しづのをだまきりかへし かへしし人をしのびつゝ。

そと 「外」(名) 17 ソト 外

二664 オヤ牛ヲソトへ出スト、子牛モツイテイキマス。

四411 一番先にしやうじやからかみが外へ出されました。

四422 戸だなや戸だなの中の物もみんな外へ出されました。

四464 《略》、家の内も外もきれいになつて居ましたので、みんながほめられました。

五252 しばらく待つて、私どもは浴

衣地とこんがすりを買つて外へ出ました。

六501 ありり火はとろく、外は吹雪。

六506 ありり火はとろく、外は吹雪。

八53 ふと、垣根の外でちやらくとすゝの音が聞えた。

八318 《略》、かまの外へ引出し、消粉をかけて消せば、かた炭が出来上るのである。

八971 《略》、金ノシヤチホコアリ。其ノ高サ八尺五寸、朝日・夕日ニカバヤキテ、遠ク數里ノ外ヨリ望ミ見ルコトヲ得ベシ。

十602 されど婦人は、氣の毒と思ひけん、僧をば待たせ置き、おのれは主人を迎へにとて外に出行けり。

十632 主人は僧の後を追ひて外に出でぬ。

十1057 外はさつきよりも一そう風が強くなつたのか、ガラス越しに見える向ふの木がひどくゆれる。

十1201 公は《略》一歩も外へは出ないで、三年の歳月を送られたさうである。

十一102 租界の外に出ると大いには支那風の町で、町幅も狭く、《略》。

十一118 《略》、騎馬の人たちはもう門の外まで乗りつけた。

十二49 停車場の外に出づれば、

イサン ハソノ 木ヲ キツテ、
《略》。

二457 ヨイオヂイサンハ《略》、
ウスヲ コシラヘマシタ。ソノ ウ
スデ米ヲ ツキマス、ト、《略》。

二471 ワルイオヂイサンハ又コ
ノウスヲ カリニ キマシタ。
《略》。又オコツテ、ソノウスヲ
ワツテ、火ニクベテシマヒマシ
タ。

二473 又オコツテ、ソノウスヲ
ワツテ、火ニクベテシマヒマシ
タ。ヨイオヂイサンハソノハヒ
ヲモラツテキテ、ニハニマキ
マシタ。

二482 ヨイオヂイサンハソノハ
ヒヲ《略》、ニハニマキマシタ。
スルト、《略》、キレイナ花ガサ
キマシタ。オヂイサンハヨロコン
デ、ソノハヒヲザルニ入レテ、
《略》。

二597 太郎 ハイマ、オカアサン
ガオクスリヲノムトコロヘ
キテ、「オカアサン、ソノオクスリ
ハニガウゴザイマスカ。」

二755 シュテンドウジハ《略》、ト
メテヤリマシタ。ソノパンシユ
テンドウジハサケニヨツテネ
マシタ。

二756 ソノパンシユテンドウジ
ハサケニヨツテネマシタ。ソノ
大キナカホハ火ノヤウニア

カク、《略》。

三96 オヤドリハ《略》、コココ
トイヒナガラ、ソノヘンヲ見
マハリマス。

三168 二一郎、おまへはそのゆ
びで人をさしますか。あしの
ゆびは、おやゆびとこゆびの
ほかにはながないのです。」
三178 二「このはの中に、お
もしろい人がゐます。《略》。」

「そのはこをかしてください。」
三224 犬は《略》、小一郎のそば
へよつてきました。それから
そのへんをむやみにかけまはり
ました。

三232 又とりはじめて、二人は
たくさんとつてからくらべてみ
ました。《略》。そのとき正一の
おちいさんが、《略》そこへきま
した。

三314 村の人は五一車とよん
でゐます。五一ちいさんがその
水車やのぼんをしてゐるから
です。

三328 ざぶざぶおちる水のおと、
とんとんひびくきねのおと、そ
のにぎやかな中から、《略》。

三407 《略》、子どもが大ぜいで
かめをつかまへて、おもちゃに
してゐます。うらしまは《略》、
子どもからそのかめをかつて、
《略》。

三416 うらしまさん、このあひ
だはありがたうございました。

そのおれいにりゆうぐうへつ
れていつて上げませう。

三502 《略》、新シイ家ガ七八ケ
ンデキマシタ。ソノ中ニハ、ニ
ウリヤモアリマス。

三503 ソノ中ニハ、ニウリヤモ
アリマス。今ソノミセノマヘ
ニ二車ガトマリマシタ。

三663 アトヘ竹ノキレヲノコ
シテ行キマシタガ、ソノ中ニ
《略》、水デツパウニナリサウナ
ノガアリマシタ。

三671 ソレカラホソイ竹ヲエ
ニシテ、ソノサキニキレヲマ
キツケテ、センヲコシラヘマシタ。

三706 この《略》もんつきは私
のです。そのとなりの三つもん
のはおりとしまのはかまは
おとうさんのです。

三723 こちらの《略》つつそでは
太郎のあはせで、そのとなり
のめりんすのあはせは私の
です。

三734 ムカシ鳥トケダモノガ
ケンクワヲシタコトガアリマ
ス。ソノトキカウモリハ《略》。

三756 イツマデタツテモシヨウ
ブガツカナイノデ、中ナホリヲ
シマシタ。ソノ時カウモリガ
ケダモノノ方ヘ行キマス、ト、

《略》。

三874 「《略》、おかへし申します。

そのかはりに天人のまひと
いふものをお見せ下さいませ。」
三881 おれいにまひをまひま
せう。そのはごろもをおかへし
下さいませ。

四45 今年は田がよく出来た
ので、ぼんにはそのおいひの
火花が上るさうです。

四52 しぶ柿が三本、あま柿が
二本で、その中に私の木が
一本あります。

四62 「ごいんきよさま、その
お年でつき木をなさるのです
か。」

四64 《略》、下男の太七がわら
ひながら、「《略》。」といったさ
うです。その時おちいさんは
「《略》。」とおつしやつたといふ
ことです。

四192 コノ神様モ、「《略》。」ト
オタツネニナリマシタ。白ウサギ
ハ《略》、又ソノワケヲ申シ上
ゲマシタ。

四201 《略》、ガマノホヲシイ
テ、ソノ上ニコロガレ。

四203 スルト神様ハ「《略》。」ト
ヨシヘテ下サイマシタ。白ウサギ
ガソノ通りニシマス、ト、《略》。
四214 《略》、「《略》。」ト申シ上ゲ
マシタ。ソノ後大國主ノ神ハ、

白ウサギノイツタ通り、エライ
オ方ニオナリニナリマシタ。

四二七 略 其の物屋くすり屋さ
か屋さかな屋、そのほか大きな
店はいくつも電とうをつけま
した。

四三八 フクロフガ鳴クト、其ノ
明クル日ハ天氣ガヨイカラ、
略。

四四一 たんすをうごかすと、其
のうしろから物さしと花子の
お手玉が出ました。

四五二 此のあひだひかうせん
が東京の空をとびました。こ
れは其のゑはがきです。

四五三 ニハニ大工小屋ヲタテ、
大ゼイノ大工サンガ毎日其ノ
中デ仕事ヲシテ居マス。

四六六 見ればへさきに長いさを
を立てて、其のさをの先には、
ひらいた赤い扇がつけてあり
ます。

四六八 略、其のさをの先には、
ひらいた赤い扇がつけてあり
ます。一人のくわんぢよが其の
下に立つて、略。

四六九 げんじの大しやうよしつ
ねは略、「略。」とたづねま
した。其の時一人の家來がす
すみ出て、略。

四七三 私ハ略 おちいさんや
おばあさんを其のわかい時か

ら知つて居ました。

四七四 略 金持のむすめさん
が、此の人の所へおよめに
來ましたが、其の時はなかなか
にぎやかなことでした。

四七八 略、日がくれてから村
へはいりました。其の後間も
なく死んだのです。

五九七 略 八岐の大蛇が來て、
毎年一人づつたべました。略、近
い中に又其の大蛇がたべにまゐりま
す。

五一〇 頭が八つ、尾が八つある
大蛇で、略。「よし。其の大蛇を
たいぢしてやらう。」

五一一 酒が出來ると、みことは
略、八岐の大蛇の來るのを待つて
いらつしやいました。間もなく大蛇
が來て、略、其の強い酒を飲みま
した。

五一八 略、むかし神武天皇が略、
わるものどもが強く、おこまりに
なつたことがある。其の時一天には
かにかき曇つて、ひようがひどくふ
り出すと、略。

五二七 略 鶏の光がまるでいなり
のやうで、わるものどもは略、
おそれみんなにげしまつたさう
だ。其のいはれで、略。

五二六 略、鯉が略、家のむね
よりも高く尾を上げます。其の尾を
下して來て、さをに着けるかと思ふ

と、略。

五二八 其の尾を下して來て、さをに
着けるかと思ふと、又はらをふくら
ませて、をどり上ります。其のたび
に、鯉のかげが地の上をおよぎます。

五三三 此の時の氣もなく自分のう
ちを見て、その小さいにおどろき
ました。

五四六 天皇は日本武尊にこれを
征伐せよとおほせられました。尊は
其のころ、やまとをぐなといふ御名
で、略。

五四二 略、間もなくたけるが新し
い家を造つて、人々をあつめて、其
の祝をしました。

五四四 略、間もなくたけるが新し
い家を造つて、人々をあつめて、其
の祝をしました。尊は略、其の
家の中へおはいりになりました。

五四六 なめてみると、酒のあぢがい
たします。喜んで、それから毎日
其の酒をくんで來て、略。

五五八 天の橋立は海中へつき出た細
長い洲で、略。其の洲の白い砂の
上に、青い松が一面に立つてゐて、
略。

五五九 昔此の村はひどく貧乏で、
略。此のあたりの青田も、其の頃は
大でいあれ地で、其の杉山なんぞ
は、木もろくにない草山だつたとい
ふことだ。

五五八 略、其の杉山なんぞは、木

もろくにない草山だつたといふこと
だ。

五七〇 着手は來年からといふことに
なつて、庄屋は方々の村へ用水池を
見に出た。略。いよく其の年にな
つて、略。

五七三 庄屋は略、土手をつきな
ほしたが、略、其の年のつゆに、
又土手がくづれて、略。

五七四 略、もう一度土手をつきな
ほした。其の賃錢をみんな庄屋が自
分のふところから出した。

五七八 其の賃錢をみんな庄屋が自
分のふところから出した。略、其の
ために田を賣り、畠を賣り、略。

五七二 略、庄屋の妻は子どもをつ
れて里へ歸つてゐた。其の後村の人
は、略、妻や子どもに、もとの家
へ歸つてもらつた。

五八六 略、間もなく火の見で半
しやうをうち出しました。其の時表
で水だくとさげぶこゑがしました
ので、略。

五九二 郵便物をあつめる人は、毎日
きまつた時刻に來て、私のおなかを
明けて持つて行きます。其のあつめ
に來る頃に、略。

五九六 熊が來て、からだ中かぎまは
しましたが、略、其のまま行つて
しまひました。

六二六 うちでも土間に丸太を置いて、
其の上につんであります。

- 六71 〔内地では甲斐^{かみ}の白根で、一万五百尺。〕其の次は。』
- 六10 金や銀ハ美シクテ、オアシニナツタリ、指ワニナツタリ、其ノ外イロ／＼ナカザリ物ニナリマスガ、〔略〕。
- 六11 〔略〕、湯ヲワカス私モ、私ノ乗ルゴトクモ鐵デス。其ノ外、釘ヤ針ノヤウナ小サイ物カラ、キクワシ車・軍艦ノヤウナ大キナ物マデ、〔略〕。
- 六13 〔略〕、ヤクワンハ之ヲ聞イテ、〔略〕。』ト言ヒマシタ。其ノ時鐵ピンハ〔略〕。』ト言ツテ、中々マケマセンデシタ。
- 六13 〔略〕アレガヤハリサビデス。シカモ其ノサビハ大ソウ毒ナ物デス。
- 六15 〔略〕僕が紅色のきれいなきのを取つて、にいさんに見せましたら、〔略〕。毒だよ。其の手でぐみをたべてはいけない。』と、にいさんが言ひました。
- 六23 〔略〕両方からおしよせて、ぢんの間がわづか三町ばかりになりました。其の夜のことです、〔略〕。
- 六25 〔略〕親が落ちれば其の子も落ち、弟が落ちれば兄も落ち、〔略〕。
- 六27 〔略〕大きな虎が山おくて、〔略〕。』とひとりごとを言ひました。其の時「あはゝ。」と笑ふものがありました。
- 六41 〔略〕どの町村からも、歩兵が一番多く出てゐるのに、ふしぎと私の村からは私一人だ。其の代り輜重兵の外は各種の兵が出てゐる。
- 六45 〔略〕鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ魚デモアル。其ノワケハ、川デ卵カラカヘツテ、海デ大キクナルカラダ。
- 六46 〔略〕頭ヤ尾デ穴ヲ掘ツテ、其ノ中ヘ卵ヲ産ム。
- 六47 〔略〕、産ンデシマフト、其ノ上ニ砂ヤ小石ヲカブセル。
- 六47 〔略〕、産ンデシマフト、其ノ上ニ砂ヤ小石ヲカブセル。サウシテ〔略〕、シバラク其ノアタリニ番ヲシテキテ、〔略〕。
- 六52 〔略〕、十二番の舞がめでたくすみました、其の中で人に人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。
- 六52 〔略〕、其の中でことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。〔略〕。其の五番目の舞姫といふのは、かの萬じゆの姫であつたのでございます。
- 六55 〔略〕義仲からは〔略〕大切な刀を送つてよしました。光盛の娘は其の後、夜晝頼朝をねらひましたが、〔略〕。
- 六56 〔略〕かへつて、〔略〕刀を見つけてられてしまひました。頼朝は其の刀に見おぼえがあつたのでございます。
- 六56 〔略〕唐糸といふのは此の女のことでございます。唐糸には其の時十二になる娘がありました。
- 六60 〔略〕三月二十日、〔略〕、御殿は人少でございます。萬じゆは其の夜ひそかにうばをつれて、〔略〕。
- 六62 〔略〕やがてうばをも呼入れて、三人は其の夜をなみだの中に明かしました。
- 六63 〔略〕これから後萬じゆは、〔略〕、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。さうして其の明くる年の春、舞姫に出ることになつたのでございます。
- 六66 〔略〕或村に大火事があつて、一村ほとんど丸やけになつた。其のとなり村の青年たちが見かねて、〔略〕。
- 六68 〔略〕さて主人に火事の話をして、義捐金のことをいひ出すと、「それはお氣の毒だ。』と言つて、たくさん金を出した上に、〔略〕。其の歸り途中で、青年たちは〔略〕。
- 六73 〔略〕、川原が遠く北につゞいて、其のさきにやさしい姿の山がからすんで見えます。
- 六73 〔略〕賀茂川は水が多くないので、船は通りませんが、其の代りに水がいたつてきれいで、染物にむいてゐます。
- 六76 〔略〕「イ、エ、ヤハリ毛絲デオツタ物デス。〔略〕。』其ノキレイナモヤウハ、ドウシテツケルノデセウカ。』
- 六83 〔略〕通有は〔略〕。味方は後からく／＼とつゝいた。さん／＼に切りまくつて、其の船の大將を生けどりにして引上げた。
- 六83 〔略〕、其の船の大將を生けどりにして引上げた。其の後も攻めよせる者がたえないので、敵は一先づ沖の方へしりぞいたが、〔略〕。
- 六96 〔略〕、賊は大きなはしごを作つて、之を城の堀に渡して橋にした。〔略〕、其の上を賊が我先に渡つた。
- 六96 〔略〕すると正成は、〔略〕、たくさんなたいまつを出して、〔略〕、橋の上に投げさせた。さうして其の上へ油をふりかけさせた。
- 六98 〔略〕村の學校のげんくわんの向つて右の落葉松は、わたしの子どもが植ゑたので、其の子はとうに戦死した。
- 六103 〔略〕其の後おさきりもございませんか。
- 七12 〔略〕われらが住む世界は、其の形まるくして、球の如し。
- 七4 〔略〕地球の上には大小合はせて六十餘國あり。其の中我が大日本帝國と、〔略〕を世界の五大強國といふ。
- 七17 〔略〕、細長い田には細長く、田の形其のまゝに紅紫のまうせんをしきつめたやうに見える。
- 七20 〔略〕すると、〔略〕稻村崎は、其の夜の月の入る頃に、二十餘町にはかに干上つて砂地にかはり、〔略〕。
- 七21 〔略〕義貞は之を見て、〔略〕、其の

遠千がたを眞一文字に鎌倉さして攻めこみました。

七23 4 〈略〉、村の人は之を傘松と呼んでゐる。其の松の下に石できざんだ地蔵様が立つていらつしやる。

七25 4 塚の前に馬頭觀世音とほつた石が立つてゐて、其の前に時時新しい馬のくつが上つてゐる。

七28 5 大阪へ昔に徳天皇ノ都シタル煙ノ少キヲ見テ、〈略〉。

七36 2 通は廣くて平で、歩道と車道の間に並木が植ゑてありますが、此の頃は其の葉の美しいさかりです。

七36 7 人口はおよそ十一萬、其の中日本人は五萬人、〈略〉。

七41 2 軍人をのせた御用船が今しも港を出ようとした其の時、〈略〉、前へ出るおばあさんがある。

七41 8 御用船を見つけると、「一太郎やあい。其の船に乗つてゐるなら、鐵砲を上げる。」とさげんだ。

七50 2 私ノ近所二年ヨリノカジ屋ガアリマシタ。〈略〉。私ハ時々其ノ仕事場へ行ツテ見マシタ。

七51 6 イカニモ丈夫サウナ老人デシタガ、去年ノクレニ死ンデシマヒマシタ。其ノ時分マデ、ヨソヘ奉公ニ行ツテキタ若イムスコガ、〈略〉。

七51 7 其ノ時分マデ、ヨソヘ奉公ニ行ツテキタ若イムスコガ、今デハ其ノ後ヲツイデ、〈略〉。

七52 3 遠洋航海を終へて、郷里に歸り來れる太平丸の船長は、一日其の町の學校へまねかれて、航海の話なせり。

七53 2 私ハ年中航海をしてゐるものですから、少し其のお話を致します。

七54 8 〈略〉、月夜には波が銀色に光つて、其の美しいことは何ともいひやうがありません。

七56 4 船長はコツプの水を一口飲み、又其の話をつづけた。

七61 1 皆さんのうちには、大きくなつてから、商用其の他で、外國へ出かける人もあります。

七67 1 「落し物をしましたから。」といひくかけ出します。人夫は其の男のたもとをおさへて、「〈略〉。」

七73 1 どうかすると、其の日のくらしにこまるやうなこともあります。

七75 5 紀州の男は急いで國へ歸つて、其の金をまちがひなくとゞけるやうに致せ。

七78 5 信長はかるくうなづいたが、其の後間もなく藤吉郎を草履取から引上げて役人の數に入れた。

七79 3 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤ其ノ外イロくノ動物ガスンデ居リ、〈略〉。

七87 3 〈略〉、先ツ綠色ノモノハ淺イ所ニ、紅色ノモノハ深い所ニ、茶色

ノモノハ其ノ中間ニ生エテキルノデアル。

七87 9 〈略〉、海藻ハ養分ヲ其ノ體ノ全面カラ吸取ルノデアル。

七107 1 切つてく切りまくり、其の勢で明の都へおしよせ、〈略〉。

七108 4 彼岸ハ七日ノ間ニシテ、其ノ中日ニ、春ハ春季皇靈祭、秋ハ秋季皇靈祭ヲ行ハセラル。

八9 8 信作はつるりとすべり落ちて、其のはずみに、ころく池の中へころげこんだ。

八13 8 〈略〉、家康は小勢の方へ行けと命じた。家來があやしんで、其のわけをたづねると、〈略〉。

八14 8 徳川家康が大坂城を攻めた時、其の子頼宣は〈略〉。

八19 3 揚子江ハ支那第一ノ大河ニシテ、其ノ長サ一千三百里、〈略〉。

八19 6 第五 揚子江 〈略〉。我が國第一ノ長流鴨綠江ノ如キハ實ニ其ノ支流ニモ及バザルナリ。

八20 8 〈略〉、之ライカダニ組ミテ河ヲ下スコトアリ。〈略〉。其ノ家ヲ出デテヨリ、イカダヲトキテ木材ヲ賣ルニ至ルマデ、一年ノ長キニワタルコト珍シカラズトイフ。

八23 3 ちやうど蕃人が、其の前の年に取つた首が四十餘ありましたので、〈略〉。

八23 5 ちやうど蕃人が、其の前の年に取つた首が四十餘ありましたので、

それをしまつて置かせて、其の後のお祭には、毎年其の首を一つづつ供へさせました。

八23 5 〈略〉、其の後のお祭には、毎年其の首を一つづつ供へさせました。

八25 5 〈略〉、赤い着物を着た人が來ました。〈略〉、蕃人どもは、すぐに其の人を殺して、首を取りました。

八26 2 さて蕃人どもは、呉鳳を神にまつて、其の前で、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。

八26 4 さて蕃人どもは、〈略〉、〈略〉とちかひました。さうして今も其の通りにしてゐるのだといひます。

八29 9 或日炭を焼く男が太郎のうちへ來て、〈略〉。此の時太郎が、炭はどうして焼くのかときくと、其の男はていねいに教へてくれた。

八30 4 先づよい場所を見立てて、〈略〉小屋を建てる。次に其の小屋のそばへ土と石でかまをつく。

八31 4 〈略〉、それをぎつしりとかまの中に立て並べ、よくもえるやうに其の上下にそだを置き、〈略〉。

八31 5 〈略〉、よくもえるやうに其の上下にそだを置き、又其の上になつたかま土を置いて、打固める。

八32 6 山野に生ずる草木の中には、薬用にするものが多くありますが、其の中貴重なもの一つは朝鮮人參です。

八32 9 〈略〉、其の中貴重なものの一

つは朝鮮人^{にんじん}参です。〈略〉。さうして其の栽培については次のやうな話もあります。

八34 〆 〆 明日何山の何所へ行けば、望のものをさつてやるといふ神様のお告がありました。婦人は〈略〉、すぐに其の山へ上りました。

八36 〆 〆 見なれない草に、眞赤な美しい實が一つなつてゐました。婦人は、〈略〉、其の實を取つて来て、庭先の畠の中にまきました。

八35 〆 〆 一 子ども争 〈略〉。越前守は〈略〉、「其の子を二人の眞中に置いて、両方から子どもの手を取つて引合へ。〈略〉。」といひました。

八36 〆 〆 勝つた方へ其の子を渡す。

八37 〆 〆 彼女、其の手を放せ。

八39 〆 〆 越前守は手代の言ふ所を聞いて、「其の方の申す所では、どうやら其の地藏がうたがはしい。

八42 〆 〆 一同は驚いて、〈略〉、大さわざでございます。しばらくして、其の中のおも立つた者が出て、いろ／＼おわびを致しますと、〈略〉。

八42 〆 〆 「しからば許してつかはすであらうが、其の代りと致して、白木綿を一反づつ、名札をつけて、三日の間に間違なく持参致せ。」

八43 〆 〆 〆 一同は白木綿を一反づつ持つて参りました。越前守は〈略〉、其の中に盗まれた品のありなしを調べさせました。

八43 〆 〆 越前守は〈略〉、其の中に盗まれた品のありなしを調べさせました。すると其の中に二反ありました。

八43 〆 〆 すると其の中に二反ありました。そこで其の反物を出した者を呼出して、買先をたゞし、〈略〉。

八46 〆 〆 〆 其の後どうかと案じてゐましたが、手紙を見て安心しました。

八50 〆 〆 〆 巢ハ〈略〉、〈略〉絶壁ノ間ヤ老木ノ上ニ、タテ横ニ小枝ヲ並べ、其ノ上ニヤハラカナコケヲ置クダケデアル。

八53 〆 〆 〆 せいろうから、ゆげが上るまでに、少し間があつた。其の時にいさんが「〈略〉。」といひ出すと、〈略〉。

八60 〆 〆 〆 彼ノ焼^い薩屋ノ看板ニ、八里半ト記セルモノノ如キハコレニシテ、其ノ味クリニ近シトイフ意ナリ。

八62 〆 〆 〆 保己一の家は今の東京、其の頃の江戸の番町にありて、〈略〉。

八79 〆 〆 〆 これは縣の税で、縣立の學校や病院や、其の他道路などの費用になります。

八80 〆 〆 〆 軍隊や、裁判所や、外國とのつきあひや、其の他いろ／＼の費用になるのです。

八96 〆 〆 〆 此所ニ名高キ名古屋城アリ。〈略〉、其ノ天守閣ハ加藤清正ノキツキシ所ナリ。

八96 〆 〆 〆 天守閣ニハ棟ノ兩端ニ金ノシヤチホコアリ。其ノ高サ八尺五寸、

九99 〆 〆 〆 中佐、飛來る彈丸^{たま}に忽ちうせて、旅順港外うらみぞ深き、軍神廣瀬と其の名残れど。

八102 〆 〆 〆 君等は〈略〉、此の數日の間少しも食物を送つてよこしませんでした。其の爲に新しい血が出来なくなつて、〈略〉。

八105 〆 〆 〆 分業で造ると、其の出来がよいばかりでなく、出来高がたいそう多くて、〈略〉。

八112 〆 〆 〆 大將の父は途々義士のことを大將に話してきかせて、其の墓に参詣したのである。

八113 〆 〆 〆 大將が何か食物の中にきらひな物があると見れば、三度三度の食事に、必ず其のきらひな物ばかり出して、〈略〉。

八114 〆 〆 〆 大將が馴れるまで、うち中の者がそればかり食べるやうにした。其の爲、大將には全く食物に好ききらひといふものがないやうになつた。

八114 〆 〆 〆 大將の一家は郷里へ歸ることになつた。其の時大將は江戸から大阪まで、馬やかごに乗らず、〈略〉。

九5 〆 〆 〆 内地から来て先づ目につくのは植物で、其の中でも殊に珍しいのはコ、椰子^{やし}の木やパンの木などです。

九5 〆 〆 〆 大きな葉が、幹の上

の方に集つてついてをり、其の葉の根本には、〈略〉實がすぐなりになつてゐます。

九5 〆 〆 〆 實の中にはかたい殻^かがあつて、其の内がはに白い肉のやうなものがあつてゐます。

九6 〆 〆 〆 又パンの木も所々に美しい林をつくつてゐます。其の實は土人の一番大事な食料で、〈略〉。

九7 〆 〆 〆 殊に毎日のやうに降るにはか雨が、〈略〉。水の乏しい此の島々では、其の雨水がまた大切な飲料水となるのです。

九10 〆 〆 〆 〆 御船少しも進まず、今にもくつがへらなばかりなりき。

其の時、御供にしたがひ給へる弟^{あに}橋媛^{はしむね}、尊の御身危しと見給ひ、〈略〉。

九11 〆 〆 〆 其の時、〈略〉弟^{あに}橋媛^{はしむね}、〈略〉、きぬの敷物八枚を波の上に敷重ね、其の上に飛下り給へり。

九12 〆 〆 〆 妹は餌箱^えを持ちて、とやの前に来る。親どりどもすぐに見つけて、其の足もとにむらがる。

九13 〆 〆 〆 妹は餌をつかみて、わざと少しはなれたるきりの木のあたりにまきちらせば、鶏はあわてて其の方へ行く。

九14 〆 〆 〆 〆 しづみの殻^かを取出し、細かに打ちくだく。其の音を聞きつけてかけ来り、〈略〉、すばやくつてばみたるは眞白なるめんどりなり。

九181 保護色ヲモツテキル上ニ、其

ノ動物ノ姿勢ニヨツテ、形マデマハリノ物ニ似テ見エルモノモアル。

九185 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、其ノ色ガ桑ノ木ニ似テキルバカリデナク、〈略〉。

九1810 又沖繩ニ産スル木ノ葉蝶ハ、其ノ羽ノ表ノ方ニハ美シイ色ドリガアルガ、〈略〉。

九228 四代前の歎庵様が、〈略〉、始めて農學をお修めになり、〈略〉。それから元庵様・不昧軒様、二代つゞいて、其のお志をおつぎになり、一そう研究を進められた。

九234 ところで此の父も、何とぞ此の學問を大成したいと、〈略〉、寢食を忘れて其の道の書物を読み、〈略〉。

九257 此の方々のお書きになつたものは、大い此所に持つてゐる。其の本については、後に又言聞かせるが、〈略〉。

九282 此の老人こそは出羽の國の醫者佐藤信季、少年は其の子信淵である。

九283 これは今から百三十年ばかり前に、下野の國足尾山中の旅人宿で起つた事で、〈略〉。信季は其の後幾日かたつて、とう／＼此の宿でなくなつた。

九296 〈略〉、海のやうな湖から流れる大きな河が、一大絶壁をみなぎり落ちるのですから、其の壯觀はとて

も筆や口にはつくされません。

九451 かくノ如ク物ニ價アルハ、其ノ物ガ人ノ爲ニ有用ナルト、意ノ如クニ得ラザルトニヨルナリ。

九454 又コ、二匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、其ノ五人ハ、〈略〉、争ヒテ高キ價ヲツク。

九454 又コ、二匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、〈略〉、各其ノ馬ガ他人ノ手ニ渡ランコトヲ恐レテ、〈略〉。

九458 之ニ反シテ、同ジヤウナル馬五匹アリ、其ノ持主ハ別々ニテ、買ハントスル人タゞ一人ナルトキハ、〈略〉。

九4510 同ジヤウナル馬五匹アリ、〈略〉、買ハントスル人タゞ一人ナルトキハ、五人ノ持主各其ノ馬ノ賣レザランコトヲ恐レテ、争ヒテ價ヲ下グ。

九462 五人ノ持主各其ノ馬ノ賣レザランコトヲ恐レテ、争ヒテ價ヲ下グ。〈略〉、最モ價ヲ下ゲタル持主、其ノ馬ヲ賣ルコトナル。

九463 かくノ如ク、品物多クシテ、之ヲ望ム者少ケレバ、其ノ物ノ價安クナリ、〈略〉。

九465 品物少クシテ、之ヲ望ム者多ケレバ、其ノ物ノ價高クナル。

九481 昨夜は手つだひの人

たちを呼んで、ごちそうをしました。

其の時おとうさんがいさんと、「〈略〉。」と話していらつしやいました。

九518 始は近在の小賣店へ、毎日々々、〈略〉、おろしに歩き廻つたものださうだが、其のつらさはとてもお前たちにわかるものではない。

九529 あの社長さんはもと上方の人で、〈略〉。さうして人々に推されて、町の銀行の頭取になつた。

〈略〉。うちのおぢいさんはよく其の話をなすつては、大へんほめていらつしやつたものだ。

九5510 おとうさんは〈略〉。「〈略〉。全くあんな人は珍しい。」とお話になりました。僕は今日其のえらい社長さんに會つて來たのだと思ふと、何となくうれしい氣がしました。

九6010 艦橋には當直將校の姿が見え、其のそばには、〈略〉。信號兵が遠くを見張つてゐる。

九637 千數百人の乗員が號令にしたがつて、規律正しく活動する其の様は、如何にも目ざましい。

九655 水兵が、甲板をこすりながら頭を並べて進んで行く其の様は、まるで雨後の蛙がむらがり飛んでゐるやうである。

九722 八百年前の建物で、今も韃

堂の中に其のまゝ保存されてゐる。

九8710 あ柄でない方の端にある

二つの星を結びつけて、其の線を、ひしやくの口の向いてゐる方へのばして行くと、〈略〉。

九901 西洋では昔から、あの七つの星と其の近所の星を一しよにして小熊の形を想像し、〈略〉。

九903 西洋では昔から、〈略〉、北斗七星と其の近所の星を一しよにして小熊の形を想像して、〈略〉。

九908 小熊座と大熊座について、面白い昔話があるはずだから、ねえさんに聞いてごらん。」信吉は〈略〉、「ねえさん、どうぞ其の話を聞かせて下さい。」と頼みたり。

九932 信吉は兄と姉とに謝して、楽しく其の夜のゆめに入れり。

九9510 木の枝などを櫓にして、此の雪溪をすべつて下る人があります。僕も其の通りになつて見ましたが、〈略〉。

九1004 向ふの畠には、たうのいもが作つてゐる。其の隣の畠にしやうがが、ぎやうぎよく並んでゐるのも美しい。

九1047 中尉の固く結んだ口もと、するどい目の光、其の様子がどうも一通りでない。

九1067 しかしとう／＼恐ろしい日が來た。其の日の戦は果して今までになくはげしかった。

九1072 敵の砲兵が放列をしいてゐる。味方は其の正面から眞一文

字に進んで行く。

九一〇 〇 略、怪獸のやうな大砲、其のまはりにむらがる人かげが見えて来る。

九一〇 八 中尉は「略」、「略」と叫んだ。ちやうど其の時、敵の砲弾が近くで破れつて、略。

九一〇 九 略、敵の砲弾が近くで破れつて、其の破片がびゅつと北風のたてがみをかすめた。

九一〇 四 北風は驚いてすぐに立止らうとしたが、略、思はず其の場から數十間も進んでしまった。

九一〇 三 主人の姿を見つけると、静かに其のそばに立止つた。

九一〇 一 しかし聞えるのはかすかな息づかひばかりであつた。ちやうど其の時、はるか遠方で味方の萬歳の聲がわき起つた。

九一〇 〇 或日 略 一水兵が、女手の手紙を読みながら泣いてゐた。略 某大尉が之を見て、略、「略」。軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、其の有様は何事だ。

九一〇 一 或日 略 一水兵が、女手の手紙を読みながら泣いてゐた。略。水兵は略、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、略、其の手紙を差出した。

九一〇 二 候 村の方々は、略、親切におほせ下され候。母は其の方々の

顔を見る毎に、そなたのふがひなき事が思ひ出されて、略。

九一〇 九 〇 略、おあさんは、『一命を捨てて君恩に報いよ。』と言つてゐられるが、まだ其の折に出會はないのだ。

九一〇 八 〇 略、其のうちに花々しい戦争もあるだらう。其の時にはお互に目ざましい働をして、略。

九一〇 五 〇 略、シカシ今度ノ候補者ノ中ニ、略、アノ人ナラバト思ハレル人ガアルカラ、オトウサンハ最初カラチヤント其ノ人ニキメテキタ。

九一〇 四 〇 略、ソナナエライ方ナラ、略 大丈夫デセウ。」「イヤ、其ノ人ガ當選スルコトハウタガヒナイガ、略。

九一〇 三 〇 略、當時の御殿・御庭などの、今も其のまゝに保存せらるゝなりとぞ。

九一〇 二 〇 略、昔ヨーロッパにアレクサンドル大王といふ王があつた。略。其の大王が東方諸國の遠征に出かけた時の事である。

九一〇 一 〇 略、再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出来た。

九一〇 〇 〇 略、私どもの若い時分には、略、あなたの方の半分ぐらゐしか働きませんでした。略。皆さんの前に立つと、其の頃の心掛が恥づかしくてなりません。

九一〇 〇 〇 略、はじめて青年團の規

約を見た時は、其のとゝのつてゐるのに驚いて、略。

九一〇 八 〇 略、せり場を中央にして、其の周囲は馬つなぎ場になつてゐます。

九一〇 七 〇 略、中には、君ぐらゐの子供や、其のおかあさんらしい人が、今日の別れを惜しんで、略。

九一〇 六 〇 略、せり場の一方に高い臺があつて、其の上に掛の人が居る。

九一〇 五 〇 略、買手は、略、次第にせり上げる。其の間、買手の競争する聲と掛の人の聲と入亂れて、略。

九一〇 四 〇 略、さうして、もうこれが最高の直だと見ると、掛の人が其の直で賣渡すといふあひづに手を打つて、略。

九一〇 三 〇 略、取引の成立つた馬は、其の日の中に買手に引渡されてしまひます。

九一〇 二 〇 略、此の町では、二歳駒の市が十日間も續いて、其の間には千頭からの賣買があり、略。

九一〇 一 〇 略、英國の東海岸にロングストーンといふ島がある。其の一角にそびえてゐる燈臺に、略。

九一〇 〇 〇 略、年とつた燈臺守が、妻と娘と三人で、わびしく其の日を送つて居た。

九一〇 〇 〇 略、娘の勇ましい行爲は、歌に歌はれ、其の肖像畫は到る處の店頭に

飾られた。

九一〇 〇 〇 略、パナマ地峡は一體に小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。其の外にもいろ／＼の理由があるので、略。

九一〇 〇 〇 略、柿の色の美しさに打たれて、もう立つても居ても居られなくなつたのである。喜三右衛門は、其の日から赤色の焼付に熱中した。

九一〇 〇 〇 略、一年と過ぎ二年とたつうちに、其の日の暮しにも困るやうになつた。

九一〇 〇 〇 略、喜三右衛門は、略、やがて「よし。」と叫んで火を止めた。其の夜喜三右衛門は窯の前を離れないで、略。

九一〇 〇 〇 略、柿右衛門は略、其の名は遠く西洋諸國にまで聞えてゐる。

九一〇 〇 〇 略、便利だが、その代り利子が安い。

九一〇 〇 〇 略、貸附の利子は預金の利子より高くしてあるから、其の差だけが銀行の収入になるのだ。

九一〇 〇 〇 略、今では各國共に盛に傳書鳩の改良に力を用ひ、其の飼養を奨勵してゐる。

九一〇 〇 〇 略、飼養所から食事所へ通つて食物を取るやうに馴らして、其の往來を利用するのである。

九一〇 〇 〇 略、鳩に手紙を運ばせるには、足に略、細いくだを附け、又は胸に袋を掛けさせて、其の中に入れるの

である。

十584 傳書鳩を利用する場合はなかなか多い。〈略〉。又戦争の時戦線から戦状を報じたり、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。

十592 あゝ、あのかはいゝ鳩が、〈略〉、矢のやうに目的地へ向つて飛んで行くのを見たならば、何人も其のかしこさと勇ましさに感心しない者はあるまい。

十6610 私はもと鉢の木がすきで、いろ／＼集めた事もありましたが、〈略〉、大てい人にやつてしまひました。しかし此の三本だけは、其の頃のかたみとして、大切に殘して置いたのでございますが、〈略〉。

十674 主人は三本の鉢の木を切りてゐるにたきぬ。僧は其の厚意を深く謝し、さて「〈略〉。」

十716 これは何時ぞやの大雪に宿を借りた旅僧であるぞ。其の時の言葉にたがはず、眞先かけて参つたは感心の至り。

十721 又寒夜に秘藏の鉢の木を切つてたい志は、何よりもうれしく思ふぞ。其の返禮として「〈略〉、合はせて三箇所の地を汝に授ける。

十7310 京城の市街は、〈略〉、高い城壁で圍まれ、その處々にかういふ門があつて、〈略〉。

十754 此處には〈略〉京城神社があり、又其の近くに朝鮮總督府がある。

ります。

十761 松林を後にして右に昌徳宮、左に景福宮の壯大な構がある。其の手前は一帶に朝鮮家屋で、

十762 其の手前は一帶に朝鮮家屋で、其の又手前には朝鮮ホテル・〈略〉などのりつばな洋館がそびえてゐる。

十784 面白いのは、三日四日續いて寒ければ、其の次には又其のくらの間暖さが續くといふやうに、

十784 面白いのは、三日四日續いて寒ければ、其の次には又其のくらの間暖さが續くといふやうに、〈略〉。

十842 採炭坑夫は四人づつ一組になつてゐて、其の内の二人が石炭を掘崩すと、〈略〉。

十884 これらの製品は〈略〉、又支那・印度其の他の東洋諸國へ輸出される。

十932 「本道は遠いから近道を通らう。」と正雄が言ふと、〈略〉。其の近道といふのは田のあぜ道で、

十945 父は「〈略〉。」とたづねたが、太郎はだまつてゐた。其の夜又父に強く聞きたゞされて、〈略〉。

十947 太郎はやつと今日の次第を有りのまゝに話した。父は「なぜ其の時『〈略〉。』と、きつぱり

ことわらなかつたのか。」

十972 宋の臣文天祥、大いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。其の友之を止めてはいはく、

十1002 天祥はいはく、「〈略〉。」と。帝其の志の動かすべからざるを知り、

十1059 〈略〉、ガラス越しに見える向ふの木がひどくゆれる。其の枝の先にしよんぼりと止つてゐる鳥の姿も、見るから寒さうだ。

十1132 マストの上の見張人が〈略〉、北の方を指さした。〈略〉十人許の乗組員は、ひとしく目を其の方向に向けた。

十1136 砲手は此の時早く船首の砲後に立つて、其の引金に手をかけた。

十1159 〈略〉、さすがの鯨も次第に弱つて、船から五十メートルぐらゐの處まで引寄せられた。其の時、二番もりが打出された。

十1189 白梅は今やうど眞盛りであるが、其の間に咲きかけの紅梅が點々と交つて美しい。

十1253 又池・沼を利用して鯉・鮒を養ふことも盛にして、大てい二年毎に之を賣るに、其の利益少しとせず。

十1255 かくの如くなれば全村頗る豊にして、村民皆其の家業を樂しめり。

十1262 校長も着實温厚なる人にして、〈略〉。其の他の教員も、校長を模範として専心職務につとむるが故に、〈略〉。

十1266 青年團の事業の一として、杉・檜の植林を営めり。其の利益は、大部分を學校の基本金とし、〈略〉。

十1267 其の利益は、大部分を學校の基本金とし、其の殘部を一村共同の有益なる事業の費用にあつて計畫なり。

十1271 〈略〉、一村は誠に平和にして、年を追うて其の繁榮を増すばかりなり。

十119 〈略〉太陽とは、一體どんなものであらう。〈略〉。さうして其のさしたは三十五萬四千里、即ち地球の百九倍餘りに當り、〈略〉。

十1110 〈略〉太陽とは、一體どんなものであらう。〈略〉、其の容積は地球の百三十萬倍に當つてゐる。

十1133 此の黒點は多分表面に生ずるうづ巻であらうといふ。さうして其の數や大きさは、〈略〉。

十1138 つまり此の宇宙には、あの太陽のほかに、これと同じやうなものがある數限りもなく存在してゐるが、たゞ其の距離の遠いために、

十1140 孔子は〈略〉。〈略〉、長じて後魯の君に仕へ、大いに治績を

十1140 孔子は〈略〉。〈略〉、長じて後魯の君に仕へ、大いに治績を

- 擧げしかども、〈略〉、久しく其の職に居ることあたはずして魯を去りぬ。
- 十一 6 1 図 門人三千人、其の最もすぐれたるもの、顔淵・〈略〉等七十二人なりき。
- 十一 6 3 図 論語は、〈略〉が孔子及び其の高弟の言行を集録したるものにして、〈略〉。
- 十一 6 5 図 論語は、〈略〉、最もよく此の大聖の面目をうかがふを得べし。今此の書によりて其の一端を述べん。
- 十一 6 7 図 孔子は正義の念強き人なりき。其の言にいはいはく、〈略〉。
- 十一 7 3 図 又きはめて學問に熱心にして、其の好學の念の切なる、〈略〉。といふに至れり。
- 十一 7 7 図 孔子は他人を正す前に先づおのれを正し、近きより遠きに及すを以て其の主義としたり。
- 十一 7 10 図 かつて自らいはいはく、〈略〉。と。其の身を忘れ、よはひを忘れて、人生の爲に盡くしたる大聖の面目、〈略〉。
- 十一 8 7 図 〈略〉、黄浦江といふ支流に入り、更に十海里餘りさかのぼると、其の西岸にある上海に着く。
- 十一 9 4 図 〈略〉、言語・風俗の違つた幾多の人種が入交つてゐるので、其の有様は一見世界人種の展覧會のやうである。
- 十一 9 9 図 〈略〉、銀行・會社等のりつぱな建物がそびえてゐる。其の外各

- 種の學校や、〈略〉等の修養機關、〈略〉等の娛樂機關が到る處に散在してゐる。
- 十一 11 8 図 〈略〉、紡績・造船・製粉・製紙其の他の諸工場が勢よく黒煙を立ててゐる。
- 十一 15 4 一年生の時からの成績物も見せていたゞいて、其の始末のよいのに感心してしまひました。
- 十一 19 2 例へば、借りた金を、〈略〉、返さない人がある。其の場合に貸主から借主を裁判所に訴へると、〈略〉。
- 十一 19 4 図 〈略〉、裁判所は〈略〉、貸主の主張を正當とみとめれば、其の借金を返すやうに借主に命ずる。
- 十一 19 9 図 〈略〉犯罪があつた場合には、國家は其のやうな不法な行が再びされないやうに、其の犯罪者をこらし、〈略〉。
- 十一 19 10 図 〈略〉犯罪があつた場合には、國家は〈略〉、其の犯罪者をこらし、〈略〉。
- 十一 20 2 ところで、どういふ事をすれば罪になるか、其の制裁としてどのやうな刑罰を受けるかは、〈略〉。
- 十一 21 2 図 〈略〉、區裁判所の裁判に不服な者は地方裁判所に上訴し、尙其の裁判に不服な者は更に大審院に上訴する。
- 十一 21 10 図 又民事裁判では、原告・被告の相談相手・附添人又は代理人となつて其の主張を助け、〈略〉。

- 十一 22 5 裁判の目的は、〈略〉。此の世を〈略〉、平和な、秩序正しい世の中にするのが其の目的である。
- 十一 22 7 図 〈略〉、人々相互の争がはてしなく行はれて、しかも其の争は、〈略〉わるがしこい者が勝つことになるであらう。
- 十一 24 9 図 されども不意を討たれし俄の軍に、清秀等の奮戦其のかひなく、〈略〉。
- 十一 33 1 図 瀬戸内海には、〈略〉、大小無數の島々各所に散在す。船の其の間を行く時、島かと見れば岬なり。
- 十一 33 6 図 かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。
- 十一 34 1 図 兩岸及び島島、見渡す限り田園よく開けて、毛氈を敷けるが如く、白壁の民家其の間に點在す。
- 十一 36 7 図 地藏山の内、二町三段五畝、峯通り檜苗、其の他總べて杉苗。
- 十一 39 9 図 生きた枝でも枯れた枝でも、其のまゝにしておくと、〈略〉、其處が節になるのだといふ。
- 十一 39 10 図 生きた枝でも枯れた枝でも、其のまゝにしておくと、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。
- 十一 40 5 図 〈略〉、一番早く伐るとして、其の時は僕がおとうさんくらゐの年になつてゐるわけだ。
- 十一 43 5 図 實は去月十日頃より感冒の心地にて引きこもり居候處、其

- の後とかく病勢衰へず、遂に肺炎を引起し申候。
- 十一 43 10 図 〈略〉、其の中御地へ参り候やもはかり難く候。其の節は何とぞ宜しく願上候。
- 十一 44 8 図 昔、泉州堺のなにがし寺に、或畫師久しく寄食してありけるが、〈略〉。住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、〈略〉。
- 十一 46 4 図 さまたげせんも心なしと思ひて、住持は其のまゝ、寢間に入れり。
- 十一 46 7 図 翌朝畫師は〈略〉、ふすまに向ひてしきりに筆を動かしたる。其の畫がく所皆鶴にして、筆勢非凡、〈略〉。
- 十一 47 2 図 かくて次の夜は如何にとうかゞふに、畫師は〈略〉、明日はかく畫がかなど獨言してゐたりければ、〈略〉。其の後又夜更けてうかゞひ見れば、〈略〉。
- 十一 48 10 図 「先に畫がきたる檜、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、〈略〉、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、〈略〉。」
- 十一 51 5 此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあとに種をまくか、〈略〉。
- 十一 52 1 図 〈略〉、これが成長して、切付を行ふまでには五六年もかゝる。其の間草をとつたり、〈略〉、苦心は

なか／＼一通りでない。

十一55 10 〈略〉老砲手は、〈略〉、甲板からしきりに勵ました。ちやうど其の時、〈略〉。

十一58 4 とたんに、〈略〉すさまじい大砲の音がとどろき渡つた。砲手はその結果を見るのをおそれるやうに、〈略〉。

十一61 1 此の峠には長いトンネルがあつて、其のあたりは海拔約千八百尺、〈略〉。

十一62 6 十勝川の流域一帯の廣野はいはゆる十勝平原で、其の中心をなすものは帶廣の町である。

十一67 10 〈略〉、初め松の木や魚・獸の油などをたいたのであつたが、其の後にふそくや種油がともされ、〈略〉。

十一76 7 老學者の言に深く感激した宣長は、〈略〉、ひっそりした町すちを我が家へ向つた。其の後宣長は絶えず文通して眞淵の教を受け、〈略〉。

十一77 8 我我はこれらの貨幣や紙幣を用ひて物品を賣買し、其の他いろいろの用を辨じてゐる。

十一78 2 此のやうに便利なものも、其の使用に馴れきつてしまつてゐる我々は、〈略〉。

十一79 1 しかしこれらの物は、受取る者にそれが不用であつたり、〈略〉、其の他いろいろの缺點がある。

十一92 1 僕はよく年寄の人が新の幾

日とか舊の幾日とかいふのを思ひ出して、其の事を父に尋ねた。

十一92 4 園 〈略〉、日本では明治五年まで太陰曆を用ひてゐたが、其の翌年から太陽曆を用ひた。

十一92 9 園 太陽曆は春分から春分までを一回歸年といつて、〈略〉。其の間は約三百六十五日と四分の一だが、〈略〉。

十一95 5 リンカーンが七歳の時、一家はインディアナ州に移つたが、〈略〉。〈略〉。リンカーンは其の頃からもう父の手助をしなければならなかつた。

十一98 10 〈略〉、書物を持つてゐる人の所には遠近を問はず借りに行つた。さうして其の本の内容がすつかりわかつてしまふまでは何度でも讀む。

十一100 3 〈略〉雨のために、本がすつかりぬれてゐたので、子供心にも大變心配して、其の晩はとう／＼眠れなかつた。

十一100 5 園 「辨しやうすることが出来ませんから、其の代りに何か仕事をさせて下さい。」

十一100 7 翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、「〈略〉。」と願つた。其の人は別にとがめもせず、〈略〉。

十一100 8 其の人は〈略〉、願に任せて三日間草をとらせ、さうして本は其のまゝ、リンカーンにやつた。

十一100 9 〈略〉、さうして本は其のまゝ、リンカーンにやつた。リンカーンは其の本をていねいに乾かして、〈略〉。

十一100 10 リンカーンは其の本をていねいに乾かして、其の後何度も／＼讀返してゐるうちに、〈略〉。

十一103 3 園 此のブラジル國は、〈略〉、其の大部分は熱帯に屬し居候へども、〈略〉。

十一104 1 園 此の手紙と一しよに、繪葉書をたくさん小包にて送り申候。其の中に〈略〉、イグアススーの大瀑布の壯觀を寫したるものもこれあり候。

十一105 5 園 次にイグアススーの瀧は、〈略〉大瀑布にて、〈略〉、其の壯觀實に筆舌に盡くし難く候。

十一108 5 園 森林には大木すき間もなく繁茂し、其の根本には、つる草・灌木など思ふまゝにはびこり居候。

十一109 2 園 かゝる處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、其の有様は如何にも男らしく勇ましきものに候。

十一109 8 園 伐倒したる木は乾くまで其のまゝに致置き、〈略〉。

十一113 1 園 〈略〉、はかなく露と消えしかど、其の名はくちせず、諸葛孔明。

十一113 3 我が國の地方自治團體には、

府・縣・市・町・村の別がある。其の土地に廣い狭いがあり、〈略〉。

十一113 4 我が國の地方自治團體には、府・縣・市・町・村の別がある。〈略〉、其の組織に繁簡の差があるにしても、〈略〉。

十一113 5 我が國の地方自治團體には、府・縣・市・町・村の別がある。〈略〉、地方自治の精神に基づいて其の團體の幸福を進め、〈略〉。

十一114 3 地方人民が協同一致して自ら地方公共の事に當り、誠意其の團體の爲に力を盡くす精神が即ちそれである。

十一114 5 此の精神は實に自治制の根本であり、又其の生命である。

十一114 8 又市町村長が其の事務を處理するにも、〈略〉、常に此の公平な精神をもつてしなければならぬ。

十一115 1 市町村長や議員を選挙するには、専ら其の人物に重きをおいて、〈略〉。

十一115 2 市町村長や議員を選挙するには、〈略〉、決して親族・縁故其の他私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。

十一116 1 公吏・議員等、直接間接に公共の事務に當る者は、如何に其の職務に忠實であつても、〈略〉。

十一116 7 〈略〉自治團體の事業は、地方人民が〈略〉、之に協力することによつて、始めて其の効果を完全

に擧げることが出来る。

十一1257 図 一切經は、佛教に關する書籍を集めたる一大叢書にして、
《略》。しかも其の卷數幾千の多きに上り、《略》。

十一1259 図 一切經は、《略》。《略》、學者其の得がたきに苦しみたりき。

十一1278 図 つらく思ふに、《略》。一切經を世にひろむるはもとより必要の事なれども、人の死を救ふは更に必要なるに非ずや。」と。すなはち喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、《略》。

十一1289 図 鐵眼《略》、喜捨せる人々に説きて出版の事業を中止し、其の資金を以て力の及ぶ限り廣く人々を救ひ、《略》。

十二75 図 こゝにおいて大國主命、《略》。恭しく國土をたてまつりぬ。

十二79 図 此の社は規模の大なるを以て世に知られ、本殿の如き其の高さ實に八十尺に及ぶ。

十二155 図 我が國にてかゝる新聞の現れたるは維新前後にして、其の後數十年の間に驚くべき發達を遂げた

り。
十二179 図 《略》、原稿締切時刻より刷出まで其の間僅かに數十分、以て其の如何に速なるかを知るべし。

十二1710 図 《略》、原稿締切時刻より刷出まで其の間僅かに數十分、以て

其の如何に速なるかを知るべし。

十二208 《略》實が鈴なりになつてゐる。《略》、其の一つ／＼が日の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。

十二244 《略》商人は、《略》、忍耐も努力も要するに皆自己の爲であつた。彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。

十二297 図 《略》、國會議事堂・大英博物館・ウェストミンスター寺院、其の他見る物聞く物唯々驚く外はありません。

十二301 図 陳列品の多種多様で、しかも其の數量の數限りもないのは、《略》。

十二304 図 我が日本のよろひ・かぶと其の他の武器類もたくさん集めてあります。

十二392 《略》、《略》若い男が靴を縫つてゐる。其のそばにある舊式のピアノによりかゝつてゐるのは妹であらう。

十二404 ベートーベンも《略》、口ごもりながら、「《略》。」其の言方が如何にもをかしかつたので、《略》。

十二414 《略》、ベートーベンは《略》直にひき始めた。其の最初の一言が既にきやうだいの耳には不思議にひびいた。

十二453 彼は急いで家に歸つた。さうして其の夜はまんじりともせず机

に向つて、かの曲を譜に書きあげた。

十二458 図 我が國に産する木材は其の種類頗る多し。

十二458 図 我が國に産する木材は其の種類頗る多し。今其の主要なるものを擧ぐれば、《略》。

十二461 図 凡そこれ等の木材は、其の有する性質によりて各種の用に供すべく、《略》。

十二463 図 凡そこれ等の木材は、《略》何れも重要ならざるはなければ、中にも其の用途の廣きは杉及び檜なり。

十二465 図 殊に杉は《略》、其の需要の多きこと我が國の木材中第一位にあり。

十二478 図 ひば・松・落葉松は何れも堅くして、《略》其の用途頗る廣し。

十二4710 図 ひばは抵抗力を有し、松は彈力に富み、落葉松は一種の品位を有する等、各其の特性を具へたり。

十二494 図 松に至りては産地極めて廣くして、《略》、其の豊富なること我が國の木材中の首位を占む。

十二497 十和田湖は一部分秋田縣鹿角郡に屬し、其餘は青森縣上北郡に屬してゐる。

十二499 《略》、湖面は海面より四百メートルも高く、其の面積は約六千方キロメートルある。

十二581 ねちもがつかりした。其の

時、今まで雲の中に居た太陽が顔を出したので、《略》。

十二582 其の時、《略》、日光が店一ぱいにさし込んで來た。するとねちが其の光線を受けてぴかりと光つた。

十二603 図 ねちが一本いたんでゐましたから、取りかへて置きました。工合の悪いのは其の爲でした。

十二609 図 國旗は實に國家を代表する標識にして、其の徽章・色彩にはそれ／＼深き意義あり。

十二624 図 《略》、更にアイルランドの加はるに及び、白地に斜赤十字の徽章ある其の國旗を合はせて、《略》。

十二637 図 國旗の色彩が其の國の人種を表すものに、支那の國旗あり。

十二643 図 これイタリヤ中興の主エ・ンマヌエル王、國土統一の時、其の家の紋章の色なる白と赤とに、《略》緑を加へ、《略》。

十二646 図 《略》各國の國旗は、或は其の建國の歴史を暗示し、或は其の國民の理想・信仰を表すものなれば、《略》。

十二648 図 《略》、國民の之に對する尊敬は、即ち其の國家に對する忠愛の情の發露なり。

十二6510 王は其の治めてゐるイギリスを三分して娘たちに與へ、《略》。

十二68 3 コーデリヤは王が一番かはいがつてゐる娘であつた。王は「略」、今や遅しと其の答を待受けてゐる。

十二70 6 「略」、王の怒はいよ／＼つものつて、もうどうすることも出来ない。「略」。リヤ王はフランス王を其の場と呼んで、「略」。

十二72 4 「略」王は、「略」荒野の末にさまよひ出た。其の夜は風雨にともなつて雷鳴・電光ものすさまじい夜であつた。

十二75 4 「略」、「略」。笑つて下さるな、どうも娘のコーデリヤのやうに思はれてならぬが。」コーデリヤは父の手を取つて泣きながら、「其のコーデリヤでございます。」

十二75 9 王は尚あらぬ言葉を口走つてはゐたが、其の言葉の端端にも、「略」娘にわびる眞心がこもつてゐた。

十二76 3 コーデリヤはそれを聞いて腸をちぎられるやうな思がした。其の後老王はコーデリヤの孝養によつて餘生を安樂に送つたといふ。

十二77 8 「略」、海岸から沖の方へ二百間も長く垣網を張り、其の先へ身網を張る。

十二78 4 群をなして寄せて来たまぐろは、先づ垣網に驚き、之に沿うて沖へ逃げようとして身網の中へはい入る。其の時魚見やぐらの上で旗を揚

げて、「略」。

十二79 3 網の中がいよ／＼狭くなる

と、其の周圍を船で取巻いてしまふ。

十二82 1 「略」樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。然るに其の實際を調査して此の疑問を解決したる人、「略」。

十二84 1 「略」、對岸の大陸に渡りて其の地の模様を探るは、かへつて目的を達するに便なることを知りぬ。

十二85 8 「略」それより山を越え、河を下り、湖を渡りて黒龍江の河岸なるキチーに出づ。其の間、山にさしかゝれば舟を引きて之を越え、「略」。

十二86 6 「略」土人等林蔵を「略」他の家に連行き、「略」。やがて酒食を出したれども、林蔵は其の心をはかりかねて顧みず。

十二88 6 法律を制定するには、政府又は貴衆兩院の何れかが其の案を作成して議會に提出する。

十二88 10 政府から提出された案は先づ議會の一院で討議される。「略」。即ち第一讀會で其の案を大體に調査し、「略」。

十二89 2 政府から提出された案は先づ議會の一院で討議される。「略」。かうして其の院で可決すれば、其の案を他院に移す。

十二89 2 政府から提出された案は先づ議會の一院で討議される。「略」。

かうして其の院で可決すれば、其の案を他院に移す。

十二90 1 これ等の命令も國の規則であつて、「略」、其の制定も出来る限り慎重な手續を経る。

十二90 3 唯法律は必ず帝國議會の協賛を経なければならぬが、命令には其の事がない。

十二90 4 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。

十二93 8 「略」、マгада國の首府王舎城の附近に來た。「略」。彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聞いたが、どれにも満足することが出来ない。

十二95 8 「略」、夜はほの／＼と明けそめた。其の別那、彼は「略」、はつきりとまことの道を悟り得た。

十二96 7 かつて釋迦を見捨てた彼等も、其の慈悲圓滿の姿を見ては、思はず其の前にひざまづかざるを得なかつた。

十二96 8 かつて釋迦を見捨てた彼等も、「略」、思はず其の前にひざまづかざるを得なかつた。

十二99 1 「略」これまで説いた教そのものが私の命である。私のなくなつた後、めい／＼が其の教をまじめに行ふ所に私は永遠に生きてをる。

十二103 5 「略」更に首を回らして南を望めば、「略」畝傍山・耳成山・天の

香久山の三山まゆの如く、其の南に一きは高く多武峯・吉野山の山々連なるを見る。

十二103 3 そこで人々は「略」、一日も早く洞門を開通し、老僧の命のあるうちに其の志を遂げさせると共に、我々もあのくさり戸を渡る難儀をのがれようではないかと相談して、「略」。

十二108 5 そこで人々は「略」、我々もあのくさり戸を渡る難儀をのがれようではないかと相談して、其の方法を取りきめた。

十二108 7 そこで人々は「略」、其の方法を取りきめた。其の後は「略」、仕事は大いにはかどつて來た。

十二113 2 「略」次いで白金其の他の金屬の針金を以て様々の實驗を重ねしが、「略」。

十二114 4 「略」、日本竹最も適當なりしかば、専ら之によりて心を製出せり。しかして其の電球は忽ち世界に廣まりぬ。

十二114 10 「略」エヂソンの發明せるは「略」、アメリカにて特許を得たるもののみにて其の數實に千餘に及ぶ。

十二117 8 「略」電信や電話の發明は其の當時實に全世界を驚かしたものであ

けてゐた者は人一倍苦勞をする。其の中に又くはしい事を知らせよう。
 七147 潮がすっかり落ちて、海はをかのようになつた。《略》。其のうちに潮がさしはじめたので、みんな舟にもどつた。
 七941 「どうかひどい風にならなればよいが。」と、おちいさんが言つていらつしやつたが、其の中に《略》、風がだんくはげしくなつて來た。
 八42 あまりかはいらしいので、僕はしばらくそれを見てゐた。すると其のうちに、僕の見えてゐるのに氣がついたと見えて、《略》。
 八743 団 シカゴを立つ日に、お前たちの年始状が着きました。《略》。其のうちに繪葉書や寫眞帖を送りますから、ゆつくりごらん。
 九659 甲板洗がすむと、「總員顔洗へ。」「煙草ぼん出せ。」の令が下る。《略》。其の中に上陸員が歸艦する。
 九728 《略》、叔父さんは近く左に見える山を指さして、「《略》。」とおつしやつた。其の中に汽車は山の間を出て、《略》。
 九915 団 《略》、ジュノーといふ神様が《略》、とうとうカリストを熊にしてしまひました。其の中に、子供のアルカスはだんく大きくなつて、《略》。
 九1192 団 豊島沖の海戦に出なかつた

ことは、艦中一同殘念に思つてゐる。《略》。其のうちに花々しい戦争もあるだらう。
 十825 安全燈をたよりに歩いて行く、と、《略》。《略》。其のうちに馬屋の前に出ました。
 十一439 團 《略》、轉地するもよからんと醫師も申居候に付、或は仰に従ひ、其の中御地へ参り候やもはかり難く候。
 十一569 《略》、二人の耳にははいらぬのか、夢中で泳ぎくらを續けてゐる。《略》。其のうちに二人はふかの來るのに氣がついた。
 十一664 思ふに《略》自然の火から、火種を取つたものであらう。其のうち《略》、木片と木片をこすりあはせて火を得る法をさとするやうになつた。
 十一857 手足が大分くたびれて來た。腹もすいた。その中、先に進んでゐた者が二人列から離れて船に上つた。
 十二1069 其のうちに誰言ふとなく、《略》といふうはさが立つた。
 十二1295 団 官軍方の思召通り一押にはゆかぬかも知れませぬ。すると其のうちに又思の外な尻押なども現れて、《略》。
 そのかみ「其上」(名) 2 そのかみ
 十二94 団 なぎさに立ちて昔をしのべば、そのかみ此處にいかめしく向

ひあひけん英雄の姿、今までのあたり見るが如く、《略》。
 十二1103 団 そのかみ金殿玉樓相望みてうちつゞく都大路を、大宮人の櫻かざし紅葉かざして往來しけむ、今にして思へば唯一場の夢に過ぎず。そのほう「其方」(代名) 2 其の方
 七1053 団 秀吉は清正を召出して、「其の方は無分別者で、大名になつてもまだ仲間げんくわのくせがぬけぬ。
 八399 団 越前守は手代の言ふ所を聞いて、「其の方の申す所では、どうやら其の地藏がうたがはしい。そのもの「其物」(名) 1 そのもの
 十二989 団 これまで説いた教そのものが私の命である。
 そば「側」(名) 30 ソバ そば じおそば
 一226 ネエサン ガジヲカイテ キマス。マサヲ ガソバ デミテ キマス。
 三98 ネコ デモ ソバ ヘクルト、オヤドリ ハオコツテ ケヲ サカ ダテマス。
 三125 あかちやんがなき出すと、すぐそばへよつて、《略》、子もうたをうたひます。
 三223 犬は《略》、小二郎のそばへよつてきました。
 三262 そこから竹の子が出るのです。このあひだかきねの

そばへ出たのは、《略》。
 三842 《略》、松の木に美しい物がかがつてゐました。そばへよつて見ますと、《略》。
 四372 スズメハヨワイ鳥デスガ、ソバヘヨツテ、ヨドツタリサヘツタリシテバカニシマス。
 四828 そばに乗つて居た人の話では、軍かんだといふことでした。
 四924 《略》くどうは、《略》、いつも大ぜいの家來をつれて居ます。二人のものはなかなかそばへよることも出來ません。
 五427 《略》、たけるは尊を見つけて、自分のそばへ呼びました。
 六717 川の西は水のすぐそばから、すき間もなく家が立ちならんでゐます。
 八84 二番太鼓の「並べ」のあひづに、五人の騎手は打連れて、拜殿のそばの大きな立石の前に並んだ。
 八151 そばに居た松平正綱が「《略》。」といつてなぐさめると、頼宣は顔色をかへて、《略》。
 八305 次に其の小屋のそばへ土と石でかまをつく。
 九138 団 妹も同じ心にや、しばし見とれてひよこのそばをはなれず。
 九323 其所の木のかげ、此所の石のそばには、《略》、春蘭のつばみのふくらんだのも見える。

九60 10 艦橋には當直將校の姿が見え、其のそばには、〈略〉信號兵が遠くを見張つてゐる。

九80 1 ふと氣がつくと、校長先生と山田先生が、箱のそばへ来て、〈略〉。

九04 3 兵士たちはめい／＼馬のそばに立つて、今かく／＼と命令の下るのを待つてゐた。

九110 3 主人の姿を見つけると、靜かに其のそばに立止つた。

十17 1 1 ならない私は、〈略〉、やはり馬のそばを通るのが危険なやうな氣がしてならなかつたが、〈略〉。

十39 9 父は〈略〉、たき火のそばの切りかぶに腰を下し、鎌をときにかゝつた。

十84 9 或日、〈略〉百姓が、たき火をしてゐると、そばの黒い岩に火がつき、煙をあげて燃出しました。

十一57 7 つと大砲のそばへ寄つて、急いで彈丸をこめ、ねらひを定めた。

十一118 2 農場主は〈略〉、そばに居た自分の子に、「〈略〉。」と言ひつけた。

十二21 3 ふと見ると、ついそばの木の下では、〈略〉二三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。

十二39 2 〈略〉、〈略〉若い男が靴を縫つてゐる。其のそばにある舊式のピアノによりかゝつてゐるのは妹であらう。

十二53 4 自分の置かれたのは、仕事

臺の上に乗つてゐる小さなふたガラスの中で、そばには小さな心棒や齒車やぜんまいなどが並んでゐる。

十二58 3 仕事臺のそばに、ふさぎこんで下を見つめてゐた女の子がそれを見附けて、〈略〉。

十二74 9 やがて眠から覺めた王は、〈略〉、そばに居るコーデリヤを見て、「これはどなたであらうな。笑つて下さるな、どうも娘のコーデリヤのやうに思はれてならぬが。」

そば「蕎麦（名）2 蕎麦（きそば）九100 10 山のすその方があちらこちら白いのは、蕎麦の花であらう。

十43 6 6 かうしてみんな手をそろへて働けば、來年の秋はもう眞白な蕎麦の花で、此の地面が埋まつてしまふのだ。

そばだ・つ「時」（五）1 そばだつ

そばだ・つ「歌」（下二）1 そばだつ

九98 10 10 〈略〉、戸隠連山は東北の方に、呼べば答へるばかり近くそばだつてゐます。

そばだ・つ「歌」（下二）1 そばだつ

九110 9 北風は〈略〉、訴へるやうな目付で主人の顔を見下し、左右の耳をそばだててみた。

そばえたつ「簀立」（五）1 そびえたつ

三81 1 1 靑空高くそびえたち、〈略〉、かすみのすそを遠くひ

く、ふじは日本一の山。

そびえる「簀」（下二）7 そびえる

《一エ》

九98 5 5 〈略〉、眼前には杓子岳や鍵岳がぬつとそびえ、〈略〉。

九98 9 9 淺間山は煙をなびかせて、東南の空はるかにそびえ、〈略〉。

十24 5 其の一角にそびえてゐる燈臺に、年とつた燈臺守が、妻と娘と三人で、わびしく其の日を送つて居た。

十35 6 6 〈略〉、湖上に點々と散在してゐる島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。

十76 4 4 〈略〉、其の又手前には朝鮮ホテル・朝鮮銀行・京城郵便局・天主教會堂などのりつばな洋館がそびえてゐる。

十一9 9 〈略〉、河岸には〈略〉、銀行・會社等のりつばな建物がそびえてゐる。

十二36 7 7 〈略〉、はるかに紺青の空にそびえて雪をいたゞくアルプの連峯。

そびゆ「簀」（下二）2 そびゆ

《一エ》

十二17 7 7 大空にそびえて見ゆるたかねにも、のぼればのぼる道はありけり。

十二99 8 8 〈略〉、東大寺の金堂は天空高くそびえて、五丈三尺の大佛一千二百年の面影を残せり。

そば「祖母」（名）2 祖母（ごそ）

さま

八44 8 8 病中の祖母も大そう喜びまして、ありがた涙をこぼして居ります。

八46 7 7 祖母一人孫一人の事だから、〈略〉、一人で寝起の出来るまで、ゆつくり看病してお上げなさい。

そまつ「粗末」（形状）6 ソマツそまつ 粗末

八50 1 1 巢ハ至ツテソマツナモノデ、〈略〉、タテ横ニ小枝ヲ並べ、其ノ上ニヤハラカナコケヲ置クダケデアル。

八115 4 4 郷里の家は〈略〉、至つてせまい、そまつな家であつた。

十59 8 8 〈略〉、身なりはそまつなれど氣品高き婦人立出でて、「〈略〉。」とことわりぬ。

十108 3 3 3 今日小包にて粗末なる物、赤さんの御着物にもと御送り致し候間、〈略〉。

十123 6 6 着物は粗末ながら、さつぱりしたものを着て、齒もよくみがいてゐました。

十二40 6 6 6 しかし誠に粗末なピアノで。それに樂譜もございせんが。

そま・る「染」（五）1 そま（一）

四10 2 2 ならやくぬぎのはは黄にそまり、廣いたんぼに北風あれる。

そむく「背」（四・五）5 ソムクそむく 背く《一イ・カ・ケ》

九129 世間ニハ、〈略〉、或ハ棄權

シテシマツタリスル人モアルガ、ソ
ンナ事ヲスルノハ、選舉ノ趣意ニソ
ムイテキル。

十98 7 図 「我、國を救ふことあた
はず。いづくんぞ人をいざなひてそ
むかしめんや。」

十一120 8 図 ウェリントン公爵ともい
はれるえらいお方が、おとうさんの
言ひつけに背けとおつしやらうとは、
〈略〉。

十二103 8 図 〈略〉、其の南に一きは高
く多武峯・吉野山の山々連なるを見
る。げにや「めぐらせる青垣山に、
こもれる大和うるはし。」と歌ひし
にそむかず。

十二139 2 我々は〈略〉、又常に其の
短所に注意し、之を補つて大國民た
るにそむかぬりつばな國民とならね
ばならぬ。

そめ じゆうぜんぞめ

そめもの「染物」(名) 1 染物

六73 6 賀茂川は〈略〉、其の代りに
水がいたつてきれいで、染物にむい
てゐます。

そめる「初」じあけそめる

そめる「染」(下二) 4 そめる 染

メル 染める「一メーメル」

五30 8 圖 つゆや時雨が色よくそめた
うらの小山に秋風吹けば、〈略〉。

六76 8 図 コレハ、〈略〉、後デカタヲ
置イテ染メルノデ、縮緬ノ友禪ト同

ジデス。

六77 1 図 コレゴラン、表タケデ、ウ
ラノ方ハ染メテナイデセウ。

十一36 4 地圖の中の薄緑に染めてあ
るのが一昨年植付けた處、朱線で圍
んであるのが今年伐採する處、〈略〉。
そめわく「染分」(下二) 3 染分く
《一ヶ》

十二63 2 図 藍・白・赤三色を以て縦
に染分けられたるは、フランスの國
旗なり。

十二63 6 図 〈略〉、黒・赤・金の三色
を横に染分けたるものはドイツの國
旗なり。

十二64 1 図 イタリヤの國旗は、緑・
白・赤の三色を縦に染分け、中央の
白地中に王家の紋章を表せり。

そもそも (副) 2 そもく

七78 7 信長は〈略〉、其の後間もな
く藤吉郎を草履取から引上げて役人
の數に入れた。これがそもく藤吉
郎出世のいとぐちである。

十二102 1 図 〈略〉、北に大内裏の宮殿
を仰ぎ、〈略〉、南端に羅城門をふま
へたる古の奈良の都は、そもく如
何に美しく、如何に盛なりしぞ。

そよそよ (副) 1 そよく

九34 4 〈略〉、そよくと吹く風につ
れて、若葉のほひがひしくと身
にせまつて来る。

そら「空」(名) 46 ソラ 空 じあお
ぞら・たかぞら

二16 7 日ガハイリマシタ。〈略〉。

アチラノソラガマツカニナリ
マシタ。

三33 トヲアケルト、ムカフノ
ソラガウスアカクナツテキマ
ス。

三76 8 ソコデカウモリハ〈略〉、
クラクナツテカラ空ヲトビマ
ハルヤウニナツタトイヒマス。

三78 5 空は水のやうにすみき
つて、雲一つありません。

三83 4 おきの方はかすんで、空
と水が一つになつて見えま
す。

三87 1 天人は〈略〉、なみだにう
るむ目で空を見上げました。

三88 5 図 「いやいや、おかへし申し
たら、まはすに空へお上りに
なりませう。」

四15 大きな字を書いたのぼり
がすみきつた空に立つてゐま
す。

四11 6 圖 「やつとすんだ。」と見
上げる空に、あすも天氣か、
夕日が赤い。

四53 1 図 此のあひだひかうせん
が東京の空をとびました。
四63 7 図 空をとんで居る鳥で
も、三羽ねらへば、二羽だけは
きつといおとすほどの上手で
ございます。

四66 7 赤い扇は〈略〉、空に高

くまひ上つて、〈略〉、なみの上
におちました。

五52 7 〈略〉、目二見エナイ水蒸氣
ニナツテ、空ヘカヘルノモアルサウ
デス。

五61 3 圖 〈略〉、空のあぎぬへ一筆
に、だれがかいたか、虹の橋。

六19 4 鉛色の空は次第々々に低くな
つて來ます。

六21 1 圖 空もみどり、海もみどり、
空につゞく海のみどり、海に
つゞく空のみどり、すみきつて、
かゞみとかゞみ。

六21 3 圖 〈略〉、空につゞく海のみ
どり、海につゞく空のみどり、す
みきつて、かゞみとかゞみ。

六21 4 圖 〈略〉、空につゞく海のみ
どり、海につゞく空のみどり、す
みきつて、かゞみとかゞみ。

七28 7 図 〈略〉、大工場多く、エント
ツノ煙ツネニ空ヲオホヘリ。

七34 4 圖 〈略〉、空一ぱいの星は
皆、涼しく金にまたけり。

七92 7 「〈略〉。」と、おとうさんは朝
起きるとすぐ空を仰いでかうおつし
やつた。

七92 9 〈略〉、空には雲もなく、ま
ことによく晴れてゐた。
七94 2 〈略〉、其の中に南の空が黄色
になつて、風がだんくはげしくな
つて來た。

八48 8 マシテ自由ノ天地ニ居テ、自

在ニ空ヲトブ様ハ、實ニ勇マシイモノデアル。

八七〇 此所は工業地で、煙突の煙で空は眞黒だが、〈略〉。

九三三 空ははてもなくすんで、所々にちぎれ雲が飛んでゐる。

九六八 東の空が明るくなると、〈略〉軍艦の壮大な姿が、だん／＼にあらはれて来る。

九六二 副長もはや上甲板にあらはれて、今日の天氣はどうかと空をながめる。

九八四 空よく晴れて、満天の星は寶石をちりばめたるが如し。

九八三 「にーさん、空にはあんなにたくさん星が見えますが、少しも動かないのですか。」

九八五 信吉は感心して、熱心に空を仰ぎのしが、〈略〉。

九八八 浅間山は煙をなびかせて、東南の空はるかにそびえ、〈略〉。

九八八 昨夜雨が降つたせゐか、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近く見える。

九八六 〈略〉、後足を長く延ばし、眞青な空をじつとながめてゐる。

九八九 空には赤とんぼが幾つともなく飛んでゐる。

九八七 東の空がほんのりと白む頃、北風は外の軍馬と一所に、〈略〉、列を正して並んだ。

九八四 月が西の空にうす白く残り、

野には朝つゆがしつとりと置いてゐた。

一三三 太陽も、夜の空に銀の砂をまいたやうに見える小さな星の一つと同じものだといふ。

一四一 西の空がほんのり明るい。

一八三 空には眞夏の日がきら／＼とかゞやきわたつてゐる。

一八七 父は空をながめて、「〈略〉。」と、團扇を使ひながら言つた。

二二四 秋晴の空はあくまですみて、暖さ春の如し。

二二六 是るかに紺青の空にそびえて雪をいたゞくアルプの連峯。

二四三 彼はしばらくすみきつた空を眺めてゐたが、〈略〉。

二四三 ちやうど東の空に上る月が次第々々にやみの世界を照らすやう、〈略〉。

二八三 渦を巻き、巻いて流れて流れて巻いて、空にとびたつ、潮けむり。

そら (感) 1 そら

九八七 中尉は「そら、もう一息だぞ。襲へ／＼。」と叫んだ。

そらいちめん 「空一面」 1 そら

一めん 三五一 子どもがそら一めんの星を見て、「ああわかつた。あの光るところが雨のふるあな

だ。」

九五九 木の枝などを横にして、此の雪溪をすべつて下る人があります。

そる 「反」 (四) 2 そる 《一リール》

二四六 櫓を以て第一とすべし。光澤と香氣とを有し、ねばり強くして、割れ、そる等の憂極めて少く、〈略〉。

二四七 もみ・つがは共にそり又は伸び縮みすること著しきを以て、〈略〉。

それ 「其」 (代名) 一八八 それ

一七四 ハナハソレデヨイカラ、ハヨチヒサクシテ、モウ一ペンカイテゴランナサイ。

二二九 「ナルホドヨイカンガヘダ。」トイツテ、ミンナカンシンシマシタ。スルト年トツタネズミガ、「ソレモヨイガ、ダレガソノスズツケニイクカ。」

トイヒマシタノデ、〈略〉。

二四四 土ノ中カラ、オカネヤタカラモノガタクサンデマシタ。ワルイオヂイサンハソレヨキイデ、〈略〉。

二二七 下のはうからかさかさいはせてかけ上つてくるものがあります。〈略〉、それは小

二郎のうちのいぬでした。

三二二 うらしまは〈略〉、子どもからそのかめをかつて、海へはなしてやりました。それから二三日たつて、〈略〉。

三二四 うらしまは〈略〉、おとひめに「〈略〉。もうおいとまにいたしませう。」といひました。おとひめは「それはまことにおなごりをしいことでございます。」

三二五 たうふうはこれを見て、〈略〉とさとりました。それから一しやうけんめいになつて、〈略〉。

三二六 アトヘ竹ノキレヲノコシテ行キマシタガ、〈略〉。私ハソレヲヒロツテ、〈略〉。

三二七 「これはよい物がある。〈略〉。」といつて、持つてかへらうとしますと、〈略〉美しい女が來ました。「それは私の着物でございます。」

三二八 持つてかへつて家のたからにします。「いや、それは天人のはごろもといふ物で、人げんにはよいものないものです。」

三二九 「天人のはごろもなら、なほさらかへすことは出來ません。〈略〉。」それがなくては、天へかへることが出來ません。

三三〇 れふしがはごろもをかへ

しますと、天人はそれを着て、まひはじめました。

四133 〔略〕、「オマヘノナカマトワタシノナカマト、ドツチガ多イカ、クラベテミヨウ。」トイヒマシタ。ワニザメハ「ソレハオモ白カラウ。」トイッテ、〔略〕。

四161 〔略〕、「オマヘタチハウマクワタシニダマサレタナ。ワタシハコノヲカヘ來タカツタノダ。」トイッテワラヒマシタ。ワニザメハソレヲキクト、タイソウオコツテ、〔略〕。

四194 〔略〕白ウサギハ目ヲコスツテ、又ソノワケヲ申シ上ゲマシタ。スルト神様ハ「ソレハカイサウダ。

四321 〔略〕、「ばか」と口まねをします。〔略〕。〔略〕、父にこのことを話しますと、父は「それは山びこです。

四333 〔略〕人のこゑも山の中では、〔略〕、かへつて來ることがあります。それが山びこです。

四495 〔略〕まん中へふせておきなさい。こんど取つた人がそれも取ることにします。

四646 〔略〕「なすのよ」と申すものがございます。〔略〕、三羽ねらへば、二羽だけはきつといおとすほどの上手でございま

す。」といひました。よしつねは「それをよべ。」

四684 〔略〕私のうちに山がらが一羽かつてありました。〔略〕。それが〔略〕、あるばんねずみに足のゆびをくひきられました。

四772 〔略〕おさう式が私の前を通りました。それは西の村で、一番目の金持だといはれたうちに生れた人のでした。

五92 〔略〕私どもにはもと娘が八人ございました。それを八岐の大蛇が來て、毎年一人づつたべました。

五108 〔略〕酒が出來ると、みことはそれを八つのをけに入らせて、〔略〕。

五242 〔略〕入口の左手には、小切やえりや帶あげなどがたくさん下げてあつて、それを見てゐる人も大ぜいあります。

五466 〔略〕「上のうすには、どうして米を入れる。」「それまではまだかんがへなかつた。」

五473 〔略〕頭を上げて、繭をかける所をさがします。それをひろつて、まぶしへうつすのですが、〔略〕。

五513 〔略〕ハジメハ糸スデホドノ流デスガ、ソレガダンくアツマツテ、〔略〕。

五532 〔略〕山から薪を取つて來て、それを賣つて、くらしを立ててゐました。五545 〔略〕、石の中から酒にいた物がわいてゐます。〔略〕。喜んで、そ

れからは毎日其の酒をくんで來て、〔略〕。

五678 〔略〕「鯉も居るが、それよりもつとお前に聞かせて置きたい話がある。」

五755 〔略〕一雨毎に池の水はふえた。それを見て、村の人は急にあれ地を田にしました。

五777 〔略〕其の後村の人は、〔略〕、もとの家へ歸つてもらつた。あの白壁造の土藏のある家がそれだ。

五877 〔略〕仕合はせに水はそれからふえませんでした。町はたいい水につかつて、〔略〕。

五916 〔略〕作物の種や商品の見本も入れてよいことになつてゐますが、私はまだそれをあづかつたことはありません。

五921 〔略〕、はがきの外はきつと切手はつてあります。それも品と目方によつて切手の價がちがひます。

五945 〔略〕、〔略〕書生さんが、お友だちへ出した葉書には、私もはらわたがちぎれるやうに思ひました。「それにはどんな事が書いてあつたか。」

五947 〔略〕「それにはどんな事が書いてあつたか。」といふおたづねが出るかも知れませんが、それは人にもらしてはならないことになつてゐます。

五966 〔略〕叔父サンノウチニモ、ブダウ棚ガゴザイマス。ソレニハ黒ミノア

ルムラサキ色ノ實ガナツテキマス。六88 〔略〕「高くて名高いのは、どの山ですか。」「それは富士山さ。」

六104 〔略〕金や銀ハ美シクテ、〔略〕、ドチラモタクサンアリマセンカラ、ネダンモ高ウゴザイマス。銅ハソレニヒキカヘテ、〔略〕タクサンアリマスカラ、〔略〕。

六154 〔略〕僕が紅色のきれいなきのことを取つて、にいさんに見せましたら、「あ、それは紅茸だ。

六354 〔略〕弓は潮に引かれて流れて行きます。義經は〔略〕、むちのさきでそれをかきよせようとしています。

六565 〔略〕さあ、此の女にはゆだんが出來ぬといふ事になつて、石のらうを造つて、それに入れました。

六681 〔略〕さて主人に火事の話をして、義捐金のことをいひ出すと、「それはお氣の毒だ。」

六754 〔略〕「ラシヤトフランネル。」「ソレダケデスカ。」

六761 〔略〕「ネエサンガ今ヌツテキル此ノ帶ハ。」「ソレハメリンスデ、絹デセウ。」

六855 〔略〕敵の船はこつぱみぢんにくだけて、敵兵は海のそこに沈んでしまつた。〔略〕。それからこゝに六百餘年、〔略〕。

六875 〔略〕、乗つてゐた象つかひは桶の中へはいつてしやがんだ。象がそれを下して來て地に置くと、〔略〕。

六99 4 罎 あの子は十一、落葉松は

あの子のせいより低かつた。それが今では學校の二階のまにとゞいてる。

六101 7 罎 〈略〉、しやうぶが小指程に

芽を出してゐました。〈略〉、手を出す、「義一さん、それはお節供に使ふですよ。」といふねえさんの聲がしました。

七11 1 罎 船頭がさをつき立てて、それに舟をつないだ。

七22 9 罎 村の西にくぬぎ林がある。それを通りぬけて四五町上ると、〈略〉。

七26 8 罎 馬はたいそう元氣のよい動物で、〈略〉。武人は昔から之を愛養して、いざといふ時には、それに乗つて出かけた。

七43 8 罎 〈略〉、信玄は兵を二手に分けて、はさみうちにしやうとした。謙信はそれをさとつて、〈略〉。

七58 4 罎 一たい船にはらしんぎといふ物があつて、それで方角をとつて進みますから、〈略〉。

七58 7 罎 又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、それにたよつて方角を知ること出来るし、〈略〉。

七59 1 罎 又海岸には所々に燈臺がありますから、それを見ると、あれは何所だといふことが分ります。

七60 2 罎 さておしまひに一ついつて置きたい事があります。それは日本は海國でありながら、まだ海を恐れ

る人もあるといふことで、〈略〉。

七69 4 罎 〈略〉、もうあるまいとは思ひましたが、〈略〉、引つかへして参りました。〈略〉。それがあなたのやうな正直なお方に拾はれて、財布をいたゞかせてもらひましたが、〈略〉。

七72 5 罎 もしお金をもらつたら、あなたの氣はそれですむかも知れませんが、私の氣がすみません。

七73 8 罎 〈略〉、人からはいれなく金をもらはうとは思ひません。〈略〉。かの男は「それではこまる、ぜひ。」

七93 1 罎 何だか少しむし暑いやうだが、空には雲もなく、まことによく晴れてゐた。それが、朝飯がすむと間もなく、稻の葉がざわ／＼し出した。

七105 6 罎 〈略〉、又明國への返書に豊臣清正と記したといふが、それはまことの事か。

七107 8 罎 清正は〈略〉、「〈略〉。」と、べんぜつさわやかに申し開きました。秀吉は感心して、「それは皆此の方がやりさうな事。

七111 2 罎 「アシタノアサーバンノキ シヤデタツテイキマス。」「それでは長過ぎる。電報はなるべくみじかい方がよい。

七111 5 罎 「アシターバンノキシヤデ イキマス。」「それで何字になる。」

七111 8 罎 「アシターバンノキシヤデ イキマス。」「それで何字になる。」

「十五字です。」「〈略〉、にごりのあは字は二字に數へるのだから、それでは十七字になる。

七112 3 罎 「アスーバンデタチマス。」

「それでもよいが、電報はさうていねいにいはなくてもよい。

七112 9 罎 「アスーバンデタツ。」「それでよい。

七112 9 罎 それで十字だから、〈略〉、此の頼信紙に書きこんでごらん。

八4 2 罎 〈略〉、小さな犬ころが二匹、〈略〉じやれてゐる。あまりかはいらしいので、僕はしばらくそれを見てゐた。

八6 1 罎 昔或氏神のお祭に、競馬の神事といふ事があつた。それは氏子の五箇村から、子どもの騎手を一人づつ出して、〈略〉といふ定めであつた。

八7 5 罎 神主は先づ神前で祝詞を上げて、それがすむと、「支度」といふあひづの一番太鼓を鳴らした。

八9 2 罎 〈略〉、もはや信作と耕造の二人だけの競走となつた。さうしてそれが同時に決勝點へ着いた。

八23 4 罎 ちやうど蕃人が、其の前の年に取つた首が四十餘ありましたので、それをしまつて置かせて、〈略〉。

八24 6 罎 それ程首がほしいなら、〈略〉。

八25 7 罎 〈略〉蕃人どもは、すぐに其の人を殺して、首を取りました。見ると、それは呉鳳の首でございました。

八31 3 罎 さて山の木をきり倒して、四五尺の長さにきりそろへ、それをぎつしりとかまの中に立て並べ、〈略〉。

八34 8 罎 婦人は、〈略〉、其の實を取つて来て、庭先の畠の中にまきました。間もなくそれから芽が出ましたので、〈略〉。

八43 7 罎 そこで其の反物を出した者を呼出して、買先をたゞし、それからそれと調べましたので、〈略〉。

八43 7 罎 そこで其の反物を出した者を呼出して、買先をたゞし、それからそれと調べましたので、〈略〉。

八52 6 罎 つき上ると、おばあさんが餅を臼の中で丸めて、〈略〉。おかあさんはそれを二つにちぎつて、〈略〉。

八63 9 罎 或夜〈略〉、風にはかに吹きて、ともし火きえたり。保己一はそれとも知らず、〈略〉。

八75 9 罎 「大洋を西へ／＼と航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がらだらうか。」

八78 9 罎 「〈略〉。三枚とも切符です。」「それをみんなうちで納めるのですか。」

八81 1 罎 「どのうちでも、納める金高は同じですか。」「いや、それは財産や収入の多少によつて違ひます。

八82 8 罎 〈略〉、工夫して大仕掛に水を落せば、大きな仕事をする。彼の水

力電氣の如きはそれで、〈略〉。

八八四三 母が「とよちゃんかね。丈夫であるよ。」といふと、信吉は〈略〉、「〈略〉。それをお聞きして安心致しました。」

八八九五 〇「略」、今は口を見せてものを言はせませう。「それはありがた

八九四九 先生は「何なら、あのお子

八〇〇三 或時、口・耳・目・手・足等

八〇四三 〇「略」、一人で一日に一包は造

八二九 〇「略」、必ず其のきらひな物ばかり出して、大將が馴れるまで、うち中の者がそればかり食べるやうにした。

九一七二 〇「略」、季節ニヨツテマハリノ物ノ色ガカハレバ、ソレニツレテ同

九一七七 〇「略」、何時デモマハリノ物ノ色ガカハレバ、間モナクソレト似タ

九二二三 〇「略」、終には國を立ちのかねばならぬやうになつた。それから

諸國を歩き廻つたすゑ、〈略〉。

九二七三 〇「略」、父の此の願だけは、〈略〉、必ず仕とげてもらひたい。それにはわたし死んでも國へ歸らずに、〈略〉、一心に學問をはげむがよい。

九三五六 〇「略」、大きな青大將が、〈略〉、のろのろと草の中にかくれて行く。

九三五九 〇「略」、「〈略〉。」と、聲をかけた者がある。頭を上げてみると、それは石井君であつた。

九三八九 〇「略」、やがてレマン將軍は、〈略〉、帶劔をときて渡さんとするを、エン

九四四七 〇「略」、例ヘバコ、ニツソ石アリ

九四八〇 〇「略」、もう二番茶もつまなくて

九五一〇 〇「略」、十年餘もしんぼうしてやう

九五二七 〇「略」、さうして人々に推されて、

九五四三 〇「略」、さうして全く無一物になつ

九五六三 〇「略」、親子三人町外れの裏長屋に移つてしまつた。けれども社長さんは、

それを少しも苦にしないで、〈略〉。

九五五五 〇「略」、後には表通へ店を出すまでになつた。それからだんく

九五六〇 〇「略」、後には麥の束が山と積んであ

九六二〇 〇「略」、これから號令が雨のやうに下

九六八 〇「略」、僕は眠くなつたので、それか

九六八〇 〇「略」、それに、たくさん

九八六〇 〇「略」、北極星といふ星だ。」

九八七二 〇「略」、それを見つ

九九一四 〇「略」、おかあさんのカリストは、

九九一七 〇「略」、其の中に、子供のアルカス

九九一七 〇「略」、狩人になりましたが、或

九九一〇 〇「略」、此の大熊こそは、〈略〉お

九九二三 〇「略」、アルカスは〈略〉、あぶなく親身の親を射殺すところ

九一〇四 〇「略」、中尉の固く結んだ口もと、

九一〇五 〇「略」、其の様子がどうも一通りでな

九一〇六 〇「略」、軍人となつて、い

九一〇七 〇「略」、大尉はそれを取つて見ると、

九一〇八 〇「略」、オトウサンハ誰ニ投票ナ

九一〇九 〇「略」、王に於て密書が届い

九一一〇 〇「略」、王に於て密書が届い

九一一一 〇「略」、王に於て密書が届い

九一一二 〇「略」、王に於て密書が届い

であつた。

十105 程なくフィリップは〈略〉、うやくしく薬のコップを王にさげた。王は片手にそれを受取り、〈略〉。

十158 高橋さんの熱心な話は、それからそれへと續いて、團員に強い感動をあたへた。

十158 高橋さんの熱心な話は、それからそれへと續いて、團員に強い感動をあたへた。

十201 中には、〈略〉、今日の別れを惜しんで、〈略〉、くびや背をなでたりしてゐるのがあります。それを見ると、〈略〉。

十374 米國が此の運河を造るのに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。〈略〉、地をうがち、河水をせき止めた事など、一としてそれならぬものは無い。

十465 しかしいくら工夫をこらしても、目ざす柿の色の美しさは出て来ない。〈略〉、歎息する彼の様子は、實に見る目もいたましい程であつた。

十521 困難はそればかりで無かつた。

十521 困難はそればかりで無かつた。

十562 しかし此の外に、往復通信の方法もある。それは、〈略〉、飼養所から食事所へ通つて食物を取るやうに馴らして、其の往來を利用するのである。

十653 〔略〕。ちやうど有合はせの粟の飯、召上るならと妻が申してをりますが、いかゞでございませう。」「それはけつこう、頂きませう。」

十668 私はもと鉢の木がすきで、いろ／＼集めた事もありましたが、かう落ちぶれては、それも無用の物好と思ひ、大てい人にやつてしまひました。

十681 〔略〕「お見受け申す所、たゞのお方とも思はれません。是非お明かし下さい。」「それ程おつしやるなら恥かしながら申し上げませう。

十683 〔略〕、もとは佐野三十餘郷の領主、それが一族どもに所領を奪はれて、此の通りの始末でございいます。

十715 〔略〕、常世はちぎれたる具足を着け、〈略〉、進みて御前にかしこまれば、最明寺入道時頼はるかの上座より、「それなるは佐野源左衛門常世か。

十758 市街の周圍を取圍んだ山々は地はだが白く、それに松がまばらに生えてゐる。

十806 〔略〕、周圍の壁は皆石炭で、それが電燈の光に物すごく光つてあります。

十843 〔略〕、其の内の二人が石炭を掘崩すと、他の二人がそれをさるで運んで炭車に入れる。

十844 炭車が一ぱいになると、馬方がそれを馬に引かせて、〈略〉。

十851 或日、〈略〉百姓が、たき火をしてゐると、そばの黒い岩に火がつき、煙をあげて燃出しました。

〔略〕。それから『燃える石』といふひやうばんが高くなつて、〈略〉。

十8710 又外國から原料を輸入し、それに加工して、更に外國へ輸出する事も少くない。

十882 綿花は主に印度やアメリカ合衆國から輸入し、それに加工して綿絲や綿織物を造る。

十1081 〔略〕 近き處ならば早速上り候て御世話も致すべく候へども、〈略〉、それも心に任せず、甚だ殘念に存じ居り候。

十1192 〔略〕、不意にかん高い鳥の聲が聞えた。〈略〉、それは園内に飼つてある鶴の聲であつた。

十122 〔略〕 あ青年が〈略〉、先づ着物のほこりを拂ひ、はいると靜かに戸をしめました。きれいすきで、つゝしみ深いことは、それでよく分りました。

十124 談話の最中に一人の老人がはいつて來ましたが、それを見るとすぐに立つて、〈略〉。

十1210 〔略〕、一々明白に答へて、しかもよけいなことは言ひません。はきはきしてゐて、禮儀をわきまへてゐることも、それですつかり分

ました。

十1234 外の者は少しも氣がつかないらしかつたが、あの青年は〈略〉。それで注意深い男だといふことを知りました。

十185 〔略〕、海上を走ること約四百海里で揚子江の河口に達する。それから五十海里ばかりさかのぼつて、〈略〉。

十1810 〔略〕、他人に害を加へてはならぬなどといふことは、我々が十分心得てゐる事である。しかし大勢の中にはそれを守らない人もある。

十1527 〔略〕、此の組織の所まで小刀が届いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。

十1531 ゴム園の人は〈略〉、受持の木に此の切付をして廻る。それがすむと、今度はバケツを持つて〈略〉。

十15810 二人の少年はボートに乗せられて歸つて來る。老砲手は〈略〉、無言のまゝじつとそれを見つめてゐる。

十1631 當時此のあたりは未開の原野で、〈略〉。それが今は人口約二萬、〈略〉。

十1646 〔略〕、立木や切株の根本を掘つておいて、それにくさりをつけて此のトラクターで引くと、〈略〉。

十1695 〔略〕、燈が〈略〉、今にも消

えさうになつた。末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。

十一72ノ図 「略」。「略」、さつき御出かけの途中『略』と、御立寄り下さいました。」「それは惜しいことをした。

十一72ノ 宣長は、大急ぎで眞淵の様子を聞きとつて、後を追つたが、
「略」、それらしい人は見えない。

十一73ノ 望みがかなつて、宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出来たのは、それから数日の後であつた。

十一74ノ 図 「私はかね／＼古事記を研究したいと思つてをります。それについて何か御注意下さることはございますまいか。」

十一74ノ 図 「私はかね／＼古事記を研究したいと思つてをります。
「略」。」「それはよいところに氣がつかしました。

十一78ノ 石・貝・略」などが、
「略」、それ／＼貨幣の役目をしたこともあつた。しかしこれらの物は、受取る者にそれが不用であつたり、
「略」、其の他いろ／＼の缺點がある。

十一88ノ 父は暦を持つて来て、
「略」弟の手に渡した。弟はそれを見てしばらく考へてゐたが、
「略」

十一89ノ 図 「こゝに『八十八夜』とありますが、これは何ですか。」「それも立春から數へると八十八日目で、

「略」。」

十一92ノ 図 太陽暦は春分から春分までを一回歸年といつて、それを本としてこしらへたものだ。

十一94ノ 図 「暦は實に重寶なものだ。
「略」、それを利用しないのであるのは實の持ちぐさだ。」

十一95ノ 図 「父は自分で木を切出して小さな家をつた。それは三方が丸太の壁で、
「略」。

十一97ノ シャベルが數字で眞黒になると、それをふいては又書く。

十一98ノ しかしせつかく始めた學校通ひも、
「略」止めねばならなくなつた。それから又父の手助をしたり、
「略」。

十一114ノ 一體自治の精神とは何であるか。地方人民が
「略」、誠意其の團體の爲に力を盡くす精神が即ちそれである。

十二12ノ 彼が探検船ビーグル號に乗込んで意氣揚々と本國を出發したのは、二十三歳の時である。
「略」、種々の材料を集めて本國に歸つたのはそれから五年の後である。

十二13ノ ダーウィンは興味を覺える
と、あくまでそれにこる性質で、
「略」。

十二55ノ 女の子は
「略」、「まあ、かはいゝねち。」男の子は指先でそれをつままうとしたが、
「略」。

十二57ノ 「略」、若し見附からなかつ

たらと、それが又心配になつて來た。

十二58ノ するとねちが其の光線を受けてぴかりと光つた。
「略」女の子がそれを見附けて、
「略」。

十二58ノ 時計師は
「略」。さうして一つの懷中時計を出してそれをいちつてゐたが、
「略」。

十二66ノ 図 お前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、わしはそれが知りたいのだ。

十二68ノ 図 「なに、どう申し上げてよいかわからぬ。それでは返事にならぬではないか。」

十二72ノ 「略」コーデリヤは、やがていたましい報知を得た。それは父が姉たちの爲に虐待されてゐるといふことであつた。

十二76ノ 「略」、其の言葉の端端にも
「略」、自分を責めて娘にわびる眞心がこもつてゐた。コーデリヤはそれを聞いて腸をちぎられるやうな思ひをした。

十二83ノ 図 「略」、小舟に乗じていよ／＼探検の途に上りぬ。それより一年ばかりの間、風波をしのぎ、飢寒と戦ひ、
「略」。

十二85ノ 図 「略」、コーニ・林蔵等の一行八人は、
「略」、デカストリー灣の北に上陸したり。それより山を越え、河を下り、
「略」。

十二91ノ 彼はだん／＼物思に沈むやうになつた。それを見てひどく氣を

もんだ父王は、
「略」。

十二104ノ これからが世に恐しい青のくさり戸である。それは
「略」、見るから危げな數町のかけはしを造つたものであるが、
「略」。

十二116ノ 図 「略」、石炭の火力による蒸氣力は、多くの場合之に敵するものが出来なくなりました。そればかりでなく、石炭は早晚使ひ盡くされてしまふが、水力は無限といつてよい。

十二118ノ 図 又最近無線電話が發明されましたが、今やそれが盛に利用される機運となりました。

十二132ノ 我が國が
「略」、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、主として我々國民にそれだけすぐれた素質があつたからである。

十二137ノ 我が國民には潔いこと、あつさりしたことを好む風がある。櫻の花の一時に咲き一時に散る風情を喜ぶのがそれであり、
「略」。

十二138ノ 我が國民には潔いこと、あつさりしたことを好む風がある。
「略」、古の武士が玉とくだける討死を無上の名譽としたのがそれである。

それ（感）6 それ
四72ノ 図 それ、もう日がくれるぞ。

六94ノ 賊は「それ、敵が出た。一騎も餘すな。」とおしよせた。

七62ノ 図 「略」、「それ、川が渡れ

る。」といふことになりますと、我もく先をあらそつて渡りました。八375 里親の方は「それ見よ。」といはぬばかりに、子どもを引きよせますと、略。

十963 僕何だかきまりが悪くつて、さう言へなかつたのです。「それ御らん。『はい。』も言ひにくい言葉では無いか。」

十二1272 略、門を守つてゐた兵士等が「それ勝が来た、勝が来た。」とひしめきながら、略。

それいじょう「其以上」(名) 1 それ以上

七276 略、五尺あると十寸といふ。それ以上は、十寸一寸、十寸二寸などといふ。

それがし「某」(代名) 3 某

七1027 庭先の御門を守る者が「ございません。某の手で固めませう。」と清正がいひますと、秀吉はうなづきました。

七1059 清正はつゝしんで、「明國の使者、某の陣中に参り、『略。』」などの廣言。

七1073 略、某は四つ五つの頃から親にはなれて、姓も存じませんので、御威光を借りて豊臣と記したの「ございませう。」

それから(接) 32 ソレカラ それから
三317 略「カドマツヲタテマス。」

「ソレカラ。」「シメヲハリマス。」
二322 略「シメヲハリマス。」「ソレカラ。」「オソナヘノモチモカザリマス。」

二365 ヤハウマクアタリマシタ。アタルト、モチハ略、パットトンディキマシタ。ソレカラコノ人ノ田ニハ、オ米ガスコシ

三154 略。「略」。一ばんふといのがおやゆびで、一ばんほそいのがこゆびです。「それから。」

三155 略「それから。」「それから、一ばんながいのが中ゆびで、中ゆびとおやゆびのあひだにあるのが人さしゆび、略。」

三223 犬は略、小二郎のそばへよつてきました。それからそのへんをむやみにかけまはりました。

三373 略、左ノ手ニオモイモノヲ持ツトキニハ、カラダヲ右ノ方ヘマゲマス。ソレカラ、道ヲアルクトキニハ、左ガハヲ通ルノガヨイコトニナツテキマス。

三668 私ハ略、フシノマン中ニ、キリデ小サナアナヲアケマシタ。ソレカラホソイ竹ヲエニシテ、略、センヲコシラヘマシタ。

三716 略、はばのせまい黒い

のはおばあさんのです。略。それから、あの赤いじゆばんはねえさんので、略。

四513 一どすみしました。道子が十二まい、みよ子が十まい、略。それから又二くみに分れて、

四693 略、山がらは略、竹がきの上にとまつて、それからうらの山へとんで行つてしまひました。

四781 それでとうとう家も土さうも田も畠も人の物になつてしまひました。それから略、村にもひさしく居ませんでした。

六158 僕はびつくりして、ぐみも紅草も地面へなげつけました。それからいさんと、ざふ木林へはいつて、略。

六475 サウシテ外ノ魚ガ其所ヘ來ナイヤウニ、シバラク其ノアタリニ番ヲシテキテ、ソレカラ海ヘ歸ル。

六577 先づ鶴岡の八幡宮へまゐつて、母の命を助けたまへといひ、それから頼朝の御殿へ行つて、略。

六864 自由にうごかすことの出来る長い鼻、略、小さな目、それから太い足、細い尾、一切繪で見た通りであつた。

七907 略「向ふむきになつて、此のいすにかけていらつしやい。」「かう

ですか。」「略。それから、つんばのまねをしてね。」

八798 略、これは縣の税で、縣立の學校や病院や、その他道路などの費用になります。それからこれは國の税で、納税告知書としてあります。

八935 信吉は略、娘の顔と先生の顔を、かはりばんこに見てゐた。それから先生は、僕等を一年生の教室に連れて行かれた。

九227 略、四代前の敷庵様が、國利民福の本は農業を盛にするにあるとお氣づきになつて、始めて農學をお修めになり、りつばな書物もお書きになつた。それから元庵様・不昧軒様、二代ついで、其のお志をおつぎになり、略。

九965 お話を聞いて、僕もすべて見たくなりました。それから、お花畠のお話も面白うございました。

十3410 略、海面より約二十六メートルも高い水面に浮ぶのである。それから船はクレブラの掘割を通る。

十959 略、お前のやうな弱蟲には、略、「いゝえ。」といふ言葉は言ひにくいのだ。それから又、晝間私が聞いた時、なぜすなほに『はい。』といはなかつたのだ。

十1022 略、一番美しいのは、たれ下つた莖に、幾つも咲いてゐる薄紅色の花である。それから少し行くと、うつぽかづらといふものがある。

十一365 地圖の中の薄緑に染めてあるのが一昨年植付けた處、朱線で圍んであるのが今年伐採する處、それから次々という／＼の印がついてゐる。

十一397 〈略〉、枝を打てば、〈略〉、又空氣の流通がよくなくて蟲がつかなくなるさうだ。それから始めて聞いて面白いと思つたのは、枝打をしないと木に節が出来ることである。

十一667 其のうち 〈略〉、木片と木片をこすりあはせて火を得る法をさとするやうになつた。それから少し進むと、石や金を打合はせて火を出す法を考へるやうになつた。

十一761 圖 〈略〉、先づ土臺を作つて、それから一步一歩高く登り、最後の目的に達するやうになさい。

十一915 圖 そこを見ると、臺灣や樺太のやうな遠い所の氣候までも大體分る。それから雨雪の量は何處が一番多いか、〈略〉、こんなことも記してある。

十一924 圖 〈略〉、日本では明治五年まで太陰曆を用ひてゐたが、其の翌年から太陽曆を用ひた。それから太陰曆を舊曆、太陽曆を新曆といふやうになつた。

十二952 〈略〉 五人の友は、〈略〉、彼を捨てて立去つた。それから釋迦はブツダガヤの緑色濃き木陰に靜坐しておもむろに思をこらした。

それぞれ (名) 14 それ／＼

八808 圖 「縣や國の税も、村の役場へ納めれば、よいのですか。」さうです。村役場で、〈略〉まとめて、それ／＼送るのです。」

八1048 〈略〉、職工が大勢居つて、それ／＼手分をして働いてゐる。

九423 圖 二人の我が子それ／＼に、死所を得たるを喜べり。

九904 圖 〈略〉、〈略〉を一しよにして小熊の形を想像し、〈略〉を一しよにして大熊の形を想像して、それ／＼小熊座・大熊座といふ名をつけてゐる。

十一118 總員三十二人が四組に分れて、それ／＼仕事の持場に向つた。

十一169 〈略〉、そこへ弟さんが雑誌を二三つ持つて来て、本棚に並んでゐる雑誌の間へそれ／＼お入れになりました。

十一258 圖 寄手の大將佐久間盛政は、〈略〉、大岩山・鉢峯などの要所々々にそれ／＼將卒を配置したり。

十一317 圖 福島正則以下の六人、またそれ／＼に名ある勇士を討取つて、〈略〉。

十一539 かうして出来たゴムは、〈略〉加硫法を行ふ。〈略〉。之をそれ／＼用途に應じて、更に加工するのである。

十一789 石・貝・家畜・獸皮・布・農産物などが、〈略〉、それ／＼貨幣

の役目をしたこともあつた。

十二109 又いろいろの鳥を注意して見ると、それ／＼違つた面白い習性をもつてゐるので、〈略〉。

十二168 圖 しかして編輯局は更に編輯部・〈略〉・校正部等に分れ、各部にそれ／＼掛の記者又は技術家ありて、〈略〉。

十二546 圖 ああいろいろの道具、たくさん時計、形も大きさもそれ／＼違つてはゐるが、〈略〉。

十二6010 國旗は實に國家を代表する標識にして、其の徽章・色彩にはそれ／＼深き意義あり。

それで (接) 11 ソレデ それで

三393 ちか道の方は、道がこはれてゐたり、石が出てゐたりしました。それでとほい本道をまはつた小二郎の方が、正一よりもかへつてさきにつきました。

四756 〈略〉、稻も麥もよそのよりはよく出来ました。それでだんだんうちがよくになりました。

四777 此の人は〈略〉、〈略〉、うちの仕事もせず、ゐばつてばかり居ました。それでとうとう家も土さうも田も畠も人の物になつてしまひました。

五176 圖 「これは鶏だよ。それで金鶏勲章といふのだが、〈略〉。」

五535 此の人に年取つたおとうさん

がありまして、酒がすきでございまして。それで山へ行くにも、〈略〉、かへりに酒を買つて来ては、おとうさんを喜ばせてゐました。

六106 圖 銅ハ〈略〉安ウゴザイマス。

ソレデ、オアシニナルコトモ出来レバ、針金ニナルコトモ出来マス。

十867 米は〈略〉、全く外國米の足しまへを受けぬわけには行かない。

それで、〈略〉年々輸入してゐる。

十873 機械類は、〈略〉、物によつては、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。それで、機械類もまだかなり多く輸入されてゐる。

十928 圖 「誠にやさしいやうだが、それで中々言ひにくい場合があるのだ。」

十一792 しかしこれらの物は、〈略〉、其の他いろいろの缺點がある。それで金屬を用ひることを思ひつき、〈略〉。

十二409 圖 〈略〉、「え、樂譜がない。それでどうして。」といひさして、ふと見ると、かはいさうに妹はめくらである。

それであるから (接) 1 それであるから

十一1162 〈略〉、一般の人民の後援がなければ自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。それであるから人々は常に〈略〉團體の福利を増進することを心掛けねばならない。

それでは (接) 17 ソレデハ それでは

一 316 図 「マタ 一ハ キマシタ。」
「ソレデハ 六パ デス。」

二 212 図 「略」サツパリ アリマセン。
「ソレデハ 略」アノ 木ノ 下 ヘイツテ ミマセウ。」

二 545 図 「ラヂサン、コンヤ モ マ タカゲエ ヲ シテ 見セテ クダ サ イ。」
「ソレデハ シヤウジ ノ ム カ フ ニ オスワリ ナ サ イ。」

三 162 図 「略」中ゆびとこゆびのあひだにあるのがくすりゆびです。「さうです。それではあしのゆびのなをしつてゐますか。」

三 187 図 「あかいきものをきてゐます。「それではをんなでせう。」

三 191 図 「いいえ。「それではとこの子ですか。」

三 196 図 「かほちゆう ひげだらけです。「それではでもあしもないでせう。」

三 385 図 正「略」ぼくは右のちか道の方をいつてみま

す。「小「二郎」それではぼくは左の本道を通ります。」
三 447 図 それはまことにおなごりをしいこととでございます。それではこの玉手箱を上げます。
六 54 図 「略」何しろ一万二千五

百尺もあつて、内地第一の高山だから。「それでは日本一の高山は。」

七 110 6 図 「ハナシデキタイツクルヘン。」
「さうか。それでは明日の一番で立たう。」

八 82 2 水にはこれといふ形がない。
「略」それでは弱いものかといふに、さうではない。

八 84 6 図 「ありがたうございます。
「略」それではちよつと行つて参ります。」

八 104 5 しかし之を一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。
「略」それではマツチは、どうして誰が造るのであらう。

十 52 6 図 「略」當座の方は何時でも引出すことが出来るが、定期の方は、
「略」期限が来ないと引出すことが出来ない。「それでは當座預金の方が便利ですね。」

十二 43 6 彼は再びピアノの前に腰を下した。
「略」それでは此の月の光を題に一曲。」

十二 57 2 ねぢは「略」飛上るやうにうれしかつた。それでは自分のやうな小さな者でも役に立つことがあるのかしらと、夢中になつて喜んだが、
「略」。

それでも (接) 12 ソレデモ それでも
三 13 4 あかちゃんがなき出すと、
「略」子もりうたをうたひます。

それでも まだ あかちゃんがなくときには、
「略」だつこをしておかあさんのところへつれていきます。

四 37 4 スズメハ「略」ヲドツタリサヘツタリシテ バカニシマス。
ソレデモ フクロフ ハシ方 ガ ナイノデ、
「略」キヨトキヨト シテ 居ル バカリ デス。

四 45 7 「略」すすきは大きにらくになりました。」と今吉がいひましたが、それでも
「略」すつかりいろいろな物をもとの所へなほしたら、夕方近くになりました。

五 74 4 「略」もう庄屋の惡口を言ふ者ばかりで、普請方はどうくにげてしまつた。それでも庄屋はくじけなかつた。

六 12 7 図 「略」今デハ鐵ハ「略」人ノ役ニ立ツコトハ銅以上デス。」

「略」
「ソレデモ鐵ハチキニサビデ、赤クナルデハアリマセンカ。」

六 18 4 行つて見ますと、なるほど少し早すぎましたが、それでも、小さなしめぢが列を作つて出てゐました。

六 36 2 源氏の者どもは「略」
「略」。「お捨てなさい。」と口々に言ひます。それでも義経は、
「略」
とうとう弓を拾ひ上げました。
八 54 7 おとうさんが「せいは高くて、まだだめだ。」とおつしやつた

が、それでもとうく一白だけはつき上げた。

九 85 9 図 「略」しかし地球が廻るために、我々の目には動くやうに見える。
「略」。「それでも航海をする人などが、よく星を見て船の位置をはかるといふではありませんか。」

九 107 5 敵弾は前後左右へ雨のやうに落ちて来る。それでも誰一人敵に後を見せる者はない。

十 47 1 「略」今は手助する人さへも無くなつた。喜三右衛門はそれでも研究を止めようとしな

い。
十一 38 2 下刈はいつも土用中にするので、ずるぶん苦しいが、それでも木が「略」、しんを立ててすくすくと延びてゐるのを見ると、非常にうれ

それなら (接) 4 ソレナラ

一 312 図 「アチラ ニ 一ハ キ マ ス。」
「ソレナラ 五ハ デス。」

一 49 6 図 「一ツクダサイ、オトモ ヲ シマス。」
「ソレナラ ヤル カラ、ツイテ コイ。」

二 61 2 図 「イエエ。サウ ニ ガク ハ アリマセン。」
「ソレナラ、ソンナ ニ スコシ ヅツ ノ マ ナ イ デ、モ ツ ト タ ク サ ン オ ア ガ リ ニ ナ ツ タ ラ、ハヤク ナ ホ リ マ セ ウ。」

四 17 3 図 ワケヲ 申シ上ゲマス ト、
「ソレナラ 海ノ 水ヲ アビテ、ネテ 居ル ガ ヨイ。」

そんなき 「損益」(名) 1 損益

十二23 又單に損益の點から見ても、かやうな仕方は唯一時の利益を得るに止つて、永續することが出来ないから、〈略〉。

そんなかい 「村会」 ↓ふけんしちようそんなかい いん

そんなかい 「村界」(名) 1 村界

五37 村界

そんなけい 「尊敬」(名) 1 尊敬

十二64 國「略」國旗は、〈略〉、或は其の國民の理想・信仰を表すものなれば、國民の之に對する尊敬は、即ち其の國家に對する忠愛の情の發露なり。

そんなざい・する 「存在」(サ変) 2 存在する「一シースル」

十一13 地球上に存在するもので、太陽の影響を受けぬものは一つもない。

十一38 つまり此の宇宙には、あの太陽のほか、これと同じやうなものがないは數限りもなく存在してゐるが、〈略〉。

そんなじ ↓ごぞんじ

そんなじお・り 「存居」(ラ変) 2 存じ居り「一リ」

十108 國「略」近き處ならば早速上り候て御世話も致すべく候へども、〈略〉、それも心に任せず、甚だ残念に存じ居り候。

十二121 國「略」此の上はいよく仕事

に勵み、一日も早く一人前の商人となりて、親に安心致させたと存じ居り候。

そんなじたてまつる 「存奉」(四) 1 存じ奉る「一リ」

十二120 國「略」常に「小山はどうしてゐるだらうか。」と仰せらるゝ由、いよく御なつかしく存じ奉り候。

そんなす 「存」(サ変) 1 存す「一スル」

十一125 國「略」されば古は、支那より渡來せるものの僅かに世に存するのみにて、學者其の得がたきに苦しみたりき。

そんなず ↓かれそんなず
そんなず 「存」(サ変) 9 存ず「一ジーズ」

九111 國「略」昨日は美しきお話の本御送り下され、誠に有難く存じ候。

九112 國「略」三毛の子猫、もはや大きくなり候事と存じ候。

九113 國「略」早速御見舞に參上致したく存じ候へども、御住所不明にて困り居り候。

十106 國「略」玉の様な女の御子御生れの由承り、誠にめでたくうれしき限りと存じ候。

十107 國「略」私とても〈略〉、何よりうれしく、一日も早く御顔を見たく存じ候。

十109 國「略」此の度の御報は全

く夢かと存ぜられ候。

十一107 國「略」子供が、各國人の間にまじりてかひなく立働ける様を見ては、如何にもけなげに存ぜられ候。

十二119 國「略」當地に參りて以來、一度手紙を以て御様子御伺ひ申上げたしとは存じながら、〈略〉。

十二120 國「略」參りし當座は何事もわからず、唯氣をもむのみにて、我ながら情なく存じ候ひしが、〈略〉。

そんなする 「存」(サ変) 8 存ずる「一ジ」

七101 國「略」上様をはじめ皆様、おしの下になつては居られぬかと存じ、〈略〉かけつけました。

七106 國「略」御威光にもかゝる所と存じ、〈略〉。」と返書をつかはしました。

七107 國「略」某は四つ五つの頃から親にはなれて、姓も存じませんので、御威光を借りて豊臣と記したのでございます。

八44 國「略」一週間もおひまをいただきますまして、まことにありがたう存じます。

八109 國「略」父が今年八十八になりましたので、来る二十五日に、〈略〉、ほんの心ばかりの祝を致したいと存じます。

十二67 國「略」私はもう何よりも、〈略〉父上を大事と存じます。

十二67 國「略」、——私は〈略〉、ひたすら父上を大事に致すのを此の上もない仕合はせと存じてをります。

十二128 國「略」安芳がいふ、「官軍方の御意見はどのやうなものか存じませんが、拙者の考へる所では、〈略〉。

そんなちよう 「村長」(名) 1 村長

十125 國「略」村長は村の舊家に生れ、〈略〉、深く村民に敬愛せられて、〈略〉。

そんなちようさん 「村長」(名) 3 村長さん

四74 國「略」私は東の村の今の村長さんのおぢいさんやおばあさんを其のわかい時から知つて居ました。

四75 國「略」今の村長さんのおとうさんもおとなしい人で、小さい時からよくはたきました。

四76 國「略」今の村長さんも子どもの時からすなはで、なさげぶかい人でした。

そんなちようす 「尊重」(サ変) 1 尊重す「一スル」

十二64 國「略」故に我等は、自國の國旗を尊重すると同時に、諸外國の國旗に對しても、常に敬意を表せざるべからず。

そんなちよう・する 「尊重」(サ変) 1 尊重する「一シ」

十一116 國「略」自治團體の事業は、地方人民が一般に之を尊重し、之に

協力することによつて、始めて其の効果を完全に擧げることが出来る。そんな(形状) 14 ソンナ そんな

二612 図 「イイエ。サウ ニガクハアリマセン。」「ソレナラ、ソンナ ニスコシ ヅツノ マナイデ、モツトタクサン オアガリ ニナツタラ、ハヤク ナホリマセウ。」

三532 図 そんなところ でとどくものか。やねへ上つてはたけ。五718 図 土手は 略、幅は一番上

で三間といふ大きなもくろみであつた。「そんな大きな池がいるだらうか。」と言つて、首をひねる者もあつたといふが、略。

六146 図 松山の入口で、赤くなつてゐたぐみを一枝折ると、「そんな大きな枝を」と、にいさんに注意されました。

九546 図 社長さんは 略、醬油のはかり賣を始めた。町の人々は之を見かねて、『そんな事までなさらくても。』といつて、略。

九7610 図 「東京から此所までは四百五十六哩もあるのだが、略、そんなに遠い所に來たやうな氣がしないね。」

九861 図 「略」。しかし地球が廻るために、我々の目には動くやうに見える。略。「略」。星がそんなに位置の變るものなら、日當にならな

九1218 図 「略」。シカシ今度ノ候補者ノ中ニ、實ニリツパナ考ヲ持ツテ

キテ、アノ人ナラバト思ハレル人ガアルカラ、略。「ソナエライ方ナラ、オトウサンガワザくオ歸リニナラナクツテモ大丈夫デセウ。」

九128 図 世間ニハ、略、或ハ棄權シテシマツタリスル人モアルガ、ソ

ンナ事ヲスルノハ、選舉ノ趣意ニツムイテキル。十142 図 略、とかく無責任な事は

かりしてゐました。そんな風でしたから、ぼんの道ふしんなどは、何時も二日はかゝつたものでした。

十665 図 略 主人の持來れるは、秘藏の梅・松・櫻の鉢植なり。僧は驚きて、「略、そんなりつばな鉢の木をたくのは、どうぞ止めて下さい。」

十926 図 「おとうさんは、もつと言ひにくい言葉を知つてゐる。」「略。」「はい。」といふ言葉と、『いゝえ。』といふ言葉だ。「略。どうしてそんなに言ひにくいのです。」

十一861 図 僕も 略、一所に船上らうかと思つたが、「略。そんな弱いことではだめだ。」と、自ら勵まして進んで行つた。

十二385 図 略。ほんたうに一度でもよいから、演奏會へ行つて聴いて

みたい。」と、略。「そんなことをいつたつて仕方がない。

そんない 「村内」(名) 1 村内 八807 図 村役場で、村内の家々から納めるのをまとめて、それへ送るのです。

そんない 〆おもうぞんぶん 十二128 図 略、幕臣の身としては如何がな申分ではあるが、徳川家の存亡などは言ふにも足らぬ小事でござります。

そんない 「村民」(名) 2 村民 十1254 図 かくの如くなれば全村頗る豊にして、村民皆其の家業を樂しめり。

十1258 図 村長は 略、深く村民に敬愛せられて、幾度の改選にも重ねて選舉せられ、既に二十餘年動續せり。

そんない 「存立」(名) 1 存立 十二1336 略、國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國內はおほむね平和であつた。

た

た 「他」(名) 25 他

七611 図 皆さんのうちには、大きく

なつてから、商用其の他で、外國へ出かける人もありませう。

七861 海藻ニハイロアル。先ヅ タベルモノニハ、略・モヅクナドガアリ、糊ニスルモノニハ、略。此ノ他海藻ニハマダタクサンナ種類ガアツテ、略。

八135 徳川家康が幼時 略 石台戰を見に行つた。一方は百四五十人で、他の一方は三百人以上もあつた。

八613 図 看板ニハマタ商品ヲエガキタルモノアリ。略。此ノ他宿屋ニハ、掛行燈ニ旅人宿何屋ト記シテ掛クルモアリ、略。

八797 図 これは縣の税で、縣立の學校や病院や、其の他道路などの費用になります。

八801 図 略 これは國の税で、略。軍隊や、裁判所や、外國とのつきあひや、其の他いろいろの費用になるのです。

九162 保護色ヲモツテキルト、マハリノ色ニマギレテ、容易ニ他ノ動物ニ見ツケラレナイ。

九206 又或動物ハ保護色トハ反對ニ、鮮カナ體色ヲモツテキル。コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐レル武器ヲソナヘテキルカ、イヤガル味ヤニホヒノアルモノデ、略。

十544 此の愛らしい小鳥が、他の方法では全く通信が出來なくなつた場合でも、いろいろの困難ををかし

遠い處まで使者の役目を務めると聞
いては、〈略〉。

十55 10 普通傳書鳩を使用する方法は、
一定の飼養所から他の土地に連れて
行つて、飛歸らせるのである。

十84 2 採炭坑夫は四人づつ一組にな
つてゐて、其の内の二人が石炭を掘
崩すと、他の二人がそれをさるで運
んで炭車に入れる。

十88 4 綿花は主に印度やアメリカ合
衆國から輸入し、それに加工して
〈略〉。〈略〉、又支那・印度其の他の
東洋諸國へ輸出される。

十126 2 校長も〈略〉。其の他の教
員も、校長を模範として専心職務に
つとむるが故に、〈略〉。

十111 8 上海は〈略〉、近時工業も
次第に盛になつて、紡績・造船・製
粉・製紙其の他の諸工場が勢よく黒
煙を立ててゐる。

十136 7 「地藏山の内、二町三段五
畝、峯通り檜苗、其の他總べて杉
苗。〈略〉。」

十150 9 〈略〉、近年ゴムの需要が激
増したために、英國人はマレイ半島
の領地にパラゴムの木を移植するに
至つた。他の國人も之にならつて、
南洋におけるゴムの栽培は頗る盛に
なつた。

十165 9 〈略〉、火を使用するのは人
類ばかりで、他の動物には見られな
い所である。

十177 9 我我はこれらの貨幣や紙幣
を用ひて物品を賣買し、其の他いろ
／＼の用を辨じてゐる。

十179 1 石・貝・〈略〉などが、
〈略〉貨幣の役目をしたこともあつ
た。しかしこれらの物は、受取る者
にそれが不用であつたり、思ふやう
に分割することが出来なかつたり、
其の他いろ／＼の缺點がある。

十115 2 市町村長や議員を選擧する
には、〈略〉、決して親族・縁故其の
他私交上の關係の爲に心を迷はすや
うなことがあつてはならない。

十297 7 10 ロンドンは何と言つても
世界の都會です。〈略〉、國會議事
堂・大英博物館・ウェストミンス
ター寺院、其の他見る物聞く物唯々
驚く外はありません。

十304 7 昨日大英博物館を一覽し
ました。〈略〉。我が日本のよろひ・
かぶと其の他の武器類もたくさん集
めてあります。

十286 4 10 キチーにて土人の家に宿
る。土人等林蔵を珍しがりて之を他
の家に連行き、〈略〉。

十289 6 又貴衆兩院の何れから提
出された案は、他の一院のみで討議
し、〈略〉。

十213 2 10 初め彼は紙に炭素を塗り
て試みしが、〈略〉。次いで白金其の
他の金屬の針金を以て様々の實驗を
重ねしが、〈略〉。

た「田」(名) 24 田 ↓ あおた・いな
だ・やまだ

二33 4 ムカシアルトコロニ、田
ヤハタケヲタクサンモツテキ
タ人ガアリマシタ。

二36 6 ソレカラコノ人ノ田ニ
ハ、オ米ガスコシモデキナクナ
ツタトイヒマス。

三51 1 ツイコノアヒダウエタ田
ガ、モウアンナニ青クナリマシ
タ。

四4 4 今年は田がよく出來た
ので、ぼんにはそのおいはひ
の花火が上るさうです。

四75 4 此の人たちの田や畠
の作り方はていねいでしたか
ら、〈略〉。

四77 8 此の人は〈略〉、大きくな
つても、うちの仕事もせず、
〈略〉。それでとうとう家も土ざ
うも田も畠も人の物にな
つてしまひました。

五27 4 ツバメハ田や畠ノ作物ニツク
虫ヲ取ツテタバマスカラ、〈略〉。

五37 田 田
五60 4 田 あれ／＼、虹が立つてゐる。
森も小山も下に見て、向ふの田
から大空の雲までとゞく弓のなり。

五66 4 田 道の兩がはは一面に青田で、
〈略〉。「うちの方では、田に水がな
いと言つて、ささいでゐますのに、
此の村にはよく水がありますね。」

五72 3 氣早な者は自分の持地を田に
造りかへたといふことだ。

五74 8 よい身代であつたが、〈略〉
田を賣り、畠を賣り、家も土藏もみ
んな賣りはらつた。

五75 6 一雨毎に池の水はふえた。そ
れを見て、村の人は急にあれ地を田
にしたらした。

五76 1 六月の田植時から七月・八月
にかけて、水はありあまつた。そこ
で一年まじに田がふえたが、〈略〉。

七17 1 此の頃はれんげさうの花ざか
りである。四角な田には四角に、細
長い田には細長く、田の形其のまゝ
に紅紫のもうせんをしきつめたや
うに見える。

七17 1 〈略〉、細長い田には細長く、
〈略〉もうせんをしきつめたやうに
見える。

七17 1 〈略〉、田の形其のまゝに紅
紫のもうせんをしきつめたやうに
見える。

七26 4 馬はたいそう元氣のよい動物
で、〈略〉。又力が強いので、〈略〉、
田や畠の耕作に使つたりする。

九16 6 保護色ノ例ハイクラモアル。
田ニ住ム土蛙ハ土色、〈略〉。

九101 1 二百十日を無事に越した田に
は稻の穂先がもう大分重みを見せて
ゐる。

十93 3 「本道は遠いから近道を通ら
う。」と正雄が言ふと、〈略〉。其の

近道といふのは田のあぜ道で、
 十939 まん中から折れて、三人は水中におちいつた。さいはひ附近の田で働いてゐた村の人々に助けられ、
 〈略〉。

十11610 太宰府まうで 〈略〉、驛前で太宰府行の輕便鐵道に乗つた。〈略〉、霜の眞白に置いた田の中を走る。十五分許で汽車は太宰府町に着いた。十二914 ぼろを着た農夫は玉のやうな汗をかいて田をすき起し、牛はつかれ果ててあへぎあへぎ働いてゐる。
 た (助動) 2977 タ た 《タ・ダ・タラ・ダラ》
 ちよつとした・にゆうえいしたあにから・はるがきた

- 103 サルガカキノタネヨカニニヤリマシタ。
- 107 カニガニギリメシヲサルニヤリマシタ。
- 121 メヲダシマシタ。
- 131 キニナリマシタ。
- 141 ミガナリマシタ。
- 144 サルガミツケテトリマシタ。
- 147 アライノヲカニニナゲツケマシタ。
- 151 カニガシニマシタ。
- 154 コガニガナイテキマシタ。
- 157 ハチガキテ、ナクワケヲタツネマシタ。
- 163 ハチガキテオコリマシタ。

- 165 クリモキイテオコリマシタ。
- 167 ウスモキイテオコリマシタ。
- 172 カタキウチヲスルコトニナリマシタ。
- 174 クリガトビツキマシタ。
- 177 サルガヤケドヲシマシタ。
- 185 サルガミツヲツケニイキマス、ハチガチクリトサシマシタ。
- 187 サルガニゲダシマシタ。
- 193 ウスガオチテキテ、サルヲオシツケマシタ。
- 197 コガニガサルノクビヲハサミキリマシタ。
- 201 アメガヤミマシタ。
- 202 ヒガテリダシマシタ。
- 252 ヘチマノハナガサキマシタ。
- 315 アヒルガオヨイデキマス。〈略〉。「マタ一ハキマシタ。」
- 364 オハナガエンビツデアサガホヲカキマシタ。
- 371 ナンベンモカキナホシテ、ニイサンニミセマシタ。
- 373 「ニイサン、ミテクダサイ。」「ヨクデキマシタ。〈略〉。」
- 381 ユフガタニナリマシタ。
- 401 一バンボシミツケタ。
- 405 二バンボシミツケタ。
- 413 三バンボシミツケタ。

- 443 ムカシムカシ、オデイサントオバアサンガアリマシタ。
- 447 オデイサンハヤマヘシバカリニ、オバアサンハカハヘセントクニイキマシタ。
- 453 〈略〉、オホキナモモガナガレテキマシタ。
- 457 オバアサンハソノモモヲヒロツテカヘリマシタ。
- 467 〈略〉、モモガニツニワレテ、ナカカラオホキナヲトコノコガウマレマシタ。
- 473 オデイサンハソノコニ、モモタラウトイフナヲツケマシタ。
- 477 モモタラウハダンダンオホキクナツテ、タイソウツヨクナリマシタ。
- 503 イヌヲケライニシテイキマス、サルガキマシタ。
- 505 サルモダンゴヲモラツテ、ケライニナリマシタ。
- 507 コンドハキジガキマシタ。
- 512 キジモダンゴヲモラツテ、ケライニナリマシタ。
- 522 モンヲヤブツテセメコミマシタ。
- 534 モモタラウハカタナヲヌイテ、一バンオホキナオニニムカヒマシタ。
- 537 オニドモハカウサンシテ、ダイジナタカラモノヲダシマシタ。

- 541 クルマニツンダタカラモノ、〈略〉。
- 551 オキヤクアソビ 〈略〉。オチヨガオキヤクニナツテキマシタ。
- 555 「オチヨサンデスカ、ヨクイラツシヤイマシタ。」
- 62 オハナハ 〈略〉、オチャトオクワシヲダシマシタ。
- 92 ミゴトニサイタ カキネノコギク、〈略〉。
- 102 ミゴトニサイタ カキネノコギク、〈略〉。
- 115 ベンケイガ大ナギナタデキリツケマシタ。
- 121 ウシワカマルハヒラリトランカンヘトビアガリマシタ。
- 124 〈略〉、ベンケイノナギナタヲウチオトシマシタ。
- 127 ベンケイハ 〈略〉、ウシワカマルノケライニナリマシタ。
- 133 木ノエダニ、コトリガ十パトマツテキマシタ。
- 135 人ガテツパウデ、一ドニ三バウチオトシマシタ。
- 143 犬ガサカナヲクハヘテ、ハシノウヘヲトホリマシタ。
- 145 シタヲミルト、〈略〉サカナヲクハヘタ犬ガキマス。
- 153 〈略〉、ワント一コエホエマシタ。

- 二155 〈略〉、クハヘテキタサカナハ、川ノナカヘオチテシマヒマシタ。
 二157 〈略〉、クハヘテキタサカナハ、川ノナカヘオチテシマヒマシタ。
 二163 七 ユフヤケ 日ガハイリマシタ。
 二171 アチラノソラガマツカニナリマシタ。
 二183 〈略〉、月ガデハジメマシタ。
 二187 〈略〉、月ガデハジメマシタ。〈略〉。モウスツカリ木ノ上ヘデマシタ。
 二204 園 ユフベカゼガフイタカラ、〈略〉。
 二207 園 モウ人がヒロツタノカ、サツバリアリマセン。
 二222 園 ドコカラキタノカ、トンデキタ木ノハ、〈略〉。
 二223 園 ドコカラキタノカ、トンデキタ木ノハ、〈略〉。
 二233 園 ドコカラキタノカ、トンデキタ木ノハ、〈略〉。
 二234 園 ドコカラキタノカ、トンデキタ木ノハ、〈略〉。
 二275 〈略〉、ト、年トツタネズミガナカマノモノニイヒマシタ。
 二276 〈略〉、ト、年トツタネズミガナカマノモノニイヒマシタ。
 二282 ソノトキ一ピキノ子ネズミガマヘヘデテイヒマシタ。
 二291 園 大キナスズヲネコノクビニツケテオイテ、ソノオトガキコエタラ、ニゲルコトニシテハドウデセウ。
 二295 「ナルホドヨイカンガヘダ。」トイツテ、ミンナカンシンシマシタ。
 二295 スルト年トツタネズミガ、〈略〉。
 二303 スルト年トツタネズミガ、〈略〉。
 二304 〈略〉、トイヒマシタノデ、〈略〉。
 二304 〈略〉、ミンナダマツテシマヒマシタ。
 二306 園 「オトウサン、モウイクツネタラ、お正月デスカ。」
 二336 〈略〉、田ヤハタケヲタクサンモツテキタ人がアリマシタ。
 二336 〈略〉、田ヤハタケヲタクサンモツテキタ人がアリマシタ。
 二345 ユミヲイルコトガスキデ、トリヤケダモノヲイコロシテ、オモシロガツテキマシタ。
 二353 アル日トモダチニ〈略〉、〈略〉。トイヒマシタ。
 二356 園 モチハタイセツナオ米デコシラヘタモノデスカラ、〈略〉。
 二361 トモダチハ「モチハ〈略〉、イテハイクマセン。」ト、トメマシタガ、〈略〉。
 二362 トモダチハ「〈略〉。」ト、トメマシタガ、キカナイデイマシタ。
 二363 ヤハウマクアタリマシタ。
 二365 アタルト、モチハ白イトリニナツテ、パットトンデイキマシタ。
 二367 ソレカラ〈略〉、オ米ガスコシモデキナクナツタトイヒマス。
 二383 園 サイタサイタハナガ、マツ白ナハナガ。
 二383 園 サイタサイタハナガ、マツ白ナハナガ。
 二395 ニイサンガオトモダチト、ニハニ大キナユキダルマヲコシラヘマシタ。
 二403 ワタクシハネエサンニ、ユキデウサギヲコシラヘテイタデキマシタ。
 二414 ムカシムカシ、ヨイオヂイサントワルイオヂイサンガアリマシタ。
 二421 ヨイオヂイサンハ犬ヲ一ピキカツテ、タイソウカハイガツテキマシタ。
 二425 アル日犬ハ畠ノスミデ、「ココホレ、ワンワン。」トヨシヘマシタ。
 二433 〈略〉、土ノ中カラ、オカネヤタカラモノガタクサンデマシタ。
 二435 ワルイオヂイサンハソレヲキイテ、ソノ犬ヲカリニキマシタ。
 二437 サウシテムリニ犬ヲナカセテ、ソコヲホツテミマシタガ、〈略〉。
 二444 〈略〉、ソノ犬ヲコロシテシマヒマシタ。
 二451 〈略〉、犬ヲウツメテ、ソノ上ニ小サナマツノ木ヲウエマシタ。
 二454 ソノマツノ木ハズンズン大キクナリマシタ。
 二456 ヨイオヂイサンハソノ木ヲキツテ、ウスヲコシラヘマシタ。
 二463 〈略〉、ウスノ中カラ、マタオカネヤタカラモノガデマシタ。
 二465 ワルイオヂイサンハ又コノウスヲカリニキマシタ。
 二466 サウシテムリヲツイデミマシタガ、〈略〉。
 二467 〈略〉、ヤツバリキタナイモノバカリデマシタ。
 二472 又オコツテ、ソノウスヲワツテ、火ニクベテシマヒマシタ。
 二475 ヨイオヂイサンハソノハヒヲモラツテキテ、ニハニマキマシタ。

- 二481 スルト、ニハノカレ木ノエダニ、キレイナ花ガサキマシタ。
 二487 オヂイサンハ「略」、「略」トヨンデアルキマシタ。
 二495 トノサマガオトホリニナツテ、「略」トオホセニナリマシタ。
 二502 「略」、一メンニ花ザカリニナリマシタ。
 二506 「略」、ゴホウビヲタクサンクダサイマシタ。
 二512 「略」、ノコツテキタハヒヲカキアツメテ、「略」。
 二516 ワルイオヂイサンハ「略」、トノサマノオカヘリヲマツテキマシタ。
 二524 「略」、トノサマガオトホリニナツテ、「略」トオホセニナリマシタ。
 二532 「略」目モ、口モ、耳モハヒダラケニナリマシタ。
 二537 「略」、ワルイオヂイサンハトウトウシバラレテシマヒマシタ。
 二614 窓「略」、モツトタクサンオアガリニナツタラ、ハヤクナホリマセウ。
 二651 子牛ハコノアヒダウマレタノデス。
 二653 モウヨホド大キクナリマシタ。
 二675 コレカラダンダンアタタカナツテキマシタ。
 二676 ウメノ花ガサキ出シマシタ。
 二682 ケサウグヒスガ「略」ナキマシタ。
 二712 罎ノツテミタイナヒカウキニ。「略」。アンナニトンダラユクワイダラウ。
 二717 ムカシ大江山ニ「略」ワルモノガキマシタ。
 二722 山カラ出テ、モノヲトツタリ、人ヲサラツタリシマシタ。
 二723 「略」、テシタモ大ゼイアリマシタ。
 二725 ソノ上イハヤニコモツテキマシタカラ、「略」。
 二727 「略」、ナカナカタイヂスルコトガデキマセンデシタ。
 二735 ソコデ天子サマカラ、「略」大シヤウニ、「略」ト、オホセツケニナリマシタ。
 二742 ライクワウハ「略」、大江山ヘムカヒマシタ。
 二745 「略」、ミチハワカリマセンデシタガ、「略」。
 二751 「略」、トウトウタヅネアテテ、トメテクレトタノミマシタ。
 二754 シュテンドウジハ「略」トオモツテ、トメテヤリマシタ。
 二756 ソノバンシュテンドウジハサケニヨツテネマシタ。
 二762 「略」、イビキハカミナリノヤウデシタ。
 二765 「略」、タチヲスルリトヌイテキリツケマシタ。
 二767 シュテンドウジハオコツテクルヒマハリマシタ。
 二773 ドチラモマケズニタタカヒマシタガ、「略」。
 二775 「略」、トウトウライクワウガカチマシタ。
 二782 ライクワウノケライモ、シュテンドウジノテシタヲノコラズタイヂシマヒマシタ。
 三32 「略」、トオモツテ、ソツトネドコヲ出マシタ。
 三36 窓「ア、日ガ出ハジメタ。「略」」。
 三54 ニ三日マヘカラメンドリガスニツキマシタ。
 三55 ケサオカアサンガタマゴヲ入レテオヤリニナリマシタ。
 三56 メンドリハヘンナコエヲタテテキマシタガ、「略」。
 三58 メンドリハ「略」、タマゴヲハラノ下ニダイテシマヒマシタ。
 三67 オカアサンニ、「略」トキキマス、「略」トオツシヤイマシタ。
 三71 窓「ヒヨコガカヘツタ」。
 三72 アルアサ、オカアサンガ「略」トオツシヤツタノデ、「略」。
 三77 「略」、ヒヨコガ小サナアタマヲ出シテ、ビヨビヨトナイテキマシタ。
 三78 ハネノ下ニモ二三バキルヤウデシタ。
 三83 ヒヨコガナクト、オヤドリハ「略」、コココトイツテキマシタ。
 三85 「略」、オヤドリハヒヨコヲニハヘツレ出シマシタ。
 三145 ゆふはんがすんだあとで、「略」。
 三146 「略」、おちいさんが二郎にたづねました。
 三174 おちいさんはわらひながら、「略」とをしへてやりました。
 三193 窓「どうもこまりました」。「略」。
 三198 窓「わかりました。だるまさんです」。
 三203 小一郎は正一とうらの山ヘわらびをとりいきました。
 三204 よけいにとつたはうがかちだといつて、「略」。
 三206 「略」、二人はまつやつつじのあひだを「略」くぐつてとりました。
 三208 太くてやはらかなわらびがたくさんはえてゐました。

- 三二二 一 〈略〉、それは小二郎のう
ちのいぬでした。
- 三二二 三 犬は〈略〉、小二郎のそば
へよつてきました。
- 三二二 五 それからそのへんをむ
やみにかけまはりました。
- 三二二 七 〈略〉、二人はたくさんと
つてからくらべてみました。
- 三二三 一 どちらもたいいてい、おなじ
くらゐで、かちまけはありません
でした。
- 三二三 四 そのとき正一のおぢいさ
んが、〈略〉そこへきました。
- 三二三 五 二人はよろこんで、おぢい
さんについてかへりました。
- 三二三 八 〈略〉、犬は〈略〉、かけて
きてとびきました。
- 三二五 三 この一三日の雨で、竹の
子がかんなに出来ました。
- 三二五 三 むぐらもちでもとほつた
やうに、〈略〉。
- 三二六 二 このあひだかきねのそば
へ出たのは、もう私のせい
より高くなりました。
- 三二六 四 このあひだかきねのそば
へ出たのは、もう私のせい
より高くなりました。
- 三二六 六 石がきの下へ出たのは、
〈略〉、竹になりかかつてゐます。
- 三二八 二 〈略〉、いまに竹になつた
ら、おぢいさんに、あれで竹う
まをこしらへていただくつもり
です。
- 三三〇 一 圃 〈略〉。と、こしには
さんだ手ぬぐひのはしひきさ
いてさし出せば、〈略〉。
- 三三〇 四 圃 「しごとなされよ、きり
きりしやんと、かけたたすきの
きれるほど。」
- 三三〇 四 〈略〉おとうさんが道で、
「〈略〉。」とおつしやつたら、〈略〉。
- 三三〇 七 〈略〉、五一ぢいさんは
「〈略〉。」といつて、大きな手で
あたまをなでました。
- 三三七 四 又わかれ道のところへ
きました。
- 三三九 一 二人はかけ足でまはりつ
こをしました。
- 三三九 三 ちか道の方は、道がこ
はれてゐたり、石が出てゐたり
しました。
- 三三九 四 それでとほい本道をまは
つた小二郎の方が、〈略〉。
- 三三九 五 〈略〉小二郎の方が、正一
よりもかへつてさきにつしま
した。
- 三三九 八 むかしうらしま太郎とい
ふ人がありました。
- 三四一 一 うらしまは〈略〉、子ども
からそのかめをかつて、海へ
はなしてやりました。
- 三四一 六 圃 「うらしまさん、このあ
ひだはありがたうございました。
〈略〉。」
- 三四二 一 〈略〉、大きなかめが出て
きて、〈略〉。私のせ中へおの
りなさい。」といひました。
- 三四二 五 〈略〉りゆうぐうへつきま
した。
- 三四二 七 りゆうぐうのおとひめは
うらしまのかたのをよろこん
で、〈略〉。
- 三四三 三 りゆうぐうのおとひめは
〈略〉、毎日いろいろなごちそう
をしたり、さまざまなあそびを
して見せたりしました。
- 三四三 八 うらしまはおもしろがつて、
うちへかへるのもわすれてゐ
ましたが、〈略〉。
- 三四四 二 圃 うらしまは〈略〉、おとひ
めに「いろいろおせわになりま
した。」
- 三四四 五 あまり長くなりますから、
もうおいとまにいたしませう。」
といひました。
- 三四五 二 おとひめは〈略〉、きれいな
箱をわたしました。
- 三四五 五 うらしまは〈略〉、海の上
へ出てきました。
- 三四六 六 うちへかへつてみると、
おどろきました、〈略〉。
- 三四六 三 〈略〉、おとひめのいつた
こともわすれて、玉手箱をあけ
ました。
- 三四六 四 〈略〉、玉手箱をあけました。
- 三四六 七 あけると、〈略〉、うらしま
はたちまち白がのおぢいさん
になつてしまひました。
- 三四六 八 キヨネンデキ上ツタ新道
ハ、〈略〉。
- 三四一 新道ノリヤウガハニハ、
新シイ家ガ七八ケンデキマシタ。
- 三四五 今ソノミセノマヘニニ
車ガトマリマシタ。
- 三四六 車ヲヒイテキタ人ガベ
ンタウデモタベルノデセウ。
- 三四一 ツイコノアヒダウエタ田
ガ、モウアンナニ青クナリマシ
タ。
- 三四二 ツイコノアヒダウエタ田
ガ、モウアンナニ青クナリマシ
タ。
- 三四四 モウオヒルニナツタノ
デセウ。
- 三四五 オ寺ノカネモナリ出シマ
シタ。
- 三四一 圃 子どもがそら一めんの
星を見て、「ああわかつた。あの
光るところが雨のふるあな
だ。」
- 三四六 星のかず あるばん、弟
がにはへ出て、「一つ二つ」と
かぞへてゐました。
- 三四六 六 むかしをののたうふうと
いふ人がありました。
- 三四七 わかいとき字をならひま
した、〈略〉。
- 三四八 〈略〉、うまく書けませんの

で、こまつてゐました。

三55 6 かへるはやなぎのつゆを虫とでもおもつたのでせう、
《略》。

三56 3 だんだん高くとべるやうになつて、とうとうやなぎにとびつきました。

三56 8 たうふうは《略》とさとり
ました。

三57 2 それからは《略》、毎日字をならひました。

三57 4 《略》、のちには名高い書手となりました。

三57 7 《略》、カラヲキタセミガハヒ上ツテキマス。

三58 1 《略》、カラヲヌギハジメマシタ。

三58 2 マモナクヌイデシマヒマシタ。

三58 5 《略》、チデンデキタハネモダンダンノビテ、《略》。

三58 6 《略》、色モシダイニコクナツテキマシタ。

三59 2 コノ大キナモノガ、ヨクアノカラノ中ニハイツテキタモノダトオモヒマシタ。

三59 3 《略》トオモヒマシタ。

三59 5 《略》、「ジイツ」トナイテ、トンデ行キマシタ。

三61 7 男の子三人はささのはをとつて、舟をこしらへました。

三62 2 みよ子は《略》、土はしの

上にたちました。

三62 4 園 みよ子「さあ、私がおえをかけましたら、みなさん一しよに舟を出すのですよ。一、二、三。」

三62 8 三人は一しよに舟を出しました。

三63 6 草のはにとまつてゐたてふてふがおどろいてとびたちました。

三63 8 草のはにとまつてゐたてふてふがおどろいてとびたちました。

三64 2 園 みよ子「あら、てふてふが五郎さんの舟にとまりました。」

三65 4 園 みよ子「五郎さんの舟には、てふてふのせんだうさんがのつたから、かつたのでせう。《略》。」

三65 4 園 みよ子「五郎さんの舟には、てふてふのせんだうさんがのつたから、かつたのでせう。《略》。」

三66 2 私ノウチヘキノフヲケヤガ来テ、手ヲケヤタラヒノ

タガヲカケカヘマシタ。

三66 3 アトヘ竹ノキレヲノコシテ行キマシタガ、《略》。

三66 5 《略》、水デツパウニナリサウナノガアリマシタ。

三66 8 《略》、フシノマン中ニ、

キリデ小サナアナヲアケマシタ。

三67 2 《略》、センヲコシラヘマシタ。

三67 8 《略》、ウエ木ニ水ヲカケタリシマシタ。

三68 4 ソノウチニ水ガ出ナクナツタノデ、《略》。

三68 6 《略》、キレガトレテキマシタ。

三69 1 《略》小サナアナヲタクサンアケマシタ。

三69 2 サウシテセンヲヒキマシタガ、《略》。

三69 4 コマツテニイサンニ見テモラヒマシタラ、《略》。

三69 8 《略》、「《略》ソノウチニ、ニイサンガコシラヘテヤラウ。」

トイフコトデシタ。

三73 4 ムカシ鳥トケダモノガケンクワヲシタコトガアリマス。

三74 1 ソノトキカウモリハ《略》、ドチラヘモツキマセンデシタ。

三74 3 ソノ中ニケダモノガカチサウニナツタノデ、《略》。

三74 7 《略》、ケダモノノミカタニナリマシタ。

三75 1 スコシタツテ、コンドハ鳥ガカチサウニナリマシタ。

三75 3 スルトカウモリハ《略》、鳥ノ方ニツキマシタ。

三75 6 《略》、中ナホリヲシマシタ。

三77 1 ソコデカウモリハ《略》、クラクナツテカラ空ヲトビマハルヤウニナツタトイヒマス。

三77 7 夕はんがすむと、うちのものはみんなえんがはへ出ました。

三78 3 今日私が川の土手からとつて来たすきも、《略》。

三79 3 時々すずしい風が吹いて来ると、おもひ出したやうにくつわ虫がなきます。

三80 1 おばあさんが「《略》。」と、ひとりごとのやうにおつしやいました。

三82 8 むかし一人のれふしが《略》、みほの松原を通りました。

三83 2 日はよくてつてゐて、ふじの山はいつもよりなほきれいに見えました。

三83 7 《略》、れふしがぼんやりと海をながめてゐました。

三84 2 《略》、松の木に美しい物がかかつてゐました。

三84 3 《略》、見たこともないきれいな着物でした。

三84 4 そばへよつて見ますと、《略》きれいな着物でした。

三84 8 《略》、見たこともない美しい女が来ました。

三85 1 《略》美しい女が来ました。

三85 4 園 「いや、これは私が今

ここでひろつたのです。〈略〉。」
 三867 れふしはかへしませんでした。
 三871 天人はしをしをして、〈略〉空を見上げました。
 三885 園 「いやいや、おかへし申したら、まはずに空へお上りになりませう。」
 三893 園 「ああ、はづかしいことを申しました。」
 三897 〈略〉、天人はそれを着て、まひはじめました。
 三902 〈略〉、はごろもの色は日の光にかがやきました。
 三906 〈略〉、天人は〈略〉大空のかすみの中へはいって行きました。
 四114 大きな字を書いたのぼりがすみきつた空に立つてゐます。
 四115 〈略〉のぼりがすみきつた空に立つてゐます。
 四117 おひるすぎに、〈略〉おとよさんと太郎さんが來ましたので、〈略〉。
 四118 〈略〉、三人でお宮へまゐりました。
 四34 私どももすずをならしてをがみました。
 四44 今年は田がよく出來たので、〈略〉。
 四54 これは私が生れた年、

〈略〉。
 四55 〈略〉つぎ木をして下さったのださうです。
 四64 〈略〉、下男の太七がわらひながら、「〈略〉。」といったさうです。
 四67 その時 おぢいさんは「〈略〉。」とおつしやつたといふことです。
 四72 〈略〉、どの木にもよくみがなりました。
 四76 きのみ一つ取つてみましたら、〈略〉。
 四77 〈略〉、もう黒くごまをふいてゐました。
 四85 キノフハ十月三十一日デ、天長節ノオイハヒ日デシタ。
 四87 〈略〉、トモダチトムカフノ山へ上リマシタ。
 四91 〈略〉、ドノ家ニモコクキガ出シテアリマシタ。
 四94 〈略〉、コクキガ出シテアリマシタ。
 四96 キノフハ日本國中ノ人ガミンナ天皇ヘイカノパンザイライハツタノデス。
 四115 園 園 「やつとすんだ。」
 四122 島ニキタ白ウサギガ、〈略〉。
 四125 島ニキタ白ウサギガ、〈略〉、海ヲワタルクフウヲシテキマシタ。

四126 〈略〉、ワニザメガ居マシタカラ、〈略〉。
 四132 〈略〉、「オマヘノナカマトワタシノナカマト、ドツチガ多イカ、クラベテミヨウ。」トイヒマシタ。
 四135 ワニザメハ〈略〉、スグニナカマト大ゼイツレテ來マシタ。
 四146 白ウサギハコレヲ見テ、〈略〉。」トイヒマシタ。
 四151 ワニザメハ白ウサギノイフ通りニナラビマシタ。
 四153 白ウサギハ一ツニツトカゾヘテ、ワタツテ行キマシタガ、〈略〉。
 四157 園 「オマヘタチハウマクワタシニダマサレタナ。〈略〉。」
 四158 園 「〈略〉。ワタシハコノヲカヘ來タカツタノダ。」
 四161 白ウサギハ〈略〉。」トイツテワラヒマシタ。
 四163 ワニザメハソレヲキクト、タイソウオコツテ、一パンシマヒニ居タノガ、〈略〉。
 四164 〈略〉白ウサギノ毛ヲミンナムシリ取ツテシマヒマシタ。
 四166 白ウサギハ〈略〉、ナイテ居マシタ。
 四171 ソコヘ神様ガタガオ通りガカリニナツテ、〈略〉。」トオタツネニナリマシタ。
 四175 〈略〉オヲシヘニナリマシ

タ。
 四177 白ウサギハスグ海ノ水ヲアビマシタガ、〈略〉。
 四178 白ウサギハ〈略〉、クルシガツテ居マシタ。
 四182 ソコヘ大國主ノ神ガオ出デニナリマシタ。
 四183 コノ神様ハサキホドオ通りニナツタ神様ガタノ弟ノ方デス。
 四185 〈略〉、フクロヲカツイデイラツシヤツタノデ、〈略〉。
 四186 〈略〉、オオクレニナツタノデス。
 四191 コノ神様モ、「〈略〉。」トオタツネニナリマシタ。
 四193 白ウサギハ〈略〉、又ソノワケヲ申シ上ゲマシタ。
 四202 スルト神様ハ「〈略〉。」トヲシヘテ下サイマシタ。
 四205 〈略〉、カラダハスツカリモトノヤウニナホリマシタ。
 四208 園 「オカゲサマデ、カラダハコノ通りニナホリマシタ。〈略〉。」
 四213 ヨロコンデ大國主ノ神ノトコロヘオレイニ行ツテ、「〈略〉。」ト申シ上ゲマシタ。
 四215 ソノ後大國主ノ神ハ、白ウサギノイツタ通り、〈略〉。
 四216 ソノ後大國主ノ神ハ、〈略〉、エライオ方ニオナリニ

ナリマシタ。

四二二 私はきのふ〈略〉、おつかひに行きました。

四二六 ちさんのうちでは、にばいもみがほしてあつて、足のふみばもないくらゐでした。

四二三 〈略〉、おばあさんが日あたりのよいえんがはでつぎ物をしていらつしやいました。

四二三 図 「おう、三ちゃんか。よく来たね。」

四二三 おばあさんは〈略〉、とだなからうでたくりをおぼんにばい持つて来て下さいました。

四二四 おぼさんは〈略〉うでたくりをおぼんにばい持つて来て下さいました。

四二六 おばあさんが「〈略〉。」といつておとめになりましたが、〈略〉。

四二六 〈略〉、おそくなるとおもつて、いただいたくりを持つてかへりました。

四二三 〈略〉、いただいたくりを持つてかへりました。

四二六 私どもの町でも、このあひだから電とうがつくやうになりました。

四二七 〈略〉のきらんぶが電とうにかはりました。

四二七 〈略〉大きな店はいくつ

も電とうをつけました。

四二八 私のうちでも二つつけました。

四二六 よこ町に電氣の力で、米をつく家も出来ました。

四二九 もう高いえんとつは大方出来上りました。

四二九 さうなつたら町はどんなにべんりになるでせう。

四三〇 正太郎が犬をつれて、山道を通りました。

四三〇 犬のすがたが見えなくなつたので、〈略〉。

四三一 そこへぼちが来ましたので、〈略〉。

四三一 〈略〉、しよに向ふの方へ行つてみましたが、だれも居ませんでした。

四三一 〈略〉、だれも居ませんでした。

四三二 〈略〉、父は「それは山びこです。〈略〉。」とをしへました。

四三二 図 〈略〉、かべにあたつたごむりのやうに、〈略〉。

四三三 向ふで「ばか」といつたのも、〈略〉。

四三四 図 〈略〉、お前が先に「ばか」といつたからです。

四三四 九 〈略〉。フクレタカラダ、マンマルナ目。

四三六 ある時、日と風が力くらべをしました。

四三七 たび人のぐわいたうをぬがせた方が勝といふことにきめて、〈略〉。

四三八 〈略〉、先づ風からはじめました。

四三九 風は〈略〉はげしく吹立てました。

四三九 するとたび人は、〈略〉、ぐわいたうをしつかりとからだにくつつけました。

四四〇 こんどは日の番になりました。

四四〇 日は〈略〉、あたたかな光をおくりました。

四四〇 たび人は〈略〉、しまひにはぐわいたうをぬぎました。

四四二 そこで、風の負になりました。

四四四 昨日はうちのすすはきでした。

四四八 おかあさんが〈略〉、下女や手つだひのものに、おさしづをしておはたらきになりました。

四四二 一番先にしやうじやからかみが外へ出されました。

四四三 かけ物やがくもはづされました。

四四五 〈略〉、そこへ火ばちや

〈略〉がはこび出されました。

四四八 〈略〉、其のうしろから物

さしと花子のお手玉が出まし

た。

四四八 つづらや長持も出されました。

四四二 〈略〉みんな外へ出されました。

四四四 〈略〉、子ねずみが一ぴきとび出しました。

四四五 下女がびつくりして、「きやつ」といつたので、〈略〉。

四四六 下女がびつくりして、「きやつ」といつたので、後でみんなにわはれました。

四四八 ばたばた、ばたばた、いよいよさうぢがはじまりました。

四四八 僕もはたきを持つて手つだひしました。

四四四 〈略〉、まるでいくさのやうでした。

四四七 手つだひの今吉が〈略〉、べんけいのまねをしました。

四四八 僕は牛わかまるになつて、はねまはつてたかひましたら、〈略〉。

四四二 僕は〈略〉、おかあさんにしかられました。

四四四 花子はねこをだいてうろうろして居ましたので、〈略〉。

四四八 〈略〉、「花子も〈略〉、ちやんとおかたづけなさい。」といはれました。

四四五 図 「此のころは大さうぢがやかましくなつたから、〈略〉。」

四45 5 図 「略」、すすはきは大き
にらくになりました。」
四45 6 「略。」と今吉がいひま
したが、略。」
四46 2 「略」、すっかりいろいろな
物をもとの所へなほしたら、
夕方近くなりました。
四46 2 「略」、夕方近くなりました。
四46 3 おとうさんがおかへりに
なつた時には、略。」
四46 5 「略」、家の内も外もき
れいになつて居ましたので、
略。」
四46 5 「略」、みんながほめられま
した。
四47 5 図 みよ子「はい、ありまし
た。」
四48 3 図 音二郎「はい、とりまし
た。」
四48 6 図 道子「私が取つたので
す。」
四48 7 図 友一「いいえ。僕が取つ
たのです。」
四49 4 図 こんど取つた人がそれ
も取ることにします。
四49 8 図 道子「はい、取りました。
略。」
四50 5 これから友一はだんだん
あせり出しました。
四50 6 みんなもしまひにはむち
ゆうになつて取りました。
四50 7 一どすみしました。

四51 2 「略」、友一はたつた二ま
いでした。
四51 4 「略」、何べんも取つてあ
そびました。
四52 5 図 「勝太郎、略」系はがき
が來ました。略。」
四53 7 図 此のあひだひかうせん
が東京の空をとびました。
四53 5 東京の宿屋で、山國の
ものと、島國のものがおちあ
ひました。
四54 7 図 「お前はたいそうとんち
があると聞いた。略。」
四55 8 図 思ふぞんぶんはびこつた
山のふもとのしひの木は、
略。」
四56 4 図 山の中からころげ出て、
人にふまれたかしのみが、
略。」
四56 5 図 「略」かしのみが、し
ひを見上げてかういつた。
四57 3 図 何百年かたつた後、
略。」
四60 8 「略」、友タチトツミ木ヲ
シテアソビマシタ。
四61 3 「略」、げんじはをか、へい
けは海で、向ひあつて居ました
時、略。」
四61 5 「略」、へいけ方から舟を
一そうこぎ出して來ました。
四61 7 「略」、其のさをの先には、
ひらいた赤い扇がつけてあり

ます。
四63 4 げんじの大しやうよしつ
ねは家來に向つて、略。」と
たづねました。
四64 4 其の時一人の家來がす
すみ出て、略。」といひました。
四64 7 「略」、すぐによ一をよび
出しました。
四64 8 よ一はじたいしましたが、
略。」
四65 2 よ一は心の中で、もし
これをいそこなつたら、生きて
は居まいとかくこをきめて、
略。」
四65 5 「略」、馬にまたがつて、海
の中へのり入れました。
四66 5 よ一は弓に矢をつがへ、
略」、ひようといはなしました。
四67 1 赤い扇はかなめのきは
をいきられて、略」、なみの上
におちました。
四67 4 をかの方では大しやう
よしつねをはじめ、みんなが
略」よろこびました。
四67 6 海の方でもへいけ方が
略」、一度にとつとほめました。
四68 1 私のうちに山がらが一
羽かつてありました。
四68 3 「略」、私の手から系を
たべるほどになつて居ました。
四68 5 「略」ねずみに足のゆび
をくひきられました。

四68 6 どんなにか鳴いたのでせ
うが、略。」
四68 7 「略」、うちのものは朝
までしらずに居ました。
四69 4 「略」、山がらは略」うら
の山へとんで行つてしまひま
した。
四69 6 これは私が七つの年
のことでしたが、略。」
四69 8 「略」、足のきずはどう
したらうかと思はないことは
ありません。
四72 4 図 一本杉のうしろへお日
様がおほいりになつた。
四72 7 図 一本杉のふところから
お月様がお上りになつた。
四73 4 私は長生をして居ます
ので、略」、火事があつたり、水
が出たりしたことをみんな
見て知つて居ます。
四74 4 私は略」を其のわかい
時から知つて居ました。
四74 5 まことによくはたらく人
たちでした。
四74 8 「略」、くはやかまを持つ
てたんぼへ行きました。
四75 3 「略」、お星様が光りはじめ
るころになつて、小さなわらぶ
きのうちへかへつて行きまし
た。
四75 4 此の人たちの田や畠
の作り方はていねいでしたか

ら、〈略〉。

四七五 〇 〈略〉、稲も麦もよその

よりはよく出来ました。

四七六 〇 それでだんだんうちがよくなり

なりました。

四七六 〇 〈略〉、小さい時からよく

はたらきました。

四七六 〇 〈略〉、むすめさんが、此の人の所へおよめに來ました

が、〈略〉。

四七六 〇 〈略〉、此の人の所へおよめに來ましたが、其の時は

なかなかにぎやかなことでした。

四七六 〇 今の村長さんも〈略〉すなほで、なさげぶかい人でした。

四七七 〇 此の間さびしいおさう式

が私の前を通りました。

四七七 〇 それは西の村で、一番目の金持だといはれたうち

に生れた人のでした。

四七七 〇 それは〈略〉金持だといはれたうちに生れた人のでした。

四七七 〇 それは〈略〉金持だといはれたうちに生れた人のでした。

四七七 〇 此の人は〈略〉、あばつて

ばかり居ました。

四七八 〇 それでとうとう家も〈略〉

人の物になつてしまひました。

四七八 〇 それからどこへ行つて居たか、〈略〉。

四七八 〇 〈略〉、村にもひさしく居

ませんでした。

四七八 〇 かへつて來た時には、

〈略〉。

四七八 〇 かへつて來た時には、ひ

どいみなりをして居ました。

四七八 〇 〈略〉、日がくれてから村

へはいりました。

四七八 〇 其の後間もなく死んだのです。

四七八 〇 さむい日のことで、あまり

気のどくでしたから、〈略〉。

四七八 〇 〈略〉、私が風の音をこ

うつとさせてやりましたら、〈略〉。

四七八 〇 「此の人も一本杉の外にないてくれるものがなくなつた。」

四七八 〇 〈略〉、送つて行く人が

「〈略〉。」といひました。

四七八 〇 私は長い間に子どもを

たくさん見ましたので、〈略〉。

四八九 〇 昨日〈略〉、軍たいに居る

にいさんの所へ出かけました。

四八九 〇 てつけうへかかつた時、

河を見たら、〈略〉。

四八九 〇 てつけうへかかつた時、

河を見たら、〈略〉。

四八九 〇 〈略〉、河を見たら、たいそ

う水が出て居ました。

四八九 〇 「此のよいお天氣に、どうしたのでせう。」

四八九 〇 「〈略〉。」とたづねましたら、

〈略〉。

四八九 〇 「河上の方で雪がと

けはじめたのだらう。」

四八九 〇 〈略〉、「〈略〉。」といふこと

でした。

四八九 〇 トネルを出て、海を見

下した時には、〈略〉。

四八九 〇 〈略〉、いつ見てもよいけ

しきだと思ひました。

四八九 〇 ちやうど大きな船がおき

を通つて居ました。

四八九 〇 そばに乗つて居た人の

話では、〈略〉。

四八九 〇 〈略〉、軍かんだといふこ

とでした。

四八九 〇 むかふのてい車場へ着い

たら、にいさんがむかへに來て

居ました。

四八九 〇 むかふのてい車場へ着い

たら、にいさんがむかへに來て

居ました。

四八九 〇 三人で町を見物しました。

四八九 〇 〈略〉、夕方の汽車でかへ

りました。

四八九 〇 オ花ハオカアサンニオヒ

ナ様ヲカザツテイタダキマシタ。

四八九 〇 〈略〉、オ花ノオカアサン

ガ來マシタ。

四八九 〇 〈略〉、學校ガヒケタラ、

スグアソビニオ出デナサイ。

四八九 〇 春が來た、春が來た、

どこに來た。

四八九 〇 春が來た、春が來た、

どこに來た。

四八九 〇 春が來た、春が來た、

どこに來た。

四八九 〇 山に來た、里に來た、

野にも來た。

四八九 〇 山に來た、里に來た、

野にも來た。

四八九 〇 山に來た、里に來た、

野にも來た。

四八九 〇 曾我兄弟は兄を十郎、弟

を五郎といひました。

四八九 〇 〈略〉、父はくどうすけつ

ねにころされました。

四八九 〇 「〈略〉。お前たちが大き

くなつたら、此のかたきを取つ

ておくれ。」

四八九 〇 母は泣きながら二人の

子どもに、「〈略〉。」といひました。

四八九 〇 五郎はまだ小さくて、何

も分りませんでした、が、〈略〉。

四八九 〇 〈略〉、十郎はなみだをお

さへて、「〈略〉。」と答へました。

四八九 〇 九つとなり、七つとなつ

たころからは、〈略〉。

四八九 〇 〈略〉、かたきを取らうと

心がけました。

四八九 〇 〈略〉、長い間つけねらひま

したが、〈略〉。

四八九 〇 〈略〉、手を出すすきは

ありませんでした。

四八九 〇 ある年、よりともは〈略〉、

ふじのまきがりをいたしました。
 四93 兄弟は「略」、ふじのすそ野へ急ぎました。
 四94 3 「略」くどうのやかたへ向ひました。
 四94 8 二人はたいまつを上げて、つくづくとかほを見合ひました。
 四95 2 兄弟はくどうのやかたへふみこみました。
 四95 8 四 「おきよ、すけつね。曾我兄弟がまゐつた。」
 四96 1 ね入つて居るものをきりはひけふと、「略」と名のりしました。
 四96 2 すけつねも人に知られたさむらひ、「略」。
 四96 3 四 すけつねも人に知られたさむらひ、「心えた。」と、まくらもとの刀を取つて「略」。
 四96 5 「略」、まくらもとの刀を取つておき上らうとしました。
 四96 8 「略」、父がうたれてから十八年目にめでたくのぞみをとげました。
 五25 四 「略」、神代此の方一度もてきに 負けたことなく、「略」。
 五32 「略」、先生が知らない生徒を一人つれてお出でになりました。
 五35 「略」、此の間からあいてゐたせきをおさしになりました。
 五36 「略」、此の間からあいてゐたせきをおさしになりました。

五37 さうして「山田さん」とおよびになりましたから、「はい」と答へますと、「略」。
 五43 「略」、「略」、今日から此の級へはいる方です。」とおつしやいました。
 五46 又中村君には、「略」とおつしやいました。
 五47 私ども二人はていねいにおじぎをしました。
 五52 「略」、前からの友だちのやうになりました。
 五53 中村君がこれまで居た所は日本の方で、「略」。
 五57 何でも汽車に二日「ばん乗通」して、こちらへ着いたのださうですから、「略」。
 五62 こちらは今さくらのさかりですが、あちらでは、もうとうにちつてしまつたさうです。
 五64 ある日、「略」、中村君が泣いてゐました。
 五66 「略」、中村君を生いきだといつて、いちめたのださうです。
 五71 僕は「略」、日本の男は泣くものではない。」といつて、力をつけてやりました。
 五77 「略」、すさのをのみこと申す神様がございました。
 五81 「略」、川上から簞が流れて來ました。
 五86 「略」、おちいさんとおぼあさ

んが、一人の娘を中において泣いてゐました。
 五92 四 私どもにはもと娘が八人ございました。
 五95 四 それを八岐の大蛇が來て、毎年一人づつたべました。
 五96 四 もう此の子一人になりましたのに、「略」。
 五107 「略」とおいひつけになりました。
 五112 「略」、八岐の大蛇の來るのを待つていらつしやいました。
 五114 間もなく大蛇が來て、「略」、其の強い酒を飲みました。
 五117 「略」、大蛇をすたすたにお切りになりました。
 五118 ひの川が血になつて流れました。
 五121 尾をお切りになつた時、「略」。
 五122 「略」、つるぎのはがこぼれました。
 五123 「略」、つるぎが一ふり出ました。
 五126 「略」、天照大神へお上げになりました。
 五131 四月二十一日 土曜 雨 今日から日記をつけることにしました。
 五133 「略」、廣田君から多はがきが來てゐました。
 五134 四 北國にも春が來ました。
 五138 「略」、廣田君から多はがきが來てゐました。「略」と書いてあり

ました。
 五143 「略」朝、おさらひをすましてから、春子とつくしをつみに行きしました。
 五144 かへりみちに、はなれ馬がとんで來ましたので、「略」。
 五146 「略」、よそのをぢさんが大手を廣げてとめて下さいました。
 五152 「略」、學校に居てもしんばいでしたが、「略」。
 五154 「略」、尾をふつてむかへに出了ました。
 五157 「略」、すゞめが教室の中へとびこみました。
 五158 先生がまどをすつかり明けて、出しておやりにりました。
 五161 夕方から雨がふり出しました。
 五164 「略」、新しい筆で書き方のおけいこをしました。
 五168 「略」、僕には小刀とえんぴつをおみやげに下さいました。
 五172 四 「をちさん、勲章がふえましたね。「略」」。
 五174 四 「あ、今度の戦争でいたゞいた。」
 五185 四 むかし神武天皇がわるものどもをこせいばつになつた時、「略」。
 五186 四 「略」、わるものどもが強くて、おこまりになつたことがある。
 五192 四 「略」、金色の鴉が一羽とんで來て、天皇のお弓の先にとまつた。
 五197 四 「略」、おそれてみんなにげ

てしまつたさうだ。

五20 1 図 〈略〉、大きな手がらを立て

た軍人に下さる勲章に、〈略〉。

五20 2 図 〈略〉、金の鶏をおつけにな

つたのだ。

五22 3 美しいびらで、一月も前から

廣告してゐた島屋の大賣出しは、

〈略〉。

五22 5 〈略〉、いよく今日からはじ

まりました。

五22 7 おひるすぎおかあさんにつれ

られて、買物に行きました。

五22 8 島屋の前には、人が黒山のや

うにあつまつてゐました。

五25 2 しばらく待つて、私どもは浴

衣地とこんがすりを買つて外へ出ま

した。

五25 3 うちへかへつて、ふろしきを

明けて見ましたら、〈略〉。

五25 4 〈略〉、店のしるしのついた手

ぬぐひと物さがしが〈略〉。

五25 5 〈略〉、〈略〉手ぬぐひと物さ

しが景物にはいつてゐました。

五29 2 此の間町のをばさんがいらつ

しやつて、「略。」とおつしやいま

した。

五30 8 図 つゆや時雨が色よくそめた

うらの小山に秋風吹けば、〈略〉。

五32 1 図 本のおさらひすました後は

枝につるしたふらんこ遊。

五32 2 図 本のおさらひすました後は

枝につるしたふらんこ遊。

五32 8 ある朝早く、おとうさんがた

びへお立ちになつた時、〈略〉。

五32 8 ある朝早く、〈略〉、お見送を

して表へ出て見ました。

五33 4 〈略〉、新聞配達と四五人の人

のすがたが見えるだけでした。

五33 6 〈略〉、その小さいのにおどろ

きました。

五34 1 〈略〉、これで間敷が七つもあ

るとは、どうしても思はれませんでした。

五34 3 〈略〉、ひよろ松は、葉がほこ

りだらけでした。

五35 3 「略。」と、とこの中からお

きゝすると、「略。」とおつしやつ

たので、はね起きました。

五35 3 〈略〉、はね起きました。

五35 6 〈略〉、先生もお出でになつて

ゐました。

五35 7 学校の門を出て西へ向ひまし

た。

五36 1 〈略〉、すっかり葉になつてゐ

ました。

五36 4 いたどりは私どものせいほど

のびてゐました。

五37 1 〈略〉、道ばたの立石にさるが

三匹ほつてありました。

五38 1 〈略〉、松山の下へ瓦やきを見

に行きました。

五38 2 ちやうどかまを明けたところ

で、〈略〉。

五38 3 〈略〉、白いけむりが立つてゐ

ました。

五38 7 〈略〉、先生が「ちよつと用が

あるから。」といつて、〈略〉、學校

へおよりになりました。

五39 3 〈略〉、おちいさんが、〈略〉、

「皆さん、遠足かね。」といつて通り

ました。

五39 4 八幡様の高い石だんを上りつ

めた所に、しめをはつた大きな杉の

木がありました。

五39 5 〈略〉、しめをはつた大きな杉

の木がありました。

五39 5 〈略〉、しめをはつた大きな杉

の木がありました。

五39 7 私どもが六人で、やつとかか

へました。

五39 8 「略。」と先生がおつしやい

ました。

五40 3 〈略〉、さつきの學校の小使

さんが麥ゆを持つて來て下さいまし

た。

五40 4 のどがかわいてゐたので、み

んな大よろこびで飲みました。

五40 5 のどがかわいてゐたので、み

んな大よろこびで飲みました。

五40 8 〈略〉、三時ごろ學校へかへり

ました。

五41 4 〈略〉、川上のたけるといふ者

があつて、天皇のおほせにしたがひ

ませんでした。

五41 5 天皇は日本武尊にこれを

征伐せよとおほせられました。

五41 8 尊は〈略〉、御年はわづかに

十六でいらつしやいましたが、〈略〉。

五41 8 尊は〈略〉、いさみ立つてお

出かけになりました。

五42 3 〈略〉、人々をあつめて、其の

祝をしました。

五42 5 尊は〈略〉、其の家の中へお

はいりになりました。

五42 8 〈略〉、たけるは尊を見つけて、

自分のそばへ呼びました。

五43 1 夜がふけて、人々はかへりま

した。

五43 3 たけるも酒によつてねむりま

した。

五43 6 此の時尊はふところのつるぎ

を出して、たけるのむねをおつきに

なりました。

五44 4 〈略〉、たけるも熊襲のかしら

だけあつて、「略。」といひました。

五44 5 尊は手をおゆるめになりました

た。

五44 8 図 あゝ、たゞ人ではおありな

さらなかつた。

五45 2 図 自分にまさる者はないので、

たけると申して居りましたが、みや

こには強いお方がおありになつた。

五45 3 図 〈略〉、みやこには強いお方

がおありになつた。

五45 5 図 「略」。自分にまさる者は

ないので、たけると申して居りまし

たが、〈略。〉といつて、息がたえ

ました。

五45 7 図 これから後やまとをぐなの皇子を日本武尊と申し上げることになりました。

五46 1 図 「日本一の事をくふうした。」

五46 6 図 「それまではまだかんがへなかつた。」

五46 8 昨日からうちの蠶が上りはじめました。

五47 8 今日のお晝頃はうち中、目がまはるほどいそがしいございました。

五49 6 図 「民子、いよく今夜一ぱんになつたよ。〈略〉。」

五49 8 さつきおかあさんが、「〈略〉。」と、ねえさんにおつしやいました。

五51 6 雨水ノ流レル道ハ地圖ニカイタ川ヲ見ルヤウデス。

五53 1 昔美濃の國にまづしい人がありました。

五53 3 〈略〉、くらしを立ててゐました。

五53 3 此の人に年取つたおとうさんがありまして、〈略〉。

五53 5 〈略〉、酒がすきでございました。

五53 7 〈略〉、かへりに酒を買つて来ては、おとうさんを喜ばせてゐました。

五54 1 〈略〉、うつむけにたふれました。

五54 3 〈略〉、石の中から酒にた物がわいてゐます。

五55 1 喜んで、それからは毎日其の酒をくんで来て、おとうさんに上げました。

五55 4 〈略〉、わざ／＼奈良の都から美濃の國へ行幸になりました。

五55 6 図 「これは親孝行のほうびに、神々がさづけられたにちがひない。」

五55 7 酒の出る所を御らんになつて、〈略〉。」とおほせになりました。

五56 1 〈略〉、年がうを養老とお改めになつたと申します。

五57 3 晴れた日、月の夜、雪の朝、いつ見てもよい景色です。

五57 6 天の橋立は海中へつき出た細長い洲で、〈略〉。

五59 2 ことにしほのみちた時は、〈略〉、お話にある龍宮はこれかと思はれます。

五60 6 図 だれがかけたか、虹の橋。

五61 4 図 〈略〉、空のゑぎぬへ一筆に、だれがかいたか、虹の橋。

五63 3 作太郎は父につれられて、はじめて町へ行きました。

五65 4 図 うちの繭あめの工場で生絲になつたはずだ。

五66 2 二人は峠を下りて、となり村へはいりました。

五66 7 図 よく氣がついた。

五68 4 〈略〉、此の村の名を言ふと、〈略〉。」と言はれたものださうだ。

五68 7 〈略〉、木もろくにない草山だつたといふことだ。

五69 1 〈略〉、此の村の庄屋が、村のことをいろいろと考へたすゑ、〈略〉。

五69 3 ところが、今から百三十年前に、此の村の庄屋が、〈略〉、〈略〉と思つた。

五69 6 どうしても大きな用水池を掘らなければならぬと考へた。

五69 7 此の事を村の相談にかけた。

五69 8 村の人々は中々大きな仕事だとは思つたが、〈略〉。

五70 2 〈略〉、みんな賛成したといふことだ。

五70 5 〈略〉、庄屋は方々の村へ用水池を見に出た。

五70 5 物なれた人には相談をかけた。

五70 6 物なれた人には相談をかけた。

五70 8 〈略〉、庄屋は普請方をよそからつれて来た。

五71 2 〈略〉、一日置に普請の手つたひをすることになつた。

五71 4 〈略〉、村の人は普請方のさしづをうけてはたらいだ。

五71 7 〈略〉、幅は一番上で三間といふ大きなもくろみであつた。

五72 1 「〈略〉。」と言つて、首をひねる者もあつたといふが、〈略〉。

五72 3 〈略〉、べつだんくじやうも出なかつた。

五72 4 氣早な者は自分の持地を田に造りかへたといふことだ。

五72 6 〈略〉、せつかくつき上げた土

手が、半分はともくづれてしまつた。

五72 7 〈略〉土手が、半分はともくづれてしまつた。

五73 5 〈略〉、手つだひに出る者は日ましにへつた。

五73 7 〈略〉、土手をつきなほしたが、〈略〉。

五74 1 〈略〉、池のたまり水が村の中へおし出した。

五74 3 〈略〉、普請方はとう／＼にげてしまつた。

五74 4 それでも庄屋はくじけなかつた。

五74 6 〈略〉、もう一度土手をつきなほした。

五74 7 其の賃錢をみんな庄屋が自分のふところから出した。

五74 7 よい身代であつたが、〈略〉。

五75 1 〈略〉、家も土蔵もみんな賣りはらつた。

五75 2 しまひには妻や子どもの着がへまでもないやうになつた。

五75 4 〈略〉、三度目に土手の工事はうまくいった。

五75 5 一雨毎に池の水はふえた。

五75 6 それを見て、村の人は急にあれ地を田にだした。

五75 7 一冬こして、春には池の水がばいになつた。

五75 8 六月の田植時から七月・八月にかけて、水はありあまつた。

五76 1 そこで一年ましに田がふえた

が、〈略〉。

五七二 〈略〉、庄屋は池が出来上つた

年の冬、死んでしまつた。

五七三 〈略〉、庄屋は池が出来上つた

年の冬、死んでしまつた。

五七四 長い間の苦勞が病氣のもとで

あつたといふことだ。

五七六 家屋敷もなくなつた上に、

〈略〉。

五七七 〈略〉、夫に死なれたので、庄

屋の妻は子どもをつれて里へ歸つて

ゐた。

五七二 〈略〉、庄屋の妻は子どもをつ

れて里へ歸つてゐた。

五七六 〈略〉、妻や子どもにも、もとの

家へ歸つてもらつた。

五七八 親のほねをりが子の時になつ

てあらはれたのであらう、〈略〉。

五七三 〈略〉、身代は前よりもよくな

つた。

五七四 〈略〉、今話した事がくはしく

書いてある。

五七六 此の山の杉も庄屋が先に立つ

て植ゑたのださうだ。

五七六 〈略〉、狐が一匹とんで出まし

た。

五七九 義家は〈略〉狐を追つかけま

した。

五八〇 〈略〉、頭の上をすれ／＼にい

ました。

五八三 〈略〉、狐はころりとたふれま

五八〇 窓 びつくりしてたふれたのだ。

五八二 〈略〉、義家が「〈略〉。」と言

ひました。

五八七 〈略〉、義家はせ中をくるりと

むけて、うつばへさゝせました。

五八二 かりまたは、矢じりがつづめ

の尾のやうにわれた、たいそうする

どい矢で、〈略〉。

五八三 〈略〉、宗任はつい此の間義家

にかうさんしたてきの大將なのです。

五八五 窓 「あぶないことだ。もし宗

任に悪い心があつたら。」

五八六 「〈略〉。」と、義家の家來ども

はひやく／＼したといひます。

五八三 窓 おとうさんにうかゞひます

と、叔母さんの町に大水が出たさう

です。

五八四 窓 皆様におかげもございませ

んでしたか、お見舞を申し上げます。

五八四 窓 おとうさんへ電報で御返事

をいたしたやうに、〈略〉、中々のさ

わぎでした。

五八四 窓 〈略〉、うちには大した事も

ありませんでしたが、中々のさわぎ

でした。

五八四 窓 〈略〉、中々のさわぎでした。

五八五 窓 九月にはいつては雨つゞき

でしたが、〈略〉。

五八七 窓 〈略〉、夕方から風もはげし

くなりました。

五八五 窓 〈略〉、夜中に手をけやはき

物まですつかり二階へ上げました。

五八五 窓 〈略〉、間もなく火の見で半

しょうをうち出しました。

五八五 窓 其の時表で水だ／＼ときけ

ぶこゑがしましたので、〈略〉。

五八六 窓 〈略〉、水が表の通をさつと

洗ひました。

五八六 窓 叔父さんは大へんだ士手が

切れたといつて、〈略〉。

五八六 窓 叔父さんは〈略〉、すぐ屋

根へ出ました。

五八六 窓 たちまち水が一尺になり、

三尺になり、五尺にもなりました。

五八八 窓 うら手で助けてくれ助けて

くれと呼ぶこゑが聞えましたが、

〈略〉。

五八七 窓 〈略〉、どうすることも出来

ませんでした。

五八七 窓 其のうちに、どうやら水が

二階にもつきさうになつたので、

〈略〉。

五八七 窓 〈略〉、わたしは正男をつれ

て物ほしへ出ました。

五八八 窓 仕合はせに水はそれからふ

えませんでした、〈略〉。

五八八 窓 〈略〉、人家も七八軒流れま

した。

五八八 窓 うちでも一時は飲水やたべ

物にこまりましたが、〈略〉。

五八八 窓 〈略〉、今ではあとかたづけ

も大がいますみしました。

五九〇 窓 時々道を人にきいて來た者と

見えて、〈略〉。

五九〇 窓 「うん、郵便函といつたの

はこれだな。」

五九一 窓 〈略〉、私はまだそれをあづか

つたことはありません。

五九二 窓 郵便物をあつめる人は、毎日

きまつた時刻に來て、〈略〉。

五九三 窓 〈略〉、封書には、いろ／＼こ

み入つた事が書いてあります。

五九四 窓 つか大そう雨のふるばんに、

年取つたおぢいさんが、〈略〉。

五九四 窓 〈略〉、年取つたおぢいさんが、

遠方に居るむすこの所へ出した封書

や、〈略〉。

五九四 窓 〈略〉、かつて足をほらして

ゐる書生さんが、お友だちへ出した

葉書には、〈略〉。

五九四 窓 〈略〉、私はらわたがちぎれ

るやうに思ひました。

五九四 窓 「それにはどんな事が書いて

あつたか。」

五九六 窓 二十四 ブダウ 〈略〉。フサ

くト下ツタウスムラサキノ實ハ、

美シイモノヤウニ見エマス。

五九七 窓 〈略〉、熊が出て來ました。

五九八 窓 一人は早く見つけて、木の上

へにげ上りました。

五九八 窓 一人は〈略〉、地にたふれて、

死んだふりをしてゐました。

五九八 窓 一人は〈略〉、地にたふれて、

死んだふりをしてゐました。

五九八 窓 熊は死人には手着けないと

聞いてゐたからでございます。

五98 5 熊が来て、からだ中かきまはしました。が、〈略〉、其のまま行つてしまひました。

五98 6 〈略〉、ほんたうの死人だと思つたのでせう、其のまま行つてしまひました。

五98 7 熊が来て、からだ中かきまはしましたが、〈略〉、其のまま行つてしまひました。

五98 8 此の時、木に上つてゐた者が下りて来て、〈略〉

五99 1 窓 「どんなにこはかつたらう。〈略〉」

五99 2 窓 「〈略〉。僕は木の上から見つて、びく／＼してゐた。〈略〉」

五99 3 窓 「〈略〉。熊が君の耳の所へ口を持つて行つたやうだが、何か言つたのか。」

五99 4 窓 「〈略〉。熊が君の耳の所へ口を持つて行つたやうだが、何か言つたのか。」

五100 1 窓 「うん。『あぶない時に、友だちをすててにげるやうな者には、これからつきあふな。』と言つた。」

六1 4 窓 「さうです。新田が大へんよく出来ました。〈略〉」

六1 6 朝飯の時こんな話が出ました。

六1 8 今日うちの者がみんなたんぼへ稲こぎに行きました。

六2 3 〈略〉、卵買が来て、卵を七つ買つて行きました。

六3 4 今日庭にほしてあるもみをす

つて、俵に入れてつんだら、三つ目の山は出来上りませう。

六4 2 〈略〉、おちいさんが庭で腰をのぼして、「もうお晝かな。」とおつしやいました。

六4 3 土間でこぼれもみを拾つてゐたにはとりが、〈略〉。

六4 4 〈略〉にはとりが、俵の山へ上つてときを作りました。

六4 6 窓 「朝晩めつきり寒くなつた。高い山はもう雪だらう。」

六9 4 〈略〉、ヤクワントテツピング、ジマン話ヲシ合ヒマシタ。

六13 1 ヤクワンハ之ヲ聞イテ、

「〈略〉」ト言ヒマシタ。

六13 8 其ノ時鐵ビンハ「〈略〉」ト言ツテ、中々マケマセンデシタ。

六14 2 二三日降りつゞいた雨がかりとはれたので、〈略〉。

六14 2 二三日降りつゞいた雨がかりとはれたので、〈略〉。

六14 4 〈略〉、にいさんときのこ取に行きました。

六14 5 松山の入口で、赤くなつてゐたぐみを一枝折ると、〈略〉。

六14 7 〈略〉ぐみを一枝折ると、「そんな大きな枝を。」と、にいさんに注意されました。

六15 1 〈略〉、にいさんは初茸を五六本取つたやうでした。

六15 1 〈略〉、にいさんは初茸を五六本取つたやうでした。

六15 3 僕は紅色のきれいなきのこを取つて、にいさんに見せましたら、

「〈略〉。」と、にいさんが言ひました。

六15 6 〈略〉、「あ、それは紅茸だ。毒だよ。〈略〉。」と、にいさんが言ひました。

六15 7 僕はびつくりして、ぐみも紅茸も地面へなげつけました。

六16 1 〈略〉、じめ／＼した落葉をふんで、ねずみ茸を少し取りました。

六16 2 〈略〉、ねずみ茸を少し取りました。

六16 7 木びきの力蔵さんがうたをうたひながら、大きなこぎりで板をひいてゐました。

六17 1 何の木か、おがくづが大そうよくにほつてゐました。

六18 2 〈略〉、栗林の下のくぼ地を教へてくれました。

六18 4 行つて見ますと、なるほど少し早すぎましたが、〈略〉。

六18 5 〈略〉、小さなしめちが列を作つて出てゐました。

六18 6 〈略〉、かご一ぱい取つて歸りました。

六18 7 歸りがけに、力蔵さんにお禮を言ひましたら、「〈略〉。」と言ひました。

六18 8 窓 〈略〉、「二雨降つたら、又お出で。」と言ひました。

六19 1 歸りがけに、力蔵さんにお禮を言ひましたら、「〈略〉。」と言ひま

した。

六22 7 木曾義仲が都へせめ上ると聞いて、平家はあわてて討手をさしむけました。

六23 1 〈略〉、越中の國の礪波山にちんを取りました。

六23 3 義仲は五万騎を引きつれて、これもおなじく礪波山のもとにちんを取りました。

六23 5 〈略〉、ちんの間がわづか三町ばかりになりました。

六23 8 〈略〉、兩方から一度にどつとときのこゑをあげさせました。

六24 1 不意を討たれた平家方は、上を下への大さわぎ、〈略〉。

六24 3 不意を討たれた平家方は、上を下への大さわぎ、弓を取つた者は矢を取らず、矢を取つた者は弓を取らず、〈略〉。

六24 5 〈略〉、矢を取つた者は弓を取らず、〈略〉。

六25 3 〈略〉、平家方はにげ場がなく、後のくりから谷へ、なだれをうつて落ちました。

六25 7 〈略〉、ずるぶん深いぐりから谷が、平家の人馬で埋まりました。

六26 1 大將維盛は命から／＼加賀の國へにげました。

六26 5 庭の菊も白い花びらに赤みがさして来た、〈略〉。

六26 6 庭の菊も白い花びらに赤みがさして来た、霜にあたつたからだら

う。

六278 大きな虎が山おくて、「略。」

とひとりごとを言ひました。

六282 其の時「あは。」と笑ふものがありました。

六283 虎が見まはしましたが、だれも居ません。

六284 図 「だれだい、今笑つたのは。」

六288 図 「何で笑つた。」

六291 図 「だつて分り切つた事でせう。略。」

六302 虎はおこつて、蟻をふみつぶさうとしました。

六303 蟻は略、仲間の者にあひづをしました。

六305 略、数かぎりもない蟻がまつ黒になつて、出て來ました。

六307 さうして虎の目・鼻・耳・口、所きはらず食ひつきました、略。

六313 とうく弱つて、蟻にあやまつたと言ひます。

六316 一番汽車ニ乗ラウトイフノデ、父ト五時半頃ニ家ヲ出タ。

六317 町ハマダヒツソリトシテ、ネムツテキタ。

六318 其所此所ニハトリノコエガ聞エタ。

六321 マツ先ニ出アツタノハ牛乳配達デ、略。

六322 略、車ノ音ヲ高クサセテ、ハシツテ行ツタ。

六325 略、車夫ガ「略。」ト言ツタ。

六327 東ガ白ンデ、屋根ノ霜ガ見エルヤウニナツタ。

六331 病院ノ前ノ酒屋デハ雨戸ヲ明ケハジメタ。

六332 少し行クト、呉服屋ノ小ゾウガ表ヲハイテキタ。

六333 自轉車ガ後カラ來テ、カケヌケテ行ツタ。

六336 略、町ハダンくニギヤカニナツテ來タ。

六338 停車場近クニナルト、急ニ人通ガ多クナツタ。

六344 朝日ガバツト西ガハノ家ノガラス戸ニカガイタ。

六346 略、郵便物ヲツンダ車ガキセイヨクカケテ來タ。

六346 略、郵便物ヲツンダ車ガキセイヨクカケテ來タ。

六351 略、義經が小わきにはさんであた弓を海へ落しました。

六351 略、義經が略、弓を海へ落しました。

六366 それでも義經は、略、とうとう弓を拾ひ上げました。

六367 陸へ上つた時、家來が「略。」と申しますと、略。

六371 図 「たとひ金銀で作つた弓でも、御命には代へられませぬ。」

六376 図 いやく、弓が惜しかつたのではない。

六384 略、義經は笑つて、「略。」と言つたと申します。

六385 義經に此の名を惜しむ心があつたので、略。

六385 略、何時の戦にも勝つたのでございませう。

六388 図 第十一 入營した兄から國では初雪が降つたさうだね。

六392 図 洋服は着なれなかつたので、はじめは寒いやうに思つたが、もうなれた。

六393 図 洋服は略、はじめは寒いやうに思つたが、もうなれた。

六394 図 洋服は略、もうなれた。

六396 図 入營後はじめて此の前の日曜日に外出をゆるされた。

六398 図 昨日は略、町を見物した。

六402 図 お前はなぜ自分の村の人と見物しなかつたかと思ふだらうが、略。

六408 図 略、役場につとめてゐられた下村さんは騎兵、略。

六428 図 軍隊へ來ても、學校でなまけてゐた者は人一倍苦勞をする。

六445 月と日と雷が同じ宿屋にとまりました。

六448 図 「もうとうにお立ちになりました。」

六454 叔父サンニ蛙ノ話ヲ聞イタカラ、ワスレナイ中ニ書イテ置カウ。

六461 大キクナツタ蛙ハ、略。

六477 略、卵カラカヘツタ蛙ハ、

川ヲ下ツテ海ヘ行ク。

六482 略、フシギニ自分ノ生レタ川ヘ歸ツテ來ルサウデ、略。

六483 図 「之ヲ蛙ノ里歸トデモ言ツタヲカウ。」

六484 略、「略。」ト叔父サンガ言ハレタ。

六511 源 頼朝が略、舞姫をみつめました。

六512 十二人いるうち、十一人まではありましたが、あとの一人がありません。

六514 略、御殿に仕へてゐる萬じゆがよからうと申し出た者がありました。

六515 略と申し出た者がありました。

六515 頼朝は一目見た上でと、萬じゆを呼出しましたが、略。

六516 頼朝は一目見た上でと、萬じゆを呼出しましたが、かほも美しく、略。

六517 略、すがたも上品に見えたので、さつそく舞姫にきめました。

六518 略、さつそく舞姫にきめました。

六521 略、舞姫の中では一番年わかでございました。

六523 略、舞見物の人々が何千人ともなくあつてました。

六525 一番一番三番と、十二番の舞

- がめでたくすみましたが、〈略〉。
- 六525 〈略〉、其の中でことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。
- 六526 〈略〉、其の中でことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。
- 六528 〈略〉、いつしよに舞を舞ひました。
- 六531 其の五番目の舞姫といふのは、かの萬じゆの姫であつたのでございます。
- 六542 翌日頼朝は萬じゆを呼出して、「〈略〉。」と言ひました。
- 六545 萬じゆはおそろく、「〈略〉。」と申しました。
- 六546 之を聞くと、頼朝のかほの色はさつとかはりました。
- 六547 かはるも道理、これには深いわけがあつたのでございます。
- 六548 頼朝が木曾義仲をせめようとした頃、〈略〉。
- 六552 〈略〉、木曾の家來手塚太郎光盛の娘が頼朝に仕へて居りましたが、〈略〉。
- 六553 〈略〉、之をさとつて、すぐに義仲の所へ知らせました。
- 六555 〈略〉、木曾の家につたはつてゐた大切な刀を送つてよこしました。
- 六556 〈略〉、木曾の家につたはつてゐた大切な刀を送つてよこしました。
- 六558 〈略〉、夜晝頼朝をねらひました。
- 六561 たが、少しもすぎがありません。
- 六561 かへつて、はだみはなさず持つてゐた刀を見つつけられてしまひました。
- 六562 かへつて、〈略〉刀を見つつけられてしまひました。
- 六563 頼朝は其の刀に見おほえがあつたのでございます。
- 六565 〈略〉、石のらうを造つて、それにいれました。
- 六568 唐糸には其の時十二になる娘がありました。
- 六571 これが萬じゆの姫で、木曾に住んで居りましたが、〈略〉。
- 六572 〈略〉、うばをつれて、鎌倉をさして上りました。
- 六575 〈略〉、やうく鎌倉に着きました。
- 六581 〈略〉、うばと二人で御ほうこうをねがつたのでございます。
- 六583 〈略〉、人の仕事まで引きけるやうにしましたので、「萬じゆくく。」と、人々にかはいがられました。
- 六584 〈略〉、「萬じゆくく。」と、人々にかはいがられました。
- 六591 〈略〉と、力をおとして居りました。
- 六595 〈略〉、下仕の女が来て、「〈略〉。」と申しました。
- 六601 わけをたづねますと、「〈略〉。」と答へました。
- 六601 之を聞いた萬じゆの喜はどんなであつたのでございませう。
- 六602 之を聞いた萬じゆの喜はどんなであつたのでございませう。
- 六606 萬じゆは〈略〉、石のらうをたづねました。
- 六607 〈略〉、門の戸は細めに明いて居りました。
- 六608 〈略〉、姫の中にはいました。
- 六613 〈略〉、石のらうがありました。
- 六621 〈略〉、「たれか。」と、らうの中から申しました。
- 六626 〈略〉、親子は手を取合つて泣きました。
- 六628 〈略〉、三人は其の夜をなみだの中に明かしました。
- 六633 〈略〉、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。
- 六634 さうして其の明くる年の春、舞姫に出ることになつたのでございます。
- 六637 〈略〉、頼朝もかんしんして、石のらうから唐糸を出して、萬じゆに渡しました。
- 六638 二人が〈略〉、うれし泣きに泣いた時には、〈略〉。
- 六641 〈略〉、頼朝をはじめ、居合はせた者に、だれ一人もらひ泣きをしなない者はありませんでした。
- 六642 〈略〉、だれ一人もらひ泣きをしなない者はありませんでした。
- 六643 頼朝は唐糸をゆるした上に、萬じゆにはたくさんほうびをあたましたので、〈略〉。
- 六644 〈略〉、萬じゆにはたくさんほうびをあたましたので、〈略〉。
- 六646 〈略〉、喜び勇んで木曾へ歸りました。
- 六651 町ノ叔父サンカラ、才年玉ニ大キナ磁石ヲイタバイタ。
- 六653 昨日ニイサンガ釘箱ヲ火鉢ノフチニ置イテ、手工ヲシテキタ時、〈略〉。
- 六655 〈略〉、手ヲ灰タラケニシテ拾ヒハジメタ。
- 六656 僕ハ「待テ、待テ。」トイツテ、磁石ヲ持ツテ來タ。
- 六662 〈略〉、果シテ磁石ノサキニ釘ガタクサンツイテキタ。
- 六662 二三返クリカヘシタラ、釘ハ殘ラズ取レテ、〈略〉。
- 六663 〈略〉、折レタ針ヤ、サビタ針金マデツイテ來タ。
- 六663 〈略〉、折レタ針ヤ、サビタ針金マデツイテ來タ。
- 六664 〈略〉、折レタ針ヤ、サビタ針金マデツイテ來タ。
- 六667 或村に大火事があつて、一村ほとんど丸やけになつた。
- 六668 其のとなり村の青年たちが見かねて、方々へ義捐金をつのりに出た。
- 六672 〈略〉、下男がまだ使へる小繩を捨てたと言つて、主人がひどくし

かつてゐた。

六六七 〈略〉、主人がひどくしかつて

ゐた。

六六七 青年たちは之を聞いて、さゝ

やき合つた。

六六八 〈略〉、たくさん金を出した上

に、粳や豆の種を分けて上げててもよいと言つた。

六六八 〈略〉、粳や豆の種を分けて上

げててもよいと言つた。

六六八 〈略〉「全くだ。あんな小言を言ふ程だから、此の義捐が出来たのだらう。」

六六九 其の歸り途で、青年たちは

「略。」「略。」「さうだ、く。」

といひ合つた。

六六九 〈略〉、冠をかぶつて太刀を

はいたおくげ様方や、〈略〉。

六六九 〈略〉、牛車に乗つたお姫様方

の姿を、〈略〉。

六六九 〈略〉お姫様方の姿を、此の

川の水はいくたびとなくうつしたこ

とでございませう。

六七〇 又いくさのあつた時には、

〈略〉。

六七〇 〈略〉、よろひかぶとの勇まし

いなりをした武士の刀や、なぎなた

の光も、〈略〉。

六七〇 〈略〉、なぎなたの光も、いく

たびとなく此の川の水にうつつたこ

とでございませう。

六七〇 こんな人、こんな姿は、とう

の昔にきえましたが、川は昔のまゝに清く美しく流れてゐます。

六七〇 ああ美しい友禪染は、もと此

の川べりで出来たのでございませう。

六七〇 「サウ、ヨク知ツテキマシ

タ。〈略〉。」

六七〇 毛絲デオツタ物ニハ、ドン

ナ物ガアリマスカ。

六七〇 「イ、エ、ヤハリ毛絲デオ

ツタ物デス。〈略〉。」

六七〇 二三日ひどく寒かつたので、

湖の水が大へんあつくなつた。

六七〇 〈略〉、湖の水が大へんあつく

なつた。

六七〇 第二十一 神風 〈略〉、元か

らおしよせた船でおほはれた。

六七〇 第二十一 神風 〈略〉、元か

らおしよせた船でおほはれた。

六七〇 四國・九州の武士は博多の濱

にあつまつた。

六七〇 〈略〉、濱へに石垣をきづいて

守つた。

六七〇 〈略〉、こつちからおしよせた。

六七〇 〈略〉、こつちはつり舟のやう

な小舟であつた。

六七〇 けれども我が武士は、船の大

小などは少しも氣になかつた。

六七〇 〈略〉、敵の船に火をかけて引

上げた。

六七〇 〈略〉、鐵のくさりで船をつな

ぎ合はせた。

六七〇 まるで大きな島が出来たやう

なものである。

六八〇 此の時河野の通有は、たつた

小舟二そうで向つた。

六八〇 敵ははげしく射立てた。

六八〇 敵ははげしく射立てた。味方

はばたばたとたふれた。

六八〇 通有も左のかたを射られたが、

少しも屈せず、〈略〉。

六八〇 〈略〉、刀をふるつて進んだ。

六八〇 いよくおしよせたが、敵の

船は高くて上ることが出来ない。

六八〇 通有は〈略〉、敵の船へをど

りこんだ。

六八〇 味方は後からくくとつづいた。

六八〇 〈略〉、其の船の大將を生けど

りにして引上げた。

六八〇 〈略〉、敵は一先づ沖の方へし

りぞいたが、〈略〉。

六八〇 〈略〉、これまでにない大難で

あつた。

六八〇 おそれ多くも龜山上皇は、

〈略〉、おいのりになつた。

六八〇 武士といふ武士は必死のかく

こでふせいだ。

六八〇 百しやうも一生けんめいで、

ひやうらうをはこんだ。

六八〇 全く上下の者が心を一にして、

國難にあたつたのである。

六八〇 此のまごころが神のおぼしめ

しにかなつたのであらう、〈略〉。

六八〇 〈略〉、一夜大暴風雨がおこつ

て、海はわきかへつた。

六八〇 〈略〉、敵兵は海のそこに沈ん

でしまつた。

六八〇 生きてかへつた者は數へる程

しかなかつたといふ。

六八〇 生きてかへつた者は數へる程

しかなかつたといふ。

六八〇 〈略〉、まだ一度も外國から攻

められたことはない。

六八〇 見せ物小屋で象を見た。

六八〇 先づ大きなのにおどろいた。

六八〇 たけは一丈からあつた。

六八〇 〈略〉、一切繪で見た通りであ

つた。

六八〇 〈略〉、一切繪で見た通りであ

つた。

六八〇 象つかひが〈略〉、ごぼんの

上へ乗らせたりした。

六八〇 象が大きな桶を鼻で頭の上へ

まき上げると、乗つてゐた象つかひ

は桶の中へはいつてしやがんだ。

六八〇 〈略〉、乗つてゐた象つかひは

桶の中へはいつてしやがんだ。

六八〇 〈略〉、象つかひがぬつと桶の

中で立上つた。

六八〇 みんな手をうつてかつさいし

た。

六八〇 牙は象つかひの腕よりも太か

つた。

六八〇 自分たち程の子どもが出て來

て、象の前足にだきついて見せた。

六八〇 〈略〉、象の前足にだきついて

見せた。子どもの手がやつと合つて

ゐた。
 六八七 〈略〉、長い鼻をぶら／＼させて歩き出した。
 六八八 何だか地ひゞきでもするやうな気がした。
 六八九 〈略〉、今の子どもが象の腹の下へねころんだ。
 六九〇 すると象は鼻で、其所にあつたうちを拾つて、〈略〉。
 六九一 〈略〉、子どもの顔をあふぎ出した。
 六九二 此の時、「大きなお守さんだ。」と誰かがいつたので、〈略〉。
 六九三 〈略〉、みんなが一度にふき出した。
 六九四 楠木正成が守つた千早城は、〈略〉。
 六九五 之をかこんだ賊は百萬騎といふ大軍で、〈略〉。
 六九六 〈略〉、城の四方二三里の間は、人や馬でふさがつた。
 六九七 〈略〉、賊のさわぐ所をさんざんに射た。
 六九八 賊は坂からころげ落ちて、たまちも五六千人も死んだ。
 六九九 これにこりて、賊は城の水をたやして苦しめようとはかつた。
 七〇〇 〈略〉、城兵が汲みに來られないうやうにした。
 七〇一 城中には十分水の用意がしてあつた。
 七〇二 〈略〉、旗をうばつて引上げた。

七〇三 正成は〈略〉、さん／＼に賊を惡口させた。
 七〇四 賊が〈略〉攻めよせると、正成は高いがけの上から大木を落させた。
 七〇五 〈略〉、又々五千餘もころした。
 七〇六 〈略〉、賊は城へ攻めよせないことにした。
 七〇七 〈略〉、どつとときの聲をあげた。
 七〇八 賊は「それ、敵が出た。一騎も餘すな。」とおしよせた。
 七〇九 賊は「〈略〉。」とおしよせた。
 七一〇 城兵はさつと引上げたが、三十人はふみとまつた。
 七一一 〈略〉、二十三人はふみとまつた。
 七一二 〈略〉、城から大石を四五十一度に落したので、〈略〉。
 七一三 〈略〉、又何百人かころされた。
 七一四 ふみとまつてゐたのは、みんな薬人形であつた。
 七一五 ふみとまつてゐたのは、みんな薬人形であつた。
 七一六 賊はうまくはかられたのである。
 七一七 〈略〉、之を城の堀に渡して橋にした。
 七一八 廣さが一丈五尺、長さが二十丈、其の上を賊が我先に渡つた。
 七一九 今度こそは千早城もあやふく

見えた。
 七二〇 すると正成は、何時の間に用意して置いたか、〈略〉。
 七二一 〈略〉、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。
 七二二 さうして其の上へ油をふりかけさせた。
 七二三 橋はまん中からもえ切れて、谷そこへどうと落ちた。
 七二四 又賊は何千人か死傷した。
 七二五 〈略〉、方々で官軍が賊のひやうらう道をふさいだので、賊は人馬ともにつかれた。
 七二六 〈略〉、賊は人馬ともにつかれた。
 七二七 〈略〉、はじめ百萬騎といつた賊も、しまひには十萬騎に減じ、〈略〉。
 七二八 〈略〉、はじめ百萬騎といつた賊も、殘少になつて退いた。
 七二九 〈略〉、向つて右の落葉松は、わたしの子どもが植ゑたので、其の子はとうに戦死した。
 七三〇 〈略〉、其の子はとうに戦死した。
 七三一 かの學校がたつた時、
 七三二 〈略〉、うちの畠にあつたのを、死んだあの子が掘取つて、
 七三三 死んだあの子が掘取つて、かついで行つて植ゑたのだ。

七三四 〈略〉、かついで行つて植ゑたのだ。
 七三五 其の子は十二、落葉松はあの子のせいより低かつた。
 七三六 「わたしの植ゑた落葉松があんなに高くなりました。」
 七三七 「わたしの植ゑた落葉松があんなに高くなりました。」
 七三八 昨日學校で校長に、あの木の事を話したら、〈略〉、大事にするとおつしやつた。
 七三九 はじめて聞いた記念の木、大事にするとおつしやつた。
 七四〇 〈略〉、大事にするとおつしやつた。
 七四一 「〈略〉。」と、おかあさんが誰かにおつしやつてゐる時、私は庭へ出ました。
 七四二 雨あがりの庭はぼうつとけむつてゐました。
 七四三 〈略〉、しやうぶが小指程に芽を出してゐました。
 七四四 〈略〉、「〈略〉。」といふねえさんの聲がしました。
 七四五 ねえさんは〈略〉、手洗鉢の水をかへてゐました。
 七四六 なるほど、去年鯉のぼりを立てた時、しやうぶとよもぎを軒へさした。
 七四七 〈略〉、しやうぶとよもぎを軒へさした。

沖へ流れてしまひました。

七二一 義貞は「略」鎌倉さして攻めこみました。

七二四 「略」、濱風が之をあふり立てたからたまりません。

七二七 「略」、「略」北條方は、此の火の中にほろびてしまひました。

七二三 みきが二かゝへもあつて、枝が傘をひろげたやうに出てゐるので、「略」。

七二三 其の松の下に石でござんだ地蔵様が立つていらつしやる。

七二五 茶屋から二三町行つた所の右手に、「略」。

七二五 「略」、まんどゆう笠をふせたやうな塚がある。

七二五 塚の前に馬頭観世音とほつた石が立つてゐて、「略」。

七二五 馬は「略」、生れた日からすぐ歩く。

七二六 武人は「略」、それに乗つて出かけた。

七二七 畠山重忠はひよどりごえのさか落しに、馬をしよつて下りたといふし、「略」。

七二三 「略」、近くは乃木大將も、馬は煉瓦造の小屋に入れて置かれたのである。

七二九 我が國の馬は「略」、せいも低く、體格もおとつてゐたが、「略」。

七二八 「略」、近年外國から種馬を輸入したので、「略」。

七二八 「略」、いたる所に良馬を見るやうになつた。

七三五 大連へ来てから、もうかれこれ七八十日、町のもやうも大分わかつて來ました。

七三八 船から陸あげした荷物は、「略」。

七三九 氣候も思つたよりよくて、快晴の日が多いやうです。

七四〇 又我が忠勇の士が血を流して取つた二百三高地にも上つて歸りました。

七四〇 二百三高地にも上つて歸りました。

七四一 軍人をのせた御用船が今しも港を出ようとした其の時、「略」。

七四二 御用船が今しも港を出ようとした其の時、「略」。

七四二 御用船を見つけると、「略」とさげんだ。

七四二 すると甲板の上で鐵砲を上げた者がある。

七四二 おばあさんは又さげんだ。

七四四 「略」。わかつたらもう一度鐵砲を上げる。」

七四六 おばあさんは又さげんだ。「略」。すると、又鐵砲を上げたのがかすかに見えた。

七四六 「略」、又鐵砲を上げたのがかすかに見えた。

七四八 おばあさんは「やれく」といつて、其所へすわつた。

七四九 「略」、わらちがけで急いで來たのださうだ。

七四九 郡長をはじめ、見送の人々はみんな泣いたといふことである。

七四五 「略」上杉謙信と「略」が、たびたび信濃の川中島で戰つた。

七四八 ある時謙信が山の手に陣を取つてゐると、信玄は兵を二手に分けて、はさみうちしようとした。

七四九 謙信は「略」信玄の陣へ攻入つた。

七四九 信玄は不意を打たれておどろいたが、「略」。

七四三 信玄は「略」、忽ち陣立をかねて、敵を引受けた。

七四六 兩軍は入りまじつて、火花をちらして戰つた。

七四八 謙信は「略」、信玄に打つてかゝつた。

七四五 ぐんばいうちはでふせいだが、えが折れて、肩先へ切りつけられた。

七四五 「略」、肩先へ切りつけられた。

七四五 「略」、後からやりで謙信をついたが、あたらない。

七四五 力一ぱいに謙信の馬をなぐりつけた。

七四五 馬はおどろいてとび上つたので、信玄はあぶない所を助かつた。

七四五 「略」、信玄はあぶない所を助かつた。

七四五 川中島で前後五回戰つたが、まだ勝負がつかなくつた。

七四八 「略」、まだ勝負がつかなくつた。

七四三 「略」。勝つた方のものが川中島を取ることにしては。」

七四六 第六回目にいたつて、信玄から謙信へ、「略」と申しこんだ。

七四六 謙信はこれに同意した。

七四八 翌日武田方からは安間彦六といふ大の男が、「略」、上杉方の陣へ向つた。

七四六 上杉方からは小さな馬に乗つた小さな鎧武者が一人あらはれて、「略」。

七四四 上杉方からは小さな馬に乗つた小さな鎧武者が一人あらはれて、「略」と名のつた。

七四八 二人は「略」、馬上のまゝでむんずと組み、兩馬の間にどうと落ちた。

七四八 彦六が與五左衛門を組みふせた。

七四八 「略」、手早く首を取つてさし上げた。

七四八 上杉方はどつとときの聲をあげた。

七四六 「略」、武田方から十騎ばかり、木戸を開いて切つて出ようとした。

七四八 鬼神の如き彦六が、あれ程の小兵に討たれたは味方の不運。

七四九 此の時信玄は之を止めて、「略」といつたので、めでたく中なほりが出來た。

七49 2 〈略〉、めでたく中なほりが出来た。

七49 4 私ノ近所二年ヨリノカヂ屋ガアリマシタ。

七49 6 〈略〉、チヨツト見ルト、コハ

イヤウデシタガ、〈略〉。

七49 7 〈略〉、氣立ノヤサシイ老人デシタ。

七50 1 〈略〉、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音ガ聞エマシタ。

七50 1 一日モ休ンダコトハアリマセン。

七50 3 私ハ時々其ノ仕事場ヘ行ツテ見マシタ。

七50 3 鎌ヲキタヘテキタコトモアリマス。

七50 5 鍬ヲ打ツテキタコトモアリマス。

七50 6 ナタヲ打ツテキタコトモアリマスシ、〈略〉。

七50 8 〈略〉、車ノ輪ヲ打ツテキタコトモアリマス。

七51 1 何時カ私ノウチノツルベノ金タガガコハレタ時、ツクロヒヲタノシタラ、〈略〉。

七51 1 〈略〉、ツクロヒヲタノシタラ、翌日スグニナホシテクレマシタ。

七51 2 〈略〉、翌日スグニナホシテクレマシタ。

七51 4 〈略〉、日ノクレルマデ働イテキマシタ。

七51 5 イカニモ丈夫サウナ老人デシ

タガ、〈略〉。

七51 6 〈略〉、去年ノクレニ死ンデシマヒマシタ。

七51 7 其ノ時分マデ、ヨソヘ奉公ニ行ツテキタ若イムスコガ、〈略〉。

七52 8 〇 私も子どもの時には、〈略〉、此の講堂でお話を聞いたに致しました。

七56 1 〇 其所にゐる人は、私どもとはまるでちがつた風をして、〈略〉。

七56 2 〇 〈略〉、まるでちがつた言葉で話をしてゐます。

七58 5 〇 〈略〉、いくらきりが深くて、まるでちがつた方へ行くやうなことはありません。

七60 6 〇 海の波を見たばかりで、もう恐しがる人もあります。

七62 1 〇 連日の雨で、川といふ川には水があふれました。

七62 4 〇 〈略〉、川べの宿はとめきれない程の客でございました。

七62 6 〇 中でも安倍川の宿は一そうの人ごみであつたと申しますが、〈略〉。

七62 8 〇 〈略〉、我もくゝと先をあらそつて渡りました。

七62 9 〇 水になれた人夫の肩に乗るか、〈略〉。

七63 8 〇 〈略〉、川べはひじやうなさわぎでございました。

七64 1 〇 此の時見すばらしいなりをした一人の男が、〈略〉。

七64 2 〇 〈略〉、一人の男が、人夫と渡

賃を高いやすいと言つてあらそつてゐましたが、相談は出来ないものと見きつたのでせう、〈略〉。

七64 3 〇 〈略〉、相談は出来ないものと見きつたのでせう、〈略〉。

七64 4 〇 〈略〉、一人の男が、〈略〉、一人で川へはいつて行きました。

七64 6 〇 〈略〉、やうやう向岸に着きました。

七64 8 〇 〈略〉、先程渡賃をあらそつた所へ行つて見ますと、〈略〉。

七64 9 〇 〈略〉、革の財布が落ちてゐました。

七65 2 〇 〈略〉、中には小判がどつさりはいつてゐました。

七65 2 〇 これはあの人が落ちて行つたにちがひないが、〈略〉。

七65 4 〇 〈略〉、此のあふない川を一人でこしたほどの人である。

七65 5 〇 もし此の大金がなかつたら、氣がちがつて死ぬやうな事になるかも知れぬ。

七65 8 〇 〈略〉、人夫はすぐ川を渡つて、かの男を追つかけてました。

七66 4 〇 人夫は「もしくゝ」と呼びかけて、たづねました。

七66 5 〇 「あなたは今朝一人で川をこした方ではありませんか。」

七66 9 〇 「落し物をしましたから。」

七67 3 〇 「まあ、お待ちなさい。落した物は。」

七68 1 〇 〈略〉。此所へ持つて來ま

した。」

七68 2 〇 「〈略〉。」といつて、人夫は財布を出して渡しました。

七68 4 〇 かの男はゆめかとはかり喜んで、財布を幾度かいたゞきました。

七68 6 〇 家の中で見えなくした物でも、中々出ないものでございます。

七68 8 〇 まして人通の多い渡場で落しましたから、〈略〉。

七68 9 〇 〈略〉、たとひとんで行つて見た所で、もうあるまいとは思ひましたが、〈略〉。

七68 9 〇 〈略〉、もうあるまいとは思ひましたが、此のまゝ歸ることも出来ませんので、〈略〉。

七69 2 〇 〈略〉、引つかへして参りました。

七69 4 〇 〈略〉、かくこをして來たのでございます。

七69 6 〇 〈略〉、財布をいたゞかせてもらひましたが、いたゞいたのは財布ではなくて、私の命でございます。

七69 6 〇 〈略〉、いたゞいたのは財布ではなくて、私の命でございます。

七70 1 〇 しばらくして、「〈略〉。」といつて、財布の中に手を入れました。

七70 7 〇 人夫は之を見て、「〈略〉。」といつて、歸らうとしました。

七70 8 〇 かの男は「どうぞしばらく。」といつて引きとめました。

七71 2 〇 〈略〉、れふを致して居りま

といひきつて歸りました。

七99 〆略、とうく太閤のお目通へ出ることを禁ぜられました。

七100 〆略、人々の泣叫ぶ聲は天地にひびきました。

七100 〆此の時清正は、〆略、一さんに伏見の城へかけつけました。

七101 〆秀吉は〆略、御臺所やおそばの女どもと居りました。

七101 〆其所へ清正がかけつけました。

七101 〆清正は大聲で申しました。

七102 〆略、〆略、家來ども二百人に梃を持たせてかけつけました。

七102 〆略、〆さてく、早く参つた。

七102 〆秀吉が之を聞いて、〆略、と心の中で喜びました。

七102 〆さうして清正のやせた姿、日にやけた顔を見ては、〆略。

七102 〆略、日にやけた顔を見ては、〆略。

七102 〆略、怒がとけて、涙ぐみました。

七102 〆略、秀吉はうなづきました。

七103 〆間もなく石田三成が城に登つて参りました。

七103 〆「ずるぶんおそく來たものだ。」

七104 〆秀吉が之を聞いて、幕の中から、「もうよい。通してやれ。」とい

七104 〆「ひましたので、〆略。」

た。

七105 〆翌日諸大名が伏見城の大廣間へつめました。

七105 〆略、又明國への返書に豊臣清正と記したといふが、それはま

ことの事か。

七105 〆秀吉は清正を召出して、〆略、とたづねました。

七106 〆略、〆略、生けどつた者は皆かへせ。〆略。

七106 〆略、〆小西は〆略、道案内の者故、にげも致したであらう。〆略。

七107 〆略、御威光にもかゝる所と存じ、〆略、と返書をつかはしまし

たが、〆略。

七107 〆略、御威光を借りて豊臣と記したのでございます。

七107 〆略、〆と、べんぜつさわやかに申し開きました。

七108 〆略、清正はつけひもの頃から、此の方のひざの上でそだつたので、

何時か見習つたものと見える。

七108 〆略、〆何時か見習つたものと見える。

七108 〆略、〆略、豊臣と名のつたもの差支がない。

七108 〆秀吉は感心して、〆略、清正に名刀をあたましました。

七110 〆略、〆おとうさん、電報が來ま

七110 〆略、〆ハナシデキタイツクルヘン。

七113 〆第二十六 注文 一 ニツ

イタハデムキモウ二〇オクレ

七113 〆略、去る三日にお差出しの編物

三十反、本日無事に着きました。

八12 〆略、此の間二度降つた雨に、山の木の葉は目立つて色づいた。

八13 〆略、〆山の木の葉は目立つて色づいた。

八15 〆略、林の中へはいると、眞赤にな

つたつたが、〆略。

八34 〆略、炭を焼く煙も所々に立ちほじ

めた。

八42 〆略、〆僕はしばらくそれを見てゐた。

八43 〆略、〆僕の見えてゐるのに氣がついたと見えて、〆略。

八45 〆略、〆尾をふりながら、ちよこくやつて來た。

八54 〆略、〆ふと、垣根の外でちやらくとすゝの音が聞えた。

八54 〆略、〆二匹はいちもくさんにかけて行つたが、〆略。

八55 〆略、〆間もなくかはいらしいのを一匹つれて來た。

八56 〆略、〆仲間がふえたので、〆略。

八57 〆略、〆又一しきりじやれ合ひをはじめた。

八61 〆略、〆昔或氏神のお祭に、競馬の

八63 〆略、〆勝つた子どもを出した村が、〆略。

八63 〆略、〆勝つた子どもを出した

八63 〆略、〆勝つた子どもを出した

村が、〆略。

八65 〆略、〆五箇村の頭になるといふ定めであつた。

八66 〆略、〆或年選ばれた子どもの中に、すぐれて上手なものが二人あつた。

八67 〆略、〆すぐれて上手なものが二人あつた。

八72 〆略、〆おびたしい見物人が、朝早くから宮の境内へつめかけた。

八74 〆略、〆やがて五人の騎手は〆略、鳥居の中に集つて來た。

八76 〆略、〆支度、といふあひづの一番太鼓を鳴らした。

八81 〆略、〆負けたら村のはちになるぞ。

八85 〆略、〆拜殿のそばの大きな立石の前に並んだ。

八88 〆略、〆五匹の馬は一さんにか

け出した。

八89 〆略、〆始の間はあまり甲乙はなかつたが、〆略。

八92 〆略、〆もはや信作と耕造の二人だけの競走となつた。

八93 〆略、〆さうしてそれが同時に決勝點へ着いた。

八93 〆略、〆二人を出した村の者は、たがひに勝利をいひはるので、〆略。

八95 〆略、〆もう一度競走させることにした。

八96 〆略、〆今度の競走も五分々々に進んで行つたが、〆略。

八97 〆略、〆中程まで行つた時、

八97 〆略、〆中程まで行つた時、

八97 〆略、〆中程まで行つた時、

《略》。

八 9 8 《略》、信作の馬はつまづいて前足を折つた。

八 9 9 信作は《略》、ころ／＼と池の中へころげこんだ。

八 10 6 《略》、一たん沈んで又浮上つた信作のえりを引つつかんで、《略》。

八 10 8 耕造は《略》、《略》信作のえりを引つつかんで、ぐつと岸へ引上げた。

八 11 4 信作が落ちたのかまはず馬をかけさせたら、《略》。

八 11 5 信作が落ちたのかまはず馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、《略》。

八 11 7 信作、相手を助けてやつたのはえらい。

八 11 8 如何にも見上げた心掛だ。

八 12 2 耕造方の人々は耕造の肩をたゝいて、「《略》。」などといった。

八 12 4 あなた方の村が勝つたのです。

八 12 5 耕造さんのおかげで、信作の命が助かりました。

八 12 6 耕造さんの心掛は實に見上げたものです。

八 12 9 信作方の人々は之を聞いて、「《略》。」といったのである。

八 12 9 信作方の人々は之を聞いて、「《略》。」といったので、さうきまつたといふことである。

八 13 5 《略》、安倍川原へ石合戦を見に行つた。

八 13 6 一方は百四五十人で、他の一方は三百人以上もあつた。

八 13 7 見物人は争つて、多勢の方へ行つたが、《略》。

八 13 8 《略》、家康は小勢の方へ行けと命じた。

八 14 4 家來があやしんで、其のわけをたづねると、「《略》。」といった。

八 14 5 《略》、果して小勢の方が勝つた。

八 14 5 後に此の話を聞いた者は、《略》。

八 14 6 《略》、皆家康の年に似合はずかしこいのに驚いた。

八 14 8 徳川家康が大阪城を攻めた時、《略》。

八 14 9 《略》、其の子頼宣は戦が始つたと聞いて、先陣へかけつけたが、《略》。

八 14 9 《略》、其の子頼宣は《略》、先陣へかけつけたが、《略》。

八 15 1 《略》、もう間に合はなかつた。

八 15 2 《略》、そばに居た松平正綱が「《略》。」といつてなくさめると、《略》。

八 15 7 《略》、頼宣は顔色をかへて、「《略》。」といった。

八 15 9 家康は之を聞いて、「《略》。」といつて喜んだ。

八 16 2 松平正綱の子信綱は幼名を長

四郎といった。

八 16 4 九つ時から將軍の若君竹千代のおつきになつた。

八 16 7 竹千代が軒ばに雀の巢を見つけて、「《略》。」と命じた。

八 17 1 《略》、もう少しで雀の巢へ手が届かうとした時、《略》。

八 17 1 《略》、ふみ外して軒下へどうと落ちた。

八 17 3 《略》、長四郎であつた。

八 17 4 何しに此所へ参つた。」

八 17 5 雀の子がほしくて参りました。」

八 17 6 誰に頼まれた。」

八 17 8 「いや、きつと頼まれたであらう。」

八 17 9 「い、え、頼まれたのではございません。」

八 18 3 將軍は《略》、袋の口を封じて柱に掛けた。

八 18 4 翌日になつて、將軍が又たづねたが、《略》。

八 18 5 《略》、始のやうに答へた。

八 18 6 《略》、長四郎はやつと袋から出された。

八 18 8 「長四郎があの子で大きくなつたら、竹千代には無二の忠臣であらう。」

八 19 1 將軍はあとで、御臺所に、「《略》。」といつたといふことである。

八 22 5 《略》、亞里山の蕃人にだけは、此の悪い風が早くから止みました。

八 22 8 呉鳳は《略》、亞里山の役人でした。

八 22 8 たいそう蕃人のかはいがりましたので、《略》。

八 22 9 《略》、蕃人からは親のやうにしたはれました。

八 23 1 呉鳳は役人になつた時から、《略》。

八 23 2 呉鳳は役人になつた時から、どうかして首取の惡風を止めさせたものだと思ひました。

八 23 3 ちやうど蕃人が、其の前の年に取つた首が四十餘ありましたので、《略》。

八 23 4 ちやうど蕃人が、其の前の年に取つた首が四十餘ありましたので、《略》。

八 23 6 《略》、毎年其の首を一つづつ供へさせました。

八 23 8 《略》、もう供へる首がなくなりました。

八 24 1 《略》、首を取ることを許してくれといつて出ました。

八 24 3 呉鳳は《略》、もう一年、もう一年とのぼさせてゐましたが、《略》。

八 24 5 《略》、「もう、どうしても待つてゐられません。」といつて來ました。

八 24 9 呉鳳は「《略》。」といひました。

八 25 3 《略》、赤い着物を着た人が來

ました。

八25 4 〈略〉、赤い着物を着た人が来ました。

八25 5 待ちかまへてゐた蕃人どもは、〈略〉。

八25 6 〈略〉、蕃人どもは、すぐに其の人を殺して、首を取りました。

八25 8 見ると、それは呉鳳の首でございました。

八26 1 蕃人どもは聲を上げて泣きました。

八26 4 さて蕃人どもは、〈略〉、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。

八29 6 太郎は〈略〉、まだ一度も其所へ行つて見たことがない。

八29 8 〈略〉、あろりのはたでいろくゝの話をした。

八30 1 〈略〉、其の男はていねいに教へてくれた。

八31 5 〈略〉、又其の上になつたかま土を置いて、打固める。

八32 8 これはもと野生のものでしたが、〈略〉。

八32 9 〈略〉、今から千何百年も前から栽培することになったのだとつたへてゐます。

八33 7 〈略〉、朝晩神様にいのつてゐました。

八33 9 〈略〉、望のものをさづけてやるといふ神様のお告がありました。

八34 2 婦人は〈略〉、すぐに其の山へ上りました。

八34 2 さうして教へられた場所へ行つて見ますと、〈略〉。

八34 3 〈略〉、望の赤子は居ませんでしたが、〈略〉。

八34 5 〈略〉、眞赤な美しい實が一つなつてゐました。

八34 6 婦人は、〈略〉、神様がおさづけ下さつたのはこれに違ひないと思つて、〈略〉。

八34 7 〈略〉、庭先の畠の中にまきました。

八34 8 間もなくそれから芽が出ましたので、〈略〉。

八34 9 〈略〉、婦人は之を我が子のやうに育てました。

八35 1 〈略〉、此の婦人は長生をしましたが、〈略〉。

八35 2 〈略〉、一生の間仕合はせのよい事がつゞいたと申します。

八35 5 昔江戸で、夫に死なれた女が、〈略〉。

八35 6 〈略〉、乳飲子を里子にやつて奉公に出ました。

八35 7 〈略〉、先方はあづかつたおぼえがないといつて返しません。

八35 9 困つて町奉行へ訴へて出ました。

八36 4 越前守はじつと考へましたが、〈略〉。

八36 6 図「略」。勝つた方へ其の子を渡す。」

八36 8 越前守はじつと考へましたが、「略」といひました。

八36 9 図「かしこまりました。」

八37 1 二人の女は〈略〉、両方から引合ひましたが、〈略〉。

八37 5 〈略〉、子どもがいたがつて、わつと泣出しますと、實母の方は驚いて手を放しました。

八38 2 図 手を放した女が實母にきまつた。

八38 3 図 手を放した女が實母にきまつた。

八38 4 〈略〉、越前守は聲をかけて、「略」と申し渡しましたので、〈略〉。

八38 4 〈略〉、里親は恐れ入つたといひます。

八38 8 呉服屋の手代が、大きなふろしきづつみを石地藏の前におろして休みましたが、〈略〉。

八38 9 〈略〉、餘程つかれてゐたものと見えて、〈略〉。

八39 1 〈略〉、ぐつすりねこんでしまひました。

八39 4 包の中には白木綿が五十反ばかりはいつてゐたのでございます。

八39 7 困つて町奉行へ訴へて出ました。

八40 5 越前守は手代の言ふ所を聞いて、「略」といって、下役の者に石地藏をしぼつて来るやうに命じました。

八41 3 図「略」。地藏様でも悪いことをなさつたと見える。」

八41 6 〈略〉、四五百人のものが、〈略〉、思はず知らず役所の門内へ入りこみました。

八42 3 越前守は早速門をしめさせて、〈略〉、さておごそかに、「略」と申し渡しました。

八42 5 しばらくして、其の中のおも立つた者が出て、〈略〉。

八43 1 〈略〉、越前守は「略」と命じました。

八43 3 三日の間に一同は白木綿を一反つ持つて参りました。

八43 4 〈略〉、其の中に盗まれた品のありなしを調べさせました。

八43 5 〈略〉、其の中に盗まれた品のありなしを調べさせました。

八43 5 すると其の中に二反ありました。

八43 6 そこで其の反物を出した者を呼出して、〈略〉。

八43 7 〈略〉、それからそれと調べましたので、とうとう罪人がわかりました。

八43 8 〈略〉、とうとう罪人がわかりました。

八44 1 越前守は再び一同を呼出して、さきに納めさせた白木綿を返し、〈略〉。

八44 2 〈略〉、ついでに石地藏を、もとの所へもどしたと申します。

- 八45ノ目 始は熱が高くて心配致しました、略。
- 八45ノ目 略、食事進むやうになりましたので、略。
- 八45ノ目 略、やつと安心致しました。
- 八46ノ目 其の後どうかと案じてゐましたが、略。
- 八46ノ目 略、手紙を見て安心しました。
- 八48ノ目 略、サキノ曲ツタ大キナクチバシ、略。
- 八50ノ目 餅をつく音に目がさめた。
- 八51ノ目 略、略、せいろからは、盛にゆげが上つてゐた。
- 八51ノ目 略、餅を並べる所をこしらへてゐた。
- 八52ノ目 よく目がさめたね。
- 八52ノ目 「略」。今四時を打つばかりだ。」
- 八52ノ目 略、「略。」と、にいさんがいつた。
- 八52ノ目 略、おばあさんが餅を臼の中で丸めて、おかあさんの所へ持つていらつしやつた。
- 八52ノ目 おかあさんは略、ぐるぐるまはしていらつしやつたが、略。
- 八52ノ目 略、忽ちきれいなおそなへになつた。
- 八53ノ目 略、三日目からは、のし餅が出来た。
- 八53ノ目 四日目の時は、おちいさんも手つだつてつかれた。
- 八53ノ目 略、ゆげが上るまでに、少し間があつた。
- 八53ノ目 略、おちいさんが「とてもまだ。」とおつしやつたが、略。
- 八54ノ目 略、おばあさんは「まあ、ついでみるがよい。」とおつしやつた。
- 八54ノ目 いやよくにいさんがつき出した。
- 八54ノ目 始のうちは勢がよかつたが、略。
- 八54ノ目 略、略、兩足が、きねをふり上げるたびに動いた。
- 八54ノ目 おとうさんが「略。」とおつしやつたが、略。
- 八54ノ目 略、それでもとう／＼一白だけはつき上げた。
- 八54ノ目 八時頃には、すつかりすんだ。
- 八55ノ目 略、近所へも配つた。
- 八64ノ目 「略」。今風であかりがきえました。」
- 八65ノ目 ハワイから出した繪葉書は見ましたらうね。
- 八65ノ目 ハワイから出した繪葉書は見ましたらうね。
- 八65ノ目 おとうさんは一昨日の正午無事にサンフランシスコへ着きました。
- 八65ノ目 おとうさんが着いた日は、略。
- 八66ノ目 略、日本人の家には、鯉のぼりが立つてゐました。
- 八66ノ目 此の港には、十五六年前に大地震があつて、町は大方こはれたのですが、略。
- 八68ノ目 略、子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、略。
- 八68ノ目 略、又日本人の立てた學校へ行つて、略。
- 八69ノ目 略、今日此のシカゴに着きました。
- 八70ノ目 略、汽車の窓から見た牧場の實景です。
- 八70ノ目 長く滞在してゐたシカゴ市を立つて、略。
- 八71ノ目 略、今日いよく略、ニューヨーク市に着きました。
- 八71ノ目 略、たつた十八時間着きました。
- 八74ノ目 シカゴを立つ日に、お前たちの年始状が着きました。
- 八74ノ目 二人とも字が上手になつたのに驚きました。
- 八74ノ目 二人とも字が上手になつたのに驚きました。
- 八74ノ目 二人とも字が上手になつたのに驚きました。
- 八74ノ目 うちには何事もないさうで安心しました。
- 八75ノ目 コロンブスがアメリカを發見して歸つた時、略。
- 八75ノ目 略、イスパニヤ人の喜んだことは非常なものでした。
- 八75ノ目 略、イスパニヤ人の喜んだことは非常なものでした。
- 八75ノ目 大洋を西へくと航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がらだらうか。
- 八76ノ目 略、一人の男が「略。」といつて冷笑しました。
- 八76ノ目 之を聞いたコロンブスは、つと立つて、略。
- 八76ノ目 之を聞いたコロンブスは、略、「略。」といひました。
- 八76ノ目 人々は何の爲にこんなことをいひ出したかと思ひながら、略。
- 八76ノ目 略、やつて見ましたが、もとより立たうはずはございません。
- 八77ノ目 略、何の苦もなく立てて申しました。
- 八77ノ目 「諸君、これも人のした後では、何のさうさもない事でございませう。」
- 八81ノ目 雪も小降りになつた。
- 八82ノ目 もと僕のうちに奉公してゐた信吉が、略。
- 八83ノ目 略、信吉が、昨日の朝三年ぶりでハワイから歸つて來た。
- 八83ノ目 信吉は僕の兩親に歸つて來たあいさつをすますと、略。
- 八83ノ目 信吉は略、「奥様、あのとよは。」と、さも心配さうにたづねた。
- 八84ノ目 「略」。それをお聞きして安心致しました。略。」
- 八84ノ目 略、あの子のことばかりが、氣にかゝつてゐたのでございま

八〇四 かりに造れたとしても、〈略〉。
 八〇五 〇 略、軸木を火で乾かす者もあり、乾かした軸木の先に薬をつける者もあり、〈略〉。
 八〇五 二 略、薬をつけた軸木を温室で乾かす者もあり、〈略〉。
 八〇五 三 略、乾かしたのをそろへてマツチの箱に入れる者もあり、〈略〉。
 八〇五 五 略、箱に入れたのを十つづ集めて包紙に包む者もある。
 八〇七 九 〇 略、もし天氣がよかつたら、〈略〉。
 八〇九 四 〇 父が今年八十八になりまして、〈略〉。
 八一一 八 乃木大將は幼少の時、體が弱く、其の上臆病であつた。
 八一一 八 幼名を無人といつたが、〈略〉。
 八一一 九 略、朝晩よく泣いたので、〈略〉。
 八一一 二 略、近所の人は大將のことを、無人ではない、泣人だといつたといふことである。
 八一一 四 大將の父は〈略〉、江戸で若君のお守役をしてゐたが、〈略〉。
 八一一 七 略、どうかして大將の體を丈夫にし、氣を強くしなければならぬと思つた。
 八一二 一 略、〈略〉 泉岳寺へよく連れて行つた。
 八一二 五 大將の父は〈略〉、其の墓に參詣したのである。
 八一二 八 或年の冬、大將が思はず「寒

い。」といつた。
 八一二 三 略、頭から冷水を浴びせかけた。
 八一二 五 大將はこれから後、一生の間「寒い。」とも「暑い。」ともいひなかつたといふ。
 八一二 六 大將の母もまたえらい人であつた。
 八一二 一 略、うち中の者がそればかり食べるやうにした。
 八一二 三 其の爲、大將には全く食物に好ききらひといふものがないやうになつた。
 八一二 五 大將が十歳の年、大將の一家は郷里へ歸ることになつた。
 八一二 七 其の時大將は江戸から大阪まで、〈略〉、両親と共に歩いて行つた。
 八一二 九 當時大將の體は、もうこれだけ丈夫になつてゐたのである。
 八一二 五 郷里の家は〈略〉、至つてせまい、そまつな家であつた。
 八一二 六 けれども刀・〈略〉など、武士の魂と呼ばれる物は、何時もきら／＼光つてゐたといふことである。
 八一二 八 此の父母の下に、此の家に育つた乃木大將が、〈略〉。
 八一二 一 略、武人の手本と仰がれるやうになつたのは、〈略〉。
 九三三 〇 三月二十五日お出しのお手紙を昨日受取りました。
 九三三 九 略、土地の様子も一通りはわかりました。

九四一 〇 略、かねて思つてゐたとは違ひ、〈略〉。
 九四一 五 略、内地から移つて來た人も多く、〈略〉。
 九四一 四 〇 鳥の羽に似た大きな葉が、〈略〉。
 九四一 九 〇 味はまことにあつさりしたものです。
 九四一 五 〇 略、にはか雨が、〈略〉草を洗つて通り過ぎた後の、〈略〉。
 九四一 七 〇 何だかおとぎばなしの世界にでもまよひこんだやうです。
 九四一 〇 〇 略、殊に近年我が國で學校をそこ、に立てたので、〈略〉。
 九四一 三 〇 此の間も十ぐらゐる少女が「君が代」をうたつてゐました。
 九四一 八 〇 略、間モナクソレト似タ色ニカハルモノモアル。
 九四一 〇 〇 略、枯木ニ移レバ枯木ニ似タ色ニナル。
 九四一 七 〇 病みつかれた六十ばかりの老人が、〈略〉。
 九四一 二 〇 〇 略、これまで折々話した通り、〈略〉。
 九四一 二 〇 〇 略、りつぱな書物もお書きになつた。
 九四一 九 〇 略、一そう研究を進められた。
 九四一 二 〇 〇 略、まだ全く手の着かない事が少くなかつた。
 九四一 六 〇 略、出来るだけは骨折つたつもりである。

九四一 八 〇 略、其の上政治上の事で度々殿様に上書した爲、〈略〉。
 九四一 九 〇 略、終には國を立ちのかねばならぬやうになつた。
 九四一 〇 〇 略、それから諸國を歩き廻つたすゑ、〈略〉。
 九四一 二 〇 〇 略、此の山中へ來たのである。
 九四一 五 〇 略、老人は大分つかれたやうである。
 九四一 六 〇 少年はてつびんの湯をついで老人にすゝめた。
 九四一 七 〇 老人は一口飲んで横になつた。
 九四一 八 〇 少したつて、今度は寝たまゝぼつ／＼と話し出した。
 九四一 九 〇 少したつて、今度は寝たまゝぼつ／＼と話し出した。
 九四一 二 〇 〇 略、元庵様はおもに氣候と農業との關係をお調べなされたが、〈略〉。
 九四一 五 〇 略、おちい様の不昧軒様はまた、地質や鑛物の方で新しい發見をなされた。
 九四一 六 〇 略、此の方々のお書きになつたものは、大てい此所に持つてゐる。
 九四一 三 〇 略、くはしく計畫を立てた事もあるが、〈略〉。
 九四一 五 〇 略、實行が出来ずにしまつた。
 九四一 七 〇 略、しかしわたしの四十年の骨折は、〈略〉決してむだでなかつたと思ふ。

九27 目に涙を一ぱいためて聞いてゐた少年は、〈略〉。
 九28 〈略〉少年は、〈略〉、實行をちかつた。
 九29 父は安心した様子で、〈略〉。
 九27 父は〈略〉、やがてすやくと眠つた。
 九28 1 これは今から百三十年ばかり前に、〈略〉足尾山中の旅人宿で起つた事で、〈略〉。
 九28 4 信季は〈略〉、とうく此の宿でなくなつた。
 九28 7 信淵は〈略〉、一心に西洋の學問を勉強した。
 九28 9 〈略〉、國家の爲に富源を開發することが甚だ多かつた。
 九28 10 歎庵以來代々力をつくして來た農學は、〈略〉。
 九29 1 〈略〉農學は、〈略〉、信淵に至つて大成したのである。
 九29 8 〈略〉、數百歩はなれた所でも〈略〉。
 九29 9 〈略〉、器に盛つた水が波紋をゑがく程です。
 九30 9 瀧の上手にかけた石橋を渡り、〈略〉。
 九32 5 〈略〉、春蘭しゅんらんのつぼみのふくらんだのも見える。
 九32 5 しつとりとしめりを帶びた一すちの道が、〈略〉。
 九33 2 〈略〉、ふろしき包をしよつたせなかがしつとりと汗あせばんで來る。

九33 4 目じるしの大けやきの所まで來た時、〈略〉。
 九33 6 〈略〉、美しい小鳥が二三羽、身がるに枝移りした。
 九33 7 〈略〉、栗鼠りしが一匹、けろりとした顔を出したが、〈略〉。
 九33 7 〈略〉、栗鼠りしが一匹、けろりとした顔を出したが、〈略〉。
 九33 8 〈略〉、栗鼠りしが〈略〉、急にまたかくれてしまつた。
 九33 9 道がだんく上りになつたと見えて、〈略〉。
 九33 10 〈略〉、遠い湖がちらくくと見えて來た。
 九34 7 〈略〉、黄の勝つた緑のけやき、〈略〉。
 九34 10 〈略〉、此の前來た時の事を考へながら、〈略〉。
 九35 2 腹が大分すいて來た。
 九35 8 図「やあ、加藤君、よく來てくれたね。」
 九35 9 〈略〉、「やあ、加藤君、よく來てくれたね。」と、聲をかけた者がある。
 九35 10 頭を上げてみると、それは石井君であつた。
 九37 10 図「閣下の防戦はまことに見事であつた。」
 九38 3 図「〈略〉。しかし部下の者は、最後までベルギーの名譽をけがさなかつたつもりである。」
 九38 10 図 閣下の劍は軍人の魂として

少しも名譽をきずつけなかつた。
 九46 9 図 にいさん、昨日でうちの田植がすつかりすみました。
 九46 10 図 図「今年ほど水の都合のよかつた事はない。」
 九47 1 図 ああ降りつゝいた雨のおかげで、〈略〉。
 九47 3 図 〈略〉、山田の高い所まで一息に植ゑることが出來ました。
 九47 5 図 一昨日海軍のにいさんが、休暇きかでお歸りになつたので、〈略〉。
 九47 7 図 〈略〉、植手が八人になつて、にぎやかでした。
 九47 9 図 私は苗くぼりをして、「お前もたしかに半人前だ。」と、おかあさんにほめられました。
 九47 10 図 田植がすんだので、〈略〉。
 九48 1 図 〈略〉、昨夜は手つだひの人たちを呼んで、ごちそうをしました。
 九48 8 図 其の時おとうさんがにいさんと、〈略〉。」と話していらつしやいました。
 九49 4 図 夏休も近くなりました。
 九49 10 図 〈略〉、精米會社へお使に行つて來ました。
 九50 3 會社では、〈略〉、四五人の若い人々がぬかだらけになつて働いてゐました。
 九50 5 僕は何となくえらさうな人だと思ひました。
 九50 6 お返事をお渡しした後で、〈略〉。

九51 2 〈略〉、おとうさんは〈略〉、あの方の小さい時分からのお話をして下さいました。
 九51 4 図 〈略〉、此の町へ始めて奉公に來たのは、ちやうどお前と同じ十二の年だつたさうだ。
 九51 5 図 〈略〉、此の町へ始めて奉公に來たのは、ちやうどお前と同じ十二の年だつたさうだ。
 九51 6 図 主人の家が大きな醬しやう油屋だつたので、〈略〉。
 九51 7 図 〈略〉、始は近在の小賣店へ、〈略〉、おろしに歩き廻つたものさうだが、〈略〉。
 九52 2 図 〈略〉、年來の貯金と主人からもらつた金を資本にして、〈略〉。
 九52 2 図 〈略〉、小さい米屋を始めた。
 九52 6 図 〈略〉、十年もたぬ中に、町でも屈指の財産家となつた。
 九52 7 図 さうして人々に推されて、町の銀行の頭取になつた。
 九52 8 図 それはわたしの十五六の時分だつたらう。
 九52 9 図 うちのおぢいさんはあの人とは前から友だちだつたので、〈略〉。
 九52 10 図 うちのおぢいさんは〈略〉、大へんほめていらつしやつたものだ。
 九53 7 図 〈略〉、銀行が破産しなければならぬ事になつた。
 九54 1 図 〈略〉、あの方は〈略〉、自分の財産を残らず差出した。
 九54 2 図 〈略〉、親子三人町外れの裏

長屋に移つてしまつた。

九54 4 園 けれども社長さんは、〈略〉、『略。』といつて、笑つてゐた。

九54 6 園 社長さんは〈略〉、醬油のはかり賣を始めた。

九54 8 園 〈略〉、資本を出さうとする者もあつたが、〈略〉。

九54 10 園 〈略〉、社長さんは、『略。』といつて、夜を日について働いた。

九55 2 園 〈略〉、毎朝引いて出た荷が、〈略〉。

九55 5 園 〈略〉、後には表通へ店を出すまでになつた。

九55 7 園 〈略〉、六十五六の時にはもう餘程の財産が出来た。

九55 8 園 〈略〉、追追に大きくして、あんなりつばな會社にしたのだ。

九55 10 園 おとうさんはすぐ言葉をついで、『略。』とお話になりました。

九56 1 園 僕は今日其のえらい社長さんに會つて來たのだと思ふと、〈略〉。

九56 2 園 〈略〉、何となくうれしい氣がしました。

九56 8 園 正一の家でも、親子三人、庭にすゑた打臺の前に並んで、〈略〉。

九57 8 園 「正一も大分役に立つやうになつたなあ。」

九57 9 園 あみ笠をかぶつた父がふり向くと、〈略〉。

九58 3 園 〈略〉、母もすげ笠をそちらへ向けて、『略。』と言ひながら、正一を見てにつこりした。

九58 7 園 庭に敷きつめたむしろの上に、〈略〉。

九59 4 園 ふり上げた棒の先が、強い日光にきらり／＼と光る。

九59 6 園 赤いたすきを掛けた女たちがよい聲で歌をうたふと、〈略〉。

九60 9 園 〈略〉、今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壯大な姿が、〈略〉。

九61 1 園 〈略〉、望遠鏡を持つた信號兵が遠くを見張つてゐる。

九61 2 園 舷門には、銃を手にした番兵が近くを警戒してゐる。

九61 5 園 人の顔がやつと見分けられるやうになつた頃、〈略〉。

九64 6 園 兩舷直といふのは、特別の務のあるものをのぞいた外の水兵のことである。

九65 4 園 〈略〉、ブラシを持つた數十人の水兵が、〈略〉。

九66 5 園 一時間餘りも活動した後であるから、〈略〉。

九67 5 園 軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は、〈略〉。

九67 9 園 午後六時、〈略〉、上野驛から青森行の列車に乗つた。

九67 9 園 ずる分こんでゐたが、〈略〉。

九67 10 園 〈略〉、みんながゆづり合つてくれたので、〈略〉。

九68 1 園 〈略〉、二人とも腰を掛けることが出來た。

九68 2 園 〈略〉、見なれた所も面白く感じた。

九68 2 園 〈略〉、關東平野はだん／＼夜の景色にかはつて、見なれた所も面白く感じた。

九68 4 園 〈略〉、何時かおかあさんと日光見物に來た時のことを思ひ出した。

九68 4 園 〈略〉、何時かおかあさんと日光見物に來た時のことを思ひ出した。

九68 5 園 まだ日が暮れたばかりのやうに思つたが、〈略〉。

九68 5 園 まだ日が暮れたばかりのやうに思つたが、〈略〉。

九68 5 園 まだ日が暮れたばかりのやうに思つたが、〈略〉。

九68 6 園 〈略〉、もう八時半であつた。

九68 6 園 間もなく西那須野に着いた。

九68 8 園 昔は一面の荒野であつたが、〈略〉。

九69 1 園 叔父さんが『略。』とおつしやつた。

九69 1 園 僕は眠くなつたので、〈略〉。

九69 2 園 〈略〉、それから直にねてしまつた。

九69 4 園 〈略〉、汽車は果もなく續いてゐる青田の中を走つてゐた。

九69 7 園 「略」。よくねたね。」

九69 9 園 「叔父さん、此所は何所ですか。」と聞くと、『略。』とおつしやつた。

九69 10 園 窓から吹きこむ朝風のひやりとするのは、餘程北へ進んだ爲だらう。

九70 2 園 〈略〉、私がゆめの中に通過した驛々のお話をうかゞつた。

九70 2 園 〈略〉、私がゆめの中に通過した驛々のお話をうかゞつた。

た驛々のお話をうかゞつた。

九70 3 園 白河を通つたのは昨夜の十一時前であつた。

九70 3 園 白河を通つたのは昨夜の十一時前であつた。

九70 7 園 昔能因といふ人が、『都をば、かすみと共に立ちしかど、秋風ぞ吹く、白河の關。』とよんだのは其所のことで、〈略〉。

九70 8 園 〈略〉、此の關所は〈略〉、有名なものであつた。

九70 10 園 仙臺に着いたのは午前の三時で、〈略〉。

九70 10 園 〈略〉、少しは下りた人も乗つた人もあつた。

九71 1 園 〈略〉、少しは下りた人も乗つた人もあつた。

九71 1 園 〈略〉、少しは下りた人も乗つた人もあつた。

九71 3 園 昔は竹に雀の紋所で名高い仙臺様の城下であつた。

九71 7 園 一關で辨當を買つた。

九71 10 園 光堂ともいつて、昔は金光りに光りかゞやいてゐたさうだ。

九72 3 園 義經の居た高館のあとも〈略〉。

九72 4 園 〈略〉、高館のあとも右手に見えたはずだが、〈略〉。

九72 5 園 〈略〉、もう通過してしまつた。

九72 6 園 辨慶が立往生をしたと傳へられてゐる衣川は、〈略〉。

九七二 八 〈略〉、叔父さんは近く左に見える山を指さして、「〈略〉。」とおつしやつた。

九七二 九 〈略〉、大きな川の見える所に出た。

九七三 二 「〈略〉。」と教へて下さつた。

九七三 三 午前八時盛岡に着いた。

九七三 四 停車場にはいる手前でまた北上川を見たが、〈略〉。

九七四 三 〈略〉、「〈略〉。」とおつしやつた。

九七四 六 北上川は〈略〉、とうく谷川になつてしまつた。

九七五 一 〈略〉、所所に放し飼の馬の群れてゐるのが見えた。

九七五 四 野邊地地始めて海が見えた。

九七五 四 青々とした波の上に、〈略〉。

九七五 六 〈略〉、野や山ばかり見て来た目に殊さらうれしかつた。

九七五 六 〈略〉、野や山ばかり見て来た目に殊さらうれしかつた。

九七五 八 「〈略〉。」と、叔父さんがおつしやつた。

九七五 一〇 〈略〉、陸奥灣の風光が手に取るやうに見えた。

九七六 二 〈略〉、大そう景色のよい所であつた。

九七六 五 午後二時二十分、汽車は青森に着いた。

九七六 六 北海道に渡る人は、停車場に續いた乗船所から汽船に乗るのである。

九七六 七 私は叔父さんに連れられて宿に着いた。

九七七 一 〇 「〈略〉、そんなに遠い所に来たやうな気がしないね。」

九七七 二 叔父さんが「〈略〉。」とおつしやつた。

九七七 八 〈略〉、先生はにこくして、「〈略〉。」とおつしやつた。

九七七 九 これこそ僕たちが、〈略〉、毎日々々待つてゐた命令だつたので、〈略〉。

九七七 九 これこそ僕たちが、〈略〉、毎日々々待つてゐた命令だつたので、〈略〉。

九七七 九 これこそ僕たちが、〈略〉、毎日々々待つてゐた命令だつたので、〈略〉。

九七七 一〇 〈略〉、皆一せいに小をどりして喜んだ。

九七八 二 〈略〉、めいく身輕になつて、校舎の後の菜園に集つた。

九七八 三 枯れかゝつて一面に黄色になつたじやが、いも畑を、〈略〉。

九七八 六 當番が農具小屋から、〈略〉道具を出して来た。

九七八 七 〈略〉、ほつたいもは此の中へ入れるやうに〈略〉。

九七八 八 〈略〉、ほつたいもは此の中へ入れるやうに〈略〉。

九七八 一〇 僕は〈略〉一本の莖を握つて、ぐつと引張つた。

九七八 一〇 やほらかい黒い土がむくく盛上つたと思ふと、〈略〉。

九七九 二 〈略〉、白茶色の玉が、〈略〉ころくとして出て来た。

九七九 二 〈略〉、白茶色の玉が、〈略〉ころくとして出て来た。

九七九 七 〈略〉、星野君が根氣よくほつて、ほつたいもを〈略〉ならべて行く。

九八〇 三 ふと氣がつくと、校長先生と山田先生が、〈略〉僕等の仕事を見ていらつしやつた。

九八〇 一 〇 〈略〉、今結んだ二つの星のへだたりの五倍ばかりのところに、〈略〉。

九八〇 三 〇 あれが今話した北極星だ。

九八〇 三 〇 〈略〉、道に迷つた時などにもすぐ方角を知る事が出来る。

九八〇 一〇 〇 あゝ、よく氣がついたね。

九八〇 一〇 〇 私も餘程前に讀んだのですから、〈略〉。

九八〇 一 〇 昔カリストといふおかあさんと、アルカスといふ子供がいました。

九八〇 一 〇 〇 おかあさんのカリストは、大そう美しい人だつたので、〈略〉。

九八〇 一 〇 〇 ジュノーといふ神様が〈略〉、とうとうカリストを熊にしまひました。

九八〇 一 〇 〇 アルカスは〈略〉、狩人になりましたが、〈略〉。

九八〇 一 〇 〇 或日大熊を見つけたので、それを射殺さうとしました。

九八〇 一 〇 〇 或日大熊を見つけたので、それを射殺さうとしました。

九八〇 一 〇 〇 此の大熊こそは、先にジュノーに形を變へられたおかあさんのカリストだつたのですが、〈略〉。

九八〇 一 〇 〇 此の大熊こそは、先にジュノーに形を變へられたおかあさんのカリストだつたのですが、〈略〉。

九八〇 一 〇 〇 此の大熊こそは、先にジュノーに形を變へられたおかあさんのカリストだつたのですが、〈略〉。

九八〇 一 〇 〇 此の大熊こそは、先にジュノーに形を變へられたおかあさんのカリストだつたのですが、〈略〉。

九八〇 一 〇 〇 此の大熊こそは、〈略〉おかあさんのカリストだつたのですが、〈略〉。

九八〇 一 〇 〇 〇 あぶなく親身の親を射殺すところでした。

九八〇 一 〇 〇 〇 すぐに親子の者を天へ連れていつて、大熊座と小熊座になさつたのださうです。

九八〇 一 〇 〇 〇 あゝ、面白かつた。

九八〇 一 〇 〇 〇 おや、北斗七星が半分杉林にかくれてしまつた。

九八〇 一 〇 〇 〇 にいさん、やつぱりにいさんのおつしやつたやうに、星の位置は變りますね。

九八〇 一 〇 〇 〇 僕今夜は〈略〉、ほんたうにうれしかつた。

九八〇 一 〇 〇 〇 岡田さんが旅行からお歸りになつたと聞いて、〈略〉。

九八〇 一 〇 〇 〇 今日にいさんと二人で遊びに行きました。

九八〇 一 〇 〇 〇 ちやうど岡田さんは〈略〉、白馬登山のお話をなさつていらつしやる所でした。

九八〇 一 〇 〇 〇 白馬岳が〈略〉の有名な山だといふ事は知つてゐましたが、〈略〉。

九八〇 一 〇 〇 〇 くはしい事は今日始めてうかゞひました。

九八〇 一 〇 〇 〇 中でも面白かつたのは大雪溪のお話です。

九八〇 一 〇 〇 〇 雪溪は谷を埋めた雪の坂で、

九八〇 一 〇 〇 〇 雪溪は谷を埋めた雪の坂で、

九八〇 一 〇 〇 〇 雪溪は谷を埋めた雪の坂で、

九八〇 一 〇 〇 〇 雪溪は谷を埋めた雪の坂で、

- ばかり登つた所から始つて、〈略〉。
- 九95 雲や霧がわいたかと思へば散じ、〈略〉。
- 九95 雲や霧が〈略〉、散じたかと思へば又わいて来て、〈略〉。
- 九95 石づきの付いた金剛杖や鳶口を力に、〈略〉。
- 九95 僕も其の通りにして見ました、〈略〉。
- 九96 實に壯快でした。
- 九96 お話を聞いて、僕もすべて見たくなりました。
- 九96 それから、お花島のお話も面白うございました。
- 九96 お花島は雪溪を登りつめた所にあります。
- 九97 「〈略〉。」と言つて、岡田さんは高山植物や雷鳥の繪葉書を、〈略〉見せて下さいました。
- 九98 僕等も〈略〉、山の上に居るやうな氣持になつて聞きました。
- 九98 頂上に立つて四方をながめた景色は、全く雄大です。
- 九99 富士山も、晴れた日には、〈略〉。
- 九99 面白いお話がまだたくさんありさうでしたが、〈略〉。
- 九99 夕方になつたので、〈略〉。
- 九99 僕等はおいとまごひをして歸りました。
- 九99 おかあさんと茄子をもぎに出たついでに、〈略〉。
- 九99 此の前まだ少し早いと言つて残して置いたのが、〈略〉。
- 九99 今日はもう熟しきつたやうな顔をして、〈略〉。
- 九99 黒みがかった紫色の莖が見事に延びて、〈略〉。
- 九99 昨夜雨が降つたせゐか、〈略〉。
- 九99 二百十日を無事に越した田には〈略〉。
- 九99 ざるを持つた子供が、川下の方に集つてさういであるのは、〈略〉。
- 九99 まるで我が子のやうに大事にしてゐた。
- 九99 或年戦争が始つたので、〈略〉。
- 九99 主人にしたがつて戦地へ向つた。
- 九99 戦地ではいろいろつらい事もあつたが、〈略〉。
- 九99 戦場をかけ廻るのは、北風にとつて愉快な事であつた。
- 九99 戦場の光景は實に恐ろしいものであつたが、〈略〉。
- 九99 北風は〈略〉、びくともせずに勇ましく活動した。
- 九99 かしとくく恐ろしい日が来た。
- 九99 或朝の事であつた。
- 九99 北風は外の軍馬と一所に、〈略〉、列を正して並んだ。
- 九99 兵士たちは〈略〉、今かくと命令の下るのを待つてゐた。
- 九99 野には朝つゆがしつとりと置いてゐた。
- 九99 だん／＼明るくなつて来た。
- 九99 中尉の固く結んだ口もと、〈略〉様子がどうも一通りでない。
- 九99 利口な北風はすぐそれに氣がついた。
- 九99 大砲の音がとろろき始めた。
- 九99 中尉はひらりと北風にまたがつて、亂れてゐたてがみをそろへ、〈略〉。
- 九99 中尉は〈略〉、「〈略〉。」と、まるで人間に言ふやうに言つた。
- 九99 北風は、主人の手がかうしてくびすぢにさはるのが何より好きだつたから、〈略〉。
- 九99 北風は、〈略〉、うれしくて、得意さうに頭を高くあげた。
- 九99 いつものやうにすんだ聲で號令をかけた。
- 九99 いつものやうにすんだ聲で號令をかけた。
- 九99 兵士たちは一せいに馬上の人となつた。
- 九99 馬は〈略〉、乗手のあひづが下るのを待ちかまへてゐた。
- 九99 數分の後には、北風はもう列の先頭に立つて進んでゐた。
- 九99 其の日の戦は果して今までになくはげしかった。
- 九99 中でも一番目ざましかったのは最後の襲撃。
- 九99 谷一つへだたた向ふの岡に、〈略〉。
- 九99 中尉は始終先頭に立つて進んでゐたが、〈略〉。
- 九99 敵陣が間近になつたのを見て、〈略〉。
- 九99 いつものはれ／＼とした聲で、「〈略〉。」と叫んだ。
- 九99 中尉は〈略〉、「〈略〉。」と叫んだ。
- 九99 其の破片がびゆつと北風のたてがみをかすめた。
- 九99 北風は、主人の體がぐらの上でぐらつとゆれるのを感じた。
- 九99 中尉は後方にころげ落ちた。
- 九99 北風は驚いてすぐに立止らうとしたが、〈略〉。
- 九99 思はず其の場から數十間も進んでしまつた。
- 九99 しかし主人をうしなつたと思ふと、〈略〉。
- 九99 今まで張りつめてゐた勇氣もくじけて、〈略〉。
- 九99 ゆめからさめたやうにあたりを見廻した。
- 九99 ゆめからさめたやうにあたりを見廻した。
- 九99 北風は俄におちけがついた。
- 九99 今來た方へ一散にかけ

もどつた。

九一〇二 〈略〉、今来た方へ一散にかけ

もどつた。

九一〇四 主人の姿を見つけると、静かに其のそばに立止つた。

九一〇六 北風は、〈略〉、そつと顔を主人の肩のあたりへすりよせた。

九一〇九 北風は〈略〉、左右の耳をそばだててみた。

九一一〇 しかし聞えるのは小さな息づかひばかりであつた。

九一一二 〈略〉、はるか遠方で味方の萬歳の聲がわき起つた。

九一一三 戦争なれた北風は、〈略〉。

九一一四 戦争なれた北風は、此の聲の意味をよく知つてゐた。

九一一五 〈略〉、一聲高く天に向つてい

なゝゝいた。

九一一六 中尉の顔には満足らしい多みが浮んだ。

九一一七 明治二十七八年戦役の時であつた。

九一一八 〈略〉一水兵が、女手の手紙を読みながら泣いてゐた。

九一一九 ふと通りかゝつた某大尉が之を見て、〈略〉。

九一二〇 「こら、どうした。〈略〉。」

九一二一 〈略〉。命が惜しくなつたか、〈略〉。〈略〉。妻子がこひしくなつたか。〈略〉。」

九一二二 〈略〉。軍人となつて、い

くさに出たのを男子の面目とも思はず、〈略〉。〈略〉。」

九一二三 ふと通りかゝつた某大尉が之を見て、〈略〉。」と、言葉鋭くしかつた。

九一二四 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、

〈略〉。

九一二五 水兵は驚いて立上つて、〈略〉。〈略〉。」と言つて、其の手紙を差出した。

九一二六 〈略〉、次のやうな事が書いてあつた。

九一二七 わたしが悪かつた。

九一二八 豊島沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念に思つてゐる。

九一二九 大尉は之を読んで、〈略〉。〈略〉。」と言聞かせた。

九一三〇 水兵は頭を下げて聞いてゐたが、〈略〉。

九一三一 〈略〉、につこりと笑つて立上つた。

九一三二 〈略〉、商用デ四國ノ方へ旅行シテキタ父ガ、〈略〉。

九一三三 〈略〉、父ガ、夜汽車デ歸ツタトコロデアツタ。

九一三四 〈略〉、父ガ、夜汽車デ歸ツタトコロデアツタ。

九一三五 一月モカ、ルヤウナオ話ダツタノニ、〈略〉。

九一三六 〈略〉、ドウシテコンナニ早くオ歸リニナツタノダラウト思ツテ聞

イテミタ。

九一三七 〈略〉、ドウシテコンナニ早くオ歸リニナツタノダラウト思ツテ聞イテミタ。

九一三八 「オートウサン、御用ハモウスンダノデスカ。」

九一三九 「ドウシテオ歸リニナツタノデスカ。」

九一四〇 〈略〉、投票ノ爲ニ歸ツテ來タノダ。」

九一四一 〈略〉、オートウサンハ最初カラチャント其ノ人ニキメテキタ。

九一四二 今日投票ノ爲ニ歸ツタノモ出發ノ時カラノ豫定ナノダ。

九一四三 〈略〉、カウシテワザ／＼歸ツテ來タノダ。

九一四四 道雄ハ此ノ時、フト學校ノ級長選舉ノ事ヲ思ヒ出シタ。

九一四五 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長ガ轉校シタノデ、〈略〉。

九一四六 〈略〉、近々後任ノ選舉ヲスルコトニナツテキルノデアツタ。

九一四七 道雄ハ此ノ時、中村君ヲ選舉シヨウト決心シタ。

九一四八 昔ヨーロッパにアレクサンドル大王といふ王があつた。

九一四九 〈略〉、當時世界に類のない大國を建設した英雄である。

九一五〇 其の大王が東方諸國の遠征に出かけた時の事である。

九一五一 或曰王は〈略〉、タルススといふ町に着いた。

九一五二 全身砂ほこりにまみれた王は、〈略〉。

九一五三 〈略〉、町はづれを流れてゐるきれいな川にはいつて水浴をした。

九一五四 水は意外に冷たくて、まるで氷のやうであつた。

九一五五 此の水浴が體にさはつたものか、〈略〉。

九一五六 〈略〉、王は俄にはげしい熱病にかゝつた。

九一五七 〈略〉、一命をなげうつても王を助けようと決心した。

九一五八 方法は或劇藥を用ひる外になかつたので、〈略〉。

九一五九 〈略〉、フィリップは真心こめて此の事を申し出た。

九一六〇 王はこゝろよく之を許した。

九一六一 フィリップが藥を調合しに別室へ退いた後へ、〈略〉。

九一六二 〈略〉、王にあてた密書が届いた。

九一六三 〈略〉、王にあてた密書が届いた。

九一六四 それには〈略〉、用心するやうにと書いてあつた。

九一六五 王は讀終つて、そつと手紙をまぐらの下へ入れた。

九一六六 〈略〉、うや／＼しく藥のこつ

プを王にさゝげた。

九一六七 王は〈略〉かの密書を取り出して、靜かにフィリップに渡した。

九一六八 やがて讀終つたフィリップが、

112 略、王は略、フィリッ
 プを見下してゐた。
 114 略、再び其の英姿を陣頭に
 あらはす事が出来た。
 116 十月二十五日は、青年團の道
 ぶしんの日であつた。
 117 團員は、午前七時八幡神社の
 境内に集つた。
 119 略、それ／＼仕事の持場に
 向つた。
 1110 略、再び境内に集つた。
 1123 略、休んでゐる所へ、略
 高橋さんが來られた。
 1126 今通つて見て來ましたが、
 略。
 1126 略、大そうりつぱになり
 ました。
 1127 略、よくこんなに早く出來まし
 たね。
 11210 誰かが力石をころがして來て、
 略、席を作つた。
 1132 略、あなたもずぶん大きくな
 りましたね。
 1134 略、私も、よく道ぶしん
 に出たものでした。
 1135 略、私も、よく道ぶしん
 に出たものでした。
 1138 郷里の青年諸君がこんなに
 まじめになつて來たのは、何よりう
 れしい事です。
 11310 子どもの若い時分には、

略、あなた方の半分ぐらゐしか働
 きませんでした。
 1142 略、とかく無責任な事ば
 かりしてゐました。
 1142 略、そんな風でしたから、略。
 1143 略、ぼんの道ぶしんなど
 は、何時も二日はかゝつたものでし
 た。
 1144 略、ぼんの道ぶしんなど
 は、何時も二日はかゝつたものでし
 た。
 1147 略、はじめて青年團の規
 約を見た時は、略。
 1149 略、少し氣になつたので
 した。
 1149 略、少し氣になつたので
 した。
 11410 略、しかし、此の間夜學を參觀
 した時の皆さんの熱心な様子や、
 略。
 1151 略、今日の働を見て、大
 そう心強くなりました。
 1155 略、朝鮮の青年も、近頃はなか
 へ頭が進んで來ましたので、略。
 1159 高橋さんの熱心な話は、略、
 團員に強い感動をあたへた。
 1159 やがて暮近くなつたので、
 略。
 1161 略、一同は略、夕日を
 浴びて歸途についた。
 1163 宮本の伯父様の所に着いた
 のは昨夜七時でした。

1164 宮本の伯父様の所に着いた
 のは昨夜七時でした。
 1165 略、お話をして、非常に
 愉快でした。
 1168 略、義雄君に案内しても
 らつて見物に行きました。
 1173 略、やはり馬のそばを通
 るのが危険なやうな氣がしてならな
 かつたが、略。
 11710 私の行つた時には、略。
 1181 略、もう其所にすぎ間も
 無く子馬がつないでありました。
 1183 略、馬つなぎ場を見て廻
 つたが、略。
 1204 略、それを見ると、略、と、
 しみると思ひました。
 1205 略、せりの始つたのは十時頃で
 した。
 1205 略、せりの始つたのは十時頃で
 した。
 1216 略、取引の成立つた馬は、略。
 1218 二年の年月苦勞して育てて
 來たものが、略。
 1229 略、飼主たちがあんなに
 かはいがつてゐたのを見て、略。
 12210 略、此の子馬共を買つた
 人たちも、略。
 1232 略、略、と、心からい
 のりました。
 1235 略、賣つてゐる菓子もお
 もちゃも、多くは馬にちなんだ物で、
 略。

1236 略、店の看板にも馬がか
 いてあるのがよく目につきました。
 1237 成程、此の邊は馬でもつて
 ゐる處だと思ひました。
 1238 別封の繪葉書も歸りに買つ
 たのです。
 1245 其の一角にそびえてゐる燈臺
 に、年とつた燈臺守が、略。
 1246 略、わびしく其の日を送つ
 て居た。
 1249 略、老夫婦のなぐさめとな
 るものは、氣だてのやさしい一人娘
 のグレース、ダールリングであつた。
 1251 一そのの船が、略、此の島
 に近い岩に乘上げた。
 1253 船は二つにくだけて、船尾の
 方を見る／＼大波にさらはれてしま
 つた。
 1253 岩の上に残つた船體には、
 略。
 1254 略、聲を限りに救を求めた
 が、略。
 1255 略、何のかひもなかつた。
 1256 夜がほの／＼と明けた頃、
 略。
 1257 略、荒れくるふ海上を見渡
 したグレース親子は、略。
 1258 略、ふとはるかの沖合に、
 かの難破船を見とめた。
 1264 命を捨ててかゝつたら、救
 へないことはありませんまい。
 1266 此のけなげな言葉は遂に父を

動かした。

十267 二人は早速ボートを出す支度に取りかゝつた。

十268 やがてボートは岸をはなれた。

十269 打返す磯波にまき込まれたかと思へば、〈略〉。

十271 親子は死力を盡くして漕ぎに漕いだ。

十277 〈略〉、二人はボートをあやつつた。

十279 からうじてボートはかの難破船にたどり着いた。

十279 生残つた船員は〈略〉。

十2710 生残つた船員は涙を流して喜んだ。

十283 〈略〉、我が家へと向つた。

十283 つかれ果てた人々も、〈略〉。

十285 かうしてボートは〈略〉、燈臺に歸り着いたのである。

十287 〈略〉、波浪もをさまつた。

十288 グレースの眞心こめた看護によつて、〈略〉。

十289 〈略〉、全く元氣を回復した人々は、〈略〉。

十2810 〈略〉、名残を惜しんで此の島を去つた。

十291 今まで人にも知られなかつた燈臺守の娘グレース、ダリーングの名は、〈略〉。

十292 〈略〉グレース、ダリーングの名は、程なく國の内外に傳はつた。

十294 〈略〉、其の肖像畫は到る處の

店頭に飾られた。

十312 此の地峽に造つた運河が、〈略〉。

十318 〈略〉、此の地峽を切通し、太平・大西兩洋の水を通はせることは到底出来ぬ事であつた。

十319 そこで此の運河は、非常に變つた仕組に出来てゐるのである。

十321 〈略〉、湖を二つ造つた。

十323 高い土地の上に水をたゝへたのであるから、〈略〉。

十347 かうして前後三段に上つた船は、〈略〉。

十351 これは高い山地を切通したもので、〈略〉。

十352 〈略〉、此處を切通すのは非常な難工事であつたといふ事である。

十356 〈略〉、島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。

十363 パナマ地峽に運河を造る事は、數百年來ヨーロッパ人のしばく計畫したところで、〈略〉。

十364 〈略〉、實地に大仕掛の工事をやつた事もあつたが、〈略〉。

十364 〈略〉、實地に大仕掛の工事をやつた事もあつたが、〈略〉。

十365 〈略〉、成功を見るに至らなかつた。

十367 〈略〉、遂に之を造り上げたのである。

十369 米國が此の運河を造るに成功したのは、〈略〉。

十3610 〈略〉、最新の學理を應用したからであつた。

十3610 米國が此の運河を造るに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。

十372 〈略〉、幾萬の従業者の健康をはかつた事や、〈略〉。

十374 〈略〉、河水をせき止めた事など、〈略〉。

十376 昔、太平・大西兩洋の間を往來する船は、〈略〉大廻りしなければならなかつた。

十379 しかしパナマ運河の開通以來は、〈略〉世界の航路に大きな變動を生じたのである。

十384 今日私は私もついて行つて見た。

十385 かり取つた難木、〈略〉。

十385 〈略〉、切倒した大木、〈略〉。

十385 〈略〉、掘起した木の根や石ころ、〈略〉。

十388 〇 私は思はず、「やあ、すつかり變つた。」

十391 〈略〉、兄は〈略〉、かついで來たつるはしを下へ置いた。

十391 〈略〉、兄は〈略〉、かついで來たつるはしを下へ置いた。

十395 兄は〈略〉、小枝などを拾ひ集めて來て、たき火を始めた。

十3910 父は〈略〉、鎌をときにかゝつた。

十403 力藏さんも、〈略〉、〈略〉けやきの大木を、大のこぎりでひき始

めた。

十406 父は「力藏さん、〈略〉。」といつたが、〈略〉。

十412 向ふの山の頂に日の光が赤々とさして來た。

十414 やがて父は、鎌を手にして難木のやぶへはいつて行つた。

十416 〇 壯吉、お前はおとうさんのかつた難木を、かういふ風に束ねて運んでくれ。

十418 兄は〈略〉、生木の枝で難木を束ねて見せた。

十4110 〈略〉、父のかり取つたあとを元氣よくつるはしで掘返し始めた。

十421 〈略〉、〈略〉つるはしで掘返し始めた。

十422 私は教へられた通り、〈略〉。

十427 〈略〉、精一ぱいに働いた。

十4210 〈略〉、谷向ふのくさむらの中から、〈略〉、山鳥が一羽飛立つた。

十431 同時に獵銃の音が續げさまに二發聞えた。

十438 父は「〈略〉。」と楽しさうに言つた。

十441 〈略〉、九時頃にはもう數坪の地面が新しく開かれた。

十441 力藏さんのひいてゐたけやきの大木も、〈略〉。

十442 〈略〉けやきの大木も、見事に根本から切倒された。

十444 窯場から出て來た喜三右衛門は、〈略〉。

十445 〈略〉、つかれた體を休めた。
 十445 〈略〉、つかれた體を休めた。
 十447 〈略〉、すゝなりになつた實が
 夕日を浴びて、〈略〉。
 十449 喜三右衛門は餘りの美しさに
 うつとりと見とれてゐたが、〈略〉。
 十455 〈略〉、又窯場の方へとつて返
 した。
 十457 日頃から自然の色にあこがれ
 てゐた彼は、〈略〉。
 十459 〈略〉彼は、〈略〉、もう立つ
 ても居ても居られなくなつたのであ
 る。
 十4510 喜三右衛門は、其の日から赤
 色の焼付に熱中した。
 十464 〈略〉彼の様子は、實に見る
 目もいたましい程であつた。
 十465 困難はそればかりで無かつた。
 十469 〈略〉、其の日の暮しにも困る
 やうになつた。
 十4610 〈略〉、今は手助する人さへも
 無くなつた。
 十472 〈略〉、氣ちがひと罵つたが、
 少しもとんぢやくしない。
 十474 〈略〉、唯夕日を浴びた柿の色
 であつた。
 十474 彼の頭の中にあるものは、唯
 夕日を浴びた柿の色であつた。
 十475 かうして五六年はたつた。
 十476 或日の夕方、喜三右衛門はあ
 わたゞしく窯場から走り出た。
 十478 彼は氣がくるつた様にそこら

をかけ廻つた。
 十478 彼は氣がくるつた様にそこら
 をかけ廻つた。
 十4710 〈略〉、何でもひつつかんで行
 つては窯の中へ投込んだ。
 十481 喜三右衛門は、血走つた目を
 見張つて、〈略〉。
 十482 〈略〉、しばらく火の色を見つ
 めてゐたが、やがて「よし。」と叫
 んで火を止めた。
 十483 〈略〉、やがて「よし。」と叫
 んで火を止めた。
 十485 〈略〉、もどかしうに夜の明
 けるのを待つてゐた。
 十487 胸ををどらせながら窯のまは
 りをぐる／＼廻つた。
 十488 いや／＼夜が明けた。
 十489 彼はふるふる足をふみしめて
 窯をあけにかゝつた。
 十4810 朝日のさわやかな光が、木立
 をもれて窯場にさし込んだ。
 十491 喜三右衛門は、一つ又一つと
 窯から皿を出してゐたが、〈略〉。
 十492 〈略〉、不意に「これだ。」と
 大聲をあげた。
 十493 〇「出来た／＼。」
 十493 〇「出来た／＼。」
 十494 皿をさ／＼げた喜三右衛門は、
 こをどりして喜んだ。
 十494 皿をさ／＼げた喜三右衛門は、
 こをどりして喜んだ。
 十495 かうして柿の色を出す事に成

功した喜三右衛門は、〈略〉。
 十496 〈略〉喜三右衛門は、程なく
 名を柿右衛門と改めた。
 十498 柿右衛門は〈略〉、肥前の有
 田にゐた陶工である。
 十4910 〈略〉、世に柿右衛門風といは
 れる精巧な陶器を製作するに至つた。
 十506 〇「おとうさん、今度役場の
 隣にりつばな建物が出来ましたね。
 あれは何ですか。」
 十507 〇「〈略〉。今までは横町の小
 さい家だつたが、〈略〉。」
 十508 〇「〈略〉、今度はあゝいふりつ
 ばなのを建てたのだ。」
 十5010 〇「〈略〉、おとうさんは、何時
 かも銀行へ行つてお金を預けて來る
 とおつしやいましたね。」
 十518 〇「だから、少しでも餘つたお
 金があつたら必ず預金にして置つも
 のだ。」
 十518 〇「だから、少しでも餘つたお
 金があつたら必ず預金にして置つも
 のだ。」
 十518 〇「だから、少しでも餘つたお
 金があつたら必ず預金にして置つも
 のだ。」
 十5110 〇「預けたお金は何時でも返
 してもらへますか。」
 十523 〇「〈略〉、定期の方は、預けた
 日から半年とか一年とかきまつた期
 限が來ないと〈略〉。」
 十524 〇「〈略〉、預けた日から半年と
 か一年とかきまつた期限が來ないと
 〈略〉。」
 十529 〇「〈略〉、まとまつたお金は定

期預金にした方がよいのだ。
 十529 〇「〈略〉、まとまつたお金は定
 期預金にした方がよいのだ。」
 十539 〇「成程、うまく出来たもので
 すね。」
 十541 〇「寶玉をちりばめたやうなかは
 い、目、〈略〉。」
 十541 〇「紅をさしたかと思はれ
 るやさしくちばし、〈略〉。」
 十543 〇「〈略〉、美しい羽毛に包まれた
 圓い胸、〈略〉。」
 十545 〇「〈略〉、他の方法では全く通信
 が出来なくなつた場合でも、〈略〉。」
 十548 〇「鳩を通信に使つたのは、餘程
 古い時代からの事で、〈略〉。」
 十549 〇「〈略〉、殊に一時は非常に盛に
 行はれたが、〈略〉。」
 十551 〇「〈略〉、自然輕んぜられるやう
 になつた。」
 十553 〇「〈略〉、通信者の働の偉
 大な事が證明せられたので、〈略〉。」
 十581 〇「〈略〉、登山者が路に迷つて危
 険におちいつた時、〈略〉。」
 十587 〇「〈略〉、全く方法の盡きた場合
 などには、〈略〉。」
 十592 〇「〈略〉、矢のやうに目的地へ向
 つて飛んで行くのを見たならば、
 〈略〉。」
 十606 〇「おゝ、降つたは／＼。」
 十606 〇「おゝ、降つたは／＼。」
 十607 〇「世に榮えてゐる人がながめ
 たら、さぞ面白い事であらうが。」

十60回 「此の大雪に、どうして出かけたのか。」

十64回 「お連れ申しましたが、差上げる物はあらうか。」

十65回 だんく寒くなつて来たが、
略。

十65回 略、あやにく新も盡きてしまつた。

十66回 略、いろく集めた事もありませんが、略。

十66回 略、いろく集めた事もありませんが、略。

十66回 略、大てい人にやつてしまひました。

十67回 しかし此の三本だけは、略、大切に置いて置いたのでござ

十67回 略、真先かけて参つたは感心の至り。

十67回 略、真先かけて参つたは感心の至り。

十67回 略、真先かけて参つたは感心の至り。

十67回 略、真先かけて参つたは感心の至り。

十67回 略、真先かけて参つたは感心の至り。

十67回 略、真先かけて参つたは感心の至り。

十67回 略、真先かけて参つたは感心の至り。

十67回 略、真先かけて参つたは感心の至り。

たゝんだ高い城壁で圍まれ、略。

十74回 略、處々にかういふ門があつて、出入口になつてゐたのださうです。

十75回 此處には天照大神をおまつりした京城神社があり、略。

十75回 僕はもう南山へ何度も上りましたが、略。

十75回 市街の周圍を取圍んだ山々は地はだが白く、略。

十76回 すみきつた空氣の中に略。

十76回 龍山はもと漢江にのぞんだ小さな町であつたが、略。

十76回 龍山はもと漢江にのぞんだ小さな町であつたが、略。

十77回 略、今では龍山も京城の中に編入されたのださうです。

十77回 略、毎日何處へか出かけたてたまらないだらうと思ひました。

十78回 略、大分長くなりましたから、略。

十79回 此の間、九州三池の或炭坑を見物しました。

十79回 略、案内の事務員と一所に昇降器に乗りました。

十80回 略、何時の間にか、地下九百尺の坑底に着きました。

十80回 坑道を少し行つて、ポンプ室の前に出ました。

十81回 ポンプ室を出てから小道へはいりました。

いりました。

十82回 略、不意に足もとからねずみが一匹飛出しました。

十82回 事務員は平氣で、「略。」と言つて笑ひました。

十82回 其のうちに馬屋の前に出ました。

十82回 略、いよいよ石炭を掘つてゐる處へ來ました。

十84回 歸途、事務員は次のやうな事を話してくれました。

十84回 或日、此の附近の山へ薪をとり來た百姓が、略。

十84回 略、煙をあげて燃出しました。

十85回 略、あたりは同じ眞黒な岩ばかりでした。

十85回 略、附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。

十85回 坑外に出ると、急に夜が明けたやうで、略。

十85回 略、坑夫の仕事、たふといものに思ひました。

十85回 略、更に生きかへつたやうな氣持がしました。

十85回 略、更に生きかへつたやうな氣持がしました。

十87回 機械類は、近年我が國でも盛に製造されるやうになつたが、略。

十87回 略、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。

十87回 略、國內で出來た物を外國へ輸出することもない。

十91回 略、太郎は生麥生米生卵と、早口にすら言へるやうになつた。

十93回 略、學校から歸る時の事であつた。

十93回 略、良一はすぐ賛成した。

十93回 略、途中にはかなり深い小川にかけ渡した一本橋がある。

十93回 太郎は前から父に、「略。」と固く禁ぜられてゐたのであるが、略。

十93回 略、友だちのすゝめをことわりかねて、一所に渡り出した。

十93回 すると橋はまん中から折れて、三人は水中におちいつた。

十93回 さいはひ附近の田で働いてゐた村の人々に助けられ、略。

十93回 略、何れもぬれねずみのやうになつて家に歸つた。

十94回 略、お前はどうかしたのだ。

十94回 かねてあふないといつて置いた、あの橋を略。

十94回 略、あの橋を渡つたのでは無いか。

十94回 父は「略。」とたづねたが、太郎はだまつてゐた。

十94回 父は「略。」とたづねたが、太郎はだまつてゐた。

十94回 略、太郎はやつと今日の次第を有りのまゝに話した。

十 94 8 〔なぜ其の時「略。」と、
 きつぱりことわらなかつたのか。〕
 十 94 9 〔僕は再三ことわつたので
 す。略。〕
 十 94 10 すると、しまひに皆が僕の
 事を弱蟲だといつて笑ひました。
 十 95 1 僕は残念でたまらなくなつ
 たので、略。
 十 95 2 〔略。〕と、自分から
 先に立つて渡つたのです。
 十 95 9 〔略。〕それから又、晝間私が聞い
 た時、略。
 十 95 10 〔略。〕なぜすなほに『は
 い。』といはなかつたのだ。
 十 96 1 〔略。〕さう言へなかつた
 のです。』
 十 96 4 太郎はつくぐと自分の悪か
 った事を後悔すると共に、略。
 十 96 6 〔略。〕「はい。」と「いゝえ。」
 の言ひにくいわけをさとることが出
 來た。
 十 100 9 〔略。〕全く別の世界に來たや
 うな心持がする。
 十 101 3 先に立つたにいきさんが、
 「略。」と、いろく説明して下さ
 る。
 十 101 6 〔略。〕熱帯地方から持つて來たの
 だから、略。
 十 101 10 〔略。〕たれ下つた莖に、幾つ
 も咲いてゐる薄紅色の花である。
 十 103 6 成程、緑色の絹糸で作つたの
 かと思はれるやうな葉もあれば、

〔略。〕
 十 104 2 椰子・バナ・コーヒー・ゴ
 ムの木などは名を聞いてゐたが、
 〔略。〕
 十 104 7 にいさんは「略。」と教へ
 て下さつた。
 十 105 7 兄さんも足を止めて、「略。」
 とお笑ひになつた。
 十 105 8 外はさつきよりも一そう風が
 強くなつたのか、略。
 十 112 5 昨夜の風雨は名残なくをさま
 つたが、略。
 十 112 10 マストの上の見張人が略、
 北の方を指さした。
 十 113 1 甲板に立つてゐた船長を始め
 十人許の乗組員は、略。
 十 113 2 〔略。〕乗組員は、ひとしく目
 を其の方向に向けた。
 十 113 4 砲手の落ちついた力のこもつ
 た號令に、略。
 十 113 4 砲手の落ちついた力のこもつ
 た號令に、略。
 十 113 5 〔略。〕船ははや方向を轉じた。
 十 113 6 砲手は略、其の引金に手
 をかけた。
 十 113 7 右に左に鯨を追ひつつ四五十
 メートルまで近づいた時、略。
 十 113 8 〔略。〕破裂矢をしかけたもり
 を打つ。
 十 113 10 〔略。〕すさまじい波を起して、
 鯨は海底深く沈んだ。
 十 114 2 一同は歡呼の聲をあげた。

十 114 4 〔略。〕破裂矢が見事に破裂し
 たのであらう。
 十 114 5 もりにつけた長い綱はぐんぐ
 ん引張られて、略。
 十 114 7 〔略。〕綱は略、三百メート
 ル許もくり出された。
 十 114 8 やがて鯨は再びはるか彼方に
 浮上つた。
 十 114 9 今まで勢よく引出されてゐた
 綱もやゝゆるんで來た。
 十 114 9 今まで勢よく引出されてゐた
 綱もやゝゆるんで來た。
 十 115 9 〔略。〕さすがの鯨も次第に弱
 つて、略、引寄せられた。
 十 115 10 其の時、二番もりが打出され
 た。
 十 116 8 汽車で二日市驛に着いたのは
 午前の八時、略。
 十 116 9 〔略。〕驛前で太宰府行の輕便
 鐵道に乗つた。
 十 116 10 〔略。〕霜の眞白に置いた田の
 中を走る。
 十 117 2 十五分許で汽車は太宰府町に
 着いた。
 十 117 7 〔略。〕沿道の家は大てい天満
 宮にちなんだ物を賣つてゐる。
 十 117 9 間もなく神社の廣い境内には
 いった。
 十 117 9 何百年も経たであらうと思は
 れる樟の大木が略。
 十 118 5 此の神社は菅公の御墓所に
 建てたものだといひ、略。

十 118 6 〔略。〕一層感を深くした。
 十 118 7 社殿の後に廻ると、其處は
 廣々とした梅林で、略。
 十 119 2 〔略。〕不意にかん高い鳥の聲
 が聞えた。
 十 119 3 〔略。〕それは園内に飼つてあ
 る鶴の聲であつた。
 十 119 4 歸りは二日市まで歩くことに
 した。
 十 119 9 〔略。〕榎寺といふ處に立寄
 った。
 十 119 10 低いじめじめした松林の中に
 小さな社がある。
 十 120 2 公は略、三年の歳月を送
 られたさうである。
 十 120 4 宮中の御宴の事を思ひ出して
 詩を作られたのも此處であらう。
 十 120 6 榎寺を出て二日市の停車場へ
 急いだ。
 十 120 9 停車場に着いた時は午後六
 時を過ぎてゐた。
 十 120 10 停車場に着いた時は午後六
 時を過ぎてゐた。
 十 121 3 外國の或商會で、新聞紙に店
 員入用の廣告を出した。
 十 121 3 申し込んで來た者は五十人許
 もあつて、略。
 十 121 4 〔略。〕中には知名の人の紹介
 状を持つて來た者や、略。
 十 121 5 〔略。〕りつぱな學歴のある者
 もあつたのに、略。
 十 121 6 〔略。〕或一人の青年をやとひ

初の裁判に不服な者は、〈略〉。

十一 22 6 若し裁判が無いとしたら、

〈略〉。

十一 22 9 若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、〈略〉。

十一 35 7 園 「あそこは一昨年植付をした地蔵山だ。」

十一 35 9 〈略〉、四五尺にのびた杉の

若木が勢よく立並んでゐるのが、目

に見えるやうな気がする。

十一 36 1 園 「あそここの植付をした時はまだ寒かつた。」

十一 36 1 園 「〈略〉まだ寒かつた。」

十一 36 3 〈略〉、明日の用意に出して

おいた植林地の書付を開いて見る。

十一 36 4 地圖の中の薄緑に染めてあ

るのが一昨年植付けた處、〈略〉。

十一 36 9 一昨年植付けた時の覺書だ。

十一 37 2 あの時、〈略〉。」と僕が聞

いたら、〈略〉。

十一 37 8 〈略〉、おとうさんが

「〈略〉。」といつて笑つてをられた。

十一 37 9 植付けた苗木の枯れた處へ

補植をするのは、〈略〉。

十一 37 9 植付けた苗木の枯れた處へ

補植をするのは、〈略〉。

十一 38 4 〈略〉、斜面などに植ゑた木

は、〈略〉。

十一 38 9 〈略〉、今まで兩方の枝と枝

と組合つてゐたのが急に間がすいて

〈略〉。

十一 39 4 いつかにもいさんが、「杉

の散髪だ。」といつてみんなを笑は

せたことがある。

十一 39 8 それから始めて聞いて面白

いと思つたのは、〈略〉。

十一 39 9 生きた枝でも枯れた枝でも

〈略〉。

十一 39 9 生きた枝でも枯れた枝でも

〈略〉。

十一 40 2 僕がお手傳して植ゑたあの

杉や檜は、〈略〉。

十一 40 2 〈略〉あの杉や檜は、何時

になつたら伐るのだらう。

十一 40 7 今年伐るはずのは、おとう

さんの子供の時植ゑたのだといふが、

〈略〉。

十一 49 5 〈略〉、數へてみるとゴムで

造つたものは實に多い。

十一 49 9 ゴムは、〈略〉液を原料と

して、製造したものである。

十一 50 2 〈略〉ゴムの大部分は、此

の木から取つたものである。

十一 50 4 此の種のゴムが、昔主とし

て南米ブラジルのパラ州から産出し

たので、〈略〉。

十一 50 4 〈略〉、パラゴムの名が生じ

たわけである。

十一 50 7 〈略〉、近年ゴムの需要が激

増したために、〈略〉。

十一 50 9 〈略〉、英國人はマレイ半島

の領地にパラゴムの木を移植するに

至つた。

十一 51 1 〈略〉、南洋におけるゴムの

栽培は頗る盛になつた。

十一 53 2 〈略〉、今度はバケツを持つ

てコップにたまつた液を集めて歩く

のである。

十一 53 2 集めた液は之を工場に持つ

て行き、〈略〉。

十一 53 7 かうして出來たゴムは、各

國の工場に運んで加硫法を行ふ。

十一 54 3 近來床の敷物や、道路にも

ゴムを用ひることが行はれて來た。

十一 54 6 昔、アフリカの或港に一そ

うの船がとまつてゐた時の話である。

十一 54 8 熱帶の暑さにたへかねてゐ

た船員等は、〈略〉。

十一 54 9 〈略〉は、船長から泳を許

されたので、〈略〉。

十一 54 9 〈略〉、我先にと海に飛込ん

だ。

十一 54 10 船には船長と老砲手だけが

残つてゐた。

十一 55 1 船員等は、如何にも氣持よ

ささうに泳ぎ廻つてゐたが、〈略〉。

十一 55 2 〈略〉、中にもうれしさうに

見えたのは、〈略〉。

十一 55 3 〈略〉、中にもうれしさうに

見えたのは、十三四になる二人の少

年であつた。

十一 55 4 二人は 〈略〉、沖のうきを

目當に泳ぎくらをしてゐた。

十一 55 5 初は十間以上も相手をぬい

てゐたが、〈略〉。

十一 55 5 〈略〉、どうしたのか急に相

手にぬかれて、〈略〉。

十一 55 6 〈略〉、一二間も後れてしま

つた。

十一 55 7 これまでにこゝくしてなが

めてゐた老砲手は、〈略〉。

十一 55 9 〈略〉老砲手は、〈略〉、甲

板からしきりに勵ました。

十一 56 1 ちやうど其の時、〈略〉船

長のけたゝましい叫び聲が聞えた。

十一 56 8 救ひのボートは下された。

十一 56 10 其のうちに二人はふかの來

るのに氣がついた。

十一 57 6 ものすごい程青白くかはつ

た老砲手の顔には、〈略〉。

十一 57 7 〈略〉老砲手の顔には、決

心の色が浮んだ。

十一 57 9 〈略〉、ねらひを定めた。

十一 58 2 「あつ。」と、思はず人々が

叫んだ。

十一 58 3 とたんに、ずどんと一發す

さまじい大砲の音がとどろき渡つた。

十一 58 5 〈略〉、手で顔をおほつて大

砲の上につつ伏した。

十一 58 6 立ちこめた砲煙の薄れゆく

につれて、〈略〉。

十一 58 6 〈略〉、先づ目に入つたのは、

〈略〉。

十一 58 7 〈略〉、先づ目に入つたのは、

大きなふかの死體であつた。

十一 58 8 喜の聲はどつと起つた。

十一 59 10 〈略〉、思ふまゝに設計して

造つた町であるから、〈略〉。

十一 61 5 汽車は〈略〉、やがてトンネルにはいる。〈略〉再び光明の世界に出た時、〈略〉。
 十一 61 5 〈略〉、突如として眼前に展開せられた風景は、〈略〉。
 十一 61 8 〈略〉、眼下には廣々とした十勝の太平洋がはるばると續いて、〈略〉。
 十一 62 8 明治十六年こゝに十三戸の農家が移住して來たのが〈略〉。
 十一 62 9 〈略〉此の町の始りであつた。
 十一 63 1 〈略〉、唯僅かに〈略〉アイヌの丸木舟の便をかりるに過ぎなかつた。
 十一 63 2 それが今は〈略〉りつばな町となつたのである。
 十一 66 1 一體人は最初どうして火を得たであらうか。
 十一 66 2 〈略〉、密生した樹木の枝と枝がすれあつて〈略〉。
 十一 66 3 〈略〉、密生した樹木の枝と枝がすれあつて起つたりした自然の火から、〈略〉。
 十一 66 3 〈略〉自然の火から、火種を取つたものであらう。
 十一 66 6 〈略〉火を得る法をさとするやうになつた。
 十一 66 8 〈略〉火を出す法を考へるやうになつた。
 十一 66 9 此の方法は各國民の間に、廣く又極めて長い間行はれてゐた

のであるが、〈略〉。
 十一 66 10 〈略〉、マッチの使用が廣まるにつれてすたつて來た。
 十一 67 1 マッチは今から約百年前に發明されたものである。
 十一 67 2 火の熱は、初め主として食物を調理するのに用ひたもののやうであるが、〈略〉。
 十一 67 4 〈略〉、火の用途もだん／＼廣くなつて來た。
 十一 67 9 燈火としては、初め松の木や魚・獸の油などをたいたのであつたが、〈略〉。
 十一 67 10 燈火としては、初め松の木や魚・獸の油などをたいたのであつたが、〈略〉。
 十一 68 2 〈略〉、今はガス燈や電燈が到る處にかゝりやき渡る時代となつた。
 十一 68 3 かくして人は、暗黒の世界からだん／＼光明の世界へと、みちびかれて來たのである。
 十一 68 6 〈略〉、火の熱と光とをあらゆる方面に利用することを考へて來た。
 十一 68 7 しかし火の利用法は、決してこれで完成したといふわけではあるまい。
 十一 69 2 〈略〉、七日間の無言の行を始めた。
 十一 69 3 小僧一人だけ自由に室内に入らせて、いろ／＼の用を足させた。

十一 69 5 〈略〉燈がだん／＼暗くなり、今にも消えさうになつた。
 十一 69 5 末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。
 十一 69 6 うつかり口をきいてしまつた。
 十一 69 8 隣に坐つてゐた僧が之を聞いて、〈略〉。
 十一 69 10 第二座の僧は、二人とも規則を破つたのが不快でたまらない。
 十一 70 3 三人とも物を言つてしまつたので、〈略〉。
 十一 70 9 〈略〉、一心に勉強してゐた。
 十一 71 2 どのも残念なことでした。
 十一 71 4 賀茂眞淵先生が、先程御見えになりました。
 十一 71 10 〈略〉、さつき御出かけの途中〈略〉、御立寄り下さいました。
 十一 72 1 御それは惜しいことをした。
 十一 72 4 後を追つて御いでになつたら、大い追ひつけませう。
 十一 72 8 宣長は、大急ぎで眞淵の様子を聞きとつて、後を追つたが、〈略〉。
 十一 72 10 次の宿のさきまで行つてみたが、〈略〉。
 十一 72 10 〈略〉、やはり追ひつけなかつた。
 十一 73 1 宣長は〈略〉、す／＼ともどつて來た。
 十一 73 2 〈略〉、萬一御歸りに又泊れることがあつたら、すぐ知らせ

もらひたいと〈略〉。
 十一 73 4 さうして新上屋の主人に、〈略〉と頼んでおいた。
 十一 73 7 〈略〉、宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出來たのは、〈略〉。
 十一 73 9 〈略〉、宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出來たのは、それから數日の後であつた。
 十一 73 9 二人はほの暗い行燈のもとで對坐した。
 十一 74 1 眞淵は〈略〉、天下に聞えた老大家。
 十一 74 6 〈略〉、眞淵は宣長の學識の尋常でないことをさとつて、非常にたのしく思つた。
 十一 74 10 それはよいところに氣がつきました。
 十一 75 2 私も〈略〉、古事記を研究しようとしたが、〈略〉。
 十一 75 5 そこで先づ順序として萬葉集の研究を始めたところが、〈略〉。
 十一 75 7 〈略〉、古事記に手を延ばすことが出來なくなりました。
 十一 75 8 〈略〉、しつかり努力なすつたら、きつと此の研究を大成することが出來ませう。
 十一 76 4 老學者の言に深く感激した宣長は、〈略〉。
 十一 76 5 〈略〉、ひつそりした町すちを〈略〉。
 十一 76 6 〈略〉我が家へ向つた。

- 十一 76 8 〈略〉、師弟の關係は日一日と親密の度を加へたが、〈略〉。
 十一 76 9 〈略〉、面會の機會は松坂の一夜以後とうく來なかつた。
 十一 77 1 宣長は〈略〉、遂に古事記の研究を大成した。
 十一 78 4 〈略〉、又之を考案した昔の人々に對して別段感謝の念を起すこともない。
 十一 78 7 〈略〉、人間は實に種々様々なものを使用してみたのである。
 十一 78 9 石・貝・〈略〉などが、〈略〉、それ／＼貨幣の役目をしたこともあつた。
 十一 78 9 〈略〉、それ／＼貨幣の役目をしたこともあつた。
 十一 79 4 〈略〉、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。
 十一 79 4 かうして出來た貨幣は極めて使用に便利ではあるが、〈略〉。
 十一 79 6 〈略〉、更に貨幣の代りになる紙幣といふ物を案出した。
 十一 84 8 波も追々大きくなつた。
 十一 85 2 竹島を越したと思ふと、〈略〉。
 十一 85 3 〈略〉、急に水が冷たくなつた。
 十一 85 5 〈略〉、もとの水の温度にかへつた。
 十一 85 6 手足が大分くたびれて來た。
 十一 85 7 腹もすいた。
 十一 85 7 その中、先に進んでゐた者が三人列から離れて船に上つた。
 十一 85 9 その中、〈略〉三人列から離れて船に上つた。
 十一 85 10 〈略〉、一所に船に上らうかと思つたが、〈略〉。
 十一 86 2 〈略〉、「〈略〉。」と、自ら勵まして進んで行つた。
 十一 87 2 とうく大島についた。
 十一 87 3 図 「あゝ、五海里の海上を僕も泳ぎきることが出來たのだ。」
 十一 87 6 〈略〉、僕も思はず「萬歳。」と叫んだ。
 十一 87 10 図 「大層天氣がおだやかになつたね。〈略〉。」
 十一 88 1 図 「〈略〉。二百十日もこれで無事にすんだ。」
 十一 88 2 父は空をながめて、「〈略〉。」と、團扇を使ひながら言つた。
 十一 88 5 すると弟が〈略〉、日數を數へてみようとした。
 十一 88 8 図 これは一月一日から數へた日數だ。
 十一 88 9 父は曆を持つて來て、「〈略〉。」かういつて弟の手に渡した。
 十一 88 10 弟はそれを見てしばらく考へてゐたが、〈略〉、「〈略〉。」
 十一 90 5 僕はこれまで曆といふと、〈略〉といふやうな事を見るものとばかり考へてゐたので、〈略〉。
 十一 90 5 〈略〉、此の話を聞いて珍しく感じた。
 十一 92 1 僕は〈略〉を思ひ出して、其の事を父に尋ねた。
 十一 92 4 図 〈略〉、日本では明治五年まで太陰曆を用ひてゐたが、〈略〉。
 十一 92 4 図 〈略〉、日本では〈略〉、其の翌年から太陽曆を用ひた。
 十一 92 5 図 それから太陰曆を舊曆、太陽曆を新曆といふやうになつた。
 十一 92 6 図 「どうして太陽曆を用ひるやうになつたのですか。」
 十一 92 9 図 太陽曆は春分から春分までを一回歸年といつて、それを本としてこしらへたものだ。
 十一 93 3 図 ところが太陰曆は月のみちたりかけたりの變化を本としてこしらへたもので、〈略〉。
 十一 94 5 最後に父は「〈略〉。」と言葉をそへた。
 十一 94 9 〈略〉リンカーンは、〈略〉、ケンタッキー州の片田舎の貧しい家に生れた。
 十一 94 10 〈略〉、一家はインディアナ州に移つたが、〈略〉。
 十一 95 2 〈略〉、父は自分で木を切出して小さな家を造つた。
 十一 95 4 〈略〉、戸も窓も床もないものであつた。
 十一 95 5 家が出來てから次に土地を開きにかゝつた。
 十一 95 6 リンカーンは其の頃からもう父の助手をしなければならなかつた。
 十一 95 8 〈略〉かひがひしく働いてゐた。
 十一 96 1 〈略〉、時には生のじやがいもしか食はれないこともあつた。
 十一 96 1 かういふ有様であつたから、〈略〉。
 十一 96 3 〈略〉、リンカーンは十歳頃までは本を讀むことなどは殆ど出來なかつた。
 十一 96 4 〈略〉、僅かに心をなぐさめてゐた。
 十一 96 7 〈略〉、父に對して是非學校に入れてもらひたいと願つたけれども、〈略〉。
 十一 96 8 〈略〉、父は學校へ行つて時間をつぶすよりも畠に出て働いた方がよいといつて、〈略〉。
 十一 96 9 〈略〉、なか／＼許してくれなかつた。
 十一 96 10 ところが母のとりなしで終に學校に入ることが出來たので、〈略〉。
 十一 97 1 〈略〉、リンカーンの喜は一通りでなかつた。
 十一 97 2 學校は四哩餘りも離れてゐたが、〈略〉。
 十一 97 6 〈略〉、毎日毎日元氣よく通學した。
 十一 97 8 鉛筆や紙も自由には買へなかつたから、〈略〉。
 十一 97 9 〈略〉、家で算術の練習をするには、木のシャベルと炭を用ひた。
 十一 97 10 大事なことは拾ひ集めた木

片などに書留めて忘れないやうにしておく。

十一981 かういふ心掛であつたから、
《略》。

十一982 《略》、成績は何時も優等であつた。

十一983 しかしせつかく始めた學校通ひも、《略》。

十一984 《略》學校通ひも、家事のために僅か一年足らずで止めねばならなくなつた。

十一986 それからは又父の助手をしたり、人にやとはれたりすることになつたが、《略》。

十一986 《略》、本を読みたいといふ心は少しも變らなかつた。

十一988 《略》、どうしても人から借りて讀む外はなかつた。

十一9810 熱心なリンカーンは、《略》遠近を問はず借りに行つた。

十一993 かうしてイソップ物語や《略》等を読んだ。

十一994 或時近邊の人からワシントン傳を借りたことがある。

十一996 リンカーンはかねて此の偉人を非常にしたつてゐたので、
《略》。

十一996 《略》、鬼の首でも取つた氣になつて一心に讀續けた。

十一996 《略》、鬼の首でも取つた氣になつて一心に讀續けた。

十一9910 ところが或夜、夜中に激し

い雨が降つたことがある。

十一1001 リンカーンがふと目を覺した時はもう遅かつた。

十一1001 リンカーンがふと目を覺した時はもう遅かつた。

十一1001 壁のすき間をもつた雨のために、《略》。

十一1002 《略》、本がすつかりぬれてゐたので、《略》。

十一1003 《略》、其の晩はどうく眠れなかつた。

十一1004 翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、《略》。

十一1007 翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、「《略》。」と願つた。

十一1009 《略》、さうして本は其のまゝリンカーンにやつた。

十一1011 《略》、此の偉人の品性に深く感化された。

十一1013 《略》、非常な熱心と努力とをもつて勉強を續けた。

十一1015 彼が他日大統領となり、世界の偉人として萬人に仰がれるやうになつたのは、《略》。

十一1178 《略》、農場主が大勢の人の耕作するのを監督してゐた。

十一1179 《略》、銃獵に出たらしいりつばな騎馬の人たちが、《略》。

十一1182 《略》、そばに居た自分の子に、「《略》。」と言ひつけた。

十一1186 農場主は《略》、そばに居

た自分の子に、「《略》。」と言ひつけた。

十一1188 《略》、騎馬の人たちはもう門の外まで乗りつけた。

十一1189 さうしてジョージに早くあけて通すやうにと言つた。

十一1196 《略》、あけてくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。

十一1199 窓「おとうさんは、誰が來ても此の門をあけてはならないと僕に言ひつけました。」

十一11910 しかしジョージは依然として、「《略》。」とくり返すばかりであつた。

十一1201 最後に目つきのやさしい老紳士が言つた。

十一1205 ジョージは、かねて《略》といふ事を聞いてゐたので、《略》。

十一1206 《略》、さて靜かに口を開いた。

十一1211 公爵はひどく此の答が氣に入つた。

十一1212 《略》、一同を引連れて立去つた。

十一1213 ジョージは《略》、帽子を振りながら叫んだ。

十一1217 昨日橋本君と一しよに町はづれのガラス工場を見に行つた。

十一1218 最初にはいつたのは原料を調査するところで、《略》。

十一1219 《略》、マスクをかけた職工

が《略》。

十一12110 《略》ソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。

十一1226 《略》、どんなにつらいことであらうと思つた。

十一1228 とけたガラスが中でぎらくかがやいてゐる。

十一1233 《略》、とけたガラスの中に突つこんで引出すと、《略》。

十一1238 見てゐるうちに大きなフラスコが出來た。

十一1241 《略》、いろく扱つてゐるうちに臺付のコップになつた。

十一1243 《略》、次の室にはいつた。

十一1245 エプロンをかけた職工がガラスの皿やコップなどを、《略》。

十一12410 歸りがけに事務所の陳列棚を見せてもらつた。

十一1252 《略》、きれいに並んでゐた。

十一1252 取分け美しかつたのは電燈の笠で、《略》。

十一1253 《略》、目もさめるばかりであつた。

十一299 チャールス、ダーウィンは今から百年餘り前イギリスに生れた。

十一2101 《略》、目殺や鑛石などを室内に並べては一人で楽しんでゐた。

十一2102 九歳の時始めて學校にはいつたが、《略》。

十一2103 《略》、餘りすばしい生れつきでなかつたので、《略》。

十一2104 《略》、先生にもむしろ中以

下の生徒と思はれてゐた。

十二107 又父には「略。」といつて叱られたことがあつた。

十二107 又父には「略。」といつて叱られたことがあつた。

十二108 十歳の頃には昆蟲採集を始めた。

十二109 略、それ／＼違つた面白い習性をもつてゐるので、略。

十二111 略、略、不思議に思ふやうになつた。

十二112 父はダーウインを醫者にしようと思つて大學へやつた。

十二114 温順な彼は父の命に従つて勉強してゐたが、略。

十二116 略、何時の間にか好きな博物學の研究が主となつてしまつた。

十二117 此の頃のことであつた。

十二119 或日彼が古木の皮をむくと、珍しい甲蟲が二匹ゐた。

十二1110 略、又一匹變つたのが見えた。

十二1110 略、又一匹變つたのが見えた。

十二121 略、いきなり右の手の蟲を口の中へ投込んだ。

十二121 投込まれた蟲は苦しまぎれに恐しく辛い液を出したので、略。

十二122 投込まれた蟲は苦しまぎれに恐しく辛い液を出したので、略。

十二123 略、蟲は得たりと逃げてしまつた。

十二124 此の時にはもう三番目の蟲はどこへ行つたかわからなかつた。

十二124 此の時にはもう三番目の蟲はどこへ行つたかわからなかつた。

十二126 彼が探検船ビーグル號に乗込んで意氣揚々と本國を出發したのは、二十三歳の時である。

十二129 略、種々の材料を集めて本國に歸つたのはそれから五年の後である。

十二131 此の航海によつて略、一生の方針がはつきりとしまつた。

十二133 略、一度何かをし始めたから、略。

十二134 略、満足な結果を得るまでは決して中途でやめなかつた。

十二135 略、毎日きめた時間割通りに仕事を進めて、略。

十二136 略、たとへ十分、十五分の餘暇でも無益に費すことがなかつた。

十二137 ダーウインの後半生は病氣がちであつたが、略。

十二139 略、七十四歳の長壽を保つことが出来た。

十二142 略、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。

十二143 略、學界を根本から動かしたものである。

十二19 調子のよい蜜柑歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはして、

略。

十二201 今登つて來た方を振返つて見ると、略。

十二203 略、幾段にも幾段にもきづき上げられた山畑には、略。

十二206 略、枝といふ枝にはもう黄金色に色づいた實が鈴なりになつてゐる。

十二215 略、かごを首に掛けた三人の男が、略。

十二216 略、さえたはさみの音がちよき／＼と聞える。

十二241 昔は個人の利益を營むのが商業であると思はれてゐた。

十二243 略、忍耐も努力も要するに皆自己の爲であつた。

十二243 彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。

十二246 略、商人の人格が重んぜられなかつたからである。

十二247 文明の進んだ今日尚此のやうな考を持つのは、略。

十二2910 昨日大英博物館を一覽しました。

十二303 略、さすがに世界の大博物館といはれるだけあると思ひました。

十二305 市街を見物して私の特に感心したのは、略。

十二313 略、パリに着きました。

十二325 略、ルーブル博物館を一覽しました。

ましたが、略。

十二329 略、りつばな繪畫・彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。

十二3210 又エッフェル塔にも登つて見ました。

十二347 汽車でドイツの國內にはいつたのは朝まだほの暗い頃でした、略。

十二348 汽車でドイツの國內にはいつたのは朝まだほの暗い頃でした、略。

十二351 略、又工場といふ工場には盛に黒煙が上つてゐました。

十二354 略、私は今更ながらドイツ人の勤勉なのに驚きました。

十二357 略、彼等が略、盛に活動してゐるのには全く敬服しました。

十二369 久しく單調平凡な景色にあきてゐた私には、略。

十二373 略、ベートルベンがまだ若い時分のことであつた。

十二373 月のさえた冬の夜友人と二人町へ散歩に出て、略。

十二376 あゝ、あれは僕の作つた曲だ。

十二378 彼は突然かういつて足を止めた。

十二379 二人は戸外にたゞずんでしばらく耳をすましてゐたが、略。

十二389 ベートルベンは急に戸をあ

けてはいつて行つた。

十二 38 10 友人も續いてはいつた。

十二 39 4 二人は不意の來客にさも驚いたらしい様子。

十二 39 6 〇 私は音楽家ですが、面白

さについつり込まれて參りました。

十二 39 7 「略。」とベートーベンがいつた。

十二 39 7 妹の顔はさつと赤くなつた。

十二 39 9 ベートーベンも我ながら餘りだしぬけだと思つたらしく、略。

十二 40 1 〇 實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが、略。

十二 40 2 〇 略、——あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふお話でしたね。

十二 40 4 其の言方が如何にもをかしかつたので、略。

十二 40 4 略、言つた者も聞いた者も思はずにつこりした。

十二 40 5 略、言つた者も聞いた者も思はずにつこりした。

十二 40 5 略、言つた者も聞いた者も思はずにつこりした。

十二 41 4 略、ベートーベンがピアノの前に腰を掛けて直にひき始めた。

十二 41 5 其の最初の音が既にきやうだいの耳には不思議にひびいた。

十二 41 6 略、彼の身には俄に何者かが乗移つたやう。

十二 42 1 折から燈がぼつと明るくなつたと思ふと、略。

十二 42 2 折から燈が略、ゆら／＼と動いて消えてしまつた。

十二 42 3 ベートーベンはひく手を止めた。

十二 42 5 略、ピアノとひき手の顔を照らした。

十二 42 7 略、力のこもつた、しかも低い聲で、「略。」

十二 42 10 略、さつき娘がひいてゐた曲を又ひき始めた。

十二 43 1 略、さつき娘がひいてゐた曲を又ひき始めた。

十二 43 3 「略。」きやうだいは思はず叫んだ。

十二 43 4 ひき終るとベートーベンは、つと立上つた。

十二 43 5 三人は「どうかもう一曲。」としきりに頼んだ。

十二 43 6 彼は再びピアノの前に腰を下した。

十二 43 7 略、彼はしばらくすみきつた空を眺めてゐたが、略。

十二 43 8 略、彼はしばらくすみきつた空を眺めてゐたが、略。

十二 43 8 略、やがて指がピアノの鍵にふれたと思ふと、略。

十二 43 9 略、やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が次第々々にやみの世界を照らすやう、略。

十二 44 4 略、唯ほうつとして、ひき終つたのも氣附かぬくらゐ。

十二 44 7 ベートーベンは立つて出かけた。

十二 44 9 「略。」きやうだいは口を揃へていつた。

十二 45 2 ベートーベンは、ちよつとふりかへつてめくらの娘を見た。

十二 45 3 彼は急いで家に歸つた。

十二 45 4 略、かの曲を譜に書きあげた。

十二 45 5 略、不朽の名聲を博したのは此の曲である。

十二 52 2 略、此の湖には魚類が全く居なかつた。

十二 52 2 これは奥入瀬川を十町餘り下つた處に大きな瀧があつて、略。

十二 52 4 今日鱒の産地として世に知られるやうになつたのは養魚經營の賜である。

十二 52 7 暗い箱の中にしまひ込まれてゐた小さな鐵のねちが、略。

十二 52 8 略、鐵のねちが、略、明るい處へ出された。

十二 52 9 ねちは驚いてあたりを見廻したが、略。

十二 53 1 略、何が何やらさつぱりわからなかつた。

十二 53 3 略、此處は時計屋の店であることがわかつた。

十二 53 3 自分の置かれたのは、略、ふたガラスの中で、略。

十二 54 4 略、ふと自分の身の上に考へ及んだ。

十二 55 4 略、小さな子どもが二人奥からかけ出して來た。

十二 55 5 二人は其處らを見廻してゐたが、略。

十二 55 6 略、男の子はやがて仕事臺の上の物をあれこれといぢり始めた。

十二 55 7 女の子は唯じつと見まもつてゐたが、略。

十二 55 9 男の子は指先でそれをつままうとしたが、略。

十二 55 10 略、餘り小さいのでつまめなかつた。

十二 55 10 やつとつまんだと思ふと直に落してしまつた。

十二 56 1 やつとつまんだと思ふと直に落してしまつた。

十二 56 2 子どもは思はず顔を見合はせた。

十二 56 2 ねちは仕事臺の脚の陰にころがつた。

十二 56 4 略、父の時計師がはいつて來た。

十二 56 6 略、出して置いたねちの無いのに氣が附いた。

十二 56 7 時計師は略、出して置いたねちの無いのに氣が附いた。

十二 56 8 〇 誰だ、仕事臺の上をかき廻したのは。

十二 57 2 ねちは之を聞いて、飛上るやうにうれしかつた。

十二 57 4 略、夢中になつて喜んだが、略。

十二575 〈略〉、若し見附からなかつたらと、〈略〉。
 十二576 〈略〉、それが又心配になつて来た。
 十二577 親子は總掛りで探し始めた。
 十二579 三人はさんく探し廻つて見附からないのでがっかりした。
 十二5710 ねちもがっかりした。
 十二581 其の時、今まで雲の中に居た太陽が顔を出したので、〈略〉。
 十二581 其の時、今まで雲の中に居た太陽が顔を出したので、〈略〉。
 十二582 〈略〉、日光が店一ぱいにさし込んで来た。
 十二583 するとねちが其の光線を受けてびかりと光つた。
 十二584 〈略〉、ふさぎこんで下を見つめてゐた女の子がそれを見附けて、〈略〉。
 十二585 〈略〉、女の子がそれを見附けて、思はず「あら。」と叫んだ。
 十二586 父も喜んだ、〈略〉。
 十二586 〈略〉、子どもも喜んだ。
 十二586 しかも一番喜んだのはねちであつた。
 十二587 しかも一番喜んだのはねちであつた。
 十二589 〈略〉、大事さうにもとのふたガラスの中へ入れた。
 十二5810 さうして一つの懷中時計を出してそれをいぢつてゐたが、〈略〉。
 十二592 〈略〉、小さなねち廻しでし

つかりとした。
 十二593 〈略〉、今まで死んだやうになつてゐた懷中時計が、〈略〉。
 十二593 〈略〉、今まで死んだやうになつてゐた懷中時計が、〈略〉。
 十二594 〈略〉、懷中時計が、忽ち愉快さうにかちく〜と音を立て始めた。
 十二595 ねちは、自分が此處に位置を占めたために、〈略〉。
 十二596 〈略〉、此の時計全體が再び活動することが出来たのだと思ふと、〈略〉。
 十二597 ねちは、〈略〉、うれしくてうれしくてたまらなかつた。
 十二597 時計師は仕上げた時計をちよつと耳に當ててから、〈略〉。
 十二599 時計師は仕上げた時計を〈略〉、ガラス戸棚の中につり下げた。
 十二5910 一日おいて町長さんが来た。
 十二601 時計は直りましたか。
 十二602 直りました。
 十二602 ねちが一本いたんでゐましたから、〈略〉。
 十二603 〈略〉、取りかへて置きました。
 十二603 工合の悪いのは其の爲でした。
 十二604 「〈略〉。」といつて渡した。
 十二606 ねちは、「〈略〉。」と心から満足した。
 十二653 リヤ王はもう八十の坂を越

えた。
 十二655 〈略〉、ちよつとした事にも怒り易くなつてゐた。
 十二656 〈略〉、もう政務にもたへられなくなつて来た。
 十二658 王にはゴネリル・リガン・コーデリヤといふ三人の娘があつた。
 十二659 〈略〉、妹はかねてフランス王の后になることにきまつてゐた。
 十二662 王は〈略〉、餘生を安樂に送らうと決心した。
 十二668 〈略〉、王は娘たちを面前に呼んで、「〈略〉。」と尋ねた。
 十二669 ゴネリルの答は如何にも言葉巧みであつた。
 十二672 昔からあつた孝子のどの人よりも厚い眞心をもつて、〈略〉。
 十二674 長女の言葉に満足した王は、〈略〉。
 十二675 〈略〉、王は、地圖を指さしながら領地の三分の一を與へた。
 十二677 王は、——ほんたうに姉上は私の思つてゐる通りをおつしやいました。
 十二681 王はリガンにも三分の一を與へた。
 十二682 コーデリヤは王が一番かはいがつてゐる娘であつた。
 十二686 王は自分の耳を疑ふかのやうに目を見張つた。
 十二692 娘の言葉を物足りなく思つた王は、〈略〉

十二693 娘の答に失望した王は、
 十二697 〈略〉。
 十二6910 〈略〉、「お前にはもう何もやらぬぞ。永の勤當だ。」と言渡した。
 十二701 さうして残りの領地を二分して、姉二人にやつてしまつた。
 十二702 家來の中にはしきりに王をなだめた者もあつたが、〈略〉。
 十二702 家來の中にはしきりに王をなだめた者もあつたが、〈略〉。
 十二702 家來の中にはしきりに王をなだめた者もあつたが、〈略〉。
 十二705 コーデリヤはすく〜と父の許を去らなければならなかつた。
 十二707 〈略〉、コーデリヤを勤當したことを告げた。
 十二707 〈略〉、コーデリヤを勤當したことを告げた。
 十二710 〈略〉、本國にともなひ歸つて約束の如く自分の后とした。
 十二712 リヤ王は〈略〉、姉娘ゴネリルの許に身を寄せた。
 十二713 ゴネリルは決して氣だてのやさしい女ではなかつた。
 十二714 二週間もたぬ中にもう王に無愛想な仕向をした。
 十二715 其の上王に百人の家來を五十人に減するやうにといつた。
 十二717 王は〈略〉、早速馬にむちうつて次女リガンの許に走つた。
 十二719 ところがリガンは、〈略〉、すげなくも王を内に入れなかつた。

十二710 全領地を二分して與へてやつた二人の娘が、〈略〉。
 十二722 王は男泣きに泣いた。
 十二723 怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた王は、〈略〉。
 十二724 〈略〉王は、我にもあらず荒野の末にさまよひ出た。
 十二725 其の夜は〈略〉雷鳴・電光ものすさまじい夜であつた。
 十二727 王は〈略〉、とある小屋に一夜を明かしたが、〈略〉。
 十二727 王は〈略〉、何時の間にかもう發狂してゐた。
 十二728 父の身の上を案じながらフランスに行つたコーデリヤは、〈略〉。
 十二729 〈略〉コーデリヤは、やがていたましい報知を得た。
 十二7210 それは父が姉たちの爲に虐待されてゐるといふことであつた。
 十二732 そこでコーデリヤは〈略〉イギリスに渡つた。
 十二733 家來は荒野にさまよつてゐたりや王を見附けて、〈略〉。
 十二734 家來は〈略〉リヤ王を見附けて、コーデリヤの許に連れて來た。
 十二735 フランス王の侍醫は〈略〉老王に藥を與へて靜かに眠らせた。
 十二736 コーデリヤは眠つてゐる父の衰へ果てた姿をつくづくと見て、〈略〉。
 十二739 〇 〈略〉、此の白い髪や髭を

御覽になつたら、〈略〉。
 十二743 〈略〉、よゝと泣きくづれた。
 十二744 やがて眠から覺めた王は、〈略〉。
 十二745 〈略〉、幾分氣も靜まつたのか、〈略〉。
 十二747 〇 一體わしは今までどうしてゐたのだらう。
 十二759 王は尚あらぬ言葉を口走つてはゐたが、〈略〉。
 十二761 〈略〉、其の言葉の端端にも、〈略〉娘にわびる眞心がこもつてゐた。
 十二762 コーデリヤはそれを聞いて腸をちぎられるやうな思がした。
 十二764 其の後老王はコーデリヤの孝養によつて餘生を安樂に送つたといふ。
 十二769 これを海中に張つた形は〈略〉。
 十二773 群をなして寄せて來たまぐろは、〈略〉。
 十二786 〈略〉、まぐろの群が網にはいつたといふ合圖をみると、〈略〉。
 十二788 そこで數そのの船に分乗した漁夫が、〈略〉。
 十二887 政府から提出された案は先づ議會の一院で討議される。
 十二894 〈略〉、兩院の意見が一致すれば、最後に議決した議院の議長から國務大臣を経て奏上する。
 十二896 又貴衆兩院の何れから提

出された案は、〈略〉。
 十二9010 釋迦は〈略〉カピラバスト王國の太子として生れた。
 十二912 釋迦は〈略〉、何事も深く考へ込むたちであつた。
 十二913 〈略〉、農夫の働く様を見廻つたことがある。
 十二913 ぼろを着た農夫は玉のやうな汗をかいて〈略〉。
 十二915 折から飛下りて來た鳥が〈略〉。
 十二916 〈略〉鳥が鎌に傷つけられた蟲をついばんだ。
 十二916 折から飛下りて來た鳥が〈略〉蟲をついばんだ。
 十二916 木陰からじつと見てゐた彼は、〈略〉。
 十二918 〈略〉彼は、〈略〉、蟲の運命をあはれんだ。
 十二919 彼はだんく物思に沈むやうになつた。
 十二9110 それを見てひどく氣をもんだ父王は、〈略〉。
 十二921 〈略〉父王は、〈略〉、國政にも與らせようとした。
 十二924 しかし彼は〈略〉、益々世のはかなさを感じた。
 十二925 〇 人は何の爲に此の世に生れて來たのか。
 十二9210 〈略〉、「略。」と思ひ立つに至つた。
 十二932 父のいさめも〈略〉、此の

決心をひるがへすことは出來なかつた。
 十二933 かくて彼は〈略〉、人知れず宮殿を出て修行の途に上つた。
 十二935 〈略〉、マガダ國の首府王舎城の附近に來た。
 十二936 かねて釋迦の徳をしたつてゐたマガダ國王は、〈略〉。
 十二937 〈略〉マガダ國王は、〈略〉、自分の國をゆづらうとまで申し出たが、〈略〉。
 十二938 〈略〉、彼の決心はどうしても動かなかつた。
 十二939 彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聴いたが、〈略〉。
 十二942 〈略〉、或靜かな森へ行つた。
 十二943 さうして此處で父王の心盡くしから送られた五人の友と、〈略〉。
 十二944 さうして此處で〈略〉、六年の間種々の苦行を試みた。
 十二946 〈略〉、物にすがらなければ立てない程になつた時、〈略〉。
 十二947 〈略〉、彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。
 十二948 〈略〉、たま／＼其處にゐた少女のさ／＼げた牛乳を飲んで〈略〉。
 十二948 〈略〉、たま／＼其處にゐた少女のさ／＼げた牛乳を飲んで〈略〉。
 十二949 〈略〉牛乳を飲んで元氣を回復した。
 十二949 ところが此の新たな態度に驚いた五人の友は、〈略〉。

十二107 5 〈略〉、穴は〈略〉、既に何十間といふ深さに達した。

十二107 7 此の洞穴と、〈略〉僧の根氣とを見た村の人々は、〈略〉。

十二107 8 〈略〉村の人々は、今更のやうに驚いた。

十二107 8 出来る氣づかひはないと見くびつてゐた岩山の掘抜も、〈略〉。

十二107 9 一念こつた不斷の努力は恐しいものであると思ひつくと、〈略〉。

十二108 1 〈略〉、老僧の姿が、急に尊いものに見え出した。

十二108 6 そこで人々は〈略〉と相談して、其の方法をも取りきめた。

十二108 9 〈略〉、仕事は大いにはかどつて來た。

十二108 10 〈略〉、村の人々は此の仕事にあきて來た。

十二109 4 〈略〉、はては又村人全體が此の老僧から離れるやうになつた。

十二110 1 〈略〉、時には夜半までも〈略〉のみを振るふことさへあつた。

十二110 2 老僧の終始一貫した根氣は〈略〉。

十二110 2 老僧の〈略〉根氣は、遂に村人を恥ぢさせたものか、〈略〉。

十二110 3 〈略〉、仕事を助ける者が又ぼつくと出來て來た。

十二110 5 〈略〉、彼が一生をさへげた大工事が見事に成就した。

十二110 6 〈略〉、彼が一生をさへげた大工事が見事に成就した。

十二110 7 〈略〉、川に面した方には處々にあかり取りの窓さへうがつてある。

十二115 5 二十五日午後一時から、〈略〉講演があつた。

十二115 8 尚進んで電氣機關車さへも用ひられるやうになりました。

十二115 9 諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力も〈略〉。

十二116 4 蒸氣力は、多くの場合之に敵することが出来なかりました。

十二116 8 博士は先づ「〈略〉。」といつて、〈略〉、將來益々水力電氣の利用をはからなければならぬことを力説した。

十二116 9 次に博士は電氣の光に就いて述べた。

十二116 10 エヂソンが炭素線の電燈を發明したのは四十年ばかり前のことであつたが、〈略〉。

十二117 1 エヂソンが炭素線の電燈を發明したのは四十年ばかり前のことであつたが、〈略〉。

十二117 3 今では〈略〉電燈さへも發明されました。

十二117 7 〈略〉、活動寫眞のフィルムが〈略〉發火して、多くの死傷者を出した話などを附加へた。

十二117 7 〈略〉、話などを附加へた。

十二117 9 電信や電話の發明は〈略〉全世界を驚かしたものであります。が、〈略〉。

十二118 1 其の後〈略〉、自由に消息を交換することが出来るやうになりました。

十二118 2 又最近無線電話が發明されましたが、〈略〉。

十二118 3 今やそれが盛に利用される機運となりました。

十二118 7 進行中の汽車が無線電話機を備へ附けてゐたために危険を免れたことや、〈略〉。

十二118 7 進行中の汽車が〈略〉危険を免れたことや、〈略〉。

十二118 9 などの耳新しい話に、博士は満堂の會衆を喜ばせた。

十二119 2 最後に博士は〈略〉興味ある話をして壇を下つた。

十二124 8 東山道先鋒は板橋に着いた。

十二125 2 しかし市中の混亂は蜂の巢を突いたやうなさわざである。

十二125 5 全權を委任せられてゐた舊幕府の陸軍總裁勝安芳は、〈略〉。

十二125 6 勝安芳は、かねてから〈略〉時局の圓滿な解決を計つてゐた。

十二125 7 しかし大勢は如何ともしがたく、危機は既に目前に迫つたので、〈略〉。

十二125 8 安芳は三月十三日官軍の參謀西郷隆盛に會見を求めた。

十二125 9 西郷は早速承知して、薩摩屋敷で會見したが、〈略〉。

十二126 1 西郷は早速承知して、期して別れた。

十二126 3 翌十四日の會見は、芝、田町の薩摩屋敷で行はれた。

十二126 6 安芳は〈略〉と決心して、西郷をおとつたのである。

十二126 10 門を守つてゐた兵士等が〈略〉。

十二127 2 勝が來た、勝が來た。十二127 2 勝が來た、勝が來た。

十二127 4 一せいに銃劍を取直して行くてをさへぎつた。

十二127 6 安芳は高音に「西郷はどこに居る。」と叫んだ。

十二127 7 其の勢に吞まれて兵士等は思はず道を開いた。

十二127 8 安芳は出て來た。

十二128 5 安芳は、うか／＼と兄弟垣にせめいでゐたら、〈略〉。

十二129 10 西郷はだまつてうなづいた。

十二130 7 西郷はしばらくじつと考へてゐたが、「〈略〉。」

十二131 2 やがて安芳は西郷に見送られて門を出た。

十二131 4 警衛の兵士等は、一時に押寄せて來たが、

十二131 5 一同恭しく捧げ銃の

禮をした。

十二131 8 安芳は、西郷と顔を見合はせてにつこり笑つた。

十二131 9 西郷は軍令を出して翌日の進軍を中止させた。

十二132 2 徳川方の願意をとほさせた。

十二132 2 安芳が一命をかけた努力と、

十二132 5 新の大事業もとゞこほりなく成し遂げられるやうになつた。

十二132 9 我が國が、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、

十二132 10 主として我々國民にそれだけすぐれた素質があつたからである。

十二132 10 主として我々國民にそれだけすぐれた素質があつたからである。

十二133 3 之に附隨して幾多の良性・美德が發達した。

十二133 4 東海の島に據つた日本は、

十二133 5 日本は、國家を建設する上に頗る有利であつた。

十二133 8 國內はおほむね平和であつた。

十二133 9 隨つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、

十二134 1 舉國一致國難に當る

氣風を生じた。

十二132 萬世一系の皇室を中心として團結した國民は、〈略〉。

十二133 〈略〉、熱烈な愛國心を養成した。

十二134 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、〈略〉、〈略〉性情を育成するのに與つて力があつた。

十二134 8 〈略〉、生活の安易な樂土に平和を樂しんでゐた我が國民は、〈略〉。

十二135 4 〈略〉鎖國は、〈略〉、世界の大勢を知らぬ國民とならしめた。

十二135 9 〈略〉、性質が小さく狭く出来たきらひがある。

十二136 1 〈略〉、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、〈略〉。

十二136 2 今日我が國が列強の間に立つて世界的の地歩を占めた以上、〈略〉。

十二136 7 〈略〉、更に西洋の文明を入れて長足の進歩を成し遂げた日本國民は、〈略〉。

十二137 2 〈略〉創造力は、十分に發揮せられたことがなく、〈略〉。

十二137 2 〈略〉、昔から殆ど模倣のみを事として來た觀がある。

十二137 8 〈略〉、あつさりしたことを好む風がある。

十二138 1 〈略〉、古の武士が玉とくだける討死を無上の名譽としたのがそ

れである。

十二138 1 日本人ほどあつさりした色や味はひを好むものはあるまい。

十二138 2 あつさりしたこと、潔いことを好む我が國民は、〈略〉。

十二138 9 我が國民の長所・短所を數へたならば、まだ外にもいろいろあらう。

だ (助動) 2080 ダ だ 《ダ・ダッ・ダ・デ・ナ・ナラ・ニ》 ↓ たしかなほしう・なんだか

一53 6 〈略〉、ダイジナタカラモノヲダシマシタ。

二25 イロイロナハタガカゼニヒラヒラシテキマス。

二9 2 罇 ミゴトニサイタ カキネノコギク、〈略〉。

二9 5 罇 〈略〉、一ツトリタイ、キイロナハナヲ、〈略〉。

二10 2 罇 ミゴトニサイタ カキネノコギク、〈略〉。

二10 5 罇 〈略〉、一ツトリタイ、マツシロナハナヲ、〈略〉。

二17 1 アチラノソラガマツカニナリマシタ。

二25 ミヨチヤンハワタクシノイモウトデ、〈略〉。

二29 3 罇 「ナルホドヨイカンガヘダ。」

二34 1 ユミヲイルコトガスキデ、〈略〉。

二35 5 罇 「モチハタイセツナオ米

デコシラヘタモノデスカラ、〈略〉。」

二37 3 罇 〈略〉、マツ白ナユキガ。

二37 7 罇 〈略〉、マツ白ナユキガ。

二38 4 罇 〈略〉、マツ白ナハナガ。

二39 6 マツクロナ目ヲシテ、〈略〉。

二40 4 耳ハナンテンノハデ、目ハナンテンノミデス。

二40 6 アカイ小サナ目デ、カハイラシウゴザイマス。

二43 6 サウシテムリニ犬ヲナカセテ、〈略〉。

二47 7 〈略〉、キレイナ花ガサキマシタ。

二49 3 罇 オモシロイコトダ。

二53 3 罇 コレハニセモノダ。

二53 4 罇 ニクイヤツダ。

二60 2 罇 ニガイナラ、オサタウヲ入レテオアガリナサイ。

二61 2 罇 ソレナラ、ソシナニスコシツツノマナイデ、〈略〉。

二63 2 〈略〉、センセイノ見セテクダサルイロイロナモノモ見ルノデス。

二63 7 〈略〉、ミンナノイフコトヲキキオトスヤウナコトハアリマセン。

二67 4 コレカラダンダンアタタカニナツテキマシタ。

二69 5 罇 大キナトビガ、トブヤウダ。

二70 3 罇 アレアレアンナニヒカウキガ。

二70 6 罇 小サナトンボガトブヤウダ。

二71 2 罇 アンナニトンダラユクワイダラウ。

二71 3 罇 アンナニトンダラユクワイダラウ。

二75 3 シユテンドウジハホシタウノ山ブシダトオモツテ、〈略〉。

二76 1 ソノ大キナカホハ火ノヤウニアカク、〈略〉。

二72 4 カゼモアタタカデ、オモテデアソブニハバンヨイトキデス。

二73 6 罇 ア、日ガ出ハジメタ。キレイダ。

二74 4 〈略〉、エントツカラムクムクトマツクロナケムリガ出マス。

二75 6 メンドリハヘンナコエヲタテテキマシタガ、〈略〉。

二78 2 〈略〉、オヤドリハオハナシデモスルヤウニ、ココココトイツテキマシタ。

二73 1 罇 ばうやはよい子だ、ねんねしな。

二75 2 罇 一ばんふといのがおやゆびで、一ばんほそいのがこゆびです。

二75 6 罇 「それから、一ばんながいのが中ゆびで、〈略〉。」

二72 3 よけいにとつたはうがか

ちだといつて、〈略〉。
 三20 4 よけいにとつたはうがか
 ちだといつて、〈略〉。
 三20 7 太くてやはらかなわらび
 がたくさんはえてゐました。
 三21 1 二人がむちゆうになつて
 とつてゐますと、〈略〉。
 三22 4 それからそのへんをむ
 やみにかけました。
 三22 8 どちらもたいいてい おなじ
 くらゐで、かちまけはありませ
 んでした。
 三25 3 この二三日の雨で、竹の
 子 がおんなに出ました。
 三25 4 むぐらもちでもとほつた
 やうに、土がところどころもち
 上つてゐます。
 三27 4 〈略〉わらをむすびつけて
 あるのは、ほりとらないしるし
 で、のぼしておや竹にするの
 ださうです。
 三27 6 〈略〉おや竹にするのだ
 さうです。
 三32 8 〈略〉、そのにぎやかな中
 から、「略」。
 三34 3 〇 「いつも おたつしやなこ
 とで。」
 三34 3 〇 「いつも おたつしやなこ
 とで。」
 三34 8 五一ちいさんは ことし 六
 十九ださうです。
 三35 4 〈略〉、ハシヲモツ方ノ

手ハ右デ、チャワンヲモツ方
 ノ手ハ左デス。
 三36 3 〇 〈略〉アルキ出スノハ左
 ノ足デ、オケイコノトキアゲ
 ルノハ右ノ手デス。
 三40 6 うらしまは かはい さうに
 おもつて、〈略〉。
 三42 8 〈略〉、毎日いろいろなごち
 そうをしたり、〈略〉。
 三43 2 〇 〈略〉、さまざまなあそびを
 して見せたりしました。
 三44 7 〇 それはまことに おなご
 りをしいこと でございます。
 三45 2 〇 〈略〉、きれいな箱をわた
 しました。
 三47 1 日ノ出ル方ガ東デ、日
 ノハイル方ガ西デス。
 三47 5 〇 〈略〉、右ノ手ノ方ガ南
 デ、左ノ手ノ方ガ北デス。
 三49 7 〇 〈略〉新道ハ、村ヲ東カ
 ラ西ヘ、マツスグニツキヌイテ
 キマス。
 三51 2 〇 〈略〉田ガ、モウアンナニ
 青クナリマシタ。
 三52 2 〇 〈略〉。あの光るところ
 が雨のふるあなだ。」
 三52 5 〇 〈略〉、何をしてゐる
 のだ。」
 三53 1 〇 「星を二つ三つはたき
 おとさうとしてゐるのだ。」
 三53 2 〇 「ばかなことをいふ。
 〈略〉。」

三53 7 〇 「おまへ、何をかぞへて
 あるのだ。」
 三56 1 〇 だんだん 高くとべるやう
 になつて、〈略〉。
 三56 7 〇 〈略〉、このかへるのやう
 に、こんきがよければ、〈略〉。
 三57 1 〇 それからは一しやうけん
 めいになつて、毎日字をならひ
 ました。
 三58 4 〇 色ガウスクテ、ヌレテキ
 ルヤウニ見エマス。
 三58 8 〇 〈略〉、モウリツパニセミ
 ニナツテキマス。
 三59 2 〇 〈略〉、ヨクアノカラノ中
 ニハイツテキタモノダトオ
 モヒマシタ。
 三60 4 〇 日の光がやはらかにさ
 して、〈略〉。
 三60 5 〇 〈略〉、小川の水はきれい
 にすきとほつてゐます。
 三60 6 〇 風がしづかにふいて来て、
 〈略〉。
 三64 5 〇 五郎「ほうら、もうおき
 しようぶだ。」
 三66 4 〇 〈略〉、水デツパウニナリ
 サウナノガアリマシタ。
 三69 5 〇 「コンナニアナヲタクサ
 ンアケテハダメダ。〈略〉。」
 三69 6 〇 「コンナニアナヲタクサ
 ンアケテハダメダ。〈略〉。」
 三71 2 〇 そちらのはばの 廣い 光
 るおびはねえさんのので、〈略〉。

三71 7 〇 それから、あの 赤いじゆ
 ばんはねえさんのので、〈略〉。
 三72 3 〇 ちらのかすりのつつそ
 では太郎のあはせで、〈略〉。
 三73 6 〇 「私ハ鳥デモケダモノ
 デモナイカラ。」
 三73 6 〇 「私ハ鳥デモケダモノ
 デモナイカラ。」
 三74 2 〇 ソノ中ニケダモノガカ
 チサウニナツタノデ、〈略〉。
 三74 5 〇 「私ハ〈略〉、ケダモノ
 ダ。」
 三75 1 〇 スコシタツテ、コンドハ
 鳥ガカチサウニナリマシタ。
 三75 2 〇 「私ハ羽ガアルカラ、
 鳥ダ。」
 三76 1 〇 「オ前ハ鳥デハナイ
 カ。」
 三76 4 〇 「オ前ハケダモノダラ
 ウ。」
 三77 1 〇 ソコデカウモリハ〈略〉、
 クラクナツテカラ空ヲトビマ
 ハルヤウニナツタトイヒマス。
 三78 5 〇 空は水のやうにすみき
 つて、雲一つありません。
 三79 3 〇 〈略〉、おもひ出したやうに
 くつわ虫が なきます。
 三79 8 〇 おばあさんが「〈略〉。」と、
 ひとりごとのやうにおつしやい
 ました。
 三82 6 〇 「今日はまあ、何とい
 ふよい お天きだらう。」

- 三83 2 〈略〉、ふじの山はいつもよりなほきれいに見えました。
- 三83 3 風はしづかで、なみもおとをたてません。
- 三84 4 〈略〉、見たこともないきれいな着物でした。
- 三85 2 6 〈略〉「それは私の着物でございます。」
- 三85 7 6 〈略〉「いや、それは天人のはごろもといふ物で、〈略〉。」
- 三86 1 6 〈略〉「天人のはごろもなら、なほさらかへすことは出来ません。〈略〉。」
- 三87 2 2 れふしはきのどくになりまして、「〈略〉。」
- 四22 2 〈略〉、いろいろな店がならんでゐます。
- 四28 2 ちやうど人の出さかりで、お宮のすずがひつきりなしになつてゐます。
- 四52 2 しふ柿が三本、あま柿が二本で、その中に私の木が一本あります。
- 四55 5 〈略〉つき木をして下さつたのださうです。
- 四68 8 今年柿のあたり年で、〈略〉。
- 四84 4 キノフハ十月三十一日デ、天長節ノオイハヒ日デシタ。
- 四158 8 8 ワタシハコノヲカヘ來タカツタノダ。
- 四195 5 5 ソレハカイサウダ。
- 四20 4 4 〈略〉、カラダハスツカリモトノヤウニナホリマシタ。
- 四24 3 3 〈略〉、はがまつかになつてゐて、〈略〉。
- 四24 4 4 〈略〉、〈略〉柿が、赤い玉のやうに光つてゐます。
- 四25 6 6 6 今日、はこんなにもみがあるから、〈略〉。
- 四26 6 6 〈略〉電とうがつくやうになりました。
- 四27 7 7 本町通は夜もひるのやうで、〈略〉。
- 四29 3 3 これは大じかけでれんぐわをやく工場です。
- 四29 7 7 さうなつたら町はどんなにべんりになるでせう。
- 四29 7 7 さうなつたら町はどんなにべんりになるでせう。
- 四31 1 1 1 「だれだ」
- 四31 1 1 1 「だれだ」
- 四32 2 2 だれも居るのではありません。
- 四32 4 4 正「山びことは何のことでございませうか。」
- 四33 2 2 人のこゑも〈略〉、〈略〉ごむまりのやうに、かへつて來ることがあります。
- 四34 4 4 フクレタカラダ、マンマルナ目。
- 四34 5 5 カホハネコノヤウデ、其ノ上ネズミヲトツテクフノデ、〈略〉。
- 四37 8 8 フクロフノ鳴キゴエハ所ニヨツテイロイロニイヒマス。
- 四38 2 2 〈略〉、「ノリツケホウセ」ト鳴クノダトイフ所モアリマス。
- 四39 7 7 日は〈略〉、あたたかな光をおくりました。
- 四41 5 5 〈略〉火ばちや机や本箱やいろいろな物がはこび出されました。
- 四42 3 3 だい所でいろいろな物のけると、〈略〉。
- 四43 6 6 〈略〉、はうきを大きなたのやうに持つて、〈略〉。
- 四45 4 4 4 「〈略〉、すすきは大きにらくになりました。」
- 四46 1 1 1 〈略〉、すつかりいろいろな物をもの所のへなほしたら、〈略〉。
- 四46 4 4 〈略〉、家の内も外もきれいになつて居ましたので、〈略〉。
- 四46 8 8 よみ手はおちいさんで、取手はみよ子ちよ子國太郎音二郎の四人と、〈略〉。
- 四50 6 6 みんなもしまびにはむちゆうになつて取りました。
- 四54 5 5 5 「へええ、日は屋根から出て、屋根へはいるものではございませうか。」
- 四64 2 2 2 〈略〉、「二羽だけはきつといおとすほどの上手でござ
- 四68 4 4 4 います。
- 四68 4 4 4 それがかはいさうに、あるばんねずみに足のゆびをくひきられました。
- 四68 6 6 6 どんなにか鳴いたのでせうが、〈略〉。
- 四69 7 7 7 〈略〉、まだあれが生きて居るだらうか、〈略〉。
- 四70 4 4 4 雪ノヤウニ白ウゴザイマスガ、〈略〉。
- 四70 5 5 5 〈略〉、雪ノヤウニツメタクハナク、〈略〉。
- 四71 3 3 3 シカシ二人トモ大セツナモノデ、〈略〉。
- 四71 3 3 3 シカシ二人トモ大セツナモノデ、〈略〉。
- 四72 5 5 5 ああ、よいばんだ。
- 四76 1 1 1 〈略〉おとなしい人で、小さい時からよくはたらきました。
- 四76 5 5 5 〈略〉、其の時はなかなかにぎやかなことでした。
- 四76 7 7 7 今の村長さんも〈略〉すなほで、なまけぶかい人でした。
- 四77 3 3 3 〈略〉西の村で、二番目の金持だといはれたうちに〈略〉。
- 四77 5 5 5 〈略〉いたづらもので、大きくなつても、うちの仕事もせず、〈略〉。
- 四79 1 1 1 さむい日のことで、あまり氣のどくだしたから、〈略〉。
- 四80 3 3 3 〈略〉、生物をころしたり

するやうな子どもは、〈略〉。

四八七図 「河上」の方で雪がとけはじめたのだらう。」

四八五 〈略〉、いつ見てもよいけしきだと思ひました。

四八三 〈略〉、軍かんだといふことでした。

四八三図 ダイリ様ノゴ家來ダサウデス。

四八七図 アレハウタヲウタフ人ダサウデス。

四九四図 何といふくやしい事だらう。

四九二 〈略〉くどうは、みなもとのよりともといふ大將のお氣に入りで、〈略〉。

五一五圖 大日本、大日本、神のみすゑの天皇陛下、われら國民七千萬をわが子のやうに おぼしめされる。

五三八図 「此の方は中村さんといふ人で、今度遠い所から來て、〈略〉。」

五四七 私ども二人はていねいにおじぎをしました。

五五二 〈略〉、前からの友だちのやうになりました。

五五四 中村君がこれまで居た所は日本の南の方で、冬でもめつたに雪のふることがなく、〈略〉。

五五七 何でも汽車に二日二ばん乗通して、こちらへ着いたのださうですから、〈略〉。

五五七 何でも汽車に二日二ばん乗通して、こちらへ着いたのださうですから、〈略〉。

五六五 〈略〉、中村君を生いきだといつて、いちめたのださうです。

五六六 聞けば級のものゝ〈略〉、いちめたのださうです。

五六八図 日本の男は泣くものではない。

五七〇図 「頭が八つ、尾が八つある大蛇で、目はほづきのやうに赤く、〈略〉。」

五七三図 「〈略〉、目はほづきのやうに赤く、〈略〉。」

五七七 〈略〉、大蛇をずたずたに切りになりました。

五八二 ふしぎに思つて、〈略〉。

五八四 これはめづらしいつるぎだ。

五八五 ぼちが昨日から病氣で、ごはんをたべませんので、〈略〉。

五八六図 これは鶏だよ。

五八七図 それで金鶏勲章といふのだが、〈略〉。

五八八図 〈略〉、鶏のついてゐるわけは知つてゐるだらう。

五八九図 其の時一天にはかにかき曇つて、〈略〉。

五九四図 鶏の光がまるでいなびかりのやうで、わるものどもは目を明けてゐることが出來ず、〈略〉。

五九七図 〈略〉、おそれてみんなにげてしまつたさうだ。

五九二図 〈略〉勲章に、金の鶏をおつけになつたのだ。

五九五図 「をぢさんの功七級だ。」

五九八 島屋の前には、人が黒山のやうにあつまつてゐました。

五九六 〈略〉、目のさめるやうなちりめんや、〈略〉。

五九七 〈略〉、きれいな帶や、〈略〉。

五九九 〈略〉、すゞしさうな浴衣地がかざつてあります。

六〇二 〈略〉、土さうからいろいろな反物や帶地をかついで來て、〈略〉。

六〇五 ツバメハトブコトガ上手ナ鳥デ、ツブテノヤウニトンデ來テ、〈略〉。

六〇八 〈略〉、ツブテノヤウニトンデ來テ、〈略〉。

六一一 ガントオナジク、ワタリ鳥デ、〈略〉。

六一四 〈略〉、アタ、カニナツテ、ガング北ノ國ヘカヘルコロ、〈略〉。

六一八 こんな所にと思ふやうな村外れに、〈略〉。

六二二 それはくしづかな所で、〈略〉。

六二五 それはくしづかな所で、〈略〉、何の音も聞えません。

六二八 うら一めんの林は私のうちのもので、〈略〉。

六三一図 「こんなしづかな所でくら

してみたい。」

五九三 晝あれほどにぎやかな通に、〈略〉。

五九四 私のうちの右どなりは小間物屋で、左どなりは時計屋です。

五九六 見ざる・いはざる・聞かざるといふのださうです。

五九八 ちやうどかまを明けたところで、白いけむりが立つてゐました。

六〇〇 御神木ださうです。

六〇二 〈略〉、みんな大よろこびで飲みました。

六〇五 尊は其のころ、やまとをぐなといふ御名で、〈略〉。

六〇八 〈略〉、御年はわづかに十六でいらつしやいましたが、〈略〉。

六一一 〈略〉、御年はわづかに十六でいらつしやいましたが、〈略〉。

六一四 なみくの者なら、「あつ」とさけんで死にませうが、〈略〉。

六一八 「あなたはどなたでいらつしやいます。」

六二二 あゝ、たゞ人ではおありなさなかつた。

六二五 「何だ。」

六二八 「〈略〉、上にもうすをさかさにつるしておけば、〈略〉。」

六三一 〈略〉、蠶のからだがすき通るやうになります。

六三六 又うすい吉野紙のやうな作りかけの繭の中で、〈略〉。

六三七 〈略〉、きゆうくつさうにから

だをまげて、一生けんめいにはたらいてゐるのがあります。
 五49ノ<略>、一生けんめいにはたらいてゐるのがあります。
 五49ノ<略>、あれで八分通だ。
 五50ノカラカサニ降ル雨ガ四方へ流レオチルヤウニ、水ハ低イ方へ低イ方ヘト流レテ行キマス。
 五51ノ低クテ廣イ所ニタマルト、池ノヤウニナリ、<略>。
 五52ノ雨水ハタカウシテ流レルバカリデハアリマセン。
 五53ノ<略>、酒がすきでございまして。
 五54ノ<略>、ふしぎに思つて、見まはしますと、<略>。
 五55ノ又まことにめでたい事だといふので、<略>。
 五57ノ天の橋立は海中へつき出た細長い洲で、<略>。
 五58ノ<略>、長い橋のやうに見えます。
 五58ノ宮島はまはりガ七里もある島で、<略>。
 五59ノ朱ぬりの社殿が<略>、たいそうきれいに見えます。
 五61ノ<略>、用ありさうに天と地の遠きをつなぐ雲の上。
 五62ノ<略>、あのあざやかな色どりもしだい／＼にうすくなり、<略>。
 五63ノ<略>「おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、<略>。」

五63ノ<略>、あのたんぼの中に、ちよつとした森があるだらう。
 五64ノ<略>、あれは神明様の森だが、<略>。
 五64ノ<略>、あれまでが半道で、あれから町まで一里ある。
 五64ノ<略>、あの青田の中にあるのならう。
 五65ノ<略>、あれは製絲工場で、女工が四百人も絲を取つてゐる。
 五65ノ<略>、うちの繭もあの工場で生絲になつたはずだ。
 五66ノ道の兩がはは一面に青田で、ちやうど田の草取のさい中です。
 五67ノ<略>、其所から水を引くからだ。
 五67ノ<略>、少しまはり道だが、となり村の用水池を見て行くことにしよう。
 五68ノ昔此の村はひどく貧乏で、此の村の名を言ふと、<略>。
 五68ノ<略>、「あゝ、あの貧乏村か。」と言はれたものださうだ。
 五68ノ<略>、此の村の名を言ふと、「あゝ、あの貧乏村か。」と言はれたものださうだ。
 五68ノ<略>、其の頃は太いあれ地で、其の杉山なんぞは、<略>。
 五68ノ<略>、其の杉山なんぞは、木もろくにない草山だつたといふことだ。
 五68ノ<略>、其の杉山なんぞは、木もろくにない草山だつたといふこと

だ。
 五69ノ<略>、米がとれるやうにしたものだと思つた。
 五69ノ<略>、米がとれるやうにしたものだと思つた。
 五69ノ<略>、米がとれるやうにしたものだと思つた。
 五69ノ<略>、村の人々は中々大きな仕事だとは思つたが、<略>。
 五70ノ<略>、みんな賛成したといふことだ。
 五71ノ<略>、幅は一番上で三間といふ大きなもくろみであつた。
 五71ノ<略>「そんな大きな池がいるだらうか。」
 五72ノ氣早な者は<略>。
 五72ノ氣早な者は自分の持地を田に造りかへたといふことだ。
 五73ノ「こんなむだな仕事をすれば、<略>。」
 五73ノ「<略>、貧乏村はいよいよ貧乏になる。」
 五73ノ<略>、運の悪い時には悪いもので、其の年のつゆに、又土手がくづれて、<略>。
 五74ノかうなつては、もう庄屋の惡口を言ふ者ばかりで、普請方はとう／＼にげてしまつた。
 五74ノよい身代であつたが、<略>。
 五75ノしまひには妻や子どもの着がへまでもないやうになつた。
 五75ノ人の一心といふものはえらいもので、三度目に土手の工事はうま

五75ノ<略>、村の人は急にあれ地を田にしだした。
 五75ノ<略>、春には池の水が一ぱいになつた。
 五76ノ長い間の苦勞が病氣のもとであつたといふことだ。
 五76ノ長い間の苦勞が病氣のもとであつたといふことだ。
 五77ノあの白壁造の土藏のある家がそれだ。
 五78ノ親のほねをりが子の時になつてあらはれたのであらう、<略>。
 五78ノ此の山の杉も庄屋が先に立つて植ゑたのださうだ。
 五78ノ此の山の杉も庄屋が先に立つて植ゑたのださうだ。
 五78ノ<略>、ゆびをりの金持村だと言はれてゐる。
 五79ノ<略>、此の用水池にはあんなに水がたまつてゐる。
 五79ノいころすのまかはいさうだと思つて、<略>。
 五80ノ<略>、頭の上をすれ／＼にしました。
 五80ノ<略>、びつくりしてたふれたのだ。
 五82ノ<略>、矢じりがつづめの尾のやうにわたした、<略>。
 五82ノかりまたは、<略>、たいそうするどい矢で、<略>。
 五82ノ<略>、宗任は<略>てきの大將なのです。
 五82ノ<略>、あぶないことだ。

五84 2 囀 おとうさんへ電報で御返事をいたしたやうに、〈略〉。

五84 6 囀 〈略〉、四日の日は朝からひどい雨で、夕方から風もはげしくなりました。

五85 4 囀 〈略〉、急に川水の音がごろ／＼と聞えて来て、〈略〉。

五85 7 囀 其の時表で水だ／＼とさけぶこゑがしましたので、〈略〉。

五85 7 囀 其の時表で水だ／＼とさけぶこゑがしましたので、〈略〉。

五86 3 囀 叔父さんは大へんだ土手が切れたといつて、〈略〉。

五87 2 囀 〈略〉、中からうすやたらひがぼかぼか流れ出すほどで、どうすることも出来ませんでした。

五87 5 囀 〈略〉、水が二階にもつきさうになつたので、〈略〉。

五87 7 囀 仕合はせに水はそれからふえませんでした、〈略〉。

五89 5 私ほ町の辻に立つてゐる郵便函であります。

五90 3 囀 「うん、郵便函といつたのはこれだな。」

五90 6 〈略〉、〈略〉郵便物を大切にあづかつてゐて、〈略〉。

五90 7 私のやくめは、〈略〉、これをあつて来る人に渡すのであります。

五93 5 おめでたい事やたのしさうな事が書いてありますと、〈略〉。

五93 7 〈略〉、悲しい事や苦しさを事が書いてありますと、〈略〉。

五94 4 〈略〉、私もはらわたがちぎれるやうに思ひました。

五96 3 〈略〉、美シイ玉ノヤウ二見エマス。

五96 8 ウチノブダウトハ種ガチガフノダサウデス。

五98 4 〈略〉と聞いてゐたからでございます。

五98 6 〈略〉、ほんたうの死人だと思つたのでせう、〈略〉。

五99 1 囀 どんなにこはかつたらう。

五99 4 囀 熊が君の耳の所へ口を持つて行つたやうだが、〈略〉。

五99 7 囀 『あぶない時に、友だちをすててにげるやうな者には、〈略〉。』

五100 4 東京停車場は東洋第一の大停車場で、〈略〉。

五100 6 赤れんぐわの三階造で、間口が百八十四間もあります。

五100 8 〈略〉、左が出口で、まん中が帝室用になつてゐます。

六11 2 囀 今年はほんたうにほう年だ。

六11 2 囀 今の分では去年より七八俵よけいに取れさうだ。

六11 3 囀 今の分では去年より七八俵よけいに取れさうだ。

六11 3 囀 今の分では去年より七八俵よけいに取れさうだ。

六12 7 〈略〉、一番上は一俵で、一山は十俵つづです。

六14 7 囀 高い山はもう雪だらう。

六15 3 囀 〈略〉、内地第一の高山だから。

六15 6 囀 臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、〈略〉。

六15 8 囀 〈略〉、此の山のいたゞきには、いつもつもつてゐるといふことだ。

六16 5 囀 〈略〉、四番目が富士山だ。

六16 7 囀 「内地では甲斐の白根で、一万五百尺。」

六17 2 囀 「信州の檜岳や赤石山で、どれも一万尺以上ある。」

六17 6 囀 印度のヒマラヤ山は世界一で、〈略〉。

六18 1 囀 しかし三郎、高い山がかならず名高い山だとはかぎらない。

六18 2 囀 奈良の春日山や〈略〉は千尺そこ／＼だが、〈略〉。

六18 4 囀 〈略〉や三笠山は千尺そこ／＼だが、白根や檜岳よりも知られてゐるし、京都の東山にしてもさうだ。

六18 6 囀 ふとん着て、ねたるすがたや東山。で、先づ高い岡だと思へばよい。

六18 6 囀 〈略〉。で、先づ高い岡だと思へばよい。

六19 6 囀 〈略〉、中デ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デアラウト思ヒマス。

六19 6 囀 〈略〉、其ノ外イロ／＼ナカザリ物ニナリマスガ、〈略〉。

六19 8 囀 〈略〉、私ノヤウナヤクワン

六19 8 囀 〈略〉、私ノヤウナヤクワン

ニモナリマス。

六11 6 囀 〈略〉、モツト役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。

六12 1 囀 其ノ外、釘ヤ針ノヤウナ小サイ物カラ、〈略〉。

六12 2 囀 〈略〉、キクワン車・軍艦ノヤウナ大キナ物マデ、〈略〉。

六13 7 囀 シカモ其ノサビハ大ソウ毒ナ物デス。

六15 2 僕が紅色のきれいなきのを取つて、〈略〉。

六15 4 囀 あゝ、それは紅茸だ。

六15 4 囀 毒だよ。

六18 5 ふまないやうに注意して、〈略〉。

六19 6 風がひゆうつとうなつて来るたびに、濱の松は身をふるはせて、頭を地に着けさうにします。

六20 6 囀 「これが五日もつゞくと、ひぼしだ。」

六22 8 大將は平維盛で、〈略〉。

六23 6 〈略〉、義仲はひそかにみ方の者を敵の後へまはらせて、〈略〉。

六26 4 屋根の上に霜がまつ白だ。

六26 6 〈略〉、霜にあたつたからだらう。

六27 1 ひよどりは元氣な鳥だ。

六27 1 ひよどりは元氣な鳥だ。

六27 7 囀 「どうも分らないのは、あの弱い人間がわれわれの仲間を生けどりにすることだ。」

六28 4 囀 「だれだい、今笑つたの

は。」
 六29 5 人間があなたの方を生けどりにするには、いく人かで力を合はせるではありませんか。
 六30 5 〈略〉、数かぎりもない蟻がまつ黒になつて、出て來ました。
 六32 1 マツ先二出アツタノハ牛乳配達デ、〈略〉。
 六32 6 東ガ白ンデ、屋根ノ霜ガ見エルヤウニナツタ。
 六32 8 カラノ荷車ヲヒテ行クノハ、八百屋ヤサカナ屋デ、買出シニ行クノラシイ。
 六33 5 〈略〉、町ハダンノニギヤカニナツテ來タ。
 六33 7 停車場近クニナルト、急二人通ガ多クナツタ。
 六34 1 〈略〉、サツキカラ汽デキノ鳴ツテキル工場ヘ急グノデアラウ。
 六37 6 〆 いや、弓が惜しかつたのではない。
 六37 8 叔父爲朝の弓のやうな強い弓なら、〈略〉。
 六37 8 敵にやつてもよいが、〈略〉。
 六38 2 〆 『これが義經の弓だ。』
 六38 3 〆 『これが義經の弓だ。』 などと言はれては、源氏の名折れになるからだ。
 六38 6 義經に此の名を惜しむ心があつたので、何時の戦にも勝つたのでございませう。

六38 8 國では初雪が降つたさうだね。
 六39 1 〆 こつちは國よりよほどあたゝかだ。
 六39 3 〆 〈略〉、はじめは寒いやうに思つたが、もうなれた。
 六40 2 〆 お前はなぜ自分の村の人と見物しなかつたかと思ふだらうが、〈略〉。
 六40 5 〆 〈略〉、私の村から、今歩兵になつて來てゐるのは私一人だけなのだ。
 六40 5 〆 〈略〉、今歩兵になつて來てゐるのは私一人だけなのだ。
 六41 6 〆 〈略〉、ふしぎと私の村からは私一人だ。
 六42 1 〆 輜重兵にも其の中にだれか出るだらう。
 六42 2 〆 分家の萬藏君などは小男だから、〈略〉。
 六42 4 〆 お前は今の分では大男になりさうだから、〈略〉。
 六42 4 〆 お前は今の分では大男になりさうだから、〈略〉。
 六42 5 〆 砲兵か騎兵になれるだらう。
 六42 6 〆 からだをぢやうぶにして、〈略〉。
 六43 7 〆 「海の上でも歩けさうだ。」
 六44 3 〆 「なるほど、理くつはさうだ。」
 六45 1 〆 あゝ、月日の立つのは早いものだ。

六45 6 〆 鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ魚デモアル。
 六45 6 〆 鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ魚デモアル。
 六45 8 〆 〈略〉、海デ大キナルカラダ。
 六46 5 〆 コレハ卵ヲ産ム場所ヲ見ツケニ來ルノデアル。
 六46 6 〆 キレイナ水ガサラノ流レテ、〈略〉。
 六46 8 〆 卵ハ小豆程ノ大キサデ、〈略〉。
 六47 1 〆 卵ハ、ウスアカイ玉ノヤウニ見エル。
 六47 4 〆 サウシテ外ノ魚ガ其所ヘ來ナイヤウニ、シバラク其ノアタリニ番ヲシテキテ、〈略〉。
 六48 2 〆 〈略〉、フシギニ自分ノ生レタ川ヘ歸ツテ來ルサウデ、〈略〉。
 六48 3 〆 〈略〉、フシギニ自分ノ生レタ川ヘ歸ツテ來ルサウデ、〈略〉。
 六48 5 〆 鮭ハ寒イ國ノ魚デ、我が國デハ樺太ト北海道ガオモナ産地ダサウダ。
 六48 6 〆 〈略〉、我が國デハ樺太ト北海道ガオモナ産地ダサウダ。
 六48 6 〆 〈略〉、我が國デハ樺太ト北海道ガオモナ産地ダサウダ。
 六51 7 〆 〈略〉、すがたも上品に見えましてので、〈略〉。
 六52 1 〆 〈略〉、舞姫の中では一番年わ

かでございまして。
 六52 6 〆 〈略〉、其の中でことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございした。
 六53 1 〆 其の五番目の舞姫といふのは、かの萬じゆの姫であつたのでございします。
 六53 2 〆 〈略〉、かの萬じゆの姫であつたのでございします。
 六54 1 〆 ほうびはのぞみにまかせて取らせるであらう。
 六54 7 〆 〈略〉、これには深いわけがあつたのでございします。
 六55 5 〆 〈略〉、木曾の家につたはつてゐた大切な刀を送つてよこしました。
 六56 3 〆 頼朝は其の刀に見おぼえがあつたのでございします。
 六56 6 〆 唐糸といふのは此の女のことでございます。
 六56 8 〆 唐糸には其の時十二になる娘がありました。これが萬じゆの姫で、木曾に住んで居りましたが、〈略〉。
 六58 1 〆 〈略〉、うばと二人で御ほうこうをねがつたのでございします。
 六58 2 〆 〈略〉、人の仕事まで引きうけるやうにしましたので、〈略〉。
 六58 8 〆 あゝ、母はもう此の世の人ではないのかと、〈略〉。
 六60 2 〆 之を聞いた萬じゆの喜はどんなであつたでございませう。
 六60 2 〆 之を聞いた萬じゆの喜はどんなであつたでございませう。

七107 園 「皆さん、そろくおしたくだ。」
 七114 園 「皆さん、これが目じるしだよ。」
 七119 〈略〉、おもしろいやうにあさりが出た。
 七126 おさへて見たら、小さなかれひであつた。
 七127 園 「丸山君、かれひだ。」
 七131 〈略〉、ふりかへつたのは知らない人であつた。
 七133 潮がすっかり落ちて、海はスカのやうになつた。
 七138 何時か知らない人とも話し合ふやうになつて、〈略〉。
 七141 日は暖で、風はなし、〈略〉。
 七142 〈略〉、むされるやうな気がする。
 七153 珍しかつたのは、〈略〉、たつのおとしこが一つあつたことであつた。
 七164 園 此の蛤は私どもの拾つた中から、大きなのをよつたのでございます。
 七169 此の頃はれんげさうの花ざかりである。
 七171 四角^{かく}な田には四角に、〈略〉。
 七173 〈略〉、田の形其のまゝに紅^{あか}紫^{むらさき}のもうせんをしきつめたやうに見える。
 七176 道ばたや土手にさいてゐるのはこぼれ種であらう。

七177 しやうの強いもので、一度種が地に落ちれば、年年其所で花がさく。
 七209 〈略〉、二十餘町にはかに干上つて砂地にかはり、〈略〉。
 七233 みきが二かゝへもあつて、枝が傘をひろげたやうに出てゐるので、〈略〉。
 七247 此のおばあさんにむすこが一人あるのださうだが〈略〉。
 七248 此のおばあさんにむすこが一人あるのださうだが〈略〉。
 七251 〈略〉、ずつと前から南アメリカへ行つてゐるといふことだ。
 七253 〈略〉、まんぢゆう笠をふせたやうな塚がある。
 七256 これは馬がけがをしないやうに、馬方が上げるのださうだ。
 七256 〈略〉、馬方が上げるのださうだ。
 七257 〈略〉、馬方が上げるのださうだ。
 七259 馬はたいそう元氣のよい動物で、生れた日からすぐ歩く。
 七267 〈略〉、きはめて大切なものである。
 七267 〈略〉、きはめて大切なものである。
 七273 〈略〉、近くは乃木大將も、馬は煉瓦造の小屋に入れて置かれたのである。
 七275 八寸・九寸などといふのは、

四尺八寸・四尺九寸などのことで、五尺あると、十寸といふ。
 七282 〈略〉、いたる所に良馬を見るやうになつた。
 七359 園 通は廣くて平で、〈略〉。
 七369 園 〈略〉、日本人は年々ふえるばかりださうです。
 七382 園 〈略〉、たくさん大船をいどきに横づけにすることが出来ます。
 七388 園 大連の貿易高は横濱や神戸よりは少し下で、〈略〉。
 七388 園 大連の貿易高は〈略〉、大てい大阪ぐらゐだといひます。
 七389 園 輸出品は豆粕^{あひぢ}が第一で、〈略〉。
 七393 園 まだ来て二三箇月で、よくはわかりませんが、〈略〉。
 七411 日露戦争當時のことである。
 七415 年は六十四五でもあらうか、〈略〉。
 七418 園 「〈略〉。其の船に乗つてゐるなら、鐵砲を上げる。」
 七424 園 天子様によく御ほうこうするだよ。
 七426 すると、又鐵砲を上げたのがかすかに見えた。
 七429 園 〈略〉、わらちがけで急いで来たのださうだ。
 七429 園 〈略〉、わらちがけで急いで来たのださうだ。
 七431 園 〈略〉、見送の人々はみんな泣いたといふことである。

七467 〈略〉、物の具見事に着かざり、〈略〉。
 七485 無念に思つて、〈略〉。
 七496 〈略〉、イタツテ正直で、氣立ノヤサシイ老人デシタ。
 七515 イカニモ丈夫サウナ老人デシタガ、〈略〉。
 七526 園 〈略〉、皆さんと同じやうに、あの運動場で遊んだり、〈略〉。
 七531 園 〈略〉、何よりもうれしいのでございます。
 七535 園 〈略〉、太平丸といふのは、長さが六十間程もある汽船で、〈略〉。
 七563 園 見るもの聞くものが、總べて皆珍しいのであります。
 七567 園 急に暴風雨が来ると、〈略〉。
 七568 園 〈略〉、山のやうな波が立つて、〈略〉。
 七569 園 〈略〉、船は今にも沈むかと思ふやうになります。
 七571 園 けれども船はなかゝ沈むものではありません。
 七575 園 〈略〉、外の船に衝突したりするやうなまぢがひが出来まし。
 七582 園 〈略〉、かねや汽笛を鳴らすのは、〈略〉、衝突をさけるためであります。
 七586 園 〈略〉、いくらきりが深くて、も、まるでちがつた方へ行くやうなことはありません。
 七592 園 〈略〉、それを見ると、あれは何所だといふことが分ります。

- 七59 6 〇 略、はなはだ大切なことなのであります。
- 七59 6 〇 略、はなはだ大切なことなのであります。
- 七59 6 〇 略、はなはだ大切なことなのであります。
- 七60 2 〇 略、それは日本は海國でありながら、略。
- 七60 3 〇 略、それは、まだ海を恐れる人もあるといふことで、これは實に残念な事であります。
- 七60 4 〇 略、これは實に残念な事であります。
- 七60 4 〇 略、これは實に残念な事であります。
- 七61 3 〇 略、どうか今から十分海になれて置くやうにしてみたいのであります。
- 七61 4 〇 略、どうか今から十分海になれて置くやうにしてみたいのであります。
- 七61 9 〇 略、百八十年昔の事であります。
- 七62 4 〇 略、川べの宿はとめきれない程の客でございました。
- 七62 5 〇 略、中でも安倍川の宿は一そうの人ごみであつたと申しますが、略。
- 七63 2 〇 略、手をひいてもらふかして渡るのでございます。
- 七63 8 〇 略、川べはひじやうなさわぎでございます。
- 七63 8 〇 略、川べはひじやうなさわぎでございます。

- 七65 4 〇 略、此のあぶない川を一人でこしたほどの人である。
- 七65 5 〇 略、氣がちがつて死ぬやうな事になるかも知れぬ。
- 七65 6 〇 略、氣の毒なことだと思つて、略。
- 七65 6 〇 略、氣の毒なことだと思つて、略。
- 七66 2 〇 略、見れば先の男でございす。
- 七66 5 〇 略、あなたは今朝一人で川をこした方ではありませんか。」
- 七67 4 〇 略、落した物は。」革の財布で。」
- 七67 7 〇 略、五十兩は黄色なきれに、んであつて、略。
- 七68 7 〇 略、家の中で見えなくした物でも、中々出ないものでございす。
- 七69 4 〇 略、かくをして來たのでございす。
- 七69 5 〇 略、それがあなたのやうな正直なお方に拾はれて、略。
- 七69 5 〇 略、それがあなたのやうな正直なお方に拾はれて、略。
- 七69 7 〇 略、いたゞいたのは財布ではなくて、略。
- 七69 7 〇 略、いたゞいたのは略、私の命でございす。
- 七70 4 〇 略、あなたから一文でももらふ氣があるくらゐなら、此所まで持つて來はしません。
- 七70 9 〇 略、私は此所から百里さきの紀州の者でございす。

- 七71 3 〇 略、此の財布に入れて來たのでございす。
- 七71 9 〇 略、どうぞ之を受取つて、私の氣がすむやうにして下さい。
- 七72 7 〇 略、私は川ばたの夫婦で、略。
- 七72 8 〇 略、私は、名前をいふ程の者ではありません。
- 七73 2 〇 略、其の日のくらしにこまるやうなこともあります、略。
- 七73 4 〇 略、たとひ親子の者がうゑ死をするやうなことがあつても、略。
- 七75 6 〇 略、其の金をまちがひなくとけるやうに致せ。
- 七76 3 〇 略、織田信長の草履取をしてゐた時のことである。
- 七77 8 〇 略、一時は今の二時間にあたるのである。
- 七78 3 〇 略、「はい。これが御奉公だと思ひますれば、略。」
- 七78 8 〇 略、これがそも／＼藤吉郎出世のいとぐちである。
- 七79 8 〇 略、魚類ニハイワシ・アヂ・カツヲナドノヤウニ、水ノ表面ニ近イ所ヲ泳グモノガアリ、略。
- 七80 2 〇 略、タヒ・アナゴ・ハモナドノヤウニ、岩ノカゲヤ海藻ノ間ヲ泳グモノガアリ、略。
- 七80 4 〇 略、カレヒ・ヒラメナドノヤウニ、底ニ沈ンデキルモノモアル。
- 七81 9 〇 略、カキハ又スグフェルモノデ、軍艦ヤ汽船ハ時々之ヲカキオトサナケレバナライホドデアル。

- 七82 2 〇 略、軍艦ヤ汽船ハ時々之ヲカキオトサナケレバナライホドデアル。
- 七82 6 〇 略、此ノ貝ノカラノ中ニアルノデアル。
- 七82 8 〇 略、中デ面白イノハサンゴデ、タクサン集ツテ、略。
- 七82 8 〇 略、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテキル。
- 七83 1 〇 略、サンゴハ、皆此ノ蟲ノ骨デアル。
- 七83 4 〇 略、海綿モ、ヤハリ略、蟲ノ骨デアル。
- 七84 9 〇 略、コンナ所ニハ、動物モゴクマレデ、略。
- 七86 1 〇 略、此ノ他海藻ニハマダタクサンナ種類ガアツテ、略。
- 七86 3 〇 略、海藻ノ形ハ様々デ、帶ノ様ニ廣クテ長イノモアレバ、略。
- 七86 3 〇 略、帶ノ様ニ廣クテ長イノモアレバ、略。
- 七86 4 〇 略、全體ガ細カニ分レテ、略。
- 七86 4 〇 略、枝ノ様ニナツテキルノモアリ、略。
- 七86 7 〇 略、色モ一様デハナイ。
- 七86 7 〇 略、ミルヤモヅクノ様ニ綠色ノモノモアレバ、略。
- 七86 8 〇 略、コンブヤアラメノヤウニ茶色ノモノモアリ、略。
- 七86 9 〇 略、テングサノヤウニ紅色ノモノモアル。

七
92
5
会
よいあんばいだ。

だ。

屋がうのカネキを入れて、〈略〉。

「今年の競馬はさぞ見もの」

八102 しかも其所は深い所である。
八112 〈略〉、上を下へのさわぎである。

八114 圃 耕造方の人々は耕造の肩をたゝいて、「感心だ、感心だ。」

八114 圃 耕造方の人々は耕造の肩をたゝいて、「感心だ、感心だ。」

八114 圃 耕造方の人々は耕造の肩をたゝいて、「感心だ、感心だ。えらい子だ。」

八118 圃 如何にも見上げた心掛だ。
八118 圃 相手の信作があゝの通りだから、〈略〉。

八129 信作方の人々は之を聞いて、「〈略〉。」といったので、さうきまつたといふことである。

八135 一方は百四五十人で、〈略〉。
八142 圃 〈略〉、小勢の方は〈略〉、一生けんめいになつてゐる。」

八164 長四郎が十一歳の時のことである。
八172 將軍秀忠が刀を取つて出て見ると、長四郎であつた。

八178 圃 「いや、きつと頼まれたであらう。」
八179 圃 「いゝえ、頼まれたのではございません。」

八185 翌日になつて、將軍が又たづねたが、始のやうに答へた。
八189 圃 「長四郎があゝの心で大きくなつたら、竹千代には無二の忠臣であらう。」

八191 將軍はあとで、御臺所に、「〈略〉。」といったといふことである。
八226 これは呉鳳といふ人のおかげだと申します。

八227 呉鳳は今から二百年程前の人で、亞里山の役人でした。
八229 〈略〉、蕃人からは親のやうにしたはれました。

八232 〈略〉、どうかして首取の惡風を止めさせたいものと思ひました。
八246 圃 「それ程首がほしいなら、明日の晝頃、〈略〉、此所を通る者の首を取れ。」

八258 見ると、それは呉鳳の首でございしました。
八265 さうして今も其の通りにしてゐるのだといひます。

八301 〈略〉、其の男はていねいに教へてくれた。
八308 かまはさしわたしが一丈ぐらゐ、高さが四五尺ぐらゐで、〈略〉。

八311 〈略〉、後の方に煙出の口を明けるのである。
八314 〈略〉、よくもえるやうに其の上下にそだを置き、〈略〉。

八319 〈略〉、かた炭が出来上るのである。
八322 炭に焼く木は、主にならとくぬぎで、〈略〉。

八326 〈略〉、其の中貴重なものの一つは朝鮮人蔘です。
八329 これはもと野生のものでした

が、今から千何百年も前から栽培することになつたのだとつたてゝあます。
八333 さうして其の栽培については次のやうな話もあります。

八336 〈略〉、子どもをおさづけ下さるやうに、朝晩神様にいのつてゐました。
八344 〈略〉、見なれない草に、眞赤な美しい實が一つなつてゐました。

八349 〈略〉、婦人は之を我が子のやうに育てました。
八349 これが人蔘で、此の婦人は長生をしましたが、〈略〉。

八361 時の町奉行は名高い大岡越前守で、〈略〉。
八363 〈略〉、どちらも實母だといひはります。

八381 圃 泣くのもかまはず力まかせに引くとは、情を知らぬ不届者。
八394 包の中には白木綿が五十反ばかりはいつてゐたのでございます。

八404 越前守は手代の言ふ所を聞いて、「〈略〉。」といつて、下役の者に石地蔵をしぼつて来るやうに命じました。
八408 物見高いは江戸のくせで、〈略〉。

八409 圃 物見高いは江戸のくせで、「何だ、何だ。」
八409 圃 「何だ、何だ。」

八418 越前守は〈略〉、さておこそかに、「〈略〉。」と申し渡しました。
八424 一同は驚いて、泣くやらなげくやら、大さわぎでございます。

八427 圃 〈略〉、越前守は「しからば許してつかはすであらうが、〈略〉。」と命じました。
八453 圃 〈略〉、食事も進むやうになりましたので、〈略〉。

八455 圃 〈略〉、老體のこと故、餘程大事にしなればならぬといふことでございます。
八456 圃 しかし醫者の申す所では、老體のこと故、餘程大事にしなればならないといふことでございます。

八458 圃 まことに勝手がましい御願でございますが、〈略〉。
八468 圃 祖母一人孫一人の事だから、〈略〉。

八472 圃 〈略〉、何か好きな物を買つて上げて下さい。
八478 〈略〉、驚ハタシカニ鳥類ノ王デアル。

八478 〈略〉、驚ハタシカニ鳥類ノ王デアル。
八484 〈略〉、アクマデモガンジヨウナツバサ・尾、〈略〉。

八488 〈略〉、自在ニ空ヲトブ様ハ、
八489 〈略〉、自在ニ空ヲトブ様ハ、
八489 實ニ勇マシモノデアル。

八494 〈略〉、スウツト下リテ來テ、
急ニツバサヲチャメ、〈略〉。

八八九 窓 「指であひづをしたのは昔のことで、今は口を見せてもの言はせませう。」

八八九 窓 聞えるなら、もう一つ何か言っておくれ。

八八九 窓 いや、聲が聞えるのではありません。

八九一 窓 よく見えるやうにして、もう一度しづかに言つてごらんさい。

八九一 窓 おとよは信吉の口を、中までのぞきこむやうにしてゐたが、〈略〉。

八九二 先生はいろ／＼な事を信吉に話して聞かされた。

八九二 窓 おとよは話し方ばかりでなく、〈略〉料理も習つてゐる、〈略〉。

八九二 窓 大そうりこうだから、〈略〉。

八九二 窓 〈略〉、りつぱに一人前の事が出来るやうになる。

八九二 窓 〈略〉、りつぱに一人前の事が出来るやうになる。

八九二 窓 げんに此の學校の卒業生で、商店の番頭になつてゐる者もあれば、〈略〉。

八九三 信吉はとりのぼせたやうにうれしがつて、〈略〉。

八九四 窓 どうも恐れ入つたことだ。

八九四 窓 信吉は教室を出ると、〈略〉。といつて、先生を廊下でをがむやうにした。

八九九 窓 〈略〉、君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、少しも僕等の爲につくさない。

八〇一 窓 僕はたゞ坐つてゐて物を食ふだけの者ではありません。

八〇一 窓 食つた物をこなして、之を血の製造場へ送るのが僕の役目であつて、〈略〉。

八〇一 窓 〈略〉、僕が若し食物をこなさなかつたなら、からだを養ふ所の血がどうして出来ませう。

八〇二 窓 〈略〉、かへつて君等は自分で苦しむやうになつたのです。

八〇二 窓 これは全く君等が自分で招いたのであります。

八〇二 窓 君等が若し僕に食物を送る爲に働いたといふなら、僕もまた君等を養ふ爲に骨を折つたといひます。

八〇三 窓 マツチはちよつとした物で、價も安く、〈略〉。

八〇三 窓 かし之を一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。

八〇三 窓 かし之を一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。

八〇四 窓 まうかるどころか、非常な損になる。

八〇四 窓 それではマツチは、どうして誰が造るのであらう。

八〇五 窓 すべてかういふやうに、手分をして別々に仕事をするを分業といふ。

八〇五 窓 すべてかういふやうに、手分をして別々に仕事をするを分業といふ。

をして別々に仕事をするを分業といふ。

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

八〇五 窓 分業で造ると、其の出来がよ

わけがない、〈略〉。

八一一 窓 〈略〉、どうかして大將の體を丈夫にし、氣を強くしなければならぬと思つた。

八一二 窓 〈略〉、其の墓に參詣したのである。

八一三 窓 「よし。寒いなら、暖くなるやうにしてやる。」

八一三 窓 「よし。寒いなら、暖くなるやうにしてやる。」

八一三 窓 大將の母もまたえらい人であつた。

八一三 窓 大將が何か食物の中にきらひな物があると見れば、〈略〉。

八一三 窓 〈略〉、必ず其のきらひな物ばかり出して、〈略〉。

八一四 窓 〈略〉、うち中の者がそればかり食べるやうにした。

八一四 窓 其の爲、大將には全く食物に好ききらひといふものがないやうになつた。

八一四 窓 當時大將の體は、もうこれだけ丈夫になつてゐたのである。

八一五 窓 當時大將の體は、もうこれだけ丈夫になつてゐたのである。

八一五 窓 郷里の家は〈略〉、そまつな家であつた。

八一五 窓 郷里の家は〈略〉、そまつな家であつた。

八一五 窓 郷里の家は〈略〉、そまつな家であつた。

八一五 窓 郷里の家は〈略〉、そまつな家であつた。

もつまいと思ふ。

九24 5 老人は大分つかれたやうである。

九25 9 略、大體一身一家の爲でなく、略。

九26 1 略、一寸ぢに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ事で、略。

九26 1 略、これが佐藤の家の學問の精神である。

九26 5 略、これはまことに残念な事である。

九26 5 略、これはまことに残念な事である。

九26 7 略、しかしわたしの四十年の骨折は、農學の進歩の爲には決してむだでなかつたと思ふ。

九26 9 略、此の學問を大成するのがお前の役目だ。

九27 1 略、又つらい事もあるであらうが、略。

九27 4 略、りつぱな學者を先生にして、略。

九27 9 父は安心した様子で、やがてすやくと眠つた。

九28 1 略、これは今から百三十年ばかり前に、略、旅人宿で起つた事で、略。

九28 2 略、少年は其の子信淵である。

九29 1 略、農學は、信季の望通り、信淵に至つて大成したのである。

九29 5 廣さが千數百方里もある、海のやうな湖から流れる大きな河が、略。

九30 3 右にあるのがアメリカ瀧、左にあるのがカナダ瀧で、略。

九31 4 略、カナダの方からはるかに全景を見渡すのも面白。

九31 7 略、頭から雨のやうなしぶきを浴びながら、略。

九32 8 略、「もう一息だ。」

九33 4 略、急にかん高い音を立てて、略。

九33 5 略、美しい小鳥が二三羽、身がるに枝移りした。

九33 8 略、太い尾をちらりと見せて、急にまた穴にかくれてしまつた。

九34 10 略、石井君のうちが見えるはずだ。

九35 2 略、もうお晝頃だらう。

九35 3 略、やうやく清水まで来て、手の切れるやうにつめたいのを二三ぱいつまげ様に飲んでみると、略。

九35 10 略、頭を上げてみると、それは石井君であつた。

九37 10 略、閣下の防戦はまことに見事であつた。」

九38 4 略、しかし部下の者は、最後までベルギーの名譽をけがさなかつたつもりである。

九47 8 略、「お前もたしかに半人前だ。」

九47 8 略、「お前もたしかに半人前だ。」

だ。」

九48 3 略、世の中は何でも一生けんめいに働く者が勝た。

九48 3 略、世の中は何でも一生けんめいに働く者が勝た。

九48 6 略、めい／＼の骨折に對して、御ほうびを下さるのだ。

九48 7 略、うち中が丈夫で、仲よくかせぐ、略。

九48 7 略、うち中が丈夫で、仲よくかせぐ、略。

九49 1 略、それがすむとやがて夏蠶の上りだ。

九49 2 略、にいったちの分もわたしが働くのだ。

九50 4 略、社長さんは餘程の年よりらしいが、にこにこしてゐる元氣な方です。

九50 5 略、僕は何となくえらさうな人だと思ひました。

九50 5 略、僕は何となくえらさうな人だと思ひました。

九50 7 略、「あの精米會社の社長さんはえらい方なんぞう。」

九51 3 略、あの社長さんはもと上方の人で、略。

九51 5 略、此の町へ始めて奉公に來たのは、ちやうどお前と同じ十二の年だつたさうだ。

九51 5 略、ちやうどお前と同じ十二の年だつたさうだ。

九51 5 略、主人の家が大きな醬油屋

九51 5 略、主人の家が大きな醬油屋

だつたので、略。

九51 7 略、始は近在の小賣店へ、略、おろしに歩き廻つたものださうだが、略。

九51 7 略、おろしに歩き廻つたものださうだが、略。

九51 8 略、其のつらさはとてもお前たちにわかるものではない。

九51 10 略、それから又長い間忠實に勤めて、略。

九52 3 略、さて商賣を始めると、あの人なるといふ信用はあるし、略。

九52 8 略、それはわたしの十五六の時分だつたらう。

九52 9 略、うちのおぢいさんはあの人とは前から友だちだつたので、略。

九52 10 略、うちのおぢいさんは略、大へんほめていらつしやつたものだ。

九53 3 略、「いや、これから先があの人のほんたうにえらい所だ。」

九55 3 略、それにあの人の事だから、決してあせらず、略。

九55 8 略、あんなりつぱな會社にしたのだ。

九55 9 略、あんなりつぱな會社にしたのだ。

九56 1 略、僕は今日其のえらい社長さんに會つて來たのだと思ふと、略。

九57 3 略、敷いてあるむしろの上に面白いやうに飛散る。

九57 8 略、「正一も大分役に立つやうになつたなあ。」

九57 8 略、「正一も大分役に立つやうになつたなあ。」

- 九58 何所からかにぎやかな歌が聞えて来る。
- 九58 略、黄色い麦の穂が略、まぶしいやうな夏の日に、かゝやいてゐる。
- 九59 略、へうきんな五平ちいさなが、時時へんな掛聲をして皆を笑はせる。
- 九59 略、略、時時へんな掛聲をして皆を笑はせる。
- 九60 略、にぎやかに打續ける。
- 九60 庭のすみにはほうせん花が真赤に咲いてゐる。
- 九60 略、略、軍艦の壮大な姿が、略。
- 九61 千数百人の乗員は、今もなほ安らかに眠を續けてゐる。
- 九61 艦内は深山のやうな静かさである。
- 九61 艦内は深山のやうな静かさである。
- 九61 艦内は深山のやうな静かさである。
- 九61 人の顔がやつと見分けられるやうになつた頃、略。
- 九61 軍艦の起床時間は、夏は五時、冬は六時である。
- 九62 これから號令が雨のやうに下る。
- 九64 上甲板洗は水兵の受持で、略。
- 九64 兩舷直といふのは、特別の務のあるものをのぞいた外の水兵のことである。
- 九64 水兵はくもの子を散らすやうに八方へ散つて、略。
- 九64 略、身輕な姿となつて分隊毎に甲板洗を始める。
- 九65 甲板洗はいかにも勇ましく面白いものである。
- 九65 其の様は、まるで雨後の蛙がむらがり飛んでゐるやうである。
- 九66 一時間餘りも活動した後であるから、略。
- 九67 略、實におごそかなものである。
- 九67 略、實におごそかなものである。
- 九67 略、實におごそかなものである。
- 九67 略、乗員は、これから訓練に取掛るのである。
- 九68 まだ日が暮れたばかりのやうに思つたが、略。
- 九68 略、もう八時半であつた。
- 九68 此の邊が有名な那須野が原だ。
- 九68 此の邊が有名な那須野が原だ。
- 九68 此の邊が有名な那須野が原だ。
- 九68 昔は一面の荒野であつたが、略。
- 九68 略、塩原へ行くには、此所で下りるのだ。
- 九69 略、やがて一關だ。よくねたね。
- 九69 窓から吹きこむ朝風のひやりとするのは、餘程北へ進んだ爲だらう。
- 九70 白河を通つたのは昨夜の十一時前であつた。
- 九70 昔能因といふ人が、『都をば、かすみと共に立ちしかど、秋風ぞ吹く、白河の關。』とよんだのは其所のことで、略。
- 九70 略、此の關所は略、有名なのであつた。
- 九70 略、此の關所は略、有名なのであつた。
- 九70 仙臺に着いたのは午前の三時で、略。
- 九71 仙臺は東北第一の都會で、大學も高等學校もある。
- 九71 昔は竹に雀の紋所で名高い仙臺様の城下であつた。
- 九71 仙臺は「松島は。」「仙臺から三つ目の松島驛で下りるのだ。略」
- 九71 光堂ともいつて、昔は金光りに光りかゝやいてゐたさうだ。
- 九72 八百年前の建物で、今も略、保存されてゐる。
- 九72 略、高館のあととも右手に見えたはずだが、略。
- 九72 略、あれが北上川だ。
- 九73 汽車は此の邊からあの川について、北へく走るのだ。
- 九73 略、あれは岩手山だ。
- 九74 略、あのふもとに有名な小岩井農場があるのだ。
- 九74 略、あのふもとに有名な小岩井農場があるのだ。
- 九74 略、あのふもとに有名な小岩井農場があるのだ。
- 九74 略、谷間に白い山ゆりの花のまばらに見えるのも面白い。
- 九75 略、海に向ふに遠く見えるのが下北半島だ。
- 九75 略、陸奥灣の風光が手に取るやうに見えた。
- 九76 遠くにはかすかに津輕半島が横たはり、略。
- 九76 略、大そう景色のよい所であつた。
- 九76 略、此所は名高い温泉場で、海水浴も出来るさうだ。
- 九76 略、海水浴も出来るさうだ。
- 九76 北海道に渡る人は、停車場に續いた乗船所から汽船に乗るのである。
- 九76 東京から此所までは四百五十六哩もあるのだが、略。
- 九76 略、かうたやすく來てみると、そんなに遠い所に來たやうな氣がしないね。
- 九77 略、そんなに遠い所に來たやうな氣がしないね。
- 九77 略、皆いつものやうに、此所で支度をして、略。
- 九77 これこそ略、毎日々々待つてゐた命令だつたので、略。
- 九78 略、めい／＼身輕になつて、校舎の後の菜園に集つた。
- 九78 枯れかゝつて一面に黄色になつたじやがいも畑を、略。
- 九78 略、ほつたいは此の中へ

入れるやうにとおつしやつた。

九七四 〔略〕、雀の卵ぐらゐなかはいらしいものもあるが、〔略〕。

九七五 〔略〕、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。

九七五 〔略〕、絹のやうなうすい皮がはち切れさうに、よく實がいつてゐる。

九七八 〔略〕、ほつたいもを一つ一つていねいにならべて行く。

九七九 〔略〕、あちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲。

九八〇 〔略〕、面白さうに僕等の仕事をを見ていらつしやつた。

九八三 〔略〕、「毘沙門天を刻むのだ。」

九八七 〔略〕、「來春まではかゝるだらう。」

九八五 〔略〕、「にいさん、空にはあんなにたくさん星が見えますが、〔略〕。」

九八五 〔略〕、「さうだ。動かないのだ。〔略〕。」

九八六 〔略〕、しかし地球が廻るために、我々の目には動くやうに見える。

九八五 〔略〕、それでも航海をする人などが、よく星を見て船の位置をはかる

といふではありませんか。

九八六 〔略〕、星がそんなに位置の変わるものなら、日當にならないでせう。

九八六 〔略〕、星がそんなに位置の変わるものなら、日當にならないでせう。

九八七 〔略〕、年中ほとんど位置の

變らないのがあるから、まことに都合がよいのだ。

九八六 〔略〕、「北極星といふ星だ。」

九八六 〔略〕、「でも、あんなにたくさんある星ですもの、〔略〕。」

九八七 〔略〕、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九八七 〔略〕、ひしやくのやうな形になつて、七つの星が並んでゐるのが見えるだらう。

九八七 〔略〕、七つの星が並んでゐるのが見えるだらう。

九八七 〔略〕、あれが北斗七星だ。

九八七 〔略〕、あの柄でない方の端にある二つの星を結びつけて、〔略〕。

九八八 〔略〕、かなり大きい星があるだらう。

九八八 〔略〕、あれが今話した北極星だ。

九八八 〔略〕、北斗七星は何時もあんなにひしやくの形をしてゐて、〔略〕。

九八九 〔略〕、さうだ。

九八九 〔略〕、もう一つ、小さい北斗七星のやうなものが出来てゐますね。

九九〇 〔略〕、並び方が全く似てゐるだらう。

九九〇 〔略〕、小熊座と大熊座について、面白い昔話があるはずだから、〔略〕。

九九一 〔略〕、おかあさんのカリストは、大そう美しい人だつたので、〔略〕。

九九一 〔略〕、此の大熊こそは、〔略〕お

かあさんのカリストだつたのですが、

〔略〕。

九九二 〔略〕、「あゝ、かはいさうだ。あのアルカスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。」

九九二 〔略〕、大熊座と小熊座になさつたのださうです。

九九二 〔略〕、いさん、やつぱりにいさんのおつしやつたやうに、星の位置は變りますね。

九九三 〔略〕、白馬岳が飛驒山脈中の有名な山だといふ事は知つてゐましたが、

〔略〕。

九九三 〔略〕、白馬岳が飛驒山脈中の有名な山だといふ事は知つてゐましたが、

〔略〕。

九九四 〔略〕、雪溪は谷を埋めた雪の坂で、

〔略〕。

九九五 〔略〕、時には一寸先も見えないやうなことがあります。

九九六 〔略〕、急な坂を矢のやうに早くすべるのですから、〔略〕。

九九六 〔略〕、急な坂を矢のやうに早くすべるのですから、〔略〕。

九九七 〔略〕、雪溪が冬の世界ならば、此所は春の國でせう。

九九八 〔略〕、岡田さんは目の前に見てゐるやうな様子で説明なさるので、

〔略〕。

九九八 〔略〕、山の上に居るやうな氣持になつて聞きました。

九九八 〔略〕、もやの底にかすかに見える

越中の平野、〔略〕。

九九八 〔略〕、日本海の波の上にはるかに浮ぶ能登半島、〔略〕。

九九八 〔略〕、淺間山は煙をなびかせて、東南の空はるかにそびえ、〔略〕。

九九九 〔略〕、富士山も、晴れた日には、白雲の上にかすかに見える事があるさうです。

九九九 〔略〕、今日はもう熟しきつたやうな顔をして、へそを日にさらしてゐる。

九九九 〔略〕、黒みがかつた紫色の莖が見事に延びて、〔略〕。

九九九 〔略〕、空がきれいにすんで、

九九九 〔略〕、山の方であちらこちら白いのは、蕎麥の花であらう。

九九九 〔略〕、二百十日を無事に越した田には〔略〕。

九九九 〔略〕、後足を長く延ばし、眞青な空をじつとながめてゐる。

九九九 〔略〕、ざるを持つた子供が、川下の方に集つてさいわいであるのは、鮒やどちやうを取るものであらう。

九九九 〔略〕、今年はなり年なのだ。

九九九 〔略〕、今年はなり年なのだ。

九九九 〔略〕、まだ青いが早く甘くなるたちだから、〔略〕。


九九九 〔略〕、午後には弟と天神山へきのこ取りに行くのだ。

九九九 〔略〕、北風はたけが五尺二寸もある

黒馬で、〔略〕。

ことは、艦中一同残念に思つてゐる。
九119 2 会 其のうちには花々しい戦争

もあるだらう。

九1195  〈略〉、安心なさるやうにす

るがよい。

九二〇 一 〈略〉、〈略〉父ガ、夜汽車デ

九
120
2

一月モカ、ルヤウナオ話ダツ

タノニ、略。

九202 一月モカ、ルヤウナオ話ダツ

九203 タノニ、略、ドウシテコンナニ早ク

オ歸リニナツタノダラウト思ツテ聞
イテミタ。

九1203 〈略〉、ドウシテコンナニ早ク
オ歸リニナツタノダラウト思ツテ聞

イテミタ。

九1207(会) 今日午後四時ノ汽車デ又出

カケルノダ。

九1209 会 「今日ハ衆議院議員ノ總選

九
120
10
10
会

「略、略」
投票ノ爲ニ歸ツテ

來タノダ。」

ハナイ。

實ニリツバナ考ヲ持ツテキテ、〈略〉

レル人ガアルカラ、〈略〉。

九
月
七
日
今日投票ノ爲ニ歸ソタノモ
出發ノ時カラノ豫定ナノダ。

九二一七 会 今日投票ノ爲ニ歸ツタノモ

出發ノ時カラノ豫定ナノダ。

九二八 〇 「ソナエライ方ナラ、

〈略〉大丈夫デセウ。」

九二二 〇 〈略〉、選舉人トシテカリソ

メニモスベキ事デハナイカラ、〈略〉。

九二二 〇 〈略〉、カウシテワザく歸

ツテ來タノダ。

九二四 〇 當選スルシナイハ別ニシテ、

〈略〉。

九二六 〇 〈略〉、ホントウノ選舉トイ

フモノダ。

九二八 〇 國民トシテ恥ヅベキ事ダ。

九二九 〇 〈略〉、近々後任ノ選舉ヲスル

コトニナツテキルノデアツタ。

九三〇 〇 道雄ハ 〈略〉、自分デ一番適

當ダト信ジテキル中村君ヲ選舉シヨ

ウト決心シタ。

九三二 〇 〈略〉、當時世界に類のない大

國を建設した英雄である。

九三三 〇 其の大王が東方諸國の遠征に

出かけた時の事である。

九三四 〇 或曰王は部下の精兵を引連れ、

焼けつくやうに熱い平原を横ぎつて、

〈略〉。

九三五 〇 〈略〉王は、町はづれを流れ

てゐるきれいな川にはいつて水浴を

した。

九三六 〇 水は意外に冷たくて、まるで

水のやうであつた。

九三七 〇 水は意外に冷たくて、まるで

水のやうであつた。

九三八 〇 水は意外に冷たくて、まるで

水のやうであつた。

にかゝつた。

九三九 〇 醫師は 〈略〉、たゞ経過を見

守つてゐるばかりである。

九四〇 〇 〈略〉、用心するやうにと書い

てあつた。

九四一 〇 〈略〉、靜かにフィリップに渡

した。

九四二 〇 やがて讀終つたフィリップが、

眞青な顔をして王を見上げると、

〈略〉。

九四三 〇 十月二十五日は、青年團の道

ぶしんの日であつた。

九四四 〇 高橋さんは、あちらで長らく

教育に従事してゐる人である。

九四五 〇 今通つて見て來ましたが、

大そうりつぱになりました。

九四六 〇 よくこんなに早く出來まし

たね。

九四七 〇 郷里の青年諸君がこんなに

まじめになつて來たのは、〈略〉。

九四八 〇 郷里の青年諸君がこんなに

まじめになつて來たのは、〈略〉。

九四九 〇 〈略〉、とかく無責任な事ば

かりしてゐました。

九五〇 〇 〈略〉、これがまじめに實行

されてゐるかどうかと、〈略〉。

九五一 〇 しかし、〈略〉皆さんの熱

心な様子や、今日の働を見て、〈略〉。

九五二 〇 〈略〉、非常に喜んでをりま

す。

九五三 〇 高橋さんの熱心な話は、〈略〉。

九五四 〇 久々で皆様といろくお話

をして、非常に愉快でした。

をして、非常に愉快でした。

九五五 〇 久々で皆様といろくお話

をして、非常に愉快でした。

九五六 〇 〈略〉、やはり馬のそばを通

るのが危険なやうな氣がしてならな

かつたが、〈略〉

九五七 〇 〈略〉、やはり馬のそばを通

るのが危険なやうな氣がしてならな

かつたが、〈略〉。

九五八 〇 〈略〉、土地の人は一向平氣

で、〈略〉。

五九 〇 〈略〉、腹の下などを自由に

くゞつて歩きます。

六〇 〇 馬も誠に従順で、〈略〉。

六一 〇 馬も誠に従順で、けたりか

みついたりするやうな事は決してし

ません。

六二 〇 廣さは二町四方ぐらゐで、

〈略〉。

六三 〇 皆二歳駒ださうです。

六四 〇 子馬には大てい飼主の一家

族がついて來て、親切に世話をして

ゐます。

六五 〇 それを見ると、成程、こん

なにかはいがられて居れば、〈略〉。

六六 〇 〈略〉、馬も従順で人になつ

くわけだと、〈略〉。

六七 〇 〈略〉、馬も従順で人になつ

くわけだと、〈略〉。

六八 〇 〈略〉、黒山のやうに集つて

ゐる買手は、〈略〉。

六九 〇 〈略〉、非常ににぎやかです。

七〇 〇 〈略〉、非常ににぎやかです。

七十一 〇 さうして、もうこれが最高

の直だと見ると、〈略〉。

七十二 〇 〈略〉、急に見ず知らずの人

の手に渡つてしまふのだから、〈略〉。

七十三 〇 〈略〉、急に見ず知らずの人

の手に渡つてしまふのだから、〈略〉。

七十四 〇 〈略〉、飼主が泣いて別れを

惜しむのも、もつともな事です。

七十五 〇 〈略〉、或は馬車馬になり、

或は耕馬になるのださうです。

七十六 〇 〈略〉、飼主たちがあんなに

かはいがつてゐたのを見て、〈略〉。

七十七 〇 〈略〉、どうか同じやうにや

さしく扱つてくれ、ばよいと、〈略〉。

七十八 〇 〈略〉、賣つてゐる菓子もお

もやも、多くは馬にちなんだ物で、

〈略〉。

七十九 〇 成程、此の邊は馬でもつて

ゐる處だと思ひました。

八〇 〇 〈略〉、ものは、〈略〉一人娘の

グレース、ダーリングであつた。

八十一 〇 或秋の夜の事である。

八十二 〇 「まあ、かはいさうに。

〈略〉。」

八十三 〇 かはいさうだが、とても人

間業では救へない。

八十四 〇 此のけなげな言葉は遂に父を

動かしした。

八十五 〇 親子は非常な危険ををかし、

〈略〉。

八十六 〇 かうしてポートは 〈略〉、燈

臺に歸り着いたのである。

八十七 〇 かうしてポートは 〈略〉、燈

1355 ガツン湖といつて、〔略〕大

な風に働いてみると、〈略〉。

1478 彼は氣がくるつた様にそこら

てしまふ。

金があつたら必ず預金にして置くも

のだ。

十527 便利だが、その代り利子が安い。

十529 だから「略」お金は定期預金にした方がよいのだ。

十534 略、又何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。

十536 略、資金の足らぬ人に貸附けるのだ。

十538 略、其の差だけが銀行の収入になるのだ。

十541 寶玉をちりばめたやうなかはいゝ目、略。

十543 略、鳩は見るからに愛らしいものである。

十548 鳩を通信に使つたのは、餘程古い時代からの事で、略。

十549 略、殊に一時は非常に盛に行はれたが、略。

十549 略、殊に一時は非常に盛に行はれたが、略。

十5410 略、自然輕んぜられるやうになつた。

十552 略、やはり此の「略」通信者の働の偉大な事が證明せられたので、略。

十553 略、今では各國共に盛に傳書鳩の改良に力を用ひ、略。

十556 略、矢のやうに自分の巢に飛歸る。

十557 略、容易に通信が出来るの

である。

十557 略、容易に通信が出来るのである。

十5510 略、飛歸らせるのである。

十567 略、飼養所から食事所へ通つて食物を取るやうに馴らして、略。

十568 略、其の往來を利用するのである。

十574 略、其處を見覚えさせて飛歸らせるやうにする事も出来る。

十577 略、其の中に入れるのである。

十585 略、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。

十591 略、矢のやうに目的地へ向つて飛んで行くのを見たならば、略。

十592 略、矢のやうに目的地へ向つて飛んで行くのを見たならば、略。

十5910 略、「折あしく主人が留守でございますので。」

十607 略、世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。

十626 略、お泊め申してはいかゞでございませう。

十647 略、「粟飯ならございませうが。」

十6410 略、ちやうど有合はせの粟の飯、召上るならと妻が申してをりますが、略。

十651 略、いかゞでございませう。

う。

十661 略、「さうだく。略。」

十661 略、「さうだく。略。」

十665 略、「そんなりつばな鉢の木をたくのは、どうぞ止めて下さい。」

十667 略、私はもと鉢の木がすきで、いろく集めた事もありましたが、略。

十671 略、大切に殘して置いたのでございませうが、略。

十671 略、大切に殘して置いたのでございませうが、略。

十676 略、「いや、名前を申し上げる程の者ではございません。」

十681 略、それ程おつしやるなら、恥かしながら申し上げませう。

十684 略、此の通りの始末でございませう。

十687 略、かやうに落ちぶれてはゐるものの、略。

十716 略、これは何時ぞやの大雪に宿を借りた旅僧であるぞ。

十726 略、理非を正して裁斷致すであらう。

十741 略、出入口になつてゐたのださうです。

十744 略、門も主なものは残つてゐます。

十749 略、京城での一番にぎやかな處です。

十757 略、此處からは京城の市

街がまるで繪のやうに見えます。

十758 略、それに松がまばらに生えてゐる。

十761 略、左に景福宮の壯大な構がある。

十762 略、其の手前は一帯に朝鮮家屋で、略。

十763 略、りつばな洋館がそびえてゐる。

十766 略、松の緑色などが鮮かに浮出して見えるのは實にきれいです。

十769 略、龍山はもと漢江にのぞんだ小さな町であつたが、略。

十771 略、今では龍山も京城の中に編入されたのださうです。

十776 略、よくも續くと思ふくらゐの天氣續きで、雨といふものはごくたまにしか降りません。

十777 略、殊に秋晴の美しさはかくべつで、略。

十778 略、遠足好きの君なら、毎日何處へか出かけたてたまらないだらうと思ひました。

十779 略、毎日何處へか出かけたてたまらないだらうと思ひました。

十783 略、寒いといふよりもいたいやうに感じます。

十785 略、其の次には又其のくらゐの温暖さが續くといふやうに、寒さと暖さがほとんど規則正しく交

替することです。

十80 地下水のしづくが、四方から雨のやうに落ちて来る。

十80 6 〈略〉、周囲の壁は皆石炭で、〈略〉。

十81 5 これは炭坑内の地下水を坑外へ汲出す爲で、〈略〉。

十81 10 安全燈をたよりに歩いて行くと、不意に足もとからねずみが一匹飛出しました。

十82 2 事務員は平気で、「〈略〉。」と言つて笑ひました。

十82 7 坑内に馬が居るのは不思議だと思つて、聞いてみると、〈略〉。

十82 8 〈略〉、これは石炭を運ぶために飼はれてゐるのださうです。

十83 2 暗やみの中にかすかに安全燈が光つてゐる。

十84 4 炭車が一ぱいになると、〈略〉。

十84 6 歸途、事務員は次のやうな事を話してくれました。

十84 7 今から四百年許前の事ださうです。

十85 1 驚いて調べてみると、あたりは同じ眞黒な岩ばかりでした。

十85 3 附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。

十85 4 これがつまり此の炭坑の始ださうです。

十85 5 坑外に出ると、急に夜が明けたやうで、〈略〉。

十85 5 坑外に出ると、急に夜が明けたやうで、日光の有難さをしみ／＼感じると共に、〈略〉。

十85 9 〈略〉、更に生きかへつたやうな氣持がしました。

十86 2 〈略〉、我が國で出来る品物ばかりでは用が足らない。

十86 5 〈略〉、主にこれ等の事情からである。

十87 1 機械類は、近年我が國でも盛に製造されるやうになつたが、〈略〉。

十87 2 機械類は、近年我が國でも盛に製造されるやうになつたが、〈略〉。

十87 3 〈略〉、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。

十87 5 我が國は種々の品物を輸入してゐるばかりでなく、〈略〉。

十87 7 輸出品の主な物は、〈略〉。

十87 8 輸出品の主な物は、生絲・〈略〉など、〈略〉。

十87 9 〈略〉、輸出先はアメリカ合衆國・〈略〉等である。

十88 6 〈略〉、又支那へ輸出されるなども同じ例である。

十88 8 最近における我が國の輸出入總額は數十億圓の多額で、〈略〉。

十88 8 〈略〉、實に十數倍である。

十88 10 〈略〉國家が次第に盛になる印である。

十88 10 〈略〉のは國家が次第に盛になる印である。

十91 6 〈略〉、太郎は生麥生米生卵。

と、早口にすら／＼言へるやうになつた。

十91 7 太郎は得意になつて、〈略〉

十91 8 「おとうさん、こんなに言ひにくい言葉は外に無いでせう。」

十92 4 「はい。」といふ言葉と、『いゝえ。』といふ言葉だ。

十92 5 「はい。」『はい。』『いゝえ。』大變やさしい言葉ではありませんか。〈略〉。

十92 6 どうしてそんなに言ひにくいのです。

十92 8 誠にやさしいやうだが、〈略〉。

十92 9 誠にやさしいやうだが、それで中々言ひにくい場合があるのだ。

十93 1 翌日太郎が〈略〉、學校から歸る時の事であつた。

十93 3 其の近道といふのは田のあぜ道で、〈略〉。

十93 5 「あの橋は危険だから決して渡つてはならぬ。」

十93 6 太郎は前から父に、「〈略〉。」と固く禁ぜられてゐたのであるが、〈略〉。

十93 10 〈略〉、何れもぬれぬずみのやうになつて家に歸つた。

十94 2 「お前はどうしたのだ。〈略〉。」

十94 3 かねてあふないといつて置いた、あの橋を渡つたのでは無いか。

十94 10 すると、しまひに皆が僕の

事を弱蟲だといつて笑ひました。

十95 1 僕は残念でたまらなくなつたので、〈略〉。

十95 4 成程弱蟲だ。

十95 5 お前のやうな弱蟲には、〈略〉。

十95 6 〈略〉、ひよつとすると命を失ふやうなあふない時でも、〈略〉。

十95 8 〈略〉、「いゝえ。」といふ言葉は言ひにくいのだ。

十95 9 〈略〉、なぜすなほに『はい。』といはなかつたのだ。

十95 10 〈略〉、なぜすなほに『はい。』といはなかつたのだ。

十96 3 「それ御らん。『はい。』も言ひにくい言葉では無いか。」

十100 10 〈略〉、全く別の世界に來たやうな心持がする。

十101 1 とり／＼の花の色、むせ返るやうな強い香、〈略〉。

十101 3 〈略〉、まるで春の國に居るやうだ。

十101 5 みよ子、ずる／＼珍しい花があるだらう。

十101 6 此處は重に蘭の類を集めてある處だ。

十101 6 熱帶地方から持つて來たのだから、〈略〉。

十101 8 〈略〉、かうして年中六七十年代以上の暖さの處に置かなければいけないのだ。

十102 1 〈略〉一番美しいのは、〈略〉

薄紅色の花である。

十1027 此の袋で蟲をとるのだ。

十1029 中をのぞいて御らん、何かはいつてゐるやうだから。

十1031 〈略〉、はへのやうな蟲が二匹、〈略〉。

十1032 ほんたうに不思議な草だ。

十1032 ほんたうに不思議な草だ。

十1033 〔さあ、今度は葉のきれいな植物を集めてある處だ。〕

十1034 〔さあ、今度は葉のきれいな植物を集めてある處だ。〕

十1036 成程、緑色の絹絲で作つたのかと思はれるやうな葉もあれば、〈略〉。

十1043 〈略〉、實物を見るのは始めてである。

十1045 〈略〉、適當に暖めるやうになつてゐるのだ。

十1045 〈略〉、適當に暖めるやうになつてゐるのだ。

十1046 〈略〉、適當に暖めるやうになつてゐるのだ。

十1048 〈略〉、細長い室一ぱいに、目もさめるやうな草花が並べてある。

十1049 〈略〉、目もさめるやうな草花が並べてある。

十1053 どうか、美しいだらう。

十1053 どうか、美しいだらう。

十1054 〈略〉、こんなに早く咲くのだ。

十1055 〈略〉、こんなに早く咲くの

だ。

十1056 一度此の中にはいると、また寒い處へ出るのがいやになるね。

十10510 〈略〉鳥の姿も、見るから寒さうだ。

十1079 近き處ならば早速上り候て御世話も致すべく候へども、〈略〉。

十1128 マストの上の見張人が不意に「鯨、鯨。」と聲高く叫んで、北の方を指さした。

十1144 〈略〉、破裂矢が見事に破裂したのであらう。

十1144 〈略〉、破裂矢が見事に破裂したのであらう。

十1161 〈略〉、小山のやうな體を水面に横たへる。

十11610 〈略〉、霜の眞白に置いた田の中を走る。

十1174 太宰府町は太宰府神社のある處である。

十1179 何百年も経たであらうと思はれる樟の太木が茂り合つてゐる。

十1186 此の神社は菅公の御墓所に建てたものだと聞いて、一層感を深くした。

十1187 社殿の後に廻ると、其處は廣々とした梅林で、幾百本とも知れない古木の梅が咲續いてゐる。

十1189 白梅は今ちやうど眞盛りであるが、〈略〉。

十1191 〈略〉、不意にかん高い鳥の聲が聞えた。

十1193 〈略〉、それは園内に飼つてある鶴の聲であつた。

十1199 此處は菅公配所の跡である。

十1202 公は〈略〉、三年の歳月を送られたさうである。

十1204 〈略〉詩を作られたのも此處であらう。

十1214 〈略〉、りつばな學歴のある者もあつたのに、〈略〉。

十1221 〈略〉、はいると靜かに戸をしめました。

十1222 きれいずきで、つゝしみ深いことは、それでよく分りました。

十1225 人に親切なことはこれでも知れると思ひました。

十1226 あいさつをしてもいいねいで、少しも生意氣な風が無く、〈略〉。

十1227 〈略〉、少しも生意氣な風が無く、〈略〉。

十1228 〈略〉、何を聞いても、一々明白に答へて、〈略〉。

十1228 〈略〉、しかもよいいなことは言ひません。

十1235 それで注意深い男だといふことを知りました。

十1239 〈略〉、爪の先は眞黒になつてゐる者が多うございました。

十1243 りつばな人の紹介状よりも、〈略〉。

十1244 〈略〉、本人の行がたしかな保證です。

十113 地球上に存在するもので、

太陽の影響を受けぬものは一つもない。

十116 これほど我々に重大な關係のある太陽とは、〈略〉。

十117 〈略〉太陽とは、一體どんなものであらう。

十118 一口にいへば、白熱の状態にある一大火球で、之を形造つてゐるものは、〈略〉。

十118 〈略〉、液體に近い氣體であらうといふ。

十124 光の強さに至つては非常なもので、〈略〉。

十124 光の強さに至つては非常なもので、之を燭光でいへば〈略〉。

十129 〈略〉、太陽の表面は全部が一樣にかゞやいてゐるのではなく、〈略〉。

十129 〈略〉、太陽の表面は全部が一樣にかゞやいてゐるのではなく、〈略〉。

十132 此の黒點は多分表面に生ずるうづ巻であらうといふ。

十136 〈略〉、夜の空に銀の砂をまいたやうに見える小さな星の一つと同じものだといふ。

十136 ところが此の大きな太陽も、〈略〉小さな星の一つと同じものだといふ。

十138 〈略〉、これと同じやうなものなほ數限りもなく存在してゐるが、〈略〉。

十一 216 〈略〉、つまり裁判を念入にするためである。

十一 217 裁判を行ふのは判事の職務であり、〈略〉。

十一 218 〈略〉犯罪者の處罰を求めるのは検事の職務である。

十一 2110 〈略〉、刑事裁判では、不當な刑罰が加へられぬやうに〈略〉。

十一 221 〈略〉、不當な刑罰が加へられぬやうに被告を保護するために辯護士といふものがある。

十一 224 裁判の目的は、〈略〉人を罰することではない。

十一 224 此の世を〈略〉、平和な、秩序正しい世の中にするのが〈略〉。

十一 225 此の世を〈略〉世の中にするのが其の目的である。

十一 228 〈略〉、しかも其の争は、力の強い者やわがしこい者が勝つことになるであらう。

十一 228 若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、〈略〉。

十一 2210 〈略〉、我々は安心して生活することが出来ぬであらう。

十一 231 裁判は實に正義保護のため大切な仕事であり、〈略〉。

十一 231 裁判は實に正義保護のため大切な仕事であり、〈略〉。

十一 232 〈略〉、判事・検事・辯護士の任務は極めて重大なものといふべきである。

十一 232 〈略〉、判事・検事・辯護士

の任務は極めて重大なものといふべきである。

十一 354 窓 「これでは明日の山廻りはだめだ。」

十一 355 窓 「これでは明日の山廻りはだめだ。」

十一 358 窓 「あそこは一昨年植付をした地蔵山だ。」

十一 3510 〈略〉、目に見えるやうな氣がする。

十一 3610 一昨年植付けた時の覺書だ。

十一 371 窓 「こんなに間を置いてよいのですか。」

十一 375 窓 〈略〉、此の邊では太材を取るのが利益だから、〈略〉。

十一 375 窓 〈略〉、かう間を置いて植ゑるのだ。

十一 377 窓 〈略〉、十五年目には間伐をしなければならぬやうになるから。

十一 3710 〈略〉補植するのは、翌年一回だけだといふから、〈略〉。

十一 3710 〈略〉、今年はもうしなくともよいのであらう。

十一 382 〈略〉、それでも木が競争するやうに、しんを立ててすくすくと延びてゐるのを見ると、〈略〉。

十一 383 〈略〉、非常にうれしい。

十一 384 木でも見下されるのがいやなのか、〈略〉。

十一 387 〈略〉枝打は、面白いものだ。

十一 389 〈略〉、今まで兩方の枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて〈略〉。

十一 3810 〈略〉、〈略〉急に間がすいて如何にも氣持よさうに見える。

十一 392 窓 「杉の散髪だ。」

十一 397 〈略〉、又空氣の流通がよくなつて蟲がつかなくなるさうだ。

十一 398 〈略〉、枝打をしないと木に節が出来ることである。

十一 401 〈略〉、其處が節になるのだといふ。

十一 403 〈略〉あの杉や檜は、何時になつたら伐るのだらう。

十一 404 〈略〉、三十年目から五十六年目ぐらゐの間に伐るのださうだから、〈略〉。

十一 404 〈略〉、三十年目から五十六年目ぐらゐの間に伐るのださうだから、〈略〉。

十一 406 〈略〉、其の時は僕がおとうさんくらゐの年になつてゐるわけだ。

十一 407 今年伐るはずのは、おとうさんの子供の時植ゑたのだといふが、〈略〉。

十一 409 窓 「植林は貯金のやうなもので、〈略〉。」

十一 409 窓 「植林は貯金のやうなもので、〈略〉。」

十一 409 窓 「植林は貯金のやうなもので、〈略〉。」

十一 4010 おとうさんは、よく「〈略〉。」とおつしやるが、ほんたうにさうだ。

十一 4010 おとうさんは、よく「〈略〉。」とおつしやるが、ほんたうにさうだ。

十一 496 一體ゴムは何からどうして造るのであらうか。

十一 499 ゴムは、〈略〉白色の液を原料として、製造したものである。

十一 501 これには種類が多く、一番よいのはパラゴムといふのである。

十一 502 〈略〉、此の木から取つたものである。

十一 504 〈略〉、パラゴムの名が生じたわけである。

十一 506 〈略〉、山野に自生するゴムの木から原料をとるのであるが、〈略〉。

十一 511 〈略〉、南洋におけるゴムの栽培は頗る盛になつた。

十一 518 〈略〉、又は苗木を植付けるのであるが、〈略〉。

十一 522 〈略〉、苦心はなか／＼一通りでない。

十一 524 切付といふのは、〈略〉、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。

十一 526 元來ゴム液は、〈略〉乳管組織といふ所から出るものであるから、〈略〉。

十一 528 〈略〉、〈略〉それより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。

十一 529 此の傷から出て来るゴム液は、流れて下のコップにたまるのである。

十一 532 〈略〉コップにたまつた液

十一 532 〈略〉コップにたまつた液

を集めて歩くのである。

十一 53 3 〈略〉、先づこして不純な物を取除き、〈略〉。

十一 53 5 〈略〉、機械で薄くにして乾かすのである。

十一 53 6 こゝまでが原産地における仕事である。

十一 53 8 加硫法とは、ゴムに硫黄をまぜる事で、〈略〉。

十一 53 8 〈略〉、かうするとゴムが非常に弾力を増して来る。

十一 53 10 之をそれ／＼用途に應じて更に加工するのである。

十一 54 4 ゴムの用途は、年を追うて益々廣くなるばかりである。

十一 54 7 昔、アフリカの或港に一そこの船がとまつてゐた時の話である。

十一 55 1 船員等は、如何にも氣持よささうに泳ぎ廻つてゐたが、〈略〉。

十一 55 2 〈略〉、中にもうれしさに見えたのは、〈略〉。

十一 55 3 〈略〉、中にもうれしさに見えたのは、十三四になる二人の少年であつた。

十一 55 4 一人は老砲手の子である。

十一 55 6 〈略〉、どうしたのか急に相手にぬかれて、〈略〉。

十一 55 7 〈略〉老砲手は、急に氣をもんで、「略」と、甲板からしきりに勵ました。

十一 55 10 図 「ふかだく。」

十一 55 10 図 「ふかだく。」

十一 56 5 老砲手は氣ちがひのやうになつて、〈略〉。

十一 56 7 〈略〉、夢中で泳ぎくらを續けてゐる。

十一 58 4 砲手はその結果を見るのを、おそれるやうに、手で顔をおほつて〈略〉。

十一 58 7 〈略〉、先づ目に入つたのは、大きなふかの死體であつた。

十一 59 4 〈略〉、街路が眞直で幅の非常に廣いことである。

十一 59 5 〈略〉、街路が眞直で幅の非常に廣いことである。

十一 59 5 〈略〉先づ感ずることは、街路が眞直で幅の非常に廣いことである。

十一 59 5 市街は此の眞直な路によつて〈略〉割られてゐる。

十一 59 6 市街は此の眞直な路によつて、基盤の目のやうに正しく割られてゐる。

十一 59 6 主な通にはアカシヤの並木が青々と茂つてをり、〈略〉。

十一 59 9 〈略〉、〈略〉大通は、むしろ公園ともいふべきもので、〈略〉。

十一 59 10 未開の土地を切開いて、思ふまゝに設計して造つた町であるから、〈略〉。

十一 60 1 〈略〉、總べてが大規模でのび／＼としてゐる。

十一 60 7 〈略〉、實にのどかである。

十一 61 2 〈略〉、北海道鐵道沿線中の

最高所である。

十一 61 7 〈略〉、恐らく全道第一の壯觀であらう。

十一 61 8 右手には遠く日高境の山々が大浪のやうに連なり、〈略〉。

十一 62 2 〈略〉のは、サホロ嶽の連峯の一つであらう。

十一 62 3 〈略〉上り列車は、ちやうどおもちやのやうに見える。

十一 62 6 十勝川の流域一帯の廣野はいはゆる十勝平原で、〈略〉。

十一 62 7 〈略〉、其の中心をなすものは帶廣の町である。

十一 62 8 〈略〉のが此の町の始りであつた。

十一 62 9 當時此のあたりは未開の原野で、殆ど交通の便もなく、〈略〉。

十一 62 10 〈略〉、唯僅かに十勝川を下するアイヌの丸木舟の便をかりるに過ぎなかつた。

十一 63 2 それが今は〈略〉りつばな町となつたのである。

十一 63 2 それが今は〈略〉りつばな町となつたのである。

十一 63 6 こんな廣い畠であるから、〈略〉。

十一 63 9 トラクターはちやうど軍用のタンクのやうな形で、〈略〉。

十一 63 9 トラクターはちやうど軍用のタンクのやうな形で、〈略〉。

十一 65 1 農業者は多く古い習慣になづみやすいものであるが、〈略〉。

十一 65 4 はてしなく續く廣野の中で、人々は自由な大氣を呼吸しながら、〈略〉。

十一 65 4 〈略〉、土の香に親しんで樂しげに働いてゐる。

十一 65 6 十勝の平野は心ゆくばかり晴々しい處である。

十一 65 8 「人は火を用ひる動物。」といはれてゐるやうに、火を使用するのは人類ばかりで、〈略〉。

十一 65 9 〈略〉、火を使用するのは人類ばかりで、〈略〉。

十一 65 9 〈略〉、他の動物には見られない所である。

十一 66 1 一體人は最初どうして火を得たであらうか。

十一 66 4 〈略〉自然の火から、火種を取つたものであらう。

十一 66 6 〈略〉、木片と木片をこすりあはせて火を得る法をさとするやうになつた。

十一 66 8 〈略〉、石や金を打合はせて火を出す法を考へるやうになつた。

十一 66 9 此の方法は〈略〉長い間行はれてゐたものであるが、〈略〉。

十一 67 1 マツチは今から約百年前に發明されたものである。

十一 67 3 火の熱は、初め主として食物を調理するのに用ひたもののやうであるが、〈略〉。

十一 67 8 〈略〉、汽車や〈略〉を動かすのに大切なものとなつてゐる。

- 十一 67 10 燈火としては、初め松の木や魚・獸の油などをたいいたのであつたが、〈略〉。
- 十一 68 3 かくして人は、暗黒の世界からだんく光明の世界へと、みちびかれて來たのである。
- 十一 68 4 「必要は發明の母。」である。
- 十一 68 7 しかし火の利用法は、決してこれで完成したといふわけではあるまい。
- 十一 68 9 〈略〉、今のガスや電氣にかはることであらうか。
- 十一 69 2 小僧一人だけ自由に室内に入らせて、〈略〉。
- 十一 69 5 〈略〉、今にも消えさうになつた。
- 十一 70 2 〇「あなたがたはとんでもない人たちだ。」
- 十一 70 5 〇「物を言はないのはわしばかりだ。」
- 十一 70 7 本居宣長は〈略〉松坂の人である。
- 十一 70 8 若い頃から讀書がすきで、〈略〉、一心に勉強してゐた。
- 十一 71 2 〇「どうも残念なことでした。」
- 十一 71 8 〇〈略〉、これから參宮をなさるのださうです。
- 十一 72 2 〇「どうかして御日にかゝりたいものだが。」
- 十一 73 8 〈略〉のは、それから數日の後であつた。
- 十一 73 10 眞淵は〈略〉、いろく

- つばな著書もあつて、〈略〉。
- 十一 74 1 宣長はまだ三十歳餘り、温和なひとりのうちに、〈略〉。
- 十一 74 4 年こそちがへ、二人は同じ學問の道をたどつてゐるのである。
- 十一 74 5 〈略〉、眞淵は宣長の學識の尋常でないことをさとつて、〈略〉。
- 十一 74 5 〈略〉、非常にたのもしく思つた。
- 十一 75 3 〇〈略〉、どうも古い言葉がよくわからないと十分なことは出来ない。
- 十一 76 2 〇〈略〉、最後の目的に達するやうになさい。
- 十一 77 1 有名な古事記傳といふ大著述は〈略〉。
- 十一 77 2 有名な古事記傳といふ大著述は此の研究の結果で、〈略〉。
- 十一 78 1 我々は始ど貨幣・紙幣なくして一日も生活することは出来ぬといつてもよいからである。
- 十一 78 2 此のやうに便利なものも、〈略〉。
- 十一 78 2 此のやうに便利なものも、〈略〉。
- 十一 78 6 〈略〉、人間は實に種々様々なものを使用してゐたのである。
- 十一 78 7 〈略〉、人間は實に種々様々なものを使用してゐたのである。
- 十一 78 10 しかしこれらの物は、受取る者にそれが不用であつたり、〈略〉。
- 十一 79 1 〈略〉、思ふやうに分割する

- ことが出来なかつたり、〈略〉。
- 十一 79 3 〈略〉、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。
- 十一 79 4 〈略〉、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。
- 十一 79 5 かうして出來た貨幣は極めて使用に便利ではあるが、〈略〉。
- 十一 79 5 〈略〉、尚場合によつては持運びに不便なので、〈略〉。
- 十一 79 7 今では世界各國、貨幣・紙幣を用ひない國はないのである。
- 十一 83 5 今日は始めての遠泳だと思ふと、〈略〉。
- 十一 83 6 〈略〉、何だかうれしいやうな心配なやうな氣がする。
- 十一 83 6 〈略〉、何だかうれしいやうな心配なやうな氣がする。
- 十一 83 6 〈略〉、何だかうれしいやうな心配なやうな氣がする。
- 十一 83 8 砂の上を歩いて行くと、足の裏が焼けるやうだ。
- 十一 84 4 今日殊に波も靜かだ。
- 十一 84 4 此の分ならば五海里や十海里は何でもない。
- 十一 84 8 〈略〉、水の色はものすごい程濃い紺色だ。
- 十一 85 2 竹島を越したと思ふと、急に水が冷たくなつた。
- 十一 85 4 何だか氣持の悪いものだ。
- 十一 85 9 僕も急に元氣がなくなつて、〈略〉。
- 十一 86 1 〇「いや、こゝがまん

- しどころだ。〈略〉。」
- 十一 86 2 〇「〈略〉。そんな弱いことではだめだ。」
- 十一 86 5 〈略〉、もうつかれきつて氣も遠くなるばかりだ。
- 十一 86 6 〇「しつかりやれ。もう少しだ、もう少しだ。」
- 十一 86 6 〇「しつかりやれ。もう少しだ、もう少しだ。」
- 十一 86 8 これに力を得て、又一しやうけんめいに泳いで行く。
- 十一 87 4 〇「あ、五海里の海上を僕も泳ぎきることが出來たのだ。」
- 十一 87 10 〇「大層天氣がおだやかになつたね。〈略〉。」
- 十一 88 1 〇「〈略〉。二百十日もこれで無事にすんだ。」
- 十一 88 7 〇これは略本曆だ。
- 十一 88 8 〇これは一月一日から數へた日數だ。
- 十一 89 3 〇「成程、二百十日目だ。」
- 十一 89 10 〇「それも立春から數へると八十八日目で、稻をはじめ大ていの物の種をまく目安になる日だ。」
- 十一 90 1 〇「〈略〉、稻をはじめ大ていの物の種をまく目安になる日だ。」
- 十一 90 2 〇〈略〉、今年は紀元何年であるか、〈略〉。
- 十一 90 3 〇〈略〉、何月何日は何曜日であるか、〈略〉。
- 十一 90 4 〇僕はこれまで曆といふと、〈略〉、〈略〉・月食が何時になるかと

いふやうな事を見るものとはばかり考へてゐたので、〈略〉。

十一 90 7 厓を見れば、まだいろ／＼大切な事がわかる。

十一 90 8 此の頃の日の出や日の入は何時だらう、〈略〉。

十一 90 8 厓 〈略〉、満月は何日頃だらう。

十一 91 1 厓 おとうさんが毎年潮干狩によい日を選ぶのも『月齢』を見て知るのだ。

十一 91 4 厓 そこを見ると、臺灣や〈略〉のやうな遠い所の氣候までも大體分る。

十一 91 8 厓 かういふやうに、厓は〈略〉大切なものだ。

十一 91 9 厓 かういふやうに、厓は〈略〉大切なものだ。

十一 91 9 厓 かういふやうに、厓は〈略〉大切なものだ。

十一 92 2 厓 新は新厓、舊は舊厓のことだ。

十一 92 5 厓 それから太陰厓を舊厓、太陽厓を新厓といふやうになつた。

十一 92 6 厓 どうして太陽厓を用ひるやうになつたのですか。

十一 92 7 厓 太陽厓の方がよく季節にあつて都合がよいからだ。

十一 92 9 厓 〈略〉、それを本としてこしらへたものだ。

十一 92 10 厓 其の間は約三百六十五日と四分の一だが、〈略〉。

十一 93 3 厓 ところが太陰厓は〈略〉もので、通例十二箇月を一年とするが、〈略〉。

十一 93 7 厓 したがつて二百十日も太陽厓なら大が九月一日で、〈略〉。

十一 93 7 厓 したがつて二百十日も太陽厓なら大が九月一日で、ちがつても一日ぐらゐるものだが、〈略〉。

十一 93 8 厓 〈略〉、ちがつても一日ぐらゐるものだが、〈略〉。

十一 93 10 厓 櫻の咲く季節でも霜の降る季節でも、やはりさうである。

十一 93 10 厓 こんな不便な厓でも〈略〉、今でも使つてゐるものがあるやうだ。

十一 94 1 厓 〈略〉、今でも使つてゐるものがあるやうだ。

十一 94 3 厓 厓は實に重寶なものだ。

十一 94 3 厓 厓は實に重寶なものだ。

十一 94 3 厓 厓は實に重寶なものだ。

十一 94 3 厓 こんな重寶なものがあるのに、〈略〉。

十一 94 4 厓 〈略〉、それを利用しないでゐるのは寶の持ちぐされだ。

十一 95 3 厓 それは三方が丸太の壁で、一方は明けはなしになつてゐて、〈略〉。

十一 95 4 厓 〈略〉、戸も窓も床もないものであつた。

十一 95 7 厓 〈略〉、父が畠を打てば自分は種をまくといふ風にかひがひしく働いてゐた。

十一 95 9 厓 一家の暮し向は誠にあはれ

なもので、〈略〉。

十一 95 9 厓 一家の暮し向は誠にあはれなもので、〈略〉。

十一 95 10 厓 〈略〉、食物なども自由には得られず、〈略〉。

十一 96 1 厓 かういふ有様であつたから、〈略〉。

十一 96 4 厓 〈略〉、僅かに心をなぐさめてゐた。

十一 96 10 厓 〈略〉、リンカーンの喜は一通りでなかつた。

十一 97 7 厓 鉛筆や紙も自由には買へなかつたから、〈略〉。

十一 97 9 厓 シャベルが數字で眞黒になると、〈略〉。

十一 97 10 厓 大事なことは〈略〉。

十一 98 1 厓 〈略〉忘れないやうにしておく。

十一 98 1 厓 かういふ心掛であつたから、〈略〉。

十一 98 2 厓 〈略〉、成績は何時も優等であつた。

十一 98 7 厓 ところが家に書物がないばかりでなく、〈略〉。

十一 98 9 厓 熱心なリンカーンは、〈略〉。

十一 99 5 厓 リンカーンはかね／＼此の偉人を非常にしたつてゐたので、〈略〉。

十一 99 9 厓 燈が盡きると翌朝すぐ手に取れるやうに、まくらもとの壁際に置く。

十一 100 9 厓 リンカーンは其の本をてい

ねいに乾かして、〈略〉。

十一 101 2 厓 リンカーンは父の助手をして忠實に勤くと共に、〈略〉。

十一 101 3 厓 〈略〉、非常な熱心と努力とをもつて勉強を續けた。

十一 101 4 厓 彼が他日大統領となり、世界の偉人として萬人に仰がれるやうになつたのは、〈略〉。

十一 101 5 厓 〈略〉、實に此の少年時代の苦心のたまものである。

十一 114 1 厓 〈略〉、國運の發展を期することは皆同じである。

十一 114 2 厓 一體自治の精神とは何であるか。

十一 114 4 厓 〈略〉、誠意其の團體の爲に力を盡くす精神が即ちそれである。

十一 114 5 厓 此の精神は實に自治制の根本であり、〈略〉。

十一 114 5 厓 〈略〉、又其の生命である。

十一 114 10 厓 〈略〉、常に此の公平な精神をもつてしなければならぬ。

十一 115 3 厓 〈略〉、決して〈略〉關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。

十一 115 5 厓 〈略〉、私利によつて勧誘するとかいふやうな手段を用ひたり、〈略〉。

十一 115 6 厓 〈略〉、自治の精神に全く反するものである。

十一 115 9 厓 〈略〉、決して私心をもたないものである。

十一 116 1 厓 〈略〉、如何に其の職務に忠

實であつても、〈略〉。

十二116 2 〈略〉、〈略〉自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。

十二116 7 〈略〉、始めて其の効果を完全に擧げることが出来る。

十二116 10 〈略〉、皆公共心の發動であつて、〈略〉。

十二117 1 〈略〉、自治團體を助長するものであるから、〈略〉。

十二117 3 制度を運用するのは人である。

十二117 9 ふと向ふを見ると、〈略〉りつばな騎馬の人たちが、〈略〉。

十二118 9 さうしてジョージに早くあけて通すやうにと言つた。

十二119 10 しかしジョージは依然として、〈略〉。」とくり返すばかりであつた。

十二120 2 図 「私は公爵ウエリントンだ。〈略〉。」

十二120 2 図 「〈略〉。よい子だから私の頼をきいてくれ。」

十二120 5 〈略〉ウエリントン公爵が勲功も高く、りつばな人物であるといふ事を聞いてゐたので、〈略〉。

十二120 5 〈略〉ウエリントン公爵が勲功も高く、りつばな人物であるといふ事を聞いてゐたので、〈略〉。

十二120 6 〈略〉、さて靜かに口を開いた。

十二121 8 最初にはいつたのは原料を調査するところで、〈略〉。

十二122 1 〈略〉、白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、〈略〉。

十二122 5 〈略〉、どんなにつらいことであらうと思つた。

十二122 5 〈略〉、どんなにつらいことであらうと思つた。

十二123 7 まるであめ細工のやうである。

十二123 10 何が出来るであらうかと思つてゐると、〈略〉。

十二124 2 實にうまいものである。

十二124 4 こゝは加工場である。

十二124 5 〈略〉、石や木や金の圓板が車輪のやうに廻つてゐる。

十二125 1 皿・コップをはじめ、〈略〉などがきれいに並んでゐた。

十二125 2 取分け美しかったのは電燈の笠で、赤・黄・紫・緑とりどりに〈略〉。

十二125 3 〈略〉、赤・黄・紫・緑とりどりに目もさめるばかりであつた。

十二125 3 〈略〉、赤・黄・紫・緑とりどりに目もさめるばかりであつた。

十二129 10 〈略〉、又物を集めることがすきで、〈略〉。

十二1210 3 〈略〉、餘りすばしい生れつきでなかつたので、〈略〉。

十二1210 5 図 「お前のやうに大の世話やねずみを取ることにばかり熱心では困るではないか。」

十二1210 6 図 「お前のやうに〈略〉にばかり熱心では困るではないか。」

十二1210 6 図 「お前のやうに〈略〉にばかり熱心では困るではないか。」

十二1211 1 〈略〉、人はなぜみんな鳥類の研究をしないだらうと思議に思ふやうになつた。

十二1211 1 〈略〉、〈略〉と思議に思ふやうになつた。

十二1211 1 〈略〉、〈略〉と思議に思ふやうになつた。

十二1211 3 温順な彼は父の命に従つて勉強してゐたが、〈略〉。

十二1211 5 〈略〉、何時の間にか好きな博物學の研究が主となつてしまつた。

十二1211 7 此の頃のことであつた。

十二1212 6 〈略〉のは、二十三歳の時である。

十二1212 9 〈略〉本國に歸つたのはそれから五年の後である。

十二1212 10 〈略〉彼の博物學者としての基礎が十分に出来、〈略〉。

十二1213 3 ダーウィンは〈略〉、あくまでそれにこる性質で、〈略〉。

十二1213 3 〈略〉、満足な結果を得るまでは決して中途でやめなかつた。

十二1213 6 〈略〉、たとへ十分、十五分の餘暇でも無益に費すことがなかつた。

十二1213 7 ダーウィンの後半生は病氣がちであつたが、〈略〉。

十二1213 10 〈略〉、下等なものから高等なものへ〈略〉。

十二1214 1 〈略〉、下等なものから高等なものへ〈略〉。

十二1214 1 〈略〉、生物は〈略〉、下等なものから高等なものへと進むものであるといふことを證明した。

十二1214 2 これが有名な進化論で、〈略〉。

十二1214 2 これが有名な進化論で、學界を根本から動かしたものである。

十二1214 3 〈略〉、學界を根本から動かしたものである。

十二1219 10 〈略〉、何處からともなくのどかに聞えて来る。

十二1221 2 〈略〉、蜜柑の木でない處はない。

十二1221 5 〈略〉、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。

十二1221 6 さつきの歌の主であらう。

十二1221 9 あれは港の親船へ蜜柑を運んで行くのであらう。

十二1221 10 〈略〉、其處からも夢のやうに船歌が聞えて来る。

十二1222 2 商業は之に従事する商人だけを利用するためのものではない。

十二1222 4 〈略〉、品質のよい品物を作るべく安價になるべく敏速に供給して、〈略〉。

十二1222 6 これ即ち〈略〉堅實に自己の事業を發展させる道である。

十二1222 7 これ即ち〈略〉堅實に自己の事業を發展させる道である。

十二1222 9 〈略〉、見本には精良な品を使つて、〈略〉。

十二1222 9 〈略〉、見本には精良な品を使つて、〈略〉。

湖岸線は大體單調であるが

《略》。

十二504 《略》、東南岸だけは《略》

や、複雑になつてゐる。

十二511 《略》、此の湖中での一番深い處である。

十二513 我が國の湖沼中此の湖より深いものは秋田縣の田澤湖だけである。

十二515 湖の水は東岸から《略》流れ出るのであるが、《略》。

十二518 《略》、僅かに三十八センチメートルに過ぎない。

十二519 これは主として周圍が山で、流れ込む川に大きいのがないのに原因してゐる。

十二523 《略》、魚類のさかのぼる道を絶つてゐるからである。

十二524 今日鱒の産地として世に知られるやうになつたのは《略》。

十二525 《略》世に知られるやうになつたのは養魚經營の賜である。

十二528 《略》ねちが、不意に《略》、明るい處へ出された。

十二531 《略》、いろいろの物の形がごとくと耳にはいり目にはいるばかりで、《略》。

十二532 《略》、此處は時計屋の店であることがわかつた。

十二534 自分の置かれたのは、《略》ふたガラスの中で、《略》。

十二538 《略》、いろいろな時計がたくさん並んでゐる。

十二539 かち／＼と氣ぜはしいのは置時計で、《略》。

十二539 《略》、かつたり／＼と大やうなのは柱時計である。

十二5310 《略》、かつたり／＼と大やうなのは柱時計である。

十二542 《略》、あれは何の役に立つのであらう、《略》。

十二543 《略》、これはどんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、《略》。

十二545 《略》、自分は何といふ小さい情ない者であらう。

十二548 《略》、自分よりはえらさうである。

十二549 《略》、どれもこれも不足は無ささうである。

十二5410 《略》、唯自分だけが此のやうに小さくて、《略》。

十二551 《略》、何の役にも立ちさうにない。

十二551 《略》、あゝ、何といふ情ない身の上であらう。

十二553 《略》、不意にばた／＼と音がして、《略》。

十二554 男の子と女の子である。

十二568 《略》、誰だ、仕事臺の上をかき廻したのは。

十二569 《略》、あゝ、いふねちは《略》、あれ一つしか無いのだ。

十二572 ねちは之を聞いて、飛上るやうにうれしかつた。

十二573 それでは自分のやうな小さな者でも役に立つことがあるのかしらと、《略》。

十二574 それでは自分のやうな小さな者でも役に立つことがあるのかしらと、夢中になつて喜んだが、《略》。

十二574 《略》、此のやうな處にころげ落ちてしまつて、《略》。

十二576 《略》、それが又心配になつて來た。

十二582 《略》、日光が店一ぱいにさし込んで來た。

十二587 しかも一番喜んだのはねちであつた。

十二589 《略》、大事さうにもとのふたガラスの中へ入れた。

十二593 龍頭を廻すと、今まで死んだやうになつてゐた懷中時計が、《略》。

十二594 《略》、忽ち愉快さうにかち／＼と音を立て始めた。

十二596 ねちらは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出來たのだと思ふと、《略》。

十二605 《略》、「自分もほんたうに役に立つてゐるのだ。」

十二662 《略》、餘生を安樂に送らうと決心した。

十二665 《略》、お前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、《略》。

十二666 《略》、わしはそれが知りたいのだ。

十二669 ゴネリルの答は如何にも言葉巧みであつた。

十二676 《略》、私も姉上と同じ心で、——ほんたうに姉上は私の思つてゐる通りをおつしやいました。

十二678 《略》、唯少しおつしやり足りませぬばかりで、《略》。

十二679 《略》、ひたすら父上を大事に致すのを此の上もない仕合はせと存じてをります。

十二682 コーデリヤは王が一番かはいがつてゐる娘であつた。

十二686 王は自分の耳を疑ふかのやうに目を見張つた。

十二688 《略》、それでは返事にならぬではないか。

十二689 《略》、私は胸にある事が十分に言へないのでございます。

十二689 《略》、私は胸にある事が十分に言へないのでございます。

十二691 《略》、唯私は子としての務を盡くしたいと思ふばかりでございます。

十二693 《略》、どうしたのだ、コーデリヤ。

十二693 《略》、何とか言方がありさうなものだ。

十二694 《略》、何とか言方がありさうなものだ。

十二695 《略》、父上、私は唯ほんたうの事を申し上げてゐるのでございます。

- 十二699 〇 永の勘當だ。
- 十二708 〈略〉、コーデリヤの簡単な答の中にも十分真心のこもつてゐるのを認め、〈略〉。
- 十二713 ゴネリルは決して氣だてのやさしい女ではなかつた。
- 十二713 二週間もたゝぬ中にもう王に無愛想な仕向をした。
- 十二715 其の上王に百人の家來を五十人に減ずるやうにといつた。
- 十二716 王は胸も張裂けんばかりに怒り、〈略〉。
- 十二721 〈略〉娘が、揃ひも揃つてこれ程の不孝者であらうとは。
- 十二723 〈略〉王は、我にもあらず荒野の末にさまよひ出た。
- 十二725 其の夜は〈略〉雷鳴・電光ものすさまじい夜であつた。
- 十二7210 それは父が姉たちの爲に虐待されてゐるといふことであつた。
- 十二735 フランス王の侍醫はとりあへず老王に藥を與へて靜かに眠らせた。
- 十二738 〇 「たとひ我が親でないにしても、〈略〉。」
- 十二7310 〇 「略」、姉上もお氣の毒とお思ひになりさうなものなのに、〈略〉。」
- 十二7310 〇 「略」、姉上もお氣の毒とお思ひになりさうなものなのに、〈略〉。」
- 十二746 〇 此處は何處だらう。
- 十二748 〇 一體わしは今までどうしてゐたのだらう。
- 十二751 〇 これはどなたであらうな。
- 十二752 〇 笑つて下さるな、どうも娘のコーデリヤのやうに思はれてならぬが。
- 十二754 〇 「其のコーデリヤでございます。」
- 十二756 〇 お前はわたしをうらんでゐるはずだが。
- 十二762 コーデリヤはそれを聞いて腸をちぎられるやうな思がした。
- 十二764 其の後老王は〈略〉餘生を安樂に送つたといふ。
- 十二767 〈略〉、だいぼう網で取るほど勇壯なものはあるまい。
- 十二769 だいぼう網は〈略〉、非常に大きなものである。
- 十二769 だいぼう網は〈略〉、非常に大きなものである。
- 十二772 即ち水のはいる處に當る部分が身網で、〈略〉。
- 十二773 〈略〉、柄に當る部分が垣網である。
- 十二779 潮に流されないやうに、〈略〉石などが重りに附けてある。
- 十二798 〈略〉光景は、實に壯快の極みである。
- 十二799 船がまぐろで一ぱいになると、〈略〉。
- 十二801 〈略〉、まるで凱旋の將士のやうに見える。
- 十二883 法律は、國家といふ共同生活、〈略〉幸福なものにするための規則であるから、〈略〉。
- 十二884 法律は、國家といふ共同生活を、〈略〉幸福なものにするための規則であるから、〈略〉。
- 十二898 〈略〉、始めて法律が出来上るのである。
- 十二8910 これ等の命令も國の規則であつて、〈略〉。
- 十二901 〈略〉、廣い意味でいふ場合にはやはり法律であるから、〈略〉。
- 十二902 〈略〉、其の制定も出来る限り慎重な手續を経る。
- 十二906 我々は常に國法にしたがつて幸福な生活を営み、〈略〉。
- 十二912 釋迦は〈略〉、何事も深く考へ込むたちであつた。
- 十二914 ぼろを着た農夫は玉のやうな汗をかくて田をすき起し、〈略〉。
- 十二919 彼はだんく物思に沈むやうになつた。
- 十二922 〈略〉、杖にすがるあはれな老人や、〈略〉。
- 十二926 〇 我々の行末はどうなるだらうか。
- 十二942 彼は遂に「〈略〉。」と決心して、或靜かな森へ行つた。
- 十二949 ところが此の新たな態度に驚いた五人の友は、〈略〉。
- 十二956 或時のことである。
- 十二971 續いて釋迦はマガダ國王をたづねてねんごろに道を説聞かせ、〈略〉。
- 十二976 〈略〉、反抗するばかりでなく、〈略〉。
- 十二977 殊にデーバダッタは、いとこの身でありながら、〈略〉。
- 十二981 〈略〉、石は釋迦の足を傷つけただけで、目的を果すことは出来なかつた。
- 十二9810 〇 これまで説いた教そのものが私の命である。
- 十二991 〇 〈略〉私は永遠に生きてゐる。
- 十二992 〈略〉、「〈略〉。」と論じて靜かに眼を閉ぢた。
- 十二1045 これからが世に恐しい青のくさり戸である。
- 十二1045 〈略〉屏風のやうな絶壁をたよりに、〈略〉。
- 十二1046 〈略〉、見るから危げな數町のかけはしを造つたものであるが、〈略〉。
- 十二1047 〈略〉、見るから危げな數町のかけはしを造つたものであるが、〈略〉。
- 十二1049 享保の頃の事であつた。
- 十二1053 〈略〉年の頃もよくわからぬくらゐであるが、〈略〉。
- 十二1057 〈略〉、たま／＼此の難處を通つて幾多のあはれな物語を耳にし、〈略〉。

十二106 1 〈略〉、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、〈略〉。
 十二106 2 〈略〉、神佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。
 十二106 9 〈略〉、あれは山師坊主で、〈略〉。
 十二106 10 〈略〉、あのやうなまねをして、〈略〉。
 十二106 10 〈略〉、人をろうらくするのであらうといふうはさが立つた。
 十二107 7 〈略〉、村の人々は、今更のやうに驚いた。
 十二107 9 〈略〉、これではどうにか出来さうである。
 十二107 10 一念こつた不斷の努力は恐しいものであると思ひつくと、〈略〉。
 十二108 1 〈略〉、此の見る影もない老僧の姿が、急に尊いものに見え出した。
 十二108 5 〈略〉、我々もあのくさり戸を渡る難儀をのがれようではないかと相談して、〈略〉。
 十二109 4 〈略〉、はては又村人全體が此の老僧から離れるやうになつた。
 十二110 5 〈略〉、彼が一生をさへげた大工事が見事に成就した。
 十二115 8 〈略〉、尚進んで電気機關車さへも用ひられるやうになりました。
 十二115 9 諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力もだん／＼電氣に變つて、〈略〉。

十二116 4 そればかりでなく、〈略〉。
 十二117 1 Edison が炭素線の電燈を發明したのは四十年ばかり前のことであつたが、〈略〉。
 十二117 3 一體最も理想的な燈火は〈略〉。
 十二117 4 一體最も理想的な燈火は太陽の光のやうに明るくて、〈略〉。
 十二117 5 〈略〉、しかもほたるの光のやうに熱をとまはないものであります。
 十二117 5 〈略〉、しかもほたるの光のやうに熱をとまはないものであります。
 十二117 9 電信や電話の發明は其の當時實に全世界を驚かしたものであります、〈略〉。
 十二117 10 自由、自由に消息を交換することが出来るやうになりました。
 十二118 1 自由、自由に消息を交換することが出来るやうになりました。
 十二118 2 自由、今やそれが盛に利用される機運となりました。
 十二120 4 小山はどうしてゐるだらうか。
 十二124 10 一舉に江戸を乗つ取る手はずである。
 十二125 2 しかし市中の混亂は蜂の巢を突いたやうなさわざである。
 十二125 2 しかし市中の混亂は蜂の巢を突いたやうなさわざである。
 十二125 6 かねてから百万畫策

して時局の圓滿な解決を計つてゐた。
 十二126 6 西郷をおとつたのである。
 十二127 10 しかし二人は互に信じ合つてゐる仲なので、〈略〉。
 十二128 1 話はおだやかに運ばれる。
 十二128 2 官軍方の御意見はどのやうなものか存じませんが、〈略〉。
 十二128 6 日本全國にのしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。
 十二128 8 之に比べれば、幕臣の身としては如何がな申分ではあるが、〈略〉。
 十二128 8 之に比べれば、幕臣の身としては如何がな申分ではあるが、〈略〉。
 十二128 9 徳川家の存亡などとは言ふにも足らぬ小事でござります。
 十二129 5 すると其のうちに又思の外な尻押なども現れて、〈略〉。
 十二129 6 事めんだうな筋合にならぬとも限りませぬ。
 十二129 7 拙者は、此の談判がよしどのやうに決着するにもせよ、〈略〉。
 十二129 8 拙者は、さやうな事になれかしとは毛頭考へませぬが、〈略〉。
 十二129 9 大勢は人力の如何ともしやうのないもので――。

十二130 2 特別の御仁慈を以ておだやかに事のまとまるやう〈略〉。
 十二130 3 誠に日本國の幸でござります。
 十二130 6 何分今一應の御評議を推して御願ひ申す次第でござります。
 十二132 4 維新の大事業もとゞこほりなく成し遂げられるやうになつた。
 十二132 9 今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、〈略〉。
 十二132 10 主として我々國民にそれだけすぐれた素質があつたからである。
 十二133 3 忠孝は實に我が國民性の根本をなすもので、〈略〉。
 十二133 5 東海の島に據つた日本は、國家を建設する上に頗る有利であつた。
 十二133 5 容易に外敵のうかがふことを許さないから、〈略〉。
 十二133 7 國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、〈略〉。
 十二133 7 國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、〈略〉。
 十二133 8 國內はおほむね平和であつた。
 十二134 2 熱烈な愛國心を養成した。
 十二134 3 其の上我が國の美しい風景

や温和な氣候は、〈略〉。

十二134 7 狭い島國に育ち、生活の安易な樂土に平和を樂しんでゐた我が國民は、〈略〉。

十二134 10 温和な氣候や美しい風景は、〈略〉。

十二135 1 温和な氣候や美しい風景は、人の心をやさしくし、優美にはするが、〈略〉。

十二135 3 〈略〉、徒に此の小天地を理想郷と觀じて、〈略〉。

十二135 7 〈略〉排斥されるやうなことも起つて来る。

十二136 1 〈略〉、〈略〉ことが、其の主たるものであらう。

十二136 3 〈略〉、かういふ短所はやがて我が國民から消去するであらうが、〈略〉。

十二136 4 〈略〉、出来る限り早く之を一掃することは我々の務ではあるまいか。

十二136 7 〈略〉、賢明な機敏な國民である。

十二136 7 〈略〉、賢明な機敏な國民である。

十二136 7 〈略〉、賢明な機敏な國民である。

十二136 8 〈略〉、之を巧みに自國のものとすることは、〈略〉。

十二136 9 〈略〉、實に我が國民性の一大長所である。

十二136 10 しかし此の半面にもまた短

所がうかゞはれないであらうか。

十二137 1 〈略〉創造力は、十分に發揮せられたことがなく、〈略〉。

十二137 4 〈略〉、遂に日本人には獨創力がないであらうと自らも輕んじ、〈略〉。

十二137 5 しかし模倣はやがて創造の過程でなくてはならぬ。

十二137 6 我々は何時かは模倣の域を脱して十分に獨創力を發揮し、〈略〉。

十二137 7 〈略〉、世界文明の上に大いに貢獻したいものである。

十二137 10 櫻の花の一時に咲き一時に散る風情を喜ぶのがそれであり、〈略〉。

十二138 1 〈略〉、古の武士が玉とくだけける討死を無上の名譽としたのがそれである。

十二138 8 こゝにもまた我々の反省すべき短所があるやうである。

十二138 9 我が國民の長所・短所を數へたならば、〈略〉。

十二138 10 〈略〉、之を十分に發揮すると共に、〈略〉。

十二139 2 〈略〉、之を補つて大國民たるにそむかぬ國民とならねばならぬ。

三22 2 犬ははなをくんくんいはせ、ををやたらにふつて、〈略〉。

六68 8 図 「さうだ、く。」

六68 8 図 「さうだ、く。」

六68 8 図 「さうだ、く。」

九21 5 ホンタウニ面白イデハナイカ。

十一63 4 皇にしても、〈略〉仕切ることをしないから、一枚の皇でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。

十二69 10 第二座の僧は、二人とも規則を破つたのが不快でたまらない。

ダーウィン 「人名」 3 ダーウィン ↓

チャールスダーウィン

十二11 2 父はダーウィンを醫者にしようと思つて大學へやつた。

十二13 2 ダーウィンは興味を覺える、と、あくまでそれにこる性質で、〈略〉。

十二13 7 ダーウィンの後半生は病氣がちであつたが、〈略〉。

ダーリング ↓グレースダーリング

たい 「対」 ↓いいたいじゆうまん

たい 「隊」 ↓いいたい・えいへいたい

たい 「鯛」 (名) 2 タヒ

七79 図 タヒ

七80 1 〈略〉、タヒ・アナゴ・ハモナ

ドノヤウニ、〈略〉。

たい (助動) 52 タイ たい 《タイ・

タウ・タカツ・タク》

二9 4 図 ミゴトニサイタ カキネ

三44 1 うらしまは〈略〉、うちへかへるのもわすれてゐましたが、そのうちにかへりたくなつて、〈略〉。

四12 3 鳥ニキタ白ウサギガ、ムカフノ大キナヲカヘ行ツテ見タイトオモツテ、〈略〉。

四15 8 図 ワタシハコノヲカヘ來タカツタノダ。

五13 6 図 これだけはお目にかけたと思ひます。

五29 1 図 「こんなしづかな所でくらししてみたい。」

五44 2 図 申したいことがあります。

五68 1 図 「〈略〉、もつとお前に聞かせて置きたい話がある。」

五69 3 〈略〉、米がとれるやうにしたものだと思つた。

六54 4 図 「べつにのぞみはございませんが、唐糸の身代りに立ちたうございます。」

七60 1 図 さておしまひに一ついつて置きたい事があります。

七61 4 図 どうか今から十分海になれて置くやうにしたらひたいのであります。

七72 1 図 其の上あなたのお名前をうけたまはりたうございます。

七88 5 マリーはどうかしてかくしてやりたいと思ひました。

八23 2 呉鳳は〈略〉、どうかして首

- 五〇七 〔略〕、此の停車場へ降りる人は、大い先づ第一に宮城をさしてまゐります。
- 七三九 〔略〕 輸出品は豆粕が第一で、〔略〕。
- 九一八 〔略〕 總べて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。
- 一二四八 〔略〕 然れども材の優良にして美麗なるは檜を以て第一とすべし。
- 一二四九 〔略〕 杉は吉野杉・秋田杉を以て第一とし、〔略〕。
- 一二五〇 〔略〕、何事も忍耐が第一とのかねての御教訓に従ひ、〔略〕。
- だいいち 〔第二〕 1 第一 八二五 〔略〕、自分の子がかう弱虫の泣虫では、第一藩主に對しても申しわけがない、〔略〕。
- だいいち 〔第一位〕 (名) 2 第一位 一一一五 〔略〕、我が居留民の数は、外國人中第一位を占めてゐる。
- 一二四六 〔略〕、其の需要の多きこと我が國の木材中第一位にあり。
- だいいち どうか 〔第一読會〕 (名) 2 第一讀會
- 一二八八 〔略〕 討論の形式は、普通第一讀會・第二讀會・第三讀會の三度の會議を経ることになつてゐる。
- 一二八九 即ち第一讀會で其の案を大體に調査し、〔略〕。
- だいいち 〔第一課〕 〔課名〕 4 第一課
- 十一目二 第一課 太陽
- 十二目二 第一課 明治天皇御製
- 十二目二 第一課 明治天皇御製
- たいいんれき 〔太陽曆〕 (名) 5 太陽曆
- 十一九二 〔略〕 曆には太陽曆と太陰曆とあつて、〔略〕。
- 十一九三 〔略〕、日本では明治五年まで太陰曆を用ひてゐたが、〔略〕。
- 十一九四 〔略〕 それから太陰曆を舊曆、太陽曆を新曆といふやうになつた。
- 十一九五 〔略〕 ところが太陰曆は月のみちたりかけたりする變化を本としてこしらへたもので、〔略〕。
- 十一九六 〔略〕 したがつて二百十日も太陽曆なら大い九月一日で、ちがつても一日ぐらゐるものだが、太陰曆になると三十日もちがふことがある。
- だいいち はくぶつかん 〔大英博物館〕 (名) 2 大英博物館
- 十二九五 〔略〕、國會議事堂・大英博物館・ウェストミンスター寺院、其の他見る物聞く物唯々驚く外はありません。
- 十二九六 〔略〕 昨日大英博物館を一覽しました。
- だいいち 〔大王〕 (名) 1 大王
- アレクサンドルだいいち 大王・アレクサンドルだいいち といふフィリップ
- 十八一 其の大王が東方諸國の遠征に出かけた時の事である。
- だいいち 〔大音〕 (名) 1 大音
- 十二九七 〔略〕 安芳は大音に「西郷はどこに居る。」と叫んだ。
- だいいち 〔大音聲〕 (名) 1 大音聲
- 十一九八 〔略〕 秀吉〔略〕、「てがらは仕勝ちぞ。かゝれ。」と大音聲。
- たいか 〔大家〕 (名) 1 大家
- 九二七 〔略〕 さうして終に當代第一の農學の大家となつて、〔略〕。
- たいか 〔大河〕 (名) 2 大河
- 五二五 〔略〕、小川カラ大河へ、流れくテ海へ行キマス。
- 八二六 〔略〕 揚子江ハ支那第一ノ大河ニシテ、〔略〕。
- だいいち 〔代価〕 (名) 1 代價
- 九四三 〔略〕、一手桶何程トイフ代價ヲハラヒテ水ヲ買フ。
- たいかい 〔大海〕 (名) 2 大海
- 九四四 〔略〕 既に大海に出で給ひしに、〔略〕。
- 九四五 〔略〕 ふしぎや、今まで荒れに荒れるたる大海、おのづから静まりて、〔略〕。
- たいがい 〔大概〕 (副) 4 大がい
- 四三八 〔略〕 夜ニナルト、ホカノ鳥ハ大がい目ガ見エナクナルノニ、〔略〕。
- 五八四 〔略〕、今ではあとかたづけ
- も大がすみしました。
- 九五八 〔略〕 おかげで今日中には大がいかたづきます。
- 十一九七 〔略〕 したがつて二百十日も太陽曆なら大い九月一日で、〔略〕。
- たいか 〔体格〕 (名) 1 体格
- 七二九 〔略〕 我が國の馬は西洋諸國の馬にくらべると、せいも低く、體格もおとつてゐたが、〔略〕。
- だいがく 〔大學〕 (名) 3 大學
- 六七一 〔略〕 大學
- 九七二 〔略〕 仙臺は東北第一の都會で、大學も高等學校もある。
- 十二一三 〔略〕 父はダーウィンを醫者にしようと思つて大學へやつた。
- だいがく 〔大學者〕 (名) 1 大學者
- 八二四 〔略〕、まことのめくらにして、大學者となりし人あり。
- たいがん 〔對岸〕 (名) 1 對岸
- 十二八四 〔略〕、對岸の大陸に渡りて其の地の模様を探るは、〔略〕。
- たいき 〔大氣〕 (名) 1 大氣
- 十一六五 〔略〕、人々は自由な大氣を呼吸しながら、土の香に親しんで樂しげに働いてゐる。
- だいきん 〔大飢饉〕 (名) 1 大飢饉
- 十一二五 〔略〕 然るに、此の度は近畿地方に大飢饉起り、〔略〕。
- だいきほ 〔大規模〕 (形状) 1 大規模
- 十一六〇 〔略〕、總べてが大規模でのびくとしてゐる。

たいきやくぐん 「退却軍」(名) 1 退却軍

十一281図 二十日の月は上りぬ。退却軍は少しく之にたよりを得たれども、秀吉の軍は、(略)、追撃すること頗る急なり。

たいきやくくしはじむ 「退却始」(下) 1 退却しはじむ 《一メ》

十一269図 盛政は(略)、俄にやみの中を退却しはじめたり。

たいきゆう 「耐久」(名) 2 耐久

十二477図 ひば・松・落葉松は何れも堅くして、耐久・耐濕の性あるを以て(略)。

十二484図(略)、栗は耐久・耐濕の性殊に著しきを以て、(略)。

たいきん 「大金」(名) 2 大金

七654 もし此の大金がなかつたら、氣がちがつて死ぬやうな事になるかも知れぬ。

十九10 (略) フィリップが敵から大金をもらふ約束で王を毒殺しようとしてゐるといふ風説があるから、(略)。

だいきん 「代金」(名) 1 代金
七1143 図 あのため子ども向の品をもう五十反、至急お送り下さい。代金は二口合はせて月末に送ります。

だいく 「第九」(課名) 10 第九

六目12 第九 町ノ朝

六314 第九 町ノ朝

七目10 第九 大阪

七283 第九 大阪

八目13 第九 炭

八294 第九 炭

九目10 第九 兩將軍の握手

九361 第九 兩將軍の握手

十目10 第九 陶工柿右衛門

十443 第九 陶工柿右衛門

だいく 「大工」(名) 2 大工

六406 正作君と大工の松さんは工兵、(略)。

八285 大工の家を建て、(略)、農夫の田畑を耕すも、皆手の働なり。

だいくか 「第九課」(課名) 4 第九課

十一目10 第九課 植林

十二353 第九課 植林

十二目10 第九課 月光の曲

十二371 第九課 月光の曲

だいくこや 「大工小屋」(課名) 2 大工小屋

四目5 十六 大工小屋

四576 十六 大工小屋

だいくこや 「大工小屋」(名) 1 大工小屋

四581 ニハニ大工小屋ヲタテテ、大ゼイノ大工サンガ毎日其ノ中デ仕事ヲシテ居マス。

だいくさん 「大工」(名) 3 大工サン

四582 (略)、大ゼイノ大工サンガ毎日其ノ中デ仕事ヲシテ居マス。

四585 (略)、大工サンハミンナシルシバンテンヲヌイデ、(略)。

四606 私ハ昨日大工サンカラ木ノキレヲタクサンモラツテ、(略)。

たいぐん 「大軍」(名) 6 大軍

六797 十何萬といふ大軍である。

六912 之をかこんだ賊は百萬騎といふ大軍で、城の四方三三三の間は、人や馬でふさがつた。

九364 図(略) ベルギーの勇將レマンは、(略)、エンミット將軍のひきゐたるドイツの大軍を物ともせず、勇ましく防ぎ戦ひたり。

十693 図(略)、眞先かけて敵の大軍に割つて入り、(略)。

十981 図 たま／＼元の大軍至るに及んで天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。

十一264 図(略)、こは如何に、降つてわいたる敵の大軍、木之本の邊に満ち／＼たりと報じ来る。

たいけい 「大兄」(代名) 2 大兄

十1006 図 大兄をはじめ皆様方の御悲歎、如何ばかりかと御察し申し上げ候。

十1009 図(略)、大兄と共にいろ／＼御話を承り候事など、(略)。

たいけん 「帯剣」(名) 1 帯剣

九387 図(略)、かすかにふるふ手に帯剣をときて渡さんとするを、(略)。

たいこ 「太古」(名) 1 太古

十二88 図 此の社にては、今も太古の法に従ひ、之によりて火を作るといふ。

たいこ 「太鼓」(名) 1 たいこ ちばんだいこ・さんばんだいこ・にばんだいこ

四12 うぢがみさまの森で、あからたいこのおとがします。

だいく 「第五」(課名) 10 第五

六目6 第五 海

六192 第五 海

七目6 第五 れんげさう

七168 第五 れんげさう

八目9 第五 揚子江

八192 第五 揚子江

九目6 第五 動物ノ色ト形

九157 第五 動物ノ色ト形

十目6 第五 燈臺守の娘

十243 第五 燈臺守の娘

たいこいらい 「太古以來」(名) 1 太古以來

十二103 図 愛すべく美しき山野は、更に太古以來の歴史と結び文學と結びて、(略)。

たいこう 「太后」(名) 1 たいこう しょうけんこうたいこう

たいこう 「太閤」(名) 2 太閤 太閤

七986 ところが長盛が(略)、石田と中直りをしなければ太閤の御きげんは直るまいと申しました。

七996 正直者の清正は(略)、とう／＼太閤のお目通へ出ることを禁ぜられました。

だいごう 「第号」(名) 1 第號

七112図 第 號	だいこうけいほう 「大口徑砲」(名) 1	意し、之を補つて大國民たるにそむかぬりつばな國民とならねばならぬ。	八目4 第三 競馬	十二9010 〈略〉、北インドのヒマラヤ山のふもとカピラバスト王國の太子として生れた。
九366図 されど比類なき四十二センチメートルの大口徑砲の威力に對しては、〈略〉。	たいこぼし 「太鼓橋」(名) 1 太鼓橋	十1187 池にかけてある二つの太鼓橋を渡り、〈略〉。	九目4 第三 弟橋媛	たいじ 〓おろちたいじ
だいこうじ 「大工事」(名) 1 大工事	だいこん 「大根」(名) 1 大根	九168 〈略〉、白イ蝶ハ大根ノ花ニ集ル。	九98 第三 弟橋媛	だいし 「第四」(課名) 10 第四
十二1105 〈略〉、彼が一生をさゝげた大工事が見事に成就した。	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	九124図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	九18 第三 道ふしん	六目5 第四 きのこ取
だいこうじょう 「大工場」(名) 1 大工場	たいざい 「大罪」(名) 1 大罪	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	七目5 第四 きのこ取
七287図 今ハ商工業サカンニシテ、大工場多ク、エントツノ煙ツネニ空ヲオホヘリ。	たいざいす 「滞在」(サ変) 1 滞在す	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	七93 第四 潮干狩
だいごか 「第五課」(課名) 4 第五課	十一454図 〈略〉京に上り、或は二年滞在せんもはかり難し。	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	八目5 第四 武將の幼時
十一目6 第五課 のぶ子さんの家	たいざいする 「滞在」(サ変) 1 滞在する	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	八132 第四 武將の幼時
十一147 第五課 のぶ子さんの家	八708図 長く滞在してゐたシカゴ市を立つて、〈略〉。	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	九目5 第四 養鶏
十二目6 第五課 蜜柑山	たいざいちゅう 「滞在中」(名) 1 滞在中	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	九119 第四 養鶏
十二196 第五課 蜜柑山	十一1022図 目下滞在中のリオ、デ、ジャネーロ市は、〈略〉。	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	十目5 第四 馬市見物
たいこく 「大國」(名) 1 大國	たいざいする 「対座」(サ変) 1 對坐する	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	十162 第四 馬市見物
かいごたいこく	十一739 二人はほの暗い行燈のもとで對坐した。	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	だいじ 「大字」(名) 1 大字
十二1029図 今若草山に登りて古京の跡を展望すれば、眼下に横たはる奈良市街の西、〈略〉。大極殿の跡はるかに指點すべく、〈略〉。	だいさん 「第三」(課名) 10 第三	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	八585図 〈略〉、ハキ物屋ニ下駄・草履・傘ナドト、大字ニテ目立ツヤウニ記シタル看板ヲ出セルハ、〈略〉。
だいこくみん 「大國民」(名) 1 大國民	六目4 第三 ヤクワントテツピン	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	だいじ 「大事」(形状) 11 ダイジ 大事
十二1302 〈略〉、又常に其の短所に注	六91 第三 ヤクワントテツピン	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	一536 オニドモ ハカウサンシテ、ダイジナタカラモノヲダシマシタ。
民	七目4 第三 横濱	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	六1005図 〈略〉、はじめて聞いた記念の木、大事にするとおつしやつた。
十二1302 〈略〉、又常に其の短所に注	七73 第三 横濱	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	八455図 〈略〉、老體のこと故、餘程大事にしなければならぬとのことでございます。
	七73 第三 横濱	九24図 あのアルクスに親殺の大罪をかかせてはならぬ。	十一15 第三 道ふしん	八803図 國の税は勿論、縣の税も村の税もみんな大事なもので、〈略〉。

九67 其の實は土人の一番大事な食料で、〈略〉。

九68 たいそう北風をかはいがつて、まるで我が子のやうに大事にしてゐた。

十一97 大事なこととは拾ひ集めた木片などに書留めて〈略〉。

十二58 時計師は早速ピンセットでねちをはさみ上げて、大事さうにもとのふたガラスの中へ入れた。

十二66 前あたりのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、〈略〉。

十二67 私はもう何よりも、どんな寶よりも——ほんたうに自分の命よりも父上を大事と存じます。

十二69 略 私はあるとあらゆる身の樂しみを退けても、ひたすら父上を大事に致すのを此の上もない仕合はせと存じてをります。

だいしか 第四課 課名 4 第四課

十一5 第四課 遠足

十一11 第四課 遠足

十二5 第四課 新聞

十二14 第四課 新聞

だいじぎよう 「大事業」(名) 1 大事業

十二132 略、維新の大事業もとこほりなく成し遂げられるやうになつた。

たいじ・する 「退治」(サ変) 4 タイ

デスル たいちする 《—シー—スル。

—セヨ—

二72 ムカシ 大江山 ニシユテン

ドウジトイフワルモノ ガキマシタ。〈略〉。ナカナカ タイ

デスル コト ガデキマセン デシタ。

二73 ソコデ 天子 サマカラ、ライクワウトイフ ツヨイ 大シヤウ

ニ、シユテンドウジヲ タイヂセヨト、オホセツケ ニナリマシタ。

二78 ライクワウ ノケライ モ、シユテンドウジ ノテシタ ヲノコ

ラズ タイヂシテ シマヒマシタ。

五10 其の大蛇をたいぢしてやらう。

たいした 「大」(連体) 3 大した

五84 略、うちには大した事もありませんでした、中々のさわぎでした。

七92 第二十一 二百十日

「略」。此のもやうなら、今日は大したことはあるまい。」と、おとうさんは 略 空を仰いでかうおつしやつた。

八73 五 アメリカ人は 略、何でも世界一になるやうに心掛けてゐるといひますが、何しろ大した勢です。

だいしち 「第七」(課名) 10 第七

六10 第七 霜

六26 第七 霜

七18 第七 傘松

七22 第七 傘松

八17 第七 心と心

八26 第七 心と心

九18 第七 ナイヤガラ の瀧

九29 第七 ナイヤガラ の瀧

十18 第七 パナマ運河

十30 第七 パナマ運河

だいしちか 「第七課」(課名) 4 第七課

十一18 第七課 賤獄の七本槍

十一23 第七課 賤獄の七本槍

十二8 第七課 鎌倉

十二24 第七課 鎌倉

たいしつ 「耐濕」(名) 2 耐濕

十二47 七 ひば・松・落葉松は何れも堅くして、耐久・耐濕の性あるを以て建築・土木・造船等其の用途頗る廣し。

十二48 略、栗は耐久・耐濕の性殊に著しきを以て、〈略〉。

だいじっか 「第十課」(課名) 4 第十課

十一11 第十課 手紙

十一41 第十課 手紙

十二11 第十課 我が國の木材

十二45 第十課 我が國の木材

たいしや ↓いずもたいしや

たいしやえき 「大社駅」(名) 1 大社驛

十二49 今市を過ぎ、大社驛に着きぬ。

だいじゅう 「第十」(課名) 10 第十

六13 第十 弓流し

六37 第十 弓流し

七11 第十 獅子と武士

七30 第十 獅子と武士

八14 第十 朝鮮人蔘

八32 第十 朝鮮人蔘

九11 第十 水師營の會見

九39 第十 水師營の會見

十11 第十 銀行

十50 第十 銀行

だいじゅういち 「第十一」(課名) 10 第十一

六14 第十一 入營した兄から

六38 第十一 入營した兄から

七12 第十一 初夏の夜

七34 第十一 初夏の夜

八15 第十一 大岡さばき

八35 第十一 大岡さばき

九12 第十一 物ノ價

九43 第十一 物ノ價

十12 第十一 傳書鳩

十53 第十一 傳書鳩

だいじゅういっか 「第十一課」(課名) 4 第十一課

十一12 第十一課 畫師の苦心

十一44 第十一課 畫師の苦心

十二12 第十一課 十和田湖

十二49 第十一課 十和田湖

だいじゅうく 「第十九」(課名) 10 第十九

六17 第十九 メリンス

六74 第十九 メリンス

七17 第十九 海ノ生物

七78 第十九 海ノ生物

	八目 ¹¹	第十九	コロンブスの卵	六目 ¹⁶	第十三	鮭	十二目 ¹⁵	第十四課	リヤ王物語	だいじゅううにか〔第十二課〕〔課名〕	四
	九七五 ¹	第十九	コロンブスの卵	六四五 ³	第十三	鮭	十二二〇 ²	第十四課	リヤ王物語	第十一課	
	九日 ⁷	第十九	星の話	七日 ¹⁴	第十三	一太郎やあい	だいじゅうしち〔第十七〕〔課名〕	十			
	九八四 ⁷	第十九	星の話	七四〇 ⁹	第十三	一太郎やあい	第十七				
	十日 ⁶	第十九	温室の中	八日 ²	第十三	鶯	六目 ⁵	第十七	けんやくと義捐	十一目 ¹³	第十二課 ゴム
	十百 ⁷	第十九	温室の中	八四七 ⁶	第十三	鶯	六六六 ⁵	第十七	けんやくと義捐	十一四三 ³	第十二課 ゴム
	だいじゅううか〔第十九課〕〔課名〕	四		九目 ¹⁴	第十三	老社長	七日 ⁵	第十七	安倍川の義夫	十二目 ¹³	第十二課 小さなねぢ
第十九課				九四九 ⁸	第十三	老社長	七七六一 ⁸	第十七	安倍川の義夫	十二二二 ⁶	第十二課 小さなねぢ
	十一目 ⁶	第十九課	我は海の子	十日 ¹⁴	第十三	京城の友から	八目 ⁶	第十七	塙保己一	第十八	
	十一一九 ⁸	第十九課	我は海の子	十七二〇 ¹⁰	第十三	京城の友から	八六二 ¹	第十七	塙保己一	六目 ⁶	第十八 賀茂川
	十二目 ⁶	第十九課	釋迦	だいじゅうさんか〔第十三課〕〔課名〕	四		九目 ⁵	第十七	いもほり	六八九 ²	第十八 賀茂川
	十二九〇 ⁸	第十九課	釋迦	十三課			九七一 ³	第十七	いもほり	七目 ⁶	第十八 木下藤吉郎
だいじゅううこ〔第十五〕〔課名〕	十五			十一目 ¹⁴	第十三課	ふか	十四目 ⁴	第十七	言ひにくい言葉	七八七 ¹	第十八 木下藤吉郎
	十六目 ³	第十五	萬じゆの姫	十一五四 ⁵	第十三課	ふか	十九目 ¹	第十七	言ひにくい言葉	八六八 ⁸	第十八 アメリカだより
	六五七	第十五	萬じゆの姫	十二目 ¹⁴	第十三課	國旗	だいじゅうしちか〔第十七課〕〔課名〕			九目 ⁶	第十八 石安工場
	七目 ³	第十五	カジ屋	十二六〇 ⁷	第十三課	國旗	四	第十七課		九八四	第十八 石安工場
	七四三	第十五	カジ屋	だいじゅうし〔第十四〕〔課名〕	十四		十一目 ⁴	第十七課	松坂の一夜	十目 ⁵	第十八 文天祥
	八目 ⁴	第十五	町の辻	六目 ²	第十四	冬の夜	十一七〇 ⁶	第十七課	松坂の一夜	十九六 ⁷	第十八 文天祥
	八五三	第十五	町の辻	六七四 ⁷	第十四	冬の夜	十二目 ⁴	第十七課	間宮林蔵	だいじゅうをはちか〔第十八課〕〔課名〕	
	九目 ³	第十五	軍艦生活の朝	七目 ¹⁵	第十四	川中島	十二八一 ⁹	第十七課	間宮林蔵	四	第十八課
	九六七	第十五	軍艦生活の朝	七四三 ²	第十四	川中島の戦	十二			十一目 ⁵	第十八課 貨幣
	十目 ²	第十五	輸出入	八目 ³	第十四	餅つき	六目 ¹⁵	第十二	笑ひ話	十一七四 ⁴	第十八課 貨幣
	十八五 ¹⁰	第十五	輸出入	八五〇 ⁷	第十四	餅つき	六四三 ⁵	第十二	笑ひ話	十二二五 ⁵	第十八課 法律
だいじゅううか〔第十五課〕〔課名〕	第四			九目 ²	第十四	麥打	七三五 ²	第十二	大連だより	十二八八 ²	第十八課 法律
第十五課				九五六 ³	第十四	麥打	七三七 ²	第十二	大連だより	第十六	
	十一目 ²	第十五課	人と火	九十七 ⁶	第十四	炭坑	八目 ¹⁸	第十二	手紙	六目 ⁴	第十六 磁石
	十一六五 ⁷	第十五課	人と火	十目 ¹⁵	第十四	炭坑	八四四 ³	第十二	手紙	六六四 ⁷	第十六 磁石
	十二目 ²	第十五課	まぐろ網	だいじゅうしか〔第十四課〕〔課名〕	十四		九目 ¹³	第十二	弟から兄へ	七目 ⁴	第十六 航海の話
	十二七六 ⁵	第十五課	まぐろ網	第十四課			九四六 ⁷	第十二	弟から兄へ	七五一 ¹	第十六 航海の話
だいじゅうさん〔第十三〕〔課名〕	十			十一目 ¹⁵	第十四課	北海道	十目 ¹³	第十二	鉢の木	八目 ⁵	第十六 看板
第十三				十一五九 ²	第十四課	北海道	十五九 ⁴	第十二	鉢の木	八五八 ²	第十六 看板

九目4 第十六 東京から青森まで
 九67 第十六 東京から青森まで
 十目3 第十六 登校の道
 十89 第十六 登校の道
 だいじゅうろくだい 「第十六代」(名)
 1 第十六代
 十一94 7 アメリカ合衆國第十六代の
 大統領リンカーンは、〈略〉。
 だいじゅうろくか 「第十六課」 「課名」
 4 第十六課
 十一目3 第十六課 無言の行
 十一68 10 第十六課 無言の行
 十二目3 第十六課 鳴門
 十二80 3 第十六課 鳴門
 だいしゅっぱん 「大出版」(名) 1 大
 出版
 十一130 2 〇 〈略〉、一切經六千九百五
 十六卷の大出版は遂に完成せられた
 り。
 たいしょう 「大將」(名) 36 大シヤウ
 大しやう 大將 ↓ そうたいしよ
 う・のぎたいしよ・のぎたいしよ
 のようねんじだい
 二73 2 ソコデ 天子 サマカラ、ラ
 イクワウトイフツヨイ 大シヤウ
 ニ、〈略〉ト、オホセツケ ニナリ
 マシタ。
 四62 8 げんじの大しやうよしつ
 ねは家來に向つて、「略。」と
 たづねました。
 四67 2 をかの方では大しやう
 よしつねをはじめ、〈略〉。

四92 2 けれどもかたきのくどう
 は、みなもとのよりともといふ
 大將のお氣に入りで、〈略〉。
 五82 3 〈略〉、宗任はつい此の間義家
 にかうさんしたてきの大將なのです。
 六22 7 大將は平維盛で、〈略〉。
 六25 8 大將維盛は命からく加賀の
 國へにげました。
 六83 3 さんくんに切りまくつて、其
 の船の大將を生けどりにして引上げ
 た。
 七18 7 〇 「大將も討死されました。」
 七22 5 〈略〉、賊の大將高時以下北條
 方は、〈略〉。
 七97 3 豊臣秀吉が朝鮮へ向はせた先
 手の大將は加藤清正・小西行長の兩
 人でした。
 七106 1 〇 〈略〉、日本の大將小西行長
 は一たまりもなくにげ落ち、〈略〉。
 七106 6 〇 小西は日本の大將ならず、
 〈略〉。
 七106 8 〇 此の清正こそはまことの太
 將、四十萬の軍勢は此所へ向けよ。
 八111 1 乃木大將は〈略〉。〈略〉、近
 所の人は大將のことを、無人ではな
 い、泣人だといつたといふことであ
 る。
 八111 3 大將の父は長府藩主に仕へ
 て、〈略〉。
 八111 6 〈略〉、どうかして大將の體を
 丈夫にし、氣を強くしなければなら
 ぬと思つた。

八111 8 そこで大將が四五歳の時から
 〈略〉
 八111 8 〈略〉、大將の父はうす暗い中
 に大將を起して、〈略〉。
 八111 9 〈略〉、大將の父はうす暗い中
 に大將を起して、〈略〉。
 八112 3 大將の父は途々義士のことを
 大將に話してきかせて、〈略〉。
 八112 4 大將の父は途々義士のことを
 大將に話してきかせて、〈略〉。
 八112 7 或年の冬、大將が思はず「寒
 い。」といつた。
 八112 8 すると大將の父は「よし。寒
 いなら、暖くなるやうにしてや
 る。」といつて、〈略〉、頭から冷水
 を浴びせかけた。
 八113 2 〈略〉、大將を井戸端へ連れて
 行つて、着物をぬがせて、頭から冷
 水を浴びせかけた。
 八113 3 大將はこれから後、一生の間
 「寒い。」とも「暑い。」ともいはな
 かつたといふ。
 八113 6 大將の母もまたえらい人であ
 った
 八113 6 大將が何か食物の中にきらひ
 な物があると見れば、〈略〉。
 八113 9 〈略〉、大將が馴れるまで、
 〈略〉。
 八114 1 其の爲、大將には全く食物に
 好ききらひといふものがないやうに
 なつた。
 八114 4 大將が十歳の年、〈略〉。

八114 4 〈略〉、大將の一家は郷里へ歸
 ることになつた。
 八114 5 其の時大將は江戸から大阪ま
 で、〈略〉、両親と共に歩いて行つた。
 八114 8 當時大將の體は、もうこれだ
 け丈夫になつてゐたのである。
 九42 6 〇 〇 「略。」と、大將答力
 あり。
 十一25 2 〇 寄手の大將佐久間盛政は、
 〈略〉。
 だいしょう 「大小」(名) 6 大小
 五56 6 松島は大小二三百の島が、
 〈略〉。
 六80 7 けれども我が武士は、船の大
 小などは少しも氣になかつた。
 七4 1 〇 地球の上には大小合はせて
 六十餘國あり。
 九75 2 黒・白・茶色、大小さま／＼
 の馬が、〈略〉。
 十一32 10 〇 〈略〉、灣あり、大小無數
 の島々各所に散在す。
 十二15 6 〇 勿論今日我が國にて發行
 せらるゝ新聞中にも大小種種ありて、
 〈略〉。
 たいしょうがた 「大將方」(名) 1 大
 將方
 七35 7 〇 町に大山通・乃木町・
 〈略〉などと、日露戦争の時の大將
 方の名を取つてつけてあるのは面白
 いでせう。
 たいしょうさんねん 「大正三年」(名)
 1 大正三年

- 十367 〔略〕、我が大正三年、遂に之を造り上げたのである。
- たいしょうじゅうにねん「大正十二年」(名) 3 大正十二年
- 十一89 大正十二年
- 十一89 大正十二年
- 十一89 大正十二年
- たいしょうてん「大商店」(名) 1 大商店
- 十一97 街路をさしはさんで大商店が軒をつらね、〔略〕。
- たいしょうぶ「大丈夫」(形状) 2 大丈夫
- 九121 〔略〕「ソナエライ方ナラ、オトウサンガワザ」オ歸リニナラナクツテモ大丈夫デセウ。」
- 十1610 〔略〕なれない私は、大丈夫といはれても、やはり馬のそばを通るのが危険なやうな氣がしてならなかつたが、〔略〕。
- たいしよく「体色」(名) 4 體色
- 九1510 中デモ面白イノハ、或動物ノ體色ガマハリノ物ノ色ニ似テキルコトデアル。
- 九161 〔略〕「マハリノ物トマギレナイヤウナ鮮カナ體色ヲモツテキル。
- 九2010 例ヘバ毒ヲモツテキル蜂ノ體色ガ黄ト黒ノダンダラニナツテタリ、〔略〕。
- だいじん いかいぐんだいじん・こくむだいじん
- だいしんいん「大審院」(名) 3 大審院
- 十一209 〔略〕、これに區裁判所・地方裁判所・控訴院・大審院の四階級がある。
- 十一212 〔略〕、尚其の裁判に不服な者は更に大審院に上訴する。
- 十一214 〔略〕、控訴院・大審院にと順次に上訴する。
- だいしんぶん「大新聞」(名) 1 大新聞
- 十一218 〔略〕、但し大新聞にありては、〔略〕、新しき事件ある毎に改版して、最後の最も新しきものを市内版とす。
- たい・す「対」(サ変) 5 對す 《一シ・スル》
- 九366 〔略〕、されど比類なき四十二センチメートルの大口徑砲の威力に對しては、〔略〕、ベルギー軍の防戦も、終に如何ともしがたく、〔略〕。
- 十二635 〔略〕、フランスの國旗が縦に三色を分たるに對して、黒・赤・金の三色を横に染分けたるものはドイツの國旗なり。
- 十二648 〔略〕、國民の之に對する尊敬は、〔略〕。
- 十二648 〔略〕、即ち其の國家に對する忠愛の情の發露なり。
- 十二6410 〔略〕、故に我等は、〔略〕、諸外國の國旗に對しても、常に敬意を表せざるべからず。
- たい・する「対」(サ変) 8 對する
- 《一シ・スル》
- 八1115 〔略〕、第一藩主に對しても申しわけがない、〔略〕。
- 九485 〔略〕、めい／＼の骨折に對して、御ほうびを下さるのだ。
- 十954 〔略〕、人の言ふことに對して『いゝえ。』と言切るには、〔略〕。
- 十一784 〔略〕、又之を考案した昔の人々に對して別段感謝の念を起すこともない。
- 十一966 〔略〕、父に對して是非學校に入れてもらひたいと願つたけれども、〔略〕。
- 十二229 〔略〕、實際の注文に對しては粗惡なものを送るやうな事は、〔略〕。
- 十二3310 〔略〕、私は今落日に對して、うすら寒い秋風を浴びながら、山鳩の聲さびしきベルダンの戰跡に立つてゐます。
- 十二1254 〔略〕、慶喜から官軍に對する交渉の全權を委任せられてゐた舊幕府の陸軍總裁勝安芳は、〔略〕。
- だい・する「題」(サ変) 1 題する 《一スル》
- 十二1155 二十五日午後一時から、學校の講堂で村崎工學博士の「電氣の世の中」と題する講演があつた。
- たいせい「大西」いいたいいたいせりょうよう
- たいせい「大勢」(名) 6 大勢
- 十979 〔略〕、されど宋軍の大勢日々に非にして、〔略〕。
- 十988 〔略〕、張世傑等の奮戦も大勢を轉ずることあたはずして、〔略〕。
- 十992 〔略〕、「汝大勢の如何とすべからざるを知つて、〔略〕。」
- 十二1256 〔略〕、しかし大勢は如何ともしがたく、〔略〕。
- 十二1298 〔略〕、大勢は人力の如何ともしやうのないもので――。
- 十二1354 〔略〕、世界の「大勢」を知らぬ國民とならしためた。
- たいせい「大聖」(名) 3 大聖
- 十一45 〔略〕、大聖として長く後人に敬はれ、徳化の尚今日に著しきもの、孔子に及ぶはなし。
- 十一64 〔略〕、論語は、〔略〕、最もよく此の大聖の面目をうかゞふを得べし。
- 十一81 〔略〕、人生の爲に盡くしたる大聖の面目、〔略〕。
- たいせい・する「大成」(サ変) 5 大成する 《一シ・スル》
- 九233 〔略〕、そこで此の父も、何とぞ此の學問を大成したいと、〔略〕。
- 九269 〔略〕、此の學問を大成するのが前目の役目だ。
- 九291 〔略〕、農學は、〔略〕、信淵に至つて大成したのである。
- 十一758 〔略〕、しつかり努力なすつたら、きつと此の研究を大成することが出來ませう。
- 十二771 〔略〕、宣長は〔略〕、遂に古事記の研究を大成した。

たいせいでん 「大成殿」(名) 1 大成殿

十一5 大成殿

たいせいでん 「大西洋」(地名) 7 大西洋

七16 海を分けて太平洋・大西洋・印度洋とし、(略)。

七2 大西洋

七3 大西洋

十34 大西洋

十34 大西洋

十35 終に洋々たる大西洋に出るのである。

十一10 大西洋

たいせつ 「大切」(形状) 14 タイセツ

大セツ 大切

二35 「モチハタイセツナオ米デコシラヘタモノデスカラ、(略)。」

四71 シカシ二人トモ大セツナモノデ、ドナタノウチニモ、ナカマノモノガ大テイ行ツテ居マス。

五96 (略)、皆様が私の口へお入れになる郵便物を大切にあげかつてゐて、(略)。

六55 (略)、木曾の家につたはつてゐた大切な刀を送つてよこしました。

七26 第八馬 (略)。(略)乗用としても、輸送用としても、きはめて大切なものである。

七59 此の星を見分けることや、

燈臺のあかりを知ること、船に乗る者に取つて、はなはだ大切なことなのであります。

九78 水の乏しい此の島々では、其の雨水がまた大切な飲料水となるのです。

十68 ひとりきやう掘取る者、運ぶ者、植込む者、一様に心を盡くして、大切に取扱ひたるによるならん。

十66 しかし此の三本だけは、其の頃のかたみとして、大切に殘して置いたのでございますが、(略)。

十一23 裁判は實に正義保護のため大切な仕事であり、(略)。

十一67 (略)、石炭の火は(略)、汽車や汽船や工場の重い機械を動かすのに大切なものとなつてゐる。

十一90 曆を見れば、まだいろ／＼大切な事がわかる。

十一91 かういふやうに、曆はわたしたちに日日の事を教へてくれる大切なものだ。

十一101 勉強も大切なれど、(略)。

たいせつ たい 大雪溪 (名) 1 大雪溪

九94 中でも面白かつたのは大雪溪のお話です。

たいせん じゅうしゅうたいせん だいせんかん 「大戦艦」(名) 1 大戦艦

十127 今日を晴と満艦飾をほどこ

されたる二萬四千噸の大戦艦陸奥は、海を後にして悠然と横たはれり。

たいせん 「大戦艦」(名) 1 大戦艦

十二35 (略)、彼等が大戦艦における自國の疲弊を回復するため盛に活動してゐるのには全く敬服しました。

たいせんたい 「大船体」(名) 1 大船體

十128 一秒又一秒、七百尺に近き大船體は、寸、尺、間と音もなくすべり出づ。

たいそう 「体操」(名) 1 タイサウ

三36 タイサウノトキアルキ出スノハ左ノ足デ、(略)。

たいそう 「大層」(副) 33 タイソウ

たいそう 大ソウ 大そう 大層

一47 モモトラウハダンダンオホキクナツテ、タイソウツヨクナリマシタ。

二87 アノキクハオトウサンモタイソウオスキデス。

二41 ヨイオヂイサンハ犬ヲ一ピキカツテ、タイソウカハイガツテキマシタ。

二44 ヨイオヂイサンハタイソウカナシガツテ、(略)。

二66 オヤ牛ハ子牛ヲタイソウカハイガリマス。

三18 たいそう かるうございませぬ。

四42 あちらこちらに(略)らつ

ばやふえの音もして、たいそうにぎやかです。

四16 ワニザメハソレヲキクト、タイソウオコツテ、(略)。

四54 お前はたいそうとんちがあると聞いた。

四68 たいそうよくなれて、私の手からゑをたべるほどになつて居ました。

四71 一人ハタイソウ皆サンニスカレマスガ、(略)。

四81 (略)、河を見たら、たいそう水が出て居ました。

五59 朱ぬりの社殿が山のみどりを後にして、たいそうきれいに見えま

す。

五82 かりまたは、(略)、たいそう

するどい矢で、(略)。

五92 もし間に合はないと、向ふへ大そうおくれで着くからです。

五93 いつか大そう雨のふるばんに、(略)。

六13 シカモ其ノサビハ大ソウ毒ナ物デス。

六16 何の木か、おがくづが大そうよくはつてゐました。

六26 今朝は大そう寒い。

七25 馬はたいそう元氣のよい動物で、(略)。

七64 取上げると大そうおもくて、(略)。

八22 たいそう蕃人のかはいがりま

- したので、〈略〉。
- 八四八 病中の祖母も大そう喜びまして、〈略〉。
- 八七四 娘が大そうお世話様になります。
- 八九二 大そういこうだから、〈略〉。
- 八〇五 出来高がたいそう多くて、〈略〉。
- 九四二 おとうさんは今朝も、〈略〉。とおつしやつて、大そう元氣です。
- 九七二 大そう景色のよい所であつた。
- 九九三 おかあさんのカリストは、大そう美しい人だったので、〈略〉。
- 九〇八 北風の主人は若い騎兵中尉で、たいそう北風をかはいがつて、〈略〉。
- 一〇二六 今通つて見て來ましたが、大そうりっぱになりました。
- 一〇五 大そう、今日の働を見て、大そう心強くなりました。
- 一一八 大層天氣がおだやかになつたね。
- だいそうとくふ 「大総督府」(名) 1 大總督府
- 一二三 さいうして直に静岡の大總督府にはせつけて議をまとめ、〈略〉。
- だいだい 「大體」(副) 5 大體
- 九二五 大體一身一家の爲でなく、一すちに國の爲、民の爲にくすといふお考は、〈略〉。
- 一一一五 そこを見ると、臺灣や樺太のやうな遠い所の氣候までも大體分る。
- 一一一三 ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。
- 一二五 湖岸線は大體單調であるが、〈略〉。
- 一二八 即ち第一讀會で其の案を大體に調査し、〈略〉。
- だいたい 「代代」(名) 1 代々
- 九二八 數庵以來代々力をつくして來た農學は、〈略〉。
- だいたい 「大内裏」(名) 2 大内裏
- 一二一〇 北に大内裏の宮殿を仰ぎ、〈略〉。
- 一二二 大内裏
- だいたす 「大多數」(名) 1 大多數
- 一二四 それ故大多數の商人は、〈略〉。
- だいち 「大地」(名) 2 大地
- 七三 蛇は眞二つとなりて、大地にのたうちまはりてたふれたり。
- 九二八 物すごいひびきは萬雷の如く、大地もふるひ、〈略〉。
- だいちよじゅつ 「大著述」(名) 1 大著述
- 一一七 有名な古事記傳といふ大著述は此の研究の結果で、〈略〉。
- だいつき 「台付」(名) 1 臺付
- 一一二 いろ／＼扱つてゐるうちに臺付のコツパになつた。
- たいてい 「大抵」(副) 22 たいてい
- 大テイ 大てい
- 三二七 どちらもたいてい おなじくらゐで、かちまけはありませんでした。
- 四一四 、「ドナタノウチニモ、ナカマノモノガ大テイ行ツテ居マス。」
- 四八〇 生物をころしたりするやうな子どもは、大ていろくなものになりません。
- 五九四 今桑をたべてゐる蠶も、明日の朝までには、たいてい上つてしまふさうです。
- 五八五 此のあたりの青田も、其の頃は、大ていあれ地で、〈略〉。
- 五八七 町は大てい水につかつて、人家も七八軒流れました。
- 五九三 葉書には、大ていちよつとした用事が書いてありますが、〈略〉。
- 五〇七 此の停車場へ降りる人は、大てい先づ第一に宮城をさしてまゐります。
- 七三八 大連の貿易高は横濱や神戸よりは少し下で、大てい大阪ぐらゐだといひます。
- 八〇七 お呼びするのは大てい近所の人で、〈略〉。
- 九二〇 コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐れ武器ヲソナヘテセルカ、〈略〉。
- 九二五 此の方々のお書きになつたものは、大てい此所に持つてゐる。
- 一〇六 種類は大てい我が國に産する限りを盡くし、〈略〉。
- 一〇八 子馬には大てい飼主の一家族がついて來て、親切に世話をしてゐます。
- 一〇九 私ほもと鉢の木がすきで、いろ／＼集めた事もありましたが、〈略〉、大てい人にやつてしまひました。
- 一〇六 沿道の家は、大てい天満宮にちなんだ物を賣つてゐる。
- 一〇五 鯉・鮒を養ふことも盛にして、大てい二年毎に之を賣るに、〈略〉。
- 一一〇 租界の外に出ると大てい支那風の町で、〈略〉。
- 一一三 こんな廣い畠であるから、耕すにも、〈略〉、大てい機械と馬の力による。
- 一二四 「後を追つて御いでになつたら、大てい追ひつけませう。」
- 一一〇 稲をはじめ大ていの物の種をまく目安になる日だ。」
- 一一八 原野は大てい牧場にて、牛馬は放し飼にせられ居候。
- だいていしば 「大停車場」(名) 1 大停車場
- 一〇四 東京停車場は東洋第一の大停車場で、〈略〉。
- たいてき 「大敵」(名) 1 大てき
- 一〇四 「ゆだん大てき。」
- たいど 「態度」(名) 1 態度
- 一二九 ところが此の新たな態度に驚

いた五人の友は、〈略〉。
だいでう 「大道」(名) 1 大道

五365 大道へ出て、となり村の入口へ行くと、〈略〉。

だいでうりょう 「大統領」(名) 2 大統領

十一947 アメリカ合衆國第十六代の大統領リンカーンは、〈略〉。

十一1013 彼が他日大統領となり、世界の偉人として萬人に仰がれるやうになつたのは、〈略〉。

だいつかい 「大都會」(名) 6 大都會

八709 〔略〕、今日いよく米國第一の大都會ニューヨーク市に着きました。

八718 〔略〕 ニューヨークは人口からいへば、ロンドンに次ぐ大都會で、七百萬以上あるといひます。

八958 〔略〕 名古屋市ハ我が國屈指ノ大都會ニシテ、人口四十餘萬アリ。

十一89 上海は支那第一の貿易場、百萬近くの人口を有する大都會である。

十一103 〔略〕 町のりつばなる事も、文明諸國の大都會に比して少しも劣る所これなく候。

十二292 〔略〕 ロンドンは何と言つても世界の都會です。

だいでう 「台所」(名) 2 だい所

臺所 ↓ みだいでう

四423 だい所でいろいろな物をのけると、〈略〉。

十一174 しばらくたつと、おかあさんが臺所の方から、〈略〉。

たいない 「体内」(名) 1 体内

十1143 もりが体内深くひ込んで、〈略〉。

だいなん 「大難」(名) 1 大難

六838 實に我が國にとつては、これまでにない大難であつた。

だいに 「第二」(課名) 10 第二

六目3 第二 日本の高山

六45 第二 日本の高山

七目3 第二 長き行列

七45 第二 長き行列

八目3 第二 犬ころ

八36 第二 犬ころ

九目3 第二 トラック島便り

九31 第二 トラック島便り

十目3 第二 アレクサンドル大王と醫師フィリップ

十一44 第二課 孔子

十二目3 第二課 出雲大社

十二43 第二課 出雲大社

だいにぎ 「第二座」(名) 1 第二座

十一6910 第二座の僧は、二人とも規則を破つたのが不快でたまらない。

だいにじゅう 「第二十課」(課名) 4

第二十課

十一目7 第二十課 遠泳

十一834 第二十課 遠泳

十二目7 第二十課 奈良

十二993 第二十課 奈良

だいにじゅう 「第二十五」(課名) 10 第二十五

六目8 第二十 水すべり

六773 第二十 水すべり

七目10 第二十 マリーのきてん

七881 第二十 マリーのきてん

八目12 第二十 税

九996 第二十一 初秋

十目8 第二十一 日光山

十一1109 第二十一 日光山

だいにじゅういっか 「第二十一課」(課名) 4 第二十一課

十一目8 第二十一課 暦の話

十一877 第二十一課 暦の話

十二目8 第二十一課 青の洞門

十二10310 第二十一課 青の洞門

だいにじゅうご 「第二十五」(課名) 10 第二十五

六目13 第二十五 芽

六1006 第二十五 芽

七目15 第二十五 電報

七1099 第二十五 電報

八目17 第二十五 胃とからだ

八994 第二十五 胃とからだ

九目13 第二十五 選舉ノ日

九1199 第二十五 選舉ノ日

十目12 第二十五 平和なる村

十1246 第二十五 平和なる村

だいにじゅうごか 「第二十五課」(課名) 4 第二十五課

十一目12 第二十五課 自治の精神

十一1132 第二十五課 自治の精神

十二目12 第二十五課 港入

十二1224 第二十五課 港入

だいにじゅうさん 「第二十三」(課名) 10 第二十三

六目17 第二十三 千早城

六906 第二十三 千早城

七目13 第二十三 加藤清正

七97 2	第二十三	加藤清正	十二119 3	第二十四課	舊師に呈す	苦學	十二目9	第二十二課	トマス、エヂ	隆盛	十二124 6	第二十六課	勝安芳と西郷
八目15	第二十三	名古屋市	だいにじゅうしち	「第二十七」	「課名」	ソン	十二111 2	第二十二課	トマス、エヂ	隆盛	だいにっぽん	「大日本」	「課名」
八95 7	第二十三	名古屋市	4	第二十七		ソン	2	第二十八		日本	五目2	大日本	
九目11	第二十三	手紙	八目19	第二十七	人を招く手紙	だいにじゅうはち	「第二十八」	「課名」	日本	五1 1	大日本		
九11 7	第二十三	手紙	八107 1	第二十七	人を招く手紙	2	第二十八		だいにっぽん	「大日本」	「地名」	6	大
十目10	第二十三	太宰府まうで	十目14	第二十七	兒島高德	八目20	第二十八	乃木大將の幼年時	日本	五1 2	大日本	神のみ	
十116 7	第二十三	太宰府まうで	十130 1	第二十七	兒島高德	代			すゑの天皇陛下	われら國民七千萬	をわが子のやうに	おぼしめされ	
だいにじゅうさんか	「第二十三課」	「課名」	だいにじゅうしちか	「第二十七課」	「課名」	八110 6	第二十八	乃木大將の幼年時	をわが子のやうに	おぼしめされ			
名) 4	第二十三課		名) 4	第二十七課		代			五1 2	大日本	神のみ		
十一目10	第二十三課	南米より	十一目14	第二十七課	ガラス工場	十一目15	第二十八課	鐵眼の一切經	五1 2	大日本	神のみ		
の通信			十一121 5	第二十七課	ガラス工場	十一125 4	第二十八課	鐵眼の一切經	をわが子のやうに	おぼしめされ			
十一101 6	第二十三課	南米より	十二目14	第二十七課	我が國民性の	だいにじゅうはちか	「第二十八課」	「課名」	五1 2	大日本	神のみ		
の通信			長所短所			名) 2	第二十八課		五1 2	大日本	神のみ		
十二目10	第二十三課	電氣の世の中	十二132 6	第二十七課	我が國民性の	十一目15	第二十八課	鐵眼の一切經	すゑの天皇陛下	われら國民七千萬	をわが子のやうに	おぼしめされ	
十二115 3	第二十三課	電氣の世の中	長所短所			十一125 4	第二十八課	鐵眼の一切經	をわが子のやうに	おぼしめされ			
だいにじゅうし	「第二十四」	「課名」	だいにじゅうし	「第二十二」	「課名」	だいにじゅうろく	「第二十六」	「課名」	五1 7	大日本	われら		
第二十四			第二十二			8	第二十六		國民七千萬は	天皇陛下を神ともあ			
六目12	第二十四	記念の木	六目10	第二十二	象	六目14	第二十六	伊勢參宮	五1 7	大日本	われら		
六98 1	第二十四	記念の木	六85 7	第二十二	象	六103 1	第二十六	伊勢參宮	國民七千萬は	天皇陛下を神ともあ			
七目14	第二十四	彼岸	七目12	第二十二	助力	七目16	第二十六	注文	ふぎ、	略			
七108 6	第二十四	彼岸	七95 2	第二十二	助力	七113 3	第二十六	注文	五1 7	大日本	われら		
八目16	第二十四	廣瀬中佐	八目14	第二十二	啞の學校	八目18	第二十六	分業	國民七千萬は	天皇陛下を神ともあ			
八97 5	第二十四	廣瀬中佐	八83 1	第二十二	啞の學校	八103 6	第二十六	分業	ふぎ、	略			
九目12	第二十四	水兵の母	九目10	第二十二	北風號	十目13	第二十六	進水式	五2 3	大日本	神代此		
九114 3	第二十四	水兵の母	九102 5	第二十二	北風號	十127 2	第二十六	進水式	五2 3	大日本	神代此		
十目11	第二十四	たしかな保證	十目9	第二十二	捕鯨船	だいにじゅうろく	「第二十六課」	「課名」	五2 3	大日本	神代此		
十121 1	第二十四	たしかな保證	十112 4	第二十二	捕鯨船	名) 4	第二十六課		五2 3	大日本	神代此		
だいにじゅうし	「第二十四課」	「課名」	だいにじゅうし	「第二十二課」	「課名」	と少年			五2 3	大日本	神代此		
名) 4	第二十四課		名) 4	第二十二課		と少年			五2 3	大日本	神代此		
十一目11	第二十四課	孔明	十一目9	第二十二課	リンカーンの	十一117 6	第二十六課	ウェリントン	だいにっぽん	「大日本帝國」			
十一110 5	第二十四課	孔明	苦學			と少年			地名) 3	大日本帝國			
十二目11	第二十四課	舊師に呈す	十一94 6	第二十二課	リンカーンの	十二目13	第二十六課	勝安芳と西郷	七1 9	大日本帝國	アジヤ洲		

の東部にあり。

七三〇 大日本帝國

七四二 其の中我が大日本帝國と

《略》を世界の五大強國といふ。

だいにどっかい「第二読会」(名) 2

第二讀會

十二88 討議の形式は、普通第一讀

會・第二讀會・第三讀會の三度の會

議を経ることになつてゐる。

十二89 1 《略》、第二讀會で逐條に審

議し、《略》。

だいのうしき「大農式」(名) 1 大農

式

十一63 中にはトラクターを用ひて

全く大農式にやつてゐる處もある。

だいはくふ「大瀑布」(名) 2 大瀑布

十一104 3 其の中に有名なるアマ

ゾン河や、イグアスの大瀑布の

壯觀を寫したるものもこれあり候。

十一105 4 次にイグアススの瀧

は、ブラジル國と隣のアルゼンチン

國との境にある大瀑布にて、《略》。

だいはくぶつかん「大博物館」(名) 1

大博物館

十二30 2 《略》、さすがに世界の太

博物館といはれるだけあると思ひま

した。

だいはち「第八」(課名) 10 第八

六目11 第八 虎と蟻

六27 4 第八 虎と蟻

七目9 第八 馬

七25 8 第八 馬

八目12 第八 手の働

八27 8 第八 手の働

九目9 第八 若葉の山道

九31 9 第八 若葉の山道

十目9 第八 開墾

十37 10 第八 開墾

だいはちか「第八課」(課名) 4 第八

課

十一目9 第八課 瀬戸内海

十一31 10 第八課 瀬戸内海

十二目9 第八課 ヨーロッパの旅

十二28 8 第八課 ヨーロッパの旅

たいはん「大半」(名) 1 大半

十一103 4 中央の高地や海

岸地方の大半は割合に涼しく、《略》。

だいはひようす「代表」(サ変) 2 代

表す「一スル」

十二60 9 國旗は實に國家を代表す

る標識にして、《略》。

十二63 10 即ち赤・黄・藍・白・黒

の五色を横に並べたるものにて、赤

は漢人、《略》、黒は西蔵人を代表す

るなり。

だいはひようする「代表」(サ変) 1

代表する「一シ」

十一21 8 《略》、刑事裁判で、國家を

代表して犯罪者の處罰を求めるのは

検事の職務である。

だいは「大分」(副) 13 大分

五35 5 《略》、もう級の方が大分來

てゐて、《略》。

七35 4 町のもやうも大分わ

かつて來ました。

九24 5 老人は大分つかれたやうであ

る。

九35 2 腹が大分すいて來た。

九57 8 「正一も大分役に立つやう

になつたなあ。」

九101 1 二百十日を無事に越した田に

は稻の穂先がもう大分重みを見せて

ゐる。

九105 3 おい北風、今日は大分手ご

たへがあるぞ。

十43 1 日は大分高くなつてさわやか

にかゞやき、《略》。

十77 10 此の頃は太分寒くなつて、

《略》。

十78 10 お知らせしたい事はまだい

ろくありませんが、大分長くなりま

したから、《略》。

十一40 8 《略》、もう幹のまはりの三

尺餘りもあるものが大分見える。

十一41 9 貴兄には去月以

來御病氣にて、しかも一時は大分御

重態なりし由、《略》。

十一85 6 手足が大分くたびれて來た。

だいぶつ「大仏」(名) 3 大佛

十二25 5 長谷觀音の堂

近く、露坐の大佛 おはします。

十二99 9 《略》、五丈三尺の大佛一

千二百年の面影を残せり。

十二102 東大寺(大佛)

だいぶふん「大部分」(名) 4 大部分

十74 2 今でも城壁は大部分昔の面

影を留めてゐますし、《略》。

十106 7 其の利益は、大部分を學校

の基本金とし、《略》。

十一50 2 今日世界におけるゴムの大

部分は、此の木から取つたものであ

る。

十一103 3 此のブラジル國は、

《略》、其の大部分は熱帶に屬し居候

へども、《略》。

たいへいたいせりようよう「太平洋大

西兩洋」(名) 2 太平・大西兩洋

十31 7 《略》、太平・大西兩洋の水を

通はせることは到底出來ぬ事であつ

た。

十37 5 昔、太平・大西兩洋の間を往

來する船は、《略》。

たいへいまる「太平丸」(名) 2 太平

丸

七52 2 遠洋航海を終へて、郷里に

歸り來れる太平丸の船長は、《略》。

七53 4 私に乗つてゐる太平丸とい

ふのは、長さが六十間程もある汽船

で、《略》。

だいはい「太平洋」(名) 1 大平野

十一61 8 《略》、眼下には廣々とした

十勝の大平野がはるばると續いて、

《略》。

たいへいよう「太平洋」(地名) 6 太

平洋

七16 海を分けて太平洋・大西

洋・印度洋とし、《略》。

七2 太平洋

十33 4 今太平洋の方から此の運河を通るとする。

十34 図 太平洋

十34 図 太平洋

十一02 図 太平洋

たいへん 「大変」(形状) 4 大へん大變

五86 2 図 叔父さんは大へんだ土手が切れたといつて、すぐ屋根へ出ました。

六30 4 さあ大へん、何千匹か何萬匹か、数がぎりもない蟻がまつ黒になつて、出て來ました。

九87 1 図 「でも、あんなにたくさんある星ですもの、それを見つけるのに大變でせう。」

十二11 10 これも逃しては大變と、いきなり右の手の蟲を口の中へ投込んだ。

たいへん 「大變」(副) 6 タイヘン大へん 大變

二72 2 タイヘン カガツヨク、テシタモ大ゼイアリマシタ。

六14 4 図 新田が大へんよく出來ました。來年もやはりあの稻を作りませう。

六77 4 二三日ひどく寒かつたので、湖の水が大へんあつくなつた。

九52 10 図 うちのおぢいさんは「略」、大へんほめていらつしやつたものだ。

十92 5 図 「はい。」「いゝえ。」大變やさしい言葉ではありませんか。

十一100 2 「略」、子供心にも大變心配して、其の晩はとう／＼眠れなかつた。

たいほう 「大砲」(名) 8 大砲

九103 4 ラツパのひゞきや大砲の音に、北風の心は先づ勇みたつ。

九104 9 やがてあたりの静かさを破つて、大砲の音がとゞろき始めた。

九107 8 「略」、怪獸のやうな大砲と、其のまはりにむらがる人かげが見えて來る。

九109 7 大空には、午後の日が大砲の煙や砂ほこりにさへぎられて、どんよりとかゝり、「略」。

十一57 7 つと大砲のそばへ寄つて、急いで彈丸をこめ、ねらひを定めた。

十一58 3 とたんに、ずどんと一發すさまじい大砲の音がとゞろき渡つた。

十一58 5 「略」、手で顔をおほつて大砲の上につつ伏した。

十一58 10 老砲手は大砲にもたれて、「略」。

だいほうあみ 「大謀網」(名) 2 だいほう網

十二76 6 まぐろを取る方法はいろ／＼あるが、だいほう網で取るほど

勇壯なものはあるまい。

十二76 8 だいほう網は身網と垣網と二つの部分から成つてゐて、非常に

大きなものである。

だいほうふうう 「大暴風雨」(名) 1 大暴風雨

六84 8 「略」、一夜大暴風雨がおこつて、海はわきかへつた。

たいぼく 「大木」(名) 10 大木

四57 1 図 「略」、僕だつて、見上げるほどの大木になつて

見せずにおくものか。」

四57 4 図 「略」、山のふもとの大木はあゝのしひの木か、「略」。

六94 1 「略」、正成は高いがけの上から大木を落させた。

七19 5 「略」、岸には大木がきりたふしてあります。

十38 5 かり取つた雜木、切倒した大木、掘起した木の根や石ころ、「略」。

十40 3 力藏さんも、「略」、昨日からひきかけてゐるけやきの大木を、大のこぎりでひき始めた。

十44 2 力藏さんのひいてゐたけやきの

大木も、見事に根本から切倒された。

十117 10 何百年も経たであらうと思はれる樟の大木が茂り合つてゐる。

十一108 3 図 森林には大木すき間もなく繁茂し、「略」。

十一109 5 図 「略」、次にををを振るつて大木を伐るに、「略」。

たいまつ 「松明」(名) 4 たいまつ

四94 2 「略」、二人はたいまつで道をてらしてくどうのやかたへ向ひました。

四94 7 二人はたいまつを上げて、

つくづくとかほを見合ひました。六96 5 すると正成は、「略」、たくさんなたいまつを出して、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。

十一25 10 図 「略」、美濃路の方面に當りてたいまつ

の光おびたしく、「略」。

だいまよう 「大名」(名) 2 大名 ↓ しまだいまよう

七105 3 図 其の方は無分別者で、大名になつてもまだ仲間げんくわのくせがぬけぬ。

十71 1 図 諸國の大名・小名きら星の如く並べる中に、「略」

だいまん 「大明」(地名) 1 大明

七105 9 図 大明の軍勢四十萬、勢はげしくおしよせたるに、「略」。

だいまん ↓ なんだいまんんどおり

だいまんじ 「大文字」(名) 1 大文字

十132 7 図 「略」、大いなる櫻の幹をけづりて、大文字に詩の句を書きつけた。

たいや (名) 1 タイヤ

十一49 4 自動車・自轉車のタイヤ、「略」など、數へてみるとゴムで造つたものは實に多い。

だいや 「大谷」(地名) 1 大谷

十111 1 図 二荒の山もと 木深き處、大谷の奔流 岩打つほとり、「略」。

たいよう 「太陽」(課名) 2 太陽

十一目2 第一課 太陽

十一12 第一課 太陽

たいよう「大洋」(名) 1 大洋

八七五八「大洋を西へ」と航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がらだらうか。」

たいよう「太陽」(名) 11 太陽

十一一三 地球上に存在するもので、太陽の影響を受けぬものは一つもない。

十一一四 太陽の光と熱とがなくては、
「略」。

十一一六 これほど我々に重大な關係のある太陽とは、一體どんなものであらう。

十一二八 望遠鏡で見ると、太陽の表面は全部が一樣にかゝやいてゐるのではなく、「略」。

十一三五 ところが此の大きな太陽も、夜の空に銀の砂をまいたやうに見える小さな星の一つと同じものだといふ。

十一三七 つまり此の宇宙には、あの太陽のほかに、これと同じやうなものがあるが、
「略」。

十一三〇 しかも我々に最も近いあの太陽でさへ、地球からは凡そ三千八百萬里も離れてゐる。

十一四二 「略」、太陽に到着するには八十七年かゝるのである。

十二五八 其の時、今まで雲の中に居た太陽が顔を出したので、「略」。

十二一七「略」、「略」光の色が太

陽に似て、しかも比較的熱をとまなふことの少い電燈さへも「略」。

十二一七四 一體最も理想的な燈火は太陽の光のやうに明るくて、「略」。

たいようしゅう「大洋州」(地名) 2 大洋洲

七一八「略」、陸を分けて、アジア・ヨーロッパ・アフリカ・南アメリカ・北アメリカ・及び大洋洲とす。

七二「略」大洋洲
たいようれき「太陽暦」(名) 8 太陽暦

十一九二 暦には太陽暦と太陰暦とあつて、「略」。

十一九四「略」、日本では明治五年まで太陰暦を用ひてゐたが、其の翌年から太陽暦を用ひた。

十一九五 それから太陰暦を舊暦、太陽暦を新暦といふやうになつた。

十一九六「どうして太陽暦を用ひるやうになつたのですか。」

十一九七 太陽暦の方がよく季節にあつて都合がよいからだ。

十一九八 太陽暦は春分から春分までを一回歸年といつて、それを本としてこしらへたものだ。

十一九三 ところが太陰暦は「略」、太陽暦とくちがたつて來て、「略」。

十一九七 したがつて二百十日も太陽暦なら大が九月一日で、「略」。

たいら「平」(形状) 1 平

七三五 通は廣くて平で、歩道と車道の間に並木が植ゑてありますが、「略」。

たいら「平」(形状) 1 平
三三六「略」、此の地峽を切通し、平かな掘割を造つて、太平・大西兩洋の水を通はせることは「略」。

たいら「平」(下二) 2 平
「略」

九九九 景行天皇の皇子日本武尊、蝦夷を平げよとの勅命を奉じて、東國の方に下り給ひき。

十二五〇 昔、大國主命賊を平げ民をなつて、威勢四隣に並ぶものなし。

たいらのこれより「平維盛」(人名) 1 平維盛

六二七 大將は平維盛で、十萬騎を引きつれて、越中の國の礪波山に

ぢんを取りました。

だいいり「大陸」(名) 5 大陸

十二八〇 樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、「略」。

十二八二 樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざることは、「略」。

十二八四「略」、對岸の大陸に渡りて其の地の模様を探るは、「略」。

十二八四 たま／＼／＼が交易のため大陸に渡らんとするに際し、「略」。

十二八七「略」、樺太は大陸の一部

にあらざること明白となりしのみならず、「略」。

だいいりさま「内裏様」(名) 2 ダイリ様

四八五「ダイリ様ノ下ノダンニ、弓ヤ矢ヲ持ツテ居ル人ハ何デセウ。」

四八六「ダイリ様ノゴ家來ダサウデス。」

だいいりに「代理人」(名) 1 代理人
十一二九 又民事裁判では、原告・被告の相談相手・附添人又は代理人となつて其の主張を助け、「略」。

たいりょうばた「大漁旗」(名) 1 大漁旗

十二七九 船がまぐろで一ぱいになると、大れふ旗を風になびかせながら、「略」。

だいいん「大連」(地名) 2 大連

七三五 大連へ來てから、もうかれこれ七八十日、町のもやうも大分わかつて來ました。

七三八 大連の貿易高は横濱や神戸よりは少し下で、大てい大阪ぐらゐだといひます。

だいいんだより「大連便」(課名) 2 大連だより

七目三 第十二 大連だより

七三五 第十二 大連だより

六目九 第六 くりから谷

七目7 第六 鎌倉攻
 七184 第六 鎌倉攻
 八目10 第六 呉鳳
 八222 第六 呉鳳
 九目7 第六 五代の苦心
 九216 第六 五代の苦心
 十目7 第六 霧
 十295 第六 霧
 だいろっか「第六課」〔課名〕4 第六課
 十一目7 第六課 裁判
 十一187 第六課 裁判
 十二目7 第六課 商業
 十二221 第六課 商業
 だいろっかいめ「第六回目」〔名〕1 第六回目
 七458 第六回目にいたつて、信玄から謙信へ、「略」と申しこんだ。
 たいわん「台湾」〔地名〕7 臺灣 臺灣
 六555 臺灣の新高山さ。これは一万三千尺からある。
 六566 臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、「略」。
 六633 いや、二番も三番も臺灣にあつて、四番目が富士山だ。
 八223 臺灣の蕃人には、お祭に人の首を取つて供へる風がありますが、「略」。
 十644 臺灣・樺太など、遠方より送り來れるもあれば、「略」。
 十一914 そこを見ると、臺灣や樺

太のやうな遠い所の氣候までも大體分る。
 十二491 〔略〕、檜は木曾産の聲譽高く近時臺灣阿里山の檜また有名な。
 たいん「他院」〔名〕1 他院
 十二893 かうして其の院で可決すれば、其の案を他院に移す。
 たう「耐」〔下二〕3 たふ 耐ふ
 〔一フルーへ〕
 十一127 鐵眼此の状を目撃して悲しみにたへず。
 十二4610 〔略〕、又よく濕氣に耐ふるが故に、建築材として最も重んぜらる。
 十二476 〔略〕、つがは堅くして久しきに耐ふるが故に、家屋の柱・土臺となすに宜し。
 たうえ「田植」〔名〕2 田植
 九468 田にいさん、昨日でうちの田植がすつかりすみました。
 九4710 田植がすんだので、「略」。
 たうえどき「田植時」〔名〕1 田植時
 五757 六月の田植時から七月・八月にかけて、水はありあまつた。
 たえ「妙」〔形状〕1 たへ
 十1122 第二十一 日光山「略」。
 美術の光のかやく此の地、山皆緑に 水また清く、樂園日本の たへなる花と、とつ國人さへめづるもうべぞ。
 たえか・ねる「耐兼」〔下二〕1 たへ

かねる「一ネ」
 十一548 熱帯の暑さにたへかねてゐた船員等は、「略」。
 たえず「絶」〔副〕6 たえず 絶えず
 五233 〔略〕、おくの方からたえずちくおんきの音が聞えて來ます。
 七576 〔略〕、それゆゑたえず海の深さはかつたり、かねや汽笛を鳴らしたりします。
 十856 〔略〕、あの坑内でたえず活動してゐる坑夫の仕事を、たふといものに思ひました。
 十一346 〔略〕、汽船絶えず通航して、遠く近く黒煙の青空にたなびくを見る。
 十一767 其の後官長は絶えず文通して眞淵の教を受け、「略」。
 十二781 〔略〕、漁夫が絶えずまぐろの來るのを見張つてゐる。
 たえだえ「絶絶」〔形状〕1 たえだえ
 十二922 〔略〕、息もたえだえの病人、「略」。
 たえま「絶間」〔名〕1 絶間
 十一997 〔略〕、電車・馬車・自動車等が絶間なく往來してゐる。
 たえる「耐」〔下二〕2 たへる「一へ」
 十二656 それに近來はめつつきり元氣が衰へて、もう政務にもたへられなくなつて來た。
 十二928 〔略〕、遂に心の苦しみにたへられなくなつて、「略」。

たえる「絶」〔下二〕3 たえる「一エーエル」
 五325 〔略〕、りやうがはの歩道に人通のたえることがあります。
 五455 〔略〕、「略」といつて、息がたえました。
 六835 其の後も攻めよせる者がたえないので、「略」。
 たおす「倒」〔五〕1 たふす
 シ「ひきりたおす・ぶつたおす」
 六828 通有ははしらをたふして、之をはしごにして、敵の船へをどりこんだ。
 たおる「倒」〔下二〕3 たふる 倒る「ール・ーレ」
 七318 〔略〕、蛇は眞二つとなりて、大地にのたうちまはりてたふれたり。
 十一2810 〔略〕、敵は見る間にばたくと倒れて、一軍今や崩れんとす。
 十一1096 〔略〕、次にをのを振るつて大木を伐るに、「略」地ひびきを打つて倒る様、壯快言語に絶し候。
 たおれる「倒」〔下二〕9 たふれる
 倒れる「レ・ーレ」
 五541 或日山の中で、こけに足をすべらせて、うつむけにたふれました。
 五803 〔略〕、狐はころりとたふれました。
 五808 〔略〕「びつくりしてたふれたのだ。ほつて置け、今に生きかへる。」
 五868 〔略〕、うちでも下の雨戸が

たふれて、中からうすやたらひがば
かばか流れ出すほどで、〈略〉。

五九二 一人はもうにげる間がないの
で、地にたふれて、死んだふりをし
てゐました。

六八八 敵はげしく射立てた。味方
はばたばたとたふれた。

七九四 垣根も倒れれば、しをり戸も
外れる。

七九九 ところが或夜大地震が起つて、
人家堂塔一時に倒れ、〈略〉。

九一〇 中尉はあをのけになつて倒れ
てゐる。

たか じうりあげだか・きんだか・でき
だか・ぼうえきだか

たが 〔籠〕(名) 1 タガ↓かなたが

三六六 〔略〕ヲケヤガ來テ、手ヲ
ケヤタラヒノ タガヲカケカヘ
マシタ。

たかい 〔高〕(形) 73 タカイ 高い

高い 〔イ・ウ・ク〕↓かん
かい・こだかい・なだかい・ものみだ
かい

一八三 コノタカイトコロ ハヤマ
デス。

三二六 三〇から竹の子が出る
のです。このあひだ〈略〉出た
のは、もう私のせいより高く
なりました。

三五八 かへるは〈略〉とびつかう
とします。だんだん高くとべる
やうになつて、〈略〉。

三六四 〔略〕、高く上ゲルト、ヤネ
ノ上マデトドキマス。

三八一 〔略〕 青空 高くそびえたち
、ふじは日本一の山。

三九〇 〔略〕、天人はまひながら
松原の上をだんだん 高く上つ
て、〈略〉。

三九〇 〔略〕、天人は〈略〕、ふじ
の山よりも 高い 大空のかす
みの中へはいつて行きました。

四二九 〔略〕、もう 高い えんとつ は 大方
出来上りました。

四三六 〔略〕、モズハ 〔略〕、高い所カラ
トシテ來ガケニ、フクロフノ
カホヲケツテ、〈略〉。

四六六 〔略〕、赤い扇は 〔略〕、空に高
くまひ上つて、〈略〉。

四七六 〔略〕、せいの 高い 私の目にも、
〔略〕。

五二六 〔略〕、六 鯉のぼり 〔略〕、家のむ
ねよりも 高く尾を上げます。

五三九 〔略〕、八幡様の 高い石だんを上りつ
めた所に、〈略〉。

五五一 〔略〕、庭へ降ル雨モ、庭ノ高い所カ
ラ、低い方へ流レテ行キマス。

五五二 〔略〕、高い所ニ行キアタルト、
其所ヲヨケテ流レマス。

五五八 〔略〕、あたりの 高い所からもながめ
ますが、〈略〉。

六四六 〔略〕、高い山はもう雪だらう。

六七四 〔略〕、外國には、新高山より、も
つと高い山がありますか。

六七八 〔略〕、しかし三郎、高い山がかな
らず名高い山だとはかぎらない。

六八六 〔略〕、ふとん着て、ねたるすがた
や東山。で、先づ高い岡だと思へば
よい。

六八七 〔略〕、高くて名高いのは、どの山
ですか。

六一〇 〔略〕、金や銀ハ美シクテ、〈略〕、
ネダンモ高ウゴザイマス。

六二七 〔略〕、高い木の上をとびまは
つて鳴いてゐる。

六三二 〔略〕、車ノ音ヲ高くサセテ、
ハシツテ行ツタ。

六八〇 〔略〕、敵は高いやぐらのある大船
〔略〕。

六八二 〔略〕、いよくおしよせたが、敵の
船は高く上ることが出来ない。

六九四 〔略〕、正成は高いがけの上か
ら大木を落させた。

六一〇 〔略〕、〔わたし〕の植ゑた落葉松
が あんなに高くなりました。

七四九 〔略〕、セイガ高く、目ガスルドクテ、
〔略〕。

七五五 〔略〕、時には鯨が高く潮を吹いて
ゐるのを見ることがあります。

七六四 〔略〕、人夫と渡賃を高いやす
いと言つてあらそつてゐましたが、
〔略〕。

七六五 〔略〕、渡賃が高いといつて、
〔略〕。

八四五 〔略〕、始は熱が高くて心配致しま
したが、〈略〉。

八五六 〔略〕、「せいは高くても、まだだ
めだ。」

八七九 〔略〕、高い建物のあることは世界
第一で、〈略〉。

八七二 〔略〕、中で最も高いのは五十五階
もあります。

八七三 〔略〕、中で最も高いのは五十五階
もあります。〈略〉。アメリカ人は大
きいこと、廣いこと、高いこと、早
いこと、何でも世界一になるやうに
心掛けてゐるといひますが、何しろ
大した勢です。

九五三 〔略〕、コ、椰子は、高いのは七八
間もあります。

九四六 〔略〕、之ヲ望ム者少ケレバ、
其ノ物ノ價安クナリ、品物少クシテ、
之ヲ望ム者多ケレバ、其ノ物ノ價高
クナル。

九四七 〔略〕、山田の 高い所まで一
息に植ゑることが出来ました。

九五七 〔略〕、前の麥葉の山が見る
く、高くなる。

九六四 〔略〕、ラツパが一きは高く
ひゞき渡ると、〈略〉。

九八八 〔略〕、「あゝ、あの一番高い杉の
眞上の所にあるのが北極星でせう。」

九一〇 〔略〕、北風は、〈略〕、得意さうに頭
を高くあげた。

九一〇 〔略〕、中尉は 〔略〕、一だん高く軍
刀をふりかざし、〈略〉。

九一〇 〔略〕、又自分の最愛の主人に
味方の勝利を語るやうに、一聲高く

天に向つていなゝいた。
 十206 罫 せり場の一方に高い臺があつて、其の上に掛の人が居る。
 十224 罫 〈略〉、直段も一頭四千圓・五千圓といふ高いのがあるさうです。
 十321 高い土地の上に水をたゝへたのであるから、湖の水面は海面よりずっと高い。
 十324 〈略〉、湖の水面は海面よりずっと高い。
 十327 所で、此の高い湖と低い掘割を何の仕掛もなしに連結すれば、〈略〉。
 十3310 底の水道から水がわき出て、船は次第に高く浮上る。
 十342 前と同じ方法で、船はもう一段高く浮上り、〈略〉。
 十346 此の湖を横ぎると又水門があつて、船はさらに一段高くなる。
 十348 〈略〉、船は、海面より約二十メートルも高い水面に浮ぶのである。
 十351 これは高い山地を切通したもので、〈略〉。
 十431 日は大分高くなつてさわやかにかゞやき、〈略〉。
 十432 〈略〉、高い／＼青空を、ひわの一群が身輕さうに飛んで行く。
 十432 〈略〉、高い／＼青空を、ひわの一群が身輕さうに飛んで行く。
 十537 罫 貸附の利子は預金の利子より高くしてあるから、〈略〉。

十739 罫 京城の市街は、もと石でたゞんだ高い城壁で圍まれ、〈略〉。
 十852 罫 それから『燃える石』といふひやうばんが高くなつて、〈略〉。
 十1126 〈略〉、海面にはまだ波のうねりが高い。
 十11210 〈略〉「鯨、鯨。」と聲高く叫んで、北の方を指さした。
 十1223 温度は表面で約六千度、内部に入るに随つて益々高い。
 十1517 南洋は一年中温度が高く、雨量が多いので、〈略〉。
 十1676 〈略〉、石炭の火は木炭の火よりずっと熱度が高いので、〈略〉。
 十1762 罫 〈略〉、先づ土臺を作つて、それから一步一歩高く登り、〈略〉。
 十11204 ジョージは、かねてウェリントン公爵が勲功も高く、〈略〉といふ事を聞いてゐたので、〈略〉。
 十1228 買ふ人の無智に乗じて安い品を高く賣付け、〈略〉。
 十1249 〈略〉、湖面は海面より四百メートルも高く、〈略〉。
 十12517 即ち水位の一番高い五月と一番低い一月との差は、〈略〉。
 十12710 身網の外側や陸上の高い處に魚見やぐらが設けてあつて、〈略〉。
 たがい「互」(名) 9 たがひ 互におたがい
 六637 二人がたがひに取りついて、うれし泣きに泣いた時には、〈略〉。
 七462 罫 〈略〉、信玄から謙信へ、

「〈略〉。よつて明日たがひに勇士を一人づつ出して組討をさせ、〈略〉。」と申しこんだ。
 七475 二人はたがひに馬を乗りよせて、馬上のまゝでむんずと組み、兩馬の間にどうと落ちた。
 八94 二人を出した村の者はたがひに勝利をいひはるので、〈略〉。
 八1032 罫 此の時胃は一同に向つて言ひました。「〈略〉。〈略〉、これから後は互に親しみ合つて暮しませう。
 九987 罫 〈略〉、いづれおとらぬ高山が、南から西へ連なつて、互に雄姿を競つてゐます。
 十1334 罫 昔支那に呉・越とて相隣れる二國ありき。年久しく相争ひて互に勝敗ありしが、〈略〉。
 十1517 罫 當時支那は數國に分れて互に相争ひ、戦亂止むことなかりしかば、〈略〉。
 十121210 しかし二人は互に信じ合つてゐる仲なので、話はおだやかに運ばれる。
 たがう「違」(五) 1 たがふ「ハ」
 十1717 罫 其の時の言葉にたがはず、眞先かけて参つたは感心の至り。
 たかく「多額」(名) 1 多額
 十888 〈略〉我が國の輸出入總額は數十億圓の多額で、〈略〉。
 たかさ「高」(名) 10 高サ 高さが
 五715 土手は長さが三百間、高さが

六間半、〈略〉。
 七274 馬の高さは前足の所ではかる。
 八307 かまはさしわたしが一丈ぐらゐ、高さが四五尺ぐらゐで、〈略〉。
 八969 罫 〈略〉金ノシヤチホコアリ。其ノ高サ八尺五寸、〈略〉。
 九307 瀧の幅は、アメリカ瀧が百餘丈、カナダ瀧が三百餘丈、高さはどちらも十六丈あります。
 十11054 罫 次にイグアッスーの瀧は、〈略〉、高さ五十五メートル、〈略〉。
 十1279 罫 〈略〉、本殿の如き其の高さ實に八十尺に及ぶ。
 十123210 罫 此の塔は世界最高の建物で、高さが三百メートルもあるさうです。
 十12507 岸は絶壁になつてゐる處が多く、〈略〉、絶壁の高さが二百メートル以上もある。
 十121106 洞門の長さは實に三百八間、高さ二丈、〈略〉。
 たか・し「高」(形) 14 高シ 高し「キ・ク」よりずたかし・なだかし
 七319 罫 獅子はうれしげに一聲高くほえ、〈略〉。
 七957 罫 罫 〈略〉、掛聲高くおしてやる。
 九455 罫 又コ、ニ一匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、〈略〉、争ヒテ高キ價ヲツク。
 九456 罫 カクテ價ハ次第二高クナリ

テ、〈略〉。

九45 6 図 〈略〉、馬ハ最モ高キ價ヲツケタル人ノ物トナル。

十59 8 図 〈略〉、身なりはそまつなれど氣品高き婦人立出でて、〈略〉。

十128 9 図 〈略〉、羽音高く舞上る數羽の鳩。

十129 7 図 見る／＼艦は速力を増して、白波高く海にをどり入る。

十一80 10 図 高く鼻つく／＼その香に、不斷の花のかをりあり。

十二26 6 図 上るや石のきざはしの左に高き大いてふ、〈略〉。

十二28 6 図 建長・圓覺 古寺の山門高き松風に、昔の首やこもるらん。

十二49 1 図 〈略〉、檜は木曾産の聲響高く〈略〉。

十二99 8 図 〈略〉、東大寺の金堂は天空高くそびえて、〈略〉。

十二103 6 図 〈略〉、其の南に一きは高く多武峯・吉野山の山々連なるを見る。

たかしお 「高潮」(名) 1 高潮

十二80 7 圖 八重の高潮かちどき揚げて、海の誇のあるところ。

たかぞら 「高空」(名) 1 高空

十58 10 あゝ、あのかはいゝ鳩が、〈略〉、勇ましく高空に輪を畫がきながら、〈略〉。

たかだち 「高館」(名) 1 高館

九72 3 圖 義經の居た高館のあととも

〈略〉。

たかだやさだきちどの 「高田屋定吉殿」(人名) 1 高田屋定吉殿

七114 6 圖 代金は二口合はせて月末に送ります。十月十三日 山口屋小三郎 高田屋定吉殿

たかちほ 「高千穂」(名) 1 高千穂

九114 5 或日我が軍艦高千穂の一水兵が、〈略〉。

たかちほかん 「高千穂艦」(名) 1 高千穂艦

九119 3 圖 〈略〉、我が高千穂艦の名をあげよう。

たかとき じほうじようたかとき

たかときいかほうじようがた 「高時以下北条方」(名) 1 高時以下北条方

七22 5 〈略〉、賊の大將高時以下北条方は、此の火の中にほろびてしまひました。

たかなみ 「高波」(名) 1 高波

六20 2 いつも通る汽船も、高波をよけて、沖を通ると見えて、〈略〉。

たかなわ 「高輪」(地名) 2 高輪

八112 1 図 〈略〉、往復一里餘もある高輪の泉岳寺へよく連れて行つた。

十二125 9 西郷は早速承知して、芝、高輪の薩摩屋敷で會見したが、〈略〉。

たかね 「高根」(名) 1 たかね

十二117 図 大空にそびえて見ゆるたかねにも、のぼればのぼる道はありけり。

たかのり 「高德」(人名) 3 高德 ↓

こじまたかのり

十130 10 図 然るに今主上隠岐にうつされ給ふと聞き、高德一族共を集めていへるやう、〈略〉。」と。

十132 3 図 高德せめては此の所存を君に知らせ奉らばやとて、〈略〉。

十133 10 図 高德此の故事をひきて、〈略〉。

たかはしさん 「高橋」(人名) 6 高橋さん

十二12 図 〈略〉、〈略〉朝鮮から歸つてをられる高橋さんが來られた。

十二13 高橋さんは、あちらで長らく教育に従事してゐる人である。

十二19 誰かが力石をころがして來て、土をはらつて高橋さんの爲に席を作つた。

十二110 高橋さんは、すぐ前に居る順太郎君を見て、「〈略〉。」

十三16 高橋さんは、お茶を一口飲んで、「〈略〉。」

十五18 高橋さんの熱心な話は、それからそれへと續いて、〈略〉。

たかはま 「高浜」(地名) 1 高濱

十一34 5 圖 瀬戸内海の沿岸には大阪・神戸・〈略〉・高濱等良港多く、〈略〉。

たかまつ 「高松」(地名) 1 高松

十一34 5 圖 瀬戸内海の沿岸には〈略〉・高松・多度津・高濱等良港多く、〈略〉。

たかまど 「高円」(地名) 1 高円

十二101 7 圖 佐保・佐紀の連岡に北を限り、春日・高圓の山々を東に、〈略〉。

たかまどやま 「高円山」(地名) 1 高円山

十二102 圖 高円山

たか・める 「高」(下) 1 高める

十二90 7 〈略〉、あはせて國の品位を高めることにつとめなければならぬ。

たかもり じかつやすよしとさいごうたかもり・さいごうたかもり

たがや・す 「耕」(四・五) 3 耕す

《「サ・ス」

八28 6 圖 〈略〉、農夫の田畑を耕すも、皆手の働なり。

十一63 6 こんな廣い畠であるから、耕すにも、うねを作るにも、〈略〉。

十一64 3 〈略〉、二間幅ぐらゐに耕されて行く。

たから 「玉」(名) 7 たから 寶

三84 6 圖 〈略〉、ひろつて家のたからにしよう。」

三85 5 圖 〈略〉、持つてかへつて家のたからにします。」

三86 2 圖 「天人のはごろもなら、〈略〉。國のたからにいたします。」

十一94 4 圖 こんな重寶なものがあるのに、それを利用しないのであるのは寶の持ちぐされだ。

十一256 図 一切経は、〈略〉、此の教に志ある者の無二の寶として貴ぶところなり。

十二6610 図 私はもう何よりも、どんな寶よりも〈略〉父上を大事と存じます。

十二1243 図 〈略〉、うづたかき積荷の中に 海山の寶を載せて、船は今靜かに歸る、〈略〉。

だから (接) 2 だから

十517 図 うちに置くと、火事にあつたり、盗人に取られたりする危険があるからね。さうで無くても、餘分のお金があると、ついむだな事に使つてしまふ。だから、少しでも餘つたお金があつたら必ず預金にして置くものだ。

十528 図 「それでは當座預金の方が便利ですね。」「便利だが、その代り利子が安い。定期の方には利子がずつと多く附く。だから當分使ふ見込のない、まとまつたお金は定期預金にした方がよいのだ。」

たからもの「宝物」(名) 4 タカラモノ

一536 オニドモ ハカウサンシテ、ダイジナ タカラモノ ヲダシマシタ。

一541 圖 クルマ ニツンダ タカラモノ、イヌガ ヒキダス エンヤラヤ。

二432 ヨイ オヂイサン ガソコヲ

ホツテミマス、ト、土ノ中カラ、オカネヤタカラモノガタクサンデマシタ。

二462 ソノウスデ米ヲツキマスト、ウスノ中カラ、マタオカネヤタカラモノガデマシタ。

たかゝる【集】(五) 1 タカル

《一ツ》

四364 スルトホカノ鳥ガ見ツケテ、〈略〉、ヨツテタカツテイデメカヘシマス。

たき【滝】(名) 7 瀧ハアメリカだき・カナダたき・ナイヤガラのだき

九2910 瀧は、落口にあるゴート島といふ小島の爲に二つに分れてゐます。

九305 瀧の幅は、アメリカ瀧が百餘丈、カナダ瀧が三百餘丈、〈略〉。

九309 瀧の上手にかけた石橋を渡り、〈略〉。

九312 〈略〉、もうくくと立ちこめる水煙の間から近く瀧をながめるのもよく、〈略〉。

十329 〈略〉、湖の水は瀧のやうに掘割へ落込んで、〈略〉。

十一1053 圖 次にイグアッスーの瀧は、ブラジル國と隣のアルゼンチン國との境にある大瀑布にて、〈略〉。

十二522 これは奥入瀬川を十町餘り下つた處に大きな瀧があつて、〈略〉。

たきかわ【滝川】(地名) 1 瀧川

十一609 狩勝の展望 瀧川から根室^{ねむろ}の汽車に乗ると、〈略〉。

たきぎ【薪】(名) 7 たきぎ 薪

三232 そのとき正一のおぢいさんが、たきぎをうまにつけてそこへきました。

五532 山から薪を取つて来て、〈略〉。

十477 図 「薪は無いか。薪は無いか。」

十477 図 「薪は無いか。薪は無いか。」

十659 図 だんく寒くなつて来たが、あやにく薪も盡きてしまつた。

十848 図 或日、此の附近の山へ薪をとりに来た百姓が、〈略〉。

十853 図 〈略〉、附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。

だきつく【抱付】(五) 2 だきつく

《一イ》

六882 自分たち程の子どもが出て来て、象の前足にだきついて見せた。

八864 おとよは信吉の顔を見ると、かけよつて来て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

たきつぽ【滝壺】(名) 1 瀧つぽ

九318 殊に遊覧船に乗つて、〈略〉、瀧つぽを見物して廻るのは、實に壯快です。

たきび【焚火】(名) 3 たき火

十395 兄は〈略〉、小枝などを拾ひ集めて来て、たき火を始めた。

十399 〈略〉、たき火のそばの切りかぶに腰を下し、〈略〉。

十848 図 或日、此の附近の山へ薪をとりに来た百姓が、たき火をしてゐると、〈略〉。

たぎゝる【滾】(五) 2 たぎる 《一リール》

十二801 圖 山もどろに引潮たぎり、〈略〉。

十二811 圖 〈略〉、たぎる引潮あら渦を巻き、〈略〉。

たく【宅】(名) 1 宅

十二838 図 〈略〉、酋長^{チーフ}コーニの宅に留りてしばらく時機の至るを待ちぬ。

たく【焚】(四・五) 9 タク

《一イ・カ・キ・ク》

六117 図 飯ヲタクカマモ、〈略〉。

八515 おぢいさんは大釜の火をたいていらつしやる。

十661 図 あのだ木の木をたいて、せめてものおもてなしにしよう。

十665 図 お志は有難いが、そんなりつばな鉢の木をたくのは、どうぞ止めて下さい。

十672 図 〈略〉残して置いたのでございすが、今夜は之をたいて、あなたのおもてなしに致します。

十673 図 主人は三本の鉢の木を切りてゐるにたきぬ。

十7110 図 又寒夜に秘藏の鉢の木を切つてたいた志は、〈略〉。

十一277 図 〈略〉、かゞり火をたかせ、糧^{りやう}食の用意をなさしむ。

十一679 燈火としては、初め松の木

や魚・獣の油などをたいたのであつたが、〈略〉。
だ・く「抱」(五) 3 ダク だく「一イ・カ」

二24 6 ミヨチャンガイマオカアサンニダカレテ、オチチヲノンデキマス。

三5 8 メンドリハ〈略〉、タマゴヲハラノ下ニダイテシマヒマシタ。

四44 3 花子はねこをだいてうろうろして居ましたので、〈略〉。

だくおんはんだくおんもじ「濁音半濁音文字」(名) 1 濁音半濁音文字

七112 図 濁音半濁音文字の下は一字あけること

たくさん「沢山」(形状) 10 タクサン たくさん

六64 3 〈略〉、萬じゆにはたくさんなほうびをあたへましたので、〈略〉。

六96 4 すると正成は、〈略〉、たくさんなたいまつを出して、〈略〉。

七38 2 図 〈略〉、たくさんな大船を一度きに横づけにすることが出来ます。

七86 1 此ノ他海藻ニハマダタクサンナ種類ガアツテ、〈略〉。

九86 5 図 それに、たくさんの星の中に一つだけ、〈略〉。

十18 6 図 中には、母馬がつきそつて来てゐるのもたくさんにあります。

十一51 4 〈略〉、日本人の経営してゐるゴム園もたくさんにある。

十一118 1 農場主は〈略〉を、たくさんの馬や犬にふみあらされてはたまらないと思つて、〈略〉。

十二41 2 図 有難うございます。しかし誠に粗末なビヤノで。それに樂譜もございませんが。」と兄がいふ。

〈略〉。「いや、これでたくさんです。」といひながら、〈略〉。

十二54 6 図 あのいろいろの道具、たくさんの時計、〈略〉。

たくさん「沢山」(副) 43 タクサン たくさん

一25 4 ツボミモタクサンツイテキマス。

二8 3 図 「ソノツギハ、アノタクサンサイテキル、小サナキイロイキクデス。」

二20 3 図 コノ山ニハ、クリノ木ガタクサンアリマス。

二33 5 〈略〉、田ヤハタケヲタクサンモツテキタ人ガアリマシタ。

二43 2 〈略〉、オカネヤタカラモノガタクサンデマシタ。

二50 6 「略。」トオホメニナツテ、ゴホウビヲタクサンクダサイマシタ。

二61 3 図 「略」、モツトタクサンオアガリニナツタラ、ハヤクナホリマセウ。」

三20 7 〈略〉わらびがたくさんはえてゐました。

三22 6 〈略〉、二人はたくさんとつてからくらべてみました。

三69 1 〈略〉小サナアナヲタクサンアケマシタ。

三69 5 図 コンナニアナヲタクサンアケテハダメダ。

四8 1 この二十五日はおちいさんのめい日ですから、たくさん取つてそなへるつもりです。

四60 7 私ハ昨日大工サンカラ木ノキレヲタクサンモラツテ、〈略〉。

四79 6 私は長い間に子どもをたくさん見ましたので、〈略〉。

五10 6 図 強い酒をたくさんつくれ。

五24 1 入口の左手には、小切やえりや帯あげなどがたくさん下げてあつて、〈略〉。

五28 7 〈略〉、此のころは栗の花がたくさんさいてゐます。

五56 3 日本の國には、景色のよい所がたくさんありますが、〈略〉。

五58 5 〈略〉、島の山には鹿がたくさんすんでゐます。

五97 3 私ドモハブダウノ實ヲ生デタバマスガ、タクサン作ル所デハ、〈略〉。

六10 2 図 金や銀ハ美シクテ、〈略〉、ドチラモタクサンアリマセンカラ、〈略〉。

六10 4 図 銅ハソレニヒキカヘテ、金や銀ヨリモタクサンアリマスカラ、

〈略〉。
六11 4 図 ナルホド、銅ハタクサンアツテ、〈略〉。

六11 5 図 〈略〉、モツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。

六66 1 〈略〉、果シテ磁石ノサキニ釘ガタクサンツイテキタ。

六68 2 〈略〉、たくさん金を出した上に、〈略〉。

六71 1 賀茂川には橋がたくさんかけてあります。

七15 1 妹とお松のさるには、やどかりがたくさんゐた。

七75 8 〈略〉、人夫にほうびの金をたくさんやつたと申します。

七82 7 虫類モタクサン居ル。

七82 8 中デ面白イノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテキル。

八65 6 図 サンフランシスコには、日本人がたくさんゐて、〈略〉。

八73 8 図 〈略〉、〈略〉圖書館などもたくさんあります。

九7 1 図 珍しい植物は此の外にもまだたくさんあります。

九85 3 図 「にいさん、空にはあんなにたくさん星が見えますが、〈略〉。」

九86 10 図 「でも、あんなにたくさんある星ですもの、〈略〉。」

九97 3 〈略〉、岡田さんは高山植物や雷鳥の繪葉書を、たくさん出して見

せて下さいました。

九99 面白いお話がまだたくさんありさうでしたが、〈略〉。

十82 〇「坑内には、ねずみがたくさん居て困ります。」

十101 〇「たぐさん咲いてゐる中で一番美しいのは、〈略〉。」

十一103 〇「此の手紙と一しよに、繪葉書をたくさん小包にて送り申候。」

十二30 〇「我が日本のよろひ・かぶと其の他の武器類もたくさん集めてあります。」

十二53 〇「〈略〉、いろ／＼な時計がたくさん並んでゐる。」

たくじょう 〇「卓上」(名) 1 卓上

八76 〇「諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立ててごらんない。」

たくまし 〇「遅」(形) 1 たくましい

九60 〇「分家の金次叔父さんは、軍隊歸のたくましい腕で、〈略〉。」

たくみ 〇「巧」(名) 1 巧

十111 〇「浮きぼり・毛ぼりの柱にけたに、振るひしのみので巧をきはめ、〈略〉。」

たくみ 〇「巧」(形状) 2 たくみ 巧み

十33 〇「掘割の處處に水門を設けて、たくみに船を上下する様にしてある。」

十二136 〇「他國の文明を消化して、之を巧みに自國のものとすることは、

〈略〉。

だくりゅう 〇「濁流」(名) 1 濁流

八21 〇「夏、夏季ハコトニ増水シテ、濁流江ニミナギリ、〈略〉。」

たぐる 〇「手繰」(五) 1 たぐる

十二78 〇「そこで数その船に分乗した漁夫が、〈略〉身網を一方からたぐつて行く。」

たけ 〇「丈」(名) 2 たけ 〇なるたけ

六86 〇「見せ物小屋で象を見た。〈略〉。たけは一丈からあつた。」

九102 〇「北風はたけが五尺二寸もある黒馬で、〈略〉。」

たけ 〇「竹」(名) 10 タケ 竹 〇おや

たけ 〇「さおだけ」

二38 〇「マツノ木ノエダニ、タケノハノ上ニ。」

二56 〇「ハイ、コレハセンドウサン、ナガイ竹ノサラデフネヲコギマス。」

二67 〇「竹になりかかつてゐます。」

二81 〇「〈略〉、二本ならんでゐるほそい竹の子は、いまに竹になつたら、〈略〉。」

三66 〇「アトヘ竹ノキレヲノコシテ行キマシタガ、〈略〉。」

三68 〇「ソレカラホソイ竹ヲエニシテ、〈略〉。」

十二110 〇「〈略〉、實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。」

十二114 〇「彼は直に竹を以て炭素線を作りて實驗せしに、〈略〉。」

十二114 〇「こゝにおいて彼は人を世界の各地につかはして竹を採集せしめ、〈略〉。」

十二114 〇「〈略〉、日本の竹最も適當なりしかば、〈略〉。」

たけ 〇「岳」 〇さほろだけ・しずがたけ・しずがたけふきのす・しゃくしだけ・しろうまだけ・つるぎだけ・のりくらがだけ・ほかかだけ・やりがたけ・やりがだけ

たけ 〇「茸」 〇ねずみたけ・はつたけ・べにだけ

だけ 〇「副助」 47 ダケ だけ

四44 〇「花子も自分のおもちゃだけ、ちやんとおかたづけなさい。」

四63 〇「空をとんで居る鳥でも、三羽ねらへば、二羽だけはきつといおとすほどの上手でございます。」

五13 〇「これだけはお目にかきたいと思ひます。」

五33 〇「〈略〉、〈略〉と四五人の人のすがたが見えるだけでした。」

五44 〇「なみ／＼の者なら、「あつ」とさけんで死にませうが、たけるも熊襲のかしらだけあつて、「〈略〉。」といひました。」

六18 〇「おるす居はおちいさんと私だけです。」

六40 〇「〈略〉、私の村から、今歩兵になつて來てゐるのは私一人だけなのだ。」

六75 〇「ソレダケデスカ。」

六77 〇「コレゴラン、表ダケデ、ウヲノ方ハ染メテナイデセウ。」

七53 〇「〈略〉、乗組人員だけでも二百人からあります。」

七69 〇「ついでには此の中の金を半分だけお禮のしるしにさし上げます。」

七87 〇「根ノヤウナ所モ、〈略〉。タマハナレナイヤウニ、岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲナスモノデ、〈略〉。」

七98 〇「此の人だけは自分のために心配してくれるであらうと思つたのでございます。」

八92 〇「〈略〉、もはや信作と耕造の二人だけの競走となつた。」

八95 〇「〈略〉、神主は二人の者だけで、もう一度競走させることにした。」

八22 〇「〈略〉、亞里山の蕃人にだけは、此の悪い風が早くから止まりました。」

八50 〇「〈略〉、タテ横ニ小枝ヲ並べ、其ノ上ニヤハラカナコケヲ置クダケデアル。」

八54 〇「〈略〉、それでもとう／＼一白だけはつき上げた。」

八66 〇「アメリカ人の元氣なことは、これだけ聞いてもわかりませう。」

八99 〇「〈略〉、君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、少しも僕等の爲に

つくさない。

八〇五 僕はたゞ坐つてゐて物を食ふだけの者ではありません。

八四九 其の時大將は江戸から大阪まで、馬やかごに乗らず、兩親と共に歩いて行つた。當時大將の體は、もうこれだけ丈夫になつてゐたのである。

八五八 郷里の家は「略」と、二疊の板の間が一つだけの、至つてせまい、そまつな家であつた。

九二五 そこで此の父も、何とぞ此の學問を大成したいと、「略」、出来るだけは骨折つたつもりである。

九二七 父の此の願だけは、しかと心にとめて置いて、「略」。

九三二 木立も、まだ若葉だけに、下草まで見えるぐらゐ明るい。

九四一 あれは岩手山だ。南部富士といはれるだけあつて、ちよつと形が似てゐるね。

九八六 それに、たくさん星の中に一つだけ、年中ほとんど位置の變らないのがあるから、「略」。

一〇四八 朝のうちに此のけやきだけぶつ倒したいと思つてね。

一〇五三 大勢の人に利子を拂ふだけでは、銀行が損をしないでせうか。

一〇五七 貸附の利子は預金の利子より高くしてあるから、其の差だけが銀行の収入になるのだ。

一〇六六 しかし此の三本だけは、其

の頃のかたみとして、大切に殘して置いたのでございますが、「略」。

一〇九三 外の者は着物だけは美しかつたが、爪の先は眞黒になつてゐる者が多うございました。

一一三〇 植付けた苗木の枯れた處へ補植するのは、翌年一回だけだといふから、今年はもうしなくともよいのであらう。

一一五〇 船には船長と老砲手だけが殘つてゐた。

一一六二 小僧一人だけ自由に室内に入出させて、いろ／＼の用を足させた。

一一八八 本當に自治の精神に富んでゐる者は、「略」適任者を擧げることだけを考へて、決して私心をもたないものである。

一二二二 商業は之に従事する商人だけを利用するためのものではない。

一二三二 「略」、さすがに世界の大博物館といはれるだけあると思ひました。

一二五一 此處はさすがに藝術の都として世界に聞えてゐるだけあつて、建物なども一般に壯麗です。

一二五二 湖岸線は大體單調であるが、東南岸だけは「略」やゝ複雑になつてゐる。

一二五一 我が國の湖沼中此の湖より深いものは秋田縣の田澤湖だけである。

一二五四 唯自分だけが此のやうに小さくて、何の役にも立ちさうにな

い。

一二九〇 「略」、石は釋迦の足を傷つけただけで、目的を果すことは出来なかつた。

一二九二 そこで人々はいつそ我々も出来るだけ此の仕事を手付けて、「略」と相談して、其の方法をも取りきめた。

一二九八 とにかく明日の總攻撃見合はせの一事だけは、拙者一命にかけて御引受け申します。

一二九八 「略」、主として我々國民にそれだけすぐれた素質があつたからである。

たけうま 「竹馬」(名) 1 竹うま

三二八 「略」、あれで竹うまをこしらへていただくつもりです。

たけがき 「竹垣」(名) 1 竹がき

四六二 「略」、山がらはとび出して、竹がきの上にとまつて、「略」。

たけこ 「竹子」(人名) 1 竹子

五八三 九月七日 竹子 叔母上様

たけこさま 「竹子様」(人名) 1 竹子様

七四六 翌日武田方からは安間彦六といふ大の男が、「略」。

七四八 武田方が之を見て、聲をあげて喜ぶと、「略」。

七四八 無念に思つて、武田方から十騎ばかり、木戸を開いて切つて出ようとした。

たけだしんげん 「武田信玄」(人名) 1 武田信玄

七四四 越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄が、たびたび信濃の川中島で戦つた。

たけちよ 「竹千代」(人名) 3 竹千代

八六三 九つ時から將軍の若君竹千代のおつきになつた。

八六四 竹千代が軒ばに雀の巣を見つけて、「略」。

八八八 長四郎があのかで大きくなつたら、竹千代には無二の忠臣であらう。

たけにすずめ 「竹雀」(名) 1 竹に雀

九七二 昔は竹に雀の紋所で名高い仙臺様の城下であつた。

たけのこ 「竹子」(課名) 2 竹の子

三二五 九 竹の子

たけのこ 「竹子」(名) 3 竹の子

三二五 この二三日の雨で、竹の子がこんなに出来ました。

三二五 そこから竹の子が出るのです。

三二八 むかふの方に、二本なら

- んであるほそい竹の子は、いまに竹になつたら、〈略〉。
- たけのり ↓かすやたけのり
たけひらちよう ↓とうきようこうじま
ちくたけひらちよういち
- たけみかずちのみこと「建御雷命」(人名) 2 建御雷命 建御雷命
十二62図 時に天照大神の使者建御雷命此の地に來りていふやう、
〈略〉
- 十二91図 かの建御雷命が大國主命と會見せられしは此處なりといふ。
たける「梟師」(人名) 6 たける ↓
かわかみのたける
五421 お着きになりますと、問もな
くたけるが新しい家を造つて、〈略〉。
五427 〈略〉、たけるは尊を見つけて、
〈略〉。
五431 たけるも酒によつてねむりま
した。
五434 此の時尊はふところのつるぎ
を出して、たけるのむねをおつきに
なりました。
五438 なみくの者なら、「あつ」
とさけんで死にませうが、たけるも
熊襲のかしらだけあつて、〈略〉。
五451図 自分にまさる者はないので、
たけると申して居りましたが、〈略〉。
たこ「蛸」(名) 3 タコ
七806 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タ
コ・イカナドガステンデキル。
七80図 タコ
- 七811 〈略〉、タコヤイカガ、アシヲ
ソロヘテ泳グ様ハ、マコトニ面白イ。
たこく「他国」(名) 1 他國
十二1368 他國の文明を消化して、
〈略〉。
ださいふ「大宰府」(名) 1 大宰府
十一98 途中、大宰府といふ昔の役所
の跡などを見て、〈略〉。
ださいふじんじや「太宰府神社」(名)
1 太宰府神社
十一73 太宰府町は太宰府神社のある
處である。
ださいふまち「太宰府町」(地名) 2
太宰府町
十一71 十五分許で汽車は太宰府町に
着いた。
十一73 太宰府町は太宰府神社のある
處である。
ださいふもうで「太宰府詣」(課名) 2
太宰府まうで
十目10 第二十三 太宰府まうで
十一67 第二十三 太宰府まうで
ださいふゆき「太宰府行」(名) 1 太
宰府行
十一69 〈略〉、驛前で太宰府行の輕便
鐵道に乗つた。
たざわこ「田沢湖」(地名) 1 田澤湖
十二512 我が國の湖沼中此の湖より
深いものは秋田縣の田澤湖だけであ
る。
たし(助動) 16 たし 度《タク・タ
シ》
- 七112図 取扱上不都合の廉あらば口
頭又は無料郵便にて申越されたし
九1129 候 近き中に頂きに上りたく
候に付き、〈略〉。
九11210 候 〈略〉、御知らせ下され
た、御願ひ申し上げ候。
九1137 候 早速御見舞に參上致した
く存じ候へども、〈略〉。
九11310 候 〈略〉、御手数ながら至急
御報知下されたく、願ひ上げ候。
九1179 候 如何ばかりの思にて此の
手紙をしたゝめしか、よくよく御察
し下されたく候。
十三33 候 〈略〉、神前にさゝげたと
願ひ出づる者數多しといふ。
十1074 候 私とてもかはゆらしきめ
ひの生れ候と聞きては、何よりうれ
しく、一日も早く御顔を見たく存じ
候。
十1076 候 御名は何と付けられ候や、
これも早く承りたく、〈略〉。
十1085 候 〈略〉、裁縫のおけいこに
御仕立て下されたく候。
十1086 候 皆様へよろしく御傳へ下
されたく願ひ上げ候。
十1105 候 〈略〉、御佛前へ御供へ下
されたく候。
十一428 候 〈略〉、御受納下され度
候。
十二1196 候 〈略〉御様子御伺ひ申
上げたしとは存じながら、〈略〉。
十二1199 候 失禮の段御許し下され
たく候。
十二1219 候 〈略〉、親に安心致させ
たしと存じ居り候。
だし ↓おおうりだし・おさしだし・お
だし・かいだし・けむだし・こひきだ
し・すりだし・ひきだし
だしあう「出合」(四) 1 出し合ふ
《ト》
七963 候 〈略〉、人々物を出し合
ひて、樂なぐらしにかへてやる。
たしか「確」(形状) 4 タシカ たし
か
七914 候 「おい娘、兵士が一人來た
らう。」「いゝえ。」「たしかに來たは
ずだ。」「
八478 候 驚ハタシカニ鳥類ノ王
デアル。
九477 候 私は苗くぼりをして、
「お前もたしかに半人前だ。」と、お
かあさんにほめられました。
十1244 候 りっぱな人の紹介状よりも、
何よりも、本人の行がたしかな保證
です。
たしか「確」(副) 1 たしか
六77 候 〈略〉ヒマラヤ山は世界一
で、たしか三万尺近いとおぼえてゐ
る。
たしかなほしよう「課名」 2 たしか
な保證
十目11 第二十四 たしかな保證
十1211 第二十四 たしかな保證
たしか・む「確」(下二) 1 確む「一

六63 6 〈略〉、石のらうから唐糸を出して、萬しゆに渡しました。
 六68 2 〈略〉、義捐金のことをいひ出すと、〈略〉、たくさん金を出した上に、〈略〉。
 六68 5 図 「こまかな人だが、出す時には出すね。」
 六68 5 図 「こまかな人だが、出す時には出すね。」
 六96 5 〈略〉、たくさんなたいまつを出して、〈略〉。
 六101 4 〈略〉、しやうぶが小指程に芽を出してゐました。
 六101 6 〈略〉、しやうぶが小指程に芽を出してゐました。〈略〉、一つ取って行つて見せようと思つて、手を出す、〈略〉。
 六102 8 〈略〉、しやくやくが赤い芽を出してゐました。
 七46 3 図 よつて明日たがひに勇士を一人づつ出して組討をさせ、〈略〉。
 七68 2 〈略〉、人夫は財布を出して渡しました。
 八62 2 それは氏子の五箇村から、子どもの騎手を一人づつ出して、社の横の池のまはりで競走させて、〈略〉。
 八63 3 〈略〉、勝つた子どもを出した村が、〈略〉。
 八93 3 二人を出した村の者は、〈略〉。
 八182 2 將軍は長四郎を大きな袋へ入れて、「ありのまゝに申すまでは出さぬ。」といつて、〈略〉。

八18 6 書頃、〈略〉、長四郎はやつと袋から出された。
 八43 6 そこで其の反物を出した者を呼出して、〈略〉。
 八65 1 図 ハワイから出した繪葉書は見ましたらうね。
 八113 9 〈略〉、三度三度の食事に、必ず其のきらひな物ばかり出して、〈略〉。
 九33 7 すると木のうろから、栗鼠が一匹、けろりとした顔を出したが、〈略〉。
 九54 7 図 〈略〉、資本を出さうとする者もあつたが、〈略〉。
 九55 4 図 〈略〉、後には表通へ店を出すまでになつた。
 九65 8 図 「煙草ぼん出せ。」
 九78 6 當番が農具小屋から、〈略〉道具を出して來た。
 九97 3 〈略〉、岡田さんは高山植物や雷鳥の繪葉書を、たくさん出して見せて下さいました。
 九118 7 図 〈略〉、自分の職務に精を出すのが第一だ。
 十26 7 二人は早速ボートを出す支度に取りかゝつた。
 十44 10 図 あの色をどうかして出したものだ。
 十49 1 喜三右衛門は、一つ又一つと窯から皿を出してゐたが、〈略〉。
 十49 5 かうして柿の色を出す事に成功した喜三右衛門は、〈略〉。

十102 4 葉の先からつるを出して、五六寸の細長い袋をつるしてゐる。
 十121 2 外國の或商會で、新聞紙に店員入用の廣告を出した。
 十一36 2 〈略〉、明日の用意に出しておいた植林地の書付を開いて見る。
 十一66 7 〈略〉、石や金を打合はせて火を出す法を考へるやうになつた。
 十一123 10 〈略〉型に入れ、又吹いて型から出す。
 十二12 2 投込まれた蟲は苦しまぎれに恐しく辛い液を出したので、〈略〉。
 十二52 8 〈略〉鐵のねちが、〈略〉、明るい處へ出された。
 十二56 6 時計師は〈略〉、出して置いたねちの無いのに氣が附いた。
 十二58 1 其の時、今まで雲の中に居た太陽が顔を出したので、〈略〉。
 十二58 10 さうして一つの懷中時計を出してそれをいぢつてゐたが、〈略〉。
 十二117 7 〈略〉、活動寫眞のフィルムが〈略〉發火して、多くの死傷者を出した話などを附加へた。
 十二131 9 西郷は軍令を出して翌日の進軍を中止させた。
 たすうー ↓ だいたすう
 たすか・る 「助」(五) 2 助かる
 《一ツーリ》
 七45 5 〈略〉、信玄はあぶない所を助かつた。
 八12 5 図 耕造さんのおかげで、信作の命が助かりました。

たすき 「襷」(名) 4 たすき
 三33 4 圖 「しごと」なされよ、きりきりしやんと、かけた たすきのきれるほど。」
 六102 1 ねえさんは赤いたすきをかけて、〈略〉。
 七14 3 女の人はたすきをかけて、手ぬぐひをねえさんかぶりにしてゐる。
 九59 6 赤いたすきを掛けた女たちがよい聲で歌をうたふと、〈略〉。
 たす・く 「助」(下二) 1 助く 《一ケ》
 七97 1 図 〈略〉、苦しむ者を、泣く者を、助けて共に楽しまん。
 たすけ 「助」(名) 1 助 ↓ てだすけ・てだすける
 十133 7 図 〈略〉、范蠡といふ忠臣の助を得て報復の計を立て、〈略〉。
 たすけたま・う 「助給」(五) 1 助けたまふ 《一ケ》
 六57 6 先づ鶴岡の八幡宮へまゐつて、母の命を助けたまへといひ、〈略〉。
 たす・ける 「助」(下二) 10 助ける
 《一ケ・一ケル》
 五86 6 図 うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、〈略〉。
 五86 6 図 うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、〈略〉。
 七106 4 図 命ばかりは助けてやらう。
 八11 7 図 〈略〉、人の命にはかへられ

ないと思つて、相手を助けてやつたのはえらい。

十95 〈略〉、一命をなげうつても王を助けようと決心した。

十259 〇 おとうさん、早く助けに行きませう。

十939 さいはひ附近の田で働いてゐた村の人々に助けられ、〈略〉。

十一2170 又民事裁判では、原告・被告の相談相手・附添人又は代理人となつて其の主張を助け、刑事裁判では、〈略〉被告を保護するために辯護士といふものがある。

十二1082 そこで人々はいづそ我々も出来るだけ此の仕事を手付けて、一日も早く洞門を開通し、〈略〉。

十二1103 〈略〉、仕事を助ける者が又ぼつくと出来て来た。

たずさえく「携来」(カ変) 1 たづさへ来「キ」

十三3 〇 〈略〉、それらの品を社務所にたづさへ来て、神前にさへげたと願ひ出づる者数多しといふ。

たずさわる「携」(四) 1 たづさはる「ル」

十二1610 〇 〈略〉、或は社内において編輯事務にたづさはる。

たずぬ「尋」(下二) 1 たづぬ「ヌル」

八98 〇 〇 船内くまなくたづねる三度、〈略〉。

たずね 〇 おたずね

たずねあてる「尋当」(下二) 1 タ

ツネアテル「一テ」

二746 〈略〉、ミチハワカリマセンデシタガ、トウトウタツネアテテ、〈略〉。

たずねまわる「尋回」(五) 1 尋ね廻る「一ツ」

十二939 彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聞いたが、〈略〉。

たずねる「尋」(下二) 24 タツネルたづねる 尋ねる「ネ・ネル」

〇 おたずねる

一157 ハチガキテ、ナクワケヲタツネマシタ。

三146 〈略〉、おちいさんが二郎にたづねました。

三538 兄が「〈略〉」とたづねますと、弟「〈略〉」。

四634 げんじの大しやうよしつねは家來に向つて、「〈略〉」とたづねました。

四815 「〈略〉」とたづねましたら、「〈略〉」といふことでした。

六176 〈略〉、「此の近くに、しめちの出る所はありませんか。」とたづねますと、〈略〉。

六595 わけをたづねますと、「〈略〉」と答へました。

六605 萬じゆは其の夜ひそかに〈略〉、石のらうをたづねました。

六632 〈略〉、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。

七663 人夫は「もしく。」と呼びかけて、たづねました。

七751 役人はわけをくはしくたづね、人夫をも呼出して、「〈略〉」と申し渡して、〈略〉。

七982 清正は先づ増田長盛をたづねました。

七1058 秀吉は清正を召出して、「〈略〉」とたづねました。

八138 家來があやしんで、其のわけをたづねると、〈略〉。

八184 翌日になつて、將軍が又たづねたが、始のやうに答へた。

八839 信吉は〈略〉、「奥様、あのとよは。」と、さも心配さうにたづねた。

十944 父は「〈略〉」とたづねたが、太郎はだまつてゐた。

十1192 茶屋のおばさんに尋ねると、それは園内に飼つてある鶴の聲であつた。

十1218 後日、人が主人に向つて、〈略〉と尋ねた。

十一161 「〈略〉」と尋ねてみると、のぶ子さんは上の棚を指さして、「〈略〉」とおつしやいました。

十一921 僕は〈略〉を思ひ出して、其の事を父に尋ねた。

十二668 さて領地をゆづる日に、王は娘たちを面前に呼んで、「〈略〉」と尋ねた。

十二965 釋迦は世を救ふ手始として

先づかの五人の友をたづねた。

十二971 續いて釋迦はマガダ國王をたづねてねんごろに道を説聞かせ、〈略〉。

たせい「多勢」(名) 2 多勢

八137 見物人は争つて、多勢の方へ行つたが、〈略〉。

八141 〇 「多勢の方はゆだんをしてゐるが、〈略〉」

ただ「徒」(名) 1 たゞ

十679 〇 お見受け申す所、たゞのお方とも思はれません。

ただ「唯」(副) 36 タゞ たゞ 唯

五524 雨水ハタバカウシテ流レルバカリデハアリマセン。

七222 賊のそなへは忽ちくづれて、防ぐにも防がれず、たゞあわてさわいでゐます。

七877 根ノヤウナ所モ、陸上ノ植物ノ様ニ養分ヲ吸取ルタメノモノデハナイ。タバハナレナイヤウニ、岩ナリ石ナリヘクツツクダケノ用ヲナスモノデ、〈略〉。

八998 〇 〈略〉、君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、少しも僕等の爲につくさない。

八1015 〇 僕はたゞ坐つてゐて物を食ふだけの者ではありません。

九459 〇 之ニ反シテ、同ジヤナル馬五匹アリ、其ノ持主ハ別々ニテ、買ハントスル人タバ一人ナルトキハ、〈略〉。

が、命令には其の事がない。

十二112 9 図 〈略〉、着々成功の域に進みしが、唯心に至りては彼の最も苦心したる所なりき。

ただい 「多大」(形状) 1 多大

十二17 8 図 かくいへば、頗る繁雜にして多大の時間を要する如くなれども、〈略〉。

ただい 今 「只今」(名) 1 唯今

十68 9 図 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、〈略〉、やせたりともあの馬にうち乗つて一番にはせ參じ、〈略〉、あつばれてがらを立てるかくこ。

たた・う 「称」(下二) 2 た・ふ 《一》

九41 7 図 昨日の敵は今日の友、語る言葉もうちとけて、我はた・へつ、彼の防備。

九41 8 図 彼はた・へつ、我が武勇。たた・う 「湛」(下二) 1 た・ふ 《一》

十69 8 図 〈略〉、兩眼に涙をた・へて聞きあたり。

たた・える 「称」(下二) 1 た・へる 《一》

十50 1 柿右衛門はひとり我が國內において古今の名工とた・へられてゐるばかりでなく、〈略〉。

たた・える 「湛」(下二) 2 た・へる 《一》

十32 2 高い土地の上に水をた・へたのであるから、湖の水面は海面より

ずつと高い。

十二68 3 王は滿面に笑みをた・へながら、今や遅しと其の答を待受けてゐる。

たたかい 「戦」(名) 8 戦

六38 5 義經に此の名を惜しむ心があつたので、何時の戦にも勝つたのでございませう。

七46 1 図 「戦をはじめてから十二年、〈略〉」。

七98 8 図 「神々も照覧あれ、戦一つ出来ず、〈略〉」。

八14 9 〈略〉、其の子類宣は戦が始つたと聞いて、〈略〉。

九106 7 其の日の戦は果して今までになくはげしかつた。

十一24 10 図 〈略〉、戦は午前のうちに終りぬ。

十一25 3 図 寄手の大將佐久間盛政は、今日の戦に勝ちほこり、〈略〉。

十一26 5 図 味方は今日の戦に將卒共につかれ果てて、物の用に立つべくもあらず。

たたか・う 「戦」(四・五) 10 タタカフ たたかふ 戦ふ 《一ツ・ヒ・ーフ》

↓ふせぎたたかう 二77 2 ドチラモマケズニタタカヒマシタガ、〈略〉。

四43 8 僕は牛わかまるになつて、はねまはつて たたかひましたら、

〈略〉。

七43 5 越後の上杉謙信と甲斐の武田

信玄が、たびたび信濃の川中島で戦つた。

七44 6 兩軍は入りまじつて、火花をちらして戦つた。

七45 7 川中島で前後五回戦つたが、まだ勝負がつかなくつた。

十98 3 図 時に宋の勇將張世傑よく戦ひて元軍を防ぐ。

十133 8 図 〈略〉、再び呉と戦ひて遂に之を亡しぬ。

十二83 3 図 〈略〉、飢寒と戦ひ、〈略〉。

十二98 3 釋迦は〈略〉、なほつゞれをまとひ飢と戦ひつゝ、〈略〉。

十二125 1 徳川方も事こゝに至つては、あくまでも戦ふ覺悟をきめて、〈略〉。

たたきつ・ける 「叩付」(下二) 1 た・きつける 《一ケル》

九57 1 それをてんで一束づつ取つては、兩手で根本の所をつかんで、打臺にぱた／＼とた・きつけると、

〈略〉。

たた・く 「叩」(五) 6 たたく た・く 《一イ・キ・ーク》

四43 2 天じやうをはらふ、たたみをたたく、〈略〉。

四67 3 〈略〉、みんなが馬のくらをたたいてよろこびました。

四67 5 海の方でもへいけ方がふなばたをたたいて、一度にどつとほめました。

八11 3 耕造方の人々は耕造の肩をた・いて、「感心だ、感心だ。えら

い子だ。〈略〉。」などといった。

九57 3 束を廻して又たゝき、穂が残らず落ちてしまふと、〈略〉。

九105 1 中尉はひらりと北風にまたがつて、〈略〉、くびすぢを軽くた・きながら、〈略〉。

ただごと 「徒事」(名) 1 た・事 十一26 2 図 こはた・事ならじと、尾野路山の本營に急報すれば、〈略〉。

ただし 「但」(接) 1 但し

十二18 10 図 かくて刷上りたる新聞は、直に販賣部を経て遠近に發送せらる。但し大新聞にありては、比較的早く印刷したるものをば地方版として遠隔の地方へ送り、〈略〉、最後の最も新しきものを市内版とす。

ただ・し 「正」(形) 2 正し 《一シキ》

十一6 8 図 富貴は人のねがふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之に居らず。

十一6 9 図 貧賤は人のいとふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之を去らず。

ただし・い 「正」(形) 5 正しい 《一イ・ーク》 ↓きそくただし・いきりつ

ただし 九62 10 それにつれて、つり床は正しく一定の場所に納められる、〈略〉。

十55 5 鳩は餘程遠い處で放しても、正しく方向を判定して、矢のやうに自分の巢に飛歸る。

- 十一225 此の世を〈略〉、平和な、秩序正しい世の中にするのが其の目的である。
- 十一596 市街は此の眞直な路によつて碁盤の目のやうに正しく割られてゐる。
- 十一759 図 たゞ注意しなければならぬのは、順序正しく進むといふことです。
- ただす 「正」(四・五) 9 たゞす 正す 《サ・シ・ス・セ》 ↓ききただす
- 八437 そこで其の反物を出した者を呼出して、買先をたゞし、それからそれと調べましたので、〈略〉。
- 八829 彼の水力電氣の如きはそれで、電燈・電車等に用ひる電氣も、もとをたゞせば水の力である。
- 九419 図 かたち正していひ出でぬ、〈略〉。』と。
- 九672 〈略〉、皆姿勢を正して、軍艦旗に敬禮する。
- 九1042 〈略〉、列を正して並んだ。
- 十726 図 理非を正して裁斷致すであらう。
- 十一76 図 孔子は他人を正す前に先づおのれを正し、〈略〉。
- 十一76 図 孔子は他人を正す前に先づおのれを正し、〈略〉。
- 十二998 図 〈略〉、森嚴自ら人の襟を正さしめ、〈略〉。
- ただす・む 「付」(四・五) 2 たゞずむ
- 《ミーン》
- 十6310 図 隆積む雪に道を失ひ、進みもやらずたゞずみたる様は、〈略〉。
- 十二379 二人は戸外にたゞずんでしばらく耳をすましてゐたが、〈略〉。
- ただだ 「唯唯」(副) 1 唯々
- 十二298 図 〈略〉、其の他見る物聞く物唯々驚く外はありません。
- ただちに 「直」(副) 8 たゞちに 直に
- 七191 手もとの軍ぜい二萬騎を引きつれて、たゞちに極樂寺坂へ向ひました。
- 十298 図 野路を行く人影 たゞちにきえて、〈略〉。
- 十一263 図 こはたゞ事ならじと、尾野路山の本營に急報すれば、盛政直に物見の兵を出してうかつはしむるに、〈略〉。
- 十一303 図 〈略〉、「組打。」と叫ぶ。直に組合ひたる二人の勇士、〈略〉。
- 十二172 図 〈略〉、〈略〉特派員又は通信員ありて、事件起れば直に電話又は電信にて通知し来る。
- 十二174 図 印刷部にては直に所要の活字を拾ひて之を組み、校正刷を刷りて校正部に廻す。
- 十二188 図 かくて刷上りたる新聞は、直に販賣部を経て遠近に發送せらる。
- 十二1142 図 彼は直に竹を以て炭素線を作りて實驗せしに、豫想以上の好結果を得たり。
- ただびと 「徒人」(名) 1 たゞ人
- 五448 図 「あ、たゞ人ではおありなさらなかつた。〈略〉。」
- たたみ 「置」(名) 1 たたみ
- 四431 天じやうをはらふ、たたみをたたく、〈略〉。
- たたむ 「置」(五) 1 たゞむ 《一ン》
- 十739 図 京城の市街は、もと石でたゞんだ高い城壁で圍まれ、〈略〉。
- ただよう 「漂」(四・五) 4 たゞよふ 《一ツ・ヒ・フ》
- 十1163 あたりには流れ出る血に、紅の波がたゞよふ。
- 十一412 〈略〉、いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。
- 十一825 図 浪にたゞよふ氷山も、來らば來れ、恐れんや。
- 十二123 図 はやて吹くやみにたゞよひ、〈略〉、船は今靜かに歸る、懷かしき故郷の港。
- たたり 「祟」(名) 1 たゞり
- 九1010 図 「これ海神のたゞりならん。〈略〉。」
- たち 「立」 ↓こだち・ゆうだち
- たち 「達」 ↓あねたち・おともだち・おまえたち・おんなたち・かいぬしたち・こぞうさんたち・じぶんたち・せいねんたち・でしたち・ともだち・いさんたち・ばんとうさんたち・ひとたち・へいしたち・ぼくたち・むすめたち・むらびとたち・もんじんたち・わたくしたち・わたしたち
- たち 「館」 ↓たかだち
- たち 「太刀」(名) 7 タチ たち 太刀 ↓おおだち
- 二764 ライクワウハ〈略〉、タチヲスルリトヌイテキリツケマシタ。
- 二767 タチガヒカレバ、目モヒカル。
- 四917 〈略〉、弟はたちをふりまはし、〈略〉。
- 六363 それでも義経は、太刀で熊手をふせぎ、とうとう弓を拾ひ上げました。
- 六695 〈略〉、冠をかぶつて太刀をはいたおくげ様方や、〈略〉。
- 七205 〈略〉、黄金作の太刀を取つて、海の中に投入されました。
- 七315 図 武士は太刀をぬきて馬よりとび下り、〈略〉。
- たち 「性質」(名) 3 たち
- 七1141 図 あのため子ども向の品をもう五十反、至急お送り下さい。
- 九1022 まだ青いが早く甘くなるたちだから、もう直に食べられる。
- 十二912 釋迦は生れつき同情の念に厚く、何事も深く考へ込むたちであつた。
- たちあがる 「立上」(四・五) 5 立上る 《一ツ・リ》
- 六876 象がそれを下して來て地に置

くと、象つかひがぬつと桶の中で立上つた。

七314 武士の馬はおどろきて、後足にて立上り、〈略〉。

七336 獅子はかなしげにほえて、濱べに立上りたりしが、つと海の中にをどり入りたり。

九115 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、〈略〉。

十二43 4 ひき終るとベートーベンは、つと立上つた。

たちいず「立出」(下二) 1 立出つ

十五8 図とあるあばら家の門口に杖を止めて、一夜の宿を貸し給へとこへば、〈略〉婦人立出でて、「〈略〉。」とことわりぬ。

たちおうじょう「立往生」(名) 1 立往生

九72 6 辨慶が立往生をしたと傳へられてゐる衣川は、すぐ此の先にある。

たちき「立木」(名) 2 立木

十五5 図〈略〉、立木きはめて少かりしかば、新に植込みたる木の數、實に十數萬本に及べり。

十一64 4 又開墾する場合には、立木や切株の根本を掘つておいて、〈略〉。

たちこめる「立籠」(下二) 3 立ちこめる

九31 1 〈略〉、もうくと立ちこめる

水煙の間から近く瀧をながめるのもよく、〈略〉。

十一39 もうくと立ちこめる白煙の間から見ると、すさまじい波を起して、鯨は海底深く沈んだ。

十一58 6 立ちこめた砲煙の薄れゆくにつれて、〈略〉。

たちさる「立去」(四・五) 6 立去る

九119 8 水兵は〈略〉、につこりと笑つて立去つた。

十61 10 図すくと立去る僧の後影を見送りたる妻は、〈略〉

十70 6 図されどかくて何時まで留るべき身ぞと、心強くも立去りけり。

十一49 2 図〈略〉、又別れを告げて立去れりといふ。

十一121 2 〈略〉、一同を引連れて立去つた。

十二94 10 〈略〉五人の友は、〈略〉、彼を捨てて立去つた。

たちどおす「立通」(五) 1 立通す

五89 7 雨が降つても、風が吹いても、夜でも、晝でも、此所に立通しに立つてゐますが、〈略〉。

たちどまる「立止」(五) 3 立止る

九109 2 北風は驚いてすぐに立止らうとしたが、〈略〉。

九110 3 主人の姿を見つけると、静かに其のそばに立止つた。

十82 1 〈略〉、不意に足もとからねずみが一匹飛出しました。はつと思つて立止ると又一匹。

たちならぶ「立並」(四・五) 4 立ちならぶ

六72 1 川の西は水のすぐそばから、すき間もなく家が立ちならんでゐます。

七53 8 図〈略〉、港に立並んでゐる人家は、〈略〉。

十30 3 図しめやかに、夜の霧ちまたをつゝみ、立並ぶ家々、ともしびうるむ。

十一35 9 〈略〉、四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるのが、目に見えるやうな氣がする。

たちのく「立退」(五) 1 立ちのく

九23 8 図〈略〉、役人ににくまれて、終には國を立ちのかねばならぬやうになつた。

たちのぼる「立上」(四・五) 3 立ちのぼる

七28 5 図〈略〉、其ノ頃天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノ貧シキヲアハレミタマヒキ。

十120 9 あちらこちらの村々からは細い煙が立上つてゐる。

十一122 2 〈略〉、白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、目も口もあけられない。

たちはじめる「立始」(下二) 1 立ちはじめ

八33 炭を焼く煙も所々に立ちはじめた。

たちはたらく「立働」(四) 1 立働く

十一107 6 図中にも十三四ばかりの子供が、各國人の間にまじりてかひなくしく立働ける様を見ては、如何にもけなげに存ぜられ候。

たちばなし「立話」(名) 1 立話

五92 6 〈略〉、急ぎの封書を入れに來る者が、途中で人と立話でもはじめると、〈略〉。

たちほう「他地方」(名) 1 他地方

十二19 4 図されば同一日附の同じ新聞にても、發行地にて受取るものと他地方にて受取るものとは、記事に多少の相違あるを常とす。

たちまち「忽」(副) 16 たちまち 忽ち

三46 6 あけると、箱の中から白いけむりがぱつと出て、うらしまはたちまち白がのおちいさんになつてしまひました。

五86 4 図叔父さんは大へんだ土手が切れたといつて、すぐ屋根へ出ました。たちまち水が二尺になり、三尺になり、五尺にもなりました。

六91 7 賊は坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。

七10 2 潮がずんくと下がるので、舟

はすすつと進んで、たちまち海へ出た。

七22 賊のそなへは忽ちくづれて、防ぐにも防がれず、たゞあわてさわいでゐます。

七44 信玄は不意を打たれておどろいたが、忽ち陣立をかへて、敵を引受けた。

七48 彦六が與五左衛門を組みふせた。武田方が之を見て、聲をあけて喜ぶと、與五左衛門は忽ちはねかへして、〈略〉。

八52 おかあさんはそれを二つにちぎつて、ぐるぐるまはしていらつしやつたが、忽ちきれいなおそなへになつた。

八99 図 今とはボートにうつれる中佐、飛來る彈丸に忽ちうせて、〈略〉。

九62 4 「總員起し。」此の號令で、朝の静かさが忽ち破られ、〈略〉。

十26 打返す磯波にまき込まれたかと思へば、忽ち大波にゆり上げ、ゆり下げられながら、〈略〉。

十27 打ちよせる大波、打返すさか波、危く岩に打付けられ、忽ち死の口に吞まれようとする。

十一33 5 一島未だ去らざるに、一島更にあらはれ、水路きはまるが如くにして、また忽ち開く。

十二23 6 即ち一人の貿易商が外人の信用を失ふやうな事をすれば、忽ち

國全體の商品の信用に關係して、〈略〉。

十二59 4 龍頭を廻すと、今まで死んだやうになつてゐた懷中時計が、忽ち愉快さうにかち／＼と音を立て始めた。

十二114 7 しかして其の電球は忽ち世界に廣まりぬ。

たちよる「立寄」(五) 1 立寄る「一ツ」↓おたちよりくださる

十119 9 〈略〉、櫻寺といふ處に立寄つた。

たつ「辰」↓かのえたつ・きのえたつたつ「立」(四・五) 78 タツ たつ

立ツ 立つ 起つ 《一タ・一チ・一ツ》↓いさみたつ・おたつ・おもいたつ・おもだつ・さきだつ・そばだつ・そびえたつ・つたつ・つれだつ・とびたつ・なみだつ・なりたつ・ひらめきたつ・めだつ・もえたつ

二57 6 アナタガオタチニナレバ、ワタクシモ タチ、アナタガオアルキニナレバ、〈略〉。

三48 8 大キナ家ガ三ムネ、「コ」ノ字ナリニタツテキマス。

三62 1 みよ子は〈略〉、土ぼしの上にたちました。

四1 5 〈略〉のぼりがすみきつた空に立つてゐます。

四16 6 白ウサギハ〈略〉、ハマベニ立ツテ、ナイテ居マシタ。

四61 8 一人のくわんちよが其の

下に立つて、まねいて居ます。

四72 1 私 は道ばたの一本杉です。もう二百年あまりもここに立つて居ます。

四73 2 〈略〉、家がたつたり、こはれたり、〈略〉。

五27 5 ツバメハ〈略〉、人ノヤクニ立ツ鳥デス。

五28 1 〈略〉、家が一けん立つてゐます。

五38 2 ちやうどかまを明けたところで、白いけむりが立つてゐました。

五58 1 其の洲の白い砂の上に、青い松が一面に立つてゐて、〈略〉。

五60 2 虹が立つてゐる。

五78 5 此の山の杉も庄屋が先に立つて植ゑたのださうだ。

五89 5 私は町の辻に立つてゐる郵便函であります。

五89 7 〈略〉、此所に立通しに立つてゐますが、〈略〉。

六9 6 金ニハイロ／＼アリマサガ、中デ一番人ノ役ニ立ツノハ、〈略〉。

六11 2 シテムレバ銅ホド役ニ立ツ物ハアリマスマイ。

六11 4 ナルホド、銅ハタクサンアツテ、役ニモ立チマセウガ、〈略〉。

六11 6 〈略〉、役ニモ立チマセウガ、モツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。

六12 5 今デハ鐵ハ〈略〉、人ノ役ニ立ツコトハ銅以上デス。

六45 1 月日の立つのは早いものだ。

六54 4 「唐糸の身代りに立ちたうございます。」

六60 7 うばを門のわきに立たせて置いて、姫は中はいりました。

六61 2 〈略〉、松の一むら立つてゐる中に、石のらうがありました。

六71 3 今、三條の大橋に立つて、川下を見ると致しませう。

六72 4 〈略〉、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、〈略〉。

六98 6 あの學校がたつた時、〈略〉。

六103 5 おとうさんは昨日〈略〉伊勢參宮に立たれました。

六108 2 夕方京都へ立つ。

七23 6 其の松の下に石できざんだ地藏様が立つていらつしやる。

七25 4 塚の前に馬頭觀世音とほつた石が立つてゐて、〈略〉。

七36 4 目ぬきの所には〈略〉家が軒をならべて立つてゐるので、〈略〉。

七55 9 外國の港に着くと、見なれない形の家が並んで立つてゐます。

七56 8 急に暴風雨が來ると、山のやうな波が立つて、船は今にも沈むかと思ふやうになります。

七97 9 清正は朝鮮を立つて、伏見へ參りました。

七110 6 「さうか。それでは明日の一番で立たう。」

七110 9 「アシタノアサーバンノキ

シヤデタツテイキマス。」

七112 2 団 「アスーバンデタチマス。」

七112 8 団 「アスーバンデタツ。」

七112 図 団 アスーバンデタツ

八66 1 団 〈略〉、日本人の家には、鯉のぼりが立つてゐました。

八70 8 団 長く滞在してゐたシカゴ市を立つて、〈略〉。

八73 9 団 シカゴを立つ日に、お前たちの年始状が着きました。

八75 5 一日祝賀會の席上で、人々がかはる／＼立つて、コロンブスの成功を祝しますと、〈略〉。

八76 2 之を聞いたコロンブスは、つと立つて、食卓の上のうで卵を取り、〈略〉。

八76 8 之を聞いたコロンブスは、〈略〉、「諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立ててごらんさい。」といひました。〈略〉、もとより立たうはずはございません。

九57 8 団 「正一も大分役に立つやうになつたなあ。」

九70 5 図 団 『都をば、かすみと共に立ちしかど、秋風ぞ吹く、白河の關。』

九98 2 団 頂上に立つて四方をながめた景色は、全く雄大です。

九104 3 兵士たちはめい／＼馬のそばに立つて、今か／＼と命令の下るのを待つてゐた。

九106 6 數分の後には、北風はもう列

の先頭に立つて進んでゐた。

九108 4 中尉は始終先頭に立つて進んでゐたが、〈略〉。

十8 8 陣頭に立つては百萬の敵を物とも思はぬ英雄も、〈略〉。

十14 4 団 皆さんの前に立つと、其の頃の心掛が恥づかしくなりません。

十45 8 〈略〉、もう立つても居ても居られなくなつたのである。

十89 8 図 団 〈略〉、霜柱たつやぶかげの路、〈略〉。

十95 2 団 〈略〉、自分から先に立つて渡つたのです。

十101 3 先に立つたにいさんが、〈略〉。

十113 1 甲板に立つてゐた船長を始め十人許の乗組員は、〈略〉。

十113 5 砲手は此の時早く船首の砲後に立つて、其の引金に手をかけた。

十122 4 団 談話の最中に一人の老人がはいつて來ましたが、それを見るとすぐに立つて、椅子をゆづりました。

十一26 6 団 〈略〉、物の用に立つべくもあらず。

十一59 9 〈略〉、銅像なども立つてゐる。

十一111 8 図 団 〈略〉、我が身をすてて報いんと、起ちてぞ出でぬる、草のいほりを。

十二54 4 団 〈略〉、大鳥居あり、巨人の如く我がゆくてに立つ。

十二93 3 団 なぎさに立ちて昔をしのべば、〈略〉。

十二34 3 団 私は今〈略〉ベルダンの戦跡に立つてゐます。

十二42 3 友人がそつと立つて窓の戸をあけると、〈略〉。

十二44 7 「さやうなら。」ベートーベンは立つて出かけた。

十二54 2 〈略〉、あれは何の役に立つのであらう、〈略〉。

十二54 9 団 一かどの役目を勤めて世間の役に立つのに、〈略〉。

十二55 1 団 〈略〉、何の役にも立ちさうにない。

十二57 3 それでは自分のやうな小さな者でも役に立つことがあるのかしらと、〈略〉。

十二60 5 団 「自分もほんたうに役に立つてゐるのだ。」

十二104 10 〈略〉、路をさへぎつて立つ岩山に、〈略〉。

十二107 1 其のうちに誰言ふとなく、〈略〉といふうはさが立つた。

十二136 2 今日我が國が列強の間に立つて世界的の地歩を占めた以上、〈略〉。

たつ「断」(五) 1 絶つ 《一ツ》

十二52 3 これは奥入瀬川を十町餘り下つた處に大きな瀧があつて、魚類のさかのぼる道を絶つてゐるからである。

たつ「経」(四・五) 27 タツ たつ

《一タ・一チ・一ツ・一ツ》

三66 6 団 「二十日 バカリタツト

出マス。」

三84 二三日 タツト、オヤドリハヒヨコヲニハヘツレ出シマシタ。

三41 2 それから二三日 たつて、うらしまが舟にのつてつりをしてゐますと、〈略〉。

三58 7 スコシタツテカラ又來テ見マス、ト、〈略〉。

三74 8 スコシタツテ、コンドハ鳥ガカチサウニナリマシタ。

三75 4 イツマデタツテモシヨウブガツカナイノデ、〈略〉。

四57 3 何百年か たつた後、〈略〉。

五51 氣がさつぱりしてゐて、二三日 たつと、前からの友だちのやうになりました。

六47 8 四五年モタツト、大キクナツテ、〈略〉。

六58 6 〈略〉、十日たつても二十日たつても、母の名をいふ者がありません。

六58 7 〈略〉、十日たつても二十日たつても、母の名をいふ者がありません。

六92 8 二日たつても三日たつても汲みに來ない。

六92 8 二日たつても三日たつても汲みに來ない。

六92 8 二日たつても三日たつても汲みに來ない。

六104 8 団 〈略〉、千年もたつたかと思ふ老木の下へ行つた時には、〈略〉。

八九七 〔略〕、もう二年たつて、此の學校を卒業する頃には、〔略〕。
 八〇〇 かうして二三日たちますと、耳は鳴り、目は暗み、〔略〕。
 九二四 少したつて、今度は寝たまゝ、ぼつ／＼と話し出した。
 九二八 信季は其の後幾日かたつて、とう／＼此の宿でなくなつた。
 九五二 〔略〕、十年もたゝぬ中に、町でも屈指の財産家となつた。
 一〇二七 二日たつて、天氣も晴れ、波浪もをさまつた。
 一〇四八 一年と過ぎ二年とたつうちに、其の日の暮しにも困るやうになつた。
 一〇七五 かうして五六年はたつた。
 一一一四 しばらくたつと、おかあさんが臺所の方から、「〔略〕」とおつしやいました。
 一一四三 〔略〕 今少しく日もたゝば、轉地するもよからんと醫師も申居候に付、〔略〕。
 一一四八 未だ一月もたゝざるに、かの畫師は突然歸り來れり。
 一二七三 二週間もたゝぬ中にもう王に無愛想な仕向をした。
 一二七四 かくて又幾年かたつうちに、穴はだん／＼奥行を加へて、〔略〕。
 たつ 〔立〕 (下二) 7 立つ 建ツ 建つ 〔一ツ・一テ〕
 八二〇 〔略〕、又小屋ヲ建テテ豚・鶏・等ヲカヒ、〔略〕。
 八二五 〔略〕 大工の家を建て、左官の壁

を塗り、〔略〕、皆手の働なり。
 九二六 〔略〕 綿毛に包まれたるひよこども、小さき聲を立てつゝ、ちよこ／＼とかけ廻る。
 九二七 〔略〕 八幡様に日參致し候も、そなたがあつぱれなるてがらを立て候やうとの心願に候。
 一〇二八 〔略〕 全村農業を以て生計を立つ。
 一〇三三 〔略〕、范蠡といふ忠臣の助を得て報復の計を立て、再び呉と戦ひて遂に之を亡しぬ。
 一〇八六 〔略〕 木の枝を伐りて地上に立て、上を木の皮にておほひ、〔略〕。
 一〇九一 〔抱〕 (名) 1 だつこ
 一〇九四 かういつて、だつこをしておかあさんのところへつれていきます。
 一〇九八 〔達者〕 (形状) 1 達者 ↓ おたつしや
 一一二六 〔略〕、仲間のうちにて計算は私が一番達者なりとて、何時もほめられ申候。
 たつす 〔達〕 (サ変) 5 達す 〔一・一ス・一スル〕
 一一五 〔略〕、廣き參道を行くこと十町ばかりにして神宮橋に達す。
 一二三 〔略〕 翌朝警固の武士ども之を見つけて、讀みかねて上聞に達したり。
 一二五 〔略〕 しかも遂に志を達することを得ざりしかば、〔略〕。
 一二八 〔略〕、かへつて目的を達するに便なることを知りぬ。

一二八六 〔略〕 歸途一行は黒龍江を下りて河口に達し、海を航してノテトに歸れり。
 たつする 〔達〕 (サ変) 3 達する 〔一・一ス・一スル〕
 一三〇 長崎を出た汽船は、海上を走ること約四百海里で揚子江の河口に達する。
 一三六 〔略〕、最後の目的に達するやうになさい。
 一四〇 〔略〕、六はだん／＼奥行を加へて、既に何十間といふ深さに達した。
 たつする 〔脱〕 (サ変) 1 脱する 〔一・一シ〕
 一四三 我々は何時かは摸倣の域を脱して十分に獨創力を發揮し、〔略〕。
 たつた 〔副〕 3 たつた
 一五二 道子が十二まい、みよ子が一十まい、〔略〕、友一はたつた二まいでした。
 一五八 此の時河野の通有は、たつた小舟二艘で向つた。
 一六四 〔略〕 シカゴとニューヨークの間は九百八十哩もありますが、おとうさんは最大急行の列車に乗つて、たつた十八時間着きました。
 たつて 〔接助〕 1 たつて
 一六八 〔略〕 そんなことをいつたつて仕方がない。
 たつて 〔接〕 1 たつて
 一七二 〔略〕 「何で笑つた。」 たつて分

り切つた事でせう。〔略〕。
 たつて 〔係助〕 2 たつて
 一八六 〔略〕 「今に見てゐろ、僕だつて、見上げるほどの大木になつて見せずにおくものか。」
 一九二 なるほど、ごまつぶ程の蟻が一匹虎を見上げてゐます。
 〔略〕。〔略〕 私どもだつて、大ぜいしてかゝれば、あなた方に負けません。
 たづな 〔手綱〕 (名) 1 たづな
 一九八 と、たづなが急にゆるんで、中尉は後方にころげ落ちた。
 たつのおとしこ 〔電落子〕 (名) 2 たつのおとしこ
 二〇四 たつのおとしこ
 二一〇 珍しかったのは、丸山君のざるに、たつのおとしこが一つあつたことであつた。
 たつまき 〔電巻〕 (名) 1 たつまき
 二一七 〔略〕 海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ、驚かし。
 たて 〔立〕 ↓ きだて・さんがいだて・しかいだて・じんだて
 たて 〔縦〕 (名) 3 縦
 二二二 〔略〕 藍・白・赤三色を以て縦に染分けられたるは、フランスの國旗なり。
 二二三 〔略〕 フランスの國旗が縦に三色を分ちたるに對して、〔略〕。
 二二四 〔略〕 イタリアの國旗は、緑・

白・赤の三色を縦に染分け、〈略〉。
 たていし「立石」(名) 2 立石
 五367 〈略〉、道ばたの立石にさるが三匹ほつてありました。
 八84 〈略〉、拜殿のそばの大きな立石の前に並んだ。
 たてがみ「鬘」(名) 3 たてがみ
 七319 獅子はうれしげに一聲高くほえ、たてがみをふるひ、〈略〉。
 九105 中尉はひらりと北風にまたがつて、亂れてゐたたてがみをそろへ、〈略〉。
 九109 〈略〉、其の破片がびゅつと北風のたてがみをかすめた。
 たてき・る「立切」(五) 1 たて切る
 《一ッ》
 九22 1 〈略〉、たて切つてあるしやうじのやぶれを、秋風がはたはたとあふる。
 たてこもる「立込」(四) 1 立てこもる《一リ》
 九362 図 リエージュの要塞に立てこもりたるベルギーの勇将レマンは、〈略〉。
 たてならべる「立並」(下二) 1 立て並べる《一ベ》
 八313 さて山の木をきり倒して、四五尺の長さにきりそろへ、それをぎつしりとかまの中に立て並べ、〈略〉。
 たてはじめる「立始」(下二) 1 立て始める《一メ》
 十二594 〈略〉懷中時計が、忽ち愉

快さうにかち／＼と音を立て始めた。
 たてまつりたまふ「奉給」(四) 2
 たてまつり給ふ《一フーヘ》
 十二64 図 快く此の國をたてまつり給ふや如何に。
 十二71 図 仰のまゝにたてまつり給へ。
 たてまつる「奉」(四) 4 たてまつる 奉る 《一リール》いみなみたてまつる・うつしたてまつる・うばいたてまつる・しやしたてまつる・しらせたてまつる・ぞんじたてまつる・はいしたてまつる・まちたてまつる・みおくりたてまつる・やすんじたてまつる
 十三1 図 又日々に奉る供へ物には、〈略〉。
 十六2 図 献木にて、中には小學生の奉りたるものも少からず。
 十二73 図 「此の葦原の中つ國を皇孫にたてまつりて、とこしへに天つ日嗣を護りまつらん。」
 十二75 図 こゝにおいて大國主命、〈略〉。」と申して恭しく國土をたてまつりぬ。
 たてもの「建物」(名) 12 建物
 八719 図 高い建物のあることは世界第一で、〈略〉。
 九721 図 八百年前の建物で、〈略〉。
 十46 図 〈略〉、程なく小さき建物の前に出づ。
 十五 図 建物
 十505 図 「おとうさん、今度役場の

隣にりつぱな建物が出来ましたね。〈略〉」
 十103 図 建物は此處から右に折れる。
 十一99 〈略〉、銀行・會社等のりつぱな建物がそびえてゐる。
 十一105 〈略〉、西洋風の建物もあつて、趣がやゝ變つてゐる。
 十一127 図 次の建物にはいと、〈略〉。
 十二315 図 〈略〉、建物なども一般に壯麗です。
 十二318 図 〈略〉、五六層もある美しい建物が道路の兩側に並び、〈略〉。
 十二321 図 此の塔は世界最高の建物で、高さが三百メートルもあるさうです。
 たてやま「立山」(地名) 1 立山
 九98 図 〈略〉、遠くには槍岳・穂高岳・乗鞍岳・立山・劍岳・白山など、いづれおとらぬ高山が、〈略〉。
 たてよこ「縦横」(名) 1 タテ横
 八502 果ハ至ツテソマツナモノデ、人ノヨリツケナイ絶壁ノ間ヤ老木ノ上ニ、タテ横ニ小枝ヲ並べ、〈略〉。
 たて・る「立」(下二) 37 タテル たてる 立てる 建てる 《一テーテル》いあおりたてる・いたてる・おたてる・かきたてる・さかだてる・そばだてる・つきたてる・はやしたてる・ふきたてる・ほえたてる・ほめたてる・みたてる
 二316 図 「カドマツヲタテマス。」
 二443 オヂイサンハハラヲタテ

テ、ソノ犬ヲコロシテシマヒマシタ。
 三56 メンドリハヘンナコエヲタテテキマシタガ、〈略〉。
 三304 図 かばふはずみにあねはまた足だのはなをふつりと。
 〈略〉 あねは手ばやくををたてて、〈略〉きやうだいはがくかうさしていそぎゆく。
 三607 風がしづかにふいて来て、さしのさがさがさらさらとおとをたててゐます。
 三833 風はしづかで、なみもおとをたてません。
 四582 ニハニ大工小屋ヲタテテ、大ゼイノ大工サンガ毎日其ノ中デ仕事ヲシテ居マス。
 四616 見ればへさきに長いさをを立てて、其のさをの先には、〈略〉。
 五201 図 〈略〉、戦争の時、大きな手がらを立てた軍人に下さる勳章に、〈略〉。
 五533 山から薪を取つて来て、それを賣つて、くらしを立ててゐました。
 六935 正成は此の旗を城門に立てて、さん／＼に賊を惡口させた。
 六1023 なるほど、去年鯉のぼりを立てた時、しやうぶとよもぎを軒へさした。
 六1024 しやうぶ湯を立ててうち中の者がはいった。

九
118
4
会
しかし今の戦争は昔と違つ

688 会
〈略〉、たとひとんで行つて

デナク、何時デモマハリノ物ノ色ガ

津・高濱等良港多く、〈略〉。

たどりつく〔連着〕(四・五) 5 たど

りつく たどり着く『イ・キ』
 十279 からうじてボートはかの難破
 船にたどり着いた。

十596 〔略〕、上州佐野の里に、
 〔略〕たどり着きたる旅僧あり。

十1319 〔略〕杉坂に待ち奉らんと
 て、けはしき山路をふみわけてたど
 り着きたりしに、〔略〕。

十1132 〔略〕 たどりつきたる峠の上
 に、菜の花にはふり見下して、笑
 ひさめくひるげのむしろ。

十834 〔略〕樺太の北端に近き
 ナニヲといふ處にたどり着きたり。
 たどる〔連〕(四・五) 3 たどる

『ツ・レ』
 十46 〔略〕此所を出でて舊御苑に入り、
 木立の間の細道をたどれば、程なく
 小き建物の前に出づ。

十174 年こそちがへ、二人は同じ
 學問の道をたどつてゐるのである。
 十104 〔略〕、川沿の道をたどつて
 行くと、〔略〕。

たな〔棚〕(名) 2 棚 ↓かぼちゃだ
 な・ガラスとだな・ちんれつだな・と
 だな・ぶどうだな・ほんだな

五475 〔略〕、少しでもおくれると、
 かごのうらや棚のすみなどで、繭を
 かけはじめますから、〔略〕。

十116 〔略〕、のぶ子さんは上の棚
 を指さして、〔略〕。

たなそこ〔手底〕(名) 1 たなそこ

十1122 〔略〕 天下を定むる三分の計、
 たなそこの上に指さすがごと。

たなびく〔棚引〕(四・五) 3 たなび
 く『カ・ク』

十1347 〔略〕、遠く近く黒煙の青
 空にたなびくを見る。

十1622 はるかの下に一條の白煙を
 たなびかせて見えがくれする上り列
 車は、〔略〕。

十1802 〔略〕、煙たなびくと
 まよこそ、〔略〕。

たに〔谷〕(名) 4 谷 ↓くりからだ
 に

九339 道がだん／＼上りになつたと
 見えて、谷のこずゑ／＼に、遠い湖
 がち／＼と見えて來た。

九945 〔略〕雪溪は谷を埋めた雪の坂で、
 〔略〕。

九106 谷一つへだてた向ふの岡に、
 〔略〕。

十2122 どの山を見てもどの谷を見
 ても、蜜柑の木でない處はない。

たにあい〔谷間〕(名) 1 谷あひ

七348 〔略〕田の面は水の廣々と、
 蛙の聲もにぎはしく、谷あひの家
 窓明けて、夜に親しむ時は來ぬ。

たにがわ〔谷川〕(名) 2 谷川

六923 先づ谷川のほとりに三千人の
 番兵を置いて、〔略〕。

九746 北上川はまだをりを見える
 が、いよ／＼せまくなつて、とう
 く谷川になつてしまつた。

たにそこ〔谷底〕(名) 3 谷ソコ 谷
 そこ 谷底

四91 谷ソコノ一ケンヤニモ、
 〔略〕。

六968 橋はまん中からもえ切れて、
 谷そこへどうと落ちた。

十1312 〔略〕、ふみそこねてあは
 や谷底へ轉び落ちんとす。

たにま〔谷間〕(名) 3 谷間

八22 谷間の水はすぎとほるやうに
 すんでゐる。

九747 〔略〕、谷間に白い山ゆりの花
 のまばらに見えるのも面白い。

十2910 〔略〕谷間よりはひ出で、木
 の幹ぬらし、しら／＼と、おぼろ
 に 朝霧流る。

たにむこう〔谷向〕(名) 1 谷向ふ

十429 〔略〕、谷向ふのくさむらの中
 から、〔略〕。

たにん〔他人〕(名) 5 他人

九454 〔略〕、各其ノ馬ガ他人ノ手
 ニ渡ランコトヲ恐レテ、争ヒテ高キ
 價ヲツク。

九539 〔略〕世間にはこんな場合に、な
 るたけ自分の負擔を軽くしようとする
 者もあるが、あの人は反對に、少
 しでも他人の負擔を軽くしようとし
 て、〔略〕。

十176 〔略〕孔子は他人を正す前に先
 づおのれを正し、〔略〕。

十1188 〔略〕、他人に害を加へては
 ならぬなどといふことは、〔略〕。

十1198 又他人の物を盗んだといふ
 やうな犯罪があつた場合には、〔略〕。

たぬき〔狸〕(名) 1 狸
 八496 狐・狸・兎・犬・豚ナドハ彼
 ノ求メル物デアルガ、〔略〕。

たね〔種〕(名) 11 タネ 種 ↓こぼ
 れだね・なたね・なたねばたけ・ひだ
 ね

一101 サルガカキノタネヲカ
 ニニヤリマシタ。

一113 〔略〕ハヤク メヲダセ、カ
 キノタネ。

五915 作物の種や商品の見本も入れ
 てよいことになつてゐますが、〔略〕。

五967 ウチノフダウトハ種ガチガフ
 ノダサウデス。

六683 〔略〕、粃や豆の種を分けて上
 げてもよいと言つた。

七177 しやうの強いもので、一度種
 が地に落ちれば、年年其所で花がさ
 く。

十1516 〔略〕、其のあとに種をまく
 か、〔略〕。

十1636 〔略〕、耕すにも、うねを作
 るにも、種を蒔くにも、大てい機械
 と馬の力による。

十1901 〔略〕「〔略〕、稻をはじめ大て
 いの物の種をまく目安になる日だ。」

十1957 〔略〕、父が畠を打てば自分
 は種をまくといふ風にかひがひしく
 働いてゐた。

十1106 〔略〕、唯物笑の種にしてゐ

た。

たねあぶら 「種油」(名) 1 種油

十一 67 10 「略」、其の後らふそくや種油がともされ、(略)。

たねうま 「種馬」(名) 1 種馬

七 28 1 「略」、近年外國から種馬を輸入したので、(略)。

たねまき 「種時」(名) 1 種時

七 109 6 「略」、農家ニテハ種時・(略)・取入レヲナスニ、(略)。

たのくさと 「田草取」(名) 1 田の草取

五 66 2 道の兩がはは一面に青田で、ちやうど田の草取のさい中です。

たのし 「楽」(形) 3 たのし 樂し

《—シキ—シク》

九 93 2 「信吉は兄と姉とに謝して、樂しく其の夜のゆめに入れり。

十一 12 10 「略」、今日はたのしき遠足の日よ。

十一 13 10 「略」、今日はたのしき遠足の日よ。

たのしい 「楽」(形) 2 たのしい 樂しい

五 93 4 おめでたい事やたのしさうな事が書いてありますと、(略)。

十 43 8 父は「(略)」と樂しそうに言つた。

たのしげ 「楽」(形状) 1 樂しげ

十一 65 4 「略」、土の香に親しんで樂しげに働いてゐる。

たのしさ 「楽」(名) 1 樂しさ

六 49 3 「略」、ともし火近く 衣ぬふ母は

春の遊の 樂しさかたる。

たのしみ 「楽」(名) 3 タノシミ 樂しみ

三 10 3 「略」、ヒヨコヲ見ルノガタノシミデス。

十 126 5 「略」、卒業後も尚學校の門に出入することを樂しみとせり。

十二 67 9 「略」、——私はあるとあらゆる身の樂しみを退けても、(略)。

たのしみおり 「楽居」(ラ変) 1 樂しみ居り 《—リ》

九 112 3 「略」、同級の人々を驚かさんと樂しみ居り候。

たのしむ 「楽」(四・五) 5 樂しむ

《—マー・メ—ン》

七 97 1 「略」、苦しむ者を、泣く者を、助けて共に樂しまん。

十 125 5 「略」、村民皆其の家業を樂しめり。

十一 7 9 「略」、發憤しては食を忘れ、樂しんではうれひを忘れ、老の將に至らんとするを知らず。

十二 10 1 「略」、目録や鑛石などを室内に並べては一人で樂しんでゐた。

十二 134 7 狭い島國に育ち、生活の安易な樂土に平和を樂しんでゐた我が國民は、(略)。

たのみ 「頼」(名) 1 頼

十一 120 2 「略」、よい子だから私の頼をきいてくれ。

たのむ 「頼」(四・五) 14 タノム 頼

む 《—マー・ミ—ム—ン》

二 75 1 「略」、トメテクレトタノミマシタ。

七 51 1 「略」、金タガゴハレタ時、ツクロヒヲタノンダラ、(略)。

七 97 5 行長は清正の軍功をねたみ、石田三成に頼んで、清正のことを秀吉にざんげんしました。

八 17 6 「誰に頼まれた。」

八 17 7 「誰にも頼まれは致しませんでした。」

八 17 8 「いや、きつと頼まれたであらう。」

八 17 9 「いゝえ、頼まれたものではございません。」

九 24 1 「略」、あの毎日見舞に來てくれる門人たちに頼まれて、(略)、此の山中へ來たのである。

九 90 9 「信吉は傍なる姉に向ひて、「ねえさん、どうぞ其の話を聞かせて下さい。」と頼みたり。

九 105 4 「しつかり頼むよ。」

十 58 4 「略」、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。

十 61 1 「旅僧が一夜の宿を頼むとおほせられて、あなたのお歸を待つていらつしやいます。」

十一 73 4 「略」、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。

十二 43 5 三人は「どうかもう一曲。」としきりに頼んだ。

たのも 「田面」(名) 2 田の面

七 34 6 「略」、田の面は水の廣々と、蛙の聲もにぎはしく、谷あひの家窓明けて、夜に親しむ時は來ぬ。

十 90 2 「略」、耕地整理のあとつづく、並ぶ田の面に水きらめき、(略)。

たのもしい 「楽」(形) 1 たのもしい 《—ク》

十一 74 5 「略」、眞淵は宣長の學識の尋常でないことをさとつて、非常にたのもしく思つた。

たば 「束」(名) 4 束 ↓はなたば・ひとたば

九 56 9 後には麥の束が山と積んである。

九 57 3 束を廻して又たゝき、(略)。

九 57 4 「略」、束をむしろの向ふにぱいと投げて、(略)。

九 57 5 「略」、又新しい束を取る。

たばこぼん 「煙草盆」(名) 2 煙草ぼん

九 65 8 「煙草ぼん出せ。」

九 66 1 火繩一本の煙草ぼんのまはりには、(略)。

たはた 「田畑」(名) 2 田畑

八 28 6 「略」、農夫の田畑を耕すも、皆手の働なり。

十二 34 9 「略」、もう沿道の田畑には農夫が鋤を振るつてをり、(略)。

たばねる 「束」(下二) 4 束ねる 《—ネ》

十 41 7 「壯吉、お前はおうさん

のかつた難木を、かういふ風に束ねて運んでくれ。」

十418 兄は〈略〉、生木の枝で難木を束ねて見せた。

十424 私は教へられた通り、難木を束ねては運び、〈略〉。

十426 〈略〉、運んでは又束ねて、精一ぱいに働いた。

たび 「度」(名) 4 たび ↓いくたび・このたび・ふたび

五218 其のたびに、鯉のかがが地の土をおよぎます。

六195 風がひゆうつとうなつて来るたびに、濱の松は身をふるはせて、〈略〉。

八545 〈略〉、ふみしめてゐる兩足が、きねをふり上げるたびに動いた。

十二113 図 古のふみ見るたびに思ふかな、おのが治むる國はいかにと。

たび 「旅」(名) 3 たび 旅 ↓きしゃのたび・ヨーロッパのたび

五327 ある朝早く、おとうさんがたびへお立ちになった時、〈略〉。

十634 図 なうく、旅のお方、おもどり下さい。

十69 図 翌朝僧は暇をこひて又行くへ知らぬ旅に出でんとす。

たび 「足袋」(名) 1 タビ

三358 キモノノソデニモ、タビニモ、手ブクロニモ、クツニモ

右左ガアリマス。

たびさき 「旅先」(名) 1 旅先

九26 図 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、〈略〉。

たびたび 「度度」(副) 3 たびたび度々 度度

七434 越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄が、たびたび信濃の川中島で戦った。

九237 図 〈略〉、其の上政治上の事で度々殿様に上書した爲、〈略〉。

十1008 図 當地に御住まひの頃度度参上致し、〈略〉。

たびと 「旅人」(名) 4 たび人旅人

四386 たび人のぐわいたうをぬがせた方が勝と〈略〉。

四392 するとたび人は、〈略〉ぐわいたうをしつかりとからだにくつつけました。

四397 たび人はだんだんよい心持になつて、しまひにはぐわいたうをぬぎました。

十一963 唯通りがかりの旅人から珍しい話を聞いては、〈略〉。

たびほ 「足袋舗」(名) 1 足袋舗

八61 図 足袋舗

たびや 「足袋屋」(名) 1 足袋屋

八608 図 又足袋屋・〈略〉等ニハ、商品ヲ大キクセル模型ヲカ、グル風アリ。

たぶん 「多分」(副) 1 多分

十一32 此の黒點は多分表面に生ず

るうづ巻であらうといふ。

たべもの 「食物」(名) 2 タベモノ

三88 タベモノデモサガスノデセウ、キイロイクチバシデ、トキドキデメンヲツツキマス。

五882 図 うちでも一時は飲水やたべ物にこまりましたが、〈略〉。

た・べる 「食」(下二) 26 タベル

三94 ナノハヤコ米ヲヤルト、ヒヨコハミンナヨツテキテタベマス。

三95 オヤドリハナンニモタベナイデ、〈略〉。

三264 かうのびてはとてもたべられません。

三353 ゴハンヲタベルトキニ、〈略〉。

三507 車ヲヒイテキタ人ガベ

四682 〈略〉、私の手からゑを

たべる ほどになつて居ました。

四836 ひるのごはんをたべてから、〈略〉。

五94 図 私どもにはもと娘が八人ございました。それを八岐の大蛇が来て、毎年一人づつたべました。

五98 図 もう此の子一人になりましたのに、近の中に又其の大蛇がたべにまゐります。

五151 ぼちが昨日から病氣で、ごは

んをたべませんので、〈略〉。

五275 ツバメハコチラニ居ル間ニ、人ノ家ニスヲ作ツテ、ヒナヲソデマス。ツバメハ田ヤ畠ノ作物ニツク

虫ヲ取ツテタベマスカラ、〈略〉。

五402 〈略〉、べんたうをたべてゐると、〈略〉。

五472 もう桑の葉をたべないで、頭を上げて、繭をかける所をさがします。

五493 今桑をたべてゐる蠶も、〈略〉。

五972 私ドモハブダウノ實ヲ生デタベマスガ、〈略〉。

六148 僕がぐみをたべてゐる間に、〈略〉。

六155 図 其の手でぐみをたべてはいけない。

七154 舟の中でゆつくりべんたうをたべた。

七854 先ツタベルモノニハ、コンブ・ワカメ・〈略〉ナドガアリ、〈略〉。

八551 おしまひの一日には、小豆やきな粉をつけて、うちでもたべ、近所へも配つた。

八1141 〈略〉、大將が馴れるまで、うち中の者がそればかり食べるやうにした。

九68 図 其の實は〈略〉、焼いて食べたり、餅にして食べたりします。

九68 図 其の實は〈略〉、餅にして食べたりします。

九701 顔を洗つて来て、ビスケット

を食へながら、〈略〉。

九〇三 〈略〉、もう直に食へられる。

一〇九 掛茶屋に休んで名物の餅を食

べてゐると、〈略〉。

たま 「玉」(名) 14 彈丸 玉 球 彈

丸 ↓おてだま・おとしだま・くすだ

ま・しらたま・ふうせんだま・またま

四二四 〈略〉柿が、赤い玉のや

うに光つてゐます。

五九三 フサくト下ツタウスムラサ

キノ實ハ、美シイ玉ノヤウニ見エマ

ス。

六四七 卵ハ小豆程ノ大キサデ、ウス

アカイ玉ノヤウニ見エル。

七一二 〇 われらが住む世界は、其の

形まるくして、球の如し。

七二九 カンザシノ玉ヤ根ガケノ玉ニ

スルサンゴハ、〈略〉。

七二九 カンザシノ玉ヤ根ガケノ玉ニ

スルサンゴハ、〈略〉。

八九一 〇 今とはポットにうつれる

中佐、飛來る彈丸に忽ちうせて、

〈略〉。

九七二 中からみづくしい白茶色の

玉が、〈略〉。

九八四 〇 店に飾れる石燈籠、

皆

ぢいさんののみのあと。

一〇六 〇 玉の様な女の子の御

子御生れの由承り、〈略〉。

一一五八 つと大砲のそばへ寄つて、

急いで彈丸をこめ、ねらひを定めた。

一一二五 細長い管の一端を、とけた

ガラスの中に突つこんで引出すと、

先に赤い玉がくつついてゐる。

一二九三 ぼろを着た農夫は玉のやう

な汗をかいて田をすき起し、〈略〉。

一二三〇 〇 古の武士が玉とくだ

ける討死を無上の名譽としたのがそ

れである。

たま 「靈」 ↓おおもたま

たまう 「給」(四) 1 たまふ 《一

へ》 ↓あわれみたまう・いでたまう・

うしないたまう・かえりたまう・かか

りたまう・かきたまう・かしたまう・

きたまう・くだりたまう・くれたま

う・しがいたまう・しつかりしたま

う・しめたまう・しりたまう・せたま

う・たすけたまう・たてまつりたま

う・つきたまう・とどまりたまう・と

びおりたまう・とりたまう・ふるいた

まう・ほろぼしたまう・みたまう・み

やこしたまう・もうしたまう・ゆきた

まう・れたまう・わたりたまう

一〇〇 〇 願はくは我に死をたまへ。

たまこ 「卵」(名) 16 タマゴ 卵 ↓

うでたまこ・コロンブスのたまこ・な

またまこ

三二四 ケサ オカアサンガ タマゴ

ヲ入レテ オヤリニ ナリマシタ。

三二五 メンドリハ 〈略〉、タマゴ

ヲハラノ下ニダイテ シマヒマ

シタ。

三六二 〈略〉、タマゴヲアタタメテ

キマス。

六二二 〈略〉、卵買が来て、卵を七つ

買つて行きました。

六四七 鮭ハ海ノ魚デモアレバ、川ノ

魚デモアル。其ノワケハ、川デ卵カ

ラカヘツテ、海デ大キクナルカラダ

六四四 大キクナツタ鮭ハ、〈略〉。コ

レハ卵ヲ産ム場所ヲ見ツケニ來ルノ

デアル。

六四八 〈略〉、其ノ中ヘ卵ヲ産ム。

六四八 卵ハ小豆程ノ大キサデ、ウス

アカイ玉ノヤウニ見エル。

六四七 翌年ノ春ニナツテ、卵カラカ

ヘツタ鮭ハ、川ヲ下ツテ海ヘ行ク。

六四八 〇 今度ハ自分ガ卵ヲ産ミ

ニ川ヘ上ツテ來ルガ、〈略〉。

八五〇 〇 鷺ハ 〈略〉。春ノ初二三ノ

卵ヲ産ミ、五週間程アタ、メテ、ヒ

ナニカヘス。

八七四 〇 「諸君、こゝろみに此の卵

を卓上に立ててごらん下さい。」

八七九 此の時コロンブスは、こつん

と卵のはしを食卓にうちつけ、〈略〉。

九一四 〇 とやの内に入りにて見るに、

敷藁の中に見事なる卵二つころがれ

り。

九一四 〇 「四月二十五日朝、卵二

つ。」

九七三 〈略〉、雀の卵ぐらゐなはい

らしいものがあるが、〈略〉。

たまこかい 「卵買」(名) 1 卵買

六二二 〈略〉、卵買が来て、卵を七つ

買つて行きました。

たましい 「魂」(名) 4 魂

八一五 けれども刀・槍・〈略〉など、

武士の魂と呼ばれる物は、〈略〉。

九三九 〇 閣下の劍は軍人の魂として

少しも名譽をきずつけなかつた。

一二七三 怒と失望と後悔とに身も魂

もくだけ果てた王は、〈略〉。

一二二二 〇 しかしたとへにも申す通

り、一寸の蟲にも五分の魂。

だま・す 「騙」(五) 1 ダマス 《一

サ》

四一五 〇 オマヘタチハウマクワ

タシニダマサレタナ。

たまたま 「偶偶」(副) 5 たま／＼

一〇八 〇 されど宋軍の大勢日々に非

にして、天祥の誠忠を以てしても如

何ともすることあたはず。たま／＼

元の大軍至るに及んで天祥大いに敗

れ、遂に敵兵に捕へらる。

一一二七 〇 鐵眼大いに喜び、將に出

版に着手せんとす。たま／＼大阪に

出水あり。

一二八四 〇 たま／＼コーニが交易の

ため大陸に渡らんとするに際し、林

藏は好機至れりとひそかに喜びて、

〈略〉。

一二九四 〇 そこで彼は先づ近處の河に

浴し、たま／＼其處にあつた少女の

さ／＼げた牛乳を飲んで元氣を回復し

た。

一二一〇六 僧は名を禪海といつてもと

越後の人、〈略〉、たま／＼此の難處を通じて幾多のあはれな物語を耳にし、〈略〉。

たまち 「田町」〔地名〕 1 田町

十二126 翌十四日の會見は、芝、田町の薩摩屋敷で行はれた。

たまてばこ 「玉手箱」〔名〕 3 玉手箱

三44 7 図 それではこの玉手箱を上げます。

三45 3 うらしまは玉手箱をもらつて、〈略〉。

三46 4 〈略〉、玉手箱をあけました。たまに 「偶」〔副〕 4 たまに

五91 3 たまには雑誌や寫眞がはいることもあります。

七56 7 図 航海といふものは、かういふ面白いのですが、たまには恐しい目にもあひます。

十39 3 あたりは如何にも静かで、たまに散る落葉の音が、かさり／＼と聞える。

十77 6 図 〈略〉、雨といふものはごくたまにしか降りません。

たまもの 「賜物」〔名〕 3 たまもの

十38 10 図 「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」

十一101 5 彼が他日大統領となり、世界の偉人として萬人に仰がれるやうになつたのは、實に此の少年時代の苦心のたまものである。

十二52 5 今日鱒の産地として世に知

られるやうになつたのは養魚經營の賜である。

たまらない 「堪」〔形〕 6 たまらな

い 《イー・カッ・ク》

十77 9 図 〈略〉、遠足好きの君なら、毎日何處かへ出かけたくてたまらな

いだらうと思ひました。

十95 7 図 僕は残念でたまらなくなつたので、何此のくらの事がこはい

ものかと、自分から先に立つて渡つたのです。

十一69 10 第二座の僧は、二人とも規則を破つたのが不快でたまらない。

十一118 2 農場主はせつかくよく出来てゐる麥を、たくさん馬や犬にふみあらされてはたまらないと思つて、〈略〉。

十二57 8 ねぢは「此處に居ます。」と叫びたくてたまらないが、口がきけない。

十二59 7 ねぢは、〈略〉、うれしくてうれしくてたまらなかつた。

たまり じくばたまり・ひとたまり・みずたまり

たまりみず 「溜水」〔名〕 1 たまり水

五74 1 〈略〉、其の年のつゆに、又土手がぐつれて、池のたまり水が村の中へおし出した。

たまゝる 「堪」〔五〕 5 タマル たまゝる 《一リ》

三46 2 かなしくてかなしくてたまゝりませんから、おとひめのいつ

たこともわすれて、玉手箱をあけました。

三67 6 ウレシクテタマリマセンノ

デ、〈略〉。

四16 5 白ウサギハイタクテタマリマセンカラ、〈略〉。

五92 7 〈略〉、私は氣がもめてたまりません。

七22 4 此の時義貞が方々へ火をかけさせますと、濱風が之をあふり立てたからたまりません。

たまゝる 「溜」〔五〕 5 タマル たまゝる 《一ツ・ール》

一24 2 ハスノハニツユガタマツテキマス。

五51 8 低クテ廣イ所ニタマルト、池ノヤウニナリ、〈略〉。

五79 1 今年のひでりにも、此の用水池にはあんなに水がたまつてゐる。

十一52 9 此の傷から出て来るゴム液は、流れて下のコップにたまるのである。

十一53 2 それがすむと、今度はバケツを持つてコップにたまつた液を集めて歩くのである。

だまゝる 「黙」〔五〕 5 ダマル だまゝる 《一ツ》

二30 3 スルト年トツタネズミガ、〈略〉。トイヒマシタノデ、ミンナダマツテシマヒマシタ。

十94 4 父は「略。」とたづねたが、太郎はだまつてゐた。

十二42 6 かしベーター・ベンは唯だまつてうなだれてゐる。

十二128 10 相手は〈略〉、だまつて聴いてゐる。

十二129 10 西郷はだまつてうなづいた。

たみ 「民」〔名〕 5 民 じみたみ

七28 5 図 〈略〉、其ノ頃天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノ貧シキヲアハレミタマヒキ。

七60 7 図 こんなことでは、どうして海國の民といはれませう。

九25 10 図 〈略〉、一すぢに國の爲、民の爲につくすといふお考は、〈略〉。

十二510 図 昔、大國主命賊を平げ民をなつて、〈略〉。

十二130 4 図 又延いては徳川家及び江戸百萬の民の仕合せ、〈略〉。

たみこ 「民子」〔人名〕 1 民子

五49 6 図 民子、いよく今夜一ばんになつたよ。

たむけやま 「手向山」〔地名〕 1 手向山

十二100 図 〈略〉、手向山の紅葉夕日にはゆる様殊に見所あり。

たむけやまじんじや 「手向山神社」〔名〕 1 手向山神社

十二102 図 手向山神社

ため 「為」〔名〕 86 タメ ため 爲

じおんため

五74 8 よい身代であつたが、其のために田を賣り、畠を賣り、家も土藏もみんな賣りはらつた。

七57 9 図 深さをはかるのは、淺瀬に
乗上げないため、〈略〉。

七58 2 図 〈略〉、かねや汽笛を鳴らす
のは、〈略〉、衝突をさけるためであ
ります。

七76 根ノヤウナ所モ、陸上ノ植物
ノ様ニ養分ヲ吸取ルタメノモノデハ
ナイ。

七98 3 此の人だけは自分のために心
配してくれるであらうと思つたので
ございます。

八21 5 図 揚子江ハ〈略〉、河口ヨリ
海上百里ノ間、海水コレガタメニ赤
シトイフ。

八24 1 呉鳳はお祭の爲に人を殺すの
はよくないといふことを説聞かせて
〈略〉。

八30 3 先づよい場所を見立てて、炭
を焼く間ねとまりをするための小屋
を建てる。

八59 3 図 ヨリテ看板ノ如キモ、タヤ
スク人目ヲヒカシメンガ爲ニ、キソ
ヒテ小屋根ノ上ニカ、グルニ至レリ。

八76 人々は何の爲にこんなことを
いひ出したかと思ひながら、〈略〉。

八99 9 図 〈略〉、君は〈略〉、少しも
僕等の爲につくさない。

八102 3 図 君等は〈略〉食物を送つて
よこしませんでした。其の爲に新し
い血が出来なくなつて、〈略〉。
八102 8 図 君等が若し僕に食物を送る
爲に働いたといふなら、〈略〉。

八102 9 図 〈略〉、僕もまた君等を養ふ
爲に骨を折つたといひます。

八114 1 其の爲、大將には全く食物に
好ききらひといふものがないやうに
なつた。

九23 8 図 〈略〉、其の上政治上の事で
度々殿様に上書した爲、役人にく
まれて、〈略〉。

九24 2 図 〈略〉、新しい鑛^{くわ}山を開い
たりする爲に、此の山中へ來たので
ある。

九25 9 図 〈略〉、大體一身一家の爲で
なく、〈略〉。

九25 9 図 〈略〉、一すぢに國の爲、民
の爲につくすといふお考は、どなた
も皆同じ事で、〈略〉。

九25 10 図 〈略〉、民の爲につくすとい
ふお考は、〈略〉。

九26 6 図 〈略〉、農學の進歩の爲には
決してむだでなかつたと思ふ。

九26 8 図 〈略〉、國家の爲に、此の學
問を大成するのがお前の役目だ。

九28 8 図 〈略〉、國家の爲に富源を開發
することが甚だ多かつた。

九29 10 瀧は、落口にあるゴート島と
いふ小島の爲に二つに分れてゐます。
九37 1 図 レマン將軍も、火藥の爆發
によりて起れるガスの爲に窒息し居
たるを、〈略〉。
九45 1 図 カクノ如ク物ニ價アルハ、
其ノ物ガ人ノ爲ニ有用ナルト、〈略〉。
九69 10 窓から吹きこむ朝風のひやり

とするのは、餘程北へ進んだ爲だら
う。

九85 5 図 さうだ。動かないのだ。し
かし地球が廻るために、我々の目に
は動くやうに見える。

九116 7 図 何の爲にいくさには御出
でなされ候ぞ。

九116 8 図 一命を捨てて君の御恩に
報ゆる爲には候はずや。

九116 10 図 一人の子が御國の爲
いくさに出でし事なれば、〈略〉。

九120 9 図 「今日ハ衆議院議員ノ總選
舉ダカラ、投票ノ爲ニ歸ツテ來タノ
ダ。」

九121 6 図 今日投票ノ爲ニ歸ツタノモ
出發ノ時カラノ豫定ナノダ。

九122 7 図 世間ニハ、イロ／＼ノ事情
ノ爲ニ、或ハ信用モシテキナイ人ニ
投票シタリ、〈略〉。

十4 5 図 〈略〉、御庭の此所彼所に、
下葉の色づきかけたるはぎ茂れり。
はぎの御茶屋といふ名のあるも之が
ためなるべし。

十12 2 図 〈略〉、此の頃墓参りのために
朝鮮から歸つてをられる高橋さんが
來られた。

十12 10 誰かが力石をころがして來て、
土をはらつて高橋さんの爲に席を作
つた。
十46 5 研究の爲には、少からぬ費用
もかゝる。
十81 5 これは炭坑内の地下水を坑外

へ汲出す爲で、〈略〉。

十82 7 坑内に馬が居るのは不思議だ
と思つて、聞いてみると、これは石
炭を運ぶために飼はれてゐるのださ
うです。

十107 8 図 〈略〉、御前様には御家事
御手つだひのため、何かと御いそが
しき事と察し申し候。

十125 8 図 〈略〉、常に力を一村の幸福
の爲に盡くすが故に、〈略〉。

十一3 9 図 〈略〉、たゞ其の距離の遠い
ために、あんなに小さく見えるので
ある。

十一4 9 図 〈略〉、奸臣の爲にさまた
げられ、久しく其の職に居ることあ
たはずして魯を去りぬ。

十一8 1 図 〈略〉、人生の爲に盡くし
たる大聖の面目、〈略〉。

十一14 8 図 〈略〉、お取込があつたため、
今まで延びてゐたのださうです。

十一18 3 図 これまで自分の不整頓の
ために、むだに費した時間と努力は
大きなものであつた。

十一20 5 此の犯罪者を罰するための
裁判を刑事裁判といふ。

十一21 6 かういふ風に、三回くりか
へして裁判してもらふ事の出来る組
織になつてゐるのは、つまり裁判を
念入にするためである。
十一22 1 又〈略〉、不當な刑罰が加
へられぬやうに被告を保護するため
に辯護士といふものがある。

する。

六32 橋ノタモトニ人力車ガ一ダイ

アツテ、〈略〉。

六72 東の方は此の橋のたもとから、

川にそつて電車が出ます。

七67 人夫は其の男のたもとをおさ

へて、〈略〉。

十60 折から、たもとの雪を打拂

ひくつ、此方へ来かかれるは、此

の家の主人なるべし。

たやす 〔絶〕(五) 1 たやす

六92 これにこりて、賊は城の水を

たやして苦しめようとはかつた。

たやす い(形) 2 タヤスイ たやす

い(一ク)

九20 〔略〕、タヤスク見トメラレル

方ガカヘツテ安全ナノデアル。

九76 〔略〕「東京から此所までは四百

五十六哩もあるのだが、かうたやす

く来てみると、〈略〉。」

たやす し(形) 2 タヤスシ (一ク)

八59 〔略〕ヨリテ看板ノ如キモ、タヤ

スク人目ヲヒカシメンガ爲ニ、〈略〉。

九44 〔略〕ソレガ如何ニマレニシテ、

タヤスク得ラレザル物ナリトモ、

〈略〉。

たゆ 〔絶〕(下二) 5 タユ たゆ

〔一エ・ユル〕

七75 〔略〕横濱 横濱は〈略〉、商船

の出入たゆる時なし。

七29 〔略〕、港ニハ船ノ出入タエ

ズ。

七31 〔略〕今や獅子の息はたえんとす。

八55 〔略〕ゆききの車馬のたえざれ

ば、向ふの側へ行きかねつ。

九43 〔略〕砲音たえし砲臺に ひら

めき立てり、日の御旗。

たよう したしめたよう

たより 〔頼〕(名) 7 たより 便り

アメリカカダより・だいいんだより・

トラックとうだより

六57 〔略〕、風のたよりに此の事を

聞いて、〈略〉。

九94 〔略〕いづれ又近い中に便りをし

ませう。

十81 安全燈をたよりに歩いて行く

と、〈略〉。

十119 地圖を便りにして進んで行く

と、〈略〉。

十一28 〔略〕退却軍は少しく之にたよ

りを得たれども、〈略〉。

十二106 それは山國川に沿うて連な

る屏風のやうな絶壁をたよりに、

見るから危げな數町のかけしを造

つたものであるが、〈略〉。

十二108 〔略〕、時には夜半までも薄

暗い燈を便りに、經文をとこなへな

ら一心にのみを振るふことさへあつ

た。

たよる 〔頼〕(五) 4 たよる

〔一ツ・ール〕

七58 〔略〕、星が出てゐれば、そ

れにたよつて方角を知ること出來

るし、〈略〉。

九28 〔略〕、間もなく江戸へ出て、

宇田川玄隨・大槻玄澤などの人々を

たよつて、一心に西洋の學問を勉強

した。

十58 〔略〕、全く方法の盡きた場合

などには、此の勇ましい小傳令使に

たよるより外はない。

十二94 〔略〕もう人にはたよるまい。

自分一人で修行をしよう。

たら い 〔盟〕(名) 2 タラヒ たらひ

いかなだら

三66 〔略〕、手ヲケヤタラヒ

ノタガヲカケカヘマシタ。

五87 〔略〕、うちでも下の雨戸が

たふれて、中からうすやたらひがぼ

かぽか流れ出すほどで、〈略〉。

だらけ 〔あせ〕だらけ・こぬかだらけ・

ぬかだらけ・はいだらけ・ひげだら

け・ほこりだらけ

だらだらさか 〔坂〕(名) 1 だら／＼

坂

九31 〔略〕だら／＼坂を登りきると、道

は低いみねづたひになる。

たり 〔並助〕100 タリ たり 〔タリ・

ダリ〕

二58 〔略〕、日ヤ月ガデテ 〔ナ

ナカタリ スレバ、〈略〉。

二58 〔略〕、日ヤ月ガデテ 〔ナ

ナカタリ、アカリガツイテ 〔ナ

ナカタリ スレバ、〈略〉。

ナカタリ スレバ、〈略〉。

二72 山カラ出テ、モノヲトツ

タリ、人ヲサラツタリシマシタ。

二72 山カラ出テ、モノヲトツ

タリ、人ヲサラツタリシマシタ。

三12 〔略〕、おつかひにいつたり、

にはをはいたりして、おかあさ

んのおてつだひをします。

三12 〔略〕、おつかひにいつたり、

にはをはいたりして、おかあさ

んのおてつだひをします。

三39 ちか道の方は、道がこ

はれてゐたり、石が出てゐたり

しました。

三39 ちか道の方は、道がこ

はれてゐたり、石が出てゐたり

しました。

三43 〔略〕、毎日いろいろなごちそう

をしたり、さまざまなあそびを

して見せたりしました。

三43 〔略〕、毎日いろいろなごちそう

をしたり、さまざまなあそびを

して見せたりしました。

三67 〔略〕、ニハニ水ヲウツタ

リ、ウエ木ニ水ヲカケタリシ

マシタ。

三67 〔略〕、ニハニ水ヲウツタ

リ、ウエ木ニ水ヲカケタリシ

マシタ。

四35 〔略〕、ホカノ鳥ヲイヂメ

タリ、ツカミコロシテエニシタ

リシテアバレマハリマス。

四35 〈略〉、ホカノ鳥ヲイヂメ

タリ、ツカミコロシテエニシタ
リシテアバレマハリマス。

四37 スズメハ〈略〉、ソバヘヨ

ツテ、ヲドツタリサヘツツタリシ
テバカニシマス。

四37 スズメハ〈略〉、ソバヘヨ

ツテ、ヲドツタリサヘツツタリシ
テバカニシマス。

四62 舟はなみにゆられて、上

つたり下つたりします。

四62 舟はなみにゆられて、上

つたり下つたりします。

四72 〈略〉、人が生れたり、死ん

だり、〈略〉したことをみんな
見て知つて居ます。

四72 〈略〉、人が生れたり、死ん

だり、〈略〉したことをみんな
見て知つて居ます。

四73 〈略〉、人が生れたり、死ん

だり、家がたつたり、こはれたり、
〈略〉したことをみんな見て知
つて居ます。

四73 〈略〉、人が生れたり、死ん

だり、家がたつたり、こはれたり、
〈略〉したことをみんな見て知
つて居ます。

四73 〈略〉、火事があつた

り、水が出たりしたことをみ
んな見て知つて居ます。

四73 〈略〉、火事があつた

り、水が出たりしたことをみ
んな見て知つて居ます。

り、水が出たりしたことをみ
んな見て知つて居ます。

四80 学校の行きかへりに道草

をくつたり、石をなげたり、生
物をころしたりするやうな子
どもは、〈略〉。

四80 〈略〉、石をなげたり、生物

をころしたりするやうな子ど
もは、〈略〉。

四80 〈略〉、石をなげたり、生物

をころしたりするやうな子ど
もは、〈略〉。

五97 〈略〉、ブダウ酒ヲ造ツタリ、

ホシブダウニシタリスルト申シマス。

五97 〈略〉、ブダウ酒ヲ造ツタリ、

ホシブダウニシタリスルト申シマス。

六98 金や銀ハ美シクテ、オアシ

ニナツタリ、指ワニナツタリ、其ノ
外イロ／＼ナカザリ物ニナリマスガ、
〈略〉。

六10 金や銀ハ美シクテ、オアシ

ニナツタリ、指ワニナツタリ、其ノ
外イロ／＼ナカザリ物ニナリマスガ、
〈略〉。

六87 〈略〉、らつばを吹かせたり、

ごぼんの上へ乗らせたりした。

六87 〈略〉、らつばを吹かせたり、

ごぼんの上へ乗らせたりした。

七26 又力が強いので、荷物をつけ

たり、荷車をひかせたり、田や畠の
耕作に使つたりする。

七26 又力が強いので、荷物をつけ

たり、荷車をひかせたり、田や畠の
耕作に使つたりする。

たり、荷車をひかせたり、田や畠の
耕作に使つたりする。

七26 又力が強いので、荷物をつけ

たり、荷車をひかせたり、田や畠の
耕作に使つたりする。

七52 〈略〉、あの運動場で遊んだ

り、此の講堂でお話を聞いたり致し
ました。

七52 〈略〉、あの運動場で遊んだ

り、此の講堂でお話を聞いたり致し
ました。

七57 〈略〉、あきりがかゝつたり、大雪

が降つたりして、一寸先も見えなく
なることもあります。

七57 〈略〉、あきりがかゝつたり、大雪

が降つたりして、一寸先も見えなく
なることもあります。

七57 〈略〉、あきりがかゝつたり、大雪

が降つたりして、一寸先も見えなく
なることもあります。

七57 〈略〉、あきりがかゝつたり、大雪

が降つたりして、一寸先も見えなく
なることもあります。

七57 〈略〉、あきりがかゝつたり、大雪

が降つたりして、一寸先も見えなく
なることもあります。

七57 〈略〉、あきりがかゝつたり、大雪

が降つたりして、一寸先も見えなく
なることもあります。

七57 〈略〉、あきりがかゝつたり、大雪

が降つたりして、一寸先も見えなく
なることもあります。

七80 エビノピン／＼ハネタリ、カ

ニノ横ニハツテアルク様子ハ、〈略〉。

七83 又物ヲ洗ツタリファイタリスル

時ニ使フ海綿モ、〈略〉。

七83 又物ヲ洗ツタリファイタリスル

時ニ使フ海綿モ、〈略〉。

七94 〈略〉、おぢいさんはかぼちや

棚につつかい棒を入れたり、菊の鉢

を軒下に運んだりされた。

七94 〈略〉、おぢいさんはかぼちや

棚につつかい棒を入れたり、菊の鉢

を軒下に運んだりされた。

八93 「い」を「う」と間違へたり、

「う」を「え」と間違へたりするの
を、〈略〉。

八93 「い」を「う」と間違へたり、

「う」を「え」と間違へたりするの
を、〈略〉。

九68 其の實は土人の一番大事な

食料で、焼いて食べたり、餅にして
食べたりします。

九68 其の實は土人の一番大事な

食料で、焼いて食べたり、餅にして
食べたりします。

九24 〈略〉、此所の銅の製法を改

良したり、新しい鑛山を開いたり
する爲に、〈略〉。

九24 〈略〉、此所の銅の製法を改

良したり、新しい鑛山を開いたり
する爲に、〈略〉。

九106 馬はどれも皆張りきつて、く

つわをかんたり、前がきをしたり、
頭をふり上げたりしながら、乗手の
あひづが下るのを待ちかまへてゐた。

九106 馬はどれも皆張りきつて、く

- つわをかんだり、前がきをしたり、頭をふり上げたりしながら、〈略〉。
- 九106 馬はどれも皆張りきつて、くつわをかんだり、前がきをしたり、頭をふり上げたりしながら、〈略〉。
- 九127 〇 略、或ハ信用モシテキナイ人ニ投票シタリ、或ハ棄權シテシマツタリスル人モアルガ、〈略〉。
- 九128 〇 略、或ハ信用モシテキナイ人ニ投票シタリ、或ハ棄權シテシマツタリスル人モアルガ、〈略〉。
- 十175 〇 馬も誠に從順で、けたりかみついたりするやうな事は決してしません。
- 十176 〇 馬も誠に從順で、けたりかみついたりするやうな事は決してしません。
- 十199 〇 略、泣きながら豆やにんじんをやつたり、くびや背をなでたりしてゐるのがあります。
- 十1910 〇 略、泣きながら豆やにんじんをやつたり、くびや背をなでたりしてゐるのがあります。
- 十515 〇 うちに置くと、火事にあつたり、盗人に取られたりする危険があるからね。
- 十516 〇 うちに置くと、火事にあつたり、盗人に取られたりする危険があるからね。
- 十579 飛行機の不時着陸地點を知らせたり、漁業者が沖から獲物の多少や難船の有様を通知したり、〈略〉。
- 十5710 〇 略、漁業者が沖から獲物の多少や難船の有様を通知したり、登山者が路に迷つて危険におちいつた時、救を求めたり、いろ／＼に利用する事が出来る。
- 十582 〇 略、漁業者が沖から獲物の多少や難船の有様を通知したり、登山者が路に迷つて危険におちいつた時、救を求めたり、いろ／＼に利用する事が出来る。
- 十583 又戦争の時戦線から戦状を報じたり、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。
- 十584 又戦争の時戦線から戦状を報じたり、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。
- 十808 〇 略、電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。
- 十808 〇 略、電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。
- 十808 〇 略、電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。
- 十521 其の間草をとつたり、虎や象の荒しに來るのを防いだり、苦心はなか／＼一通りでない。
- 十522 其の間草をとつたり、虎や象の荒しに來るのを防いだり、苦心はなか／＼一通りでない。
- 十662 思ふに落雷の爲に樹木が燃えたり、密生した樹木の枝と枝がすれあつて起つたりした自然の火から、火種を取つたものであらう。
- 十663 思ふに落雷の爲に樹木が燃えたり、密生した樹木の枝と枝がすれあつて起つたりした自然の火から、火種を取つたものであらう。
- 十一675 木炭や石炭や石炭ガスの火は、部屋を暖めたり物を煮たりするに用ひられ、〈略〉。
- 十一675 木炭や石炭や石炭ガスの火は、部屋を暖めたり物を煮たりするに用ひられ、〈略〉。
- 十一675 木炭や石炭や石炭ガスの火は、部屋を暖めたり物を煮たりするに用ひられ、〈略〉。
- 十一7810 しかしこれらの物は、受取る者にそれが不用であつたり、思ふやうに分割することが出来なかつたり、其の他いろ／＼の缺點がある。
- 十一791 しかしこれらの物は、受取る者にそれが不用であつたり、思ふやうに分割することが出来なかつたり、其の他いろ／＼の缺點がある。
- 十一839 手や足の關節を曲げたり延ばしたりして、出發の號令を待つ。
- 十一839 手や足の關節を曲げたり延ばしたりして、出發の號令を待つ。
- 十一839 手や足の關節を曲げたり延ばしたりして、出發の號令を待つ。
- 十一8610 波打際には大勢の人が旗を振つたり帽子を振つたりして、「萬歳々々。」と叫んでゐる。
- 十一8610 波打際には大勢の人が旗を振つたり帽子を振つたりして、「萬歳々々。」と叫んでゐる。
- 十一8610 波打際には大勢の人が旗を振つたり帽子を振つたりして、「萬歳々々。」と叫んでゐる。
- 十一932 〇 ところが太陰曆は月のみちたかりかけたりする變化を本としてこしらへたもので、〈略〉。
- 十一932 〇 ところが太陰曆は月のみちたかりかけたりする變化を本としてこしらへたもので、〈略〉。
- 十一932 〇 ところが太陰曆は月のみちたかりかけたりする變化を本としてこしらへたもので、〈略〉。
- 十一985 それからは又父の手助をしたり、人にやとはれたりすることになつたが、〈略〉。
- 十一985 それからは又父の手助をしたり、人にやとはれたりすることになつたが、〈略〉。
- 十一985 それからは又父の手助をしたり、人にやとはれたりすることになつたが、〈略〉。
- 十一1155 まして威力によつて強制するとか、私利によつて勧誘するとかいふやうな手段を用ひたり、又此の手段に動かされたりするのは、〈略〉。
- 十一1155 まして威力によつて強制するとか、私利によつて勧誘するとかいふやうな手段を用ひたり、又此の手段に動かされたりするのは、〈略〉。
- 十一1155 まして威力によつて強制するとか、私利によつて勧誘するとかいふやうな手段を用ひたり、又此の手段に動かされたりするのは、〈略〉。
- 十一1168 又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、〈略〉。
- 十一1168 又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、〈略〉。
- 十一1168 又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、〈略〉。
- 十一1169 又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、〈略〉。
- 十一1169 又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、〈略〉。
- 十一1169 又産業組合を設けたり、慈善事業を起したり、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、〈略〉。
- 十一1195 騎馬の人たちは、あけないとなぐるぞと言つておどしたり、あけてくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。
- 十一1195 騎馬の人たちは、あけないとなぐるぞと言つておどしたり、あけてくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。
- 十一1195 騎馬の人たちは、あけないとなぐるぞと言つておどしたり、あけてくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。
- 十一1196 騎馬の人たちは、あけないとなぐるぞと言つておどしたり、あけてくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。
- 十一1196 騎馬の人たちは、あけないとなぐるぞと言つておどしたり、あけてくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。
- 十一1196 騎馬の人たちは、あけないとなぐるぞと言つておどしたり、あけてくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。

けてくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。

十一1247 〈略〉コツプなどを、此の圓板にあてて模様をほりつけたたり、みがきをかけたたりしてゐる。

十一1247 〈略〉コツプなどを、此の圓板にあてて模様をほりつけたたり、みがきをかけたたりしてゐる。

十二791 〈略〉、まぐろは水面に渦巻を起したり、背びれを水上に現したりして泳ぎ廻つてゐる。

十二792 〈略〉、まぐろは水面に渦巻を起したり、背びれを水上に現したりして泳ぎ廻つてゐる。

たり (助動) 11 タリ たり 《タリ・タル・ト》

八213 図 揚子江ハ水量ツネニ豐ニシテ、洋々ト流ルレドモ、〈略〉。

十359 〈略〉、終に洋々たる太西洋に出るのである。

十1003 図 天祥刑せらるゝにのぞみ、從容としてはいく、「臣が事終る。」と。

十1274 図 〈略〉大戦艦陸奥は、海を後にして悠然と横たはれり。

十二223 商人たる者は、〈略〉。

十二884 法律は、〈略〉、いやくも國民たる者は必ず之を守らなければならぬ。

十二1002 図 〈略〉、尚三重五重の塔、猿澤の池水に影をうつして南都第一の美觀たり。

十二1019 図 〈略〉、九條の條坊井然として、北に大内裏の宮殿を仰ぎ、〈略〉古の奈良の都は、〈略〉。

十二1331 君と親とに眞心を捧げ盡くして仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、今更いふまでもない。

十二1361 其の原因はいろいろあらうが、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、其の主たるものであらう。

十二1392 我々は〈略〉大國民たるにそむかぬりつばな國民とならねばならぬ。

たり (助動) 187 タリ たり 《タリ・タル・タレ》ふえたり

六85 圖 ふとん着て、ねたるすがたや東山。

七306 図 〈略〉、大いなる蛇つと出でて、獅子のからだにまきつきたり。

七307 図 獅子はおどろきてふりはなさんとしたれど、〈略〉。

七308 図 〈略〉、蛇はますくかたくしめつたり。

七311 図 〈略〉、蛇はますく強くしめつたり。

七318 図 〈略〉、蛇は眞二つとなりて、大地にのたうちまはりてたふれたり。

七323 図 獅子は〈略〉、しづかに近よりて武士の手をなめたり。

七335 図 船は沖に向ひて港を出でたり。

七336 図 獅子はかなしげにほえて、濱べに立上りたりしが、つと海の中にをどり入りたり。

七337 図 獅子はかなしげにほえて、〈略〉、つと海の中にをどり入りたり。

七565 図 船長はコツプの水を一口飲みて、又其の話をうけたたり。

七615 図 船長はかくいひて後一だん聲をほり上げて、「〈略〉。」とむすびたる時は、拍手の音しばらくはやまざりき。

七616 図 かくて船長は外國より持歸りたる寫眞帖を學校に寄附して去れり。

七106 1 圖 大明の軍勢四十萬、勢はげしくおしよせたるに、〈略〉。

八584 図 學校用具ヲ賣ル店ニ、手帳・筆・墨・繪具ナドト記シタル看板ヲ出シ、〈略〉。

八585 図 〈略〉、ハキ物屋ニ下駄・草履・傘ナドト、大字ニテ目立ツヤウニ記シタル看板ヲ出セルハ、〈略〉。

八598 図 サレド食物を賣ル店ニハ、〈略〉・惣んざん(センペイ)ナドト記シテ、軒ニ下ゲタルモアリ。

八605 図 看板ニハマタ商品ヲエガキタルモノアリ。

八631 図 〈略〉、多くの弟子保己一につきて學びたれば、時の人 番町で目あきめくらに 道をき、と言ひたりといふ。

八635 図 〈略〉、時の人 番町で目あきめくらに 道をき、と言ひたりといふ。

きめくらに 道をき、と言ひたりといふ。

八638 図 〈略〉、風にはかに吹きて、ともし火きえたり。

八641 図 保己一はそれとも知らず、話をつけたれば、弟子どもは「先生、少しお待ち下さいませ。今風であかりがきえました。」と言ひしに、〈略〉。

八647 図 〈略〉、保己一は笑ひて、「さてく、目あきといふものは不自由なものだ。」と言ひたりとぞ。

八966 図 此所ニ名高キ名古屋城アリ。三百年前徳川家康ガ諸大名ニ命ジテ造ラシメタルモノニシテ、〈略〉。

八973 図 名古屋市ハ〈略〉、「尾張名古屋ハ城デ持ツ。」ト歌ハレタリ。

九244 圖 〈略〉、ほのくと 東の窓はしらみたり。

九116 図 ふしぎや、今まで荒れに荒れるる大海、おのづから静まりて、〈略〉。

九123 図 待ちかねたる鶏ども、我先にと走り出づ。

九125 図 綿毛に包まれたるひよこども、〈略〉。

九1210 図 妹は餌をつかみて、わざと少しはなれたるきりの木のあたりにまきちらせば、鶏はあわてて其の方へ行く。

九142 図 〈略〉、飛びちりたる貝のかけを、すばやくついばみたるは

〈略〉。

九142図 〈略〉、すばやくついばみたるは眞白なるめんどりなり。

九143図 くだきたる目殻を器に入れてあたふるに、〈略〉。

九146図 昨日の午後に産みたるなるべし。

九147図 妹の置きて行きたる餌箱に入れて持歸り、〈略〉。

九151図 〈略〉、日記をも渡されれば、鶏の事は總べて之に記入し置くなり。

九362図 リエージュの要塞に立てこもりたるベルギーの勇將レマンは、〈略〉。

九364図 〈略〉、エンミツヒ將軍のひきゐたるドイツの大軍を物とせず、勇ましく防ぎ戦ひたり。

九365図 〈略〉、勇ましく防ぎ戦ひたり。

九371図 レマン將軍も、〈略〉ガスの爲に窒息し居たるを、〈略〉。

九373図 レマン將軍も、〈略〉、ドイツ兵に發見せられて、野戦病院に送られたり。

九385図 〈略〉、レマン將軍は靜かに、〈略〉。」と答へたり。

九391図 〈略〉、エンミツヒ將軍は「〈略〉。」と、強ひて之をおし止めた

九424図 二人の我が子それ／＼に、死所を得たるを喜べり。

九456図 〈略〉、馬ハ最も高キ價ヲツケタル人ノ物トナル。

九462図 〈略〉、最も價下ゲタル持主、〈略〉。

九828図 ぢいさん今年六十の坂を越えたる足もとに、〈略〉。

九849図 信吉の家にては、〈略〉、家内一同涼みたり。

九8410図 〈略〉、満天の星は寶石をちりばめたるが如し。

九851図 信吉は夏休にて歸り居たる兄に向ひて、〈略〉。

九852図 〈略〉、いろ／＼と星の説明を求めたり。

九909図 信吉は傍なる姉に向ひて、〈略〉。」と頼みたり。

十377図 〈略〉、無量の感に打たれた

十433図 〈略〉、下葉の色づきかけたるはぎ茂れり。

十588図 〈略〉、新に植込みたる木の數、實に十數萬本に及べり。

十611図 大方は國民の眞心こめたる獻木にて、〈略〉。

十622図 〈略〉、中には小學生の奉りたるものも少からず。

十666図 〈略〉、ほとんど皆勢よく根づきたるは、誠に驚くべき事ならずや。

十688図 〈略〉、大切に取扱ひたる

十711図 〈略〉、何れも十日間を限りて土木に従事せしめたるに、通常の入夫にもまさりて仕事ははか取りたりと聞く。

十722図 〈略〉、通常の入夫にもまさりて仕事ははか取りたりと聞く。

十744図 途中、先生は「〈略〉。」と語られたり。

十596図 〈略〉、つかれし足の歩重くたどり着きたる旅僧あり。

十6110図 すぐ／＼と立去る僧の後影を見送りたる妻は、〈略〉

十637図 〈略〉、はるかに行過ぎたる僧は、〈略〉。

十6310図 降積む雪に道を失ひ、進みもやらずたゞみたる様は、〈略〉。

十643図 降積む雪に道を失ひ、進みもやらずたゞみたる様は、古歌に〈略〉。」といへるにも似たりけり。

十6810図 〈略〉、ちぎれたりとも、此の具足に身を固め、〈略〉。

十691図 〈略〉、さびたりとも長刀を持ち、〈略〉。

十6911図 〈略〉、やせたりともあの馬にうち乗つて一番にはせ参じ、〈略〉。

十698図 〈略〉、主人の物語に、いたく動かされたる旅僧は、〈略〉。

十699図 〈略〉、兩眼に涙をたゝへて聞きあり。

十7010図 常世は、時こそ來れと、やせ馬にむちうつてはせつけたり。

十712図 〈略〉、常世はちぎれたる具足を着け、〈略〉

十713図 〈略〉、わるびれたる様もな

十1081図 近き處ならば早速上り候て御世話も致すべく候へども、何分百里の山川をへだてたる事とて、それも心に任せず、〈略〉。

十1117図 心をこめたる繪筆ぞにほふ。

十1273図 今日を晴と満艦飾をほどこされたる三萬四千噸の大戦艦陸奥は、〈略〉。

十1275図 果もなくすみ渡りたる大空、〈略〉。

十1276図 〈略〉、場に満ちたる十幾萬の拜觀者の胸は、〈略〉。

十1283図 やがて工廠長のふりかざしたる金色の槌は、〈略〉。

十1288図 艦首につるしたるくす玉はつとわれて、〈略〉。

十1308図 〈略〉、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、〈略〉。

十1309図 〈略〉、力なくて止みたり。

十1319図 〈略〉、けはしき山路をふみわけてたどり着きたりしに、〈略〉。

十1327図 高德、大いなる櫻の幹をけづりて、大文字に詩の句を書きつけたり。

十1331図 〈略〉、讀みかねて上聞に達したり。

十1342図 〈略〉、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなり。

十148図 孔子は〈略〉、當時の魯

即ち今の山東省の地に生れたり。

十一510 〇 〇 略、老後は専ら力を教育と著述に用ひたり。

十一61 〇 〇 門人三千人、其の最もすぐれたるもの、〇 略。

十一64 〇 〇 論語は、曾参と有若との門人等が孔子及び其の高弟の言行を集録したるものにして、〇 略。

十一72 〇 〇 「過ぎたるは及ばざるが如し。」

十一77 〇 〇 孔子は〇 略、近きより遠きに及すを以て其の主義としたり。

十一81 〇 〇 〇 略、人生の爲に盡くしたる大聖の面目、〇 略。

十一82 〇 〇 〇 略、大聖の面目、よく此の語にあらはれたりといふべし。

十一132 〇 〇 〇 略、たどりつきたる峠の上に、〇 略。

十一234 〇 〇 越路の雪も解初めれば、〇 略。

十一236 〇 〇 待ちまうけたる秀吉は、〇 略。

十一244 〇 〇 〇 略、湖に沿ひたる一筋路を急に急ぎて進み来る。

十一246 〇 〇 〇 略、あわてて逃げんとすれども時既におそく、大方はやには斬倒されたり。

十一247 〇 〇 〇 略、危く逃延びたる一二の兵卒、〇 略。

十一258 〇 〇 〇 略、大岩山・鉢峯などの要所々々にそれく將卒を配置したり。

十一264 〇 〇 〇 略、降つてわいたる敵の大軍、〇 略。

十一265 〇 〇 〇 略、降つてわいたる敵の大軍、木之本の邊に滿ちたりと報じ来る。

十一269 〇 〇 〇 略、盛政は〇 略、俄にやみの中を退却しはじめたり。

十一272 〇 〇 〇 略、あたかも晝食の膳に向ひ居たる秀吉は、〇 略。

十一273 〇 〇 〇 略、持ちたる箸を投捨て、〇 略。

十一273 〇 〇 〇 略、「すは勝つたるぞ。」

十一2710 〇 〇 〇 略、一萬五千の軍勢まつしぐらに進軍して、夜半の頃には既に木之本に到着したり。

十一282 〇 〇 〇 略、退却軍は少しく之にたよりを得たれども、秀吉の軍は、〇 略、追撃すること頗る急なり。

十一285 〇 〇 〇 略、明ければ二十一日の朝、盛政は賤嶽より西北に當れる高地に兵を引きまとめたりしが、〇 略。

十一287 〇 〇 〇 略、〇 略、弟勝政に引きあげを命じたり。

十一288 〇 〇 〇 略、今まで賤嶽の山上より、また、きもせず戦況を見居たりし秀吉、〇 略。

十一288 〇 〇 〇 略、勝政の引足になりたるを見て、〇 略。

十一289 〇 〇 〇 略、秀吉、勝政の引足になりたるを見て、すかさず鐵砲組に合圖して銃火をあびせかけたれば、〇 略。

十一304 〇 〇 〇 略、直に組合ひたる二人の勇士、〇 略。

十一307 〇 〇 〇 略、清正やがて正國をねち伏せたり。

十一3010 〇 〇 〇 略、正國得たりと、力足をふん張りてはねかへさんとせしが、〇 略。

十一313 〇 〇 〇 略、清正手早くかぶとのをを切つたりければ、かぶとはつゝじの枝に残つて、〇 略。

十一314 〇 〇 〇 略、二人はしつかと組みたるまゝころくと轉び落つること三十間許。

十一327 〇 〇 〇 略、此の四海峽に包まれたる細長き内海を瀬戸内海といふ。

十一417 〇 〇 〇 略、さて昨日御地より歸村せられたる河井氏の御話によれば、〇 略。

十一448 〇 〇 〇 略、昔、泉州堺のなにがし寺に、或畫師久しく寄食してありけるが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を経たり。

十一467 〇 〇 〇 略、翌朝畫師は常にもあらず早く起出で、ふすまに向ひてしきりに筆を動かしたり。

十一4610 〇 〇 〇 略、畫師は前の如く夜もすがら寝ねずして、明日はかく畫がかななど獨言してゐたりければ、住持は尚知らぬ顔して過しに、〇 略。

十一474 〇 〇 〇 略、今度はひちを張り、足をのべ、手を口に當てて鶴の臥し

たる様をなせり。

十一476 〇 〇 〇 略、夜明けて住持、畫師に向ひて、〇 略。」と、夜中に畫師のしたる様をまねて見るに、〇 略。

十一4710 〇 〇 〇 略、「昨夜のぞき見て知りたり。」

十一488 〇 〇 〇 略、「先に畫がきたる檜、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、〇 略。」

十一4810 〇 〇 〇 略、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、〇 略。」

十一818 〇 〇 〇 略、百尋・千尋海の底、遊びなれたる庭廣し。

十一8110 〇 〇 〇 略、幾年こゝにきたへたる鐵より堅き腕あり。

十一822 〇 〇 〇 略、吹く潮風に黒みたるはだは赤銅さながらに。

十一104 〇 〇 〇 略、イグアスの大瀑布の壯觀を寫したるものもこれあり候。

十一1067 〇 〇 〇 略、大勢の人々が熟したるコーヒの實を手にてこき落し、〇 略。

十一1069 〇 〇 〇 略、まじりたる石・砂などは沈み、〇 略。

十一1097 〇 〇 〇 略、伐倒したる木は乾くまで其のまゝに致置き、〇 略。

十一1255 〇 〇 〇 略、一切經は、佛教に關する書籍を集めたる一大叢書にして、〇 略。

十一12510 〇 〇 〇 略、されば古は、支那より渡

來せるものの僅かに世に存するのみにて、學者其の得がたきに苦しみたりき。

十一126 5 図 〈略〉、廣く各地をめぐりて資金をつること數年、やうやくにして之をととのふる事を得たり。

十一127 2 図 図 我が一切經の出版を思立ちたるは〈略〉。

十一127 4 図 喜捨を受けたる此の金、〈略〉。

十一127 5 図 図 〈略〉、此の金、之を一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ふるも、〈略〉。

十一127 9 図 〈略〉、資金を悉く救助の用に當てたりき。

十一127 10 図 苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、〈略〉。

十一129 2 図 二度資を集めて二度散じたる鐵眼は、〈略〉。

十一129 10 図 〈略〉、此の度は製版・印刷の業着々として進みたり。

十一130 2 図 かくて天和元年〈略〉、一切經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられたり。

十一130 6 図 此の版木は今も萬福寺に保存せられ、三棟百五十坪の倉庫に滿ち／＼たり。

十二1 5 文 圖 淺緑すみわたりたる大空のひろきをおのが心とがな。

十二3 4 文 圖 いづ方に志してか、日盛りのやけたる道を蟻の行くらむ。

十二4 4 図 松江を發したる汽車は風

光繪の如き六道湖畔を走ること約四十分、〈略〉。

十二9 6 図 〈略〉、打寄する波の音さへ何事をか語るに似たり。

十二14 7 図 されば珍しき事件の起りし時、之を記述して印刷に附し、廣く發賣することは古より行はれたるしが、〈略〉。

十二15 4 図 我が國にてかゝる新聞の現れたるは維新前後にして、〈略〉。

十二15 5 図 〈略〉、其の後數十年の間に驚くべき發達を遂げたり。

十二18 8 図 かくて刷上りたる新聞は、〈略〉。

十二19 1 図 但し大新聞にありては、比較的早く印刷したるものをば地方版として遠隔の地方へ送り、〈略〉。

十二47 10 図 ひばは抵抗力を有し、松は彈力に富み、落葉松は一種の品位を有する等、各其の特性を具へたり。

十二61 8 図 イギリスの國旗は、今日の形式を具ふるまでに幾多の變化を重ねたるものなり。

十二62 7 図 アメリカ合衆國の國旗は一定不變の部分と、變化を許されたる部分とより成る。

十二63 2 図 藍・白・赤三色を以て縦に染分けられたるは、フランスの國旗なり。

十二63 5 図 フランスの國旗が縦に三色を分ちたるに對して、〈略〉。

十二63 6 図 〈略〉、黒・赤・金の三色

を横に染分けたるものはドイツの國旗なり。

十二63 8 図 即ち赤・黄・藍・白・黒の五色を横に並べたるものにて、〈略〉。

十二64 5 図 〈略〉、其の家の紋章の色なる白と赤とに、〈略〉、緑を加へ、更に王家の紋章を配したるものなり。

十二82 1 図 樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。

十二82 2 図 然るに其の實際を調査して此の疑問を解決したる人、遂に我が日本人の中より現れぬ。

十二82 7 図 樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざることは、此の探檢によりて略々知ることを得たれども、〈略〉。

十二83 4 図 〈略〉、非常なる困難ををかして樺太の北端に近きナニヲといふ處にたどり着きたり。

十二85 1 図 圖 「我若し彼の地にて死したりと聞かば、〈略〉。」

十二85 7 図 〈略〉、デカストリー灣の北に上陸したり。

十二86 6 図 やがて酒食を出したれども、林藏は其の心をはかりかねて顧みず。

十二99 10 図 興福寺は伽藍半ば廢れたれど、尚三重五重の塔、猿澤の池水に影をうつして南部第一の美觀たり。

十二102 1 図 〈略〉、南端に羅城門をふ

まへたる古の奈良の都は、そも／＼如何に美しく、如何に盛なりしぞ。

十二111 3 図 電燈の發明せられたるは、今より凡そ百十餘年前のことなり。

十二112 1 図 かねて此の希望をみたさんと思ひあたるトマス、エヂソンは、〈略〉。

十二112 2 図 〈略〉、既に電話機に關する發明に成功したるを以て、〈略〉。

十二112 5 図 〈略〉、更に進んで新しき電燈の發明に従事したり。

十二112 10 図 〈略〉、唯心に至りては彼の最も苦心したる所なりき。

十二113 4 図 こゝにおいて再び炭素線の研究に没頭したれども、徒に多くの時日と金銭とを費したるに過ぎざりき。

十二113 8 図 こゝにおいて再び炭素線の研究に没頭したれども、徒に多くの時日と金銭とを費したるに過ぎざりき。

十二113 8 図 何心なく手に取りて眺めたりし彼の眼は異様に輝きぬ。

十二113 10 図 彼の眺め入りしは〈略〉、實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

十二114 3 図 彼は直に竹を以て炭素線を作りて實驗せしに、豫想以上の好結果を得たり。

十二114 10 図 〈略〉、アメリカにて特許を得たるもののみにて其の數實に千餘に及ぶ。

た・りる 「足」(上二) 1 たりる 《一
り》 ↓ おつしやりたりる・ものたりな
い

五七三 〇 「工夫がたりない。」

たる 「樽」(名) 1 たる

十二四六 〇 家屋・橋梁・船舶・電
柱より桶・たる・曲物の類に至るま
で、《略》。

た・る 「足」(四・五) 5 足る 《一ラ》
↓ いちねんたらず・ものたる

六九〇 〇 《略》 千早城は、《略》、まは
りが一里にも足らず、總勢わづか千
人ばかり。

八二九 〇 《略》、手の足らずといふは、
働く人の少きをいふなり。

十五三 〇 《略》、資金の足らぬ人に貸
附けるのだ。

十八六 〇 《略》、我が國で出来る品物ば
かりでは用が足らない。

十二二八 〇 《略》、徳川家の存亡など
は言ふにも足らぬ小事でござります。

タルスス 「地名」 1 タルスス

十八三 〇 《略》、焼けつくやうに熱い平
原を横きつて、タルススといふ町に
着いた。

だるま ↓ ゆきだるま

だるまさん 「達磨」(名) 1 だるま
さん

三一九 〇 「わかりました。だるま
さんです。」

たれ 「垂」 ↓ あまだれ・まえたれ

たれ 「誰」(代名) 1 たれ

六六一 〇 萬じゆがかけよつて、らう
のとびらに手をかけますと、「たれ
か。」と、らうの中から申しました。

だれ 「誰」(代名) 46 ダレ だれ 誰

二二九 〇 「ソレモヨイガ、ダレ
ガソノスズヲツケニイク
カ。」

三七七 〇 だれか川上の方で、さ
きほどからふえを吹いてゐま
す。

四三〇 〇 《略》、「だれだ」といふ
と、「だれだ」と答へます。

四三一 〇 《略》、「だれだ」と答へ
ます。

四三二 〇 《略》、一しよに向ふの方
へ行つてみました。だれも
居ませんでした。

四三二 〇 「それは山びこです。だ
れも居るのではありません。」

四六三 〇 だれかあの扇をいお
とすものはないか。

五〇六 〇 だれがかけたか、虹の橋。

五六一 〇 《略》、だれがかいたか、
虹の橋。

五六二 〇 だれが渡るか、虹の橋。

五六二 〇 だれがけすのか、虹の橋。

六二八 〇 虎が見まはしましたが、だれ
も居ません。

六二八 〇 「だれだい、今笑つたの
は。」

六四一 〇 輜重兵にも其の中にだれか
出るだらう。

六五八 〇 さて萬じゆは、だれか母の事
をいひ出す者はないかと氣をつけて
ゐますが、《略》。

六六四 〇 《略》、頼朝をはじめ、居合は
せた者に、だれ一人もらひ泣きをし
ない者はありませんでした。

六九四 〇 此の時、「大きなお守さん
だ。」と誰かがいつたので、みんな
が一度にふき出した。

六〇〇 〇 《略》、と、おかあさんが誰
かにおつしやつてゐる時、私は庭へ
出ました。

七五九 〇 《略》、もう廣い海には誰も
なかつた。

七八三 〇 《略》、つみ草の時には、誰も
之を取つて花たばにする。

七三七 〇 《略》、来て先づ誰でもおど
ろくのは、《略》。

七六六 〇 「誰か居るか。」

七六九 〇 「誰か居るか。」

七九五 〇 正直者の清正は人づきあひが
下手なので、誰一人清正を秀吉にと
りなす者がなく、《略》。

七〇一 〇 まだ誰一人城に登つて居りま
せん。

七〇三 〇 御門を守る者は誰か。

八一七 〇 誰に頼まれた。

八一七 〇 「誰にも頼まれは致しませ
ん。」

八〇四 〇 それではマツチは、どうして
誰が造るのであらう。

八〇七 〇 分業で仕事をする時、誰か一

人の手ぎはが悪いと、全體の出來ま
でも悪くなる。

九四九 〇 《略》、用ヒヤウナケレバ、
誰モ之ヲ買フ者ナク、《略》。

九八二 〇 《略》、「あ、あの角の
石屋か。」と、誰もうなづく工場あ
り。

九〇七 〇 それでも誰一人敵に後を見せ
る者はない。

九二二 〇 「オトウサンハ誰ニ投票ナ
サルノデス。」

九二二 〇 ソレハ誰ニモ言フベキ事デ
ハナイ。

九二四 〇 道雄ハ誰ガ何ト言ツテモ、
《略》。

一二九 〇 誰かが力石をころがして来て、
土をはらつて高橋さんの爲に席を作
つた。

一四〇 〇 力藏さんも、「《略》。」と誰に
言ふともなく言つて、《略》。

一四三 〇 かる、切る、掘る、運ぶ、誰
も彼も一心不乱に働くので、《略》。

一五七 〇 此の愛らしい小鳥が、《略》、
遠い處まで使者の役目を務めると聞
いては、誰でも驚かない者はあるま
い。

一一九 〇 僕はおとうさんから、誰
が来ても此の門をあけてはならない
と言ひつけられてゐるのです。

一一九 〇 「おとうさんは、誰が来
ても此の門をあけてはならないと僕
に言ひつけました。」

十一 1209 僕は、誰が来てても此の門をあけてはならないとおとうさんに言はれてゐるのです。

十二 568 ねちが無い。誰だ、仕事臺の上をかき廻したのは。

十二 665 前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、わしはそれが知りたいのだ。

十二 1069 其のうちに誰言ふとなく、
「略」といふはさが立つた。

たれさがる「垂下」(五) 1 たれ下る「一ツ」

十 10110 たくさん咲いてゐる中で一番美しいのは、たれ下つた莖に、幾つも咲いてゐる薄紅色の花である。

たろう「太郎」(人名) 13 太郎 じうらしまたろう・てづかのたろうみつもり・はちまんだろう・はちまんだろうよいいえ

二 592 太郎ノオカアサンハ「略」。

二 593 太郎 ハイマ、オカアサンガオクスリヲノムトコロヘキテ、「略」。

三 722 こちらのかすりのつつそでは 太郎のあはせで、「略」。

八 295 太郎は毎日炭を焼く煙を遠くに見てゐるが、「略」。

八 297 或日炭を焼く男が太郎のうちへ来て、「略」。

八 298 此の時太郎が、炭はどうして焼くのかときくと、「略」。

十 914 「略」、太郎は生麥生米生卵。

と、早口にすらく言へるやうになつた。

十 916 太郎は得意になつて、「おとうさん、こんなに言ひにくい言葉は外に無いでせう。」といふと、「略」

十 9210 翌日太郎が友だちの正雄・良一と三人連で、學校から歸る時の事であつた。

十 934 太郎は「略」、友だちのすゝめをことわりかねて、一所に渡り出した。

十 944 父は「略」とたづねたが、太郎はだまつてゐた。

十 945 「略」、太郎はやつと今日の次第を有りのまゝに話した。

十 964 太郎はつくぐと自分の惡かつた事を後悔すると共に、「略」。

たろうさん「太郎」(人名) 1 太郎さん

四 17 おひるすぎに、をばさんのうちからおとよさんと太郎さんが來ましたので、「略」。

たろうどの「太郎殿」(人名) 2 太郎どの

八 689 五月七日 父から 太郎どのさち子どの

八 748 一月十八日 父から 太郎どのさち子どの

たわけ「戯」(名) 1 たわけ

十 472 人は此の有様を見て、たわけとあざけり、「略」。

たわら「俵」(名) 4 俵

六 24 今このうちへ行つて見ても、俵の山が出來てゐます。

六 34 今日庭にほしてあるもみをすつて、俵に入れてつんだら、「略」。

六 43 土間でこぼれもみを拾つてゐたにはとりが、俵の山へ上つてときを作りました。

十 893 冬の朝日のさす軒下に、俵あむ手のいそがしげなる父と母とに暇を告げて、「略」。

たわらのやま「課名」 2 俵の山

六 17 第一 俵の山

タワール「名」 1 タワール橋

十二 294 テームス川を飾るタワール橋・ロンドン橋を始め、「略」。

たん じいちゃん・こじちゃん・さんじちゃん・にたん・にちようさんたんごせ

だん「団」 じかくちほうせいねんだん・せいねんだん

だん「段」(名) 2 ダン 段 じいくだん・いちだん・さんだん

四 852 ダイリ様ノ下ノダンニ、弓ヤ矢ヲ持ツテ居ル人ハ何デセウ。

十二 1198 失禮の段御許し下されたく候。

だん「壇」(名) 1 壇

十二 1192 最後に博士は「略」、家庭における電氣の利用に就いて興味ある話をして壇を下つた。

だんいん「団員」(名) 2 團員

十 117 團員は、午前七時八幡神社の境内に集つた。

十 159 高橋さんの熱心な話は、それからそれへと續いて、團員に強い感動をあたへた。

だんか「団歌」(名) 1 團歌

十 1510 やがて暮近くなつたので、一同は元氣よく團歌を歌ひながら、夕日を浴びて歸途についた。

だんがん「彈丸」(名) 1 彈丸

八 976 とろく砲音、飛來る彈丸。

だんがんあと「彈丸跡」(名) 1 彈丸あと

九 399 庭に一本なつめの木、彈丸あともいちじくる、「略」。

タンク(名) 1 タンク

十 639 トラクターはちやうど軍用のタンクのやうな形で、「略」。

だんけつ・する「団結」(サ変) 1 團結する「一シ」

十二 134 萬世一系の皇室を中心として團結した國民は、「略」。

たんけん「探検」(名) 3 探検

十二 827 ことは、此の探検によりて略々知ることを得たれども、「略」。

十二 831 小舟に乘じていよく探検の途に上りぬ。

十二 879 林蔵が二回の探検によりて、「略」。

たんけんす [探検] (サ変) 1 探検す 《一セ》

十二82 6 図 〈略〉、林蔵は幕府の命によつて、松田傳十郎と共に樺太の海岸を探検せり。

たんけんせん [探検船] (名) 1 探検船

十二12 5 彼が探検船ビートル號に乗込んで意氣揚々と本國を出發したのは、〈略〉。

だんご [団子] (名) 4 ダンゴ だんごきびだんご

— 50 3 サルモダンゴヲモラツテ、クライニナリマシタ。

— 51 1 キジモダンゴヲモラツテ、クライニナリマシタ。

三77 8 えんがはには、夕方からいもやだんごをつくゑにのせて、お月さまにそなへてあります。

四47 4 図 「花よりだんご。」

たんこう [炭坑] (課名) 2 炭坑

十目15 第十四 炭坑

十79 6 第十四 炭坑

たんこう [炭坑] (名) 2 炭坑

十79 7 炭坑 此の間、九州三池の或炭坑を見物しました。

十85 4 図 これがつまり此の炭坑の始ださうです。

たんこうない [炭坑内] (名) 1 炭坑内

十81 3 これは炭坑内の地下水を坑外

へ汲出す爲で、〈略〉。

だんし [男子] (名) 2 男子 ↓ にっぽんだんし

九114 10 図 軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、其の有様は何事だ。

十100 6 図 文天祥は眞の男子なり。

たんしゃ [炭車] (名) 3 炭車

十80 8 〈略〉、電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

十84 3 〈略〉二人が石炭を掘崩すと、他の二人がそれをさるで運んで炭車に入れる。

十84 3 炭車が一ぱいになると、馬方がそれを馬に引かせて、電氣機關車の通ふ道まで運んで行きます。

たんじゅん [單純] (形状) 1 單純

十二14 10 図 〈略〉、印刷術の幼稚なる時代にありては、唯をりく興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。されど人智の進歩と印刷術の發達とは、何時までもかく單純にして遊戲的なものに満足すべくもあらず、〈略〉。

たんしよ [短所] (名) 7 短所 ↓ わがこくみんせいのちようしよたんしよ

十二134 6 しかし此の事情は一面に國民の短所をもなしてゐる。

十二135 8 すべて日本人の短所として、性質が小さく狭く出來たきらひがある。

十二136 3 〈略〉、かういふ短所はやがて我が國民から消去するであらうが、〈略〉。

十二136 10 しかし此の半面にもまた短所がかゞはれないであらうか。

十二136 8 こゝにもまた我々の反省すべき短所があるやうである。

十二136 9 我が國民の長所・短所を數へたならば、まだ外にもいろいろあらう。

十二136 1 我々は常に其の長所を知つて、之を十分に發揮すると共に、又常に其の短所に注意し、〈略〉。

だんじよ [男女] (名) 1 男女 ↓ きせんだんじよ

八56 1 図 老婆の前を右左、行きかふ男女多けれど、〈略〉。

たんじよ [誕生] (名) 1 誕生

十129 10 図 見るく艦は速力を増して、白波高く海にをどり入る。あゝ、海の戰士の勇ましき誕生。

たんじよ [誕生] (名) 1 誕生

八107 3 図 来る十六日は私の誕生日で、〈略〉。

たんしん [單身] (名) 1 單身

十二82 8 図 〈略〉、同年七月林蔵は單身にてまた樺太におもむけり。

たんす [簞笥] (名) 4 たんす

三70 2 たんすやつづらから着物を出して、〈略〉。

四41 6 たんすをうごかすと、其

のうしろから物さしと花子のお手玉が出ました。

十一14 3 通された部屋には、古いたんすや戸棚などが並べてありました、〈略〉。

十一17 6 のぶ子さんはすぐたんすの小引出から取出して、〈略〉。

たんず [嘆] (サ変) 1 歎ず 《一ジ》

十100 6 図 元帝歎じてはいはく、「文天祥は眞の男子なり。」と。

たんせい [丹青] (名) 2 丹青

十111 6 図 丹青まばゆき格天井に、心をこめたる繪筆ぞにほふ。

十一46 8 図 〈略〉、筆勢非凡、丹青の妙言ふべからず。

たんそ [炭素] (名) 1 炭素

十二112 10 図 初め彼は紙に炭素を塗つて試みしが、思はしき結果を得ず。たんそくする [嘆息] (サ変) 1 歎息する 《一スル》

十46 3 毎日焼いてはくだき、焼いてはくだきして、歎息する彼の様子は、〈略〉。

たんそせん [炭素線] (名) 3 炭素線

十二113 3 図 こゝにおいて再び炭素線の研究に没頭したれども、〈略〉。

十二114 2 図 彼は直に竹を以て炭素線を作りて實驗せしに、〈略〉。

十二116 10 図 エヂソンが炭素線の電燈を發明したのは四十年ばかり前のこ

とであつたが、〈略〉。

だんたい〔団体〕(名) 3 團體 ↓じ

ちだんたい・ちほうじちだんたい

十一113 5 〈略〉、地方自治の精神に基

づいて其の團體の幸福を進め、〈略〉。

十一114 3 地方人民が協同一致して自

ら地方公共の事に當り、誠意其の團

體の爲に力を盡くす精神が即ちそれ

である。

十一116 4 〈略〉、協同一致して團體の

福利を増進することを心掛けねばな

らない。

だんだん〔段〕(名) 1 ダンダラ

九21 1 例へば毒ヲモツテキル蜂ノ體

色ガ黄ト黒ノダンダラニナツテヤリ、

〈略〉。

だんだん〔段段〕(副) 46 ダンダン

ダン／＼ だんだん だん／＼ 段々

一47 4 モモトラウハダンダンオ

ホキク ナツテ、タイソウ ツヨク

ナリマシタ。

二18 4 マツノ木ノアヒダガダ

ンダン アカルク ナツテ キマス。

二67 4 ダンダン アタタカニナツテ

キマシタ。

二70 7 團 ダンダン チカヨル オ日

サマニ。

三42 3 〈略〉、かめはだんだん海

の中へはいつていつて、まもな

くりゆうぐうへつきました。

三55 8 だんだん高くとべるやう

になつて、とうとうやなぎにと

びつきました。

三58 5 見テキルウチニ、チヂン

デキタハネモダンダンノビテ、

色モシダイニコクナツテキマ

シタ。

三64 3 舟はだんだん土ぼしへ

近くなります。

三90 3 〈略〉、天人はまひながら

松原の上をだんだん高く上つ

て、〈略〉かすみの中へはいつ

て行きました。

四39 8 たび人はだんだんよい心

持になつて、しまひにはぐわい

たうをぬぎました。

四50 4 これから友一はだんだん

あせり出しました。

四75 6 それでだんだんうちがよ

くなりました。

五8 3 みことは此の川上にも人がす

んでゐるにちがひないとおかんがへ

になつて、だんだん山おくへおはい

りになりますと、〈略〉。

五26 7 サウシテダン／＼スバシクナ

ツテ、〈略〉。

五51 3 ハジメハ絲スヂホドノ流デス

ガ、ソレガダン／＼アツマツテ、ミ

ゾニオチル頃ニハ、流モ早クナリ、

水ノカサモ多クナリマス。

六16 3 だん／＼上つて行くと、〈略〉。

木びきの力蔵さんがうたをうたひ

ながら、大きなこぎりで板をひい

てゐました。

六33 5 〈略〉、町ハダン／＼ニギヤカ

ニナツテ來タ。

六46 2 ダン／＼上流ニサカノボツテ、

時ニハセ中ガ出ル程ノ淺イ所マデ上

ツテ來ル。

七10 5 だん／＼潮が引いて、もう其

所此所に洲が見え出した。

七15 4 潮がだんだんさして來て、何

時の間にか洲が見えなくなつた。

七53 8 先づいかりをあげて港を出

て行きますと、港に立並んでゐる人

家は、だん／＼小さくなつて行きま

す。

七94 2 〈略〉、風がだん／＼はげしく

なつて來た。

九33 9 道がだん／＼上りになつたと

見えて、谷のこずゑごしに、遠い湖

がちら／＼と見えて來た。

九52 4 店はだんだん繁昌し

て、十年もたゝぬ中に、町でも屈指

の財産家となつた。

九55 5 それからだん／＼商賣の手

を廣げて、六十五六の時にはもう餘

程の財産が出来た。

九57 5 後の山がだんだん低くなるに

つれて、前の麥藁の山が見る／＼高

くなる。

九60 9 東の空が明るくなると、今ま

で軍港のやみに包まれてゐた軍艦の

壮大な姿が、だん／＼にあらはれて

來る。

九68 1 汽車が進むにつれて、關東平

野はだん／＼夜の景色にかはつて、

〈略〉。

九74 9 〈略〉幾つかのトンネルを

くぐると、廣い原野がだん／＼に開

けて來る。

九91 6 其の中に、子供のアルカス

はだん／＼大きくなつて、狩人にな

りましたが、〈略〉。

九104 6 月が西の空にうす白く残り、

野には朝つゆがしつとりと置いてゐ

た。だん／＼明るくなつて來た。

十16 9 だん／＼市場に近づくと、

本通も横町も皆馬でいっぱいです。

十65 9 だん／＼寒くなつて來たが、

あやにくしも盡きてしまつた。

十82 9 馬屋の前を通つてだん／＼奥

深く進むと、いよいよ石炭を掘つて

ゐる處へ來ました。

十一38 5 〈略〉、こずゑの差が段々少

くなつて行くのも面白い。

十一66 4 其のうちだん／＼人智が発

達するにつれて、〈略〉。

十一67 4 〈略〉、時代が進んで燃料の

種類が増すにつれて、火の用途もだ

ん／＼廣くなつて來た。

十一68 3 かくして人は、暗黒の世界

からだん／＼光明の世界へと、みち

びかれて來たのである。

十一69 4 夜が更けるにつれて燈がだ

ん／＼暗くなり、今にも消えさうに

なつた。

十一74 4 だん／＼話してゐるうちに、

眞淵は宣長の學識の尋常でないことをさとつて、非常にたのもしく思つた。

十一846 だんく沖の方へ進んで行くと、水の色はものすごい程濃い紺色だ。

十二532 しかしだんく落着いて見ると、此處は時計屋の店であることがわかつた。

十二7810 かうしてだんく網の中が狭められるに随つて、〈略〉。

十二919 彼はだんく物思に沈むやうになつた。

十二1074 かくて又幾年かたつうちに、穴はだんく奥行を加へて、既に何十間といふ深さに達した。

十二1159 諸機械の原動力であつた人力又は蒸氣力もだんく電氣に變つて、工業界の一大革新をうながしてゐます。

たんちょう〔單調〕(形状) 1 單調
十二501 湖岸線は大體單調であるが、〈略〉。

たんちょうへいぼん〔單調平凡〕(形状) 1 單調平凡
十二368 久しく單調平凡な景色にあきてゐた私には、〈略〉。

たんとうす〔担当〕(サ変) 1 擔當す「一ス」
十二166 編輯・營業の二局ありて、販賣・廣告に關することは後者之を擔當す。

だんな〔旦那〕(名) 3 ダンナ だんな

六324 〔ダンナ、マキリマセウ。〕
七714 小ぶくろの方は私どものだんなが國へおやりになる金ですが、〈略〉。

七715 だんなはなさけ深い方ですから、〈略〉。
たんに〔單〕(副) 2 單に

十二231 又單に損益の點から見ても、〈略〉。
十二1114 當時は單に理化學の實驗用として使用せらるるに過ぎざりしが、〈略〉。

だんのうら〔壇浦〕(地名) 1 壇浦
十一349 屋島・壇浦は源平の昔語に人の感興を動かすこと甚だ切なり。

だんばん〔談判〕(名) 1 談判
十二1207 拙者は、此の談判がよしどのやうに決着するにもせよ、〈略〉。

たんぼ〔田圃〕(名) 11 タンボ たんぼ
二164 人ガボツボツタンボカラカヘツテキマス。

四103 ならやくぬぎのはは黄にそまり、廣いたんぼに北風あれる。

四113 おやはかへして、子はくれうつて、廣いたんぼの麥まきすす。

四227 うちの人 はみんな たん

ぼへ出て、〈略〉。

四748 〔略〕、くはやかまを持つてたんぼへ行きました。

五407 〔略〕、たんぼの小道へ出て、三時ごろ學校へかへりました。

五637 あのだんぼの中に、ちよつとした森があるだらう。

五953 〔略〕、一くはく、廣いたんぼをうちかへす。

六17 今日はおちの者がみんなたんぼへ稻こきに行きました。

六37 私がたんぼへお湯を持つて行つてくると、〈略〉。

九103 たんぼの中程を流れてゐる小川は、いつもより水が多い。

たんぼ〔蒲公英〕(名) 1 タンポポ
三21 ミチバタニハスミレヤタンポポガサイテキルシ、〈略〉。

だんめん 〔バナマウ〕がだんめんりやくず

たんもの〔反物〕(名) 2 反物
五247 小ざうさんたちは、土ざうからいろくな反物や帶地をかついで來て、お客の前につみ上げます。

八436 そこで其の反物を出した者を呼出して、〈略〉。
だんりよく〔彈力〕(名) 3 彈力
十一539 〔略〕、かうするとゴムが非常に彈力を増して來る。
十二479 〔略〕、松は彈力に富み、〈略〉。
十二485 〔略〕、かしは最も堅くし

て彈力に富むが故に、〈略〉。

だんわ〔談話〕(名) 1 談話
十123 談話の最中に一人の老人がはいつて來ましたが、それを見るとすぐに立つて、椅子をゆづりました。

ち

ち〔地〕(名) 12 地 ↑ ↓ あれ

ち・おんち・かいこんち・きよりうち・くさち・くぼち・げんさんち・こ

うぎようち・こんきよち・しがいち・しょうぎようち・しょくりんち・しん

りんちかいこん・にち・はつこうち・もくてきち・りくち

五617 〔略〕、虹はおもしろい。雨のはれ間にちよつと出て、用ありさうに天と地の遠きをつなぐ雲の上。

十722 其の返禮として加賀に梅田、合はせて三箇所の地を汝に授ける。

十118 美術の光の か々やく此の地、山皆緑に 水また清く、〈略〉。

十一47 孔子は今より凡そ二千五百年前、當時の魯即ち今の山東省の地に生れたり。
十一108 上海が黄浦江に臨む部分は延長八哩、六十餘の波止場がある。

此の地は交通上重要な位置を占めてゐて、〈略〉。

十一 34 8 図 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。

十二 6 2 図 時に天照大神の使者建御雷命此の地に來りていふやう、〈略〉。

十二 17 1 図 此の外、國內各地は勿論、世界各國主要の地に特派員又は通信員ありて、〈略〉。

十二 84 2 図 〈略〉、對岸の大陸に渡りて其の地の模様を採るは、〈略〉。

十二 84 6 図 〈略〉「容貌の異なる汝が彼の地に行かば、〈略〉、或は命も危かるべし。」

十二 84 10 図 「我若し彼の地にて死したりと聞かば、〈略〉。」

十二 86 10 図 翌日此の地を去り、河をさかのぼること五日、遂に目的地なるデレンに着せり。

ち 「血」(名) 6 血

五 11 7 〈略〉、みことはこしのつるぎをぬいて、大蛇をすたずたにお切りになりました。ひの川が血になつて流れました。

七 40 1 図 〈略〉、又我が忠勇の士が血を流して取つた二百三高地にも上つて歸りました。

八 10 7 図 此の時胃は一同に向つて言ひました。「略」。食つた物をこなして、之を血の製造場へ送るのが僕の役目であつて、〈略〉。

八 10 9 図 〈略〉、僕が若し食物をこなさなかつたなら、からだを養ふ所の血がどうして出来ませう。

八 10 3 図 其の爲に新しい血が出来なくなつて、かへつて君等は自分で苦しむやうになつたのです。

十 116 2 二十メートルもある大鯨が今は全く息たえて、〈略〉。あたりには流れ出る血に、紅の波がたゞよふ。

ちいさい 「小」(形) 22 チヒサイ

小サイ 小さい 「イー・ーク」

一 37 5 図 ハナハソレデヨイカラ、ハヲチヒサクシテ、モウー

ペンカイテゴランナサイ。

四 36 6 モズハ小サイガ、マケヌ氣ノ鳥デスカラ、〈略〉。

四 76 1 今の村長さんのおとうさんもおとなしい人で、小さい時からよくはたきました。

四 77 4 此の人は小さい時からいたづらもので、〈略〉。

四 90 7 五郎はまだ小さくて、何も分りませんでした。が、〈略〉。

五 33 5 此の時の氣もなく自分のうちを見て、その小さいのおどろき

しました。

六 12 1 図 其ノ外、釘や針ノヤウナ小サイ物カラ、キクワン車・軍艦ノヤウナ大キナ物マデ、皆鐵ガナクレバ造ルコトガ出来マセン。

七 11 9 小さい熊手で砂をかくと、おもしろいやうにあさりが出た。

七 53 8 図 〈略〉、港に立並んでゐる人家は、だん／＼小さくなつて行きま

す。

七 112 図 数字は大きく 小さいと假名と間違ひます

九 51 1 〈略〉、おとうさんは〈略〉、あの方の小さい時分からのお話をし

て下さいました。

九 52 2 図 〈略〉、年來の貯金と主人からもらつた金を資本にして、小さい

米屋を始めた。

九 89 8 図 「にいさん／＼、あの北極星がひしやくの柄の先になつて、もう一つ、小さい北斗七星のやうなものが出来てゐますね。」

十 34 3 前と同じ方法で、船はもう一段高く浮上り、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。

十 50 7 図 「あれは銀行だよ。今までは横町の小さい家だつたが、〈略〉。」

十一 3 9 つまり此の宇宙には、あの太陽のほかに、これと同じやうなものがなほ数限りもなく存在してゐるが、たゞ其の距離の遠いために、あんなに小さく見えるのである。

十二 9 9 チャールス、ダーウィンは〈略〉。ごく小さい時分から動植物に深い趣味を持ち、〈略〉。

十二 37 4 〈略〉、或小さいみすぼらしい家の前まで來ると、中からピアノの音が聞える。

十二 54 5 図 ねちは、〈略〉。「自分は

何といふ小さい情ない者であらう。

十二 54 10 図 唯自分だけが此のやうに

小さくて、何の役にも立ちやうにな

い。

十二 55 9 〈略〉、やがてかの小さなね

ぢを見附けて、〈略〉指先でそれをつままうとしたが、餘り小さいので

つまめなかつた。

十二 135 8 すべて日本人の短所として、性質が小さく狭く出来たきらひがある。

ちいさ・し 「小」(形) 4 小さし 「キ」

八 58 1 図 〈略〉皆、彼の姿を見送りぬ、さとするべき子にさとされし

小さき悔をいだきつゝ。

九 12 6 図 綿毛に包まれたるひよこども、小さき聲を立てつゝ、ちよこ

／＼とかけ廻る。

九 13 4 図 〈略〉、中なるひよこどもは小さき口を開きて、びよ／＼と鳴き

つゝ、かこひぎはに集る。

十 4 6 図 此所を出てで舊御苑に入り、

木立の間の細道をたどれば、程なく

小さき建物の前に出づ。

ちいさな 「小」(連体) 34 チヒサナ

小サナ 小さな

一 35 4 図 オホキナガンハサキ

ニ、チヒサナガンハ アトニ、

ナカヨク ワタレ。

二 8 4 図 ソノツギハ、アノタク

サンサイテキル、小サナキイロ

イキクデス。

二264 〈略〉、ミヨチャンハ〈略〉、小サナテヲダシテ、ウマウマトイヒマス。

二405 〈略〉、ユキデウサギヲコシラヘテイタダキマシタ。〈略〉、目ハナンテンノミデス。アカイ小サナ目デ、カハイラシウゴザイマス。

二447 〈略〉、犬ヲウヅメテ、ソノ上ニ小サナマツノ木ヲウエマシタ。

二705 罎 アレアレアンナニヒカウキガ。小サナトンボガトプヤウダ。

三75 〈略〉、オヤドリノムネノトコロカラ、ヒヨコガ小サナアタマヲ出シテ、ピヨピヨトナイテキマシタ。

三667 私ハ〈略〉、フシノマン中ニ、キリデ小サナアナヲアケマシタ。

三688 〈略〉、フシニ小サナアナヲタクサンアケマシタ。

四92 谷ソコノ一ケンヤニモ、川ヲ下ツテ行ク小サナ舟ニモ、コクキガ出シテアリマシタ。

四752 〈略〉、お星様が光りはじめるところになつて、小さなわらぶきのうちへかへつて行きました。

六184 行つて見ますと、〈略〉、小さ

なしめちが列を作つて出てゐました。

六864 見せ物小屋で象を見た。〈略〉、長い牙、小さな目、それから太い足、細い尾、一切繪で見た通りであつた。

七125 おさへて見たら、小さなかれひであつた。

七243 傘松の四五間さきに、小さな茶屋が一軒ある。

七416 年は六十四五でもあらうか、腰に小さなふるしきづつみをむすびつけてゐる。

七468 上杉方からは小さな馬に乗つた小さな鎧武者が一人あらはれて、「〈略〉。」と名のつた。

七469 上杉方からは小さな馬に乗つた小さな鎧武者が一人あらはれて、「〈略〉。」と名のつた。

七677 五十兩は黄色なきれにつゝんであつて、百兩は小さなふくろに入れてあります。

八38 しやうじを明けて見ると、小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれてゐる。

八529 二日目で小さなおそなへが幾かさねか出来、三日目からは、のし餅が出来た。

十77 マケドニヤといふ小さな國の王子と生れ、〈略〉、當時世界に類のない大國を建設した英雄である。

十768 龍山はもと漢江にのぞんだ小さな町であつたが、〈略〉。

十119 低いじめくした松林の中に

小さな社がある。

十一36 ところが此の大きな太陽も、夜の空に銀の砂をまいたやうに見える小さな星の一つと同じものだといふ。

十一952 リンカーンが七歳の時、〈略〉、父は自分で木を切出して小さな家を造つた。

十二527 〈略〉、小さな鐵のねちが、〈略〉。

十二534 自分の置かれたのは、仕事臺の上に乗つてゐる小さなふたガラスの中で、〈略〉。

十二534 〈略〉、そばには小さな心棒や齒車やぜんまいなどが並んでゐる。

十二536 きりやねち廻しやピンセツトや小さな槌やさまぐの道具も、〈略〉。

十二553 不意にばたくと音がして、小さな子どもが二人奥からかけ出して來た。

十二557 女の子は〈略〉、やがてかの小さなねちを見附けて、「〈略〉。」

十二573 それでは自分のやうな小さな者でも役に立つことがあるのかしらと、夢中になつて喜んだが、〈略〉。

十二591 〈略〉、やがてピンセツトでねちをはさんで機械の穴にさし込み、小さなねち廻しでしつかりとした。

ちいさなねじ (課名) 2 小さなねち
十二目13 第十二課 小さなねち
十二526 第十二課 小さなねち

ちえ ねずみのちえ

ちおんいん 「知恩院」(名) 1 知恩院
六71 知恩院
ちか 「地下」(名) 1 地下

十804 〈略〉、何時の間にか、地下九百尺の坑底に着きました。

ちか 「近」↓まちか
ちかい 「近」(形) 22 近い 近い
『イ・イク』↓さんまんじやくちかい・しちじゅうちかい

三643 舟はだんだん土ぼしへ近くなります。

四286 電話も近い中に私どもの町へかかるさうです。

五97 もう此の子一人になりましたのに、近い中に又其の大蛇がたべにまゐります。

五635 「おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、まだ一里半もあるのですか。」

五637 「おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、まだ一里半もあるのですか。」さう。これで中々近くはない。

六488 春の遊の、楽しさかたる。
七271 畠山重忠は、近くは乃木大將も、馬は煉瓦造の小屋に入れて置かれたのである。

七799 魚類ニハイウシ・アヂ・カツヲナドノヤウニ、水ノ表面ニ近い所ヲ泳グモノガアリ、〈略〉。

七85 1 〈略〉、岸ニ近イ淺イ所カラ二三百尺グラキノ所マデニハ、海藻ガ生エテキル。

七108 2 園 もと此の方には近い種類の者、豊臣と名のつたのも差支がない。

九94 4 園 いづれ又近い中に便りをしませう。

九31 2 〈略〉、もうくくと立ちこめる水煙の間から近く瀧をながめるのもよく、〈略〉はるかに全景を見渡すのも面白い。

九49 4 園 夏休も近くなりました。

九71 8 〈略〉、叔父さんは近く左に見える山を指さして、〈略〉。

九94 10 園 雪溪は〈略〉。幅は二三町、長さは一里に近く、行つても行つても眞白です。

九98 10 園 〈略〉、戸隠連山は東北の方に、呼べば答へるばかり近くそばだつてゐます。

九100 9 昨夜雨が降つたせゐか、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近く見える。

十25 1 一そのの船が、俄の嵐におそはれて、此の島に近い岩に乘上げた。

十一1 8 〈略〉太陽とは、一體どんなものであらう。一口にいへば、白熱の状態にある一大火球で、之を形造つてゐるものは、液體に近い氣體であらうといふ。

十一3 10 しかも我々に最も近いあの太陽でさへ、地球からは凡そ三千八

百萬里も離れてゐる。

十一34 6 園 瀬戸内海の沿岸には〈略〉等良港多く、汽船絶えず通航して、遠く近く黒煙の青空にたなびくを見る。

十一73 10 眞淵はもう七十歳に近く、いろくくりつばな著書もあつて、天下に聞えた老大家。

ちがい「違」(名) 4 ちがひ 違ひ
↓ かんがえちがい・きちがい・まちがい
いあつかい・てちがい・まちがい

五82 〈略〉、川上から箸が流れて來ました。みことは此の川上にも人がすんでゐるにちがひないとおかんがへになつて、〈略〉。

五55 6 園 「これは親孝行のほうびに、神々がさづけられたにちがひない。」

七65 2 これはあの人が落して行つたにちがひないが、〈略〉。

八34 6 婦人は、これは珍しい、神様がおさづけ下さつたのはこれに違ひないと思つて、其の實を取つて來て、庭先の畠の中にまきました。

ちか・う 「誓」(四・五) 3 ちかふ
《ツ・ーヒ》

八26 3 さて蕃人どもは、呉鳳を神にまつて、其の前で、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。

九27 8 〈略〉少年は、固い決心を顔にあらはして、實行をちかつた。

十二106 1 〈略〉此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安全な路を造つてやらう

と、神佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。

ちが・う 「違」(五) 23 チガフ ちがふ 違フ 違ふ 《ツ・ーハ・ーヒ・フー》 ↓ ちがう

四28 2 電とうはらんぶとちがつて、へやのすみずみまであかるく、〈略〉。

五92 2 それも品と目方によつて切手の價がちがひます。

五96 7 叔父サンノウチニモ、ブダウ棚ガゴザイマス。〈略〉。ウチノブダウトハ種ガチガフノダサウデス。

六41 2 園 〈略〉、兵種がちがふと、兵舎のあり場所もちがふので、〈略〉。

六41 2 園 〈略〉、兵種がちがふと、兵舎のあり場所もちがふので、〈略〉。

六76 3 園 ラシヤヤフランネルトチガツテ、絲ガ細イカラ、氣ガツカナイノデス。

七56 1 園 外國の港に着くと、〈略〉。其所にゐる人は、私どもとはまるでちがつた風をして、まるでちがつた言葉で話をしてゐます。

七56 1 園 外國の港に着くと、〈略〉。其所にゐる人は、〈略〉、まるでちがつた言葉で話をしてゐます。

七58 5 園 〈略〉、いくらきりが深くて、まるでちがつた方へ行くやうなことはありません。

七65 5 もし此の大金がなかつたら、氣がちがつて死ぬやうな事になるか

も知れぬ。

七80 9 エビノピンくハネタリ、カニノ横ニハツテアルク様子ハ、池ヤ川ニスムモノトチガハナイガ、〈略〉。

七84 6 〈略〉、象ヲ鯨ニクラベルト、赤子ト大人トヨリモ、モツトチガフ。

八81 1 園 「どのうちでも、納める金高は同じですか。」いや、それは財産や収入の多少によつて違ひます。

九42 2 園 〈略〉、かねて思つてゐたとは違ひ、なか／＼住みよいところのやうです。

九18 7 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、〈略〉、形ガ桑ノ小枝ニ寸分違ハナイ。

九118 4 園 しかし今の戦争は昔と違つて、一人で進んで功を立てるやうなことは出来ない。

十一9 3 租界といふのは居留地の一

種で、居留民が支那政府の手を離れて、自治制を布いてゐる處である。

租界には皮膚の色の違ひ、言語・風俗の違つた幾多の人種が入交つてゐるので、〈略〉。

十一9 3 租界には皮膚の色の違ひ、言語・風俗の違つた幾多の人種が入交つてゐるので、〈略〉。

十一74 3 年こそちがへ、二人は同じ學問の道をたどつてゐるのである。

十一93 7 園 したがつて二百十日も太陽暦なら大が九月一日で、ちがつても一日ぐらゐるものだが、〈略〉。

十一 93 9 図 〈略〉、太陰曆になると三

十日もちがふことがある。

十二 10 9 又いろ／＼の鳥を注意して

見ると、それ／＼違つた面白い習性をもちてゐるので、〈略〉。

十二 54 7 図 あのいろいろの道具、た

くさんの時計、形も大きさもそれ／＼違つてはゐるが、〈略〉。

ちがえる じまちがえる・みちがえる
ちかく 〔近〕 (名) 10 近く じあさむ

しちかく・かこいちかく・かわぐちかく・きしちかく・くれちかく・さんまんちかく・ちようじうちかく・ていしやばちかく・ひやくまんちかく・ゆうがたちかく

四 29 5 〈略〉、工場の近くにいてい

しや場が出来るさうです。

六 17 4 図 〔此の近くに、しめぢの出

る所はありませんか。〕

八 25 1 翌日蕃人どもが、役所の近く

に集つてゐますと、〈略〉。

九 61 2 舷門には、銃を手にした番兵

が近くを警戒してゐる。

九 76 1 遠くにはかすかに津輕半島が

横たはり、近くには形のよい島々な

どもあつて、大そう景色のよい所であつた。

九 108 8 ちやうど其の時、敵の砲弾が

近くで破れつて、其の破片がぴゅつと北風のたてがみをかすめた。

十 75 4 図 此處には天照大神をおまつ

りした京城神社があり、又其の近く

に朝鮮總督府があります。

十一 57 3 ふかははや十數メートルの

近くにせまつてゐる。

十一 98 7 ところが家に書物がないば

かりでなく、近くに圖書館もないので、〈略〉。

十二 78 6 〈略〉、まぐろの群が網には

いつたといふ台圖を見ると、網口の

近くに番をしてゐる漁夫が急いで網

口をしめてしまふ。

ちかごろ 〔近頃〕 (名) 2 近頃

七 75 4 図 さて／＼、二人ともまこと

に心がけのよい者。近頃かんしん致

した。

十 15 4 図 朝鮮の青年も、近頃はなか

／＼頭が進んで來ましたので、〈略〉。

ちかし 〔近〕 (形) 13 近し

《キーク・シー》 じさんまんちかし

八 60 2 図 彼ノ燒葺屋ノ看板ニ、八里

半ト記セルモノノ如キハコレニシテ、

其ノ味クリニ近シトイフ意ナリ。

九 11 10 図 井戸に近き柿の木の、〈略〉。

九 112 9 図 近き中に頂きに上りたく

候に付き、〈略〉。

十 59 5 図 雪の日の夕暮に近き頃、

〈略〉。

十 107 9 図 近き處ならば早速上り候

て御世話も致すべく候へども、何分

百里の山川をへだてたる事とて、

十 128 7 図 一秒又一秒、七百里に近き

大船體は、寸、尺、間と音もなくす

べり出づ。

十一 76 図 孔子は他人を正す前に先

づおのれを正し、近きより遠きに及

すを以て其の主義としたり。

十一 32 7 図 本土の西、近く九州と相

接せんとする處、下關海峡あり。

十一 32 5 図 淡路島の東端、本土と相

望む處、紀淡海峡となり、四國に近

き處、鳴門海峡となる。

十一 128 3 図 然れども鐵眼少しも屈せ

ず、〈略〉 宿志の果さるゝも近きに

あらんとす。

十二 25 4 図 極樂寺坂越え行けば、

長谷觀音の堂近く、露坐の大佛

おはします。

十二 83 3 図 〈略〉、非常なる困難をを

かして樺太の北端に近きナニラーと

いふ處にたどり着きたり。

十二 122 8 図 夢にのみ見し山川も、

あけくれにしたひし家も、まの

あたり近く迫りぬ。

ちかすい 〔地下水〕 (名) 2 地下水

十 79 10 地下水のしづくが、四方から

雨のやうに落ちて來る。

十 81 4 これは炭坑内の地下水を坑外

へ汲出す爲で、〈略〉。

ちかちか 〔近近〕 (副) 1 近々

九 123 3 道雄ノ學校デハ、此ノ間級長

ガ轉校シタノデ、近々後任ノ選舉ヲ

スルコトニナツテキルノデアツタ。

五 102 3 汽車の發着時刻が近づくとき、

自動車・馬車・人力車がいくだいた

なく、入口・出口によつて來ます。

七 31 5 図 武士の馬はおどろきて、後

足にて立上り、おそれて其所に近づ

かんとせず。

九 20 7 コレ等ハ大テイ他ノ動物ノ恐

レル武器ヲソナヘテキルカ、〈略〉

ノデ、之ニ近ヅカウトスルモノガナ

イカラ、〈略〉。

十 16 9 図 だん／＼市場に近づくとき、

本通も横町も皆馬でいっぱいです。

十 33 6 しばらく進むと水門があつて、

〈略〉。近づくとき、門の戸びらは左右

に開いて、船が中はいり、戸びらはし

十 83 3 暗やみの中にかすかに安全燈

が光つてゐる。近づいて見ると、坑

夫が汗だらけになつて、元氣よく石

炭を掘つてゐます。

十 113 7 右に左に鯨を追ひつゝ四五十

メートルまで近づいた時、〈略〉。

十二 9 2 図 折から日は地平線に近づ

きて、雲も水も金色に輝き、美しさ

いふばかりなし。

十二 84 9 図 出發の日近づくや、林藏

はこれまでの記録一切を取りまどめ、

〈略〉。

十二 98 6 いや／＼臨終が近づいた時、

釋迦は泣き悲しんでゐる人たちに、

〈略〉。

ちかつて 〔誓〕 (副) 1 ちかつて

十一 126 3 図 一代の事業として一切經を出版せん事を思立ち、如何なる困難を忍びても、ちかつて此のくはだてを成就せんと、〈略〉。

ちかてつどう 「地下鉄道」(名) 2 地下鉄道

八 72 5 図 地上の鐵道には勿論、高架鐵道にも、地下鐵道にも、電車や汽車が終日終夜、休なしに運轉してゐます。

十二 30 8 図 〈略〉、地下鐵道・乗合自動車などの乗り下りにも、むやみに先を爭ふやうなことはありません。

ちかみち 「近道」(名) 5 ちか道 近道

三 38 2 図 ぼくは右のちか道の方をいつてみます。

三 38 図 右ちか道

三 39 1 ちか道の方は、道がこはれてゐたり、石が出てゐたりしました。

十 93 1 図 「本道は遠いから近道を通らう。」

十 93 2 其の近道といふのは田のあぜ道で、途中にはかなり深い小川にかけ渡した一本橋がある。

ちかよる 「近寄」(四・五) 4 チカヨル 近よる 近寄る 《一ツ・一リ・一ル》

二 70 7 圖 アレアレ アンナニ ヒカ ウキガ。〈略〉。ダンダン チカヨル オ日サマニ。

七 32 2 図 獅子はうれしげに一聲高くほえ、〈略〉、しづかに近よりにて武士の手をなめたり。

十 114 10 綱を次第々々にくりもどすと、鯨は刻一刻船に近よつて来る。

十二 42 7 しばらくして兄は恐る恐る近寄つて、力のこもつた、しかも低い聲で、〈略〉。

ちから 「力」(名) 41 チカラ ちから 力 ↓みずのちから

二 3 5 グラン ナサイ、ミンナガ チカラ ライレテ、一シャウケンメイデス。

二 72 2 タイヘン カガツヨク、テ シタモ 大ゼイ アリマシタ。

四 28 5 よこ町に電氣の力で、米をつく家も出來ました。

五 7 1 僕は「〈略〉。」といつて、力をつけてやりました。

六 29 4 図 人間があなた方を生けどりにするには、いく人かで力を合はせるではありませんか。

六 59 1 あゝ、母はもう此の世の人ではないのかと、力をおとして居りました。

六 65 1 〈略〉 大キナ磁石ライタイバイタ。鐵ヲ引ケ力ガ強い。

六 87 8 象の鼻は手の用をなすもので、實に力がある。

七 26 3 馬は〈略〉。又力が強いので、荷物をつけたたり、荷車をひかせたり、田や畠の耕作に使つたりする。

七 31 6 図 武士は太刀をぬきて馬よりとび下り、満身の力をこめて、蛇の胴中目(なな)がけて打下せば、〈略〉。

七 96 7 図 共同助力は人の道、おのれの利のみかへりみず、力を分ち、物をさき、〈略〉。

八 81 8 圖 明治天皇の御製に、器にはしたがひながら、いはほをもとほすは水の力なりけり。といふ御歌がある。

八 82 9 〈略〉 電氣も、もとをたゞせば水の力である。

八 101 1 かうして二三日たちますと、〈略〉、からだに全く力がなくなりました。

九 28 10 歡庵以來代々力をつくして來た農學は、信季の望通り、信淵に至つて大成したのである。

九 42 6 圖 『〈略〉。』と、大將答力あり。

九 54 8 図 「自分の力でやれる所までやつてみます。」

九 95 6 図 登山者はかんじきをはいて、石づきの付いた金剛杖(こんがうじょう)や鳶口(とりのくち)を力に、此の坂を登るのです。

十 28 2 親子は〈略〉、又あらん限りの力をオールに注いで、我が家へと向つた。

十 28 4 つかれ果てた人々も、親子の勇ましい働にはげまされて、我もくくと力をそへる。

十 55 4 〈略〉、今では各國共に盛に傳

書鳩の改良に力を用ひ、〈略〉。
十 56 10 鳩は一分間に約一キロメートルも飛ぶ力があるから、〈略〉。

十 113 4 砲手の落ちついた力のこもつた號令に、船ははや方向を轉じた。

十 125 7 図 村長は〈略〉、常に力を一村の幸福の爲に盡くすが故に、〈略〉。
十 130 9 図 主上(みみかみ)に笠置(かさざき)におはせし時早くも義兵を擧げしが、事のいまだ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、力なくて止みたり。

十 131 10 図 〈略〉、「主上はや院庄(いんじょう)に入らせ給ふ。」と人の言へば、衆皆力を失ひて散りくになりぬ。

十一 5 9 図 しかも遂に志を達することを得ざりしかば、老後は専ら力を教育と著述(しやくそく)とに用ひたり。

十一 15 6 図 「成績物は一つ一つ自分の力のこもつたもので、皆一生の記念になるのだ。」

十一 22 7 若し裁判が無いとしたら、〈略〉、しかも其の争は力の強い者やわるがしこい者が勝つことになるであらう。

十一 63 7 こんな廣い畠であるから、耕すにも、うねを作るにも、種を蒔くにも、大てい機械と馬の力による。

十一 73 1 宣長は力を落して、すぐくともどつて來た。

十一 86 7 「〈略〉。」船の上からはしきりに勵ましてくれる。これに力を得

て、又一しやうけんめいに泳いで行く。

十一114 3 一體自治の精神とは何であるか。〈略〉、誠意其の團體の爲に力を盡くす精神が即ちそれである。

十一117 2 〈略〉、地方人民は大いにこれ等の事業に力を盡くさねばならぬ。

十一128 7 幕府は處々に救小屋を設けて救助に力を用ふれども、〈略〉。

十一128 10 鐵眼〈略〉出版の事業を中止し、其の資金を以て力の及ぶ限り廣く人々を救ひ、〈略〉。

十二2 3 國圖 ほど／＼に心を盡くす國民の ちからぞやがてわが力なる。

十二2 3 國圖 ほど／＼に心を盡くす國民の ちからぞやがてわが力なる。

十二42 7 しばらくして兄は恐る恐る近寄つて、力のこもつた、しかも低い聲で、「〈略〉。」

十二48 6 國圖 〈略〉、かしは最も堅くして弾力に富むが故に、機・車・運動器具の如き強烈なる力を受くるものを製作するに適せり。

十二134 5 其の上我が國の美しい風景や温和な氣候は、〈略〉、〈略〉を育成するのに與つて力があつた。

ちからあし 「力足」(名) 1 力足

十一30 10 國圖 正國得たりと、力足をふん張りてはねかへさんとせしが、〈略〉。

ちからいし 「力石」(名) 1 力石

十二12 9 誰かが力石をころがして來て、

土をはらつて高橋さんの爲に席を作つた。

ちからいっぱい 「力一杯」(副) 1 力一杯

七45 3 力一杯に謙信の馬をなぐりつけた。

ちからくらべ 「力比」(名) 1 力くらべ

四38 5 ある時、日と風が力くらべをしました。

ちからまかせ 「力任」(名) 1 力まかせ

八38 1 泣くのもかまはず力まかせに引くとは、情を知らぬ不届者。

ちぎ 「千木」(名) 2 千木

六106 8 棟にはかつを木がならべてあり、棟の兩はしには千木が置いてある。

十二7 9 國圖 これ即ち出雲大社の起原なり。〈略〉。千木のほとりを飛ぶ鳩の、さながら雀の如く見ゆるも、社殿の高大なる爲なるべし。

ちきゅう 「地球」(名) 7 地球

七1 3 國圖 われらが住む世界は、其の形まるくして、球の如し。ゆゑに之を地球といふ。

七1 4 國圖 地球の表面には、海と陸とありて、海の廣さはおよそ陸の二倍半なり。

七4 1 國圖 地球の上には大小合はせて六十餘國あり。

九85 5 國圖 しかし地球が廻るために、

我々の目には動くやうに見える。

十一1 10 さうして其のさしたは三十五萬四千里、即ち地球の百九倍餘りに當り、〈略〉。

十一1 10 さうして其のさしたは三十五萬四千里、〈略〉、其の容積は地球の百三十萬倍に當つてゐる。

十一3 10 しかも我々に最も近いあの太陽でさへ、地球からは凡そ三千八百萬里も離れてゐる。

ちきゅうじよう 「地球上」(名) 1 地球上

十一1 3 地球上に存在するもので、太陽の影響を受けぬものは一つもない。

ちきよう 「地狭」(名) 3 地狭 ↓ パナマちきよう

十一3 2 此の地峡に造つた運河が、世界に名高いパナマ運河である。

十一3 6 〈略〉、此の地峡を切通し、平かな掘割を造つて、太平・大西洋の水を通はせることは到底出来ぬ事であつた。

十一3 10 先づ地峡の山地を流れてゐる河の水をせき止めて、湖を二つ造つた。

ちぎる 「千切」(五) 2 ちぎる

《一ッ・ーラ》

八52 6 つき上ると、おばあさんが餅を臼の中で丸めて、〈略〉。おかあさんはそれを二つにちぎつて、〈略〉。

十二76 1 コーデリヤはそれを聞いて

腸をちぎられるやうな思がした。

ちぎる 「千切」(下二) 2 ちぎる

《一レ》

十68 10 國圖 唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、ちぎれたりとも、此の具足に身を固め、〈略〉。

十一7 2 國圖 諸國の大名・小名きら星の如く並べる中に、常世はちぎれたる具足を着け、〈略〉。

ちぎれぐも 「千切雲」(名) 1 ちぎれ雲

九34 1 空ははてもなくすんで、所々にちぎれ雲が飛んでゐる。

ちぎれる 「千切」(下二) 1 ちぎれる

《一レル》

五94 4 〈略〉封書や、〈略〉葉書には、私もはらわたがちぎれるやうに思ひました。

ちぐう 「知遇」(名) 1 知遇

十一111 6 國圖 〈略〉、劉備が三顧のこよなき知遇、我が身をすてて報いんと、起ちてぞ出でぬる、草のいほりを。

ちくおんき 「蓄音機」(名) 3 ちくおんき 蓄音機 蓄音機

五23 3 二かいのまどに萬國旗がつるしてあつて、おくの方からたえずちくおんきの音が聞えて來ます。

十一54 1 電氣の機械や、蓄音機の圓盤などに用ひるエボナイトといふものもゴムから造る。

十二114 8 國圖 エヂソンの發明せるは電

話・電燈・電信・電車・活動寫眞・蓄音機に關するものなど極めて多く〈略〉。

ちくじょう 「逐条」(名) 1 逐條

十二89 即ち第一讀會で其の案を大體に調査し、第二讀會で逐條に審議し、第三讀會で法律案全體の可否を議決する。

ちくりと (副) 1 チクリト

一184 〈略〉、ハチガチクリトサシマシタ。

ちけい 「地形」(名) 1 地形

十31 1 〈略〉部分は、パナマ地峽といつて、地形がきはめて細長くなつてゐる。

ちしき 「知識」(名) 2 知識

十一65 1 農業者は〈略〉、此の邊では新しい知識をいれて、新式の農具を用ひ、新式の方法によつてどしどし土地を開いて行く。

十一96 5 かうしてゐるうちに、知識を得たいといふ彼の欲望は益々強くなり、〈略〉。

ちしつ 「地質」(名) 1 地質

九25 4 4 〈略〉、おちい様の不昧軒様はまた、地質や礦物の方で新しい発見をなされた。

ちしつがく 「地質學」(名) 1 地質學

十二12 7 かくて世界の各地をめづつて、歡喜の眼を輝かしながら、博物學や地質學の實地研究につとめ、〈略〉。

ちじょう 「地上」(名) 4 地上

八49 3 サウシテ何カ地上ニエモノヲ發見スルト、〈略〉エモノノ上ニツカミカ、ル。

八72 4 4 地上の鐵道には勿論、高架鐵道にも、地下鐵道にも、電車や汽車が終日終夜、休なしに運轉してゐます。

九109 8 大空には、〈略〉、地上には、人馬の死がいがあちらにもこちらにも重り合つてゐる。

十二85 10 10 夜は野宿すること少からず。木の枝を伐りて地上に立て、上を木の皮にておほひ、〈略〉。

ちじん 「知人」(名) 1 知人

十一106 6 6 昨日知人に誘はれてコーヒー園見物に出掛け候。

ちず 「地図」(名) 4 地圖地圖

五51 6 6 雨水ノ流れル道ハ地圖ニカイタ川ヲ見ルヤウデス。

十一119 4 4 地圖を便りにして進んで行くこと、〈略〉。

十一36 3 3 〈略〉植林地の書付を開いて見る。地圖の中の薄緑に染めてあるのが一昨年植付けた處、〈略〉。

十二67 4 4 長女の言葉に満足した王は、地圖を指さしながら領地の三分の一を與へた。

ちせき 「治績」(名) 1 治績

十一4 9 9 孔子は〈略〉。少時より學問に勵み、長じて後魯の君に仕へ、大いに治績を擧げしかども、〈略〉。

ちそう 「地層」(名) 1 地層

十31 4 4 パナマ地峽は一體に小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。

ちそう 「馳走」↓ごちそう

ちち 「父」(名) 2 父

四32 6 6 父がごむまりをかべになげつけると、はねかへるでせう。」
四33 1 1 父「人のこゑも山の中では、〈略〉、かへつて來ることがあります。

ちち 「父」(名) 68 父 ↓おんちちう

えさま・なんべいよりちちのつうしん
三45 7 7 うちへかへつてみると、おどろきました、父も母もしんでしまつて、〈略〉。

四31 7 7 うちへかへつて、父にこのことを話しますと、〈略〉。
四31 8 8 〈略〉、父は「〈略〉。」としへました。

四90 1 1 十郎が五つ、五郎が三つの年に、父はくどうすけつねにころされました。

四96 7 7 二人はすかさずうち取つて、〈略〉、父がうたれてから十八年目にめでたくのぞみをとげました。

五63 2 2 作太郎は父につれられて、はじめて町へ行きました。

六22 2 2 沖へ急ぐ兄の小舟、濱へ歸る父の小舟、すれ合つて、ゑがほとゑがほ。

六31 5 5 一番汽車ニ乗ラウトイフノデ、父ト五時半頃ニ家ヲ出タ。

六50 2 2 ゐろりのはたに縄なふ父は、すぎしいくさの手がらを語る。

六108 3 3 三月十九日 父から 千太どの

七72 8 8 家には七十近い父と、三十になる妻と、三つになる子どもがあるの、〈略〉。

七74 1 1 見れば年取つた父といふのが、うす暗い小窓の下で、わらぢを作つて居りまして、〈略〉。

八68 8 8 五月七日 父から 太郎どの さち子どの

八74 7 7 一月十八日 父から 太郎どの さち子どの

八84 7 7 父は「相かはらずせつかぢだね。」といったが、〈略〉。

八85 6 6 私はこちらに御やくかいになつてゐる松木とよの父でございませう。

八109 4 4 父が今年八十八になりましたので、〈略〉、ほんの心ばかりの祝を致したいと存じます。

八111 3 3 大將の父は長府藩主に仕へて、江戸で若君のお守役をしてゐたが、〈略〉。

八112 3 3 大將の父は途々義士のことを大將に話してきかせて、其の墓に參

詣したのである。

八112 9 すると大將の父は「よし。寒いなら、暖くなるやうにしてやる。」といって、〈略〉。

九23 3 ところで此の父も、何とぞ此の學問を大成したいと、〈略〉、出来るだけは骨折つたつもりである。

九27 1 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、さぞ心細くもあらう、又つらい事もあるであらうが、父の此の願だけは、しかと心にとめて置いて、必ず仕とげてもらひたい。

九27 8 父は安心した様子で、やがてすやくと眠つた。

九28 4 信淵は父の門人たちの情で、形ばかりの葬式をすますと、〈略〉。

九57 9 あみ笠をかぶつた父がふり向くと、母もすげ笠をそちらへ向けて、〈略〉。

九120 1 道雄が今朝起キテミルト、商用デ四國ノ方へ旅行シテキタ父が、夜汽車デ歸ツタトコロデアツタ。

十26 6 此のけなげな言葉は遂に父を動かした。

十38 2 父は毎日、兄や木びきの力藏さんと、朝早くから行つて、夕方おそくまで働いてゐる。

十39 5 父は腰から鎌をぬきながら、〈略〉。

十40 3 父は「力藏さん、まあ、一服やつてから始めなさい。」といった

が、〈略〉。

十41 4 やがて父は、鎌を手にして雑木のやぶへはいつて行つた。

十41 9 さうして兄は〈略〉、父のかり取つたあとを元氣よくつるはしで掘返し始めた。

十43 4 父は「〈略〉。」と楽しさうに言つた。

十89 4 冬の朝日のさす軒下に、俵あむ手のいそがしげなる 父と母とに暇を告げて、勇みて出づる我が家の門。

十91 10 太郎は得意になつて、「〈略〉。」といふと、父はにこ／＼笑ひながら、〈略〉。

十92 7 父は「誠にやさしいやうだが、それで中々言ひにくい場合があるのだ。」

十93 4 太郎は前から父に、「〈略〉。」と固く禁ぜられてゐたのであるが、〈略〉。

十94 1 父は「〈略〉。」とたづねたが、太郎はだまつてゐた。

十94 5 其の夜又父に強く聞きたゞされて、太郎はやつと今日の次第を有りのまゝに話した。

十94 6 父は「なぜ其の時『〈略〉。』と、きつぱりことわらなかつたのか。」

十187 8 父は空をながめて、「〈略〉。」と、團扇を使ひながら言つた。

十188 5 父は暦を持つて来て、

「〈略〉。」かういつて弟の手に渡した。

十一90 5 父はなほ言葉をつゞけて、〈略〉。

十一91 2 父は更に「〈略〉。」

十一92 1 僕はよく年寄の人が新の幾日とか舊の幾日とかいふのを思ひ出して、其の事を父に尋ねた。

十一92 1 父は「新は新暦、舊は舊暦のことだ。〈略〉。」

十一94 2 最後に父は「暦は實に重寶なものだ。〈略〉。」と言葉をそへた。

十一95 1 リンカーンが七歳の時、〈略〉、父は自分で木を切出して小さな家をつつた。

十一95 5 リンカーンは其の頃からもう父の手助をしなければならなかつた。

十一95 6 リンカーンは「〈略〉。父が木を伐れば自分は雑草をかり取る、木を伐れば自分は雑草をかり取る、種をまくといふ風にかひがひしく働いてゐた。

十一96 6 〈略〉、父に對して是非學校に入れてもらひたいと願つたけれども、〈略〉。

十一96 7 〈略〉、父は學校へ行つて時間をつぶすよりも畠に出て働いた方がよいといつて、なか／＼許してくれなかつた。

十一98 5 それからは又父の手助をし

たり、人にやとはれたりすることになつたが、〈略〉。

十一101 2 リンカーンは父の手助をして忠實に働くと共に、非常な熱心と努力とをもつて勉強を續けた。

十二10 4 又父には「〈略〉。」といつて叱られたことがあつた。

十二11 2 父はダーウィンを醫者にしようと思つて大學へやつた。

十二11 3 温順な彼は父の命に従つて勉強してゐたが、〈略〉。

十二56 3 此の時大きなせきばらひが聞えて、父の時計師がはいつて來た。

十二58 6 父も喜んだ、子どもも喜んで。

十二66 5 前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、わしはそれが知りたいのだ。

十二70 4 コーデリヤはす／＼と父の許を去らなければならなかつた。

十二72 8 父の身の上を案じながらフランスに行つたコーデリヤは、やがていたましい報知を得た。

十二72 9 〈略〉 コーデリヤは、やがていたましい報知を得た。それは父が姉たちの爲に虐待されてゐるといふことであつた。

十二73 6 コーデリヤは眠つてゐる父の衰へ果てた姿をつくづくと見て、「〈略〉。」といひながら、よ／＼と泣きくづれた。

十二75 3 コーデリヤは父の手を取つ

て泣きながら、「其のコーデリヤで
ございます。」

十二93 父のいさめも妻のなげきも、
此の決心をひるがへすことは出来な
かった。

ちち「乳」おちち

ちちうえ「父上」(名) 7 父上

九14 父上の命にて、養鶏は今年
より僕等の仕事となり、日記をも渡
されたれば、〈略〉。

十二67 父はもう何よりも、どん
な寶よりも——ほんたうに自分の命
よりも父上を大事と存じます。

十二67 昔からあつた孝子のどの
人よりも厚い眞心をもつて、父上に
お仕へ致します。

十二67 父はありとあ
らゆる身の樂しみを返けても、ひた
すら父上を大事に致すのを此の上も
ない仕合はせと存じてをります。

十二68 コーデリヤは唯うつむい
て、「父上、私はどう申し上げてよ
いかわかりません。」

十二69 「どうしたのだ、コーデ
リヤ。何とか言方がありさうなもの
だ。」父上、私は唯ほんたうの事を
申し上げてゐるのでございます。

十二71 ところがリガンは、まだ父
上を迎へる準備が整つてゐないとい
ふのを口實にして、すげなくも主を
内に入れた。

ちちおう「父王」(名) 4 父王

十二91 釋迦は〈略〉。或時、父王
と共に城外に出て、農夫の働く様を
見廻つたことがある。

十二91 父王は、彼を見てひどく氣をもん
だ父王は、彼に妃を迎へ、目もまば
ゆい宮殿に住まはせて、國政にも與
らせようとした。

十二94 さうして此處で父王の心盡
くしから送られた五人の友と、六年
の間種々の苦行を試みた。

十二97 續いて釋迦は〈略〉、更に
カピラバストに歸つて、父王・妻子
を始め國民を教化して故郷の恩に報
いた。

ちちから「父」(題名) 2 父から

六目16 第二十六 伊勢參宮 〈略〉

二 父から

六104 二 父から

ちちぎみ「父君」(名) 1 父君

十二610 此の時事代主命は〈略〉
といふ處にありしが、使を得て急ぎ
歸り、父君に申すやう、「〈略〉。」

ちちみ ↓のびちぢみす

ちち・む「縮」(五) 1 チヂム 《一

三58 アブラゼミデス。〈略〉。見

テキルウチニ、チチンデキタ

ハネモダンダンノビテ、色モ

シダイニコクナツテキマシタ。

ちち・める「縮」(下二) 1 チヤメル

《一メ》

八49 〈略〉、スウツト下リテ來テ、

急ニツバサヲチヤメ、風ヲ切ツテマ
ツシクラニエモノノ上ニツカミカ、
ル。

ちつじょ「秩序」(名) 2 秩序 秩序
十一22 裁判の目的は、〈略〉では
ない。此の世を不道理や罪惡の行は
れない、平和な、秩序正しい世の中
にするのが其の目的である。

十二88 法律は、國家といふ共同生
活を、秩序ありかつ幸福なものにす
るための規則であるから、〈略〉。

ちつそくしいる「室息居」(上二) 1
室息し居る 《一井》

九37 レマン將軍も、火藥の爆發
によりて起れるガスの爲に室息し居
たるを、〈略〉。

ちつとも (副) 1 ちつとも

五47 〈略〉、少しでもおけると、
かごのうらや棚のすみなどで、繭を
かけはじめますから、ちつともゆだ
んが出来ません。

ちてん ↓ふじちやくりくちてん

ちとせや「千歳屋」(名) 3 千歳屋

八60 ちとせや

八60 ちとせや

ちなむ「因」(五) 2 ちなむ 《一

十23 賣つてゐる菓子もお

もちやも、多くは馬にちなんだ物で、

店の看板にも馬がかいてゐるのがよ

く目につきました。

十117 青銅の大鳥居をくづつて進む
と、沿道の家は大いて天満宮にちな
んだ物を賣つてゐる。

ちのみこ「乳飲子」(名) 1 乳飲子
八35 昔江戸で、夫に死なれた女が、
乳飲子を里子にやつて奉公に出まし
た。

ちばしる「血走」(五) 1 血走る
《一ツ》

十48 喜三右衛門は、血走つた目を
見張つて、しばらく火の色を見つめ
てゐたが、〈略〉。

ちはやじよう「千早城」(課名) 2 千
早城

六目11 第二十三 千早城

六90 第二十三 千早城

ちはやじよう「千早城」(名) 3 千早
城

六90 楠木正成が守つた千早城は、
けはしい金剛山上にはあるが、〈略〉。
六96 今度こそは千早城もあやふく
見えた。

六97 賊が千早城一つを持餘してゐ
ると、〈略〉。

ちひろ「千尋」(名) 1 千尋

十一81 丈餘のろかい操りて、

行手定めぬ浪まくら、百尋・千

尋海の底、遊びなれたる庭廣し。

ちへいせん「地平線」(名) 1 地平線

十二92 折から日は地平線に近づ

きて、雲も水も金色に輝き、美しさ

いふばかりなし。

チベットじん (名) 1 西蔵人

十二63 9 國旗の色彩が其の國の人の種を表すものに、支那の國旗あり。

即ち赤・黄・藍・白・黒の五色を横に並べたるものにて、〈略〉、黒は西蔵人を代表するなり。

ちほ 「地歩」 (名) 1 地歩

十二136 2 今日我が國が列強の間に立つて世界的の地歩を占めた以上、〈略〉。

ちほう 「地方」 (名) 2 地方 ↓ おう

うちほう・かいがんちほう・かくちほうせいねんだん・きんきちほう・さばくちほう・じよりうちほう・たちほう・ねったいちほう

十二19 2 但し大新聞にありては、

比較的早く印刷したるものをば地方版として遠隔の地方へ送り、〈略〉。

十二87 10 林蔵が二回の探検によりて、〈略〉、此の地方の事情も始めて我が國に知らるゝに至れり。

ちほうこうきょう 「地方公共」 (名) 1

地方公共

十一114 3 一體自治の精神とは何であるか。地方人民が協同一致して自ら地方公共の事に當り、誠意其の團體の爲に力を盡くす精神が即ちそれである。

ちほうこうしよく 「地方公職」 (名) 1 地方公職

十一115 7 本當に自治の精神に富んでゐる者は、公平無私、地方公職の爲

の適任者を擧げることだけを考へて、〈略〉。

ちほうさいばんしよ 「地方裁判所」 (名) 4 地方裁判所

十一20 8 裁判所は國家が設ける機關で、これに區裁判所・地方裁判所・控訴院・大審院の四階級がある。

十一20 10 裁判は事件の輕重によつて、最初區裁判所又は地方裁判所で行はれる。

十一21 1 ところで、區裁判所の裁判に不服な者は地方裁判所に上訴し、尙其の裁判に不服な者は更に大審院に上訴する。

十一21 3 又地方裁判所で行はれた最初の裁判に不服な者は、控訴院・大審院にと順次に上訴する。

ちほうじち 「地方自治」 (名) 1 地方自治

十一113 5 我が國の地方自治團體には、府・縣・市・町・村の別がある。

〈略〉、地方自治の精神に基づいて其の團體の幸福を進め、國連の發展を期することは皆同じである。

ちほうじちだんたい 「地方自治団体」 (名) 1 地方自治團體

十一113 3 我が國の地方自治團體には、府・縣・市・町・村の別がある。

ちほうじんみん 「地方人民」 (名) 3

地方人民

十一114 2 一體自治の精神とは何であるか。地方人民が協同一致して自ら

地方公共の事に當り、誠意其の團體の爲に力を盡くす精神が即ちそれである。

十一116 5 例へば教育・衛生等の自治團體の事業は、地方人民が一般に之を尊重し、〈略〉。

十一117 1 〈略〉、地方人民は大いにこれ等の事業に力を盡くさねばならぬ。

ちほうばん 「地方版」 (名) 1 地方版

十二19 1 但し大新聞にありては、比較的早く印刷したるものをば地方版として遠隔の地方へ送り、新しき事件ある毎に改版して、最後の最も新しきものを市内版とす。

ちまた 「巷」 (名) 1 ちまた

十30 2 図 しめやかに、夜の霧、ちまたをつゝみ、立並ぶ家々、ともしびうるむ。

ちみ 「地味」 (名) 2 地味

八21 8 図 揚子江ノ流域ハ地味スコブルコエ、米・茶・綿等ノ産物多シ。

八67 5 図 〈略〉、此の州は合衆國の中でも、氣候がよくて、其の上地味が肥えてゐますから、いろいろな農産物に富んでゐます。

ちめい 「知名」 (名) 1 知名

十121 4 外國の或商會で、新聞紙に店員入用の廣告を出した。〈略〉、中には知名の人の紹介状を持つて來た者や、〈略〉。

ちや 八21 8 図 揚子江ノ流域ハ地味スコブルコエ、米・茶・綿等ノ産物多シ。

十87 8 輸出品の主な物は、生絲・綿織物・綿絲・羽二重・銅・茶・マツチなどで、〈略〉。

ちやいろ 「茶色」 (名) 3 茶色

七86 8 〈略〉、コンブアアラメノヤウニ茶色ノモノモアリ、テングサノヤウニ紅色ノモノモアル。

七87 3 〈略〉、先ヅ綠色ノモノハ淺イ所ニ、紅色ノモノハ深イ所ニ、茶色ノモノハ其ノ中間ニ生エテキルノデアル。

九75 1 黒・白・茶色、大小さまゝの馬が、林のかげや沼のほとりを元氣よくかけ廻つてゐる様は、實に勇ましい。

ちやくじつおんこう 「着実温厚」 (形状) 1 着實温厚

十125 10 図 校長も着實温厚なる人にして、生徒を愛すること子の如く、〈略〉。

ちやくしゅ 「着手」 (名) 1 着手

五70 4 〈略〉用水池を掘らなければならぬと考へた。〈略〉。着手は來年からといふことになつて、庄屋は方々の村へ用水池を見に出た。

ちやくしゅす 「着手」 (サ変) 3 着手す 《一シ・一セ》

十一126 7 図 鐵眼大いに喜び、將に出版に着手せんとす。

十一128ノ図 然れども鐵眼少しも屈せず、再び募集に着手して努力すること更に數年、〈略〉。

十一1294図 二度資を集めて二度散じたる鐵眼は、終に奮つて第三回の募集に着手せり。

ちやくしゅする「着手」(サ変) 2
着手する「一シ」

十366 パナマ地峽に運河を造る事は、〈略〉。最後にアメリカ合衆國は、國家事業として此の工事に着手し、〈略〉。

十二1062 〈略〉此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、神佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。

ちやくす「着」(サ変) 1 着す「一セ」

十二871図 翌日此の地を去り、河をさかのぼること五日、遂に目的地なるデレンに着せり。

ちやくちやく「着着」(副) 3 着々

十1282図 〈略〉、續いて造船部長の指揮につれて吹く進水主任の號笛を合圖に、着々と進み行く進水作業。

十一12910図 〈略〉、此の度は製版・印刷の業着々として進みたり。

十二1128図 〈略〉トマス、エヂソンは、〈略〉電燈の發明に従事したり。彼が稀代の天才はこゝにも遺憾なく發揮せられて、着々成功の域に進みしが、〈略〉。

ちやくりく ↓ふじちやくりくちてん
ちやくのま 「茶間」(名) 1 茶の間

九147図 〈略〉、敷藁の中に見事なる卵二つころがれり。〈略〉餌箱に入れて持歸り、茶の間の戸棚の中にしまふ。

ちやく「茶屋」(名) 4 茶屋 ↓かけ
ぢやく・はぎのおんちやく

七243 傘松の四五間さきに、小さな茶屋が一軒ある。

七244 茶屋にはおばあさんが一人ぼつちで菓子やわらぢを賣つてゐる。

七252 茶屋から二三町行つた所の右手に、まんぢゆう笠をふせたやうな塚がある。

十1192 茶屋のおばあさんに尋ねると、それは園内に飼つてある鶴の聲であつた。

ちやくちやく「副」2 ちやくちやく
八37 庭のすみで、先程からちやくちやくとすゝの音が聞える。

八53 ふと、垣根の外でちやくちやくとすゝの音が聞えた。

ちやく「茶碗」(名) 1 茶碗
三354 ゴハンヲタベルトキニ、

〈略〉、チャワンヲモツ方ノ手ハ左デス。

ちやく ↓あかちやく・さんちやく・と
よちやく・みよちやく

ちやくと「副」2 チャント ちやくと

四446図 「花子も自分のおもち

やだけ、ちやくとおかたづけなさい。」

九1215図 シカシ今度ノ候補者ノ中ニ、〈略〉人ガアルカラ、オトウサンハ最初カラチャント其ノ人ニキメテキタ。

チャールスダーウィン「課名」2
チャールス、ダーウィン

十二目4 第三課 チャールス、ダーウィン

十二97 第三課 チャールス、ダーウィン

チャールスダーウィン「人名」1
チャールス、ダーウィン

十二98 チャールス、ダーウィンは今から百年餘り前イギリスに生れた。

ちゆう ↓あいじちゆう・がいこくじん
ちゆう・ごさいせいちゆう・こしょう

ちゆう・しろじちゆう・しんこうちゆう・じんぶつちゆう・しんぶんちゆう・たいざいちゆう・どうちゆう・なんべいちゆう・にゆうえいちゆうの

あにから・ひださんみやくちゆう・ほつかいどうてつどうえんせんちゆう・もくざいちゆう

ちゆうあい「忠愛」(名) 1 忠愛

十二648図 かくの如く各國の國旗は、

〈略〉ものなれば、國民の之に對する尊敬は、即ち其の國家に對する忠愛の情の發露なり。

ちゆうい「中尉」(名) 9 中尉 ↓き

へいちゆうい

九1037 〈略〉、北風は自分の信じてゐる中尉が乗つてゐてくれるので、砲彈の雨の中でも、銃劍の林の中でも、びくともせず、勇ましく活動した。

九1046 中尉の固く結んだ口もと、するどい目の光、其の様子がどうも一通りでない。

九10410 中尉はひらりと北風にまたがつて、亂れてゐたたてがみをそろへ、

〈略〉。

九1058 やがて中尉はちよつと腕時計を見て、いつものやうにすんだ聲で號令をかけた。

九1084 中尉は始終先頭に立つて進んでゐたが、敵陣が間近になつたのを見て、〈略〉。

九1091 と、たづなが急にゆるんで、中尉は後方にころげ落ちた。

九1104 中尉はあをのけになつて倒れてゐる。

九1106 中尉の手はじつとして動かない。

九1115 中尉の顔には満足らしいゑみが浮んだ。

ちゆうい「注意」 ↓かきかたちちゆうい・ごちゆういくださる・ごちゆういなさる

ちゆういか「中以下」(名) 1 中以下

十二103 九歳の時始めて學校にはいつたが、〈略〉、先生にもむしろ中以下の生徒と思はれてゐた。

ちゆういする「注意」(サ変) 8 注

ちゆういする「注意」(サ変) 8 注

意スル 注意する 《一サー・シ》
 六147 松山の入口で、赤くなつてゐたぐみを一枝折ると、「そんな大きな枝を。」と、にいさんに注意されました。
 六185 《略》、小さなしめぢが列を作つて出てゐました。ふまないやうに注意して、《略》。
 九158 多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、イロ／＼珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。
 九213 動物ノ形ヤ色デモ、注意シテ調べテミルト、コノヤウニイロ／＼フシギナ事ガアル。
 十一759 図 たゞ注意しなければならぬのは、順序正しく進むといふことです。
 十二108 又いろ／＼の鳥を注意して見ると、それ／＼違つた面白い習性をもつてゐるので、《略》。
 十二239 外國貿易業者はかへす／＼深く此の點に注意しなければならぬ。
 十二139 我々は《略》、又常に其の短所に注意し、之を補つて大國民たるにそむかぬりつばな國民とならねばならぬ。
 ちゅういぶかい 「注意深」(形) 1
 注意深い 《一イ》
 十1234 図 それで注意深い男だといふことを知りました。
 ちゅうおう 「中央」(名) 6 中央
 十178 図 市場は町はづれにあります。

廣さは二町四方ぐらゐで、せり場を中央にして、其の周圍は馬つなぎ場になつてゐます。
 十207 子馬が一頭つつ中央の廣場に引出されると、黒山のやうに集つてゐる買手は、《略》。
 十1256 図 役場と學校とは村の中央にあり。
 十一597 主な通にはアカシヤの並木が青々と茂つてをり、市街の中央を東西に貫ぬく幅六十間の太通は、《略》。
 十一1034 國 此のブラジル國は、《略》、其の大部分は熱帯に屬し居候へども、中央の高地や海岸地方の大半は割合に涼しく、《略》。
 十二647 図 イタリアの國旗は、緑・白・赤の三色を縦に染分け、中央の白地中に王家の紋章を表せり。
 ちゅうおうゆうびんきょく 「中央郵便局」(名) 1 中央郵便局
 五1015 停車場の階上には、役所もホテルもあります。階下の入口には、《略》 中央郵便局の分室もあれば、兩替店や、いろ／＼の賣店もあります。
 ちゅうがく 「中学」(名) 1 中學
 七397 図 旅順へは汽車で一時間で行けます。十日ばかり前に、私ども中學の二年生が修學旅行に行つて、《略》。
 ちゅうかん 「中間」(名) 1 中間

七873 一ガインイフコトハ出來ナイガ、先ツ綠色ノモノハ淺イ所ニ、紅色ノモノハ深い所ニ、茶色ノモノハ其ノ中間ニ生エテキルノデアル。
 ちゅうぎ 「忠義」(名) 1 忠義
 十9810 図 宋亡びぬ。御身の忠義を盡くすべき所なし。
 ちゅうこう 「中興」(名) 1 中興
 十二642 図 これイタリア中興の主エシマヌエル王、國土統一の時、《略》。
 ちゅうこう 「忠孝」(名) 2 忠孝
 十二1337 君と親とに眞心を捧げ盡くして仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、今更いふまでもない。
 十二1332 忠孝は實に我が國民性の根本をなすもので、之に附隨して幾多の良性・美德が發達した。
 ちゅうさ 「中佐」(名) 2 中佐
 ちゅうさ 「中佐」(名) 2 中佐
 八978 図 荒波洗ふデツキの上に、やみをつらぬく中佐の叫。
 八985 図 今ほとボートにうつれる中佐、飛來る弾丸に忽ちうせて、旅順港外うらみぞ深き、軍神廣瀬と其の名残れど。
 ちゅうじき 「昼食」(名) 1 晝食
 十一272 図 あたかも晝食の膳に向ひ居たる秀吉は、持ちたる箸を投捨て、《略》。
 ちゅうしき 「中止」(下) 1
 中止させる 《一セ》
 十二1319 西郷は軍令を出して翌日の

進軍を中止させた。
 ちゅうし 「中止」(サ変) 1 中止
 十一1289 図 鐵眼こゝにおいて再び意を決し、喜捨せる人々に説きて出版の事業を中止し、《略》。
 ちゅうじつ 「忠実」(形状) 3 忠實
 九5110 図 十年餘りもしんばうして、やう／＼一人前の番頭になり、それから又長い間忠實に勤めて、《略》。
 十一1012 リンカーンは父の手助をして忠實に働くと共に、非常な熱心と努力とをもつて勉強を續けた。
 十一1167 公吏・議員等、直接間接に公共の事務に當る者は、如何に其の職務に忠實であつても、《略》。
 ちゅうしん 「中心」(名) 2 中心
 十一627 十勝川の流域一帯の廣野はいはゆる十勝平原で、其の中心をなすものは帶廣の町である。
 十二1347 萬世一系の皇室を中心として團結した國民は、《略》。
 ちゅうしん 「忠臣」(名) 4 忠臣
 八189 図 「長四郎があゝの心で大きくなつたら、竹千代には無二の忠臣であらう。」
 十1337 図 《略》、勾踐此のうらみ忘れがたく、范蠡といふ忠臣の助を得て報復の計を立て、再び呉と戦ひて遂に之を亡しぬ。
 十13310 図 高德此の故事をひきて、やがて忠臣の起りて勤王の兵を擧げ、

十二
229
〈略〉、見本には精良な品を

あまの・しづなはつらふり、すうらは

しょうこうはん
〔張弘範〕
〔人名〕 2

長壽じゆを保つことが出來た。

ようしょ
〔長所〕
（名） 3 長所 ↓

いちだいちょうしよ・わがこくみんせいのちょうしよたんしよ

十二三三三 〔略〕我が國民は、其の長所として廉恥を貴び、潔白を重んずる美德を發揮してゐる。

十二三三九 我が國民の長所・短所を數へたならば、まだ外にもいろいろあらう。

十二三三〇 我が國民の長所・短所を數へたならば、まだ外にもいろいろあらう。我々は常に其の長所を知つて之を十分に發揮すると共に、〔略〕。

ちょうじょ 〔長女〕(名) 1 長女

十二六七四 長女の言葉に満足した王は、地圖を指さしながら領地の三分の一を與へた。

ちょうじょ 〔頂上〕(名) 3 頂上

九六一〇 あの雷鳥といふ珍しい鳥も、此のあたりから頂上へ登る途中のはひ松の間に居るので。

九七五 〔略〕、岡田さんは高山植物や雷鳥の繪葉書を、たくさん出して見せて下さいました。お話が頂上のながめに移ると、〔略〕。

九八二 頂上に立つて四方をながめた景色は、全く雄大です。

ちょうじょ ちょうちかく 〔頂上近〕(名) 1 頂上近く

九四八 雪溪は谷を埋めた雪の坂で、ふもとの村から三里ばかり登つた所から始つて、頂上近くまで續いてゐます。

ちょうしろう 〔長四郎〕(人名) 8 長四郎

八一六二 松平正綱の子信綱は幼名を長四郎といつた。

八一六四 長四郎が十一歳の時のことである。

八一六六 竹千代が軒ばに雀の巢を見つけて、「長四郎、雀の子を取つて參れ。」と命じた。

八一六八 日が暮れてから、長四郎がそつと屋根づたひに行つて、〔略〕。

八一七二 將軍秀忠が刀を取つて出て見ると、長四郎であつた。

八一八一 將軍は長四郎を大きな袋へ入れて、「〔略〕。」といつて、袋の口を封じて柱に掛けた。

八一八五 晝頃、御臺所のおわびによつて、長四郎はやつと袋から出された。

八一八八 〔長四郎があつた心で大きくなつたら、竹千代には無二の忠臣であらう。〕

ちょう・ず 〔長〕(サ変) 1 長ず 《一ジ》

一一四八 孔子は〔略〕。少時より學問に勵み、長じて後魯の君に仕へ、〔略〕。

ちょうせいけつ 〔張世傑〕(人名) 2 張世傑 張世傑

十九八三 時に宋の勇將張世傑よく戦ひて元軍を防ぐ。

十九八五 〔書をしたゝめて張世傑を招け。〕

ちょうせいけつら 〔張世傑等〕(人名) 1 張世傑等

十九八八 張世傑等の奮戦も大勢を轉ずることあたはずして、宋遂に亡びしかば、〔略〕。

ちょうぜいでんれいしよ 〔徵税伝令書〕(名) 1 徵税傳令書

八七九六 〔略〕、これは縣の税で、書とありませう。これは縣の税で、〔略〕。

ちょうぜいれいしよ 〔徵税令書〕(名) 1 徵税令書

八七九七 此の一枚には徵税令書とありませう。これは村の税で、〔略〕。

ちょうせん 〔朝鮮〕(地名) 6 朝鮮

朝鮮 七九七 豐臣秀吉が朝鮮へ向はせた先手の大將は加藤清正・小西行長の兩人でした。

七九八 清正は朝鮮を立つて、伏見へ參りました。

七〇〇三 大明の軍勢四十萬、勢はげしくおしよせたるに、日本の大將小西行長は一たまりもなくにげ落ち、もはや朝鮮に日本の武士は一人も居らぬ。

八三三 昔朝鮮に一人の婦人があつて、子どもをおさづけ下さるやうに、朝晩神様にいのつてゐました。

十二二 〔略〕、此の頃墓參りのために朝鮮から歸つてをられる高橋さんが來られた。

十五四 朝鮮の青年も、近頃はなか／＼頭が進んで來ましたので、〔略〕。

ちょうせんかおく 〔朝鮮家屋〕(名) 1 朝鮮家屋

十七六一 其の手前は一帯に朝鮮家屋で、其の又手前には〔略〕などのりつばな洋館がそびえてゐる。

ちょうせんぎんこう 〔朝鮮銀行〕(名) 1 朝鮮銀行

十七六二 〔略〕朝鮮ホテル・朝鮮銀行・京城郵便局・天主教會堂などのりつばな洋館がそびえてゐる。

ちょうせんそうとくふ 〔朝鮮總督府〕(名) 1 朝鮮總督府

十七五四 此處には天照大神をおまつりした京城神社があり、又其の近くに朝鮮總督府があります。

ちょうせんになじん 〔朝鮮人參〕(課名) 2 朝鮮人參

八二四 第十 朝鮮人參

ちょうせんになじん 〔朝鮮人參〕(名) 1 朝鮮人參

八三二 山野に生ずる草木の中には、藥用にするものが多くありますが、其の中貴重なもの一つは朝鮮人參です。

ちょうせんホテル 〔名〕 1 朝鮮ホテル

十七六二 〔略〕朝鮮ホテル・朝鮮銀行・京城郵便局・天主教會堂などのりつばな洋館がそびえてゐる。

ちょうそく「長足」(名) 1 長足

十二136 支那・印度の文明を入れ、更に西洋の文明を入れて長足の進歩を成し遂げた日本國民は、〈略〉。

ちょうそん「町村」(名) 1 町村

六414 どの町村からも、歩兵が一番多く出てゐるのに、ふしぎと私の村からは私一人だ。

ちょうだい「頂戴」(名) 1 ちやうだい

三138 「おかあさん、あかちゃんにおちちをのませてちやうだい。」

ちやうちよう「蝶蝶」(名) 5 テフテフ

てふてふ

二68 サクラガサクノハコレカラデス。〈略〉。テフテフガマフノモコレカラデス。

三14 テフテフハ花カラ花ヘヒラヒラトマヒ、〈略〉。

三63 草のはにとまつてゐたてふてふがおどろいてとびたちました。

三64 「みよ子」あら、てふてふが五郎さんの舟にとまりました。」

三65 「みよ子」五郎さんの舟には、てふてふのせんだうさんがのつたから、かつたのでせう。ちやうちようさん「町長」(名) 2 町長さん

十二56 「あゝいふねちは〈略〉。」

あれが無いと町長さんの懐中時計が直せない。

十二59 一日おいて町長さんが来た。

ちやうちん ↓ おおちやうちん

ちやうど「丁度」(副) 25 チャウド

ちやうど

三57 「カラヲキタセミガハヒ上ツテキマス。チャウド私

ノ目ノ前デトマツテ、カラヲヌギハジメマシタ。

四28 ちやうど人の出さかりで、

お宮のすずがひつきりなしになつてゐます。

四82 トンネルを出て、海を見

下した時には、〈略〉。ちやうど

大きな船がおきを通つて居ました。

五38 「瓦やきを見に行きました。ちやうどかまを明けたところで、

白いけむりが立つてゐました。

五62 道の兩がはは一面に青田で、

ちやうど田の草取のさい中です。

八23 呉鳳は役人になつた時から、

どうかして首取の惡風を止めさせた

いものだと思ひました。ちやうど蕃

人が、其の前の年に取つた首が四十

餘ありましたので、〈略〉。

八65 おとうさんは一昨日の正午

無事にサンフランシスコへ着きました。

横濱を出てから、ちやうど十五

日目です。

八68 おとうさんが着いた日は、

ちやうど五月のお節供の日で、日本人の家には、鯉のぼりが立つてゐました。

八107 来る十六日は私の誕生日で、

ちやうど日曜日ですから、〈略〉。

九39 此のトラック島へ来てから

〈略〉。冬でも春でもこちらではちやうど内地の夏のやうです。

九51 あの社長さんはもと上方の

人で、此の町へ始めて奉公に來たのは、ちやうどお前と同じ十二の年だ

つたさうだ。

九53 社長さんが銀行の頭取にな

つてからちやうど十年目の秋、〈略〉。

九93 いさんのお友だちの岡田さ

んが旅行からお歸りになつたと聞いて、今日にいとさんと二人で遊びに行

きました。ちやうど岡田さんは四五

人のお友だちに、白馬登山のお話を

なさつていらつしやる所でした。

九108 中尉は「そら、もう一

息だぞ。襲へ」と叫んだ。ち

やうど其の時、敵の砲弾が近くで破

れつして、〈略〉。

九111 北風は、左右の耳をそ

ばだててみた。しかし聞えるのはか

すかな息づかひばかりであつた。ち

やうど其の時、はるか遠方で味方の

萬歳の聲がわき起つた。

十16 宮本の伯父様の所に着いた

のは昨夜七時でした。〈略〉。ちやう

ど此の頃、此所の名物の馬市が始つ

てゐるといふので、〈略〉。

十64 お宿は致しても、さて何も

差上げる物はございません。ちやう

ど有合はせの粟の飯、〈略〉。

十118 白梅は今ちやうど眞盛りであ

るが、〈略〉。

十一14 今日、のぶ子さんのうち

へ始めて遊びに行きました。〈略〉。

のぶ子さんはちやうど、五年生の時

の成績物に表紙をつけて、とちてい

らつしやる所でした。

十一55 これまでにこゝしてなが

めてゐた老砲手は、甲板から

しきりに勵ました。ちやうど其の時

「ふかだく」といふ船長のけた、

美しい叫び聲が聞えた。

十一62 はるかの下に一條の白煙を

たなびかせて見えがくれする上り列

車は、ちやうどおもちゃのやうに見

える。

十一63 トラクターはちやうど軍用

のタンクのやうな形で、ガソリンの

發動機が取付けてある。

十二43 やがて指がピアノの

鍵にふれたと思ふと、やさしい沈ん

だ調は、ちやうど東の空に上る月が

次第々々にやみの世界を照らすやう、

〈略〉。

十二76 だいばう網は身網と垣網と

二つの部分から成つてゐて、非常に

大きなものである。これを海中に張

つた形はちやうど大きなひしやくに

似てゐる。

十二110 4 かうして、老僧が始めての
みを絶壁に下してからちやうど三十
年目に、彼が一生をさゝげた大工事
が見事に成就した。

ちょうにん 「町人」(名) 3 町人

七105 5 小西程の者を堺の町人と
のゝしり、略。

七106 7 小西は日本の大將ならず、
まことは堺の町人、道案内の者故、
にげも致したであらう。

十二24 3 昔は個人の利益を營むのが
商業であると思はれてゐた。それ故
大多數の商人は、略。彼等が町人
といつて賤しめられたのも其の爲で
あらう。

ちょうねんげつ 「長年月」(名) 1 長
年月

十二13 10 略、生物は總べて長年月
の間には次第に變化し、下等なもの
から高等なものへと進むものである
といふことを證明した。

ちようふはんしゅ 「長府藩主」(名) 1
長府藩主

八11 3 大將の父は長府藩主に仕へ
て、江戸で若君のお守役をしてゐた
が、略。

ちようほう 「重宝」(形状) 2 重寶

十一94 3 曆は實に重寶なものだ。

十一94 3 曆は實に重寶なものだ。

こんな重寶なものがあるのに、それ
を利用しないのであるのは寶の持ちぐ

された。

ちようぼうだい 「眺望台」(名) 1 眺
望臺

十二33 3 又エツフェル塔にも登つ
て見ました。略。眺望臺で眺める
と、略。

ちようめ ↓さいくまちにちようめじゅ
うごばんち

ちようめん 「帳面」(名) 1 帳面

十一15 10 本や帳面はどうしてい
らつしやいますか。

ちようり・する 「調理」(サ変) 1 調
理する 《一スル》

十一67 2 火の熱は、初め主として食
物を調理するのに用ひたもののやう
であるが、略。

ちようりゅう 「長流」(名) 1 長流

八19 5 揚子江ハ略。我が國第
一ノ長流鴨緑江ノ如キハ實ニ其ノ
支流ニモ及バザルナリ。

ちようるい 「鳥類」(名) 2 鳥類

八47 8 大キサカライツテモ、強サカ
ライツテモ、鷲ハタシカニ鳥類ノ王
デアル。

十二10 10 略、人はなぜみんな鳥類
の研究をしないだらうと思議に思
ふやうになつた。

ちよきよく 「著局」(名) 1 著局

七112 著局

ちよきん 「貯金」(名) 2 貯金

九52 1 略、三十ぐらゐの時、年
來の貯金と主人からもらつた金を資

本にして、小さい米屋を始めた。

十一40 8 植林は貯金のやうなも
ので、植ゑてさへおけば、年々太つ
て利息が附いて行く。

ちよきんちよきん (感) 1 ちよきん
く

十二21 7 略、二三人の男が、器用
な手つきで蜜柑を採つてゐる。略。
あちらでもこちらでも、さえたはさ
みの音がちよきんくと聞える。

ちよく 「直」 ↓りようげんちよく

ちよく 「勅」(名) 1 勅

十二63 3 時に天照大神の使者建
御雷命此の地に來りていふやう、
「大神の勅にいはいく、略。」と。

ちよくさい 「勅裁」(名) 1 勅裁

十二132 1 西郷は軍令を出して翌日の
進軍を中止させた。略、更に京都
に上つて勅裁を仰ぎ、とうく徳川
方の願意をとほさせた。

ちよくせつかんせつ 「直接間接」(名)
2 直接間接

十一115 10 公吏・議員等、直接間接に
公共の事務に當る者は、略。

十二115 1 今文明の利器と稱せら
るゝものにして、直接間接に彼の天
才によらざるもの殆どなしといひて
可なり。

ちよくめい 「勅命」(名) 2 勅命

九99 9 景行天皇の皇子日本武
尊、蝦夷を平げよとの勅命を奉じ
て、東國の方に下り給ひき。

九112 天皇は勅命を果して、め
でたく都に歸り給へ。

ちよくれい 「勅令」(名) 1 勅令

十二89 9 法律の外に勅令・閣令・省
令・府縣令等の命令がある。これ等
の命令も國の規則であつて、略。

ちよこ 「話手」 1 ちよ子

四48 1 ちよ子「はい。」

ちよこ (人名) 2 ちよ子

四47 1 よみ手はおぢいさんで、
取手はみよ子ちよ子國太郎音
二郎の四人と、略です。

四50 8 略、ちよ子が八まい、音
二郎が六まい、友一はたつた
二まいでした。

ちよこちよこ (副) 3 チヨコチヨコ
ちよこく

三87 ヒヨコハホソイアシデ、
チヨコチヨコアルキマス。

八44 犬ころが二匹、上になり下に
なりしてじやれてゐる。略。略、
尾をふりながら、ちよこくやつて
來た。

九12 6 綿毛に包まれたるひよこど
も、小さき聲を立てつゝ、ちよこ
くとかけ廻る。

ちよじゅつ 「著述」(名) 1 著述 ↓
だいちよじゅつ

十一5 10 しかも遂に志を達するこ
とを得ざりしかば、老後は専ら力を
教育と著述とに用ひたり。

ちよしょ 「著書」(名) 1 著書

ちよしょ 「著書」(名) 1 著書

十一73 眞淵はもう七十歳に近く、いろ／＼りつばな著書もあつて、下に聞えた老大家。

ちよつと (副) 14 チヨット ちよつと

二66 オヤ牛 ヲソトへ出スト、

子牛 モツイテイキマス。チヨツト ハナレマスガ、スゲ オヤ牛

ノトコロへキマス。

五38 此所を出て、となり村の學校の前へ行くと、先生が「ちよつと用があるから。」といつて、私どもを道に待たせておいて、學校へおよりになりました。

五61 虹はおもしろい。

雨のはれ間にちよつと出て、用ありさうに天と地の 遠きをつなぐ雲の上。

七49 私ノ近所二年ヨリノカチ屋ガアリマシタ。セイガ高ク、目ガスルドクテ、チヨツト見ルト、コハイヤウデシタガ、〈略〉。

七60 それは日本は海國でありながら、まだ海を恐れる人もあるといふことで、〈略〉。ちよつと渡船に乗

つてさへ、こはがる者があります。

七74 年よりはちよつとふりかへりましたが、何ともいはず、すぐ又仕事をづけました。

八46 それではちよつと行つて参ります。

八85 學校へ行つて〈略〉。「私はこちらに御やくかいになつてゐる松

木とよの父でございます。ちよつととよにあひたくて参りました。」

九74 あれは岩手山だ。南部富士といはれるだけあつて、ちよつと形が似てゐるね。

九105 やがて中尉はちよつと腕時計を見て、いつものやうにすんだ聲で號令をかけた。

十一123 ガラス工場を見に行つた。〈略〉。こちらを見ると、そこではちよつと吹いて型に入れ、又吹いて型から出す。

十二40 實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが、〈略〉。

十二45 ベートーベンは、ちよつとふりかへつてめくらの娘を見た。

十二59 時計師は仕上げた時計をちよつと耳に當ててから、ガラス戸棚の中につり下げた。

ちよつとした (連体) 4 ちよつとした

五63 あのだんぼの中に、ちよつとした森があるだらう。

五93 葉書には、大ていちよつとした用事が書いてありますが、封書には、いろ／＼こみ入つた事が書いてあります。

八103 マツチはちよつとした物で、價も安く、一包十箱が十錢ぐらゐで買はれる。

十二65 生れつき烈しい氣性の上に、年とともに老の氣短さが加はつて、

ちよつとした事にも怒り易くなつてゐた。

ちらし (散) (名) 1 ちらし

四47 友一のうちでかるた取がはじまつて居ます。〈略〉。今ちらしで取つて居ます。

ちらす (散) (五) 2 ちらす 散らす 《一・ス》 ↓ かきちらす・まきちらす

七44 兩軍は入りまじつて、火花をちらして戦つた。

九64 「上甲板洗ひ方。」水兵はくもの子を散らすやうに八方へ散つて、〈略〉。

ちらちら (副) 2 ちら／＼

九33 道がだん／＼上りになつたと見えて、谷のこすゑごしに、遠い湖がち／＼と見えて來た。

十119 〈略〉。霜よけのわらの間から、黄色い夏みかんがち／＼見えてゐるのも珍しい。

ちらばる (散) (五) 3 ちらばる 散らばる 《一・ツ》

五56 松島は大小二百の島が、海上三四里の間にちらばつてゐて、〈略〉。

十22 此の町では、二歳駒の市が十日間も續いて、〈略〉。これ等の馬が日本全國に散らばつて、或は軍馬になり、或は馬車馬になり、或は耕馬になるのださうです。

十39 兄はそこに散らばつてゐる

木の根や、小枝などを拾ひ集めて來て、たき火を始めた。

ちらりと (副) 1 ちらりと

九37 すると木のうろから、栗鼠が一匹、けろりとした顔を出したが、僕の姿を見ると、太い尾をちらりと見せて、急にまた穴にかくれてしまつた。

チリ (地名) 1 チリ

チリ (塵) (名) 2 ちり

四47 かるた取がはじまつて居ます。〈略〉「ちりつもつて山となる。」

五96 ちりがつもつて山となり、しづ／＼がよつて海となる。

ちりちり (副) 2 ちりちり

三108 うちの子ねこは かわいい子ねこ、くびのこすずをちりちりならし、すそにからまり、たもとにすがる。

三116 うちの子ねこは かわいい子ねこ、くびのこすずをちりちりならし、まりとぎれ

ては えんからおちる。

ちりちり (形状) 1 散り／＼

十132 〈略〉。けはしき山路をふみわけてたどり着きたりしに、

「〈略〉。」と人の言へば、衆皆力を失ひて散り／＼になりぬ。

ちりばむ (鑢) (下二) 1 ちりばむ

《一・メ》

九八四〇 月はまだ出でざれども、空よく晴れて、満天の星は寶石をちりばめたるが如し。

ちりばめなす「鏤成」(四) 1 ちりばめなす「一シ」

十五四〇 略、金銀珠玉をちりばめなして、ひねもす見れどもあかざる宮居。

ちりばめなす「鏤」(下二) 1 ちりばめなす「一メ」

十五四 寶玉をちりばめたるやうなはい、目、略、鳩は見るからに愛らしいものである。

ちりめん「縮緬」(名) 2 ちりめん縮緬

五二三 下のかざりまどには、目のさめるやうなちりめんや、きれいな帯や、略がかざつてあります。

六七六 コレハ、ハジメ白地ニオツテ置イテ、後デカタヲ置イテ染メルノデ、縮緬ノ友禪ト同ジデス。

ちりょう「治療」(名) 1 治療

十九九 父母の病あつければ、醫藥の効なきを知りても、尚治療につとむるは人情の常にあらずや。

ちりよけ「塵除」(名) 1 ちりよけ

四四六 昨日はうちのすすきはきでした。おかあさんがあたまに手ぬぐひをかぶり、着物の上にちりよけを着て、略。

ちる「散」(四・五) 6 ちる 散る「一ツ・一ル・一レ」とびちる

五六二 こちらは今さくらのさかりですが、あちらでは、もうとうにちつてしまつたさうです。

五三二 松をのこして木の葉がちれば、庭は一日がよくあたる。

九六四 「上甲板洗ひ方。」水兵はくもの子を散らすやうに八方へ散つて、略。

十三九 あたりは如何にも静かで、たまに散る落葉の音が、かさりくと聞える。

十二八 艦首につるしたるくす玉ばつとわれて、紅白の紙片花ふぶきの如くに散る中を、略。

十二三九 我が國民には潔いこと、あつさりしたことを好む風がある。櫻の花の一時に咲き一時に散る風情を喜ぶのがそれであり、略。

ちん ちやちん・わたしちん ちんせん「賃錢」(名) 1 賃錢

五七六 方々から人夫をやとつて來て、もう一度土手をつきなほした。其の賃錢をみんな庄屋が自分のふところから出した。

ちんちようす「珍重」(サ変) 1 珍重す「一セ」

十二四三 中にもけやきはもくめ美しく、磨けば美麗なる光澤を生じ、又くるひ少きが故に裝飾材として珍重せられ、略。

ちんれつたな「陳列棚」(名) 1 陳列棚

十一二四 歸りがけに事務所の陳列棚を見せてもらつた。

ちんれつひん「陳列品」(名) 1 陳列品

十二二九 昨日大英博物館を一覽しました。陳列品の多種多様で、略。

つ 1 ツ

七二二 略、ワとツ、ニと二、ハと八等は書方にて間違ひ易し

つ(格助) あしはらのなかつくに・あまつひつき・とつくに・とつくにびと

つ(助動) 4 つ「ツ・ツル」

八五五 ゆききの車馬のたえざれば、向ふの側へ行きかねつ。

九四七 昨日の敵は今日の友、語る言葉もうちとけて、我はたへつ、彼の防備。

九四八 彼はたへつ、我が武勇。九四九 此の方面の戦鬪に二子をうしなひ給ひつる 閣下の心如何にぞ。

つ(副) 5 ツイ つい 三五一 ツイコノアヒダウエタ田ガ、モウアンナニ青クナリマシタ。 五八二 略、宗任はつい此の間義家

にかうさんしたてきの大將なのです。十五一 さいで無くても、餘分のお金があると、ついむだな事に使つてしまふ。

十二二 ぶと見ると、ついそばの木の下では、かごを首に掛けた三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。

十二三九 「御免下さい。私は音楽家ですが、面白さについてり込まれて参りました。」

ついえ「費」(名) 1 費

十一四五 我もとより衣食の費をいとふにあらざれど、略。

ついききす「追撃」(サ変) 1 追撃す「一スル」

十一二八 退却軍は少く之にたよりを得たれども、秀吉の軍は、略、追撃すること頗る急なり。

ついちち「二日」(名) 3 一日 ちがつちちち・くがつちちち

十一八九 一日木 略

十一八九 一日火 望前六時三十分 きのえいぬ 略

十一八九 一日土 ひとのうし 略

ついで「序」(名) 1 ついで におついで

九九八 おかあさんと茄子をもちに出たついでに、かぼちや畠を見廻ると、略。

ついで「次」(接) 1 次いで

十二113ノ図 初め彼は紙に炭素を塗り

て試みしが、思はしき結果を得ず。次いで白金其の他の金屬の針金を以て様々の實驗を重ねしが、〈略〉。

ついでに「序」(副) 1 ついでに ↓ おついでに

八44ノ 越前守は〈略〉、さきに納めさせた白木綿を返し、ついでに石地藏を、もとの所へもどしたと申しま

す。

ついでに「就」(接) 1 ついては

七69ノ図 それがあなたのやうな正直なお方に拾はれて、財布をいたゞかせてもらひましたが、〈略〉。ついでに此の中の金を半分だけお禮のしるしにさし上げます。

ついに「終」(副) 34 終に 遂に

九23ノ図 しかし思ふ程に仕事は出來ず、其の上政治上の事で度々殿様に上書した爲、役人ににくまれて、終には國を立ちのかねばならぬやうになつた。

九27ノ図 古人も『志ある者は事終に成る。』と言つてゐる。

九28ノ 〱略〱などの人々をたよつて、一心に西洋の學問を勉強した。さうして終に當代第一の農學の大家となつて、〈略〉。

九36ノ図 されど〈略〉大口徑砲の威力に對しては、〈略〉ベルギー軍の防戦も、終に如何ともしがたく、要塞は全く破くわいせられ、將卒は多

く戦死せり。

十26ノ 〱略〱。さあ、行きませう。命を捨ててかゝつたら、救へないことはありますまい。此のけなげな言葉は遂に父を動かした。

十35ノ 今太平洋の方から此の運河を通るとする。〈略〉。此處から又掘割を走つて、終に洋々たる大西洋に出るのである。

十36ノ 最後にアメリカ合衆國は、國家事業として此の工事に着手し、十年の歲月と八億圓の費用とを費して、我が大正三年、遂に之を造り上げたのである。

十97ノ図 然るに元軍の勢いよく盛にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝・皇后も遂に敵手に落ちぬ。

十98ノ図 たま／＼元の大軍至るに及んで天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。

十98ノ図 張世傑等の奮戦も大勢を轉ずることあたはずして、宋遂に亡びしかば、〈略〉。

十99ノ図 天祥はいはく、〱略〱。と。遂に獄に投ぜらる。

十109ノ圖 承り候へば、御祖母様には先日より御病氣の處、御養生のかひもなく、去る十九日遂に御死去遊ばされ候由、誠に驚き入り候。

十133ノ圖 〱略〱、勾踐此のうらみ忘れがたく、〈略〉、再び呉と戦ひて遂に之を亡しぬ。

十一57ノ圖 〱略〱、孔子 〱略〱、廣く

各國をめぐりて、用ひられんことを求めぬ。しかも遂に志を達することを得ざりしかば、〈略〉。

十一31ノ圖 正國の首は終に清正の手に入りぬ。

十一43ノ圖 實は去月十日頃より感冒の心地にて引きこもり居候處、其の後とかく病勢衰へず、遂に肺炎を引起し申候。

十二77ノ 宣長は眞淵の志をうけつぎ、三十五年の間努力に努力を續けて、遂に古事記の研究を大成した。

十二79ノ それで金屬を用ひることを思ひつき、形の上に種々の工夫をこらして、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。

十一96ノ 〱略〱、なか／＼許してくれなかつた。ところが母のとりなしで終に學校に入ることが出來たので、リンカーンの喜は一通りでなかつた。

十一127ノ圖 苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も残らずなりぬ。

十一129ノ圖 二度資を集めて二度散じたる鐵眼は、終に奮つて第三回の募集に着手せり。

十一130ノ圖 かくて天和元年鐵眼が初度の募集を始めてより十八年の後に至りて、一切經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられたり。

十二22ノ圖 イギリスの國旗は、〈略〉

幾多の變化を重ねたるものなり。

〱略〱、更にアイルランドの加はるに及び、白地に斜赤十字の徽章ある其の國旗を合はせて、遂に今日の如き形式をなすに至れり。

十二82ノ圖 〱略〱、世界の人は久しく之を疑問としたりき。然るに其の實際を調査して此の疑問を解決したる人、遂に我が日本人の中より現れぬ。

十二84ノ圖 コーニは〱略〱。とて、しきりに止むれども林藏きかず、遂に同行することに決せり。

十二86ノ圖 翌日此の地を去り、河をさかのぼること五日、遂に目的地なるデレンに着せり。

十二92ノ こんな事を次から次へと考へては、遂に心の苦しみにあたへられなくなつて、〱略〱。と思ひ立つに至つた。

十二93ノ 彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聴いたが、どれにも満足することが出來ない。彼は遂に〱略〱。と決心して、或靜かな森へ行つた。

十二98ノ 釋迦は八十歳の高年に及んでも、〱略〱、各地を巡つて道を傳へてゐたが、遂に病を得てクシナガラ附近の林中に留つた。

十二104ノ 〱略〱、川沿の道をたどつて行くと、左手の山は次第に頭上にせまり、遂には路の前面に突立つて人のゆくてをさへぎつてしまふ。

十552 〈略〉、やはり此のやさしい、しかも勇ましい通信者の働の偉大な事が證明せられたので、〈略〉。

つうしんぶ 「通信部」(名) 1 通信部

十二167 図 しかして編輯局は更に編輯部・政治部・經濟部・社會部・通信部・外報部・學藝部・寫眞部・校正部等に分れ、〈略〉。

つうずる 「通」(サ変) 4 通ずる

《一ジ》

十326 此の湖へ兩方の海から掘割が通じてある。

十807 此處から方々へ坑道が通じてゐて、〈略〉。

十一96 アスファルトや石を敷いた道が縦横に通じ、電車・馬車・自動車等が絶間なく往來してゐる。

十二516 湖の水は東岸から奥入瀬川となつて流れ出るのであるが、一年を通じて水位の變化は極めて少い。

つうちきたる 「通知來」(四) 1 通知し來る 《一ル》

十二172 図 此の外、國內各地は勿論、世界各國主要の地に特派員又は通信員ありて、事件起れば直に電話又は電信にて通知し來る。

つうちする 「通知」(サ変) 1 通知する 《一シ》

十5710 飛行機の不時着陸地點を知らせたり、漁業者が沖から獲物の多少や難船の有様を通知したり、〈略〉、いろいろに利用する事が出来る。

つうれい 「通例」(副) 1 通例

十一933 図 ところが太陰曆は月のみちたりかけたりする變化を本としてこしらへたもので、通例十二箇月を一年とするが、〈略〉。

つえ 「杖」(名) 5 つゑ 杖 ↓ こん

七667 三四里行つて、大きな峠へかゝりますと、上から片はだぬいで、右手につゑをついて、かけ下りて來る者があります。

八555 図 雪どけ道のぬかるみを杖にすがりてとほくと、歩み來れる老婆あり。

九957 図 眞夏の日中でも、杖を握つてゐる手などは、何時の間にかつめなくなつてしまひます。

十597 図 とあるあばら家の門口に杖を止めて、一夜の宿を貸し給へとこへば、〈略〉。

十二922 〈略〉、杖にすがるあはれな老人や、息もたえだえの病人、〈略〉。

つか 「塚」(名) 2 塚 塚

七253 茶屋から二三町行つた所の右手に、まんちゆう笠をふせたやうな塚がある。

七253 塚の前に馬頭觀世音とほつた石が立つてゐて、〈略〉。

つか 「柵」(名) 3 つが

十二459 図 今其の主要なるものを舉ぐれば、杉・檜・もみ・つが・ひば・松・〈略〉等なり。

十二472 図 もみ・つがは共にそり又は伸び縮みすること著しきを以て、杉・檜に比すれば用途甚だ狭し。

十二475 図 されど何れも美しき光澤を有するが上に、〈略〉、つがは堅くして久しきに耐ふるが故に、家屋の柱・土臺となすに宜し。

つかい 「使」(名) 4 使 ↓ いきづかい・おつかい・きづかい・こづかい・こづかいさん・ぞうつかい

七186 「極樂寺坂の味方があやふうございます。」といふ使の後から、

「〈略〉。」といふ使が來たが、〈略〉。

七188 「〈略〉。」といふ使の後から、

「大將も討死されました。」といふ使が來たが、〈略〉。

十二610 図 大國主命答へてはいく、

「〈略〉。我が子事代主とはかりて答へ申さん。」此の時事代主命はすな

どりのため美保崎といふ處にありしが、使を得て急ぎ歸り、〈略〉。

十二1205 図 主人の使などにまゐる途中、小学校の前を通りては、〈略〉。

つかいつくす 「使尽」(五) 1 使ひ盡くす 《一サ》

十二1164 図 そればかりでなく、石炭は早晚使ひ盡くされてしまふが、水力は無限といつてよい。

つかいみち 「使道」(名) 1 使ひみち

十一403 僕がお手傳して植ゑたあの杉や檜は、何時になつたら伐るのだらう。使ひみちによつて、三十年目

から五六十年目ぐらゐる間に伐るのださうだから、〈略〉。

つかいりよう 「使料」(名) 1 使ひ料

十883 〈略〉綿絲や綿織物を造る。これらの製品は我々の使ひ料にもなるが、又支那・印度其の他の東洋諸國へ輸出される。

つかう 「使」(五) 17 使フ 使ふ

《一ッ・ハー・ヒーフ》

六132 図 其ノ時鐵ビシハ「私タチノサビルノハ人ガ使ハナイカラデス。

六133 図 私タチノサビルノハ人ガ使ハナイカラデス。モシセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ、イツデモ光ツ

テキマス。

六134 図 銅ハ人ニ使ハレテキテモ、時々青イ物ヲ出シマス。

六1017 図 〈略〉、しやうぶが小指程に芽を出してゐました。〈略〉、手を出すと、「義一さん、それはお節供に使ふのですよ。」といふねえさんの聲がしました。

七264 馬は〈略〉。又力が強いので、荷物をつけたり、荷車をひかせたり、田や畠の耕作に使つたりする。

七832 又物ヲ洗ツタリファイタリスル時ニ使フ海綿モ、ヤハリ〈略〉。

十517 図 さうで無くても、餘分のお金があると、ついむだな事に使つてしまふ。

十528 図 だから當分使ふ見込のない、まとまつたお金は定期預金にした方

がよいのだ。

十548 鳩は通信に使つたのは、餘程古い時代からの事で、〈略〉。

十573 鳩は〈略〉。又暗い時の飛行に馴れさせて、夜間に使ふ事も出来るし、〈略〉。

十584 鳩は〈略〉。〈略〉。又戦争の時戦線から戦状を報じたり、援兵を頼んだりするに使ふのも其の一つである。

十853 石 『燃える石』といふひやうばんが高くなつて、附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。

十863 又國內で出来るものを使ふよりも、時には外國の品を使ふ方が都合のよい事もある。

十863 又國內で出来るものを使ふよりも、時には外國の品を使ふ方が都合のよい事もある。

十一882 父は空をながめて、「〈略〉。」と、團扇を使ひながら言つた。

十一941 こんな不便な曆でも〈略〉、今でも使つてゐるものがあるやうだ。

十二229 〈略〉、見本には精良な品を使つて、實際の注文に對しては粗惡なものを送るやうな事は、〈略〉。

つか・う 「仕」(下二) 4 仕ふ
十991 図 「宋亡びぬ。御身の忠義を盡くすべき所なし。今より心を改

めて元に仕へば、富貴は意の如くならん。」

十9910 元の皇帝深く文天祥を惜しみ、ねんごろに諭して元に仕へしめんとす。

十1001 図 我は宋の臣なり。いづくんぞ二朝に仕へんや。

十一48 孔子は〈略〉。少時より學問に勵み、長じて後魯の君に仕へ、〈略〉。

つかえ 「支」 ↓さしつかえ
つかえ 「仕」 ↓しもつかえ
つか・える 「仕」(下二) 4 仕へる
「へーへー」 ↓おつかえいたす・おつかえもうす

六514 こまつてゐる所へ、御殿に仕へてゐる萬じゆがよからうと申し出た者がありました。

六551 〈略〉 手塚太郎光盛の娘が頼朝に仕へて居りましたが、〈略〉。

八113 大將の父は長府藩主に仕へて、江戸で若君のお守役をしてゐたが、〈略〉。

十二131 君と親とに真心を捧げ盡くして仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、〈略〉。

つか・える 「使」(下二) 1 使へる
「へー」
六671 或物持の所へ行くと、下男がまだ使へる小繩を捨てたと言つて、主人がひどくしかつてゐた。

つか・える 「番」(下二) 1 つがへる

「へー」

四664 よーは弓に矢をつがへ、〈略〉、ひようといはなしました。
つかさど・る 「司」(四) 1 司どる
「ーリ」

十二165 編輯・營業の二局ありて、編輯に關することは前者之を司どり、〈略〉。

つかま・える 「捕」(下二) 2 ツカマヘル つかまへる 「へー」

三403 ある日はまを通ると、子どもが大ぜいでかめをつかまへて、おもちゃにしてゐます。

三594 アブラゼミデス。〈略〉。ツカマヘヨウトシテ手ヲ出シマスト、〈略〉。

つかまつる ↓さんじようつかまつる・しつれいつかまつる・はいけんつかまつる

つかま・る 「捕」(五) 1 つかまる
「ーッ」
九1015 蛙が〈略〉。やがておもだかの莖や芹の葉などにつかまつて、後足を長く延ばし、〈略〉。

つかみかか・る 「擱掛」(五) 1 ツカミカハル
「へー」
八495 鷲ハ〈略〉。サウシテ何カ地上ニエモノヲ發見スルト、〈略〉、風ヲ切ツテマツシクラニエモノノ上ニツカミカハル。

つかみころ・す 「擱殺」(五) 1 ツカミコロス 「ーシ」

四354 フクロフハ〈略〉。〈略〉。

「略」、ホカノ鳥ヲイデメタリ、ツカミコロシテエニシタリシテアバレマハリマス。

つか・む 「擱」(四・五) 5 つかむ
「ミームー」 ↓ひつつかむ
七128 おさへて見たら、小さなかれひであつた。「丸山君、かれひだ。」と言つて、つかんで見せると、〈略〉。

九129 妹は餌をつかみて、〈略〉まきちらせば、鶏はあわてて其の方へ行く。

九571 後には麥の束が山と積んである。〈略〉、兩手で根本の所をつかんで、打臺にばたくとたゝきつける

と、〈略〉。

十一308 ねぢ伏せられながら正國、清正がよるひのすそをしつかとつかむ。

十二119 〈略〉、珍しい甲蟲が二匹ゐた。早速兩手に一匹づつつかむと、〈略〉。

つか・る 「浸」(五) 1 つかる
「ーッ」
五881 町は大てい水につか

つて、人家も七八軒流れました。
つか・る 「疲」(下二) 1 つかる
「レ」

十595 上州佐野の里に、つかれし足の歩重くだどり着きたる旅僧あり。

つかるはんと 「津軽半島」(地名) 1

津輕半島

九七六 遠くにはかすかに津輕半島が横たはり、近くには〈略〉。

つかれ 〔疲〕(名) 1 つかれ

十一八七五 〔略〕。かう思ふ瞬間、

つかれも何も忘れてしまつて、〈略〉。つかれきゝる 〔疲切〕(五) 1 つか

きる 《—ツ》

十一八六四 やうやく月島の横を通り越す頃には、もうつかれきつて氣も遠くなるばかりだ。

つかれは・つ 〔疲果〕(下二) 1 つかれ果つ 《—テ》

十一二六六 味方は今日の戦に將卒共につかれ果てて、物の用に立つべくもあらず。

つかれは・てる 〔疲果〕(下二) 2 つかれ果てる 《—テ》

十二八三 つかれ果てた人々も、親子の勇ましい働にはげまされて、〈略〉。

十二九一四 ぼろを着た農夫は玉のやうな汗をかいて田をすき起し、牛はつかれ果ててあへぎあへぎ働いてゐる。

つか・れる 〔疲〕(下二) 5 ツカレル

つかれる 《—レ》 ↓ やみつかれる

六四七六 鮭ハ〈略〉。中ニハ其所デツカレテ死ンデシマフノモアル。

六九七四 〔略〕官軍が賊のひやうらう道をふさいだので、賊は人馬ともにつかれた。

八三八 呉服屋の手代が、大きなふろしきづつみを石地藏の前におろして

休みましたが、餘程つかれてゐたものと見えて、〈略〉。

九二四五 老人は半分つかれたやうである。

十四四五 窯場から出て來た喜三右衛門は、縁先に腰を下して、つかれた體を休めた。

つかわ・す 〔遣〕(四・五) 3 つかはす 《—シ—ス》

七〇七二 明國の使者、某の陣中に参り、〔略〕。などとの廣言。〔略〕。

〔略〕。と返書をつかはしましたが、

八四二七 〔「しからば許してつかはすであらうが、其の代りと致して、白木綿を一反づつ、〔略〕持參致せ。」

十二二四四 ころにおいて彼は人を世界の各地につかはして竹を採集せしめ、〈略〉。

つき 〔月〕(課名) 2 月

二目九 八月

二一八 八月

つき 〔月〕(名) 21 月 ↓ おつきさま・ひとつき・ひとつきあまり・みつき・みつきあまり

二一八三 ネエサン、デテゴランナサイ、月ガデハジメマシタ。

二五八三 〔略〕、日ヤ月ガデテキナカツタリ、アカリガツイテキナカツタリスレバ、〈略〉。

三二七四 十五やの月がざしきのまん中までさしてゐます。

三二七六 〔「ふみ子もこんやはきつとあちらでこの月を見てゐませう。」

五五七三 晴れた日、月の夜、雪の朝、いつ見てもよい景色です。

六四四五 月と日と雷が同じ宿屋にとまりました。

六四四六 朝、雷が目をさまして見ると、月と日が居りません。

六六〇八 月の光にすかして、あちらこちらさがしますと、松の一むら立つてゐる中に、石のらうがありました。

七二〇八 すると、これまで潮の満ちてゐた稻村崎は、其の夜の月の入る頃に、二十餘町にはかに干上つて砂地にかはり、〈略〉。

九八四九 月はまだ出でざれども、空よく晴れて、満天の星は寶石をちりばめたるが如し。

九四四四 月が西の空にうす白く残り、野には朝つゆがしつとりと置いてゐた。

十二九七 〔略〕しらぐと、朝霧 野山をこめて、月のごと、日輪 ほのかに浮ぶ。

十一二八 二十日の月は上りぬ。

十一九三二 ところが太陰暦は月のみちたりかけたりする變化を本としてこしらへたもので、〈略〉。

十二三六 〔略〕はるぐと風のゆくへの見ゆるかな、すゝきがはらの秋の夜の月。

十二三三七 月のさえた冬の夜友人と二人町へ散歩に出て、〈略〉。

十二四二四 〔略〕、清い月の光が流れるやうに入込んで、ビヤノとひき手の顔を照らした。

十二四三六 月は益々えわたつて來る。

十二四三六 〔「それでは此の月の光を題に一曲。」

十二四三九 〔略〕指がビヤノの鍵にふれたと思ふと、やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が次第々々にやみの世界を照らすやう、〈略〉。

十二四四九 月の十五日を期して總攻撃を行ひ、一擧に江戸を乗つ取る手はずである。

つき 〔付〕 ↓ うまれつき・おつき・だいつき・てつき・めつき・もんつき

つき 〔搗〕 ↓ もちつき

つき 〔次〕(名) 29 ツギ つぎ 次

二八二 〔「ワタクシハアノアカイ大キナハナガスキデス。」

二八三 〔「ワタクシハアノアカイ大キナハナガスキデス。」

二八四 〔「ワタクシハアノアカイ大キナハナガスキデス。」

二八五 〔「ワタクシハアノアカイ大キナハナガスキデス。」

二八六 〔「ワタクシハアノアカイ大キナハナガスキデス。」

二八七 〔「ワタクシハアノアカイ大キナハナガスキデス。」

二八八 〔「ワタクシハアノアカイ大キナハナガスキデス。」

番も臺灣にあつて、四番目が富士山だ。「富士山の次は。」

六71図 「富士山の次は。」「内地では甲斐の白根で、一万五百尺。」「其の次は。」

八63 それは「略」、勝つた子どもを出した村が、次の年のお祭の日まで、五箇村の頭になるといふ定めであつた。

八304 先づ「略」小屋を建てる。次に其の小屋のそばへ土と石でかまをつく。

八316 さて山の木をきり倒して、「略」、又其の上になつたかま土を置いて、打固める。次にかま口から火をつけて、四五日の間、中の木をむし焼にする。

八332 さうして其の栽培については次のやうな話もあります。

九717 一關で辨當を買つた。次の平泉といふ驛を出て間もなく、「略」。

九1162 大尉はそれを取つて見ると、次のやうな事が書いてあつた。

十341 と、上手の水門が開いて、船は次の箱の中へはいる。

十343 前と同じ方法で、船はもう一段高く浮上り、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。

十784図 面白いのは、三日四日續いて寒ければ、其の次には又其のくらの間暖さが續くといふやうに、寒さと暖さがほとんど規則正しく交替

することです。

十846 歸途、事務員は次のやうな事を話してくれました。

十1035 「略」といつて、にいさんは次の室へ案内して下さる。

十10310 次の室には大きい熱帯植物類が並んでゐる。

十一468図 かくて次の夜は如何にとうかふに、畫師は前の如く夜もすがら寝ねずして、「略」。

十一534 集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不純な物を取り除き、次に薬品を入れて固まらせ、「略」。

十一729 「略」、後を追つたが、松坂の町はづれまで行つても、それらしい人は見えない。次の宿のさきまで行つてみたが、やはり追ひつかなかつた。

十一954 家が出來てから次に土地を開きにかゝつた。

十一1052図 アマゾン河は「略」。次にイグアッスの龍は、ブラジル國と隣のアルゼンチン國との境にある大瀑布にて、「略」。

十一1095図 先づ柄の長さ一間もあるなにて灌木を伐拂ひ、次にをのを振るつて大木を伐るに、「略」。

十一1227 最初にはいつたのは原料を調査するところで、「略」。「略」。次の建物にはいると、こゝには焙解窯がある。

十一1243 橋本君にうながされて、次の室にはいつた。

十二675 ゴネリルの答は如何にも言葉巧みであつた。「略」。次にリガンは「略」。

十二927 こんな事を次から次へと考へては、遂に心の苦しみにたへられなくなつて、「略」と思ひ立つに至つた。

十二927 こんな事を次から次へと考へては、遂に心の苦しみにたへられなくなつて、「略」と思ひ立つに至つた。

十二1169 次に博士は電氣の光に就いて述べた。

つきあい 「付合」(名) 1 つきあひ ↓ひとつきあい

八801図 それからこれは國の税で、「略」。軍隊や、裁判所や、外國とのつきあひや、その他いろいろの費用になるのです。

つきあ・う 「付合」(五) 1 つきあふ

《一フ》

五998図 「あぶない時に、友だちをすててにげるやうな者には、これからつきあふな。」

つきあがる 「掲上」(五) 2 つき上る 《一ル》

八513 おかあさんは取粉をのし板の上にひろげて、餅のつき上るのを待つていらつしやる。

を臼の中で丸めて、「略」。

つきあ・げる 「掲上」(下二) 1 つき上げる 《一ゲ》

八548 「略」、それでもとうとう一臼だけはつき上げた。

つきあ・げる 「築上」(下二) 1 つき上げる 《一ゲ》

五725 翌年の春、大雨がふりつゞいて、せつかくつき上げた土手が、半分ほどむくづれてしまつた。

つきあたる 「突当」(五) 1 ツキアタル 《一ル》

五258 ツバメハ「略」、物ニツキアタルカト思フト、カルクミヲカハシテ、「略」。

つきあわ・す 「突合」(下二) 1 つき合はす 《一セ》

九133図 「略」、十幾羽の鶏一つにかたまり、頭と頭とをつき合はせて、いそがしげに餌を拾ふ。

つきい・ず 「突出」(下二) 1 突出づ 《一デ》

十一323図 四國の西には佐田岬長く突出で、九州にせまりて豊豫海峡をなす。

つきかげ 「月影」(名) 1 月影

十一343図 月影のさゞなみにくだけ、漁火の波間に出没する夜景もまた一段の趣あり。

つきがわり 「月代」(名) 1 月代り

十二661 王は其の治めてあるイギリ

スを三分して娘たちに與へ、自分は

を臼の中で丸めて、「略」。

つきあ・げる 「掲上」(下二) 1 つき上げる 《一ゲ》

八548 「略」、それでもとうとう一臼だけはつき上げた。

つきあ・げる 「築上」(下二) 1 つき上げる 《一ゲ》

五725 翌年の春、大雨がふりつゞいて、せつかくつき上げた土手が、半分ほどむくづれてしまつた。

つきあたる 「突当」(五) 1 ツキアタル 《一ル》

五258 ツバメハ「略」、物ニツキアタルカト思フト、カルクミヲカハシテ、「略」。

つきあわ・す 「突合」(下二) 1 つき合はす 《一セ》

百人の家來を連れて月代りに三人の娘の許に身を寄せ、餘生を安樂に送らうと決心した。

つきぎ 「接木」(名) 3 つぎ木 接木

四55 あま柿です。これは私が生れた年、おちいさんが私のぶんにつき木をして下さったのださうです。

四62 「こいんきよさま、そのお年でつき木をなさるのですか。」

七06 農家ニテハ「略」・接木・刈込・取入レ等ヲナスニ、彼岸ヲ日アテトシテ、日ヲ定ムルコト多シ。

つきさつ 月寒 「地名」 1 月寒

十一603 市外の眞駒内及び月寒には、大きな牧場がある。

つきしたがう 「付従」(四) 1 つきしたがふ 「一ヒ」

七324 これより獅子は日夜武士につきしたがひてはなれず、武士には無二の従者となれり。

つきしま 「月島」(地名) 2 月島

十一862 第二十課 遠泳「略」。しかし月島はなかなか來ない。

十一864 やうやく月島の横を通り越す頃には、もうつかれきつて氣も遠くなるばかりだ。

つきす 「尽」(サ変) 2 つきす 盡

九428 兩將畫食共にして、なほもつきせぬ物語。

十二274 鎌倉宮にまうでは、盡きせぬ親王のみうらみに、悲憤の涙わきぬべし。

つきすえ 「月末」(名) 1 月末

七1143 代金は二口合はせて月末に送ります。

つきすすむ 「突進」(五) 1 つき進む 「一ム」

十2610 やがてボートは岸をはなれた。太波にゆり上げ、ゆり下げられながら、沖へくつき進む。

つきそい 「付添」(名) 1 つきそひ

八108 つきそひの者や見物人はかけよつて來て、「略」。

つきそいにん 「付添人」(名) 1 附添人

十一219 又民事裁判では、原告・被告の相談相手・附添人又は代理人となつて其の主張を助け、刑事裁判では、「略」ために辯護士といふものがある。

つきそ・う 「付添」(五) 2 つきそふ

「一ッ・一ハ」

八72 やがて五人の騎手は多くの人々につきそはれ、しづく馬を歩ませて、鳥居の中に集つて來た。

十186 中には、母馬がつきそつて來てゐるのめたくさんにあります。

つきだ・す 「突出」(五) 2 ツキ出ス 突出す「一シ・一ス」

九186 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、「略」、體ヲナ、メニツキ出スト、

形ガ桑ノ小枝ニ寸分違ハナイ。

十二503 湖岸線は大體單調であるが、東南岸だけは二つの半島が並んで突出してゐるためにやゝ複雑になつてゐる。

つきだ・す 「掲出」(五) 1 つき出す

「一シ」

八542 第十四 餅つき「略」。いよくにいさんがつき出した。

つきた・てる 「突立」(下二) 1 つき立てる 「一テ」

七111 舟は間もなくとまつた。船頭がさをつき立てて、それに舟をつないだ。

つきたま・う 「着給」(四) 1 着き給ふ 「一ヒ」

九118 「略」、尊はつがなく上總の國に着き給ひきといふ。

つきつき 「次次」(副) 2 次々

十一365 地圖の中の薄緑に染めてあるのが一昨年植付けた處、朱線で圍んであるのが今年伐採する處、それから次々といふの印がついてゐる。

十二954 さうして日夜次々に起つて來る心の迷をしりぞけて唯一筋に悟の道を求めた。

つき・でる 「突出」(下二) 1 つき出る 「一デ」

五576 天の橋立は海中へつき出た細長い橋で、長さは一里、はゞは四五十間。

つきなお・す 「築直」(五) 2 つきなおす 「一シ」

五737 庄屋は村の者にいろく言つて聞かせて、土手をつきなほしたが、「略」、又土手がくづれて、池のたまり水が村の中へおし出した。

五745 方々から人夫をやとつて來て、もう一度土手をつきなほした。

つきぬ・く 「突抜」(五) 1 ツキヌク 「一イ」

三497 キヨネンデキ上ツタ新道ハ、村ヲ東カラ西ヘ、マツスグニツキヌイテキマス。

つきのいり 「月入」(名) 2 月入

十一89 五月大三十日 通日 月齡 月出 月入

十一89 九月小三十日 通日 月齡 月出 月入

十一89 九月小三十日 通日 月齡 月出 月入

つぎのま 「次間」(名) 1 次の間

十二1279 一室に通されて待つてゐると、やがて西郷が出て來た。次の間には官軍の荒武者共がひかへて、何となく物々しい。

つきひ 「月日」(名) 2 月日

五25 月日とともに、國の光ががやきまざる。

六451 月と日と雷が同じ宿屋にと

まりました。朝、雷が目をさまして見ると、月と日が居りません。《略》。雷はかんしんして、「あゝ、月日の立つのは早いものだ。自分は夕立にしよう。」

つぎもの「継物」(名) 1 つぎ物

四二八 《略》、おばあさんが日あたりのよいえんがはでつぎ物をしていらつしやいました。

つきやす・し「付易」(形) 1 ツキヤスシ 《一カラ》

八五八 《略》 スベテ看板ハ商品又ハ職業ノ名、屋號等ヲ記シテ、人目ニツキヤスカラシメントスルモノナリ。

つきよ「月夜」(名) 1 月夜

七五四 《略》、月夜には波が銀色に光つて、《略》。

つ・きる「尽」(上二) 4 盡きる 《一キ・キル》

十五八 殊に要塞が敵にかこまれて、無線電信機は破壊せられ、傳令使は途中で要撃せられ、全く方法の盡きた場合などには、《略》。

十六九 《略》、だん／＼寒くなつて來たが、あやにくしも盡きてしまつた。

十一九八 《略》、夜は床に就いてから燈が盡きるまで讀む。

十一九八 《略》、燈が盡きるまで讀む。燈が盡きると翌朝すぐ手に取れるやうに、まくらもとの壁際に置く。

つく「付」(四・五) 52 ツク つく 付く 附く 着く 《一イ・一カ・一キ・

一ク》いろいろなづきかく・いろづく・おきづく・おもいつく・かたづく・かみつしまわる・かみつく・きづく・くいつく・すがりつく・だきつく・ちかづく・とびつく・とりつく・につき・ぬかづく・ねつく・ねづく・まきつく・もとづく・やけつく

一五五 ヘチマノハナガサキマシタ。ツボミモタクサンツイテキマス。

一三八 オチヨサンノウチデハ、オザシキニアカリガツイテキマス。

一四九 《略》「一ツクダサイ、オトモヲシマス。」ソレナラヤルカラ、ツイテコイ。

二五八 《略》、アナタガオアルキニナレバ、ワタクシモアルキマス。イツモアナタニツイテキマサガ、《略》。

二五八 《略》、日ヤ月ガデテキナカツタリ、アカリガツイテキナカツタリスレバ、《略》。

二六五 オヤ牛ヲソトヘ出スト、子牛モツイテイキマス。

二三四 二人はよろこんで、おぢいさんについてかへりました。

三三三 ムカシ鳥トケダモノガケンクワヲシタコトガアリマス。ソノトキカウモリハ「私ハ鳥デモケダモノデモナイカラ。」トイツテ、ドチラヘモツ

キマセンデシタ。

三七三 スルトカウモリハ「私ハ羽ガアルカラ、鳥ダ。」トイツテ、鳥ノ方ニツキマシタ。

三七五 イツマデタツテモシヨウブガツカナイノデ、中ナホリヲシマシタ。

四二六 私どもの町でも、このあひだから電とうがつくやうになりました。

五七五 《略》「をぢさん、勳章がふえましたね。一番こつちは金鶏勳章でせう。」《略》。「金の鳥がついてゐますね。」

五七五 《略》「金の鳥がついてゐますね。」「これは鶏だよ。それで金鶏勳章といふのだが、鶏のついてゐるわけは知つてゐるだらう。」

五二五 《略》、店のしるしのついた手ぬぐひと物さしが景物にはいつてゐました。

五二七 ツバメハ田ヤ畠ノ作物ニツク虫ヲ取ツタベマスカラ、《略》。

五六六 《略》よく氣がついた。

六六六 サウシテ灰ノ中ヲカキマハシテ、上ゲテ見ルト、果シテ磁石ノサキニ釘ガタクサンツイテキタ。

六六六 二三返クリカヘシタラ、針ハ残ラズ取レテ、其ノ上、折レタ針ヤサビタ針金マデツイテ來タ。

タ物デス。ラシヤフランネルトチガツテ、絲ガ細イカラ、氣ガツカナイノデス。」

七四五 川中島で前後五回戦つたが、まだ勝負がつかなくつた。

七三九 かの男は「それではこまる、ぜひ。」といひながら、人夫の後について來ましたが、《略》。

七八五 アサリヤ蛤ハ砂ヤ泥ノ中ニ居リ、カキヤアハビハ岩ニツイテキルトガアルクレドモ、カキハ一度ツイタラ決シテハナレナイ。

八四三 すると其のうちに、僕の見えてゐるのに氣がついたと見えて、じやれ合ふのを止めて、《略》。

八四五 物見高いは江戸のくせで、《略》。などといつて、四五百人のものゝ、ぞろ／＼と車の後について、思はず知らず役所の門内へ入りこみました。

九五〇 内地から來て先づ目につくのは植物で、《略》。

九五五 鳥の羽に似た大きな葉が、幹の上の方に集つてついてをり、《略》。

九五九 多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、イロ／＼珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。

九二〇 此ノ蟲ハ主ニ三止ツテキデ、《略》、全ク蘭ノ花ト同ジヤウデ、ナカ／＼見分ケガツカナイサウデアル。

九23 2 図 しかし此の農學といふ學問は、〈略〉、まだ全く手の着かない事が少くなかつた。

九57 2 〈略〉、麥を打つてゐる。〈略〉、打臺にばたくとたきつけると、

莖の先についてゐる穂が、敷いてあるむしろの上に面白いやうに飛散る。

九72 10 図 汽車は此の邊からあの川について、北へくと走るのだ。

九80 1 ふと氣がつくと、校長先生と山田先生が、箱のそばへ来て、面白さうに僕等の仕事を見ていらつしやつた。

九80 8 図 石安工場と筆太に、小屋根に上げし看板が 往來の人の目につきて、〈略〉。

九89 10 図 よく氣がついたね。

九95 5 図 登山者はかんじきをはいて、石づきの付いた金剛杖や鳶口を力に、此の坂を登るのです。

九102 1 うちの方をふりかへると、井戸端の柿の木に柿がすゞなりになつてゐるのが目につく。

九104 8 中尉の固く結んだ口もと、するどい目の光、其の様子がどうも一通りでない。利口な北風はすぐそれに氣がついた。

九109 10 北風は俄におちけがついた。

十18 10 子馬には大てい飼主の一族がついて来て、親切に世話をしてゐます。

十23 6 図 〈略〉、店の看板にも馬が

いてゐるのがよく目につきました。
十38 4 今日私は私もついて行つて見た。
十52 8 図 定期の方には利子がずつと多く附く。

十84 9 図 或日、〈略〉百姓が、たき火をしてゐると、そばの黒い岩に火がつき、煙をあげて燃出しました。

十123 2 図 外の者は少しも氣がつかないらしかつたが、あの青年は〈略〉。

十一36 6 地圖の中の薄緑に染めてあるのが一昨年植付けた處、〈略〉、それから次々といろくの印がついてゐる。

十一39 7 〈略〉、枝を打てば、〈略〉、又空氣の流通がよくなつて蟲がつかなくなるさうだ。

十一40 10 図 植林は貯金のやうなもので、植ゑてさへおけば、年々太つて利息が附いて行く。

十一52 7 〈略〉、此の組織の所まで小刀が届いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。

十一56 10 其のうちに二人はふかの來るのに氣がついた。

十一74 10 図 それはよいところに氣がつきました。

十二56 7 時計師は〈略〉、出して置いたねぢの無いのに氣が附いた。

つく「吐」(四・五) 2 つく「イー・イク」

八84 2 〈略〉、信吉はほつと息をつ

て、「〈略〉。」といつて、すぐ出かけようとした。
十90 4 図 新道づたひ車重げに ひき來る馬のつく息白し。

つく「突」(四・五) 7 つく 突く

つく「イー・イク」おつく

七45 3 信玄の家來は之を見て、後からやりで謙信をついたが、あたらない。

七66 1 〈略〉、大きな峠へかゝりますと、上から片はだぬいで、右手に手をついて、かけ下りて來る者があります。

八5 1 〈略〉、二匹ともくつぬぎに手をついて、ぎやうぎよく僕のすることを見てゐる。

九21 9 少年はひざに兩手をついて、老人の顔をじつと見つめながら聞いてゐる。

十一29 9 図 中にも加藤清正は、山際のがけ路にて敵將山路正國に出であひ、片鎌槍をしごいて突いてかゝる。

十一80 10 図 高く鼻つくいその香に、不斷の花のかをりあり。

十二125 2 しかし市中の混亂は蜂の巢を突いたやうなさわざである。

つく「就」(四・五) 5 ツク つく

就く「イー・キ」

三53 二三日マヘカラメンドリ

ガスニツキマシタ。

八63 1 図 〈略〉、多くの弟子保己一につきて學びたれば、〈略〉。

十7 8 マケドニヤといふ小さな國の王子と生れ、二十一で位につき、〈略〉。

十16 1 〈略〉、一同は元氣よく團歌を歌ひながら、夕日を浴びて歸途についた。

十一99 7 晝の仕事の合間に讀むのは勿論、夜は床に就いてから燈が盡きるまで讀む。

つく「着」(四・五) 38 ツク つく

着く「イー・キ・ク」おつく・おちつく・およぎつく・かえりつく・たどりつく・はせつく

一51 3 オニガシマヘツイテミマスト、オニドモハテツノモンヲシメテ、シロヲマモツテキマス。

三39 5 〈略〉小二郎の方が、正一よりもかへつてさきにつきました。

三42 5 〈略〉、かめはだんだん海の中へはいつていつて、まもなく

くりゆうぐうへつききました。

四83 3 むかふのてい車場へ着いたら、にいさんがむかへに來て居ました。

五57 何でも汽車に二日二ばん乗通して、こちらへ着いたのださうですから、何百里かはなれてゐるのでせう。

五87 5 其のうちに、どうやら水が二階にもつきさうになつたので、わ

たしは正男をつれて物ほしへ出ました。

五九二 八 もし間に合はないと、向ふへ大そうおくれて着くからです。

六五七 四 〈略〉、なれない道を一月あまりも歩きつづけて、やうく鎌倉に着きました。

六四四 五 昨日正午にこちらへ着いて、午後外宮へ参り、今日内宮へ参つた。

七一九 二 稲村崎の此方に着いて、賊のそなへを見渡しますと、〈略〉。

七三七 六 船で来れば、神戸から三晝夜、門司からは二晝夜で當地へ着きますが、〈略〉。

七五五 八 外國の港に着くと、見なれない形の家が並んで立つてゐます。

七六四 六 さうしてずゐぶんあぶない目にあつて、やうやう向岸に着きました。

七七三 五 二ツイタハデムキモウ二〇オクレ

七八三 八 去る三日にお差出しの編物三十反、本日無事に着きました。

八六五 三 八 九 さうしてそれが同時に決勝點へ着いた。

八六五 三 八 おとうさんは一昨日の正午無事にサンフランシスコへ着きました。

八六五 三 八 おとうさんが着いた日は、ちやうど五月のお節供の日で、〈略〉。

八六八 八 八 サンフランシスコから三日二晩汽車に乗通して、今日此のシカ

ゴに着きました。

八七一 一 四 〈略〉、今日いよく米國第一の大都會ニューヨーク市に着きました。

八七一 五 四 シカゴとニューヨークの間は九百八十哩もありますが、〈略〉、たつた十八時間で着きました。

八七四 一 四 シカゴを立つ日に、お前たちの年始状が着きました。

九六八 六 間もなく西那須野に着いた。

九七〇 四 仙臺に着いたのは午前の三時で、少しは下りた人も乗つた人もあつた。

九七三 三 午前八時盛岡に着いた。

九七六 五 午後二時二十分、汽車は青森に着いた。

九七六 七 私叔父さんに連れられて宿に着いた。

一〇八 三 或日王は部下の精兵を引連れ、〈略〉、タルスといふ町に着いた。

一〇八 三 四 宮本の伯父様の所に着いたのは昨夜七時でした。

一〇八 四 四 〈略〉、何時の間にか、地下九百尺の坑底に着きました。

一〇八 八 八 汽車で二日市驛に着いたのは午前の八時、〈略〉。

一〇八 二 二 十五分許で汽車は太宰府町に着いた。

一〇八 九 九 停車場に着いた時は午後の六時を過ぎてゐた。

一〇八 七 七 〈略〉、黄浦江といふ支流に入り、更に十海里餘りさかのぼる

と、其の西岸にある上海に着く。

一一八七 二 とうく大島についた。

一二四 九 松江を發したる汽車は〈略〉。今市を過ぎ、大社驛に着きぬ。

一二三 一 三 一 昨日朝ロンドンを出發して午後早くパリに着きました。

一二四 八 明治元年三月徳川慶喜征討の官軍は〈略〉、東海道先鋒は品川に、東山道先鋒は板橋に着いた。

つく 一 五 八 ツク つく 《一イ・カーキーク》

二四五 七 ソノウスデ米ヲツキマスト、ウスノ中カラ、マタオカネヤタカラモノガデマシタ。

二四六 五 サウシテ米ヲツイテミマシタガ、ヤツパリキタナイモノバカリデマシタ。

二四八 五 よこ町に電氣の力で、米をつく家も出來ました。

二四六 三 四 「米をつくの、上にもうすをさかさにつるしておけば、きねの上げ下しに米がつける。」

二五〇 八 餅をつく音に目がさめた。

二五三 二 四 四 目の時は、おちいさんも手つだつてつかれた。

二五三 五 八 私にもつかせてみて下さい。

二五三 九 九 まあ、ついてみるがよい。

つく 一 五 二 つく 《一ク》

二五七 三 三 〈略〉、樋をうるめる、土手をつく、いろいろの工事に、村の人は普請方のさしづをうけてはたらいだ。

八三〇 六 次に其の小屋のそばへ土と石をかまをつく。

つく 一 五 三 三 盡く 《一キークル》

一七〇 三 三 常世も、一夜の物語にうちとけては、名残なかく盡きず。

一一三 三 六 かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。

一二一〇 四 四 〈略〉、大和平野の盡くる處はるかに畝傍山・耳成山・天の香久山の三山まゆの如く、〈略〉。

つく 一 五 四 四 ツク 付く

着く 《一ク・一ケ》 けうえつけもうす・かきつく・ききつく・しめつく・すえつく・みつく

九四五 五 五 〈略〉、其ノ五人ハ、各其ノ馬ガ他人ノ手ニ渡ランコトヲ恐レテ、争ヒテ高キ價ヲツク。

九四六 六 六 カクテ價ハ次第二高クナリテ、馬ハ最モ高キ價ヲツケタル人物トナル。

一〇七 二 二 四 〈略〉、常世はちぎれたる具足を着け、さび長刀を横たへ、わるびれたる様もなく、進みて御前にかしこまれば、〈略〉。

一〇七 五 五 御名は何と付けられ候や、〈略〉。

つく 一 五 四 四 次 次 次 《一グ》

七八五 五 五 又輸入品は綿もつとも多く、砂糖これに次ぐ。

八七一 八 八 ニューヨークは人口からい

へば、ロンドンに次ぐ大都會で、七百萬以上もあるといひます。

つぐ [注] (五) 1 つぐ 《一イ》

九24 少年はつびんの湯をついで老人にすゝめた。

つぐ [継] (四・五) 5 ツグ つぐ

《一イ・グ》 ↓ うけつぐ・おつぐ

四57 おぢいさんがこの柿の木をついでいらつしやる時、

《略》。

七517 其ノ時分マデ、ヨソへ奉公ニ

行ツテキタ若イムスコガ、今デハ其ノ後ヲツイデ、朝カラ晩マデ、相

カハラズ、トンテンカン、トンテンカント、働イテキマス。

九534 おとうさんはすぐ言葉をついで、「略。」とお話しになりました。

九5410 略、社長さんは、『略。』といつて、夜を日についで働いた。

十978 二、において皇兄位をつぐ。つぐ [告] (下二) 5 告ぐ 《一ゲ

レーゲ》

十894 父と母とに暇を告げて、勇みて出づる我が家の門。

十一247 危く逃延びたる一二の兵卒、はせもどつて急を告ぐれば、

《略》。

十一492 畫師「略。」とて一枝かき添へ、又別れを告げて立

去れりといふ。

十一1278 すなはち喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、資金を悉

く救助の用に當てたりき。

十二877 此處にて林蔵はコーニ等に別れを告げ、同年九月の半ば、白主に歸着しぬ。

つくえ [机] (名) 8 つくえ 机

三778 えんがはには、夕方からいもやだんごをつくゑにのせて、お月さまにそなへてあります。

四414 にはへいたやむしろをして、そこへ火ばちや机や本箱やいろいろな物がはこび出

されました。

五28 四月四日の朝、當番で僕が机の上をふいてみると、《略》。

八49 僕がえんがはへ机を持出して、おさらひをはじめると、《略》。

九148 机の引出より養鶏日記を出し、「略。」と記入す。

十一355 「略。」と思ひながら、机によりかゝつて向ふの方をながめると、《略》。

十一1113 うき世をよそなるしづけき住居、出でては日毎畑を打ち、

入りては机に書をひもとく。

十二454 さうして其の夜はまんじりともせず机に向つて、かの曲を譜に

書きあげた。

つくし [尽] ↓ こころづくし

つくし [土筆] (名) 1 つくし

五142 朝、おさらひをすましてから、春子とつくしをつみに行きました。

つくしがたし [尽難] (形) 1 盡くし難し 《一ク》

十一1056 次にイグアッスーの瀧は、《略》、其の壯觀實に筆舌に盡くし難く候。

つくす [尽] (四・五) 16 つくす 盡くす 《一サー・シース》 ↓ おこない

つくす・かたりつくす・ささげつくす・つかいつくす

八999 君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、少しも僕等の爲につくさない。

九2510 略、大體一身一家の爲でなく、一すちに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ

事で、《略》。

九2810 歡庵以來代々力をつくして來た農學は、信季の望通り、信淵に至

つて大成したのである。

九297 略、大きな河が、一大絶壁をみなぎり落ちるのでから、其の

壯觀はとても筆や口にはつくされません。

十63 種類は大い我が國に産する限りを盡くし、産地は日本全國にわたれり。

十68 ひとりきやう掘取る者、運ぶ者、植込む者、一様に心を盡くし

て、大切に取扱ひたるによるならん。

十271 親子は死力を盡くして漕ぎに漕いだ。

十9810 宋亡びぬ。御身の忠義を

盡くすべき所なし。

十996 心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。

十1258 村長は《略》、常に力を一

村の幸福の爲に盡くすが故に、深く村民に敬愛せられて、《略》。

十一810 其の身を忘れ、よはひを忘れて、人生の爲に盡くしたる大聖の面目、《略》。

十一1126 二代の帝に盡くす真心、強敵ひしきて世をしづめんと、

《略》。

十一1144 地方人民が協同一致して自ら地方公共の事に當り、誠意其の團體の爲に力を盡くす精神が即ちそれである。

十一1172 略、地方人民は大いにこれ等の事業に力を盡くさねばならぬ。

十二22 ほどく心に心を盡くす國民のちからぞやがてわが力なる。

十二6810 唯私は子としての務を盡くしたいと思ふばかりでございます。

つくづく [熟] (副) 4 つくづく つくづく

四947 二人はたいまつを上げて、つくづくとかほを見合ひました。

十964 太郎はつくづくと自分の惡かつた事を後悔すると共に、《略》。

十一182 略、私はひとり歩きながら自分の始末のわるいことを考へて、つくづく恥づかしくなりました。

十二736 コーデリヤは眠つてゐる父

の衰へ果てた姿をつくづくと見て、
《略》。

つくり ぐいしづくり・こがねづくり・
さんがいづくり・しらかべづくり・し
らきづくり・にかいづくり・れんがづ
くり

つくりあ・げる 「作上」(下二) 2 作
り上げる 造り上げる 《一ゲ》
五48 早いのはもう繭を作り上げて
ゐます。

十367 第七 パナマ運河 《略》。最
後にアメリカ合衆國は、《略》、我が
大正三年、遂に之を造り上げたので
ある。

つくりか・える 「作替」(下二) 1 造
りかへる 《一へ》
五723 氣早な者は自分の持地を田に
造りかへたといふことだ。

つくりかけ 「作掛」(名) 1 作りかけ
五486 又うすい吉野紙のやうな作り
かけの繭の中で、《略》、一生けんめ
いにはたらいてゐるのもあります。

つくりかた 「作方」(名) 1 作り方
四754 此の人たちの田や畠
の作り方はていねいでしたか
ら、《略》。

つくりだ・す 「作出」(五) 1 造り出
す 《一ス》
十二1371 自分で思ふまゝに造り出す
創造力は、十分に發揮せられたこと
がなく、昔から殆ど摸倣のみを事と
して來た觀がある。

つくる 「作」(四・五) 54 つくる 作

ル 作る 造ル 造る 《一ツ・一ラ・
一リ・一ル・一レ》ぐかたちづくる
五106 園 「よし。其の大蛇をたいぢ
してやらう。強い酒をたくさんつく
れ。」

五272 ツバメハコチラニ居ル間ニ、
人ノ家ニスヲ作ツテ、ヒナヲソダテ
マス。
五422 お着きになりますと、間もな
くたけるが新しい家を造つて、人々
をあつめて、其の祝をしました。

五973 私ドモハブダウノ實ヲ生デタ
ベマスガ、タクサン作ル所デハ、
《略》、ホシブダウニシタリスルト申
シマス。

五973 《略》タクサン作ル所デハ、
ブダウ酒ヲ造ツタリ、ホシブダウニ
シタリスルト申シマス。
六15 園 來年もやはりあの稻を作り
ませう。

六44 《略》にはとりが、俵の山へ
上つてときを作りました。
六123 園 其ノ外、《略》小サイ物カ
ラ、《略》大キナ物マデ、皆鐵ガナ
ケレバ造ルコトガ出來マセン。

六184 行つて見ますと、《略》、小
なしめぢが列を作つて出てゐました。
六368 園 「たとひ金銀で作つた弓で
も、御命には代へられませぬ。」

六565 さあ、此の女にはゆだんが出
來ぬといふ事になつて、石のらうを

造つて、それに入れました。

六958 《略》、賊は大きなしごを作
つて、之を城の堀に渡して橋にした。
七742 見れば年取つた父といふのが、
うす暗い小窓の下で、わらぢを作つ
て居りまして、《略》。

八204 園 イカダノ大ナルモノハ
《略》、コレニ土ヲ置キテ野菜ヲ作り、
又小屋ヲ建テテ豚・鶏等ヲカヒ、
《略》。

八311 《略》、前には三尺に一尺程の
かま口を造り、後の方に煙出の口を
明けるのである。
八965 園 此所ニ高キ名古屋城アリ。
三百年前徳川家康ガ諸大名ニ命ジテ
造ラシメタルモノニシテ、《略》。

八1039 マツチは《略》、一包十箱が
十錢ぐらゐで買はれる。しかし之を
一人で造るとして、こんなに安く賣
れるであらうか。

八1046 それではマツチは、どうして
誰が造るのであらう。
八1058 分業で造ると、其の出來がよ
いばかりでなく、出來高がたいそう
多くて、《略》。

八1061 分業で造ると、《略》、一
人々々別々になつて造るのとは比べ
ものにならない。
八1065 分業はマツチの製造ばかりで
はない。うちを造るにしても、時
計を造るにしても、家を建てるにし
ても、皆これによるのである。

八1065 《略》、時計を造るにしても、
家を建てるにしても、皆これによる
のである。

九510 園 これから椰子油を取り、石
鹼・蠟燭なども造るのださうです。
九66 園 又パンの木も所々に美しい
林をつくつてゐます。

九156 園 出がけにとやの方を見れば、
《略》、をんどりは《略》、今やとき
をつくらんとする様なり。

九746 山畑に稗の作つてあるのも珍
しく、《略》。
九1002 向ふの畠には、たうのいもが
作つてある。

十1210 誰かが力石をころがして來て、
土をはらつて高橋さんの爲に席を作
つた。

十312 此の地峽に造つた運河が、世
界に名高いパナマ運河である。
十317 《略》、此の地峽を切通し、平
かな掘割を造つて、太平・大西洋
の水を通はせることは到底出來ぬ事
であつた。

十321 先づ地峽の山地を流れてゐる
河の水をせき止めて、湖を二つ造つ
た。

十362 パナマ地峽に運河を造る事は、
數百年來ヨーロッパ人のしばし計
畫したところで、《略》。

十369 米國が此の運河を造るに成功
したのは、《略》。
十883 綿花は主に印度やアメリカ合

衆國から輸入し、それに加工して綿糸や綿織物を造る。

十885 支那の豚の毛が輸入されて日本でブラシに造られ、〈略〉。

十1036 成程、緑色の絹糸で作ったのかと思はれるやうな葉もあれば、〈略〉。

十1203 宮中の御宴の事を思ひ出して詩を作られたのも此處であらう。

十1184 整頓といふのは體裁をつくることではなくて、むだをなくすことだ。

十11495 自動車・自転車のタイヤ、〈略〉・ゴム風船など、数へてみるとゴムで造ったものは實に多い。

十11496 一體ゴムは何からどうして造るのであらうか。

十11542 電氣の機械や、蓄音機の圓盤などに用ひるエボナイトといふものもゴムから造る。

十115910 未開の土地を切開いて、思ふまゝに設計して造った町であるから、〈略〉。

十11636 〈略〉、うねを作るにも、種を蒔くにも、大い機械と馬の力による。

十11761 図 〈略〉、先づ土臺を作つて、最後の目的に達するやうになさい。

十11794 それで金屬を用ひることを思ひつき、〈略〉、遂に今のやうな貨幣を造つたのである。

十11952 〈略〉、父は自分で木を切出して小さな家をつつた。

十1176 図 大神其の眞心の厚きを賞して、命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。

十1189 図 此の社にては、今も太古の法に従ひ、之によりて火を作るといふ。

十1177 図 校正終れば紙型に取り、更に之をもととして鉛版を造り、印刷機にかく。

十11376 図 あゝ、あれは僕の作つた曲だ。聴き給へ。

十11475 図 されど何れも美しき光澤を有するが上に、もみは柔かにして工作に便なれば、諸種の箱を作るに用ひられ、〈略〉。

十111046 それば 〈略〉屏風のやうな絶壁をたよりに、見るから危げな數町のかけはしを造つたものであるが、〈略〉。

十111061 〈略〉、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、神佛に堅くちかつて此の仕事に着手したのであつた。

十111142 図 彼は直に竹を以て炭素線を作りて實驗せしに、豫想以上の好結果を得たり。

つく・れる「作」(下二) 2 造れる
《一レ》

八1043 たとひ休まず働いても、一日に一包は造れまい。

八1043 かりに造れたとしても、それ

を十錢ぐらゐで賣つてはまうかるまい。

つくろい「繕」(名) 1 ツクロヒ

七511 何時カ私ノウチノツルベノ金タガゴハレタ時、ツクロヒヲタノンダラ、翌日スグニナホシテクレマシタ。

つけ 且あとかたづけ・いいつけ・うえつけ・うけつけ・おかたづけなざる・かいつけ・かきつけ・かしつけ・きりつけ・どういつひづけ・やきつけ・ゆうびんきつてはりつけ・よこづけ

つけ 且おつけ

つけくわ・える「付加」(下二) 1 附加へる 《一レ》

十二1117 〈略〉、活動寫眞のフィルムがアーク燈の熱の爲に發火して、多くの死傷者を出した話などを附加へた。

つけねら・う「付狙」(五) 1 つけねらふ 《一レ》

四927 くだうが東へ行けば、兄弟も東へ行き、〈略〉、長い間

つけねらひましたが、〈略〉。

つけひも「付紐」(名) 1 つけひも

七1078 図 清正はつけひもの頃から、

此の方のひぎの上でそだつたので、何時か見習つたものと見える。

つ・ける「付」(下二) 42 ツケル

つ ける 附ける 着ける 《一ケ・一ケル》 且いいつける・うえつける・うちつける・うりつける・おいつける・

おおせつける・おしつける・おつける・かけつける・かしつける・かたづける・きずつける・きりつける・しぼりつける・そなえつける・それにつけても・たたきつける・とりかたづける・とりつける・なぐりつける・なげつける・のりつける・はせつける・ほりつける・まきつける・みつける・むすびつける・よせつける

一182 サルガヤケドヲシマシタ。サルガミヅヲツケニイキマス

ト、〈略〉。

一472 オダイサンハソノコニ、モモタラウトイフナヲツケマシタ。

二286 図 大キナスズヲネコノ

クビニツケテオイテ、〈略〉。

二301 図 「ソレモヨイガ、ダレ

ガソノスズヲツケニイク

カ。」

二671 ツナヲツケナクテモ、ヨ

ソヘハイキマセン。

三233 そのとき正一のおぢいさ

んが、たきぎをうまにつけて

そこへきました。

四276 〈略〉大きな店はいくつ

も電とうをつけました。

四281 〈略〉、このあひだから電

とうがつくやうになりました。

〈略〉。私のうちでも二つつけ

ました。

四617 見ればへさきに長さを

を立てて、其のさをの先には、ひらいた赤い扇がつけてあります。

五七 僕は「略。」といつて、力をつけてやりました。

五三 今から日記をつけることにしました。

五二 其の尾を下して来て、さをに着けるかと思ふと、又はらをふくませて、をどり上ります。

五五 それで山へ行くにも、へうたを腰に着けてゐて、「略。」

五八 熊は死人には手を着けないと聞いているからでございます。

一九 風がひゆうつとうなつて来るたびに、濱の松は身をふるはせて、頭を地に着けさうにします。

五八 さて萬じゆは、だれか母の事をいひ出す者はないかと氣をつけてゐますが、「略。」

六五 「其ノキレイナモヤウハ、ドウシテツケルノデセウカ。」

六八 みんな氷靴を着けて、思ひくすべり方をしてゐる。

九六 すると正成は、「略」、たくさんなたいまつを出して、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。

二六 又力が強いので、荷物をつけたり、「略」たりする。

三五 町に「略」などと、日露戦争の時の大將方の名を取つてつけてあるのは面白いでせう。

八二 五箇村の人々は「略」、「略。」

など、口々に勢をつけてゐる。

三一 次にかま口から火をつけて、四五日の間、中の木をむし焼にする。

四二 「略」、白木綿を一反つ、名札をつけて、三日の間に間違なく持参致せ。」

五五 おしまひの一日には、小豆やきな粉をつけて、うちでもたべ、「略。」

八五 僕はかまを着けて、信吉と一しよに出かけた。

八二 「略」、乾かした軸木の先に薬をつける者もあり、「略。」

一〇五 「略」、薬をつけた軸木を温室で乾かす者もあり、「略。」

一八 桑ノ木ニ居ルエダシヤクトリハ、「略」、體ノ後ノ端ヲ木ニツケテ、體ヲナ、メニツキ出スト、「略。」

九〇 西洋では昔から、「略」、それ／＼小熊座・大熊座といふ名をつけてゐる。

二〇 「略」、「略」買手は、自分の見込で思ひ／＼の直をつけて、次第にせり上げる。

五五 それ故鳩の體に手紙を附けて放せば、容易に通信が出来るのである。

五七 鳩に手紙を運ばせるには、足にアルミニウムカセルロイドの細いくだを附け、「略。」

一四 五 もりにつけた長い綱はぐんぐん引張られて、「略。」

二六 光の強さに至つては非常なもので、之を燭光でいへば二三の下に零を二十六もつけて表さねばならぬ。

一四 七 のぶ子さんはちやうど、五年生の時の成績物に表紙をつけて、とちていらつしやる所でした。

一七 二 弟さんですが、あんなに氣をつけていらつしやるとは實に感心なことです。

五二 切付といふのは、「略」、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。

六四 「略」、立木や切株の根本を掘つておいて、それにくさりをつけて此のトラクターで引くと、「略。」

一四 九 「略」、職工が五六人ならんで、ガラス器にいろ／＼の模様をつけてゐる。

二七 「略」、身網にも垣網にも土俵や石などが重りに附けてある。

二五 「略」、うか／＼と兄弟垣にせめいでゐたら、日本全國にのしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。

つける「搗」(下) 1 つける「一ケル」

四四 米をつくのには、上にもうすをさかさにつるしておけば、きねの上げ下しに米がつける。

つづける「告」(下) 1 告げる「一ゲ」

二七 七 リヤ王はフランス王を其の場に呼んで、コーデリヤを勸當したことを告げた。

つづける「都合」(名) 6 都合

一六 保護色ヲモツテキルト、「略」、「略」、又コチカラ敵ヲオソフノニモ都合ガヨイノデアル。

四九 「今年ほど水の都合のよかつた事はない。」

八七 七 それに、たくさん星の中に一つだけ、年中ほとんど位置の變らないのがあるから、まことに都合がよいのだ。

八二 「でも、あんなにたくさんある星でも、それを見つけるのに大變でせう。」「それにはまた都合のよい事がある。

八三 又國內で出来るものを使ふよりも、時には外國の品を使ふ方が都合のよい事もある。

九二 太陽曆の方がよく季節にあつて都合がよいからだ。

つじ「辻」(名) 2 辻／＼まちのつじ

八五 私ほ町の辻に立つてゐる郵便函であります。

八二 北風寒き町の辻、身なりいやしき老婆には、手をかす人もあらざりき。

つじどう「辻堂」(名) 1 辻堂

一七 石垣の間でも、地藏様のかけ

でも、辻堂のえんの下でもさく。

つた「鳥」(名) 1 つた

八15 林の中へはいると、眞赤になつたつたが、松の木にからまつてをり、略。

つたい ↓いそづたい・しんどづたい・なわてづたい・みねづたい・やねづたい

つたう「伝」(下二) 1 つたふ「フレ」↓おんつたえくださる

九413 図 乃木大將はおごそかに、略。大みことのりつたふれば、略。

つたえる「伝」(下二) 3 つたへる

傳へる「一へ」

八329 これはもと野生のものでしたが、今から千何百年も前から栽培することになったのだとつたへてあます。

九726 図 辨慶が立往生をしたと傳へられてゐる衣川は、すぐ此の先にある。

十二983 釋迦は八十歳の高年に及んでも、略、各地を巡つて道を傳へてゐたが、略。

つたわる「伝」(四・五) 4 つたはる

傳はる「一ッ・一リール」

六555 義仲からは折りかへし返事があつて、略、木曾の家につたはつてゐた大切な刀を送つてよこしました。

十292 略 燈臺守の娘グレース、

ダーリングの名は、程なく國の内外に傳はつた。

十709 頃しも鎌倉より、勢ぞろへの沙汰俄に國々に傳はりぬ。

十二984 危篤の報が傳はると、略。つち「土」(名) 12 土 ↓かまつち・なまつち

二431 ヨイオヂイサンガソコヲホツテミマス、土ノ中カラ、オカネヤタカラモノガタクサン

デマシタ。

三254 むぐらもちでもとほつたやうに、土がところどころもち上つてゐます。

五712 土を掘る、略、いろくの工事に、村の人は普請方のさしづをうけてはたらいだ。

八204 図 イカダノ大ナルモノハ長サ六七十間、幅三四十間、コレニ土ヲ置キテ野菜ヲ作り、略。

八305 略、炭を焼く間ねとまりをするための小屋を建てる。次に其の小屋のそばへ土と石でかまをつく。

九153 図 略、めんどりはせはしげに幾度か土をかきちらして、餌をあさるにいがしく、略。

九174 北國ニ住ム野ウサギヤ高山ノ上ニ居ル雷鳥ハ、夏ハ略、枯葉ヤ土ノ色ニ似テキルガ、略。

九484 図 米が出来るのも、麥が取れるのも、土といふありがたいものが、めいくの骨折に對して、御は

うびを下さるのだ。

九7810 やはらかい黒い土がむくく盛上つたと思ふと、四方へくづれる。

九1005 其の隣の島にやうがが、根ぎはの赤い所を少し土からあらはして、略。

十129 誰かが力石をころがして来て、土をはらつて高橋さんの爲に席を作つた。

十一654 はてしなく續く廣野の中で、人々は略、土の香に親しんで樂しげに働いてゐる。

つち「槌」(名) 3 ツチ 槌

七499 略、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音ガ聞エマシタ。

十1283 図 やがて工廠長のふりかざしたる金色の槌は、略、切斷臺上の繫索をはつしと切る。

十二536 きりやねち廻しやピンセツトや小さな槌やさまぐの道具も、同じ臺の上に横たはつてゐる。

つちいる「土色」(名) 1 土色

九166 保護色ノ例ハイクラモアル。田ニ住ム土蛙ハ土色、木ノ葉ニ宿ル雨蛙ハ緑色。

つちおと「槌音」(名) 1 槌音

九814 図 石碑を刻む、文字をほる、槌音のみ音かしましき 廣き工場

の片すみに、略。

つちがえる「土蛙」(名) 1 土蛙

九166 保護色ノ例ハイクラモアル。

田ニ住ム土蛙ハ土色、木ノ葉ニ宿ル雨蛙ハ緑色。

つちのえさる「戊申」(名) 1 つちのえさる

十一89 図 四日 祈年祭班幣節分金星西方離隔 つちのえさる 略

つちのえとら「戊寅」(名) 1 つちのえとら

十一89 図 二日 二百十日 つちのえとら

つちのとう「己卯」(名) 1 つちのとう

十一89 図 三日 下弦後九時四十分水星東方離隔 つちのとう 略

つちのととり「己酉」(名) 1 つちのととり

十一89 図 五日 立春 つちのととり 略

つち「銃」↓ささげつつ

つち(接助) 12 つち、つち、居ならぶ子どもは 指を折りつつ、日數かぞへて、喜び勇む。

八581 図 略、下駄屋にありし人は皆、彼の姿を見送りぬ、さとすべき子にさとされし 小さき悔をいだきつ。

九126 図 綿毛に包まれたるひよこども、小さき聲を立てつち、ちよこくとかけ廻る。

九135 図 略 ひよこどもは小さき口を開きて、ぴよくと鳴きつちかこひぎはに集る。

十604 折から、たもとの雪を打拂

ひくつ、此方へ來かかれるは、此の家の主人なるべし。

十907 〔略〕、はうき手にく此方をさして 語りつゝ來る若き人々、〔略〕。

十113 6 〔略〕、船ははや方向を轉じた。〔略〕。右に左に鯨を追ひつゝ四五十メートルまで近づいた時、〔略〕。

十126 8 〔略〕、盛政は勝つてかぶとのををしめざりし油斷を悔いつゝ、俄にやみの中を退却しはじめたり。

十146 3 〔略〕、住持ひそかに行き見るに、畫師は障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ寝起する様なり。

十151 〔略〕旅行にはよき日なりなど思ひつゝ、參詣人の群にまじりて行けば大鳥居あり、〔略〕。

十127 2 〔略〕 若宮堂の舞の袖、しづのをだまきくりかへし かへしし人をしのびつゝ。

十198 3 釋迦は八十歳の高年に及んでも、なほつゞれをまとひ飢と戦ひつゝ、各地を巡つて道を傳へてゐたが、〔略〕。

つつおと 〔同音〕(名) 2 砲音 砲音 八97 6 〔略〕とゞろく砲音、飛來る彈丸。

九43 7 〔略〕 砲音たえし砲臺に ひらめき立てり、日の御旗。

つつかいぼう 〔突支棒〕(名) 1 つつかい棒

七94 7 〔困つた風だ。〕とおつしやつて、おぢいさんはかぼちや棚につつかい棒を入れたり、〔略〕。

つつがなし 〔恙無〕(形) 2 つゝがなし 〔一ク〕

九11 7 〔略〕 ふしぎや、今まで荒れに荒れぬる大海、おのづから静まりて、おだやかなる屈となり、尊はつゝがなく上總の國に着き給ひきといふ。

十123 6 〔略〕、思出の深き船路や、つゝがなく今日しも果てて、船は今靜かに歸る、懐かしき故郷の港。

つづき 〔あめつづき・じつづき・てんきつづき・まちつづき

つづく 〔突〕(五) 2 ツツク 〔一キ〕

三9 2 ヒヨコハ 〔略〕。〔略〕、キイロイクチバシデ、トキドキデメ

四36 6 鳥ハ大キナコエデワル口ヲイヒ、太イクチバシデツ

ツキマス。 つづく 〔続〕(四・五) 31 つづく 續

く 〔一イ・一ク・一ケ〕 〔うちつづく・さきつづく・ふりつづく

五78 2 親のほねをりが子の時になつてあらはれたのであらう、あの家にはよい事がつゞいて、身代は前よりもよくなった。

六20 6 第五 海 一 しけ 〔略〕。こんな時には、「これが五日もつゞ

くと、ひぼしだ。」と言ふれふしのこゑが、其所此所にします。

六21 3 〔略〕 空もみどり、海もみどり、空につづく海のみどり、海につづく空のみどり、すみきつて、かゞみとかゞみ。

六21 4 〔略〕 空もみどり、海もみどり、空につづく海のみどり、海につづく空のみどり、すみきつて、かゞみとかゞみ。

六73 3 又三條の大橋から川上を見ると、川原が遠く北につゞいて、其のさきにやさしい姿の山がかすんで見えます。

六83 2 通有は 〔略〕、敵の船へをどりこんだ。味方は後からくつゞいていた。

七51 〔略〕 一年生を先頭に、二・三・四・五・六年が 四列になりて歩く時、全校生徒の八百は 八十間もつゞくなり。

七56 〔略〕 八百萬の小學生 四列になりて歩かんか、八十萬間つゞくべし。

八89 〔略〕、五匹の馬は一さんにかけ出した。始の間はあまり甲乙はなかつたが、半行程の所から一騎後れ、二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、〔略〕。

八35 2 〔略〕、此の婦人は長生をしましたが、一生の間仕合はせのよい事がつゞいたと申します。

九22 8 〔略〕 それから元庵様・不昧軒様

二代つゞいて、其のお志をおつぎになり、一そう研究を進められた。

九32 6 しつとりとしめりを帶びた一すぢの道が、足もとからうねくつゞいて、やがて茂みの中にかくれてしまふ。

九69 4 〔略〕、汽車は果もなく續いてゐる青田の中を走つてゐた。

九76 6 北海道に渡る人は、停車場に續いた乗船所から汽船に乗るのである。

九94 8 〔略〕 雪溪は谷を埋めた雪の坂で、ふもとの村から三里ばかり登つた所から始つて、頂上近くまで續いてゐます。

十15 8 高橋さんの熱心な話は、それからそれへと續いて、團員に強い感動をあたへた。

十22 2 〔略〕 此の町では、二歳駒の市が十日間も續いて、〔略〕。

十30 9 北アメリカが南アメリカに續く部分は、パナマ地峽といつて、地形がきはめて細長くなつてゐる。

十40 1 〔略〕「しかし天氣が續いてよいあんばいだ。」

十77 5 〔略〕 こちらへ來てもう三月餘りになりますが、よくも續くと思ふくらゐの天氣續きで、〔略〕。

十78 3 〔略〕 面白なのは、三日四日續いて寒ければ、其の次には又其のくらの間暖さが續くといふやうに、

《略》。

十785 面白いのは、三日四日續いて寒ければ、其の次には又其のくらの間暖さが續くといふやうに、《略》。

十128 海軍大臣の命名書朗讀、

《略》、續いて造船部長の指揮につれて吹く進水主任の號笛を合圖に、着々と進み行く進水作業。

十一275 秀吉は、《略》、「者ども續け。」と馬にむちうつて近江に向ふ。

十一356 《略》向ふの方をながめると、うね／＼と續く岡が雨に煙つて、ぼんやりと遠く見える。

十一619 《略》、眼下には廣々とした十勝の大平野がはるばると續いて、末は青い大空に接してゐる。

十一635 此の邊の農業は總べて規模が大きい。《略》、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。

十一653 はてしなく續く廣野の中で人々は《略》、土の香に親しんで樂しげに働いてゐる。

十二3810 ベートーベンは急に戸をあけてはいつて行つた。友人も續いてはいつた。

十二97 釋迦は世を救ふ手始として先づかの五人の友をたづねた。《略》。續いて釋迦はマガダ國王をたづねて《略》。

十二1314 警衛の兵士等は、安芳の姿を見るときに一時に押寄せて來たが、西郷が後に續いてゐるのを見て、一同恭しく捧げ銃の禮をした。

つづく「統」(下) 2 つづく《一ケ》

七565 船長はコップの水を一口飲みて、又其の話をうつて。

八64 或夜弟子をあつめて、書物を教へし時、風にはかに吹きて、ともし火きえたり。保己一はそれとも知らず、話をうつてたれば、《略》。

つづけさま「統様」(名) 2 つづけ様續けさま

九354 やうやく清水まで來て、手の切れるやうにつめたいのを三三ぱいつづけ様に飲んでゐると、《略》。

十43 山鳥が一羽飛立つた。同時に獵銃の音が續けさまに二發聞えた。

つづく「統」(下) 8 つづける續ける《一ケ》あるきつづける・うちつづける・おもいつづける・よみつづける

七747 《略》、年よりはちよつとふりかへりましたが、何ともいはず、すぐ又仕事をつづけました。

九613 千數百人の乗員は、今もなほ安らかに眠を續けてゐる。艦内は深山のやうな静かさである。

九709 叔父さんはなほ言葉を續けて、《略》。

十一567 老砲手は氣ちがひのやうになつて、「逃がろ／＼。」と聲を限りに叫んでゐるが、二人の耳にははいらぬのか、夢中で泳ぎくらを續けてゐる。

十一77 宣長は眞淵の志をうけつぎ、三十五年の間努力に努力を續けて、遂に古事記の研究を大成した。

十一906 父はなほ言葉をうつて、「厝を見れば、まだいろ／＼大切な事がわかる。

十一1013 リンカーンは《略》、非常な熱心と努力とをもつて勉強を續けた。

十二12910 安芳は尚言葉を續けて、《略》。

つっこむ「突込」(五) 1 突つこむ《一》

十一1234 細長い管の一端を、とけたガラスの中に突つこんで引出すと、先に赤い玉がくつついてゐる。

つつき「筒先」(名) 1 銃先

十二1316 次第によつては、或は君等の銃先にかゝつて死ぬかも知れぬ。

つつじ「躰躰」(名) 3 つつじ つつじ

三205 八 わらびとり 《略》。《略》、二人はまつやつつじのあひだをあちらこちらへく／＼つてとりました。

かゝりて、身のはたき自由ならず。

十一313 清正手早くかぶとのをを切つたりければ、かぶとはつゝじの枝に残つて、二人はしつかと組みたるまゝ、ころ／＼と轉び落つること三十間許。

つつしみぶかい「慎深」(形) 1 つゝしみ深い《一イ》

十1222 きれいすきで、つゝしみ深いことは、それでよく分りました。

つつしむ「慎」(四・五) 4 つゝしむ 謹む 《一ミーン》

七1058 秀吉は清正を召出して、「《略》。」とたづねました。清正はつゝしんで、「《略》。」と、べんぜつさわやかに申し開きました。

八445 第十二 手紙 一 小ぞうから主人へ 謹んで申し上げます。

十23 拜殿の前に進みて整列し、謹みて拜し奉る。

十728 時頼は尚一同に向ひて、「《略》。」一同謹んで承る中に、《略》。

つつそで「筒袖」(名) 1 つつそで

三722 こちらの かすりの つつそでは 太郎の あはせで、《略》。

つたつ「突立」(五) 2 つつ立つ 突立つ 《一ッ》

五802 矢は狐の鼻のさきの地面につつ立つて、狐はころりとたふれま

した。

十二1043 《略》、川沿の道をたどつて行くと、左手の山は次第に頭上にせ

まり、遂には路の前面上突立つて人のゆくてをさへぎつてしまふ。

つっつきまわる 「突回」(五) 1 ツ

ツツキマハル 「一リ」

一523 「略」、オニドモハテツノ

モンヲシメテ、シロヲマモツ

テキマス。「略」。キジハツツツ

キマハリ、サルハヒツカキマハリ

イヌハカミツキマハリマス。

つつぶす 「突伏」(五) 1 つつ伏す

《一シ》

十一585 砲手はその結果を見るのを

おそれるやうに、手で顔をおほつて

大砲の上につつ伏した。

つつみ 「包」(名) 2 つつみ 包 ↓

こづつみ・こづつみびん・ひとつ

み・ふろしきづつみ

三288 「略」、つつみ かかへて

がくかうへ つれだちいそぐあ

ねおとと。

八393 目をさまして見ると、ふろし

きづつみがありません。包の中には

白綿が五十反ばかりはいつてゐた

のでございます。

つつみがみ 「包紙」(名) 1 包紙

八105 マツチの製造所へ行つて見る

と、《略》。《略》、箱に入れたのを十

づつ集めて包紙に包む者もある。

つつむ 「包」(四・五) 12 つつむ 包

む 《一マー・ミーム・ーン》

七677 五十兩は黄色なきれにつゝ

んであつて、《略》。

八105 マツチの製造所へ行つて見る

と、《略》。《略》、箱に入れたのを十

づつ集めて包紙に包む者もある。

九125 綿毛に包まれたるひよこど

も、《略》。

九608 東の空が明るくなると、今ま

で軍港のやみに包まれてゐた軍艦の

壮大な姿が、だん／＼にあらはれて

来る。

十302 図 しめやかに、夜の霧

またをつゝみ、立並ぶ家々、とも

しびうるむ。

十542 《略》、美しい羽毛に包まれた

圓い胸、鳩は見るからに愛らしいも

のである。

十701 図 始は身の上をつゝみ、貧の

恥をつゝまんとして宿をことわりし

常世も、《略》。

十701 図 始は身の上をつゝみ、貧の

恥をつゝまんとして宿をことわりし

常世も、《略》。

十一327 図 此の四海峽に包まれたる

細長き内海を瀬戸内海といふ。

十一337 図 春は島山かすみに包まれ

て眠るが如く、《略》。

十一3910 生きた枝でも枯れた枝でも

其のまゝにしておくと、木が太るに

つれて其の枝を包んで行くために、

其處が節になるのだといふ。

十二1008 春は若草山の芝緑にもえ

たち、三月堂・二月堂霞につゝまれ

てさながら夢の如く、《略》。

つづら 「葛」(名) 2 つづら

三703 たんすやつづらから着物

を出して、《略》。

四418 つづらや長持も出されま

した。

つづりかた 「綴方」(名) 1 つづり方

五156 つづり方の時間に、すゞめが

教室の中へとびこみました。

つづる 「綴」(五) 1 つづる

《一ツ》

七743 《略》、妻はろばたでほろを

つゝつて居ります。

つづれ 「綴」(名) 1 つづれ

十二982 釋迦は八十歳の高年に及ん

でも、なほつづれをまとひ飢と戦ひ

つゝ、各地を巡つて道を傳へてゐた

が、《略》。

つて (接助) 1 つて

十961 図 「僕何だかきまりが悪くつ

て、さう言へなかつたのです。」

つても (接助) 1 ツテモ

九1219 図 ソンナエライ方ナラ、オト

ウサンガワザ／＼オ歸リニナラナク

ツテモ大丈夫デセウ。

つと (訓) 5 つと

七305 図 昔一匹の獅子、森の中に

眠りしに、後の暗きやぶかげより大

いなる蛇つと出でて、獅子のからだ

にまきつきたり。

七336 図 獅子はかなしげにほえて、

濱べに立上りたりしが、つと海の中

にをどり入りたり。

八762 之を聞いたコロンブスは、つ

と立つて、食卓の上のうで卵を取り、

「《略》。」といひました。

十一577 ものすごい程青白くかはつ

た老砲手の顔には、決心の色が浮ん

だ。つと大砲のそばへ寄つて、急い

で弾丸をこめ、ねらひを定めた。

十二434 ひき終るとベートーベン

は、つと立上つた。

つとむ 「努」(下二) 2 つとむ 《一

ムル》

十995 図 父母の病あつければ、醫

藥の効なきを知りても、尚治療につ

とむるは人情の常にあらずや。

十1263 図 其の他の教員も、校長を模

範として専心職務につとむるが故に、

生徒は皆よく之になつて課業には

げみ、《略》。

つとめ 「勤」(名) 4 務

八804 図 國の税は勿論、縣の税も村

の税もみんな大事なもの、之を納

めることは國民の務です。

九645 兩舷直といふのは、特別の務

のあるものをのぞいた外の水兵のこ

とである。

十二6810 図 唯私は子としての務を盡

くしたいと思ふばかりでございます。

十二1364 《略》、かういふ短所はやが

て我が國民から消去するであらうが、

出来る限り早く之を一掃することは

我々の務ではあるまいか。

つとめおり 「勤居」(ラ変) 1 勤め

使用者の役目を務めると聞いては、誰

六八四 敵は此のいきほひにおそれて

常〔名〕4 常

十一 71 文 孔子常に中正不偏を貴び

略。

十一112 〈略〉、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。
 十一114 9 又市町村長が其の事務を處理するにも、議員が豫算を議するにも、常に此の公平な精神をもつてしなければならない。
 十一116 3 それであるから人々は常に自治制の本旨を辨へ、協同一致して團體の福利を増進することを心掛けねばならない。
 十二62 9 國 アメリカ合衆國の國旗は一定不變の部分と、變化を許されたる部分とより成る。〈略〉、藍地中の星章は、常に州の數と一致せしむるを定めとす。
 十二64 10 故に我等は、自國の國旗を尊重すると同時に、諸外國の國旗に對しても、常に敬意を表せざるべからず。
 十二90 5 我々は常に國法にしたがつて幸福な生活を営み、あはせて國の品位を高めることにつとめなければならぬ。
 十二120 3 國 國 私のこと御心にかけ下され、常に「略。」と仰せらるゝ由、〈略〉。
 十二138 10 我が國民の長所・短所を數へたならば、〈略〉。我々は常に其の長所を知つて、之を十分に發揮すると共に、〈略〉。
 十二139 1 我々は常に其の長所を知つて、之を十分に發揮すると共に、又

常に其の短所に注意し、〈略〉。
 つねよ 「常世」(人名) 4 常世 じさのげんざえもんつねよ
 十70 2 始は身の上をつゝみ、貧の恥をつゝまんとして宿をことわりし常世も、一夜の物語にうちとけては、名残なく盡きず。
 十70 9 常世は、時こそ來れと、やせ馬にむちうつてはせつたり。
 十71 2 諸國の大名・小名きら星の如く並べる中に、常世はちぎれたる具足を着け、さび長刀を横たへ、わるびれたる様もなく、進みて御前にかしこまれば、〈略〉。
 十72 8 一同謹んで承る中に、常世は有難き身にしみ、喜にみちて御前を退きけりとぞ。
 つの 「角」(名) 2 ツノ
 一21 5 國 デンデンムシムシ カタツムリ、〈略〉。ツノダセ、ヤリダセ、アタマダセ。
 二65 4 子牛 ハコノ アヒダ ウマレ タノ デス。〈略〉。ケレドモ マダ ツノ ハハエマセン。
 つのまた 「角又」(名) 2 ツノマタ
 七85 7 海藻ニハイロくアル。〈略〉。糊ニスルモノニハ、フノリヤツノマタガアリ、〈略〉。
 七85 國 ツノマタ
 つのゝる 「墓」(四・五) 4 つのる
 《一ッーリール》
 六66 8 或村に大火事があつて、一村

ほとんど丸やけになつた。其のとなり村の青年たちが見かねて、方々へ義捐金をつのりに出た。
 十一27 6 五十人の兵は行くく百姓をつのり、かゞり火をたかせ、糧、食の用意をなさしむ。
 十一126 4 一代の事業として一切經を出版せん事を思立ち、〈略〉、廣く各地をめぐるて資金をつのること數年、〈略〉。
 十二70 3 〈略〉、王の怒はいよくつので、もうどうすることも出來ない。
 つばさ 「翼」(名) 3 ツバサ
 八48 4 第十三 鷲 〈略〉。ア クマデモガンジヨウツバサ・尾、何所ニ一分ノスキモナク、強ミガ全身ニミチミチテキル。
 八49 1 スナハチ一間餘モアルツバサ ヲハツテ、數分ノ間羽バタキ一ツセズ、空中ヲノシテ行ク。
 八49 4 〈略〉、スウツト下リテ來テ、急ニツバサヲチヤメ、風ヲ切ツテマツシクラニエモノノ上ニツカミカ、ル。
 つばめ 「燕」(課名) 2 ツバメ
 五目9 ハ ツバメ
 五25 6 ハ ツバメ
 つばめ 「燕」(名) 4 ツバメ つばめ
 五25 7 ツバメハトブコトガ上手ナ鳥デ、〈略〉、矢ヨリモ早クトンデ行キマス。

五27 1 ツバメハコチラニ居ル間ニ、人ノ家ニスヲ作ツテ、ヒナヲソダテマス。
 五27 4 ツバメハ田ヤ畠ノ作物ニツク虫ヲ取ツテタバスカラ、人ノヤクニ立ツ鳥デス。
 五81 8 かりまたは、矢じりがつばめの尾のやうにわれた、たいそうするどい矢で、〈略〉。
 つぶ じごまつぶ・さんしせんつぶ
 つぶ・す 「潰」(五) 1 つぶす 《一ス》じふみつぶす
 十一96 7 〈略〉、父は學校へ行つて時間をつぶすよりも畠に出て働いた方がよいといつて、〈略〉。
 つぶて 「礫」(名) 1 ツブテ
 五25 7 ツバメハトブコトガ上手ナ鳥デ、ツブテノヤウニトンデ來テ、物ニツキアタルカト思フト、カルクミヲカハシテ、〈略〉。
 つぶやく 「弦」(五) 1 つぶやく
 《一キ》
 十45 2 喜三右衛門は〈略〉「あ、きれいだ。あの色をどうかして出したいものだ。」とつぶやきながら、又窯場の方へとつて返した。
 つぶる 「瞑」(五) 2 つぶる
 《一ッ》
 四66 1 しばらく目をつぶつて、神様にいのつてから目をひらいて見ると、〈略〉。
 十80 3 〈略〉、じつと目をつぶつてゐ

るうちに、何時の間にか、地下九百尺の坑底に着きました。

つづれる「潰」(下一) 1 つづれる

「一レ」よりいづづれる

九〇八 砲口はかかるがはるいなづまのやうな砲火をはいては、耳もつづれさうにほえ立ててゐる。

つづ「坪」よりいづづ・ひとつづ・ひやくごじつづ・やくにじゅうにまんづづ

つづ「壺」よりいづづ

つづみ「舊」(名) 2 ツボミ つづみ

一五三 ヘチマノハナガサキマシタ。ツボミモタクサンツイデキマス。

九三二 略、春蘭のつづみのふくらんだのも見える。

つま「妻」(名) 15 妻

五七五 しまひには妻や子どもの着がへまでもないやうになつた。

五七六 略、庄屋の妻は子どもをつれて里へ歸つてゐた。

五七四 其の後村の人は、庄屋の家屋敷や田地を買ひもどして、妻や子どもに、もとの家へ歸つてもらつた。

七二二 其の上あなたのお名前をうけたまはりたうございます。妻や子どもに、朝晩おねんぶつのかはりにとなへさせます。

七二九 家には七十近い父と、三十になる妻と、三つになる子どもがある

るので、略。

七四三 略、妻はろばたでぼろをつづつて居ります。

七四七 妻もまた「せつかくですが。」といつて、相手になりません。

九一五 八 我には妻も子も有りません。

一四六 略、年とつた燈臺守が、妻と娘と三人で、わびしく其の日を送つて居た。

一六〇 九 略、此方へ來かかれるは、此の家の主人なるべし。略。ふと我が妻を見つけて、「此の大雪に、どうして出かけたのか。」

一六一〇 略、すくく」と立去る僧の後影を見送りたる妻は、やがて夫に向ひて、「略。」

一六二 八 同情深き妻の言葉に、主人はいたく心動きて、「略。」

一六四 五 からうじて僧をともしひ歸れる主人は、物かげに妻を呼びて、「略。」

一六五 一 ちやうど有合はせの粟の飯、召上るならと妻が申してをりますが、いかゞでございませう。

一六九 一 父のいさめも妻のなげきも、此の決心をひるがへすことは出来なかつた。

つまさき「爪先」(名) 1 爪先

八八六 信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をなして、頭の前から足の爪先までながめたが、しばらくして、「略。」

つまずく「躓」(五) 1 つまづく

「一イ」
八九七 略、中程まで行つた時、信作の馬はつまづいて、前足を折つた。

つまむ「撮」(五) 2 つまむ「一マーン」

一五五 九 女の子は略、やがてかの小さなねちを見附けて、「略。」

男の子は指先でそれをつまもうとしたが、略。

一五五 一〇 やつとつまんだと思ふと直に落してしまつた。

つまめる「撮」(下二) 1 つまめる

「一メ」
一五五 一〇 男の子は指先でそれをつまもうとしたが、餘り小さいのでつまめなかつた。

つまり「詰」(副) 5 つまり

一六八 五 日本人は八萬人餘も居て、子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、英語で勉強しますが、歸つて來ると、又日本人の立てた學校へ行つて、日本語で學問をしてゐます。つまりお前たちよりもよけいに勉強してゐるわけです。

一八五 四 それから「燃える石」といふやうなばんが高くなつて、附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。これがつまり此の炭坑の始ださうです。

一八六 三 ところが此の大きな太陽も、夜の空に銀の砂をまいたやうに見える小さな星の一つと同じものだといふ。

つみ「罪」(名) 1 罪

一八二 一〇 ところで、どういふ事をすれば罪になるか、其の制裁としてどのやうな刑罰を受けるかは、法律で明かに定めてあるから、略。

つみあける「積上」(下二) 1 つみ上げる「一ゲ」

一八四 八 小ぞうさんたちは、土さうからいろいろな反物や帶地をかついで來て、お客の前につみ上げます。

つみき「積木」(名) 1 ツミ木

一八六 七 私ハ昨日大工サンカラ木ノキレヲタクサンモラツテ、友ダチトツミ木ヲシテアソビマシタ。

つみくさ「摘草」(名) 1 つみ草

七二二 第五 れんげさう 略。色が美しい上に、姿がやさしいので、

つみ草の時には、誰も之を取つて花
たばにする。

つみに「積荷」(名) 1 積荷

十二四二〇圖 略、うづたかき積
荷の中に 海山の寶を載せて、船
は今靜かに歸る、懐かしき故郷の
港。

つむ「摘」(五) 2 つむ 《一マ・一
ミ》

五十四 朝、おさらひをすましてから、
春子とつくしをつみに行きました。

九四九〇圖 もう二番茶もつまなくて
はならない。

つむ「積」(五) 8 ツム つむ 積
む 《一ン》 ↓ふりつむ

一五四〇圖 クルマニツンダタカラ
モノ、イヌガヒキダスエンヤラ
ヤ。

六二六 今このうちへ行つて見ても、
俵の山が出来てゐます。うちでも土
間に丸太を置いて、其の上につん
であります。

六三六 今日庭にはしてあるもみをす
つて、俵に入れてつんだら、三つ目
の山は出来上りませう。

六四六 略、郵便物ヲツンダ車ガギ
セイヨクカケテ來タ。

八四六 下役の者が石地藏に荒縄を掛
けて、車に積んで参ります。

八五九 略、土間の大金の上に積ん
であるせいろからは、盛にゆげが
上つてゐた。

九五九 後には麥の束が山と積んであ
る。

十四九 彼は此の後も尚研究に研究を
重ね、工夫に工夫を積んで、世に柿
右衛門風といはれる精巧な陶器を製
作するに至つた。

つめ「爪」(名) 3 爪

八四三 略、鷲ハタシカニ鳥類ノ王
デアル。略、トガツテカギノ如ク
ニ見エル爪、略、強ミガ全身ニミ
チミチテキル。

一四三〇圖 又字を書く時に指先を見る
と、爪はみじかく切つてゐました。

一四三九圖 外の者は着物だけは美しか
つたが、爪の先は眞黒になつてゐる
者が多うございました。

つめか・ける「詰掛」(下二) 1 つめ
かける 《一ケ》

八七一「今年の競馬はさぞ見ものだ
らう。」といつて、祭の當日には、
おびたしい見物人が、朝早くから
宮の境内へつめかけた。

つめた・い「冷」(形) 6 ツメタイ
つめたい 冷たい 《一・イ・カッ・
ク》

四七五 雪ノヤウニ白ウゴザイ
マスガ、雪ノヤウニツメタク
ハナク、略。

七二六 僕が一番先に海へ下りた。水
は思つたよりつめたかつた。

九三三 やうやく清水まで来て、手の
切れるやうにつめたいのを二三ばい

つゞけ様に飲んでゐると、略。

九五八圖 眞夏の日中でも、杖を握つ
てゐる手などは、何時の間にかつめ
たくなつてしまひます。

一八六 水は意外に冷たくて、まるで
水のやうであつた。

一八五 第二十課 遠泳 略。竹
島を越したと思ふと、急に水が冷た
くなつた。

つめた・し「冷」(形) 1 冷たし 《一
キ》

一四一五圖 雪降りみだるゝ冬のあ
したに、風なほ冷たき春のゆふべ
に、劉備が三顧のこよなき知遇、
略。

つめる「詰」(下二) 2 つめる 《一
メ》 ↓しきつめる・のぼりつめる・は
りつめる

七四一 翌日諸大名が伏見城の大廣間
へつめました。

七四三圖 「それでは長過ぎる。電報
はなるべくみじかい方がよい。もつ
とつめてごらん。」

つもり「積」(名) 4 つもり

三二八 むかふの方に、二本なら
んでゐるほそい竹の子は、いま
に竹になつたら、おぢいさんに、
あれで竹うまをこしらへてい
ただくつもりです。

四八一 今年、柿のあたり年で、
どの木にもよくみがなりました。
た。略。この二十五日はおぢ

いさんのめい日ですから、たく
さん取つてそなへる つもりです。

九二六圖 そこで此の父も、略、出
來るだけは骨折つたつもりである。

九三八圖 「おほめにあづかつて恐れ
入る。しかし部下の者は、最後まで
ベルギーの名譽をけがさなかつたつ
もりである。」

つもる「積」(五) 5 ツモル つも
る 《一ツ・ール》 ↓ふりつもる

二二七六圖 ツモル ツモル ユキガ、
マツ白ナユキガ。

二二七六圖 ツモル ツモル ユキガ、
マツ白ナユキガ。

四四七六圖 ちり つもつて 山となる。
五九五六圖 ちりが つもつて 山となり、
しづくがよつて海となる。

六五七圖 臺灣ではめつたに雪が降ら
ないさうだが、此の山のいたゞき
は、いつも つもつてゐるといふこと
だ。

つやつやしい「艶艶」(形) 1 つや
くしい 《一ク》

九四七 北風はたけが五尺二寸もある
黒馬で、毛はうるしのやうにつや
くしく、見るからに強さうな軍馬
である。

つゆ「露」(名) 5 ツユ つゆ 露
 ↓あさつゆ

一四二 ハスノハニツユガタマ
ツテキマス。

三三三 かへる はやなぎの つゆ

を虫とでもおもつたのでせう、
《略》。

五307 罫 つゆや時雨が色よくそめた
うらの小山に秋風吹けば、《略》。

八575 罫 國に母をや残すらん、
彼のまぶたにつゆありき。

十一1129 罫 《略》、三軍進めし五
丈原頭、はかなく露と消えしかど、
其の名はくちせず、諸葛孔明。
しよかつうめい。

つゆ 〔梅雨〕(名) 1 つゆ

五738 《略》、運の悪い時には悪いも
ので、其の年のつゆに、又土手がく
づれて、池のたまり水が村の中へお
し出した。

つゆ 〔露〕(副) 1 つゆ

九1177 罫 母も人間なれば、我が子
にくしとはつゆ思ひ申さず。

つよい 〔強〕(形) 24 ツヨイ 強い
強い 《一・イ・一・ク》 ↓ ↓ ころづ
よい

一476 モモタラウ ハダンダンオ
ホキク ナツテ、タイソウウ ツヨク
ナリマシタ。

二722 タイヘン カガツヨク、テ
シタモ大ゼイ アリマシタ。

二732 ソコデ 天子 サマカラ、ラ
イクワウトイフ ツヨイ 大シヤウ
ニ、《略》ト、オホセツケ ニナリ
マシタ。

四917 《略》、早く強く なつて、か
たきを取らうと心がけました。
五105 罫 強い酒をたくさんつくれ。

五114 間もなく大蛇が来て、《略》、
其の強い酒を飲みました。

五185 罫 むかし神武天皇がわるもの
どもをこせいばつになつた時、わる
ものどもが強く、おこまりになつ
たことがある。

五452 罫 自分にまさる者はないので、
たけると申して居りましたが、みや
こには強いお方がありになつた。
六378 罫 叔父爲朝の弓のやうな強い
弓なら、わざと敵にやつてもよいが、
《略》。

六651 《略》大キナ磁石ライタマイ
タ。鐵ヲ引ク力ガ強い。

七176 道はたや土手にさいてゐるの
はこぼれ種であらう。しやうの強い
もので、一度種が地に落ちれば、年
年其所で花がさく。

七263 馬は《略》。《略》。又力が強
いので、荷物をつけたり、荷車をひ
かせたり、田や畠の耕作に使つたり
する。

八1116 大將の父は《略》、どうかし
て大將の體を丈夫にし、氣を強くし
なければならぬと思つた。

九342 みねからすそにかけての若々
しいこずゑの色は、強い日光を浴び
て、一面に煙つてゐる。

九594 ふり上げた棒の先が、強い日
光にきらりと光る。

九1027 北風は《略》、見るからに強
さうな軍馬である。

十159 高橋さんの熱心な話は、《略》、
團員に強い感動をあたへた。

十945 其の夜又父に強く聞きたゞさ
れて、太郎はやつと今日の次第を有
りのまゝに話した。

十1011 とり／＼の花の色、むせ返る
やうな強い香、《略》、まるで春の國
に居るやうだ。

十1058 外はさつきよりも一そう風が
強くなつたのか、ガラス越しに見え
る向ふの木がひどくゆれる。

十1152 綱を次第々々にくりもどすと、
鯨は刻一刻船に近よつて来る。しか
しまだなかなか勢が強いので、《略》。

十一210 望遠鏡で見ると、太陽の表
面は全部が一樣にかゞやいてゐるの
ではなく、光の強い部分もあれば弱
い部分もあり、《略》。

十一227 若し裁判が無いとしたら、
人々相互の争がはてしなく行はれて、
しかも其の争は、力の強い者やわる
がしこい者が勝つことになるであら
う。

十一966 かうしてゐるうちに、知識
を得たいといふ彼の欲望は益々強く
なり、《略》。

つよき 〔強〕(名) 3 強サ 強さ ↓
ねばりづよき

八477 大キサカライツテモ、強サカ
ライツテモ、驚ハタシカ二鳥類ノ王
デアル。

十一23 第一課 太陽 《略》。光の

強さに至つては非常なもので、之を
燭、光でいへば一三の下に零を二十
六もつけて表さねばならぬ。

十二1054 《略》 僧があつた。《略》、
きつと結んだ口もとは意志の強さ
が現れてゐる。

つよし 〔強〕(形) 6 強し 《一・キ・
一・ク》 ↓ ↓ ころづよし・ねばりづよし
七71 罫 世界に比なき帝國の 強
き御民となるべしと。 強き御民と
なるべしと。

七72 罫 世界に比なき帝國の 強
き御民となるべしと。 強き御民と
なるべしと。

七311 罫 獅子はおどろきてふりはな
さんとしたれど、蛇はます／＼かた
くしめつたり。《略》、蛇はます
／＼強くしめつたり。

十一67 罫 孔子は正義の念強き人な
りき。

十一129 罫 鐵眼の深大なる慈悲心と、
あくまで初一念をひるがへさざる熱
心とは、強く人々を感動せしめしに
や、《略》。

十二1119 罫 然れどもこは今日のアー
ク燈に類するものにして、《略》、室
内に用ふるには、大仕掛にして光力
強きに過ぎ、實用に適せず。

つよみ 〔強〕(名) 1 強ミ

八485 第十三 驚 《略》。ジツト止
リ木ニ止ツテキルノヲ見テモ、《略》、
何所ニ一分ノスキモナク、強ミガ全
身ニミチミチテキル。

つら 〇なきつら

つらい 「辛」(形) 3 つらい 《一イ》

九二七〇 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、さぞ心細くもあらう、又つらい事もあるであらうが、《略》。

九〇三 戦地ではいろ／＼つらい事もあつたが、《略》。

一一二五 こんなところで毎日働いてゐる人たちは、どんなにつらいことであらうと思つた。

つらさ 「辛」(名) 1 つらさ

九五八 〇 《略》、始は近在の小賣店へ、毎日々々、降つても照つても、おろしに歩き廻つたものださうだが、其のつらさはとてもお前たちにわかるものではない。

つらつら 「熟」(副) 1 つら／＼

一一一七 〇 つら／＼思ふに、「《略》。」と。

つらなる 「連」(四・五) 7 連なる

《一ツ・一リール》

九八七 〇 《略》、いづれおとらぬ高山が、南から西へ連なつて、互に雄姿を競つてゐます。

一一六一 〇 右手には遠く日高境の山々が大浪のやうに連なり、《略》。

一二三二 〇 世界最美の街路といはれてゐるシャンゼリゼーの大通には、《略》、緑したゝる街路樹が目もはるかに連なつてゐます。

一二三六 〇 緑り色の水に浮ぶルソー

島、湖畔に連なる緑樹・白壁、《略》。

一二四二 〇 今若草山に登りて古京の跡を展望すれば、《略》、遠く連なる田園の間に東西に走る三筋の路は、《略》。

一二四三 〇 更に首を回らして南を望めば、《略》、其の南に一きは高く多武峯・吉野山の山々連なるを見る。

一二四四 〇 これからが世に恐しい青のくさり戸である。それは山國川に沿うて連なる屏風のやうな絶壁をたよりに、見るから危げな数町のかげはしを造つたものであるが、《略》。

つらぬく 「貫」(四・五) 2 つらぬく

貫ぬく 《一ク》

八九七 〇 〇 とゞろく砲首、飛來る弾丸。荒波洗ふデッキの上に、や

みをつらぬく中佐の叫。

一一五九 〇 《略》、市街の中央を東西に貫ぬく幅六十間の大通は、《略》。

つらねる 「連」(下二) 1 つらねる

《一ネ》

一一九八 街路をさしはさんで大商店が軒をつらね、《略》。

つり 「釣」(名) 2 つり

三二四 〇 それから二三日たつて、うらしまが舟にのつてつりを

してゐますと、《略》。

五三〇 〇 うちの前には小川が流れ、舟も浮かべば、あひるもうかぶ。つりも出来るし、およぎも出来て、

《略》。

つりこむ 「釣込」(五) 1 つり込む

《一マ》

一二三九 〇 「御免下さい。私は音楽家ですが、面白さにつり込まれ

て参りました。」

つりさげる 「釣下」(下二) 1 つり

下げる 《一ゲ》

一二五八 時計師は仕上げた時計をちよつと耳に當ててから、ガラス戸棚

の中につり下げた。

つりどこ 「釣床」(名) 3 つり床

九二六 〇 《略》、傳令員は號笛を吹きながら、「總員起し。」と呼んで、つり

床の間をぬつて行く。

九二八 〇 すると乗員は、一せいに飛起きて、手早くつり床をくぐる。

九二九 〇 これから號令が雨のやうに下る。それにつれて、つり床は正しく

一定の場所に納められる、《略》。

つりぶね 「釣船」(名) 1 つり舟

六八〇 〇 敵は高いやぐらのある大船、こつちはつり舟のやうな小舟であつ

た。

つる 「蔓」(名) 1 つる

一〇二四 〇 《略》、うつぽかづらといふものがある。葉の先からつるを出して、五六寸の細長い袋をつるしてゐる。

つる 「鶴」(名) 6 鶴 鶴

一〇九三 〇 茶屋のおばあさんに尋ねると、それは園内に飼つてある鶴の聲であつた。

一一四六 〇 其の畫がく所皆鶴にして、筆勢非凡、丹青の妙言ふべからず。

一一四七 〇 《略》、十日餘りにして、ふすまの鶴は二十四五羽となりぬ。

一一四八 〇 其の後又夜更けてうかゞひ見れば、今度はひぢを張り、足をのべ、手を口に當てて鶴の臥したる様をなせり。

一一四九 〇 「今日かき給はん鶴の姿はかやうなるべし。」

一一五〇 〇 此の一言を聞くや、畫師又かのふすまの鶴に筆を取らず、《略》。

つる 「連」(下二) 2 ツル 《一レ》

〇 うちつれゆく

七〇九 〇 〇 畫ノ長クナルニツレテ、氣候ハ次第ニ暖ク、《略》。

七一〇 〇 《略》、夜ノ長クナルニツレテ、氣候ハ次第ニ寒シ。

つるうめもどき 「蔓梅擬」(名) 2 つるうめもどき

八一七 〇 林の中へはいると、《略》、日當りのよい所には、つるうめもどきが美しい實をならべてゐる。

八二〇 〇 つるうめもどき

つるがおか 「地名」 2 鶴岡 鶴岡

六五八 〇 源頼朝が鶴岡の八幡宮へ舞を奉納する事になつて、舞姫をあつ

めました。

六五九 〇 先づ鶴岡の八幡宮へまゐつて、母の命を助けたまへといひ、《略》。

つるぎ 「剣」(名) 7 つるぎ 劍

くさなぎのつるぎ
 五116 〈略〉、みことはこしのつるぎをぬいて、大蛇をすたずたにお切りになりました。
 五121 尾をお切りになつた時、つるぎのはがこぼれました。
 五123 ふしぎに思つて、尾をさいてごらんになりますと、つるぎが一ふり出ました。
 五124 これはめづらしいつるぎだ。
 五424 尊はかみをといて、女のすがたになり、つるぎをふところにかくして、其の家の中へおはいりになりました。
 五434 此の時尊はふところのつるぎを出して、たけるのむねをおつきになりました。
 十二252 七里が濱のいそ傳ひ、稻村が崎、名將の 劔投せし古戦場。
 つるぎだけ 〈地名〉 1 劔岳
 九986 〈略〉、遠くには槍岳・穂高岳・乗鞍岳・立山・劔岳・白山など、いづれおとらぬ高山が、〈略〉。
 つるくさ 〔蔓草〕 (名) 2 つる草
 十一388 なたや鎌などでつる草を拂ひ、下枝を伐落して行くと、〈略〉。
 十一1087 園 森林には大木すき間もなく繁茂し、其の根本には、つる草・灌木など思ふまゝにはびこり居候。
 つるす 〔吊〕 (四・五) 5 つるす

《一し》
 五231 二かいのまどに萬國旗がつるしてあつて、〈略〉。
 五322 本のおさらひすました後は枝につるしたふらんこ遊。
 五463 米をつくの、上にもうすをさかさにつるしておけば、きねの上げ下しに米がつける。
 十1025 〈略〉、うつぼかづらといふものがある。葉の先からつるを出して、五六寸の細長い袋をつるしてゐる。
 十1288 艦首につるしたるくす玉ばつとわれて、〈略〉。
 つるはし 〔鶴嘴〕 (名) 5 つるはし
 十391 〈略〉、兄は「略。」といつて、かついで來たつるはしを下へ置いた。
 十4110 さうして兄は〈略〉、父のかり取つたあとを元氣よくつるはしで掘返し始めた。
 十8210 つるはしの首がこつくり／＼聞える。
 十836 つるはしの先がきらりと光る。
 十838 又つるはしをふり上げる。
 つるべ 〔釣瓶〕 (名) 1 ツルベ
 七509 何時カ私ノウチノツルベノ金タガガコハレタ時、〈略〉。
 つるりと (副) 1 つるりと
 八98 〈略〉、信作の馬はつまづいて、前足を折つた。信作はつるりとすべり落ちて、其のはずみに、ころ／＼と池の中へころげこんだ。

つれ じさんにんづれ
 つれだす 〔連出〕 (五) 1 ツレ出ス
 《一し》
 三85 一三日タツト、オヤドリハヒヨコヲニハへツレ出シマシタ。
 つれだつ 〔連立〕 (五) 1 つれだつ
 《一し》
 三291 園 〈略〉、つつみかかへてがくかうへ つれだちいそぐあねおとと。
 つれゆく 〔連行〕 (四) 1 連行く
 《一し》
 十二864 土人等林藏を珍しがりて之を他の家に連行き、大勢にて取圍みながら、〈略〉。
 つれる 〔連〕 (下二) 41 ツレルつれる 連れる 《一し》 〴〵うちつれる・おつれもうす・おつれる・ひきつれる
 三142 それでもまだあかちやんがなくときには、〈略〉、だつこをしておかあさんのところへつれていきます。
 三417 園 そのおいにりゆうぐうへつれていつて上げませう。
 四134 ワニザメハ「ソレハオモ白カラウ。」トイッテ、スゲニナカマヲ大ゼイツレテ來マシタ。
 四302 正太郎が犬をつれて、山道を通りました。
 四923 けれどもかたきのくどう

は、〈略〉、いつも大ぜいの家來をつれて居ます。
 五31 〈略〉、先生が知らない生徒を一人つれてお出でになりました。
 五226 おひるすぎおかあさんにつれて、買物に行きました。
 五632 作太郎は父につれられて、はじめて町へ行きました。
 五708 いや／＼其の年になつて、庄屋は普請方をよそからつれて來た。
 五771 〈略〉、庄屋の妻は子どもをつれて里へ歸つてゐた。
 五794 八幡太郎義家が或日安倍宗任をつれて廣い野原を通りますと、〈略〉。
 五876 其のうちに、どうやら水が二階にもつきさうになつたので、わたしは正男をつれて物ほしへ出ました。
 六572 これが萬じゆの姫で、木曾に住んで居りましたが、〈略〉、うばをつれて、鎌倉をさして上りました。
 六605 萬じゆは其の夜ひそかにうばをつれて、石のらうをたづねました。
 八55 第一犬ころ 〈略〉、二匹はいちもくさんにかけて行つたが、間もなくかはいらしいのを一匹つれて來た。
 八862 〈略〉黒い服を着た先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。
 八935 それから先生は、僕等を二年

生の教室に連れて行かれた。

八〇八ノ団 もし天氣がよかつたら、三郎さんを連れて、お晝前にいらつしやい。

八二二ノ そこで大將が四五歳の時から大將の父はうす暗い中に大將を起して、〈略〉泉岳寺へよく連れて行つた。

八三二ノ すると大將の父は「〈略〉。」といつて、大將を井戸端へ連れて行つて、着物をぬがせて、頭から冷水を浴びせかけた。

九一七ノ 保護色ヲモツテキルモノノ中ニハ、季節ニヨツテマハリノ物ノ色ガカハレバ、ソレニツレテ同ジヤウナ色ニカハルモノモアル。

九三三ノ 〈略〉、そよぐと吹く風につれて、若葉のほびがひしくと身にせまつて来る。

九五七ノ 後の山がだんだん低くなるにつれて、前の麥藁の山が見る／＼高くなる。

九六二ノ これから號令が雨のやうに下る。それにつれて、つり床は正しく一定の場所に納められる、すべての窓や出入口は開かれる。

九六八ノ 汽車が進むにつれて、關東平野はだん／＼夜の景色にかはつて、〈略〉。

九七六ノ 私は叔父さんに連れられて宿に着いた。

九九二ノ ところがめぐみ深いジュー

ターといふ神様が、それを見て、

『〈略〉。』と、すぐに親子の者を天へ連れていつて、大熊座と小熊座になつたのださうです。

一〇五五ノ 普通傳書鳩を使用する方法は、一定の飼養所から他の土地に連れて行つて、飛歸らせるのである。

一〇七六ノ 龍山はもと漢江にのぞんだ小さな町であつたが、京城の發展するに連れて次第に廣がり、兩方が町續きになつて、〈略〉。

一〇八二ノ 〈略〉造船部長の指揮につれて吹く進水主任の號笛を合圖に、着々と進み行く進水作業。

一一三九ノ 生きた枝でも枯れた枝でも、其のまゝにしておく、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

一一五八ノ 立ちこめた砲煙の薄れゆくにつれて、先づ目に入つたのは、〈略〉。

一一六六ノ 其のうちだん／＼人智が發達するにつれて、木片と木片をこすりあはせて火を得る法をさとするやうになつた。

一一六六ノ それから少し進むと、石や金を打合はせて火を出す法を考へるやうになつた。此の方法は〈略〉、マッチの使用が廣まるにつれてすたつて來た。

一一六七ノ 〈略〉、時代が進んで燃料の種類が増すにつれて、火の用途もだ

ん／＼廣くなつて來た。

一一六九ノ 夜が更けるにつれて燈がだん／＼暗くなり、今にも消えさうになつた。

一一七四ノ こゝは加工場である。調べかほの廻るにつれて、石や木や金の圓板が車輪のやうに廻つてゐる。

一二六六ノ 王は〈略〉、自分は百人の家來を連れて月代りに三人の娘の許に身を寄せ、〈略〉と決心した。

一二七二ノ リヤ王は百人の家來を連れて先づ姉娘ゴネリルの許に身を寄せた。

一二七三ノ そこでコーディリヤは夫に請うて共に家來を連れてイギリスに渡つた。

一二七三ノ 家來は〈略〉リヤ王を見附けて、コーディリヤの許に連れて來た。

つんぽ 〔疊〕(名) 1 つんぽ ↓かな
つんぽ
七九七ノ 「あゝ、さうです。それから、つんぽのまねをしてね。」

て

て 〔手〕(名) 96 テ て 手 ↓あいて・あらて・いて・うえて・うって・うらて・おおい・おんなで・かいて・かきて・かたて・かみて・くまで・さきて・しもて・そうだんあいて・とつ

て・とりて・のりて・ひきて・ひだりて・ひとで・ふたて・みぎて・やまて・やまのて・ゆくて・よせて・よみて・りようて

二二六ノ 〈略〉、ミヨチヤンハ〈略〉、小サナテヲダシテ、ウマウマトイヒマス。

三二四ノ 「おまへはてのゆびのなをしつてゐますか。」

三三六ノ 「それではてもあしもないでせう。」

三三九ノ あねは手はやくををたてて、小川の水で手をあらひ、〈略〉。

三四六ノ 〈略〉、五一ぢいさんは〈略〉、大きな手であたまをなでました。

三五四ノ ゴハンヲタベルトキニ、ハシヲモツ方ノ手ハ右デ、〈略〉。

三五六ノ ゴハンヲタベルトキニ、ハ左デス。

三六五ノ 〈略〉、オケイコノトキアゲルノハ右ノ手デス。

三六七ノ 又オモイモノヲ右ノ手ニ持ツトキニハ、カラダヲ左ノ方ヘマゲ、〈略〉。

三六八ノ 〈略〉、左ノ手ニオモイモノヲ持ツトキニハ、カラダヲ右ノ方ヘマゲマス。

三七五ノ 東ヘムイテリヤウ手ヲ

ヒロゲルト、右ノ手ノ方ガ
 南デ、左ノ手ノ方ガ北デス。
 三47 6 〈略〉、右ノ手ノ方ガ南
 デ、左ノ手ノ方ガ北デス。
 三57 2 ずんずん手が上つて、の
 ちには名高い書手となりまし
 た。
 三59 4 ツカマヘヨウトシテ手ヲ
 出シマス、〈略〉。
 三61 8 みよ子はささの小えだ
 を手にもつて、〈略〉。
 四68 1 たいそうよくなれて、私
 の手から糸をたべるほどに
 なつて居ました。
 四92 8 〈略〉、長い間つけねらひま
 したが、手を出すすきはあり
 ませんでした。
 五37 2 一匹は目に、一匹は口に、一
 匹は耳に手をあててゐます。
 五44 4 〈略〉、「しばらくお待ち下さ
 い。申したいことがあります。」と
 いひました。尊は手をおゆるめにな
 りました。
 五98 3 熊は死人には手を着けないと
 聞いてゐたからでございませう。
 六15 4 四「あ、それは紅茸だ。毒
 だよ。其の手でぐみをたべてはいけ
 ない。」
 六61 6 萬じゆがかげよつて、らうの
 とびらに手をかけますと、〈略〉。
 六62 1 萬じゆはとびらのすきから手
 を入れて、〈略〉。

六62 6 「〈略〉。」と、親子は手を取合
 つて泣きました。
 六65 4 四〈略〉、弟ガ釘箱ヲ火鉢ノ中ヘ
 ヒツクリカヘシテ、手ヲ灰ダラケニ
 シテ拾ヒハジメタ。
 六78 8 〈略〉、人の手にすがつて、こ
 はごはすべる者もある。
 六87 7 みんな手をうつてかつさいし
 た。
 六87 8 象の鼻は手の用をなすもので、
 實に力がある。
 六88 3 自分たち程の子どもが出て來
 て、象の前足にだきついて見せた。
 子どもの手がやつと合つてゐた。
 六101 6 うちの人はみんな知らずに居
 るから、一つ取つて行つて見せよう
 と思つて、手を出す、〈略〉。
 七32 3 四獅子は〈略〉、たてがみを
 ふるひ、四足をのばして後、しづか
 に近よりに武士の手をなめたり。
 七63 1 水になれた人夫の肩に乗るか、
 手をひいてもらふかして渡るのでご
 ざいませう。
 七70 1 しばらくして、「〈略〉。」とい
 つて、財布の中に手を入れました。
 七91 6 「〈略〉。」と言つて、敵はあち
 こち見まはしましたが、おばあさん
 の肩に手をかけて、「〈略〉。」
 七102 8 四「お庭先の御門を守る者が
 ございませう。某の手で固めませ
 う。」
 八4 7 〈略〉、喜んで僕の手にとびつ

いて、ペろくとなるめる。
 八5 1 四〈略〉、二匹ともくつぬぎに手
 をついて、ぎやうぎよく僕のするこ
 とを見てゐる。
 八16 9 〈略〉、もう少しで雀の巢へ手
 が届かうとした時、ふみ外して軒下
 へどうと落ちた。
 八27 9 四取る・拾ふ・握る・持つな
 どは皆手の働なり。
 八28 1 四もし手なくば、我等は如何
 に不自由ならん。
 八28 6 四〈略〉、船頭の舟をこぎ、農
 夫の田畑を耕すも、皆手の働なり。
 八28 9 四〈略〉、のみ一ちやうにて見
 事なるほり物をほりて、人を感じし
 むるも、手の働なり。
 八29 1 四手はすべて仕事のもとにし
 て、〈略〉。
 八29 2 四〈略〉、いそがしき時に、手
 の足らずといふは、働く人の少きを
 いふなり。
 八36 6 四其の子を一人の真中に置い
 て、兩方から子どもの手を取つて引
 合へ。
 八37 4 四〈略〉、子どもがいたがつて、
 わつと泣出しますと、實母の方は驚
 いて手を放しました。
 八37 9 四これ女、其の手を放せ。
 八38 2 四手を放した女が實母にきま
 った。
 八56 4 四四四〈略〉、身なりいやしき
 老婆には、手をかす人もあらざり

き。
 八78 6 四「今手に持つていらつしや
 るのは、みんな切符ですか。」
 八86 7 信吉は〈略〉、娘の手をはな
 して、頭の前から足の爪先までなが
 めたが、〈略〉。
 八95 4 信吉は〈略〉、應接室に待つ
 てゐた娘の手を取つて、幾度も先生
 におじぎをした。
 八99 5 或時、口・耳・目・手・足等
 が申し合はせて、胃に向つていひま
 すには、〈略〉。
 八100 5 さうしてそれから後は、〈略〉、
 手は食物を口へ入れることを止め、
 足は食堂へ行くことを止めました。
 九8 3 四〈略〉、美しい海底のありさ
 まが手に取るやうによく見えます。
 九23 2 四しかし此の農學といふ學問
 は、〈略〉、三代かゝつても、まだ全
 く手の着かない事が少くなかつた。
 九32 10 〈略〉十時過ぎの日かげが、
 若葉の色を下に投げるのか、手もう
 す緑、足もうす緑、〈略〉。
 九35 3 やうやく清水まで來て、手の
 切れるやうにつめたいのを二三ばい
 つぐに飲んでゐると、〈略〉。
 九38 7 四やがてレマン將軍は、萬感
 胸にみちて、かすかにふるふ手に帶
 劔をときて渡さんとするを、〈略〉。
 九43 3 四四四軍のおきてにしたがひ
 て、他日我が手に受領せば、〈略〉。
 九45 4 四〈略〉、其ノ五人ハ、各其ノ

馬ガ他人ノ手ニ渡ランコトヲ恐レテ、
争ヒテ高キ價ヲツク。

九55 5 園 それからだん／＼商賣の手
を廣げて、〈略〉。

九58 4 仕事は水入らずの三人の手で、
ずん／＼はかどつて行く。

九61 2 舷門には、銃を手にした番兵
が近くを警戒してゐる。

九75 10 〈略〉、汽車が海岸を走るので、
陸奥灣の風光が手に取るやうに見え
た。

九95 7 園 眞夏の日中でも、杖を握つ
てゐる手などは、何時の間にかつめ
たくなつてしまひます。

九105 6 北風は、主人の手がかうして
くびすぢにさはるのが何より好きだ
つたから、〈略〉。

九110 6 中尉の手はじつとして動かな
い。

九117 10 大尉は之を讀んで、思はずも
涙を落し、水兵の手を握つて、〈略〉。

九119 7 水兵は〈略〉、やがて手をあ
げて敬禮して、〈略〉。

十11 9 園 水屋の水に手を清め口をす
すぎて南神門を入れれば、〈略〉。

十21 4 園 さうして、〈略〉、掛の人が
其の直で賣渡すといふあひづに手を
打つて、取引が成立ちます。

十21 9 園 二年の年月苦勞して育てて
來たものが、急に見ず知らずの人の
手に渡つてしまふのだから、〈略〉。

十41 4 やがて父は、鎌を手にして糶

木のやぶへはいつて行つた。

十43 5 園 「かうしてみんな手をそろ
へて働けば、來年の秋はもう眞白な
蕎麥の花で、此の地面が埋まつてし
まふのだ。」

十89 3 園 〈略〉、俵あむ手のいそ
がしげなる 父と母とに暇を告げて、
〈略〉。

十111 5 園 浮きぼり・毛ぼりの 柱
にけたに、振るひしのみので 巧
をきはめ、〈略〉。

十113 6 砲手は〈略〉、其の引金に手
をかけた。

十119 2 租界といふのは居留地の一
種で、居留民が支那政府の手を離れ
て、自治制を布いてゐる處である。

十127 3 園 〈略〉 秀吉は、持ちたる
箸を投捨てて、「すは勝つたぞ。」
と手を打つて喜び、〈略〉。

十131 6 園 正國の首は終に清正の手
に入りぬ。

十136 9 「〈略〉。」とおとうさんの手
で記してある。

十147 3 園 〈略〉、今度はひちを張り、
足をのべ、手を口に當てて鶴の臥し
たる様をなせり。

十158 4 砲手は〈略〉、手で顔をお
ほつて大砲の上につつ伏した。

十175 6 園 〈略〉、何時の間にか年を
とつてしまつて、古事記に手を延ば
すことが出来なくなりました。

十183 9 手や足の關節を曲げたり延

ばしたりして、出發の號令を待つ。

十188 9 父は曆を持つて來て、
「〈略〉。」かういつて弟の手に渡し
た。

十199 8 燈が盡きると翌朝すぐ手に
取れるやうに、まくらもとの壁際に
置く。

十1106 8 園 大勢の人々が熟したる
コーヒーの實を手にてこき落し、
〈略〉。

十121 1 これも逃しては大變と、い
きなり右の手の蟲を口の中へ投込ん
だ。

十142 3 。ベーターベンはひく手を
止めた。

十175 3 コーデリヤは父の手を取つ
て泣きながら、「其のコーデリヤで
ございます。」

十179 4 漁夫はめい／＼手に一ちや
うづつの鈎を持ち、狂ひ廻るまぐろ
を引つかけ、〈略〉。

十1107 6 〈略〉、十年一日の如く黙々
としてのみの手を休めない僧の根氣
とを見た村の人々は、〈略〉。

十1211 9 今では此の洞門を掘りひろ
げ、處々に手を加へて舊態を改めて
はあるが、〈略〉。

十1213 8 園 何心なく手に取りて眺め
ゐたりし彼の眼は異様に輝きぬ。

て (接助) 441 テ て ↓あらためて・
あわせて・いたつて・おして・おつ
て・かえつて・かくして・かくて・か

さねて・かねて・きわめて・けつし
て・こうして・ここにおいて・さだめ
て・しいて・しかして・したがつて・
しゅとして・すぐれて・せめて・そう
して・それにつけても・ついで・ついで
ては・どうして・どうしても・とつて
かえず・において・はじめて・はたし
て・ひいて・まして・もつて・よつ
て・よつて・わけても・をもつて

一14 3 サルガミツケテ トリマシ
タ。

一15 3 コガニガナイテ キマシタ。

一15 5 ハチガキテ、ナクワケヲ
タツネマシタ。

一16 2 ハチガキテ オコリマシ
タ。

一16 4 クリモキイテ オコリマシ
タ。

一16 6 ウスモキイテ オコリマシ
タ。

一19 1 ウスガオチテ キテ、サル
ヲオシツケマシタ。

一19 1 ウスガオチテ キテ、サル
ヲオシツケマシタ。

一20 6 スズシイカゼガフイテ、
ヨイコロモチデス。

一22 2 ニイサンガエヲカイト
キマス。

一22 4 ネエサンガジヲカイト
キマス。

一22 7 マサヲガソバデミテキ
マス。

- 232 ホタルガトンデキマス。
 242 ハスノハニツユガタマツテキマス。
 255 ツボミモタクサンツイテキマス。
 293 ヤマニハ、キガウエテアリマス。
 297 カハニハ、ハシガカケテアリマス。
 301 阿ヒルガオヨイデキマス。
 302 ナンバキルカ、カゾヘテグランナサイ。
 322 ヒノミノカネガナツテキマス。
 324 ヒケシガトンデキマス。
 326 トビグチヲカツイデキマス。
 341 ガンガトンデキマス。
 346 ガンガトンデキマス。
 366 ナンベンモカキナホシテ、ニイサンニミセマシタ。
 372 「ニイサン、ミテクダサイ」。
 375 ハナハソレデヨイカラ、ハヲチヒサクシテ、モウーペンカイテグランナサイ。
 376 阿略、モウーペンカイテグランナサイ。
 386 オチヨサンノウチデハ、オザシキニアカリガツイテキマス。
 452 オバアサンガセンタクヲシテキマス、ト、阿略。
 453 阿略、オホキナモモガナガレテキマシタ。
 456 オバアサンハソノモモヲヒロツテカヘリマシタ。
 465 阿略、モモガニツニワレテ、ナカカラオホキナヲトコノコガウマレマシタ。
 475 モモトラウハダンダンオホキナツテ、タイソウツヨクナリマシタ。
 497 「ソレナラヤルカラ、ツイテコイ」。
 501 イスヲケライニシテイキマス、サルガキマシタ。
 504 サルモダンゴヲモラツテ、ケライニナリマシタ。
 511 キジモダンゴヲモラツテ、ケライニナリマシタ。
 513 オニガシマヘツイテミマスト、阿略。
 516 阿略、オニドモハテツノモンヲシメテ、シロヲマモツテキマス。
 517 阿略、オニドモハテツノモンヲシメテ、シロヲマモツテキマス。
 521 モンヲヤブツテセメコミマシタ。
 532 モモトラウハカタナヲヌイテ、一バンオホキナオニニムカヒマシタ。
 535 オニドモハカウサンシテ、ダイジナタカラモノヲダシマシタ。
 527 イロイロナハタガカゼニヒラヒラシテキマス。
 536 グランナサイ、ミンナガチカラヲイレテ、一シヤウケンメイデス。
 544 オハナトオチヨガオキヤクアソビヲシテキマス。
 547 オチヨガオキヤクニナツテキマシタ。
 561 オハナハオチヨヲザシキヘトホシテ、オチヤトオクワシヲダシマシタ。
 584 「ソノツギハ、アノタクサンサイテキル、小サナキイロイキクデス」。
 593 マタキリツケルト、トビノイテ、ペンケイノナギナタヲウチオトシマシタ。
 595 ペンケイハトウトウカウサンシテ、ウシワカマルノケライニナリマシタ。
 596 木ノエダニ、コトリガ十バトマツテキマシタ。
 597 木ニマダナンバトマツテキマセウカ。
 598 犬ガサカナヲクハヘテ、ハシノウヘヲトホリマシタ。
 599 ソノサカナモホシクナツテ、ワントーコエホエマシタ。
 599 ホエルト、口ガアイテ、クハヘテキタサカナハ、川ノナカヘオチテシマヒマシタ。
 599 阿略、クハヘテキタサカナハ、阿略。
 599 阿略、クハヘテキタサカナハ、川ノナカヘオチテシマヒマシタ。
 599 人ガボツボツタンボカラカヘツテキマス。
 599 子ドモガ大ゼイ、オモテデーシヨニウタツテキマス。
 599 ネエサン、デテグランナサイ、月ガデハジメマシタ。
 599 マツノ木ノアヒダガダンダンアカルクナツテキマス。
 599 一メンニアカルクナツテ、ヒルノヤウデス。
 599 阿略、キツトクリガオチテキマス。
 599 サガシテミマセウ。
 599 阿略、アノ木ノ下ヘイツテミマセウ。
 599 ドコカラキタノカ、トンデキタ木ノハ、阿略。
 599 阿略、トンデキタ木ノハ、クルクルマハツテ、クモノスニカカリ、阿略。
 599 カゼニフカレテ、ヒラヒラスレバ、阿略。

二23 二 罎 ドコカラキタノカ、
 トンデキタ木ノハ、〈略〉、ク
 モハムシカトヨツテクル。
 二23 四 罎 ドコカラキタノカ、
 トンデキタ木ノハ、〈略〉。
 二23 五 罎 〈略〉、トンデキタ木ノ
 ハ、ヒラヒラマツテキテ、〈略〉。
 二23 六 罎 〈略〉、トンデキタ木ノ
 ハ、ヒラヒラマツテキテ、イ
 ケノ上ニオチテ、〈略〉。
 二23 七 罎 〈略〉、イケノ上ニオ
 チテ、ナミニユラレテ、ユラユ
 ラスレバ、〈略〉。
 二23 八 罎 〈略〉、ナミニユラレテ、
 ユラユラスレバ、〈略〉。
 二24 一 罎 〈略〉、コヒハエサカ
 トウイテクル。
 二24 二 罎 ミヨチャンガイマオカア
 サンニダカレテ、オチチヲノン
 デキマス。
 二24 三 罎 ミヨチャンガ〈略〉、オチチ
 ヲノンデキマス。
 二26 一 罎 ワタクシハマイ日ミヨチ
 ヤンノオモリヲシテアゲマス。
 二26 二 罎 ワタクシガアヤシテアゲ
 ルト、ミヨチャンハ〈略〉、ウマ
 ウマトイヒマス。
 二26 三 罎 〈略〉、ミヨチャンハカハイ
 イカホヲシテ、小サナテヲダ
 シテ、ウマウマトイヒマス。
 二26 四 罎 〈略〉、ミヨチャンハ〈略〉、
 小サナテヲダシテ、ウマウマト

イヒマス。
 二27 一 罎 コノゴロナカマノモノ
 ガ、ネコニトラレテコマルガ、
 〈略〉。
 二28 一 罎 ソノトキ一ピキノ子ネズ
 ミガマヘデテイヒマシタ。
 二28 二 罎 大キナスズヲネコノ
 クビニツケテオイテ、〈略〉。
 二28 三 罎 大キナスズヲネコノ
 クビニツケテオイテ、ソノオト
 ガキコエタラ、ニゲルコトニ
 シテハドウデセウ。
 二29 一 罎 〈略〉、ソノオトガキコ
 エタラ、ニゲルコトニシテハ
 ドウデセウ。
 二29 二 罎 〈略〉、トイツテ、ミンナ
 カンシンシマシタ。
 二30 一 罎 スルト年トツタネズミガ、
 「〈略〉」トイヒマシタノデ、ミン
 ナダマツテシマヒマシタ。
 二33 一 罎 〈略〉、田ヤハタケヲタク
 サンモツテキタ人ガアリマシ
 タ。
 二34 一 罎 〈略〉、トリヤケダモノヲ
 イコロシテ、オモシロガツテキマ
 シタ。
 二34 二 罎 〈略〉、トリヤケダモノヲ
 イコロシテ、オモシロガツテキマ
 シタ。
 二34 三 罎 アル日トモダチニユミ
 ノジマンヲシテ、「〈略〉」トイ
 ヒマシタ。

二35 一 罎 「オソナヘノモチヲマ
 トニシテ、イテミマセウカ。」
 二35 二 罎 「オソナヘノモチヲマ
 トニシテ、イテミマセウカ。」
 二35 三 罎 「モチハ〈略〉、イテハ
 イケマセン。」
 二36 一 罎 トモダチハ「〈略〉」ト、ト
 メマシタガ、キカナイデイマシタ。
 二36 二 罎 アタルト、モチハ白イト
 リニナツテ、パットトンデイキ
 マシタ。
 二36 三 罎 アタルト、モチハ〈略〉、
 パットトンデイキマシタ。
 二39 一 罎 マツクロナ目ヲシテ、コ
 チヲヲニランデキマス。
 二39 二 罎 マツクロナ目ヲシテ、コ
 チヲヲニランデキマス。
 二40 一 罎 ワタクシハネエサンニ、
 ユキデウサギヲコシラヘテイ
 タダキマシタ。
 二41 一 罎 ヨイオヂイサンハ犬ヲ
 一ピキカツテ、タイソウカハイガ
 ツテキマシタ。
 二41 二 罎 ヨイオヂイサンハ犬ヲ
 〈略〉、タイソウカハイガツテキマ
 シタ。
 二42 一 罎 ヨイオヂイサンガソコヲ
 ホツテミマス、ト、〈略〉。
 二43 一 罎 ワルイオヂイサンハソレ
 ヲキイテ、ソノ犬ヲカリニキ
 マシタ。
 二43 二 罎 サウシテムリニ犬ヲナカ

セテ、ソコヲホツテミマシタガ、
 〈略〉。
 二43 三 罎 サウシテムリニ犬ヲナカ
 セテ、ソコヲホツテミマシタガ、
 〈略〉。
 二44 一 罎 オヂイサンハハラヲタテ
 テ、ソノ犬ヲコロシテシマヒマ
 シタ。
 二44 二 罎 オヂイサンハハラヲタテ
 テ、ソノ犬ヲコロシテシマヒマ
 シタ。
 二44 三 罎 ヨイオヂイサンハタイソ
 ウカナシガツテ、犬ヲウヅメテ、
 ソノ上ニ小サナマツノ木ヲ
 ウエマシタ。
 二44 四 罎 ヨイオヂイサンハ〈略〉、
 犬ヲウヅメテ、ソノ上ニ小サ
 ナマツノ木ヲウエマシタ。
 二45 一 罎 ヨイオヂイサンハソノ木
 ヲキツテ、ウスヲコシラヘマシ
 タ。
 二46 一 罎 サウシテ米ヲツイテミマ
 シタガ、〈略〉。
 二47 一 罎 又オコツテ、ソノウスヲ
 ワツテ、火ニクベテシマヒマシ
 タ。
 二47 二 罎 又オコツテ、ソノウスヲ
 ワツテ、火ニクベテシマヒマシ
 タ。
 二47 三 罎 又オコツテ、ソノウスヲ
 ワツテ、火ニクベテシマヒマシ
 タ。

- 二47 4 ヨイオヂイサン ハソノハ
 ヒヨモラツテキテ、ニハニマ
 キマシタ。
 二47 4 ヨイオヂイサン ハソノハ
 ヒヨモラツテキテ、ニハニマ
 キマシタ。
 二48 2 オヂイサン ハヨロコンデ、
 ソノハヒヨザルニ入レテ、
 「略。」トヨンデアルキマシタ。
 二48 3 「略。」ソノハヒヨザルニ
 入レテ、「略。」トヨンデアル
 キマシタ。
 二48 7 オヂイサン ハヨロコンデ、
 「略。」トヨンデアルキマ
 シタ。
 二49 2 トノサマガオトホリニナ
 ツテ、「略。」トオホセニナリ
 マシタ。
 二49 4 花ヲサカセテミヨ。
 二49 7 ハヒヨマキマス、ト、カレ
 木ニ花ガサイテ、一メンニ花
 ザカリニナリマシタ。
 二50 5 「略。」トオホメニナツ
 テ、ゴホウビヲタクサンクダサ
 イマシタ。
 二51 1 ワルイオヂイサン ハコノ
 ハナシヲキイテ、「略。」カレ木
 ニノボツテ、トノサマノオカヘ
 リヲマツテキマシタ。
 二51 2 ワルイオヂイサン ハ「略」
 ノコツテキタハヒヨカキアツメ
 テ、「略」。
 二51 3 ワルイオヂイサン ハ「略」
 ノコツテキタハヒヨカキアツメ
 テ、カレ木ニノボツテ、「略」。
 二51 4 ワルイオヂイサン ハ「略」
 カレ木ニノボツテ、トノサマノ
 オカヘリヲマツテキマシタ。
 二51 5 ワルイオヂイサン ハ「略」
 「略」、トノサマノオカヘリヲマ
 ツテキマシタ。
 二52 1 ソノウチニ、トノサマガ
 オトホリニナツテ、「略。」ト
 オホセニナリマシタ。
 二52 2 「モウ一ド花ヲサカセ
 テミヨ。」
 二53 5 「略。」トイツテ、ワルイ
 オヂイサンハトウトウシバラレ
 テシマヒマシタ。
 二53 6 「略」、ワルイオヂイサンハ
 トウトウシバラレテシマヒマシ
 タ。
 二54 3 「ヲヂサン、コンヤモマ
 タカゲエヲシテ見セテクダサ
 イ。」
 二54 3 「ヲヂサン、コンヤモマ
 タカゲエヲシテ見セテクダサ
 イ。」
 二55 3 サア、犬デス。大キナ口
 ヲアイテ、ワンワン。
 二56 2 「ヲヂサン、ハヤクセンド
 ウサンヲ見セテクダサイ。」
 二57 1 「略」、ミンナデヤツテ
 グランナサイ。
 二58 2 イツモアナタニツイテキ
 マスガ、「略」。
 二58 3 「略」、日ヤ月ガデテキ
 ナカツタリ、「略」。
 二58 5 「略」、アカリガツイテキ
 ナカツタリスレバ、「略」。
 二59 3 太郎ノオカアサンハカゼ
 ヲヒイテネテキマス。
 二59 3 太郎ノオカアサンハカゼ
 ヲヒイテネテキマス。
 二59 6 太郎ハイマ、オカアサン
 ガオクスリヲノムトコロヘキ
 テ、「略」。
 二60 4 ニガイナラ、オサタウヲ
 入レテオアガリナサイ。
 二61 3 「ソレナラ、ソナニス
 コシツツノマナイデ、モツトタ
 クサンオアガリニナツタラ、
 「略」。
 二61 6 サウ一ドニノンデハイ
 ケマセン。
 二62 2 オクスリハ、オイシヤサ
 マノオツシヤルトホリニシテ
 ノマナケレバナリマセン。
 二62 6 私ノ目ハイツモハツキ
 リシテキテ、ヨク見エマス。
 二62 6 私ノ目ハイツモハツキ
 リシテキテ、ヨク見エマス。
 二63 1 コレデ「略」、センセイノ
 見セテクダサルイロイロナモノ
 モ見ルノデス。
 二65 7 ナンニデモスグビツクリ
 シテ、カケ出シマス。
 二66 3 日ニナンベンモナメテ
 ヤリマス。
 二66 5 オヤ牛ヲソトヘ出スト、
 子牛モツイテイキマス。
 二67 4 ダンダンアタタカニナツテ
 キマシタ。
 二70 1 ノツテミタイナヒカウ
 キニ。
 二71 7 山カラ出テ、モノヲトツ
 タリ、人ヲサラツタリシマシタ。
 二72 4 ソノ上イハヤニコモツテ
 キマシタカラ、「略」。
 二73 7 ライクワウハ「略」、山ブシ
 ニスガタヲカヘテ、大江山ヘ
 ムカヒマシタ。
 二74 7 「略」、トウトウタツネアテ
 テ、トメテクレトタノミマシタ。
 二74 7 「略」、トウトウタツネアテ
 テ、トメテクレトタノミマシタ。
 二75 3 シュテンドウジハホンタウ
 ノ山ブシダトオモツテ、トメ
 テヤリマシタ。
 二75 3 シュテンドウジハ「略」、ト
 メテヤリマシタ。
 二75 6 ソノバンシュテンドウジ
 ハサケニヨツテネマシタ。
 二76 5 ライクワウハ「略」、タチ
 ヲスルリトヌイテキリツクマシ
 タ。
 二76 6 シュテンドウジハオコツテ
 クルヒマハリマシタ。

二78 2 ライクワウノケライモ、
 シュテンドウジノテシタヲノコ
 ラズタイヂシテシマヒマシタ。
 三17 〈略〉、ハチハセツセトミ
 ツヲアツメテキマス。
 三21 ミチバタニハスミレヤタ
 ンポボガサイテキルシ、〈略〉。
 三23 〈略〉、ムギ畠ノ上ニハア
 サハヤクカラヒバリガサヘツ
 ツテキマス。
 三27 コウバノキテキガナツテ
 キマス。
 三31 〈略〉、ケサコソニイサン
 ヨリサキニオキテミヨウトオ
 モツテ、〈略〉。
 三32 〈略〉、ケサコソニイサン
 ヨリサキニオキテミヨウトオ
 モツテ、ソツトネドコヲ出マシ
 タ。
 三34 〈略〉、ムカフノソラガウ
 スアカクナツテキマス。
 三35 カラスガ二三バナキナガ
 ラトンデイキマス。
 三43 又一シキリキテキガナツ
 テ、エントツカラムクムクトマ
 ツクロナケムリガ出マス。
 三46 コウバデハモウシゴトガ
 ハジマツテキルラシイ。
 三47 ハヤクカホヲアラツテ、
 ニイサント一シヨニオサラヒヲ
 シマセウ。
 三55 ケサオカアサンガタゴ

ヲ入レテオヤリニナリマシタ。
 三56 メンドリハヘンナコエヲ
 タテテキマシタガ、〈略〉。
 三57 メンドリハ〈略〉、見テキ
 ルウチニ、タマゴヲハラノ下
 ニダイテシマヒマシタ。
 三58 メンドリハ〈略〉、〈略〉、タ
 マゴヲハラノ下ニダイテシ
 マヒマシタ。
 三62 エヤ水ヲヤツテモ、見
 ムキモシナイデ、タマゴヲアタ
 タメテキマス。
 三62 〈略〉、タマゴヲアタタメテ
 キマス。
 三76 〈略〉、ヒヨコガ小サナア
 タマヲ出シテ、ビヨビヨトナイ
 テキマシタ。
 三77 〈略〉、ヒヨコガ小サナア
 タマヲ出シテ、ビヨビヨトナイ
 テキマシタ。
 三83 ヒヨコガナクト、オヤド
 リハ〈略〉、コココトイッテ
 キマシタ。
 三94 ナノハヤコ米ヲヤルト、
 ヒヨコハミンナヨツテキテタ
 ベマス。
 三94 〈略〉、ヒヨコハミンナヨ
 ツテキテタベマス。
 三95 オヤドリハナンニモタベ
 ナイデ、〈略〉、ソノヘンヲ見マ
 ハリマス。
 三101 〈略〉、オヤドリハオコツテ

ケヲサカガデマス。
 三102 私ハガクカウカラカヘツ
 テ、ヒヨコヲ見ルノガタノシ
 ミデス。
 三117 うちの子ねこはかは
 いい子ねこ、〈略〉、まりとざ
 れてはえんからおちる。
 三124 お花は〈略〉、おつかひに
 いたり、にはをはいたりして、
 おかあさんのおてつだひをしま
 す。
 三126 あかちゃんがなき出すと、
 すぐそばへよつて、〈略〉、子も
 りうたをうたひます。
 三138 「おかあさん、あかちゃん
 におちちをのませてちやうだ
 い。」
 三141 かういつて、〈略〉おかあさ
 んのところへつれていきます。
 三141 〈略〉、だつこをしておか
 あさんのところへつれていき
 ます。
 三142 〈略〉、だつこをしておか
 あさんのところへつれていき
 ます。
 三148 「おまへはてのゆびの
 なをしつてゐますか。」
 三151 しつてゐます。
 三163 それではあしのゆび
 のなをしつてゐますか。
 三165 「まあ、いつてごらん。」
 三174 おちいさんはわらひなが

ら、「略。」とをしへてやりまし
 た。
 三177 「このはの中に、お
 もしろい人がゐます。あててご
 らんなさい。」
 三178 「そのはこをかしてく
 ださい。」
 三182 「ふつてもようございま
 すか。」
 三185 この人はどんないろ
 のきものをきてゐますか。
 三186 「あかいきものをきて
 ゐます。」
 三194 どんなかほをしてゐま
 すか。
 三204 よけいにとつたはうがか
 ちだといつて、二人は〈略〉と
 りました。
 三206 〈略〉、二人はまつやつつ
 じのあひだをあちらこちらへ
 くぐつてとりました。
 三207 太くてやはらかなわらび
 がたくさんはえてゐました。
 三208 太くてやはらかなわらび
 がたくさんはえてゐました。
 三212 二人がむちゆうになつて
 とつてゐますと、〈略〉。
 三212 二人がむちゆうになつて
 とつてゐますと、〈略〉。
 三214 〈略〉、下のはうからかさ
 かさいはせてかけ上つてくるも
 のがあります。

三
41
4
〈略〉、大きなかめが出て

きて、「略。」といひました。

三41 4 〈略〉、大きなかめが出てきて、「略。」といひました。

三41 7 窓 そのおいにりゆうぐうへつれていつて上げませう。

三41 7 窓 そのおいにりゆうぐうへつれていつて上げませう。

三42 2 うらしまがよるこんでかめにのると、「略。」

三42 4 〈略〉、かめはだんだん海の中へはいつていつて、「略。」

三42 4 〈略〉、かめはだんだん海の中へはいつていつて、まもなく

三42 8 りゆうぐうのおとひめはうらしまのきたのをよるこんで、「略」、さまざまあそびを

して見せたりしました。

三43 2 りゆうぐうのおとひめは〈略〉、さまざまあそびを

三43 5 うらしまはおもしろがつて、うちへかへるのもわすれてゐ

ましたが、「略。」

三43 7 うらしまはおもしろがつて、うちへかへるのもわすれてゐ

ましたが、「略。」

三44 1 うらしまは〈略〉、そのうちにかへりたくなつて、おとひ

三45 2 おとひめは「略。」とい

つて、きれいな箱をわたしまし

た。

三45 3 うらしまは玉手箱をもらつて、又かめのせ中につて、

三45 4 うらしまは〈略〉、又かめのせ中につて、海の上へ

三45 5 うらしまは〈略〉、海の上へ出てきました。

三45 6 うちへかへつてみると、おどろきました、「略。」

三45 7 〈略〉、父も母もしんでしまつて、「略。」

三45 7 〈略〉、父も母もしんでしまつて、うちもなくなつてゐ

はつてゐます。

三45 8 〈略〉、うちもなくなつてゐて、「略。」

三45 8 〈略〉、うちもなくなつてゐて、村のやうすもすつかり

三46 1 〈略〉、村のやうすもすつかりかはつてゐます。

三46 1 〈略〉、村のやうすもすつかりかはつてゐます。

三46 2 かなしくてかなしくてたま

三46 2 かなしくてかなしくてたま

三46 2 かなしくてかなしくてたま

三46 4 〈略〉、おとひめのいつた

三46 4 〈略〉、おとひめのいつた

こともわすれて、玉手箱をあけました。

三46 6 あけると、箱の中から白

三46 7 〈略〉、うらしまはたちまち

三47 3 東へムイテリヤウ手ヲ

三48 8 大キナ家ガ三ムネ、「コ」

三49 4 〈略〉、川ガ二ツオチアツ

三49 4 〈略〉、川ガ二ツオチアツ

三49 4 〈略〉、川ガ二ツオチアツ

三49 5 〈略〉、川ガ二ツオチアツ

三49 7 〈略〉新道ハ、村ヲ東カ

三50 6 車ヲヒイテキタ人ガベ

三51 8 子どもがそら一めんの星

三52 4 窓 「おい、長いさををふり

三52 5 窓 「おい、長いさをををふり

三52 5 窓 「おい、長いさをををふり

三52 5 窓 「おい、長いさをををふり

まはして、何をしてゐるのだ。」

三52 8 窓 「星を二つ三つはたき

三53 3 窓 やねへ上つてはたけ。

三53 5 あるばん、弟がにはへ

三53 6 あるばん、弟がにはへ

三53 7 窓 「おまへ、何をかぞへて

三54 1 窓 弟「星をかぞへてゐま

三54 3 窓 兄「こんなくらいばんに

三54 8 〈略〉、うまく書けませんの

三55 2 〈略〉、たうふうがにはへ

三55 4 〈略〉、しだれやなぎのえだ

三55 6 かへるは〈略〉、とんでは

三55 7 かへるは〈略〉、とんでは

三55 7 かへるは〈略〉、とんでは

三55 7 かへるは〈略〉、とんでは

三55 7 かへるは〈略〉、とんでは

三56 / だんだん 高く とべる やう
 になつて、とうとう やなぎ にと
 びつきました。
 三56 5 たうふう は これを見て、
 〈略〉、何 こと も できない こと は
 ない と さとり ました。
 三57 / それからは 一しやうけん
 めい になつて、毎日 字 を ならひ
 ました。
 三57 3 ずんずん 手 が 上つて、の
 ち には 名高い 書手 と なりまし
 た。
 三57 7 〈略〉、カラヲ キタ セミ ガ
 ハヒ上ツテ キマス。
 三57 8 チャウド 私 ノ 目 ノ 前デ
 トマツテ、カラヲ スギハジメマ
 シタ。
 三58 2 マモナク ヌイデ シマヒマシ
 タ。
 三58 3 色 ガ ウスクテ、ヌレテ キ
 ルヤウ ニ 見エマス。
 三58 3 〈略〉、ヌレテ キルヤウ ニ
 見エマス。
 三58 4 見テ キルウチ ニ、チデン
 デ キタ ハネ モ ダンダン ノ ビテ、
 〈略〉。
 三58 5 〈略〉、チデンデ キタ ハネ
 モ ダンダン ノ ビテ、〈略〉。
 三58 5 〈略〉、チデンデ キタ ハネ
 モ ダンダン ノ ビテ、色 モ シダイ
 ニ コク ナツテ キマシタ。
 三58 6 〈略〉、色 モ シダイ ニ コク

ナツテ キマシタ。
 三58 7 スコシタツテ カラ 又 來テ
 見マス ト、〈略〉。
 三58 7 〈略〉又 來テ 見マス ト、モ
 ウリツパニセミ ニナツテ キマ
 ス。
 三58 8 〈略〉、モウリツパニセミ
 ニナツテ キマス。
 三59 2 コノ 大キナ モノ ガ、ヨク
 アノ カラ ノ 中 ニ ハイツテ キタ
 モノ ダト オモヒマシタ。
 三59 4 ツカマヘヨウト シテ 手ヲ
 出シマス ト、〈略〉。
 三59 5 〈略〉、「ジイツ」ト ナイテ、
 トンデ 行キマシタ。
 三59 5 〈略〉、「ジイツ」ト ナイテ、
 トンデ 行キマシタ。
 三60 / 今 ニ ハ ノ 木 ニ セミ ガ
 ウルサイ ホド ナイテ キマス。
 三60 4 日 の 光 が やほらかに さ
 して、小川 の 水 は きれいに す
 きとほつてゐます。
 三60 5 〈略〉、小川 の 水 は きれい
 に すきとほつてゐます。
 三60 6 風 が しづかに ふいて 來て、
 〈略〉。
 三60 6 風 が しづかに ふいて 來て、
 きし の ささが さらさら と おと
 を たててゐます。
 三60 7 〈略〉、きし の ささが さら
 さら と おと を たててゐます。
 三61 / 三郎 さん、又 今日 も 舟

を ながして あそびませう。
 三61 6 男 の 子 三人 は ささ の は
 を とつて、舟 を こしらへました。
 三62 / みよ子は ささ の 小えだ
 を 手 にもつて、土ぼし の 上 に
 たちました。
 三63 2 舟 は 〈略〉、土ぼし の 方
 へ ながれて 行きます。
 三63 3 三人 は 舟 と ならんで、川
 の ふち を かけて 行きます。
 三63 4 三人 は 〈略〉、川 の ふち
 を かけて 行きます。
 三63 6 草 の は に とまつてゐた
 てふてふ が 〈略〉。
 三63 7 〈略〉てふてふ が おどろい
 て とびたちました。
 三64 7 みよ子 は さつと ささ の
 小えだ を 上げて、「一ばんがち、
 五郎 さん の 舟。」
 三65 5 〇 もう 一ど やつて ござん
 ない。
 三65 8 私 ノ ウチ ヘ キノ フ ラケ
 ヤガ 來テ、手ヲケ ヤタラヒ ノ
 タガヲ カケカヘマシタ。
 三66 3 アトヘ 竹 ノ キレヲ ノ コ
 シテ 行キマシタガ、〈略〉。
 三66 4 〈略〉、ソノ 中 ニ フシガ
 一ツ アツテ、水デツパウ ニ ナリ
 サウナ ノ ガ アリマシタ。
 三66 6 私 ハ ソレヲ ヒロツテ、
 〈略〉、キリデ 小サナ アナヲ ア
 ケマシタ。

三67 / ソレカラ ホソイ 竹ヲ エ
 ニシテ、ソノ サキ ニ キレヲ マ
 キツケテ、センヲ コシラヘマシタ。
 三67 / 〈略〉、ソノ サキ ニ キレヲ
 マキツケテ、センヲ コシラヘマ
 シタ。
 三67 3 池 ノ 水 デ タメシテ ミル
 ト、ウマク 出來テ キテ、〈略〉。
 三67 4 〈略〉、ウマク 出來テ キテ、
 高ク 上ゲルト、ヤネノ 上 マデ
 トドキマス。
 三67 4 〈略〉、ウマク 出來テ キテ、
 高ク 上ゲルト、ヤネノ 上 マデ
 トドキマス。
 三67 6 ウレシクテ タマリマセンノ
 デ、〈略〉。
 三68 5 〈略〉、センヲ ヌイテ 見ル
 ト、キレガトレテ キマシタ。
 三68 6 〈略〉、センヲ ヌイテ 見ル
 ト、キレガトレテ キマシタ。
 三68 6 又 マキナホシテ、コンドハ
 水デツパウヲ ジョウロノ カハ
 リニ シヨウト オモツテ、〈略〉。
 三68 8 〈略〉水デツパウヲ ジョウウ
 ロノ カハリニ シヨウト オモツ
 テ、フシニ 小サナ アナヲ タク
 サン アケマシタ。
 三69 3 コマツテ ニイサン ニ 見テ
 モラヒマシタラ、〈略〉。
 三69 3 コマツテ ニイサン ニ 見テ
 モラヒマシタラ、〈略〉。
 三69 5 〇 コンナニ アナヲ タクサ

ンアケテハダメダ。

三六九 ㊦ ソノウチニ、ニイサン
ガコシラヘテヤラウ。

三七〇 たんすやつづらから着物
を出して、風通しのよいところ
にかけてあります。

三七四 ㊦ 風通しのよいところ
にかけてあります。

三七一 おおあさんはあれをしめ
て、よくお寺まゐりにいらつし
やいます。

三七二 私どもはあれを着て、
をばさんの村のお祭によばれ
て行くのです。

三七八 ㊦ をばさんの村のお
祭によばれて行くのです。

三七八 ソノトキカウモリハ
「略。」トイッテ、ドチラヘモ
ツキマセンデシタ。

三七四 ㊦ 「私ハカラダガネズミ
ニニテキルカラ、ケダモノダ。」
三七八 ㊦ 「略。」トイッテ、
ケダモノノミカタニナリマシタ。

三七八 スコシタツテ、コンドハ
鳥ガカチサウニナリマシタ。

三七五 スルトカウモリハ「略。」
トイッテ、鳥ノ方ニツキマシ
タ。

三七六 ㊦ 「オ前ハ鳥デハナ
イカ。」トイッテ、ナカマヘ入
レテクレマセン。

三七六 ㊦ 「略」、ナカマヘ入レ

テクレマセン。

三七五 ㊦ 「オ前ハケダモノダ
ラウ。」トイッテ、アヒテニシマ
セン。

三七八 ソコデカウモリハ「略」、
ヒルハ木ノウロヤアナノ中
ニカクレテキテ、

三七八 ㊦ 「略」、ヒルハ木ノウロ
ヤアナノ中ニカクレテキテ、
クラクナツテカラ空ヲトビマ
ハルヤウニナツタトイヒマス。

三七八 ㊦ 「略」、クラクナツテカラ
空ヲトビマハルヤウニナツタ
トイヒマス。

三七五 十五やの月がざしきの
まん中までさしてゐます。

三七八 えんがはには、夕方から
いもやだんごをつくゑにのせ
て、お月さまにそなへてありま
す。

三七八 ㊦ 「略」、お月さまにそなへて
あります。

三七三 今日私が川の土手から
とつて来たすすきも、

三七三 ㊦ 「略」すすきも、花いけに
さしてそなへてあります。

三七四 ㊦ 「略」すすきも、花いけに
さしてそなへてあります。

三七五 空は水のやうにすみき
つて、雲一つありません。

三七八 だれか川上の方で、さ
きほどからふえを吹いてゐま
す。

す。

三七二 時々すずしい風が吹いて
来ると、

三七七 ㊦ 「ふみ子もこんやはき
つとあちらでこの月を見て
みませう。」

三八二 ねえさんは遠いところへ
およめに行つていらつしやる
のです。

三八六 ㊦ 「略」、四方の山を見
おろして、かみなりさまを下
にきく、ふじは日本一の山。

三八二 ㊦ 「略」、からだにゆきの
着物着て、かすみのすそを
遠くひく、ふじは日本一の山。

三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。

三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。

三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。

三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。

三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。

三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。

三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。

三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。

三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。

三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。

三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。
三八二 ㊦ 「略」、ふじは日本一の山。

三八三 そばへよつて見ますと、

三八五 ㊦ ひろつて家のたからに
しよう。

三八七 「略。」といつて、持つて
かへらうとしますと、

三八七 ㊦ 「略」、持つてかへらうと
しますと、

三八四 ㊦ 持つてかへつて家のた
からにします。

三八四 ㊦ 持つてかへつて家のた
からにします。

三八四 ㊦ 持つてかへつて家のた
からにします。

三八八 天人はしをしをととして、
なみだにうるむ目で空を見
上げました。

三八七 ㊦ 「略」、天人はそれを着て、
まひはじめました。

三九二 ㊦ 「略」、天人はそれを着て、
まひはじめました。

三九四 ㊦ 「略」、天人はそれを着て、
まひはじめました。

三九四 ㊦ 「略」、天人はそれを着て、
まひはじめました。

三九四 ㊦ 「略」、天人はそれを着て、
まひはじめました。

三九四 ㊦ 「略」、天人はそれを着て、
まひはじめました。

三九四 ㊦ 「略」、天人はそれを着て、
まひはじめました。

三九四 ㊦ 「略」、天人はそれを着て、
まひはじめました。

三九四 ㊦ 「略」、天人はそれを着て、
まひはじめました。

木ノ枝ニトマツテ、ボンヤリト
シテ居ルコトガアリマス。
四362 スルトホカノ鳥ガ見ツ
ケテ、略、ヨツテタカツテイヂ
メカヘシマス。
四364 略、ヨツテタカツテイヂ
メカヘシマス。
四368 モズハ略、高イ所カラ
トンデ來ガケニ、フクロフノ
カホヲケツテ、略。
四371 モズハ略、フクロフノ
カホヲケツテ、「キイキイ」ト
カチドキヲアゲマス。
四373 スズメハ略、ソバヘヨ
ツテ、ヲドツタリサヘツツタリシ
テバカニシマス。
四375 ソレデモフクロフハ略、
大キナ目ヲ見ハツテキヨトキヨ
トシテ居ルバカリデス。
四376 略、大キナ目ヲ見ハツ
テキヨトキヨトシテ居ルバカリ
デス。
四377 フクロフノ鳴キゴエハ所
ニヨツテイロイロニヒマス。
四387 たび人のぐわいたうをぬ
がせた方が勝といふことに
きめて、先づ風からはじめまし

た。
四391 四 「何、一まくりにして見
せよう。」
四397 日は雲のあひだからや
さしいかほを出して、あたたか
な光をおくりました。
四398 たび人はだんだんよい心
持になつて、しまひにはぐわい
たうをぬぎました。
四406 おかあさんが略、着物
の上にちりよけを着て、下女
や手つだひのものに、おさしづ
をしておはたらきになりました。
四408 おかあさんが略、下女
や手つだひのものに、おさしづ
をしておはたらきになりました。
四414 にはへいたやむしろを
しいて、そこへ略いろいろな
物がはこび出されました。
四425 下女がびつくりして、「き
やつ」といったので、略。
四428 僕もはたきを持つて手
つだひました。
四435 手つだひの今吉がおどけ
て、略、べんけいのまねをし
ました。
四436 手つだひの今吉がおどけ
て、はうきを大なぎなたのやう
に持つて、べんけいのまねを
しました。

四438 僕は牛わかまるになつて、
はねまはつてたたかひましたら、
略。
四438 僕は牛わかまるになつて、
はねまはつてたたかひましたら、
略。
四443 花子はねこをだいてう
ろうろして居ましたので、略。
四443 花子はねこをだいてう
ろうろして居ましたので、略。
四458 略、それでもふきさうち
がすんで、すつかりいろいろな
物をもとの所へなほしたら、
夕方近くなりました。
四464 略、家の内も外もき
れいになつて居ましたので、
略。
四467 友一のうちでかるた取
がはじまつて居ます。
四473 今ちらしで取つて居ます。
四476 四 「ちりつもつて山とな
る。」
四491 四 さうひつぱりあつては
いけません。
四493 四 まん中へふせておきな
さい。
四506 みんなもしまひにはむち
ゆうになつて取りました。
四513 それから又二くみに分
れて、何べんも取つてあそびま
した。
四514 それから又二くみに分

れて、何べんも取つてあそびま
した。
四525 四 「勝太郎、略ゑはがき
が來ました。よんでごらん。」
四537 四 「日は山から出て、山
へはいる。」
四541 四 「いや、海から出て、海
へはいる。」
四542 山國のものが「略。」と
いへば、島國のものが「略。」
といつてあらそひます。
四543 そこへ宿屋のていしゆ
が來て、「略。」
四544 四 「へええ、日は屋根から
出て、屋根へはいるものでは
ございませんか。」
四547 四 此のからかみにかいて
あるとらをしばつて見せよ。
四551 四 此のからかみにかいて
あるとらをしばつて見せよ。
四553 四 しばつてお目にかけま
す。
四555 四 どうぞここへ追出して
下さいませ。
四563 四 山の中からころげ出て、
人にふまれたかしのみが、
略。
四565 四 略、人にふまれたか
しのみが、しひを見上げて
かういつた。
四566 四 今に見てゐろ、略。
四572 四 略、見上げるほど

の 大木に なつて 見せずにお
くものか。

四58 1 私ノウチデハ此ノゴロ
土ザウノフシンガハジマツテ
居マス。

四58 2 ニハニ大工小屋ヲタテ、
大ゼイノ大工サンガ毎日其ノ
中デ仕事ヲシテ居マス。

四58 3 〈略〉、大ゼイノ大工サン
ガ毎日其ノ中デ仕事ヲシテ
居マス。

四58 6 〈略〉、大工サンハミンナ
シルシバンテンヲヌイデ、キセイ
ヨクハタライテ居マス。

四58 7 〈略〉、大工サンハ〈略〉、
キセイヨクハタライテ居マス。

四59 7 私ハカンナヲカケテ居
ルノヲ見ルコトガスキデス。

四60 3 〈略〉、カンナクヅガヒトリ
デニクルリトマハツテスベリオ
チマス。

四60 5 風ガ吹クト、カンナクヅ
ガ小屋中マツテアルキマス。

四60 5 〈略〉、カンナクヅガ小屋中
マツテアルキマス。

四60 7 私ハ昨日大工サンカラ
木ノキレヲタクサンモラツテ、
友ダチトツミ木ヲシテアソビ
マシタ。

四60 8 私ハ〈略〉、友ダチトツミ
木ヲシテアソビマシタ。

四61 3 屋島のたたかひに、げん

じはをか、へいけは海で、向
ひあつて居ました時、〈略〉。

四61 5 〈略〉、へいけ方から舟を
一そうこぎ出して來ました。

四61 6 見ればへさきに長いさを
を立てて、其のさをの先には、
ひらいた赤い扇がつけてあり
ます。

四61 7 〈略〉、其のさをの先には、
ひらいた赤い扇がつけてあり
ます。

四62 1 一人のくわんぢよが其の
下に立つて、まねいて居ます。

四62 1 一人のくわんぢよが其の
下に立つて、まねいて居ます。

四62 3 舟はなみにゆられて、上
つたり下つたりします。

四62 4 扇は風に吹かれて、くる
くるまはつて居ます。

四62 5 扇は風に吹かれて、くる
くるまはつて居ます。

四63 1 げんじの大しやうよしつ
ねは家來に向つて、〈略〉と
たづねました。

四63 5 其の時一人の家來がす
すみ出て、〈略〉といひました。

四63 7 空をとんで居る鳥で
も、〈略〉いとおすほどの上手
でございます。

四65 3 よ一は心の中で、もし
これをいそこなつたら、生きて
は居まいとかくこをきめて、

〈略〉。

四65 4 よ一は心の中で、〈略〉
とかくこをきめて、馬にまた
がつて、海の中へのり入れまし
た。

四65 4 よ一は〈略〉とかくこを
きめて、馬にまたがつて、海の
中へのり入れました。

四65 6 弓をとりなほして、向ふ
を見わたすと、〈略〉。

四65 7 〈略〉、舟がゆれて、まと
がさだまりません。

四66 1 しばらく目をつぶつて、
神様にいのつてから目をひら
いて見ると、〈略〉。

四66 1 しばらく目をつぶつて、
神様にいのつてから目をひら
いて見ると、〈略〉。

四66 2 〈略〉目をひらいて見る
と、〈略〉。

四66 3 〈略〉、今度は扇が少し
おちついて見えます。

四66 4 よ一は〈略〉、よくねらひ
をさだめて、ひようといはしまし
ました。

四66 7 赤い扇はかなめのきは
をいきられて、空に高くまひ上
つて、〈略〉。

四66 7 赤い扇は〈略〉、空に高
くまひ上つて、ひらひらと二つ
三つまはつて、なみの上にお
ちました。

四66 8 赤い扇は〈略〉、ひらひら
と二つ三つまはつて、なみの
上におちました。

四67 4 〈略〉、みんなが馬のくら
をたたいてよろこびました。

四67 5 〈略〉へいけ方がふなばた
をたたいて、一度にとつとほめ
ました。

四67 8 私のうちに山がらが一
羽かつてありました。

四68 1 たいそうよくなれて、私
の手からゑをたべるほどに
なつて居ました。

四68 2 〈略〉、私の手からゑを
たべるほどになつて居ました。

四68 8 きずを見てやらうと思
つて、私がかごの戸を明けま
すと、〈略〉。

四68 8 きずを見てやらうと思
つて、私がかごの戸を明けま
すと、〈略〉。

四69 2 〈略〉、山がらはとび出して、
竹がきの上にとまつて、それ
からうらの山へとんで行つて
しまひました。

四69 2 〈略〉、山がらはとび出して、
竹がきの上にとまつて、それ
からうらの山へとんで行つて
しまひました。

四69 2 〈略〉、山がらはとび出して、
竹がきの上にとまつて、それ
からうらの山へとんで行つて
しまひました。

四69 2 〈略〉、山がらはとび出して、
竹がきの上にとまつて、それ
からうらの山へとんで行つて
しまひました。

四69 3 〈略〉、山がらはとび出して、
竹がきの上にとまつて、それ
からうらの山へとんで行つて
しまひました。

四69 3 〈略〉、山がらはとび出して、
竹がきの上にとまつて、それ
からうらの山へとんで行つて
しまひました。

四六三 〈略〉、山がらは〈略〉、それからうらの山へとんで行つてしまひました。

四六九 〈略〉、今でも〈略〉、まだあれが生きて居るだらうか、足のきずはどうしたらうかと思はないことはありません。

四七〇 私ドモ二人ハ色モナリモヨクニテ居マス。

四七〇 シカシユヤ水ニハスグトケテシマヒマス。

四七五 〈略〉、ドナタノウチニモ、ナカマノモノガ大テイ行ツテ居マス。

四七二 もう二百年あまりもここに立つて居ます。

四七二 私ハ長生をして居ますので、〈略〉。

四七四 私ハ〈略〉、〈略〉、火事があつたり、水が出たりしたこと、をみんな見て知つて居ます。

四七四 私ハ〈略〉、〈略〉、火事があつたり、水が出たりしたこと、をみんな見て知つて居ます。

四七四 私は〈略〉村長さんのおぢいさんやおばあさんを其のわかい時から知つて居ました。

四七八 〈略〉、くはやかまを持つてたんばへ行きました。

四七二 〈略〉、お星様が光りはじめるところになつて、小さなわらぶきのうちへかへつて行きました。

四七五 〈略〉、小さなわらぶきのうちへかへつて行きました。

四七六 此の人は〈略〉、ゐばつてばかり居ました。

四七八 それでとうとう家も土さうも田も畠も人の物になつてしまひました。

四八二 それからどこへ行つて居たか、村にもひさしく居ませんでした。

四八四 かへつて来た時には、ひどいみなりをして居ました。

四八五 かへつて来た時には、ひどいみなりをして居ました。

四八六 私の下で、長い間しょんぼりとして居まして、〈略〉。

四八六 私の下で、長い間しょんぼりとして居まして、日がくれてから村へはいりました。

四八七 〈略〉、日がくれてから村へはいりました。

四九三 〈略〉、私が風の音をきうつとさせてやりましたら、送つて行く人が「〈略〉。」といひました。

四九三 〈略〉、送つて行く人が「〈略〉。」といひました。

四九四 「此の人も一本杉の外にないてくれるものがなくなつた。」

四八二 〈略〉、河を見たら、たいそ

う水が出て居ました。

四八二 トンネルを出て、海を見下した時には、〈略〉。

四八二 ちやうど大きな船がおきを通つて居ました。

四八三 そばに乗つて居た人の話では、〈略〉。

四八三 〈略〉、にいきさんがむかへに来て居ました。

四八六 ひるのごはんをたべてから、へいえいを見せてもらひ、〈略〉。

四八七 ひるのごはんをたべてから、へいえいを見せてもらひ、〈略〉。

四八八 弟へへいたいばうをおみやげに買つて、夕方の汽車でかへりました。

四八四 オ花ハオカアサンニオヒナ様ヲカザツテイタダキマシタ。

四八五 モモノ花ガ花イケニサシテアリ、〈略〉。

四八六 〈略〉、ヒシモチモモウソナヘテアリマス。

四八七 今オキクトオヒナ様ノ前ニスワツテナガメテ居マス。

四八七 今オキクトオヒナ様ノ前ニスワツテナガメテ居マス。

四八三 ダイリ様ノ下ノダンニ、弓ヤ矢ヲ持ツテ居ル人ハ何デセウ。

四八六 クワンデヨノリヤウワキ

ニカザツテアルノデセウ。

四八六 扇ヲ持ツテ居ル人デスカ。

四八七 二人ガオ話ヲシテ居ル所へ、〈略〉。

四九〇 お前たちが大きくなつたら、此のかたきを取つてくれ。

四九七 五郎はまだ小さくて、何も分りませんでした、が、〈略〉。

四九一 〈略〉、十郎はなみだをおさへて、「〈略〉。」と答へました。

四九二 「きつと此のかたきを取つて見せます。」

四九七 〈略〉、早く強くなつて、かたきを取らうと心がけました。

四九三 けれどもかたきのくどうは、〈略〉、いつも大ぜいの家來をつれて居ます。

四九三 ある年、よりともは日本中のさむらひを引きつれて、ふじのまきがりをいたしました。

四九三 かたきのくどうもよりとものおともをして行つて居ます。

四九三 かたきのくどうもよりとものおともをして行つて居ます。

四九三 兄弟は今度こそはと、母にいとまごひをして、ふじのすそ野へ急ぎました。

四九二 〈略〉、二人はたいまつで

道をてらしてくどうのやかたへ向ひました。

四94 今夜かぎりのいのちと思つて、十郎五郎、かほを見せよ。」

四94 二人はたいまつを上げて、つくづくとかほを見合ひました。

四95 3 ふみこんで見ると、くどうはよくね入つて居ます。

四95 4 ふみこんで見ると、くどうはよくね入つて居ます。

四95 5 ね入つて居るものをきるはひけふと、「略」と名のりしました。

四96 4 すけつねも「略」、「心えた。」と、まくらもとの刀を取つておき上らうとしました。

四96 6 二人はすかさずうち取つて、「略」、父がうたれてから十八年目にめでたくのぞみをとげました。

四96 7 「略」、父がうたれてから十八年目にめでたくのぞみをとげました。

五22 天皇陛下を神ともあふぎ、おやとしたりてお仕へ申す。

五28 四月四日の朝、當番で僕が机の上をふいてみると、「略」。

五31 「略」、先生が知らない生徒を一人つれてお出でになりました。

五35 「略」といって、此の間か

らあいてゐたせきをおさしになりました。

五35 「略」、此の間からあいてゐたせきをおさしになりました。

五41 此の方は中村さんといふ人で、今度遠い所から来て、今日から此の級へはいる方です。

五48 中村君は色が黒くて、まるまると太つてゐます。

五48 中村君は色が黒くて、まるまると太つてゐます。

五51 気がさつぱりしてゐて、「略」。

五51 気がさつぱりしてゐて、二三日たつと、前からの友だちのやうになりました。

五58 「略」、何百里かはなれてゐるのでせう。

五62 こちらは今さくらのさかりですが、あちらでは、もうとうにちつてしまつたさうです。

五63 ある日、僕がうんどう場へ出て見ると、「略」。

五64 「略」、中村君が泣いてゐました。

五65 聞けば級のものが二三人で、中村君を生いきたといつて、いちめたのださうです。

五71 僕は「略」といって、力をつけてやりました。

五71 僕は「略」といって、力をつけてやりました。

五81 ある時、「略」、川上から箸が

流れて來ました。

五82 みことは此の川上にも人がすんでゐるにちがひないとおかんがへになつて、「略」。

五83 みことは此の川上にも人がすんでゐるにちがひないとおかんがへになつて、だんだん山おくへおはいりになりますと、「略」。

五85 「略」、おちいさんとおばあさんが、一人の娘を中において泣いてゐました。

五85 「略」、おちいさんとおばあさんが、一人の娘を中において泣いてゐました。

五94 それを八岐の大蛇が来て、毎年一人つたべました。

五104 頭が八つ、尾が八つある大蛇で、「略」、せ中には、ひのきや杉の木が生えてゐます。

五105 よし。其の大蛇をたいちしてやらう。

五111 酒が出來ると、みことはそれを八つのをけに入れて、八岐の大蛇の來るのを待つていらつしやいました。

五112 「略」、みことは「略」、八岐の大蛇の來るのを待つていらつしやいました。

五113 間もなく大蛇が来て、八つの頭を八つのをけに入れて、其の強い酒を飲みました。

五114 「略」、八つの頭を八つのをけ

に入れて、其の強い酒を飲みました。

五115 飲みほして、大蛇がよひつづれますと、「略」。

五116 「略」、みことはこしのつるぎをぬいて、大蛇をすたずたにお切りになりました。

五118 ひの川が血になつて流れました。

五122 ふしぎに思つて、尾をさいてごらんになりますと、つるぎが一ふり出ました。

五122 ふしぎに思つて、尾をさいてごらんになりますと、「略」。

五125 自分の物にしてはならぬとおぼしめして、天照大神へお上げになりました。

五125 自分の物にしてはならぬとおぼしめして、天照大神へお上げになりました。

五132 學校からかへつて見ると、廣田君からゑはが来てゐました。

五133 「略」、廣田君からゑはが来てゐました。

五135 うめやも、やさくらがみんなしよにさいてゐます。

五138 北國にも春が來ました。「略」と書いてありました。

五142 朝、おさらひをすましてから、春子とつくしをつみに行きました。

五144 かへりみちに、はなれ馬がとんで來ましたので、「略」。

五145 かへりみちに、はなれ馬がと

んで来ましたので、どうしようかと

思つてゐますと、〈略〉。

五146 〈略〉、よそのをぢさんが大手

を廣げてとめて下さいました。

五146 〈略〉、よそのをぢさんが大手

を廣げてとめて下さいました。

五153 〈略〉、かへつて來ると、もう

よくなつてゐて、〈略〉。

五153 〈略〉、かへつて來ると、もう

よくなつてゐて、〈略〉。

五153 〈略〉、かへつて來ると、もう

よくなつてゐて、尾をふつてむかへ

に出来ました。

五154 〈略〉、尾をふつてむかへに出

ました。

五158 先生がまどをすつかり明けて

出しておやになりました。

五158 先生がまどをすつかり明けて

出しておやになりました。

五163 學校からかへつて、新しい筆

で書き方のおけいこをしました。

五166 海軍のをぢさんがお出にな

つて、〈略〉、僕には小刀とえんぴつ

をおみやげに下さいました。

五175 〈略〉金の鳥がついてゐますね。

五177 〈略〉、鶏のついてゐるわけ

は知つてゐるだらう。

五177 〈略〉、鶏のついてゐるわけ

は知つてゐるだらう。

五182 〈略〉「話して上げようか。」

五185 〈略〉むかし神武天皇が〈略〉、

わるものどもが強く、おこまりに

なつたことがある。

五187 〈略〉其の時一天にはかにかき曇

つて、ひようがひどくふり出すと、

〈略〉。

五188 〈略〉、金色の鶏が一羽とん

で來て、天皇のお弓の先にとまつた。

五188 〈略〉、金色の鶏が一羽とん

で來て、天皇のお弓の先にとまつた。

五195 〈略〉鶏の光がまるでいなびかり

のやうで、わるものどもは目を明け

てゐることが出來ず、〈略〉。

五196 〈略〉、わるものどもは

〈略〉、おそれみんなにげてしまつ

たさうだ。

五197 〈略〉、わるものどもは

〈略〉、おそれみんなにげてしまつ

たさうだ。

五207 ゆふべの雨がはれて、青葉の

上に日が氣持よくてつてゐます。

五208 ゆふべの雨がはれて、青葉の

上に日が氣持よくてつてゐます。

五215 〈略〉、鯉が大きな口で、思ふ

ぞんぶん風をのんで、家のむねより

も高く尾を上げます。

五217 其の尾を下して來て、さをに

着けるかと思ふと、〈略〉。

五217 其の尾を下して來て、さをに

着けるかと思ふと、〈略〉。

五218 〈略〉、又はらをふくらませて、

をどり上ります。

五223 美しいびらで、一月も前から

廣告してゐた島屋の大賣出しは、

〈略〉。

五226 おひるすぎおかあさんにつれ

られて、買物に行きました。

五228 島屋の前には、人が黒山のや

うにあつまつてゐました。

五231 二かいのまどに萬國旗がつる

してあつて、〈略〉。

五232 二かいのまどに萬國旗がつる

してあつて、おくの方からたえずち

くおんきの音が聞えて來ます。

五234 〈略〉、おくの方からたえずち

くおんきの音が聞えて來ます。

五238 下のかざりまどには、〈略〉、

すゞしさうな浴衣地がかざつてあり

ます。

五241 入口の左手には、小切やえり

や帶あげなどがたくさん下げてあつ

て、〈略〉。

五242 入口の左手には、小切やえり

や帶あげなどがたくさん下げてあつ

て、それを見てゐる人も大せいあり

ます。

五242 〈略〉、それを見てゐる人も大

せいあります。

五244 店の中へはいつて見ますと、

〈略〉。

五245 〈略〉、番頭さんたちは、お客

から注文をうけては、小ぞうさんた

ちにさしづをしてゐます。

五246 〈略〉、番頭さんたちは、〈略〉、

小ぞうさんたちにさしづをしてゐま

す。

五248 小ぞうさんたちは、土さうか

らしいろく／＼な反物や帶地をかついで

來て、〈略〉。

五248 小ぞうさんたちは、土さうか

らしいろく／＼な反物や帶地をかついで

來て、お客の前につみ上げます。

五251 しばらく待つて、私どもは浴

衣地とこんがすりを買つて外へ出ま

した。

五252 〈略〉、私どもは浴衣地とこん

がすりを買つて外へ出しました。

五252 うちへかへつて、ふろしきを

明けて見ましたら、〈略〉。

五253 うちへかへつて、ふろしきを

明けて見ましたら、〈略〉。

五255 〈略〉、店のしるしのついた手

ぬぐひと物さしが景物にはいつてゐ

ました。

五258 ツバメハトブコトガ上手ナ鳥

デ、ツブテノヤウニトンデ來テ、

〈略〉。

五258 ツバメハトブコトガ上手ナ鳥

デ、ツブテノヤウニトンデ來テ、

〈略〉、矢ヨリモ早クトンデ行キマス。

五261 ツバメハ 〈略〉、物ニツキア

タルカト思フト、カルクミヲカハシ

テ、矢ヨリモ早クトンデ行キマス。

五262 ツバメハ 〈略〉、矢ヨリモ早

クトンデ行キマス。

五264 〈略〉、アタ、カニナツテ、ガ

ンガ北ノ國ヘカヘルコロ、南ノ國カ

ラワタツテ來マス。

五26 6 〈略〉、ガンガ北ノ國ヘカヘル
コロ、南ノ國カラワツテ來マス。
五26 7 サウシテダンノ／＼スバシクナ
ツテ、ガンガソロ／＼ワツツテ來ル
コロ、〈略〉。
五26 8 〈略〉、ガンガソロ／＼ワツツ
テ來ルコロ、南ノ國ヘカヘツテ行キ
マス。
五27 1 〈略〉、ガンガソロ／＼ワツツ
テ來ルコロ、南ノ國ヘカヘツテ行キ
マス。
五27 2 ツバメハコチラニ居ル間ニ、
人ノ家ニスヲ作ツテ、ヒナヲソダテ
マス。
五27 4 ツバメハ田ヤ畠ノ作物ニツク
虫ヲ取ツテバマスカラ、〈略〉。
五28 1 〈略〉村外れに、家が一けん
立つてゐます。
五28 5 庭さきのみぢの木は、前の
川に美しいかげをうつしてゐます。
五28 7 〈略〉、此のころは栗の花がた
くさんさいてゐます。
五28 8 此の間町のをばさんがいらつ
しやつて、「〈略〉。」とおつしやいま
した。
五29 1 図 「こんなしづかな所でくら
してみたい。」
五29 7 圖 〈略〉、かはる／＼に花さ
きみだれ、人も來て見る、小鳥も
うたふ。
五30 4 圖 つりも出來るし、およぎも
出來て、あついで夏でもすゝしく

らす。
五31 2 圖 〈略〉、木々のしづくもき
のことなつて、ばんのごはんのお
かずにまじる。
五31 4 圖 松をのこして木の葉がちれ
ば、〈略〉。
五32 5 私のうちの表通は電車や自轉
車が引切なしに通つて、りやうがは
の歩道に人通のたえることがありま
せん。
五32 8 ある朝早く、おとうさんがた
びへお立ちになつた時、お見送をし
て表へ出て見ました。
五32 8 〈略〉、お見送をして表へ出て
見ました。
五33 5 此の時の氣もなく自分のう
ちを見て、その小さいのおどろき
ました。
五34 2 せまい中庭から、屋根の上に
頭を出してゐるひよろ松は、〈略〉。
五35 2 圖 「よいお天氣です。早く起
きてお出で。」
五35 4 遠足のしたくをして學校へ行
くと、もう級の方が大分來てゐて、
〈略〉。
五35 5 〈略〉、もう級の方が大分來
てゐて、先生もお出でになつてゐま
した。
五35 5 〈略〉、もう級の方が大分來
てゐて、先生もお出でになつてゐま
した。
五35 6 〈略〉、もう級の方が大分來

てゐて、先生もお出でになつてゐま
した。
五35 7 學校の門を出て西へ向ひまし
た。
五36 1 〈略〉、わらびやせんまいが、
すつかり葉になつてゐました。
五36 3 いたどりは私どものせいほど
にのびてゐました。
五36 5 大道へ出て、となり村の入口
へ行くと、〈略〉。
五36 8 〈略〉、道ばたの立石にさるが
三匹ほつてありました。
五37 2 一匹は目に、一匹は口に、一
匹は耳に手をあててゐます。
五37 7 大平橋を渡つてから左へをれ
て、松山の下へ瓦やきを見に行きま
した。
五37 8 大平橋を渡つてから左へをれ
て、松山の下へ瓦やきを見に行きま
した。
五38 3 ちやうどかまを明けたところ
で、白いけむりが立つてゐました。
五38 4 此所を出て、となり村の學校
の前へ行くと、〈略〉。
五38 5 〈略〉、先生が「〈略〉。」とい
つて、私どもを道に待たせておいて、
學校へおよりにりました。
五38 6 〈略〉、先生が「〈略〉、私ども
を道に待たせておいて、學校へおよ
りになりました。」
五38 6 〈略〉、先生が「〈略〉、私ども
を道に待たせておいて、學校へおよ
りになりました。」

りになりました。
五39 1 〈略〉よく物賣に來るおちい
さんが、紺のふろしきづつみをしよ
つて來て、「〈略〉。」といつて通りま
した。
五39 1 〈略〉よく物賣に來るおちい
さんが、紺のふろしきづつみをしよ
つて來て、「皆さん、遠足かね。」と
いつて通りました。
五39 3 此の時私どもの村へよく物
賣に來るおちいさんが、〈略〉、
「〈略〉。」といつて通りました。
五40 1 先づ拜禮をして、拜禮のよこ
の芝の上で、べんたうをたべてゐる
と、〈略〉。
五40 2 〈略〉、べんたうをたべてゐる
と、〈略〉。
五40 3 〈略〉、べんたうをたべてゐる
と、さつきの學校の小使さんが麥
ゆを持つて來て下さいました。
五40 3 〈略〉、さつきの學校の小使
さんが麥ゆを持つて來て下さいまし
た。
五40 4 のどがかわいてゐたので、み
んな大よろこびで飲みました。
五40 6 先生が拜殿にかけてある繪馬
のお話をして下さいましてから、
〈略〉。
五40 7 先生が拜殿にかけてある繪馬
のお話をして下さいましてから、
〈略〉。
五40 7 先生が拜殿にかけてある繪馬

のお話をして下さいましてから、た
 んぼの小道へ出て、〈略〉。
 五407 〈略〉、たんぼの小道へ出て、
 三時ごろ學校へかへりました。
 五413 昔熊襲のかしらに川上のたけ
 るといふ者があつて、天皇のおほせ
 にしたがひませんでした。
 五418 尊は〈略〉、いさみ立つてお
 出かけになりました。
 五422 お着きになりますと、間もな
 くてたけるが新しい家を造つて、人々
 をあつめて、其の祝をしました。
 五422 〈略〉たけるが新しい家を造
 つて、人々をあつめて、其の祝をし
 ました。
 五423 尊はかみをといて、女のすが
 たになり、〈略〉。
 五424 尊は〈略〉、つるぎをふとこ
 ろにかくして、其の家の中へおはい
 りになりました。
 五426 大ぜいの女どもにまじつてい
 らつしやいますと、〈略〉。
 五427 〈略〉、たけるは尊を見つけて、
 自分のそばへ呼びました。
 五431 夜がふけて、人々はかへりま
 した。
 五432 たけるも酒によつてねむりま
 した。
 五434 此の時尊はふところのつるぎ
 を出して、たけるのむねをおつきに
 なりました。
 五437 なみくの者なら、「あつ」

とさけんで死にませうが、〈略〉。
 五441 〈略〉、たけるも熊襲のかしら
 だけあつて、「〈略〉。」といひました。
 五452 自分にもさる者はないので、
 たけると申して居りましたが、〈略〉。
 五455 日本武皇子と申し
 たまへ。」といつて、息がたえまし
 た。
 五464 米をつくの、上にもうす
 をさかさにつるしておけば、きねの
 上げ下しに米がつける。
 五465 「上のうすには、どうして
 米を入れる。」
 五472 もう桑の葉をたべないで、頭
 を上げて、繭をかける所をさがしま
 す。
 五473 もう桑の葉をたべないで、頭
 を上げて、繭をかける所をさがしま
 す。
 五474 それをひろつて、まぶしへう
 つすのですが、〈略〉。
 五482 まぶしには、かさくといふ
 音がしてゐますが、〈略〉。
 五484 早いのもう繭を作り上げて
 ゐます。
 五488 〈略〉繭の中で、きゆうくつ
 さうにからだをまげて、一生けんめ
 いにはたらいてゐるのもあります。
 五491 〈略〉繭の中で、きゆうくつ
 さうにからだをまげて、一生けんめ
 いにはたらいてゐるのもあります。
 五492 まだ繭をかける場所をさがし

てゐるのもあります。
 五493 今桑をたべてゐる蠶も、明日
 の朝までには、たいてい上つてしま
 ふさうです。
 五494 〈略〉、明日の朝までには、た
 いてい上つてしまふさうです。
 五504 此ノ頃ハ雨ガ降りツツバイテ、
 表デ遊ブ日ガアリマセン。
 五505 カウ毎日降ル雨ハドウナツテ
 シマフノデセウ。
 五508 〈略〉、水ハ低イ方ヘ低イ方ヘ
 ト流レテ行キマス。
 五512 庭ヘ降ル雨モ、庭ノ高イ所カ
 ラ、低イ方ヘ流レテ行キマス。
 五513 ハジメハ糸スヂホドノ流デス
 ガ、ソレガダンくアツマツテ、ミ
 ゾニオチル頃ニハ、流モ早クナリ、
 水ノカサモ多クナリマス。
 五518 低クテ廣イ所ニタマルト、池
 ノヤウニナリ、〈略〉。
 五521 〈略〉、高イ所ニ行キアタルト、
 其所ヲヨケテ流レマス。
 五523 カウシテ流レル水ハ、ミゾカ
 ラ小川ヘ、小川カラ大河ヘ、流レ
 くテ海ヘ行キマス。
 五525 地ノ中ニシミコンデ、井戸水
 ヤ泉ノモトニナルノモアリ、〈略〉。
 五527 〈略〉、目ニ見エナイ水蒸氣
 ニナツテ、空ヘカヘルノモアルサウ
 デス。
 五532 山から薪を取つて来て、〈略〉。
 五532 山から薪を取つて来て、それ

を賣つて、くらしを立ててゐました。
 五532 山から薪を取つて来て、それ
 を賣つて、くらしを立ててゐました。
 五533 〈略〉、それを賣つて、くらし
 を立ててゐました。
 五534 此の人に年取つたおとうさん
 がありまして、酒がすきでございま
 した。
 五536 それで山へ行くにも、へうた
 んを腰に着けてゐて、〈略〉。
 五536 それで山へ行くにも、へうた
 んを腰に着けてゐて、かへりに酒を
 買つて来ては、おとうさんを喜ばせ
 てゐました。
 五536 〈略〉、かへりに酒を買つて来
 ては、おとうさんを喜ばせてゐまし
 た。
 五536 〈略〉、かへりに酒を買つて来
 ては、おとうさんを喜ばせてゐまし
 た。
 五537 〈略〉、かへりに酒を買つて来
 ては、おとうさんを喜ばせてゐまし
 た。
 五538 或日山の中で、こけに足をす
 べらせて、うつむけにたふれました。
 五542 すると酒のほひがしますの
 で、ふしぎに思つて、見まはします
 と、〈略〉。
 五543 〈略〉、石の中から酒にた物
 がわいてゐます。
 五544 なめてみると、酒のあちがい
 たします。

五五五 喜んで、それから毎日其の酒をくんで来て、おとうさんに上げました。

五547 喜んで、それから毎日其の酒をくんで来て、おとうさんに上げました。

五五八 喜んで、それから毎日其の酒をくんで来て、おとうさんに上げました。

五五二 どうか此の事が天皇のお耳に入りまして、わざく奈良の都から美濃の國へ行幸になりました。

五五 酒の出る所を御らんになつて
五五 〔略〕とおほせになりました。
五五 松島は大小二三百の島が、海

上三四里の間にちらばつてゐて、
 五五七 松島は大小三百の島が、海

上三四里の間にちらばつてゐて、島といふ島には、枝ぶりのよい松がしげつてゐます。

558 〈略〉、島といふ島には、枝ぶりのよい松がしげつてゐます。

552 〈略〉、多くは舟に乗つて、島

の間を通つて見物します。

5573 〈略〉、多くは舟に乗つて、島の間を通つて見物します。

558 2 みて、長い橋のやうに見えます。
558 2 〈略〉、青い松が一面に立つて

ゐて、長い橋のやうに見えます。
五586 〈略〉、島の山には鹿しかがたくさ

んすんでゐます。

五五九 朱ぬりの社殿が山のみどりを
後にして、たいそうきれいに見えま
す。

594 ことにしほのみちた時は、社
殿や廻廊くわいろうが海の中に浮いて、お話
にある龍宮りゅうぐうはこれかと思はれます。


五六十韻 あれく、虹にじが立つてゐる
五十二韻 〈略〉、七つの色をならば
せて、空のゑぎぬへ一筆に、だれ

五十六 韻 雨のはれ間にちよつと出て
用ありさうに天と地の 遠きをつ

なぐ雲の上。

五⁶²₃ 韻 あれく、虹がきえて行く

五⁶³₂ 作太郎は父につれられて、は

五635  「おとうさん、町があんな
 に近く見えてゐて、まだ一里半もあ

五 63 6 ㊦ 「おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、まだ一里半もあるのですか。」

るのですか。」

五五二 〔会〕 あれは製絲工場で、女工が四百人も絲を取つてゐる。

五五八 会 「あ、町の方へ馬車が二だ
五五五 会 いかけて行きます。」

つて、此の下まで來てもよい。」

へはいりました。

564 会 「うちの方では、田に水がないと言つて、さわいであますのに此の村にはよく水がありますね。」

五 66 5 会 「うちの方では、田に水がないと言つて、さわいでゐますのに此の村にはよく水がありますね。」

五668 此の村には、向ふの杉山の
すそに、大きな用水池があつて、其
所から水を引くからだ。

五674 ㊦ 來年あたりから掘ることに
なつてゐる。

五676 ㊦ 少しまはり道だが、となり

村の用水池を見て行くことにしよう

五692 〈略〉、此の村の庄屋が、
 〈略〉、どうかして村のあれ地を田地

にして、米がとれるやうにしたいものだと思つた。

を田地にして、米がとれるやうにしたいものだと思つた。

引いて来る川がない。

5704 着手は來年からといふことになつて、庄屋は方々の村へ用水池を

見に出た。

五七 七 いよく其の年になつて、庄屋は普請方ふしんかたをよそからつれて來た。

らつれて來た。

五七〇八 村の人は代り合つて、一日置に普請の手つだひをすることになつた。

五七四 〈略〉、いろいろの工事に、村
の人は普請方のさしづをうけてはた
らいた。

五七二「略」と言つて、首をひねる者もあつたといふが、略。

五七五 翌年の春、大雨がふりつづい

て、〈略〉土手が、半分ほどもくづれてしまった。

手が、半分ほどもくづれてしまった
五⁷³四「略。」などと言ふ者が出て
來て、手つだひに出る者は日ましに

へつた。

五七四 「略。」などと言ふ者が出て
來て、手つだひに出る者は日ましに

へつた。

五⁷³6 庄屋は村の者にいろく言つて聞かせて、土手つきなほしたが

五三六 庄屋は村の者にいろく言つて聞かせて、土手をつきなほしたが

五七四 一 〈略〉、其の年のつゆに、又十
手かくづれて、池のたまり水が村の

中へおし出した。

五七二 かうなつては、もう庄屋の亞口を言ふ者ばかりで、普請方はどう

- 五743 〈略〉、普請方はとう／＼にげてしまった。
- 五745 方々から人夫をやとつて来て、もう一度土手をつきなほした。
- 五745 方々から人夫をやとつて来て、もう一度土手をつきなほした。
- 五755 それを見て、村の人は急にあれ地を田にしまった。
- 五756 一冬こして、春には池の水が一ぱいになった。
- 五758 六月の田植時から七月・八月にかけて、水はありあまつた。
- 五762 〈略〉、をしいことに、庄屋は池が出来上つた年の冬、死んでしまった。
- 五771 〈略〉、庄屋の妻は子どもをつれて里へ歸つてゐた。
- 五772 〈略〉、庄屋の妻は子どもをつれて里へ歸つてゐた。
- 五774 其の後村の人は、庄屋の家屋敷や田地を買ひもどして、妻や子どもに、もとの家へ歸つてもらつた。
- 五776 其の後村の人は、〈略〉、妻や子どもに、もとの家へ歸つてもらつた。
- 五781 親のほねをりが子の時になつてあらはれたのであらう、〈略〉。
- 五782 〈略〉、あの家にはよい事がつゞいて、身代は前よりもよくなつた。
- 五785 土手の此の記念碑に、今話した事がくはしく書いてある。
- 五786 此の山の杉も庄屋が先に立つて植ゑたのださうだ。
- 五788 昔の貧乏村は、今、郡の中でもゆびをりの金持村だと言はれてゐる。
- 五791 今年のひでりにも、此の用水池にはあんなに水がたまつてゐる。
- 五794 八幡太郎義家が或日安倍宗任をつれて廣い野原を通りますと、〈略〉。
- 五795 八幡太郎義家が〈略〉廣い野原を通りますと、狐が一匹とんで出ました。
- 五797 義家はせ中のうつぽから、かりまたをぬいて狐を追つかけてました。
- 五798 いころすのもかはいさうだと思つて、兩耳の間をねらつて、頭の上をすれ／＼にいました。
- 五801 〈略〉、兩耳の間をねらつて、頭の上をすれ／＼にいました。
- 五802 矢は狐の鼻のさきの地面につつ立つて、狐はころりとたふれました。
- 五804 かけよつて見て、宗任が「〈略〉。」と言ふと、〈略〉。
- 五804 かけよつて見て、宗任が「〈略〉。」と言ふと、〈略〉。
- 五805 矢はあたつて居りませぬのに、狐は死んで居ります。」
- 五806 狐は死んで居ります。」
- 五808 びつくりしてたふれたのだ。
- 五808 ぼつて置け、今に生きかへる。
- 五814 さて宗任がかりまたをぬき取つて、義家にかへしますと、〈略〉。
- 五816 〈略〉、義家はせ中をぐるりとむけて、うつぽへさ／＼せました。
- 五844 九月にはいつては雨つゞきでしたが、〈略〉。
- 五848 大水が出なければよいがと心ばいして、夜中に手をけやはき物まですつかり二階へ上げました。
- 五853 夜明け方になつて、雨も風もやみますと、〈略〉。
- 五855 急に川水の音がごう／＼と聞えて来て、〈略〉。
- 五855 急に川水の音がごう／＼と聞えて来て、間もなく火の見で半しようをうち出しました。
- 五861 二階のまどからのぞいて見ますと、水が表の通をさつと洗ひました。
- 五863 叔父さんは大へんだ土手が切れたといつて、すぐ屋根へ出しました。
- 五866 うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、〈略〉。
- 五867 うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、〈略〉。
- 五867 うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、〈略〉。
- 五871 うちでも下の雨戸がたふれて、中からうすやたらひがぼかぼか流れ出すほどで、〈略〉。
- 五876 わたしは正男をつれて物ほしへ出しました。
- 五881 町は大い水につかつて、人家も七八軒流れました。
- 五887 おとうさんやおかあさんには、取りまぎれてまだ手紙も上げずに居ります。
- 五888 どうぞよろしく申して下さい。
- 五895 私は町の辻に立つてゐる郵便函であります。
- 五897 〈略〉、夜でも、晝でも、此所に立通しに立つてゐますが、〈略〉。
- 五902 時々道を人にきいて來た者として、〈略〉。」とひとりごとを言つて行く者があります。
- 五902 時々道を人にきいて來た者として、〈略〉。」とひとりごとを言つて行く者があります。
- 五903 時々〈略〉、〈略〉。」とひとりごとを言つて行く者があります。
- 五907 私のやくめは、〈略〉、〈略〉郵便物を大切にあづかつてゐて、これをあつめに來る人に渡すのであります。
- 五907 私のやくめは、〈略〉、〈略〉郵便物を大切にあづかつてゐて、これをあつめに來る人に渡すのであります。
- 五915 作物の種や商品の見本も入れ

てよいことになつてゐますが、〈略〉。

五91 6 作物の種や商品の見本も入れてよいことになつてゐますが、〈略〉。

五92 1 私の口にはいる物は、はがきの外はきつと切手がつてあります。

五92 2 それも品と目方によつて切手の價がちがひます。

五92 4 郵便物をあつめる人は、毎日きまつた時刻に来て、私のおなかを明けて持つて行きます。

五92 4 郵便物をあつめる人は、〈略〉、私のおなかを明けて持つて行きます。

五92 4 〈略〉、私のおなかを明けて持つて行きます。

五92 7 〈略〉、私は氣がもめてたまりません。

五92 8 もし間に合はないと、向ふへ大そうおくれで着くからです。

五93 3 葉書には、大ていちよつとした用事が書いてありますが、〈略〉。

五93 4 〈略〉、封書には、いろ／＼こみ入つた事が書いてあります。

五93 5 おめでたい事やたのしさうな事が書いてありますと、私もうれしいと思ひますが、〈略〉。

五93 7 〈略〉、悲しい事や苦しうな事が書いてありますと、もらひ泣きをいたします。

五94 2 〈略〉、かついで足をはらしてゐる書生さんが、〈略〉。

五94 5 〇「それにはどんな事が書いてあつたか。」

五94 7 「〈略〉。」といふおたづねが出るかも知れませんが、それは人にもらしてはならないことになつてゐます。

五94 8 「〈略〉。」といふおたづねが出るかも知れませんが、それは人にもらしてはならないことになつてゐます。

五95 6 〇 ちりがつもつて山となり、しづくがよつて海となる。

五95 7 〇 ちりがつもつて山となり、しづくがよつて海となる。

五96 1 庭サキノブドウ棚ニ、今、夕日ガサシテキマス。

五96 4 モウアマクナツテキマセウ。

五96 7 ソレニハ黒ミノアルムラサキ色ノ實ガナツテキマス。

五97 7 二人の者が山の中を通ると、熊が出て來ました。

五97 8 一人は早く見つけて、木の上へにげ上りました。

五98 2 一人は〈略〉、地にたふれて死んだふりをしてゐました。

五98 2 一人は〈略〉、死んだふりをしてゐました。

五98 3 熊は死人には手を着けないと聞いてゐたからでございます。

五98 5 熊が來て、からだ中かぎまはしました。

五98 7 〈略〉、ほんたうの死人だと思つたのでせう、其のまま行つてしまひました。

五98 8 此の時、木に上つてゐた者が下りて來て、〈略〉。

五98 8 此の時、木に上つてゐた者が下りて來て、〈略〉。

五98 8 此の時、木に上つてゐた者が下りて來て、〈略〉。

五99 2 〇 僕は木の上から見て、びく／＼してゐた。

五99 2 〇 僕は木の上から見て、びく／＼してゐた。

五99 3 〇 熊が君の耳の所へ口を持つて行つたやうだが、何か言つたのか。

五99 6 〇 あぶない時に、友だちをすててにげるやうな者には、これからつきあふな。

五100 7 向つて右が入口、左が出口で、まん中が帝室用になつてゐます。

五101 1 〈略〉、まん中が帝室用になつてゐます。

五101 5 階下の入口には、左右に大きな待合室があつて、此の外に〈略〉、兩替店や、いろ／＼の賣店もあります。

五102 5 〈略〉、自動車・馬車・人力車がいくだいとなく、入口・出口によつて來ます。

五102 6 はじめて東京見物に來て、此の停車場へ降りる人は、〈略〉。

五102 7 〈略〉、此の停車場へ降りる人は、大てい先づ第一に宮城をさしてまゐります。

六2 1 おちいさんが庭にほしてある

もみをかへしていらつしやると、〈略〉。

六2 2 おちいさんが庭にほしてあるもみをかへしていらつしやると、〈略〉。

六2 2 〈略〉、卵買が來て、卵を七つ買つて行きました。

六2 3 〈略〉、卵買が來て、卵を七つ買つて行きました。

六2 4 今このうちへ行つて見ても、俵の山が出來てゐます。

六2 5 今このうちへ行つて見ても、俵の山が出來てゐます。

六2 5 うちでも土間に丸太を置いて、其の上につんであります。

六2 6 うちでも土間に丸太を置いて、其の上につんであります。

六2 8 昨日までに二山出來て、もう三つ目の山が出來かゝつてゐます。

六3 1 〈略〉、もう三つ目の山が出來かゝつてゐます。

六3 2 今日庭にほしてあるもみをすつて、俵に入れてつんだら、〈略〉。

六3 3 今日庭にほしてあるもみをすつて、俵に入れてつんだら、〈略〉。

六3 4 今日庭にほしてあるもみをすつて、俵に入れてつんだら、三つ目の山は出來上りませう。

六3 7 私がたんぼへお湯を持つて行つてくると、おちいさんが庭で腰をのばして、「〈略〉。」とおつしやいました。

六37 私がたんぼへお湯を持つて行つてくると、〈略〉。
 六38 〈略〉、おぢいさんが庭で腰をのぼして、「〈略〉。」とおつしやいました。
 六43 土間でこぼれもみを拾つてゐたにはとりが、俵の山へ上つてときを作りました。
 六43 〈略〉にはとりが、俵の山へ上つてときを作りました。
 六51 窓 さうさ、中ほどまでは降つてゐるかも知れない。
 六52 窓 何しろ一万二千五百尺もあつて、内地第一の高山だから。
 六57 窓 臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、此の山のいたゞきには、いつもつもつてあるといふことだ。
 六64 窓 「いや、二番も三番も臺灣にあつて、四番目が富士山だ。」
 六77 窓 印度のヒマラヤ山は世界一で、たしか三万尺近いとおぼえてゐる。
 六83 窓 奈良の春日山や三笠山は千尺そこくだが、白根や槍岳よりも知られてゐるし、京都の東山にしてもさうだ。
 六85 窓 ふとん着て、ねたるすがたや東山。
 六87 窓 「高くて名高いのは、どの山ですか。」
 六92 或晩人ガネシツマツテカラ、

金物屋ノ店デ、ヤクワントテツビンガ、ジマン話ヲシ合ヒマシタ。
 六98 窓 金や銀ハ美シクテ、オアシニナツタリ、指ワニナツタリ、其ノ外イロくナカザリ物ニナリマスガ、〈略〉。
 六104 窓 銅ハソレニヒキカヘテ、金ヤ銀ヨリモタクサンアリマスカラ、〈略〉。
 六114 窓 ナルホド、銅ハタクサンアツテ、役ニモ立チマセウガ、〈略〉。
 六115 窓 〈略〉、モツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。
 六126 ヤクワンハ之ヲ聞イテ、〈略〉。ト言ヒマシタ。
 六127 窓 「ソレデモ鐵ハデキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」
 六133 窓 モシセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ、イツデモ光ツテキマス。
 六133 窓 モシセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ、イツデモ光ツテキマス。
 六134 窓 モシセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ、イツデモ光ツテキマス。
 六135 窓 銅ハ人ニ使ハレテキデモ、時々青イ物ヲ出シマス。
 六138 其ノ時鐵ビンハ「〈略〉。」ト言ツテ、中々マケマセンデシタ。
 六144 松山の入口で、赤くなつてゐたぐみを一枝折ると、〈略〉、にいさんに注意されました。
 六148 僕がぐみをたべてゐる間に、

〈略〉。
 六152 僕が紅色のきれいなきのこを取つて、にいさんに見せましたら、〈略〉。
 六155 窓 「あゝ、それは紅茸だ。毒だよ。其の手でぐみをたべてはいけない。」
 六157 僕はびつくりして、ぐみも紅茸も地面へなげつけました。
 六158 それからにいさんと、ざふ木林へはいつて、〈略〉、ねずみ茸を少し取りました。
 六161 〈略〉、ざふ木林へはいつて、じめくした落葉をふんで、ねずみ茸を少し取りました。
 六163 だんく上つて行くと、〈略〉。木びきの力蔵さんが〈略〉、大きなこぎりで板をひいてゐました。
 六167 木びきの力蔵さんが〈略〉、大きなこぎりで板をひいてゐました。
 六168 何の木か、おがくづが大そうよくにほつてゐました。
 六173 にいさんが「今日は。」と言つて、「〈略〉。」とたづねますと、
 六181 〈略〉、「〈略〉。」と言つて、栗林の下のくぼ地を教へてくれました。
 六181 〈略〉、「〈略〉。」と言つて、栗林の下のくぼ地を教へてくれました。
 六183 行つて見ますと、なるほど少

し早すぎましたが、それでも、小さなしめちが列を作つて出てゐました。
 六184 〈略〉、それでも、小さなしめちが列を作つて出てゐました。
 六185 ふまないやうに注意して、かご一ぱい取つて歸りました。
 六186 ふまないやうに注意して、かご一ぱい取つて歸りました。
 六194 鉛色の空は次第々々に低くなつて來ます。
 六195 風がひゆうつとうなつて來るたびに、〈略〉。
 六196 〈略〉、濱の松は身をふるはせて、頭を地に着けさうにします。
 六197 うちよせて來る波は、岩をかみ、〈略〉。
 六198 うちよせて來る波は、岩をかみ、小じやりとばしては、さあつと引いて行きます。
 六198 うちよせて來る波は、〈略〉、さあつと引いて行きます。
 六201 もとより舟は一そうも出てゐません。
 六202 いつも通る汽船も、高波をよけて、沖を通ると見えて、〈略〉。
 六203 いつも通る汽船も、高波をよけて、沖を通ると見えて、汽てきの音は少しも聞えませんが、
 六215 窓 空もみどり、海もみどり、
 六223 窓 〈略〉、沖へ急ぐ兄の小舟かゝみ。

濱へ歸る父の小舟、すれ合つて、
ゑがほとゑがほ。

六22 木曾義仲が都へせめ上ると聞
いて、平家はあわてて討手をさしむ
けました。

六22 平家はあわてて討手を
さしむけました。

六22 大將は平維盛で、十万騎を
引きつれて、越中の國の礪波山に
ぢんを取りました。

六22 義仲は五万騎を引きつれて、
これもおなじく礪波山のふもとにぢ
んを取りました。

六23 兩方からおしよせて、ぢんの
間がわづか三町ばかりになりました。

六23 義仲はひそかにみ方の
者を敵の後へまはらせて、兩方から
一度にどつときこのゑをあげさせ
ました。

六25 暗さは暗し、道はなし、平家
方にはげ場がなくて、後のくりから
谷へ、なだれをうつて落ちました。

六25 平家方は「略」、後の
くりから谷へ、なだれをうつて落ち
ました。

六25 馬の上には人、人の上
には馬、かさなりかさなつて、ずる
ぶん深いくりから谷が、平家の人馬
で埋まりました。

六25 庭の菊も白い花びらに赤みが
さして來た、霜にあたつたからだら
う。

六26 うめもどきの實がいつもより
目立つて見える。

六27 こんな寒い日にも、朝早くか
ら、高い木の上をとびまはつて鳴い
てゐる。

六27 こんな寒い日にも、朝早くか
ら、高い木の上をとびまはつて鳴い
てゐる。

六28 なるほど、ごまつぶ程の蟻が
一匹虎を見上げてゐます。

六30 虎はおこつて、蟻をふみつぶ
さうとしました。

六30 蟻は虎の指のまたからくどつ
て、仲間の者にあひづをしました。

六30 數かぎりもない蟻がま
つ黒になつて、出て來ました。

六31 虎はうん／＼うなつて、かけ
まはるより外、どうすることも出來
ません。

六31 とう／＼弱つて、蟻にあやま
つたと言ひます。

六31 町ハマダヒツソリトシテ、ネ
ムツテキタ。

六32 マツ先ニ出アツタノハ牛乳
配達デ、車ノ音ヲ高くサセテ、ハシ
ツテ行ツタ。
六32 「略」、車ノ音ヲ高くサセテ、
ハシツテ行ツタ。

六32 橋ノタモトニ人力車ガ一ダイ
アツテ、車夫ガ「略。」ト言ツタ。

六32 東ガ白ンデ、屋根ノ霜ガ見え
ルヤウニナツタ。

六32 カラノ荷車ヲヒイテ行クノハ、
八百屋ヤサカナ屋デ、「略。」

六32 少シ行クト、呉服屋ノ小ゾウ
ガ表ヲハイテキタ。

六33 自轉車ガ後カラ來テ、カケヌ
ケテ行ツタ。

六33 自轉車ガ後カラ來テ、カケヌ
ケテ行ツタ。

六33 豆腐屋ノラツパヤ「略」ガ小
路ノオクニ聞エテ來テ、「略。」

六33 豆腐屋ノラツパヤ「略」ガ小
路ノオクニ聞エテ來テ、町ハダン
／＼ニギヤカニナツテ來タ。

六33 町ハダン／＼ニギヤカ
ニナツテ來タ。

六33 ベンタウヲサゲテ來ル女工ハ、
サツキカラ汽デキノ鳴ツテキル工場
ヘ急グノデアラウ。

六34 女工ハ、サツキカラ汽
デキノ鳴ツテキル工場ヘ急グノデア
ラウ。
六34 停車場デキツプヲ買ツテキル
ト、郵便物ヲツンダ車ガセイヨク
カケテ來タ。
六34 「略」、郵便物ヲツンダ車ガセイ
ヨクカケテ來タ。
六34 屋島の合戦に、義經が小わき
にはさんでゐた弓を海へ落しました。

六35 弓は潮に引かれて流れて行き
ます。

六35 弓は「略」流れて行きます。
六35 義經は馬の上にうつぶしにな
つて、むちのさきでそれをかきよせ
ようとします。

六35 敵は船の中から熊手を出して、
義經のかぶとに引つけようとしま
す。

六35 「捨てておしまひなさい。」
六37 「略」、義經は笑つて、「略。」
と言つたと申します。

六38 叔父爲朝の弓のやうな強い
弓なら、わざと敵にやつてもよいが、
「略。」

六38 「略」、此の弱い弓を取られ
て、『これが義經の弓だ。』などと言
はれては、「略。」

六38 「略」、此の弱い弓を取られ
て、『これが義經の弓だ。』などと言
はれては、源氏の名折れになるから
だ。

六39 昨日はとなり村から來てゐ
る歩兵の音吉君と二人で町を見物し
た。

六40 兵には歩・騎・砲・
工・輜重の五種があつて、私の村
から、今歩兵になつて來てゐるのは
私一人だけなのだ。

六40 「略」、私の村から、今歩兵
になつて來てゐるのは私一人だけな
のだ。

六404 〔略〕、私の村から、今歩兵
 になつて來てゐるのは私一人だけな
 のだ。
 六407 〔略〕、役場につとめてゐら
 れた下村さんは騎兵、〔略〕。
 六408 〔略〕、私を入れて村からは
 五人も出てゐるが、〔略〕。
 六411 〔略〕、私を入れて村からは
 五人も出てゐるが、〔略〕。
 六415 〔略〕、どの町村からも、歩兵が一
 番多く出てゐるのに、〔略〕。
 六417 〔略〕、其の代り輜重兵の外は各種
 の兵が出てゐる。
 六426 〔略〕、からだをぢやうぶにして、
 よく學問をべんきやうしなさい。
 六428 〔略〕、軍隊へ來ても、學校でなま
 けてゐる者は人一倍苦勞をする。
 六446 〔略〕、朝、雷が目をさまして見ると、
 月と日が居りません。
 六448 〔略〕、雷はかんしんして、「あゝ、
 月日の立つのは早いものだ。
 六455 〔略〕、ワスレナイ中ニ書イテ
 置カウ。
 六457 〔略〕、其ノワケハ、川デ卵カラカヘ
 ツテ、海デ大キクナルカラダ。
 六461 〔略〕、大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬
 ニカケテ、海カラ川ヘ上ツテ來ル。
 六462 〔略〕、大キクナツタ鮭ハ、秋カラ冬
 ニカケテ、海カラ川ヘ上ツテ來ル。
 六463 〔略〕、ダン／＼上流ニサカノボツテ、
 時ニハセ中ガ出ル程ノ淺イ所マデ上
 ツテ來ル。

六464 〔略〕、時ニハセ中ガ出ル程ノ
 淺イ所マデ上ツテ來ル。
 六466 〔略〕、キレイナ水ガサラ／＼流レテ、
 川ソコニ小石ノ多イ所ガアルト、
 〔略〕。
 六467 〔略〕、頭ヤ尾デ穴ヲ掘ツテ、
 其ノ中ヘ卵ヲ産ム。
 六472 〔略〕、産ンデシマフト、其ノ
 上ニ砂ヤ小石ヲカブセル。
 六475 〔略〕、シバラク其ノアタリニ
 番ヲシテキテ、ソレカラ海ヘ歸ル。
 六475 〔略〕、シバラク其ノアタリニ
 番ヲシテキテ、ソレカラ海ヘ歸ル。
 六476 〔略〕、中ニハ其所デツカレテ死ンデ
 シマフノモアル。
 六476 〔略〕、中ニハ其所デツカレテ死ンデ
 シマフノモアル。
 六476 〔略〕、中ニハ其所デツカレテ死ンデ
 シマフノモアル。
 六477 〔略〕、翌年ノ春ニナツテ、卵カラカ
 ヘツタ鮭ハ、川ヲ下ツテ海ヘ行ク。
 六478 〔略〕、翌年ノ春ニナツテ、卵カラカ
 ヘツタ鮭ハ、川ヲ下ツテ海ヘ行ク。
 六481 〔略〕、四五年モタツト、大キクナツ
 テ、今度ハ自分ガ卵ヲ産ミニ川ヘ上
 ツテ來ルガ、〔略〕。
 六482 〔略〕、今度ハ自分ガ卵ヲ産ミ
 ニ川ヘ上ツテ來ルガ、〔略〕。
 六483 〔略〕、フシギニ自分ノ生レタ
 川ヘ歸ツテ來ルサウデ、〔略〕。
 六496 〔略〕、居ならぶ子どもは 指を折
 りつつ、日數かぞへて、喜び勇む。
 六504 〔略〕、居ならぶ子どもはねむさ忘
 れて、耳をかたむけ、こぶしをに

ぎる。
 六511 〔略〕、源 頼朝が鶴岡の八幡宮へ舞
 を奉納する事になつて、舞姫をあつ
 めました。
 六513 〔略〕、こまつてゐる所へ、〔略〕。
 六514 〔略〕、御殿に仕へてゐる萬じ
 ゆがよからうと申し出た者がありま
 した。
 六527 〔略〕、此の時には頼朝もおもしろく
 なつて、いつしよに舞を舞ひました。
 六534 〔略〕、翌日頼朝は萬じゆを呼出して、
 「〔略〕。」と言ひました。
 六541 〔略〕、ほうびはのぞみにまかせて
 取らせるであらう。
 六551 〔略〕、木曾の家來手塚太郎
 光盛の娘が頼朝に仕へて居りました
 が、〔略〕。
 六552 〔略〕、木曾の家來手塚太郎
 光盛の娘が頼朝に仕へて居りました
 が、〔略〕。
 六554 〔略〕、義仲の所へ知らせました。
 六554 〔略〕、義仲からは折るかへし返事が
 あつて、「〔略〕。」と、〔略〕 刀を送
 つてよこしました。
 六554 〔略〕、「すきをねらつて、頼朝の
 命を取れ。」
 六555 〔略〕、木曾の家につかはつて
 あた大切な刀を送つてよこしました。
 六556 〔略〕、木曾の家につかはつて
 あた大切な刀を送つてよこしました。
 六561 〔略〕、かへつて、はだみはなさず持
 つてゐた刀を見つつけられてしまひま
 した。

六562 〔略〕、かへつて、はだみはなさず持
 つてゐた刀を見つつけられてしまひま
 した。
 六564 〔略〕、さあ、此の女にはゆだんが出
 來ぬといふ事になつて、石のらうを
 造つて、それに入れました。
 六565 〔略〕、石のらうを造つて、そ
 れに入れました。
 六568 〔略〕、これが萬じゆの姫で、木曾に
 住んで居りましたが、〔略〕。
 六571 〔略〕、風のたよりに此の事を
 聞いて、うばをつれて、鎌倉をさし
 て上りました。
 六572 〔略〕、うばをつれて、鎌倉を
 さして上りました。
 六572 〔略〕、鎌倉をさして上りまし
 た。
 六574 〔略〕、二人は〔略〕一月あまりも歩
 きつづけて、やう／＼鎌倉に着きま
 した。
 六576 〔略〕、先づ鶴岡の八幡宮へまゐつて、
 母の命を助けたまへといひ、〔略〕。
 六578 〔略〕、それから頼朝の御殿へ
 行つて、うばと二人で御ほうこうを
 ねがつたのでございます。
 六586 〔略〕、さて萬じゆは、だれか母の事
 をいひ出す者はないかと氣をつけて
 ゐますが、〔略〕。
 六591 〔略〕、あゝ、母はもう此の世の人で
 はないのかと、力をおとして居りま
 した。
 六592 〔略〕、或日のこと、萬じゆが御殿の

うらへ出て、何の氣もなくあたりをながめて居りますと、〈略〉。

六59 或日のこと、萬じゆが御殿のうらへ出て、何の氣もなくあたりをながめて居りますと、〈略〉。

六59 或日のこと、〈略〉、下仕の女が来て、「略。」と申しました。

六59 4 〇 「あの門の中へ、はいつてはなりません。」

六59 7 〇 「あの中には石のらうがあつて、唐糸様がおしこめられて居られます。」

六59 8 〇 「あの中には石のらうがあつて、唐糸様がおしこめられて居られます。」

六60 5 萬じゆは其の夜ひそかにうばをつれて、石のらうをたづねました。

六60 7 八幡様の御引合はせか、門の戸は細めに明いて居りました。

六60 8 うばを門のわきに立たせて置いて、姫は中はいりました。

六60 8 うばを門のわきに立たせて置いて、姫は中はいりました。

六61 1 月の光にすかして、あちらこちらさがしますと、〈略〉。

六61 2 〈略〉、松の一むら立つてゐる中に、石のらうがありました。

六61 4 萬じゆがかげよつて、らうのとびらに手をかけますと、〈略〉。

六62 2 萬じゆはとびらのすきから手を入れて、「おなつかしや、母様。」

六62 6 「何、萬じゆ。木曾の萬じゆ

か。」と、親子は手を取合つて泣きました。

六62 7 やがてうばをも呼入れて、三人は其の夜をなみだの中に明かしました。

六63 1 これから後萬じゆは、うばと心を合はせて、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。

六63 2 〈略〉、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。

六63 2 〈略〉、折々らう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。

六63 6 親を思ふ孝子の心には、頼朝もかんしんして、石のらうから唐糸を出して、萬じゆに渡しました。

六63 6 〈略〉、石のらうから唐糸を出して、萬じゆに渡しました。

六63 7 二人がたがひに取りついて、うれし泣きに泣いた時には、〈略〉。

六64 5 〈略〉、親子は、うばもろともに、喜び勇んで木曾へ歸りました。

六65 2 昨日ニイサンが釘箱ヲ火鉢ノフチニ置イテ、手工ヲシテキタ時、

六65 3 昨日ニイサンが〈略〉、手工ヲシテキタ時、〈略〉。

六65 4 〈略〉、弟が釘箱ヲ火鉢ノ中へヒツクリカヘシテ、手ヲ灰ダラケニシテ拾ヒハジメタ。

六65 4 〈略〉、弟が釘箱ヲ火鉢ノ中へヒツクリカヘシテ、手ヲ灰ダラケニシテ拾ヒハジメタ。

六65 5 僕ハ「待テ、待テ。」トイツテ、磁石ヲ持ツテ來タ。

六65 5 僕ハ〈略〉、磁石ヲ持ツテ來タ。

六65 8 サウシテ灰ノ中ヲカキマハシテ、上ゲテ見ルト、〈略〉。

六65 8 サウシテ灰ノ中ヲカキマハシテ、上ゲテ見ルト、〈略〉。

六66 1 〈略〉、果シテ磁石ノサキニ釘ガタクサンツイテキタ。

六66 3 二三返クリカヘシタラ、釘ハ殘ラズ取レテ、其ノ上、折レタ針ヤ、サビタ針金マデツイテ來タ。

六66 4 〈略〉、其ノ上、折レタ針ヤ、サビタ針金マデツイテ來タ。

六66 6 或村に大火事があつて、一村ほとんど丸やけになつた。

六66 8 其のとなり村の青年たちが見かねて、方々へ義捐金をつのりに出た。

六67 2 〈略〉、下男がまだ使へる小繩を捨てたと言つて、主人がひどくしかつてゐた。

六67 2 〈略〉、下男がまだ使へる小繩を捨てたと言つて、主人がひどくしかつてゐた。

六67 3 青年たちは之を聞いて、さ、やき合つた。

六67 5 〇 これではとても義捐はしてくれまい。

六67 7 さて主人に火事の話をして、義捐金のことをいひ出すと、〈略〉。

六68 2 〈略〉、「略。」と言つて、たくさん金を出した上に、〈略〉。

六68 3 〈略〉、粃や豆の種を分けて上げててもよいと言つた。

六68 3 〈略〉、粃や豆の種を分けて上げててもよいと言つた。

六69 3 京都を北から南へ流れてゐる川を賀茂川といひます。

六69 5 〈略〉、冠をかぶつて太刀をはいたおかげ様方や、〈略〉。

六69 6 〈略〉、きれいな着物を着て、牛車に乗つたお姫様方の姿を、〈略〉。

六70 8 〈略〉、川は昔のまゝに清く美しく流れてゐます。

六71 1 賀茂川には橋がたくさんかけてあります。

六71 3 今、三條の大橋に立つて、川下を見ると致しませう。

六72 1 川の西は水のすぐそばから、すき間もなく家が立ちならんであります。

六72 2 東の方は此の橋のたもとから、川にそつて電車が出ます。

六72 3 此の電車道から東山のすそへかけて、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、〈略〉。

六72 4 此の電車道から東山のすそへかけて、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、〈略〉。

六72 4 〈略〉、やはり人家がこみ合つて立つてゐますが、〈略〉。

六72 8 人通の多いのは此の大橋で、

これには電車も通つてゐます。

六73 義經・辨慶の五條の大橋は此の川下にかゝつてゐるのでございませう。

六73 〆略、川原が遠く北につゞいて、其のさきにやさしい姿の山がすすんで見えます。

六73 〆略、其のさきにやさしい姿の山がすすんで見えます。

六73 〆略、其の代りに水がいたつてきれいで、染物にむいてゐます。

六74 〆略「春子、才前ハ着物ヤ帶ノ地ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマスカ。」

六75 〆略 サウ、ヨク知ツテキマシタ。

六75 〆略「ネエサンガ今ヌツテキル此ノ帶ハ。」

六76 〆略 ラシヤヤフランネルトチガツテ、絲ガ細イカラ、氣ガツカナインデス。

六76 〆略「其ノキレイナモヤウハ、ドウシテツケルノデセウカ。」

六76 〆略 コレハ、ハジメ白地ニオツテ置イテ、後デカタヲ置イテ染メルノデ、〆略。

六76 〆略 コレハ、ハジメ白地ニオツテ置イテ、後デカタヲ置イテ染メルノデ、〆略。

六76 〆略 コレハ、ハジメ白地ニオツテ置イテ、後デカタヲ置イテ染メルノデ、〆略。

六77 〆略 コレゴラン、表ダケデ、ウ

ラノ方ハ染メテナイデセウ。

六78 〆略 みんな水靴を着けて、思ひ〆のすべり方をしてゐる。

六78 〆略 みんな水靴を着けて、思ひ〆のすべり方をしてゐる。

六78 〆略、人の手にすがつて、こはごはすべる者もある。

六79 〆略 いろ〆な曲すべりをやる者もあり、ころんでばかりゐる者もある。

六79 〆略、何でもなれてしまへば、少しも陸上とかはらない。

六80 〆略 元の兵は一人も上陸させぬといふ意氣こみで、濱べに石垣をきつて守つた。

六81 〆略 草野の次郎の如きは夜敵の船におしよせて、首二十一取つて、敵の船に火をかけて引上げた。

六81 〆略 草野の次郎の如きは夜敵の船におしよせて、首二十一取つて、敵の船に火をかけて引上げた。

六81 〆略 草野の次郎の如きは夜敵の船におしよせて、首二十一取つて、敵の船に火をかけて引上げた。

六81 〆略 敵は此のいきほひにおそれて、鐵のくさりて船をつなぎ合はせた。

六82 〆略 通有も左のかたを射られたが、少しも屈せず、刀をふるつて進んだ。

六82 〆略 いよ〆おしよせたが、敵の船は高くて上ることが出来ない。

六83 〆略 通有はほばしらをたふして、之をほし〆にして、敵の船へをどりこんだ。

六83 〆略 さん〆に切りまくつて、其の船の大將を生けどりにして引上げた。

六83 〆略、其の船の大將を生けどりにして引上げた。

六83 〆略、敵は一先づ沖の方へしりぞいたが、又おしよせて来るのは明らかである。

六83 〆略 實に我が國にとつては、これまでにない大難であつた。

六84 〆略 全く上下の者が心を一にして、國難にあたつたのである。

六84 〆略、一夜大暴風雨がおこつて、海はわきかへつた。

六85 〆略 敵の船はこつぱみちんにくだけて、敵兵は海のそこに沈んでしまつた。

六85 〆略、敵兵は海のそこに沈んでしまつた。

六85 〆略 生きてかへつた者は數へる程しかなかつたといふ。

六86 〆略 象つかひが乗つてゐて、〆略、ごぼんの上へ乗らせたりした。

六87 〆略 象つかひが乗つてゐて、口上をのべては、らつぱを吹かせたり、ごぼんの上へ乗らせたりした。

六87 〆略 象つかひが乗つてゐて、口上をのべては、らつぱを吹かせたり、ごぼんの上へ乗らせたりした。

六87 〆略、乗つてゐた象つかひは桶の中へはいつてしやがんだ。

六87 〆略、乗つてゐた象つかひは桶の中へはいつてしやがんだ。

六87 〆略 象がそれを下して來て地に置くと、〆略。

六87 〆略 象がそれを下して來て地に置くと、〆略。

六87 〆略 象がそれを下して來て地に置くと、〆略。

六87 〆略 象がそれを下して來て地に置くと、〆略。

六87 〆略 象がそれを下して來て地に置くと、〆略。

六87 〆略 象がそれを下して來て地に置くと、〆略。

六87 〆略 象がそれを下して來て地に置くと、〆略。

六87 〆略 象がそれを下して來て地に置くと、〆略。

六87 〆略 象がそれを下して來て地に置くと、〆略。

六87 〆略 象がそれを下して來て地に置くと、〆略。

六87 〆略 象がそれを下して來て地に置くと、〆略。

たやして苦しめようとはかつた。

六92 2 これにこりて、賊は城の水をたやして苦しめようとはかつた。

六92 4 先づ谷川のほとりに三千人の番兵を置いて、城兵が汲みに来られないやうにした。

六92 7 城中には十分水の用意がしてあつた。

六93 1 番兵がゆだんをしてゐると、
《略》。

六93 2 《略》、城兵が切りこんで来て、旗をうばつて引上げた。

六93 2 《略》、城兵が切りこんで来て、旗をうばつて引上げた。

六93 2 《略》、城兵が切りこんで来て、旗をうばつて引上げた。

六93 5 正成は此の旗を城門に立てて、さんぐに賊を惡口させた。

六93 7 賊が之を聞いて、くやしがつて攻めよせると、《略》。

六93 8 賊が之を聞いて、くやしがつて攻めよせると、《略》。

六94 2 さうして、これをよけようとして賊のさわぐ所を射させて、《略》。

六94 3 《略》、賊のさわぐ所を射させて、又々五千人数もころした。

六94 4 此の上はひやうらう攻にしようと思つて、賊は城へ攻めよせないことにした。

六94 6 或朝、夜明頃、城中からうつて出て、どつとときの聲をあげた。

六94 6 或朝、夜明頃、城中からうつて出て、どつとときの聲をあげた。

て出て、どつとときの聲をあげた。

六95 2 賊が四方から之を目がけておしよせると、《略》。

六95 4 ふみとままつてゐたのは、みんな藁人形であつた。

六95 8 《略》、賊は大きなはしごを作つて、之を城の堀に渡して橋にした。

六96 1 《略》、賊は大きなはしごを作つて、之を城の堀に渡して橋にした。

六96 4 すると正成は、何時の間に用意して置いたか、たくさんなたいまつを出して、《略》。

六96 5 すると正成は、《略》、たくさんなたいまつを出して、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。

六96 5 すると正成は、《略》、たくさんなたいまつを出して、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。

六96 5 すると正成は、《略》、たくさんなたいまつを出して、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。

六96 8 橋はまん中からもえ切れて、谷そこへどうと落ちた。

六97 2 賊が千早城一つを持餘してゐると、《略》。

六97 5 百騎にげ、二百騎にげして、はじめ百萬騎といった賊も、しまひには十萬騎に減じ、《略》。

六97 7 《略》、はじめ百萬騎といった賊も、《略》、前後から官軍にうたれて、残少になつて退いた。

六97 7 《略》、はじめ百萬騎といった賊も、《略》、前後から官軍にうたれて、残少になつて退いた。

六97 7 《略》、はじめ百萬騎といった賊も、《略》、前後から官軍にうたれて、残少になつて退いた。

六98 3 村の學校のげんくわんの

六98 3 村の學校のげんくわんの

向つて右の落葉松は、《略》。

六98 8 圖 《略》、うちの畠にあつたのを、死んだあの子が掘取つて、かついで行つて植ゑたのだ。

六99 1 圖 《略》、死んだあの子が掘取つて、かついで行つて植ゑたのだ。

六99 1 圖 《略》、死んだあの子が掘取つて、かついで行つて植ゑたのだ。

六100 7 圖 二雨々々暖になつて、よいあなばいです。」

六100 8 《略》、と、おかあさんが誰かにおつしやつてゐる時、私は庭へ出ました。

六101 2 雨あがりの庭はぼうつとけむつてゐました。

六101 3 池のはたへ行つて見ると、しやうぶが小指程に芽を出してゐました。

六101 4 池のはたへ行つて見ると、しやうぶが小指程に芽を出してゐました。

六101 5 うちの人はみんな知らずに居るから、一つ取つて行つて見せようと思つて、手を出すと、《略》。

六101 5 《略》、一つ取つて行つて見せようと思つて、手を出すと、《略》。

六101 6 《略》、一つ取つて行つて見せようと思つて、手を出すと、《略》。

六102 1 ねえさんは赤いたすきをかけて、手洗鉢の水をかへてゐました。

六102 2 ねえさんは《略》、手洗鉢の水をかへてゐました。

六102 2 ねえさんは《略》、手洗鉢の水をかへてゐました。

六102 2 ねえさんは《略》、手洗鉢の水をかへてゐました。

六102 2 ねえさんは《略》、手洗鉢の水をかへてゐました。

六102 5 しやうぶ湯を立ててうち中の者がはいつた。

六102 6 かしはもちをこしらへていた。

六102 7 こんなことを思ひ出して垣根の方へ行くと、《略》。

六102 8 《略》、しやくやくが赤い芽を出してゐました。

六103 6 圖 参拜をすましてから、京都へ出て、二三日見物して歸られるさうです。

六103 7 圖 参拜をすましてから、京都へ出て、二三日見物して歸られるさうです。

六103 7 圖 参拜をすましてから、京都へ出て、二三日見物して歸られるさうです。

六103 7 圖 参拜をすましてから、京都へ出て、二三日見物して歸られるさうです。

六104 5 圖 昨日正午にこちらへ着いて、午後外宮へ参り、今日内宮へ参つた。

六104 7 圖 宇治橋を渡つて神苑に入り、千年もたつたかと思ふ老木の下へ行つた時には、《略》。

六105 2 圖 《略》、何となく心持がかはつて、一そうありがたかんじだ。

六105 7 圖 御門の前でうやうやしく拜禮してから、神殿の御もやうを拜した。

六106 4 圖 一切白木造で、お屋根はかやでふいてゐる。

六106 6 圖 棟にはかつを木がならべてあり、棟の兩はしには千木が置いてある。

六106 8 圖 《略》、棟の兩はしには千木

六106 8 圖 《略》、棟の兩はしには千木

六106 8 圖 《略》、棟の兩はしには千木

が置いてある。

六〇七二 何のかざりもない御神殿を拜して、まことにおそれ多い氣がした。

六〇七五 参拜をすましてから、二見浦を見に行つて、〈略〉。

六〇七七 二見浦を見に行つて、おみやげに貝細工を買つた。

六〇七八 こはさないやうにして持つて歸る。

六〇八一 こはさないやうにして持つて歸る。

七一四 地球の表面には、海と陸とありて、海の廣さはおよそ陸の二倍半なり。

七一六 海を分けて太平洋・大西洋・印度洋とし、〈略〉。

七一七 陸を分けて、アジア・ヨーロッパ・アフリカ・南アメリカ・北アメリカ・及び大洋洲とす。

七二四 地球の上には大小合はせて六十餘國あり。

七四八 一年生を先頭に、二・三・四・五・六年が 四列になりて歩く時、全校生徒の八百は 八十分もつゞくなり。

七五五 八百萬の小學生、四列になりて歩かんか、八十萬間つゞくべし。

七六五 三萬近き學校に 分れて學ぶわれくの 望に向ふ足なみは

皆一せいにそろふなり。

七六六 港には防波堤ありて、風波のおそれ少く、〈略〉。

七九四 もやが水の上をこめてゐる。

七九五 大川を下つて行く舟の中はうすら寒い。

七九七 川口近くになると、潮干狩の舟がいくそもよつて來た。

七九八 潮がずん／＼下がるので、舟はすすと進んで、たちまち海へ出た。

七九九 にいさんが「我は海の子」をうたひ出して、丸山君が合唱した。

八〇〇 だん／＼潮が引いて、もう其所所に洲が見え出した。

八〇一 着物のすそをはしよつた。

八〇二 船頭がさをつき立てて、それに舟をつないだ。

八〇三 さうしてさをの先に、赤いしのあるはんでんをしばらくつけて、〈略〉。と言つた。

八〇四 時々手ごたへがして大きな蛤が出た。

八〇五 おさへて見たら、小さなかれひであつた。

八〇六 八〇七 八〇八 八〇九 八一〇 八一一 八一二 八一三 八一四 八一五 八一六 八一七 八一八 八一九 八二〇 八二一 八二二 八二三 八二四 八二五 八二六 八二七 八二八 八二九 八三〇 八三一 八三二 八三三 八三四 八三五 八三六 八三七 八三八 八三九 八四〇 八四一 八四二 八四三 八四四 八四五 八四六 八四七 八四八 八四九 八五〇 八五一 八五二 八五三 八五四 八五五 八五六 八五七 八五八 八五九 八六〇 八六一 八六二 八六三 八六四 八六五 八六六 八六七 八六八 八六九 八七〇 八七一 八七二 八七三 八七四 八七五 八七六 八七七 八七八 八七九 八八〇 八八一 八八二 八八三 八八四 八八五 八八六 八八七 八八八 八八九 八九〇 八九一 八九二 八九三 八九四 八九五 八九六 八九七 八九八 八九九 九〇〇 九〇一 九〇二 九〇三 九〇四 九〇五 九〇六 九〇七 九〇八 九〇九 九一〇 九一一 九一二 九一三 九一四 九一五 九一六 九一七 九一八 九一九 九二〇 九二一 九二二 九二三 九二四 九二五 九二六 九二七 九二八 九二九 九三〇 九三一 九三二 九三三 九三四 九三五 九三六 九三七 九三八 九三九 九四〇 九四一 九四二 九四三 九四四 九四五 九四六 九四七 九四八 九四九 九五〇 九五二 九五三 九五四 九五五 九五六 九五七 九五八 九五九 九六〇 九六一 九六二 九六三 九六四 九六五 九六六 九六七 九六八 九六九 九七〇 九七一 九七二 九七三 九七四 九七五 九七六 九七七 九七八 九七九 九八〇 九八一 九八二 九八三 九八四 九八五 九八六 九八七 九八八 九八九 九九〇 九九一 九九二 九九三 九九四 九九五 九九六 九九七 九九八 九九九 一〇〇〇

八二八 八二九 八三〇 八三一 八三二 八三三 八三四 八三五 八三六 八三七 八三八 八三九 八四〇 八四一 八四二 八四三 八四四 八四五 八四六 八四七 八四八 八四九 八五〇 八五一 八五二 八五三 八五四 八五五 八五六 八五七 八五八 八五九 八六〇 八六一 八六二 八六三 八六四 八六五 八六六 八六七 八六八 八六九 八七〇 八七一 八七二 八七三 八七四 八七五 八七六 八七七 八七八 八七九 八八〇 八八一 八八二 八八三 八八四 八八五 八八六 八八七 八八八 八八九 八九〇 八九一 八九二 八九三 八九四 八九五 八九六 八九七 八九八 八九九 九〇〇 九〇一 九〇二 九〇三 九〇四 九〇五 九〇六 九〇七 九〇八 九〇九 九一〇 九一一 九一二 九一三 九一四 九一五 九一六 九一七 九一八 九一九 九二〇 九二一 九二二 九二三 九二四 九二五 九二六 九二七 九二八 九二九 九三〇 九三一 九三二 九三三 九三四 九三五 九三六 九三七 九三八 九三九 九四〇 九四一 九四二 九四三 九四四 九四五 九四六 九四七 九四八 九四九 九五〇 九五二 九五三 九五四 九五五 九五六 九五七 九五八 九五九 九六〇 九六一 九六二 九六三 九六四 九六五 九六六 九六七 九六八 九六九 九七〇 九七一 九七二 九七三 九七四 九七五 九七六 九七七 九七八 九七九 九八〇 九八一 九八二 九八三 九八四 九八五 九八六 九八七 九八八 九八九 九九〇 九九一 九九二 九九三 九九四 九九五 九九六 九九七 九九八 九九九 一〇〇〇

八二八 八二九 八三〇 八三一 八三二 八三三 八三四 八三五 八三六 八三七 八三八 八三九 八四〇 八四一 八四二 八四三 八四四 八四五 八四六 八四七 八四八 八四九 八五〇 八五一 八五二 八五三 八五四 八五五 八五六 八五七 八五八 八五九 八六〇 八六一 八六二 八六三 八六四 八六五 八六六 八六七 八六八 八六九 八七〇 八七一 八七二 八七三 八七四 八七五 八七六 八七七 八七八 八七九 八八〇 八八一 八八二 八八三 八八四 八八五 八八六 八八七 八八八 八八九 八九〇 八九一 八九二 八九三 八九四 八九五 八九六 八九七 八九八 八九九 九〇〇 九〇一 九〇二 九〇三 九〇四 九〇五 九〇六 九〇七 九〇八 九〇九 九一〇 九一一 九一二 九一三 九一四 九一五 九一六 九一七 九一八 九一九 九二〇 九二一 九二二 九二三 九二四 九二五 九二六 九二七 九二八 九二九 九三〇 九三一 九三二 九三三 九三四 九三五 九三六 九三七 九三八 九三九 九四〇 九四一 九四二 九四三 九四四 九四五 九四六 九四七 九四八 九四九 九五〇 九五二 九五三 九五四 九五五 九五六 九五七 九五八 九五九 九六〇 九六一 九六二 九六三 九六四 九六五 九六六 九六七 九六八 九六九 九七〇 九七一 九七二 九七三 九七四 九七五 九七六 九七七 九七八 九七九 九八〇 九八一 九八二 九八三 九八四 九八五 九八六 九八七 九八八 九八九 九九〇 九九一 九九二 九九三 九九四 九九五 九九六 九九七 九九八 九九九 一〇〇〇

七三二 潮がすっかり落ちて、海はをかやうになつた。

七三三 舟で來た人も、をから來た人も入りまじつて、何百人か數へきれない程ある。

七三八 何時か知らない人とも話し合ふやうになつて、〈略〉、おたがひに見せ合ふ。

七三九 女の人はたすきをかけて、手ぬぐひをねえさんかぶりにしてゐる。

七四〇 女の人はたすきをかけて、手ぬぐひをねえさんかぶりにしてゐる。

七四一 妹やお松は何があつたのか、笑ひながらしきりに取つてゐる。

七四二 めい／＼ざるをかしげて、え物を見せ合つた。

七四三 潮がだんだんさして來て、何時の間にか洲が見えなくなつた。

七四四 潮がだんだんさして來て、何時の間にか洲が見えなくなつた。

七四五 舟は上げ潮に乗つて、をかの方へ動きはじめた。

七四六 川口にかゝつた時ふりかへて見たら、もう廣い海には誰もゐなかつた。

七四七 昨日おかあさんになるすをしていて、〈略〉。

七四八 昨日おかあさんになるすをしていて、うち中の者が潮干狩に參りました。

七四九 麦畠やなね畠の間にさいてゐるのは、ことに目立つて美しい。

七五〇 麦畠やなね畠の間にさいてゐるのは、ことに目立つて美しい。

七五一 麦畠やなね畠の間にさいてゐるのは、ことに目立つて美しい。

七五二 麦畠やなね畠の間にさいてゐるのは、ことに目立つて美しい。

七五三 道ばたや土手にさいてゐるのはこぼれ種であらう。

七五四 七五五 七五六 七五七 七五八 七五九 七六〇 七六一 七六二 七六三 七六四 七六五 七六六 七六七 七六八 七六九 七七〇 七七一 七七二 七七三 七七四 七七五 七七六 七七七 七七八 七七九 七八〇 七八一 七八二 七八三 七八四 七八五 七八六 七八七 七八八 七八九 七九〇 七九一 七九二 七九三 七九四 七九五 七九六 七九七 七九八 七九九 八〇〇 八〇一 八〇二 八〇三 八〇四 八〇五 八〇六 八〇七 八〇八 八〇九 八一〇 八一一 八一二 八一三 八一四 八一五 八一六 八一七 八一八 八一九 八二〇 八二一 八二二 八二三 八二四 八二五 八二六 八二七 八二八 八二九 八三〇 八三一 八三二 八三三 八三四 八三五 八三六 八三七 八三八 八三九 八四〇 八四一 八四二 八四三 八四四 八四五 八四六 八四七 八四八 八四九 八五〇 八五一 八五二 八五三 八五四 八五五 八五六 八五七 八五八 八五九 八六〇 八六一 八六二 八六三 八六四 八六五 八六六 八六七 八六八 八六九 八七〇 八七一 八七二 八七三 八七四 八七五 八七六 八七七 八七八 八七九 八八〇 八八一 八八二 八八三 八八四 八八五 八八六 八八七 八八八 八八九 八九〇 八九一 八九二 八九三 八九四 八九五 八九六 八九七 八九八 八九九 九〇〇 九〇一 九〇二 九〇三 九〇四 九〇五 九〇六 九〇七 九〇八 九〇九 九一〇 九一一 九一二 九一三 九一四 九一五 九一六 九一七 九一八 九一九 九二〇 九二一 九二二 九二三 九二四 九二五 九二六 九二七 九二八 九二九 九三〇 九三一 九三二 九三三 九三四 九三五 九三六 九三七 九三八 九三九 九四〇 九四一 九四二 九四三 九四四 九四五 九四六 九四七 九四八 九四九 九五〇 九五二 九五三 九五四 九五五 九五六 九五七 九五八 九五九 九六〇 九六一 九六二 九六三 九六四 九六五 九六六 九六七 九六八 九六九 九七〇 九七一 九七二 九七三 九七四 九七五 九七六 九七七 九七八 九七九 九八〇 九八一 九八二 九八三 九八四 九八五 九八六 九八七 九八八 九八九 九九〇 九九一 九九二 九九三 九九四 九九五 九九六 九九七 九九八 九九九 一〇〇〇

七五五 手もとの軍ぜい二萬騎を引きつれて、たゞちに極樂寺坂へ向ひました。

七五六 稲村崎の此方に着いて、賊のそなへを見渡しますと、〈略〉。

七五七 北の山手には木戸を立てて、數萬の兵が之を守つてゐます。

七五八 北の山手には木戸を立てて、數萬の兵が之を守つてゐます。

七五九 又南の海上にはひしひしと軍船を浮べて、岸には大木がぎりたふしてあります。

七六〇 岸には大木がぎりたふしてあります。

七六一 義貞は馬から下りてかぶとをぬぎ、はる／＼と海上を拜しました。

七六二 さて、心の中に、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をほろぼさうとしてゐます。

七六三 賊臣北條をほろぼさうとしてゐます。

七六四 海神ねがはくは潮を退けて、道を開かせたまへと念じて、〈略〉。

七六五 海神ねがはくは潮を退けて、道を開かせたまへと念じて、黄金作の太刀を取つて、海の中に投入

七六六 海神ねがはくは潮を退けて、道を開かせたまへと念じて、黄金作の太刀を取つて、海の中に投入

七六七 海神ねがはくは潮を退けて、道を開かせたまへと念じて、黄金作の太刀を取つて、海の中に投入

れました。

七20 〆略〃黄金作の太刀を取つて、海の中に投入れました。

七207 すると、これまで潮の満ちてゐた稲村崎は、〆略〃。

七21 すると、〆略〃稲村崎は、其の夜の月に入る頃に、二十餘町にはかに干上つて砂地にかはり、〆略〃。

七21 〆略〃、落ちて行く潮にさそはれて、賊の軍船はことごとく沖へ流れてしまひました。

七212 〆略〃、落ちて行く潮にさそはれて、賊の軍船はことごとく沖へ流れてしまひました。

七213 〆略〃、賊の軍船はことごとく沖へ流れてしまひました。

七215 義貞は之を見て、「ものども進め。」と、〆略〃鎌倉さして攻めこみました。

七219 義貞は〆略〃、其の遠干がたを眞一文字に鎌倉さして攻めこみました。

七22 賊のそなへは忽ちくづれて、防ぐにも防がれず、〆略〃。

七222 賊のそなへは忽ちくづれて、防ぐにも防がれず、たゞあわてさわいでゐます。

七225 鎌倉は一面火の海になつて、賊の大將高時以下北條方は、此の火の中にほろびてしまひました。

七226 〆略〃、賊の大將高時以下北條方は、此の火の中にほろびてしまひました。

ました。

七229 それを通りぬけて四五町上ると、道ばたに大きな松が一本ある。

七232 みきが二かゝへもあつて、枝が傘をひろげたやうに出てゐるので、村の人は之を傘松と呼んでゐる。

七233 〆略〃、枝が傘をひろげたやうに出てゐるので、村の人は之を傘松と呼んでゐる。

七234 〆略〃、村の人は之を傘松と呼んでゐる。

七236 其の松の下に石できざんだ地藏様が立つていらつしやる。

七238 晒木綿のづきんをかぶつて、雨ざらしになつていらつしやるが、

〆略〃。

七238 〆略〃、雨ざらしになつていらつしやるが、何時もお花が上つてゐる。

七24 〆略〃、雨ざらしになつていらつしやるが、何時もお花が上つてゐる。

七241 時々線香の上つてゐることもある。

七246 茶屋にはおばあさんが一人ぼつちで菓子やわらぢを賣つてゐる。

七249 此のおばあさんにむすこが一人あるのださうだがずつと前から南アメリカへ行つてゐるといふことだ。

七254 塚の前に馬頭觀世音とほつた石が立つてゐて、〆略〃。

七254 塚の前に馬頭觀世音とほつた石が立つてゐて、〆略〃。

た石が立つてゐて、其の前に時時新しい馬のくつが上つてゐる。

七255 〆略〃、其の前に時時新しい馬のくつが上つてゐる。

七262 走ることがはやくて、乗用としてはこれにまさる動物がない。

七268 武人は昔から之を愛養して、いざといふ時には、それに乗つて出かけた。

七268 武人は昔から之を愛養して、いざといふ時には、それに乗つて出かけた。

七271 畠山重忠はひよどりごえのさか落しに、馬をしよつて下りたといふし、〆略〃。

七272 〆略〃、近くは乃木大將も、馬は煉瓦造の小屋に入れて置かれたのである。

七279 我が國の馬は西洋諸國の馬にくらべると、せいも低く、體格もおとつてゐるが、〆略〃。

七281 〆略〃、近年外國から種馬を輸入したので、大いに改良されて、いたる所に良馬を見るやうになつた。

七285 〆略〃、其ノ頃天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノ貧シキヲアハレミタマヒキ。

七291 〆略〃、淀川ハイクスズニモ分レテ海ニソ、ゲ。

七292 〆略〃、又多クノ堀アリテ、川ト川トツナゲリ。

七305 〆略〃、後の暗きやぶかげより大なる蛇つと出でて、獅子のからだにまきつきたり。

七306 〆略〃、獅子はおどろきてふりはなさんとしたれど、〆略〃。

七309 〆略〃、獅子の目は火の如くにもえ、怒りてさげふ聲には、百獸おそれてにげまどへど、〆略〃。

七309 〆略〃、怒りてさげふ聲には、百獸おそれてにげまどへど、〆略〃。

り大なる蛇つと出でて、獅子のからだにまきつきたり。

七306 〆略〃、獅子はおどろきてふりはなさんとしたれど、〆略〃。

七309 〆略〃、獅子の目は火の如くにもえ、怒りてさげふ聲には、百獸おそれてにげまどへど、〆略〃。

七309 〆略〃、怒りてさげふ聲には、百獸おそれてにげまどへど、〆略〃。

七314 〆略〃、武士の馬はおどろきて、後足にて立上り、〆略〃。

七314 〆略〃、武士の馬はおどろきて、後足にて立上り、〆略〃。

七314 〆略〃、武士の馬はおどろきて、後足にて立上り、〆略〃。

七316 〆略〃、武士は太刀をぬきて馬よりとび下り、〆略〃。

七316 〆略〃、武士は太刀をぬきて馬よりとび下り、満身の力をこめて、蛇の胴中目がけて打下せば、〆略〃。

七317 〆略〃、満身の力をこめて、蛇の胴中目がけて打下せば、〆略〃。

七317 〆略〃、満身の力をこめて、蛇の胴中目がけて打下せば、〆略〃。

七317 〆略〃、満身の力をこめて、蛇の胴中目がけて打下せば、〆略〃。

七318 〆略〃、蛇は眞二つとなりて、大地にのたうちまはりてたふれたり。

七321 〆略〃、獅子は〆略〃、たてがみをふるひ、四足をのばして後、しづかに近よりて武士の手をなめたり。

七322 〆略〃、獅子は〆略〃、しづかに近よりて武士の手をなめたり。

七325 〆略〃、これより獅子は日夜武士につきしたがひてはなれず、〆略〃。

七三二 図 かくて幾年かすぎし後、武士は海をこえてふるさとへ歸ることとなり。

七三三 図 獅子はもとより武士にしたがひて行かんとせり。

七三二 図 しかるに船長はおそれて之をゆるさず。

七三三 図 船は沖に向ひて港を出でたり。

七三六 図 獅子はかなしげにほえて、濱べに立上りたりしが、〈略〉。

七三九 図 獅子は武士の方を見まもりて、あはれ、波の底に入りぬ。

七三八 図 谷あひの家窓明けて、夜に親しむ時は來ぬ。

七三三 図 大連だより 大連へ來てから、もうかれこれ七八十日、〈略〉。

七三四 図 〈略〉、町のもやうも大分わかつて來ました。

七三五 図 町に〈略〉・兒玉町などと、日露戦争の時の大將方の名を取つて

つけてあるのは面白いでせう。

七三八 図 町に〈略〉・兒玉町などと、日露戦争の時の大將方の名を取つて

つけてあるのは面白いでせう。

七三九 図 通は廣くて平で、歩道と車道の間に並木が植ゑてありますが、〈略〉。

七三六 図 〈略〉、歩道と車道の間に並木が植ゑてありますが、〈略〉。

七三四 図 目ぬきの所には〈略〉家が軒をならべて立つてゐるので、〈略〉。

七三六 図 目ぬきの所には〈略〉家が軒をならべて立つてゐるので、〈略〉。

七三六 図 〈略〉、日本の町よりはかへつて西洋の都會に似てゐるといひます。

七三七 図 〈略〉、來て先づ誰でもおどろくのは、波止場の大きなことです。

七三八 図 第一第二第三と三つならんでゐて、〈略〉。

七三八 図 第一第二第三と三つならんでゐて、たぐさんな大船をどきに横づけにすることが出來ます。

七三九 図 船から陸あげした荷物は、すぐ其所から汽車にのせて、ハルビンへでも北京へでも送ることが出來ます。

七三九 図 まだ來て二三箇月で、よくはわかりませんが、〈略〉。

七三九 図 〈略〉、氣候も思つたよりよくて、快晴の日が多いやうです。

七三九 図 〈略〉、修學旅行に行つて、白玉山上の表忠塔をあふぎ、〈略〉。

七四〇 図 〈略〉、又我が忠勇の士が血を流して取つた二百三高地にも上つて歸りました。

七四〇 図 〈略〉、二百三高地にも上つて歸りました。

七四一 図 〈略〉、見送人をおし分けて、前へ出るおばあさんがある。

七四一 図 〈略〉、腰に小さなふろしきをつみをむすびつけてゐる。

七四一 図 〈略〉、腰に小さなふろしきをつみをむすびつけてゐる。

七四一 図 〈略〉、腰に小さなふろしきをつみをむすびつけてゐる。

七四一 図 其の船に乗つてゐるなら、鐵砲を上げる。

七四二 図 おばあさんは「やれく」といつて、其所へすわつた。

七四二 図 聞けば今朝から五里の山道を、わらちがけで急いで來たのださうだ。

七四三 図 ある時謙信が山の手に陣を取つてゐると、〈略〉。

七四三 図 〈略〉、信玄は兵を二手に分けて、はさみうちしようとした。

七四三 図 謙信はそれをさとつて、夜の間に進んで信玄の陣へ攻入つた。

七四三 図 謙信はそれをさとつて、夜の間に進んで信玄の陣へ攻入つた。

七四四 図 信玄は不意を打たれておどろいたが、〈略〉。

七四四 図 信玄は〈略〉、忽ち陣立をかねて、敵を引受けた。

七四四 図 兩軍は入りまじつて、火花をちらして戦つた。

七四四 図 兩軍は入りまじつて、火花をちらして戦つた。

七四四 図 謙信は馬に一むちくれて、信玄の本陣に切りこみ、〈略〉。

七四四 図 謙信は〈略〉、大太刀をふりかざして、信玄に打つてかゝつた。

七四四 図 謙信は〈略〉、大太刀をふりかざして、信玄に打つてかゝつた。

七四五 図 ぐんばいうちはでふせいだが、えが折れて、肩先へ切りつけられた。

七四五 図 信玄の家來は之を見て、後からやりで謙信をついたが、あたらな

い。

七四五 図 馬はおどろいてとび上つたので、信玄はあぶない所を助かつた。

七四八 図 第六回目にいたつて、信玄から謙信へ、「〈略〉。」と申しこんだ。

七四六 図 戦をはじめてから十二年、今に勝負がきまらない。

七四六 図 よつて明日たがひに勇士を一人づつ出して組討をさせ、〈略〉。

七四六 図 「〈略〉。」よつて明日たがひに勇士を一人づつ出して組討をさせ、勝つた方のものが川中島を取ることにしては。」と申しこんだ。

七四六 図 安間彦六といふ大の男が、物の具見事に着かざり、大の馬に打乗つて、上杉方の陣へ向つた。

七四六 図 小さな鎧武者が一人あらはれて、「〈略〉。」と名のつた。

七四六 図 二人はたがひに馬を乗りよせて、馬上のまゝでむんずと組み、〈略〉。

七四八 図 武田方が之を見て、聲をあげて喜ぶと、〈略〉。

七四八 図 武田方が之を見て、聲をあげて喜ぶと、〈略〉。

七四八 図 武田方が之を見て、聲をあげて喜ぶと、〈略〉。

七四八 図 與五左衛門は忽ちはねかへして、彦六を組みしき、〈略〉。

七四八 図 手早く首を取つてさし上げた。

七四八 図 無念に思つて、武田方から十騎ばかり、木戸を開いて切つて出ようとした。

七四六 〈略〉、木戸を開いて切つて出ようとした。
 七四六 〈略〉、木戸を開いて切つて出ようとした。
 七四七 此の時信玄は之を止めて、「略」といつたので、めでたく中なほりが出来た。
 七四八 セイガ高く、目ガスルドクテ、チヨット見ルト、コハイヤウデシタガ、〈略〉。
 七五〇 私ハ時々其ノ仕事場ヘ行ツテ見マシタ。
 七五〇 鎌ヲキタヘテキタコトモアリマス。
 七五〇 鎌ヲ打ツテキタコトモアリマス。
 七五〇 ナタヲ打ツテキタコトモアリマスシ、車ノ輪ヲ打ツテキタコトモアリマス。
 七五〇 〈略〉、車ノ輪ヲ打ツテキタコトモアリマス。
 七五二 〈略〉、ツクロヒヲタノンダラ、翌日スグニナホシテクレマシタ。
 七五四 夏ノドンナ暑イ日デモ、〈略〉、日ノクレルマデ働イテキマシタ。
 七五五 〈略〉、去年ノクレニ死ンデシマヒマシタ。
 七五七 其ノ時分マデ、ヨソヘ奉公ニ行ツテキタ若イムスコガ、〈略〉。
 七五七 〈略〉若イムスコガ、今デハ其ノ後ヲツイデ、朝カラ晩マデ、〈略〉、働イテキマス。

七五九 〈略〉若イムスコガ、今デハ其ノ後ヲツイデ、〈略〉、働イテキマス。
 七五二 遠洋航海を終へて、郷里に歸り來れる太平丸の船長は、〈略〉。
 七五三 船長は、一日其の町の學校へまねかれて、航海の話をなせり。
 七五六 私も子どもの時には、毎日此の學校へ通つて、〈略〉、此の講堂でお話を聞いたり致しました。
 七五八 で、今日此のなつかしい學校に來て、皆さんにお話をするのは、〈略〉。
 七五九 私は年中航海をしてゐるものですから、少し其のお話を致します。
 七五九 私の乗つてゐる太平丸といふのは、〈略〉。
 七五七 先づいかりをあげて港を出て行きますと、〈略〉。
 七五七 先づいかりをあげて港を出て行きますと、〈略〉。
 七五九 港に立並んでゐる人家は、だん／＼小さくなつて行きます。
 七五九 港に立並んでゐる人家は、だん／＼小さくなつて行きます。
 七五九 海岸の松原や、いその小山も次第に遠くなつて、しまひにはもう何も見えなくなります。

七五五 けれども日の出や日の入には、日光が波にうつつて、水の色が金色になりますし、〈略〉。
 七五八 月夜には波が銀色に光つて、其の美しいことは何ともいひやうがありません。
 七五二 時には鯨が高く潮を吹いてゐるのを見ることがあります。
 七五四 何萬とも知れないいるかが、はね上つてはおよぎ、〈略〉。
 七五五 是ね上つてはおよぎ、〈略〉。
 七五五 是ね上つてはおよぎして行くのを見ることがあります。
 七五五 是ね上つてはおよぎ、はね上つてはおよぎ、はね上つてはおよぎして行くのを見ることがあります。
 七五九 外國の港に着くと、見なれない形の家が並んで立つてゐます。
 七五九 外國の港に着くと、見なれない形の家が並んで立つてゐます。
 七五九 其所にある人は、私どもとはまるでちがつた風をして、まるでちがつた言葉で話をしてゐます。
 七五二 其所にある人は、〈略〉、まるでちがつた言葉で話をしてゐます。
 七五四 船長はコツプの水を一口飲み、又其の話を／＼聞いたり。
 七五八 急に暴風雨が來ると、山のやうな波が立つて、船は今にも沈むかと思ふやうになります。
 七五三 又きりがかゝつたり、大雪が降つたりして、一寸先も見えなく

なることもあります。
 七五八 かねや汽笛を鳴らすのは、外の船に自分等の船の居ることを知らせて、衝突をさけるためであります。
 七五三 一たい船にはらしんぎといふ物があつて、それで方角をとつて進みますから、〈略〉。
 七五八 それで方角をとつて進みますから、〈略〉。
 七五七 又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、それにたよつて方角を知ることが出来るし、〈略〉。
 七五七 又夜はいくら暗くても、星が出てゐれば、それにたよつて方角を知ることが出来るし、〈略〉。
 七五九 燈臺のあかりを知ることは、船に乗る者に取つて、はなはだ大切なことなのであります。
 七五八 船長はかくいひて後、一だん聲をはり上げて、〈略〉。
 七五九 一だん聲をはり上げて、〈略〉。
 七五九 一だん聲をはり上げて、〈略〉。
 七五九 さておしまひに一ついつて置きたい事があります。
 七六〇 ちよつと渡船に乗つてさへ、こはがる者があります。
 七六〇 皆さんのうちには、大きくなつてから、商用其の他で、外國へ出かける人もあります。
 七六三 どうか今から十分海になれ

て置くやうにしてもらひたいのであります。

七61 ㊦ どうか今から十分海になれて置くやうにしてもらひたいのであります。

七61 ㊦ かくて船長は外國より持歸りたる寫眞帖を學校に寄附して去れり。

七62 ㊦ 〈略〉、我も／＼と先をあらそつて渡りました。

七63 ㊦ 水になれた人夫の肩に乗るか、手をひいてもらふかして渡るのでございませう。

七63 ㊦ 水になれた人夫の肩に乗るか、手をひいてもらふかして渡るのでございませう。

七63 ㊦ 大ぜいの人々が口々に人夫を呼んでは我先に渡らうとしますし、〈略〉。

七63 ㊦ 〈略〉、年よりや子どもは聲を立てて呼びひますので、〈略〉。

七64 ㊦ 〈略〉 一人の男が、人夫と渡賃を高いやういと言つてあらそつてゐましたが、〈略〉。

七64 ㊦ 〈略〉 一人の男が、人夫と渡賃を高いやういと言つてあらそつてゐましたが、〈略〉。

七64 ㊦ 〈略〉 一人の男が、人夫と渡賃をぬいで頭にのせ、一人で川へはいつて行きました。

七64 ㊦ 〈略〉 一人の男が、人夫と渡賃をぬいで頭にのせ、一人で川へはいつて行きました。

七64 ㊦ さうしてずいぶんあぶない目にあつて、やうやう向岸に着きました。

七64 ㊦ かの入夫は、少ししてから、何の氣もなく、先程渡賃をあらそつた所へ行つて見ますと、〈略〉。

七64 ㊦ かの入夫は、〈略〉、先程渡賃をあらそつた所へ行つて見ますと、〈略〉。

七64 ㊦ 〈略〉、先程渡賃をあらそつた所へ行つて見ますと、革の財布が落ちてゐました。

七65 ㊦ 取上げると大そうおもくて、中には小判がどつさりはいつてゐました。

七65 ㊦ 〈略〉、中には小判がどつさりはいつてゐました。

七65 ㊦ これはあの人落して行つたにちがひないが、〈略〉。

七65 ㊦ 〈略〉、渡賃が高いといつて、此のあぶない川を一人でこしたほどの人である。

七65 ㊦ もし此の大金がなかつたら、氣がちがつて死ぬやうな事になるかも知れぬ。

七65 ㊦ 氣の毒なことだと思つて、人夫は〈略〉、かの男を追つかけた。

七65 ㊦ 〈略〉、人夫はすぐ川を渡つて、かの男を追つかけた。

七66 ㊦ 〈略〉、上から片はだぬいで、右手につゑをついて、かけ下りて来る者があります。

七66 ㊦ 〈略〉、上から〈略〉、右手につゑをついて、かけ下りて来る者があります。

七66 ㊦ 〈略〉、上から〈略〉、右手につゑをついて、かけ下りて来る者があります。

七66 ㊦ 人夫は「もし／＼。」と呼びかけて、たづねました。

七66 ㊦ 「なんで又さうあわてて引つかへします。」

七67 ㊦ 人夫は其の男のたもとをおさへて、〈略〉。

七67 ㊦ 小判が百五十兩はいつて居ります。

七67 ㊦ 五十兩は黄色なきれにつゑ、んであつて、〈略〉。

七67 ㊦ 五十兩は黄色なきれにつゑ、んであつて、百兩は小さなふくろに入れてあります。

七67 ㊦ 〈略〉、百兩は小さなふくろに入れてあります。

七68 ㊦ 「安心しなさい。此所へ持つて來ました。」

七68 ㊦ 〈略〉、目からはなみだがひつきりなしにこぼれてゐます。

七68 ㊦ しばらくして、〈略〉。といつて、財布の中に手を入れました。

七68 ㊦ 〈略〉、たとひとんで行つて見た所で、もうあるまいとは思ひましたが、〈略〉。

七68 ㊦ 〈略〉、たとひとんで行つて見た所で、もうあるまいとは思ひましたが、〈略〉。

七69 ㊦ 〈略〉、此のまゝ歸ることも出來ませんので、引つかへして參りました。

七69 ㊦ いや／＼ない時には、川の中へとびこんで死んでしまはうと、〈略〉。

七69 ㊦ いや／＼ない時には、川の中へとびこんで死んでしまはうと、〈略〉。

七69 ㊦ 〈略〉と、かくごをして來たのでございませう。

七69 ㊦ それがあなたのやうな正直なお方に拾はれて、財布をいたゞかせてもらひましたが、〈略〉。

七69 ㊦ それがあなたのやうな正直なお方に拾はれて、財布をいたゞかせてもらひましたが、〈略〉。

七69 ㊦ 〈略〉、いたゞいたのは財布ではなくて、私の命でございませう。

七70 ㊦ しばらくして、〈略〉。といつて、財布の中に手を入れました。

- 七702 人夫は之を見て、「略。」といつて、歸らうとしました。
- 七704 あなたから一文でももらふ氣があるくらゐなら、此所まで持つて來はしません。
- 七706 私は渡場へ歸つて人を渡します。
- 七707 人夫は之を見て、「略。」といつて、歸らうとしました。
- 七708 かの男は「どうぞしばらく。」といつて引きとめました。
- 七711 房州へ出かせぎに行つて、れふを致して居りましたが、略。
- 七712 房州へ出かせぎに行つて、れふを致して居りましたが、略。
- 七713 仲間の者が國へ送る金をあづかつて、此の財布に入れて來たのでございます。
- 七713 略、仲間の者が國へ送る金をあづかつて、此の財布に入れて來たのでございます。
- 七718 どうぞ之を受取つて、私の氣がすむやうにして下さい。
- 七719 どうぞ之を受取つて、私の氣がすむやうにして下さい。
- 七724 人夫は之を聞いて、首をふりました。
- 七737 かういつて、さつさと歸つて參ります。
- 七737 かういつて、さつさと歸つて參ります。
- 七739 かの男は「略。」といひな

- がら、人夫の後について來ましたが、略。
- 七741 かの男は略、とうく又川を渡つて、人夫の家へ參りました。
- 七743 見れば年取つた父といふのが、うす暗い小窓の下で、わらちを作つて居りまして、略。
- 七743 見れば年取つた父といふのが、略、わらちを作つて居りまして、妻はろばたでぼろをつつて居ります。
- 七744 略、妻はろばたでぼろをつつて居ります。
- 七744 かの男がわけを話して、どうかお禮を受けてくれといひますと、略。
- 七745 かの男がわけを話して、どうかお禮を受けてくれといひますと、略。
- 七748 妻もまた「せつかくですが。」といつて、相手になりません。
- 七749 男はしあんにくれて、役所へうつたへて出ました。
- 七749 男はしあんにくれて、役所へうつたへて出ました。
- 七752 役人はわけをくはしくたづね、人夫をも呼出して、「略。」と申し渡して、略。
- 七754 紀州の男は急いで國へ歸つて、其の金をまちがひなくとけるやうに致せ。
- 七755 紀州の男は急いで國へ歸つ

- て、其の金をまちがひなくとけるやうに致せ。
- 七758 役人は略、「略。」と申し渡して、人夫にほうびの金をたくさんやつたと申します。
- 七762 豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎といつて、織田信長の草履取をしてゐた時のことである。
- 七763 豊臣秀吉が略、織田信長の草履取をしてゐた時のことである。
- 七764 信長はよく夜明前から馬場へ出て馬を乗りならした。
- 七765 毎朝げんくわんへ出て、「誰か居るか。」と呼ぶと、いつも藤吉郎が眞先に出て來た。
- 七767 略、いつも藤吉郎が眞先に出て來た。
- 七768 或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、「誰か居るか。」と呼ぶと、略。
- 七771 略、「誰か居るか。」と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て來た。
- 七774 一つもより早いのに、よく參つて居つた。
- 七775 一つも人より一前に參つて居ります。
- 七777 「一時も前に。」といつて信長は驚いた。
- 七786 信長は略、其の後間もなく藤吉郎を草履取から引上げて役人の數に入れた。
- 七794 海ノ中ニハ魚ヤ貝ヤ其ノ外イ

- ロくノ動物ガスンデ居リ、略。
- 七796 海ノ中ニハ略、又サマザマノ植物モ生エテ居ル。
- 七804 魚類ニハ略、カレヒ・ヒラメナドノヤウニ、底ニ沈ンデキルモノモアル。
- 七807 魚類ノ外ニ、エビ・カニ・タコ・イカナダガスンデキル。
- 七808 エビノピン／＼ハネタリ、カニノ横ニハツテアルク様子ハ、略。
- 七812 略、タコヤイカガ、アシヲソロヘテ泳グ様ハ、マコトニ面白イ。
- 七815 略、カキヤアハビハ岩ニツイテキル。
- 七816 アハビハ岩ヲハナレテ動クコトガアルケレドモ、略。
- 七828 中デ面白イノハサンゴデ、タクサン集ツテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテキル。
- 七828 略、タクサン集ツテ、木ノ枝ノヤウナ形ヲシテキル。
- 七834 略、海綿モ、ヤハリ海ノ底ノ岩ニ取リツイテキル蟲ノ骨デアル。
- 七835 海ニハ又獸類ガスンデキル。
- 七853 略、岸ニ近い淺イ所カラ二三尺グラキノ所マデニハ、海藻ガ生エテキル。
- 七862 此ノ海藻ニハマダタクサンナ種類ガアツテ、中ニハ肥料ニスルモノモアル。
- 七863 海藻ノ形ハ様々デ、帶ノ様ニ廣クテ長イノモアレバ、略。

七86 4 〈略〉、全體ガ細カニ分レテ、
枝ノ様ニナツテキルノモアリ、〈略〉。
七86 4 〈略〉、全體ガ細カニ分レテ、
枝ノ様ニナツテキルノモアリ、〈略〉。
七87 3 〈略〉、紅色ノモノハ深イ所ニ、
茶色ノモノハ其ノ中間ニ生エテキル
ノデアル。
七88 2 あわたゞしくかけこんで来た
者があります。
七88 4 敵が追つかけて来ます。
七88 4 敵が追つかけて来ます。
七88 5 マリーはどうかしてかくして
やりたいと思ひました。
七88 5 マリーはどうかしてかくして
やりたいと思ひました。
七88 7 こまつてゐますと、〈略〉。
と兵士が言ひました。
七89 1 マリーが大急ぎでコツプに水
を汲んで来ました。
七89 6 「あゝ、さうだ。」と言つて、
マリーはおばあさんのづきんを取つ
て、兵士の頭にかぶせました。
七89 7 〈略〉、マリーはおばあさんの
づきんを取つて、兵士の頭にかぶせ
ました。
七90 2 かう言つて、又大急ぎでおば
あさんの着物を着せてやりました。
七90 3 かう言つて、又大急ぎでおば
あさんの着物を着せてやりました。
七90 4 向ふむきになつて、此の
いすにかけていらつしやい。」

七90 4 向ふむきになつて、此の
いすにかけていらつしやい。」
七90 8 「あゝ、さうです。それか
ら、つんぼのまねをしてね。」
七90 9 此の時どやくと四五人の敵
兵がはいつて来ました。
七91 5 「たしかに來たはずだ。」と言
つて、敵はあちこち見まはしました
が、〈略〉。
七91 6 〈略〉、敵はあちこち見まはし
ましたが、おばあさんの肩に手をか
けて、〈略〉。
七91 7 「これ、おばあさん、お前
は知つてゐるだらう。」
七92 3 さうして、〈略〉。」と言つて、
みんな出て行つてしまひました。
七92 3 〈略〉、みんな出て行つてしま
ひました。
七92 3 〈略〉、みんな出て行つてしま
ひました。
七92 7 〈略〉、おとうさんは朝起きる
とすぐ空を仰いでかうおつしやつた。
七92 9 〈略〉、空には雲もなく、ま
ことによく晴れてゐた。
七92 9 〈略〉、空には雲もなく、ま
ことによく晴れてゐた。
七93 3 風が
出て來た。」
七93 7 〈略〉、此の日はよく大風が吹
くから、厄日といつて、農家ではこ
とに心配するのださうだ。
七94 1 〈略〉。」と、おちいさんが言

つていらつしやつたが、〈略〉。
七94 2 〈略〉、其の中に南の空が黄色
になつて、風がだんくはげしくな
つて來た。
七94 3 〈略〉、風がだんくはげしく
なつて來た。
七94 6 「困つた風だ。」とおつしやつ
て、おちいさんは〈略〉、菊の鉢を
軒下に運んだりされた。
七95 1 夕方からは雨になつて、風は
全く止んだ。
七95 5 重き荷車ひきか
ぬる 人を見かねて、物賣は 〈略〉、
掛聲高くおしてやる。
七95 7 物賣は 〈略〉、
掛聲高くおしてやる。
七96 3 小使の 年のより
しがあはれさに、人々物を出し合
ひて、樂なくらしにかへてやる。
七96 4 人々物を出し合
ひて、樂なくらしにかへてやる。
七97 1 共同助力は人の道、
〈略〉、苦しむ者を、泣く者を、助
けて共に樂しまん。
七97 5 行長は 〈略〉、石田三成に頼
んで、清正のことを秀吉にさんげん
しました。
七97 8 秀吉は之を信じて、清
正に歸國を命じました。
七97 9 清正は朝鮮を立て、伏見へ
參りました。
七98 3 此の人だけは自分のために心

配してくれるであらうと思つたので
ございます。
七98 7 清正は腹を立てて、〈略〉。
といひきつて歸りました。
七99 4 清正は腹を立てて、〈略〉。
といひきつて歸りました。
七99 8 ところが或夜大地震が起つて、
人家堂塔一時に倒れ、〈略〉。
七100 3 此の時清正は、地震と共に
ね起き、家來の者二百人に梃を持
せて、一さんに伏見の城へかけつけ
ました。
七100 9 秀吉は城の庭にしき物をのべ
させ、大提灯をとぼして、
御臺所やおそばの女どもと居りま
した。
七101 3 まだ誰一人城に登つて居りま
せん。
七101 7 上様をはじめ皆様、おしの
下になつては居られぬかと存じ、
〈略〉。
七101 9 家來ども二百人に梃
を持たせてかけつけました。
七102 2 秀吉が之を聞いて、〈略〉。
と心の中で喜びました。
七102 5 さうして清正のやせた姿、日
にやけた顔を見ては、怒がとけて、
涙ぐみました。
七102 5 怒がとけて、涙ぐみま
した。
七103 1 間もなく石田三成が城に登つ
て參りました。

七〇三 三成は驚いて、「略」。御門を守る者は誰か。」
 七〇四 秀吉が之を聞いて、幕の中から、「略」といひましたので、略。
 七〇六 〇 「もうよい。通してやれ。」
 七〇八 〇 「あのせいの低いのが石田だ。通してやれ。」
 七〇九 〇 略、「清正は略」といつて、三成を入れてやりました。
 七〇九 〇 略、「清正は略」といつて、三成を入れてやりました。
 七〇二 〇 秀吉は清正を召出して、「略」とたづねました。
 七〇八 〇 清正はつゝしんで、「略」と、べんぜつさわやかに申し開きました。
 七〇四 〇 命ばかりは助けてやらう。
 七〇六 〇 切つてく切りまくり、略。
 七〇九 〇 切つてく切りまくり、略。
 七〇三 〇 略、某は四つ五つの頃から親にはなれて、姓も存じませんので、略。
 七〇四 〇 略、某は略、御威光を借りて豊臣と記したのでございませう。
 七〇七 〇 秀吉は感心して、「略」といつて、軍功の賞として、清正に名刀をあたまへました。
 七〇八 〇 秀吉は感心して、「略」といつて、軍功の賞として、清正に名刀をあたまへました。

いつて、軍功の賞として、清正に名刀をあたまへました。
 七〇八 〇 彼岸ハ春ト秋トニアリテ、此ノ頃ハ晝夜ノ長サホトンド相等シク、略。
 七〇九 〇 晝ノ長クナルニツレテ、氣候ハ次第第二寒シ。
 七〇九 〇 晝ノ長クナルニツレテ、氣候ハ次第第二寒シ。
 七〇九 〇 農家ニテハ種蒔・略・取入レ等ヲナスニ、彼岸ヲ目アテトシテ、日ヲ定ムルコト多シ。
 七〇四 〇 「あゝ、信吉からだ。よんでごらん。」
 七〇八 〇 「返事のことだ。一つこしらへてごらん。」
 七〇九 〇 「アシタノアサーバンノキシヤデタツテイキマス。」
 七〇三 〇 電報はなるべくみじかい方がよい。もつとつめてごらん。」
 七〇九 〇 十五字までにしてごらん。
 七〇七 〇 電報はさうしていねいにはなくてもよい。
 七〇七 〇 もつと工夫してごらん。
 七〇三 〇 略、うちの屋がうのカネキを入れて、此の頼信紙に書きこんでごらん。
 七〇三 〇 略、此の頼信紙に書きこんでごらん。
 七〇四 〇 代金は二口合はせて月末に送ります。

八〇三 〇 此の間二三度降つた雨に、山の木の葉は目立つて色づいた。
 八〇六 〇 林の中へはいると、眞赤になつたつたが、松の木にからまつてをり、略。
 八〇七 〇 略、日當りのよい所には、つるうめもどきが美しい實をならべてゐる。
 八〇三 〇 谷間の水はすきとほるやうにすんでゐる。
 八〇五 〇 小鳥は時々此の清水にのどをうるはしては、こずあでさへづるのである。
 八〇九 〇 きのこのむらがつて出るものしひの實が落ちて、くぼたまりにころがり合ふのも今である。
 八〇三 〇 略、しひの實が落ちて、くぼたまりにころがり合ふのも今である。
 八〇八 〇 しゃうじを明けて見ると、略。
 八〇三 〇 略、小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれてゐる。
 八〇三 〇 略、小さな犬ころが二匹、上になり下になりしてじやれてゐる。
 八〇二 〇 あまりかはいらしいので、僕はしばらくそれを見てゐた。
 八〇二 〇 すると其のうちに、僕の見えてゐるのに気がついたと見えて、略。
 八〇三 〇 略、僕の見えてゐるのに気がついたと見えて、じやれ合ふのを止めて、略、ちよこくやつて来た。

八〇四 〇 略、じやれ合ふのを止めて、尾をふりながら、ちよこくやつて来た。
 八〇四 〇 略、尾をふりながら、ちよこくやつて来た。
 八〇六 〇 僕が庭へ下りて、かはるく頭をなでてやると、略。
 八〇六 〇 僕が庭へ下りて、かはるく頭をなでてやると、略。
 八〇七 〇 僕が庭へ下りて、かはるく頭をなでてやると、略。
 八〇七 〇 喜んで僕の手にとびついて、べろくとなめる。
 八〇七 〇 喜んで僕の手にとびついて、べろくとなめる。
 八〇九 〇 僕がえんがはへ机を持出して、おさらひをはじめと、略。
 八〇五 〇 略、二匹ともくつぬぎに手をついて、ぎやうぎよく僕のことを見てゐる。
 八〇五 〇 略、二匹ともくつぬぎに手をついて、ぎやうぎよく僕のことを見てゐる。
 八〇四 〇 二匹はいちもくさんにかけて行つたが、略。
 八〇五 〇 略、間もなくかはいらしいのを一匹つれて来た。
 八〇六 〇 それは氏子の五箇村から、子どもの騎手を一人づつ出して、社の横の池のまはりで競走させて、略。
 八〇六 〇 略、社の横の池のまはりで競走させて、勝つた子どもを出した村が、次の年のお祭の日まで、五箇村の頭になるといふ定めであつた。

八六八 一人は信作、一人は耕造といつて、年は同じく十五歳。
 八六九 「略。」といつて、祭の當日には、おびたしい見物人が、朝早くから宮の境内へつめかけた。
 八七三 やがて五人の騎手は「略」、しづくと馬を歩ませて、鳥居の中に集つて来た。
 八七四 やがて五人の騎手は「略」、鳥居の中に集つて来た。
 八七五 神主は先づ神前で祝詞を上げて、それがすむと、「略」一番太鼓を鳴らした。
 八七七 五人の騎手は神に勝利をいのつて、第二のあひづを待ちかまへてゐる。
 八七八 五人の騎手は「略」、第二のあひづを待ちかまへてゐる。
 八七九 五箇村の人々は各自分の村の騎手に向つて、「略。」などと、口々に勢をつけてゐる。
 八七九 〇 「ぜひ勝つてくれ。」
 八八〇 〇 「しつかりやつてくれ。」
 八八二 五箇村の人々は各自分の村の騎手に向つて、「略。」などと、口々に勢をつけてゐる。
 八八四 「略」、五人の騎手は打連れて、拜殿のそばの大きな立石の前に並んだ。
 八八五 馬の頭をそろへて、三番太鼓を今やおそしと待ちかまへてゐる。
 八八六 「略」、三番太鼓を今やおそし

と待ちかまへてゐる。
 八九一 「略」、半分程の所から一騎後れ、二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、「略」。
 八九一 〇 「略」、半分程の所から一騎後れ、二騎後れ、つゞいて三騎までも後れて、もはや信作と耕造の二人だけの競走となつた。
 八九六 今度の競走も五分々々に進んで行つたが、「略」。
 八九七 「略」、中程まで行つた時、信作の馬はつまづいて、前足を折つた。
 八九八 信作はつるりとすべり落ちて、「略」、ころくと池の中へころげこんだ。
 八九三 耕造は驚いて、ひらりと馬からとび下り、「略」。
 八九五 「略」、一たん沈んで又浮上つた信作のえりを引つつかんで、「略」。
 八〇七 耕造は「略」、一たん沈んで又浮上つた信作のえりを引つつかんで、ぐつと岸へ引上げた。
 八〇一 〇 つきそひの者や見物人はかけよつて来て、「略」、上を下へのさわぎである。
 八一一 〇 耕造方の人々は耕造の肩をたゝいて、「略。」などといった。
 八一一六 〇 「略」、人の命にはかへられないと思つて、相手を助けてやつたのはえらい。

八一一七 〇 「略」、相手を助けてやつたのはえらい。
 八一一九 〇 「略」、いづれ又改めてやり直しをしてもらはなければなるまい。
 八一二二 〇 信作方の人々は之を聞いて、「略。」といったので、「略」。
 八一二八 〇 どうか今日から一年の間、あなた方の村が五箇村の頭になつて下さい。
 八一三四 〇 徳川家康が幼時家來に負はれて、安倍川原へ石合戦を見に行つた。
 八一三七 〇 見物人は争つて、多勢の方へ行つたが、家康は小勢の方へ行くと命じた。
 八一三八 〇 家來があやしんで、其のわけをたづねると、「略」。
 八一四一 〇 「多勢の方はゆだんをしてゐるが、「略」。
 八一四二 〇 「略」、小勢の方はみんな心を合はせて、一生けんめいになつてゐる。」
 八一四三 〇 「略」、小勢の方はみんな心を合はせて、一生けんめいになつてゐる。」
 八一四九 〇 徳川家康が大坂城を攻めた時、其の子頼宣は戦が始つたと聞いて、先陣へかけつけたが、「略」。
 八一五三 〇 「殿はまだお若くて、これから功名をお立てになる折はいくらもございます。」
 八一五五 〇 「略」、そばに居た松平正綱が「略。」といつてなぐさめると、

八一五五 〇 「略」、頼宣は顔色をかへて、「略。」といった。
 八一五七 〇 家康は之を聞いて、「略」
 八一五九 〇 家康は之を聞いて、「略」
 八一六五 〇 竹千代が軒ばに雀の巢を見つけて、「略。」と命じた。
 八一六六 〇 「長四郎、雀の子を取つて参れ。」
 八一六八 〇 日が暮れてから、長四郎がそつと屋根つたひに行つて、「略」。
 八一六九 〇 日が暮れてから、長四郎がそつと屋根つたひに行つて、もう少しで雀の巢へ手が届かうとした時、「略」。
 八一七〇 〇 「略」、もう少しで雀の巢へ手が届かうとした時、ふみ外して軒下へどうと落ちた。
 八一七二 〇 將軍秀忠が刀を取つて出て見ると、長四郎であつた。
 八一七二 〇 將軍秀忠が刀を取つて出て見ると、長四郎であつた。
 八一七五 〇 「雀の子がほしくて参りました。」
 八一八一 〇 將軍は長四郎を大きな袋へ入れて、「略。」といつて、袋の口を封じて柱に掛けた。
 八一八三 〇 將軍は「略」、「略」
 八一八三 〇 將軍は「略」、「略」
 八一八三 〇 將軍は「略」、「略」
 八一八三 〇 將軍は「略」、「略」

つて、袋の口を封じて柱に掛けた。

八18 翌日になつて、將軍が又たづねたが、始のやうに答へた。

八18 5 晝頃、御臺所のおわびによつて、長四郎はやつと袋から出された。

八20 1 図 〈略〉 木材ヲキリ出シ、之ヲイカダニ組ミテ河ヲ下スコトアリ。

八20 4 図 イカダノ大ナルモノハ長サ六七十間、幅三四十間、コレニ土ヲ置キテ野菜ヲ作り、〈略〉。

八20 5 図 〈略〉、又小屋ヲ建テテ豚・鶏等ヲカヒ、〈略〉。

八20 7 図 イカダノ大ナルモノハ長サ六七十間、〈略〉、一家コトゴトクコレニ乗りテ、流ニシタガヒテ下ル。

八20 7 図 〈略〉、流ニシタガヒテ下ル。

八20 8 図 其ノ家ヲ出デテヨリ、イカダヲトキテ木材ヲ賣ルニ至ルマデ、〈略〉。

八20 9 図 其ノ家ヲ出デテヨリ、イカダヲトキテ木材ヲ賣ルニ至ルマデ、〈略〉。

八21 4 図 揚子江ハ〈略〉、夏季ハコトニ増水シテ、濁流江ニミナギリ、〈略〉。

八21 9 図 又沿岸ニハ上海・漢口等アリテ、我が國トノ貿易甚ダ盛ナリ。

八22 3 臺灣の蕃人には、お祭に人の首を取つて供へる風がありますが、〈略〉。

八23 1 呉鳳は〈略〉、どうかして首

取の惡風を止めさせたいものだと思

ひました。

八23 4 ちやうど蕃人が、其の前の年に取つた首が四十餘ありましたので、それをしまつて置かせて、〈略〉。

八23 5 〈略〉、それをしまつて置かせて、〈略〉、毎年其の首を一つづつ供へさせました。

八23 7 四十餘年はいつのか過ぎ

て、もう供へる首がなくなりました。

八23 9 そこで蕃人どもが呉鳳へ、首を取ることを許してくれといつて出

ました。

八23 9 そこで蕃人どもが呉鳳へ、首を取ることを許してくれといつて出

ました。

八24 2 呉鳳はお祭の爲に人を殺すのはよくないといふことを説聞かせて、もう一年、もう一年とのぼさせて

ましたが、〈略〉。

八24 3 呉鳳は〈略〉、もう一年、もう一年とのぼさせてあ

ましたが、〈略〉。

八24 4 図 「もう、どうしても待つてあられません。」

八24 5 〈略〉、四年目になると、「もう、どうしても待つてあられません。」といつて來ました。

八24 7 図 「それ程首がほしいなら、明日の晝頃、赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」

八24 7 図 「〈略〉、明日の晝頃、〈略〉、

赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」

八25 2 翌日蕃人どもが、役所の近くに集つてゐますと、〈略〉。

八25 3 〈略〉、果して赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着た人が來ました。

八25 4 待ちかまへてゐた蕃人どもは、〈略〉。

八25 6 〈略〉蕃人どもは、すぐに其の人を殺して、首を取りました。

八25 9 蕃人どもは聲を上げて泣きました。

八26 2 さて蕃人どもは、呉鳳を神にまつて、其の前で、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。

八26 4 さうして今も其の通りにしてゐるのだといひます。

八27 1 図 はをむきて、うゝとうなりて、垣を出て行く。

八27 1 図 はをむきて、うゝとうなりて、垣を出て行く。

八27 2 図 はをむきて、うゝとうなりて、垣を出て行く。

八27 6 図 尾を立てて、のどを鳴らして、我にすりよる。

八27 6 図 尾を立てて、のどを鳴らして、我にすりよる。

八28 8 図 〈略〉、のみ一ちやうにて見事なるほり物をほりて、人を感じしむるも、手の働なり。

八29 5 太郎は毎日炭を焼く煙を遠くに見てゐるが、まだ一度も其所へ行

つて見たことがない。

八29 6 〈略〉、まだ一度も其所へ行つて見たことがない。

八29 7 或日炭を焼く男が太郎のうちへ來て、ゐろりのはたでいろゝの話をした。

八29 9 此の時太郎が、炭はどうして焼くのかときくと、〈略〉。

八30 1 〈略〉、其の男はいいねに教へてくれた。

八30 2 先づよい場所を見立てて、炭を焼く間ねとまりをするための小屋を建てる。

八31 2 さて山の本をきり倒して、四五尺の長さにきりそろへ、〈略〉。

八31 5 〈略〉、又其の上にねつたかま土を置いて、打固める。

八31 6 次にかま口から火をつけて、四五日の間、中の木をむし焼にする。

八31 8 さうして煙出から出る煙の色で焼加減を見て、かまの外へ引出し、〈略〉。

八31 9 〈略〉、かまの外へ引出し、粉をかけて消せば、かた炭が出來上るのである。

八32 9 これはもと野生のものでしたが、今から千何百年も前から栽培することになつたのだとつたへてゐます。

八33 5 昔朝鮮に一人の婦人があつて、子どもをおさづけ下さるやうに、朝晩神様にいのつてゐました。

八33 5 昔朝鮮に一人の婦人があつて、子どもをおさづけ下さるやうに、朝

晩神様にいのつてゐました。

八33 5 昔朝鮮に一人の婦人があつて、子どもをおさづけ下さるやうに、朝

晩神様にいのつてゐました。

八三六 昔朝鮮に一人の婦人があつて、
 八三六 〈略〉、朝晩神様にいのつてゐました。
 八三八 すると或夜ゆめの中に、明日
 何山の何所へ行けば、望のものをさ
 づけてやるといふ神様のお告があり
 ました。
 八三九 婦人は大いに喜んで、夜の明
 けるのを待つて、すぐに其の山へ上
 りました。
 八三四 婦人は〈略〉、夜の明けるの
 を待つて、すぐに其の山へ上りまし
 た。
 八三二 さうして教へられた場所へ行
 つて見ますと、〈略〉。
 八三四 〈略〉、見なれない草に、眞赤
 な美しい實が一つなつてゐました。
 八三六 婦人は、これは珍しい、神様
 がおさづけ下さつたのはこれに違ひ
 ないと思つて、其の實を取つて來て、
 庭先の畠の中にまきました。
 八三七 婦人は、〈略〉、其の實を取つ
 て來て、庭先の畠の中にまきました。
 八三七 婦人は、〈略〉、其の實を取つ
 て來て、庭先の畠の中にまきました。
 八三六 昔江戸で、夫に死なれた女が、
 乳飲子を里子にやつて奉公に出まし
 た。
 八三七 幾年かの後、里子を返しても
 らはうとすると、〈略〉。
 八三八 〈略〉、先方はあづかつたおほ
 えがないといつて返しません。
 八三八 困つて町奉行へ訴へて出まし

た。
 八三九 困つて町奉行へ訴へて出まし
 た。
 八三六 時の町奉行は〈略〉、一人の
 子どもに二人の實母はないはずとい
 つて、いろいろ調べますが、〈略〉。
 八三六 其の子を二人の眞中に置い
 て、兩方から子どもの手を取つて引
 合へ。
 八三六 其の子を二人の眞中に置い
 て、兩方から子どもの手を取つて引
 合へ。
 八三七 〈略〉、子どもがいたがつて、
 わつと泣出しますと、〈略〉。
 八三七 〈略〉、子どもがいたがつて、
 わつと泣出しますと、實母の方は驚
 いて手を放しました。
 八三七 〈略〉、越前守は聲をかけて、
 「〈略〉。」と申し渡しましたので、里
 親は恐れ入つたといひます。
 八三八 呉服屋の手代が、大きなふろ
 しきつつみを石地藏の前におろして
 休みましたが、〈略〉。
 八三八 〈略〉、餘程つかれてゐたもの
 と見えて、〈略〉。
 八三八 〈略〉、餘程つかれてゐたもの
 と見えて、何時の間にか、ぐつすり
 ねこんでしまひました。
 八三九 〈略〉、何時の間にか、ぐつす
 りねこんでしまひました。
 八三九 目をさまして見ると、ふろし
 きつつみがありません。

八三九 包の中には白木綿が五十反は
 かりはいつてゐたのでございます。
 八三九 驚いてあたりをさがしても見
 當らず、〈略〉。
 八三九 驚いてあたりをさがしても見
 當らず、〈略〉。
 八三六 困つて町奉行へ訴へて出まし
 た。
 八三七 困つて町奉行へ訴へて出まし
 た。
 八三九 越前守は手代の言ふ所を聞い
 て、〈略〉。」といつて、下役の者に
 石地藏をしぼつて來るやうに命じま
 した。
 八四〇 越前守は〈略〉、下役の者に
 石地藏をしぼつて來るやうに命じま
 した。
 八四〇 下役の者が石地藏に荒縄を掛
 けて、車に積んで参ります。
 八四〇 下役の者が石地藏に荒縄を掛
 けて、車に積んで参ります。
 八四一 地蔵様が繩にかゝつてい
 らつしやる。
 八四一 「〈略〉。」などといつて、四五
 百人のものが、ぞろ／＼と車の後に
 ついて、思はず知らず役所の門内へ
 入りこみました。

八四一 〈略〉、四五百人のものが、ぞ
 ろ／＼と車の後について、思はず知
 らず役所の門内へ入りこみました。
 八四一 越前守は早速門をしめさせて、
 見物人一同の所名前を書取らせ、
 〈略〉。
 八四一 此所は天下の役所なるに、
 許しもなくて亂入するとは不届し
 ぐ。
 八四二 一同は驚いて、泣くやらなげ
 くやら、大さわぎでございます。
 八四二 しばらくして、其の中のおも
 立つた者が出て、いろ／＼おわびを
 致しますと、〈略〉。
 八四二 〈略〉、其の中のおも立つた者
 が出て、いろ／＼おわびを致します
 と、〈略〉。
 八四二 「しからば許してつかはす
 であらうが、〈略〉、白木綿を〈略〉、
 三日の間に間違なく持参致せ。」
 八四二 「しからば許してつかはす
 であらうが、其の代りと致して、白
 木綿を一反づつ、名札をつけて、三
 日の間に間違なく持参致せ。」
 八四二 白木綿を一反づつ、
 名札をつけて、三日の間に間違なく
 持参致せ。」
 八四二 三日の間に一同は白木綿を一
 反づつ持つて参りました。
 八四三 越前守は呉服屋の手代を呼出
 して、其の中に盗まれた品のありな
 しを調べさせました。

八43 6 そこで其の反物を出した者を

呼出して、買先をたゞし、〈略〉。

八43 9 越前守は再び一同を呼出して、さきに納めさせた白木綿を返し、〈略〉。

八44 5 謹んで申し上げます。

八44 7 取分けおいそがしい中を、一週間もおひまをいただきまして、まことにありがたう存じます。

八44 9 病中の祖母も大そう喜びまして、ありがた涙をこぼして居ります。

八44 9 病中の祖母も〈略〉、ありがた涙をこぼして居ります。

八45 1 始は熱が高くて心配致しましたが、〈略〉。

八45 2 昨朝あたりから熱が下つて、食事進むやうになりましたので、〈略〉。

八46 4 其の後どうかと案じてゐましたが、手紙を見て安心しました。

八46 5 其の後どうかと案じてゐましたが、手紙を見て安心しました。

八46 9 一人で寝起の出来るまで、ゆつくり看病してお上げなさい。

八47 2 此の爲替はほんのわづかですが、何か好きな物を買つて上げて下さい。

八47 3 何か好きな物を買つて上げて下さい。

八47 7 大キサカライツテモ、強サカ

ライツテモ、鷺^{ササ}ハタシカニ鳥類ノ王デアル。

八47 7 大キサカライツテモ、強サカライツテモ、鷺^{ササ}ハタシカニ鳥類ノ王デアル。

八47 9 金アミノ中ニ飼ハレテ、ジツト止リ木ニ止ツテキルノヲ見テモ、〈略〉。

八47 9 金アミノ中ニ飼ハレテ、ジツト止リ木ニ止ツテキルノヲ見テモ、〈略〉。

八48 1 怒ツテキル肩、サキノ曲ツタ大キナクチバシ、〈略〉、何所ニ一分ノスキモナク、〈略〉。

八48 2 スルドクテ落着イテキル目、〈略〉。

八48 2 スルドクテ落着イテキル目、〈略〉。

八48 2 トガツテカギノ如クニ見エル爪、〈略〉。

八48 6 金アミノ中ニ飼ハレテ、ジツト止リ木ニ止ツテキルノヲ見テモ、〈略〉、強ミガ全身ニミチミチテキル。

八48 7 マシテ自由ノ天地ニ居テ、自在ニ空ヲトブ様ハ、〈略〉。

八49 1 スナハチ一間餘モアルツバサヲハツテ、數分ノ間羽バタキ一ツセズ、空中ヲノシテ行ク。

八49 2 數分ノ間羽バタキ一ツセズ、空中ヲノシテ行ク。

八49 4 サウシテ何カ地上ニエモノヲ發見スルト、スウツト下リテ來テ、

〈略〉。

八49 4 サウシテ何カ地上ニエモノヲ發見スルト、スウツト下リテ來テ、

八49 5 エモノノ上ニツカミカ、ル。ニエモノノ上ニツカミカ、ル。

八49 7 マレニハ庭先ニ遊ンデキル子ドモヲサラツテ行クコトモアル。

八49 8 マレニハ庭先ニ遊ンデキル子ドモヲサラツテ行クコトモアル。

八49 9 鷺ハ遠ク人里ヲハナレテ深山ニスム。

八50 4 春ノ初二三ノ卯ヲ産ミ、五週間程アタ、メテ、ヒナニカヘス。

八50 6 ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒クテ、家畜ヲサラフノモ多クハ此ノ時デアル。

八50 8 はね起きて見ると、〈略〉せいろうからは、盛にゆげが上つてゐた。

八50 9 はね起きて見ると、土間の大釜の上に積んであるせいろうからは、盛にゆげが上つてゐた。

八51 1 はね起きて見ると、〈略〉せいろうからは、盛にゆげが上つてゐた。

八51 2 おかあさんは取粉をのし板の上ひろげて、餅のつき上るのを待つていらつしやる。

八51 3 おかあさんは〈略〉、餅のつき上るのを待つていらつしやる。

き上るのを待つていらつしやる。

八51 5 おぢいさんは大釜の火をたいていらつしやる。

八51 7 にいさんが奥の間に、餅を並べる所をこしらへてゐた。

八52 5 つき上ると、おばあさんが餅を臼の中で丸めて、おかあさんの所へ持つていらつしやつた。

八52 5 つき上ると、おばあさんが餅を臼の中で丸めて、おかあさんの所へ持つていらつしやつた。

八52 6 おかあさんはそれを二つにちぎつて、ぐるぐるまはしていらつしやつたが、〈略〉。

八52 7 おかあさんはそれを二つにちぎつて、ぐるぐるまはしていらつしやつたが、〈略〉。

八53 2 四目目の時は、おぢいさんも手つだつてつかれた。

八53 5 「私にもつかせてみて下さい。」

八53 5 「私にもつかせてみて下さい。」

八53 9 まあ、ついてみるがよい。

八54 4 間もなく腰がふらつき出して、ふみしめてゐる兩足が、きねをふり上げるたびに動いた。

八54 4 八55 1 おしまひの一日には、小豆やきな粉をつけて、うちでもたべ、〈略〉。

- 八五五 雪どけ道のぬかるみを杖にすがりてとぼくと、歩み來れる老婆あり。
- 八五六 米屋の小ぞうへ略、ひらりと下りて自轉車を角の下駄屋にあづけ置き、すぐに老婆をみちびきぬ。
- 八五七 かくいふ聲を後にして、小ぞうは乗りぬ、自轉車に。
- 八五八 スベテ看板ハ商品又ハ職業ノ名、屋號等ヲ記シテ、人目ニツキヤスカラシメントスルモノナリ。
- 八五九 近年人々ノ生活次第ニイツガシクナリテ、見物人ノ外ハ、町ノ兩側ヲナガメテ、ユル／＼歩クガ如キ者ナシ。
- 八六〇 見物人ノ外ハ、町ノ兩側ヲナガメテ、ユル／＼歩クガ如キ者ナシ。
- 八六一 ヨリテ看板ノ如キモ、略、キノヒテ小屋根ノ上ニカ、グルニ至レリ。
- 八六二 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、今ナホ古風ヲ守リテ、せせむ(キノバ)・略 ナドト記シテ、軒ニ下ゲタルモアリ。
- 八六三 サレド食物ヲ賣ル店ニハ、略、略 ナドト記シテ、軒ニ下ゲタルモアリ。
- 八六四 此ノ他宿屋ニハ、掛行燈ニ旅人宿何屋ト記シテ掛クルモアリ、略

- 八六一 寫眞屋ニハ、寫眞ノ看板モアリテ、看板ノ種類ハキハメテ多シ。
- 八六二 保己一は略、人に書物をよませて、一心に之を聞き、略、後には名高き學者となりて、多くの書物をあらはせり。
- 八六三 保己一の家は今の東京、其の頃の江戸の番町にありて、多くの弟子保己一につきて學びたれば、略。
- 八六四 多くの弟子保己一につきて學びたれば、略。
- 八六五 或夜弟子をあつめて、書物を教へし時、略。
- 八六六 或夜略、風にはかに吹きて、ともし火きえたり。
- 八六七 保己一は笑ひて、略、と言ひたりとぞ。
- 八六八 横濱を出てから、ちやうど十五日目です。
- 八六九 サンフランシスコには、日本人がたくさんゐて、いろいろな商賣をしてゐます。
- 八七〇 日本人の家に、鯉のぼりが立つてゐました。
- 八七一 此の港には、十五六年前に大地震があつて、町は大方こはれたのですが、略。

- 八七二 今では前よりもかへつてりつぱになつてゐます。
- 八七三 此の州は合衆國の中でも、氣候がよくて、其の上土地味が肥えてゐますから、略。
- 八七四 其の上土地味が肥えてゐますから、略。
- 八七五 此の州は略、いろいろな農産物に富んでゐます。
- 八七六 日本人は八萬人餘も居て、子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、英語で勉強しますが、略。
- 八七七 日本人は八萬人餘も居て、子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、英語で勉強しますが、略。
- 八七八 日本人は八萬人餘も居て、子どもは、略、歸つて來ると、又日本人の立てた學校へ行つて、日本語で學問をしてゐます。
- 八七九 子どもは、略、歸つて來ると、又日本人の立てた學校へ行つて、日本語で學問をしてゐます。
- 八八〇 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八八一 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八八二 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八八三 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八八四 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八八五 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八八六 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八八七 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八八八 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八八九 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八九〇 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八九一 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八九二 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八九三 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八九四 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八九五 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八九六 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八九七 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八九八 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 八九九 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。
- 九〇〇 子どもは、略、日本語で學問をしてゐます。

- 八七〇 長く滞在してゐたシカゴ市を立つて、略。
- 八七一 シカゴ市を立つて、今日いよく米國第一の都會ニューヨーク市に着きました。
- 八七二 おとうさんは最大急行の列車に乗つて、たつた十八時間着きました。
- 八七三 電車や汽車が終日終夜、休なしに運轉してゐます。
- 八七四 アメリカ人は略、何でも世界一になるやうに心掛けてゐるといひますが、何しろ大した勢です。
- 八七五 コロンブスがアメリカを發見して歸つた時、略。
- 八七六 一日祝賀會の席上で、人々がかはる／＼立つて、コロンブスの成功を祝しますと、略。
- 八七七 「大洋を西へ／＼と航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がだらうか。」
- 八七八 一人の男が「略。」といつて冷笑しました。
- 八七九 之を聞いたコロンブスは、つと立つて、食卓の上のうで卵を取り、「略。」といひました。
- 八八〇 「諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立ててごらんさい。」
- 八八一 人々は略と思ひながら、やつて見ましたが、略。
- 八八二 此の時コロンブスは、こつんと卵のはしを食卓にうちつけ、何の

苦もなく立てて申しました。

八七九 明日にでもなつて、雪がはれてからではいけませんか。」

八七九 「明日にでもなつて、雪がはれてからではいけませんか。」

八七六 「今手に持つていらつしやるのは、みんな切符ですか。」

八七九 「それからこれは國の税で、納税告知書としてあります。」

八八〇 村役場で、村内の家々から納めるのをまとめて、それ／＼へ送るのです。

八八一 「いや、それは財産や収入の多少によつて違ひます。」

八八四 役場のひけないうちに行つて来よう。

八八二 「略」、工夫して大仕掛に水を落せば、大きな仕事をする。

八八二 もと僕のうちに奉公してゐた信吉が、略。

八八三 「略」信吉が、昨日の朝三年ぶりでハワイから歸つて来た。

八八五 信吉にはおとよといふ今年十一になる女の子があるが、生れつき啞なので、僕のうちで世話して、啞の學校に入れてある。

八八六 「略」、生れつき啞なので、僕のうちで世話して、啞の學校に入れたある。

八八七 信吉は僕の両親に歸つて来たあいさつをすますと、略。

八八二 「略」、信吉はほつと息をついて、略。」といつて、すぐ出かけようとした。

八八四 「略」それをお聞きして安心致しました。

八八五 「略」あちらでも、あの子のことばかりが、氣にかゝつてゐたのでございしました。

八八六 「略」それではちよつと行つて参ります。

八八七 「略」、信吉はほつと息をついて、略。」といつて、すぐ出かけようとした。

八八八 「略」お前も一しよに行つてお出で。」

八八二 「略」僕ははかまを着けて、信吉と一しよに出かけた。

八八四 「略」學校へ行つて案内をこふと、小使が出て来た。

八八四 「略」學校へ行つて案内をこふと、小使が出て来た。

八八五 「略」私はこちらに御やくかいになつてゐる松木とよの父でございします。

八八七 「略」ちよつととよにあひたくて参りました。

八八八 「略」、信吉はのび上るやうにして奥の方を見た。

八八九 「略」小使は僕等を應接室へ通して出で行つたが、略。

八八九 「略」小使は僕等を應接室へ通して出で行つたが、略。

八八二 「略」、先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。

八八二 「略」、先生が、女生徒を一人つれて、はいつて來られた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八四 「略」おとよは略、かけよつて來て、いきなり信吉にだきついて泣いた。

八八九 信吉はびつくりして、二足三足後へ下つたが、略。」といつて、娘を引きよせて、略。

八八九 信吉は略、娘を引きよせて、先生、どうして口がきけたんでせう、略。

八八九 「指であひづをしたのは昔のこと、今は口を見せてものを言はせます。」

八八九 「略」聞えるなら、もう一つ何か言つておくれ。

八八九 先生はにこ／＼して、「いや、聲が聞えるのではありません。」

八九〇 「略」口の動き方を見てさとのです。

八九〇 信吉はまだ先生の言はれたことがわからなかつたと見えて、娘の耳に口をよせて、略。」と大きな聲で言つたが、略。

八九〇 信吉は略、娘の耳に口をよせて、略。」と大きな聲で言つたが、略。

八九〇 信吉は略、娘の耳に口をよせて、略。」と大きな聲で言つたが、略。

八九〇 「略」おとよ、おとうさんが歸つて來て、うれしかい。

八九〇 「略」おとよ、おとうさんが歸つて來て、うれしかい。

八九〇 「略」おとよ、おとうさんが歸つて來て、うれしかい。

八九〇 「略」おとよ、おとうさんが歸つて來て、うれしかい。

八九〇 「略」おとよ、おとうさんが歸つて來て、うれしかい。

八九〇 「略」おとよ、おとうさんが歸つて來て、うれしかい。

八九〇 「略」おとよ、おとうさんが歸つて來て、うれしかい。

八91 〇 よく見えるやうにして、もう一度しづかに言つてごらんさい。
 八91 3 信吉は少しはなれて、今度はおとよの顔を見ながら、「略。」と言つた。
 八91 5 〇 「おとよ、おとうさんが歸つて、うれしいか。」
 八91 7 おとよは信吉の口を、中までのぞきこむやうにしてゐたが、略。
 八91 9 〇 もう何所へも行つて下さいますな。
 八92 3 信吉は「略。」といつて、大きな涙をぽた／＼落した。
 八92 4 先生はいろ／＼な事を信吉に話して聞かされた。
 八92 6 おとよは略、書き方も算術も裁縫も料理も習つてゐる、略。
 八92 7 略、もう二年たつて、此の學校を卒業する頃には、略。
 八93 1 げんに此の學校の卒業生で、商店の番頭になつてゐる者もあれば、裁縫の先生になつてゐる者もあるなどと話された。
 八93 2 げんに此の學校の卒業生で、略、裁縫の先生になつてゐる者もあるなどと話された。
 八93 3 信吉はとりのぼせたやうにうれしがつて、娘の顔と先生の顔を、かはりばんこに見てゐた。
 八93 4 信吉は略、娘の顔と先生の顔を、かはりばんこに見てゐた。

八93 6 それから先生は、僕等を一年生の教室に連れて行かれた。
 八93 7 此所では女の先生が、生徒に五十音の發音を教へてゐられた。
 八93 9 略、先生は根氣よく、何度も／＼教へてゐられた。
 八94 2 〇 先生、私の娘にもあゝして教へて下さつたのでせうか。
 八94 2 〇 先生、私の娘にもあゝして教へて下さつたのでせうか。
 八94 4 信吉は教室を出ると、「略。」といつて、先生を廊下でをがむやうにした。
 八94 7 〇 何なら、あのお子を今日一日お連れになつてもようございます。
 八95 3 〇 近所の者に見せてやりたい。
 八95 4 信吉は略、すぐ「略。」といつて、應接室に待つてゐた娘の手を取つて、幾度も先生におじぎをした。
 八95 4 信吉は略、應接室に待つてゐた娘の手を取つて、略。
 八95 5 信吉は略、應接室に待つてゐた娘の手を取つて、幾度も先生におじぎをした。
 八96 5 〇 三百年前徳川家康ガ諸大名ニ命ジテ造ラシメタルモノニシテ、略。
 八97 1 〇 其ノ高サ八尺五寸、朝日・夕日ニカバヤキテ、遠ク數里ノ外ヨリ望ミ見ルコトヲ得ベシ。
 八97 2 〇 名古屋市ハ此ノ城アルニヨ

リテ名高く、略。」ト歌ハレタリ。
 八99 1 〇 今とはボートにうつれる中佐、飛來る彈丸に忽ちうせて、旅順港外うらみぞ深き、軍神廣瀬と其の名残れど。
 八99 5 或時、口・耳・目・手・足等が申し合はせて、胃に向つていひますには、略。
 八99 6 或時、口・耳・目・手・足等が申し合はせて、胃に向つていひますには、略。
 八99 7 〇 僕等はふだんいそがしく働いてゐますのに、君は略、少しも僕等の爲につくさない。
 八99 8 〇 略、君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、略。
 八99 8 〇 略、君はたゞ坐つてゐて物を食ふだけで、略。
 八100 1 〇 僕等は一同申し合はせて、今日からは働かないことにしたから、さう思つてくれ給へ。
 八100 2 〇 僕等は略、今日からは働かないことにしたから、さう思つてくれ給へ。
 八100 9 略、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、略。
 八100 9 略、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、略。
 八101 1 〇 略、顔の色も青くなつて來て、からだに全く力がなくなりまして。
 八101 1 〇 略、顔の色も青くなつて來

て、からだに全く力がなくなりまして。
 八101 2 此の時胃は一同に向つて言ひました。
 八101 5 〇 僕はたゞ坐つてゐて物を食ふだけの者ではありません。
 八101 5 〇 僕はたゞ坐つてゐて物を食ふだけの者ではありません。
 八101 6 〇 食つた物をこなし、之を血の製造場へ送るのが僕の役目であつて、略。
 八101 8 〇 食つた物をこなし、之を血の製造場へ送るのが僕の役目であつて、僕が若し食物をこなさなかつたなら、からだを養ふ所の血がどうして出来ませう。
 八102 1 〇 君等は僕を苦しめようとして、此の數日の間少しも食物を送つてよこしませんでした。
 八102 2 〇 君等は略、此の數日の間少しも食物を送つてよこしませんでした。
 八102 3 〇 其の爲に新しい血が出来なくなつて、かへつて君等は自分で苦しむやうになつたのです。
 八102 6 〇 今になつて始めて、考違をしてゐたことがお分りになるでせう。
 八102 6 〇 今になつて始めて、考違をしてゐたことがお分りになるでせう。
 八103 2 〇 こんなわけですから、これから後は互に親しみ合つて暮しませう。

我が國の支配に屬してゐるので、
《略》。

九四五 内地から移つて來た人も多く、少しもさびしくはありません。

九四九 内地から來て先づ目につくのは植物で、《略》。

九五五 鳥の羽に似た大きな葉が、幹の上の方に集つてついでをり、
《略》。

九五五 鳥の羽に似た大きな葉が、幹の上の方に集つてついでをり、
《略》。

九五七 《略》、其の葉の根本には、大人の頭ぐらゐの實がすゝなりになつてゐます。

九五七 實の中にはかたい殻があつて、其の内がはに白い肉のやうなものがあります。

九六一 まだ十分にじゆくしてゐない實は、中にきれいな水があります。

九六四 これがなか／＼うまいもので、私たちもよく取つて飲みます。

九六六 又パンの木も所々に美しい林をつくつてゐます。

九六八 其の實は《略》、焼いて食べたり、餅にして食べたりします。

九六八 其の實は《略》、焼いて食べたり、餅にして食べたりします。

九七三 茂つてゐる様子は實に見事です。

九七五 《略》にはか雨が、非常な

勢で木を洗ひ草を洗つて通り過ぎた後の、あざやかな緑の世界は、《略》。

九八一 水のすんでゐる事はかくべつで、《略》、美しい海底のありさまが手に取るやうによく見えます。

九八二 《略》、波の静かな所でふなばたからのぞいて見ると、美しい海底のありさまが手に取るやうによく見えます。

九八六 《略》 美しい魚の群が、珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。

九八六 《略》 美しい魚の群が、珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。

九八八 土人はまだよく開けてゐませんが、性質はおとなしく、《略》。

九八九 此の間も十ぐらゐの少女が「君が代」をうたつてゐました。

九一〇 《略》 日本武尊、蝦夷を平げよとの勅命を奉じて、東國の方に下り給ひき。

九一〇 既に大海に出で給ひしに、大風俄に吹來りて、波すさまじく荒れくるひ、御船少しも進まず、《略》。

九一一 われ皇子の御身代りとなりて海に入り、神の御心をなだむべし。

九一二 皇子は勅命を果して、めでたく都に歸り給へ。

九一四 其の時、《略》 弟橘媛、尊の御身危しと見給ひ、「《略》。」と

いひて、《略》、きぬの敷物八枚を波の上に敷重ね、其の上に飛下り給へり。

九一七 ふしぎや、今まで荒れに荒れるたる大海、おのづから静まりて、おだやかなる屈となり、《略》。

九一八 朝早く起きて、井戸端に出づ。

九二〇 顔を洗ひをはりて、いつもの如く、庭のすみなるとやの戸を開く。

九二四 中に入りてひよこの箱をかへ出し、《略》。

九二八 妹は餌箱を持ちて、とやの前に來る。

九二九 親どりどもすぐに見つけて、其の足もとにむらがる。

九三〇 妹は餌をつかみて、わざと少しはなれたるきりの木のあたりにまきちらせば、《略》。

九三一 《略》、鶏はあわてて其の方へ行く。

九三三 《略》、十幾羽の鶏一つにかたまり、頭と頭とをつき合はせて、いそがしげに餌を拾ふ。

九三五 《略》、中なるひよこどもは小さき口を開きて、びよ／＼と鳴きつゝ、かこひぎはに集る。

九三八 妹も同じ心にや、しばし見とれてひよこのそばをはなれず。

九四〇 其の音を聞きつけてかけ來り、飛びちりたる貝のかけを、すば

やくついばみたるは眞白なるめんどりなり。

九四四 くだきたる目殻を器に入れてあたふるに、《略》。

九四五 とやの内に入りて見るに、敷藁の中に見事なる卵二つころがれり。

九四七 妹の置きてきたる餌箱に入れて持歸り、《略》。

九四七 《略》 餌箱に入れて持歸り、茶の間の戸棚の中にしまふ。

九五二 朝飯を終へて、妹と共に學校に行く。

九五四 《略》、めんどりはせはしげに幾度か土をかきちらして、餌をあさるにいそがしく、《略》。

九五五 《略》、をんどりは箱のふちをふまへて、《略》、今やときをつくらんとする様なり。

九五八 多クノ動物ヲ注意シテ見ルト、イロ／＼珍シイ事ガアルノニ氣ガツク。

九五九 中デモ面白イノハ、或動物ノ體色ガマハリノ物ノ色ニ似テキルトデアル。

九六〇 保護色ヲモツテキルト、《略》、容易ニ他ノ動物ニ見ツケラレナイ。

九六二 保護色ヲモツテキルト、マハリノ色ニマギレテ、容易ニ他ノ動物ニ見ツケラレナイ。

九七一 保護色ヲモツテキルトモノノ中ニハ、《略》。

- [illegible]

ぽつく／＼と話し出した。

九257 此の方々のお書きになつた

ものは、大てい此所に持つてゐる。

九262 わたしも此の精神にもとづ

いて、〈略〉、くはしく計畫を立て

た事もあるが、〈略〉。

九263 わたしも〈略〉、主に海産

物や水利の事を調べて、くはしく計

畫を立てた事もあるが、〈略〉。

九264 〇 〈略〉、いろ／＼の差支があ

つて、實行が出来ずにしまつた。

九268 此の四代の苦心の後を受け

て、國家の爲に、此の學問を大成す

るのがお前の役目だ。

九2610 十六のお前が、旅費も乏し

い旅先で親に別れては、さぞ心細く

もあらう、〈略〉。

九272 〇 〈略〉、父の此の願だけは、

しかと心にとめて置いて、〈略〉。

九272 〇 〈略〉、父の此の願だけは、

しかと心にとめて置いて、必ず仕と

げてもらひたい。

九273 〇 〈略〉、父の此の願だけは、

〈略〉、必ず仕とけてもらひたい。

九274 〇 〈略〉、すぐに江戸へ出て、

〈略〉、一心に學問を上げむがよい。

九275 〇 〈略〉、りつばな學者を先生

にして、一心に學問を上げむがよい。

九276 〇 古人も『志ある者は事終に

成る。』と言つてゐる。

九277 目に涙を一ぱいたためて聞いて

ゐた少年は、〈略〉。

九277 目に涙を一ぱいたためて聞いて

ゐた少年は、〈略〉。

九278 〇 〈略〉少年は、固い決心を顔

にあらはして、實行をちかつた。

九283 信季は其の後幾日かたつて、

とう／＼此の宿でなくなつた。

九285 信淵は、間もなく江戸

へ出て、〈略〉、一心に西洋の學問を

勉強した。

九286 信淵は、宇田川玄隨・

〈略〉などの人々をたよつて、一心

に西洋の學問を勉強した。

九288 さうして終に當代第一の農學

の大家となつて、國家の爲に富源を

開發することが甚だ多かつた。

九2810 歡庵以來代々力をつくして來

た農學は、〈略〉。

九291 〇 〈略〉農學は、信季の望通り、

信淵に至つて大成したのである。

九301 〇 龍は、落口にある〈略〉小島

の爲に二つに分れてゐます。

九304 〇 右にあるのがアメリカ龍、左

にあるのがカナダ龍で、此の二つを

合はせてナイヤガラ龍といふので

す。

九311 〇 〈略〉、木立の深いゴート島に

行つて、〈略〉近く龍をながめるの

もよく、〈略〉。

九313 〇 〈略〉、下手へ廻つて、カナダ

の方からはるかに全景を見渡すのも

面白い。

九316 殊に遊覧船に乗つて、〈略〉、

龍つばを見物して廻るのは、實に壯

快です。

九318 殊に遊覧船に乗つて、〈略〉、

龍つばを見物して廻るのは、實に壯

快です。

九321 何時もはうす暗い程茂り合つ

てゐる兩がはの木立も、〈略〉。

九324 〇 〈略〉、やぶかうじの赤い實に

並んで、春蘭のつばみのふくらん

だのも見える。

九326 〇 〈略〉一すぢの道が、足もと

からうね／＼とつゞいて、やがて茂

みの中にかくれてしまふ。

九327 〇 〈略〉一すぢの道が、足もと

からうね／＼とつゞいて、やがて茂

みの中にかくれてしまふ。

九329 〇 かん／＼とこずゑをてらして

ゐる十時過ぎの日かげが、〈略〉。

九332 〇 あたりの空氣までが何となく

ぼうつとして、〈略〉せなががじつ

とりと汗ばんで來る。

九333 〇 〈略〉、せなががじつと

りと汗ばんで來る。

九335 〇 〈略〉、急にかん高い音を立て

て、美しい小鳥が二三羽、身がるに

枝移りした。

九338 〇 〈略〉、栗鼠が一匹、〈略〉、太

い尾をちらりと見せて、急にまた穴

にかくれてしまつた。

九338 〇 〈略〉、栗鼠が一匹、〈略〉、急

にまた穴にかくれてしまつた。

九339 〇 道がだん／＼上りになつたと

見えて、谷のこずゑごしに、遠い湖

がちら／＼と見えて來た。

九3310 〇 〈略〉、谷のこずゑごしに、遠

い湖がちら／＼と見えて來た。

九341 〇 空ははてもなくすんで、所々

にちぎれ雲が飛んでゐる。

九341 〇 空ははてもなくすんで、所々

にちぎれ雲が飛んでゐる。

九342 〇 みねからすそにかけての若々

しいこずゑの色は、〈略〉。

九343 〇 〈略〉こずゑの色は、強い日

光を浴びて、一面に煙つてゐる。

九343 〇 〈略〉こずゑの色は、強い日

光を浴びて、一面に煙つてゐる。

九344 〇 道端の切りかぶに腰かけて、

ひたひの汗をふいてゐると、〈略〉。

九344 〇 道端の切りかぶに腰かけて、

ひたひの汗をふいてゐると、〈略〉。

九345 〇 〈略〉、そよ／＼と吹く風につ

れて、若葉のほひがひし／＼と身

にせまつて來る。

九346 〇 〈略〉、若葉のほひが

ひし／＼と身にせまつて來る。

九349 〇 「此の坂を下りて、あの清

水の所まで行くと、石井君のうかが

見えるはずだ。」

九351 〇 〈略〉、出後のわらびを一本

折つて、又歩き出す。

九352 〇 腹が大分すいて來た。

九353 〇 やうやく清水まで來て、手の

切れるやうにつめたいのを二三ぱい

つゞけ様に飲んでゐると、〈略〉。

九三六 〔略〕、手の切れるやうにつめ

たいのを三はいつゞけ様に飲んでゐると、〔略〕。

九三五 〔略〕、大きな青大將が、向ふの水たまりの所をうねつて、のろのろと草の中にかくれて行く。

九三六 〔略〕、大きな青大將が、〔略〕のろのろと草の中にかくれて行く。

九三七 〔略〕、それを見送つてゐると、

九三八 〔略〕、「やあ、加藤君、よく来てくれたね。」

九三九 頭を上げてみると、それは石井君であつた。

九四〇 〔略〕、大口徑砲の威力に對しては、正義の念と愛國の情とに死を恐れざるベルギー軍の防戦も、終に如何ともしがたく、〔略〕。

九四一 〔略〕、火藥の爆發によりて起れるガスの爲に〔略〕、〔略〕。

九四二 〔略〕、レマン將軍も、〔略〕、ドイツ兵に發見せられて、野戰病院に送られたり。

九四三 〔略〕、エンミツヒ將軍は、みづから進んで握手を求め、〔略〕。

九四四 〔略〕、おほめにあづかつて恐れ入る。

九四五 〔略〕、やがてレマン將軍は、萬感胸にみちて、かすかにふるふ手に帶劍をときて渡さんとするを、〔略〕。

九四六 〔略〕、やがてレマン將軍は、〔略〕、帶劍をときて渡さんとするを、〔略〕。

九四七 〔略〕、旅順開城約成りて、敵の將軍ステッセル 乃木大將と會見の所はいづこ、水師營。

九四八 〔略〕、彼かしこみて謝しまつる。

九四九 〔略〕、語る言葉もうちとけて、我はたへつ、彼の防備。

九四〇 〔略〕、かたち正していひ出でぬ、

九四一 〔略〕と。

九四二 〔略〕、兩將畫食共にして、なほもつきせぬ物語。

九四三 〔略〕、軍のおきてにしたがひて、他日我が手に受領せば、長くいたはり養はん。

九四四 〔略〕、『さらば』と、握手ねんごろに、別れて行くや右左。

九四五 〔略〕、飲料水ニ不自由ナキ土地ニアリテハ、金錢ヲツヒヤシテ、水ヲ買フナドトイフハ、思ヒモヨラス事ナリ。

九四六 〔略〕、金錢ヲツヒヤシテ、水ヲ買フナドトイフハ、思ヒモヨラス事ナリ。

九四七 〔略〕、一手桶何程トイフ代價ヲハラヒテ水ヲ買フ。

九四八 〔略〕、又コ、ニ一匹ノ馬アリテ、之ヲ買ハントスル人五人アルトキハ、

九四九 〔略〕、其ノ五人ハ、各其ノ馬ガ他人ノ手ニ渡ランコトヲ恐レテ、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

九五〇 〔略〕、其ノ五人ハ、〔略〕、

て下さいました。

九519 十年餘りもしんぼうして、

やうく一人前の番頭になり、〈略〉。

九521 店はだんだん繁昌し

て、十年もたぬ中に、町でも屈指

の財産家となつた。

九522 三十九の年、年

來の貯金と主人からもらった金を資

本にして、小さい米屋を始めた。

九525 店はだんだん繁昌し

て、十年もたぬ中に、町でも屈指

の財産家となつた。

九526 さうして人々に推されて、

町の銀行の頭取になつた。

九5210 うちのおぢいさんは〈略〉、

よく其の話をなすつては、大へんほ

めていらつしやつたものだ。

九5210 うちのおぢいさんは〈略〉、

よく其の話をなすつては、大へんほ

めていらつしやつたものだ。

九534 おとうさんはすぐ言葉をつい

で、〈略〉。とお話しになりました。

九535 社長さんが銀行の頭取にな

つてからちやうど十年目の秋、〈略〉。

九5310 社長さんは、あの人とは反對に、少

しでも他人の負擔を軽くしようとし

て、自分の財産を残らず差出した。

九541 さうして全く無一物になつ

て、親子三人町外れの裏長屋に移つ

てしまつた。

九542 親子三人町外れの裏

長屋に移つてしまつた。

九543 けれども社長さんは、それ

を少しも苦にしないで、〈略〉。と

いつて、笑つてゐた。

九544 けれども社長さんは、〈略〉、

〈略〉。といつて、笑つてゐた。

九544 けれども社長さんは、〈略〉、

〈略〉。といつて、笑つてゐた。

九545 社長さんは早速荷車を一臺

借りて来て、〈略〉。

九545 社長さんは早速荷車を一臺

借りて来て、醬油のはかり賣を始め

た。

九546 町の人々は之を見かねて、

〈略〉。といつて、資本を出さうと

する者もあつたが、〈略〉。

九547 そんな事までなさらなくて

も。

九547 町の人々は之を見かねて、

〈略〉。といつて、資本を出さうと

する者もあつたが、〈略〉。

九549 『自分の力でやれる所まで

やつてみます。』

九549 社長さんは、〈略〉。

といつて、夜を日について働いた。

九5410 社長さんは、〈略〉。

といつて、夜を日について働いた。

九5410 人々の同情は集つてゐるし、

〈略〉。

九551 商賣の仕方は十分心

得てゐるので、〈略〉。

九551 毎朝引いて出た荷が、

夕方には必ず空になるといふ景氣。

九554 一軒二軒と得意先を

まして行つて、〈略〉。

九554 一軒二軒と得意先を

まして行つて、後には表通へ店を出

すまでになつた。

九556 それからだんく商賣の手

を廣げて、六十五六の時にはもう餘

程の財産が出来た。

九558 精米所を始め、追追

に大きくして、あんまりつばな會社

にしたのだ。

九561 僕は今日其のえらい社長さん

に會つて來たのだと思ふと、〈略〉。

九569 親子三人、庭にすゑた

打臺の前に並んで、麥を打つてゐる。

九569 親子三人、庭にすゑた

打臺の前に並んで、麥を打つてゐる。

九569 後には麥の束が山と積んであ

る。

九5610 それをてんで一束づつ取つ

ては、兩手で根本の所をつかんで、

打臺にぱた／＼とた／＼きつてると、

〈略〉。

九571 兩手で根本の所をつか

んで、打臺にぱた／＼とた／＼きつ

てると、〈略〉。

九572 草の先についてゐる穂

が、〈略〉飛散る。

九572 穂が、敷いてあ

るむしろの上に面白いやうに飛散る。

九573 束を廻して又た／＼き、穂が残

らず落ちてしまふと、〈略〉。

九574 束を廻して又た／＼き、穂が残

らず落ちてしまふと、〈略〉。

九575 束をむしろの向ふにぼ

いと投げて、又新しい束を取る。

九576 後の山がだんだん低くなるに

つれて、前の麥藁の山が見る／＼高

くなる。

九5710 母もすげ笠をそちらへ

向けて、〈略〉。と言ひながら、正

一を見てにつこりした。

九583 母もすげ笠をそちらへ

向けて、〈略〉。と言ひながら、正

一を見てにつこりした。

九585 仕事は水入らずの三人の手で、

ずん／＼はかどつて行く。

九585 何所からかにぎやかな歌が聞

えて来る。

九588 黄色い麥の穂が一面に

廣げられて、まぶしいやうな夏の日

にか／＼やいてゐる。

九589 黄色い麥の穂が〈略〉

夏の日に／＼やいてゐる。

九5810 正一のうちの人たちに手つた

ひもまじつて、七八人の男や女が

〈略〉麥を打つてゐる。

九5810 七八人の男や女が向ひ

合つて、〈略〉麥を打つてゐる。

九593 七八人の男や女が

〈略〉麥を打つてゐる。

九599 へうきんな五平ちいさ

さんが、時時へんな掛聲をして皆を笑

はせる。

九604 日はかんく〜と照つてゐる。

九605 庭のすみにはほうせん花が眞赤に咲いてゐる。

九606 鶏が麥のこぼれを食ひに來ては、追はれて逃げて行く。

九606 鶏が麥のこぼれを食ひに來ては、追はれて逃げて行く。

九606 鶏が麥のこぼれを食ひに來ては、追はれて逃げて行く。

九609 〈略〉、今まで軍港のやみに包まれてゐた軍艦の壯大な姿が、〈略〉。

九610 〈略〉、軍艦の壯大な姿が、だんく〜にあらはれて來る。

九611 〈略〉、信號兵が遠くを見張つてゐる。

九612 舷門には、銃を手にした番兵が近くを警戒してゐる。

九614 千數百人の乗員は、今もなほ安らかに眠を續けてゐる。

九616 〈略〉、時鐘番兵がことく〜と艦橋の下へ來て、「〈略〉。」と當直將校に報告する。

九619 間もなく甲板士官や傳令員が起きて來る。

九619 副長もはや上甲板にあらはれて、今日の天氣はどうかと空をながめる。

九626 〈略〉、傳令員は〈略〉、「總員起し。」と呼んで、つり床の間をぬつて行く。

九627 〈略〉、傳令員は〈略〉、「總員起し。」と呼んで、つり床の間をぬ

つて行く。

九628 すると乗員は、一せいに飛起きて、手早くつり床をく〜る。

九6210 それにつれて、つり床は正しく一定の場所に納められる、すべての窓や出入口は開かれる。

九636 〈略〉、千數百人の乗員が號令にしたがつて、規律正しく活動する其の様は、〈略〉。

九6310 そこで五分間の休けいがあつて、上甲板洗となる。

九644 〈略〉、はだしのままの水兵が後甲板にはせ集つて、ずらりと整列する。

九649 水兵は〈略〉八方へ散つて、〈略〉分隊毎に甲板洗を始める。

九651 水兵は〈略〉、身輕な姿となつて分隊毎に甲板洗を始める。

九653 下士官が、〈略〉海水を、桶に汲んでほとんどく〜流すと、〈略〉。

九655 〈略〉、ブラシを持った數十人の水兵が、甲板をこすりながら頭を並べて進んで行く。

九655 〈略〉、ブラシを持った數十人の水兵が、甲板をこすりながら頭を並べて進んで行く。

九655 〈略〉、ブラシを持った數十人の水兵が、甲板をこすりながら頭を並べて進んで行く。

九656 其の様は、まるで雨後の蛙がむらがり飛んでゐるやうである。

九662 火繩一本の煙草ぼんのまはりには、人の山が出来て、いろいろの話が出る。

九672 〈略〉、艦長をはじめ乗員一同は、皆姿勢を正して、軍艦旗に敬禮

する。

九674 朝日にかゞやく軍艦旗が、〈略〉、しづ〜と上つて行く様は、〈略〉。

九675 軍艦旗を仰いで、心の底まで清められた乗員は、〈略〉。

九679 ずる分こんでゐたが、〈略〉、二人とも腰を掛けることが出來た。

九6710 〈略〉、みんながゆづり合つてくれたので、〈略〉。

九681 汽車が進むにつれて、關東平野はだんく〜夜の景色にかはつて、

九682 〈略〉、關東平野はだんく〜夜の景色にかはつて、見なれた所も面白く感じた。

九688 今、今は方々に町や村が出来てゐる。

九692 僕は眠くなつたので、それから直にねてしまつた。

九693 目がさめると、もう夜が明けてゐて、汽車は果もなく續いてゐる青田の中を走つてゐた。

九694 〈略〉、汽車は果もなく續いてゐる青田の中を走つてゐた。

九694 〈略〉、汽車は果もなく續いてゐる青田の中を走つてゐた。

九694 〈略〉、汽車は果もなく續いてゐる青田の中を走つてゐた。

九694 〈略〉、汽車は果もなく續いてゐる青田の中を走つてゐた。

九694 〈略〉、汽車は果もなく續いてゐる青田の中を走つてゐた。

九697 仙臺はとづくに過ぎて、やがて一關だ。

を食べながら、〈略〉。

九701 顔を洗つて來て、ビスケットを食べながら、〈略〉。

九709 叔父さんはなほ言葉を續けて、「〈略〉。」

九716 歸りに見物して行かう。

九717 次の平泉といふ驛を出て間もなく、〈略〉。

九718 〈略〉、叔父さんは近く左に見える山を指さして、「〈略〉。」とおつしやつた。

九719 光堂ともいつて、昔は金光りに光りかゞやいてゐたさうだ。

九7110 〈略〉、昔は金光りに光りかゞやいてゐたさうだ。

九722 〈略〉、今も鞘堂の中に其のまゝ保存されてゐる。

九725 〈略〉、もう通過してしまつた。

九727 辨慶が立往生をしたと傳へられてゐる衣川は、すぐ此の先にある。

九728 其の中に汽車は山の間を出て、大きな川の見える所に出た。

九731 汽車はこの邊からあの川について、北へ〜と走るのだ。

九732 「あれが北上川だ。〈略〉。」と教へて下さつた。

九736 〈略〉、此所まで來ると川幅がかなりせまくなつてゐる。

九737 汽車が盛岡を出て少し進むと、〈略〉。

さん出して見せて下さいました。

九77 お話が頂上のながめに移ると、いよくはずんで来て、〈略〉。

九77 お話が〈略〉、いよくはずんで来て、岡田さんは目の前に見てゐるやうな様子で説明なさるので、〈略〉。

九78 〈略〉、岡田さんは目の前に見てゐるやうな様子で説明なさるので、〈略〉。

九81 〈略〉、僕等も何時の間にか、山の上に居るやうな氣持になつて聞きました。

九82 頂上に立つて四方をながめた景色は、全く雄大です。

九87 山、いづれおとらぬ高山が、南から西へ連なつて、互に雄姿を競つてゐます。

九88 山、いづれおとらぬ高山が、〈略〉、互に雄姿を競つてゐます。

九88 山、いづれおとらぬ高山が、〈略〉、互に雄姿を競つてゐます。

九88 山、いづれおとらぬ高山が、〈略〉、互に雄姿を競つてゐます。

九88 山、いづれおとらぬ高山が、〈略〉、互に雄姿を競つてゐます。

九88 山、いづれおとらぬ高山が、〈略〉、互に雄姿を競つてゐます。

九88 山、いづれおとらぬ高山が、〈略〉、互に雄姿を競つてゐます。

九88 山、いづれおとらぬ高山が、〈略〉、互に雄姿を競つてゐます。

やうな顔をして、へそを日にさらしてゐる。

九101 〈略〉、此の前まだ少し早いと言つて残して置いたのが、〈略〉、へそを日にさらしてゐる。

九102 向ふの畠には、たうのいもが作つてある。

九103 黒みがかった紫色の莖が見事に延びて、大きな葉をゆらゆらと風に動かしてゐる姿は、〈略〉。

九104 黒みがかった紫色の莖が見事に延びて、大きな葉をゆらゆらと風に動かしてゐる姿は、〈略〉。

九106 其の隣の畠にしやうがが、根ぎはの赤い所を少し土からあらはして、ぎやうぎよく並んでゐるのも美しい。

九106 其の隣の畠にしやうがが、〈略〉、ぎやうぎよく並んでゐるのも美しい。

九108 〈略〉、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近く見える。

九102 〈略〉、稲の穂先がもう大分重みを見せてゐる。

九103 たんぼの中程を流れてゐる小川は、いつもより水が多い。

九104 蛙がぼか／＼と飛込んで、すうつと泳いで行く。

九105 蛙がぼか／＼と飛込んで、すうつと泳いで行く。

九106 やがておもだかの莖や芹の葉などにつかまつて、後足を長く延ば

し、〈略〉。

九107 〈略〉、後足を長く延ばし、眞青な空をじつとながめてゐる。

九108 ざるを持つた子供が、川下の方に集つてさわいでゐるのは、〈略〉。

九109 空には赤とんぼが幾つともなく飛んでゐる。

九102 井戸端の柿の木に柿がすゞなりになつてゐるのが目につく。

九102 北風の主人は、〈略〉、たいそ

九102 北風の主人は、〈略〉、たいそ

九102 北風の主人は、〈略〉、たいそ

九102 北風の主人は、〈略〉、たいそ

九102 北風の主人は、〈略〉、たいそ

九102 北風の主人は、〈略〉、たいそ

九102 北風の主人は、〈略〉、たいそ

九102 北風の主人は、〈略〉、たいそ

九102 北風の主人は、〈略〉、たいそ

に、〈略〉、列を正して並んだ。

九104 兵士たちはめい／＼馬のそばに立つて、今か／＼と命令の下るのを待つてゐた。

九104 兵士たちは、〈略〉、今か／＼と命令の下るのを待つてゐた。

九105 〈略〉、野には朝つゆがしつとりと置いてゐた。

九106 だん／＼明るくなつて来た。

九109 やがてあたりの静かさを破つて、大砲の音がとどろき始めた。

九104 中尉はひらりと北風にまたがつて、〈略〉、「略」と、まるで人間に言ふやうに言つた。

九104 中尉はひらりと北風にまたがつて、〈略〉、「略」と、まるで人間に言ふやうに言つた。

九106 北風は、主人の手がかうしてくびすちにさはるのが何より好きだったから、〈略〉。

九107 北風は、〈略〉、うれしくて、得意さうに頭を高くあげた。

九108 やがて中尉はちよつと腕時計を見て、〈略〉、號令をかけた。

九102 馬はどれも皆張りきつて、〈略〉、乗手のあひづが下るのを待ちかまへてゐた。

九104 馬は、〈略〉、乗手のあひづが下るのを待ちかまへてゐた。

九106 數分の後には、北風はもう列の先頭に立つて進んでゐた。

九106 數分の後には、北風はもう列

の先頭に立つて進んでゐた。

九〇七 敵の砲兵が放列をしいてゐる。

九〇七 味方は其の正面から眞一文字に進んで行く。

九〇七 敵弾は前後左右へ雨のやうに落ちて来る。

九〇七 やがてもうく上る白煙の間から、略人かげが見えて来る。

九〇八 砲口はかかるがはるいなづまのやうな砲火をはいては、耳もつぶれさうにはえてゐる。

九〇八 砲口は略、耳もつぶれさうにはえてゐる。

九〇八 中尉は始終先頭に立つて進んでゐたが、略。

九〇八 中尉は始終先頭に立つて進んでゐたが、略。

九〇八 中尉は略、敵陣が間近になつたのを見て、一だん高く軍刀をふりかざし、略、「略。」と叫んだ。

九〇九 ちやうど其の時、敵の砲弾が近くで破れつて、其の破片がびゅつと北風のたてがみをかすめた。

九〇九 と、たづなが急にゆるんで、中尉は後方にころげ落ちた。

九〇九 北風は驚いてすぐに立止らうとしたが、略。

九〇九 北風は略、後からかけて来る味方に追はれて、略。

九〇九 北風は略、後からかけて来る味方に追はれて、略。

九〇九 北風は略、後からかけて来る味方に追はれて、略。

来る味方に追はれて、思はず其の場から數十間も進んでしまつた。

九〇九 北風は略、思はず其の場から數十間も進んでしまつた。

九〇九 略、今まで張りつめてゐた勇氣もくじけて、略。

九〇九 略、今まで張りつめてゐた勇氣もくじけて、ゆめからさめたやうにあたりを見廻した。

九〇九 大空には、午後の日が大砲の煙や砂ぼこりにさへぎられて、どんよりとかゝり、略。

九〇九 略、地上には、人馬の死がいが略重り合つてゐる。

九〇九 さうして主人がこひしくなつて、今来た方へ一散にかけもどつた。

九〇九 中尉はあをのけになつて倒れてゐる。

九〇九 中尉はあをのけになつて倒れてゐる。

九〇九 中尉はあをのけになつて倒れてゐる。

九〇九 北風は、もう一度鼻先をなでてもらひたくなつて、略。

九〇九 北風は、もう一度鼻先をなでてもらひたくなつて、そつと顔を主人の肩のあたりへすりよせた。

九〇九 中尉の手はじつとして動かない。

九〇九 北風はもう一度あの勇ましい號令が聞きたいと思つて、略、左右の耳をそばだててみた。

九〇九 北風は略、左右の耳をそばだててみた。

九〇九 北風は略、左右の耳をそばだててみた。

九一一 戦争なれた北風は、此の聲の意味をよく知つてゐた。

九一一 さうして之に合はせるやうに、略、一聲高く天に向つていなゝい

た。

九一一 略、一水兵が、女手の手紙を読みながら泣いてゐた。

九一一 ふと通りかゝつた某大尉が之を見て、餘りにめゝしいふるまひと思つて、略。

九一一 ふと通りかゝつた某大尉が之を見て、餘りにめゝしいふるまひと思つて、略。」と、言葉鋭くしかつた。

九一一 軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、略。

九一一 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、略。

九一一 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、略。

九一一 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、略。

九一一 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、略。

九一一 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、略。

九一一 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、略。

九一一 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、略。

九一一 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、略。

九一一 水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、略。

九一二 大尉はそれを取つて見ると、次のやうな事が書いてあつた。

九一二 一命を捨てて君の御恩に報ゆる爲には候はずや。

九一二 母は略、そなたのふがひなき事が思ひ出されて、此の胸は張りさくるばかりにて候。

九一二 略、此の胸は張りさくるばかりにて候。

九一二 大尉は之を読んで、思はずも涙を落し、略。

九一二 大尉は之を読んで、略、水兵の手を握つて、「略。」と言聞かせた。

九一二 しかし今の戦争は昔と違つて、一人で進んで功を立てるやうなことは出来ない。

九一二 略、一人で進んで功を立てるやうなことは出来ない。

九一二 将校も兵士も皆一つになつて働かなければならない。

九一二 總べて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。

九一二 『一命を捨てて君恩に報いよ。』

九一二 おかあさんは、『略。』と言つてゐられるが、略。

九一二 豊島沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念に思つてゐる。

九一二 其の時にはお互に目ざましい働をして、我が高千穂艦の名をあげよう。

九一二 其の時にはお互に目ざましい働をして、我が高千穂艦の名をあげよう。

九一二 其の時にはお互に目ざましい働をして、我が高千穂艦の名をあげよう。

茂りて、新しき宮の境内とは思はれず。

けたるはぎ茂れり。

186 水は意外に冷たくて、まるで

氷のやうであつた。

十 8 8 陣頭に立つては百萬の敵を物とも思はぬ英雄も、〈略〉。

十 8 10 ようだいは時々刻々に悪くなつて行く。

十 9 1 醫師は皆、投薬してもし萬一の事があれば、〈略〉。

十 9 2 醫師は皆、投薬してもし萬一の事があれば、毒殺のうたがひを受けはしないかと恐れて、たゞ経過を見守つてゐるばかりである。

十 9 3 醫師は皆、〈略〉、たゞ経過を見守つてゐるばかりである。

十 9 4 此の有様を見て、フィリップといふ醫師が、〈略〉と決心した。

十 9 6 〈略〉、フィリップは眞心こめて此の事を申し出た。

十 9 9 〈略〉、王の日頃信頼してゐるパルメニオ將軍から、〈略〉。

十 10 1 〈略〉フィリップが〈略〉王を毒殺しようとしてゐるといふ風説があるから、〈略〉。

十 10 2 それには〈略〉といふ風説があるから、用心するやうにと書いてあつた。

十 10 3 王は讀終つて、そつと手紙をまくらの下へ入れた。

十 10 4 程なくフィリップは病室にはいつて来て、〈略〉。

十 10 4 程なくフィリップは病室にはいつて来て、うやく／＼しく藥のコープを王にさへげた。

十 10 6 王は〈略〉、片手にかの密書

を取出して、靜かにフィリップに渡した。

十 10 10 やがて讀終つたフィリップが、眞青な顔をして王を見上げると、〈略〉。

十 11 1 〈略〉、王は信頼の情を面にあらはして、フィリップを見下してゐた。

十 11 2 〈略〉、王は信頼の情を面にあらはして、フィリップを見下してゐた。

十 11 3 王は間もなく健康を回復して、再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出来た。

十 11 8 總員三十二人が四組に分れて、それ／＼仕事の持場に向つた。

十 11 10 午後四時、豫定の仕事を終へて、再び境内に集つた。

十 12 1 熱い番茶にのどをうるほして休んでゐる所へ、〈略〉。

十 12 1 熱い番茶にのどをうるほして休んでゐる所へ、〈略〉。

十 12 2 〈略〉、此の頃募参りのために朝鮮から歸つてをられる高橋さんが來られた。

十 12 4 高橋さんは、あちらで長らく教育に従事してゐる人である。

十 12 5 今通つて見て來ましたが、大そうりつぱになりました。

十 12 5 今通つて見て來ましたが、大そうりつぱになりました。

十 12 5 今通つて見て來ましたが、大そうりつぱになりました。

十 12 5 今通つて見て來ましたが、大そうりつぱになりました。

十 12 5 今通つて見て來ましたが、大そうりつぱになりました。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 12 9 誰かが力石をころがして來て、〈略〉席を作つた。

十 15 2 私は此の村の青年諸君が、〈略〉、骨を折つてをられるのを、うれしく思ひます。

十 15 4 朝鮮の青年も、近頃はなか／＼頭が進んで來ましたので、〈略〉。

十 15 5 〈略〉、あちらの教育に關係してゐる私どもは、非常に喜んでをります。

十 15 6 〈略〉、私どもは、非常に喜んでをります。

十 15 7 それに付けても、諸君にも大いに奮發していただきたいのです。

十 15 8 高橋さんの熱心な話は、それからそれへと續いて、團員に強い感動をあたへた。

十 16 1 〈略〉、一同は〈略〉、夕日を浴びて歸途についた。

十 16 5 久々で皆様といろ／＼お話をして、非常に愉快でした。

十 16 6 ちやうど此の頃、此所の名物の馬市が始つてゐるといふので、〈略〉。

十 16 7 〈略〉、今日は朝から、義雄君に案内してもらつて見物に行きました。

十 16 8 〈略〉、今日は朝から、義雄君に案内してもらつて見物に行きました。

十 17 2 ねれない私は、〈略〉、やはり馬のそばを通るのが危険なやうな氣がしてならなかつたが、〈略〉。

十 17 4 〈略〉、三四歳の子供でも、

腹の下などを自由にくゞつて歩きます。

十178 圀 〈略〉、せり場を中央にして、其の周囲は馬つなぎ場になつてゐます。

十179 圀 〈略〉、せり場を中央にして、其の周囲は馬つなぎ場になつてゐます。

十181 圀 〈略〉、もう其所にすぎ間も無く子馬がつないであります。

十183 圀 〈略〉、馬つなぎ場を見て廻つたが、〈略〉。

十184 圀 〈略〉、どの子馬も皆かはいらしい顔をして、おとなしくつながれてゐます。

十185 圀 〈略〉、どの子馬も〈略〉、おとなしくつながれてゐます。

十186 圀 中には、母馬がつきそつて來てゐるのもたくさんあります。

十186 圀 中には、母馬がつきそつて來てゐるのもたくさんあります。

十1810 圀 子馬には大い飼主の一家族がついて來て、〈略〉。

十1810 圀 子馬には大い飼主の一家族がついて來て、親切に世話をしてゐます。

十191 圀 子馬には大い飼主の一家族がついて來て、親切に世話をしてゐます。

十196 圀 中には、〈略〉、今日の別れを惜しんで、〈略〉、くびや背をなでたりしてゐるのもあります。

十1910 圀 中には、〈略〉、くびや背をなでたりしてゐるのもあります。

十202 圀 〈略〉、こんなにかはいがられて居れば、馬も従順で人になつくわけだと、〈略〉。

十206 圀 せり場の一方に高い臺があつて、其の上に掛の人が居る。

十208 圀 〈略〉、黒山のやうに集つてゐる買手は、〈略〉。

十2010 圀 〈略〉、買手は、自分の見込で思ひ／＼の直をつけて、次第にせり上げる。

十211 圀 〈略〉、聲と掛の人の聲と入亂れて、非常ににぎやかです。

十214 圀 〈略〉、掛の人が〈略〉手を打つて、取引が成立します。

十217 圀 取引の成立つた馬は、其の日の中に買手に引渡されてしまひます。

十218 圀 二年の年月苦勞して育てて來たものが、〈略〉。

十218 圀 二年の年月苦勞して育てて來たものが、〈略〉。

十219 圀 二年の年月苦勞して育てて來たものが、急に見ず知らずの人の手に渡つてしまふのだから、〈略〉。

十2110 圀 〈略〉、飼主が泣いて別れを惜しむのも、もつともな事です。

十223 圀 此の町では、二歳駒の市が十日間も續いて、其の間には千頭からの賣買があり、〈略〉。

十226 圀 これ等の馬が日本全國に散

らばつて、或は軍馬になり、或は馬車馬になり、或は耕馬になるのださうです。

十228 圀 私は今日此所に来て、飼主たちがあんなにかはいがつてゐたのを見て、〈略〉。

十229 圀 私は〈略〉、飼主たちがあんなにかはいがつてゐたのを見て、〈略〉。

十229 圀 私は〈略〉、飼主たちがあんなにかはいがつてゐたのを見て、〈略〉。

十231 圀 私は〈略〉、此の子馬共を買つた人たちも、どうか同じやうにやさしく扱つてくれ、ばよいと、心からいのりました。

十233 圀 歸りに散歩がてら町を歩いて見ると、〈略〉。

十234 圀 〈略〉、賣つてゐる菓子もおもちゃも、多くは馬にちなんだ物で、〈略〉。

十235 圀 〈略〉、店の看板にも馬がかいてあるのがよく目につきました。

十237 圀 成程、此の邊は馬でもつてゐる處だと思ひました。

十239 圀 市場の様子がよくわかるから、引合はせて見て下さい。

十2310 圀 市場の様子がよくわかるから、引合はせて見て下さい。

十245 其の一角にそびえてゐる燈臺に、〈略〉。

十246 圀 〈略〉、年とつた燈臺守が、妻

と娘と三人で、わびしく其の日を送つて居た。

十251 一その船が、俄の嵐におそはれて、此の島に近い岩に乗上げた。

十252 船は二つにくだけて、船尾の方は見る／＼大波にさらはれてしまつた。

十252 船は二つにくだけて、船尾の方は見る／＼大波にさらはれてしまつた。

十254 岩の上に残つた船體には、十人許の船員がすがり附いて、聲を限りに救を求めたが、〈略〉。

十258 娘は驚いて、「まあ、かはいさうに。〈略〉。」

十263 圀 私は、とても人の死ぬのをじつと見ては居られません。

十264 圀 命を捨ててかゝつたら、救へないことはありませんまい。

十271 親子は死力を盡くして漕ぎに漕いだ。

十276 一進一退、たゞ運を天にまかせて、二人はボートをあやつつた。

十2710 生残つた船員は涙を流して喜んだ。

十281 親子は非常な危険ををかして、人々をボートに收容し、〈略〉。

十282 親子は〈略〉、又あらん限りの力をオールに注いで、我が家へと向つた。

十284 つかれ果てた人々も、親子の勇ましい働にはげまされて、我も

く」と力をそへる。

十285 かうしてボートは再び荒波を切りぬけて、燈臺に歸り着いたのである。

十287 二日たつて、天氣も晴れ、波浪もさまつた。

十288 グレースの眞心こめた看護によつて、全く元氣を回復した人々は、
〈略〉。

十2810 〈略〉人々は、〈略〉、名残を惜しんで此の島を去つた。

十296 図 しらぐと、朝霧 野山をこめて、月のごと、日輪 ほのかに浮ぶ。

十298 図 野路を行く人影 たゞちにきて、けたまし、もずの音、
〈略〉。

十311 北アメリカが南アメリカに續く部分は、パナマ地峡といつて、地形がきはめて細長くなつてゐる。

十311 北アメリカが南アメリカに續く部分は、〈略〉、地形がきはめて細長くなつてゐる。

十314 パナマ地峡は一體に小山が起伏してゐる上に、〈略〉。

十317 〈略〉、平かな掘割を造つて、太平・大西兩洋の水を通はせることは到底出来ぬ事であつた。

十319 そこで此の運河は、非常に變つた仕組に出来てゐるのである。

十3110 先づ地峡の山地を流れてゐる河の水をせき止めて、〈略〉。

十321 先づ〈略〉河の水をせき止めて、湖を二つ造つた。

十326 此の湖へ兩方の海から掘割が通じてある。

十331 所で、此の高い湖と低い掘割を何の仕掛もなしに連結すれば、湖の水は瀧のやうに掘割へ落込んで、とても船を通すことは出来ないから、
〈略〉。

十332 〈略〉、掘割の處處に水門を設けて、たくみに船を上下する様にしてある。

十333 〈略〉、掘割の處處に水門を設けて、たくみに船を上下する様にしてある。

十336 しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。

十336 しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。

十337 近づく、門の戸びらは左右に開いて、船が中にはいり、〈略〉。

十339 〈略〉、船は大きな箱の中に浮いてゐる形である。

十3310 底の水道から水がわき出て、船は次第に高く浮上る。

十341 と、上手の水門が開いて、船は次の箱の中へはいる。

十343 〈略〉、船は〈略〉、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。

十345 此の湖を横ぎると又水門があつて、船はさらに一段高くなる。

十353 掘割を通過して船は又湖に出る。

十354 ガツン湖といつて、〈略〉大きな人造湖で、〈略〉。

十355 〈略〉、湖上に點々と散在してゐる島々は、〈略〉

十356 〈略〉、湖上に點々と散在してゐる島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。

十356 此の湖を渡つて又水門を通過する。

十358 今度は前と反對に、順次に三段を下つて、海と同じ水面に浮ぶ。

十359 此處から又掘割を走つて、終に洋々たる太西洋に出るのである。

十367 〈略〉、十年の歳月と八億圓の費用とを費して、〈略〉、遂に之を造り上げたのである。

十371 衛生の設備をよくして危険な病氣を根絶し、〈略〉。

十373 〈略〉、ほとんどあらゆる文明の利器を運用して、山をくづし、地をうがち、河水をせき止めた事など、
〈略〉。

十381 〈略〉、うちの雜木山を開墾し始めてから、もう一月餘りになる。

十383 父は毎日、〈略〉、朝早くから行つて、夕方おそくまで働いてゐる。

十384 父は毎日、〈略〉、夕方おそくまで働いてゐる。

十384 今日私は私もついて行つて見た。

十391 〈略〉、兄は「〈略〉。」といつ

て、かついで來たつるはしを下へ置いた。

十391 〈略〉、兄は「〈略〉。」といつて、かついで來たつるはしを下へ置いた。

十394 兄はそこらに散らばつてゐる木の根や、小枝などを〈略〉。

十395 兄は〈略〉、小枝などを拾ひ集めて來て、たき火を始めた。

十399 父は腰から鎌をぬきながら、「〈略〉。」といつて、たき火のそばの切りかぶに腰を下し、〈略〉。

十401 図 「しかし天氣が續いてよいあんばいだ。」

十402 力藏さんも、「〈略〉。」と誰に言ふともなく言つて、〈略〉けやきの太木を、大のこぎりでひき始めた。

十402 〈略〉、昨日からひきかけてゐるけやきの太木を、〈略〉。

十405 図 「力藏さん、まあ、一服やつてから始めなさい。」

十409 図 「朝のうちに此のけやきだけぶつ倒したいと思つてね。」

十410 〈略〉、力藏さんは〈略〉、元氣な聲で、「〈略〉。」と答へて、止めようとしなない。

十412 向ふの山の頂に日の光が赤々とさして來た。

十414 やがて父は、鎌を手にして雜木のやぶへはいつて行つた。

十441 力藏さんのひいてゐたけやきの
大木も、〈略〉。

はくだきして、略。

十462 毎日焼いてはくだき、焼いて

十486 一番鶏の聲を聞いてからは、もうじつとしては居られない。

「預けたお金は何時でも返すのだ。」

してもらへますか。」

十5210 〇 一體、銀行は人からお金を預つてそれをどうするのですか。

十533 〇 世の中にはお金の有餘つてゐる人もあるが、〈略〉。

十534 〇 〈略〉、又何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。

十535 〇 銀行は有餘つてゐる人からお金を預つて、〈略〉。

十535 〇 銀行は有餘つてゐる人からお金を預つて、資金の足らぬ人に貸附けるのだ。

十537 〇 貸附の利子は預金の利子より高くしてあるから、〈略〉。

十546 此の愛らしい小鳥が、〈略〉、いろいろの困難ををかして、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、〈略〉。

十546 此の愛らしい小鳥が、〈略〉、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、誰でも驚かない者はあるまい。

十5410 〈略〉、無線電信などが發明せられて以來、自然輕んぜられるやうになつた。

十554 〈略〉、今では各國共に〈略〉、其の飼養を奨勵してゐる。

十556 鳩は〈略〉、正しく方向を判定して、矢のやうに自分の巢に飛歸る。

十557 〇 鳩は故鳩の體に手紙を附けて

放せば、〈略〉。

十5510 〈略〉、一定の飼養所から他の土地に連れて行つて、飛歸らせるのである。

十5510 〈略〉、一定の飼養所から他の土地に連れて行つて、飛歸らせるのである。

十563 〇 それは、豫め甲乙の二地をきめて置いて、〈略〉。

十563 〇 それは、豫め甲乙の二地をきめて置いて、一方を飼養所、一方を食事所とし、〈略〉。

十566 〇 〈略〉、飼養所から食事所へ通つて食物を取るやうに馴らして、〈略〉。

十567 〇 〈略〉、飼養所から食事所へ通つて食物を取るやうに馴らして、其の往來を利用するのである。

十571 〇 鳩は、四五十キロメートルの處を往復して食事するぐらゐは何でも無い。

十572 〇 又暗い時の飛行に馴れさせて、夜間に使ふ事も出来るし、〈略〉。

十574 〇 〈略〉、飼養所を移動し、其處を見覚えさせて飛歸らせるやうにする事も出来る。

十577 〇 鳩に手紙を運ばせるには、足に〈略〉細いくだを付け、又は胸に袋を掛けさせて、其の中に入れるのである。

十581 〇 〈略〉、登山者が路に迷つて危険におちいつた時、救を求めたり、

〈略〉。

十586 〇 殊に要塞が敵にかこまれて、無線電信機は破壊せられ、傳令使は途中で要撃せられ、全く方法の盡きた場合などには、〈略〉。

十591 〇 あゝ、あのかはい、鳩が、〈略〉、矢のやうに目的地へ向つて飛んで行くのを見たならば、〈略〉。

十591 〇 あゝ、あのかはい、鳩が、〈略〉、矢のやうに目的地へ向つて飛んで行くのを見たならば、〈略〉。

十597 〇 とあるあばら家の門口に杖を止めて、一夜の宿を貸し給へといへば、〈略〉。

十599 〇 〈略〉、〈略〉、婦人立出でて、〈略〉。」とことわりぬ。

十606 〇 世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。

十608 〇 感がい打沈みてとぼくと歩を運ぶ。

十609 〇 ふと我が妻を見つけて、「此の大雪に、どうして出かけたのか。」

十611 〇 「旅僧が一夜の宿を頼むとおほせられて、あなたのお歸を待つていらつしやいます。」

十612 〇 「旅僧が〈略〉、あなたのお歸を待つていらつしやいます。」

十613 〇 主人は急ぎて家に歸りぬ。

十619 〇 されど主人は、「〈略〉。」といふに、僧は返す言葉もなく出て行きぬ。

十621 〇 〈略〉 妻は、やがて夫に向ひて、「あゝ、おいたはしいお姿。〈略〉。」

十626 〇 お泊め申してはいかゞでございませう。

十629 〇 同情深き妻の言葉に、主人はいたく心動きて、「ではお泊め申さう。〈略〉。」

十632 〇 主人は僧の後を追ひて外に出でぬ。

十641 〇 〇 駒とめて袖打拂ふかげもなし、佐野のわたりの雪の夕暮。

十645 〇 〈略〉 主人は、物かげに妻を呼びて、「〈略〉。」

十648 〇 主人はうちうなづきて出來り、僧に向ひて、「〈略〉。」

十651 〇 〈略〉 栗の飯、召上るならと妻が申してをりますが、〈略〉。

十654 〇 〈略〉 貧しき膳に向ひ、僧は喜び箸を取りぬ。

十656 〇 三人はゐろりを圍みて坐せり。

十657 〇 ゐろりの火は次第におとろへ行き、ひまもる夜風はだへをさす如し。

十659 〇 だん／＼寒くなつて來たが、あやにくしも盡きてしまつた。

十6510 〇 だん／＼寒くなつて來たが、あやにくしも盡きてしまつた。

十661 〇 あゝの鉢の木をたいて、せめ

てものおもてなしにしよう。

十664 僧は驚きて、「略」、どうぞ止めて下さい。」

十666 略、そんなりつばな鉢の木をたくのは、どうぞ止めて下さい。

十668 略、かう落ちぶれては、それも無用の物好と思ひ、略。

十669 私はもと鉢の木がすきで、いろ／＼集めた事もありましたが、略、大てい人にやつてしまひました。

十671 しかし此の三本だけは、其の頃のかたみとして、大切に置いていたのですが、略。

十672 略、今夜は之をたいて、あなたのおもてなしに致しませう。

十673 主人は三本の鉢の木を切りてあろりにたきぬ。

十675 「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」

十678 主人はけんそんして言はず。

十682 佐野源左衛門常世と申して、もとは佐野三十餘郷の領主、略。

十684 略、それが一族ともに所領を奪はれて、此の通りの始末でございます。

十685 「略。」といひて目をふせしが、略。

十686 略、主人はやがて語氣を改めて、「略。」

十687 かやうに落ちぶれてはあるものの、御らん下さい、略。

十689 略、又あれには馬を一匹

つないでもつてをります。

十689 略、又あれには馬を一匹つないでもつてをります。

十692 略、やせたりともあの馬にうち乗つて一番にはせ参じ、略。

十693 略、眞先かけて敵の大軍に割つて入り、略。

十693 略、眞先かけて敵の大軍に割つて入り、略。

十694 略、これぞと思ふ敵と打合つて、あつぱれてがらを立てるかぐ。

十695 略、しかし此のまゝに日を送つては、唯空しくうゑ死する外はございませぬ。

十699 略、旅僧は、兩眼に涙をたゝへて聞きあたり。

十6910 翌朝僧は暇をこひて又行くへ知らぬ旅に出でんとす。

十702 略、貧の恥をつ、まんとして宿をこわりし常世も、略。

十703 略、常世も、一夜の物語にうちとけては、名残なか／＼盡きず。

十704 略、今一日留り給へとすゝめて止まざりき。

十705 略、旅僧もまた主人夫婦の情心にしみて、そゝろに別れがたき思あり。

十707 略、降積みし雪もあと無くきえ

て、山河草木喜にあふるゝ春とはなれり。

十710 略、常世は、時こそ來れと、やせ馬にむちうつてはせつたり。

十710 略、やがて命ありて御前に召されぬ。

十713 略、常世は略、進みて御前にかしこまれば、略。

十717 略、其の時の言葉にたがはず、眞先かけて参つたは感心の至り。

十719 略、佐野三十餘郷は、理非明らかなるによつて汝に返しあたへる。

十7110 略、又寒夜に秘藏の鉢の木を切つてたい志は、略。

十722 略、其の返禮として略、合はせて三箇所の地を汝に授ける。

十724 略、時頼は尚一同に向ひて、略。

十726 略、理非を正して裁斷致すであらう。

十728 略、一同謹んで承る中に、略。

十729 略、常世は略、喜にみちて御前を退きけりとぞ。

十736 略、此の停車場を出て大通を東北に進むと、略。

十7310 略、その處々にかういふ門があつて、出入口になつてゐたのださうです。

十741 略、その處々にかういふ門があつて、出入口になつてゐたのださうです。

十743 略、今でも城壁は大部分昔の面影を留めてゐますし、略。

十745 略、門も主なものもは残つてゐます。

十747 略、南大門通から本町通・鍾路通にかけての一帶が、略。

十752 略、南大門の東南の方に南山といふ山があつて、公園になつてゐます。

十752 略、南山といふ山があつて、公園になつてゐます。

十759 略、山々は地はだが白く、それに松がまばらに生えてゐる。

十7510 略、松林を後にして右に昌徳宮、左に景福宮の壯大な構がある。

十764 略、其の又手前には略、などのりつばな洋館がそびえてゐる。

十766 略、すみきつた空氣の中に煉瓦の赤色や、松の緑色などが鮮かに浮出しているのは實にきれいです。

十769 略、龍山は略、小さな町であつたが、京城の發展するに連れて次第に廣がり、略。

十7610 略、兩方が町續きになつて、今では龍山も京城の中に編入されたのださうです。

十774 略、こちらへ來てもう三月餘りになります、略。

十779 略、遠足好きの君なら、毎日何處へか出かけたてたまらな

いだらうと思ひました。

十77回 此の頃は十分寒くなつて、朝は攝氏零度以下十何度といふきびしさ、〈略〉。

十78回 四、三日四日續いて寒ければ、其の次には又其のくらゐの間暖さが續くといふやうに、〈略〉。

十78回 こちらでは昔から之を三寒四温といつてゐるさうです。

十79回 四、大分長くなりましたから、今日は此のくらゐにして置きます。

十79回 八、安全燈を持つて、〈略〉昇降器に乗りました。

十80回 地下水のしづくが、四方から雨のやうに落ちて来る。

十80回 昇降器がすさまじい勢で下りて行くので、〈略〉。

十80回 安全燈の取手を握りしめて、じつと目をつぶつてゐるうちに、〈略〉。

十80回 八、じつと目をつぶつてゐるうちに、〈略〉。

十80回 昇降器を下りて、あたりを見まはすと、〈略〉。

十80回 八、周囲の壁は皆石炭で、それが電燈の光に物すごく光つてゐます。

十80回 此處から方々へ坑道が通じてゐて、〈略〉。

十80回 此處から方々へ坑道が通じてゐて、〈略〉。

十80回 此處から方々へ坑道が通じてゐて、〈略〉。

炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

十80回 八、電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

十80回 九、電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

十80回 十、坑道を少し行つて、ポンプ室の前に出ました。

十81回 室の中には、大きなポンプが〈略〉活動してゐます。

十81回 八、こんな大きなポンプを備へ附けてゐる處は、世界でも珍しいさうです。

十81回 八、ポンプ室を出てから小道へはいりました。

十81回 十、安全燈をたよりに歩いて行く

と、〈略〉。

十82回 八、はつと思つて立止ると又一匹。

十82回 十、坑内には、ねずみがたくさん居て困ります。」

十82回 事務員は平氣で、「〈略〉。」と言つて笑ひました。

十82回 二三十匹の馬がまぐさを食つてゐます。

十82回 坑内に馬が居るのは不思議だと思つて、聞いてみると、〈略〉。

十82回 坑内に馬が居るのは不思議だと思つて、聞いてみると、〈略〉。

十82回 八、これは石炭を運ぶために飼はれてゐるのださうです。

十82回 馬屋の前を通つてだん／＼奥深く進むと、〈略〉。

十82回 十、いよいよ石炭を掘つてゐる處へ來ました。

十83回 暗やみの中にかすかに安全燈が光つてゐる。

十83回 近づいて見ると、坑夫が〈略〉、元氣よく石炭を掘つてゐます。

十83回 八、坑夫が汗だらけになつて、元氣よく石炭を掘つてゐます。

十83回 八、坑夫が汗だらけになつて、元氣よく石炭を掘つてゐます。

十83回 十、石炭の壁は安全燈の光に照らされて、黒光りに光つてゐます。

十84回 十、石炭の壁は〈略〉、黒光りに光つてゐます。

十84回 十、探炭坑夫は四人づつ一組になつてゐて、〈略〉。

十84回 十、探炭坑夫は四人づつ一組になつてゐて、其の内の二人が石炭を掘崩すと、他の二人がそれをさるで運んで炭車に入れる。

十84回 八、他の二人がそれをさるで運んで炭車に入れる。

十84回 八、馬方がそれを馬に引かせて、〈略〉運んで行きます。

十84回 八、炭車が一ぱいになると、〈略〉、電氣機關車の通ふ道まで運んで行きます。

十84回 八、歸途、事務員は次のやうな事を話してくれました。

十84回 八、百姓が、たき火をし

てゐると、そばの黒い岩に火がつき、

〈略〉。

十84回 九、そばの黒い岩に火がつき、煙をあげて燃出しました。

十84回 十、驚いて調べてみると、〈略〉。

十84回 十、驚いて調べてみると、あたりは同じ眞黒な岩ばかりでした。

十85回 二、それから『燃える石』といふやうばんが高くなつて、附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。

十85回 三、附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。

十85回 七、あの坑内でたえず活動してゐる坑夫の仕事を、〈略〉。

十85回 八、事務所の湯にはいつて服を改めると、〈略〉。

十86回 一、我々が今日生活して行くには、〈略〉。

十86回 八、それで、印度支那半島あたりから年々輸入してゐる。

十87回 二、物によつては、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。

十87回 四、それで、機械類もまだかなり多く輸入されてゐる。

十87回 五、我が國は種々の品物を輸入してゐるばかりでなく、〈略〉。

十87回 十、又外國から原料を輸入し、それに加工して、更に外國へ輸出する事も少くない。

十88回 二、綿花は〈略〉輸入し、それに加工して綿絲や綿織物を造る。

十88回 二、綿花は〈略〉輸入し、それに加工して綿絲や綿織物を造る。

十885 支那の豚の毛が輸入されて日本でブラシに造られ、〈略〉。
 十889 輸出入の額の増加して行くのは國家が次第に盛になる印である。
 十894 父と母とに暇を告げて、勇みて出づる我が家の門。
 十895 勇みて出づる我が家の門。
 十906 ほうき手にく、此方をさして 語りつゝ来る若き人々、〈略〉。
 十914 幾度もくりかへしてゐる中に、
 十917 太郎は得意になつて、「〈略〉。」といふと、〈略〉。
 十921 「おとうさんは、もつと言ひにくい言葉を知つてゐる。」
 十935 「あの橋は危険だから決して渡つてはならぬ。」
 十936 太郎は前から父に、「〈略〉。」と固く禁ぜられてゐたのであるが、〈略〉。
 十937 太郎は〈略〉、友だちのすゝめをことわりかねて、一所に渡り出した。
 十938 すると橋はまん中から折れて、三人は水中におちいつた。
 十939 さいはひ附近の田で働いてゐた村の人々に助けられ、〈略〉。
 十9310 〈略〉、何れもぬれぬすみのやうになつて家に歸つた。
 十942 かねてあぶないといつて置

いた、あの橋を渡つたのでは無いか。
 十944 父は「〈略〉。」とたづねたが、太郎はだまつてゐた。
 十945 其の夜又父に強く聞きたゞされて、太郎はやつと今日の次第を有りのまゝに話した。
 十947 「いゝえ、僕は止められてゐるから渡りません。』」
 十9410 すると、しまひに皆が僕の事を弱蟲だといつて笑ひました。
 十952 僕は〈略〉、自分から先に立つて渡つたのです。
 十954 人の言ふことに對して「いゝえ。」と言切るには、〈略〉。
 十9610 〈略〉、宋は次第におとろへて、ほとんど亡びんとするに至れり。
 十971 宋の臣文天祥、義兵を集めて國難を救はんとす。
 十972 其の友之を止めてはいはく、〈略〉。」と。
 十975 天祥きかずしてはいはく、〈略〉。」と。出でて元軍に當る。
 十978 文天祥命を奉じ、各地に轉戦して元軍を破る。
 十981 元の大軍至るに及んで天祥大いに敗れ、〈略〉。
 十983 時に宋の勇將張世傑よく戦ひて元軍を防ぐ。
 十984 敵將張弘範如何にもして之を降らしめんとし、〈略〉。
 十985 敵將張弘範、文天祥に命じてはいはく、「〈略〉。」と。

十985 「書をしたゝめて張世傑を招け。」
 十986 天祥固くこぼみてはいはく、「〈略〉。」と。
 十987 いづくんぞ人をいざなひてそむかしめんや。
 十989 張弘範、文天祥に説きてはいはく、「〈略〉。」と。
 十991 今より心を改めて元に仕へば、富貴は意の如くならん。
 十992 或人又なじりてはいはく、「〈略〉。」と。
 十993 「汝大勢の如何ともすべからざるを知つて、何ぞいたづらに苦しむことの甚だしきや。」
 十996 心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。
 十999 元の皇帝深く文天祥を惜しみ、ねんごろに論して元に仕へしめんとす。
 十1004 天祥刑せらるゝにのぞみ、從容としてはいはく、「臣が事終る。」と。
 十1005 うやくしく南、宋の方を拜して死す。
 十1006 元帝歎じてはいはく、「文天祥は眞の男子なり。」と。
 十1008 冬枯の小道を通つて來て、〈略〉。
 十1009 冬枯の小道を通つて來て、一足温室の中にはいと、〈略〉。
 十1012 〈略〉、ガラス屋根を通して來

るやはらかい日の光、〈略〉。
 十1014 あゝ、咲いてゐる、く。
 十1014 あゝ、咲いてゐる、く。
 十1015 此處は重に蘭の類を集めてある處だ。
 十1016 熱帯地方から持つて來たのだから、〈略〉。
 十1019 先に立つたにいささんが、「〈略〉。」と、いろく説明して下さる。
 十1019 たくさん咲いてゐる中で一番美しいのは、〈略〉。
 十1021 〈略〉、たれ下つた莖に、幾つも咲いてゐる薄紅色の花である。
 十1025 葉の先からつるを出して、五六寸の細長い袋をつるしてゐる。
 十1026 葉の先からつるを出して、五六寸の細長い袋をつるしてゐる。
 十1028 中をのぞいて御らん、〈略〉。
 十1029 中をのぞいて御らん、何かはいつてゐるやうだから。
 十1031 〈略〉、そつとのぞいて見ると、〈略〉。
 十1032 〈略〉、はへのやうな蟲が二匹、底の水の中で、動けなくなつてゐる。
 十1033 「さあ、今度は葉のきれいな植物を集めてある處だ。」
 十1035 〈略〉といつて、にいさんは次の室へ案内して下さる。
 十1035 「〈略〉。」といつて、にいさんは次の室へ案内して下さる。
 十1039 中には、〈略〉、紅色の葉が、

莖の上の方に群がつて出てゐるものもある。

十103 9 〈略〉葉が、莖の上の方に群がつて出てゐるものもある。

十104 1 次の室には大きい熱帯植物類が並んでゐる。

十104 2 〈略〉・ゴムの木などは名を聞いてゐるが、實物を見るのは始めてである。

十104 5 窓 其處から熱い湯を管で各室へ送つて、適當に暖めるやうになつてゐるのだ。

十104 5 窓 〈略〉、適當に暖めるやうになつてゐるのだ。

十104 7 にいさんは「略。」と教へて下さつた。

十104 9 〈略〉、細長い室一ぱいに、目もさめるやうな草花が並べてある。

十105 1 〈略〉、どれを見てもどれを見ても、一枝髪にさしてみたい。

十105 2 にいさんも足を止めて、「略。」とお笑ひになつた。

十105 3 窓 此の温室は南を受けてゐる上に、〈略〉。

十105 4 窓 此の温室は〈略〉、十分熱い湯が通つてゐるから、〈略〉。

十105 9 其の枝の先にしよんぼりと止つてゐる鳥の姿も、見るから寒さうだ。

十106 8 窓 〈略〉、御母上様には去る二日御安産にて、玉の様な女の御子御生れの由承り、〈略〉。

十107 3 窓 私とてもかはゆらしきめの生れ候と聞きては、何よりうれしく、〈略〉。

十107 7 窓 御母上様はまだ御やすみにて、御前様には〈略〉、何かと御いそがしき事と察し申し候。

十107 10 窓 近き處ならば早速上り候て御世話も致すべく候へども、〈略〉。

十109 4 窓 平生甚だ御達者にて、近來は殊に御元氣のやうに承り居り候事とて、〈略〉。

十111 2 窓 〈略〉、金銀珠玉をちりばめなして、ひねもす見れどもあかざる宮居。

十112 7 一隻の捕鯨船が、勇ましく波を切つて進んで行く。

十112 7 一隻の捕鯨船が、勇ましく波を切つて進んで行く。

十112 10 マストの上の見張人が〈略〉聲高く叫んで、北の方を指さした。

十113 1 甲板に立つてゐた船長を始め十人許の乗組員は、〈略〉。

十113 6 砲手は此の時早く船首の砲後に立つて、其の引金に手をかけた。

十113 8 〈略〉、ねらひを定めて、ずどんと一發、〈略〉もりを打つ。

十113 10 〈略〉、すさまじい波を起して、鯨は海底深く沈んだ。

十114 3 もりが體內深くくひ込んで、破裂矢が見事に破裂したのであらう。

十114 6 もりにつけた長い綱はぐんぐん引張られて、三百メートル許もく

り出された。

十114 9 今まで勢よく引出されてゐた綱もやゝゆるんで來た。

十114 9 〈略〉綱もやゝゆるんで來た。

十115 1 〈略〉、鯨は刻一刻船に近よつて來る。

十115 3 〈略〉、綱を卷いてはのぼし、のぼしては卷いて、氣長くあしらつてゐるうちに、〈略〉。

十115 4 〈略〉、綱を卷いてはのぼし、のぼしては卷いて、氣長くあしらつてゐるうちに、〈略〉。

十115 4 〈略〉、綱を卷いてはのぼし、のぼしては卷いて、氣長くあしらつてゐるうちに、〈略〉。

十115 5 〈略〉、氣長くあしらつてゐるうちに、さすがの鯨も次第に弱つて、

十115 6 〈略〉、さすがの鯨も次第に弱つて、〈略〉引寄せられた。

十116 1 二十メートルもある大鯨が今は全く息たえて、小山のやうな體を水面に横たへる。

十116 6 船員は手早く鯨の尾をくさりて船ばたにつないで、威勢よく根據地に引上げる。

十117 5 青銅の大鳥居をくゞつて進むと、〈略〉。

十117 7 〈略〉、沿道の家は大てい天満宮にちなんだ物を賣つてゐる。

十118 1 〈略〉樟の大木が茂り合つてゐる。

十118 1 池にかけてある二つの太鼓橋を渡り、〈略〉。

十118 2 〈略〉、繪馬堂の前を通つて樓門をくゞると、〈略〉。

十118 3 うやく／＼しく拜んでさて頭を上げると、〈略〉。

十118 4 〈略〉、神前の大きな神鏡が、きら／＼とか／＼やいてゐて神々しい。

十118 5 〈略〉、神前の大きな神鏡が、きら／＼とか／＼やいてゐて神々しい。

十118 6 此の神社は菅公の御墓所に建てたものだと聞いて、一層感を深くした。

十118 8 〈略〉、幾百本とも知れない古木の梅が咲續いてゐる。

十118 10 〈略〉、其の間に咲きかけの紅梅が點々と交つて美しい。

十118 10 掛茶屋に休んで名物の餅を食べてゐると、〈略〉。

十119 1 掛茶屋に休んで名物の餅を食べてゐると、〈略〉。

十119 3 〈略〉、それは園内に飼つてある鶴の聲であつた。

十119 5 地圖を便りにして進んで行く

と、〈略〉。

十119 5 地圖を便りにして進んで行く

と、〈略〉。

十119 6 〈略〉、山畑の其處此處に野梅の咲きこぼれてゐるのも面白く、

十119 7 〈略〉、霜よけのわらの間から、黄色い夏みかんがちら／＼見えてゐる。

- るのも珍しい。
- 十119 途中、太宰府といふ昔の役所の跡などを見て、榎寺といふ處に立寄つた。
- 十120 公は此處にうつされてから一步も外へは出ないで、〈略〉。
- 十120 公は〈略〉一步も外へは出ないで、三年の歳月を送られたさうである。
- 十120 宮中の御宴の事を思ひ出して詩を作られたのも此處であらう。
- 十120 榎寺を出て二日市の停車場へ急いだ。
- 十120 冬の日はもう暮れかゝつてゐる。
- 十120 あちらこちらの村々からは細い煙が立上つてゐる。
- 十120 停車場に着いた時は午後の六時を過ぎてゐた。
- 十121 申し込んで来た者は五十人許もあつて、〈略〉。
- 十121 申し込んで来た者は五十人許もあつて、中には〈略〉、りつぱな學歷のある者もあつたのに、〈略〉。
- 十121 知名の人の紹介状を持つて来た者や、〈略〉。
- 十121 主人はそれ等の人々をさしおいて、或一人の青年をやとひ入れた。
- 十121 後日、人が主人に向つて、〈略〉と尋ねた。
- 十121 主人は答へて、「〈略〉。」とい

- つた。
- 十122 談話の最中に一人の老人がはいつて来ましたが、〈略〉。
- 十122 椅子をゆづりました。
- 十122 何を聞いても、一々明白に答へて、しかもよけいなことは言ひません。
- 十122 はきはきしてゐて、禮儀をわきまへてゐることも、〈略〉。
- 十122 はきはきしてゐて、禮儀をわきまへてゐることも、〈略〉。
- 十122 はきはきしてゐて、禮儀をわきまへてゐることも、〈略〉。
- 十122 私はずいといさつた書物を床の上に投げて置きました。
- 十123 青年ははいるとすぐに書物を取上げて、テーブルの上に置きました。
- 十123 さつぱりしたものを着て、齒もよくみがいてゐました。
- 十123 さつぱりしたものに着て、齒もよくみがいてゐました。
- 十123 又字を書く時に指先を見る
- 十123 爪はみじかく切つてゐました。
- 十123 爪の先は眞黒になつてゐる者が多うございました。
- 十124 いろいろの美質をもつてゐることをよく見定めて、〈略〉。
- 十124 いろいろの美質をもつてゐることをよく見定めて、あの青年をやとふことにしたのです。

- 十124 村の財産家にて事業に熱心なる人、〈略〉。
- 十124 みづから先んじて耕作・養蠶・養鶏・養魚等の模範をしてみしを以て、〈略〉。
- 十125 桑を植ゑて蠶を飼ふ者多く、〈略〉。
- 十125 又池・沼を利用して鯉・鮒を養ふことも盛にして、〈略〉。
- 十125 村長は〈略〉、深く村民に敬愛せられて、幾度の改選にも重ねて選舉せられ、〈略〉。
- 十126 其の他の教員も、校長を模範として専心職務につとむるが故に、〈略〉。
- 十126 生徒は皆よく之になつて課業にはげみ、〈略〉。
- 十127 一村は誠に平和にして、年を追うて其の繁榮を増すばかりなり。
- 十127 大戦艦陸奥は、海を後にして悠然と横たはれり。
- 十127 拜觀者の胸は、〈略〉、壯快なる光景を豫想して、唯をどりにをどる。
- 十128 工廠長の進水命令、續いて造船部長の指揮につれて吹く進水主任の號笛を合圖に、〈略〉。
- 十128 造船部長の指揮につれて吹く進水主任の號笛を合圖に、〈略〉。
- 十128 二年間の苦心を此の一揮にこめて、切斷臺上の繫索をはつしと切る。

- 十128 艦首につるしたるくす玉ばつとわれて、紅白の紙片花ぶきのように散る中を、〈略〉。
- 十129 艦は速力を増して、白波高く海をどり入る。
- 十130 京中の貴賤男女、此の行幸を悲しみて涙と共に見送り奉り、〈略〉。
- 十130 事のいまだ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、力なくて止みたり。
- 十130 然るに今主上隱岐にうつされ給ふと聞き、高德一族共を集めていへるやう、「〈略〉。」と。
- 十131 義を見てせざるは勇なきなり。
- 十131 いでや、行幸の路に待受け、君を奪ひ奉りて義軍を起さん。
- 十131 さらば美作の杉坂に待ち奉らんとて、けはしき山路をふみわけたどりに着きたりしに、〈略〉。
- 十132 人の言へば、衆皆力を失ひて散りくになりぬ。
- 十132 夜にまぎれて行在所の御庭にしのび入り、〈略〉。
- 十132 高徳、大いなる櫻の幹をけづりて、大文字に詩の句を書きつけたり。
- 十132 翌朝警固の武士ども之を見

つけて、讀みかねて上聞に達したり。
 十132 〇 習朝警固の武士ども之を見つけて、讀みかねて上聞に達したり。
 十133 〇 主上は詩の心を御さとりありて、天顔殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。

十134 〇 年久しく相争ひて互に勝敗ありしが、略。
 十135 〇 略、勾踐略、范蠡といふ忠臣の助を得て報復の計を立て略。

十136 〇 略、勾踐略、再び呉と戦ひて遂に之を亡しぬ。

十137 〇 高德此の故事をひきて、やがて忠臣の起りて勤王の兵を挙げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなり。

十138 〇 略、やがて忠臣の起りて勤王の兵を挙げ、略。

十139 〇 太陽の光と熱とがなくては、我々人間は勿論、あらゆる生物、一として生存することは出来ない。

十140 〇 略、之を形造つてゐるものは、液體に近い氣體であらうといふ。

十141 〇 略、其の容積は地球の百三十萬倍に當つてゐる。

十142 〇 温度は表面で約六千度、内部に入るに随つて益々高い。

十143 〇 光の強さに至つては非常なもの、略。

十144 〇 略、之を燭光でいへば

一三の下に零を二十六もつけて表さねばならぬ。

十145 〇 略、太陽の表面は全部が一樣にかゞやいてゐるのではなく、略。

十146 〇 略、又所々に黒點といつて黒く見える所もある。

十147 〇 略、凡そ十一年餘を週期として増減してゐる。

十148 〇 さうして其の數や大きさは、略、増減してゐる。

十149 〇 略、これと同じやうなものがある、略。

十150 〇 略、あの太陽でさへ、地球からは凡そ三千八百萬里も離れてゐる。

十151 〇 今かりに略、飛行機に乗つて行つたとしても、略。

十152 〇 少時より學問に勵み、長じて後魯の君に仕へ、略。

十153 〇 當時支那は數國に分れて互に相争ひ、戦亂止むことなかりしかば、略。

十154 〇 略、孔子略、如何にもして國家を治め、萬民の苦を救はんものと、略。

十155 〇 略、孔子略、廣く各國をめぐるに、用ひられんことを求めぬ。

十156 〇 今此の書によりて其の一端を述べん。

十157 〇 略、「おのれを修めて人を安んず。」

十158 〇 略、發憤しては食を忘れ、略。

十159 〇 略、楽しんでほうれひを忘れ、略。

十160 〇 略、其の身を忘れ、よはひを忘れて、人生の爲に盡くしたる大聖の面目、略。

十161 〇 略、それから五十海里ばかりさかのぼつて、黄浦江といふ支流に入り、略。

十162 〇 略、これ等は租界といふ特別の區域内に住んでゐる。

十163 〇 略、租界といふのは居留地の一、種で、居留民が支那政府の手を離れて、自治制を布いてゐる處である。

十164 〇 略、租界といふのは居留民が居留民が略、自治制を布いてゐる處である。

十165 〇 略、租界には略、幾多の人類が入交つてゐるので、略。

十166 〇 略、電車・馬車・自動車等が絶間なく往來してゐる。

十167 〇 略、街路をさしはさんで大商店が軒をつらね、略。

十168 〇 略、河岸には略、銀行・會社等のつばな建物がそびえてゐる。

十169 〇 略、修養機關、略、娛樂機關が到る處に散在してゐる。

十170 〇 唯商業の取引の盛な部分は、

相當に活氣を帯びてをり、略。

十171 〇 略、西洋風の建物もあつて、趣がやゝ變つてゐる。

十172 〇 略、西洋風の建物もあつて、趣がやゝ變つてゐる。

十173 〇 此の地は交通上重要な位置を占めてゐて、略。

十174 〇 此の地は交通上重要な位置を占めてゐて、略、支那の各地との取引にもきはめて便利であるから、略。

十175 〇 略、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。

十176 〇 略、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。

十177 〇 貿易上最も重要な關係をもつてゐるのは、日・英・米三國で、略。

十178 〇 略、我が居留民の數は、外國人中第一位を占めてゐる。

十179 〇 上海は専ら商業の都市として知られてゐるが、略。

十180 〇 上海は略、近時工業も次第に盛になつて、略、諸工場が勢よく黒煙を立ててゐる。

十181 〇 略、諸工場が勢よく黒煙を立ててゐる。

十182 〇 略、かげろふもえて野は晴れたる。

十183 〇 略、菜の花にはふり見下して、笑ひささめくひるげのむしろ。

織になつてゐるのは、〈略〉

十一 21 5 かういふ風に、三回くりかへして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、〈略〉。

十一 21 8 〈略〉、刑事裁判で、國家を代表して犯罪者の處罰を求めるのは檢事の職務である。

十一 21 10 又民事裁判では、原告・被告の相談相手・附添人又は代理人となつて其の主張を助け、〈略〉。

十一 22 7 若し裁判が無いとしたら、人々相互の争は、力の強い者やわがしこい者が勝つことになるであらう。

十一 22 10 若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、〈略〉、我々は安心して生活することが出来ぬであらう。

十一 23 6 〇 〈略〉、柴田勝家、先づ佐久間盛政をして〈略〉、近江の柳瀬に討つて出でしむ。

十一 23 7 〇 待ちまうけたる秀吉は、〈略〉、諸將を配置して防備をさをさ急なし。

十一 23 9 〇 やがて勝家また自ら五萬の兵を督し、來りて盛政の軍に合す。

十一 24 1 〇 〈略〉、幾頭かの馬をひきて余吾湖のほとりに下り來れる七八人の兵卒あり。

十一 24 3 〇 水際に寄りて馬の足を冷さんとする折しも、〈略〉。

十一 24 4 〇 〈略〉、思ひもよらぬ敵の一隊、湖に沿ひたる一筋路を急ぎに

急ぎて進み來る。

十一 24 5 〇 あわてて逃げんとすれども時既におそく、〈略〉。

十一 24 7 〇 危く逃延びたる一二の兵卒、はせもどつて急を告ぐれば、〈略〉。

十一 24 8 〇 〈略〉、とりでの守將中川清秀、士卒を指揮して防ぎ戦ふ。

十一 24 10 〇 〈略〉、清秀は討死してとりでは落ち、戦は午前のうちに終りぬ。

十一 25 4 〇 寄手の大將佐久間盛政は、〈略〉、明日は進んで賤嶽のとりでをおとし、一舉に敵をみぢんにせん、と、〈略〉。

十一 25 9 〇 夜ふけに及んで、鉢峯を守れる兵卒の一人、ふと東南の方を望み見るに、〈略〉。

十一 25 10 〇 〈略〉、美濃路の方面に當りてたいまつ光おびたしく、〈略〉。

十一 26 1 〇 〈略〉、何とも知らぬ物音ざわ／＼として夜の静けさを破る。

十一 26 3 〇 〈略〉、盛政直に物見の兵を出してうか／＼はしむるに、〈略〉。

十一 26 4 〇 〈略〉、降つてわいたる敵の大軍、〈略〉。

十一 26 6 〇 味方は今日の戦に將卒共につかれ果てて、物の用に立つべくもあらず。

十一 26 7 〇 此のまゝ、新手の兵を迎へては、萬に一つの勝算もなし。

十一 26 8 〇 盛政は勝つてかぶとのををしめざりし油斷を悔い、つゝ、〈略〉。

十一 27 1 〇 これより先、秀吉は織田信孝を攻めて大垣にありしが、〈略〉。

十一 27 3 〇 あたかも晝食の膳に向ひ居たる秀吉は、持ちたる箸を投捨てて、「〈略〉。」と手を打つて喜び、〈略〉。

十一 27 3 〇 あたかも晝食の膳に向ひ居たる秀吉は、持ちたる箸を投捨てて、「〈略〉。」と手を打つて喜び、〈略〉。

十一 27 4 〇 〈略〉、秀吉は、〈略〉、先づ五十人の兵に旨をふくめて先發せしめ、〈略〉。

十一 27 5 〇 〈略〉、「者ども續け。」と馬にむちうちつて近江に向ふ。

十一 27 9 〇 〈略〉、一萬五千の軍勢まつしぐらに進軍して、夜半の頃には既に木之本に到着したり。

十一 28 3 〇 〈略〉、秀吉の軍は、此の時既に處々のとりでより來れる守兵と合して、追撃すること頗る急なり。

十一 28 6 〇 〈略〉、此の時までも飯浦坂にふみ留つて、追來る敵を防ぎ居し弟勝政に〈略〉。

十一 28 8 〇 〈略〉、秀吉、勝政の引足になりたるを見て、すかさず鐵砲組に合圖して銃火をあびせかけたれば、〈略〉。

十一 28 9 〇 〈略〉、すかさず鐵砲組に合圖して銃火をあびせかけたれば、

合圖して銃火をあびせかけたれば、

〈略〉。

十一 28 10 〇 〈略〉、敵は見る間にばた／＼と倒れて、一軍今や崩れんとす。

十一 29 2 〇 秀吉はるかに之を望み、旗本の若武者どもをきつと見て、「〈略〉。」と大音聲。

十一 29 7 〇 「承る」と、〈略〉・片桐且元等の荒武者ども、勇みに勇んで突進す。

十一 29 9 〇 中にも加藤清正は、〈略〉、片鎌槍をしごいて突いてかゝる。

十一 29 9 〇 中にも加藤清正は、〈略〉、片鎌槍をしごいて突いてかゝる。

十一 29 10 〇 正國も〈略〉、俄に槍を投捨てて大手をひろげ、「組打。」と叫ぶ。

十一 30 10 〇 〈略〉、かぶとのしろろつゝの枝に引つかゝりて、身のはたらき自由ならず。

十一 31 1 〇 正國得たりと、力足をふん張りてはねかへさんとせしが、〈略〉。

十一 31 1 〇 正國、ふみそこねてあはや谷底へ轉び落ちんとす。

十一 31 3 〇 〈略〉、かぶとはつゝの枝に残つて、二人は〈略〉轉び落つること三十間許。

十一 31 8 〇 〈略〉名ある勇士を討取つて、武名を天下にとゞろかせり。

十一 31 9 〇 武器は皆槍なりしかば、世に之を稱して賤嶽の七本槍といふ。

十一 32 3 〇 四國の西には佐田岬長

く突出で、九州にせまりて豊豫海峡をなす。

十一 33 6 図 かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。

十一 33 7 図 春は島山かすみに包まれて眠るが如く、〈略〉。

十一 33 10 図 兩岸及び島島、見渡す限り田園よく開けて、毛氈を敷けるが如く、〈略〉。

十一 34 2 図 海の靜かなることは鏡の如く、朝日夕日を負ひて、島がくれば行く白帆の影ものどかなり。

十一 34 6 図 〈略〉、汽船絶えず通航して、遠く近く黒煙の青空にたなびくを見る。

十一 34 9 図 嚴島は古より日本三景の一に數へられて殊に名高く、〈略〉。

十一 35 1 図 我が國に遊べる西洋人は此の瀬戸内海の風景を賞して、世界における海上の一大公園なりといへり。

十一 35 4 障子をあけてみるとまだ雨が降つてゐる。

十一 35 4 〈略〉まだ雨が降つてゐる。

十一 35 5 〈略〉。と思ひながら、机によりかゝつて向ふの方をながめると、〈略〉。

十一 35 7 〈略〉、うね／＼と續く岡が雨に煙つて、ぼんやりと遠く見える。

十一 35 8 〈略〉、山の背を通つてゐる小路を中にはさんで、〈略〉。

十一 35 9 〈略〉、山の背を通つてゐる

小路を中にはさんで、四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるのが、〈略〉。

十一 35 9 〈略〉、四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるのが、〈略〉。

十一 36 3 〈略〉、明日の用意に出しておいた植林地の書付を開いて見る。

十一 36 3 〈略〉植林地の書付を開いて見る。

十一 36 4 地圖の中の薄緑に染めてあるのが一昨年植付けた處、〈略〉。

十一 36 4 地圖の中の〈略〉、朱線で圍んであるのが今年伐採する處、〈略〉。

十一 36 6 〈略〉、それから次々といろ／＼の印がついてゐる。

十一 36 9 〈略〉。とおとうさんの手で記してある。

十一 37 1 図 「こんなに間をおいてよいのですか。」

十一 37 3 図 早く間伐して細材を取る目的のところでは、一坪に二本も三本も植ゑるが、〈略〉。

十一 37 5 図 〈略〉、此の邊では太材を取る方が利益だから、かう間をおいて植ゑるのだ。

十一 37 6 図 〈略〉、此のくらゐ離して植ゑても、〈略〉。

十一 37 8 〈略〉、おとうさんが「略。」といつて笑つてをられた。

十一 37 8 〈略〉、おとうさんが「略。」

といつて笑つてをられた。

十一 38 2 〈略〉、それでも木が競争するやうに、しんを立ててすくすくと延びてゐるのを見ると、〈略〉。

十一 38 3 〈略〉、それでも木が競争するやうに、しんを立ててすくすくと延びてゐるのを見ると、〈略〉。

十一 38 5 〈略〉、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

十一 38 6 〈略〉、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

十一 38 8 なたや鎌などでつる草を拂ひ、下枝を伐落して行くと、〈略〉。

十一 38 9 〈略〉、今まで兩方の枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて〈略〉。

十一 38 10 〈略〉、今まで兩方の枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて如何にも氣持よさうに見える。

十一 39 3 いつかもにいさんが、「杉の散髪だ。」といつてみんなを笑はせたことがある。

十一 39 6 〈略〉、枝を打てば、〈略〉空氣の流通がよくなつて蟲がつかなくなるさうだ。

十一 39 7 それから始めて聞いて面白と思つたのは、〈略〉。

十一 39 9 生きた枝でも枯れた枝でも、其のまゝにしておくと、〈略〉。

十一 39 10 〈略〉、其のまゝにしておく

と、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、〈略〉。

十一 39 10 〈略〉、其のまゝにしておくと、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十一 40 2 僕がお手傳して植ゑたあの杉や檜は、〈略〉。

十一 40 3 使ひみちによつて、三十年前から五六十年目ぐらゐの間に伐るのださうだから、〈略〉。

十一 40 6 〈略〉、其の時は僕がおとうさんくらゐの年になつてゐるわけだ。

十一 40 9 図 〈略〉、植ゑてさへおけば、年々太つて利息が附いて行く。

十一 40 9 図 〈略〉、植ゑてさへおけば、年々太つて利息が附いて行く。

十一 41 1 ぼんやりいろ／＼の事を考へてゐるうちに、〈略〉。

十一 41 2 〈略〉、いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。

十一 41 3 〈略〉、向ふの山も薄墨色に暮れて行く。

十一 41 8 候 貴兄には去月以來御病氣にて、しかも一時は大部分御重態なりし由、〈略〉。

十一 42 1 候 何とぞ十分の御養生ありて、一日も早く御全快なされ候様切に祈申候。

十一424 園 何分田舎にて萬事不使

には候へども、〈略〉。

十一435 園 實は去月十日頃より感冒の心地にて引きこもり居候處、〈略〉。

十一437 園 しかし幸に經過良好にて、熱も凡そ二週間餘にて全く相去り申候。

十一446 園 昔、泉州堺のなにがし寺に、或畫師久しく寄食してありけるが、〈略〉。

十一447 園 〈略〉、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を経たり。

十一448 園 住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、「〈略〉。」といへば、〈略〉。

十一453 園 〈略〉、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。

十一454 園 愚僧も所用ありて京に上り、或は一二年滞在せんもはかり難し。

十一458 園 さらば謝恩の爲に何か畫がきて參らすべし。

十一4510 園 或夜小僧、住持の居間に來りて、「〈略〉。」とさゝやきければ、〈略〉。

十一461 園 「彼處に行きて、彼の畫師のする様を見給へ。」

十一462 園 〈略〉、住持ひそかに行きて見るに、〈略〉。

十一463 園 〈略〉、畫師は障子に身を

寄せて、様々に姿を變へつゝ、寢起する様なり。

十一464 園 さまたげせんも心なしと思ひて、住持は其のまゝ、寢間に入れり。

十一466 園 翌朝畫師は〈略〉、ふすまに向ひてしきりに筆を動かしたるに、

十一4610 園 かくて次の夜は如何にとうかゞふに、畫師は〈略〉、明日はかく畫がかななど獨言してゐたりければ、〈略〉。

十一471 園 〈略〉、住持は尚知らぬ顔して過しに、〈略〉。

十一472 園 其の後又夜更けてうかゞひ見れば、〈略〉。

十一473 園 〈略〉、今度はひちを張り、足をのべ、手を口に當てて鶴の臥したる様をなせり。

十一474 園 夜明けて住持、畫師に向ひて、「〈略〉。」と、夜中に畫師のしたる様をまねて見るに、〈略〉。

十一474 園 夜明けて住持、畫師に向ひて、〈略〉。」と、夜中に畫師のしたる様をまねて見るに、〈略〉。

十一476 園 夜明けて住持、〈略〉、夜中に畫師のしたる様をまねて見るに、〈略〉。

十一477 園 〈略〉、畫師驚きて、「〈略〉。」と問ふ。

十一478 園 「我が心に思ひ構へし事を如何にして知り給へるか。」

十一4710 園 昨夜のぞき見て知りました。

十一482 園 〈略〉、畫師〈略〉、唯杉戸に檜一本を畫がきて東國へ出立しぬ。

十一484 園 住持驚きて、「〈略〉。」と問へば、〈略〉。

十一488 園 先に畫がきたる檜、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、〈略〉。

十一4810 園 〈略〉、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、〈略〉。

十一492 園 〈略〉、畫師「〈略〉。」とて一枝かき添へ、又別れを告げて立去れりといふ。

十一495 園 〈略〉など、數へてみるとゴムで造つたものは實に多い。

十一4910 此の液の取れる木を普通にゴムの木といつてゐる。

十一5010 他の國人も之にならつて、南洋におけるゴムの栽培は頗る盛になつた。

十一512 南洋は〈略〉、ゴムの木の發育には最もよく適してゐる。

十一513 園 〈略〉、日本人の經營してゐるゴム園もたくさんある。

十一515 此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあとに種をまくか、又は苗木を植付けるのであるが、〈略〉。

十一519 園 〈略〉、これが成長して、切

付を行ふまでには五六年もかかる。

十一527 園 〈略〉、此の組織の所まで小刀が届いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。

十一528 此の傷から出て來るゴム液は、〈略〉。

十一529 園 〈略〉、ゴム液は、流れて下のコップにたまるのである。

十一5210 園 人の人は毎朝暗いうちに起きて、受持の木に此の切付をして廻る。

十一531 園 人の人は〈略〉、受持の木に此の切付をして廻る。

十一531 園 それがすむと、今度はバケツを持つてコップにたまつた液を集めて歩くのである。

十一532 園 それがすむと、〈略〉コップにたまつた液を集めて歩くのである。

十一533 集めた液は之を工場に持つて行き、〈略〉。

十一533 集めた液は之を工場に持つて行き、先づこして不純な物を取り除き、〈略〉。

十一534 集めた液は〈略〉、次に薬品を入れて固ませ、〈略〉。

十一534 園 〈略〉、次に薬品を入れて固ませ、機械で薄くして乾かすのである。

十一537 かうして出來たゴムは、各國の工場に運んで加硫法を行ふ。

これまでにくくしてなが

十一 58
5 砲手は〈略〉、手で顔をお

びくとしてゐる。

638 中にはトラクターを用ひて

全く大農式にやつてゐる處もある。

十一 63 10 トラクターは〈略〉、ガソリンの發動機が取付けてある。

十一 64 1 これが大きな鋤を何本も引いて、〈略〉のそりくくと歩き廻ると、〈略〉。

十一 64 4 これが〈略〉のそりくくと歩き廻ると、二間幅ぐらゐに耕されて行く。

十一 64 5 〈略〉、立木や切株の根本を掘つておいて、〈略〉。

十一 64 6 〈略〉、立木や切株の根本を掘つておいて、それにくさりをつけて此のトラクターで引くと、〈略〉。

十一 64 6 〈略〉、それにくさりをつけて此のトラクターで引くと、〈略〉。

十一 64 8 〈略〉、めりくくと音を立てて根こぎにされてしまふ。

十一 64 8 〈略〉、めりくくと音を立てて根こぎにされてしまふ。

十一 65 2 〈略〉、此の邊では新しい知識をいれて、新式の農具を用ひ、新式の方法によつてどし／＼土地を開いて行く。

十一 65 2 〈略〉、此の邊では〈略〉、新式の方法によつてどし／＼土地を開いて行く。

十一 65 3 〈略〉、此の邊では〈略〉、新式の方法によつてどし／＼土地を開いて行く。

十一 65 4 〈略〉、人々は〈略〉、土の香に親しんで樂しげに働いてゐる。

十一 65 5 〈略〉、人々は〈略〉、土の香に親しんで樂しげに働いてゐる。

十一 65 8 「人は火を用ひる動物。」といはれてゐるやうに、〈略〉。

十一 66 1 一體人は最初どうして火を得たであらうか。

十一 66 3 〈略〉、密生した樹木の枝と枝がすれあつて起つたりした自然の火から、〈略〉。

十一 66 5 其のうちだん／＼人智が發達するにつれて、〈略〉火を得る法をさとするやうになつた。

十一 66 5 〈略〉、木片と木片をこすりあはせて火を得る法をさとするやうになつた。

十一 66 7 〈略〉、石や金を打合はせて火を出す法を考へるやうになつた。

十一 66 9 此の方法は各國民の間に、廣く又極めて長い間行はれてゐたものであるが、〈略〉。

十一 66 10 此の方法は〈略〉、マツチの使用が廣まるにつれてすたつて來た。

十一 66 10 此の方法は〈略〉、マツチの使用が廣まるにつれてすたつて來た。

十一 66 10 此の方法は〈略〉、マツチの使用が廣まるにつれてすたつて來た。

十一 67 3 〈略〉、時代が進んで燃料の種類が増すにつれて、〈略〉。

十一 67 4 〈略〉、時代が進んで燃料の種類が増すにつれて、火の用途もだん／＼廣くなつて來た。

十一 67 4 〈略〉、火の用途もだん／＼廣くなつて來た。

だん／＼廣くなつて來た。

十一 67 8 〈略〉、石炭の火は〈略〉、汽車や汽船や工場の重い機械を動かすのに大切なものとなつてゐる。

十一 68 3 かくして人は、暗黒の世界からだん／＼光明の世界へと、みちびかれて來たのである。

十一 68 6 人は〈略〉、火の熱と光とをあらゆる方面に利用することを考へて來た。

十一 68 8 將來は又どんなものが發明されて、今のガスや電氣にかはることであらうか。

十一 69 1 或山寺で、四人の僧が一室に閉ぢこもつて、七日間の無言の行を始めた。

十一 69 3 小僧一人だけ自由に室内に入らせて、いろ／＼の用を足させた。

十一 69 4 夜が更けるにつれて燈がだん／＼暗くなり、〈略〉。

十一 69 5 末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。

十一 69 6 末席に坐つてゐた僧は、それが氣になつてしかたがない。

十一 69 6 うつかり口をきいてしまつた。

十一 69 7 小僧、早く燈心をかきたててくれ。」

十一 69 8 隣に坐つてゐた僧が之を聞いて、〈略〉。

十一 69 8 隣に坐つてゐた僧が之を聞いて、〈略〉。

いて、「無言の行に口をきくといふ事があるか。」

十一 70 3 三人とも物を言つてしまつたので、〈略〉

十一 70 4 〈略〉、上座の老僧がもつたいらしい顔をして、「物を言はないのはわしばかりだ。」

十一 70 9 〈略〉、將來學問を以て身を立たせたいと、一心に勉強してゐた。

十一 71 1 或夏の半ば、宣長はかねて買ひつけの古本屋に行くと、主人は愛想よく迎へて、〈略〉。」といふ。

十一 71 5 あまり思ひがけない言葉に宣長は驚いて、「先生がどうしてこちらへ。」

十一 71 7 何でも山城・大和方面の御旅行がすんで、これから參宮をなさるのださうです。

十一 71 9 かの新上屋に御泊りになつて、さつき御出かけの途中『略』と、御立寄り下さいました。

十一 72 1 どうかして御目にかゝりたいものだが。

十一 72 3 後を追つて御いになつたら、大いひ追ひつけませう。」

十一 72 7 宣長は、大急ぎで眞淵の様子を聞きとつて、後を追つたが、〈略〉。

十一 72 10 次の宿のさきまで行つてみたが、やはり追ひつけなかつた。

十一 73 1 宣長は力を落して、すご／＼とどつて來た。

十一 73 1 宣長は力を落して、すご／＼とどつて來た。

十一 73 1 宣長は力を落して、すご／＼とどつて來た。

十一 76 / ㊦ 〈略〉、先づ土臺を作つてそれから一歩一歩高く登り、最後の目的に達するやうになさい。

幣の役目をしたこともあつた。

十一 793 〈略〉、形の上に種々の工夫

1185 I ふと見ると、〈略〉くらげ

十一 85 〈略〉「つかれも何も忘れてしまつて、僕も思はず『萬歳。』」と

叫んだ。

十一 87 8 夕食をすましてから、縁がはへ出て涼む。

十一 87 8 夕食をすましてから、縁がはへ出て涼む。

十一 87 9 父は空をながめて、「略。」と、團扇を使ひながら言つた。

十一 88 5 すると弟が「略。」と言つて、日数を数へてみようとした。

十一 88 5 すると弟が「略。」と言つて、日数を数へてみようとした。

十一 88 5 父は暦を持つて来て、「これは略本暦だ。略。」

十一 88 6 父は暦を持つて来て、「これは略本暦だ。略。」

十一 88 7 父は暦を持つて来て、「これは略本暦だ。略。」

十一 88 9 かういつて弟の手に渡した。

十一 88 9 弟はそれを見てしばらく考へてゐたが、略

十一 88 10 弟はそれを見てしばらく考へてゐたが、略

十一 89 1 弟は略、すぐ二百十日の通日から立春の前日の通日を引去つて、略。

十一 89 5 弟は尚あちらこちら暦をくつてゐるうち、略

十一 89 8 弟は略、ふと「八十八夜」の文字に目を止めて、略。

十一 90 5 僕はこれまで暦といふと、略といふやうな事を見るものとばかり考へてゐたので、略。

十一 90 5 僕は略、此の話を聞いて珍しく感じた。

十一 90 6 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 90 10 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 90 10 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 91 3 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 91 3 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 91 7 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 91 7 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 91 9 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 92 1 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 92 3 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 92 3 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 92 7 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 92 8 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 92 9 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 92 9 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 93 1 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 93 3 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 93 5 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 93 5 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 93 5 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 94 1 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 94 4 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 95 1 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 95 2 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 95 2 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 95 3 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 95 3 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 95 3 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 95 4 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 95 8 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 96 3 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 96 4 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 96 5 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 96 6 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 96 6 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 96 6 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 96 7 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 96 8 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 96 8 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 96 8 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 96 9 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 97 2 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 97 9 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 97 10 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 98 1 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 98 8 父はなほ言葉をつづけて、略。

十一 98 8 父はなほ言葉をつづけて、略。

りて讀む外はなかつた。

十一 98 9 〈略〉、書物を持つてゐる人の所には遠近を問はず借りに行つた。

十一 99 1 さうして其の本の内容がすつかりわかつてしまふまでは何度でも讀む。

十一 99 5 リンカーンはかね／＼此の偉人を非常にしたつてゐたので、〈略〉。

十一 99 6 リンカーンは〈略〉、鬼の首でも取つた氣になつて一心に讀續けた。

十一 99 7 〈略〉、夜は床に就いてから燈が盡きるまで讀む。

十一 100 2 〈略〉雨のために、本がすつかりぬれてゐたので、〈略〉。

十一 100 3 〈略〉、子供心にも大變心配して、其の晩はとう／＼眠れなかつた。

十一 100 3 翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、〈略〉。

十一 100 4 翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、「〈略〉。」と願つた。

十一 100 6 圖「〈略〉、其の代りに何か仕事をさせて下さい。」

十一 100 7 其の人は〈略〉、願に任せて三日間畠の草をとらせ、〈略〉。

十一 100 9 リンカーンは其の本をいねいに乾かして、其の後何度も／＼讀返してゐるうちに、〈略〉。

十一 100 10 〈略〉、其の後何度も／＼讀

返してゐるうちに、〈略〉。

十一 101 2 リンカーンは父の助手をして忠實に勤くと共に、〈略〉。

十一 102 9 圖 目下滞在の中のリオ、デジャネーロ市は、ブラジル國の首府にて非常に景色よく、〈略〉。

十一 103 1 圖 町のりつぱなる事も、文明諸國の大都會に比して少しも劣る所これなく候。

十一 104 10 圖 河幅は驚く程の廣さにて、河口の處にては、三百二十キロメートルもこれある由、〈略〉。

十一 105 4 圖 次にイグアッスーの龍は、〈略〉大瀑布にて、高さ五十五メートル、幅三千六百メートル、〈略〉。

十一 105 10 圖 此の邊は南米中、日本人の最も多く住める處にて、何處に行きても日本人を見かけ候は甚だ愉快に候。

十一 106 2 圖 殊に日本人の小學校ありて、御前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては、〈略〉。

十一 106 3 圖 〈略〉、御前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては、殆ど身の南米に在るを忘れ候。

十一 106 5 圖 世界に名高きブラジルコーヒーの主要なる産地も此の邊にて、甘蔗・綿花・米等もよく出来る由に候。

十一 106 6 圖 昨日知人に誘はれてコーヒー園見物に出掛け候。

十一 106 8 圖 大勢の人々が熟したる

コーヒーの實を手にてこき落し、之を集めてみぞに投入候へば、〈略〉。

十一 106 10 圖 〈略〉、實のみ浮びて流れ候を、下流にてすくひ上げ、〈略〉。

十一 107 2 圖 之を機械にかけて皮を除き、袋に入れて外國に輸出する由に候。

十一 107 2 圖 之を機械にかけて皮を除き、袋に入れて外國に輸出する由に候。

十一 107 6 圖 〈略〉子供が、各國人の間にまじりてかひ／＼しく立働ける様を見ては、〈略〉。

十一 107 6 圖 〈略〉子供が、各國人の間にまじりてかひ／＼しく立働ける様を見ては、如何にもけなげに存ぜられ候。

十一 108 2 圖 原野は大い牧場にて、牛馬は放し飼にせられ居候。

十一 109 5 圖 〈略〉、次にをのを振るつて大木を伐るに、〈略〉。

十一 109 6 圖 〈略〉、三抱も四抱もあるものが地ひゞきを打つて倒るる様、〈略〉。

十一 109 9 圖 〈略〉、天をもこがすばかりのほのほをあげて燃ゆる光景は、〈略〉。

十一 110 1 圖 燃えあとは取片附けて畠とし、〈略〉。

十一 111 2 圖 〈略〉、出でては日毎畑を打ち、入りては机に書をひも

とく。

十一 111 3 圖 〈略〉、出でては日毎畑を打ち、入りては机に書をひもとく。

十一 111 7 圖 〈略〉、劉備が三顧のこよなき知遇、我が身をすてて報いんと、〈略〉。

十一 111 8 圖 〈略〉、我が身をすてて報いんと、起ちてぞ出でぬる、草のいほりを。

十一 112 7 圖 〈略〉、強敵ひしきて世をしづめんと、三軍進めし五丈原頭、〈略〉。

十一 113 5 〈略〉、地方自治の精神に基づいて其の團體の幸福を進め、國運の發展を期することは皆同じである。

十一 114 3 地方人民が協同一致して自ら地方公共の事に當り、〈略〉。

十一 115 2 市町村長や議員を選挙するには、専ら其の人物に重きをおいて、決して親族・縁故其の他私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。

十一 115 3 市町村長や議員を選挙するには、〈略〉、決して親族・縁故其の他私交上の關係の爲に心を迷はすやうなことがあつてはならない。

十一 115 4 まして威力によつて強制するとか、〈略〉。

十一 115 4 〈略〉、私利によつて勧誘するとかいふやうな手段を用ひたり、〈略〉。

十一 115 4 〈略〉、私利によつて勧誘するとかいふやうな手段を用ひたり、〈略〉。

十一 115 4 〈略〉、私利によつて勧誘するとかいふやうな手段を用ひたり、〈略〉。

十一115 7 本當に自治の精神に富んでゐる者は、〈略〉。

十一115 8 〈略〉、地方公職の爲の適任者を擧げることだけを考へて、決して私心をもたないのである。

十一116 4 それであるから人々は〈略〉、協同一致して團體の福利を増進することを心掛けねばならない。

十一116 6 〈略〉自治團體の事業は、地方人民が一般に之を尊重し、之に協力することによつて、始めて其の効果を完全に擧げることが出来る。

十一116 9 〈略〉、又は青年團を組織して産業の發達、風俗の改善等に務めたりするのは、〈略〉。

十一116 10 〈略〉のは、皆公共心の發動であつて、自治の精神を養成し、自治團體を助長するものであるから、〈略〉。

十一117 8 〈略〉、農場主が大勢の人の耕作するのを監督してゐた。

十一117 10 〈略〉、〈略〉騎馬の人たちが、眞一文字にこちらへかけて来る。

十一118 1 〈略〉せつかくよく出来てゐる麥を、〈略〉。

十一118 2 農場主は〈略〉麥を、たくさん馬や犬にふみあらされてはたまらないと思つて、〈略〉。

十一118 2 農場主は〈略〉と思つて、そばに居た自分の子に、「〈略〉。」と言ひつけた。

十一118 4 園 ジョージ、早く行つて農

場の門をしめろ。

十一118 7 ジョージがとんで行つて門の戸にくわんぬきをさすが早いか、〈略〉。

十一118 7 ジョージがとんで行つて門の戸にくわんぬきをさすが早いか、〈略〉。

十一118 9 さうしてジョージに早くあけて通すやうにと言つた。

十一119 2 園 僕はおとうさんから、誰が來ても此の門をあけてはならないと言ひつけられてゐるのです。

十一119 3 園 僕はおとうさんから、〈略〉と言ひつけられてゐるのです。

十一119 4 するとジョージは、「〈略〉。」と言つてどうしてもあけない。

十一119 5 騎馬の人たちは、〈略〉、あけてくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。

十一119 6 騎馬の人たちは、〈略〉、あけてくれ、ばお禮に金貨をやると言つてすかしたりした。

十一119 8 園 「おとうさんは、誰が來ても此の門をあけてはならないと僕に言ひつけました。」

十一120 3 園 よい子だから私の頼をきいてくれ。

十一120 5 ジョージは、〈略〉といふ事を聞いてゐたので、〈略〉。

十一120 6 ジョージは、〈略〉、帽子をぬいで恭しく敬禮して、〈略〉。

十一120 6 ジョージは、〈略〉、帽子をぬいで恭しく敬禮して、さて靜かに口を開いた。

十一120 10 園 僕は、誰が來ても此の門をあけてはならないとおとうさんに言はれてゐるのです。

十一120 10 園 僕は、〈略〉とおとうさんに言はれてゐるのです。

十一121 2 さうして自身も帽子をぬいで答禮し、一同を引連れて立去つた。

十一121 2 さうして自身も帽子をぬいで答禮し、一同を引連れて立去つた。

十一121 3 ジョージは後を見送つて、帽子を振りながら叫んだ。

十一121 10 〈略〉、職工が珪砂にソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。

十一121 10 〈略〉、職工が珪砂にソーダ灰や石灰石の粉を入れてかきまぜてゐた。

十一122 2 〈略〉、白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、目も口もあけられない。

十一122 4 こんなところで毎日働いてゐる人たちは、〈略〉。

十一122 10 とけたガラスが中でぎら／＼かがやいてゐる。

十一123 2 窯の周圍には、八九人の職工が汗を流して働いてゐる。

十一123 4 細長い管の一端を、とけたガラスの中に突つこんで引出すと、〈略〉。

十一123 5 〈略〉、先に赤い玉がくつゝいてゐる。

十一123 5 一端に口を當てて息を吹きこむと、ぶうつとふくれる。

十一123 6 ふり動かしては又吹く。

十一123 8 見てゐるうちに大きなフラスコが出来た。

十一123 9 〈略〉、そこではちよつと吹いて型に入れ、〈略〉。

十一123 9 〈略〉、そこではちよつと吹いて型に入れ、又吹いて型から出す。

十一123 10 何が出来るであらうかと思つてゐると、〈略〉。

十一124 1 〈略〉、いろ／＼扱つてゐるうちに臺付のコップになつた。

十一124 3 橋本君にうながされて、次の室にはいつた。

十一124 4 調べかのは廻るにつれて、石や木や金の圓板が車輪のやうに廻つてゐる。

十一124 5 〈略〉、石や木や金の圓板が車輪のやうに廻つてゐる。

十一124 6 〈略〉職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板にあてて模様をほりつけたり、〈略〉。

十一124 7 〈略〉職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板にあてて

〈略〉、みがきをかけたりしてゐる。

十一124 7 〈略〉職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板にあてて

〈略〉、みがきをかけたりしてゐる。

十一124 7 〈略〉職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板にあてて

〈略〉、みがきをかけたりしてゐる。

十一124 7 〈略〉職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板にあてて

〈略〉、みがきをかけたりしてゐる。

十一124 7 〈略〉職工がガラスの皿やコップなどを、此の圓板にあてて

〈略〉、みがきをかけたりしてゐる。

十一1248 隣の室では、職工が五六人ならんで、ガラス器にいろ／＼の模様をつけてゐる。

十一1249 隣の室では、〈略〉、ガラス器にいろ／＼の模様をつけてゐる。

十一12410 歸りがけに事務所の陳列棚を見せてもらつた。

十一1252 〈略〉、鉢・びん・花瓶・水さしなどがきれいに並んでゐた。

十一1259 〈略〉 されば古は、支那より渡來せるものの僅かに世に存するのみにて、學者其の得がたきに苦しみた

十一1264 〈略〉、廣く各地をめぐりて資金をつること數年、〈略〉。

十一1269 〈略〉 死傷頗る多く、家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らず。

十一1271 〈略〉 鐵眼此の状を目撃して悲しみにたへず。

十一1278 〈略〉 すなはち喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、〈略〉。

十一12710 〈略〉 苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、〈略〉。

十一1282 〈略〉、再び募集に着手して努力すること更に數年、〈略〉。

十一1286 〈略〉 幕府は處々に救小屋を設けて救助に力を用ふれども、〈略〉。

十一1289 〈略〉 鐵眼こゝにおいて再び意を決し、喜捨せる人々に説きて出版の事業を中止し、〈略〉。

十一1292 〈略〉 二度資を集めて二度散じ

たる鐵眼は、〈略〉。

十一1293 〈略〉 鐵眼は、終に奮つて第三回の募集に着手せり。

十一1298 〈略〉、喜んで寄附するもの意外に多く、〈略〉。

十一1301 〈略〉 かくて天和元年鐵眼が初度の募集を始めてより十八年の後に至りて、〈略〉。

十一1301 〈略〉 かくて天和元年鐵眼が初度の募集を始めてより十八年の後に至りて、一切經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられたり。

十一1307 〈略〉 福田行誠かつて鐵眼の事業を感歎していはく、「〈略〉。」と。

十一1317 〈略〉 大空にそびえて見ゆるたかねにも、のぼればのぼる道はありけり。

十二26 〈略〉 よきを取りあしきを捨てて、とつ國に おとらぬ國となすよしもがな。

十二33 〈略〉 いづ方に志してか、日盛りの やけたる道を蟻の行くらむ。

十二41 〈略〉 海原はみどりに晴れて、濱松の こずまさやかにふれる白雪。

十二45 〈略〉、やがて新川を渡り更に進みて斐伊川の鐵橋にかゝる。

十二410 〈略〉、秋晴の空はあくまですみて、暖さ春の如し。

十二52 〈略〉、參詣人の群にまじりて行けば大鳥居あり、〈略〉。

十二58 〈略〉 やがて打續く松並木の間を過ぎて境内に入り、〈略〉。

十二61 〈略〉 昔、大國主命^{おほくにのみこと}賊を平げ民をなつて、威勢四隣に並ぶものなし。

十二62 〈略〉 時に天照大神の使者建御雷^{たけみかづら}命此の地に來りていふやう、〈略〉。

十二66 〈略〉 大國主命答へていはく、「〈略〉。」

十二68 〈略〉 我が子事代主^{ことしろぬし}とはかりて答へ申さん。

十二610 〈略〉 此の時事代主命は〈略〉、使を得て急ぎ歸り、〈略〉。

十二73 〈略〉 此の葦原の中つ國を皇孫にたてまつりて、とこしへに天つ日嗣^{ひつぎ}を護りまつらん。

十二75 〈略〉 こゝにおいて大國主命、「〈略〉。」と申して恭しく國土をたてまつりぬ。

十二76 〈略〉 大神其の眞心の厚きを賞して、命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。

十二82 〈略〉 寶物殿に入りて拜觀するに、〈略〉。

十二87 〈略〉 此の棒を此の板の上にてきりをもむが如く廻せば、摩擦によりて火を生ず。

十二89 〈略〉 此の社にては、今も太古の法に従ひ、之によりて火を作るといふ。

十二810 〈略〉 境内を出でて海岸に到る。

十二92 〈略〉 折から日は地平線に近づきて、雲も水も金色に輝き、美しさ

いふばかりなし。

十二94 〈略〉 なぎさに立ちて昔をしのべば、〈略〉。

十二101 〈略〉、貝殻や鑽石などを室内に並べては一人で楽しんでゐた。

十二101 〈略〉、貝殻や鑽石などを室内に並べては一人で楽しんでゐた。

十二104 〈略〉、先生にもむしろ中以下の生徒と思はれてゐた。

十二107 又父には「〈略〉。」といつて叱られたことがあつた。

十二109 又いろ／＼の鳥を注意して見ると、〈略〉。

十二109 又いろ／＼の鳥を注意して見ると、それ／＼違つた面白い習性をもつてゐるので、〈略〉。

十二112 父はダーウインを醫者にしようと思つて大學へやつた。

十二113 温順な彼は父の命に従つて勉強してゐたが、〈略〉。

十二114 温順な彼は父の命に従つて勉強してゐたが、〈略〉。

十二116 〈略〉、何時の間にか好きな博物學の研究が主となつてしまつた。

十二1110 これも述しては大變と、〈略〉。

十二123 〈略〉、蟲は得たりと逃げてしまつた。

十二125 彼が探檢船ビーグル號に乗込んで意氣揚々と本國を出發したのは、〈略〉。

十二127 かくて世界の各地をめぐつ

て、〈略〉、博物學や地質學の實地研究につとめ、〈略〉。

十二128 〈略〉、種々の材料を集めて本國に歸つたのはそれから五年の後である。

十二129 此の航海によつて彼の博物學者としての基礎が十分に出來、〈略〉。

十二135 〈略〉、毎日きめた時間割通りに仕事を進めて、たとへ十分、十五分の餘暇でも無益に費することがなかつた。

十二138 〈略〉、此の規則正しい生活とふだんの養生とによつて、七十四歳の長壽を保つことが出來た。

十二139 さうして廣く動植物を研究して、〈略〉といふことを證明した。

十二146 〈略〉、されば珍しき事件の起りし時、之を記述して印刷に附し、廣く發賣することは古より行はれたりしが、〈略〉。

十二148 〈略〉、印刷術の幼稚なる時代にありては、唯をりく興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。

十二152 〈略〉、〈略〉時事を論ずるもの起りて、こゝに始めて我等の生活に切實なる關係を有するものとはなりぬ。

十二157 〈略〉新聞中にも大小種種ありて、一がいには言難けれども、〈略〉。

十二161 〈略〉然らばかくの如き新聞は如何にして編輯せられ、印刷せられ、讀者に配布せらるゝか。

十二163 〈略〉これも社によりて多少の相違はあれども、〈略〉。

十二164 〈略〉、多くは總務局ありて全體を統べ、〈略〉。

十二165 〈略〉、編輯・營業の二局ありて、編輯に關することは前者之を司どり、販賣・廣告に關することは後者之を擔當す。

十二169 〈略〉、各部にそれく掛の記者又は技術家ありて、或は出でて材料を取り、或は社内において編輯事務にたづさはる。

十二169 〈略〉、或は出でて材料を取り、或は社内において編輯事務にたづさはる。

十二1610 〈略〉、或は社内において編輯事務にたづさはる。

十二171 〈略〉特派員又は通信員ありて、事件起れば直に電話又は電信にて通知し來る。

十二175 〈略〉印刷部にては直に所要の活字を拾ひて之を組み、〈略〉。

十二175 〈略〉印刷部にては〈略〉、校正刷を刷りて校正部に廻す。

十二176 〈略〉校正終れば紙型に取り、更に之をもととして鉛版を造り、印刷機にかく。

十二185 〈略〉、機械は電力によりて働き、〈略〉。

十二189 〈略〉かくて刷上りたる新聞は、直に販賣部を経て遠近に發送せらる。

十二1810 〈略〉但し大新聞にありては、〈略〉、新しき事件ある毎に改版して、最後の最も新しきものを市内版とす。

十二192 〈略〉、新しき事件ある毎に改版して、最後の最も新しきものを市内版とす。

十二1910 調子のよい蜜柑取歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはして、何處からともなくのどかに聞えて來る。

十二1910 調子のよい蜜柑取歌が〈略〉、何處からともなくのどかに聞えて來る。

十二201 今登つて來た方を振返つて見ると、〈略〉。

十二201 今登つて來た方を振返つて見ると、〈略〉。

十二204 〈略〉、山畑には、蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。

十二206 どれを見ても、〈略〉實が鈴なりになつてゐる。

十二209 〈略〉、其の一つくが日の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。

十二209 〈略〉、其の一つくが目の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。

十二215 〈略〉、〈略〉一三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。

十二218 ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。

十二219 あれは港の親船へ蜜柑を運んで行くのであらう。

十二2110 小春日和の暖さにとけて、其處からも夢のやうに船歌が聞えて來る。

十二2110 〈略〉、其處からも夢のやうに船歌が聞えて來る。

十二225 商人たる者は、〈略〉、品質のよい品物をなるべく安價になるべく敏速に供給して、廣く公衆の爲を計らなければならぬ。

十二226 これ即ち世間の信用を博して堅實に自己の事業を發展させる道である。

十二228 買ふ人の無智に乗じて安い品を高く賣付け、〈略〉。

十二229 〈略〉、見本には精良な品を使つて、實際の注文に對しては粗惡なものを送るやうな事は、〈略〉。

十二229 〈略〉、實際の注文に對しては粗惡なものを送るやうな事は、〈略〉。

十二232 〈略〉、かやうな仕方は唯一時の利益を得るに止つて、永續することが出來ないから、〈略〉。

十二233 〈略〉、つまりは小利をむさぼつて大損を招く結果になる。

十二234 外國貿易に至つては、之に従事する者の心掛け如何の影響が更に大きい。

十二237 〈略〉、忽ち國全體の商品の信用に關係して、貿易の不振を招き

國運の發展をもまたげることになる。

十二23 10 昔は個人の利益を營むのが商業であると思はれてゐた。

十二24 1 それ故大多數の商人は、自己の利益を除いては、殆ど何物をも眼中に置かず、〈略〉。

十二24 3 彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。

十二25 8 図 由比の濱邊を 右に見て、雪の下道 過行けば、八幡宮の御やしろ。

十二27 3 図 鎌倉宮にまうでは、盡きせぬ親王のみうらみに、悲憤の涙わきぬべし。

十二28 1 図 歴史は長し 七百年、興亡すべて ゆめに似て、英雄墓は こけむしぬ。

十二30 4 図 我が日本のよろひ・かぶと其の他の武器類もたくさん集めてあります。

十二30 5 図 市街を見物して私の特に感心したのは、〈略〉。

十二30 7 図 〈略〉、よく警官の指揮に従つて、混亂することがなく、〈略〉。

十二31 2 図 一昨日朝ロンドンを出發して午後早くパリに着きました。

十二31 5 図 此處はさすがに藝術の都として世界に聞えてゐるだけあつて、〈略〉。

十二31 5 図 此處はさすがに藝術の都として世界に聞えてゐるだけあつて、

建物なども一般に壯麗です。

十二31 7 図 世界最美の街路といはれてゐるシャンゼリゼーの大通には、〈略〉。

十二31 10 図 〈略〉、緑したゝる街路樹が目もはるかに連なつてゐます。

十二32 10 図 又エッフェル塔にも登つて見ました。

十二33 2 図 塔の中には賣店もあり、音楽堂・食堂なども設けられてあります。

十二33 3 図 〈略〉、道を往來してゐる人間や自動車などは、〈略〉。

十二33 9 図 山も森も村も皆焼野が原と變つてゐます。

十二33 10 図 私は今落日に對して、〈略〉ベルダンの戦跡に立つてゐます。

十二34 3 図 私は今〈略〉ベルダンの戦跡に立つてゐます。

十二34 10 図 〈略〉、もう沿道の田畑には農夫が鎌を振るつてをり、〈略〉。

十二35 1 図 〈略〉、又工場といふ工場には盛に黒煙が上つてゐました。

十二35 4 図 やがてベルリンに入つて見ても、〈略〉。

十二35 5 図 〈略〉、勤儉の美風が市民の間にあふれてゐて、〈略〉。

十二35 5 図 〈略〉、勤儉の美風が市民の間にあふれてゐて、彼等が大戦後における自國の疲弊を回復するため盛に活動してゐるのには全く敬服し

ました。

十二35 7 図 〈略〉、彼等が大戦後ににおける自國の疲弊を回復するため盛に活動してゐるのには全く敬服しました。

十二35 9 図 世界の公園といはれてゐるスイスは、〈略〉。

十二36 2 図 私は今〈略〉てすりにもたれて、ジュネーブ湖上の風光に見とれてゐます。

十二36 3 図 私は今〈略〉、ジュネーブ湖上の風光に見とれてゐます。

十二36 7 図 〈略〉、はるかに紺青の空にそびえて雪をいたゞくアルプの連峯。

十二36 9 図 久しく單調平凡な景色にあきてゐた私には、〈略〉。

十二37 4 図 〈略〉町へ散歩に出て、〈略〉、或小さいみすばらしい家の前まで來ると、〈略〉。

十二37 8 彼は突然かういつて足を止めた。

十二37 9 二人は戸外にたゝずんでしばらく耳をすましてゐたが、〈略〉。

十二37 9 二人は戸外にたゝずんでしばらく耳をすましてゐたが、〈略〉。

十二37 10 図 〈略〉、やがてピアノの音はたと止んで、「〈略〉。」と、情ないやうにいつてゐるのは若い女の聲である。

十二38 3 図 ほんたうに一度でもよいから、演奏會へ行つて聴いてみたい。

十二38 3 図 ほんたうに一度でもよいから、演奏會へ行つて聴いてみたい。

十二38 4 図 〈略〉、やがてピアノの音はたと止んで、「〈略〉。」と、情ないやうにいつてゐるのは若い女の聲である。

十二38 8 図 はいつてみよう。さうして一曲ひいてやらう。

十二38 8 図 はいつてみよう。さうして一曲ひいてやらう。

十二38 9 ベートーベンに急に戸をあけてはいつて行つた。

十二38 9 ベートーベンは急に戸をあけてはいつて行つた。

十二38 10 友人も續いてはいつた。

十二39 2 図 〈略〉、色の青い元氣のなさうな若い男が靴を縫つてゐる。

十二39 3 図 〈略〉ピアノによりかゝつてゐるのは妹であらう。

十二39 6 図 私は音楽家ですが、面白さについてり込まれて参りました。

十二39 8 兄はむつとりとしてやゝ當惑の體である。

十二40 2 図 〈略〉、——あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふお話でした。

十二40 3 図 まあ一曲ひかせていただきます。

十二40 10 図 ベートーベンは、「〈略〉。」といひさして、ふと見ると、〈略〉。

十二41 4 図 〈略〉、ベートーベンはピアノの前に腰を掛けて直にひき始めた。

十二416 ベートーベンの兩眼は異様に輝いて、彼の身には俄に何者かが乗移つたやう。

十二417 一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか彼自らも覺えないやうである。

十二417 〈略〉、何をひいてゐるか彼自らも覺えないやうである。

十二419 きやうだいは唯うつとりとして感に打たれてゐる。

十二4110 ベートーベンの友人も全く我を忘れて、一同夢に夢見る心地。

十二422 折から燈が〈略〉、ゆら／＼と動いて消えてしまつた。

十二422 折から燈が〈略〉、ゆら／＼と動いて消えてしまつた。

十二423 友人がそつと立つて窓の戸をあけると、〈略〉。

十二425 〈略〉、清い月の光が流れるやうに入込んで、ピヤノとひき手の顔を照らした。

十二426 しかしベートーベンは唯だまつてうなだれてゐる。

十二426 しかしベートーベンは唯だまつてうなだれてゐる。

十二426 しばらくして兄は恐る恐る近寄つて、〈略〉。

十二427 しばらくして兄は恐る恐る近寄つて、力のこもつた、しかも低い聲で、〈略〉。

十二429 〇「まあ待つて下さい。」

十二4210 ベートーベンはかういつて、

さつき娘がひいてゐた曲を又ひき始めた。

十二4210 ベートーベンはかういつて、さつき娘がひいてゐた曲を又ひき始めた。

十二436 月は益々さえたつて来る。

十二437 「それでは此の月の光を題に一曲。」といつて、彼はしばらくすみきつた空を眺めてゐたが、〈略〉。

十二438 〈略〉、彼はしばらくすみきつた空を眺めてゐたが、〈略〉。

十二442 〈略〉、いはば奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生にをどるやう、〈略〉。

十二444 〈略〉、三人の心はもう驚と感激で二ぱいになつて、唯ぼうつとして、ひき終つたのも氣附かぬくらゐる。

十二444 〈略〉、唯ぼうつとして、ひき終つたのも氣附かぬくらゐる。

十二447 ベートーベンは立つて出かけた。

十二449 きやうだいは口を揃へていつた。

十二451 ベートーベンは、ちよつとふりかへつてめくらの娘を見た。

十二453 彼は急いで家に歸つた。

十二454 さうして其の夜はまんじりともせず机に向つて、かの曲を譜に書きあげた。

十二455 ベートーベンの「月光の曲」といつて、不朽の名聲を博した

のは此の曲である。

十二461 〇凡それ等の木材は、其の有する性質によりて各種の用に供すべく、〈略〉。

十二464 〇殊に杉は人爲によりて容易に増殖せらるゝ點において檜にまさり、〈略〉。

十二471 〇唯杉に比して産額少く、増殖やゝ困難なるは惜しむべし。

十二492 〇松に至りては産地極めて廣くして、〈略〉。

十二498 十和田湖は一部分秋田縣鹿角郡に屬し、其餘は青森縣上北郡に屬してゐる。

十二503 〈略〉、東南岸だけは二つの半島が並んで突出してゐるために〈略〉。

十二503 〈略〉、東南岸だけは二つの半島が並んで突出してゐるために〈略〉。

十二504 〈略〉、東南岸だけは〈略〉。

十二505 岸は絶壁になつてゐる處が多々、〈略〉。

十二506 〈略〉、殊に兩半島にはさまれてゐる中湖の東岸の如きは、〈略〉。

十二515 湖の水は東岸から奥入瀬川となつて流れ出るのであるが、〈略〉。

十二516 〈略〉、一年を通じて水位の變化は極めて少い。

十二5110 これは主として周圍が山で、

流れ込む川に大きいのがないのに原因してゐる。

十二523 これは〈略〉大きな瀧があつて、魚類のさかのぼる道を絶つてゐるからである。

十二523 〈略〉大きな瀧があつて、魚類のさかのぼる道を絶つてゐるからである。

十二527 暗い箱の中にしまひ込まれてゐた小さな鐵のねちが、〈略〉。

十二528 〈略〉小さな鐵のねちが、不意にピンセットにはさまれて、明るい處へ出された。

十二529 ねちは驚いてあたりを見廻したが、〈略〉。

十二532 しかしだん／＼落着いて見ると、此處は時計屋の店であることがわかつた。

十二534 自分の置かれたのは、仕事臺の上に乗つてゐる小さなふたガラスの中で、〈略〉。

十二535 〈略〉、そばには小さな心棒や齒車やぜんまいなどが並んでゐる。

十二537 きりやねち廻しや〈略〉も、同じ臺の上に横たはつてゐる。

十二538 周圍の壁やガラス戸棚には、いろ／＼な時計がたくさん並んでゐる。

十二541 ねちは、これ等の道具や時計をあれこれと見比べて、〈略〉、これはどんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、〈略〉。

十二541 ねちは、これ等の道具や時計をあれこれと見比べて、〈略〉、これはどんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、〈略〉。

十二541 ねちは、これ等の道具や時計をあれこれと見比べて、〈略〉、これはどんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、〈略〉。

十二541 ねちは、これ等の道具や時計をあれこれと見比べて、〈略〉、これはどんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、〈略〉。

- 十二543 ねぢは、〈略〉、これはどんな處に置かれるのであらうなどと考へてゐる中に、〈略〉。
- 十二547 図 〈略〉、形も大きさもそれ／＼違つてはゐるが、〈略〉。
- 十二548 図 一かどの役目を勤めて世間の役に立つのに、どれもこれも不足は無ささうである。
- 十二5410 図 唯自分だけが此のやうに小さくて、何の役にも立ちさうにな
い。
- 十二553 不意にばた／＼と音がして、小さな子どもが二人奥からかけ出して來た。
- 十二554 〈略〉、小さな子どもが二人奥からかけ出して來た。
- 十二555 二人は其處らを見廻してゐたが、〈略〉。
- 十二557 女の子は唯じつと見まもつてゐたが、〈略〉
- 十二557 女の子は〈略〉、やがてかの小さなねぢを見附けて、「まあ、かはい、ねぢ。」
- 十二561 やつとつまんだと思ふと直に落してしまつた。
- 十二563 此の時大きなせきばらひが聞えて、父の時計師がはいつて來た。
- 十二564 此の時〈略〉、父の時計師がはいつて來た。
- 十二565 図 此處で遊んではいけない。
- 十二566 時計師は「〈略〉。」といひながら仕事臺の上を見て、出して置いたねぢの無いのに氣が附いた。
- 十二566 時計師は〈略〉、出して置いたねぢの無いのに氣が附いた。
- 十二569 図 あゝいふねぢはもう無くなつて、あれ一つしか無いのだ。
- 十二572 ねぢは之を聞いて、飛上るやうにうれしがつた。
- 十二574 〈略〉と、夢中になつて喜んだが、〈略〉。
- 十二575 〈略〉、此のやうな處にころげ落ちてしまつて、〈略〉。
- 十二575 〈略〉、此のやうな處にころげ落ちてしまつて、若し見附からなかつたらと、〈略〉。
- 十二576 〈略〉、若し見附からなかつたらと、それが又心配になつて來た。
- 十二578 ねぢは「此處に居ます。」と叫びたくてたまらないが、口がきけない。
- 十二579 三人はさん／＼探し廻つて見附からないのがつかりした。
- 十二582 其の時、〈略〉、日光が店一ぱいにさし込んで來た。
- 十二583 するとねぢが其の光線を受けてぴかりと光つた。
- 十二584 仕事臺のそばに、ふさぎこんで下を見つめてゐた女の子がそれを見附けて、〈略〉。
- 十二584 仕事臺のそばに、ふさぎこんで下を見つめてゐた女の子がそれを見附けて、〈略〉。
- 十二584 〈略〉女の子がそれを見附けて、思はず「あら。」と叫んだ。
- 十二588 時計師は早速ピンセットでねぢをはさみ上げて、大事さうにもとのふたガラスの中へ入れた。
- 十二5810 さうして一つの懷中時計を出してそれをいぢつてゐたが、〈略〉。
- 十二5810 さうして一つの懷中時計を出してそれをいぢつてゐたが、〈略〉。
- 十二591 〈略〉、やがてピンセットでねぢをはさんで機械の穴にさし込み、〈略〉。
- 十二593 〈略〉、今まで死んだやうになつてゐた懷中時計が、〈略〉。
- 十二596 ねぢは、〈略〉、うれしくてうれしくてたまらなかつた。
- 十二597 ねぢは、〈略〉、うれしくてうれしくてたまらなかつた。
- 十二598 時計師は仕上げた時計をちよつと耳に當ててから、ガラス戸棚の中につり下げた。
- 十二5910 一日おいて町長さんが來た。
- 十二602 図 ねぢが一本いたんでゐましたから、〈略〉。
- 十二603 図 ねぢが一本いたんでゐましたから、取りかへて置きました。
- 十二604 「直りました。〈略〉。」といつて渡した。
- 十二605 図 「自分もほんたうに役に立つてゐるのだ。」
- 十二619 図 元來イギリスは、〈略〉三國の合同して成れる國家にして、〈略〉。
- 十二622 図 〈略〉、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、藍地に斜白十字の徽章ある後者の國旗とを合して一旗となし、〈略〉。
- 十二624 図 〈略〉、白地に斜赤十字の徽章ある其の國旗を合はせて、遂に今日の如き形式をなすに至れり。
- 十二627 図 即ち赤・白合はせて十三條の横筋は、〈略〉。
- 十二635 図 フランスの國旗が縦に三色を分ちたるに對して、黒・赤・金の三色を横に染分けたるものはドイツの國旗なり。
- 十二638 図 即ち赤・黄・藍・白・黒の五色を横に並べたるものにて、赤は漢人、〈略〉、黒は西藏人を代表するなり。
- 十二6410 故に我等は、〈略〉、諸外國の國旗に對しても、常に敬意を表せざるべからず。
- 十二654 〈略〉、年とともに老の氣短さが加はつて、ちよつとした事にも怒り易くなつてゐた。
- 十二655 〈略〉、ちよつとした事にも怒り易くなつてゐた。
- 十二656 それに近來はめつき元氣が衰へて、もう政務にもたへられなくなつて來た。
- 十二659 〈略〉、妹はかねてフランス王の后になることにきまつてゐた。

十二65 10 王は其の治めてゐるイギリ

スを三分して娘たちに與へ、〈略〉。

十二65 10 王は其の治めてゐるイギリ

スを三分して娘たちに與へ、〈略〉。

十二66 1 父上、自分は百人の家來を

連れて月代りに三人の娘の許に身を

寄せ、〈略〉。

十二66 3 さて領地をゆづる日に、王

は娘たちを面前に呼んで、〈略〉。」

十二66 4 今日はお前たちに一つ聞

いてみたい事がある。

十二66 5 お前たちのうちで誰が一

番此の父を大事に思つてくれるか、

わしはそれが知りたいのだ。

十二66 7 先づ姉のゴネリルから言

つてみよ。

十二67 7 私も姉上と同じ心で、

——ほんたうに姉上は私の思つてゐ

る通りをおしやいました。

十二67 10 〈略〉、——私は〈略〉、

ひたすら父上を大事に致すのを此の

上もない仕合はせと存じてをります。

十二68 2 コーデリヤは王が一番かは

いがつてゐる娘であつた。

十二68 4 王は〈略〉、今や遅しと其

の答を待受けてゐる。

十二68 4 コーデリヤは唯うつむいて、

「〈略〉。」

十二68 5 「父上、私はどう申し上

げてよいかわかりません。」

十二68 7 なに、どう申し上げてよ

いかわからぬ。

十二69 2 〈略〉王は、やゝせきこん

で、「どうしたのだ、コーデリヤ。

〈略〉。」

十二69 5 父上、私は唯ほんたうの

事を申し上げてゐるのでございます。

十二69 8 娘の答に失望した王は、

〈略〉、苦り切つて、「〈略〉。」と言渡

した。

十二69 10 さうして残りの領地を二分

して、姉二人にやつてしまつた。

十二70 1 さうして残りの領地を二分

して、姉二人にやつてしまつた。

十二70 3 〈略〉、王の怒はいよくつ

つて、もうどうすることも出来な

い。

十二70 6 リヤ王はフランス王を其の

場と呼んで、コーデリヤを勸當した

ことを告げた。

十二70 8 しかしフランス王は一部始

終をよくくきゝたゞして、コーデ

リヤの簡単な答の中にも十分真心の

こもつてゐるのを認め、〈略〉。

十二70 9 〈略〉、コーデリヤの簡単な

答の中にも十分真心のこもつてゐる

のを認め、〈略〉。

十二70 10 〈略〉、本國にともなひ歸つ

て約束の如く自分の后とした。

十二71 1 リヤ王は百人の家來を連れ

て先づ姉娘ゴネリルの許に身を寄せ

た。

十二71 6 王は〈略〉、早速馬にむち

うつて次女リガンの許に走つた。

十二71 8 ところがリガンは、まだ父

上を迎へる準備が整つてゐないとい

ふのを口實にして、〈略〉。

十二71 8 ところがリガンは、〈略〉

のを口實にして、すげなくも王を内

に入れた。

十二71 10 全領地を二分して與へてや

つた二人の娘が、〈略〉。

十二71 10 全領地を二分して與へてや

つた二人の娘が、〈略〉。

十二72 1 〈略〉二人の娘が、揃ひも

揃つてこれ程の不孝者であらうとは。

十二72 5 其の夜は風雨にともなつて

雷鳴・電光ものすさまじい夜であつ

た。

十二72 6 王は二三の忠臣にかしづか

れて、とある小屋に一夜を明かした

が、〈略〉。

十二72 7 王は〈略〉、何時の間にか

もう發狂してゐた。

十二72 10 それは父が姉たちの爲に

虐待されてゐるといふことであつ

た。

十二73 1 そこでコーデリヤは夫に請

うて共に家來を連れてイギリスに

渡つた。

十二73 1 〈略〉家來を連れてイギリ

スに渡つた。

十二73 3 家來は荒野にさまよつてゐ

たリヤ王を見附けて、〈略〉。

十二73 3 家來は〈略〉リヤ王を見附

けて、コーデリヤの許に連れて來た。

十二73 4 家來は〈略〉リヤ王を見附

けて、コーデリヤの許に連れて來た。

十二73 5 フランス王の侍醫はとりあ

へず老主に藥を與へて靜かに眠らせ

た。

十二73 6 コーデリヤは眠つてゐる父

の衰へ果てた姿をつくづくと見て、

〈略〉。

十二73 7 コーデリヤは眠つてゐる父

の衰へ果てた姿をつくづくと見て、

〈略〉。」といひながら、よゝと泣き

くづれた。

十二74 7 一體わしは今までどうし

てゐたのだらう。

十二74 9 やがて眠から覺めた王は、

〈略〉、〈略〉。」といつてあたりを見

廻し、〈略〉

十二74 10 やがて眠から覺めた王は、

〈略〉、そばに居るコーデリヤを見て、

「これはどなたであらうな。〈略〉。」

十二75 1 笑つて下さるな、どうも

娘のコーデリヤのやうに思はれてな

らぬが。

十二75 2 〈略〉、どうも娘のコーデ

リヤのやうに思はれてならぬが。

十二75 3 コーデリヤは父の手を取つ

て泣きながら、「其のコーデリヤで

ございます。」

十二75 5 涙をこぼしてくれるのか。

十二75 5 お前はわたしをうらんで

ゐるはずだが。

十二857 図 それより山を越え、河を下り、湖を渡りて黒龍江の河岸なるキチーに出づ。

十二859 図 其の間、山にさしかれば舟を引きて之を越え、〈略〉。

十二8510 図 〈略〉、河・湖に出づればまた舟を浮べて進む。

十二8510 図 木の枝を伐りて地上に立て、上を木の皮にておほひ、〈略〉。

十二862 図 〈略〉、八人一所にうつくまりて僅かに雨露をしのご。

十二863 図 土人等林蔵を珍しがりて之を他の家に連行き、〈略〉、或は抱き或は懷を探り、或は手足をもてあそびなす。

十二866 図 やがて酒食を出したれども、林蔵は其の心をはかりかねて顧みず。

十二867 図 土人等怒りて林蔵の頭を打ち、強ひて酒を飲ましめんとす。

十二868 図 折よく同行の樺太人來りて土人等を叱し、林蔵を救ひ出しぬ。

十二872 図 デレンは各地の人々來り集りて交易をなす處なり。

十二876 図 歸途一行は黒龍江を下りて河口に達し、〈略〉。

十二876 図 歸途一行は〈略〉、海を航してノテトに歸れり。

十二879 図 林蔵が二回の探検によりて、〈略〉、此の地方の事情も始めて我が國に知らるゝに至れり。

十二887 法律を制定するには、政府

又は貴衆兩院の何れかが其の案を作成して議會に提出する。

十二8810 討議の形式は、〈略〉三度の會議を経ることになつてゐる。

十二895 〈略〉、最後に議決した議院の議長から國務大臣を経て奏上する。

十二8910 これ等の命令も國の規則であつて、廣い意味でいふ場合にはやはり法律であるから、〈略〉。

十二905 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。

十二905 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。

十二906 我々は常に國法にしたがつて幸福な生活を営み、〈略〉。

十二912 或時、父王と共に城外に出て、農夫の働く様を見廻つたことがある。

十二914 ぼろを着た農夫は玉のやうな汗をかいて田をすき起し、〈略〉。

十二914 〈略〉、牛はつかれ果ててあへぎあへぎ働いてゐる。

十二915 〈略〉、牛はつかれ果ててあへぎあへぎ働いてゐる。

十二915 折から飛下りて來た鳥が鐵に傷つけられた蟲をついばんだ。

十二916 木陰からじつと見てゐた彼は、〈略〉。

十二917 〈略〉彼は、しみゝと自分の身の上に思ひ比べて、農夫や牛

の勞苦を思ひやると共に、〈略〉。

十二919 それを見てひどく氣をもんだ父王は、彼に妃を迎へ、〈略〉。

十二921 〈略〉父王は、〈略〉、目もまばゆい宮殿に住まはせて、國政にも與らせようとした。

十二924 〈略〉息もたえだえの病人、さては野邊に送られる死者をまのあたり見て、益々世のはかなさを感じた。

十二925 図 人は何の爲に此の世に生れて來たのか。

十二927 こんな事を次から次へと考へては、遂に心の苦しみにたへられなくなつて、〈略〉。

十二928 〈略〉、遂に心の苦しみにたへられなくなつて、〈略〉。

十二929 図 「此の上は聖賢を訪うて教を受ける外はない。」

十二933 かくて彼は二十九歳の或夜、人知れず宮殿を出て修行の途に上つた。

十二934 師を求めてあちらこちらさまよつてゐるうちに、〈略〉。

十二934 師を求めてあちらこちらさまよつてゐるうちに、〈略〉。

十二936 かねて釋迦の徳をしたつてゐたマガダ國王は、〈略〉。

十二937 〈略〉マガダ國王は、修行を思ひ止らせようとして、自分の國をゆづらうとまで申し出たが、〈略〉。

十二939 彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聴いたが、〈略〉。

十二942 彼は遂に「〈略〉。」と決心して、或靜かな森へ行つた。

十二945 次第にやせ衰へて、物にすがらなければ立てない程になつた時、〈略〉。

十二948 〈略〉、たまゝ其處にあた少女のさゝげた牛乳を飲んで元氣を回復した。

十二9410 〈略〉五人の友は、釋迦が全く修行を止めてしまつたものと思ひ、〈略〉。

十二9410 〈略〉五人の友は、釋迦が全く修行を止めてしまつたものと思ひ、〈略〉。

十二9410 〈略〉五人の友は、釋迦が全く修行を止めてしまつたものと思ひ、〈略〉。

十二952 それから釋迦は〈略〉木陰に靜坐しておもむろに思をこらした。

十二954 さうして日夜次々に起つて來る心の迷をしりぞけて〈略〉。

十二955 さうして〈略〉心の迷をしりぞけて唯一筋に悟の道を求めた。

十二956 彼は夜もすがら靜坐してひたすら思をこらしてゐると、〈略〉。

十二957 彼は夜もすがら靜坐してひたすら思をこらしてゐると、〈略〉。

十二957 〈略〉、やがて一點の明星がきらめいて、夜はほのゝと明けそめた。

十二959 其の刹那、彼は迷の雲がかりと晴れて、はつきりとまことの道を悟り得た。

十二9510 彼は此の心境の尊さに數日

- の間唯うつとりしてゐたが、〈略〉。
- 十二968 かつて釋迦を見捨てた彼等も、其の慈悲圓滿の姿を見ては、思はず其の前にひざまづかざるを得なかつた。
- 十二9610 彼等は釋迦の教を聽いて即座に弟子となつた。
- 十二971 續いて釋迦はマガダ國王をたづねてねんごろに道を説聞かせ、〈略〉。
- 十二971 續いて釋迦はマガダ國王をたづねてねんごろに道を説聞かせ、〈略〉。
- 十二972 〈略〉、更にカピラバストに歸つて、父王・妻子を始め國民を教化して故郷の恩に報いた。
- 十二973 〈略〉、父王・妻子を始め國民を教化して故郷の恩に報いた。
- 十二976 〈略〉、中には彼をそねむあまり、〈略〉、迫害を加へようとするものさへも出て來た。
- 十二979 或時の如きは、釋迦が山の下にゐるのを見附けて、上の方から大石をころがしたが、〈略〉。
- 十二983 釋迦は八十歳の高年に及んでも、〈略〉、各地を巡つて道を傳へてゐたが、〈略〉。
- 十二983 釋迦は八十歳の高年に及んでも、〈略〉、各地を巡つて道を傳へてゐたが、〈略〉。
- 十二984 釋迦は〈略〉、遂に病を得てクシナガラ附近の林中に留つた。
- 十二985 危篤の報が傳はると、これまで教を受けた人々が四方から集つて別れを惜しんだ。
- 十二987 いや／＼臨終が近づいた時、釋迦は泣き悲しんでゐる人たちに、〈略〉。
- 十二991 囚 私になくなつた後も、めい／＼が其の教をまじめに行ふ所に私は永遠に生きてをる。
- 十二992 〈略〉、釋迦は泣き悲しんでゐる人たちに、〈略〉。」と諭して靜かに眼を閉ぢた。
- 十二995 囚 奈良の都も、色移り香失せて年既に久しく、〈略〉。
- 十二997 囚 〈略〉、朱の廻廊山の緑にはえて、森嚴自ら人の襟を正さしめ、〈略〉。
- 十二999 囚 〈略〉、東大寺の金堂は天空高くそびえて、五丈三尺の大佛一千二百年の面影を残せり。
- 十二1001 囚 〈略〉、尚三重五重の塔、猿澤の池水に影をうつして南都第一の美觀たり。
- 十二1009 囚 〈略〉、三月堂・二月堂霞につゝ、まれてさながら夢の如く、〈略〉。
- 十二1013 囚 人なつかしげに寄り來る鹿の、〈略〉、秋より冬にかけて哀音しきりに人の眠をさますも、〈略〉。
- 十二1018 囚 佐保・佐紀の連岡に北を限り、春日・高圓の山々を東に、矢田山・生駒山を西にひかへて、東西四十町、南北四十五町、〈略〉。
- 十二10110 囚 〈略〉、北に大内裏の宮殿を仰ぎ、朱雀の大路南に走りて、南端に羅城門をふまへたる古の奈良の都は、〈略〉。
- 十二1023 囚 今若草山に登りて古京の跡を展望すれば、〈略〉。
- 十二1028 囚 〈略〉東西に走る三筋の路は、北より數へて古の一條・二條・三條の大路の名残とす。
- 十二1031 囚 そのかみ金殿玉樓相望みてうちつゞく都大路を、〈略〉。
- 十二1032 囚 そのかみ〈略〉都大路を、大宮人の櫻かざし紅葉かざして往來しけむ、〈略〉。
- 十二1034 囚 更に首を回らして南を望めば、〈略〉。
- 十二1039 囚 愛すべく美しき山野は、更に太古以來の歴史と結び文學と結びて、感いよく深きを覺ゆ。
- 十二1042 囚 〈略〉、激流岩をかむ山國川を右に見て、川沿の道をたどつて行くと、〈略〉。
- 十二1042 囚 〈略〉、川沿の道をたどつて行くと、〈略〉。
- 十二1043 囚 〈略〉、左手の山は次第に頭上にせまり、遂には路の前面に突立つて人のゆくてをさへぎつてしまふ。
- 十二1044 囚 〈略〉、左手の山は次第に頭上にせまり、〈略〉人のゆくてをさへぎつてしまふ。
- 十二1045 囚 それは山國川に沿うて連なる屏風のやうな絶壁をたよりに、〈略〉。
- 十二1047 囚 〈略〉、昔から之を渡らうとして水中に落ち、命を失つた者が幾百人あつたか知れない。
- 十二10410 囚 〈略〉、路をさへぎつて立つ岩山に、〈略〉。
- 十二1051 囚 〈略〉、毎日々々根氣よくのみを振るつて、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。
- 十二1051 囚 〈略〉、餘念なく穴を掘つてゐる僧があつた。
- 十二1053 囚 〈略〉、日にやけ仕事にやつれて年の頃もよくわからぬくらゐであるが、〈略〉。
- 十二1054 囚 〈略〉、きつと結んだ口もとは意志の強さが現れてゐる。
- 十二1055 囚 僧は名を禪海といつてもと越後の人、〈略〉。
- 十二1056 囚 僧は〈略〉、たま／＼此の難處を通つて幾多のあはれな物語を耳にし、どうか仕方はないものかと深く心をなやました。
- 十二1059 囚 さていろ／＼と思案したあげく、遂に心を決して、〈略〉此の仕事に着手したのであつた。
- 十二10510 囚 〈略〉、一身をさ／＼げて此の岩山を掘抜き、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、〈略〉。
- 十二1061 囚 〈略〉、萬人の爲に安全な路を造つてやらうと、〈略〉。
- 十二1061 囚 〈略〉、神佛に堅くちかつて

此の仕事に着手したのであつた。

十二106 3 〈略〉之を見た村人たちは、彼を氣違扱ひにして相手にせず、〈略〉。

十二106 4 之を見た村人たちは、彼を〈略〉、唯物笑の種にしてゐた。

十二106 4 子どもらは仕事をしてゐる老僧のまはりに集つて、「〈略〉。」と

はやし立て、〈略〉。

十二106 5 子どもらは仕事をしてゐる老僧のまはりに集つて、「〈略〉。」と

はやし立て、〈略〉。

十二106 7 しかし僧はふりかへりもせず、唯黙々としてのみを振るつてゐた。

十二106 10 〈略〉、あのやうなまねをして、人をろうらくするのであらうといふうはさが立つた。

十二107 3 しかし僧は唯黙々としてのみを振るつてゐた。

十二107 5 〈略〉、穴はだん／＼奥行を加へて、既に何十間といふ深さに達した。

十二107 8 出来る氣づかひはないと見くびつてゐた岩山の掘抜も、これではどうにか出来さうである。

十二108 3 〈略〉我々も出来るだけ此の仕事を手付けて、一日も早く洞門を開通し、〈略〉。

十二108 5 〈略〉、我々もあのくさり戸を渡る難儀をのがれようではないかと相談して、其の方法をも取りきめた。

十二108 8 〈略〉、費用を喜捨する者もあつて、仕事は大いにはかどつて来た。

十二108 9 〈略〉、仕事は大いにはかどつて来た。

十二108 10 〈略〉、村の人々は此の仕事にあきて来た。

十二109 2 手傳をする者が一人へり二人へりして、はては又村人全體が此の老僧から離れるやうになつた。

十二110 3 〈略〉、仕事を助ける者が又ぼつ／＼と出来て来た。

十二110 4 かうして、老僧が始めてのみを絶壁に下してからちやうど三十年目に、〈略〉。

十二110 7 〈略〉、川に面した方には處々にあかり取りの窓さへうがつてある。

十二110 9 今では此の洞門を掘りひろげ、處々に手を加へて舊態を改めてはゐるが、〈略〉。

十二110 10 〈略〉、處々に手を加へて舊態を改めてはゐるが、〈略〉。

十二110 10 〈略〉、一部は尚昔の面目を留めて、禪海一生の苦心を永久に物語つてゐる。

十二111 1 〈略〉、一部は尚昔の面目を留めて、禪海一生の苦心を永久に物語つてゐる。

十二111 5 〇 〈略〉、次第に改良せられて、四五十年の後はに燈臺などにすゑ附けらるゝに至りぬ。

十二112 3 〇 〈略〉トマス、エヂソンは、〈略〉、更に進んで新しき電燈の發明に従事したり。

十二112 8 〇 彼が稀代の天才はこゝにも遺憾なく發揮せられて、着々成功の域に進みしが、〈略〉。

十二112 10 〇 〈略〉、唯心に至りては彼の最も苦心したる所なりき。

十二113 1 〇 初め彼は紙に炭素を塗りて試みしが、思はしき結果を得ず。

十二113 7 〇 エヂソンは例の如く實驗室に閉ぢこもりて研究に餘念なかりしが、〈略〉。

十二113 8 〇 何心なく手に取りて眺めゐたりし彼の眼は異様に輝きぬ。

十二114 2 〇 彼は直に竹を以て炭素線を作りて實驗せしに、〈略〉。

十二114 4 〇 こゝにおいて彼は人を世界の各地につかはして竹を採集せしめ、〈略〉。

十二114 6 〇 〈略〉、日本の竹最も適當なりしかば、専ら之によりて心を製出せり。

十二115 2 〇 今日文明の利器と稱せらるゝものにして、直接間接に彼の天才によらざるもの殆どなしといひて可なり。

十二115 7 〇 電車は次第に汽車の領分までも侵略し、尚進んで電氣機關車さへも用ひられるやうになりました。

十二115 10 〇 〈略〉人力又は蒸氣力もだん／＼電氣に變つて、工業界の一

大革命をうながしてゐます。

十二115 10 〇 〈略〉人力又は蒸氣力もだん／＼電氣に變つて、工業界の一

大革命をうながしてゐます。

十二116 5 〇 〈略〉、石炭は早晚使ひ盡くされてしまふが、〈略〉。

十二116 5 〇 〈略〉、水力は無限といつてよい。

十二116 6 博士は先づ「〈略〉。」といつて、〈略〉、將來益々水力電氣の利用をはからなければならぬことを力説した。

十二116 6 〇 〈略〉、急流や瀑布に富んでゐる我が國では、〈略〉。

十二117 1 〇 〈略〉、今では更に進んで光の色が太陽に似て、しかも比較的熱をとるなふことの少い電燈さへも發明されました。

十二117 2 〇 〈略〉光の色が太陽に似て、しかも比較的熱をとるなふことの少い電燈さへも發明されました。

十二117 4 〇 一體最も理想的な燈火は太陽の光のやうに明るくて、しかもほたるの光のやうに熱をとるなふものでもあります。

十二117 7 〇 〈略〉、活動寫眞のフィルムがアーク燈の熱の爲に發火して、多くの死傷者を出した話などを附加へた。

十二117 9 〇 〈略〉、其の後無線電信が發明されて、陸上でも海上でも、自由

に消息を交換することが出来るや

うなりました。

十二117 9 〇 〈略〉、其の後無線電信が發明されて、陸上でも海上でも、自由

に消息を交換することが出来るや

うなりました。

うになりました。

十二118 7 〈略〉、進行中の汽車が無線電話機を備へ附けてゐたために危険を免れたことや、〈略〉。

十二118 8 〈略〉、無線電話で子守歌を聞かせて赤ん坊を寝つかせてゐることなどの耳新しい話に、〈略〉。

十二118 8 〈略〉、無線電話で子守歌を聞かせて赤ん坊を寝つかせてゐることなどの耳新しい話に、〈略〉。

十二119 2 最後に博士は〈略〉、家庭における電氣の利用に就いて興味ある話をして壇を下つた。

十二119 5 園 當地に参りて以來、一度手紙を以て御様子御伺ひ申上げたしとは存じながら、〈略〉。

十二119 10 園 本日突然上田君に出會ひ、久しぶりにて郷里の様子をいろいろ承り申候處、〈略〉。

十二120 3 園 「小山はどうしてゐるだらうか。」

十二120 6 園 〈略〉、小学校の前を通りては、郷里の學校のおもしろかりしことなど思ひ出し申候。

十二120 8 園 私の勤め居り候家は呉服店にて、なか／＼忙しく御座候。

十二120 10 園 参りし當座は何事もわからず、唯氣をもむのみにて、我ながら情なく存じ候ひしが、〈略〉。

十二121 3 園 〈略〉、追々店の様子もわかり、お客様の扱方にもなれて、仕事に興味を覺ゆるやう相成り申候。

十二121 9 園 〈略〉、一日も早く一人前の商人となりて、親に安心致させたいと存じ居り候。

十二122 9 園 かもめ飛ぶ海をすべりて、船は今靜かに歸る、懐かしき故郷の港。

十二123 6 園 〈略〉、思出の深き船路や、つ／＼が／＼今日しも果てて、船は今靜かに歸る、懐かしき故郷の港。

十二124 3 園 〈略〉、草の實、うづたかき積荷の中に 海山の寶を載せて、船は今靜かに歸る、懐かしき故郷の港。

十二124 8 〈略〉官軍は諸道より並び進んで、東海道先鋒は品川に、東山道先鋒は板橋に着いた。

十二124 9 月の十五日を期して總攻撃を行ひ、一舉に江戸を乗つ取るはずである。

十二124 10 徳川方も事こゝに至つては、あくまでも戦ふ覺悟をきめて、〈略〉。

十二125 1 徳川方も事こゝに至つては、あくまでも戦ふ覺悟をきめて、ものすごい緊張を示してゐる。

十二125 1 徳川方も〈略〉、ものすごい緊張を示してゐる。

十二125 4 慶喜から官軍に對する交渉の全權を委任せられてゐた舊幕府の陸軍總裁勝安芳は、〈略〉。

十二125 6 〈略〉陸軍總裁勝安芳は、かねてから百方畫策して時局の圓滿

な解決を計つてゐた。

十二125 6 〈略〉陸軍總裁勝安芳は、〈略〉時局の圓滿な解決を計つてゐた。

十二125 9 西郷は早速承知して、芝、高輪の薩摩屋敷で會見したが、〈略〉。

十二125 10 〈略〉、兩人は翌日の再會を期して別れた。

十二126 5 安芳は今日こそ最後の確答を得ようと決心して、西郷をおとづれたのである。

十二126 8 屋敷の附近は、官軍の兵士がすき間もなく警衛してゐる。

十二126 9 安芳はいつて行かうとする、〈略〉。

十二126 10 〈略〉、門を守つてゐた兵士等が〈略〉。

十二127 3 〈略〉、門を守つてゐた兵士等が〈略〉、一せいに銃劍を取直し行くてをさへぎつた。

十二127 6 其の勢に吞まれて兵士等は思はず道を開いた。

十二127 8 一室に通されて待つてゐると、やがて西郷が出て來た。

十二127 8 〈略〉、やがて西郷が出て來た。

ばれる。

十二128 4 園 〈略〉、拙者の考へる所では、今日日本の周囲には諸外國が様々の考を持つて見てをるので、〈略〉。

十二128 4 園 〈略〉、今日日本の周囲には諸外國が様々の考を持つて見てをるので、〈略〉。

十二128 5 園 〈略〉、うか／＼と兄弟垣にせめいでゐたら、〈略〉。

十二128 5 園 〈略〉、うか／＼と兄弟垣にせめいでゐたら、日本全國にのしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。

十二128 6 園 〈略〉、日本全國にのしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。

十二129 1 相手は〈略〉、だまつて聽いてゐる。

十二129 1 相手は〈略〉、だまつて聽いてゐる。

十二129 6 園 すると其のうちには又思ふの外な尻押なども現れて、事めんだうな筋合にならぬとも限りませぬ。

十二129 10 西郷はだまつてうなづいた。

十二129 10 安芳は尚言葉を續けて、

「〈略〉。」

十二130 1 園 此の邊の事情をよく／＼御推察下されて、〈略〉今一應御評議下さることになりますれば、〈略〉。

十二130 7 西郷はしばらくじつと考へてゐたが、「略」。

十二130 9 園 とにかく明日の總攻撃見合はせの一事だけは、拙者一命にかけて御引受け申します。

十二131 2 やがて安芳は西郷に見送られて門を出た。

十二131 3 警衛の兵士等は、安芳の姿を見ると一時に押寄せて來たが、「略」。

十二131 4 〈略〉、西郷が後に續いてゐるのを見て、「略」。

十二131 4 〈略〉、西郷が後に續いてゐるのを見て、一同恭しく捧げ銃の禮をした。

十二131 5 安芳は自分の胸を指さして、「略」といひながら、西郷と顔を見合はせてにつこり笑つた。

十二131 6 園 次第によつては、或は君等の銃先にかゝつて死ぬかも知れぬ。

十二131 6 園 次第によつては、或は君等の銃先にかゝつて死ぬかも知れぬ。

十二131 7 園 よく此の胸を見覺えておいてくれ。

十二131 7 園 よく此の胸を見覺えておいてくれ。

十二131 8 安芳は〈略〉、西郷と顔を見合はせてにつこり笑つた。

十二131 9 西郷は軍令を出して翌日の進軍を中止させた。

十二131 10 さうして直に静岡の大總督府にはせつけて議をまとめ、「略」。

十二132 1 〈略〉、更に京都に上つて勅裁を仰ぎ、「略」。

十二132 3 〈略〉、西郷の果斷によつて、江戸の市民も徳川家もわざわざ免れて、「略」。

十二132 3 〈略〉、江戸の市民も徳川家もわざはひを免れて、維新の大事業もとゞこほりなく成し遂げられるやうになつた。

十二132 8 我が國が〈略〉、三千年の光輝ある歴史を展開し來つて、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、「略」。

十二133 1 君と親とに眞心を捧げ盡くして仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、今更いふまでもない。

十二133 3 忠孝は實に我が國民性の根本をなすもので、之に附隨して幾多の良性・美德が發達した。

十二133 5 四周の海が天然の城壁となつて、容易に外敵のうかがふことを許さないから、「略」。

十二133 10 〈略〉、又其の誇を永久に持續しようとする心掛けも出來て、いざといへば、舉國一致國難に當る氣風を生じた。

十二134 1 萬世一系の皇室を中心として團結した國民は、「略」。

十二134 5 〈略〉美しい風景や温和な氣候は、〈略〉、自然美を愛好するやさしい性情を育成するのに與つて力があつた。

十二134 6 しかし此の事情は一面に國民の短所をもなしてゐる。

十二134 7 狭い島國に育ち、生活の安易な樂土に平和を樂しんでゐた我が國民は、「略」。

十二135 4 〈略〉鎖國は、國民をして〈略〉、徒に此の小天地を理想郷と觀じて、世界の大勢を知らぬ國民とならしめた。

十二135 7 〈略〉外國人から思ひ掛けぬ誤解を受けて排斥されるやうなことも起つて來る。

十二135 8 〈略〉外國人から思ひ掛けぬ誤解を受けて排斥されるやうなことも起つて來る。

十二135 10 〈略〉昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、〈略〉。

十二136 2 今日我が國が列強の間に立つて世界的の地歩を占めた以上、〈略〉。

十二136 6 支那・印度の文明を入れ、更に西洋の文明を入れて長足の進歩を成し遂げた日本國民は、〈略〉。

十二136 8 他國の文明を消化して、之を巧みに自國のものとすることは、〈略〉。

十二137 2 〈略〉、昔から殆ど摸倣のみを事として來た觀がある。

十二137 3 習、性となつては、遂に日本人には獨創力がないであらうと自らも輕んじ、外國人からも侮られる。

十二137 5 しかし摸倣はやがて創造の過程でなくてはならぬ。

十二137 6 我々は何時かは摸倣の域を脱して十分に獨創力を發揮し、「略」。

十二138 4 〈略〉我が國民は、其の長所として〈略〉、潔白を重んずる美德を發揮してゐる。

十二138 5 しかし其の半面には、〈略〉、あきらめ易い性情がひそんでゐるなにか。

十二138 7 〈略〉ねばり強さが缺けてはゐらないか。

十二138 10 我々は常に其の長所を知つて、之を十分に發揮すると共に、〈略〉。

十二139 1 我々は〈略〉、又常に其の短所に注意し、之を補つて大國民たるにそむかぬりつば國民とならねばならぬ。

で「出」ひおもいで・のきので・ひとで・ひので

で（接）1 で

七52 8 園 私も子どもの時には、〈略〉、此の講堂でお話を聞いたり致しました。で、今日此のなつかしい學校に來て、皆さんにお話するのは、何よりもうれいしいのでございます。

で（格助）508 デでひそこで・それで・それであるから・それでは・ところで・なんで

一115 園 ハヤク メヲダセ、カキノタネ。ダサスト、ハサミ

- デ ハサミキル。
- 二125 罫 ハヤク キニナレ。ナ
ラスト、ハサミ デ ハサミキル。
- 二135 罫 ハヤク ミガナレ。ナラ
ヌト、ハサミ デ ハサミキル。
- 二226 マサヲガソバ デ ミテキ
マス。
- 二362 オハナガエンピツ デ アサ
ガホヲカキマシタ。
- 二374 罫 ハナハソレ デ ヨイカ
ラ、〈略〉。
- 二383 オチヨサン ノ ウチデハ、
オザシキ ニ アカリ ガ ツイテキ
マス。
- 二114 ベンケイ ガ 大ナギナタ デ
キリツケマシタ。
- 二134 人 ガ テツパウデ、一ドニ
三バ ウチオトシマシタ。
- 二176 子ドモ ガ 大ゼイ、オモテ
デ シヨニ ウタツテ キマス。
- 二355 罫 「モチ ハ タイセツナ オ米
デ コシラヘタ モノ デスカラ、
〈略〉。」
- 二402 ワタクシ ハ ネエサン ニ、
ユキ デ ウサギ ヲ コシラヘテイ
タダキマシタ。
- 二422 アル日 犬 ハ 畠 ノ スミ
デ、〈略〉。」 ト ラシヘマシタ。
- 二457 ソノウス デ 米 ヲ ツキマ
スト、〈略〉。
- 二564 罫 〈略〉、ナガイ竹ノサヲ
デフネヲ コギマス。
- 二567 罫 〈略〉、ミンナ デ ヤツテ
グランナサイ。
- 二627 コレ デ 本ノ中ノジモ、
エモ、〈略〉モノモ 見ルノデス。
- 二643 ナニカ キカレマス、コ
ノ口 デ ハツキリ コタヘマス。
- 二681 ケサウグヒスガウメノ
木 デ、ホウホケキヨウト ナキマ
シタ。
- 二24 〈略〉、オモテ デ アソブ ニ
ハ バンヨイトキデス。
- 二38 「オウイ」 ト キドバタ デ、
ニイサン ノ コエガシマス。
- 二45 コウバ デ ハ モウシゴトガ
ハジマツテ キル ラシイ。
- 二86 ヒヨコ ハ ミンナ デ パ
デス。
- 二87 ヒヨコ ハ ホソイ アシデ、
チヨコチヨコ アルキマス。
- 二91 〈略〉、キイロイ クチバシデ、
トキドキ デ メン ヲ ツツキマス。
- 二133 〈略〉 かはいらしい こゑで、
子もりうたをうたひます。
- 二145 ゆふはん が すんだあとで、
おちいさんが 二郎 に たづねまし
た。
- 二168 罫 二郎、おまへ は そのゆ
びで 人をさしますか。
- 二252 この 二三日の雨で、竹の
子 が こんなに 出ました。
- 二282 〈略〉、おちいさんに、あれ
で 竹うまを こしらへて いたかく
つもりです。
- 二286 罫 ゆふべの雨でくさや
木の みどり いろ ますなつの
あさ、〈略〉。
- 二305 罫 あねは 手ばやくをを
たてて、小川の水で 手をあ
らひ、〈略〉。
- 二342 いつかうちのおとうさん
が道で、〈略〉。」とおつしやつ
たら、〈略〉。
- 二346 〈略〉、五一ちいさんは
「〈略〉。」といつて、大きな手で
あたまをなでました。
- 二388 二人は かけ足で まはりつ
こをしました。
- 二402 〈略〉、子ども が 大ぜいで
かめをつかまへて、おもちゃに
してゐます。
- 二486 村ノ中デ、一バン 目ダツ
ノハ 私ドモ ノ 學校デス。
- 二493 ヤクバ ノ ヨコデ、川ガ
二ツ オチアツテ、〈略〉。
- 二513 ドコカ ヲカノ下デ、ニ
ハトリ ガ ナキマス。
- 二532 罫 そんなところ で とどく
ものか。
- 二578 チャウド 私ノ目ノ前デ
トマツテ、カラヲ ヌギハジメマ
シタ。
- 二667 私ハ〈略〉、フシノマン中
ニ、キリデ 小サナ アナヲ アケ
マシタ。
- 三673 池ノ水 デ タメシテミル
ト、ウマク 出来テ キテ、〈略〉。
- 三787 だれか 川上の方で、さ
きほど から ふえを 吹いてゐま
す。
- 三796 罫 「ふみ子も こんやはき
つと あちらで この月を見て
ゐませう。」
- 三853 罫 いや、これは 私が 今
こゝで ひろつたのです。
- 三868 天人は 〈略〉、なみだにう
るむ目で 空を見上げました。
- 三877 罫 おかげで 天へ かへる
ことが 出来ます。
- 四12 うちが みさまの 森で、あ
さからたいこの おとが します。
- 四18 おひるすぎに、〈略〉、三人
で お宮へ まゐりました。
- 四26 又 あめや やくわしやでは、
はやし立てて おきやくを よんで
ゐます。
- 四35 お宮の うらでは すまふ
が はじまつてゐて、〈略〉。
- 四62 罫 「こいんきよさま、その
お年で つぎ木を なさるの です
か。」
- 四154 〈略〉、イマ 一足 デ ヲカヘ
上ラウト イフトコロデ、〈略〉。
- 四155 〈略〉、イマ 一足 デ ヲカヘ
上ラウト イフトコロデ、〈略〉。」
ト イツテ ワラヒマシタ。
- 四197 罫 〈略〉、シホケノ ナイ水

デカラダヲアラツテ、〈略〉。

四207 〇カゲサマデ、カラダハ

コノ通りニナホリマシタ。

四224 をぢさんのうちでは、には一ぱいもみがほしてあつて、〈略〉。

四228 〈略〉、おばあさんが日あたりのよいえんがはでつぎ物をしていらつしやいました。

四233 おばあさんはもう耳が遠いので、大きなこゑで、「略。」といふと、〈略〉。

四265 私どもの町でも、このあひだから電とうがつくやうになりました。

四281 私のうちでも二つつけました。

四285 よこ町に電氣の力で、米をつく家も出来ました。

四305 〈略〉、「ぼちぼち」とよびますと、向ふの方で、「ぼちぼち」と口まねをするものがあります。

四313 〈略〉、又向ふで、「ほか」と口まねをします。

四331 人のこゑも山の中では、かべにあたつたごむまりのやうに、かへつて来ることがあります。

四335 〇こちらでやさしくいへば、向ふでもやさしく答へ、〈略〉。

四335 〇こちらでやさしくいへば、向ふでもやさしく答へ、〈略〉。

四337 向ふで「ほか」といつたのも、お前が先に「ほか」といつたからです。

四365 烏ハ大キナコエデワル口ヲイヒ、〈略〉。

四366 烏ハ〈略〉、太イクチバシデツツキマス。

四423 だい所でいろいろな物をのけると、〈略〉。

四426 下女がびつくりして、「きやつ」といつたので、後でみんなにわらはれました。

四467 友一のうちでかるた取がはじまつて居ます。

四473 今ちらしで取つて居ます。

四534 東京の宿屋で、山國のもの、島國のものがおちあひました。

四577 私ノウチデハ此ノゴロ土ザウノフシンガハジマツテ居マス。

四583 〈略〉、大ゼイノ大工サンガ毎日其ノ中デ仕事ヲシテ居マス。

四588 ノコギリデ木ヲキルモノモアリ、〈略〉。

四591 〈略〉、ノミデアナヲホルモノモアリ、〈略〉。

四593 〈略〉、カンナデ板ヲケツ

ルモノモアリマス。

四613 屋島のたたかひに、げんじはをか、へいけは海で、向ひあつて居ました時、〈略〉。

四626 〈略〉、これを一矢でいおとすことは、なかなかむづかしさうです。

四652 よーは心の中で、もしこれをいそこなつたら、生きては居まいとかくこをきめて、〈略〉。

四672 をかの方では〈略〉、みんなが馬のくらをたたいてよろこびました。

四674 海の方でもへいけ方が〈略〉、一度にどつとほめました。

四722 東の村では「略。」といひ、〈略〉。

四725 〈略〉、西の村では「略。」などと申します。

四751 又私のかたの上で、お星様が光りはじめるころになつて、〈略〉。

四772 それは西の村で、二番目の金持だといはれたうち

に生れた人のでした。

四785 私の下で、長い間しよんぼりとして居まして、〈略〉。

四806 昨日おとうさんと朝九時の汽車で、軍たいに居るに

さんの所へ出かけました。

四816 河上の方で雪がとけ

はじめたのだらう。

四831 そばに乗つて居た人の話では、軍かんだといふことでした。

四835 三人で町を見物しました。

四838 〈略〉、夕方の汽車でかへりました。

四893 〇鳥が鳴く、鳥が鳴く、どこで鳴く。

四894 〇山で鳴く、里で鳴く、野でも鳴く。

四895 〇山で鳴く、里で鳴く、野でも鳴く。

四942 〈略〉、二人はたいまつで道をてらして〈略〉。

五28 四月四日の朝、當番で僕が机の上をふいてみると、〈略〉。

五61 こちらは今さくらのさかりですが、あちらでは、もうとうにちつてしまつたさうです。

五65 聞けば級のもの、が三人で、中村君を生きたといつて、いぢめたのださうです。

五163 學校からかへつて、新しい筆で書き方のおけいこをしました。

五174 〇「あ、今度の戦争でいたゞいた。」

五198 〇其のいはれで、戦争の時、大きな手がらを立てた軍人に下さる勲章に、金の鶏をおつけになつたの

だ。

五213 〈略〉、鯉が大きな口で、思ふぞんぶん風をのんで、〈略〉。

五223 美しいびらで、一月も前から廣告してゐた島屋の大賣出しは、〈略〉。

五291 図 「こんなしづかな所でくらししてみたい。」

五338 〈略〉、その小さいのおどろきました。〈略〉、これで間数が七つもあるとは、どうしても思はれませんでした。

五396 私どもが六人で、やつとかかへました。

五401 先づ拜禮をして、拜殿のよこの芝の上で、べんたうをたべてゐると、〈略〉。

五475 〈略〉、少しでもおくれると、かごのうらや棚のすみなどで、繭をかけはじめますから、〈略〉。

五487 又うすい吉野紙のやうな作りかけの繭の中で、きゆうくつさうにからだをまげて、〈略〉。

五497 図 〈略〉 蠶も、明日の朝までには、たいてい上つてしまふさうです。さつきおかあさんが、「〈略〉。あれで八分通だ。」と、〈略〉おつしやいました。

五504 此ノ頃ハ雨ガ降リツイテ、表デ遊ブ日ガアリマセン。

五538 或日山の中で、こけに足をすべらせて、うつむけにたふれました。

五637 図 「おとうさん、町があんなに近く見えてゐて、まだ一里半もあるのですか。」「さう。これで中々近くはない。

五653 図 うちの繭もあの工場で生絲になつたはずだ。

五664 図 「うちの方では、田に水がないと言つて、さわいでゐますのに、〈略〉。」

五672 図 「私どもの村では、どうして池を掘らないのでせう。」

五716 土手は長さが三百間、高さが六間半、幅は一番上で三間といふ大きなもくろみであつた。

五787 昔の貧乏村は、今、郡の中でもゆびをりの金持村だと言はれてゐる。

五841 図 おとうさんへ電報で御返事をいたしたやうに、〈略〉。

五855 図 〈略〉、間もなく火の見で半しようをうち出しました。

五857 図 其の時表で水だくときけぶこゑがしましたので、〈略〉。

五866 図 うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、〈略〉。

五868 図 〈略〉、うちでも下の雨戸がたふれて、中からうすやたらひがぼかぼか流れ出すほどで、どうすることも出来ませんでした。

五882 図 うちでも一時は飲水やたべ物にこまりましたが、〈略〉。

五883 図 〈略〉、今ではあとかたづけも大がいすみました。

五926 〈略〉、急ぎの封書を入れに来る者が、途中で人と立話でもはじめる、と、〈略〉。

五942 〈略〉、かついで足をはらしてゐる書生さんが、お友だちへ出した葉書には、〈略〉。

五954 圖 一針々々、金糸・銀糸でぬひをぬひ、〈略〉。

五972 私ドモハブダウノ實ヲ生デタバマスガ、〈略〉。

五973 〈略〉、タクサン作ル所デハ、ブダウ酒ヲ造ツタリ、ホシブダウニシタリスルト申シマス。

六25 うちでも土間に丸太を置いて、其の上につんであります。

六38 〈略〉、おちいさんが庭で腰をのぼして、「〈略〉。」とおつしやいました。

六42 土間でこぼれもみを拾つてゐたにはとりが、〈略〉。

六56 図 臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、〈略〉。

六67 図 「内地では甲斐の白根で、一万五百尺。」

六92 〈略〉、金物屋ノ店デ、ヤクワントテツピンガ、ジマン話ヲシ合ヒマシタ。

六95 図 金ニハイロくアリマスガ、中デ一番人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デアラウト思ヒマス。

六123 図 今デハ鐵ハオアシノ仲間ニハハイレマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ銅以上デス。

六127 図 「ソレデモ鐵ハデキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」

六144 松山の入口で、赤くなつてゐたぐみを一枝折ると、〈略〉。

六154 図 其の手でぐみをたべてはいけない。

六167 木びきの力藏さんが〈略〉、大きなこぎりで板をひいてゐました。

六257 〈略〉、ずるぶん深いぐりから谷が、平家の人馬で埋まりました。

六275 大きな虎が山おくて、「〈略〉。」とひとりごとを言ひました。

六294 図 人間があなた方を生けどりにするには、いく人かで力を合はせるではありませんか。

六331 病院ノ前ノ酒屋デハ雨戸ヲ明ケハジメタ。

六345 停車場デキツプヲ買ツテキルト、〈略〉。

六353 義経は〈略〉、むちのさきでそれをかきよせようとします。

六363 それでも義経は、太刀で熊手をふせぎく、とうとう弓を拾ひ上げました。

六368 図 「たとひ金銀で作つた弓でも、御命には代へられませぬ。」

六388 図 國では初雪が降つたさうだね。

六39 8 団 昨日は「略」音吉君と二人で町を見物した。
 六42 8 団 軍隊へ来てても、學校でなまけてゐた者は人一倍苦勞をする。
 六45 7 其ノワケハ、川デ卵カラカヘツテ、海デ大キクナルカラダ。
 六45 7 其ノワケハ、川デ卵カラカヘツテ、海デ大キクナルカラダ。
 六46 7 「略」、頭ヤ尾デ穴ヲ掘ツテ、其ノ中ハ卵ヲ産ム。
 六47 1 一匹デ三四千粒モ産ムトイフガ、「略」。
 六47 6 中ニハ其所デツカレテ死ンデシマフノモアル。
 六48 5 鮭ハ寒イ國ノ魚デ、我ガ國デハ樺太ト北海道ガオモナ産地ダサウダ。
 六51 5 頼朝は一目見た上デと、萬じゆを呼出しましたが、「略」。
 六52 1 萬じゆは「略」、舞姫の中では一番年わかでございました。
 六52 5 「略」、十二番の舞がめでたくすみましたが、其の中でことに人のほめ立てたのは五番目の舞でございました。
 六57 8 「略」、それから頼朝の御殿へ行つて、うばと二人で御ほうこうをねがつたのでございます。
 六68 4 其の歸り途で、青年たちは「略」といひ合つた。
 六73 8 ああ美しい友禪染は、もと此の川べりで出来たのでございます。

六74 2 団 春子、オ前ハ着物ヤ帶ノ地ハ何ノ絲デオルカ知ツテキマスカ。
 六75 1 団 毛絲デオツタ物ニハ、ドンナ物ガアリマスカ。
 六76 2 団 イ、エ、ヤハリ毛絲デオツタ物デス。
 六76 7 団 コレハ、ハジメ白地ニオツテ置イテ、後デカタヲ置イテ染メルノデ、「略」。
 六78 6 片足でおそろしい程早くする者もあれば、人の手にすがつて、こはこはする者もある。
 六79 7 博多の沖は見渡すかぎり、元からおしよせた船でおほはれた。
 六80 3 元の兵は一人も上陸させぬといふ意氣こみで、濱べに石垣をきづいて守つた。
 六81 3 敵は此のいきほひにおそれて、鐵のくさりで船をつなぎ合はせた。
 六81 6 此の時河野の通有は、たつた小舟ニそうで向つた。
 六84 3 武士といふ武士は必死のかくごでふせいだ。
 六85 8 見せ物小屋で象を見た。
 六86 6 自由にうごかすことの出来る長い鼻、「略」、一切繪で見た通りであつた。
 六87 3 象が大きな桶を鼻で頭の上へまき上げると、「略」。
 六87 6 「略」、象つかひがぬつと桶の中で立上つた。
 六88 5 団 「此の太い足で、どさり

／＼と歩きます。」
 六89 6 団 印度の國はいたつてあつたございませう、お子どもしゆうは此の腹の下でお晝ねをなさると申します。
 六89 8 すると象は鼻で、其所にあつたうちはを拾つて、子どもの顔をあふぎ出した。
 六91 3 「略」、城の四方二三里の間は、人や馬でふさがつた。
 六92 2 「略」、方々で官軍が賊のひやうらう道をふさいだので、「略」。
 六94 4 団 それが今では學校の二階のまどにとゞいてる。
 六99 7 団 あの子がいくさに行く時に、學校の前でふりかへり、「略」。
 六100 2 団 昨日學校で校長に、あの木の事を話したら、「略」。
 六103 5 団 おとうさんは昨日分家の叔父さんと、夜汽車で伊勢參宮に立たれました。
 六105 5 団 御門の前でうやうやしく拜禮してから、神殿の御もやうを拜した。
 六106 3 団 一切白木造で、お屋根はかやでふいてある。
 七11 9 小さい熊手で砂をかくと、おもしろいやうにあさが出了た。
 七13 3 舟で來た人も、をから來た人も入りまじつて、「略」。
 七15 4 舟の中でゆつくりべんたうをたべた。

七17 8 「略」、一度種が地に落ちれば、年年其所で花がさく。
 七17 8 石垣の間でも、地藏様のかげでも、辻堂のえんの下でもさく。
 七17 9 「略」、地藏様のかげでも、辻堂のえんの下でもさく。
 七18 1 「略」、辻堂のえんの下でもさく。
 七23 5 其の松の下に石できざんだ地藏様が立つていらつしやる。
 七24 5 茶屋にはおばあさんが一人ぼつちで菓子やわらちを賣つてゐる。
 七27 4 馬の高さは前足の所ではかる。
 七37 2 団 船で來れば、神戸から三晝夜、門司からは二晝夜で當地へ着きますが、「略」。
 七37 5 団 船で來れば、神戸から三晝夜、門司からは二晝夜で當地へ着きますが、「略」。
 七39 6 団 旅順へは汽車で一時間で行けます。
 七39 6 団 旅順へは汽車で一時間で行けます。
 七39 6 団 旅順へは汽車で一時間で行けます。
 七42 1 すると甲板の上で鐵砲を上げた者がある。
 七42 9 聞けば今朝から五里の山道を、わらちがけで急いで來たのださうだ。
 七43 5 越後の上杉謙信と甲斐の武田信玄が、たびたび信濃の川中島で戦つた。
 七44 9 ぐんばいうちはでふせいだが、えが折れて、肩先へ切りつけられた。

七45 2 信玄の家來は之を見て、後からやりで謙信をついたが、あたらな
い。
七45 7 川中島で前後五回戦つたが、
まだ勝負がつかなくつた。
七47 6 二人は〈略〉、馬上のまゝで
むんずと組み、兩馬の間にどうと落
ちた。
七51 7 〈略〉若イムスコガ、今デハ
其ノ後ヲツイデ、〈略〉。
七52 6 〇 私も子どもの時には、〈略〉、
あの運動場で遊んだり、此の講堂で
お話を聞いたり致しました。
七52 7 〇 私も子どもの時には、〈略〉、
此の講堂でお話を聞いたり致しまし
た。
七53 6 〇 私の乗つてゐる太平丸とい
ふのは、〈略〉、乗組人員だけでも二
百人からあります。
七56 2 〇 其所にゐる人は、〈略〉、ま
るでちがつた言葉で話をしてゐます。
七58 4 〇 一たい船にはらしんぎとい
ふ物があつて、それで方角をとつて
進みますから、〈略〉。
七60 6 〇 海の波を見たばかりで、も
う恐しがる人もあります。
七60 7 〇 こんなことでは、どうして
海國の民といはれませう。
七61 1 〇 〈略〉、商用其の他で、外國
へ出かける人もありませう。
七61 9 連日の雨で、川といふ川には
水があふれました。

七62 2 橋のないところでは五日も十
日も水のひくの待たなければなら
ず、〈略〉。
七62 5 中でも安倍川の宿は一そのの
人ごみであつたと申しますが、〈略〉。
七62 8 渡るといつても、自分一人で
は渡ることは出来ません。
七64 4 〈略〉、着物をぬいで頭にのせ、
一人で川へはいつて行きました。
七65 4 〈略〉、渡賃が高いといつて、
此のあぶない川を一人でこしたほ
どの人である。
七66 5 〇 「あなたは今朝一人で川を
こした方ではありませんか。」
七68 6 〇 家の中で見えなくした物で
も、中々出ないものでございます。
七68 8 〇 まして人通の多い渡場で落
しましたから、〈略〉。
七72 6 〇 〈略〉、あなたの氣はそれで
すむかも知れませんが、私の氣がす
みません。
七73 8 〇 「それではこまる、ぜひ。」
七74 2 〇 〈略〉、うす暗い小窓の下で、
わらちを作つて居りまして、〈略〉。
七74 3 〇 〈略〉、妻はろばたでぼろを
つゞつて居ります。
七82 7 〇 中デ面白イノハサンゴデ、
〈略〉。
七84 1 〇 陸ニスムモノデハ、象ガ先ヅ
一番大キイガ、〈略〉。
七93 8 〇 〈略〉、此の日はよく大風が吹
くから、厄日といつて、農家ではこ

とに心配するのださうだ。
七100 7 秀吉は城の庭にしき物をのべ
させ、幕やびやうぶでまはりをかこ
はせ、〈略〉。
七101 4 清正は大聲で申しました。
七102 4 秀吉が之を聞いて、「〈略〉。」
と心の中で喜びました。
七102 8 〇 「お庭先の御門を守る者が
ございませぬ。某の手で固めませ
う。」
七107 1 〇 切つてく切りまくり、其
の勢で明の都へおしよせ、四百餘州
をやきはらはう。
七107 9 〇 清正はつけひもの頃から、
此の方のひざの上でそだつたので、
〈略〉。
七110 6 〇 「さうか。それでは明日の
一番で立たう。」
七110 9 〇 「アシタノアサーバンノキ
シヤデタツテイキマス。」
七111 2 〇 それでは長過ぎる。
七111 4 〇 「アシターバンノキシヤデ
イキマス。」
七111 5 〇 「それで何字になる。」
七111 8 〇 〈略〉、にごりのある字は二
字に數へるのだから、それでは十七
字になる。
七112 2 〇 「アスーバンデタチマス。」
七112 3 〇 それでもよいが、電報はさ
うていねいにはなくてはよい。
七112 8 〇 「アスーバンデタツ。」
七112 9 〇 「アスーバンデタツ。」「そ

れでよい。
七112 9 〇 それで十字だから、〈略〉、
此の頼信紙に書きこんでござらん。
七112 〇 〇 アスーバンデタツ
八2 1 〇 〈略〉、秋の山は小鳥の聲に
ぎやかである。
八2 6 〇 小鳥は時々此の清水にのどを
うるほしては、こずゑでさへづるの
である。
八3 7 〇 庭のすみで、先程からちや
らくとすゑの音が聞える。
八5 3 〇 ふと、垣根の外でちやらく
とすゑの音が聞えた。
八6 2 〇 それは氏子の五箇村から、子
どもの騎手を一人づつ出して、社の
横の池のまはりで競走させて、〈略〉。
八7 5 〇 神主は先づ神前で祝詞を上げ
て、〈略〉。
八9 5 〇 〈略〉、神主は二人の者だけで、
もう一度競走させることにした。
八12 5 〇 耕造さんのおかげで、信作
の命が助かりました。
八16 9 〇 〈略〉、もう少しで雀の巢へ手
が届かうとした時、〈略〉。
八18 7 〇 將軍はあとで、御臺所に、
「〈略〉。」といったといふことである。
八18 8 〇 「長四郎があのかで大きく
なつたら、竹千代には無二の忠臣で
あらう。」
八26 3 〇 さて蕃人どもは、呉鳳を神に
まつて、其の前で、此の後は決し
て人の首を取らぬとちかひました。

八298 或日炭を焼く男が太郎のうへ来て、あろりのはたでいろ／＼の話をした。

八305 次に其の小屋のそばへ土と石でかまをつく。

八318 さうして煙出から出る煙の色で焼加減を見て、〈略〉。

八355 昔江戸で、夫に死なれた女が、乳飲子を里子にやつて奉公に出ました。

八399 其の方の申す所では、どうやら其の地蔵がうたがはしい。

八455 囲 しかし醫者の申す所では、老體のこと故、餘程大事にしなければならぬとのことでございます。

八468 囲 〈略〉、一人で寝起の出来るまで、ゆつくり看病してお上げなさい。

八524 つき上ると、おばあさんが餅を臼の中で丸めて、〈略〉。

八529 二目目で小さなおそなへが幾かさねか出来、〈略〉。

八551 おしまひの一日には、小豆やきな粉をつけて、うちでもたべ、近所へも配つた。

八633 図 番町で目あきめくらに道をき。

八642 図 今風であかりがきえました。

八665 図 〈略〉、町は大方こはれたのですが、今では前よりもかへつてりつぱになつてゐます。

八673 図 〈略〉、此の州は合衆國の中

でも、氣候がよくて、其の上土地味が肥えてゐますから、〈略〉。

八682 図 日本人は八萬人餘も居て、子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、英語で勉強しますが、〈略〉。

八684 図 〈略〉、子どもは、〈略〉、歸つて來ると、又日本人の立てた學校へ行つて、日本語で學問をしてゐます。

八701 図 此所は工業地で、煙突の煙で空は眞黒だが、〈略〉。

八715 図 〈略〉、おとうさんは最大急行の列車に乗つて、たつた十八時間着きました。

八722 図 中で最も高いのは五十五階もあります。

八755 一日祝賀會の席上で、人々がかはる／＼立つて、コロンブスの成功を祝しますと、〈略〉。

八773 図 「諸君、これも人のした後では、何のさうさもない事でございませう。」

八779 図 「明日にでもなつて、雪がはれてからではいけませんか。」

八789 図 「それをみんなうちで納めるのですか。」

八807 図 村役場で、村内の家々から納めるのをまとめて、それ／＼へ送るのです。

八812 図 くはしいことは又學校で習ふでせう。

八821 いれ物次第で、圓くもなれば、四角にもなる。

八833 〈略〉 信吉が、昨日の朝三年ぶりでハワイから歸つて來た。

八835 信吉にはおとよといふ〈略〉 女の子があるが、生れつき啞なので、僕のうちに世話して、啞の學校に入れてある。

八844 図 あちらでも、あの子のことばかりが、氣にかゝつてゐたのでございしました。

八876 図 〈略〉、何のいんぐわで、ひさしぶりに歸つた私に、一口も口をきくことが出来ないのでございます。

八879 〈略〉、先生はおとよに、低い聲で言かれた。

八882 するとおとよは、にこつた聲で、ゆつくりと、〈略〉と答へた。

八891 図 「先生、どうして口がきけんでせう、指であひづもしいのに。」

八893 図 「指であひづをしたのは昔のこと、今は口を見てもものを言はせませう。」

八906 信吉は〈略〉、娘の耳に口をよせて、〈略〉と大きな聲で言つたが、〈略〉。

八936 此所では女の先生が、生徒に五十音の發音を教へてゐられた。

八944 信吉は教室を出ると、〈略〉、先生を廊下でがむやうにした。

八973 圖 「尾張名古屋ハ城デ持ッ。」
八1024 圖 其の爲に新しい血が出来なくなつて、かへつて君等は自分で苦しむやうになつたのです。

八1025 圖 これは全く君等が自分で招いたのであります。

八1038 マツチは〈略〉、一包十箱が十錢ぐらゐで買はれる。

八1039 しかし之を一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。

八1042 たとひ休まず働いても、一人で一日に一包は造れまい。

八1044 かりに造れたとしても、それを十錢ぐらゐで賣つてはまうかるまい。

八1051 〈略〉、軸木を火で乾かす者もあり、〈略〉。

八1053 〈略〉、藥をつけた軸木を温室で乾かす者もあり、〈略〉。

八1058 分業で造ると、其の出来がよいばかりでなく、出来高がたいそう多くて、〈略〉。

八1062 したがつて一包のマツチを十錢ぐらゐで賣つても、さうおうにまうかるのである。

八1067 分業で仕事をする時、〈略〉。

八1113 大將の父は長府藩主に仕へて、江戸で若君のお守役をしてゐたが、〈略〉。

八1159 〈略〉 乃木大將が、終生忠誠質素でおし通して、武人の手本と仰がれるやうになつたのは、〈略〉。

九三九 冬でも春でもこちらではちやうど内地の夏のやうです。

九五一 内地から来て先づ目につくのは植物で、其の中でも殊に珍しいのは〈略〉。

九七四 〈略〉にはか雨が、非常な勢で木を洗ひ草を洗つて通り過ぎた後の、あざやかな緑の世界は、〈略〉。

九七八 水の乏しい此の島々では、其の雨水がまた大切な飲料水となるのです。

九八一 〈略〉、波の静かな所でふなばたからのぞいて見ると、〈略〉。

九八〇 〈略〉、殊に近年我が國で學校をここに立てたので、〈略〉。

九五九 中デモ面白イノハ、〈略〉。

九三七 しかし思ふ程に仕事は出来ず、其の上政治上の事で度々殿様に上書した爲、役人にくまれて、〈略〉。

九二五 〇 〈略〉、おちい様の不味軒様はまた、地質や鑛物の方で新しい発見をなされた。

九二六 〇 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、さぞ心細くもあらう、〈略〉。

九二八 〇 これは今から百三十年ばかり前に、〈略〉旅人宿で起つた事で、〈略〉。

九二三 〇 信季は其の後幾日かたつて、とう／＼此の宿でなくなつた。

九二四 〇 信淵は父の門人たちの情で、

形ばかりの葬式をすますと、〈略〉。

九四八 〇 にいさん、昨日でうちの田植がすつかりすみました。

九四二 〇 あの降りつゞいた雨のおかげで、山田の高い所まで一息に植ゑることが出来ました。

九四四 〇 一昨日海軍のにいさんが、休暇でお歸りになつたので、〈略〉。

九四九 〇 みんなでにいさんのお歸を待つてをります。

九五〇 〇 會社では、〈略〉精米機械が電力で勢よく廻り、四五人の若い人々がぬかだらけになつて働いてゐました。

九五〇 〇 會社では、幾臺もある精米機械が電力で勢よく廻り、〈略〉。

九五〇 〇 お返事をお渡しした後で、おとうさんに「〈略〉。」と言ふと、〈略〉。

九二五 〇 〈略〉、十年もたゝぬ中に、町でも屈指の財産家となつた。

九二九 〇 『自分の力でやれる所までやつてみます。』

九二七 〇 今日天気がいよいよ、朝から麥を打つ首が方々で聞える。

九二八 〇 正一の家でも、親子三人、〈略〉、麥を打つてゐる。

九二九 〇 それをてんで一束づつ取つては、兩手で根本の所をつかんで、打臺にぱた／＼とたゝきつけると、〈略〉。

九二九 〇 おかげで今日中には大が

かたづきます。

九二四 〇 仕事は水入らずの三人の手で、ずん／＼はかどつて行く。

九二二 〇 〈略〉、七八人の男や女が向ひ合つて、〈略〉、ばたんばたんと穀竿で麥を打つてゐる。

九二七 〇 赤いたすきを掛けた女たちがよい聲で歌をうたふと、〈略〉。

九三〇 〇 分家の金次叔父さんは、軍隊歸のたくましい腕で、す／＼と打下す。

九三二 〇 男も女もひたひの汗を、ほこりだらけの腕でふきながら、にぎやかに打續ける。

九三二 〇 〈略〉、當直將校が元氣のよい聲で號令をかける。

九三二 〇 此の號令で、朝の静かさが忽ち破られ、〈略〉。

九三三 〇 これ等の仕事は、陸上の家で、毎朝起きると先づ夜具をかたづけ、雨戸をくるのとかはりはないが、〈略〉。

九三三 〇 そこで五分間の休けいがあつて、上甲板洗となる。

九三五 〇 そこで始めて乗員は顔を洗ふ。

九三五 〇 其所此所で、「お早う」が言ひかはされる。

九三六 〇 紅葉と温泉で名高い塩原へ行くには、此所で下りるのだ。

九三八 〇 紅葉と温泉で名高い塩原へ行くには、此所で下りるのだ。

九三九 〇 昔は竹に雀の紋所で名高い

仙臺様の城下であつた。

九四五 〇 仙臺から三つ目の松島驛で下りるのだ。

九四七 〇 一關で辨當を買つた。

九四八 〇 停車場にはいる手前でまた北上川を見たが、〈略〉。

九五四 〇 野邊地で始めて海が見えた。

九五七 〇 皆いつものやうに、此所で支度をして、學校園へお集りなさい。

九五八 〇 さうして大急ぎで學校道具をかばんにしまひ、〈略〉。

九五九 〇 となりでは、莖がくさつて引きぬけないのを、星野君が根氣よくほつて、〈略〉。

九六〇 〇 あちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲。

九六〇 〇 あちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、うれしさうな聲。

九六四 〇 いや、何月何日の何時には、何所に何星が見えるといふ事が、學問上ではわかつてゐるから、はかられない事はない。

九六五 〇 西洋では昔から、〈略〉小

熊の形を想像し、〈略〉大熊の形を想像して、それ／＼小熊座・大熊座といふ名をつけてゐる。

九六六 〇 〈略〉、今日にいさんと二人で遊びに行きました。

九六八 〇 中でも面白かつたのは大雪溪のお話です。

九六九 〇 〈略〉、岡田さんは目の前に見てゐるやうな様子で説明なされるので、

〔略〕父ガ、夜汽車デ歸ツタトコロ

1246 〈略〉、年とつた燈臺守が、事

1544 此の愛らしい小鳥が、他の方法では全く通信が出来なくなつた場

四温といつてゐるさうです。

全燈を持つて、〈略〉。

十802 昇降器がすさまじい勢で下りて行くので、目がまはりさうです。

十812 〈略〉、大きなポンプが幾つもすさまじい勢で活動してゐます。

十843 〈略〉、其の内の二人が石炭を掘崩すと、他の二人がそれをざるで運んで炭車に入れる。

十852 〔略〕、附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。

十856 〈略〉、あの坑内でたえず活動してゐる坑夫の仕事を、〈略〉。

十861 〈略〉、我が國で出来る品物はかりでは用が足らない。

十862 又國內で出来るものを使ふよりも、〈略〉。

十866 米は我が國でずるぶん多くとれるが、全く外國米の足しまへを受けぬわけには行かない。

十869 〈略〉羊毛は、我が國ではほとんど産しないから、〈略〉。

十871 機械類は、近年我が國でも盛に製造されるやうになつたが、〈略〉。

十876 我が國は〈略〉、國內で出来た物を外國へ輸出することもなかなか多い。

十885 支那の豚の毛が輸入されて日本でブラシに造られ、〈略〉。

十9210 〈略〉三人連で、學校から歸る時の事であつた。

十939 さいはひ附近の田で働いてゐ

た村の人々に助けられ、〈略〉。

十10110 たくさん咲いてゐる中で一番美しいのは、〈略〉。

十1027 〔略〕此の袋で蟲をとるのだ。

十1032 〈略〉、はへのやうな蟲が二匹、底の水の中で、動けなくなつてゐる。

十1036 成程、緑色の絹絲で作つたのかと思はれるやうな葉もあれば、〈略〉。

十1044 〔略〕其處から熱い湯を管で各室へ送つて、〈略〉。

十1165 船員は手早く鯨の尾をくさりて船はたにつないで、〈略〉。

十1168 汽車で二日市驛に着いたのは午前八時、〈略〉。

十1168 〈略〉、驛前で太宰府行の輕便鐵道に乗つた。

十1171 十五分許で汽車は太宰府町に着いた。

十1212 外國の或商會で、新聞紙に店員入用の廣告を出した。

十1217 後日、人が主人に向つて、どういふお見込で、あの青年をお用ひになつたのかと尋ねた。

十1222 〔略〕きれいすぎで、つゝしみ深いことは、それでよく分りました。

十1225 〔略〕人に親切なことはこれでも知れると思ひました。

十12210 〔略〕はきはきしてゐて、禮儀をわきまへてゐることも、それですつかり分りました。

十1234 〔略〕それで注意深い男だといふ

ことを知りました。

十一22 温度は表面で約六千度、内部に入るに随つて益々高い。

十一25 光の強さに至つては非常なもの、之を燭光でいへば一三の下に零を二十六もつけて表さねばならぬ。

十一28 望遠鏡で見ると、〈略〉。

十一310 しかも我々に最も近いあの太陽でさへ、地球からは凡そ三千八百萬里も離れてゐる。

十一42 今かりに一時間五十里の速度で飛ぶ飛行機に乗つて行つたとしても、〈略〉。

十一84 長崎を出た汽船は、海上を走ること約四百海里で揚子江の河口に達する。

十一165 私は學校で習ふ本でさへ時々見失つて、大さわぎをすることがあります。

十一166 〔略〕「こんなによく整頓してゐる中で勉強したら、どんなに氣持がよいだらう。」

十一171 〈略〉、取出したら後できつともとの場所へお入れになるのださうです。

十一179 此の一事で、家の中がどんなによく整頓されてゐるかが想像されます。

十一181 〈略〉、私はひとりで歩きながら自分の始末のわるいことを考へて、〈略〉。

十一193 〈略〉、裁判所は兩者の言分を聴いた上で、貸主の主張を正當とみとめれば、其の借金を返すやうに借主に命ずる。

十一203 ところで、どういふ事をすれば罪になるか、其の制裁としてのやうな刑罰を受けるかは、法律で明かに定めてあるから、〈略〉。

十一2010 裁判は事件の輕重によつて、最初區裁判所又は地方裁判所で行はれる。

十一213 又地方裁判所で行はれた最初の裁判に不服な者は、〈略〉。

十一217 〈略〉、刑事裁判で、國家を代表して犯罪者の處罰を求めるのは檢事の職務である。

十一219 又民事裁判では、原告・被告の相談相手・附添人又は代理人となつて其の主張を助け、〈略〉。

十一2110 〈略〉、刑事裁判では、不當な刑罰が加へられぬやうに被告を保護するために辯護士といふものがある。

十一362 〈略〉、さつきおとうさんのいひついで、明日の用意に出しておいた植林地の書付を開いて見る。

十一364 〈略〉、朱線で圍んでゐるのが今年伐採する處、〈略〉。

十一369 〔略〕。「坪一本の割。」とおとうさんの手で記してある。

十一373 〔略〕早く間伐して細材を取る目的のところでは、一坪に二本も三

本も植ゑるが、〈略〉。

十一 37 4 園 〈略〉、此の邊では太材を取る方が利益だから、かう間をおいて植ゑるのだ。

十一 38 なたや鎌などでする草を拂ひ、下枝を伐落して行くと、〈略〉。

十一 49 5 〈略〉、數へてみるとゴムで造つたものは實に多い。

十一 50 5 ブラジル邊でゴムを製造するには、山野に自生するゴムの木から原料をとるのであるが、〈略〉。

十一 51 5 此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、〈略〉。

十一 52 3 切付といふのは、ゴムの木から液をとるために、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。

十一 53 4 〈略〉、次に薬品を入れて固まらせ、機械で薄くして乾かすのである。

十一 58 4 砲手は 〈略〉、手で顔をおほつて大砲の上につつ伏した。

十一 64 7 〈略〉、立木や切株の根本を掘つておいて、それにくさりをつけて此のトラクターで引くと、〈略〉。

十一 65 1 〈略〉、此の邊では新しい知識をいれて、〈略〉どしく土地を開いて行く。

十一 65 3 はてしなく續く廣野の中で、人々は 〈略〉樂しげに働いてゐる。

十一 68 7 しかし火の利用法は、決してこれで完成したといふわけではあるまい。

十一 69 1 或山寺で、四人の僧が一室に閉ぢこもつて、七日間の無言の行を始めた。

十一 72 6 宣長は、大急ぎで眞淵の様子を聞きとつて、後を追つたが、〈略〉。

十一 73 9 二人はほの暗い行燈のもとで對坐した。

十一 79 7 今では世界各國、貨幣・紙幣を用ひない國はないのである。

十一 86 1 園 「いや、こゝがまんもしどころだ。そんな弱いことではだめだ。」

十一 87 10 園 二百十日もこれで無事にすんだ。

十一 88 7 園 この中にある『通日』で數へて御らん。

十一 91 6 園 それから雨雪の量は何處が一番多いか、又一年中で何時頃が一番多いか、〈略〉。

十一 92 3 園 〈略〉、日本では明治五年まで太陰暦を用ひてゐたが、其の翌年から太陽暦を用ひた。

十一 94 1 園 こんな不便な曆でも長い間の習慣で、今でも使つてゐるものがあるやうだ。

十一 95 1 〈略〉、父は自分で木を切出して小さな家を造つた。

十一 96 9 ところが母のとりなしで終に學校に入ることが出来たので、〈略〉。

十一 97 8 〈略〉、家で算術の練習をす

るには、木のシャベルと炭を用ひた。

十一 97 9 シャベルが數字で眞黒になると、それをふいては又書く。

十一 98 4 しかしせつかく始めた學校通ひも、家事のために僅か一年足らずで止めねばならなくなつた。

十一 114 6 〈略〉、府縣市會で參事會員を選擧するにも、〈略〉、皆此の精神を本としなければならぬ。

十一 114 7 〈略〉、市町村會で市町村長を選擧するにも、皆此の精神を本としなければならぬ。

十一 117 7 昔イギリスの或大きな農場で、農場主が大勢の人の耕作するのを監督してゐた。

十一 121 10 シャベルでざく／＼かきまぜると、白い粉が一面に煙のやうに立ちのぼつて、〈略〉。

十一 122 4 こんなところで毎日働いてゐる人たちは、〈略〉。

十一 122 9 とけたガラスが中でざく／＼かがやいてゐる。

十一 123 9 こちらを見ると、そこではちよつと吹いて型に入れ、又吹いて型から出す。

十一 124 7 隣の室では、職工が 〈略〉、ガラス器にいろ／＼の模様をつけてゐる。

十一 121 10 〈略〉、目穀や鑽石などを室内に並べては一人で楽しんでゐた。

十一 123 4 ダーウィンは 〈略〉、一度何かをし始めたら、満足な結果を得

るまでは決して中途でやめなかつた。

十二 21 4 ふと見ると、ついそばの木の下では、かごを首に掛けた二三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。

十二 21 5 〈略〉、二三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。

十二 21 6 あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよん／＼と聞える。

十二 21 6 あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよん／＼と聞える。

十二 30 7 園 往來の頻繁な街上でも、よく警官の指揮に従つて、混亂することがなく、〈略〉。

十二 33 3 園 眺望臺で眺めると、道を往來してゐる人間や自動車などは、まるで蟻のはふやうに見えるし、〈略〉。

十二 34 6 園 汽車でドイツの國內にはいつたのは朝まだほの暗い頃でした

が、〈略〉。

十二 35 2 園 これはイギリスやフランスなどでは見られぬ光景で、〈略〉。

十二 39 1 薄暗いふそくの火のもとで、〈略〉若い男が靴を縫つてゐる。

十二 40 1 園 實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが、——あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふお話でしたな。

十二 41 2 園 いや、これでたくさんで

す。

十二427 しばらくして兄は〈略〉、力のこもつた、しかも低い聲で、「〈略〉」。

十二444 〈略〉、三人の心はもう驚と感激で二ぱいになつて、〈略〉。

十二5010 中湖は深さが三百七十八メートル、此の湖中で一番深い處である。

十二559 男の子は指先でそれをつままうとしたが、〈略〉。

十二565 此處で遊んではいけない。

十二577 親子は總掛りで探し始めた。

十二588 時計師は早速ピンセットでねぢをはさみ上げて、〈略〉。

十二591 〈略〉、やがてピンセットでねぢをはさんで機械の穴にさし込み、〈略〉。

十二592 〈略〉、小さなねぢ廻しでしつかりとしめた。

十二665 前たちのうちで誰が一番此の父を大事に思つてくれるか、〈略〉。

十二687 それでは返事にならぬではないか。

十二7310 〈略〉、——まあ、此の身體であのひどい嵐の中を——。

十二766 まぐろを取る方法はいろ／＼あるが、だいたい網で取るほど勇壯なものはあるまい。

十二785 其の時魚見やぐらの上で旗を揚げて、まぐろの群が網にはいつ

たといふ合圖をすると、〈略〉。

十二787 これでもう魚は逃出すことが出来ない。

十二793 網の中がいよ／＼狭くなると、其の周圍を船で取巻いてしまふ。

十二799 船がまぐろで一ぱいになると、〈略〉。

十二888 政府から提出された案は先づ議會の一院で討議される。

十二8810 即ち第一讀會で其の案を大體に調査し、〈略〉。

十二891 〈略〉、第二讀會で逐條に審議し、〈略〉。

十二891 〈略〉、第三讀會で法律案全體の可否を議決する。

十二892 かうして其の院で可決すれば、其の案を他院に移す。

十二893 此處でも同様の形式で討議し、〈略〉。

十二893 此處でも同様の形式で討議し、〈略〉。

十二896 又貴衆兩院の何れから提出された案は、他の一院のみで討議し、〈略〉。

十二897 そこで天皇が之を裁可せられ、公布せしめられると、始めて法律が出来上るのである。

十二8910 これ等の命令も國の規則であつて、廣い意味でいふ場合にはやはり法律であるから、〈略〉。

十二941 自分一人で修行をしよう。

十二942 さうして此處で〈略〉五人

の友と、六年の間種々の苦行を試みた。

十二1079 出来る氣づかひはないと見くびつてゐた岩山の掘抜も、これではどうにか出来さうである。

十二1087 其の後は老僧と共に洞穴の中でのみを振るふ者もあり、〈略〉。

十二1109 今では此の洞門を掘りひろげ、處々に手を加へて舊態を改めてはるるが、〈略〉。

十二1154 二十五日午後一時から、學校の講堂で村崎工學博士の「電氣の世の中」と題する講演があつた。

十二1166 博士は〈略〉、急流や瀑布に富んでゐる我が國では、將來益々水力電氣の利用をはからなければならぬことを力説した。

十二1171 今では更に進んで光の色が太陽に似て、しかも比較的熱をともしふことの少い電燈さへも發明されました。

十二1187 〈略〉、無線電話で子守歌を聞かせて赤ん坊を寝かせてゐることなどの耳新しい話に、〈略〉。

十二1259 西郷は早速承知して、芝、高輪の薩摩屋敷で會見したが、〈略〉。

十二1263 翌十四日の會見は、芝、田町の薩摩屋敷で行はれた。

十二1283 〈略〉、拙者の考へる所では、〈略〉、日本全國にのしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。

十二12810 相手は大きな眼でじつと安芳の顔を見つめながら、〈略〉。

十二13510 〈略〉、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、〈略〉。

十二1371 自分で思ふまゝに造り出す創造力は、十分に發揮せられたことがなく、〈略〉。

で（接助）1 で

十一459 〈略〉、畫師「〈略〉。」とて、心構せし様なりしが、尚筆も取らで數日を過しぬ。

であう「出會」（四・五）4 出アブ

出あふ 出會ふ 《ーッ・ハー・ヒ》

六321 マツ先二出アツタノハ牛乳配達デ、〈略〉。

八758 大洋を西へ／＼と航海して、陸地に出あつたのが、それ程の手がらだらうか。

九1189 おかあさんは、『一命を捨てて君恩に報いよ。』と言つてゐられるが、まだ其の折に出會はないのだ。

十二11910 本日突然上田君に出會ひ、久しぶりにて郷里の様子をいろ／＼承り申候處、〈略〉。

てあし「手足」（名）3 手足

八1009 〈略〉、耳は鳴り、目は暗み、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、〈略〉。

十一856 手足が大分くたびれて來た。腹もすいた。

十二865 土人等林蔵を珍しがりて
〈略〉、或は抱き或は懷を探り、或は
手足をもてあそびなす。

てあしらいちどう 「手足等一同」(名)

1 手足等一同

八103 之を聞いて、手足等一同は、
なるほどと感心したといひます。

てあたりしだい 「手当次第」(副) 1

手當り次第

十479 さうして手當り次第に、何で
もひつつかんで行つては窯の中へ投
込んだ。

てあて 「手当」(名) 1 手あて

七756 役人はわけをくはしくたづ
ね、〈略〉、「〈略〉。人夫には此方か

ら手あてを致す。」と申し渡して、
人夫にほうびの金をたくさんやつた
と申します。

てあらいばち 「手洗鉢」(名) 1 手洗
鉢

六102 ねえさんは赤いたすきをかけ
て、手洗鉢の水をかへてゐました。

てい 「体」(名) 1 體

十二398 兄はむつとりとしてや、當
惑の體である。

てい 「帝」(名) 1 帝 じげんてい

十1002 天祥いはく、「〈略〉。」と。
帝其の志の動かすべからざるを知り、
之を刑場に送らしむ。

てい 「堤」 じほうはてい

てい 「低回」(名) 1 低回

十二1005 何の山、何の川、

一木一草に至るまでも歴史あり古歌
あり、人をして低回する能はざらし
む。

ていき 「定期」(名) 2 定期

十523 定期の方は、預けた
日から半年とか一年とかきまつた期

限が来ないと引出すことが出来ない。
十527 定期の方には利子がずつと
多く附く。

ていきよん 「定期預金」(名) 2 定
期預金

十527 銀行の預金には定期預金と

いふのと當座預金といふのがある。
十529 だから當分使ふ見込のない、
まとまつたお金は定期預金にした方
がよいのだ。

ていこうりよく 「抵抗力」(名) 1 抵
抗力

十478 ひばは抵抗力を有し、松

は弾力に富み、〈略〉。

ていこく 「帝國」(名) 2 帝國 じだ
いにつぼんていこく

七68 世界に比なき帝國の強
き御民となるべしと。

九115 兵士の恥は艦の恥、艦の恥
は帝國の恥だぞ。

ていこぎかい 「帝國議會」(名) 1

帝國議會

十二902 唯法律は必ず帝國議會の協
賛を経なければならぬが、命令には
其の事がない。

ていさい 「体裁」(名) 1 體裁

十一184 整頓といふのは體裁をつ
くることではなくて、むだをなくす
ことだ。

ていしつよう 「帝室用」(名) 1 帝室
用

五1008 東京停車場 〈略〉。

向つて右が入口、左が出口で、ま
ん中が帝室用になつてゐます。

ていしば 「停車場」(名) 12 ていし
や場

ていしば 停車場 じだいてい
しば・とうきようていしば・りゅ
うざんていしば

四296 町を通過して、工場の近く
の町を通過して、工場の近く
ていしば場 出来るさうです。

四83 むかふのていしば場へ着い
たら、にいさんがむかへに来て
居ました。

五101 停車場の階上には、役所もホ
テルもあります。

五102 此の停車場から、毎日七八千
人づつの人が乗降りします。

五102 はじめて東京見物に来て、此
の停車場へ降りる人は、大てい先づ
第一に宮城をさしてまゐります。

六345 停車場デキツプヲ買ツテキル
ト、〈略〉。

九73 停車場にはいる手前でまた北
上川を見たが、〈略〉。

九76 北海道に渡る人は、停車場に
續いた乗船所から汽船に乗るのであ
る。

十736 汽車で京城へ来る人は通常
南大門驛で下りるのです。此の停車
場を出て大通を東北に進むと、〈略〉。

十1205 榎寺を出て二日市の停車場へ
急いだ。

十1209 停車場に着いた時は午後六
時を過ぎてゐた。

十二49 今市を過ぎ、大社驛に着
きぬ。停車場の外に出れば、秋晴
の空はあくまですみで、暖さ春の如
し。

ていしばちかく 「停車場近」(名) 1

停車場近ク

六337 停車場近クニナルト、急二人
通ガ多クナツタ。

ていしゅ 「亭主」(名) 1 ていしゅ

四543 そこへ宿屋のていしゅ
が来て、「〈略〉。」

ていしゅつする 「提出」(サ変) 3

提出する 《一サ・スル》

十二887 法律を制定するには、政府
又は貴衆兩院の何れかが其の案を作
成して議會に提出する。

十二887 政府から提出された案は先
づ議會の二院で討議される。

十二895 又貴衆兩院の何れから提
出された案は、他の二院のみで討議
し、〈略〉。

ていす じきゅうしにていす

ていと 「帝都」(名) 1 帝都

十二994 七代七十餘年の帝都とし
て、咲く花のほふが如しと誇りし

奈良の都も、〈略〉。

ていど 「程度」(名) 2 程度

十二24 〇 これはひつきやう文明の程度が低いために、共同生活の意義が明らかでなく、〈略〉。

十二90 〇 一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。

ていねい 「丁寧」(形状) 7 ていねい

四75 〇 此の人たちの田や畠の作り方はていねいでしかから、稲も麥もよそのよりはよく出来ました。

五46 〇 私ども二人はていねいにおじぎをしました。

七112 〇 それでもよいが、電報はさうていねいにはなくともよい。

八29 〇 此の時太郎が、炭はどうして焼くのかときくと、其の男はていねいに教へてくれた。

九78 〇 〈略〉、星野君が〈略〉、ほつたをも一つ一つていねいにならべて行く。

十122 〇 あいさつをしてもていねいで、少しも生意氣な風が無く、〈略〉。

十一100 〇 リンカーンは其の本をていねいに乾かして、其の後何度もくく讀返してゐるうちに、〈略〉。

でいり 「出入」(名) 2 出入

七75 〇 横濱は〈略〉一大貿易港にして、商船の出入たゆる時なし。
七29 〇 市中ニハ電車ノ往復シゲク、

港ニハ船ノ出入タエズ。
でいりぐち 「出入口」(名) 2 出入口

九63 〇 〈略〉、すべての窓や出入口は開かれる。

十73 〇 京城の市街は、もと石でた、んだ高い城壁で圍まれ、その處々にかういふ門があつて、出入口になつてゐたのださうです。

でいりさ・せる 「出入」(下二) 1 出入させる

十一69 〇 小僧一人だけ自由に室内に出入させて、いろ／＼の用を足させた。

でいりす 「出入」(サ変) 1 出入す

十126 〇 〈略〉、生徒は〈略〉、學校を思ふ心あつく、卒業後も尚學校の門に出入することを樂しみとせり。

ていりゅうば 「停留場」(名) 1 停留場
場 じんぐうまえていりゅうば

五34 〇 時計屋の前に電車の停留場があります。

デーバッター 「人名」 1 デーバッター

十二97 〇 殊にデーバッターは、いとこの身でありながら、かねてから釋迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。

テーブル 「名」 1 テーブル

十123 〇 〈略〉、あの青年はいるとすぐに書物を取上げて、テーブルの上に置きました。

テームスがわ 「地名」 1 テームス川

十二29 〇 テームス川を飾るタワー橋・ロンドン橋を始め、〈略〉見る物聞く物唯々驚く外はありません。

でおくれ 「出遅」(名) 1 出遅れ

九35 〇 〈略〉、此の前来た時の事を考へながら、出遅れのわらびを一本折つて、又歩き出す。

ておけ 「手桶」(名) 2 手ヲケ 手をけ ひととておけ

三66 〇 私ノウチヘキノフヲケヤガ來テ、手ヲケヤタラヒノタガヲカケカヘマシタ。

五84 〇 大水が出なければよいがと心ばいして、夜中に手をけやはき物まですつかり二階へ上げました。

でかく 「出掛」(下二) 1 出掛く

十一106 〇 昨日知人に誘はれてコーヒー園見物に出掛け候。

でかけ 〇 おでかけ・おでかけなさるでかけ 「出掛」(名) 1 出がけ

九15 〇 朝飯を終へて、妹と共に學校に行く。出がけにとやの方を見れば、〈略〉。

でか・ける 「出掛」(下二) 10 出カケル 出かける

四80 〇 昨日おとうさんと朝九時の汽車で、軍たいに居るに皆さんの所へ出かけました。
七26 〇 武人は昔から之を愛養して、

いざといふ時には、それに乘つて出かけた。

七61 〇 皆さんのうちには、大きくなつてから、商用其の他で、外國へ出かける人もあります。

八84 〇 〈略〉、信吉はほつと息をついて、「略」といつて、すぐ出かけようとした。

八85 〇 僕ははかまを着けて、信吉と一しよに出かけた。

九120 〇 今日午後四時ノ汽車デ又出カケルノダ。

十8 〇 其の大王が東方諸國の遠征に出かけた時の事である。

十60 〇 「此の大雪に、どうして出かけたのか。」

十77 〇 〈略〉、遠足好きの君なら、毎日何處へか出かけたてたまらないだらうと思ひました。

十二44 〇 「さやうなら。」ベイトーベンは立つて出かけた。「先生、又お出で下さいませうか。」きやうだいは口を揃へていつた。

てかず 「手数」(名) 1 手数 〇 おんてかず

八78 〇 今日までに納めないと、役場によけいな手数をかけることになります。

デカストーリーわん 「地名」 2 デカストリー湾

十二85 〇 〈略〉、一行八人は、小舟に乗じて今の間宮海峡を横ぎり、

デカストリー灣の北に上陸したり。

十二85図 デカストリー灣

でかせぎ 「出稼」(名) 1 出かせぎ

七71図 房州へ出かせぎに行つて、

れふを致して居りましたが、〈略〉。

てがみ 「手紙」(課名) 8 手紙

八目18 第十二 手紙

八43 第十二 手紙

九目11 第二十三 手紙

九117 第二十三 手紙

十目7 第二十 手紙

十106 第二十 手紙

十一目11 第十課 手紙

十一415 第十課 手紙

てがみ 「手紙」(名) 11 手紙 ↓おて

がみ・おんてがみ・ひとをまねくてが

み

五887図 おとうさんやおかあさん

は、取りまぎれてまだ手紙も上げず

に居ります。

七678図 「中には。」「小判が百五十

兩はいつて居ります。〈略〉。外にま

だ手紙が七八本。」

八465図 其の後どうかと案じてゐま

したが、手紙を見て安心しました。

九1145 或日我が軍艦高千穂の一水兵

が、女手の手紙を読みながら泣いて

ゐた。

九1161 水兵は〈略〉、「〈略〉。」と言

つて、其の手紙を差出した。

九1178図 如何ばかりの思にて此の

手紙をしたゝめしか、よくよく御察

し下されたく候。

十103 王は讀終つて、そつと手紙を

まぐらの下へ入れた。

十557 それ故鳩の體に手紙を附けて

放せば、容易に通信が出来るのであ

る。

十575 鳩に手紙を運ばせるには、足

に〈略〉細いくだを附け、又は胸に

袋を掛けさせて、其の中に入れるの

である。

十一10310図 此の手紙と一しよに、

繪葉書をたくさん小包にて送り申候。

十二1195図 當地に参りて以來、一

度手紙を以て御様子御伺ひ申上げた

しとは存じながら、〈略〉。

てがら 「手柄」(名) 6 てがら 手が

ら

五198図 其のいはれで、戦争の時、

大きな手がらを立てた軍人に下さる

勲章に、金の鶏をおつけになつたの

だ。

六503図 ろりのはたに縄なふ父は

すぎしくさの手がらを語る。

八759図 「大洋を西へく」と航海し

て、陸地に出あつたのが、それ程の

手がらだらうか。」

九1176図 八幡様に日参致し候も、

そなたがあつたばれなるてがらを立て

候やうとの心願に候。

十694図 唯今にも鎌倉の御大事とい

ふ時は、〈略〉、やせたりともあの馬

にうち乗つて一番にはせ参じ、〈略〉、

あつばれてがらを立てるかくこ。

十一293図 「てがらは仕勝ちぞ。

かゝれく。」

てき 「的」 ↓せかいてき・ひかくて

き・ゆうぎてき・りそうてき

てき 「敵」(名) 37 てき 敵

五24図 大日本、大日本、神代此

の方一度もてきに 負けたことなく

〈略〉。

五823 〈略〉、宗任はつい此の間義家

にかうさんしたてきの大將なのです。

六237 〈略〉、義仲はひそかにみ方の

者を敵の後へまはらせて、〈略〉。

六354 敵は船の中から熊手を出して、

義經のかぶとに引つけようとしま

す。

六381図 叔父爲朝の弓のやうな強い

弓なら、わざと敵にやつてもよいが、

〈略〉。

六804 我が武士は敵の攻めよせるの

を待ちきれず、こつちからおしよせ

た。

六805 敵は高いやぐらのある大船、

こつちはつり舟のやうな小舟であつ

た。

六811 草野の次郎の如きは夜敵の船

におしよせて、首二十一取つて、

〈略〉。

六812 草野の次郎の如きは〈略〉、

敵の船に火をかけて引上げた。

六812 敵は此のいきはひにおそれて、

鐵のくさりで船をつなぎ合はせた。

六817 敵ははげしく射立てた。

六824 いや／＼おしよせたが、敵の

船は高くて上ることが出来ない。

六831 通有ははばしらをたふして、

之をはしごにして、敵の船へをどり

こんだ。

六835 其の後も攻めよせる者がたえ

ないので、敵は一先づ沖の方へしり

ぞいたが、〈略〉。

六851 敵の船はこつばみぢんにくだ

けて、敵兵は海のそこに沈んでしま

つた。

六947図 賊は「それ、敵が出た。一

騎も餘すな。」とおしよせた。

七442 信玄は不意を打たれておどろ

いたが、忽ち陣立をかねて、敵を引

受けた。

七884図 「かくして下さい。敵が追

つかけて來ます。」

七915 「たしかに來たはずだ。」と言

つて、敵はあちこち見まはしました

が、〈略〉

七921 敵はどつと笑ひました。

九163 保護色ヲモツテキルト、〈略〉、

容易ニ他ノ動物ニ見ツケラレナイ。

シタガツテ敵ニオソハレハル心配モ少

ク、〈略〉。

九164 〈略〉、又コチラカラ敵ヲオソ

フノニモ都合ガヨイノデアル。

九395図 旅順開城約成りて、敵

の將軍ステッセル 乃木大將と會見

の所はいづこ、水師營。

九四五 〔圖〕 昨日の敵は今日の友、
〔略〕。

九四七 谷一つへだてた向ふの岡に、
敵の砲兵が放列をしいてゐる。

九四八 それでも誰一人敵に後を見せ
る者はない。

九四九 ちやうど其の時、敵の砲弾が
近くで破れつして、〔略〕。

九五〇 陣頭に立つては百萬の敵を物
とも思はぬ英雄も、病氣は如何とも
することが出来ない。

九五二 それにはフィリップが敵から
大金をもらふ約束で王を毒殺しよう
としてゐるといふ風説があるから、
用心するやうにと書いてあつた。

九五五 殊に要塞が敵にかこまれて、
無線電信機は破壊せられ、〔略〕、
全く方法の盡きた場合などには、
〔略〕。

九五八 眞先かけて敵の大軍
に割つて入り、〔略〕、あつばれてが
らを立てるかゝ。

六〇三 〔略〕、これぞと思ふ敵と打
合つて、あつばれてがらを立てるか
ゝ。

二四三 〔略〕、思ひもよらぬ敵の
一隊、湖に沿ひたる一筋路を急ぎに
急ぎて進み来る。

二五六 奇手の大將佐久間盛政は、
〔略〕、一舉に敵をみぢんにせんと、
〔略〕。

二六四 〔略〕、こは如何に、降つ

てわいたる敵の大軍、木之本の邊に
満ちたりと報じ来る。

二八六 明くれば二十一日の朝、
盛政は〔略〕、追来る敵を防
ぎ居し弟勝政に引きあげを命じたり。

二八九 秀吉、〔略〕、すか
さず鐵砲組に合圖して銃火をあびせ
かけたれば、敵は見る間にたゞ
と倒れて、一軍今や崩れんとす。

六三六 〔名〕 3 出来
日本一の出来。

八〇八 分業で造ると、其の出来がよ
いばかりでなく、出来高がたいそう
多くて、〔略〕。

八〇八 分業で仕事をする時、誰か一
人の手ぎはが悪いと、全體の出来ま
でも悪くなる。

できあがる 〔出来上〕 (五) 8 デキ
上ル 出来上る 《一ツ・一リール》
三九六 キヨネン デキ上ツタ 新道
ハ、〔略〕。

四二二 もう高い えんとつは大方
出来上りました。

四二九 これは大じかけでれんぐ
わをやく工場です。これが出
来るころには、〔略〕。

五七二 〔略〕、をしいことに、庄屋は
池が出来上つた年の冬、死んでしま
つた。

六三五 今日庭にほしてあるもみをす
つて、俵に入れてつんだら、三つ目

の山は出来上りませう。

八三九 〔略〕 焼加減を見て、かまの
外へ引出し、消粉をかけて消せば、
かた炭が出来上るのである。

九四四 しかし此の分では、わたし
の命は、とても仕事の出来上るまで
もつまいと思ふ。

二八九 そこで天皇が之を裁可せら
れ、公布せしめられると、始めて法
律が出来上るのである。

できかかる 〔出来掛〕 (五) 1 出来
かゝる 《一ツ》

六三一 昨日までに二山出来て、もう
三つ目の山が出来かゝつてゐます。
できこと 〔出来事〕 (名) 1 出来事

二一四 世の出来事を速に知らん
とするは人情の常なり。

できしゅ 〔敵手〕 (名) 1 敵手
十九七 然るに元軍の勢いよく盛
にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝・
皇后も遂に敵手に落ちぬ。

できしよう 〔敵將〕 (名) 2 敵將
十九八 時に宋の勇將張世傑よく
戦ひて元軍を防ぐ。敵將張弘範如何
にもして之を降らしめんとし、〔略〕。

二二九 中にも加藤清正は、山際
のかけ路にて敵將山路正國に出であ
ひ、〔略〕。

できじん 〔敵陣〕 (名) 1 敵陣
九四四 中尉は〔略〕、敵陣が間近に
なつたのを見て、〔略〕、〔略〕。」と
叫んだ。

できす 〔適〕 (サ変) 2 適す 《一
セ》

二四七 〔略〕、かしは〔略〕、
櫓・車・運動器具の如き強烈なる力
を受くるものを製作するに適せり。

二四九 然れどもこは今日のアー
ク燈に類するものにして、〔略〕、室
内に用ふるには、〔略〕、實用に適せ
ず。

できする 〔適〕 (サ変) 2 適する
《一シ》

二五二 南洋は〔略〕、ゴムの木の
發育には最もよく適してゐる。
二五三 温和な氣候や美しい風景は、
〔略〕、雄大な氣風を養成するに
は適しない。

できする 〔敵〕 (サ変) 1 敵する
《一スル》

二五三 〔略〕、電力は頗る廉價に
供給されるので、石炭の火力による
蒸氣力は、多くの場合之に敵するこ
とが出来なくなりました。

できだか 〔出来高〕 (名) 1 出来高
八五九 分業で造ると、其の出来がよ
いばかりでなく、出来高がたいそう
多くて、〔略〕。

できだん 〔敵弾〕 (名) 2 敵弾
八八四 〔略〕、船は次第に波間
に沈み、敵弾いよくあたりにし
げし。

九四四 敵弾は前後左右へ雨のやうに
落ちて来る。

てきとう 〔適當〕(形状) 5 適當

九124 〔略〕、メイ／＼自分ノ適當ト信ジテキル人ニ投票スルノガ、ホシタウノ選舉トイフモノダ。

九124 道雄ハ誰ガ何ト言ツテモ、自分デ一番適當ダト信ジテキル中村君ヲ選舉シヨウト決心シタ。

十104 〔略〕 其處から熱い湯を管で各室へ送つて、適當に暖めるやうになつてゐるのだ。

十二111 〔略〕 然れどもこは今日のアーケ燈に類するものにして、公園・街路等の照明用としては適當なれども、〔略〕。

十二114 〔略〕、日本の竹最も適當なりしかば、専ら之によりて心を製出せり。

てきとうこうへい 〔適當公平〕(形状)

1 適當公平

十一204 〔略〕、裁判所は、犯罪の疑のある者を十分に取調べて適當公平な裁判をする。

てきにんしゃ 〔適任者〕(名) 1 適任者

十一115 〔略〕、地方公職の爲の適任者を擧げることだけを考へて、決して私心をもたないものである。

てきへい 〔敵兵〕(名) 3 敵兵

六85 〔略〕 敵の船はこつぱみちんにくだけて、敵兵は海のそこに沈んでしまつた。

七90 〔略〕 此の時どや／＼と四五人の敵

兵がはいつて來ました。

十98 〔略〕 たま／＼元の大軍至るに及んで天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。

で・きる 〔出來〕(上) 142 デキル できる 出來ル 出來ル 《一キ・一キル・一キレ》

一37 〔略〕 「ニイサン、ミテクダサイ。」ヨク デキマシタ。

二36 〔略〕 ソレカラコノ人ノ田ニハ、オ米ガスコシモ デキナクナツタトイヒマス。

二72 〔略〕、ナカナカタイヂスルコトガ デキマセン デシタ。

三50 〔略〕 新道ノリヤウガハニハ、新シイ家ガ七八ケン デキマシタ。

三56 〔略〕 たらふうは〔略〕、こんきがよければ、何こともできないことはないとさとりました。

三67 〔略〕 池ノ水デタメシテミルト、ウマク 出來テ キテ、高ク上ゲルト、ヤネノ上 マデ トドキマス。

三86 〔略〕 天人のはごろもなら、なほさらかへすことは出來ません。

三86 〔略〕 それがなくては、天へかへることが出來ません。

三87 〔略〕 おかげで天へかへることが出來ます。

四44 〔略〕 今年には田がよく出來たので、ばんにはそのおいはひ

の花火が上るさうです。

四28 〔略〕 よこ町に電氣の力で、米をつく家も出來ました。

四29 〔略〕、工場の近くにいていしや場が出來るさうです。

四75 〔略〕、稲も麥もよそのよりはよく出來ました。

四92 〔略〕 二人のものはなかなかそばへよることも出來ません。

五72 〔略〕 中村君は學問もよく出來るし、うんどうも上手です。

五10 〔略〕 酒が出來ると、みことはそれを八つのをけに入れさせて、〔略〕。

五19 〔略〕 鶏の光がまるでいなびかりのやうで、わるものどもは目を明けてゐることが出來ず、〔略〕。

五30 〔略〕 つりも出來るし、およぎも出來て、あつい夏でもすくしくくらす。

五30 〔略〕 つりも出來るし、およぎも出來て、あつい夏でもすくしくくらす。

五30 〔略〕 つりも出來るし、およぎも出來て、あつい夏でもすくしくくらす。

五47 〔略〕、少しでもおくれると、〔略〕、繭をかははじめますから、ちつともゆだんが出來ません。

五87 〔略〕 うら手で助けてくれ助けてくれと呼ぶこゑが聞えましたが、〔略〕、どうすることも出來ませんでした。

六14 〔略〕 新田が大へんよく出來ました。

六24 〔略〕 今どこのうちへ行つて見ても、

俵の山が出來てゐます。

六28 〔略〕 昨日までに二山出來て、もう三つ目の山が出來かゝつてゐます。

六107 〔略〕 ソレデ、オアシニナルコトモ出來レバ、針金ニナルコトモ出來マス。

六107 〔略〕 ソレデ、オアシニナルコトモ出來レバ、針金ニナルコトモ出來マス。

六123 〔略〕 小サイ物カラ、〔略〕 大キナ物マデ、皆鐵ガナケレバ造ルコトガ出來マセン。

六31 〔略〕 虎はうん／＼うなつて、かけまはるより外、どうすることも出來ません。

六56 〔略〕 さあ、此の女にはゆだんが出來ぬといふ事になつて、〔略〕。

六68 〔略〕 あんな小言を言ふ程だから、此の義捐が出來たのだらう。

六73 〔略〕 ああ美しい友禪染は、もと此の川べりで出來たのでございます。

六81 〔略〕 まるで大きな島が出來たやうなものである。

六82 〔略〕 いや／＼おしよせたが、敵の船は高くて上ることが出來ない。

六86 〔略〕 自由にうごかすことの出来る長い鼻、〔略〕。

七38 〔略〕、たくさんな大船をいどきに横づけにすることが出來ます。

七38 〔略〕 船から陸あげした荷物は、すぐ其所から汽車にのせて、ハルビンへでも北京へでも送ることが出來

ます。
 七49 2 此の時信玄は之を止めて、「略」といだったので、めでたく中なほりが出来た。
 七57 6 図 こんな時には、略、外の船に衝突したりするやうなまちがひが出来ます。
 七58 8 図 星が出てゐれば、それにたよつて方角を知ること出来るし、略。
 七58 9 図 略、星が出てゐれば、略、自分の船の居場所を知ること出来る。
 七62 9 渡るといつても、自分一人では渡ることが出来ません。
 七64 2 略 一人の男が、人夫と渡賃を高いやういと言つてあらそつてゐましたが、相談は出来ないものと見きつたのでせう、略。
 七69 1 図 略、此のまゝ歸ることも出来ませんので、引つかへして参りました。
 七87 1 一ガインイフコトハ出来ナイガ、略。
 七98 8 図 略、戦一つ出来ず、人のかげごとばかりいふ石田めとは、此の清正一生中直りは致さぬ。
 七110 5 図 「ハナシデキタイツクルヘン」。
 八28 2 図 箸を持つことも出来ず、略。
 八28 2 図 略、帶を結ぶことも出来

ず、略。
 八28 3 図 略、かゆき所をかくことも出来ず、略。
 八28 4 図 略、いたき所をさすること出来るべし。
 八46 9 図 略、一人で寝起の出来るまで、ゆつくり看病してお上げなさい。
 八52 9 二目目で小さなおそなへが幾かさねか出来、略。
 八53 1 略、三目からは、のし餅が出来た。
 八87 7 図 略、何のいんぐわで、ひさしぶりに歸つた私に、一口も口をきくことが出来ないでございませう。
 八92 8 略、もう二年たつて、此の學校を卒業する頃には、りつぱに一人前の事が出来るやうになる。
 八100 9 略、耳は鳴り、目は暗み、手足はなえてしまつて動くことが出来ず、略。
 八101 9 図 略、僕が若し食物をこなさなかつたなら、からだを養ふ所の血がどうして出来ませう。
 八102 3 図 其の爲に新しい血が出来なくなつて、略。
 九19 8 シカシサラニコレヨリモ色ヤ形ガウマク出来テキルノハ、印度ニ産スルカマキリノ一種デアラウ。
 九23 5 図 そこで此の父も、何とぞ此の學問を大成したいと、略、出来

るだけは骨折つたつもりである。
 九23 7 図 しかし思ふ程に仕事は出来ず、略。
 九26 4 図 略、くはしく計畫を立てた事もあるが、いろ／＼の差支があつて、實行が出来ずにしまつた。
 九47 3 図 あの降りつゞいた雨のおかげで、山田の高い所まで一息に植ゑることが出来ました。
 九48 4 図 米が出来るのも、麥が取れるのも、略。
 九55 6 図 略、六十五六の時にはもう餘程の財産が出来た。
 九66 2 火縄一本の煙草ほんのまはりには、人の山が出来て、いろいろの話が出る。
 九68 1 略、二人とも腰を掛けることが出来た。
 九68 8 図 昔は一面の荒野であつたが、今は方々に町や村が出来てゐる。
 九76 4 略、此所は名高い温泉場で、海水浴も出来るさうだ。
 九83 6 図 何時頃までに出来ますか。
 九88 9 図 略、あの星を本にして、すぐに北極星を見つける事が出来る。
 九89 4 図 それにあの星は何時も眞北に居るから、略、道に迷つた時などにもすぐ方角を知る事が出来る。
 九89 9 図 略、あの北極星がひしやくの柄の先になつて、もう一つ、小さい北斗七星のやうなものが出来てゐますね。

九118 5 図 しかし今の戦争は昔と違つて、一人で進んで功を立てるやうなことは出来ない。
 十8 9 略 英雄も、病氣は如何ともすることが出来ない。
 十11 4 王は間もなく健康を回復して、再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出来た。
 十12 7 図 よくこんなに早く出来ましたね。
 十31 8 略、此の地峽を切通し、略、太平・大西兩洋の水を通はせることは到底出来ぬ事であつた。
 十31 9 そこで此の運河は、非常に變つた仕組に出来てゐるのである。
 十33 1 所で、此の高い湖と低い掘割を何の仕掛もなしに連結すれば、湖の水は瀧のやうに掘割へ落込んで、とても船を通すことは出来ないから、略。
 十36 1 運河は全長五十哩餘り、凡そ十時間前後で之を航することが出来る。
 十49 3 図 「出来たく」。血をさぐげた喜三右衛門は、こをどりして喜んだ。
 十49 3 図 「出来たく。」
 十50 5 図 おとうさん、今度役場の隣にりつぱな建物が出来ましたね。
 十52 3 図 當座の方は何時でも引出すことが出来るが、略。
 十52 4 図 略、定期の方は、略

きまつた期限が来ないと引出すことが出来ない。
 十53 9 図 「成程、うまく出来たものですね。」
 十54 5 「略」、他の方法では全く通信が出来なくなつた場合でも、
 十55 7 「略」、それ故鳩の體に手紙を附けて放せば、容易に通信が出来るのである。
 十57 3 「略」、又暗い時の飛行に馴れさせて、夜間に使ふ事も出来るし、
 十57 4 「略」、飼養所を移動し、其處を見覚えさせて飛歸らせるやうにする事も出来る。
 十58 2 「略」、飛行機の不時着陸地點を知らせたり、
 十61 6 図 「略」、お氣の毒ながら、とてもお泊め申す事は出来ません。
 十86 1 「略」、我が國で出来る品物はかりでは用が足りない。
 十86 2 「略」、又國內で出来るものを使ふよりも、
 十87 6 「略」、國內で出来た物を外國へ輸出することもなかなか多い。
 十95 7 図 「略」、お前のやうな弱蟲には、
 「いゝえ。」といふ言葉は言ひにくいのだ。
 十96 6 「略」、太郎は「はい。」と「いゝえ。」の言ひにくいわけをさとることが出来た。

十11 5 「略」、太陽の光と熱とがなくては、我々人間は勿論、あらゆる生物、一として生存することは出来ない。
 十21 5 「略」、かういふ風に、三回くりかへして裁判してもらふ事の出来る組織になつてゐるのは、
 十22 10 「略」、若し又裁判が公平に行はれぬとしたら、
 十39 8 「略」、それから始めて聞いて面白くと思つたのは、枝打をしないと木に節が出来ることである。
 十53 6 「略」、かうして出来たゴムは、各國の工場に運んで加硫法を行ふ。
 十73 7 「略」、望がかなつて、宣長が眞淵を新上屋の一室に訪ふことが出来たのは、それから數日の後であつた。
 十75 3 図 「略」、古事記を研究しようとしたが、どうも古い言葉がよくわからないと十分なこととは出来ない。
 十75 6 図 「略」、何時の間にか年をとつてしまつて、古事記に手を延ばすことが出来なくなりました。
 十75 8 図 「略」、あなたはこの研究を大成することが出来ませう。
 十77 10 「略」、我々は殆ど貨幣・紙幣なくして一日も生活することは出来ぬといつてもよいからである。
 十79 1 「略」、しかしこれらの物は、思ふやうに分割することが出来なかつたり、
 十79 4 「略」、かうして出来た貨幣は極めて使用に便利ではあるが、
 十87 3 図 「略」、あゝ、五海里の海上を僕も泳ぎきることが出来たのだ。
 十95 4 「略」、家が出来てから次に土地を開きにかゝつた。
 十96 2 「略」、リンカーンは十歳頃までは本を読むことは殆ど出来なかつた。
 十96 10 「略」、ところが母のとりなしで終に學校に入ることが出来たので、
 十100 5 図 「略」、辨しやうすることが出来ませんから、
 十106 5 図 「略」、甘蔗・綿花・米等もよく出来る由に候。
 十116 2 「略」、一般の人民の後援がなければ自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。
 十116 7 「略」、例へば教育・衛生等の自治團體の事業は、地方人民が、之に協力することによつて、始めて其の効果を完全に擧げることが出来る。
 十118 1 「略」、農場主はせつかくよく出来てゐる麥を、たくさん馬や犬にふみあらされてはたまらないと思つて、
 十123 8 「略」、見てゐるうちに大きなフラスコが出来た。
 十123 10 「略」、何が出来るであらうかと思つたり、
 十1210 「略」、此の航海によつて彼の博物學者としての基礎が十分に出来、

つてゐると、
 十1213 9 「略」、此の規則正しい生活とふだんの養生とによつて、七十四歳の長壽を保つことが出来た。
 十23 2 「略」、かやうな仕方は唯一時の利益を得るに止つて、永續することが出来ないから、
 十59 6 「略」、ねぢは、自分が此處に位置を占めたために、此の時計全體が再び活動することが出来たのだと思ふと、
 十70 3 「略」、王の怒はいよくつので、もうどうすることも出来ない。
 十78 8 「略」、これでもう魚は逃出すことが出来ない。
 十90 1 「略」、これ等の命令も國の規則であつて、
 十90 5 「略」、一國文化の程度は、其の國民が國法を守る精神の厚薄に依つて測ることが出来るといはれてゐる。
 十93 2 「略」、父のいさめも妻のなげきも、此の決心をひるがへすことは出来なかつた。
 十93 10 「略」、彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聴いたが、どれも満足することが出来ない。
 十98 1 「略」、石は釋迦の足を傷つ

つてゐると、
 十1210 「略」、此の航海によつて彼の博物學者としての基礎が十分に出来、

けただけで、目的を果すことは出来なかつた。

十二107 8 出来る氣づかひはないと見

くびつてゐた岩山の掘抜も、〈略〉。

十二107 9 〈略〉 岩山の掘抜も、これ

ではどうにか出来さうである。

十二108 2 そこで人々はいつそ我々も出来るだけ此の仕事を手付けて、〈略〉と相談して、〈略〉。

十二110 3 老僧の終始一貫した根氣は、遂に村人を恥ぢさせたものか、仕事を助ける者が又ぼつ／＼と出来て来た。

十二116 3 殊に近年は水力電氣の驚くべき發達にともなひ、〈略〉、石炭の火力による蒸氣力は、多くの場合之に敵することが出来なくなりまして。

十二117 10 〈略〉、其の後無線電信が發明されて、〈略〉、自由に消息を交換することが出来るやうになりました。

十二118 6 〈略〉、遠い處の音楽・演説・講話などを居ながら聞くことが出来ることや、〈略〉。

十二133 10 随つて國民は〈略〉、又其の誇を永久に持續しようとする心掛けも出来て、〈略〉。

十二135 9 すべて日本人の短所として、性質が小さく狭く出来たきらひがある。

十二136 3 〈略〉、かういふ短所はやが

て我が國民から消去するであらうが、出来る限り早く之を一掃することは我々の務ではあるまいか。

てぎわ 「手際」(名) 1 手ぎは

八106 7 分業で仕事をする時、誰か一人の手ぎはが悪いと、全體の出来までも悪くなる。

でぐち 「出口」(名) 2 出口

五100 8 向つて右が入り口、左が出口で、

まん中が帝室用になつてゐます。

五102 5 汽車の發着時刻が近づく、自動車・馬車・人力車がいくだいたなく、入口・出口によつて來ます。

てこ 「挺子」(名) 2 挺 挺

七100 3 此の時清正は、地震と共にねえ、家來の者二百人に挺を持させて、一さんに伏見の城へかけつけました。

七101 9 上様をはじめ皆様、おしの下になつては居られぬかと存じ、家來ども二百人に挺を持たせてかけつけました。

てこたえ 「手筈」(名) 2 手こたへ

七12 7 時々手こたへがして大きな蛤が出た。

九105 3 北風、今日は大分手こたへがあるぞ。

でさかり 「出盛」(名) 1 出さかり

四2 8 ちやうど人の出さかりで、お宮のすずがひつきりなしになつてゐます。

でし 「弟子」(名) 4 弟子

七49 9 トンテンカン、トンテンカン

ト、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音が聞エマシタ。

八63 1 〇〇〇、多くの弟子保己一につきて學びたれば、〈略〉。

八63 6 〇〇 或夜弟子をあつめて、書物を教へし時、〈略〉。

十二96 10 彼等は釋迦の教を聴いて即座に弟子となつた。

てした 「手下」(名) 2 テシタ

二72 3 ムカシ 大江山 ニシユテンドウジ トイフワルモノ ガキマシタ。〈略〉。タイヘン力ガツヨク、テシタモ大ゼイアリマシタ。

二78 1 ライクワウノケライモ、シユテンドウジノテシタヲノコラスタイデシテシマヒマシタ。

でしたち 「弟子達」(名) 1 弟子たち

十46 9 弟子たちも此の主人を見限つて、一人逃げ二人逃げ、〈略〉。

でしども 「弟子共」(名) 1 弟子ども

八64 1 〇〇 〈略〉、弟子どもは「略」と言ひしに、保己一は「略」。

です (助動) 444 です です 《デシ・デス・デセ》

一20 7 スズシイカゼガフイデ、ヨイココロモチデス。

一28 2 コレハワタクシノハコニハデス。

一28 4 コノタカイトコロハヤマデス。

一28 7 コノヒクイトコロハカハ

デス。

一31 3 〇〇 「ソレナラ五ハデス。」

一31 7 〇〇 「ソレデハ六ハデス。」

一48 7 〇〇 「オコシノモノハナンデスカ。」

二2 4 コレハウンドウクワイノエデス。

二3 2 イマ、ツナヒキノマツサイチユウデス。

二3 7 ゴランナサイ、ミンナガチカラワイレテ、一シャウケンメイデス。

二5 3 〇〇 「オチヨサンデスカ、ヨクイラツシヤイマシタ。」

二6 7 〇〇 「オカアサン、オカアサンハドノハナガパンオスキデスカ。」

二7 4 〇〇 オカアサンハアノシロイハナガスキデス。

二8 1 〇〇 ワタクシハアノアカイ大キナハナガスキデス。

二8 5 〇〇 「ソノツギハ、〈略〉、小サナキイロイキデス。」

二8 6 〇〇 「アレデスカ。アノキクハ〈略〉。」

二9 1 〇〇 アノキクハオトウサンモタイソウオスキデス。

二19 2 一メンニアカルクナツテ、ヒルノヤウデス。

二19 7 コチラノクライモリノ中ニミエルノハ、ドコノウチノアカリデセウ。

二252 ミヨチャンハマダ一ツデス。
 二256 〈略〉、ワタクシハミヨチャ
 ンノネエサンデス。
 二292 大キナスズヲネコノ
 クビニツケテオイテ、ソノオト
 ガキコエタラ、ニゲルコトニ
 シテハドウドセウ。
 二307 〇「オトウサン、モウイクツ
 ネタラ、オ正月デスカ。」
 二311 〇「モウ五ツネレバ、オ正月
 デス。」
 二356 〇「モチハタイセツナオ米
 デコシラヘタモノデスカラ、
 イテハイクマセン。」
 二405 耳ハナンテンノハデ、
 目ハナンテンノミデス。
 二551 〇「サア、犬デス。」
 二574 ワタクシハアナタノオト
 モダチデス。
 二633 コレデ本ノ中ノジモ、
 エモ、〈略〉モ見ルノデス。
 二651 子牛ハコノアヒダウマレ
 タノデス。
 二684 サクラガサクノハコレ
 カラデス。
 二686 ナノ花ガサクノモコ
 レカラデス。
 二687 テフテフガマフノモコ
 レカラデス。
 二726 〈略〉、ナカナカタイヂスル
 コトガデキマセンデシタ。

二745 山ハケハシク、ミチハワ
 カリマセンデシタガ、〈略〉。
 二762 〈略〉、イビキハカミナリ
 ノヤウデシタ。
 三113 イマハサクラヤナタネ
 ノ花ザカリデス。
 三25 カゼモアタタカデ、オモ
 テデアソブニハ一バンヨイト
 キデス。
 三78 ハネノ下ニモ二三バキ
 ルヤウデシタ。
 三86 ヒヨコハミンナデ十バ
 デス。
 三88 タベモノデモサガスノデ
 セウ、キイロイクチバシデ、トキ
 ドキデメンヲツツキマス。
 三103 私ハ〈略〉、ヒヨコヲ見ル
 ノガタノシミデス。
 三143 お花はことし九つです。
 三153 〈略〉、一ばんほそいの
 がこゆびです。
 三161 〇〈略〉、中ゆびとこゆび
 のあひだにあるのがくすりゆ
 びです。
 三162 〇「さうです。それではあ
 しのゆびのなをしつてゐま
 すか。」
 三164 〇「おなじことせう。」
 三173 〇あしのゆびは、おやゆ
 びとこゆびのほかにはなが
 ないのです。
 三187 〇「それではをんなでせ

う。」
 三191 〇「それではをとこの子で
 すか。」
 三192 〇「いいえ。としよりです。」
 三195 〇「かほちゆうひげだらけ
 です。」
 三196 〇「それではてもあしも
 ないでせう。」
 三198 〇「わかりました。だるまさ
 んです。」
 三221 〇〈略〉、それは小二郎のう
 ちのいぬでした。
 三231 〇〈略〉、かちまけはありませ
 んでした。
 三261 〇そこから竹の子が出る
 のです。
 三271 〇あれはいまにさを竹に
 でもなるのでせう。
 三277 〇〈略〉、のぼしておや竹に
 するのださうです。
 三284 〇〈略〉、おちいさんに、あれ
 で竹うまをこしらへていただく
 つもりです。
 三315 〇五ーおちいさんがその水車
 やのばんをしてゐるからで
 す。
 三316 〇五ーおちいさんはおもしろい
 ちいさんです。
 三323 〇〈略〉、いつもきげんよく
 うたをうたふおちいさんです。
 三326 〇〈略〉、こぬかだらけになつ
 てはたらくちいさんです。

三351 〇五ーおちいさんはことし六
 十九ださうです。
 三355 〇〈略〉、チャワンヲモツ方
 ノ手ハ左デス。
 三365 〇〈略〉、オケイコノトキア
 ゲルノハ右ノ手デス。
 三472 〇〈略〉、日ノハイル方ガ
 西デス。
 三476 〇〈略〉、左ノ手ノ方ガ北
 デス。
 三487 〇〈略〉、デ、一バン目ダツノ
 ハ私ドモノ學校デス。
 三508 〇車ヲヒイテキタ人ガベ
 ンタウデモタベルノデセウ。
 三514 〇モウオヒルニナツタノ
 デセウ。
 三556 〇かへるはやなぎのつゆ
 を虫とでもおもつたのでせう、
 〈略〉、何べんも何べんもとびつ
 かうとします。
 三583 〇アブラゼミデス。色ガウ
 スクテ、ヌレテキルヤウニ見え
 マス。
 三602 〇アノセミモコノ中ニキ
 ルノデセウ。
 三626 〇「さあ、私がお魚をかけ
 ましたら、みなさん一しよに舟
 を出すのですよ。」
 三655 〇五郎さんの舟には、て
 ふてふのせんどうさんがのつ
 たから、かつたのでせう。
 三698 〇コマツテニイサンニ見テ

モラヒマシタラ、「略。」トイフ
コトデシタ。
三702 今日 はうちの 虫ほして
す。
三706 この 黒い もめんの もんつ
きは 私 の です。
三708 「略」しまのはかまはお
うさんの です。
三713 「略」はばのせまい 黒い
のは おばあさんの です。
三718 それから、「略」ねずみ色
の もんつきは おかあさんの で
す。
三725 「略」めりんすの あ
はせは 私 の です。
三731 私どもは あれを 着て、
をばさんの 村のお祭によばれ
て行くの です。
三738 ソノトキ カウモリハ
「略。」トイッテ、ドチラヘモ
ツキマセンデシタ。
三803 ねえさんは 遠いところへ
およめに行つて いらつしやる
の です。
三844 そばへよつて 見ますと、
見たこともない きれいな 着物
でした。
三854 「いや、これは 私が 今
ここで ひろつたの です。」
三858 「いや、それは「略」人
げんには ようの ない もの で
す。」

三867 れふしは かへしませんでした。
三873 「あまり おかはいさうで
すから、おかへし申します。」
四14 今日はお祭です。
四43 あちらこちらに 子どもの
ならすらつばやふえの 音も
して、たいそうにぎやかです。
四46 「略」ぼんには その おい
はひの 火花が 上るさうです。
四53 「略」その中に 私の 木
が一本あります。あま柿です。
四56 これは 私が 生れた年、
おぢいさんが 私のぶんに つぎ
木をして 下さつたの ださう
です。
四63 「略」そのお年で つぎ
木をなさるの ですか。
四64 「略」下男の 太七が わら
ひながら、「略」といつたさ
うです。
四67 その時 おぢいさんは
「略。」とおつしやつたといふ
ことです。
四81 この二十五日は おぢいさ
んの めい日です から、「略」。
四82 「略」たくさん 取つて そな
へるつもりです。
四85 キノフハ十月三十一日デ、
天長節ノオイハヒ日デシタ。
四97 キノフハ日本國中ノ人
ガミンナ天皇ヘイカノバンザ

イヲイハツタノデス。
四183 コノ 神様ハサキホドオ通
リニナツタ 神様ガタノ弟ノ
方デス。
四186 「略」フクロヲカツイデ
イラツシヤツタノデ、オオクレニ
ナツタノデス。
四21「略」アナタハオナサケブカイ
オ方デスカラ、「略」。
四226 「略」には 一ぱいもみが
ほしてあつて、足の ふみばも
ないくらゐでした。
四278 本町通は 夜も ひるのや
うで、りはつ店などは まぶしい
ほどです。
四287 電話も 近い中に 私ども
の 町へかかるさうです。
四293 これは 大じかけで れんぐ
わを やく工場です。
四296 「略」工場の 近くにてい
しや場が 出来るさうです。
四298 さうなつたら 町は どんな
にべんりになるでせう。
四316 「略」、一しよに向ふの方
へ行つて みました が、だれも
居ませんでした。
四32「略」それは 山びこです。だ
れも 居るのではありません。」
四327 「父」こむまりを かべに
なげつけると、はねかへるでせ
う。」
四334 「それが 山びこです。」

四337 「こちらで「略」、おこつて
いへば、おこつて 答へるの です。
四341 向ふで「ほか」といつた
のも、お前が 先に「ほか」と
いつたからです。
四343 フクロフハオモ白イカツ
カウノ鳥デス。
四367 モズハ小サイガ、マケヌ
氣ノ鳥デスカラ、「略」。
四372 スズメハヨワイ鳥デス
ガ、「略」。
四376 ソレデモ フクロフハ「略」、
大キナ目ヲ見ハツテ キヨトキヨ
トシテ 居ルバカリデス。
四404 昨日は うちの すすはき
でした。
四434 天じやうをはらふ、「略」、
まるで いくさのやうでした。
四472 「略」取手は「略」と友一
の あねの 道子です。
四486 「道子」私が 取つたの で
す。」
四488 友二「いいえ。僕が 取つ
たの です。」
四512 道子が 十二まい、「略」、友
一は たつた二まいでした。
四532 「此の あひだ ひかうせん
が 東京の 空をとびました。こ
れは 其の 夢はがきです。」
四598 私ハカンナヲカケテ 居
ルノヲ見ルコトガスキデス。
四622 さをの 先の 扇をいよ

といふのでせう。

四六二 いくら弓の名人でも、これを一矢でいおとすことは、なかなかむづかしさうです。

四六六 どんなにか鳴いたのせうが、うちのもものは朝までしらずに居ました。

四六九 これは私が七つの年のことでしたが、〈略〉。

四七六 私ドモハ何ト何デセウ。

四七八 私は道ぼたの一本杉です。

四七五 まことによくはたらく人たちでした。

四七五 此の人たちの田や畠の作り方はていねいでしたから、〈略〉。

四七五 西の村一番の金持のむすめさんが、此の人の所へおよめに來ましたが、其の時はなかなかにぎやかなことでした。

四七六 今の村長さんも子どもの時からすなほで、なさげぶかい人でした。

四七八 あのうちは此の上よくなるばかりでせう。

四七四 此の間さびしいおさう式が私の前を通りました。それは〈略〉人のでした。

四七三 それからどこへ行つて居たか、村にもひさしく居ませ

んでした。

四七八 其の後間もなく死んだのです。

四七九 〈略〉、あまり氣のどくでしたから、私が風の音をこつとさせてやりましたら、〈略〉。

四八三 此のよいお天氣に、どうしたのでせう。」

四八八 〈略〉、「河上の方で雪がとけはじめたのだらう。」といふことでした。

四八八 ほぼしらが二本、えんとつが四本の船です。

四八二 そばに乗つて居た人の話では、軍かんだといふことでした。

四八五 マア、キレイデスコト。

四八五 ダイリ様ノ下ノダンニ、弓ヤ矢ヲ持ツテ居ル人ハ何デセウ。

四八六 クワンデヨノリヤウワキニカザツテアルノデセウ。

四八六 ズキジンデス。

四八六 ダイリ様ノゴ家來ダサウデス。

四八六 オキク「五人バヤシノ一番右ニ居ル人ハ何ヲスルノデセウ。」

四八六 扇ヲ持ツテ居ル人デスカ。

四八六 アレハウタヲウタフ人ダサウデス。

四八四 「ラバサン、今日ハ。」「オ

キクサンデスカ。

四八五 明日ハオセツクデスカラ、〈略〉アソビニオ出デナサイ。

四九八 五郎はまだ小さくて、何も分りませんでした。が、〈略〉。

四九三 〈略〉、長い間つけねらひましたが、手を出すすきはありませんでした。

四九四 〈略〉、雨のふるばんの事です、二人は〈略〉くどうのやかたへ向ひました。

五三三 ここがあなたの教室です。

五四二 「此の方は〈略〉、今日から此の級へはいる方です。」

五四四 これは級長の山田さんです。

五五六 〈略〉、うめやさくらも、こちらよりはすつと早くさくさうです。

五五七 何でも汽車に二日二ばん乗通して、こちらへ着いたのださうですから、〈略〉。

五五八 〈略〉、何百里かはなれてゐるのでせう。

五六一 こちらは今さくらのさかりですが、〈略〉。

五六二 〈略〉、あちらでは、もうとうにちつてしまつたさうです。

五六六 聞けば級のものが〈略〉、いちめたのださうです。

五七二 中村君は學問もよく出来るし、うんどうも上手です。

五五二 ぼちが昨日から病氣で、ごは

んをたべませんので、學校に居てもしんばいでしたが、〈略〉。

五七三 一番こつちは金鶏勲章でせう。

五七五 ツバメハ〈略〉、人ノヤクニ立ツ鳥デス。

五二八 これが私のうちです。

五三三 〈略〉、新聞配達と四五人の人のすがたが見えるだけでした。

五三四 〈略〉間数が七つもあるとは、どうしても思はれませんでした。

五三四 ひよろ松は、葉がほこりだらけでした。

五三四 〈略〉、左どなりは時計屋です。

五三五 よいお天氣です。

五三七 見える・いはざる・聞かざるといふのださうです。

五三六 〈略〉大きな杉の木がありました。御神木ださうです。

五四四 昔熊襲のかしらに川上のたけるといふ者があつて、天皇のおほせにしたがひませんでした。

五四四 それをひろつて、まぶしへうつすのですが、〈略〉。

五四三 〈略〉音がしてゐますが、これは蠶が動くからです。

五四四 今桑をたべてゐる蠶も、明日の朝までには、たいてい上つてしまふさうです。

五五二 おかあさんもねえさんも、此の五六日は夜もろくろくおやすみにならないのです。

五506 カウ毎日降ル雨ハドウナツテ
シマフノデセウ。
五513 ハジメハ糸スデホドノ流デス
ガ、〈略〉。
五517 雨水ノ流レル道ハ地圖ニカイ
タ川ヲ見ルヤウデス。
五527 〈略〉水蒸氣ニナツテ、空へ
カヘルノモアルサウデス。
五575 晴れた日、月の夜、雪の朝、
いつ見てもよい景色です。
五636 〇「おとうさん、〈略〉、まだ
一里半もあるのですか。」
五645 〇「神明様のこちらにある白
壁造の家は工場ですか。」
五663 道の兩がはは一面に青田で、
ちやうど田の草取のさい中です。
五673 〇「私どもの村では、どうし
て池を掘らないのでせう。」
五823 〈略〉、宗任は〈略〉てきの大
將なのです。
五832 〇〈略〉、叔母さんの町に大水
が出たさうです。
五834 〇皆様におけがもございませ
んでしたか、〈略〉。
五843 〇〈略〉、うちには大した事も
ありませんでしたが、〈略〉。
五843 〇〈略〉、中々のさわぎでした。
五844 〇九月にはいつては雨つゞき
でしたが、〈略〉。
五873 〇〈略〉、どうすることも出来
ませんでした。
五878 〇仕合はせに水はそれからふ

えませんでした、〈略〉。
五931 もし間に合はないと、向ふへ
大そうおくれて着くからです。
五968 ウチノブダウトハ種ガチガフ
ノダサウデス。
五986 熊が来て、〈略〉、ほんたうの
死人だと思つたのでせう、〈略〉。
六144 〇さうです。
六18 〇おるす居はおぢいさんと私だ
けです。
六27 〇〈略〉、一山は十俵つづです。
六48 〇「にいさん、富士山はまつ
白でせうね。」
六87 〇「高くて名高いのは、どの
山ですか。」
六118 〇飯ヲタクカマモ、〈略〉、私
ノ乗ルゴトクモ鐵デス。
六125 〇今デハ鐵ハ〈略〉、人ノ役
ニ立ツコトハ銅以上デス。
六133 〇私タチノサビルノハ人が使
ハナイカラデス。
六136 〇アレガヤハリサビデス。
六137 〇シカモ其ノサビハ大ソウ毒
ナ物デス。
六138 〇其ノ時鐵ピンハ「〈略〉。」ト
言ツテ、中々マケマセンデシタ。
六151 〇〈略〉、にいさんは初音を五六
本取つたやうでした。
六236 〇其の夜のことで、義仲は
〈略〉ときのこゑをあげさせました。
六285 〇「私です。蟻です。」
六285 〇「私です。蟻です。」

六292 〇だつて分り切つた事でせう。
六642 〇〈略〉、だれ一人もらひ泣きを
しない者はありませんでした。
六694 〇京都は長い間の都ですから、
〈略〉。
六744 〇「絹糸ト木綿糸デス。」
六748 〇「マダアリマセウ。」「毛絲
デス。」
六754 〇「ソレダケデスカ。」
六755 〇「セルモサウデセウカ。」
六756 〇サウデス。
六761 〇「ソレハメリンスデ、絹デ
セウ。」
六762 〇イ、エ、ヤハリ毛絲デオツ
タ物デス。
六764 〇ラシヤフランネルトチガ
ツテ、絲ガ細イカラ、氣ガツカナ
イデス。
六766 〇「其ノキレイナモヤウハ、
ドウシテツケルノデセウカ。」
六771 〇コレハ、〈略〉、縮緬ノ友禪
ト同ジデス。
六772 〇コレゴラン、表ダケデ、ウ
ラノ方ハ染メテナイデセウ。
六1007 〇〈略〉、よいあんばんいです。
六1017 〇「義一さん、それはお節供
に使ふのですよ。」
六1038 〇〈略〉、二三日見物して歸ら
れるさうです。
七358 〇町に〈略〉、日露戦争の時
の大將方の名を取つてつけてあるの
は面白いでせう。

七362 〇〈略〉、此の頃は其の葉の美
しいさかりです。
七368 〇〈略〉、其の中日本人は五萬
人、支那人は六萬人ですが、〈略〉。
七371 〇〈略〉、日本人は年々ふえる
ばかりださうです。
七381 〇〈略〉、誰でもおどろくのは、
波止場の大きなことです。
七391 〇〈略〉、輸入品は綿布が一番
多いといふことです。
七395 〇〈略〉、氣候も思つたよりよ
くて、快晴の日が多いやうです。
七496 〇〈略〉、チョット見ルト、コハ
イヤウデシタガ、〈略〉。
七497 〇〈略〉、イタツテ正直デ、氣立
ノヤサシイ老人デシタ。
七515 〇イカニモ丈夫サウナ老人デシ
タガ、〈略〉。
七532 〇私は年中航海をしてゐるも
のですから、〈略〉。
七533 〇皆さんは海を御存じでせう。
七534 〇汽船も軍艦も御存じでせう。
七543 〇どちらを向いても青い水ば
かりです。
七566 〇航海といふものは、かうい
ふ面白いものですが、〈略〉。
七643 〇〈略〉一人の男が、〈略〉、相
談は出来ないものと見きつたのでせ
う、〈略〉、一人で川へはいつて行き
ました。
七667 〇「さうです。」
七715 〇小ぶくろの方は私どものだ

んなが國へおやりになる金ですが、
《略》。

七16 國 《略》、だんなはなさけ深い
方ですから、《略》。

七47 國 「せつかくですが。」

七83 見れば自國の兵士です。

七96 國 「かうですか。」

七97 國 あゝ、さうです。

七97 國 《略》 先手の大將は加藤清
正・小西行長の兩人でした。

七97 三成は秀吉のお氣に入りで
から、《略》。

七107 國 「おとうさん、ヘンとは何
のことですか。」

七116 國 「十五字です。」

八124 國 あなたの方の村が勝つたので
す。

八126 國 耕造さんの心掛は實に見上
げたものです。

八228 吳鳳は《略》、亞里山の役人
でした。

八327 《略》、其の中貴重なものの一
つは朝鮮人參です。

八327 これはもと野生のものでした
が、《略》。

八343 《略》、望の赤子は居ません
でしたが、《略》。

八472 國 此の爲替はほんのわづかで
すが、何か好きな物を買つて上げて
下さい。

八655 國 横濱を出てから、ちやうど
十五日目です。

八664 國 《略》 大地震があつて、町
は大方こはれたのですが、《略》。

八671 國 サンフランシスコはカリ
フォルニア州にあるのですが、《略》。

八679 國 ことに野菜や果物が有名で
す。

八686 國 つまりお前たちよりもよけ
いに勉強してゐるわけです。

八703 國 《略》、煙突の煙で空は眞黒
だが、《略》、健康には害がなささう
です。

八705 國 此の繪葉書は《略》牧場の
實景です。

八735 國 アメリカ人は《略》、何し
ろ大した勢です。

八736 國 此所は有名な商業地ですが、
《略》。

八753 《略》、イスパニヤ人の喜んだ
ことは非常なものでした。

八787 國 「今手に持つていらつしや
るのは、みんな切符ですか。」

八788 國 さうです。

八788 國 三枚とも切符です。

八789 國 「それをみんなうちで納め
るのですか。」

八791 國 さうです。

八793 國 これは村の税で、村の學校
や役場の費用などになるのです。

八795 國 一枚は縣の税で、一枚は國
の税です。

八802 國 軍隊や、《略》、其の他いろ
くゝの費用になるのです。

八804 國 《略》、之を納めることは國
民の務です。

八805 國 「縣や國の税も、村の役場
へ納めれば、よいのですか。」

八807 國 さうです。

八808 國 村役場で、《略》まとめて、
それゝゝへ送るのです。

八809 國 「どのうちでも、納める金
高は同じですか。」

八812 國 くはしいことは又學校で習
ふでせう。

八881 國 此の方はどなたですか。

八891 國 「先生、どうして口がきけ
たんでせう、《略》。」

八901 國 口の動き方を見てさとのの
です。

八909 國 《略》 返事をしないのは、
あなたの口が見えないからです。

八943 國 先生、私の娘にもあゝして
教へて下さつたのでせうか。

八1014 國 君等はかうなることは知ら
なかつたのですか。

八1022 國 君等は《略》少しも食物を
送つてよこしませんでした。

八1025 國 其の爲に《略》君等は自分
で苦しむやうになつたのです。

八1027 國 今になつて始めて、考違を
してゐたことがお分りになるでせう。

八1031 國 こんなわけですから、《略》
互に親しみ合つて暮しませう。

八1033 國 世の中といふものは、すべ
て相持のものです。

八1074 國 来る十六日は私の誕生日で、
ちやうど日曜日ですから、《略》。

八1078 國 お呼びするのは大い近所
の人で、あなたが知つていらつしや
る方ばかりです。

八1087 國 まことに御苦勞様ですが、
《略》、お出でを願ひたうございます。

九34 國 おとうさんはじめ皆様お元
氣で何よりです。

九310 國 冬でも春でもこちらではち
やうど内地の夏のやうです。

九43 國 《略》、なかゝ住みよいと
ころのやうです。

九52 國 《略》 殊に珍しいのはコ、
椰子の木やパンの木などです。

九510 國 これから椰子油を取り、石
鯨・蠟燭なども造るのださうです。

九610 國 味はまことにあつさりした
ものです。

九73 國 これ等の植物が思ふまゝに
茂つてゐる様子は實に見事です。

九77 國 《略》、あざやかな緑の世界
は、何ともしやうのない、氣持
のよいものです。

九79 國 《略》、其の雨水がまた大切
な飲料水となるのです。

九710 國 海の中もなかゝきれいで
す。

九87 國 何だかおとぎばなしの世界
にでもまよひこんだやうです。

九296 《略》 大きな河が、一大絶壁
をみなぎり落ちるのですから、《略》。

九29 〇 略、數百歩はなれた所でも、器に盛つた水が波紋を多かく程です。
 九30 〇 略、此の二つを合はせてナイヤガラニヤガラの瀧たきといふのです。
 九31 〇 略、瀧つぽを見物して廻るのは、實に壯快です。
 九47 〇 略、植手が八人になつて、にぎやかでした。
 九49 〇 略、おとうさんは今朝も、大そう元氣です。
 九50 〇 略、社長さんは、ここにこしてゐる元氣な方です。
 九50 〇 略、あの精米會社の社長さんはえらい方なでせう。
 九53 〇 略、ほんたうにえらい人です。ね。
 九54 〇 略、『なにあに、もう一度出直すのです。』
 九58 〇 略、ほんたうにさうですね。
 九69 〇 略、叔父さん、此所は何所ですか。
 九83 〇 略、『ちいさん、今度は何ですか。』
 九85 〇 略、『にいさん、空にはあんなにたくさん星が見えますが、少しも動かないのですか。』
 九86 〇 略、星がそんなに位置の變るものなら、日當にならないでせう。
 九86 〇 略、それは何といふ星ですか。
 九86 〇 略、『でも、あんなにたくさんある星ですもの、それを見つけるのに大變でせう。』
 九87 〇 略、それを見つけるの

に大變でせう。』
 九89 〇 略、あゝ、あの一番高い杉の眞上の所にあるのが北極星でせう。
 九90 〇 略、私も餘程前に讀んだのですから、略。
 九91 〇 略、此の大熊こそは、略、おあさんのカリストだつたのですが、略、射殺すところでした。
 九92 〇 略、あぶなく親身の親を射殺すところでした。
 九92 〇 略、ジュピターといふ神様が、略、すぐに親子の者を天へ連れていつて、大熊座と小熊座になつたのださうです。
 九93 〇 略、ちやうど岡田さんは略、お話をなさつていらつしやる所でした。
 九94 〇 略、中でも面白かつたのは大雪溪せつがいのお話です。
 九95 〇 略、幅は二三町、長さは一里に近く、行つても行つても眞白です。
 九95 〇 略、登山者はんじきをはいて、略、此の坂を登るのです。
 九96 〇 略、急な坂を矢のやうに早くすべるのですから、略。
 九96 〇 略、僕も其の通りに見ましたが、略、實に壯快でした。
 九96 〇 略、雪溪が冬の世界ならば、此所は春の國でせう。
 九96 〇 略、何ともいへない美しさでせう。
 九97 〇 略、あの雷鳥といふ珍しい鳥も、略、はひ松の間に居るのです。

九98 〇 略、頂上に立つて四方をながめた景色は、全く雄大です。
 九99 〇 略、富士山も、略、かすかに見える事があるさうです。
 九99 〇 略、面白いお話がまだたくさんありさうでしたが、略。
 九115 〇 略、それは餘りな御言葉です。
 九115 〇 略、私も日本男子です。
 九120 〇 略、オトウサン、御用ハモウスンダノデスカ。
 九120 〇 略、ドウシテオ歸リニナツタノデスカ。
 九121 〇 略、オトウサンハ誰ニ投票ナサルノデス。
 九121 〇 略、オトウサンガワザくオ歸リニナクツテモ大丈夫デセウ。
 九125 〇 略、やあ、皆さん御苦勞ですね。
 九133 〇 略、おとうさんの若い時そつくりです。
 九135 〇 略、私も、略、よく道ぶしんに出たものでした。
 九138 〇 略、略、のは、何よりうれし事です。
 九131 〇 略、私どもの若い時分には、略、半分ぐらゐしか働きませんでした。
 九142 〇 略、そんな風でしたから、略。
 九144 〇 略、ぼんの道ぶしんなどは、何時も二日はかゝつたものでした。
 九149 〇 略、私が今度歸つて來て、はじ

めて青年團の規約を見た時は、略、少し氣になつたのでした。
 九157 〇 略、それにつけても、諸君にも大いに奮發していただきたいのです。
 九164 〇 略、宮本の伯父様の所に着いたのは昨夜七時でした。
 九165 〇 略、久々で皆様といろ／＼お話をして、非常に愉快でした。
 九161 〇 略、だん／＼市場に近づく、本通も横町も皆馬でいっぱいです。
 九182 〇 略、皆二歳駒にせうこまださうです。
 九205 〇 略、せりの始つたのは十時頃でした。
 九212 〇 略、非常ににぎやかです。
 九221 〇 略、飼主が泣いて別れを惜しむのも、もつともな事です。
 九225 〇 略、直段も一頭四千圓・五千圓といふ高いのがあるさうです。
 九227 〇 略、これ等の馬が略、或は馬車馬になり、或は耕馬になるのださうです。
 九238 〇 略、別封の繪葉書も歸りに買ったのです。
 九506 〇 略、あれは何ですか。
 九511 〇 略、銀行はお金を預ける處ですか。
 九513 〇 略、一體、なぜお金を預けるのですか。
 九526 〇 略、それでは當座預金の方が便利ですね。
 九531 〇 略、一體、銀行は人からお金を預つてそれをどうするのですか。

十532 大勢の人に利子を拂ふだけでは、銀行が損をしないでせうか。
十539 成程、うまく出来たものですね。」

十733 こちらも一同無事です。

十736 汽車で京城へ来る人は通常南大門驛で下りるのです。

十738 此の門が南大門です。

十741 門が、その處々にかういふ門があつて、出入口になつてゐたのださうです。

十749 南大門通から本町通・鍾路通にかけての一帶が、京城での一番にぎやかな處です。

十766 すみきつた空氣の中に煉瓦の赤色や、松の緑色などが鮮かに浮出して見えるのは實にきれいです。

十772 今では龍山も京城の中に編入されたのださうです。

十786 面白いのは、寒さと暖さがほとんど規則正しく交替することです。

十788 こちらでは昔から之を三寒四温といつてゐるさうです。

十802 目がまはりさうです。

十817 こんな大きなポンプを備へ付けてゐる處は、世界でも珍しいさうです。

十819 此處は電燈も無いので、眞暗です。

十828 略、これは石炭を運ぶために飼はれてゐるのださうです。

十847 今から四百年前の事ださうです。

十851 驚いて調べてみると、あたりは同じ眞黒な岩ばかりでした。

十854 これがつまり此の炭坑の始ださうです。

十919 「おとうさん、こんなに言ひにくい言葉は外に無いでせう。」

十923 「何といふ言葉ですか。」

十926 どうしてそんなに言ひにくいのです。

十949 僕は再三ことわつたのです。

十953 僕は残念でたまらなくなつたので、自分から先に立つて渡つたのです。

十962 「僕何だかきまりが悪くつて、さう言へなかつたのです。」

十1243 かういふ點から、あの青年をやとふことにしたのです。

十1244 略、何よりも、本人の行がたしかな保證です。

十147 のぶ子さんはちやうど、五年生の時の成績物に表紙をつけて、とちていらつしやる所でした。

十149 略、お取込があつたため、今まで延びてゐたのださうです。

十153 のぶ子さんは、學年の終におまめになるのださうです。

十171 略、取出したら後できつともとの場所へお入れになるのださうです。

十173 弟さんまでが、あんなに氣

をつけていらつしやるのは實に感心なことです。

十1371 「こんなに間をおいてよいのですか。」

十1712 どうも残念なことでした。

十1718 何でも、これから參宮をなさるのださうです。

十1754 古い言葉を調べるのに一番よいのは萬葉集です。

十17510 たゞ注意しなければならぬのは、順序正しく進むといふことです。

十1761 これは學問の研究には特に必要ですから、略。

十1884 「おとうさん、二百十日は立春から二百十日目に當るのですね。」

十1899 「こゝに『八十八夜』とありますが、これは何ですか。」

十1926 「どうして太陽暦を用ひるやうになつたのですか。」

十1193 僕はおとうさんから、略と言ひつけられてゐるのです。

十12010 僕は、略とおとうさんに言はれてゐるのです。

十1292 ロンドンは何と言つても世界の都會です。

十1306 略、感心したのは、市民が交通道德を重んずることです。

十1315 此處は、建物なども一般に壯麗です。

十1331 此の塔は、高さが

三百メートルもあるさうです。

十1348 汽車でドイツの國內にはいつたのは朝まだほの暗い頃でした

が、略。

十1381 にいさん、まあ何といふよい曲なんでせう。

十1395 私は音楽家ですが、略。

十1401 實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが、略。

十1402 略、あなたは演奏會へ行つてみたいとかいふお話でしたね。

十1412 「いや、これでたくさんです。」

十1432 「あゝ、あなたはベーターベン先生ですか。」

十1603 工合の悪いのは其の爲でした。

十1156 現今における電氣の利用は實にめざましいものです。

*てすう くてかず

てすり 「手摺」(名) 1 てすり

十1361 私は今ジュネーブ市のモンブラン橋のてすりにもたれて、略。

てだい 「手代」(名) 3 手代

八38 呉服屋の手代が、大きなふろしきづつみを石地蔵の前におろして休みましたが、略。

八39 越前守は手代の言ふ所を聞いて、略。

八43 越前守は呉服屋の手代を呼出して、其の中に盗まれた品のありな

しを調べさせました。

てだすけ「手助」(名) 3 手助

十一955 リンカーンは其の頃からもう父の手助をしなければならなかった。

十一985 それから又父の手助をしたり、人にやとはれたりすることになったが、略。

十一1012 リンカーンは父の手助をして忠實に働くと共に、略。
てだすけ・する「手助」(サ変) 1 手助する「スル」

十4610 弟子たちも此の主人を見限つて、一人逃げ二人逃げ、今は手助する人さへも無くなつた。

てちがい「手違」(名) 1 手違
九536 略、いろ／＼の手違から、銀行が破産しなければならぬ事になつた。

てちよう「手帳」(名) 1 手帳
八583 略 学校用具ヲ賣ル店ニ、手帳・筆・墨・繪具ナドト記シタル看板ヲ出シ、略。

てつ「鉄」(名) 11 テツ 鐵
一515 略、オニドモハテツノモンヲシメテ、シロヲマモツテキマス。

六116 略、モツトタクサンアツテ、モツト役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。

六118 略 飯ヲタクカマモ、物ヲニルナベモ、湯ヲワカス私モ、私ノ乗ル

ゴトクモ鐵デス。

六122 略 小サイ物カラ、略
大キナ物マデ、皆鐵ガナクレバ造ルコトガ出来マセン。

六124 略 今デハ鐵ハオアシノ仲間ニハハイレマセンガ、人ノ役ニ立ツコトハ銅以上デス。

六127 略 「ソレデモ鐵ハチキニサビテ、赤クナルデハアリマセンカ。」
六651 第十六 磁石 略。鐵ヲ引

六813 敵は此のいきほひにおそれ、鐵のくさりで船をつなぎ合はせた。
八1151 實に鐵は熱いうちにきたへなければならぬ。

十一821 略 幾年こゝにきたへたる鐵より堅き腕あり。
十二527 略 小さな鐵のねちが、不意に略、明るい處へ出された。

てづかのたろうみつもり「手塚太郎光盛」(人名) 1 手塚太郎光盛
六551 略、木曾の家來手塚太郎光盛の娘が頼朝に仕へて居りましたが、略。

てつき「手付」(名) 1 手つき
十二215 略 一三人の男が、器用な手つきで蜜柑を採つてゐる。

デツキ(名) 1 デツキ
八977 略 荒波洗ふデツキの上に、やみをつらぬく中佐の叫。

てつきやう「鉄橋」(名) 2 てつけう 鐵橋

四811 てつけうへかかつた時、

河を見たら、略。

十二46 略 松江を發したる汽車は略 斐伊川の鐵橋にかゝる。

てつげん「鉄眼」(人名) 11 鐵眼 鐵眼

十一1267 略 今より二百數十年前、山城宇治の黄檗山萬福寺に鐵眼といふ僧ありき。

十一1266 略 鐵眼大いに喜び、將に出版に着手せんとす。

十一12610 略 たま／＼大阪に出水あり。略。鐵眼此の状を目撃して悲しみにたへず。

十一1281 略 然れども鐵眼少しも屈せず、再び募集に着手して努力すること更に數年、効果空しからずして宿志の果さるゝも近きにあらんとす。

十一1283 略 鐵眼の喜知るべきなり。

十一1288 略 鐵眼こゝにおいて再び意を決し、喜捨せる人々に説きて出版の事業を中止し、略。

十一1293 略 二度資を集めて二度散じたる鐵眼は、終に奮つて第三回の募集に着手せり。

十一1294 略 鐵眼の深大なる慈悲心と、あくまで初一念をひるがへさざる熱心とは、強く人々を感動せしめしにや、略。

十一12910 略 かくて天和元年鐵眼が初度の募集を始めてより十八年の後に至りて、一切經六千九百五十六卷の

大出版は遂に完成せられたり。

十一1307 略 福田行誠かつて鐵眼の事業を感歎していはく、略。」と。

十一1307 略 「鐵眼は一生に三度一切經を刊行せり。」

てつげんのいっさいきやう「課名」 2 鐵眼の一切經

十一目15 第二十八課 鐵眼の一切經

十一1254 第二十八課 鐵眼の一切經

てつげんばん「鉄眼版」(名) 1 鐵眼版
十一1303 略 かくて天和元年略、一切經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられたり。これ世に鐵眼版と稱せらるゝものにして、略。

てつだい「手伝」(名) 9 手つだい 手傳いおてつだい・おてつだいする・おんてつだい

四407 おかあさんが略、下女や手つだひのものに、おさしづをしておはたらきになりました。

四435 手つだひの今古がおどけて、略、べんけいのまねをしました。

五711 村の人は代り合つて、一日置に普請の手つだひをすることになつた。

五734 略。」などと言ふ者が出て來て、手つだひに出る者は日ましにへつた。

九475 略、おとなりからの手つ

だひと合はせて、植手が八人になつて、にぎやかでした。

九47 田植がすんだので、昨夜は手つだひの人たちを呼んで、ごちそうをしました。

九58 正一のうちの人たちに手つだひもまじつて、〈略〉、ばたんばたんと穀^こで麥^{むぎ}を打つてゐる。

十二83 網をすき、舟を漕ぎ、漁業の手傳などして土人に親しみ、〈略〉。

十二108 手傳をする者が一人へり二人へりして、はては又村人全體が此の老僧から離れるやうになつた。

てつだう「手伝」(五) 2 手つだふ
《一ッ・ヒ》
四43 僕もはたきを持つて手つだひました。

八53 四日目の時は、おちいさんも手つだつてつかれた。

てつづき「手続」(名) 2 手續
十二89 又貴衆兩院の何れから提出された案は、他の一院のみで討議し、可決すれば同じ手續によつて奏上する。

十二90 此等の命令も國の規則であつて、〈略〉、其の制定も出来る限り慎重な手續を経る。

てつどう「鉄道」(名) 4 てつどう
鐵道 けいいべんてつどう・こうかてつどう・ちかてつどう・ほっかいどう

てつどうえんせんちゅう

四29 町を通過して、工場の近くにいていしや場が出来るさうです。

八72 地上の鐵道には勿論、高架鐵道にも、地下鐵道にも、電車や汽車が終日終夜、休なしに運轉してゐます。

十二48 栗は耐久・耐濕の性殊に著しきを以て、家屋の土臺、鐵道のまくら木等の用に供せられ、〈略〉。

てつどうせん「鐵道線」(名) 1 鐵道線
十二102 鐵道線

てつびん「鉄瓶」(名) 4 テツビン
てつびん 鐵ビン ↓ やかんとてつびん

六93 〈略〉、金物屋ノ店デ、ヤクワントテツピング、ジマン話ヲシ合ヒマシタ。

六113 テツピンハ「ナルホド、銅ハ〈略〉、役ニモ立チマセウガ、〈略〉、モット役ニ立ツ物ハ鐵デアラウト思ヒマス。

六13 其ノ時鐵ビンハ「〈略〉。」ト言ツテ、中々マケマセンデシタ。

九24 少年はてつびんの湯をついで老人にすゝめた。

てつべん「天辺」(名) 1 てつべん
六30 さうして〈略〉、所きはらず食ひつきました、頭のとつべんから

尾のさきまで、からだ中すき間もなく。

てつぼう「鉄砲」(名) 5 テツパウ
鐵砲 ↓ みずでつぼう
二13 人ガテツパウデ、一ドニ三パウチオトシマシタ。

七41 其の船に乗つてゐるなら、鐵砲を上げろ。

七42 すると甲板^{かんぱん}の上で鐵砲を上げた者がある。

七42 上がった。わかつたらもう一度鐵砲を上げる。

七42 すると、又鐵砲を上げたのがかすかに見えた。

てつぼうぐみ「鉄砲組」(名) 1 鐵砲組
十一28 秀吉、勝政の引足になりたるを見て、すかさず鐵砲組に合圖して銃火をあびせかけたれば、〈略〉。

でなおす「出直」(五) 1 出直す
《一ス》
九54 けれども社長さんは、それを少しも苦にしないで、『なかに、もう一度出直すのです。』といつて、笑つてゐた。

てにてに「手手」(副) 1 手にく
十90 村の社の掃除や終へし、はうき手にく此方をさして語

りつゝ来る若き人々、〈略〉。

てぬぐい「手拭」(名) 5 手ぬぐひ
三30 「ねえさんこれをあげま

す。」と、こしにはさんだ手ぬぐひのはしひきさいてさし出せば、〈略〉。

四40 おかあさんがあたまに手ぬぐひをかぶり、着物の上にちりよけを着て、〈略〉。

五25 店のしるしのついた手ぬぐひと物さが景物にはいつてゐました。

七14 女の人のはたすきをかけて、手ぬぐひをねえさんかぶりにしてゐる。

十41 さうして兄は腰の手ぬぐひを取つて鉢まきに、〈略〉。

てのはたらき「課色」2 手の働
八目 第八 手の働
八27 第八 手の働
では(接) 3 では

七88 マリーはどうかしてかくしてやりたいと思ひました。けれども貧しい木こり小屋で、戸棚一つもありません。こまつてゐますと、「では水を一ぱい下さい。」と兵士が言ひました。

八95 信吉は「いや、何、それには及びません。」といったが、すぐ「では、一日お借り申します。〈略〉。」といつて、〈略〉。

十62 同情深き妻の言葉に、主人はいたく心動きて、「ではお泊め申さう。

てはじめ「手始」(名) 1 手始
十二96 釋迦は世を救ふ手始として

先づかの五人の友をたづねた。
ではじめる「出始」(下二) 2 デハ

ジメル 出はじめる「一メ」

二183 ネエサン、デテゴランナサ

イ、月ガデハジメマシタ。

三36 罫 ア、日ガ出ハジメタ。

てはず「手筆」(名) 1 手はず

十二24 罫 月の十五日を期して總攻撃

を行ひ、一舉に江戸を乗つ取る手はずである。

てばや・い「手早」(形) 5 手ばやい

手早い「一ク」

三30 罫 あねは手ばやくをを

たてて、〈略〉。

七483 〈略〉、與五左衛門は忽ちはね

かへして、彦六を組みしき、手早く

首を取つてさし上げた。

九628 すると乗員は、一せいに飛起

きて、手早くつり床をくぐる。

十一1165 船員は手早く鯨の尾をくさり

で船はたにつないで、〈略〉。

十一312 罫 清正手早くかぶとのをを

切つたりければ、〈略〉。

てぶくろ「手袋」(名) 1 手ブクロ

三358 〈略〉、手ブクロ ニモ、クツ

ニモ 右左ガアリマス。

てほん「手本」(名) 1 手本

八1159 〈略〉乃木大將が、終生忠誠

質素でおし通して、武人の手本と仰

がれるやうになつたのは、〈略〉。

てま ↓かたてま

てまえ「手前」(名) 4 手前

九734 停車場にはいる手前でまた北

上川を見たが、〈略〉。

十761 罫 〈略〉、松林を後にして右に

昌徳宮、左に景福宮の壯大な構が

ある。其の手前は一帶に朝鮮家屋で、

〈略〉。

十762 罫 其の手前は一帶に朝鮮家屋

で、其の又手前には〈略〉りつばな

洋館がそびえてゐる。

十二104 罫 此の青のくさり戸にさし

かゝる手前、路をさへぎつて立つ岩

山に、〈略〉。

てまど・る「手間取」(五) 1 手間取

る「一リ」

七112 罫 判りにくいと配達がてまどり

ます

ても(援助) 97 テモ ても

ニ526 コンド ハイクラ ハヒヲ

マイテモ、スコシモ花ガサキマ

セン。

ニ671 ツナヲツケナクテモ、ヨ

ソヘハイキマセン。

三61。エヤ水ヲヤツテモ、

見ムキモシナイデ、〈略〉。

三317 罫 からすのなかない日は

あつても、五一ちいさんがうた

はない日はない。

三448 罫 どんなことがあつても、

ふたをおあけなさいますな。

三754 イツマデタツテモシヨウ

ブガツカナイノデ、〈略〉。

四706 〈略〉、又日ニテラサレテ

モトケマセン。

四776 此の人は〈略〉、大きくな

つても、うちの仕事もせず、

〈略〉。

四824 〈略〉、いつ見てもよいけ

しきだと思ひました。

五152 ぼちが昨日から病氣で、ごは

んをたべませんので、學校に居ても

しんばいでした、〈略〉。

五574 晴れた日、月の夜、雪の朝、

いつ見てもよい景色です。

五896 雨が降つても、風が吹いても、

夜でも、晝でも、此所に立通しに立

つてゐますが、〈略〉。

五896 雨が降つても、風が吹いても、

夜でも、晝でも、此所に立通しに立

つてゐますが、〈略〉。

六24 今このうちへ行つて見ても、

俵の山が出来てゐます。

六84 罫 奈良の春日山や三笠山は千

尺そこくだが、白根や槍岳よりも

知られてゐるし、京都の東山にして

もさうだ。

六135 罫 銅八人二使ハレテキテモ、

時々青い物ヲ出シマス。

六428 罫 軍隊へ來ても、學校でなま

けてゐる者は人一倍苦勞をする。

六587 さて萬じゆは、だれか母の事

をいひ出す者はないかと氣をつけて

ゐますが、十日たつても二十日たつ

ても、母の名をいふ者がありません。

六587 〈略〉、十日たつても二十日た

つても、母の名をいふ者がありませ

ん。

六928 二日たつても三日たつても汲

みに來ない。

六928 二日たつても三日たつても汲

みに來ない。

七54 罫 どちらを向いても青い水ば

かりです。

七585 罫 〈略〉、いくらきりが深くて

も、まるでちがつた方へ行くやうな

ことはありません。

七587 罫 又夜はいくら暗くても、星

が出てゐれば、それにたよつて方角

を知ることゝ出来るし、〈略〉。

七628 渡るといつても、自分一人で

は渡ることゝ出来ません。

七717 罫 〈略〉、此の金をあなたにさ

し上げまして、おしかりになるこ

とはあるまいと思ひます。

七735 罫 たとひ親子の者がうゑ死を

するやうなことがあつても、人から

いはれなく金をもらはうとは思ひま

せん。

七992 罫 〈略〉、此のまゝ切腹を命ぜ

られても、石田めとは中直りは致さ

ぬ。

七105 罫 其の方は無分別者で、大名

になつてもまだ仲間げんくわのくせ

がぬけぬ。

八395 〈略〉、近所の人にきいても知

らぬ知らぬと申します。

八479 〈略〉、ジツト止り木ニ止ツテ

つても、母の名をいふ者がありませ

ん。

六928 二日たつても三日たつても汲

キルノヲ見テモ、〈略〉、強ミガ全身ニミチミチテキル。

八546 図 「せいは高くて、まだだめだ。」

八667 図 アメリカ人の元氣なことは、これだけ聞いてもわかりませう。

八826 長い間かゝらなくても、工夫して大仕掛に水を落せば、大きな仕事をやる。

八871 図 わしはあちらに居ても、お前の事ばかり心配してゐた。

八1004 さうしてそれから後は、耳は食事の知らせを聞いても、聞かないふりをし、〈略〉。

八1005 さうしてそれから後は、〈略〉、日は食物を見ても、見ないふりをし、〈略〉。

八1042 たとひ休まず働いても、一人で一日に一包は造れまい。

八1043 かりに造れたとしても、それを十錢ぐらゐで賣つてはまうかるまい。

八1062 したがつて一包のマツチを十錢ぐらゐで賣つても、さうおうにまうかるのである。

八1065 うちを造るにしても、時計を造るにしても、家を建てるにしても、皆これによるのである。

八1065 〈略〉、時計を造るにしても、家を建てるにしても、皆これによるのである。

八1066 〈略〉、家を建てるにしても、

皆これによるのである。

九231 図 〈略〉、三代かゝつても、まだ全く手の着かない事が少くなかつた。

九273 図 それにはわたし死んでも國へ歸らずに、すぐに江戸へ出て、

九347 うす紅のかへで、銀ねずみ色の櫓、〈略〉、どの木を見てもなつかしい。

九443 図 同じ物ニテモ、意ノ如クニ得ラルレバ價ナク、得ガタケレバ價アルナリ。

九446 図 得ガタキ物ニテモ、有用ナラヌ物ハ價ナシ。

九516 図 〈略〉、始は近在の小賣店へ、毎日々々、降つても照つても、おろしに歩き廻つたものださうだが、

九517 図 〈略〉、降つても照つても、おろしに歩き廻つたものださうだが、

九9410 図 幅は二三町、長さは一里に近く、行つても行つても眞白です。

九9410 図 幅は二三町、長さは一里に近く、行つても行つても眞白です。

九1171 図 何にても多なりよなく言へ。

九1234 道雄ハ誰ガ何ト言ツテモ、
〈略〉 中村君ヲ選舉シヨウト決心シタ。
十95 〈略〉、一命をなげうつても王

を助けようと決心した。

十171 図 なれない私は、大丈夫といはれても、やはり馬のそばを通るのが危険なやうな氣がしてならなかつたが、〈略〉。

十461 しかしいくら工夫をこらしても、目ざす柿の色の美しさは出て来ない。

十516 図 さうで無くても、餘分のお金があると、ついむだな事に使つてしまふ。

十555 鳩は餘程遠い處で放しても、正しく方向を判定して、矢のやうに自分の巢に飛歸る。

十649 図 お宿は致しても、さて何も差上げる物はございません。

十9710 図 されど宋軍の大勢日々非にして、天祥の誠忠を以てしても如何ともすることあたはず。

十995 図 父母の病あつければ、醫藥の効なきを知りても、尚治療につとむるは人情の常にあらずや。

十1051 図 〈略〉、どれを見てもどれを見ても、一枝髪にさしてみたい。

十1051 図 〈略〉、どれを見てもどれを見ても、一枝髪にさしてみたい。

十1226 図 あいさつをしてもいてねいで、少しも生意氣な風が無く、〈略〉。

十1227 図 〈略〉、何を聞いても、一々明白に答へて、しかもよいいなことは言ひません。
十一42 今かりに一時間五十里の速

度で飛ぶ飛行機に乗つて行つたとしても、太陽に到着するには八十七年かゝるのである。

十一192 例へば、借りた金を、〈略〉いくら催促されても、返さない人がある。

十一376 図 今に御らん、此のくらゐ離して植ゑても、十五六年目には間伐をしなればならないやうになるから。

十一405 〈略〉、一番早く伐るとしても、其の時は僕がおとうさんくらゐの年になつてゐるわけだ。

十一633 畠にしても、小路によつて細かく仕切ることをしてないから、一枚の畠でうねが五町も十町も長々と續いてゐるのが少くない。

十一729 〈略〉、松坂の町はづれまで行つても、それらしい人は見えない。

十一938 図 したがつて二百十日も太陽暦なら大が九月一日で、ちがつても一日ぐらゐのものが、〈略〉。

十一10510 図 〈略〉、何處に行きても日本人を見かけ候は甚だ愉快に候。

十一1081 図 ブラジルは何處へ参りても果なき原野と森林とに候。

十一1135 〈略〉、其の組織に繁簡の差があるにしても、地方自治の精神に基づいて其の團體の幸福を進め、國運の發展を期することは皆同じである。

十一1161 〈略〉、直接間接に公共の事

務に當る者は、如何に其の職務に忠實であつても、一般の人民の後援がなければ自治團體の圓滿な發達を望むことは出来ない。

十一118 人何と言つても決してあけるな。

十一119 僕はおうさんから、誰が來ても此の門をあけてはならないと言ひつけられてゐるのです。

十一118 人「おうさんは、誰が來ても此の門をあけてはならないと言ひつけました。」

十一120 僕は、誰が來ても此の門をあけてはならないとおとうさんに言はれてゐるのです。

十一126 略、如何なる困難を忍びても、ちかつて此のくはだてを成就せんと、略。

十二19 略 されば同一日附の同じ新聞にても、發行地にて受取るものと他地方にて受取るものとは、記事に多少の相違あるを常とす。

十二20 どれを見ても、枝といふ枝にはもう黄金色に色づいた實が鈴なりになつてゐる。

十二21 どの山を見てもどの谷を見ても、蜜柑の木でない處はない。

十二22 どの山を見てもどの谷を見ても、蜜柑の木でない處はない。

十二23 又單に損益の點から見ても、かやうな仕方は唯一時の利益を得るに止つて、永續することが出来ない

から、略。

十二29 略 ロンドンは何と言つても世界の大都會です。

十二35 略 やがてベルリンに入つて見ても、勤儉の美風が市民の間にあふれてゐて、略。

十二54 略、どれを見ても自分よりは大きく、自分よりはえらさうである。

十二67 略 私はあるとあらゆる身の樂しみを退けても、ひたすら父上を大事に致すのを此の上もない仕合はせと存じてをります。

十二73 略 たとひ我が親でないにしても、略、姉上もお氣の毒とお思ひになりさうなものだのに、略。

十二87 略 林藏の怪しみもてあそばさるゝこと、此處にては更に甚だしかりしが、かゝる中にありても、彼は土地の事情を研究することを怠らざりき。

十二94 略、彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。

十二98 釋迦は八十歳の高年に及んでも、なほつゞれをまとひ飢と戦ひつゝ、各地を巡つて道を傳へてゐたが、略。

十二114 略 エヂソンの發明せるは略、アメリカにて特許を得たるものの中にても其の數實に千餘に及ぶ。十二136 そこで海外に移住しても外國人から思ひ掛けぬ誤解を受けて排

斥されるやうなことも起つて來る。

でも 接 1 でも

九86 略、それに、たくさん星の中に一つだけ、年中ほとんど位置の變らないのがあるから、まことに都合がよいのだ。」略。

「略。」「でも、あんなにたくさんある星ですもの、それを見つけるのに大變でせう。」

でも 副助 81 デモ でも 引 それでも・なんでも

二65 略 ナンニデモ スグビツクリシテ、カケ出シマス。

三82 略 ヒヨコガナクト、オヤドリハオハナシデモ スルヤウニ、コココトイツテ キマシタ。

三88 略 タベモノ デモ サガスノデセウ、略。

三98 略 ネコデモ ソバヘクルト、オヤドリハオコツテケヲサカダデマス。

三25 略 むぐらもち でも とほつたやうに、土がところどころもち上つてゐます。

三26 略 あれはいまにさを竹にでも なるのでせう。

三50 略 車ヲヒイテ キタ人ガベシタウ デモ タベルノデセウ。

三55 略 かへるはやなぎのつゆを虫とでも おもつたのでせう、略。

四30 略 友だちでも 居るのかと

おもつて、「おうい」とよぶと、略。

四58 略 ドンナ サマイ デモ、大工サン ハミンナ シルシバンテン ヲヌイデ、井セイ ヨク ハタライテ 居マス。

四62 略 いくら弓の名人でも、これを一矢でいとおとすことは、なかなかむづかしさうです。

四63 略 空をとんで 居る鳥でも、三羽ねらへば、二羽だけはきつといおとすほどの上手でございます。

四69 略、今でも 山がらのこゑをきくと、略、足のきずはどうしたらうかと思はないことはありません。

五54 略 中村君がこれまで居た所は日本の方で、冬でもめつたに雪のふることがなく、略。

五30 略 つりも出来るし、およぎも出來て、あつい夏でもすくしくくらす。

五47 略、少しでもおくれると、かごのうらや棚のすみなどで、繭をかけはじめますから、略。

五69 略、さうでもしなければ、外に村のさかえる工夫はあるまいといふので、略。

五89 略、夜でも、晝でも、此所に立通しに立つてゐますが、略。五89 略、夜でも、晝でも、此所

に立通しに立つてゐますが、〈略〉。

五90 8 いかな日でも葉書の百枚や封書の三十通ぐらゐるは、私の口にはいいないことはありません。

五92 6 〈略〉、急ぎの封書を入れに来る者が、途中で人と立話でもはじめると、私は氣がもめてたまりません。

六13 4 〇 モシセイ出シテ使ツテクレサヘスレバ、イツデモ光ツテキマス。

六16 4 〇 山の中でも、三軒家でも、住めば都よ、わが里よ。

六16 4 〇 山の中でも、三軒家でも、住めば都よ、わが里よ。

住めば都よ、わが里よ。

六37 1 〇 「たとひ金銀で作つた弓でも、御命には代へられませぬ。」

六43 7 〇 「海の上でも歩けさうだ。」

六48 3 〇 「之ヲ鯉ノ里歸トデモ言ツタヲヨカラウ。」

六79 3 はた拾、まり送、おにごつこ、何でもなれてしまへば、少しも陸上とかはならない。

六88 7 何だか地ひゞきでもするやうな氣がした。

七13 9 〈略〉、大きな蛤や馬刀貝でも取ると、おたがひに見せ合ふ。

七37 7 〇 〈略〉、来て先づ誰でもおどろくのは、波止場の大きなことです。

七38 5 〇 船から陸あげした荷物は、〈略〉、ハルビンへでも北京へでも送ることが出来ます。

七38 6 〇 船から陸あげした荷物は、〈略〉、ハルビンへでも北京へでも送

ることが出来ます。

七51 3 夏ノドンナ暑イデモ、アセヲ流シナガラ、日ノクレルマデ働イテキマシタ。

七68 6 〇 家の中で見えなくした物でも、中々出ないものでございます。

七70 3 〇 あなたから一文でももらふ氣があるくらゐなら、此所まで持つて来はしません。

八41 2 〇 地蔵様でも悪いことをなさつたと見える。

八46 6 〇 こちらのの方はどうでもなるから、心配するには及びません。

八46 8 〇 祖母一人孫一人の事だから、五日でも十日でも、〈略〉、ゆつくり看病してお上げなさい。

八46 8 〇 祖母一人孫一人の事だから、五日でも十日でも、〈略〉、ゆつくり看病してお上げなさい。

八77 9 〇 「明日にでもなつて、雪がはれてからではいけませんか。」

八80 9 〇 「どのうちでも、納める金高は同じですか。」

八82 5 雨だれでも石をうがつ。

八107 5 〇 〈略〉、母が私に、お友だちをお呼びなさい、おこはでもふかして上げようと申します。

九3 9 〇 冬でも春でもこちらではちやうど内地の夏のやうです。

九3 9 〇 冬でも春でもこちらではちやうど内地の夏のやうです。

九8 7 〇 何だかおとぎばなしの世界

にでもまよひこんだやうです。

九17 7 〈略〉、何時デモマハリノ物ノ色ガカハレバ、間モナクソレト似タ色ニカハルモノモアル。

九21 3 動物ノ形ヤ色デモ、〈略〉、コノヤウニイロノフシギナ事ガアル。

九29 9 物すごいひびきは萬雷の如く、〈略〉、數百歩はなれた所でも、器に盛つた水が波紋をゑがく程です。

九48 3 〇 世の中は何でも一生けんめいに働く者が勝た。

九53 9 〇 〈略〉、あの人は反對に、少しでも他人の負擔を軽くしようとして、〈略〉。

九87 3 〇 〈略〉、北斗七星といふ一群の星があつて、何時でも北極星の位置を知らせてくれるのだ。

九95 7 〇 眞夏の日中でも、杖を握つてゐる手などは、何時の間にかつめたくなつてしまひます。

十17 4 〇 〈略〉、土地の人は一向平氣で、三四歳の子供でも、腹の下などを自由にぐゞつて歩きます。

十47 9 さうして手當り次第に、何でもひつつかんで行つては窯の中へ投入込んだ。

十51 8 〇 だから、少しでも餘つたお金があつたら必ず預金にして置くものだ。

十51 10 〇 「預けたお金は何時でも返してもらへますか。」

十52 2 〇 當座の方は何時でも引出す

ことが出来るが、〈略〉。

十54 5 此の愛らしい小鳥が、他の方法では全く通信が出来なくなつた場合でも、〈略〉、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、〈略〉。

十54 7 此の愛らしい小鳥が、〈略〉、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、誰でも驚かない者はあるまい。

十57 2 鳩は〈略〉、四五キロメートルの處を往復して食事するぐらゐは何でも無い。

十74 1 〇 今でも城壁は大部分昔の面影を留めてゐますし、〈略〉。

十81 7 〈略〉、こんな大きなポンプを備へ附けてゐる處は、世界でも珍しいさうです。

十95 7 〇 〈略〉、ひよつとすると命を失ふやうなあぶない時でも、言出すことの出来ない程、〈略〉。

十11 3 〇 木でも見下されるのがいやなのか、〈略〉、低い處にあるもの程早く大きくなつて、〈略〉。

十11 39 9 生きた枝でも枯れた枝でも、〈略〉、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十11 39 9 生きた枝でも枯れた枝でも、〈略〉、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十11 39 9 生きた枝でも枯れた枝でも、〈略〉、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十11 39 9 生きた枝でも枯れた枝でも、〈略〉、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十11 39 9 生きた枝でも枯れた枝でも、〈略〉、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十11 39 9 生きた枝でも枯れた枝でも、〈略〉、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十11 39 9 生きた枝でも枯れた枝でも、〈略〉、木が太るにつれて其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだといふ。

十一 93 10 櫻の咲く季節でも霜の降る季節でも、やはりさうである。
 十一 93 10 こんな不便な暦でも長い間の習慣で、今でも使つてゐるものがあるやうだ。
 十一 94 1 略、今でも使つてゐるものがあるやうだ。
 十一 99 1 さうして其の本の内容がすつかりわかつてしまふまでは何度でも讀む。
 十一 99 6 リンカーンは 略、鬼の首でも取つた氣になつて一心に讀續けた。
 十二 13 6 略、たとへ十分、十五分の餘暇でも無益に費すことがなかつた。
 十二 38 2 ほんたうに一度でもよいから、演奏會へ行つて聴いてみたい。
 十二 57 3 それでは自分のやうな小さな者でも役に立つことがあるのかしらと、夢中になつて喜んだが、略。
 十二 117 10 略、其の後無線電信が發明されて、陸上でも海上でも、自由に消息を交換することが出来るやうになりました。
 十二 117 10 略、陸上でも海上でも自由に消息を交換することが出来るやうになりました。
 てもと [手元] (名) 1 手もと
 七 18 9 手もとの軍ぜい二萬騎を引きつれて、たゞちに極樂寺坂へ向ひました。

てら [寺] (名) 1 寺 ↓ えのきでら・おてら・おてらまいり・きよみずでら・なにがしでら・ふるでら・やまでら
 六 72 5 略、青い松の間に、五重の塔や大きな寺の屋根が見えます。
 てらす [照] (五) 7 テラス てらす 照らす 《一サ・一シ・一ス》 ↓ あまてらすのおみかみ
 四 70 6 略、又日ニテラサレテモトケマセン。
 四 94 2 略、二人はたいまつで道をてらしてくどうのやかたへ向ひました。
 九 32 9 かんくんとこずゑをてらしてゐる十時過ぎの日かげが、若葉の色を下に投げるのか、略。
 九 78 3 略、じやがいも畑を、午後の日がかんくんと照らしてゐる。
 十 83 10 石炭の壁は安全燈の光に照らされて、黒光りに光つてゐます。
 十二 42 5 略、清い月の光が流れるやうに入込んで、ピアノとひき手の顔を照らした。
 十二 43 10 略、やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が次第々々にやみの世界を照らすやう、略。
 てり ↓ ひでり
 てりだす [照出] (五) 1 テリダス 《一シ》
 一 20 2 アメガヤミマシタ。ヒガテリダシマシタ。

てる [照] (五) 4 てる 照る 《一ツ》
 三 83 1 日はよくてつてゐて、略。
 五 20 8 ゆふべの雨がはれて、青葉の上に日が氣持よくてつてゐます。
 九 51 7 略、始は近在の小賣店へ、毎日々々、降つても照つても、おろしに歩き廻つたものださうだが、略。
 九 60 4 日はかんくんと照つてゐる。
 てる (助動) 2 てる 《テル》
 六 99 5 略、それが今では學校の二階のまどにとゞいてる。
 八 89 5 略 おとよ、わしの言つてることがわかるか。
 てる [出] (下二) 157 デル 出ル 出る 《デ・デル》 ↓ うきでる・ころげでる・さまよいでる・すすみでる・つきでる・ながれでる・はしりでる・ぶきでる・もうしでる・わきでる
 二 18 2 ネエサン、デテゴランナサイ、月ガデハジメマシタ。
 二 18 7 モウスツカリ木ノ上ヘデマシタ。
 二 28 1 ソノトキ一ビキノ子ネズミガマヘデテイヒマシタ。
 二 43 3 略、土ノ中カラ、オカネヤタカラモノガタクサンデマシタ。
 二 44 2 略、ソコロホツテミマシタガ、キタナイドロ水バカリ

シカデマセン。
 二 46 2 略、ウスノ中カラ、マタオカネヤタカラモノガデマシタ。
 二 46 7 サウシテ米ヲツイデミマシタガ、ヤツパリキタナイモノバカリデマシタ。
 二 58 3 略、日ヤ月ガデテキナカツタリ、アカリガツイテキナカツタリスレバ、略。
 二 71 7 ムカシ大江山ニシユテンドウジトイフワルモノガキマシタ。山カラ出テ、モノヲトツタリ、人ヲサラツタリシマシタ。
 三 3 2 略、ソツトネドコヲ出マシタ。
 三 4 4 略、エントツカラムクムクトマツクロナケムリガ出マス。
 三 6 4 略 「イツヒヨコガ出マスカ」
 三 6 6 略 「二十日バカリタツト出マス」
 三 25 3 この二三日の雨で、竹の子がこんなに出来ました。
 三 25 5 そこから竹の子が出るのです。
 三 26 2 このあひだかきねのそばへ出たのは、もう私のせいより高くなりました。
 三 26 6 石がきの下へ出たのは、略、竹になかなかつてゐます。
 三 39 2 ちか道の方は、道がこ

はれてゐたり、石が出てゐたりしました。

三41 4 〈略〉、大きなかめが出てきて、「〈略〉。」といひました。

三45 4 うらしまは〈略〉、又かめのせ中につて、海の上へ出てきました。

三46 6 あけると、箱の中から

三47 1 日ノ出ル方ガ東デ、日ノハイル方ガ西デス。

三53 5 あるぼん、弟がにはへ

三55 2 〈略〉、たうふうがにはへ出て、池のはたを通りますと、

三68 3 ソノウチニ水ガ出ナクナツタノデ、センヲヌイテ見ルト、〈略〉。

三77 7 〈略〉、うちのものはみんなえんがはへ出しました。

四2 5 ほほづきやふうせん玉を賣る店も出てゐます。

四12 5 アル日ハマベへ出テ見ルト、〈略〉。

四22 7 うちの人はみんなたんぼへ出て、〈略〉。

四41 7 たんすをうごかすと、其のうしろから物さしと花子のお手玉が出ました。

四53 7 日ハ山から出て、山へはいる。」

四54 1 日「いや、海から出て、海へはいる。」

四54 4 日「へええ、日は屋根から出て、屋根へはいるものではないですか。」

四73 4 私は〈略〉、〈略〉、火事があつたり、水が出たりしたこと

四81 2 〈略〉、河を見たら、たいそう水が出て居ました。

四82 1 トンネルを出て、海を見下した時には、〈略〉。

五6 3 ある日、僕がうんどう場へ出て見ると、中村君が泣いてゐました。

五12 3 ふしぎに思つて、尾をさいてごらんになりますと、つるぎが一ふり出しました。

五15 4 ぼちが〈略〉、尾をふつてむかへに出しました。

五25 2 〈略〉、私どもは浴衣地とこんがすりを買つて外へ出しました。

五32 8 〈略〉、お見送をして表へ出て見ました。

五35 7 学校の門を出て西へ向ひました。

五36 5 大道へ出て、となり村の入口へ行くと、〈略〉。

五38 4 此所を出て、となり村の学校の前へ行くと、〈略〉。

五40 7 〈略〉、たんぼの小道へ出て、三時ごろ學校へかへりました。

五55 4 酒の出る所を御らんになつて、「これは親孝行のほうびに、神々がさづけられたにちがひない。」とおほせになりました。

五61 6 雨のはれ間にちよつと出て、

五70 5 〈略〉、庄屋は方々の村へ用水池を見に出た。

五72 2 〈略〉、一年ばかりの間は、べつだんくじやうも出なかつた。

五73 4 「〈略〉。」などと言ふ者が出て来て、手つだひに出る者は日ましにへつた。

五73 4 〈略〉、手つだひに出る者は日ましにへつた。

五79 5 八幡太郎義家〈略〉廣い野原を通りますと、狐が一匹とんで出ました。

五83 2 叔母さんの町に大水が出たさうです。

五84 7 大水が出なければよいがと心ばいして、〈略〉。

五86 4 叔父さんは大へんだ土手が切れたといつて、すぐ屋根へ出ました。

五87 6 わたしは正男をつれて物ほしへ出ました。

五94 6 「〈略〉。」といふおたづねが出るかも知れませんが、〈略〉。

五97 7 二人の者が山の中を通ると、熊が出て來ました。

六1 6 朝飯の時こんな話が出ました。

六17 4 「此の近くに、しめぢの出る所はありませんか。」

六18 5 行つて見ますと、〈略〉、小さなしめぢが列を作つて出てゐました。

六20 1 もとより舟は一そうも出てゐません。

六30 5 〈略〉、数かぎりもない蟻がまつ黒になつて、出て來ました。

六31 6 一番汽車ニ乗ラウトイフノデ、父ト五時半頃ニ家ヲ出タ。

六41 1 正作君と大工の松さんは工兵、力松君は砲兵、〈略〉、私を入れて村からは五人も出てゐるが、〈略〉。

六41 5 どの町村からも、歩兵が一番多く出てゐるのに、〈略〉。

六41 7 其の代り輜重兵の外は各種の兵が出てゐる。

六42 1 輜重兵にも其の中にだれか出るだらう。

六46 3 ダンノ上流ニサカノボツテ、時ニハセ中ガ出ル程ノ淺イ所マデ上ツテ來ル。

六59 2 或日のこと、萬じゆが御殿のうらへ出て、何の氣もなくあたりをながめて居りますと、〈略〉。

六63 4 さうして其の明くる年の春、舞姫に出ることになつたのでござい

六66 8 其のとなり村の青年たちが見かねて、方々へ義捐金をつのりに出た。

六72 2 東の方は此の橋のたもとから、

- 川にそつて電車が出来ます。
- 六88 2 自分たち程の子どもが出て来て、象の前足にだきついて見せた。
- 六94 6 或朝、夜明頃、城中からうつて出て、どつとときの聲をあげた。
- 六94 7 図 「それ、敵が出た。一騎も餘すな。」
- 六101 1 〈略〉、私は庭へ出ました。
- 六103 7 図 参拜をすましてから、京都へ出て、二三日見物して歸られるさうです。
- 七10 2 〈略〉、舟はすつすと進んで、たちまち海へ出た。
- 七12 1 小さい熊手で砂をかくと、おもしろいやうにあさがりが出た。
- 七12 2 時々手ごたへがして大きな蛤が出た。
- 七23 3 〈略〉、枝が傘をひろげたやうに出てゐるので、村の人は之を傘松と呼んでゐる。
- 七41 2 軍人をのせた御用船が今しも港を出ようとした其の時、〈略〉。
- 七41 4 〈略〉、見送人をおし分けて、前へ出るおばあさんがある。
- 七48 6 無念に思つて、武田方から十騎ばかり、木戸を開いて切つて出ようとした。
- 七53 7 図 先づいかりをあげて港を出て行きますと、〈略〉。
- 七58 7 図 〈略〉、星が出てあれば、〈略〉、自分の船の居場所を知ること出来ます。
- 七68 6 図 家の中で見えなくした物でも、中々出ないものでございます。
- 七74 9 男はしあんにくれて、役所へうつたへて出しました。
- 七76 4 信長はよく夜明前から馬場へ出て馬を乗りならした。
- 七76 5 毎朝げんくわんへ出て、「誰か居るか。」と呼ぶと、〈略〉。
- 七76 7 〈略〉、いつも藤吉郎が眞先に出来た。
- 七77 1 〈略〉、信長は〈略〉、「誰か居るか。」と呼ぶと、やはり藤吉郎が出来た。
- 七92 3 さうして、「こいつ、かなつんぼだな。」と言つて、みんな出て行つてしまひました。
- 七93 3 図 「やはり二百十日だ。風が出て来た。」
- 七99 7 〈略〉、とう／＼太閤のお目通へ出ることを禁ぜられました。
- 八2 9 きこのむらがつて出るのも、〈略〉も今である。
- 八17 2 將軍秀忠が刀を取つて出て見ると、長四郎であつた。
- 八23 9 そこで蕃人どもが呉鳳へ、首を取ることを許してくれといつて出ました。
- 八27 2 図 是をむきて、う／＼とうなりて、垣を出て行く。
- 八31 7 さうして煙出から出る煙の色で焼加減を見て、〈略〉。
- 八34 8 間もなくそれから芽が出ましたので、〈略〉。
- 八35 6 昔江戸で、夫に死なれた女が、乳飲子を里子にやつて奉公に出ました。
- 八35 9 困つて町奉行へ訴へて出ました。
- 八39 7 困つて町奉行へ訴へて出ました。
- 八42 5 しばらくして、其の中のおも立つた者が出て、いろ／＼おわびを致しますと、〈略〉。
- 八65 4 図 横濱を出てから、ちやうど十五日目です。
- 八85 4 學校へ行つて案内をこふと、小使が出て来た。
- 八85 9 小使は僕等を應接室へ通して出て行つたが、〈略〉。
- 八94 1 信吉は教室を出ると、〈略〉。
- 八95 6 さうしてみんな一しよに學校の門を出た。
- 九27 4 図 〈略〉、すぐに江戸へ出て、りつばな學者を先生にして、一心に學問を上げむがよい。
- 九28 5 信淵は〈略〉、間もなく江戸へ出て、〈略〉。
- 九55 1 図 〈略〉、毎朝引いて出た荷が、夕方には必ず空になるといふ景氣。
- 九66 3 〈略〉、まはりには、人の山が出来て、いろいろの話が出る。
- 九71 7 次の平泉といふ驛を出て間もなく、〈略〉。
- 九72 8 其の中に汽車は山の間を出て、大きな川に見える所に出た。
- 九72 9 其の中に汽車は〈略〉、大きな川に見える所に出た。
- 九73 7 汽車が盛岡を出て少し進むと、〈略〉。
- 九79 2 中からみづ／＼しい白茶色の玉が、じゅずつなぎになつてころ／＼と出て来た。
- 九99 8 おかあさんと茄子をもぎに出たついでに、かぼちや畠を見廻ると、〈略〉。
- 九114 9 図 軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、〈略〉。
- 九116 4 図 聞けば、そなたは豊島沖の海戦にも出ず、〈略〉。
- 九118 10 図 豊島沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念に思つてゐる。
- 十13 4 図 私も、〈略〉、よく道ぶしんに出たものでした。
- 十34 4 前と同じ方法で、船はもう一段高く浮上り、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。
- 十35 3 掘割を通過して船は又湖に出る。
- 十35 9 此處から又掘割を走つて、終に洋々たる太西洋に出るのである。
- 十44 4 塞場から出て来た喜三右衛門は、〈略〉。
- 十46 2 〈略〉、目ざす柿の色の美しさは出て来ない。
- 十73 6 図 此の停車場を出て大通を東北に進むと、〈略〉。

十73 8 国 〈略〉大通を東北に進むと、
 二町ばかりで大きな門の前へ出ます。
 十80 10 坑道を少し行つて、ポンプ室
 の前に出ました。
 十81 8 ポンプ室を出てから小道へは
 いりました。
 十82 5 其のうちに馬屋の前に出まし
 た。
 十85 5 坑外に出ると、急に夜が明け
 たやうで、〈略〉。
 十103 9 〈略〉葉が、莖の上の方に群
 がつて出てゐるものもある。
 十105 6 園 一度此の中にはいると、ま
 た寒い處へ出るのがいやになるね。
 十116 9 まだ芽の出ないはぜの木の間
 を通り、〈略〉。
 十118 3 〈略〉、繪馬堂の前を通つて樓
 門をくぐると、本殿の前に出る。
 十120 1 公は此處にうつされてから一
 歩も外へは出ないで、三年の歳月を
 送られたさうである。
 十120 5 樓寺を出て二日市の停車場へ
 急いだ。
 十18 4 長崎を出た汽船は、海上を
 走ること約四百海里で揚子江の河口
 に達する。
 十110 2 租界の外に出ると大ていは
 支那風の町で、〈略〉。
 十152 6 元來ゴム液は、幹の皮部と
 木質部との間にある乳管組織といふ
 所から出るものであるから、〈略〉。
 十152 8 此の傷から出て来るゴム液

は、流れて下のコップにたまるので
 ある。
 十161 5 しばらく暗黒の中を通つて
 再び光明の世界に出た時、〈略〉。
 十187 8 夕食をすましてから、縁が
 はへ出て涼む。
 十196 8 〈略〉、父は〈略〉畠に出て
 働いた方がよいといつて、〈略〉。
 十117 9 〈略〉、銃獵に出たらしいり
 つばな騎馬の人たちが、〈略〉。
 十137 4 月のさえた冬の夜友人と二
 人町へ散歩に出て、〈略〉。
 十191 2 或時、父王と共に城外に出
 て、農夫の働く様を見廻つたことが
 ある。
 十192 2 しかし彼は城外に出る毎に、
 〈略〉、さては野邊に送られる死者を
 まのあたり見て、〈略〉。
 十193 3 かくて彼は〈略〉、人知れ
 ず宮殿を出て修行の途に上つた。
 十197 6 〈略〉、中には彼をそねむあ
 まり、〈略〉、迫害を加へようとする
 ものさへも出て來た。
 十1127 8 一室に通されて待つてゐる
 と、やがて西郷が出て來た。
 十1131 2 やがて安芳は西郷に見送ら
 れて門を出た。
 デレン (地名) 3 デレン
 十183 図 デレン
 十187 1 図 翌日此の地を去り、河を
 さかのぼること五日、遂に目的地な
 るデレンに着せり。

十1287 1 図 デレンは各地の人々來り
 集りて交易をなす處なり。
 てわけ「手分」(名) 2 手分
 八104 8 マッチの製造所へ行つて見る
 と、職工が大勢居つて、それ／＼手
 分をして働いてゐる。
 八105 6 すべてかういふやうに、手分
 をして別々に仕事をすることを分業
 といふ。
 てわのくに「出羽国」(地名) 1 出羽
 の國
 九28 1 〈略〉、此の老人こそは出羽の
 國の醫者佐藤信季、〈略〉。
 てん「天」(名) 8 天いってん
 三86 4 園 それがなくては、天へ
 かへることが出來ません。
 三87 7 園 おかげで天へかへる
 ことが出來ます。
 五61 7 園 雨のはれ間にちよつと出て
 用ありさうに天と地の 遠きをつ
 なく雲の上。だれが渡るか、虹の
 橋。
 九92 5 園 〈略〉ジュピターといふ神
 様が、それを見て、〈略〉、すぐに親
 子の者を天へ連れていつて、大熊座
 と小熊座になさつたのださうです。
 九111 5 〈略〉、又自分の最愛の主人に
 味方の勝利を語るやうに、一聲高く
 天に向つていな、いた。
 十27 6 一進一退、たゞ運を天にまか
 せて、二人はボートをあやつつた。
 十132 8 図 天、勾踐を空しうするな

かれ。時、范蠡無きしもあらず。
 十1109 9 園 〈略〉、天をもこがすば
 かりのほのほをあげて燃ゆる光景は、
 〈略〉。
 てん「店」いこうりてん・ごふくて
 ん・しまやごふくてん・りはつてん・
 りようがえてん
 てん「点」(名) 4 点いってん・
 けっしやうてん
 十124 1 園 かういふ點から、いろ／＼
 の美質をもつてゐることをよく見定
 めて、あの青年をやとふことにした
 のです。
 十123 1 又單に損益の點から見ても、
 かやうな仕方は〈略〉、永續するこ
 とが出來ないから、つまりは小利を
 むさぼつて大損を招く結果になる。
 十123 8 外國貿易業者はかへす／＼
 深く此の點に注意しなければならぬ。
 十146 4 図 殊に杉は人爲によりて容
 易に増殖せらるゝ點において檜にま
 さり、〈略〉。
 でん「伝」いこじきでん・ワシントン
 でん
 でん「殿」いだいごくでん・たいせい
 でん・ほうもつでん
 でんいちこう「電一」(名) 1 電一
 號
 七112 図 電一號
 てんいんにゅうよう「店員入用」(名)
 1 店員入用
 十121 2 外國の或商會で、新聞紙に店

員入用の廣告を出した。

でんえん 「田園」(名) 2 田園

十二33回 兩岸及び島島、見渡す限り田園よく開けて、毛氈を敷けるが如く、〈略〉。

十二102回 眼下に横たはる奈良市街の西、遠く連なる田園の間に東西に走る三筋の路は、〈略〉。

てんか 「天下」(名) 5 天下

七103回 今天下に此の石田を知らぬ者はあるまい。

八419回 此所は天下の役所なるに、許しもなくて亂入するとは不届しごとく。

十一318回 福島正則以下の六人、〈略〉、武名を天下にとどろかせり。

十一73回 眞淵はもう七十歳に近く、〈略〉、天下に聞えた老大家。

十一112回 第二十四課 孔明

〈略〉。天下を定むる三分の計、た

なそこの上に指さすがごと。

てんかいしきたる 「展開来」(四) 1

展開し来る 《一ツ》

十二132回 我が國が〈略〉、三千年の光輝ある歴史を展開し來つて、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、〈略〉。

てんかいする 「展開」(サ変) 1 展

開する 《一セ》

十一615 〈略〉、突如として眼前に展開せられた風景は、〈略〉、恐らく全道第一の壯觀であらう。

てんがん 「天顔」(名) 1 天顔

十133回 主上は詩の心を御さとりありて、天顔殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。

てんき 「天気」(名) 10 テンキ 天気

ひおてんき

二174回 「エフヤケコヤケ、アシ

タ テンキニ ナアレ。」

四117回 「やつとすんだ。」と見

上げる 空に、あすも 天気か、

夕日が 赤い。

四38回 フクロフガ鳴クト、其ノ

明クル日ハ 天気ガヨイカラ、

〈略〉。

八107回 もし天氣がよかつたら、

〈略〉、お晝前にいらつしやい。

九56回 今日は天氣がよいので、朝か

ら麥を打つ音が方々で聞える。

九61回 副長も〈略〉、今日の天氣は

どうかと空をながめる。

九99回 日本晴のよい天氣。

十28回 二日たつて、天氣も晴れ、波

浪もをさまつた。

十40回 「しかし天氣が続いてよい

あんばいだ。」

十一87回 大層天氣がおだやかに

つたね。

でんき 「電気」(名) 8 電気 ↓すい

りよくでんき

四28回 よこ町に 電氣の力で、

米をつく家も 出來ました。

八82回 〈略〉、電燈・電車等に用ひる

電氣も、もとをたゞせば水の力である。

十一54回 電氣の機械や、蓄音機の圓盤などに用ひるエポナイトといふものもゴムから造る。

十一68回 將來は又どんなものが發明されて、今のガスや電氣にかはることであらうか。

十二115回 現今における電氣の利用は實にめざましいものです。

十二115回 〈略〉人力又は蒸氣力もだんく電氣に變つて、〈略〉。

十二116回 次に博士は電氣の光に就いて述べた。

十二119回 最後に博士は〈略〉、家庭における電氣の利用に就いて興味ある話をして壇を下つた。

でんきアイロン (名) 1 電氣アイロ

ン

十二118回 最後に博士は電氣こんろ・

電氣アイロン・電氣ストーブ・扇風

機など、家庭における電氣の利用に

就いて興味ある話をして壇を下つた。

でんきかんしゃ 「電氣機關車」(名)

3 電氣機關車

十80回 〈略〉、廣い坑道には、電氣機

關車が炭車を引いて往つたり來たり

してゐます。

十84回 炭車が一ぱいになると、馬方

がそれを馬に引かせて、電氣機關車

の通ふ道まで運んで行きます。

十二115回 電車は次第に汽車の領分

までも侵略し、尚進んで電氣機關車さへも用ひられるやうになりました。

でんきこんろ 「電氣焔炉」(名) 1 電氣こんろ

十二118回 最後に博士は電氣こんろ・

〈略〉など、家庭における電氣の利用に就いて〈略〉。

でんきストーブ (名) 1 電氣ストー

ブ

十二118回 最後に博士は電氣こんろ・

電氣アイロン・電氣ストーブ・扇風

機など、家庭における電氣の利用に

就いて〈略〉。

でんきつづき 「天氣続」(名) 1 天氣

續き

十775回 〈略〉、よくも續くと思ふくらゐの天氣續きで、〈略〉。

でんきのよのなか (課名) 2 電氣の

世の中

十二110 第二十三課 電氣の世の中

十二115 第二十三課 電氣の世の中

でんきのよのなか (題名) 1 電氣の

世の中

十二115 〈略〉村崎工學博士の「電

氣の世の中」と題する講演があつた。

でんきゅう 「電球」(名) 1 電球

十二114回 しかして其の電球は忽ち

世界に廣まりぬ。

てんくう 「天空」(名) 1 天空

十二99回 〈略〉、東大寺の金堂は天

空高くそびえて、五丈三尺の大佛一

千二百年の面影を残せり。

↓ごうてんじょう

四四三 天じやうをはらふ、たたみをたたく、〈略〉、まるでいくさのやうでした。

てんしょうじゅういちねんしがつはつか

「天正十一年四月二十日」(名) 1

▼天正十一年四月二十日▼

十一二三〇 時は天正十一年四月二十日のあかつき、〈略〉。

でんしよばと「伝書鳩」(課名) 2 傳書鳩

十目一二 第十一 傳書鳩

十五三〇 第十一 傳書鳩

でんしよばと「伝書鳩」(名) 3 傳書鳩

十五五三 〈略〉、今では各國共に盛に傳書鳩の改良に力を用ひ、其の飼養を奨勵してゐる。

十五五九 普通傳書鳩を使用する方法は、一定の飼養所から他の土地に連れて行つて、飛歸らせるのである。

十五七八 傳書鳩を利用する場合はなかく多い。

でんしん「電信」(名) 3 電信 ↓む

せんでんしん・むせんでんしんき

十二一七二 〈略〉、世界各國主要の地に特派員又は通信員ありて、事件起れば直に電話又は電信にて通知し來る。

十二一四八 エヂソンの發明せるは電話・電燈・電信・〈略〉など極めて多く、〈略〉。

十二一七八 電信や電話の發明は其の

當時實に全世界を驚かしたものであります、〈略〉。

てんじんさま「天神様」(名) 1 天ジンサマ

三四八三 ヲカノ上ニ天ジンサマノオミヤガアリマス。

てんじんやま「天神山」(地名) 2 天神山

九一〇九 〈略〉、空がきれいにすんで、向ふの天神山が近く見える。

九一〇四 午後には弟と天神山へきのこ取りに行くのだ。

てん・ず「転」(サ変) 2 轉ず「ジ・ズル」

十九八八 張世傑等の奮戦も大勢を轉ずることあたはずして、宋遂に亡びしかば、〈略〉。

十一三三五 かくして島轉じ、海廻りて、其の盡くる所を知らず。

てん・ずる「転」(サ変) 1 轉ずる「ジ」

十一一三五 砲手の〈略〉號令に、船ははや方向を轉じた。

でんせつ「伝説」(名) 1 傳説

十二一四七 伝説、かのをろち退治の傳説あるは此の川の川上なり。

てんせん・す「転戦」(サ変) 1 轉戦す「シ」

十九七八 文天祥命を奉じ、各地に轉戦して元軍を破る。

てんち「天地」(名) 3 天地 ↓しよ

うてんち・べってんち

七九九 ところが或夜大地震が起つて、人家堂塔一時に倒れ、人々の泣叫ぶ聲は天地にひびきました。

八四八 マシテ自由ノ天地ニ居テ、自在ニ空ヲトブ様ハ、〈略〉。

十二九一 拍手かつさい、天地をとどろかす萬歳の叫、勇壯なる軍樂の調、〈略〉。

*でんち ↓でんじ

てんち・す「転地」(サ変) 1 轉地す「スル」

十一四三八 今少しく日もたゝば、轉地するもよからんと醫師も申居候に付、〈略〉。

でんちゅう「電柱」(名) 1 電柱

十二四六六 家屋・橋梁・船舶・電柱より桶・たる・曲物の類に至るまで、一として杉を用ひざるなし。

てんちようせつ「天長節」(名) 1 天長節

四八四 キノフハ十月三十一日デ、天長節ノオイハヒ日デシタ。

てんでに「手手」(副) 1 てんでに

九五六 後には麥の束が山と積んである。それをてんでに一束つづつては、〈略〉、打臺にばた／＼とたゞきつけると、〈略〉。

てんでんと「点点」(副) 3 點々と

九七五 青々とした波の上に、點々と白帆が浮んでゐるのは、〈略〉。

十三五 〈略〉、湖上に點々と散在して

ある島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。

十一八〇 白梅は今やうど眞盛りであるが、其の間に咲きかけの紅梅が點々と交つて美しい。

でんでんむしむし「蝸牛」(名) 1 デンデムシムシ

一二一〇 デンデムシムシカタツムリ、アタマガアルカ、メガアルカ。

テント(名) 1 テント

九一〇四 〈略〉、北風は外の軍馬と一所に、露營のテントの前に、列を正して並んだ。

てんとう「店頭」(名) 1 店頭

十二九 娘の勇ましい行爲は、歌に歌はれ、其の肖像畫は到る處の店頭に飾られた。

でんとう「電灯」(名) 15 電とう 電燈

四二六 私どもの町でも、このあひだから電とうがつくやうになりました。

四二六 町やくばも、〈略〉、みんなのきらんぶが電とうにかはりました。

四二五 〈略〉、そのほか大きな店はいくつも電とうをつけました。

四二八 電とうはらんぶとちがつて、へやのすみずみまであかるく、〈略〉。

八八二 八略、電燈・電車等に用いる電氣も、もとをたゞせば水の力である。

十 80 6 略、周囲の壁は皆石炭で、それが電燈の光に物すこく光つてゐます。

十 81 9 此處は電燈も無いので、眞暗です。

十一 68 1 略、今はガス燈や電燈が到る處にかゞやき渡る時代となつた。

十一 125 2 取分け美しかつたのは電燈の笠で、略。

十二 111 3 電燈の發明せられたるは、今より凡そ百十餘年前のことなり。

十二 111 10 此れ等の缺點なき電燈の出現は當時の人の最も希望する所なりき。

十二 112 4 略、トマス、エヂソンは、略、更に進んで新しき電燈の發明に従事したり。

十二 114 8 略、エヂソンの發明せるは電燈・電燈・略 など極めて多く、略。

十二 116 10 略、エヂソンが炭素線の電燈を發明したのは四十年ばかり前のことであつたが、略。

十二 117 3 略、今では略、光の色が太陽に似て、しかも比較的熱をとまふことの少い電燈さへも發明されました。

てんどん 「天井」(名) 1 天どん
八 60 図 天どん

てんながんねん 「天和元年」(名) 1

天和元年

十一 120 10 かくて天和元年略、一切經六千九百五十六卷の大出版は遂に完成せられたり。

てんにん 「天人」(名) 7 天人

三 85 6 略、「いや、それは天人のはごろもといふ物で、人げんにはよのうのないものです。」

三 86 1 略、天人のはごろもなら、なほさらかへすことは出来ません。

三 86 7 天人はしをしをとして、なみだにうるむ目で空を見上げました。

三 87 4 略、そのかはりに天人のまひといふものをお見せ下さいませ。

三 88 8 略、「いや、天人はうそをいひません。」

三 89 5 略、れふしがはごろもをかへしますと、天人はそれを着て、まひはじめました。

三 90 3 略、天人はまひながら松原の上をだんだん高く上つて、ふじの山よりも高い大空のかすみの中へはいつて行きました。

てんにん 「転任」↓てんにんなさる

てんねん 「天然」(名) 1 天然

十二 133 5 四周の海が天然の城壁となつて、容易に外敵のうかゞふことを

許さないから、略。

てんのう 「天皇」(名) 8 天皇 ↓け

いこうてんのう・ごだいごてんのう・じんむてんのう・にとくてんのう・めいじてんのう・めいじてんのうぎよせい

五 18 8 略、其の時略、金色の鶏が一羽とんで来て、天皇のお弓の先にとまつた。

五 41 3 昔熊襲のかしらに川上のたけるといふ者があつて、天皇のおほせにしたがひませんでした。

五 41 4 天皇は日本武尊にこれを征伐せよとおほせられました。

五 44 7 略、「われは天皇の皇子やまをぐな。」

五 55 2 いつか此の事が天皇のお耳に入りまして、略。

七 19 9 略、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をほろぼさうとしてゐます。

七 28 5 略、大阪ハ昔仁徳天皇ノ都シタマヒシ所ニシテ、其ノ頃天皇ハ立上ル煙ノ少キヲ見テ、民ノ貧シキヲアハレミタマヒキ。

十二 89 7 略、そこで天皇が之を裁可せられ、公布せしめられると、始めて法律が出来上るのである。

てんのうへいか 「天皇陛下」(名) 3

天皇ヘイカ 天皇陛下

四 9 6 キノフハ 日本國中ノ人ガミンナ 天皇ヘイカノバンザ

イライハツタノデス。

五 1 3 略、大日本、大日本、神のみすゑの天皇陛下 われら國民七千萬をわが子のやうに おぼしめされる。

五 2 1 略、大日本、大日本、われら國民七千萬は 天皇陛下を神ともあふぎ、おやともしたひてお仕へ申す。

てんぼう ↓かりかちのてんぼう

でんぼう 「電報」(課名) 2 電報

七 15 第二十五 電報
七 109 9 第二十五 電報

でんぼう 「電報」(名) 4 電報
五 84 1 略、おとうさんへ電報で御返事をいたしたやうに、略。

七 110 1 略、「おとうさん、電報が來ました。」

七 111 2 略、電報はなるべくみじかい方がよい。

七 112 4 略、それでもよいが、電報はさうていねいにはなくてもよい。

てんぼう・す 「展望」(サ変) 1 展望

十二 102 4 略、今若草山に登りて古京の跡を展望すれば、略。

でんぼうらいしんし 「電報頼信紙」(名) 1 電報頼信紙

七 112 図 電報頼信紙
でんぼうりょう 「電報料」(名) 1 電報料
七 112 図 電報料

てんまんぐう 「天満宮」(名) 1 天満宮

十117 6 〈略〉、沿道の家は大てい天満宮にちなんだ物を賣つてゐる。

てんめい 「天命」(名) 1 天命

十99 7 ㊦ ㊧ 心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。

てんらんかい 「展覧会」(名) 1 展覧會

十一9 4 租界には〈略〉幾多の人種が入交つてゐるので、其の有様は一見世界人種の展覧會のやうである。

でんりょく 「電力」(名) 3 電力

九50 1 會社では、幾臺もある精米機械が電力で勢よく廻り、〈略〉。

十二18 4 ㊦ 〈略〉、機械は電力によりて働き、印刷も切斷も人手を要せず、〈略〉。

十二116 2 ㊦ 殊に近年は水力電氣の驚くべき發達にともなひ、電力は頗る廉價に供給されるので、〈略〉。

でんれい りちようぜいでんれいしょ

でんれいいん 「伝令員」(名) 2 傳令員

九61 8 間もなく甲板士官や傳令員が起きて来る。

九62 5 〈略〉、傳令員は號笛を吹きながら、「總員起し。」と呼んで、つり床の間をぬつて行く。

でんれいし 「伝令使」(名) 1 傳令使

↓しようにでんれいし

十58 6 殊に要塞が敵にかこまれて、

無線電信機は破壊せられ、傳令使は途中で要撃せられ、全く方法の盡きた場合などには、〈略〉。

でんわ 「電話」(名) 4 電話 ↓むせんでんわ・むせんでんわき

四28 6 電話も近い中に私どもの町へかかるさうです。

十二17 2 ㊦ 〈略〉、世界各國主要の地に特派員又は通信員ありて、事件起れば直に電話又は電信にて通知し来る。

十二114 8 ㊦ エヂソンの發明せるは電話・電燈・〈略〉など極めて多く、〈略〉。

十二117 8 ㊦ 電信や電話の發明は其の當時實に全世界を驚かしたものであります、〈略〉。

でんわき 「電話機」(名) 1 電話機

十二112 2 ㊦ 〈略〉トマス、エヂソンは、既に電話機に關する發明に成功したるを以て、〈略〉。

後記 — 編集の経過と担当者

第三期国定読本『^{尋常}国語読本』（いわゆるハナハト読本、あるいは白表紙本）の総索引作成作業は、昭和五十九年七月から開始された。第一期、第二期はカードを利用した手作業方式であったが、第三期は電算機利用方式に切り換えた。そのため、光学文字読み取り装置を利用した総索引作成システムの開発にかかり、昭和六十三年三月には電算機への入力及び文脈つきK W I C索引の出力ができるところまで進んだ。その一方、国定読本の諸本の調査も精力的に進められ、昭和六十二年度には実際に使われた教科書の正確な使用年度を確定する符号のあることが貝美代子調査員によって解明された。

昭和六十三年四月からは、第三期『^{尋常}国語読本』の文脈つき総索引を二分冊で刊行することとし、第一分冊「国定読本用語総覧4」（あゝて）の編集作業を開始し、原稿作成の作業に入った。同年十月一日には国語辞典編集室が新設され、「国語辞典編集のための用例採集」という題目のもとに、この作業は国語辞典編集室の担当する事業となった。完成原稿をフロッピーの形で三省堂に渡しはじめたのは、昭和六十四年（平成元年）二月のことであった。

なお、昭和五十九年・六十年度は文部省科学研究費補助金一般研究(A)「国定読本の用語の研究」（研究代表者 飛田良文、研究分担者 林大・見坊豪紀・斎藤秀紀・高梨信博）、昭和六十二年・六十三年度は同じく一般研究(B)「光学文字読み取り装置によるコンコーダンス作成システムの開発」（研究代表者 飛田良文、研究分担者 林大・見坊豪紀・木村睦子・斎藤秀紀・加藤信明・貝美代子、研究協力者 安倍清哉・熊谷康雄）の援助があった。

第三期に関する作業にたずさわったのは次の通りである。
昭和五十九年度から平成元年度まで

主幹 飛田良文 室長 木村睦子（昭和六十二年十月から） 研究員 高梨信博（昭和六十一年七月から主任研究員）、調査員 林大・見坊豪紀・木村睦子（昭和六十三年九月まで）・瀧本典子（昭和六十

三年三月まで）・中田恵美子（同上）・加藤信明（平成元年三月まで）・貝美代子（昭和六十一年九月から）・服部隆（昭和六十二年二月から）・久池井紀子（平成元年四月から）・高橋美佐（同上）

また、木下哲生・吉竹孝介・三宅順子・妹尾和子・山川淑子・山下かおり・吉野美奈子・池上七代・内尾淑美・金田一京子・国久千賀子・佐藤裕美・杉山裕恵・東条由紀子・南條文子・宮本しょう子・吉田恵理・遠藤真希子が、この作業を助けた。

本書の解説は飛田良文が執筆した。

なお、昭和五十四年度に国語辞典編集準備室が開設されてから昭和六十二年九月末日で幕を閉じるまで、用例を採集する文献の目録を作成する作業と、用例採集の方法についての実験を継続してきた。その間に以下の成果が国語辞典編集準備資料として完成した。

- 0 国語辞典覚書（林大）
 - 1 諸外国における大辞典（千石喬・池上嘉彦・佐藤純一・田島宏・石綿敏雄ほか）
 - 2 用例採集のための主要文学作品目録（飛田良文・清水康行・湯浅茂雄・柏木成章）
 - 3 用例採集のための主要雑誌目録（飛田良文・高梨信博・見坊豪紀・荒尾禎秀・村山昌俊・斎藤純子）
 - 4 用例採集のためのベストセラー目録（飛田良文・高梨信博・見坊豪紀・村山昌俊・斎藤純子・瀧本典子）
 - 5 用例辞典編集作業のために(一)(二)（見坊豪紀）
 - 6 現代語用例辞典の構想——用例採集法を中心として——（林大・飛田良文）
 - 7 用語総索引作成のための電算機利用方式（木村睦子）
 - 8 スカウト方式用例採集の手引き（見坊豪紀）
 - 9 スカウト方式による用例採集の実験的試行（見坊豪紀）
 - 10 外国のコンコーダンス一覧（木村睦子）〈未刊〉
- 別冊 国語辞典編集準備室所蔵 見坊文庫目録
（平成元年六月十日飛田良文記す）

CONCORDANCE 4 TO KOKUTEI TOKUHON

1. CONCORDANCE 4 is the result of work done by the Section for Dictionary Research of the NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE.
2. CONCORDANCE 4 is published as part of the basic research materials to be used for the Historical Japanese Dictionary being planned.
3. Computer-aided concordance making was adopted for the first time in the series of concordances to *Kokutei Tokuhon*, and an optical character reader was also used.
4. *Kokutei Tokuhon* was a series of Japanese textbooks edited six times by the Ministry of Education. These were used in all elementary schools nationwide for 45 school years from April 1904 to March 1949.
5. CONCORDANCE 4 covers the third *Kokutei Tokuhon*, called the *Zinzyō Syōgaku Kokugo Tokuhon* or elementary school reader. The original textbooks in twelve volumes were used for the six grades of compulsory education from April 1918 to March 1933.
6. The *Zinzyō Syōgaku Kokugo Tokuhon* was revised several times. The texts chosen for CONCORDANCE 4 are the earliest versions used in the years from 1918 to 1923, and are now in the possession of five organs separately.
7. CONCORDANCE 4 covers the first half of the vocabulary of the third *Kokutei Tokuhon* or words from *A* (あ) to *TE* (て); the latter half of the words from *TO* (と) to *N* (ん) will be covered by CONCORDANCE 5.
8. The introduction explains the following;
 - the transition from the second to the third *Kokutei Tokuhon*;
 - the editorial policy of the third *Kokutei Tokuhon*;
 - the characteristics of the third *Kokutei Tokuhon*; and
 - the bibliography.
9. The appendix will be contained in CONCORDANCE 5.

国立国語研究所 国語辞典編集資料 4

国定読本用語総覧 4 第三期 あゝて

平成元年八月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘三丁目九番一四号

電話 (〇三) 九〇〇-三一一一(代表)

本書の市販品発行所

〒101 東京都千代田区三崎町二丁目二番一四号

電話 (〇三) 二三〇-九四一二

株式会社 三省堂